岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 138

加茂政所遺跡
高松原古才遺跡
立田遺跡

山陽自動車道
建設に伴う発掘調査

17

（第1分冊）

1999

日本道路公団中国支社津山工事事務所

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告138

加茂政所遺跡
高松原古才遺跡
立田遺跡

山陽自動車道
建設に伴う発掘調査

17

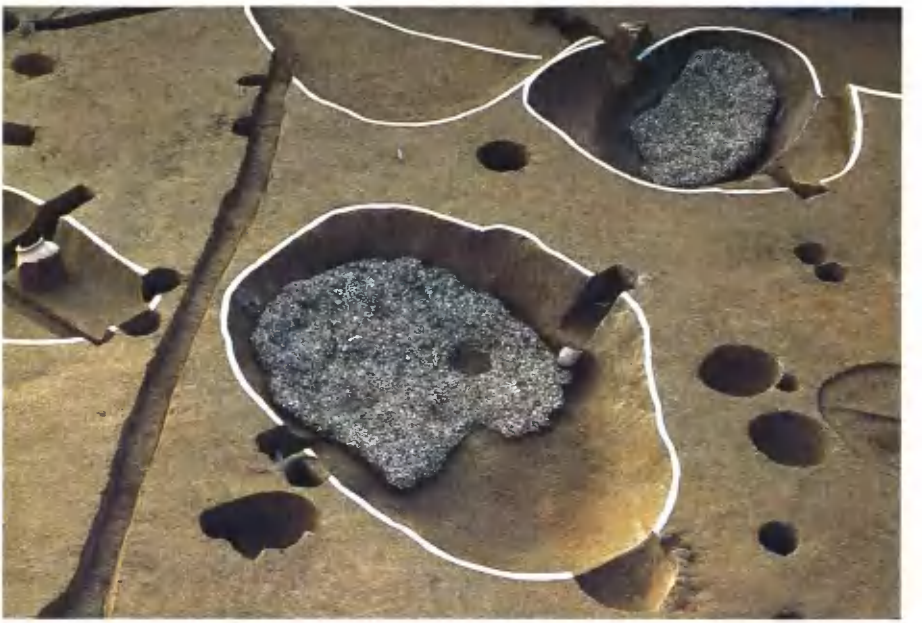
（第1分冊）

1999

日本道路公団中国支社津山工事事務所

岡山県教育委員会

収載遺跡周辺の航空写真



1　土壙２・５　貝出土状況（東から）

2　弥生時代中期中葉の土器

1　銅　釧

2　顔のある分銅形土製品

1　土器棺墓群　検出風景（南東から）

2　弥生時代後期の土器棺

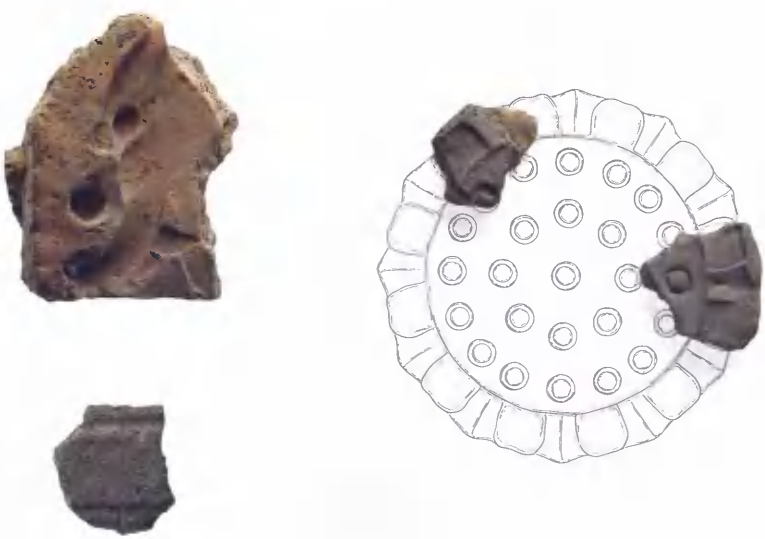
1　竪穴住居87　遺物出土状況（南西から）

2　塼　仏

1　飛鳥様式の軒丸瓦

2　古代末～中世の瓦

1　土壙375（梵鐘鋳造遺構）（南西から）



2　梵鐘鋳型（竜頭・撞座ほか）

序

山陽自動車道は、大阪府吹田市を起点として瀬戸内海沿岸の主要都市を結び、山口県下関市に至る総延長約502kmの高速自動車道であります。岡山県においては、昭和63年３月の笠岡～早島インターの供用開始に始まり、平成５年12月には県内全線を開通することができました。また、最後まで残っておりました兵庫県内の区間も、平成９年12月に開通し、ここに岡山県と関西および九州を結ぶ交通の大動脈が完成いたしました。

この山陽自動車道を建設するにあたり、建設省および日本道路公団では、その予定路線内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて岡山県教育委員会と協議し、昭和56年から記録保存のための発掘調査を岡山県教育委員会に委託して実施してまいりました。その成果は、16冊の報告書として岡山県教育委員会によりまとめられています。

第17分冊にあたる本書には、平成元年から平成４年にかけて実施した岡山市所在の加茂政所遺跡、高松原古才遺跡、立田遺跡の３遺跡の発掘調査の成果が収載されています。これらの遺跡は弥生時代から近世の集落遺跡で、本書に報告されているように多くの貴重な成果がありました。この本が埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、教育・学術のために広く活用されることを期待します。

最後に、発掘調査の実施や本書の編成にあたって御尽力いただいた岡山県教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深甚なる謝意を表するものであります。

平成11年３月

日本道路公団中国支社津山工事事務所

所　長　　安　達　靖　夫

序

瀬戸内海沿岸部の諸都市を連結して東西に走る山陽自動車道は、平成９年12月に念願の全線、延長約502kmの開通が実現し、近畿圏と九州圏を結ぶ大動脈としての役割がますます期待されています。

岡山県教育委員会は岡山県内の山陽自動車道建設に先立ち、この地がかつて勢威を誇った吉備領域の中枢に当たるだけに、予定路線内に所在する埋蔵文化財の保護を図るため、関係当局と繰り返し協議・調整を行ってまいりました。その結果、現状での保存が困難な遺跡については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとし、昭和56年から建設省岡山国道工事事務所あるいは日本道路公団広島建設局の委託を受けて、発掘調査を実施してまいりました。その成果については、既に16冊の報告書として刊行いたしております。

第17分冊にあたる本報告書には、岡山市加茂政所遺跡、同高松原古才遺跡、同立田遺跡の発掘調査成果を収載しております。これらの遺跡は、おもに弥生時代から近世にかけての集落跡で、予想にたがわず県内では初例である弥生時代の有鉤銅釧と円環形銅釧の出土をはじめ、近畿地方以外の出土としては最も古い飛鳥様式の軒丸瓦や平安時代の梵鐘鋳造遺構の発見など、数多くの成果をあげることができました。

この報告書が学術研究に寄与するだけでなく、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史研究のための資料として広く役立つならば幸甚に存じます。

最後に発掘調査の実施や報告書の作成にあたっては、山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の先生方に有益な御助言と御指導を賜り、また関係者各位から多大な御協力をいただきました。ここに深甚なる謝意を表するものであります。

平成11年３月

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　　葛　原　克　人

例　言

1　本書は、岡山県教育委員会が高速自動車国道山陽自動車道の建設に伴い、日本道路公団の委託を受けて調査を実施した、加茂政所遺跡（岡山市加茂）・高松原古才遺跡（岡山市高松原古才）・立田遺跡（岡山市立田）の発掘調査報告書である。

2　本書は、高速自動車国道山陽自動車道の建設に伴う発掘調査報告書の第17分冊である。

3　本書収載の発掘調査は、平成元年度（1989年度）から平成４年度（1992年度）にかけて実施したもので、調査面積は加茂政所遺跡12,686㎡、高松原古才遺跡1,682㎡、立田遺跡1,103㎡の合計15,471㎡である。

4　本書収載の遺跡は、これまでに政所遺跡と称して調査成果や遺物の公表が行われてきたものであるが、大字名の検討の結果、３遺跡に分離した。さらに、加茂政所遺跡については、加茂が広範な地域であるため小字名を付している。

5　発掘調査および報告書作成にあたっては、高速自動車国道山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。委員各位からは有益な御指導と御助言をいただいた。銘記して感謝の微意を表したい。

水内　昌康（岡山県文化財保護審議会委員）
鎌木　義昌（岡山県文化財保護審議会委員）平成４年度まで
西岡憲一郎（岡山県遺跡保護調査団）平成３年５月まで
西川　　宏（岡山県遺跡保護調査団）
間壁　葭子（倉敷考古館）平成８年度まで
高見　周夫（岡山県遺跡保護調査団）
根木　　修（岡山市教育委員会）
稲田　孝司（岡山大学）平成３年５月～平成５年３月
新納　　泉（岡山大学）平成３年５月まで、平成５年度～
亀田　修一（岡山理科大学）平成５年度～
土井　基司（岡山大学）平成３年５月～平成５年６月

6　本書に関係する遺物等については、調査中および報告書作成に際して、自然科学分野における鑑定・分析を下記の諸氏、諸機関に依頼し、それぞれ有益な教示を得た。また、一部の成果については報告文をいただいた。記して深く感謝を表す次第である。なお、（　）は依頼時の所属機関名である。

・鉄滓の成分分析	大澤正己
・銅滓の成分分析	内田俊秀（京都造形芸術大学）
・銅製品の蛍光Ｘ線分析	白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）
・銅釧の鉛同位体分析	平尾良光・榎本淳子（東京国立文化財研究所）
	（財）元興寺文化財研究所
・土器・瓦の胎土分析	白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）
・ガラス製品の成分分析	白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）

・土器付着の赤色顔料の成分分析　　本田光子（別府大学）
・石製品の石材鑑定　　妹尾　護（倉敷芸術科学大学）
・人骨の鑑定　　池田次郎（九州国際大学）
・歯牙の鑑定　　小田嶋梧郎（岡山大学）
・馬骨の鑑定　　富岡直人（岡山理科大学）
・貝類、魚骨類の鑑定　　金子浩昌（早稲田大学）
・梵鐘鋳造鋳型と溶解炉の鑑定　　五十川伸矢（橘女子大学）
・瓦の鑑定　　上原真人（京都大学）
・木製品の樹種鑑定　　畦柳　鎮（岡山商科大学）
・炭化材、貝の年代測定　　パリノ・サーヴェイ株式会社
・土壌中の植物珪酸体分析　　パリノ・サーヴェイ株式会社
・炭化材の樹種鑑定　　パリノ・サーヴェイ株式会社

7　本書の作成は、平成９年度に岡山県古代吉備文化財センター津寺事務所において実施した。遺構・遺物の整理は、岡山県古代吉備文化財センター職員　松本和男・平井泰男・中務和彦・岡田達矢・土師忠満・難波拓史・弘田和司・柴田英樹・清水竜太・藤田薫の10名が担当した。

8　本文の執筆は、調査担当者ならびに報告書作成担当者が行い、文責はそれぞれ文末に記した。

9　遺物写真については、政田孝氏、江尻泰幸氏の協力と援助を仰いだ。

10　本書の編集は、各遺跡ごとに整理担当者が行い、全体の編集・構成については平井、弘田、柴田が担当した。

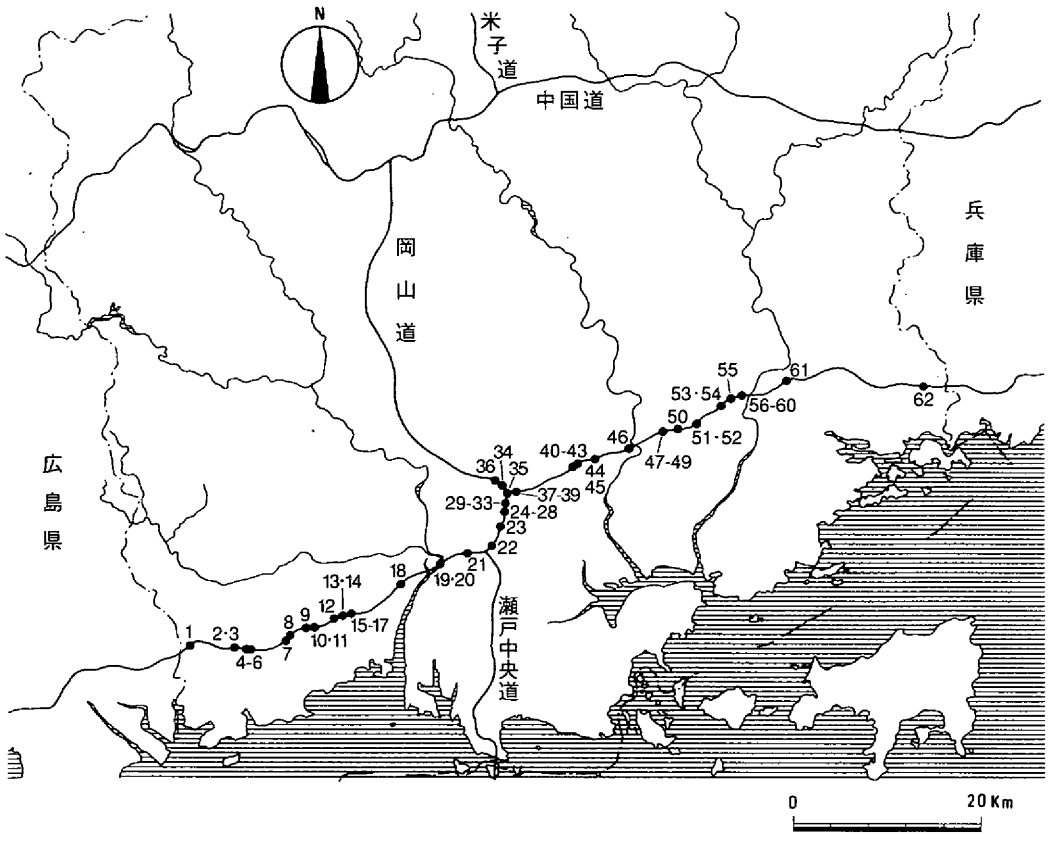
11　本書収載の遺物および各種図面・写真等の記録は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－3）に保管している。

山陽自動車道関連発掘調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	調査年度	調査面積	調査担当者	報告書
1	内山遺跡	笠岡市篠坂	散布地(一次調査のみ)	昭和59年度	550㎡	福田	70
	内山古墳						
2	中畦遺跡	笠岡市小平井	散布地(一次調査のみ)	昭和59年度	98㎡	福田	70
3	鍛冶屋遺跡	笠岡市小平井	古墳時代～中世の集落・製鉄跡	昭和59～61年度	29,328㎡	松本・岡田・福田・田中	70
4	園井土井遺跡	笠岡市園井	中世の集落	昭和59～60年度	5,570㎡	福田・田中	70
5	彌宜ヶ峠遺跡	笠岡市園井	散布地(一次調査のみ)	昭和59年度	460㎡	福田	70
6	本谷遺跡	笠岡市今立	中世の集落	昭和59年度	200㎡	福田	70
7	沖の店遺跡	鴨方町小坂西	中世の窯跡	昭和55年度	1,200㎡	伊藤・浅倉	42
8	小坂東両名遺跡	鴨方町小坂東	散布地(一次調査のみ)	昭和55年度	3,000㎡	伊藤・浅倉	42
	大畦遺跡	鴨方町小坂東	散布地(一次調査のみ)	昭和55年度	300㎡		
9	和田遺跡	鴨方町益坂	弥生時代の墳墓群	昭和54年度	250㎡	伊藤・浅倉	42
	宮の脇古墳	鴨方町地頭上	古墳時代の墳墓	昭和54年度		伊藤・浅倉	42
10	向原遺跡	鴨方町益坂		昭和54年度		伊藤・浅倉	42
11	阿坂古墳	鴨方町益坂	古墳時代の墳墓	昭和54年度		伊藤・浅倉	42
12	上竹西の坊遺跡	金光町阿坂	弥生時代～古代の集落・窯跡	昭和56・58年度	9,650㎡	正岡・井上・福田・古谷野・武田	69
13	唐津池北遺跡	倉敷市玉島道口	弥生時代の集落	昭和58～59年度	5,230㎡	正岡・福田・古谷野	69
14	道口遺跡	倉敷市玉島	古墳時代の集落	昭和58～59年度	1,830㎡	正岡・福田・古谷野	69
15	沢寺遺跡	倉敷市玉島八島	中世の集落・貝塚	昭和58～59年度	2,940㎡	正岡・福田・古谷野	69
16	西光坊遺跡	倉敷市玉島八島	中世の集落・貝塚	昭和58～59年度	480㎡	正岡・福田・古谷野	69
17	亀山遺跡	倉敷市玉島八島	中世の集落・貝塚・窯跡・墳墓	昭和58～60年度	10,160㎡	正岡・岡田・福田・古谷野・田中・武田	69
18	中山1・2号貝塚	船穂町中山	中世の貝塚	昭和59年度	850㎡	浅倉・中野	81
19	酒津八幡山平谷遺跡	倉敷市酒津	古墳時代の遺物包含層	昭和59年度	770㎡	浅倉・中野	81
20	酒津－水江遺跡	倉敷市酒津	弥生時代～中世の遺物包含層	昭和59年度	260㎡	浅倉・中野	81
21	菅生小学校裏山遺跡	倉敷市西坂	旧石器～中世の集落	昭和59・60～62年度	21,450㎡	浅倉・中野・亀山・小松原	81
	西坂古墳	倉敷市西坂	古墳時代の墳墓	昭和61年度		中野・亀山	81
22	三田散布地	倉敷市三田	中世の水田	昭和61年度	200㎡	井上	81
23	二子14号墳	倉敷市二子	古墳時代の墳墓	昭和61～62年度	1,700㎡	井上・松本・亀山	81
24	矢部古墳群A	倉敷市矢部	古墳時代の墳墓群	昭和59・61年度	4,400㎡	浅倉・大智	82
25	矢部古墳群B	倉敷市矢部	弥生時代の集落・古墳時代の墳墓群	昭和59・61～62年度	2,400㎡	井上・大智	82
26	矢部大坑遺跡	倉敷市矢部	弥生時代の集落・中世の祭祀跡	昭和59・62年度	1,200㎡	内藤・大智	82
27	矢部奥田遺跡	倉敷市矢部	縄文時代の貝塚・古墳時代の粘土採掘跡	昭和59・62年度	2,800㎡	山磨・内藤・大智・佐守	82
28	矢部堀越遺跡	倉敷市矢部	弥生時代～中世の集落・墳墓	昭和59・62年度	7,400㎡	浅倉・内藤・大智・石田	82
29	郷境墳墓群	岡山市津寺	弥生時代～古墳時代の墳墓群	昭和61～62年度	1,365㎡	井上・松本・亀山	89
30	前池内遺跡	岡山市津寺	弥生時代～中世の集落・墳墓	昭和61～62年度	6,835㎡	正岡・井上・中野・川崎・小松原	89
	前池内3号墳	岡山市津寺	古墳時代の墳墓	昭和62年度	1,675㎡	田中・亀山	89
	前池内4～7号墳	岡山市津寺	古墳時代の墳墓群	昭和63年度	990㎡	中野・福田・後藤	89
31	後池内遺跡	岡山市津寺	弥生時代・中世の集落	昭和61年度	240㎡	正岡・井上・田中・川崎・亀山	89
	後池内古墳	岡山市津寺	古墳時代の墳墓	平成元年度		葛原・土井	89
32	黒住・雲山遺跡	岡山市津寺	縄文時代～中世の集落・墳墓	昭和61～63年度	24,463㎡	正岡・松本・井上・山磨・内藤・田中・川崎・片山・大智・佐守・澤山・柴田	89
33	甫崎・天神山遺跡	岡山市津寺	縄文時代～中世の集落・墳墓・城跡	昭和61～平成元年度	15,729㎡	正岡・浅倉・井上・内藤・岡本・宇垣・片山・石田・大智・澤山・柴田	89
34	三手遺跡	岡山市三手	古墳時代～近世の集落・水田・墳墓	昭和61・63年度	20,584㎡	正岡・小柴・山磨・二宮・吉田・中野・川崎・小田・福田・亀山・大橋・後藤	90
				平成6年度	1,730㎡	伊藤・平井・中野・三上・小延・東呂木・大村・山本・高見・蛯原	未刊
35	津寺遺跡	岡山市津寺	弥生時代～近世の集落・水田・官衙・墳墓	昭和61・63～平成4年度	87,290㎡	葛原・正岡・小柴・井上・松本・高畑・山磨・岡田・二宮・福田・浅倉・林・吉田・野上・中野・窪田・栗尾・垣内・井上・川崎・光永・島崎・源・小田・福田・広瀬・山本・片山・田代・亀山・安井・佐守・大橋・小松原・澤山・弘田・柴田・古市・桑原・村田・久保・森・後藤・飯島・佐伯・谷岡・土井・石黒・波多野・守屋	90・98・104・116・127
36	高塚遺跡	岡山市高塚	弥生時代～中世の集落・祭祀跡	昭和62～平成元年度	16,195㎡	正岡・松本・浅倉・窪田・古谷野・江見・岡本・栗尾・垣内・川崎・平井・長川・佐守・小松原・弘田・横山・森・谷岡・石田	未刊
37	加茂政所遺跡	岡山市加茂	弥生時代～近世の集落・寺院・水田・墳墓・鋳造跡	平成元～4年度	12,686㎡	正岡・松本・浅倉・窪田・古谷野・出原・江見・岡本・吉久・平井・川崎・長川・平松・亀山・古市・佐守・澤山・弘田・横山・柴田・森・守屋	138
38	高松原古才遺跡	岡山市高松原古才	弥生時代～中世の集落	平成元～2年度	1,682㎡	正岡・浅倉・古谷野・窪田・川崎・弘田	138
39	立田遺跡	岡山市立田	弥生時代～中世の集落	平成元～2年度	1,103㎡	森・守屋	
40	富原西奥古墳	岡山市富原	古墳時代の墳墓	昭和62・63年度	300㎡	松本・佐守	83
41	富原大池奥山遺跡	岡山市富原	一次調査のみ	昭和63年度	300㎡	松本・佐守	83
42	大岩遺跡	岡山市富原	弥生時代～近世の集落・墳墓	平成4年度	1,583㎡	正岡・浅倉・二宮・古谷野・中野・松岡・澤山・柴田	128

番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	調査年度	調査面積	調査担当者	報告書
43	田益遺跡	岡山市田益	弥生時代～中世の集落・墳墓	平成２～３年度	5,440㎡	伊藤・松本・岡田・二宮・窪田・野上・山本・佐守・長門	128
44	白壁古墳	岡山市横井上	古墳時代の墳墓	平成２年度	300㎡	松本・佐守	83
45	白壁奥遺跡	岡山市横井上	古墳時代～古代の製鉄跡・墳墓	平成４年度	3,500㎡	下澤・竹井・瀧川	128
46	平福古墳群	岡山市玉柏	古墳時代の墳墓群	平成元年度	1,000㎡	葛原・井上・大智	83
47	馬屋遺跡	山陽町馬屋	古代～中世の集落	平成３～４年度	10,412㎡	伊藤・下澤・二宮・窪田・野上・平松・横山	99
48	池新田遺跡	山陽町穂崎		平成３年度	1,120㎡	伊藤・下澤・二宮・窪田・野上・平松・横山	99
49	新屋敷遺跡	山陽町穂崎	弥生時代の集落	平成３年度	1,164㎡	伊藤・下澤・二宮・窪田・野上・平松・横山	99
50	長尾遺跡	山陽町	遺物包含層	平成３年度	50㎡	下澤・平松・横山	99
51	斎富遺跡	山陽町斎富	縄文時代～中世の集落	平成３～４年度	20,580㎡	伊藤・下澤・井上・岡田・福田・平井二宮・窪田・大森・野上・古谷野・竹井吉久・山田・石田・山本・長川・田原・東呂木・松岡・平松・安井・大橋・高田横山・氏平・瀧川・長門・根木	105
52	斎富古墳群	山陽町斎富	古墳時代・中世の墳墓群	平成２～４年度	1,683㎡	下澤・栗原・福田・松岡・安井・古市・澤山	99
53	勘定口２号墳	瀬戸町塩納	古墳時代の墳墓	平成４年度	370㎡	福田	99
54	塩納成遺跡Ａ	瀬戸町塩納	遺物包含層	平成２年度	73㎡	下澤・栗原	99
	塩納成遺跡Ｂ	瀬戸町塩納		平成２年度	80㎡	下澤・栗原	
55	実教寺北遺跡	瀬戸町万富	遺物包含層	平成元～２年度	270㎡	下澤・栗原・大智	99
	実教寺南遺跡	瀬戸町万富		平成元～２年度	340㎡	下澤・栗原	
56	保木池尻遺跡	瀬戸町保木	一次調査のみ	平成元年度	190㎡	下澤・大智	99
57	保木西遺跡	瀬戸町保木	一次調査のみ	平成元年度	220㎡	下澤・大智	99
58	保木窯跡	瀬戸町保木	一次調査のみ	平成２年度	200㎡	下澤・栗原	99
59	奥池西遺跡	瀬戸町万富	一次調査のみ	平成２年度	537㎡	下澤・栗原	99
	奥池北遺跡	瀬戸町万富		平成２年度			
60	松尾古墳群	瀬戸町万富	古墳時代の墳墓群	平成元～２年度	610㎡	下澤・栗原・大智	99
	松尾窯跡	瀬戸町万富	中世の窯跡	平成元年度		下澤・大智	
61	満願寺遺跡	熊山町奥吉原	一次調査のみ	平成２年度	58㎡	下澤・栗原	99
62	荒神社東遺跡	佃前市福石		昭和51年度	80㎡	岡本	25

平成11年３月31日現在



凡　　例

1　本報告書に記載された高度は、海抜高である。方位は特に示さない限り磁北であるが、古代以降の一部の遺構については、磁北と真北を並記した。また、第１図～第６図については国土座標系の座標北を示した。遺跡付近の磁北線偏差は西偏６°30′を測る。

2　グリッドは国土地理院第５座標系により設定した。表記はＸ＝－145400・Ｙ＝－48700を起点として、Ｘ軸をアルファベットでＹ軸を数字で示した。

3　土層断面の土色表記は、各調査者の記述に従っており、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修　1988年版）によるものもある。

4　各遺構・遺物実測図の縮尺率は、原則として種類ごとに下記のとおりであるが、例外については縮尺を明記した。

遺構　竪穴住居・掘立柱建物：1／60　各種土壙・土壙墓・井戸：1／30　土器棺墓：1／20

遺物　土器・瓦：1／4　石製品・金属製品・土製品：1／2、1／3　　玉類：1／1

5　遺構・遺物の番号はそれぞれ種類別であり、各遺跡ごとに通し番号を付している。

6　各遺構全体図で示す遺構名は、下記のとおり省略し番号の前に付しており、番号のみは土壙である。

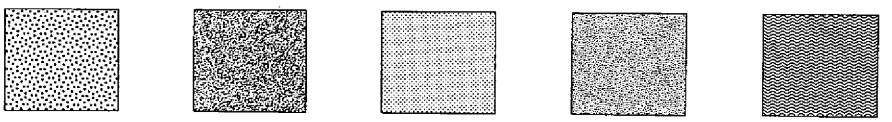
竪穴住居：住　掘立柱建物：建　袋状土壙：袋　焼成土壙：焼　井戸：井

土壙墓：墓　土器棺墓：棺

7　遺物番号は、土器・瓦は番号のみ、それ以外のものには材質にしたがって下記の記号を番号の前に付した。

石製品：Ｓ　金属製品：Ｍ　土製品：Ｃ　ガラス製品：Ｇ

8　遺構図における、被熱範囲、焼土や炭や粘土の分布範囲、貝層については、下記のスクリーントーンで表現した。



被熱範囲　　焼土　　炭　　粘土　　貝層

9　土器実測図の中軸線左右の白抜きは、小破片のため口径復元に不確実性があることを示す。

10　遺物名については、壺形土器、甕形土器、高杯形土器などを壺、甕、高杯のように略して用いた。

11　本報告書で用いる時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分、世紀を併用した。また、弥生時代から古墳時代の時期区分については「津寺遺跡２」の序説Ⅴに示す時期区分に基づいている。なお、本書では便宜的に、須恵器の出現をもって古墳時代前期と中期を分け、７世紀代については後期に含めている。

12　第Ⅱ部第１章「発掘調査の経緯と経過」で報告している調査区名については、報告書作成にあたっての地名確認作業によって一部不適切な名称が含まれていることが判明した。そのため本文中

では、第６図と第１表のうち１～７・11の調査区を「加茂政所遺跡第１微高地」、16～36の調査区を「加茂政所遺跡第２微高地」、37の調査区を「加茂政所遺跡第３微高地」として記述することにしている。

また、第７図と第２表の38～47・53～55の調査区は『高松原古才遺跡』、48～52・56～58の調査区は『立田遺跡』として報告している。

13　本報告書に掲載した地図のうち、第２図は建設省国土地理院発行の1／25,000の地形図「倉敷」および「総社東部」を複製し利用したものである。

総　目　次

カラー写真

序

序

例言

凡例

総目次

Ⅰ　収載遺跡の位置と地理的・歴史的環境……1

Ⅱ　発掘調査および報告書作成の経緯と経過……5

第１章　発掘調査の経緯と経過……7

第１節　発掘調査の経緯と１次調査……7

第２節　発掘調査の体制……10

第３節　発掘調査の経過と日誌抄……12

第２章　報告書の作成と構成……17

第１節　報告書作成の体制……17

第２節　報告書の構成……18

第３節　時期区分……19

Ⅲ　発掘調査報告……21

1　加茂政所遺跡……23

2　高松原古才遺跡……923

3　立田遺跡……969

Ⅳ　自然科学による鑑定・分析……1081

1　加茂政所遺跡の自然科学分析調査報告　パリノ・サーヴェイ株式会社…1083

2　加茂政所遺跡の植物珪酸体分析　パリノ・サーヴェイ株式会社…1090

3　加茂政所遺跡における弥生時代土壙墓出土の歯牙について　小田嶋梧郎……1094

4　加茂政所遺跡出土の動物遺体　金子浩昌……1099

5　岡山県加茂政所遺跡出土ウマ遺存体　富岡直人……1111

6　加茂政所遺跡出土の土器・瓦の胎土分析　白石　純……1123

7　加茂政所遺跡出土のガラス玉、ガラス滓および銅鏃の分析　白石　純……1130

8　加茂政所遺跡出土銅釧の鉛同位体比分析　(財)元興寺文化財研究所　保存科学センター　東京国立文化財研究所　保存科学部　平尾良光・榎本淳子……1132

9　岡山県岡山市加茂政所遺跡出土金属塊の自然科学的分析　内田俊秀……1141

10　加茂政所遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査　大澤正己……1143

11　加茂政所遺跡出土鉢形土器内の赤色物について　本田光子……1200

報告書抄録

図　目　次

第１図　収載遺跡位置図（1/1,200,000）…… 1
第２図　収載遺跡周辺の遺跡分布図(1/50,000) …… 3
第３図　一次調査トレンチ配置図(1/3,000) …… 8
第４図　一次調査土層断面(1/80) …… 9
第５図　Ｔ－30出土遺物…… 10
第６図　加茂政所遺跡調査区配置図(1/2,000) …… 13
第７図　高松原古才遺跡・立田遺跡調査区配置図(1/2,000) …… 15

表　目　次

第１表　加茂政所遺跡　発掘調査・報告書作成担当者等一覧表…… 14
第２表　高松原古才遺跡、立田遺跡　発掘調査・報告書作成担当者等一覧表…… 15
第３表　時期区分表…… 20

カラー写真目次

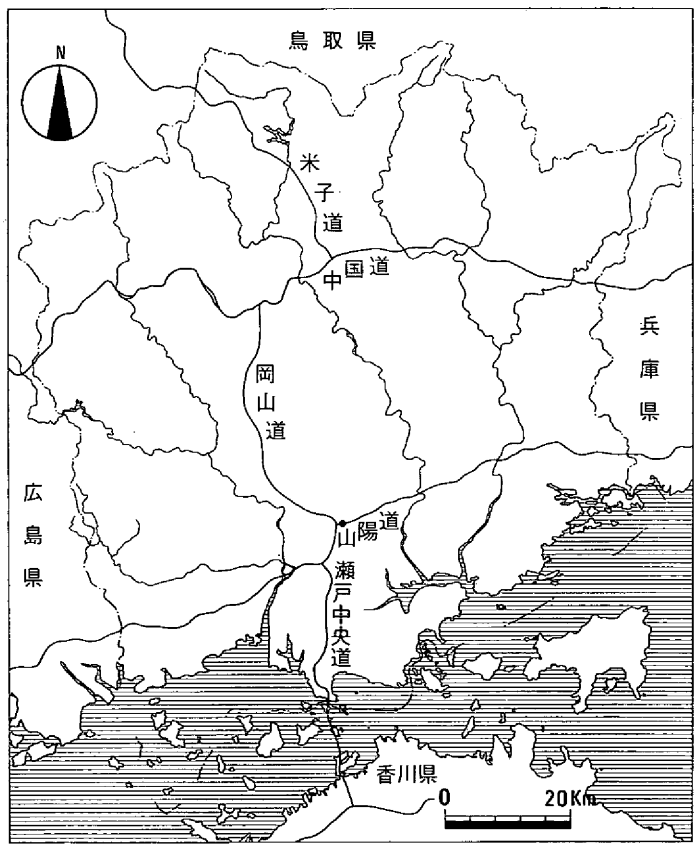
〈第１分冊〉
カラー写真１　　収載遺跡周辺の航空写真
カラー写真２－１　土壙２・５貝出土状況（東から）
　　－２　弥生時代中期中葉の土器
カラー写真３－１　銅釧
　　－２　顔のある分銅形土製品
カラー写真４－１　土器棺墓群検出風景（南東から）
　　－２　弥生時代後期の土器棺
カラー写真５－１　竪穴住居87遺物出土状況（南西から）
　　－２　塼仏
カラー写真６－１　飛鳥様式の軒丸瓦
　　－２　古代末～中世の瓦
カラー写真７－１　土壙375（梵鐘鋳造遺構）（南西から）
　　－２　梵鐘鋳型（竜頭・撞座ほか）
〈第３分冊〉
カラー写真８　　立田遺跡　土壙３出土遺物

Ⅰ　収載遺跡の位置と地理的・歴史的環境

Ⅰ　収載遺跡の位置と地理的・歴史的環境

本書に収載した３遺跡は岡山市の北西部に位置し、現在の行政区分上は岡山市大字加茂・高松原古才・立田にまたがる。この辺りは広義の岡山平野にあたるものの、３方を山に囲まれており、足守川に沿い４～５km、幅が２kmほどの小平野である。東は標高30mの孤立丘陵である中山丘陵によって岡山市街地とは区別され、北は吉備高原の南裾に連なる標高250～300mの竜王山～藤ヶ鳴山地がひかえ、また西南部では緩やかな斜面をなす都窪丘陵の北東端が延びている。なお、これらの丘陵地の多くは中生代起源の花崗岩であるが、中山丘陵は砂岩などの古生層からなる。さらには、南では現在の新幹線のすぐ南あたりが弥生時代から古墳時代にかけての海岸線となっていたようである。昭和46年に岡山市に合併されるまで高松町として存続していたこの地域はひとつの地理的空間を形成している。

この地域は、吉備高原に源を発した足守川の中流域に相当するが、かつては古高梁川がこの地を東流して古足守川と合流しており、それらの河川によって形成された谷底平野に区分される。現在は圃場整備や市街地化が進行しているものの、航空写真や大縮尺の地図を参考にみると網の目状にはりめぐらされた河道やそれに沿って形成された自然堤防が認められる。なかでも、加茂用水として現在にその名残を残す古高梁川の東分流はこの地を東に流走したのち、中山丘陵の西側で進路を南にかえ吉備の穴海とよばれた内湾にそそいでいた。海進時の状況は詳しくはわからないが、弥生時代以降の集落は基本的にそれらの自然堤防上に形成されている。さらに、古代律令制下においては吉備の中山は備前と備中の国境であり、また高梁川の東分流はこのあたりでは賀夜郡と都宇郡の境をなしていたようである。



第１図　収載遺跡位置図（1/1,200,000）

さて、この地域における人類最初の足取りは、甫崎天神山遺跡出土のナイフ型石器に求めることができる。つづく縄文時代においても、矢部伊能軒遺跡・矢部奥田遺跡で早期の押型紋土器が出土している。ただし、生活の痕跡が認められるのは縄文中期末のことである。その時期の遺跡としては、甫崎天神山遺跡、西尾貝塚や矢部貝塚などが知られ、山麓の緩斜面や扇状地を中心に立地する。そのなかでも矢部奥田貝塚では、ヤマトシジミを主体とする貝塚が形成されていた。さらに後・晩期に入ると、人々が積極的に沖積地に

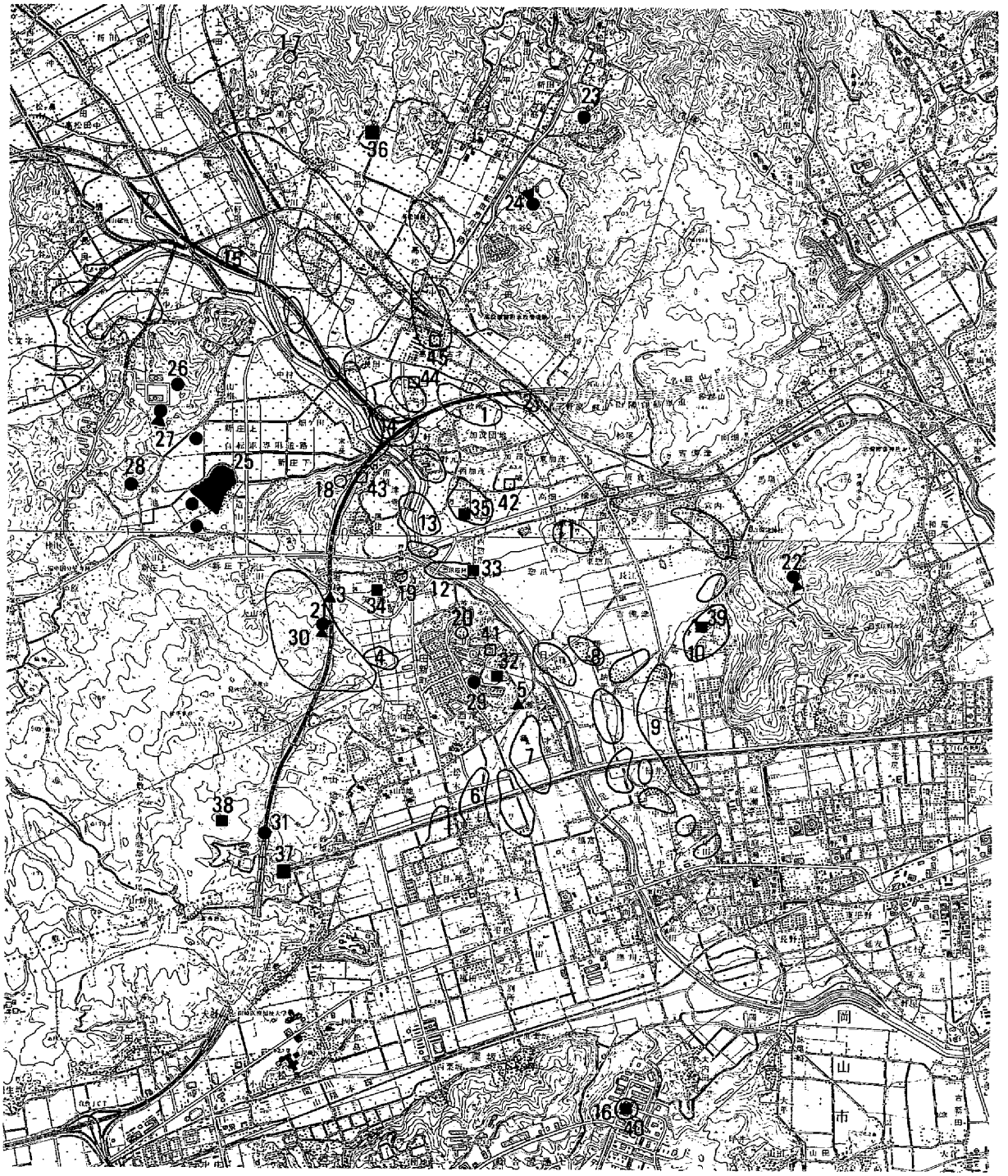
入っていった様子が吉野口遺跡や津寺遺跡などから、また総社市域ではあるが、南溝手・窪木遺跡において出土した多くの土器片からもうかがえる。

弥生時代に入ると、沖積平野上の微高地に集落が形成される。前期段階では岩倉遺跡や津寺遺跡、東山遺跡、川入遺跡などで遺構・遺物の存在が知られる。また、総社平野の窪木遺跡、南溝手遺跡は、この時期の拠点集落とみられ朝鮮半島に系譜の求められる松菊里型住居や玉作り工房も確認されている。中期には高田貝塚や新邸貝塚、上東遺跡、津寺遺跡や前池内遺跡などがあり遺跡数は増大する。これら前期から中期にかけての集落の実態はまだ不明な点が多いが、汽水域産の貝類を主体とした小規模貝塚が多く形成されているのが特徴であろう。また、中期末になると津寺遺跡のような沖積地の集落以外にも、丘陵部に矢部堀越遺跡、黒住遺跡、前池内遺跡といった谷水田を基盤とするとみられる小規模かつ短期間の集落が形成される。

後期になると平野部の微高地上に津寺遺跡・高塚遺跡・矢部南向遺跡などの大規模な集落が形成され、津寺遺跡では、集落の縁辺の低位部に水田も造られる。この時期の集団墓地は丘陵上に存在し、甫崎天神山遺跡がそれにあたる。また、高塚遺跡からは銅鐸や貨泉が、加茂Ｂ遺跡では小型鏡２面と、矢部南向遺跡では小銅鐸が出土するなど、この期の遺跡には舶載品を含む青銅祭器が多く存在し、かつ楯築墳丘墓、雲山鳥打墳丘墓、鯉喰神社墳丘墓や矢藤寺山墳丘墓など墳丘墓の出現とあわせて特色付けられよう。その中でも楯築墳丘墓は直径40ｍの円丘部の両側に方形部のついた全長が80ｍ余りの大型の墳墓であり、しかもその時期に津寺遺跡の集落が一時的に途絶え、矢部南向遺跡や加茂Ａ・Ｂ遺跡が盛隆することとあわせて強大な首長権の形成過程を知る上で興味深い現象といえよう。生産力の安定化や人口の増加に裏付けられて、すでにこの地が吉備の中枢を形成していたことを示すであろう。

古墳時代前期の集落には、津寺遺跡、加茂Ａ・Ｂ遺跡、矢部南向遺跡や上東遺跡が知られる。そのうち津寺遺跡においては、竪穴住居の総数約280軒といった大規模な集落の形成がみられる。このうち50～60軒が同時並存しており、また山陰や畿内など他地域からもたらされた、あるいは模倣した土器も多く、おおがかりな人的交流がうかがえる。こうした集落の状況を背景として、特殊器台型埴輪をもつ矢部大坑古墳（前方後円墳、全長30ｍ）や中山茶臼山古墳（前方後円墳、全長120ｍ）が出現し、また郷境墳墓群や矢部古墳群のような小規模方形墳や土壙墓群の存在も知られるようになった。中期の集落としては高塚遺跡や津寺・加茂小遺跡があるが、前・後期に比べ集落の状況は不明である。ただし、高塚遺跡や菅生小学校裏山遺跡からは朝鮮半島系の土器が多く出土している。首長墓の系譜は、尾上車山（前方後円墳、140ｍ）のあとは足守川上流部平野に移り、小盛山古墳（円墳、100ｍ）や佐古田堂山（前方後円墳、150ｍ）が続く。その後に位置付けられる造山古墳は全国４番目の規模を持ち、この小地域をこえて吉備全土を掌握した首長であろう。その後の首長墓系列は総社平野南部に移って、足守川中流域では小造山古墳（全長140ｍ、前方後円墳）を最後にその系譜は途絶える。

後期に入ると三手遺跡や津寺遺跡の微高地東側（高田調査区）で集落が展開する。津寺遺跡高田調査区は溝で区画された数棟の竪穴住居からなる単位がみられ、炉とみられる土壙や鉄滓などの遺物から鍛冶集団の集落とみられる。また、周辺の丘陵部には有力家父長層の台頭を象徴する群集墳の築造が始まる。矢部古墳群や王墓山古墳群、大崎古墳群、前池内古墳群などがそれで、その中には「官」印の須恵器を出土した前池内３号墳や二子14号墳のような外護列石をもつ２段築成の終末期方墳もあり、官僚化した被葬者の姿も見て取れる。



1 加茂政所遺跡
2 高松原古才・立田遺跡
3 矢部奥田遺跡
4 矢部伊能軒遺跡
5 西尾貝塚
6 上東遺跡
7 岩倉遺跡
8 新邸遺跡
9 川入遺跡
10 東山遺跡
11 高田遺跡
12 矢部南向遺跡
13 加茂A遺跡
14 津寺遺跡
15 高塚遺跡
16 天神坂遺跡
17 浦尾遺跡
18 雲山鳥打遺跡
19 鯉喰神社遺跡
20 楯築遺跡
21 矢部大坑古墳
22 中山茶臼山古墳
23 小盛山古墳
24 佐古田堂山古墳
25 造山古墳
26 折敷山古墳
27 小造山古墳
28 新池大塚古墳
29 王墓山古墳
30 矢部古墳群
31 二子14号墳
32 日畑廃寺
33 惣爪廃寺
34 津峴駅推定地
35 都宇郡衙推定地
36 大崎廃寺
37 二子御堂奥窯跡
38 御堂奥廃寺
39 賀陽氏居館跡
40 大内田廃寺
41 日幡城
42 加茂城
43 天神山城
44 三本木知行所
45 高松知行所

第２図　収載遺跡周辺の遺跡分布図（1/50,000）

古代には、山陽道に沿って都宇郡衙の推定地である幸利神社や惣爪の塔心礎、「矢部廃寺」が知られる。「矢部廃寺」は、出土した平城宮6663・6225亜式の軒瓦が、備中国府系と呼ばれるもので同系統の瓦が国分寺や国分尼寺にみられることや地名考証などから津峴駅家に推定されている。また、吉野口遺跡でも山陽道と直交するとみられる街路と掘立柱建物が存在し、官衙的施設と推定されているほか、海岸線付近に立地する川入遺跡では築地と国府系瓦の存在から公的な港湾施設が想定されている。さらに、古代山陽道からは少し北にそれるが、津寺遺跡では長辺110m、短辺84m程の方形の区画溝とそのなかに整然と配置された掘立柱建物群が存在する。奈良時代中期の短期間の利用であるが、官衙的性格をもった遺構と理解されている。しかも、その周辺部においても掘立柱建物や胞衣壺・三彩の壺が出土しており、居住域が広がっていたとみられる。さらにはこの遺跡の西側において平安期にも掘立柱建物と墨書土器や緑釉陶器の浄瓶などが出土しており、生石荘など荘園との関わりも感じさせる。なお、7世紀代にさかのぼると方形区画の西側にある河道に大規模な護岸工事が行われており、津寺遺跡の中心部分は洪水から守るべき特別な場所とみられていたのかもしれない。この地に条里地割が明瞭に認められないのは度重なる河川の流路変更にあったとみられる。さらに、白鳳期の寺院として大崎廃寺や日畑廃寺があるが、ともに後期古墳の系譜につながるもので有力氏族の氏寺とみられる。これら備中の氏寺には、二子御堂奥瓦窯で焼成された吉備式軒瓦が用いられている。さらに平安期にも、二子御堂奥廃寺や日差寺、大内田廃寺などの山岳寺院の建立が行われている。そのうちの日差寺は、天台宗の大伽藍を擁していたが、江戸初期に領主戸川氏からの法華宗改宗に抗して廃寺となった。

中世に入ると高塚遺跡や三手向原遺跡・津寺遺跡にみられるように、従来の集落を基にしつつ、集落・可耕地ともに大きな広がりを感じさせる。それらのなかでも高塚遺跡や津寺遺跡の土筆山調査区のように、室町時代に入ると周囲を堀で囲んだ屋敷群の存在や輸入陶磁器・鏡などの副葬品を持った墓がみられることなど、国人化した有力農民層の台頭を感じさせる。

さらに中世末には高松城水攻めの舞台となった備中高松城があり、その周囲には織田方・毛利方両軍の陣城が築かれている。調査が行われた甫崎天神山城や糠山城は毛利方の陣所であり、造山古墳の後円部頂の土塁もこのときにつくられたものである。

現在の村落景観の基礎は江戸時代初期に形成されたと見られる。この地においては旗本領が複雑に入り組んでいたが、多くは花房家やその庶流榊原家の所領となった。その際に新たな開田や村の統廃合が行われたとみられ津寺遺跡において調査された集落3ケ所はいずれも17世紀前半には廃絶している。また、それぞれの領地内には、三本木と高松知行所が置かれた。このうち高松知行所は近世初頭に整備された松山往来が原古才地内で鉤の手状に折れ曲がった個所に館の字名を残しその存在が知られている。

このように、従来から全国的にも特筆すべき遺跡が知れていたこの地域が、加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡の発掘成果とあわせて吉備中枢地域としてより強く認識されるであろう。(弘田)

主要参考文献

「気候・風土」『岡山県史』　1983年

「岡山県埋蔵文化財報告」127『津寺遺跡5』岡山県教育委員会　1998年

『吉野口遺跡』岡山市教育委員会　1997年

Ⅱ　発掘調査および報告書作成の経緯と経過

第１章　発掘調査の経緯と経過

第１節　発掘調査の経緯と１次調査

山陽自動車道は、大阪府吹田市を起点に山口県下関市に至る延長502kmの高速自動車道である。1971（昭和46）年には、基本計画が策定され、翌年にはルートの決定が行われた。岡山県教育委員会では、1972年に国庫補助を受けて県内予定路線に含まれる範囲について遺跡分布調査を実施した。その後、建設工事区域内に所在する埋蔵文化財の保護について日本道路公団と協議を行い、やむをえない遺跡については、工事施工に先立って発掘調査を実施した。

今回報告する加茂政所遺跡ほかは、前年までに報告した岡山ジャンクション部分に所在する津寺遺跡の東に位置している。足守川下流域に形成された沖積平野で、弥生時代以後の遺跡の密集した地域である。

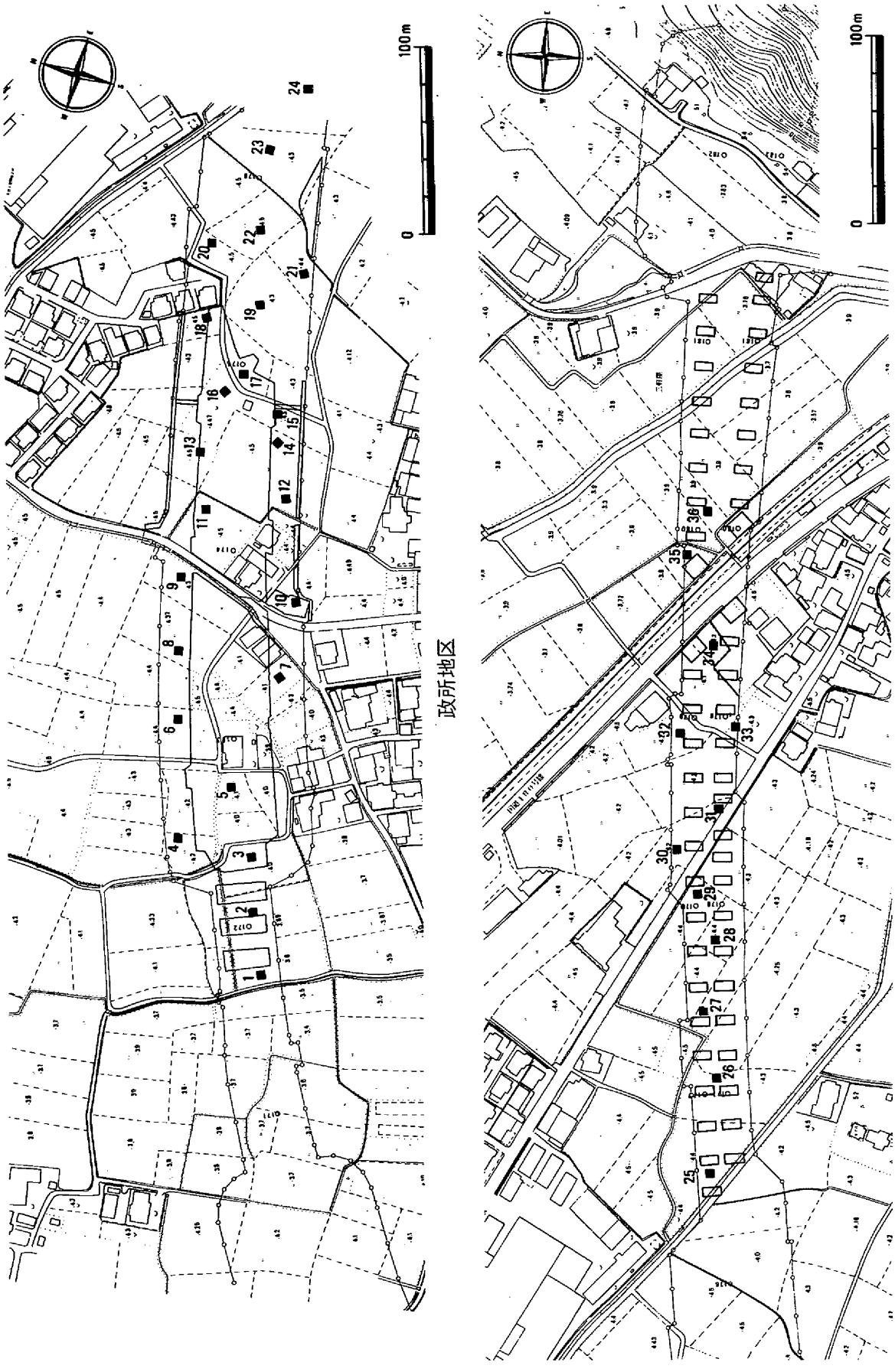
施工区域には、大規模な遺跡の存在が明確になってきたことから、昭和62年４月28日には、新たに、岡山県、岡山県教育委員会、日本道路公団広島建設局との三者間に「幹線自動車道埋蔵文化財調査対策協議会」を設置し、工事との調整、調査の効率化、調査員の増員等、発掘調査に伴う諸問題に対する調整会議を定期的に開催した。なお、本協議会は、その後建設される中国横断自動車道などについても対象として取り組んだ。

早島ジャンクションから岡山総社インターチェンジまでの発掘調査が最盛期に達していた1989（平成元）年、岡山ジャンクションから姫路方面へ向かうルートについて協議が進められていた。ルート上にあたる岡山市加茂の政所集落付近は、岡山市教育委員会発行の『岡山市遺跡分布地図』（1983年刊）に、弥生時代の散布地として記載されていた。ルート予定地の表面調査を実施したところ、当該地には、弥生時代から中世の遺物が散布していることを確認した。さらに、東方の岡山市立田にも遺跡が所在することが分かった。

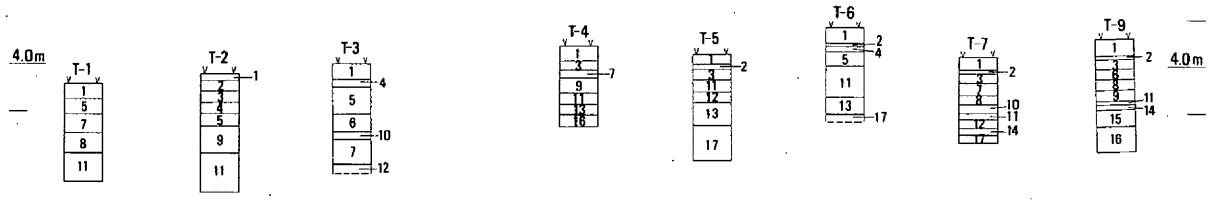
この地域の発掘調査範囲を明確にするため、公団の用地取得に合わせて、１次調査を行った。岡山ジャンクション東端から加茂大明神神社東の市道までを1989年５月22日から同年６月１日の間に30ケ所、その東から鼓山トンネル入口までを同年８月７日から８月10日の間に12ケ所のトレンチ調査を実施した。

１次調査の結果、岡山ジャンクションの東へも少し微高地が連続し、狭い低位部を挟んで加茂政所の散布地は安定した微高地であり、弥生時代から中世の遺構・遺物が発見され、その密度の高いことも分かった。この微高地の東側では北西から南東へ流れる大きな旧河道を確認した。高松原古才・立田にも安定した微高地があり、弥生時代から中世の遺構・遺物が多い、ＪＲ吉備線の東側まで微高地が拡がっているが、その東側は山裾まで低湿地となっていることが分かった。

1989年末では、岡山ジャンクション付近の調査対象面積が18,000㎡余も残っており、政所・立田付近において１次調査で明らかになった遺跡の面積は、約30,000㎡にのぼっていた。岡山県教育委員会では、山陽自動車道の発掘調査員として、1988年度に調査員を33人に増員していたが、1989年度には

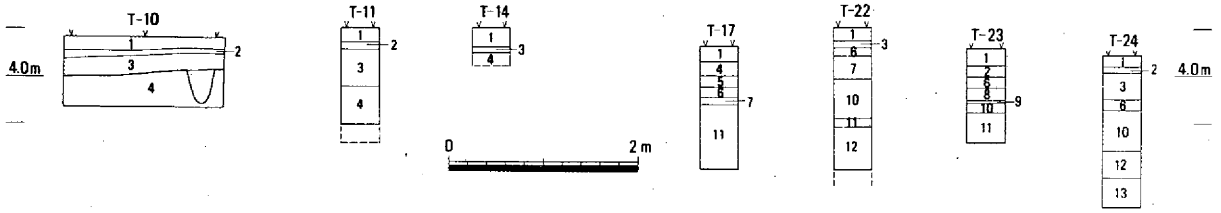


第３図　一次調査トレンチ配置図（1/3,000）



1　耕土
2　淡灰褐色細砂混り粘土
3　黄灰色細砂混り粘土
4　黄橙色粘土
5　青灰色粘土
6　暗青灰色粘土
7　黄灰色細砂混り粘土
8　青灰色粘土混り細砂
9　暗青灰色粘土
10　灰青色粘土
11　淡青灰色細砂
12　青灰色粗砂

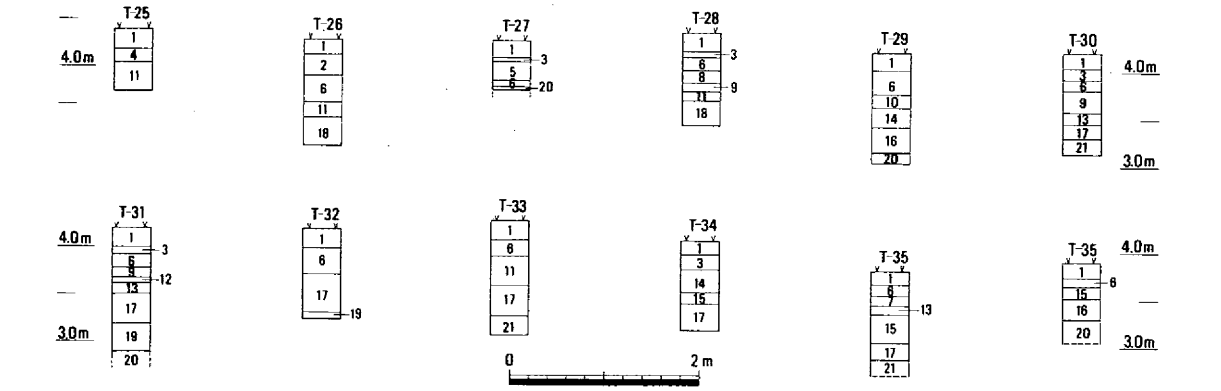
1　耕土
2　浅黄橙色粘土
3　浅黄橙色細砂混り粘土
4　浅黄橙色粗砂
5　淡灰褐色粗砂混り粘土
6　浅黄橙色粗砂混り粘土
7　黄橙色粗砂混り粘土
8　黄褐色粘土
9　浅黄橙色粗砂
10　黄褐色粘土
11　灰褐色細砂混り粘土
12　浅黄橙色粗砂
13　青灰色細砂混り粘土
14　青灰色粘土
15　灰褐色粘土
16　黄灰色粘土
17　青灰色細砂



1　耕土
2　浅黄橙色粘土混り粘土
3　灰褐色粘土
4　黄褐色粘土

1　耕土
2　暗灰色粗砂混り粘土
3　青灰色粗砂
4　淡灰褐色粗砂混り粘土
5　浅黄橙色粗砂混り粘土
6　浅黄橙色粗砂
7　黄橙色細砂
8　褐色粗砂
9　淡青灰色粗砂
10　青灰色粗砂
11　青灰色粗砂混り粘土
12　灰色粘土
13　淡灰色粘土

政所地区



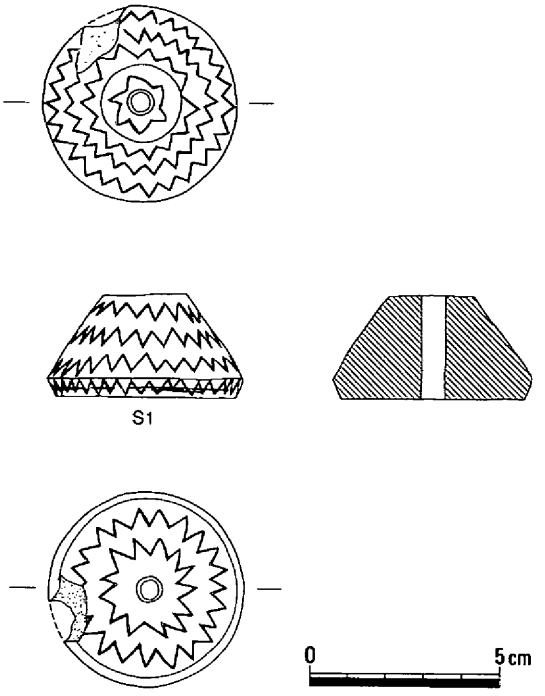
1　耕土
2　浅黄橙色細砂
3　青灰色粘土粗砂
4　淡灰褐色粘土混り細砂
5　黄橙色粗砂
6　浅黄橙色粘土
7　灰白色粘土
8　浅黄橙色粗砂混り粘土
9　浅黄橙色粗砂
10　黄灰褐色粘土
11　淡灰褐色粘土
12　浅黄橙色粗砂
13　淡黄橙色粘土
14　淡青灰色
15　浅黄橙色粘土
16　灰青色粘土
17　灰褐色粘土
18　青灰色粘土混り微砂
19　灰褐色粘土（Mnを含む）
20　暗青灰色粘土
21　黄灰色粘土

立田地区

第４図　一次調査土層断面（1/80）

さらに45人に増員して対応したところである。

しかし、供用開始予定を考慮すれば、さらに多数の増員となるが、きわめて困難な状況にあった。そこで後年次に対応することもやむをえないこととして、その手法と範囲について検討を重ねた。地下の遺構への影響を考慮するため、公団において加重実験を行い、その結果から土盛り５ｍ以下であれば遺構への影響はほとんど与えないことから、現地表面にジオグリッドという敷物を敷いて、さらなる保護策を講じる方法を考えた。そのことから、盛土法面の埋土の厚さ５ｍ以下と側道敷部分については、将来、片側３車線に拡幅する際に全面発掘調査をする協議が整った。対象となる面積は約16,000㎡である（第６・７図の網目部分）。ほかに、高架橋の下で、掘削されない部分約4,000㎡についても、発掘調査対象地から除いた。また、側溝についても、包含層に達しない部分を後年次対応とした。　（正岡）



第５図　T－30　出土遺物

第２節　発掘調査の体制

発掘調査は、日本道路公団と岡山県の委託契約に基づき岡山県教育委員会が当たった。なお、契約事項は文化課が行い、発掘調査は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。

平成元年度

岡山県教育委員会

教育長	竹内康夫

岡山県教育庁

教育次長	竹本博明

文化課

課長	吉尾啓介（11月30日まで）
課長	鬼澤佳弘（12月１日から）
課長代理	河野　衛
課長補佐（埋蔵文化財係長）	伊藤　晃
主査	藤川洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所長	長瀬日出明
次長	河本　清
総務課長	竹原成信
課長補佐（総務係長）	藤本信康
主任	岡田祥司
主任	平松郁男
主任	片山淳司
調査第三課長	正岡睦夫
課長補佐（第一係長）	松本和男
第二係長	浅倉秀昭
文化財保護主査	古谷野寿郎
文化財保護主任	川崎　肇
主事	森　宏之

平成２年度

岡山県教育委員会

教　育　長　竹内康夫

岡山県教育庁

教育次長　杉井道夫

文化課

課　長　鬼澤佳弘

課長代理　光吉勝彦

課長補佐（埋蔵文化財係長）伊藤　晃

主　査　藤川洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　長瀬日出明

次　長　河本　清

総務課長　竹原成信

課長補佐（総務係長）藤本信康

主　査　平松郁男

主　任　坂本英幸

調査第三課長　正岡睦夫

課長補佐（第一係長）松本和男

文化財保護主査　出原恒房

文化財保護主査　江見正己

文化財保護主任　平井泰男

文化財保護主任　川崎　肇

文化財保護主事　平松義則

文化財保護主事　佐守　学

主　事　横山伸一郎

第二係長　浅倉秀昭

文化財保護主査　窪田廣志

文化財保護主査　古谷野寿郎

文化財保護主査　岡本寛久

文化財保護主任　吉久正見

文化財保護主事　長川　優

主　事　弘田和司

主　事　森　宏之

主　事　守屋佳慶

平成３年度

岡山県教育委員会

教　育　長　竹内康夫

岡山県教育庁

教育次長　森崎岩之助

文化課

課　長　鬼澤佳弘（12月31日まで）

課　長　渡邊淳平（１月１日から）

課長代理　大橋義則

課長補佐（埋蔵文化財係長）柳瀬昭彦

主　査　時長　勇

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　横山常實

次　長　河本　清

総務課長　藤本信康

課長補佐（総務係長）小西親男

主　査　平松郁男

主　任　坂本英幸

調査第二課長　正岡睦夫

第二係長　浅倉秀昭

文化財保護主事　亀山行雄

主　事　古市秀治

平成４年度

岡山県教育委員会

教　育　長　竹内康夫

岡山県教育庁

教育次長　森崎岩之助

文化課

課　長　渡邊淳平

課長代理　松井新一

課長補佐（埋蔵文化財係長）柳瀬昭彦

主　査　時長　勇

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　横山常實

次　長　河本　清

文化財保護参事　葛原克人

総務課長　北原　求

課長補佐（総務係長）小西親男

主　査　石井　茂

主　任　石井善晴

主　任　三宅秀吉

調査第二課長　正岡睦夫

第二係長　浅倉秀昭

文化財保護主査　古谷野寿郎

文化財保護主査　中野雅美

文化財保護主事　澤山孝之

文化財保護主事　柴田英樹

第３節　発掘調査の経過と日誌抄

1989年（平成元）年に行った１次調査の結果、岡山ジャンクションより東にも遺跡の拡がりが確認されたことから、全面調査を実施することになった。公団からは早期の調査を要請されたが、岡山ジャンクション部分に所在する津寺遺跡と足守川右岸に所在する高塚遺跡の調査に追われていた。津寺遺跡の調査面積は莫大なものであることから、主に高塚遺跡の調査を実施していた調査第三課が担当することになった。加茂政所遺跡などのうち施工上、緊急を要するところがあることから、一部の調査員を抜いて対応せざるをえなかった。

高塚遺跡での担当区域の調査を終了した班から順次、加茂政所・高松原古才・立田遺跡の調査へ入っていくことにした。調査第三課は18名であり、１班３名を原則とし、作業員をそれぞれ30名程配置した。用地買収の遅れた部分があり、施工上急ぐところがあることなどから、調査区域を58ケ所に区分して対応した。

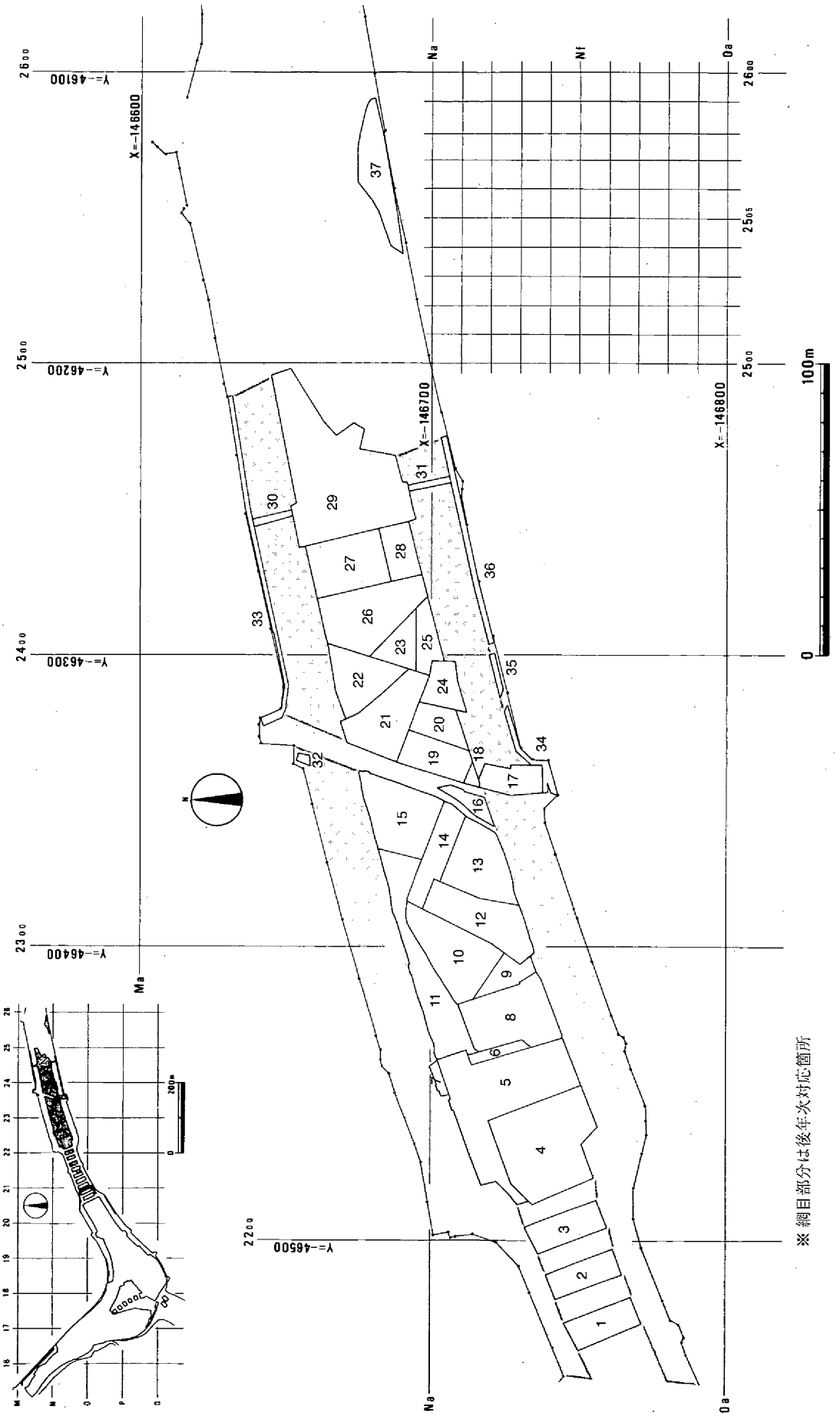
調査にあたっては、効率化を進めるため、重機によって包含層の直上までを排土し、これより下層は人力で掘り下げながら遺構の検出に努めた。ほとんどの地区で、中世から古代、古墳時代、弥生時代と重層的に遺構が検出され、しかも、密度の高いことから調査は困難を極めた。調査区域内の排水についても、用水路へ流すことができないため、排水だめのタンクを設置し、上水を地下へ吸収させるパイプを設置するなどの対応策を取った。

宮西調査区は、古代末以後に一部を削り取られ、残存した部分の北端がわずかに用地内にかかっていた。地元の要望から施工の初めに用地境へ用水路を造ることになったことから、他の地区に先がけて全面発掘調査を行った。国道180号線とＪＲ吉備線の東側にも立田遺跡が少し拡がっているのを確認した。この地点はＪＲ吉備線を跨ぐ工事となるため、施工をＪＲ側に依頼する必要があり、条件整備を急ぐ必要が生じたため、やむをえず、一部の調査員を裂いて全面調査に入ることにした。以上の２ケ所については、1989年度に実施した。

加茂政所遺跡では、西端部の高田高架橋の橋脚が３ケ所存在するが、その他は、すべて土盛り工法となるところである。盛土の法面の一部と側道敷部分については、後年次対応とされていたことから中央部分を調査した。調査予定地の盛土中には、３ケ所に通路となるボックスが造られることになり、工事期間がかかることから先行して調査をする必要が生じた。また、家屋移転の問題などもあって、調査工程でかなり困難を伴った。しかも、重層的な遺構が広域に所在することから、小さな区画に区切り、多数の調査班を投入して調査せざるをえなかった。なお、1990年夏には笠岡市教育委員会の職員の応援を得た。

高松原古才遺跡と立田遺跡は、国道180号線付近から西方の市道付近まで連続し、北西から南東へ拡がる微高地上の遺跡である。この地区は、全域が高架橋となることから、橋脚の基礎部分のみを調査した。その間の遺跡は高架下に残ることになる。側道敷部分についても、後年次対応とされたところである。発掘調査を実施した区域内の遺構は、切断されてしまうことから、近接した橋脚内の遺構との連続性を把握しにくいなどの問題点も生じた。また、狭い区域であるうえ、市道や水路の付け替えなどの必要から分断した調査をせざるをえなかった点も、遺構調査を困難とした点である。

さらに、1991（平成３）年度において、家屋移転の遅れから残っていた加茂政所遺跡の２ケ所につ



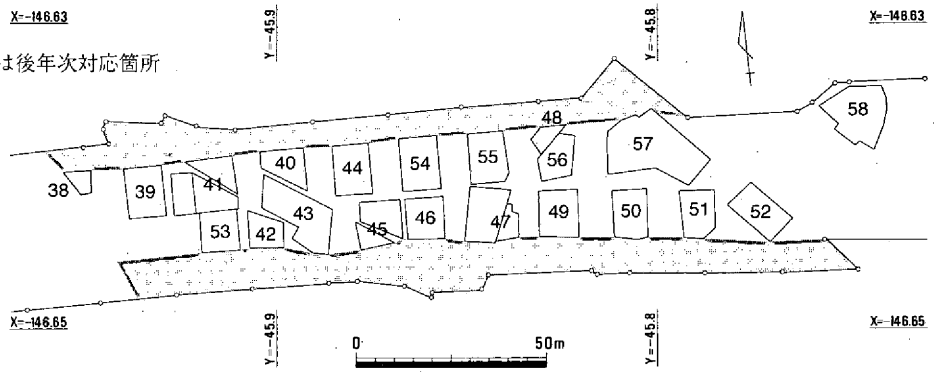
第６図　加茂政所遺跡調査区配置図（1/2,000）

	調査区名	調査面積㎡	調査期間	調　査　担　当　者	整　理　担　当　者
1	高田Ｐ７	237	900618～900629	平井泰男・川崎　肇	平井泰男・難波拓史
2	高田Ｐ８	227	900629～900714	平井泰男・川崎　肇	平井泰男・難波拓史
3	高田Ｐ９	273	900607～900614	平井泰男・川崎　肇	平井泰男・難波拓史
4	高田Ⅰ	960	900405～900606	平井泰男・川崎　肇	平井泰男・難波拓史
5	高田Ⅱ	1,098	900801～901020	平井泰男・川崎　肇	平井泰男・難波拓史
6	高田Ⅲ	70	910201～910306	古谷野寿郎・弘田和司・森 宏之	平井泰男・難波拓史
7	高田Ⅳ	40	910201～910306	古谷野寿郎・弘田和司・森 宏之	平井泰男・難波拓史
8	砂場ⅢＦ	787	920107～920310	亀山行雄・古市秀治	平井泰男・難波拓史
9	砂場ⅢＧ				
10	砂場ⅢＨ	655	920401～920518	澤山孝之・柴田英樹	平井泰男・難波拓史
11	砂場ⅢＤ	2,297	900405～901220	岡本寛久・吉久正見・長川　優	平井泰男・難波拓史
12	砂場ⅢＡ				
13	砂場ⅢＢ				
14	砂場ⅢＥ				
15	砂場ⅢＣ				
16	砂場ⅡＭ	91	910207～910305	浅倉秀昭・窪田廣志・守屋佳慶	松本和男・中務和彦・岡田達矢・柴田英樹・清水竜太
17	砂場ⅡＦ	228	900922～901115	古谷野寿郎・弘田和司・森　宏之	土師忠満・弘田和司・藤田　薫
18	砂場ⅡＬ	15	910207～910305	浅倉秀昭・窪田廣志・守屋佳慶	松本和男・中務和彦・岡田達矢・柴田英樹・清水竜太
19	砂場ⅡＫ	250	910114～910305	浅倉秀昭・窪田廣志・守屋佳慶	松本和男・中務和彦・岡田達矢・柴田英樹・清水竜太
20	砂場ⅡＪ	210	910114～910305	古谷野寿郎・弘田和司・森　宏之	土師忠満・弘田和司・藤田　薫
21	砂場ⅡＡ	497	900711～900922	古谷野寿郎・弘田和司・森　宏之	土師忠満・弘田和司・藤田　薫
22	砂場ⅡＩ	594	901106～901220	古谷野寿郎・弘田和司・森　宏之	土師忠満・弘田和司・藤田　薫
23	砂場ⅡＨ				
24	砂場ⅡＯ	143	910522～910624	亀山行雄・古市秀治	松本和男・中務和彦・岡田達矢・柴田英樹・清水竜太
25	砂場ⅡＧ	155	901201～901220	平井泰男・川崎　肇	平井泰男・難波拓史
26	砂場ⅡＢ・Ｃ	643	900830～901220	江見正己・平松義則・横山伸一郎	松本和男・中務和彦・岡田達矢・柴田英樹・清水竜太
27	砂場ⅡＤ	500	900927～901220	松本和男・出原恒房・佐守　学	松本和男・中務和彦・岡田達矢・柴田英樹・清水竜太
28	砂場ⅡＥ	200	901022～901130	平井泰男・川崎　肇	平井泰男・難波拓史
29	砂場ＩＡ	1,583	900405～901003	松本和男・出原恒房・佐守　学	松本和男・中務和彦・岡田達矢・柴田英樹・清水竜太
30	砂場ＩＢ	45	900920～901018	松本和男・出原恒房・佐守　学	松本和男・中務和彦・岡田達矢・柴田英樹・清水竜太
31	砂場ＩＣ	26	910214～910225	古谷野寿郎・弘田和司・森　宏之	松本和男・中務和彦・岡田達矢・柴田英樹・清水竜太
32	砂場ⅡＮ	6	910221～910305	古谷野寿郎・弘田和司・森　宏之	土師忠満・弘田和司・藤田　薫
33	砂場北水路	189	900405～900412	松本和男・出原恒房・佐守　学	松本和男・中務和彦・岡田達矢・柴田英樹・清水竜太
34	砂場南水路３	85	900529～900719	古谷野寿郎・弘田和司・森　宏之	土師忠満・弘田和司・藤田　薫
35	砂場南水路２	30	900529～900719	古谷野寿郎・弘田和司・森　宏之	土師忠満・弘田和司・藤田　薫
36	砂場南水路１	144	900405～900412	松本和男・出原恒房・佐守　学	松本和男・中務和彦・岡田達矢・柴田英樹・清水竜太
37	宮西	408	891003～891115	古谷野寿郎・川崎　肇・森　宏之	土師忠満・弘田和司・藤田　薫
合　計		12,686			

第１表　加茂政所遺跡　発掘調査・報告書作成担当者等一覧表

いて発掘調査をするため、報告書作成作業を行っていた調査員２名を当てざるをえなかった。この調査をもって、加茂政所遺跡の発掘調査をすべて完了した。

遺構の実測・測量は、国土地理院第５座標系に基づき、グリッドを設定し行った（第６・７図）。起点は津寺遺跡と同時に発掘作業を開始した高塚遺跡の北端にあたるＸ＝－145400，Ｙ＝－48700とし、大きく100ｍグリッドを設け、さらに、その中を10ｍの小グリッドに分割した。大グリッド分割は、起点を（0，Ａ）とし、東方向へ１・２・３…と増加し、南方向へ以下Ｂ、Ｃ、Ｄと続くように呼称した。小グリッド分割は、10ｍごとに東へ$_{00\sim09}$、南へａ～ｊの添え字をつけた。グリッド名は、各北西交点を優先することとし、Ｐ18グリッドないし$Pa18_{00}$グリッドのように呼称する。以下本文



第７図　高松原古才遺跡・立田遺跡調査区配置図（1/2,000）

		調査区名	調査面積㎡	調査期間	調査担当者	整理担当者
立田Ⅰ	38	ＡＰ８	30	900405～900425	正岡睦夫・古谷野寿郎・川崎　肇・森　宏之	土師忠満・弘田和司・藤田　薫
	39	ＡＰ９	131			
	40	ＡＰ11	91			
立田Ⅱ	41	ＡＰ10	242	900405～901106	古谷野寿郎・弘田和司・森　宏之	土師忠満・弘田和司・藤田　薫
	42	ＢＰ10	72			
	43	ＢＰ11	206			
	44	ＡＰ12	131			
	45	ＢＰ12	119			
	46	ＢＰ13	107			
	47	ＢＰ14	176			
	48	ＡＰ15＊	30			
	49	ＢＰ15＊	128			
	50	ＢＰ16＊	112			
	51	ＢＰ17＊	106			
	52	ＢＰ18＊	124			
立田Ⅲ	53	ＢＰ９	110	900405～900507	浅倉秀昭・窪田廣志・守屋佳慶	土師忠満・弘田和司・藤田　薫
	54	ＡＰ13	141			
	55	ＡＰ14	126			
	56	ＡＰ15＊	89			
	57	ＡＰ16・17＊	324			
	58	立田Ⅰ区＊	190	891019～891115	正岡睦夫・古谷野寿郎・川崎　肇・森　宏之	土師忠満・弘田和司・藤田　薫
合計			2,785			

第２表　高松原古才遺跡、立田遺跡　発掘調査・報告書作成担当者等一覧表

中のグリッド記載はこれによるものとする。

調査によって重要な発見も相次いだ。記者発表を行ったものには、弥生時代後期の銅釧２点、平安時代後期の梵鐘鋳造遺構がある。いずれも、県内では初例のもので、全国的に注目を集めた。ほかにも、弥生時代中期の小貝塚、弥生時代から古墳時代の密集した住居、古墳時代後期の鉄製紡錘車、人面を表現した分銅形土製品、小児を埋葬した土器棺群、馬の頭骨３頭分を出土した古墳時代の住居、岡山県最古の飛鳥時代の軒丸瓦、延喜通宝や鉄製鋤先を副葬した火葬蔵骨器、緑釉陶器、円面硯、中世の井戸の井筒など学術上も貴重なものが発見されている。　（正岡）

平成元年度

平成元年(1989年)

５月22日(月)　政所地区一次調査着手
６月１日(木)　政所地区一次調査終了
６月17日(土)　埋蔵文化財保護対策委員会開催
８月７日(月)　立田地区一次調査着手
８月10日(木)　立田地区一次調査終了
10月３日(火)　宮西調査区調査着手
10月19日(木)　立田Ⅰ区調査着手
10月30日(月)　埋蔵文化財保護対策委員会開催
11月15日(水)　宮西調査区、立田Ⅰ区調査終了

平成２年(1990年)

２月20日(火)　埋蔵文化財保護対策委員会開催

平成２年度

平成２年(1990年)

４月２日(月)　調査準備
４月５日(木)　高田Ⅰ区、砂場ⅠＡ区、砂場Ⅲ区、砂場南水路Ⅰ区、砂場北水路調査着手
立田Ⅰ区、立田Ⅱ区、立田Ⅲ区調査着手
４月12日(木)　砂場南水路Ⅰ区、砂場北水路調査終了
４月25日(水)　立田Ⅰ区調査終了
５月７日(月)　立田Ⅲ区調査終了
５月29日(火)　砂場南水路２・３区調査着手
６月６日(水)　高田Ⅰ区調査終了
６月７日(木)　高田Ｐ９調査着手
６月12日(火)　埋蔵文化財保護対策委員会開催
６月14日(木)　高田Ｐ９調査終了
６月18日(月)　高田Ｐ７調査着手
６月29日(金)　高田Ｐ７調査終了、高田Ｐ８調査着手
７月11日(水)　砂場ⅡＡ区調査着手
７月14日(土)　高田Ｐ８調査終了
７月19日(木)　砂場南水路２・３区調査終了
８月１日(水)　高田Ⅱ区調査着手
８月30日(木)　砂場ⅡＢ区、砂場ⅡＣ区調査着手
９月20日(木)　砂場ⅠＢ区調査着手
９月22日(土)　砂場ⅡＡ区調査終了
砂場ⅡＦ区調査着手
９月27日(木)　砂場ⅡＤ区調査着手
埋蔵文化財保護対策委員会開催
10月３日(水)　砂場ⅠＡ区調査終了
10月18日(木)　砂場ⅠＢ区調査終了
10月20日(土)　高田Ⅱ区調査終了
10月22日(月)　砂場ⅡＥ区調査着手
11月６日(木)　立田Ⅱ区調査終了
砂場ⅡＨ、砂場ⅡⅠ区調査着手
11月15日(木)　砂場ⅡＦ区調査終了
11月27日(月)　埋蔵文化財保護対策委員会開催
11月30日(金)　砂場ⅡＥ区調査終了
12月１日(土)　砂場ⅡＧ区調査着手
12月20日(木)　砂場ⅡＢ区、砂場ⅡＣ区、砂場ⅡＤ区、砂場ⅡＧ区、砂場ⅡＨ区、砂場ⅡⅠ区、砂場Ⅲ区調査終了

平成３年(1991年)

１月14日(月)　砂場ⅡＪ区、砂場ⅡＫ区調査着手
２月１日(金)　高田Ⅲ区、Ⅳ区調査着手
２月７日(木)　砂場ⅡＬ区、砂場ⅡＭ区調査着手
２月14日(木)　砂場ⅠＣ区調査着手
２月21日(木)　砂場ⅡＮ区調査着手
２月25日(月)　砂場ⅠＣ区調査終了
３月１日(金)　埋蔵文化財保護対策委員会開催
３月５日(火)　砂場ⅡＪ区、砂場ⅡＫ区、砂場ⅡＬ区、砂場ⅡＭ区、砂場ⅡＮ区調査終了
３月６日(水)　高田Ⅲ区、高田Ⅳ区調査終了

平成３年度

平成３年(1991年)

５月22日(水)　砂場ⅡＯ区調査着手
６月24日(月)　砂場ⅡＯ区調査終了

平成４年(1992年)

１月７日(火)　砂場ⅢＦ・Ｇ区調査着手
２月28日(金)　埋蔵文化財保護対策委員会開催
３月10日(月)　砂場ⅢＦ・Ｇ区調査終了

平成４年度

平成４年(1992年)

４月１日(水)　砂場ⅢＨ区調査着手
５月18日(月)　砂場ⅢＨ区調査終了
７月20日(水)　埋蔵文化財保護対策委員会開催

第２章　報告書の作成と構成

第１節　報告書作成の体制

報告書の作成は、平成９年度に岡山県古代吉備文化財センター職員、松本和男、平井泰男、中務和彦、岡田達矢、土師忠満、難波拓史、弘田和司、柴田英樹、清水竜太、藤田薫の10名が担当した。10名の担当者は三班に編制し、各班に復元、実測、トレースの補助員を配置して行うこととした。各班の担当者と整理担当調査区については、第１・２表を参照されたい。

出土遺物の水洗、注記は報告書作成以前にすでに終了させていたため、遺物の整理作業は土器の復元から開始し、実測土器の選定抽出を行った。土器復元作業と並行して、石器・土製品・金属器・木器などの抽出も行い、台帳の作成や実測が必要なものの選定を行った。このようにして選定した遺物については、土器4758点、石器・土製品・金属器・ガラス製品849点などの実測を行うことができた。実測作業はおもに補助員が実施し、出来上がった実測図について調査員が検討を加えるという手段を用いた。トレースについては担当者および補助員が行った。報告書に掲載できた遺物は、編集段階で一部割愛したため土器が4709点、石器364点、金属器244点、土製品262点、ガラス製品７点である。

遺構については、整理担当者が図面整理を行い、トレースについては担当者および補助員が行った。

（平井）

平成９年度

岡山県教育委員会

教育長	黒瀬定生

岡山県教育庁

教育次長	平岩　武

文化課

課長	髙田朋香
課長代理	西山　猛
参事	葛原克人
課長補佐（埋蔵文化財係長）	平井　勝
文化財保護主任	大橋雅也

岡山県古代吉備文化財センター

所長	簸本克之
次長	正岡睦夫
総務課長	小倉　昇
課長補佐（総務係長）	井戸丈二
主査	木山伸一
調査第一課長	高畑知功
課長補佐（第二係長）	松本和男
文化財保護主査	平井泰男
文化財保護主査	中務和彦
文化財保護主査	岡田達矢
文化財保護主査	土師忠満
文化財保護主事	難波拓史
文化財保護主事	弘田和司
文化財保護主事	柴田英樹
主事	清水竜太
主事	藤田　薫

整理協力者

伊丹もと子　上田真理子　柏野由美子　川崎康代　川原啓子　熊代明美　桑田一美　神原さちみ　近藤明子　島村仁美　杉本弘美　高塚睦子　辻尚子　藤田さち子　松田香苗　間野春恵　森久仁江　明楽美和子　薬師寺かほり　山本恵美子

第2節　報告書の構成

最初に、遺跡名称について報告しておきたい。今回報告する遺跡の発掘調査は、当初、周知されていた「政所遺跡」の一部が山陽自動車道建設予定路線内に含まれていることから計画された。その後、本格的な調査に先立って遺跡の範囲や規模を確認するために一次調査を実施したところ、従来周知されていた以上の範囲に遺跡が拡がっていることが明らかとなった（第1章第1節参照）。しかしながら、遺跡の具体的な状況が十分に把握されていない段階であることから、二次調査である全面調査にあたっても遺跡名称は変更せず「政所遺跡」として実施し、正式な報告書の段階で再検討することとしたのであった。この度報告書を作成するに当たり遺跡名称について関係者で検討した結果以下の二点を方針とした。第一に、遺跡名称については行政区名の大字名を基本的に用いるとするこれまでの方針に従うこと、第二に、大字名が広範囲に及び、またすでにその大字名を冠した遺跡名が公表されている場合は、一つ下のランクの地名を連記して遺跡名とする。この方針に基づいて法務局などの資料をもとに地名を検討した結果、第6・7図に示した調査区のうち、1～37が大字「加茂」、38～47・53～55が大字「高松原古才」、48～52、56～58が大字「立田」に相当することが明らかになった。このうち「加茂」についてはすでにいくつかの遺跡の名称として使用されていることから、より細かい地名を調べた結果、範囲が最も広かったわけではないが、従来の遺跡名を考慮して「政所」という地名を採用することとした。以上の検討結果から、遺跡名は、「加茂政所遺跡」、「高松原古才遺跡」、「立田遺跡」に決定した。

報告書の構成については、まず異なる三つの遺跡を一つの報告書でまとめるという点で苦慮した。報告する項目については従来通りであるが、章立てなど細部はこれまでと異なったものになっている。編集作業においては、遺構・遺物は並べて掲載することとし、かつ説明は節を分けて時代ごとに行うこととした。節立ては遺跡の実態に即して行うこととしたため、弥生時代前期と中期、および古墳時代中期と後期はまとめることとした。また古代と中世については、時期が明確にし難い遺構や古代から中世まで継続している遺構があることなどから一つの節として取り扱うこととした。遺構の取り扱いで問題となったのは時期が特定できない遺構である。このうち出土遺物がなく形状もしっかりしていない土壙や溝の一部については、全体図に掲載したのみで個別に説明は加えなかった。柱穴も時期の特定が困難であった。特に弥生時代中期と後期、および古代と中世の区別は難しかった。また土層名が各調査班の名称をそのまま使用しているため統一できていないことや、水田・溝・低位部の報告にあたって文章と平面図と断面図が組み合っていないところがあることなどで読みづらくなっているところがある。おもな遺構については一覧表を作成した。遺物のうち土器、土製品、石器、金属器については器種や計測値についての一覧表を作成した。そのため本文中では説明を省略したところもある。報告書に関わる遺物の自然科学的分析や鑑定については、例言に記載した諸氏、機関に依頼し、その一部については、「Ⅳ自然科学による鑑定・分析」として報告文を掲載している。遺構・遺物番号は遺跡ごとに分けたが、図番号については一つの報告書であることから通し番号にした。

文章の執筆については基本的に発掘調査担当者が分担したが、溝や水田など複数の調査区にまたがるものについては整理担当者が執筆した。その際遺構・遺物の時期や文章表現は執筆者の判断に委ね、編集段階で統一してはいない。なお文責は文末に記載することとしている。　（平井）

第３節　時期区分

津寺遺跡では、縄文時代から近世の遺構・遺物が検出されている。特に、弥生時代中期から古墳時代前半期のものが多い。各遺構・遺物について記述するにあたり、全体を検討したうえで、詳細な土器の編年作業と時期区分を行うのが望ましいが、津寺遺跡の遺物量は莫大なものであり、数年間にわたって整理作業と報告書の刊行が行われるため、従来の編年を大枠で踏襲し、一応の目安を呈示することにした。これは百間川遺跡で行っている大枠での時期区分に合わせたもので、編年上の問題や地域性の問題は、今後のまとめの中で示されていくものと考えている。

土器の編年や時期区分は古くから行われており、大規模な発掘が実施されて多量の土器が出土するたびに、各報告書において呈示されてきた。近年では高橋　護氏による型式学に基づく詳細な編年が出され、また、高畑知功氏によるまとめとしての編年も示された。それぞれの編年を対比するのは必ずしも明確でない部分もあるが、従来の研究を参考にしながら対比関係を一覧表としておきたい。

弥生時代前期をⅠ～Ⅲ、同中期をⅠ～Ⅲ、同後期をⅠ～Ⅳ、古墳時代前半期をⅠ～Ⅲに大別した。なお、文中では弥生時代前期Ⅰは弥・前・Ⅰ、古墳時代前半Ⅱは古・前・Ⅱのように表記する。以下各時期の特徴的な点について概述する。

弥・前・Ⅰは段と無軸木葉文を主体とする時期、弥・前・Ⅱでは壺に削り出し突帯が施文され、甕へのヘラ描き沈線文が使用されるようになり、弥・前・Ⅲは壺や甕のヘラ描き沈線が多条化する。壺では断面三角形の突帯を多用している。前期を通じて高杯はきわめて少ない。津寺遺跡出土の土器には前期のものは少ない。

弥・中・Ⅰは壺や甕のヘラ描き沈線がクシ描き文に変化し、その新相では甕のクシ描き文は消失する。壺には突帯とクシガキ文を施すものが多い。弥・中・Ⅱは従来から呼称されている菰池式に対応し、これまで新相のものが多く出土していたが、津寺遺跡では古相のものも多く、今後標識的な資料となりうるものである。この時期には高杯が普及し、器台が出現する。新相の壺や甕の胴部下半の内面へラケズリ技法が出現し、他地域との差異も明瞭となる。弥・中・Ⅲは、凹線文が盛行する時期で、壺や甕の胴部下半の内面へラケズリが一般化する。口縁端部の拡張も著しく、外面には凹線文が施される。器台の普及もこの時期からである。少量ではあるが畿内で盛行するタタキ技法が認められる。

弥・後・Ⅰは長頸壺が成立し、頸部の凹線文が沈線文に変化し、甕とともに内面へラケズリが頸部直下まで行われるようになる。高杯の脚部は長いものが多く、沈線文がクシ描き文に変化する時期である。弥・後・Ⅱは長頸壺の頸部が上開から下開へと変化し、高杯の口縁部は外方へ拡張し、脚部は少し短くなり、端部を薄くするものが多い。高杯には備前と異なり、口縁部と皿部の接合部が内方へ突出し、脚端部が肥厚するものが新相まで残存する。新相では杯部と脚部を別造りとするものが出現し、一般化する。弥・後・Ⅲは長頸壺の最終段階で、高杯は短脚化し、器形が小型化する。一方、特殊な大型器台が祭祀用として出現する。小型土器には水簸し粘土を使用するものがみられるようになる。弥・後・Ⅳは従来の酒津式土器の主体となる時期で、甕の口縁部は擬凹線文を施すものが現れる。

古・前・Ⅰは下田所式と呼ばれている時期で、甕の口縁部は擬凹線文からクシ描き文に変化し、壺や鉢の口縁部は外上方へ大きく拡張するものが多い。壺の胴部は球形化を示す。古・前・Ⅱは亀川上層式に対応し、甕の口縁部のクシ描き文が退化し、底部は完全な丸底に変化する。古・前・Ⅲは土器

の胎土が粗くなり、高杯の脚部は長くなり、内面のヘラケズリが施されるようになる。　　（正岡）

<table>
<tr><th></th><th></th><th>加茂政所・高松原古才立田</th><th>上東・川入</th><th>百間川</th><th>雄　町</th><th></th><th>高橋編年</th></tr>
<tr><td rowspan="12">弥生時代</td><td rowspan="3">前期</td><td>弥・前・Ⅰ</td><td rowspan="9"></td><td>百・前・Ⅰ</td><td></td><td>津　島</td><td>Ⅰ期 a b c</td></tr>
<tr><td>弥・前・Ⅱ</td><td>百・前・Ⅱ</td><td>雄町1</td><td rowspan="2">門　田</td><td rowspan="2">Ⅱ期 a b c</td></tr>
<tr><td>弥・前・Ⅲ</td><td>百・前・Ⅲ</td><td>雄町2</td></tr>
<tr><td rowspan="6">中期</td><td rowspan="2">弥・中・Ⅰ</td><td rowspan="2">百・中・Ⅰ</td><td>高　田</td><td rowspan="2">南　方</td><td rowspan="2">Ⅲ期 a b</td></tr>
<tr><td>雄町3</td></tr>
<tr><td rowspan="3">弥・中・Ⅱ</td><td rowspan="3">百・中・Ⅱ</td><td>船山5</td><td rowspan="3">菰　池</td><td rowspan="3">Ⅳ期 a b c</td></tr>
<tr><td>菰　池</td></tr>
<tr><td>雄町4</td></tr>
<tr><td rowspan="3">弥・中・Ⅲ</td><td rowspan="3">百・中・Ⅲ</td><td>前山東</td><td rowspan="2">前山Ⅱ</td><td rowspan="2">Ⅴ期 a b</td></tr>
<tr><td>雄町5</td></tr>
<tr><td>鬼川市0</td><td>雄町6</td><td>仁　伍</td><td>Ⅵ期 a b</td></tr>
<tr><td rowspan="6">後期</td><td rowspan="2">弥・後・Ⅰ</td><td rowspan="2">鬼川市Ⅰ</td><td rowspan="2">百・後・Ⅰ</td><td>雄町7</td><td rowspan="4">上　東</td><td rowspan="3">Ⅶ期 a b c d</td></tr>
<tr><td>雄町8</td></tr>
<tr><td rowspan="2">弥・後・Ⅱ</td><td rowspan="2">鬼川市Ⅱ</td><td rowspan="2">百・後・Ⅱ</td><td>雄町9</td></tr>
<tr><td>雄町10</td><td rowspan="2">Ⅷ期 a b c d</td></tr>
<tr><td>弥・後・Ⅲ</td><td>鬼川市Ⅲ</td><td>百・後・Ⅲ</td><td>＋</td><td>グランド上　東</td></tr>
<tr><td rowspan="2">弥・後・Ⅳ</td><td>才ノ町Ⅰ</td><td rowspan="2">百・後・Ⅳ</td><td>雄町11</td><td rowspan="2">Ⅸ期 a b c</td></tr>
<tr><td>才ノ町Ⅱ</td><td>雄町12</td><td>酒　津</td></tr>
<tr><td rowspan="5">古墳時代</td><td rowspan="4">前期</td><td>古・前・Ⅰ</td><td>下田所</td><td>百・古・Ⅰ</td><td rowspan="5">王泊六層</td><td rowspan="4">Ⅹ期 a b c d e</td></tr>
<tr><td rowspan="3">古・前・Ⅱ</td><td rowspan="2">亀川上層</td><td rowspan="3">百・古・Ⅱ</td><td>雄町13</td></tr>
<tr><td>＋</td><td>雄町14</td></tr>
<tr><td>古・前・Ⅲ</td><td rowspan="2">川入・大溝上層</td><td rowspan="2">百・古・Ⅲ</td><td rowspan="2">雄町15</td><td rowspan="2">Ⅺ期 a b</td></tr>
<tr><td>中　期</td><td>古・中・Ⅰ</td></tr>
</table>

第3表　時期区分表

古墳時代中期は、古・中・Ⅰ、古・中・Ⅱに、古墳時代後期は、古・後・Ⅰ～Ⅳに分けて時期を現している。

Ⅲ　発掘調査報告

1　加茂政所遺跡

目　　次

－第１・２分冊－

1　加茂政所遺跡

〈第１分冊〉

第１章　調査の概要 …… 25
第１節　遺跡の概要 …… 25
第２節　弥生時代前期～中期の遺構・遺物 …… 26
(1)　概要 …… 26
(2)　竪穴住居 …… 26
(3)　掘立柱建物 …… 45
(4)　袋状土壙 …… 45
(5)　土壙 …… 63
(6)　土壙墓 …… 176
(7)　土器棺墓 …… 178
(8)　柱穴 …… 179
(9)　溝 …… 181
(10)　水田 …… 185
(11)　低位部 …… 187
(12)　その他の遺構・遺物 …… 188
第３節　弥生時代後期の遺構・遺物 …… 209
(1)　概要 …… 209
(2)　竪穴住居 …… 209
(3)　袋状土壙 …… 286
(4)　土壙 …… 333
(5)　土壙墓 …… 385
(6)　土器棺墓 …… 386
(7)　柱穴 …… 397
(8)　土器溜り …… 399
(9)　溝 …… 400
(10)　水田 …… 416
(11)　その他の遺構・遺物 …… 417
第４節　古墳時代前期の遺構・遺物 …… 428
(1)　概要 …… 428
(2)　竪穴住居 …… 428
(3)　土壙 …… 462

(4) 柱穴 …… 463
(5) 溝 …… 463
(6) 水田 …… 482
(7) その他の遺構・遺物 …… 483
第5節 古墳時代中期～後期の遺構・遺物 …… 485
(1) 概要 …… 485
(2) 竪穴住居 …… 485
(3) 掘立柱建物 …… 553
(4) 焼成土壙 …… 553
(5) 土壙 …… 558
(6) 溝 …… 564
(7) その他の遺構・遺物 …… 569

〈第2分冊〉

第6節 古代・中世の遺構・遺物 …… 577
(1) 概要 …… 577
(2) 掘立柱建物 …… 590
(3) 井戸 …… 599
(4) 土壙 …… 605
(5) 土壙墓 …… 657
(6) 火葬墓 …… 660
(7) 柱穴列 …… 663
(8) 柱穴 …… 665
(9) 土器溜り …… 668
(10) 溝 …… 669
(11) 道路状遺構 …… 684
(12) 畑 …… 689
(13) 低位部 …… 692
(14) 河道 …… 695
(15) その他の遺構・遺物 …… 740
第7節 近世の遺構・遺物 …… 764
(1) 概要 …… 764
(2) 掘立柱建物 …… 764
(3) 井戸 …… 764
(4) 土壙 …… 764
(5) 柱穴列 …… 769
(6) 溝 …… 769
(7) 水田 …… 774

(8)　河道 …… 774
(9)　その他の遺構・遺物 …… 774

第2章　加茂政所遺跡のまとめ …… 777
第1節　遺跡の変遷 …… 777
第2節　弥生時代の集落 …… 782
第3節　弥生時代中期前葉～中葉の土器 …… 786
第4節　顔のある分銅形土製品 …… 792
第5節　弥生時代後期の銅釧 …… 794
第6節　飛鳥様式の瓦と古墳時代後期の集落 …… 797
第7節　火頭形三尊塼仏 …… 801
第8節　火葬墓 …… 804
第9節　「加茂政所廃寺」 …… 806
第10節　「梵鐘鋳造遺構」と関連遺物 …… 813
第11節　平安時代の土師器 …… 818
第12節　平安時代中期の瓦 …… 825
遺構一覧表・遺物観察表・遺構名称新旧対照表
写真

図　目　次

第８図　砂場調査区出土の縄文土器 ……25
第９図　竪穴住居１(1/60)・遺物 ……26
第10図　弥生時代前～中期遺構全体図(１)
(1/400)……27～28
第11図　弥生時代前～中期遺構全体図(２)
(1/400)……29～30
第12図　弥生時代前～中期遺構全体図(３)
(1/400)……31
第13図　弥生時代前～中期主要遺構全体図
(1/2,000)……31
第14図　竪穴住居２(1/60)・遺物 ……32
第15図　竪穴住居３(1/60) ……33
第16図　竪穴住居４(1/60)・遺物 ……33
第17図　竪穴住居５(1/60)・遺物 ……34
第18図　竪穴住居６(1/60) ……35
第19図　竪穴住居６遺物(１) ……36
第20図　竪穴住居６遺物(２) ……37
第21図　竪穴住居６遺物(３) ……38
第22図　竪穴住居７(1/60)・遺物 ……39
第23図　竪穴住居８(1/60)・遺物 ……40
第24図　竪穴住居９(1/60)・遺物 ……41
第25図　竪穴住居10(1/60)・遺物 ……41
第26図　竪穴住居11(1/60)・遺物 ……42
第27図　竪穴住居12(1/60) ……43
第28図　竪穴住居12遺物 ……44
第29図　掘立柱建物１(1/60)・遺物 ……45
第30図　袋状土壙１(1/30)・遺物 ……46
第31図　袋状土壙２(1/30) ……46
第32図　袋状土壙３(1/30) ……46
第33図　袋状土壙４(1/30)・遺物(１) ……47
第34図　袋状土壙４遺物(２) ……48
第35図　袋状土壙５(1/30)・遺物 ……49
第36図　袋状土壙６(1/30)・遺物 ……49
第37図　袋状土壙７(1/30)・遺物 ……50
第38図　袋状土壙８(1/30)・遺物 ……51
第39図　袋状土壙９(1/30)・遺物 ……52
第40図　袋状土壙10(1/30)・遺物(１) ……53
第41図　袋状土壙10遺物(２) ……54
第42図　袋状土壙10遺物(３) ……55
第43図　袋状土壙11(1/30)・遺物 ……56
第44図　袋状土壙12(1/30)・遺物 ……56
第45図　袋状土壙13(1/30)・遺物 ……57
第46図　袋状土壙14(1/30)・遺物 ……58
第47図　袋状土壙15(1/30) ……58
第48図　袋状土壙16(1/30)・遺物 ……59
第49図　袋状土壙17(1/30)・遺物(１) ……60
第50図　袋状土壙17遺物(２) ……61
第51図　袋状土壙18(1/30) ……61
第52図　袋状土壙19(1/30)・遺物 ……62
第53図　土壙１(1/30)・遺物 ……63
第54図　土壙２(1/30)・遺物 ……64
第55図　土壙３(1/60)・遺物 ……64
第56図　土壙４(1/30) ……65
第57図　土壙５(1/30) ……65
第58図　土壙５遺物 ……66
第59図　土壙６(1/30)・遺物 ……66
第60図　土壙７(1/30)・遺物 ……66
第61図　土壙８(1/30)・遺物 ……67
第62図　土壙９(1/30)・遺物 ……67
第63図　土壙10(1/30) ……67
第64図　土壙11(1/30)・遺物 ……68
第65図　土壙12(1/30)・遺物 ……68
第66図　土壙13(1/30)・遺物 ……69
第67図　土壙14(1/30)・遺物 ……69
第68図　土壙15(1/30)・遺物(１) ……70
第69図　土壙15遺物(２) ……71
第70図　土壙16(1/30)・遺物 ……72
第71図　土壙17(1/30) ……72
第72図　土壙17遺物(１) ……73
第73図　土壙17遺物(２) ……74
第74図　土壙17遺物(３) ……75
第75図　土壙18(1/30)・遺物 ……76
第76図　土壙19(1/30) ……76
第77図　土壙19遺物 ……77
第78図　土壙20(1/30)・遺物 ……78
第79図　土壙21(1/30)・遺物 ……79
第80図　土壙22(1/30) ……79
第81図　土壙22遺物 ……80
第82図　土壙23(1/30) ……81
第83図　土壙24(1/30) ……81
第84図　土壙25(1/30)・遺物 ……81
第85図　土壙26(1/30) ……82
第86図　土壙27(1/30)・遺物 ……82
第87図　土壙28(1/30) ……82

第88図　土壙29(1/30) ……83
第89図　土壙30(1/30)・遺物 ……83
第90図　土壙31(1/30) ……84
第91図　土壙32(1/30)・遺物 ……84
第92図　土壙33(1/30)・遺物 ……85
第93図　土壙34(1/30) ……85
第94図　土壙35(1/30)・遺物(1) ……86
第95図　土壙35遺物(2) ……87
第96図　土壙36(1/30) ……87
第97図　土壙37(1/30)・遺物 ……87
第98図　土壙38(1/30)・遺物 ……88
第99図　土壙39(1/30)・遺物 ……88
第100図　土壙40(1/30) ……89
第101図　土壙41(1/30)・遺物 ……89
第102図　土壙42(1/30) ……90
第103図　土壙43(1/30)・遺物 ……90
第104図　土壙44(1/30)・遺物 ……91
第105図　土壙45(1/30) ……91
第106図　土壙46(1/30) ……91
第107図　土壙47(1/30)・遺物 ……92
第108図　土壙48(1/30)・遺物 ……93
第109図　土壙49(1/30) ……93
第110図　土壙50(1/30) ……93
第111図　土壙51(1/30)・遺物 ……94
第112図　土壙52・53(1/30)・遺物 ……94
第113図　土壙54(1/30)・遺物 ……95
第114図　土壙55(1/30) ……96
第115図　土壙56(1/30)・遺物 ……96
第116図　土壙57(1/30)・遺物 ……97
第117図　土壙58(1/30)・遺物 ……98
第118図　土壙59(1/30)・遺物 ……98
第119図　土壙60(1/30)・遺物 ……99
第120図　土壙61(1/30)・遺物 ……99
第121図　土壙62・63(1/30)・遺物……100
第122図　土壙64(1/30)・遺物……101
第123図　土壙65(1/30)・遺物……102
第124図　土壙66・67(1/30)……102
第125図　土壙68(1/30)……102
第126図　土壙69(1/30)・遺物……103
第127図　土壙70(1/30)・遺物……103
第128図　土壙71(1/30)……104
第129図　土壙72・73(1/30)・遺物(1) ……104
第130図　土壙72・73遺物(2)……105
第131図　土壙74(1/30)・遺物……106
第132図　土壙75(1/30)・遺物……107
第133図　土壙76(1/60)・遺物……108
第134図　土壙77(1/30)……109
第135図　土壙78(1/30)・遺物……109
第136図　土壙79(1/30)・遺物……109
第137図　土壙80(1/30)……109
第138図　土壙81(1/30)……110
第139図　土壙82(1/30)・遺物……110
第140図　土壙83(1/30)……111
第141図　土壙84(1/30)……111
第142図　土壙85(1/30)・遺物……111
第143図　土壙86(1/30)・遺物……112
第144図　土壙87(1/30)・遺物……112
第145図　土壙88(1/30)・遺物(1) ……113
第146図　土壙88遺物(2)……114
第147図　土壙88遺物(3)……115
第148図　土壙88遺物(4)……116
第149図　土壙89(1/60)・遺物……117
第150図　土壙90(1/30)・遺物……118
第151図　土壙91(1/30)……118
第152図　土壙92(1/30)……118
第153図　土壙93(1/30)・遺物……119
第154図　土壙94(1/30)……119
第155図　土壙95(1/30)……119
第156図　土壙96(1/30)・遺物……120
第157図　土壙97(1/30)・遺物……121
第158図　土壙98(1/30)……121
第159図　土壙99(1/30)・遺物……121
第160図　土壙100(1/30)・遺物 ……122
第161図　土壙101(1/30)・遺物 ……122
第162図　土壙102(1/30)・遺物 ……123
第163図　土壙103(1/30) ……124
第164図　土壙104(1/30) ……124
第165図　土壙105(1/30)・遺物 ……125
第166図　土壙106(1/30) ……125
第167図　土壙107(1/30) ……125
第168図　土壙108(1/60)・遺物 ……126
第169図　土壙109(1/60) ……126
第170図　土壙110(1/30) ……126
第171図　土壙111(1/30) ……127
第172図　土壙112(1/30)・遺物 ……127
第173図　土壙113(1/30)・遺物 ……127
第174図　土壙114(1/30) ……127
第175図　土壙115(1/30) ……128
第176図　土壙116(1/30) ……128
第177図　土壙117(1/30)・遺物 ……129

第178図　土壙118(1/30) ……129
第179図　土壙119(1/30) ……129
第180図　土壙120(1/30) ……130
第181図　土壙121(1/30)・遺物 ……130
第182図　土壙122(1/30)・遺物 ……130
第183図　土壙123(1/30)・遺物 ……131
第184図　土壙124(1/30)・遺物 ……132
第185図　土壙125(1/30) ……132
第186図　土壙126(1/30) ……132
第187図　土壙127(1/30)・遺物 ……133
第188図　土壙128(1/30)・遺物 ……133
第189図　土壙129(1/30)・遺物 ……134
第190図　土壙130(1/60)・遺物(1) ……134
第191図　土壙130遺物(2) ……135
第192図　土壙130遺物(3) ……136
第193図　土壙131(1/30) ……137
第194図　土壙132(1/30)・遺物 ……137
第195図　土壙133(1/30) ……137
第196図　土壙134(1/30) ……138
第197図　土壙135(1/30) ……138
第198図　土壙136(1/30) ……138
第199図　土壙137(1/30)・遺物 ……138
第200図　土壙138(1/30)・遺物 ……139
第201図　土壙139(1/30)・遺物 ……139
第202図　土壙140(1/30)・遺物 ……140
第203図　土壙141(1/30) ……140
第204図　土壙142(1/30) ……140
第205図　土壙143・144(1/30)・遺物……141
第206図　土壙145(1/30)・遺物 ……142
第207図　土壙146(1/30)・遺物 ……142
第208図　土壙147(1/30) ……142
第209図　土壙148(1/30) ……143
第210図　土壙149(1/30)・遺物 ……143
第211図　土壙150(1/30)・遺物 ……144
第212図　土壙151(1/30) ……145
第213図　土壙152(1/30) ……145
第214図　土壙153(1/30)・遺物 ……145
第215図　土壙154(1/30) ……146
第216図　土壙155(1/30) ……146
第217図　土壙156(1/30) ……146
第218図　土壙157(1/30)・遺物 ……147
第219図　土壙158(1/30) ……147
第220図　土壙159(1/30)・遺物 ……147
第221図　土壙160(1/30)・遺物 ……148
第222図　土壙161(1/30) ……148
第223図　土壙162(1/30) ……148
第224図　土壙163(1/30) ……149
第225図　土壙164(1/30) ……149
第226図　土壙165(1/30)・遺物 ……149
第227図　土壙166(1/30)・遺物 ……150
第228図　土壙167(1/30) ……151
第229図　土壙168(1/30)・遺物 ……151
第230図　土壙169(1/30)・遺物 ……152
第231図　土壙170(1/30) ……153
第232図　土壙171(1/30)・遺物 ……153
第233図　土壙172(1/30)・遺物 ……154
第234図　土壙173(1/60)・遺物(1) ……154
第235図　土壙173遺物(2) ……155
第236図　土壙173遺物(3) ……156
第237図　土壙173遺物(4) ……157
第238図　土壙174(1/30)・遺物 ……158
第239図　土壙175(1/30)・遺物 ……159
第240図　土壙176(1/30)・遺物 ……159
第241図　土壙177(1/30)・遺物 ……160
第242図　土壙178(1/30)・遺物 ……160
第243図　土壙179(1/30)・遺物 ……161
第244図　土壙180(1/30)・遺物 ……161
第245図　土壙181(1/30)・遺物 ……162
第246図　土壙182(1/30) ……162
第247図　土壙183(1/30)・遺物 ……163
第248図　土壙184(1/30)・遺物 ……163
第249図　土壙185(1/30) ……163
第250図　土壙186(1/30)・遺物 ……164
第251図　土壙187(1/30) ……164
第252図　土壙188(1/30)・遺物 ……164
第253図　土壙189(1/30)・遺物 ……165
第254図　土壙190(1/30)・遺物 ……165
第255図　土壙191(1/30)・遺物 ……166
第256図　土壙192(1/30)・遺物 ……166
第257図　土壙193(1/30) ……167
第258図　土壙194(1/30)・遺物 ……167
第259図　土壙195(1/30)・遺物 ……167
第260図　土壙196(1/30)・遺物 ……168
第261図　土壙197(1/30)・遺物 ……168
第262図　土壙198(1/30) ……169
第263図　土壙199(1/30)・遺物 ……169
第264図　土壙200(1/30)・遺物 ……169
第265図　土壙201(1/30)・遺物 ……170
第266図　土壙202(1/30)・遺物 ……171
第267図　土壙203(1/30)・遺物 ……171

第268図　土壙204(1/30)・遺物(1) ……172
第269図　土壙204遺物(2) ……173
第270図　土壙205(1/30)・遺物 ……173
第271図　土壙206(1/30) ……174
第272図　土壙207(1/30)・遺物 ……174
第273図　土壙208(1/30) ……174
第274図　土壙209(1/30) ……175
第275図　土壙210(1/30) ……175
第276図　土壙211(1/30) ……175
第277図　土壙212(1/60) ……175
第278図　土壙213(1/30)・遺物 ……176
第279図　土壙214(1/30) ……176
第280図　土壙215(1/30) ……176
第281図　土壙墓1(1/30)……177
第282図　土壙墓2(1/30)……177
第283図　土壙墓3(1/30)……177
第284図　土壙墓4(1/30)・遺物……177
第285図　土器棺墓1(1/20)・遺物……178
第286図　柱穴1・2遺物 ……179
第287図　柱穴3遺物 ……179
第288図　柱穴4遺物 ……180
第289図　柱穴5遺物 ……180
第290図　柱穴6遺物 ……180
第291図　柱穴7遺物 ……180
第292図　A－A'・B－B'・C－C'断面(1/60)……182
第293図　D－D'・E－E'・F－F'断面(1/60)……183
第294図　G－G'・H－H'・I－I'断面(1/60)……184
第295図　溝3(1/60)……184
第296図　溝4(1/30)……184
第297図　溝5(1/60)……185
第298図　溝6(1/30)……185
第299図　溝7(1/30)・遺物……186
第300図　水田2(1/200・1/50) ……187
第301図　低位部1(1/60)・遺物……188
第302図　その他の遺物(1)……190
第303図　その他の遺物(2)……191
第304図　その他の遺物(3)……192
第305図　その他の遺物(4)……193
第306図　その他の遺物(5)……194
第307図　その他の遺物(6)……195
第308図　その他の遺物(7)……196
第309図　その他の遺物(8)……197
第310図　その他の遺物(9)……198
第311図　その他の遺物(10)……199
第312図　その他の遺物(11)……200
第313図　その他の遺物(12)……201
第314図　その他の遺物(13)……202
第315図　その他の遺物(14)……203
第316図　その他の遺物(15)……204
第317図　その他の遺物(16)……205
第318図　その他の遺物(17)……206
第319図　その他の遺物(18)……207
第320図　その他の遺物(19)……208
第321図　竪穴住居13(1/60)……210
第322図　竪穴住居13遺物 ……211
第323図　竪穴住居14(1/60)・遺物……212
第324図　弥生時代後期遺構全体図(1)(1/400)……213～214
第325図　弥生時代後期遺構全体図(2)(掲載遺構のみ)(1/400) ……215～216
第326図　弥生時代後期遺構全体図(3)(1/400)……217～218
第327図　弥生時代後期遺構全体図(4)(1/400) ……219
第328図　弥生時代後期主要遺構全体図(1/2,000) ……219
第329図　竪穴住居15(1/60)・遺物(1) ……220
第330図　竪穴住居15遺物(2)……221
第331図　竪穴住居15遺物(3)……222
第332図　竪穴住居16(1/60)……223
第333図　竪穴住居16遺物 ……224
第334図　竪穴住居17(1/60)・遺物……224
第335図　竪穴住居18(1/60)・遺物……225
第336図　竪穴住居19(1/60)……225
第337図　竪穴住居20(1/60)……226
第338図　竪穴住居20遺物 ……227
第339図　竪穴住居21(1/60)・遺物……227
第340図　竪穴住居22(1/60)・遺物……228
第341図　竪穴住居23(1/60)・遺物……229
第342図　竪穴住居24(1/60)・遺物……230
第343図　竪穴住居25(1/60)・遺物……231
第344図　竪穴住居26(1/60)・遺物……231
第345図　竪穴住居27(1/60)……232
第346図　竪穴住居27遺物(1)……233
第347図　竪穴住居27遺物(2)……234
第348図　竪穴住居27遺物(3)……235
第349図　竪穴住居27遺物(4)……236

第350図　竪穴住居27遺物(5)……237
第351図　竪穴住居27遺物(6)……238
第352図　竪穴住居27遺物(7)……239
第353図　竪穴住居27遺物(8)……240
第354図　竪穴住居27遺物(9)……241
第355図　竪穴住居27遺物(10)……242
第356図　竪穴住居27遺物(11)……243
第357図　竪穴住居27遺物(12)……244
第358図　竪穴住居27遺物(13)……245
第359図　竪穴住居27遺物(14)……246
第360図　竪穴住居27遺物(15)……247
第361図　竪穴住居27遺物(16)……248
第362図　竪穴住居28(1/60)……250
第363図　竪穴住居28遺物……251
第364図　竪穴住居29(1/60)・遺物……252
第365図　竪穴住居30(1/60)・遺物……253
第366図　竪穴住居31(1/60)・遺物……254
第367図　竪穴住居32(1/60)……254
第368図　竪穴住居32遺物……255
第369図　竪穴住居33(1/60)……255
第370図　竪穴住居34(1/60)・遺物……256
第371図　竪穴住居35(1/60)・遺物(1)……257
第372図　竪穴住居35遺物(2)……258
第373図　竪穴住居35遺物(3)……259
第374図　竪穴住居36(1/60)……260
第375図　竪穴住居36遺物(1)……261
第376図　竪穴住居36遺物(2)……262
第377図　竪穴住居37(1/60)・遺物……263
第378図　竪穴住居38(1/60)……263
第379図　竪穴住居38遺物……264
第380図　竪穴住居39(1/60)・遺物……265
第381図　竪穴住居40(1/60)……266
第382図　竪穴住居40遺物……267
第383図　竪穴住居41(1/60)……268
第384図　竪穴住居41遺物(1)……269
第385図　竪穴住居41遺物(2)……270
第386図　竪穴住居42(1/60)・遺物(1)……270
第387図　竪穴住居42遺物(2)……271
第388図　竪穴住居43(1/60)・遺物……271
第389図　竪穴住居44(1/60)……272
第390図　竪穴住居44遺物(1)……273
第391図　竪穴住居44遺物(2)……274
第392図　竪穴住居44遺物(3)……275
第393図　竪穴住居45(1/60)・遺物……276
第394図　竪穴住居46(1/60)……277
第395図　竪穴住居46断面(1/60)……278
第396図　竪穴住居46遺物(1)……279
第397図　竪穴住居46遺物(2)……280
第398図　竪穴住居47(1/60)……281
第399図　竪穴住居47断面(1/60)・遺物(1) 282
第400図　竪穴住居47遺物(2)……283
第401図　竪穴住居48(1/60)……284
第402図　竪穴住居49(1/60)・遺物……284
第403図　竪穴住居50(1/60)・遺物……285
第404図　竪穴住居51(1/60)……285
第405図　竪穴住居52(1/60)・遺物……285
第406図　袋状土壙20(1/30)……286
第407図　袋状土壙21(1/30)……286
第408図　袋状土壙21遺物……287
第409図　袋状土壙22(1/30)……287
第410図　袋状土壙22遺物……288
第411図　袋状土壙23(1/30)……289
第412図　袋状土壙24(1/30)……289
第413図　袋状土壙24遺物……290
第414図　袋状土壙25(1/30)・遺物……291
第415図　袋状土壙26(1/30)・遺物……291
第416図　袋状土壙27(1/30)・遺物……292
第417図　袋状土壙28(1/30)……292
第418図　袋状土壙28遺物(1)……293
第419図　袋状土壙28遺物(2)……294
第420図　袋状土壙28遺物(3)……295
第421図　袋状土壙28遺物(4)……296
第422図　袋状土壙28遺物(5)……297
第423図　袋状土壙28遺物(6)……298
第424図　袋状土壙29(1/30)・遺物……299
第425図　袋状土壙30(1/30)……300
第426図　袋状土壙31(1/30)……300
第427図　袋状土壙31遺物……301
第428図　袋状土壙32(1/30)・遺物……302
第429図　袋状土壙33(1/30)・遺物……303
第430図　袋状土壙34(1/30)・遺物……303
第431図　袋状土壙35(1/30)……304
第432図　袋状土壙36(1/30)……304
第433図　袋状土壙36遺物(1)……305
第434図　袋状土壙36遺物(2)……306
第435図　袋状土壙37(1/30)・遺物(1)……307
第436図　袋状土壙37遺物(2)……308
第437図　袋状土壙37遺物(3)……309
第438図　袋状土壙38(1/30)……310
第439図　袋状土壙39(1/30)・遺物……310

第440図　袋状土壙40(1/30)・遺物……311
第441図　袋状土壙41(1/30)・遺物……312
第442図　袋状土壙42(1/30)・遺物(1)……313
第443図　袋状土壙42遺物(2)……314
第444図　袋状土壙43(1/30)・遺物……314
第445図　袋状土壙44(1/30)・遺物……315
第446図　袋状土壙45(1/30)……316
第447図　袋状土壙46(1/30)……316
第448図　袋状土壙47(1/30)・遺物(1)……317
第449図　袋状土壙47遺物(2)……318
第450図　袋状土壙48(1/30)・遺物……318
第451図　袋状土壙49(1/30)・遺物……319
第452図　袋状土壙50(1/30)……320
第453図　袋状土壙51(1/30)……320
第454図　袋状土壙52(1/30)・遺物……320
第455図　袋状土壙53(1/30)・遺物……321
第456図　袋状土壙54(1/30)・遺物……322
第457図　袋状土壙55(1/30)・遺物……323
第458図　袋状土壙56(1/30)・遺物……323
第459図　袋状土壙57(1/30)・遺物……324
第460図　袋状土壙58(1/30)……325
第461図　袋状土壙59(1/30)・遺物……325
第462図　袋状土壙60(1/30)・遺物……326
第463図　袋状土壙61(1/30)・遺物……326
第464図　袋状土壙62(1/30)……327
第465図　袋状土壙63(1/30)・遺物……327
第466図　袋状土壙64(1/30)・遺物……328
第467図　袋状土壙65(1/30)・遺物……328
第468図　袋状土壙66(1/30)・遺物……329
第469図　袋状土壙67(1/30)・遺物……330
第470図　袋状土壙68(1/30)・遺物……330
第471図　袋状土壙69(1/30)・遺物……331
第472図　袋状土壙70(1/30)・遺物……332
第473図　袋状土壙71(1/30)・遺物……333
第474図　袋状土壙72(1/30)……333
第475図　土壙216(1/30)……334
第476図　土壙217(1/30)……334
第477図　土壙218(1/30)・遺物……335
第478図　土壙219(1/30)……335
第479図　土壙220(1/60)……335
第480図　土壙221(1/30)・遺物……336
第481図　土壙222(1/30)・遺物……336
第482図　土壙223(1/30)……336
第483図　土壙223遺物(1)……337
第484図　土壙223遺物(2)……338
第485図　土壙224(1/30)・遺物……339
第486図　土壙225(1/30)・遺物……340
第487図　土壙226(1/30)・遺物……340
第488図　土壙227(1/30)……340
第489図　土壙228(1/30)……341
第490図　土壙229(1/30)……341
第491図　土壙230(1/30)・遺物……341
第492図　土壙231(1/30)・遺物……342
第493図　土壙232(1/30)……342
第494図　土壙233(1/30)……342
第495図　土壙234(1/30)・遺物……342
第496図　土壙235(1/30)……343
第497図　土壙236(1/30)……343
第498図　土壙237(1/30)・遺物……343
第499図　土壙239(1/30)・遺物(1)……344
第500図　土壙239遺物(2)……345
第501図　土壙240(1/30)・遺物……346
第502図　土壙241(1/30)……346
第503図　土壙242(1/30)……346
第504図　土壙243(1/30)・遺物……347
第505図　土壙244(1/30)・遺物……347
第506図　土壙245(1/30)・遺物……348
第507図　土壙246(1/30)・遺物……348
第508図　土壙247・248(1/30)……348
第509図　土壙249(1/30)……349
第510図　土壙250(1/30)……349
第511図　土壙251(1/30)……349
第512図　土壙252(1/30)・遺物……349
第513図　土壙253(1/30)・遺物……350
第514図　土壙254(1/30)・遺物……351
第515図　土壙255(1/30)・遺物……352
第516図　土壙256(1/30)・遺物……353
第517図　土壙257(1/30)……353
第518図　土壙258(1/30)・遺物……354
第519図　土壙259(1/30)・遺物……355
第520図　土壙260(1/30)・遺物……356
第521図　土壙261(1/30)……356
第522図　土壙262(1/30)・遺物(1)……356
第523図　土壙262遺物(2)……357
第524図　土壙262遺物(3)……358
第525図　土壙262遺物(4)……359
第526図　土壙263(1/30)・遺物……360
第527図　土壙264(1/30)・遺物(1)……360
第528図　土壙264遺物(2)……361
第529図　土壙264遺物(3)……362

第530図　土壙264遺物(4)……363
第531図　土壙265(1/30)……364
第532図　土壙266(1/30)……364
第533図　土壙267(1/30)……364
第534図　土壙268(1/30)……364
第535図　土壙269(1/30)……364
第536図　土壙270(1/30)……365
第537図　土壙271(1/30)……365
第538図　土壙272(1/30)……365
第539図　土壙273(1/30)……365
第540図　土壙274(1/30)……366
第541図　土壙275(1/30)・遺物……366
第542図　土壙276(1/30)・遺物……367
第543図　土壙277(1/30)……367
第544図　土壙278(1/30)・遺物……368
第545図　土壙279(1/30)・遺物……368
第546図　土壙280(1/30)・遺物……368
第547図　土壙281(1/30)……369
第548図　土壙282(1/30)……369
第549図　土壙283(1/30)……369
第550図　土壙284(1/30)……370
第551図　土壙285(1/30)……370
第552図　土壙286(1/30)・遺物……370
第553図　土壙287(1/30)・遺物……371
第554図　土壙288(1/30)……371
第555図　土壙289(1/30)・遺物……371
第556図　土壙290(1/30)……372
第557図　土壙291(1/30)……372
第558図　土壙292(1/30)……372
第559図　土壙293(1/60)・遺物……373
第560図　土壙294(1/60)・遺物……373
第561図　土壙295(1/30)……374
第562図　土壙296(1/30)……374
第563図　土壙297(1/30)・遺物……374
第564図　土壙298(1/30)……375
第565図　土壙299(1/30)・遺物……375
第566図　土壙300(1/30)……375
第567図　土壙301(1/30)・遺物……376
第568図　土壙302(1/30)……376
第569図　土壙303(1/30)・遺物……376
第570図　土壙304(1/30)・遺物……377
第571図　土壙305(1/30)……377
第572図　土壙306(1/30)……377
第573図　土壙307(1/30)・遺物……378
第574図　土壙308(1/30)・遺物……378
第575図　土壙309(1/30)・遺物……379
第576図　土壙310(1/30)……379
第577図　土壙310遺物(1)……380
第578図　土壙310遺物(2)……381
第579図　土壙310遺物(3)……382
第580図　土壙311(1/30)……383
第581図　土壙312(1/30)……383
第582図　土壙312遺物(1)……384
第583図　土壙312遺物(2)……385
第584図　土壙墓5(1/30)・遺物……386
第585図　土器棺墓2(1/20)・遺物……387
第586図　土器棺墓3(1/20)……388
第587図　土器棺墓3遺物……389
第588図　土器棺墓4・5(1/20)……390
第589図　土器棺墓4遺物……390
第590図　土器棺墓5遺物……391
第591図　土器棺墓6(1/20)・遺物……392
第592図　土器棺墓7(1/20)・遺物……393
第593図　土器棺墓8(1/20)・遺物……394
第594図　土器棺墓9・10遺物……395
第595図　土器棺墓11(1/20)……395
第596図　土器棺墓11遺物……396
第597図　土器棺墓12遺物……397
第598図　柱穴遺物(1)……398
第599図　柱穴遺物(2)……399
第600図　土器溜り1遺物……399
第601図　土器溜り2遺物……400
第602図　溝9遺物……401
第603図　溝12(1/30)・遺物……401
第604図　溝13(1/30)・遺物……401
第605図　溝14(1/30)……402
第606図　溝15(1/30)……402
第607図　溝15遺物(1)……403
第608図　溝15遺物(2)……404
第609図　溝15遺物(3)……405
第610図　溝15遺物(4)……406
第611図　溝15遺物(5)……407
第612図　溝15遺物(6)……408
第613図　溝15遺物(7)……409
第614図　溝15遺物(8)……410
第615図　溝15遺物(9)……411
第616図　溝15遺物(10)……412
第617図　溝15遺物(11)……413
第618図　溝16(1/30)……414
第619図　溝17(1/30)・遺物(1)……414

第620図　溝17遺物(2)……415
第621図　溝18(1/30)・遺物……416
第622図　その他の遺物(1)……418
第623図　その他の遺物(2)……419
第624図　その他の遺物(3)……420
第625図　その他の遺物(4)……421
第626図　その他の遺物(5)……422
第627図　その他の遺物(6)……423
第628図　その他の遺物(7)……424
第629図　その他の遺物(8)……425
第630図　その他の遺物(9)……426
第631図　その他の遺物(10)……427
第632図　竪穴住居53(1/60)……428
第633図　古墳時代前期遺構全体図(1)
(1/400)……429～430
第634図　古墳時代前期遺構全体図(2)
(1/400)……431
第635図　古墳時代前期主要遺構全体図
(1/2,000)……431
第636図　竪穴住居53遺物……432
第637図　竪穴住居54(1/60)・遺物……433
第638図　竪穴住居55(1/60)……434
第639図　竪穴住居56(1/60)……434
第640図　竪穴住居57(1/60)・遺物……435
第641図　竪穴住居58(1/60)・遺物……436
第642図　竪穴住居59(1/60)……437
第643図　竪穴住居59遺物……438
第644図　竪穴住居60(1/60)……439
第645図　竪穴住居60遺物……440
第646図　竪穴住居61(1/60)・遺物……441
第647図　竪穴住居62(1/60)……441
第648図　竪穴住居63(1/60)・遺物……442
第649図　竪穴住居64(1/60)・遺物……443
第650図　竪穴住居65(1/60)・遺物……445
第651図　竪穴住居66(1/60)……446
第652図　竪穴住居66遺物(1)……447
第653図　竪穴住居66遺物(2)……448
第654図　竪穴住居66遺物(3)……449
第655図　竪穴住居67(1/60)……450
第656図　竪穴住居67b遺物(1)……451
第657図　竪穴住居67b遺物(2)……452
第658図　竪穴住居67遺物……452
第659図　竪穴住居67a遺物……453
第660図　竪穴住居67a・b遺物……453
第661図　竪穴住居68(1/60)……454
第662図　竪穴住居68遺物……455
第663図　竪穴住居69(1/60)・遺物……456
第664図　竪穴住居70(1/60)・遺物(1)……457
第665図　竪穴住居70遺物(2)……458
第666図　竪穴住居71(1/60)・遺物(1)……459
第667図　竪穴住居71遺物(2)……460
第668図　竪穴住居72(1/60)・遺物……460
第669図　竪穴住居73(1/60)……460
第670図　竪穴住居74(1/80)……461
第671図　竪穴住居75(1/60)……461
第672図　竪穴住居76(1/60)……461
第673図　土壙313(1/30)・遺物……462
第674図　土壙314(1/30)・遺物……462
第675図　土壙315(1/30)・遺物……463
第676図　土壙316(1/30)・遺物……463
第677図　柱穴15遺物……464
第678図　柱穴16遺物……464
第679図　溝19(1/60)・遺物……465
第680図　溝20(1/30)・遺物……466
第681図　溝21(1/30)……466
第682図　溝22(1/30)……466
第683図　溝23(1/30)……467
第684図　溝24・25(1/30)・溝24遺物……467
第685図　溝25遺物(1)……468
第686図　溝25遺物(2)……469
第687図　溝25遺物(3)……470
第688図　溝25遺物(4)……471
第689図　溝25遺物(5)……472
第690図　溝25遺物(6)……473
第691図　溝25遺物(7)……474
第692図　溝25遺物(8)……475
第693図　溝25遺物(9)……476
第694図　溝25遺物(10)……477
第695図　溝25遺物(11)……478
第696図　溝25遺物(12)……479
第697図　溝26(1/30)・遺物……480
第698図　溝27(1/60)・遺物(1)……480
第699図　溝27遺物(2)……481
第700図　水田5(1/800)・遺物……482
第701図　その他の遺物(1)……483
第702図　その他の遺物(2)……484
第703図　竪穴住居77(1/60・1/30)……486
第704図　古墳時代中～後期遺構全体図(1)
(1/400)……487～488
第705図　古墳時代中～後期遺構全体図(2)

(1/400)……489～490
第706図　古墳時代中～後期遺構全体図(3)
(1/400)……491
第707図　古墳時代中～後期主要遺構全体図
(1/2,000)……491
第708図　竪穴住居77遺物……492
第709図　竪穴住居78(1/60)……492
第710図　竪穴住居78カマド(1/30)……493
第711図　竪穴住居78遺物……493
第712図　竪穴住居79(1/60)……494
第713図　竪穴住居79遺物……494
第714図　竪穴住居79カマド(1/30)……495
第715図　竪穴住居80(1/60・1/30)・遺物…495
第716図　竪穴住居81(1/60)・遺物……496
第717図　竪穴住居81カマド(1/30)……497
第718図　竪穴住居82(1/60・1/30)……498
第719図　竪穴住居82遺物……499
第720図　竪穴住居83(1/60)・遺物……500
第721図　竪穴住居83カマド(1/30)……501
第722図　竪穴住居84(1/60・1/30)……501
第723図　竪穴住居84遺物……502
第724図　竪穴住居85(1/60)・遺物(1)……502
第725図　竪穴住居85遺物(2)……503
第726図　竪穴住居85カマド(1/30)……503
第727図　竪穴住居86(1/60)・遺物……504
第728図　竪穴住居87(1/60)……505
第729図　竪穴住居87遺物……506
第730図　竪穴住居87カマド(1/30)……507
第731図　竪穴住居88(1/60・1/30)・遺物…508
第732図　竪穴住居89(1/60)・遺物……509
第733図　竪穴住居89カマド(1/30)……510
第734図　竪穴住居90(1/60)・遺物……510
第735図　竪穴住居91(1/60)……511
第736図　竪穴住居92(1/60)……512
第737図　竪穴住居93(1/60)・遺物……513
第738図　竪穴住居94(1/60)……513
第739図　竪穴住居94カマド(1/30)・遺物…514
第740図　竪穴住居95(1/60)……515
第741図　竪穴住居96(1/60)・遺物……516
第742図　竪穴住居97(1/60)……517
第743図　竪穴住居98(1/60)・
馬骨出土状況(1/10)……517
第744図　竪穴住居98カマド(1/30)・遺物…518
第745図　竪穴住居99遺物(1)……518
第746図　竪穴住居99(1/60・1/30)……519
第747図　竪穴住居99遺物(2)……520
第748図　竪穴住居100(1/60)・遺物……520
第749図　竪穴住居101(1/60)……521
第750図　竪穴住居102(1/60)・遺物……522
第751図　竪穴住居103(1/60・1/30)・遺物 523
第752図　竪穴住居104(1/60)・遺物……524
第753図　竪穴住居105(1/60)……525
第754図　竪穴住居106(1/60)・遺物……526
第755図　竪穴住居107(1/60)・遺物……527
第756図　竪穴住居108(1/60)・遺物……528
第757図　竪穴住居109(1/60)・遺物……529
第758図　竪穴住居110(1/60)・遺物……530
第759図　竪穴住居111(1/60)・遺物……531
第760図　竪穴住居112(1/60)……532
第761図　竪穴住居113(1/60)……533
第762図　竪穴住居113カマド(1/30)・遺物 534
第763図　竪穴住居114(1/60)・遺物……535
第764図　竪穴住居115(1/60)・遺物……536
第765図　竪穴住居116(1/60)・遺物……537
第766図　竪穴住居117(1/60)……537
第767図　竪穴住居118(1/60)……538
第768図　竪穴住居118カマド(1/30)・遺物 539
第769図　竪穴住居119(1/60)……540
第770図　竪穴住居120(1/60)・遺物……540
第771図　竪穴住居121(1/60)……541
第772図　竪穴住居121遺物……542
第773図　竪穴住居122(1/60)……543
第774図　竪穴住居122カマド(1/30)・遺物 544
第775図　竪穴住居123(1/60・1/30)・遺物 545
第776図　竪穴住居124(1/60)・遺物……546
第777図　竪穴住居125(1/60)……546
第778図　竪穴住居126(1/60)……546
第779図　竪穴住居127(1/60)・遺物……547
第780図　竪穴住居128(1/30)・遺物……548
第781図　竪穴住居129(1/60)……548
第782図　竪穴住居130(1/60)・遺物……549
第783図　竪穴住居131(1/60)・遺物……550
第784図　竪穴住居132(1/60)・遺物……551
第785図　竪穴住居133(1/60)・遺物……552
第786図　竪穴住居134(1/60)・遺物……552
第787図　竪穴住居135(1/60)・遺物……553
第788図　掘立柱建物2(1/60)・遺物……554
第789図　掘立柱建物3(1/60)……555
第790図　焼成土壙1(1/30)……555
第791図　焼成土壙2(1/30)……555

第792図　焼成土壙３(1/30)……555
第793図　焼成土壙４(1/30)……556
第794図　焼成土壙５(1/30)……556
第795図　焼成土壙６(1/30)……556
第796図　焼成土壙７(1/30)……556
第797図　焼成土壙８(1/30)……557
第798図　焼成土壙９(1/30)・遺物……557
第799図　焼成土壙10(1/30)・遺物……557
第800図　焼成土壙11(1/30)……557
第801図　土壙317(1/30)……558
第802図　土壙318(1/30)・遺物……559
第803図　土壙319(1/60)・遺物……559
第804図　土壙320(1/30)・遺物……560
第805図　土壙321(1/30)……560
第806図　土壙322(1/30)……560
第807図　土壙323(1/30)……560
第808図　土壙324(1/30)……561
第809図　土壙325(1/60)……561
第810図　土壙326(1/30)・遺物……561
第811図　土壙327(1/30)……562
第812図　土壙328(1/30)……562
第813図　土壙329(1/30)……562
第814図　土壙330(1/30)……562
第815図　土壙331(1/30)・遺物……563
第816図　土壙332(1/30)……564
第817図　土壙333(1/30)・遺物……564
第818図　土壙334(1/30)・遺物……565
第819図　土壙335(1/30)……565
第820図　溝30(1/60)……565
第821図　溝31(1/60・1/30)・遺物(１)……566
第822図　溝31遺物(２)……567
第823図　溝33(1/60)……568
第824図　溝34(1/60)・遺物……568
第825図　溝37(1/30)……568
第826図　溝38(1/30)・遺物……569
第827図　溝39(1/30)……569
第828図　その他の遺物(１)……570
第829図　その他の遺物(２)……571
第830図　その他の遺物(３)……572
第831図　その他の遺物(４)……573
第832図　その他の遺物(５)……574
第833図　その他の遺物(６)……575
第834図　掘立柱建物４(1/60)……577
第835図　掘立柱建物５・６(1/60)……578
第836図　古代遺構全体図(１)(1/400)…579～580
第837図　古代遺構全体図(２)(1/400)…581～582
第838図　中世遺構全体図(１)(1/400)…583～584
第839図　中世遺構全体図(２)
(掲載遺構のみ)(1/400)……585～586
第840図　第２微高地東半　古代・中世遺構全体図(1/400)……587～588
第841図　古代主要遺構全体図(1/2,000)…589
第842図　中世主要遺構全体図(1/2,000)…589
第843図　掘立柱建物５・６(1/60)……590
第844図　掘立柱建物５・６遺物……591
第845図　掘立柱建物７(1/60)……591
第846図　掘立柱建物８(1/60)……592
第847図　掘立柱建物９(1/60)……593
第848図　掘立柱建物10(1/60)……594
第849図　掘立柱建物10遺物……594
第850図　掘立柱建物11(1/60)……595
第851図　掘立柱建物12(1/60)……596
第852図　掘立柱建物13(1/60)……596
第853図　掘立柱建物14(1/60)……597
第854図　掘立柱建物15・16(1/60)……598
第855図　掘立柱建物17(1/60)……599
第856図　井戸１(1/60)・遺物……599
第857図　井戸２(1/30)・遺物(１)……600
第858図　井戸２遺物(２)……601
第859図　井戸３(1/30)……602
第860図　井戸３遺物(１)……603
第861図　井戸３遺物(２)……604
第862図　井戸４(1/60)・遺物……605
第863図　井戸５(1/30)・遺物(１)……606
第864図　井戸５遺物(２)……607
第865図　井戸５遺物(３)……608
第866図　土壙336(1/30)・遺物……609
第867図　土壙337(1/30)・遺物……610
第868図　土壙338(1/30)……610
第869図　土壙339(1/30)・遺物(１)……611
第870図　土壙339遺物(２)……611
第871図　土壙340(1/30)・遺物……612
第872図　土壙341(1/30)……612
第873図　土壙342(1/30)……612
第874図　土壙343(1/30)……612
第875図　土壙344(1/30)……612
第876図　土壙345(1/30)……613
第877図　土壙346(1/30)・遺物……613
第878図　土壙347(1/30)……613
第879図　土壙348(1/30)……613

第880図　土壙349(1/30) ……614
第881図　土壙350(1/30)・遺物 ……614
第882図　土壙351(1/30) ……614
第883図　土壙352(1/60) ……614
第884図　土壙353(1/30) ……615
第885図　土壙354(1/30) ……615
第886図　土壙355(1/30) ……615
第887図　土壙356(1/80)・遺物 ……616
第888図　土壙357(1/60)・遺物 ……616
第889図　土壙358(1/30) ……616
第890図　土壙359(1/30)・遺物 ……617
第891図　土壙360(1/30) ……618
第892図　土壙361(1/30)・遺物 ……618
第893図　土壙362(1/30) ……618
第894図　土壙363(1/30) ……619
第895図　土壙364(1/30)・遺物 ……619
第896図　土壙365(1/30) ……619
第897図　土壙366(1/30) ……620
第898図　土壙367(1/30)・遺物 ……620
第899図　土壙368(1/30)・遺物 ……621
第900図　土壙369(1/30)・遺物 ……622
第901図　土壙370(1/30) ……622
第902図　土壙371(1/30) ……622
第903図　土壙372(1/60)・遺物 ……623
第904図　土壙373(1/30) ……623
第905図　土壙374(1/30) ……623
第906図　土壙375(1/60)・遺物(1) ……624
第907図　土壙375遺物(2) ……625
第908図　土壙375遺物(3) ……626
第909図　土壙375遺物(4) ……627
第910図　土壙375遺物(5) ……628
第911図　土壙375遺物(6) ……629
第912図　土壙376(1/60)・遺物 ……630
第913図　土壙377(1/30) ……631
第914図　土壙378(1/60)・遺物 ……631
第915図　土壙379(1/30) ……632
第916図　土壙380(1/30) ……632
第917図　土壙381(1/30)・遺物 ……632
第918図　土壙382(1/30) ……632
第919図　土壙383(1/60) ……633
第920図　土壙384(1/30)・遺物 ……633
第921図　土壙385(1/30) ……634
第922図　土壙386(1/60)・遺物 ……634
第923図　土壙387(1/30)・遺物 ……635
第924図　土壙388(1/60) ……635
第925図　土壙388遺物(1) ……636
第926図　土壙388遺物(2) ……637
第927図　土壙389(1/60) ……638
第928図　土壙389遺物(1) ……639
第929図　土壙389遺物(2) ……640
第930図　土壙389遺物(3) ……641
第931図　土壙390(1/30)・遺物 ……641
第932図　土壙391(1/30)・遺物(1) ……642
第933図　土壙391遺物(2) ……643
第934図　土壙392(1/20)・遺物 ……644
第935図　土壙393(1/30) ……645
第936図　土壙394(1/60) ……645
第937図　土壙395(1/60)・遺物 ……645
第938図　土壙396(1/30) ……646
第939図　土壙397(1/30) ……646
第940図　土壙398(1/60)・遺物(1) ……646
第941図　土壙398遺物(2) ……647
第942図　土壙399(1/60)・遺物 ……648
第943図　土壙400(1/30) ……648
第944図　土壙401(1/30) ……649
第945図　土壙402(1/30) ……649
第946図　土壙403(1/30) ……649
第947図　土壙404(1/30) ……649
第948図　土壙405(1/30) ……649
第949図　土壙406(1/60) ……650
第950図　土壙407(1/60) ……650
第951図　土壙408(1/30) ……650
第952図　土壙409(1/30) ……651
第953図　土壙410(1/30) ……651
第954図　土壙411(1/30) ……651
第955図　土壙412(1/30) ……651
第956図　土壙413(1/30) ……652
第957図　土壙414(1/60)・遺物 ……652
第958図　土壙415(1/60)・遺物 ……653
第959図　土壙416(1/60)・遺物 ……654
第960図　土壙417(1/30) ……654
第961図　土壙418(1/30) ……654
第962図　土壙419(1/30)・遺物 ……655
第963図　土壙420(1/30)・遺物 ……656
第964図　土壙421(1/30)・遺物 ……656
第965図　土壙422(1/30)・遺物 ……657
第966図　土壙423(1/30) ……657
第967図　土壙424(1/30)・遺物 ……657
第968図　土壙墓6(1/30)・遺物 ……658
第969図　土壙墓7(1/30)・遺物 ……658

第970図　土壙墓８(1/30)・遺物……659
第971図　土壙墓９(1/30)……659
第972図　土壙墓10(1/30)……659
第973図　土壙墓11(1/30)……659
第974図　土壙墓12(1/30)……660
第975図　土壙墓13(1/30)・遺物……660
第976図　火葬墓１(1/10)・遺物(１)……661
第977図　火葬墓１遺物(２)……662
第978図　火葬墓２(1/10)・遺物(１)……662
第979図　火葬墓２遺物(２)……663
第980図　柱穴列１(1/100)……663
第981図　柱穴列２・３・４・５(1/80)……664
第982図　柱穴列２～５遺物……665
第983図　柱穴列６(1/120)……665
第984図　柱穴遺物(１)……665
第985図　柱穴遺物(２)……666
第986図　柱穴遺物(３)……667
第987図　土器溜り３遺物……668
第988図　溝42(1/60)……669
第989図　溝43遺物……669
第990図　溝44遺物……670
第991図　溝45(1/60)……670
第992図　溝46・47(1/30)……670
第993図　溝48(1/30)……670
第994図　溝49(1/30)・遺物……670
第995図　溝50・51(1/30)……671
第996図　溝50・51遺物(１)……672
第997図　溝50・51遺物(２)……673
第998図　溝50・51遺物(３)……674
第999図　溝52(1/30)……674
第1000図　溝52遺物……675
第1001図　溝53(1/30)……675
第1002図　溝53遺物……676
第1003図　溝54(1/30)……677
第1004図　溝55(1/30)……677
第1005図　溝56(1/30)……677
第1006図　溝57遺物……677
第1007図　溝59遺物……677
第1008図　溝61～67(1/60)……677
第1009図　溝69遺物……678
第1010図　溝70遺物……678
第1011図　溝71(1/60)・遺物……678
第1012図　溝72(1/60)・遺物……678
第1013図　溝73(1/60)・遺物……679
第1014図　溝74・75(1/60)・遺物……679
第1015図　溝76(1/60)……679
第1016図　溝77・78(1/60)……680
第1017図　溝79(1/30)……680
第1018図　溝81・82(1/30)……680
第1019図　溝87～88(1/60)・遺物……680
第1020図　溝89～94遺物……680
第1021図　溝95～97(1/30)・遺物……681
第1022図　溝98・99(1/30)……681
第1023図　溝98・99遺物(１)……682
第1024図　溝98・99遺物(２)……683
第1025図　溝100(1/30)・遺物(１)……684
第1026図　溝100遺物(２)……685
第1027図　溝101(1/30)・遺物(１)……685
第1028図　溝101遺物(２)……686
第1029図　溝102(1/30)・遺物(１)……687
第1030図　溝102遺物(２)……688
第1031図　溝102遺物(３)……689
第1032図　道路状遺構１(1/80)……689
第1033図　畑(1/500)……690
第1034図　畑断面(1/60)……691
第1035図　畑遺物(１)……692
第1036図　畑遺物(２)……692
第1037図　低位部２遺物……693
第1038図　低位部３断面(1/60)……693
第1039図　低位部３遺物……693
第1040図　低位部４遺物……694
第1041図　河道断面(１)(1/60)……695
第1042図　河道断面(２)(1/60)……696
第1043図　河道遺物(１)……697
第1044図　河道遺物(２)……698
第1045図　河道遺物(３)……699
第1046図　河道遺物(４)……700
第1047図　河道遺物(５)……701
第1048図　河道遺物(６)……702
第1049図　河道遺物(７)……703
第1050図　河道遺物(８)……704
第1051図　河道遺物(９)……705
第1052図　河道遺物(10)……706
第1053図　河道遺物(11)……707
第1054図　河道遺物(12)……708
第1055図　河道遺物(13)……709
第1056図　河道遺物(14)……710
第1057図　河道遺物(15)……711
第1058図　河道遺物(16)……712
第1059図　河道遺物(17)……713

第1060図　河道遺物(18)……714
第1061図　河道遺物(19)……715
第1062図　河道遺物(20)……716
第1063図　河道遺物(21)……717
第1064図　河道遺物(22)……718
第1065図　河道遺物(23)……719
第1066図　河道遺物(24)……720
第1067図　河道遺物(25)……721
第1068図　河道遺物(26)……722
第1069図　河道遺物(27)……723
第1070図　河道遺物(28)……724
第1071図　河道遺物(29)……725
第1072図　河道遺物(30)……726
第1073図　河道遺物(31)……727
第1074図　河道遺物(32)……728
第1075図　河道遺物(33)……729
第1076図　河道遺物(34)……730
第1077図　河道遺物(35)……731
第1078図　河道遺物(36)……732
第1079図　河道遺物(37)……733
第1080図　河道遺物(38)……734
第1081図　河道遺物(39)……735
第1082図　河道遺物(40)……736
第1083図　河道遺物(41)……737
第1084図　河道遺物(42)……738
第1085図　河道遺物(43)……739
第1086図　河道遺物(44)……740
第1087図　河道遺物(45)……741
第1088図　河道遺物(46)……742
第1089図　河道遺物(47)……743
第1090図　その他の遺物(1)……744
第1091図　その他の遺物(2)……745
第1092図　その他の遺物(3)……746
第1093図　その他の遺物(4)……747
第1094図　その他の遺物(5)……748
第1095図　その他の遺物(6)……749
第1096図　その他の遺物(7)……750
第1097図　その他の遺物(8)……751
第1098図　その他の遺物(9)……752
第1099図　その他の遺物(10)……753
第1100図　その他の遺物(11)……754
第1101図　その他の遺物(12)……755
第1102図　その他の遺物(13)……756
第1103図　その他の遺物(14)……757
第1104図　その他の遺物(15)……758
第1105図　その他の遺物(16)……759
第1106図　その他の遺物(17)……760
第1107図　その他の遺物(18)……761
第1108図　その他の遺物(19)……762
第1109図　その他の遺物(20)……763
第1110図　近世遺構全体図(1)(1/400) …765～766
第1111図　近世遺構全体図(2)(1/400) …767～768
第1112図　近世主要遺構全体図(1/2,000) …769
第1113図　掘立柱建物18(1/60)・遺物……770
第1114図　井戸6(1/30)・遺物……771
第1115図　土壙425(1/30) ……772
第1116図　土壙426(1/30) ……772
第1117図　柱穴列7(1/120) ……772
第1118図　溝103(1/60)・遺物 ……772
第1119図　溝104(1/60) ……773
第1120図　溝105(1/60) ……773
第1121図　溝106・107(1/60)・遺物……773
第1122図　溝108(1/60) ……773
第1123図　溝109(1/60) ……773
第1124図　溝110(1/30) ……773
第1125図　河道遺物 ……775
第1126図　その他の遺物 ……775
第1127図　第2微高地東部弥生時代中期主要遺構(1/600) ……782
第1128図　第2微高地東部弥・後・Ⅰ～Ⅲ主要遺構(1/600) ……783
第1129図　弥生時代中期の甕(1/10)……787
第1130図　弥生時代中期の甕・壺・高杯・台付鉢(1/10)……789
第1131図　飛鳥様式の軒丸瓦の出土地点 …797
第1132図　加茂政所遺跡出土須恵器の分類(1/6)…798
第1133図　火頭形塼仏略図 ……801
第1134図　「加茂政所廃寺」関連遺構(1/600) …807
第1135図　丸瓦類型別の布目糸数による破片数割合 ……809
第1136図　平瓦類型別の布目糸数による破片数割合 ……810
第1137図　「竜頭」・「撞座」の推定復元図 …814
第1138図　杯Aの法量分布 ……819
第1139図　杯Cの法量分布 ……819
第1140図　9世紀から11世紀の土師器編年案(1/6) ……822
第1141図　宝相華紋軒丸瓦・均整唐草紋軒平瓦の分類(1/6) ……826
第1142図　陰刻唐草紋軒平瓦の分類(1/6) …828

表目次

第４表　竪穴住居１軒に対する掘立柱建物と袋状土壙（方形土壙）の数量比 ……785

写真目次

写真１　1　砂場調査区作業風景(南東から)
2　竪穴住居２(東から)
3　竪穴住居６(東から)
写真２　1　竪穴住居11(北西から)
2　竪穴住居12(北から)
3　掘立柱建物１(北から)
写真３　1　袋状土壙５埋土断面(東から)
2　袋状土壙６(北西から)
3　土壙１遺物出土状況(南東から)
写真４　1　土壙５貝出土状況(西から)
2　土壙16貝層断面(北から)
3　土壙64貝出土状況(北西から)
写真５　1　土壙75遺物出土状況(南から)
2　土壙76貝層断面(北西から)
3　土壙88埋土断面(南東から)
写真６　1　土壙102埋土断面(南西から)
2　土壙墓１(北から)
3　土壙墓４人骨出土状況(北西から)
写真７　1　竪穴住居15(北西から)
2　竪穴住居16(北東から)
3　竪穴住居24(西から)
写真８　1　竪穴住居27遺物出土状況(南から)
2　竪穴住居27(南から)
3　竪穴住居28(北西から)
写真９　1　竪穴住居29断面(南東から)
2　竪穴住居35(南から)
3　竪穴住居35銅鏃出土状況
写真10　1　竪穴住居36調査風景(南西から)
2　竪穴住居36遺物出土状況(北から)
3　竪穴住居40炭化材出土状況(北から)
写真11　1　竪穴住居43(北西から)
2　竪穴住居44(北西から)
3　竪穴住居44銅釧出土状況(北西から)
写真12　1　竪穴住居46(南東から)
2　竪穴住居47(南東から)
3　袋状土壙24埋土断面(南西から)
写真13　1　袋状土壙26(南東から)
2　袋状土壙28遺物出土状況(東から)
3　袋状土壙29(南から)
写真14　1　袋状土壙40(北西から)
2　袋状土壙52埋土断面(西から)
3　袋状土壙61埋土断面(北西から)
写真15　1　土壙216(南から)
2　土壙224遺物出土状況(東から)
3　土壙239遺物出土状況(西から)
写真16　1　土壙254遺物出土状況(北東から)
2　土壙262埋土断面(南から)
3　土壙264遺物出土状況(北から)
写真17　1　土壙310遺物出土状況(西から)
2　土壙310(北から)
3　土壙310銅釧出土状況(東から)
写真18　1　土壙墓５(北から)
2　土器棺墓２～12(南から)
3　土器棺墓３～６・８～12(南から)
写真19　1　土器棺墓２(北西から)
2　土器棺墓３(北東から)
3　土器棺墓５(北から)
写真20　1　土器棺墓６(南東から)
2　土器棺墓８(東から)
3　土器棺墓５(左)・11(右)(東から)
写真21　1　土器溜り２遺物出土状況(南東から)
2　溝15埋土断面(南東から)
3　溝９・10、水田４(東から)
写真22　1　水田４島状高まり(西から)
2　水田３～断面(北西から)
3　水田３～断面(南西から)
写真23　1　竪穴住居57(南東から)
2　竪穴住居59(北西から)
3　竪穴住居64(北から)

写真24　1　竪穴住居67遺物出土状況
(南西から)
2　竪穴住居68断面(南西から)
3　竪穴住居69(南から)
写真25　1　土壙314(南西から)
2　溝19(南から)
3　溝24・25断面(南東から)
写真26　1　竪穴住居78～81(南西から)
2　竪穴住居78(南から)
3　竪穴住居81(南西から)
写真27　1　竪穴住居87遺物出土状況
(南西から)
2　竪穴住居87(南西から)
3　竪穴住居94(西から)
写真28　1　竪穴住居98(北西から)
2　竪穴住居98馬歯出土状況(西から)
3　竪穴住居106埋土断面(南から)
写真29　1　竪穴住居113(南から)
2　竪穴住居113カマド内土器(南から)
3　竪穴住居113カマド(南から)
写真30　1　竪穴住居121(南から)
2　竪穴住居121カマド燃焼部(南から)
3　竪穴住居121カマド(南から)
写真31　1　竪穴住居130(南東から)
2　竪穴住居133(南東から)
3　掘立柱建物２(北西から)
写真32　1　掘立柱建物３(北から)
2　焼成土壙２(南東から)
3　焼成土壙６(南東から)
写真33　1　焼成土壙８(南西から)
2　焼成土壙11(南から)
3　溝30(北東から)
写真34　1　溝31(北東から)
2　溝34(南東から)
3　溝34断面(南西から)
写真35　1　掘立柱建物４(南から)
2　掘立柱建物８(北東から)
3　掘立柱建物９(南東から)
写真36　1　掘立柱建物10(北西から)
2　掘立柱建物11(北から)
3　掘立柱建物12(南東から)
写真37　1　井戸３断面(南から)
2　井戸５(北西から)
3　土壙339(北から)
写真38　1　土壙375調査風景(南から)
2　土壙375埋土断面(北東から)
3　土壙375(北から)
写真39　1　土壙384断面(東から)
2　土壙388(下)・389(上)(南西から)
3　土壙424遺物出土状況(西から)
写真40　1　土壙墓７(南から)
2　土壙墓８(西から)
3　土壙墓９(東から)
写真41　1　土壙墓10(北東から)
2　土壙墓12(南から)
3　土壙墓13(北東から)
写真42　1　火葬墓１(西から)
2　火葬墓１骨片・銅銭出土状況
(南西から)
3　火葬墓２(北から)
写真43　1　溝43(北から)
2　溝69・70(西から)
3　溝78(南東から)
写真44　1　溝96断面(南東から)
2　溝101(南東から)
3　溝101断面(南から)
写真45　1　溝102ｕ－ｕ'断面(南から)
2　溝102ｖ－ｖ'断面(南東から)
3　道路状遺構１(北から)
写真46　1　道路状遺構１(北東から)
2　畑１下層(南から)
3　畑１上層(南から)
写真47　1　掘立柱建物18(西から)
2　掘立柱建物18Ｐ２石臼出土状況
(北から)
3　溝103断面(北東から)
写真48　1　溝104(北東から)
2　水田６(南東から)
3　山陽道開通後の加茂政所遺跡
(南西から)
写真49　竪穴住居６(24・27・Ｓ４・Ｓ５・Ｓ７～
９・Ｓ13・Ｃ１・Ｃ３・Ｃ４)
竪穴住居７(48・Ｃ６・Ｃ７・Ｇ１)
写真50　袋状土壙４(80・86・87・88)
袋状土壙５(89)
袋状土壙６(Ｃ12)
袋状土壙９(Ｓ23)
写真51　袋状土壙10
写真52　袋状土壙11(146・147)
袋状土壙16(168・171)

土壙17(237・248)
写真53　土壙19(254)
土壙20(264)
土壙22(271・274・275)
写真54　土壙33(288・290・292～294)
土壙35(295・296)
写真55　土壙47(311)
土壙54(316～318・320)
写真56　土壙60(335)
土壙61(338)
土壙76(367)
土壙88(394・407・409)
写真57　土壙96(419)
土壙102(446)
土壙123(C25)
土壙130(471・472)
土壙166(C27)
土壙169(S51)
写真58　土壙173
写真59　土壙176(S53)
土壙177(S54)
土壙178(619・620)
土壙186(S55・S56)
土壙196(658)
土壙200(664)
写真60　低位部1(715・716)
その他(803・804・813・814)
写真61　竪穴住居13
写真62　竪穴住居27(1)
写真63　竪穴住居27(2)
写真64　竪穴住居27(3)
写真65　竪穴住居27(4)
写真66　竪穴住居27(5)
写真67　竪穴住居30(1133)
竪穴住居32(1134)
竪穴住居35(1145・1150・1166・1167・1171・M6)
写真68　竪穴住居36(1172・1177・1185・1186・1190・S211・S217・C70・C71)
竪穴住居38(G3)
写真69　竪穴住居41(1214・1216・1221・1223・1225・1226)
竪穴住居42(1229・M7)
写真70　竪穴住居44
写真71　竪穴住居46(1264・1272・S234・S235・C81)
竪穴住居47(1281・1285・1300・1303・S239・G4)
写真72　袋状土壙22(1322)
袋状土壙28(1)(1353・1354・1359・1420)
写真73　袋状土壙28(2)(1356・1360・1363)
袋状土壙31(1425・1426・1434)
写真74　袋状土壙36
写真75　袋状土壙37
写真76　袋状土壙42(S255・S256・S257)
袋状土壙47(1531・1536・C89)
袋状土壙70(1620・1621・1624)
写真77　土壙223(1640・1642・1647・1655)
土壙224(1659・1661・1663)
写真78　土壙239
写真79　土壙262
写真80　土壙310(1)
写真81　土壙310(2)(1850・1854・1855・M12)
土壙312(1)(1874・1875)
写真82　土壙312(2)
写真83　土器棺墓3(1900・1901)
土器棺墓5(1903・1904)
写真84　土器棺墓8(1910・1911)
土器棺墓11(1914・1915)
写真85　溝15(1)
写真86　溝15(2)
写真87　溝15(3)
写真88　溝15(4)(2115・2120・2123～2126・2132・2136・2137・2139・2144・M13)
溝17(C96)
写真89　竪穴住居59(2340・2342)
竪穴住居60(2345・2347・2351～2353・M18)
竪穴住居63(2354)
写真90　竪穴住居66
写真91　竪穴住居67(1)
写真92　竪穴住居67(2)
写真93　竪穴住居68(2476)
竪穴住居69(2481・2484)
竪穴住居70(2486・2489)
柱穴16(2502)
溝24(2520)
溝25(1)(2528・2533)
写真94　溝25(2)

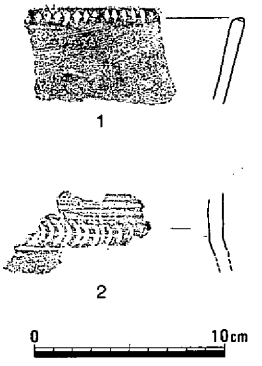
写真95　溝25(3)
写真96　溝25(4)
写真97　溝25(5)
写真98　竪穴住居77(2733・2734)
竪穴住居78(2735・2737)
竪穴住居79(2741～2743)
竪穴住居82(1)(2765)
写真99　竪穴住居82(2)(2754・2755・2758・2759・2764)
竪穴住居85(M30)
竪穴住居87(2780・2783・2792)
写真100 竪穴住居90(2799・2800)
竪穴住居94(2804)
竪穴住居96(2806～2808・2810・2811)
写真101 竪穴住居98(S298)
竪穴住居113(2841・2844・2847)
竪穴住居118(C123・C124)
竪穴住居121(2861・2865・2866・2868)
写真102 土壙331(2904)
土壙333(2905)
溝31(2920・2922・2923・2925・2926・2934・2944・2946)
写真103 その他の石製品(弥生時代)
写真104 その他の石製品・金属製品・玉類(弥生～古墳)
写真105 その他の分銅形土製品
写真106 その他の土製品(弥生～古墳)
写真107 飛鳥様式の瓦
写真108 飛鳥・白鳳様式の瓦
写真109 土壙336(3063)
土壙350(3075)
土壙359(3080～3082・3084)
土壙361(3085)
土壙368(3089・3090・3092～3095)
土壙372(3103・3105)
土壙378(3118)
写真110 土壙375(1)
写真111 土壙375(2)
写真112 土壙375(3)
写真113 土壙388
写真114 土壙389
写真115 土壙390(3242・3245・3251)
土壙391(3258・3259・3267・3274～3276)
写真116 土壙392(上段)
土壙398(中段)
土壙424(3418・S317)
土壙墓7(M82)
土壙墓8(3421)
写真117 火葬墓1(3422・M86～88・M98)
火葬墓2(3423・M99～101・M112)
写真118 溝50・51
写真119 溝53(3555・3563・3565・3567・3569・3571・3572・3576～3579)
溝100(3623・M124・M126)
溝102(3633・3634・3636・3640)
写真120 河道(1)
写真121 河道(2)
写真122 河道(3)
写真123 河道(4)
写真124 河道(5)
写真125 河道(6)
写真126 河道(7)
写真127 河道(8)
写真128 河道(9)
写真129 河道(10)
写真130 その他の瓦
写真131 その他の石製品・金属製品(古代～近世)
写真132 その他の金属製品・土製品(古代～近世)

第１章　調査の概要

第１節　遺跡の概要

加茂政所遺跡は、本調査区内では３つの微高地に分かれる。便宜的にこれらを西から「第１微高地・第２微高地・第３微高地」と称する。第１微高地は、低位部を挟んで津寺遺跡の東に位置し、幅30～40ｍと細長く、北東から南西に延びる。さらに低位部を介して、東に第２・第３微高地が存在する。この間に近世には水田化した幅70ｍの河道の肩口が確認されているが、上限が明らかでなく、両微高地が本来一続きである可能性もある。各微高地の高さは、第１微高地が最も低く、第２微高地より60㎝程度低い。第３微高地も第２微高地より若干低いようである。

当遺跡で最も古い遺物は縄文時代晩期の土器である（第８図）。１・２とも表面の磨耗はなく、集落が近くに存在すると思われる。また、遺構の確認は弥生時代前期後葉からで、第１微高地の土壙１基である。



第８図　砂場調査区出土の縄文土器

本格的に遺構が検出され始めるのは第２・３微高地で、弥生時代中期から後期にかけてである。中期では中葉の遺構が多くを占めており、竪穴住居12軒・掘立柱建物１棟・袋状土壙19基・土壙214基・土壙墓４基などが検出されている。後期では竪穴住居46軒・袋状土壙53基・土壙97基・土器棺墓11基などが確認された。また、津寺遺跡と第１微高地の間の水田と、第１微高地と第２微高地の間にある、幅54ｍの北東から南西にかけて延びる低位部は、これ以降水田等に利用されている。

古墳時代前期は竪穴住居25軒・土壙４基などが検出され、概ね弥生時代の状況を引き継ぐが、第２微高地の南北溝が中期までに廃絶してから間もなく様子が変化するようである。中期には竪穴住居６棟が認められ、大きな変化はないが、後期になると、第１微高地が比較的安定し、大きな集落が営まれる。遺構は竪穴住居55軒・掘立柱建物２棟・焼成土壙11基・土壙19基などで、集落内は溝で区画されている。古墳時代のこのような状況は、当遺跡に限ったことではなく、津寺遺跡などを含めたより広範囲な地域での現象である。

古代には、掘立柱建物８棟・井戸１基・土壙56基・火葬墓２基などが認められるが、奈良時代の状況は不明な点が多く、９世紀後半からの平安時代が中心となる。特に平安末期の第２微高地では、梵鐘鋳造遺構や区画溝の存在、多量の瓦出土などから小規模な寺院が建立されていた公算が高い。瓦には平安宮内裏のものと同笵のものも見られ、国衙領や荘園経営に関係した造営者像が浮かび上がる。

中世では、掘立柱建物６棟・井戸４基・土壙33基・土壙墓８基などが確認され、河道の肩口では土器や瓦が多量に廃棄されている。遺物から、近世初頭までに建物が廃絶した可能性を指摘でき、織田勢と毛利勢の備前・備中境での攻防に関連したこの地域の集落動向を暗示すると思われる。

近世以降は、掘立柱建物１棟・井戸１基・土壙２基・溝８条と非常に少なく、遺物も同様である。この時期以後、この地域は主に水田として利用されていたと考えられる。（柴田）

第２節　弥生時代前期～中期の遺構・遺物

（１）概要

前期の遺構・遺物は、第１微高地の西端部に位置する橋脚９調査区から検出した弥・前・Ⅲの土壙と出土土器のみである。

中期の遺構は、竪穴住居12軒、掘立柱建物１棟、袋状土壙19基、土壙214基、土壙墓４基、土器棺墓１基、溝７条、水田２面などを報告している。時期は、弥・中・Ⅱ期のものが多いが、袋状土壙や土壙にはⅢ期のものも含まれている。遺構の多くは第２・３微高地に集中しており、第１微高地との間の低位部に帯状の水田がつくられていた。遺構の中では、多くの貝や魚骨が廃棄されている土壙が注目できる。また、土壙墓と土器棺墓の検出はこの時期のものとしては貴重であろう。

中期の遺物としては、土器・土製品、石器・石製品などを報告している。このうち土器は弥・中・Ⅱのなかでも中相が多く、これまで資料の多くない時期のものとして重要であろう。土製品の中では、21点を報告している分銅形土製品が注目できるであろう。　（平井）

（２）竪穴住居

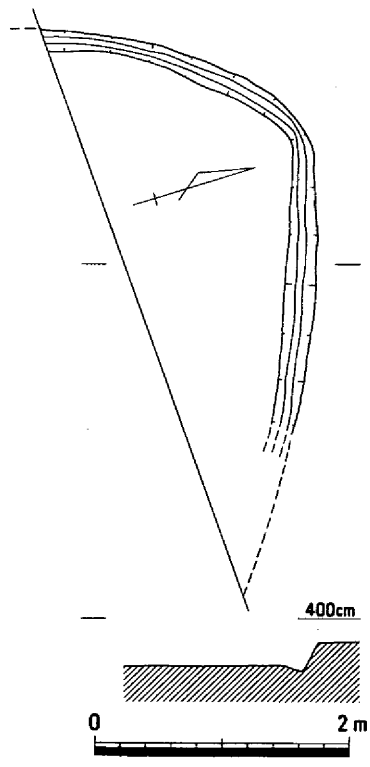
竪穴住居１（第９図）

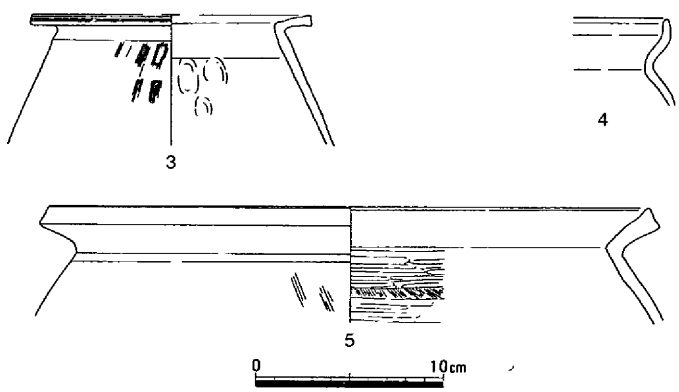
第２微高地にあり、調査区の南西端で検出した。大半が調査区外に続くが、平面形は方形を呈するとおもわれる。床面隅に壁体溝をめぐらせることから竪穴住居とした。

甕３は口縁部が強く屈曲し、肥厚する端部の外面には凹線をめぐらせる。甕５はくの字に曲げる口縁部をもち、端部は上方に肥厚させて、内傾する面をなす。時期は、弥・中・Ⅲである。(弘田)

竪穴住居２（第14図、写真１－２）

第２微高地にあり調査区の中央からやや西に位置する。平面形は円形を呈し、規模は、直径が560cmで、検出面からの深さが30cmを測る。床面上では、周囲に壁体溝をめぐらせるほか、柱穴や

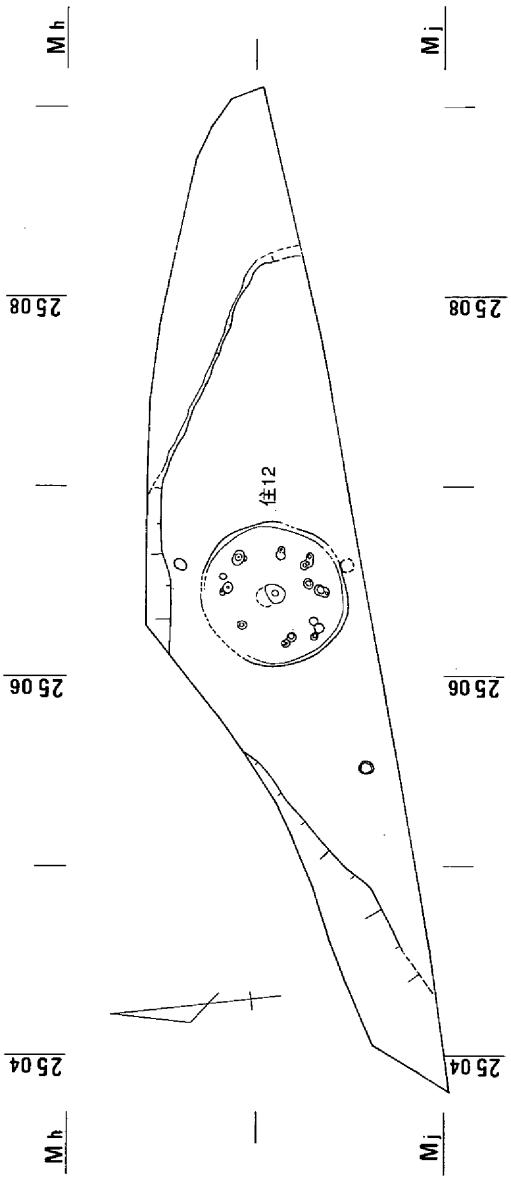




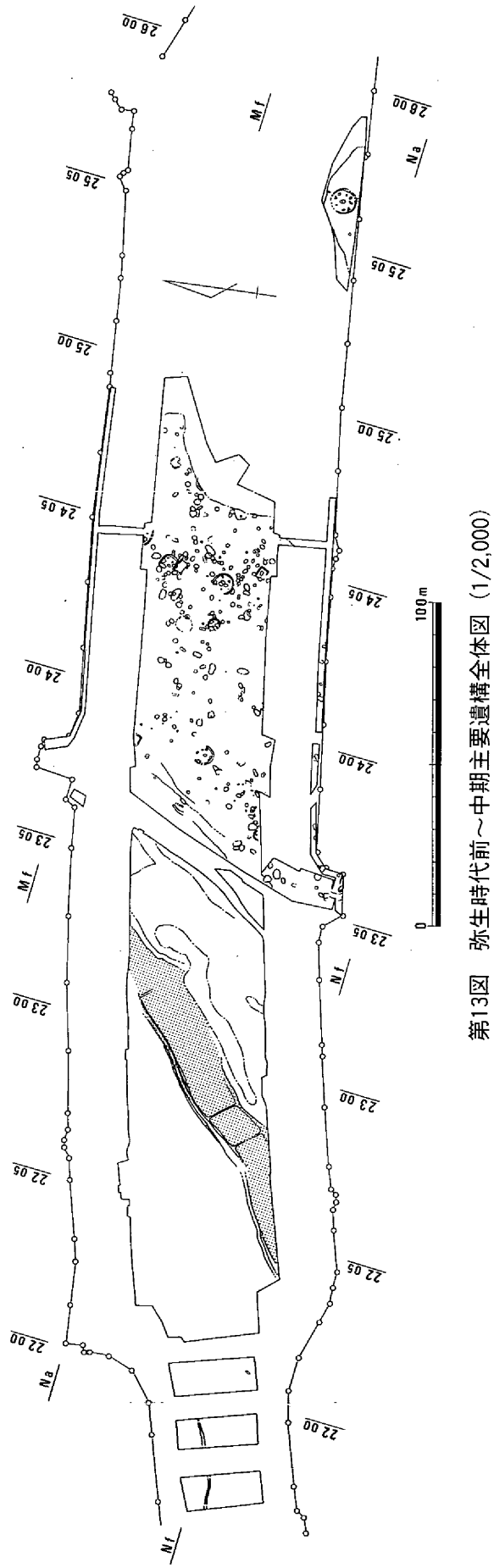
第９図　竪穴住居１（1/60）・遺物

第10図　弥生時代前～中期遺構全体図（１）（1/400）

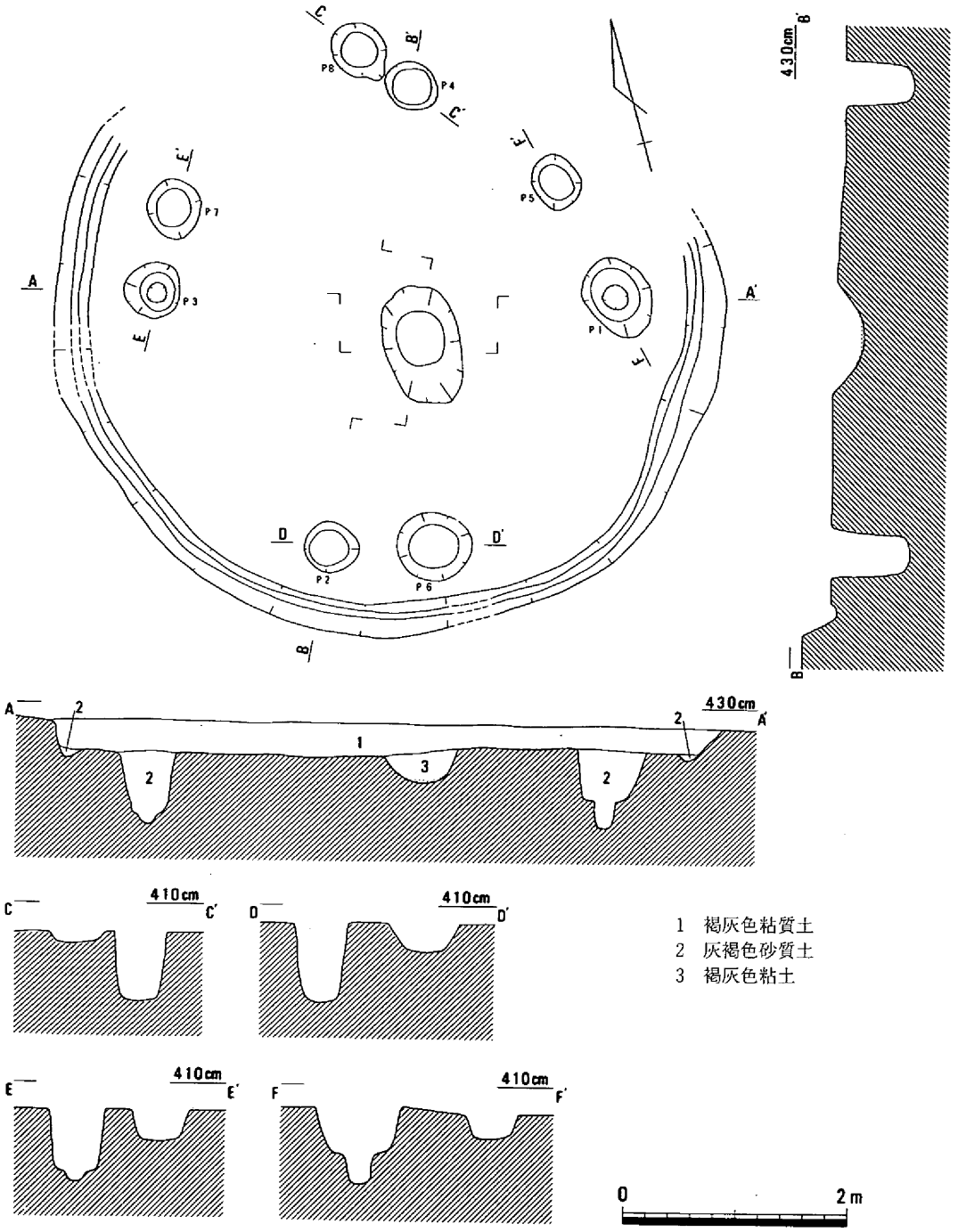
第11図　弥生時代前～中期遺構全体図（２）（1/400）



第12図　弥生時代前～中期遺構全体図（３）（1/400）



第13図　弥生時代前～中期主要遺構全体図（1/2,000）



第14図　竪穴住居２（1/60）・遺物

中央穴がみられる。柱穴は２本１組で存在し、深さの深いＰ１～４と浅いＰ５～８に分かれることから、本来は４本主柱で、１回の建て替えが行われたと思われる。中央穴は、平面形が楕円形を呈し、長さが110cm、幅は70cm、深さが30cmを測る。

この住居の時期は、弥・中・Ⅱである。　（弘田）

竪穴住居３（第15図）

第２微高地の調査区北西に位置する。ごく一部を調査したのみで、大半は調査区外に続く。方形の竪穴住居と思われ、床面隅に壁体溝がめぐる。

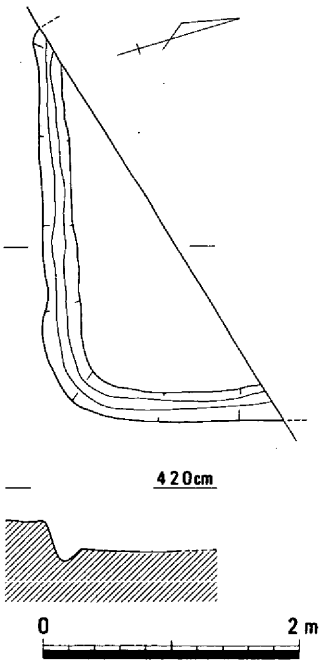
図示しうる遺物はないが、時期は弥生時代中期である。　（弘田）

竪穴住居４（第16図）

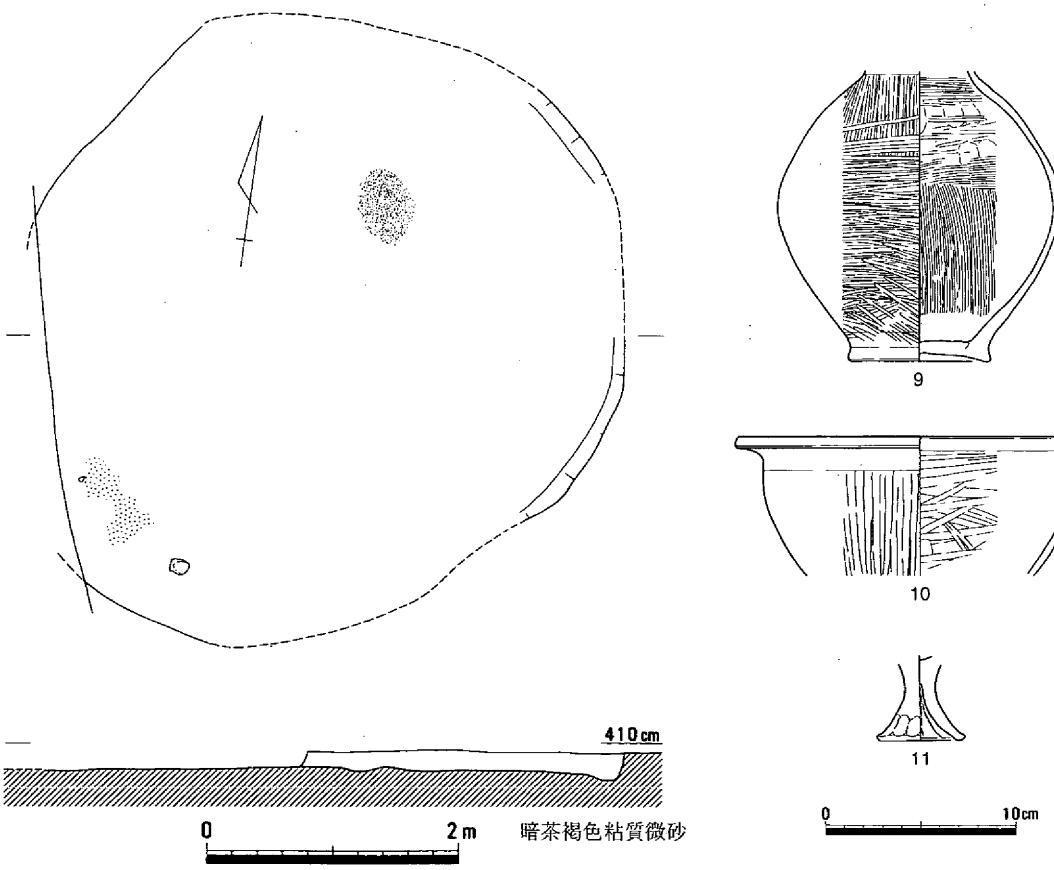
第２微高地の中央に位置する竪穴住居で、残存状況は悪い。平面形は楕円形で、長径515cmを測る。住居に伴う柱穴は確認できなかったが、南西の床面で焼土面が検出された。壺９、高杯10・11が出土しており、時期は弥・中・Ⅱと思われる。　（柴田）

竪穴住居５（第17図）

第２微高地の中央部、竪穴住居４の南に位置する焼失住居である。平面形は楕円形で、長径394cmを測る。３本の柱穴が認められ、そ



第15図　竪穴住居３（1/60）

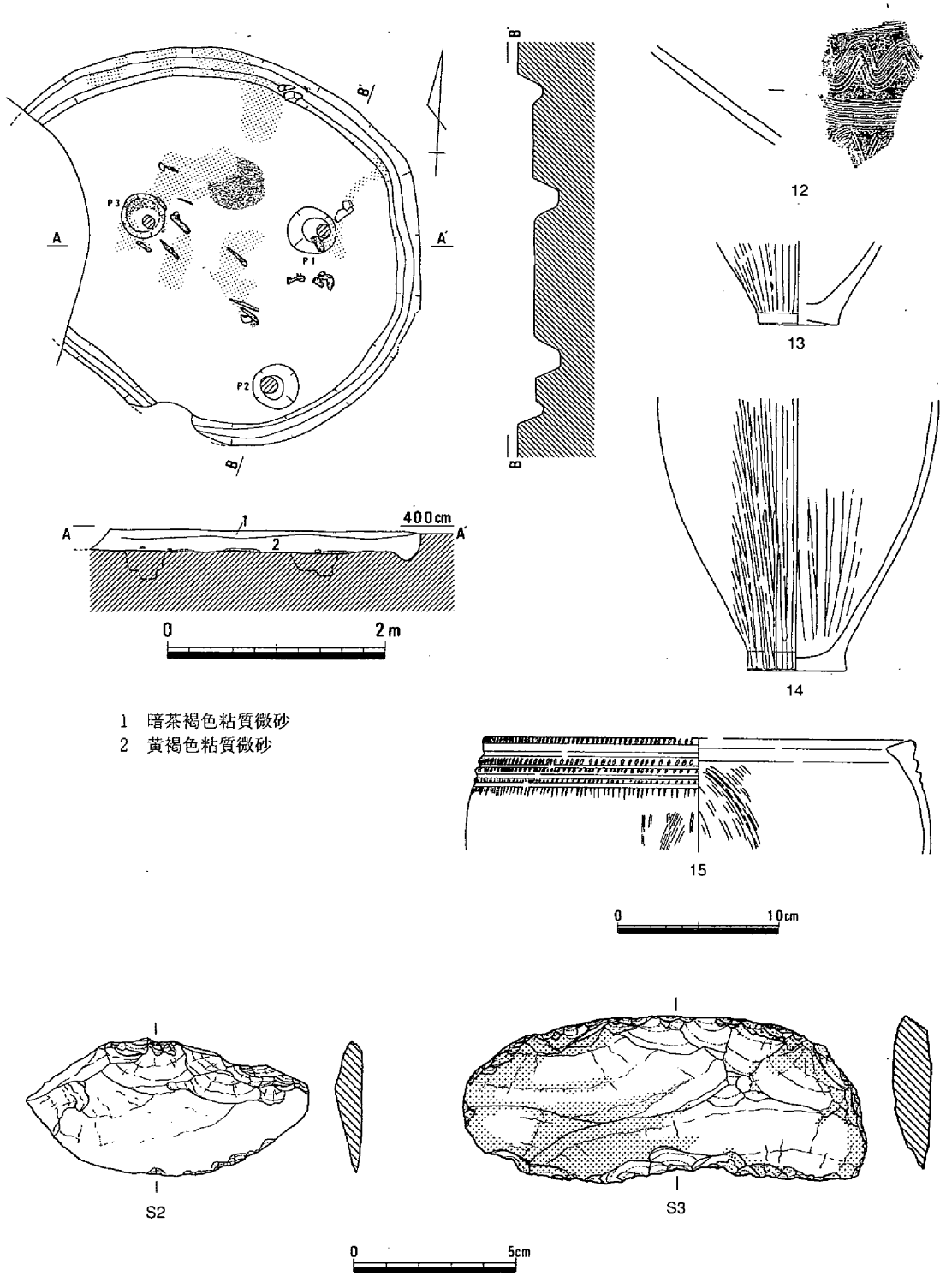


第16図　竪穴住居４（1/60）・遺物

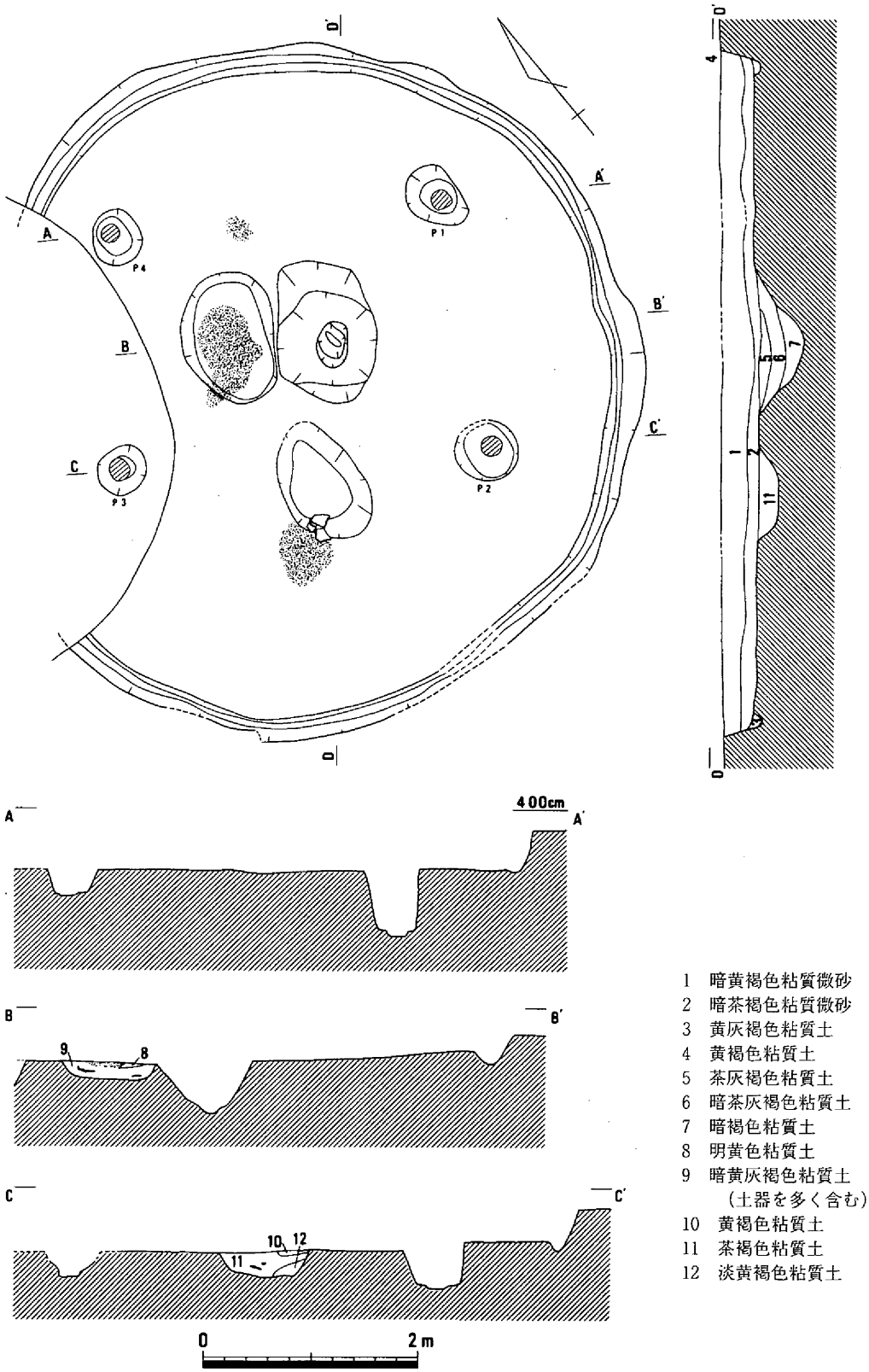
れぞれ径10～16cmの柱痕跡が確認されるが、主柱穴としてどのような構成になるかは不明である。床面中央で炭と炭化材が認められる。炭化材は炭の上にあり、Ｐ３を通り住居の長軸に沿って出土している。壺12、高杯15やスクレイパーＳ２、打製石包丁Ｓ３が出土しており、14・15・Ｓ３は床面での出土である。出土遺物から遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。　（柴田）

竪穴住居６（第18～21図、写真１－３，49）

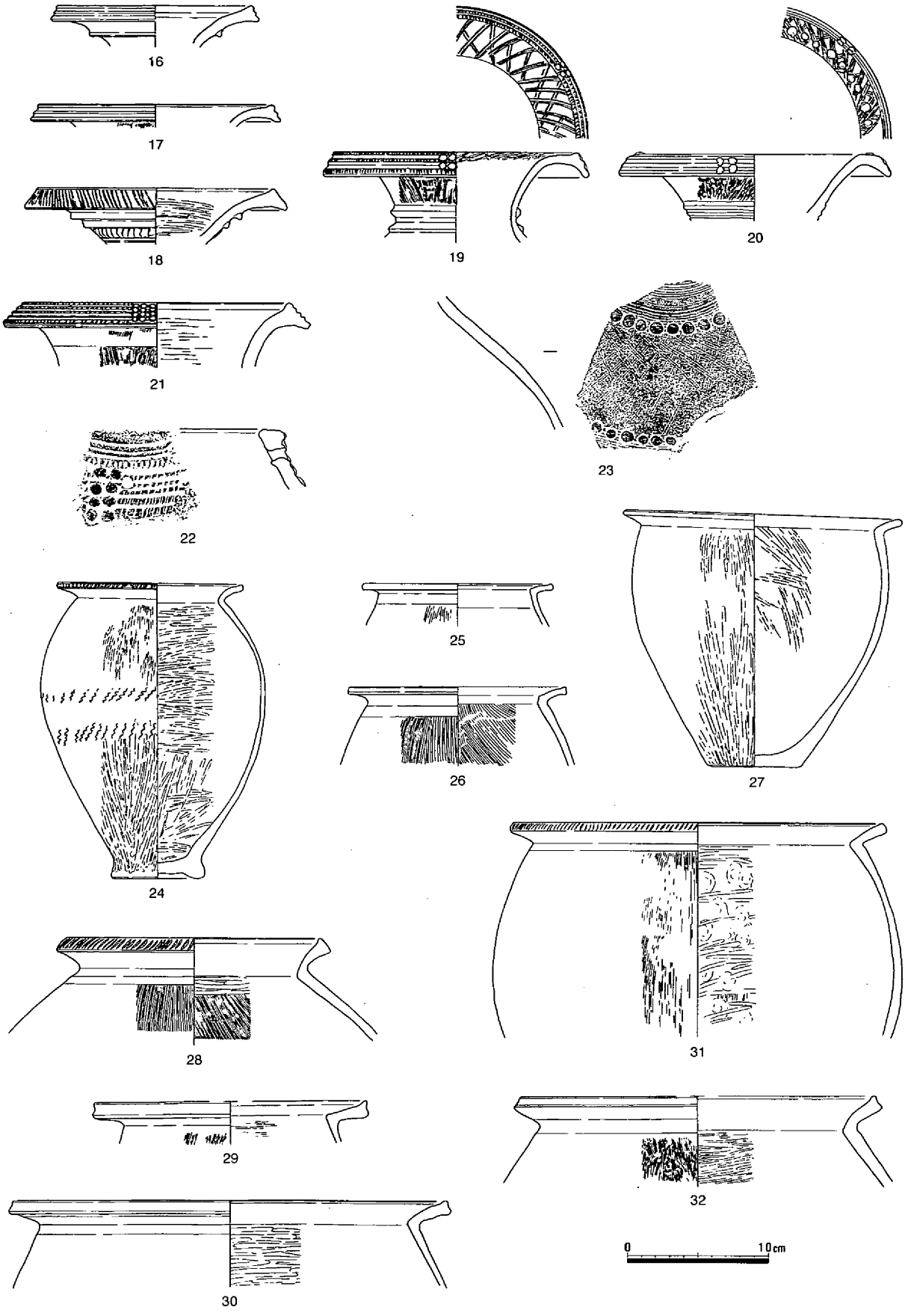
第２微高地のやや東中央部に位置する。住居の一部を弥生時代後期の住居に切られているが、平面



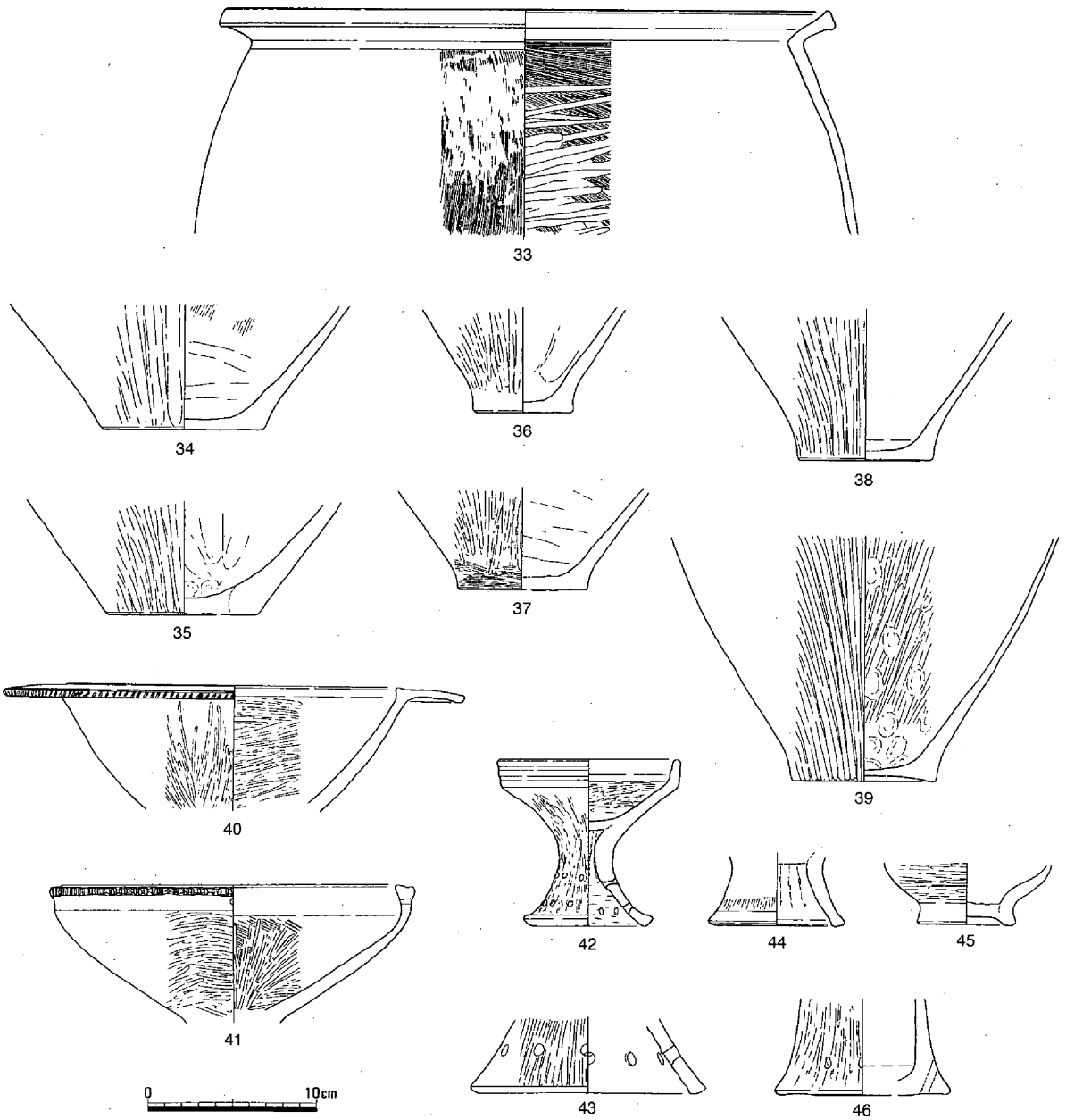
第17図　竪穴住居５（1/60）・遺物



第18図　竪穴住居６（1/60）

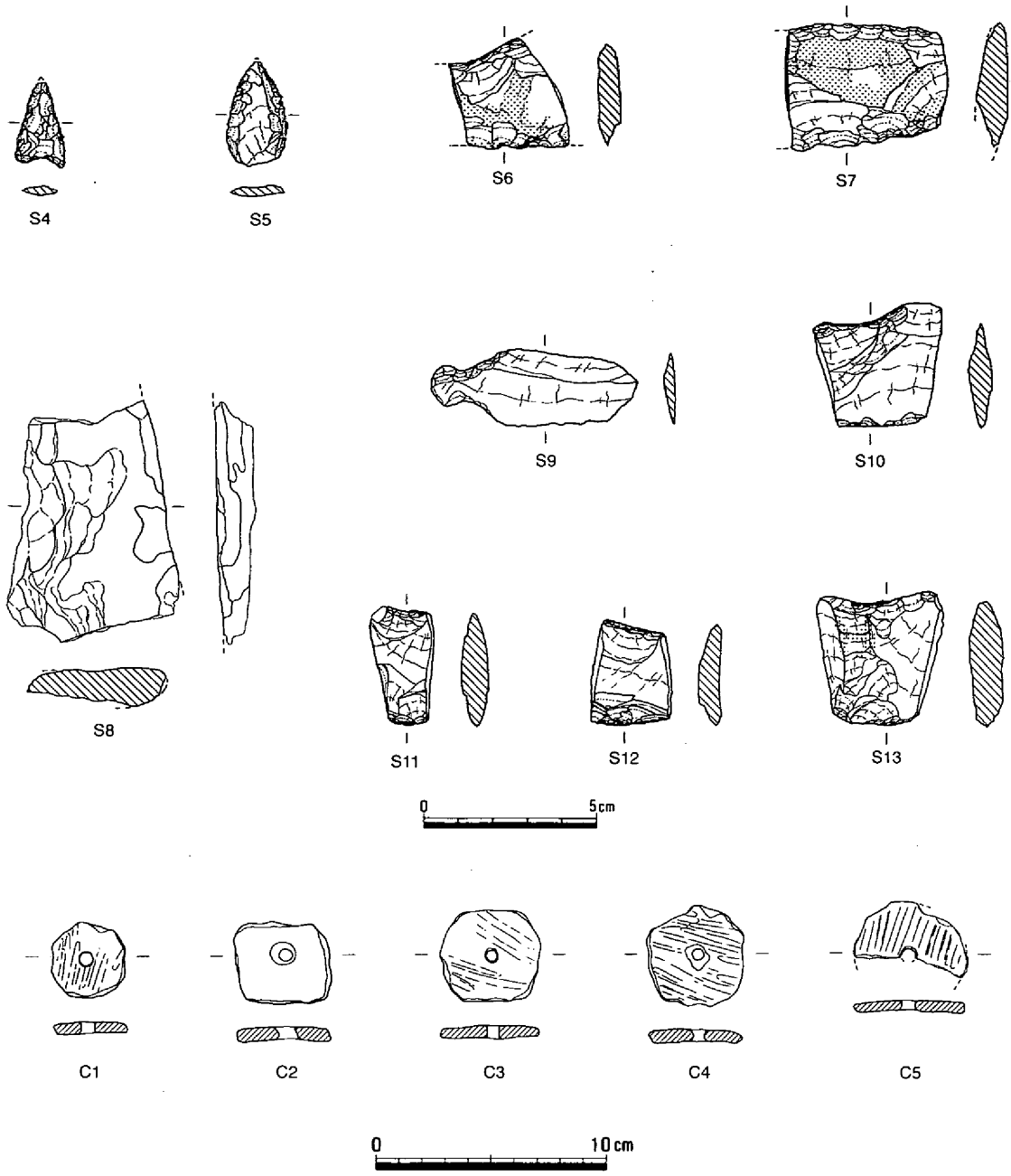


第19図　竪穴住居６　遺物（１）



第20図　竪穴住居６　遺物（２）

形は円形を呈する住居である。直径は約6.25ｍを測り、深さは遺構検出面から約30cmほど残存していた。壁際には幅10cm前後、深さ５～10cm前後の壁体溝が巡っていた。床面はほぼ平坦で、焼土面が３ケ所みられた。また、中央部には100×120cm、深さ約50cmのピットが検出されている。この中央ピットの周囲には同規模の浅いピットが２つ検出されている。柱穴は４本確認されていることから、４本柱で構成される竪穴住居である。柱穴掘り方は45～60cmのほぼ円形で、深さ40～50cm、柱痕跡は15～20cmを測る。主な出土遺物としては土器、土製品、石器がある。土器は壺16～23・34・35、甕24～33、36～39、高杯40～43、台付鉢44・45、ジョッキ形土器46など各種の土器が出土している。壺は口縁部に刻目、円形浮文、斜格子などを施文したものである。甕には口縁部に刻目を施すものが、高杯には３種類のタイプがみられた。土製品Ｃ１～５はいずれも紡錘車で、土器片を再加工したものである。Ｃ２以外は床面近くで出土している。石器は石鏃Ｓ４・５、石鏃Ｓ８、打製石包丁Ｓ６・７、石匙Ｓ



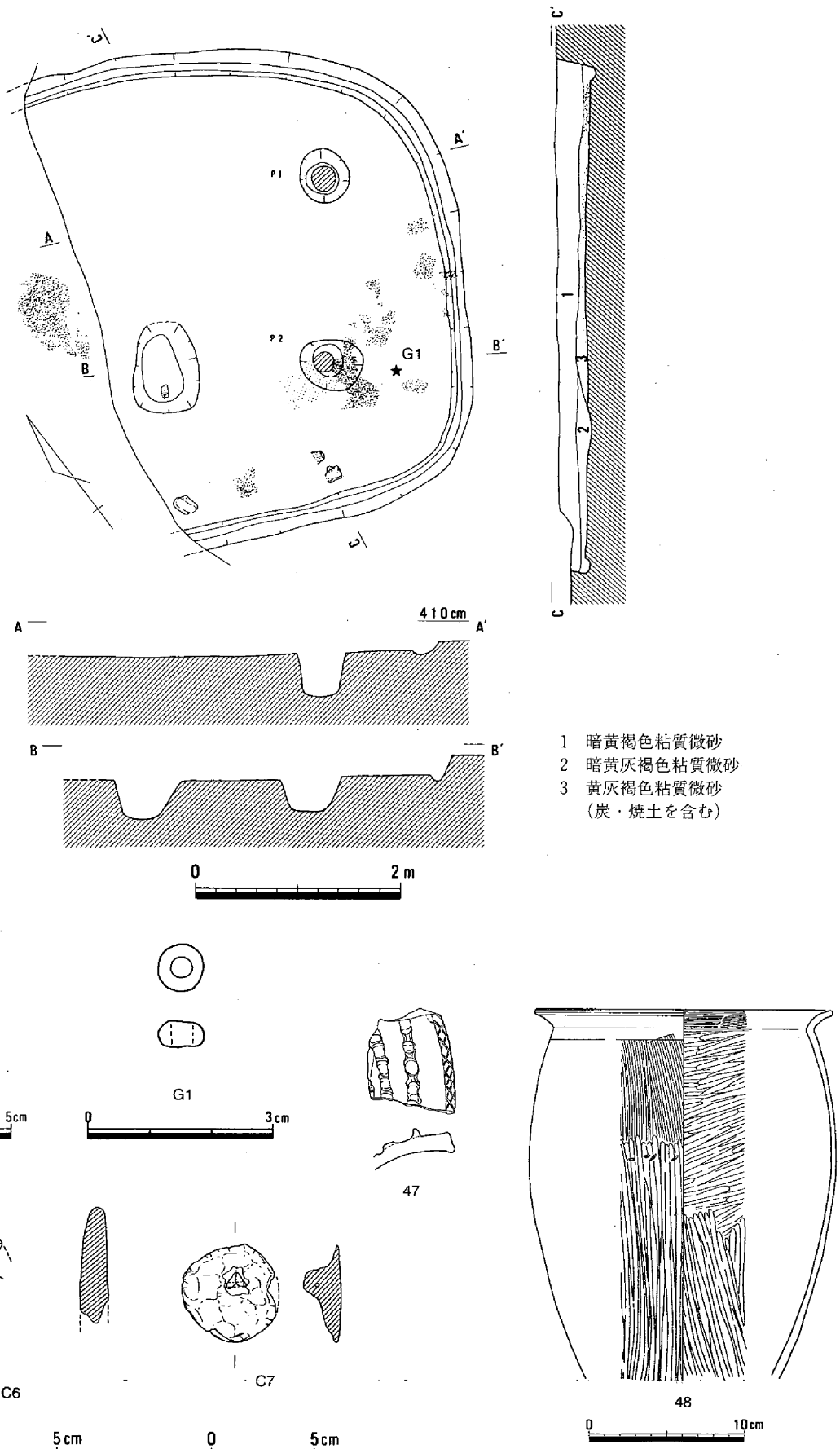
第21図　竪穴住居６　遺物（３）

９、楔Ｓ10～13などが出土している。

出土した土器の特徴からみて、この竪穴住居の時期は弥・中・Ⅱと考えられる遺構である。（松本）

竪穴住居７（第22図、写真49）

竪穴住居６から約12mほど北に位置する所で検出された遺構である。住居の西側は他の遺構に切られているが、長径は4.64m、短径は約3.8m程の隅丸方形を呈する住居である。深さは検出面から約30cm程残存していた。壁際には幅10～15cm、深さ５～10cm前後の壁体溝が巡っていた。主柱穴は２本のみ検出されたが、恐らく４本柱で構成される住居と思われる。遺物は少ないが、石錐Ｓ14、打製石包丁、ガラス玉Ｇ１、分銅形土製品Ｃ６、鏡形土製品Ｃ７、壺47、甕48など特徴のある遺物が出土している。時期は土器からみて、弥・中・Ⅱと考えられる。（松本）



第22図　竪穴住居７（1/60）・遺物

竪穴住居８（第23図）

第２微高地の北東部に位置する住居で、北半部分は調査区外になる。中央から東半分は弥・後・Ⅳの溝15や古・前の溝25に切られている。平面形は円形を基調としたものになると推測される。床面はほぼ水平で、幅25～30cm程度の壁体溝がめぐる。３本の柱穴が認められるが、これらが主柱穴を構成するかどうかは不明である。

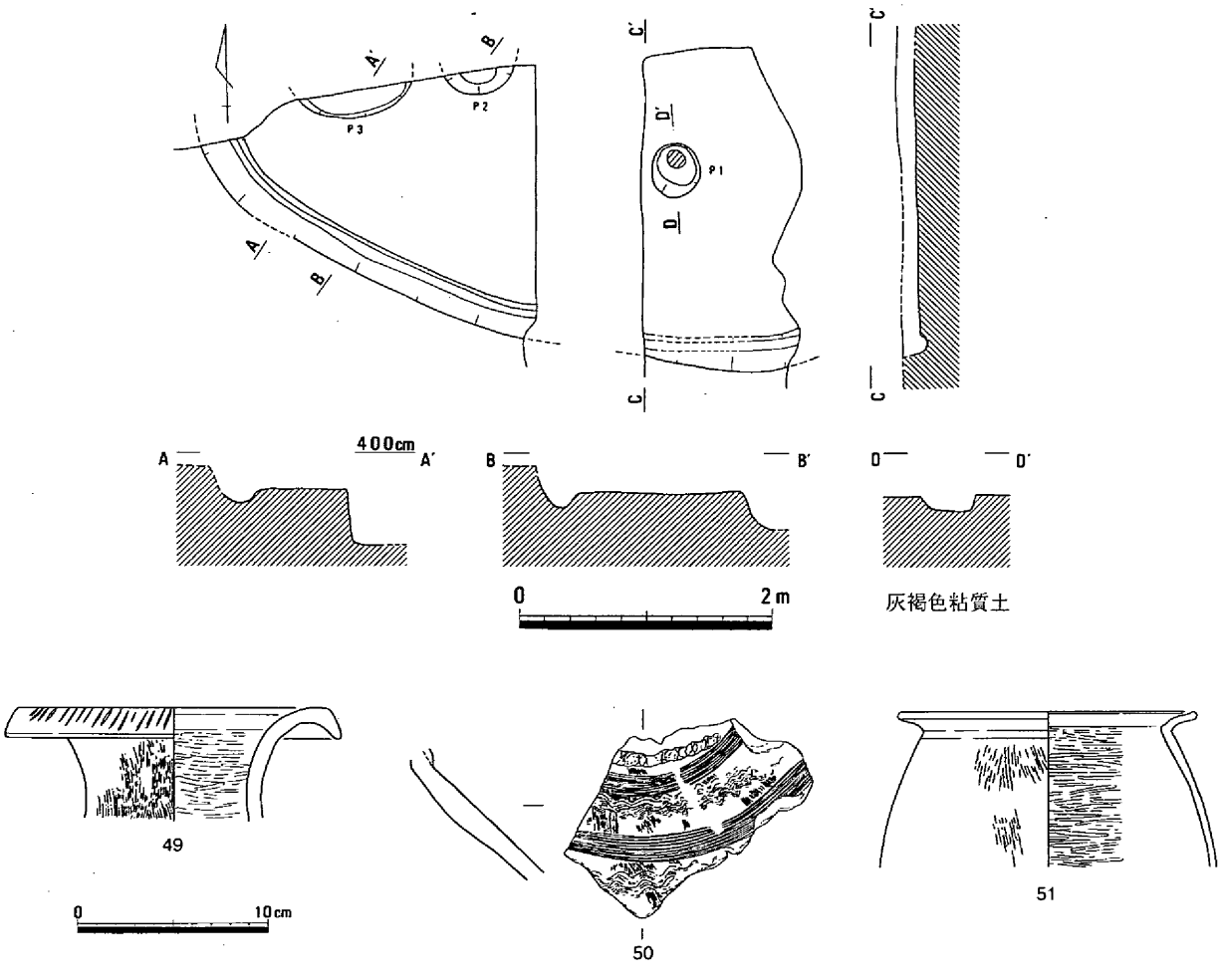
遺物としては、壺49・50、甕51を図示しており、50はＰ３から出土している。また、掲載していないが、楔形石器片も出土している。出土遺物から遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。　（柴田）

竪穴住居９（第24図）

第２微高地の東端部に位置する焼失住居である。住居大半の南東部分は、中世の河道により消失している。平面形は円形を基調としたものになると推測され、幅30～40cm程度の壁体溝がめぐる。柱穴は確認されていない。炭化材は、住居中央に向かって放射状に９本が確認され、１本の幅は10～15cm、最大長は48cmを測る。遺物としては、甕の底部52、高杯53が出土している。出土遺物から遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。　（柴田）

竪穴住居10（第25図）

第２微高地の中央からやや南東寄りに位置する。平面形は長方形で、長軸方向はN-68°-Wである。

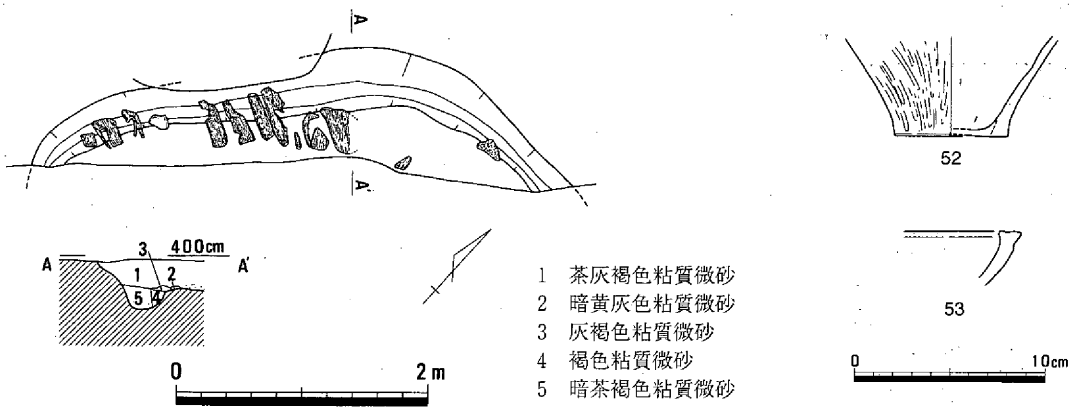


第23図　竪穴住居８（1/60）・遺物

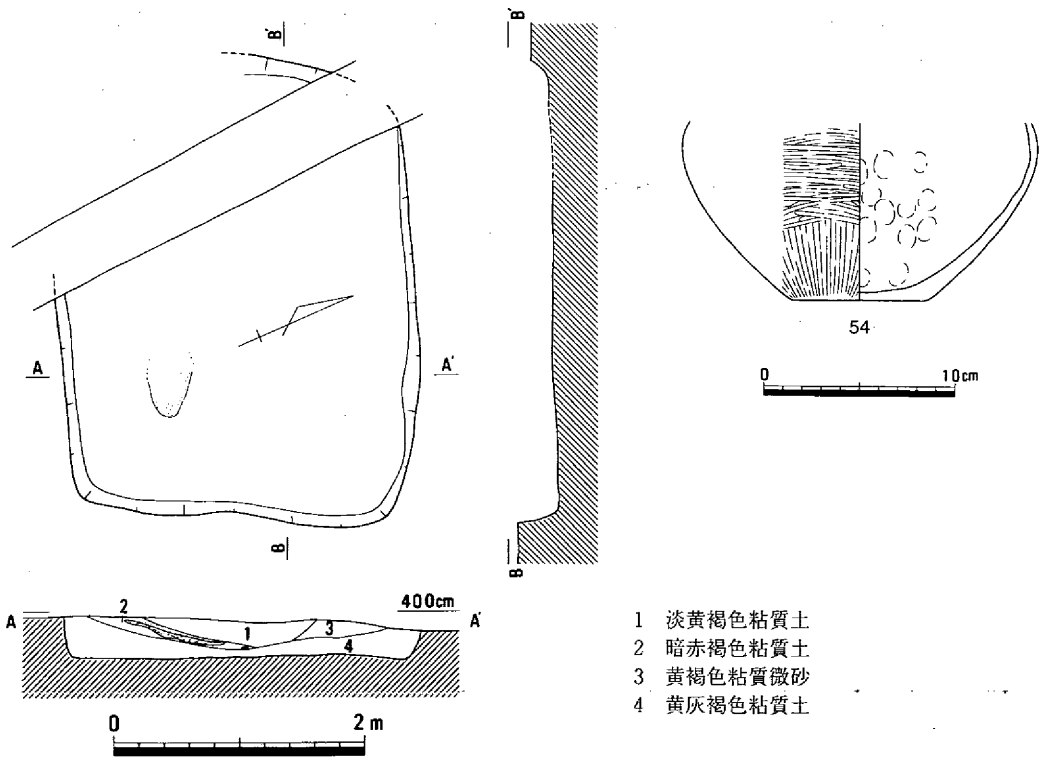
規模は349×273cmを測る。床面はほぼ水平で、壁体溝は認められない。柱穴は確認できなかった。規模の大きい土壙の可能性もある。遺物としては壺54が出土しており、他に掲載していないが、石鏃片も出土している。出土遺物から遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

竪穴住居11（第26図、写真２－１）

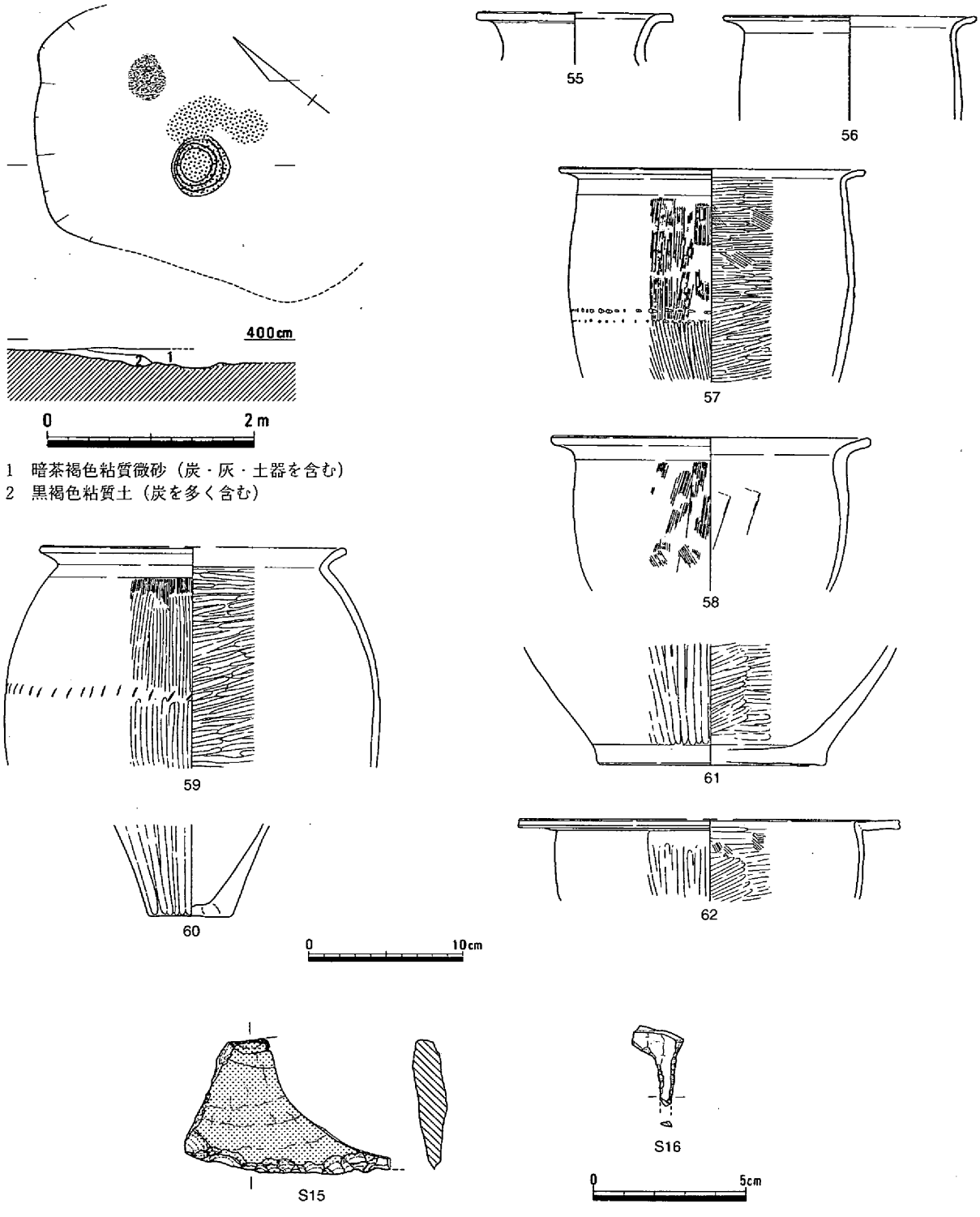
第２微高地の東端部に位置する住居で、東半部分は中世の河道により消失している。掘り方は不明瞭で、不整楕円形のくぼみ状態で検出された。規模は現状で最大長375cmを測る。柱穴は確認されていないが、床面に被熱部分が認められる。遺物としては、壺55、甕56～61、高杯62、打製石包丁Ｓ15、石錐Ｓ16が出土している。この他に図示していないが石鏃片なども出土している。出土遺物から遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）



第24図　竪穴住居９（1/60）・遺物



第25図　竪穴住居10（1/60）・遺物

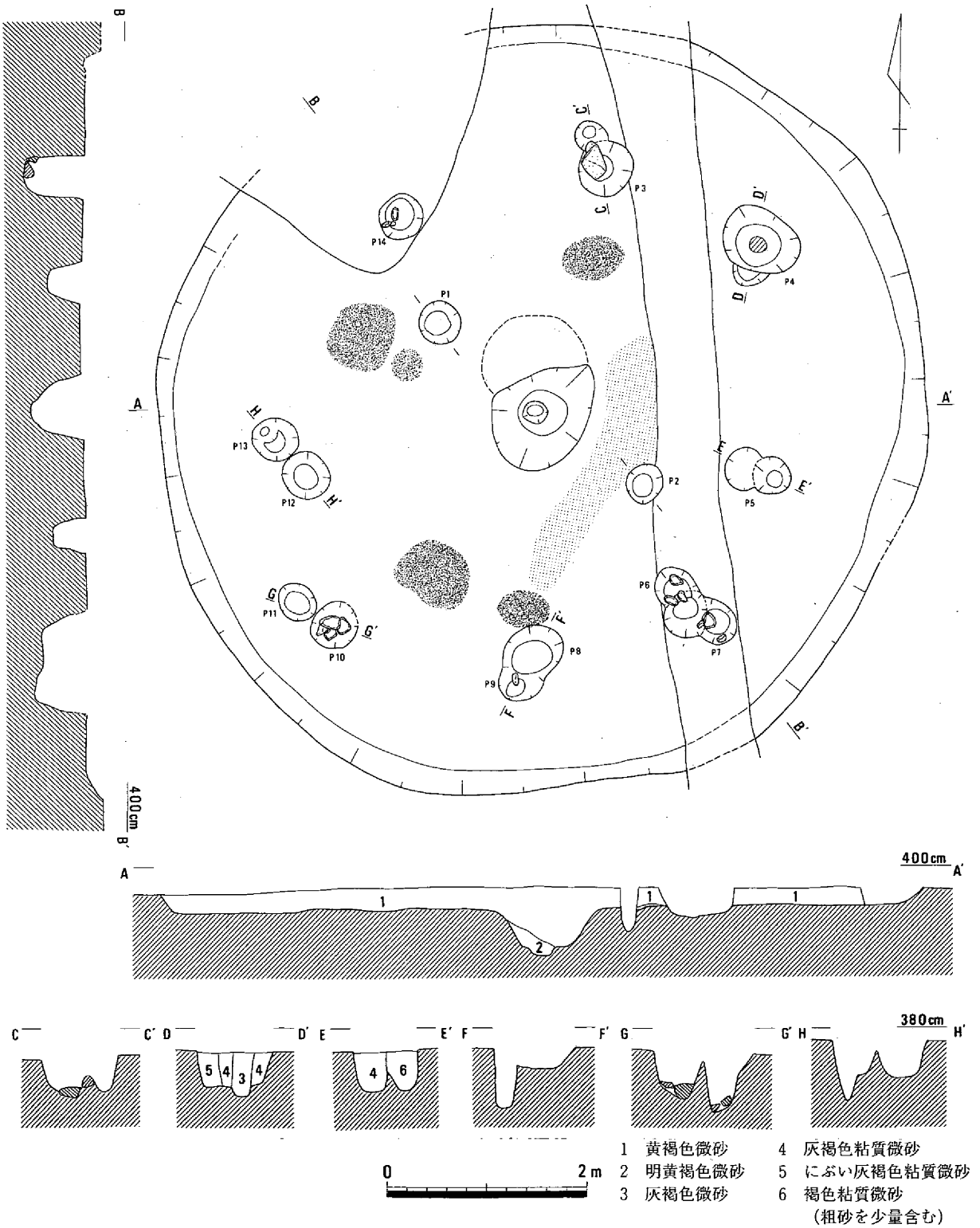


第26図　竪穴住居11（1/60）・遺物

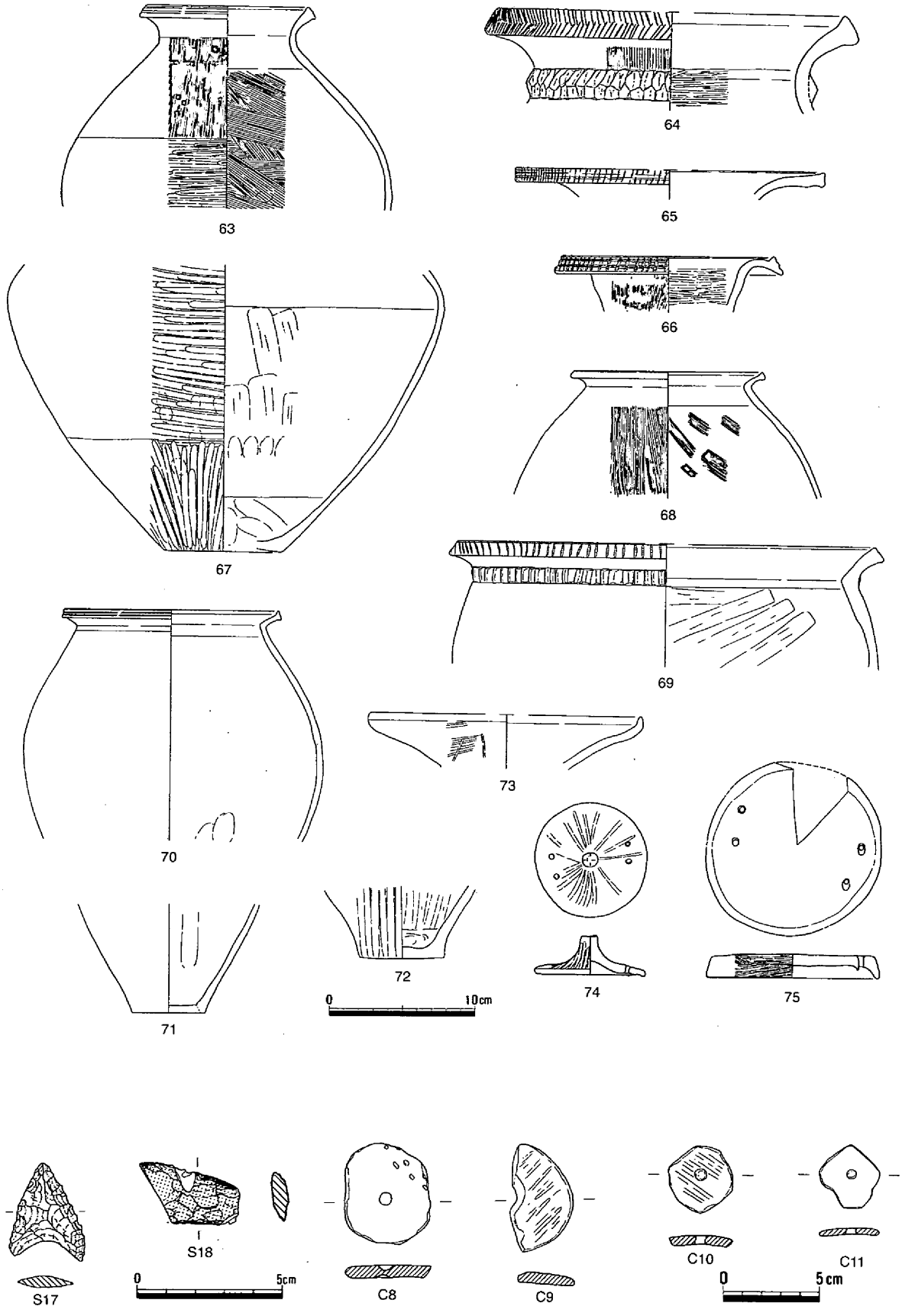
竪穴住居12（第27・28図、写真２－２）

第３微高地は、加茂政所遺跡の中心部とは、河道を挟んだ東側に位置する。河道は後世に形成された可能性があり、本来は西へ連続していたと推測される。本住居は調査区域内で最も幅広く残存したところで検出され、全体を調査することができた。平面形は円形を呈し、直径743cm、床面積40.8㎡を測り、やや大きなものである。中央部に不整形の土壙があり、北東と南東側に対になる小柱穴があ

る。主柱穴は８本あり、それぞれ接したところに柱穴が掘り直されていて、１回の建て替えが行われている。中央穴と主柱穴の間に５ケ所の火どころが存在する。２個ずつ近接しているものがあり、同時に存在したのは３ケ所と推測される。埋土中からは、土器、石器、土製品が出土した。土器には、壺63～67、甕68～72、高杯73、蓋74・75、石器には、石鏃Ｓ17、打製石包丁片Ｓ18、土製品には、土器片転用の紡錘車Ｃ８～Ｃ11がある。時期は出土遺物から、弥・中・Ⅱに比定される。　（正岡）



第27図　竪穴住居12（1/60）

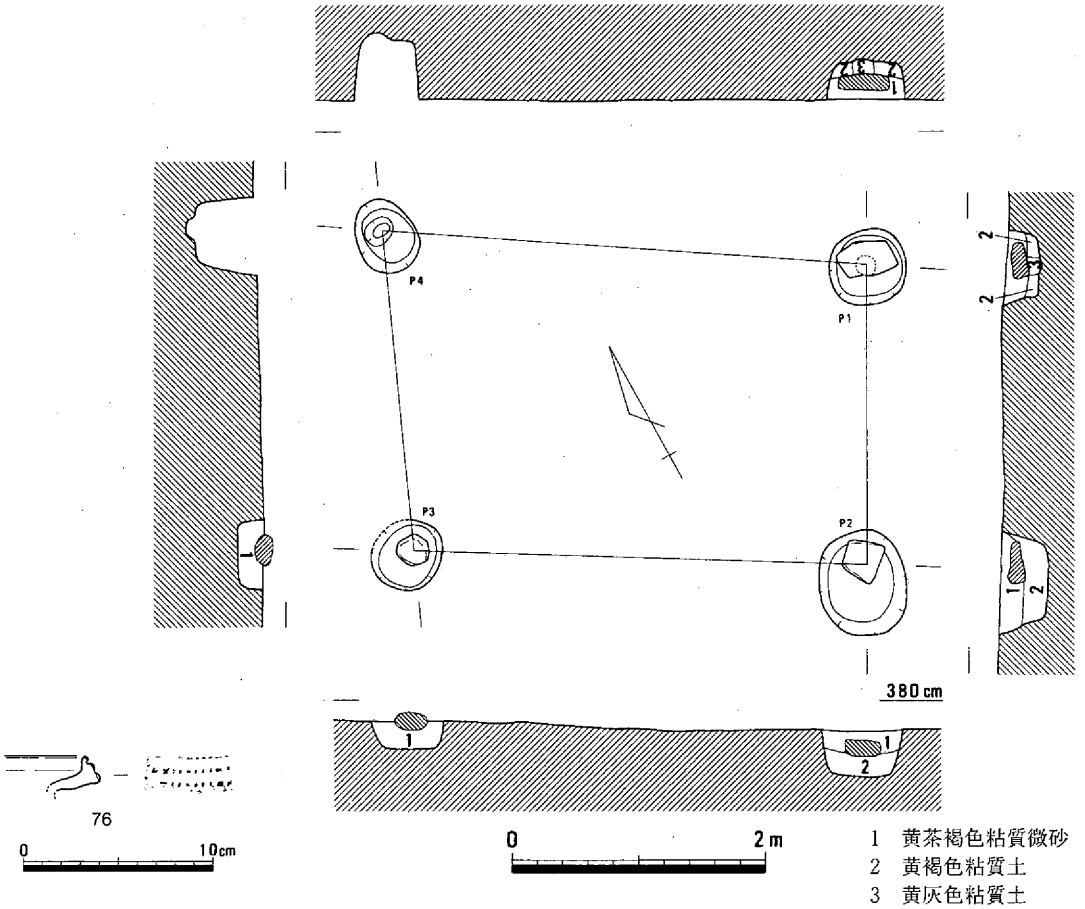


第28図　竪穴住居12　遺物

（３）掘立柱建物

掘立柱建物１（第29図、写真２－３）

掘立柱建物１は、第２微高地やや北東寄り、竪穴住居７の南に隣接する。当遺跡で、唯一この時期の建物として確認された。１×１間の建物で、桁行383cm・梁間254cmを測る。棟方向はN-58°-Wである。柱穴は楕円形で深さは一定ではないが、Ｐ１～３では底から10～15cmの位置に石が認められる。柱穴埋土中から壺の小片76が出土しており、遺構の時期を弥・中・Ⅱと考えている。　（柴田）



第29図　掘立柱建物１（1/60）・遺物

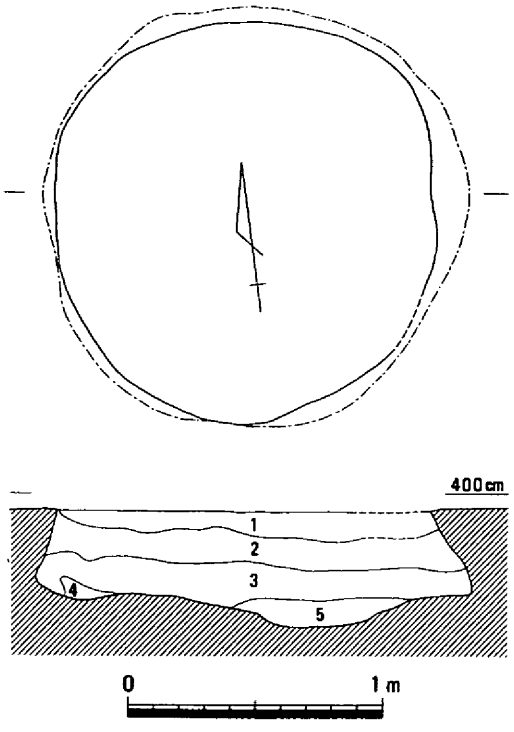
（４）袋状土壙

袋状土壙１（第30図）

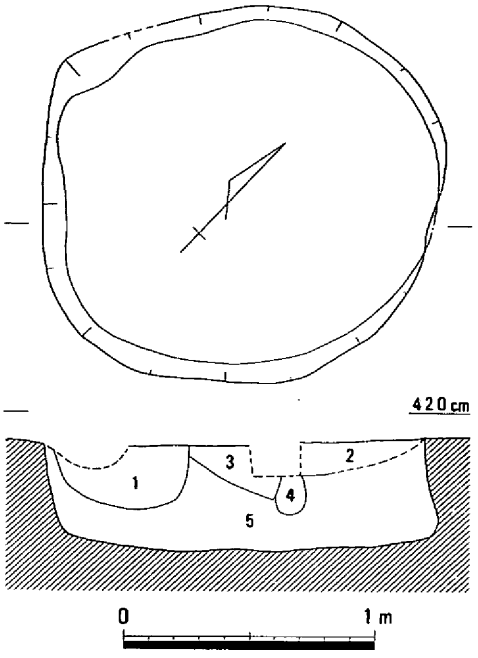
第２微高地の中央、Ｍｆ24区の南西に位置し、土壙82の南西から検出された。平面円形を呈し、底部はやや歪で一部凹む箇所がある。規模は上面径161cm、下面径172cmを測り、深さ47cmを残す。標高は3.47ｍを測る。遺物は比較的多く出土したがいずれも細片で、図示できたのは甕77のみであった。土器の形態および肩部内面のハケ調整から当遺構は弥・中・Ⅲに埋没したものであろう。　（江見）

袋状土壙２（第31図）

袋状土壙２は、第２微高地の中央、竪穴住居４の北東に隣接する。平面は径167cmの円形で、検出面からの深さは46cmを測る。床面はほぼ平らである。出土遺物は図示していないが、弥・中・Ⅱの土

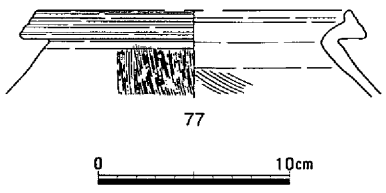


1　茶褐色粘質砂　　4　黄色粘質土
2　灰茶褐色砂質土　　5　暗茶灰色砂質土
3　暗灰茶色砂質土

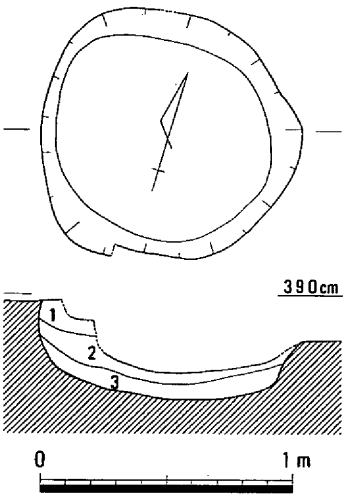


1　黄褐色粘質土　　4　茶褐色粘質土
2　灰茶褐色砂質土　　5　暗茶灰色砂質土
3　暗灰茶色砂質土

第31図　袋状土壙２（1/30）



第30図　袋状土壙１（1/30）・遺物



1　暗灰黄褐色粘質微砂
2　黄褐色粘質土
3　暗黄灰褐色粘質土

第32図　袋状土壙３（1/30）

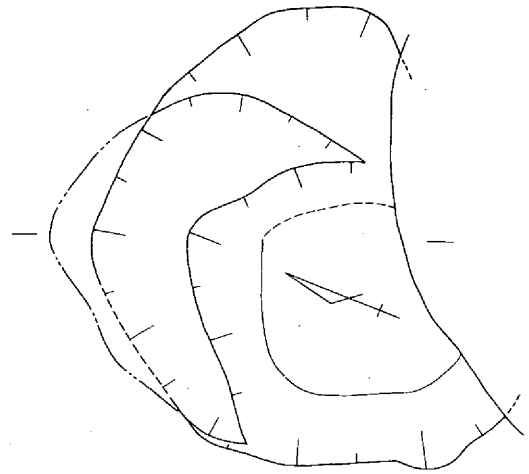
器片が多い。しかし、Ⅲのものも認められるため、遺構の時期は弥・中・Ⅲの可能性が高い。　（柴田）

袋状土壙３（第32図）

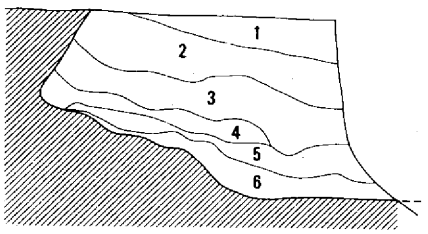
袋状土壙３は、第２微高地の中央、竪穴住居４の東に隣接する。平面は径103cmの円形で、検出面からの深さは39cmを測る。出土遺物は弥・中の土器の小片のみで、遺構の時期も弥・中であると思われる。（柴田）

袋状土壙４（第33・34図、写真50）

竪穴住居６の西約６ｍで検出された遺構である。遺構の大部分は他の遺構に切られているが、不整形な楕円形を呈するものと思われる。埋土は６層に区分され、レンズ状に堆積する。いずれの土層にも炭を含むが、第３層は多量の焼土を含んでいた。遺物は土器78～88と石器Ｓ19が出土している。土器は甕78～84、高杯85・86、鉢87、蓋88などがあり、Ｓ19は花崗閃緑岩製の石錘である。甕は口縁部

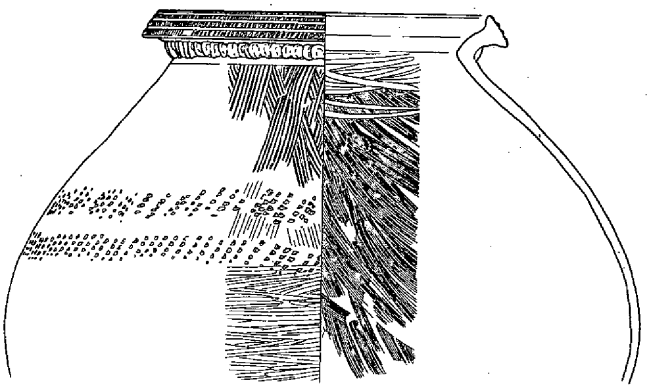


410cm

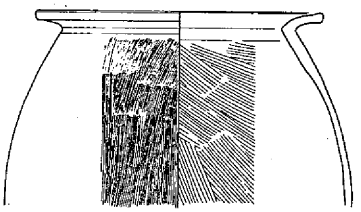


0　1m

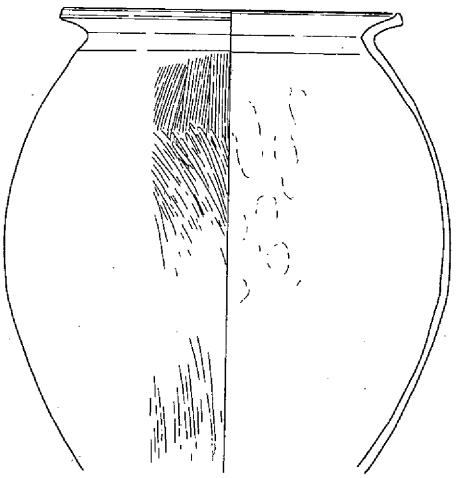
1　黄茶褐色粘質微砂（炭をわずかに含む）
2　暗茶褐色粘質微砂（炭を含む）
3　暗茶灰褐色粘質微砂（焼土を多量に含む、炭を含む）
4　黄灰褐色粘質微砂（炭をわずかに含む）
5　黒灰色粘質微砂（炭を多量に含む）
6　淡黄褐色粘質微砂（炭を含む）



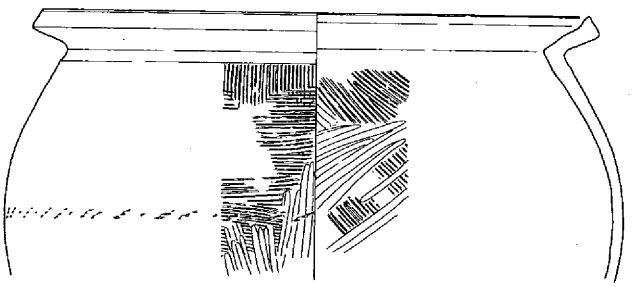
78



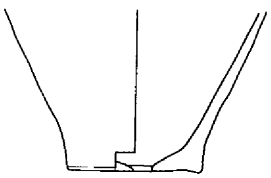
79



80

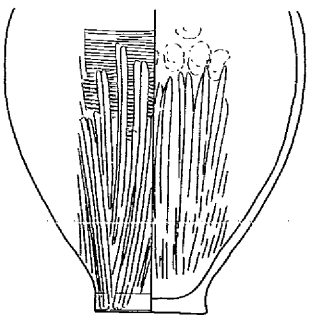


81

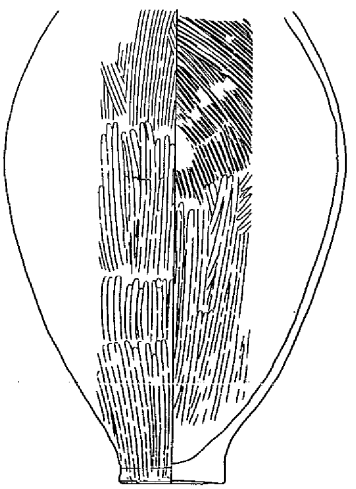


82

0　10cm

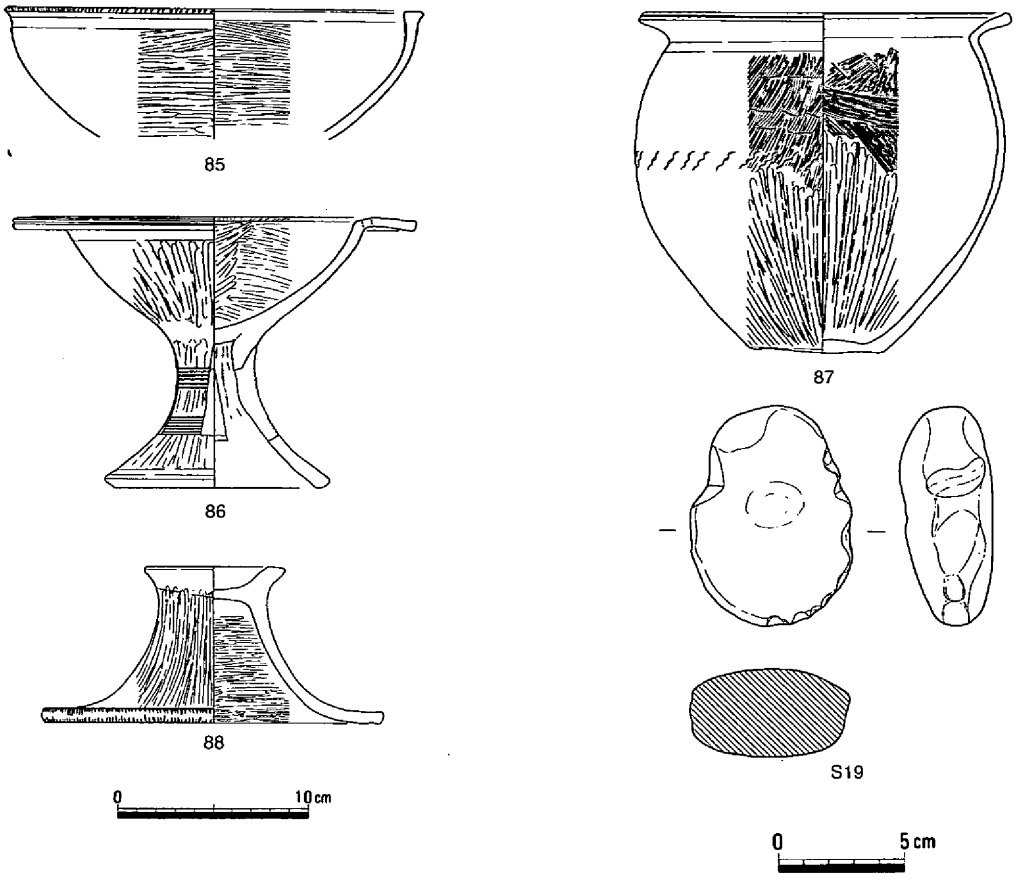


83



84

第33図　袋状土壙４（1/30）・遺物（１）



第34図　袋状土壙４　遺物（２）

の形や胴部の膨らみから二つの形態がみられ、高杯も口縁部の形態から２種類みられる。時期は出土土器からみて、弥・中・Ⅱと思われる。（松本）

袋状土壙５（第35図、写真３－１，50）

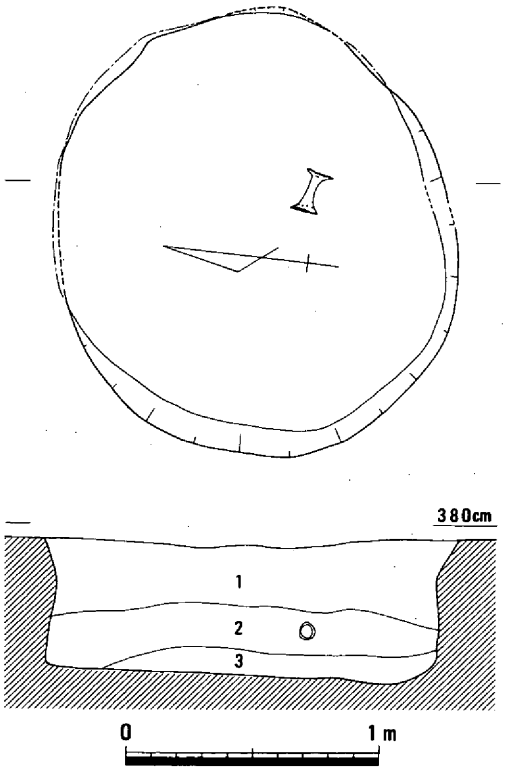
竪穴住居７の北西において検出された。上部はかなり削平されているが、底面形は楕円形を呈する。上面径は1.75m、深さは検出面から57cmを測る。底面はほぼ平坦である。図示した遺物89は底面に横転した状態で出土した。器種は高杯である。口径は21.5cm、器高は21.8cmを測る。口縁部には凹線が４条、脚裾部に透し穴が20ヶ所みられる。時期は出土遺物から弥・中・Ⅲと思われる。（松本）

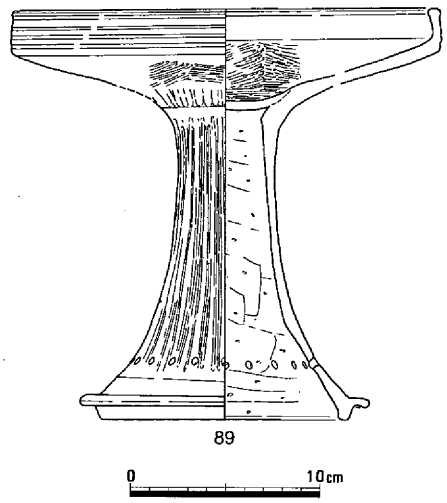
袋状土壙６（第36図、写真３－２，50）

竪穴住居７に切られる状態で検出された遺構である。規模は上面径1.48mを測り、底面形は円形である。深さは検出面から85cmを測り、底面は平坦である。断面形態はフラスコ状を呈している。埋土は４層に区分されたが、いずれも褐色系の粘質微砂ないし粘質土である。遺物は土器90・91と土製品C12などがある。90は壺の口縁部、91は甕の底部、C12は分銅形土製品の下半部である。出土遺物からみて、この遺構の時期は弥・中・Ⅱと考えられる。（松本）

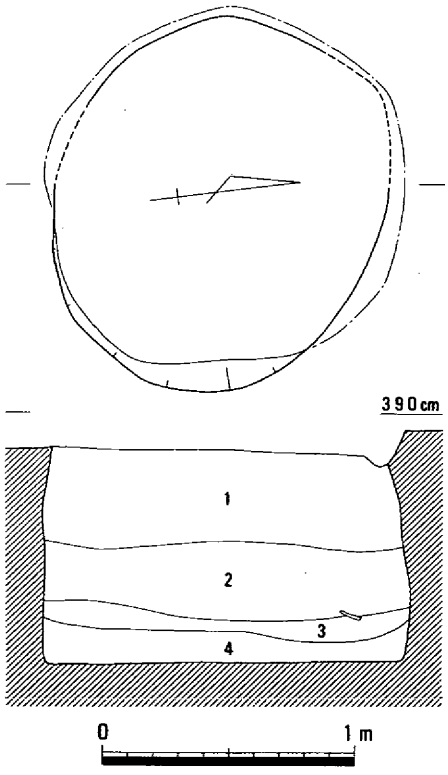
袋状土壙７（第37図）

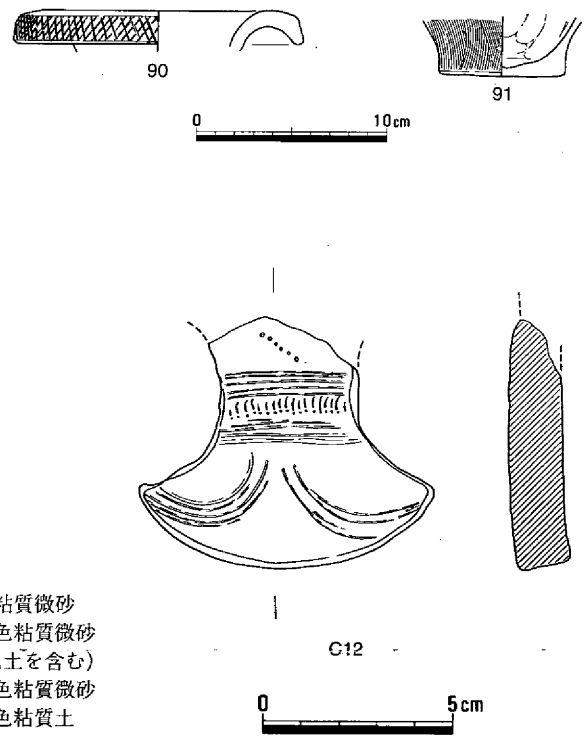
袋状土壙７は、第２微高地の中央やや東寄りに位置し、竪穴住居６の南部分と重なり、それに切られている。平面は径149cmの不整方形で、検出面からの深さは63cmを測る。床面はほぼ平らで、埋土は水平堆積である。出土遺物には甕92などがあり、遺構の時期は弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）





第35図　袋状土壙５（1/30）・遺物





第36図　袋状土壙６（1/30）・遺物

袋状土壙８（第38図）

袋状土壙８は、第２微高地の中央、竪穴住居５の東に隣接する。平面は長径90cmの不整楕円形で、検出面からの深さは18cmと浅い。床面はほぼ平らである。出土遺物には壺93・99、甕94～98・100、高杯101～103、鉢104、石鏃Ｓ20、打製石包丁Ｓ21などがある。

93は、頸部に２条の刻み目を有する貼り付け突帯を施し、口縁部は水平方向に拡張し、面を形成する。甕は、口縁端部がわずかに肥厚する94・97と、比較的大きく肥厚する95・96がある。高杯はボウル状の杯部を持ち、102はさらに水平方向に広がる。Ｓ21は調整による剥離の稜線を中心に珪酸が付着している。出土遺物から、遺構の時期は弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

袋状土壙９（第39図、写真50）

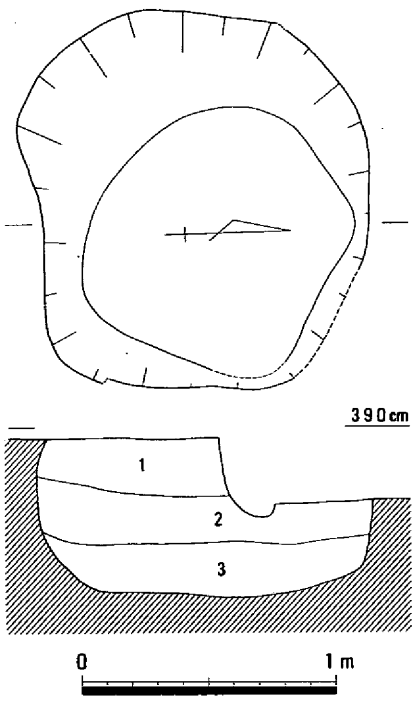
袋状土壙９は、第２微高地の中央やや東寄りに位置し、竪穴住居６の北部分と重なり、それに切られている。平面は最大長133cmの不整形で、床面はほぼ平らである。埋土の４層は焼土で、壁面寄りに集中する。さらに、この上には炭を多量に含む３層が認められる。

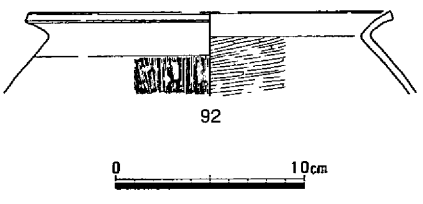
出土遺物には壺105、甕106・107、高杯108～110、台付鉢111、磨製石斧Ｓ22、打製石包丁Ｓ23などがある。105は口縁端部は下方に拡張し、口縁部と頸部突帯には棒状浮紋が施される。109・110は透かしが残存する。出土遺物から、遺構の時期は弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

袋状土壙10（第40～42図、写真51）

袋状土壙10は、第２微高地の中央やや東寄り、袋状土壙９の北東に隣接する。平面は最大長163cmの楕円形で、床面はほぼ平らである。埋土の上層はレンズ状堆積を呈し、床面から厚さ６cmの間層をおいて土器などが多く出土している。

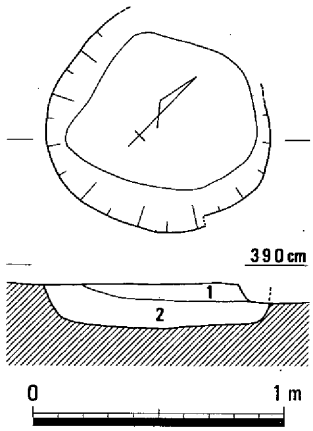
出土遺物には、壺112～118、甕119～139、高杯140～143、鉢144、台付鉢145、分銅形土製品Ｃ13～17などがある。112～114は口縁端部が水平方向に拡張し、面を形成する。114ではここに円形浮紋の剥離痕跡が認められる。頸部には刻み目を有する２条の貼り付け突帯が施される。115は口縁部が大きく水平方向に延び、さらに端部が下方に延びる。頸部には２条の貼り付け突帯が施され、肩部にかけて沈線が巡るようである。116は口縁端部が外方へ厚く折れ、端部は面を形成する。120～123は口縁部が短く屈曲し、端部は上下に肥厚する。



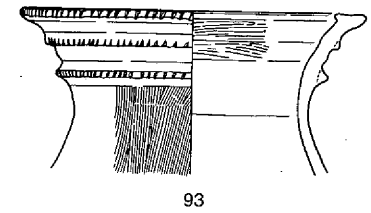


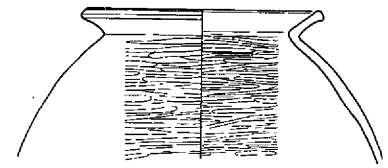
1 茶褐色粘質微砂
2 暗茶褐色粘質土
3 黄褐色粘質土

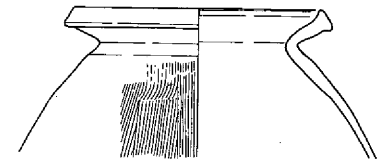
第37図 袋状土壙７（1/30）・遺物

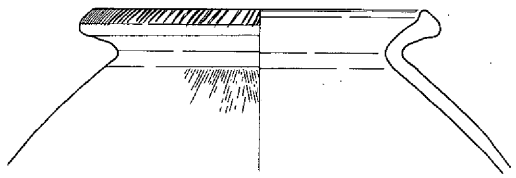


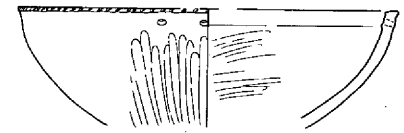
1　暗茶褐色粘質土
2　黄茶褐色粘質土

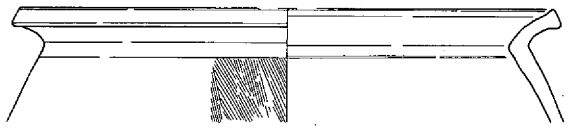

93

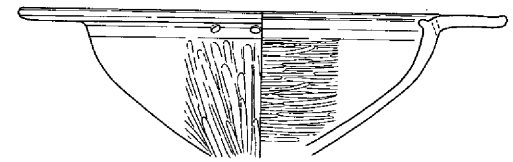

94

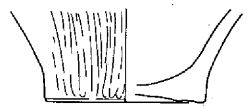

95

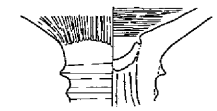

96

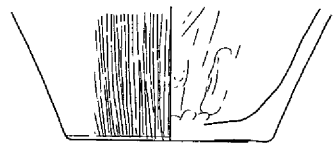

101

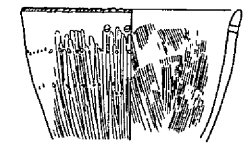

97

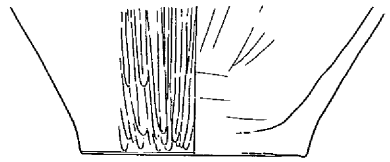

102


98

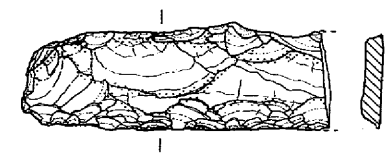

103


99


104


100

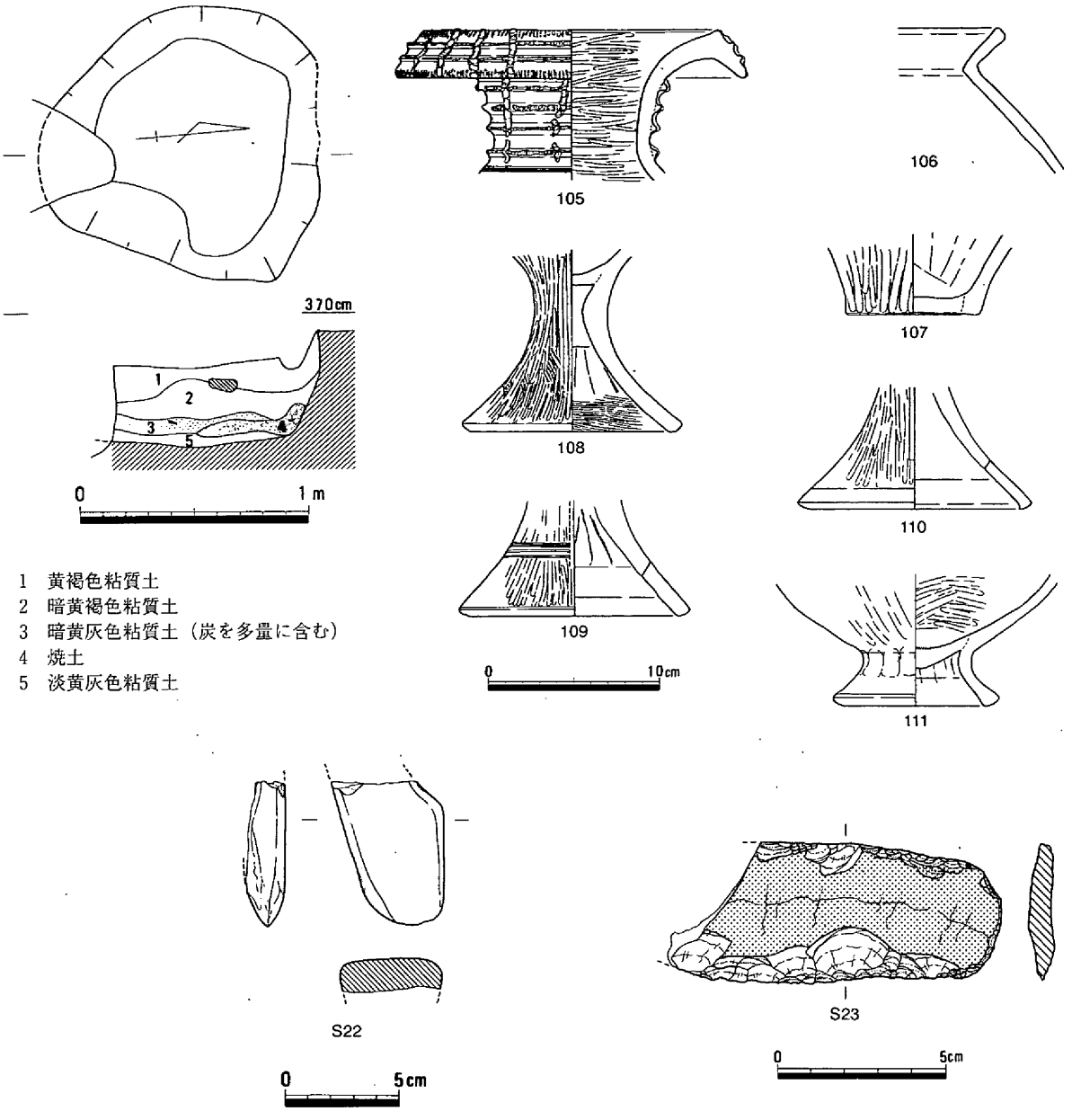
S20


S21

0　10cm

0　5cm

第38図　袋状土壙８（1/30）・遺物

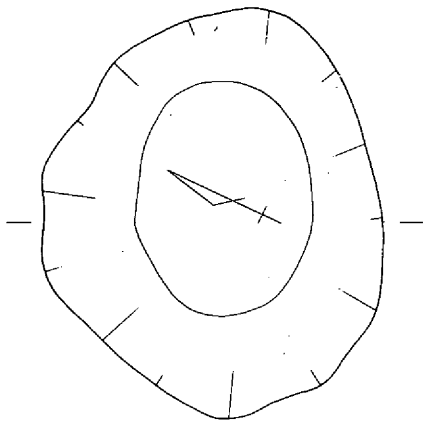


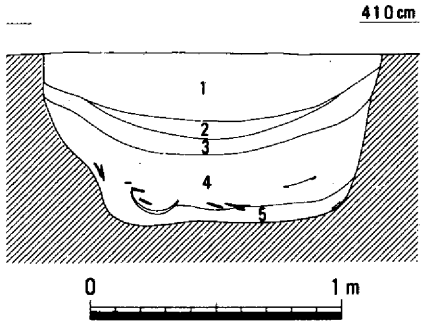
第39図　袋状土壙９（1/30）・遺物

120以外は口縁端部に刻み目や円形浮紋を施し、121では頸部に指頭圧痕紋突帯が巡る。119・124・125・131は口縁端部を上方へ摘み出すものである。126～130・132は、口縁部が強く「く」字状に折れ、端部が丸く納まるもので、比較的中形から小形のものが多い。甕の底部内面はいずれもヘラミガキやナデ、ハケメが施されている。140は口縁部が水平にのびるもので、141は脚柱部に沈線が巡る。144は平底の鉢で、口縁部は外方に屈曲する。分銅形土製品の眉状紋や重弧紋は、いずれもハケメ状工具を利用したような平行沈線と刺突紋で構成される。C13・14では端面から裏面にかけて穿孔も認められる。出土遺物から、遺構の時期は弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

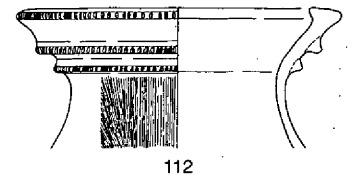
袋状土壙11（第43図、写真52）

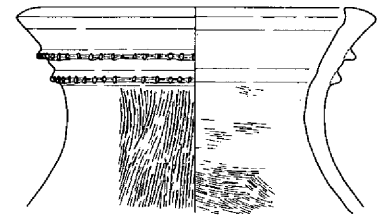
袋状土壙11は、第２微高地の中央やや東寄りに位置し、竪穴住居６の東に隣接する。平面は東西方向に長い楕円形で、規模は、検出面で79×57cmを測る。床面の最大径は83cmで、断面は皿状にくぼみ

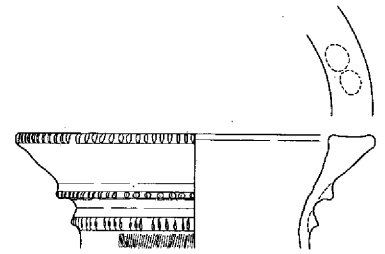


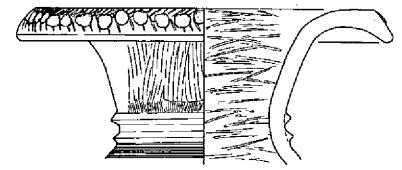


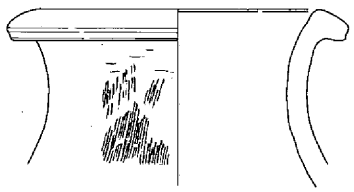
1　暗灰茶褐色粘質微砂
2　黄褐色粘質土
3　暗黄褐色粘質土
4　暗褐色粘質土（土器を含む）
5　黄褐色粘質土（土器を含む）

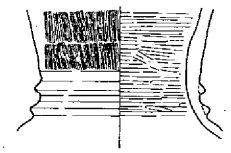

112

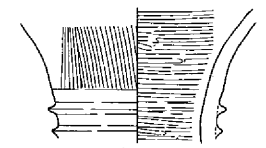

113

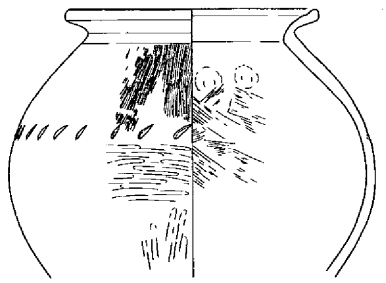

114

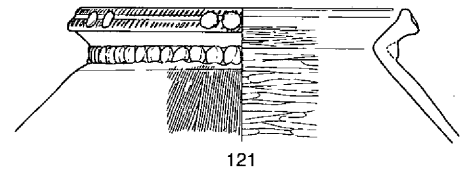

115

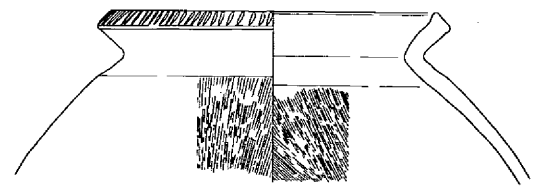

116

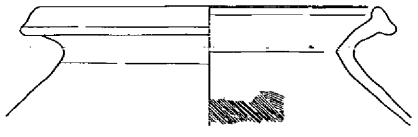

117


118

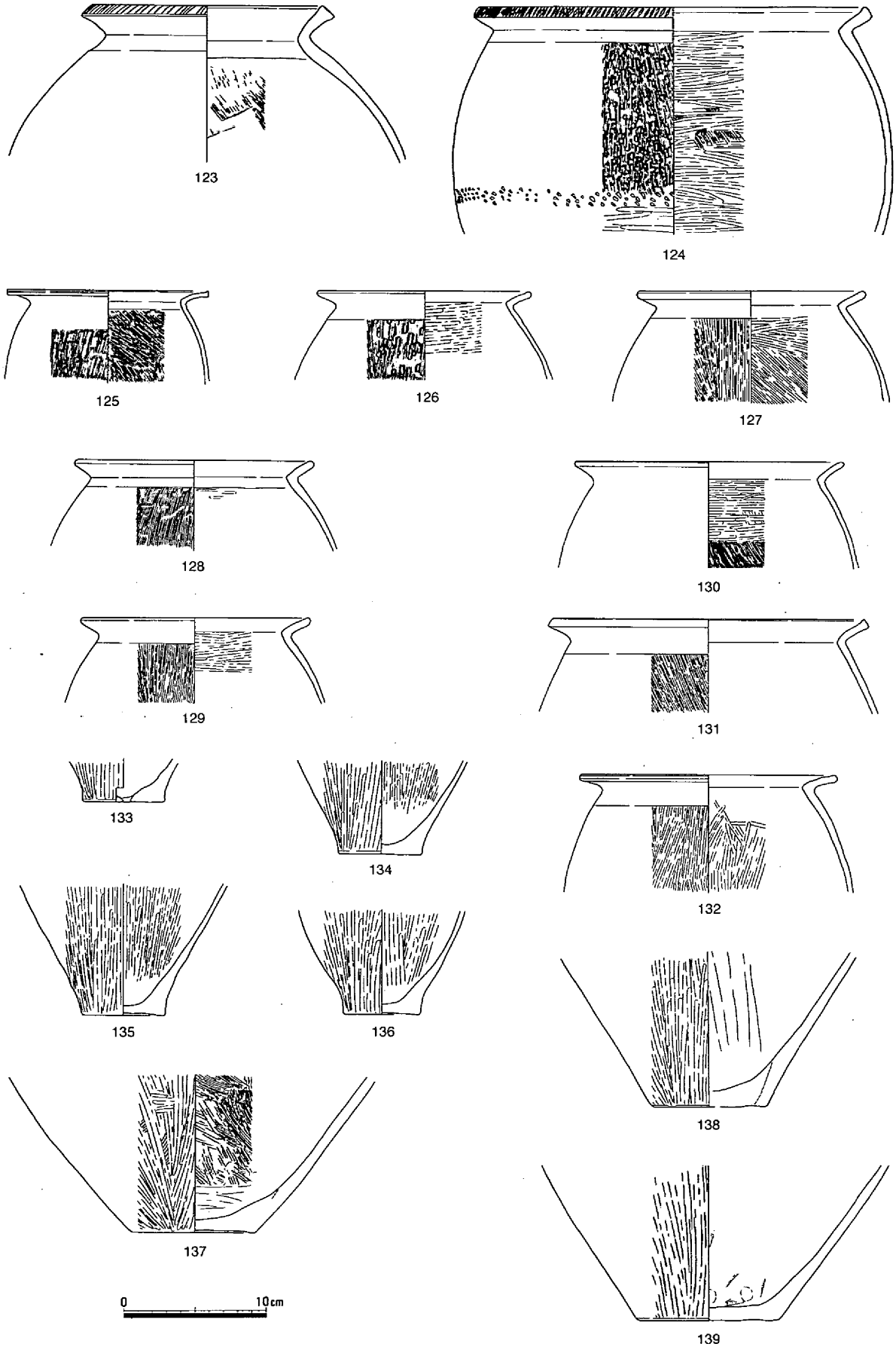

119


121

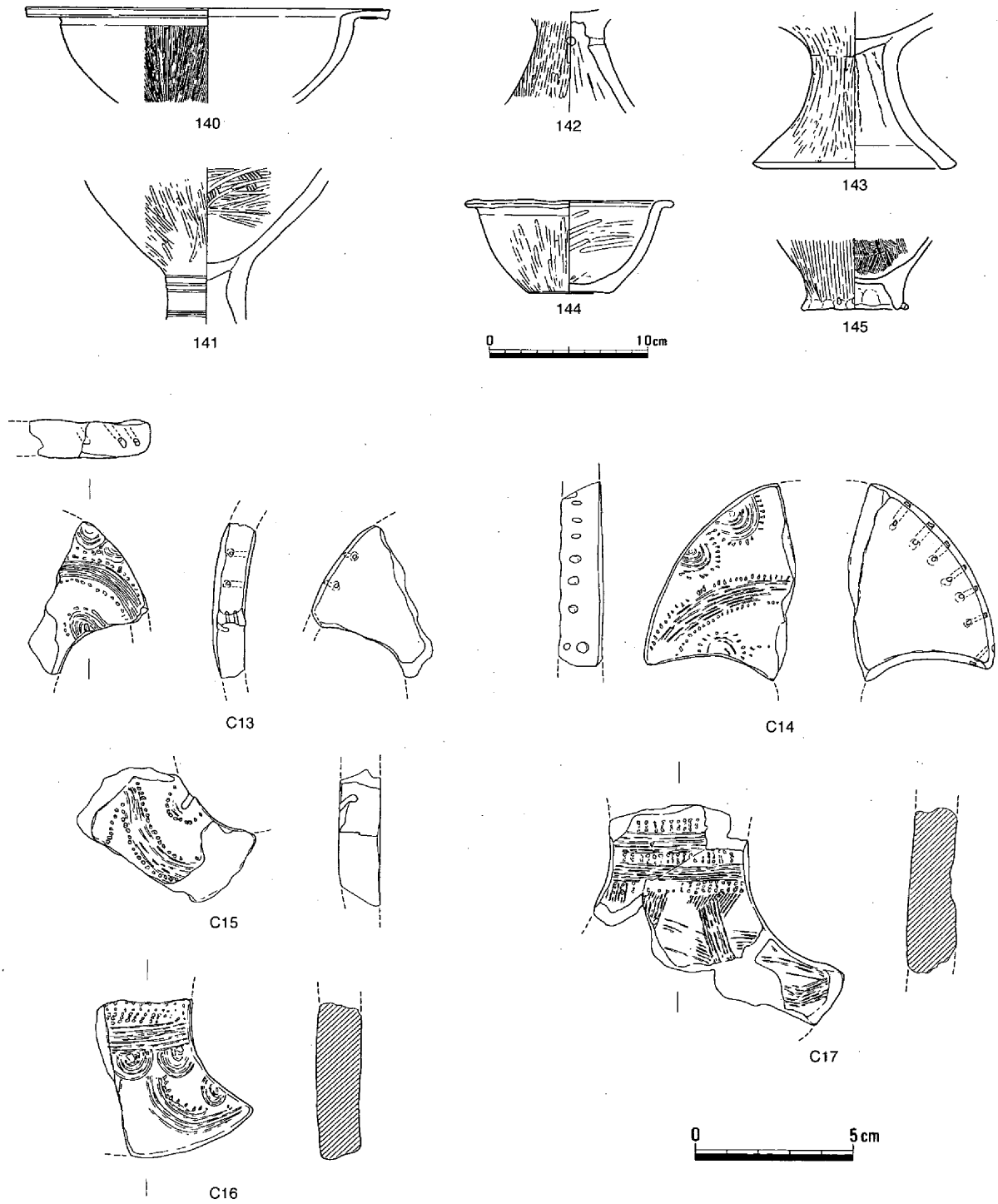

122


120

第40図　袋状土壙10（1/30）・遺物（１）



第41図　袋状土壙10　遺物（２）

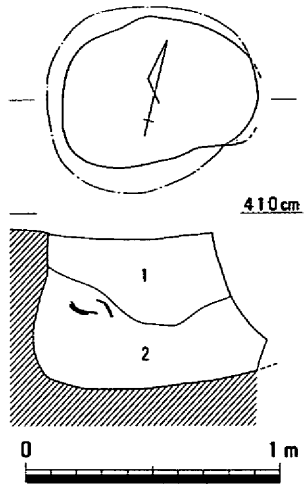


第42図　袋状土壙10　遺物（３）

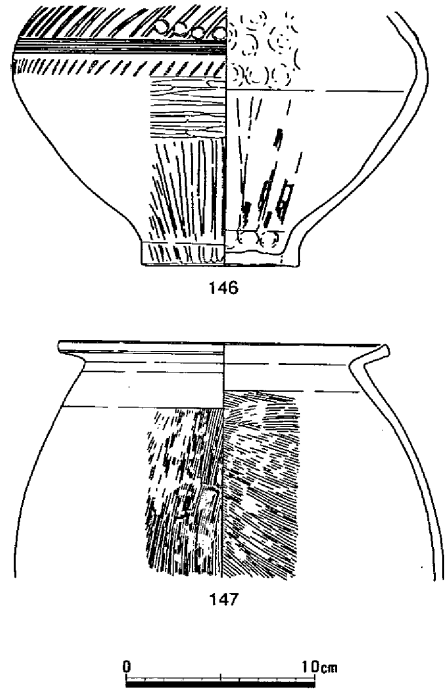
気味である。出土遺物には、壺146、甕147などがある。146は胴部中央がよく張るもので、147は口縁端部がわずかに肥厚する。出土遺物から、遺構の時期は弥・中・Ⅱと思われる。　（柴田）

袋状土壙12（第44図）

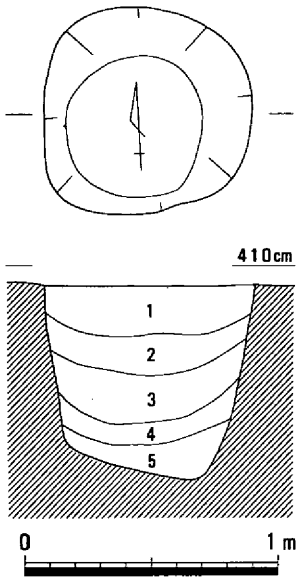
袋状土壙12は、第２微高地の中央やや東寄り、袋状土壙11の北東に隣接し、土壙272に切られる。平面は円形に近く、最大径は検出面で82cmを測る。出土遺物には、甕148～152、高杯153、石鏃Ｓ24などがある。「く」字状に屈曲する甕の口縁部は、比較的強く反り、端部は上方に摘み出されている。

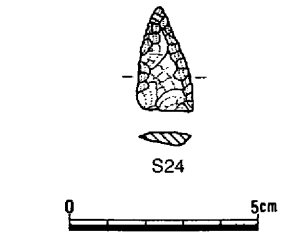


1　暗褐色粘質微砂
2　灰黄褐色粘質微砂（土器を含む）

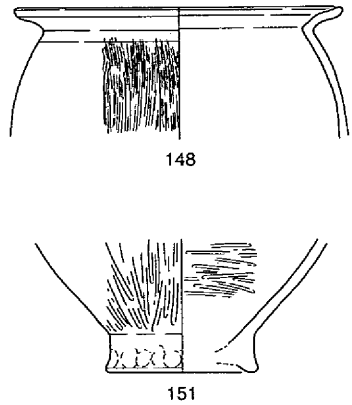


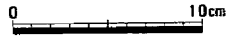
第43図　袋状土壙11（1/30）・遺物

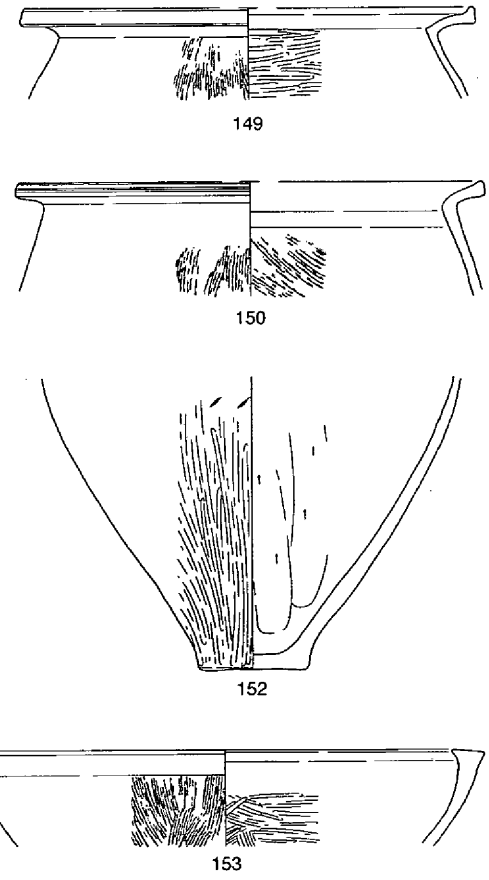




1　茶褐色粘質微砂
2　暗黄褐色粘質土
3　暗褐色粘質土（炭を含む）
4　黄灰褐色粘質土
5　灰褐色粘質土





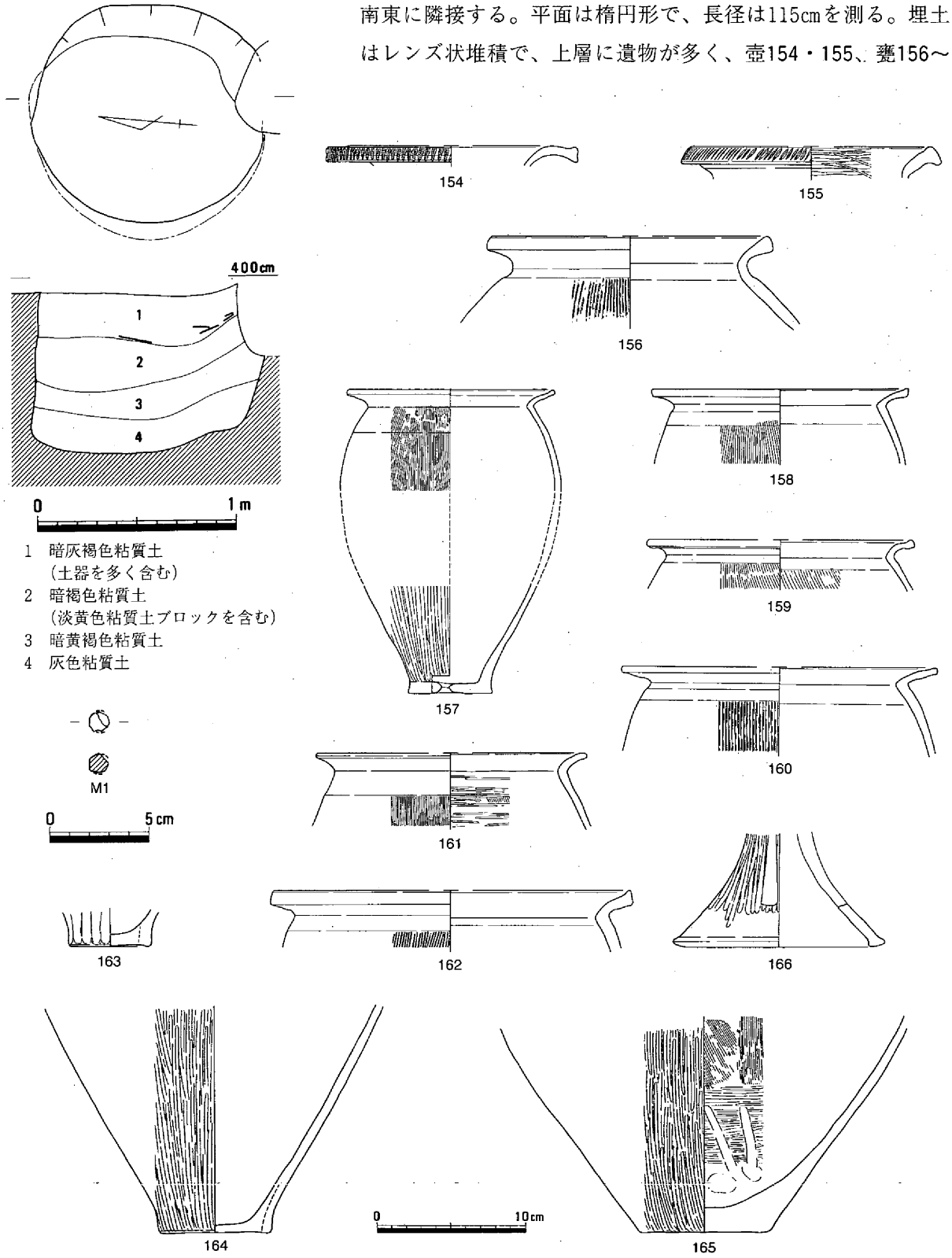


第44図　袋状土壙12（1/30）・遺物

152のように胴部内面下半まではヘラケズリが認められるようである。153はボウル状の杯部で、口縁端部が水平方向に拡張する。出土遺物から、遺構の時期は弥・中・Ⅱと思われる。　（柴田）

袋状土壙13（第45図）

袋状土壙13は、第２微高地の中央やや東寄り、竪穴住居６の南東に隣接する。平面は楕円形で、長径は115cmを測る。埋土はレンズ状堆積で、上層に遺物が多く、壺154・155、甕156～



第45図　袋状土壙13（1/30）・遺物

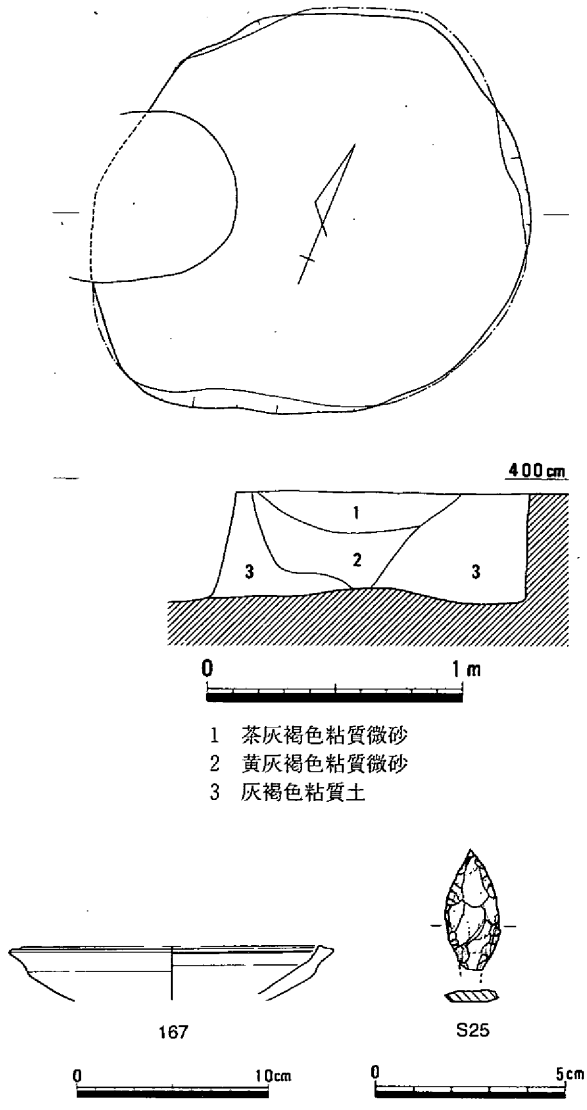
165、高杯166、円形の鉄塊Ｍ１などが出土している。154は口縁部が水平方向に大きくのび、端部に刻み目を施す。甕の口縁端部には、厚く肥厚する156、外反しながらのび、面を形成する157～160、緩やかに屈曲し丸くおさめる161、上方に摘みあげる162などがある。Ｍ１は混入の可能性もある。出土遺物から、遺構の時期は弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

袋状土壙14（第46図）

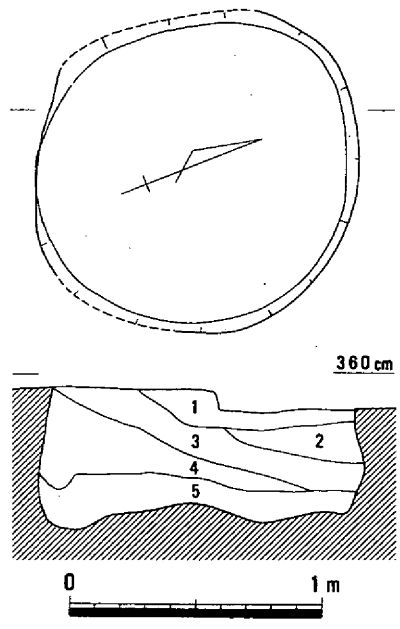
袋状土壙14は、第２微高地の南寄り、竪穴住居10の南東に隣接する。平面は最大径175cmの不整円形である。床面は周縁よりも中央部が高くなっている。出土遺物には高杯167、石鏃Ｓ25などがある。出土遺物から、遺構の時期は弥・中・Ⅲと思われる。（柴田）

袋状土壙15（第47図）

袋状土壙15は、第２微高地の東寄り、掘立柱建物１の東に位置する。平面は円形で、径140cmを測る。床面は凹凸が著しい。埋土の最下層は炭を含み、やや水平堆積気味であるが、土器は中層に認められる。出土遺物は図示していないが、土器の小片が確認されている。それによると、遺構の時期は弥・中・Ⅲと思われる。（柴田）



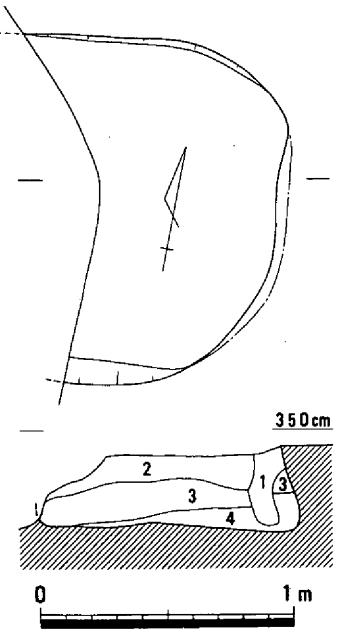
第46図　袋状土壙14（1/30）・遺物



第47図　袋状土壙15（1/30）

袋状土壙16（第48図、写真52）

袋状土壙16は、第２微高地の東寄り、袋状土壙15の東に隣接する。平面は隅丸方形気味で、西側は溝25に切られる。床面は東側がやや低い。埋土の３層上面は中央で盛り上がり、２層に焼土や土器が認められる。出土遺物には、壺168、高杯169～171などがある。168は胴部中央が強く張り、頸部に指頭圧痕紋突帯を施す。171は２段３条の沈線が巡り、裾部の三角形の透かしは21個中９個は貫通していない。出土遺物から、遺構の時期は、弥・中・Ⅲと思われる。（柴田）



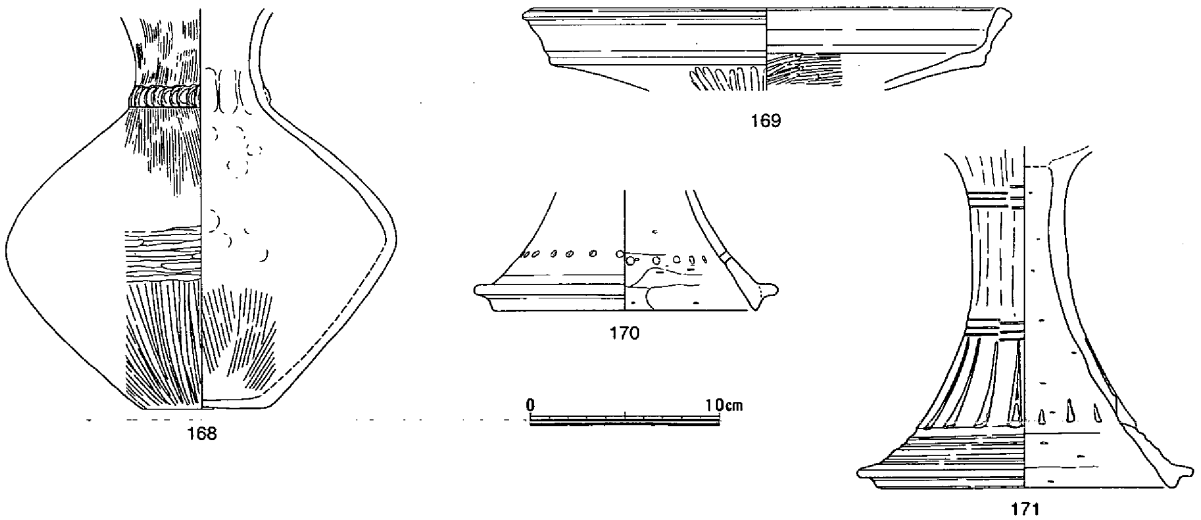
1　淡灰色粘質土
2　暗褐色粘質土
（焼土・土器を含む）
3　暗黄褐色粘質土
4　黄褐色粘質土

袋状土壙17（第49・50図）

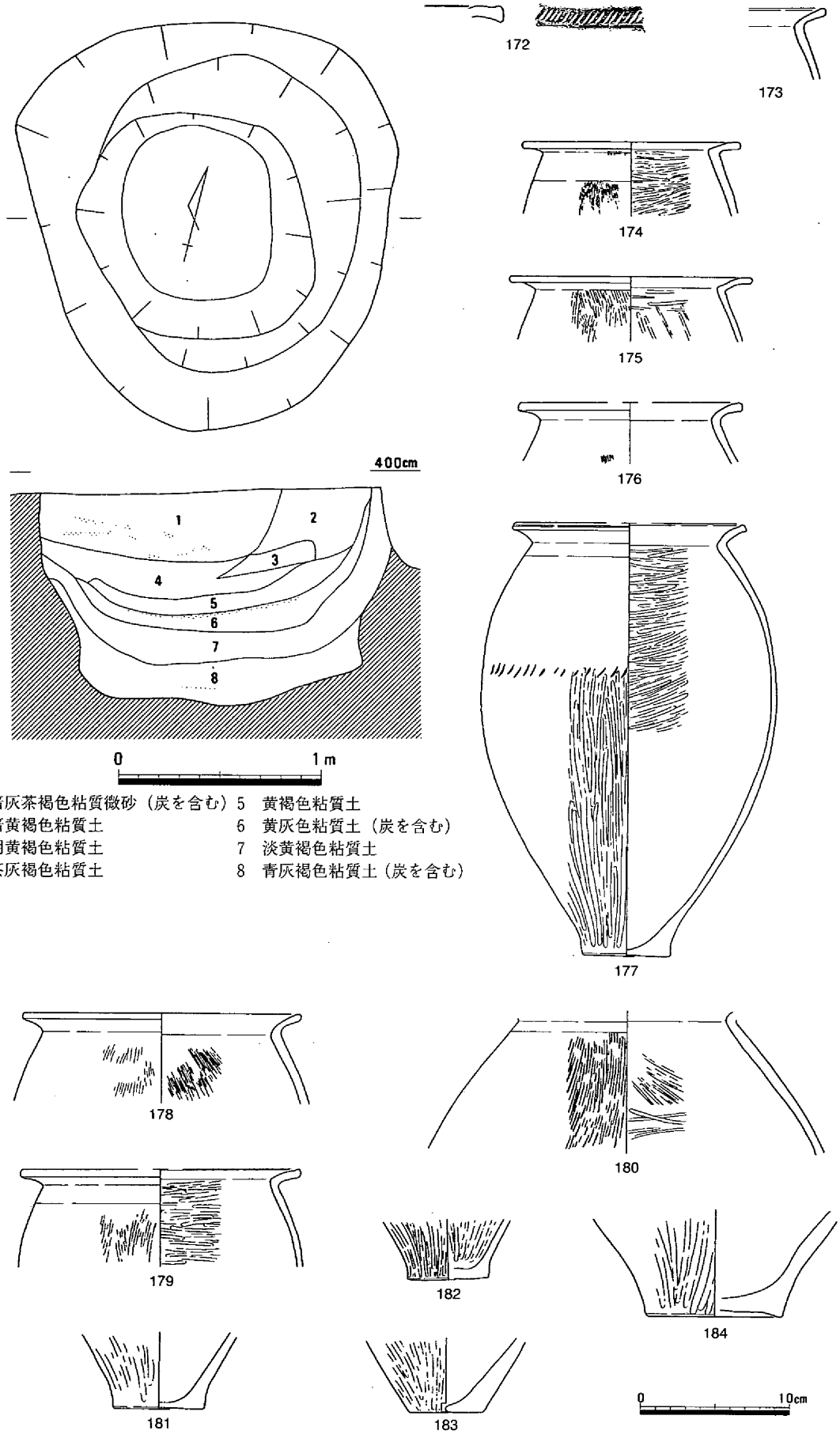
第２微高地の東端近くで検出された遺構である。土壙202によって一部が切られているが、底面形は楕円形を呈する。規模は上面径205cm、底面径88cm、深さは検出面から107cmを測り、底面には凹凸がみられる。埋土はレンズ状に堆積するが、８層に区分される。１、６、８層は炭を含む土層であった。遺物は土器、石器片が出土している。図示した遺物は甕172～187、高杯188・189、蓋190である。甕は口縁部が「く」の字状を呈し、胴部の膨らみが大きくなる。172の口縁端面には刻目、177の胴部には刺突文が施されている。183には焼成後の穿孔がみられた。188には２個１対の透し穴が２ヶ所みられる。時期は出土遺物からみて、弥・中・Ⅱと考えられる。（松本）

袋状土壙18（第51図）

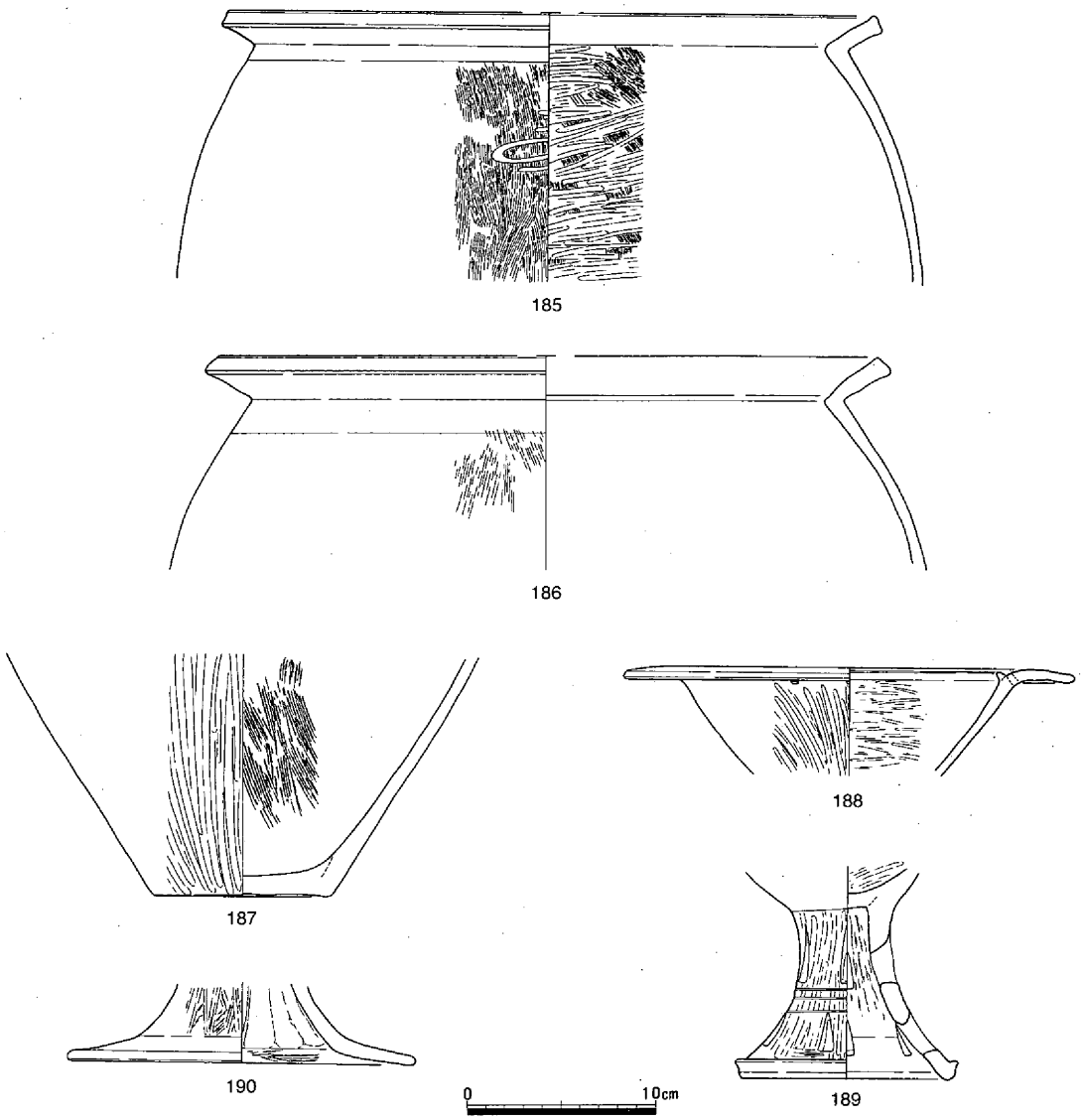
土壙173の約２ｍ東で検出された遺構である。この周辺では弥生後期の遺構が複雑に切り合っていたため、平面形、規模は明らかでない。深さは検出面から34cmを測り、底面は平坦である。埋土は暗黄褐色粘質土である。遺物は弥生中期の土器細片が出土しているため、弥生時代中期の遺構と考えられる。（松本）



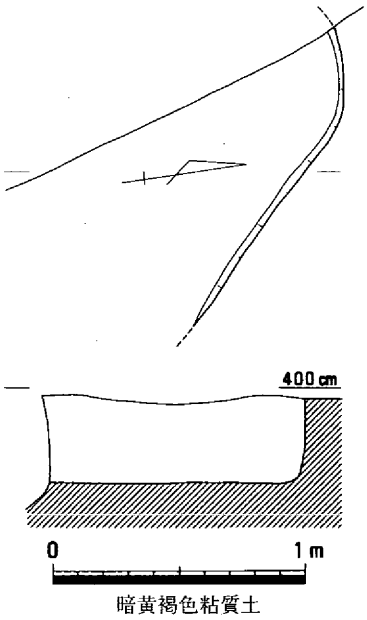
第48図　袋状土壙16（1/30）・遺物



第49図　袋状土壙17（1/30）・遺物（1）



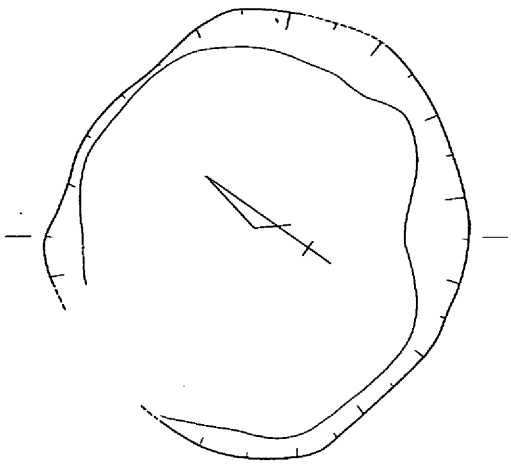
第50図　袋状土壙17　遺物（２）

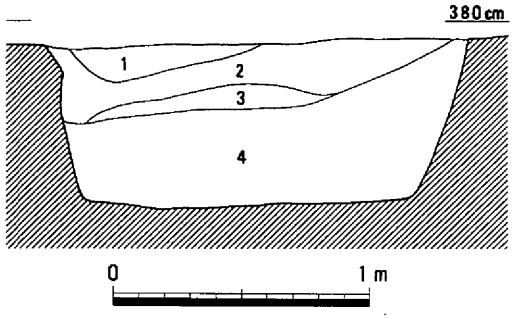


第51図　袋状土壙18（1/30）

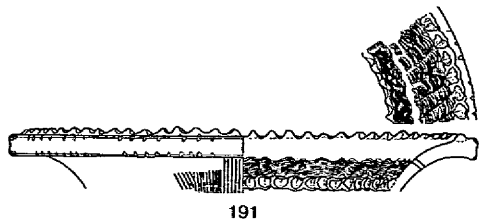
袋状土壙19（第52図）

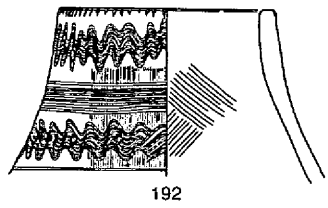
竪穴住居９の西隣りで検出された。西側が切られているが、規模は上面径179cm、底面径157cmを測り、底面形は不整楕円形を呈する。深さは検出面から66cmを測り、底面はほぼ平坦である。断面形態は逆台形状を呈している。埋土は４層に区分された。土器は壺、甕、蓋などが出土している。壺191～193は長頸あるいは短頸の広口壺である。191は口縁内側に波状文と指頭圧痕をもつ突帯文、外側には刻目、穿孔がみられた。192は口縁部に刻目、頸部には193と同じく波状文、沈線がみられる。甕の口縁部は「く」字状に折り曲げるものである。石器は打製石包丁Ｓ26が出土している。時期は出土土器からみて、弥・中・Ⅱと思われる。　（松本）

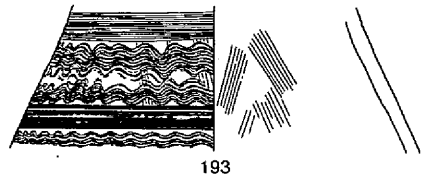


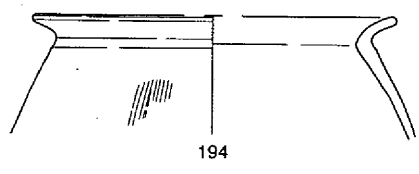


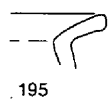
1 暗褐色粘質微砂
2 茶灰褐色粘質微砂
3 暗灰褐色粘質土
4 暗灰黄褐色粘質土

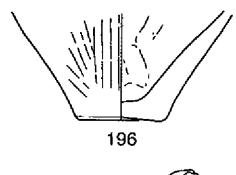


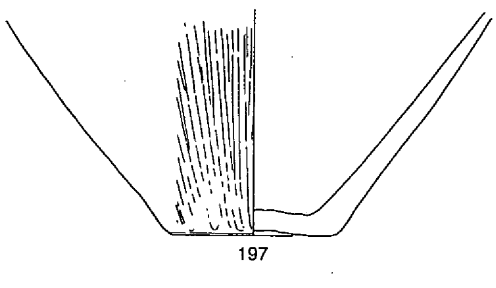


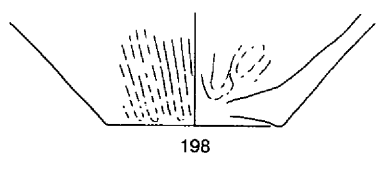


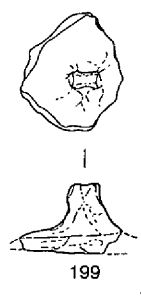


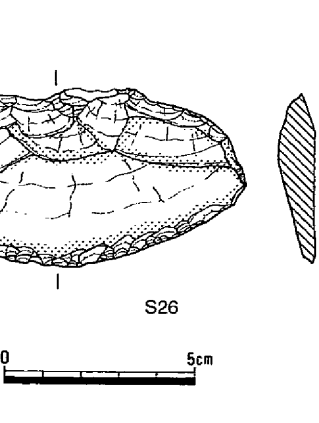


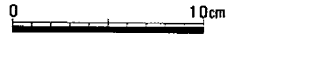












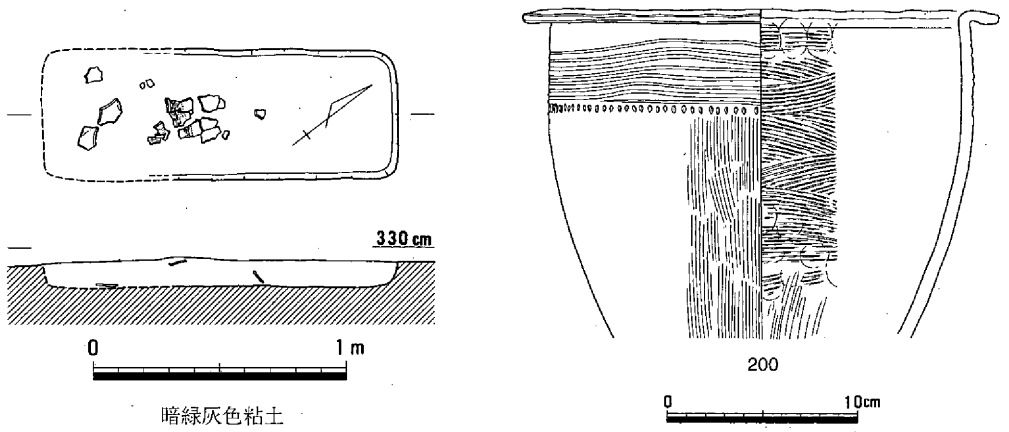
第52図 袋状土壙19（1/30）・遺物

（５）土壙

土壙１（第53図、写真３－３）

第１微高地のＮ22区の西端部、橋脚部９において検出した。平面形は西端部が明確にならなかったが、約140×50cmの長方形で、深さは約10cm残存していた。壁は垂直に近く立ち上がっており、埋土は暗緑灰色粘土が一層のみであった。

遺物は、埋土中から一個体分の甕が出土している。形状からは土壙墓の可能性が考えられるが、明確ではない。時期は出土土器から、弥・前・Ⅲと考えられる。（平井）



第53図　土壙１（1/30）・遺物

土壙２（第54図）

第２微高地で、道路本線部分の調査区南西隅に位置する。平面形が不整楕円形を呈し、規模は長さが246cm、幅は202cm、深さが70cmを測る。土壙の下約半分が混土貝層であった。貝層はヤマトシジミが圧倒的で少量のヘナタリ・カキ・サルボウ・カワニナや魚骨を含んでいた。また、これ以外に土器類も出土している。甕201・202は口縁部をくの字に外反させ、端部はわずかに上方に肥厚させる。低い台の付く鉢片203は体底部と台部の境に刻目突帯を貼り付け、脚部には透かし孔がみられる。

この土壙は貝の廃棄場と考えられ、時期は、弥・中・Ⅱである。（弘田）

土壙３（第55図）

第２微高地の南西隅にあり、土壙２に切られる。調査区外に拡がり、平面形や規模は不明であった。この土壙は長さが５ｍ以上であること、また北東方向で検出した溝５と方向が一致することから本来溝の肩部であった可能性が高い。時期は、弥・中・Ⅱである。（弘田）

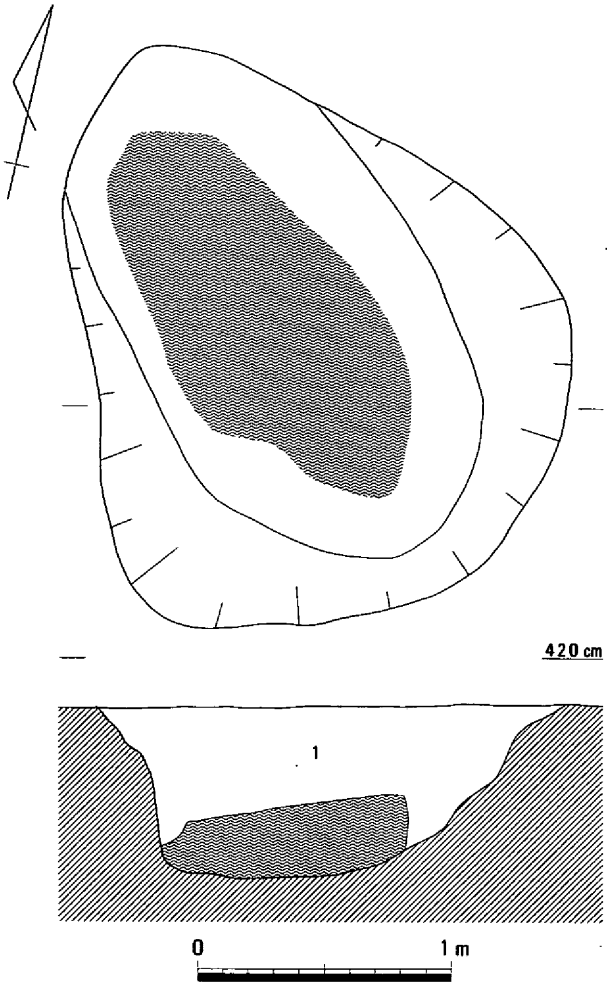
土壙４（第56図）

土壙２から東へ２ｍの所に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長さが530cm以上、幅は130cm程、深さは30cmを測る。土器片が少量出土しているが、図示できるものはない。

時期は、弥・中・Ⅱである。（弘田）

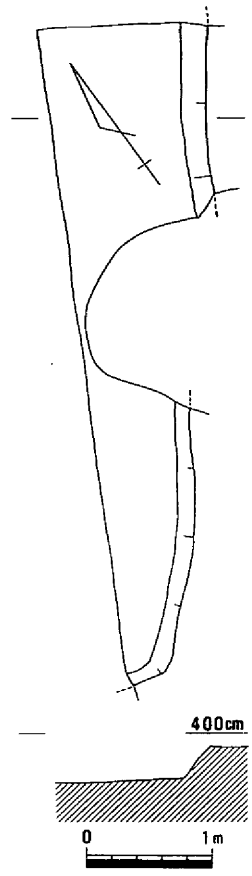
土壙５（第57・58図、写真４－１）

土壙２から南東に１ｍ離れた所に位置し、平面形が不整楕円形を呈する土壙である。規模は長さが293cm、幅は217cmを測る。断面形状は逆台形をなし、深さは70cmである。

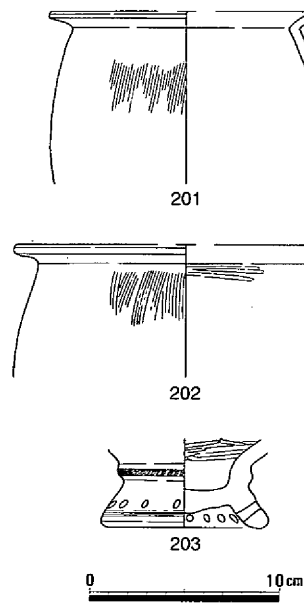


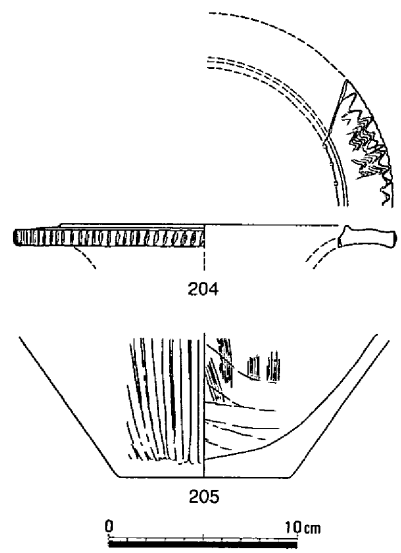
暗褐灰色砂質土（炭・濁黄色土を含む）

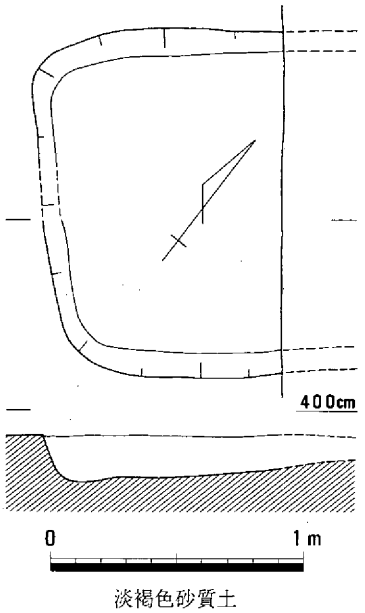
第54図　土壙２（1/30）・遺物



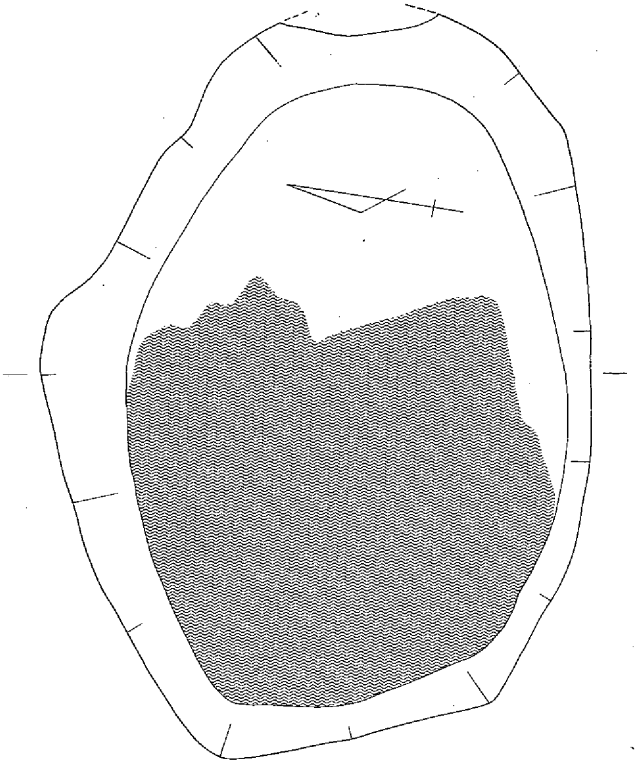
第55図　土壙３（1/60）・遺物







第56図　土壙４（1/30）



第57図　土壙５（1/30）

この土壙も土壙２と同様で、底面では南側の３分の２の範囲が、底から半分以上も貝層で埋まっていた。また、この貝層はわずかに土を含んだ混土貝層であったが、貝類は土壙２と同様に腐食化していた。

貝層のなかからはヤマトシジミを主体として少量のヘナタリ・カキ・ハイガイ・カワニナ等の貝類や魚骨、土器片が出土している。壺206は球形の体部に短く外反する口縁部をもつ。口縁端部は上下に拡張するほか、小形の壺207もある。甕208はくの字状の口縁部で、体部に２列の刺突文をめぐらす。鉢形の杯部をもつ高杯210・211は、ともに２孔１対の紐孔をもつ。この土壙の時期は、弥・中・Ⅱである。（弘田）

土壙６（第59図）

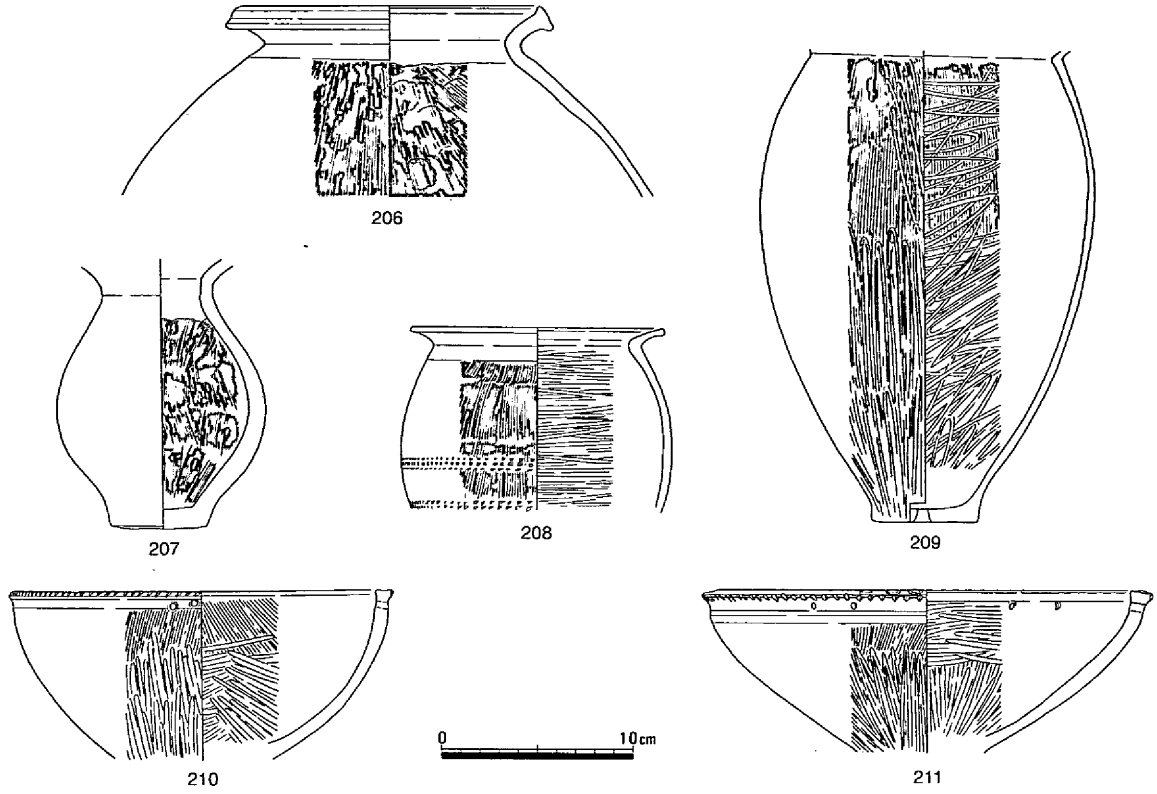
土壙５の南西に接して位置する土壙で、平面形が楕円形を呈す。規模は長さが163cm、幅は110cm、深さが18cmを測る。壺212は口縁端部が面をなし、その上下に刻目を施す。

時期は、弥・中・Ⅱである。（弘田）

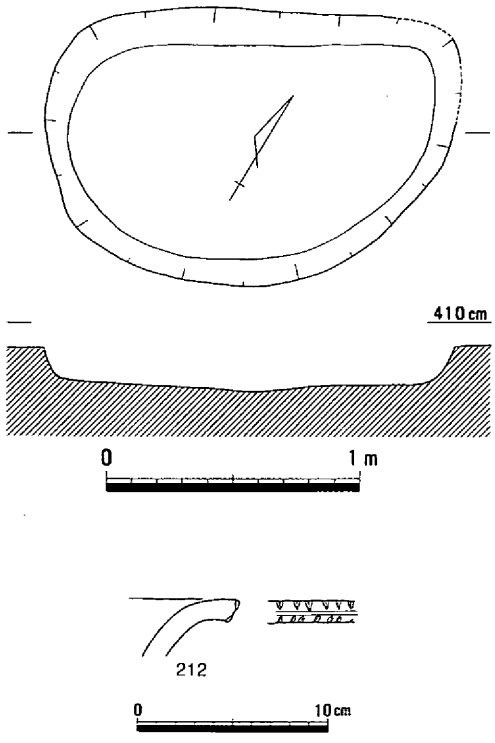
土壙７（第60図）

土壙６の南２mの所に位置する。平面形は方形を呈し、規模は長さが97cm、幅は65cmである。断面形状はボール状を呈し、深さは44cmを測る。くの字口縁をもつ甕213は端部を上方に肥厚させる。

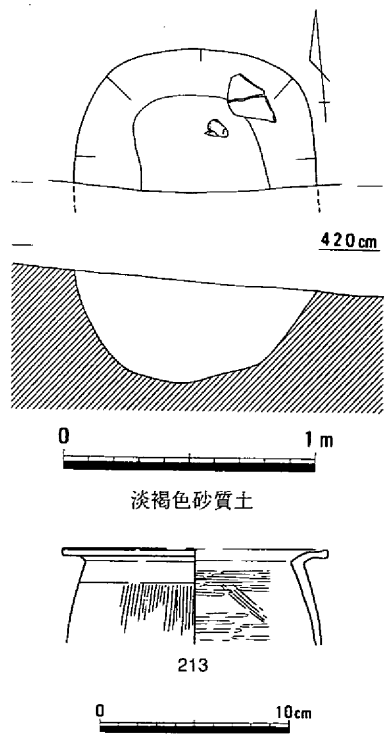
この土壙の時期は、弥・中・Ⅱである。（弘田）



第58図　土壙５　遺物



第59図　土壙６（1/30）・遺物



第60図　土壙７（1/30）・遺物

土壙８（第61図）

土壙７から南に７ｍ離れた所に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長さが155cm、幅は109cm、深さが15cmを測る。埋土中央には貝層が半球状に堆積していたが、これは土壙の埋没過程で混入したと考えられる。貝はすべてヤマトシジミであった。また、貝以外には壺の口縁部214が出土している。

この土壙の時期は、弥・中・Ⅱである。　（弘田）

土壙９（第62図）

土壙８の南に接し、土壙11に切られる。さらに一部は調査区外に続くため形態や規模は不明である。

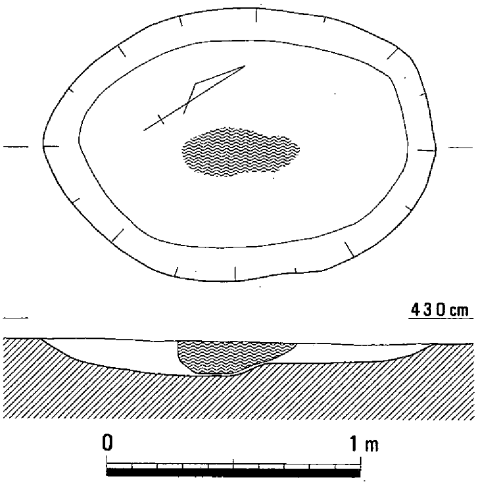
甕215・216はともに、くの字状の口縁部をもち、端部は上方に肥厚する。小型甕215は口縁端部外面と体中央部に刺突文をめぐらす。

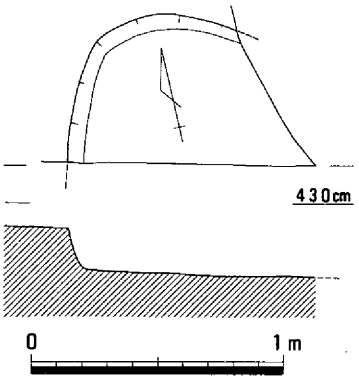
時期は、弥・中・Ⅱである。　（弘田）

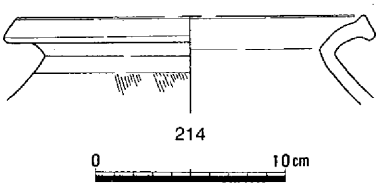
土壙10（第63図）

土壙８から北東１ｍの所に位置する。平面形が不整方形を呈し、規模は長さが92cm、幅は77cm、深さが13cmを測る。

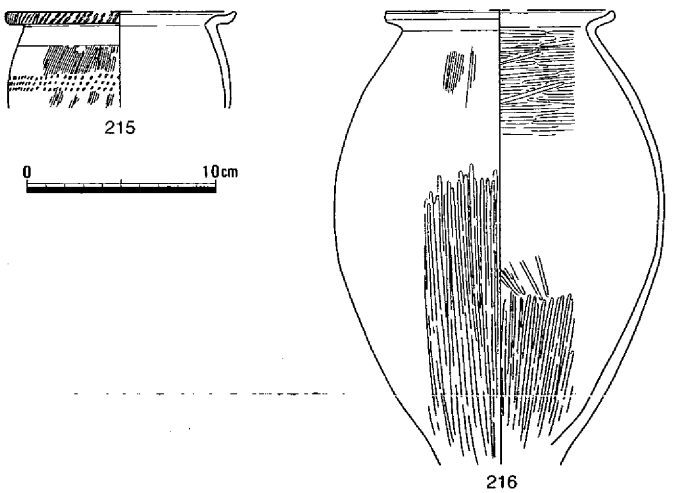
遺物は出土していないが、周囲の遺構の状況や埋土からみて、時期は弥生時代中期と考えられる。　（弘田）



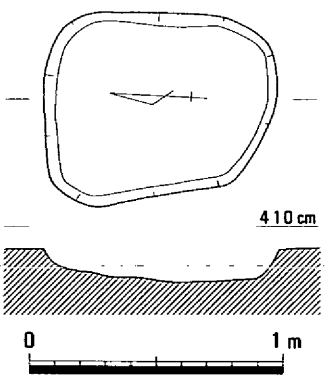




第61図　土壙８（1/30）・遺物



第62図　土壙９（1/30）・遺物



第63図　土壙10（1/30）

土壙11（第64図）

土壙９の東に接して位置する。平面形が長方形を呈し、規模は長さが185cm以上、幅は136cm、深さが31cmを測る。

土壙中央部の埋土中では、腐食してボール状となったヤマトシジミを主体とする貝層がみられたが、これはある程度埋没していた土壙を貝類の廃棄場として利用したものと考えられる。

貝以外の遺物としては、くの字状の口縁部をもつ甕217や大形で深い鉢状の杯部をもつ高杯218がみられる。

時期は、弥・中・Ⅱである。　（弘田）

土壙12（第65図）

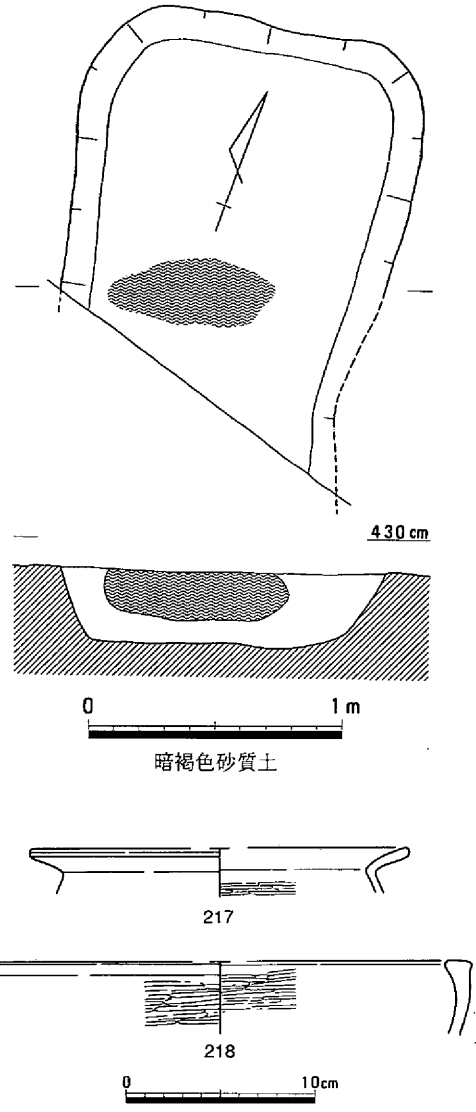
第２微高地南西端で、南水路調査区に位置する。平面形が楕円形を呈し、規模は長さが190cm、幅は99cm、深さが53cmを測る。

鉢219は球形の体部をもち、胴部中央に刺突文をめぐらせ、内面にはヘラミガキを施す。口縁部は短いくの字形で、端部は上に肥厚させる。

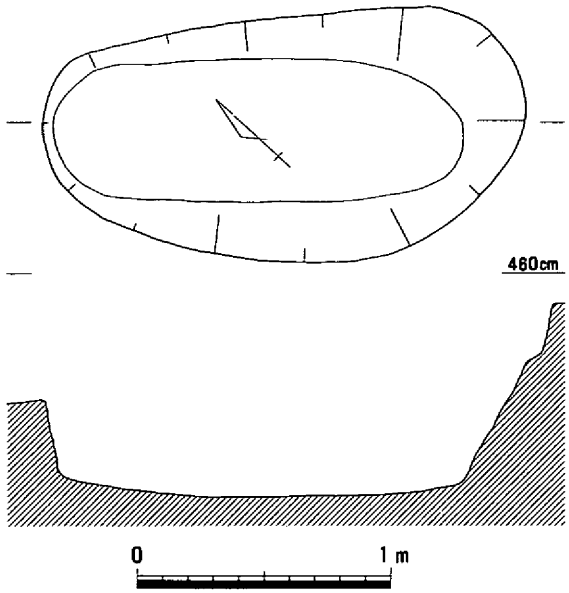
時期は、弥・後・Ⅱである。　（弘田）

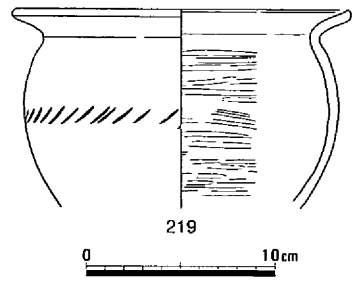
土壙13（第66図）

土壙12から東へ３m離れたところに位置する。平面形が楕円形を呈し、規模は長さが106cm、幅は78

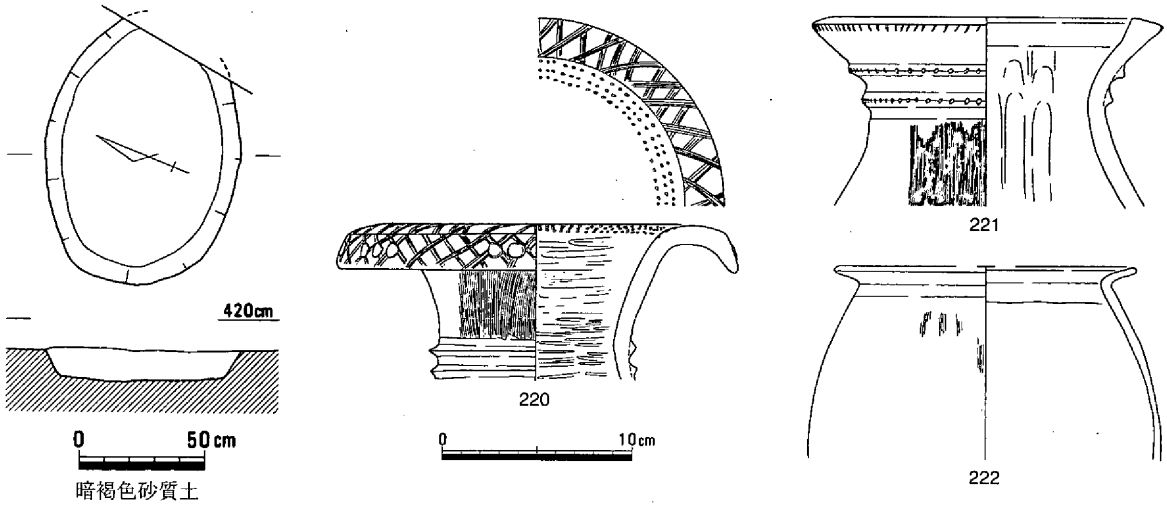


第64図　土壙11（1/30）・遺物

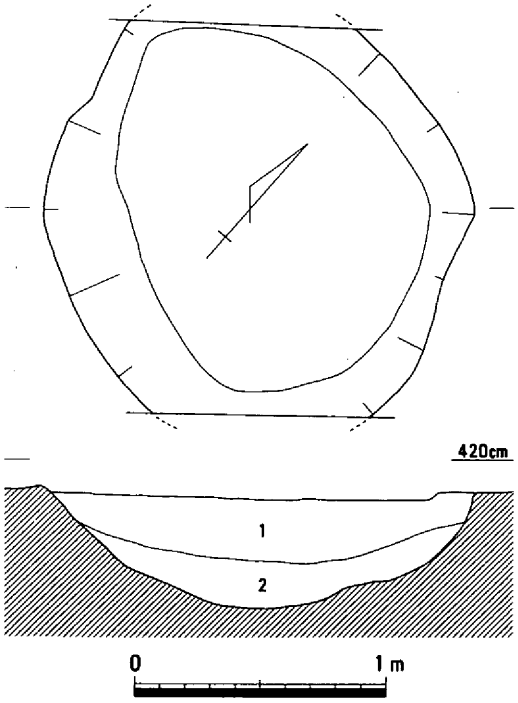




第65図　土壙12（1/30）・遺物



第66図　土壙13（1/30）・遺物



cm、深さが14cmを測る。

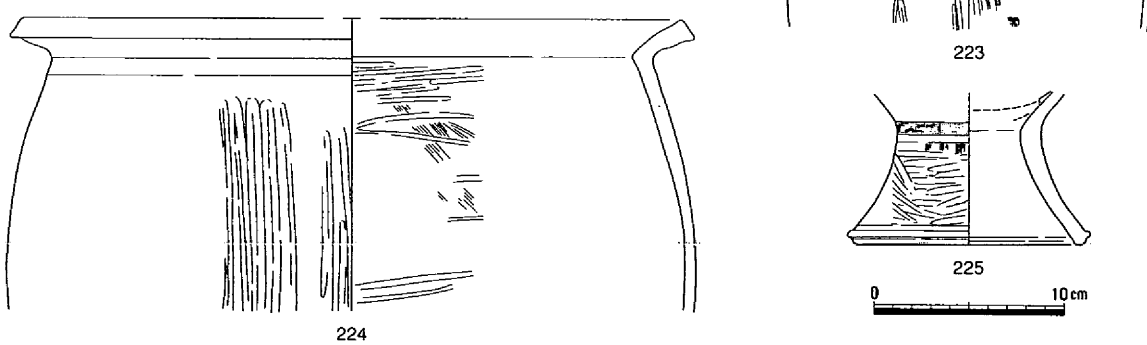
壺220は、頸部に貼付け突帯２条をめぐらせ、外傾する口縁部は一旦水平に拡がったのち下方に垂下させる。221は２条の刻目突帯をめぐらせ頸部から外反する口縁部をもち、端部は肥厚させて内傾する面をなし、外端に刻目を施す。甕222は短く、くの字に開く口縁をもつ。

時期は、弥・中・Ⅱである。

（弘田）

土壙14（第67図）

土壙13から北東に4m離れたところに位置し、



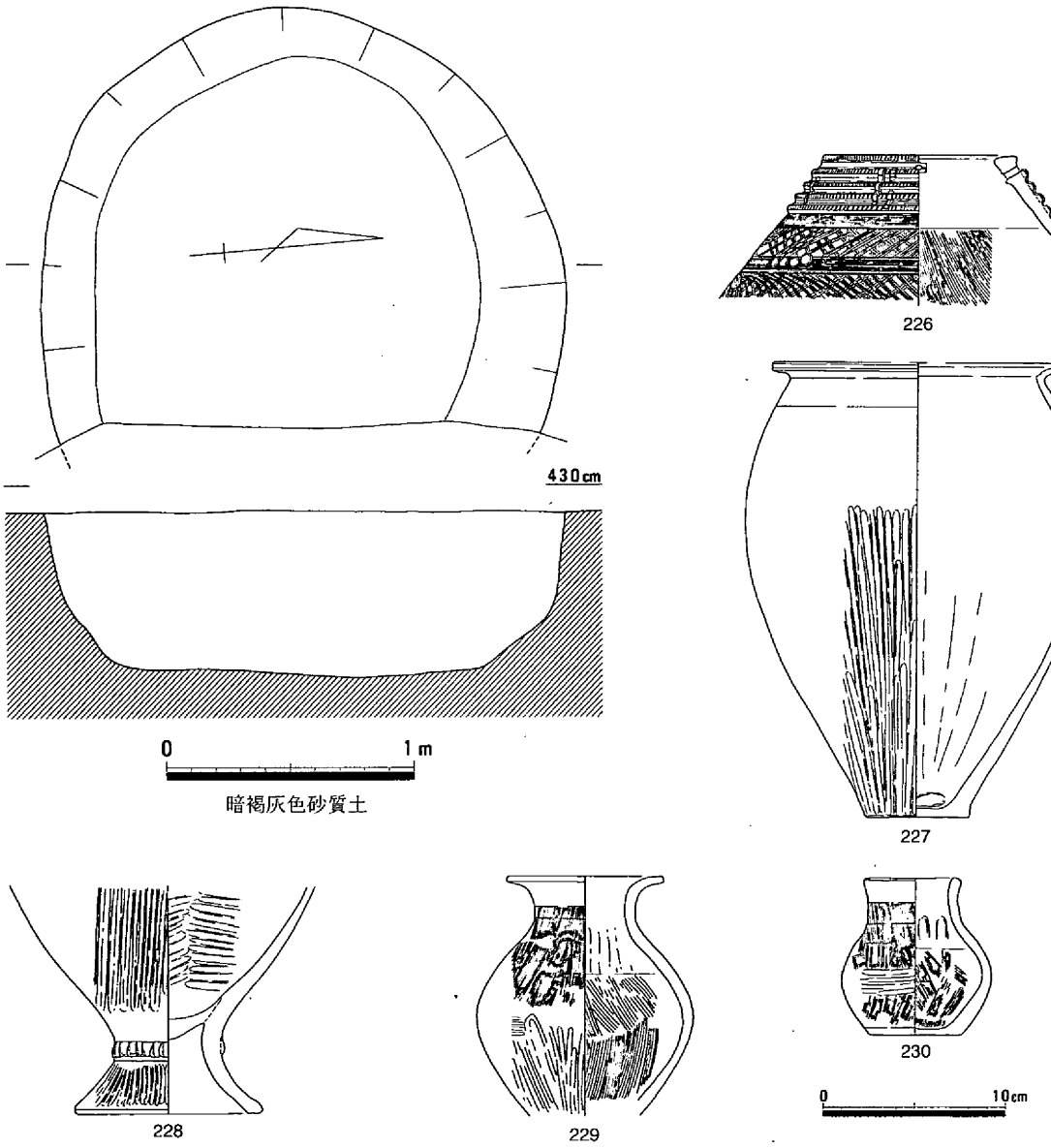
第67図　土壙14（1/30）・遺物

平面形が不整円形を呈する土壙である。規模は長さが184cm以上、幅は162cm、深さが49cmを測る。

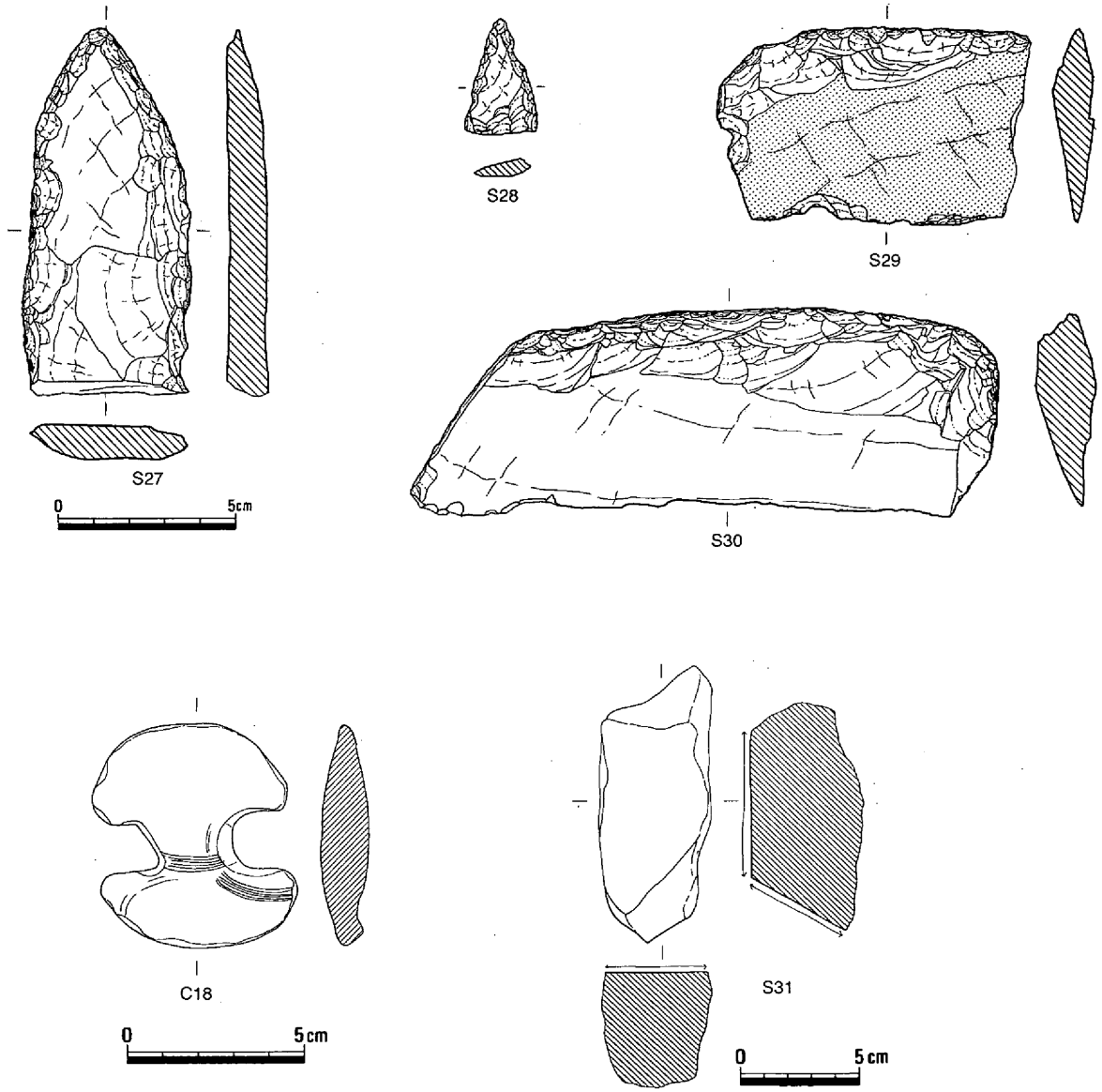
甕は２点あり、口縁部をくの字に外反させる。口縁端部を上方につまみ上げた小型の223は外面下半にヘラミガキを上半にはハケメを施す。端部が内傾する面をなす大形の224では、外面全体をヘラミガキ、内面にはハケのちヘラミガキを施す。高杯脚部225では、脚端を外に拡張して、端面には凹線状のナデを施す。時期は、弥・中・Ⅱである。　（弘田）

土壙15（第68・69図）

土壙14の西に接して位置し、平面形が楕円形を呈する土壙である。規模は、長さが214cm、幅は173cm以上である。断面形は、椀状で壁面が垂直に近く垂下したのち、平坦な底面近くで緩やかとなり、深さは68cmを測る。出土遺物のうち、無頸壺226は内傾して立つ口縁部の外面を３条の刻目突帯と棒状浮文で飾り、口縁端部直下には小円孔を穿つ。体部外面上半には、櫛描沈線文と円形浮文を施し、内面にはハケメがみられる。甕227はくの字状の口縁部をもち、端部は上方に肥厚させ外側に面をもつ。外面調整は胴部最大径以下にヘラミガキ、それ以上はナデを施す。内面は、体下半にヘラケズリ



第68図　土壙15（1/30）・遺物（１）

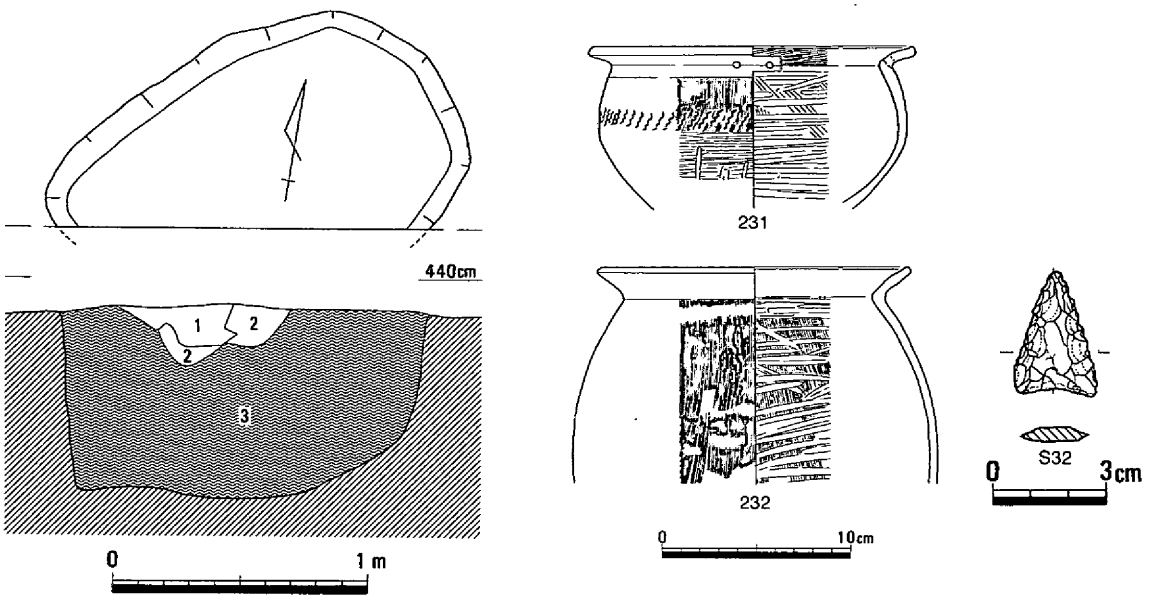


第69図　土壙15　遺物（２）

を施す。228は、短くハの字に開く脚部をもち、深い鉢形をなす体部との接合部には指頭押圧突帯を貼り付ける。体部内外面と脚外面はヘラミガキを施す。台付鉢と思われる。ミニチュアの壺には口縁部が強く外反する229と真っ直ぐ上に立つ230がある。ともに外面にはハケメのちヘラミガキ、内面にはハケメを施す。土器以外にも、サヌカイト製の打製石剣Ｓ27・石鏃Ｓ28・石包丁Ｓ29・30と分銅形土製品Ｃ18や流紋岩製の砥石Ｓ31がみられる。この土壙の時期は、弥・中・Ⅱである。　（弘田）

土壙16（第70図、写真４－２）

第２微高地内で、南側の水路調査区にあり土壙14からは東へ10ｍの所に位置する。現在の耕作土直下で検出した土壙である。平面形は隅丸方形を呈し、一部は調査区外となるが、推定規模は長さが150～160cm、幅は100cm程である。また断面形状は、ほぼ垂直に壁面が立ち上がって、深さは78cmを測るが、底面は平坦ではなく多少の凹凸がみられる。土壙埋土は、底から検出面までがわずかに土を介在するもののほぼ貝で埋まっていた。貝は、大半をヤマトシジミが占めるが、ごく少量のヘナタリ



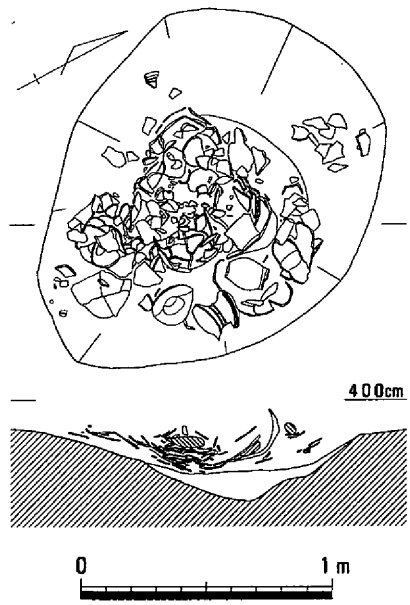
1　淡黄灰色砂質土　2　暗茶色砂質土
3　貝

第70図　土壙16（1/30）・遺物

属・サルボウ・ハイガイ・カワニナと貝類以外にもわずかながら土器や石器、魚骨がみうけられた。鉢231は扁球形の体部をもつ。短く外反する口縁部の内面にはヘラミガキを施して、口縁端部は上方にわずかに肥厚させ外側に面をつくる。体部外面中央には貝殻腹縁文を施し、頸部には2孔1対の紐孔がある。甕232は短く、くの字に開く口縁部をもち、端部は丸く終わる。サヌカイト製石鏃S32もみられる。土壙の時期は、弥・中・Ⅱである。　（弘田）

土壙17（第71～74図、写真52）

第2微高地の西端で検出した楕円形の土壙である。長軸の方向はN-45°-Wで、長さ160cm、幅123cm、深さ27cmを測る。多数の土器片が上層に重なって出土している。

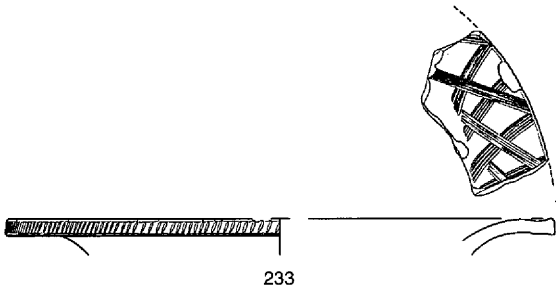


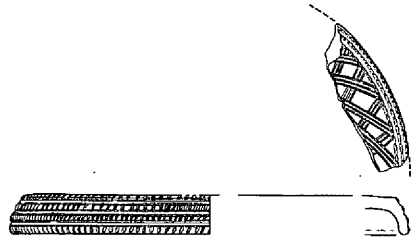
第71図　土壙17（1/30）

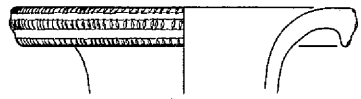
遺物は、大型の壺や甕の他に小型の壺・甕、蓋などの土器、石器も含まれている。233～243は壺である。233・234・236の口縁上面には格子文、236・238の頸部下端には断面三角形の凸帯を2条貼り付けている。この2個と239の体部には連続した刺突文も施されている。242は大型の壺で、口縁部に格子文、頸部に竹管文の付いた貼付凸帯を有する。244～246は甕で、247の大型甕の体部には2段に連続刺突文が施されている。248は甕に付くと思われる蓋である。S33はサヌカイト製のスクレイパー、S34は流紋岩製の石斧未製品、S35はひん岩製の太型蛤刃石斧である。

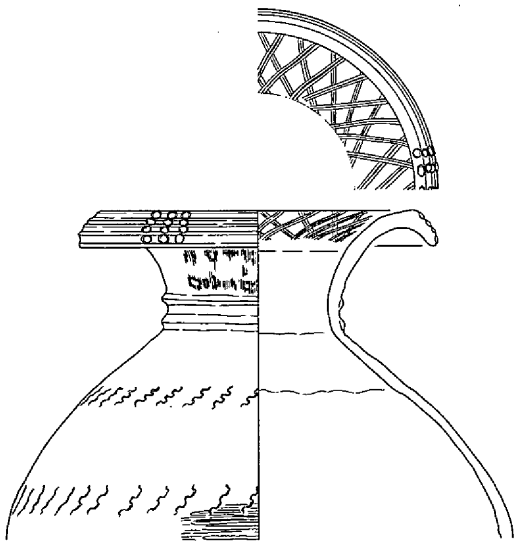
出土遺物の観察からこの土壙の廃棄された時期は弥・中・Ⅱと考えられ、用途はゴミ穴と思われる。

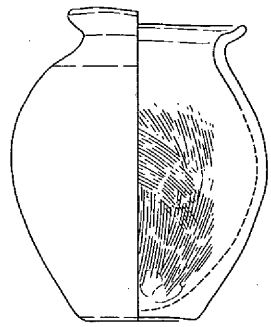
（浅倉）

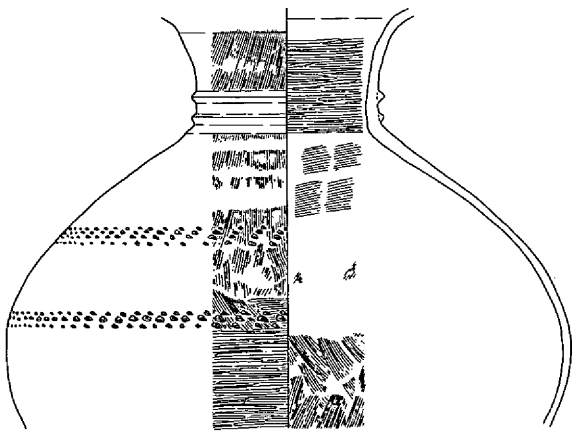

233

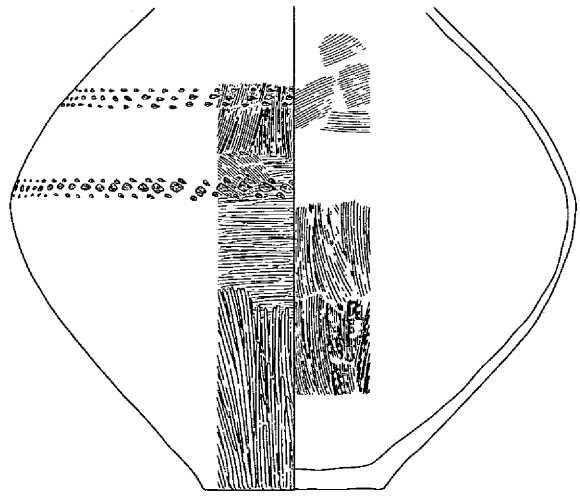

234

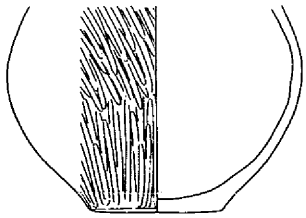

235

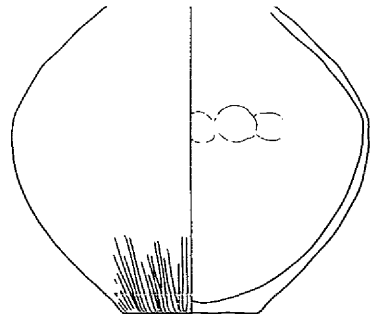

236


237

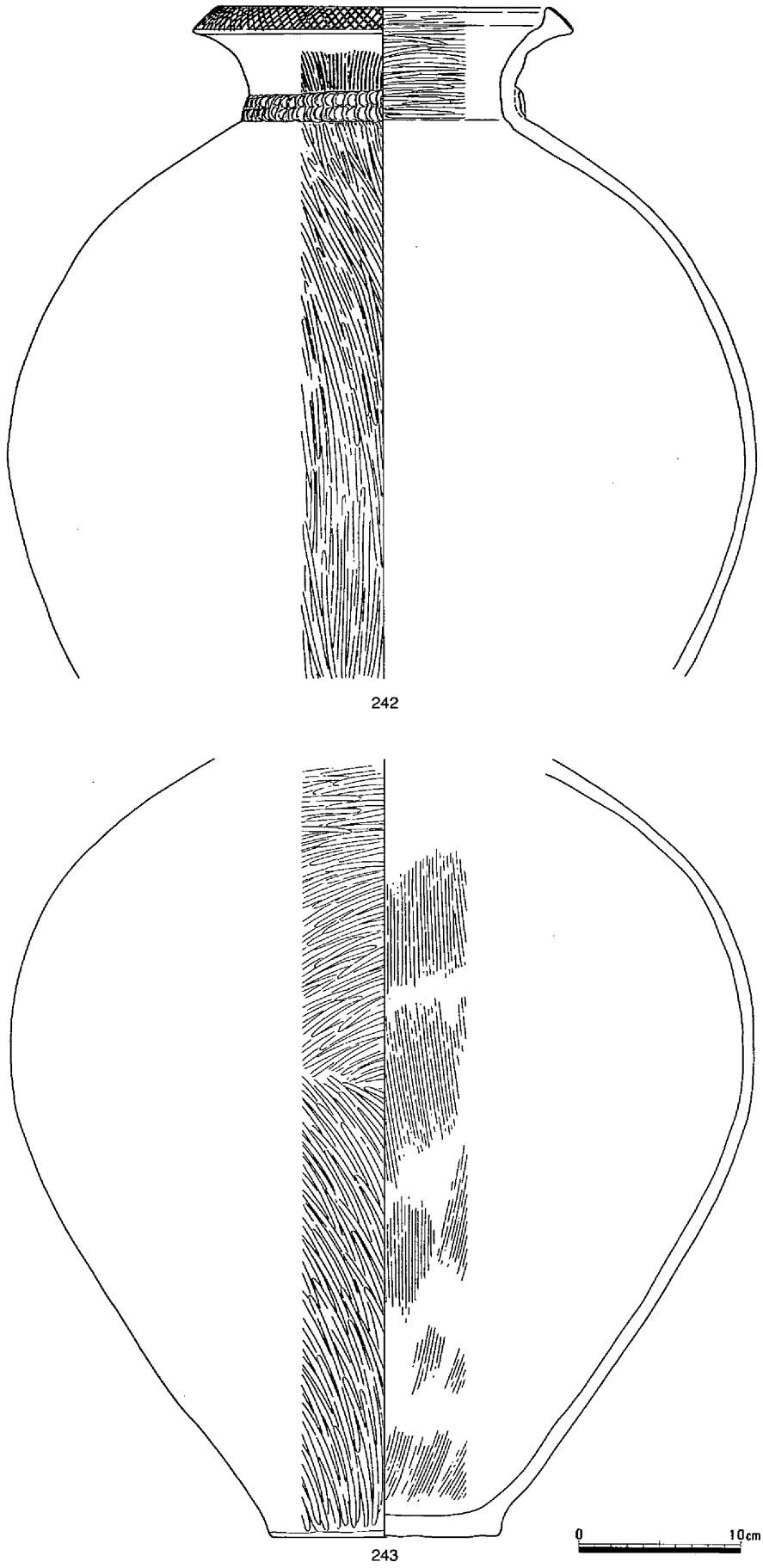

238


239

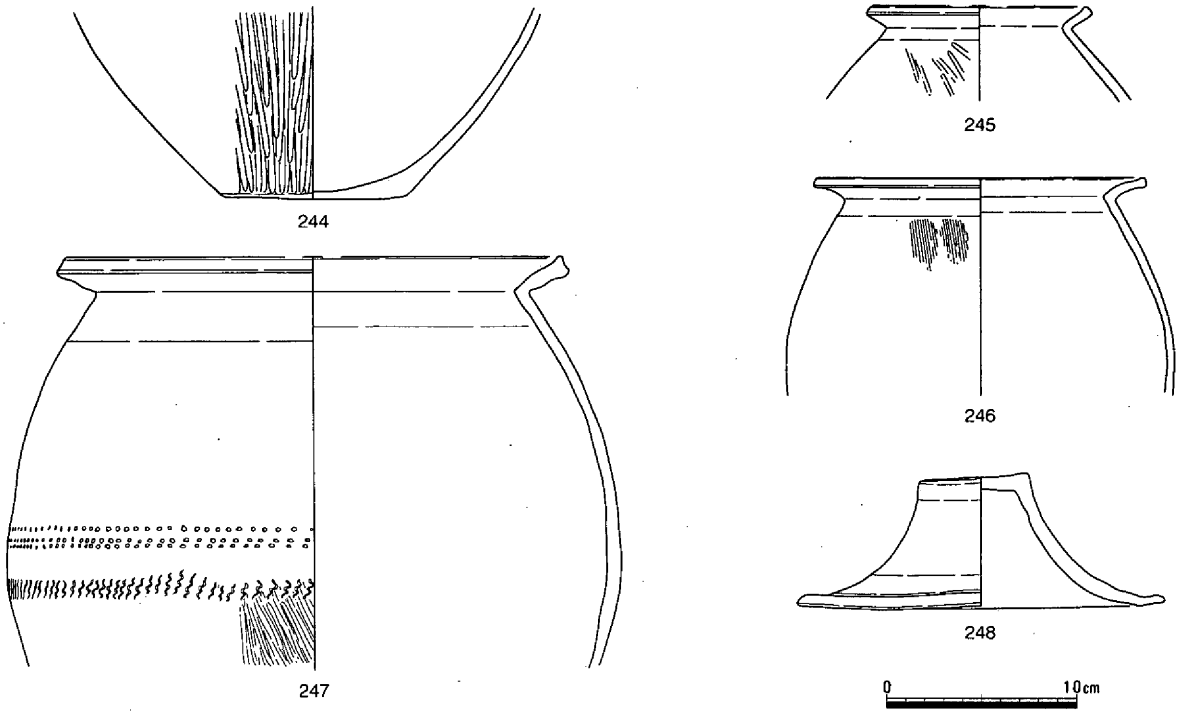

240

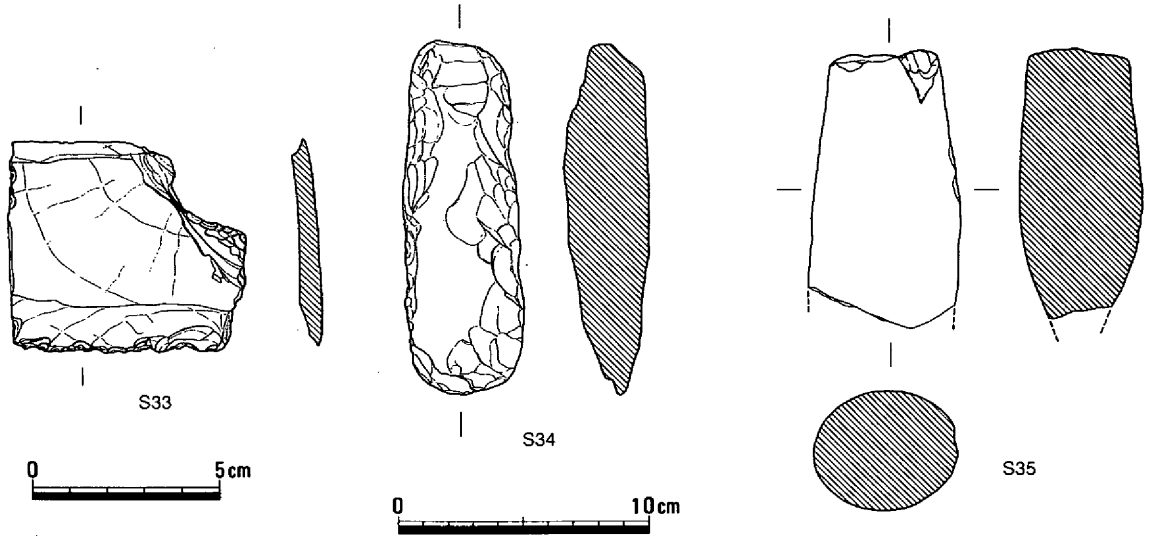

241

第72図　土壙17　遺物（１）



第73図　土壙17　遺物（2）





第74図　土壙17　遺物（３）

土壙18（第75図）

土壙17の南3.5m離れて検出できた長楕円形の浅い土壙である。長軸の方向はN-30°-E。床は平坦である。大きさは検出長190cm、幅123cm、深さ27cmを測る。

遺物は土器片と石鏃が出土している。S36はサヌカイト製の平基式石鏃である。249は壺の肩部で、格子文の下に円形浮文、その下に沈線文、さらに下に連続刺突文を施す。250は249と同一個体と考え

られる。251は甕である。

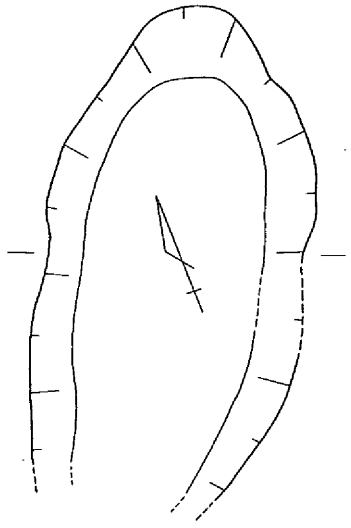
遺物の観察からこの土壙の時期は弥・中・Ⅱと考えたい。

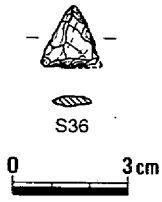
（浅倉）

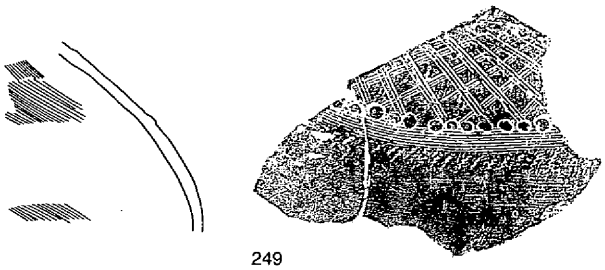
土壙19（第76・77図、写真53）

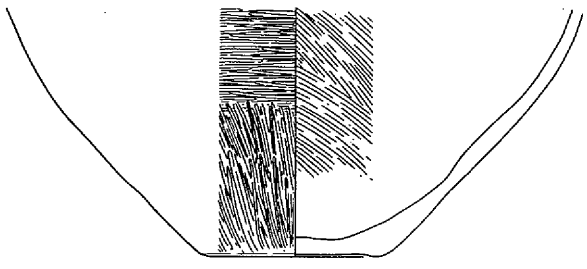
土壙17の東隣で、それに一部切られて検出された楕円形の土壙である。長軸の方向はN-30°-W。床はU字形を呈する。大きさは長さ269cm、幅152cm、深さ59cmを測る。土器片は4層中の第2層から出土している。

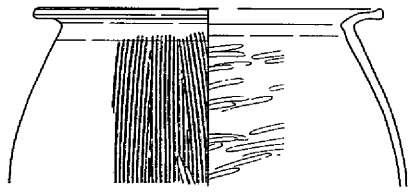
252は甕で、口縁上面に波状文を2条、外端面に刻み目を施す。254は中型の甕で、体部に3条の列点文を持つ。口縁直径18.7cmを測る。258は鉢で、259と同一個体であろう。口縁直下に2個1

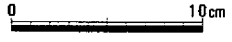




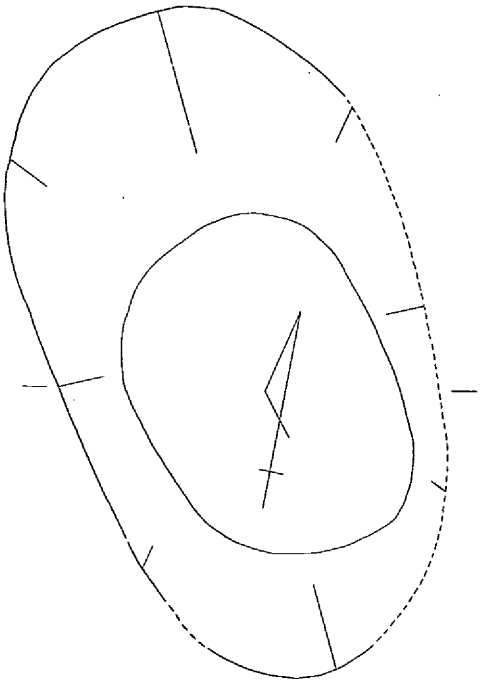


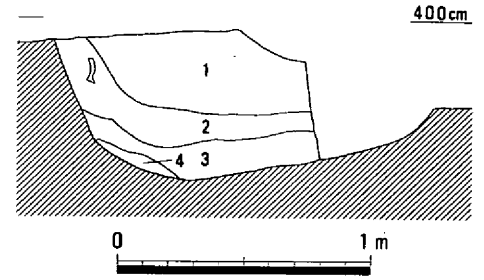






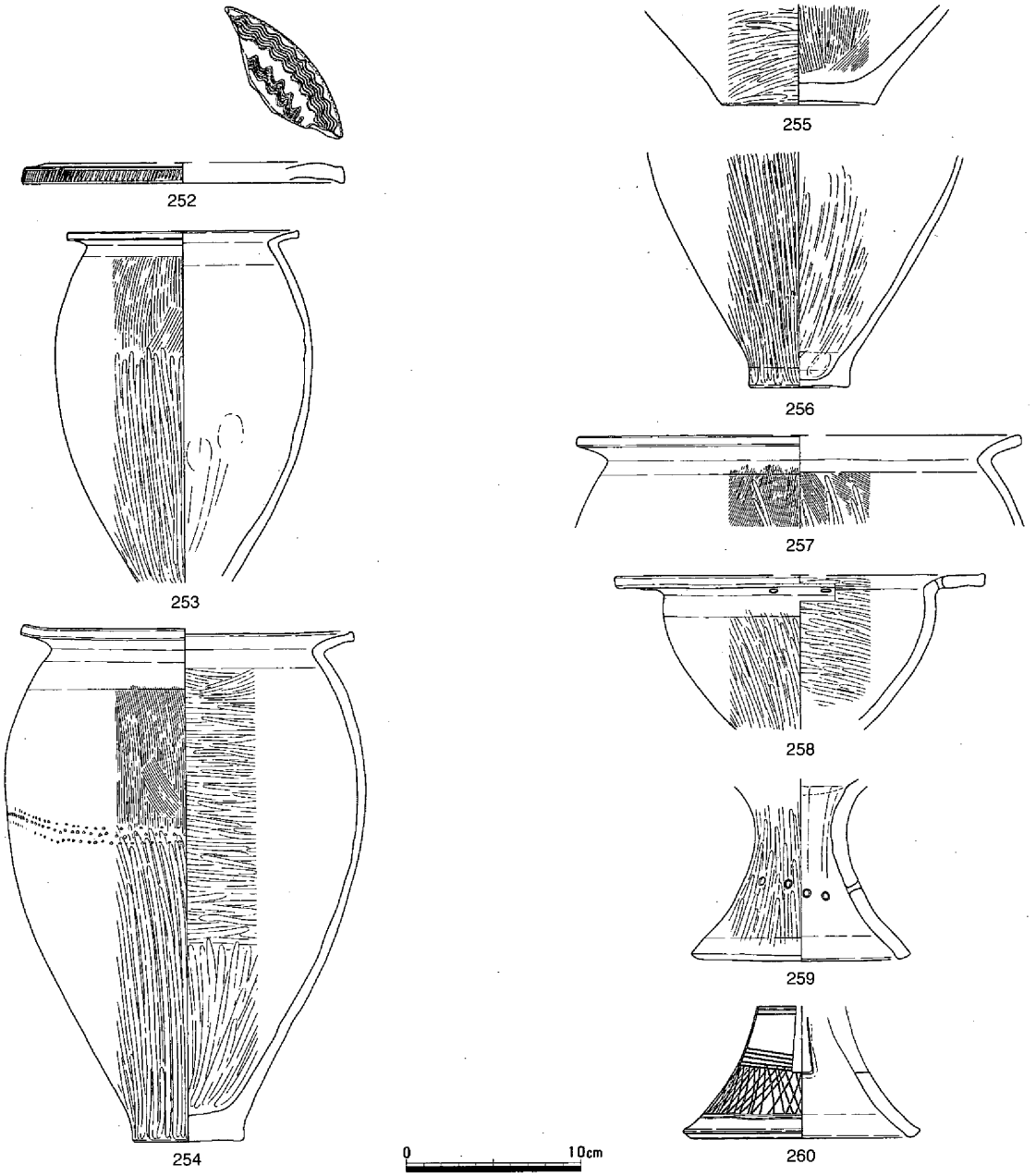
第75図　土壙18（1/30）・遺物





1　淡灰赤褐色粘質細砂（炭化物を含む）
2　灰褐色粘質細砂
　（マンガンを多く含む、土器・炭化物を含む）
3　暗黄灰色粘質土（炭化物を含む）
4　淡灰黄色粘質微砂

第76図　土壙19（1/30）



第77図　土壙19　遺物

対の小さい円孔を開けている。蓋付きの土器であろう。260は高杯か鉢の脚である。長方形の透かし穴を４個持ち、格子文を施す。

土器片から考えて、この土壙の時期は弥・中・Ⅱと考えたい。（浅倉）

土壙20（第78図、写真53）

土壙17の南隣に接して検出できた楕円形の土壙である。長軸の方向はN-80°-W。床は２段となる。大きさは長さ183cm、幅139cm、深さ73cmを測る。

遺物は土器の他に石器と土製紡錘車が出土している。S37はサヌカイト製楔形石器で、C19は土製紡錘車である。261～263は甕、264は台付鉢、266は手捏土器である。

土器から考えて、この土壙の時期は弥・中・Ⅱと考えたい。（浅倉）

土壙21（第79図）

土壙19の南東２ｍで検出できた不整楕円形の土壙である。長軸の方向はN-60°-W。床はU字形を呈す。大きさは長さ97cm、幅48cm、深さ37cmを測る。

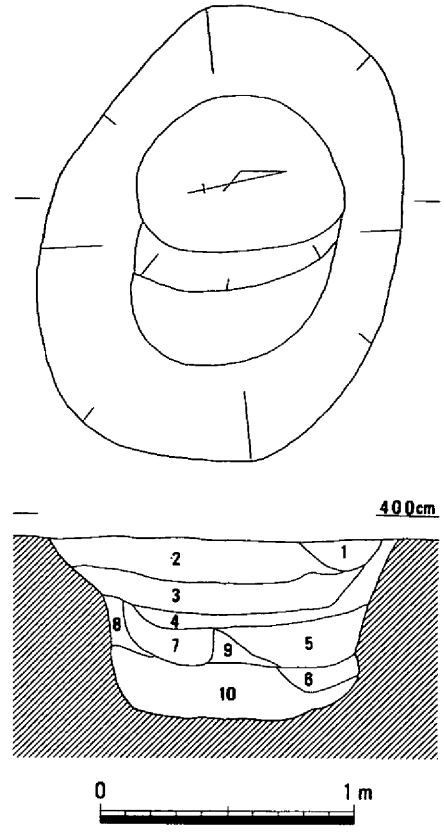
遺物は土器片が出土している。267～269は甕で267の体部には刺突文が見える。

土器から考えて、この土壙の時期は弥・中・Ⅱと考えたい。（浅倉）

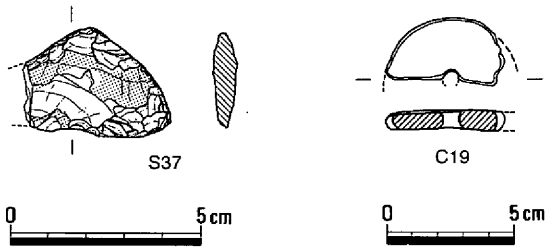
土壙22（第80・81図、写真53）

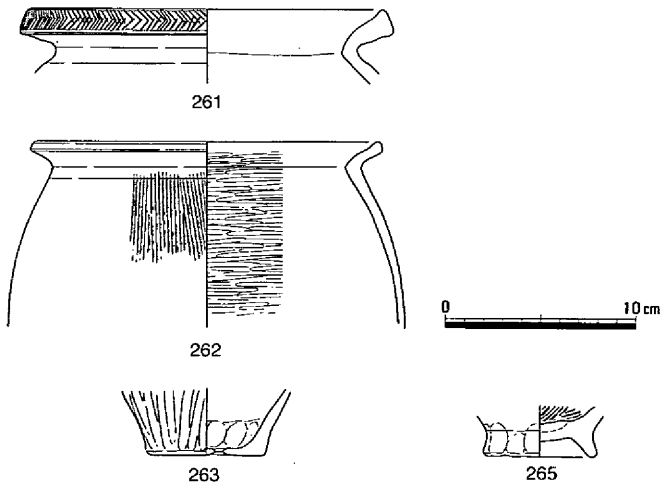
土壙21から東へ１ｍあまりの所に位置する。平面形が楕円形を呈し、規模は長さが262cm、幅は211cmを測る。深さは69cmを測り、断面形は、壁面が急傾斜をもって土壙底にいたるが、底面は平坦とならずに中央付近で不定形に凹状にくぼんでいた。この底部近くの埋土中では、周辺の土壙と同様にヤマトシジミ主体の貝層がみられた。

壺では、長い頸部から水平に開く口縁部をもち、口縁端部外面に刺突文、内面に櫛描波状文を施す270と



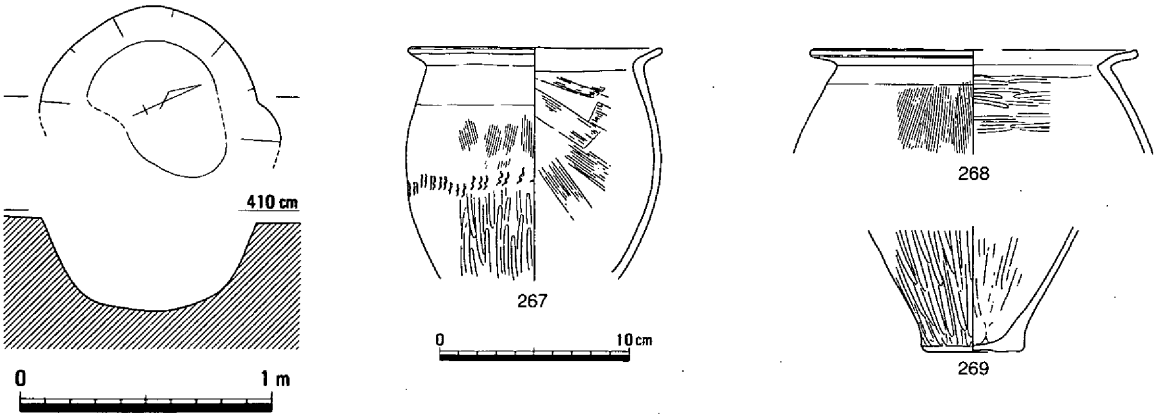
1　明黄灰褐色細砂
2　淡黄灰褐色細砂
3　淡褐黄灰色細砂
4　淡黄褐灰色粘質細砂（土器・炭化物を含む）
5　暗黄灰褐色細砂（炭化物を含む）
6　淡褐黄色細砂（炭化物を含む）
7　暗灰黄褐色細砂（炭化物を含む）
8　暗黄灰褐色細砂
9　暗褐灰黄色細砂
10　暗灰黄色粘質細砂（土器・炭化物を含む）



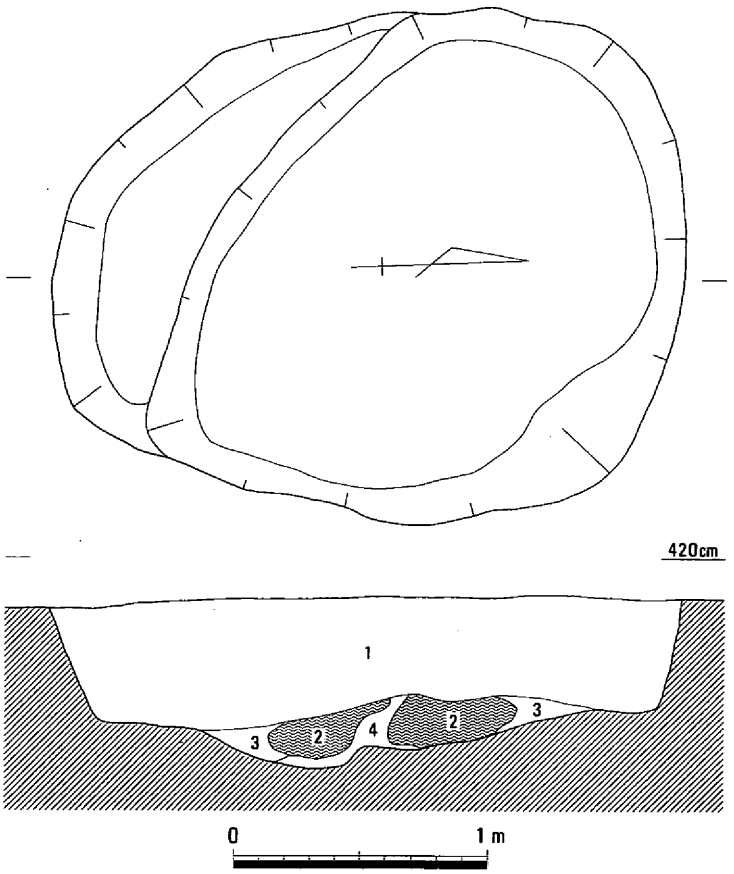


第78図　土壙20（1/30）・遺物

大型の体部に対し短く外反する口縁部をもち、内傾する口縁部端面に刺突文を施す271がある。くの字口縁の甕272～273はいずれも口縁端部を肥厚させる。273では口縁部内面の一部にヘラミガキが及び、274では底部に穿孔がみられる。大形の高杯275では、接合部外面に指頭押圧突帯を貼り付ける。また土器以外にも、土器片を転用した紡錘車Ｃ20～22がある。時期は、弥・中・Ⅱである。（弘田）



第79図　土壙21（1/30）・遺物



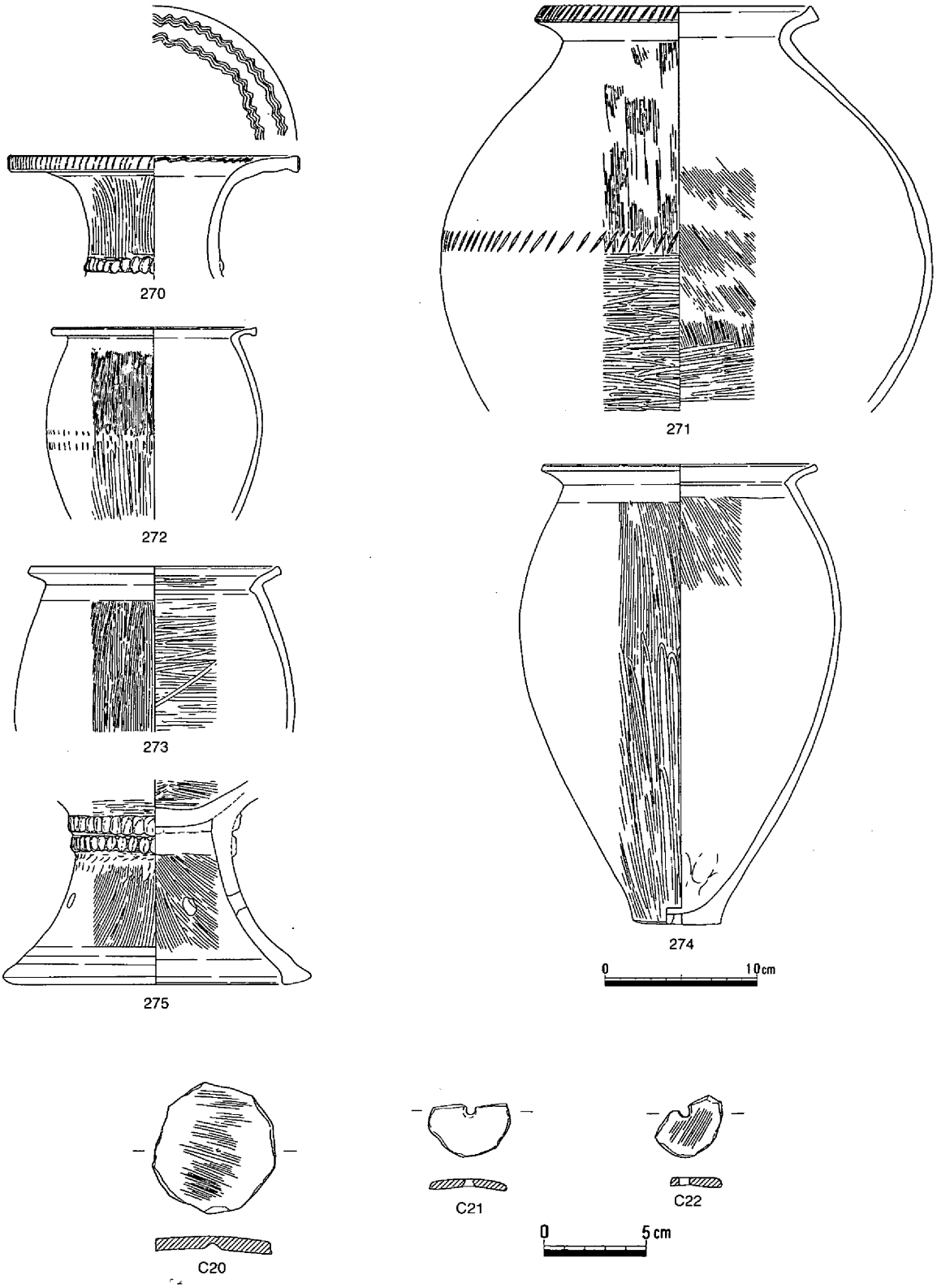
1　褐灰色砂質土
2　貝
3　暗褐灰色粘質土
4　暗黄褐色粘質土

第80図　土壙22（1/30）

土壙23（第82図）

土壙22のすぐ東に接して位置する土壙である。平面形が円形を呈し、規模は長軸が120cm、短軸は117cmを測る。断面形は逆台形を呈し、深さが30cmを測る。

図示できる遺物はないものの時期は、弥生時代中期と思われる。　（弘田）



第81図　土壙22　遺物

土壙24（第83図）

土壙22から東へ２ｍの所に位置する。平面形が楕円形を呈し、規模は長さが174cm、幅は115cmを測る。断面形は浅い椀状を呈し、深さが24cmを測る。

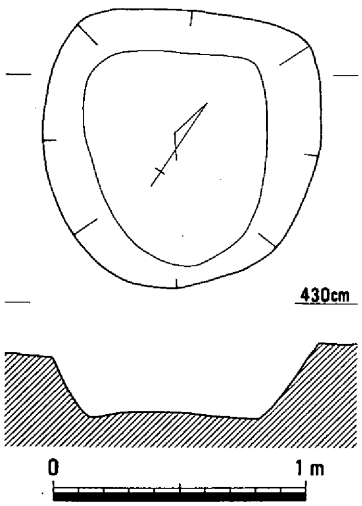
時期は、弥生時代中期と考えられる。（弘田）

土壙25（第84図）

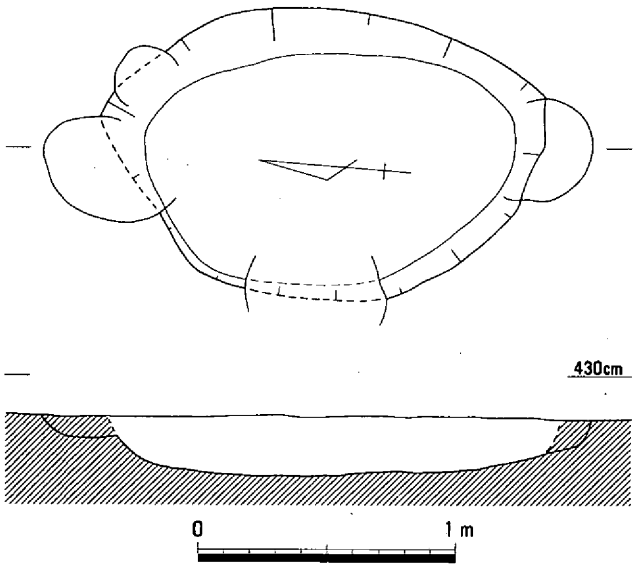
土壙24から南東に１ｍの所に位置する。平面形が楕円形を呈し、規模は長さが148cm、幅は110cmを測る。断面形は椀状を呈して、深さが32cmを測る。

出土遺物のうち、くの字口縁をもつ甕276は、口縁端部を肥厚させ外側に面をなす。高杯脚部277は、裾部に方形の透かしと端部近くにも円孔をめぐらす。傘状の蓋278では、２孔１対の紐穴がみられる。

この土壙の時期は、弥・中・Ⅱである。（弘田）

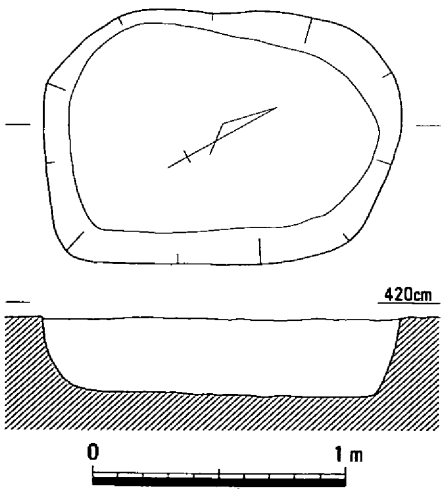


第82図　土壙23（1/30）

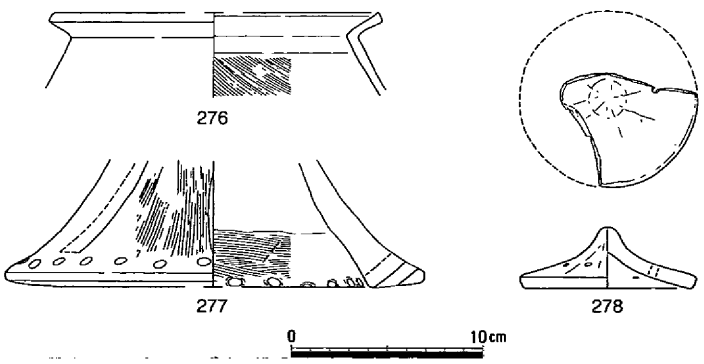


褐色細砂（淡黄茶色細砂を含む）

第83図　土壙24（1/30）



暗褐色細砂



第84図　土壙25（1/30）・遺物

土壙26（第85図）

土壙24の東に接し、かつ土壙25に切られる。平面形が円形を呈し、規模は残存部で、長さが112cm、幅は65cmを測る。断面形は椀状を呈し、深さは30cmを測る。

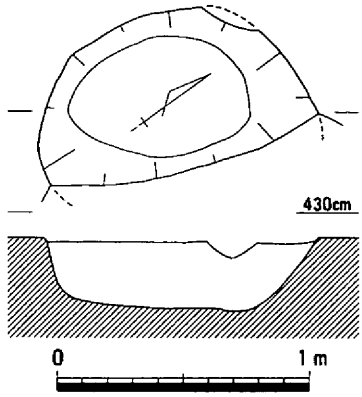
時期は、弥生時代中期と考えられる。（弘田）

土壙27（第86図）

土壙25・26の北１ｍの所に位置する土壙である。平面形が円形を呈し、規模は長さが124cm、幅は115cmである。断面形は箱形を呈し、深さが27cmを測る。甕279はくの字に開く口縁部をもち、端部はわずかに肥厚させ外側に面をもつ。調整は、内外面ともハケを施し、さらに外底部から胴部最大径にかけてヘラミガキを施し、さらには刺突文をめぐらせている。内面では、胴部最大径より下に横方向のヘラミガキを施す。時期は、弥・中・Ⅱである。（弘田）

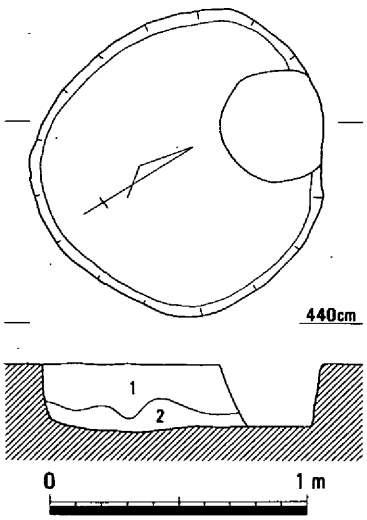
土壙28（第87図）

土壙27から北へ４ｍ離れた所に位置する。平面形が円形を呈し、規模は長さが166cm、幅は143cmを測る。また、

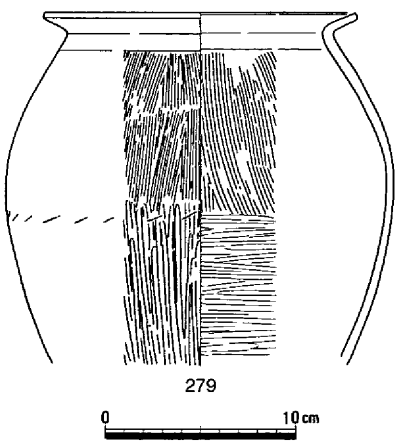


褐色砂質土

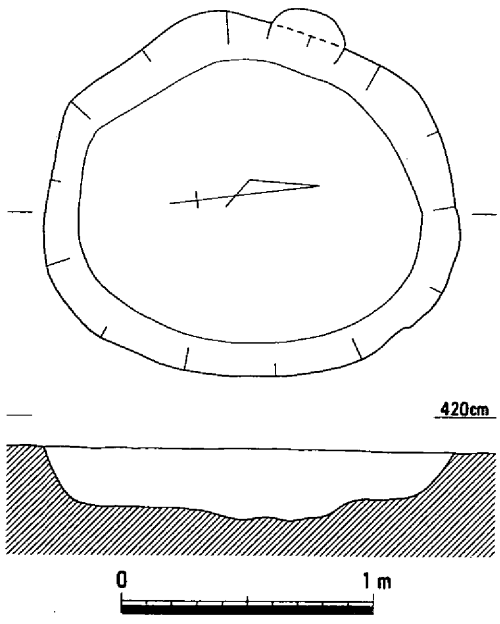
第85図　土壙26（1/30）



1　暗褐色砂質土
2　淡褐色砂質土



第86図　土壙27（1/30）・遺物



褐色細砂（炭を少し含む）

第87図　土壙28（1/30）

断面形は浅い椀状を呈し、深さが30cmを測る。

時期は、弥生時代中期と思われる。　（弘田）

土壙29（第88図）

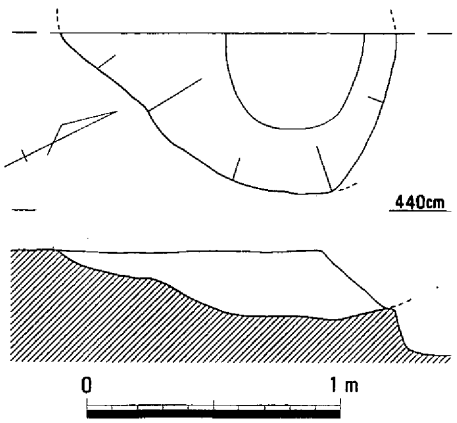
土壙28から北に５ｍ離れた所に位置する。調査区境で検出しており、これより西側の調査区では確認できなかった。平面形は不整形を呈し、規模は残存部で長さが133cm、幅は63cm、深さが27cmを測る。時期は、弥生時代中期と思われる。　（弘田）

土壙30（第89図）

土壙29から南東方向に６ｍ離れた所に位置する。平面形が円形を呈し、断面形は箱形を呈す。規模は、長さが117cm、幅は111cm、深さが30cmを測る。

壺280は、細く絞った頸部に３条の突帯をめぐらす。強く外反する口縁部には２条の刻目突帯をめぐらす。端部は拡張させて、内傾する面には櫛描波状文を施す。壺281では、頸部に指頭押圧突帯を貼付け、外反する口縁の端部は拡張して面をなす。刻目と２条の凹線を施す。甕282・283はくの字状の口縁部をもち、端部は上方に肥厚させる。時期は、弥･中･Ⅱである。

（弘田）



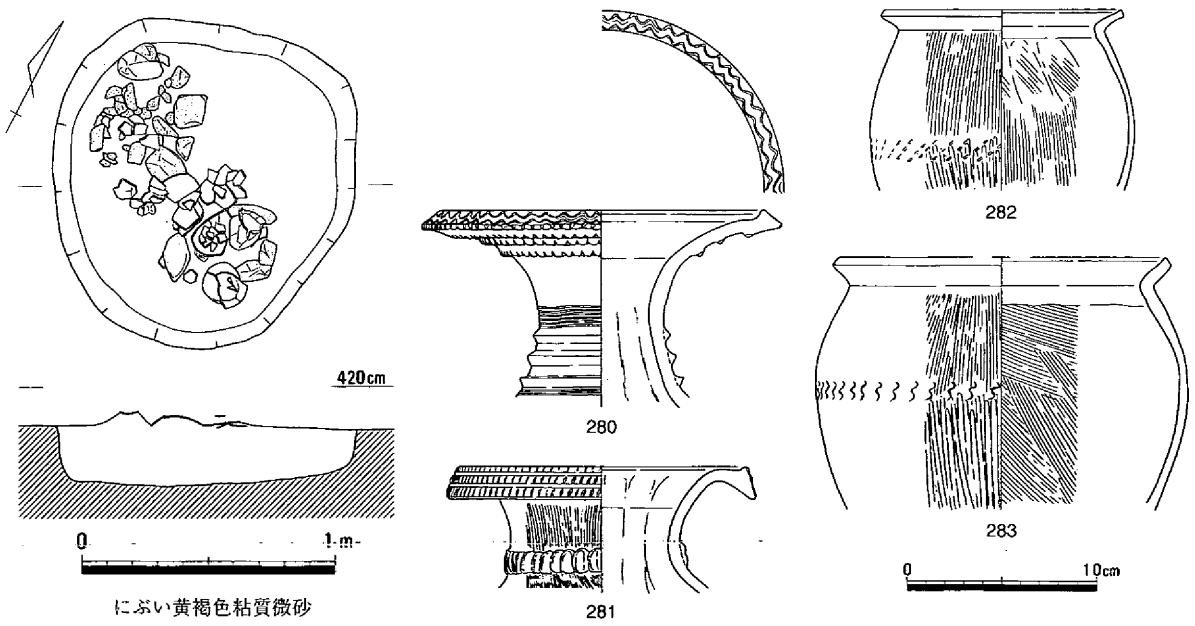
第88図　土壙29（1/30）

土壙31（第90図）

土壙30から南へ４ｍの所に位置する土壙である。平面形は隅丸正方形を呈し、断面形は南が浅く北が深い、歪な逆台形を呈する。

規模は、長さが91cm、幅は87cmで、深さが30cmを測る。

図示しうる遺物はないものの、この土壙の時期は、弥生時代中期と思われる。　（弘田）



第89図　土壙30（1/30）・遺物

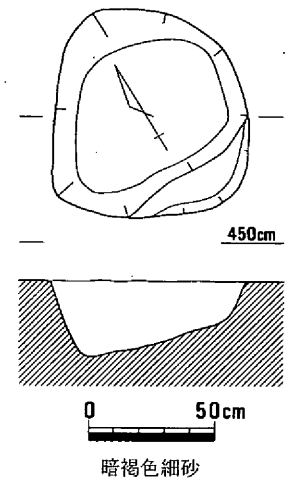
土壙32（第91図）

土壙31の北西に接して位置する。平面形は歪な楕円形を呈し、規模は長さが156cm、幅は92cmである。断面形は皿状を呈し、深さは検出面から20cmを測る。出土した遺物のうち、壺284は短く、くの字に外反した口縁部をもつ。上下に拡張する口縁端部の外側には凹線２条と円形浮文を施す。甕285・286は、くの字状の口縁部をもつ。口縁端部を上方に肥厚させる小形甕285と大形の甕286は端部を上下に肥厚させ、内傾する面には刻目文を施したのち２条の凹線と円形浮文を施す。高杯287は鉢形の体部をもち、脚部には円形の透かし孔をめぐらせ脚端部は下方に肥厚させて内傾する面をもつ。時期は、弥・中・Ⅱである。　（弘田）

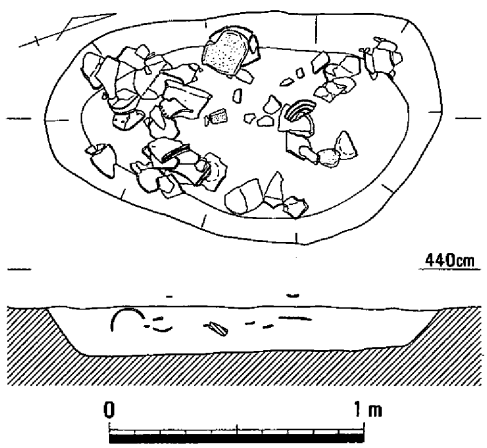
土壙33（第92図、写真54）

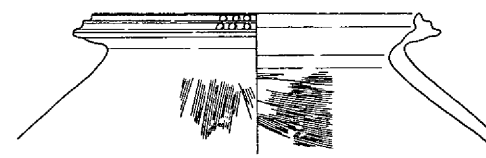
土壙32の南５mの所に位置する。平面形が隅丸長方形を呈し、規模は長さが178cm、幅は87cmである。断面は箱形を呈し、壁が垂直に下がって、平坦な底面にいたる。深さが30cmを測る。

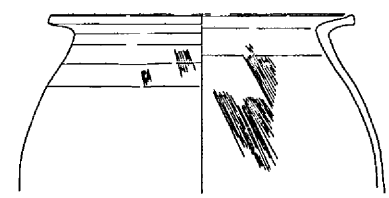
遺物のうち、壺には頸部から強く外反する口縁部をもち、端部を上に肥厚させ外面に刻み目を施す288と真っ直ぐ外上方に立つ口縁部に刻目突帯を貼り付け、さらに口縁端部は拡張させ内傾する面をなす289・290、さらに短く外反する口縁部をもち、上下に拡張した端部に凹線や円形浮文を施す291がある。くの字状の口縁部をもつ甕292は口縁端部を上方に肥厚させ、内傾する面をなす。高杯では

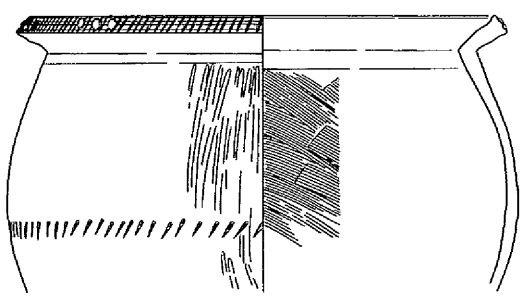


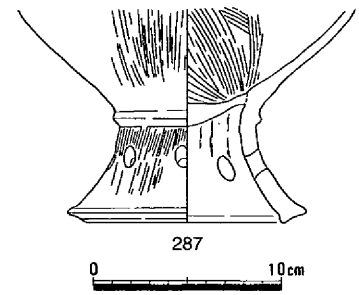
第90図　土壙31（1/30）



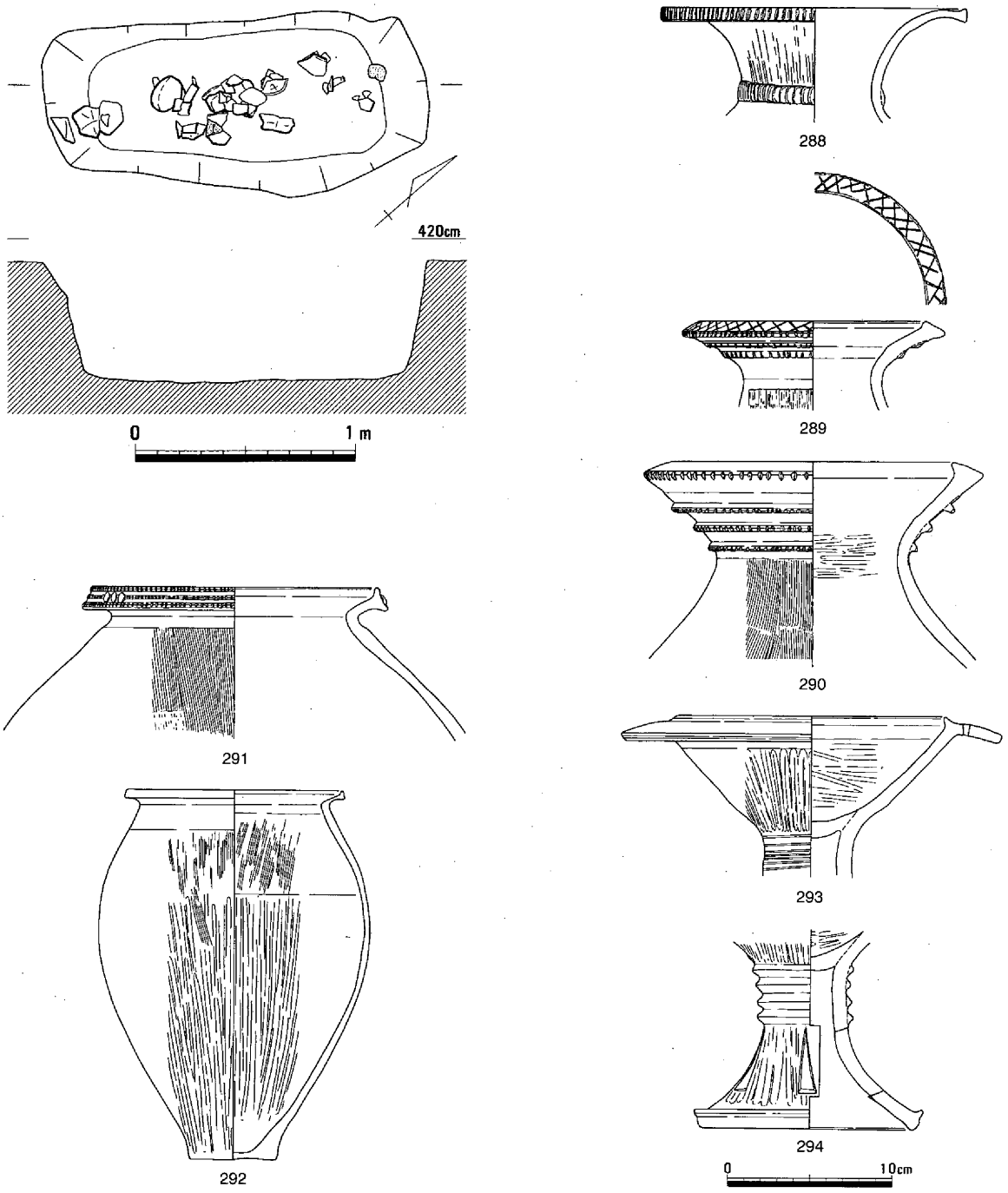

284


285


286



第91図　土壙32（1/30）・遺物



第92図　土壙33（1/30）・遺物

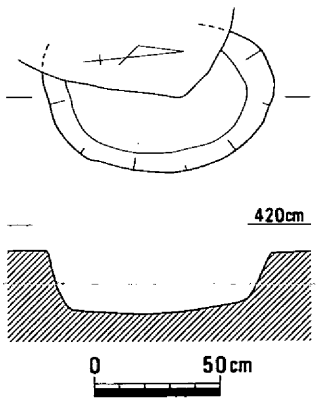
水平口縁の293と脚接合部に４条の突帯と３角形の透かし孔を４ヶ所に配した294がある。時期は、弥・中・Ⅱである。　（弘田）

土壙34（第93図）

土壙33の東側に接して位置し、土壙33に切られる土壙である。平面形が楕円形を、断面形は逆台形を呈す。

規模は、長さが92cm、幅は57cm以上で、深さが25cmを測る。

遺物は出土していないが、周辺の遺構や埋土からみて時期は弥生時代中期である。　（弘田）

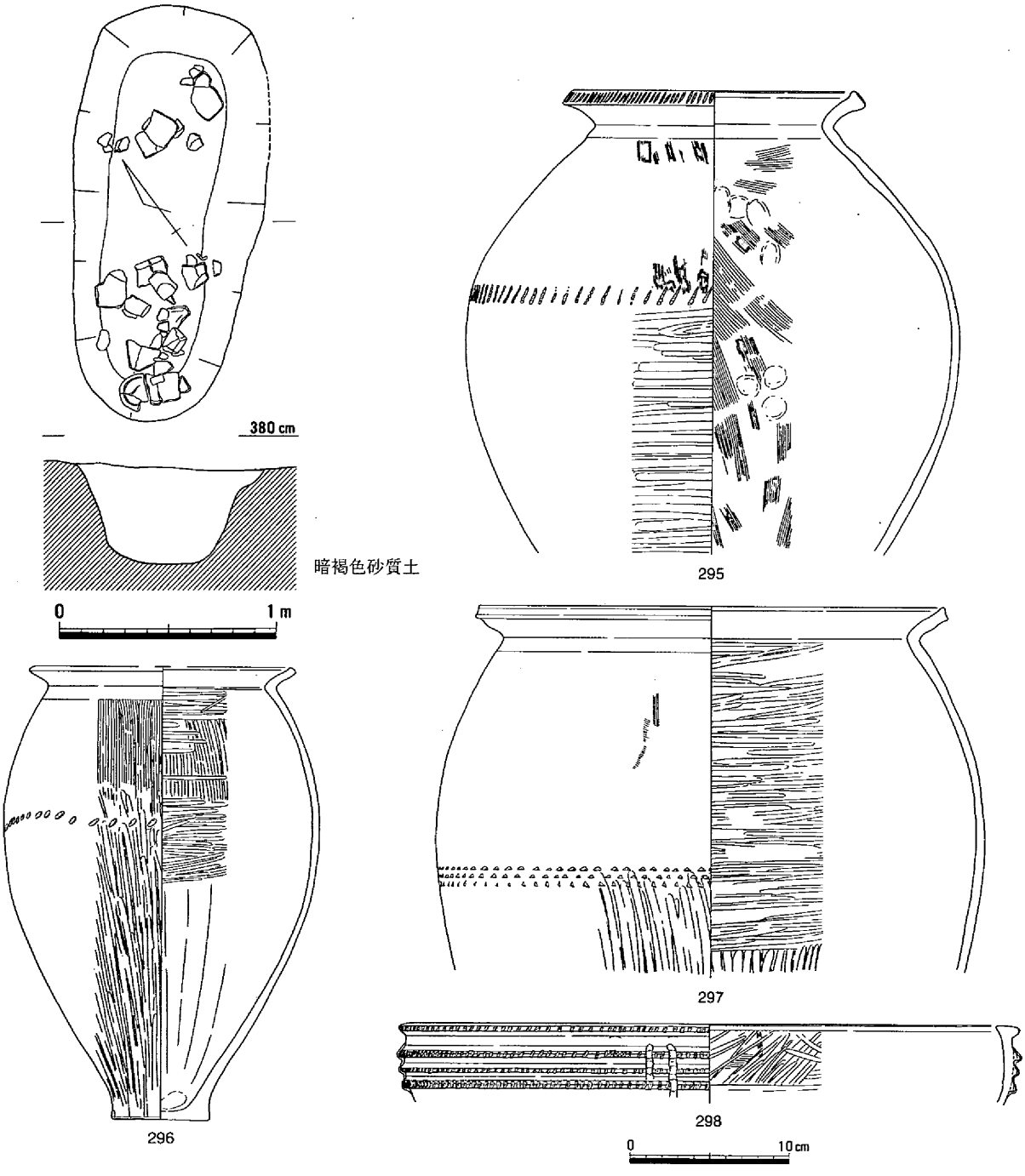


第93図　土壙34（1/30）

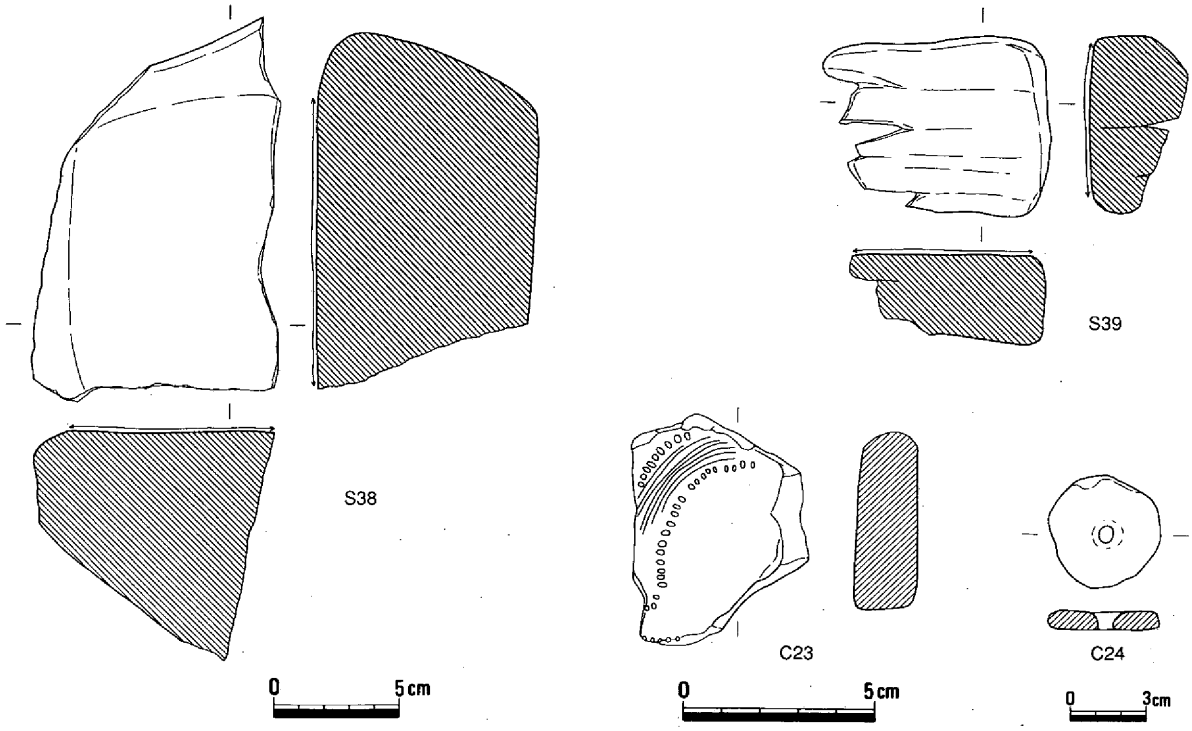
土壙35（第94・95図、写真54）

第２微高地でも調査区の西端中央やや北に位置する。平面形が楕円形を呈し、規模は長さが195cm、幅は90cmである。断面形は逆台形状を呈し、深さは47cmを測る。埋土中からは土器類のほかにシジミやハイガイなどの貝類がみられたが、ほとんどが粘土化しており痕跡程度であった。

壺295はくの字に開く口縁部をもつ。拡張させた口縁端部の外側には刺突文をめぐらせる。また体部外面では最大径あたりに刺突文を施し、その上下にはヘラミガキとハケメを施す。内面ではハケメや指頭押圧痕がみられる。甕はくの字状の口縁部をもち、端部が面をなす。小形の296では内面下半部にヘラケズリを施し、大形の297は拡張した口縁端部の外面に凹線をめぐらす。298は鉢状の体部をもつ高杯で、刻目突帯や棒状浮文で飾る。この土壙の時期は、弥・中・Ⅱである。　（弘田）



第94図　土壙35（1/30）・遺物（１）



第95図　土壙35　遺物（２）

土壙36（第96図）

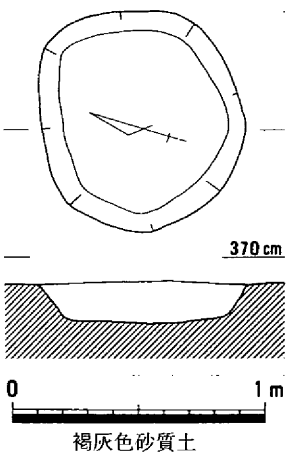
土壙35から南東方向へ２ｍ離れた所に位置する土壙で、平面形が円形、断面形は逆台形を呈する。規模は、長さが90cm、幅は86cmで、深さが17cmを測る。

この土壙の時期は、弥生時代中期と思われる。　（弘田）

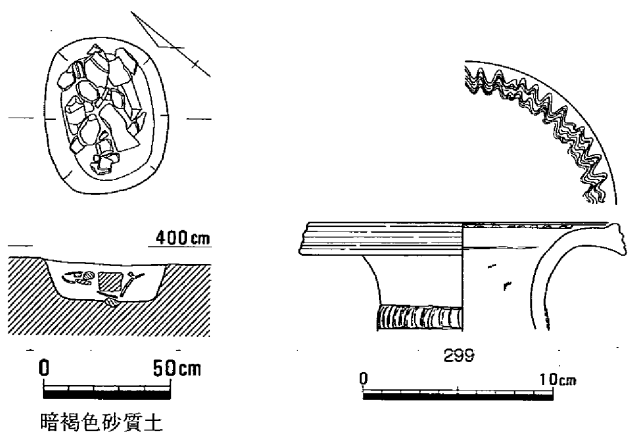
土壙37（第97図）

第２微高地の北西隅に位置する。平面形が楕円形、断面形は逆台形を呈し、規模は長さが61cm、幅は49cm、深さが17cmを測る。土壙内いっぱいに円・角礫と土器片がみられた。

時期は、弥・中・Ⅱである。　（弘田）



第96図　土壙36（1/30）



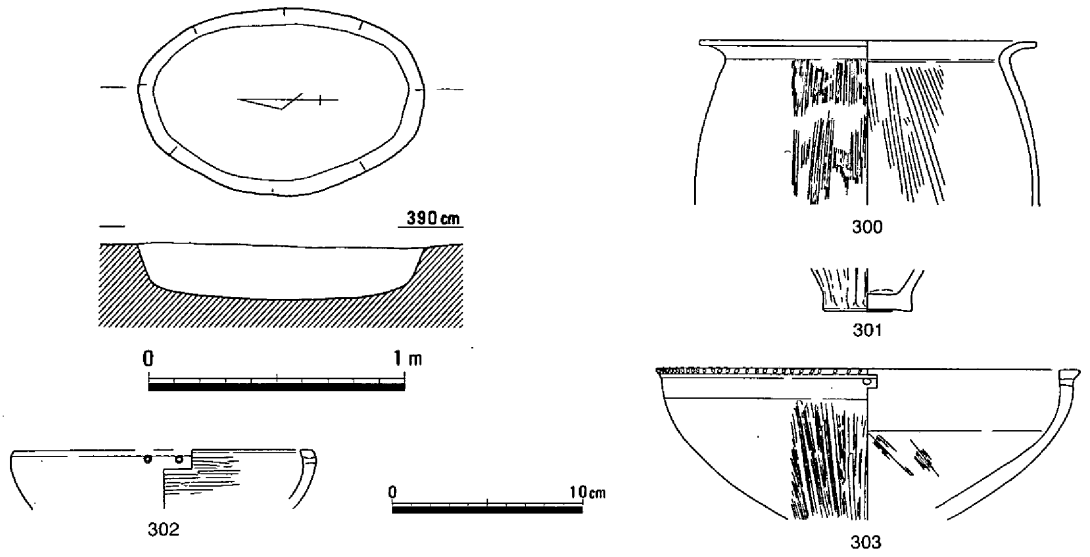
第97図　土壙37（1/30）・遺物

土壙38（第98図）

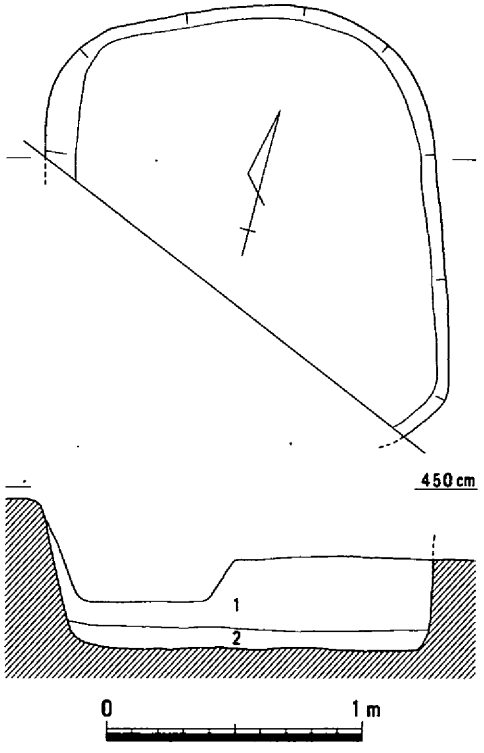
竪穴住居２から西へ２ｍ離れたところに位置する。平面形が楕円形を、断面形は浅い椀状を呈し、規模は長さが112cm、幅は74cm、深さが22cmを測る。

出土遺物のうち、甕300はくの字状の口縁部で、端部はわずかに上方に肥厚する。高杯には小形の302と大形で口縁端部が外に肥厚し、刻目を施す303がある。ともに鉢形の体部をもつ。

時期は、弥・中・Ⅱである。　（弘田）



第98図　土壙38（1/30）・遺物

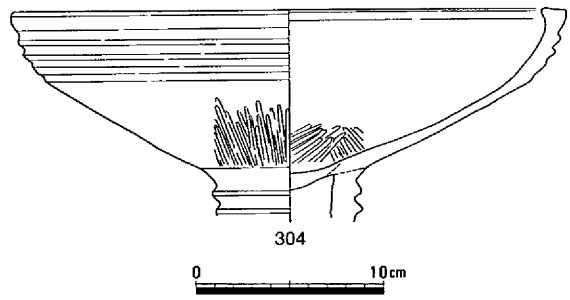


土壙39（第99図）

竪穴住居２から南西へ３ｍ離れたところに位置する。平面形が隅丸方形を呈する土壙で、一部は調査区外にのびる。壁面はほぼ垂直に下がり、底面は平坦である。規模は、長さが170cm以上、幅は150cm、深さが60cmを測る。

高杯304は口縁部外面に４条の凹線をめぐらせ、脚部には断面三角形の突帯を貼り付ける。

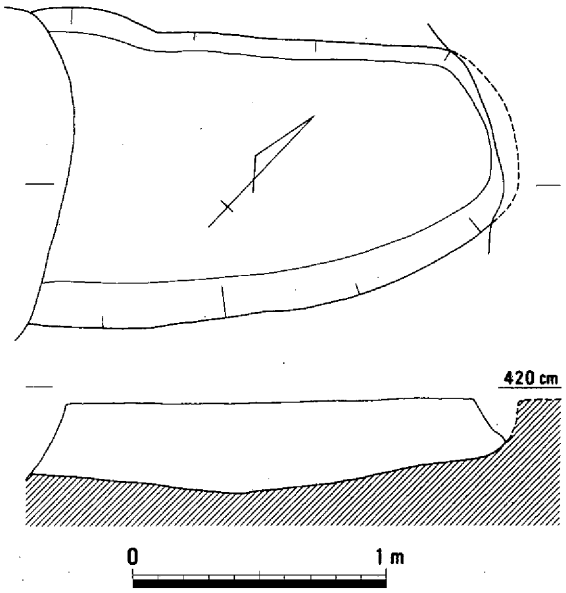
この土壙の時期は、弥・中・Ⅱである。　（弘田）



第99図　土壙39（1/30）・遺物

土壙40（第100図）

土壙39の北に接して位置する。土壙39に切られており、平面形が歪な楕円形を呈す。規模は、長さが188cm以上、幅は126cmで、深さが38cmを測る。



第100図　土壙40（1/30）

図示できる遺物はないが、遺構の切り合いからみて時期は、弥生時代中期である。（弘田）

土壙41（第101図）

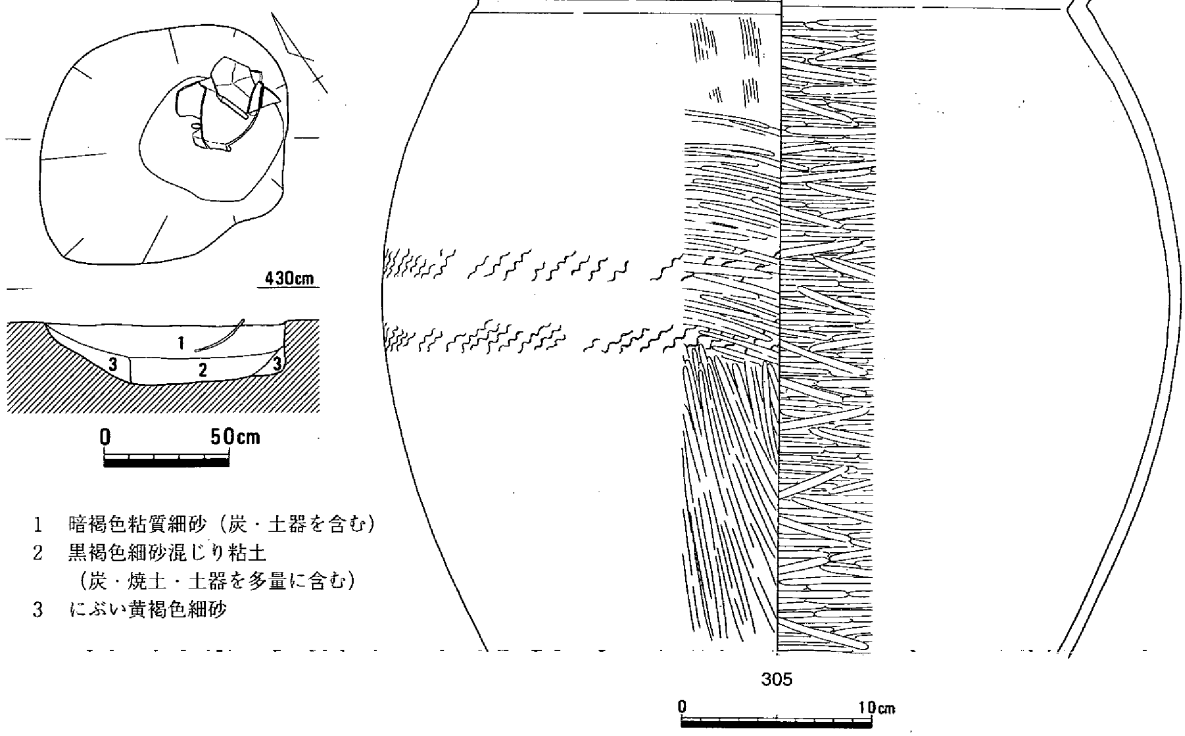
竪穴住居２から南へ３ｍの所に位置する。平面形が不整楕円形を呈し、規模は長さが115cm、幅は94cm、深さが25cmを測る。

くの字状の口縁をもつ甕305は、端部は上下に拡張し内傾する面をなす。胴部中央に２列の貝殻腹縁文をめぐらせその後にヘラミガキを施す。土層断面では、この土器片を含む１・２層とそれを包むように３層が堆積している。

この土壙は、土器棺墓の可能性があり、時期は、弥・中・Ⅱである。（弘田）

土壙42（第102図）

竪穴住居３から南西へ４ｍ離れたところに位置し、近世の水路と土壙43に切られた土壙であ



第101図　土壙41（1/30）・遺物

る。平面形が楕円形を呈し、規模は長さ、幅とも不明であるが、深さは37cmを測る。

時期は、弥生時代中期である。　(弘田)

土壙43（第103図）

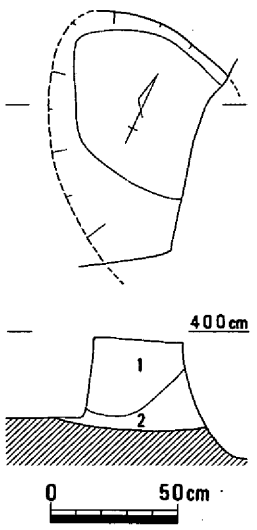
土壙42の東に接して位置する。平面形が楕円形を呈し、断面形は箱形を呈する。規模は、長さが117cm以上、幅は86cmで、深さが47cmを測る。土層断面から本来は2基の土壙が重なっていたようである。壺306・307は1層から大量の炭とともに出土した。306は頸部に指頭押圧突帯が、307では口縁部直下に断面3角形の突帯を2条貼付ける。ともに外反する口縁部をもち、口縁端部を拡張させてその外側には凹線文を施す。時期は、弥・中・Ⅱと思われる。　(弘田)

土壙44（第104図）

竪穴住居2から北へ7mの所に位置する。平面形が円形を呈し、断面形は椀状を呈する土壙で、規模は長さが87cm、幅は80cmで、深さが48cmを測る。

遺物は土壙の底面近くからまとまって出土した。底部片308は外面にヘラミガキ、内面には指ナデのち一部にヘラミガキを施す。くの字状口縁をもつ甕309は、口縁端部を上方につまむようにナデて外側に面をつくる。高杯310は杯底部から外上方に立ち上がり、口縁部が水平にのびる。口縁部には、2孔1対の円孔が上下方向にあく。

この土壙の時期は、弥・中・Ⅱである。　(弘田)



1　暗灰褐色砂質土
2　淡褐色砂質土

第102図　土壙42（1/30）

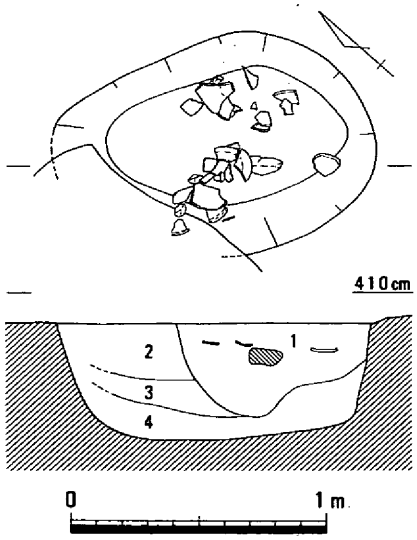
土壙45（第105図）

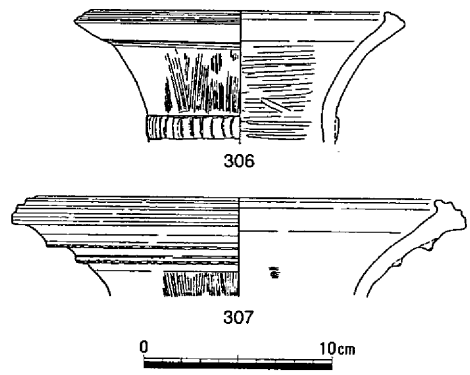
土壙44から東へ3m離れた所に位置する。平面形が円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は、長さが122cm、幅は112cmで、深さが33cmを測る。

時期は、弥生時代中期と思われる。　(弘田)

土壙46（第106図）

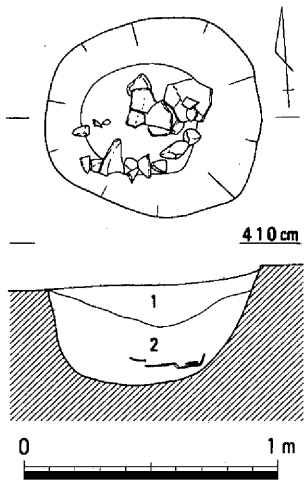
土壙45から北東へ2mの所に位置する。平面形が隅丸方形を呈し、断面





1　暗褐色粘質微砂（炭、土器を多量に含む）
2　にぶい黄褐色粘質微砂（炭、土器を若干含む）
3　褐色粘質微砂
4　褐色粘質微砂（基盤層土をブロック状に含む）

第103図　土壙43（1/30）・遺物



1　暗灰褐色砂質土
2　淡褐色砂質土

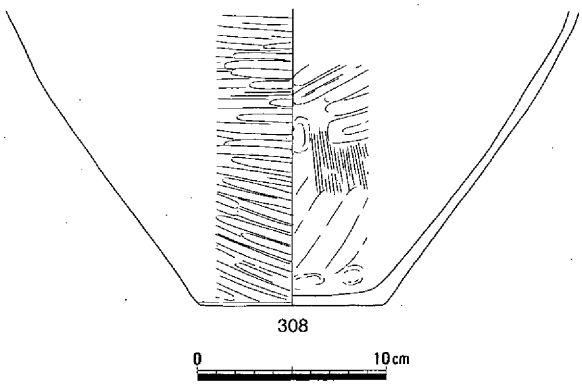
は壁面が垂直に下がり平坦な底面に至る。規模は長さが136cm、幅は115cmで、深さが40cmを測る。

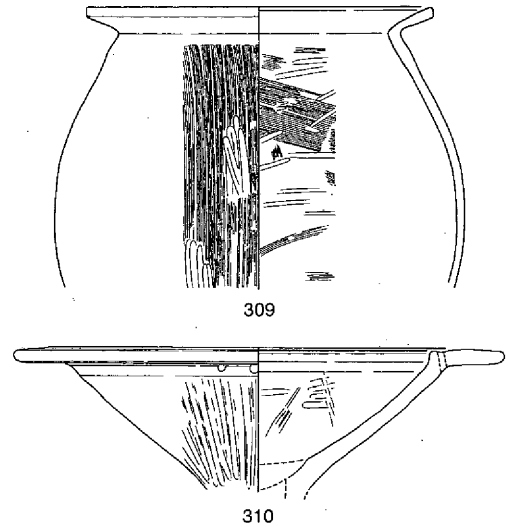
時期は、弥生時代中期である。（弘田）

土壙47（第107図、写真55）

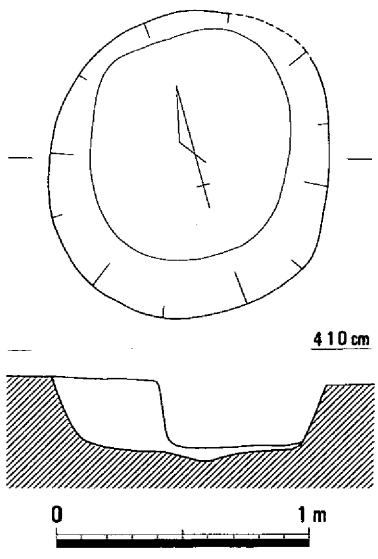
土壙46の東に接して位置する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長さが113cm、幅は100cmである。断面形は２段の椀状を呈し、深さが50cmを測る。ほぼ完形となる大形の甕１個体分が出土した。短く開く口縁部で端部は拡張し、内傾する面をなす。面では胴部中央に貝殻腹縁文を施し、内面では底部にヘラケズリがみられるほかはヘラミガキを施す。

土器棺墓の可能性があり、時期は、弥・中・Ⅱである。（弘田）



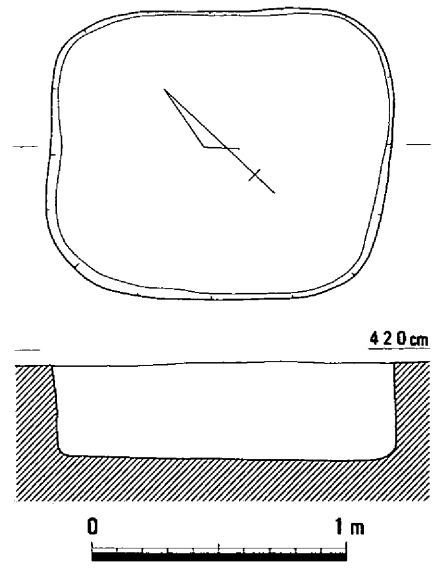


第104図　土壙44（1/30）・遺物



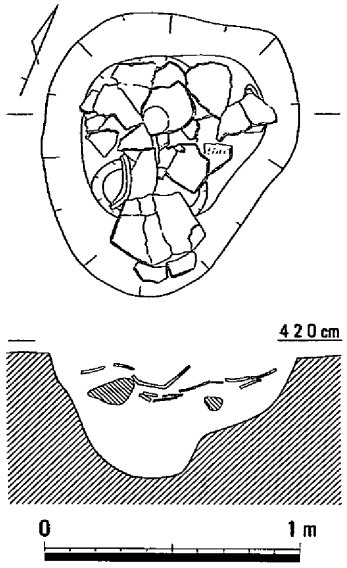
淡褐色砂質土

第105図　土壙45（1/30）



淡褐灰色砂質土

第106図　土壙46（1/30）



土壙48（第108図）

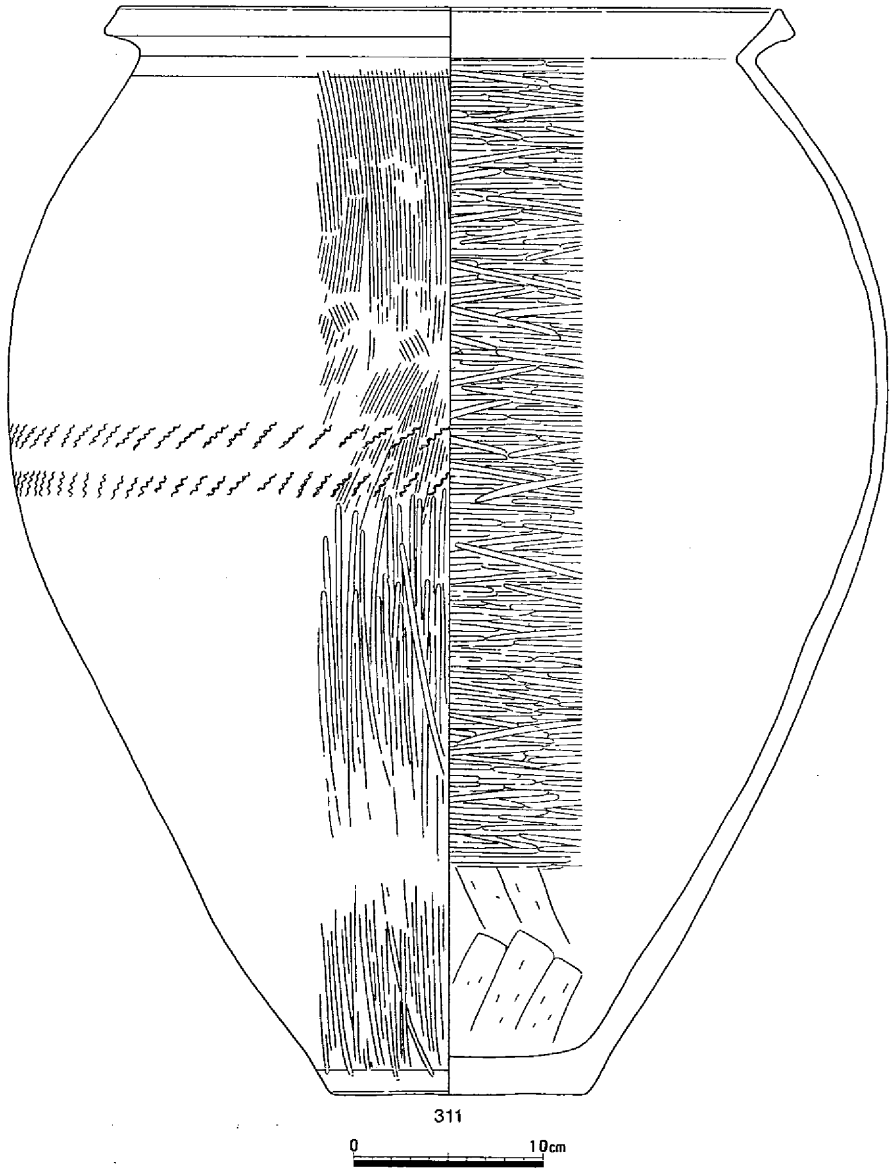
土壙46の北１ｍの所に位置する。平面形が隅丸方形を呈し、規模は長さが120cm、幅は104cmを測る。断面形は椀状を呈し、深さは29cmを測る。

出土した壺312は、口縁部に２条の刻目突帯をめぐらす。また肥厚させた口縁端部は内傾する面をなし、格子文と外端部には刻み目文を施す。

この土壙の時期は、弥・中・Ⅱである。　（弘田）

土壙49（第109図）

竪穴住居２から東に３ｍの所に位置する。一部が用水路によって削平されていたが、平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径が約



第107図　土壙47（1/30）・遺物

1.3ｍで深さが20cmを測る。図示できるものはないが出土した土器片からみて、この土壙の時期は、弥生時代中期と考えられる。（弘田）

土壙50（第110図）

土壙49から北東に３ｍ離れたところに位置する。平面形が楕円形を呈し、規模は長さが120cm、幅は79cmである。断面形は逆台形状を呈し、深さが42cmを測る。

時期は、弥生時代中期と思われる。（弘田）

土壙51（第111図）

土壙50から南へ１ｍの所に位置する。平面形が隅丸方形を呈し、規模は長さが205cm、幅は172cmを測る。壁面は緩やかに下り、底面に至る。底面は、平坦ではなく凹凸がみられる。深さが52cmである。

出土遺物には、無頸壺313と甕では口縁端部が拡張し、内傾する面にヘラ刺突文を施す314と口縁端部がわずかに上方に肥厚し、外側に小さな面をもつ315がある。

以上の遺物からみてこの土壙の時期は、弥・中・Ⅱである。（弘田）

土壙52・53（第112図）

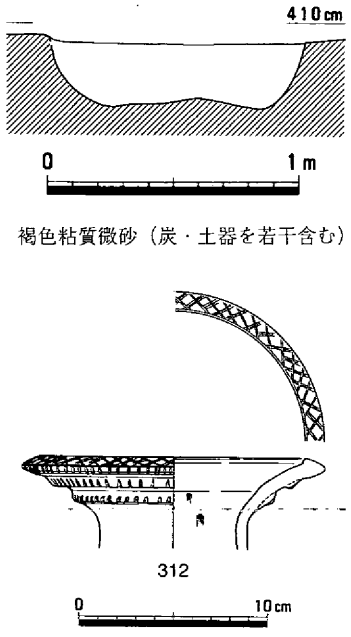
土壙51から南西方向に２ｍ離れた所に位置する。平面形が楕円形を呈する２基の土壙が並列しており、その間にはさらに弥生後期の土壙238が掘り込まれていた。規模は土壙52が長さ178cm、幅は107cm、深さが33cmを測り、土壙53では、長さが208cm、幅は106cmで深さが25cmを測る。

土器片が出土しているが図示できるものはない。土器以外ではサヌカイト製石鏃Ｓ40と流紋岩製の砥石Ｓ41がみられる。

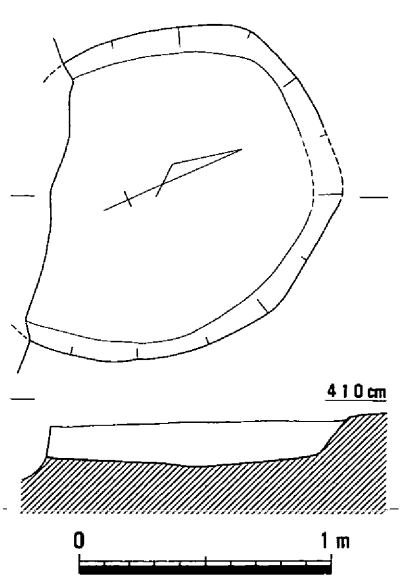
時期は、弥生時代中期と思われる。（弘田）

土壙54（第113図、写真55）

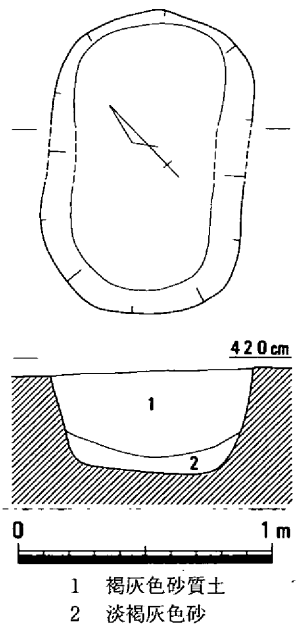
土壙52・53から東へ２ｍの所に位置する。平面形が隅丸長方形を呈し、規模は長さが146cm、幅は86cmを測る。緩やかな傾斜で底面に至り、そこからさらに長辺50cm、短辺40cmの掘りこみがみ



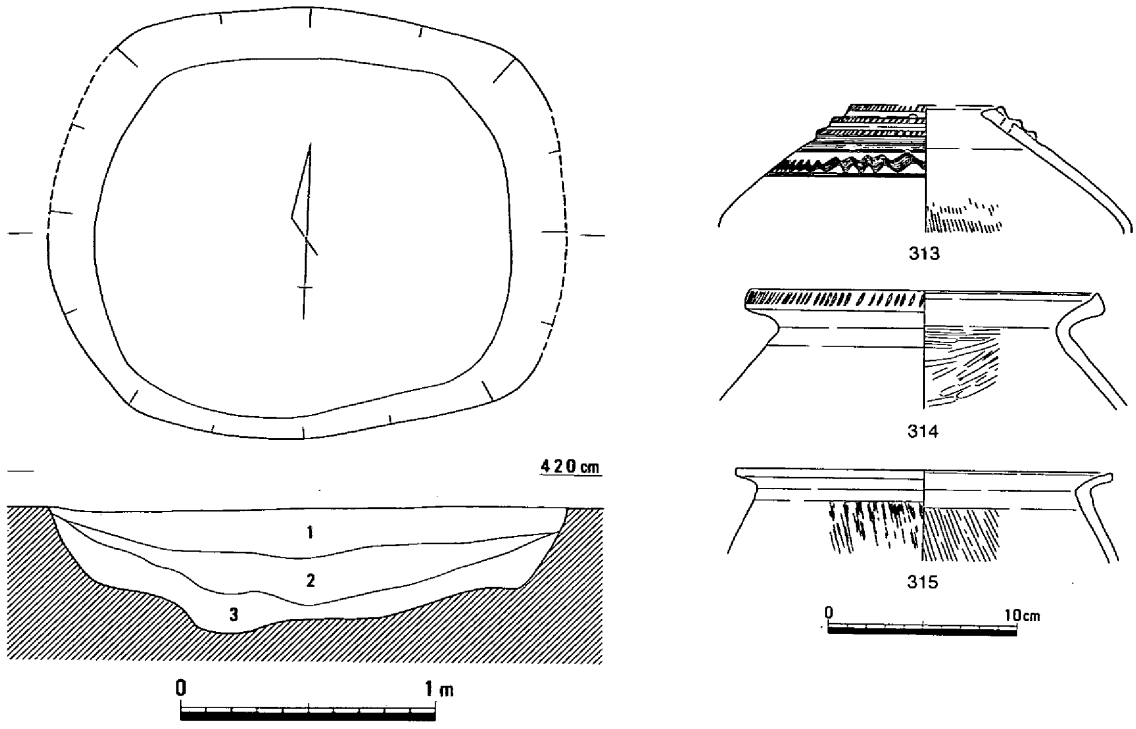
第108図　土壙48（1/30）・遺物



第109図　土壙49（1/30）

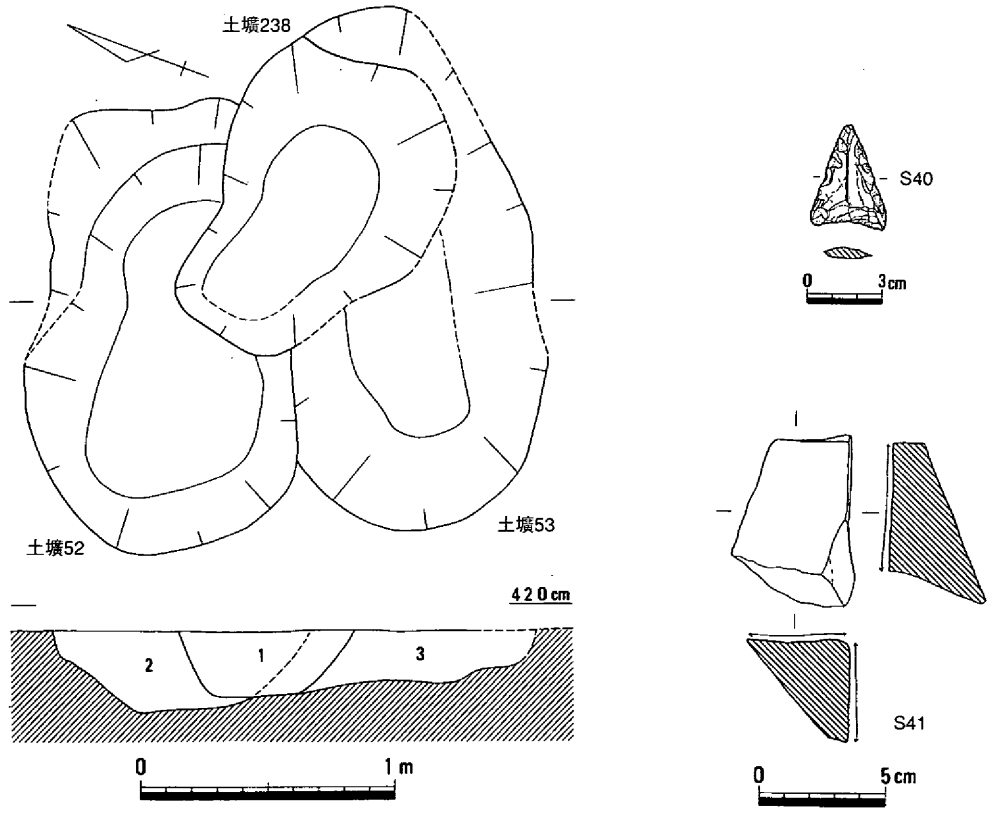


第110図　土壙50（1/30）



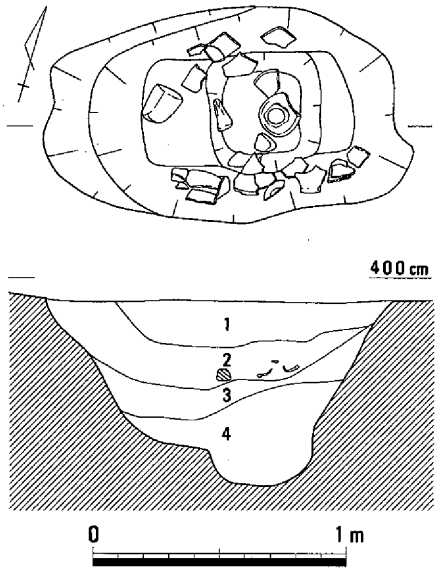
1　淡褐色砂質土　　2　暗褐灰色砂質土（炭を含む）　3　褐灰色砂質土

第111図　土壙51（1/30）・遺物

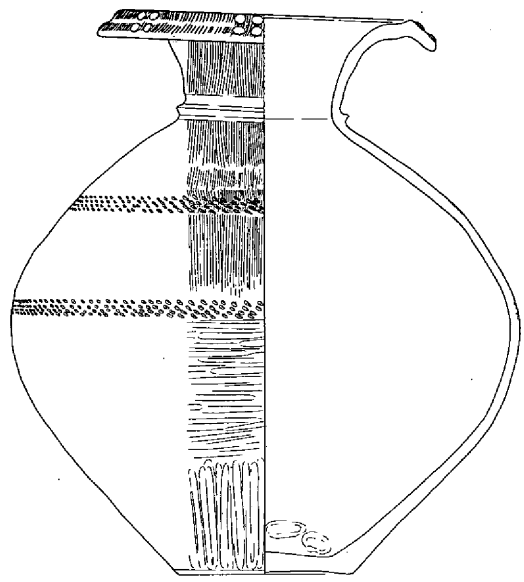


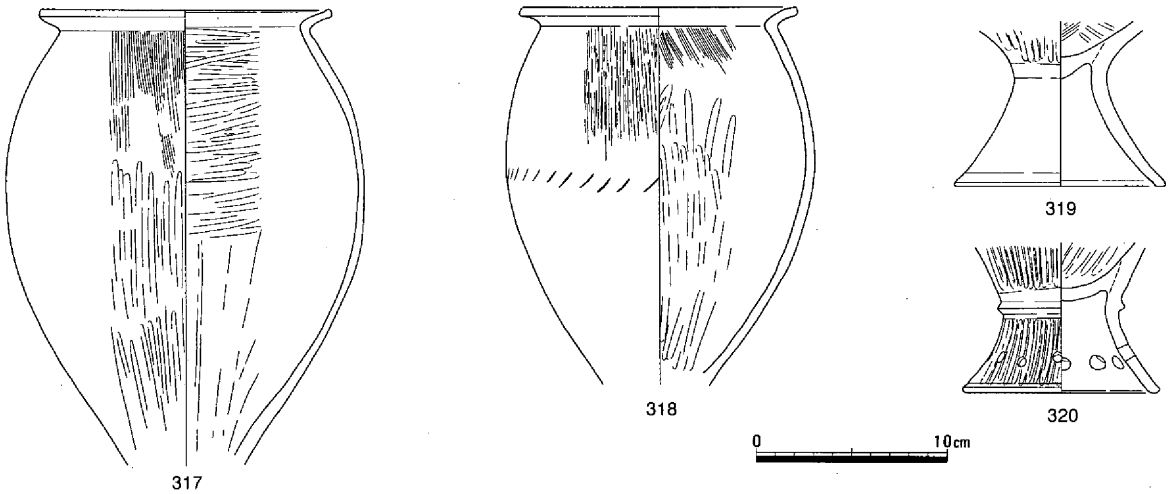
1　不明
2　褐色粘質微砂（炭・焼土を多量に含む）
3　褐色粘質微砂（炭・焼土を若干含む）

第112図　土壙52・53（1/30）・遺物



1　暗褐色粘質微砂（炭・土器を多量に含む）
2　暗褐色粘質微砂（炭を若干含む）
3　褐色粘質微砂（土器を少量含む）
4　不明





第113図　土壙54（1/30）・遺物

られた。深さは64cmを測る。

遺物は５個体分が比較的まとまって出土した。壺316は完形に近い。甕は短くくの字に開く口縁部をもつ。317は口縁端部を上に肥厚させ、内面の下半にはヘラケズリを施す。318は外反する口縁部で、胴部外面に刺突文がめぐる。高杯には長くハの字に開く脚部の319と脚部に円孔をめぐらし、接合部に突帯を貼り付ける320がある。時期は、弥・中・Ⅱである。　（弘田）

土壙55（第114図）

土壙34の北東２ｍで検出した土壙で、N23区の北東に位置する。調査区の制約から全形を検出するに至らなかったが、現状から長さ187cm、幅120cmほどの楕円形に復元される。底面には凹凸があり、検出面からの深さは16cmを測る。出土した土器の特徴から弥・中・Ⅱに比定される。　（亀山）

土壙56（第115図）

N23区の北東で検出した土壙で、土壙55の0.5m東に位置する。長さ99cm、幅69cmの楕円形を呈しており、検出面から40cmの深さにある底面には凹凸がある。４層に分かれる埋土のうち、レンズ状に堆

積する１層には炭や焼土が含まれていた。出土遺物は少なく、図示し得たのは底部321・322のみで概ね弥・中・Ⅲに位置付けられる。（亀山）

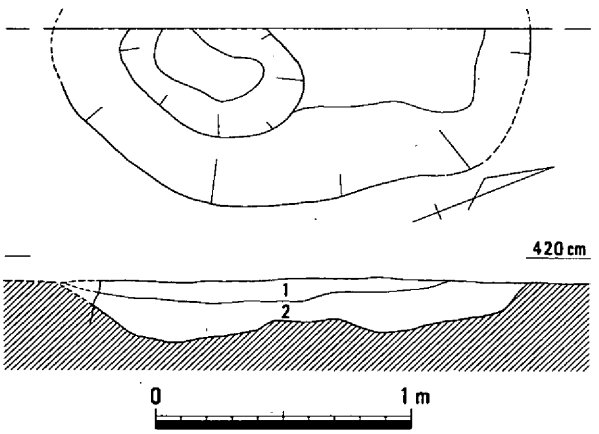
土壙57（第116図）

土壙56の北東５ｍで検出した土壙で、Ｎ23区の北東に位置する。東側の一部を検出できなかったものの、長さ211cm、幅95cmほどの長楕円形をなすものと推定される。底面は中央が浅くくぼみ、検出面からの深さは31cmを測る。

埋土からは比較的多くの土器が出土している。323～325は広口壺で、頸部から屈曲して水平に開く口縁部を櫛状工具による斜格子文や波状文などで飾る。算盤玉形をした体部は外面をヘラミガキ、内面をハケメで調整し、肩部に櫛状工具による刺突文を二段にわたってめぐらす。甕326～328は、内面をハケメで調整するものがあり、弥・中・Ⅱでも新相を呈している。（亀山）

土壙58（第117図）

Ｎ23区の北東に位置する土壙で、土壙57の南３ｍで検出した。平面形は長楕円形をなし、その規模は長さ211cm、幅95cmを測る。検出面から深さ31cmにある底面は長さ134cmの範囲で一段深くなっている。黒褐色をなす埋土には炭化物を多く含んでおり、329～332のような土器が出土している。329は肥厚して面をなす口縁部をもつ甕で、内外面をハケメで調整する。331は杯部が深い鉢形をなす高杯である。これらの土器は弥・中・Ⅱの新相に属する。（亀山）

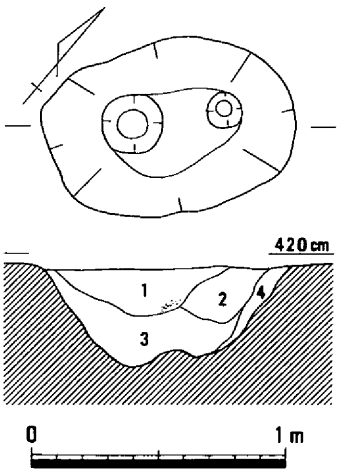


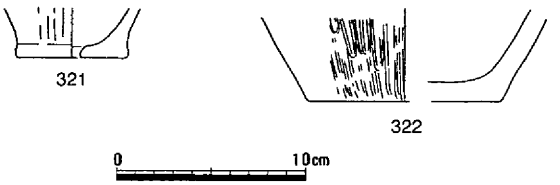
1　暗茶褐色粘質微砂
2　暗黒褐色粘質微砂

第114図　土壙55（1/30）

土壙59（第118図）

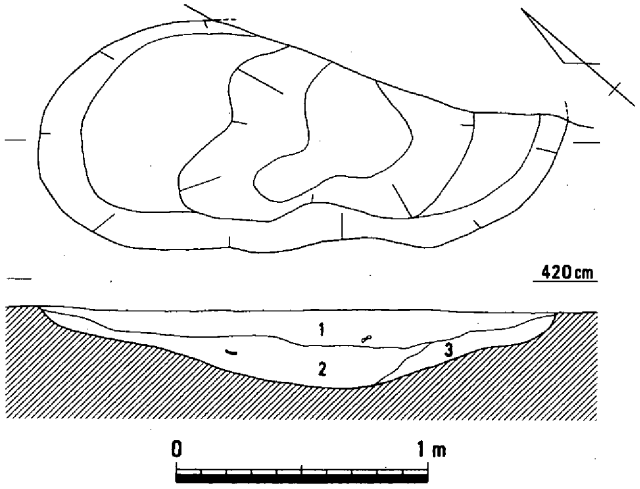
土壙58の南１ｍで検出した土壙で、Ｎ23区の北東に位置する。長さ132cm、幅104cm、深さ53cmの不整楕円形を呈する。断面はＵ字形をなすが、西壁の傾斜が他よりも緩やかになっている。埋土の下層は炭化物を多く含むのに対し、黒褐色を呈する上層からは土器がまとまって出土している。333は甕の下半部で、外面をヘラミガキで調整する。高杯334は口縁部を欠いている



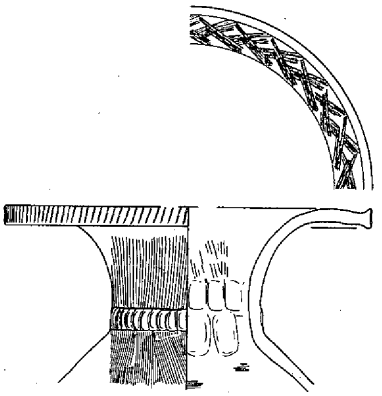


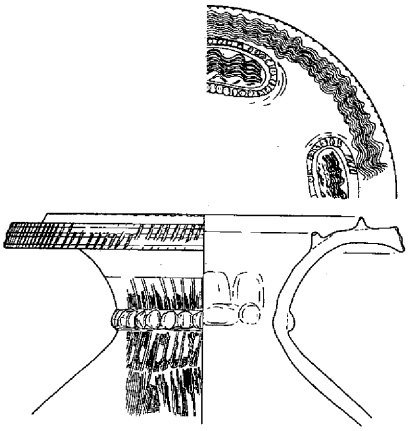
1　褐色細砂（焼土・炭を含む）
2　暗褐色細砂
3　黒褐色微砂
4　茶褐色細砂

第115図　土壙56（1/30）・遺物

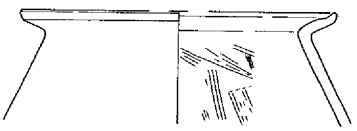


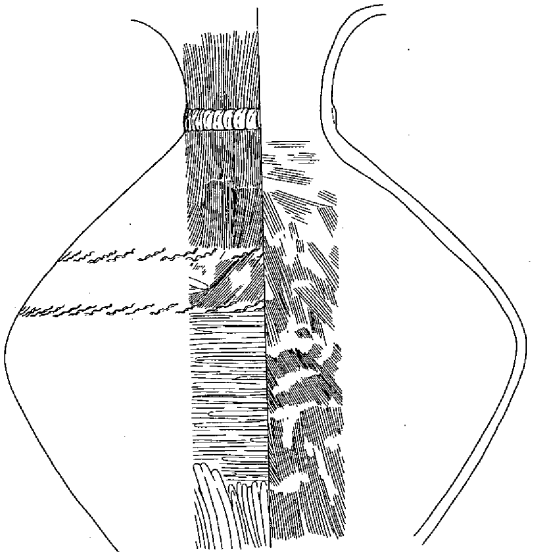
1　暗茶褐色粘質微砂（炭化物・土器を含む）
2　暗茶褐色微砂（黄色粘土ブロック・炭化物・土器を含む）
3　暗黄褐色粘質微砂

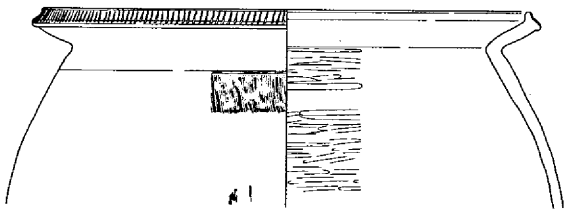

323

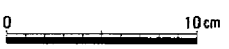

324

326


327


325


328

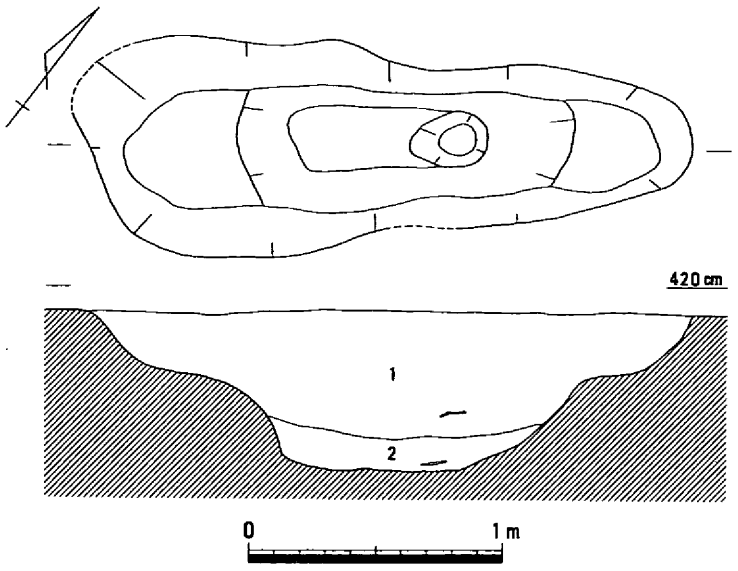


第116図　土壙57（1/30）・遺物

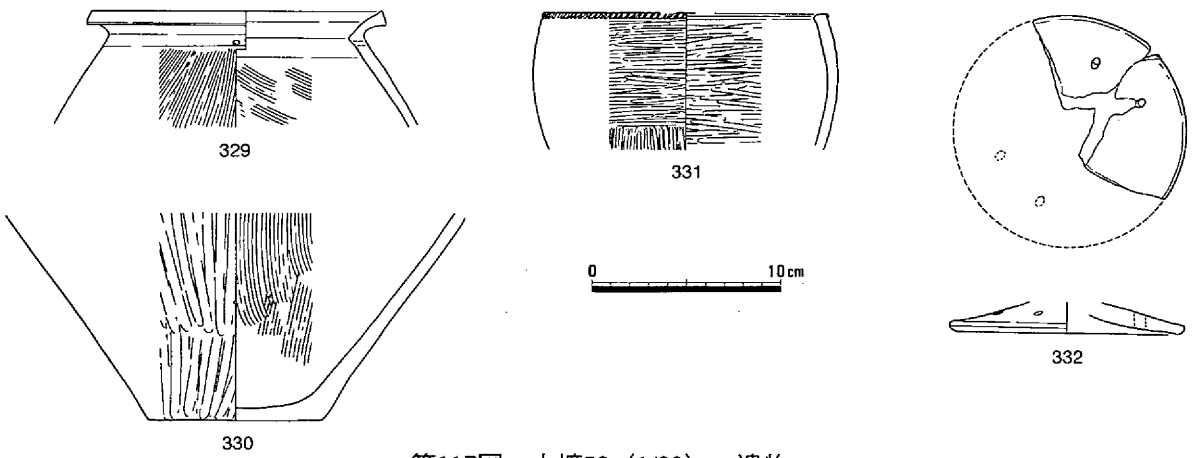
が、脚台部には三角形の透かしを飾る。これらは弥・中・Ⅲでも古相を呈している。　（亀山）

土壙60（第119図、写真56）

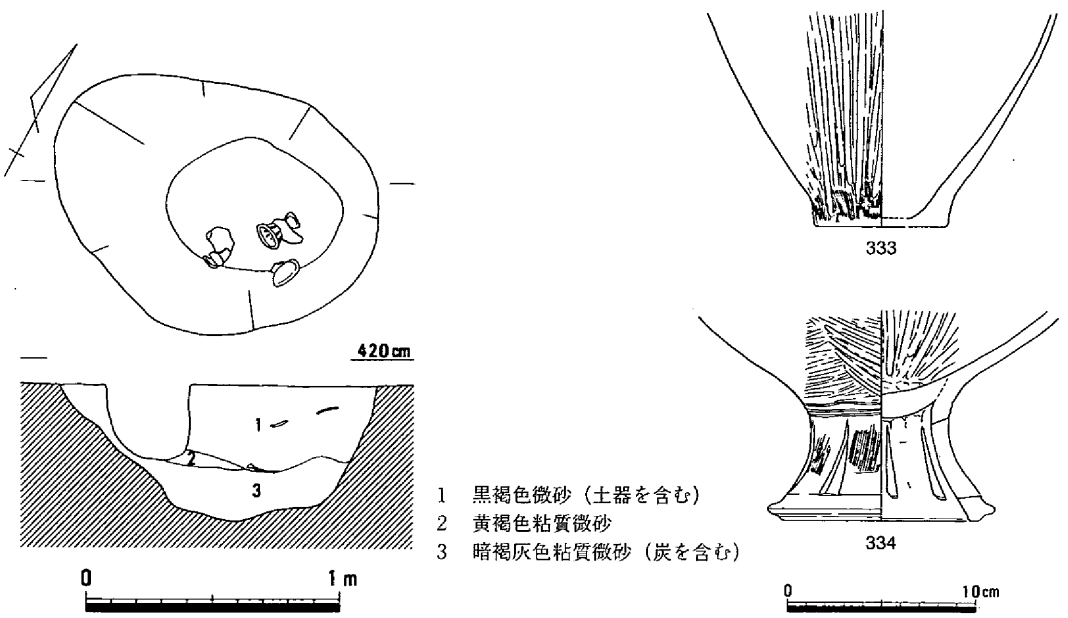
Ｎ23区の北東に位置する円形の土壙で、土壙58の南１ｍで検出した。検出面での規模は、長さ85cm、幅74cm、深さ45cmを測り、断面はＵ字形をなす。底面より15cmほど高い位置から、細頸壺335が出土



1　黒褐色粘質微砂（土器・炭化物を多く含む）
2　黒黄褐色粘質微砂（土器・炭化物・黄色粘質土ブロックを含む）



第117図　土壙58（1/30）・遺物



1　黒褐色微砂（土器を含む）
2　黄褐色粘質微砂
3　暗褐灰色粘質微砂（炭を含む）

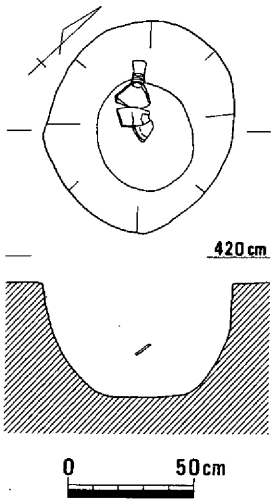
第118図　土壙59（1/30）・遺物

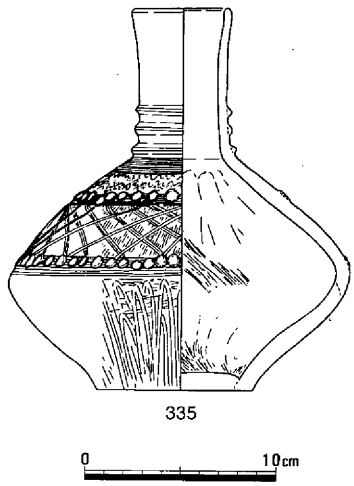
している。径5.0cmある口頸部の基部には３条の突帯をめぐらし、算盤形をなす体部には櫛状工具による波状文や斜格子文を描いたうえ円形浮文を貼り付ける。弥・中・Ⅱに比定される土器である。　　（亀山）

土壙61（第120図、写真56）

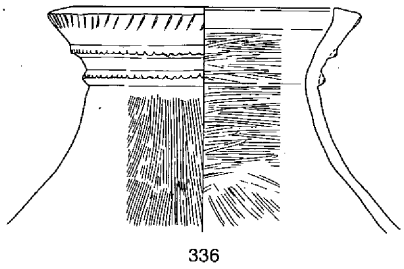
土壙59の東８ｍで検出した土壙で、N23区の北東に位置する。上面は長さ181cm、幅142cmの不整な楕円形を呈しており、深さは48cmを測る。底面にはわずかな段差があり、南西の壁面は急な、その他は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。

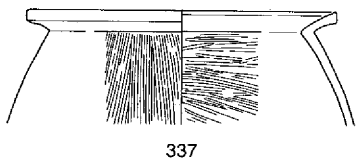
３層に分かれる埋土からは336～338のような土器が出土している。壺336は外反する口縁端部をわずかに肥厚させ、２条の刻み目突帯をめぐらせている。338は張りのある壺

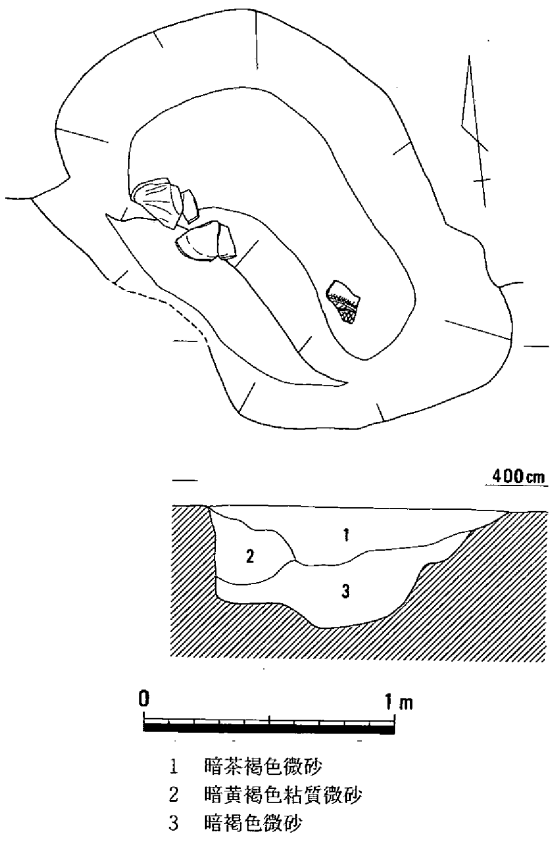


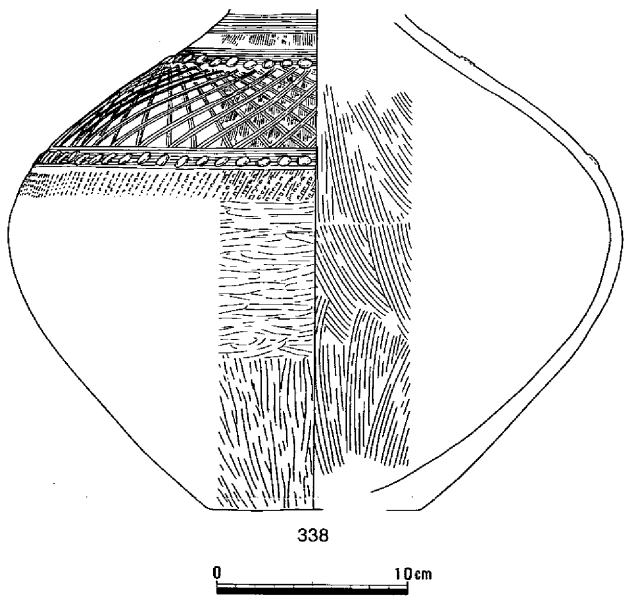


第119図　土壙60（1/30）・遺物









第120図　土壙61（1/30）・遺物

の体部で、上半に櫛状工具により斜格子文を描き、その上下に円形浮文を貼り付ける。甕337は、屈折して開く口縁の端部がわずかに肥厚し垂直な面をなして終わる。外面をハケメ、内面をヘラミガキで調整する。

これらは弥・中・Ⅱに位置づけられる。（亀山）

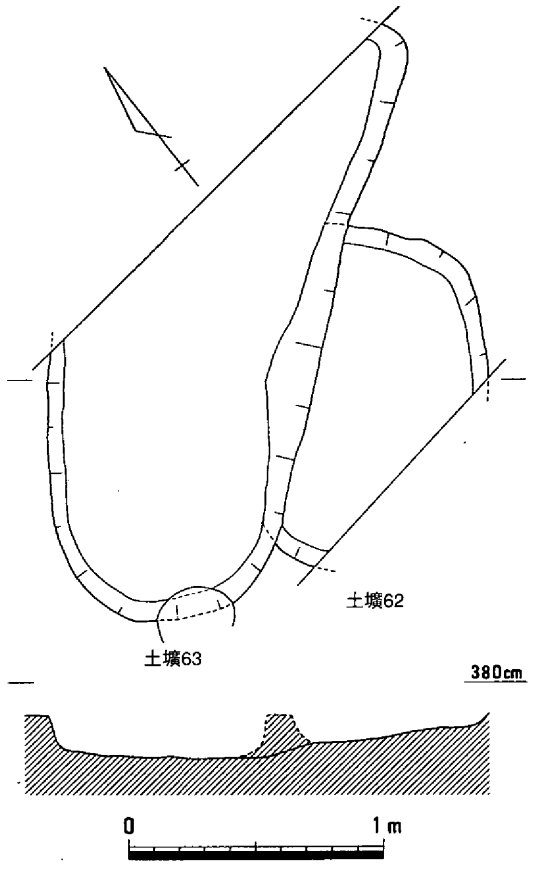
土壙62・63（第121図）

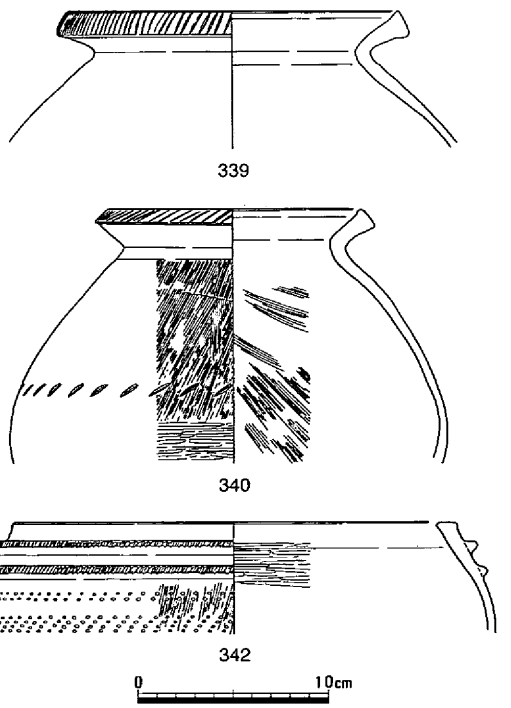
土壙61からは南に13m程離れており、南側の水路調査区内に位置する。本来は２基の土壙であるが切り合いは不明確であった。

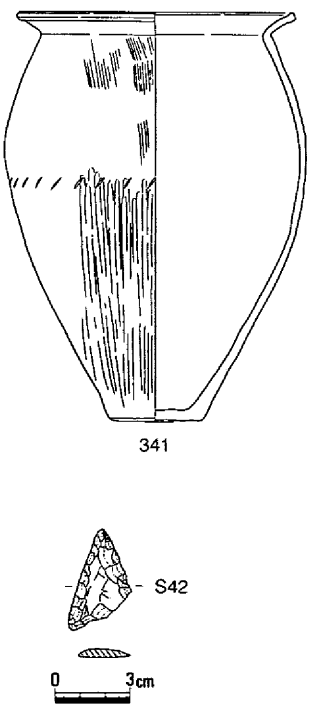
ともに一部が調査区外に拡がるものの、土壙62は平面形が楕円形を呈し、規模は長さが104cm以上、幅は約70cm、深さが12cmを測る。一方の土壙63は平面形が隅丸方形を呈し、規模は長さが256cm以上、幅は137cm、深さが17cmを測る。

土器類は双方から出土している。壺339・340は口縁端部を肥厚させ、内傾する面には刺突文を施す。甕341はくの字状の口縁部で、端部を上方に肥厚させる。大形の無頸鉢342は２条の刻目突帯を貼り付け、その下には刺突文をめぐらせる。土器以外の遺物としてはサヌカイト製の石鏃S42もみられた。

この２基の土壙の時期はともに、弥・中・Ⅱである。（弘田）





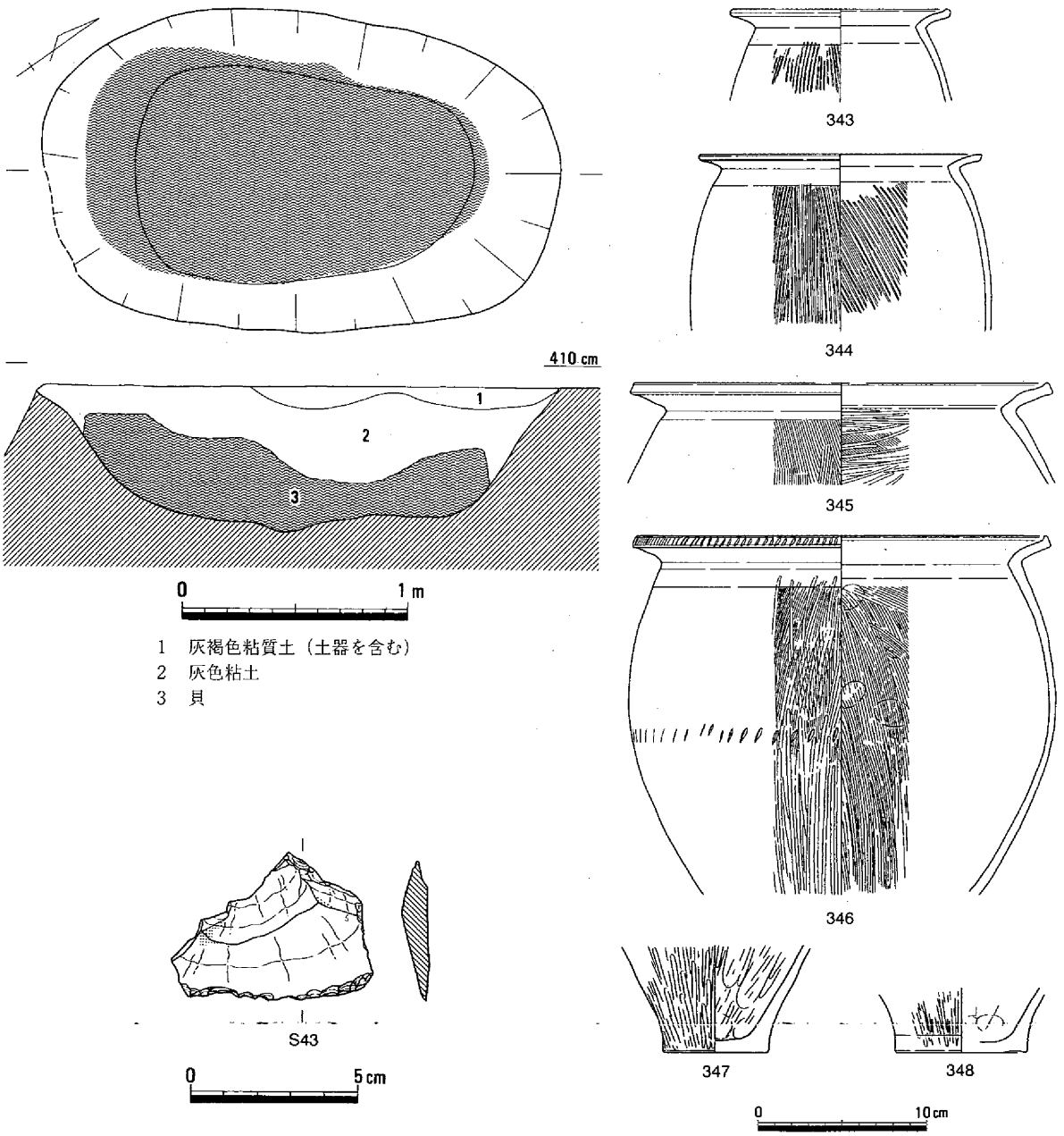


第121図　土壙62・63（1/30）・遺物

土壙64（第122図、写真４－３）

第２微高地のM24区とN24区の境に位置する。平面形は西南隅が新しい溝によって切られているが、長さ約2.3m、幅約1.45mの長楕円形で、深さは約65cm残存していた。断面形は皿形で、底面には凹凸が認められた。この土壙の特徴は、多量の貝が廃棄されていることである。貝は、断面図に示したように、下層には保存状態の良いものが、そして上層には腐った状態で出土した。最上層には、貝を含まず、土器片を含む灰褐色粘質土が、約10cm堆積していた。貝については一部を採取しており、洗浄の結果、魚骨や獣骨も含まれていることが判明したが、その種類や割合については、「Ⅳ自然科学による分析・鑑定」を参照されたい。

出土した土器343～348は甕の破片である。また石器Ｓ43はスクレイパーであろう。時期は、弥・中・Ⅱと考えられる。（平井）



第122図　土壙64（1/30）・遺物

土壙65（第123図）

第２微高地の土壙64の北東隣りに位置する。平面形は、約100×80cmの不整楕円形で、深さは17cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は二層に分離できた。遺物は、少量の土器片が出土している。図示したのは、甕349と高杯350で、時期は、弥・中・Ⅱと考えている。　（平井）

土壙66・67（第124図）

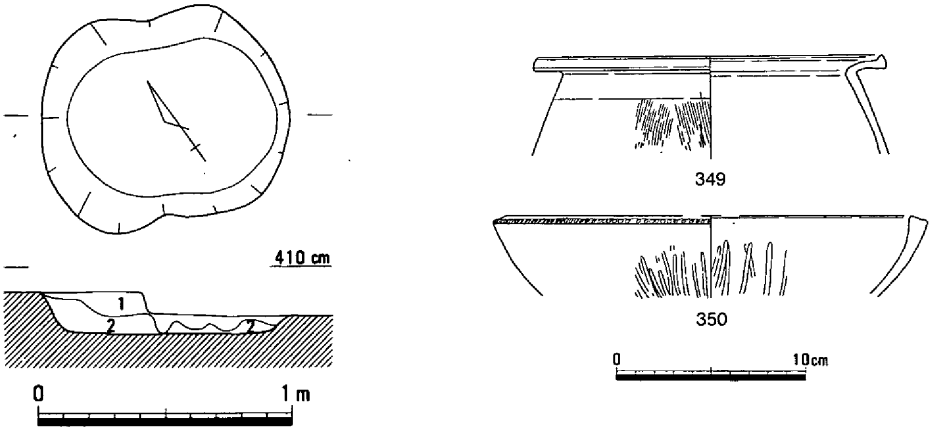
第２微高地のＮ24区の北西隅に位置する。いずれも南側が側溝に切られているため、全体の形状は明らかでない。土壙66は、土壙67を切っており、平面形が三角形状で、深さは10cm残存していた。土壙67の平面形は不詳で、深さは約10cm残存していた。

いずれも少量の土器小片が出土したのみで、時期は弥生時代中期としか捉えられない。　（平井）

土壙68（第125図）

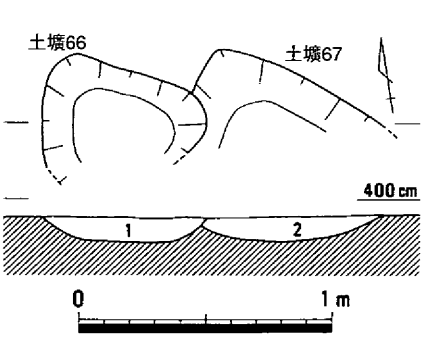
第２微高地のＮ24区の北西隅に位置する。平面形は約60×50cmの不整楕円形で、深さは6cm残存していたのみである。断面形は皿形で、埋土は、暗灰褐色砂質土が一層のみであった。

遺物が出土していないため、時期は弥生時代中期としか捉えられない。　（平井）



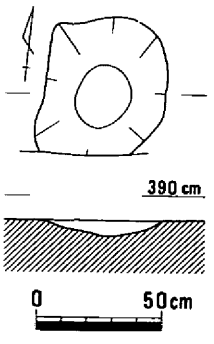
1　暗灰色砂質土（炭粒を含む）
2　淡褐灰色砂質土

第123図　土壙65（1/30）・遺物



1　暗灰褐色粘質土（炭・焼土粒を含む）
2　褐灰色砂質土

第124図　土壙66・67（1/30）



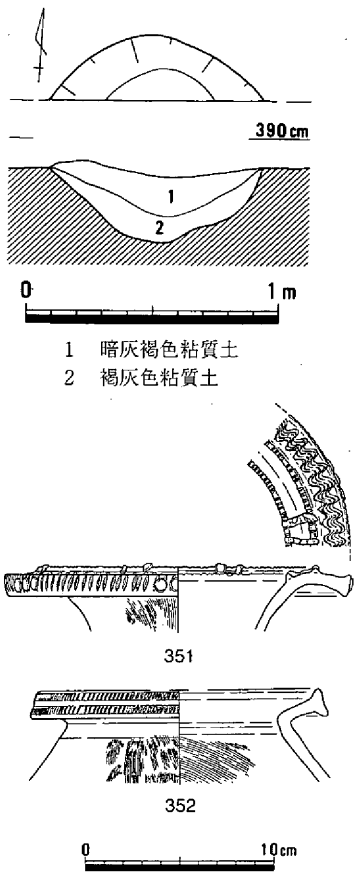
暗灰褐色砂質土

第125図　土壙68（1/30）

土壙69（第126図）

第２微高地の土壙68の東隣りにおいて検出した。南側が調査区外にのびているため、全体の形状は不明である。深さは、約30cm残存しており、埋土は二層に分離することができた。

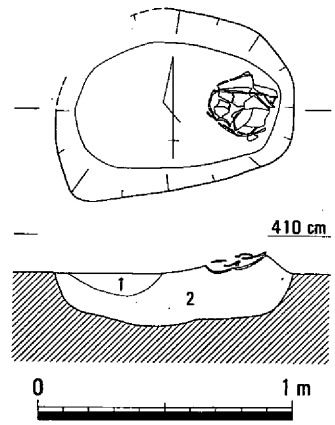
遺物は少量の土器片が出土している。351と352は壺で、352の口唇部には凹線が一条施されている。時期は、弥・中・Ⅱであろう。（平井）

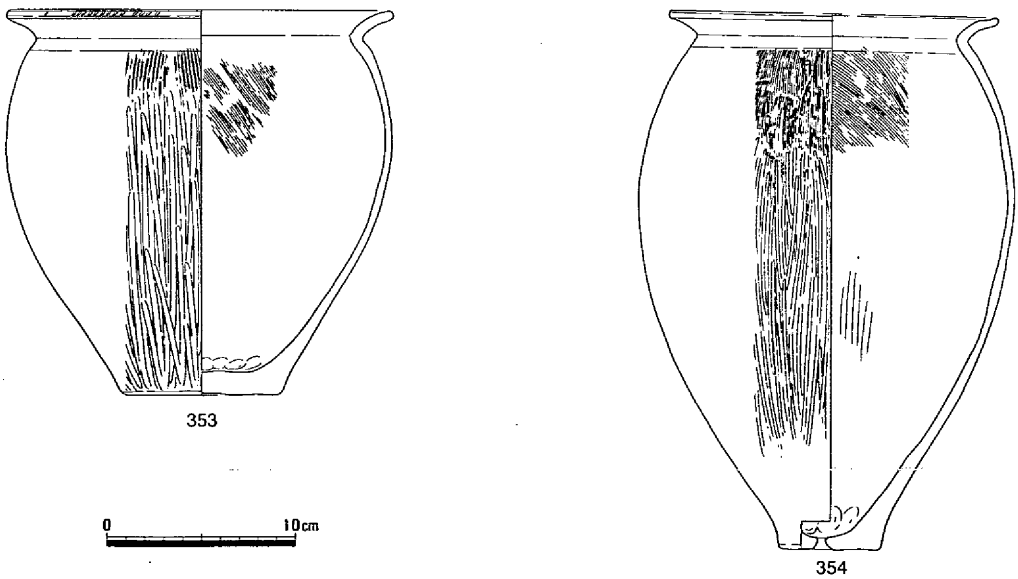


第126図　土壙69（1/30）・遺物

土壙70（第127図）

第２微高地のM24区南西隅において検出した。平面形は約100×70cmの不整楕円形で、深さは約20cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は二層に分離することができた。





第127図　土壙70（1/30）・遺物

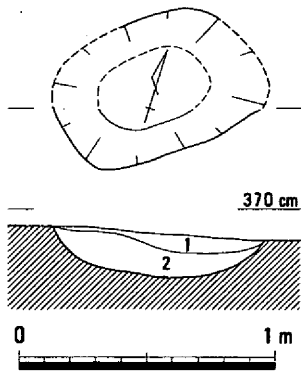
東半部の上面には、土器がつぶれた状態で出土した。

図示した土器は甕で、353の口唇部には部分的に刻目が施されている。時期は、弥・中・Ⅰ～Ⅱと考えている。（平井）

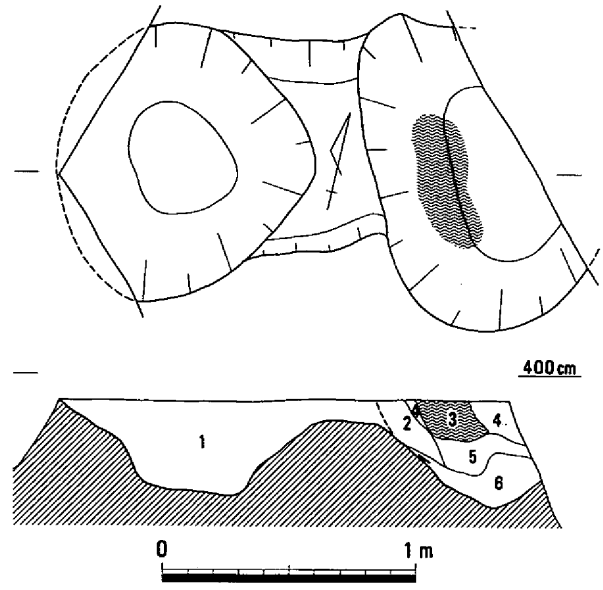
土壙71（第128図）

第２微高地の土壙70の東隣りにおいて検出した。平面形は約80×55cmの隅丸長方形で、深さは、約20cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は二層に分離することができた。

埋土は微砂や細砂である点が特徴的である。遺物がほとんど出土していないため、時期は明確ではないが、弥・中・Ⅱと考えている。（平井）

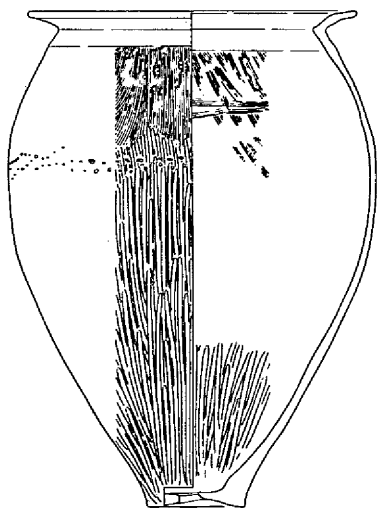


1　暗褐灰色細砂
2　灰黄色微砂

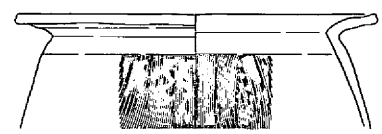


1　淡灰褐色砂質土（炭・焼土粒を少し含む）
2　淡黄灰色砂質土（炭粒を少し含む）
3　貝
4　灰色粘質土
5　暗褐色砂質土
6　褐黄色砂質土

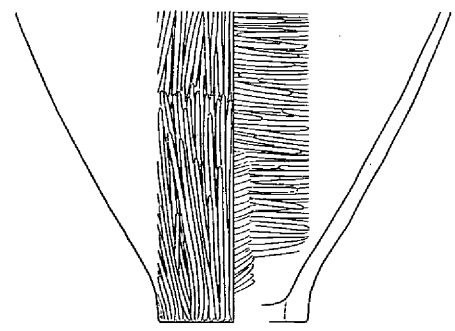
第128図　土壙71（1/30）



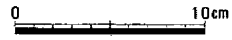
355



356



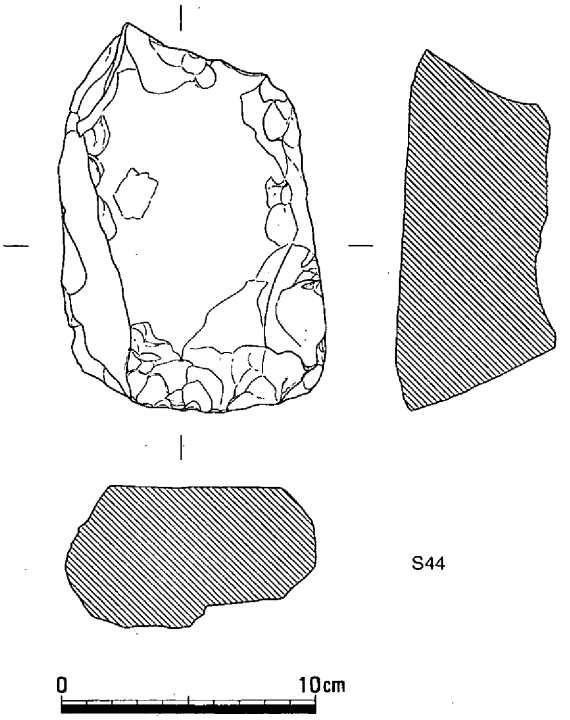
357



第129図　土壙72・73（1/30）・遺物（１）

土壙72・73（第129・130図）

第２微高地の土壙71の東隣りにおいて検出した。東端と西端が他の遺構によって切られているため、本来の形状は明確ではない。検出時には、長さ約２ｍ、幅約１ｍの楕円形状に確認できたが、最終的には、東西にある二つの土壙が連なったような形状を呈していた。断面観察でも明確にはならなかったが、東側の土壙73が時期的に新しいのではないかと推測している。西側の土壙72の平面形は円形で、深さは約40cm残存していた。東側の土壙73は楕円形で、深さは約45cm残存していた。特徴としては、土壙72・73を検出する過程で、この両土壙の上層に貝が堆積しており、この貝層は最終的には、図示したように土壙73の埋土となっていた。貝層中には少量の魚骨や獣骨も含まれているが、その種類や割合については「Ⅳ自然科学による分析・鑑定」を参照されたい。



第130図　土壙72・73　遺物（2）

図示した土器のうち、355は土壙72から、356は土壙73から出土しており、357は、両方の土壙から出土した破片が、接合している。時期は、弥・中・Ⅱであろう。（平井）

土壙74（第131図）

第２微高地の土壙73の東約１ｍにおいて検出した。平面形は長さ約1.7ｍ、幅約85cmの隅丸長方形で、深さは約30cm残存していた。断面形は逆台形で、埋土は四層に分離することができた。壁は、垂直に近く立ち上がっている。底面はほぼ平らであるが、東隅には浅い凹みが確認できている。

埋土中からは、少量の土器が出土している。358は壺、359～361は甕である。甕の口縁部には、すべてヨコナデが施されている。時期は弥・中・Ⅱと考えている。（平井）

土壙75（第132図、写真５－１）

第２微高地の土壙74の南西隣りにおいて検出した。北端部が他の遺構によって切られているが、平面形は約1.4×１ｍの隅丸長方形で、深さは約70cm残存していた。断面形は逆台形で、埋土は三層に分離することができた。おもに図の１層から土器片が出土している。図示した土器は甕で、口縁部にはヨコナデが施されている。時期は、弥・中・Ⅱと考えている。（平井）

土壙76（第133図、写真５－２，56）

土壙74の東４ｍから検出された大型の土壙である。平面は楕円形を呈し主軸はほぼ南北に向く。規模は332×157cm、深さ58cmを測る。断面逆台形を呈す。埋土は上部に僅かながら泥化したものを含む厚い貝層が堆積し、下部に砂質土の堆積が認められたが、遺物の大半は貝層に混じって出土している。貝はほとんどがヤマトシジミで他に僅かにハイガイ・カワニナ・ハマグリなどが含まれ、また、魚骨としてスズキも出土している。土器はいずれも甕でほぼ完形に復元された口径約25cm、器高約30cmの367とやや小型で倒卵形を呈す368～373がある。いずれも内外面の調整は同様であるが、前者の口縁

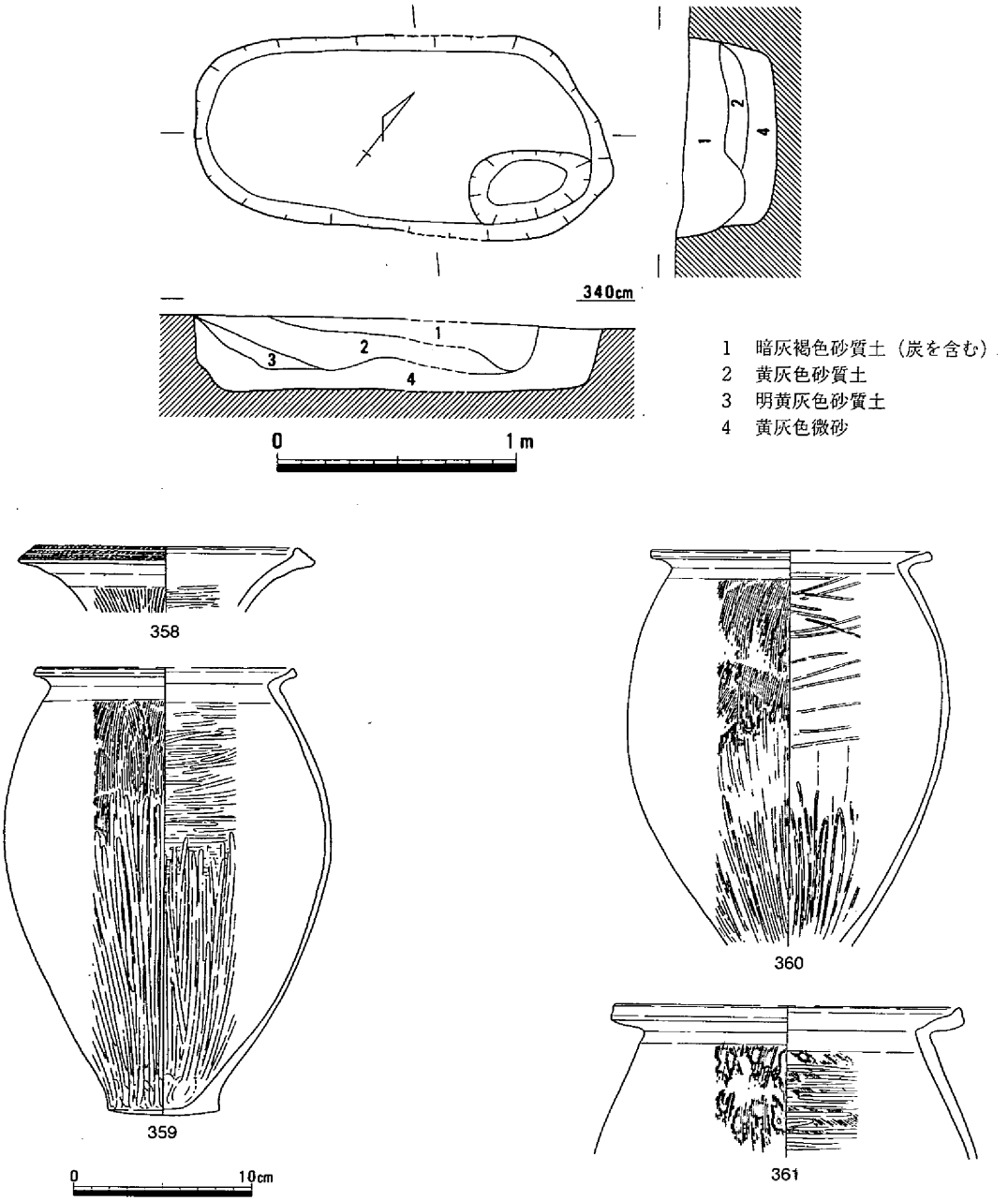
部には刻み目が施され２個１組の円形浮文で飾られるなど、形態上は甕ではあるが貯蔵用に利用されたものと思われる。いずれも弥・中・Ⅱの特徴をもつ。（江見）

土壙77（第134図）

土壙76の北西17mから検出された平面円形の浅い土壙である。径約80cm、深さ約10cmを測る。土壙内には暗茶灰色砂質土が堆積しており、これより弥・中・Ⅱの範疇と思われる土器細片が僅かながら出土している。（江見）

土壙78（第135図）

土壙77の北５mに位置し、後述の土壙79を一部切っている。平面楕円形を呈し、規模は径98×75cm、深さ30cmを測る。断面は緩い逆台形状を呈し、南部は段をなしている。土壙内には暗茶灰色粘質砂が

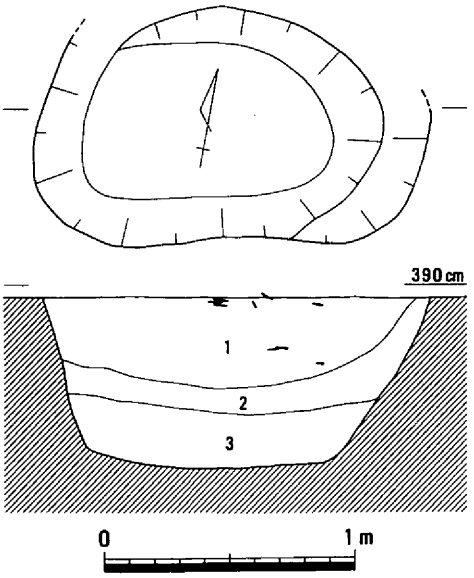


第131図　土壙74（1/30）・遺物

堆積し、少量の土器細片に混じって弥・中・Ⅱの壺374が出土している。（江見）

土壙79（第136図）

土壙78の東に重複した状態で検出された。平面不整円形を呈し、規模は径約150cm、深さ17cmを測る。断面は浅い皿形を呈し、埋土の灰褐色粘質砂に混じって甕375・376が出土している。いずれも口縁には凹線が巡らされており、特に376の口縁端部は肥厚し上方へ引き出されており、弥・中・Ⅱの新相の範疇のものと判断される。（江見）



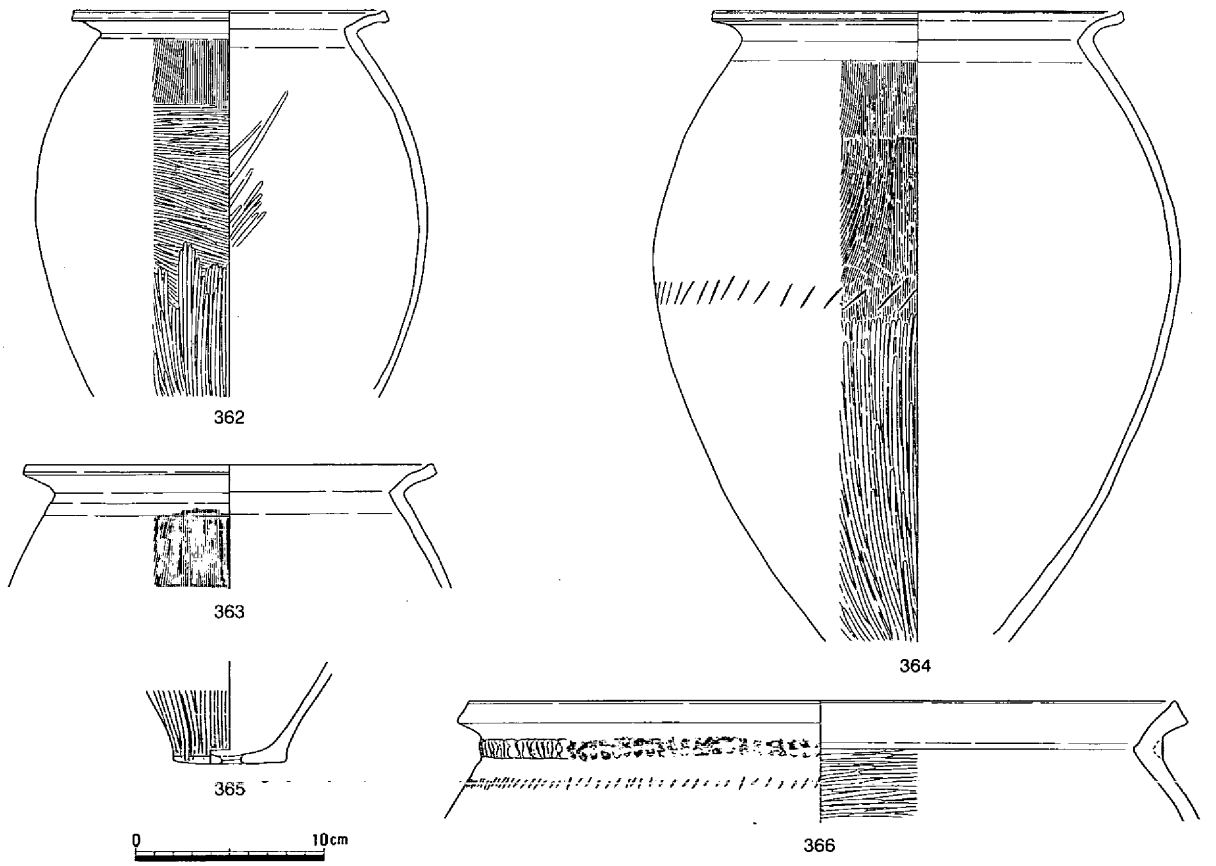
1　褐色砂質土
2　にぶい黄灰色砂質土
3　黄灰色砂質土

土壙80（第137図）

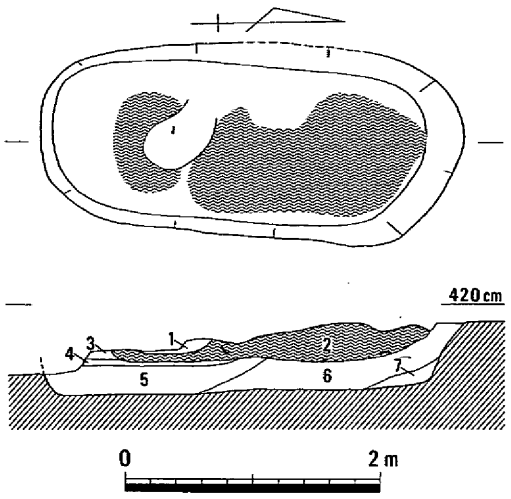
土壙79の北に接して検出された。平面楕円形を呈し、主軸を東西方向にもつ。規模は175×135cm、深さ28cmを測る。断面は浅い皿状を呈し、土壙内には灰褐色粘質砂が堆積していた。遺物は土器細片が出土しており、その特徴から弥・中・Ⅱのものと思われる。（江見）

土壙81（第138図）

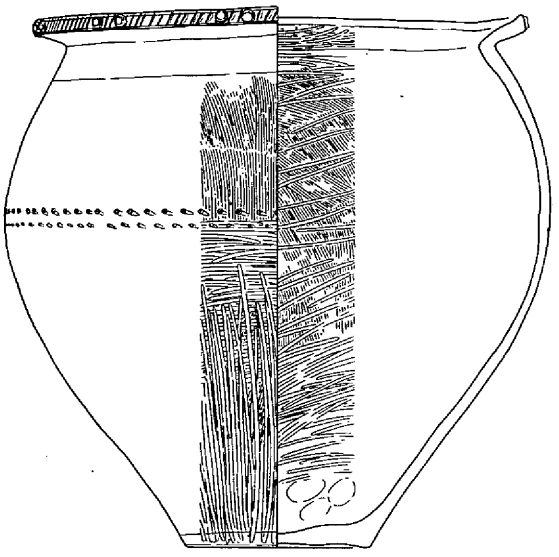
土壙80の北東、袋状土壙１と土壙82に挟まれた位置から検出された浅い土壙で平面楕円形を呈す。規模は

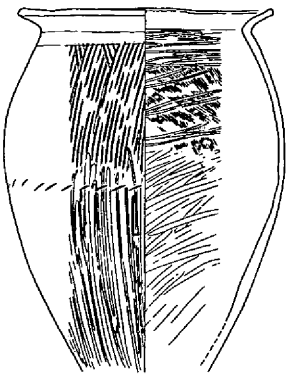


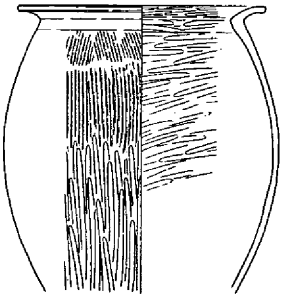
第132図　土壙75（1/30）・遺物

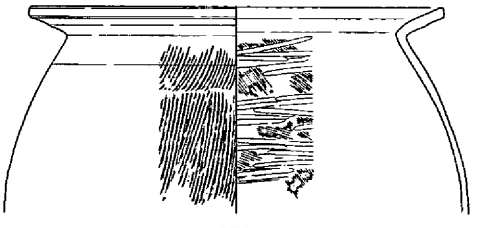


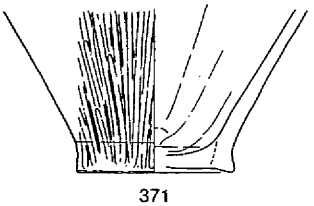
1　灰褐色粘質土
2　貝
3　褐灰色粘質土
4　褐色砂質土（炭を多く含む）
5　淡茶褐色砂質土（灰色粘質土・炭粒を含む）
6　明淡茶褐色砂質土
7　淡茶褐色砂質土

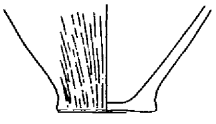

367

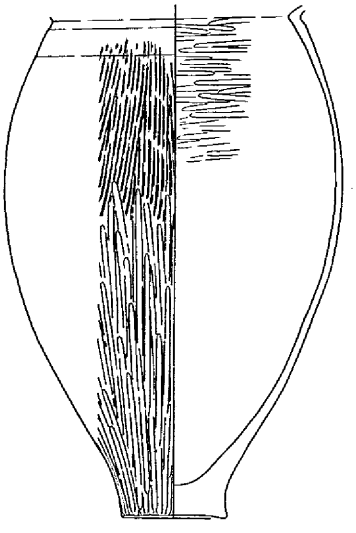

368


369

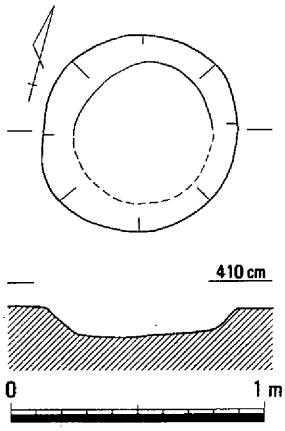

370


371

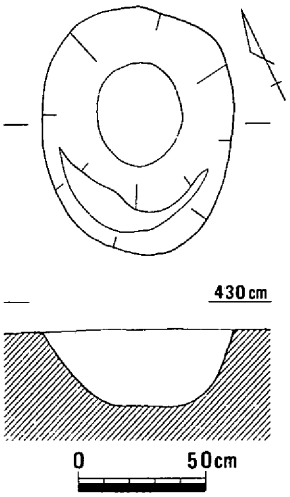

372


373

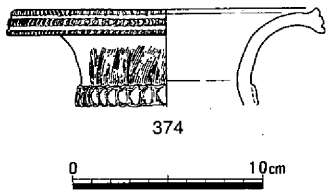
第133図　土壙76（1/60）・遺物



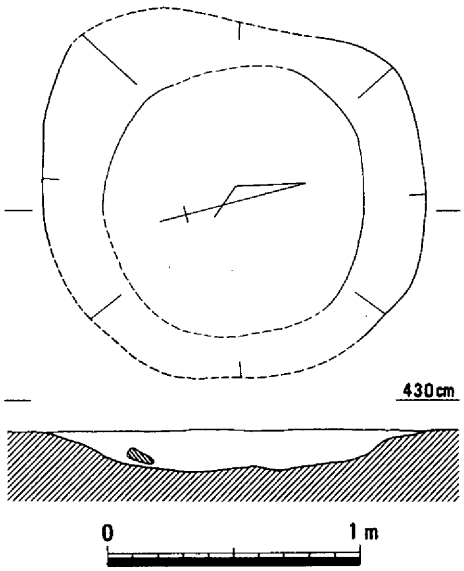
第134図　土壙77（1/30）



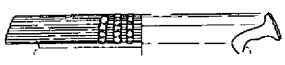
暗茶灰色粘質砂

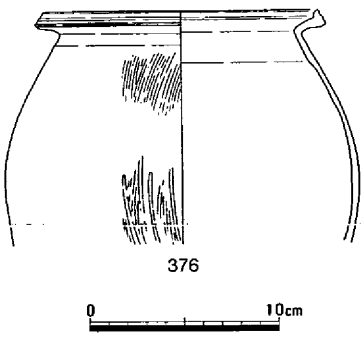


第135図　土壙78（1/30）・遺物

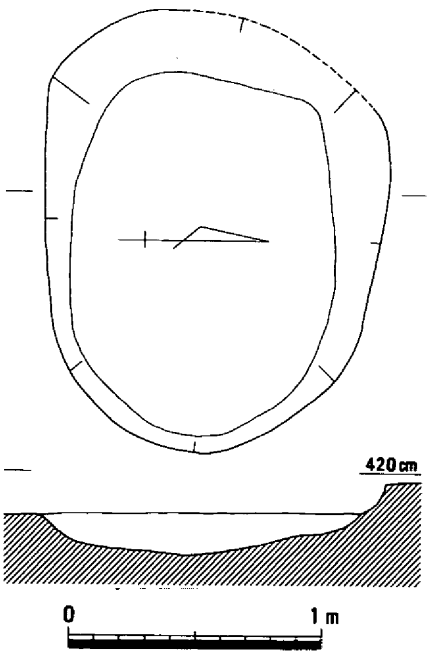


灰褐色粘質砂





第136図　土壙79（1/30）・遺物



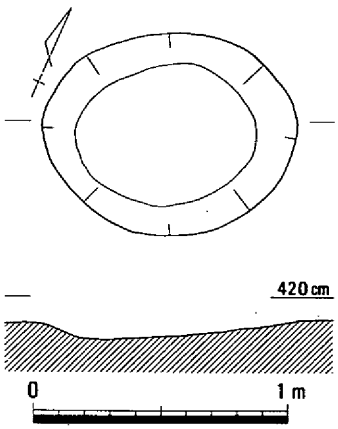
灰褐色粘質砂

第137図　土壙80（1/30）

100×80cm、深さ7cmを測る。土壙内から弥・中・Ⅱの特徴を示す土器細片が出土している。(江見)

土壙82（第139図）

土壙81の北に接して検出された。平面不整楕円形を呈し、主軸を北東方向に向ける。底部は北東半部が僅かに高く、南西半部が低い。断面は緩い逆台形状を呈し、北側が緩い傾斜を示すのに対し、南側はやや急である。規模は200×164cm、深さ36cmを測る。埋土は砂質土を主体とし、遺物は主に上層から出土した。壺377・378の口縁部にはいずれも刻み目を巡らし、、甕379の頸部には指頭圧痕文が巡る。また、甕381の内面には底部付近までヘラミガキ調整が認められるなど、これら出土土器は弥・中・Ⅱの特徴を示す。(江見)



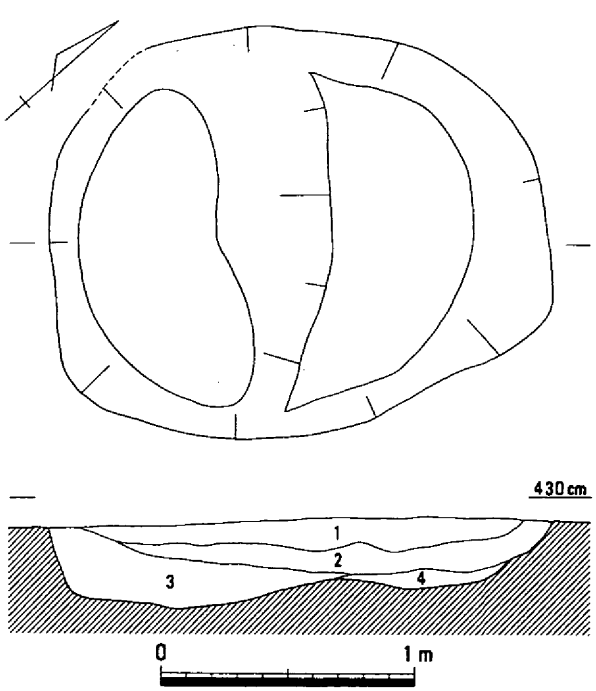
第138図　土壙81（1/30）

土壙83（第140図）

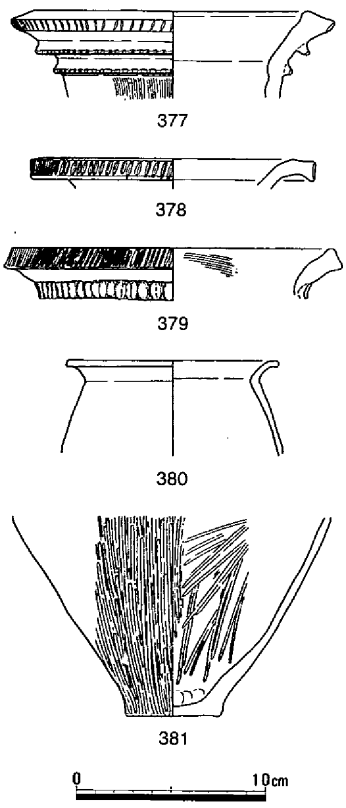
土壙81の南東約4mから検出された平面方形を呈す小形の土壙である。規模は68×55cm、深さ22cmを測る。断面「U」字状を呈す。埋土下層は炭粒を含み、これに混じって弥・中の土器細片が出土している。(江見)

土壙84（第141図）

土壙83の北東3m、竪穴住居4の西側から検出された。平面方形を呈し、主軸を北東から南西に向ける。断面は緩い逆台形状を呈す。規模は136×123cm、深さ23cmを測る。遺物はいずれも細片で時期不明瞭であるが、周囲の状況から弥・中に属すものと思われる。(江見)



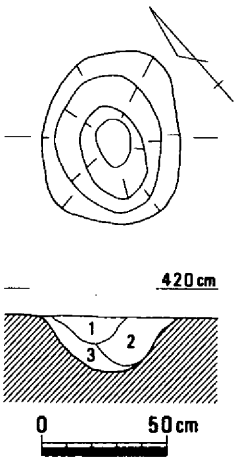
1　暗茶灰色砂質土
2　灰茶色砂質土
3　茶灰色砂質土
4　淡灰茶色砂質土



第139図　土壙82（1/30）・遺物

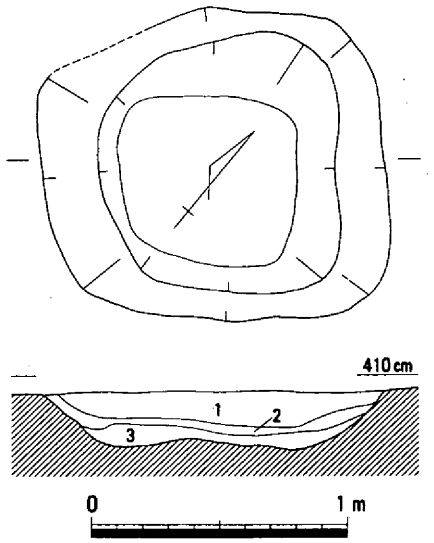
土壙85（第142図）

土壙84の南西３ｍから検出された。平面不整長方形を呈し、主軸は北東から南西に向く。規模は180×76cm、深さ26cmを測る。短軸断面は「U」字状を呈し、壁と底部の境は不明瞭である。土壙内は大半が暗茶灰色粘質砂で覆われ、底に張り付くように茶灰色粘質砂が堆積していた。遺物は少なく、僅かに東壁に接して甕382が出土した。土器の特徴は弥・中・Ⅱを示す。（江見）



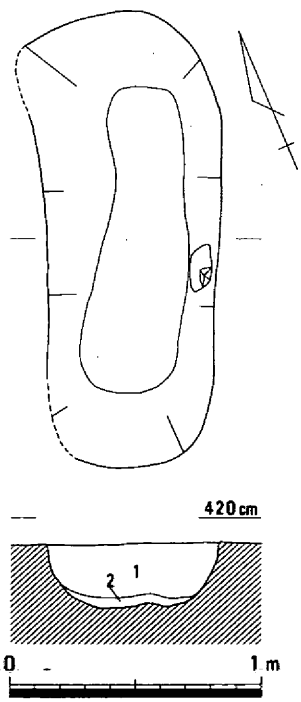
1　灰茶色粘質砂
2　暗灰褐色粘質砂（炭を含む）
3　灰褐色粘質砂（炭を含む）

第140図　土壙83（1/30）

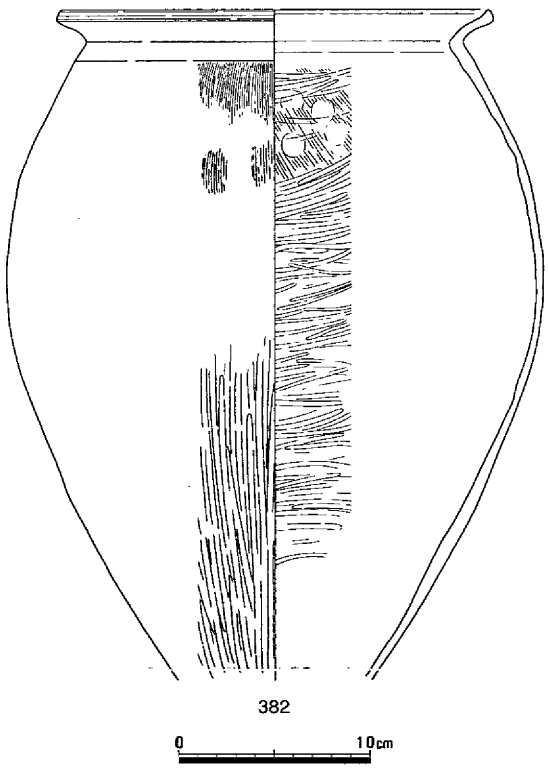


1　茶灰色粘質砂（黄色粘土ブロックを含む）
2　暗茶灰色粘質砂
3　淡茶灰色粘質砂（黄色粘土ブロックを含む）

第141図　土壙84（1/30）



1　暗茶灰色粘質砂
2　茶灰色粘質砂



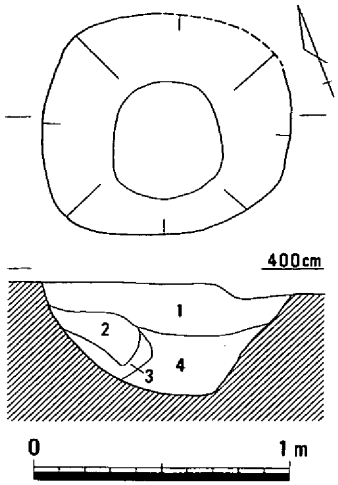
第142図　土壙85（1/30）・遺物

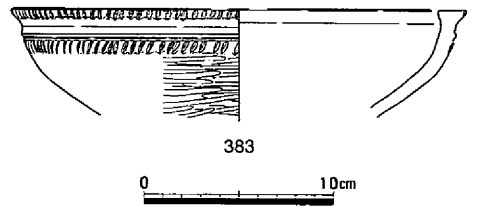
土壙86（第143図）

土壙85の南西８ｍから検出された。平面方形を呈し、規模は97×86cm、深さ45cmを測る。断面は逆台形状を呈す。埋土は４層からなり、上層より高杯383が出土している。椀状に立ち上がる口縁に端部は水平方向に引き出され、外面には二段に刻み目が巡らされている。これら特徴は弥・中・Ⅱの範疇のものと考えられる　（江見）

土壙87（第144図）

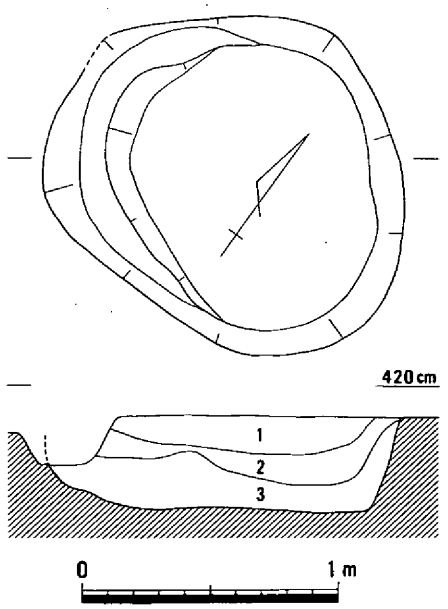
土壙86の南４ｍ位置し、土壙南端を竪穴住居103に切られている。平面不整楕円形を呈し主軸はほぼ東西に向く。

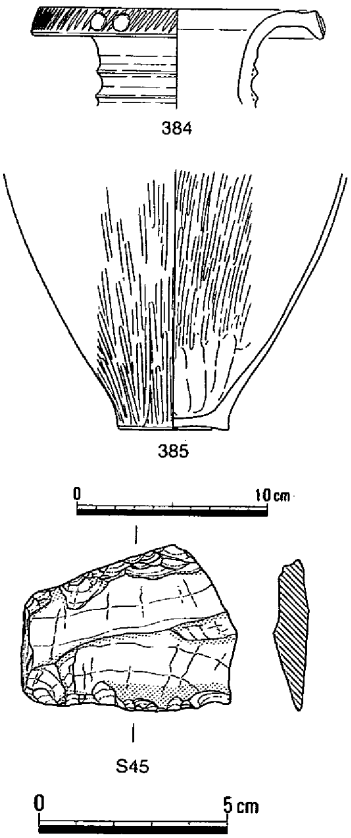




1　淡褐灰色粘質砂
2　褐灰色粘質砂（灰黄色粘質土ブロックを含む）
3　茶灰色砂質土
4　暗褐灰色粘質砂

第143図　土壙86（1/30）・遺物





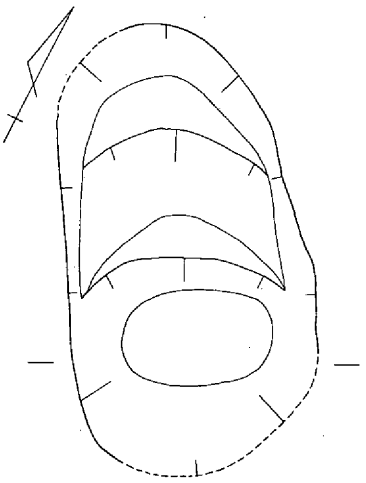
1　暗灰色粘質砂（炭粒を多く含む）
2　淡茶褐色砂質土（暗灰色粘質土小ブロックを含む）
3　暗灰色粘質砂（炭粒を多く含む、淡茶褐色砂質土小ブロックを含む）

第144図　土壙87（1/30）・遺物

規模は97×86cm、深さ45cmを測る。断面は箱形に近く急で、底部は平坦である。埋土は人為的に埋め戻されたと思われる小土塊を含むもので、遺物は壺384・甕385・石包丁Ｓ45などが出土している。384は垂下する口縁端面に刻み目を施した後円形浮文が巡り、頸部にも貼付突帯が巡らされ、385の内面はヘラミガキされるなど、弥・中・Ⅱの特徴を示している。（江見）

土壙88（第145～148図、写真５－３，56）

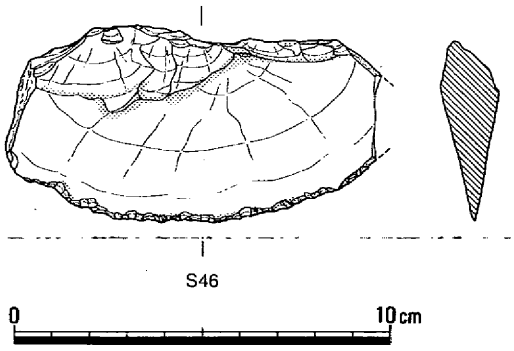
土壙86の南東３ｍに位置し、後述する古墳時代竪穴住居105下部から検出された。平面楕円形を呈し主軸は北西から南東に向く。規模は180×97cm、深さ82cmを測る。土壙は北から３段掘りがなされ、最深箇所の断面は「Ｕ」字状を呈す。埋土は７層からなり、特に、第１層下部には炭粒とともに遺物の出土が目立ったが、下層にあたる第６・７層からも壺386をはじめ、甕・台付鉢などが出土している。しかしながら、これら上下層遺物に時期的差は認められず同一時期の一群と捉え得るものと判断された。なお、当土壙から東へ８ｍに位置する弥・後・Ⅰの土壙259から甕398と同一個体片が出土している。土壙内からはスクレイパーＳ46をはじめ、壺386～388・391～393、甕389・390・394～405、高杯406、台付鉢407、ジョッキ形土器408、小型甕409などが出土している。壺・甕は大半が「く」字状に開く口縁に、端部は僅かに肥厚し面をもつ。壺は肩が張らず胴部中央に最大幅をもち、貝殻による刺突が巡るのに対し、甕は広い口に最大幅を胴部上半にもち、長胴気味の倒卵形を呈す。なお、甕には390のように端部を丸く収めるものもある。また、402は煤が確認されず、貯蔵用に利用された可能性がある。406は深い杯部に口縁は屈曲して水平に延び端部に面をもつ。407の口縁端面には斜格子文が巡るなど、弥・中・Ⅱの好資料である。（江見）



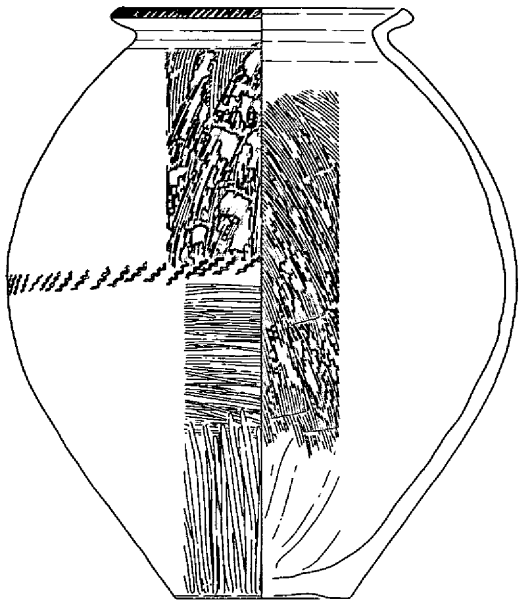
1　暗茶褐色粘質砂（炭粒を含む）
2　茶灰色粘質砂
3　暗茶色粘質砂
4　灰茶色粘質砂（炭粒を含む）
5　黄灰茶色粘質砂
6　淡茶灰色粘質砂
7　淡茶青灰色粘質砂（炭粒を含む）

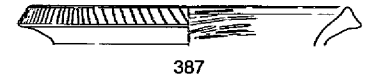
土壙89（第149図）

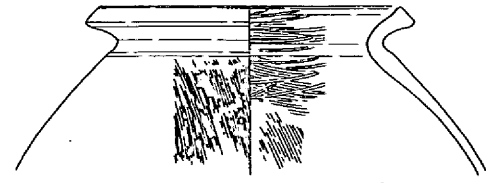
土壙88の南３ｍに位置し、上記同様の竪穴住居106下部から検出された。平面不整楕円形を呈し主軸はほぼ東西を向く。規模は323×170cm、深さ90cmを測る。断面逆台形を呈すが、主軸方向は２段掘りがれなされ、特に西側底部には小口板痕跡状の窪みが検出された。埋土は小土塊を含む砂質土が主体を占め、

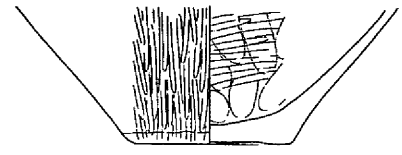


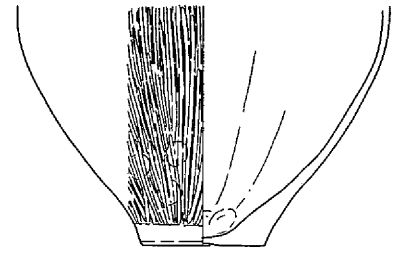
第145図　土壙88（1/30）・遺物（１）

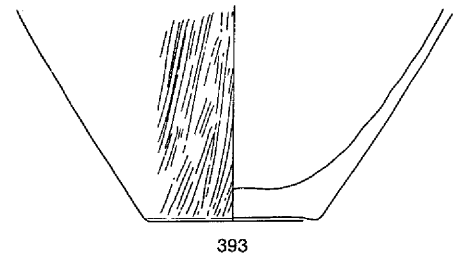

386

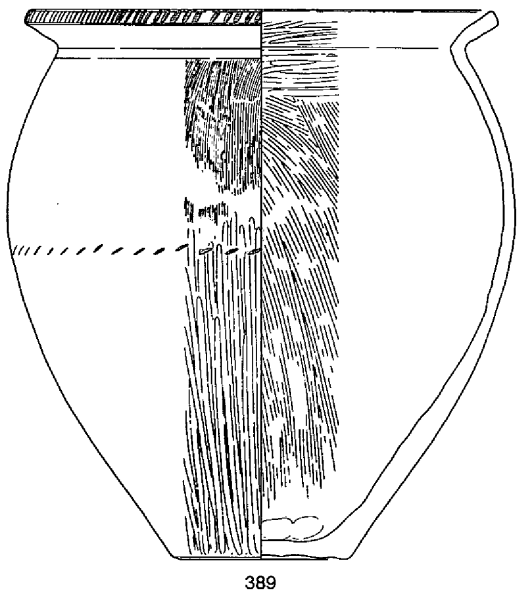

387


388

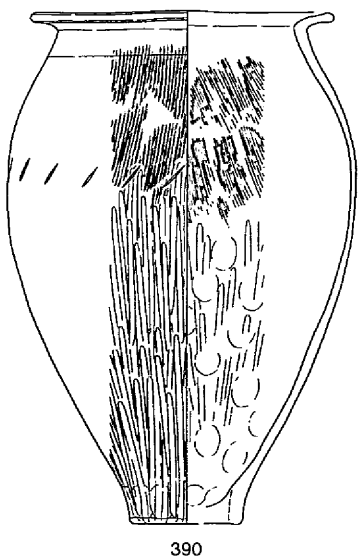

391

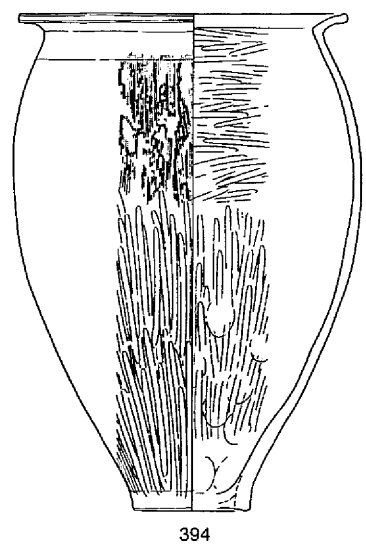

392


393

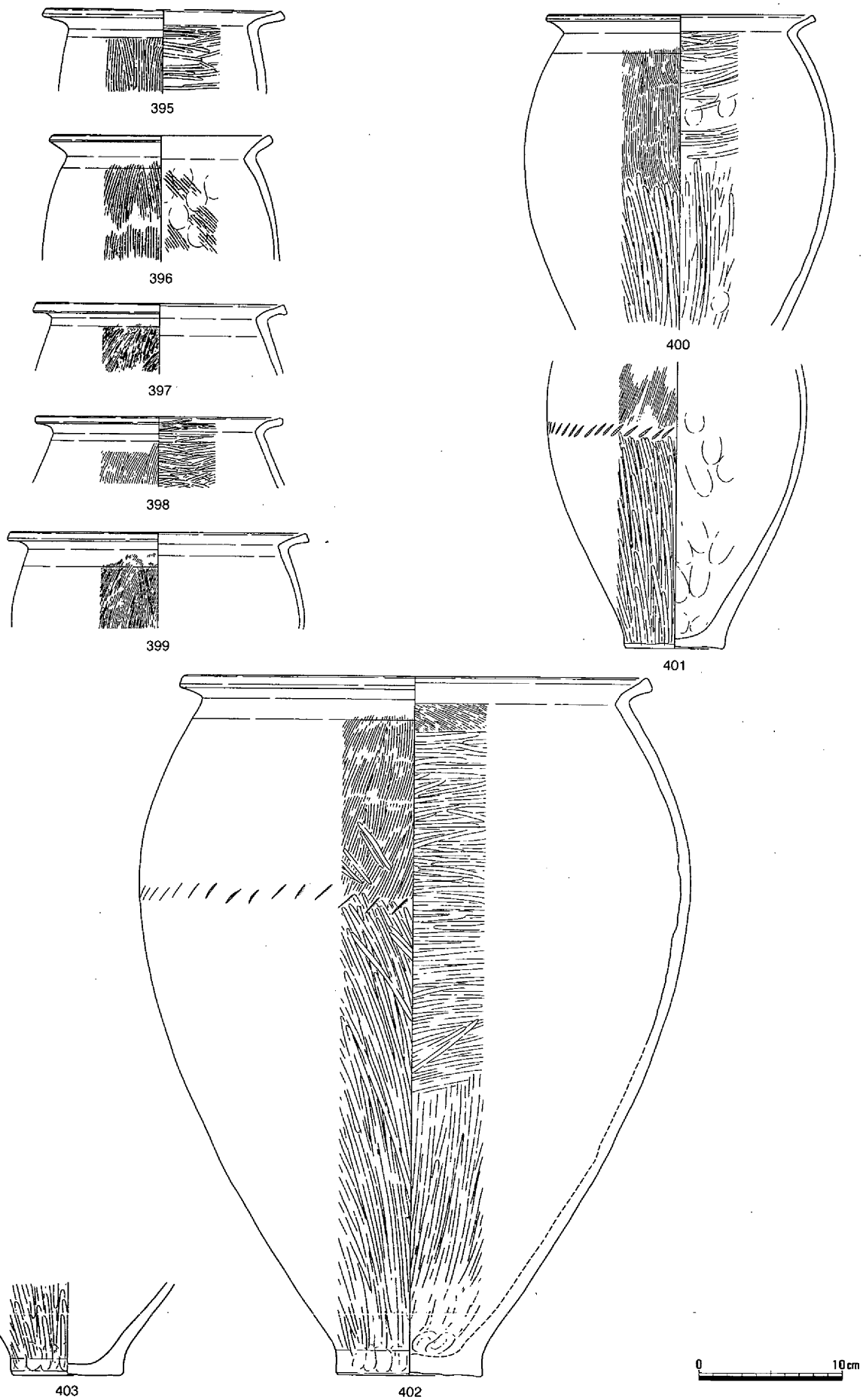

389

0　10cm

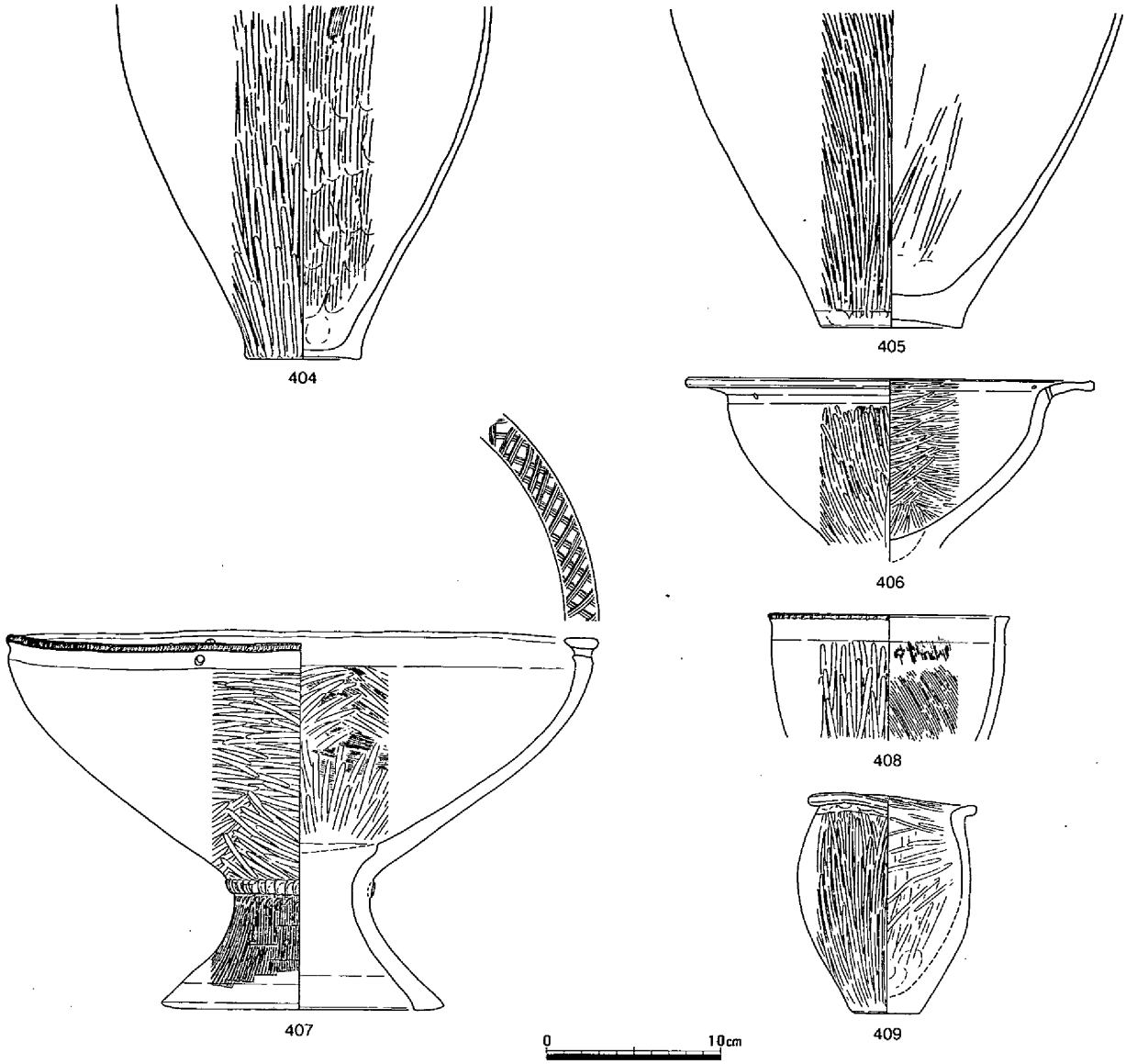

390


394

第146図　土壙88　遺物（2）



第147図　土壙88　遺物（３）



第148図　土壙88　遺物（4）

これより僅かながら遺物が出土している。壺410は大型の壺で肥厚する口縁部にはヘラガキによる斜格子文と、頸部には貼付の指頭圧痕文が巡る。甕413・414は胴部内外面をハケ調整し、414はさらに下半にヘラミガキを加え、胴中位に刺突を巡らせている。性格不明の土壙であるが、弥・中・Ⅱに属すものである。（江見）

土壙90（第150図）

土壙89の北６ｍに位置し、古墳時代竪穴住居104下部から検出された。平面隅丸方形を呈し主軸はほぼ南北に向く。規模は258×123cm、深さ33cmを測る。主軸方向は２段掘りがなされ、断面逆台形を呈し、底部は平坦である。遺物は北東部から30×20cmの扁平な自然石が斜めに出土したが土器は僅かで、大型の甕415の図示にとどまった。弥・中・Ⅱのものである。（江見）

土壙91（第151図）

土壙90の南東４ｍから検出された平面円形の浅い土壙である。規模は径約110cm、深さ18cmを測る。

断面は皿状を呈し、埋土は暗茶灰色粘質土が堆積していた。遺物は土器細片が僅かに出土するのみであったが、弥・中の範疇のものと思われる。（江見）

土壙92（第152図）

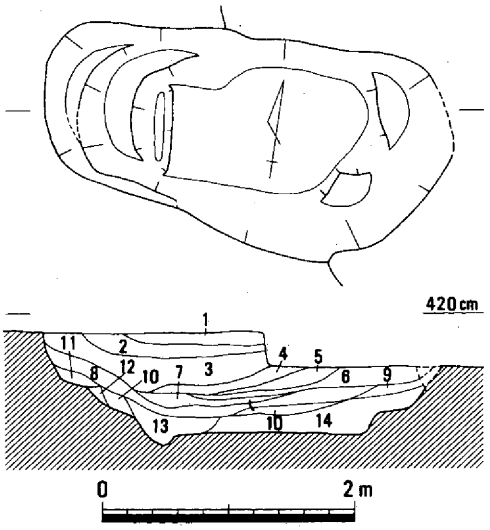
土壙91の北東３ｍから検出された平面楕円形の土壙である。規模は115×96cm、深さ27cmを測る。断面は逆台形を呈し底部が傾いている。埋土には多量の炭・焼土が含まれていたが、遺物は僅かで、土器片の特徴から弥・中・Ⅱのものと思われる。（江見）

土壙93（第153図）

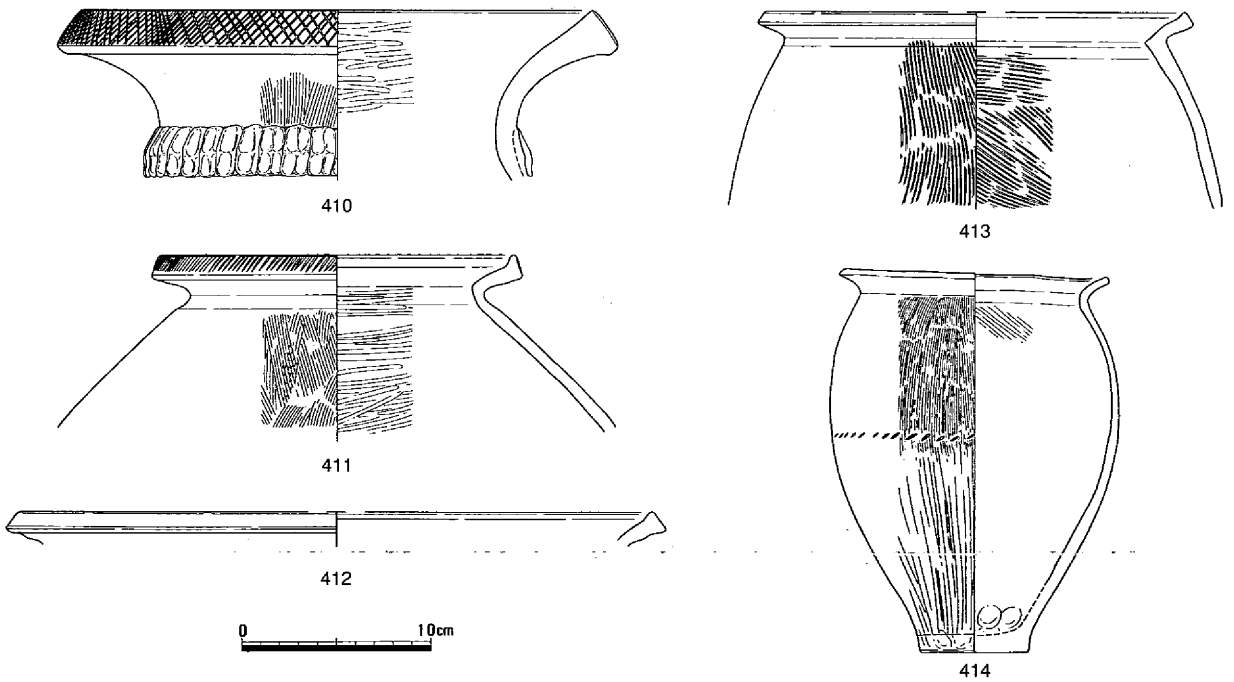
土壙91・92に挟まれた位置から検出された平面隅丸方形の浅い土壙である。規模は83×70cm、深さ11cmを測る。断面は逆台形を呈す。遺物の出土は僅かであったが甕416が出土している。口縁は「く」の字状に急に開き、端部に面をもつ。内外面ともにハケ調整後ヘラミガキを施しており、弥・中・Ⅱの特徴を示す。（江見）

土壙94（第154図）

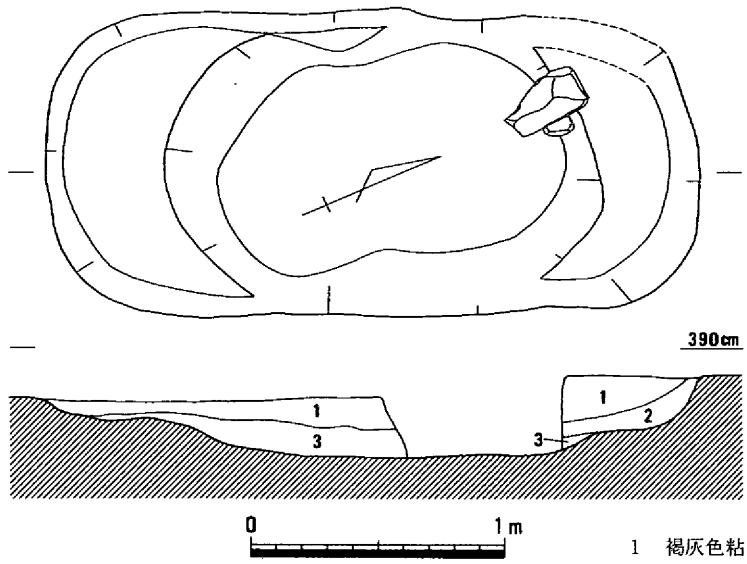
土壙94は、第２微高地中央、調査区南端に位置する。遺構の北側は調査区外になっているが、平面形



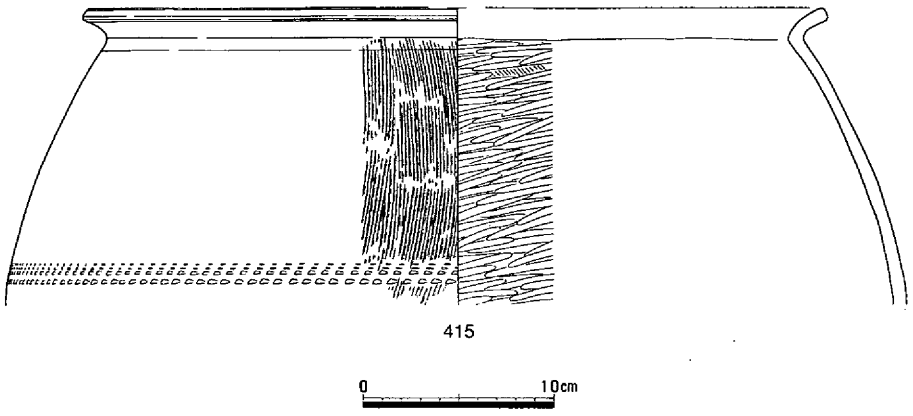
1　暗灰色粘質砂（黄色粘質土ブロックを含む）
2　暗灰色砂質土（炭を多く含む）
3　暗灰色粘質砂（茶褐色粘質ブロック・炭を含む）
4　暗灰色砂質土（炭粒を多く含む）
5　暗灰色粘質砂（茶褐色粘質土ブロック・炭を含む）
6　４層と同様
7　灰色粘質土（炭を含む）
8　４、６層と同様
9　灰色粘質砂（褐色粘質土小ブロックを含む）
10　淡灰色砂質土（黄色粘質土ブロックを含む）
11　黄褐色砂質土
12　淡茶灰色砂質土
13　灰色砂質土（炭粒をわずかに含む）
14　灰褐色砂質土（灰色粘質土小ブロックを含む）



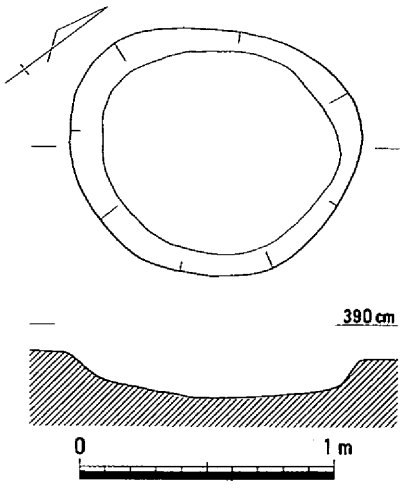
第149図　土壙89（1/60）・遺物



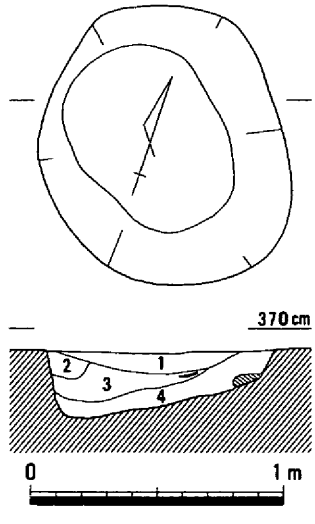
1　褐灰色粘質砂
2　茶灰色粘質砂
3　淡黄灰色粘質砂



第150図　土壙90（1/30）・遺物



第151図　土壙91（1/30）



1　暗茶褐色粘質砂
（焼土・炭を多く含む）
2　褐色微砂
3　茶灰色粘質砂
（焼土・炭を多く含む）
4　暗茶灰色粘質砂
（焼土・炭を多く含む、
炭が特に多い）

第152図　土壙92（1/30）

は方形になると思われる。床面は水平で、埋土は中央に向かって大きく下がる。出土遺物は土器の小片がわずかで、図示できる出土遺物はないが、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。　（柴田）

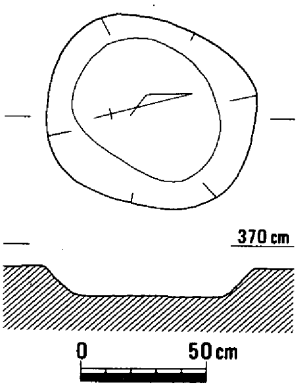
土壙95（第155図）

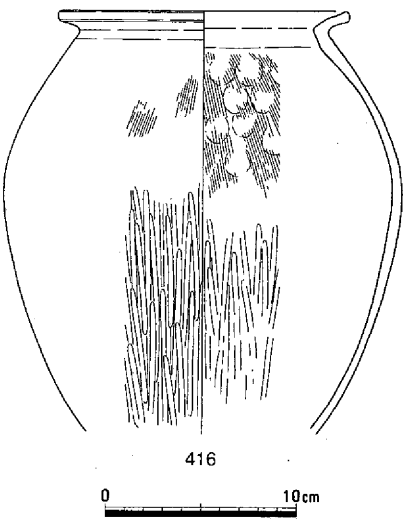
土壙95は、第２微高地中央、調査区南端に位置する。平面は楕円形で、現存での長さは98cmを測る。床面はほぼ水平である。出土遺物は土器の小片がわずかで、図示できる出土遺物はないが、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。　（柴田）

土壙96（第156図、写真57）

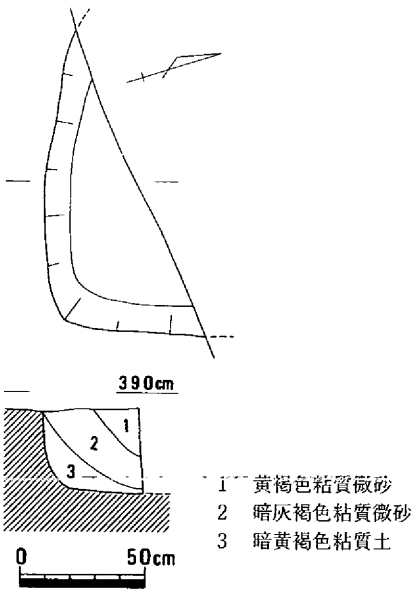
土壙96は、第２微高地中央、調査区南端に位置する。遺構の北端は調査区外になっているが、平面形は楕円形で、規模は192×134cmを測る。床面は水平で、埋土はレンズ状堆積を呈する。出土遺物については、図示したもので壺417～419、甕420～425・428などがあり、図示していないが打製石包丁片も確認されている。

壺は、いずれも口縁端部が水平方向に拡張し、面を形成し、頸部には刻み目を有する貼り付け

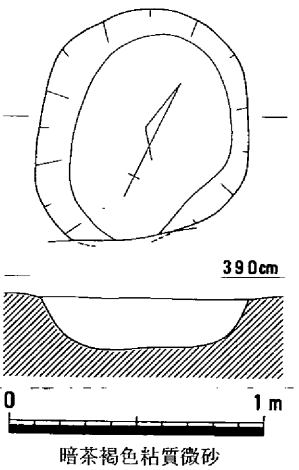




第153図　土壙93（1/30）・遺物

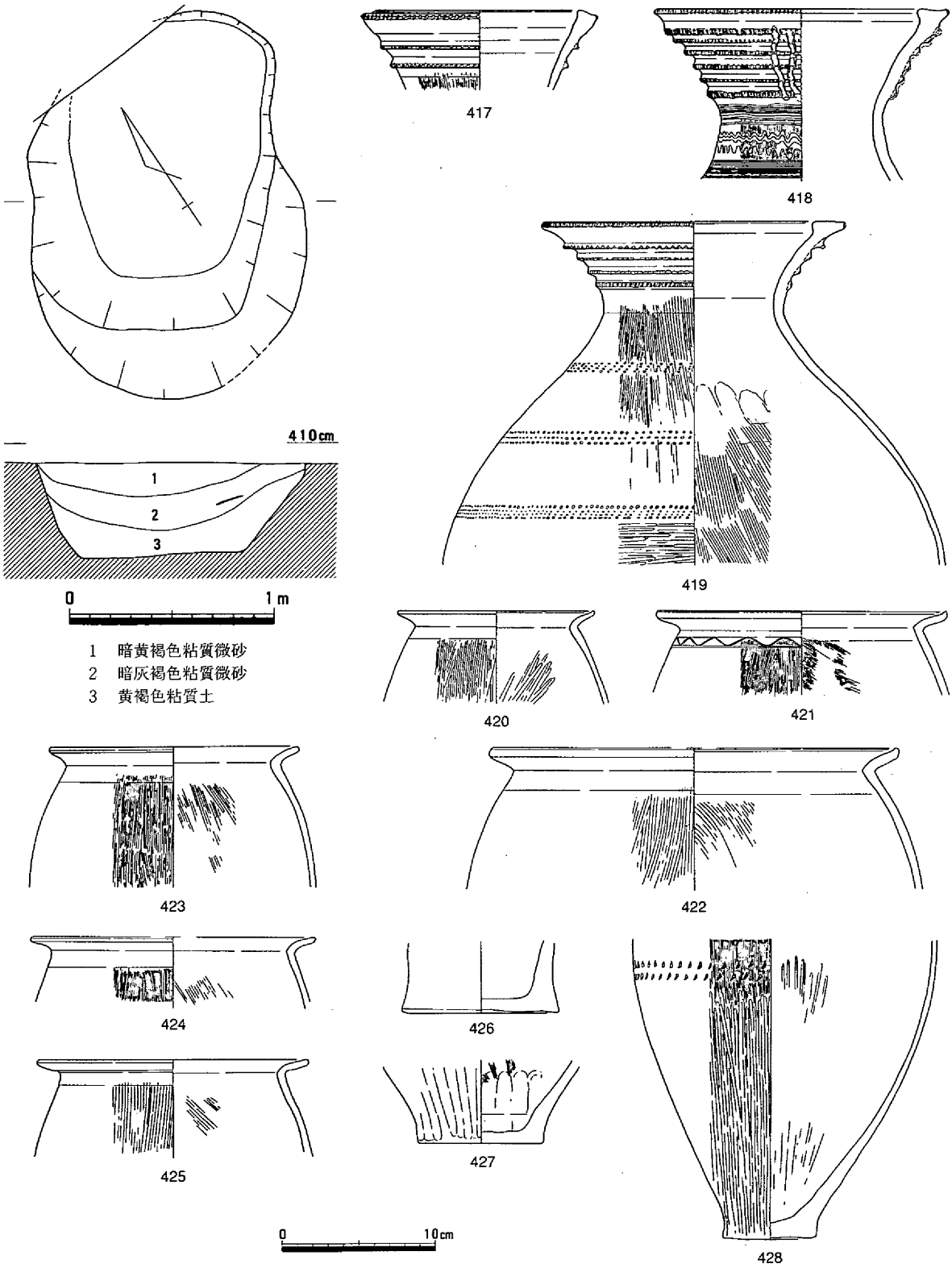


第154図　土壙94（1/30）



第155図　土壙95（1/30）

突帯を施すものである。418では、突帯に棒状浮紋が施され、頸部に波状紋や櫛描きの沈線が認められる。419は肩部から胴部にかけて、列点紋が３列認められる。甕は、420～422のように口縁端部がわずかに上方へのびるものと、423～425のように単純におさまるものがある。421の頸部には波状の沈線紋が巡る。出土遺物から、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。　（柴田）



第156図　土壙96（1/30）・遺物

土壙97（第157図）

土壙97は、第２微高地中央、調査区南端に位置する。平面は楕円形で、規模は110×107cmを測る。床面は水平で、埋土もほぼ水平である。出土遺物には、壺429、甕430などがある。429は肩部の破片で、櫛描きの沈線と波状紋が巡る。430は、「く」字状に屈曲する口縁部がさらに強く外反する。出土遺物から、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。　（柴田）

土壙98（第158図）

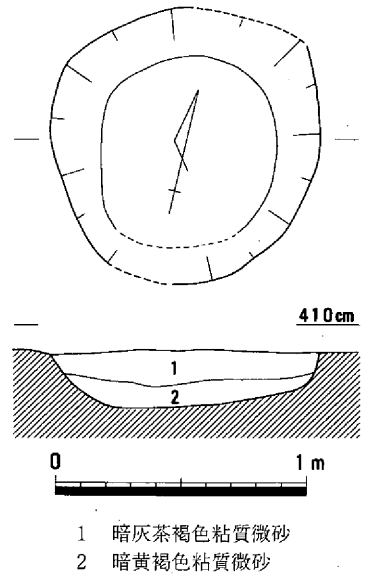
土壙98は、第２微高地中央、調査区南端に位置する。土壙97と重なっており、それに切られている。平面は不整楕円形で、規模は92×73cmを測る。出土遺物は土器の小片がわずかであるが、遺構の時期は、弥・中と思われる。　（柴田）

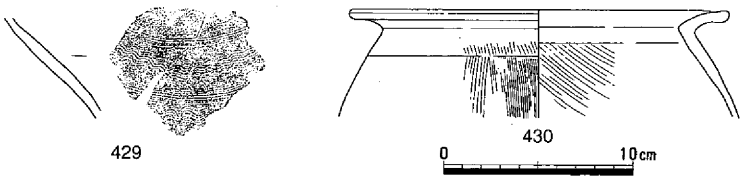
土壙99（第159図）

土壙99は、第２微高地中央、調査区南端に位置する。遺構の南側は調査区外になっているが、平面は106×85cmの楕円形である。東側の掘り方は、途中に段が形成されている。出土遺物には甕431などがある。出土遺物から、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。　（柴田）

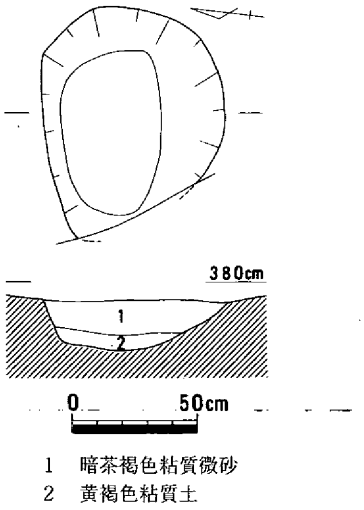
土壙100（第160図）

土壙100は、第２微高地中央、調査区南端に位置する。遺構の南側大半は調査区外になっているが、平面は円形になると思われる。埋土下層には貝殻の堆積が厚く残存している。貝の種類は、ヤマトシジミがほとんどで、ヘナタリも

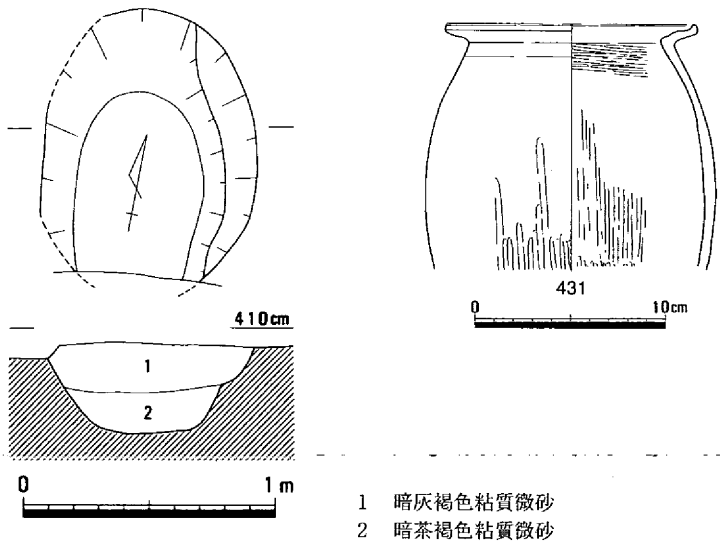




第157図　土壙97（1/30）・遺物



第158図　土壙98（1/30）



第159図　土壙99（1/30）・遺物

混入しているとの鑑定結果である。

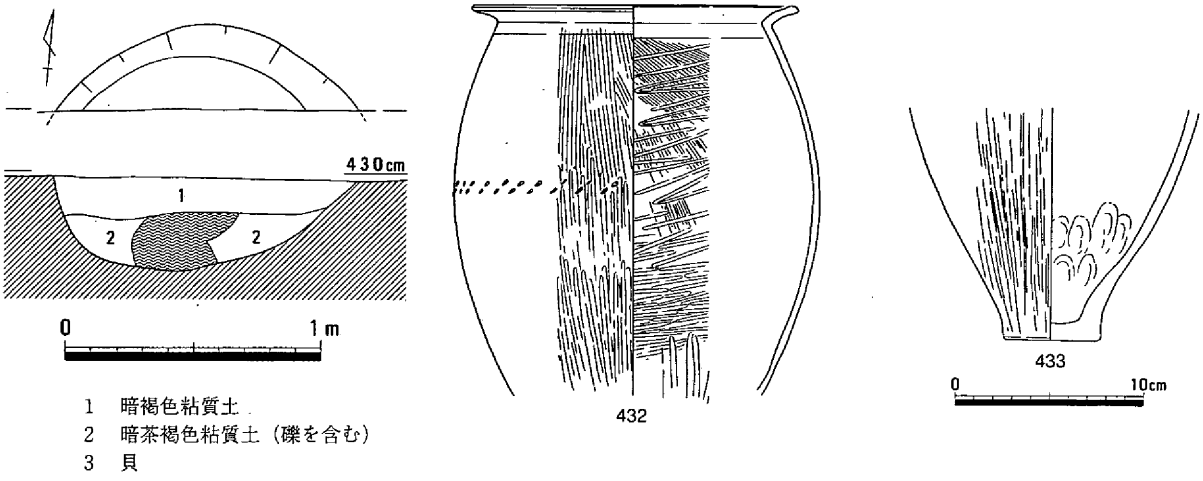
遺物には甕432・433などがあり、これらから、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。　（柴田）

土壙101（第161図）

土壙101は、第２微高地の中央やや北寄りに位置する。掘り方の東端を土壙102に切られている。平面は不整楕円形で、規模は143×130cmを測る。掘り方東側は段を形成し、床面は東側が低くなっている。出土遺物には壺434、台付鉢435などがある。434は、口縁部が大きく開き、内面に篦描きの斜格子紋や、刻み目を有する貼り付け突帯が施される。435は、貼り付け突帯や透かしを施し、端部を下方に引き出している。出土遺物から、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。　（柴田）

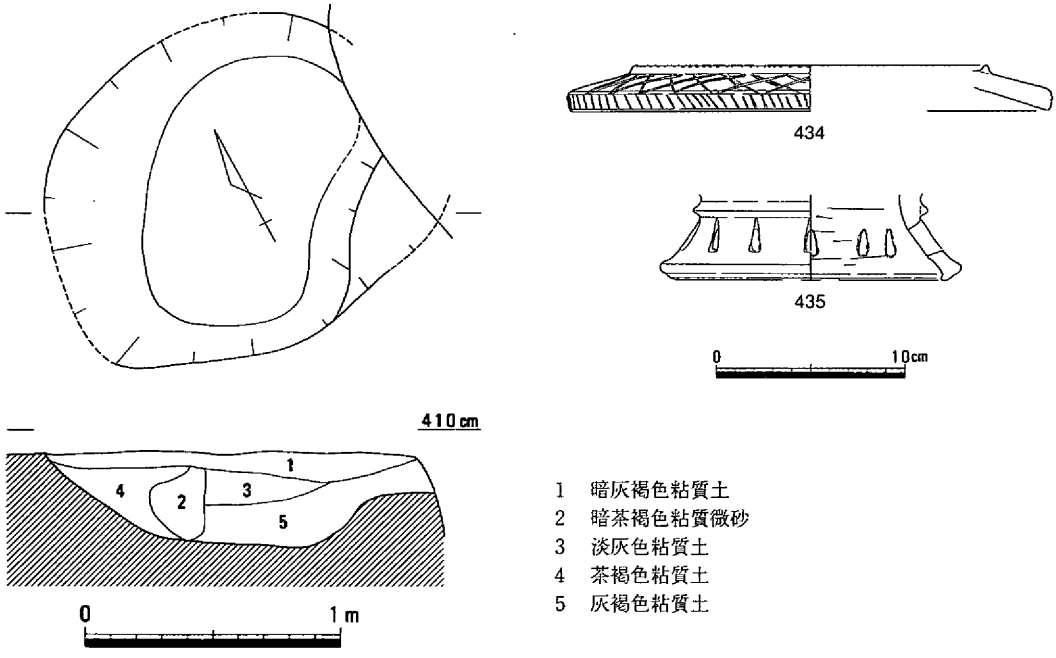
土壙102（第162図、写真６－１、写真57）

土壙102は、第２微高地の中央やや北寄りに位置し、土壙101を切っている。平面は長方形で、規模



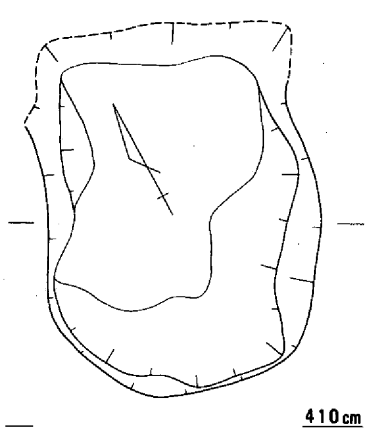
1　暗褐色粘質土
2　暗茶褐色粘質土（礫を含む）
3　貝

第160図　土壙100（1/30）・遺物

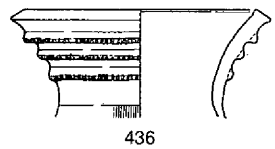


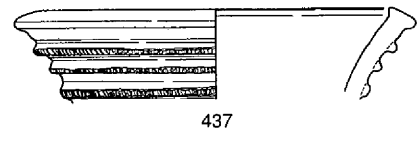
1　暗灰褐色粘質土
2　暗茶褐色粘質微砂
3　淡灰色粘質土
4　茶褐色粘質土
5　灰褐色粘質土

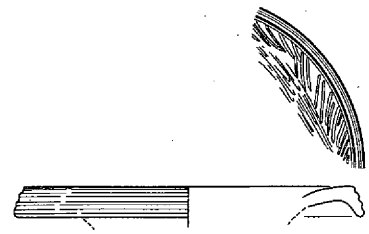
第161図　土壙101（1/30）・遺物

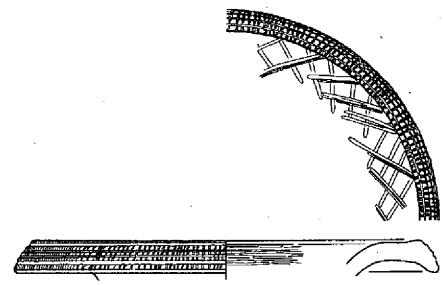


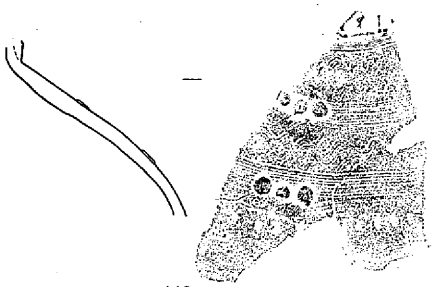
1　茶褐色粘質微砂
2　黒褐色粘質土
（炭・土器を多く含む、
黄褐色粘質ブロック
を含む）
3　明黄褐色粘質土

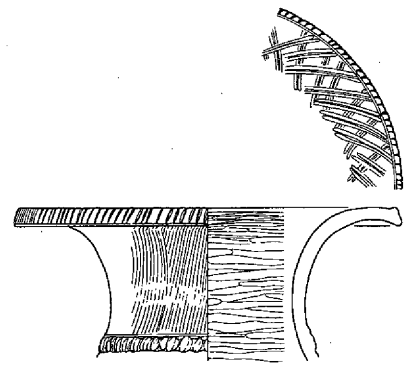

436

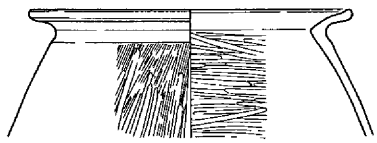

437

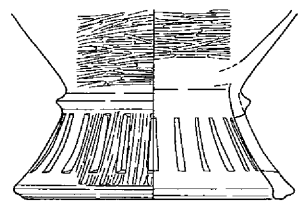

438

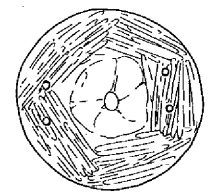

439

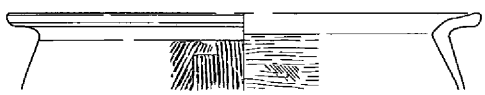

440

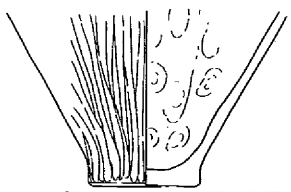

441


442

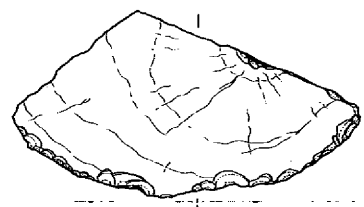

445


446


443


444

0　10cm


S47

0　5cm

第162図　土壙102（1/30）・遺物

は146×109cmを測る。南側の壁面は緩やかであるが、北側は垂直に近くなる。埋土の中層には、炭や遺物が多く、壺436～441、甕442～444、台付鉢445、蓋446、スクレイパーS47などがある。436・437は、口縁端部が内外に拡張し、頸部に刻み目を有する貼り付け突帯を施すものである。438・439・441は、口縁部が大きく開き、端部を下方に拡張するものである。内面には斜格子紋など、口縁端部には刻み目が施される。440は肩部の破片で、櫛描きの沈線や波状紋、刺突紋が巡り、指頭圧痕紋突帯や3個1対の円形浮紋が施される。442・443は口縁端部が強く外反する。S47は打面に自然面を残している。出土遺物から、遺構の時期は弥・中・Ⅱと思われる。　(柴田)

土壙103（第163図）

土壙103は、第2微高地中央に位置する。竪穴住居4の東側で重なっており、それに切られている。平面は円形で、最大径146cmを測る。断面は皿状で、床面は中央が窪む。出土遺物は土器の小片がわずかであるが、遺構の時期は、弥・中と思われる。　(柴田)

土壙104（第164図）

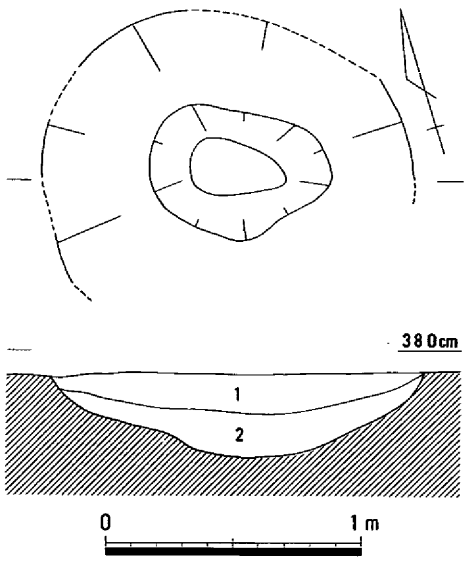
土壙104は、第2微高地の中央、竪穴住居4の北東に隣接する。平面は楕円形で、最大径118cmを測る。断面は皿状で、床面はほぼ水平である。出土遺物は土器の小片がわずかであるが、遺構の時期は、弥・中と思われる。　(柴田)

土壙105（第165図）

土壙105は、第2微高地の中央、土壙104の東に隣接する。掘り方西側は、袋状土壙2に切られる。平面は楕円形で、最大径94cmを測る。床面はほぼ水平である。出土遺物には、甕、高杯447などがある。447はボウル状の杯部で、内外面ともヘラミガキが施される。出土遺物などから、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。　(柴田)

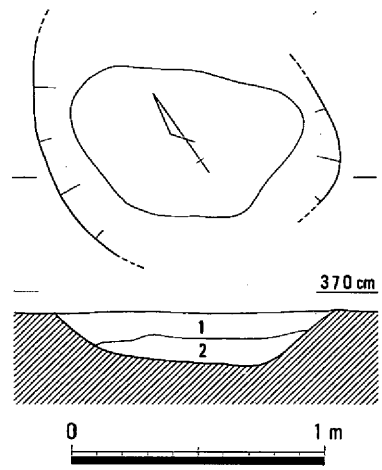
土壙106（第166図）

土壙106は、第2微高地の中央、土壙105の東に隣接する。平面は不整楕円形で、規模は139×110cmを測る。出土遺物は土器の小片がわずかであるが、遺構の時期は、弥・中・Ⅲと思われる。　(柴田)



1　茶褐色粘質微砂
2　淡黄褐色粘質土

第163図　土壙103（1/30）



1　茶褐色粘質土
2　淡黄褐色粘質土

第164図　土壙104（1/30）

土壙107（第167図）

土壙107は、第２微高地の中央、土壙106の北に隣接する。土壙108の北側で重なり、それに切られている。平面は不整楕円形で、規模は136×113cmを測る。掘り方南側には段を形成している。出土遺物は土器の小片がわずかであるが、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

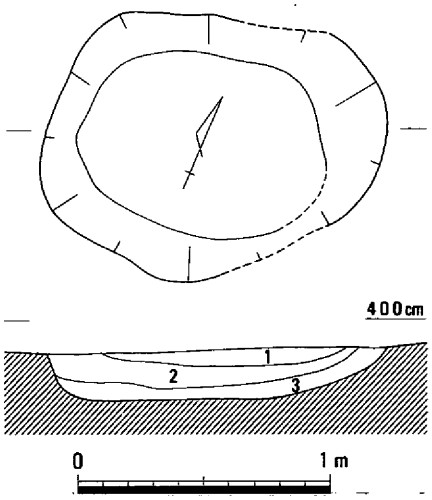
土壙108（第168図）

土壙108は、第２微高地の中央、竪穴住居４と掘立柱建物１の間に位置する。非常に浅いが、土壙106には切られ、土壙107を切っている。平面は楕円形で、規模は395×256cmを測る。出土遺物は、弥・中・Ⅱ～Ⅲの土器片とスクレイパーＳ48が認められる。Ｓ48は刃部がよく磨耗している。遺構の時期は、遺物や切り合い関係から、弥・中・Ⅲと思われる。（柴田）

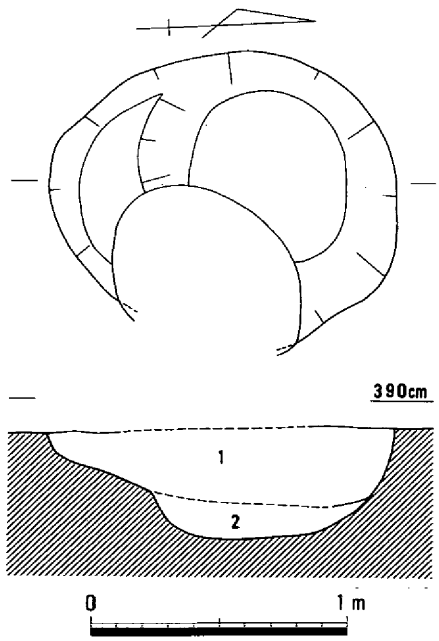
土壙109（第169図）

土壙109は、第２微高地の中央やや北寄り、土壙108の北に隣接する。平面は長方形で、規模は

第165図　土壙105（1/30）・遺物



第166図　土壙106（1/30）



第167図　土壙107（1/30）

285×172cmを測る。埋土中に焼土が認められる。出土遺物は土器の小片がわずかであるが、遺構の時期は、弥・中におさまると思われる。（柴田）

土壙110（第170図）

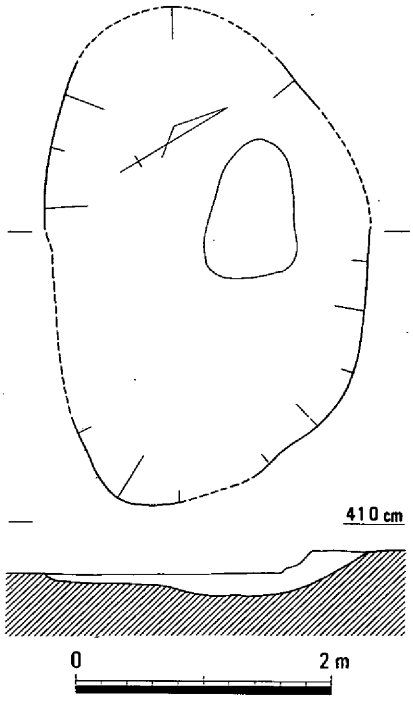
土壙110は、第２微高地の中央やや北寄り、土壙109の北東に隣接する。非常に浅く、残存状況は悪いが、平面は楕円形と思われる。規模は長径で82cmを測る。出土遺物は土器の小片がわずかであるが、遺構の時期は、弥・中におさまると思われる。（柴田）

土壙111（第171図）

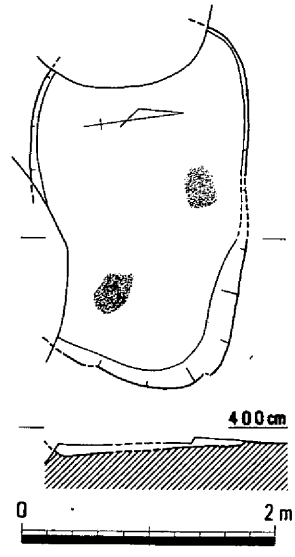
土壙111は、第２微高地の中央やや北寄り、土壙110の南東に隣接する。平面は楕円形で、規模は現存長径で108cmを測る。出土遺物は土器の小片がわずかであるが、遺構の時期は、弥・中におさまると思われる。（柴田）

土壙112（第172図）

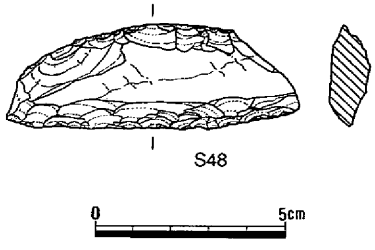
土壙112は、第２微高地の中央やや北寄り、土壙111の南に隣接する。平面は不整楕円形で、規模は97×80cmを測る。断面は皿状で、床面は窪んでいる。出土遺物には、壺448、甕449・450などがある。

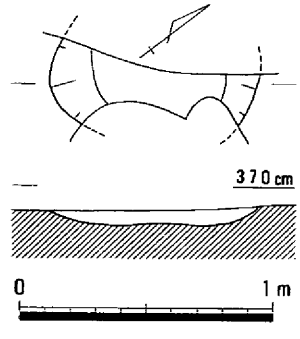


第168図　土壙108（1/60）・遺物



第169図　土壙109（1/60）





第170図　土壙110（1/30）

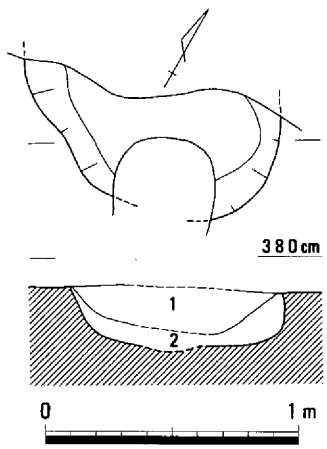
448は口縁部が大きく開き、端部に２個１対の円形浮紋を施す。449は口縁端部が上方に摘みあげられる。450は底部に穿孔が認められる。遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

土壙113（第173図）

土壙113は、第２微高地の中央やや北寄り、土壙112の南に隣接する。平面は隅丸方形で、規模は118×99cmを測る。床面は、西に向かって低くなっている。出土遺物には、甕の底部451などがある。遺構の時期は、弥・中におさまると思われる。（柴田）

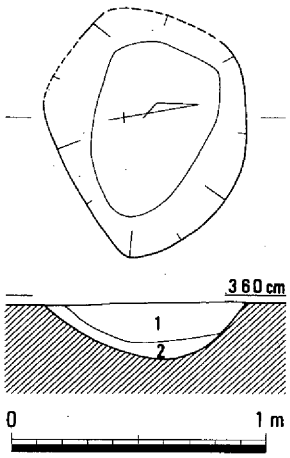
土壙114（第174図）

土壙114は、第２微高地の中央やや北寄り、掘立柱建物１の西に隣接する。残存状況は悪く、南側は後世の遺構に切られている。平面は長楕円形と思われる。出土遺物は土器の小片がわずかであるが、

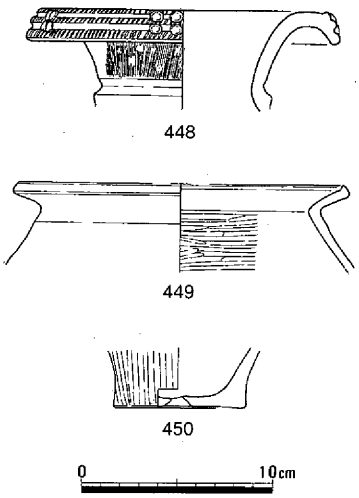


1　茶褐色粘質微砂
2　黄褐色粘質微砂

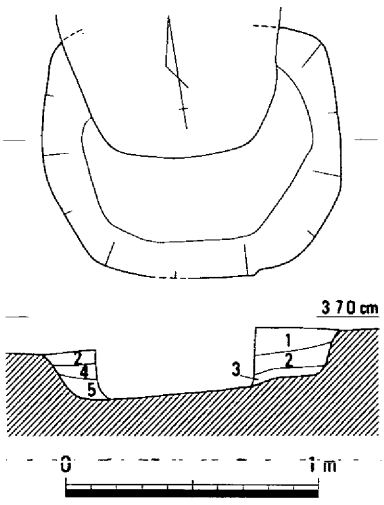
第171図　土壙111（1/30）

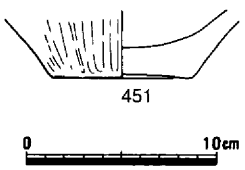


1　淡茶褐色粘質微砂
2　淡黄灰褐色粘質微砂



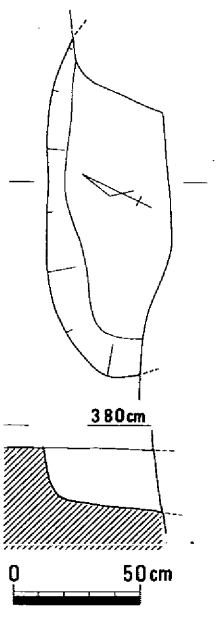
第172図　土壙112（1/30）・遺物





1　暗茶褐色粘質微砂
2　暗黄褐色粘質土
3　暗褐色粘質土
4　明黄褐色粘質土
5　黄灰色粘質土

第173図　土壙113（1/30）・遺物



暗茶褐色粘質土

第174図　土壙114（1/30）

遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

土壙115（第175図）

土壙115は、第２微高地の中央やや北寄り、土壙114の北に隣接する。平面は楕円形で、規模は171×133cmを測る。断面は概ね皿状を呈し、１・２層間には焼土が認められる。出土遺物は土器の小片がわずかであるが、遺構の時期は、弥・中におさまると思われる。（柴田）

土壙116（第176図）

土壙116は、第２微高地中央、竪穴住居５の北側で重なり、それに切られている。平面は方形と思われ、現存長は128cmを測る。床面はほぼ水平で、２層上面には炭が認められる。図示していないが、出土遺物には磨製石斧の小片がある。遺構の時期は、弥・中・Ⅱ以前である。（柴田）

土壙117（第177図）

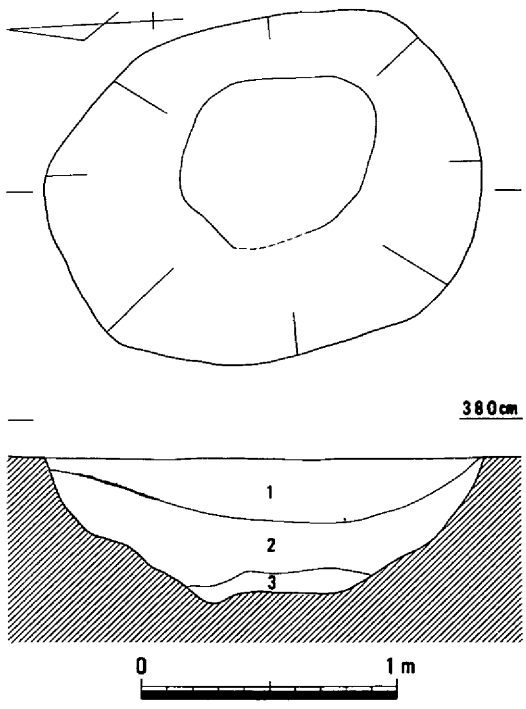
土壙117は、第２微高地中央、竪穴住居５の西側で重なり、それに切られる。平面は不整楕円形で、規模は188×119cmを測る。床面はほぼ水平であるが、所々に小さな浅い凹が認められる。埋土は西に向かって傾斜しており、３層には炭が多く含まれる。出土遺物には、壺452、甕453～455などがある。452は櫛描きの沈線や波状紋が施され、内面はハケメが認められる。453・454の口縁部は、外方へのびが比較的短い。遺物などから、遺構の時期は、弥・中・Ⅰと思われる。（柴田）

土壙118（第178図）

土壙118は、第２微高地の中央、竪穴住居５の北側で重なり、それに切られると思われる。平面は楕円形で、規模は104×86cmを測る。断面は皿状を呈する。出土遺物は土器の小片がわずかであるが、切り合い関係などから遺構の時期は、弥・中におさまると思われる。（柴田）

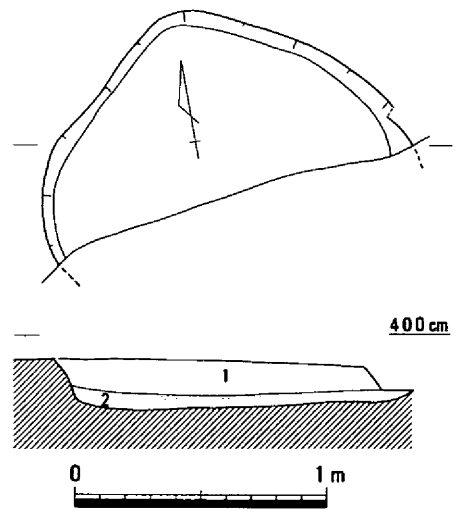
土壙119（第179図）

土壙119は、第２微高地の中央、竪穴住居５の



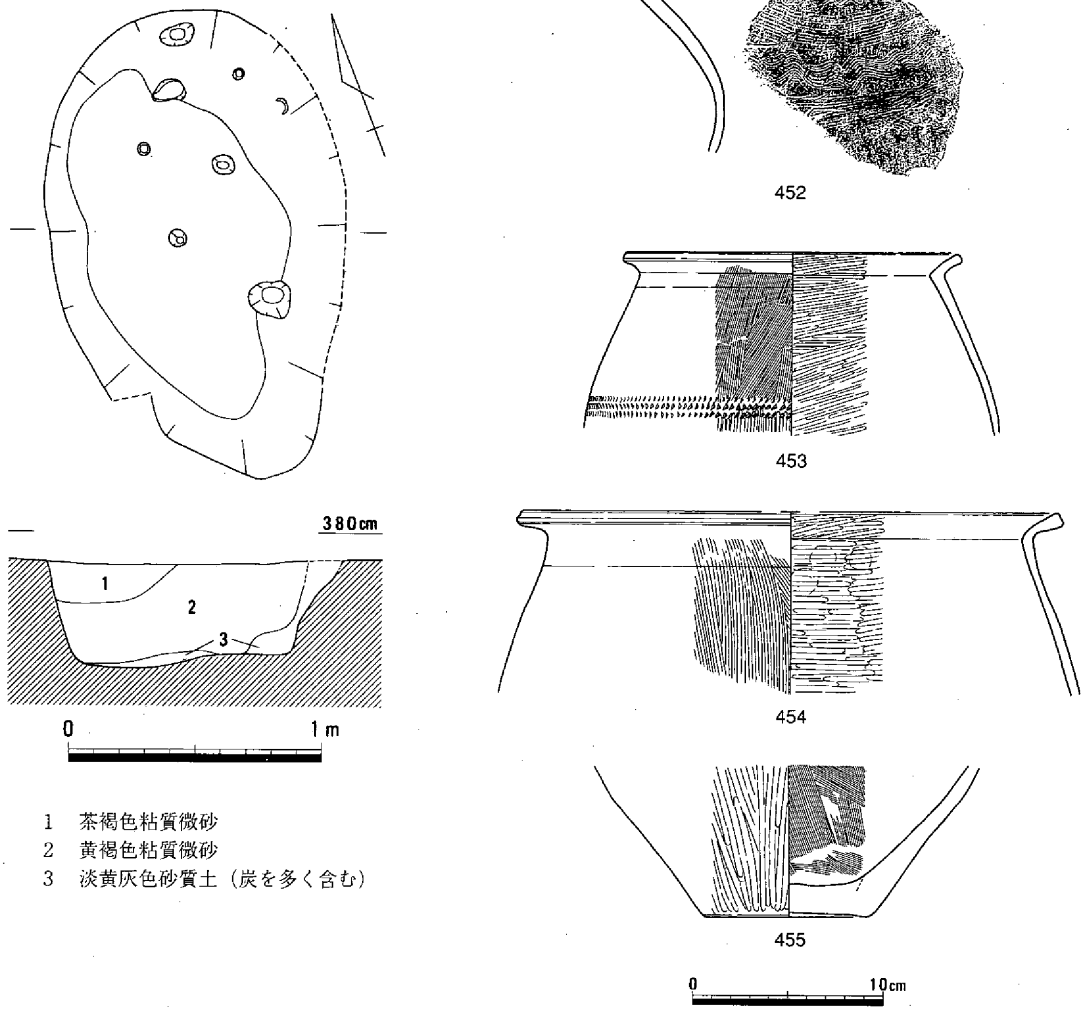
1　淡茶褐色粘質土（黄灰色ブロックを含む）
2　暗灰褐色粘質土
3　淡明黄灰色粘質土（暗灰褐色土塊を含む）

第175図　土壙115（1/30）



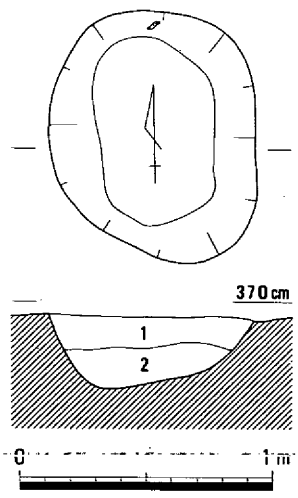
1　暗黄茶褐色粘質微砂
2　黄茶褐色粘質微砂（炭を含む）

第176図　土壙116（1/30）



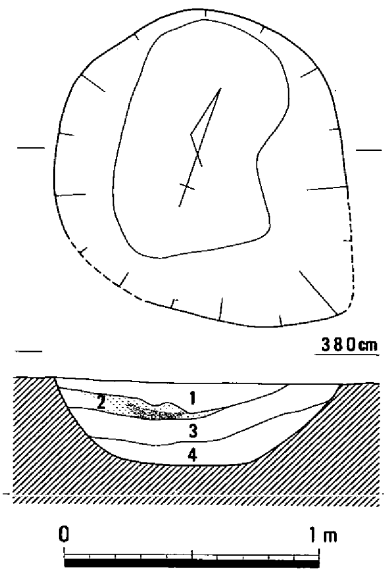
1　茶褐色粘質微砂
2　黄褐色粘質微砂
3　淡黄灰色砂質土（炭を多く含む）

第177図　土壙117（1/30）・遺物



1　暗茶褐色粘質微砂
2　暗黄褐色粘質土

第178図　土壙118（1/30）



1　黄褐色粘質微砂
2　黄茶褐色粘質土
（炭・焼土を含む）
3　黄橙色粘質土
4　淡黄褐色粘質土

第179図　土壙119（1/30）

南側で重なり、それに切られる。平面は不整楕円形で、規模は140×118cmを測る。出土遺物は土器の小片がわずかであるが、遺構の時期は、弥・中におさまると思われる。（柴田）

土壙120（第180図）

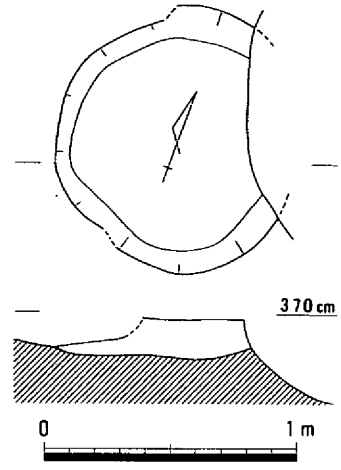
土壙120は、第２微高地中央、竪穴住居５の東側で重なり、それに切られる。また、土壙121にも切られる。平面は円形で、径は117cmを測る。出土遺物は土器の小片がわずかだが、遺構の時期は、弥・中・Ⅱ以前であると思われる。（柴田）

土壙121（第181図）

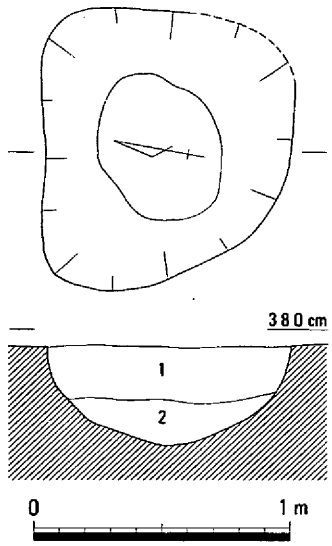
土壙121は、第２微高地の中央、竪穴住居５の東に隣接する。土壙120を切っている。平面は不整方形で、規模は112×100cmを測る。断面は皿状を呈し、床面中央は窪む。埋土は水平堆積を呈する。出土遺物には高杯456がある。出土遺物から、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

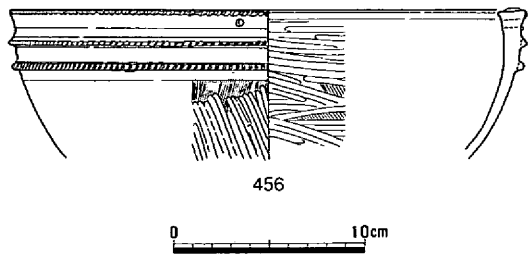
土壙122（第182図）

土壙122は、第２微高地の中央、土壙121の東に隣接する。

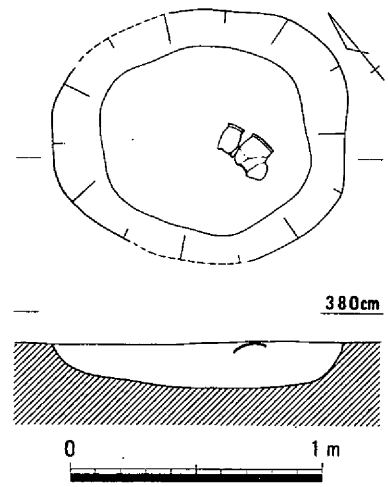


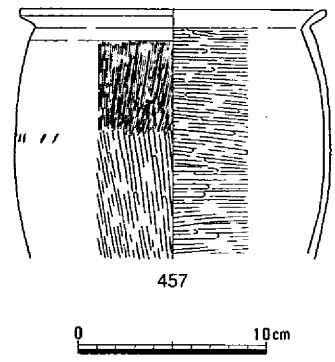
第180図　土壙120（1/30）





第181図　土壙121（1/30）・遺物





第182図　土壙122（1/30）・遺物

平面は楕円形で、規模は117×100cmを測る。床面はほぼ水平である。出土遺物には甕457がある。457は口縁部の外方へののびが比較的短く、肩から胴部にかけての張りは弱い。また、胴部の列点紋は全周していない。遺構の時期は、弥・中・Ⅰと思われる。（柴田）

土壙123（第183図、写真57）

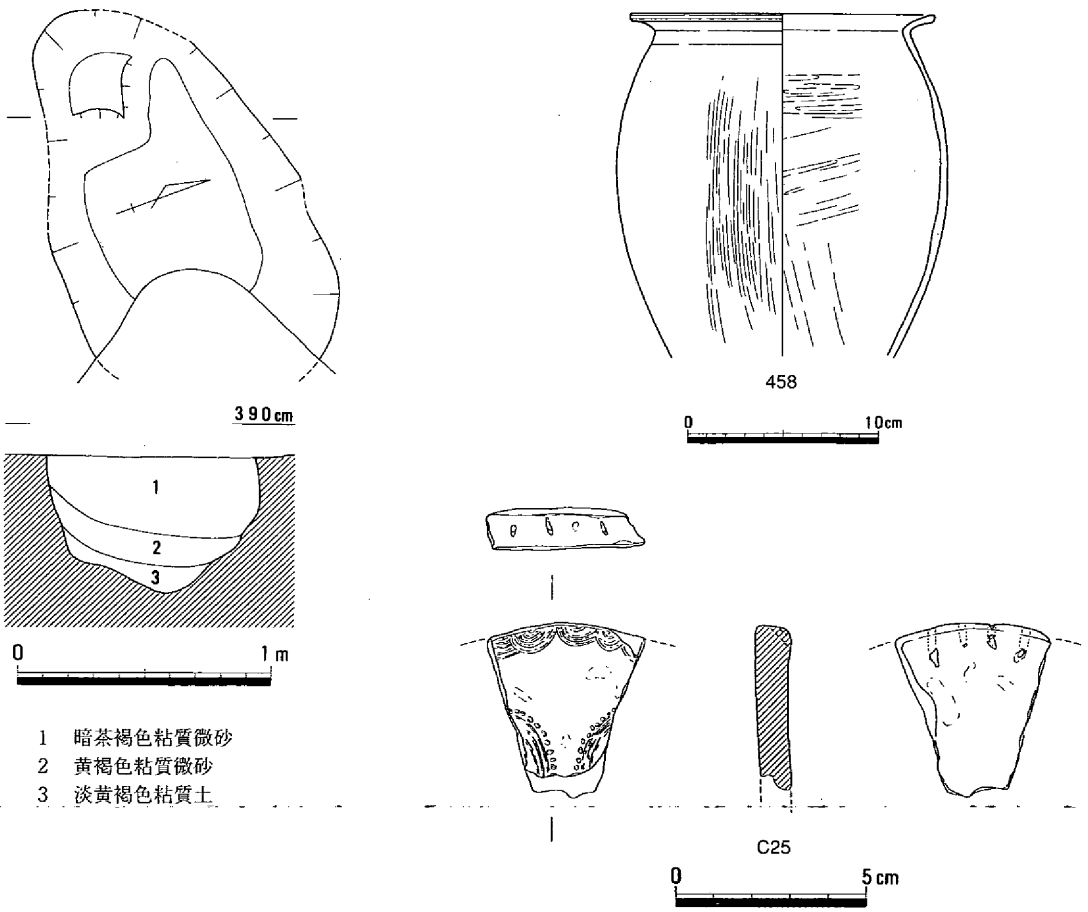
土壙123は、第２微高地の中央、竪穴住居６の北西に隣接する。平面は不整楕円形で、現存での規模は171×103cmを測る。出土遺物には、甕458、分銅形土製品Ｃ25などがある。458は、口縁部がやや外反しながらのびる。Ｃ25は、ハケメ状工具を利用したような眉状紋や重弧紋が描かれ、端面から裏面にかけて穿孔も認められる。遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

土壙124（第184図）

土壙124は、第２微高地の中央やや東寄り、竪穴住居６の北に位置する。平面は不整円形で、径は117cmを測る。床面は凹凸が著しい。出土遺物には甕459などがある。459は、口縁端部が上方に摘み出され、面を形成する。また、頸部には指頭圧痕紋突帯が巡る。出土遺物などから、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

土壙125（第185図）

第２微高地のM24区の南端中央部において検出した。平面形は約140×80cmの長楕円形で、深さは約45cm残存していた。断面形は逆台形で、壁は垂直に近く立ち上がっていた。遺物は少量の土器片が出土したのみである。時期は明確ではないが、弥・中・Ⅱと考えている。（平井）



第183図　土壙123（1/30）・遺物

土壙126（第186図）

第２微高地の土壙125の北隣りにおいて検出した。北と南が他の遺構に切られているため、全体の形状は明らかではないが、長さ約140cm、幅約70cmの隅丸長方形であったと推測できる。深さは、約40cm残存していた。少量の土器片が出土しており、時期は弥・中・Ⅱであろう。　（平井）

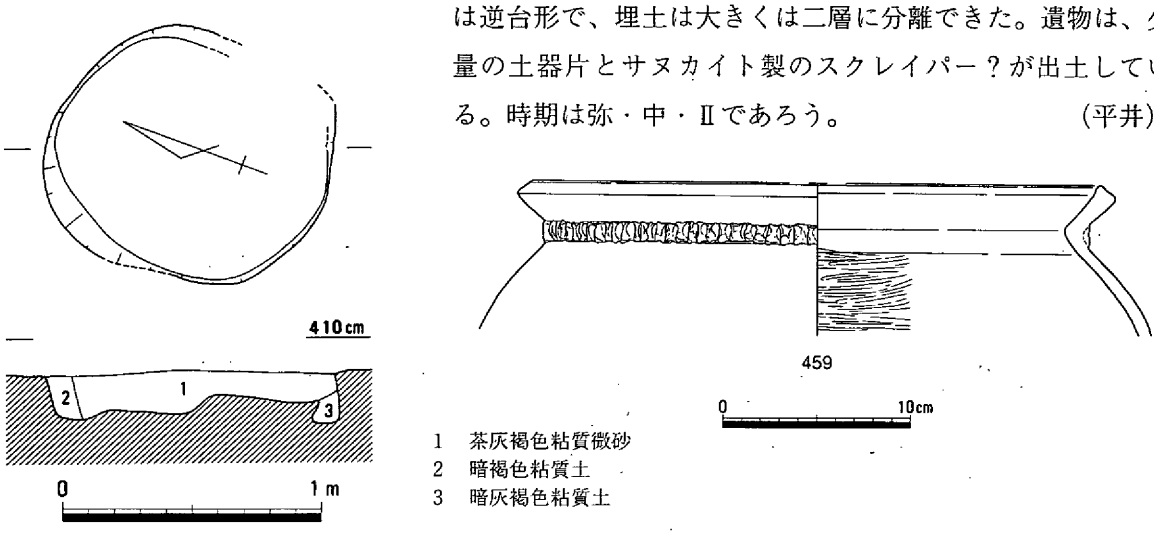
土壙127（第187図）

第２微高地のM24区において、調査区南壁に接して検出した。南側が調査区外にのびるため、全体の形状は明らかではないが、深さは約40cm残存していた。断面形は逆台形で、埋土は炭粒を少し含む褐灰色砂質土が一層のみであった。

埋土中からは少量の土器片が出土しており、時期は弥・中・Ⅱと考えている。　（平井）

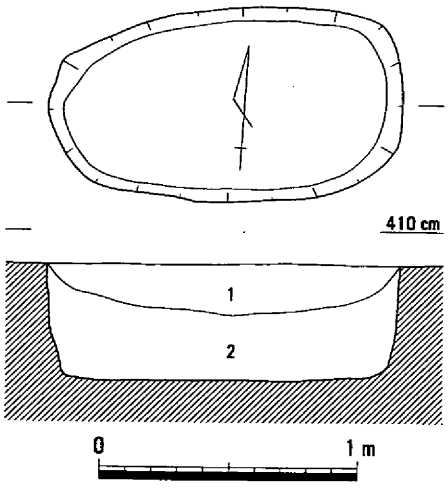
土壙128（第188図）

第２微高地のM24区において、土壙127の東に接して検出した。平面形は、南側が調査区外にのびるため明確ではないが、深さは約40cm残存していた。断面形は逆台形で、埋土は大きくは二層に分離できた。遺物は、少量の土器片とサヌカイト製のスクレイパー？が出土している。時期は弥・中・Ⅱであろう。　（平井）



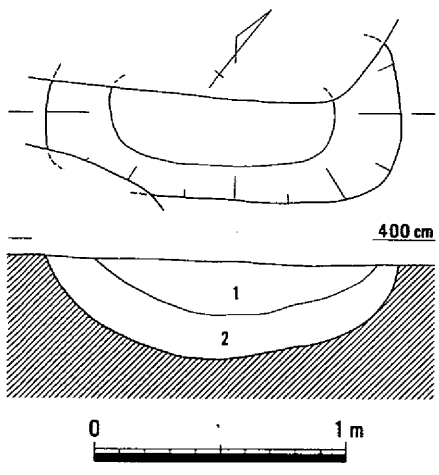
1　茶灰褐色粘質微砂
2　暗褐色粘質土
3　暗灰褐色粘質土

第184図　土壙124（1/30）・遺物



1　黄灰褐色砂質土
2　黄灰褐色砂質土（マンガンを含む）

第185図　土壙125（1/30）



1　黄色砂質土（炭粒・焼土粒を少し含む）
2　灰褐色粘質土（炭・焼土塊を多く含む）

第186図　土壙126（1/30）

土壙129（第189図）

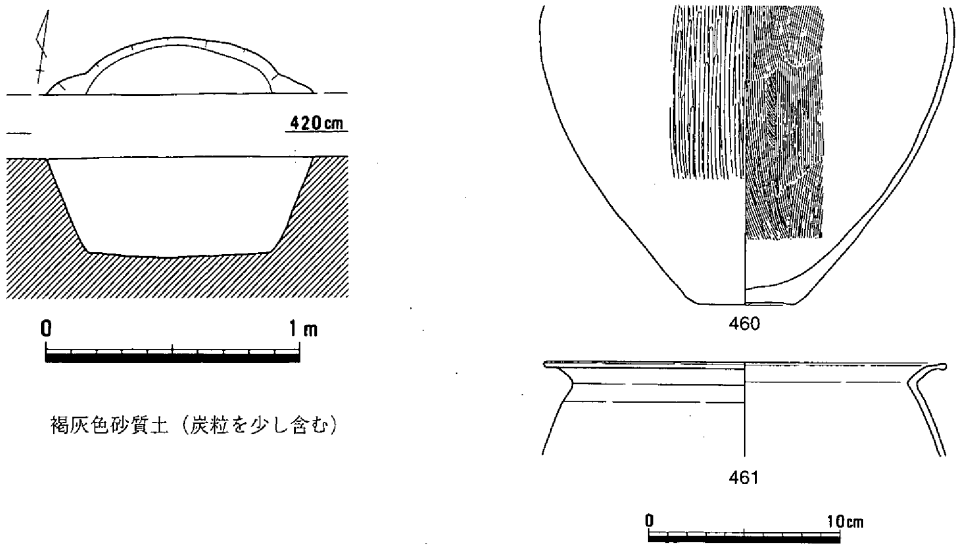
第２微高地のM24区の南半中央部に位置する。平面形は長さ約1.8m、幅約1.2mの長楕円形で、深さは45cm残存していた。断面形は不整形で、北側には段が認められた。埋土は二層に分離でき、上層には炭や焼土を含んでいた。

遺物は、少量の土器や土製紡錘車Ｃ26が出土している。462・464は甕、463は甕か鉢、465は台付鉢であろう。時期は明確ではないが、弥・中・Ⅰ～Ⅱと考えている。（平井）

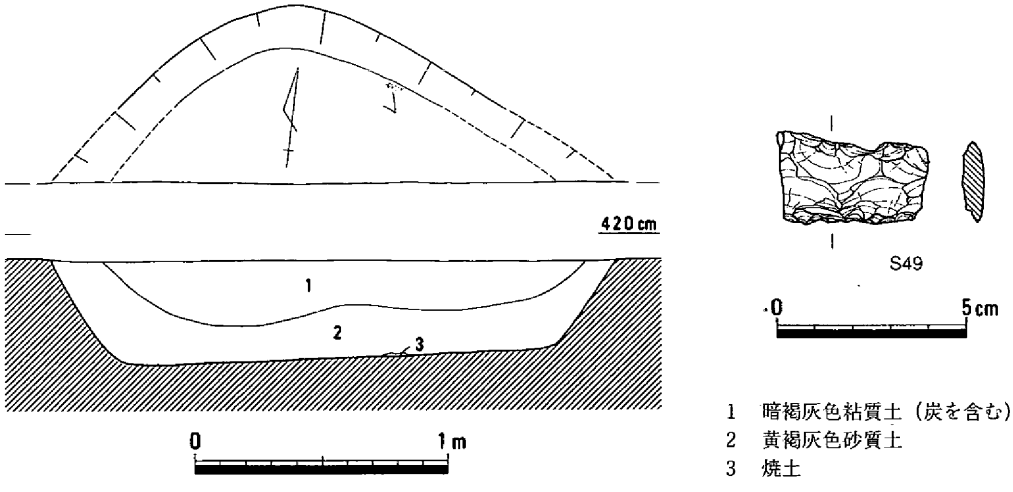
土壙130（第190～192図、写真57）

第２微高地のM24区、土壙129の南に接して検出できた。平面形は長さ約３m、幅約2.3mの長楕円形で、深さは72cm残存していた。他の土壙に比べて、規模が大きい点に特徴がある。断面形は皿形で、埋土は三層に分離できている。図の二層には炭や焼土を多く含んでおり、遺物はそれより上層で多く出土している。

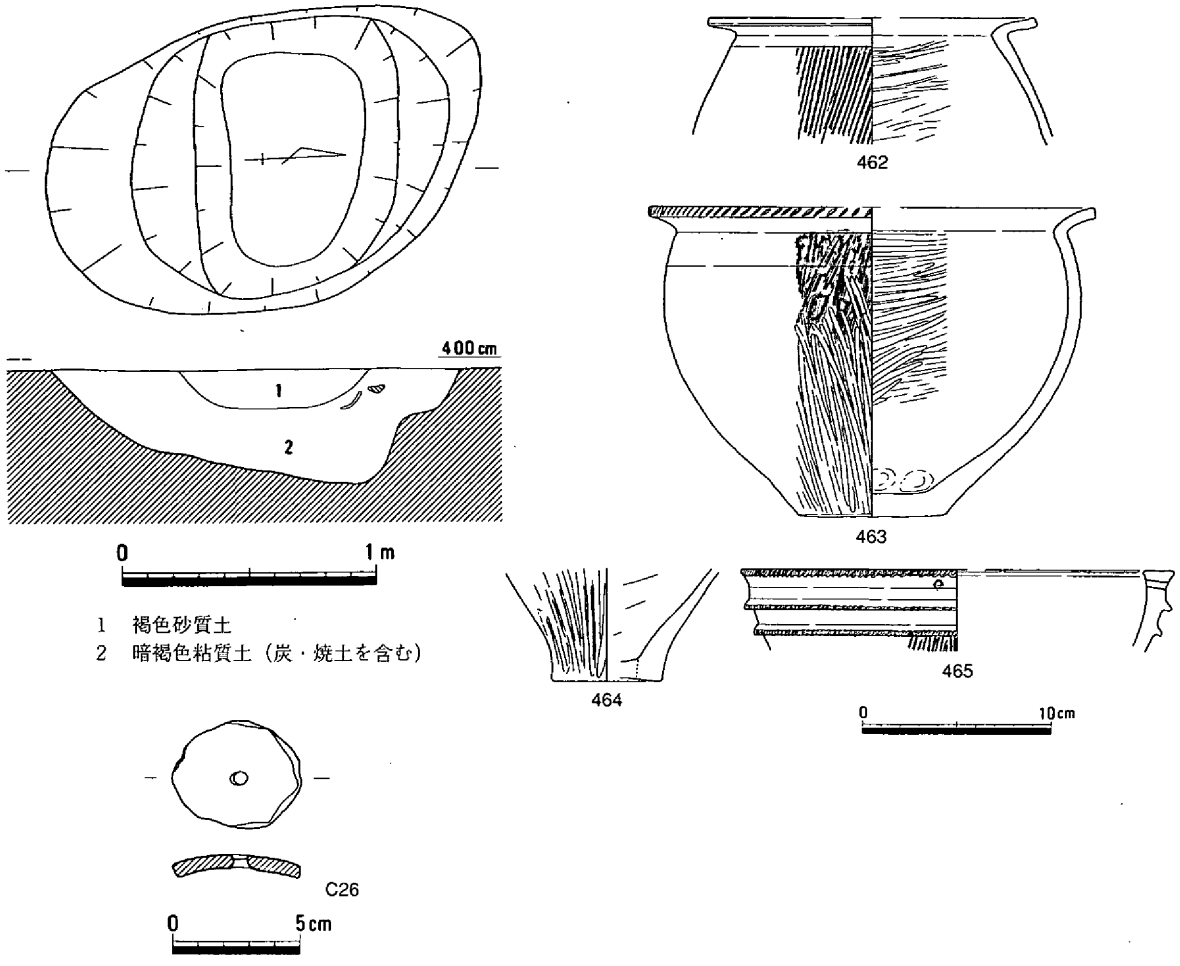
遺物は、多くの土器と石器がおもに１層から出土している。466～469は壺と考えている。466と467



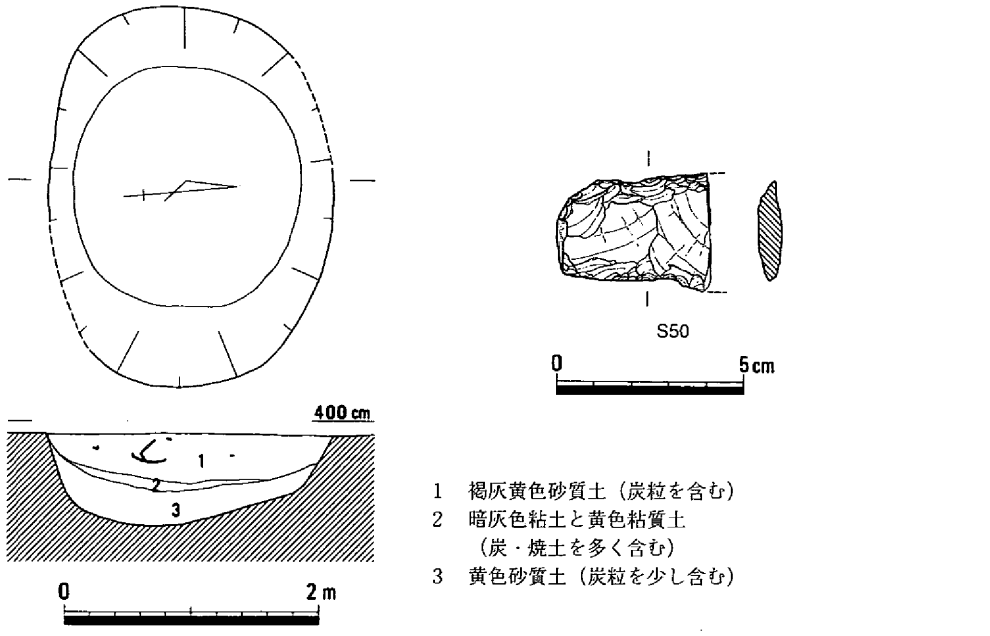
第187図　土壙127（1/30）・遺物



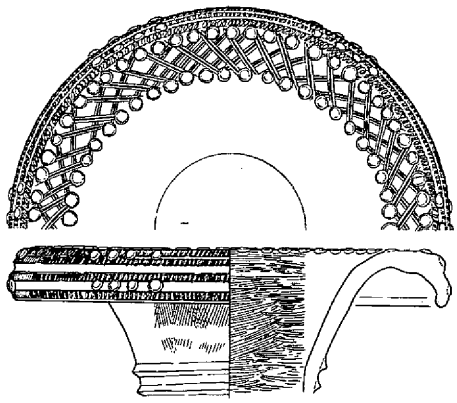
第188図　土壙128（1/30）・遺物

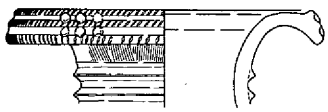


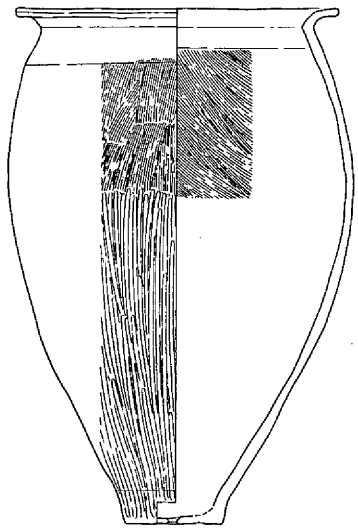
第189図　土壙129（1/30）・遺物

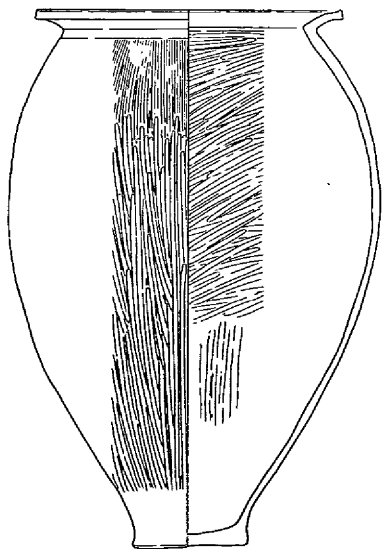


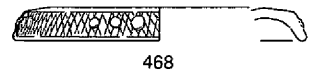
第190図　土壙130（1/60）・遺物（1）

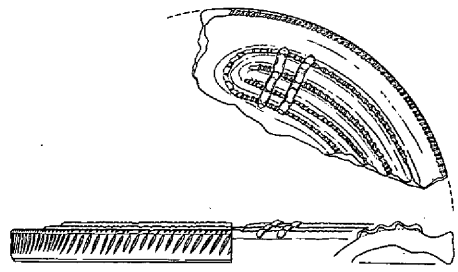

466

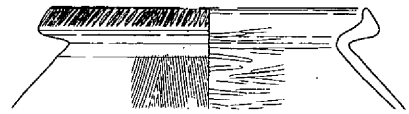

467

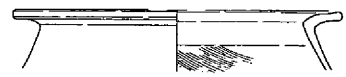

471

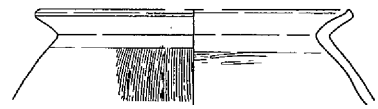

472

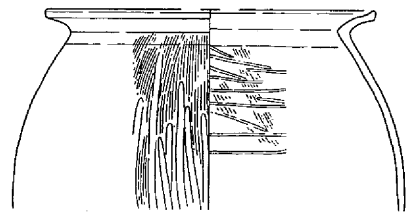

468

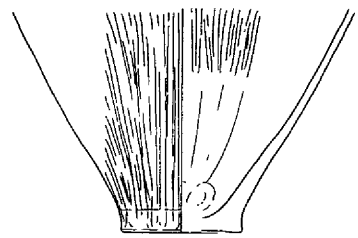

469

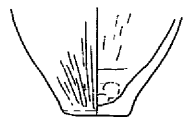

470

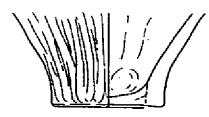

473


474


475

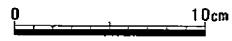

476


477

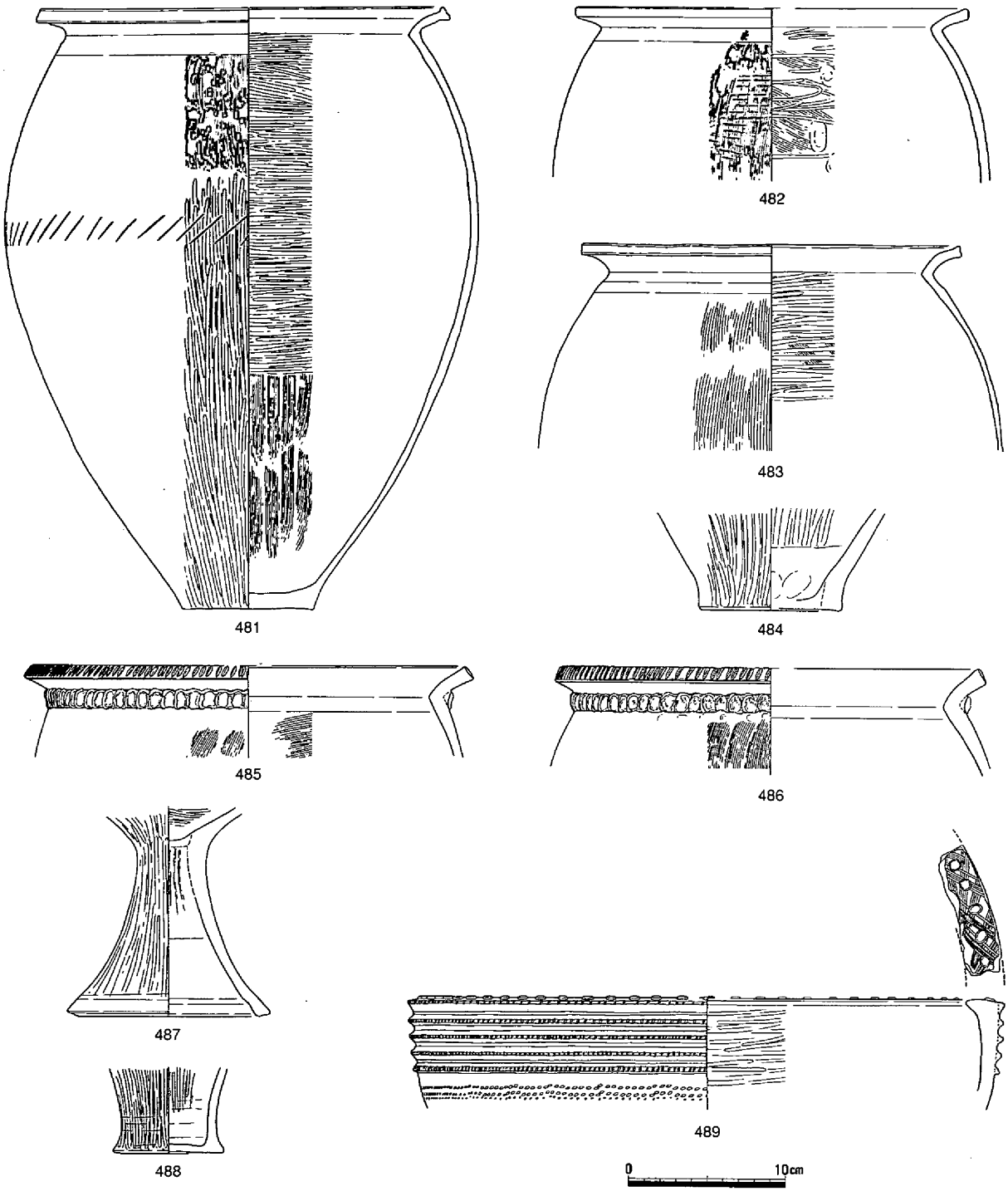

479

478

480



第191図　土壙130　遺物（２）



第192図　土壙130　遺物（3）

の口唇部外面には、凹線が二条施され、頸部には三角形の突帯が貼り付けられている。471～486は甕である。胴部内面上半の調整方法については、ミガキとハケメが認められるが、口縁部にはすべてヨコナデが施されているようである。487は高杯で、488はジョッキ形土器であろう。489は台付鉢である。S50はサヌカイト製のスクレイパーではなかろうか。

時期は、弥・中・Ⅱと考えている。　（平井）

土壙131（第193図）

第２微高地のM24区、土壙129の北東約３ｍに位置している。北側の一部は切られているが、平面形は約1.3×1.2ｍの楕円形で、深さは約40cm残存していた。断面形は逆台形で、底面はほぼ平らであった。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥・中・Ⅱと考えている。（平井）

土壙132（第194図）

第２微高地のM24区、土壙131の南東約２ｍに位置する。東側は古墳時代初頭の溝22に切られている。平面形は不整形で、深さは15cm残存している。埋土は暗褐色砂質土が一層のみである。

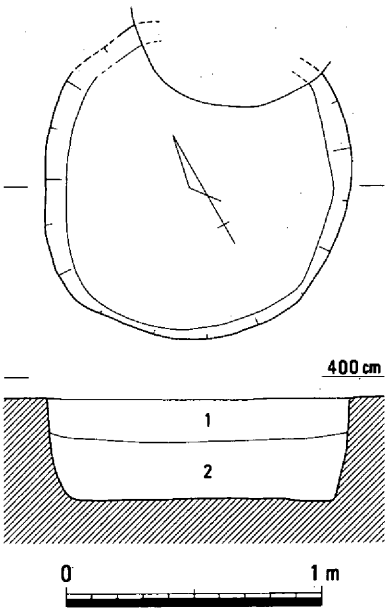
遺物は少量の土器が出土している。490は壺と考えており、口唇部外面には刻目が施されている。口縁部はヨコナデである。時期は弥・中・Ⅱではなかろうか。（平井）

土壙133（第195図）

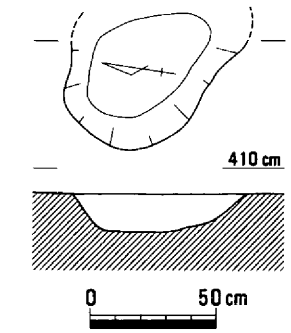
第２微高地のM24区、土壙132の東に接する。平面形は長さ約140cm、幅約60cmの長方形で、深さは約20cm残存していた。埋土は、炭や焼土粒を少し含む黄褐灰色砂質土が一層のみである。遺物は土器が少量出土しており、時期は弥・中・Ⅱと考えている。（平井）

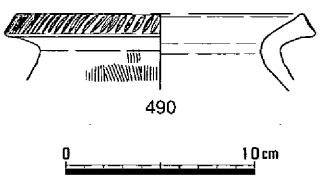
土壙134（第196図）

第２微高地のM24区、土壙133の南約３ｍに位置する。多くの部分が土器棺墓５によって切られているが、平面形は長さ約1.2m、幅約60cmの長楕円形で、深さは約10cm残存していた。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥・中・Ⅱと考えている。（平井）

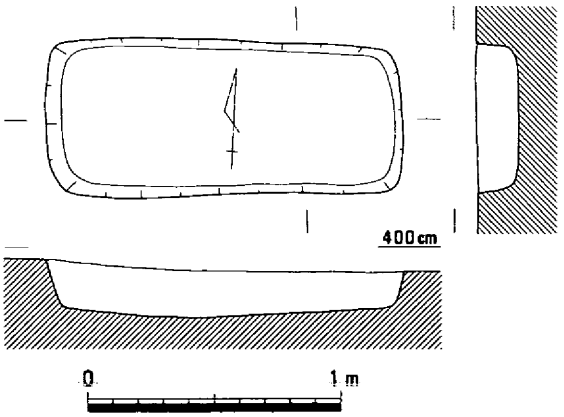


第193図　土壙131（1/30）





第194図　土壙132（1/30）・遺物



第195図　土壙133（1/30）

土壙135（第197図）

第２微高地のM24区南端部、土壙134の南に位置する。平面形は南端部の一部が切られているが、約70×40cmの長楕円形で、深さは約30cm残存していた。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥・中・Ⅱと考えている。（平井）

土壙136（第198図）

第２微高地のM24区南端部、土壙135の南に位置する。平面形は、約100×70cmを測る楕円形で、深さは約30cm残存していた。

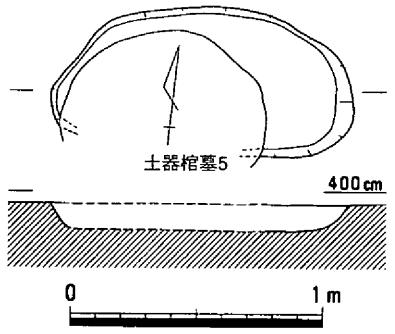
遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥・中・Ⅱと考えている。（平井）

土壙137（第199図）

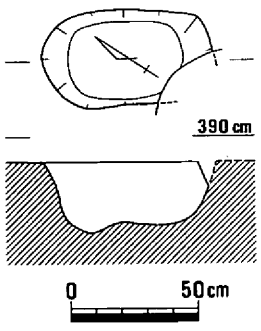
第２微高地のM24区南端部、土壙136の東隣りに位置する。平面形は約60×50cmの隅丸長方形で、深さは16cm残存していた。遺物は少量の土器片が出土している。時期は弥・中・Ⅰ～Ⅱではなかろうか。（平井）

土壙138（第200図）

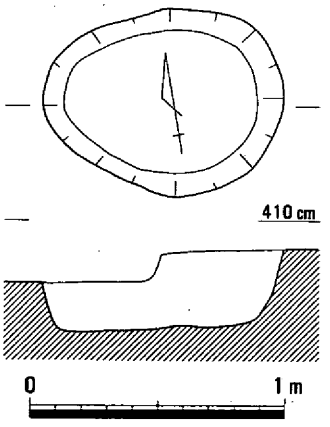
第２微高地のM24区南端部、土壙136の東約２ｍにおいて検出した。平面形は直径約50cmの不整円形で、深さは約10cm残存していた。遺物は少量の土器片が出土している。492は甕で、時期は弥・中・Ⅱと考えている。（平井）



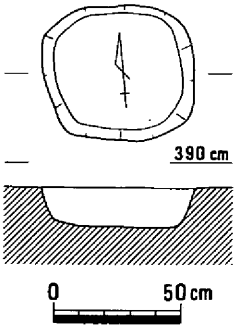
第196図　土壙134（1/30）

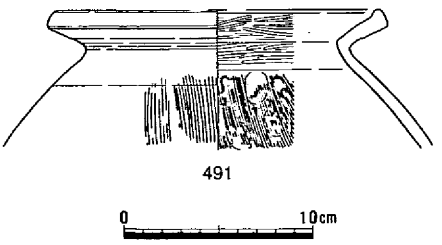


第197図　土壙135（1/30）



第198図　土壙136（1/30）



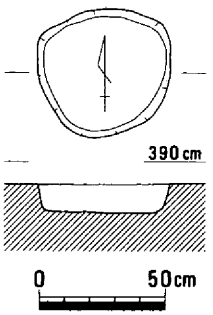


第199図　土壙137（1/30）・遺物

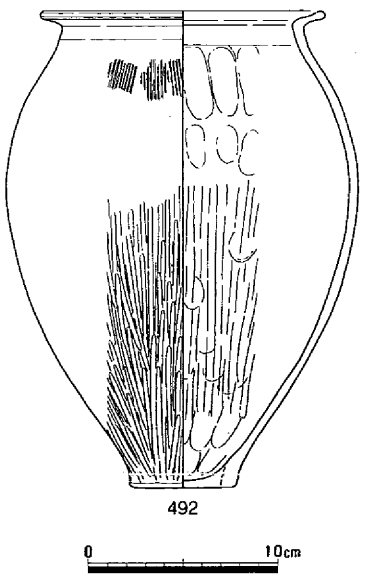
土壙139（第201図）

第２微高地のM24区南端部、土壙138の北約３ｍにおいて検出した。平面形は長さ約2.2ｍ、幅１ｍ前後の長楕円形で、南側が狭くなっている。断面形は逆台形で、底面は北側に傾斜していた。埋土は三層に分離できたが、図の３層には炭が多く含まれていた。

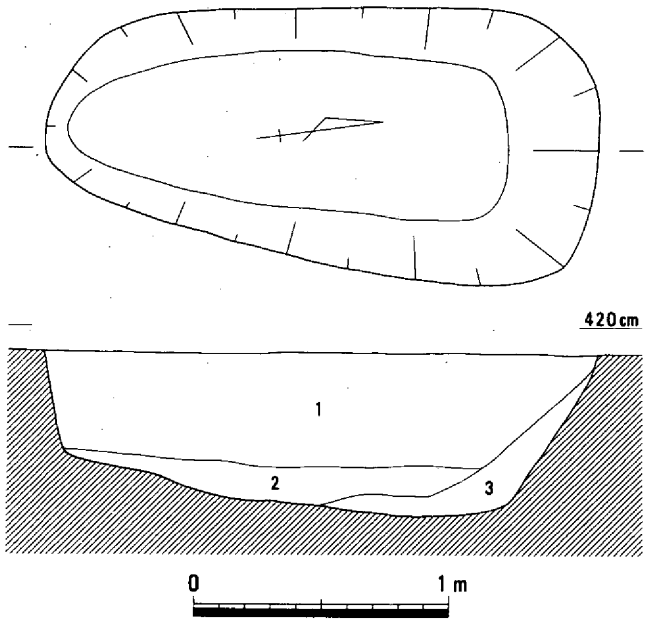
遺物は少量の土器片が出土している。493は壺と考えている。口唇部には、三条の凹線と円形浮紋が施されている。口縁部はヨコナデである。また肩部には貝殻腹縁による刺突紋が確認できる。494は甕で、口縁部はヨコナデである。時期は弥・中・Ⅱ～Ⅲと考えている。　（平井）



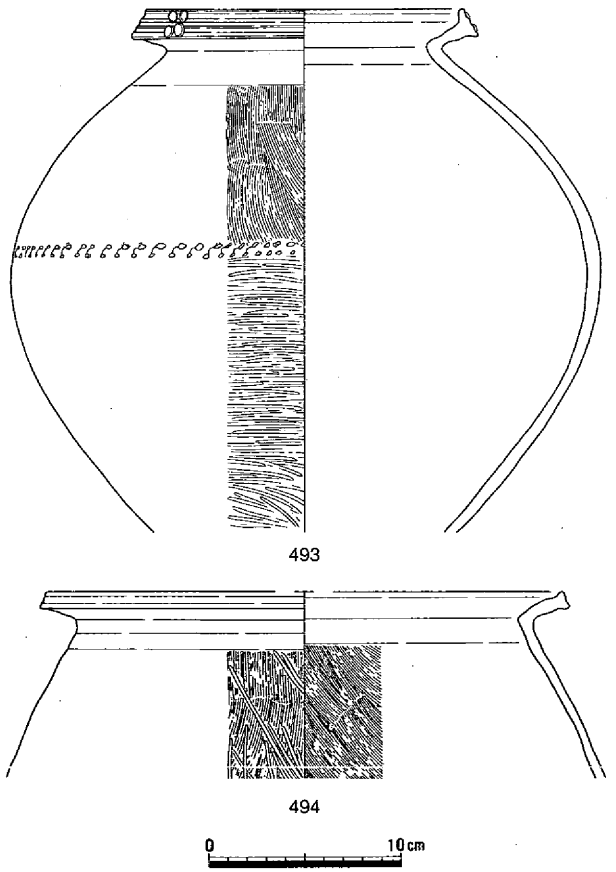
黄灰色砂質土



第200図　土壙138（1/30）・遺物



1　褐灰黄色砂質土
2　淡黄色粘質土
3　淡黄色粘質土（炭を多く含む）



第201図　土壙139（1/30）・遺物

土壙140（第202図）

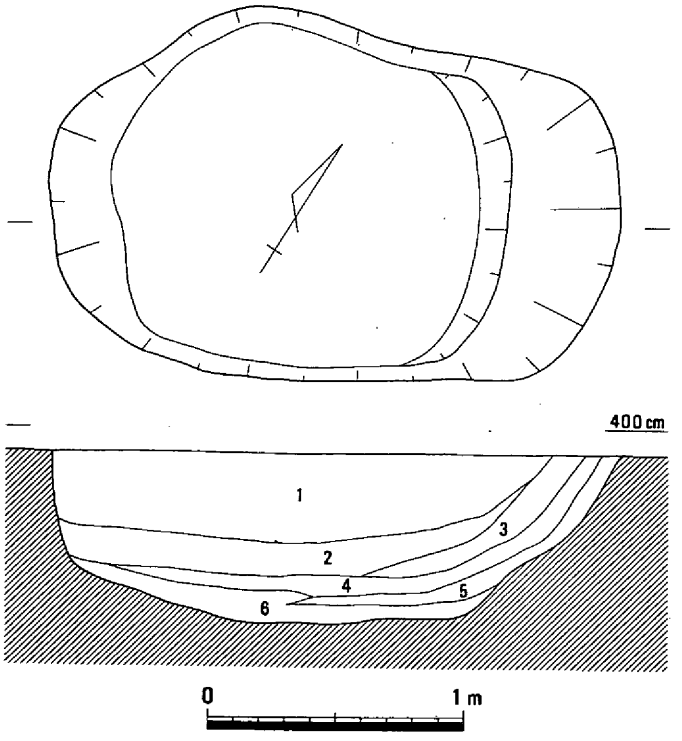
第２微高地のM24区の南端部、土壙139の東に接して検出できた。平面形は長さ約2.3m、幅約1.5mの隅丸長方形で、深さは約70cm残存していた。断面形は逆台形で、埋土は６層に分離でき、図の５層は炭の層であった。遺物は、少量の土器片が出土している。495は甕で、胴部内面上半にはミガキが施されている。時期は弥・中・Ⅱと考えている。（平井）

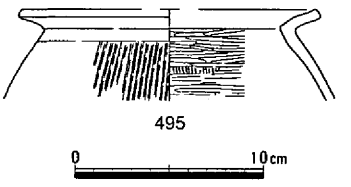
土壙141（第203図）

第２微高地のM24区南端部、土壙140の北に位置する。平面形は約70×60cmの長方形で、深さは25cmである。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥・中・Ⅱであろう。（平井）

土壙142（第204図）

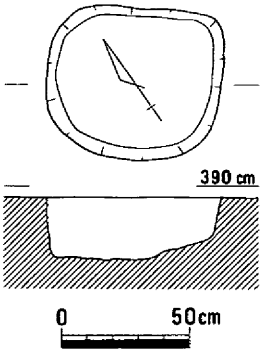
第２微高地のM24区南端部、土壙141に接して検出できた。平面形は約80×45cmの長方形で、東端は土壙141によって切られている。深さは約10cm残存していた。遺物は、土器が少量出土しており、時期は弥・中・Ⅱであろう。（平井）





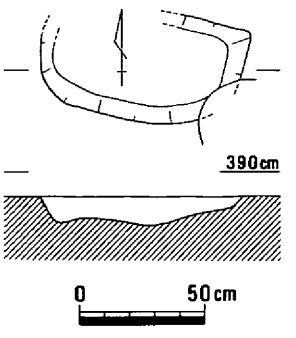
1　黄灰褐色砂質土
2　黄灰褐色砂質土（マンガンを含む）
3　淡褐色砂質土（焼土を含む）
4　淡黄灰褐色砂質土
5　炭
6　黄灰色粘質土

第202図　土壙140（1/30）・遺物



褐色砂質土

第203図　土壙141（1/30）



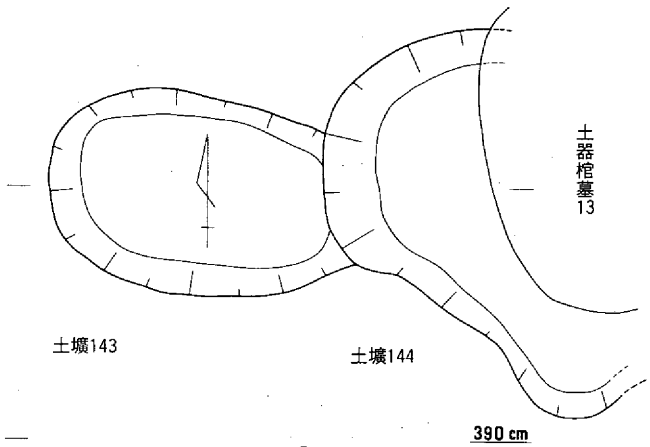
黄灰褐色砂質土

第204図　土壙142（1/30）

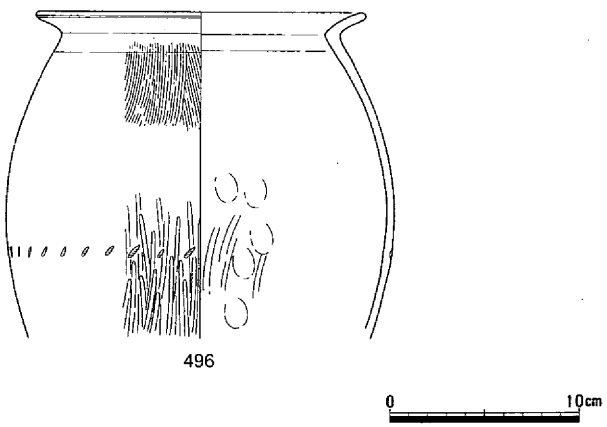
土壙143・144（第205図）

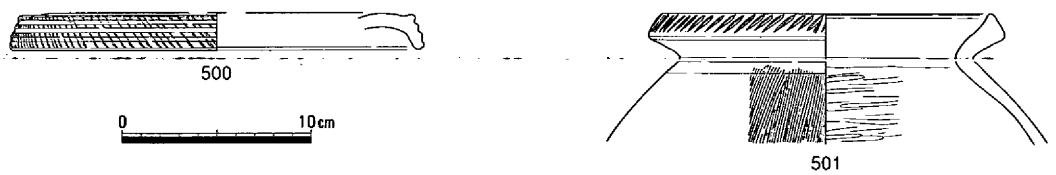
第２微高地のM24区、土壙141の東隣りに位置する。土壙143は約130×80cmの楕円形で、深さは約40cm残存していた。断面形は皿形である。埋土中からは少量の土器が出土している。496～499は甕で、497・498の口縁部にはヨコナデが施されている。

土壙144は土壙143を切っており、土器棺墓13に切られている。平面形は不整形で、深さは約50cm残存していた。埋土中からは少量の土器が出土している。500・501は壺と考えている。500の口唇部には、三条の凹線紋と刻目が施されている。501の口唇部にも刻目が施されており、胴部外面はタテのハケメ、内面はミガキである。時期はいずれも弥・中・Ⅱと考えている。　（平井）



1　暗褐灰色粘質土（炭・焼土を含む）
2　黄灰色粘質土
3　暗灰色砂質土
4　暗褐色粘質土（炭・焼土を含む）
5　灰黄色砂質土
6　褐色粘質土（黄灰色土を含む）
7　黄灰色砂質土
8　暗褐色粘質土
9　暗褐色粘質土（黄灰色土を含む）





第205図　土壙143・144（1/30）・遺物

土壙145（第206図）

第２微高地のM24区南端部、土壙143・144の南に接して検出できた。平面形は直径１ｍ前後の円形で、深さは約30cm残存している。断面形は逆台形で、埋土は二層に分離できた。下層には炭が堆積しており、上層には角礫が埋まっていた。

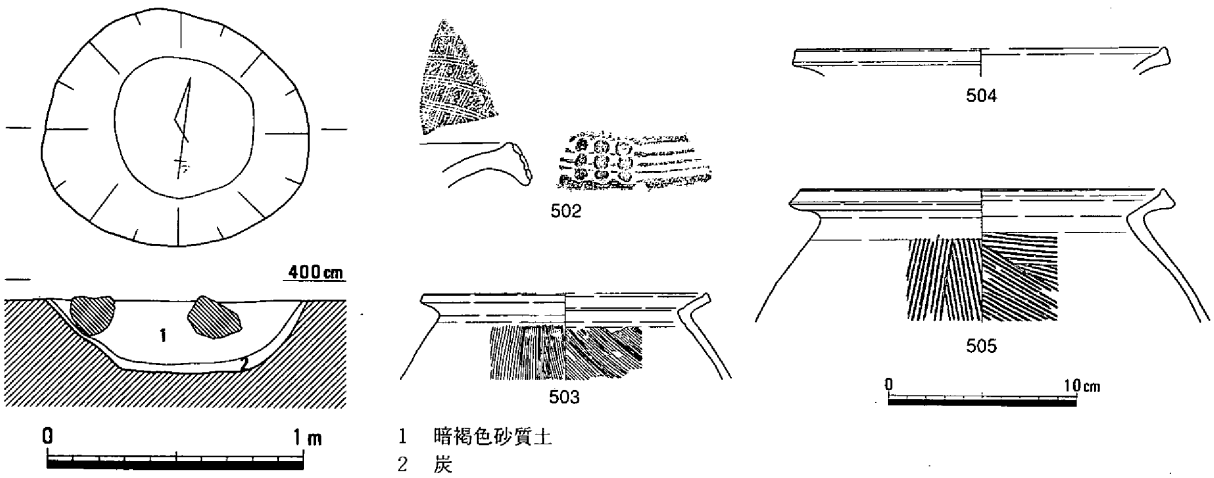
遺物は少量の土器片が出土している。502は壺で、口唇部には四条の凹線紋と円形浮紋が、また口縁部内面には斜格子紋が施されている。503～505は甕で、口縁部はヨコナデのみである。時期は弥・中・Ⅱと考えている。（平井）

土壙146（第207図）

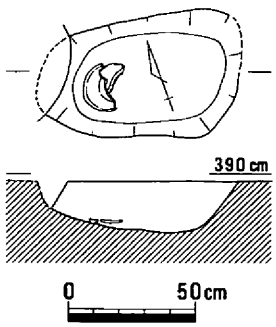
第２微高地のM24区南端部、土壙145に一部切られるかたちで検出できた。平面形は、約80×50cmの不整長方形で、深さは約20cm残存していた。断面形は逆台形にちかく、埋土は炭を含む暗褐色砂質土が一層のみであった。遺物は少量の土器が出土している。506は壺で、口唇部には二条の凹線紋と円形浮紋が、また頸部には突帯が貼り付けられている。時期は弥・中・Ⅱであろう。（平井）

土壙147（第208図）

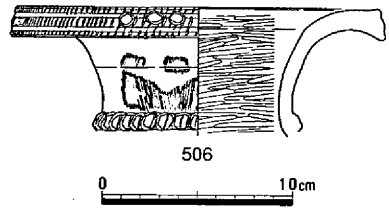
第２微高地のM24区南端部、土壙140の南約２ｍに位置している。平面形は直径約90cmの円形で、



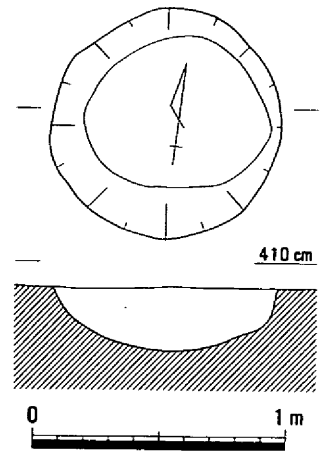
第206図　土壙145（1/30）・遺物



暗褐色砂質土（炭を含む）



第207図　土壙146（1/30）・遺物



暗褐色砂質土

第208図　土壙147（1/30）

深さは25cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は暗褐色砂質土が一層のみであった。遺物は土器が少量出土しており、時期は弥・中・Ⅱではなかろうか。　（平井）

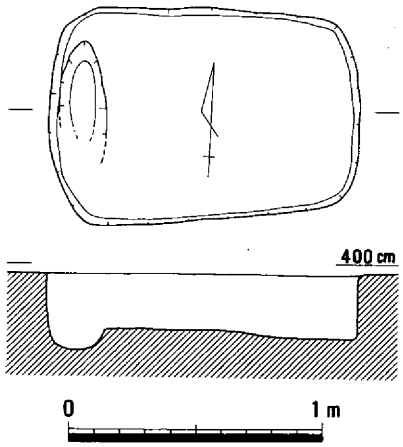
土壙148（第209図）

第２微高地M24区の調査区南端部に位置する。平面形は長さ123cm、幅85cmの長方形で、深さは25cm残存していた。埋土は、暗褐色砂質土が一層のみであった。壁は垂直にちかく立ち上がっており、底面はほぼ平らである。また東端には小口穴のような凹みが確認できているが、墓になるかどうかは明確にならなかった。

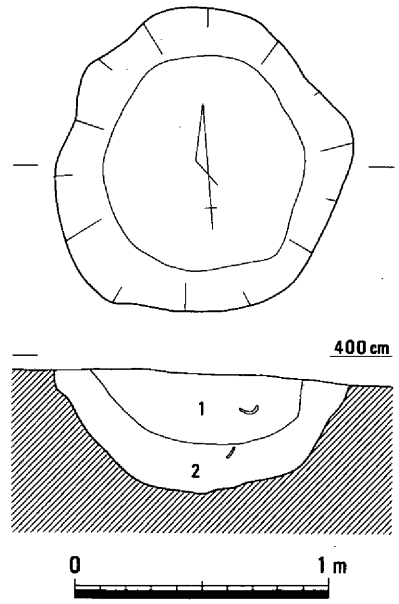
遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥・中・Ⅱと考えている。　（平井）

土壙149（第210図）

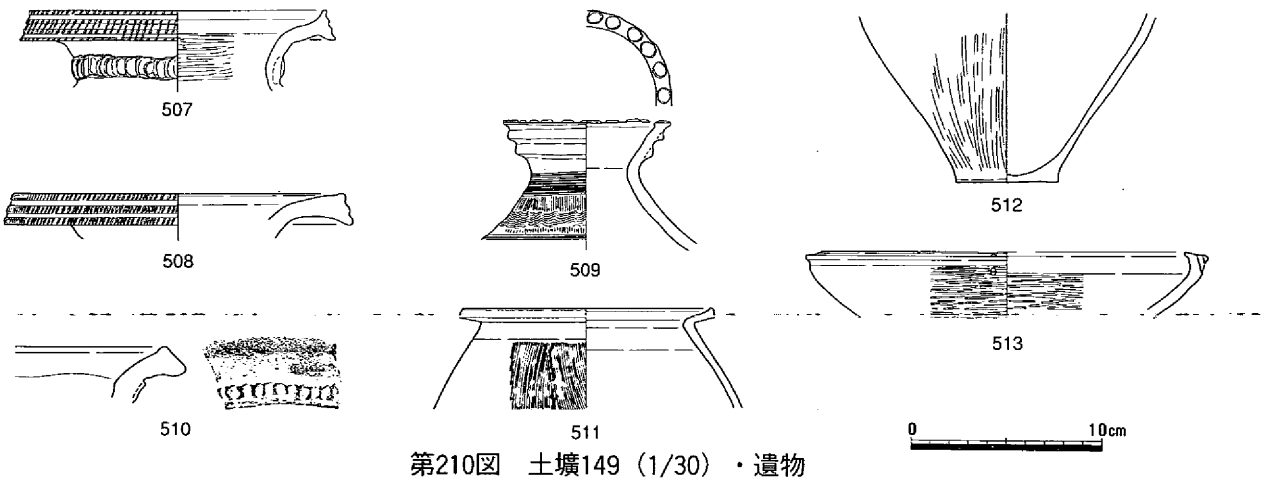
第２微高地のM24区、土壙148の北約２ｍに位置する。平面形は約120×110cmの楕円形で、深さは約50cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は二層に分離でき、いずれも炭や焼土を含んでいた。遺物は少量の土器片が出土している。507～509は壺である。507・508の口唇部には凹線紋が施されてい



第209図　土壙148（1/30）



1　暗褐色砂質土（炭・焼土を含む）
2　褐色砂質土（黄褐色土・炭・焼土を含む）



第210図　土壙149（1/30）・遺物

る。509の口縁部には突帯が貼り付けられ、胴部外面上半にはクシ描き紋が施されている。511・512は甕、513は高杯である。時期は弥・中・Ⅱであろう。　（平井）

土壙150（第211図）

竪穴住居７に切られる状態で検出された。規模は長径211cm、短径150cmを測り、平面形は隅丸方形を呈している。深さは検出面から35cmを測り、底面は平坦である。埋土は４層に区分されるが、２層には炭、焼土が含まれていた。遺物は土器が出土している。甕514～518は口縁部が「く」の字状を呈するものである。調整は口縁外面はナデを、胴上部外面はタテハケメ、内面はヨコハケメが施されている。胴下部～底部の内外面はタテハケメによる調整がなされている。520はジョッキ形の器種で、口縁部に刻目、胴部に列点文がみられる。時期は土器からみて弥・中・Ⅱと思われる。　（松本）

土壙151（第212図）

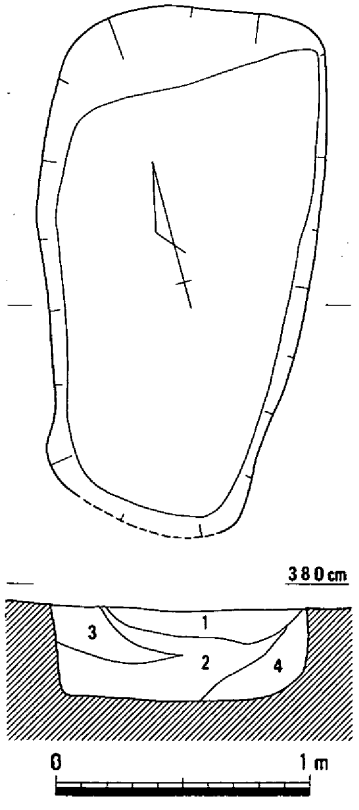
竪穴住居37に切られる状態で検出された。規模は長径272cm、短径198cmを測り、平面形は不整楕円形を呈する。深さは検出面から25cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は２層に区分された。出土遺物は無いが、切り合い関係からみて、時期は弥・中・Ⅱと思われる。　（松本）

土壙152（第213図）

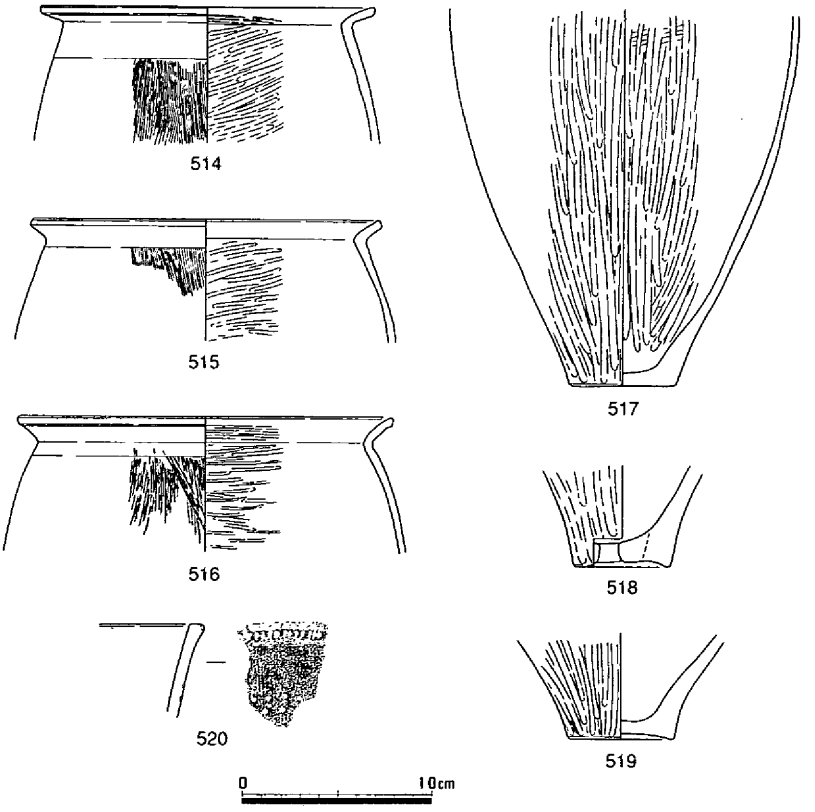
土壙151の北東寄りで検出された。規模は長径145cm、短径121cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは検出面から19cmと浅いが、底面は平坦である。埋土は２層に区分される。時期を決める遺物の出土は無いが、弥・中・Ⅱと思われる。　（松本）

土壙153（第214図）

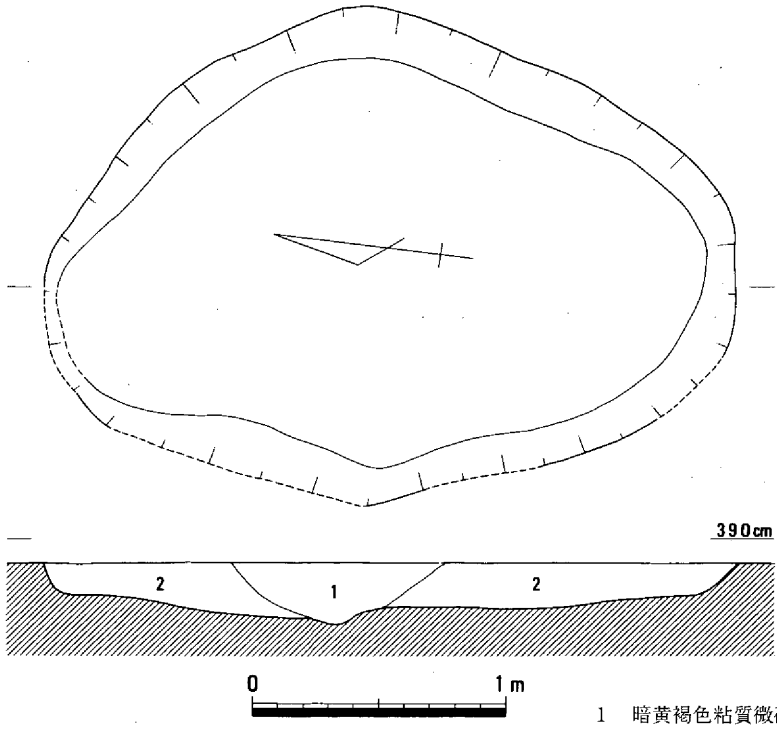
他の遺構に切られてはいるが、規模は長径119cm、短径約71cmを測



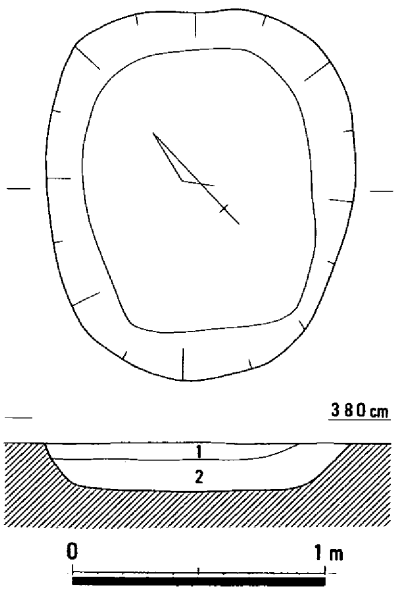
1　茶褐色粘質微砂
2　暗茶褐色粘質微砂（炭・焼土を含む）
3　黄茶褐色砂質土（焼土を含む）
4　茶褐色砂質土



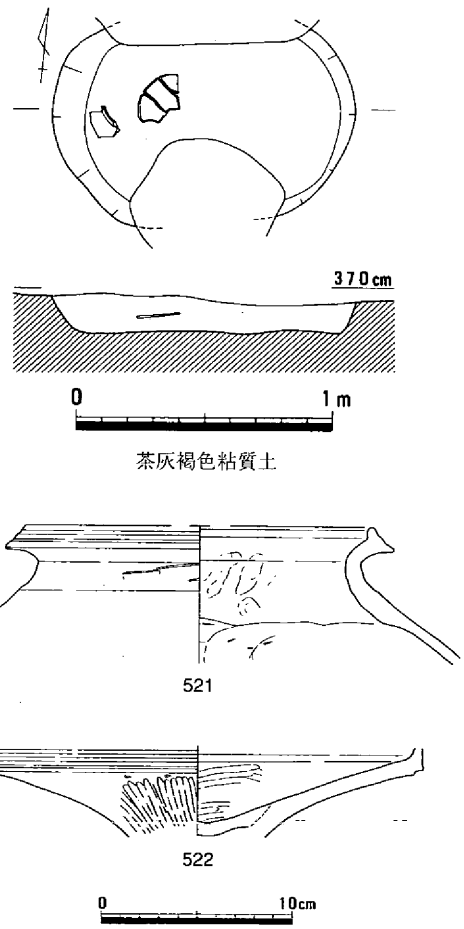
第211図　土壙150（1/30）・遺物



第212図　土壙151（1/30）



第213図　土壙152（1/30）



第214図　土壙153（1/30）・遺物

る楕円形の遺構である。深さは検出面から15cmと浅いが、底面は平坦である。遺物は甕521、高杯522が出土している。521は口径約18cmを測り、端面には凹線がみられる。522は杯部で、口縁部には凹線が施され、内外面にはヘラミガキが施されている。時期は弥・中・Ⅲと思われる。　（松本）

土壙154（第215図）

竪穴住居７に切られた状態で検出された遺構である。規模は長径135cm、短径98cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは検出面から26cmを測り、底面は平坦である。埋土は黄褐色系の粘質土が２層に区分された。出土遺物はないが、時期は弥・中のものと思われる。　（松本）

土壙155（第216図）

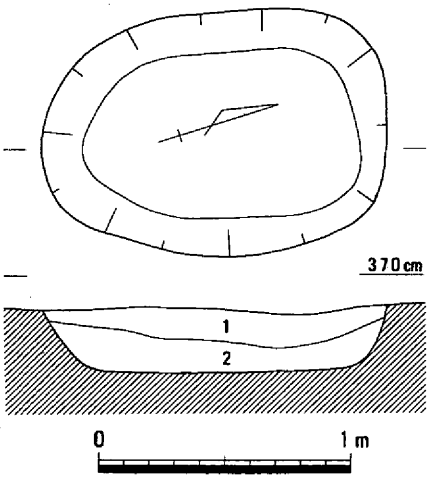
掘立柱建物１に切られる状態で検出された遺構である。規模は長径250cm、短径128cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは検出面から13cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は１層である。出土遺物は無いが、検出状態からみて時期は弥・中・Ⅱと思われる。　（松本）

土壙156（第217図）

土壙155に切られる状態で検出された。規模は長径約90cm、短径76cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは13cmを測る。出土遺物は無いが、検出状態からみて時期は弥・中・Ⅱと思われる。　（松本）

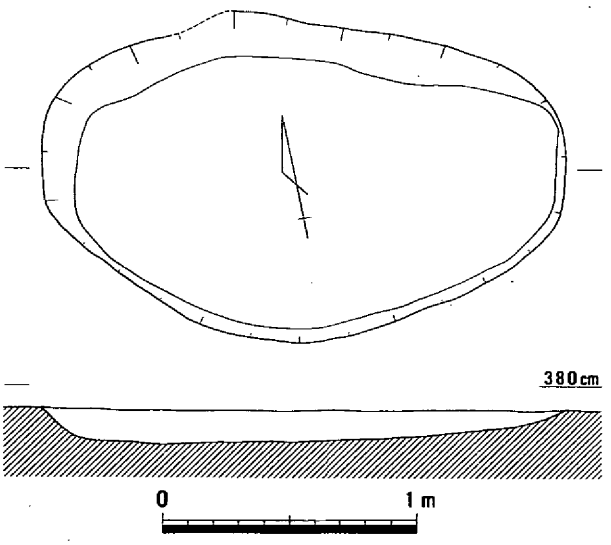
土壙157（第218図）

土壙158と切り合う遺構である。規模は長径111cm、短径81cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは検出面から17cmを測り、底面はほぼ平坦である。遺物は土器（壺、甕）が出土している。524は波状文、沈線が10条施文されている。壺の胴部と思われる。525・526は口縁部が「く」の字状を呈する甕である。時期は遺物からみて弥・中・Ⅱと思われる。　（松本）



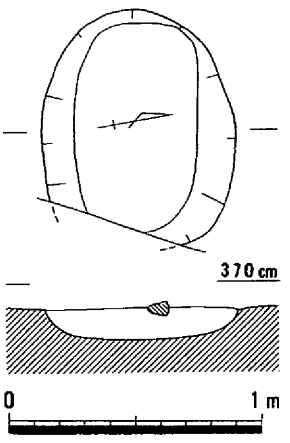
1　暗黄褐色粘質土
2　黄褐色粘質土

第215図　土壙154（1/30）



淡黄褐色粘質土（茶褐色土をごくわずかに含む）

第216図　土壙155（1/30）



黄褐色粘質土

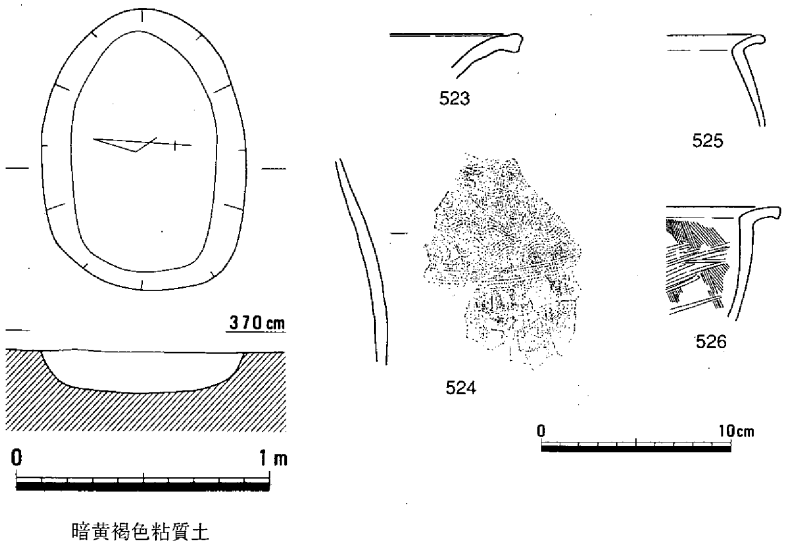
第217図　土壙156（1/30）

土壙158（第219図）

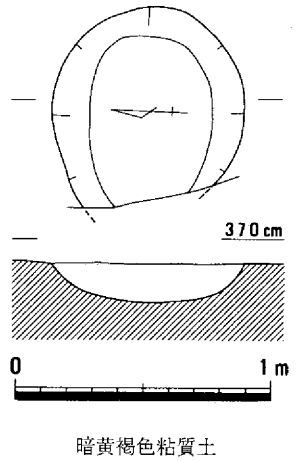
土壙157と切り合う遺構である。規模は長径が76cmまで確認している。短径は76cmを測る。平面形は楕円形を呈すると思われる。深さは検出面から15cmを測り、底面はほぼ水平であるが、断面の形状は皿状を呈する。遺物は無いが、土壙157との関係からみて時期は弥・中・Ⅱと思われる。　（松本）

土壙159（第220図）

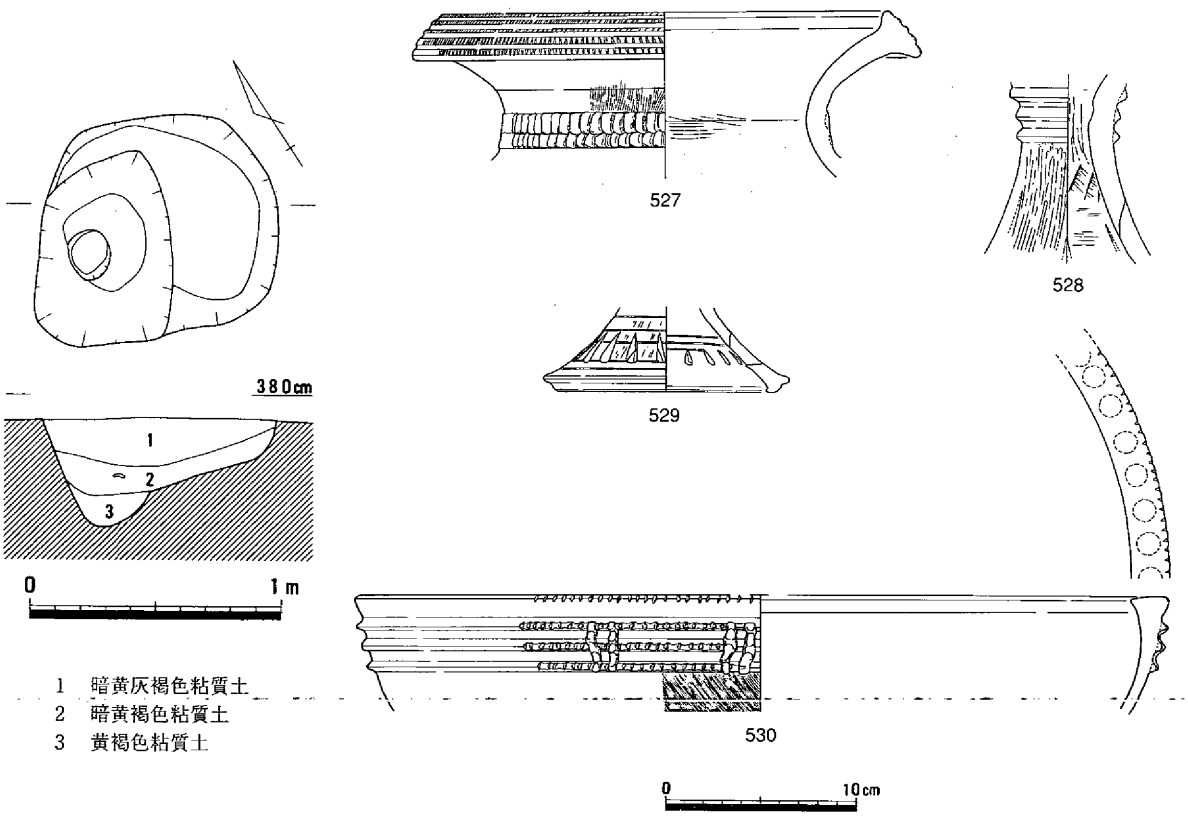
掘立柱建物１の南東において検出された遺構である。恐らく柱穴を切ってつくられた遺構と思われ



第218図　土壙157（1/30）・遺物



第219図　土壙158（1/30）



第220図　土壙159（1/30）・遺物

る。規模は長径94cm、短径88cmを測り、平面形は不整方形を呈し、深さは検出面から30cmを測る。底面は東側が深くなる。遺物は土器（壺、高杯）が出土している。527は口径23.3cmを測る壺である。口縁部に刻目、頸部凸帯に指頭圧痕文をもつ。528～530は高杯である。530は口縁部上面に円形浮文、刻目など多彩な文様が施文されている。時期はこれらの遺物から弥・中・Ⅱと思われる。　（松本）

土壙160（第221図）

土壙159の東隣において検出された遺構である。規模は長径157cm、短径127cmを測り、平面形は不整円形を呈する。深さは検出面から39cmを測り、断面形状は皿状を呈している。埋土は2層に区分される。上層は暗黄褐色、下層には黄灰色の粘質土で埋まっていた。遺物ではほぼ完形の鉢531が出土している。遺物からみて時期は弥・中と思われる。

（松本）

土壙161（第222図）

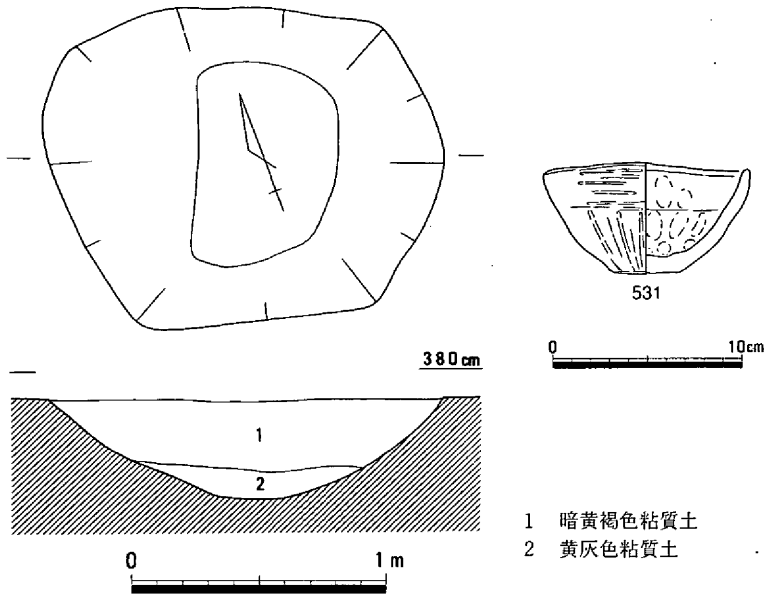
土壙162の西隣において検出された遺構である。一部切られているが、長径104cm、短径70cmを測り、平面形は隅丸方形を呈する。深さは検出面から24cmを測り、底面は平坦である。埋土は3層に区分された。時期は弥・中・Ⅲと思われる。（松本）

土壙162（第223図）

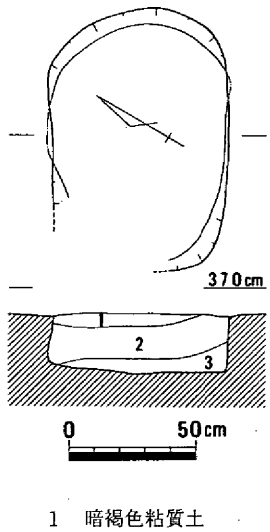
竪穴住居40に切られた遺構である。上部はかなり削平を受けているが、規模は長径157cm、短径97cmを測り、平面形は長楕円形を呈する。深さは18cmを測り、底面中央部はやや高い。遺物は無いが、時期は弥・中のものと考えられる。　（松本）

土壙163（第224図）

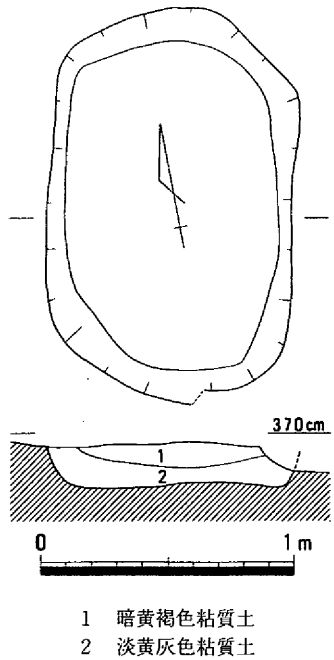
土壙159の南に位置する。他の遺構に切られてはいるが、規模は長径147cm、短径98cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは48cmを測り、底面は西側に向けて低くなる。埋土は3層に区



第221図　土壙160（1/30）・遺物



第222図　土壙161（1/30）



第223図　土壙162（1/30）

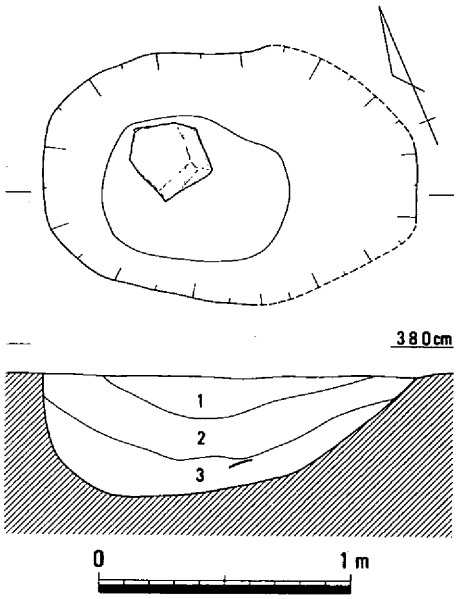
分される。底部中央には角礫が置かれていた。時期は弥・中・Ⅲと思われる。　（松本）

土壙164（第225図）

土壙163の南東に位置する。上部はかなり削平されているが、規模は長径109cm、短径93cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは検出面から19cmを測り、底面は平坦である。埋土は２層に区分される。出土遺物は無いが、時期は弥・中と思われる。　（松本）

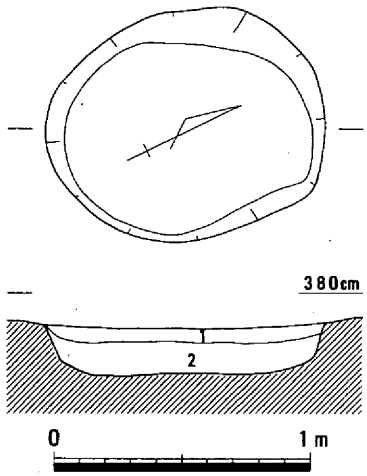
土壙165（第226図）

袋状土壙45に切られた状態で検出された遺構である。現存の規模は長径98cm、短径76cm、深さは37cmを測る。平面形は恐らく長楕円形を呈し、底面は平坦と思われる。出土遺物としては土器がある。



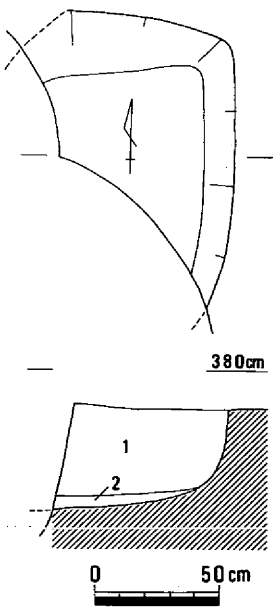
1　黄褐色粘質土
2　暗黄褐色粘質土（炭を多く含む）
3　黄灰色粘質土

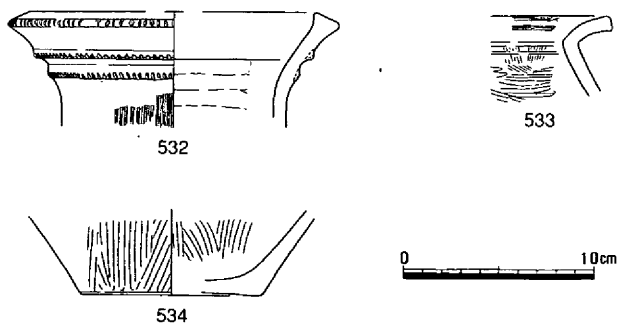
第224図　土壙163（1/30）



1　暗茶褐色粘質土
2　黄褐色粘質土

第225図　土壙164（1/30）





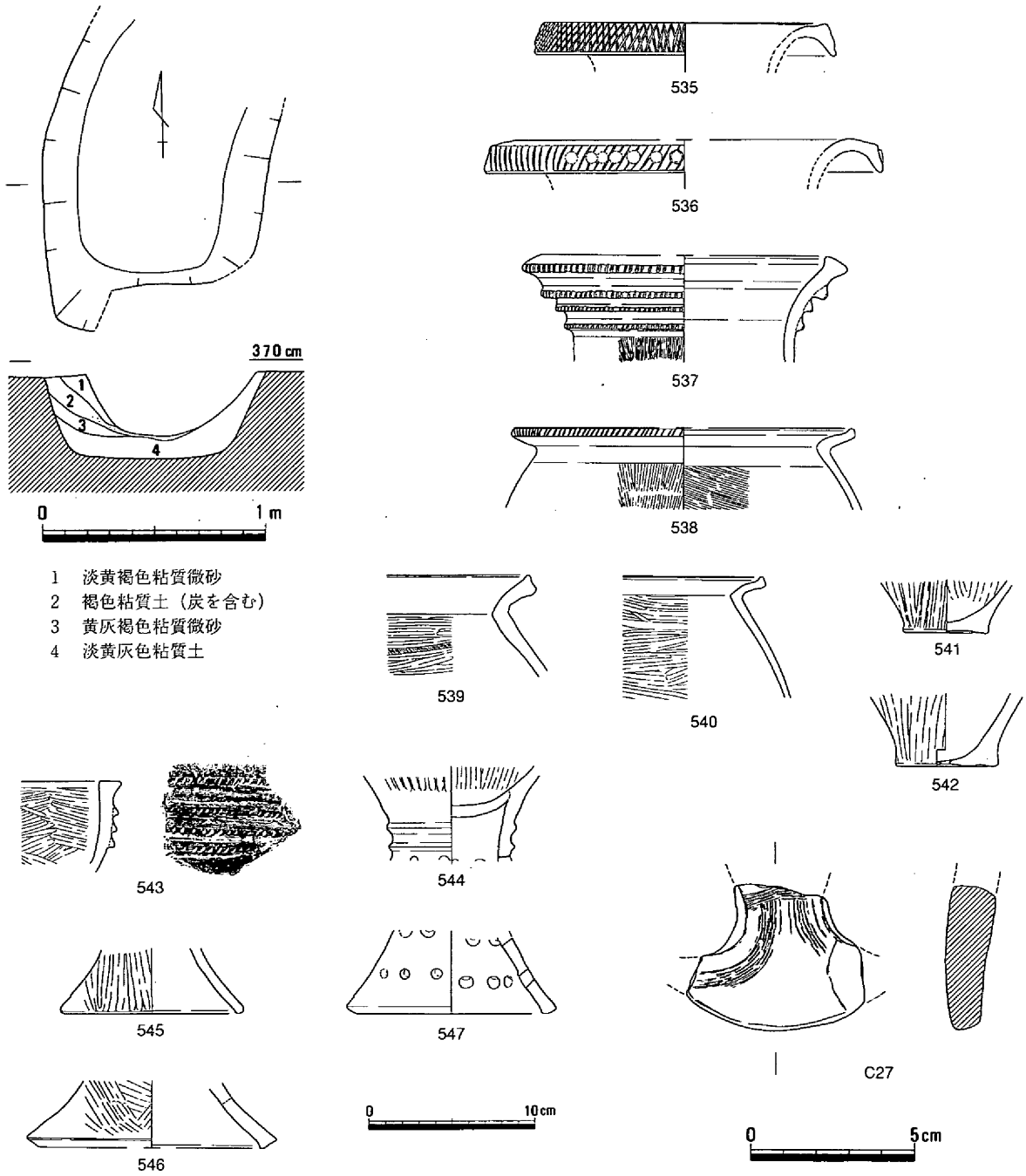
1　淡黄褐色粘質土
2　淡茶灰褐色粘質土

第226図　土壙165（1/30）・遺物

532・533は壺の口縁部である。時期は遺物からみて、弥・中・Ⅱと思われる。　（松本）

土壙166（第227図、写真57）

袋状土壙45に切られる状態で検出された遺構である。現存の規模は長径120cm、短径102cm、深さは検出面から37cmを測る。平面形は長楕円形ないし長方形を呈するものであろう。底面は平坦である。埋土は４層に区分されるが、２層には炭が含まれていた。遺物は土器、土製品などが出土している。535～537は壺、538～542は甕、543～547は高杯である。壺は口縁部に刻目、斜格子、円形浮文がみられる。Ｃ27は分銅形土製品である。時期は弥・中・Ⅱと思われる。　（松本）



第227図　土壙166（1/30）・遺物

土壙167（第228図）

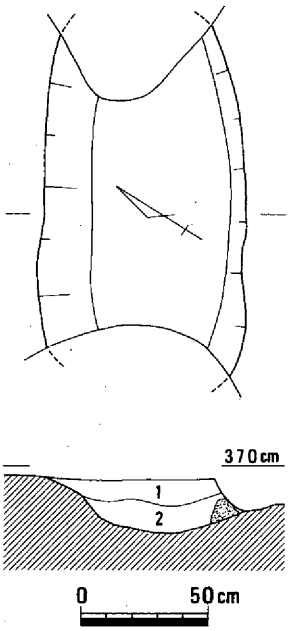
土壙169の北西の位置で検出された遺構である。他の遺構に切られているが、現存の規模は長径123cm、短径80cm、深さは21cmを測る。平面形は長楕円形を呈する。時期は弥・中・Ⅲと思われる。（松本）

土壙168（第229図）

他の遺構に切られているが、長径142cm、短径91cmを測り、平面形は不整楕円形を呈する。深さは検出面から68cmを測り、底面は南側に傾斜している。埋土は３層に区分されるが、特に最下層からは炭が多く出土している。遺物は土器が出土している。壺548は口縁部に刻目を施した長頸壺である。549～551は甕の口縁部で、「く」の字状を呈するが、端部が上方へ少し拡張する。高杯553は脚部である。凸帯に指頭圧痕文を施すとともに、二段の透し孔がみられた。これらの遺物から時期は弥・中・Ⅱと思われる。（松本）

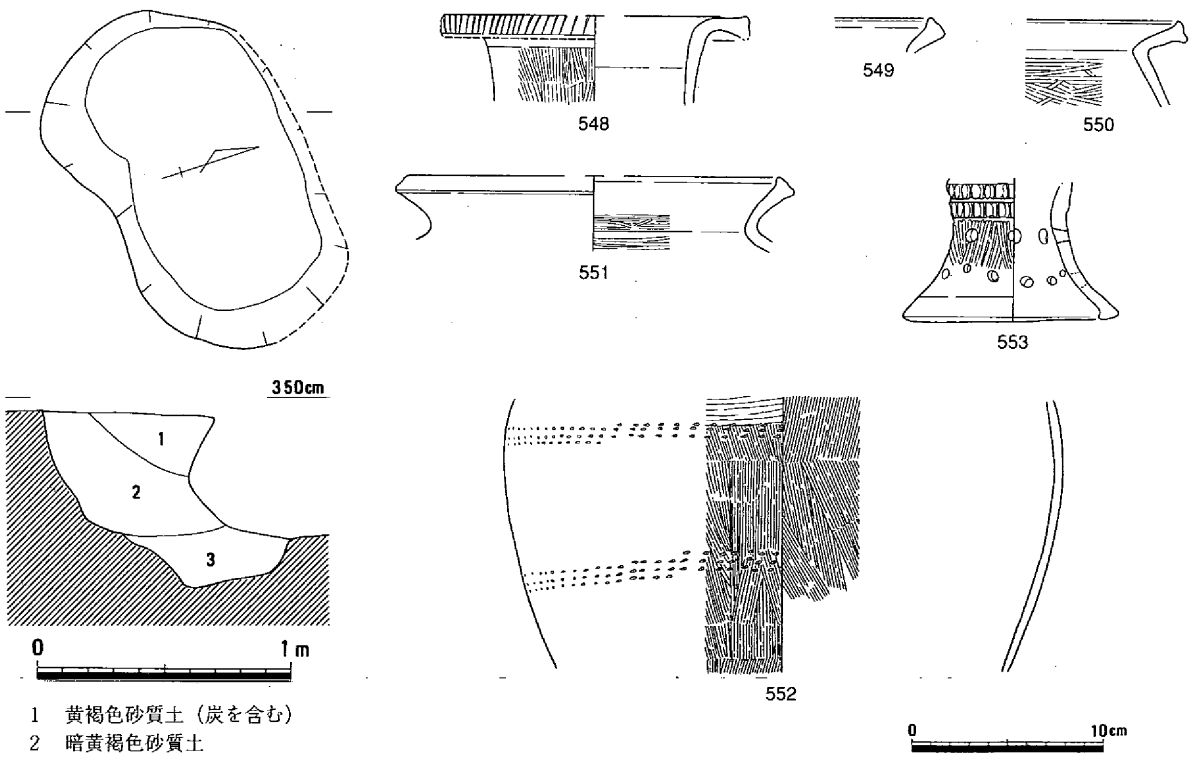
土壙169（第230図、写真57）

土壙171・172に近接する位置で検出された。規模は長径180cm、短径174cmを測り、平面形は円形である。深さは30cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は２層に区分される。主な遺物として土器では壺554・555、甕556がある。石器では打製石包丁Ｓ51がある。Ｓ51は遺構内に置かれた状態で出土した。大型の剥片を用いて製作したものである。時期は弥・中・Ⅱと思われる。（松本）



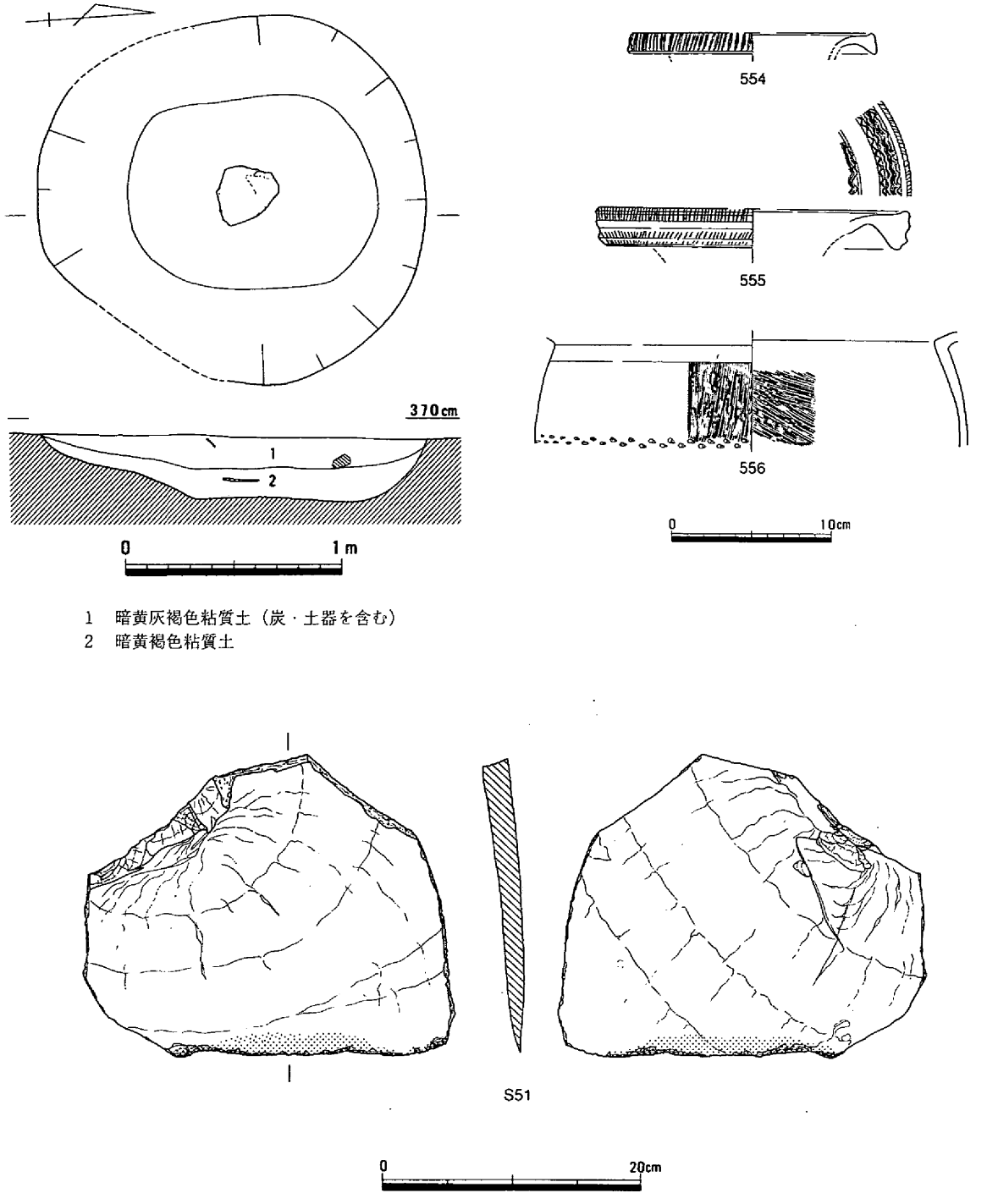
1　暗黄褐色粘質土
2　灰褐色粘質土
（焼土を含む）

第228図　土壙167（1/30）



1　黄褐色砂質土（炭を含む）
2　暗黄褐色砂質土
3　暗灰色砂質土（炭を多く含む）

第229図　土壙168（1/30）・遺物



1　暗黄灰褐色粘質土（炭・土器を含む）
2　暗黄褐色粘質土

第230図　土壙169（1/30）・遺物

土壙170（第231図）

他の遺構に切られているが、規模は長径118cm、短径106cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは検出面から31cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は２層に区分されたが、いずれも黄褐色系の粘質土である。出土遺物はないが、検出面からみて時期は弥・中・Ⅲと思われる。　（松本）

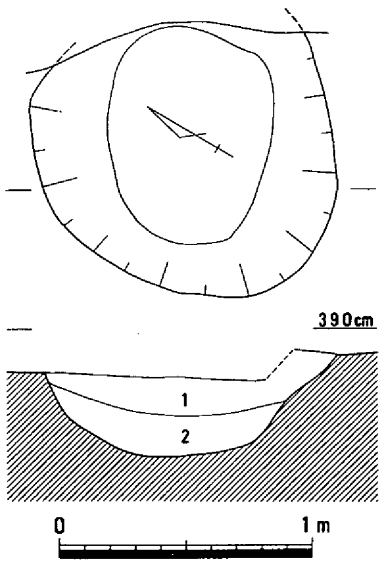
土壙171（第232図）

土壙169・170に切られる状態で検出された。規模は長径170cm、短径105cmを測り、平面形は楕円形

を呈する。深さは検出面から28cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は２層に区分される。遺物は比較的大型の壺557、甕558～560などが出土している。557は口縁部に斜格子、頸部には凸帯に指頭圧痕文を施している。時期は弥・中・Ⅱと思われる。（松本）

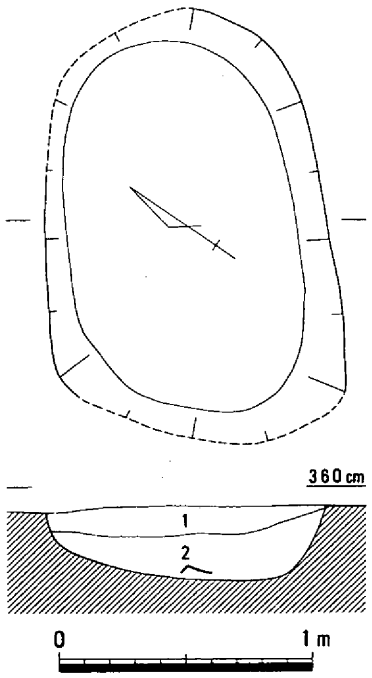
土壙172（第233図）

土壙173に切られる状態で検出された。規模は長径181cm、短径173cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは検出面から59cmを測り、底面は南から北に向けて傾斜している。遺構内からは壺561・562、甕563～565などが出土している。壺はいずれも広口で、頸部から口縁端に向かって肥厚し、平坦面を形成し、刻目が施されている。565は頸部に指頭圧痕文をもつ凸帯を巡らす。時期はこれらの遺物から弥・中・Ⅱと思われる。（松本）

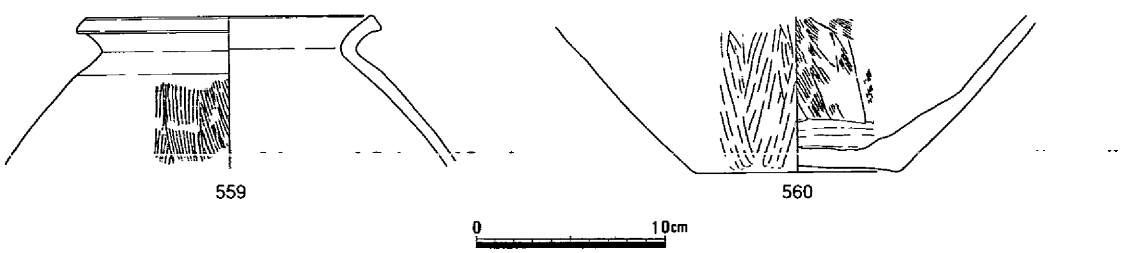


1　暗黄褐色粘質土
2　黄褐色粘質土

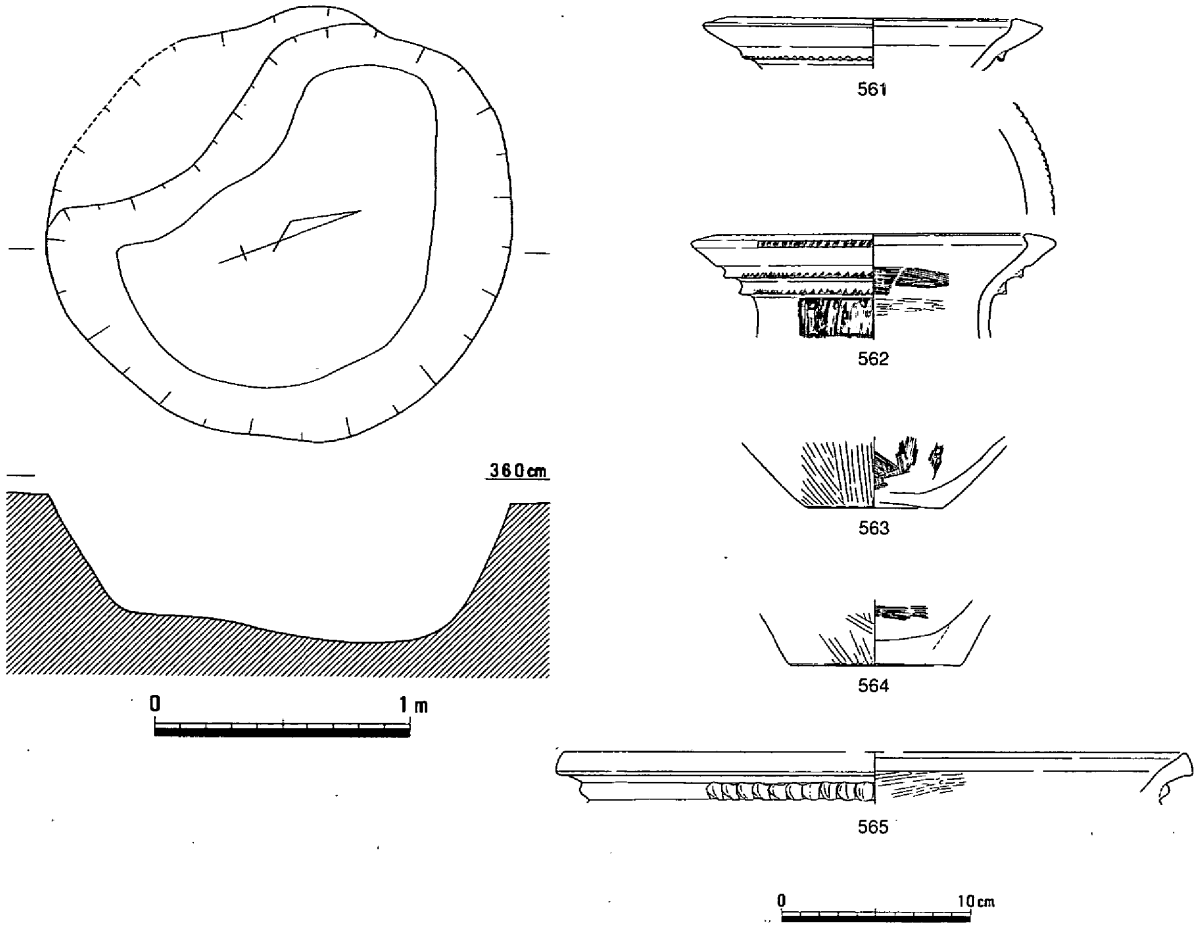
第231図　土壙170（1/30）



1　暗茶褐色粘質土
2　黄褐色粘質土



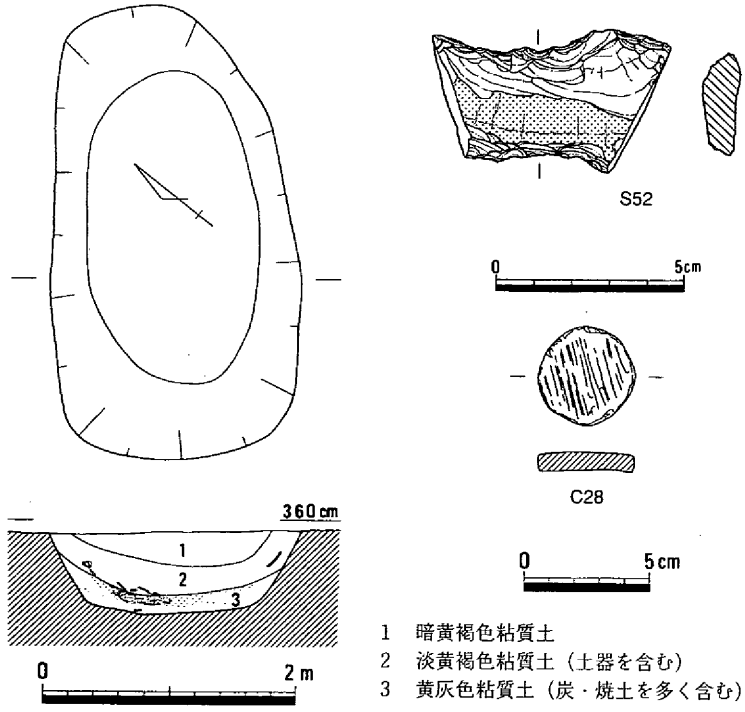
第232図　土壙171（1/30）・遺物



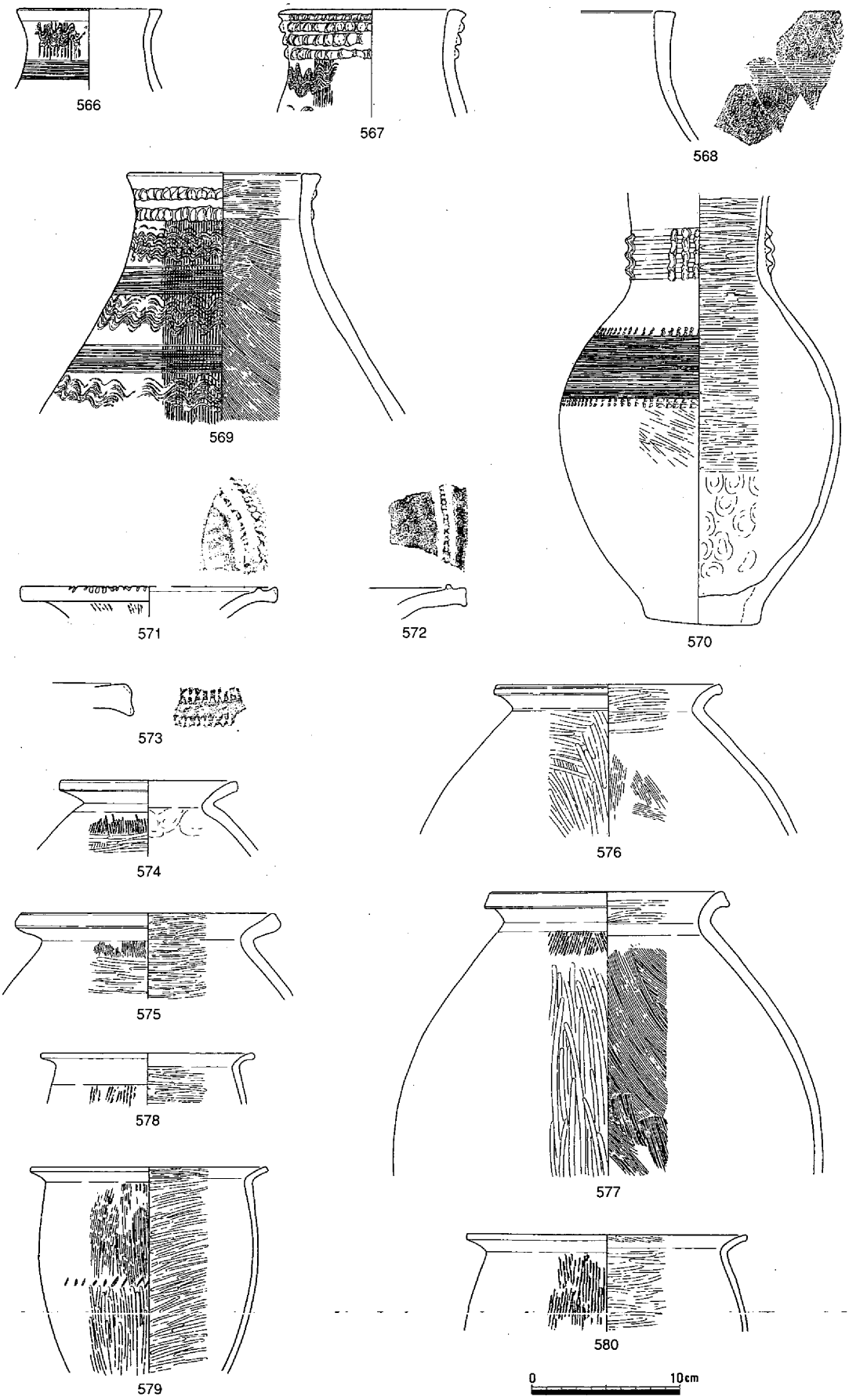
第233図　土壙172（1/30）・遺物

土壙173（第234～237図、写真58）

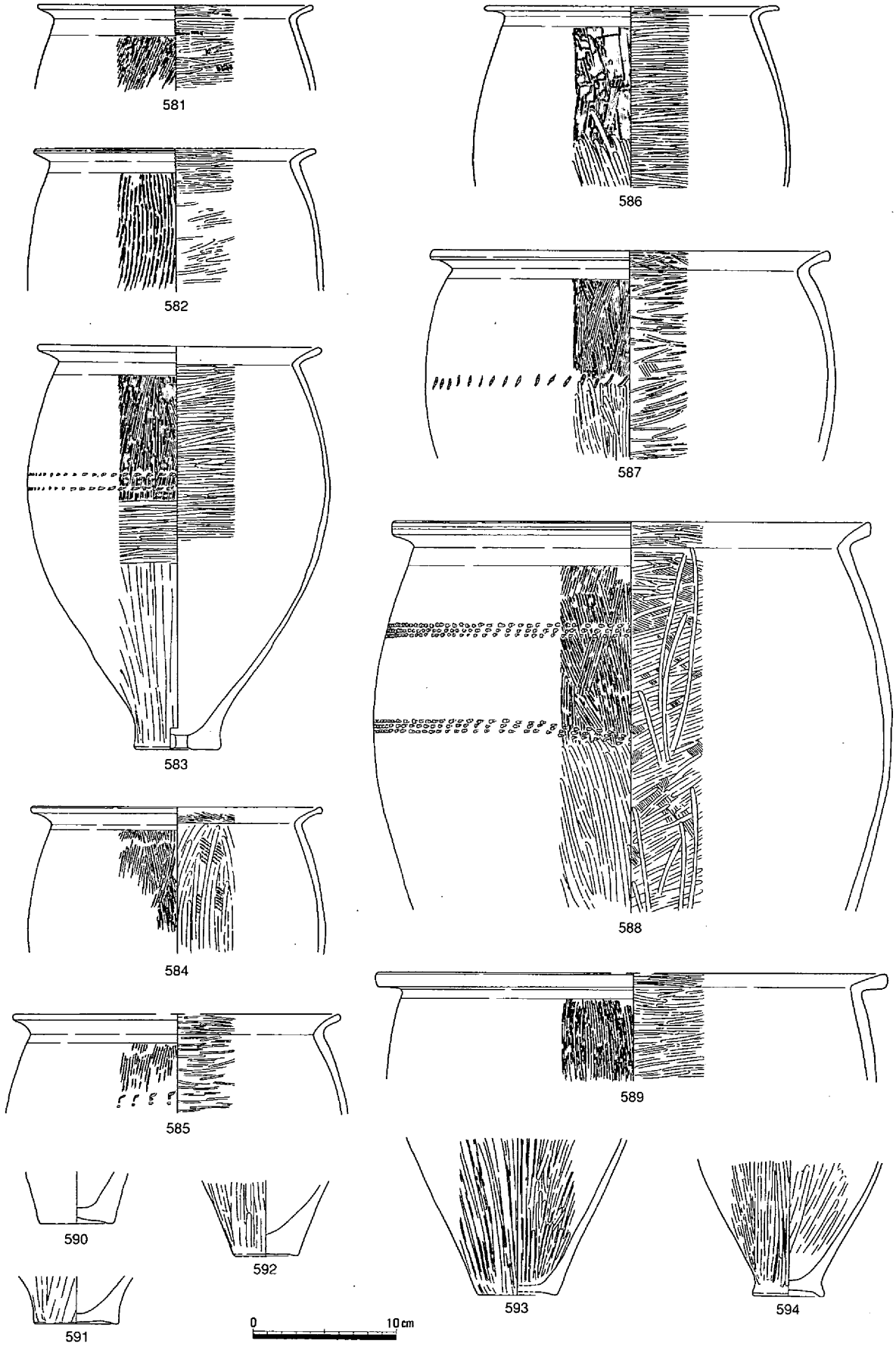
土壙173は、第２微高地の中央やや東寄りに位置し、土壙169に切られている。平面は長楕円形で、規模は358×192cmを測る。断面は皿状で、床面はほぼ水平である。埋土はレンズ状堆積を示し、３層には炭や焼土が多く、２層には土器が多く出土している。出土遺物には、壺566～573、甕574～605、高杯606～608、ジョッキ形土器609・610、楔形石器Ｓ52、土製紡錘車Ｃ28などがある。566～569は口頸部が真っすぐ上方にのびる壺



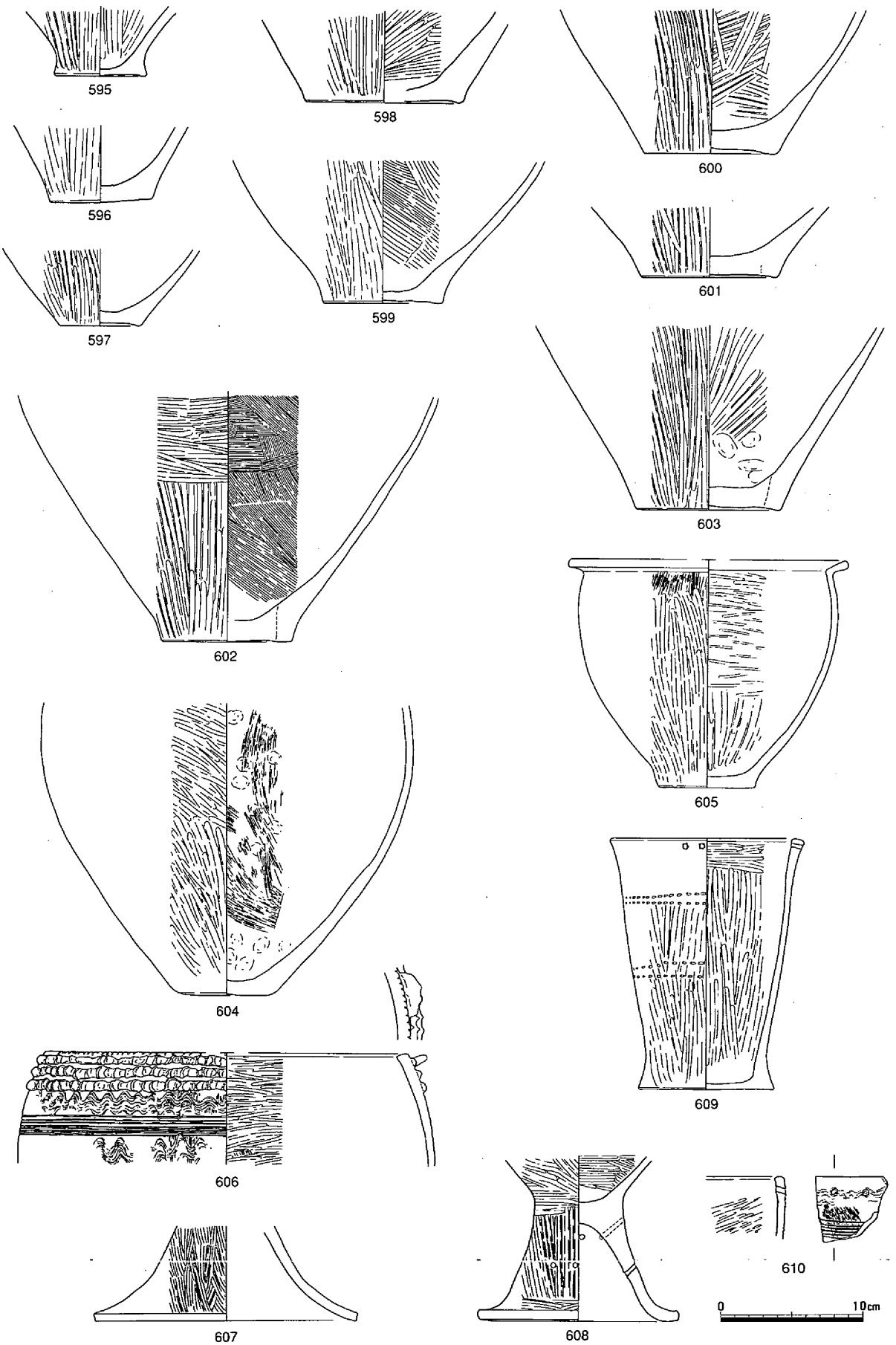
第234図　土壙173（1/60）・遺物（１）



第235図　土壙173　遺物（２）



第236図　土壙173　遺物（3）

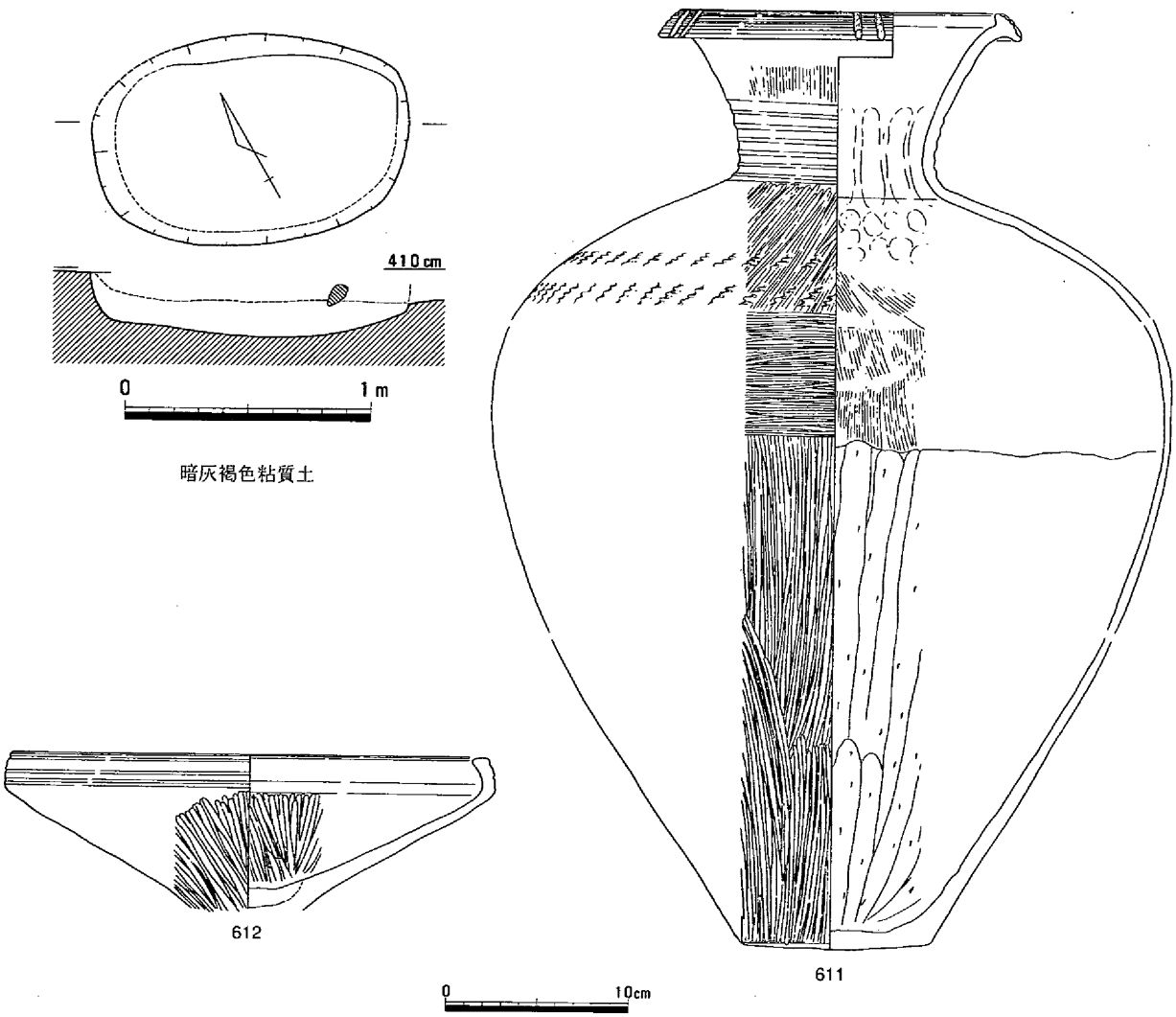


第237図　土壙173　遺物（４）

で、端部は水平方向に拡張あるいは肥厚して面を形成する。口縁端部の刻み目や、指頭圧痕紋突帯の有無が見られる。このような壺は図示したものを含めて11個体確認できた。570は長頸の壺で、肩の張りは弱い。頸部には３条の貼り付け突帯が巡り、さらに３本１組の棒状浮紋が４方向に施される。571～573は口縁部が大きく開くもので、この遺構では図示した３個体のみである。574～577は頸部が締まっているもので、口縁端部は肥厚して面を形成する。578～589は外反する口縁部ののびが比較的短いもので、端部が丸くおさまるものと肥厚して面を有するものがある。図示したものを含めて、前者は22個体、後者は11個体が確認できる。底部については、大小31個体が確認された。606は上段の指頭圧痕紋突帯の間に把手状の粘土帯が認められる。S52は珪酸が付着し、石包丁からの転用である。C28は未製品の可能性がある。出土遺物から、遺構の時期は弥・中・Ⅱと思われる。　（柴田）

土壙174（第238図）

土壙174は、第２微高地の中央やや東寄り、竪穴住居６の東に位置する。平面は楕円形で、規模は128×87cmを測る。断面は皿状で、床面は中央が窪む。出土遺物には、壺611、高杯612などがある。611は肩が強く張り、２列の貝殻腹縁紋を巡らせる。胴部内面のヘラケズリは中央付近まで認められる。612は、内湾する口縁部に３条の凹線が巡る。遺構の時期は、弥・中・Ⅲと思われる。　（柴田）



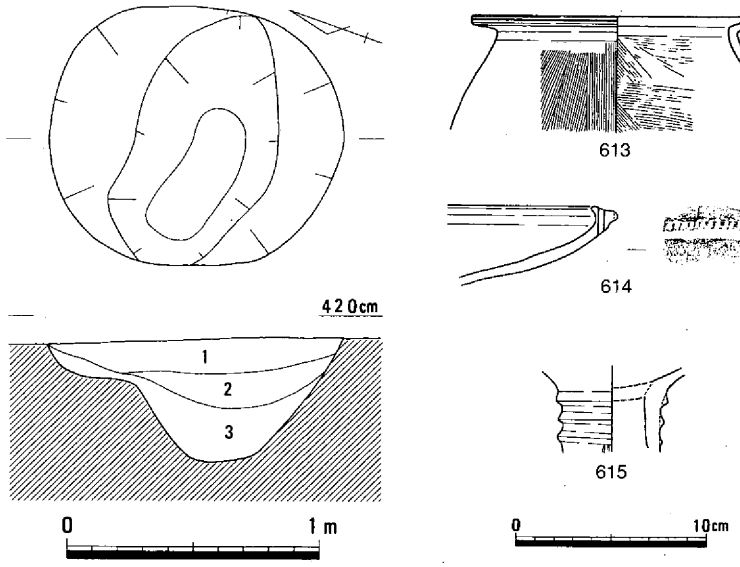
第238図　土壙174（1/30）・遺物

土壙175（第239図）

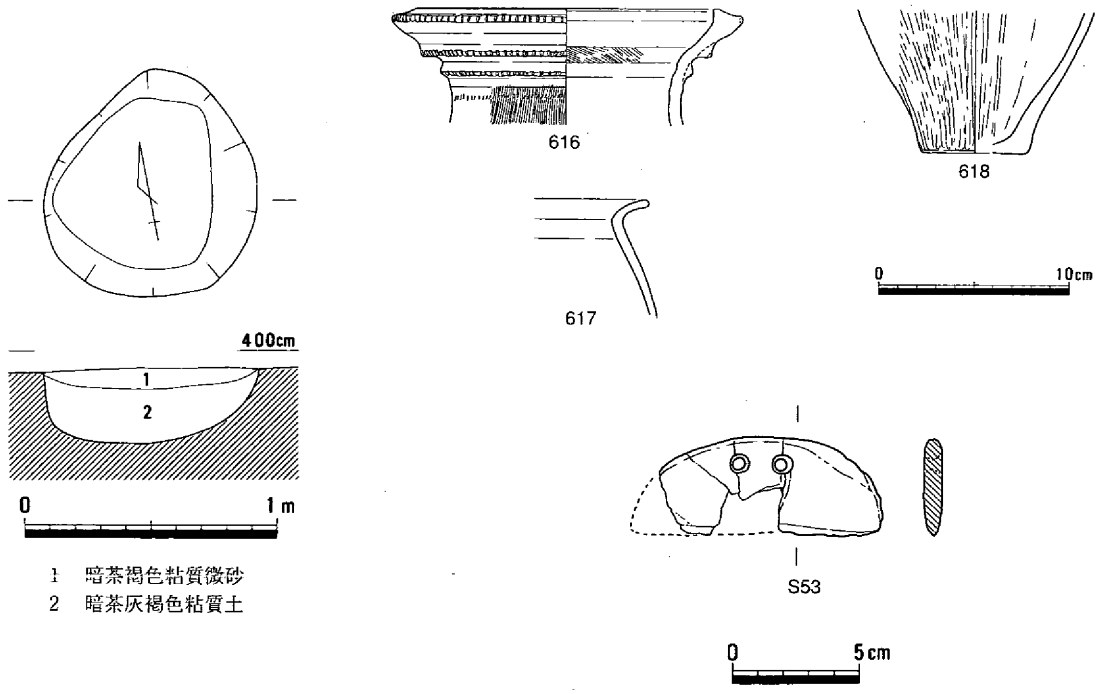
土壙175は、第２微高地の中央やや東寄り、土壙174の北に位置する。平面は円形で、径は116cmを測る。掘り方は２段になっており、床面は狭い。出土遺物には、甕613、高杯614・615などがある。613の口縁端部は下方に肥厚する。614は端部が水平方向に拡張し、刻み目を施す。615は貼り付け突帯を巡らせる。遺物などから、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

土壙176（第240図、写真59）

土壙176は、第２微高地の中央やや東寄り、土壙175の東に位置する。平面は楕円形で、規模は長径90cmを測る。断面はⅢ状で、床面はほぼ水平である。出土遺物には、壺616、甕617・618、磨製石包丁Ｓ53などがある。616は、口縁部が緩やかに外方にのび、端部は水平方向に拡張する。617は口縁部が短く屈曲し、外反する。Ｓ53は蛇紋岩製で、刃部は真っすぐのび、背部は外湾する。遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）



第239図　土壙175（1/30）・遺物



第240図　土壙176（1/30）・遺物

土壙177（第241図、写真59）

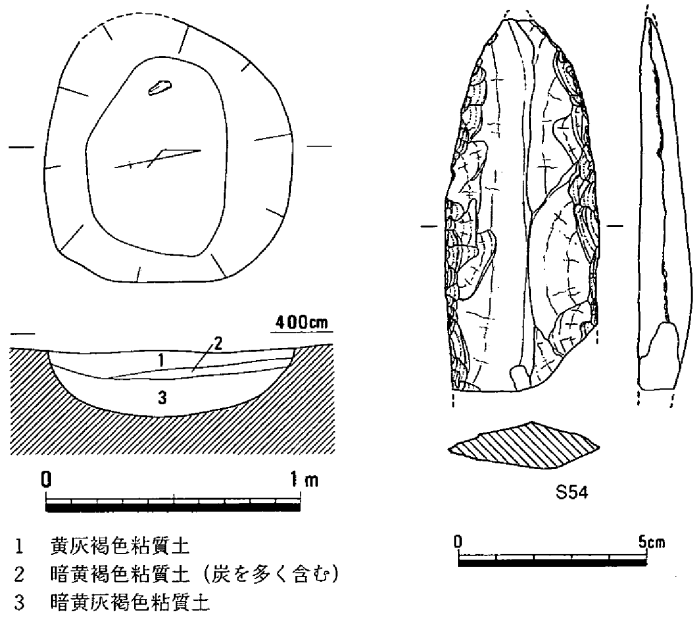
土壙177は、第２微高地の中央やや東寄り、土壙176の東に位置する。平面は楕円形で、規模は長径107cmを測る。断面は皿状で、床面はやや中央が窪む。埋土の２層には炭が多く含まれている。出土遺物には、土器の小片の他に、図示している石槍状石器Ｓ54がある。遺物などから、遺構の時期は、弥・中におさまると思われる。（柴田）

土壙178（第242図、写真59）

土壙178は、第２微高地の中央やや南東寄り、竪穴住居６と竪穴住居10の間に位置する。平面は楕円形で、現存での規模は、長径155cmを測る。断面は箱形で、床面はほぼ水平である。出土遺物には、甕619、高杯620などがある。619は、口縁端部が上下に肥厚し、面を形成する。620は口縁部が水平方向にのびるもので、内外面ともハケメの後ヘラミガキを行っている。遺物などから、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

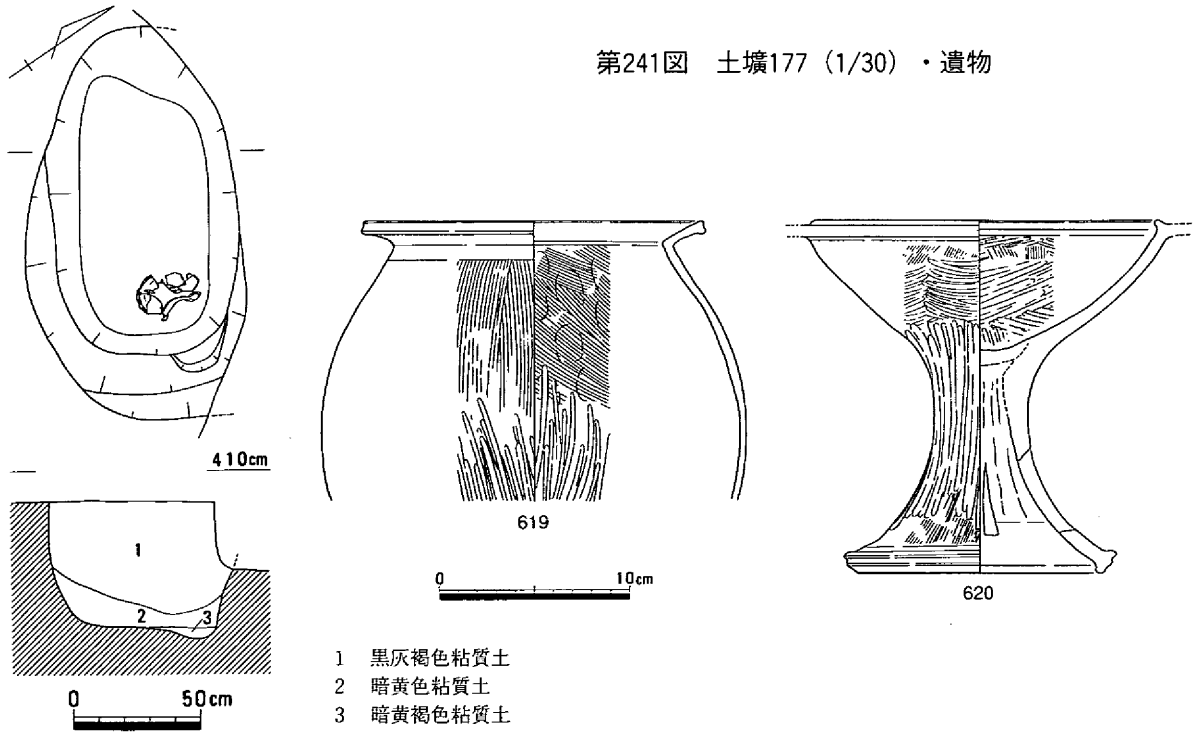
土壙179（第243図）

土壙179は、第２微高地の中央やや南東寄り、土壙178の南に位置する。平面は円形で、径は112cmを測る。床面はほぼ水平である。



1　黄灰褐色粘質土
2　暗黄褐色粘質土（炭を多く含む）
3　暗黄灰褐色粘質土

第241図　土壙177（1/30）・遺物



1　黒灰褐色粘質土
2　暗黄色粘質土
3　暗黄褐色粘質土

第242図　土壙178（1/30）・遺物

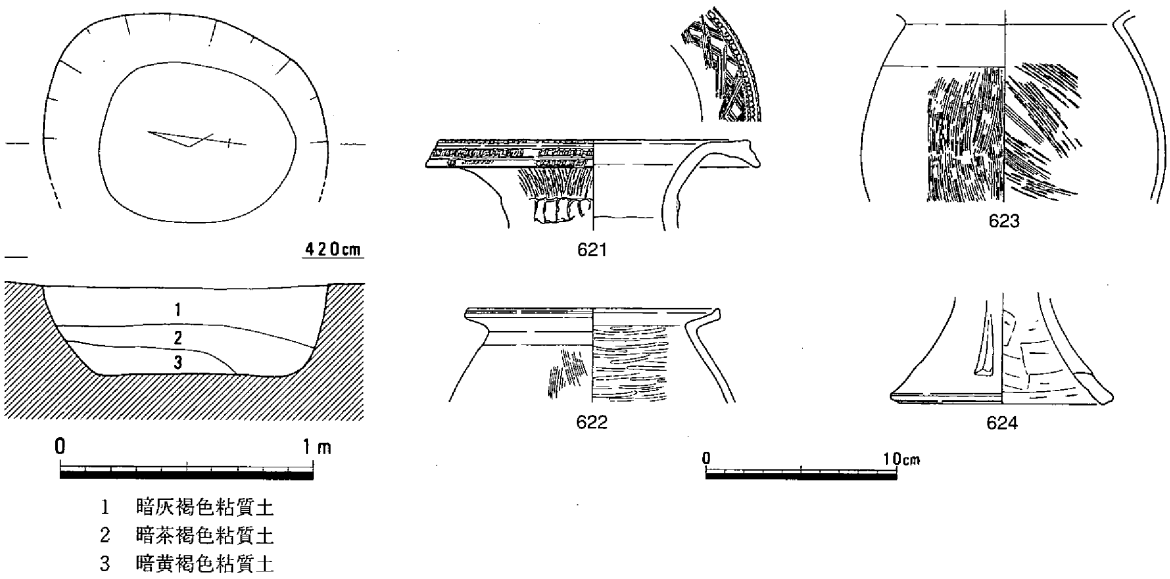
出土遺物には、壺621、甕622・623、高杯624などがある。621は口縁部が大きく開き、端部が下方にのびる。622は、口縁端部が上方に摘み出される。624の内面はヘラケズリが認められる。遺物などから、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

土壙180（第244図）

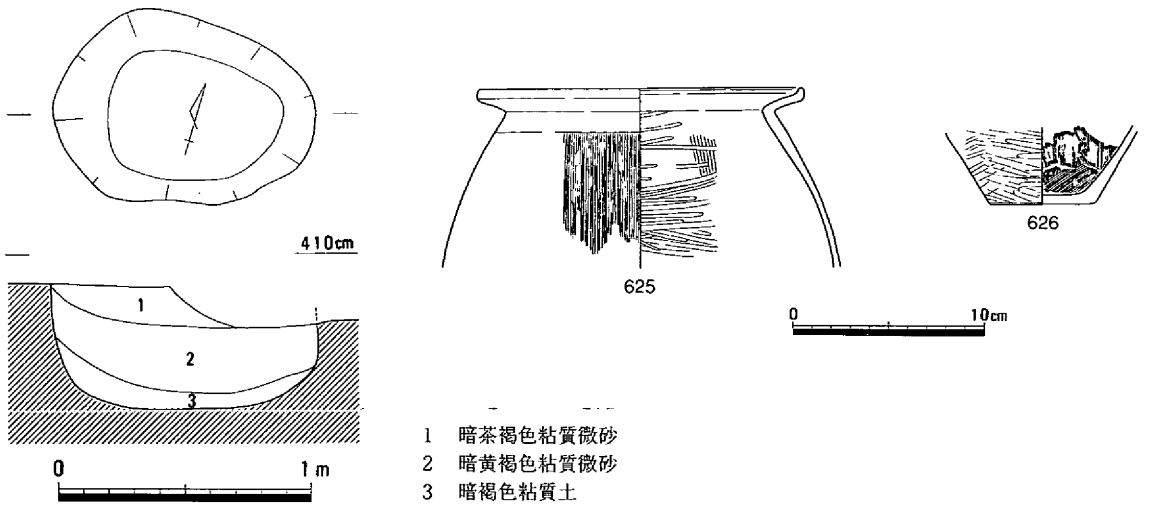
土壙180は、第２微高地の中央やや南東寄り、土壙178の東に隣接する。平面は楕円形で、長径は105cmを測る。床面はほぼ水平である。出土遺物には、甕625・626などがある。625は口縁端部が上方に摘み出され、内面は縦方向のハケメの後横方向のヘラミガキが施される。626の内面はハケメが認められる。遺物などから、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

土壙181（第245図）

土壙181は、第２微高地の中央やや南東寄り、土壙180の北東に位置する。平面は楕円形で、規模は133×87cmを測る。北西側の掘り方断面は緩やかな傾斜で、床面は中央が窪んでいる。出土遺物には、



第243図　土壙179（1/30）・遺物

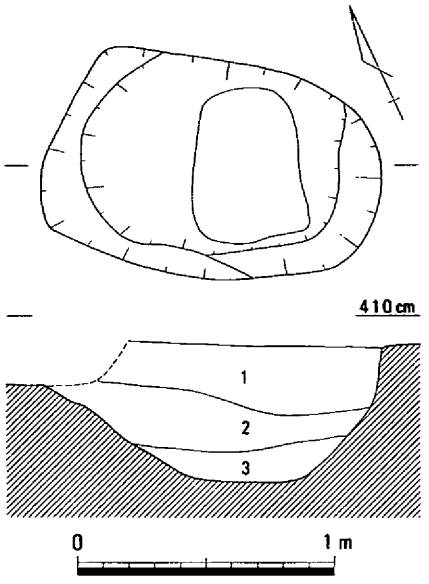


第244図　土壙180（1/30）・遺物

壺627・629、底部630・631、高杯632・633などがある。627は口縁端部がわずかに下方に肥厚するが、629では上下に拡張する。遺物などから、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。　（柴田）

土壙182（第246図）

土壙182は、第２微高地の中央やや南東寄り、土壙181の南に位置する。平面は楕円形で、規模は127×72cmを測る。床面はほぼ水平である。出土遺物は、土器の小片が確認されただけで、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。　（柴田）



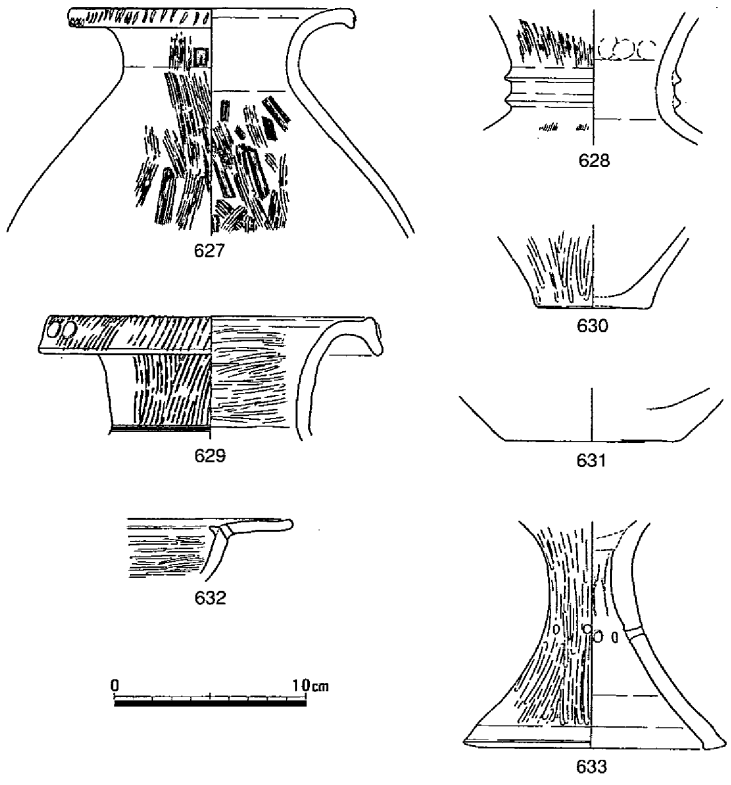
1　暗灰褐色粘質土（炭を含む）
2　暗茶灰褐色粘質土
3　暗黄褐色粘質土

土壙183（第247図）

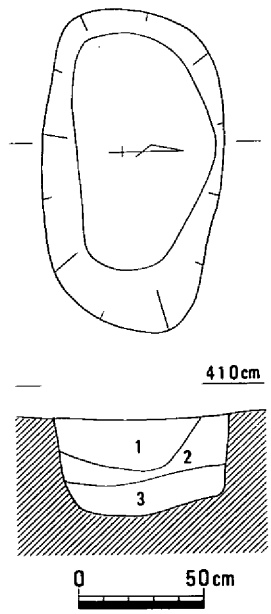
土壙183は、第２微高地の中央やや南東寄り、土壙182の南に位置する。平面は楕円形で、規模は103×62cmを測る。床面は北西に向かって下がっている。出土遺物には、甕634などがある。634は、口縁端部に近いところがわずかに上方に湾曲している。遺物などから、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。　（柴田）

土壙184（第248図）

土壙184は、第２微高地の中央やや南東寄り、竪穴住居10の中央に位置し、それを切っている。平面は楕円形で、規模は122×82cmを測る。床面はほぼ水平である。出土遺物には、甕635などがある。635は内面の底部近くでヘラケ



第245図　土壙181（1/30）・遺物



1　黒灰色粘質土
2　暗黄褐色粘質微砂
3　茶灰褐色粘質土

第246図　土壙182（1/30）

ズリが確認される。遺物などから、遺構の時期は、弥・中・Ⅲと思われる。（柴田）

土壙185（第249図）

土壙185は、第２微高地の中央やや南東寄りに位置し、土壙186の東端で切られている。残存状況はきわめて悪い。断面は皿状で、床面はほぼ水平と思われる。出土遺物は認められなかったが、切り合い関係などから、遺構の時期は、弥・中・Ⅱ以前と思われる。（柴田）

土壙186（第250図、写真59）

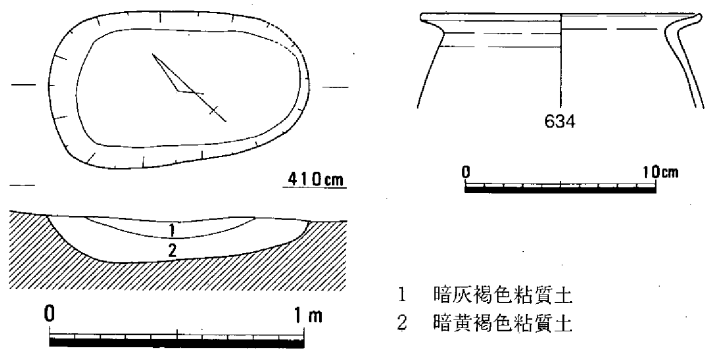
土壙186は、第２微高地の中央やや南東寄り、竪穴住居10の東に隣接する。平面は不整楕円形で、規模は132×100cmを測る。床面は中央部が窪んでおり、埋土はブロック状の土層が見られる。出土遺物には、壺636、甕637・638、打製石包丁Ｓ55、磨製石斧Ｓ56などがある。Ｓ55は刃部が真っすぐで、背部は外湾している。Ｓ56は太型蛤刃石斧の刃部である。Ｓ57は顕著な使用痕跡などは認められない。遺物などから、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

土壙187（第251図）

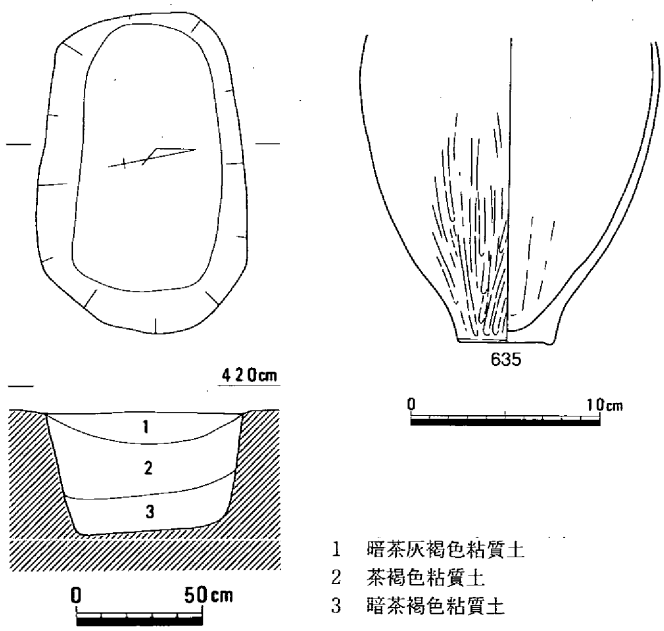
土壙187は、第２微高地の中央やや南東寄り、土壙186の北東に位置する。平面は楕円形で、規模は83×64cmを測る。２層には炭が含まれる。床面は中央が窪んでいる。出土遺物には土器の小片しか認められないが、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

土壙188（第252図）

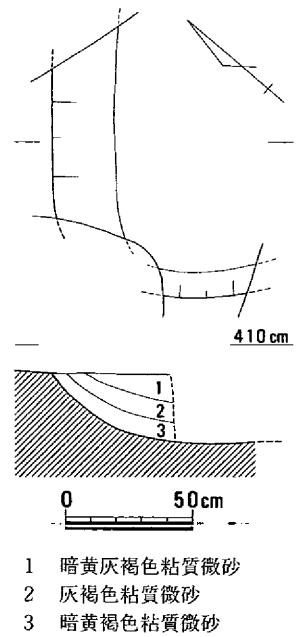
土壙188は、第２微高地の中央やや南東寄り、土壙182の東に位



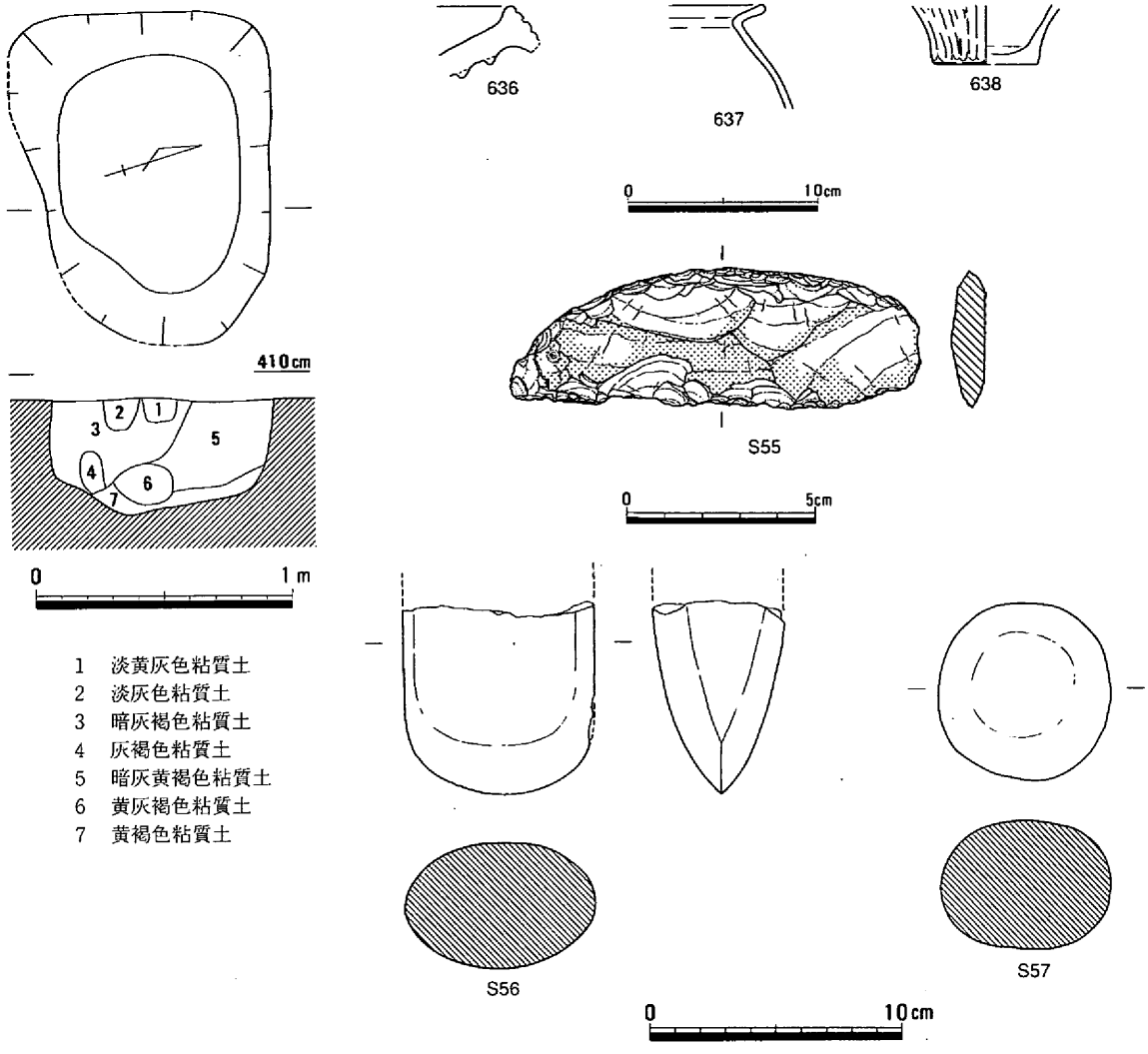
第247図　土壙183（1/30）・遺物



第248図　土壙184（1/30）・遺物

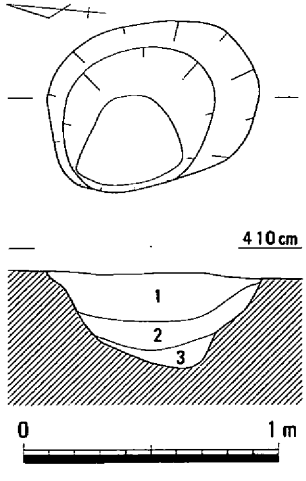


第249図　土壙185（1/30）



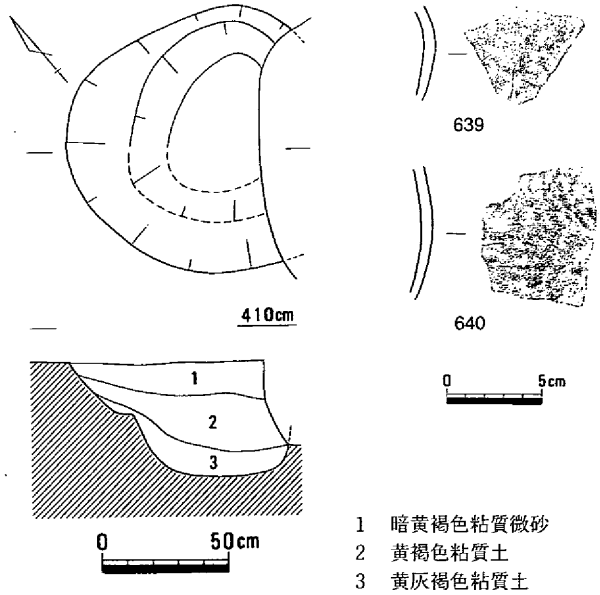
1　淡黄灰色粘質土
2　淡灰色粘質土
3　暗灰褐色粘質土
4　灰褐色粘質土
5　暗灰黄褐色粘質土
6　黄灰褐色粘質土
7　黄褐色粘質土

第250図　土壙186（1/30）・遺物



1　黄灰褐色粘質土
2　暗黄灰色粘質土（炭を含む）
3　黄灰褐色粘質土

第251図　土壙187（1/30）



1　暗黄褐色粘質微砂
2　黄褐色粘質土
3　黄灰褐色粘質土

第252図　土壙188（1/30）・遺物

置する。平面は径108cmの円形で、土壙189に切られる。掘り方は段を有し、床面はほぼ水平である。出土遺物には、壺の小片などがある。639・640とも刺突紋を施す。遺物などから、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

土壙189（第253図）

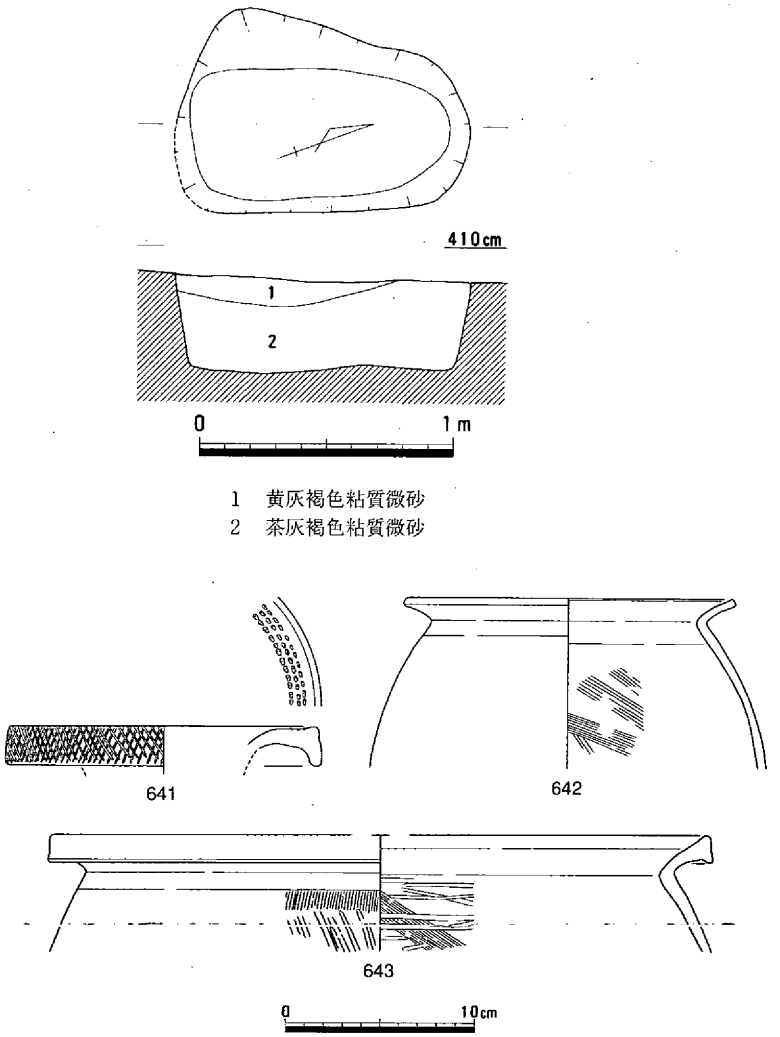
土壙189は、第２微高地の中央やや南東寄り、土壙182の南に位置し、土壙188・190を切っている。平面は不整楕円形で、規模は115×80cmを測る。出土遺物には、壺641、甕642・643などがある。641は口縁端部に斜格子紋、上面に刺突紋が施される。642は口縁端部に面を形成し、643の端部は上下に肥厚する。遺物などから、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

土壙190（第254図）

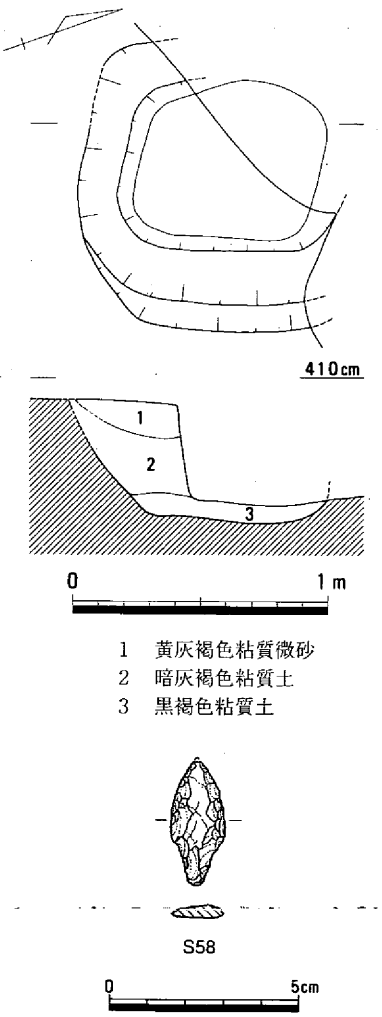
土壙190は、第２微高地の中央やや南東寄りに位置し、土壙189の南で重なり、それに切られる。平面は方形で、床面はほぼ水平である。出土遺物には、石鏃Ｓ58がある。遺物などから、遺構の時期は、弥・中におさまると思われる。（柴田）

土壙191（第255図）

土壙191は、第２微高地中央の南東寄り、土壙190の南東に位置する。平面は不整楕円形で、規模は138×105cmを測る。床面は中央が高くなる。出土遺物には、壺644、甕645・646、台付鉢647などがあ



第253図　土壙189（1/30）・遺物



第254図　土壙190（1/30）・遺物

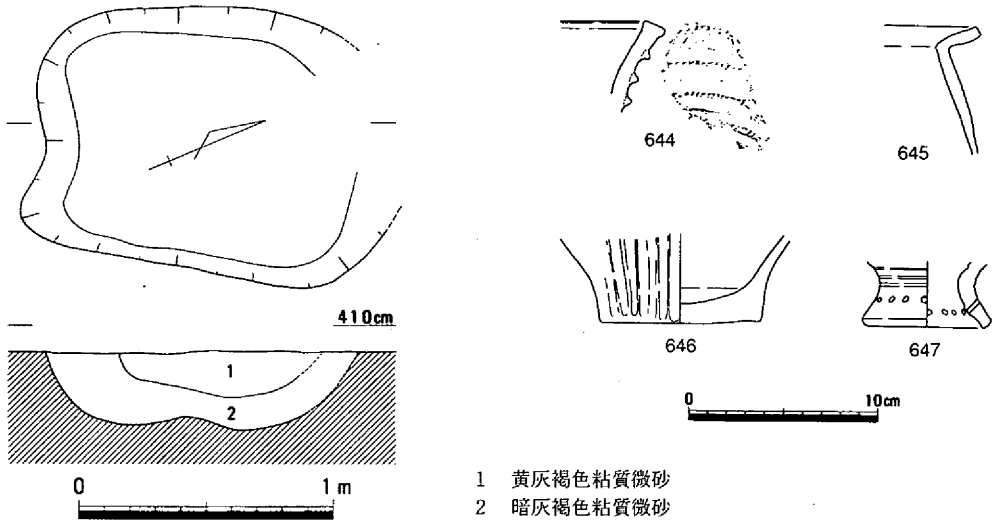
る。644は口縁端部に刻み目を有する。647は鉢部下面に凹線が認められる。遺物などから、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

土壙192（第256図）

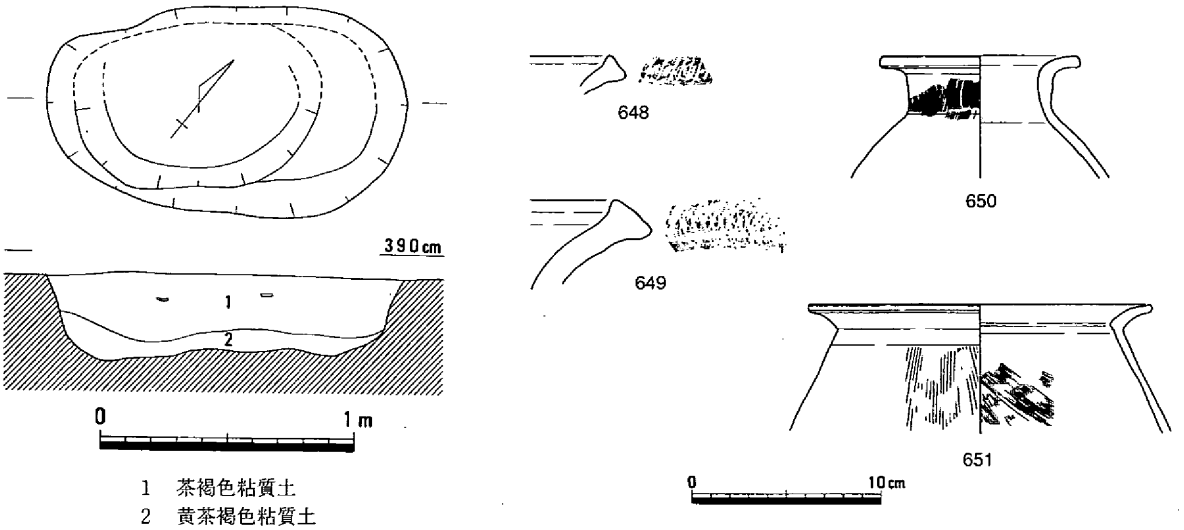
土壙192は、第２微高地の中央南東寄り、土壙191の東に位置する。平面は楕円形で、規模は141×84cmを測る。床面は中央が高い。出土遺物には、壺648～650、甕651などがある。648・649ともに口縁端部が上下に拡張し、刻み目や斜格子紋を施す。650は口縁部が水平方向に開き、端部は面を有する。651の口縁端部は丸くおさまる。遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

土壙193（第257図）

土壙193は、第２微高地の南東寄り、竪穴住居11の南西に位置する。平面は方形で、規模は97×93cmを測る。床面はほぼ水平である。出土遺物は土器の小片が認められるのみだが、遺構の時期は、弥・中におさまると思われる。（柴田）



第255図　土壙191（1/30）・遺物



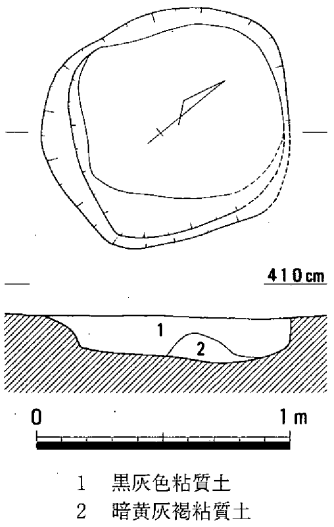
第256図　土壙192（1/30）・遺物

土壙194（第258図）

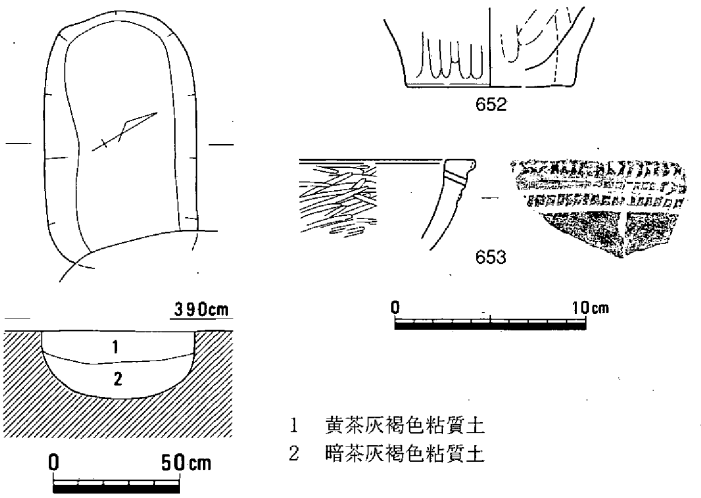
土壙194は、第２微高地の南東端に位置する。平面は楕円形で、現状での規模は93×60cmを測る。掘り方の断面は皿状で、床面は中央が窪んでいる。出土遺物には、底部652、高杯653の他に、図示していないが楔形石器片などもある。652の内面はナデが認められる。653は口縁直下に凹線が巡り、凸部に刻み目を施す。遺物などから、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。　（柴田）

土壙195（第259図）

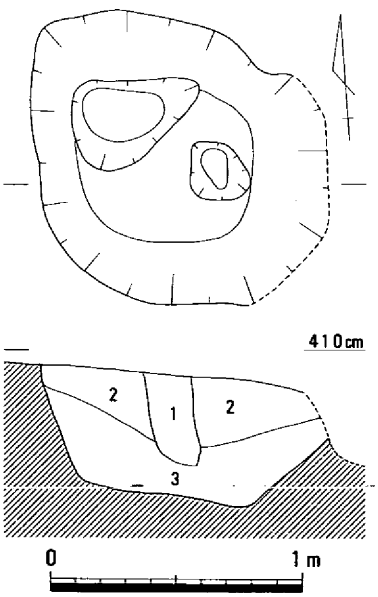
土壙195は、第２微高地の南東端に位置する。掘り方の東端は河道で切られている。平面は不整楕円形で、規模は135×112cmを測る。床面には浅い凹が認められる。出土遺物には、壺654・655、甕656・657などがある。654・655は口縁端部が水平方向に拡張し、刻み目や円形浮紋を施す。656の口縁部ののびは比較的短い。遺物などから、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。　（柴田）

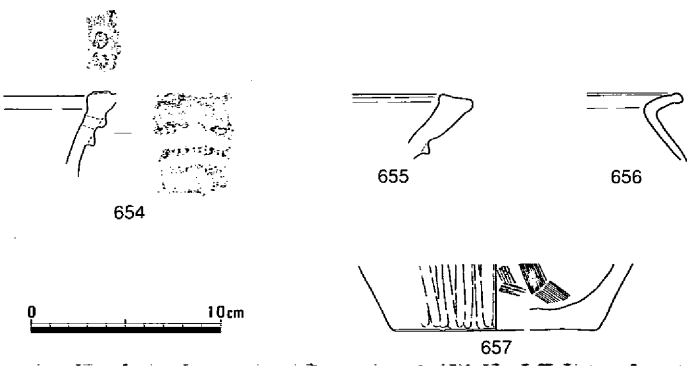


第257図　土壙193（1/30）



第258図　土壙194（1/30）・遺物





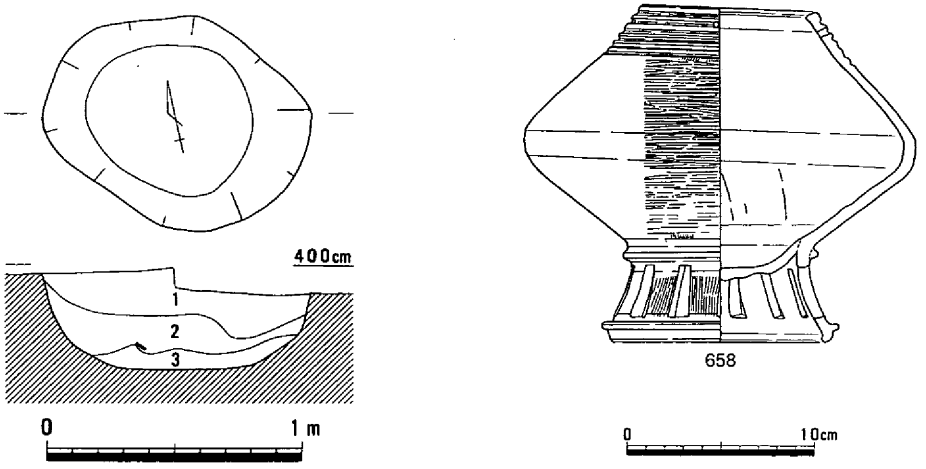
第259図　土壙195（1/30）・遺物

土壙196（第260図、写真59）

土壙196は、第２微高地の東端、竪穴住居11の西に位置する。平面は楕円形で、規模は106×86cmを測る。掘り方の断面は皿状で、床面はほぼ水平である。埋土の３層は炭を含むが、土器は１・２層に多く見られる。出土遺物には台付鉢658がある。658の鉢部は算盤玉形を呈し、口縁部直下に凹線が６条巡る。遺物などから、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）

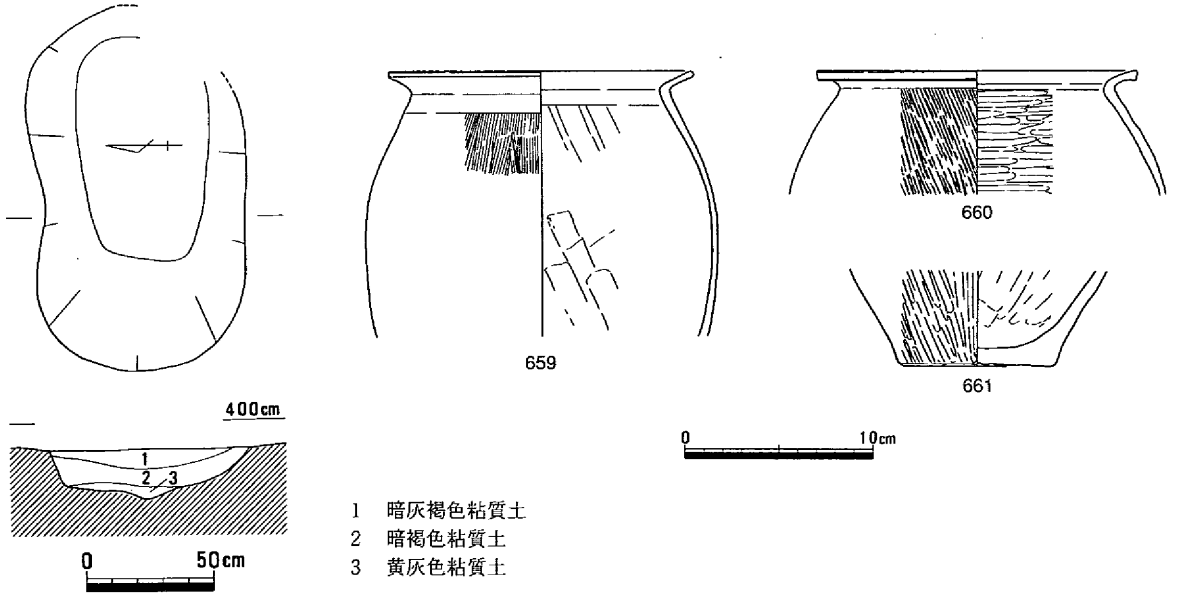
土壙197（第261図）

土壙197は、第２微高地の東端、竪穴住居11の北に隣接する。平面は不整楕円形で、規模は144×85cmを測る。出土遺物には、甕659～661、図示していないが楔形石器片などがある。659の内面は工具ナデが認められる。遺物などから、遺構の時期は、弥・中・Ⅱと思われる。（柴田）



1　黒褐色粘質微砂（土器を含む）
2　茶褐色粘質微砂（土器・炭を含む）
3　暗黄褐色粘質微砂（炭を含む）

第260図　土壙196（1/30）・遺物



1　暗灰褐色粘質土
2　暗褐色粘質土
3　黄灰色粘質土

第261図　土壙197（1/30）・遺物

土壙198（第262図）

土壙297に切られる状態で検出された。規模は長径132cm、短径122cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは検出面から28cmを測り、底面には凹凸がみられる。埋土は黄灰褐色の粘質微砂である。出土遺物はないが、遺構の切り合い関係からみて時期は弥・中と思われる。　（松本）

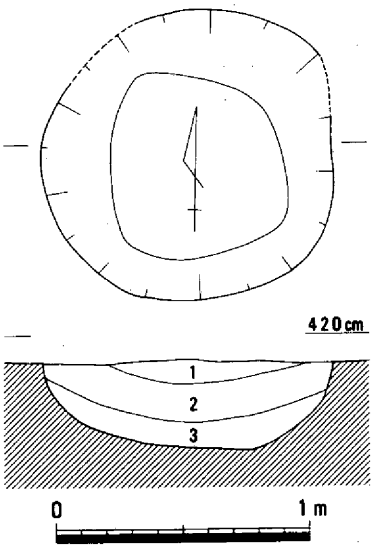
土壙199（第263図）

第２微高地の東端で検出された。規模は長径116cm、短径114cmを測り、平面形は円形である。深さは35cmを測り、断面形は皿状となる。埋土は３層に区分されるが、レンズ状の堆積となる。図示した遺物は甕であるが、その他に楔形石器片がある。

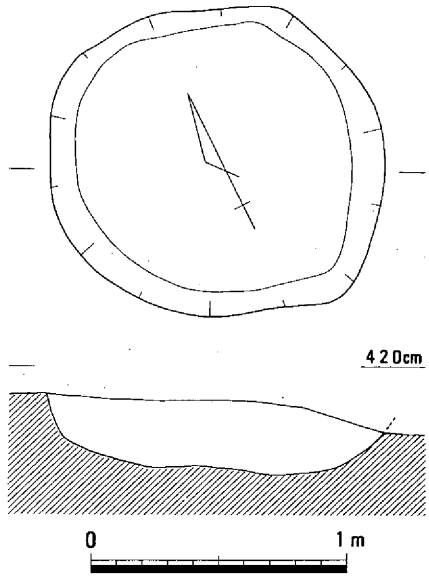
時期は弥・中・Ⅲと思われる。　（松本）

土壙200（第264図、写真59）

遺構の大部分は土壙288に切られた状態で検出

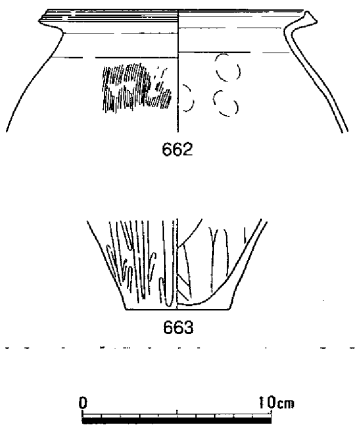


1　茶灰褐色粘質微砂
2　黒灰褐色粘質土
3　黄灰褐色粘質土

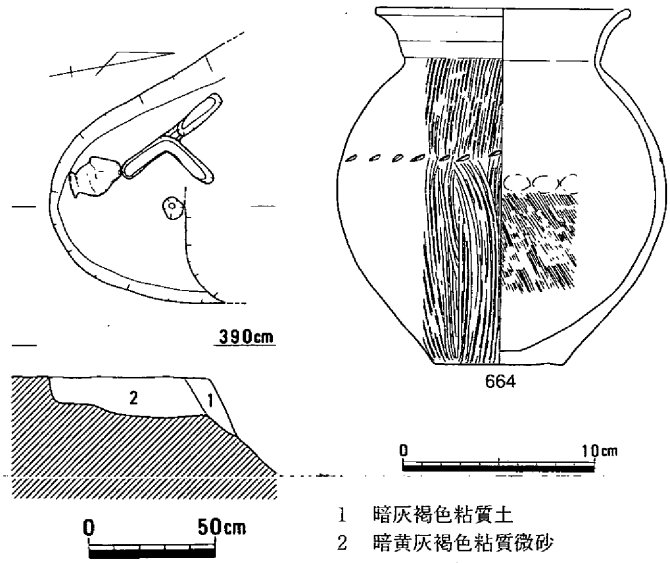


黄灰褐色粘質微砂

第262図　土壙198（1/30）



第263図　土壙199（1/30）・遺物



1　暗灰褐色粘質土
2　暗黄灰褐色粘質微砂

第264図　土壙200（1/30）・遺物

された。残存する遺構の規模は長径95cm、短径71cmを測り、平面形は楕円形を呈すると思われる。深さは検出面から16cmを測り、底面には凹凸がある。遺物は遺構の南端においてほぼ完形の甕ないし壺と思われる小型の土器664が出土している。時期は弥・中と思われる。（松本）

土壙201（第265図）

袋状土壙17に切られる状態で検出された遺構である。規模は長径208cm、短径159cmを測り、平面形は不整楕円形を呈する。深さは検出面から54cmを測り、底面は平坦である。埋土は５層に区分される。遺物は土器が出土している。図示した土器665～667はいずれも甕である。665は口縁部が「く」の字状となるものである。時期はこれらの遺物からみて弥・中・Ⅱと思われる。（松本）

土壙202（第266図）

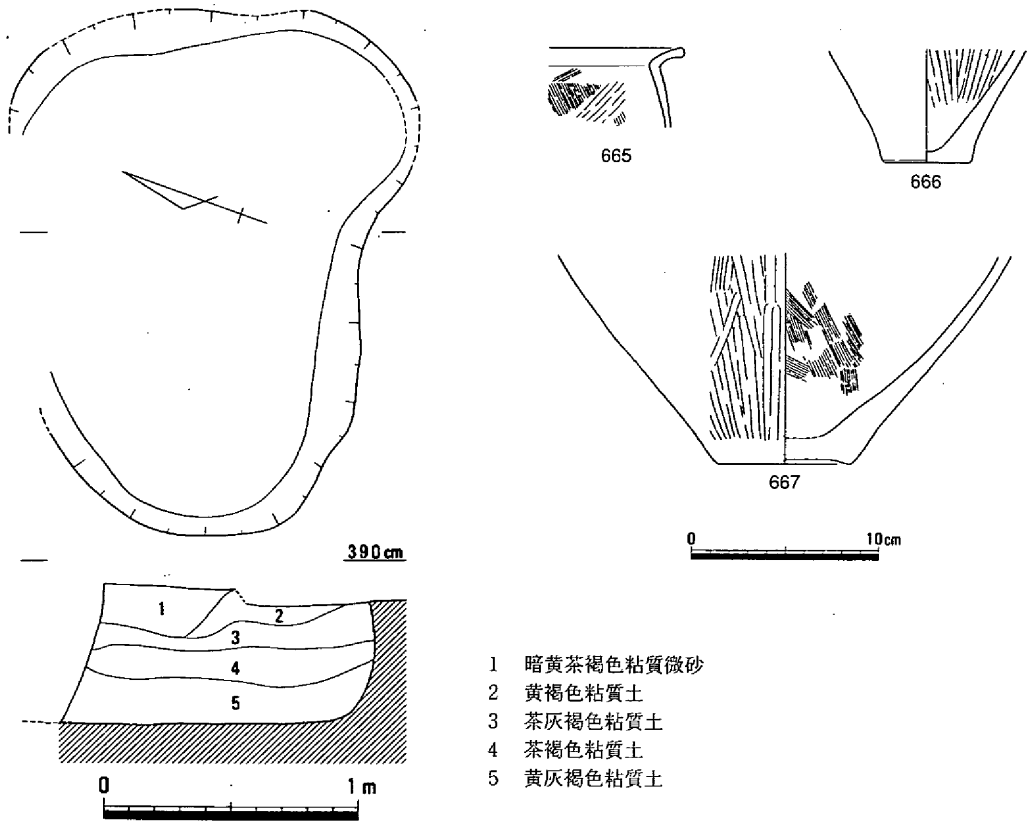
袋状土壙17を切る状態で検出された遺構である。規模は長径150cm、短径138cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは検出面から74cmを測り、底面は凹凸が著しい。埋土は５層に区分される。遺物としては広口の長頸壺668がある。時期は弥・中・Ⅱと思われる。（松本）

土壙203（第267図）

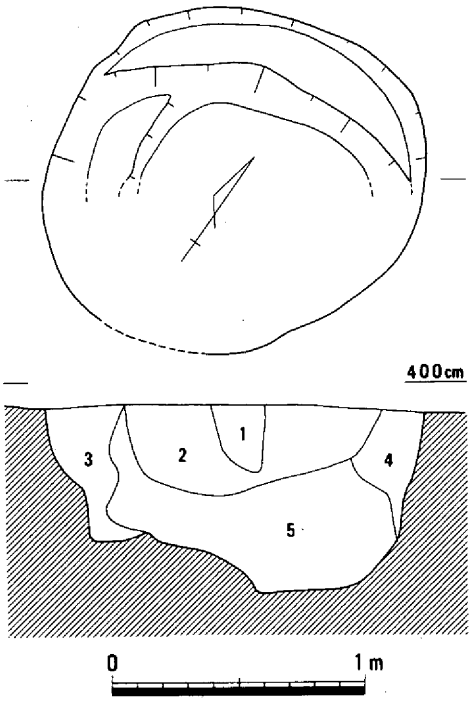
土壙201に接して検出された遺構である。規模は長径180cm、短径61cmを測り、平面形は長楕円形を呈する。深さは検出面から19cmを測り、底面は平坦である。埋土は２層に区分されるが、上層は炭を含む。遺物は長頸壺669と甕670が出土している。甕は口縁端部が上方に拡張するものである。内面は胴部中位までヘラケズリがみられる。時期は弥・中・Ⅲと思われる。（松本）

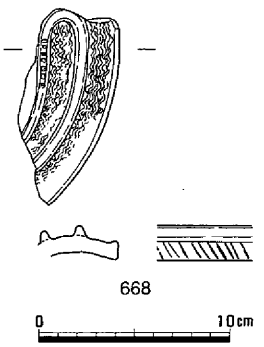
土壙204（第268・269図）

土壙205の西隣で検出された遺構である。他の時期の遺構に切られてはいるが、規模は長径181cm、



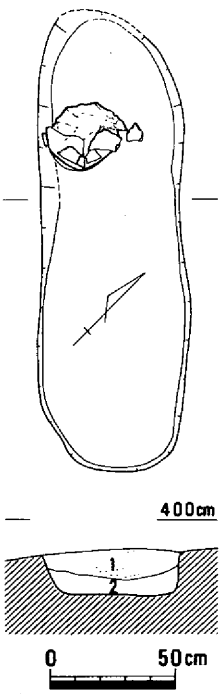
第265図　土壙201（1/30）・遺物

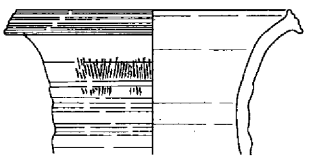


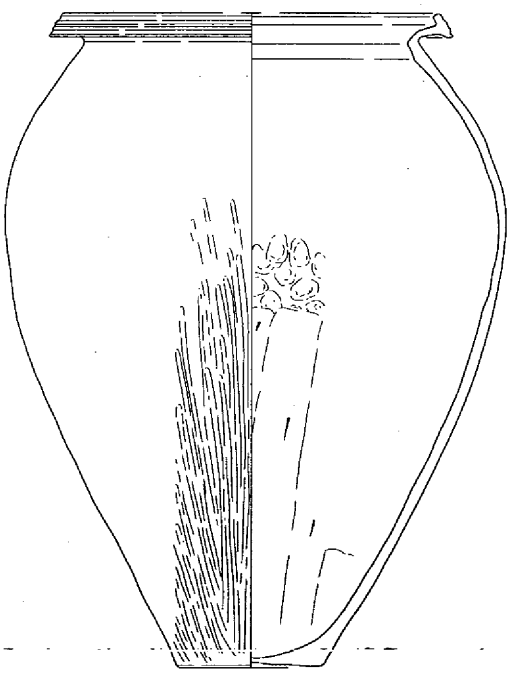


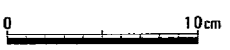
1　暗茶褐色粘質微砂
2　茶褐色粘質微砂
3　黄褐色粘質微砂
4　黄茶褐色粘質微砂
5　灰褐色粘質土

第266図　土壙202（1/30）・遺物



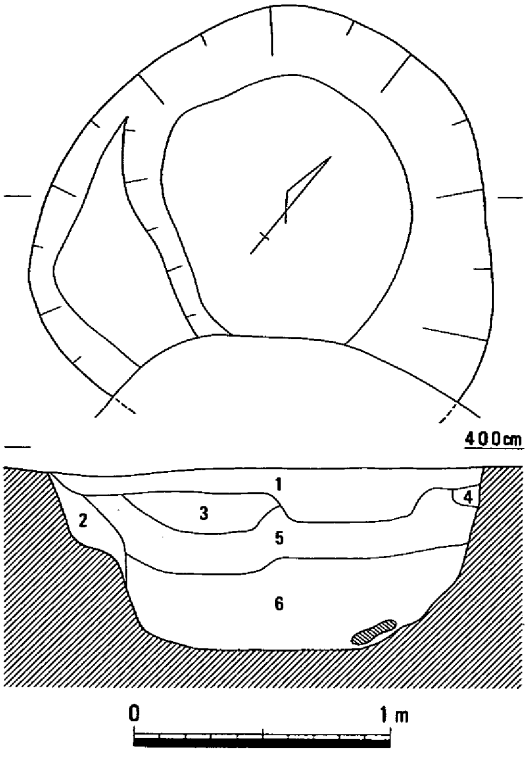




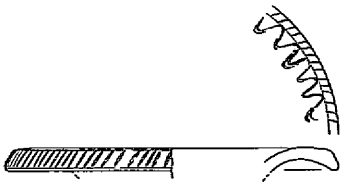


1　茶褐色粘質土（炭を含む）
2　暗茶褐色粘質土

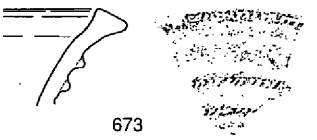
第267図　土壙203（1/30）・遺物

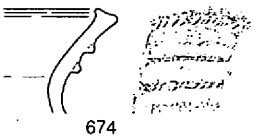


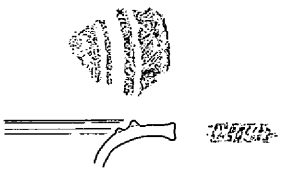
1　茶褐色粘質微砂　　4　明黄褐色粘質微砂
2　黄褐色粘質微砂　　5　暗茶褐色粘質微砂
3　黄茶褐色粘質微砂　　6　暗褐色粘質土


671

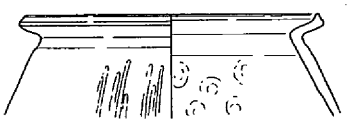
672

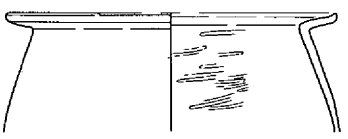

673

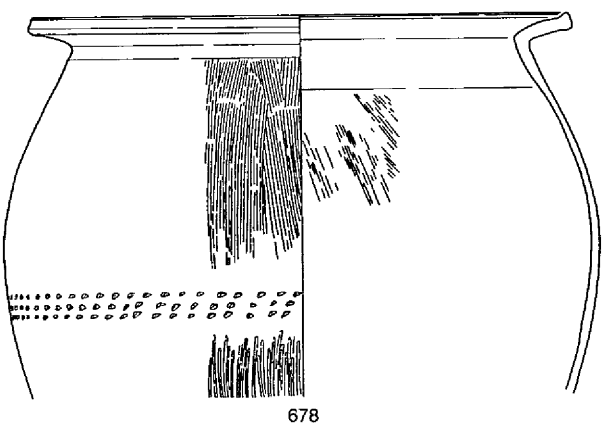

674

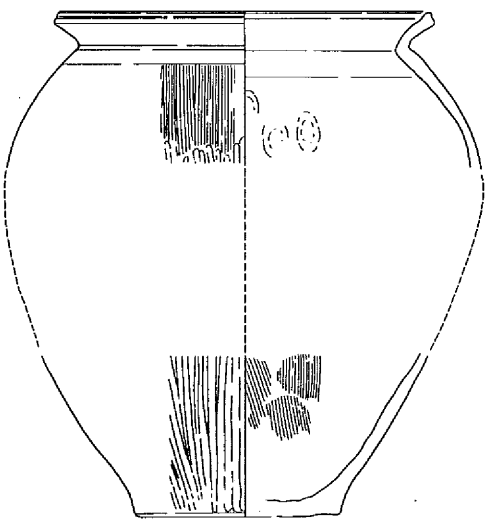

675

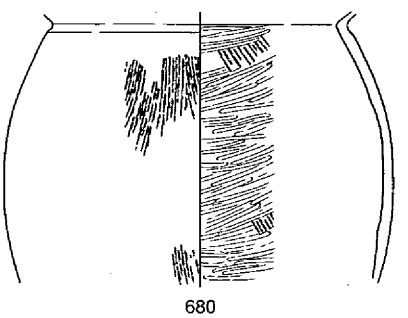
0　10cm


676

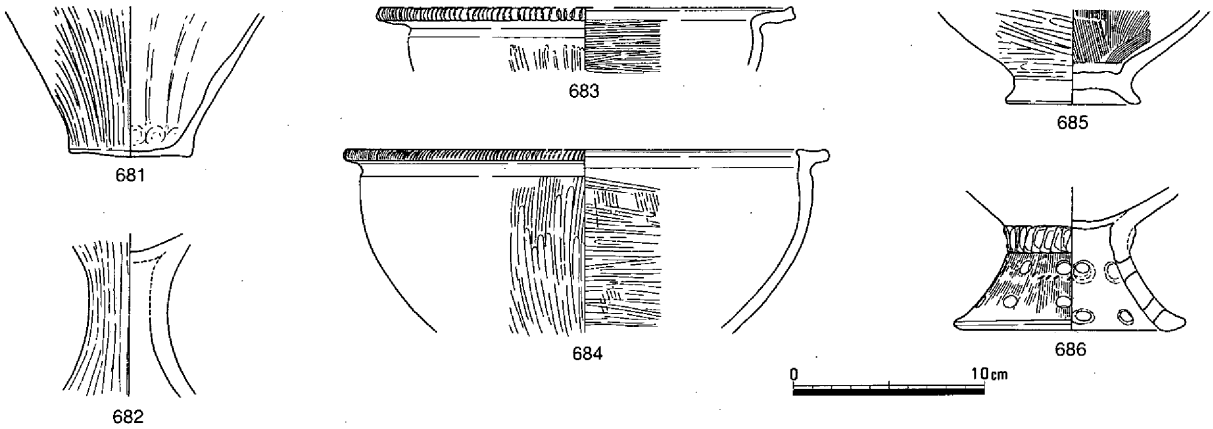

677


678


679


680

第268図　土壙204（1/30）・遺物（1）



第269図　土壙204　遺物（２）

短径132cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは検出面から72cmを測り、底面中央はほぼ平坦である。埋土は６層に区分されるが、堆積はレンズ状である。出土遺物は土器がある。671～675は壺、676～681は甕、682は高杯、683・684は鉢、685・686は台付壺と思われる。壺は広口の長頸壺で、口縁部に刻目を持つものである。672は頸部から口縁端に向かって肥厚し、平坦面を形成する。この平坦面に円形浮文などが飾られている。なお、672～674には頸部に凸帯が巡り、刻目が施されている。675は口縁部が水平となる。この上面には斜格子と刻目が施された二条の凸帯が巡っている。甕は胴上半部が大きく膨らみ、口縁部が「く」の字状となるが、口縁端部は上方に摘みあげている。器壁外面はハケメとヘラミガキによる調整がなされている。678の胴部中央には３列の刺突文がみられる。683・684は口縁部が水平となり、端面には刻目が施されている。時期は弥･中･Ⅱと思われる。（松本）

土壙205（第270図）

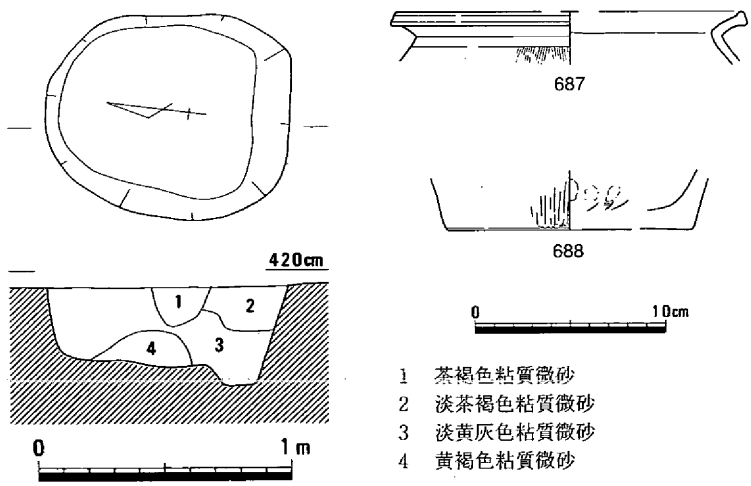
土壙204の東隣で検出された遺構である。規模は長径96cm、短径82cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは検出面から39cmを測り、底面は南に向けて低くなる。埋土は４層に区分された。遺物は土器、石器片が出土しているが、図示可能な遺物は土器である。687・688はいずれも甕である。687は口縁部が「く」の字状になっている。時期は弥・中・Ⅱと思われる。（松本）

土壙206（第271図）

土壙208の西隣に位置する。他の遺構に切られているが、規模は長径140cm、短径53cmを測り、平面形は長楕円形を呈する。深さは検出面から20cmを測り、底面は平坦である。出土遺物はないが、検出面から時期は弥・中と思われる。（松本）

土壙207（第272図）

土壙206から北に約２mほどの所で検出された遺構である。規



第270図　土壙205（1/30）・遺物

模は長径174cm、短径90cmを測り、平面形は不整楕円形を呈する。深さは検出面から26cmを測り、底面はやや西側が高い。埋土は１層である。遺物としては、甕689、高杯690などの土器が出土している。689は口縁部が「く」の字状を呈し端部が少し肥厚する。器壁外面は上部にはナナメハケ、下部はヘラミガキによる調整がなされている。時期は弥・中・Ⅲと思われる。　(松本)

土壙208（第273図）

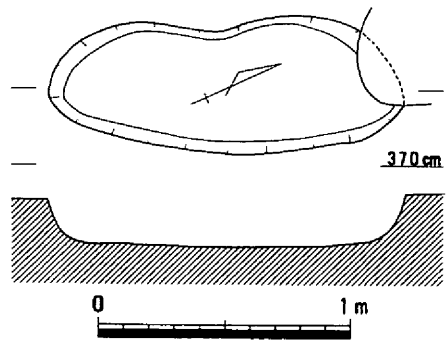
土壙206の東約１ｍの位置で検出された遺構である。他の遺構に切られているが、その規模は長径145cm、短径142cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは検出面から21cmを測り、底面は平坦である。遺物はないが、検出面からみて、弥・中・Ⅲの時期と思われる。　(松本)

土壙209（第274図）

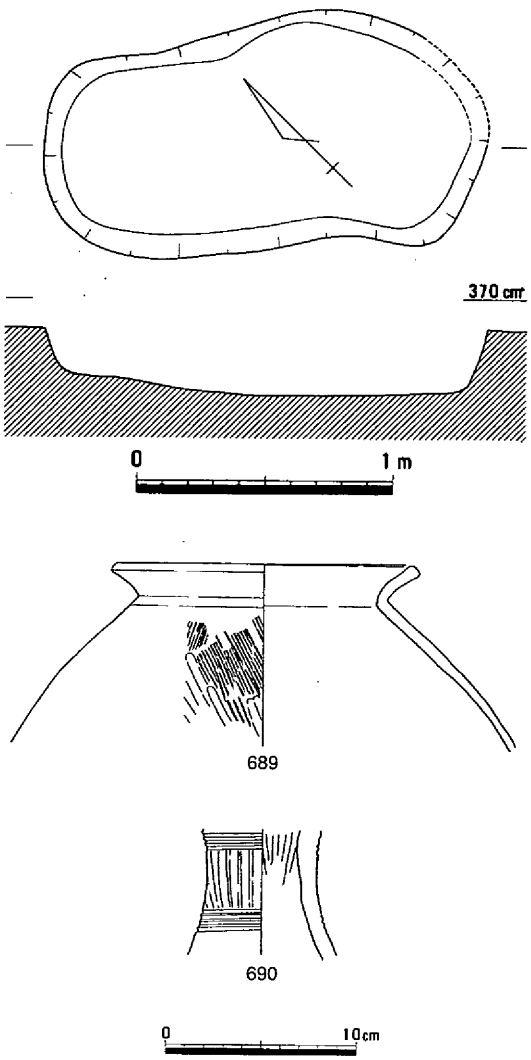
土壙210の東隣に位置する。規模は長径152cm、短径95cmを測り、平面形は長方形を呈する。深さは検出面から25cmを測り、底面は平坦である。埋土は３層に区分されるが、１、２層には炭を含む。時期は弥・中・Ⅱと思われる。　(松本)

土壙210（第275図）

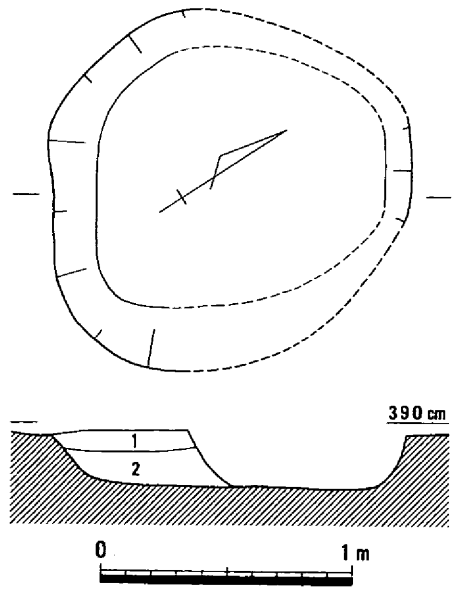
土壙209の西に位置する遺構である。規模は長径89



第271図　土壙206（1/30）



第272図　土壙207（1/30）・遺物



1　淡黄灰色粘質微砂
2　茶褐色粘質微砂

第273図　土壙208（1/30）

cm、短径75cmを測り、平面形は方形を呈する。深さは検出面から27cmを測り、底面は中央部がやや深くなっている。埋土は２層に区分される。時期は弥・中・Ⅲと思われる。（松本）

土壙211（第276図）

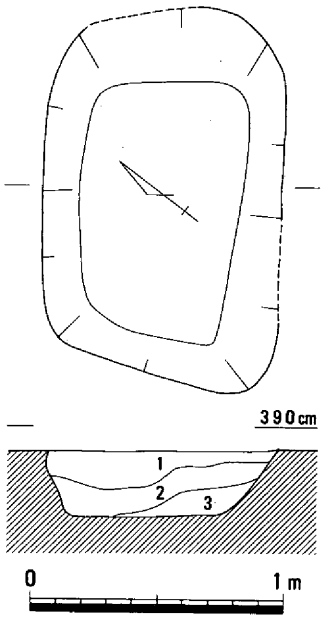
他の遺構に切られた状態で検出されていたため、規模や平面形態に不明な点があるが、確認された規模は長径73cm、短径73cmを測る。深さは検出面から41cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は３層に区分された。時期は弥・中・Ⅲと思われる。（松本）

土壙212（第277図）

土壙211と同様に他の遺構に切られた状態で検出された。規模は長径162cm、短径146cmを測り、平面形は不整方形を呈する。深さは検出面から５cmと浅く残存状態が極めて悪い遺構である。時期は弥・中と思われる。（松本）

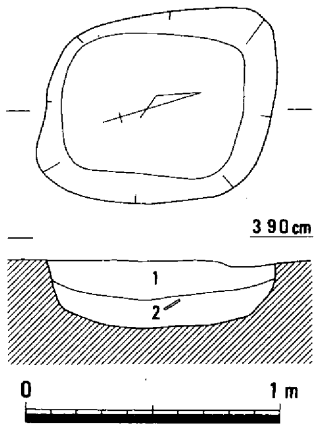
土壙213（第278図）

第２微高地の北東端において検出された遺構である。規模は長径133cm、短径102cmを測り、平面形は不整方形を呈すると思われる。深さは検出面から17cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は２層に区分される。遺物は甕の底部と思われる土器片が出土している。出土遺物からみて時期は弥・中と思われる遺構である。（松本）



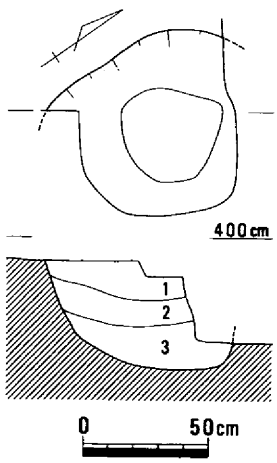
1　暗茶褐色粘質微砂（炭を含む）
2　茶褐色粘質微砂（炭を含む）
3　淡黄灰褐色粘質微砂

第274図　土壙209（1/30）



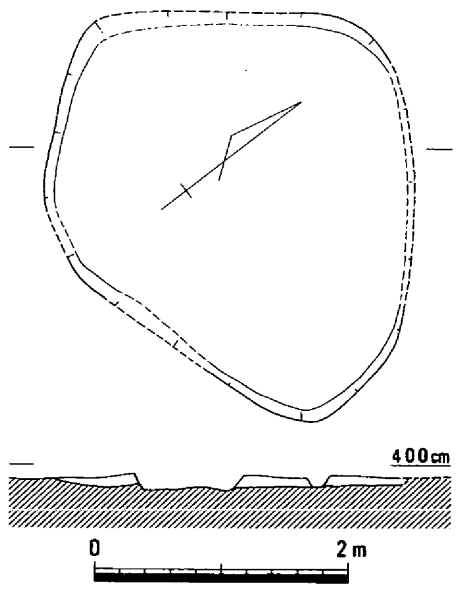
1　暗褐色粘質微砂
2　灰褐色粘質微砂

第275図　土壙210（1/30）



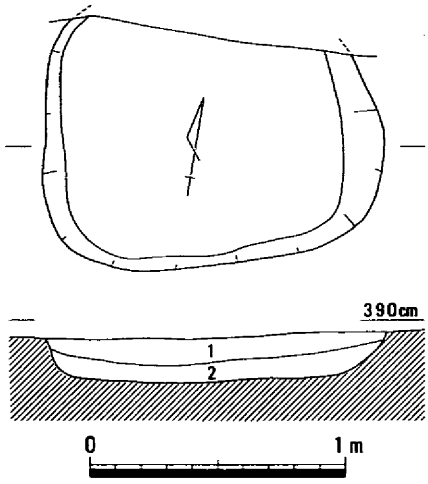
1　暗茶褐色粘質微砂
　（淡黄白色粘土ブロックを含む）
2　暗灰褐色粘質微砂
3　黄褐色粘質土

第276図　土壙211（1/30）

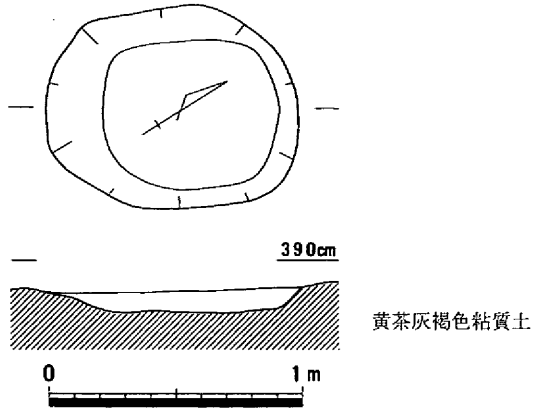


淡茶褐色粘質微砂

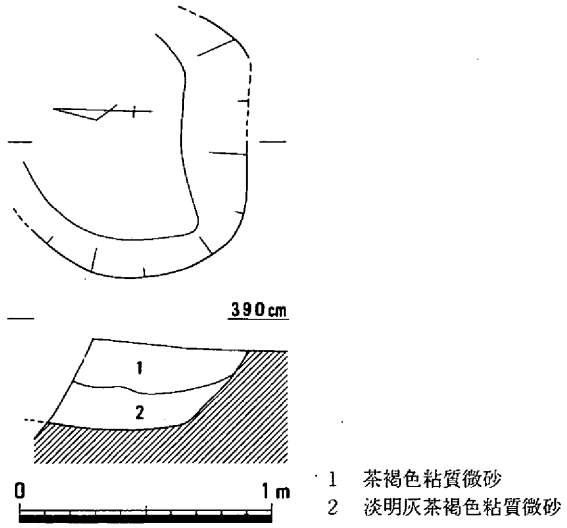
第277図　土壙212（1/60）



第278図　土壙213（1/30）・遺物



第279図　土壙214（1/30）



第280図　土壙215（1/30）

土壙214（第279図）

土壙213の南約２ｍに位置する。かなり削平を受けているが、規模は長径99cm、短径80cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは検出面から９cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は１層である。時期は弥・中・Ⅱと思われる。（松本）

土壙215（第280図）

第２微高地の東端で検出された遺構である。遺構の大部分は切られているが、規模は長径109cm、短径80cmを測り、平面形は円形を呈すると思われる。深さは検出面から36cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は２層に区分される。時期は弥・中・Ⅲと思われる。（松本）

（６）土壙墓

土壙墓１（第281図、写真６－２）

第２微高地のほぼ中央部で検出された。遺構の一部が切られているが、規模は長さ187cm、幅54cmを測り、平面形は長方形を呈する。深さは検出面から21cmを測り、底面はほぼ平坦である。人骨、副葬品などの出土品はみられなかった。時期は弥・中・Ⅱと思われる。（松本）

土壙墓２（第282図）

第２微高地のM24区南西部、竪穴住居６の南西約５ｍに位置する。平面形は長さ122cm、幅55cmの長方形で、深さは７cm残存していた。主軸はほぼ東西方向である。断面は逆台形で、底面はほぼ平ら

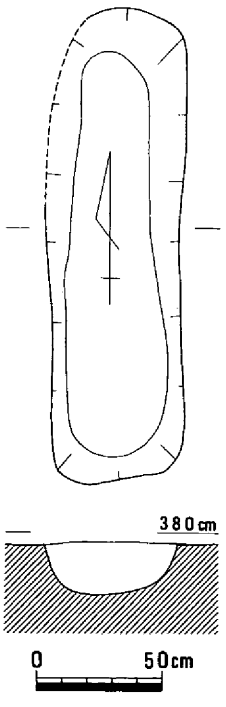
であった。図示したように北側にヒトの頭骨の一部が残存していた。頭骨には少量ではあるが歯が良好な状態で検出できており、これについては鑑定を依頼し、その結果については、「Ⅳ自然科学による分析・鑑定」に収載している。木棺の痕跡は検出できなかった。時期は明確ではないが、検出面や埋土の状況などから、弥・中・Ⅱ～Ⅲと考えている。（平井）

土壙墓３（第283図）

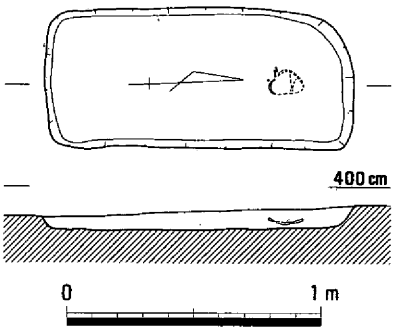
第２微高地のM24区、土壙墓２の南約２ｍに位置する。平面形は西端部が土壙墓４によって切られているが、長さは110cm以上、幅33cmの長方形で、深さは６cm残存していた。底面はほぼ平らで、埋土は褐色砂質土である。人骨は出土していないが、形状から土壙墓と考えている。時期は明確ではないが、弥・中・Ⅱ～Ⅲと考えている。（平井）

土壙墓４（第284図、写真６－３）

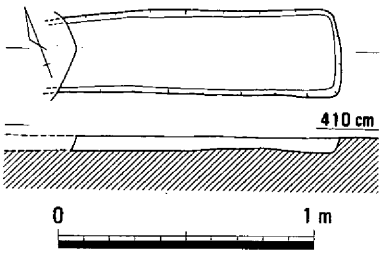
第２微高地のM24区、土壙墓３を切る形で検出した。平面形は長さ137cm、幅40cmの長方形で、深さは７cm残存していた。断面形は逆台形で、底面は平らであった。北東の端には、図示したようにヒトの頭骨が残存していた。頭骨には良好な一部の歯が検出でき、これについては鑑定を依頼し、その結果については、「Ⅳ自然科学による分析・鑑定」に収載している。木棺の痕跡は検出できなかった。埋土中からは少量の土器片が出土しているが、埋葬の時期を示すものかどうかは不明確である。時期は弥・中・Ⅱ～Ⅲと考えている。（平井）



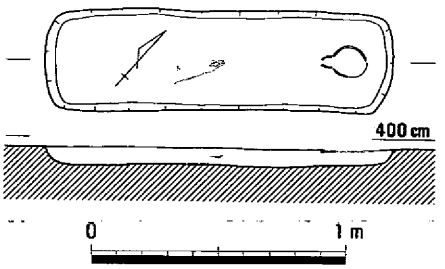
第281図　土壙墓１（1/30）

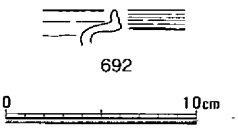


第282図　土壙墓２（1/30）



第283図　土壙墓３（1/30）



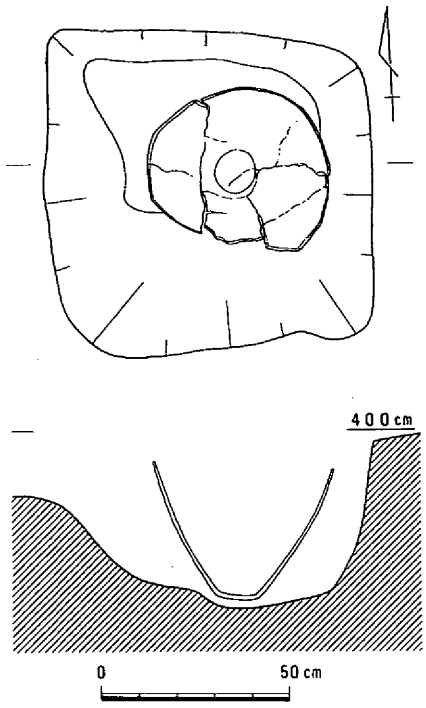


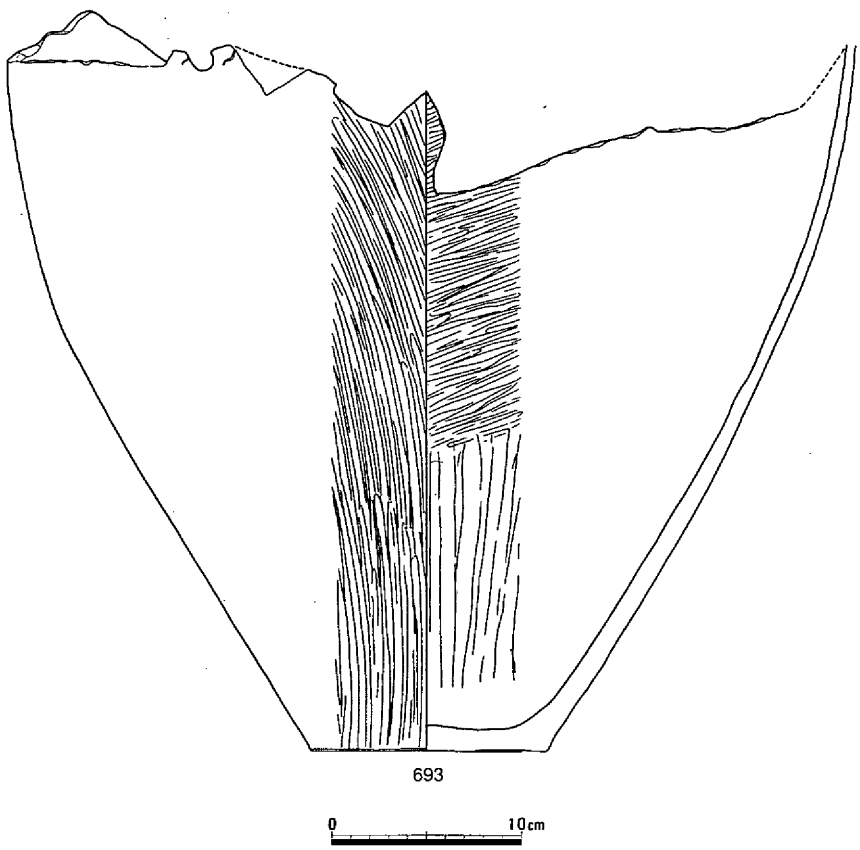
第284図　土壙墓４（1/30）・遺物

（7）土器棺墓

土器棺墓1（第285図）

竪穴住居4の南において検出された遺構である。上部はかなり削平されているが、検出された遺構の掘り方規模は長さ86cm、幅86cmを測り、平面形は正方形に近い形態である。深さは検出面から46cmを測る。掘り方は東と北側ではほぼ垂直となるが、西と南側はゆるやかな傾斜となっている。底部も東、北部分のみ平坦としている。棺の蓋は出土してないが、壙内から甕の胴部以下が直立した状態で出土した。693は底径12.4cmを測る大形製品で、器壁外面はヘラミガキ、内面には指ナデとヘラケズリによる調整がみられる。副葬品は棺身や掘り方内からも出土していない。時期は棺身として使用された土器からみて弥・中・Ⅱと思われる。　（松本）



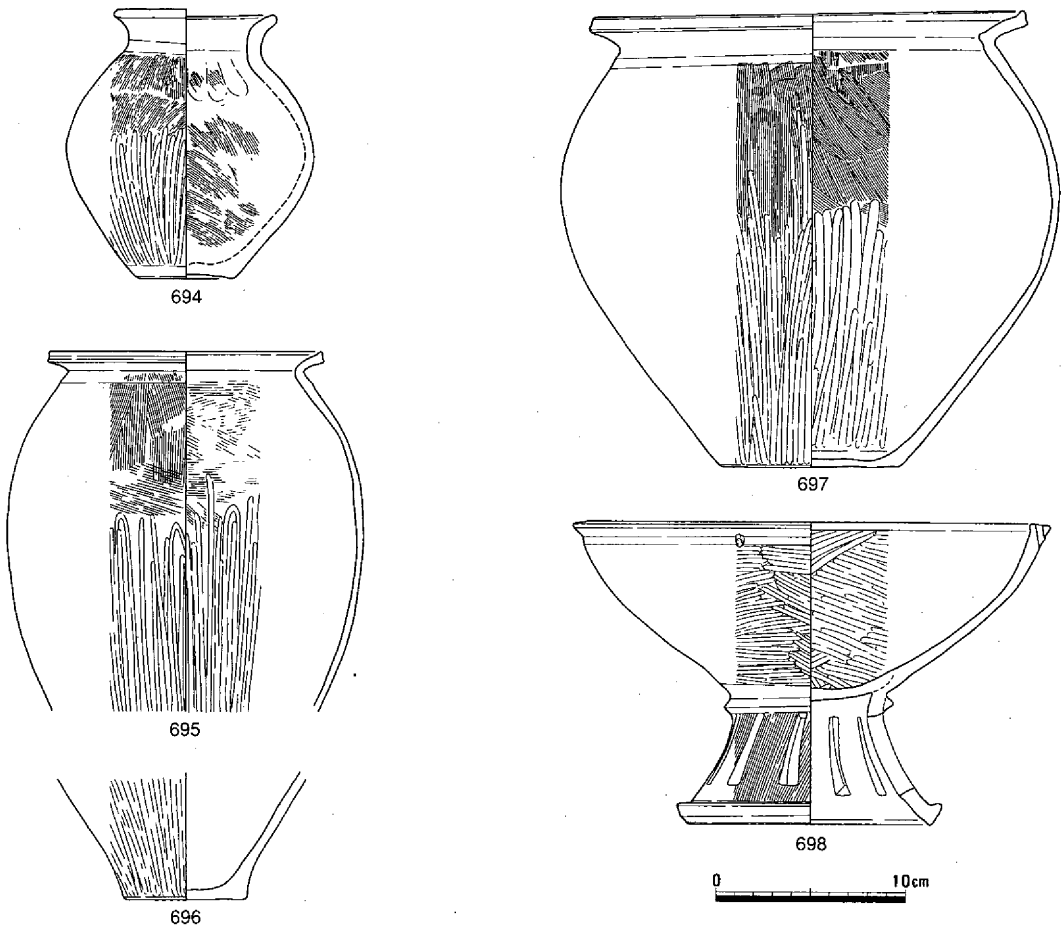


第285図　土器棺墓1（1/20）・遺物

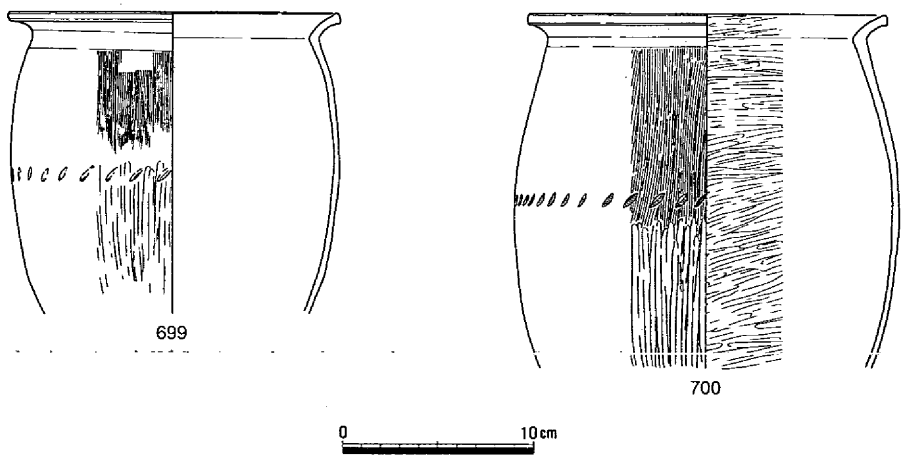
（８）柱穴

柱穴１～７（第286～291図）

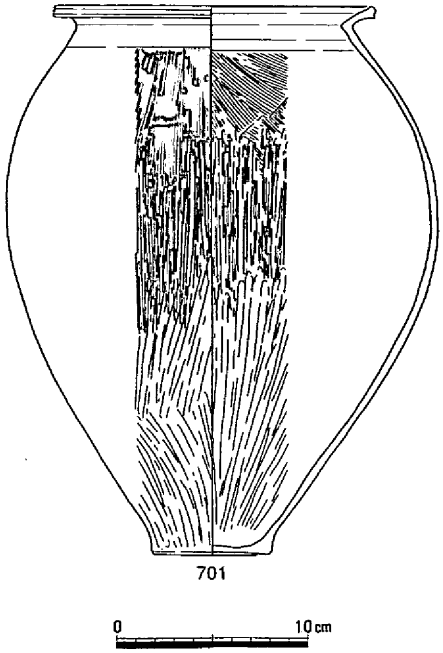
壺694は柱穴１、甕695～697、高杯698は柱穴２、甕699・700は柱穴３、甕701は柱穴４、壺702、甕703・704は柱穴５、甕705は柱穴６、分銅形土製品Ｃ29は柱穴７からの出土である。



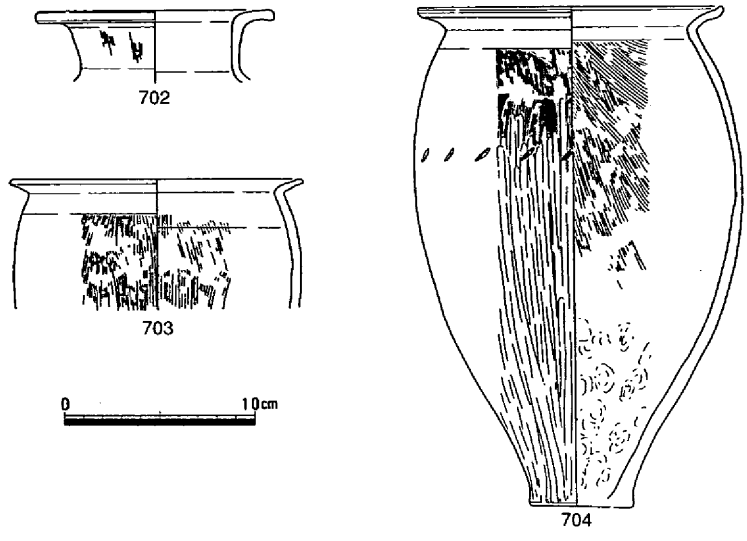
第286図　柱穴1・2　遺物



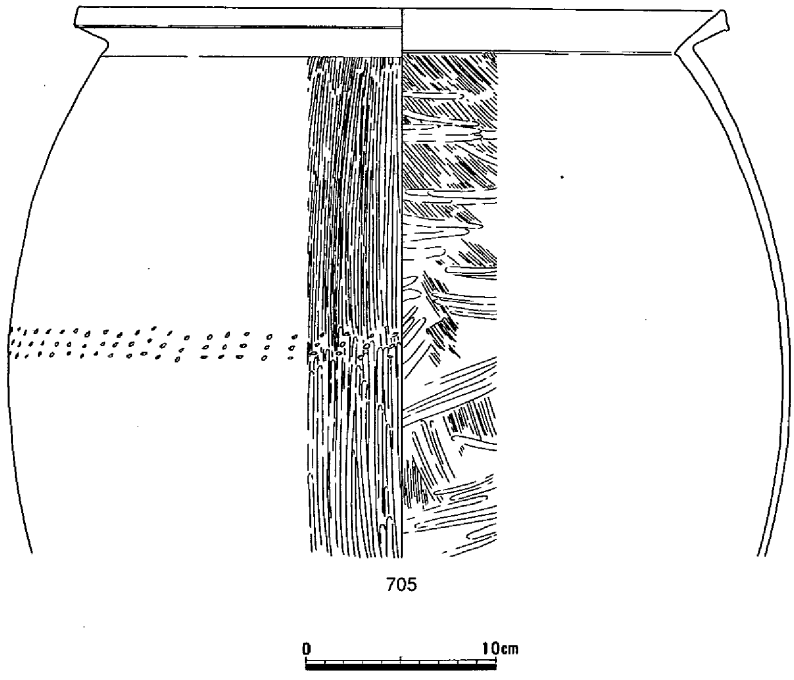
第287図　柱穴３　遺物



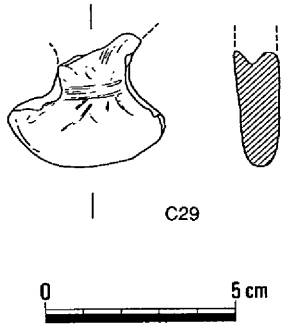
第288図　柱穴４　遺物



第289図　柱穴５　遺物



第290図　柱穴６　遺物



第291図　柱穴７　遺物

694の口頸部は短く、胴部中央の径が最大径となる。695と697は胴部の形状は異なるが、口縁部の形態や内外面の調整はよく似ている。698はやや浅いボウル状の杯部で、口縁端部は水平方向に肥厚し、面を形成する。脚の取り付きには突帯が巡り、脚裾端部は上方に拡張する。脚部外面にはハケメが認められる。699・700は肩の張りが弱く、口縁部は短く外反する。端部はわずかに肥厚し、面を形成する。外面調整は、胴部の列点紋を境に、

下半はヘラミガキ、上半はハケメが見られる。701は胴部中央がよく張り、口縁端部は肥厚し、面を形成する。外面のヘラミガキは最大径の部分まで達しない。702は口縁部が水平方向にのび、端部は面を有する。703は肩の張りが弱く、口縁部ののびは短いが、704の口縁部はわずかに上方へのびる。内面下半は指頭圧痕が残るが、上半はハケメが行われる。705は大形の甕で、胴部に列点紋を施す。口縁端部は上下に肥厚し、面を形成する。外面は縦方向のハケメとヘラミガキだが、内面は斜め方向のハケメの後横方向のヘラミガキが行われる。C29は小形で、つくりが粗雑な感がある。周囲を沿う２条の櫛描き沈線は、抉れ部の櫛描き沈線で束ねられるような紋様構成である。　（柴田）

（９）溝

溝１・２

溝１は、N21区の南東部、橋脚７調査区、溝２は、N21区の南東部、橋脚８調査区に位置する。いずれも南側に拡がる微高地の北斜面に、微高地に沿う形で東西方向につくられている。溝１は、幅50cm前後で、深さは10～20cm残存していた。断面形は逆台形にちかく、底面には凹凸が認められた（第292図Ａ断面）。溝２は、幅70cm前後で、深さは10～20cm残存していた。断面形は逆台形にちかく、底面には凹凸が認められた（第292図Ｂ断面）。これらの溝の時期は明確ではないが、土層関係から弥・中・Ⅱ頃と考えている。確認はできていないが、北側に掘られていた水田の用・排水路として機能していたのではないかと推測している。溝１と２はつながる可能性が高い。　（平井）

溝３（第295図）

N23区の南西隅、低位部の中央付近で検出された。調査区北壁の土層断面の観察によれば、弥生時代の水田層の下に位置し、旧河道を埋めた地山層の上面で検出された。調査区の南半では検出することができなかったが、おそらく島状高まりの下に続いていたものとみられる。溝の幅は55～86cm、深さが20～40cmで、断面形は滑らかな皿状を呈していた。水流の方向は明確ではない。　（岡本）

溝４（第296図）

調査区の南西端にあり、水路部分の調査区において検出した溝である。幅が140cmで、深さは40cmを測る。遺物からみて弥生時代中期に属するが、これより北側の調査時には検出できなかった。この部分は微高地端部にあたることから、本来は微高地肩部のラインであった可能性が強い。　（弘田）

溝５（第297図）

第二微高地西端で検出した大型溝である。北北東から南南西に伸びる。全長20m以上、幅370cm、深さ約100cmを測る。

遺物は底部の欠けた甕が出土している。口縁部端部はわずかに折れ曲がる。

土器から見てこの溝の時期は弥・中・Ⅲに属する。　（浅倉）

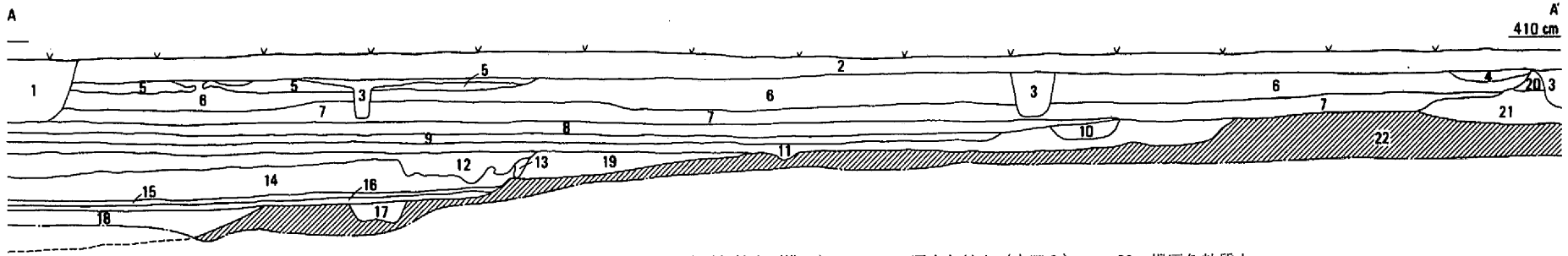
溝６（第298図）

第２微高地調査区の西端中央部に位置し、溝５とつながる可能性がある溝である。微高地が西に拡がる過程で形成された凹みのような所であり、明確な溝とはいいがたい。

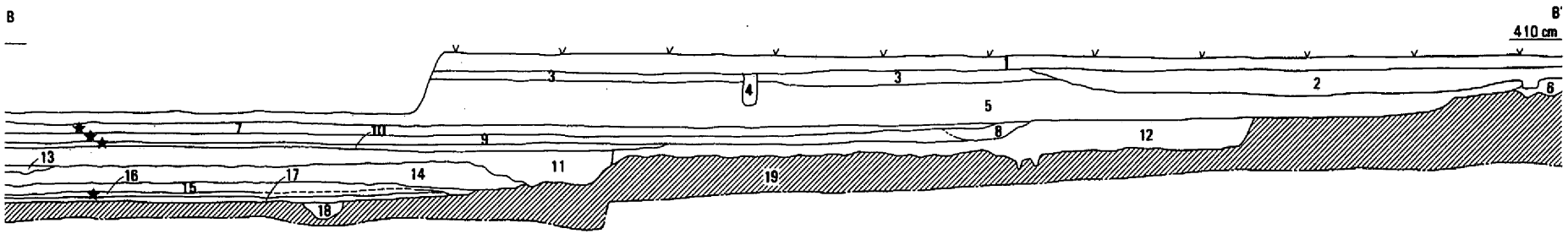
出土遺物からみて弥生時代中期と思われる。　（弘田）

溝７（第299図）

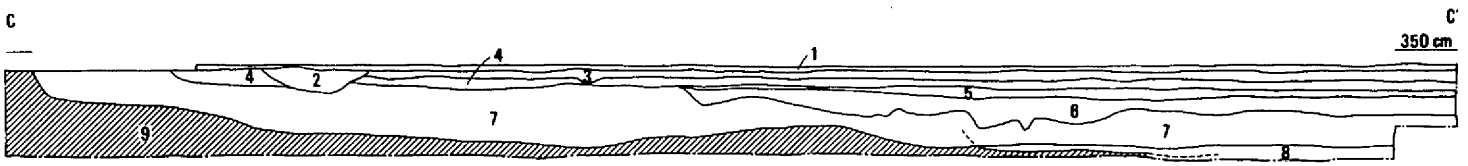
溝６の西に平行して検出できた溝である。溝の幅は80cmで、深さは20cm測る。これより南側の溝５に続く可能性はあるが北にはのびず、溝６同様に微高地端の凹みの一部であると思われる。



1　現代溝
2　暗灰色粘質土（現水田耕土）
3　暗渠
4　淡灰色粘質土
5　黄色細砂
6　灰白色微砂
7　淡青灰色粘土
8　暗灰色粘土
（中世・鎌倉時代後半の水田）
9　黄灰色粘質土
10　淡灰色粘土（溝57）
11　淡灰色粘質土
12　黒褐色粘質土（溝28）
13　淡灰色粘土
14　淡緑灰色微砂
15　灰白色粘土（水田３）
16　黄色粘土
17　淡褐灰色粘土（溝１）
18　褐灰色粘土
19　淡黄緑灰色粘質土
20　褐灰色粘質土
21　暗緑灰色粘質土
22　淡黄緑灰色細砂

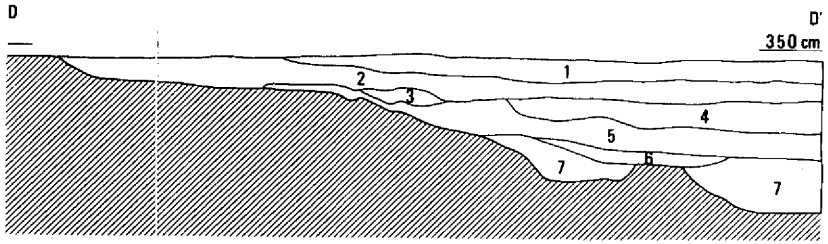


1　暗灰色粘質土（現水田耕土）
2　暗渠
3　灰白色砂質土
4　暗渠
5　灰白色粘土
6　暗灰色粘質土
7　暗灰色粘土
8　青灰色粘土（溝58）
9　灰白色粘土
10　淡灰色粘土
11　黒褐色粘質土（溝29）
12　淡緑灰色粘質土
13　灰色粘質微砂
14　灰白色粘質微砂
15　灰白色微砂（溝８の埋土）
16　灰白色粘土（水田３）
17　黄色粘土（鉄分を含む）
18　褐灰色粘土（溝２）
19　暗緑黄色微砂
★印はプラント・オパール分析試料

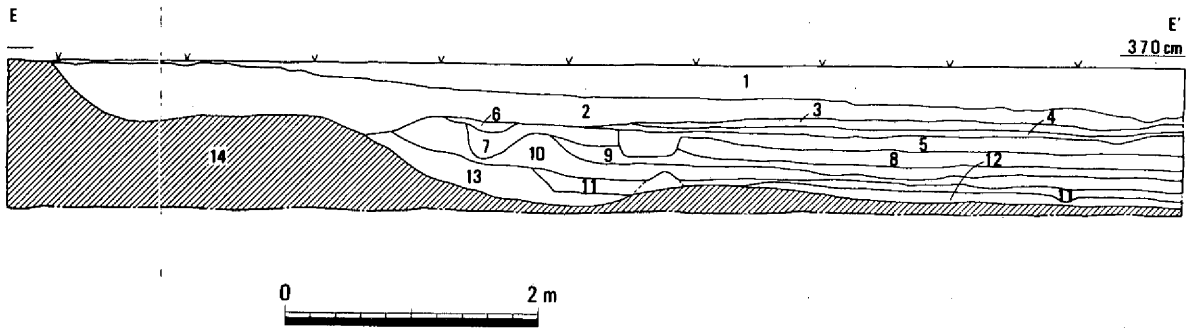


1　灰色粘土
2　暗灰色粘土（溝59）
3　灰色粘土（鉄分を含む）
4　暗灰黄色粘土（鉄分を多く含む）
5　灰黄色粘土（鉄分を多く含む）
6　暗褐色粘土
7　黄灰褐色粘土
8　明黄灰色粘質土（鉄分を含む）
9　オリーブ灰色微砂

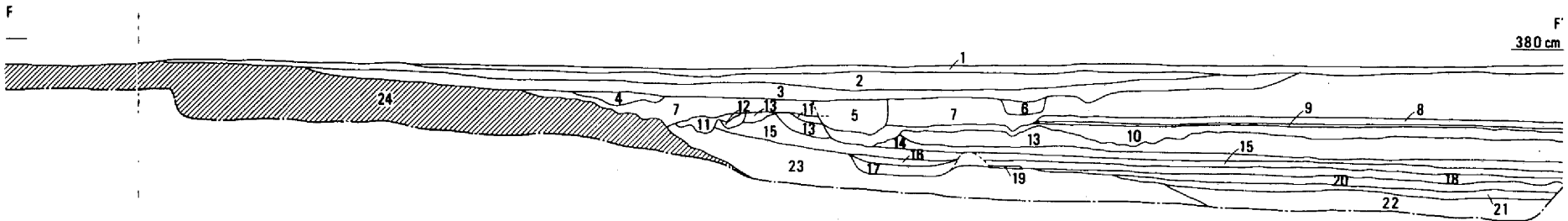
第292図　A—A′・B—B′・C—C′ 断面（1/60）



1　褐灰色微砂（マンガンを含む）
2　灰黄色微砂
3　灰黄色細砂（溝40）
4　暗褐色粘質土
5　濃灰黄色粘土
6　緑灰黄色粘土
7　緑黄灰色粘土（溝９）（マンガンを含む）

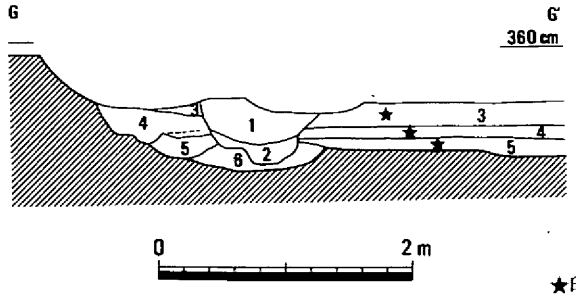


1　淡灰色粘質土
2　灰白色砂質土（低位部２）
3　淡灰色粘質土
4　淡灰色粘質土（3・4層は酸化鉄の層で分離）
5　暗褐色粘質土（溝35）
6　淡灰色粘質土
7　暗灰褐色粘質土
8　淡灰褐色粘質土
9　灰白色微砂
10　黄白色粘質土
11　灰白色粘土（北側は溝９、南側は水田４）
12　黄色粘土（鉄分を含む）
13　褐灰色粘質土（マンガンを含む）
14　淡黄色微砂



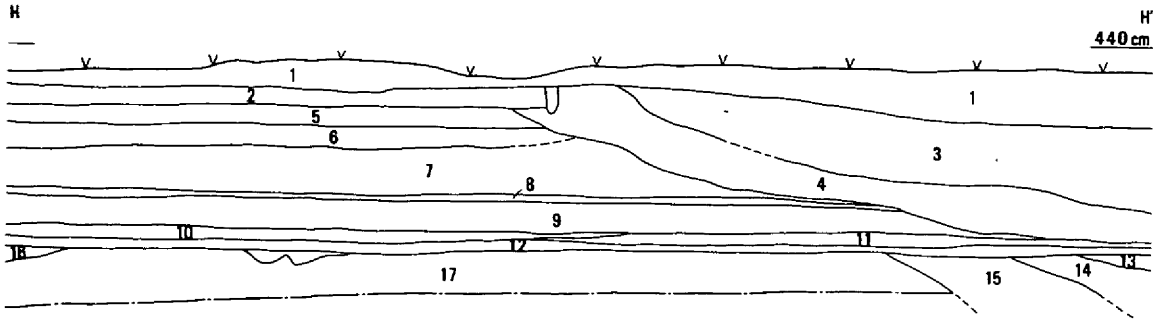
1　灰白色砂質土（低位部４）（下層にマンガンを含む）
2　灰白色砂質土（低位部４）
3　淡灰色粘質土（土器を多く含む）（低位部４）
4　淡灰色粘質土（溝69）
5　灰白色粘土
6　淡灰色粘土（溝70）
7　灰白色粘質土（低位部２）
8　淡褐灰色粘質土（水田層？）
9　鉄分
10　暗褐色粘質土（溝36）
11　灰白色粘質土（暗褐色土をブロックで含む）
12　暗灰色粘土
13　淡灰褐色粘質土
14　灰白色微砂
15　黄灰白色粘質土（水田４）
16　灰白色粘土
17　灰白色粘土（マンガンを含む）（溝９）
18　灰白色粘土（水田層４）
19　鉄分
20　黄色粘土（鉄分を含む）（水田２）
21　灰白色粘土（水田１）
22　灰白色微砂
23　褐灰白色粘質土
24　淡黄色微砂

第293図　D—D′・E—E′・F—F′ 断面（1/60）

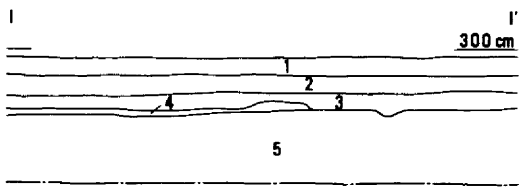


1　暗褐色微砂（溝34）
2　灰黄褐色微砂（溝34）
　（黄褐色土のブロックを含む）
3　褐色微砂（水田４）
4　淡灰白色微砂（溝11）
5　淡灰黄白色微砂（溝10）（水田２？）
6　暗灰黄白色微砂（溝９）

★印はプラント・オパール分析試料

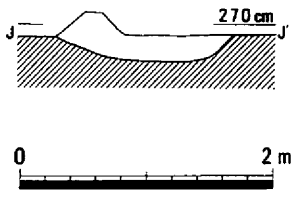


1　黒褐色砂質土
2　灰褐色微砂（上部に鉄分を含む）
3　青灰色粘土（黄褐色細砂を互層に含む）
4　黒灰色粘土
5　淡褐灰色微砂（マンガンを含む）
6　褐色微砂（上部にマンガンを多く含む）
7　明褐色微砂（上部に鉄分を含む）
8　暗褐色微砂（上部に鉄分を含む）
9　暗褐色微砂（上部に鉄分を含む）
10　淡青灰色粘質微砂（淡く酸化）（水田５）
11　黄褐色粘質微砂（強く酸化）（水田４）
12　黄灰色粘質微砂（強く酸化）
13　黒緑灰色粘質微砂
14　暗灰色細砂
15　暗灰褐色粘質微砂
16　暗褐灰色粘質微砂
17　暗褐灰色細砂
　（上部に鉄分・マンガンを含む）



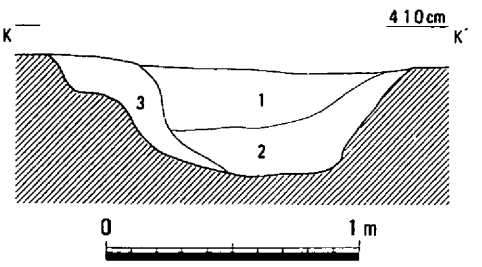
1　褐色微砂
2　淡灰白色微砂（水田４）
3　淡灰黄白色微砂（水田2？）
4　淡灰黄白色微砂（3層と同色）（水田１）
5　淡褐色細砂（粘質微砂を含む）

第294図　G—G'・H—H'・I—I' 断面（1/60）



オリーブ黒色（7.5Y3/2）粘性砂質土
（マンガンをブロックで含む）

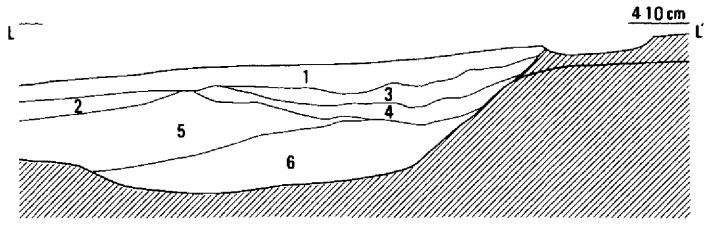
第295図　溝３（1/60）



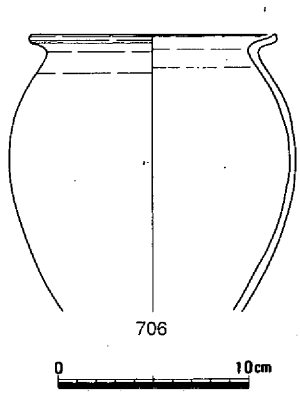
1　暗褐色粘質砂
2　灰褐色粘質砂
3　暗黄橙色砂

第296図　溝４（1/30）

壺707は頸部に指頭押圧突帯を貼り付け、大きく外反する口縁部の端部は上方に肥厚させ外面にはヘラによる刺突文を、口縁部内側に櫛描の格子文を施す。甕は短く外反する口縁部をもつ。口縁端部を上に肥厚させる708・709と内側につまみ上げるようにナデる710がある。高杯では、杯部が内湾して立ち、肥厚して面をなす端部に紐孔や円形浮文のつく711と口縁部が水平に屈曲させ内側に凸帯がめぐる713、深い椀形の714がある。これらの遺物の時期は、弥生時代中期である。　（弘田）

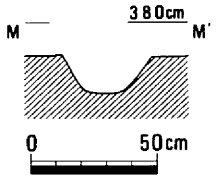


1　灰褐色微砂（炭化物を含む）
2　淡灰黄褐色微砂
3　淡褐色粘質微砂
4　淡灰褐色微砂
5　淡灰黄褐色粘質微砂
6　淡褐黄灰色細砂



第297図　溝５（1/60）

(10) 水田



第298図　溝６（1/30）

水田１

Ｎ22区の北東部とM･Ｎ23区の西半部に位置する。水田層は、時期を違えて異なる三つの調査班が発掘しているため、土層のつながりが必ずしも明確にはならなかったものの、以下に記すように理解している。

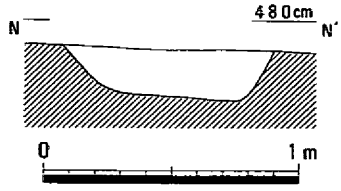
水田１とした土層は、第293図Ｆ断面の21層、第294図のＨ断面の４層に相当すると考えている。海抜高は、約2.5ｍである。平面的な調査で水田面が確認できたのは、推定範囲の中央部分のみであった。この場所では、海抜約2.55ｍまで下げて面的な調査を行ったところ、第10図に示したような、北西と南東の高い部分からのびる、おもにマンガンの沈着した帯状の筋を二条確認した。これを水田畦畔の痕跡と考えて、周囲を掘り下げ水田面とした。水田面は、最も深いところで海抜2.4ｍであった。ただし、洪水砂に埋まった水田のように確実ではない。マンガンの沈着した帯状の筋が畦畔であるとする確証はなく、また水田面との時期的な対応関係についても、疑問は残っている。北東部分では、平面的な調査は十分に行えなかったが、第10図の平面図や、第294図Ｈ断面図に示したような帯状の高まりを確認し、これを水田畦畔と理解している。これも部分的な確認にとどまっており、中央部分との面的な、あるいは層位的な比較は行うことができなかった。南西部分では、面的な調査は意識的に行っておらず、畦畔痕跡も確認することができなかった。

推定した水田範囲の西側に沿ってつくられている溝９・10については廃絶されたのは出土した土器の中で最も新しい時期である弥・後・Ⅰと考えているが、出土した土器には弥・中・Ⅱのものも含まれているため、水田１が営まれていた時期にも機能していたと推測している。

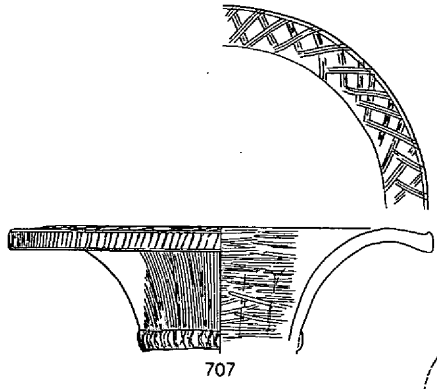
水田１の時期を確定できる資料はない。前述したように、溝９・10から出土した弥・中・Ⅱの土器から、この時期以降弥生時代後期以前と推定しておきたい。（平井）

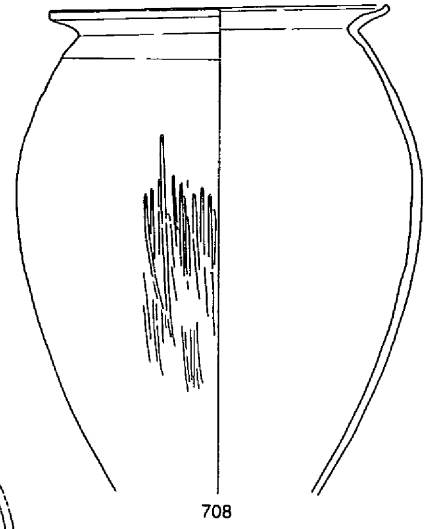
水田２（第300図）

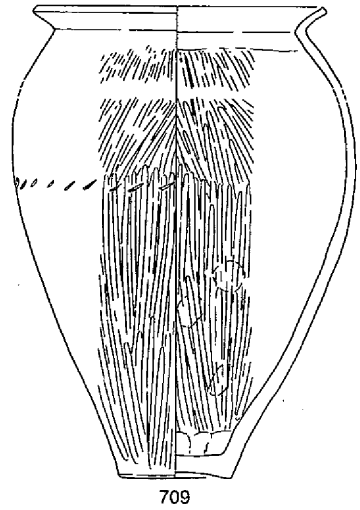
第293図Ｆ断面20層、第294図Ｇ断面５層、Ⅰ断面３層を水田２と想定しているが、明確でない。第300図は、水田１の約５cm上面で検出した水田の範囲と細長く浅い溝である。これを水田２として報告しておきたい。他の場所では面的な調査は十分に行えていない。水田１で述べたような理由で、溝９・10は水田２の段階にも機能していたと推測している。時期は水田１と同じく、弥・中・Ⅱ以降後期以前と考えている。（平井）

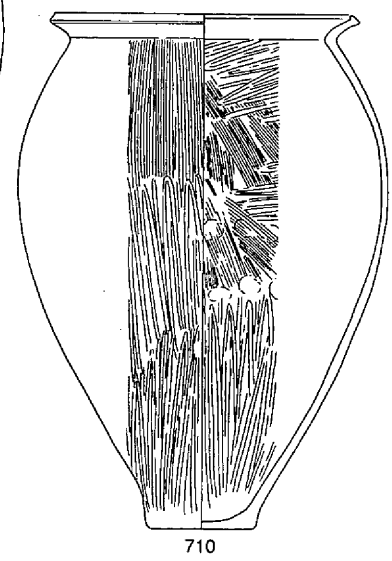


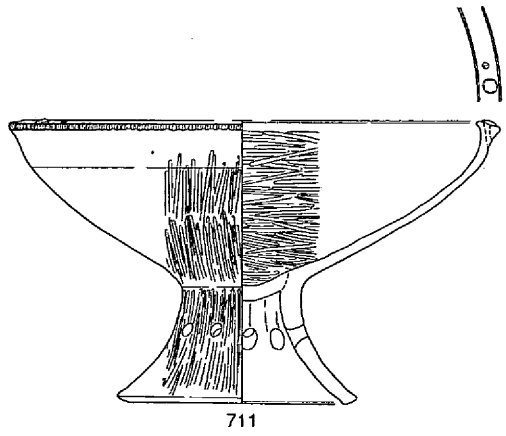
茶灰黄色砂質土

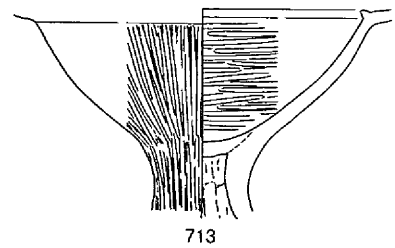


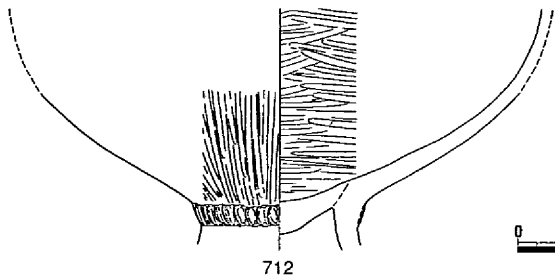


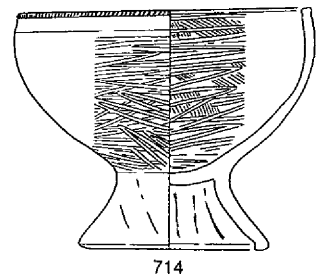




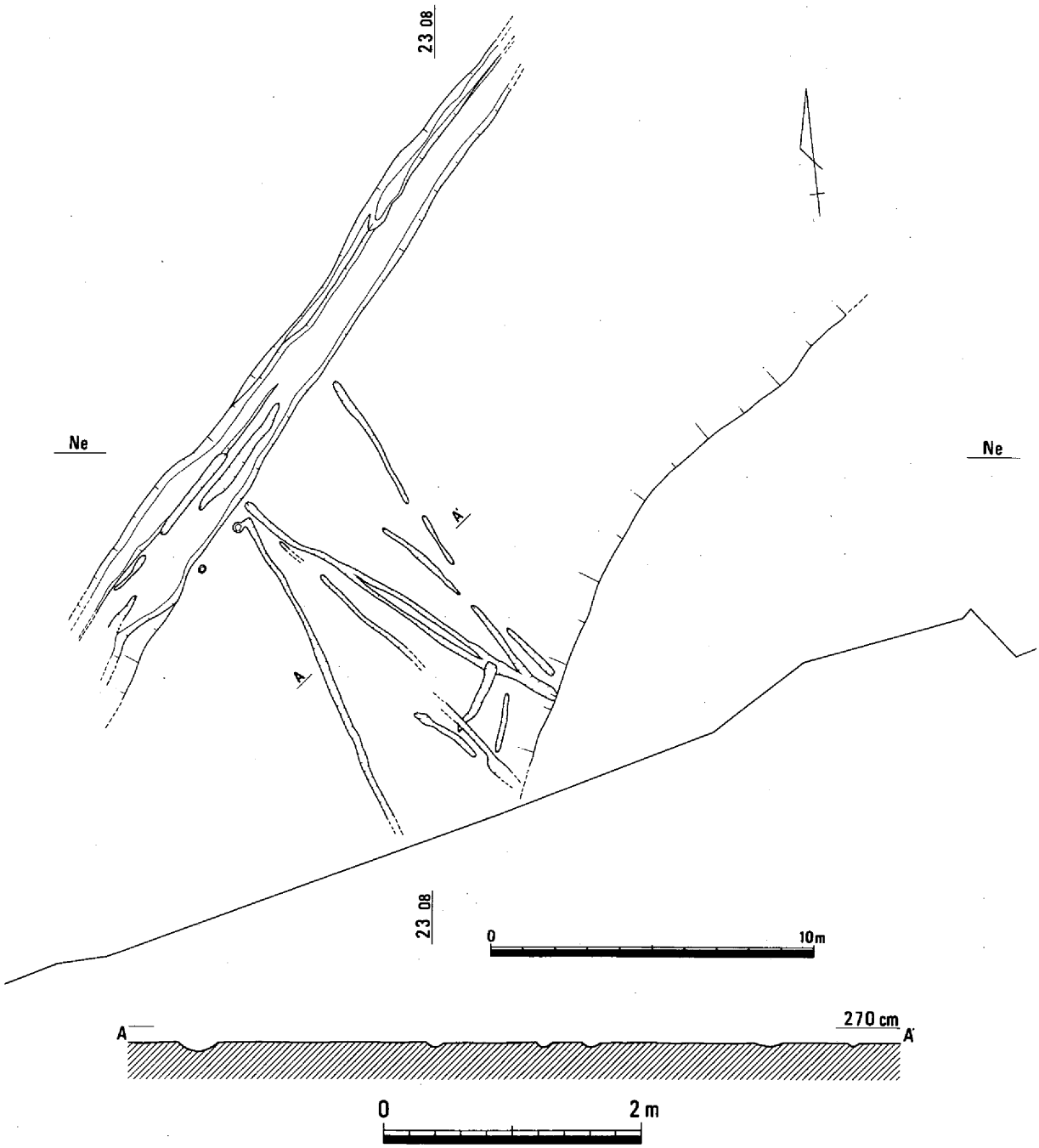








第299図　溝7（1/30）・遺物



第300図　水田２（1/200・1/50）

(11) 低位部

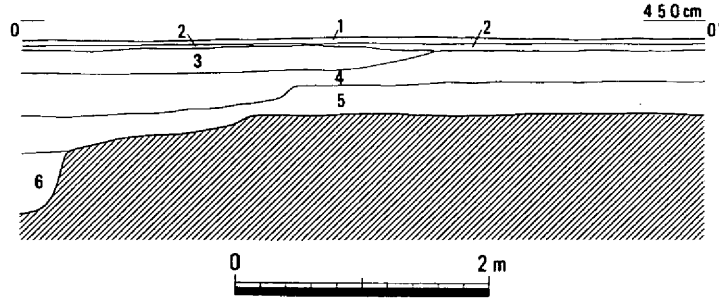
低位部１（第301図）

第２微高地が大半を占める調査区の西端では、基盤層である淡黄褐色粘質土が西に向かって急激に下がり、そこに同色の砂質土が堆積していた。また、この層では、弥生土器壺715と甕716以外に遺物は全く含まれていなかった。この下がりの肩は溝５の東肩のラインにつながり、さらに南では土壙３の肩に続く可能性がある。壺715は無花果形の体部をなし、口縁端部をわずかに外に肥厚させて内傾する面をつくる。胴部外面では、最大径の位置に刺突文をめぐらせる。それより下位にはヘラミガキ

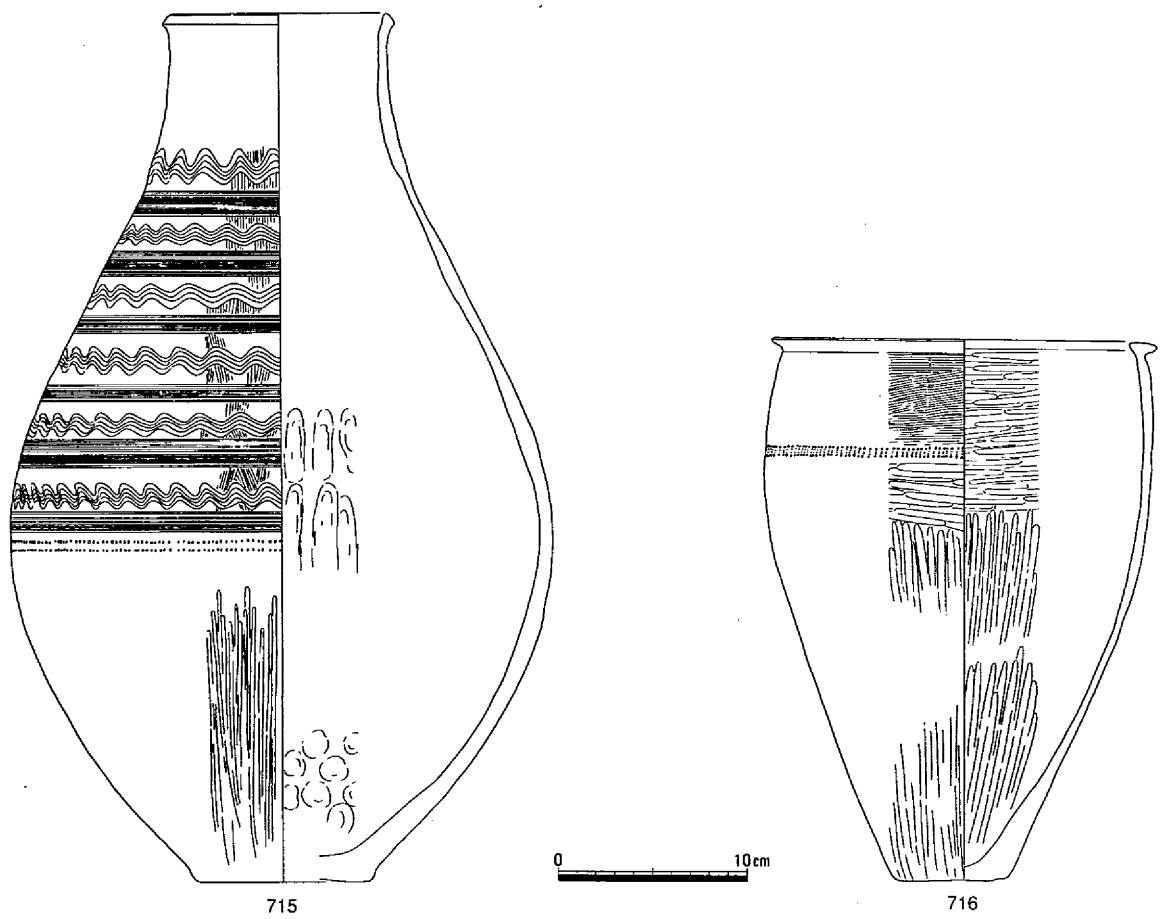
を施し、上では頸部までを櫛描の直線文と波状文で充填する。甕716は、逆Ｌ字に曲がる口縁部は内側にも肥厚する。胴部外面では、最大径あたりに刺突文をめぐらせ、それより上に乱雑な櫛描沈線を、下位にはヘラミガキ施す。ともに中期初頭に位置づけられる。　（弘田）

（12）その他の遺構・遺物

ここで取り上げた遺物は、遺構から遊離して出土したものの他に、調査の際に関係する遺構を特定できなかったもの、明らかに時期の異なる遺構に混じっていたと思われるものなどである。また、石製品や土製品については、弥生時代後期である可能性のものもあると思われるが、当地域における石製品の時期的な様相などを考慮して、敢えてここで示した。種別では、土器114点、石製品137点、土製品34点を掲載している。時期別に見ると、弥生時代中期中葉の土器がかなり多く、次いで後葉のも



1　耕土
2　不明
3　褐灰色砂質土（中世）
4　淡褐色砂質土
5　暗橙褐色粘質砂
6　淡黄褐色砂質土（弥生前～中期）



第301図　低位部１（1/60）・遺物

のが多い。石製品や土製品もこれに近い状況になるのではないかと思われる。出土地点では、いずれも第２微高地が圧倒的に多く、第１・３微高地のものは割合は非常に低い状況である。

土器（第302～309図、写真60）

図示したものは、弥生時代中期中葉の土器がかなり多く、次いで後葉のものが多い。出土地点では、第２微高地が大半を占めており、若干第３微高地のものもある。器種については、壺・甕・高杯・ジョッキ形土器・鉢・台付鉢・蓋などがある。掲載分での割合とは別に、全体を概観したところ甕の破片が非常に目立っていた。

壺には、短頸壺717～723・736、短頸広口壺726・728・734・735、長頸広口壺724・725・727・729～733、無頸壺737～739などがある。

短頸壺は、大形で頸部に刻み目を有する貼り付け突帯などを施す717～720や、やや中形で頸部と肩部の境に指頭圧痕紋突帯を巡らせる721～723などがある。前者は、口縁端部が拡張し、水平方向あるいはやや外傾した面を形成する。また、ほとんどのものが端部には刻み目を施す。内外面の調整にはハケメやヘラミガキが認められる。後者は、前者に比べると、口縁端部の形態は類似するが、装飾性は少ない。723では、胴部中央が強く張り、最大径となっている。736は小形で、胴部中央よりやや下が最大径になる。短頸広口壺は、口縁端部が上方に摘み出され、頸部と肩部の境に貼り付け突帯や凹線が巡る726・728と、緩やかに外反する734、「く」字状に屈曲する735がある。

長頸広口壺は、口縁端部が大きく下方に拡張し、垂直方向に面を形成する725・727・729・730や、外傾する面を形成する732・733などがある。前者は口縁端部に凹線が見られるものと無いものがあるが、いずれも刻み目や格子紋、円形浮紋などが施されている。また、727や730のように、頸部には貼り付け突帯が巡るようである。731は、口縁部が欠損しているが、上面には刻み目を有する貼り付け突帯や櫛描きの波状紋が施される。

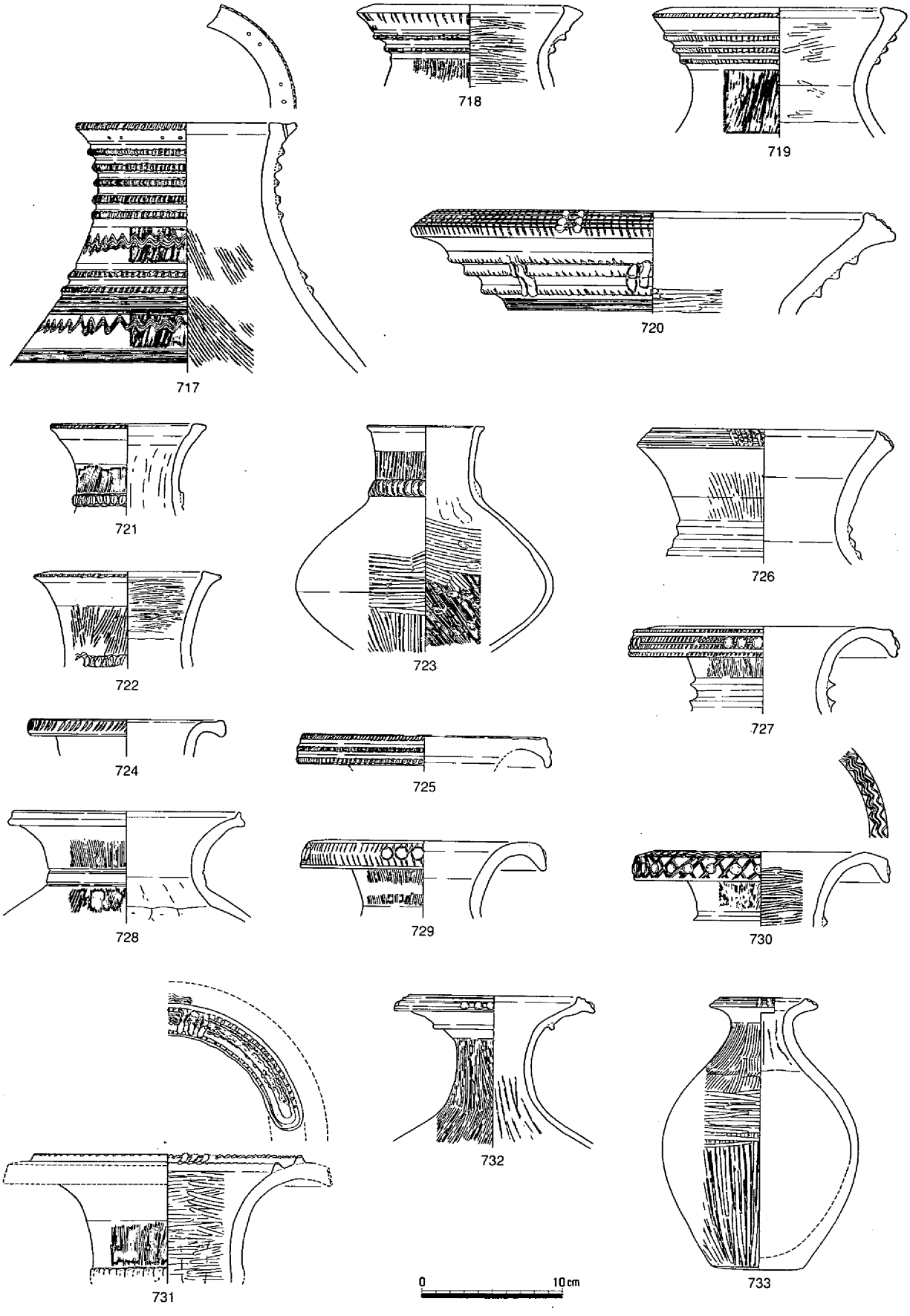
無頸壺は、肩部から口縁部にかけて内傾し、端部は肥厚し水平面を形成する。口縁端部近くには２個１対の穿孔を有する。

甕には、肩が張り、口縁部が厚く上下に肥厚する740・741、肩の張りが弱く、口縁部が「く」字状に屈曲する742～765、特に大形のもの766～768がある。これらは概ね中期中葉の形態を示す。一方、口縁端部を上方に折り曲げる769・770・772・774・775などは中期後葉の特徴を示している。

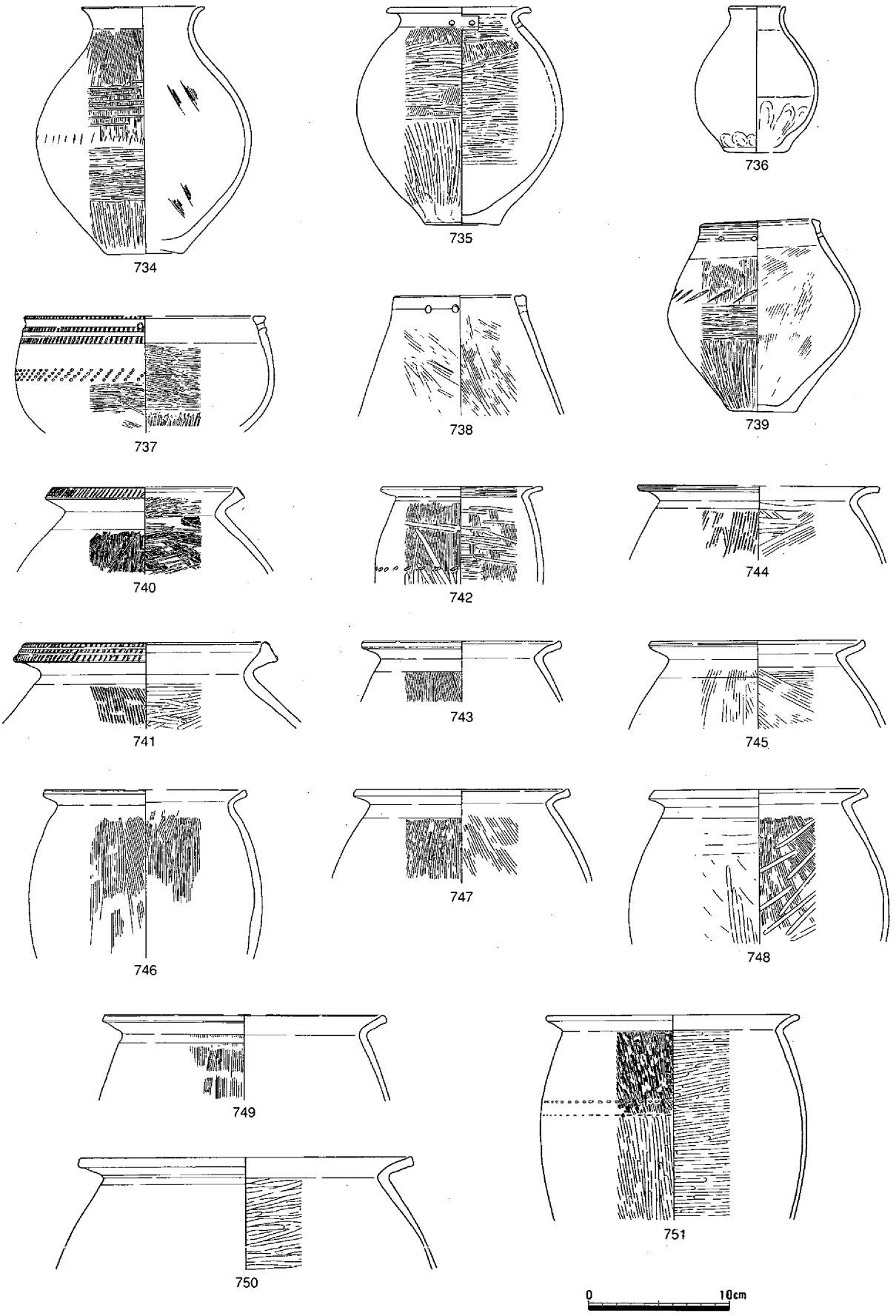
742～765の甕には、口縁部が外反するものが多いが、上方へ湾曲するもの745・756もある。また、端部は丸くおさまるもの、上方へ摘み出すもの、肥厚するものなどが認められる。内外面の調整については、全体の分かるものがあまりないが、ハケメやその後ヘラミガキを施している。特に肩部外面はハケメを残し、それ以下はヘラミガキを行うことが多いようである。内面も似た傾向だが、全面ヘラミガキを行うものも多い。大形の766・768は、口縁端部が上下に肥厚し、面を形成する。胴部には列点紋や貝殻腹縁紋を施し、内面は全体にヘラミガキ、外面も768では頸部までヘラミガキを行っている。773や774は内面にヘラケズリが認められるが、775は胴部上半には及ばないと思われる。

776～798の底部は、外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキやナデ、ハケメが行われる。798のみヘラケズリが認められる。

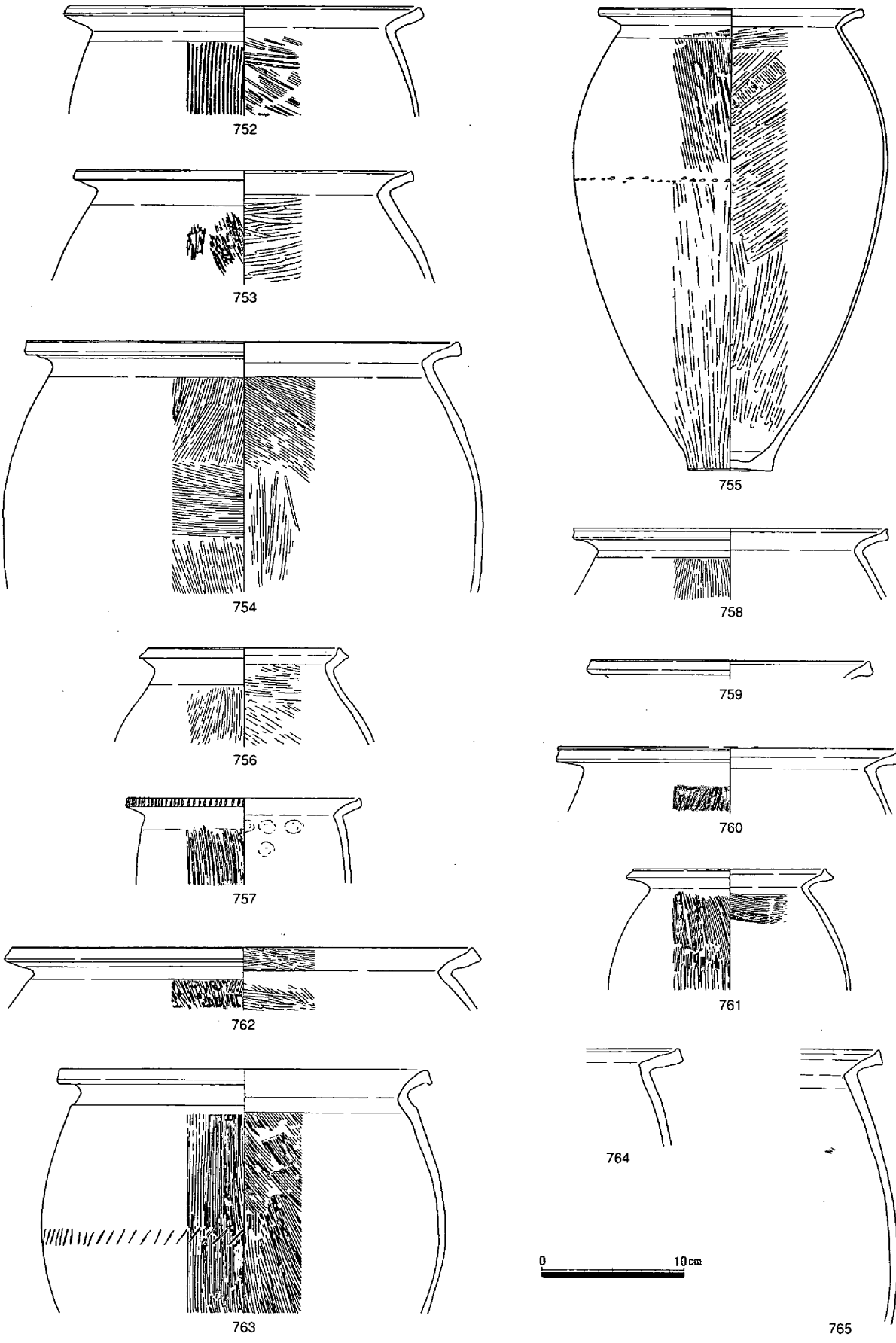
高杯にはボウル状の杯部を持つ799～806、浅い杯部で口縁部が緩やかに内湾する807～809、口縁部が強く上方に屈曲し、長脚の813・814などがある。799～804は比較的深い杯部と思われ、口縁端部が肥厚し水平面を形成する。799～801は凹線が巡り、その山部分に刻み目や棒状浮紋を施す。端部も斜



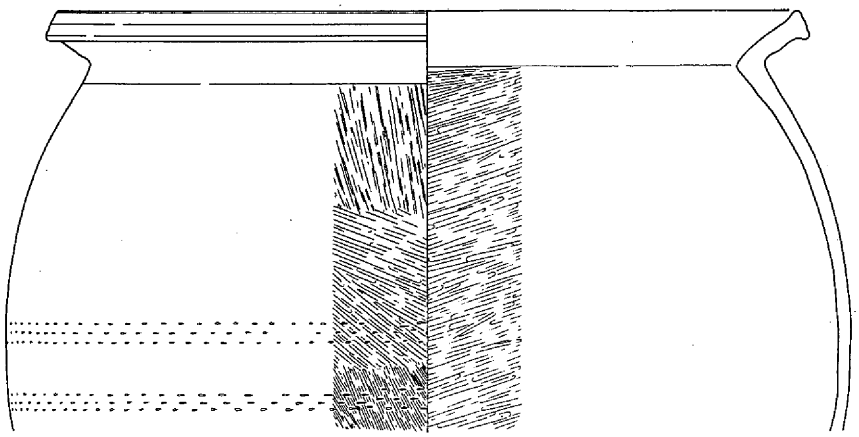
第302図　その他の遺物（1）

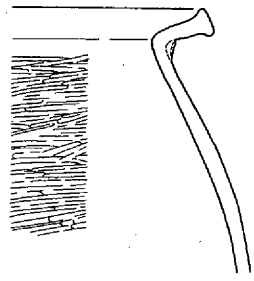


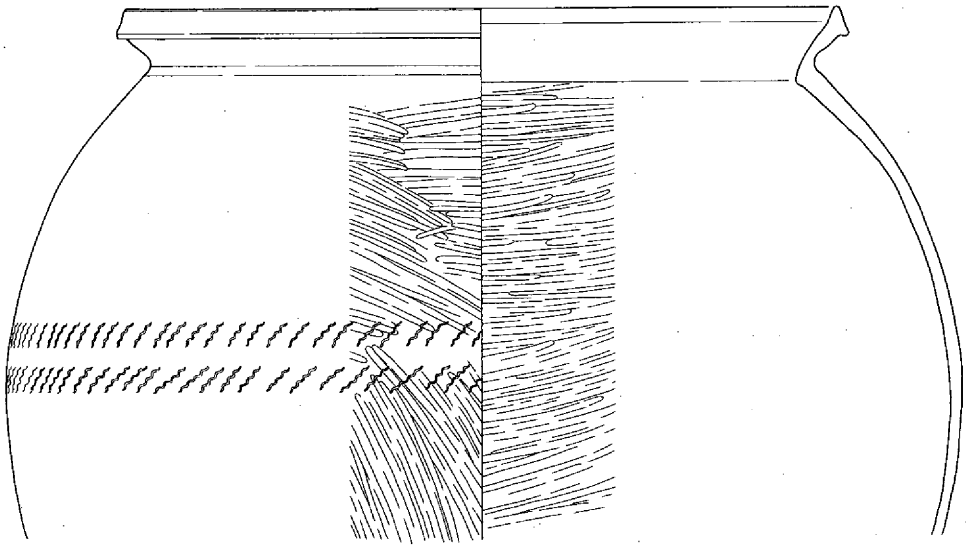
第303図　その他の遺物（２）

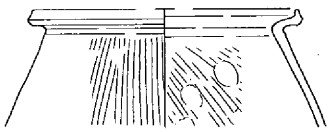


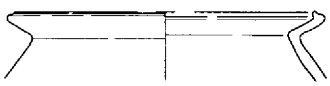
第304図　その他の遺物（3）

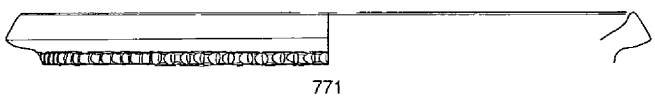

766

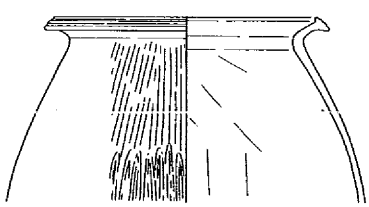

767

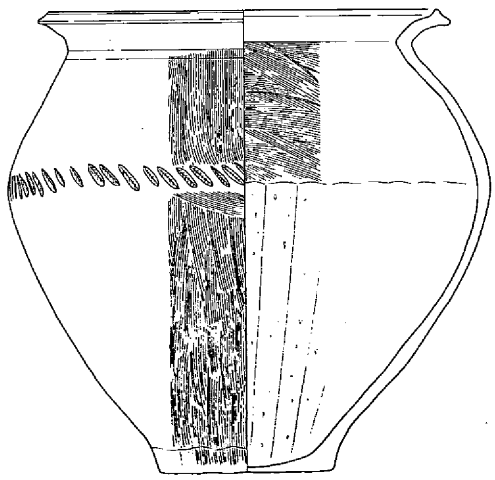

768


769

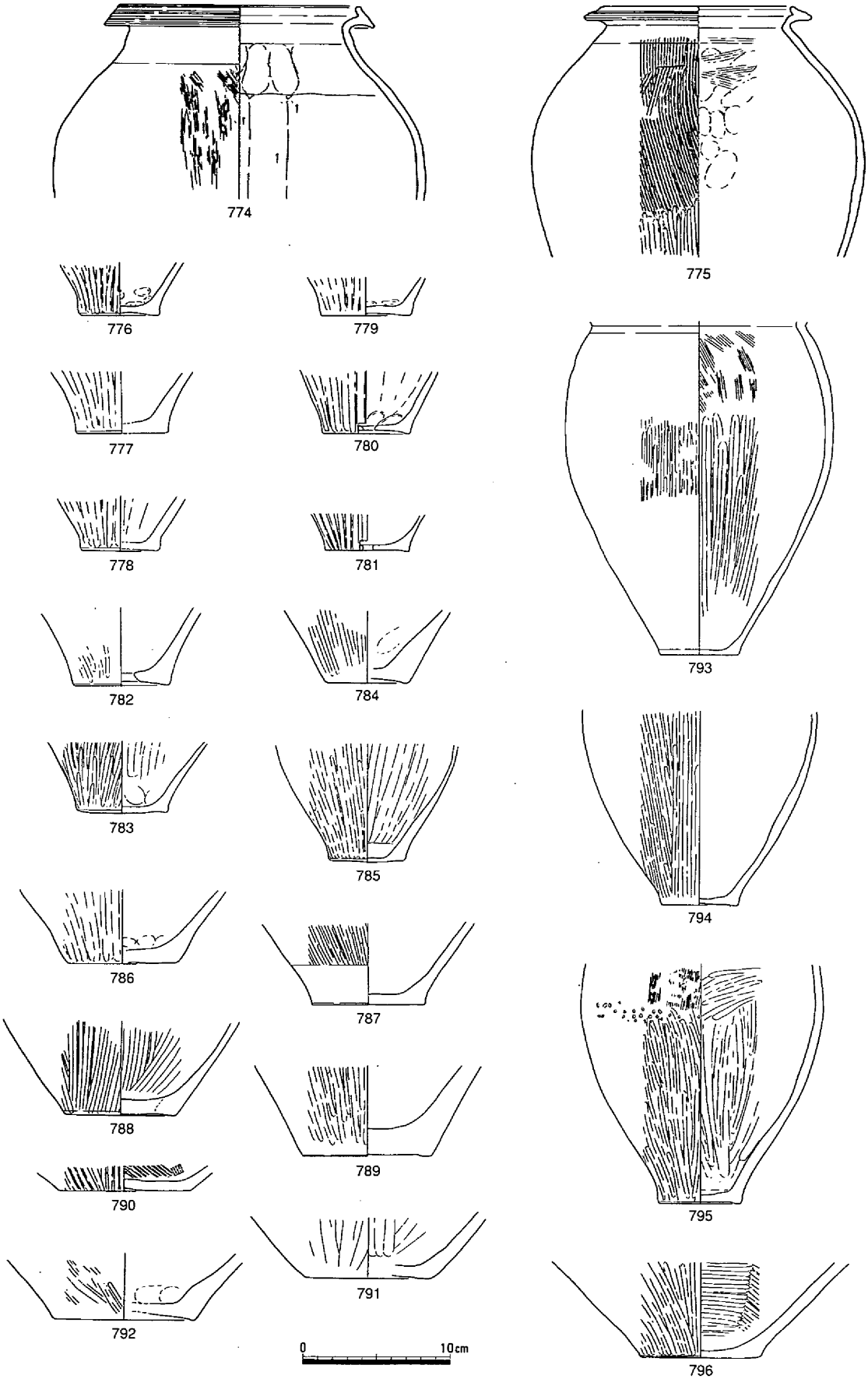

770


771

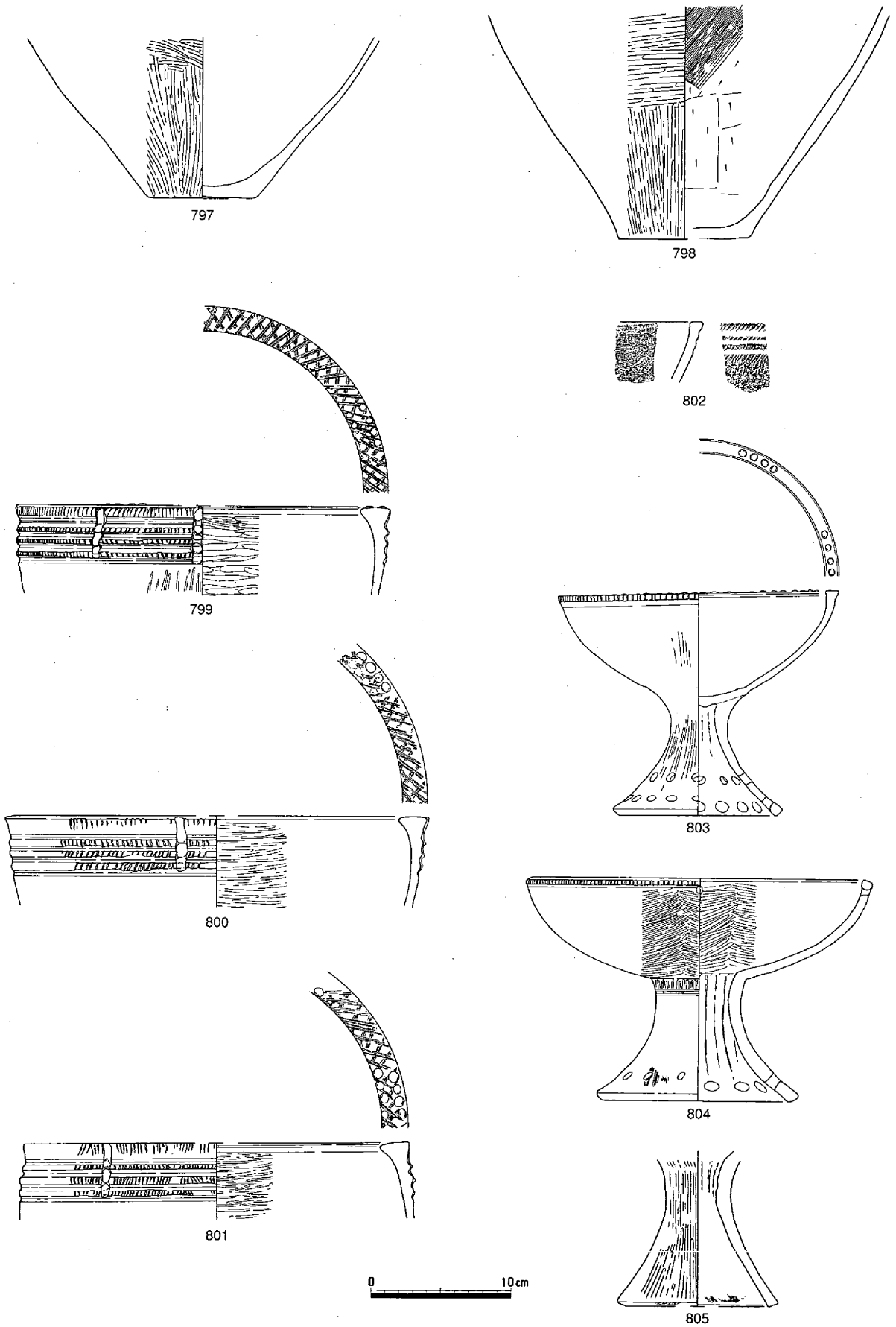

772


773

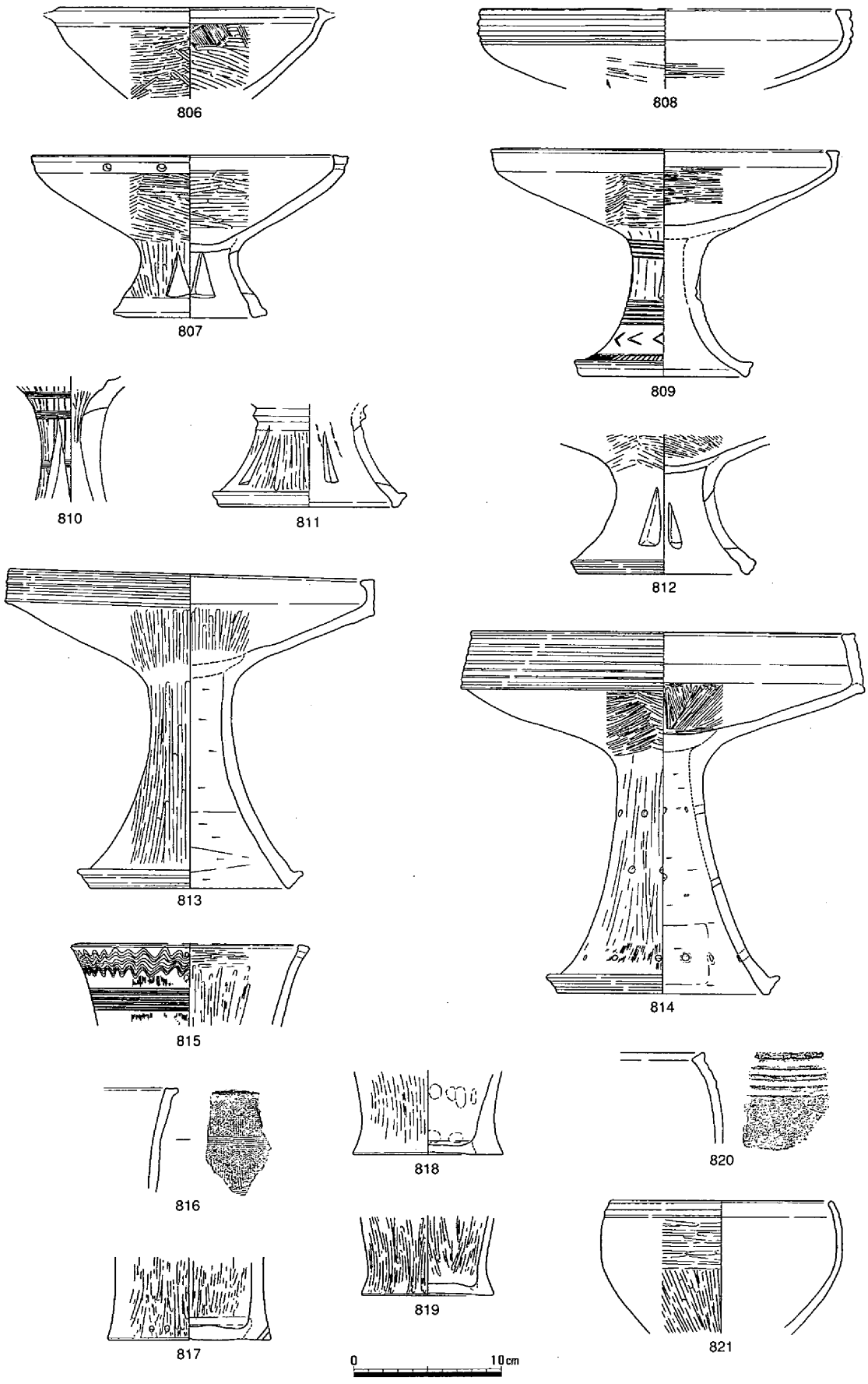
第305図　その他の遺物（４）



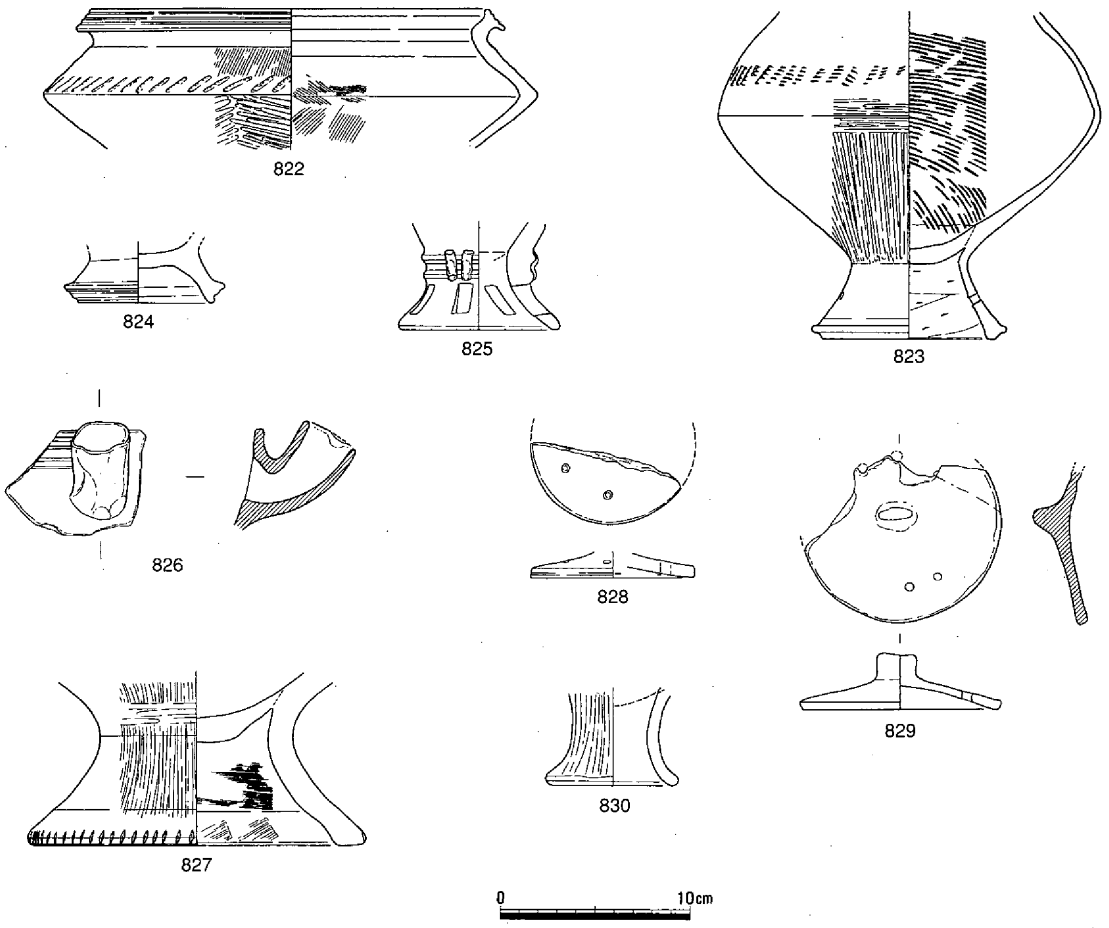
第306図　その他の遺物（５）



第307図　その他の遺物（６）



第308図　その他の遺物（7）



第309図　その他の遺物（８）

格子紋や円形浮紋が見られる。803・804の脚部は、「八」字に開き、円形の透かしを施す。脚端部は面を有する。807～809は口縁端部が内側に肥厚し、水平面を形成する。808では凹線が巡る。脚端部は内外に肥厚している。813・814は口縁部外面に凹線が巡り、脚端部は上方に拡張している。

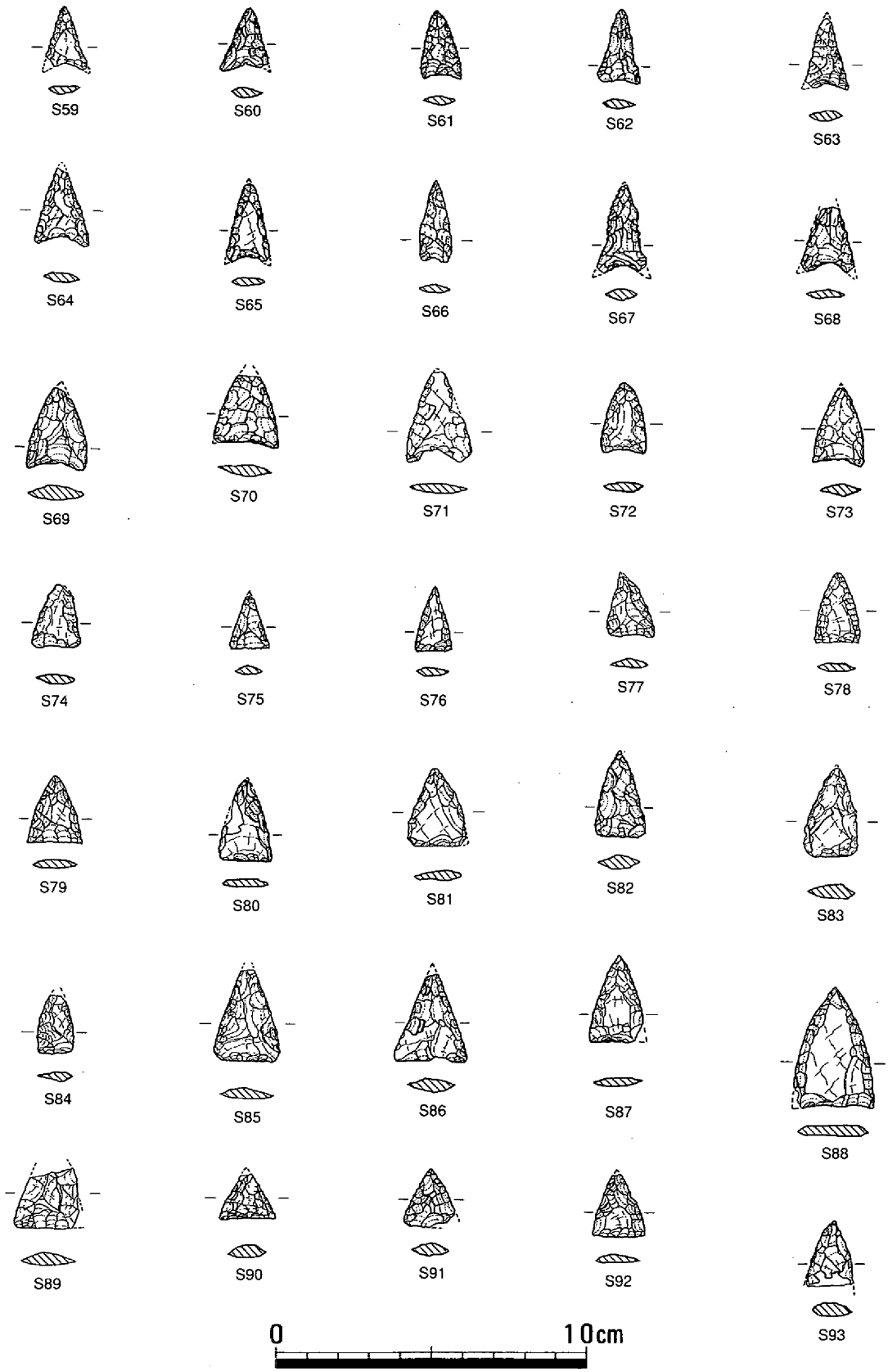
ジョッキ形土器の口縁端部は815・816のように面を有し、底部付近は818のように比較的強く外反する。817では２個１対の穿孔も認められる。鉢は、椀形の体部のもの820・821、算盤玉のような体部のもの822などがある。826は注口部である。

石製品（第310～317図、写真103・104）

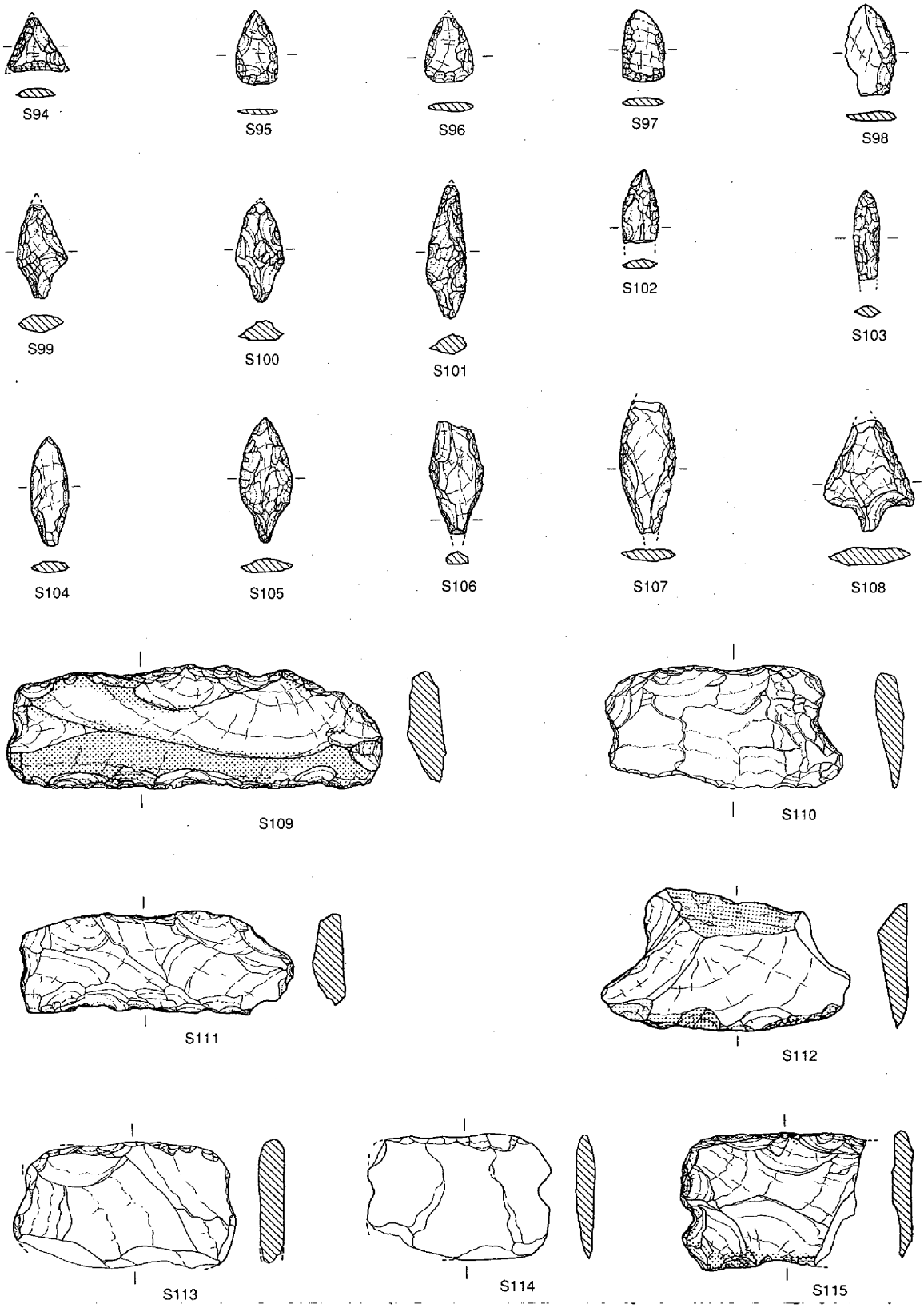
弥生時代中期のものが多いと思われるが、１点のみ縄文時代に遡る可能性のあるものが見られる。出土地点では、第２微高地やその周辺が非常に多く、第１・３微高地のものはかなり少ない。図示した器種は、石鏃Ｓ59～108、打製石包丁Ｓ109～132、石錐Ｓ133～143、石匙Ｓ145・146、スクレイパーＳ144・147～159、楔形石器Ｓ160～170、石槍状石器Ｓ171～176、磨製石包丁Ｓ177～181、磨製石斧Ｓ182～186・188、鑿状石器Ｓ187、石錘Ｓ189、石皿Ｓ190～192、砥石Ｓ193～195である。

石鏃には、凹基式Ｓ59～73、平基式Ｓ74～97、凸基式Ｓ98～101・104～107、有茎式Ｓ108がある。Ｓ65は風化が著しく、縄文時代のものである可能性がある。

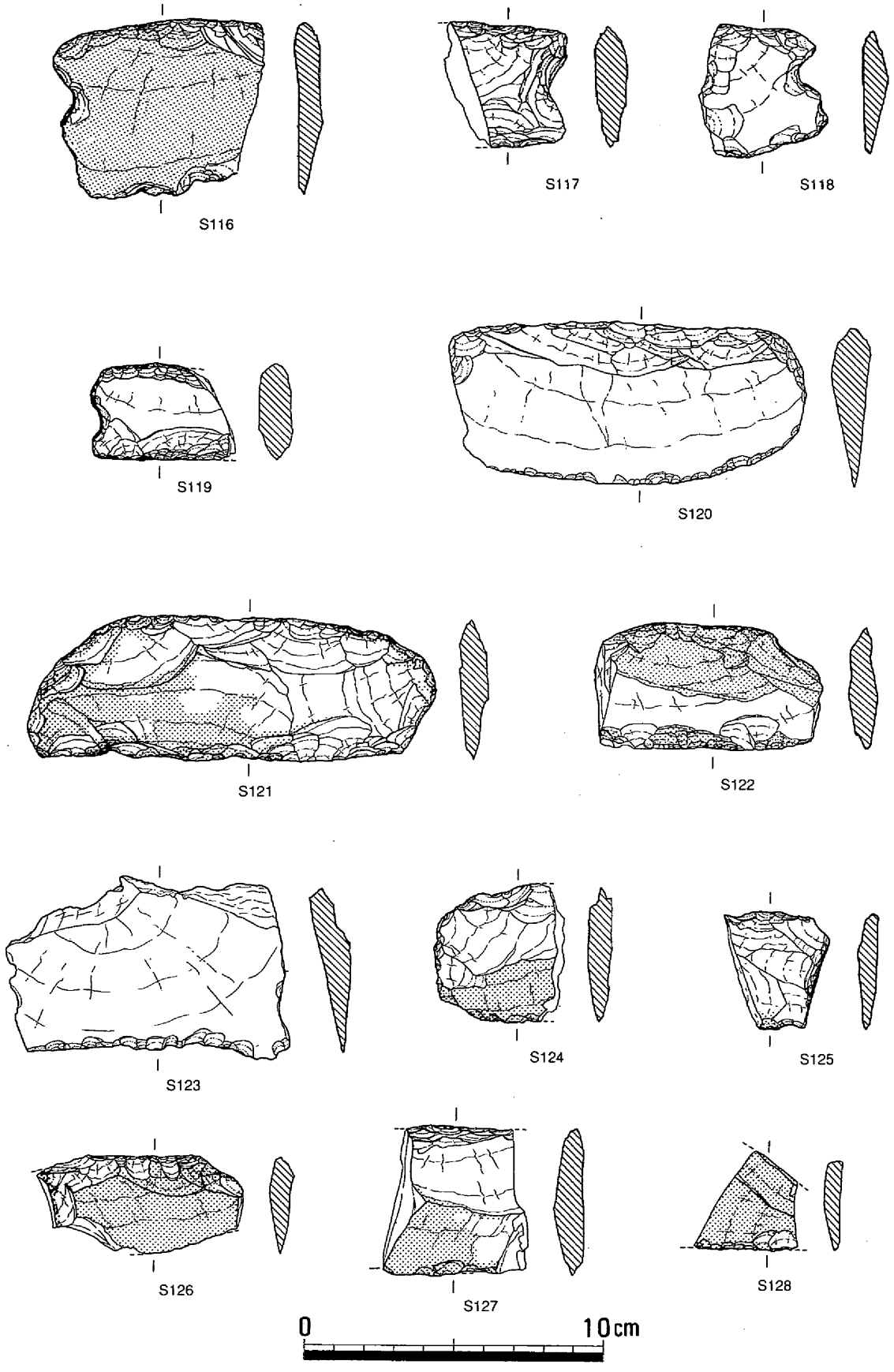
打製石包丁Ｓ110は頁岩製で、Ｓ114・129は玄武岩製の可能性がある。欠損などで両端が不明なものがあるが、抉りを有するものＳ109～119と、無いものＳ120～124がある。また、背部は直線的なものが多いが、湾曲するものＳ109・111・121もある。Ｓ112・123は調整が粗雑である。



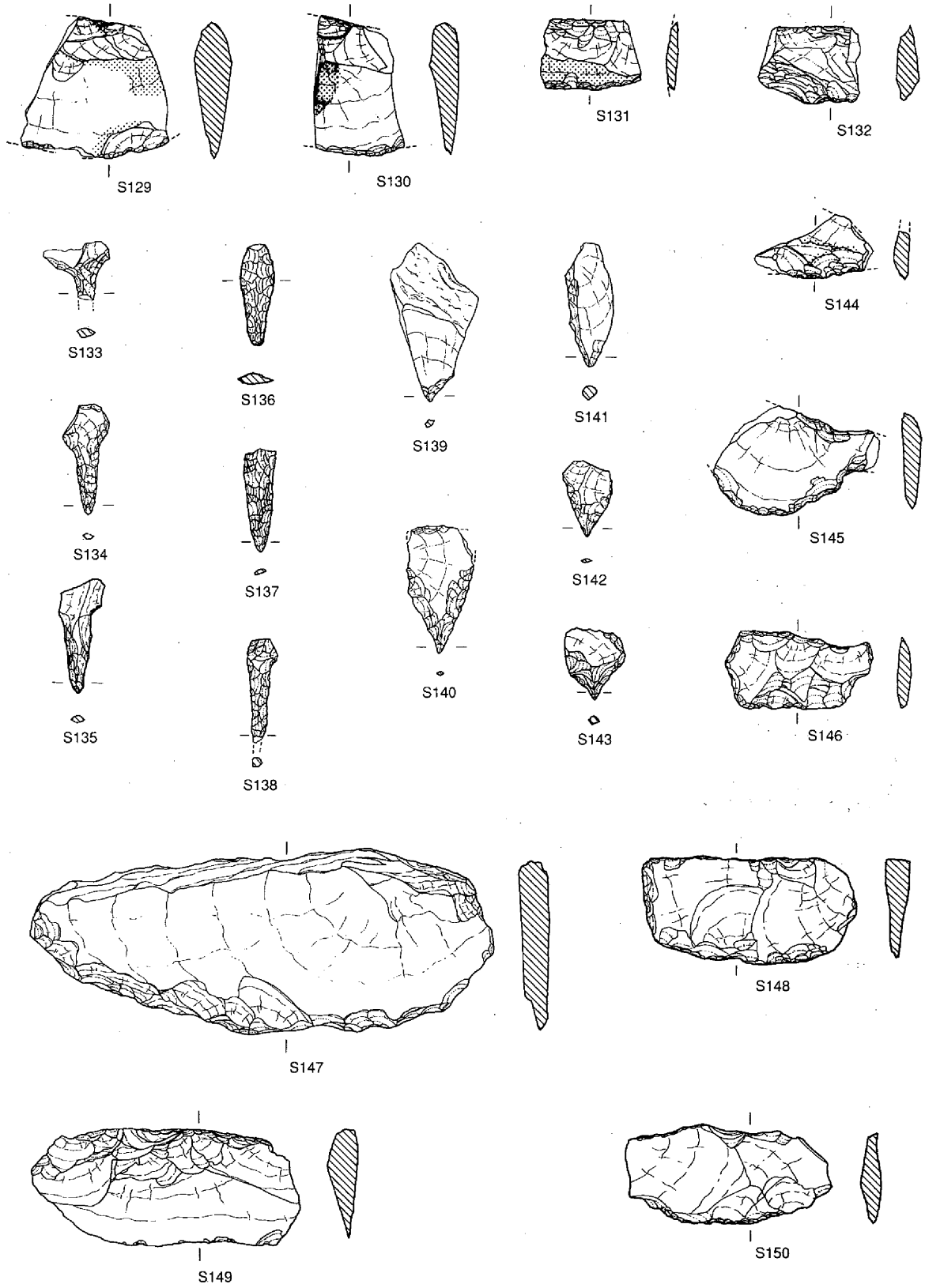
第310図　その他の遺物（9）



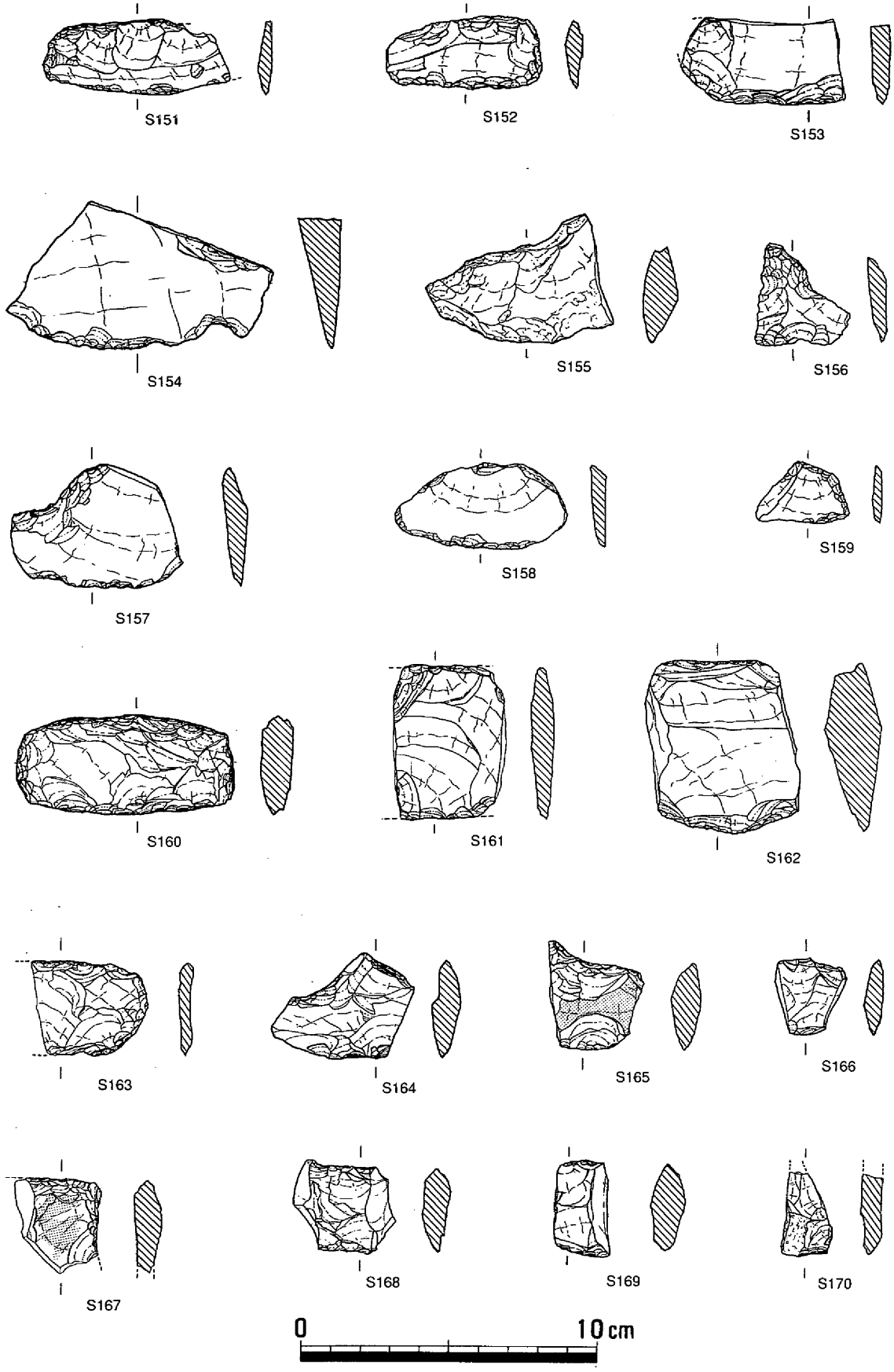
第311図　その他の遺物（10）



第312図　その他の遺物（11）



第313図　その他の遺物（12）



第314図　その他の遺物（13）

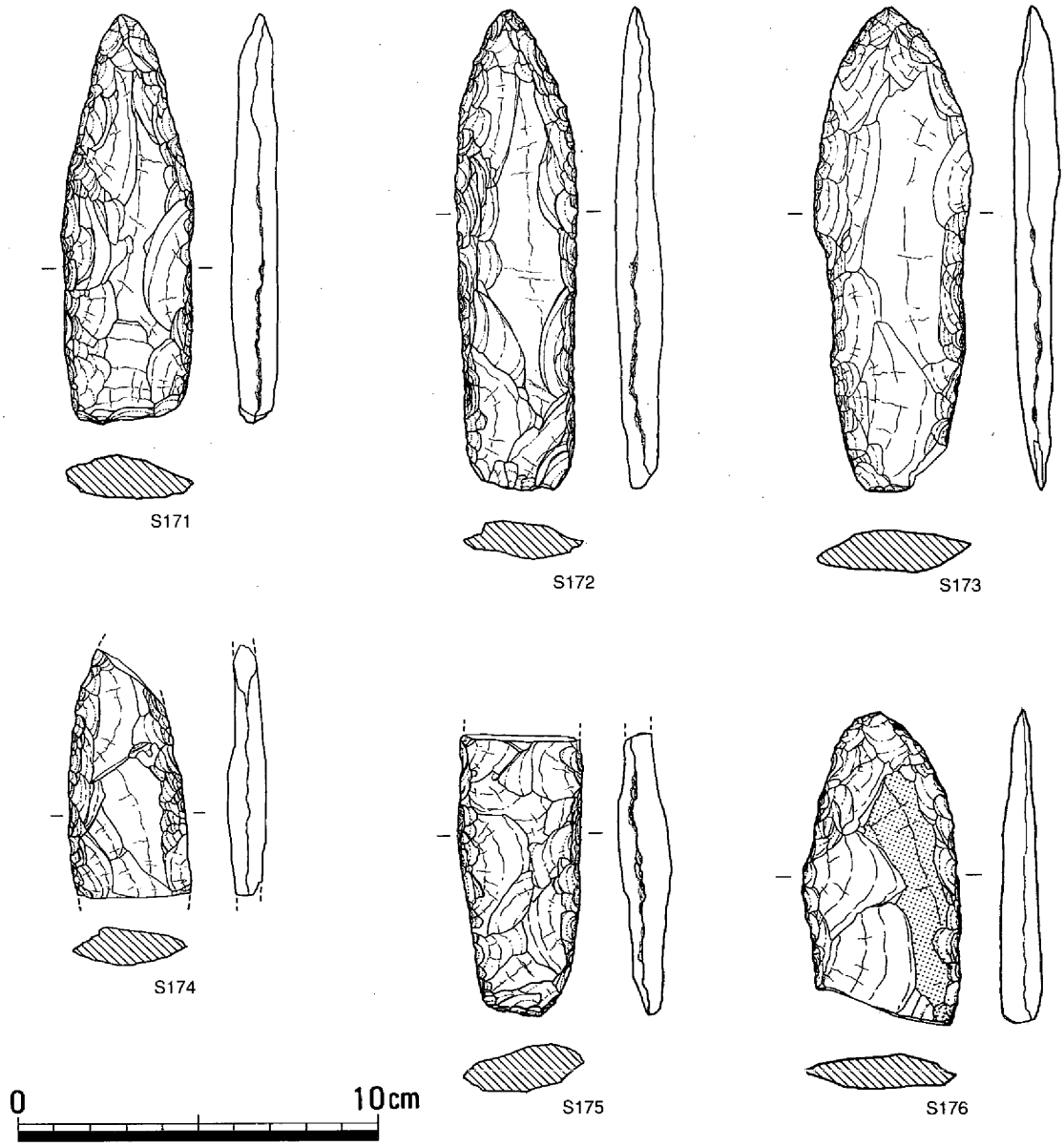
石錐には、錐部が細く、頭部との境が明瞭なものＳ133～135、錐部が比較的太く、頭部との幅が大きく変わらないものＳ136～138、幅のある剥片の尖った部分を錐部としたものＳ139～143がある。

石槍には、側縁がほぼ平行のものＳ171・172・175、側縁が内湾するものＳ173がある。Ｓ176は珪酸が付着しており石包丁に転用されているようである。

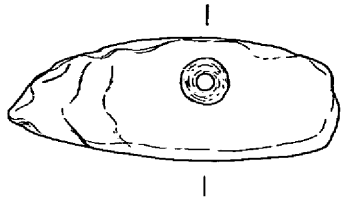
磨製石包丁は欠損したものが多く、材質は溶結凝灰岩Ｓ177、粘板岩Ｓ178・180、緑色片岩Ｓ179、流紋岩Ｓ181など多様である。磨製石斧も欠損したものが多く、材質は安山岩Ｓ182・186と閃緑岩Ｓ183～185である。Ｓ187は泥岩製の鑿状石器である。Ｓ188は流紋岩製の扁平片刃石斧である。

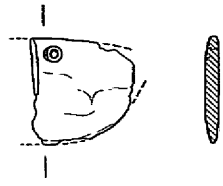
土製品（第318～320図、写真105・106）

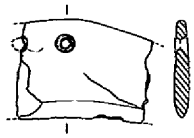
土製品としては、分銅形土製品Ｃ30～38と紡錘車Ｃ39～63を図示した。弥生時代中期のものがかなり多いと思われるが、後期に属する可能性のものもある。出土地点では、第２微高地が多く、第１・

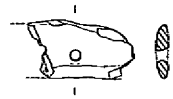


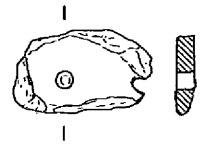
第315図　その他の遺物（14）

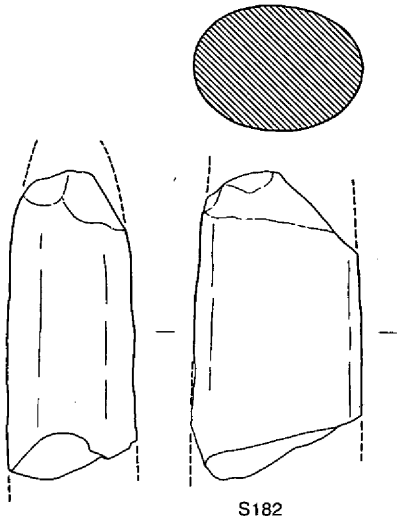

S177

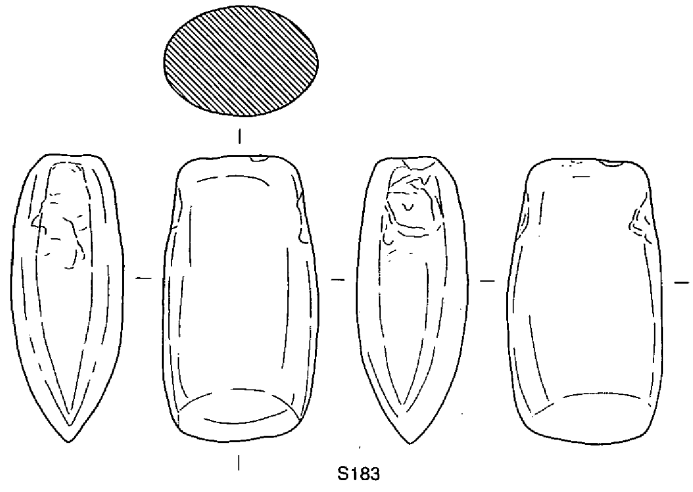

S178

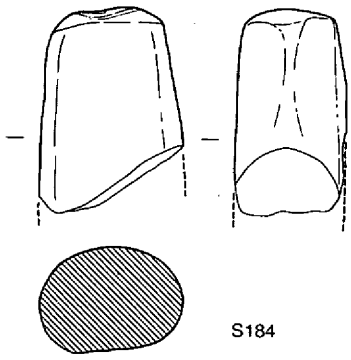

S179

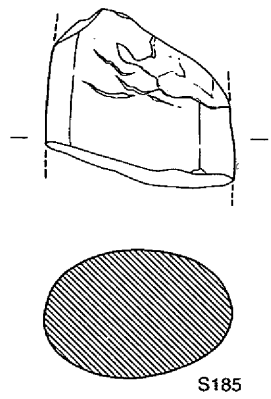

S180

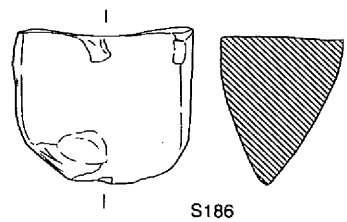

S181


S182

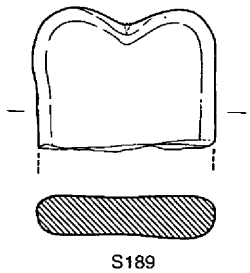

S183

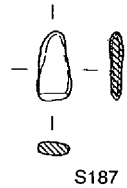

S184

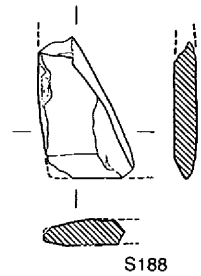

S185


S186

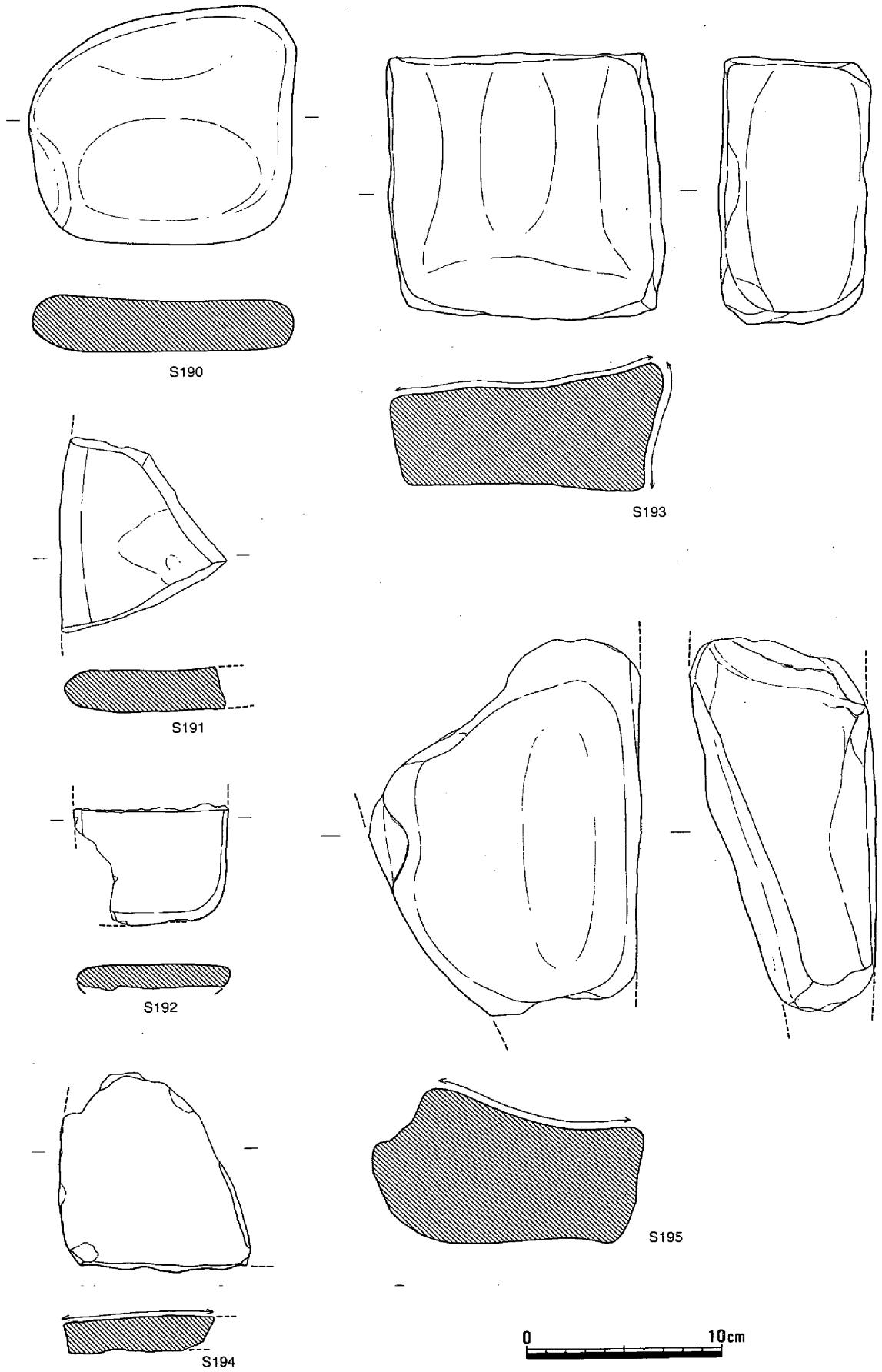
0　10cm


S189

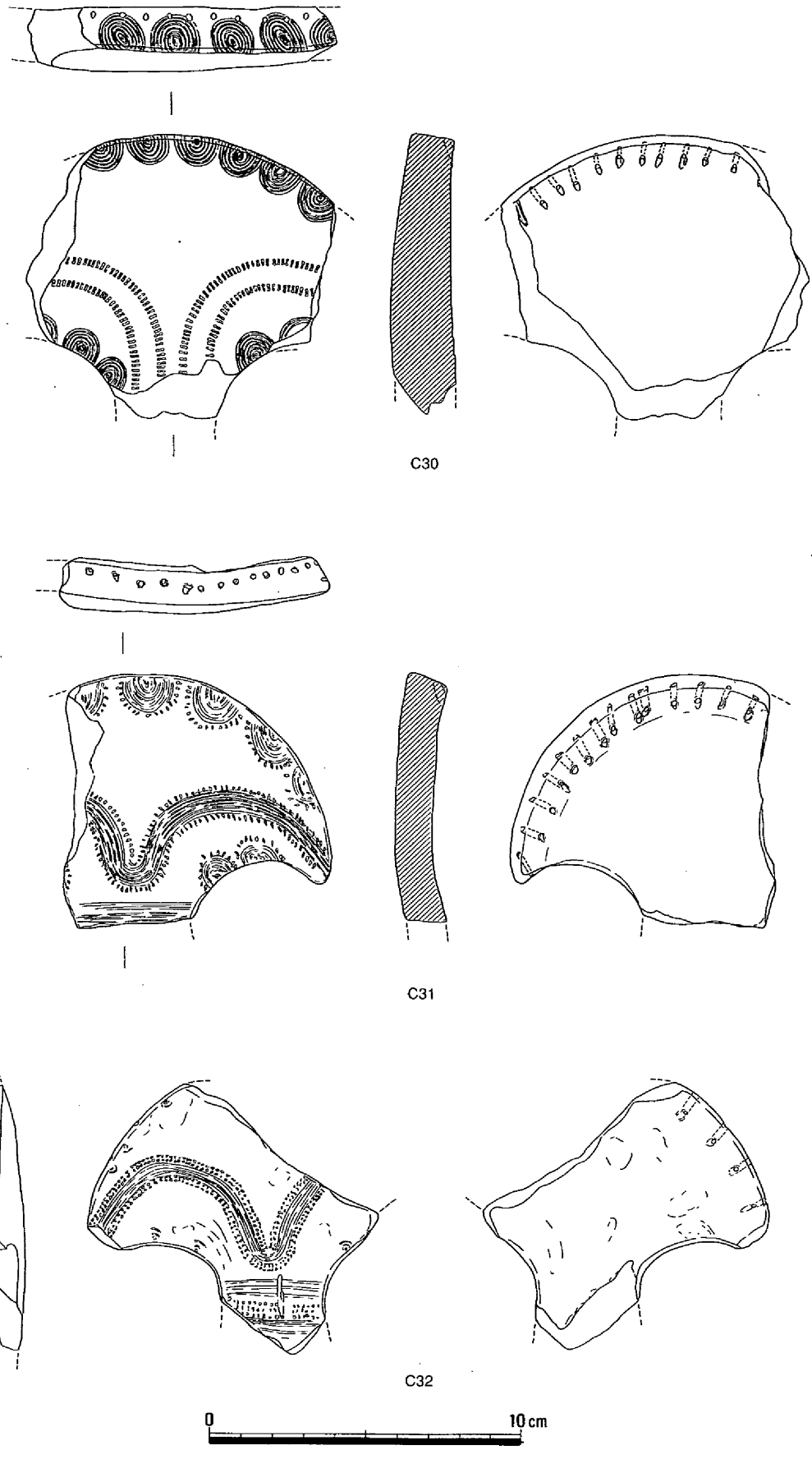

S187


S188

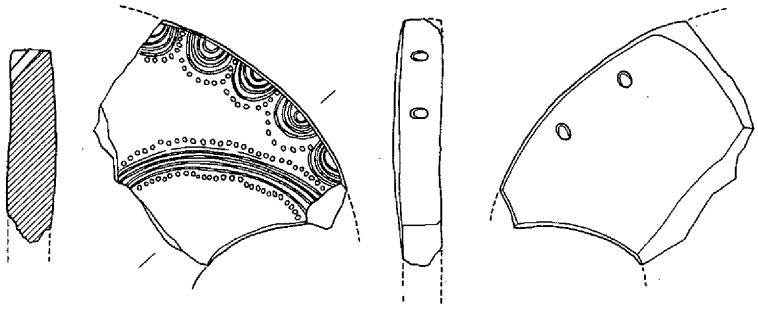
第316図　その他の遺物（15）



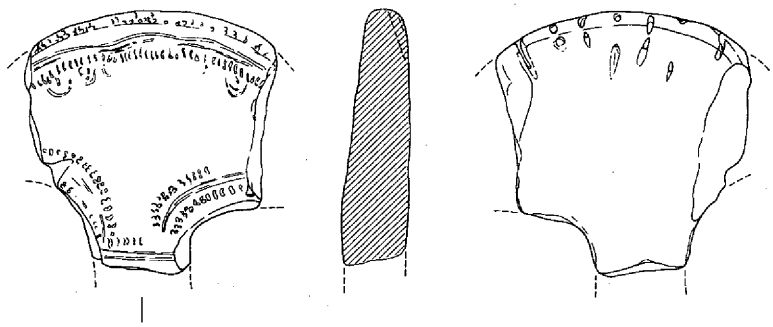
第317図　その他の遺物（16）



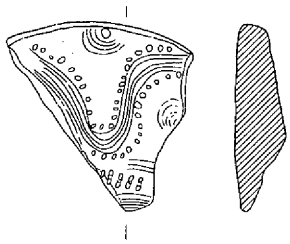
第318図　その他の遺物（17）



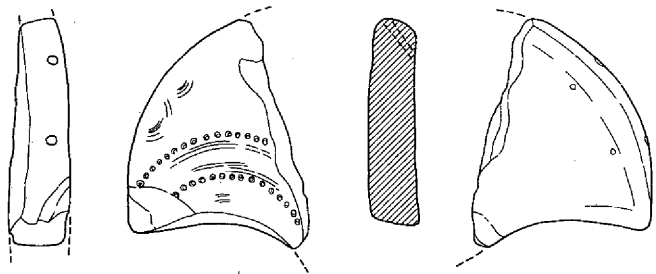
C33



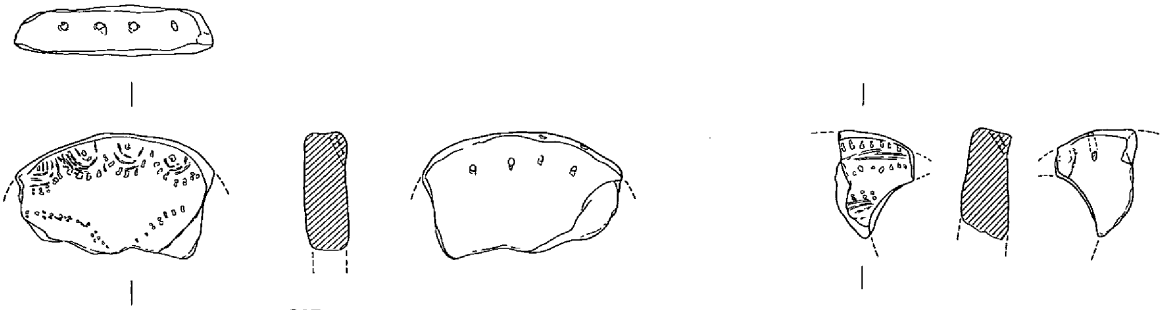
C34



C35



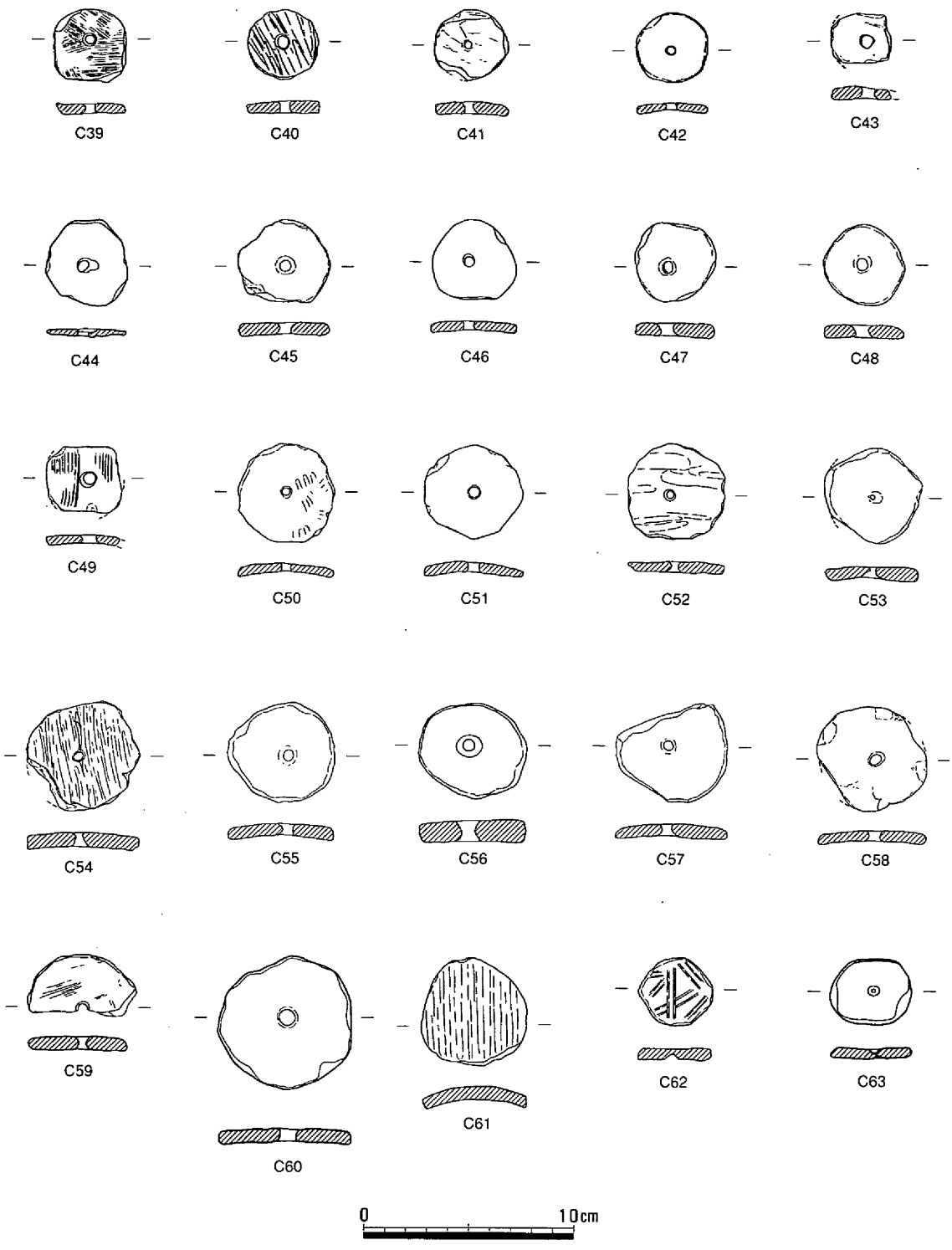
C36



C37　　C38

0　10cm

第319図　その他の遺物（18）



第320図　その他の遺物（19）

第３微高地のものは１点ずつである。

Ｃ30～33は比較的大きく、Ｃ34～38は中形から小形のものである。表面の紋様は、ハケメのような工具による眉状紋や重弧紋のほかに刺突紋などで構成され、端面から裏面にかけては穿孔が見られるものが多い。Ｃ39～63は、土器片を利用したものである。Ｃ61は未穿孔、Ｃ62は片面からの穿孔で未穿孔、Ｃ63は両側からの穿孔が行われているが貫通していない。　（柴田）

第３節　弥生時代後期の遺構・遺物

（１）概要

弥生時代後期も、中期に引き続き第２・３微高地に遺構が集中している。検出された主な遺構は、竪穴住居40軒（建て替えを含めて46軒）、袋状土壙53基、土壙97基、土壙墓１基、土器棺墓11基、土器溜まり２ケ所、溝11条、水田２面である。調査地区内では、掘立柱建物や井戸は確認されていない。これについては、隣接の津寺遺跡でもよく似た状況を示している。

この内、住居や土壙については弥・後・Ⅳのものが最も多く、第２微高地の中央から西端にかけて一定の間隔をもって存在している。次いで弥・後・Ⅰのものが多く、特に袋状土壙は、ほとんどこの時期で、一部がⅡに相当する。一方、Ⅱ～Ⅲの時期の住居は一定量確認されるものの、土壙などは他の時期と比較するとかなり少ない。この傾向は、詳細な時期の明らかでない遺構もあるので、必ずしもそうであるとは断言できないと思われる。Ⅰ～Ⅲの時期の遺構は、Ⅳとは異なり、第３微高地と第２微高地の北東端に集中する。

水田は、中期と同様に第１微高地と第２微高地の間の低位部の他に、津寺遺跡と第１微高地の間にも営まれるようになる。これらには畦畔や水路、島状高まりも確認されている。

図示した遺物は、土器1485点、石製品90点、金属製品13点、土製品42点、ガラス玉４点である。特に注目されるものでは、円環形銅釧と有鉤銅釧が１点ずつ、顔面表現のある分銅形土製品２点などが出土している。（柴田）

（２）竪穴住居

竪穴住居13（第321・322図、写真61）

第２微高地の西端で検出した方形と推定できる竪穴住居である。調査区が市道下であったため、遺構の全貌は調査できなかった。方形に巡る壁体溝は深さ10cm前後でしっかり掘られ、住居壁は床面から20cm強残存していた。柱穴は２本検出できたが４本柱と推定できる。円形の浅い中央穴と長方形の土壙が伴っている。土壙は南東壁の中央部に接して検出でき、深さ30cmを測り、内部に833の甕が出土した。床面は堅く締まっており、火災にあっていることも判明した。

遺物は埋土中からと床面に付着して多数完形に近い土器が出土している。831・832はほぼ完形の壺で、床面付着である。834・835・836は床面付着の甕である。837・838は床面付着の高杯である。839は台付き鉢、840は床面付着の台付き壺である。841は手焙形土器である。手焙形土器は方形土壙の南の壁際から出土し、床面から離れていた。使用されていたのが床面でないことを示唆する出土状態である。土器の観察からこの住居の使用された時期は、弥・後・Ⅳである。（浅倉）

竪穴住居14（第323図）

第２微高地の西端で検出した長方形の竪穴住居である。竪穴住居13から東へ16ｍ離れている。方形に巡る壁体溝は深さ10cm前後でしっかり掘られ、住居壁は床面から10cm強残存していた。柱穴は検出できなかった。規模が小さいため内部に柱を持たない住居と考えたい。床面の北部には２ケ所広い範囲が堅く赤色に焼き締まっており、火災にあっていることが判明した。住居の規模は東西555cm、南

北412cm、床面積18.8m²を測る。

遺物は埋土中から土器が出土している。842は壺で、体部内外面共にハケメ調整している。843は甕口縁部の破片である。体部内面はヘラケズリしている。844・845は高杯である。いずれも脚部に透かし穴4個を穿っている。

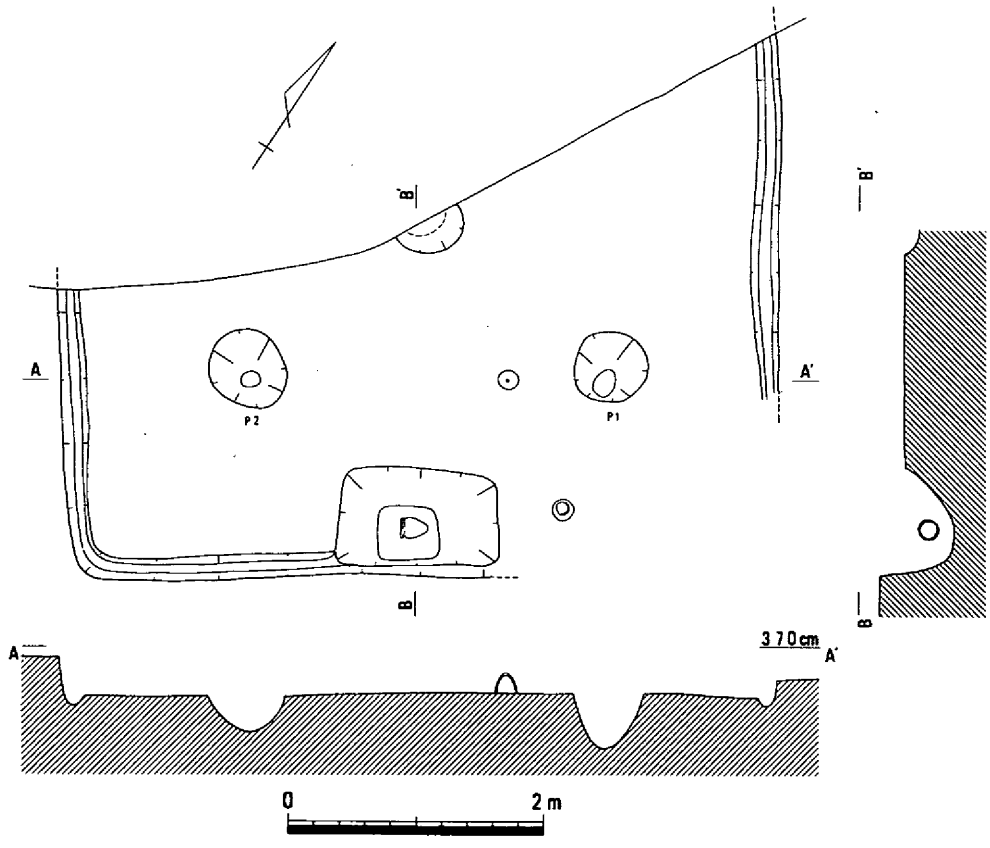
土器の観察からこの住居の使用された時期は、弥・後・Ⅳである。　（浅倉）

竪穴住居15（第329～331図、写真7－1）

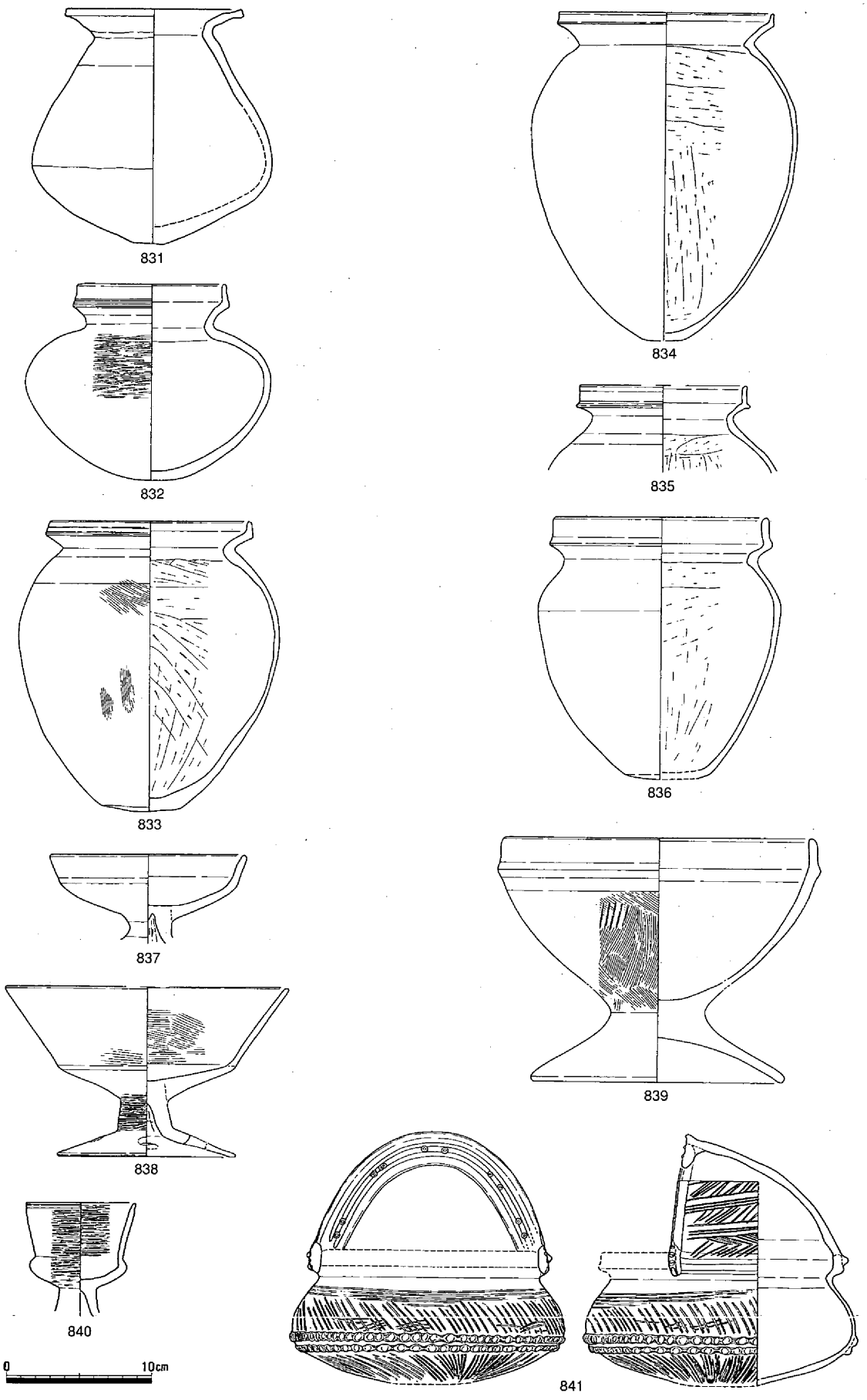
第2微高地の西端で検出した円形の竪穴住居である。竪穴住居14から南西へ5m離れている。円形に巡る壁体溝は深さ5cm前後で掘られ、住居壁は床面から20cm強残存していた。2軒の住居が重複しており、拡張されているようである。柱穴はいずれも5本あったと考えたい。床面の中央部には楕円形の一段低い範囲があり、その東端に方形の中央穴が検出できた。住居の規模は小さい方が直径453cm、大きい方が直径530cmを測る。

遺物は埋土中から分銅形土製品、鉄鏃、土器が出土している。C64は分銅形土製品である。M79は鉄鏃である。846・847は壺である。850～860は甕である。854～857は口唇部外面に多条の櫛描き沈線を持つ。860は体部外面に平行叩きを持つ甕で、他地域からの搬入品と考えられる。861～863は高杯である。口縁部はやや長く伸び、脚柱は短い。脚裾には円孔を有す。864は鉢である。体部内面はヘラミガキしている。

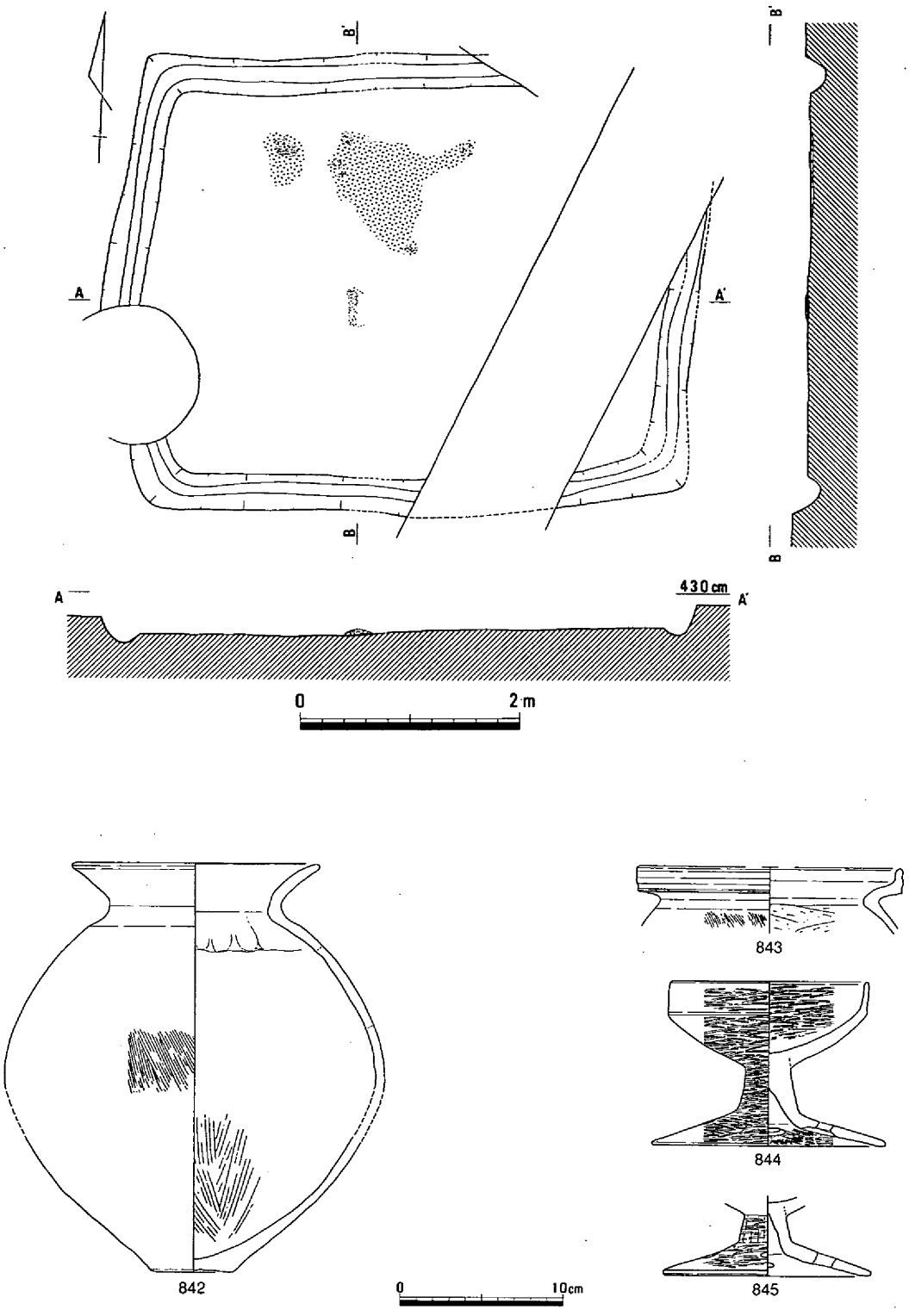
土器の観察からこの住居の使用された時期は、弥・後・Ⅳである。　（浅倉）



第321図　竪穴住居13（1/60）



第322図　竪穴住居13　遺物



第323図　竪穴住居14（1/60）・遺物

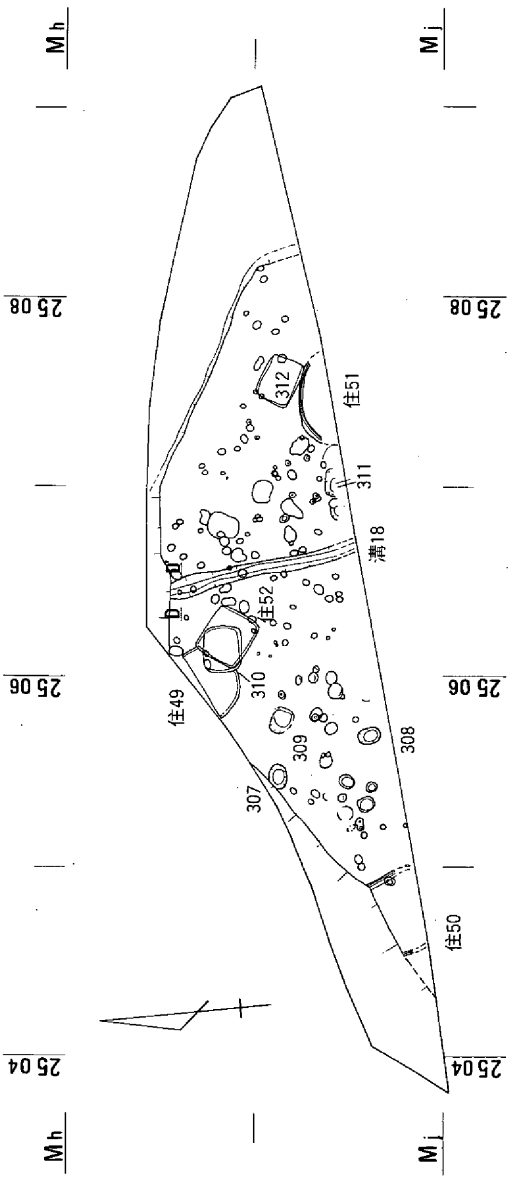
竪穴住居16（第332・333図、写真７－２）

第２微高地調査区の南西隅で竪穴住居15の西側に位置し、一部がこれと重複する。平面形は方形を呈し、１回の立て替えが行われているが、東側の１辺を共有し残り３辺を外側に拡幅したものである。

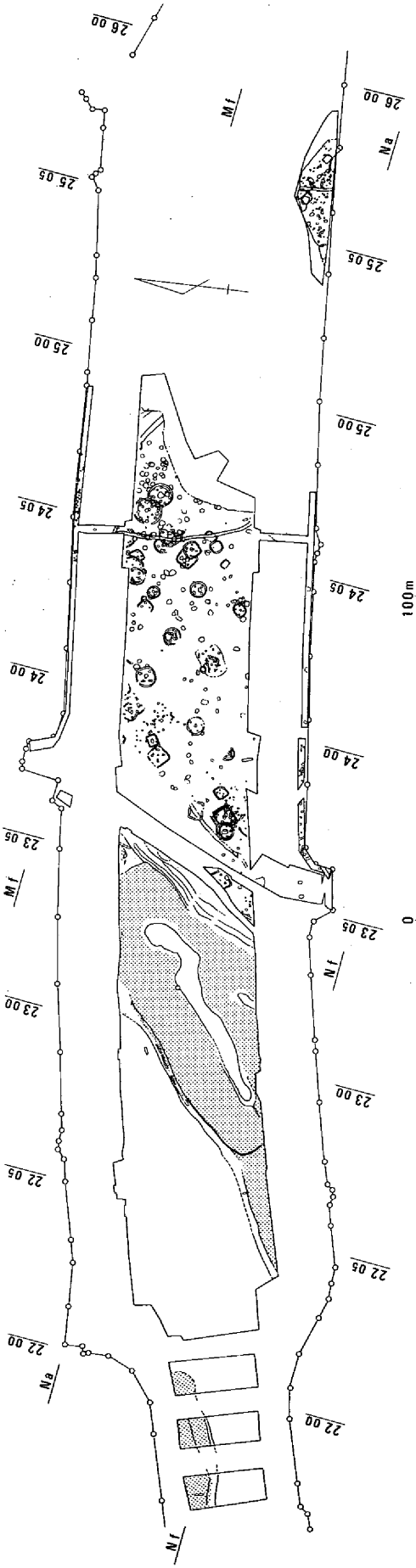
第324図　弥生時代後期遺構全体図（１）（1/400）

第325図　弥生時代後期遺構全体図（2）（掲載遺構のみ）（1/400）

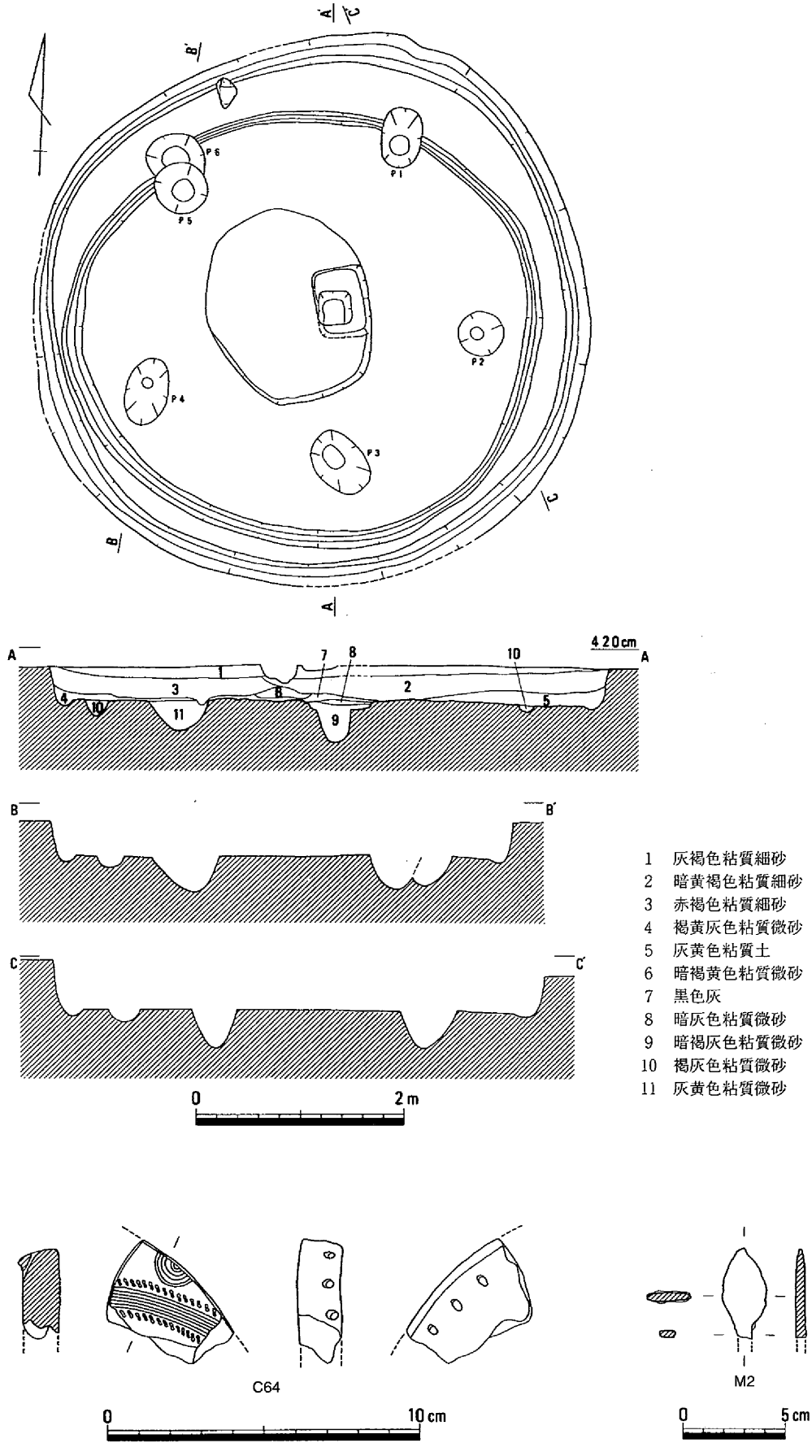
第326図　弥生時代後期遺構全体図（３）（1/400）



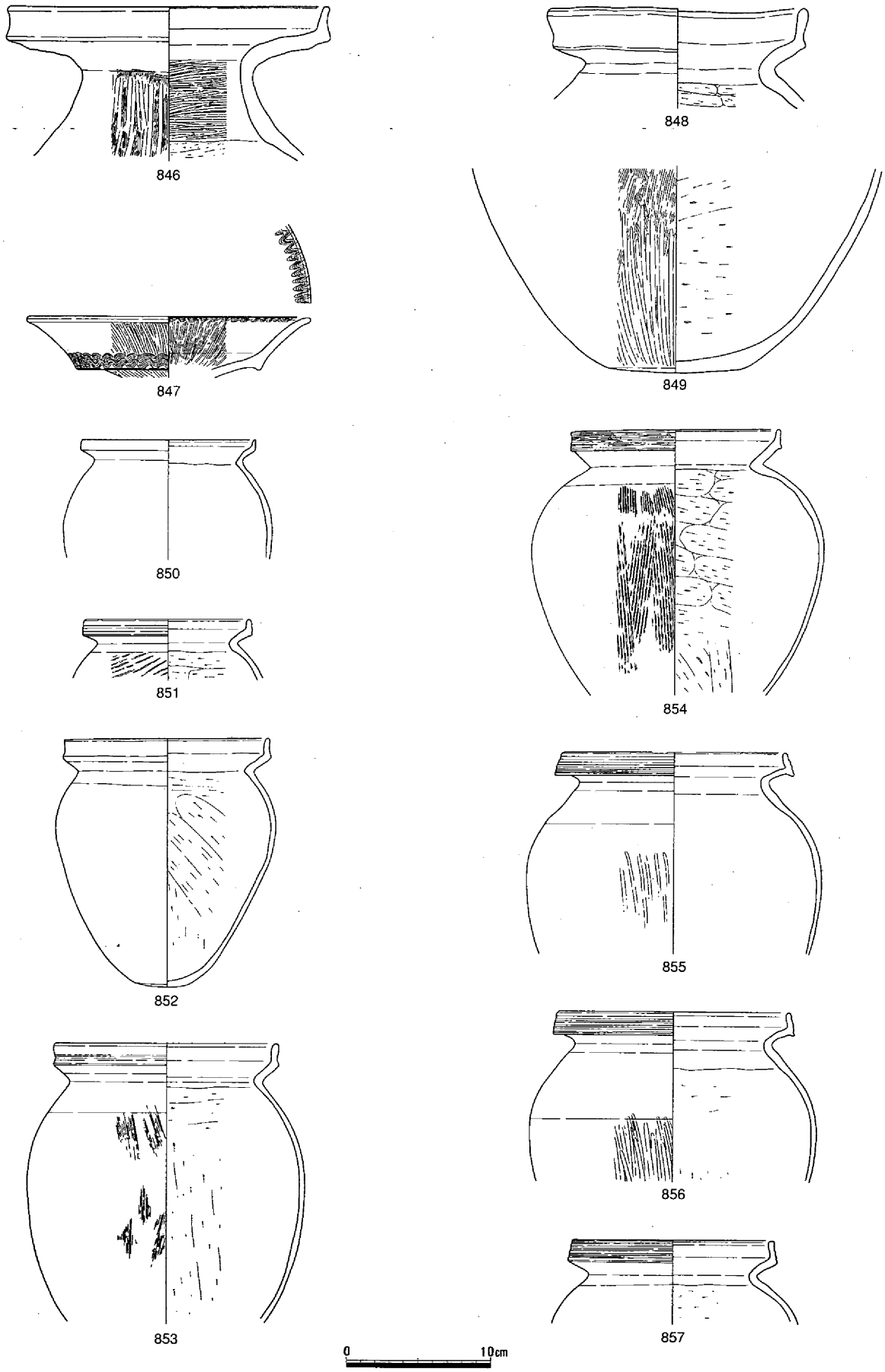
第327図　弥生時代後期遺構全体図（４）（1/400）



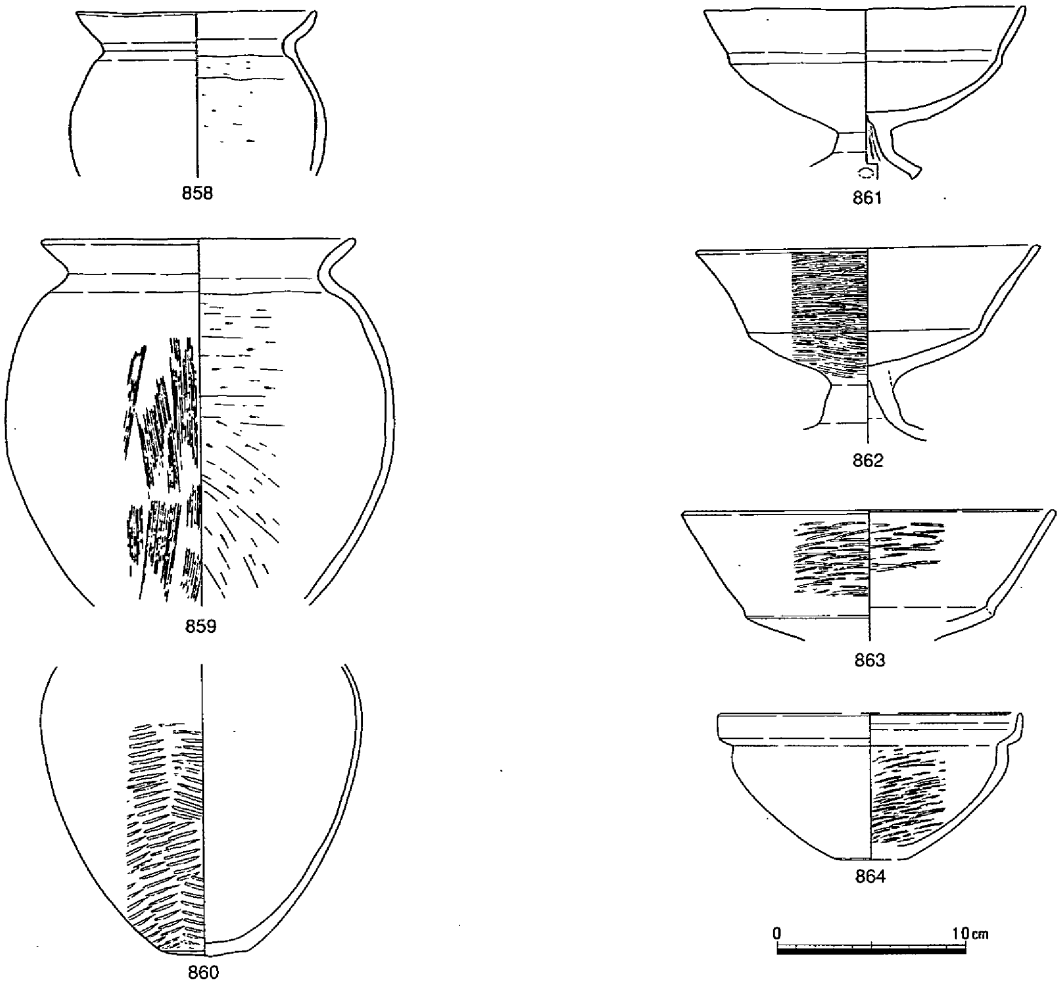
第328図　弥生時代後期主要遺構全体図（1/2,000）



第329図　竪穴住居15（1/60）・遺物（1）



第330図　竪穴住居15　遺物（２）



第331図　竪穴住居15　遺物（３）

規模は、内側の住居が長辺で540cm、短辺が510cmを測り、外側の住居は長辺が640cmで、短辺は610cmである。床面のレベルは両者ほぼ同じで、深さは検出面から20cmあまりを測る。主柱穴は４本で、掘り方の直径が50～80cm、深さは65～85cmを測る。いずれの柱穴も、柱痕跡が明瞭に残る。中央穴は、２基検出できた。うち南側のものは直径が60cm程の円形を呈し、深さが15cmを測る。また、この中央穴の東には、平面形が瓢箪形をした浅い凹みがあり、上面には炭の集積がみられた。さらに、住居東辺の中央部では壁に接して方形土壙がみられた。長さが90cm、幅は80cmを測る。これは住居の内側が浅く、壁沿いが深い階段状となっており、深さは壁沿いで30cm余りを測る。さらにこの土壙の両側には東壁から柱穴に向けて間仕切り溝２条がみられた。

出土遺物には、壺865・866と高杯867がみられる。これからみてこの住居の時期は、弥・後・Ⅳとみられる。（弘田）

竪穴住居17（第334図）

竪穴住居15・16の南に接して位置する。約半分が調査区外に出るが、平面形が円形を呈す。規模は直径が670cm以上で、深さは検出面から50cmを測る。壁体溝は東側のみで　柱穴は２本検出しており、掘り方の直径が25～40cm、深さは30と50cmを測る。ともに柱痕跡が認められた。

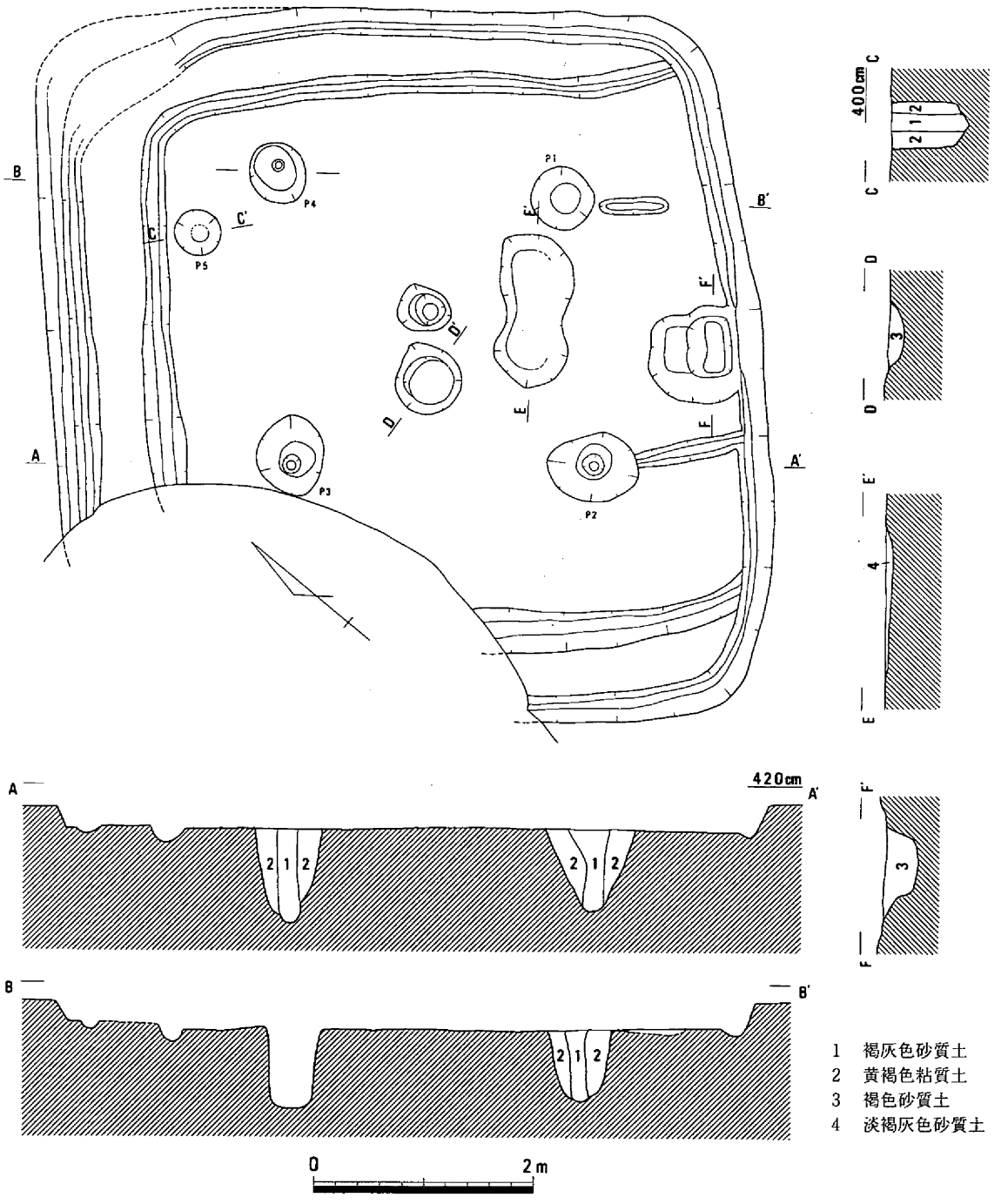
出土遺物としては、口縁部が短く、くの字に折り曲げる甕868がある。口縁端部を上方に拡張させ

て、その外側に擬凹線文をめぐらせている。土器以外では、土器片を転用した紡錘車Ｃ65がある。

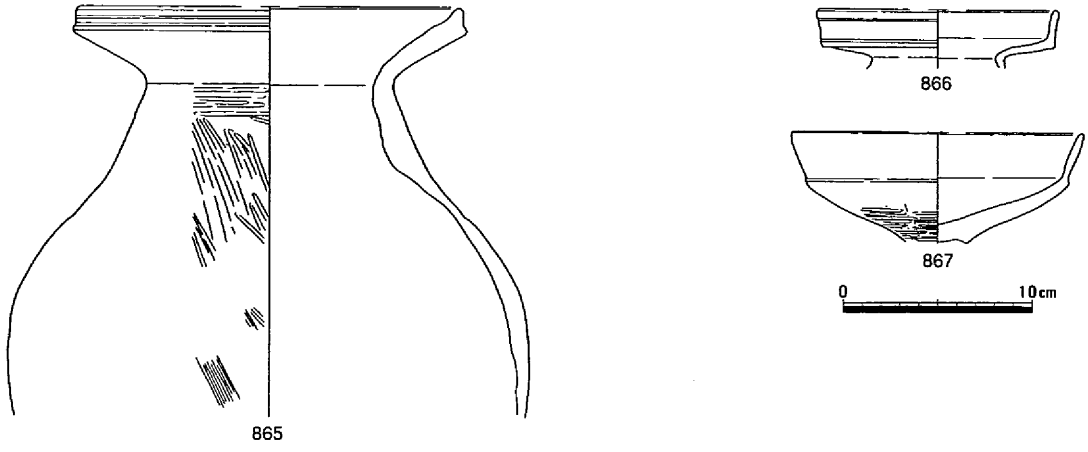
この住居の時期は、弥・後・Ⅳである。（弘田）

竪穴住居18（第335図）

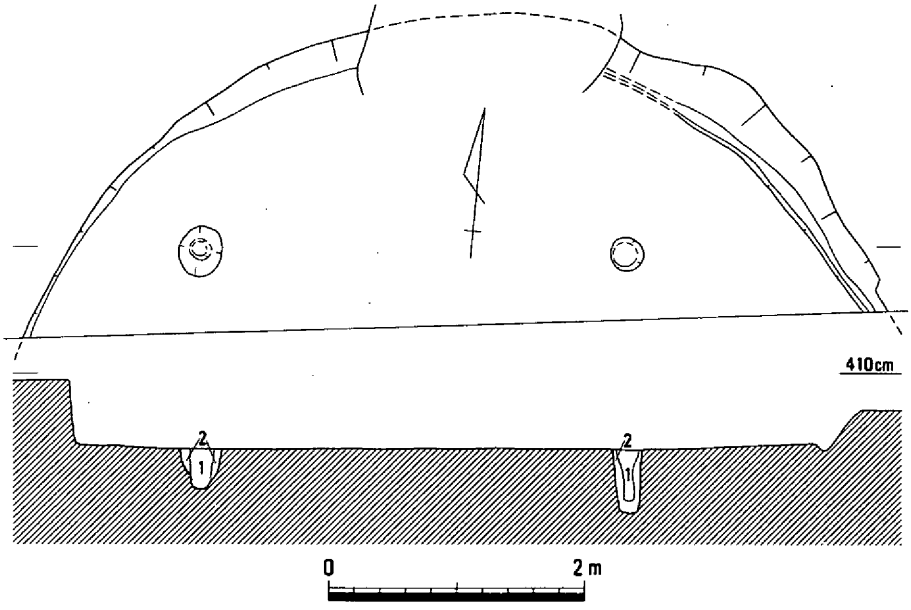
竪穴住居の16から東に２ｍ離れて位置する。平面形はやや歪な隅丸方形を呈し、規模は１辺が350～360cm、深さは20cmを測る。床面上では、周囲に壁体溝をめぐらすものの、柱穴や土壙などは一切みられなかった。



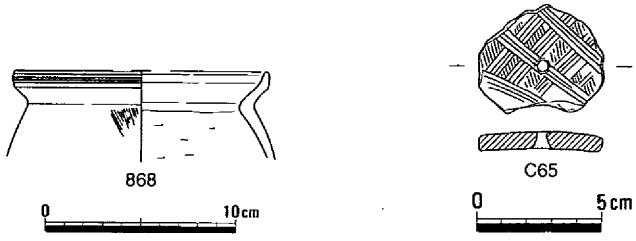
第332図　竪穴住居16（1/60）



第333図　竪穴住居16　遺物



1　淡褐灰色砂
2　暗黄褐色粘質土



第334図　竪穴住居17（1/60）・遺物

出土遺物としては、高杯脚部869がある。短い脚柱部から強く拡がる裾部がつく。裾部は内外面にヘラミガキを施し、円形の透かしを４ヶ所に配す。この住居の時期は、弥・後・Ⅳである。（弘田）

竪穴住居19（第336図）

第２微高地の調査区西北端に位置する。大半が調査区外となり、コーナー部分のみ検出した。壁体溝がみられることから方形の竪穴住居と考えられる。規模は不明で、深さは25cmを測る。

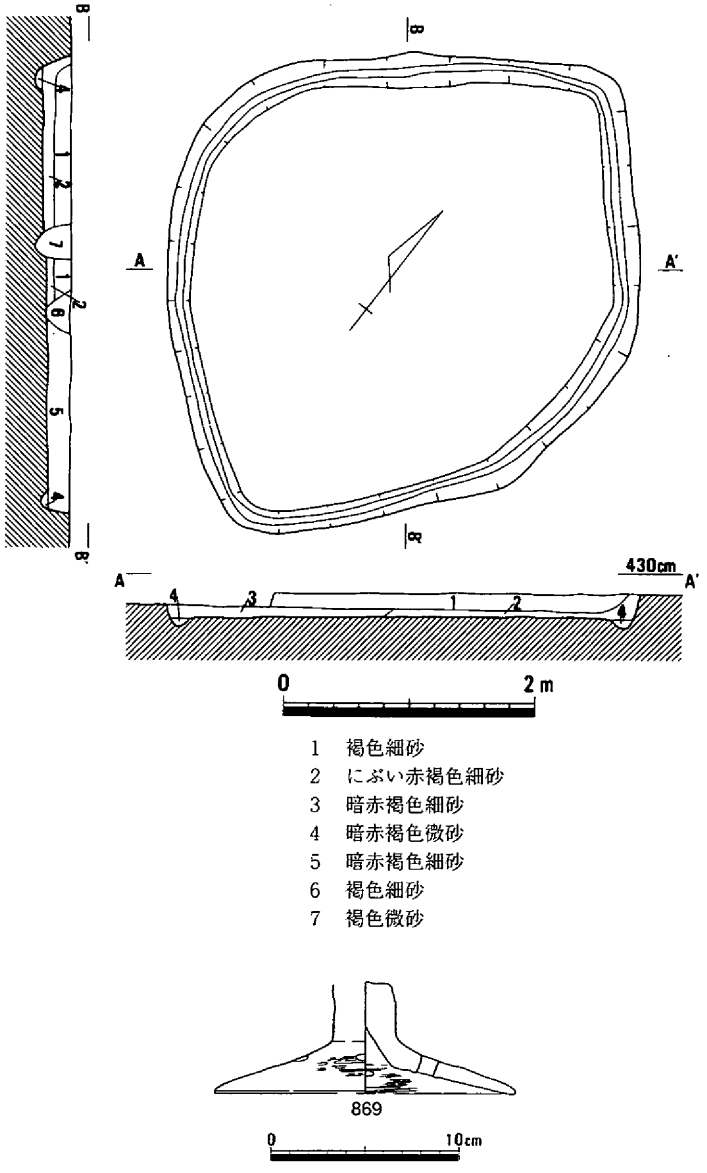
時期を特定する遺物はないものの、弥生時代後期と思われる。（弘田）

竪穴住居20（第337・338図）

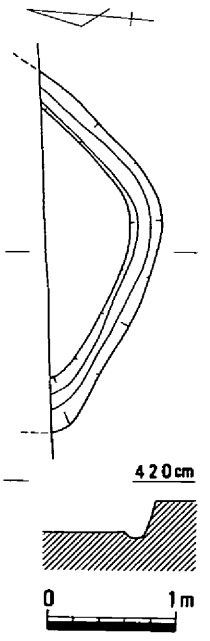
第２微高地で、調査区の北西部に位置する。平面形がかなり歪な方形を呈し、規模は１辺が540～570cm、深さは検出面から15cmを測る。床面上では、北辺の一部を除いて壁体溝は確認できなかった。主柱穴は４本であるが、各々２～３本単位でまとまって存在することからこの住居は、１～２回の立て替えがあったと思われる。中央穴は、径が45～55cmの楕円形を呈し、深さが25cm程を測る。

壺870は短い頸部をもち、外反した口縁部はさらに上方にのびて、外面には凹線をめぐらせている。甕871と872は口縁端部を上方に拡張し、外面には凹線をめぐらせる。体部はなで肩で、底は平坦である。底部内面には、指頭圧痕が残る。高杯では短脚の873と長脚化した874がある。小形鉢875は、平底に短い脚を貼り付ける。また、紡錘車Ｃ66もある。

この住居は、弥・後・Ⅳから古墳時代前期にかけて数回の建て替えを経て存続したと考えられる。（弘田）



第335図　竪穴住居18（1/60）・遺物



第336図　竪穴住居19（1/60）

竪穴住居21（第339図）

竪穴住居20の北東に接して位置する。平面形は方形を呈し、規模は長辺が340cm、短辺は300cmと小規模な竪穴住居である。検出面からの深さは15cmを測る。床面上では、西壁沿い以外には壁体溝をめぐらす。また、床面中央部には、長さが150cm、幅は70cmのきわめて浅い皿状の凹みがあり、炭が集積していた。このほかには、柱穴や土壙は存在していなかった。

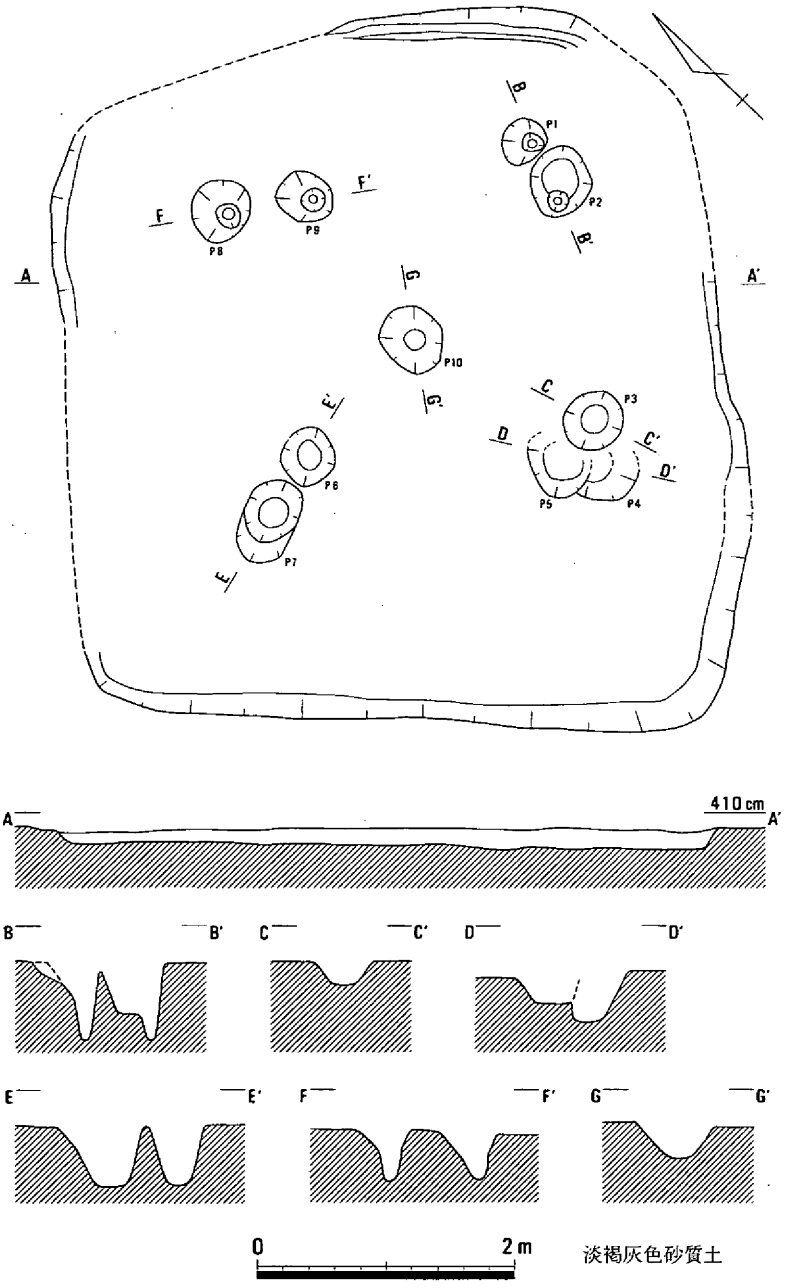
出土遺物には、甕876と土師器の小形器台の受部877がある。これらの時期は、弥・後・Ⅳから古・前・Ⅰであるが、住居の時期自体は、弥・後・Ⅳの新相と思われる。（弘田）

竪穴住居22（第340図）

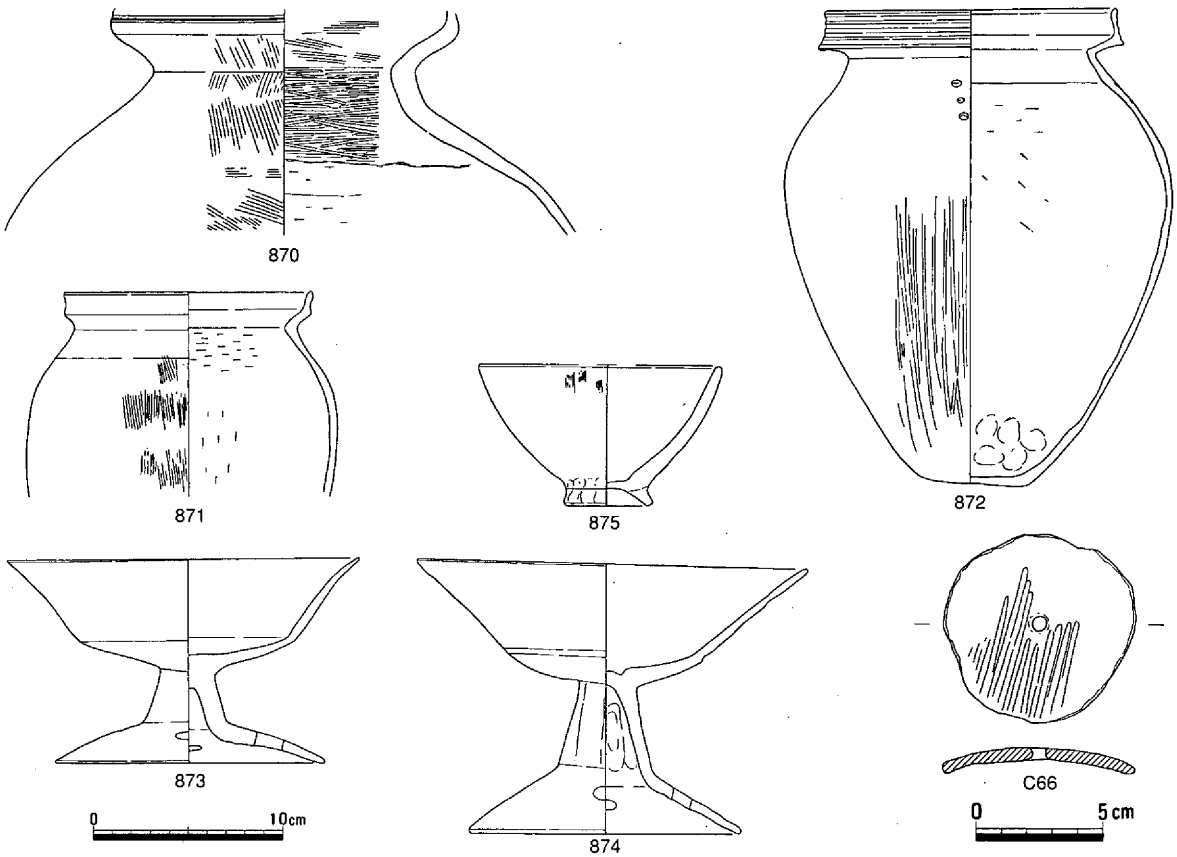
竪穴住居21から北東方向に７m離れた所に位置する。竪穴住居23・59に切られており、床面はごくわずかしか遺存していない。平面形は円形を呈し、規模は、直径が620cmで、深さは25cmを測る。床面上では残存部に壁体溝がみられたほか柱穴や土壙が確認できた。柱穴は４本検出しているがＰ１とＰ２の間にもう１本想定でき、本来は５本主柱であったと思われる。掘り方の直径40～70cm、深さは50cm前後を測る。また、床面中心から南に少し離れた所に土壙１基がある。平面形が不整楕円形を呈し、規模は長さが130cm、幅が70cm、深さが25cmを測る。

出土遺物のうち、甕878は、口縁部を短く外反したのちさらに上方に拡張させている。高杯879は短脚である。杯部のない外面にヘラミガキを施す。880は深い杯部をもつ高杯である。小形鉢881は、平底で内湾気味に立つ口縁部を有する。石器では、サヌカイト製の石鏃Ｓ196と、楔Ｓ197がある。

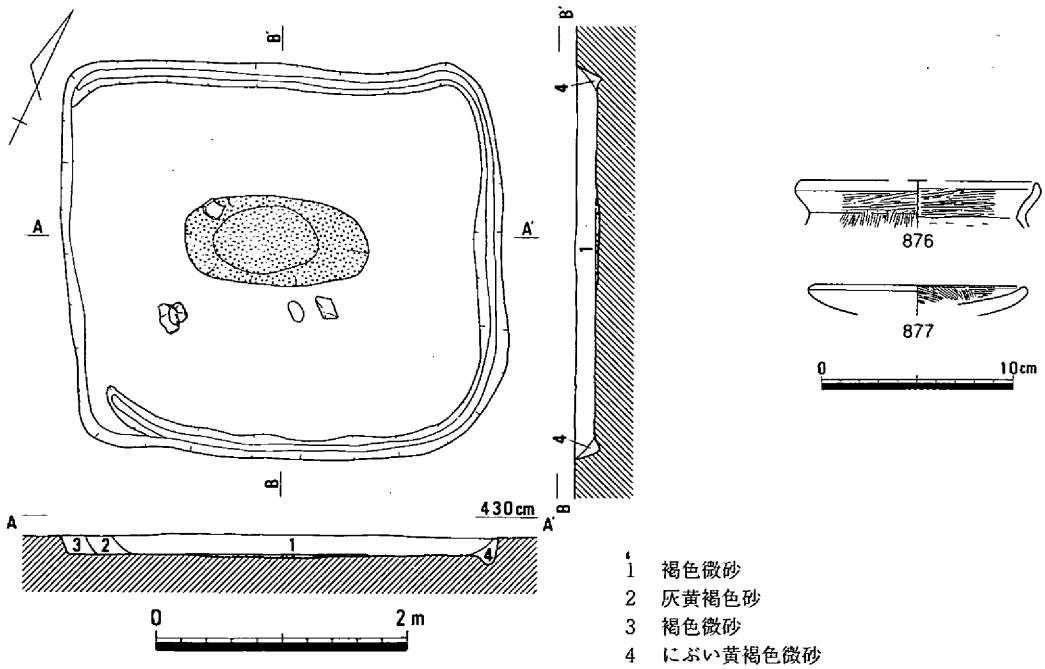
この住居の時期は、弥・後・Ⅳである。（弘田）



第337図　竪穴住居20（1/60）

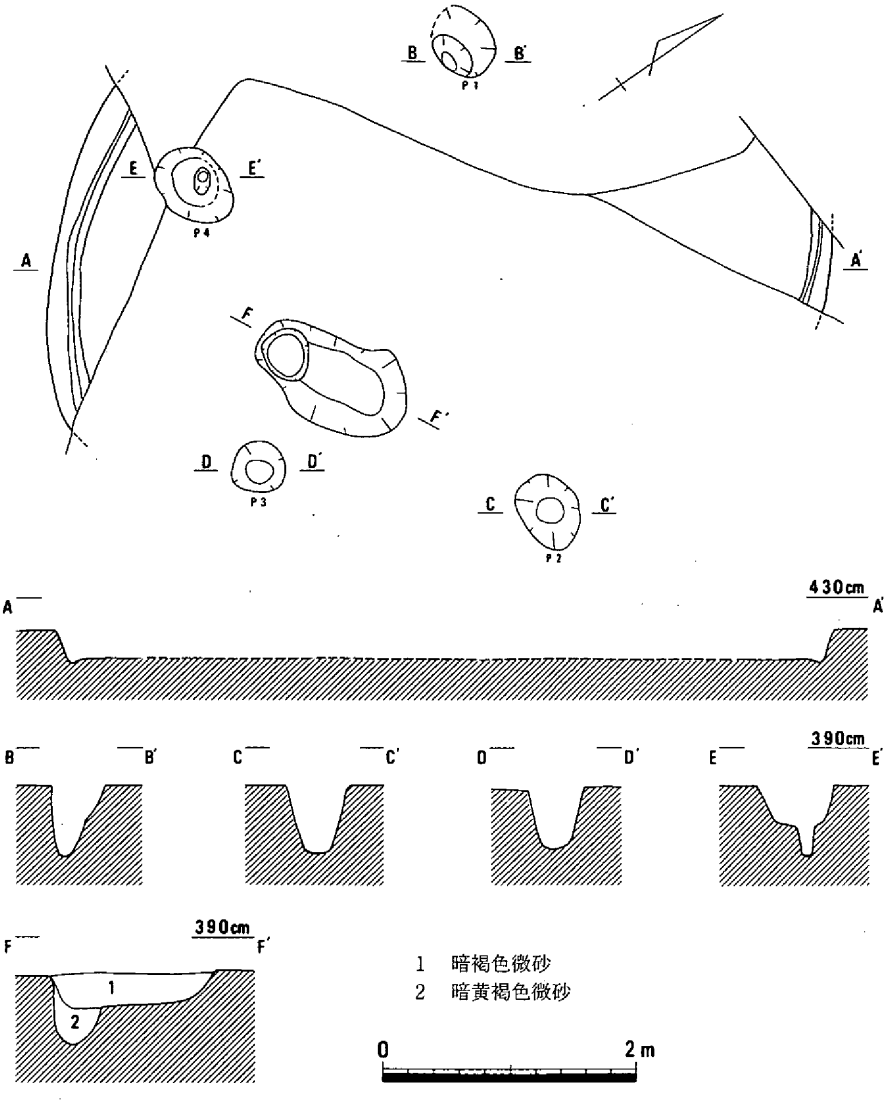


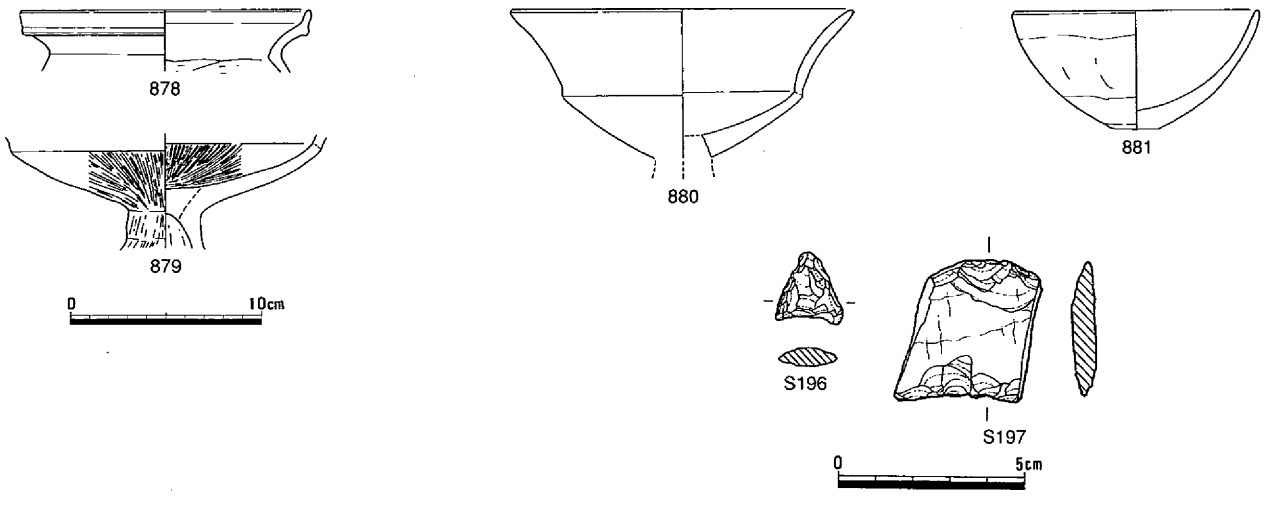
第338図　竪穴住居20　遺物



1　褐色微砂
2　灰黄褐色砂
3　褐色微砂
4　にぶい黄褐色微砂

第339図　竪穴住居21（1/60）・遺物





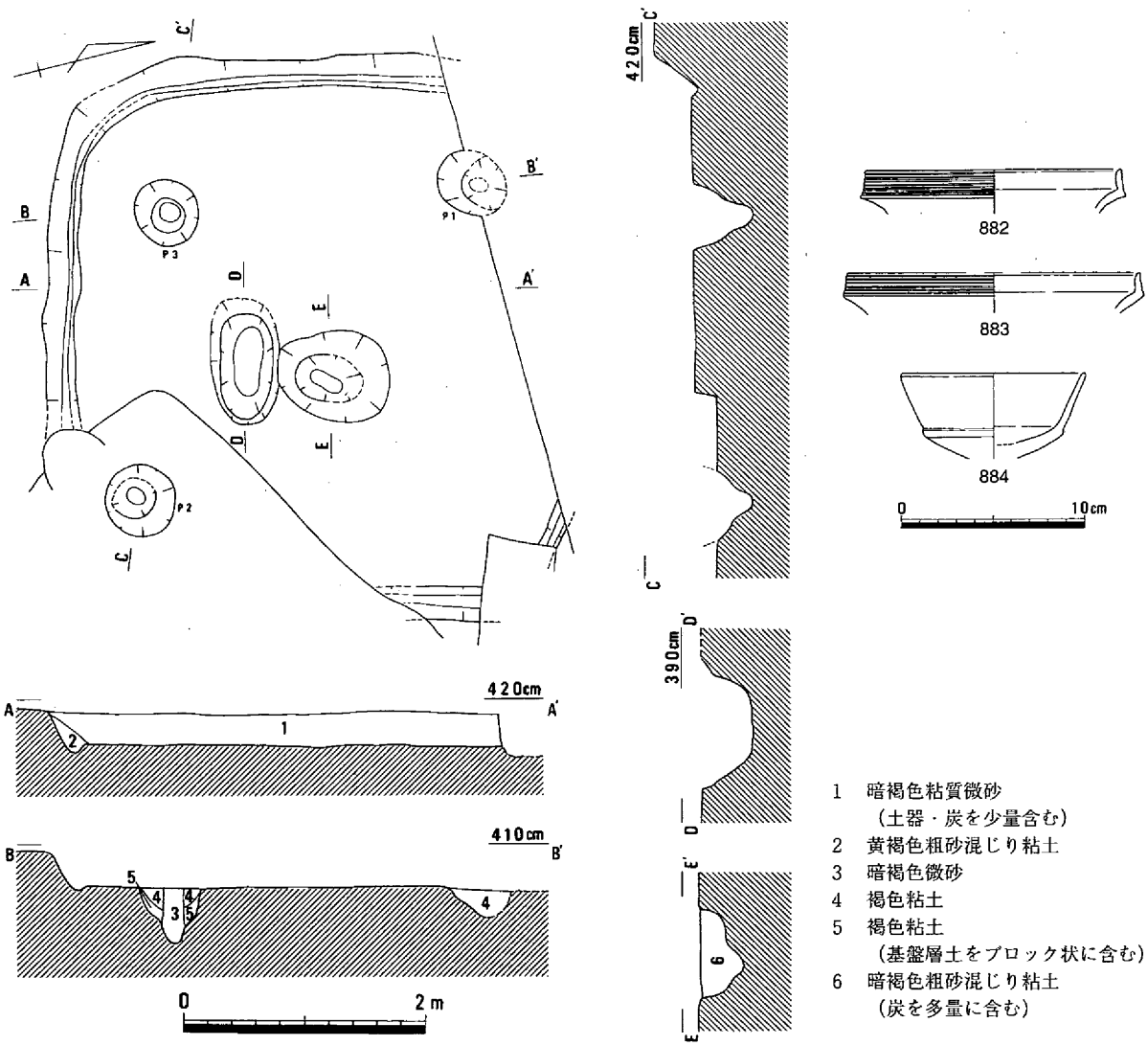
第340図　竪穴住居22（1/60）・遺物

竪穴住居23（第341図）

竪穴住居22を切って造られ、東側半分が住居22と重複する。平面形が隅丸方形を呈し、規模は、残存部で１辺が440cm、深さは30cmを測る。床面上からは、柱穴は３本と中央部には土壙２基が検出できた。主柱穴は本来は４本と思われる。掘り方の直径は、50～60cmで、深さはＰ２・３では50cmを測るが、Ｐ１では20cm程であった。中央部にある土壙のうち、より中心に位置するものは平面形が不整円形を呈し、長さが90cm、幅は75cm、深さが35cmを測る。埋土中には、炭を大量に含んでいた。もう１基は平面形が長円形を呈し、規模は長さが100cmで、幅は55cm、深さが40cmを測る。出土遺物のうち、884は土師器の小形高杯で混入したと思われる。甕882・883は外反する口縁部を鋭い稜線から上方に拡張させ、外面には擬凹線文を施す。この住居の時期は、弥・後・Ⅳと思われる。　（弘田）

竪穴住居24（第342図、写真７－３）

竪穴住居20の南西10ｍに位置する。平面形は、角があるようなやや歪な円形を呈す。規模は、直径が510cm、深さは30cmを測る。この住居は東側の一部を水路によって破壊されているが、それ以外の部分では、壁体溝、柱穴および中央穴を確認した。柱穴は４本検出しているが、配置からみて５本主



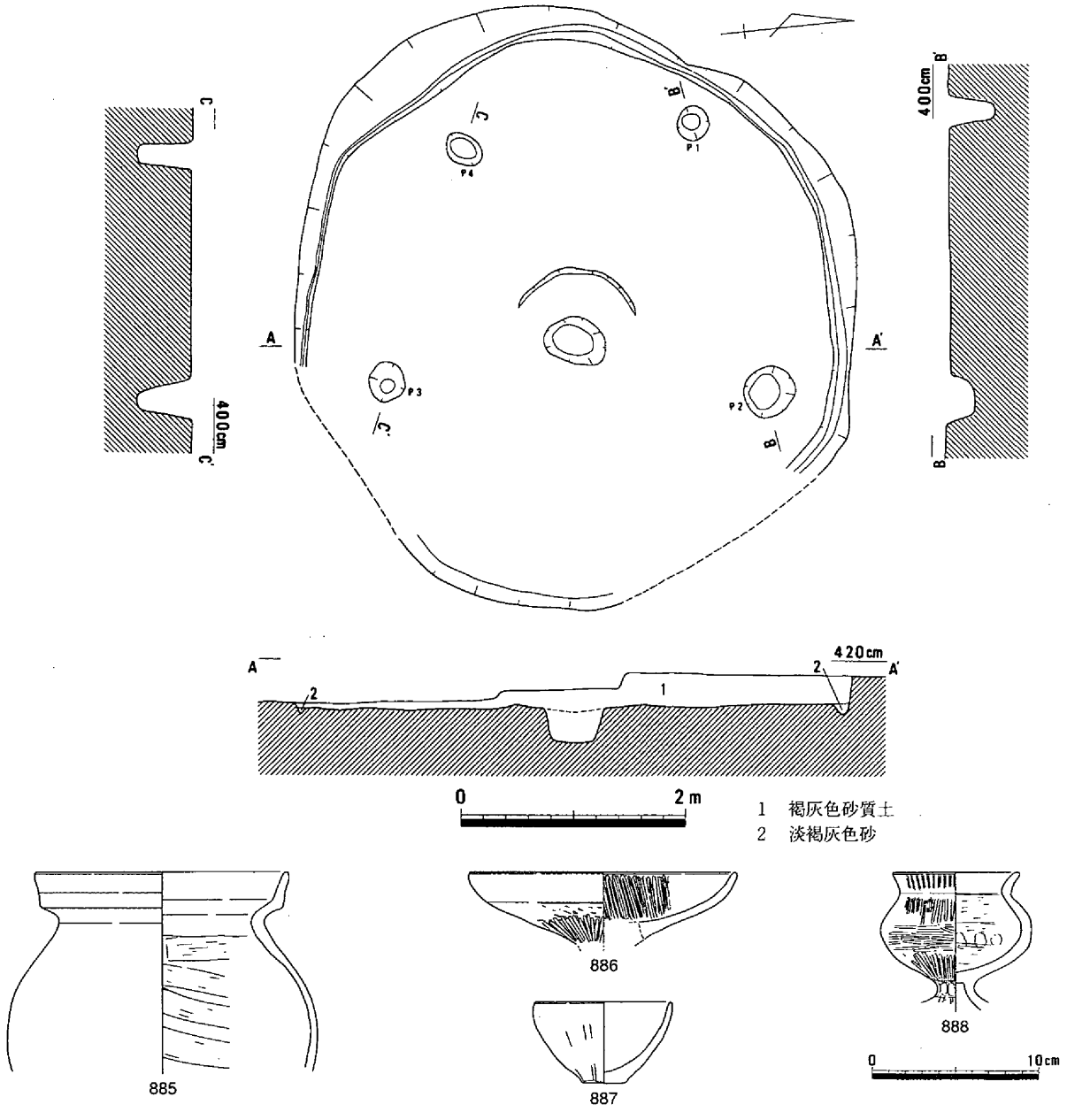
第341図　竪穴住居23（1/60）・遺物

柱である可能性が強い。柱穴は掘り方の径が30～45cmで、深さは30～50cmである。中央穴は、平面形が長円形を呈し、長さが55cm、幅は40cm、深さが30cm程を測る。さらに、この中央穴の西側において、中央穴を半周するようなわずかな高まりも認められた。

甕885は、体部はなで肩で、口縁部は外反したのちさらに上方に立ち上がる。高杯886は内湾して立つ浅い杯部をもつ。小形の鉢887は平底で、口縁は内湾気味に立ち上がる。台付壺886は口縁部がくの字に開き、端部は丸く終わる。この住居の時期は、弥・後・Ⅳである。　（弘田）

竪穴住居25（第343図）

竪穴住居の22・23の東に接して位置する。大半は調査区外につづき、ごく一部が確認されたのみであるが壁体溝をもつことから竪穴住居とした。平面形は隅丸方形もしくは円形を呈し、深さは検出面から約20cmを測る。埋土中には炭や焼土を多く含み、焼失住居の可能性がある。

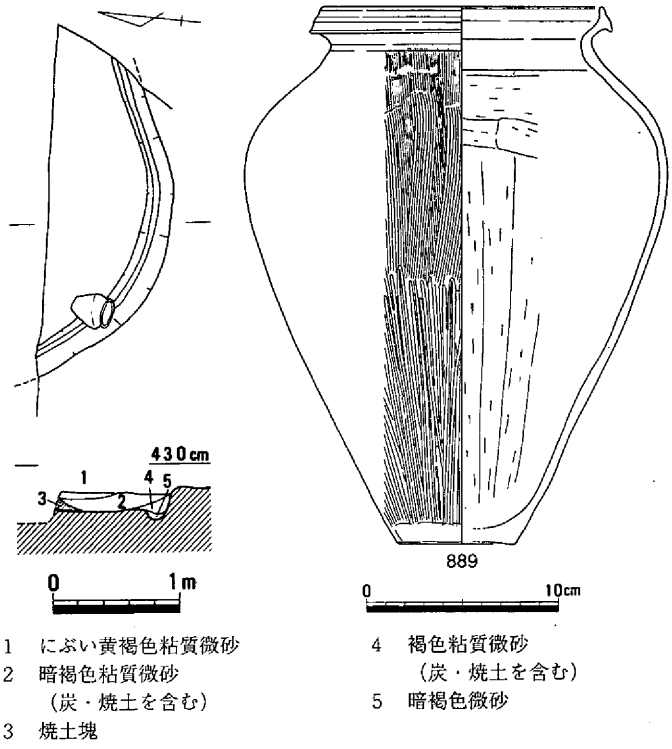


第342図　竪穴住居24（1/60）・遺物

壁沿いの床面上には、完形の弥生土器の甕889が１点出土している。これからみて住居の時期は、弥・後・Ⅲである。　（弘田）

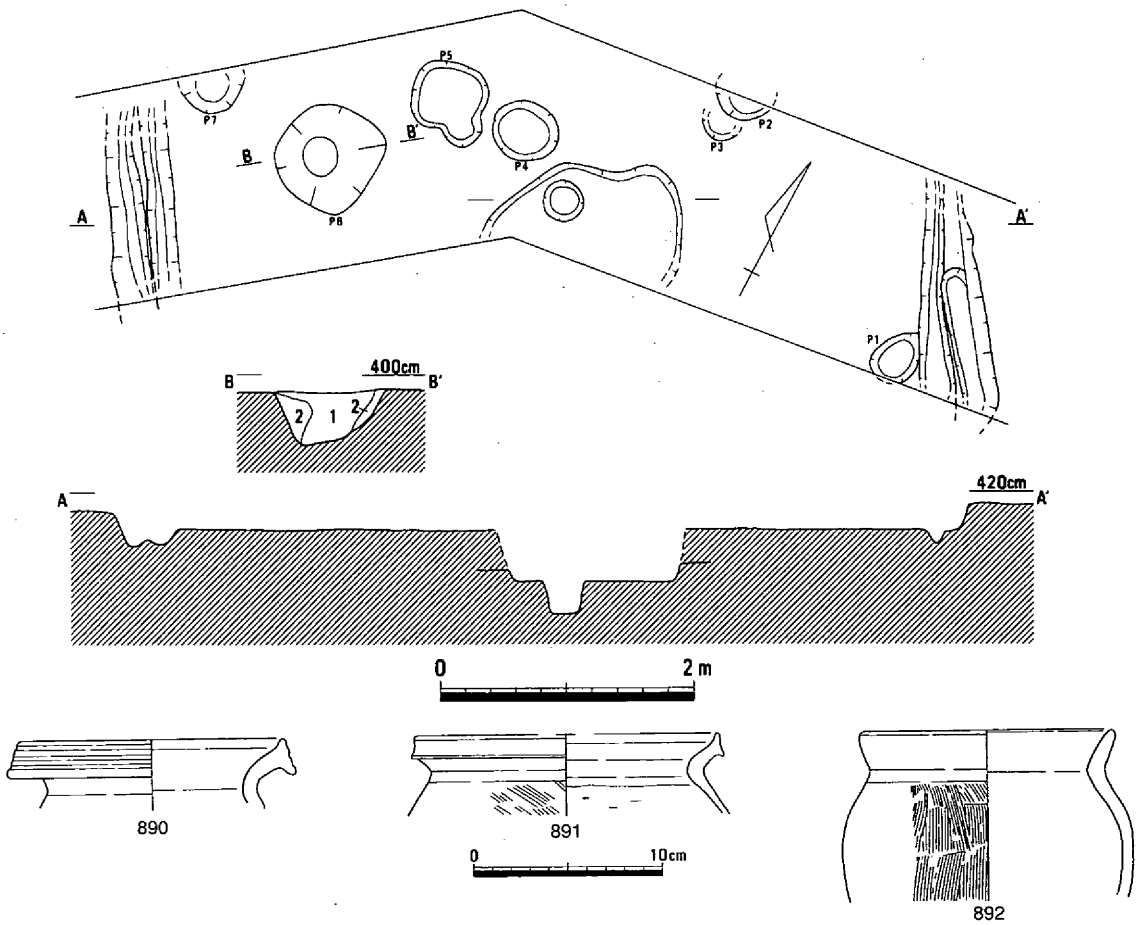
竪穴住居26（第344図）

第２微高地の南西に位置する。道路端の水路部分の調査区にあるため、ごく一部が検出できたのみであるが、平面形は円形と思われる。規模は直径が670cm程度で、深さは検出面から20cmを測る。壁体溝は２条めぐることから、１回の建て替えが考えられる。柱穴は７本検出できたが、住居にともなう主柱穴と考えられるのはＰ６である。また、床面中央部では平面形が不整形を呈する土壙もみられた。



1　にぶい黄褐色粘質微砂
2　暗褐色粘質微砂（炭・焼土を含む）
3　焼土塊
4　褐色粘質微砂（炭・焼土を含む）
5　暗褐色微砂

第343図　竪穴住居25（1/60）・遺物

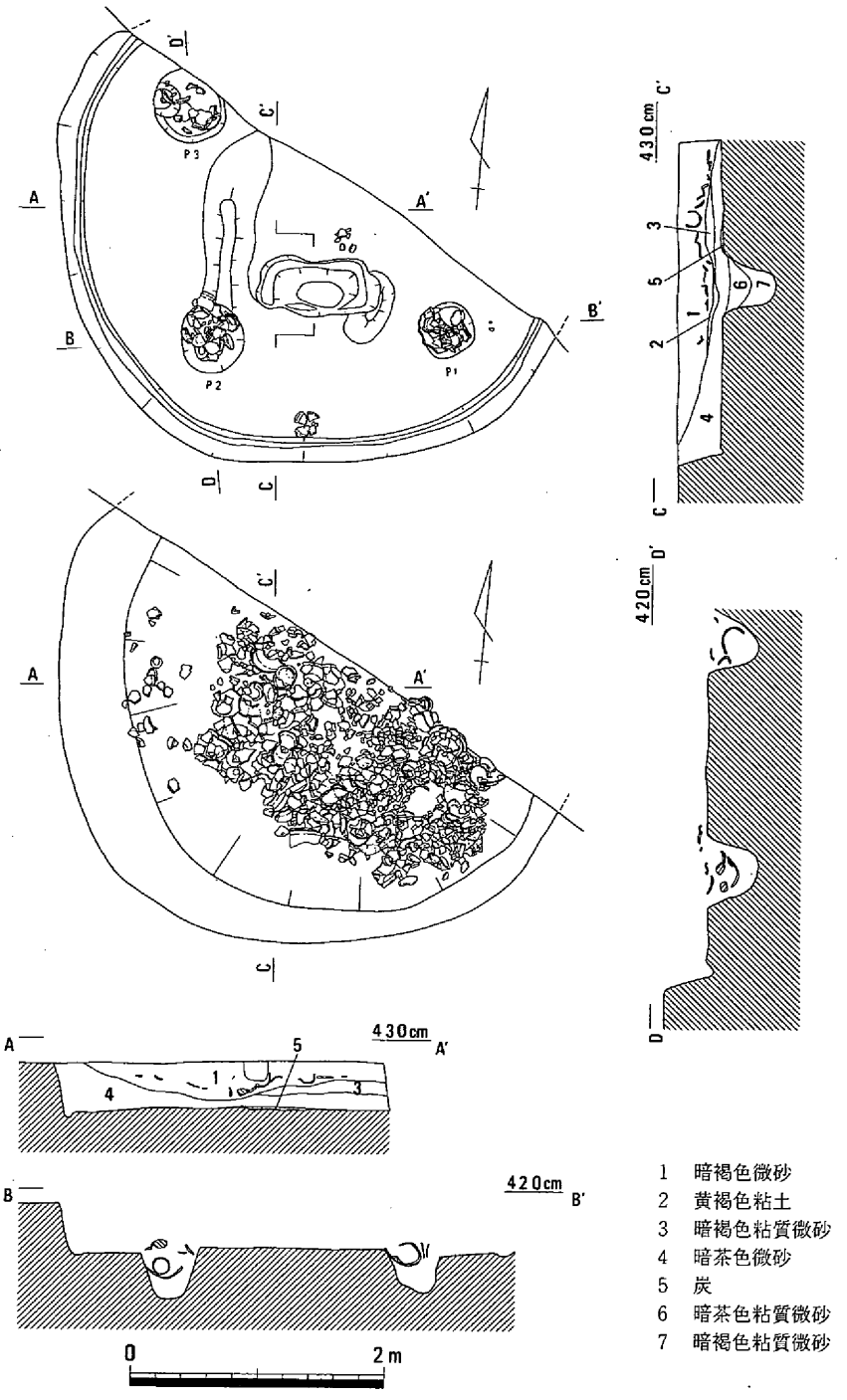


第344図　竪穴住居26（1/60）・遺物

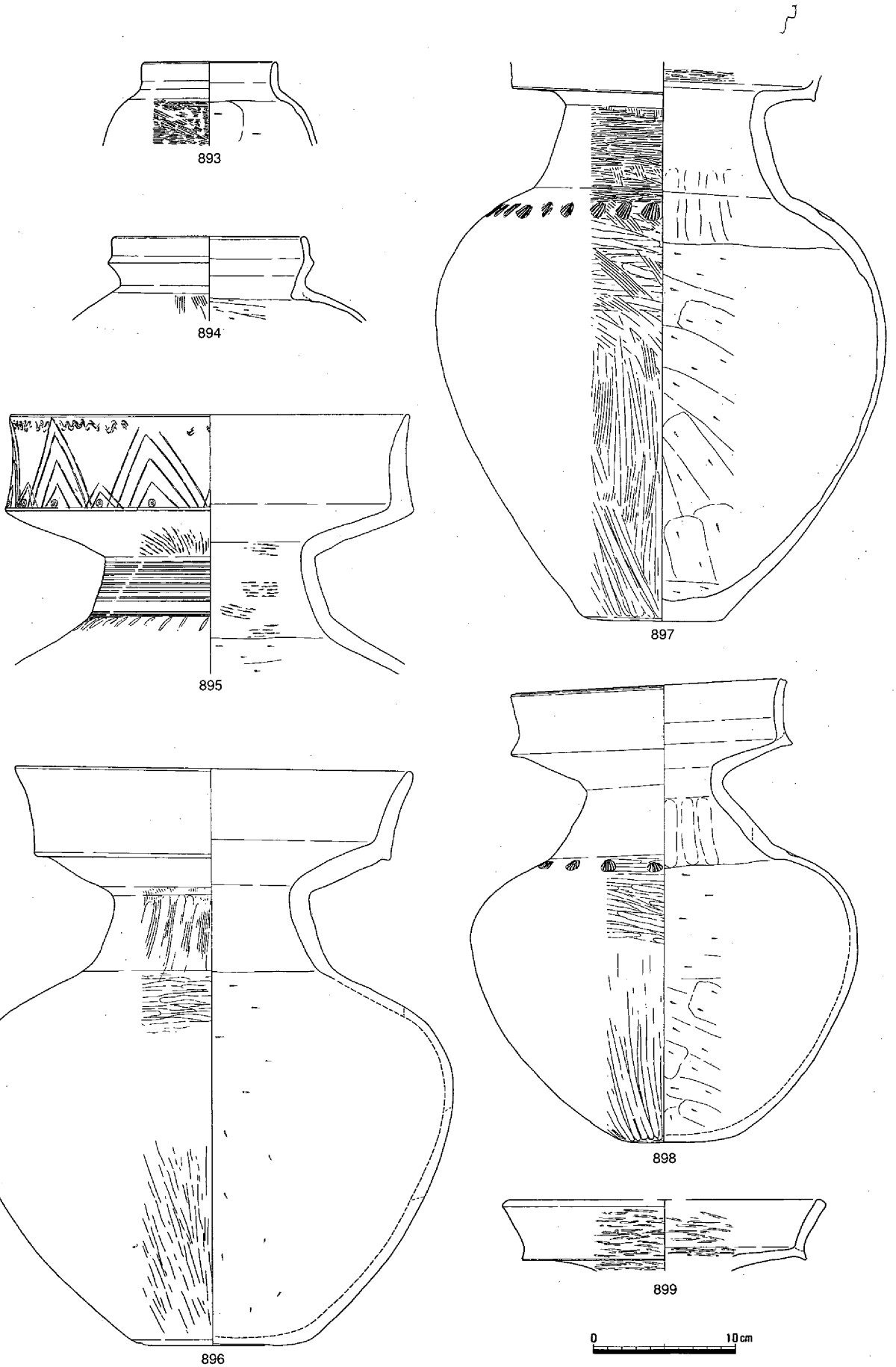
出土遺物はいずれも弥生土器の甕で、短く外反する口縁部をもち、端部を下方に垂下させ、外面に凹線をめぐらせる890と、口縁端部が上下に拡張する891や、くの字に折り曲げ、端部が丸く終わる892がある。この住居の時期は、弥・後・Ⅲである。　（弘田）

竪穴住居27（第345～361図、写真８－１・２、写真62～66）

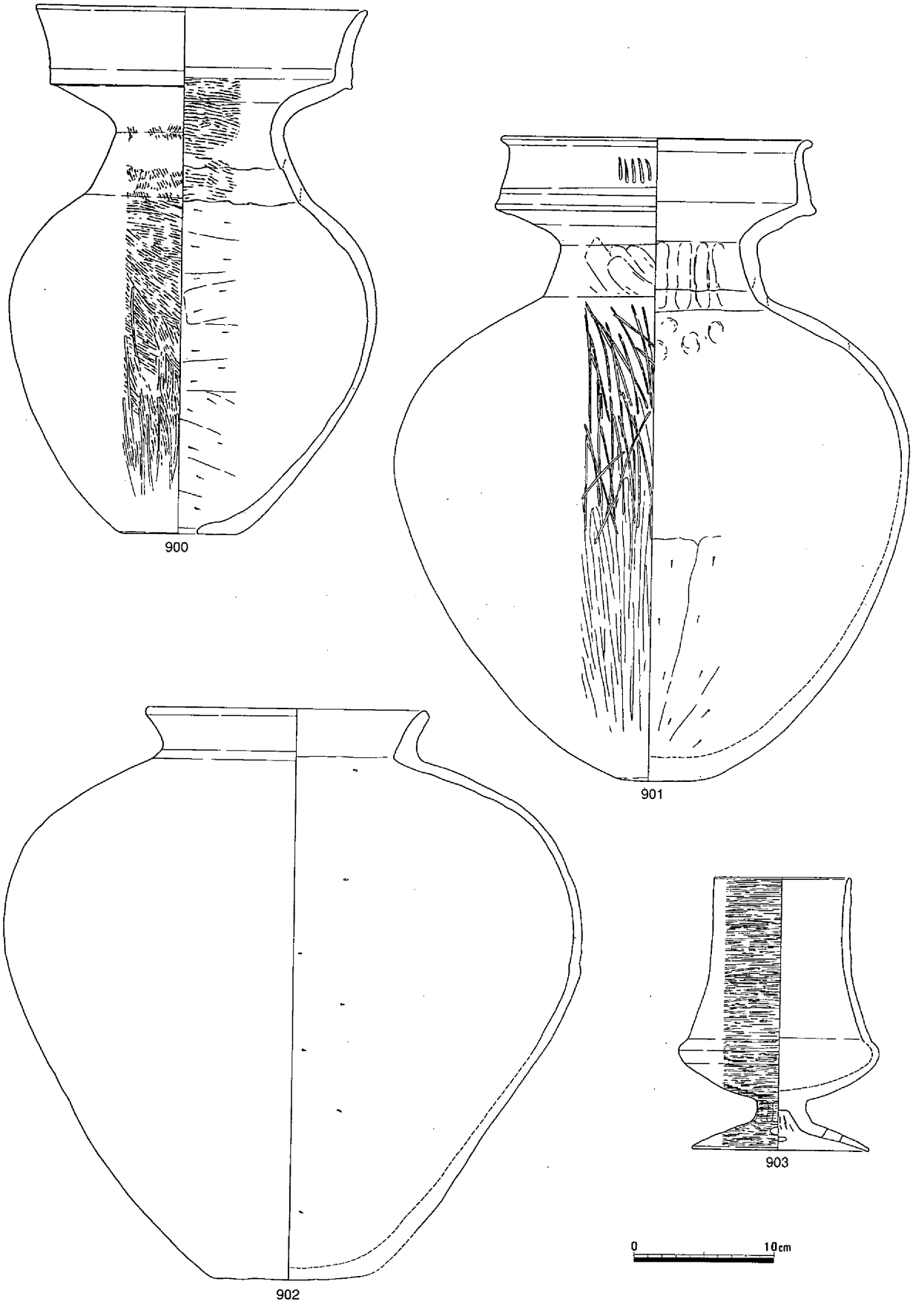
竪穴住居18の東８m位置する竪穴住居で、M23区の南東からN23区の北東にかけて検出した。調査区の制約から北東部分を確認できなかったが、現状から長さ420cm、幅405cmほどの円形に復元される。検出面から深さ35cmにある床面は平坦で、その標高は372cmを測る。床面積は11㎡あまりと推定され、



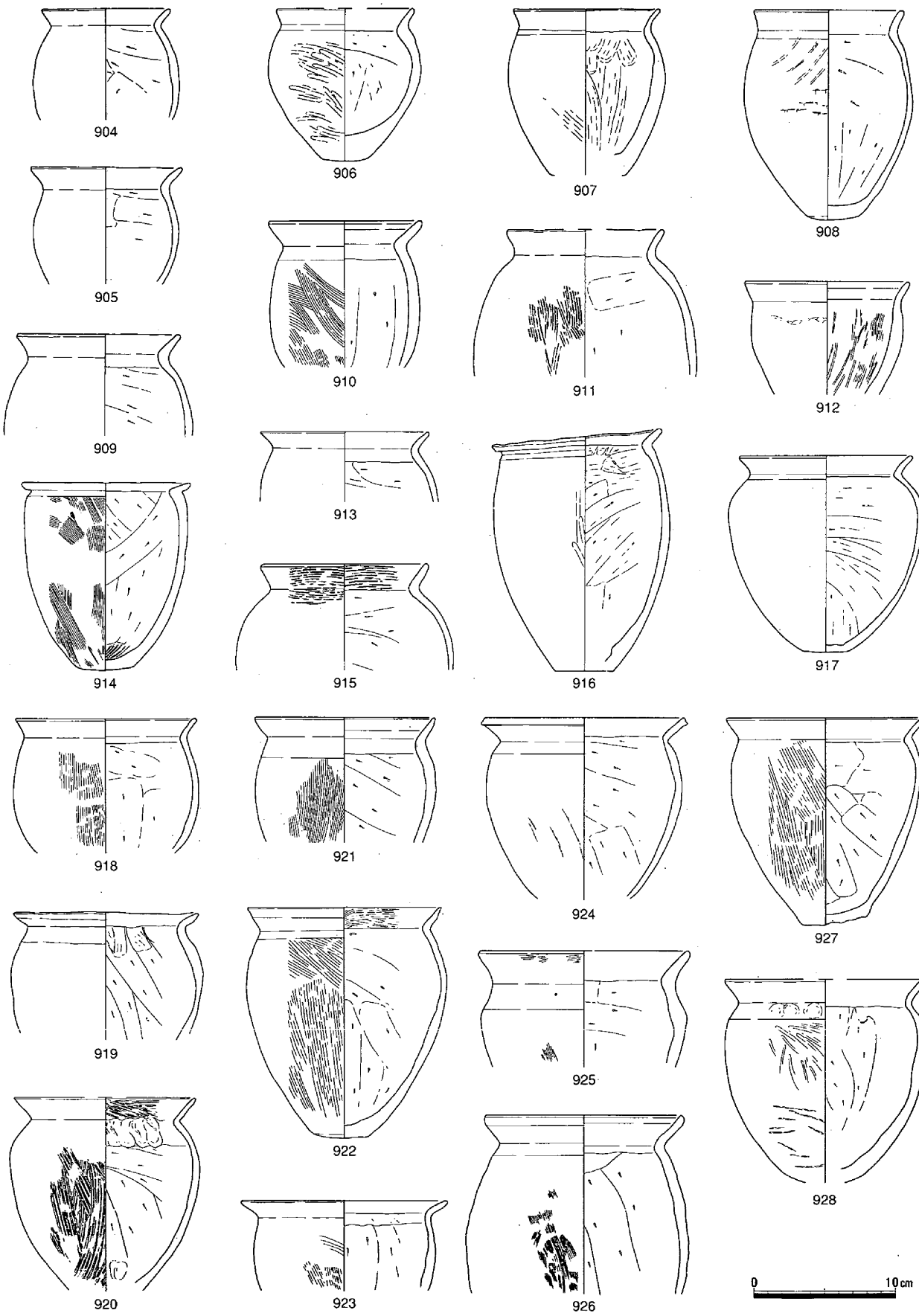
第345図　竪穴住居27（1/60）



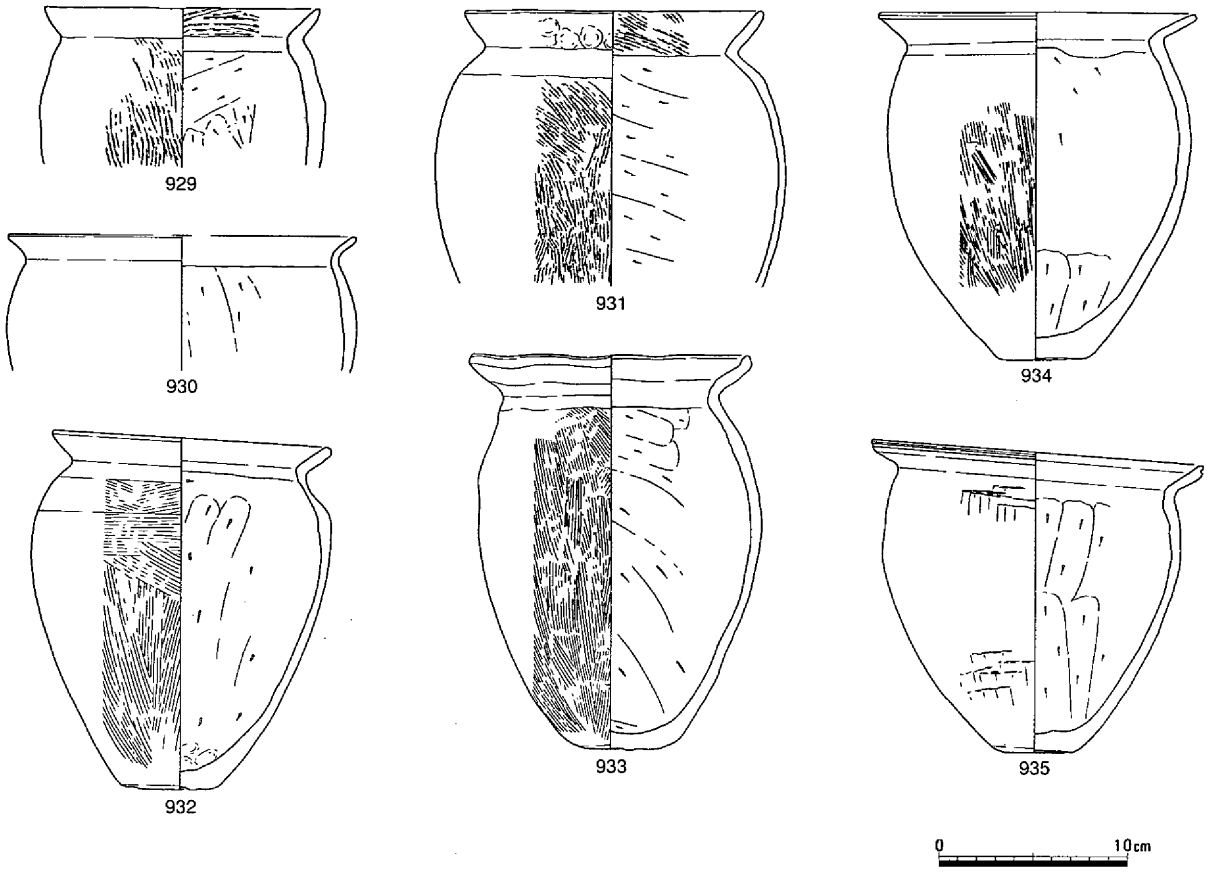
第346図　竪穴住居27　遺物（１）



第347図　竪穴住居27　遺物（２）



第348図　竪穴住居27　遺物（３）



第349図　竪穴住居27　遺物（4）

周囲には幅12cm、深さ6cmほどの壁体溝をめぐらす。

主柱は3本のみ検出したが、本来は4本で構成されていたものと思われる。掘り方は径40～60cmの円形をなし、深さは32～43cmある。それぞれ、壁体から50～60cmの位置にあり、柱間距離は187～183cmを測る。床面の中央南よりには方形の土壙が二段に掘りこまれている。上段は長さ98cm、幅43cm、下段は長さ67cm、幅34cmの方形を呈し、深さは42cmある。その北縁には炭層の分布が認められるものの、粘質を帯びた埋土中に炭や土器等は確認できなかった。この土壙の東西には、黄褐色の地山土を盛り上げた土堤状の高まりが150cmにわたって認められた。

竪穴の内部には暗褐色をなす埋土がレンズ状に堆積していた。このうち1層からは、250×150cm以上の範囲で土器がまとまって出土しており、その数は200個体にも及ぶ。これらは西から投棄された様相を呈し、高杯など小型の器種はこの辺りに集中していた。また、3つの柱穴からも土器が充填された状態で出土している。これらの中には上層の土器と接合するものがあり、住居廃絶後一定の堆積を見た後、柱材の除去に際して投棄されたものと考えられる。このほか、1層の下面には地山に由来する黄褐色土が層をなして堆積しており、上屋との関連が想起された。

出土した土器には壺・甕・高杯・鉢などがあり、それぞれ壺8％、甕47％、高杯13％、鉢32％の比率を占める。また、完形のものも少なからず存在し、壺や甕の中には体部や底部に穿孔の施されたものが複数認められた。

895～901は上方に窄まる短い頸部と二重口縁をもつ壺で、体部が倒卵形をなす897・900・901と、肩の張る偏球形をなす895・896・898とがある。これを法量から見ると口径20～23cm、器高32～38cm

第350図　竪穴住居27　遺物（５）

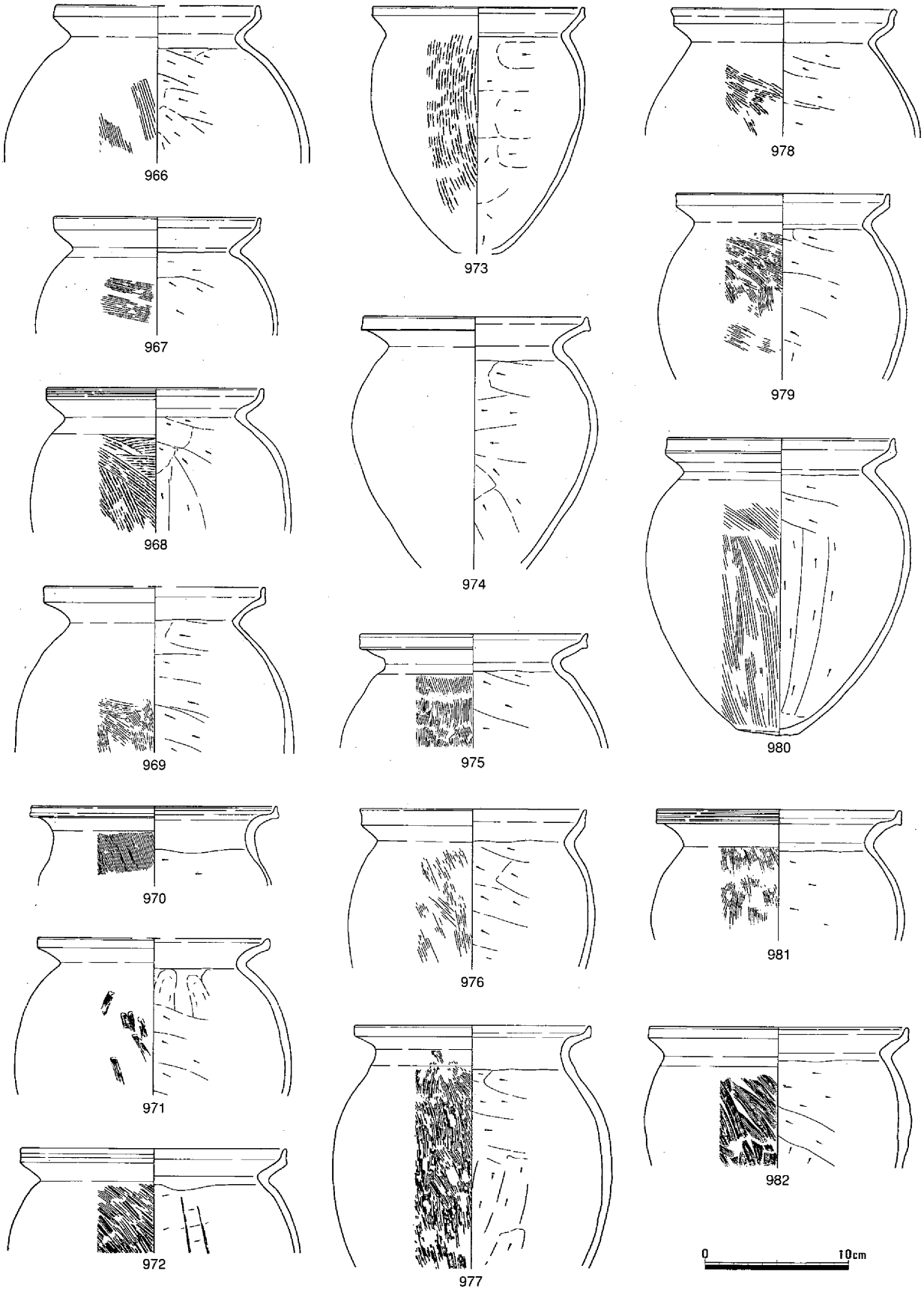
の小型898・900と口径28cm、器高42cmの大型895～897に分けられる。いずれも外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整する。また、895は口縁部に複線鋸歯文、頸部に沈線をめぐらし、897・898は肩部に二枚貝の圧痕文を連続して施す。とくに、口縁部が内傾ぎみに立ち上がり、体部下半のみヘラケズリする901は他地域に系譜をもつものである。

902は短く外反する口縁部をもつ壺で、口径18.4cm、胴径41.1cm、器高40.9cmを測る。外面をナデ、内面をヘラケズリで調整するものの、概して粗雑なつくりとなっている。類例に乏しい器形である。

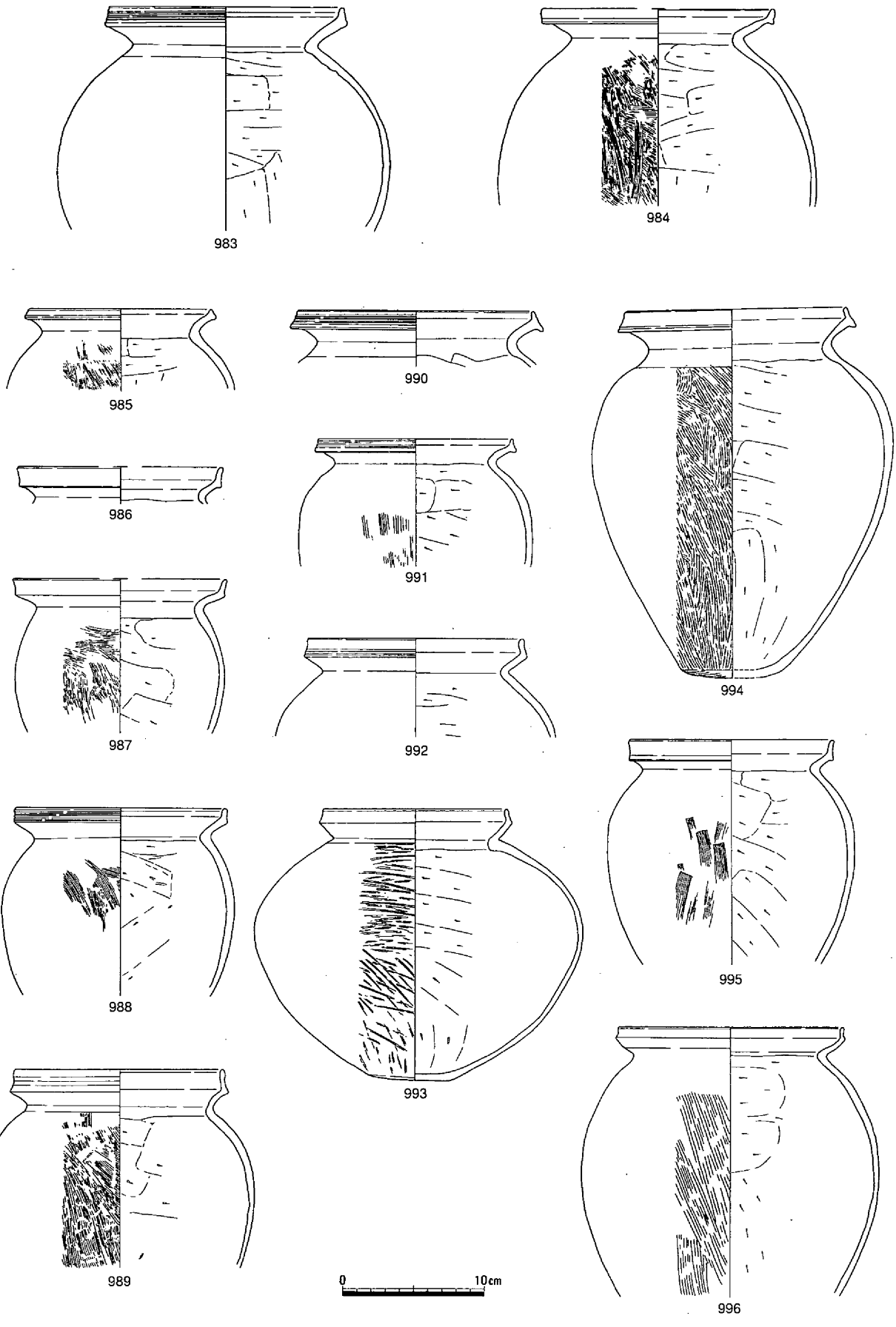
999～1005は、短い口頸部が屈折して開く壺で、上方に拡張した口縁部には数条の沈線をめぐらすものがある。厚手につくられた体部は、外面をハケメないしヘラミガキ、内面をヘラケズリで調整する。口径16.2～17.6cm、胴径27.7～30.3cm、器高30.1～32.6cmを測る。

903は直口壺で、口径9.6cm、器高19.5cmを測る。径12.6cmある脚部は短く、裾部に４つの透かし孔を穿つ。高杯と共通する胎土は緻密で、外面をヘラミガキで丁寧に調整している。

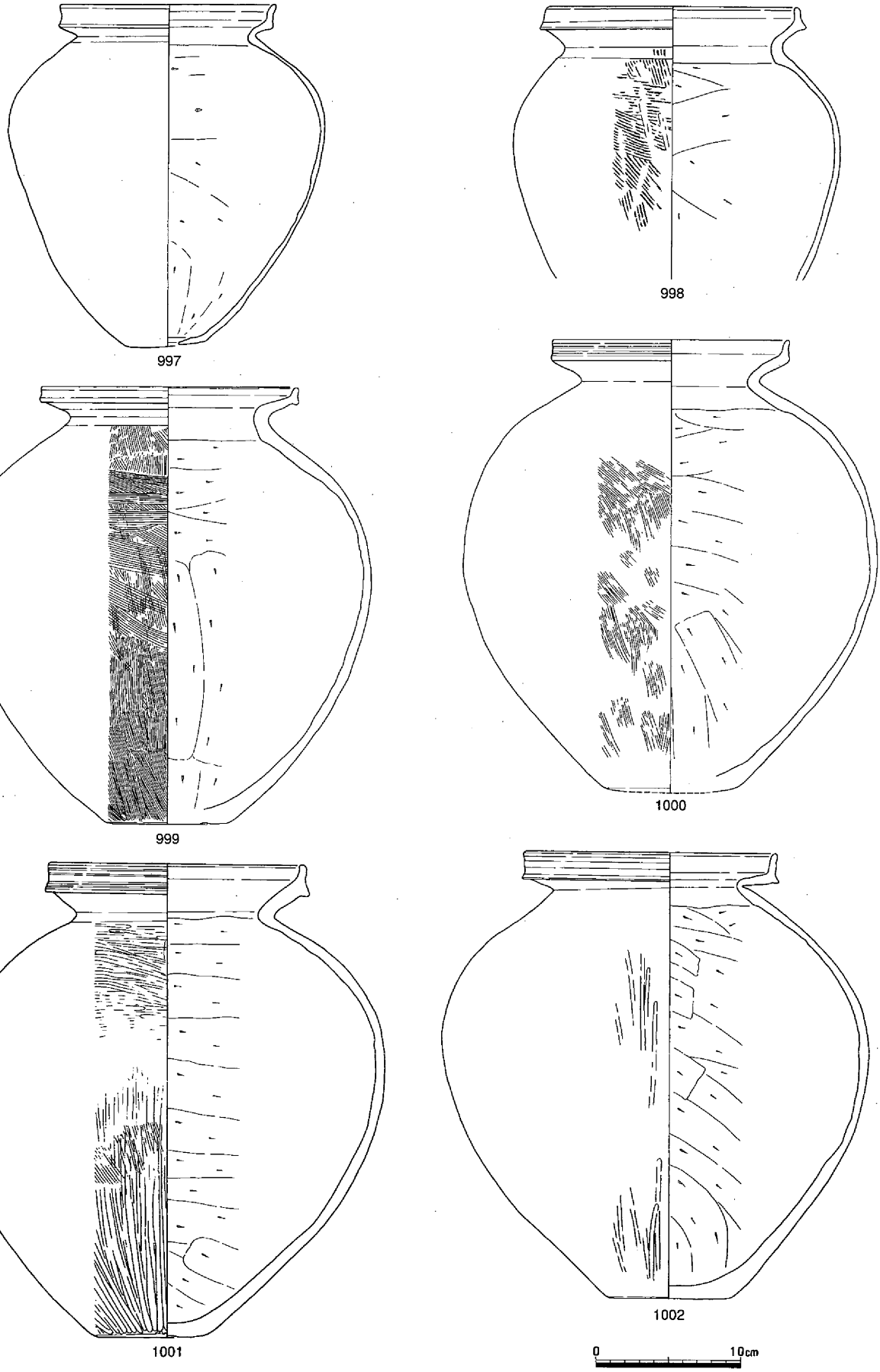
第351図　竪穴住居27　遺物（6）



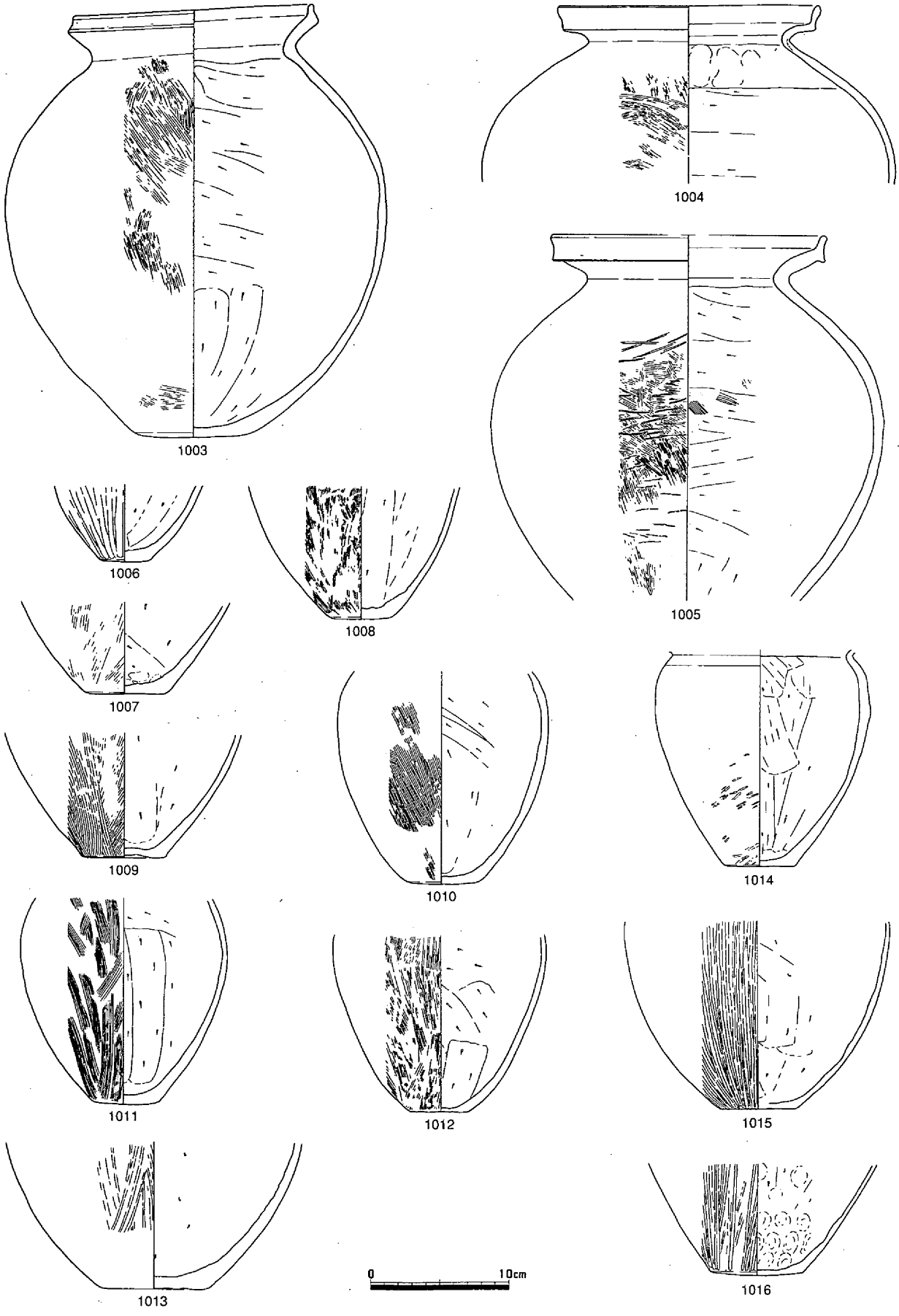
第352図　竪穴住居27　遺物（７）



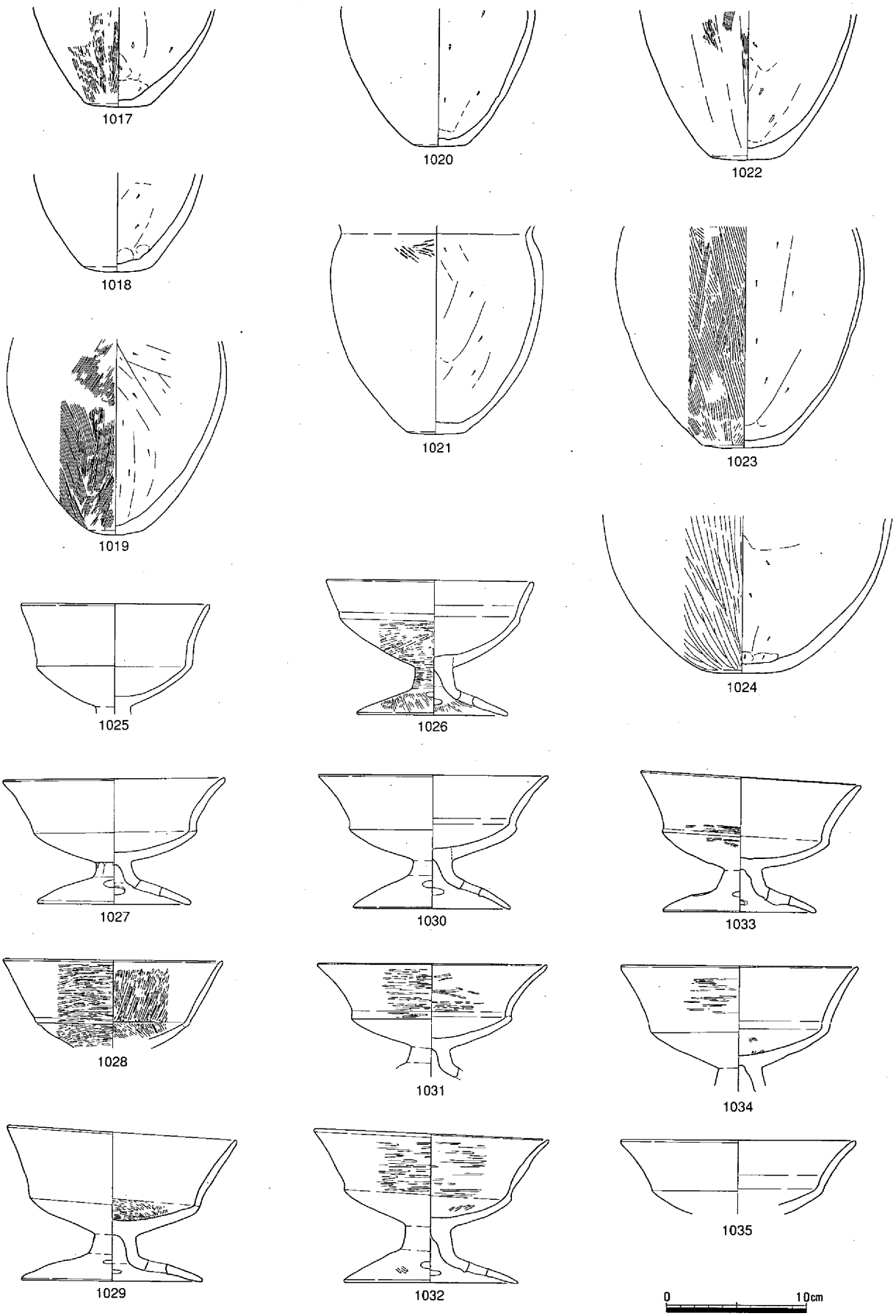
第353図　竪穴住居27　遺物（8）



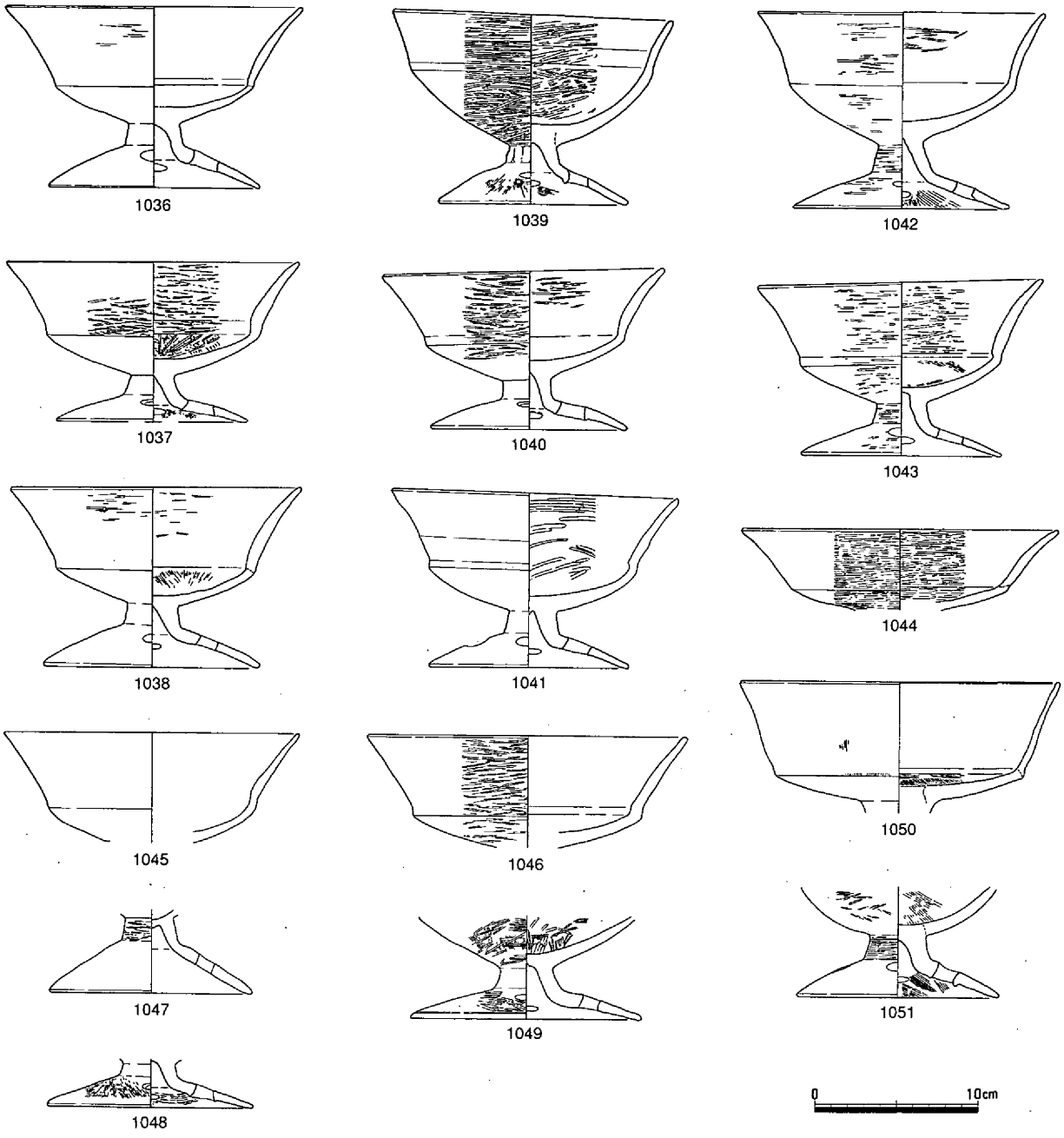
第354図　竪穴住居27　遺物（９）



第355図　竪穴住居27　遺物（10）



第356図　竪穴住居27　遺物（11）



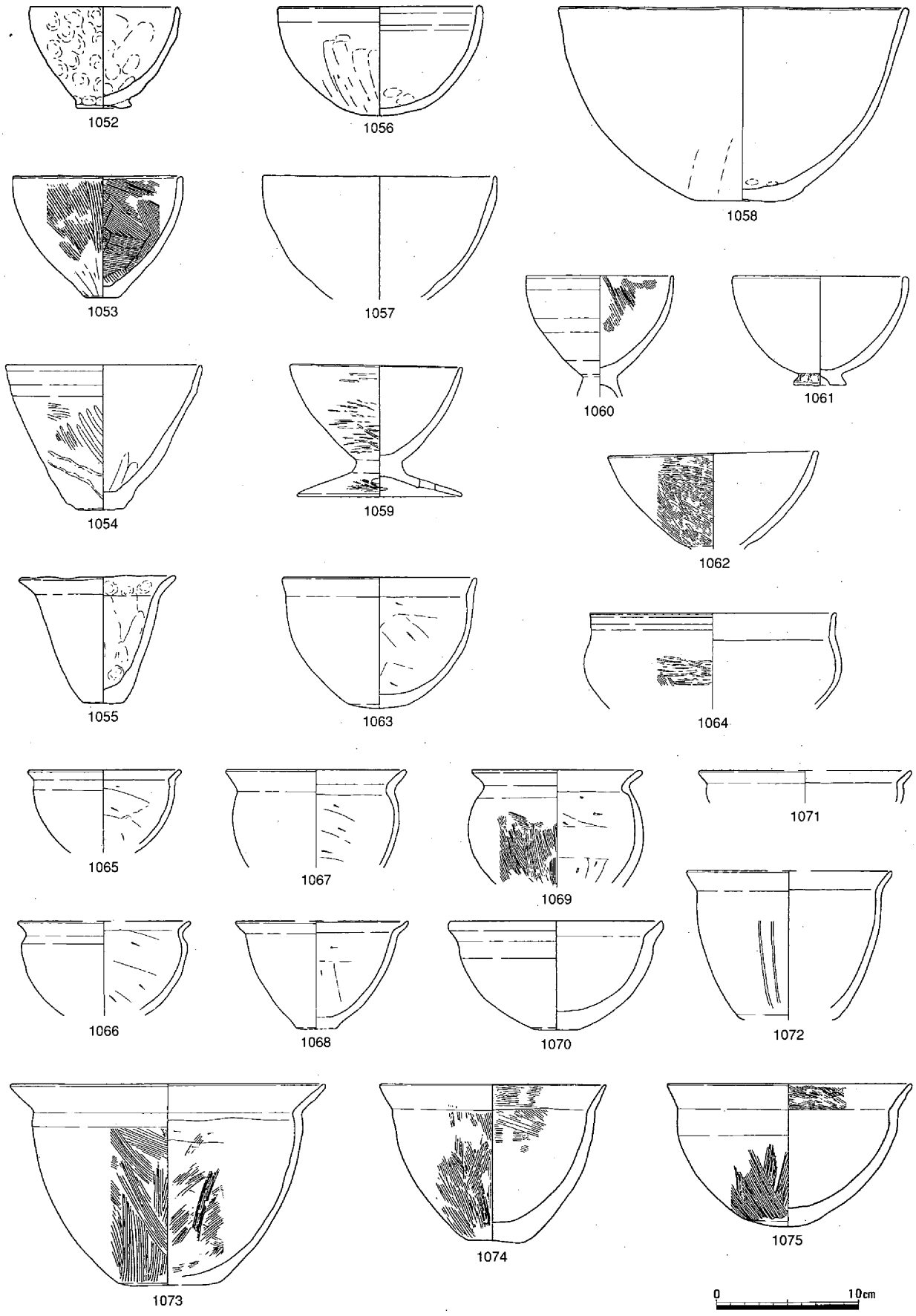
第357図　竪穴住居27　遺物（12）

894・993は短い二重口縁をもつ壺である。甕との共通点が多いが、偏球形をなす体部の外面にはヘラミガキを施している。口径12.8～13.2cm、胴径23.4cm、器高19.3cmを測る。

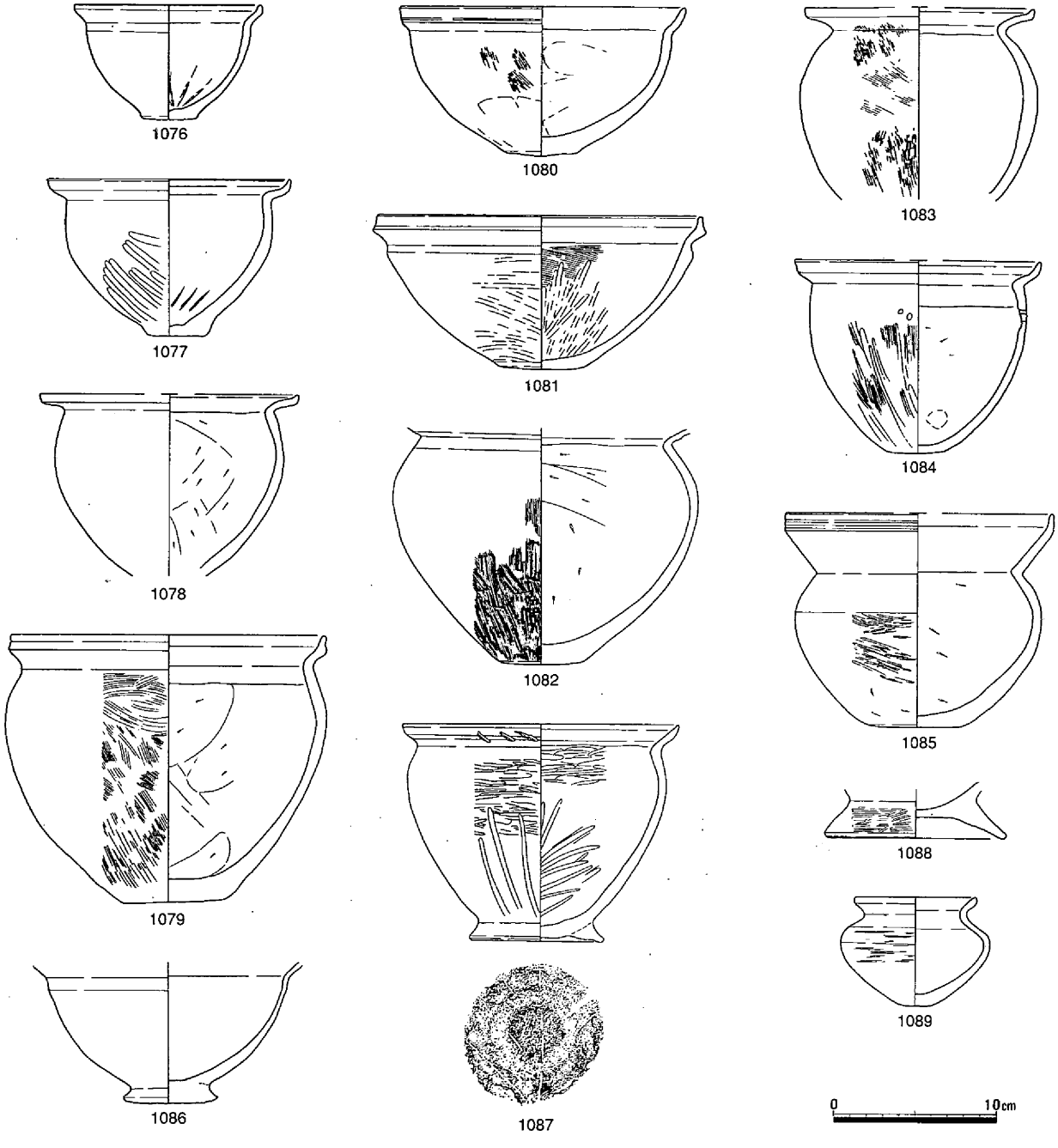
甕はく字形の口縁部をもつものと、短い二重口縁をもつものとがある。前者は口径9.0～17.8cm、器高10.8～20.8cmを測り、法量・形態ともに変異が大きい。また外面をハケメないしナデ、内面をヘラケズリで調整するものの、概して粗雑で、歪なものが多い。

これに対し後者は、口径11.2～16.9cm、器高16.2～26.2cmと前者に比してその法量は大きい。内外面は丁寧に調整しており、強くヨコナデされる口縁部には数条の沈線をめぐらすものもある。

1025～1051は深い杯部と短い脚部をもつ高杯で、口径15.2～19.2cm、器高9.0～11.9cmを測る。杯部



第358図　竪穴住居27　遺物（13）



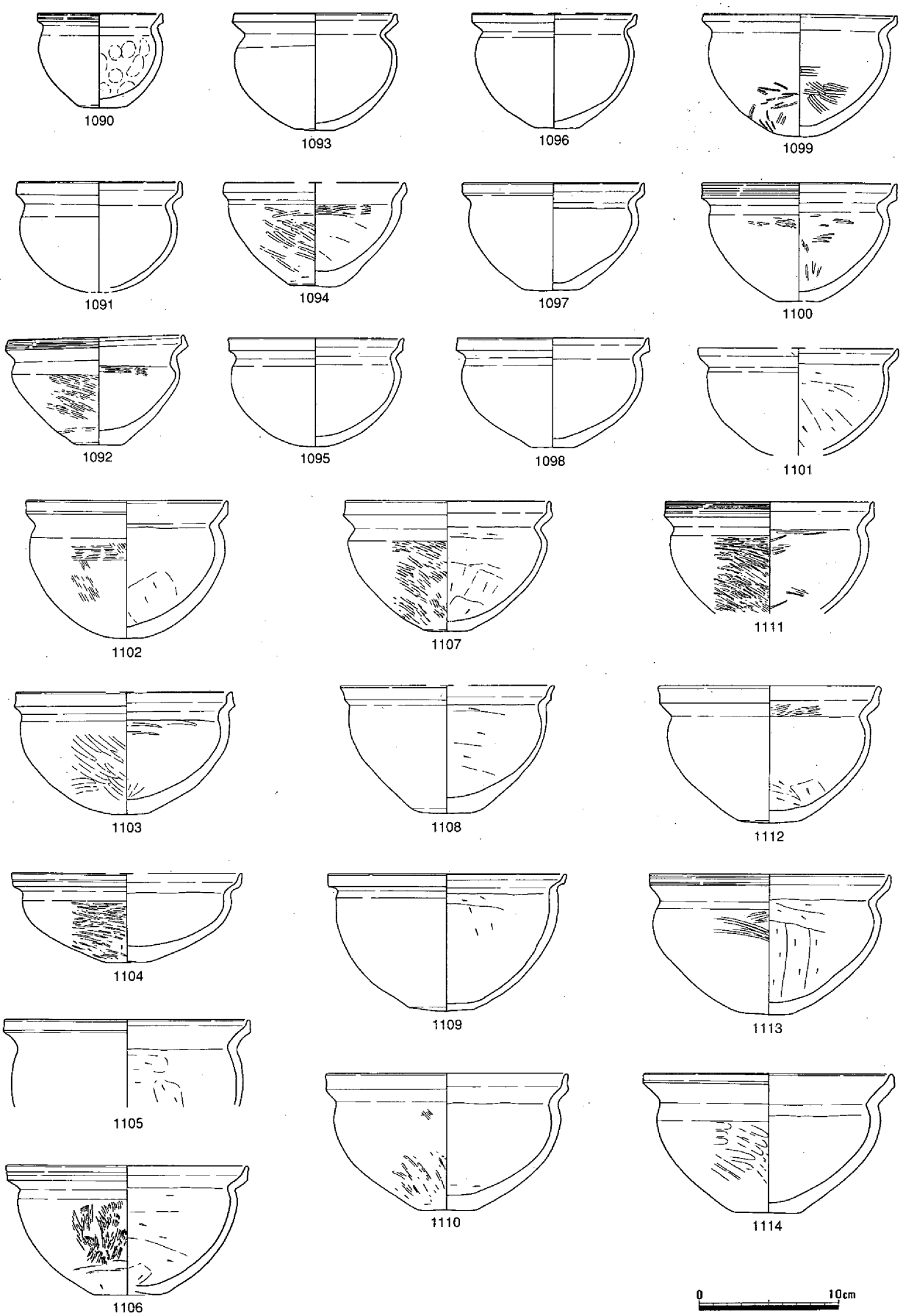
第359図　竪穴住居27　遺物（14）

は口縁部の長さによって二つに区分される。別づくりの脚部は径10.7～14.0cmあり、裾部に４つの透かし孔を穿つ。胎土は精良で、内外面に緻密なヘラミガキを施している。

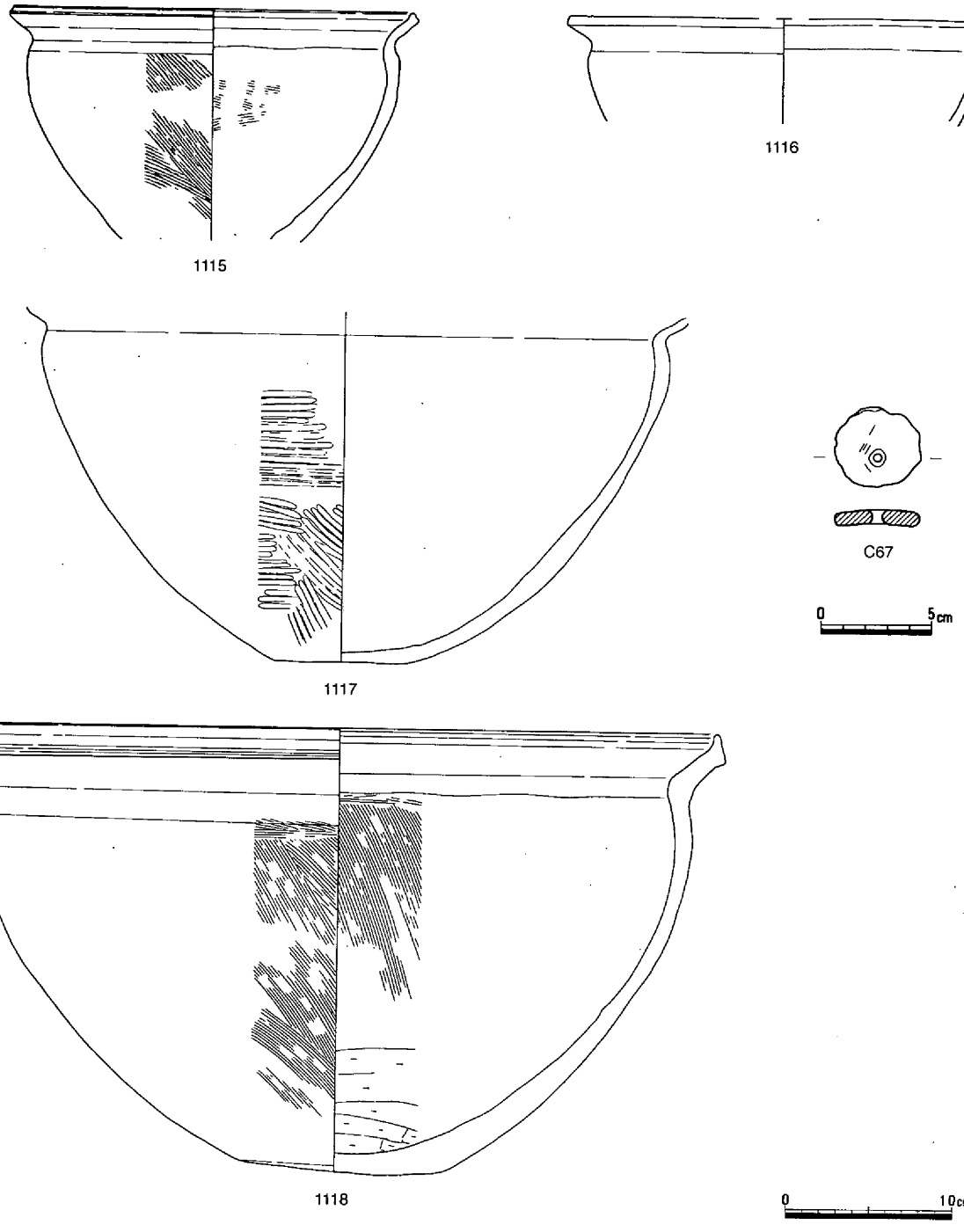
全体の３割を占める鉢は、口径10～15cmの小型、20～25cmの中型、40～45cmの大型に分けられる。その割合は小型が83%、中型11%、大型４％と小型が多数を占める。

1052～1062は椀形をなす鉢で、低い台をもつものもある。内外面をナデやハケメで調整するものの、粗雑なつくりのものが多い。小型・中型で構成される。

1063～1075・1115・1116は口縁部が外反する鉢で、小型と中型がある。外面をハケメ、内面をヘラケズリ後ナデで調整する。



第360図　竪穴住居27　遺物（15）



第361図　竪穴住居27　遺物（16）

1090～1114・1118は短い二重口縁をもつ鉢で、土師器の有段小型鉢に繋がる器種である。外反する口縁の端部をわずかに上方に拡張した二重口縁には1092・1111のように沈線をめぐらすものもある。外面にはヘラミガキを施すなど丁寧に調整されている。小型が主体をなすが、1118のような大型もある。

C67は土器片を径3.8cmの円盤状に加工した紡錘車で、重量は12.2ｇあり、中央に径0.3cmの孔を穿つ。

これらの遺物は弥・後・Ⅳでも古段階に位置付けられる。　（亀山）

竪穴住居28（第362・363図、写真８－３）

第２微高地の中央、Ｍｆ24区の南西に位置し、北東部を古墳時代竪穴住居71に切られた、少なくとも２軒の重複が推定される竪穴住居である。住居検出時は径約10ｍ×7.5ｍの楕円形を呈す部分に茶灰色砂質土の堆積が認められ、特に、北西部からは垂木の一部と思われる径10㎝余りの炭化木が２ケ所検出された。しかしながら、住居壁および床面の掘り込みは不明瞭で、炭化木と竪穴との関係は判然としないまま掘り下げを終了した。検出された住居掘り方と柱穴から、東部にはＰ１～３・５の４柱穴を主柱とした一辺約７ｍの隅丸方形住居と、西部にはＰ８・９など５本の主柱からなる径約７ｍの円形住居の所在が推定された。遺物は弥生時代中期～古墳時代初頭までの遺物が出土しているが、推定した主柱からは弥生時代中期および後期遺物が出土しており、この項に記載した。なお、住居群中央南寄りから釧と思われる銅製品Ｍ３が出土している。（江見）

竪穴住居29（第364図、写真９－１）

竪穴住居28の北西約20ｍに位置する平面円形の竪穴住居で、幾度かの柱立て替えがなされたものの主柱は４本からなる。規模は径約６ｍ、床面積は26.6㎡、床面の標高は3.88ｍを測る。主柱間距離は2.26ｍ～2.92ｍを測る。中央穴は南北にやや長い隅丸方形を呈し、その中央部は深いものの周辺は約10㎝と浅い。また、中央穴南肩口およびその南西部からは被熱面が確認されている。遺物は覆土中から弥生時代中期～後期末までの土器が多くみられ、鉢1126はやや古い特徴を示すが、Ｐ５からは甕1125が出土しており、弥・後・Ⅳに埋没したものと考えられる。他に、鉄片や明緑青色を呈すガラス小玉Ｇ２などが出土している。（江見）

竪穴住居30（第365図、写真67）

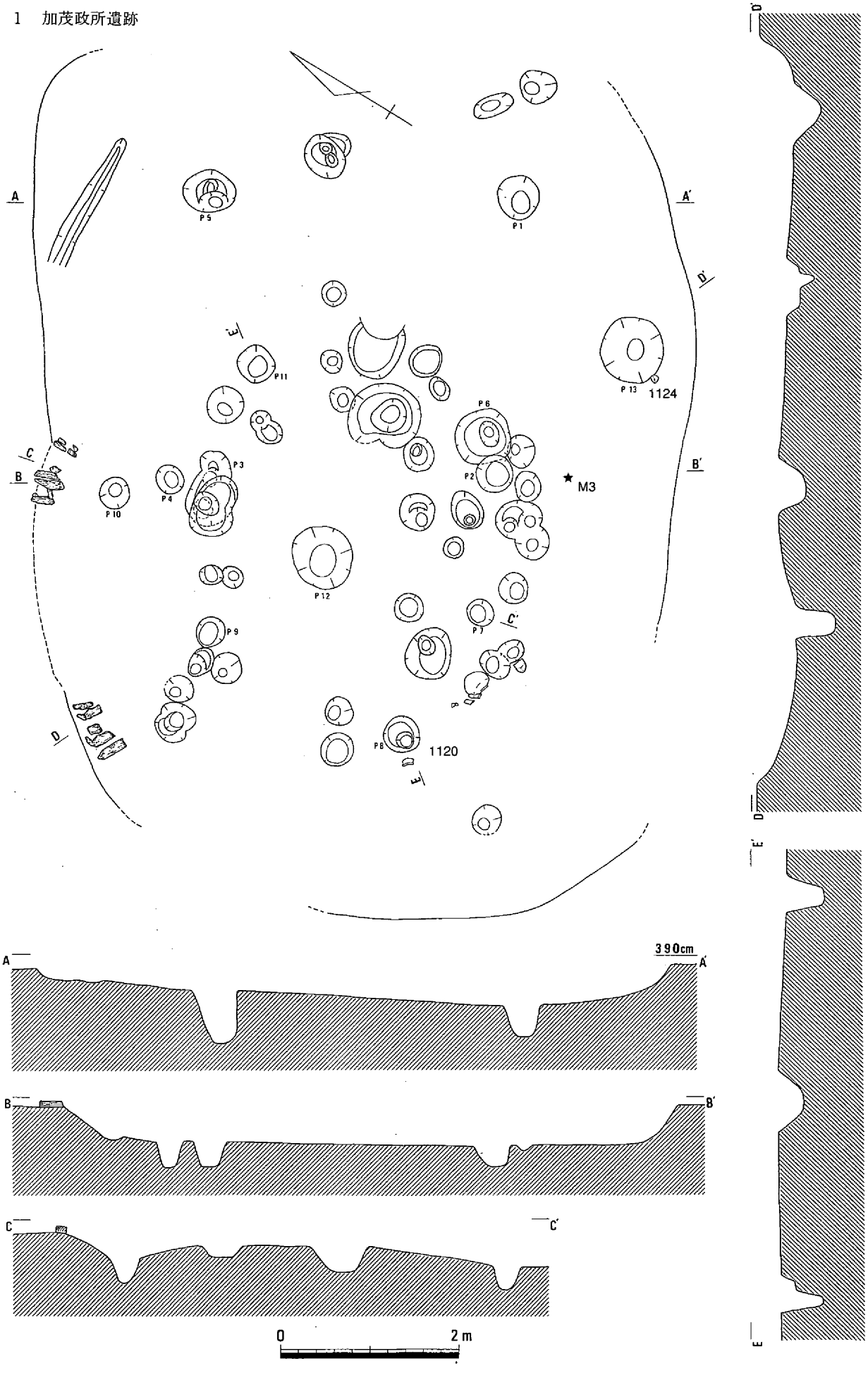
竪穴住居29の南東約12ｍ、後述する古墳時代後期の竪穴住居104および112に挟まれた位置から検出された。竪穴の平面は隅丸方形気味の円形を呈し、主柱は４本からなる。規模は径約4.5ｍ、床面積は17.1㎡、床面の標高は3.78ｍを測る。柱穴はいずれも柱部分が底部から沈み込んだ状況を示すもので、主柱間距離は1.74ｍ～2.17ｍを測る。中央穴は住居中央からやや北東部に位置し、その南部には厚さ数㎝の砂質土を土手状に巡らせ、130×70㎝余りの長方形の浅い窪みを作っていた。この窪みは再度作り直しがなされ、いずれも窪み底部には炭の堆積が認められた。なお、中央穴は故意に埋められたのか、明瞭な炭層は確認されなかった。遺物は壺1127をはじめ甕1128～1130、鉢1131～1133などが出土しているが細片が多く、これらに混じって住居北西部から土製勾玉Ｃ68が出土した。勾玉は最大長83㎜、重量80.27ｇを測る、浅黄燈色を呈す焼成の良好なものではあるが、頭部が角張りやや雑な作りである。以上、土器の特徴から弥・後・Ⅳに廃棄された住居と考えられる。（江見）

竪穴住居31（第366図）

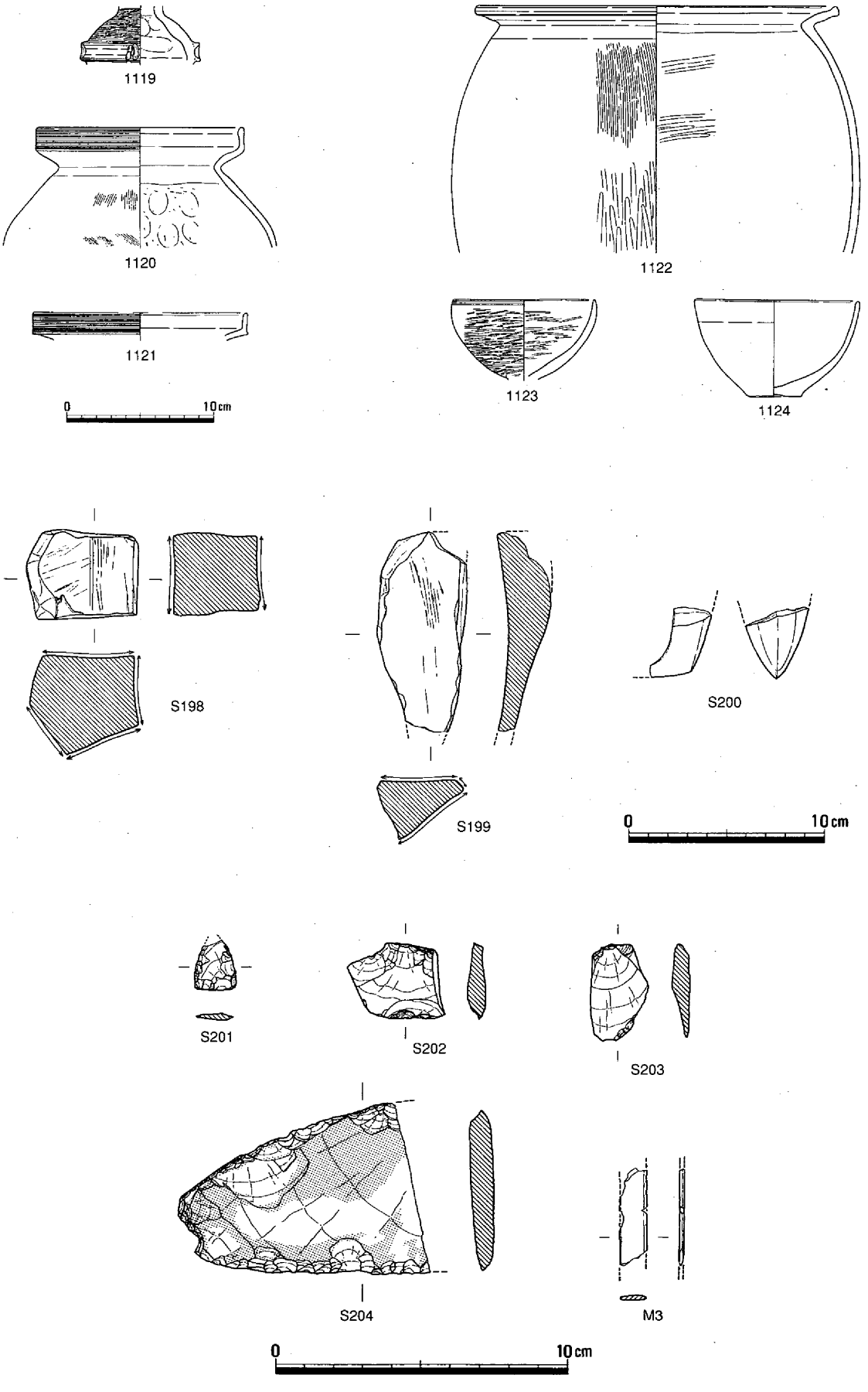
竪穴住居30の北西に位置し、大半がそれに削平を受けた平面不整円形の住居である。検出し得た住居掘り方は北西部のみで壁体溝は確認されなかった。床面の標高は3.66ｍを測る。主柱は何度か立て直しがなされたようであるがＰ３～５・８の４個からなると推定され、これら主柱間距離が２～2.5ｍを測ることや住居掘り方から、径５ｍ前後の規模をもつ住居と思われる。遺物は住居北端隅から床面に接して石包丁Ｓ22が出土した。他には僅かに土器細片が出土しているのみであるがその特徴から当住居は弥・後・Ⅳに埋没したのものと考えられる。（江見）

竪穴住居32（第367・368図、写真67）

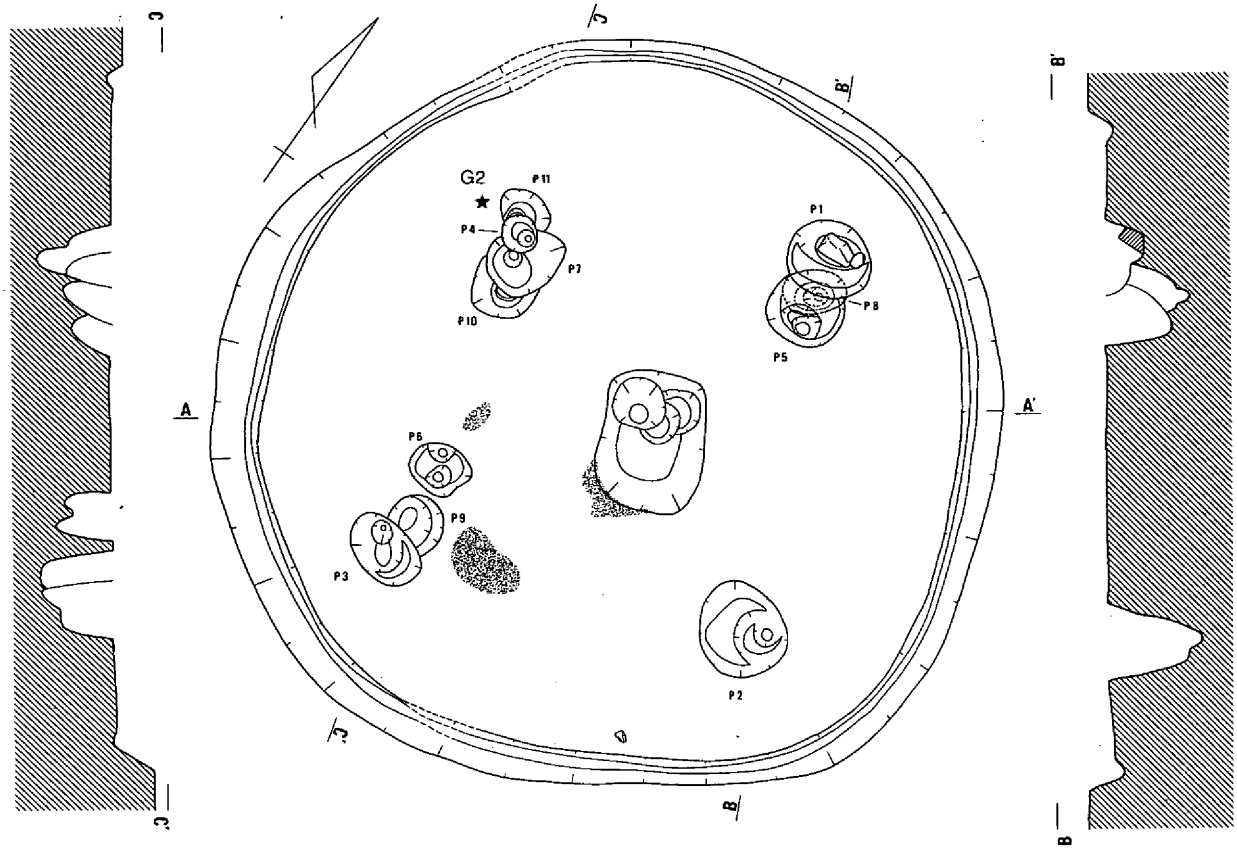
第２微高地のM24区の南端部に位置する。平面形が通常の竪穴住居に比べて長楕円形を呈している

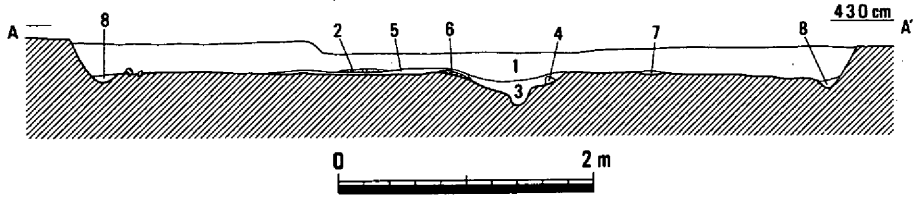


第362図　竪穴住居28（1/60）

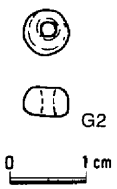


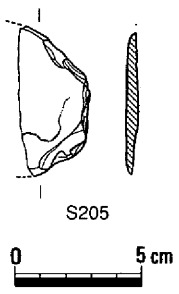
第363図　竪穴住居28　遺物

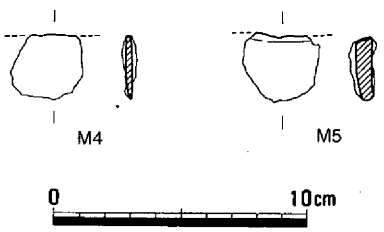


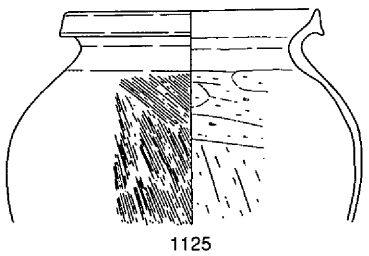


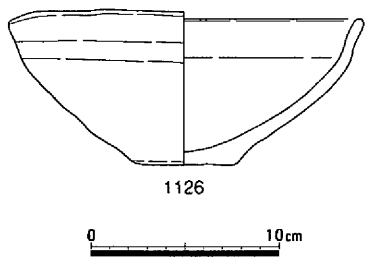
1　茶灰色砂質土
2　炭
3　茶灰色砂質土
（黄色粘土ブロックを多く含む）
4　黄色粘土ブロック
5　淡茶褐色粘質土（貼床）
6　炭
7　淡灰茶色砂質土
8　淡茶灰色粘質砂



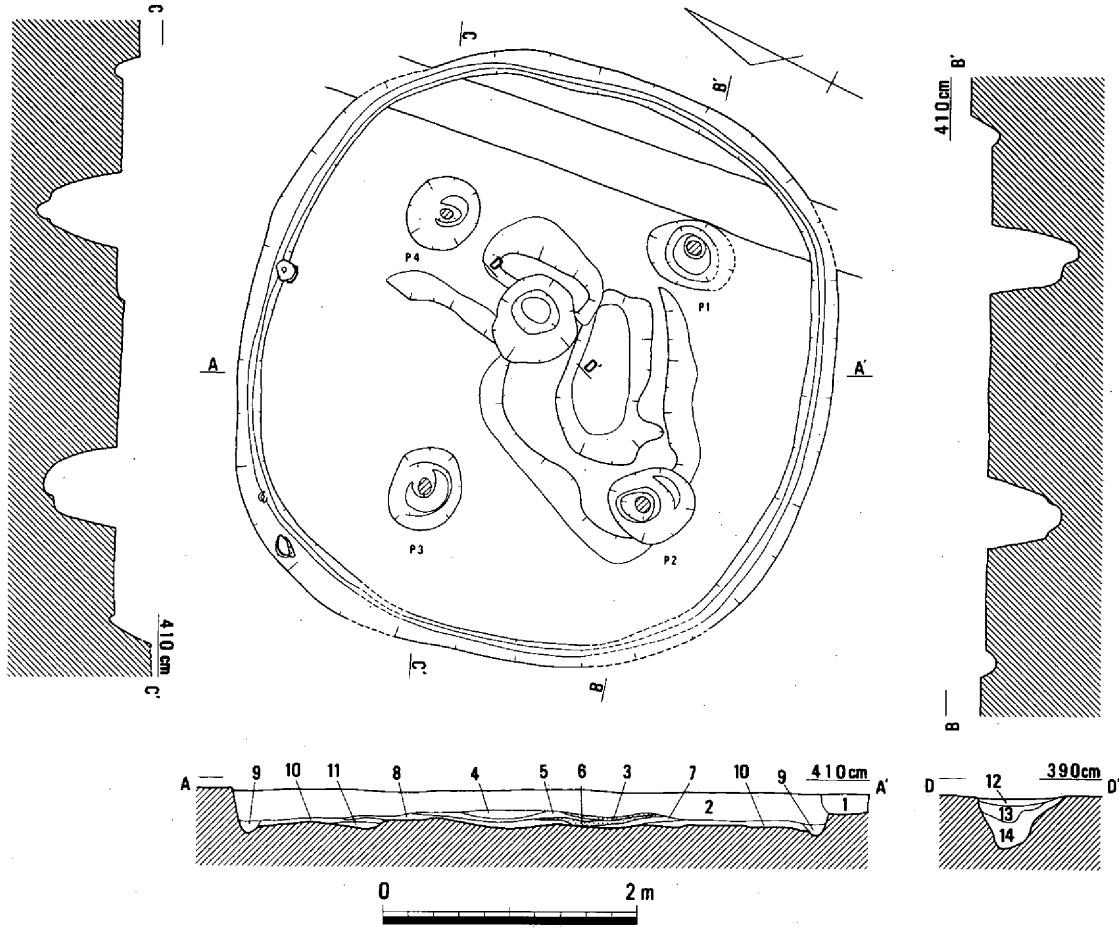




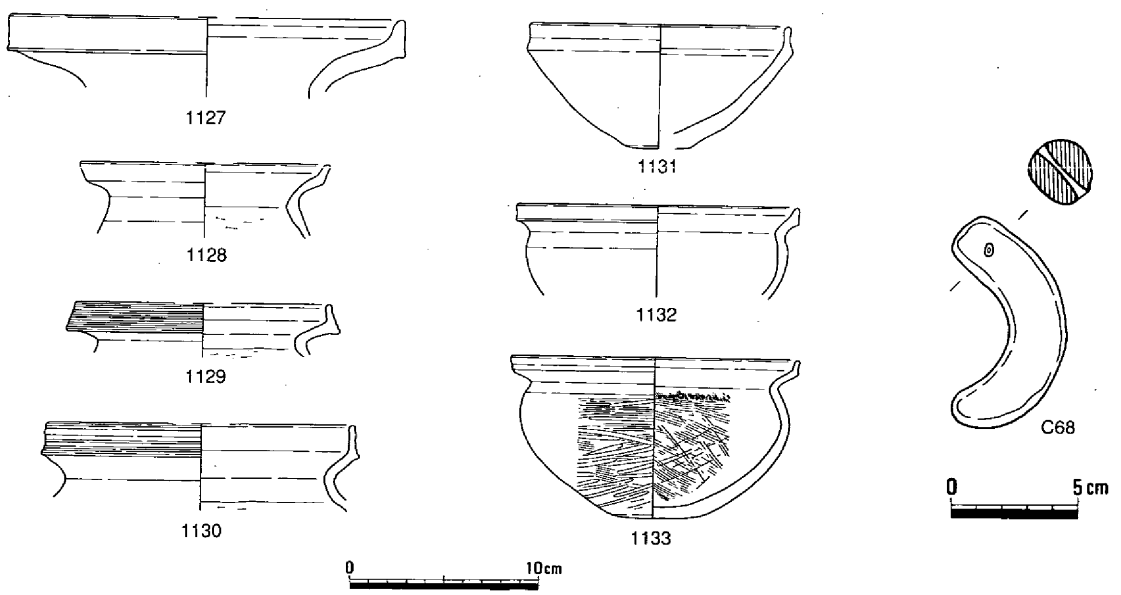




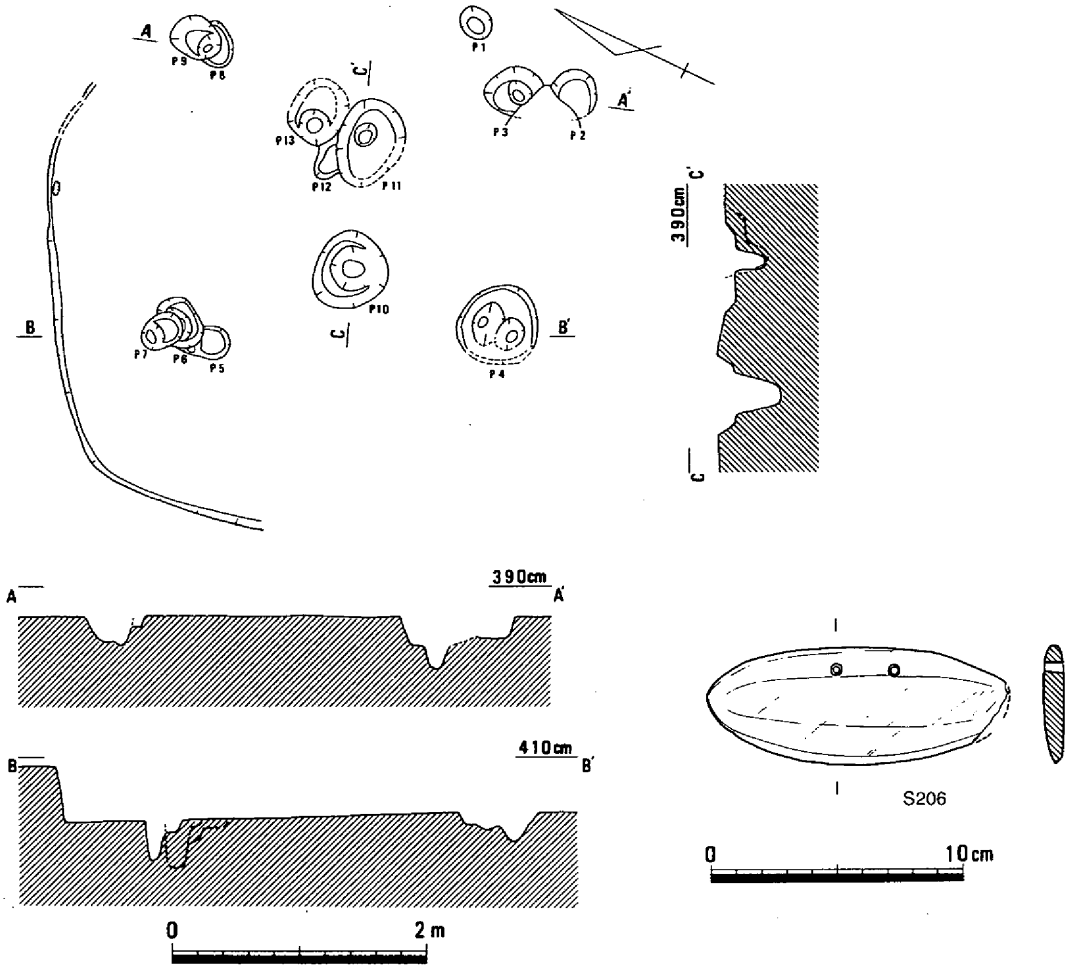
第364図　竪穴住居29（1/60）・遺物



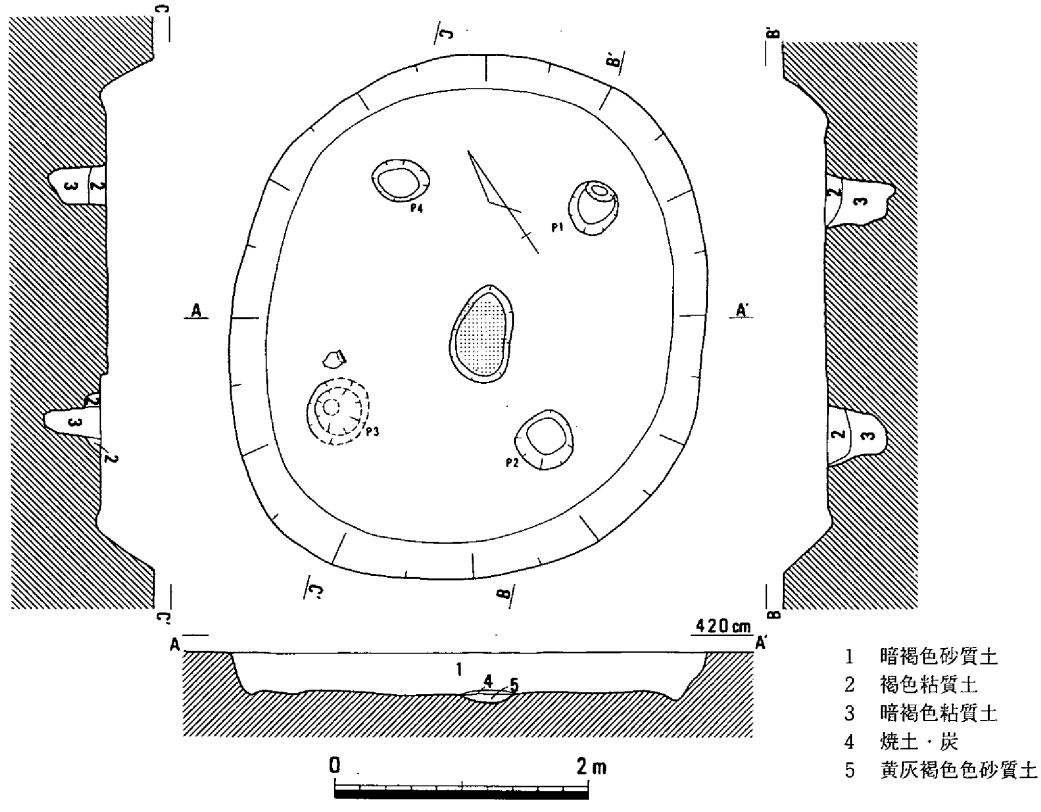
1　茶灰褐色粘質砂
2　茶灰褐色粘質砂（黄色粘土ブロックを含む）
3　炭
4　暗茶灰褐色砂質土
5　暗茶灰褐色粘質砂
6　炭
7　黄茶灰色粘質土（貼床）
8　黄茶色粘質土（貼床）
9　暗茶灰色粘質砂
10　茶灰色粘質土
11　淡茶灰色粘質砂
12　暗茶灰褐色砂質土
13　暗茶灰色粘質砂（黄色粘土ブロックを含む）
14　茶褐色粘質砂（黄色粘土ブロックを多く含む）



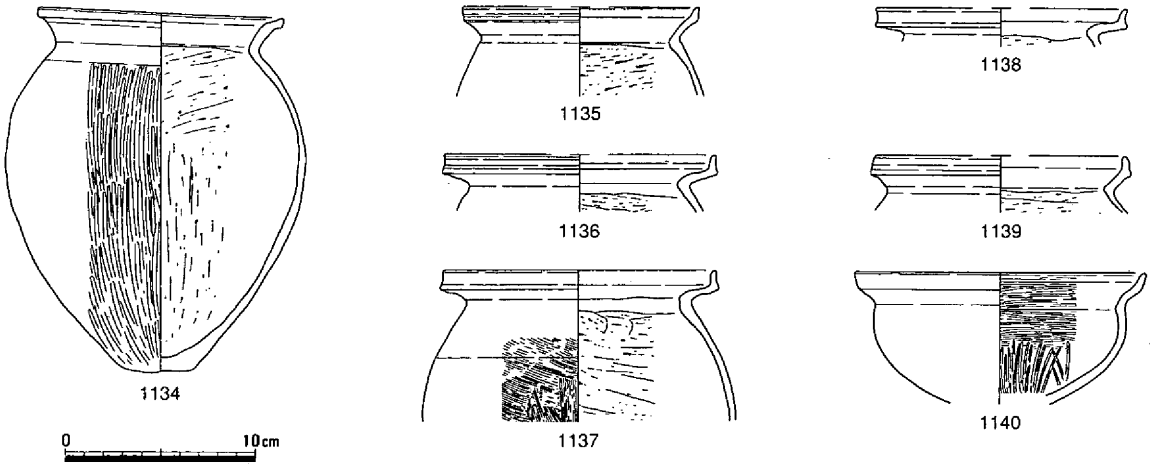
第365図　竪穴住居30（1/60）・遺物



第366図　竪穴住居31（1/60）・遺物



第367図　竪穴住居32（1/60）

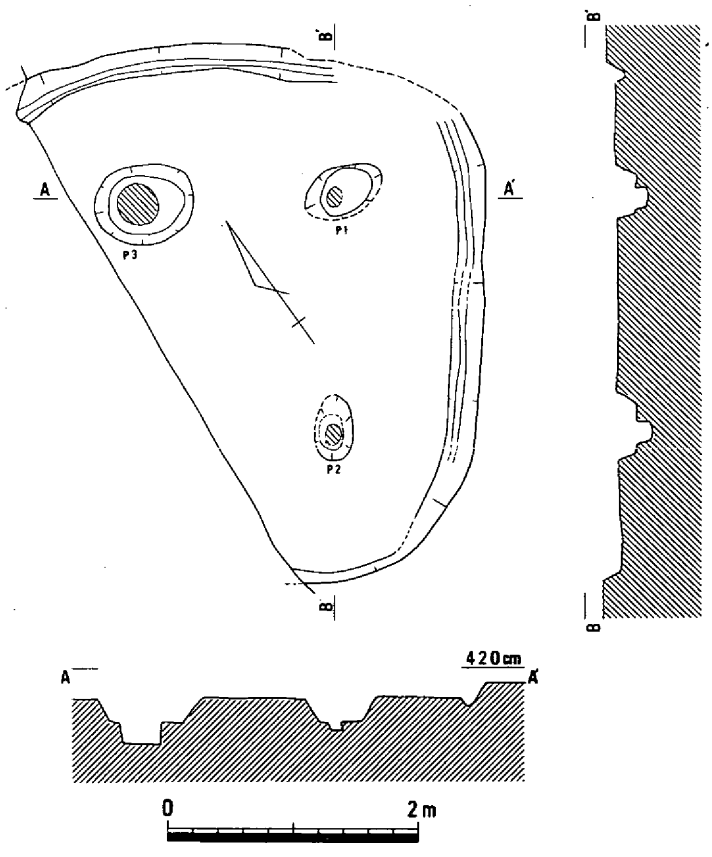


第368図　竪穴住居32　遺物

点に特色がある。規模は約4.3×3.8ｍで、深さは、検出面から床面まで32cm残存していた。断面形をみると、壁がゆるやかに外に向かって立ち上がっているのが特徴的であるが、これが、本来の姿を示しているのかどうかは明確でない。

柱穴は４本確認できた。柱穴の掘り方は、直径35～50cm前後の円形～楕円形で、深さは45～55cmであった。Ｐ３では、柱と思われる痕跡が確認でき、それによると、柱は直径約20cmの円形であったと推測できる。中央に位置する土壙は、約80×45cmの不整楕円形で、深さは約10cmであった。断面形は皿形で、上面には焼土や炭が存在していた。遺物は、少量の土器が出土している。1134は西側の床面から出土した甕である。1135～1140は、埋土中から出土した甕と鉢である。

土器の時期は弥・後・Ⅳ期ではなかろうか。　（平井）



第369図　竪穴住居33（1/60）

竪穴住居33（第369図）

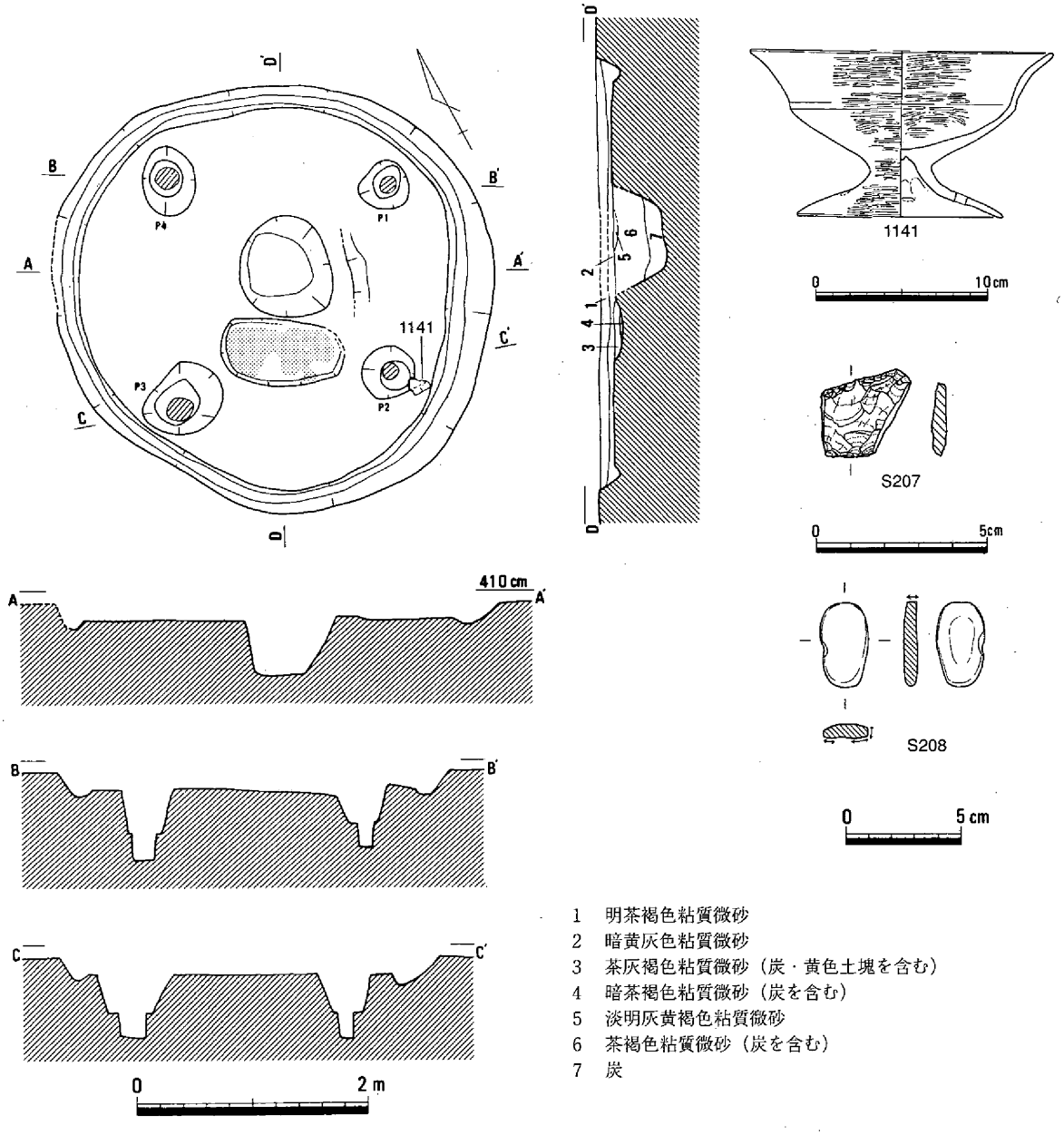
第２微高地の中央やや北寄りに位置する住居で、西側部分は中世の溝102に切られて消失している。検出面からの深さは浅く、残存状況は良くない。平面形は隅丸方形で、幅20～25cm程度の壁体溝がめぐる。主柱穴は４本柱と思われ、その内３本が残存している。柱穴の掘り方は楕円形で、長径50～80cmを測る。また、いずれも径13～33cmの柱痕跡が確認されている。

図示した遺物はないが、弥・中・Ⅱ～弥・後・Ⅳの土器小片が出土しており、それらから遺構の時期は、弥・後・Ⅳと思われる。（柴田）

竪穴住居34（第370図）

第２微高地の中央やや北寄りに位置する住居で、竪穴住居33の東に隣接する。検出面からの深さは浅く、残存状況は良くない。平面形は円形で、幅20cm程度の壁体溝がめぐる。主柱穴は４本柱と思われ、壁体近くに位置する。柱穴の掘り方は楕円形で、長径45～73cmを測り、いずれも径14～30cmの柱痕跡が確認されている。また、不整円形の中央穴と楕円形の比較的浅い土壙があり、中央穴下層と土壙内には炭が堆積している。

Ｐ２近くの床面からは高杯1141、中央穴からは楔形石器Ｓ207、埋土下層からは砥石Ｓ208が出土している。出土遺物から、遺構の時期は、弥・後・Ⅳと思われる。（柴田）

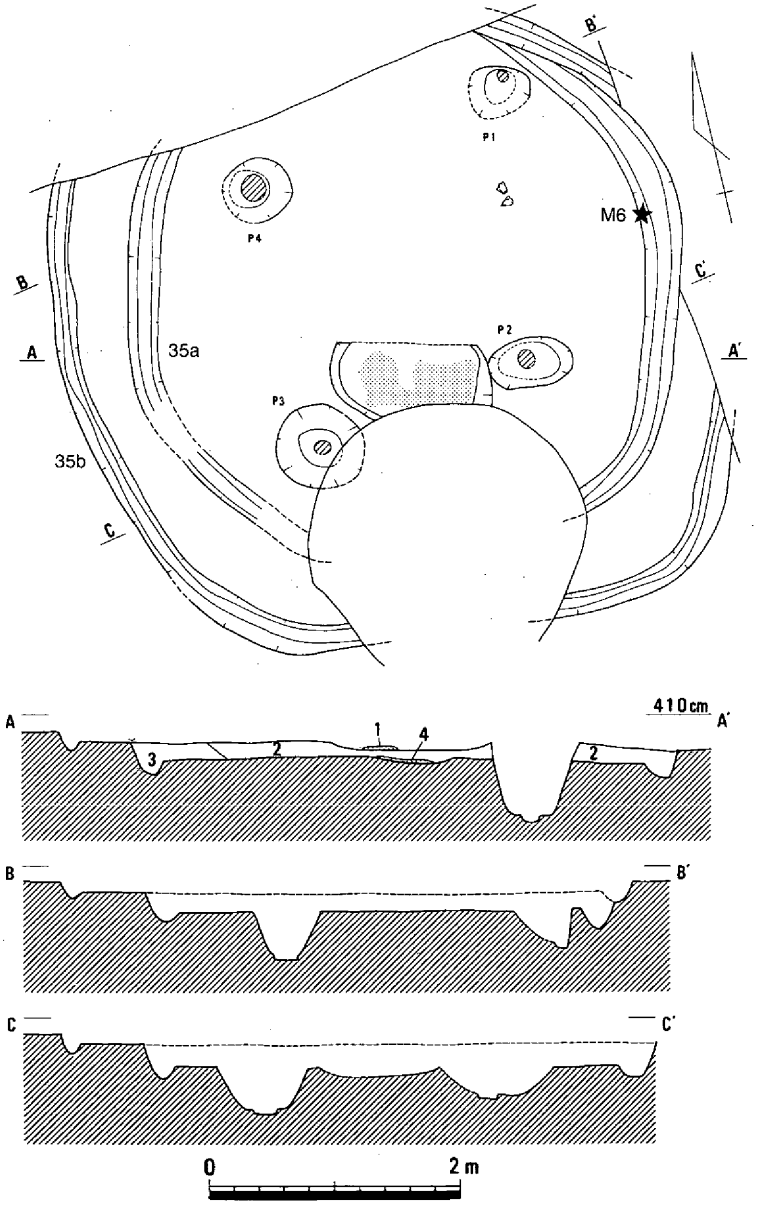


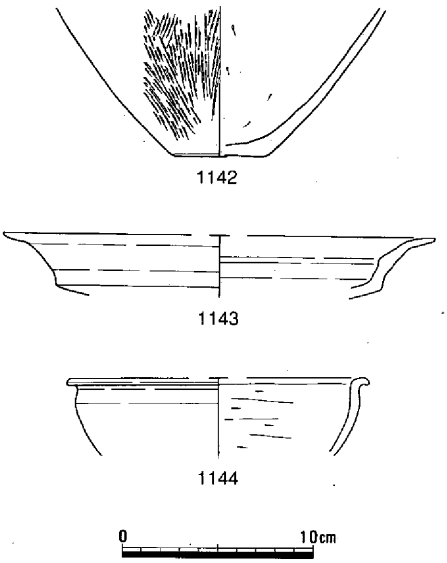
第370図　竪穴住居34（1/60）・遺物

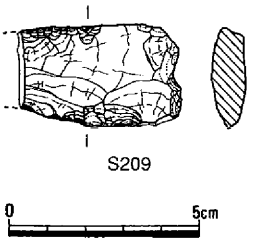
竪穴住居35（第371～373図、写真９－２・３、67）

第２微高地の中央やや北寄りに位置する住居で、竪穴住居34の北に隣接する。北側は調査区外である。住居の拡張が行われており、古いほうを35ａ、新しいほうを35ｂとする。35ｂと35ａの床面の間には間層があり、拡張に伴って造成を行ったかあるいは時間差があったと思われる。平面形はどちらも円形で、やや６角形を呈する。主柱穴は平面楕円形の４本柱で、拡張に伴う柱位置の移動は認められない。いずれも径８～20cmの柱痕跡が確認されている。また、Ｐ２とＰ３の間に楕円形の浅い土壙があり、中には炭が堆積している。

35ａからは甕1142、高杯1143、鉢1144、打製石包丁Ｓ209が出土している。35ｂからは甕1145～1157、高杯1158～1161、鉢1162～1165、台付鉢1166～1171、打製石包丁Ｓ210、銅鏃Ｍ６、土製紡錘車Ｃ69が出土している。Ｍ６は東端の床面、土製紡錘車Ｃ69はＰ３の出土である。

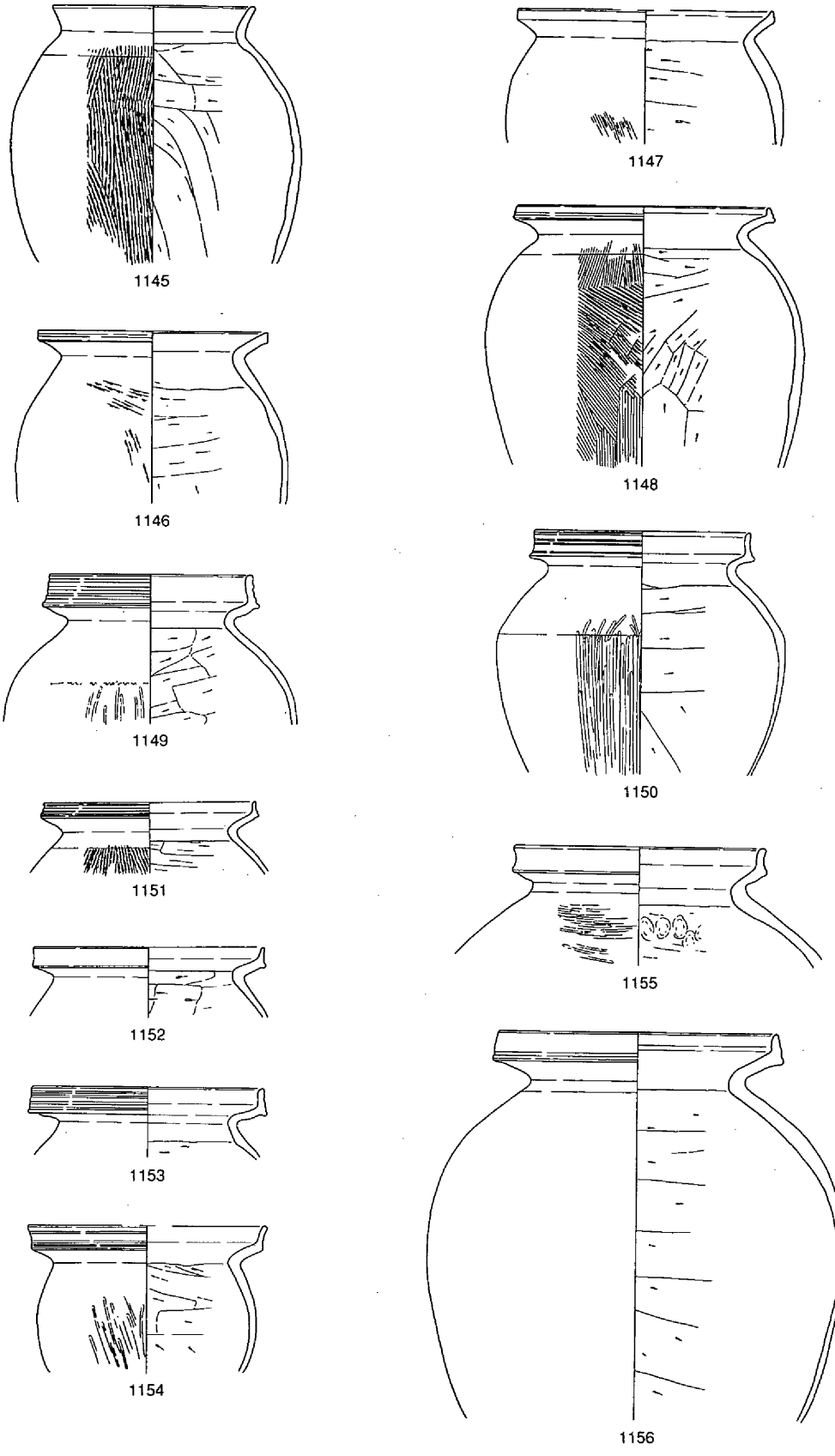




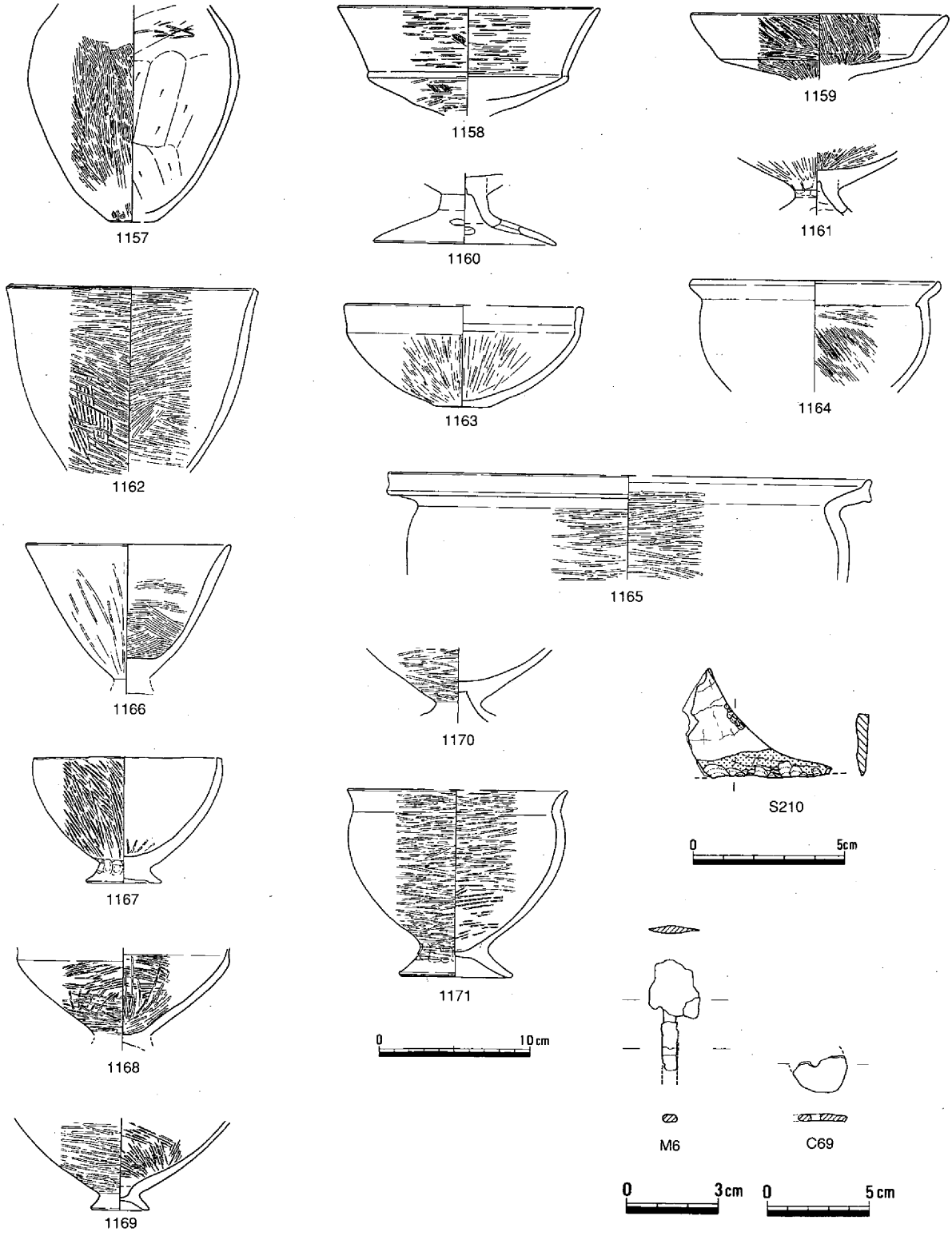


1　暗褐色粘質土
2　明黄褐色粘質土
3　暗灰黄色粘質土
4　暗褐色粘質土

第371図　竪穴住居35（1/60）・遺物（１）



第372図　竪穴住居35　遺物（２）



第373図　竪穴住居35　遺物（３）

1145は口縁部が短く屈曲し、端部は丸くおさまる。1146～1148は口縁端部を上方に摘み出している。1149～1156は口縁端部が上方に拡張するもので、凹線が施されるものもある。高杯は短脚である。出土遺物や出土状況から遺構の時期を考えると、35ａは弥・後・Ⅲ頃までは機能し、35ｂは弥・後・Ⅳの間で廃絶したと思われる。　（柴田）

竪穴住居36（第374～376図、写真10－１・２、68）

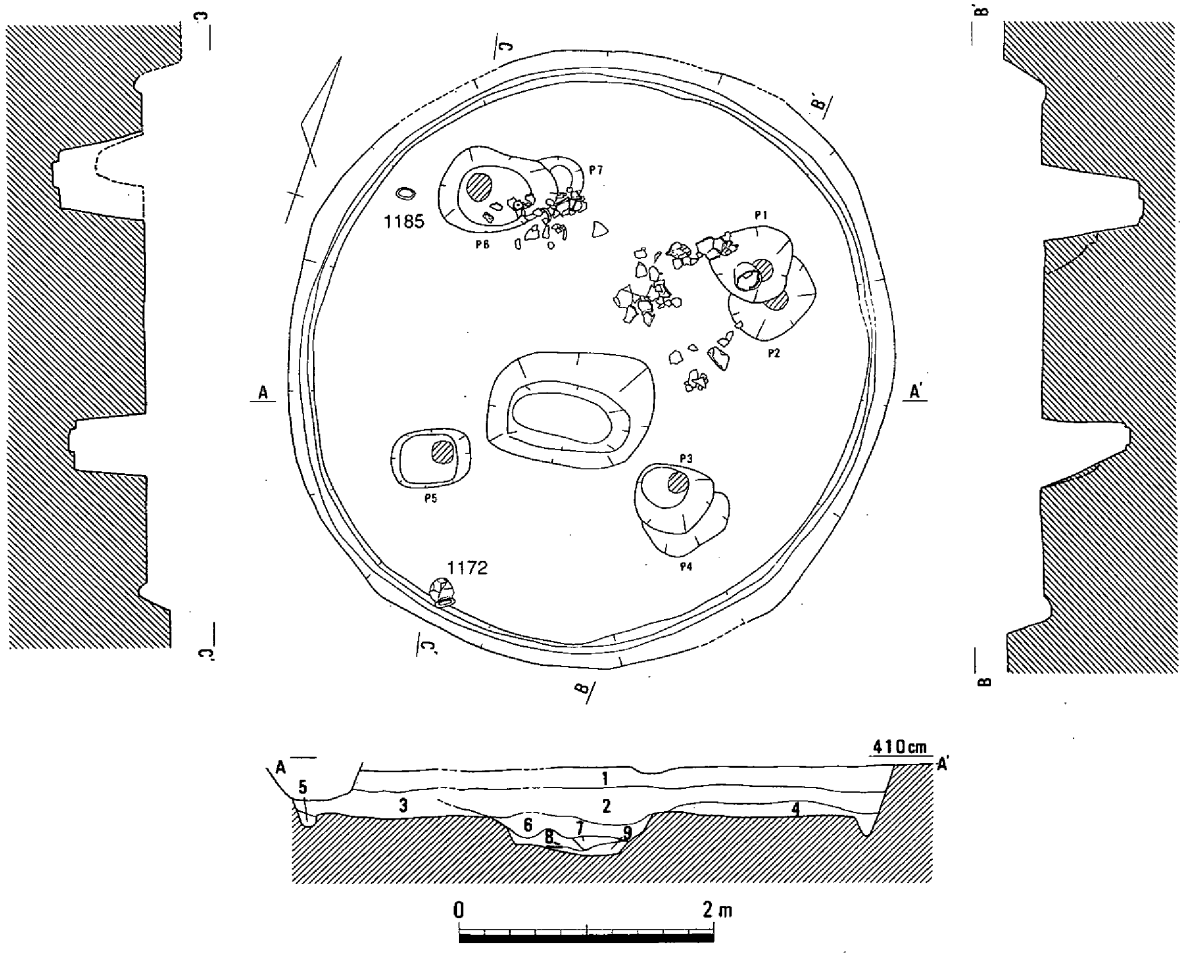
第２微高地の中央やや東寄りに位置する住居である。平面形は円形で、主柱穴は４本柱である。壁体溝は１つだけであるが、Ｐ２・４・７では若干位置が変わっていることが確認される。柱穴の掘り方は主に楕円形で、長径60～90cmを測る。また、径16～20cmの柱痕跡が確認されている。床面中央やや南寄りに、125×89cmの楕円形の中央穴がある。掘り方上面の周囲は床面より盛り上がる。

床面周縁には甕1172、鉢1185、土製勾玉Ｃ70が、Ｐ１付近では甕1175・1177が出土している。Ｐ３では鉢1186・台付鉢1190、Ｐ５では台付鉢1189が出土している。打製石包丁Ｓ211・212、スクレイパーＳ213、楔形石器Ｓ214～216、砥石Ｓ217、分銅形土製品Ｃ71は混入したものもあると思われる。

甕には、口縁端部を上方に摘み出すものと拡張するものなどがある。内面調整はヘラケズリのみだが、外面はハケメやヘラミガキである。1185は内面のヘラケズリを行っている部分に、ベンガラが付着している。出土遺物から、遺構の時期は、弥・後・Ⅳと思われる。（柴田）

竪穴住居37（第377図）

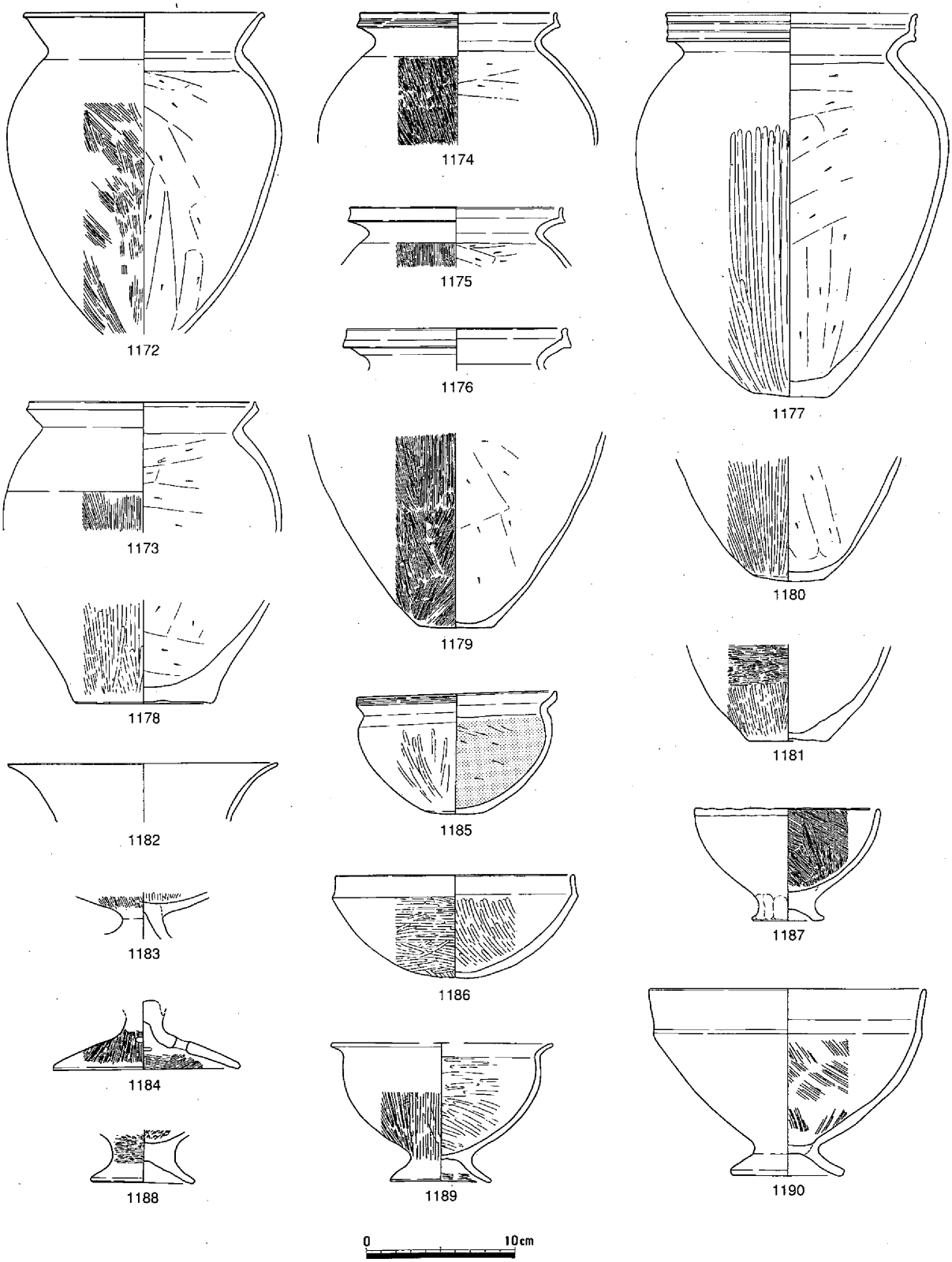
第２微高地の中央やや北寄りに位置する住居で、竪穴住居38で掘り方西隅を切られている。検出面



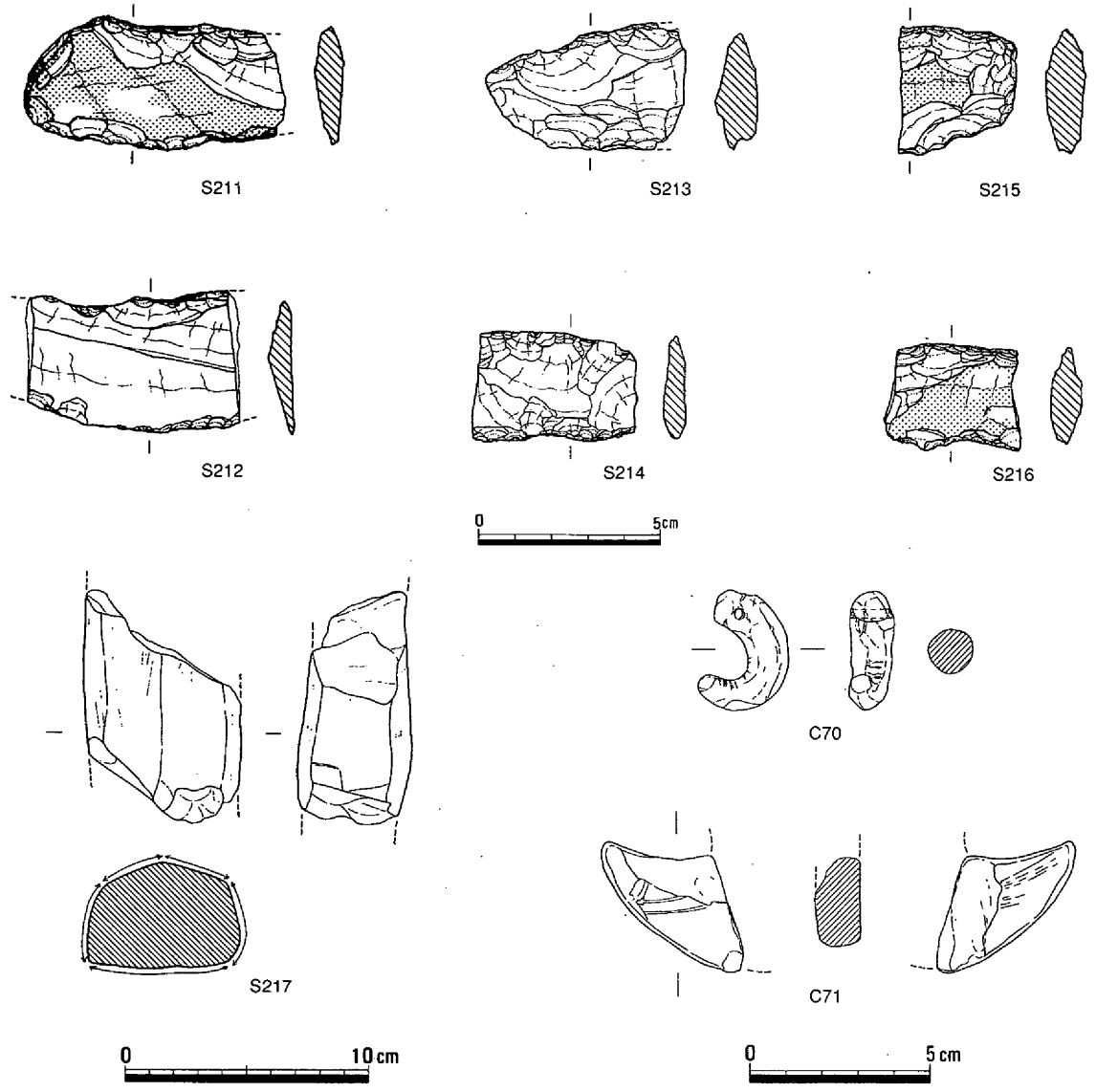
1　茶褐色粘質微砂
2　黒褐色微砂
3　暗茶褐色粘質微砂
4　黒褐色微砂（黄色ブロックを含む）
5　茶褐色微砂
6　暗茶褐色微砂（炭・土器を含む）
7　灰褐色粘質微砂
8　灰黄色粘質微砂
9　黄灰色粘質微砂

第374図　竪穴住居36（1/60）

からの深さは浅く、残存状況は良くない。平面形は隅丸方形で、４本の主柱穴が確認されている。柱穴の掘り方は径38cm程度の円形で、いずれも径15cm程度の柱痕跡が確認されている。また、床面南西寄りには隅丸長方形の中央穴があり、径18cmの円形の柱痕跡が認められる。



第375図　竪穴住居36　遺物（１）



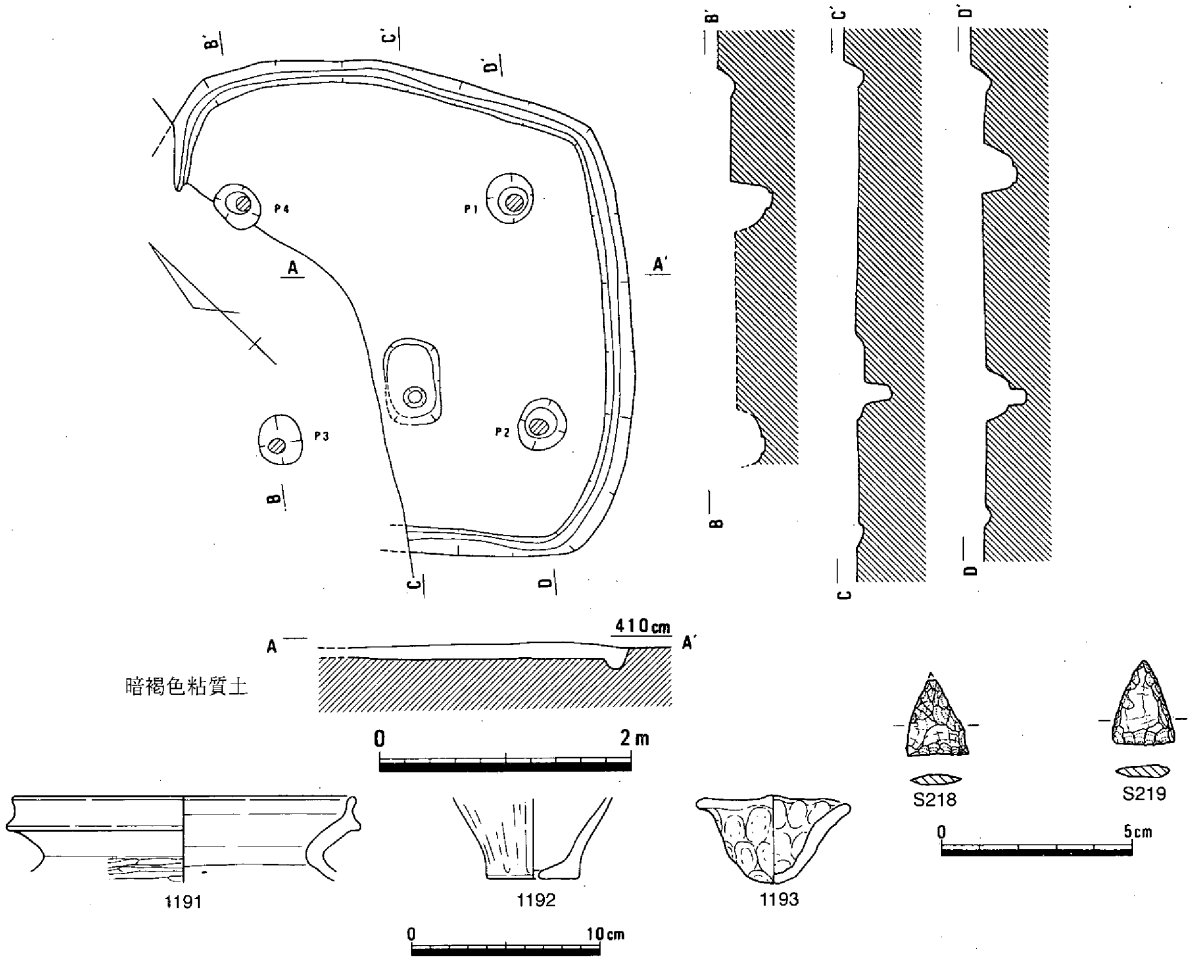
第376図　竪穴住居36　遺物（２）

床面からは、甕1191、手づくね土器1193、埋土中から甕1192、石鏃Ｓ218・219が出土している。出土遺物から、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。（柴田）

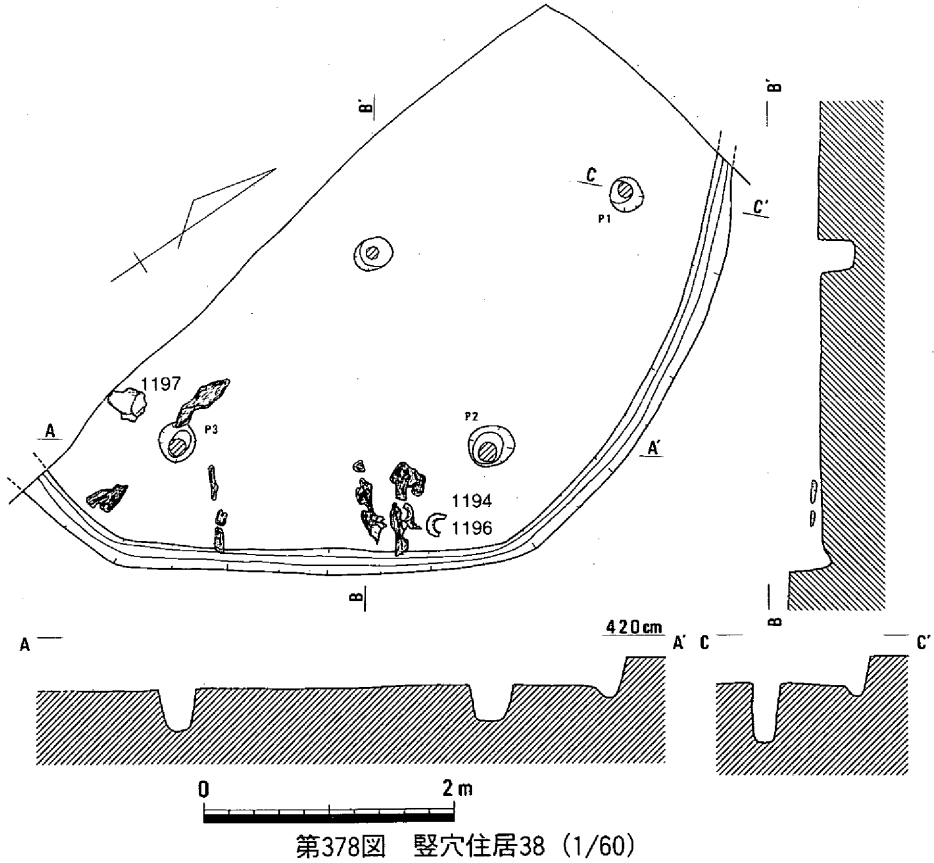
竪穴住居38（第378・379図、写真68）

第２微高地の中央やや北寄りに位置する焼失住居である。西半分は弥・後・Ⅲ～Ⅳの竪穴住居35に切られている可能性が高く、弥・後・Ⅰの竪穴住居37を切っている。北側は調査区外である。平面形は円形と思われ、主柱穴の一部が確認されている。柱穴の掘り方は径28～36cmの円形で、いずれも柱痕跡が確認されている。残存状況は悪いが、掘り方の南東部分で炭化材が検出されている。床面には接していない状況が確認されている。

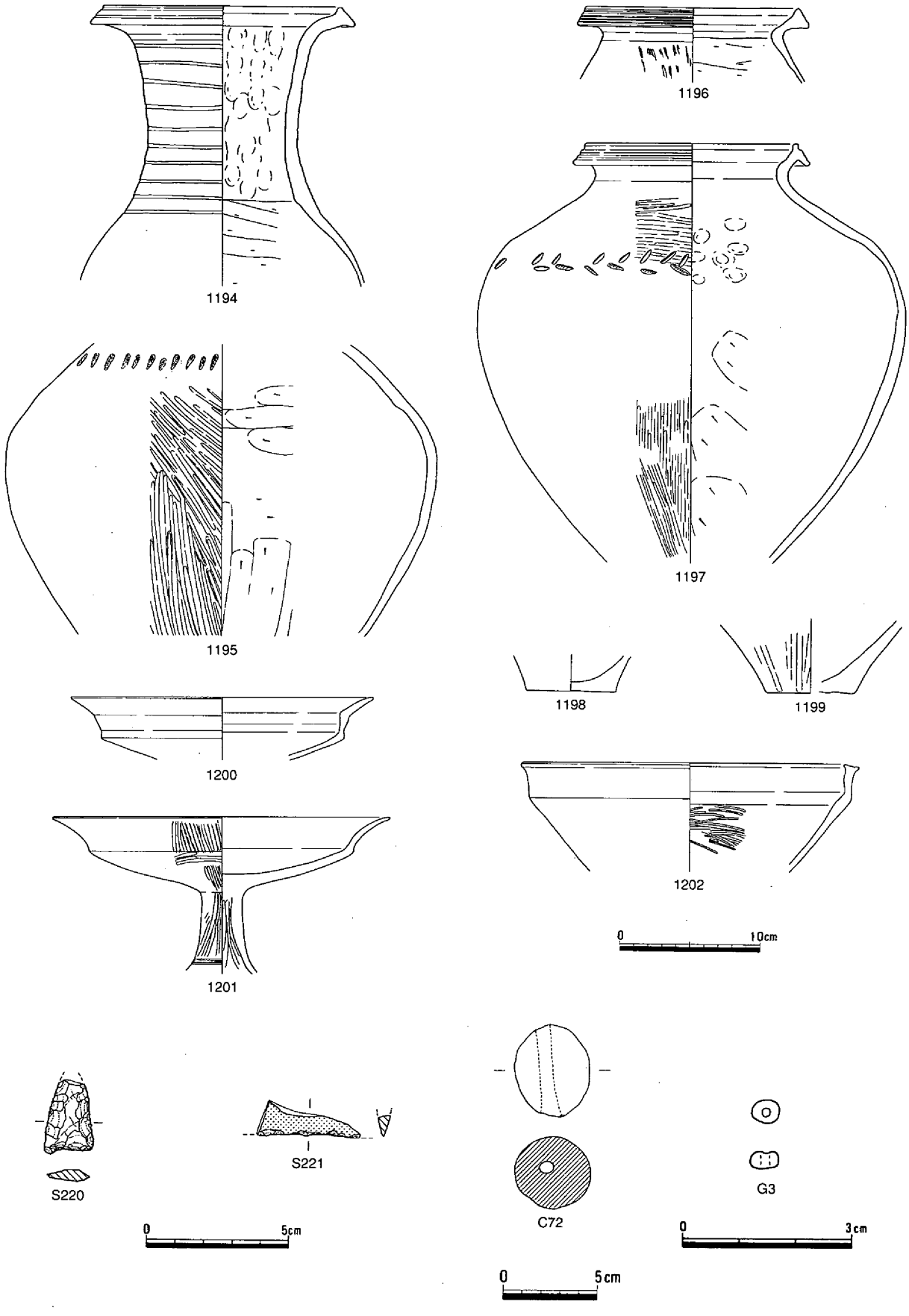
床面には、壺1194、甕1196・1197が検出された。Ｐ１からはガラス玉Ｇ３、埋土中からは、土器の他に石鏃Ｓ220、打製石包丁Ｓ221、土錘Ｃ72が出土している。土器では、弥・後・Ⅰの特徴を有するものからⅡ・Ⅲまでのものがあるが、遺構の切り合いなどを考慮すると、遺構の時期は、弥・後・Ⅱと思われる。（柴田）



第377図　竪穴住居37（1/60）・遺物



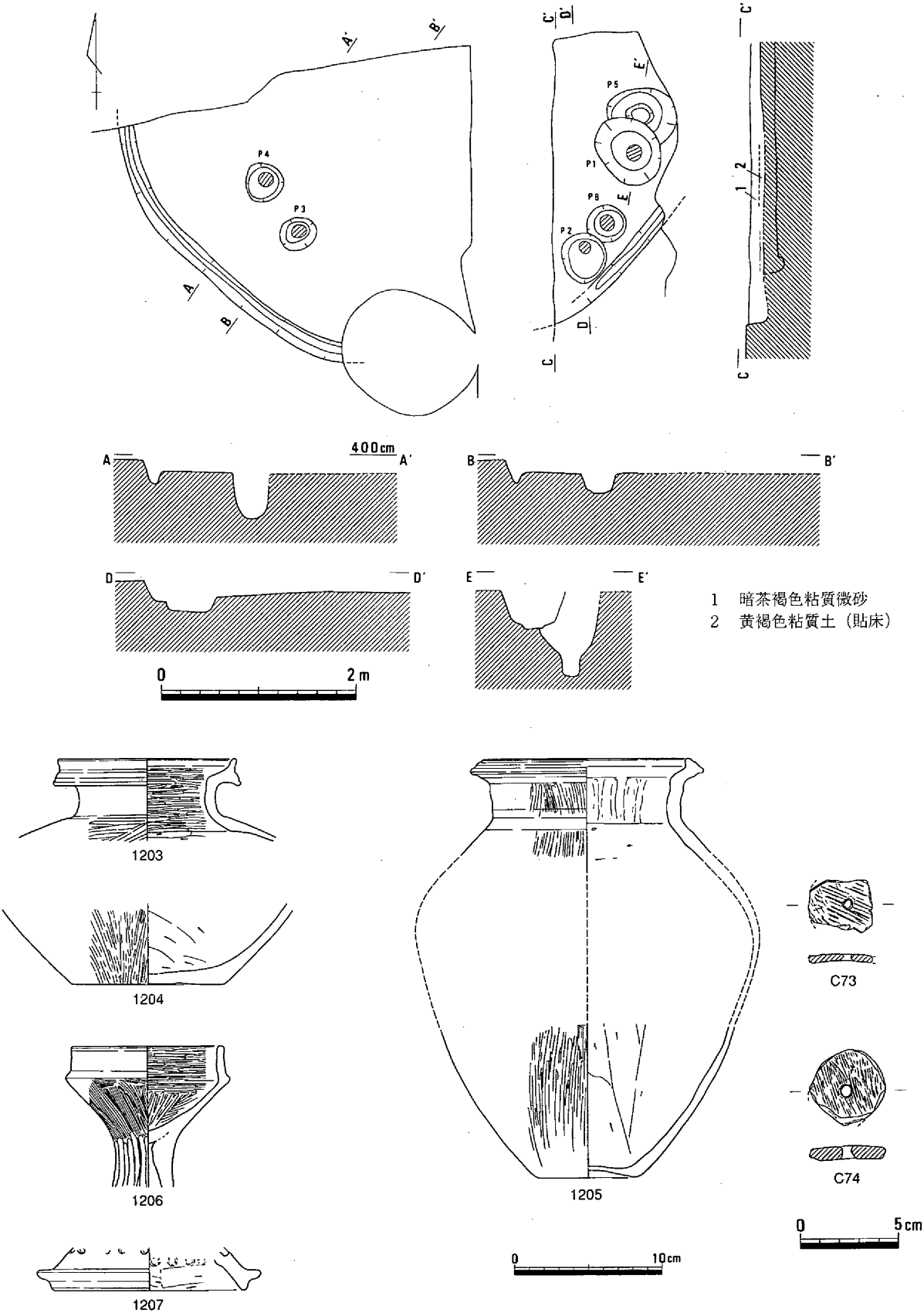
第378図　竪穴住居38（1/60）



第379図　竪穴住居38　遺物

竪穴住居39（第380図）

第２微高地の北東寄りに位置する住居で、北半分は調査区外になる。南壁を弥・後・Ⅰの袋状土壙



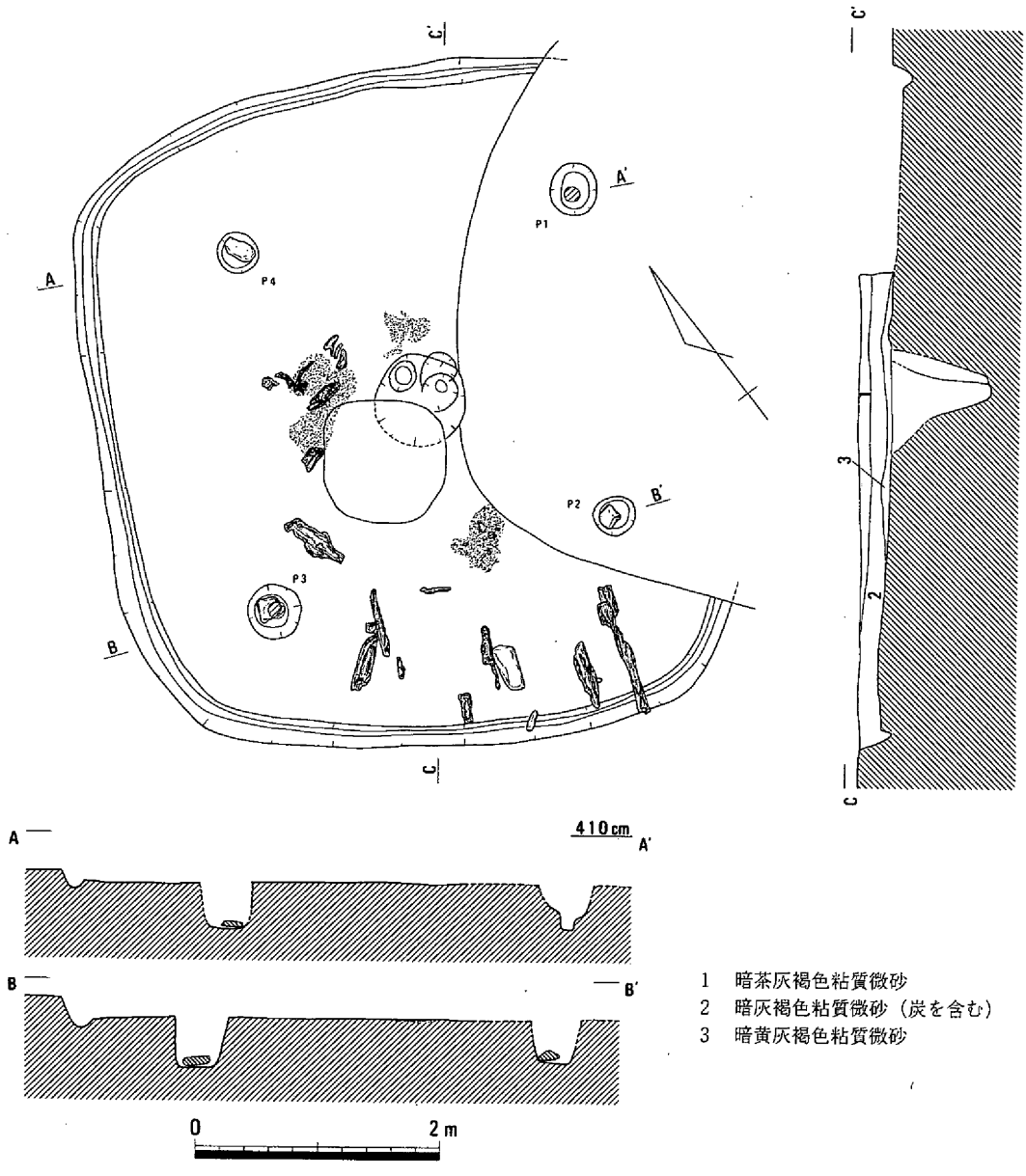
第380図　竪穴住居39（1/60）・遺物

42に切られ、中央付近も南北に溝15が流走している。この位置には弥・中・Ⅱの竪穴住居８があり、それを切っている。平面形は円形と思われ、壁体溝の近くに６本の柱穴が確認されている。しかし、主柱穴の構成は不明確である。床面は貼り床を行っていたようで、断面において部分的にその層が認められる。柱穴の掘り方は径38～75cmの円形あるいは楕円形で、いずれも径15cm程度の柱痕跡が確認されている。

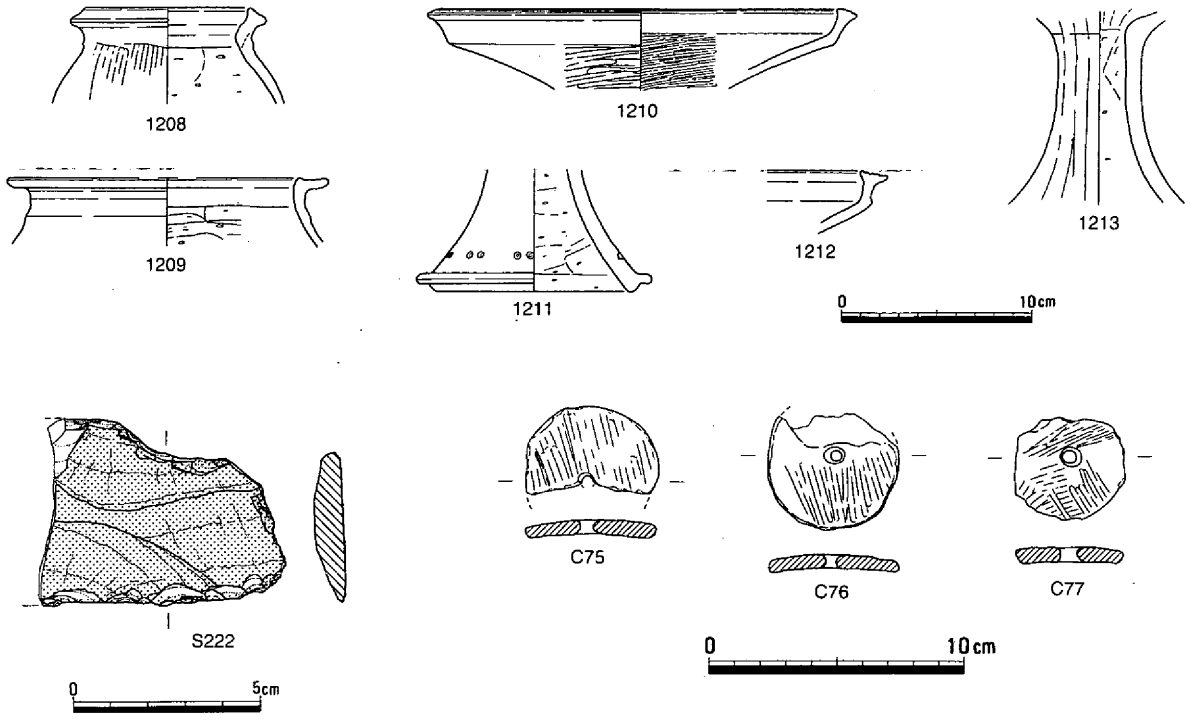
Ｐ１からは壺の底部1204・高杯1207、Ｐ６からは、土製紡錘車Ｃ73が出土している。この他に、甕1203・1205、高杯1206、土製紡錘車Ｃ74や、図示していないが打製石包丁片も確認されている。遺物や遺構の切り合いなどを考慮すると、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。　（柴田）

竪穴住居40（第381・382図、写真10－３）

第２微高地の中央東寄り、竪穴住居36の北東に位置する焼失住居である。東側を竪穴住居41に切ら



第381図　竪穴住居40（1/60）



第382図　竪穴住居40　遺物

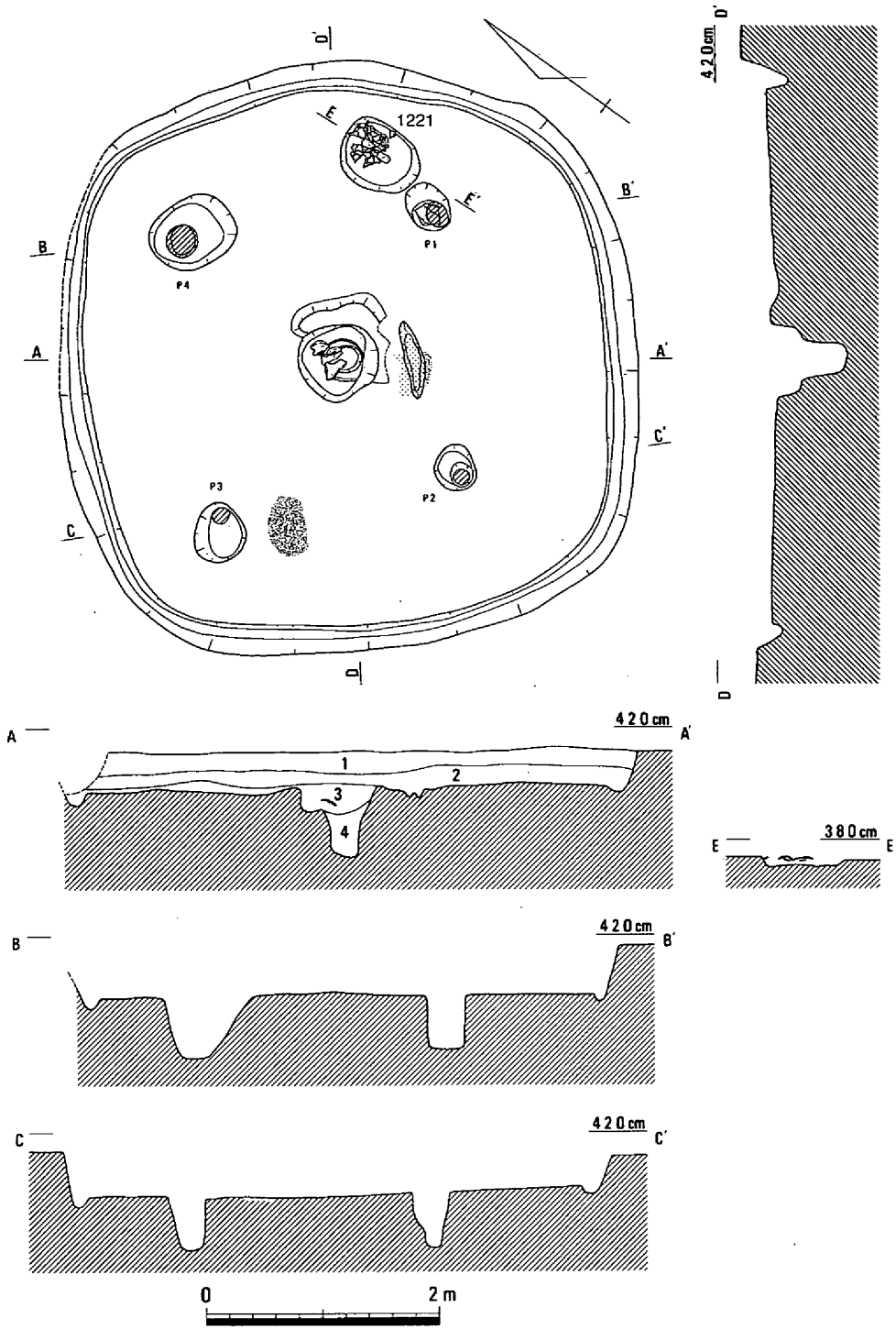
れている。平面形は隅丸方形で、４本の主柱穴が確認されている。柱穴の掘り方は径35～43cmの円形あるいは楕円形で、Ｐ１・３では径14cm程度の柱痕跡が確認されている。また、Ｐ２・３・４では底面に礎石と思われる石が認められる。上場の径が75cm程度を測る中央穴が認められ、切り合いから２時期あったと思われる。中央穴の上場は、北側周縁で床面より盛り上がっている様子が観察される。住居中央から南西辺を主体として、垂木と思われる炭化材や焼土が検出されている。

出土遺物には、甕1208・1209、高杯1210～1213、打製石包丁Ｓ222、土製紡錘車Ｃ75～77がある。1208は口縁端部が上下に肥厚し、1209は水平方向にのびる。高杯は長脚で、短く屈曲する口縁部の端部は水平方向に拡張する。Ｓ222は全面に珪酸が付着している。遺物や遺構の切り合いなどを考慮すると、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。　（柴田）

竪穴住居41（第383～385図、写真69）

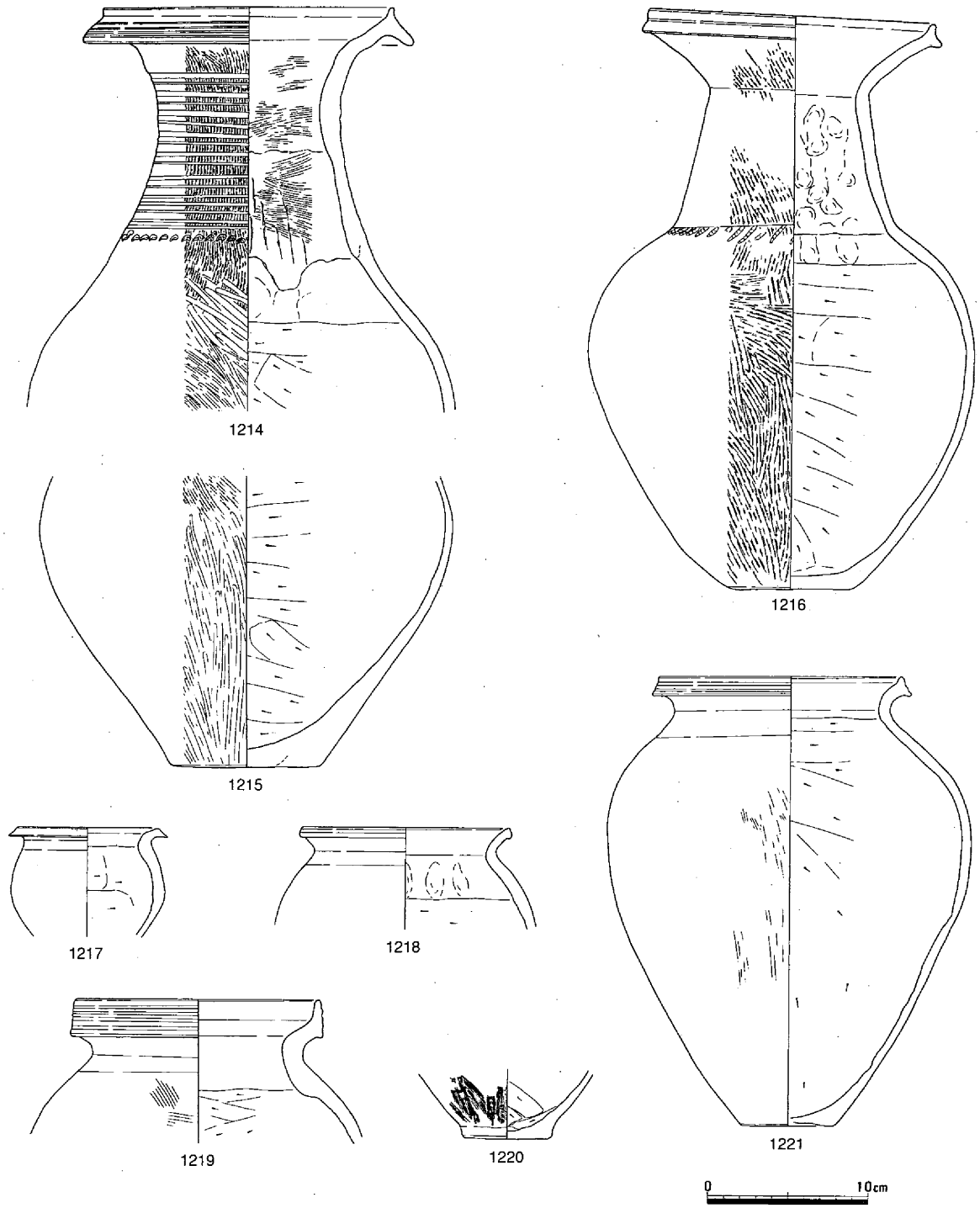
第２微高地の中央東寄りに位置する住居である。西側で弥・後・Ⅰの竪穴住居40と重なり、それを切っている。平面形は隅丸方形で、やや北西に偏って４本の主柱穴が確認されている。柱穴の掘り方は長径40～74cmの楕円形で、いずれも径14～25cmの柱痕跡が確認されている。上場の径が70cmを測る中央穴が認められ、この上場は、東側周縁で床面よりいったん下がり、盛り上がったような様子が観察される。さらに、中央穴の南東には、紡錘形の凹があり、中には炭が堆積している。Ｐ１の北には楕円形の浅い土壙が認められ、甕1221が出土している。

他の出土遺物には、壺1214～1216、甕1217～1220、高杯1222～1224、鉢1225～1228、スクレイパーＳ223、楔形石器Ｓ224、砥石Ｓ225などがある。1214はやや肩の張りは弱く、口縁部は緩やかに外反する。1216は肩の張りが強く、口縁部は外方に強く屈曲する。1221は肩が張り、口縁端部は上下に肥厚し、凹線が施される。1223の口縁部はいったん上方に立ち上がり、さらに外反する。遺物や遺構の切り合いなどを考慮すると、遺構の時期は、弥・後・Ⅱ～Ⅲと思われる。　（柴田）



1　暗黄褐色粘質微砂（炭・焼土・土器を含む）
2　茶灰褐色粘質微砂（炭・焼土・土器を少し含む）
3　灰褐色粘質微砂（焼土・土器を含む）
4　黄灰褐色粘質土

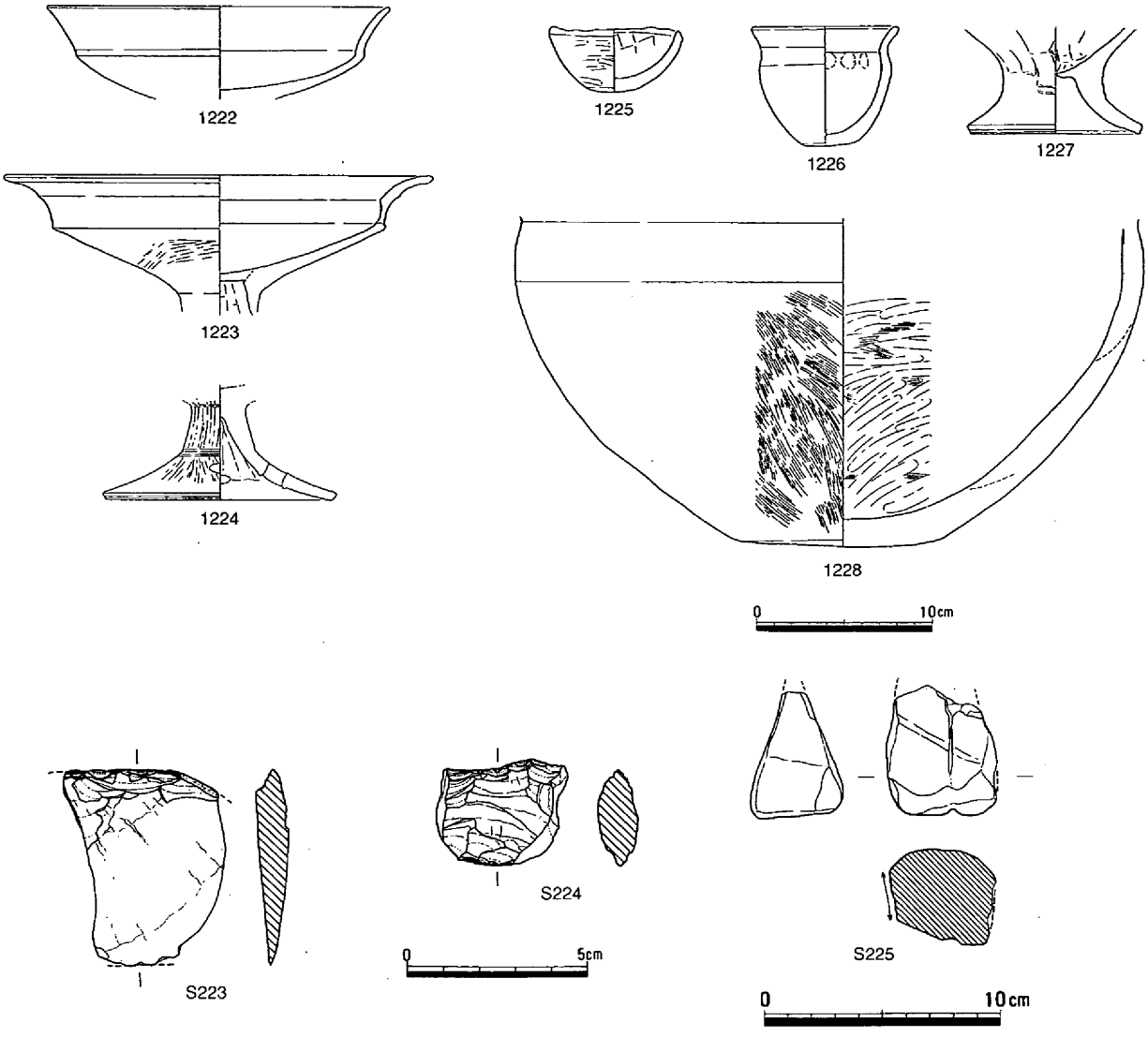
第383図　竪穴住居41（1/60）



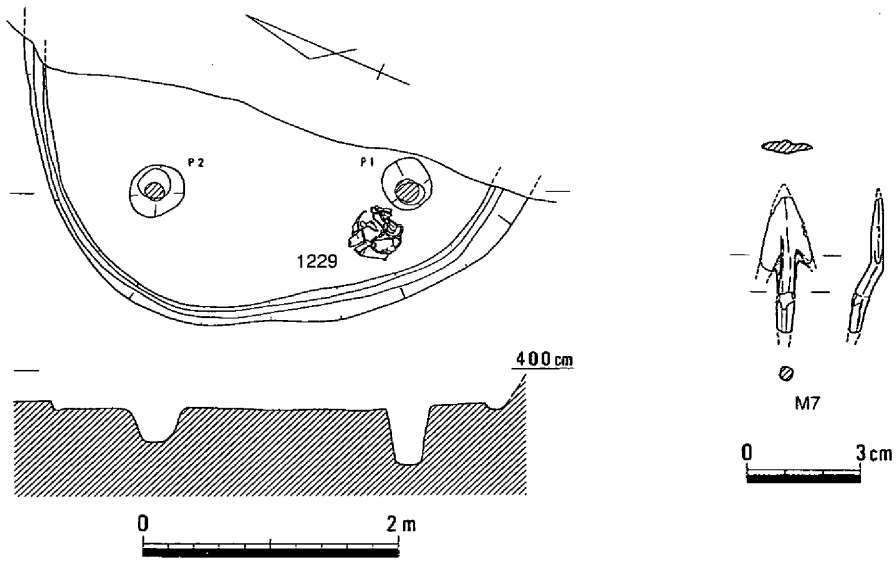
第384図　竪穴住居41　遺物（１）

竪穴住居42（第386・387図、写真69）

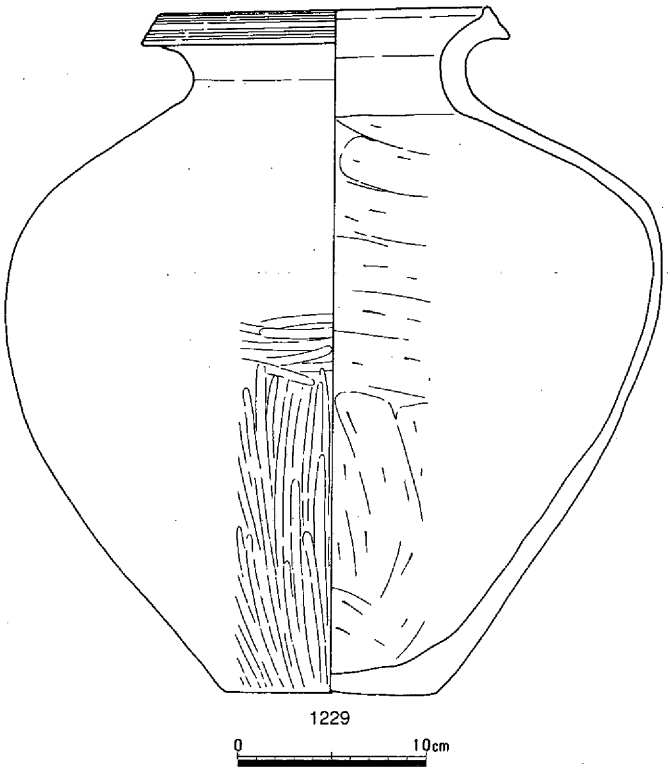
第２微高地の東寄りに位置する住居で、西側では竪穴住居44と重なっている。東側は溝25に切られるなど、東半分は検出されなかった。平面形は円形もしくは隅丸方形と思われ、主柱穴と思われる２本の柱穴が確認されている。柱穴の掘り方は長径40～45cmの楕円形で、いずれも径18cm程度の柱痕跡が確認されている。



第385図　竪穴住居41　遺物（２）



第386図　竪穴住居42（1/60）・遺物（１）

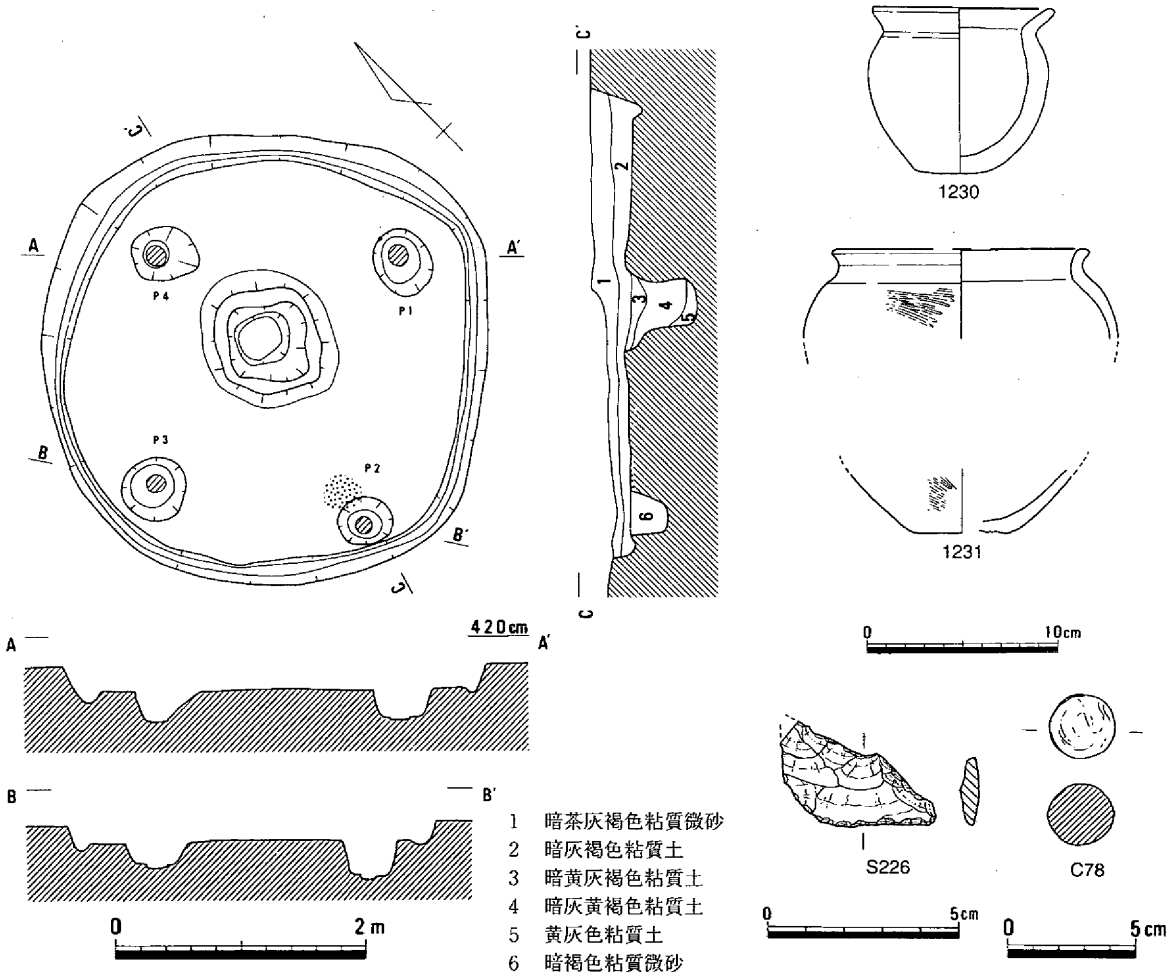


第387図　竪穴住居42　遺物（２）

Ｐ１と壁体溝の間の床面には壺1229が潰れた状態で出土している。この他には銅鏃Ｍ７、図示していないが楔形石器も確認されている。遺物から、遺構の時期は、弥・後・Ⅱと思われる。　　（柴田）

竪穴住居43（第388図、写真11－１）

第２微高地の南東寄り、竪穴住居41の南に位置する住居である。平面形は隅丸方形で、４本の主柱穴が確認されている。柱穴の掘り方は長径45～55cmの楕円形で、いずれも径15cm前後の柱痕跡が確認されている。床面やや北寄りに、60cm四方の隅丸方形の中央穴が認められる。この上場の周縁は床面より盛り上がってお



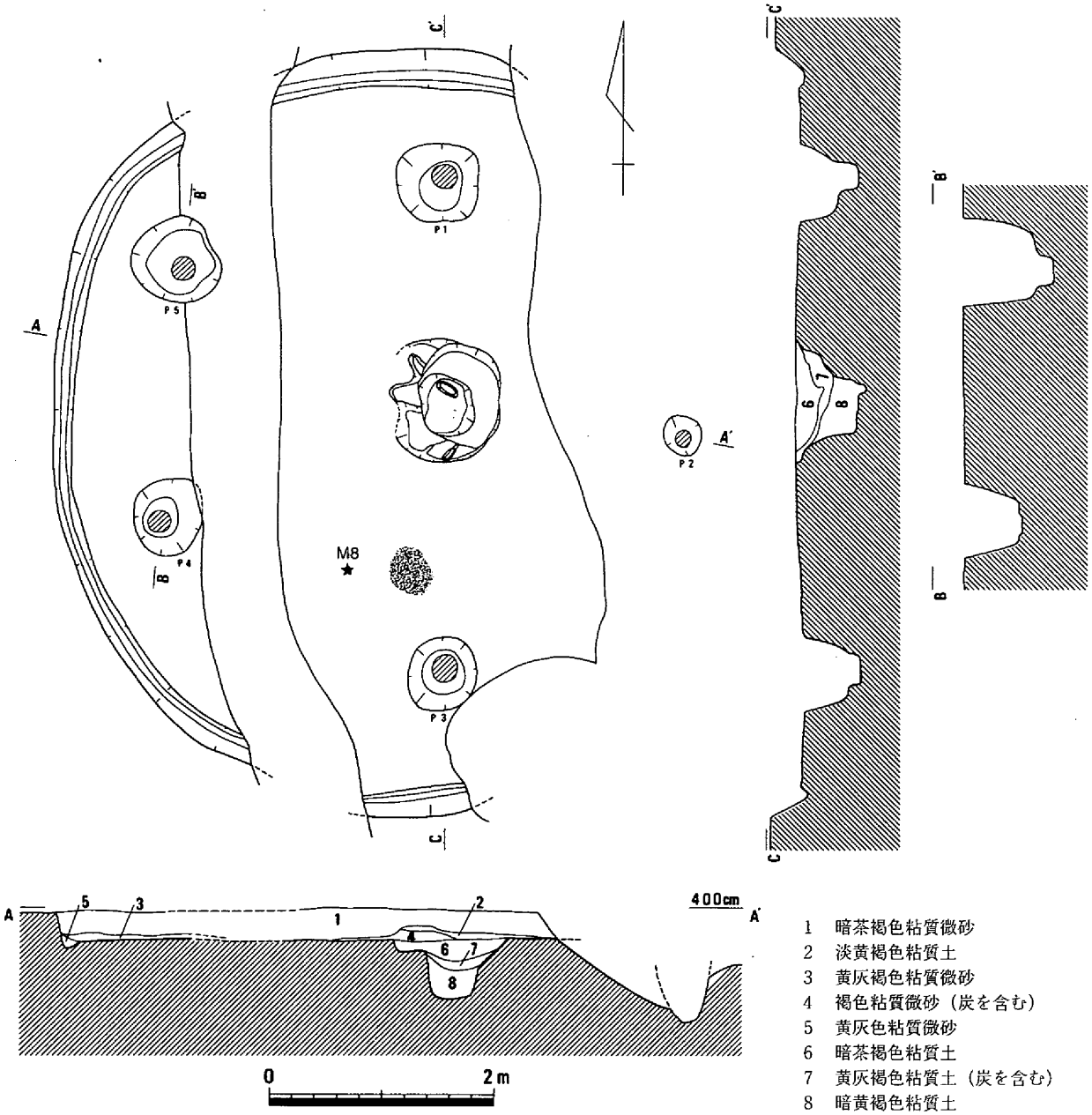
第388図　竪穴住居43（1/60）・遺物

り、土手状を呈する。Ｐ２の位置の床面には被熱面が認められる。

出土遺物には、甕1230・1231、石匙Ｓ226、楔形石器Ｓ224、土玉Ｃ78などがある。遺物から、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。（柴田）

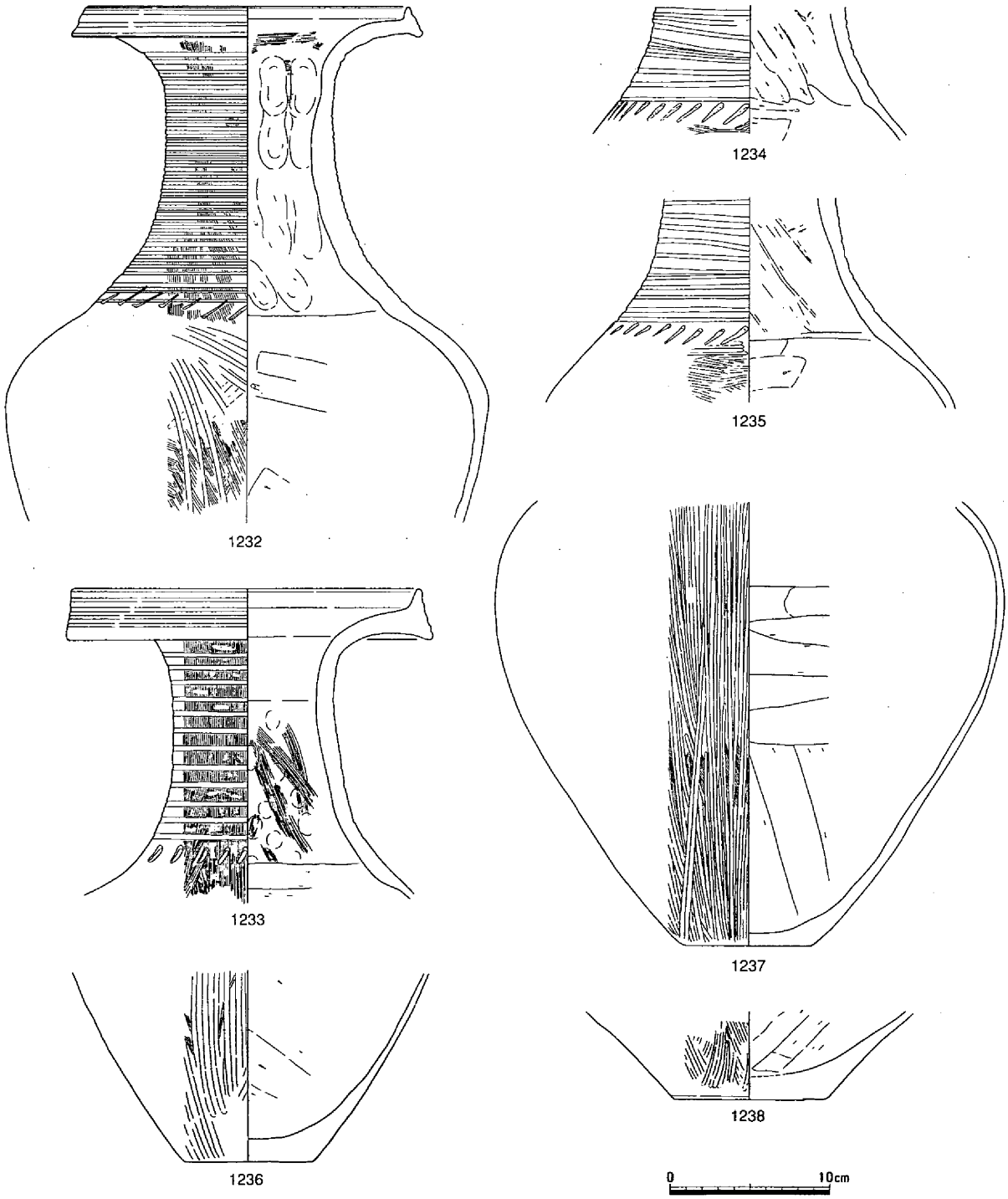
竪穴住居44（第389～392図、写真11－２・３、70）

第２微高地の中央部やや東寄りの位置において検出された遺構である。遺構の大部分は古墳時代前期の溝24・25に切られてはいるが、平面形は円形を呈していたものと思われる。直径6.61ｍほどの竪穴住居に復元される。遺構は深さ約30cm残存していた。壁際には幅10cm前後、深さ５～10cmの壁体溝が巡っている。主柱穴が５本柱（Ｐ１～５）の構造となるもので、柱間距離は230～321cmほどである。柱穴の深さは50～80cmほどあり、断面観察によって径20cmほどの柱痕跡が認められた。中央穴は100

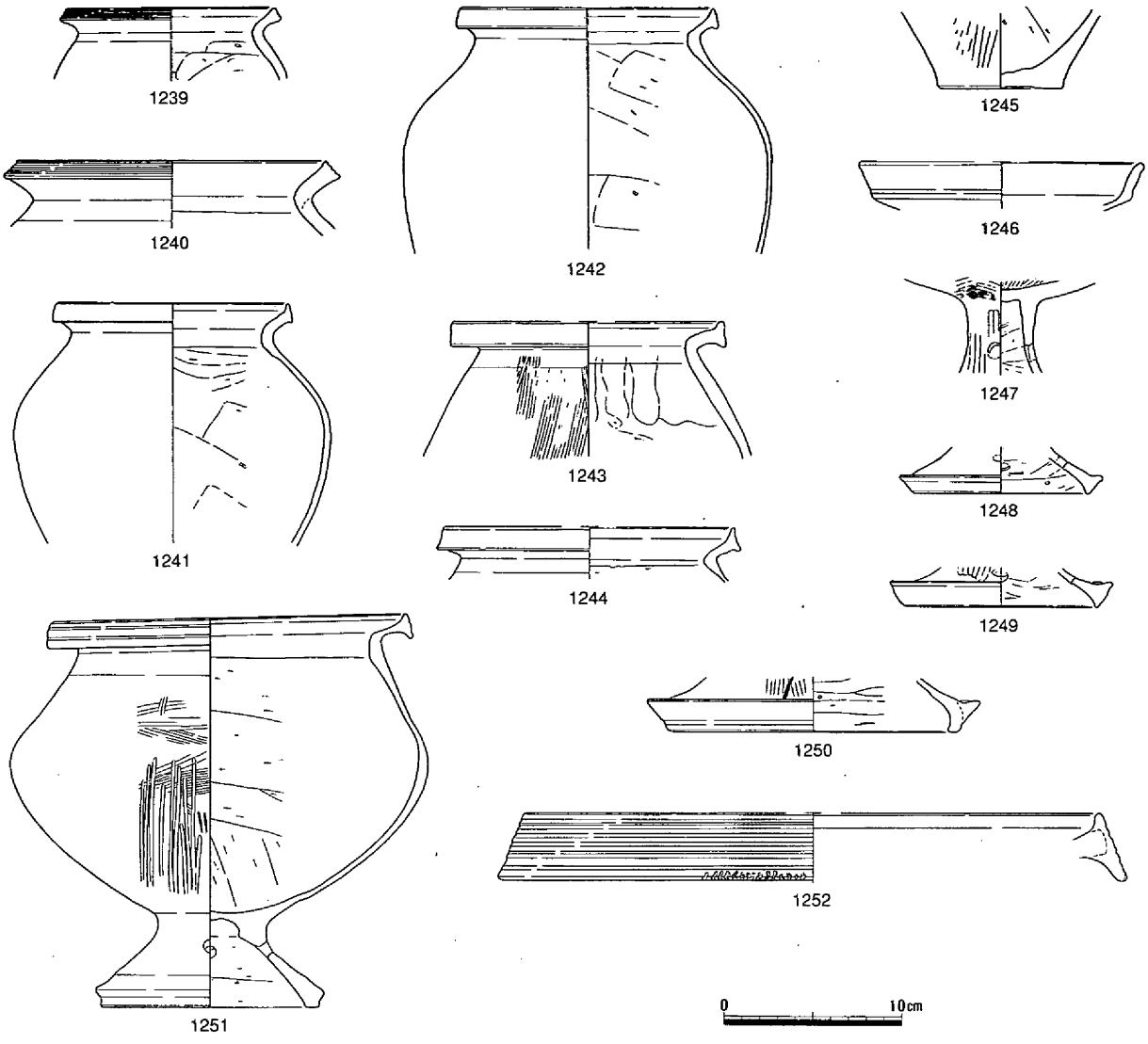


第389図　竪穴住居44（1/60）

cmほどの円形を呈し、深さ50cmほどの二段掘りの穴であった。この中央穴とＰ３との間には30×40cmの被熱痕が認められた。またその周囲には炭が散っているため、この場所は炉跡と思われる。遺物は土器、土製品、石器、銅製品などが出土している。図示した土器は1232～1238が壺、1239～1245は甕、1246～1250は高杯、1251は台付鉢、1252は器台である。土製品Ｃ79は中央部に貫通孔をもつ玉である。外面には刺突文が施されている。Ｃ80は完形の分銅形土製品である。顔面は眉、目、鼻、口が写実的に表現されている。また、頭部の毛髪は棒状工具による列点文によって表現されている。



第390図　竪穴住居44　遺物（１）

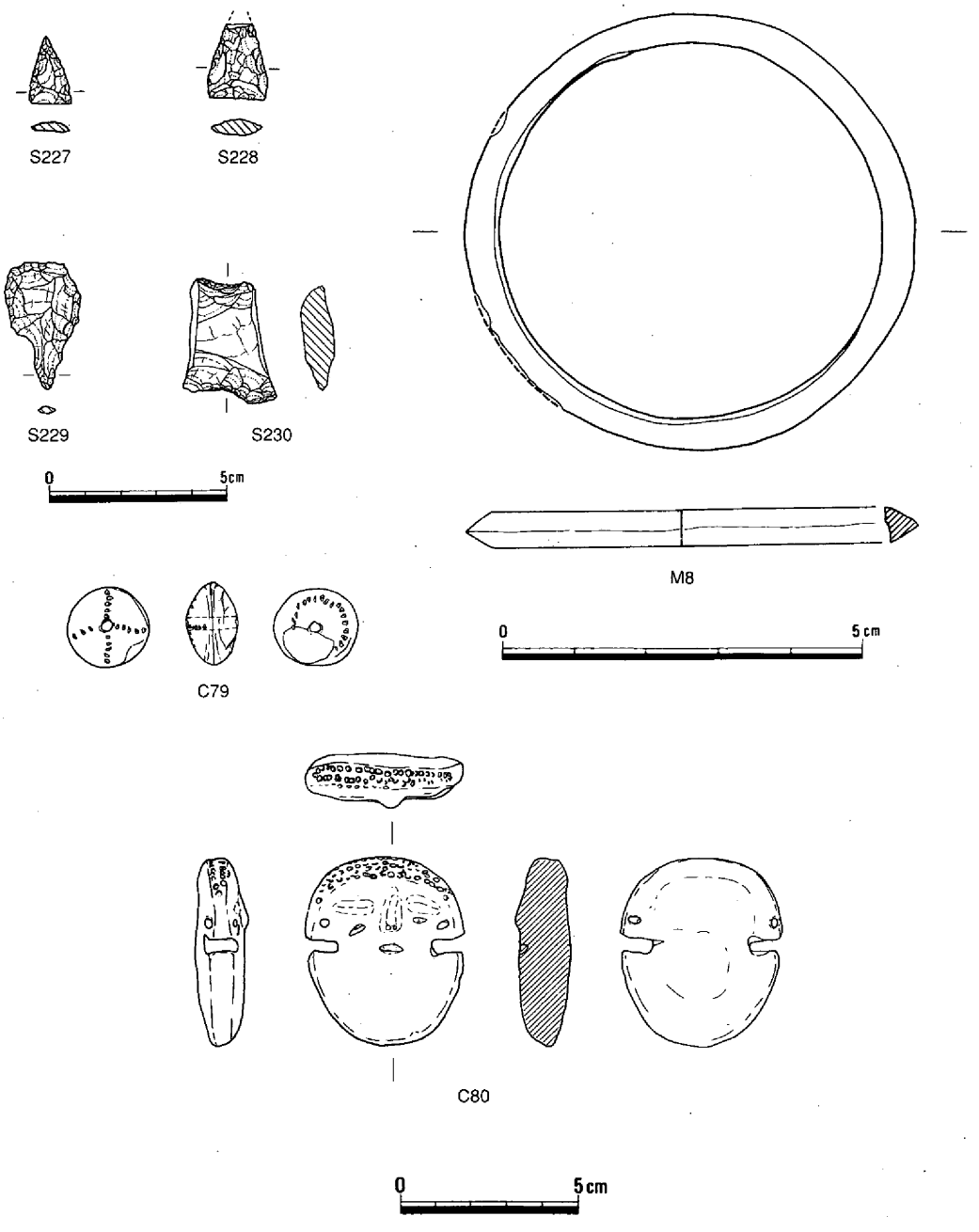


第391図　竪穴住居44　遺物（２）

重量は36.7ｇを測る。石器は石鏃Ｓ227・228、石錐Ｓ229、楔形石器Ｓ230がある。銅製品としては円環型銅釧Ｍ８がある。このＭ８は炉跡から40cmほど離れた貼床面において出土した。最大長62㎜、最大厚５㎜、重量11.41ｇを測り、断面は菱形を呈する。大きさは大型太身に分類されるものである。現在のところ形態は長瀬高浜遺跡出土のものが最も類似していると思われる。なお、分析によれば鉛は華北産である。このように完形の分銅形土製品や銅釧を所有する竪穴住居は祭祀の在り方を考えるうえで重要な類例となろう。時期は出土土器からみて弥・後・Ⅰ～Ⅱと思われる。　（松本）

竪穴住居45（第393図）

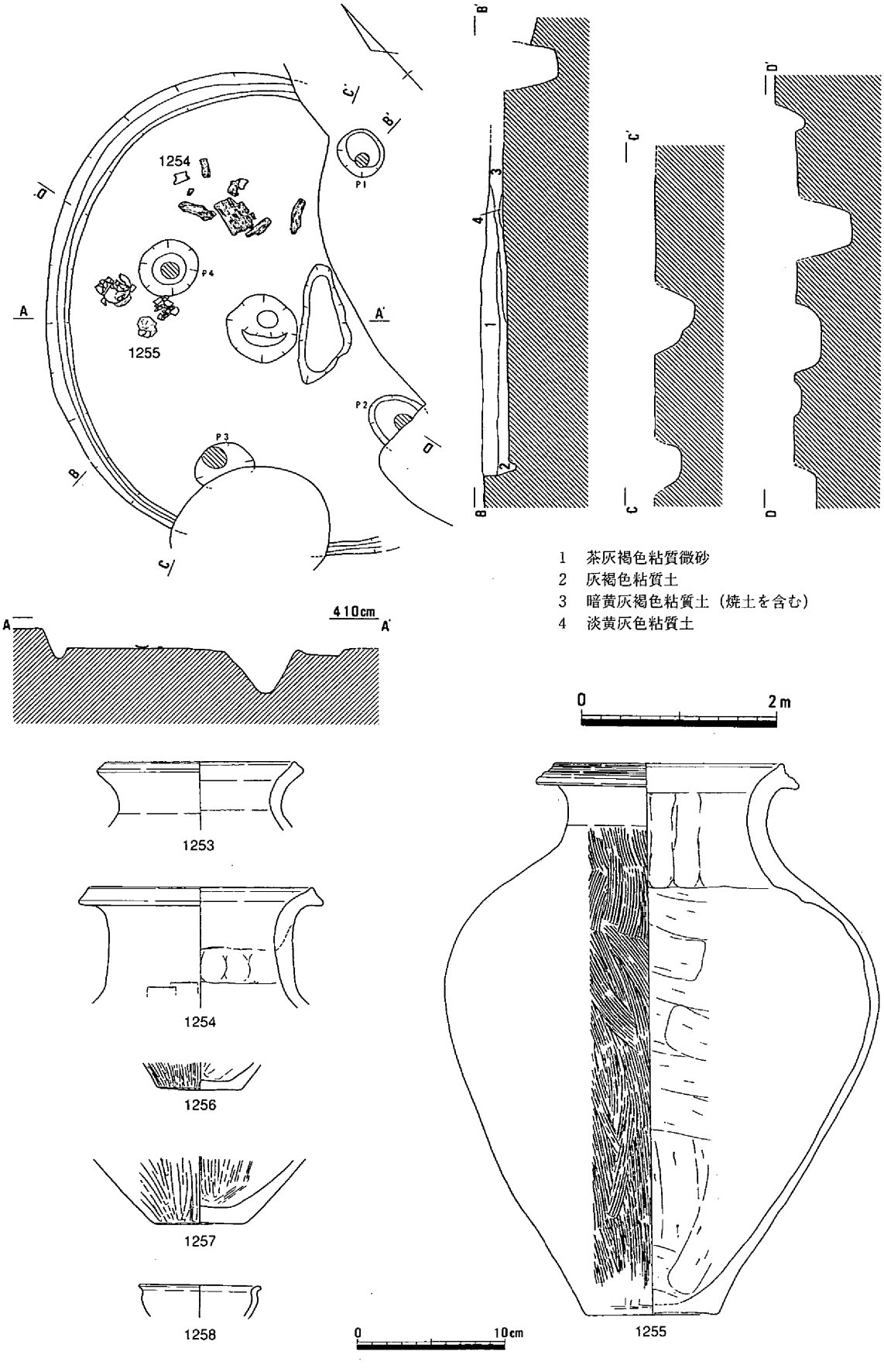
第２微高地の北端において検出された遺構である。他の遺構に切られてはいるが、径5.03ｍほどに復元される平面形が円形ないし楕円形に近い竪穴住居である。遺構は検出面から30cmほど残存していた。壁際には幅10cm前後、深さ10cm前後の壁体溝が巡っている。主柱穴は４ないし５本柱の構造となるもので、柱穴の深さは30～50cmである。床面上には図示したように炭化材や焼土が残存していることから、焼失住居と考えられる。遺物は床面、柱穴内などから壺、甕、鉢などの土器1253～1258が出土している。これらの遺物からみて時期は弥・後・Ⅰと思われる。　（松本）



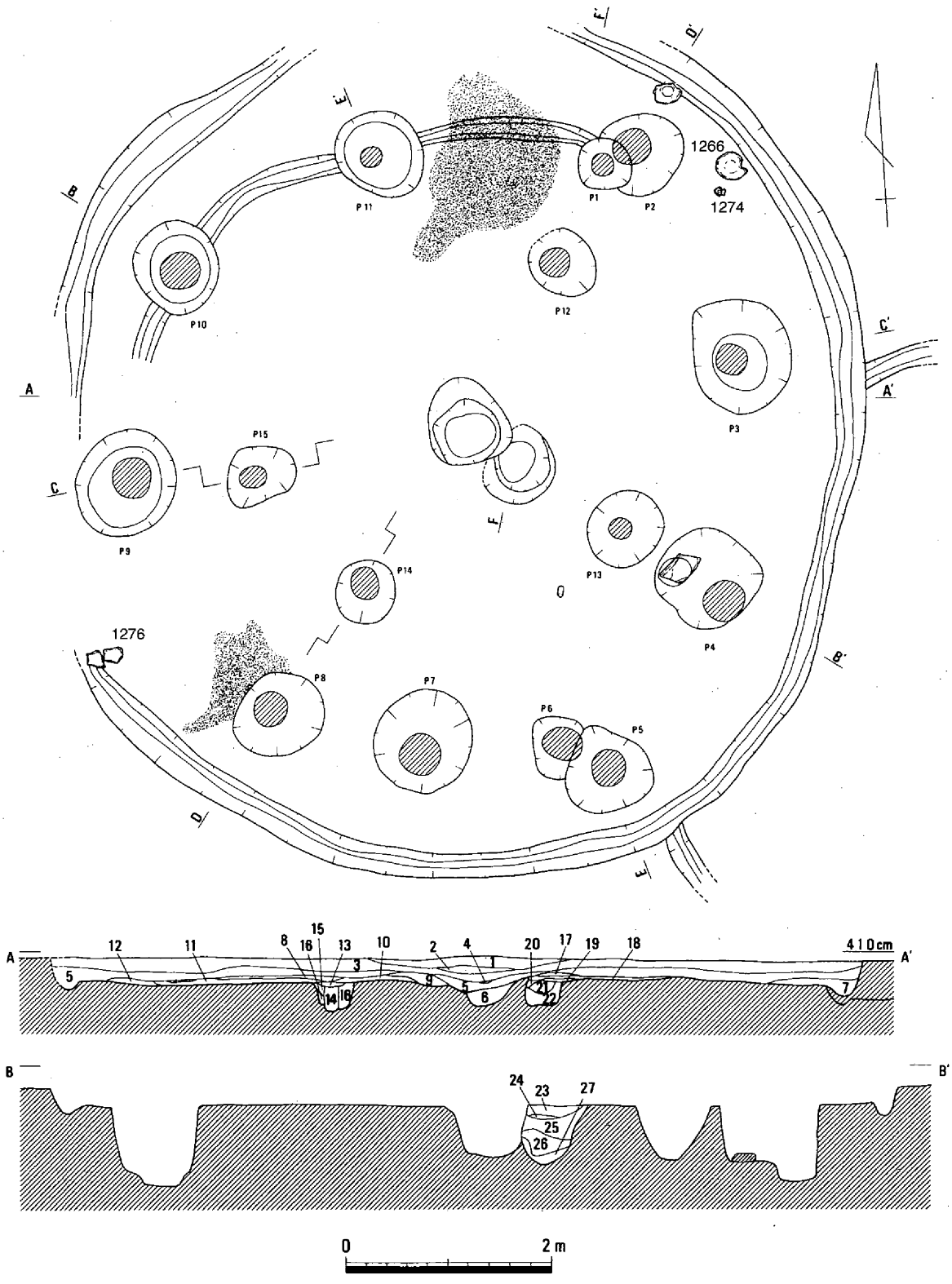
第392図　竪穴住居44　遺物（３）

竪穴住居46（第394～397図、写真12－１、71）

第２微高地の北東部の位置で検出された遺構で、竪穴住居47と切り合い関係をもつものである。住居の一部は切られているが、径8.24ｍほどを測り、平面形が円形となる竪穴住居である。遺構の深さは検出面から25cmほど残存していた。壁際には幅10～20cm前後、深さ５～10cmの壁体溝が巡っている。主柱穴は８本柱（Ｐ２～５、８、９～11）の構造となるもので、柱間距離は200～332cmほどである。柱穴掘り方は80～110cm、深さは60～80cmほどあり、断面観察によって径20cmほどの柱痕跡が認められた。中央穴は径70cmほどの円形を呈し、深さは60cmを測る。床面には被熱痕跡が２ヶ所確認された。Ｐ２と11の間には110×150cmほどのものが、Ｐ８の側には50×100cmほどのものが検出されており、状況からみてこの位置が炉跡と思われる。貼床除去後に住居の北側において、幅が20cm前後、深さ５

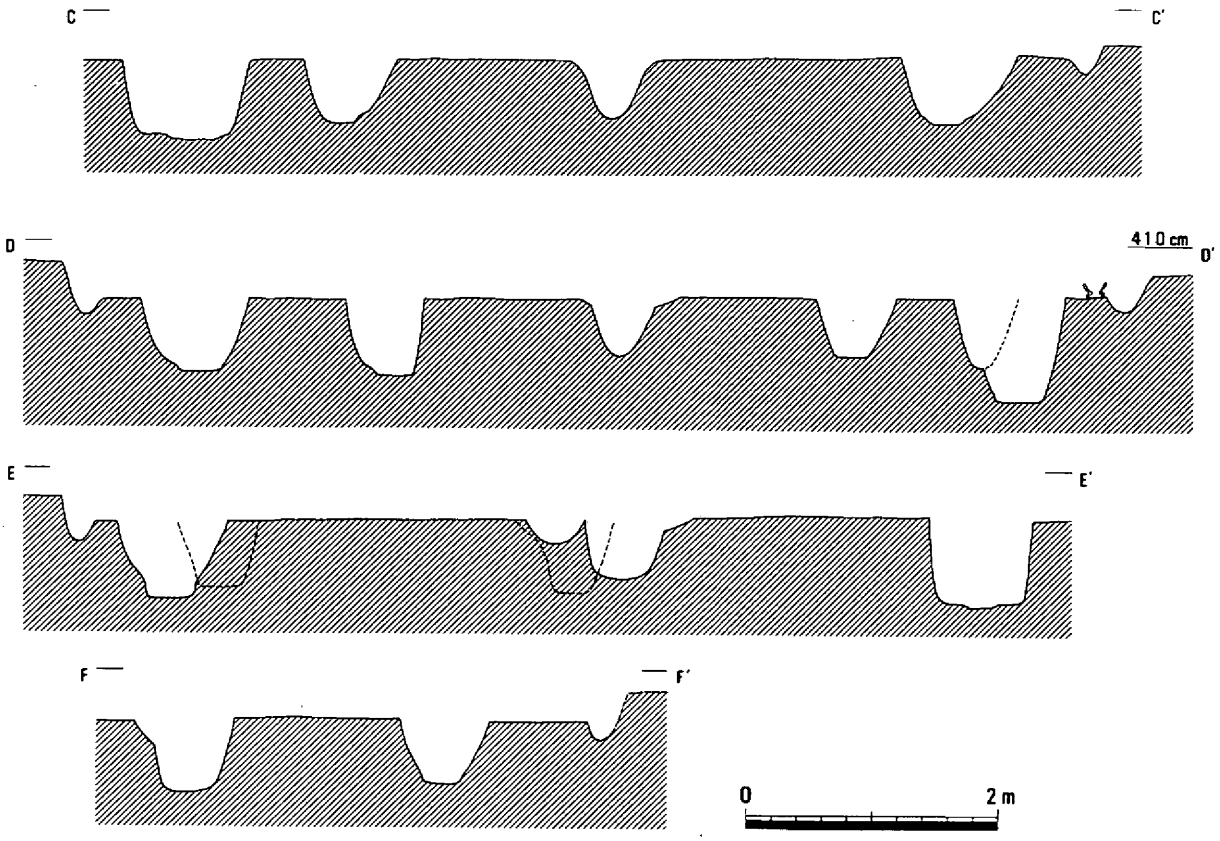


第393図　竪穴住居45（1/60）・遺物



1	茶褐色粘質微砂	8	淡黄灰色粘質土	15	暗灰褐色粘質土	22	茶灰褐色粘質土
2	暗灰褐色粘質土	9	黄灰色粘質土	16	明黄褐色粘質土	23	灰褐色粘質土（炭を含む）
3	暗黄褐色粘質微砂	10	暗黄灰色粘質土	17	淡灰色粘質土	24	明黄褐色粘質土
4	淡茶褐色粘質土	11	黄茶褐色粘質微砂	18	淡黄灰色粘質土	25	黄灰褐色粘質土
5	暗茶灰褐色粘質土	12	黄褐色粘質土	19	黄褐色粘質土	26	黄褐色粘質土
6	黄茶灰褐色粘質土	13	淡黄灰褐色粘質土	20	淡黄褐色粘質土	27	灰色粘質土
7	黄灰褐色粘質土	14	暗茶褐色粘質微砂	21	灰褐色粘質土		

第394図　竪穴住居46（1/60）



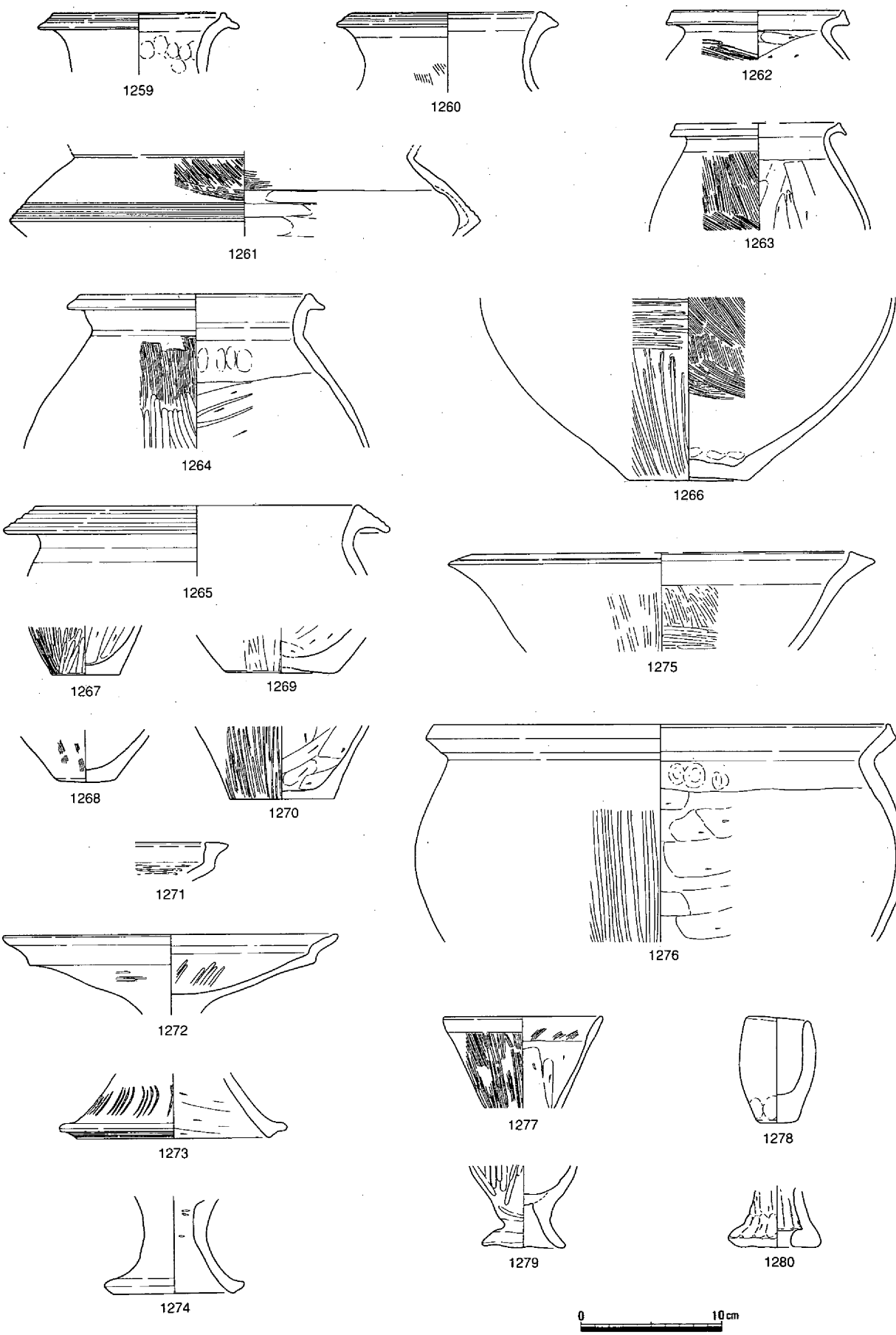
第395図　竪穴住居46　断面（1/60）

cm前後の壁体溝が検出されていることから、この住居は１回拡張されていたようである。当初の主柱穴はＰ４の古（根石をもつもの）、７、12、15の４本柱で構成されていたと思われる。

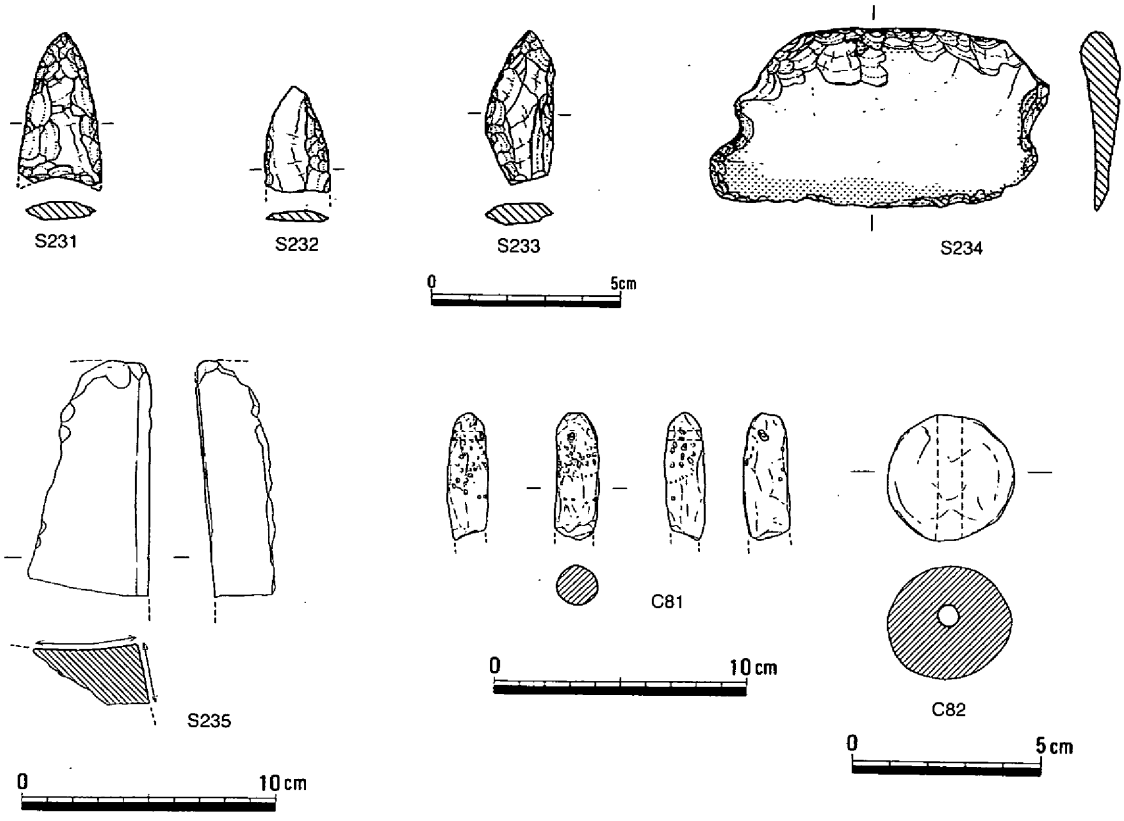
遺物は土器、石器、土製品などが出土している。土器は1259～1261、1269は大形の壺、1278は小形の壺、1262～1268、1270は甕、1271～1274は高杯、1275～1277は鉢、1279は台付鉢、1280は製塩土器である。石器はＳ231～233が石鏃、Ｓ234は打製石包丁、Ｓ235は石材が玄武岩の砥石である。土製品はＣ81は頂部に孔径４㎜ほどの貫通孔を持つ棒状土製品で表面には刺突文がみられる。Ｃ82は中央部に貫通孔をもつ重量32.4ｇを測る土錘である。Ｐ11内から出土した。これらの遺物からみて時期は弥・後・Ⅱには建てられており、廃絶が弥・後・Ⅲ頃と思われる。　（松本）

竪穴住居47（第398～400図、写真12－２、71）

竪穴住居46の東隣において切られた状態で検出された遺構である。平面形は円形を呈するようにもみえるが、むしろこの住居は多角形の竪穴住居とみるのが妥当と思われる。確認された平面形は１辺が３ｍほどの７角形となるものである。深さは検出面から35cmほど残存していた。壁際には幅10cm前後、深さ10cmほどの壁体溝が巡っている。主柱穴は７本柱（Ｐ１～４、６～８）の構造となるもので、いずれも住居の角となる位置に柱が建てられおり、その柱間距離は230～290cmほどである。柱穴掘り方は円～楕円形を呈し、深さは50～70cmほどであり、断面観察によって径20～25cmほどの柱痕跡が認められた。中央穴は80×90cmの楕円形を呈し、深さは約55cmを測る二段掘りの穴で、内部には炭、灰、土器を含んでいた。この中央穴の周囲は幅20～30cm、高さ５～10cmほどの土手状の高まりがみられるとともに、被熱帯も確認されている。なお、貼床土除去後に幅10～20cm、深さ10cm前後の壁体溝が検



第396図　竪穴住居46　遺物（１）



第397図　竪穴住居46　遺物（２）

出されているが、平面形は同じく多角形となる。拡張による建て替えが行われていた。

遺物は土器、石器、土製品、ガラス製品などが出土している。土器は短頸壺1281と長頸壺1282、甕1283～1293、高杯1294～1299、鉢1300～1302、器台1303がある。石器はスクレイパーと思われるものＳ236・237、石材が玄武岩と考えられる打製石包丁Ｓ239、石材が流紋岩の砥石Ｓ240がある。土製品は紡錘車Ｃ83がある。半分ほど欠けているが、柱穴内から出土した。ガラス製の小玉Ｇ４が床面から出土している。色調は明緑青色を呈している。これらの遺物からみて、竪穴住居は弥・後・Ⅱには建てられていたようである。廃絶の時期は弥・後・Ⅲの段階と思われる。　（松本）

竪穴住居48（第401図）

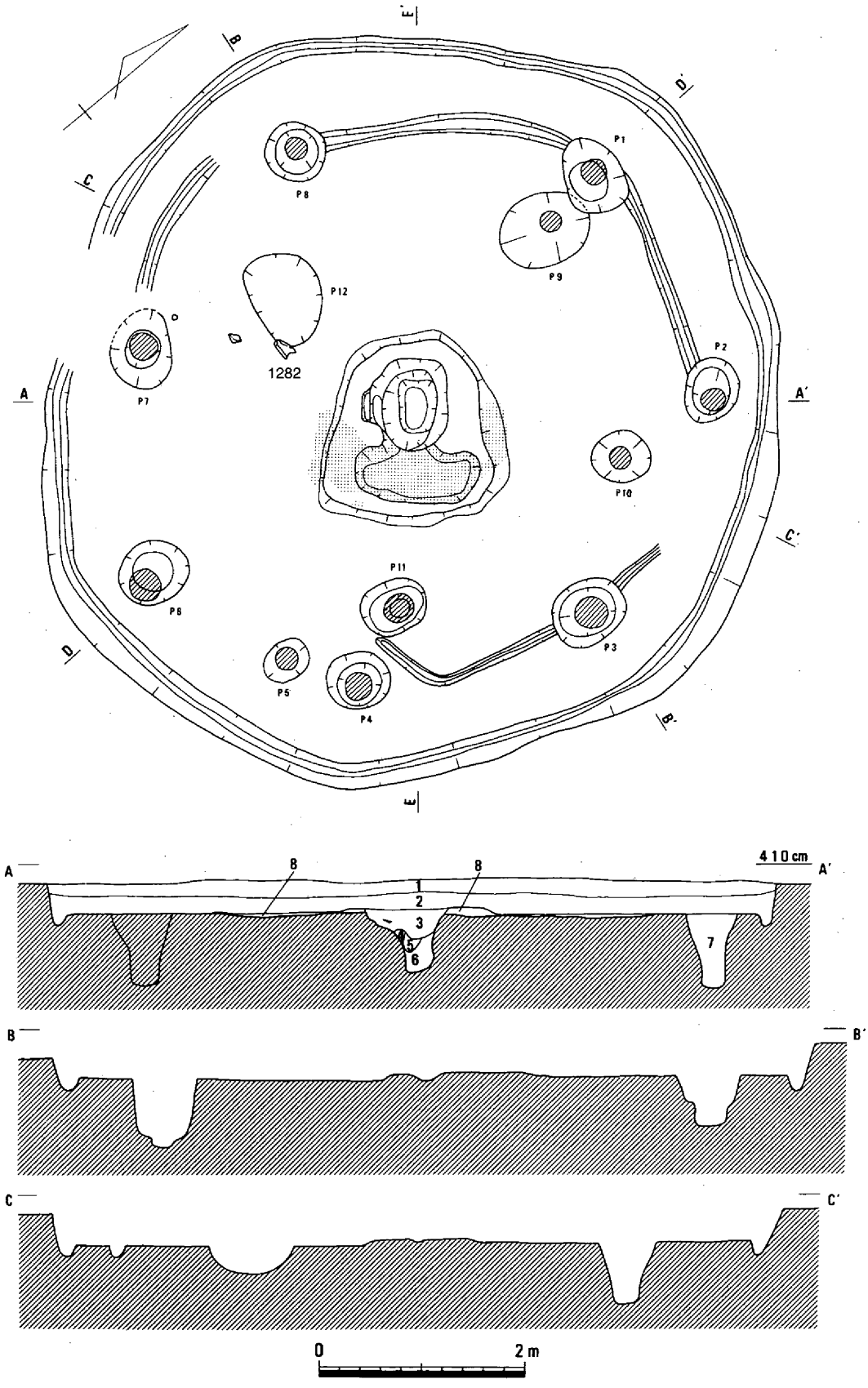
第２微高地の北東端に位置する住居である。遺構のほとんどが調査区外になっており、幅15cm程度の壁体溝が弧状に検出されただけである。

出土遺物は、弥生時代後期の土器の小片が少量確認されただけである。　（柴田）

竪穴住居49（第402図）

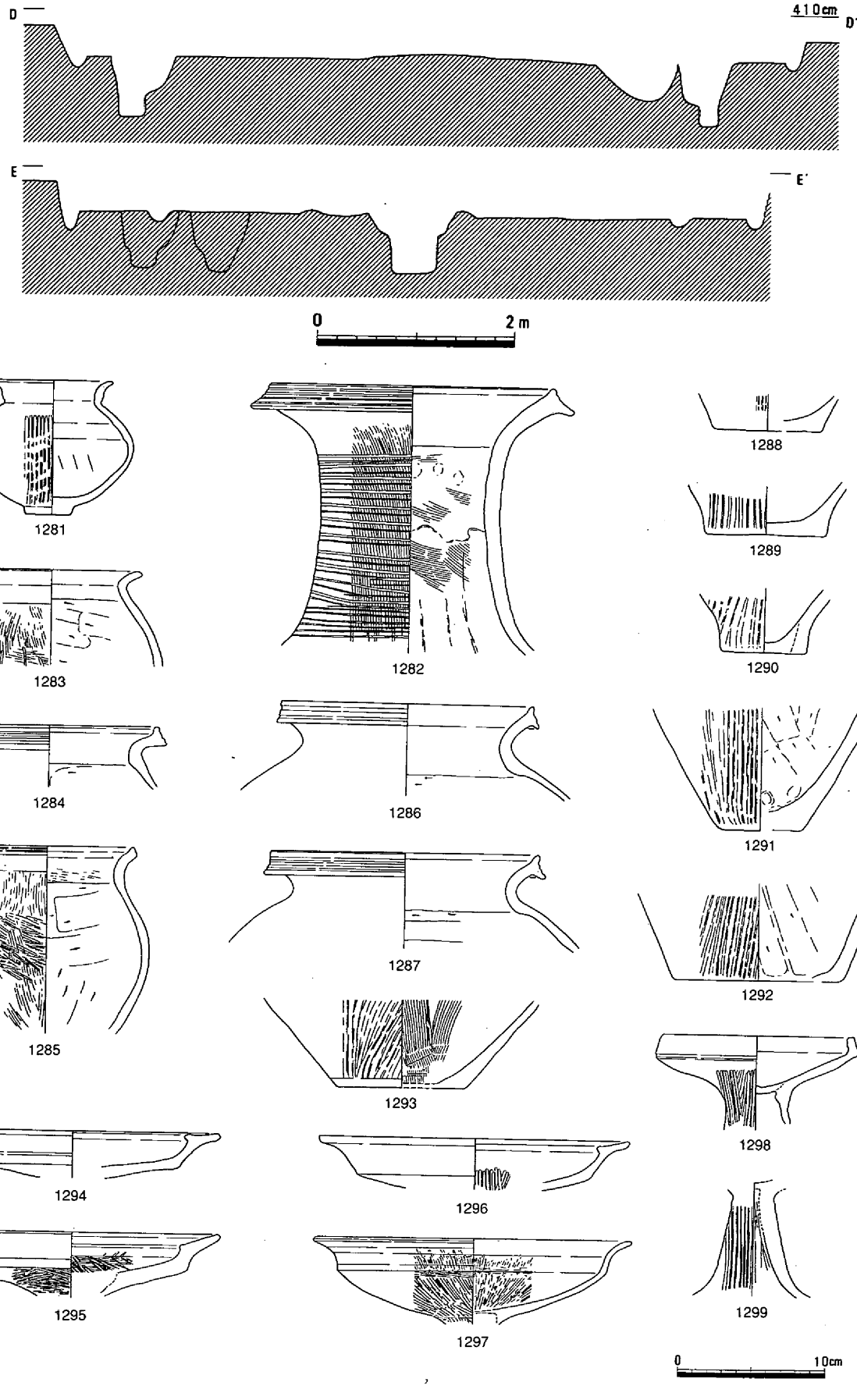
第３微高地は、加茂政所遺跡の中心部とは河道を挟んだ東側に位置する。河道は後世に形成された可能性があり、本来は西へ連続していたと推測される。本住居は第３微高地の北端で検出され、北半部を河道で削り取られている。また、東側の一部も後の竪穴住居と土壙で切られている。平面形は楕円形を呈し、河道で削られた肩部でやっと浅い土壙を検出した。床面は平坦になっている。床面を精査したが、柱穴を検出できなかった。竪穴住居の大きさは長径367cmを測る。床面の中央部付近で高杯片を検出したほか、埋土中から土器、石器を出土している。

土器には、甕1304・1305、底部1306・1307、高杯1308・1309、小型壺1310がある。小型壺は口縁部

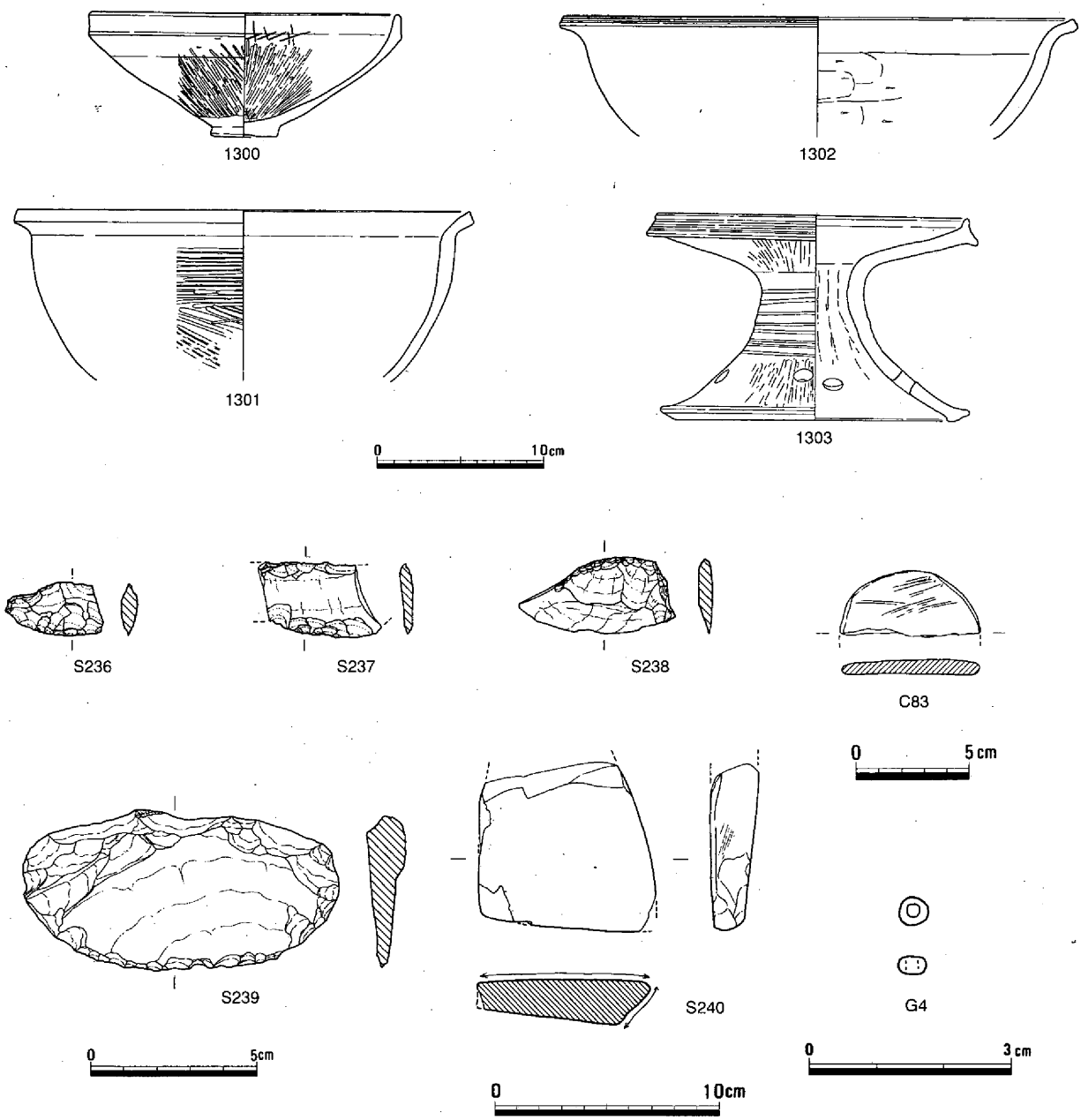


1　暗茶褐色粘質微砂
2　暗茶灰褐色粘質微砂
3　暗茶灰色砂質土（炭・灰・土器を含む）
4　茶褐色砂質土
5　黄褐色砂質土
6　明灰色粘質土
7　暗灰褐色粘質土
8　明黄褐色粘質土

第398図　竪穴住居47（1/60）



第399図　竪穴住居47　断面（1/60）・遺物（1）



第400図　竪穴住居47　遺物（２）

を外反させ、胴部はほぼ球形で、底部は平底である。石器にはサヌカイト製打製石包丁Ｓ241がある。竪穴住居の時期は出土遺物から弥・後・Ⅰに比定される。（正岡）

竪穴住居50（第403図）

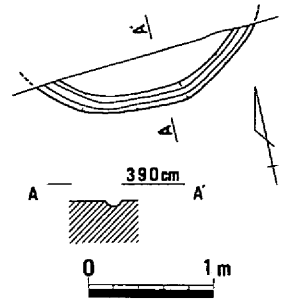
第３微高地の西端部に位置している。南側は用地外となり、北側は河道で削られているため、幅２m程しか調査できなかった。南側の用地境には側溝を掘ったため、一部を掘り取ってしまったが、南側の土層断面は詳しく観察することができた。東側と西側でほぼ南北方向の壁体溝を検出したことから、平面形は隅丸方形と推定される。調査した範囲の床面では、柱穴を検出できなかった。竪穴住居の大きさは、東西方向で419cmを測る。床面付近の埋土中から少量の土器片を出土した。出土遺物には、甕1311、高杯脚部1312がある。竪穴住居の時期は出土遺物から弥・後・Ⅰに比定される。（正岡）

竪穴住居51（第404図）

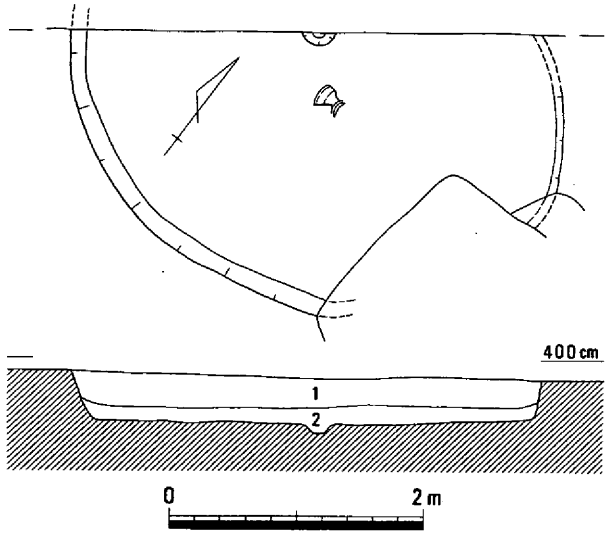
第３微高地の南東部に位置し、大部分は用地外となっている。北側１m余りを調査したにすぎない。平面形は円形を呈し、調査範囲の最大長は414cmを測る。埋土中からは土器の小片しか検出されず、詳細な時期を決められないが、弥生時代後期と推定している。（正岡）

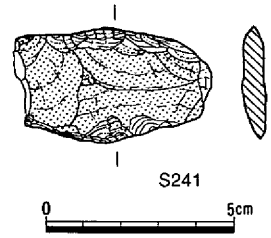
竪穴住居52（第405図）

第３微高地の北側に位置し、竪穴住居49の南端に重なっている。北寄りの上部は、土壙310によって削られているが、ほぼ全容を知ることができる。平面形は方形を呈し、床面は平坦である。床面を精査したが、柱穴、壁体溝とも検出できなかった。大きさは、東西268cm、南北233cmを測る。埋土中からは、土器片、石器、土製品が出土した。土器には、甕1313・1314、石器には、サヌカイト製スクレイパーＳ242、土製品には、土器片転用の紡錘車Ｃ84・Ｃ85がある。時期は、弥・後・Ⅲに比定される。形状・大きさを考慮すると通常の住居とは異なるようで、倉庫あるいは作業用の施設の可能性がある。（正岡）

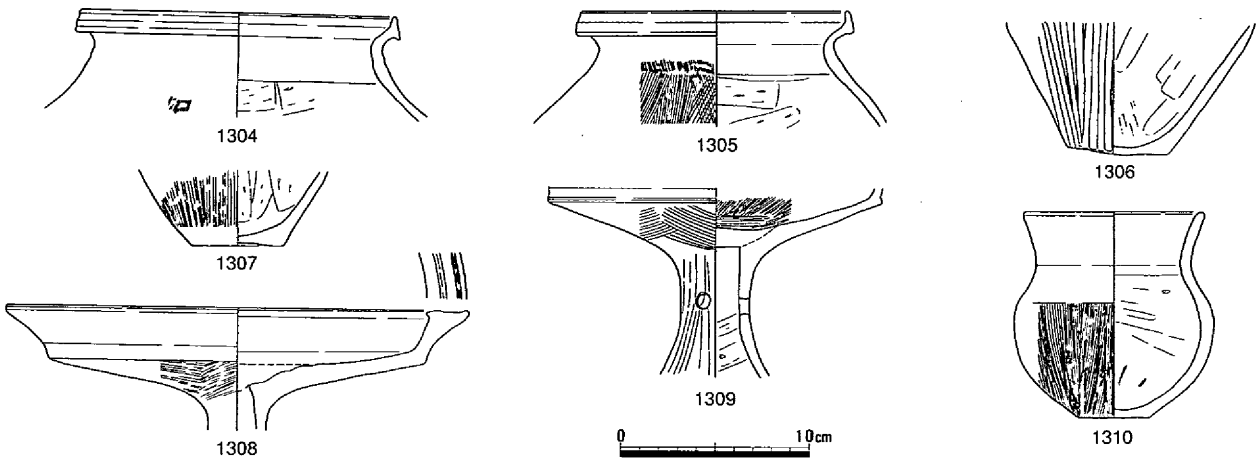


第401図　竪穴住居48（1/60）

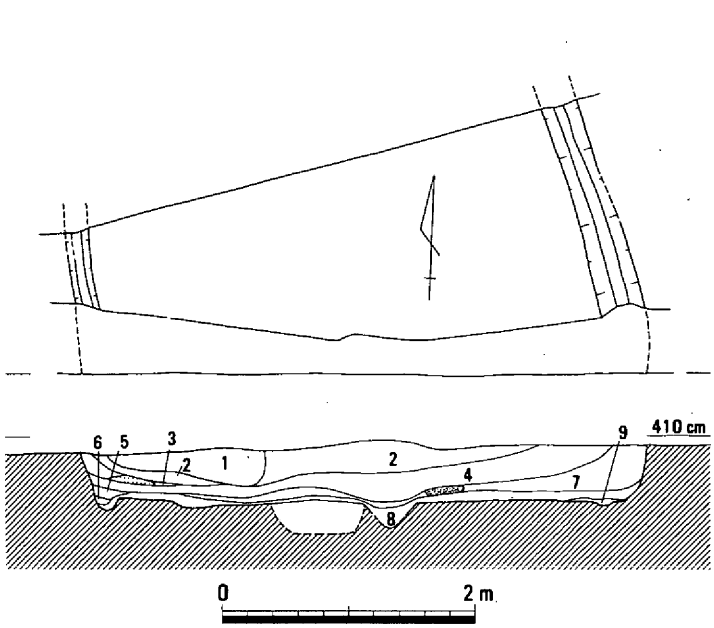


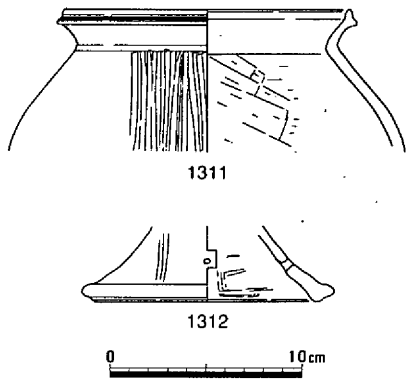


1　灰褐色粘質土
2　にぶい黄褐色粘質土



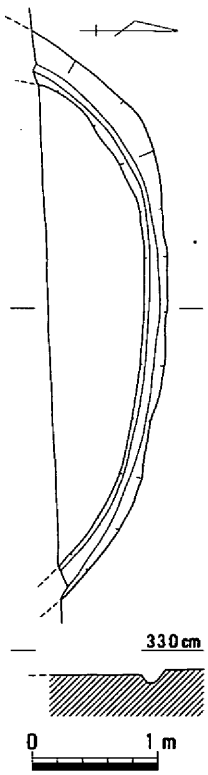
第402図　竪穴住居49（1/60）・遺物



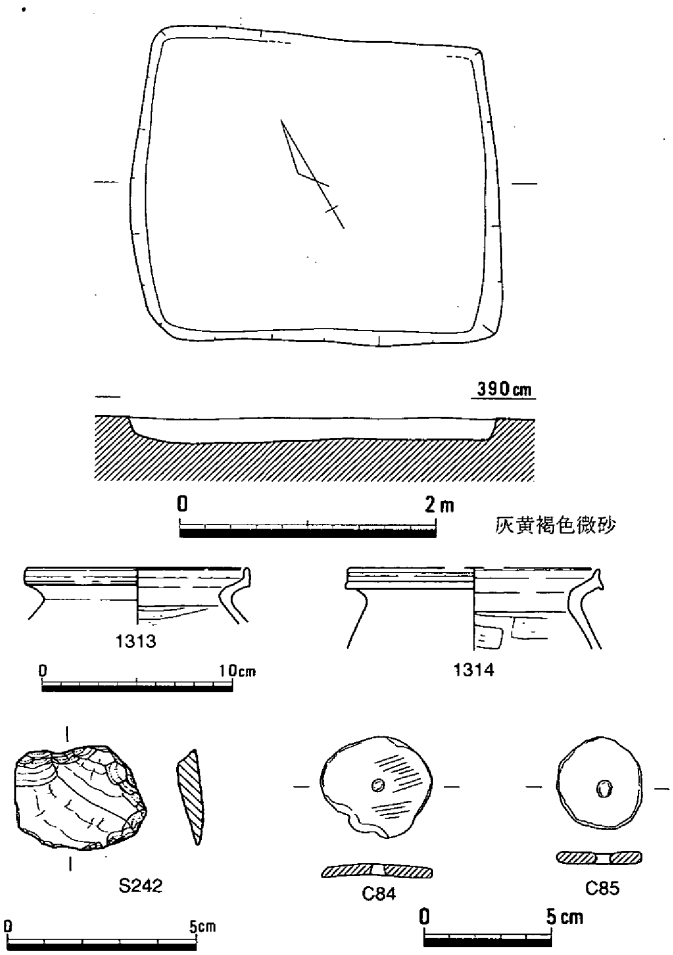


1　灰褐色微砂（褐色砂礫を含む）
2　褐灰色微砂
3　鈍い黄褐色微砂（炭化物を含む）
4　褐灰色微砂（明黄褐色斑を多く含む）
5　褐色微砂（炭化物を含む）
6　灰褐色砂（粘土を少し含む）
7　にぶい黄褐色微砂
8　黒褐色微砂（土器を含む）
9　灰褐色砂（粘土・土器を含む）

第403図　竪穴住居50（1/60）・遺物



第404図　竪穴住居51（1/60）



第405図　竪穴住居52（1/60）・遺物

（3）袋状土壙

袋状土壙20（第406図）

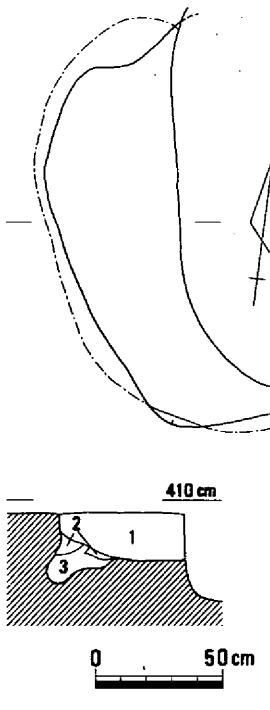
竪穴住居29の北東に接する位置から検出され、大半は袋状土壙21に削平を受けていた。残存する底面は楕円形を呈し、上面径163cm、底面径171cmを測り、深さ28cmを残す。底部の標高は3.77mを測る。遺物は土器細片が出土しており、その特徴から当土壙は弥・後・Ⅰのものと思われる。　（江見）

袋状土壙21（第407・408図）

袋状土壙20の東から検出された。底面は不整楕円形を呈す。西側は壁崩れのためか土壙下部の掘り込みは確認されず、底部は部分的に凹み平坦ではなかった。規模は上面径165cm、底面径173cm、深さ50cm、底部の標高は3.72mを測る。遺物は主に下層から出土している。長頸壺1315の頸部には凹線が巡り、甕1316の肩部内面にはヘラケズリがおよばないなど、古い特徴を残しながらも高杯1321の口縁上端拡張面は僅かに左右に引き出されているように新しい様相も見受けられることから、当土壙は弥・後・Ⅰの後半には埋没したものと考えられる。　（江見）

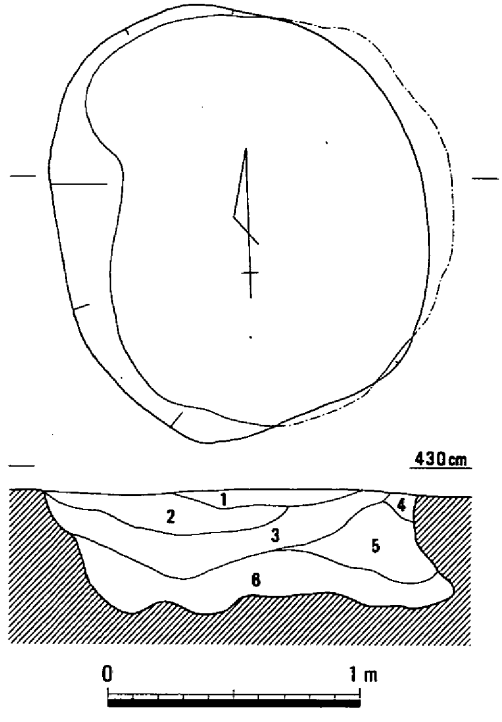
袋状土壙22（第409・410図、写真72）

袋状土壙20の南4mに位置し、竪穴住居29の東壁肩部下層から検出された。平面は円形を呈し床面は平坦である。現状では土壙下部は上部検出面に比して大きくなっているが、掘り込みは顕著ではない。規模は上面径97cm、下面径105cm、深さ107cm、底部の標高は2.98mを測る。遺物は主に埋土下層にあたる第5層以下から出土した。壺1332・直口壺1324・甕1332・高杯1321などの土器と石包丁・楔



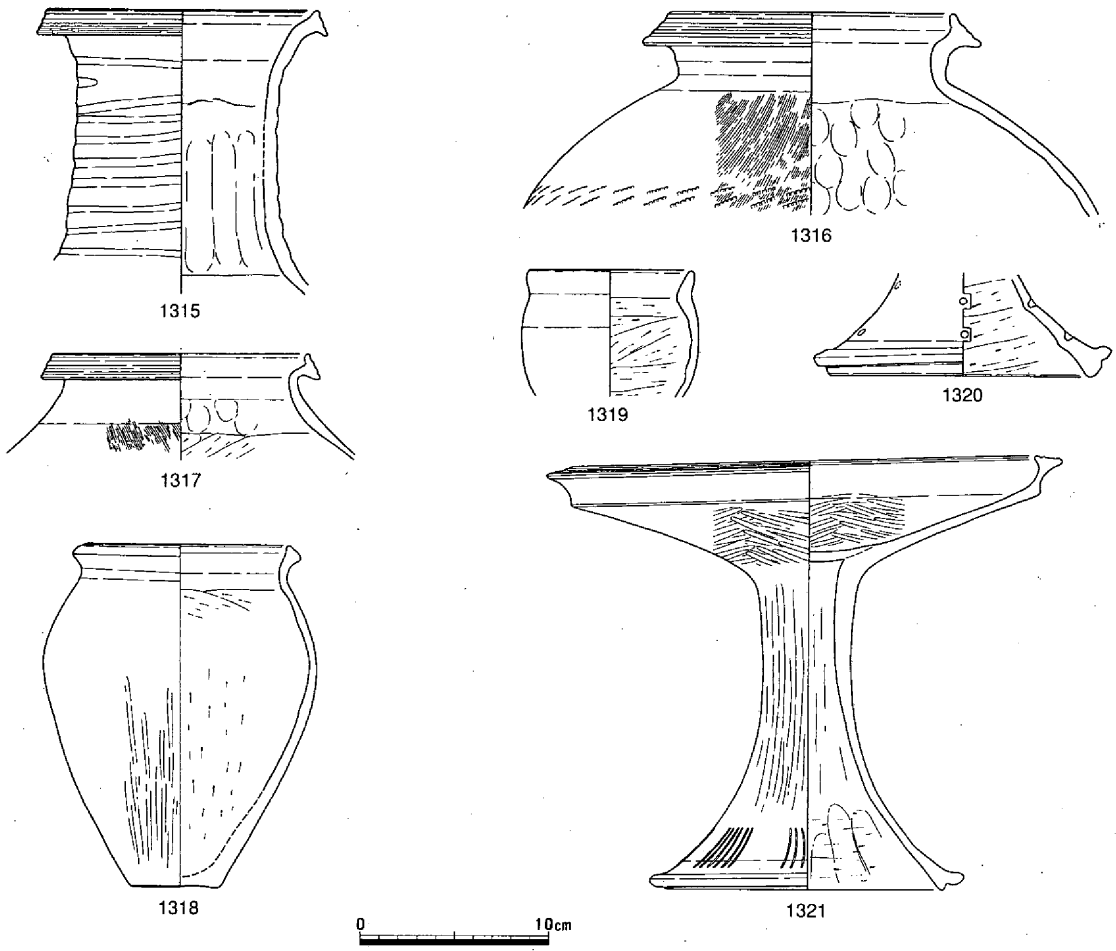
1　茶灰色砂質土
2　黄色粘質土
3　暗茶灰色砂質土

第406図　袋状土壙20（1/30）



1　灰茶色粘質砂
2　淡灰茶色粘質土（黄色粘土ブロックを含む）
3　暗灰茶色砂質土
4　黄茶色粘質土
5　暗茶灰色砂質土
6　茶灰色砂質土

第407図　袋状土壙21（1/30）



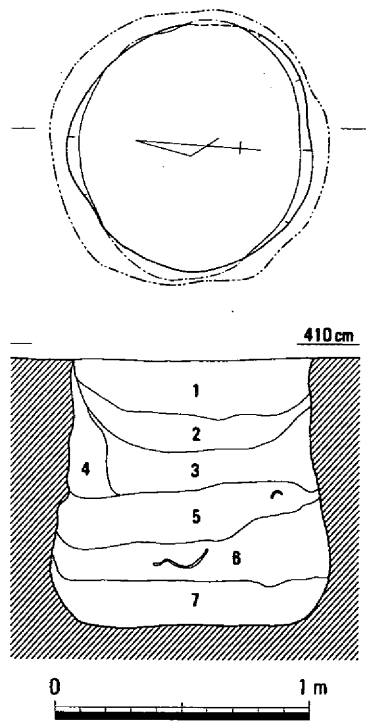
第408図　袋状土壙21　遺物

などの石器で、壺の肩部には貝殻腹縁および押圧による施文が巡らされており、高杯の脚裾部には６～７本を単位としたヘラガキ沈線が８ケ所に施されている。S243は磨製で、楔S244・245はいずれもスクレイパーおよび石包丁からの転用である。以上、当袋状土壙は遺物の特徴から弥・後・Ⅰ期に埋没したものと考えられる。　（江見）

袋状土壙23（第411図）

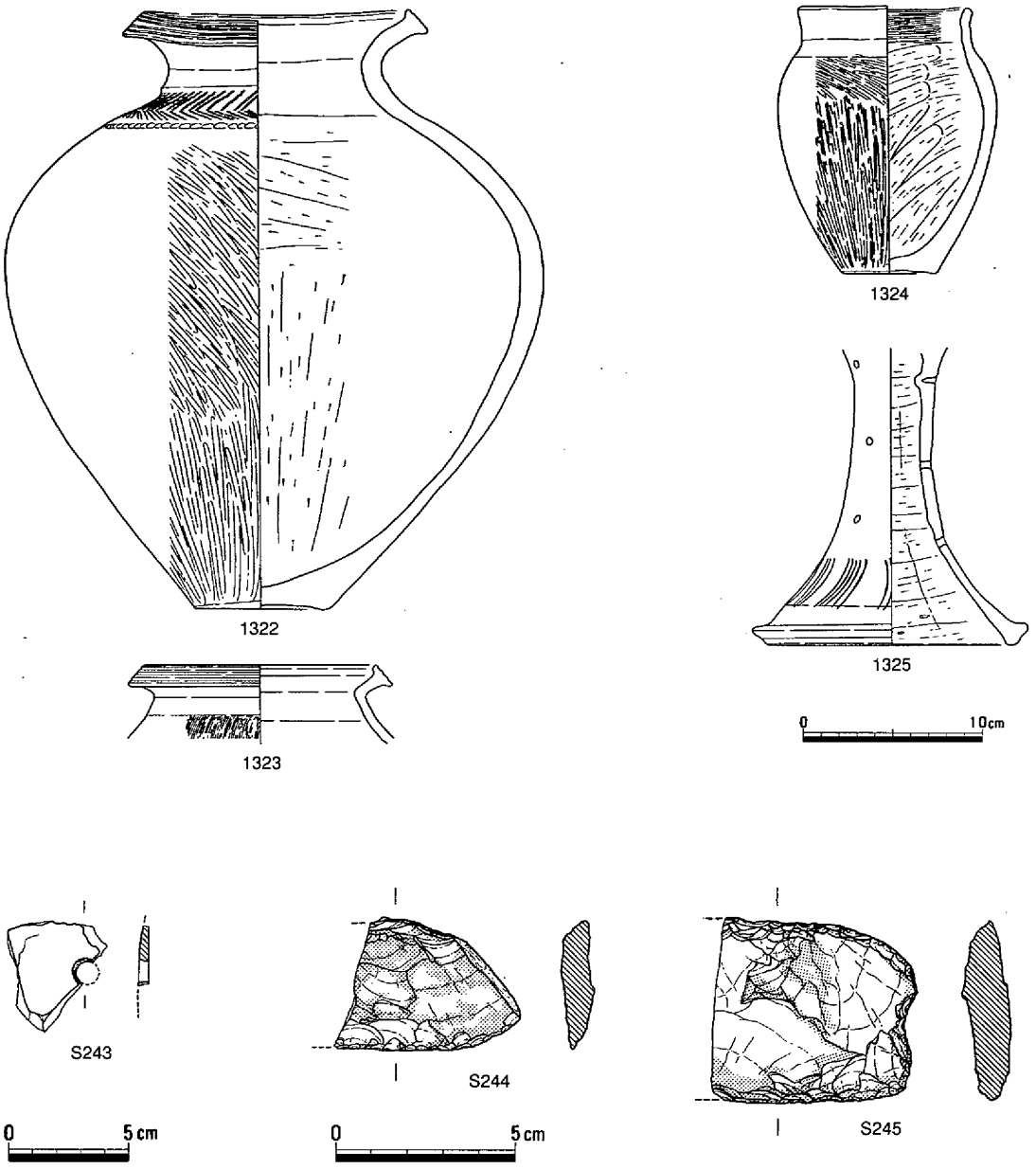
袋状土壙23は、第２微高地中央の北寄りに位置する。平面は最大長125cmの円形で、床面はほぼ平らである。埋土は中央付近が盛り上がっている。

出土遺物には、土器の小片しか認められないが、遺構の時期は弥・後におさまると思われる。　（柴田）



1　暗灰茶色粘質砂（炭を含む）
2　暗灰茶色粘質砂（黄色粘土ブロック・炭を含む）
3　暗茶灰色粘質砂（炭を含む）
4　茶灰色粘質砂（炭を含む）
5　黄茶灰色粘質砂（炭を含む）
6　黄茶灰色粘質砂（炭を含む）
7　淡茶灰色砂質土（炭を含む）

第409図　袋状土壙22（1/30）



第410図　袋状土壙22　遺物

袋状土壙24（第412・413図、写真12－３）

袋状土壙24は、第２微高地中央の北寄りに位置する。竪穴住居33の東隅で重なり、それに切られているようである。平面は最大長163cmの円形であったと推測されるが、以後の崩壊などのためか形状は整っていない。本来の状態かどうか不明だが、一部掘り方中央で段を形成する。床面はほぼ平らである。埋土は、比較的細かく細分することが可能な状態で、中層においては中央付近が盛り上がっているが、それより上の層は南東に傾斜した堆積状況を示す。19・21層は、金子氏により、貝類ではヤマトシジミが主体であり、他にスッポンやウナギ・スズキ・クロダイなどの魚骨も確認された。出土遺物には、壺1326、甕1327～1330、高杯1331～1334、鉢1336・1337、台付鉢1335などがある。

甕1326・1328と鉢1337は、口縁端部が外方に拡張し、内面は頸部までヘラケズリが行われる。

1329・1330は口縁端部が上下に拡張し、肩部内面にはヘラケズリは認められない。高杯は長脚で、口縁端部が水平方向に拡張する。出土遺物から、遺構の時期は弥・後・Ⅰと思われる。　（柴田）

袋状土壙25（第414図）

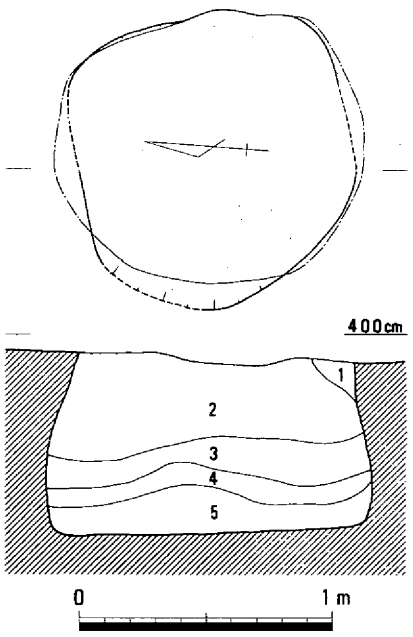
袋状土壙25は、第２微高地中央の北寄りに位置する。竪穴住居35の北東で重なり、それに切られている。平面は径121cmの円形で、床面はほぼ平らである。埋土はややレンズ状の堆積を呈し、下層で土器が出土している。出土遺物には、壺1338・1339、高杯1340などがある。

1339の底部外面はヘラミガキが行われている。1340は小片であるが、口縁部が水平方向に拡張する。遺物などから、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。　（柴田）

袋状土壙26（第415図、写真13－１）

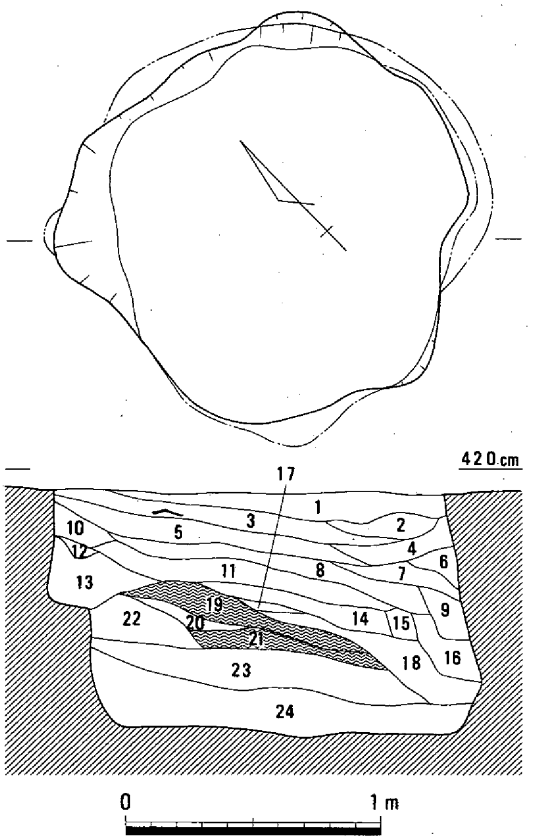
袋状土壙26は、第２微高地中央のやや北寄り、竪穴住居30の東に位置する。平面は円形で、検出面での径は99cm、床面で114cmを測る。埋土の下層は、水平堆積に近い。出土遺物には、甕1341・1342などがある。

1341の口縁端部は上下に拡張し、凹線を施す。内面のヘラケズリは、肩部まで及んでいる。遺物などから、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。　（柴田）



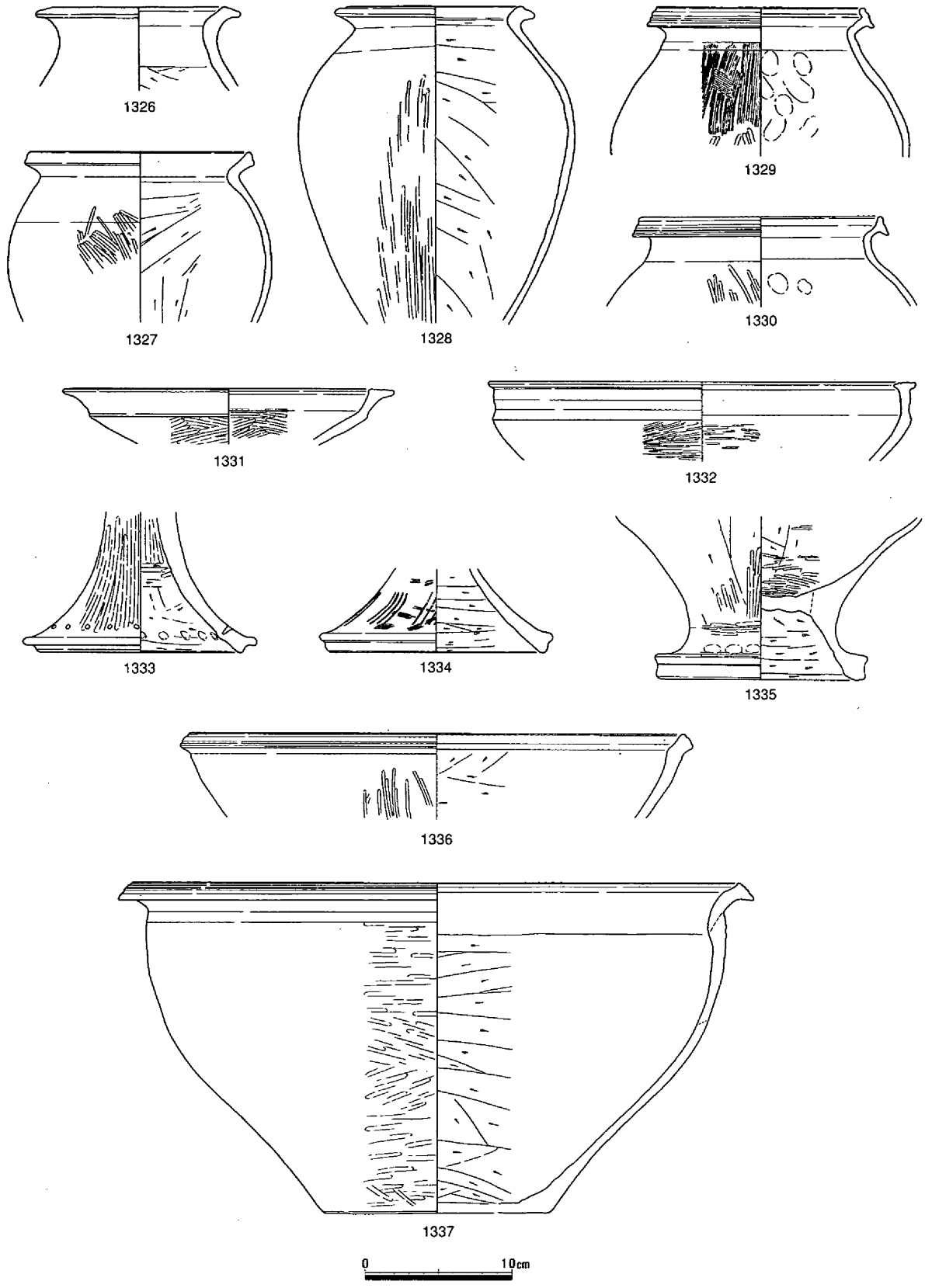
1　明黄灰褐色粘質土
2　黄褐色粘質土
3　黄灰褐色粘質土
4　淡黄褐色粘質土
5　黄灰色粘質土

第411図　袋状土壙23（1/30）



1　黄茶褐色粘質微砂
2　茶灰褐色粘質微砂（炭を含む）
3　暗茶褐色粘質微砂
4　暗黄褐色粘質土
5　暗褐色粘質土
6　明黄褐色粘質土
7　褐色粘質土
8　暗黄灰褐色粘質土
9　灰黄褐色粘質土
10　黄灰褐色粘質土
11　明黄茶褐色粘質微砂
12　黄褐色粘質土
13　黄灰褐色粘質土
14　明黄灰色粘質土
15　明灰色粘質土
16　淡黄灰色粘質土
17　暗黄灰色粘質土
18　黄灰色粘質土
19　暗灰色粘質土（貝を多量に含む）
20　淡黄褐色粘質土
21　暗黄灰色粘質土（貝を多量に含む）
22　黄茶褐色粘質土
23　暗黄灰色粘質土
24　灰黄茶色粘質土

第412図　袋状土壙24（1/30）



第413図　袋状土壙24　遺物

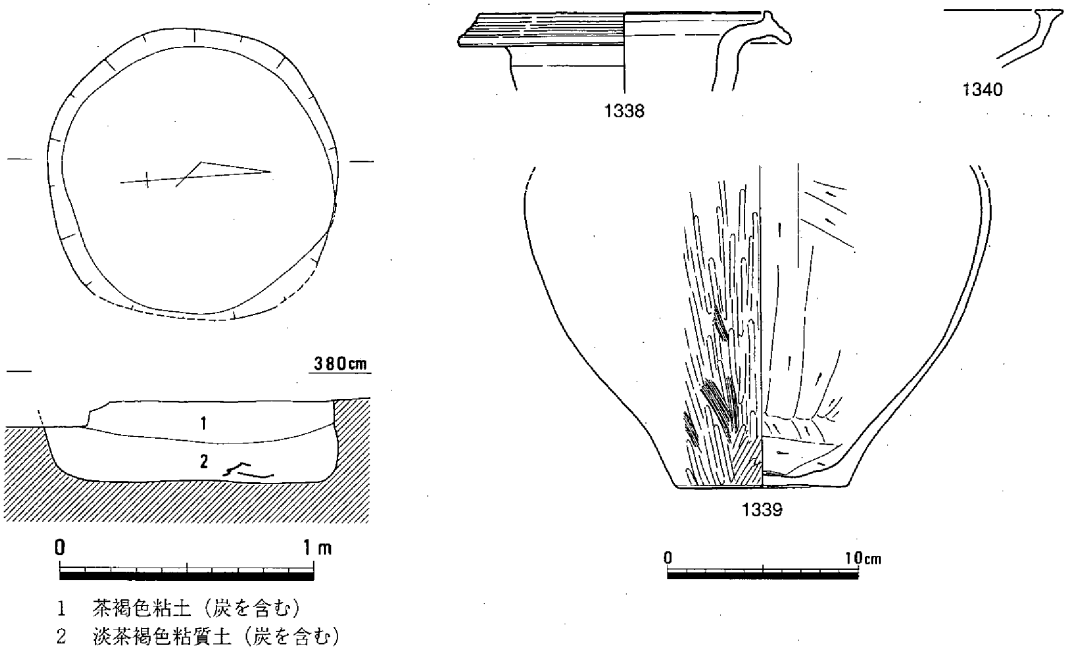
袋状土壙27（第416図）

袋状土壙27は、第２微高地中央のやや北寄り、竪穴住居34の南西に位置する。平面は径154cmの円形で、床面はほぼ平らである。埋土は水平堆積に近く、小量の土器が出土している。出土遺物には、甕1343、高杯1344などがある。

1343は小形の甕で、口縁端部は丸くおさまる。1344はヘラ描きの線刻と５条の沈線がめぐり、裾端部が水平方向に拡張する。遺物などから、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。　（柴田）

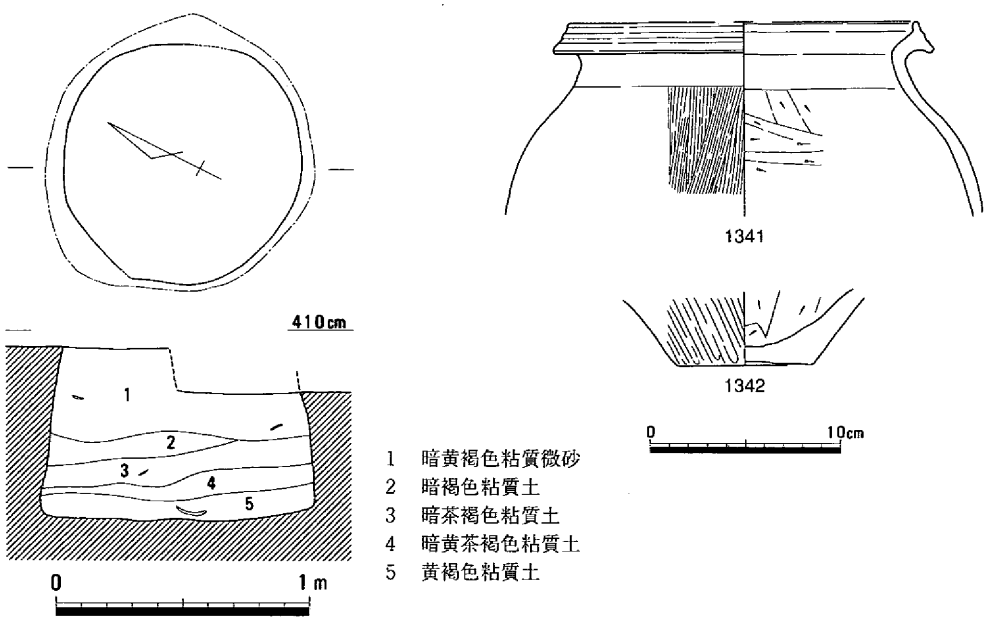
袋状土壙28（第417～423図、写真13－２、72・73）

袋状土壙28は、第２微高地中央のやや北東寄りに位置する。平面は径140cmの不整円形で、床面は



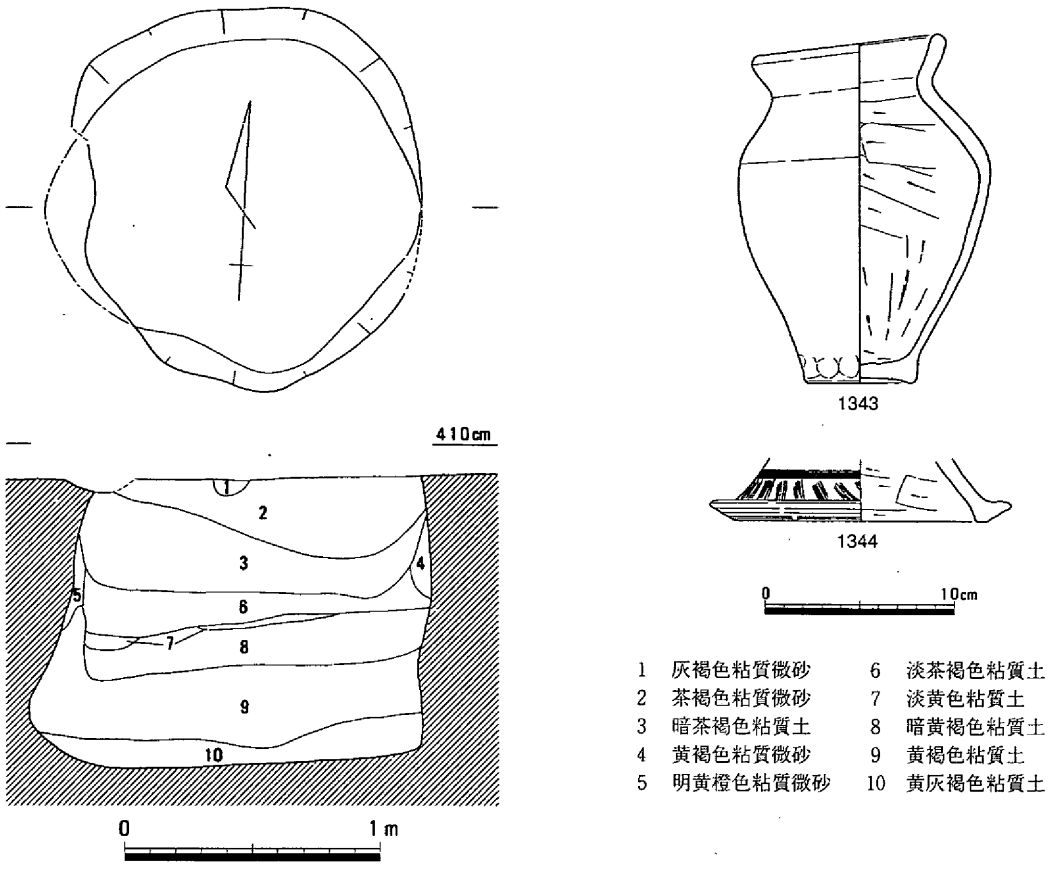
1　茶褐色粘土（炭を含む）
2　淡茶褐色粘質土（炭を含む）

第414図　袋状土壙25（1/30）・遺物

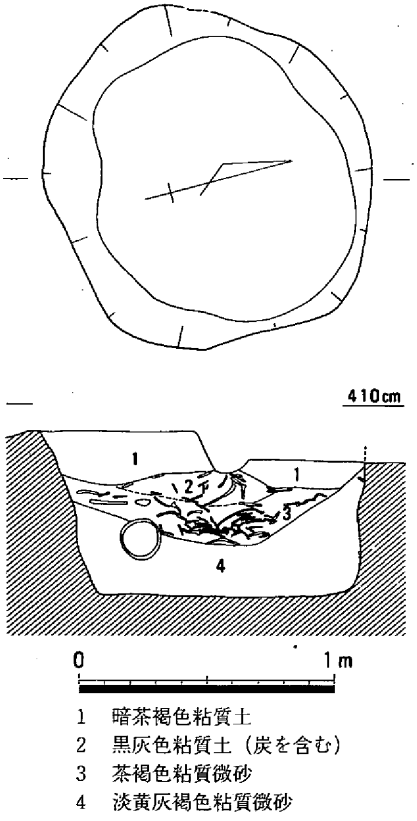


1　暗黄褐色粘質微砂
2　暗褐色粘質土
3　暗茶褐色粘質土
4　暗黄茶褐色粘質土
5　黄褐色粘質土

第415図　袋状土壙26（1/30）・遺物



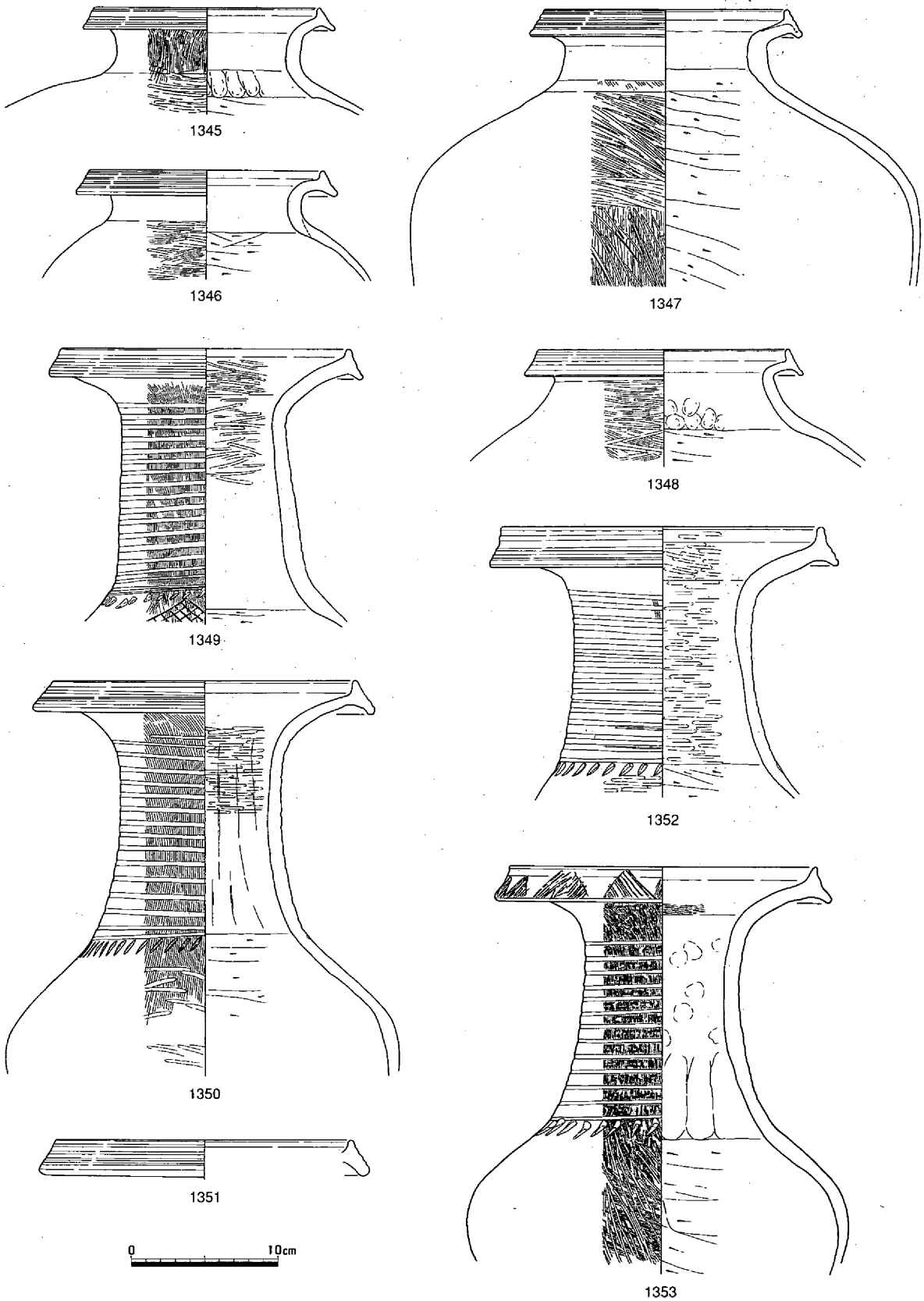
第416図　袋状土壙27（1/30）・遺物



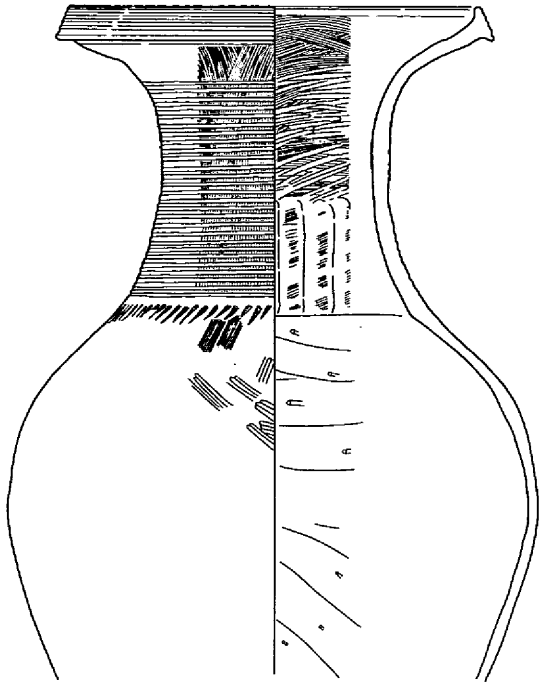
第417図　袋状土壙28（1/30）

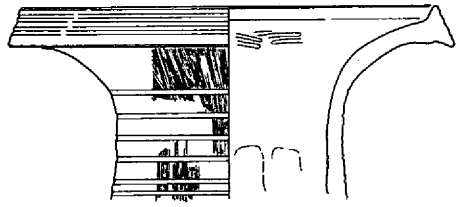
ほぼ平らである。埋土の中層からは多量の土器などが出土している。土器の個体数は、図示したものを含め、短頸壺６、長頸壺21、小形壺１、甕16、高杯16、鉢６、台付鉢４である。他に打製石包丁Ｓ246・247、砥石Ｓ248・249などもある。土器組成については、長頸壺が目立っており、周辺の立田遺跡（土壙３）や津寺一軒屋遺跡でも同様な遺構が存在する。

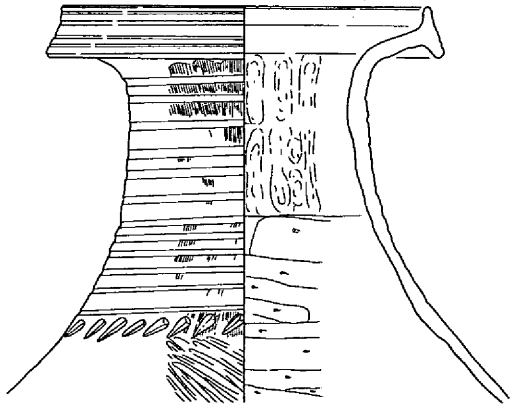
短頸壺は口縁端部が上下に拡張し、凹線がめぐる。胴部内面はヘラケズリ、外面はヘラミガキが行われている。長頸壺の口縁端部の下方への拡張の程度には、大きいもの1349～1353・1356・1359・1360・1363、小さいもの1354・1355・1357・1358・1361がある。また、ヘラケズリが頸部に及ぶもの1355～1357・1360・1361・1363と及ばないものが認められる。甕の口縁部には、さまざまなものが認められ、それぞれ１～３個体程度であるが、下方よりも上方に強く肥厚しているもの1385・1386・1390・1392・1393が６個体で最も多

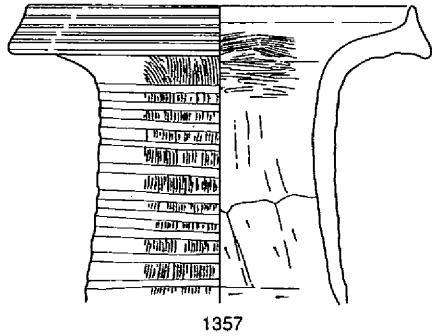


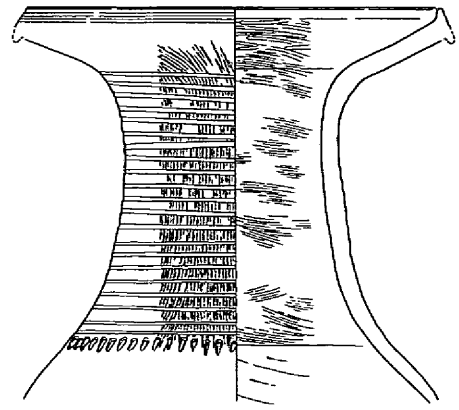
第418図　袋状土壙28　遺物（１）

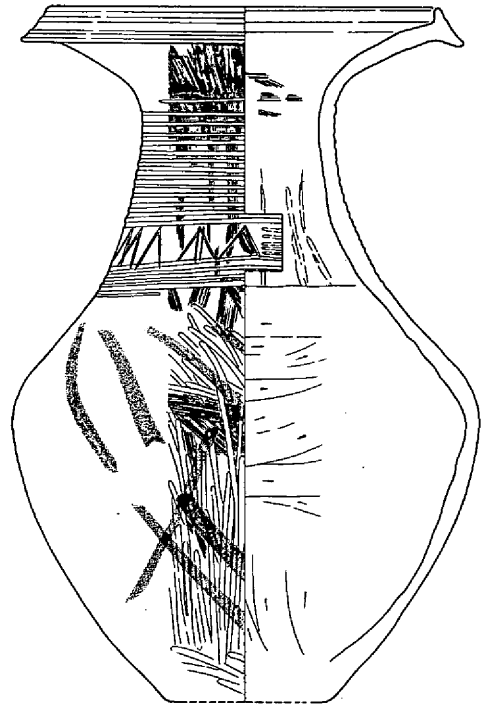

1354

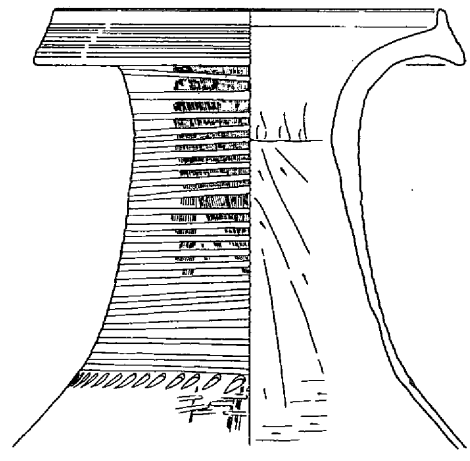

1355


1356


1357

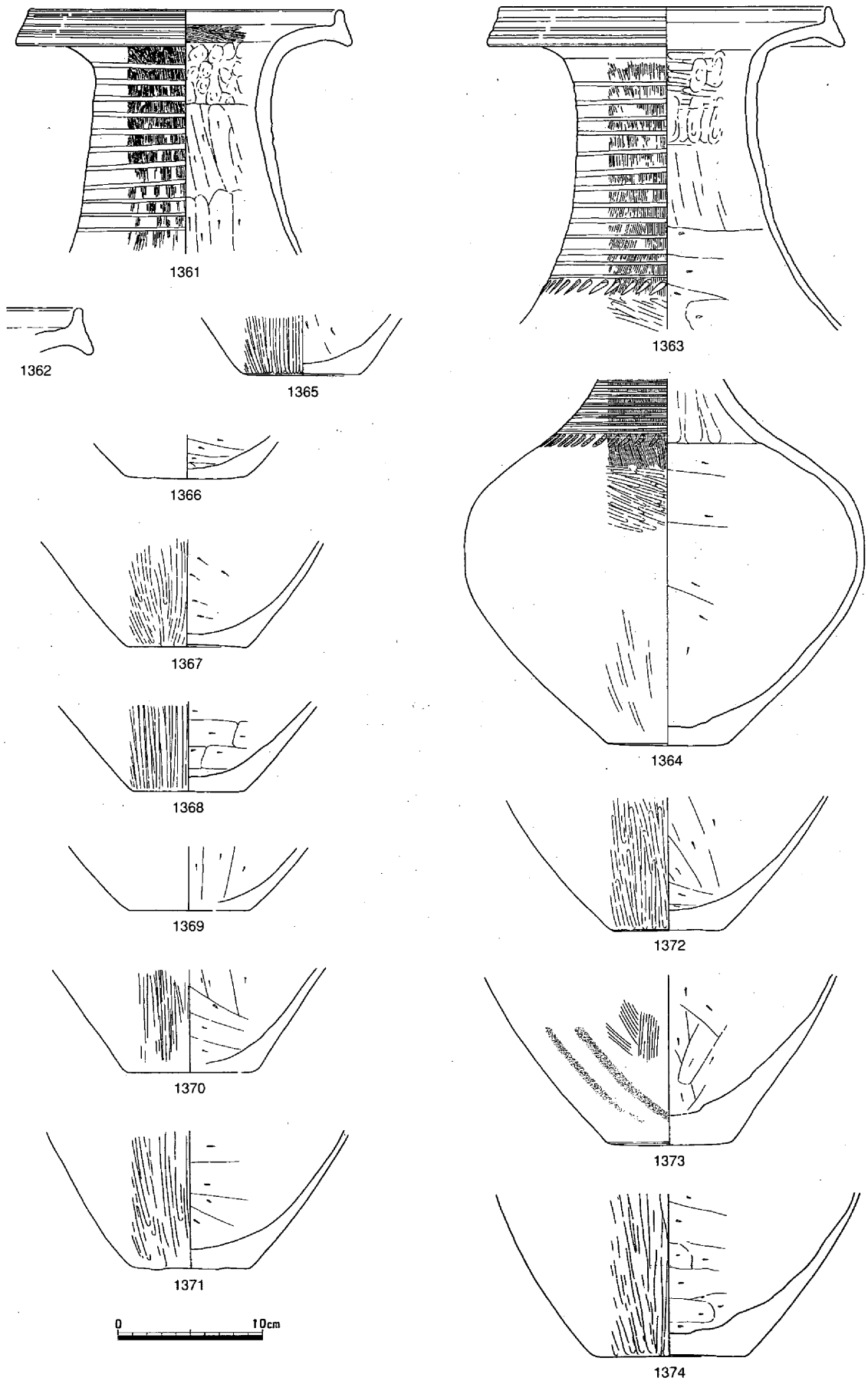

1358


1359

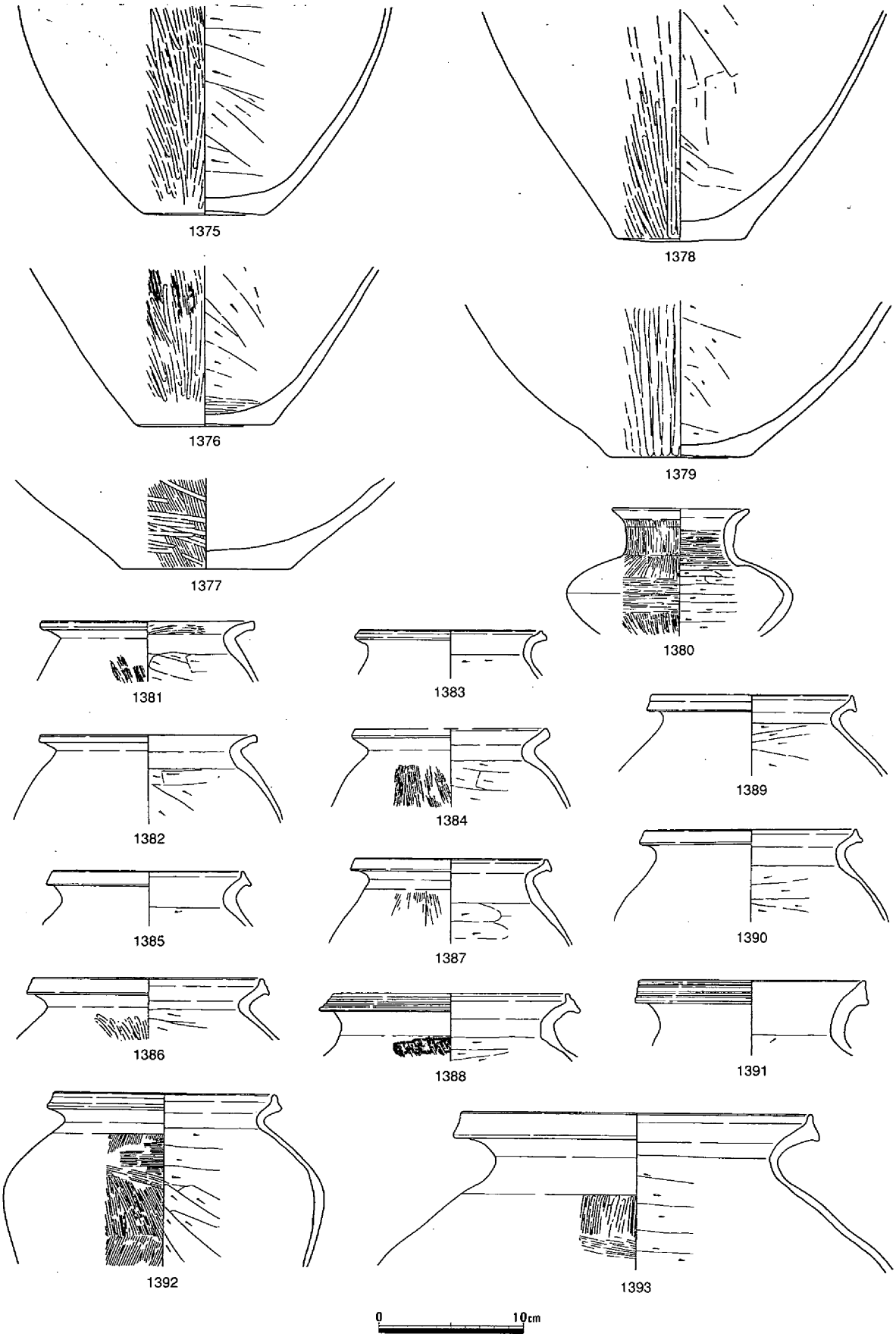

1360

0　10cm

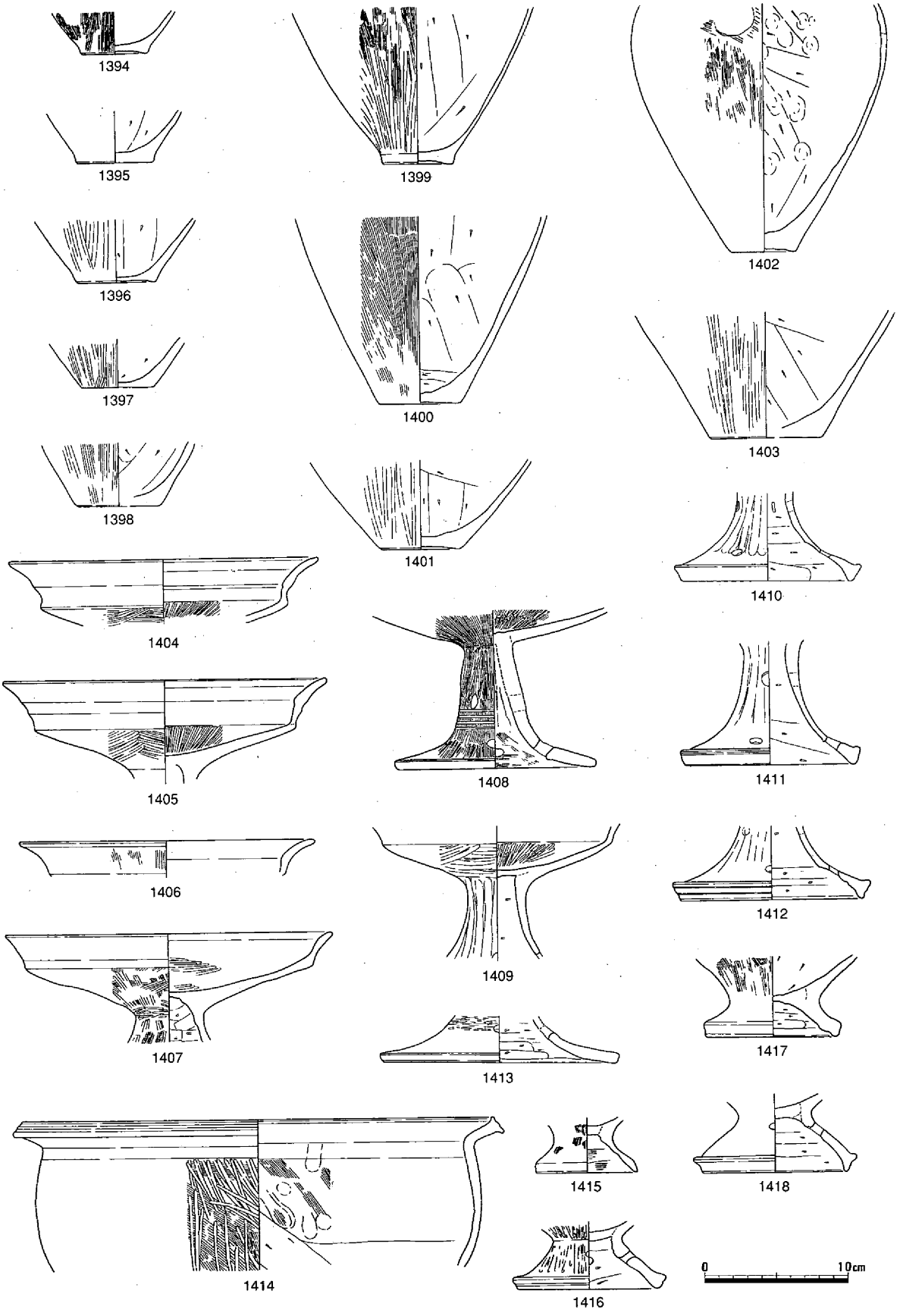
第419図　袋状土壙28　遺物（2）



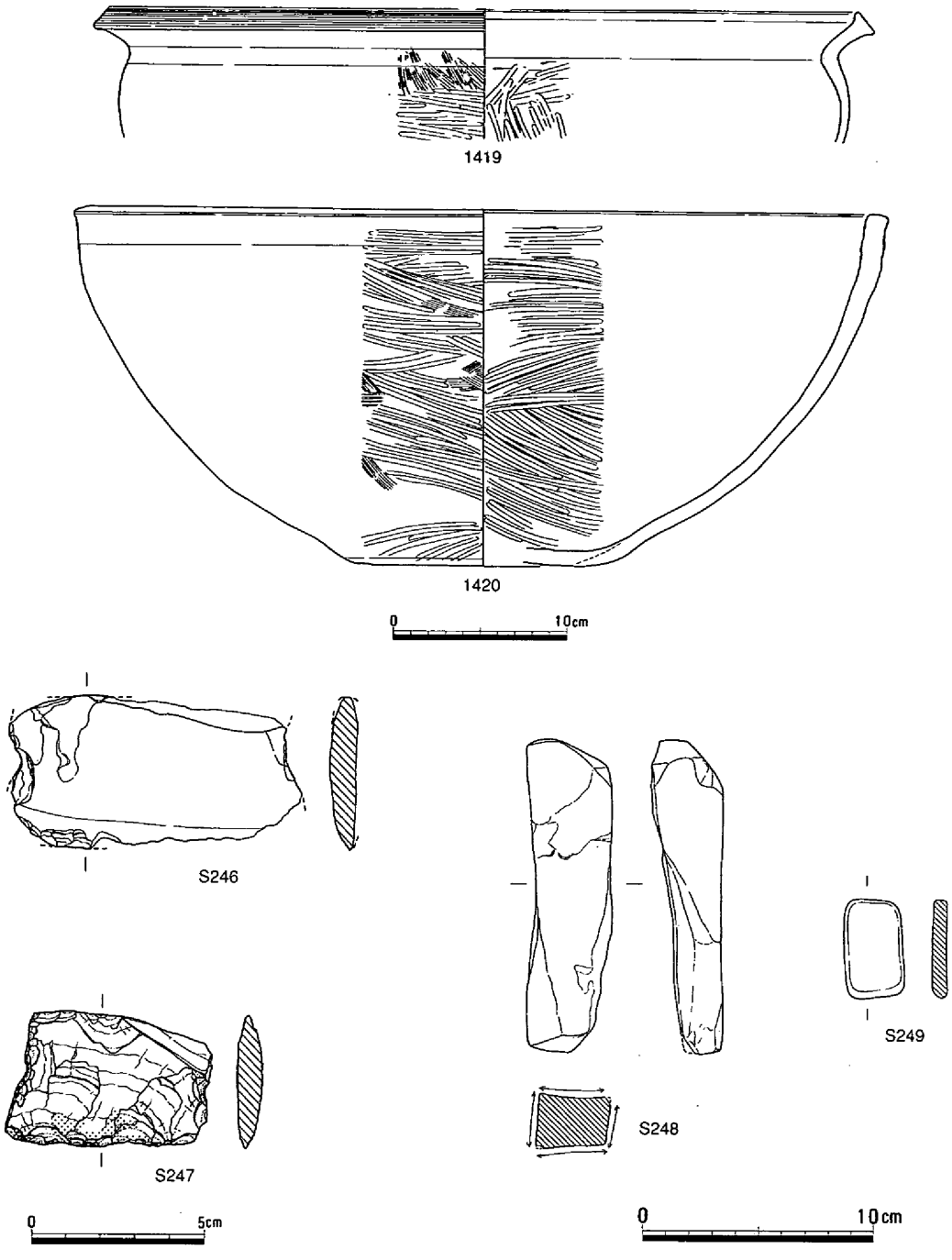
第420図　袋状土壙28　遺物（３）



第421図　袋状土壙28　遺物（4）



第422図　袋状土壙28　遺物（５）



第423図　袋状土壙28　遺物（6）

い。高杯はすべて長脚で、口縁部は一旦上方に立ち上がって外反するものと、杯部からそのまま外反するものがあり、裾端部は、上方に肥厚するものと、丸くおさまるものがある。鉢の口縁端部は拡張するものと、肥厚せず水平面を有するものがある。台付鉢の裾部も、上方に肥厚するものとしないものがある。遺物などから、遺構の時期は、弥・後・Ⅱと思われる。　（柴田）

袋状土壙29（第424図、写真13－3）

袋状土壙29は、第2微高地中央、竪穴住居36の西に位置する。平面は、検出面で長径109cmの楕円形、床面はほぼ平らで長径138cmを測る。埋土の最下層は床面中央のみに堆積し、3層も中央が盛り

上がっている。出土遺物には、壺1421、甕1422・1423、高杯1424、土製紡錘車Ｃ86などがある。

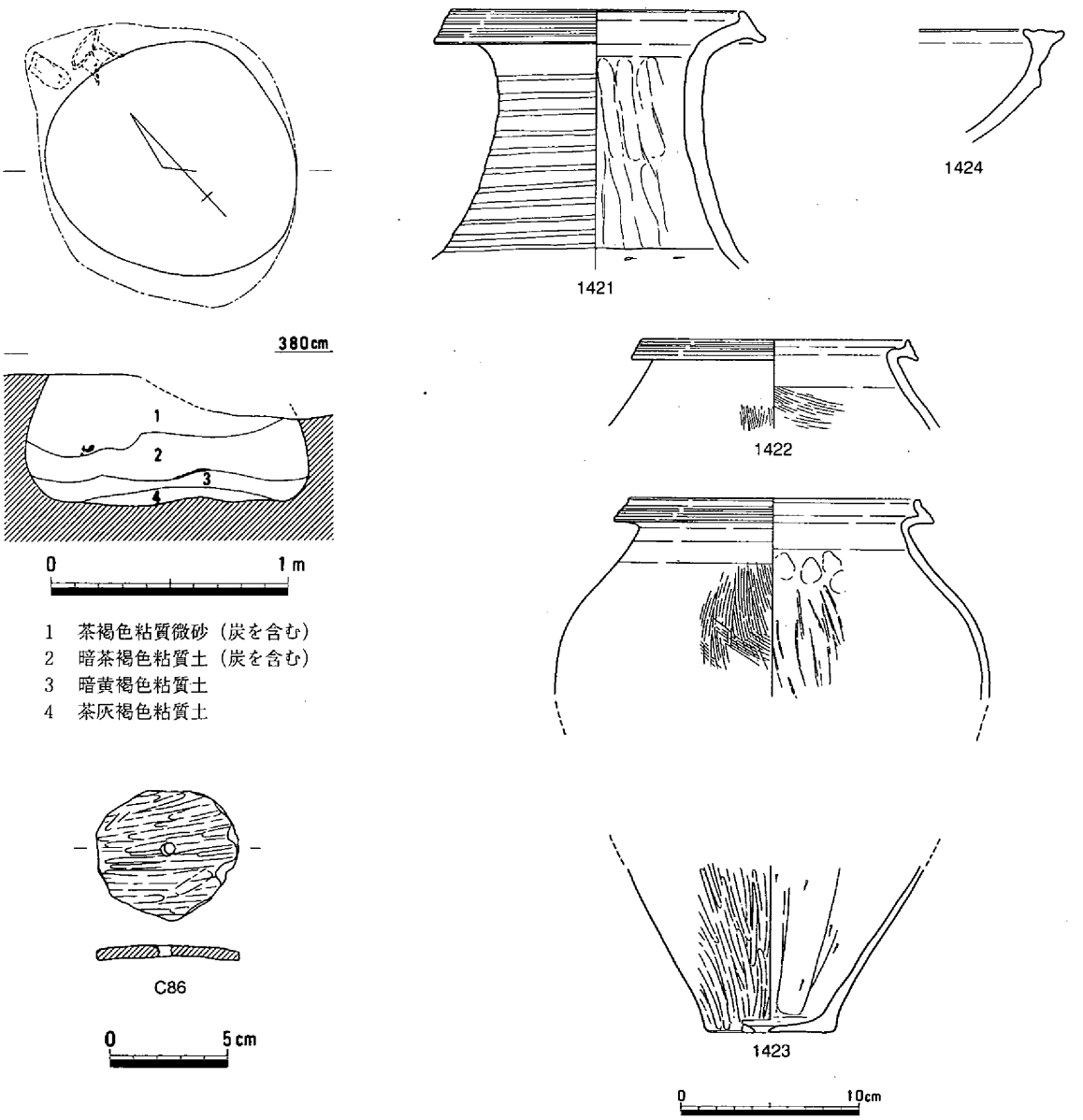
1421は長頸壺で、内面のヘラケズリは肩部までで、頸部外面には螺旋状の沈線がめぐる。1423の口縁端部は上方に折り上げており、肩部内面には、ヘラケズリの工具端が接触した痕跡が認められる。1424は大形の高杯で、杯部は深い。口縁端部は水平方向に拡張し、面を形成する。遺物などから、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。（柴田）

袋状土壙30（第425図）

袋状土壙30は、第２微高地中央、竪穴住居36の南西に位置する。平面は140×114cmの隅丸長方形で、いわゆる方形土壙の可能性が高い。出土遺物は少量の土器であるが、弥・後・Ⅳの土壙墓５に切られており、遺構の時期は、弥・後・Ⅲ～Ⅳと思われる。（柴田）

袋状土壙31（第426・427図、写真73）

袋状土壙31は、第２微高地中央のやや北東寄り、竪穴住居40の北西に位置する。平面は長径231cm



第424図　袋状土壙29（1/30）・遺物

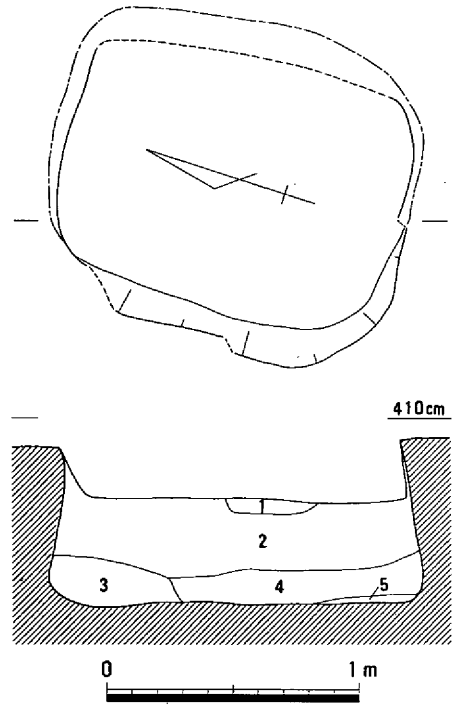
の楕円形で、床面はほぼ平らである。出土遺物には、台付直口壺1425、甕1426、高杯1428～1433、台付鉢1434、打製石包丁S250などがある。

1425は算盤玉形の胴部に、長くラッパ状に開く口頸部を有する。頸部内面はヘラケズリが認められる。1428～1430は、いずれも口縁部が短く延び、端部は水平方向に面を形成する。1431・1432は裾端部が水平方向に拡張し、3個1対の竹管紋が施される。1434は小形の台付鉢で、口縁部は内湾している。遺物などから、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。（柴田）

袋状土壙32（第428図）

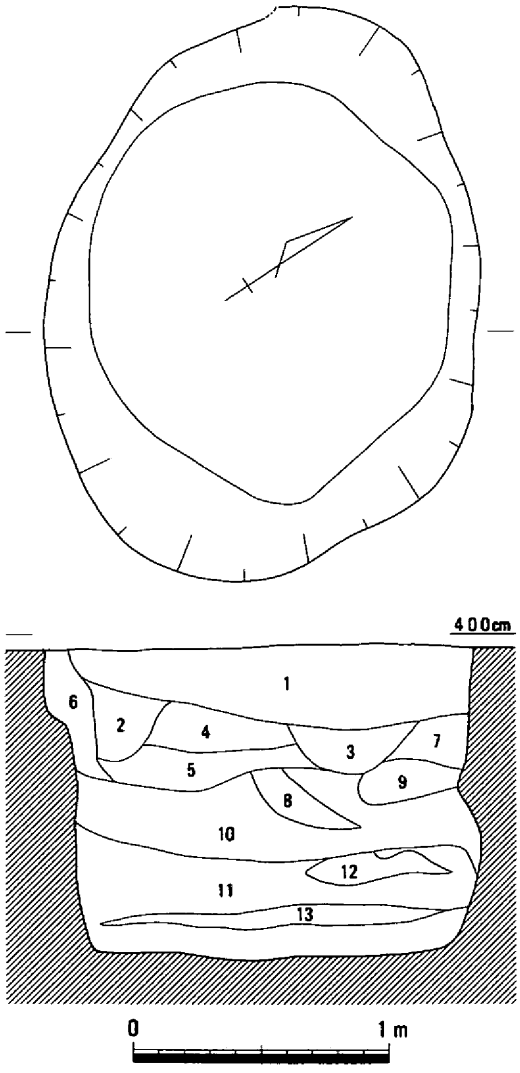
袋状土壙32は、第2微高地中央のやや北東寄りに位置する。弥・後・Ⅰの竪穴住居40の北西辺で重なり、それに切られている。平面は径149cmの円形で、床面はほぼ平らである。床面では高杯が出土している。出土遺物には、壺1435、甕1436～1442、高杯1443～1446、製塩土器1447などがある。

1435は口縁端部が上下に拡張し、頸部には凹線がめぐる。1436・1437・1439は口縁端部が下方に強く



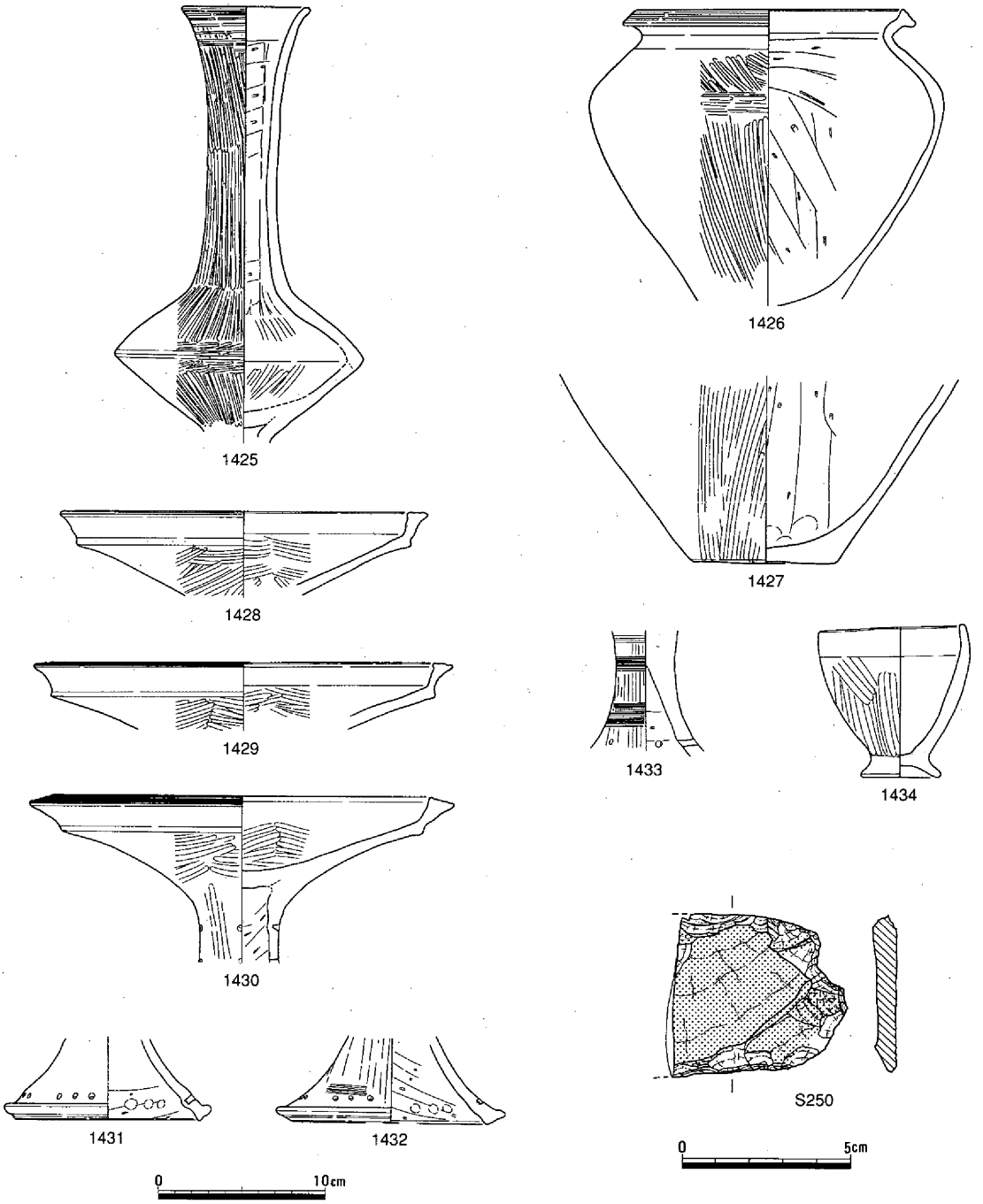
1　明黄褐色粘質土
2　暗茶褐色粘質土
3　黄褐色粘質土
4　暗黄褐色粘質土
5　暗黄灰褐色粘質土

第425図　袋状土壙30（1/30）



1　暗茶褐色粘質微砂
2　茶灰褐色粘質土
3　茶褐色粘質土
4　淡黄茶褐色粘質土
5　淡茶灰褐色粘質土
6　明黄褐色粘質土
7　黄褐色粘質土
8　淡黄色粘質土
9　淡黄色粘質土
10　黄茶褐色粘質土
11　明黄色粘質土
12　淡黄灰色粘質土
13　黄灰色粘質土

第426図　袋状土壙31（1/30）

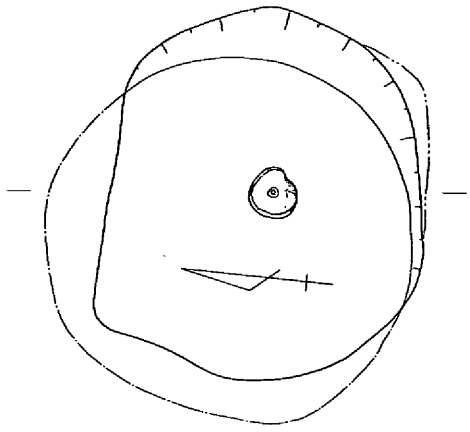


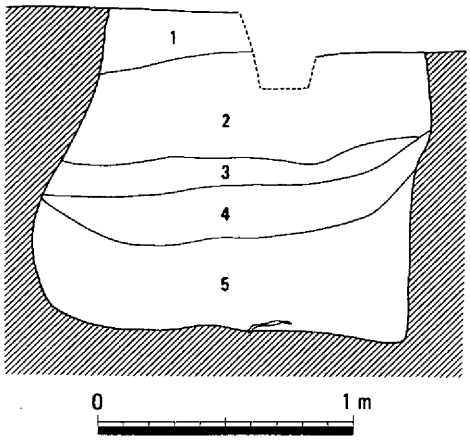
第427図　袋状土壙31　遺物

拡張し、1438では上方に肥厚するが、いずれも内面のヘラケズリは頸部付近まで達している。1443・1444の口縁部は短く立ち上がり、端部は水平方向に面を形成する。遺物や遺構の切り合いなどから、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。（柴田）

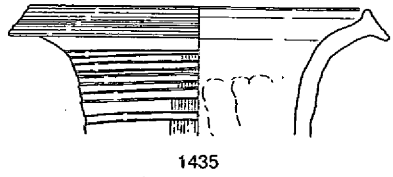
袋状土壙33（第429図）

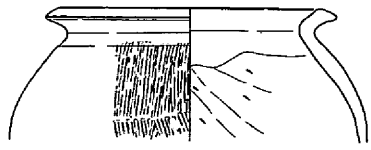
竪穴住居40を切る状態で検出された遺構である。上部はかなり削平されているが、上面径109cm、低面径99cmを測り、底面形は円形を呈する。深さは検出面から30cmを測り、底面は平坦である。埋土は４層に区分されたが、いずれも茶褐色、黄褐色、灰褐色系粘質土で埋まっていた。遺物は土器、石

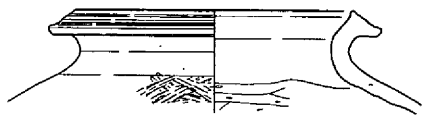


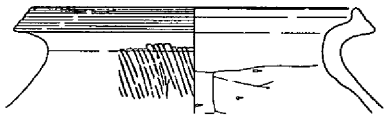


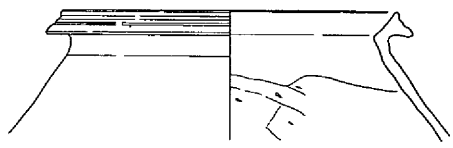
1　暗茶褐色粘質微砂
2　灰褐色粘質土
3　淡黄灰色粘質土
4　黄灰褐色粘質土
5　黄褐色粘質土

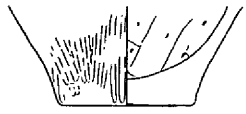

1435

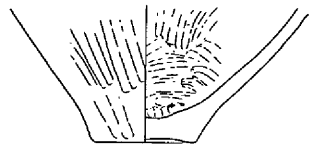

1436

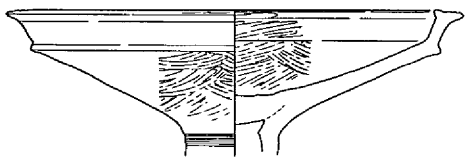

1437

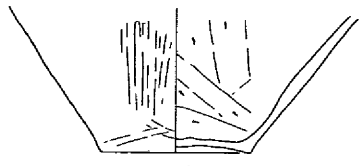

1438

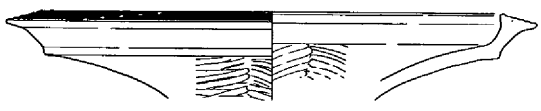

1439

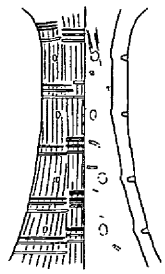

1440


1441

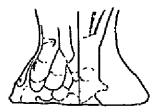

1443


1442


1444


1445

1446


1447

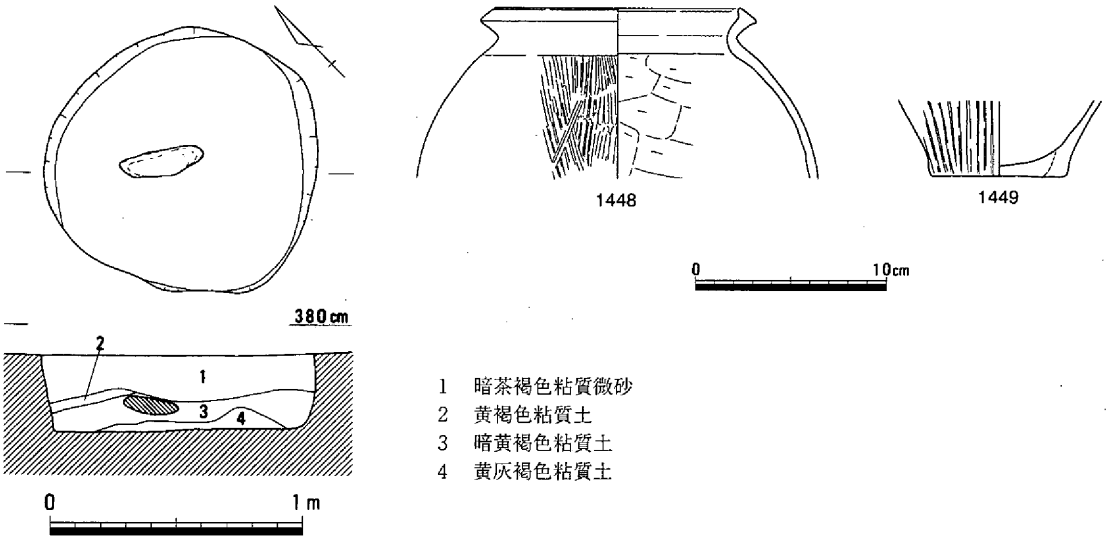
0　10cm

第428図　袋状土壙32（1/30）・遺物

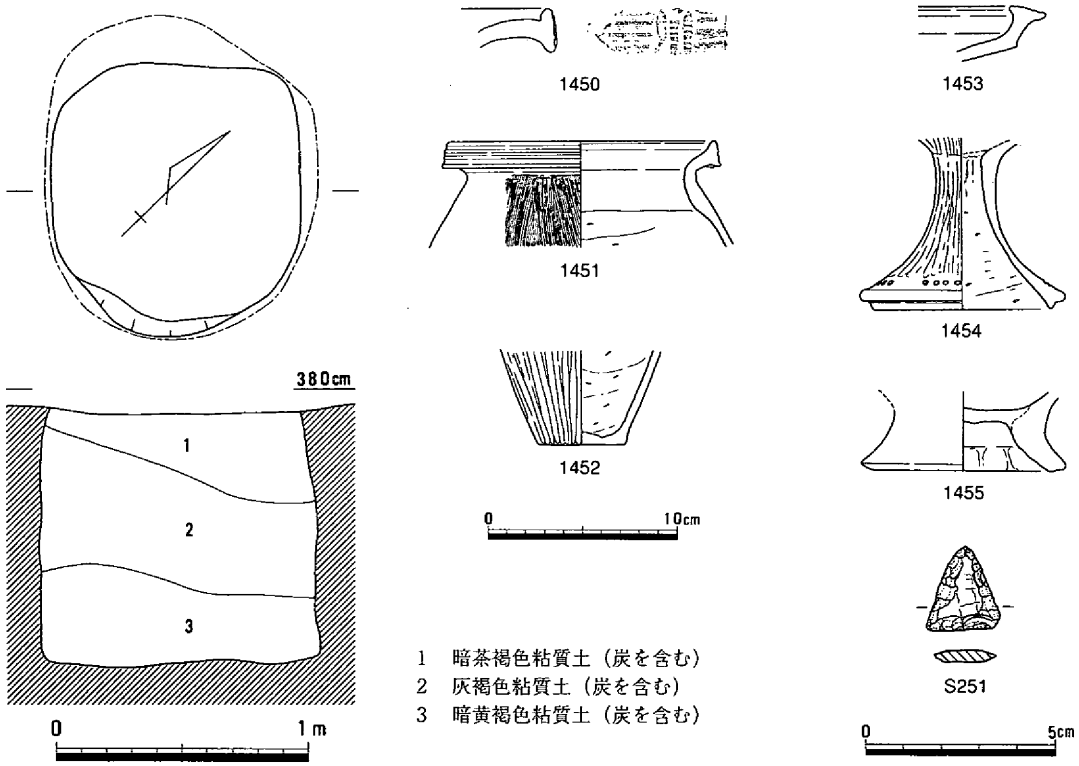
器が出土している。土器1448・1449はいずれも甕である。石器は図示してないが石鏃片が出土している。これらの遺物からみて、時期は弥・後・Ⅱと思われる。　（松本）

袋状土壙34（第430図）

袋状土壙33の南１ｍほどの位置で、竪穴住居40を切る状態で検出された。上部は削平を受けているが、上面径108cm、底面径128cmを測り、底面形は不整楕円形を呈する。深さは検出面から99cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は３層に区分され、上層から暗茶褐色、灰褐色、暗黄褐色粘質土で埋ま



第429図　袋状土壙33（1/30）・遺物



第430図　袋状土壙34（1/30）・遺物

るが、いずれの土層にも炭を含んでいる。遺物は土器、石器が出土している。土器1450は壺、1451・1452は甕、1453・1454は高杯、1455は台付鉢である。S251はサヌカイト製の石鏃である。少し古い遺物も含まれてはいるが、この遺構の時期は弥・後・Ⅰと思われる。（松本）

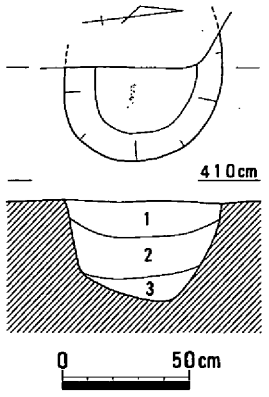
袋状土壙35（第431図）

竪穴住居41の南１ｍほどの位置で、袋状土壙37に切られる状態で検出された。上面径は66cm、底面径は40cmを測る。底面形は明瞭でないが、恐らく楕円形を呈すると思われる。深さは検出面から40cmを測り、埋土は３層に区分された。時期は弥・後・Ⅰと思われる。（松本）

袋状土壙36（第432～434図、写真74）

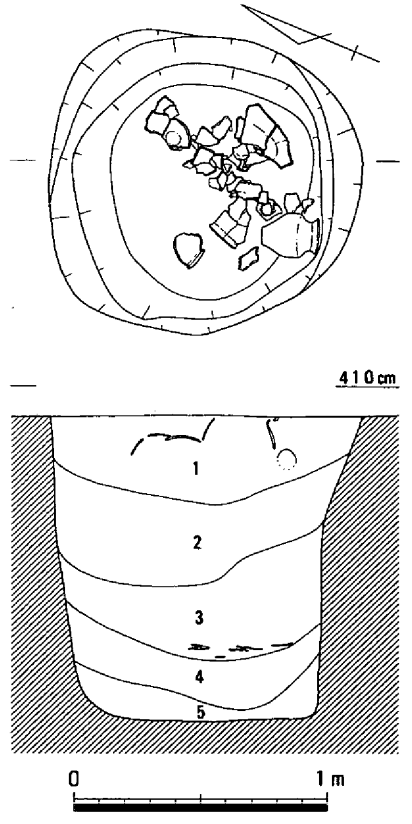
竪穴住居43の南２ｍほどの位置で単独に検出された遺構である。上部は削平を受けているが、上面径は125cm、底面径85cmを測り、底面形は不整楕円形を呈する。深さは検出面から121cmを測り、底面は平坦である。埋土は５層に区分されるが、１～４層は褐色系粘質土、最下層は黄灰色粘質土である。

遺物は土壙から大量に出土したが、主な遺物は土器、石器である。図示した主な土器は壺1456・1457・1459、甕1458、1460～1462、高杯1463・1464、蓋1465などである。1456はほぼ完形の短頸広口壺である。口縁端部はやや丸くなり、胴部の最大径は中央部に位置する。器壁外面にはタテ、ヨコのヘラミガキが施されている。内面は頸部付近が指ナデ、胴部以下はヘラケズリの調整となっている。1457は長頸の壺である。やや内傾する口縁部端面に２条の凹線文、頸部にはヘラ描きの沈線文が10条施されている。高杯1463・1464は杯部に稜をもって外反するもので、口縁端部上面に凹線文が1463には４条、1464には３条施されている。1465はツマミをもつ蓋で４ヶ所に穿孔をもつ。石器S252は欠損しているが石匙と思われる。これらの遺物からみて時期は弥・後・Ⅰと思われる。（松本）



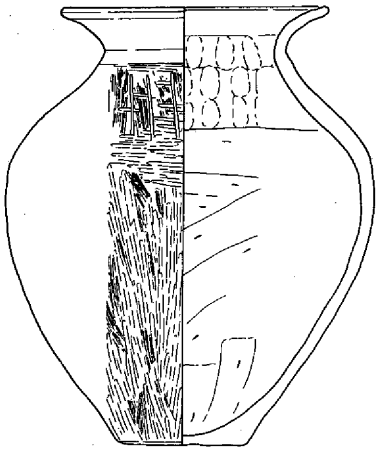
1　暗灰茶褐色粘質微砂
2　暗褐色粘質土
3　暗黄褐色粘質土

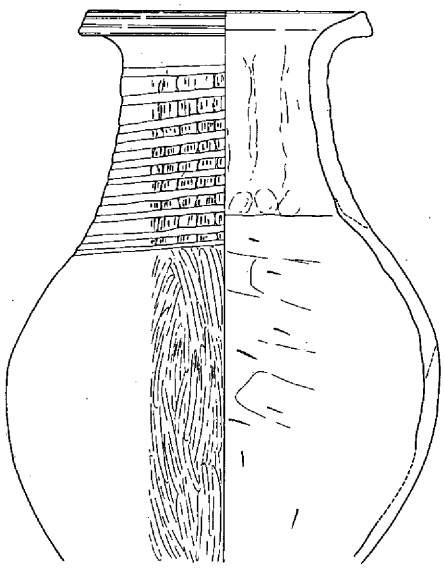
第431図　袋状土壙35（1/30）

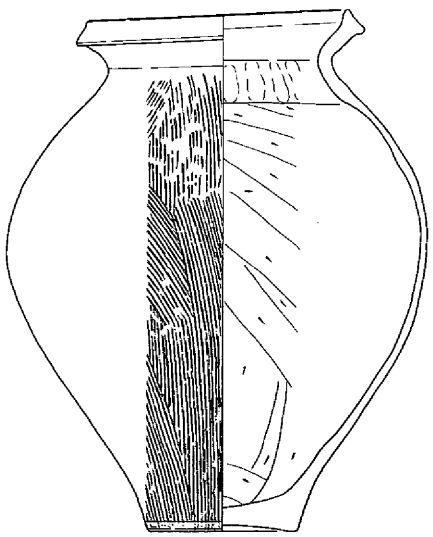


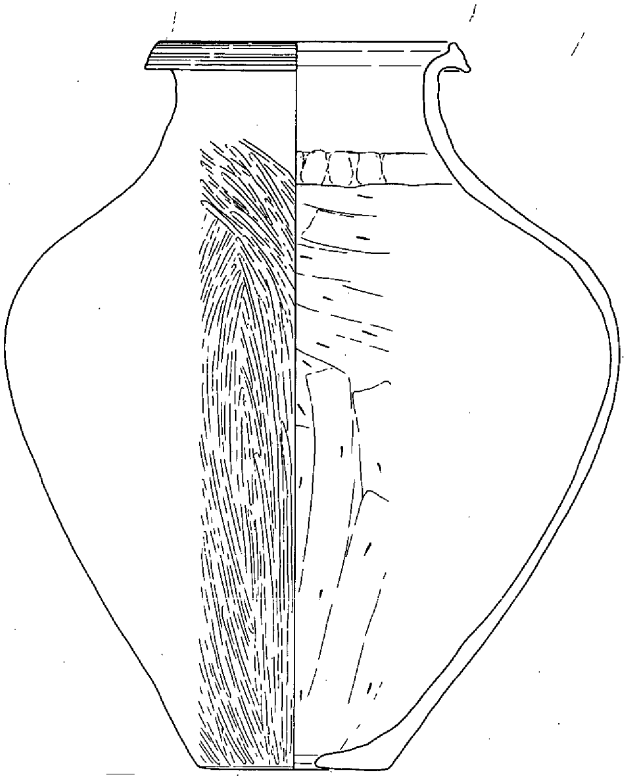
1　灰褐色粘質土（土器を含む）
2　黄灰褐色粘質土
3　暗黄灰褐色粘質土
4　茶褐色粘質土
5　黄灰色粘質土

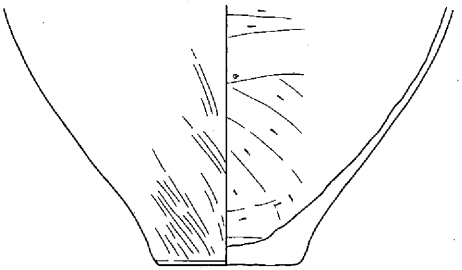
第432図　袋状土壙36（1/30）

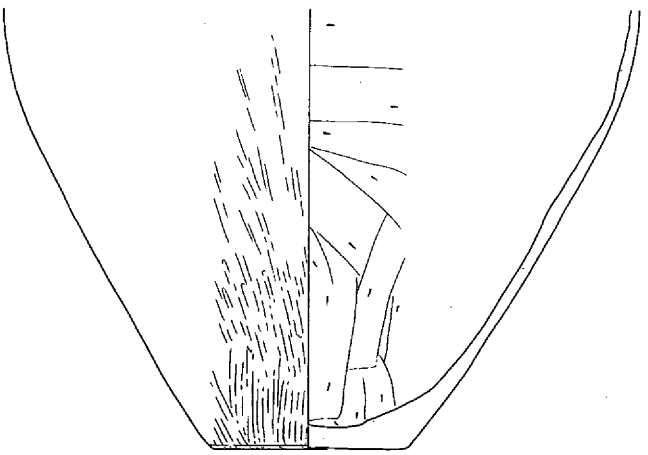

1456

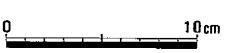

1457


1458

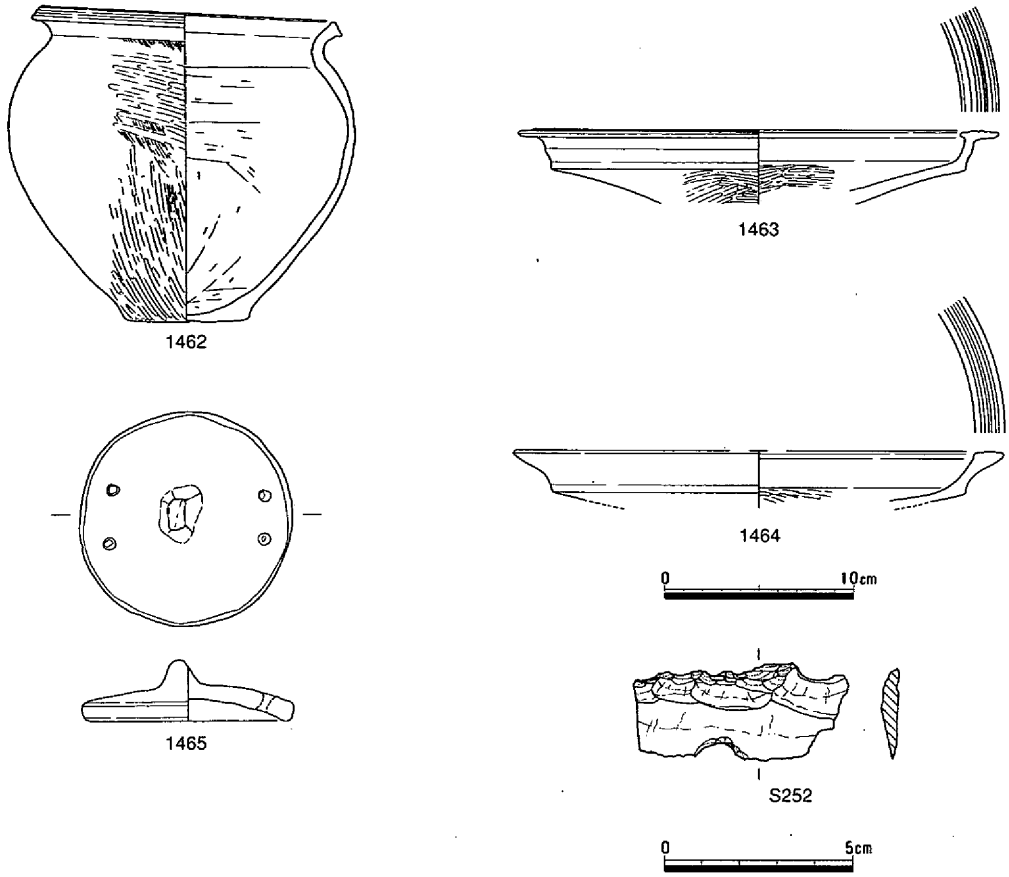

1459


1460


1461



第433図　袋状土壙36　遺物（１）

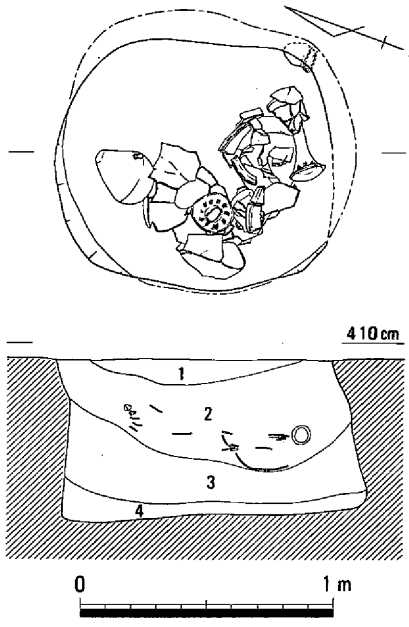


第434図　袋状土壙36　遺物（２）

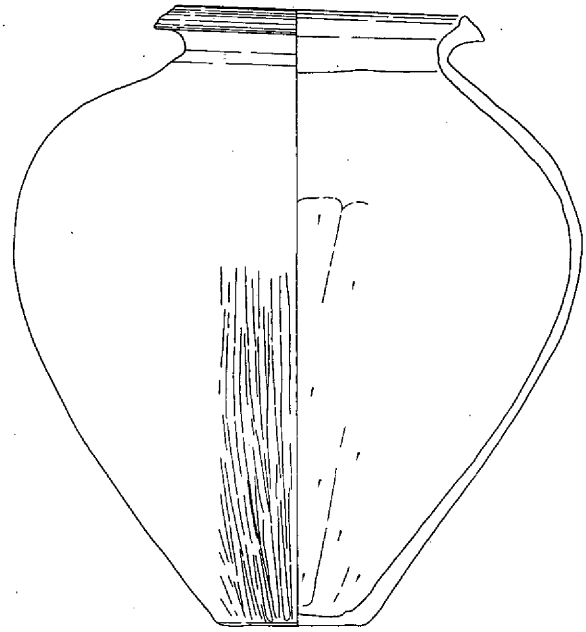
袋状土壙37（第435～437図、写真75）

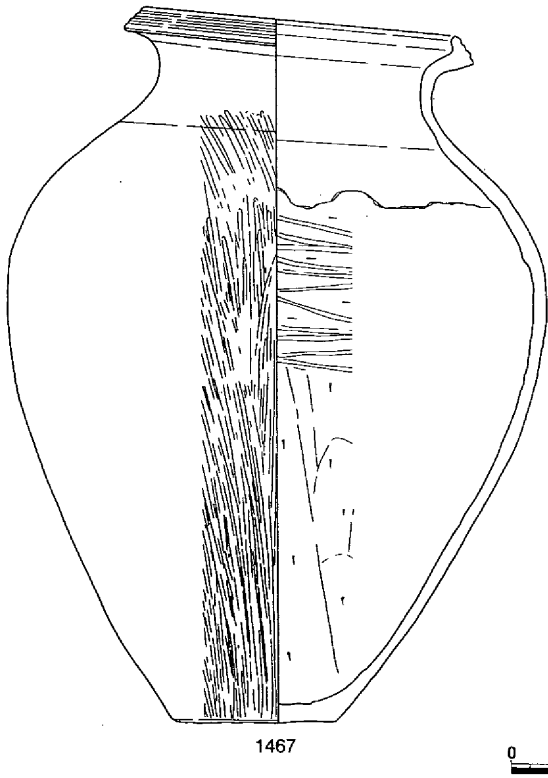
袋状土壙35を切る状態で検出された遺構である。上部はかなり削平されているが、上面径116cm、底面径119cmを測り、底面形は円形を呈する。深さは検出面から64cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は４層に区分された。１層は暗茶褐色粘質微砂で、炭を少し含む土層、２層は灰褐色粘質微砂で、多量の土器が出土した層である。また、少量の炭も含まれていた。３層は茶灰褐色粘質土、最下層の４層は黄灰褐色粘質土である。

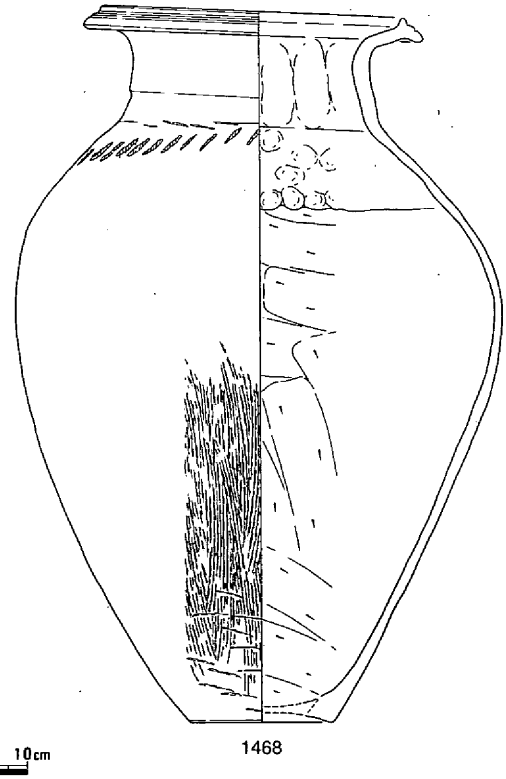
遺物の大部分は２層で出土したものである。ほとんどは土器であるが、石器も少し出土している。図示した土器は壺1467～1470、甕1466、1471～1481、高杯1482～1487、製塩土器1488で、ほぼ完形に復元される土器が多い。壺は短頸、長頸、細頸の３タイプに分けられる。1467～1469は口縁部に凹線文がみられ、1469の頸部には６条の浅い凹線がみられる。器壁内面は胴部上位までヘラケズリ、外面にはタテ、ナナメのヘラミガキによる調整が施されている。1470は細長い頸部をもつ台付直口壺である。口縁部は少し外反し、胴部は算盤形を呈するものである。器壁の内外面は丁寧なヘラミガキによる調整がみられる。甕は口縁端部がやや肥厚し、上下に拡張する。口縁外面には凹線文が施されるものと浅い凹み状を呈するものがある。器壁外面はタテ、ナナメのヘラミガキ、内面は胴部上位までヘラケズリされている。高杯は杯部に稜をもって外反するもので、口縁端部上面には凹線文が施される。内外面には丁寧な放射状のヘラミガキがみられる。脚部外面には竹管文、沈線文などが施されている。石器は石鏃Ｓ253などが出土している。時期は弥・後・Ⅰと思われる。　（松本）

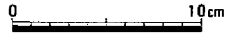


1　暗茶褐色粘質微砂（炭を少し含む）
2　灰褐色粘質微砂（土器を多く含む、炭を少し含む）
3　茶灰褐色粘質土
4　黄灰褐色粘質土

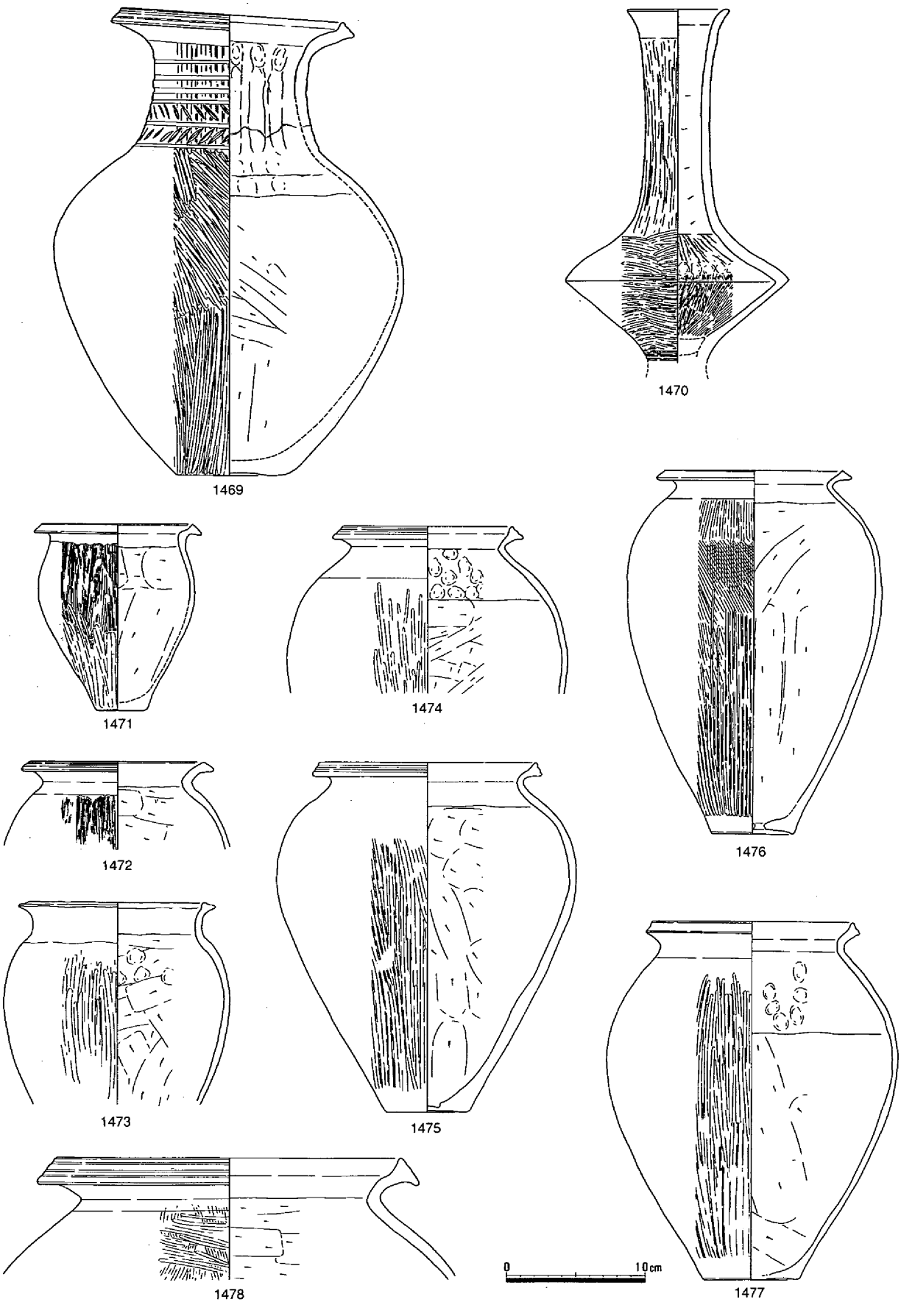




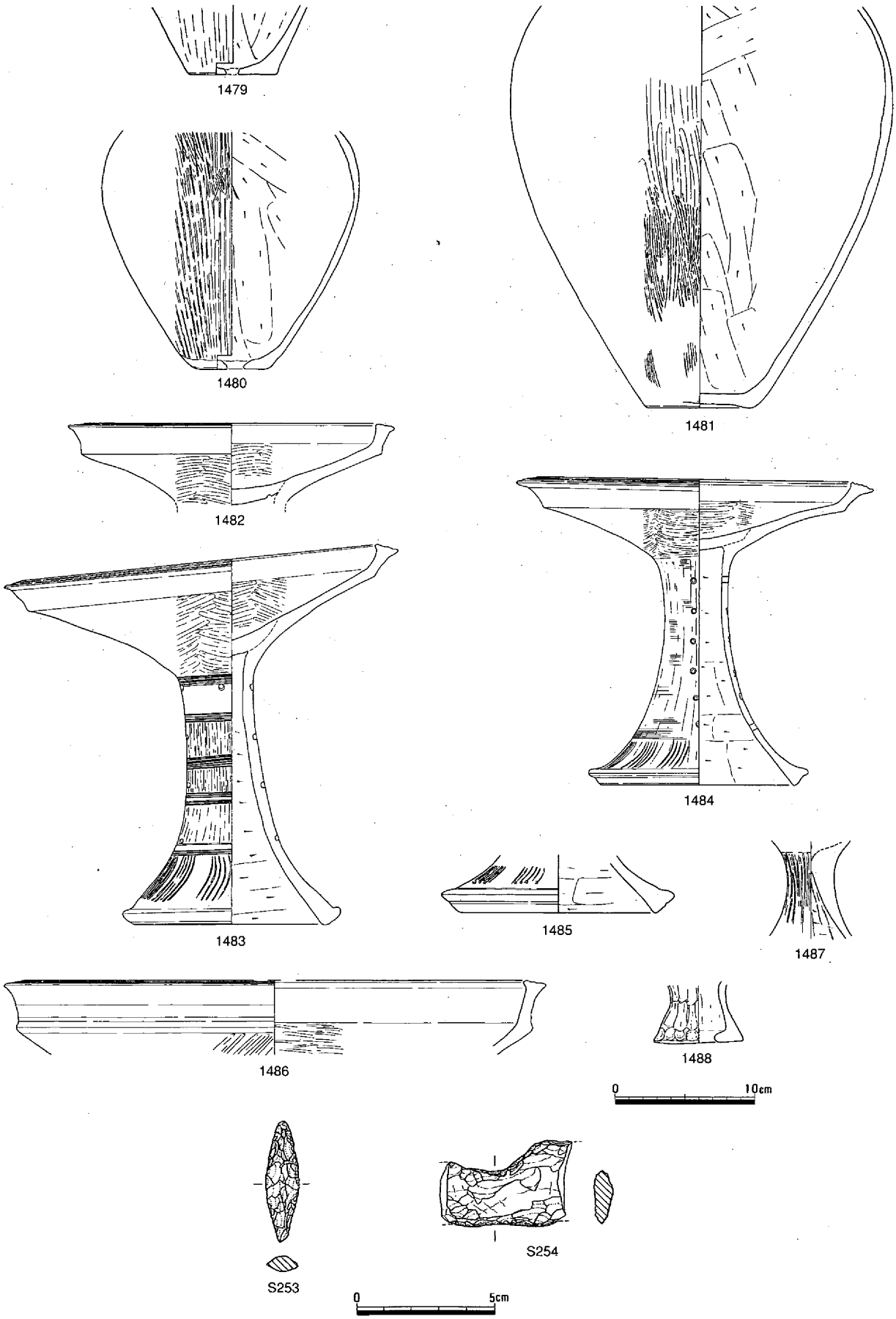




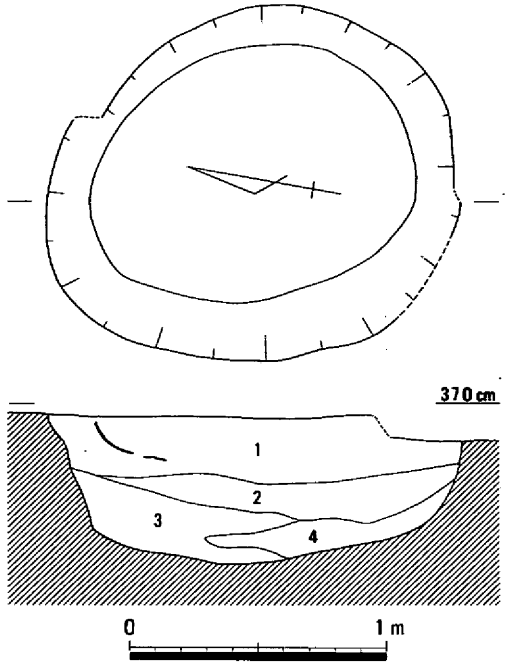
第435図　袋状土壙37（1/30）・遺物（１）



第436図　袋状土壙37　遺物（2）



第437図　袋状土壙37　遺物（３）



1　暗黄褐色粘質土　　3　暗黄灰褐色粘質土
2　黄灰褐色粘質土　　4　淡黄灰色粘質土

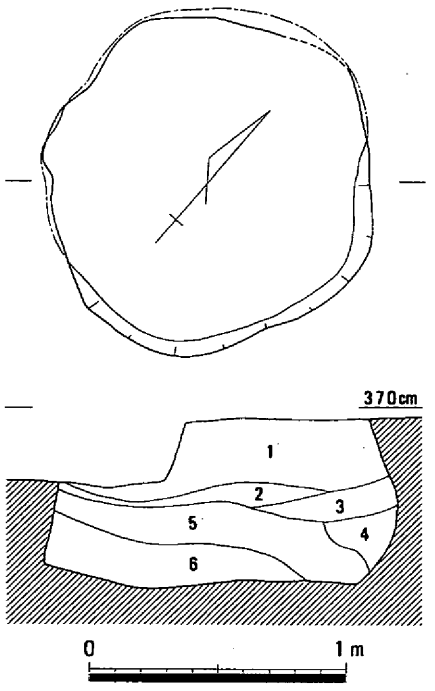
第438図　袋状土壙38（1/30）

袋状土壙38（第438図）

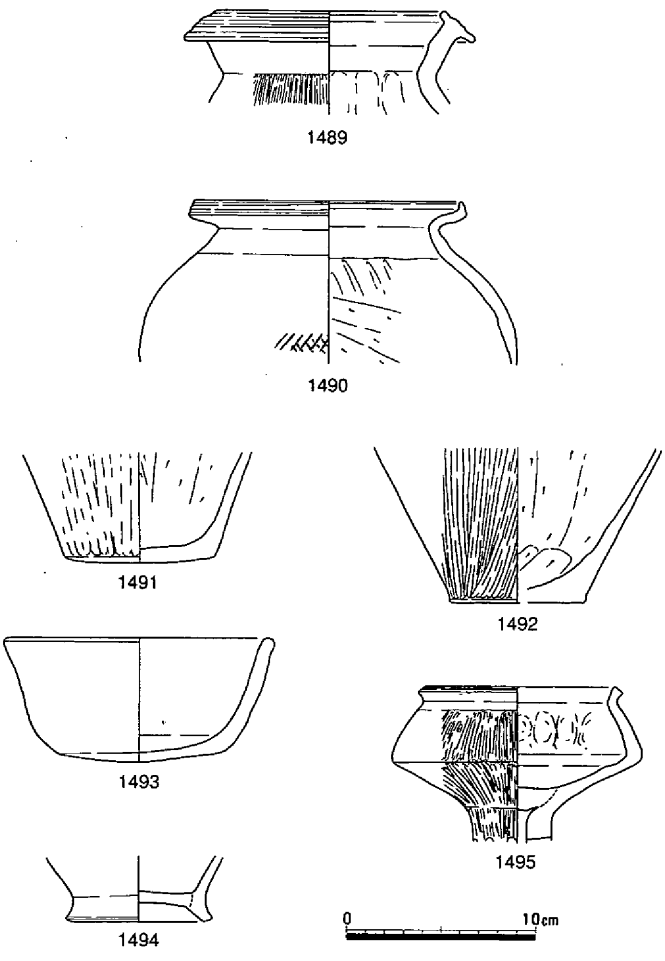
竪穴住居44に切られた状態で検出された遺構で、上部はかなり削平を受けているものと思われる。検出された上面径は158cm、底面径は119cmを測り、底面形は楕円形を呈する。深さは検出面から58cmを測り、底面中央部が窪む。埋土は4層に区分される。時期は弥・後と思われる。　　（松本）

袋状土壙39（第439図）

竪穴住居44内で検出された遺構である。古墳時代の溝にも切られている。上部はかなり削平を受けているものと思われるが、上面径は134cm、底面径は135cmを測り、底面形は不整円形を呈する。深さは検出面から65cmを測り、底面は少し凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。埋土は6層に区分されるが、1層には焼土、炭、土器が含まれていた。2～6層はいずれも炭を含む土層である。



1　暗褐色砂質土（焼土・炭・土器を含む）
2　黄灰褐色砂質土（炭を含む）
3　暗黄灰色砂質土（炭を含む）
4　黄灰色砂質土（炭を少し含む）
5　暗灰色砂質土（炭を含む）
6　黄灰色粘質微砂（炭を含む）



第439図　袋状土壙39（1/30）・遺物

遺物は土器が出土している。主な土器としては甕1489～1492と鉢1493～1495がある。1489は口縁端部が上下に拡張するもので、端面には浅い凹線文が施されている。1490は口縁部が「く」の字状を呈し、端部が上方に拡張する。鉢は無台と台付のものがある。出土遺物に新しい要素をもつものがあるが、恐らく混入遺物と思われる。時期は切り合い関係からみて弥・後・Ⅰと思われる。　（松本）

袋状土壙40（第440図、写真14－１）

溝15に切られる状態で検出された遺構である。したがって、遺構の残存状態は悪いが、上面径は約157cm、底面径141cmを測り、底面形は楕円形を呈する。深さは検出面から75cmを測り、底面は平坦であるが、壁際に幅４～8cm、深さ４～6cmほどの溝が巡っている。埋土は２層に区分される。遺物としては、甕1496・1497がある。時期は弥・後・Ⅰと思われる。（松本）

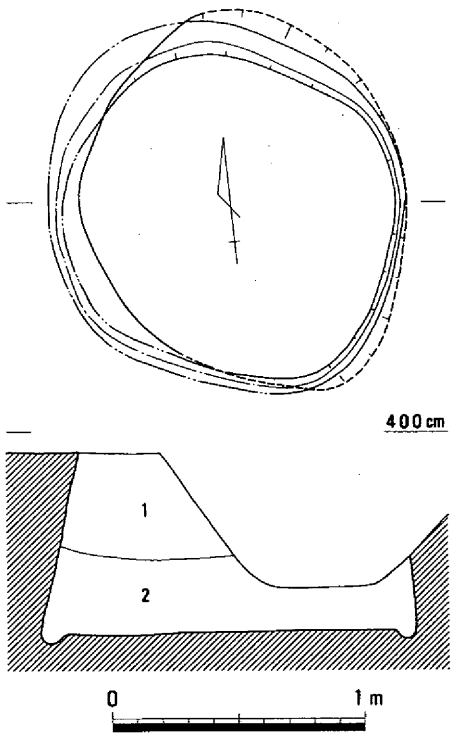
袋状土壙41（第441図）

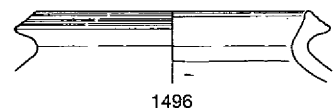
竪穴住居37の南東約１ｍの位置で検出された遺構である。上部は若干削平を受けていると思われるが、残存状態が良い遺構である。上面径は140cm、底面径は156cmを測り、底面形は円形を呈する。深さは検出面から142cmを測り、底面は平坦である。埋土は12層に区分され、レンズ状の堆積となる。

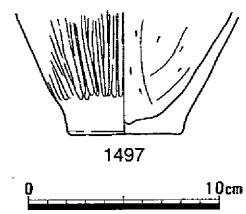
遺物は土器、土製品、図示してないが、楔形石器などが出土している。主な土器としては、壺、甕、高杯、器台などがある。1498は頸部に凹線文をもつ長頸壺、1499は胴部が算盤形となり、器壁の内外面に赤色顔料が施されているものである。1502は杯部に稜をもって外反し、口縁端部上面に凹線を持ち、脚部1503の外面には赤色顔料がみられる。Ｃ87は分銅形土製品で、表面には同心円状の文様、裏面には列点文がみられる。穿孔が１ヶ所ある。時期は弥・後・Ⅰと思われる。　（松本）

袋状土壙42（第442・443図、写真76）

竪穴住居39と切り合い関係をもつ遺構である。遺構の上部はかなり削平を受けているが、上面径は148cm、底面径は139cmを測る。底面形は不整楕円形を呈し、深さは検出面から81cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は２層に区分されるが、ほとんどが１層である暗黄茶褐色粘質土である。

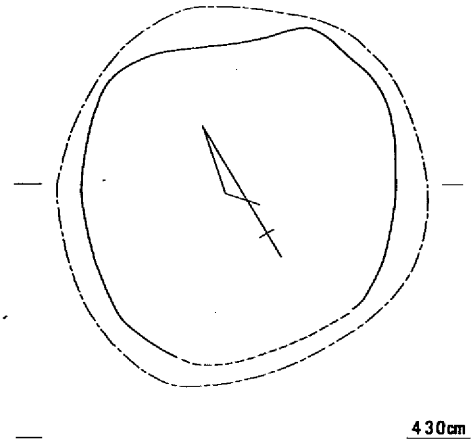


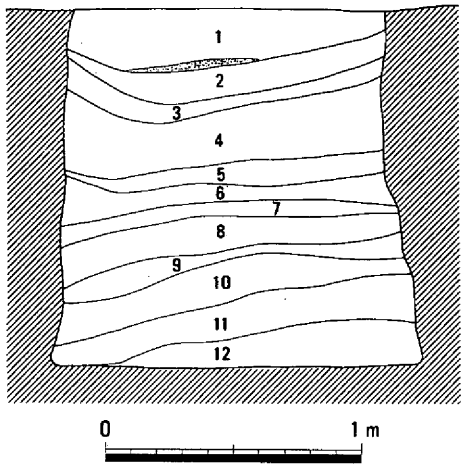




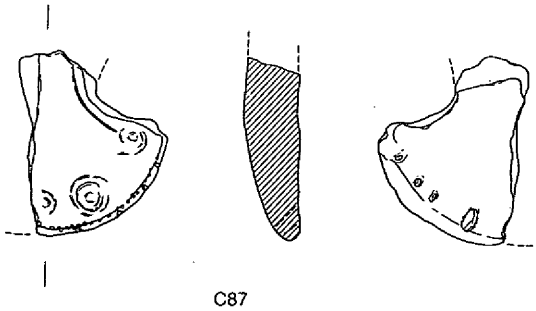
1　暗黄褐色粘質微砂
2　暗黄灰褐色粘質土

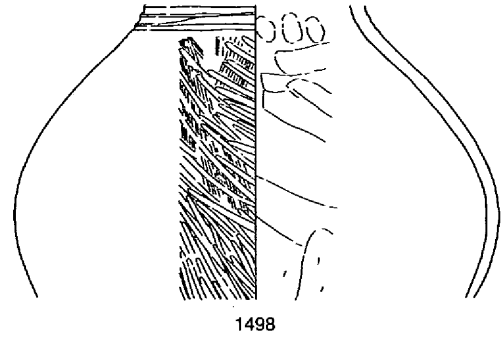
第440図　袋状土壙40（1/30）・遺物

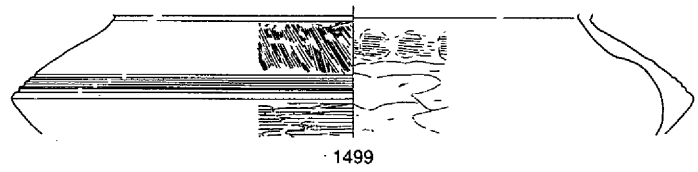


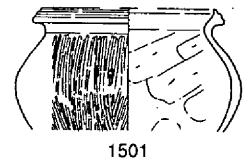


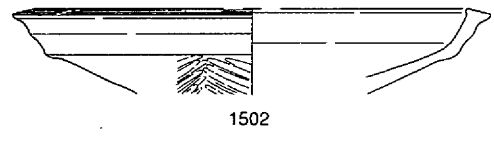
1　灰茶褐色粘質微砂
2　黄褐色粘質土
3　暗茶褐色粘質土
4　茶褐色粘質土
5　茶灰褐色粘質土
6　淡黄褐色粘質土
7　黄灰色粘質土
8　淡黄褐色粘質土
9　灰色粘質土
10　黄灰褐色粘質土
11　暗灰色粘質土
12　明黄灰褐色粘質土

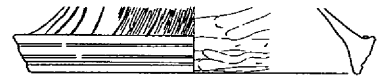


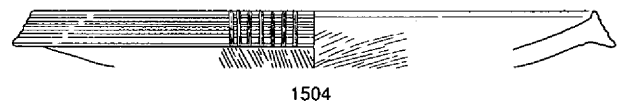


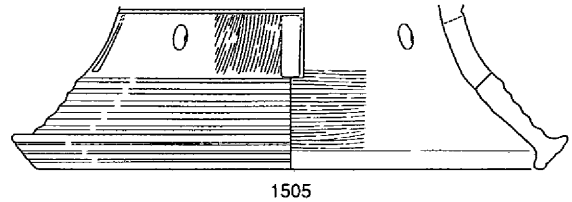




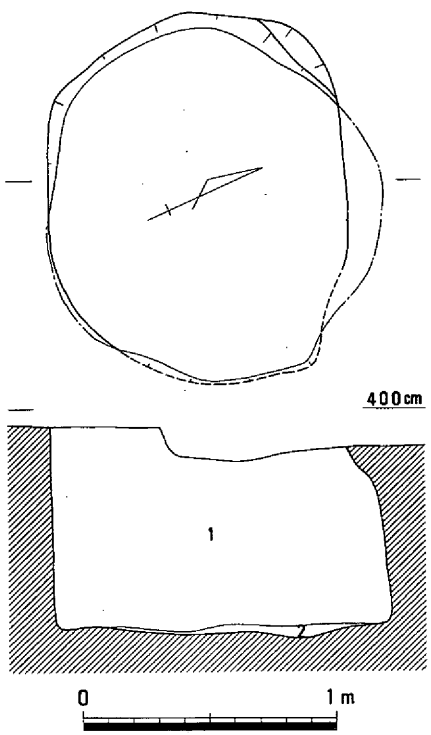




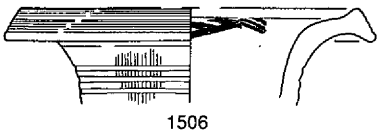


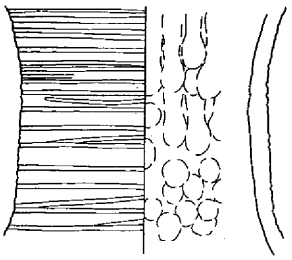


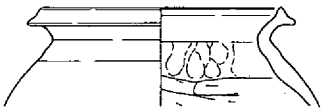
第441図　袋状土壙41（1/30）・遺物

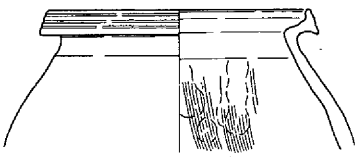


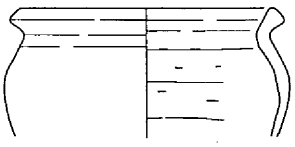
1　暗黄茶褐色粘質土
2　黄褐色粘質土

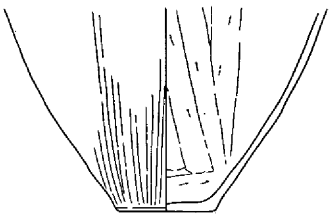

1506

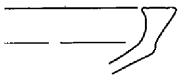

1507


1508

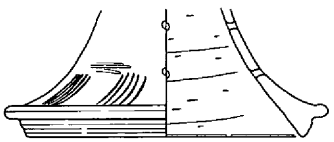

1510

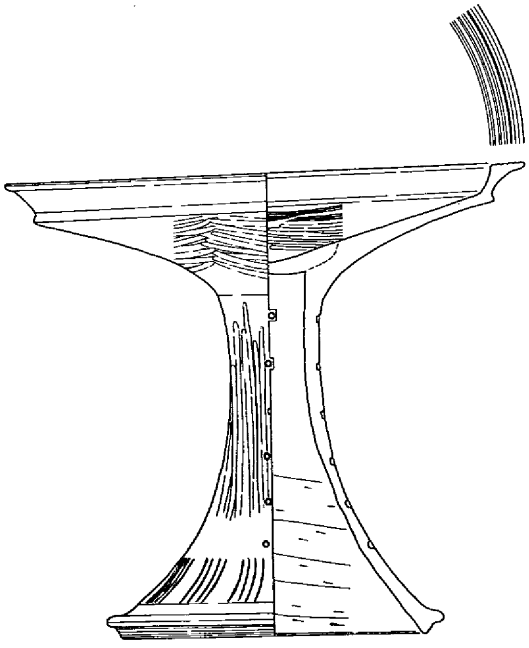

1509

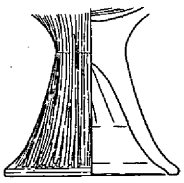

1511

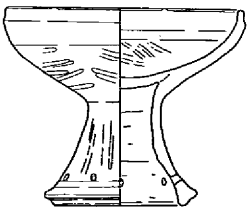

1512

1513

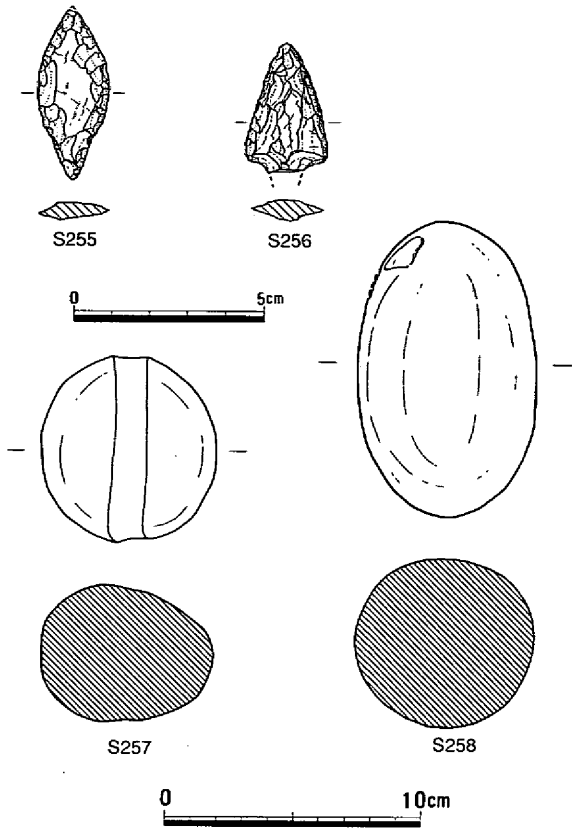

1515


1514


1516


1517

第442図　袋状土壙42（1/30）・遺物（１）



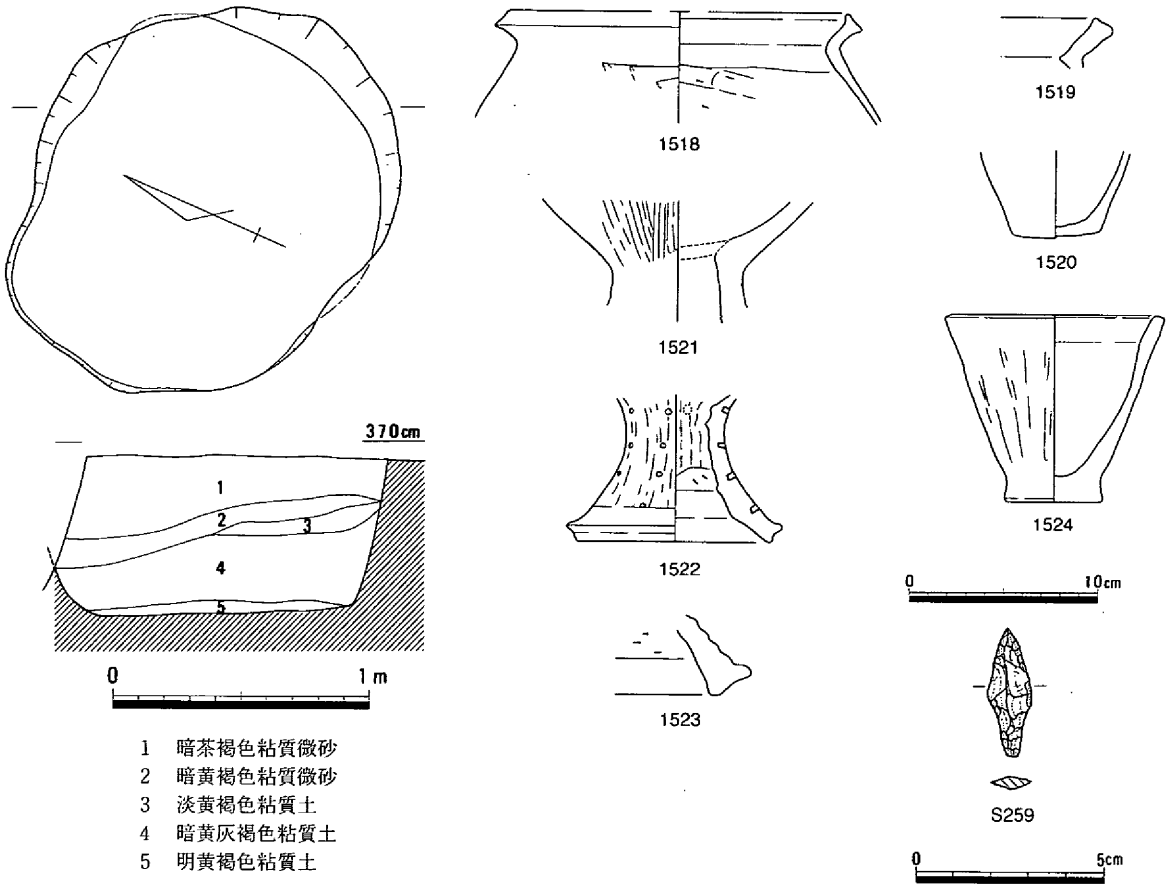
第443図　袋状土壙42　遺物（2）

遺物は土器、石器が出土している。土器は壺1506・1507、甕1508～1511、高杯1512～1517などがある。壺は長頸壺である。甕は口縁端部が上下にやや拡張するものと肥厚するものがある。高杯は杯部に稜をもって外反する1512～1514と1517のように椀状となる２形態がある。また、脚端部の断面形態も1515と1517のように２形態みられる。石器は石鏃Ｓ255・256、石錘Ｓ257、叩石Ｓ258などが出土している。時期は出土遺物からみて弥・後・Ⅰと思われる。　（松本）

袋状土壙43（第444図）

溝15と切り合い関係をもつ遺構である。上部は削平されているが、上面径は167cm、底面径は147cmを測り、底面形は不整楕円形を呈する。深さは検出面から63cmを測り、底面は平坦である。埋土は５層に区分され、茶褐色、黄褐色、黄灰褐色の粘質土や粘質微砂土で埋まっていた。

遺物としては、土器、石器が出土している。



1　暗茶褐色粘質微砂
2　暗黄褐色粘質微砂
3　淡黄褐色粘質土
4　暗黄灰褐色粘質土
5　明黄褐色粘質土

第444図　袋状土壙43（1/30）・遺物

土器は甕1518～1520、台付壺と思われるもの1521・1522、器台1523、鉢1524などがある。石器は石鏃S259が出土している。時期は弥・後・Ⅰと思われる。（松本）

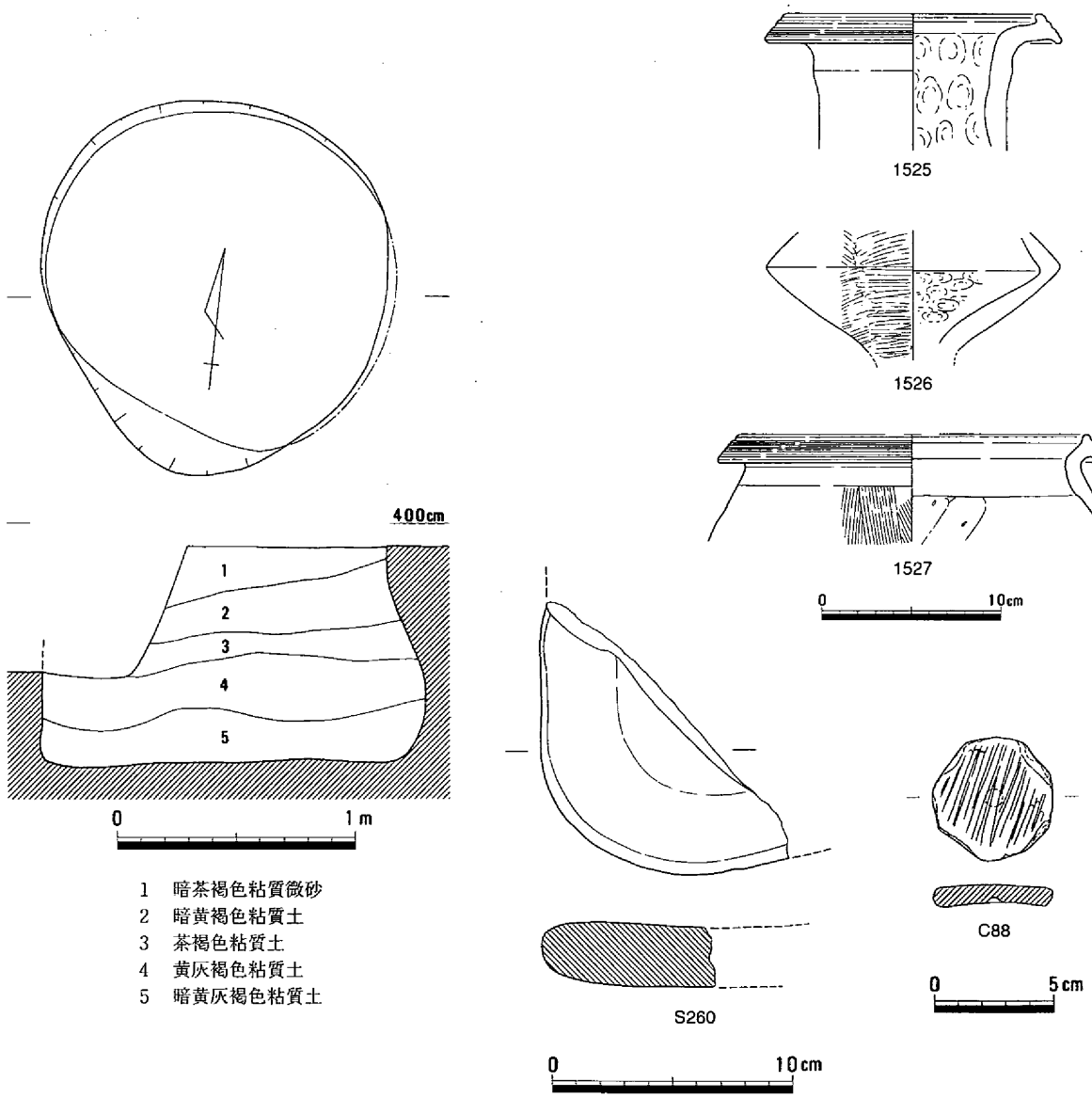
袋状土壙44（第445図）

袋状土壙45を切る状態で検出された遺構である。遺構の上部は削平を受けるとともに、古墳時代の溝に切られていた。規模は上面径が157cm、底面径が149cmを測り、底面形は楕円形を呈する。深さは検出面から90cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は５層に区分される。

遺物は土器、石器、土製品などが出土している。土器は壺1525・1526、甕1527がある。1525は長頸、1526は台付直口壺である。石器はS171が流紋岩製の石皿である。土製品C88は土器片の周囲を調整した未穿孔の紡錘車である。時期は弥・後・Ⅰと思われる。（松本）

袋状土壙45（第446図）

袋状土壙45は、第２微高地中央の北東寄りに位置する。弥・後・Ⅰの袋状土壙44に南側を切られており、平面は円形を呈すると思われる。出土遺物は土器の小片のみであるが、それらや遺構の切り合いなどから、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。（柴田）



第445図　袋状土壙44（1/30）・遺物

袋状土壙46（第447図）

袋状土壙46は、第２微高地中央の北東寄り、竪穴住居44と46の間に位置する。平面は径172cmの楕円形で、床面はほぼ水平である。

出土遺物は土器の小片のみで、遺構の詳細な時期は不明であるが、ほぼ弥・後にはおさまると思われる。（柴田）

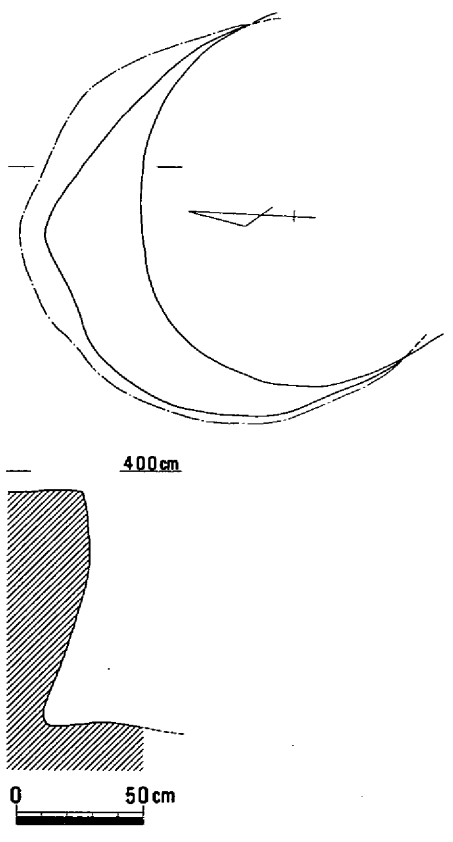
袋状土壙47（第448・449図、写真76）

袋状土壙47は、第２微高地中央の東寄りに位置し、弥・後・Ⅱの竪穴住居42に切られている。平面は長径201cmの不整楕円形で、壺1528・1529、甕1530～1532、高杯1533～1535、鉢1536、器台1538、製塩土器1537、石鏃Ｓ261、作業台Ｓ262、分銅形土製品Ｃ89などが出土している。

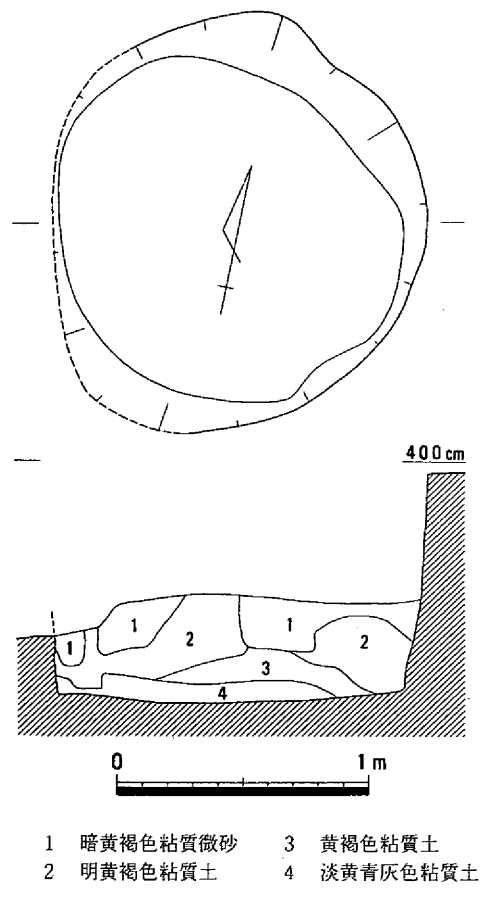
壺や甕の口縁端部は上下に肥厚、拡張しているが、内面のヘラケズリは、頸部付近まで達している。高杯は口縁部が短く立ち上がり、裾端部は水平方向に拡張する。1535はやや薄手で、台部は垂直方向に立ち上がっており、混入の可能性もある。Ｃ89は中央に穏やかな顔面があり、目・口・鼻の穴を刺突で、眉と鼻を粘土の隆起で表現している。縁辺はハケメ工具のようなものを押し引きした紋様が施されている。遺物や遺構の切り合いなどから、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。（柴田）

袋状土壙48（第450図）

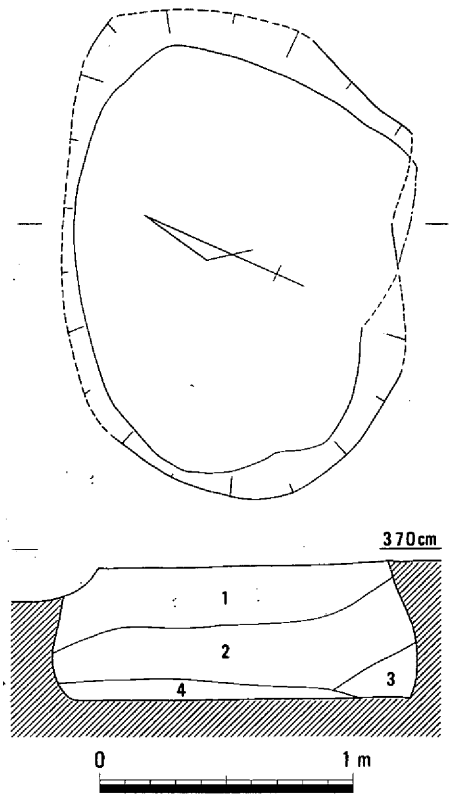
袋状土壙48は、第２微高地中央の東寄り、竪穴住居42の東に隣接する。平面は不整楕円形と思われ、東西の径は130cmを測る。床面はほぼ水平で、埋土からは、甕1539・1540、高杯1541などが出土して



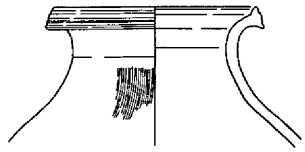
第446図　袋状土壙45（1/30）

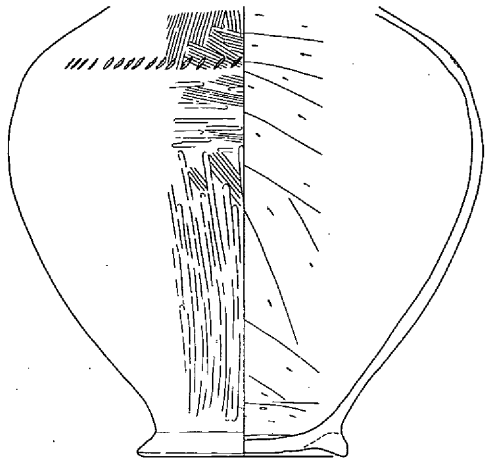


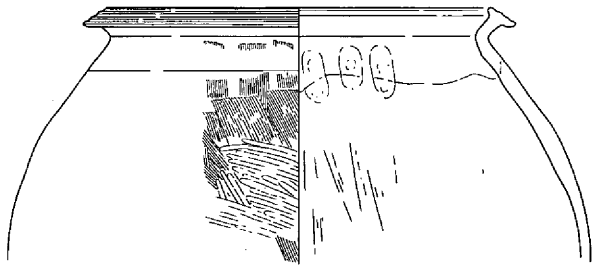
第447図　袋状土壙46（1/30）

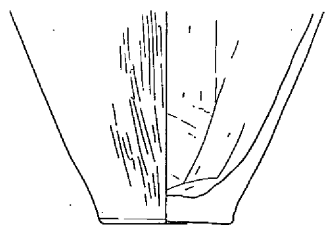


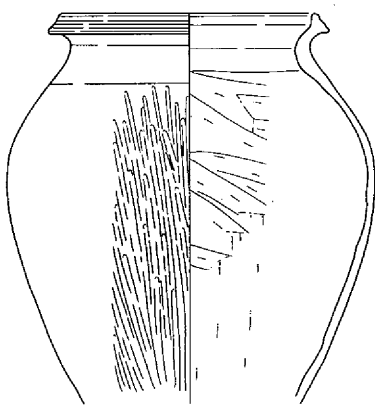
1　暗黄褐色砂質土（土器・炭を含む）
2　黄茶褐色砂質土（炭を含む）
3　灰黄色砂質土（炭を含む）
4　暗黄灰色砂質土（土器・炭を含む）

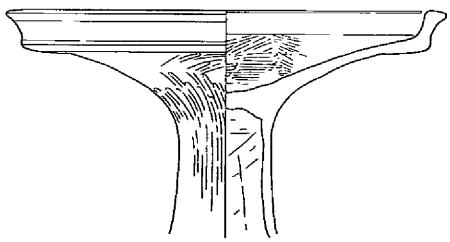

1528

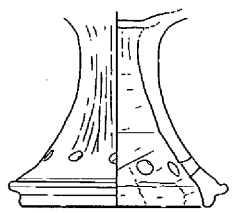

1529

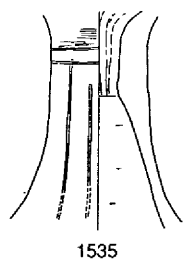

1530

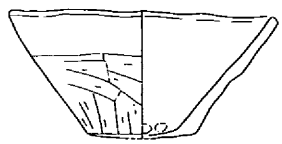

1532

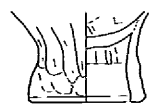

1531


1533

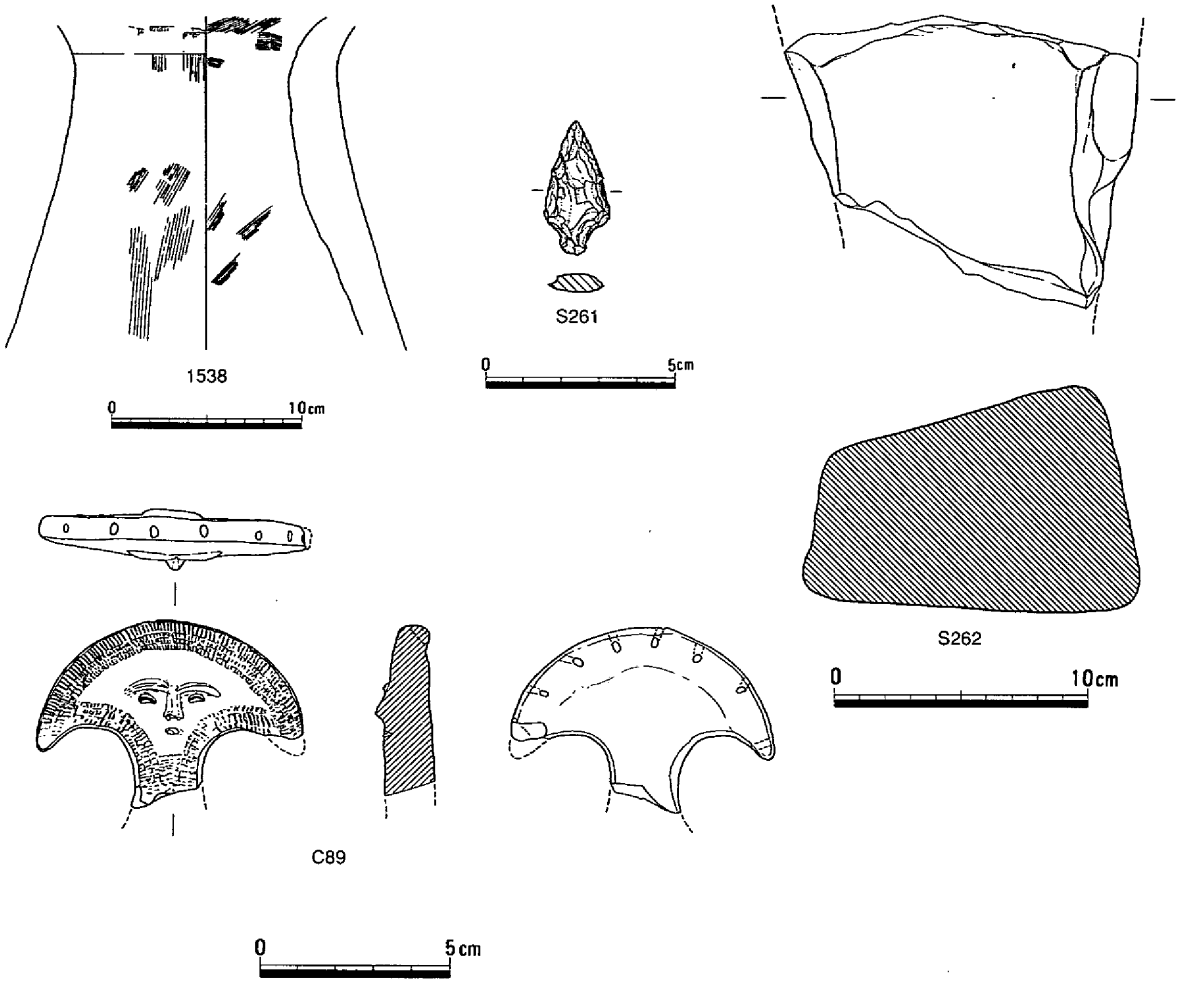

1534


1535

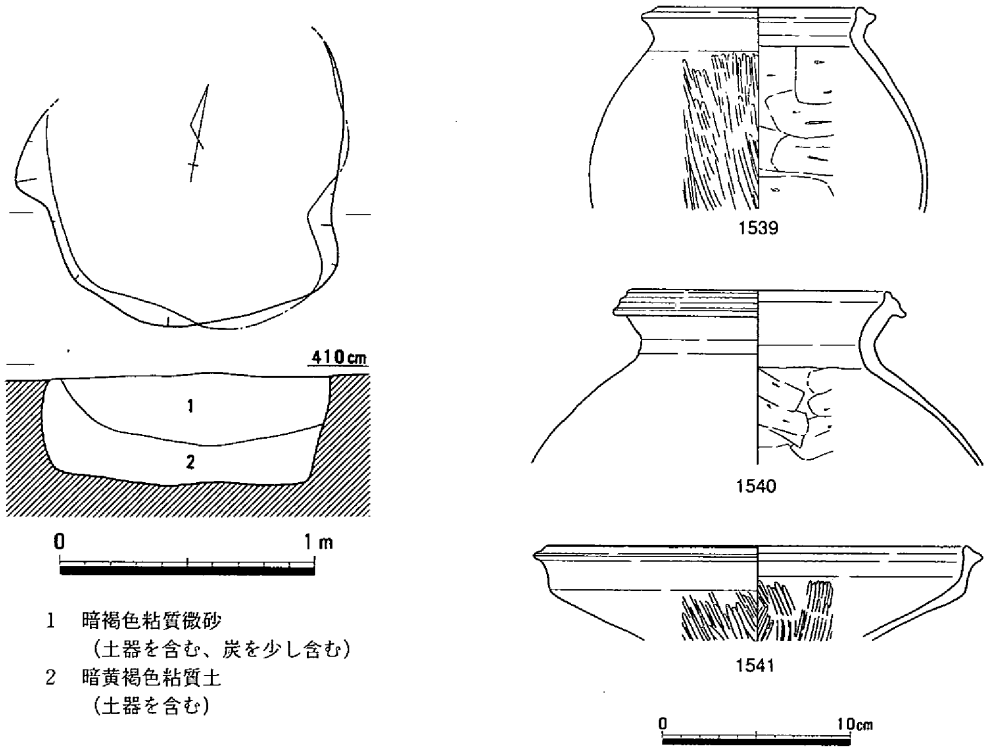

1536


1537

第448図　袋状土壙47（1/30）・遺物（１）



第449図　袋状土壙47　遺物（2）



1　暗褐色粘質微砂
　（土器を含む、炭を少し含む）
2　暗黄褐色粘質土
　（土器を含む）

第450図　袋状土壙48（1/30）・遺物

いる。甕の口縁端部は上下に肥厚、拡張しているが、内面のヘラケズリは、頸部付近まで達している。高杯は口縁部が短く立ち上がり、口縁端部は内外に拡張する。遺物などから、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。（柴田）

袋状土壙49（第451図）

袋状土壙49は、第２微高地中央の東寄り、竪穴住居42の南東に隣接する。平面は、検出面で径125㎝の円形、底面では径132㎝を測る。床面はほぼ水平であるが、埋土の下層では中央が盛り上がる堆積を示している。図示した遺物は、壺1542、甕1543～1545、高杯1546、スクレイパーＳ263であるが、他にも楔形石器片なども出土している。

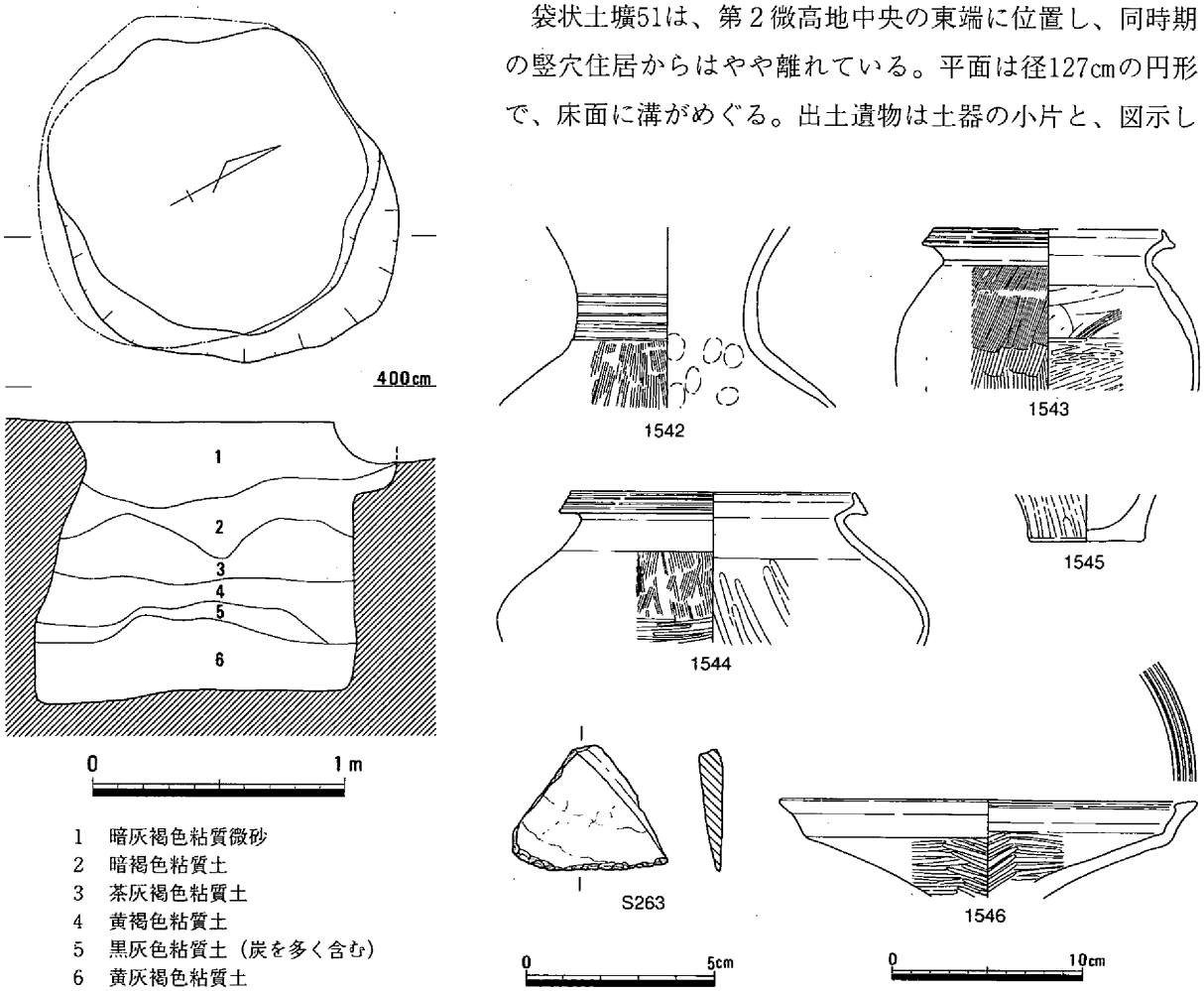
1542は口縁部が大きく開き、頸部に沈線が施される。1543・1544は口縁端部が上方に拡張し、内面にはヘラミガキが認められる。1546は口縁部が短く立ち上がり、端部は水平方向に肥厚し面を形成する。Ｓ263は自然面を残している。遺物などから、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。（柴田）

袋状土壙50（第452図）

袋状土壙50は、第２微高地中央の東端に位置し、同時期の竪穴住居からはやや離れている。平面は径119㎝の円形で、床面はほぼ水平である。出土遺物は土器の小片のみであるが、遺構の時期は、弥・後におさまると思われる。（柴田）

袋状土壙51（第453図）

袋状土壙51は、第２微高地中央の東端に位置し、同時期の竪穴住居からはやや離れている。平面は径127㎝の円形で、床面に溝がめぐる。出土遺物は土器の小片と、図示し

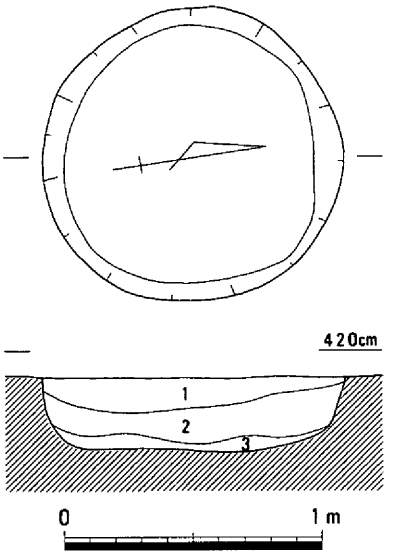


第451図　袋状土壙49（1/30）・遺物

ていないが磨製石斧片がある。遺物などから、遺構の時期は、弥・後・Ⅱと思われる。　（柴田）

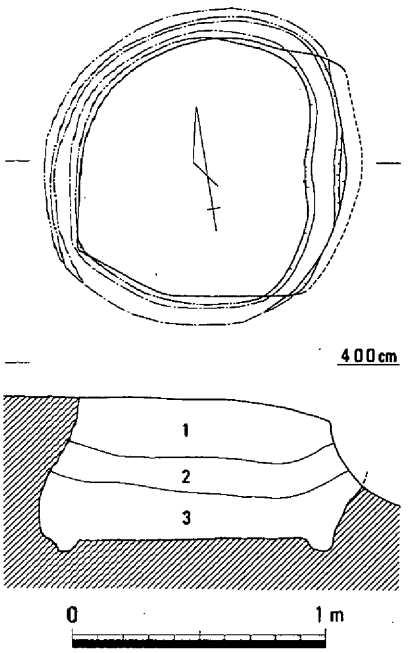
袋状土壙52（第454図、写真14－２）

袋状土壙52は、第２微高地中央の東端に位置し、同時期の竪穴住居からはやや離れている。平面は径135cmの円形で、床面はほぼ水平である。埋土は水平堆積を示しており、出土遺物には、甕1547～1550などがある。



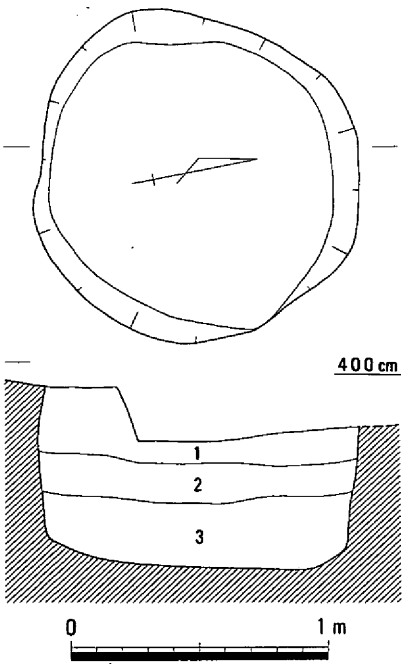
1　黄灰褐色粘質微砂
2　灰褐色粘質土
3　淡黄褐色粘質土

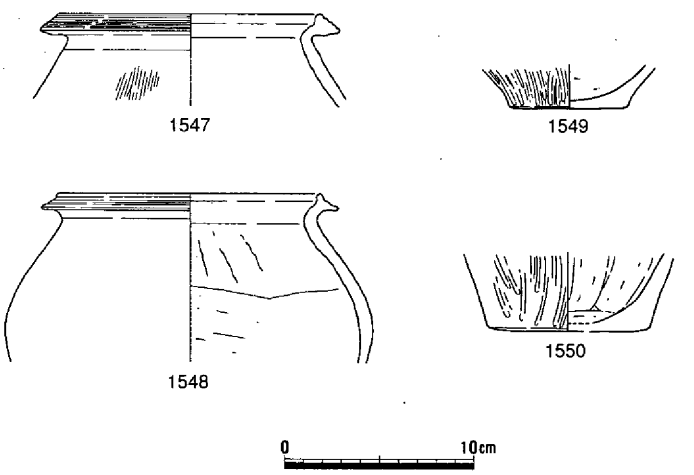
第452図　袋状土壙50（1/30）



1　暗褐色粘質土（土器・炭を含む）
2　暗褐色粘質土（黄色粘土ブロック・
　　土器・炭・焼土を含む）
3　暗茶褐色粘質微砂（マンガン粒を多く含む）

第453図　袋状土壙51（1/30）





1　暗灰褐色粘質土
2　黄褐色粘質土
3　黄灰褐色粘質土

第454図　袋状土壙52（1/30）・遺物

1547・1548の口縁端部は上方に肥厚し、水平方向にものびている。内面のヘラケズリは肩部の中程で止まる。遺物などから、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。　（柴田）

袋状土壙53（第455図）

袋状土壙53は、第２微高地の北東寄りに位置し、弥・後・Ⅱ～Ⅲの竪穴住居47に切られている。平面は長径165cmの不整楕円形で、床面はほぼ水平である。埋土は水平堆積を示しており、出土遺物には、甕1551、高杯1552・1553、打製石包丁S264などがある。

1551の口縁端部は上方に肥厚し、水平方向にものびている。1552は裾端部が斜め上方に拡張している。遺物や遺構の切り合いなどから、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。　（柴田）

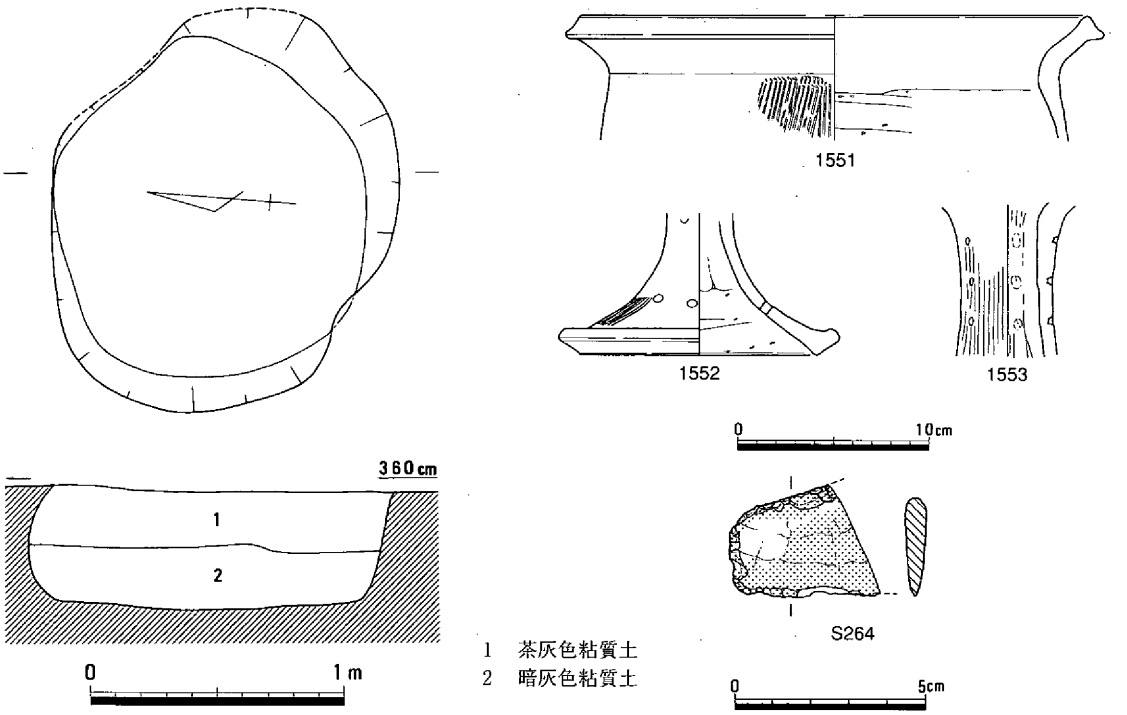
袋状土壙54（第456図）

袋状土壙54は、第２微高地の東寄り、竪穴住居47の南に位置する。平面は径118cmの円形で、床面はほぼ水平である。掘り方の壁面は垂直に近く、検出面からの深さは149cmを測る。出土遺物には、壺1554・1557・1558、甕1555・1556、高杯1561・1562、鉢1559・1560、台付鉢1563・1564、土製玉C90などがある。

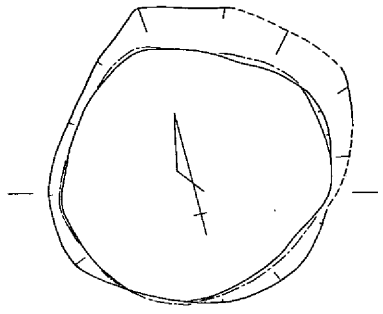
1554や1556の口縁端部はわずかに肥厚しているが、1555はほとんど肥厚せず面を形成する。内面のヘラケズリは、ほぼ頸部にまで及ぶ。高杯1562は裾端部が水平方向に拡張するが、台付鉢1563・1564の端部は肥厚するだけである。遺物などから、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。　（柴田）

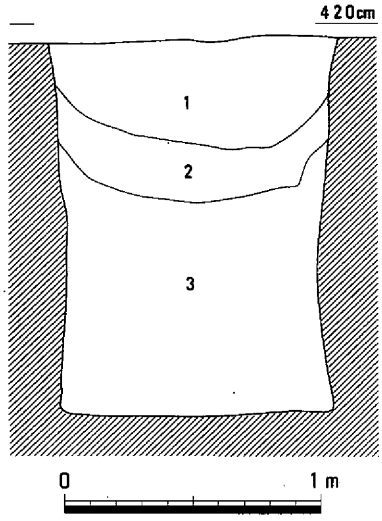
袋状土壙55（第457図）

袋状土壙55は、第２微高地の北東部に所在する袋状土壙群の西端に位置する。掘り方の北端は調査区外になっている。平面は径152cmの円形で、床面はほぼ水平である。埋土の最下層は中央が盛り上がっている状況を示す。出土遺物には、製塩土器1565などがある。この他は土器の小片のみであるが、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。　（柴田）

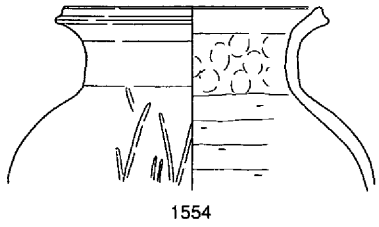


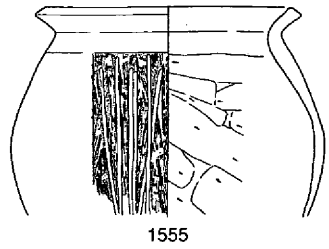
第455図　袋状土壙53（1/30）・遺物

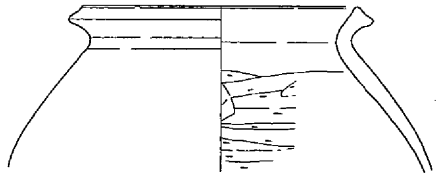


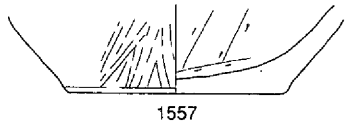


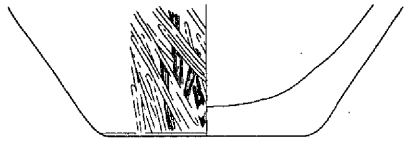
1　暗茶褐色粘質微砂
2　茶灰褐色粘質土
3　暗灰褐色粘質土

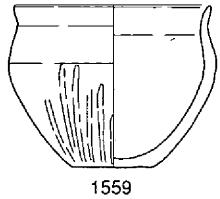

1554

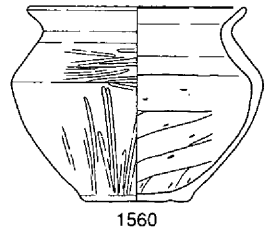

1555

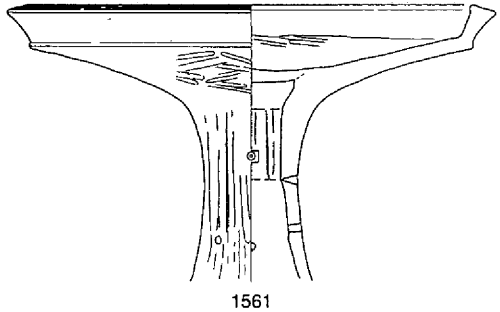

1556

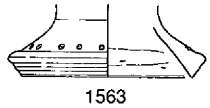

1557

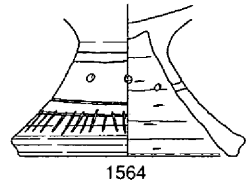

1558

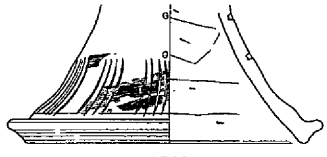

1559

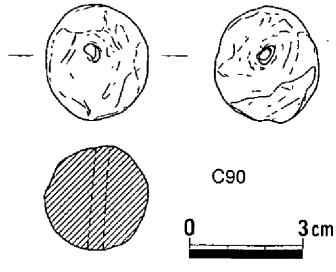

1560


1561


1563


1564


1562



第456図　袋状土壙54（1/30）・遺物

袋状土壙56（第458図）

袋状土壙56は、第２微高地の北東部に所在する袋状土壙群の西端に位置する。掘り方の北側は袋状土壙58に切られている。平面は径157cmの円形で、床面はほぼ水平である。出土遺物には、甕1566などがある。この他は土器の小片のみであるが、遺構の切り合いなどからも、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。（柴田）

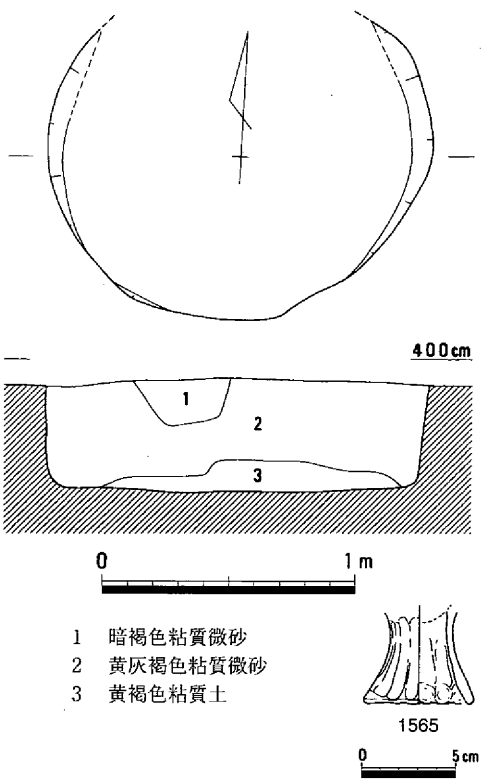
袋状土壙57（第459図）

袋状土壙57は、第２微高地の北東部に所在する袋状土壙群の西端に位置する。掘り方の南側は、弥・後・Ⅱ～Ⅲの竪穴住居47に切られる。平面は径160cmの円形で、床面は凹凸が目立つ。出土遺物には、壺1567～1570、甕1571～1573、高杯1574～1577、台付鉢1578、器台1579などがある。図示していないが、この他に杯部内面に漆が付着した高杯の小片もある。

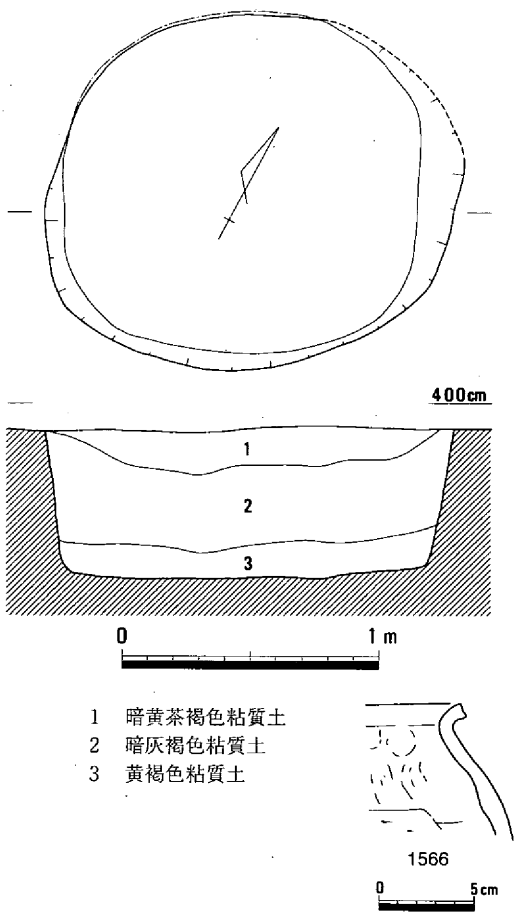
1567・1568は長頸壺で、後者の口縁端部は、上方よりも水平方向に大きく拡張し、内面のヘラケズリは頸部まで及ぶ。甕の口縁端部も下方への拡張の程度が強いようである。1576・1577・1578の裾端部は、水平方向あるいは上方への拡張が目立つ。遺物や遺構の切り合いなどから、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。（柴田）

袋状土壙58（第460図）

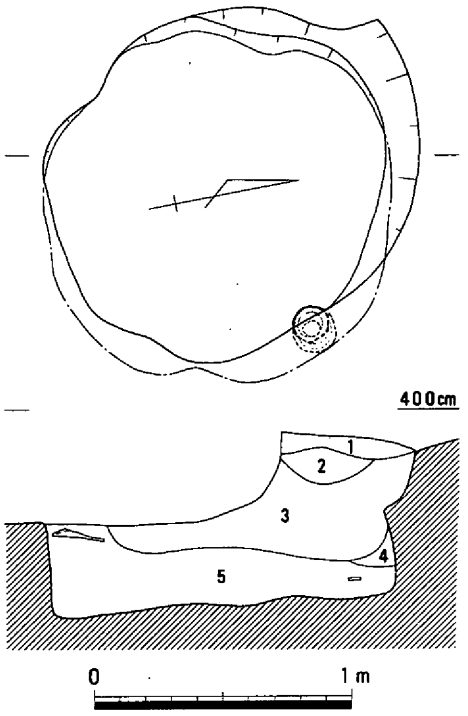
袋状土壙58は、第２微高地の北東部に所在する袋状土壙群の北端に位置し、袋状土壙56を切っている。平面は径154cmの円形で、床面はほぼ水平である。埋土の最下層は水平堆積を呈する。出土遺物は、土器の小片のみであるが、遺構の時期は、
弥・後・Ⅰと思われる。（柴田）



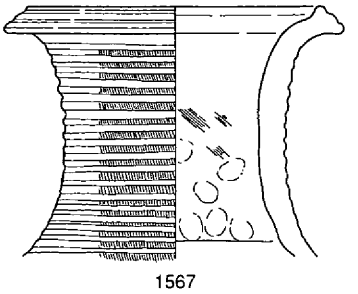
第457図　袋状土壙55（1/30）・遺物

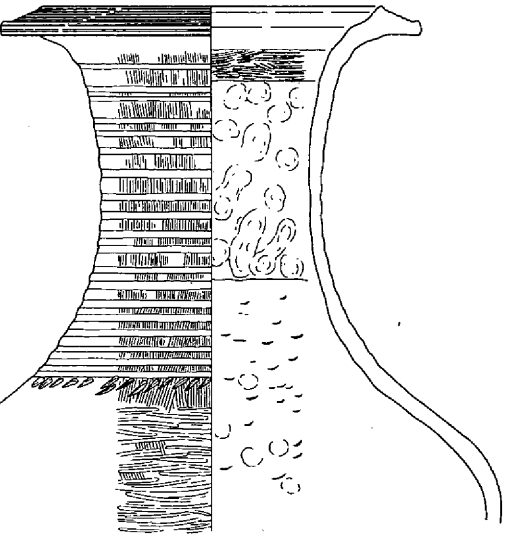


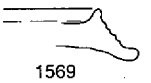
第458図　袋状土壙56（1/30）・遺物



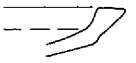
1　暗灰褐色粘質微砂
2　黄褐色粘質土（暗灰褐色土を含む）
3　暗灰褐色土（黄褐色粘土塊を含む）
4　黄褐色粘質土
5　暗灰褐色粘質微砂
（炭を含む、黄褐色粘土塊をごくわずかに含む）


1567


1568

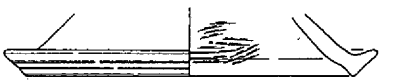

1569

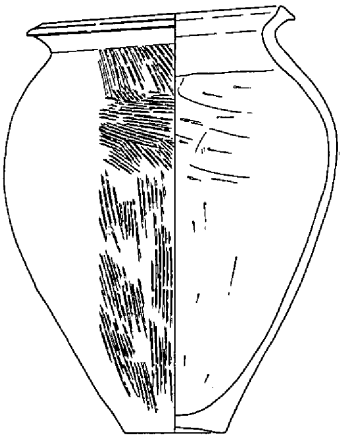
1570

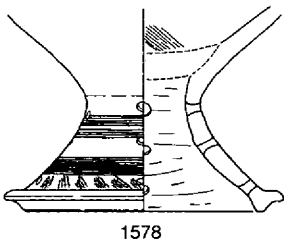

1574

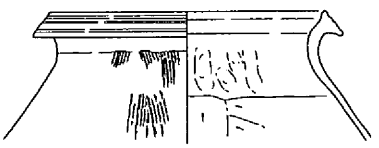
1576

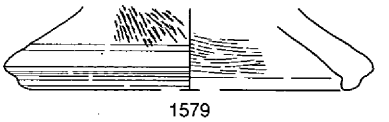
1575

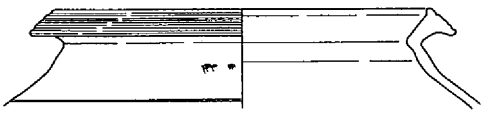

1577


1571


1578


1572


1579


1573

第459図　袋状土壙57（1/30）・遺物

袋状土壙59（第461図）

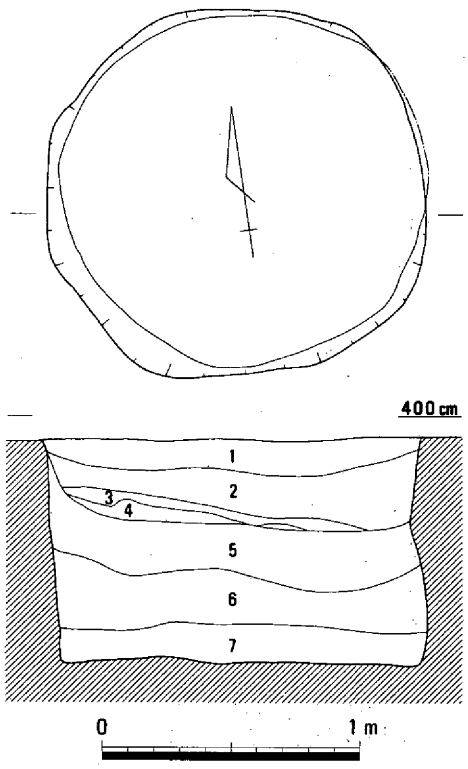
袋状土壙63の西に位置する遺構である。上部はかなり削平を受けているが、上面径は129cm、底面径は118cmを測り、底面形は不整楕円形を呈する。深さは検出面から42cmを測り、底面は少し凹凸がある。埋土は４層に区分されるが、１層は時期の新しい柱穴である。遺物は甕、高杯などの土器が出土している。1581は小形の甕、1582は高杯の杯部である。時期は弥・後・Ⅰと思われる。（松本）

袋状土壙60（第462図）

袋状土壙61に切られる状態で検出された遺構である。削平を受けているが、上面径は160cm、底面径は133cmを測り、底面形は円形を呈する。深さは検出面から77cmを測り、底面は平坦である。埋土は２層に区分されるが、殆どが１層の暗黄褐色粘質微砂で埋まっていた。遺物は長頸壺1583や甕1584などの土器が出土した。1584は口縁部が肥厚し、下に端部が拡張する。４条の凹線がみられる。時期は弥・後・Ⅰと思われる。（松本）

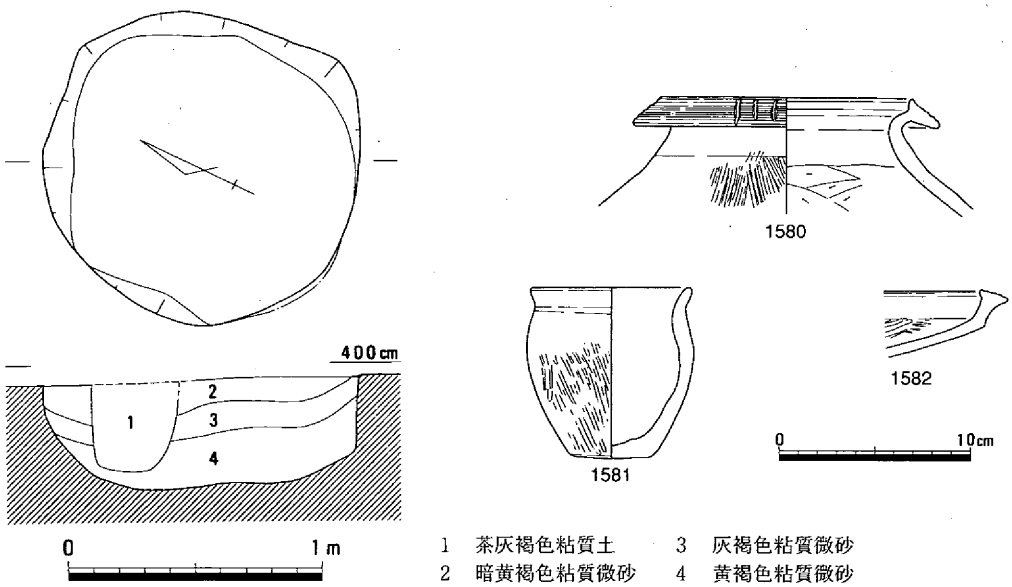
袋状土壙61（第463図、写真14－３）

上部はかなり削平されているが、規模は上面径が145cm、底面径は136cmを測り、その底面形は楕円形を呈する。深さは検出面から64cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は５層に区分される。遺物は土器が出土している。器種は甕1585、手捏ね土器1586、高杯1587などである。手捏ね土器はほぼ完形品である。甕は口縁端部が上



1　暗黄褐色粘質土　5　茶灰褐色粘質土
2　黄褐色粘質土　6　暗灰褐色粘質土
3　黄灰褐色粘質土　7　暗灰褐色粘質土
4　淡黄褐色粘質土

第460図　袋状土壙58（1/30）



1　茶灰褐色粘質土　3　灰褐色粘質微砂
2　暗黄褐色粘質微砂　4　黄褐色粘質微砂

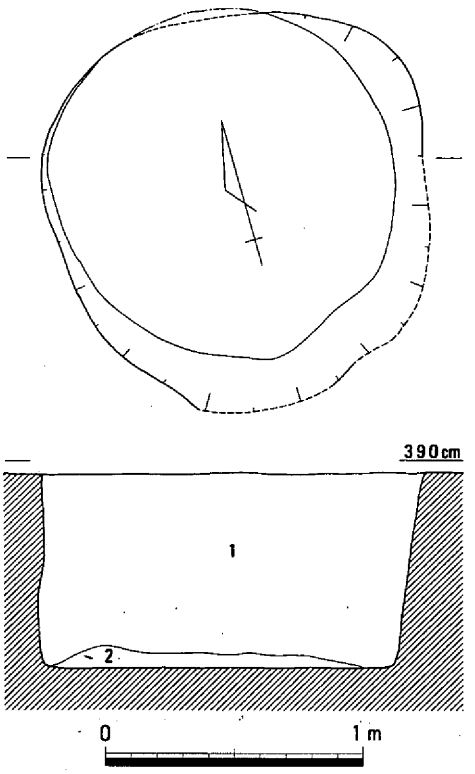
第461図　袋状土壙59（1/30）・遺物

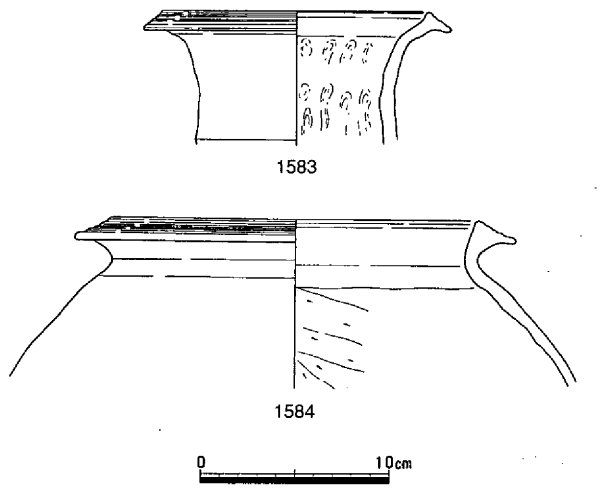
下に少し拡張し、凹線文が施されている。これらの遺物からみて、時期は弥・後・Ⅰと思われる。

（松本）

袋状土壙62（第464図）

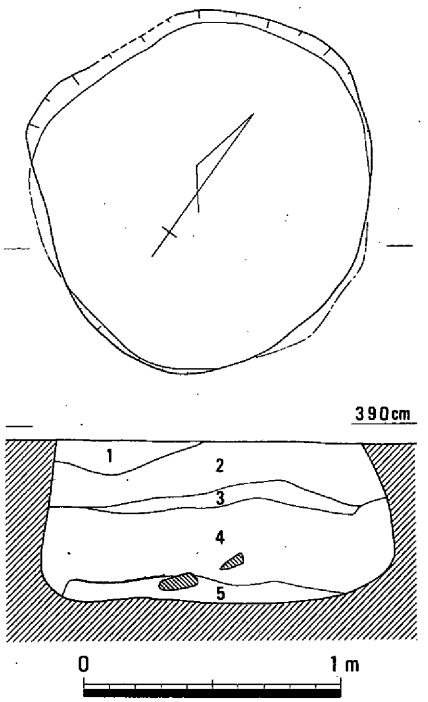
竪穴住居47の北東約２ｍの位置で検出された。削平などを受けているが、規模は上面径が121cm、底面径は99cmを測り、底面形は円形を呈する。深さは78cmを測り、底面は中央部が深くなる。埋土は３層に区分される。時期は弥・後・Ⅰと思われる。　（松本）

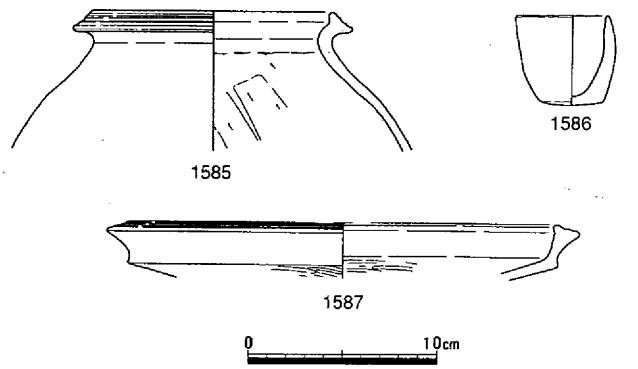




1　暗茶褐色粘質微砂（黄灰色粘土塊を含む）
2　淡黄褐色粘質土

第462図　袋状土壙60（1/30）・遺物



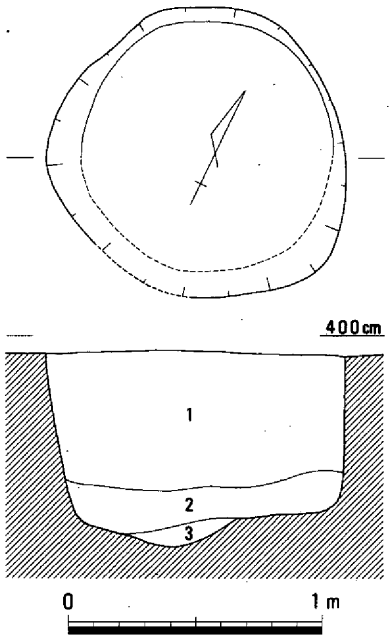


1　淡黄褐色粘質土（暗灰色土をごくわずかに含む）
2　暗灰褐色粘質微砂
3　暗灰褐色粘質微砂（黄灰色粘土塊を含む）
4　黄灰褐色粘質土（暗灰色土を含む）
5　黄灰色粘質土（暗灰色土をごくわずかに含む）

第463図　袋状土壙61（1/30）・遺物

袋状土壙63（第465図）

袋状土壙59の東隣に位置する。遺構の上部はかなり削平を受けているが、確認された規模は上面径は133cm、底面径は126cmを測り、底面形は円形を呈する。深さは検出面から79cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は３層に区分される。遺物は甕1588・1589、高杯1590、製塩土器1591などが出土している。1588は口縁部がやや肥厚するが、端部は下に拡張する。1590は杯部に稜をもって外反し、口縁端部上面に凹線をもっている。器壁の内外面には丁寧なヘラミガキ調整がなされている。時期は弥・後・Ⅰと思われる。（松本）



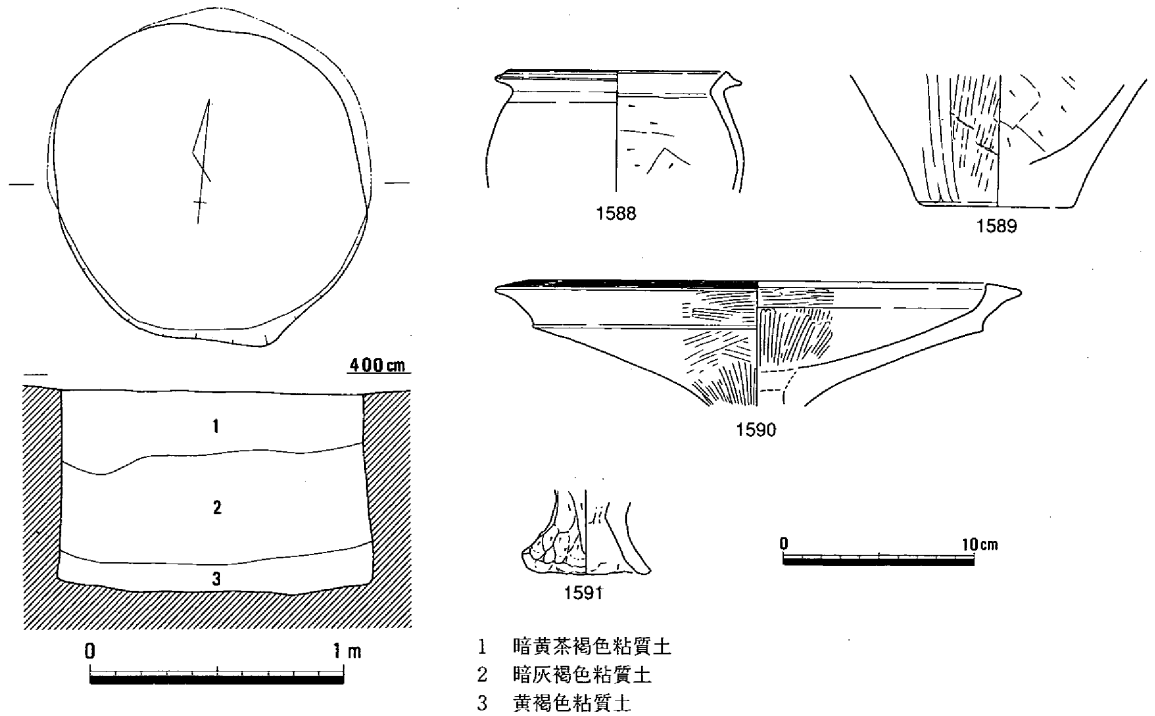
第464図　袋状土壙62（1/30）

袋状土壙64（第466図）

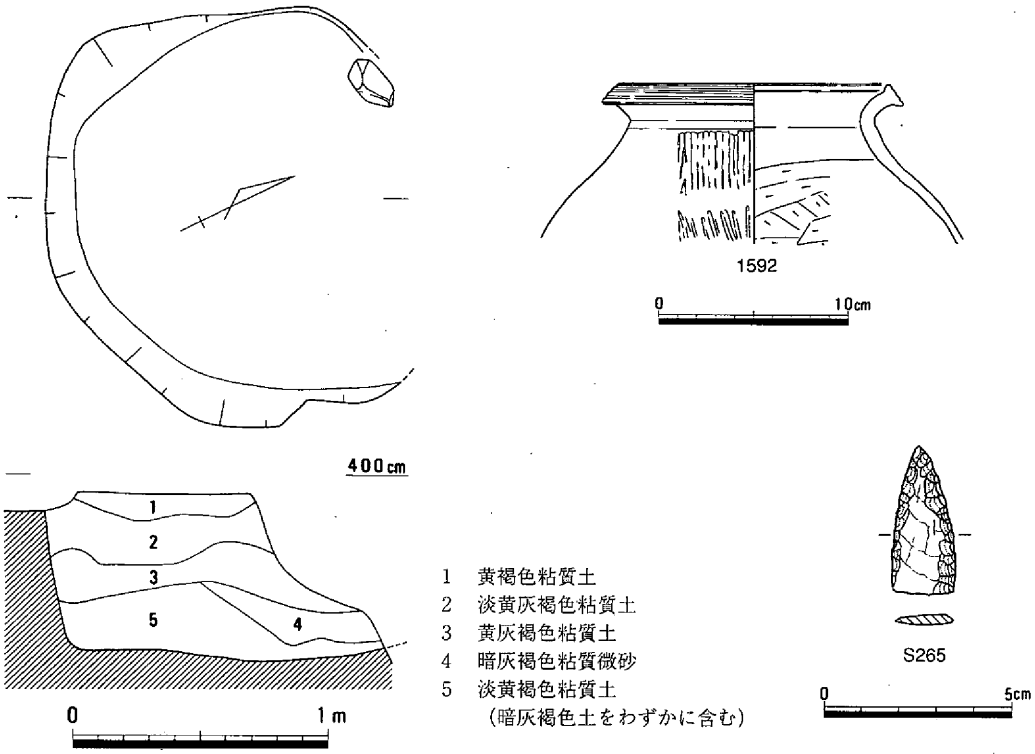
第２微高地の東端付近で検出された遺構である。遺構の残存状態はよくない。確認された規模は上面径は181cm、底面径は154cmを測り、底面形は不整楕円形を呈するものと思われる。深さは検出面から66cmを測り、底面はほぼ平坦である。また、北の壁際には25cmほどの角礫が置かれていた。埋土は５層に区分される。遺物は土器、石器が出土している。1592は甕、Ｓ265は石鏃である。時期はこれらの遺物からみて、弥・後・Ⅰと思われる。（松本）

袋状土壙65（第467図）

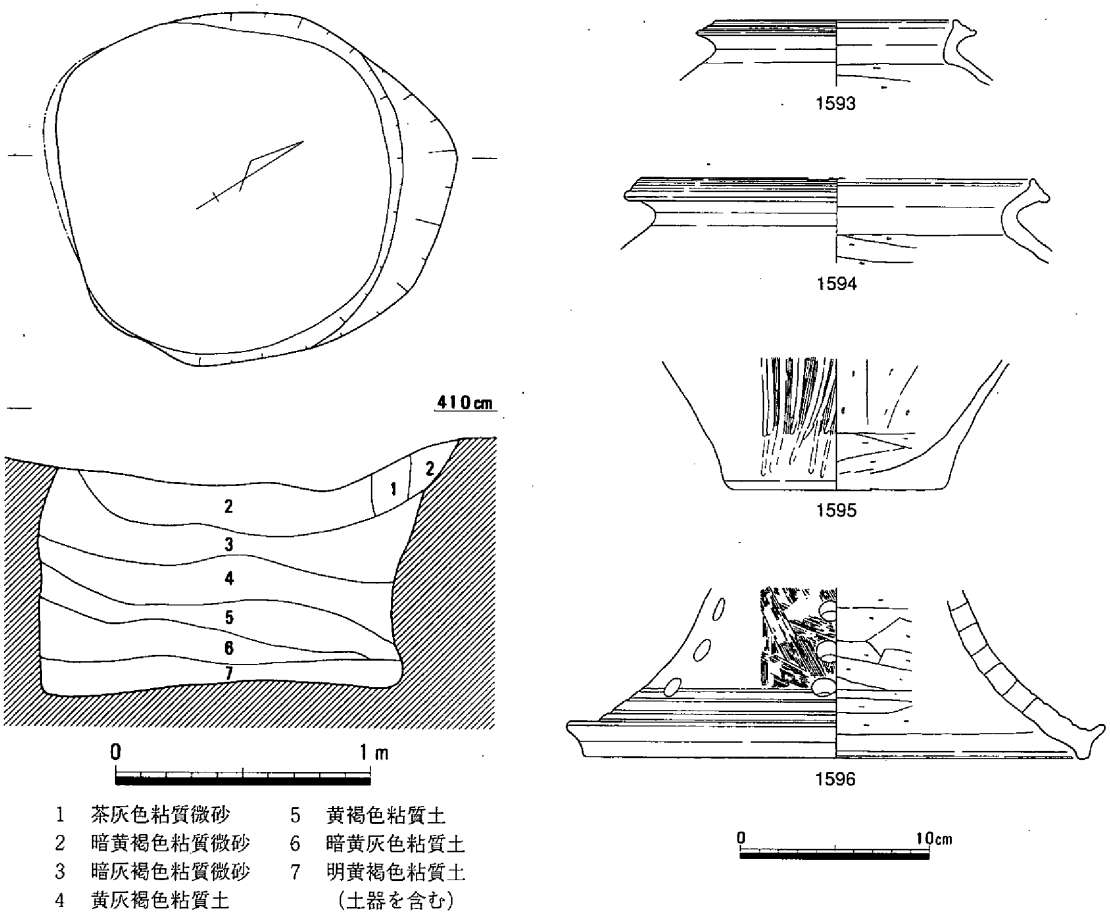
袋状土壙64の南において検出された遺構である。上部は削平を受けているが、確認された規模は上面径が155cm、底面



第465図　袋状土壙63（1/30）・遺物



第466図　袋状土壙64（1/30）・遺物



第467図　袋状土壙65（1/30）・遺物

径は136cmを測り、底面形は円形を呈する。深さは検出面から89cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は７層に区分される。遺物の出土量は多くないが、最下層からも土器が出土している。土器は甕1593・1594、壺1595、器台1596がある。甕は口縁が「く」の字状となり、端部は上下にやや拡張する。1596は器台の脚部である。時期は弥・後・Ⅰと思われる。（松本）

袋状土壙66（第468図）

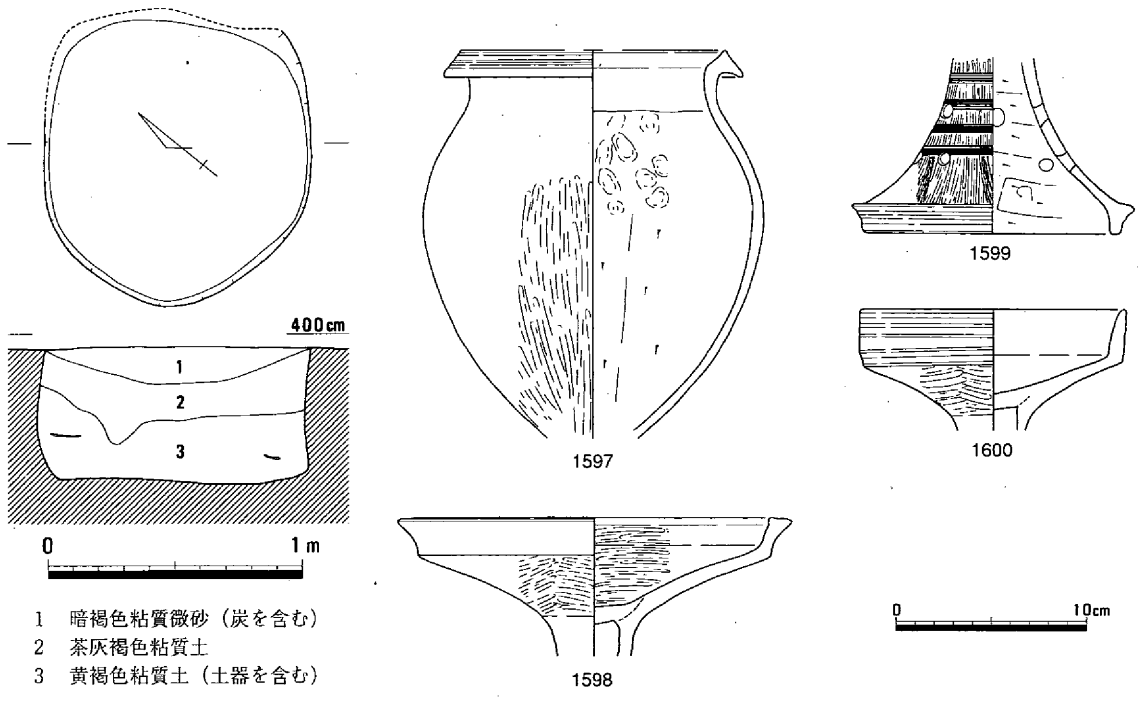
竪穴住居47の東２ｍの位置で検出された遺構である。土壙302に切られているが、確認された規模は上面径が121cm、底面径は109cmを測り、底面形は不整楕円形を呈する。深さは54cmを測り、底面は平坦である。埋土は３層に区分される。１層は炭を含み、３層からは土器が出土している。出土した遺物は甕1597、高杯1598～1600などである。高杯の杯部は２つのタイプがみられるが、いずれも器壁の内外面は丁寧なヘラミガキ調整がなされている。時期は弥・後・Ⅰと思われる。（松本）

袋状土壙67（第469図）

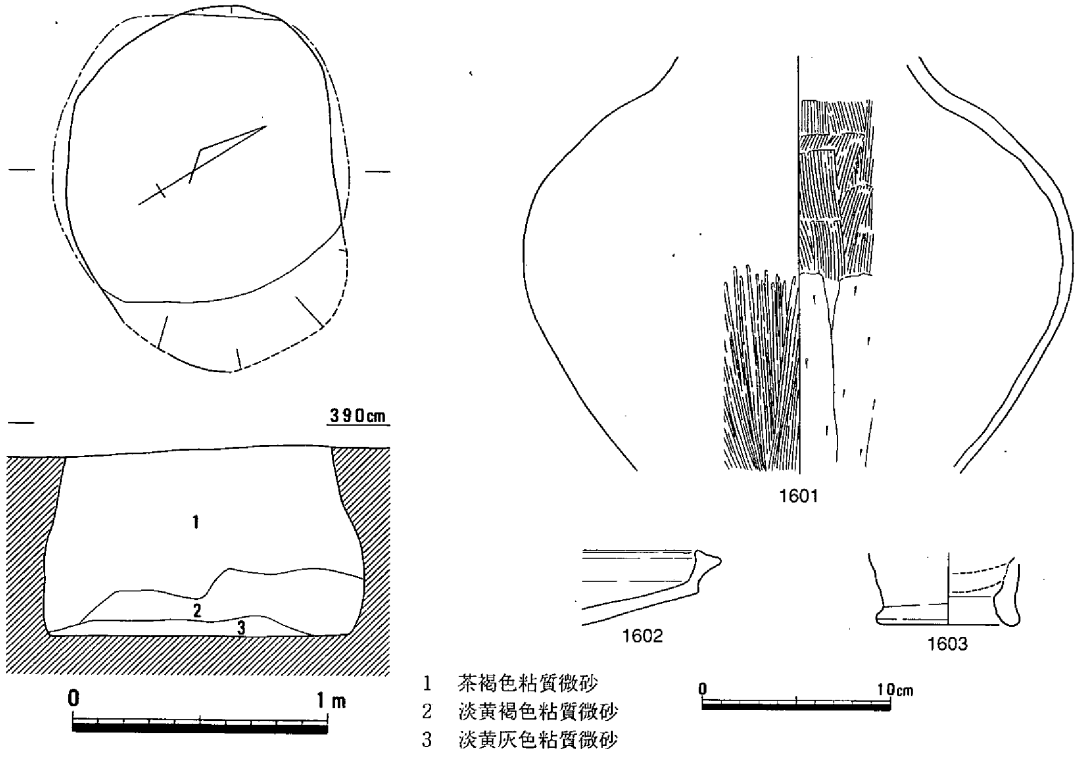
袋状土壙68に切られる状態で検出された。上部は削平されているが、上面径は146cm、底面径は128cmを測り、底面形は不整円形を呈する。深さは検出面から75cmを測り、底面は平坦である。埋土は３層に区分され、１層は茶褐色、２層は淡黄褐色、３層は淡黄灰色の粘質微砂である。遺物は土壙内から壺1601、高杯1602などの土器が出土している。壺は頸部から胴部にかけて「ハ」の字状に広がる。時期は出土遺物からみて弥・後・Ⅰと思われる。（松本）

袋状土壙68（第470図）

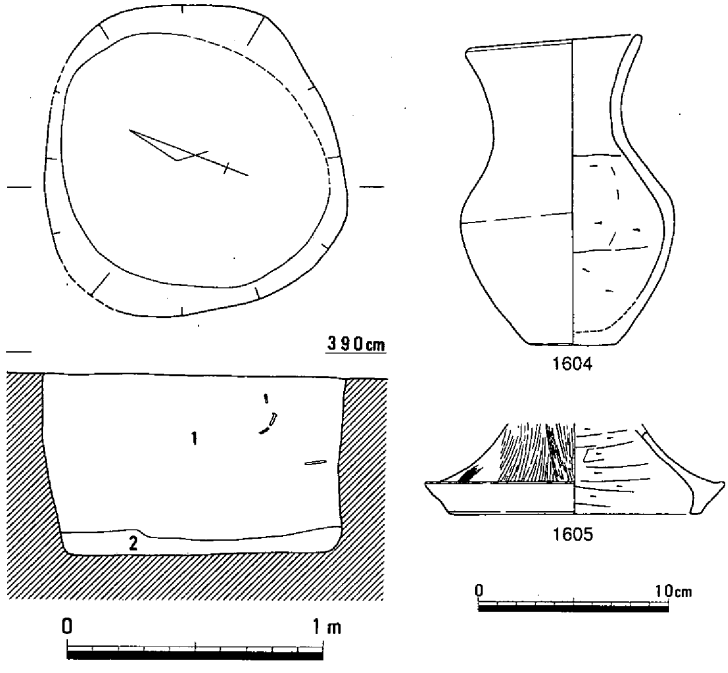
土壙303に切られる状態で検出された遺構である。かなり削平されてはいるが、上面径は130cm、底面径は113cmを測り、底面形は楕円形を呈する。深さは検出面から71cmを測り、底面は平坦である。埋土は２層に区分され、１層からは土器、炭などが出土している。遺物はほぼ完形の小形の壺1604、高杯の脚端部1605などが出土している。時期は弥・後・Ⅰと思われる。（松本）



第468図　袋状土壙66（1/30）・遺物



第469図　袋状土壙67（1/30）・遺物

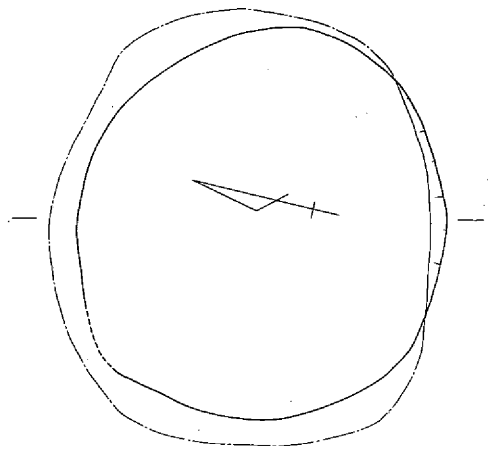


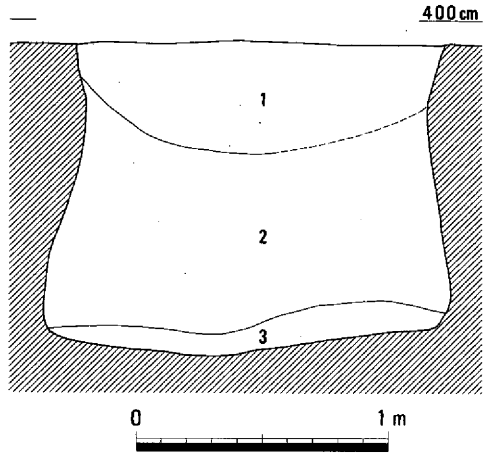
第470図　袋状土壙68（1/30）・遺物

袋状土壙69（第471図）

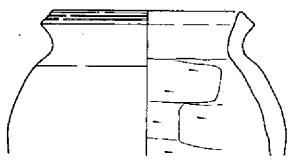
第２微高地の東端部の位置で検出された遺構である。上部は削平を受けているが、上面径は152cm、底面径は179cmを測り、底面形は楕円形を呈する。深さは検出面から124cmを測り、底面は平坦に近い。埋土は１層が暗茶褐色粘質微砂、２層は黄褐色粘質土、３層は黄灰色粘質土に区分された。

遺物は土器が出土している。主な土器としては壺1606～1609・1611・1613、甕1610・1612・1614、高杯1615～1617、製塩土器1618などがある。壺は頸部が短いものと少し長いものとがある。1606の口縁端部は拡張がみられない、短い頸部の壺である。器壁外面は頸部から下にハケメによる調整が行われ、内面には頸部から少し下にヘラケズリが行われている。1607～1609は口縁端部が上下に拡張するもので、端面に凹線文を巡らすものである。1611の胴部にはヘラ描



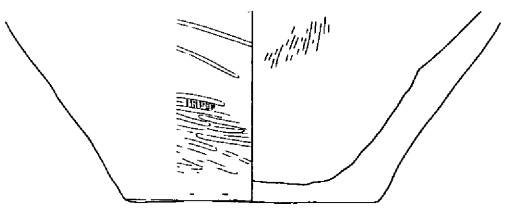


1　暗茶褐色粘質微砂
2　黄褐色粘質土
3　黄灰色粘質土

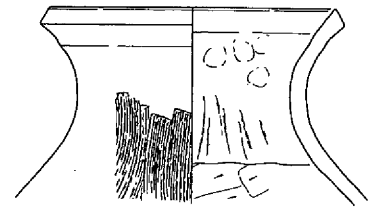


1612

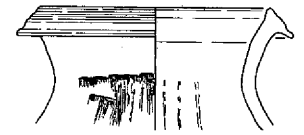
1613



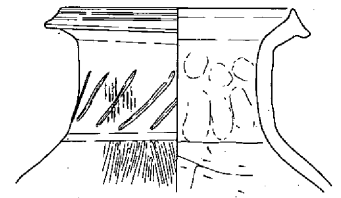
1614



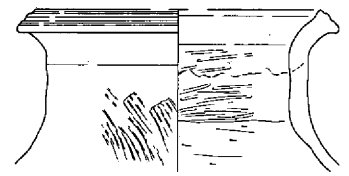
1606



1607



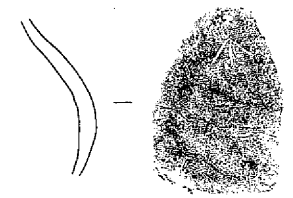
1608



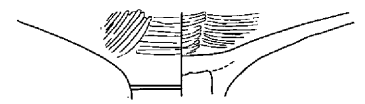
1609

1610

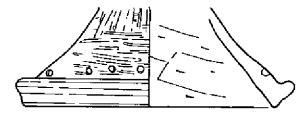
1615



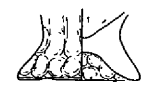
1611



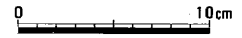
1616



1617



1618



第471図　袋状土壙69（1/30）・遺物

きの文様がみられる。高杯の杯部は稜をもって外反するものである。器壁の内外面は丁寧なヘラミガキによる調整がなされている。時期はこれらの遺物からみて弥・後・Ⅰと思われる。　（松本）

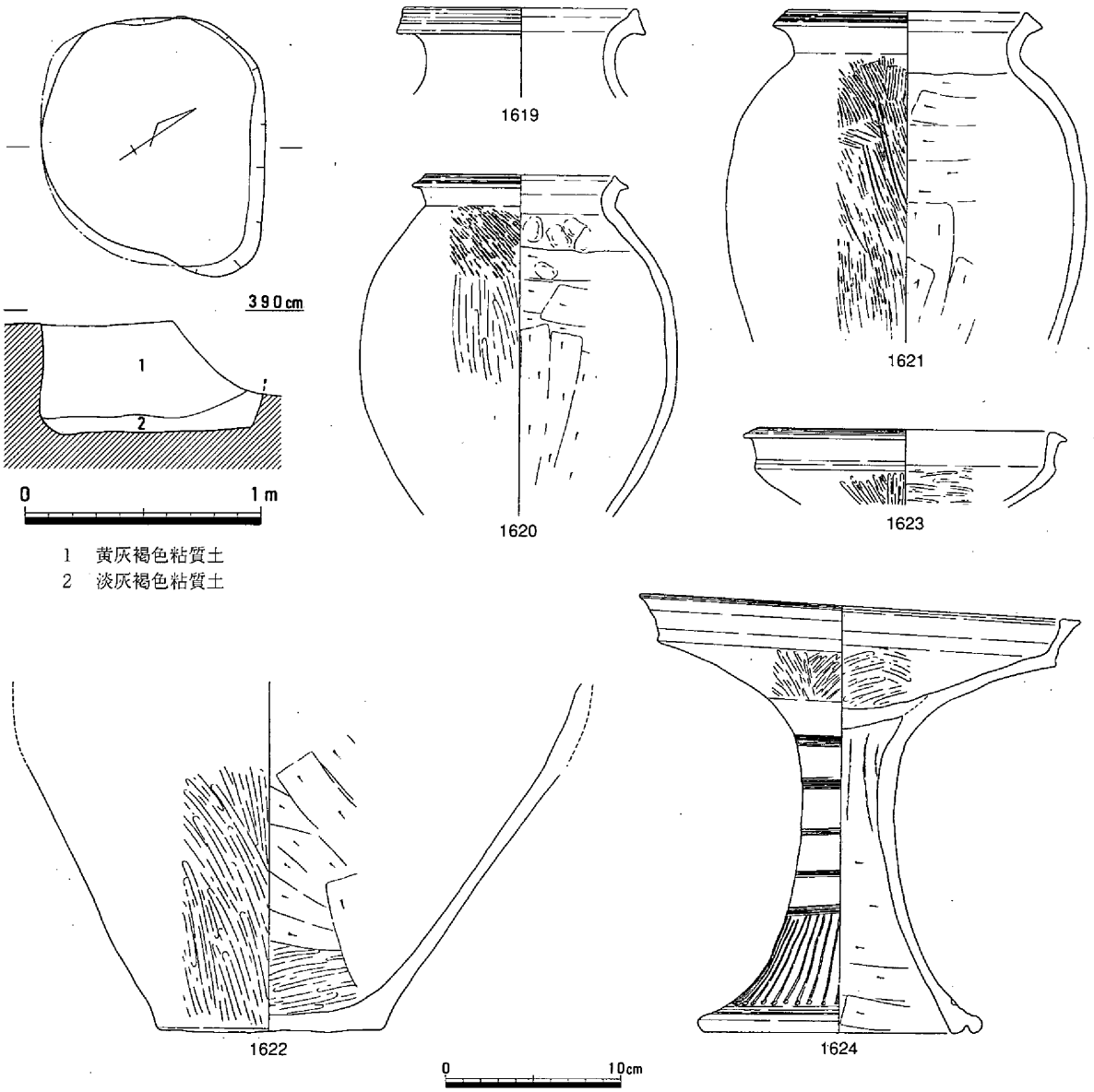
袋状土壙70（第472図、写真76）

第２微高地の東端部の位置で検出された。遺構の大部分は他の遺構に切られているが、確認された遺構の上面径は122cm、底面径は113cmを測り、底面形は不整楕円形である。深さは検出面から48cmを測り、底面は平坦である。埋土は２層に区分されるが、灰褐色系の粘質土で埋まっていた。

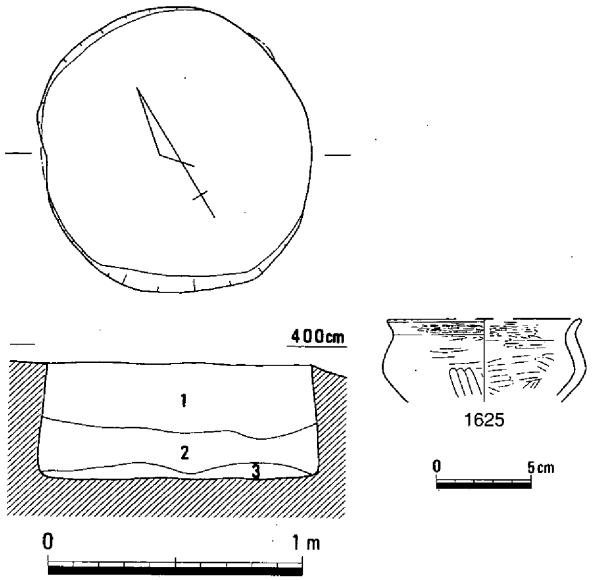
遺物は土器が出土している。器種としては、壺、甕、高杯がある。1619は頸部が短い壺と思われる。高杯は杯部に稜をもって外反するが、端部が1623のように外下方に拡張するものもある。脚部は長く、端部は肥厚する。脚柱には５段の櫛描文がみられる。時期は弥・後・Ⅰと思われる。　（松本）

袋状土壙71（第473図）

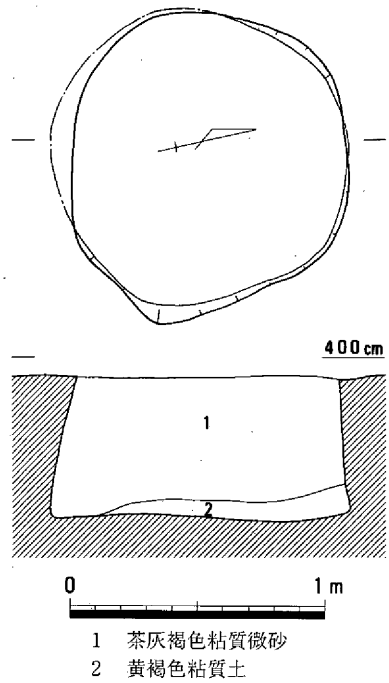
竪穴住居48の北西約２ｍの位置で検出された遺構である。上部はかなり削平を受けている。検出さ



第472図　袋状土壙70（1/30）・遺物



第473図　袋状土壙71（1/30）・遺物



第474図　袋状土壙72（1/30）

れた上面径は112cm、底面径は106cmを測り、底面形は円形を呈する。深さは検出面から46cmを測り、底面は平坦である。埋土は３層に区分されるが、いずれも灰褐色系の粘質土である。遺物としては小形の鉢1625が出土している。時期は弥・後・Ⅰと思われる。　（松本）

袋状土壙72（第474図）

第２微高地の東端、溝17の西で検出された遺構である。上部は削平を受けているが、上面径は125cm、底面径は117cmを測り、底面形は円形を呈する。深さは検出面から58cmを測り、底面は平坦である。埋土は２層に区分される。出土遺物はないが、検出面からみて弥・後と思われる。　（松本）

（４）土壙

土壙216（第475図、写真15－１）

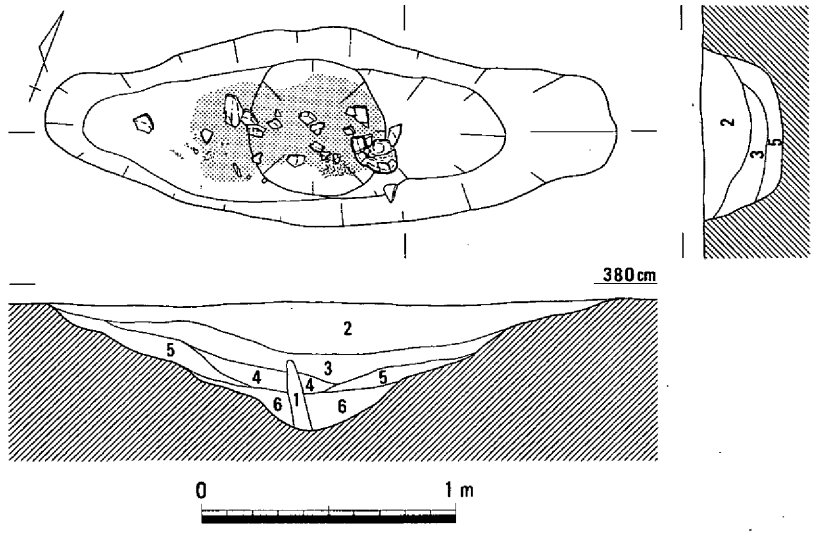
M22区の北東に位置する土壙で、溝11の北西３ｍで検出した。長さ224cm、幅78cmの長楕円形をなす、いわゆる船形土壙である。横断面はＵ字形を呈するものの、縦断面は中央に向かって深くなるＶ字形をなす。埋土には炭や焼土を多く含んでおり、弥生土器も出土している。これらは図示できなかったが、その特徴から弥・後・Ⅰ期に属するものと思われる。　（亀山）

土壙217（第476図）

島状高まり１の北半西肩部にあった。土器片が少し出土し、検出面からも弥生時代後期の遺構と考えられる。平面形は隅丸方形に近く、北西辺に片寄って長径65cmの円形の窪みがあり、南西に続いて直径22cmの柱痕らしき穴も確認された。長径は123cmで、深さが32cmであった。　（岡本）

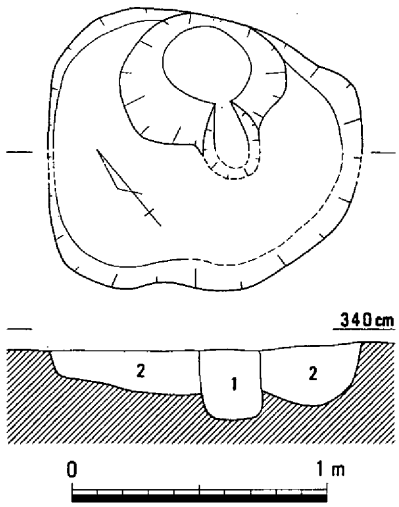
土壙218（第477図）

第２微高地の南西端で、道路本線部分から南に突出した調査区にある。平面形は不整楕円形、断面形は椀形を呈す。規模は、長さが158cm、幅は119cmで、深さが42cmを測る。



1　灰色砂質土（後世の杭痕）
2　暗茶褐色砂質土
3　暗黄灰褐色砂質土（炭・焼土を含む、土器を多く含む）
4　黄灰褐色砂質土（炭・焼土を含む）
5　黄灰褐色砂質土
6　暗灰青色砂質土（炭・焼土を含む）

第475図　土壙216（1/30）



1　褐灰色（7.5YR5/1）粘性砂質土
2　褐灰色（7.5YR6/1）粘性砂質土

第476図　土壙217（1/30）

出土遺物をみると、甕1626はくの字に短く折り曲げた口縁部をもち、端部は丸く終わる。鉢には台の付く1630、口縁が外反する小形の1627、大形の1629と口縁が直立する1628がある。高杯1631は浅い杯部をもち、脚部は短脚で四方に円孔を配す。

以上の土器の特徴からみて、この土壙の時期は、弥・後・Ⅳである。（弘田）

土壙219（第478図）

土壙218の３ｍ東に位置する土壙で、平面形は不整方形を呈す。規模は、長さが101cm、幅は90cmで、深さが25cmを測る。

図示できる遺物はないものの、この土壙の時期は弥・後・Ⅳである。（弘田）

土壙220（第479図）

土壙219から北に10m離れて位置する土壙で、平面形は、不整方形を呈す。この土壙はさらに西側が調査区外にのびるが、現存部で長さが338cm、幅は206cmで、深さが24cmを測る。

遺物は出土していないが、周囲の遺構の状況や埋土から時期は弥生時代後期と思われる。（弘田）

土壙221（第480図）

竪穴住居13の東５ｍで検出した円形の土壙である。規模は長さ74cm、幅72cm、深さ16cmを測る。床から20cm程浮いて土器が出土している。

1632は甕で、口縁端部は上に拡張し、体部内面はヘラケズリしている。1633は甑である。1634は鉢で、内外面ともヘラミガキしている。

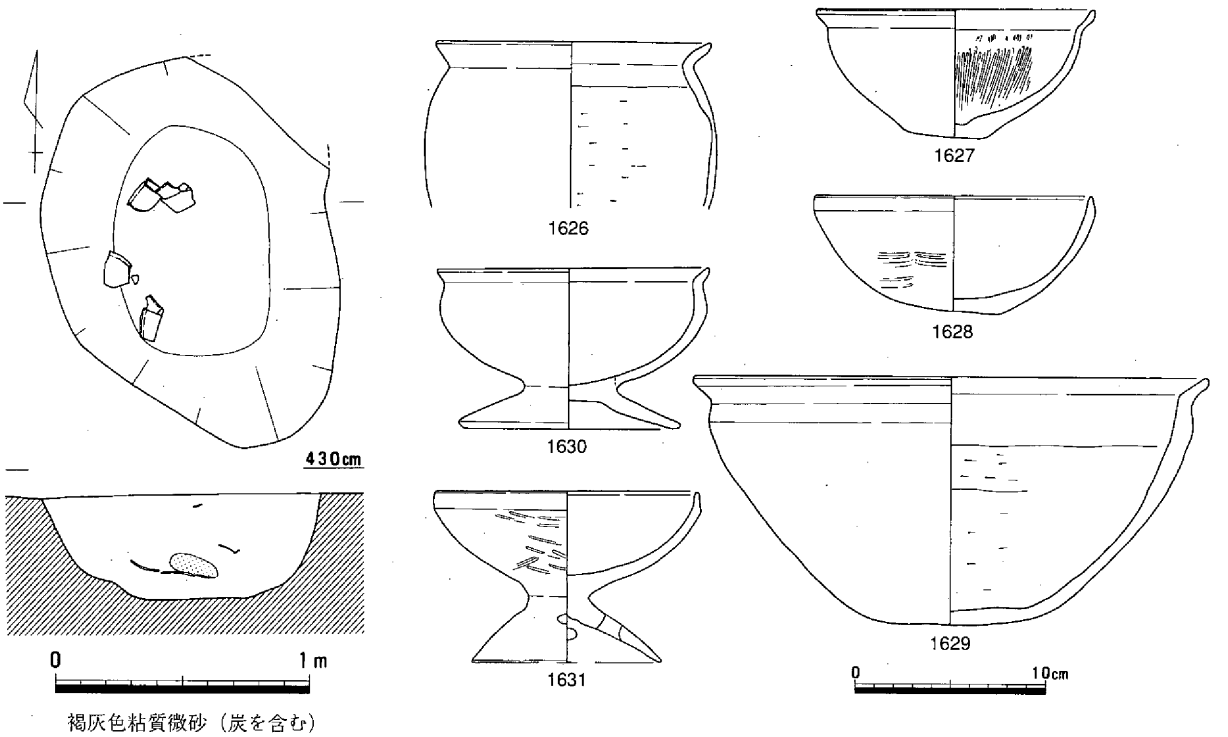
土器から考えて、この土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えたい。（浅倉）

土壙222（第481図）

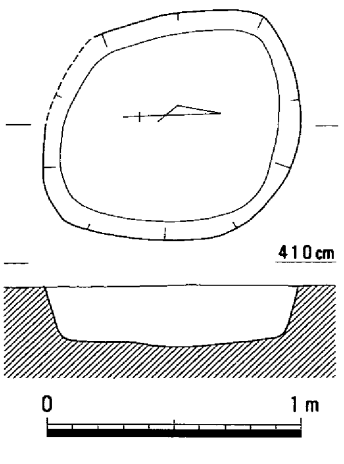
土壙221の東４ｍで検出した楕円形の土壙である。規模は長さ72cm、幅59cm、深さ14cmを測る。埋土中から土器が出土している。

1635は鉢で、口縁端部は上に拡張し、体部内面はヘラケズリしている。

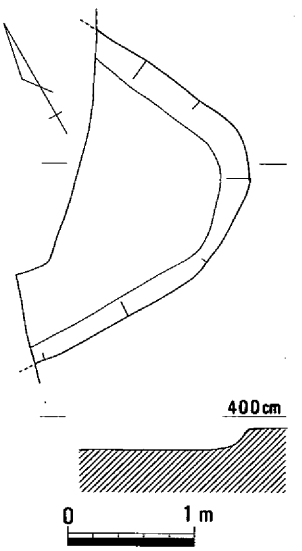
土器から考えて、この土壙の時期は弥・後・Ⅳと考えたい。（浅倉）



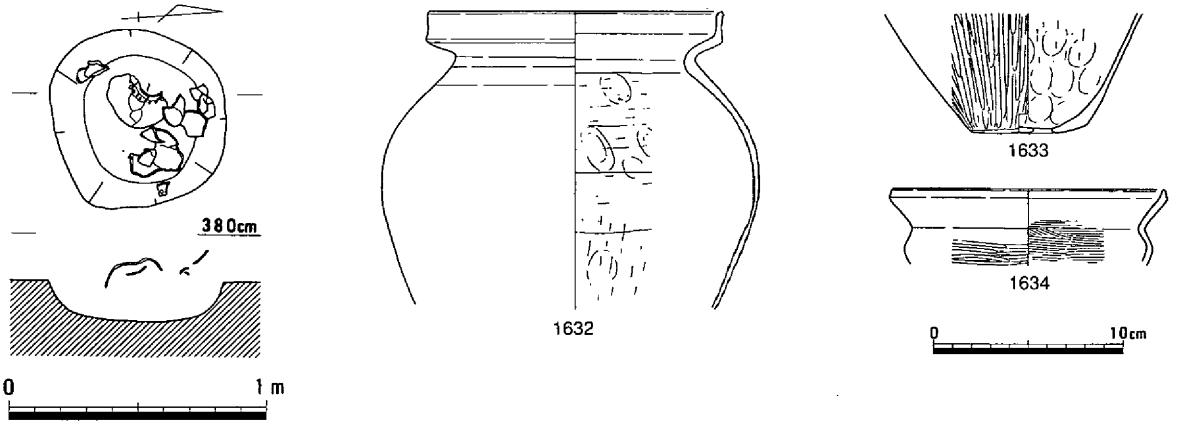
第477図　土壙218（1/30）・遺物



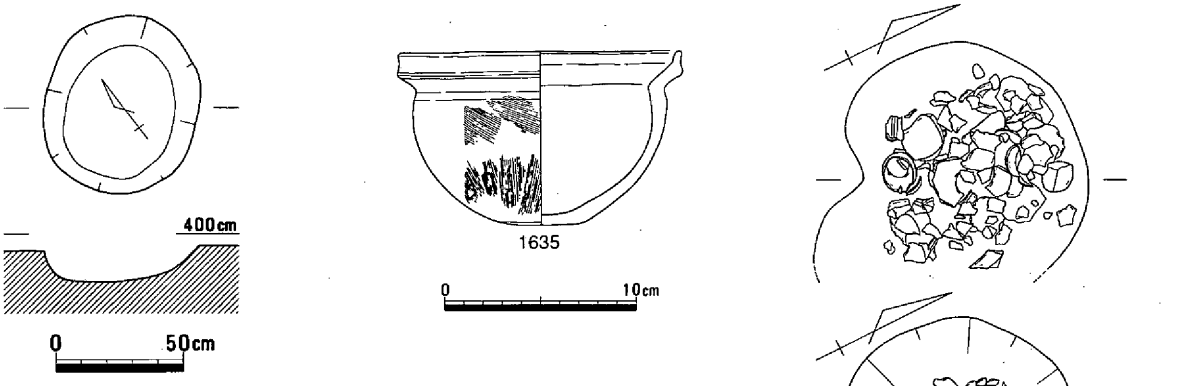
第478図　土壙219（1/30）



第479図　土壙220（1/60）



第480図　土壙221（1/30）・遺物



第481図　土壙222（1/30）・遺物

第482図　土壙223（1/30）

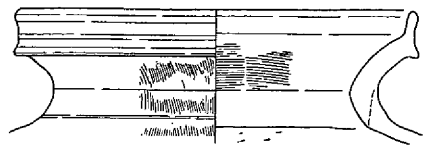
土壙223（第482～484図、写真77）

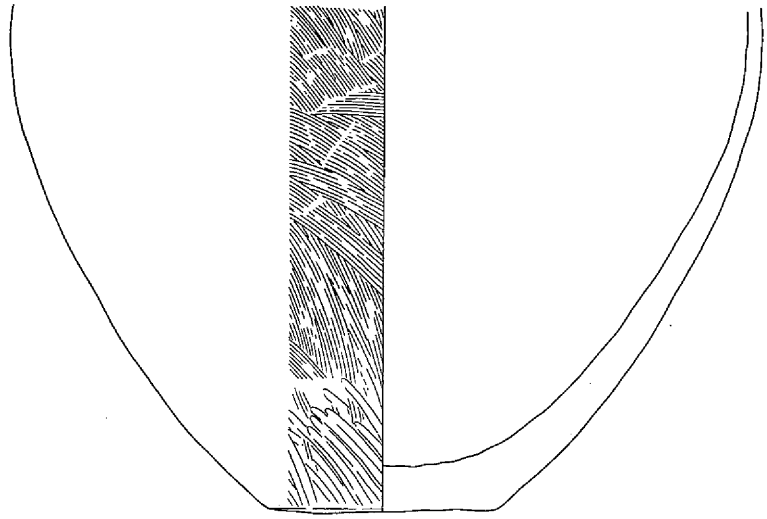
竪穴住居13の南2.5ｍで検出した不整円形の土壙である。規模は長さ104cm、幅89cm、深さ41cmを測る。床から20cm程離れて土器が多数出土している。土器は３個の完形に近いものと多数の破片があり、拳大の角礫を数個前者の上に乗せた状態が認められた。

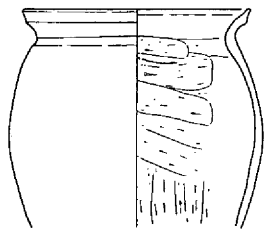
1636は壺で、口縁端部は上に拡張し、体部内面はヘラケズリしている。1637は壺下半部である。1638は甕で、内面ヘラケズリしている。1639は甕で、器壁が薄い。1640は全形のわかる甕で、体部内面ヘラケズリ、外面ハケメ調整している。1641は甕である。1642の甕は、口縁端部が上に拡張され端面に沈線を持つ。体部内面ヘラケズリ、外面ハケメ調整している。1643の甕は、肩部に３個の刺突が施され、平底の底部内面に指頭圧痕が残っている。1644～1646は口縁端部が上に拡張された甕である。1647は胴部の短い甕である。1648～1651は八の字に外反する口縁の甕である。1652～1654は短脚の高杯である。1655～1657は鉢である。

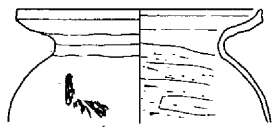
土器の出土状態から見てこの土壙の用途は土器捨て場と考えたい。この土壙の時期は弥・後・Ⅳと判断される。

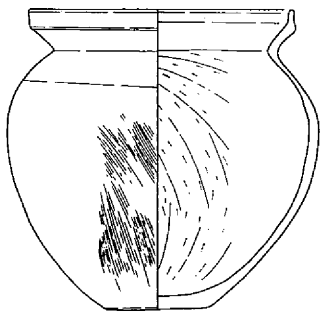
（浅倉）

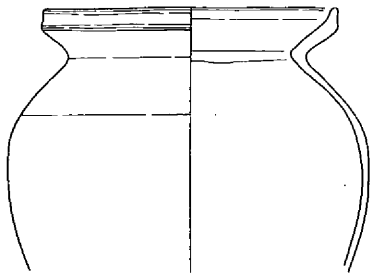

1636

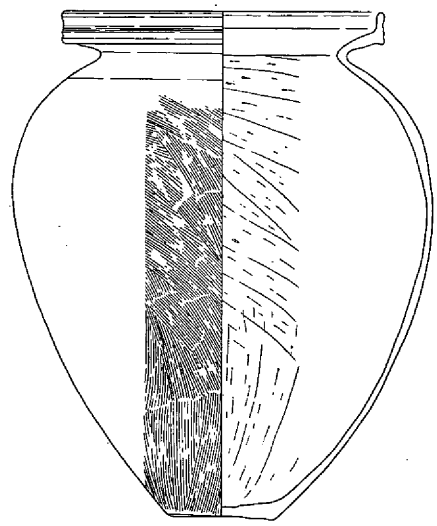

1637

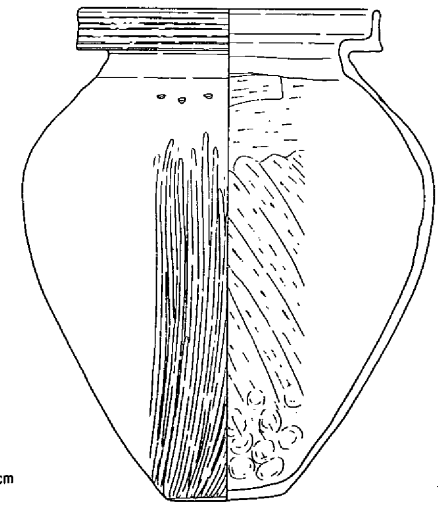

1638


1639

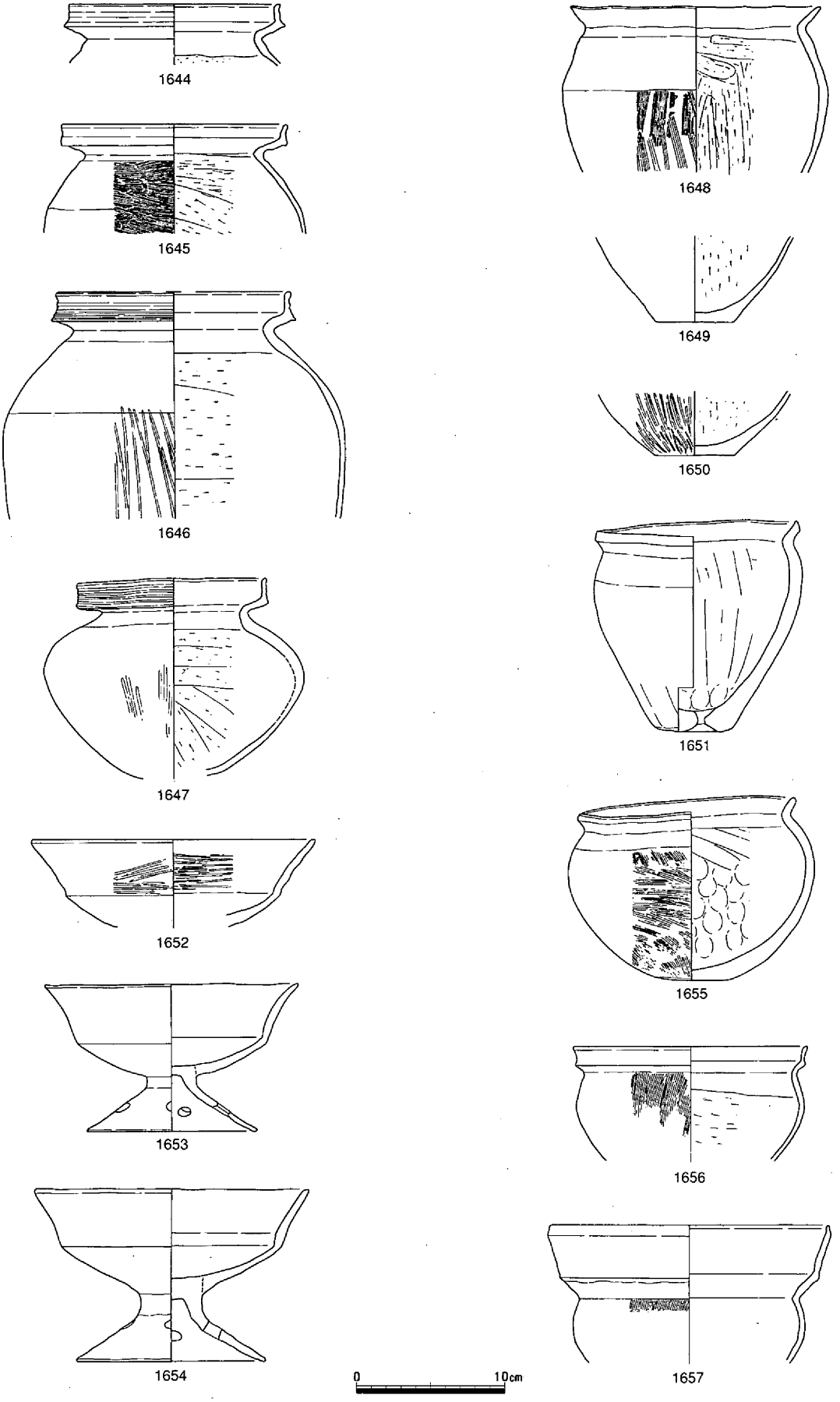

1640


1641


1642


1643

第483図　土壙223　遺物（１）



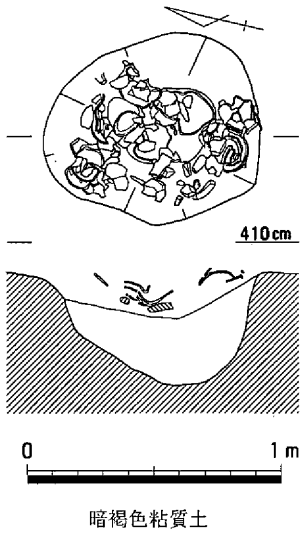
第484図　土壙223　遺物（２）

土壙224（第485図、写真15－２、77）

土壙221の北北東３ｍで検出した不整円形の土壙である。規模は長さ87cm、幅72cm、深さ44cmを測る。床から30cm程離れて土器が多数出土している。土器は多数の破片があり、薄い角礫が数個混じった状態で出土している。

1658は壺で、口縁端部は上に拡張し、端面に沈線を持つ。体部内面はヘラケズリしている。1659は外反する口縁の甕である。体部内面ヘラケズリ、外面ハケメ調整している。1661は甕で、口縁端部に幅の狭い面をもつ。1663～1665は鉢で、1663は精良な粘土を使っている。1665は底部の厚い小型鉢である。

この土壙の時期は土器から弥・後・Ⅳと判断される。土壙の用途としてはゴミ穴であろう。（浅倉）

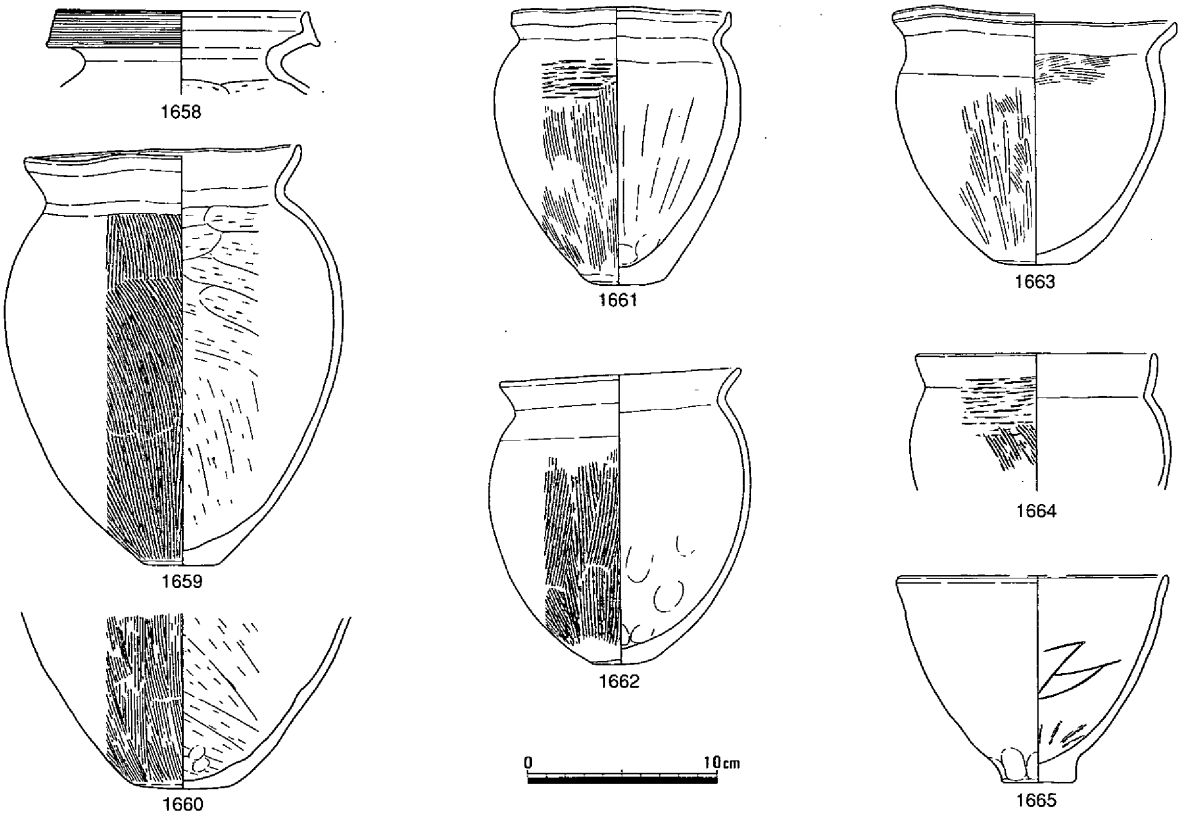


土壙225（第486図）

第２微高地で南側水路部分の調査区中央西よりに位置する。約半分が調査区外に続くと思われ、現存部では平面形が不整楕円形を呈し、規模は長さが167cm、幅は78cmで、深さが42cmを測る。

出土遺物のうち、1666は大形で二重口縁の壺である。鉢1667は平底の底部から内湾して立ち、くの字に曲げた口縁部は上方に拡張する。外面に細かいミガキを施している。

時期は、弥・後・Ⅳである。（弘田）



第485図　土壙224（1/30）・遺物

土壙226（第487図）

第２微高地の西端で調査区の中央に位置する土壙である。平面形は長方形を呈し、規模は長さが112cm、幅は94cmで、深さが25cmを測る。遺物としてはサヌカイト製石鏃Ｓ226が出土している。

時期を特定する遺物に乏しいものの、この土壙の時期は、弥生時代後期と思われる。　（弘田）

土壙227（第488図）

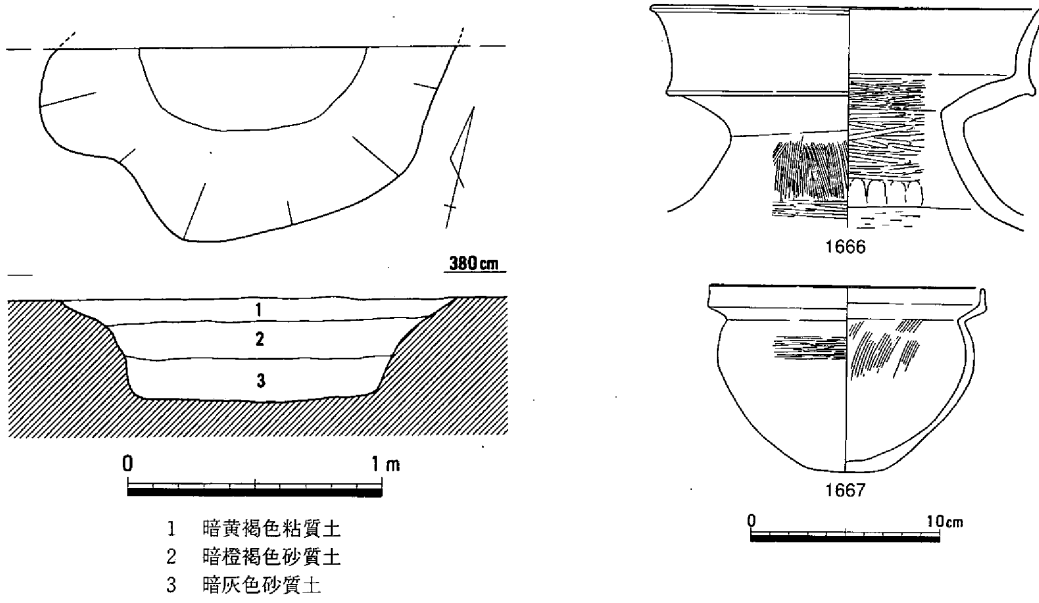
土壙226の南に接して位置する土壙で、平面形が楕円形を呈する。規模は長さが95cm、幅は71cmである。底面は段状を呈するが、深さは最大で15cmを測る。

時期を特定する遺物はないが、埋土などからみて弥生時代後期であろう。　（弘田）

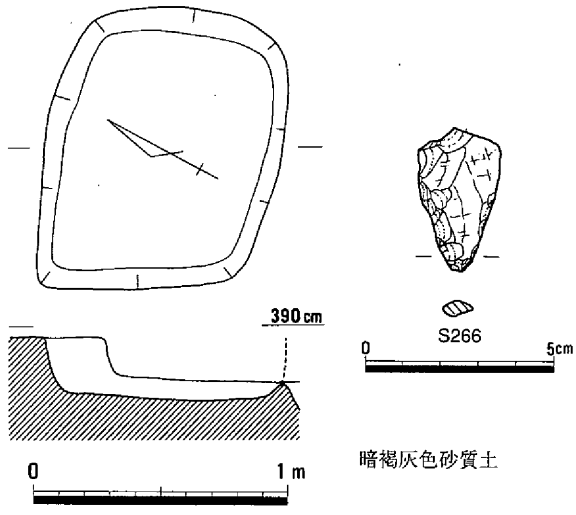
土壙228（第489図）

土壙226・227から北東方向に４ｍ離れて位置する土壙で、一部が竪穴住居91によって削平されている。平面形は楕円形を呈し、規模は長さが161cm、幅は133cmで、深さが31cmを測る。

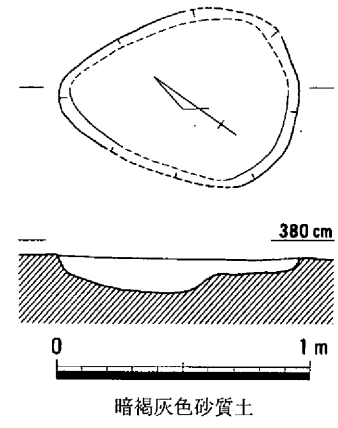
時期は、弥生時代後期である。　（弘田）



第486図　土壙225（1/30）・遺物



第487図　土壙226（1/30）・遺物



第488図　土壙227（1/30）

土壙229（第490図）

第２微高地内にあり、調査区西端近くの中央部に位置する土壙である。平面形が不整楕円形を呈し、規模は長さが176cm、幅は105cmで、深さが22cmを測る。

時期は、弥生時代後期と思われる。　（弘田）

土壙230（第491図）

土壙229の東に接して位置する土壙である。平面形は楕円形を呈す。規模は長さが148cm、幅は79cmで、深さが24cmを測る。

甕1668はくの字に外反させ、端部を上下に拡張して外面には凹線をめぐらしている。

この土壙の時期は、弥・後・Ⅲである。　（弘田）

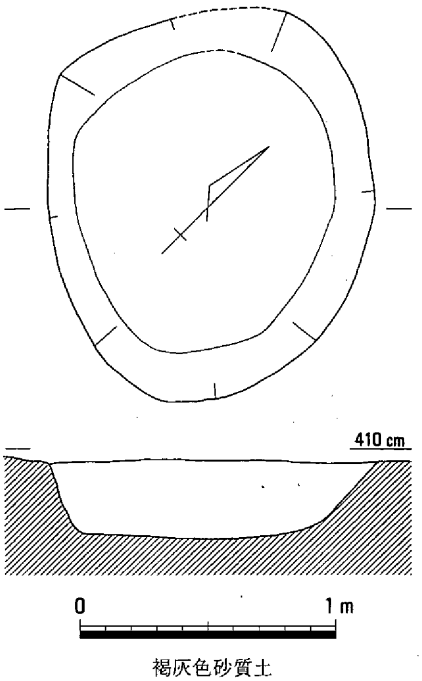
土壙231（第492図）

土壙230から東に３m位置する土壙で、平面形が楕円形を呈する。規模は、長さが127cm、幅は98cmで、深さが19cmを測る。

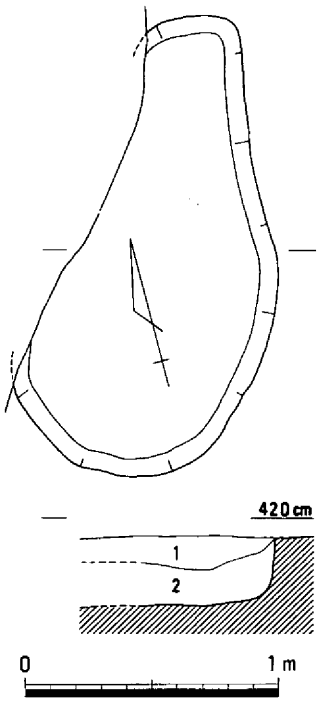
出土遺物のうち甕1669は口縁部は短く直線的に外上方にのび、端部は丸く終わる。この土壙の時期は、弥・後・Ⅳである。　（弘田）

土壙232（第493図）

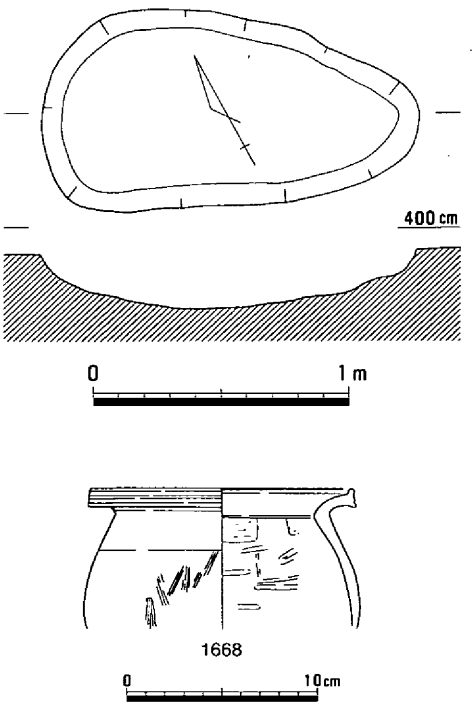
土壙231の東に近接する土壙であり、平面形は不整



第489図　土壙228（1/30）



第490図　土壙229（1/30）



第491図　土壙230（1/30）・遺物

円形を呈する。規模は長さが140cm、幅は115cmで、深さが21cmを測る。

遺物は出土していないが、弥生時代後期と思われる。　（弘田）

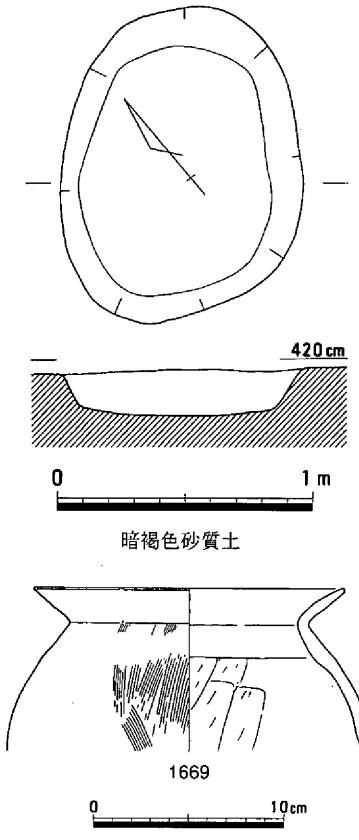
土壙233（第494図）

土壙232の東２ｍに位置する土壙で、平面形は不整楕円形、断面形が椀状を呈する。規模は長さが104cm、幅は89cmで、深さは22cmを測る。

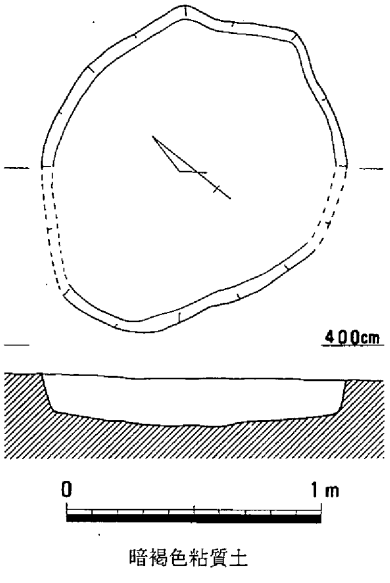
出土した遺物から、土壙の時期は弥・後・Ⅳである。　（弘田）

土壙234（第495図）

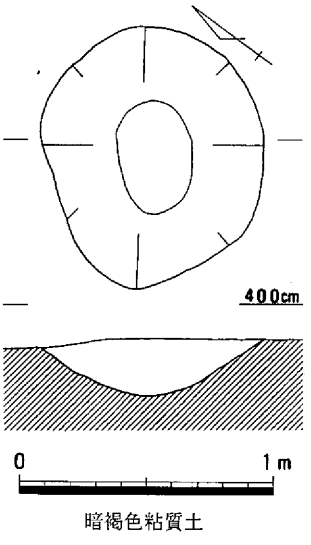
竪穴住居27の北西３ｍの所に位置する土壙で、平面形は楕円形を呈する。規模は、長さが69cm、幅は51cmで、深さが11cmを測る。



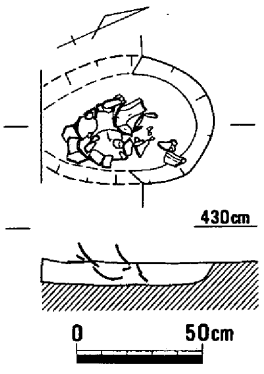
第492図　土壙231（1/30）・遺物

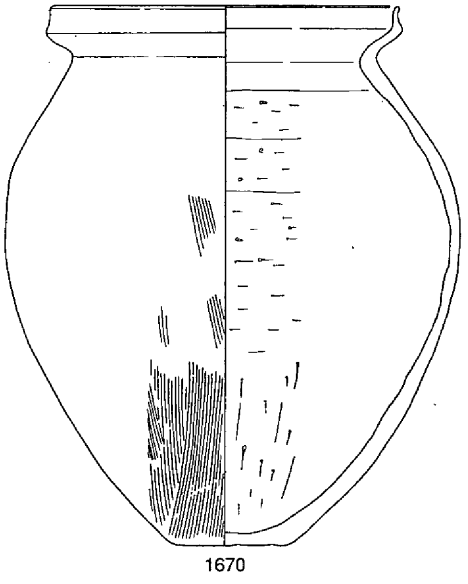


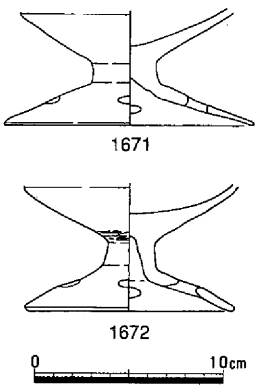
第493図　土壙232（1/30）



第494図　土壙233（1/30）







第495図　土壙234（1/30）・遺物

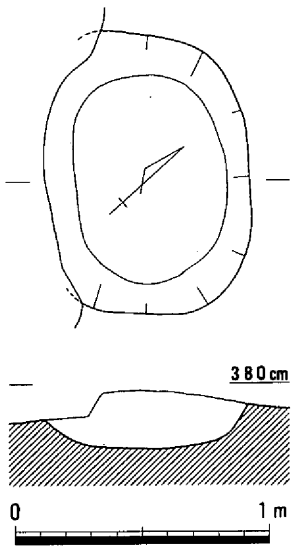
出土遺物のうち完形に復元できた甕1670は平底で卵形の体部をもつ。口縁部は短く外反したのち、上方に拡張する。高杯1671・1672はともに短脚で、裾部には４ヶ所の円孔を配す。

この土壙の時期は、弥・後・Ⅳである。　（弘田）

土壙235（第496図）

円形の竪穴住居24の南西部に接して位置する土壙である。平面形が楕円形を呈し、規模は長さが112cm、幅は82cmで、深さは23cmを測る。

この土壙の時期は、弥・後・Ⅳである。　（弘田）



第496図　土壙235（1/30）

土壙236（第497図）

竪穴住居20の北東隅に一部が重複する土壙で、平面形は楕円形を呈す。規模は残存長が151cm、幅は90cmで、深さが37cmを測る。図示できる遺物はないもののこの土壙の時期は、弥・後・Ⅱである。　（弘田）

土壙237（第498図）

竪穴住居21の東に接する土壙である。平面形は楕円形を呈し、規模は長さが83cm、幅は63cmで、深さが22cmを測る。

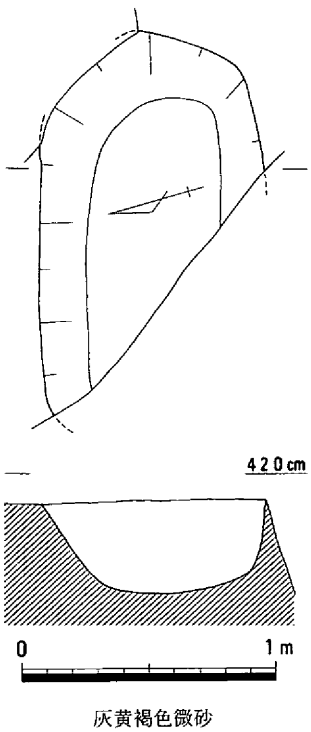
出土遺物のうち、甕1673は口縁端部が上下に拡張し、その外面に擬凹線を施す。石器には泥岩製で一方の端に両刃つけるノミ形のＳ267がある。

この土壙の時期は、弥・後・Ⅳである。　（弘田）

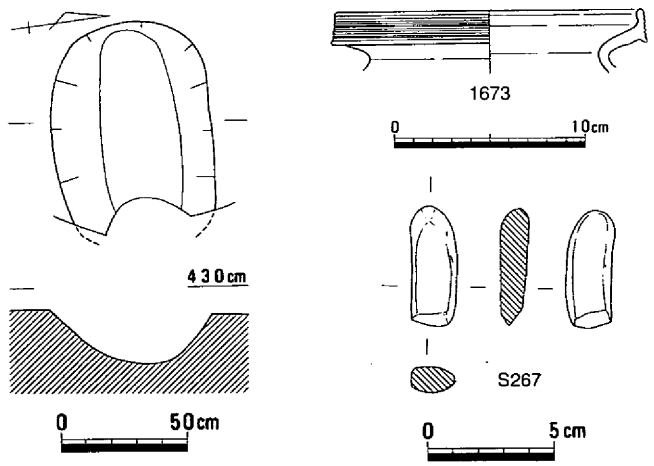
土壙238（第112図）

竪穴住居24の東に接して位置する土壙で、弥生中期の土壙52・53を切る。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長さが131cm、幅は95cmで、深さが27cmを測る。

図示できるものはないが出土遺物からみて、弥生時代後期である。　（弘田）



第497図　土壙236（1/30）



第498図　土壙237（1/30）・遺物

土壙239（第499・500図、写真15－３、78）

第２微高地の調査区中心から西より、竪穴住居24の東４ｍに位置する。平面形は長方形を呈し、壁面も急傾斜をもって平坦な底面にいたる。規模は長さが197cm、幅は142cmで、深さが57cmを測る。

二重口縁壺1674は床上に倒立して置かれていた。長頸壺1675は口縁端部を上方に拡張し、頸部以下の外面と口縁部内面には、ヘラミガキを施す。甕では、口縁部端部が上方に拡張し、外面に凹線がめぐる甕1677～1680と1680～1682がある。鉢では、小形で底部から内湾して立つ口縁部の外面に凹線をめぐらせる1683、深い体部をもちＬ字状の小さな口縁部がつく1634と口縁端部が内傾する面をなし、かつ短い脚部のつく1685がある。1683は短い脚部のつく壺で外面には細かいヘラミガキを施す。

この土壙の時期は、弥・後・Ⅳである。（弘田）

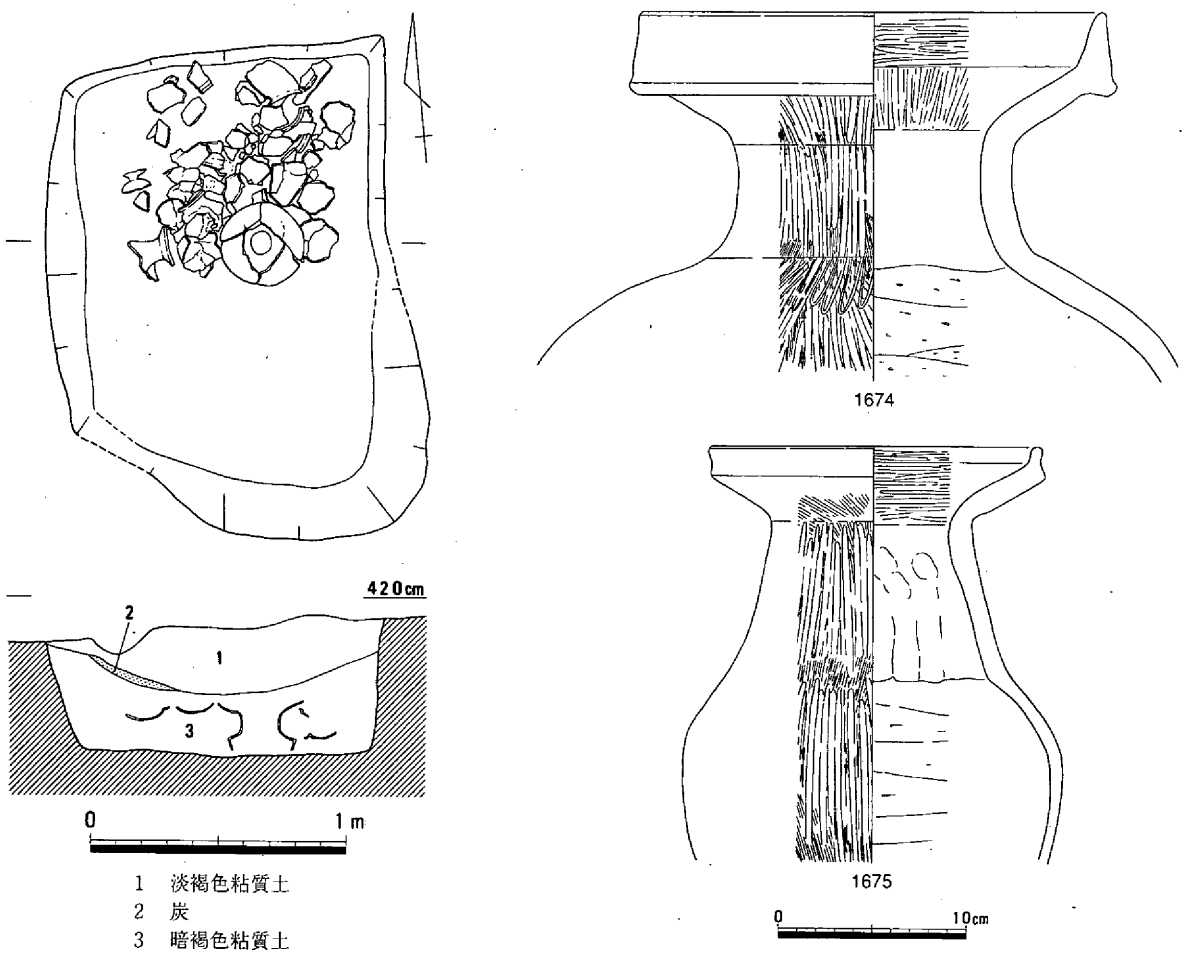
土壙240（第501図）

竪穴住居24から南東方向に５ｍ離れたところに位置する。平面形が円形を呈する土壙である。規模は長さが107cm、幅は79cmで、深さが36cmを測る。出土した遺物には、口縁部が短く外反したのち上方に拡張し、外面に擬凹線を施す甕1687と口縁部とくの字に外反し、端部が丸く終わる1688がある。

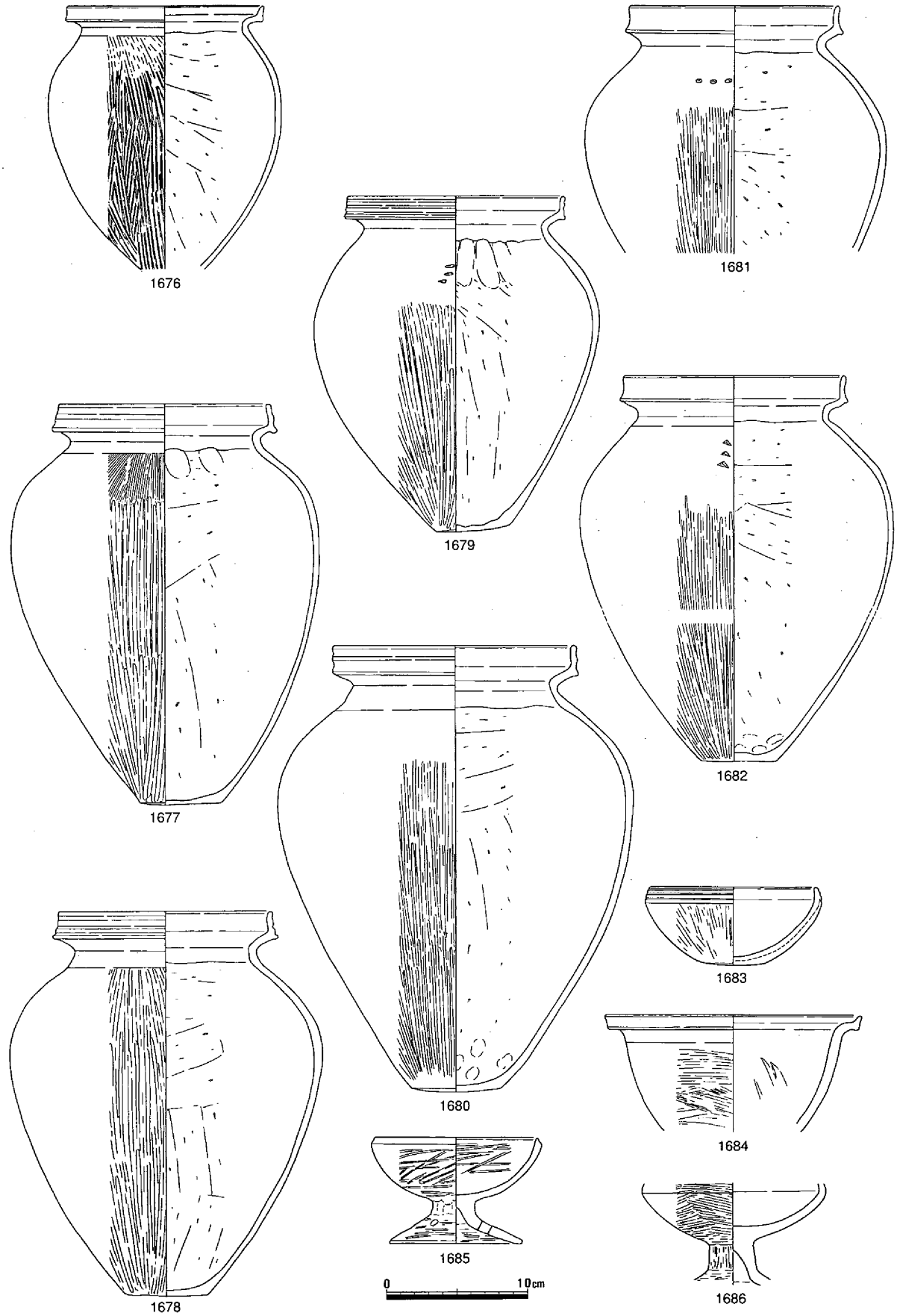
この土壙の時期は、弥・後・Ⅳである。（弘田）

土壙241（第502図）

竪穴住居24から東に５ｍ離れたところに位置する。平面形が長方形と円形を呈する二つの土壙が重



第499図　土壙239（1/30）・遺物（１）



第500図　土壙239　遺物（２）

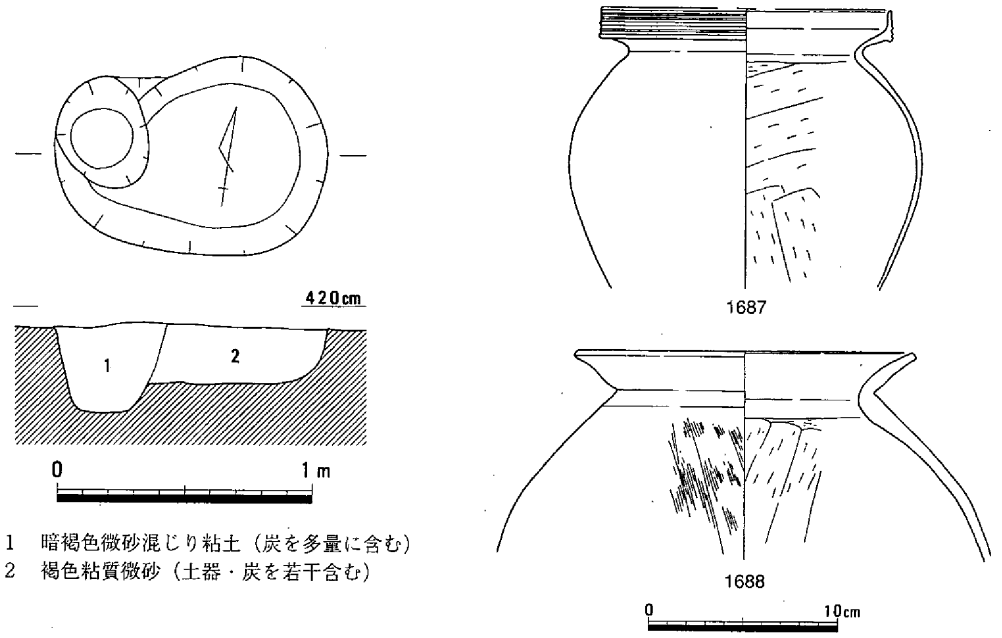
複した状態である。規模は、長さが96cm、幅は78cmで、深さが29cmを測る。

この土壙の時期は、弥生時代後期と思われる。（弘田）

土壙242（第503図）

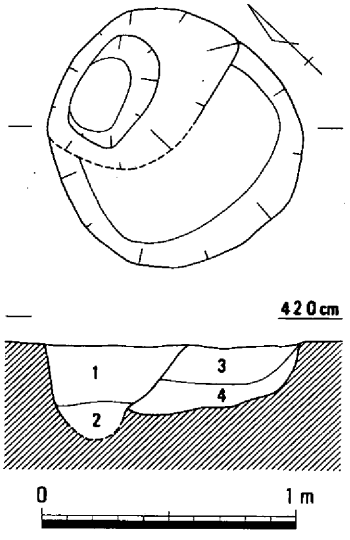
土壙240から東へ３ｍ離れたところに位置する。平面形が不整楕円形を呈する土壙である。規模は長さが105cm、幅は78cmで、深さが27cmを測る。

出土遺物からみてこの土壙の時期は、弥・後・Ⅳである。（弘田）



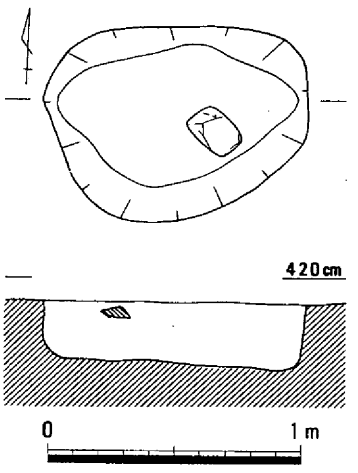
1　暗褐色微砂混じり粘土（炭を多量に含む）
2　褐色粘質微砂（土器・炭を若干含む）

第501図　土壙240（1/30）・遺物



1　暗褐色粘質微砂
2　褐色粘土
3　褐色粘質微砂
4　暗褐色粘質微砂

第502図　土壙241（1/30）



暗褐色粘質微砂（炭・土器を含む）

第503図　土壙242（1/30）

土壙243（第504図）

M23区の南東に位置する土壙で、竪穴住居27の西２ｍで検出した。上面は長さ101cm、幅78cmの不整な楕円形を呈しており、深さは24cmを測る。黒褐色を呈する埋土の下層から後期のものと思われる土器片が若干出土しているが小片のため詳細な時期は不明である。（亀山）

土壙244（第505図）

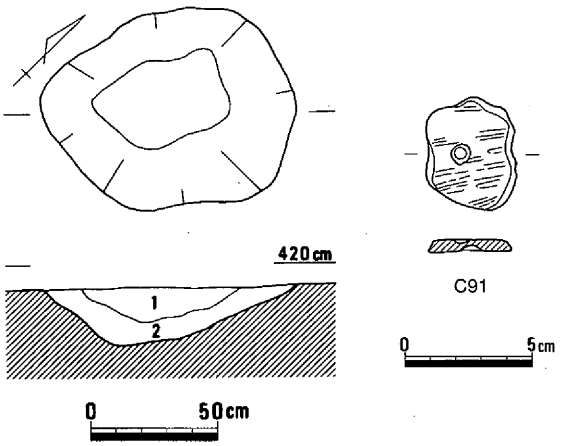
竪穴住居27の南2.5ｍで検出した溝状の土壙で、N23区の北東に位置する。長さ321cm、幅68cmの長楕円形を呈しており、深さ19cmある断面はU字形をなす。３層に分かれる埋土は、いずれも炭や土器を多く含んでいた。甕1689は外反する口縁の端部をわずかに上方へつまみあげ、内面を頸部までヘラケズリする。1690・1691は高杯で、脚部には４つの透かし孔を穿つ。1692は短い二重口縁をもつ鉢である。いずれも弥・後・Ⅳに属する。（亀山）

土壙245（第506図）

第２微高地のN24区西北端部に位置する。平面形は、南側が新しい溝によって切られているが、ほぼ直径1.3ｍ前後の円形になるものと思われる。深さは約40cm残存していた。断面形は二段になっており、埋土は三層に分離することができた。

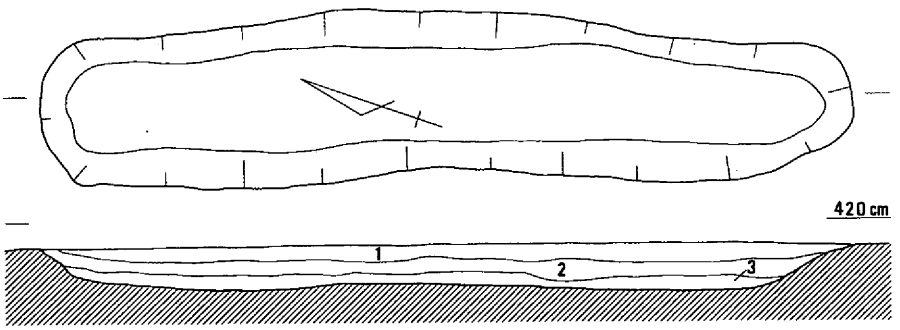
遺物は少量の土器が出土している。時期は弥・後・Ⅲ～Ⅳではなかろうか。

（平井）

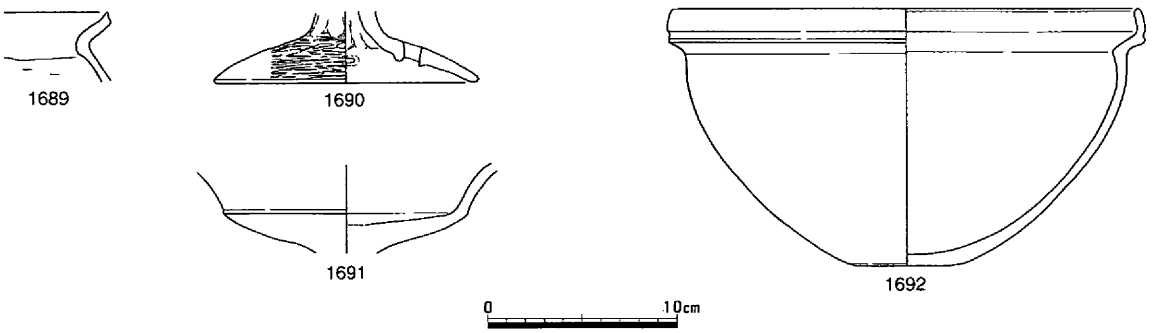


1　褐色微砂
2　黒褐色微砂（土器を含む）

第504図　土壙243（1/30）・遺物



1　黒褐色粘質微砂（土器・炭化物を含む）
2　暗褐色微砂（土器・炭化物を含む）
3　黒褐色粘質微砂（土器・炭化物を含む）



第505図　土壙244（1/30）・遺物

土壙246（第507図）

第２微高地、土壙245の東８ｍに位置する。平面形は約70×60cmの楕円形で、深さは26cm残存していた。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥・後・Ⅲ～Ⅳと考えている。　（平井）

土壙247・248（第508図）

第２微高地の調査区南端部に位置する。土壙247は平面形はおそらく長方形で、深さは約30cm残存していた。土壙247を切っている。断面形は逆台形で、埋土は黄色砂質土と暗灰色粘質土が混じっていた。土壙248は側溝によって大部分が切られている。深さは約40cmを測る。それぞれ土器が少量出土しており、時期は弥・後・Ⅲ～Ⅳと考えている。　（平井）

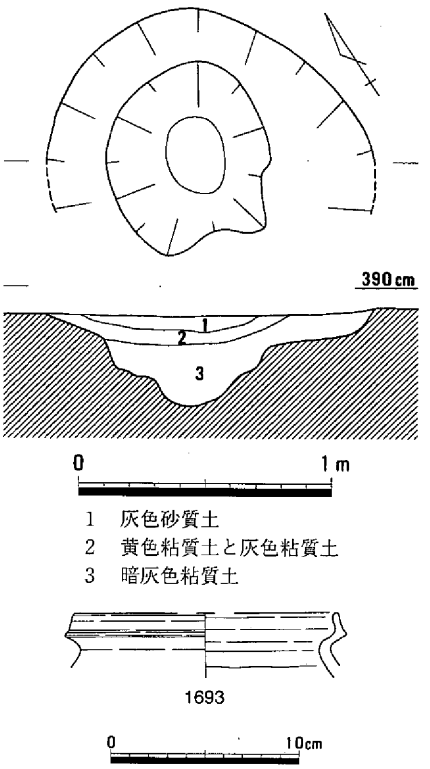
土壙249（第509図）

土壙249は、第２微高地の中央で、その南端に位置する。平面形は楕円形で、規模は109×75cmを測る。断面は皿状を呈する。

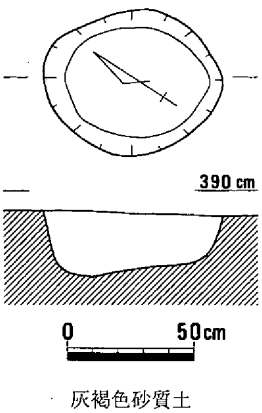
出土遺物は土器の小片のみであるが、遺構の時期は、弥・後におさまると思われる。　（柴田）

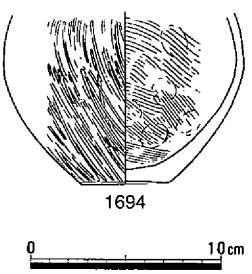
土壙250（第510図）

土壙250は、第２微高地中央の南端に位置し、古墳時代初頭の竪穴住居73に切られている。遺構の南半分は調査区外で、最大長は118cmを測る。出土遺物は土

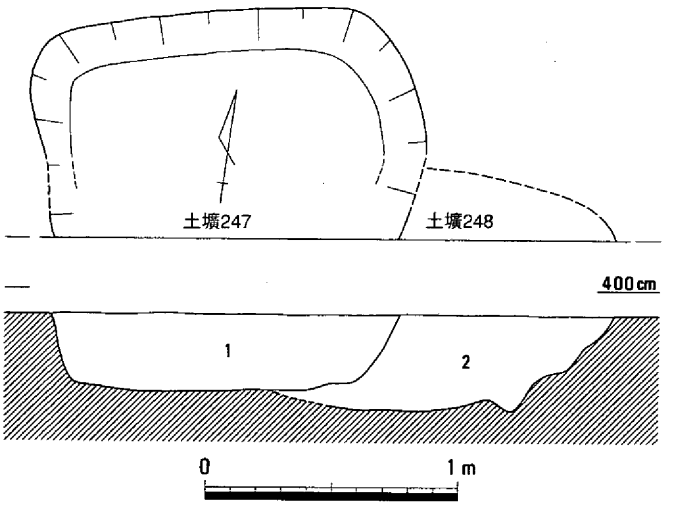


第506図　土壙245（1/30）・遺物





第507図　土壙246（1/30）・遺物



第508図　土壙247・248（1/30）

器の小片のみであるが、遺構の切り合いから、時期は弥・後におさまると思われる。　（柴田）

土壙251（第511図）

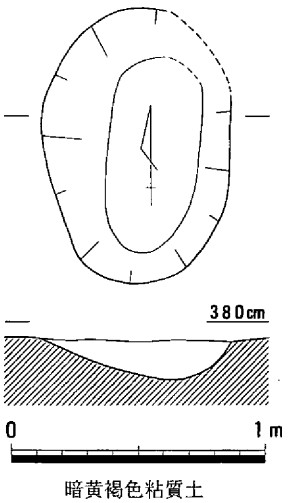
土壙251は、第２微高地の南東端に位置する。遺構の北半分は調査区外であるが、平面は長方形と思われる。床面は西側が低く、断面はわずかに皿状を呈する。出土遺物は土器の小片のみであるが、遺構の時期は、弥・後におさまると思われる。　（柴田）

土壙252（第512図）

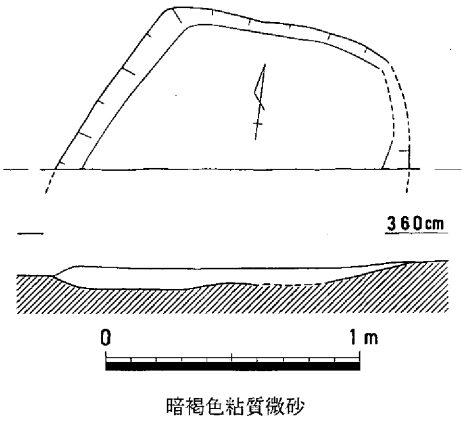
竪穴住居29の北東２ｍから検出された平面楕円形を呈す浅い土壙で、規模は110×87cm、深さ17cmを測る。断面は箱形を呈し、埋土は暗灰色砂質土塊混じりの暗茶色砂質土で、遺物は僅かながら壺1695、高杯1696・1697などが出土した。壺の頸部には２個１対の穿孔がなされている。高杯の口縁部は端部が外方に引き出され、端面には４条の凹線が施されている。これら土器の特徴から、当土壙は弥・後・Ⅰに埋没したものと考えられる。　（江見）

土壙253（第513図）

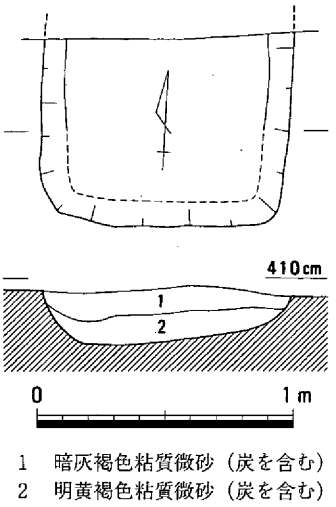
竪穴住居の北西８ｍから検出された平面楕円形を呈す土壙で、規模は104×82cm、深さ24cmを測る。



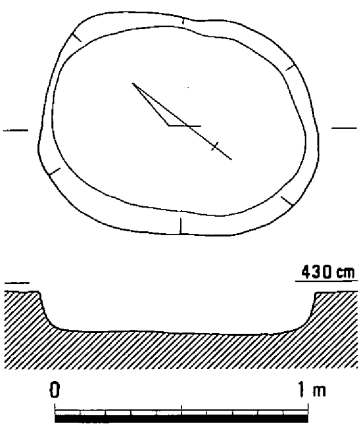
第509図　土壙249（1/30）

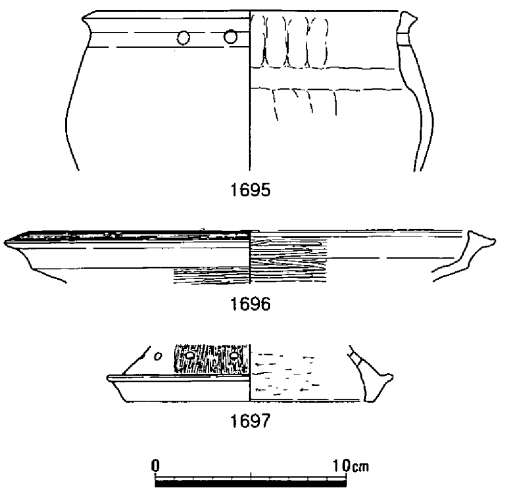


第510図　土壙250（1/30）



第511図　土壙251（1/30）

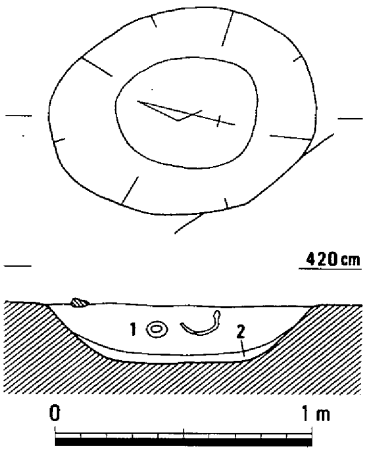




第512図　土壙252（1/30）・遺物

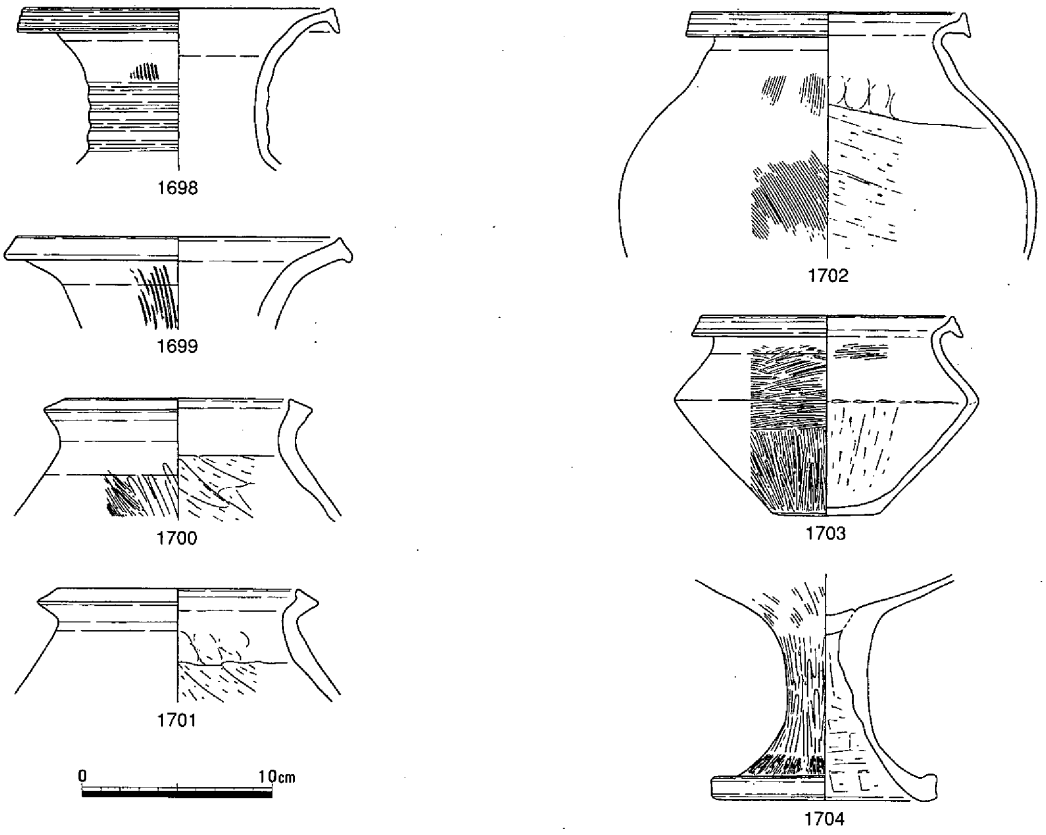
断面は逆台形を呈す。埋土は粘質砂で覆われ、遺物は壺・甕・鉢・高杯などが出土した。壺1698は口縁および頸部に凹線が施されるなど古い様相をもつ。甕は口縁が直立気味の1700、短く端部が肥厚する1701、外方に屈曲して開き端部が上下に引き出される1702などがある。鉢1703の胴部は算盤玉状に屈曲し、斜め下方に引き出された口縁部には凹線が施されている。高杯1704の脚柱部はやや短く、裾部は急に開き端部は肥厚している。以上、1698がやや古い様相をもつものの、甕内面のヘラケズリの位置や鉢、高杯の形態などから、当土壙は弥・後・Ⅰに埋没したものと考えられる。　（江見）

土壙254（第514図、写真16－１）

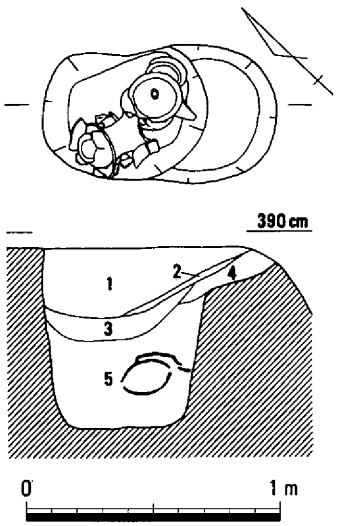


1　暗茶灰色粘質砂（褐色砂質土を多く含む）
2　茶灰褐色粘質砂

土壙253の南２ｍから検出された平面楕円形を呈す土壙で、柱穴の柱抜き取り穴状に再度掘り返された状況が確認されたが、周囲からこれに対応すると思われる柱穴の検出には至らず土壙として取り扱った。規模は92×55cm、深さ73cmを測る。土壙は南部が一段高く、２段掘りされている。断面は箱形で底部は平坦である。埋土は全体に炭粒を含み、遺物1705～1712は最下層から折り重なる状態で出土した。壺1705は口縁内面に竹管文が配置され、頸部には螺旋状の沈線および刺突が巡る。甕1706・1708の口縁端部は凹部が形成され、前者の底部は逆反りしている。高杯1710の杯部内面は雑ながらも放射線状にヘラミガキが施されている。鉢1712は唯一完形で出土したもので２ケ所に穿孔痕がある。以上、弥・後・Ⅱの古相と判断される。　（江見）

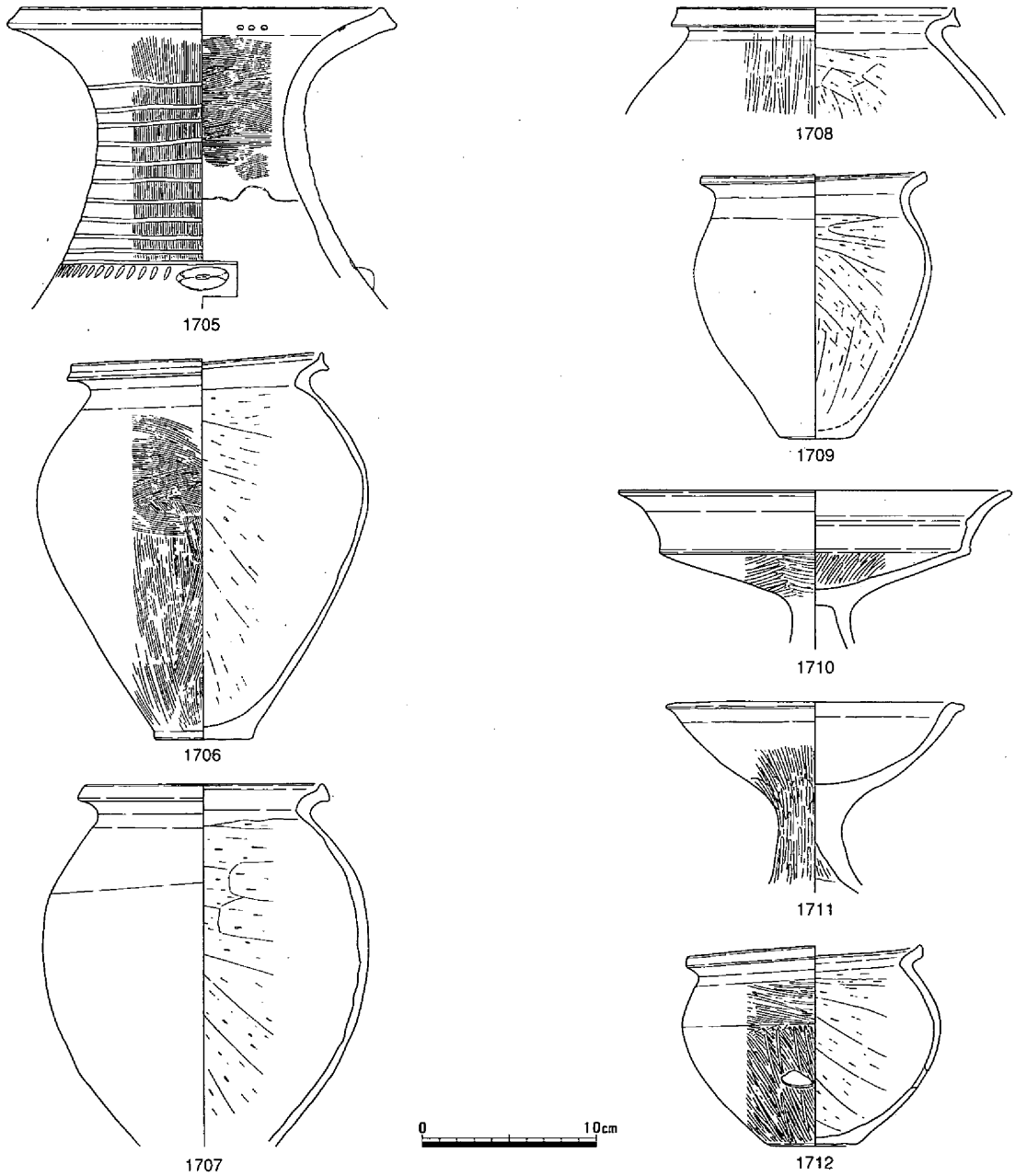


第513図　土壙253（1/30）・遺物



土壙255（第515図）

土壙254の東３ｍから検出された平面楕円形の土壙である。主軸はほぼ東西を向き、規模は118×80cm、深さ38cmを測る。断面箱形を呈し、埋土は２層からなる。遺物は主に北西部の底部からやや浮いた状態で出土している。Ｓ268は太型蛤刃石斧をすり石に二次転用している。壺1713の頸部は凹線が巡り、甕1714・1715の口縁は「く」の字状に屈曲して開き端面に凹線が施されるなど古い様相を示すものの、弥・後・Ⅰの範疇と判断される。　（江見）



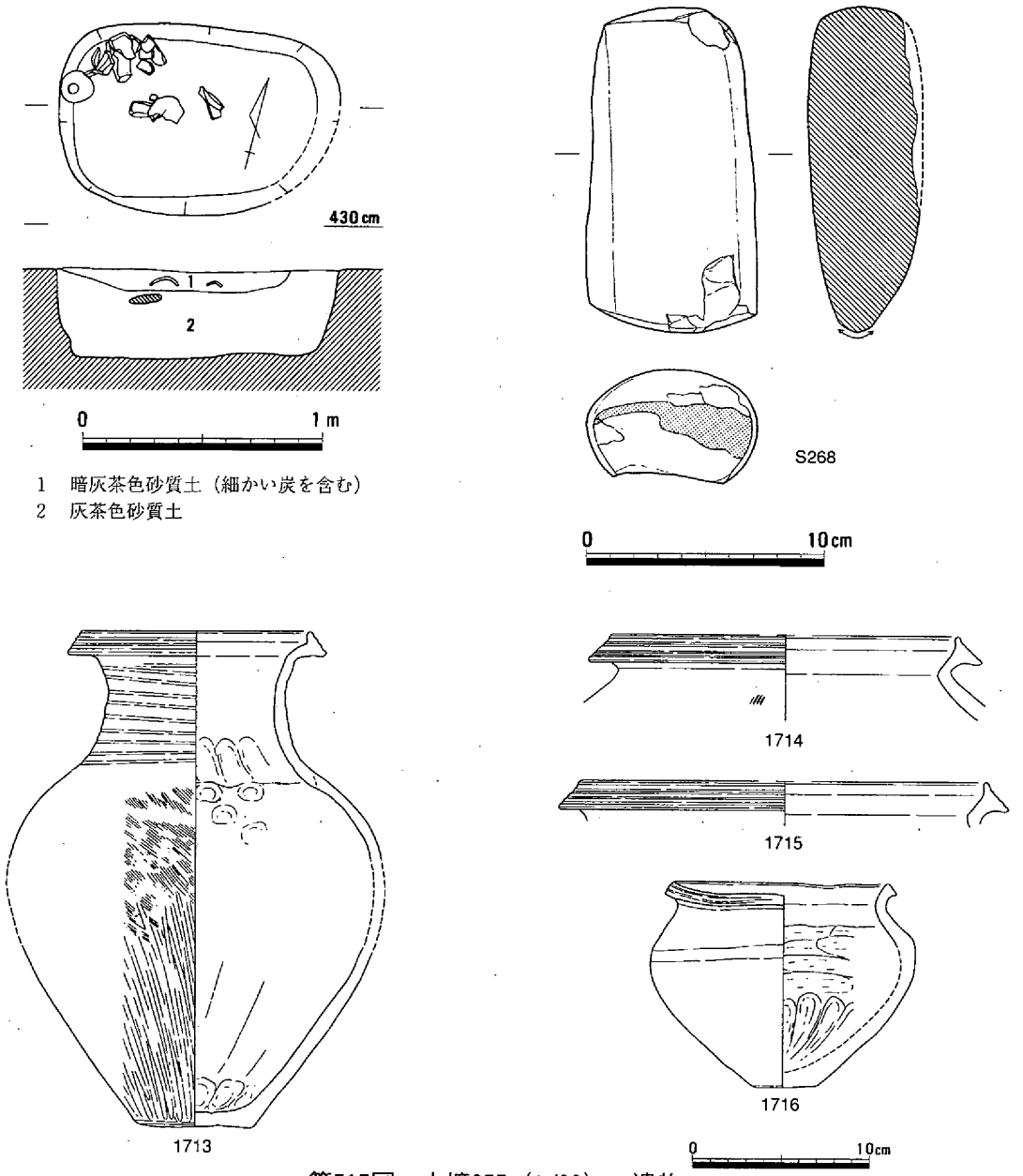
第514図　土壙254（1/30）・遺物

土壙256（第516図）

土壙255の南に位置し、竪穴住居28を切って検出された竪穴住居状の土壙である。平面隅丸方形を呈し主軸は南北に向く。壁はほぼ垂直に掘られ周囲には壁体溝が巡る。底部は平坦である。規模は176×169cm、深さ43cmを測る。竪穴住居としては狭く、また、床面から柱穴も検出されなかったことから、当土壙は小屋状の機能を果したものと推定している。埋土は人為的に埋め戻されたと思われ、上層から弥・後・Ⅰの土器片が出土している。（江見）

土壙257（第517図）

竪穴住居28の南５ｍから検出された平面不整楕円形の土壙である。主軸はほぼ南北に向き、規模は195×110cm、深さ29cmを測る。断面は緩い逆台形を呈し、底部は平坦でなく凹凸がある。遺物は弥・後・Ⅰと思われる土器細片が出土している。（江見）



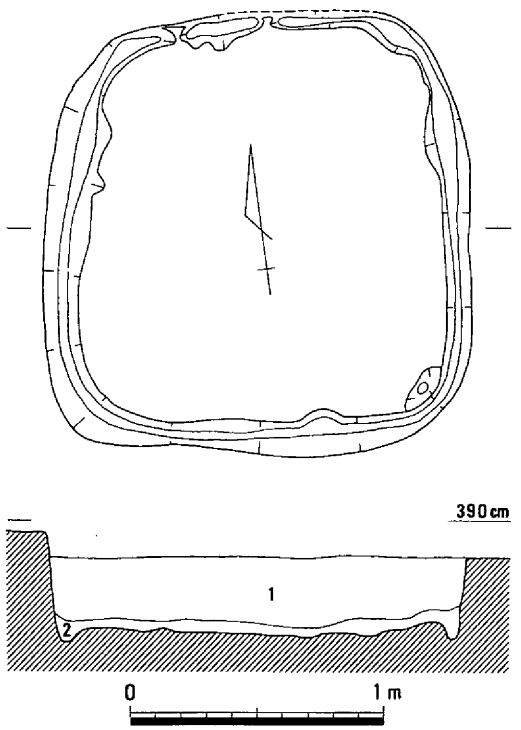
第515図　土壙255（1/30）・遺物

土壙258（第518図）

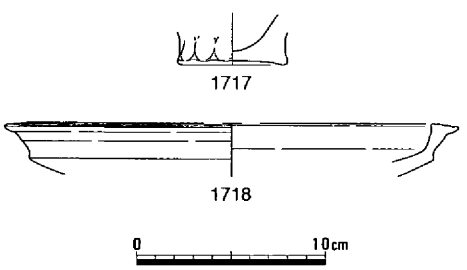
竪穴住居29の東10m、竪穴住居31の西３mに位置する平面不整円形の土壙である。規模は径53×44cm、深さ22cmを測る。断面椀状を呈し埋土は暗茶灰色砂質土であった。遺物は土壙上部からまとまって出土した。S269は楔である。壺は長頸の1719と広口の1720がある。1719はほぼ垂直に延びる頸部に沈線９条が施されている。甕は口縁端部が上下に摘み出され凹線をもつ1721、端部が肥厚する1722があり、1721は内面調整などからやや古い様相を示す。器台1723の下半部には長方形の透かしが４ケ所に配置され、その斜め上部に円孔が穿たれている。以上、当土壙は遺構規模や遺物出土状況から、弥・後・Ⅰの建物の柱穴になる可能性も考えられる。（江見）

土壙259（第519図）

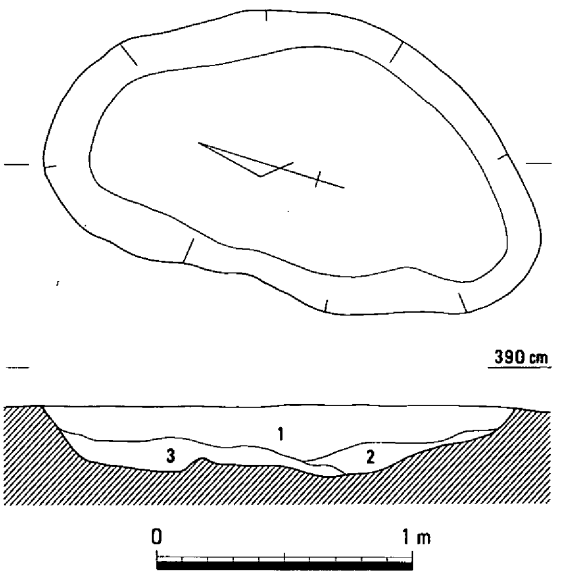
竪穴住居28の北東数mに位置し、後述する古墳時代竪穴住居71下部から検出された。平面円形を呈し、規模は径約140cm、深さ34cmを測る。土壙壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。底部東隅からは径35cm、深さ数cmの浅い土壙が検出された。埋土は最下層がレンズ状堆積を示し、上部の炭層も土壙中央が高く壁に向かって傾斜するなど、堆積状況から袋状土壙であった可能性が高いが、平断面の形状からこの項に記した。遺物は石鏃S270をはじめ土器片が出土している。甕1724の口縁端部はヨコナデによる凹部を形成する。高杯はいずれも杯部中央に円盤充填されるもので、1726の口縁は直線的に外方に立ち上がり、端部は丸く収めている。口縁上部には２条の凹線を施す。1727の口縁は端部が左右に引き出され、拡張上面には３条の凹線を施している。弥・後・Ⅰのものである。（江見）



1　灰茶色砂質土（黄色粘土ブロック・炭を含む）
2　茶灰色砂質土（黄色粘土ブロック・炭を含む）



第516図　土壙256（1/30）・遺物



1　淡灰褐色粘質土（淡灰色ブロック・焼土粒を含む）
2　灰茶色粘質土
3　淡黄茶色粘質土

第517図　土壙257（1/30）

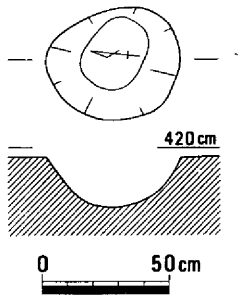
土壙260（第520図）

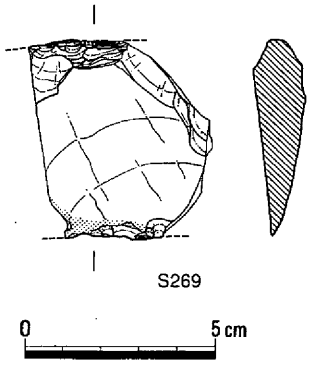
第２微高地のM24区の南端部に位置する。平面形は長さ約90cm、幅約60cmの長方形で、南西部は土壙264によって切られている。深さは18cm残存していた。断面形は逆台形で、埋土は褐色砂質土が一層のみであった。

遺物は少量の土器が出土している。1730は壺で、口唇部には凹線紋がかすかに観察できる。1731は甕の底部である。時期は弥・後・Ⅲ～Ⅳではなかろうか。（平井）

土壙261（第521図）

第２微高地のM24区、土壙260の北隣りに位置する。平面形は、長さ約130cm、幅約110cmの長方形で、深さは36cm残存していた。断面形は逆台形で、埋土は褐黄灰色砂質土が一層のみであった。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥・後・Ⅲ～Ⅳと考えている。（平井）

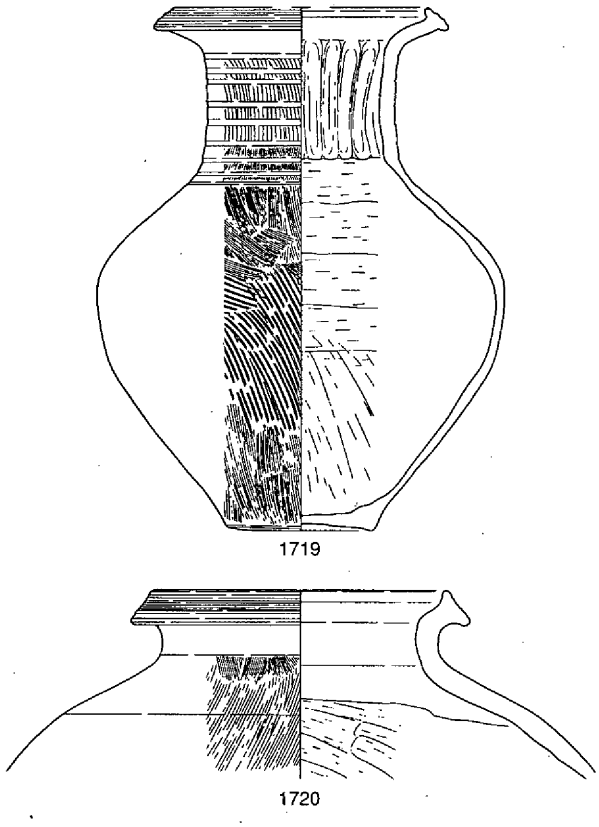


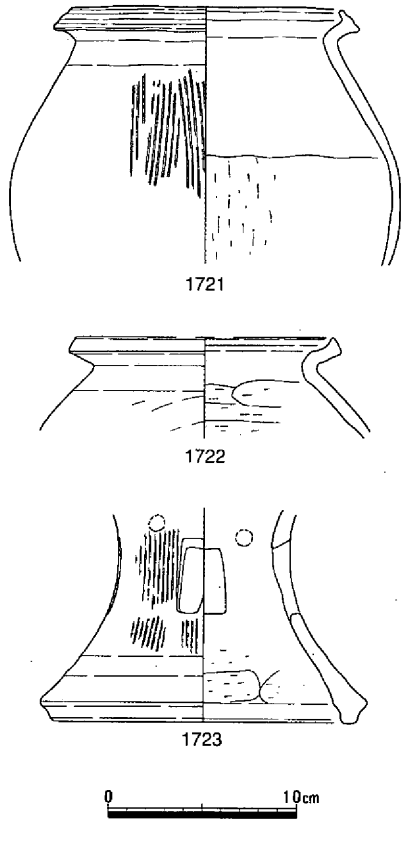


土壙262（第522～525図、写真16－２、79）

第２微高地のM24区、竪穴住居32の南西部に接して検出できた。平面形は長さ150cm、幅140cmの長方形で、深さは45cm残存していた。断面形は逆台形で、埋土は炭粒を含む灰褐色粘質土が一層のみであった。

埋土中からは多くの土器とともに、土玉C92が出土している。土玉は、直径約２cm





第518図　土壙258（1/30）・遺物

で、中心からややずれた位置には直径約３㎜の貫通する穴が穿たれており、表面には図示したような沈線紋が描かれている。重さは約5.2ｇである。

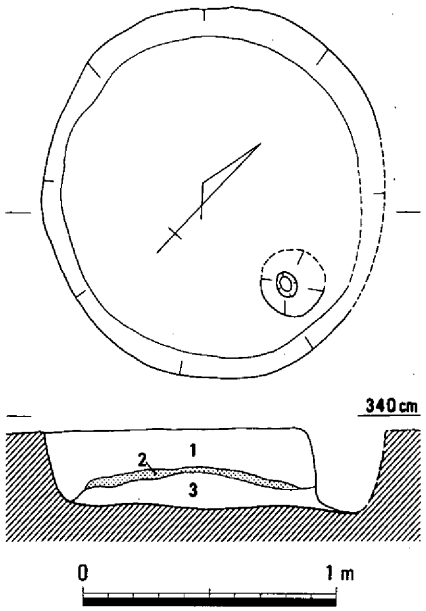
図示した土器のうち、1732～1736は壺である。1732のような退化した長頸壺が含まれている。1737～1764は甕と考えている。口縁端部の形状には、上方に短くつまみ上げたものや、明確に屈曲してしっかり立ち上げるものと、「く」の字形のものがある。1748～1756の口縁端部の紋様は、1753がクシ描き沈線紋である他は、すべて凹線紋である。胴部外面の最終調整は、ハケメのものとヘラミガキのものとがある。胴部内面はケズリである。1737の頸部には細いヘラ描き沈線紋が描かれている。1765～1773は鉢、1774～1777は高杯、1778は蓋、1779は製塩土器である。1776の内外面には丁寧なヘラミガキが施されている。

土壙261・264などと共に、いわゆる「方形土壙」として理解すべきかもしれない。

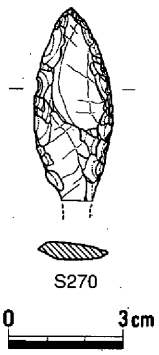
土器の時期は、弥・後・Ⅳと考えている。　（平井）

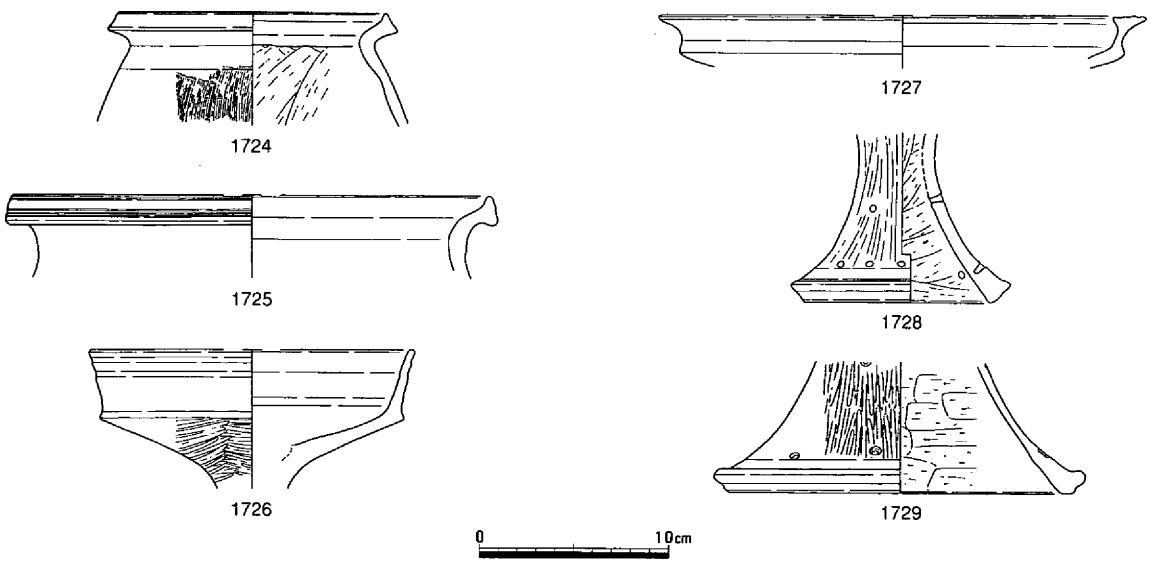
土壙263（第526図）

第２微高地のM24区南端部、土壙261の北東約２ｍに位置する。東半分は古墳時代前期の溝22によって切られているが、平面形は、おそらく直径約70㎝の円形と考えられる。深さは26㎝残存して

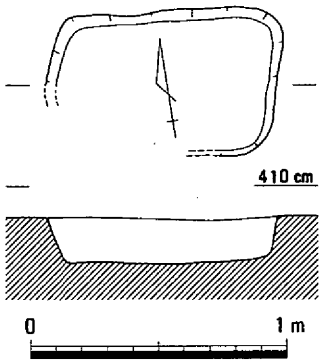


1　暗茶灰色粘質砂
（黄色粘土ブロックを含む）
2　炭
3　茶灰色粘質砂
（黄色粘土ブロックを含む）





第519図　土壙259（1/30）・遺物



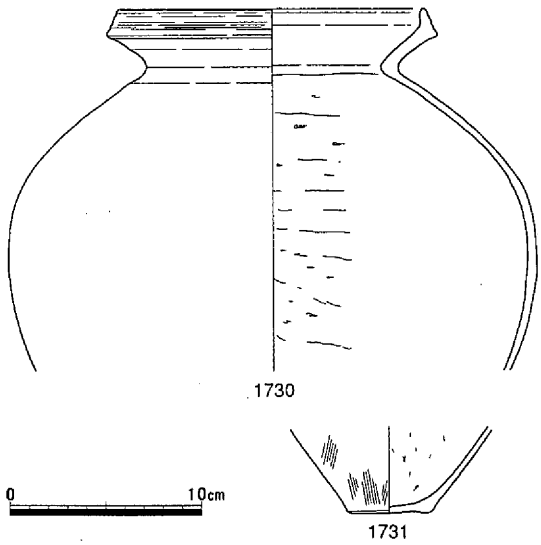
褐色砂質土

いた。断面形は逆台形で、埋土は、暗褐色砂質土が一層のみであった。

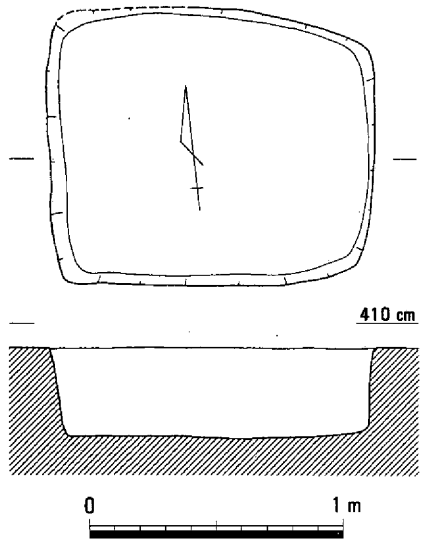
遺物は土器と土製品が出土している。1780～1785は甕と考えている。1782・1783の口縁端部外面には凹線紋が施されている。1786は鉢で、胴部は内外面とも丁寧に磨かれている。1787は手捏ね土器である。

C93は土錘と考えている。長さ7.4cm、幅4.6cm、孔径1.8cm、重さ179ｇを測る。

時期は弥・後・Ⅳではなかろうか。　　（平井）

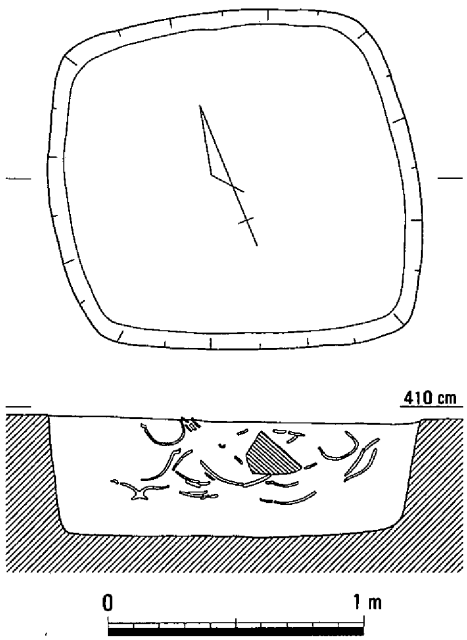


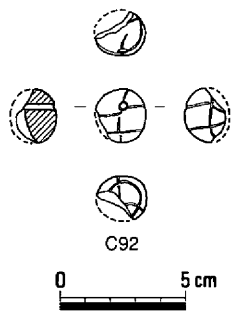
第520図　土壙260（1/30）・遺物



褐黄灰色砂質土

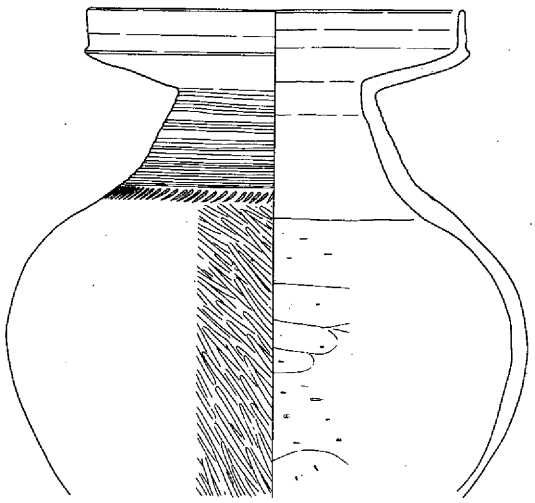
第521図　土壙261（1/30）

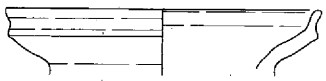


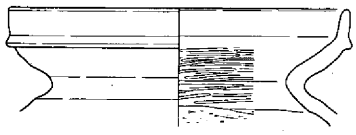


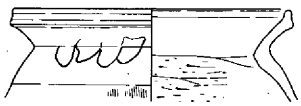
灰褐色粘質土（炭粒を含む）

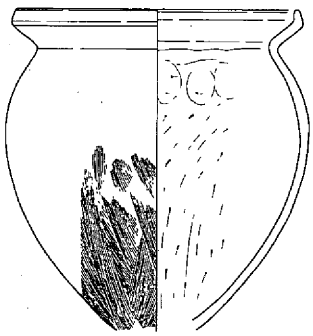
第522図　土壙262（1/30）・遺物（1）

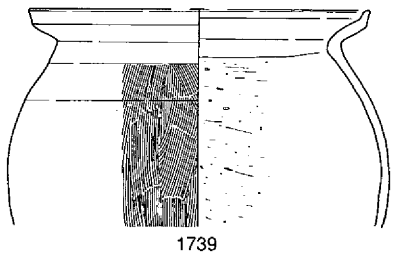

1732


1733

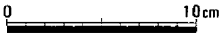

1734

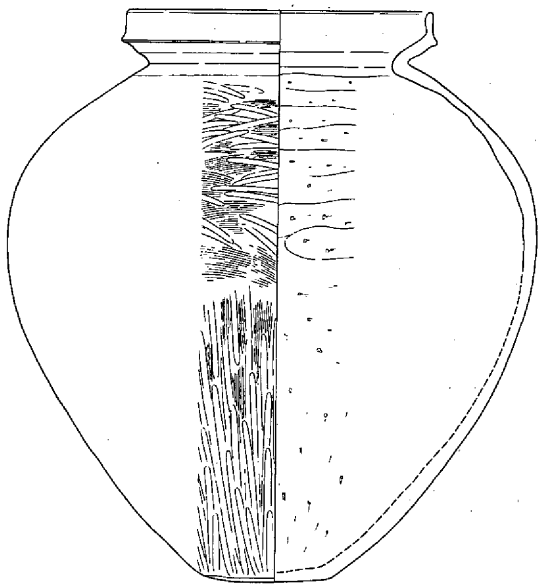

1737

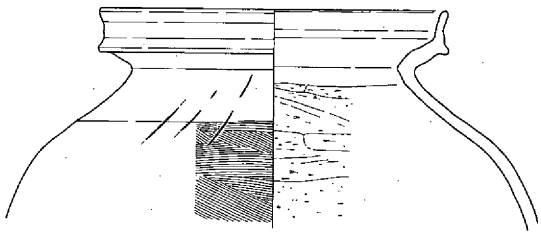

1738

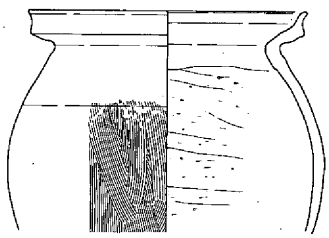

1739

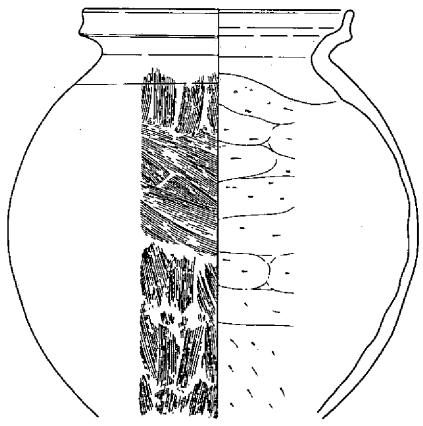
1740




1735


1736

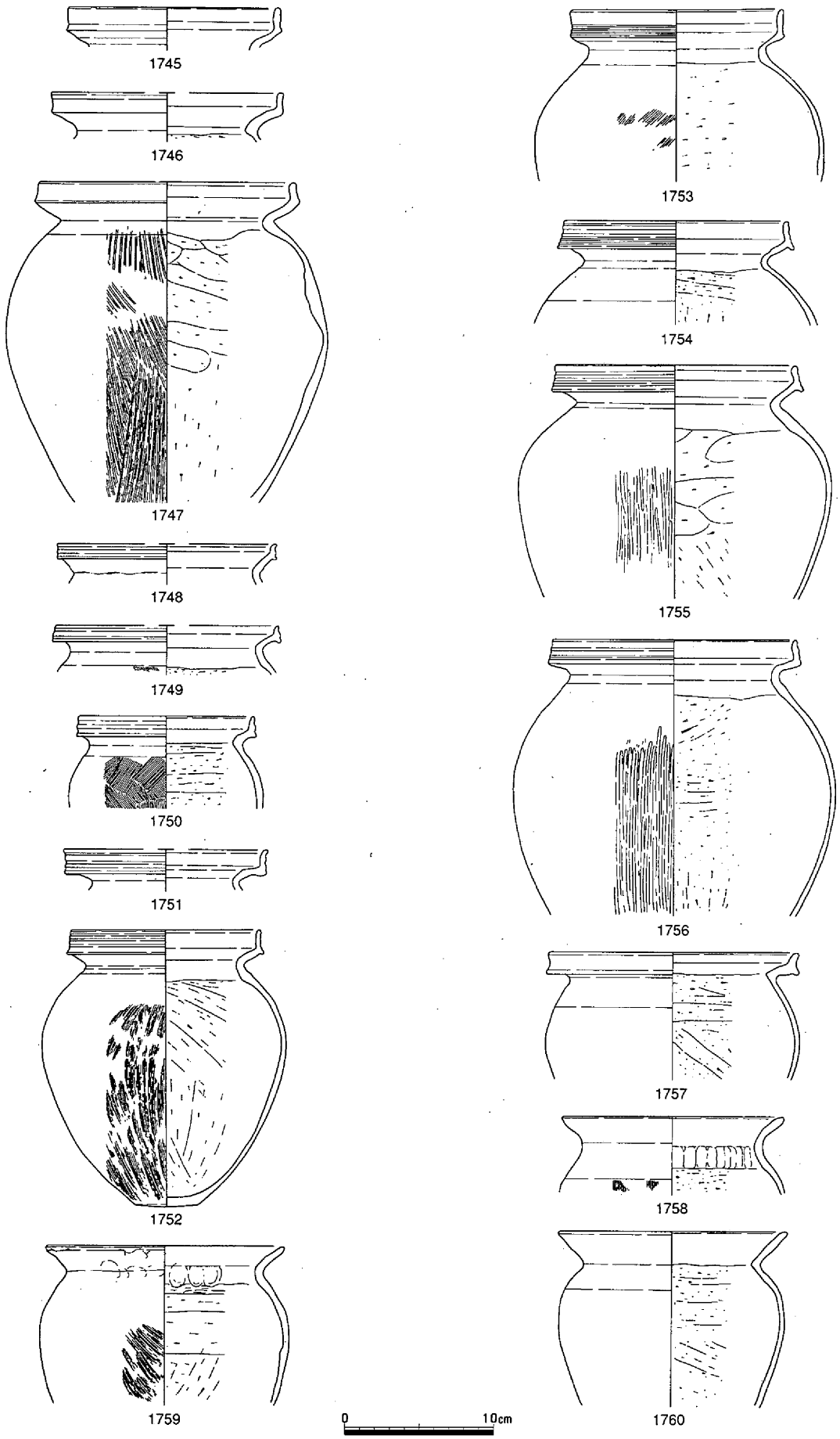

1741


1742

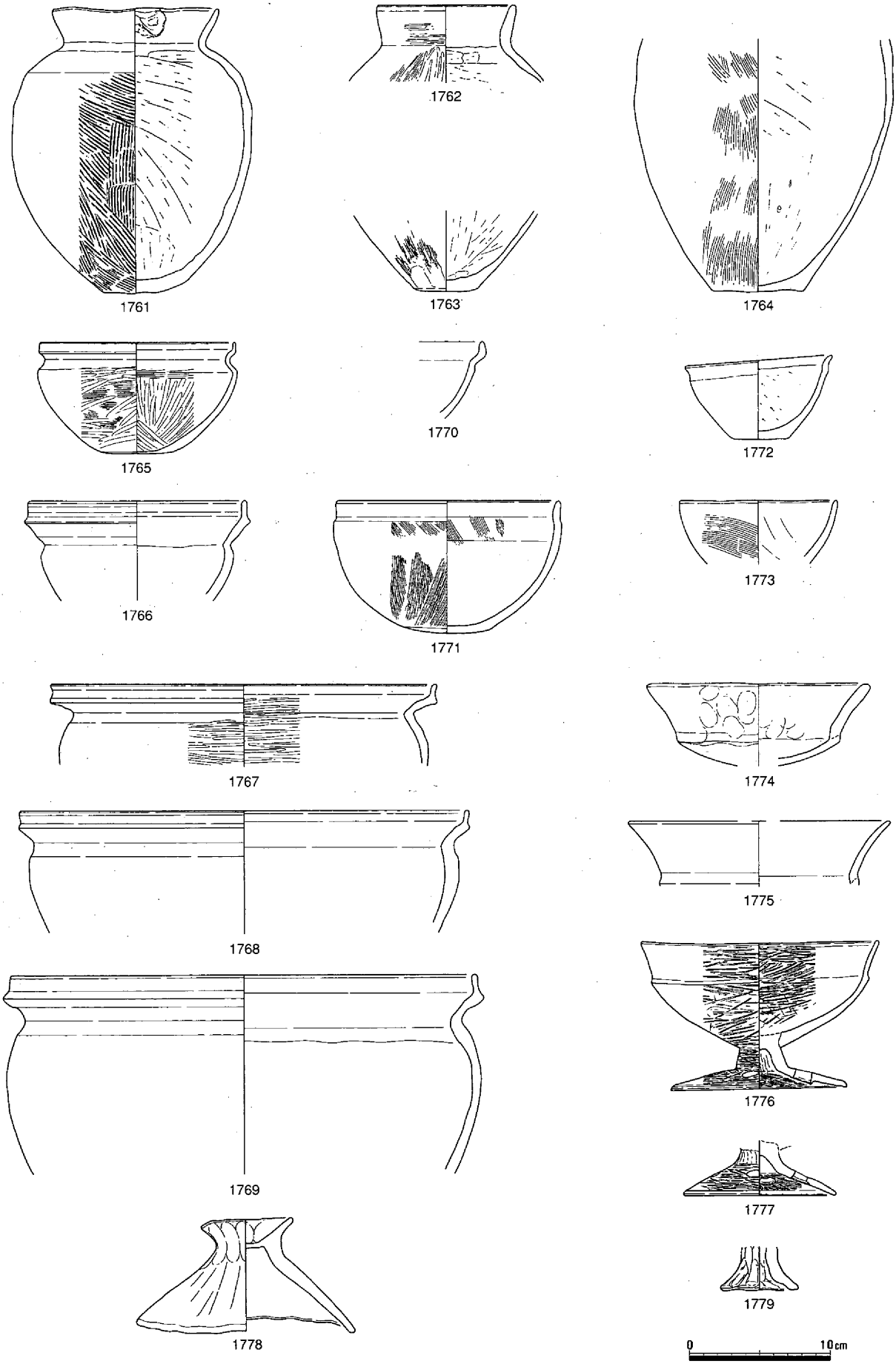
1743

1744

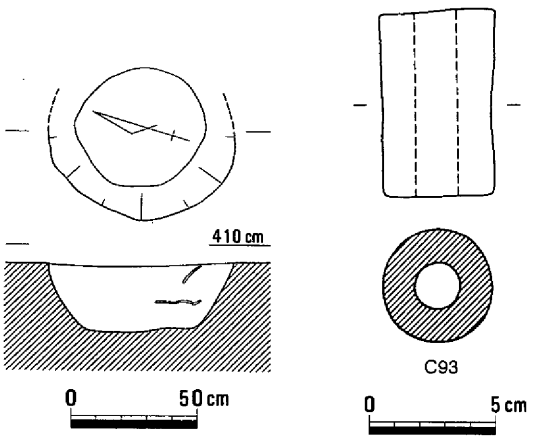
第523図　土壙262　遺物（２）



第524図　土壙262　遺物（3）



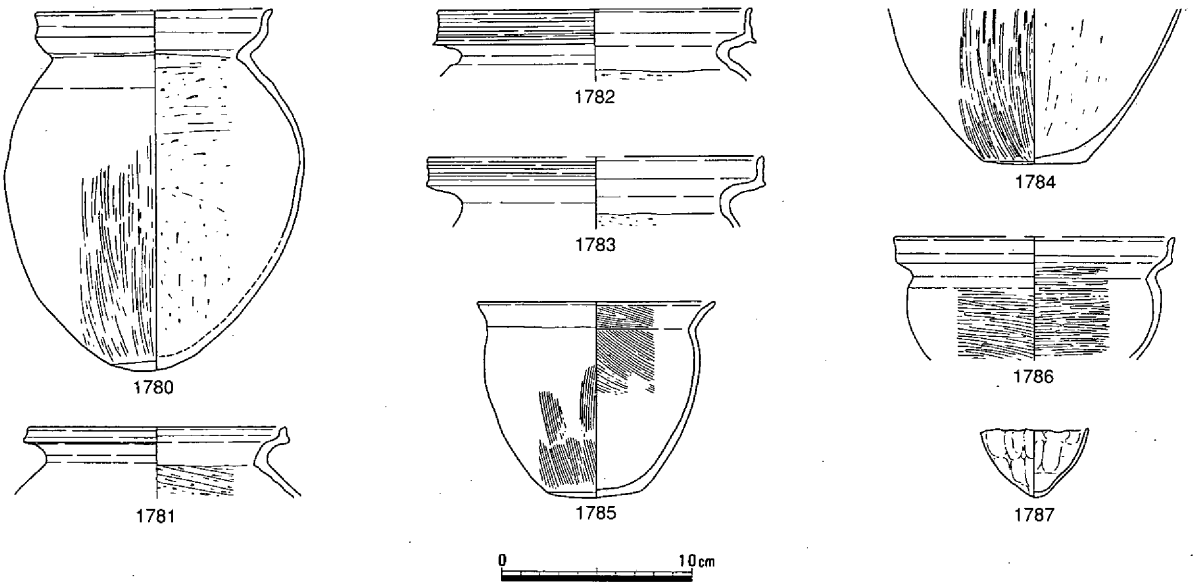
第525図　土壙262　遺物（４）



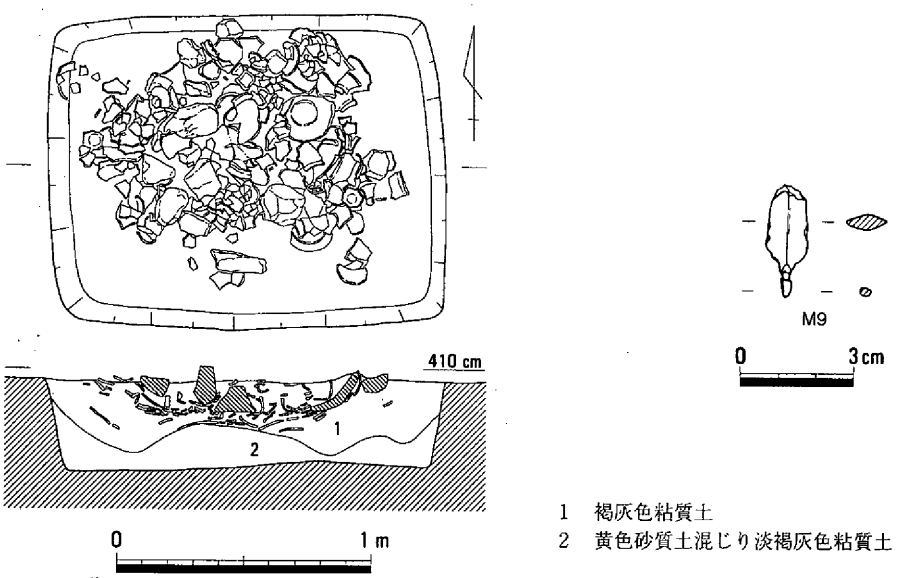
土壙264（第527～530図、写真16－３）

第２微高地のM24区南端部、竪穴住居32の南東部に接して検出できた。平面形は長さ約160cm、幅約120cmの長方形で、深さは35cm残存していた。断面形は逆台形であるが、壁は垂直に近く立ち上がっていた。埋土は二層に分離でき、上層には図示したように角礫や土器が多く廃棄されていた。

出土遺物としては土器の他に、銅鏃Ｍ９が注

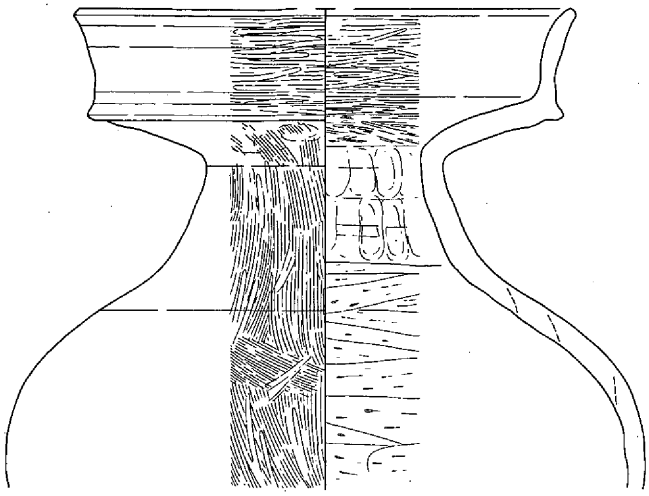


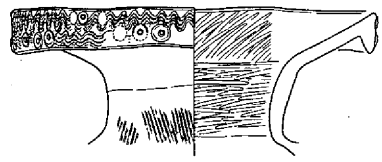
第526図　土壙263（1/30）・遺物

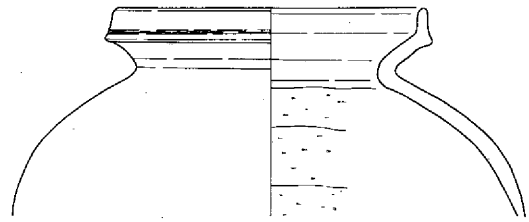


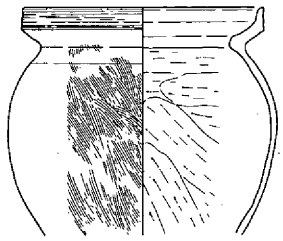
1　褐灰色粘質土
2　黄色砂質土混じり淡褐灰色粘質土

第527図　土壙264（1/30）・遺物（１）

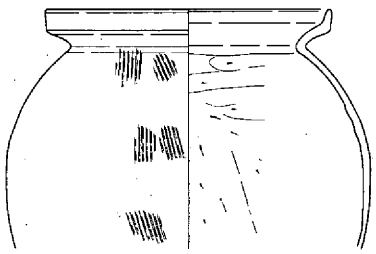

1788

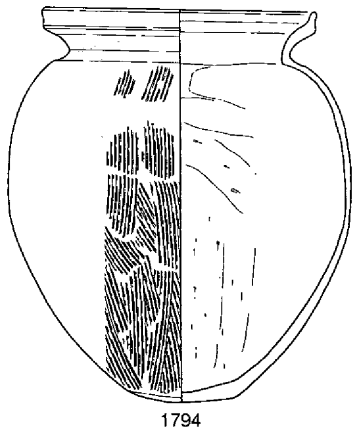

1789

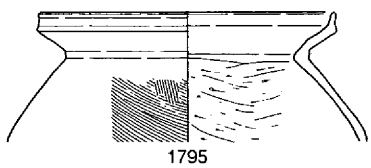

1790

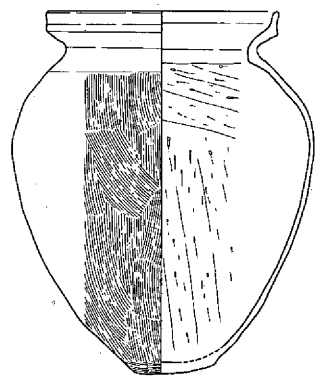

1791

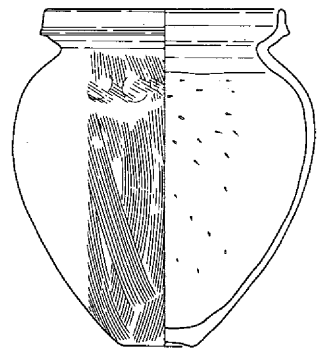
1792

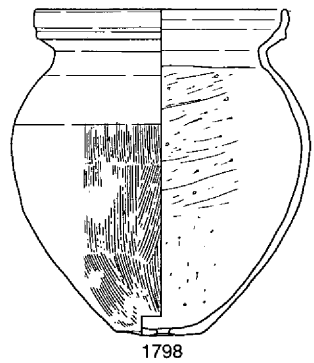

1793

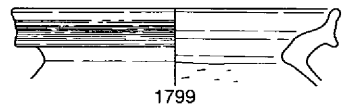

1794


1795

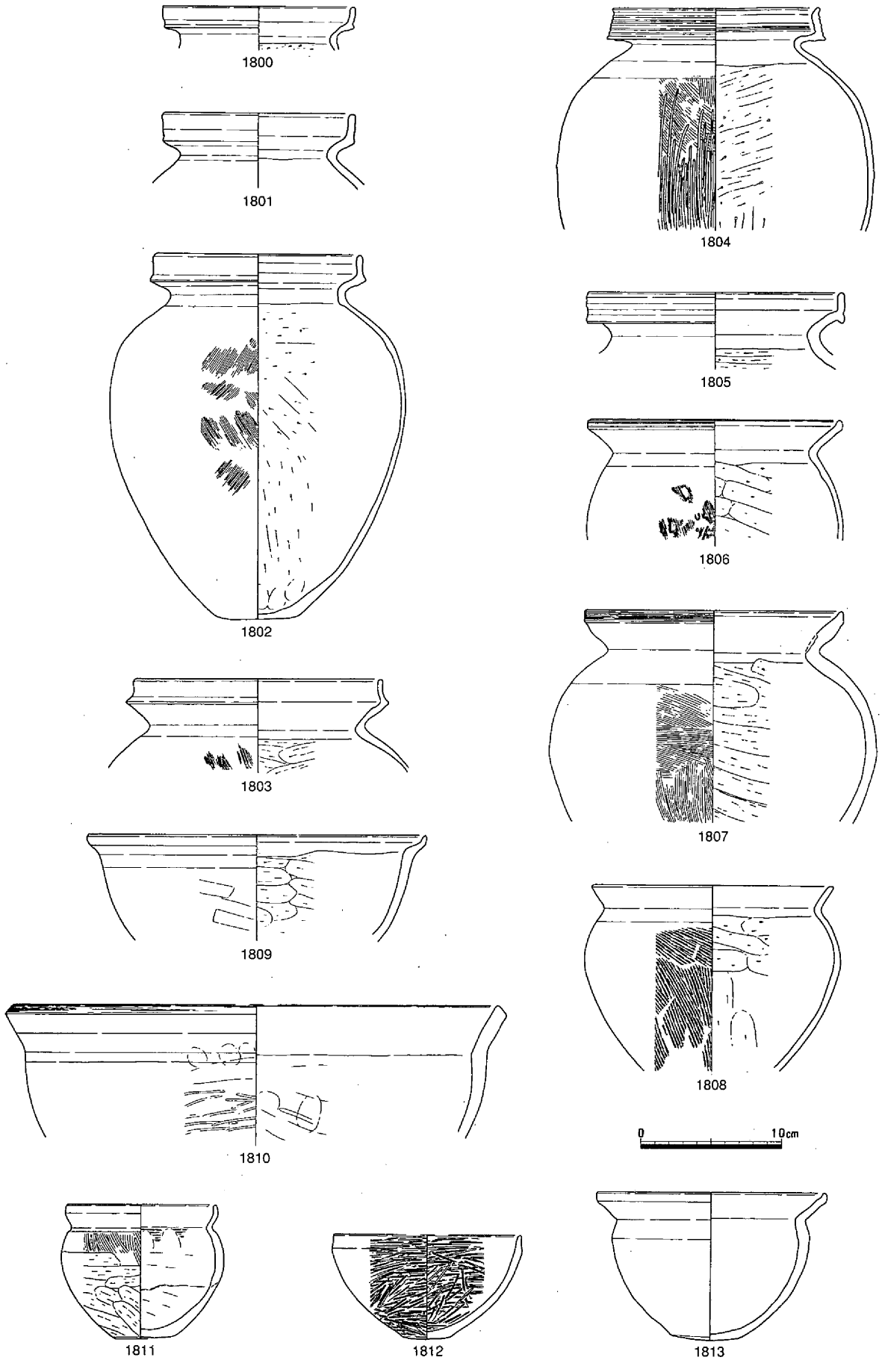

1796


1797

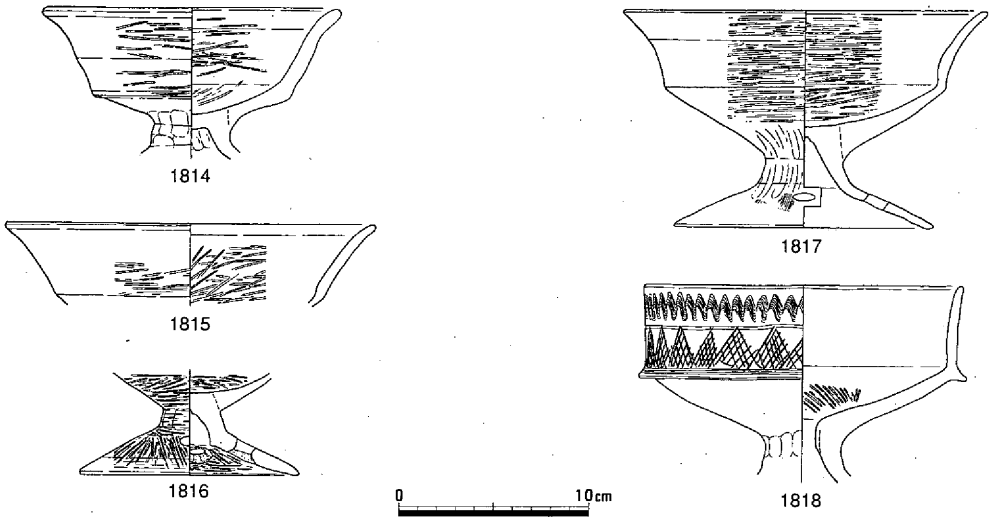

1798


1799

第528図　土壙264　遺物（２）



第529図　土壙264　遺物（3）



第530図　土壙264　遺物（４）

目できる。銅鏃は錆のため残存状態は良好ではない。鏃身の形状は柳葉形と考えている。

図示した土器のうち、1788～1790は壺である。1789の口唇部にはクシ描き波状紋と円形浮紋が施されている。非在地系の壺である。1791～1808は甕である。口縁端部の形状には、上方に強く拡張されたものと、短くつまみ上げられたもの、および、「く」の字形のものがある。口縁部の調整や紋様については、1797・1804・1805が凹線紋、1792・1799・1807がクシ描き沈線紋らしい他は、ヨコナデである。胴部外面の最終調整は、ハケメのものが多い。胴部内面はケズリである。1809～1813は鉢で、1811の胴部外面最終調整はケズリである点に特徴がある。1814～1817は高杯である。口縁部が前段階に比べて長くなりつつある。1818は器台と考えている。

時期は弥・後・Ⅳであろう。　（平井）

土壙265（第531図）

第２微高地のM24区南端部、竪穴住居32の北東８ｍに位置する。平面形は約110×80cmの不整形な楕円形で、深さは約10cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は黄灰褐色砂質土が一層のみであった。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は、弥・後・Ⅲ～Ⅳと考えている。　（平井）

土壙266（第532図）

第２微高地のM24区、土壙265の南約１ｍにおいて検出した。平面形は、長さ約130cm、幅約80cmの楕円形で、深さは10cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は暗褐色砂質土が一層のみであった。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥・後・Ⅲ～Ⅳと考えている。　（平井）

土壙267（第533図）

土壙267は、第２微高地中央の北寄り、竪穴住居33の西に位置する。平面は不整方形で、規模は142×119cmを測る。掘り方の壁面は、比較的傾斜が急である。出土遺物は土器の小片のみであるが、遺構の時期は、弥・後におさまると思われる。　（柴田）

土壙268（第534図）

土壙268は、第２微高地中央の北寄り、竪穴住居33の西に位置する。検出面での平面は不整楕円形であるが、中段では隅丸方形になっている。規模は、検出面の最大長で110cm、中段は一辺90cm前後

を測る。出土遺物は土器の小片のみであるが、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。　（柴田）

土壙269（第535図）

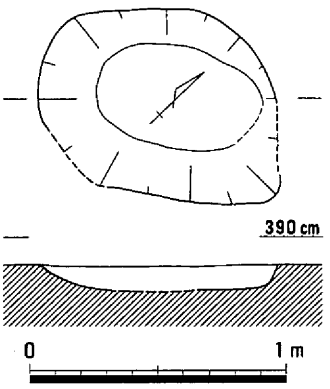
土壙269は、第２微高地中央の北寄り、竪穴住居33の北西に隣接する。平面形は不明確である。出土遺物は土器の小片のみであるが、遺構の時期は、弥・後におさまると思われる。　（柴田）

土壙270（第536図）

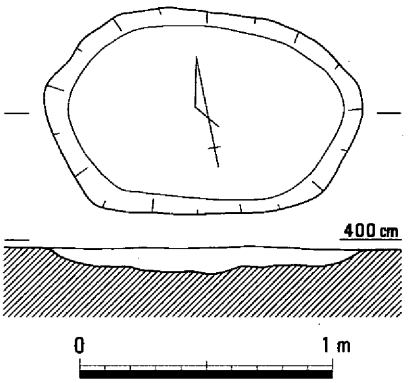
土壙270は、第２微高地中央の北寄りに位置する。弥・後・Ⅰの竪穴住居34の西側で重なり、それに切られている。平面は楕円形で、規模は154×121cmを測る。遺構の切り合いもあるが、出土した小片の土器などから、時期は弥・後・Ⅰにおさまると思われる。　（柴田）

土壙271（第537図）

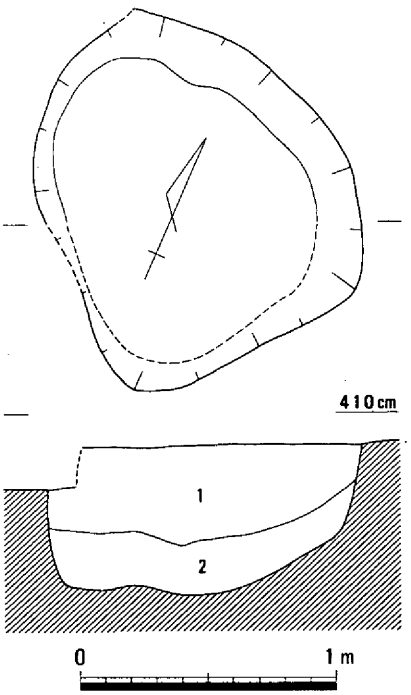
土壙271は、第２微高地中央の北寄り、竪穴住居34の東



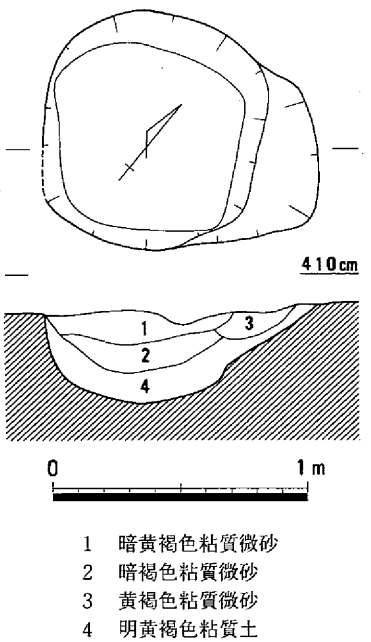
第531図　土壙265（1/30）



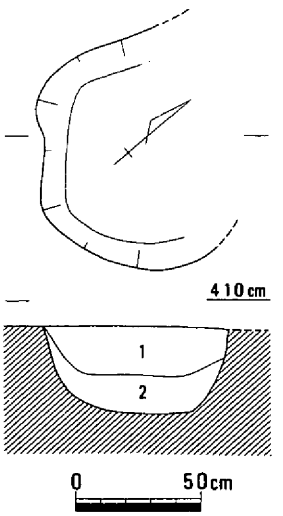
第532図　土壙266（1/30）



第533図　土壙267（1/30）



第534図　土壙268（1/30）



第535図　土壙269（1/30）

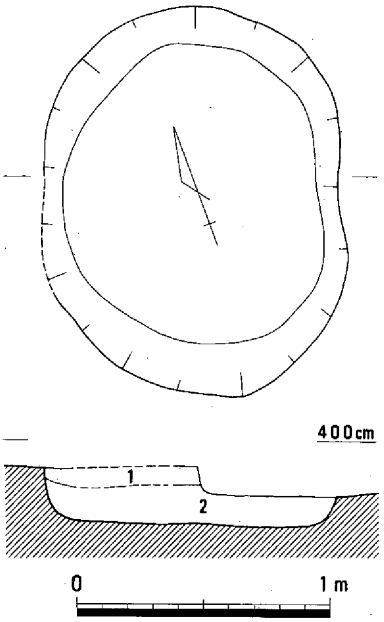
に隣接する。掘り方の東西を切られているが、平面は径100cmの円形である。出土遺物は土器の小片のみであるが、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。（柴田）

土壙272（第538図）

土壙272は、第２微高地中央の北寄り、竪穴住居34や土壙271の東に位置する。平面は楕円形で、規模は103×91cmを測る。断面は皿状を呈する。出土遺物は土器の小片のみであるが、遺構の時期は、弥・後・Ⅰと思われる。（柴田）

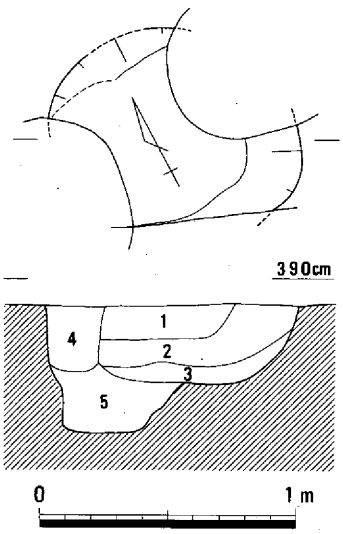
土壙273（第539図）

土壙273は、第２微高地中央の北寄り、竪穴住居34と40の間に位置する。掘り方の南端は、弥・



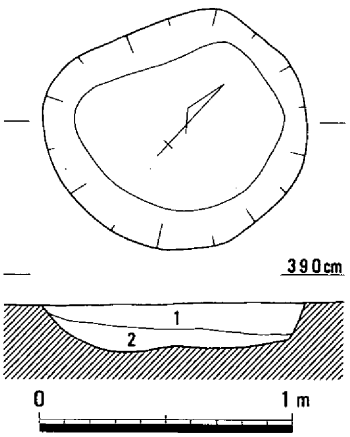
1　黄褐色粘質微砂
2　暗黄褐色粘質土

第536図　土壙270（1/30）



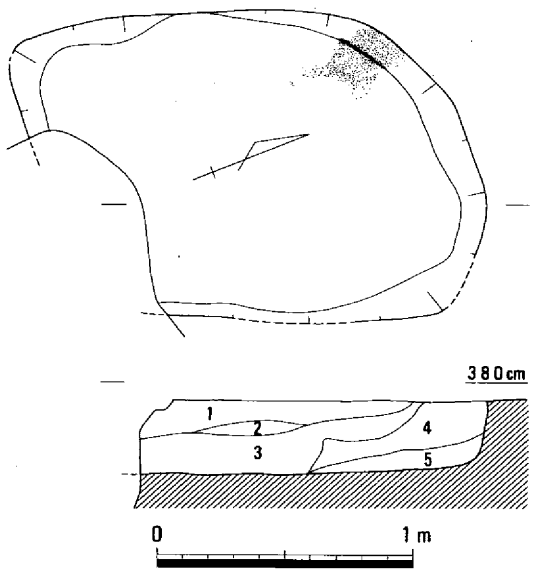
1　黄褐色粘質微砂
2　暗茶灰褐色粘質土
3　淡黄褐色粘質土
4　灰褐色粘質土
5　暗黄灰褐色粘質土

第537図　土壙271（1/30）



1　暗茶褐色粘質土
2　暗黄褐色粘質微砂

第538図　土壙272（1/30）



1　明黄褐色粘質土
2　暗黄褐色粘質土
3　黄褐色粘質土
4　黄灰褐色粘質土（焼土を多く含む）
5　淡黄褐色粘質土

第539図　土壙273（1/30）

後・Ⅰの袋状土壙31に切られている。平面は不整方形で、規模は169×124cmを測る。出土遺物は認められないが、遺構の時期は、弥・後・Ⅰにおさまると思われる。（柴田）

土壙274（第540図）

竪穴住居30の南東約１ｍの位置で検出された遺構である。規模は長径127cm、短径113cmを測り、平面形は不整円形を呈する。上部は削平されているが、深さは検出面から31cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は４層に区分される。時期は弥・後・Ⅱと思われる。（松本）

土壙275（第541図）

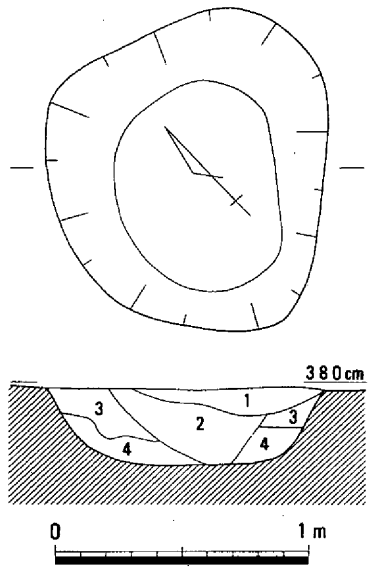
竪穴住居36の西約３ｍの位置で検出された。規模は長径151cm、短径97cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは検出面から27cmと浅く、底面はほぼ平坦である。埋土は１層であるが、検出面で30×40cmほどの焼土帯がみられた。遺物は土器1819、鉄器M10などがある。M10は尖端部に欠損がみられるが、鉇と思われる。時期は弥・後・Ⅰである。（松本）

土壙276（第542図）

竪穴住居36の北約２ｍの位置で検出された。他の遺構に切られてはいるが、規模は長径135cm、短径96cmを測り、平面形は不整楕円形を呈する。深さは検出面から36cmを測り、底面は平坦に近い。埋土は３層に区分され、レンズ状に堆積している。遺物は土器が出土している。甕1820はほぼ完形であり、底部には穿孔、器壁外面にはススの付着がみられる。時期は弥・後・Ⅳと思われる。（松本）

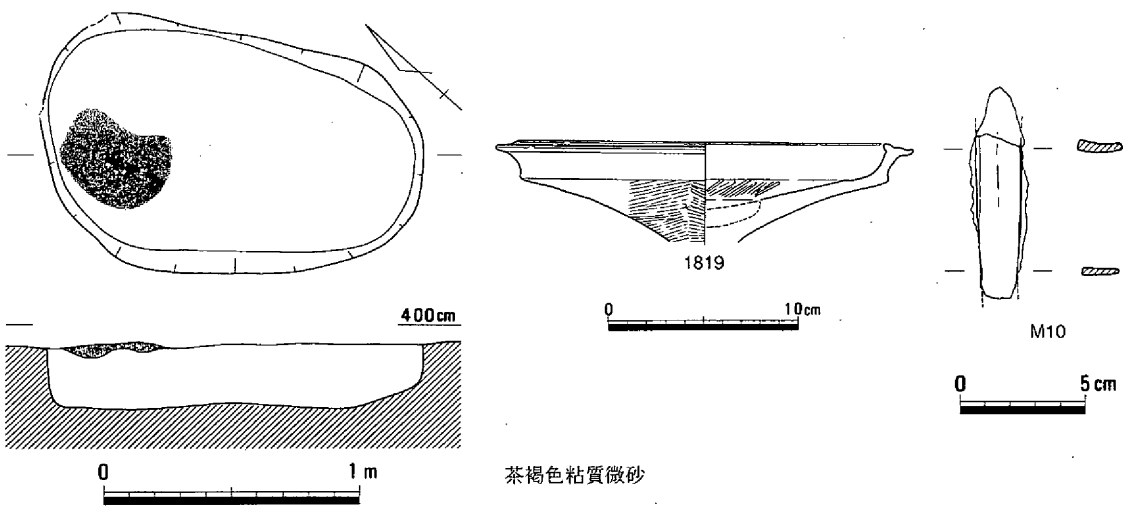
土壙277（第543図）

竪穴住居36の南西約５ｍの位置で検出された。他の遺構に切られてはいるが、確認された規模は長径約157cm、短径146cmを測り、平面形は不整方形を呈する。深さは36cmを測り、底面は平坦である。埋土は３層に区分された。遺

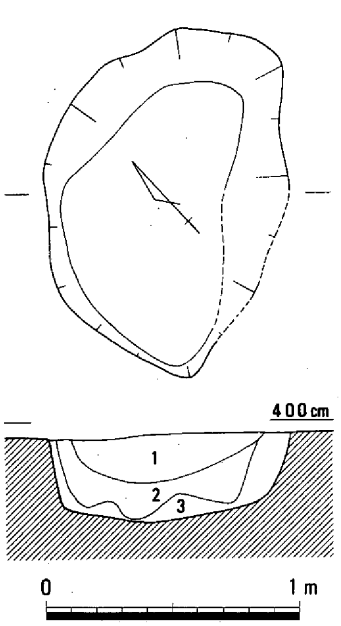


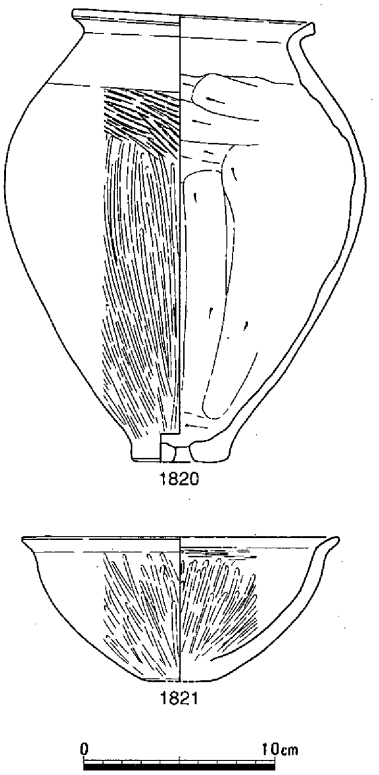
1　暗茶褐色粘質微砂
2　暗褐色粘質土
3　褐色粘質土
4　淡黄褐色砂質土

第540図　土壙274（1/30）

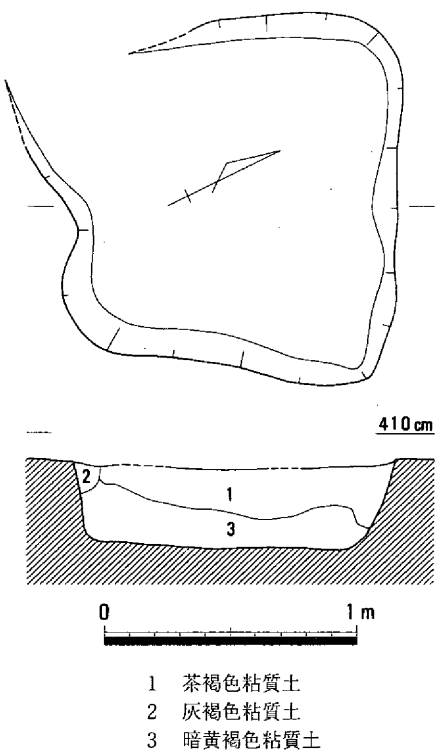


第541図　土壙275（1/30）・遺物





第542図　土壙276（1/30）・遺物



第543図　土壙277（1/30）

物はないが、時期は弥・後と思われる。　（松本）

土壙278（第544図）

竪穴住居36の北約１ｍの位置で検出された。上部は削平されているが、長径108cm、短径107cmを測り、平面形は不整方形を呈する。深さは検出面から33cmを測り、底面は平坦である。埋土は３層に区分される。遺物は土器がほぼ完形の状態で出土している。高杯は杯部が小さくて、深くなる共に脚部が短脚である。口縁部は外反するものと直立するものがある。また、胎土は精良粘土を使用している。時期は弥・後・Ⅳと思われる。　（松本）

土壙279（第545図）

竪穴住居37の北に接して検出された遺構である。長径90cm、短径81cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは検出面から26cmと浅く、底面はほぼ平坦である。埋土は２層に区分される。遺物はほぼ完形の甕1824が出土している。1824は口縁端部が上方に少し拡張するもので、肩の張りはあまり大きくない。器壁外面はタテ、ナナメの刷毛目調整がみられる。　（松本）

土壙280（第546図）

土壙279に切られる状態で検出された遺構である。上部はかなり削平されているが、規模は長径114

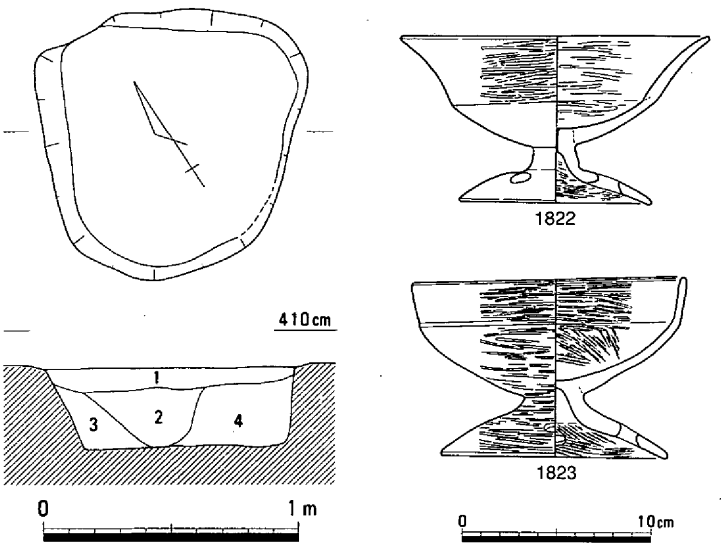
cm、短径約70cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは検出面から25cmと浅く、底面は中央部がくぼむ皿状となる。埋土は２層に区分されるが、堆積はレンズ状である。遺物は甕、高杯などの土器が出土している。甕1826は口縁端部が上下に拡張し、凹線が巡る。高杯1827は杯部に稜をもって外反し、口縁端部上面に凹線３条を巡らすものである。1828は蓋と思われるものである。これらの遺物からみて、時期は弥・後・Ⅰと考えられる。　（松本）

土壙281（第547図）

袋状土壙34に切られる状態で検出された。規模は長径119cm、短径112cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは検出面から35cmを測り、底面中央部がくぼむ皿状となる。埋土は３層に区分されるレンズ状の堆積となる。遺物はないが、遺構の切り合い関係からみて、弥・後・Ⅰと思われる。　（松本）

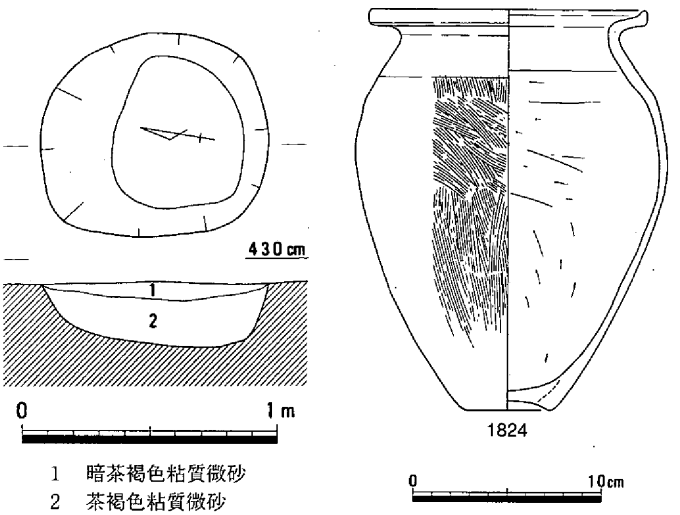
土壙282（第548図）

竪穴住居45に切られる状態で検出された。規模は長径102cm、短



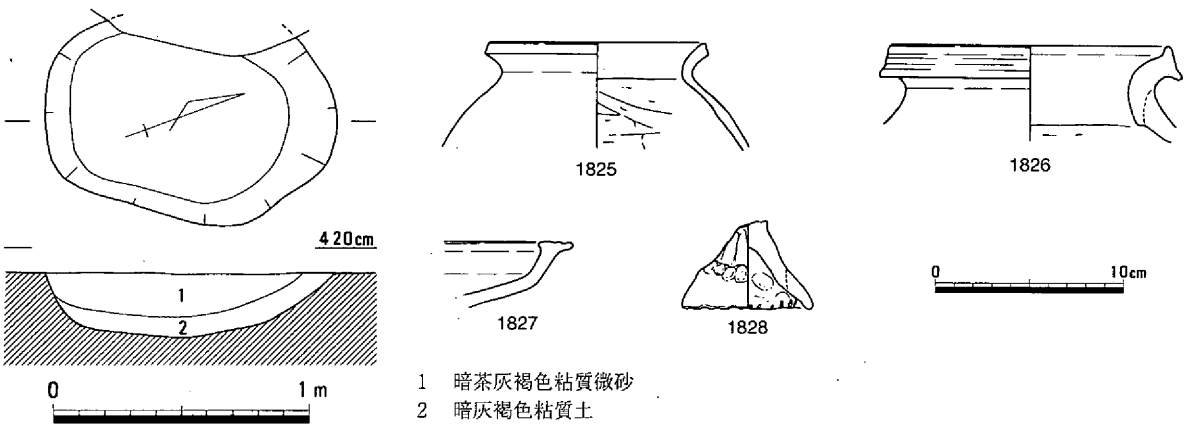
1　暗茶褐色粘質微砂
2　茶褐色粘質土
3　灰褐色粘質土
4　暗黄褐色粘質土

第544図　土壙278（1/30）・遺物



1　暗茶褐色粘質微砂
2　茶褐色粘質微砂

第545図　土壙279（1/30）・遺物



1　暗茶灰褐色粘質微砂
2　暗灰褐色粘質土

第546図　土壙280（1/30）・遺物

径86cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは検出面から20cmを測り、底面はほぼ平坦で、断面形態が皿状となる。埋土は１層だけである。出土遺物はないが、時期は弥・後・Ⅰと思われる。（松本）

土壙283（第549図）

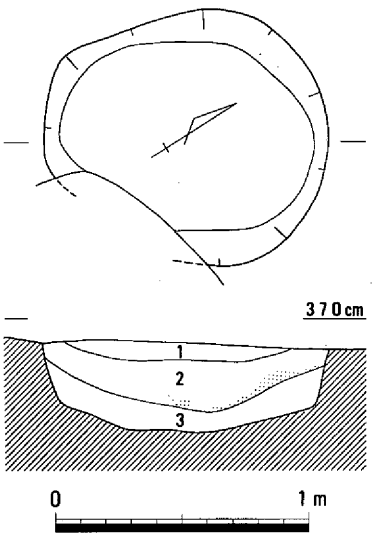
竪穴住居44に切られる状態で検出された。規模は長径約245cm、短径223cmを測り、平面形は不整方形を呈する。深さは約46cmを測り、底面は南側が深くなる。埋土は２層に区分されるが、下層は炭を含む土層である。出土遺物はないが、弥・後・Ⅰと思われる。（松本）

土壙284（第550図）

袋状土壙46に切られる状態で検出された。残存状態の悪い遺構であるが、規模は長径約155cm、短径140cmを測り、平面形は楕円形を呈すると思われる。深さは44cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は３層に区分されるが、１・２層内には炭や土器片が含まれていた。時期は弥・後・Ⅰと思われる。（松本）

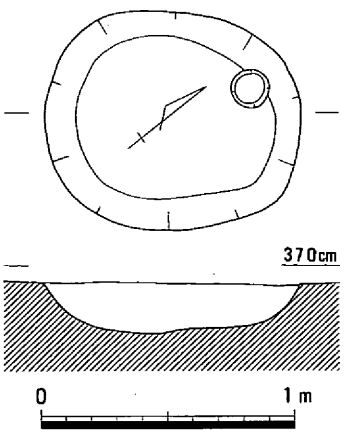
土壙285（第551図）

竪穴住居42に切られる状態で検出された。遺構の残存状態は極めて悪いが、確認された規模は長径132cm、短径85cmを測る。平面形は不整方形を呈すると思われる。深さは54cmを



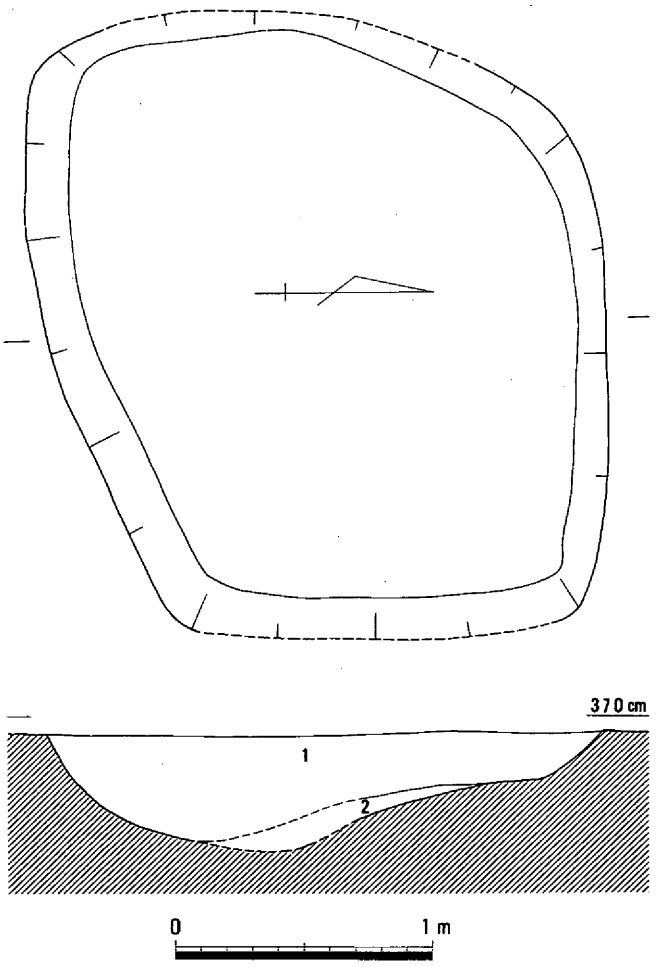
1　黄褐色粘質土
2　暗黄褐色粘質土（炭を多く含む）
3　明黄褐色粘質土

第547図　土壙281（1/30）



暗黄褐色粘質土

第548図　土壙282（1/30）



1　茶褐色粘質微砂
2　暗灰黄色砂質土（炭を含む）

第549図　土壙283（1/30）

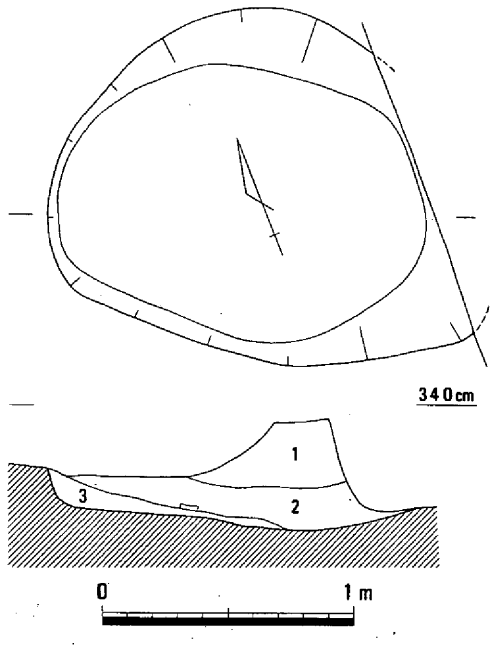
測る。埋土は６層に区分された。時期は遺構の切り合い関係などからみて、弥・後・Ⅰと思われる。
（松本）

土壙286（第552図）

竪穴住居42の近くで検出された遺構である。規模は長径92cm、短径75cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは検出面から39cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は暗灰褐色粘質土である。遺物は土器が出土している。1829は甕の下半部である。器壁外面にはハケナデ後、ヘラミガキ調整が、内面はヘラケズリがなされている。時期は弥・後と思われる。（松本）

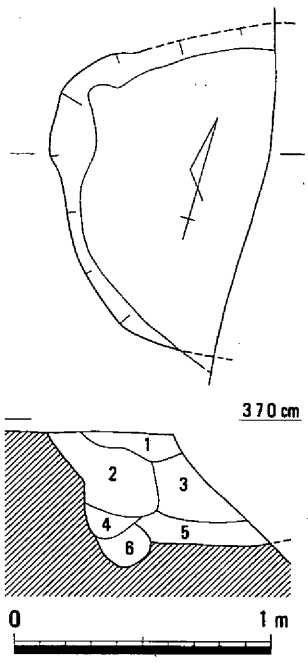
土壙287（第553図）

溝25に切られる状態で検出された遺構である。上部は削平されるとともに、大部分は切られていた。確認できた規模は長径約123cm、短径約60cmを測り、平面形は円形を呈すると思われる。深さは検出面から16cmと浅く、底面は平坦である。埋土は１層が暗褐色粘質微砂、２層は暗黄灰褐色粘質土、３層は暗黄褐色粘質土に区分された。遺物は甕1830、製塩



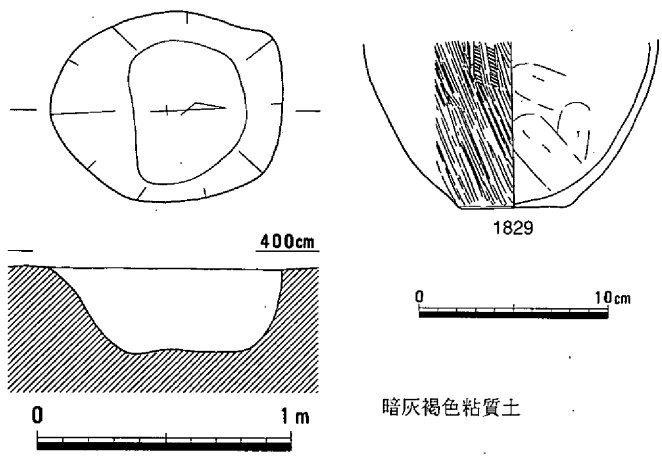
1　茶褐色粘質微砂（炭・土器を含む）
2　灰黄色微砂（炭・土器を含む）
3　黄灰色粘質微砂

第550図　土壙284（1/30）



1　黄茶褐色粘質微砂
2　暗褐色粘質微砂
3　暗茶褐色粘質微砂
4　暗黄色粘質微砂
5　暗黄色粘質微砂
（炭・黄色ブロックを含む）
6　黄灰色粘質微砂

第551図　土壙285（1/30）



暗灰褐色粘質土

第552図　土壙286（1/30）・遺物

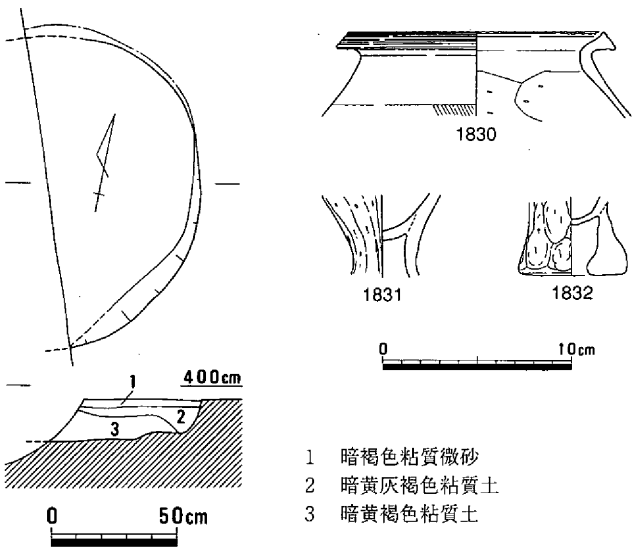
土器1831・1832などが出土している。1830は口縁部に凹線文をもち、器壁外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ調整がなされている。時期はこれらの遺物から弥・後・Ⅰと思われる。　（松本）

土壙288（第554図）

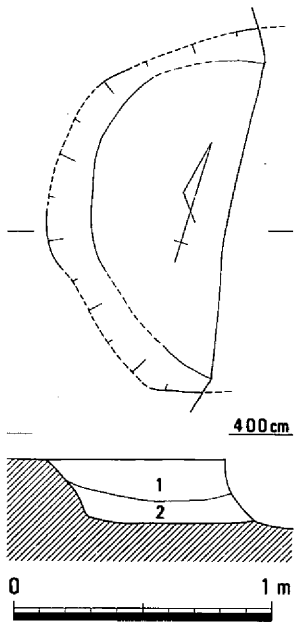
竪穴住居47の南西約４ｍの位置で検出された。遺構の残存状態は悪いが、確認された規模は長径143cm、短径約71cmを測る。平面形は恐らく円形を呈するものと思われる。深さは検出面から25cmを測り、底面は平坦である。埋土は２層に区分される。時期は弥・後と思われる。　（松本）

土壙289（第555図）

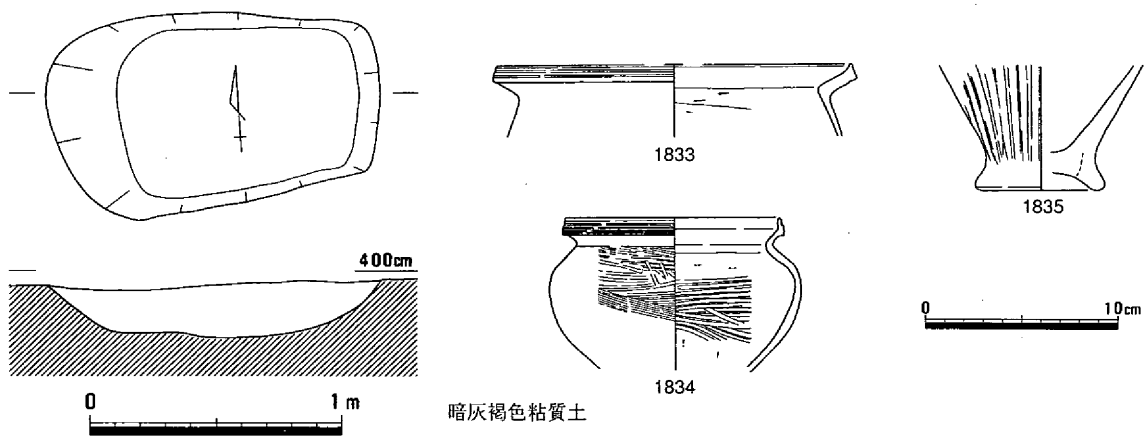
竪穴住居44の南約１ｍの位置で検出された遺構である。上部はかなり削平を受けてはいるが、規模は長径132cm、短径80cmを測り、平面形は隅丸方形を呈する。深さは検出面から21cmと浅く、底面はほぼ平坦で、断面形態は皿状となる。埋土は暗灰褐色粘質土の１層のみである。遺物は甕1833、鉢1834などが出土している。1833は頸部が「く」の字を呈し、口縁端部が上方に少し拡張する。端面には凹線がみられる。1834は口縁端部が上方に拡張する。器壁外面には赤色顔料が施されていた。時期は弥・後・Ⅳと思われる。　（松本）



第553図　土壙287（1/30）・遺物



第554図　土壙288（1/30）



第555図　土壙289（1/30）・遺物

土壙290（第556図）

袋状土壙35、37に切られる状態で検出された遺構である。規模は長径112cm、短径約72cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは検出面から30cmを測り、底面はほぼ平坦である。埋土は３層に区分され、２層には焼土塊が含まれていた。時期は弥・後と思われる。（松本）

土壙291（第557図）

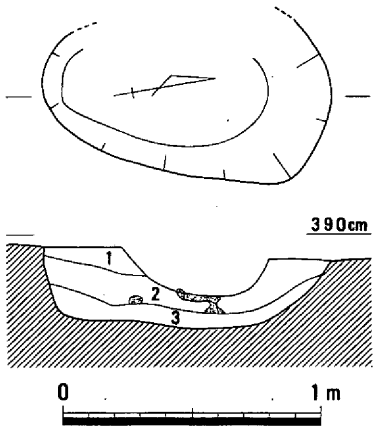
土壙291は、第２微高地中央の東寄り、竪穴住居41の南東に位置する。平面は楕円形で、規模は112×95cmを測る。床面の円形のピットは遺構に伴うかどうか不明である。出土遺物は土器の小片と打製石包丁片のみであるが、遺構の時期は、弥・後・Ⅱと思われる。（柴田）

土壙292（第558図）

土壙292は、第２微高地中央の東寄り、竪穴住居41の南東に位置する。土壙294に切られており、平面は径154cmの円形である。埋土はレンズ状堆積を呈する。出土遺物は土器の小片のみであるが、遺構の時期は、弥・後・Ⅳと思われる。（柴田）

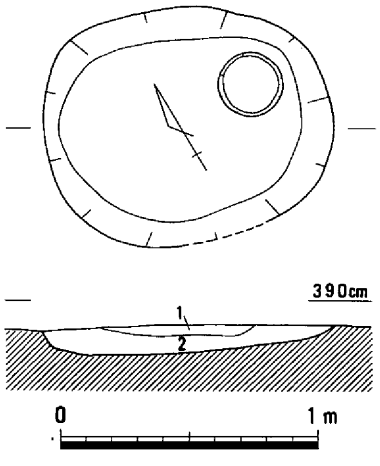
土壙293（第559図）

土壙293は、第２微高地中央の南東寄りに位置する大形の土壙である。平面は長方形で、規模は250×190cmを測る。いわゆる「方形土壙」であると考えられる。床面はほぼ水平で、埋土も水平堆積を示す。出土遺物では、甕1836と石匙Ｓ271を示したが、混入の可能性があり、遺構の時期は、弥・後・Ⅳではないかと思われる。（柴田）



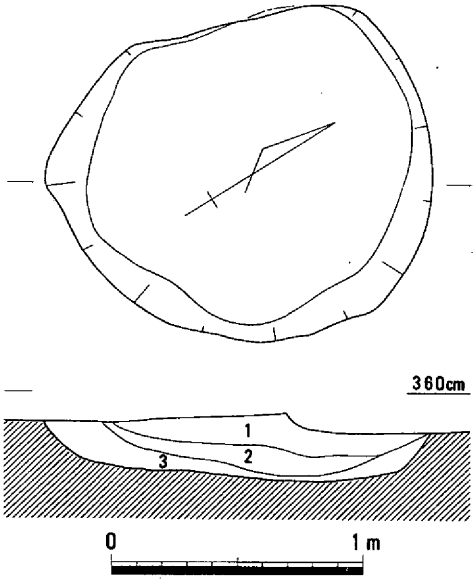
1　黄褐色粘質土
2　暗黄褐色粘質土（焼土を含む）
3　淡黄褐色粘質土

第556図　土壙290（1/30）



1　暗黄茶褐色粘質土
2　黄褐色粘質土

第557図　土壙291（1/30）



1　暗黄褐色粘質土
2　暗褐色粘質土
3　黄灰色粘質土

第558図　土壙292（1/30）

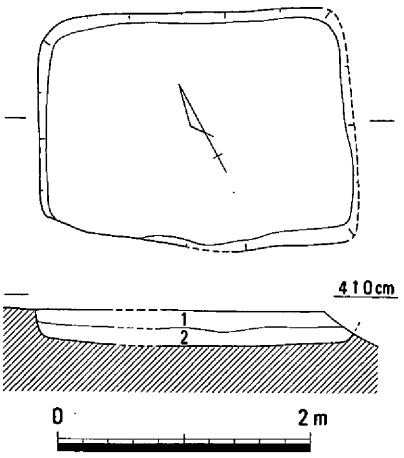
土壙294（第560図）

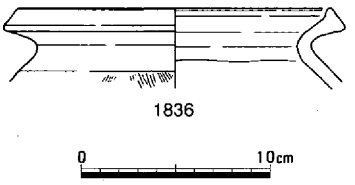
土壙264は、第２微高地中央の南東寄り、竪穴住居43の東に隣接する大形の土壙である。掘り方の北東部分を弥・後・Ⅳの溝15が南北に流走している。平面は長方形で、規模は346×260cmを測る。掘り方の壁面は、比較的垂直に立ち上がり、床面は水平である。いわゆる「方形土壙」であると考えられる。出土遺物には、土器の小片や石鏃Ｓ272、スクレイパーＳ273、磨製石斧Ｓ274、土製紡錘車Ｃ94などがあるが、混入の可能性も考えられる。

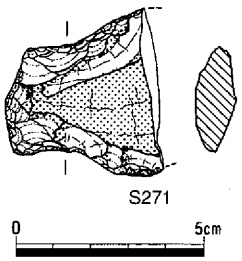
溝15との切り合いもあるが、遺構の時期は、弥・後・Ⅳにおさまると思われる。　（柴田）

土壙295（第561図）

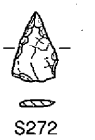
土壙295は、第２微高地の南東端に位置する。平面は楕円形で、検出面での規模は113×105cmを測る。掘り方は段を有する。出土遺物は認められない

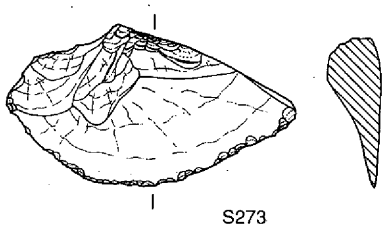


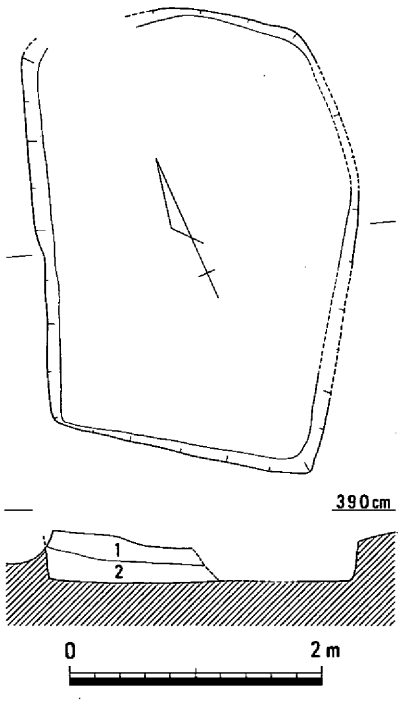


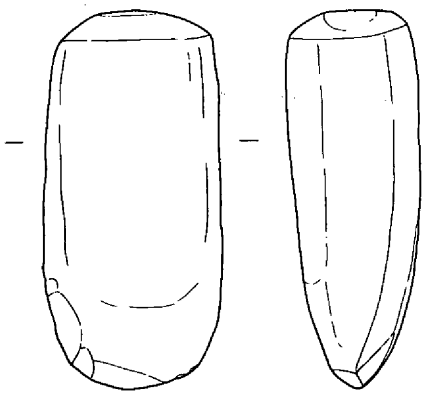


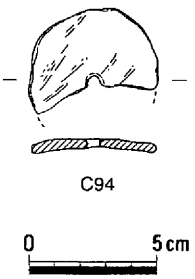
第559図　土壙293（1/60）・遺物

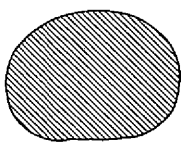












第560図　土壙294（1/60）・遺物

が、遺構の時期は、弥・後におさまると思われる。　（柴田）

土壙296（第562図）

土壙296は、第２微高地の南東端に位置する。平面は長楕円形で、規模は149×41cmを測る。掘り方の東側は、溝25により切られている。床面は中央に向かって下がり、「Ｖ」字状を呈する。出土遺物は土器の小片のみであるが、遺構の時期は、弥・後におさまると思われる。　（柴田）

土壙297（第563図）

土壙297は、第２微高地の南東端に位置する。掘り方の南半分を、弥・後・Ⅰの袋状土壙52に切られている。平面は、楕円形になると思われ、規模は、長径で101cmを測る。出土遺物には、壺1838、高杯1837、楔形石器Ｓ275などが認められる。

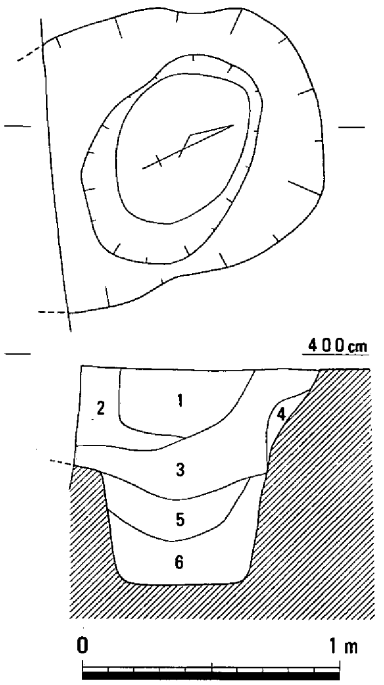
1838は長頸壺で、大きく開く口縁部の内面に３つの刺突紋が施される。1837は、裾部と脚柱部の境界付近に透かしを施している。

袋状土壙との切り合いもあるが、遺構の時期は、弥・後・Ⅰにおさまると思われる。　（柴田）

土壙298（第564図）

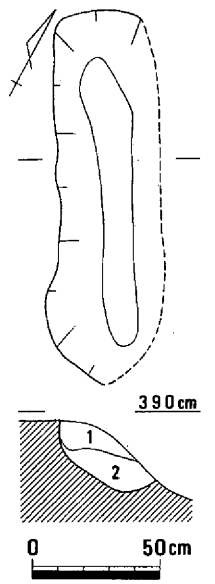
土壙298は、第２微高地の東端に位置し、袋状土壙51の南に隣接する。平面は楕円形で、規模は143×116cmを測る。床面は中央が高くなっている。

出土遺物は土器の小片のみであるが、遺構の時期は、弥・後におさまると思われる。　（柴田）



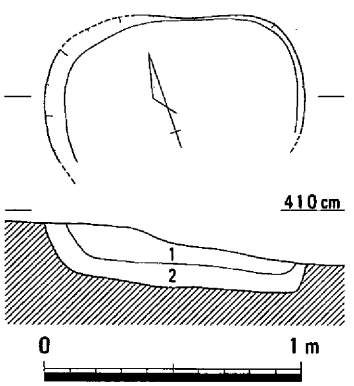
1　暗茶褐色粘質微砂
2　暗灰褐色粘質微砂
3　暗黄灰褐色粘質微砂
4　黄灰色粘質土
5　暗黄灰色粘質土
6　黄褐色粘質土

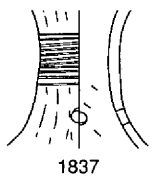
第561図　土壙295（1/30）

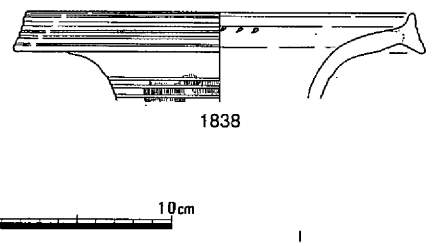


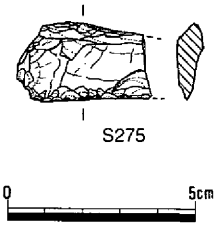
1　暗褐色粘質土
2　茶褐色粘質土

第562図　土壙296（1/30）









1　暗灰褐色粘質微砂（炭を少し含む）
2　灰褐色粘質土

第563図　土壙297（1/30）・遺物

土壙299（第565図）

土壙299は、第２微高地の北東端に位置する。弥・後・Ⅱ～Ⅲの竪穴住居47の南東で重なり、それに切られている。平面は不整円形で、規模は145×125cmを測る。出土遺物には高杯1839・1840などが認められる。遺物や遺構の切り合いなどから、時期は、弥・後・Ⅰと思われる。（柴田）

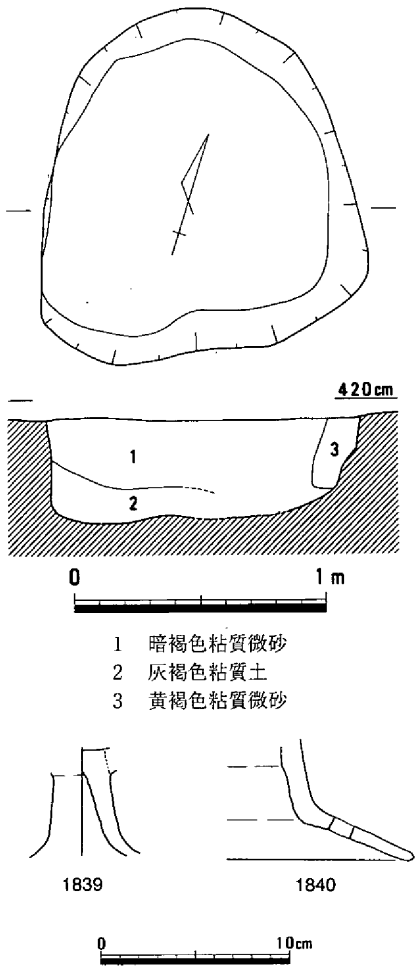
土壙300（第566図）

土壙300は、第２微高地北東端の袋状土壙群の中に位置する。平面は不整円形で、規模は105×84cmを測る。断面は皿状を呈する。出土遺物は土器の小片のみであるが、遺構の時期は、弥・後におさまると思われる。（柴田）

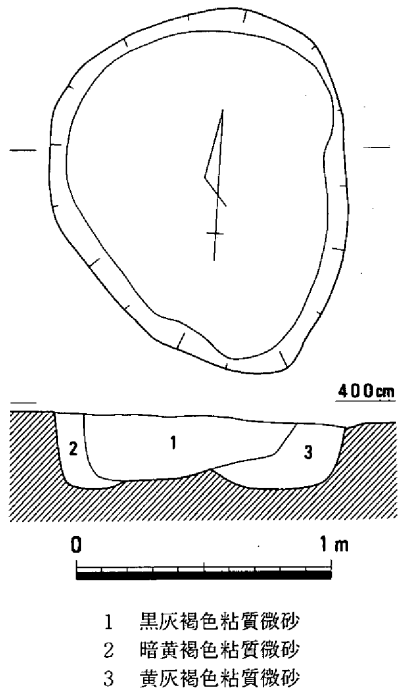
土壙301（第567図）

土壙301は、第２微高地北東端の袋状土壙群の中央に位置する。平面は楕円形で、規模は85×72cmを測る。床面は南側に向かって下がり、端では極端にくぼむようになっている。埋土はレンズ状堆積を呈し、３層では粘土塊が確認される。

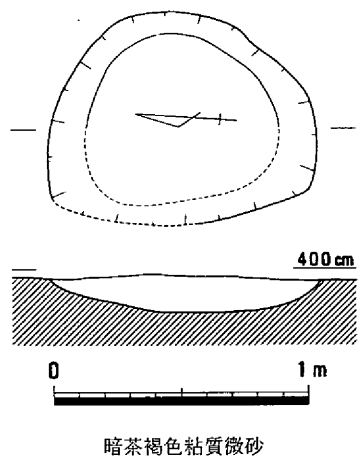
出土遺物には、甕1841などが認められる。1841は口



第565図　土壙299（1/30）・遺物



第564図　土壙298（1/30）



第566図　土壙300（1/30）

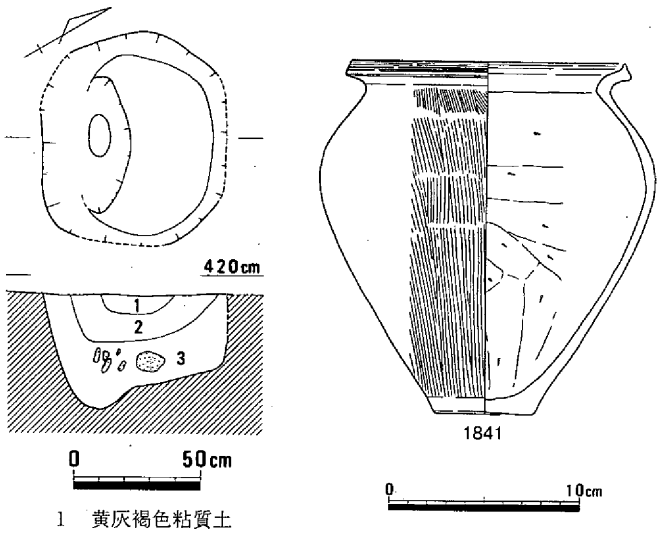
縁端部は上方にのびる。遺物などから、遺構の時期は、弥・後・Ⅳと思われる。　（柴田）

土壙302（第568図）

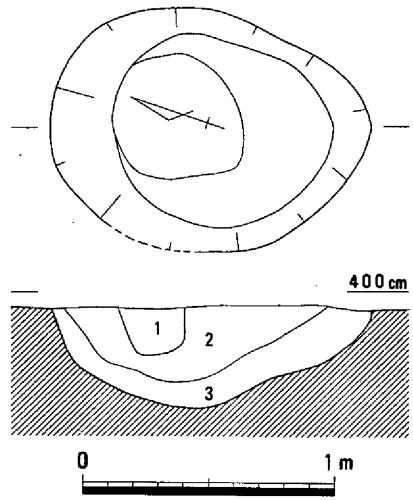
土壙302は、第２微高地北東端の袋状土壙群の中に位置し、弥・後・Ⅰの袋状土壙66を切っている。平面は楕円形で、規模は127×97cmを測る。出土遺物は土器の小片のみであるが、遺構の切り合いなどから、時期は弥・後・Ⅰにおさまる可能性があると思われる。　（柴田）

土壙303（第569図）

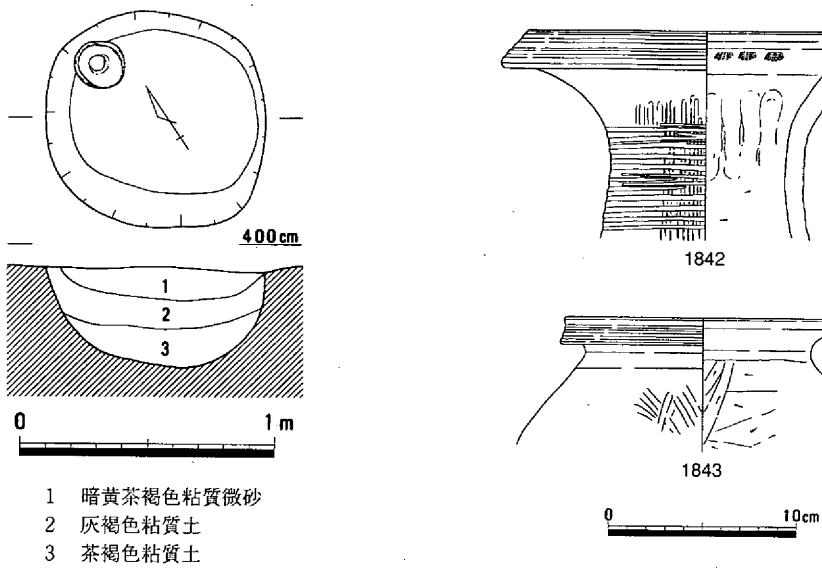
土壙303は、第２微高地北東端の袋状土壙群の中央に位置し、弥・後・Ⅰの袋状土壙68を切っている。平面は径86cmの円形を呈し、床面はややくぼんでいる。出土遺物には、壺1842、甕1843などが認



第567図　土壙301（1/30）・遺物



第568図　土壙302（1/30）



第569図　土壙303（1/30）・遺物

められる。1842は、口縁内面に貝殻圧痕紋が３つ並んで施され、ヘラケズリが頸部内面まで達している。遺物や遺構の切り合いなどから、遺構の時期は、弥・後・Ⅲと思われる。　（柴田）

土壙304（第570図）

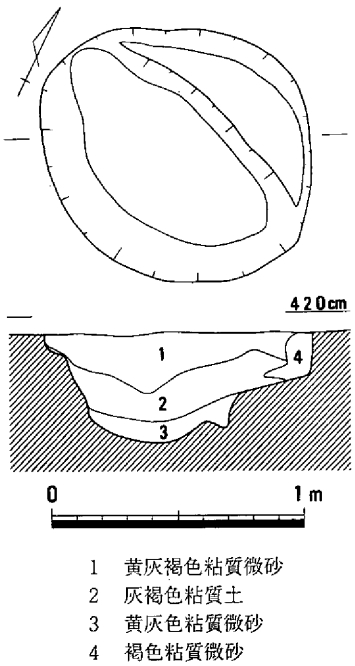
土壙304は、第２微高地北東端の袋状土壙群の南端に位置し、弥・後・Ⅰの袋状土壙68を切っている。平面は楕円形で、規模は106×102cmを測る。掘り方は段を有し、床面はくぼんでいる。出土遺物には壺1844などが認められる。1844は内面のヘラケズリが最大径の付近まで及んでいる。遺構の切り合いがあるが、遺物などから、時期は弥・後・Ⅰにおさまると思われる。　（柴田）

土壙305（第571図）

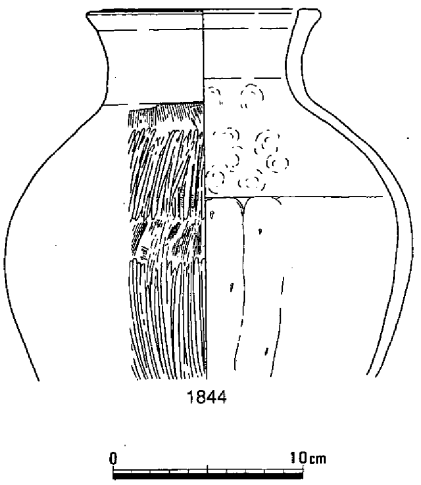
土壙305は、第２微高地の北寄りに位置する。遺構のほとんどが調査区外であるが、断面の形態や埋土の状況などから、袋状土壙になる可能性が高い。出土遺物は土器の小片のみだが、遺構の時期は、弥・後におさまると思われる。　（柴田）

土壙306（第572図）

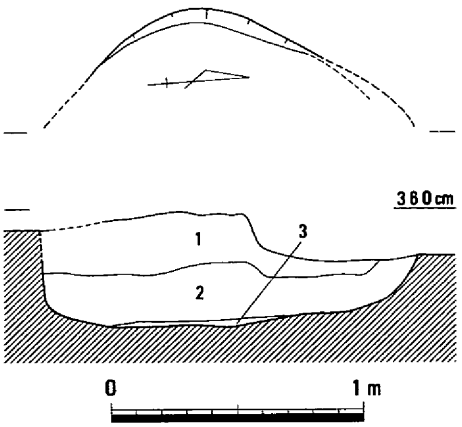
土壙306は、第２微高地の北端に位置する。平面は楕円形で、規模は70×53cmを測る。北側が１段くぼんでおり、埋土に焼土が多く認められる。出土遺物は土器の小片のみであるが、遺構の時期は、弥・後・Ⅳと思われる。　（柴田）



1　黄灰褐色粘質微砂
2　灰褐色粘質土
3　黄灰色粘質微砂
4　褐色粘質微砂

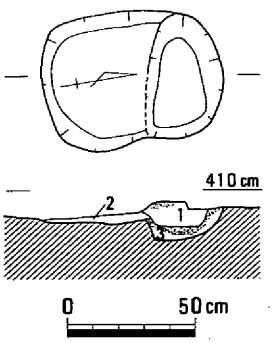


第570図　土壙304（1/30）・遺物



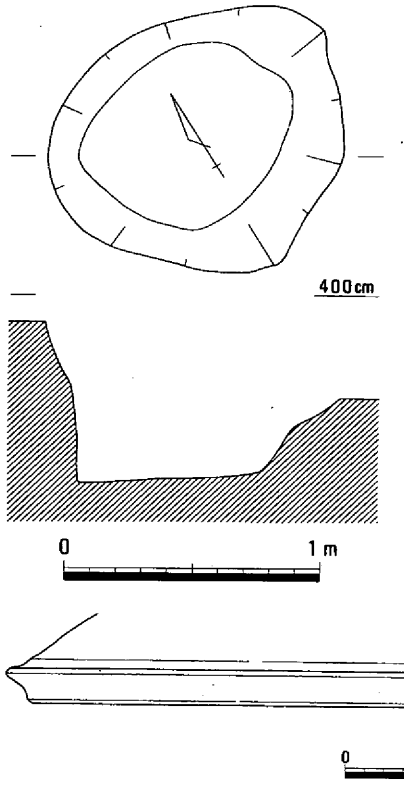
1　灰褐色粘質微砂
2　淡黄灰褐色粘質微砂
3　淡黄褐色粘質微砂

第571図　土壙305（1/30）



1　暗灰褐色粘質土
2　茶褐色粘質微砂
3　黄褐色粘質土

第572図　土壙306（1/30）

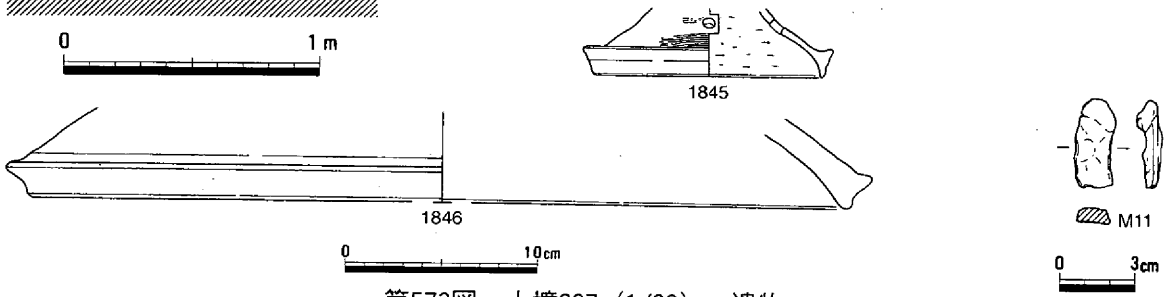


土壙307（第573図）

第３微高地の北端部で検出された土壙で、上部はかなり削平されている。平面形は不整楕円形を呈し、東西方向が少し広い。西側の壁の傾斜は急で、東側は緩やかになっている。床面はほぼ平坦である。大きさは、長径115cm、短径106cm、深さ64cmを測る。埋土中から少量の遺物が出土している。土器には、高杯の脚部1845、器台の脚部1846があり、鉄器の小片M11がある。時期は出土遺物から弥・後・Ⅰに比定される。　（正岡）

土壙308（第574図）

土壙307の南側にあり、調査区南端部に位置する。周辺部に

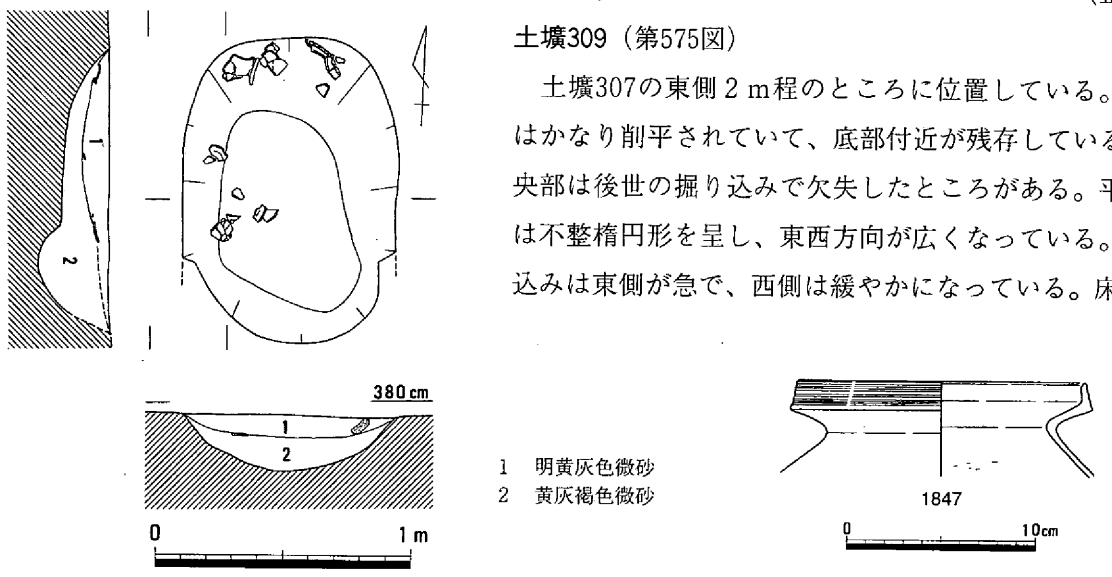


第573図　土壙307（1/30）・遺物

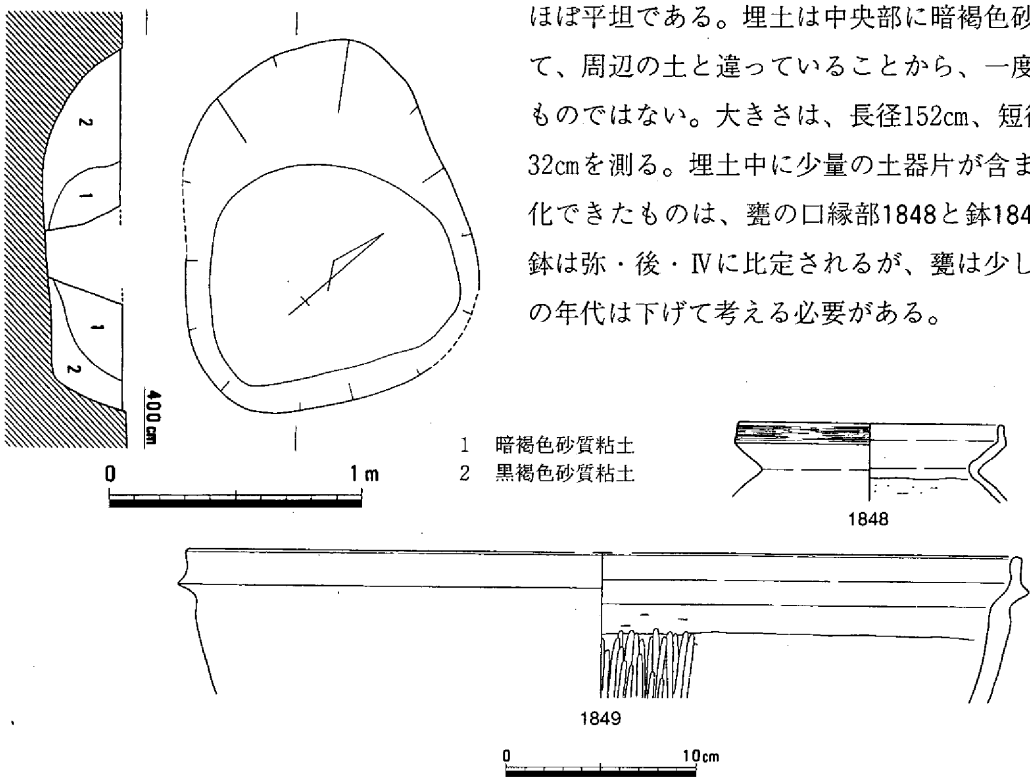
もほぼ同規模の土壙が所在している。上部はかなり削平されいて、底部付近が残存しているものと推測される。平面形は隅丸方形を呈し、南北方向が長い。南側の一部は調査中の側溝によって掘り下げたため、上部を削平している。中央部の断面でみると浅い皿状を呈しているが、南側寄りは少し掘り込まれている。あるいは柱穴と重複していた可能性がある。現状での大きさは、長径122cm、短径85cm、深さ22cmを測る。埋土の上層には、土器片が少量含まれている。図化できたものは、甕の口縁部1847だけである。時期は出土遺物から弥・後・Ⅳに比定される。　（正岡）

土壙309（第575図）

土壙307の東側２m程のところに位置している。上部はかなり削平されていて、底部付近が残存している。中央部は後世の掘り込みで欠失したところがある。平面形は不整楕円形を呈し、東西方向が広くなっている。掘り込みは東側が急で、西側は緩やかになっている。床面は

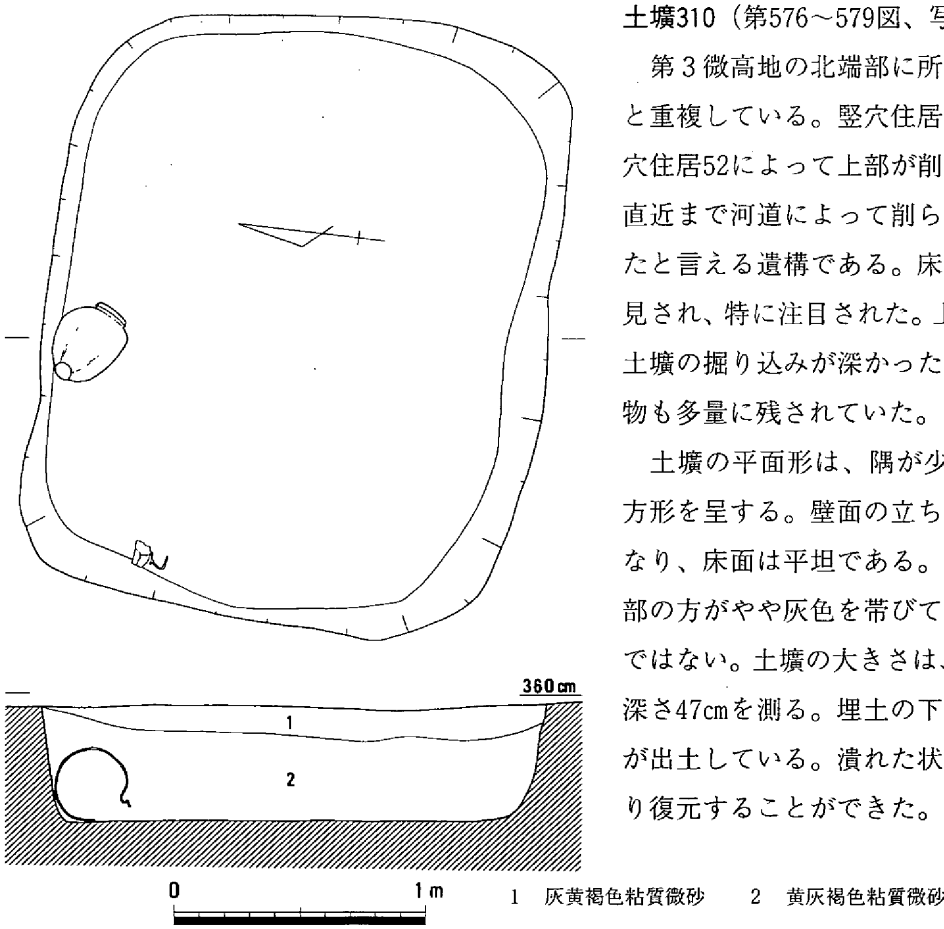


第574図　土壙308（1/30）・遺物



ほぼ平坦である。埋土は中央部に暗褐色砂質粘土があって、周辺の土と違っていることから、一度に埋められたものではない。大きさは、長径152cm、短径123cm、深さ32cmを測る。埋土中に少量の土器片が含まれている。図化できたものは、甕の口縁部1848と鉢1849だけである。鉢は弥・後・Ⅳに比定されるが、甕は少し新しく、土壙の年代は下げて考える必要がある。　（正岡）

第575図　土壙309（1/30）・遺物

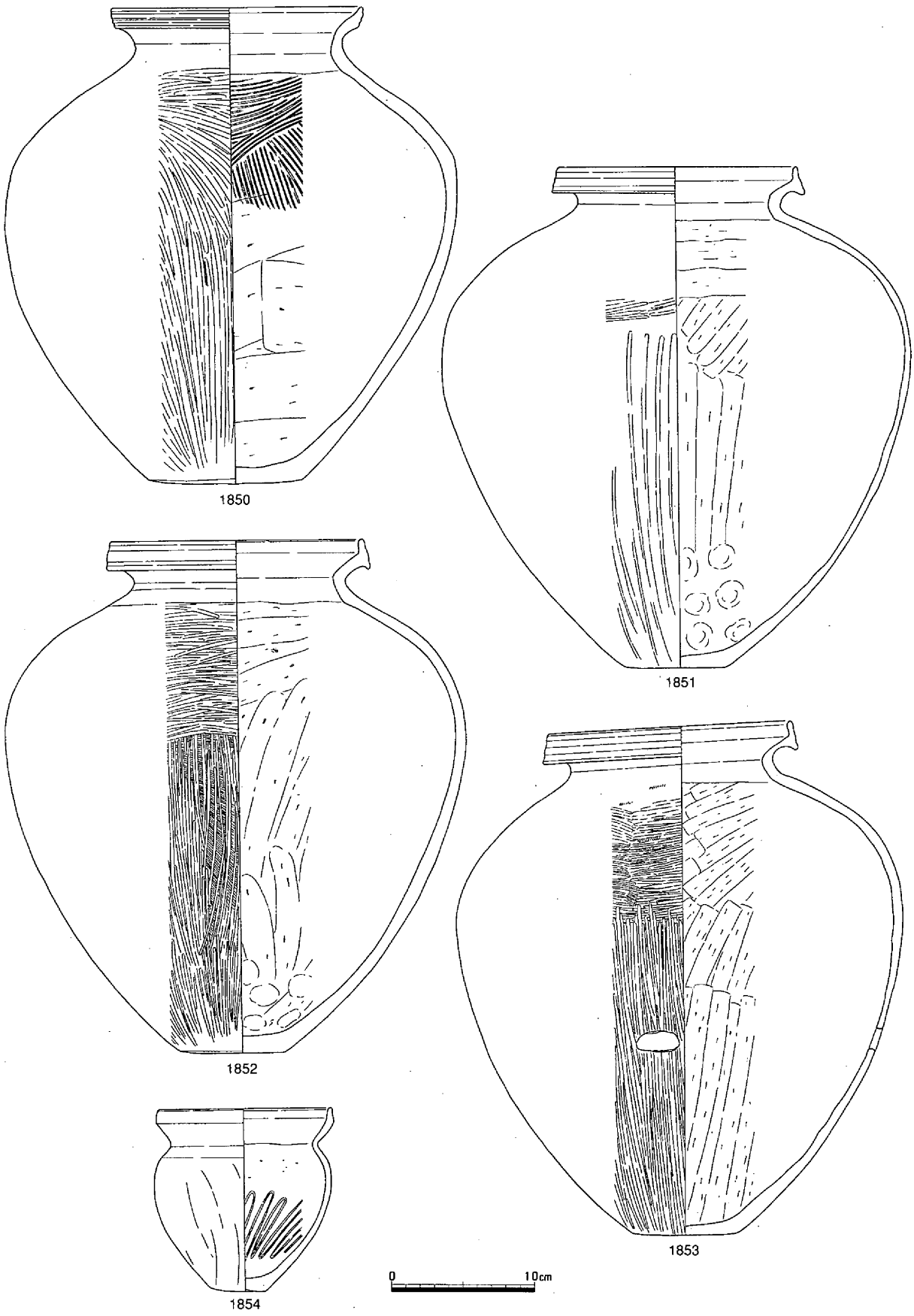


土壙310（第576～579図、写真17・80・81）

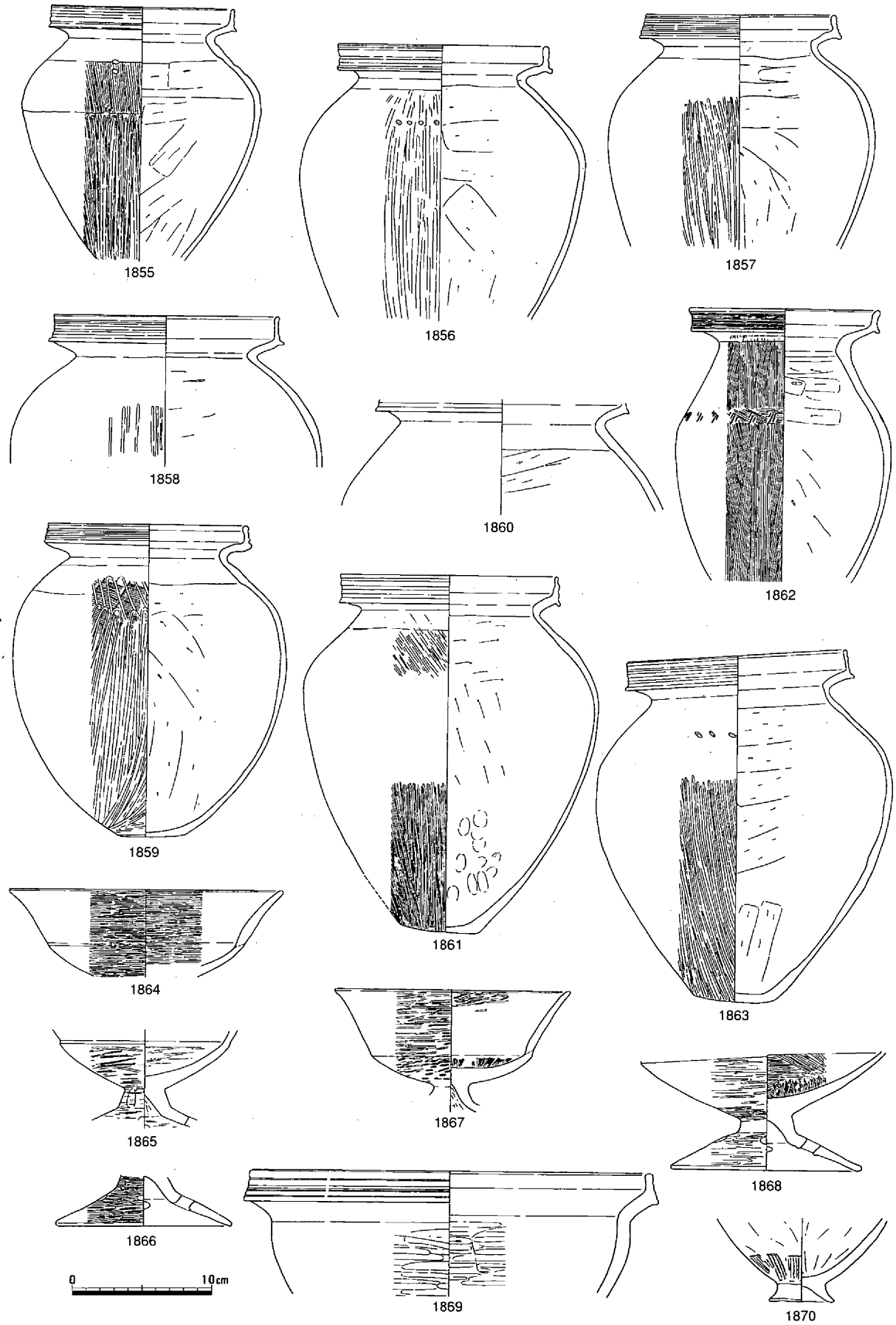
第３微高地の北端部に所在し、竪穴住居49・52と重複している。竪穴住居49を切っているが、竪穴住居52によって上部が削平されている。北側の直近まで河道によって削られていて辛うじて残ったと言える遺構である。床面近くで有鉤銅釧が発見され、特に注目された。上部の削平は著しいが、土壙の掘り込みが深かったことから、埋土中の遺物も多量に残されていた。

土壙の平面形は、隅が少し丸くなっているが、方形を呈する。壁面の立ち上がりは各面とも急になり、床面は平坦である。埋土の状況をみると下部の方がやや灰色を帯びているが、余り濃いものではない。土壙の大きさは、長さ245cm、幅202cm、深さ47cmを測る。埋土の下部からは、多量の土器が出土している。潰れた状況のものが多く、かなり復元することができた。出土状況を観察したと

第576図　土壙310（1/30）



第577図　土壙310　遺物（1）



第578図　土壙310　遺物（２）

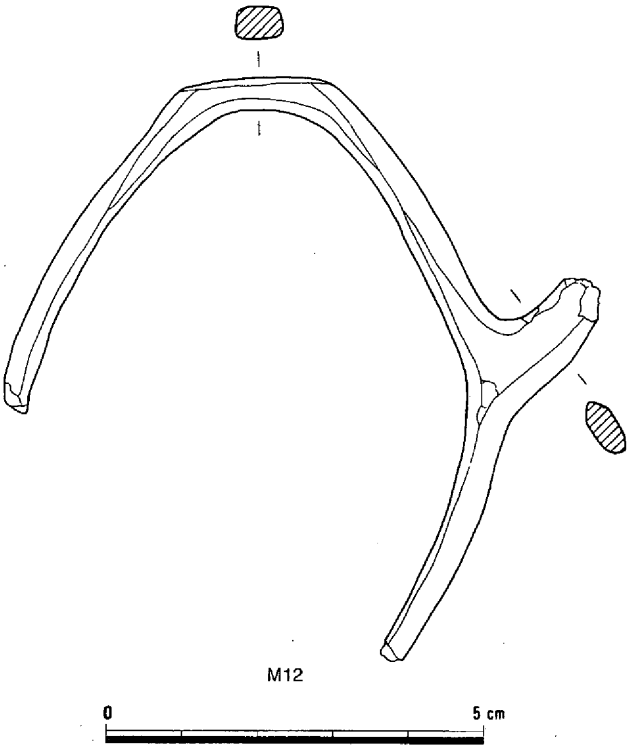
ころでは、完形のものを置き並べだとは考えられず、土壙の中へ廃棄されたものと推測された。床面に残存していた遺物としては、北壁に接した状態で、口縁部を床面につけて倒立した壺と北西の隅に近い西壁に接した床面で一部を欠損した有鉤銅釧が検出された。

出土遺物には、土器と銅釧があるので、以下少し略述する。土器には、壺、甕、高杯、鉢があり、壺と甕については、復元されたものが多く、全体の状況の分かるものがあり、一括資料として資料価値が高いものである。壺1850～1853は４点あり、いずれも短頸である。甕1854～1863は個体数が多く、形態も３種類みられる。高杯1864～1868はいずれも短脚で、精製粘土を使用している。鉢には大型のもの1869と小型のもの1870がある。以上の土器から土壙の時期は、弥・後・Ⅳに比定される。本土壙の機能としては貯蔵穴と推定される。

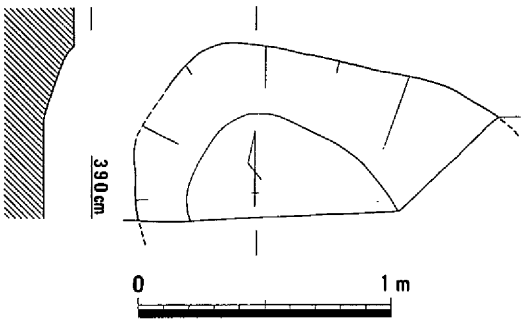
本土壙から出土したものとして、特記されるものに青銅製有鉤銅釧M12がある。出土状況でも記したように、壁よりの床面で検出したものであるが３分の１を欠失している。上部に水平方向の面を持ち、両側へ楕円形に膨らみ、一方斜めに上方へ突出する鉤がある。下部を欠失しているので、上面に対応する水平方向の平坦部を持つ部分はない。折損部は錆で覆われていて、弥生時代に折れたもので、土壙内や周辺部からも欠損部は発見されなかった。鉤部の先端も一部を欠いている。上部の断面はほぼ方形、湾曲部の断面は外方へ向かって角の丸い三角形、鉤部はやや楕円形に近い形状を示す。大きさは現存長77.0㎜、最大幅78.0㎜、鉤の下方の断面幅5.0㎜、同厚さ4.9㎜、鉤の反対側の幅6.7㎜、同厚さ4.4㎜、鉤の幅8.5㎜、同厚さ3.0㎜、残存重量17.85ｇである。

加茂政所遺跡では、ほかに第２微高地の竪穴住居44から円環形銅釧が出土している。近接して２点の異なった形態の銅釧が出土して注目されるところである。岡山県内では、当遺跡の調査後、津山市荒神峪遺跡で有鉤銅釧の有鉤部の破片が発見された。中・四国地方でみると広島県東広島市西高屋町浄福寺２号遺跡で弥生時代後期の竪穴住居床面から１点発見された。有鉤銅釧は、全国的にみると、北陸、東海、南関東から16遺跡48例発見されているが、形状は種々異なっている。政所遺跡出土のものと最も類似しているものに、福井県西山公園出土例がある。有鉤銅釧の鋳型も３例発見されているが、同型のものではない。

検出された土壙の時期は、多量の土器を伴っていたことから、弥・後・Ⅳに比定されるが、有鉤銅釧は欠損した状況で発見されていることや形態の点から弥生時代後期に比定することはできるが、製作年代を土壙の時期である終末期に下げることはできない。それまで使用されていたのか、すでに廃棄されていたものが埋没したのかは、明



第579図　土壙310　遺物（３）



第580図　土壙311（1/30）

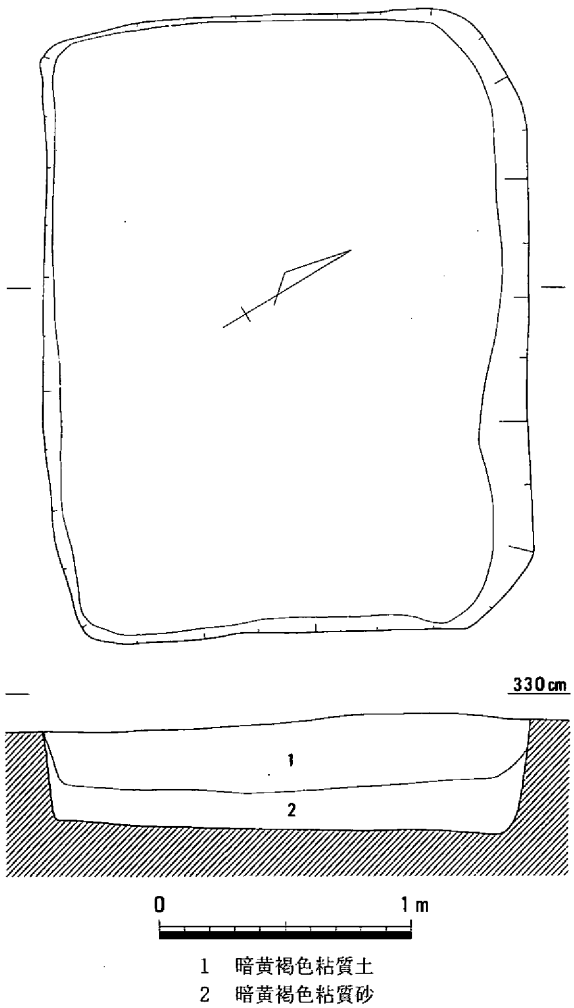
確にできない。加茂政所遺跡竪穴住居44の円環形銅釧は、完形で出土し、住居の年代である弥・後・Ⅱに比定される。当遺構の有鉤銅釧の使用年代も埋没していた土壙の時期より少し古く想定されるのではないだろうか。　（正岡）

土壙311（第580図）

第３微高地の南端部にあり、用地境のため、側溝の掘り下げによって南側を切られている。土壙は、さらに南側の用地外へのびている。東側には、近接して竪穴住居51がある。残存した部分でみると、平面形は楕円形を呈し、断面は浅い皿状である。現存する大きさは径143cm、幅70cm、深さ12cmを測る。埋土中には、少量の土器片を含んでいるが、図化できなかった。土壙の時期は、弥・後・Ⅳに比定される。　（正岡）

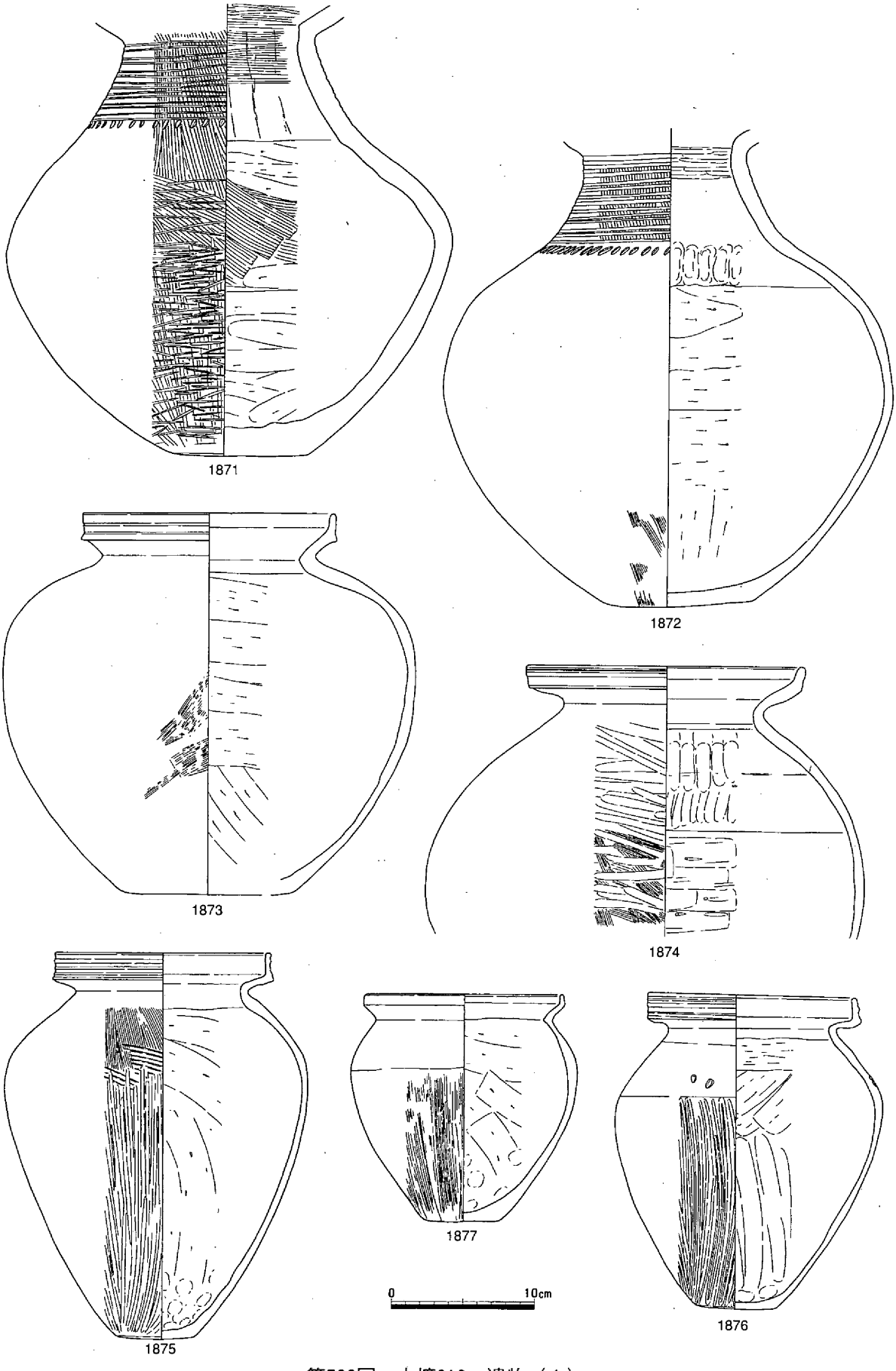
土壙312（第581～583図、写真81・82）

土壙311の東側にあり、竪穴住居51に接している。上部を削平され、一部小さな柱穴と重なっているが、ほぼ完存している。平面形は隅を少し丸くした方形を呈する。壁面の立ち上がりは各面とも急になり、床面は平坦である。床面の周囲には周溝などはない。大きさは、長さ246cm、幅193cm、深さ47cmを測る。埋土は、上部の方がやや粘質を帯びていて暗黄褐色を呈する。埋土中には多量の土器を含んでいる。土器には、壺、甕、高杯、台付壺などがある。

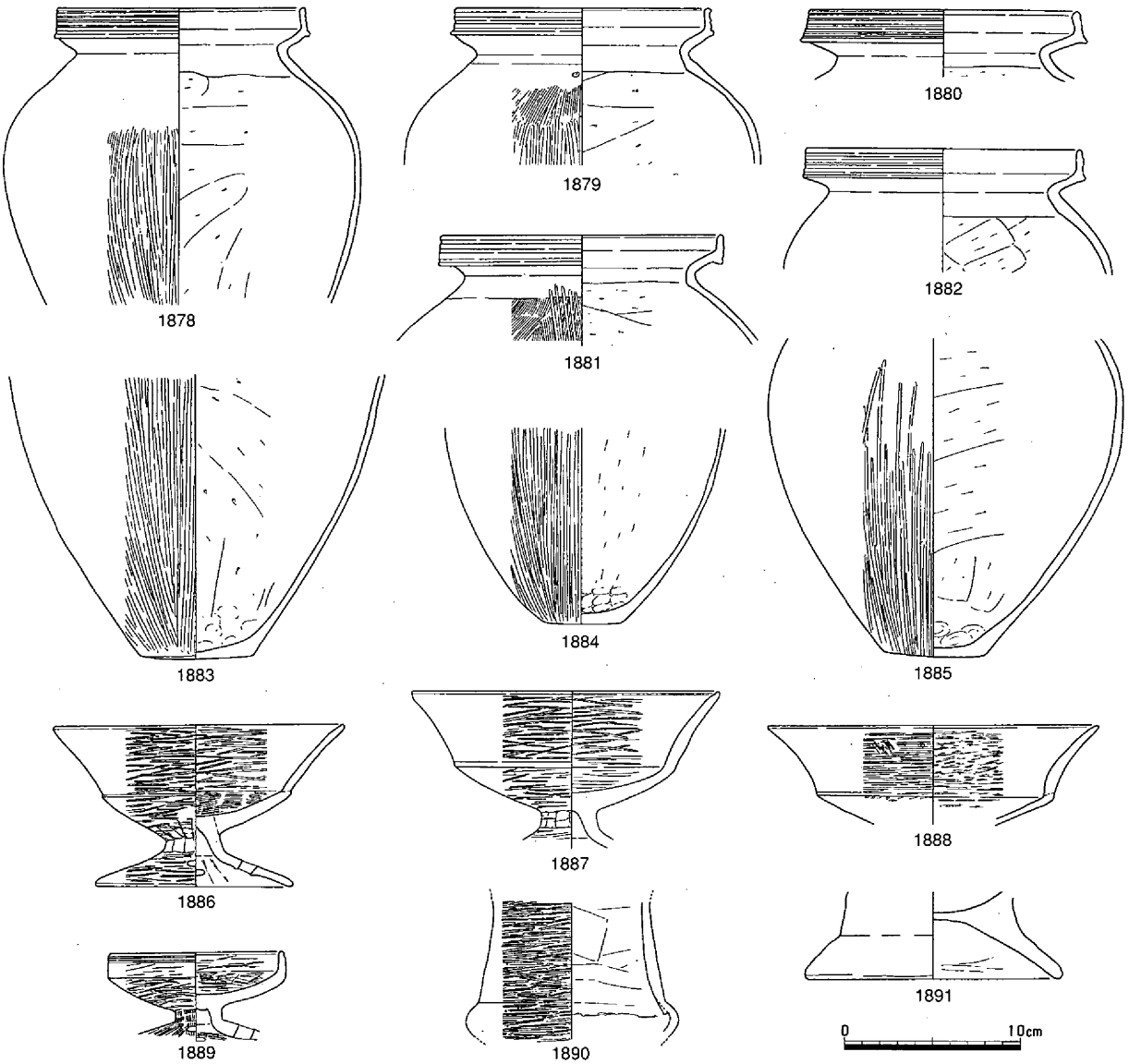


第581図　土壙312（1/30）

壺には、長頸壺1871・1872、短頸壺1873・1874がある。長頸壺は、上東式土器の長頸が少し短くなったもので、縦位のハケメの上に横位の沈線を多数巡らし、直下に列点文を配している。甕1875～1885は土壙310から出土したものと同型で、口縁部を上方へ拡張し、擬凹線文を施すもの1875・1876・1878～1882が多い。1876には肩部に棒状刺突文がある。高杯1886～1889は短脚で、口縁部を大きく拡張し、杯部が深いものと、立ち上がりが小さく、杯部の浅いものがある。いずれも胎土は精製粘土を使用している。台付壺1890は、口縁部と脚部を欠失しているが、脚が付くものである。脚台1891は甕に付くものであろう。土壙の時期は、弥・後・Ⅳに比定される。本土壙の機能としては貯蔵穴と推定される。　（正岡）



第582図　土壙312　遺物（1）

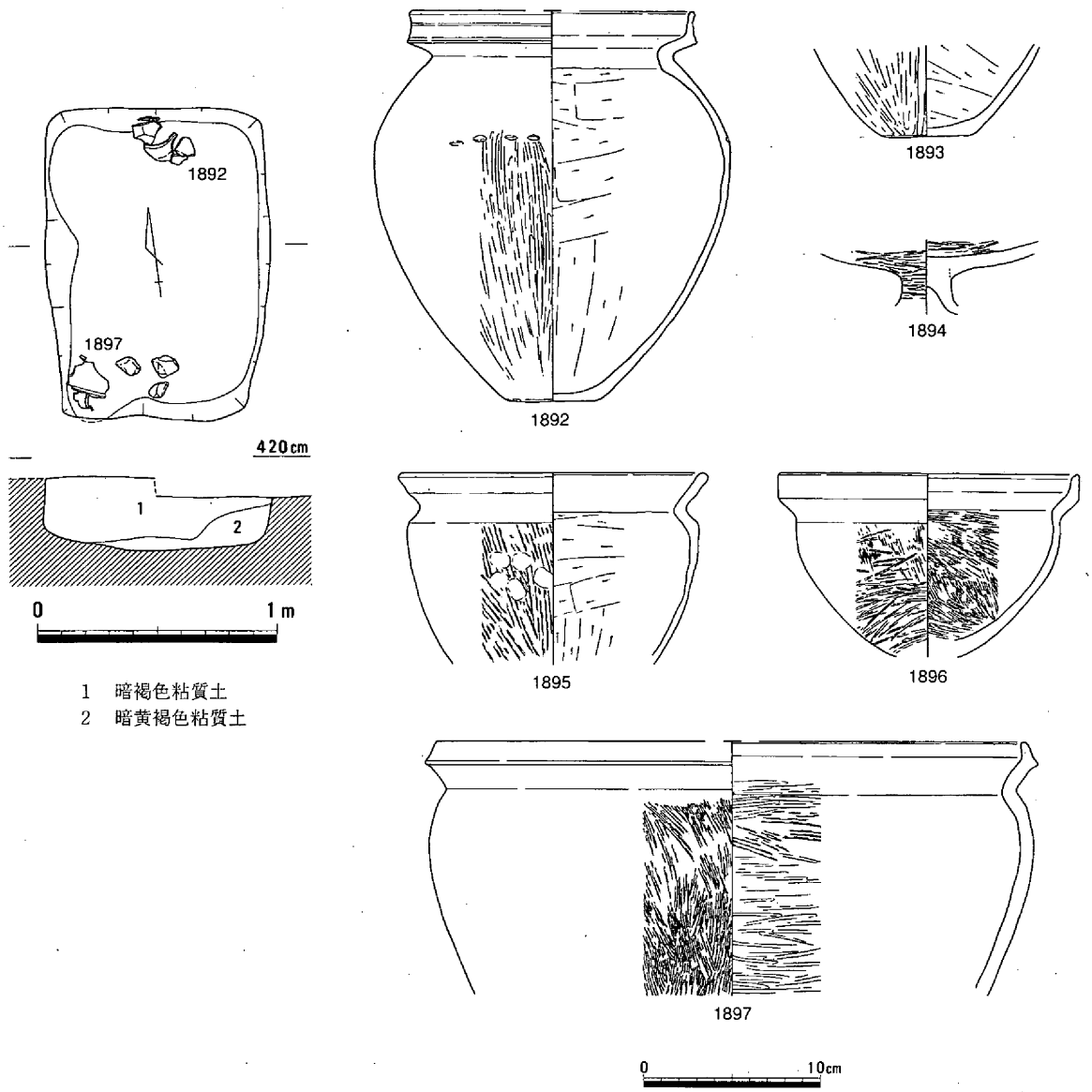


第583図　土壙312　遺物（２）

（５）土壙墓

土壙墓５（第584図、写真18－１）

土壙墓５は、第２微高地の中央やや東より、竪穴住居36の南西に位置する。弥・後・Ⅲ～Ⅳの袋状土壙30を切っている。平面形は長方形で、規模は133×94cmを測る。主軸方向はN-7°-Eで、ほぼ南北である。床面はわずかに中央がくぼむ。床面の南端には、３個の礫が配置され、枕石のような状況を呈している。また、南西隅には鉢1897が、中央北端には甕1892が破片で出土している。この他にも、甕1893、高杯1894、鉢1895・1896などが出土している。1892は、口縁端部が上方に立ち上がり、肩部に４つの刺突紋が横に並んで施されている。1895は、口縁部が「く」字状に屈曲してのび、肩部から胴部の屈曲も強い。1896は、口縁端部が上方に立ち上がり、底部はかなり狭くなっている。遺構の切り合いがあるが、遺物などから、時期は弥・後・Ⅳにおさまると思われる。　（柴田）



第584図　土壙墓５（1/30）・遺物

（６）土器棺墓

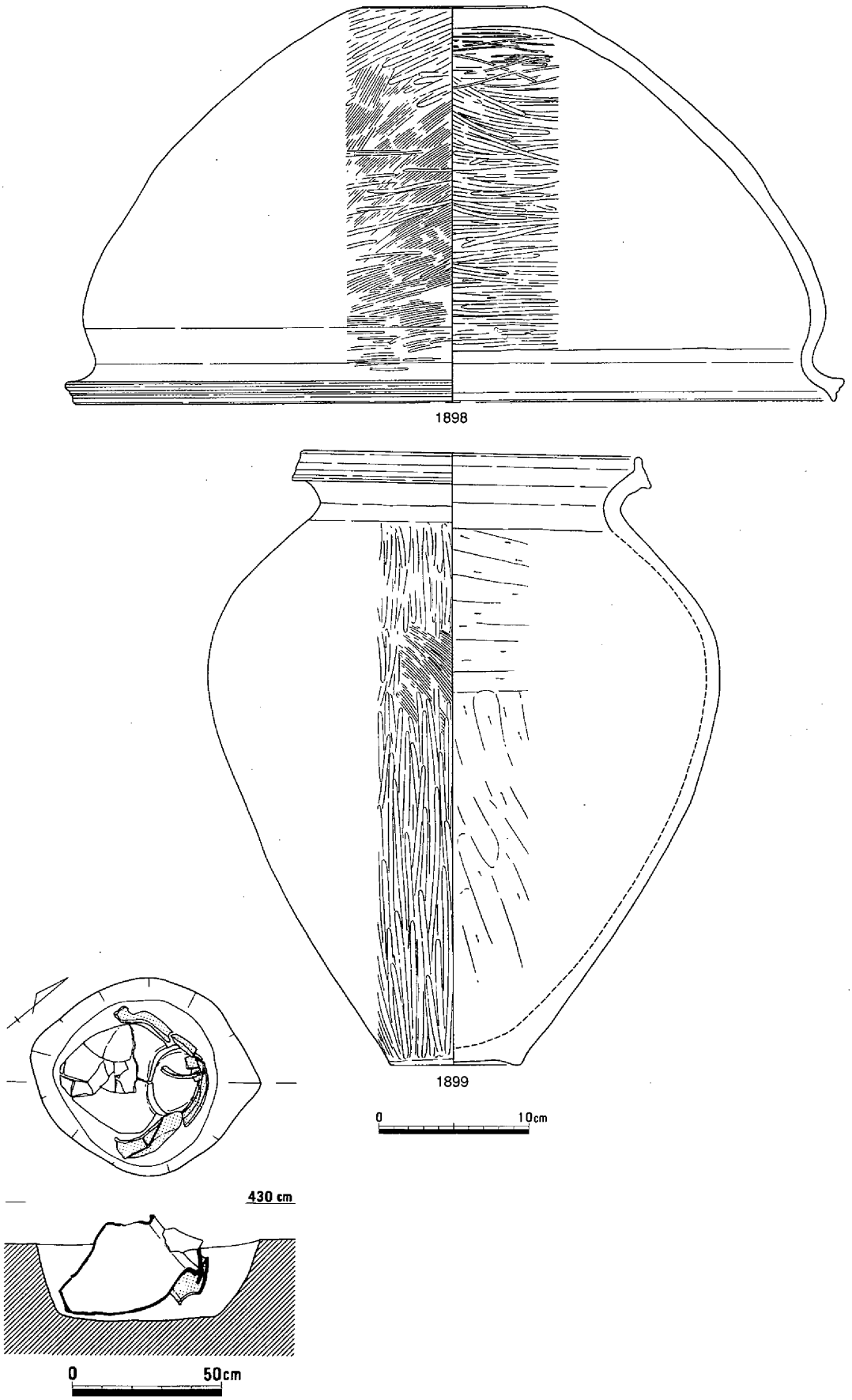
土器棺墓２（第585図、写真18－２、19－１）

第２微高地M24区中央南端部、竪穴住居36の南西約５ｍに位置する。掘り方の規模は、検出面では約80×70cmの楕円形で、深さは約40cm残存していた。断面形は逆台形で、底面は平らであった。埋土は灰褐色粘質土である。

土器棺は、口径22cm、深さ41cmの甕である。検出できた状態は、斜め約30度に傾いていた。内部には土が充満していた。蓋には、口径約50cm、深さ26.5cmの鉢を使用している。鉢の約半分は後世に壊されていた。土器の時期は、弥・後・Ⅰ～Ⅱではなかろうか。（平井）

土器棺墓３（第586・587図、写真18－２・３、19－２、83）

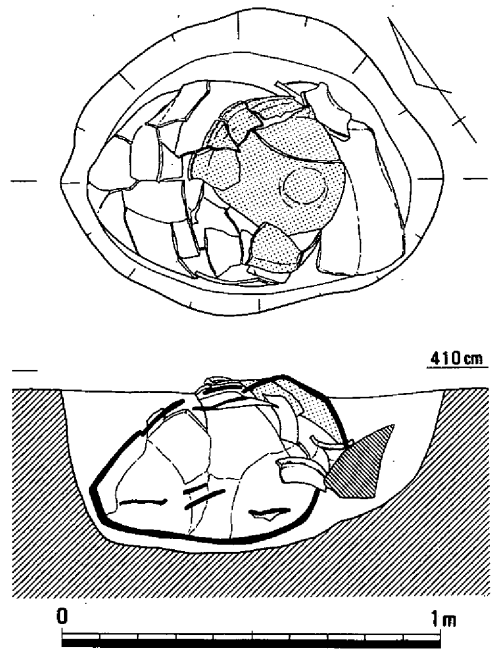
第２微高地のM24区、土器棺墓２の南約３ｍにおいて検出した。掘り方の規模は、検出面では、長さ100cm、幅80cmの楕円形で、深さは43cm残存していた。断面形は逆台形に近く、底面は一部は平ら



第585図　土器棺墓２（1/20）・遺物

であった。埋土は灰褐色粘質土である。

土器棺は口径27cm、深さ約67cmの壺で、頸部から上を打ち欠いていた。打ち欠かれていた部分の径は、約22cmである。検出できた状態は、斜め約20度に傾いていた。蓋には、口径42cm、深さ約20cmの鉢を利用している。特徴的なのは、土器棺の肩の下に長さ40cm、厚さ15cm前後の石が据えられていたことである。また打ち欠かれていた壺の口縁部と頸部は蓋の側に置かれていた。時期は、弥・後・Ⅰ～Ⅱではなかろうか。　（平井）



第586図　土器棺墓３（1/20）

土器棺墓４（第588・589図、写真18－２・３）

第２微高地のM24区、土器棺墓３の南東約１mにおいて検出した。掘り方の平面形は、検出面では50×46cmのほぼ円形で、深さは11cm残存していた。断面形は皿形であった。土器棺と考えたのは、口径15cm、深さ34cmの壺である。肩部から上は壊されていた。蓋は検出できていない。土器の時期は、弥・後・Ⅰではなかろうか。ただし、他の土器棺に比べて蓋が検出できなかったこと、底のレベルが高いこと、土器の時期が古いことから、土器棺墓でない可能性があることも記しておきたい。　（平井）

土器棺墓５（第588・590図、写真18－２・３、19－３、20－３、83）

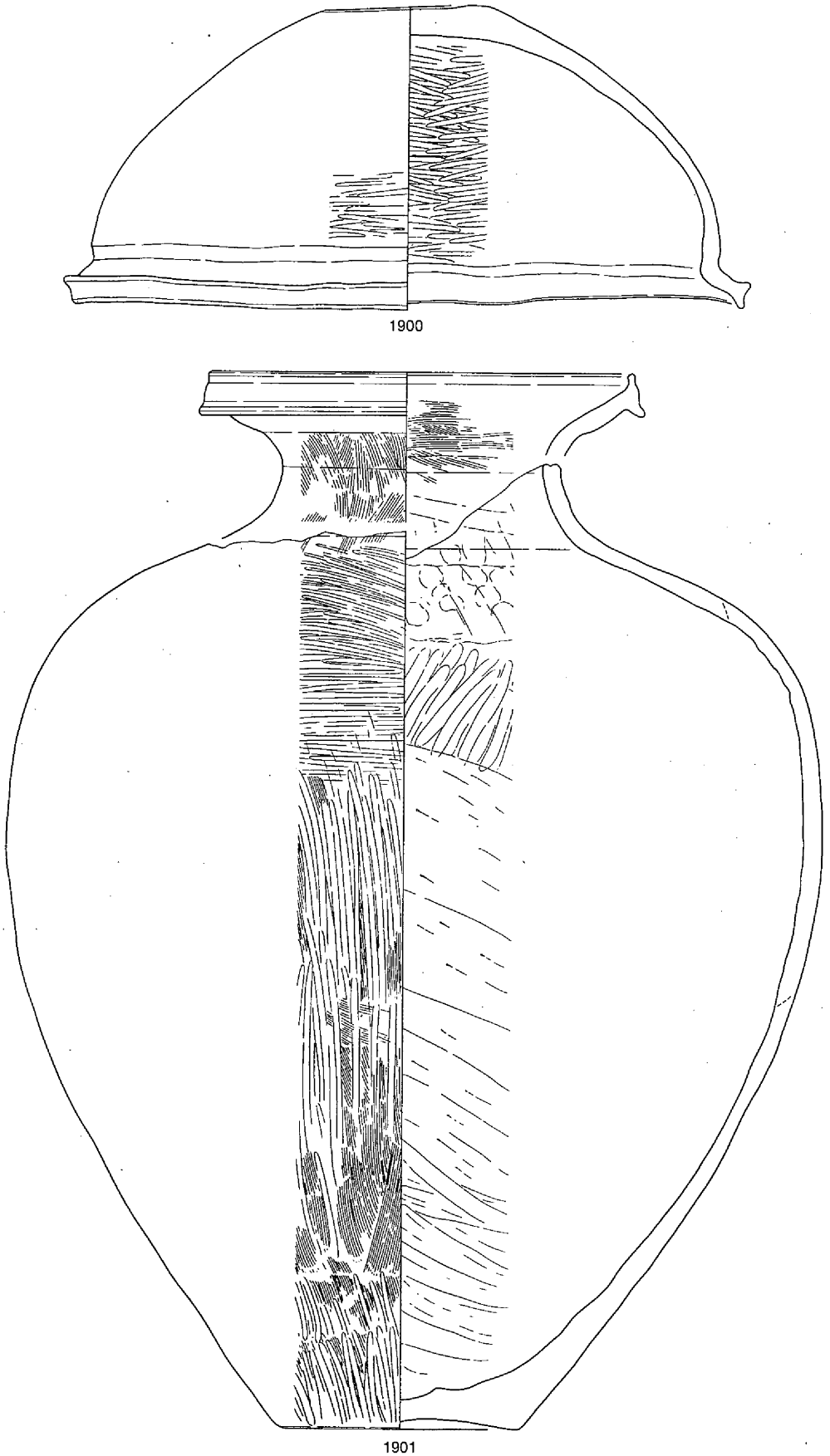
第２微高地のM24区、土器棺墓４の東に接して検出した。掘り方の平面形は、検出面では、直径約90cmの円形で、深さは54cm残存していた。南端部は、土器棺墓11によって切られている。断面形は逆台形で、底面はほぼ平らであった。土器棺は口径27cm、深さ約67cmの壺で、頸部から上を打ち欠いていた。打ち欠かれていた部分の径は約20cmである。検出できた状態は、斜め約30度に傾いていた。蓋には、口径35cm、深さ18cmの鉢を利用している。土器の残存状況は良好であった。壺の肩部にはタタキ痕跡が観察できる。口縁端部外面にはヘラ描き沈線による鋸歯紋が描かれている。鉢の口縁部は片口である。また壺の胴部には、直径約２cmの円形の孔が意識的に穿たれていた。同様の穿孔は、土器棺墓８・12においても確認できている。土器の時期は、弥・後・Ⅰ～Ⅱではなかろうか。　（平井）

土器棺墓６（第591図、写真18－２・３、20－１）

第２微高地のM24区、土器棺墓５の南約３mにおいて検出した。掘り方の平面形は、検出面では直径約55cmの円形で、深さは22cm残存していた。底面は斜めに掘られている。土器棺は、頸部から上を打ち欠いた壺で、打ち欠かれた頸の径約25cmである。深さは約43cm残存していた。検出できた状態は、斜め約40度に傾いていた。蓋には、装飾高杯の杯部1906が利用されていた。また1905の鉢も装飾高杯の脚部の上に置かれていた。土器の時期は弥・後・Ⅱ頃ではなかろうか。　（平井）

土器棺墓７（第592図、写真18－２）

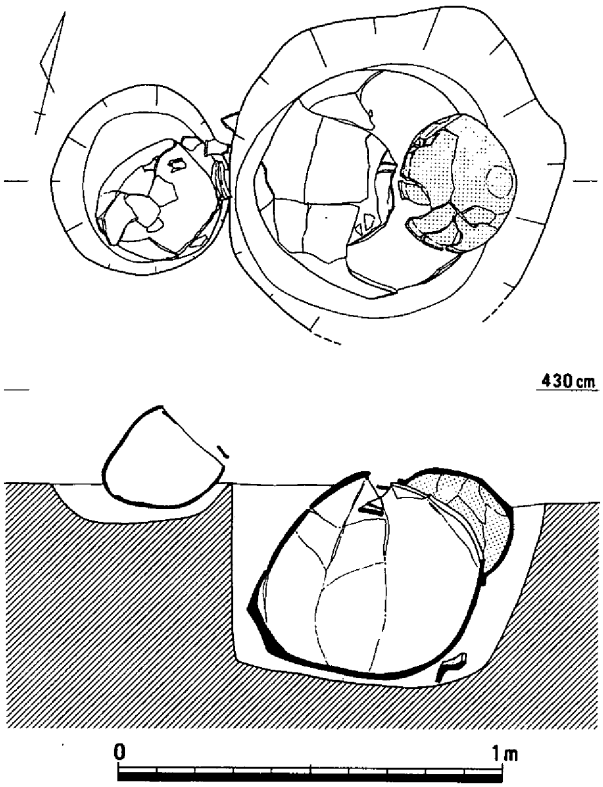
第２微高地のM24区、土器棺墓６の東隣りにおいて検出した。掘り方の平面形は、検出面では長さ78cm、幅60cmの楕円形で、深さは26cm残存していた。断面形は逆台形に近く、底面は少し窪んでいた。土器棺は、口径20cm、深さ約52cmの壺で、頸部から上を打ち欠いており、打ち欠かれた部分の径は約



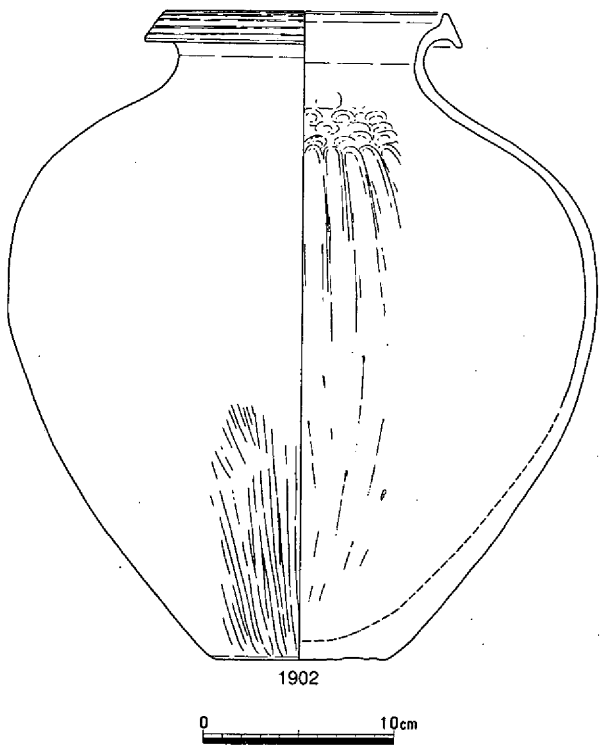
第587図　土器棺墓３　遺物

26cmである。検出できた状態は、斜め約45度に傾いていた。蓋には、口径43cm、深さ27cmの鉢が利用されていた。一部は後世の柱穴によって、穴があいていた。鉢の口縁部には、粘土による補修の痕跡が確認できている。また、壺の口頸部は、蓋に用いられた鉢を支えるような形で利用されていた。土器の時期は、弥・後・Ⅱ頃ではなかろうか。

（平井）



第588図　土器棺墓４・５（1/20）



第589図　土器棺墓４　遺物

土器棺墓８（第593図、写真84）

第２微高地のM24区、土器棺墓６の北隣りで検出した。掘り方の平面形は、検出面では68×60cmの円形で、深さは20cm残存していた。断面形は逆台形に近く、底面は斜めであった。土器棺は、口頸部が打ち欠かれた壺である。打ち欠かれた部分の径は約20cmである。また胴部には、直径約２cmの円形穴が意識的に穿たれていた。同様の穿孔は、土器棺墓５・12でも確認できている。検出できた状態は、斜め約40度に傾いていた。蓋には、口径45cm、深さ24cmの鉢を使用していた。土器の残存状態は良好であった。時期は、弥・後・Ⅱ頃であろう。　（平井）

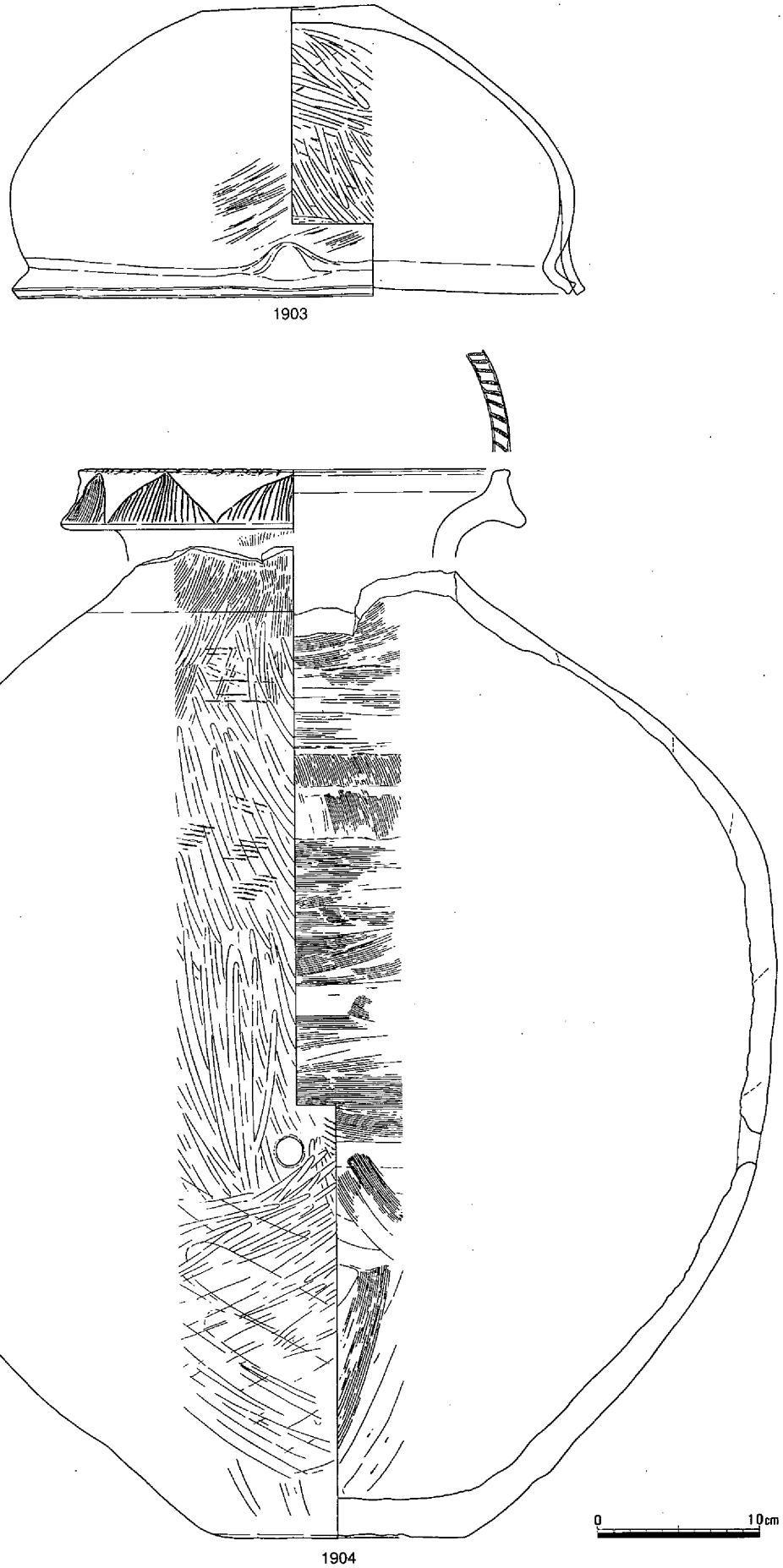
土器棺墓９（第594図、写真18－２・３）

第２微高地のM24区、土器棺墓４の西隣りにおいて検出した（第322図星印）。出土したのは、壺の胴部から底部にかけての破片1912のみであり、掘り方も確認できなかった。出土地点のみをおさえて取り上げたもので、出土レベルは、土器棺墓４に近い。このように、1912が土器棺であるという証明はできていないものの、可能性があるということで、報告しておきたい。

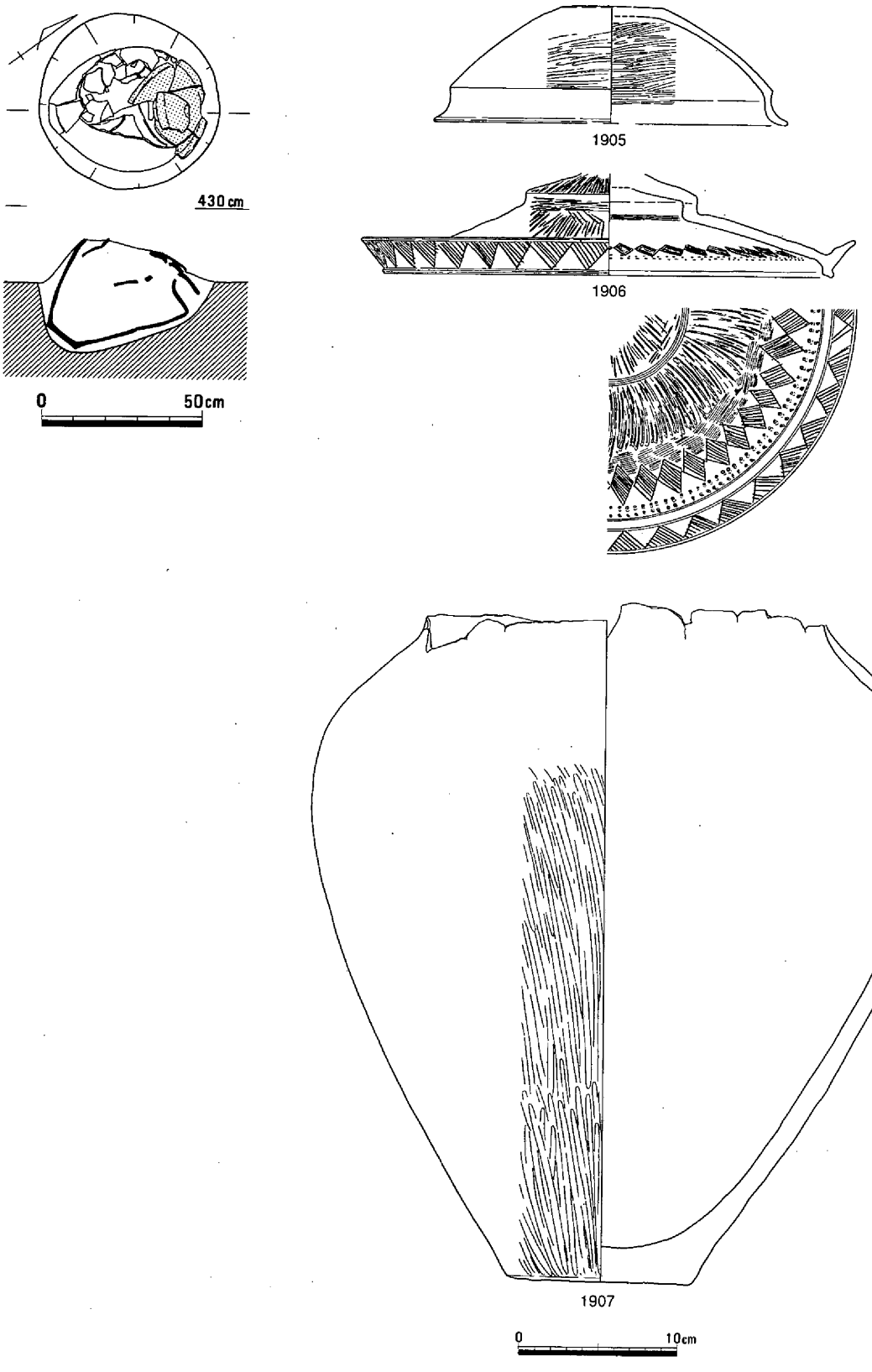
時期は弥生時代後期である。（平井）

土器棺墓10（第594図、写真18－２・３）

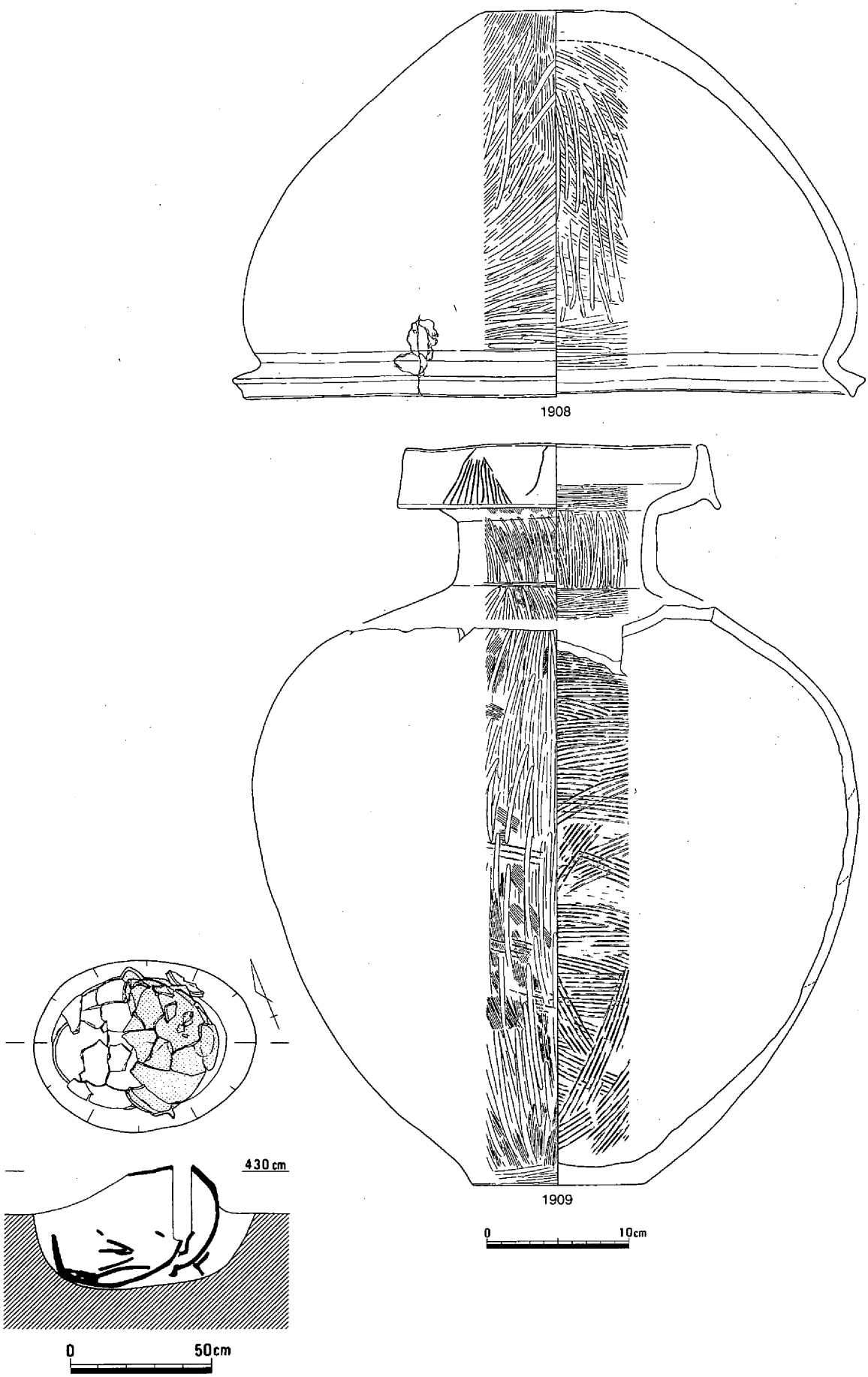
第２微高地のM24区、土器棺墓９の西隣りに位置する（第322図星印）。出土し



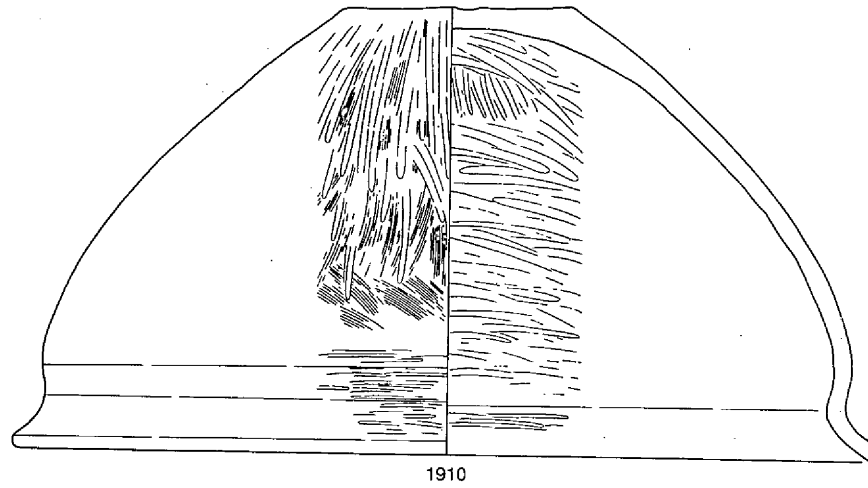
第590図　土器棺墓５　遺物

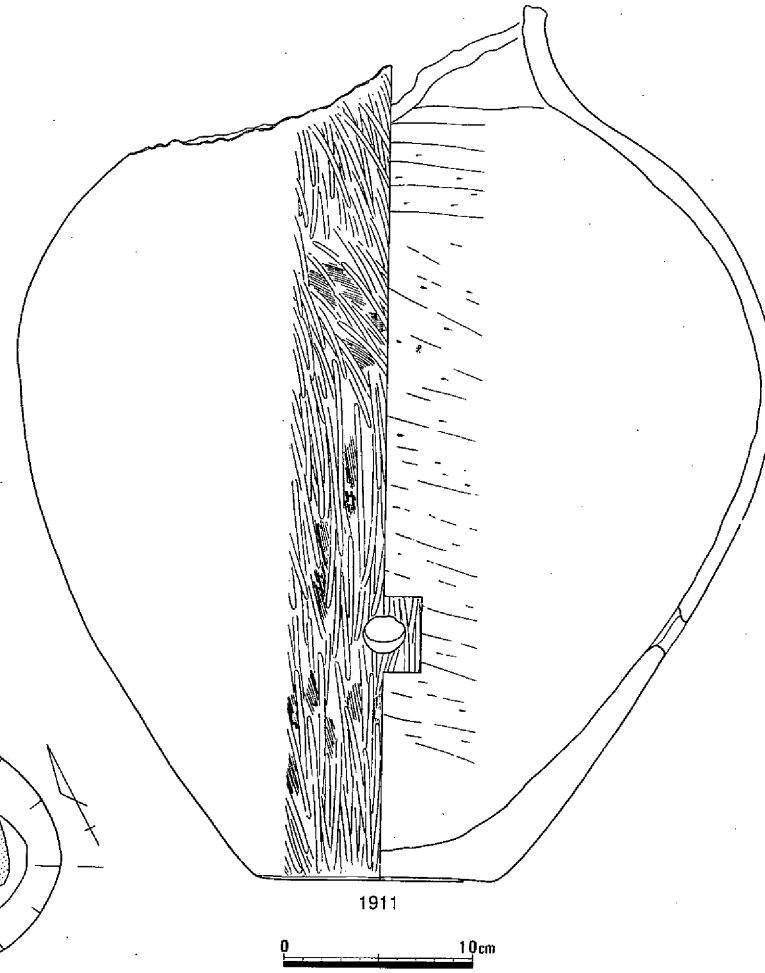


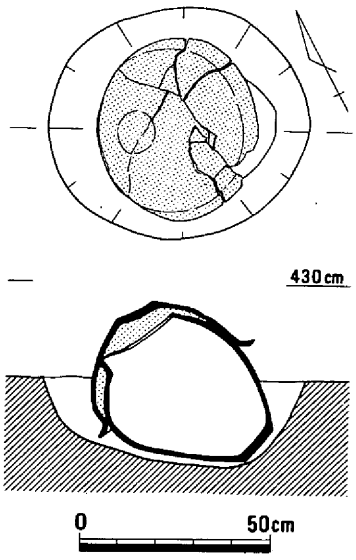
第591図　土器棺墓６（1/20）・遺物



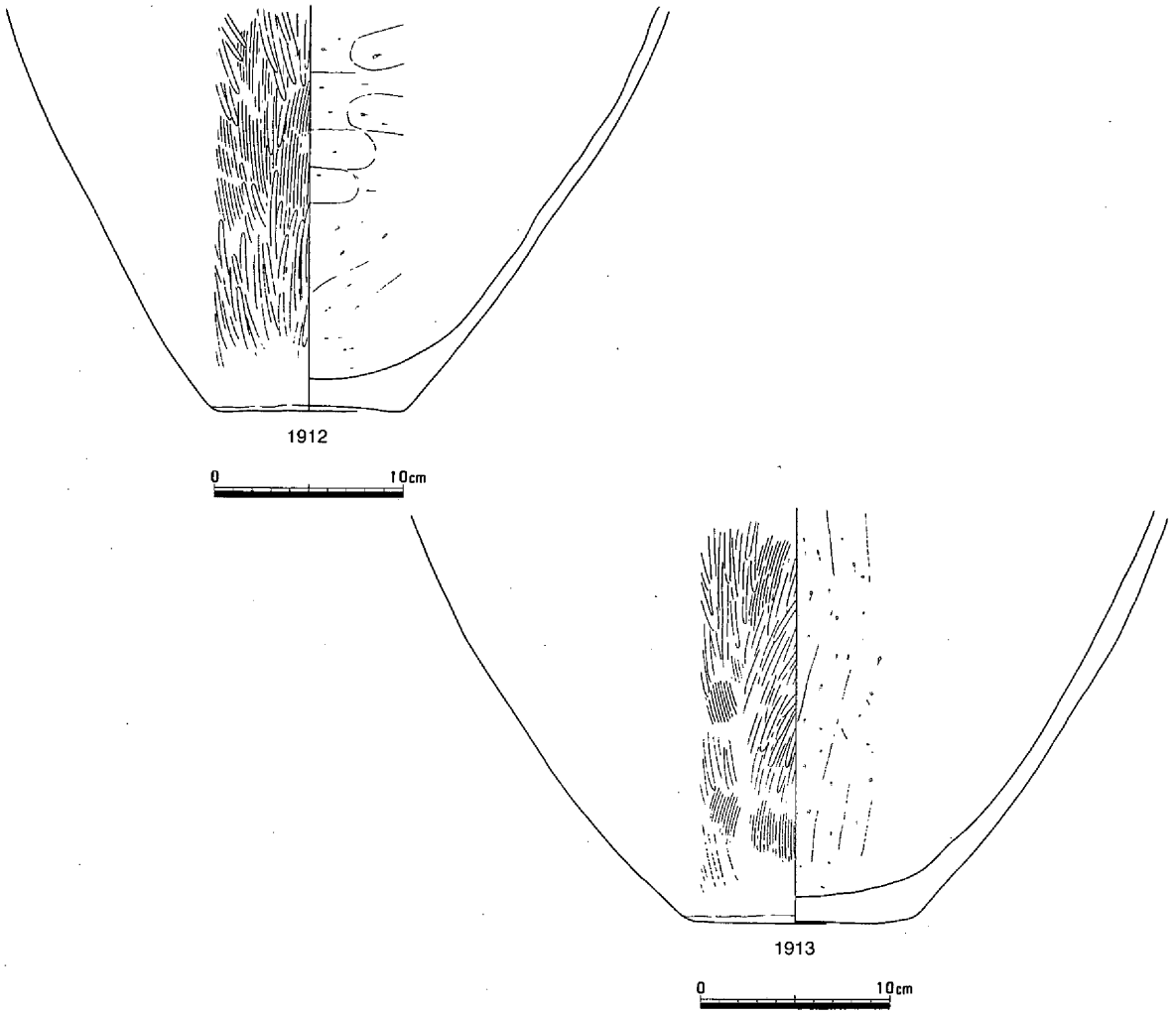
第592図　土器棺墓７（1/20）・遺物



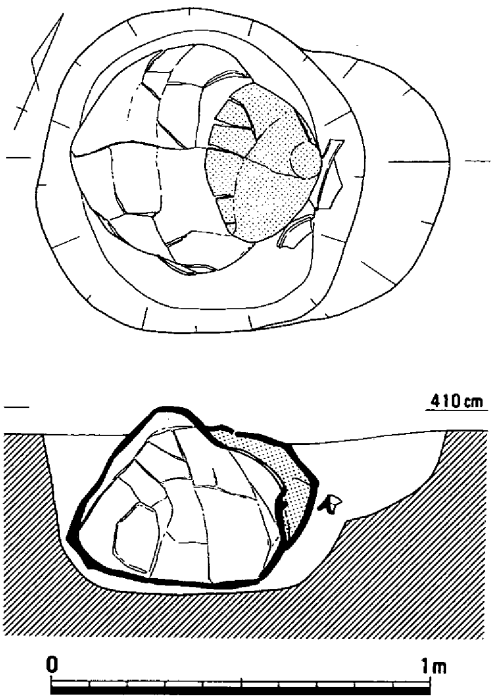




第593図　土器棺墓８（1/20）・遺物



第594図　土器棺墓９・10　遺物



第595図　土器棺墓11（1/20）

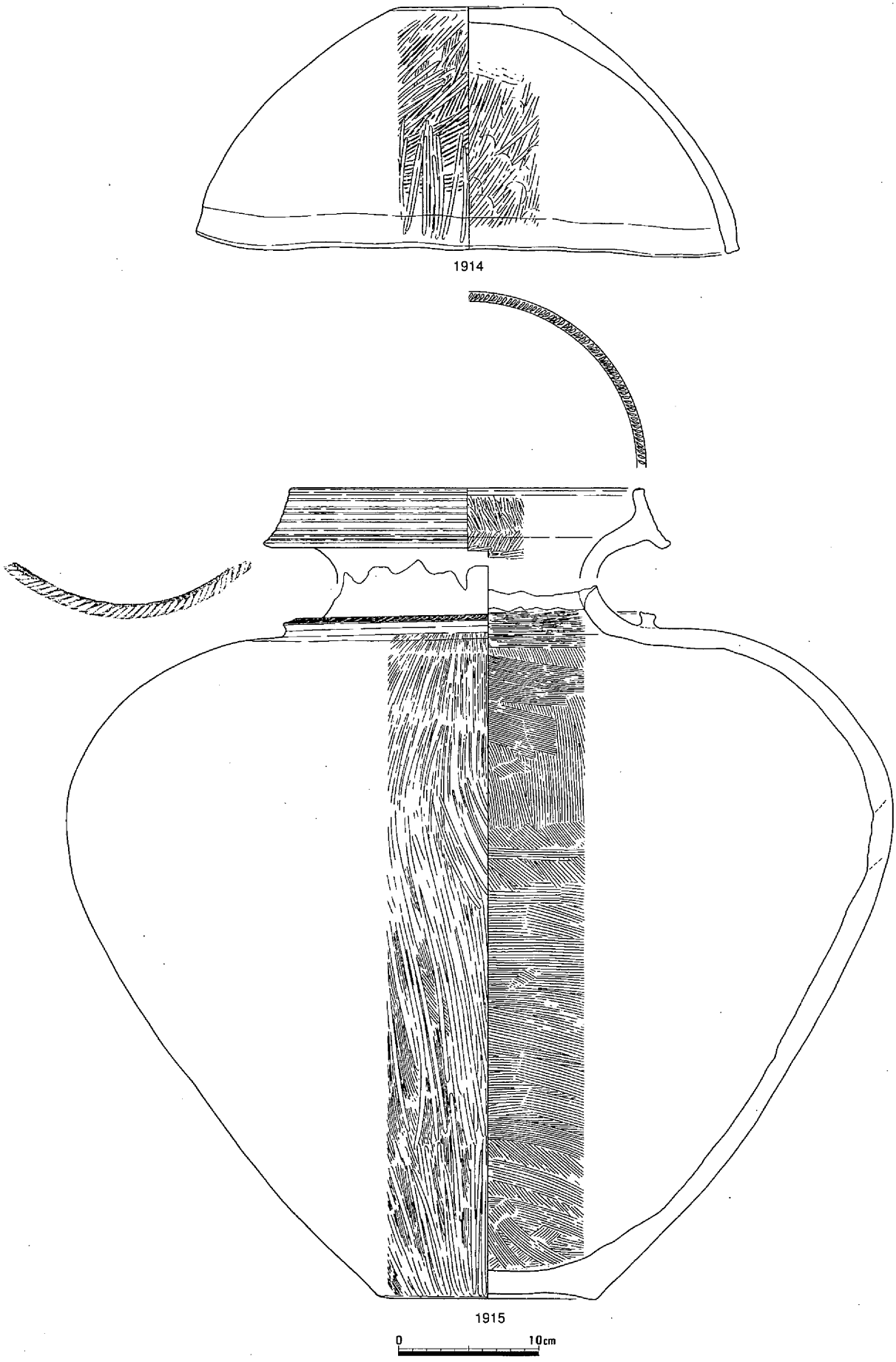
たのは、壺の胴部から底部にかけての破片1913のみで、掘り方も確認できなかった。出土地点のみをおさえて取り上げたもので、出土レベルは、土器棺墓４に近い。全体的に土器棺墓９と同じような出土状況であり、1913が土器棺であるという証明はできていないものの、可能性があるということで、報告しておきたい。

時期は弥生時代後期後半であろうか。　（平井）

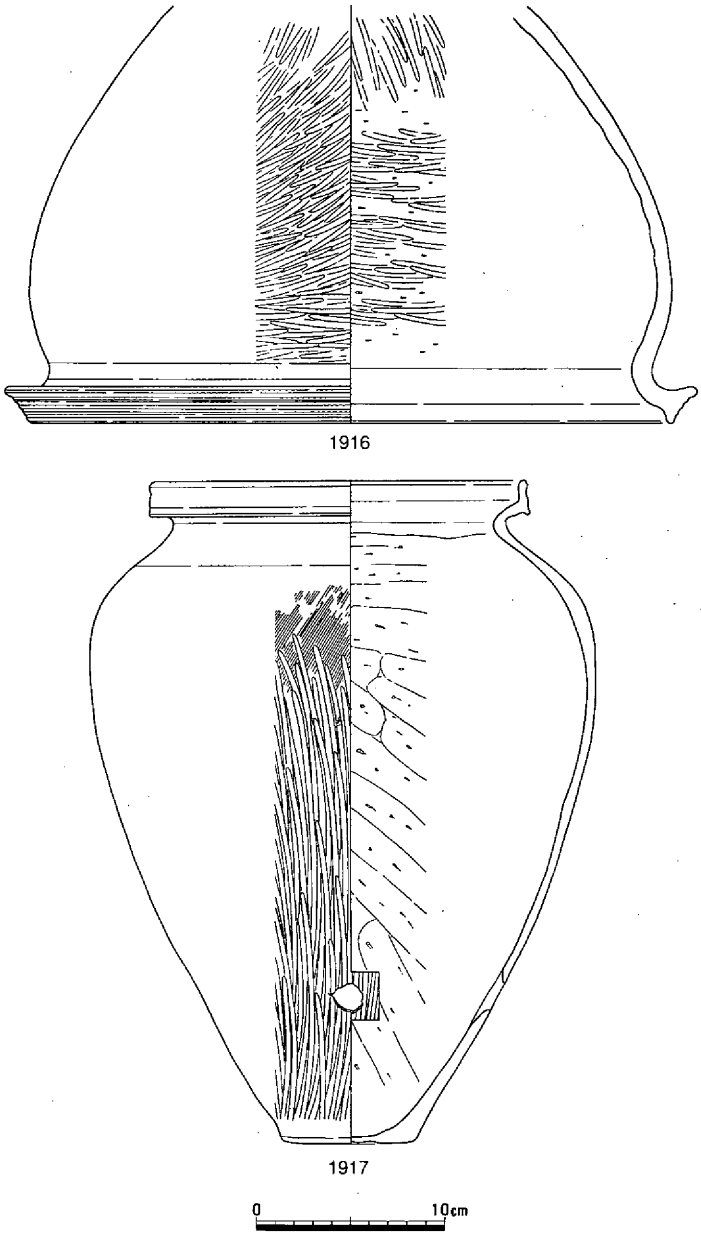
土器棺墓11（第595･596図、写真18－2･3､20－3､84）

第２微高地のM24区、土器棺墓５の南に接して検出できた。掘り方の平面形は、検出面では長さ107cm、幅85cmの楕円形で、深さは41cm残存していた。断面形は、東側が二段になっており、底面はほぼ平らであった。

土器棺は、口径25cm、深さ約58cmの壺で、口頸部



第596図　土器棺墓11　遺物



第597図　土器棺墓12　遺物

を打ち欠いていた。打ち欠かれている部分の径は、約17cmである。検出できた状態は、斜め約20度に傾いていた。壺の肩部には突帯が貼り付けられている。口縁端部と突帯の端部には細かい刻目が施されている。蓋には、口径38cm、深さ18cmの鉢が使用されている。また、壺の口頸部は鉢の下に置かれていた。土器の残存状態は良好であった。土器の時期は、弥・後・Ⅱ頃ではなかろうか。　（平井）

土器棺墓12（第597図、写真18－2・3）

第２微高地のM24区、土器棺墓10の西隣りに位置する（第322図星印）。掘り方は検出できず、土器がつぶれた状態で出土したため出土地点のみをおさえて取り上げた。土器のレベルは、土器棺墓９・10に近い。

土器は甕と鉢で、1917の甕の胴部下半には、直径約1.5cmの円形の穴が意識的に穿たれていたため、土器棺の可能性を考えている。

しかしながら、前述した出土状況および土器の時期が1917が弥・後・Ⅲ～Ⅳであるのに対して、1916は弥・後・Ⅰ～Ⅱと考えられ、時期的に相違していることから、土器棺墓ではないと考えることもできる。　（平井）

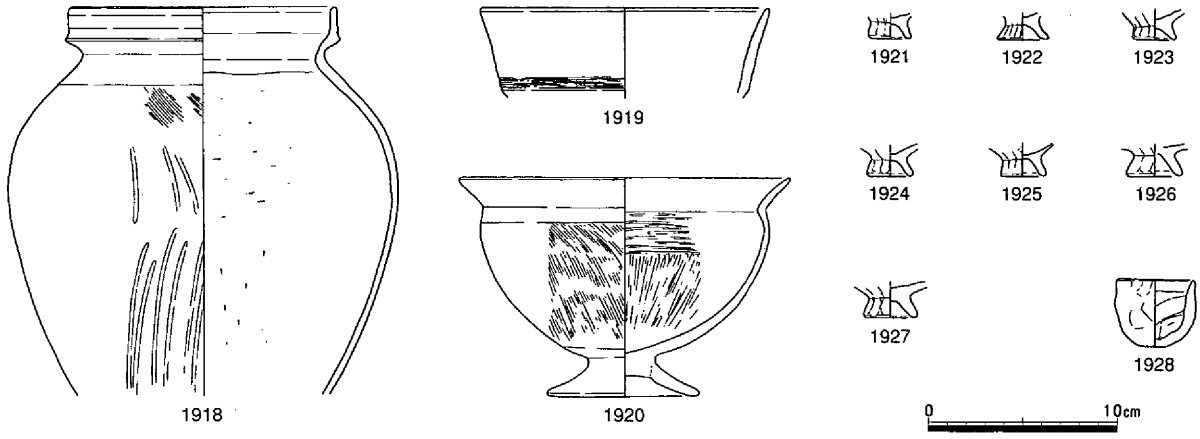
（７）柱穴

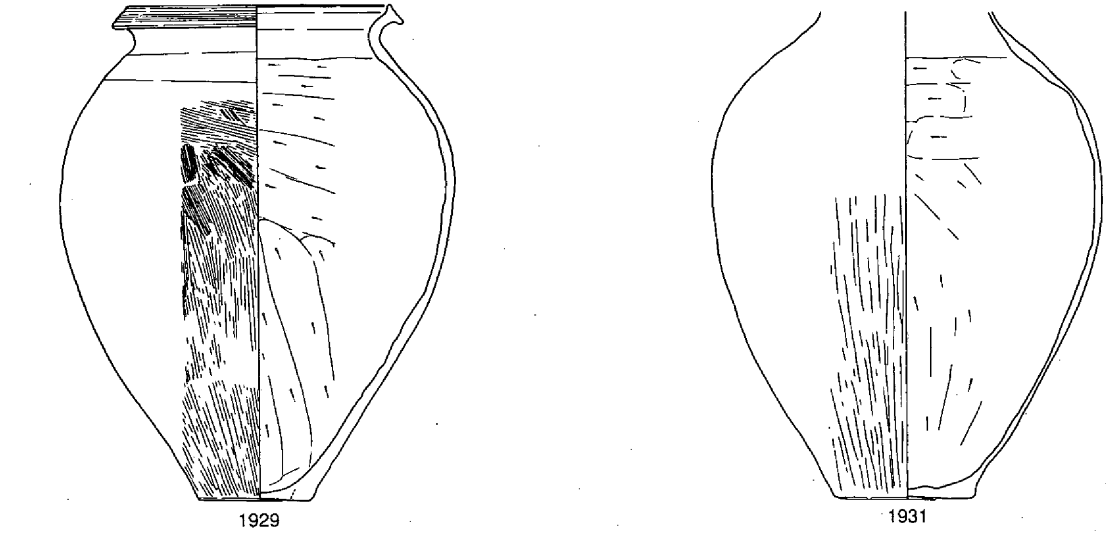
柱穴８～14（第598・599図）

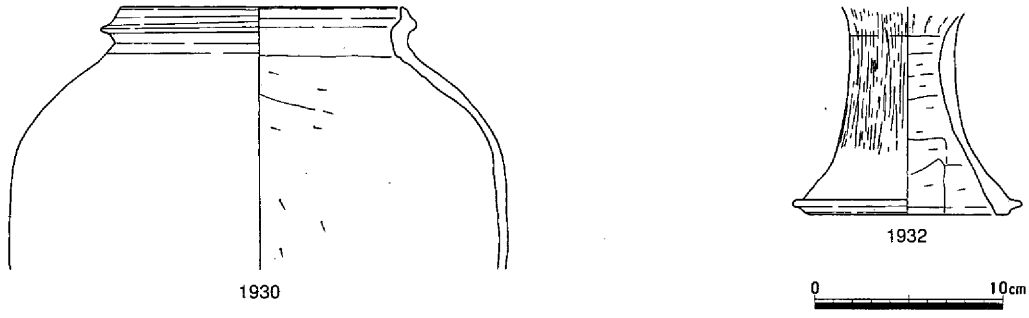
調査では、遺物や遺構の切り合いなどから、詳細な時期が明らかになった柱穴もあるが、厳密に特定できないものもかなり存在する。弥生時代の中期か後期のいずれかが不明確な柱穴については、便宜的に後期の全体図である第323図で示している。ここで取り上げる柱穴は比較的まとまった遺物が出土したものである。

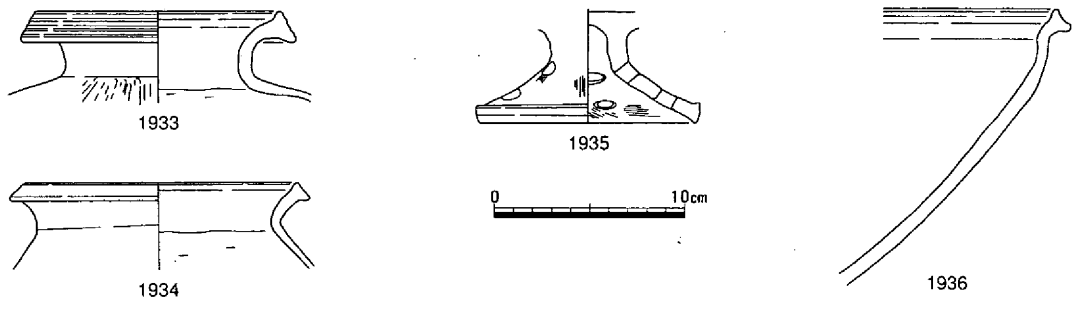
1918・1919は柱穴８、1920は柱穴９、1921～1927は柱穴10、1928は柱穴11、1929～1932は柱穴12、1933～1936は柱穴13、1937は柱穴14からの出土である。

1918・1937は、口縁端部が上方に立ち上がり、胴部外面はハケメの後ヘラミガキを施している。


1918
1919
1920
1921
1922
1923
1924
1925
1926
1927
1928
0
10cm

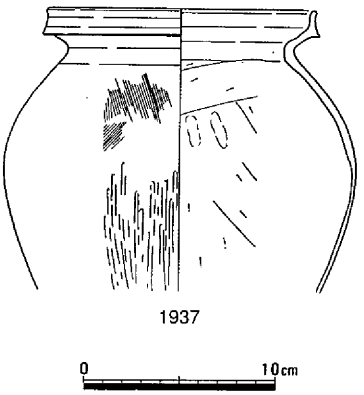

1929
1931


1930
1932
0
10cm


1933
1934
1935
0
10cm
1936

第598図　柱穴　遺物（1）

1920は、口縁部が「く」字状に屈曲してのび、椀形の体部に「ハ」字に開く低い台が取り付く。1921～1927は製塩土器の底部で、外面はヘラケズリが認められる。1929・1933は、口縁端部が上下に拡張する。1930は、口縁端部が上方に立ち上がる。1932は、脚柱部の径が比較的太い。　（柴田）



第599図　柱穴　遺物（２）

（８）土器溜り

土器溜り１（第600図）

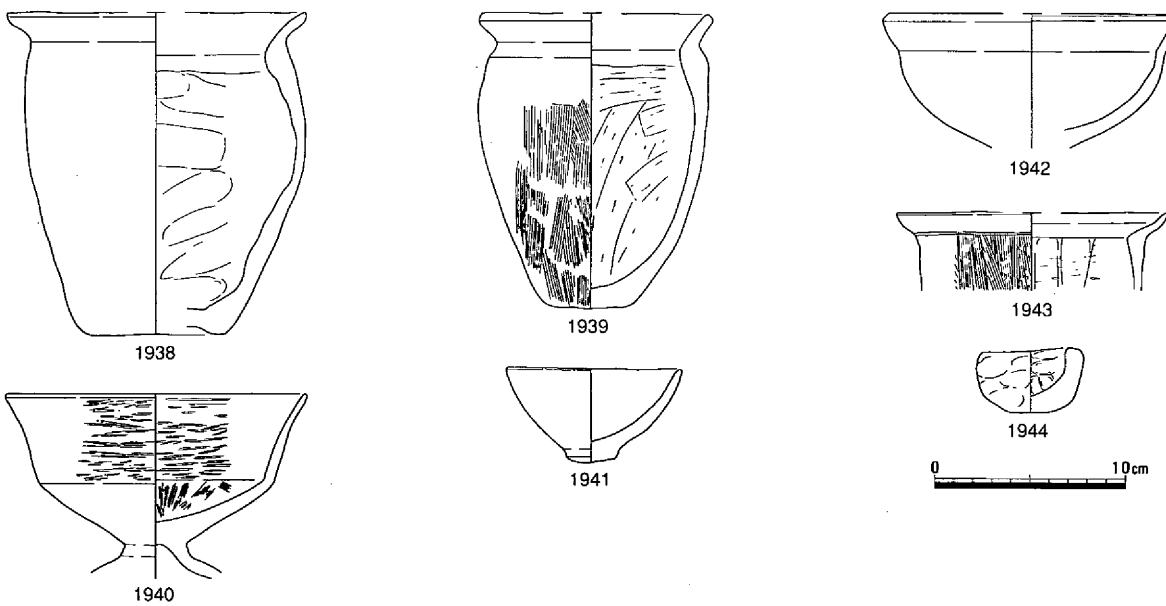
竪穴住居14と18の中間に位置する。甕1938・1939はくの字に短く外反する口縁部で、端部は丸く終わる。頸部の下でわずかに肩が張り、そこから平底の底部にいたる。1938は内面をナデて終わる。器壁が厚く、粗製の土器である。1940は深い杯部をもつ短脚高杯である。鉢には小形で椀状の1941と頸部から内湾気味に立ち端部を上方に肥厚する1942がある。1943は内湾気味に立つ口縁部をもち、体部は肩がなく、頸部から真っ直ぐ垂下する。時期は弥・後・Ⅳに属する。（弘田）

土器溜り２（第601図、写真21－１）

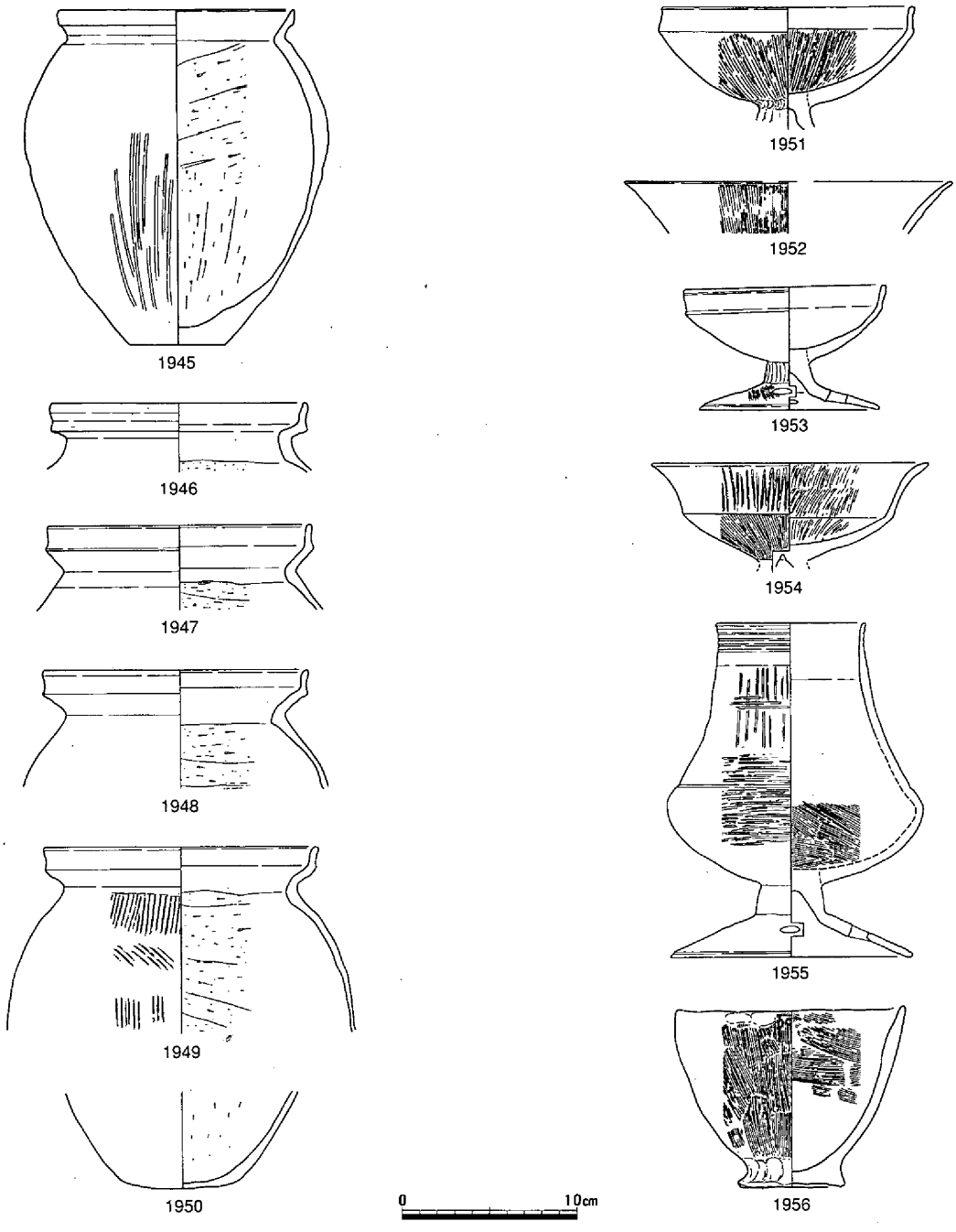
土器溜り１の西南西17ｍで検出した楕円形の土器溜りである。規模は長さ200cm、幅100cmを測る。土器が多数出土している。

1945は全形のわかる甕で、口縁端部をやや肥厚している。体部内面はヘラケズリ、外面は縦のヘラミガキが残る。1946～1950は口縁が上に拡張されている甕である。1951～1954は短脚の高杯である。口縁の形態は外反するものと上に短く立ち上がるものがある。1955はブランデーグラスに似た台付き直口壺である。台部は短脚の高杯の脚そのままである。1956は安定した広い底部を持った小型鉢である。

これらの土器からこの遺構の時期は弥・後・Ⅳと判断される。　（浅倉）



第600図　土器溜り１　遺物



第601図　土器溜り２　遺物

（９）溝

溝８

N21区の南東部、橋脚８調査区に位置する。南側に拡がる微高地の北斜面部に、微高地に沿ってつくられている溝である。幅60～100cm、深さは５cm前後残存していたのみであった。洪水層と考えられる灰色微砂で埋まっていた。南につくられている水田３の用・排水路ではないかと考えている。時期は明確ではないが、弥生時代後期ではなかろうか。　（平井）

溝９・10・11（第602図）

第１微高地の東斜面に位置する。溝９は幅１ｍ前後、深さ10～30cmで、長さ約100ｍを検出した。溝10は幅約50cm、深さ15cm前後で、溝11は幅約１ｍ、深さ25cm前後である。いずれも溝９を切っているが、検出できたのは一部にすぎない。溝９・10は弥・中・Ⅱから弥・後・Ⅰ頃まで機能していた溝で、水田１・２・４に伴う水路と考えている。溝11は弥生時代後期から古墳時代前期まで機能しており、水田４・５に伴う水路と考えている。（平井）

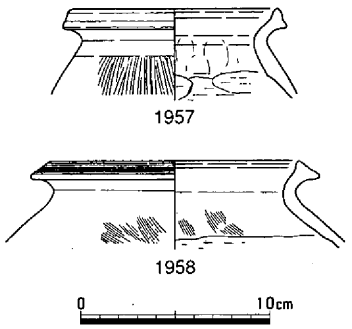
溝12（第603図）

竪穴住居14から土器溜り２までの間で検出した浅い溝である。北北東から南南西に伸びる。全長20ｍ以上、幅120cm、深さ15cmを測る。遺物は甕の口縁部が出土している。

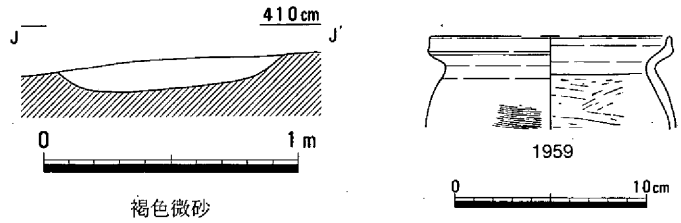
土器から見てこの溝の時期は弥・後・Ⅲに属する。（浅倉）

溝13（第604図）

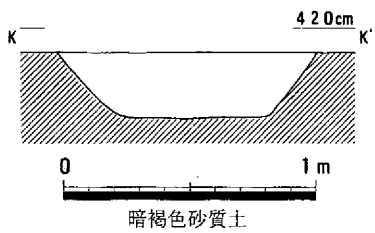
第２微高地南西端の水路調査区に位置する。

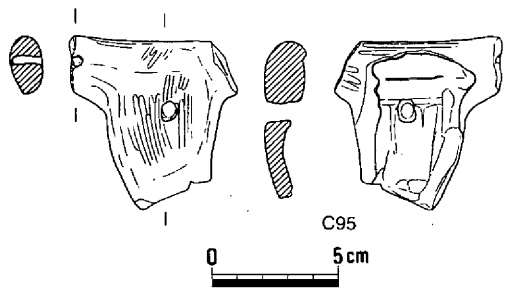


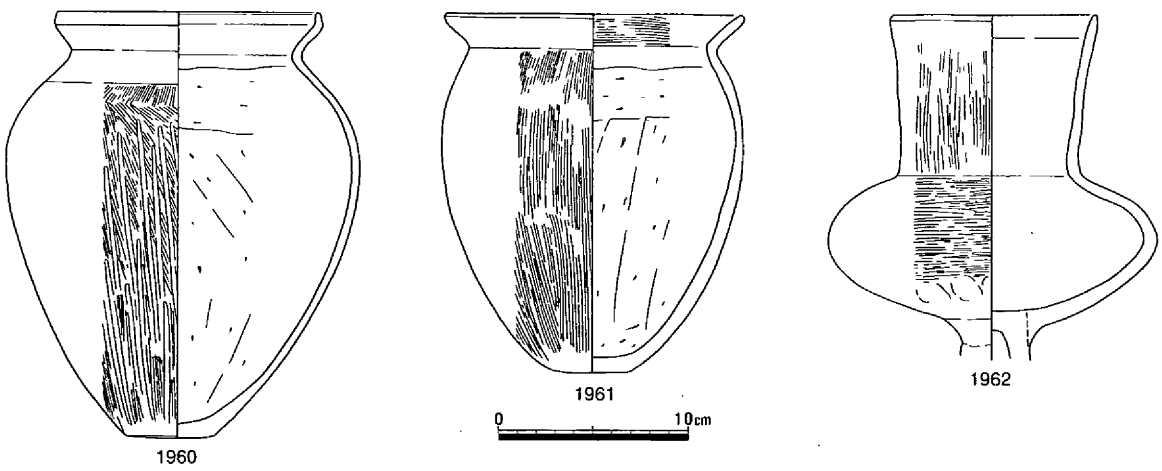
第602図　溝９　遺物



第603図　溝12（1/30）・遺物







第604図　溝13（1/30）・遺物

遺物のうち、土器には甕、脚付き壺1962がある。C95はT字形をした土製品で、中空である。2ヶ所に小孔を開け、外面をヘラで磨く。内面にもハケメがみられるが、土器などの器壁から剥離したものと考えられる。これらの遺物の時期は、弥・後・Ⅳである。（弘田）

溝14（第605図）

溝14は、第2微高地中央、竪穴住居30の東に位置する。平面形は「く」字状を呈し、長さ360cm・幅59cm・深さ12cm程度である。出土遺物は土器の小片のみであるが、遺構の時期は、弥・後・Ⅳと思われる。（柴田）

溝15（第606～617図、写真21－2、85～88）

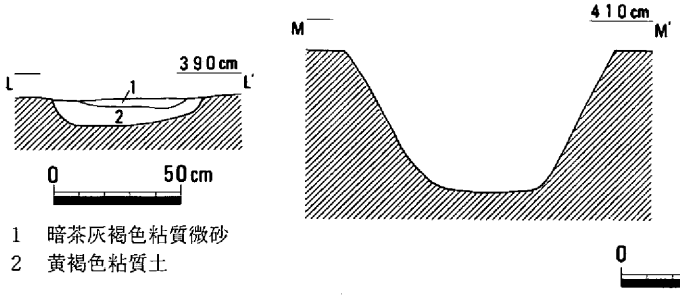
溝15は第2微高地の東寄りに位置する。わずかに湾曲しながらも、ほぼ南北方向に掘削されており、約42mにわたって検出された。南端は東の方へ振っており、調査区外へのびる。北端はやや西へ振り、溝16を切っているが、さらに北へのびているかどうかは確認されていない。検出面での幅は100cm前後を測る。底面は平らで、断面は逆台形を呈する。底面の海抜高は、北側で344cm、南側で350cmとなり、わずかに南側が高くなっている。

多くの弥・後・Ⅰの遺構を切っているが、弥・後・Ⅳと思われる土壙294も切っている。以下に述べる遺物ではⅠからⅣの時期までのものが認められる。遺物についてはⅣのものが多く、また切り合い関係などから、この溝は弥・後・Ⅳの中で掘削され、廃棄されたものと思われる。

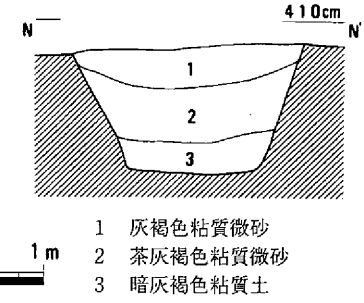
埋土中からは、多くの遺物が出土している。土器では、壺1963～1991、甕1992～2073・2144、高杯2074～2113、鉢2114～2143・2145・2146、器台2147・2148、製塩土器2149などが見られる。石器には、石鏃S276～278、楔形石器S279、打製石包丁S280・281、金属器では銅鏃M13が出土している。この内の一部は、混入した古い時期の遺物もある。

1963～1969は長頸壺で、口縁部が大きく開き、頸部に沈線がめぐる。頸部内面にはヘラケズリが及ばない。1972・1973は口縁端部が大きく上方に立ち上がる壺で、後者では外反している。内面あるいは外面にヘラミガキが行われている。1976は、胴部が扁平で、口縁部は内湾しながら立ち上がる。内外面とも丁寧にヘラミガキが行われている。1977は、平底であるがラグビーボール状の胴部で、口頸部は短く垂直に立ち上がる。口縁端部は水平面を有し、内面はヘラケズリが認められる。1983は、58個の刺突がめぐるが、この内10個は「×」印になって並んでいる。1990は、口頸部に「×」印が見られるが、意図的なものかどうかは不明である。

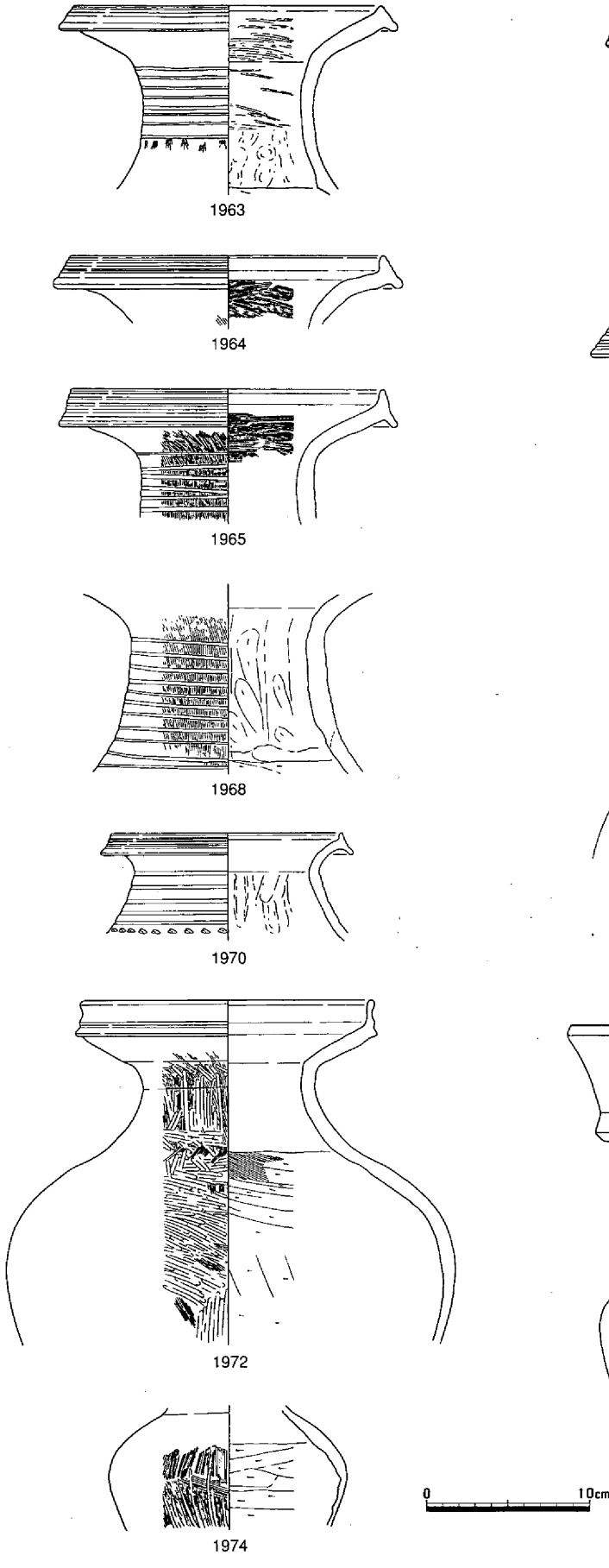
甕は1992・1993の他に、口縁端部が上下に肥厚あるいは拡張するもの1994～2004、上に摘み上げるもの2005～2008、主に上方に小さく立ち上がるもの2009～2040、大きく立ち上がるもの2041～2062などがある。いずれも内面の調整にはヘラケズリが認められるが、外面については、前4者はハケメ、



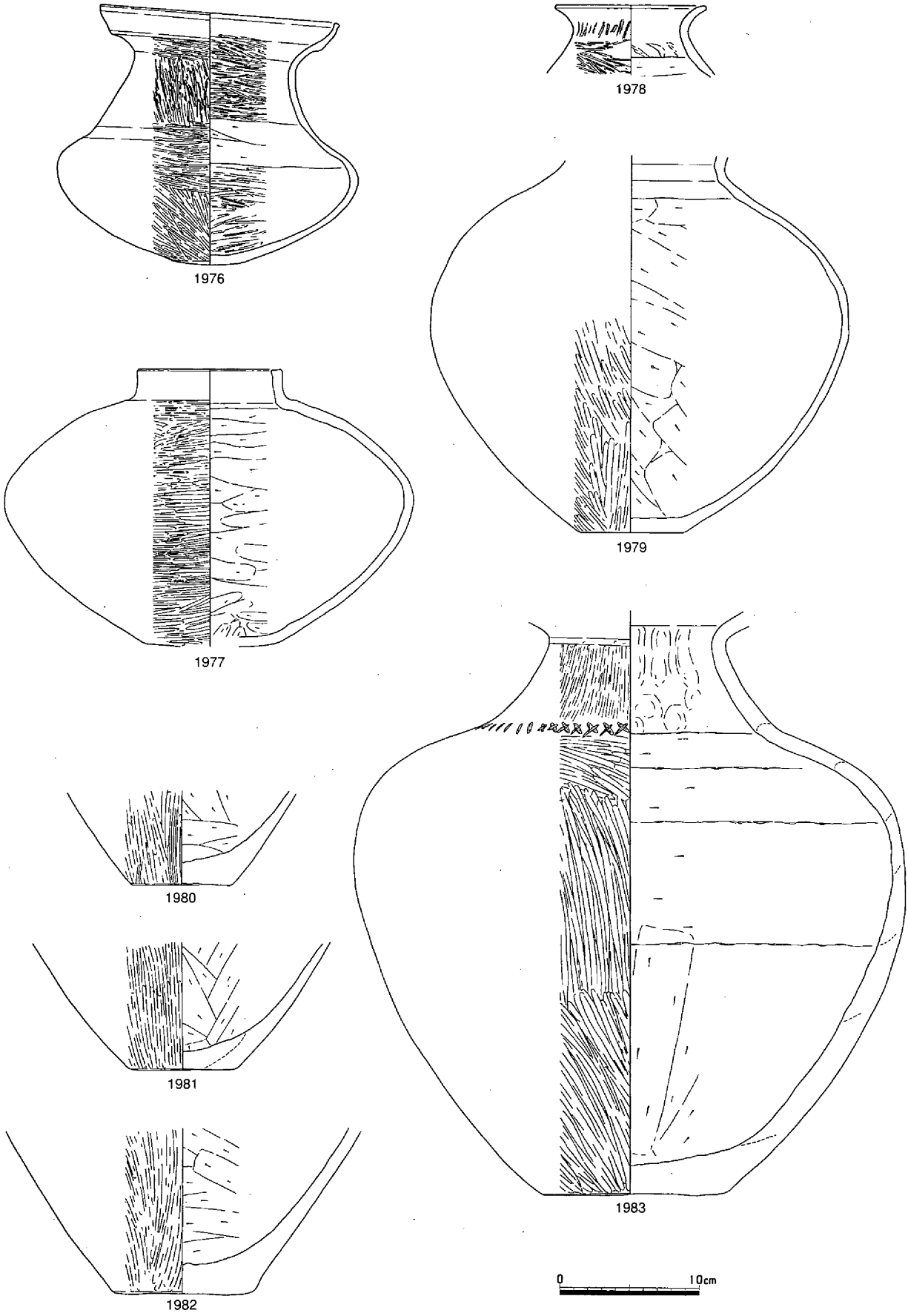
第605図　溝14（1/30）



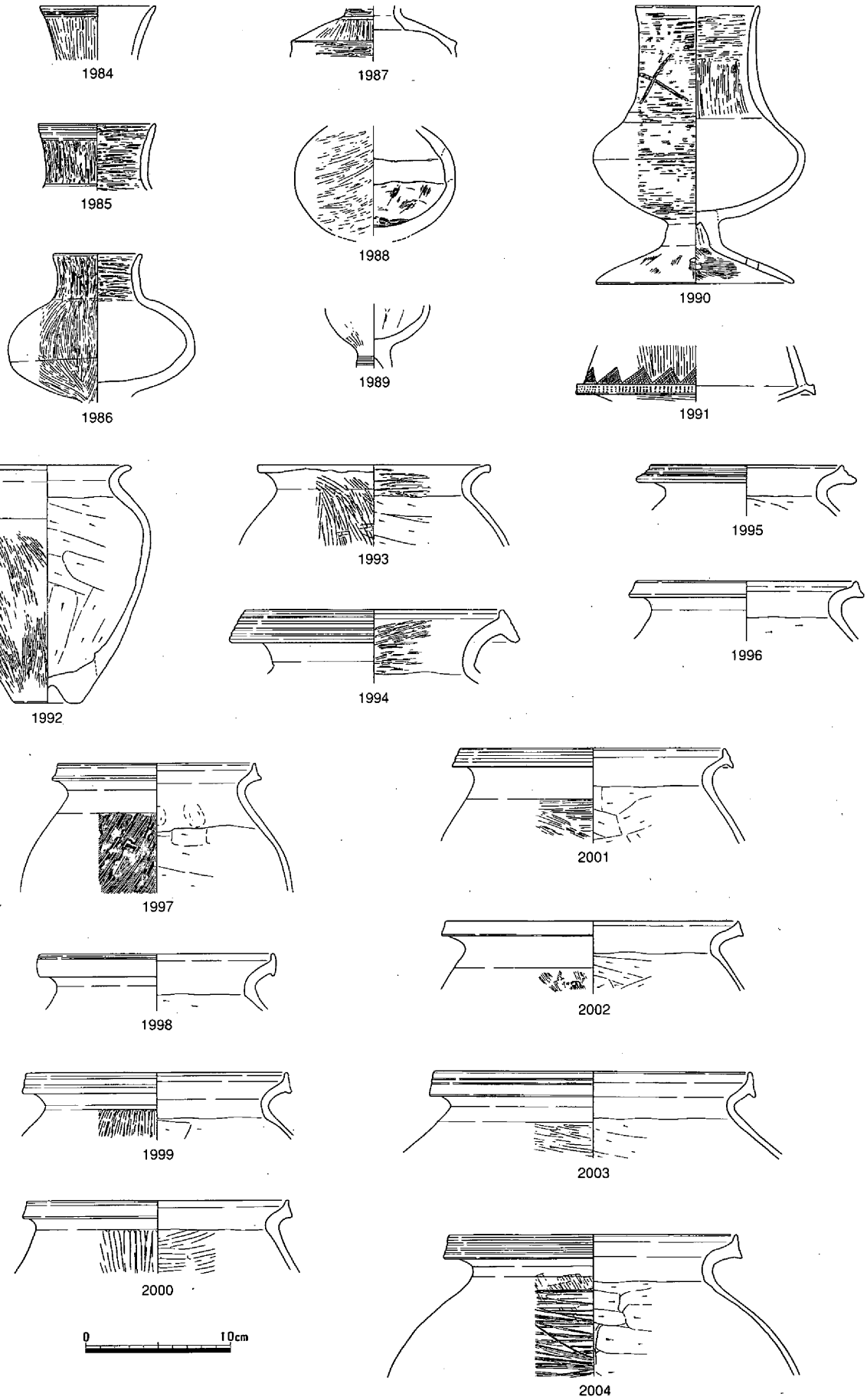
第606図　溝15（1/30）



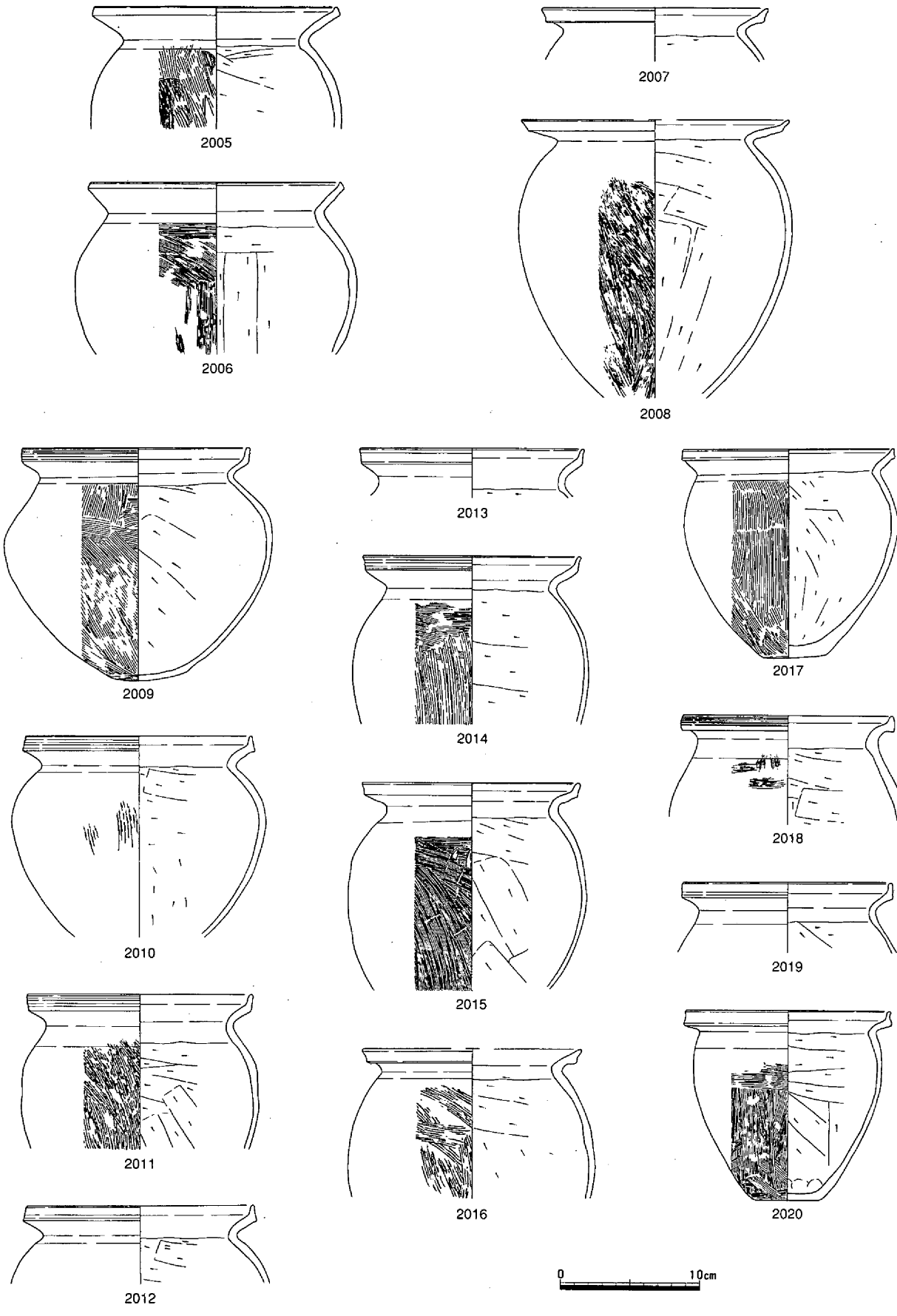
第607図　溝15　遺物（１）



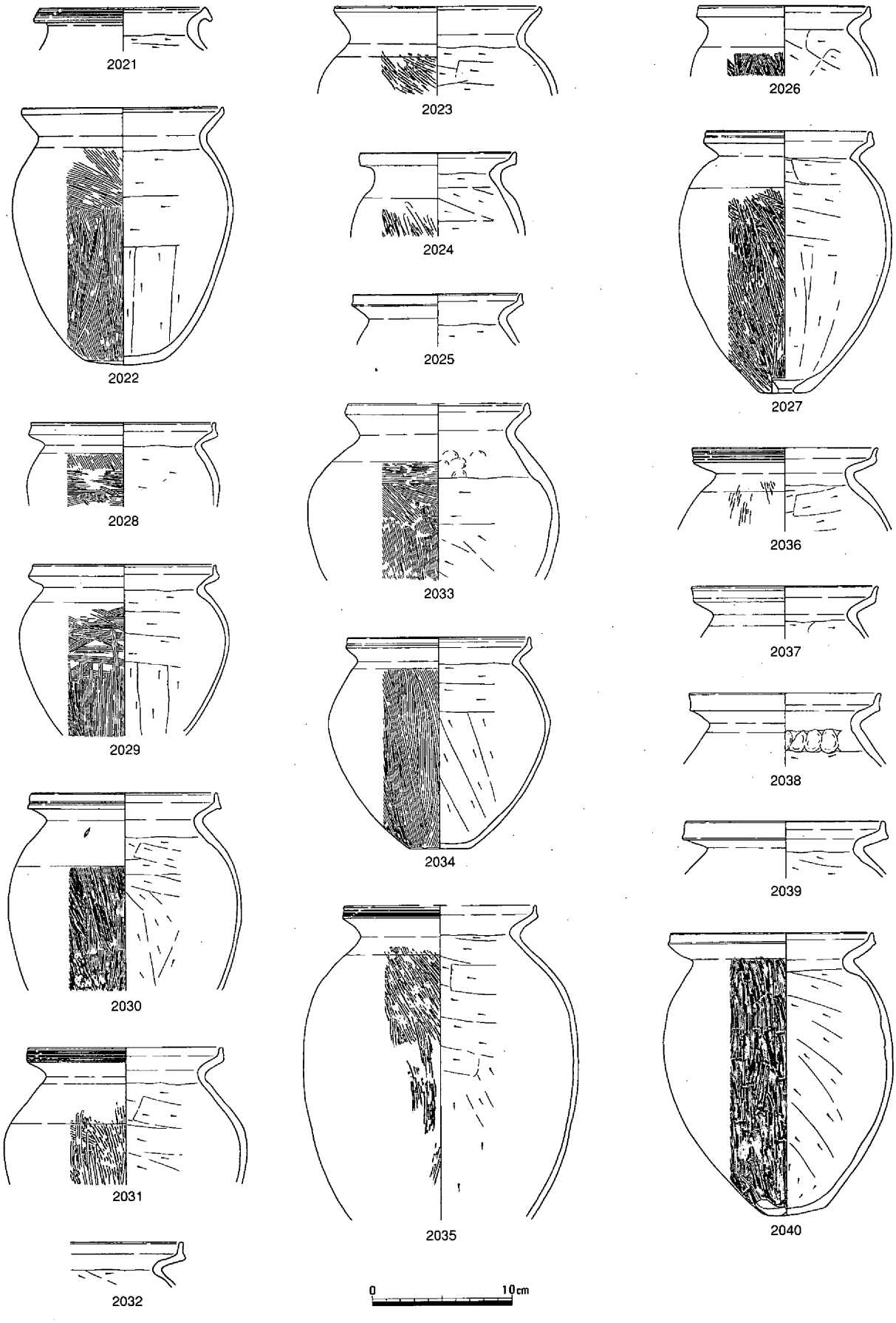
第608図　溝15　遺物（2）



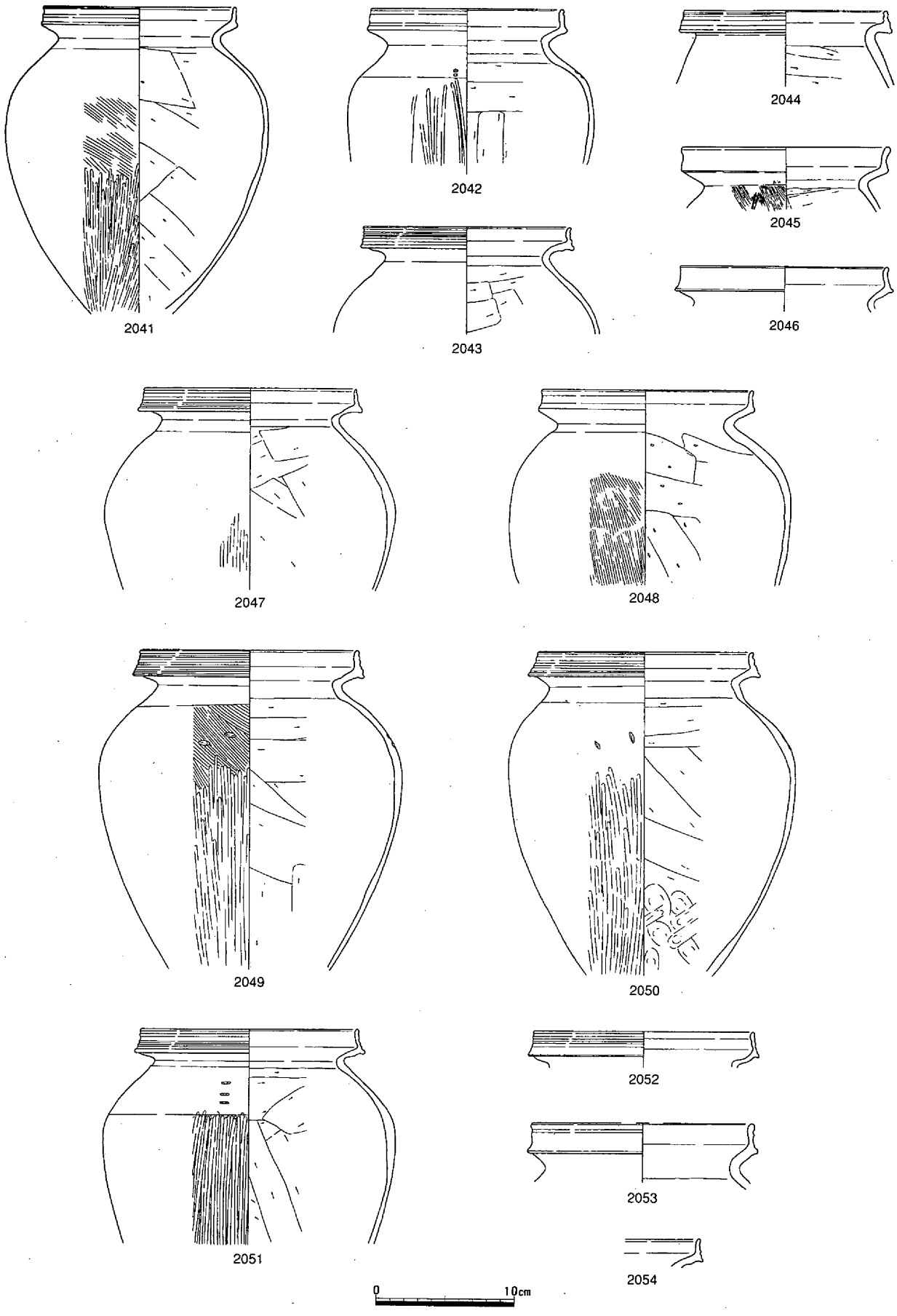
第609図　溝15　遺物（３）



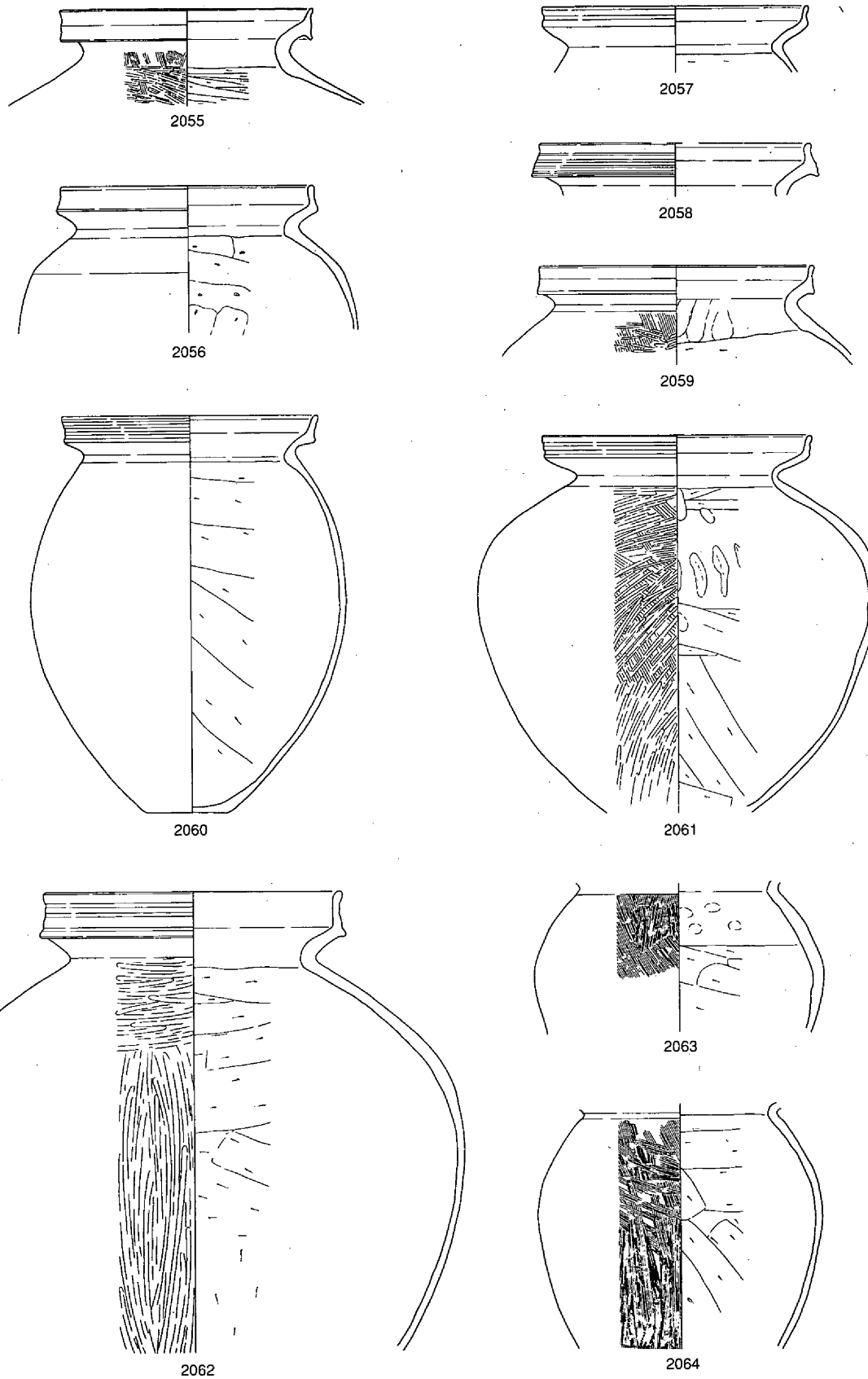
第610図　溝15　遺物（4）



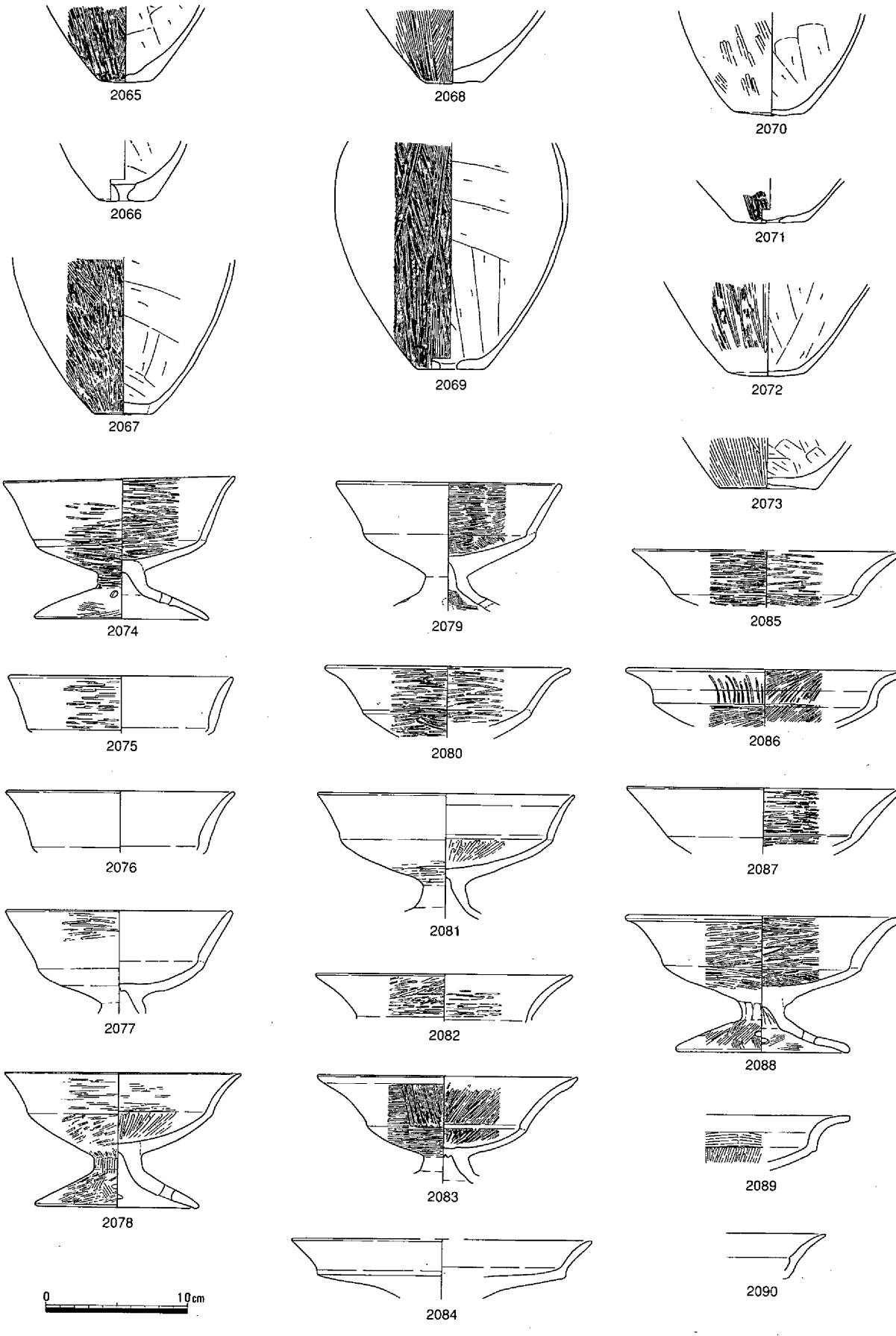
第611図　溝15　遺物（５）



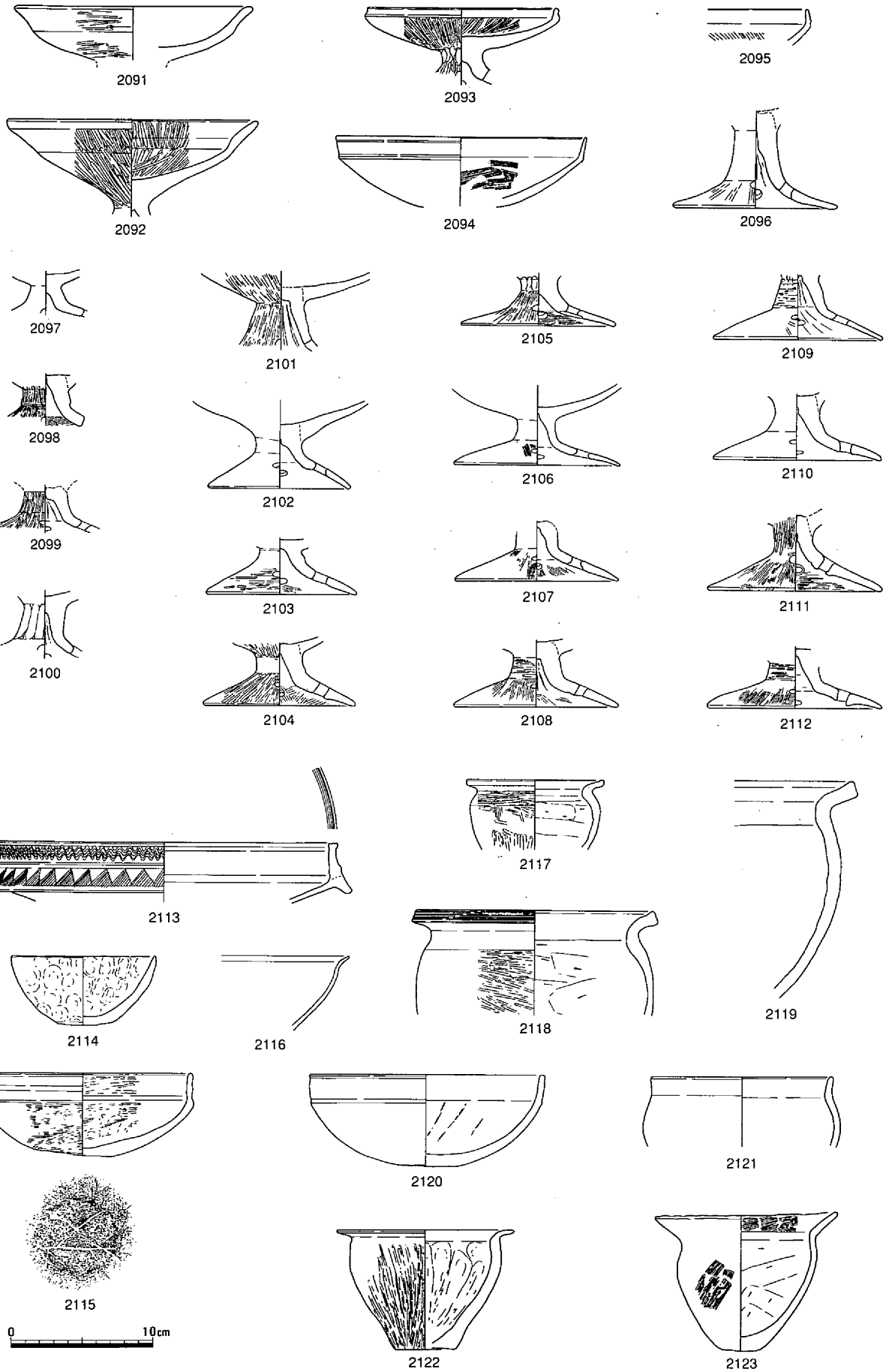
第612図　溝15　遺物（6）



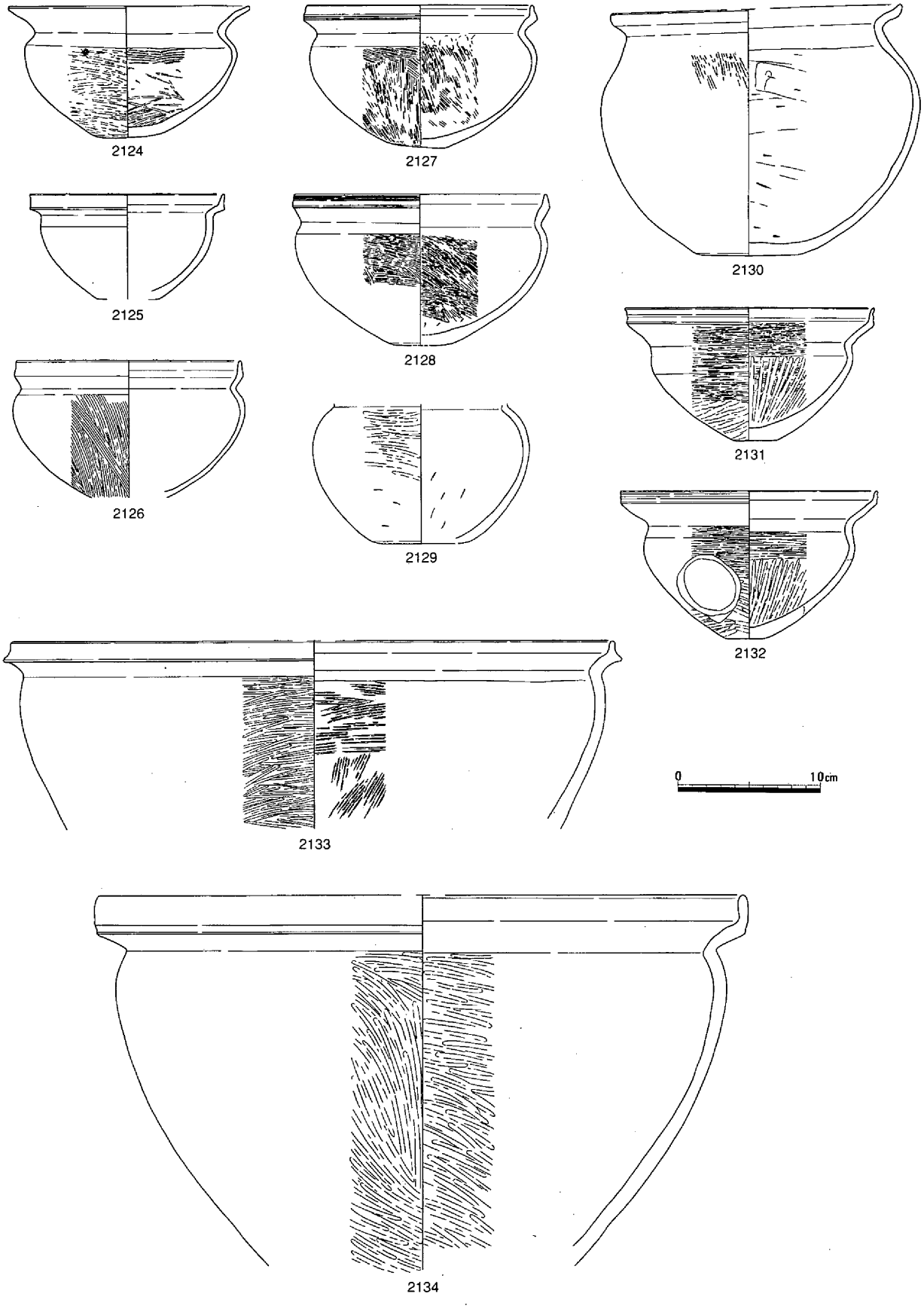
第613図　溝15　遺物（７）



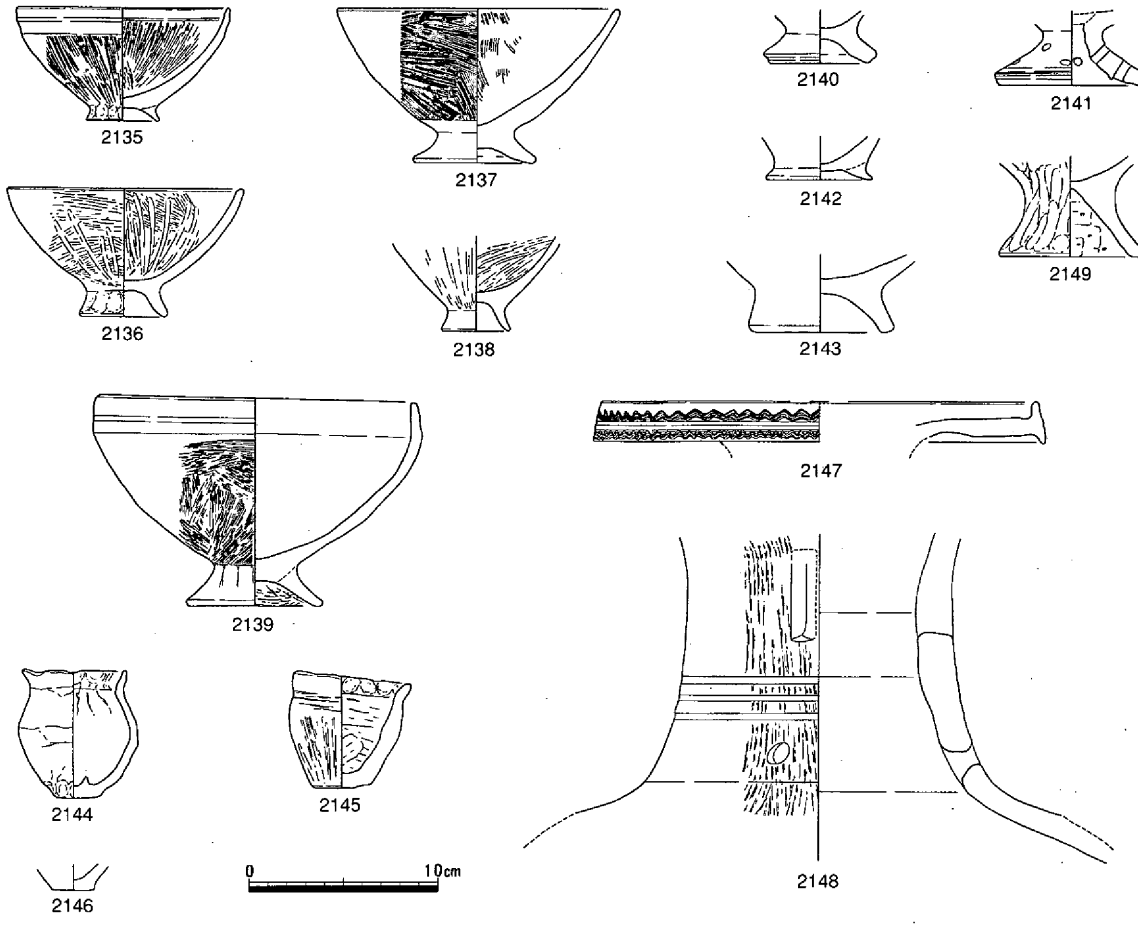
第614図　溝15　遺物（8）

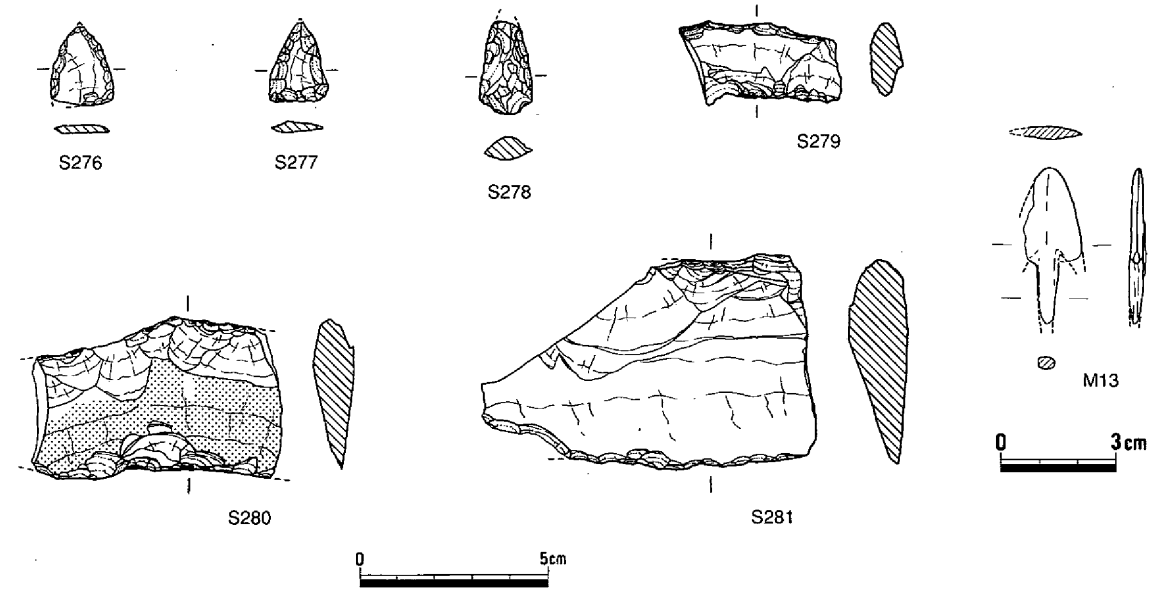


第615図　溝15　遺物（９）



第616図　溝15　遺物（10）





第617図　溝15　遺物（11）

後者はヘラミガキが目立つ。2049～2051は、肩部に刺突紋が施される。

高杯は、2084・2090・2096などを除けば、短脚のものが多い。杯部は、明瞭に口縁部が屈曲し外反するもの2074～2089や、屈曲が弱く浅いもの2091・2092、口縁部が短く立ち上がるもの2093～2095などがある。2113は装飾高杯である。

鉢は、椀形のもの2114～2116・2120・2121、口縁部が大きく開くもの2122～2124、口縁端部が上方に立ち上がるもの2125～2132・2134などがある。2115は、底部外面に木の葉の圧痕が残る。2116は非常に器壁が薄い。2132は、胴部に焼成後の穿孔が行われている。台付鉢は、椀形の鉢部に「ハ」字に開く低い台が取り付くもの2135～2139などがある。（柴田）

溝16（第618図）

溝16は第２微高地の北端に位置するが、溝の両端がどのようになるかは不明である。土壙305を切るが、西端は弥・後・Ⅳの溝15に切られている。検出面での幅は82cm、底面の海抜高は341cmを測る。底面は平らで、断面は逆台形を呈する。遺物は少ないが、切り合い関係などから、この溝の時期は弥・後におさまると思われる。（柴田）

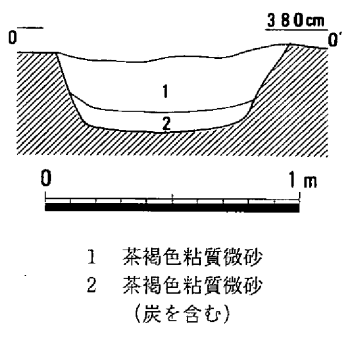
溝17（第619・620図、写真88）

溝17は第２微高地の北東端に位置する。北西から南東方向にのびる溝で、検出面での幅は130cm、底面の海抜高は320cmを測る。底面は中央部が「U」字形を呈する。中段付近の海抜高や断面形、流走方向などを見ると溝16と繋がる可能性も考えられる。また、この東に、規模や形態が類似する溝26が存在し、両者が極めて近い関係にあると考えられる。埋土からは、壺2150、甕2151～2162、高杯2164～2167、鉢2163・2168・2169、土製勾玉C96などが出土しており、図示していないが石器片なども認められた。遺物などから、溝の時期は弥・後・Ⅳと思われる。

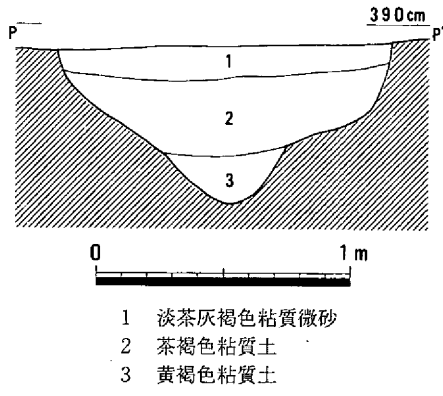
甕については、口縁端部をわずかに上方に摘み出す2155以外は、上方に大きく拡張するものが多く認められる。高杯は2165のように短脚のものがある。（柴田）

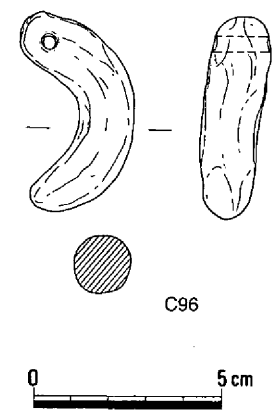
溝18（第621図）

第３微高地のほぼ中央部を南北に流れ、北側は河道によって削り取られている。断面形は鍋底形を呈し、底部はやや平坦になっている。大きさは、幅100cm、深さ30cmを測る。埋土中からは土器と石器を出土した。土器には、壺2170、高杯2171・2172がある。高杯には、口縁部を拡張して外反し、内側に段を残したもの2171と口縁部が湾曲しながら開くもの2172がある。石器には、サヌカイト製のスクレイパーS282がある。時期は出土遺物から弥・後に比定される。（正岡）

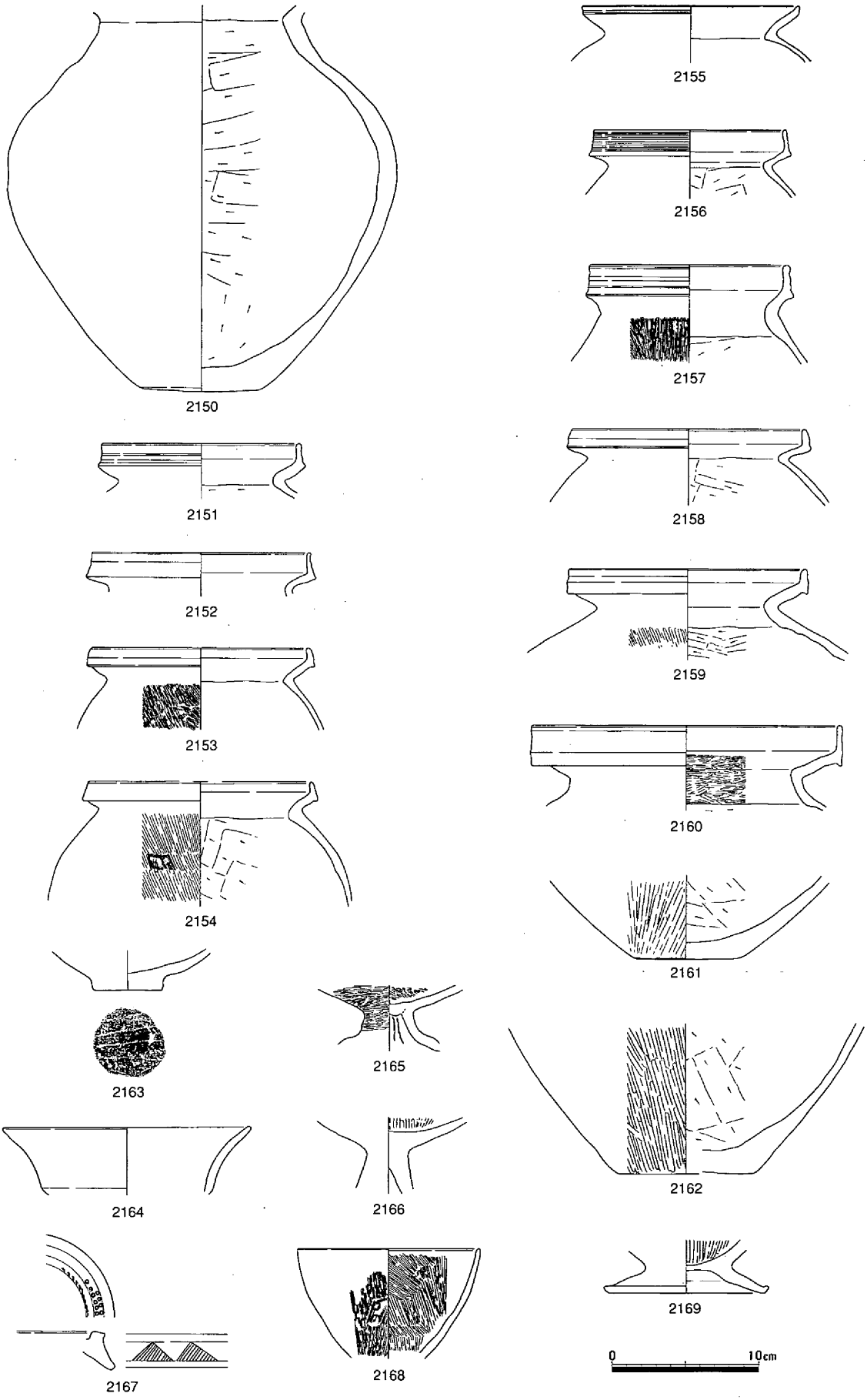


第618図　溝16（1/30）

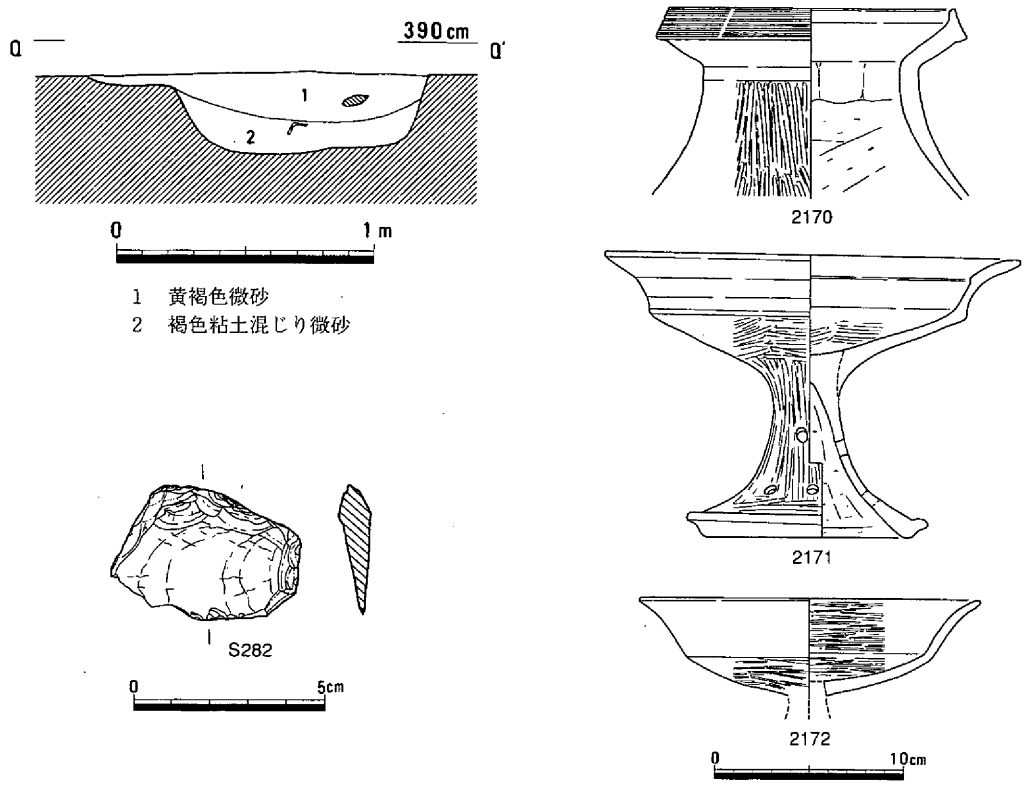




第619図　溝17（1/30）・遺物（1）



第620図　溝17　遺物（２）



第621図　溝18（1/30）・遺物

（10）水田

水田３（写真22－２・３）

調査区西端部の橋脚７・８・９の北半部に位置する（第321図）。水田層と考えたのは、第292図Ａ断面の15層、Ｂ断面の16層である。水田面の海抜高は、2.6～2.7ｍである。畦畔については、橋脚７調査区で南北方向に確認したのみである。水田層の上層には洪水砂と考えている微砂が堆積している。また下層には酸化鉄を多く含んでおり、この水田がいわゆる「乾田」である可能性を考えている。水田の時期については明確ではないが、水田層およびその上層から出土した僅かな土器と、土層関係から、弥生時代後期に開田され、古墳時代前期に廃絶されたと推測している。（平井）

水田４（写真21－３、22）

第１微高地と第２微高地の間に位置する（第321図）。中央部分には、「島状高まり」が残されている。水田層と考えているのは、第293図Ｅ断面の11層、Ｆ断面の15・18層、第294図のＧ断面の４層、Ｈ断面の10・11層、Ｉ断面の２層である。水田面の海抜高は、約2.7～2.9ｍで、北東部分の方が高かった。「島状高まり１」より西側については意識的な面的調査の結果、畦畔と思われる痕跡が二カ所で確認できているが、水田区画を明らかにするには至らなかった。東側については十分な面的調査が行えなかったため、畦畔については不明である。水田層の下層には、酸化鉄が多く含まれており、水田３と同じく「乾田」ではなかろうか。水田層の西側に沿ってつくられている溝９・10・11については、水路と考えている。また東側で検出した溝19についても、水田４に伴う水路と考えている。水田の時期は、上層から出土した少量の土器や水路と考えた溝から出土した土器を根拠に、弥・後・Ⅰに開田され、古・前・Ⅱまで機能していたと推測している。（平井）

(11) その他の遺構・遺物

ここで取り上げた遺物は、遺構から遊離して出土したものの他に、調査の際に関係する遺構を特定できなかったもの、明らかに時期の異なる遺構に混じっていたと思われるものなどである。種別では、土器143点、石製品３点、土製品９点、ガラス製品１点、金属製品１点を掲載している。

時期別に見ると、弥生時代後期前葉と後葉のものが多い。出土地点では、第２微高地が圧倒的に多い。なお、石製品や土製品などは、時期が明確でないものもあり、また前期～中期の「その他」で扱ったものの中に当該期のものが含まれている可能性もある。

土器（第622～630図）

図示したものは、弥生時代後期前葉と後葉の土器が多い。器種については、壺・甕・高杯・鉢・台付鉢・器台・蓋・製塩土器などがある。

壺には、長頸壺2179～2181・2196、短頸広口壺2173～2178・2184～2189・2199、（台付）直口壺2182・2183、無頸壺2190・2191などがある。2178は球形に近い胴部を持つ。内面の調整は、底部付近にハケメが残り、ヘラケズリは肩部下半まで認められる。2185は平底で、外面に赤色顔料が付着している。2187と2188は同一個体と思われ、口縁部や頸部に鋸歯紋や刺突紋、沈線、列点紋が施されている。2191は、器高が低く、胴部下半に最大径がある。内面はユビナデの後ハケメが行われる。

甕の口縁部には、端部が上方に折り上げられるもの2200・2201、上下に肥厚あるいは拡張するもの2202～2214、上方に拡張するもの2215～2222、上方に摘み上げられるもの2223～2225、丸くおさまるもの2226～2228などがある。2210は、口縁部に鋸歯紋が１つだけ描かれている。2227の外面調整は、平行タタキの後ナデを行い、内面はヘラケズリが認められる。

高杯には、長脚で口縁部が短く立ち上がり、端部が水平方向に拡張するもの2246～2264、口縁部が短いもの2265・2266、短脚で口縁部が外反しながらのびるもの2267～2279などがある。2255・2256は別個体であるが、裾部に鳥の足のようなヘラ描き紋様がある。

鉢には、台付のものも含めて、胴部から口縁部があまり屈曲しないでのびるもの2281・2282・2284・2285・2286、口頸部が屈曲し端部が肥厚あるいは拡張するもの2280・2283、端部が上方に拡張するもの2288・2289、コップ状のもの2292～2295などがある。

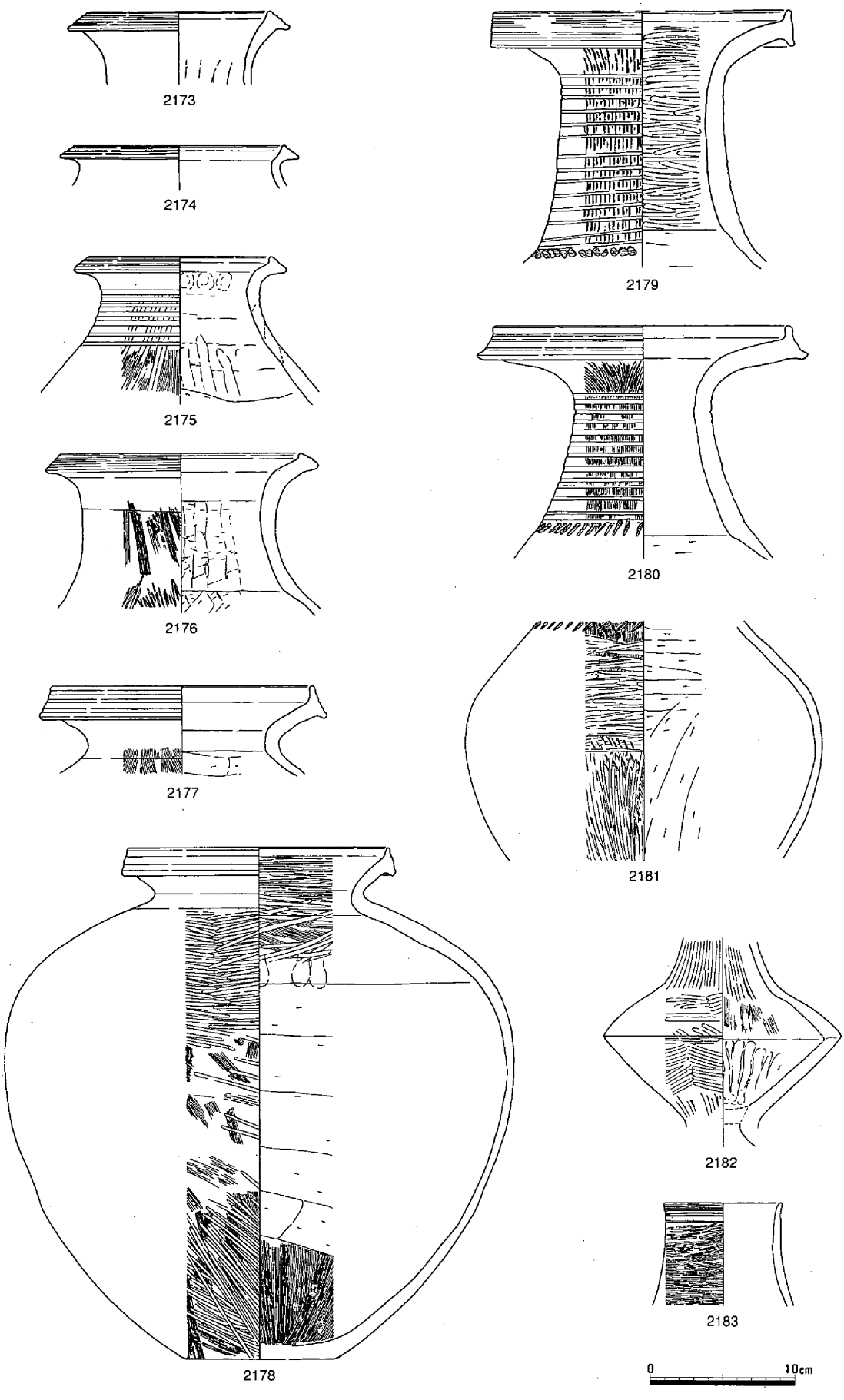
器台は、2298～2300・2302のように口縁端部の水平方向へののびが目立つものがある。また、裾が広く開くものが多いが、2303は裾がかなり小さいものである。製塩土器は、台部の端部があまり肥厚しないもの2312、厚く肥厚するもの2313～2315が認められる。

石製品・ガラス製品・土製品・金属製品（第631図、写真104～106）

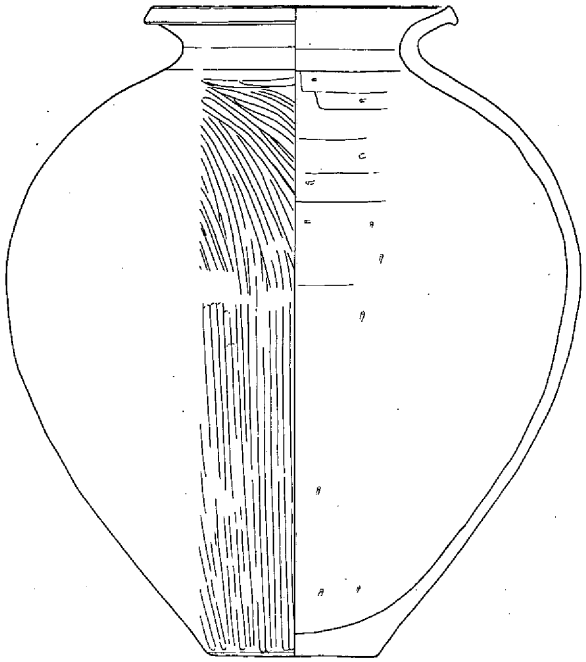
Ｓ283は人形石製品で、蛇紋岩製と思われる。全面を磨いており、中央がくびれている。その上半部は楕円形で、前面中央にわずかに稜を形成する。下半部は先端がやや尖っており、表面は平坦である。Ｓ284・285は碧玉製の管玉である。Ｇ５はガラス製の小玉で、明緑青色を呈する。

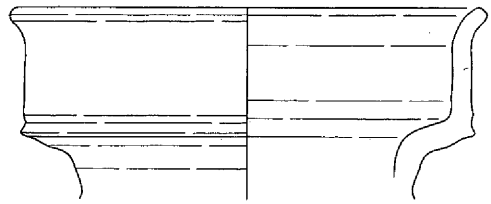
Ｃ97～100は分銅形土製品である。紋様などは比較的簡素なもので、認められないものもある。Ｃ97はほぼ全体が残っており、表裏面の周縁と上下の端面に刺突紋を施している。また、両面ともわずかに膨らんでおり、一方に反っている状況ではない。Ｃ101～105は土錘である。Ｃ101は球形で小さいが、Ｃ102～105は卵形で同様の大きさである。

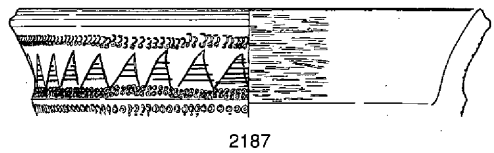
Ｍ14は銅鏃で、残存状態はよくない。　（柴田）

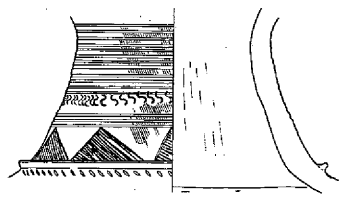


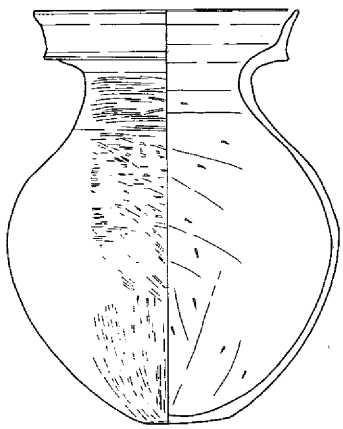
第622図　その他の遺物（1）

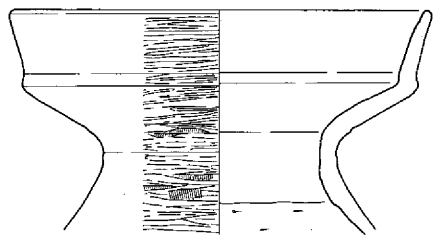

2184

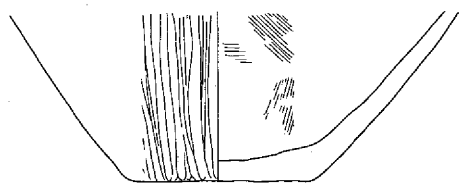

2186

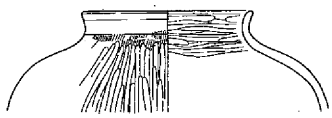

2187

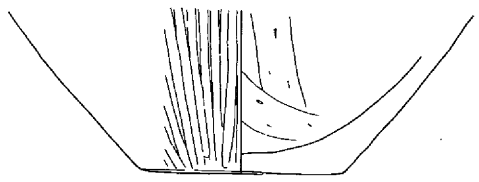

2188

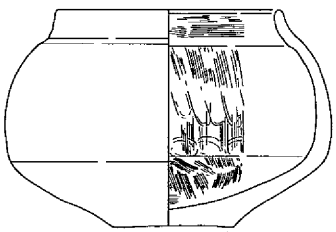

2185

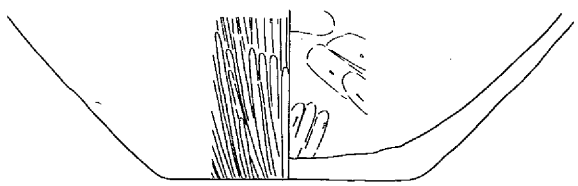

2189

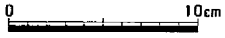

2192


2190

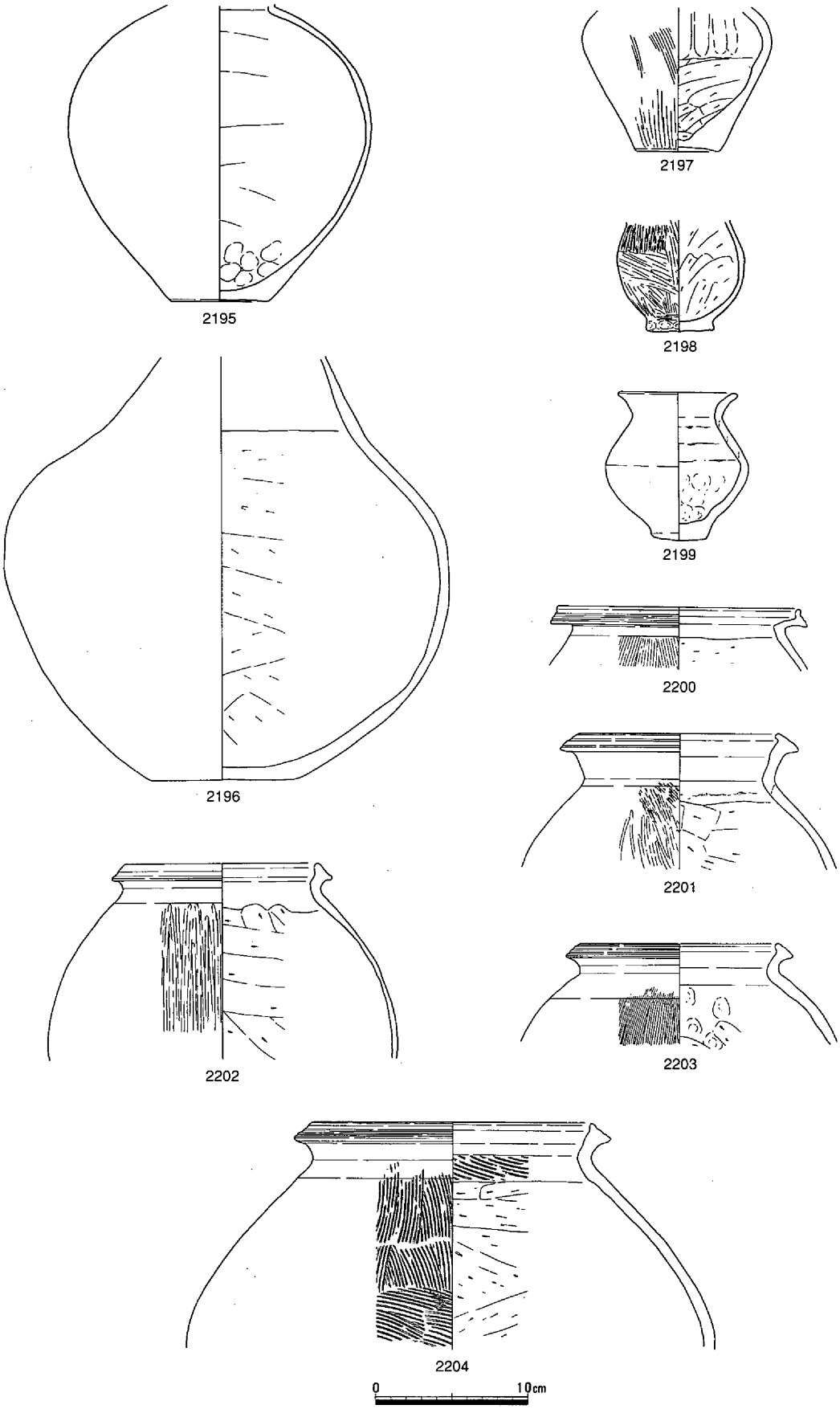

2193


2191

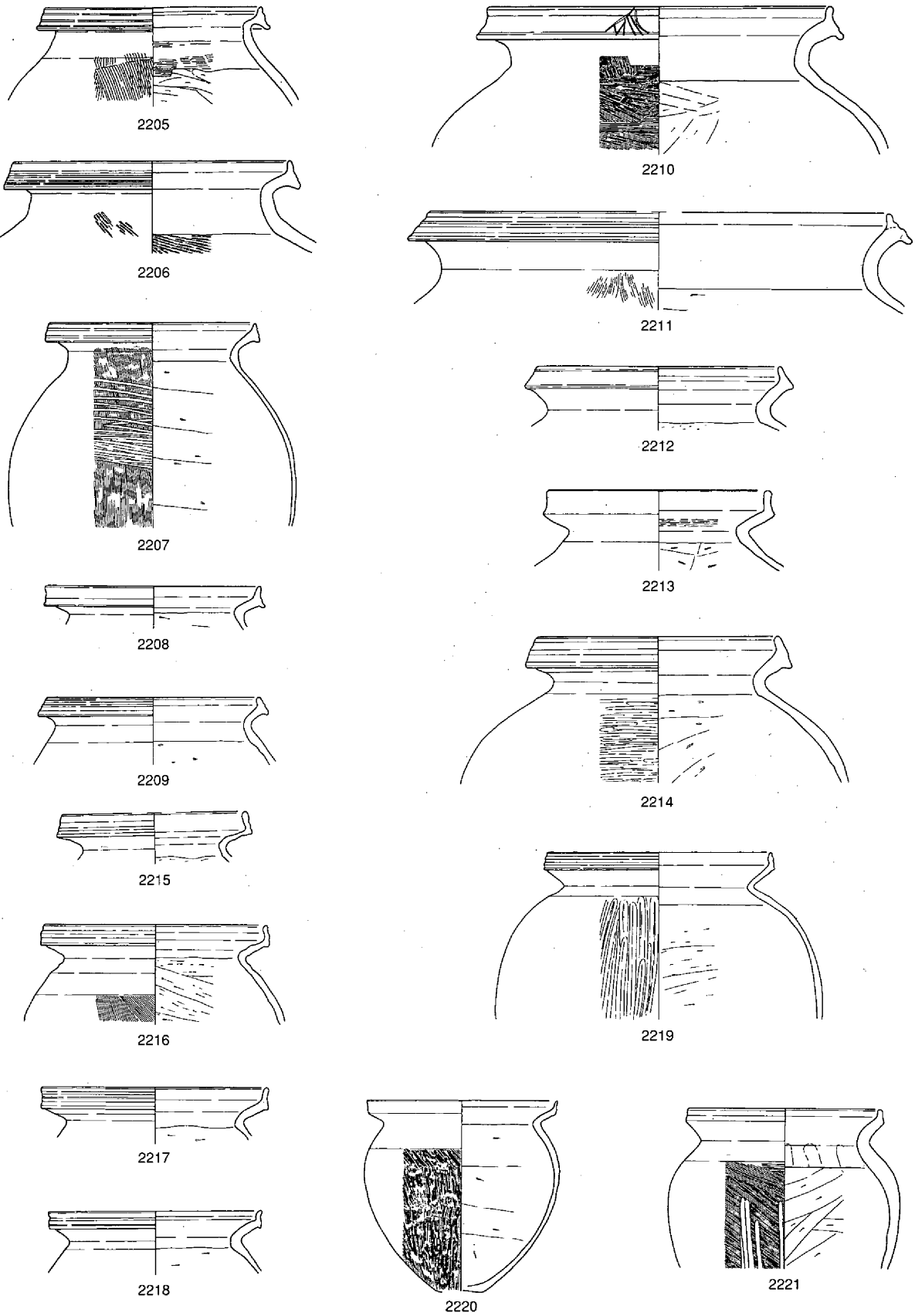

2194



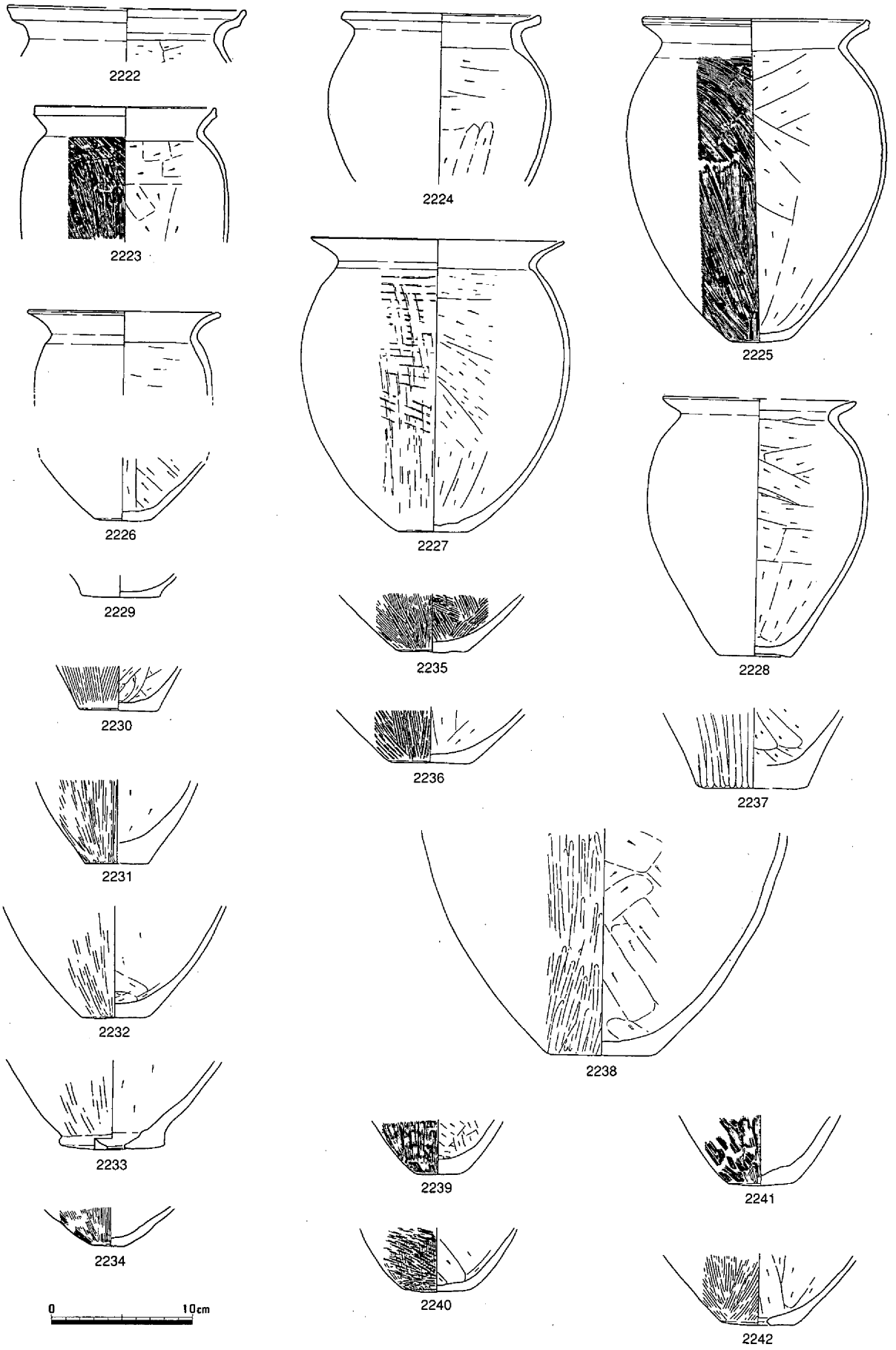
第623図　その他の遺物（２）



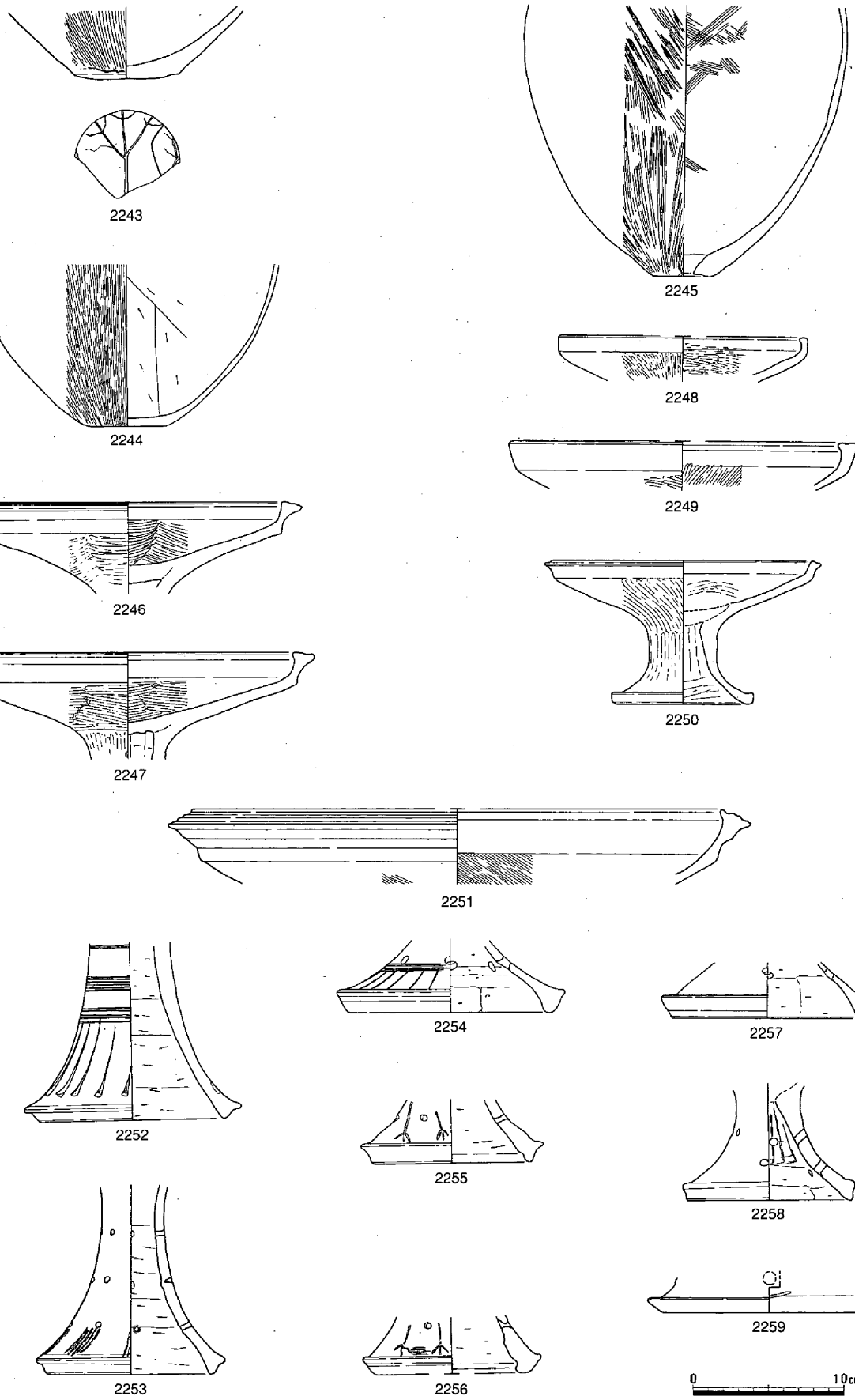
第624図　その他の遺物（3）



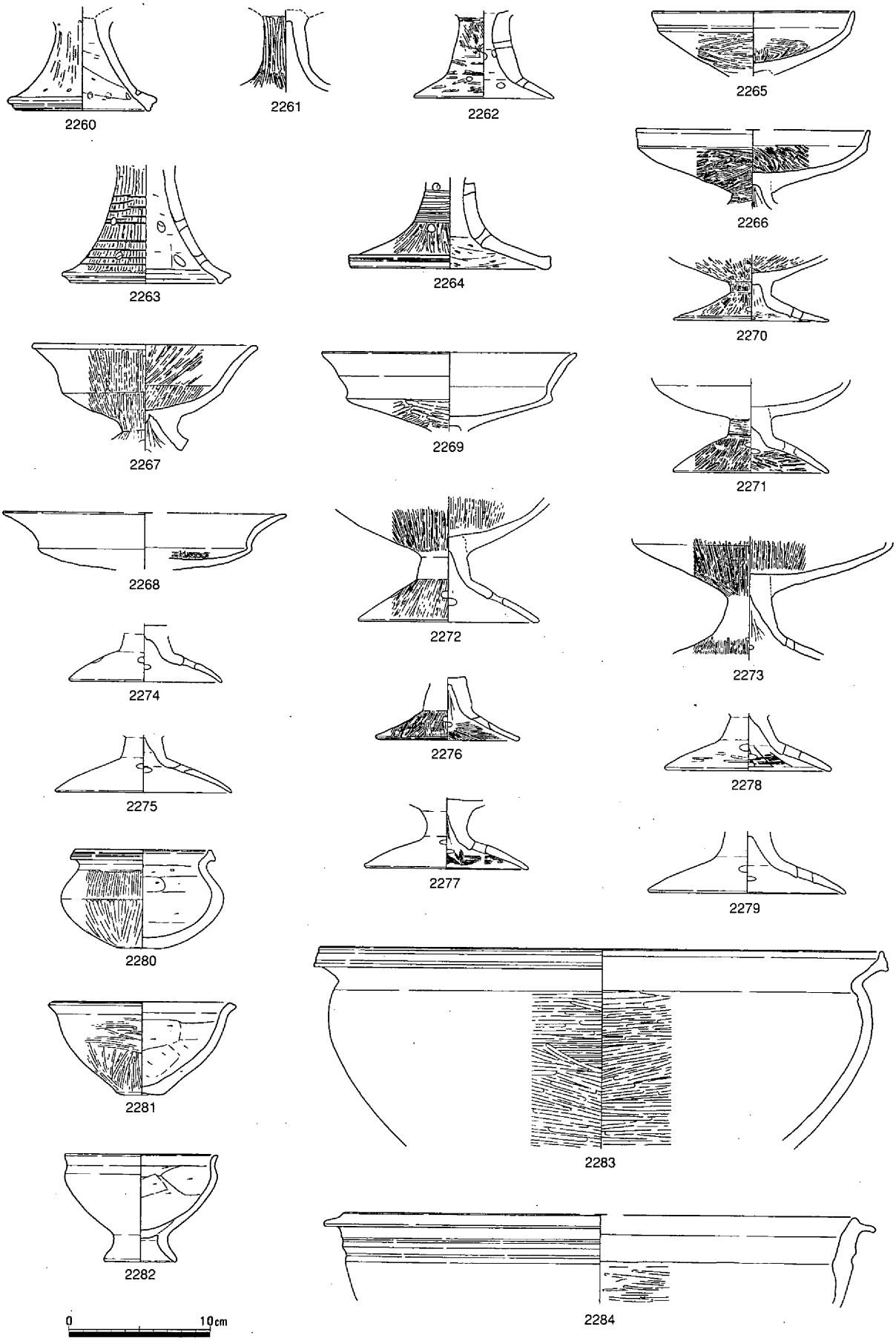
第625図　その他の遺物（４）



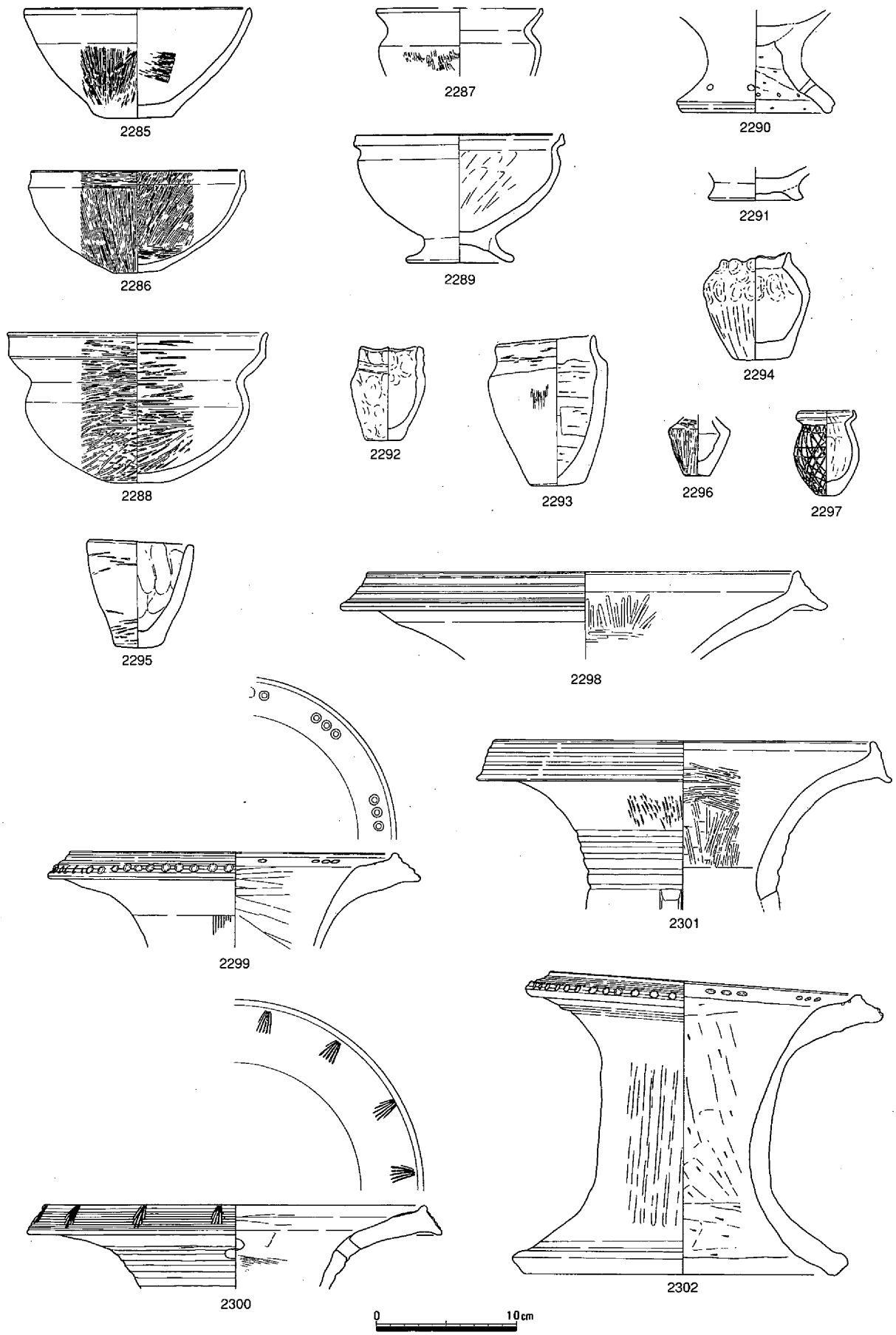
第626図　その他の遺物（5）



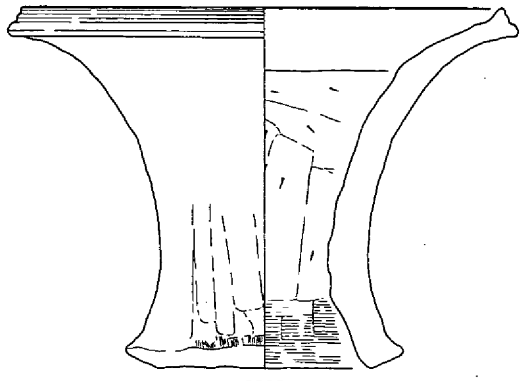
第627図　その他の遺物（６）

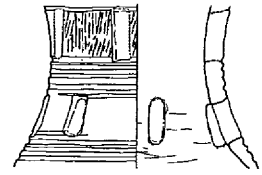


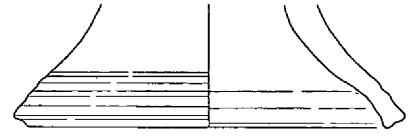
第628図　その他の遺物（７）

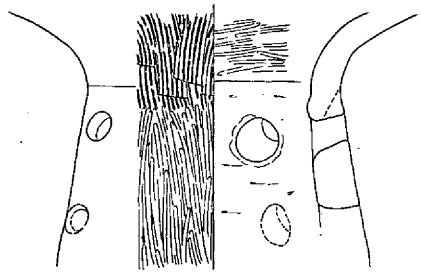


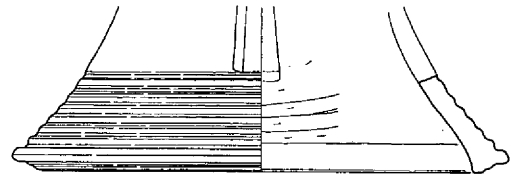
第629図　その他の遺物（８）

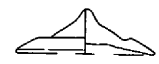

2303

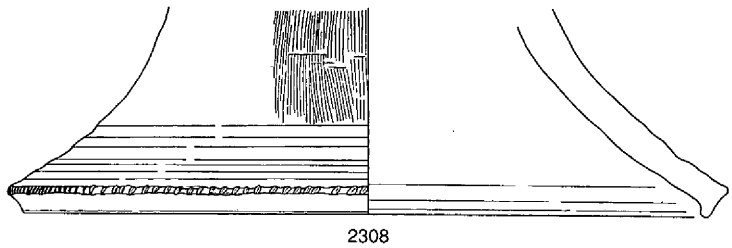

2305

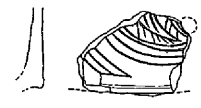

2306

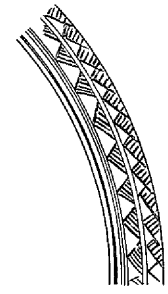

2304

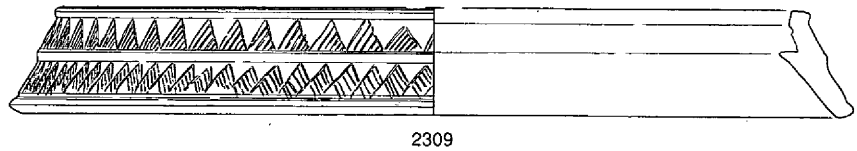

2307

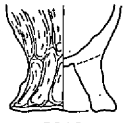

2310

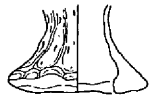

2308


2311




2309

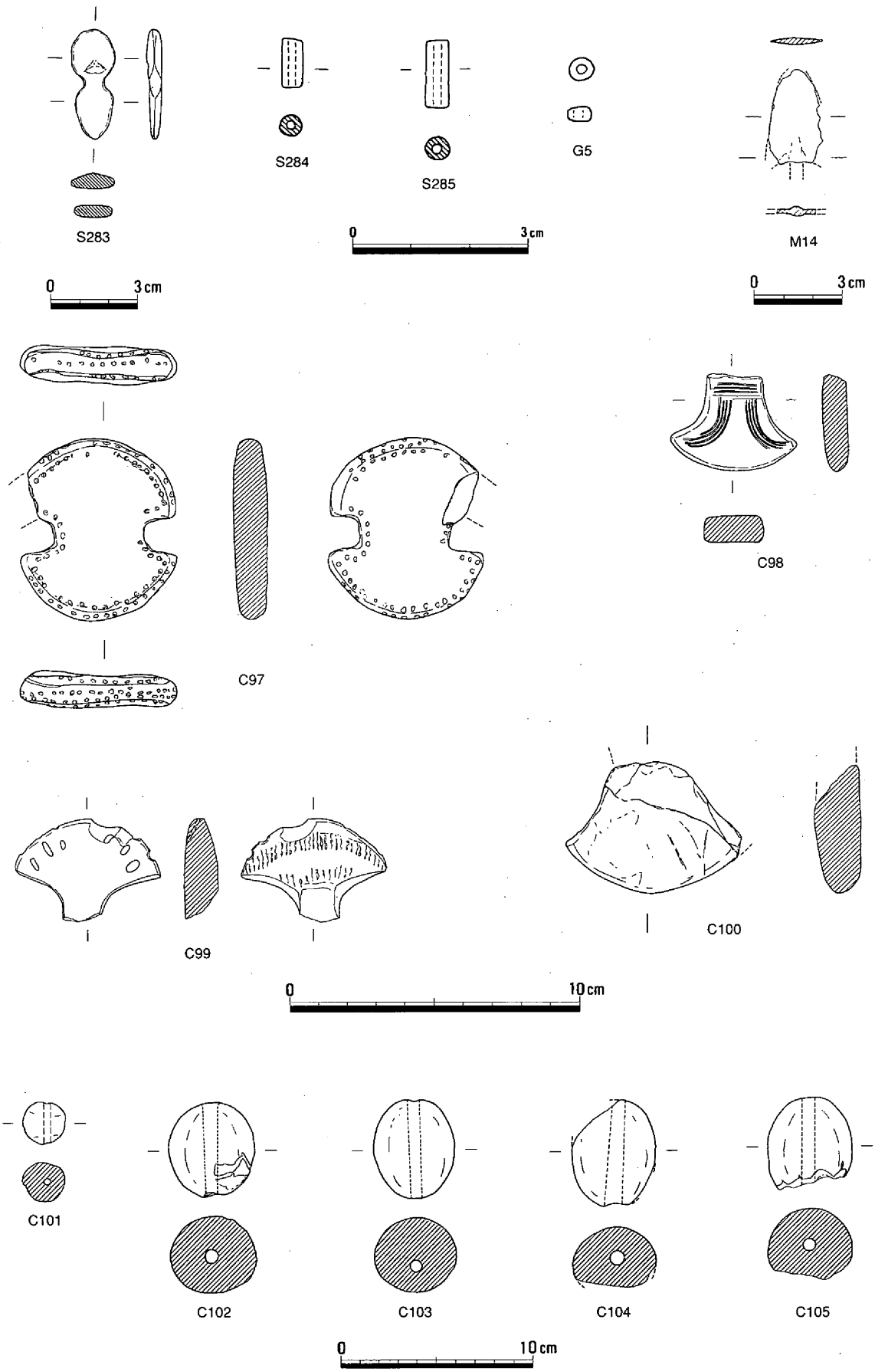

2312


2313

2314

2315

第630図　その他の遺物（９）



第631図　その他の遺物（10）

第４節　古墳時代前期の遺構・遺物

（１）概要

古墳時代前期も、弥生時代に引き続き第２・３微高地に遺構が集中している。検出された主な遺構は、竪穴住居24軒（建て替えを含めて25軒）、土壙４基、溝９条、水田１面である。他の時期と比較すると、遺構数・種類とも少ない状況である。

時期についてみると、古・前・ⅠとⅡの住居数にはあまり大きな差はなく、微高地全体に分布している。一方、古・前・Ⅲのものは極めて少ない。第２微高地では、中央から東寄りには住居は確認されておらず、南北に流走する溝が確認されているだけである。これらの溝は、詳細な時期が不明なものもあるが、用水路や集落の区画などの機能を有していたのではないかと思われる。

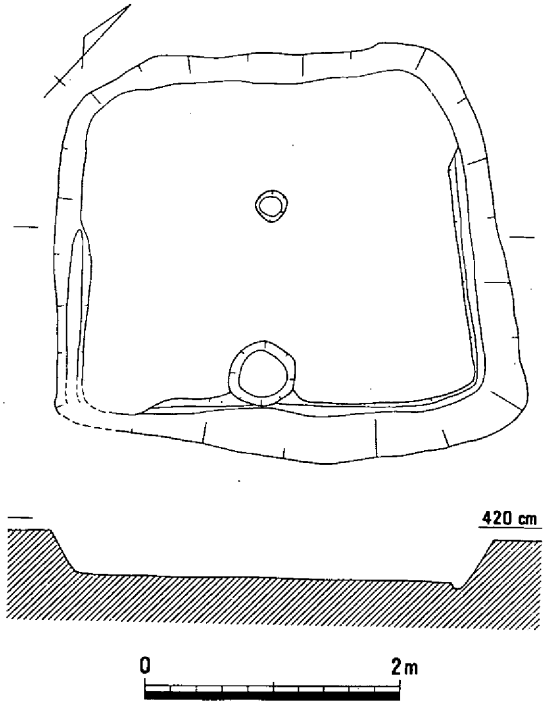
水田は、弥生時代と同様に第１微高地と第２微高地の間の低位部に営まれているが、これに伴うと思われる水路は、弥生時代のものとは異なり、水田の西側の方は認められず、東側のみが確認されている。また、島状高まりも検出されている。

図示した遺物は、土器414点、石製品10点、金属製品15点、土製品14点である。　（柴田）

（２）竪穴住居

竪穴住居53（第632・636図）

自動車道の本線部分から南にのびる調査区、N23$_{05}$区の北西隅に位置する、隅丸方形の竪穴住居である。規模は長辺で315cm、短辺が262cm、深さは検出面から約35cmを測る。

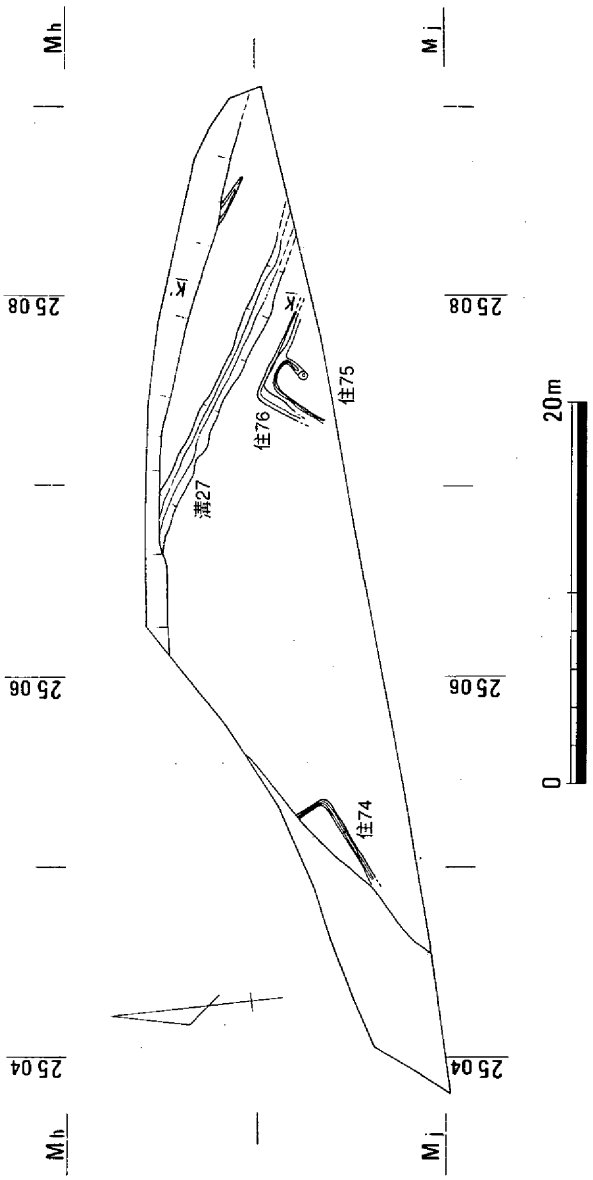


第632図　竪穴住居53（1/60）

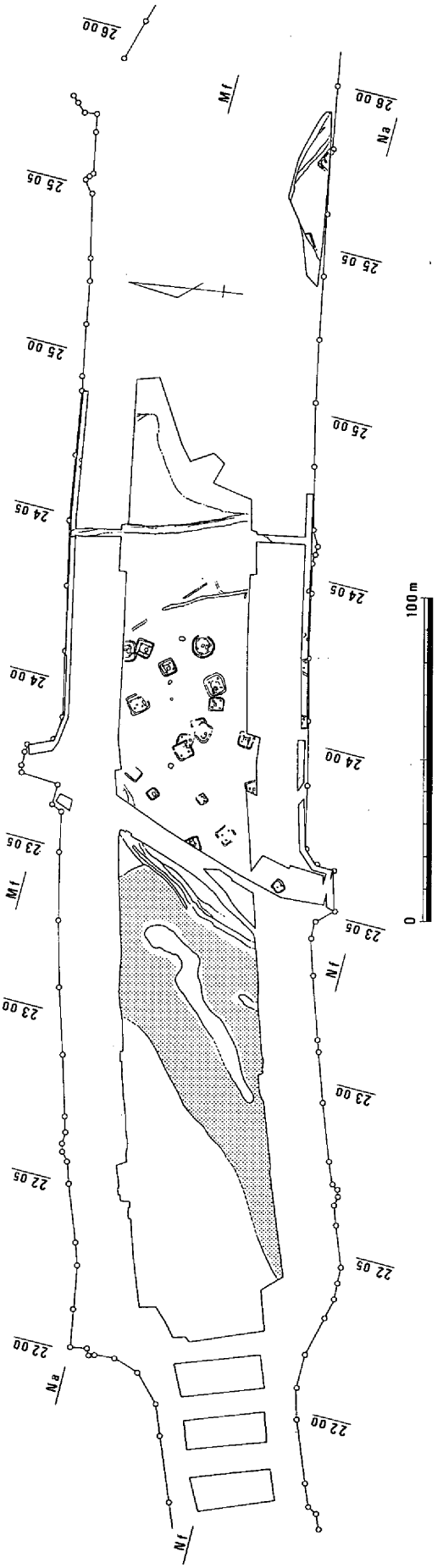
床面においては、中央付近に小柱穴１本と南東壁沿いに平面形が円形の土壙がみられたが、住居に伴うものかは判断できなかった。また、壁体溝も南側半分で確認できたのみで、カマドや焼土面などは存在しない。

遺物は床面からまとまって出土した。庄内系の壺2316は胎土を水簸している。壺2318は球形の体部をもち、短い頸部から強く外湾させたのち内湾気味に立つ口縁部となる。高杯には杯部が外反し、脚裾部が強くハの字に開き短脚の2323とやや長脚化した2324、杯部が２段に屈曲する長脚の高杯2325がある。平底傾向の小型鉢2327は、くの字に短く外反する口縁部をなし、端部は丸く終わる。また、2328は特殊器台ないしは壺の口縁部である。胎土には１～２㎜の長石・石英粒を含む。色調は黄橙色を呈する。以上の遺物からみてこの住居の時期は、古墳時代前期Ⅰである。　（弘田）

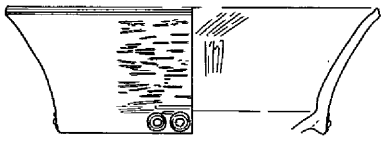
第633図　古墳時代前期遺構全体図（1）（1/400）

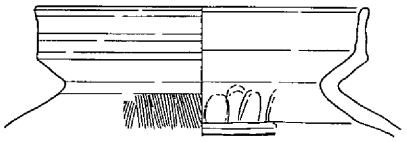


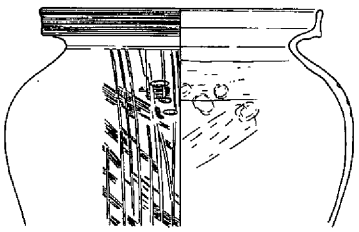
第634図　古墳時代前期遺構全体図（2）（1/400）

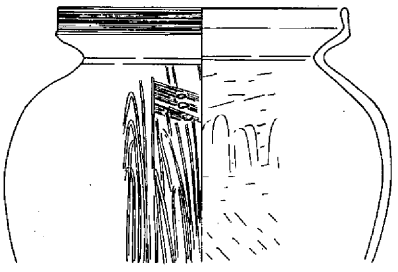


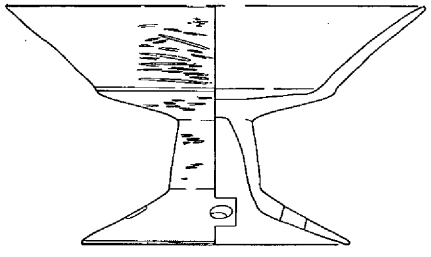
第635図　古墳時代前期主要遺構全体図（1/2,000）

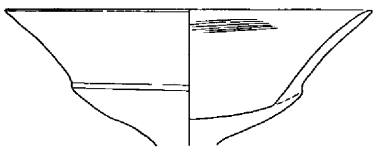

2316

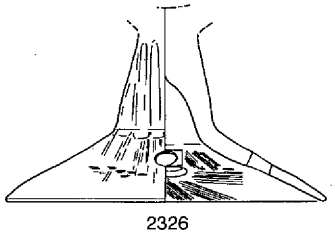

2317

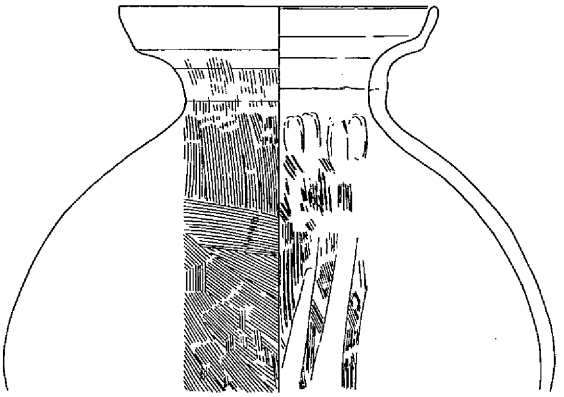

2321

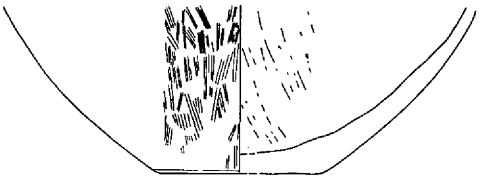

2322

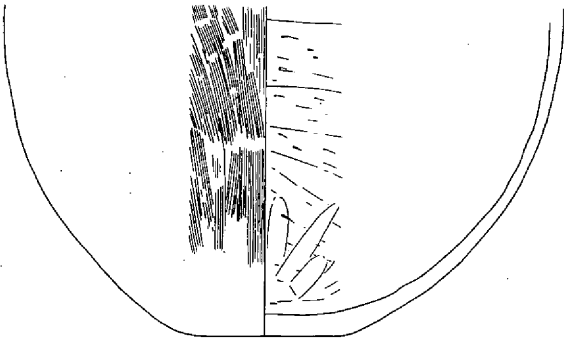

2323

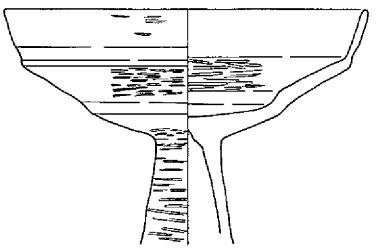

2324

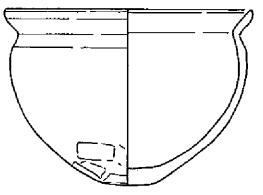

2326


2318

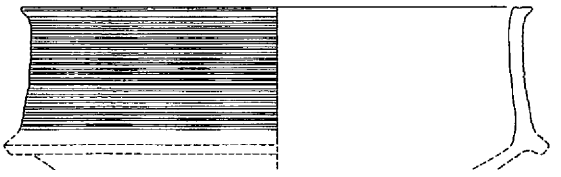

2319


2320


2325


2327

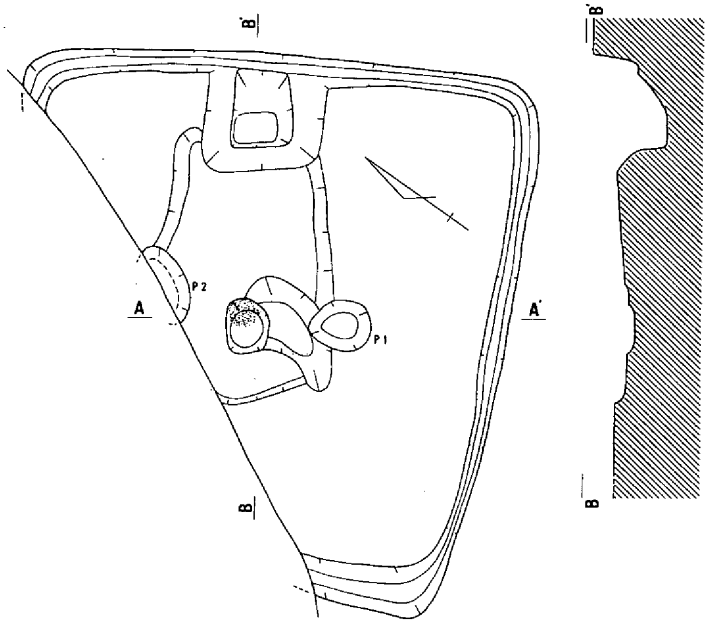
0　10cm

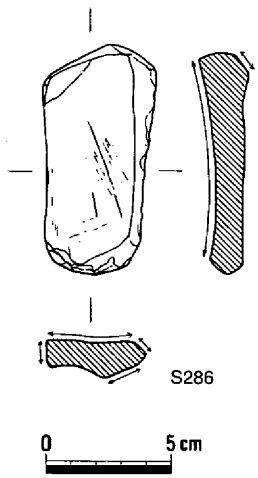

2328

第636図　竪穴住居53　遺物

竪穴住居54（第637図）

第２微高地の西端で検出した方形の竪穴住居である。竪穴住居53から北北東へ23m離れている。市道に掛かる北西部は調査出来なかった。方形に巡る壁体溝は深さ５cm前後で浅い。住居壁は北側が良く残存していて、床面から20cm強あった。柱穴は２本検出できた。床面の中央やや北寄りは長方形に一段低く窪んでおり、そこと北の壁までに方形の土壙が検出できた。中央穴もある。住居の規模は東西416cm、南北406cm、床面積10.5m²を測る。





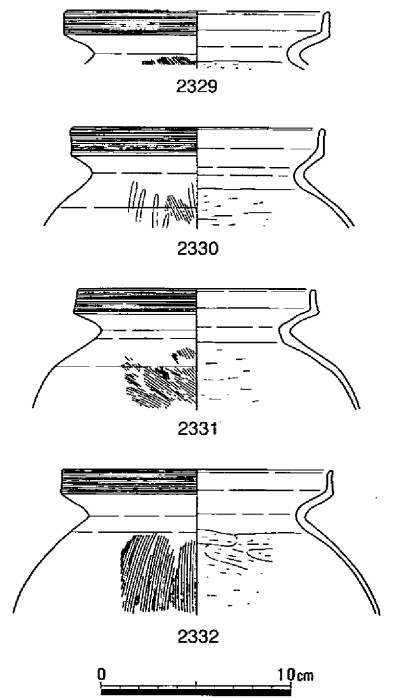
遺物は埋土中から砥石、土器が出土している。S286は流紋岩製の砥石である。非常に良く使用されている。小型の鉄器用であろう。2329～2332は甕で、口縁部外面には櫛描き沈線、体部内面はヘラケズリしている。

土器の観察からこの住居の使用された時期は、古・前である。

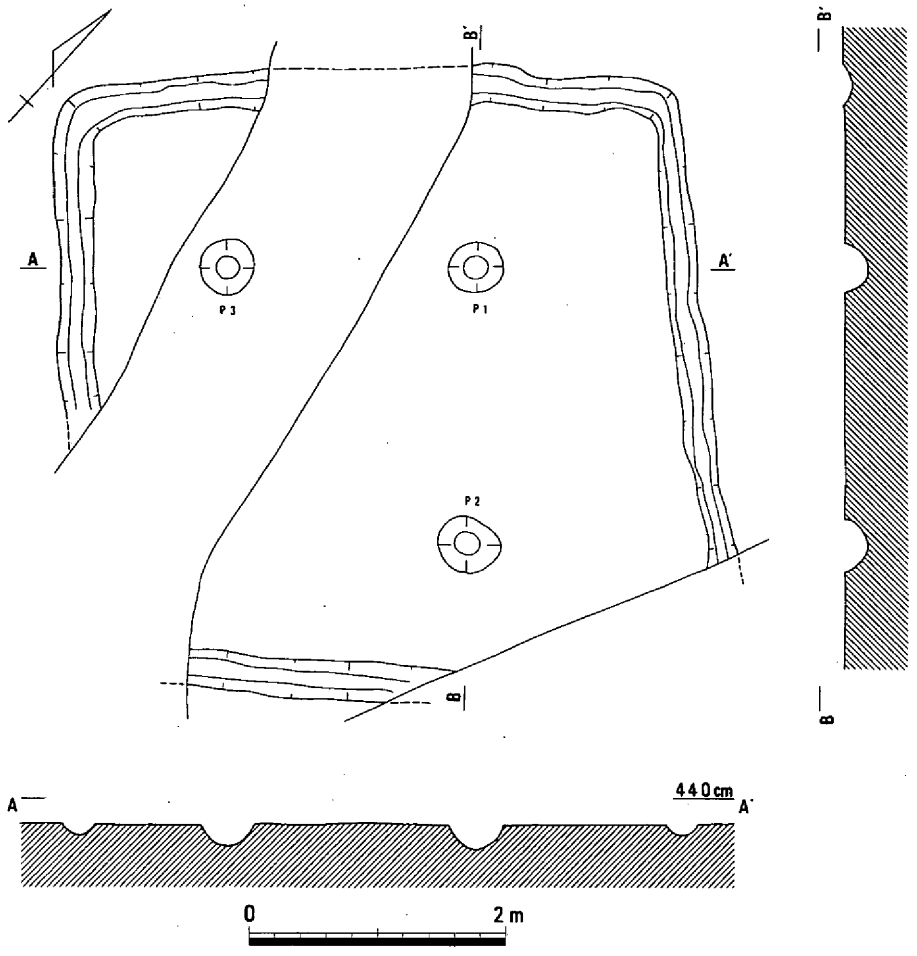
（浅倉）

竪穴住居55（第638図）

竪穴住居53から南へ５m離れている。平面形は、ほぼ正方形の住居である。方形に巡る壁体溝は深さ５cm



第637図　竪穴住居54（1/60）・遺物



第638図　竪穴住居55（1/60）

前後で浅い。住居壁の立ち上がりは残存していないが、柱穴は３本検出できた。残り１本は精査したが見つからなかった。その他の施設は全く検出できなかった。住居の規模は長さ514cm、幅488cm、床面積21.6m²を測る。

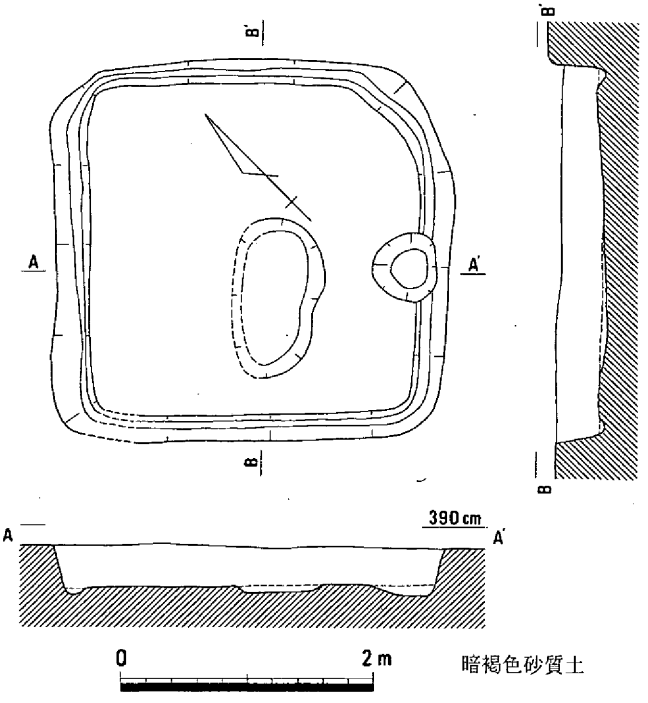
遺物は埋土中から土器片が出土している。

土器片の観察からこの住居の使用された時期は、古・前と考えたい。

（浅倉）

竪穴住居56（第639図）

竪穴住居55からは北に20m程離れ、第２微高地調査区の北西端近くに位置する。平面形が方形を呈し、規模は長



第639図　竪穴住居56（1/60）

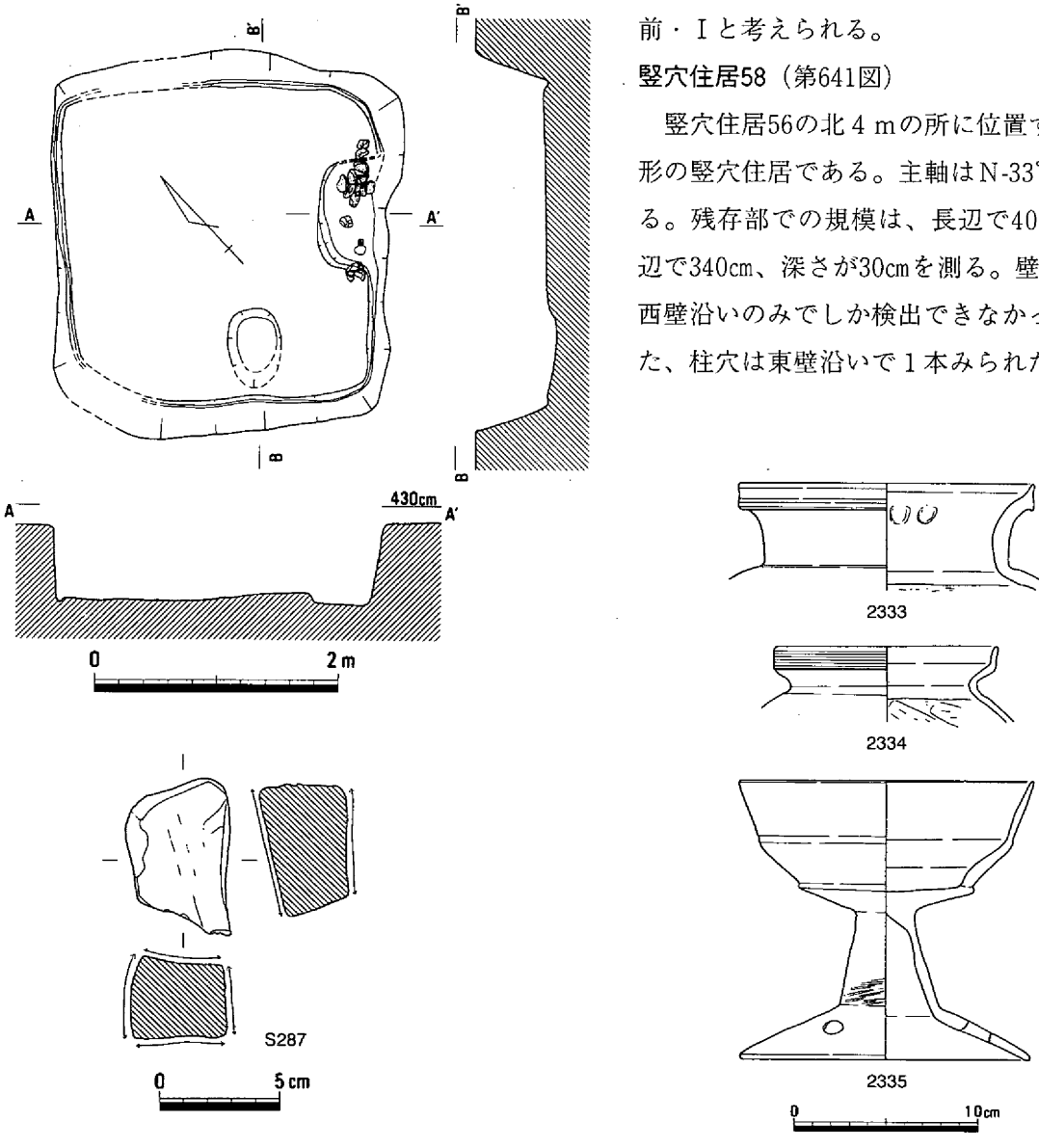
辺で292cm、短辺が285cm、深さが検出面から35cmと小規模な住居である。床面上には壁体溝がめぐるほか、浅い長円形の土壙状のくぼみと壁沿いに円形を呈する柱穴状のくぼみがみられるのみで、柱穴、焼土面やカマドなどはみられなかった。また、それらも住居に伴うものかは不明である。出土遺物はごくわずかで、図示できるものはないが、住居の時期は古墳時代前期と思われる。　（弘田）

竪穴住居57（第640図、写真23－１）

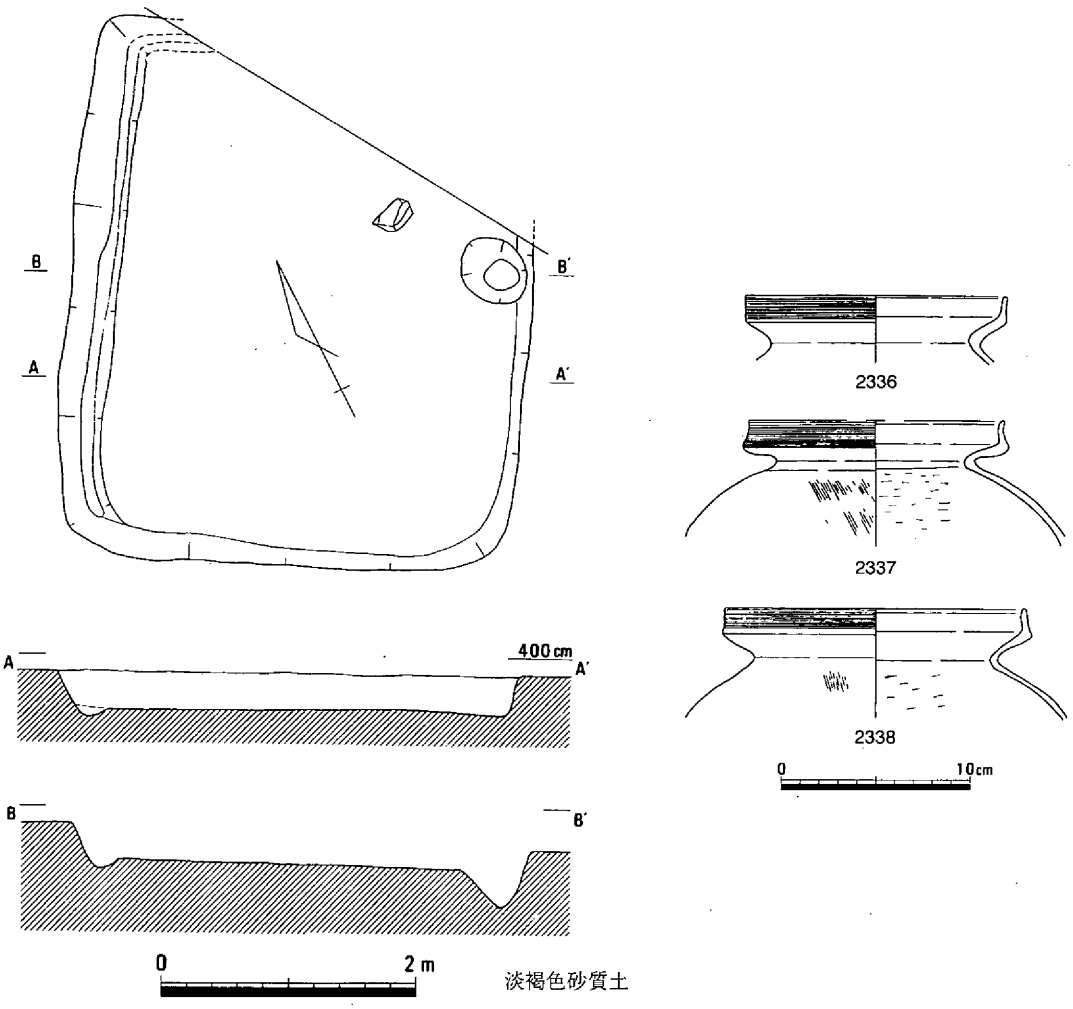
竪穴住居55の北東９ｍの所に位置する。平面形は正方形で、規模は１辺が2.7ｍ程の小規模な竪穴住居である。遺存状況は良好で、深さが60cmを測る。床面には周囲に壁体溝をめぐらすほか、壁沿いの１ヶ所では方形の土壙がみられた。この土壙は浅く、壁体溝の底と同レベルであった。また、土壙内や周囲からは拳大の礫や土器が出土している。床面ではさらにきわめて浅い楕円形の凹み１ヶ所が存在したが、柱穴や焼土面などはみられない。遺物には土師器の壺2333や甕2334、高杯2335と流紋岩（溶岩）製の砥石Ｓ287がある。2333は頸部から直立したのち外反し、口縁端部を上下に拡張させる。2335は杯部が２段に屈曲してたつ。脚部は緩く垂下したのち裾部が強くハの字に開き、円形の透かしを３方にあける。この住居の時期は、古・前・Ⅰと考えられる。　（弘田）

竪穴住居58（第641図）

竪穴住居56の北４ｍの所に位置する長方形の竪穴住居である。主軸はN-33°-Eである。残存部での規模は、長辺で400cm、短辺で340cm、深さが30cmを測る。壁体溝は、西壁沿いのみでしか検出できなかった。また、柱穴は東壁沿いで１本みられたが、住



第640図　竪穴住居57（1/60）・遺物



第641図　竪穴住居58（1/60）・遺物

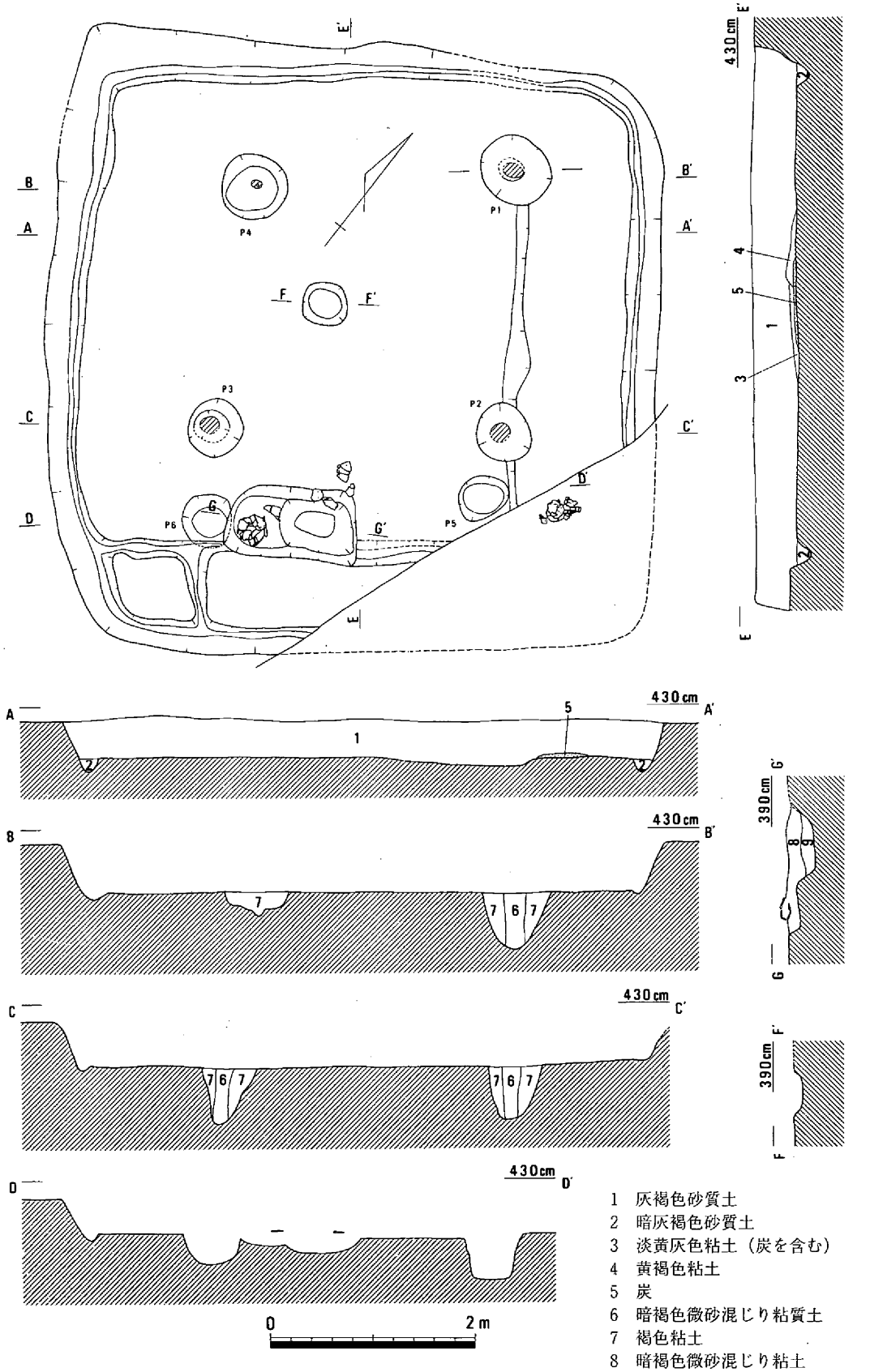
居に伴うかは不明である。

遺物は、いずれも覆土からの出土で、土師器の甕2336～2338がある。いずれも口縁部をくの字に曲げたのちさらに上方に拡張させ、外面には櫛描文を施す。

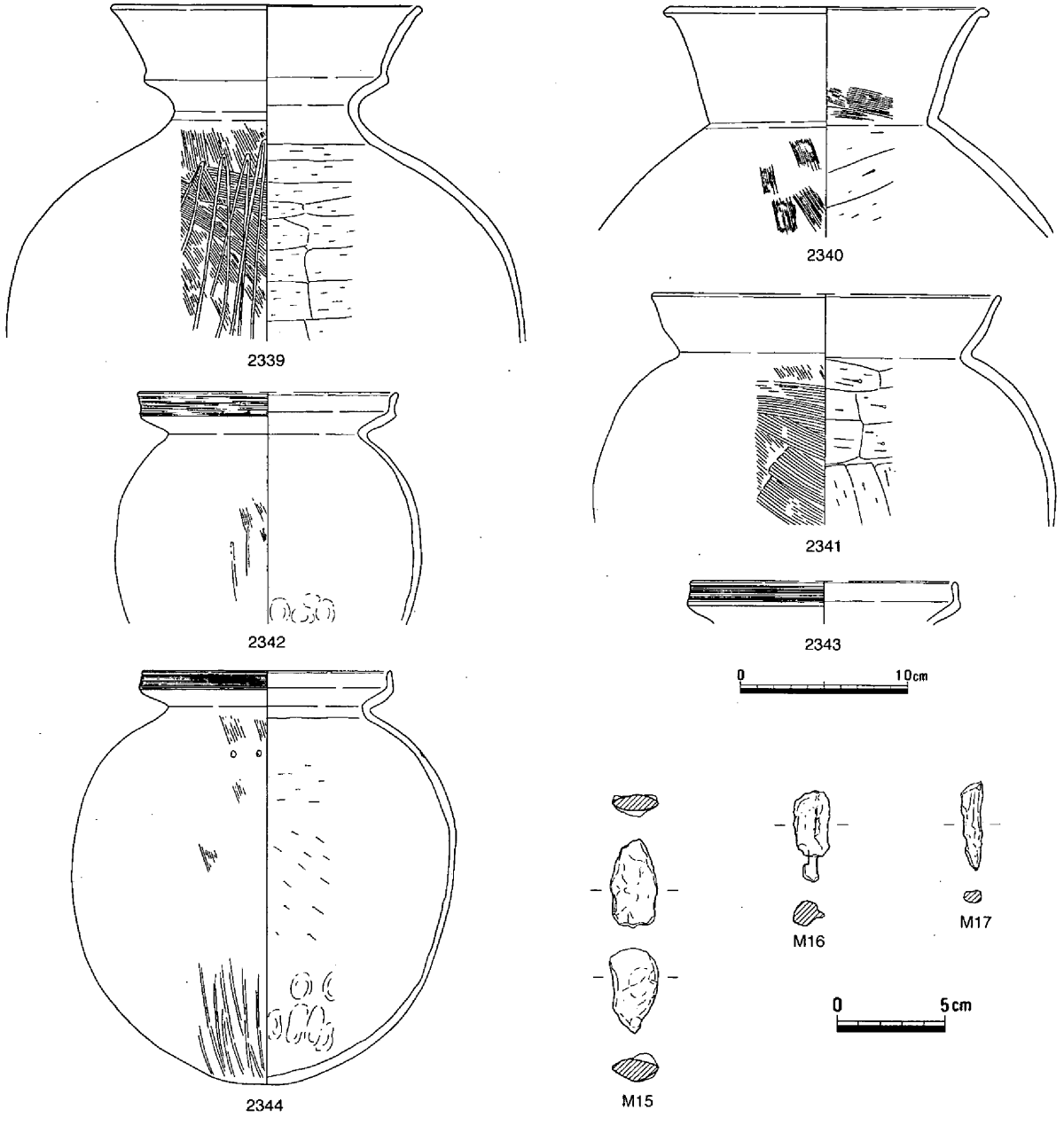
この住居の時期は、古・前・Ⅱと考えられる。（弘田）

竪穴住居59（第642・643図、写真23－2、89）

竪穴住居58の東16mの所に位置する。1回の建て替えがあり、南側に拡張している。規模は建て替え前が長辺で560cm、短辺が480cmを測り、建て替え後は長辺で580cm、短辺で560cm、深さが40cmを測る。床面では、柱穴が4本と中央穴、および内側の壁体溝にそって方形土壙がみられた。柱穴は掘り方の径が55～70cmで、深さは50cm程である。中央穴は直径が45cm程の円形で、深さは10cmと浅い。中央穴の周囲には炭層がみられた。方形土壙は、規模が、平面で130×70cm、深さは東側で25cmを測る。ここからは土師器2339・2342・2343が出土している。また、東側の壁沿いに高床部をもつ。壺には、いったん強く外反したのち、さらに外上方にのびる口縁部をもつ2339と、頸部から長く外上方にのび、端部が外に肥厚する2340がある。甕では、口縁部が内湾気味に立ち、端部が丸く終わる2341と、口縁端部が上方に拡張し、櫛描沈線文を施す2342～2344とがある。鉄器には広根鏃M15や釘状のM17がある。時期は、甕2341が古・前・Ⅲを示すほかは古・前・Ⅱでも古相と考えられる。（弘田）



第642図　竪穴住居59（1/60）



第643図　竪穴住居59　遺物

竪穴住居60（第644・645図、写真89）

竪穴住居57と59の延長線上のほぼ中間に位置する、方形の竪穴住居である。規模は長辺で510cm、短辺で480cm、深さが検出面から25cmを測り、住居の主軸はN-53°-Eである。床面上では、壁体溝と柱穴以外には炭化材がわずかにみられたが、焼土面や中央穴などの構造物は存在しなかった。柱穴は３本しか確認できなかったが、本来は４本主柱であろう。柱穴の規模は、掘り方の直径が40～55cm、深さは35～45cmを測る。出土遺物には、土師器・石器・鉄器がみられた。土師器甕では、頸部からいったん強く外反させ、さらに外上方にのびる2345と、下膨れ状の体部をなし、口縁端部が上方に拡張し櫛描沈線文を施している2346や、卵形の体部をもち、口縁部はくの字に開いて端部が丸く終わる2347がある。高杯2348・2349は、ともに深い杯部をなす。脚柱部は短く、裾部はハの字に開き円形の

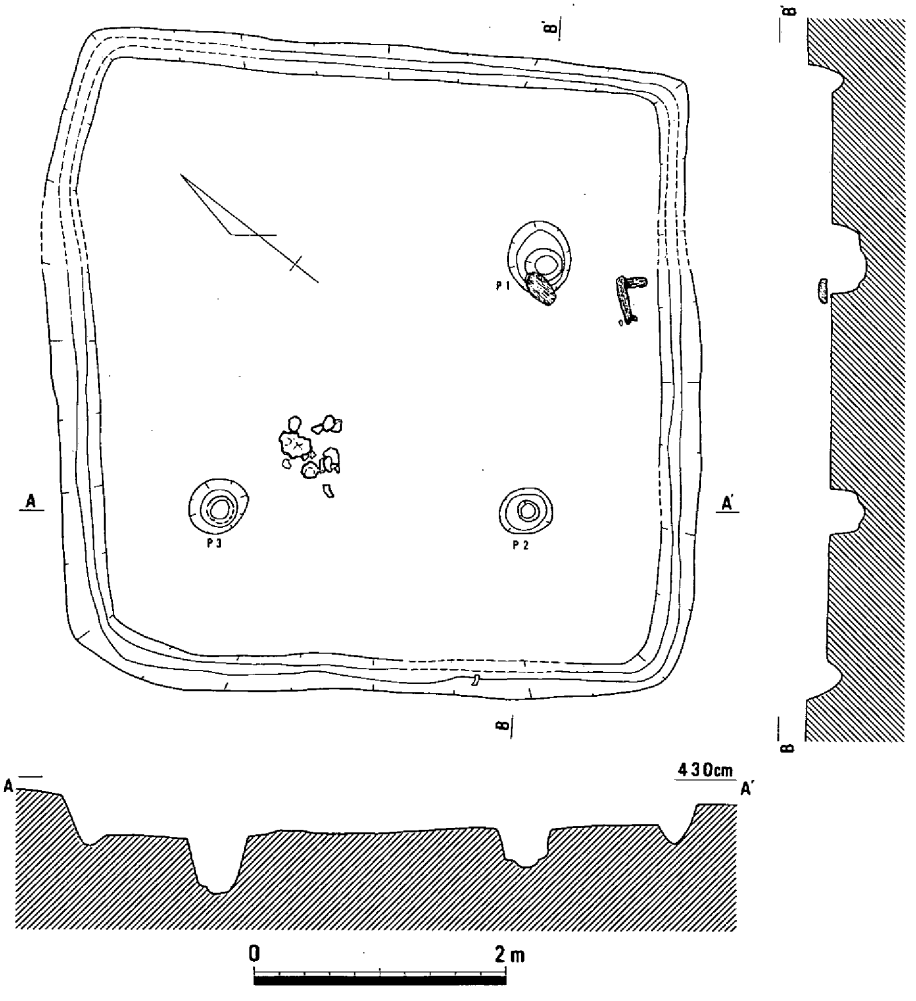
透かしを穿つ。大形の鉢2350は底部から内湾して立つ体部もち、短く外反する口縁部の端部は、上下に拡張する。ほかに小形で内湾気味に立つ浅い体部の鉢2352もある。小形丸底壺には、半球形の体部から強く外に屈曲する2351と、球形の体部をもつ2353がある。土器以外では、流紋岩製の砥石Ｓ288・Ｓ289と直刃鎌M18がある。この住居の時期は、古・前・Ⅱと考えられる。　（弘田）

竪穴住居61（第646図）

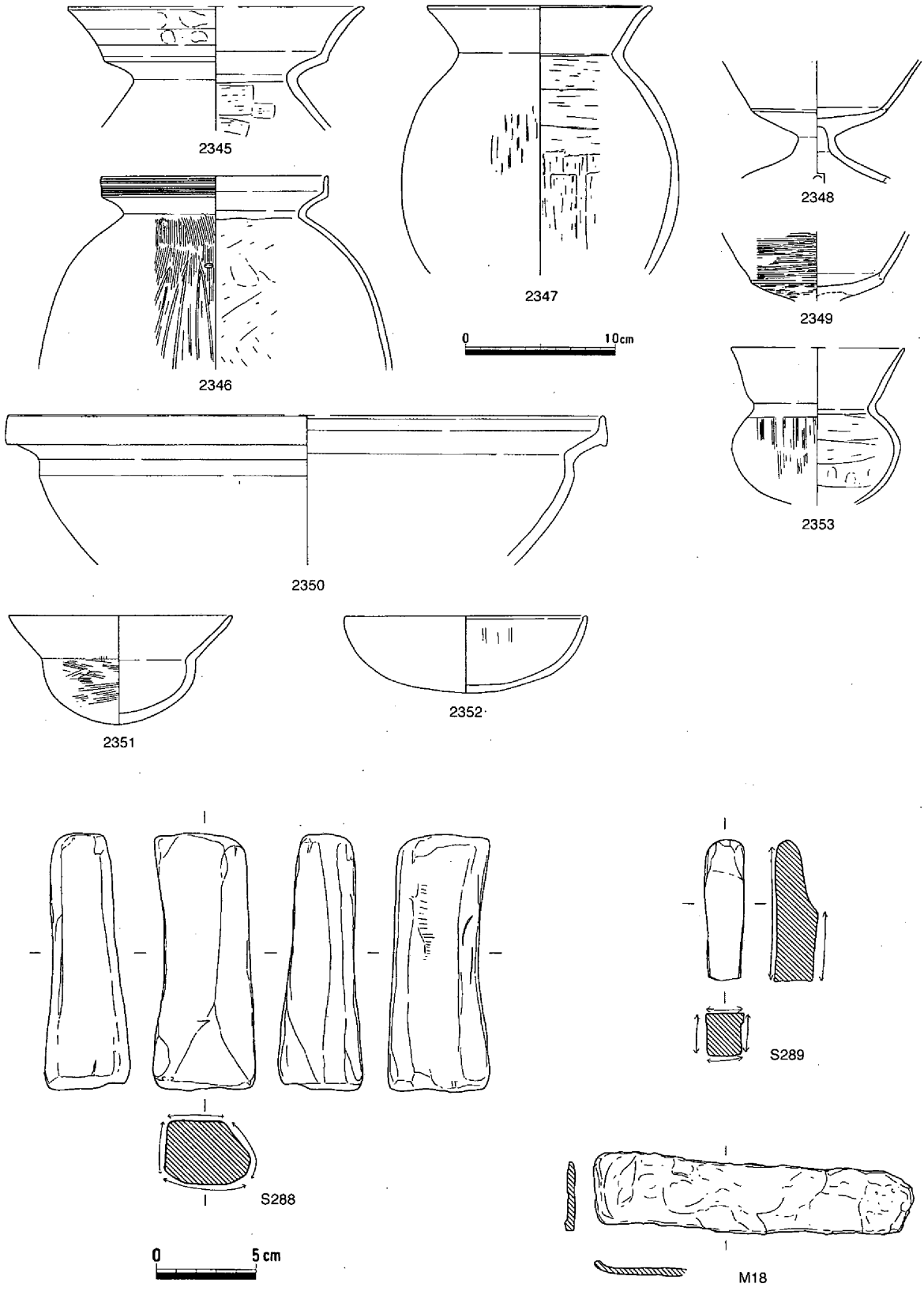
竪穴住居60の東側で約半分が重複して検出された、不整方形を呈する竪穴住居である。規模は長辺が450cm、短辺が390cm、深さは10cmを測る。床面上では、柱穴３本と中央付近に土壙１基、北壁沿いに焼土面が存在した。この住居では南・西辺の輪郭が壁体溝を伴わず、しかも北・東辺や柱穴との位置関係から内側に寄り過ぎているとみられる。そこで、この輪郭は高床部の端を検出していたとも可能性も考えられる。遺物としては釘状の鉄片M19がある。住居の時期を特定できる土器はみられなかったが、切り合い関係から古・前・Ⅱより古いと思われる。　（弘田）

竪穴住居62（第647図）

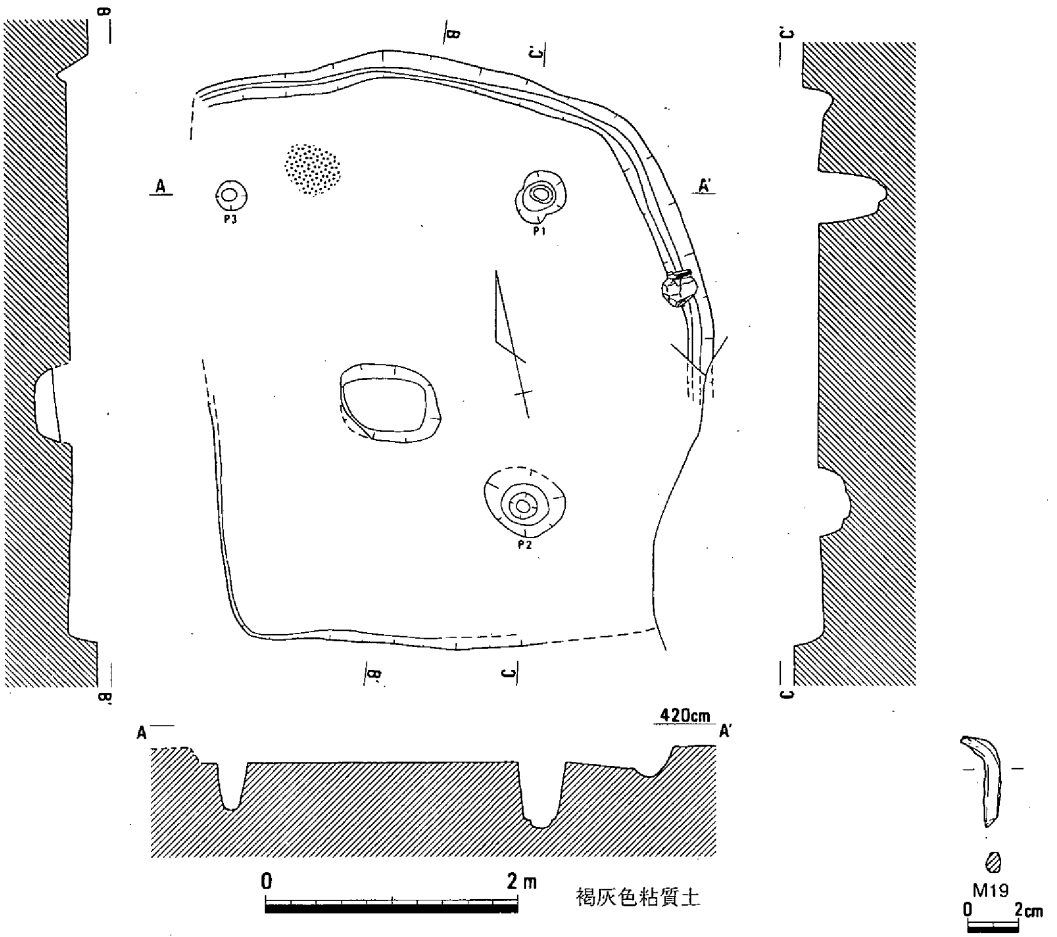
竪穴住居61の南東に接して位置する方形の竪穴住居である。住居63や95と重複し一部のみの検出となった。残存部での規模は１辺が440cmを測る。柱穴が１本あり、直径は50cm、深さが50cmを測る。時期を特定できる遺物はないが、周辺の遺構の時期などから古墳時代前期と考えたい。　（弘田）



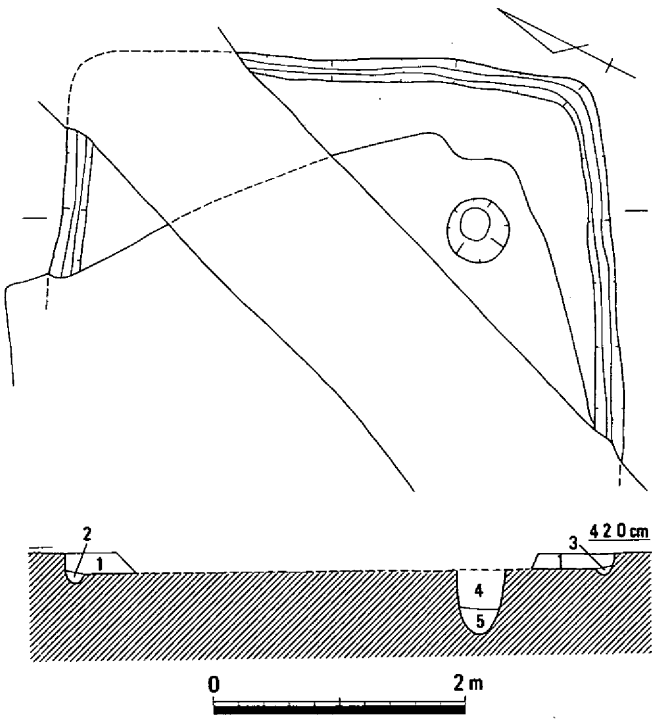
第644図　竪穴住居60（1/60）



第645図　竪穴住居60　遺物



第646図　竪穴住居61（1/60）・遺物

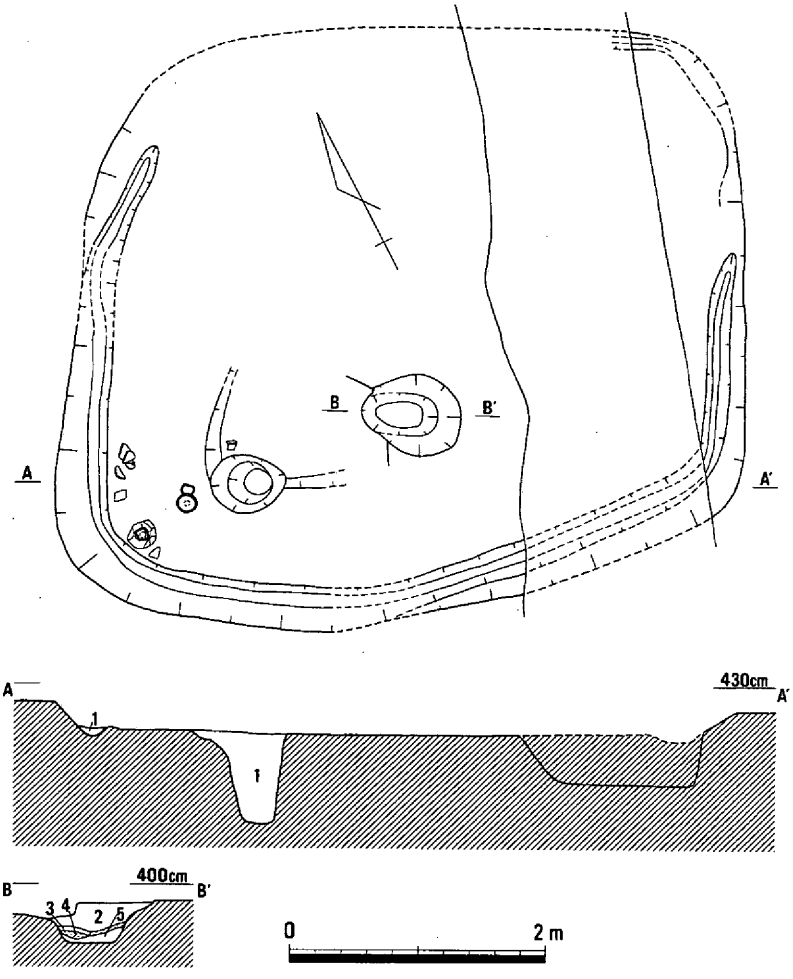


1　褐色細砂
2　褐色粘質微砂
3　暗褐色細砂
4　暗褐色粘質微砂
5　にぶい黄褐色粘質微砂

第647図　竪穴住居62（1/60）

竪穴住居63（第648図、写真89）

竪穴住居62の西に位置し、約半分が住居62と重複する。北東半分が攪乱やほかの遺構との重複によって不明瞭となっていたものの、平面形は不整隅丸方形を呈す。規模は長辺が520cm、短辺は460cm、深さが20cmを測る。床面は、北半では壁体溝も削平される状況であったものの、南西隅で高床部と柱穴１基が、中央やや南では土壙１基が検出できた。柱穴は掘り方の直径が50～60cm、深さは70cmを測る。高床部は幅が約100cmである。また、土壙は直径が70～80cm、深さは35cmを測り、埋土中には炭層が堆積していたことから灰穴炉とみられる。出土遺物には、土師器高杯2354と鉢2355、流紋岩製の砥石Ｓ290がある。2354の口縁部は底部との境に鈍い稜をなし、外上方に直線的にのびて端部は丸い。内面調整にはヘラミガキがみられる。脚部では裾部が強くハの字に開き、透かし孔はみられない。外面の調整は脚柱部ではナデ、裾部にはハケを施す。2355は手捏ね土器である。この住居の時期は、古・前・Ⅰとみられる。（弘田）

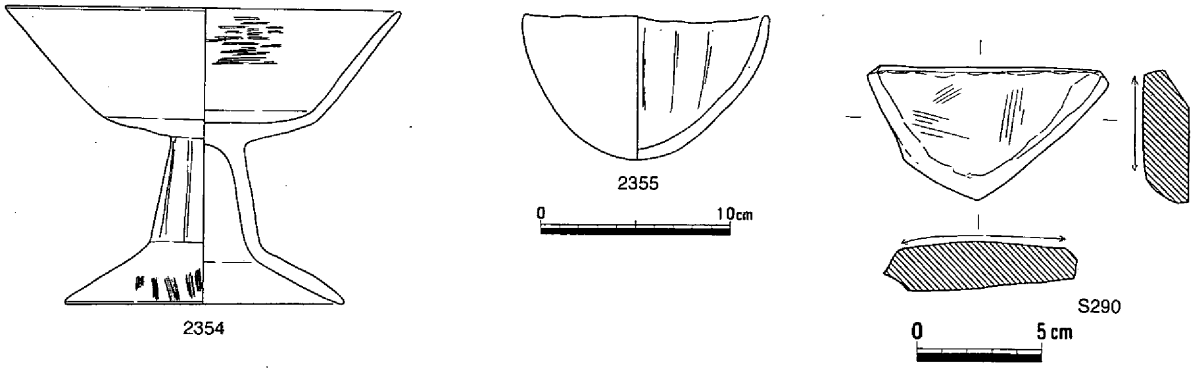


1　暗褐色粘質土
2　暗褐色細砂（だく橙色斑を含む）
3　暗赤褐色粘質微砂
4　炭
5　褐色粘質微砂

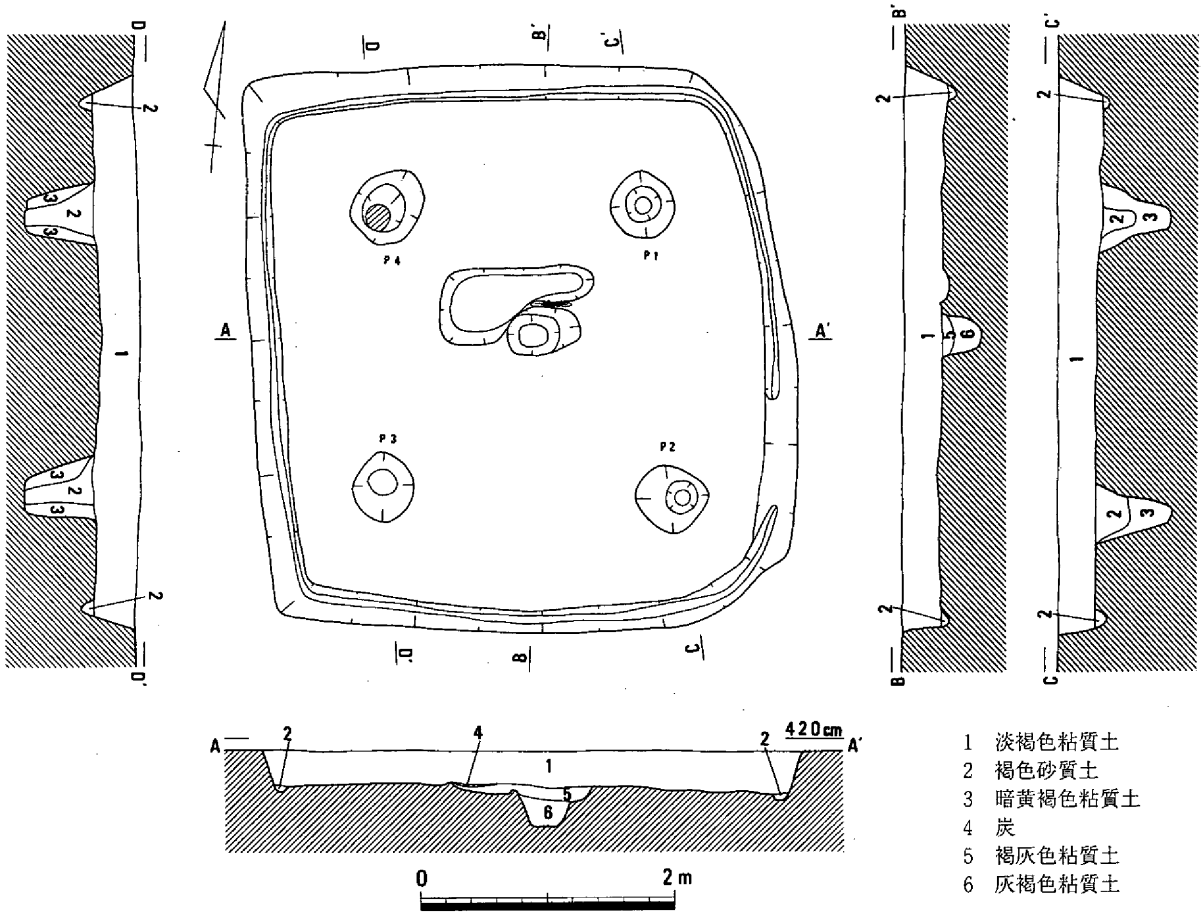
竪穴住居64

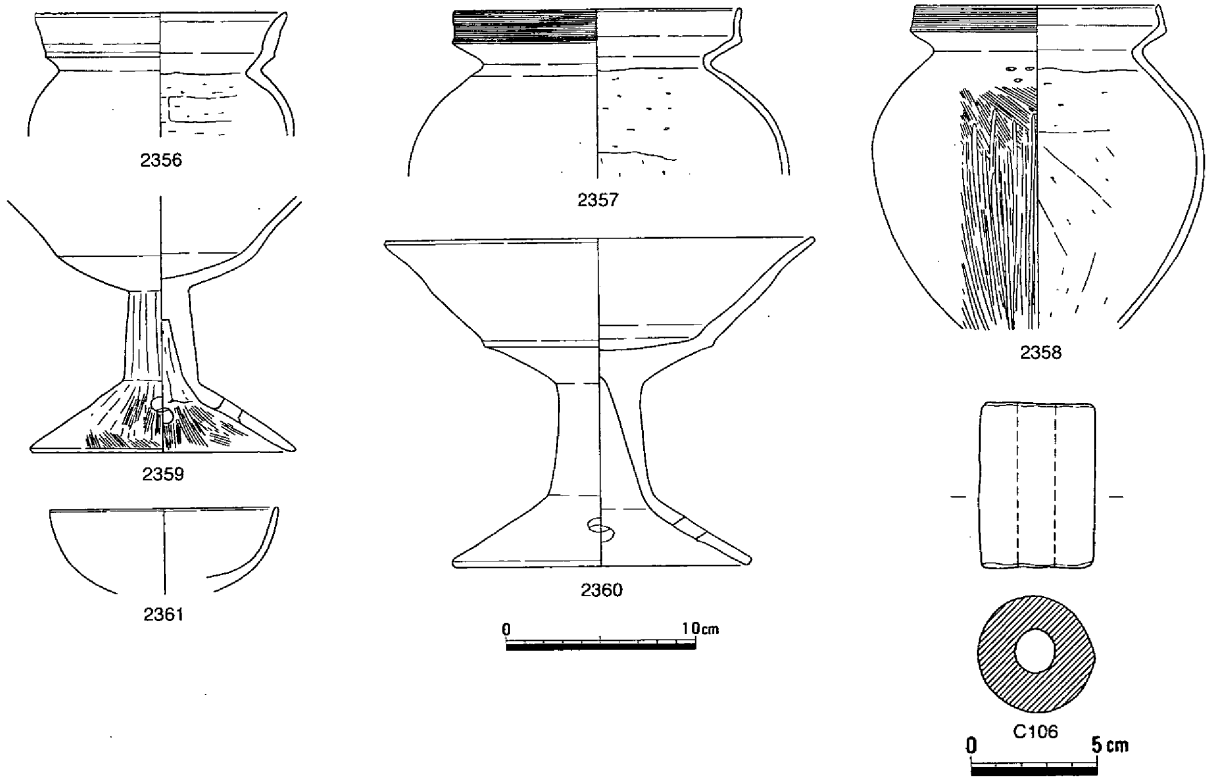
（第649図、写真23－３）

竪穴住居63の東４ｍの所に位置する、方形の竪穴住居で



第648図　竪穴住居63（1/60）・遺物





第649図　竪穴住居64（1/60）・遺物

ある。規模は、長辺で430cm、短辺が405cm、深さは検出面から30cmを測る。床面上では、壁体溝、柱穴や中央穴がみられた。主柱穴は４本で、Ｐ３や４では柱痕跡も明瞭であった。柱穴の規模は、掘り方の直径が50～60cm、深さが60cm程を測る。中央穴は、平面形が隅丸長方形を呈し、規模は30×45cm、深さは35cmを測る。また、中央穴の周りをＬ字に囲むように不整形の浅い凹みがみられ、埋土上面には炭の堆積がみられた。出土遺物をみると、甕には、頸部から短く外反し、そこからさらに外上方にのびる2356と口縁端部を上方に拡張させ、櫛描沈線文を施す2357・2358がある。高杯では、杯底部と口縁部の境が鈍い稜線である2359に対し、2360では突線状をなす。また、鉢2361、土錘Ｃ106もある。この住居の時期は、古・前・Ⅰと考えられる。（弘田）

竪穴住居65（第650図）

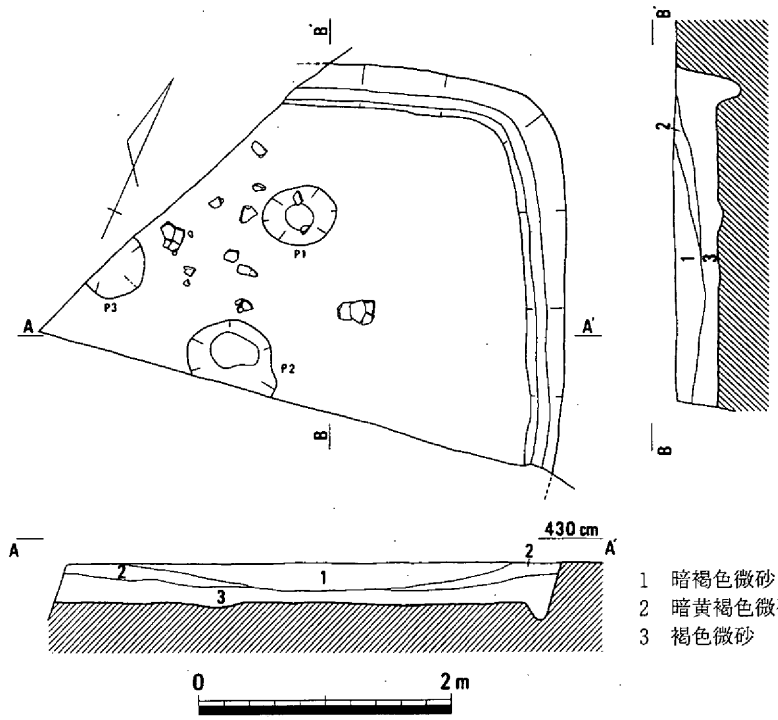
Ｎ23区の北東に位置する方形住居で、竪穴住居57の南12ｍで検出した。調査区南辺にかかって検出したため、北東部を確認するにとどまった。このため全体の規模は明らかでないが、中央穴の位置からして、一辺500cmほどの方形をなすものと推察される。検出面から深さ35cmにある床面は平坦で、周囲に幅22cm、深さ15cmほどの壁体溝をめぐらす。主柱は確認できなかったが、床面の中央には径66cmの円形をなす浅い土壙が穿たれていた。その北側の床面からは2362～2368のような土器が出土した。壺2362・2363は同一個体と見られる。倒卵形の体部と外反して開く口縁部をもち、体部の外面には平行タタキの痕跡を残す。2365～2367は椀形をなす鉢で、2367は外面をヘラケズリする。2368～2372は製塩土器で、小さな脚台を備えた鉢形をなす。これらは古・前・Ⅱに比定される。（亀山）

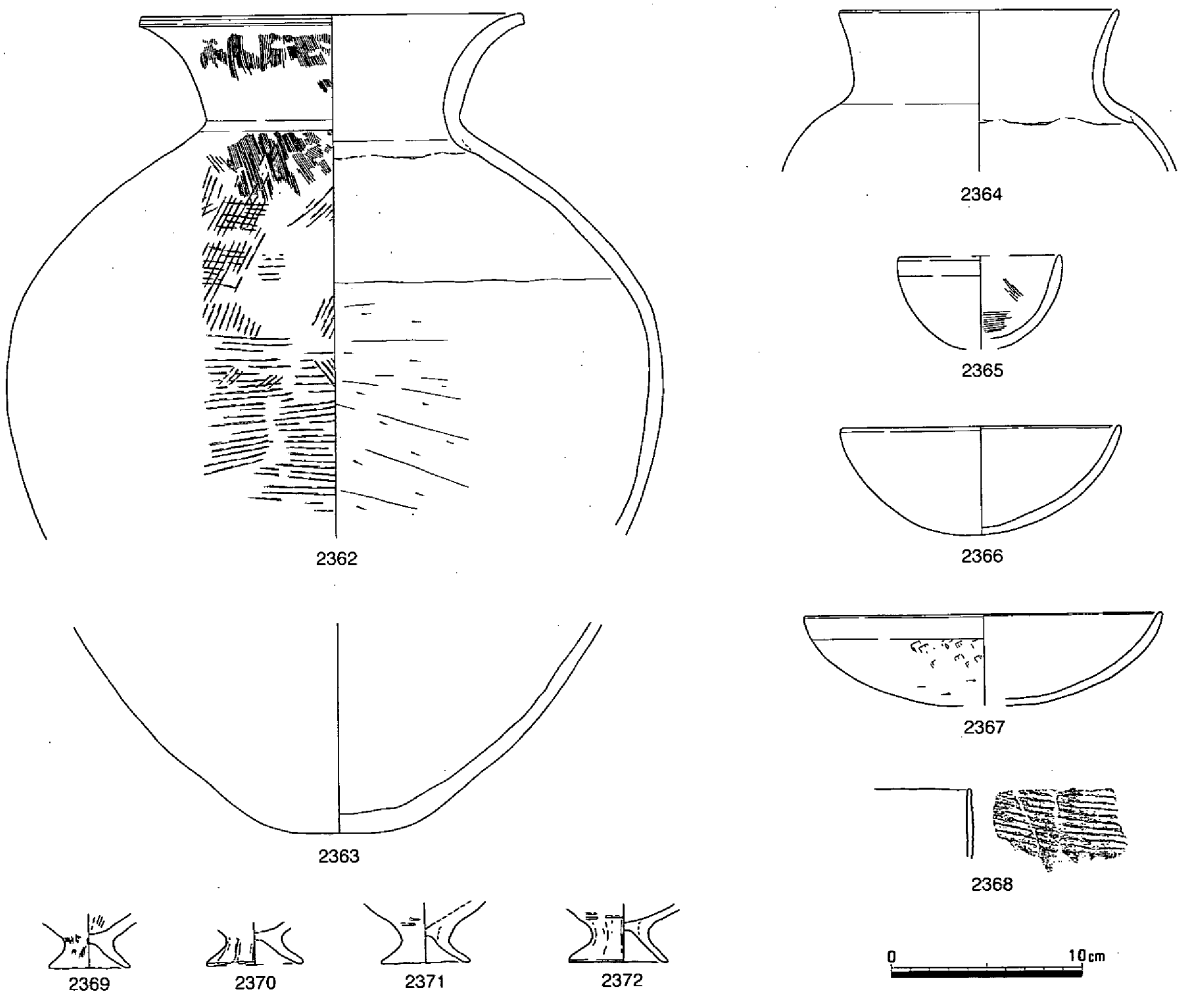
竪穴住居66（第651～654図）

竪穴住居65の東9.5ｍで検出した竪穴住居で、Ｎ23区の北東に位置する。東辺を確認できなかったが、長さ450cm、幅425cmほどの方形をなすものと推定される。床面は、検出面から深さ31cmほどの位置にあり、その標高は372cmを測る。床面積は16㎡あまりと推定され、周囲には幅12cm、深さ８cmほどの壁体溝をめぐらす。南・東壁に沿って、Ｌ字形の高床部が設けられている。幅121～156cm、高さ７cmあり、その内縁は３本の主柱に沿っている。４本ある主柱は、それぞれ壁体から100～130cmの位置にあり、柱間距離は183～187cmを測る。掘り方は径25～30cmの円形をなし、深さは43～63cmある。床面の中央には長さ48cm、幅41cmを測る円形の土壙が掘りこまれている。深さは62cmあり、柱穴状を呈している。暗茶褐色をなす埋土には炭・灰が含まれていた。また、その南には楕円形をなす土壙が設けられている。長さ93cm、幅35cmを測り、深さは７cmと浅い。

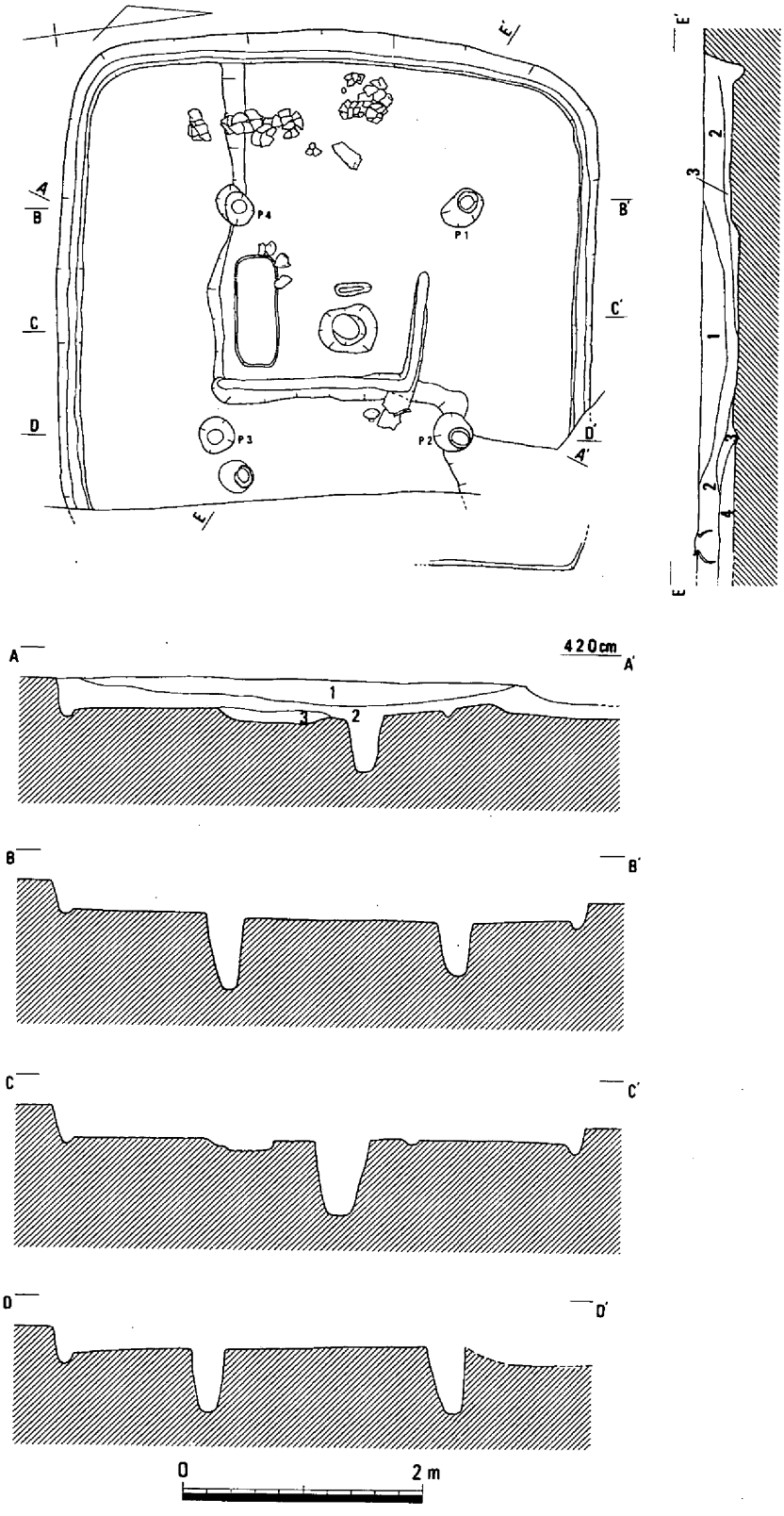
遺物は、床面西側にまとまって見られるほか、暗褐色を呈する埋土上層から多く出土している。2373は口径9.6cmを測る直口壺で、内外面にヘラミガキを施す。2376は非在地系の壺で、最大径を下半にもつ体部と外反する口縁部を備えている。外面はヘラミガキで調整し、内面は下半のみヘラケズリする。く字形の口縁部をもつ甕には、屈折して延びる口縁の端部を丸く収める2379～2382、面をなす2377・2378、尖りぎみに終わる2381がある。いずれも外面をハケメ、内面をヘラケズリで粗く調整する。2383～2390は短い二重口縁に櫛描沈線をめぐらす甕で、最大径19～21cmの中型と24～26cmの大型に分けられる。内面のヘラケズリは右方向が主体となっている。高杯は、深い杯部をもつ2393・2394、杯部が屈折して段をなす2396、椀形の杯部をもつ2399・2400などがある。脚部は短いものが多いが、脚柱部の長い2402やハ字形に開く2395がある。鉢には、椀形をなす2406、く字形の口縁部をもつ2408・2409、二重口縁を備えた2410・2411がある。

これらの土器は、弥・後・Ⅳ～古・前・Ⅰの過渡的な様相を示している。（亀山）



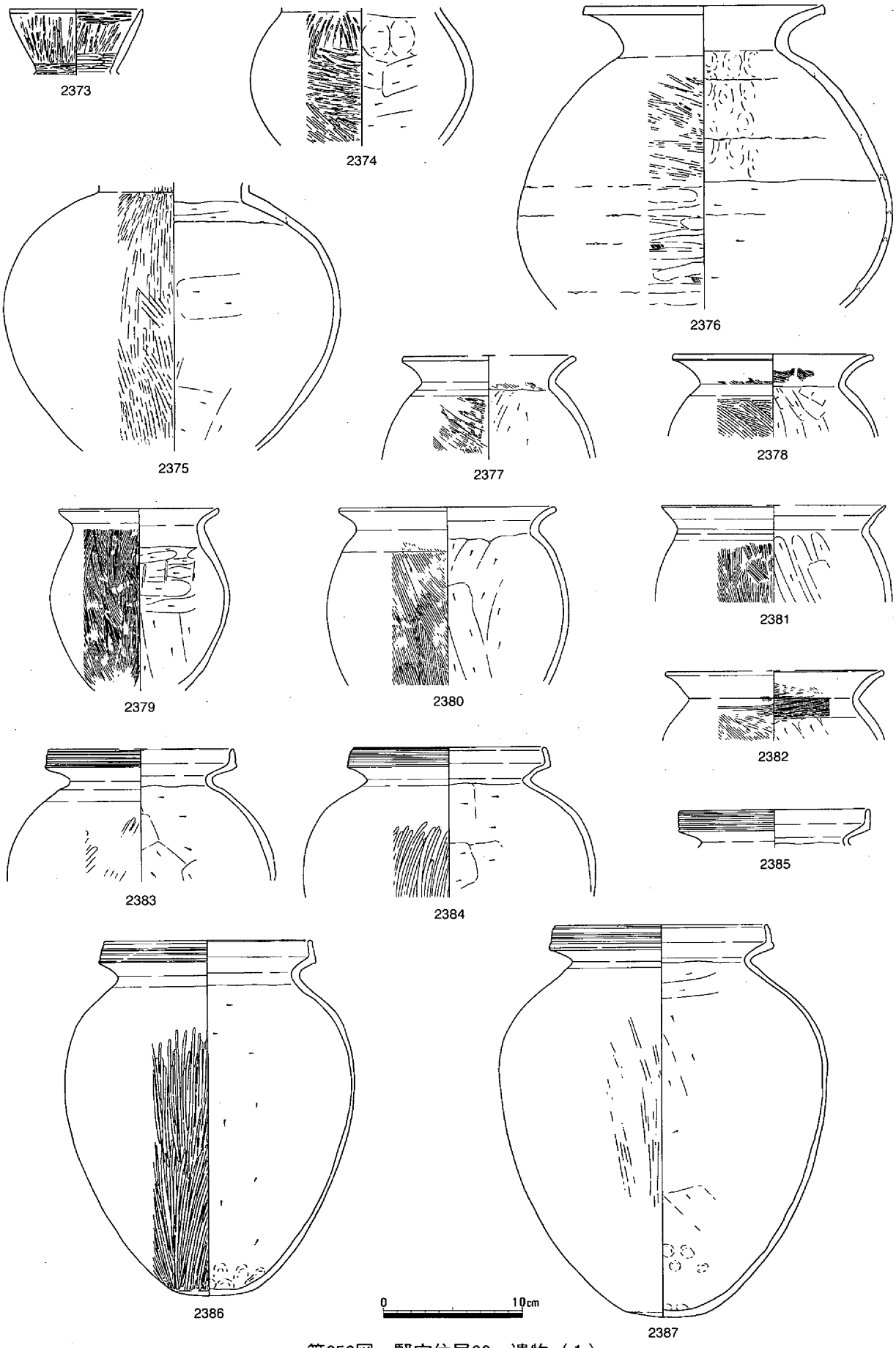


第650図　竪穴住居65（1/60）・遺物

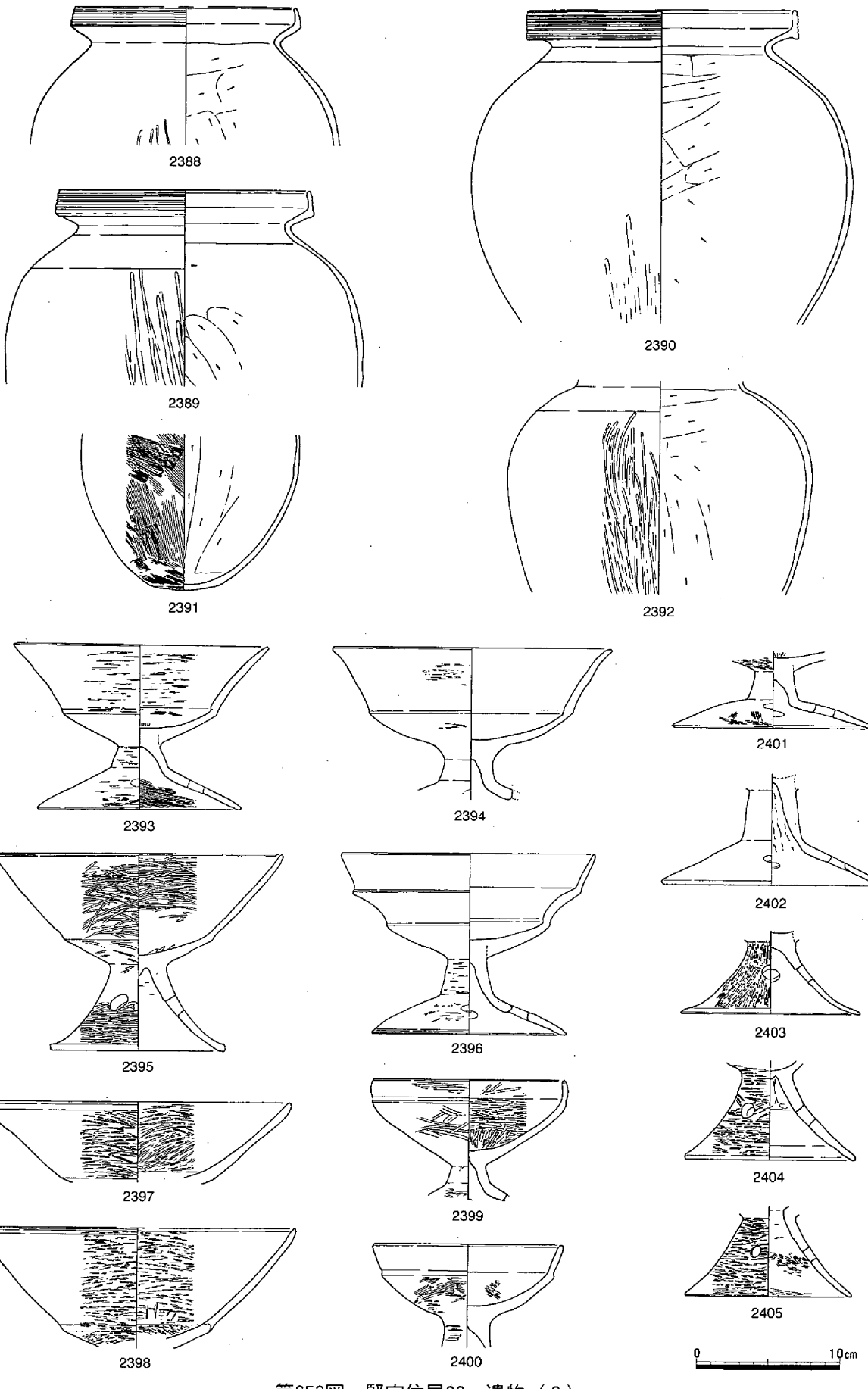


1　暗褐色微砂（土器を多く含む）
2　暗茶褐色微砂（灰・炭を含む）
3　暗褐灰色微砂（黄色土ブロックを含む）
4　黄褐色粘質微砂（黄色粘土ブロックを含む）

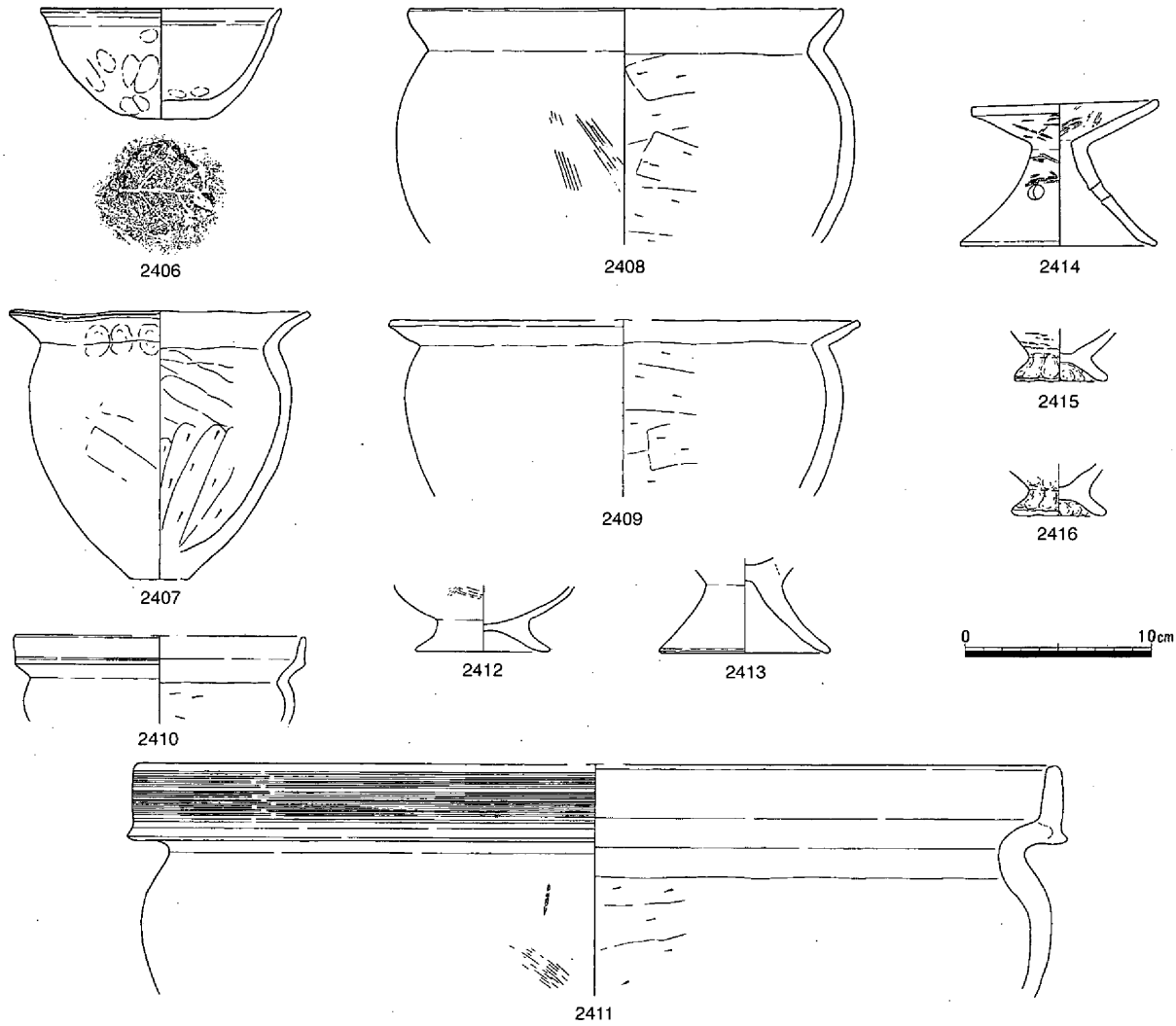
第651図　竪穴住居66（1/60）



第652図　竪穴住居66　遺物（１）



第653図　竪穴住居66　遺物（2）



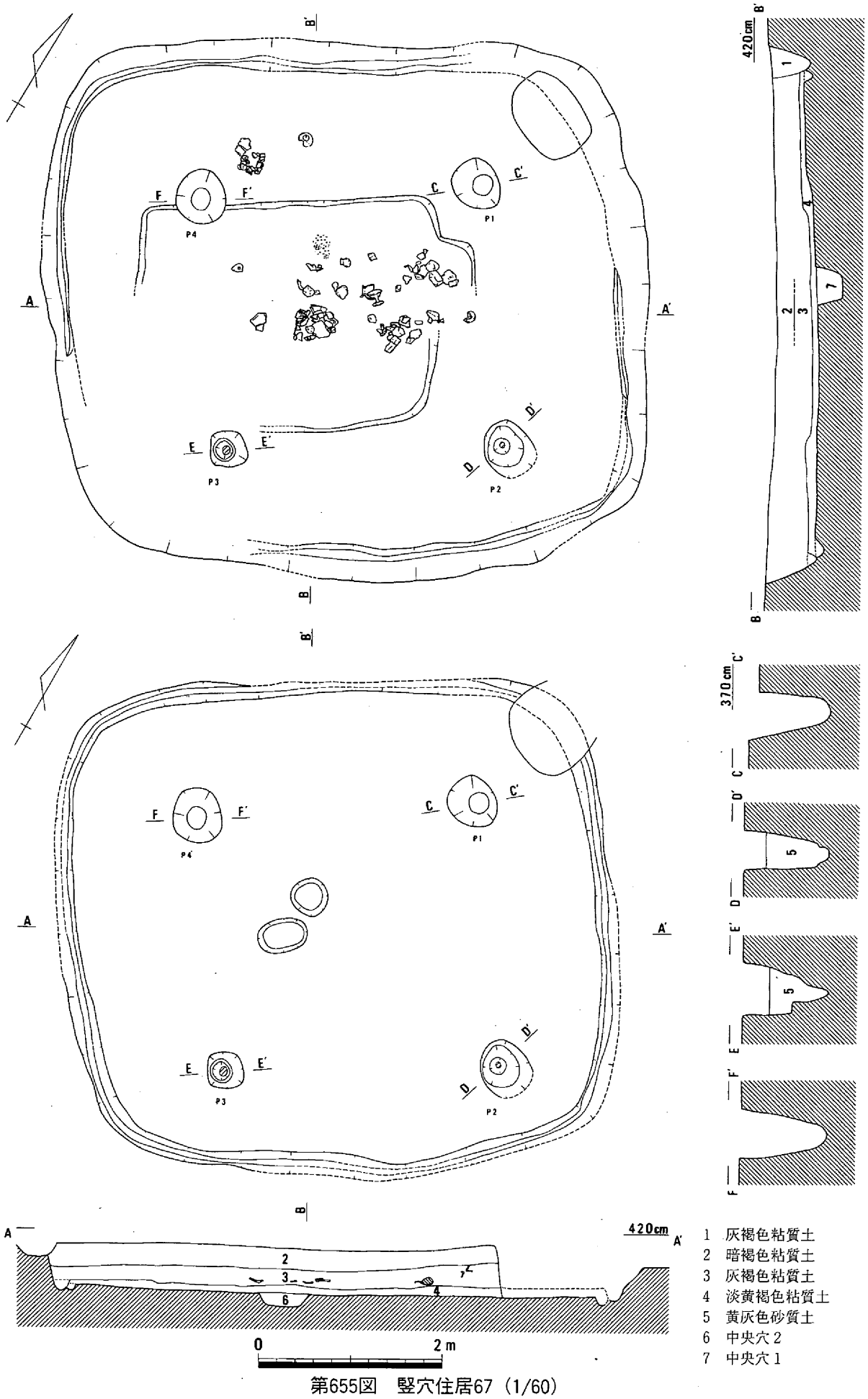
第654図　竪穴住居66　遺物（３）

竪穴住居67（第655～660図、写真24－１、91、92）

竪穴住居64の東に接して位置する。建て替えがあり、上層住居67ｂと下層住居67ａに分かれる。

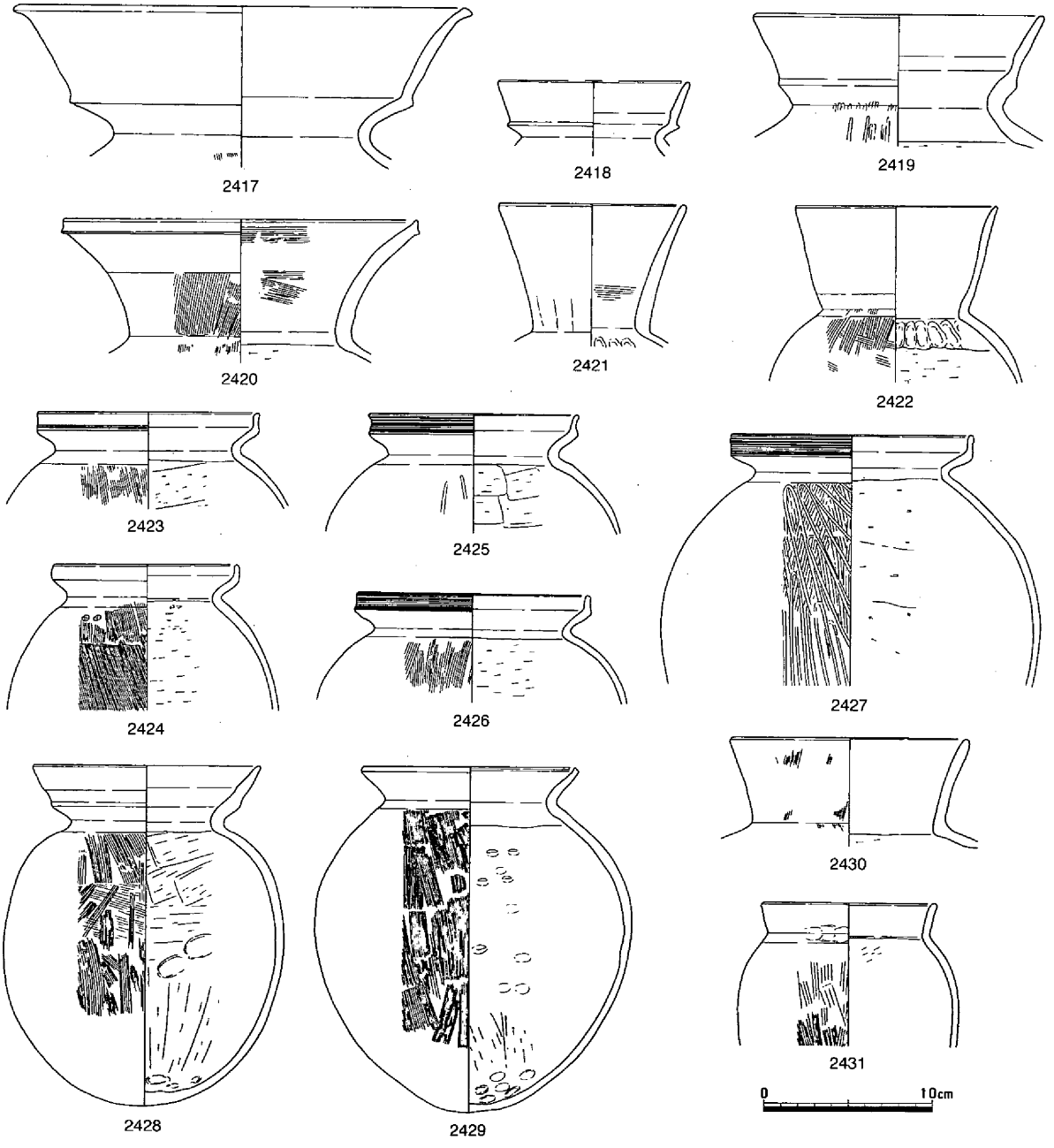
67ｂ住居は平面形が隅丸方形を呈し、規模は長辺が620cm、短辺で560cmを測る。主柱穴４本と住居の各辺に沿って高床部をもつ。この高床部は東辺に凹部があり、幅は150～200cm、北・南辺では150cmを測る。西辺では0.9ｍと狭いが、検出状況がやや曖昧であったことから本来Ｐ３・４の内側を結ぶ線あたりに段が形成されていたかもしれない。柱穴は掘り方の直径が40～60cm、深さは90cm程である。67ａ住居は平面形が隅丸方形を呈し、規模は67ｂ住居より一回り小さく長辺が590cmで、短辺は540cmを測る。また、床面は高床部をもたず、柱穴は共有していたと思われる。それ以外では、中央付近には深さが15cm程の浅い小土壙２基が存在していたが焼土面などは存在しなかった。

67ｂ住居の遺物をみると、壺には二重口縁をもつ2417～2419と、口縁部が強く外反し端部が拡張する2420や、直口壺2421・2422がある。甕では口縁部を上方に拡張させる2423～2428のうち、櫛描沈線を施す2423・2425～2427と櫛描沈線を施さない2424がある。2428は扁球形の体部をもち、口縁部は鈍い稜をへて外上方にのびる二重口縁をなす。外面のハケは下1/3には及ばずナデて終わる。内面はヘ

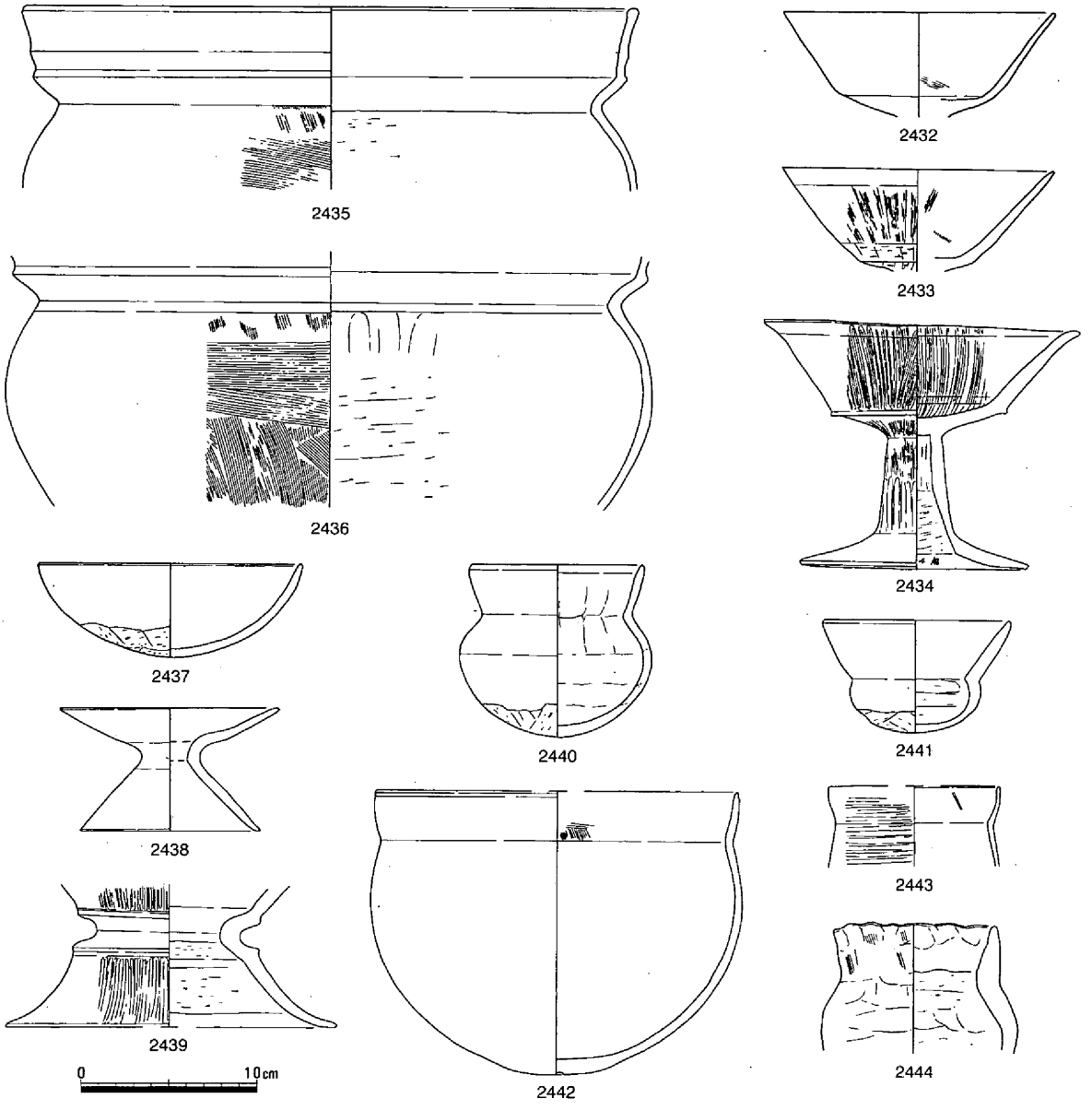


第655図　竪穴住居67（1/60）

ラケズリで、底面に指頭圧痕がみられる。2429は四国産の甕で、口縁端部を上方に肥厚させる。外底面はナデて終わる。内面は指押さえが顕著であるが底部周囲にはヘラケズリを施す。さらに、口縁部が外反して長く、端部は丸く終わる2430や短く外上方に立つ口縁部をもつ小形の甕2431もある。鉢は大形で半球形の体部に二重口縁がつく2435・2436がある。高杯2432～2434では、口縁部が鈍い稜をなして外傾し、端部が丸い2432・2433と、杯底部と口縁部の境が突線をなし、外反する口縁部をなす2434がある。このうち2433では杯部の外底面あたりをヘラケズリ、それより上にヘラミガキを施す。小形の鉢2437は底から内湾気味に立ち、端部は丸く終わる。小形器台2438の受部は浅く外傾し、脚部は中空でハの字に直線的に開く。2439は鼓形器台で外面にはヘラミガキ、底部内面にはヘラケズリを施す。小形丸底壺では球形の体部にくの字にのびる口縁部をもつ2440と半球形体部をもち外傾する口



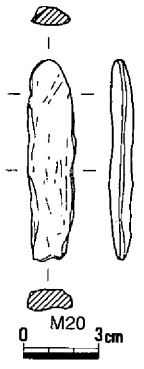
第656図　竪穴住居67ｂ　遺物（１）



第657図　竪穴住居67ｂ　遺物（２）

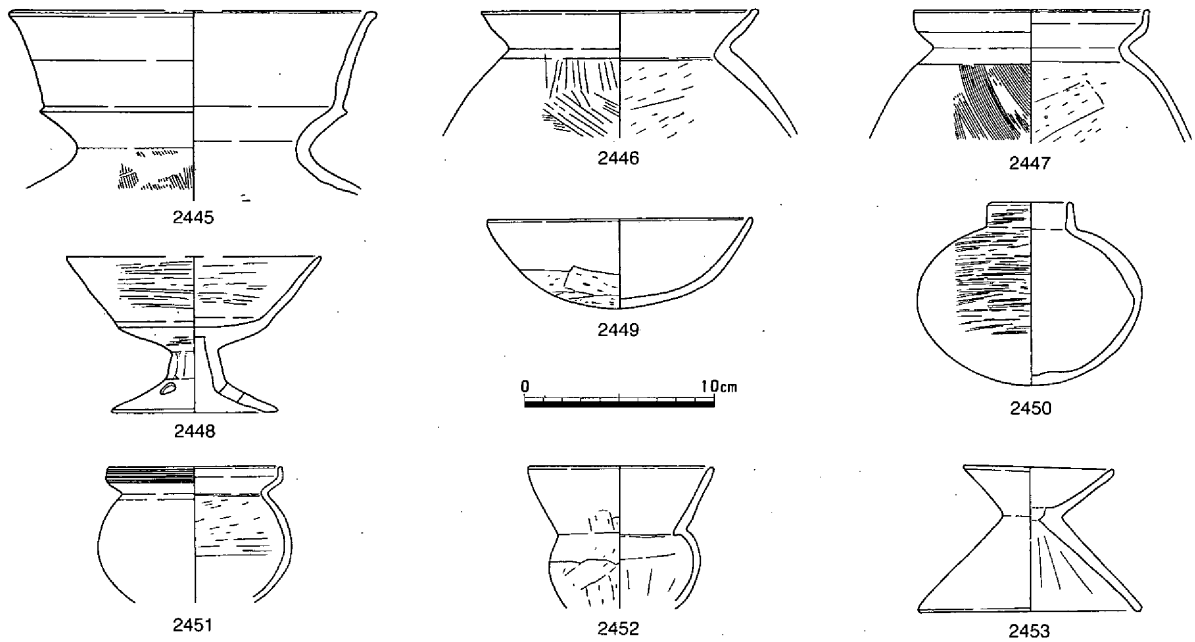
縁部が体部より大きい2441がある。2442は、砂粒を多く含む粗製の鉢で、顕著な調整がない。師楽系土師器であろう。2443は薄手小型の製塩土器で、外面にはタタキを施す。2444は手捏ね土器である。M20は鉈ないしは鑿と思われる。

2445～2453は67ａ住居にともなう。2445は二重口縁をもつ大形の壺である。甕には口縁部が短く外反し、端部をわずかに拡張させて平坦な面をなす2446と口縁部が上方に拡張する2447がある。2447は口縁部に櫛描沈線を施さない。壺2450は球形の体部に短く直立する口縁部がつく。内外面をヘラで磨き、胎土は水簸している。小形甕2451は球形の体部をもち、口縁部に櫛描沈線を施す。小形丸底壺2352では口縁部が全体の半分をしめ、体部外面下半にヘラケズリを施す。小形器台2353は受部が短く外上方にのび、端部は丸い。

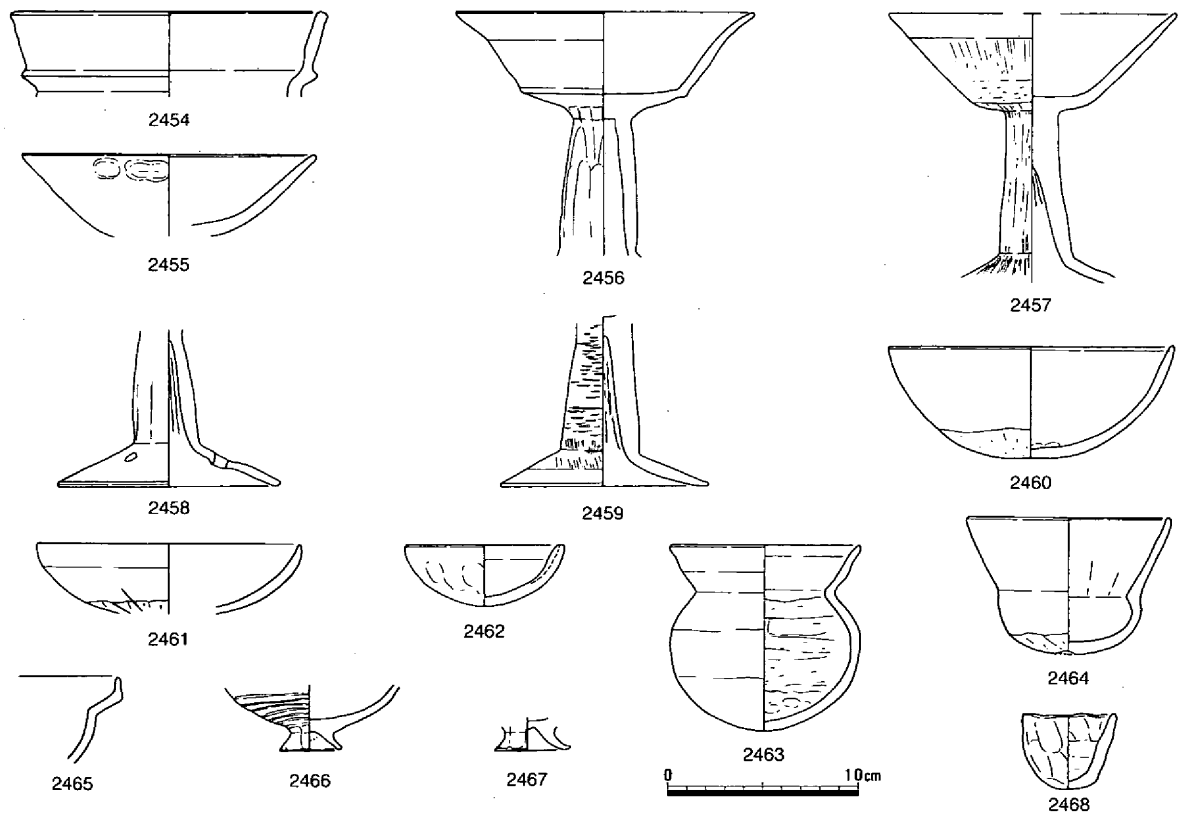


第658図　竪穴住居67
遺物

2454～2468は住居確認トレンチからの出土である。高杯2455～2459のうち、2457は杯底部周囲にケズリを施し、口縁部外面にヘラミガキを施す。小形の鉢では体部の深い2460と浅い2461がある。2465は小型有段鉢である。2466は製塩土器で椀状の体部にタタキを施す。2467も製塩土器の脚部である。また、2462・2468は手捏ね土器である。時期は、古・前・Ⅱでも新相を呈する。　（弘田）



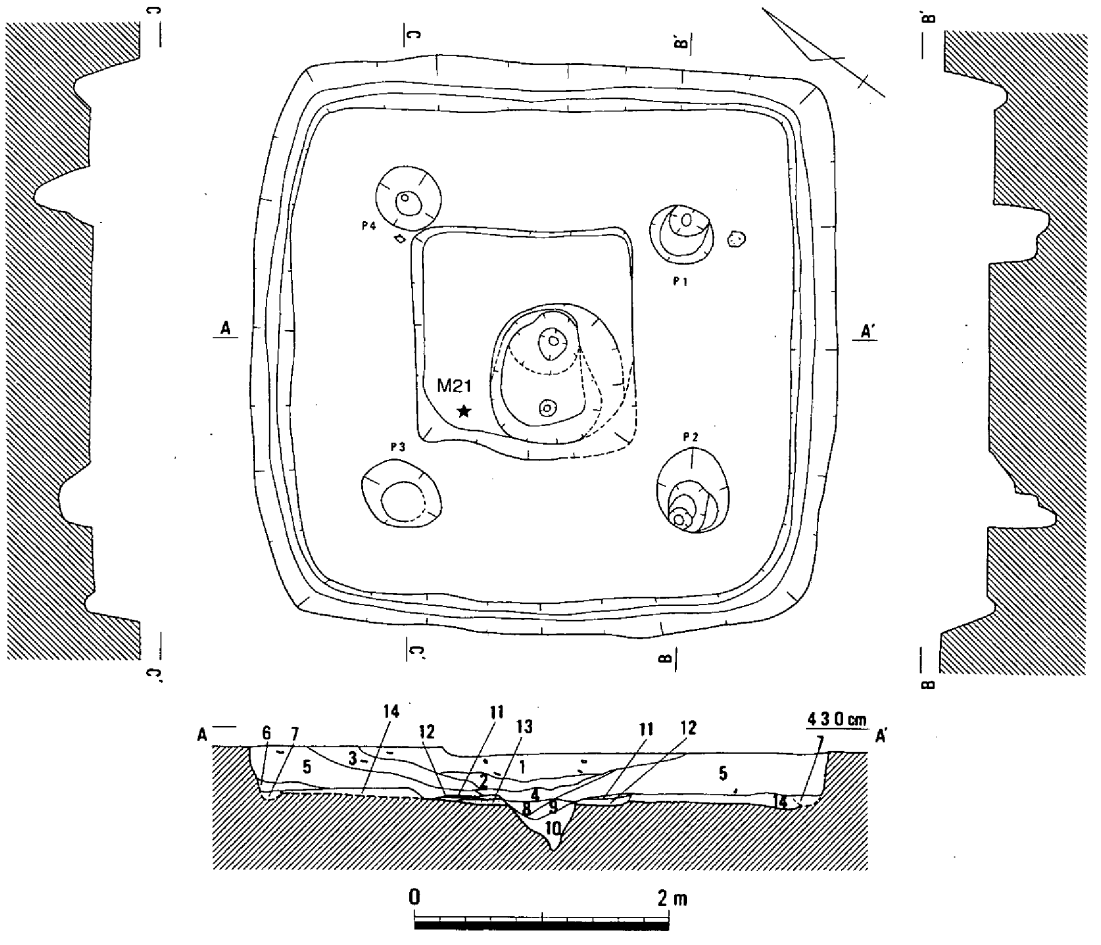
第659図　竪穴住居67ａ　遺物



第660図　竪穴住居67ａ・ｂ　遺物

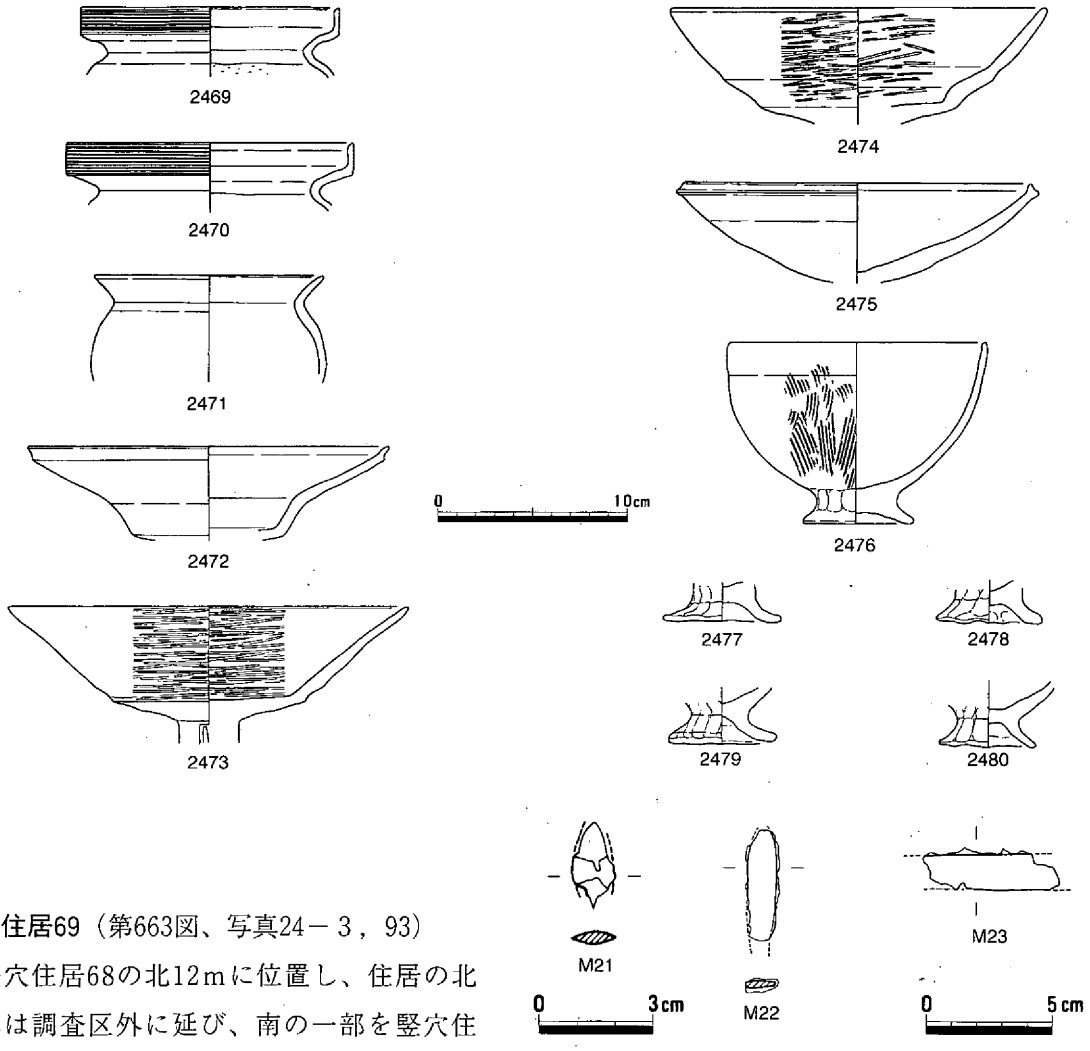
竪穴住居68（第661・662図、写真24－２、93）

竪穴住居67の北15ｍに位置し、後述する古墳時代後半竪穴住居102下部から検出された。平面は方形を呈し、主柱は４本からなり主軸はN-55°-Eを向く。規模は435×428cm、床面積は17.2㎡、床面の標高は368cmを測る。柱穴は四隅の対角線上に配置され、主柱間距離は218～242cmを測る。床面には壁に沿って幅110～130cm、高さ約10cmのベッドが全周する。床面中央南寄りには径約100cm、深さ40cmの中央穴が掘り込まれており、中には炭・焼土を含まない砂質土が埋まっていた。なお、最深部は中央に位置する。遺物は金属器・土器など大半が覆土中から出土しているが、高杯2473はＰ１、鉢2476はＰ４から出土した。M21は銅鏃で、M22・23は鉄製の鉇および刀子と思われる。甕は口縁拡張面に櫛描沈線文の施された2469・2470と「く」の字状に開く口縁の2471が出土している。また、高杯2472～2474は広く平坦な杯底部に斜め外方に延びる口縁をもち、2474の段は不明瞭になっている。鉢2475は混入の可能性がある。他に製塩土器2477～2480も出土している。土器の特徴から当住居は古・前・Ⅰ～Ⅱに埋没したものと考えられる。　（江見）



1　暗褐茶色粘質砂（下面に炭を含む）
2　暗褐茶色粘質砂（橙赤色焼土ブロックを含む）
3　褐茶色粘質砂
4　暗灰茶色粘質砂
5　灰茶色粘質砂
6　灰茶色粘質砂
7　淡黄茶色粘質砂
8　灰褐色粘質砂
9　灰褐色粘質砂（黄茶色ブロックを含む）
10　灰褐色砂
11　炭
12　黄灰色粘質砂
13　炭
14　淡黄茶色粘質土

第661図　竪穴住居68（1/60）



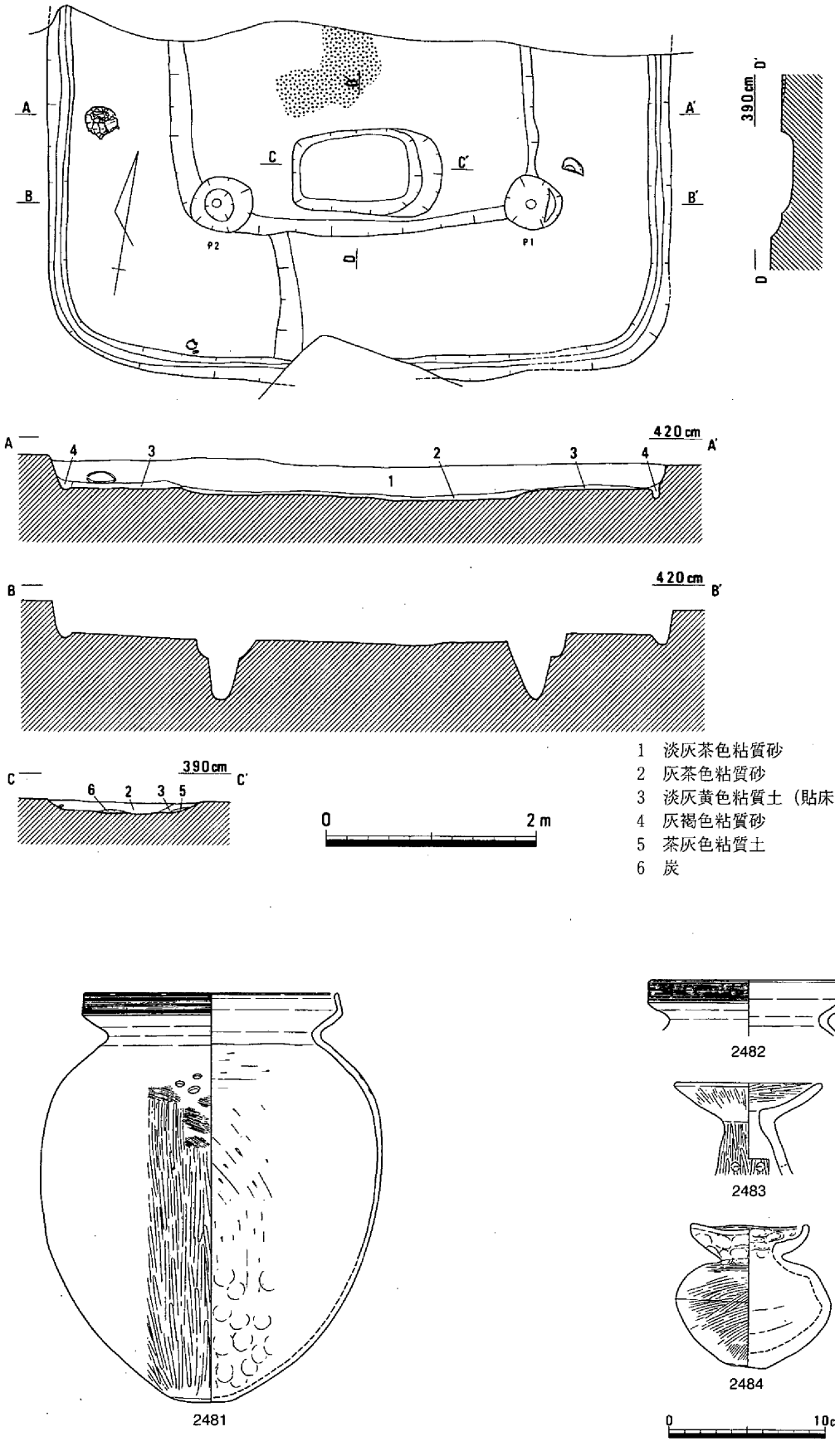
第662図　竪穴住居68　遺物

竪穴住居69（第663図、写真24－３，93）

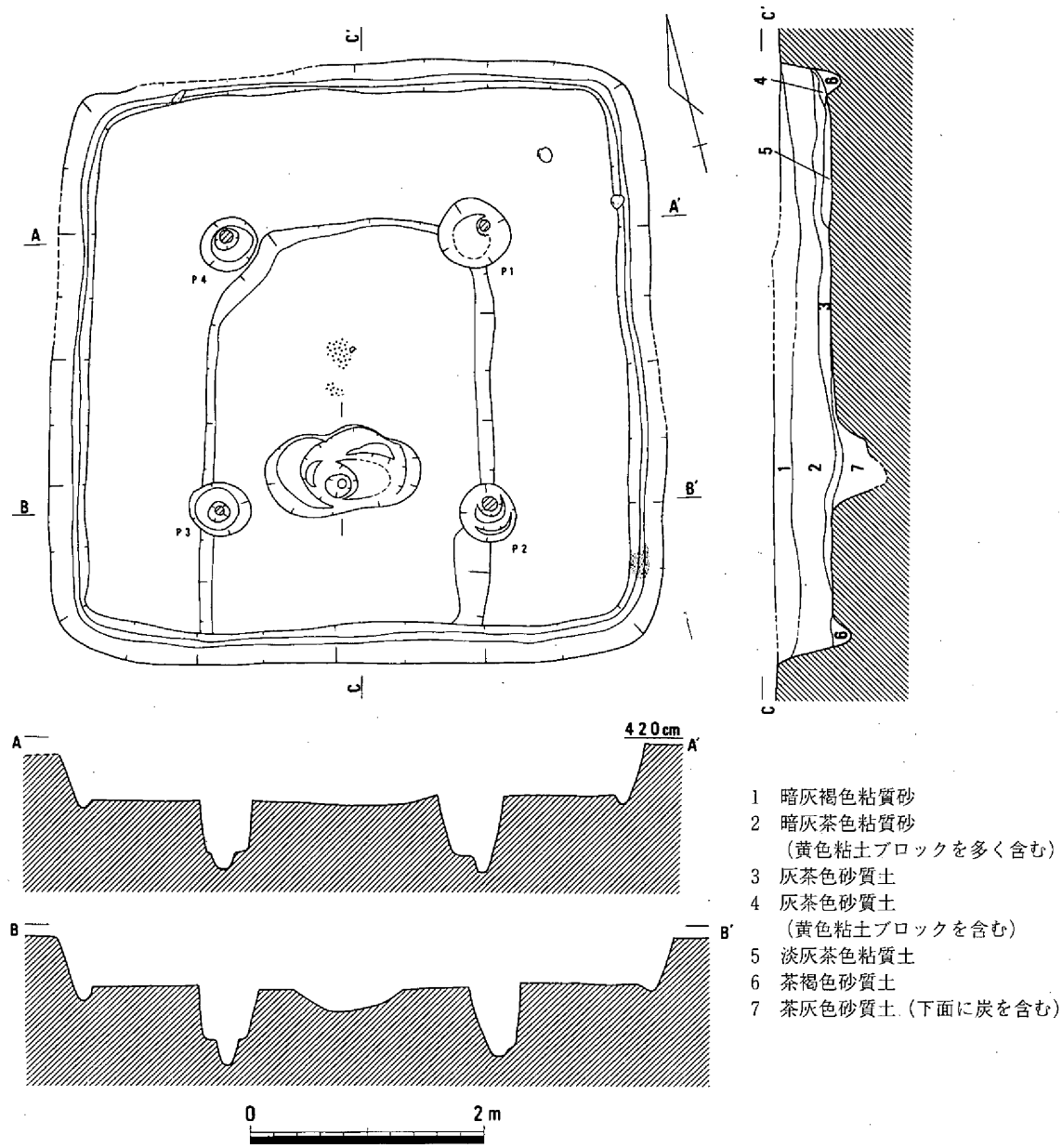
竪穴住居68の北12ｍに位置し、住居の北半部は調査区外に延び、南の一部を竪穴住居70に切られて検出された。平面方形を呈し、主柱は４本からなると考えられる。規模は残存する南半部から推定すれば床面積約30㎡の比較的大きな住居で、主柱間距離は300cmを測る。壁の周囲には幅約100cm、高さ約15cmのベッドが巡り、特に南辺では西から東に数cmの傾斜する箇所が検出された。床面中央南寄りからは140×80cm、深さ10cmの平面長方形を呈す浅い土壙が検出され、底部中央付近には薄い炭層が貼り付いていた。また、床面中央部からは被熱面が検出されている。遺物は甕2481が西部床面、手捏ね壺2484は南部覆土、他は覆土から出土した。甕の特徴から当住居は古・前・Ⅰに廃棄されたものと考えられる。（江見）

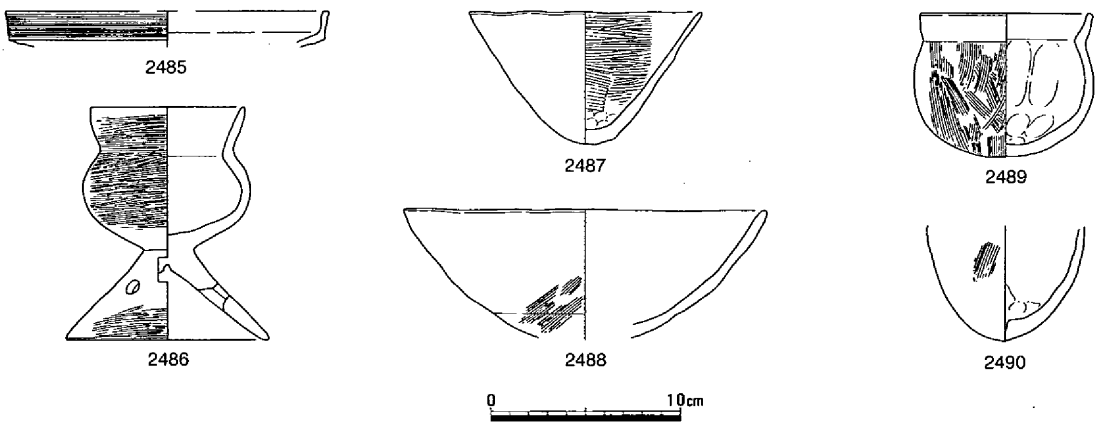
竪穴住居70（第664・665図、写真93）

竪穴住居69の南に接して検出された。平面方形を呈し、主柱は４本からなり主軸はN-15°-Eを向く。規模は一辺約480cm、床面積22.3㎡、床面の標高362cmを測る。主柱間距離は221～235cmを測る。壁の周囲には幅約120cm、高さ約５cmのベッドが「コ」字状に巡る。床面中央南寄りには平面楕円形の幾度か掘り直された、中央穴が配置され、その北側床面からは２ケ所の被熱面が検出された。遺物は南東隅から粘土塊をはじめ、北東床面から鉢2489が、他は覆土から出土した。Ｓ291は花崗岩製の叩き石である。甕2485・台付壺2486・小形鉢2487などの特徴から、当住居は古・前・Ⅰに廃棄されたものと考えられる。（江見）

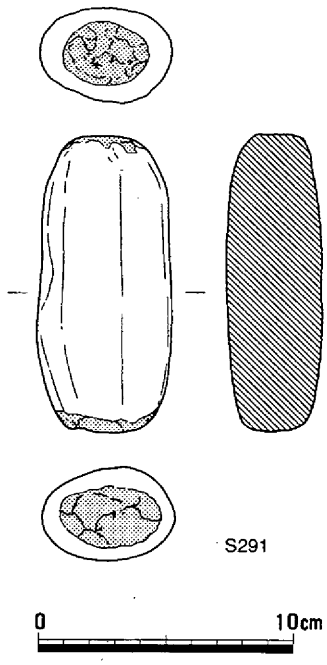


第663図　竪穴住居69（1/60）・遺物





第664図　竪穴住居70（1/60）・遺物（１）



第665図　竪穴住居70　遺物（２）

竪穴住居71（第666・667図）

竪穴住居67の東方10ｍに位置する、平面円形の住居である。主柱６本からなり、柱の建て替えが部分的になされている。規模は径約680cm、床面積34.1㎡、床面の標高は358cmを測る。主柱間距離は212～259cmを測る。壁の周囲には幅約100cm、高さ約10cmのベッドが巡り、とくに南部のＰ３～４間はベッドが幅150cmと広く、出入り口の可能性を想起させた。中央穴は径110cm、深さ30cmを測り埋土は炭を含む粘質土であった。また、この南から平面不整楕円形の土壙が検出された。130×80cm、深さ40cmの土壙には前者以上に多くの炭を含む粘質土層が堆積していた。なお、中央穴の南東、楕円形土壙との間に径30cmほどの被熱面が確認されている。遺物は中央穴から鉄鎌M24、東部ベッドから板状？M26が出土し、他は覆土中からのものである。壺2491は関西方面からの搬入品の可能性が高く、また、甕の特徴は古・前・Ⅰを示す。（江見）

竪穴住居72（第668図）

竪穴住居72は、第２微高地中央の南端に位置する。東西にのびる細長い調査区で一部が確認されただけで、全容は明らかでない。東側の壁体に沿って高床部が認められるが、南側へはのびない。円形の住居になる可能性がある。鉢2494、台付鉢2495が出土しているが、この他に図示していないものに口縁部にクシ描き沈線がめぐる甕などが出土しており、遺構の時期は弥・後・Ⅳ～古・前・Ⅰの間におさまると考え、ここに掲載した。また、鉄器片も出土している。（柴田）

竪穴住居73（第669図）

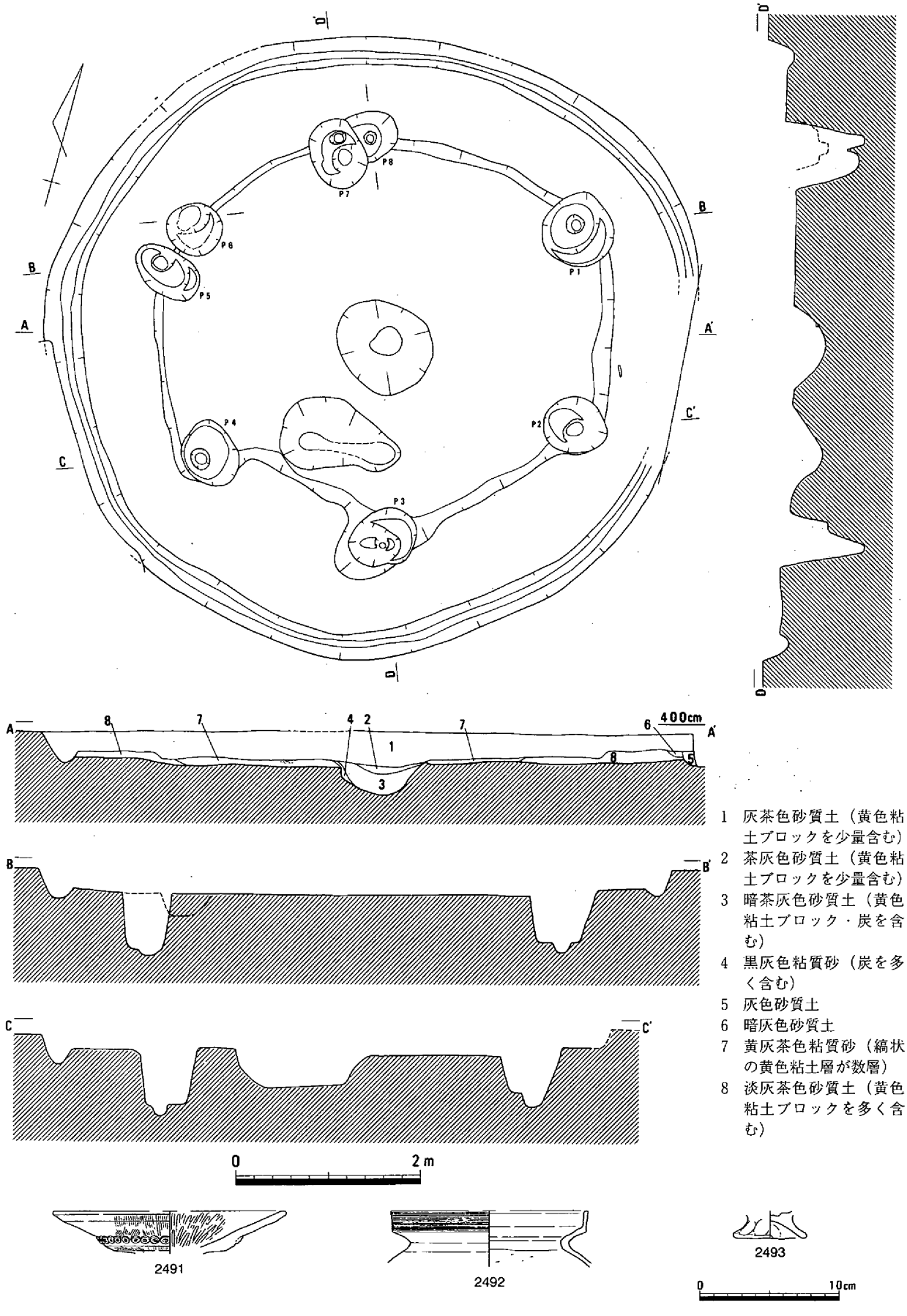
竪穴住居73は、竪穴住居72の東、第２微高地中央の南端に位置する。東西にのびる細長い調査区で一部が確認されただけで、全容は明らかでない。壁体溝からは、いびつな隅丸方形か円形の住居になる可能性がある。出土遺物は図示していないが、口縁部にクシ描き沈線がめぐる甕などがあり、遺構の時期は古・前・Ⅰにおさまると思われる。（柴田）

竪穴住居74（第670図）

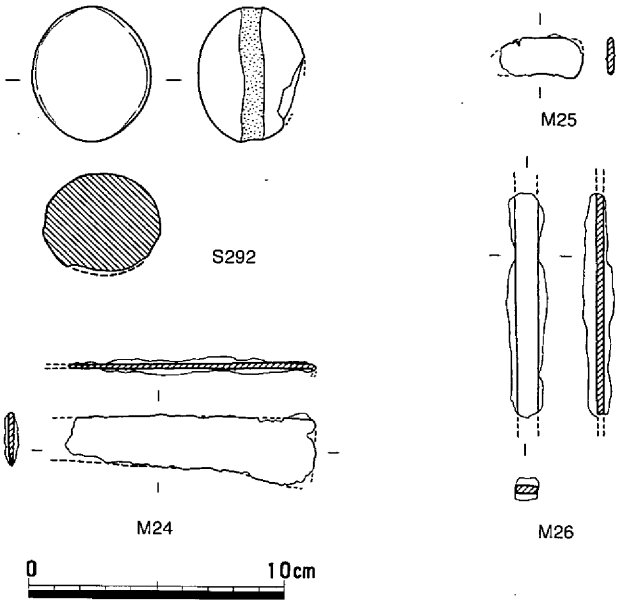
第３微高地の西端付近で検出され、大部分を河道で削り取られていることから、北東側の一部を残すにすぎない。周囲には壁体溝があり、直角に折れ曲がっていることから、平面形は方形を呈することが分かる。床面は平らである。残存する床面を精査したが、柱穴は検出できなかった。埋土中から土器片を検出しているが、図化できていない。時期は出土遺物から古・前に比定される。（正岡）

竪穴住居75（第671図）

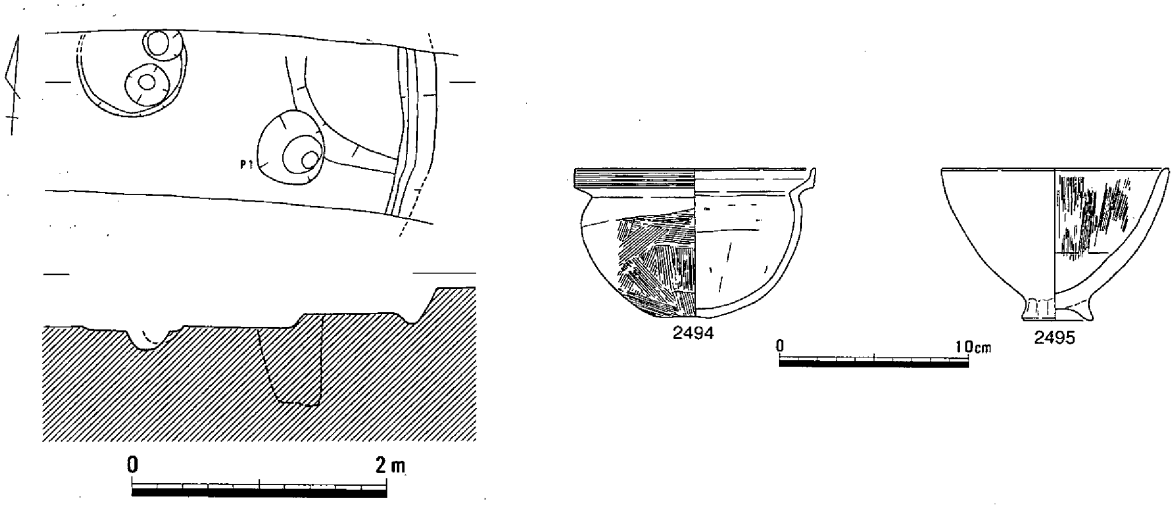
第３微高地の南東部に位置し、大部分は用地外へ広がる。北側の隅付近しか調査していないので、全容は分からないが、平面形は方形を呈する。床面は平坦で、北側の隅から２ｍくらい内側に入ったところで柱穴を１本検出した。この柱穴から北東側の壁まで細い溝があり、さらに北側のコーナーをへて、北西側の壁に沿う壁体溝へ続いている。床面付近の埋土中には、炭を多く含んでいる。埋土中から土器片を出土したが、図化できなかった。時期は出土遺物から古・前に比定される。（正岡）



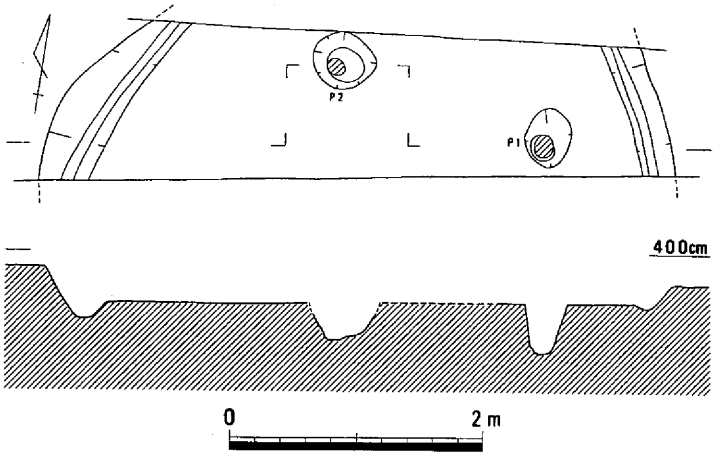
第666図　竪穴住居71（1/60）・遺物（１）



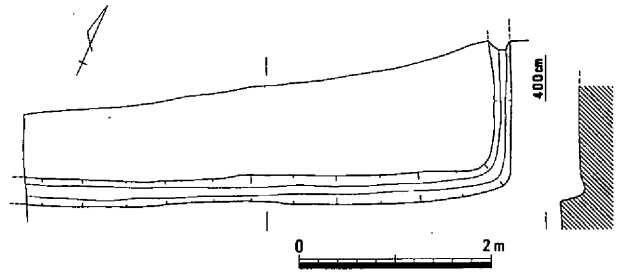
第667図　竪穴住居71　遺物（２）



第668図　竪穴住居72（1/60）・遺物



第669図　竪穴住居73（1/60）

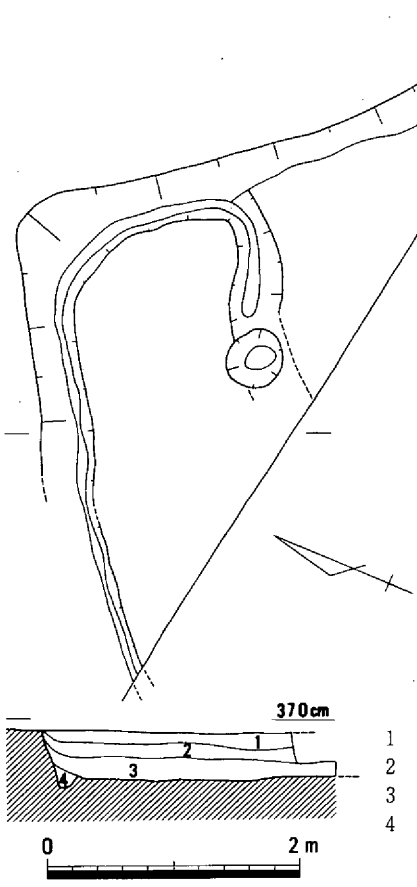


第670図　竪穴住居74（1/80）

竪穴住居76（第672図）

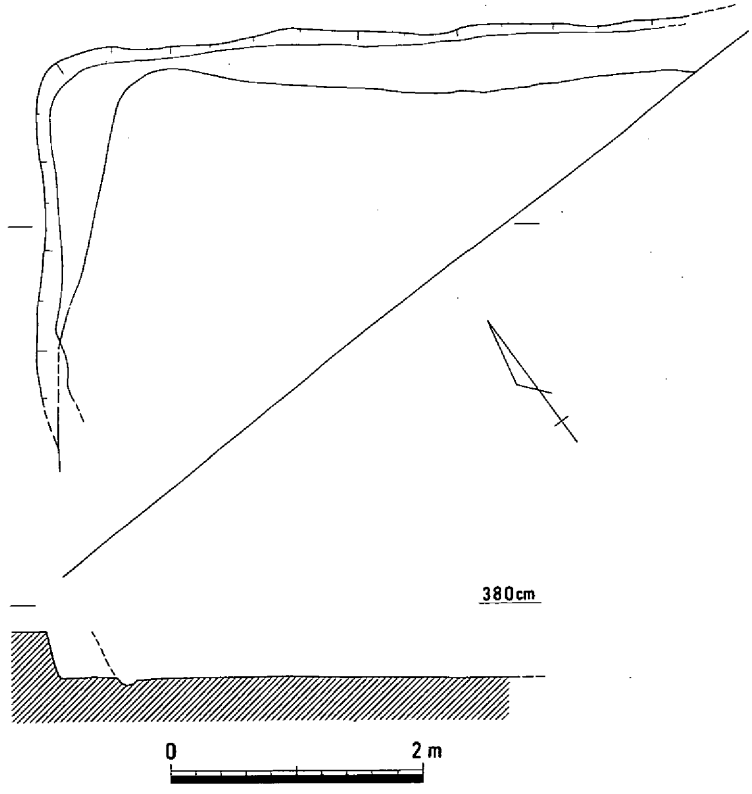
第３微高地の南東部にあり、竪穴住居75と重複している。竪穴住居75よりも少し大きいが、ほとんど重なっていることから、建て替え前のものと推定される。そのため詳細は分からないが、時期は古・前に比定される。

（正岡）



1　褐色粘質微砂
2　褐色微砂
3　灰褐色粘質土（炭を多く含む）
4　壁体溝

第671図　竪穴住居75（1/60）



第672図　竪穴住居76（1/60）

（3）土壙

土壙313（第673図）

竪穴住居60の北西方向２ｍの所に位置する土壙である。平面形態はほぼ正方形に近く、規模は辺長が120×130cmで、深さは18cmを測る。出土遺物としては、土師器の高杯2496がある。深い杯部であり、杯底部から緩く屈曲したのち直線的に外上方にのびる。口縁部は端部を丸く収める。

この土壙の時期は、古・前・Ⅰである。（弘田）

土壙314（第674図、写真25－１）

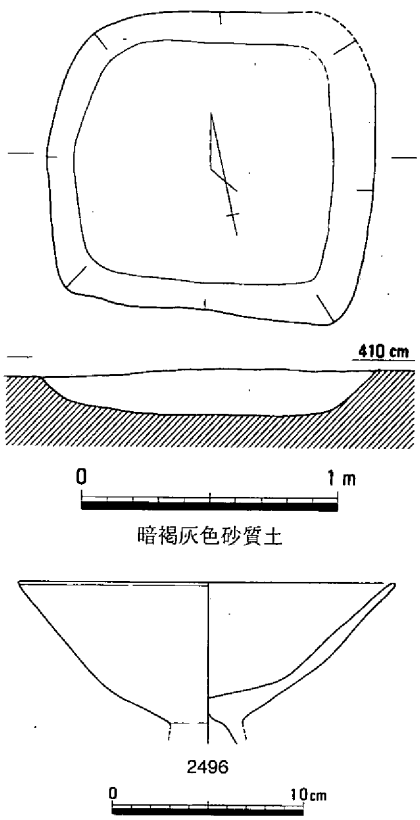
竪穴住居59の南10ｍに位置する平面楕円形の土壙である。規模は76×61cm、深さ21cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は茶灰色粘質土であった。遺物は少なく僅かに甕・高杯片が出土するにとどまった。甕2497は内傾して立ち上がる口縁拡張面に櫛描沈線文が施されることから、当土壙は古・前・Ⅰ～Ⅱにかけて廃棄されたものと判断される。（江見）

土壙315（第675図）

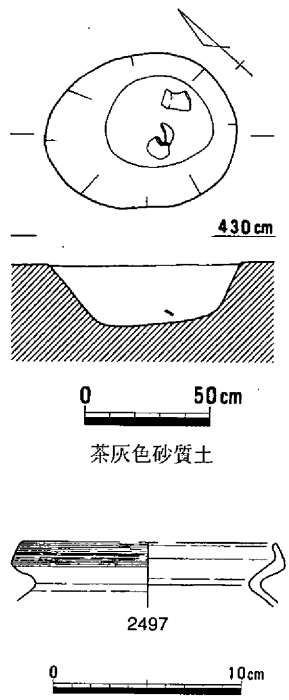
土壙314の東５ｍから検出された平面不整方形を呈し、主軸がほぼ東西に向く土壙である。規模は123×88cm、深さ17cmを測る。断面皿状を呈し埋土は炭を僅かに含む茶灰色砂質土であった。遺物は少なく甕片のみの出土であった。櫛描沈線をもつ2498の拡張面は下方に摘み出され、2499は外反する口縁に端部は面をもつ。当土壙は古・前・Ⅰに廃棄されたものと考えられる。（江見）

土壙316（第676図）

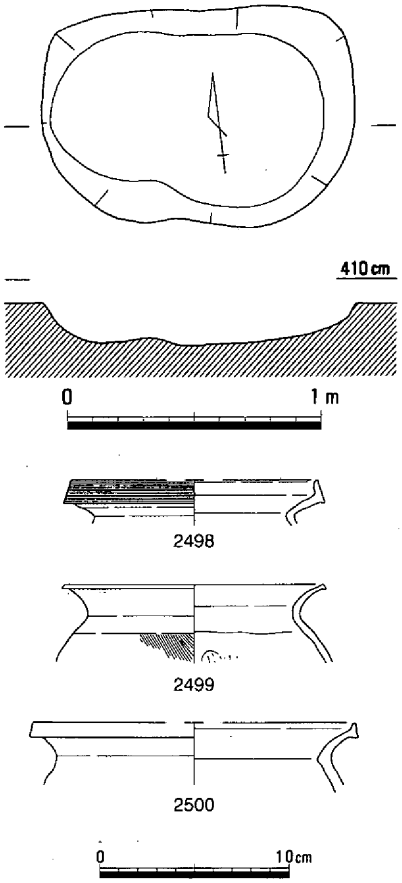
竪穴住居71の北数ｍから検出された平面楕円形を呈し、主軸が南北に向く土壙である。規模は



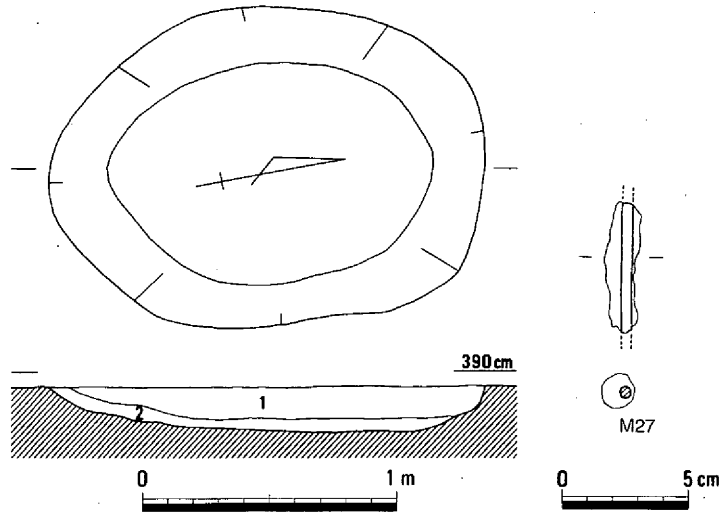
第673図　土壙313（1/30）・遺物



第674図　土壙314（1/30）・遺物



第675図　土壙315（1/30）・遺物



1　暗灰褐色粘質砂
2　灰褐色粘質砂

第676図　土壙316（1/30）・遺物

172×126cm、深さ18cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は２層の粘質砂からなる。遺物は土器細片と鉄鏃？M27が出土している。錆に大きく覆われていたが４㎜角の残存長約５cm、重量12.4ｇを測る。土器の特徴から古・前の範疇の土壙と判断した。　（江見）

（４）柱穴

柱穴15（第677図）

第２微高地の北東端に位置する。東西にのびる細長い調査区で、遺構の北半分が検出された。平面は、径100cm程度の円形である。壺2501は、口頸部が「く」字状に屈曲し、口縁端部は下方にわずかに肥厚する。肩はやや張っている。　（柴田）

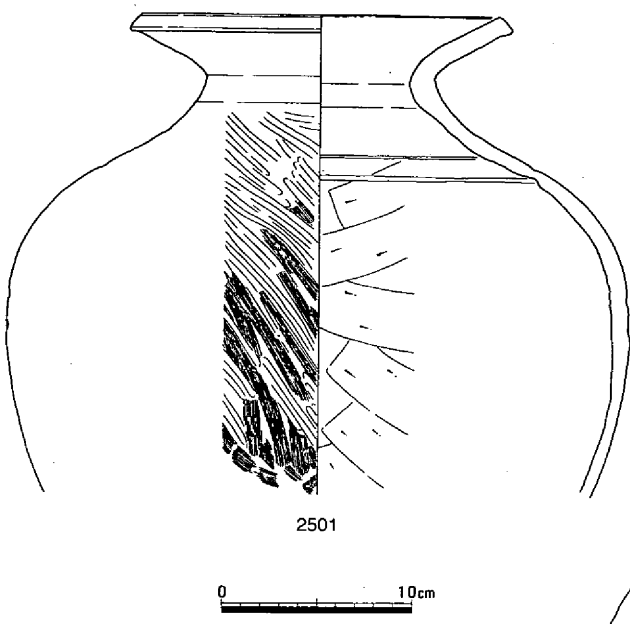
柱穴16（第678図、写真93）

第２微高地の北東端に位置する。東西にのびる細長い調査区で検出された。平面は、45×38cmの楕円形で、径20cmの円形の柱痕跡が確認されている。壺2502は、口縁部が外反しながらのびる。胴部は球形であるが、平底である。内面上半の調整はハケメが行われている。　（柴田）

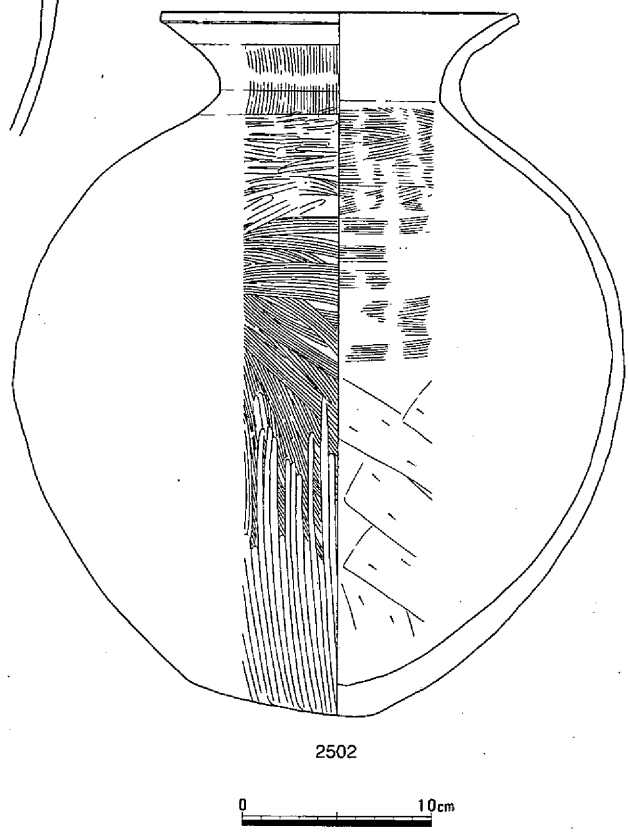
（５）溝

溝19（第679図、写真25－２）

N23区、市道西側の調査区の東端で検出された。低位部と微高地との境界に沿って流れ、北端部では微高地へ入り込んでいた。全長の中央付近では明瞭に検出することができず、第321・631図では少し降った時代の窪みを図示しているので不連続になっている。溝の規模は、北半部では幅が350cmあり、深さは微高地部で92cm、低位部で56cmを測り、南半部では幅が180cm、深さは45cmであった。二



第677図　柱穴15　遺物



第678図　柱穴16　遺物

段構造で中央部が細く落ち込んでいた。北半では二段目は中央にあったが、南半では西に片寄っていた。微高地の南半から二段目が始まっているが、溝の底の高度では南端が中央部より高く、ほとんど流れはなかったのではないかと思われる。図示した遺物は土錘も含め、すべて古墳時代初頭のものであるが、溝そのものは弥生時代後期から存続していた可能性が高い。　（岡本）

溝20（第680図）

第２微高地調査区の北西端をかすめるようにして位置し、片方の肩口が検出できた。深さは、調査範囲で140cmを測る。この位置は、第２微高地の西端部にあたることから、低位部埋没の過程で掘削された溝で、第２低位部で検出した溝19と同一と思われる。遺物には、２重口縁の壺2513や最大径が肩部にあり、底部に向けてすぼまる体部をなす甕2514や、口縁部を上方に拡張させ、外面に櫛描文を施す甕2515・2516がある。

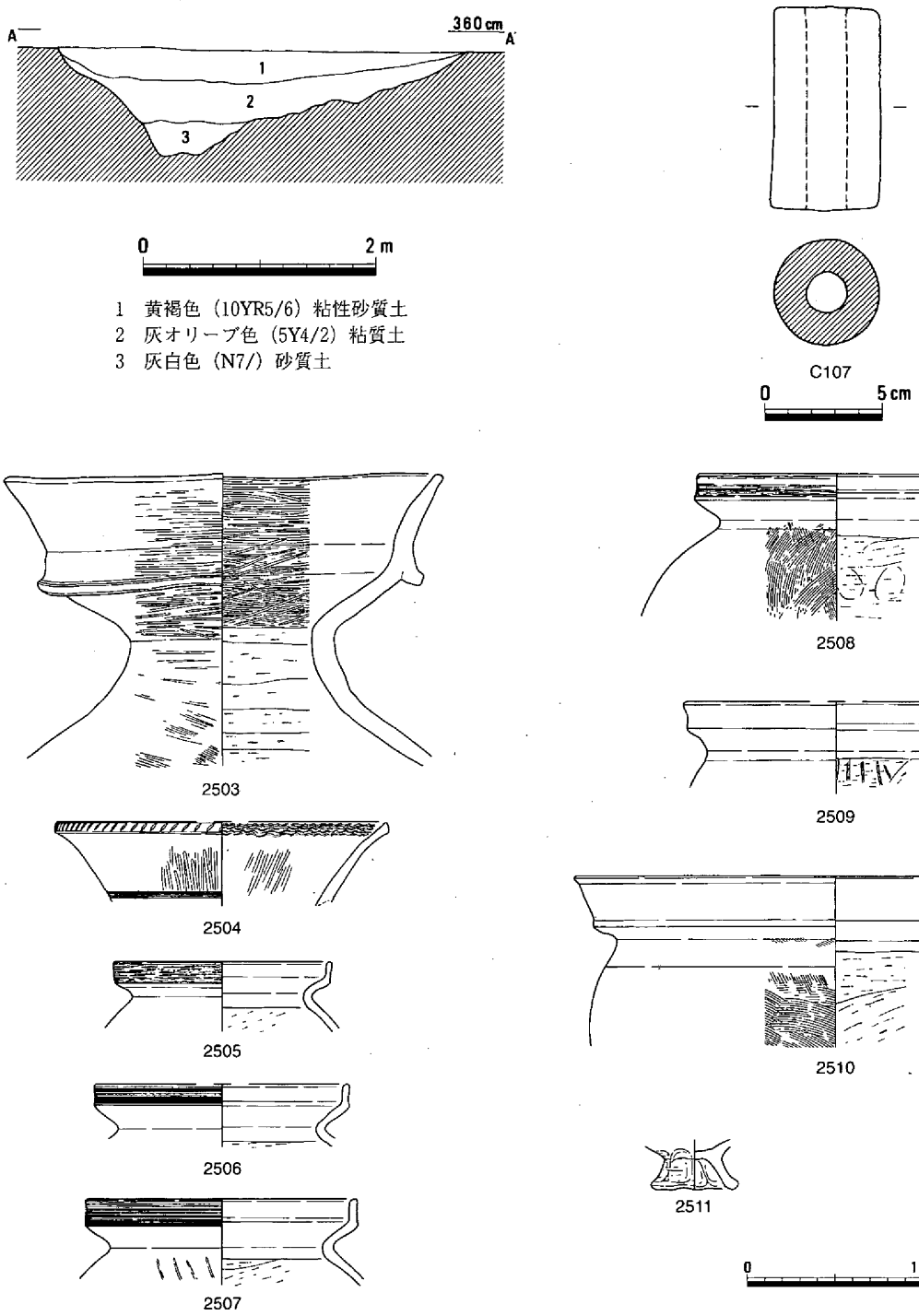
この溝の時期は、古・前・Ⅰである。　（弘田）

溝21（第681図）

第２微高地中央の北寄りに位置する。幅56cm、深さ７cmを測り、断面は皿状を呈する。溝23と繋がる可能性もある。出土遺物は土器の小片のみだが、古・前におさまると思われる。　（柴田）

溝22（第682図）

第２微高地のM24区中央南に位置する。幅35～80cmで、深さは10～30cm残存していた。長さは約270cm検出でき、調査区南端部から約８m北では、東方向にも分かれているのが確認できた。埋土は一定していなかった。遺物は土器片が少量出土しており、時期は古墳時代前期と考えている。集落を



第679図　溝19（1/60）・遺物

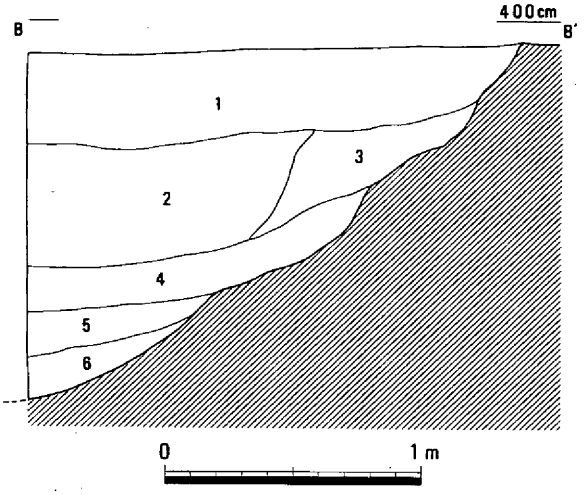
区画するための溝ではなかろうか。（平井）

溝23（第683図）

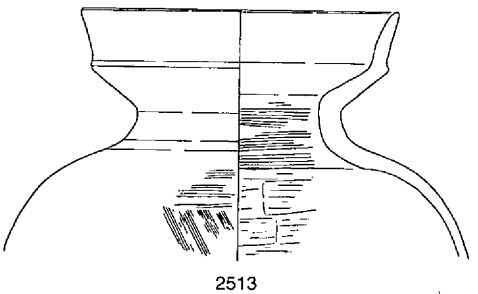
第２微高地中央の東寄りに位置し、溝21と繋がる可能性もある。出土遺物は土器の小片のみだが、弥・後・Ⅳの竪穴住居36を切っており、古・前におさまると思われる。（柴田）

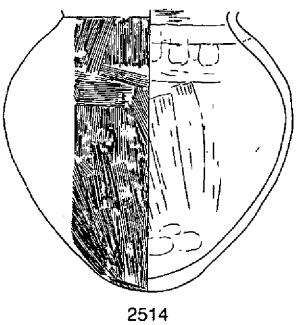
溝24（第684図、写真25－３、93）

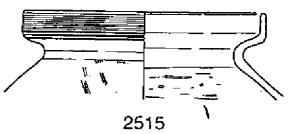
第２微高地の東端を南北に流走する溝である。溝25の東側で重なっており、それに切られている。

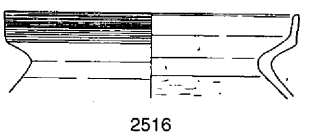


1　淡褐色粘質土
2　暗灰色粘質土
3　灰褐色砂質土
4　褐灰色砂質土
5　暗褐灰色砂質土
6　暗黄褐色砂質土

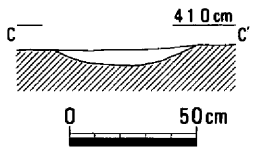








第680図　溝20（1/30）・遺物



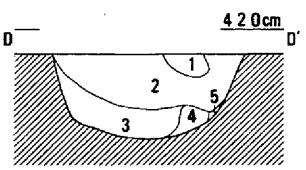
暗黄褐色粘質微砂

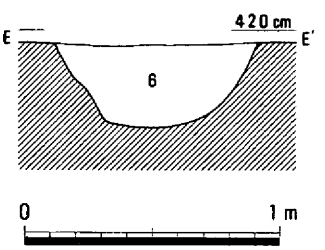
第681図　溝21（1/30）

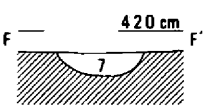
幅は50cm以上、深さは44cmを測り、断面は逆台形を呈する。

出土遺物には、壺2517・2521、甕2518、高杯2519、台付鉢2520、鉢2522、製塩土器2524～2526などがあるが、2523は混入である。

2517は口頸部の屈曲の稜が鈍く、口縁部は外反する。2519は脚柱部の径がやや細く、長脚である。2520の鉢部内面は、暗紋風のヘラミガキが行われている。切り合い関係などから遺構の時期は、古・前・Ⅰ～Ⅱと思われる。　（柴田）







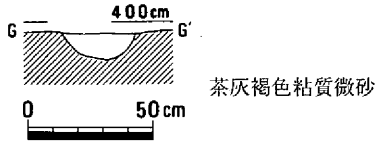
1　淡灰褐色粘質微砂
2　暗茶褐色粘質微砂
3　茶灰褐色粘質土
4　淡黄褐色粘質土
5　黄灰褐色粘質土
6　茶褐色粘質土（黄色ブロックを含む）
7　暗茶褐色粘質土

第682図　溝22（1/30）

溝25（第684～696図、写真25－３、93～97）

第２微高地の東端を南北に流走する溝である。溝24が東側で重なっており、それを切っている。幅は200cm前後で、深さは70～80cmを測る。断面は逆台形を基本とし、部分的に中央が低くなっているところもある。底面の海抜高は概ね320cm前後であるが、南端付近は10cm程度高くなっている。

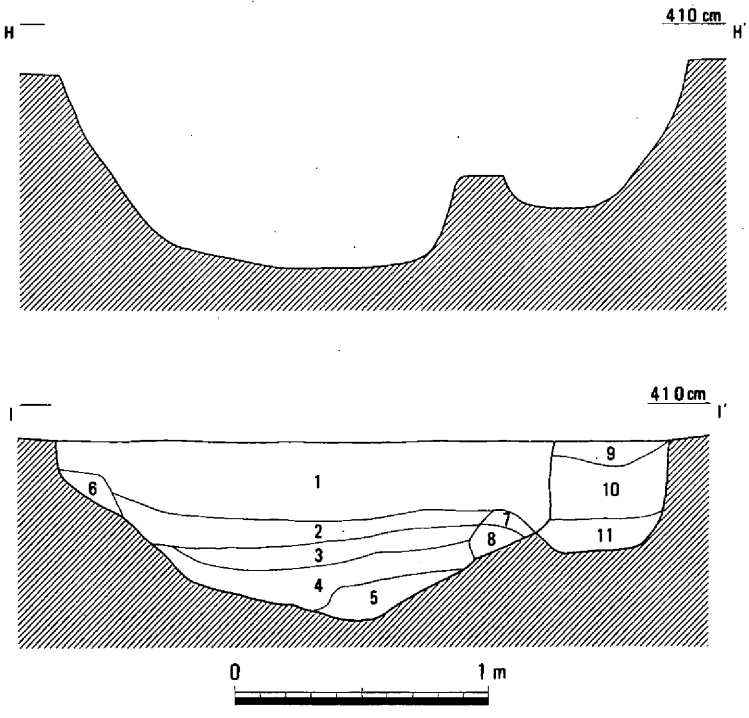
遺物は、土器を中心に多量に出土しており、上層と下層の遺物では時期差は認められなかった。器種は、壺・甕・高杯・（台付）鉢、小形丸底坩、手捏ね土器、手焙り形土器、製塩土器があり、非在地系のものも認められる。他に土錘Ｃ108～112、円板状土製品Ｃ113、管玉Ｓ293が出土している。図示していないが、鉄器片なども認められた。



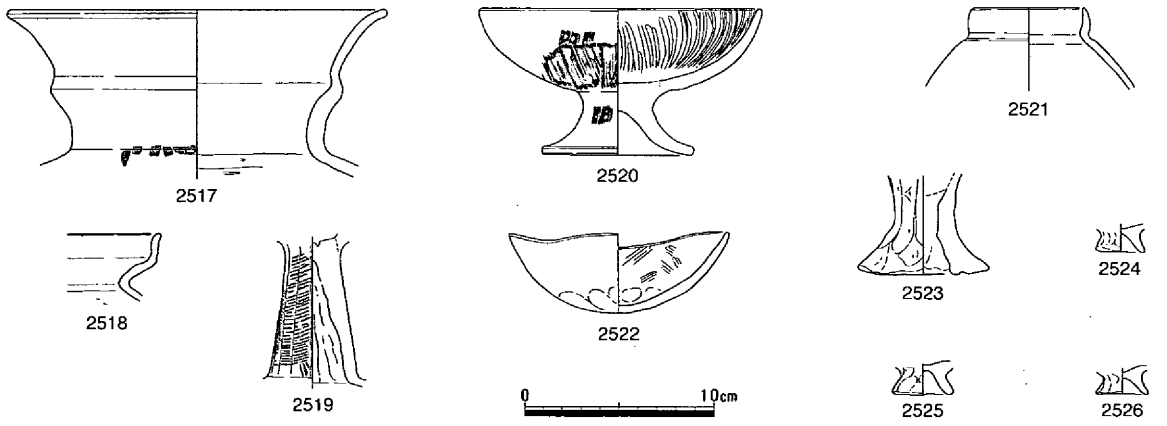
第683図　溝23（1/30）

出土遺物には、古・前・Ⅰ～Ⅲのものが多く認められ、上層から出土した須恵器の把手付椀2690は混入と思われる。このような遺物状況や遺構の切り合い関係などから、この溝は古・前・Ⅱ～Ⅲのもので、溝24が埋没した後に間もなく掘削され、須恵器が出現する頃にはほぼ埋没していたのではないかと思われる。

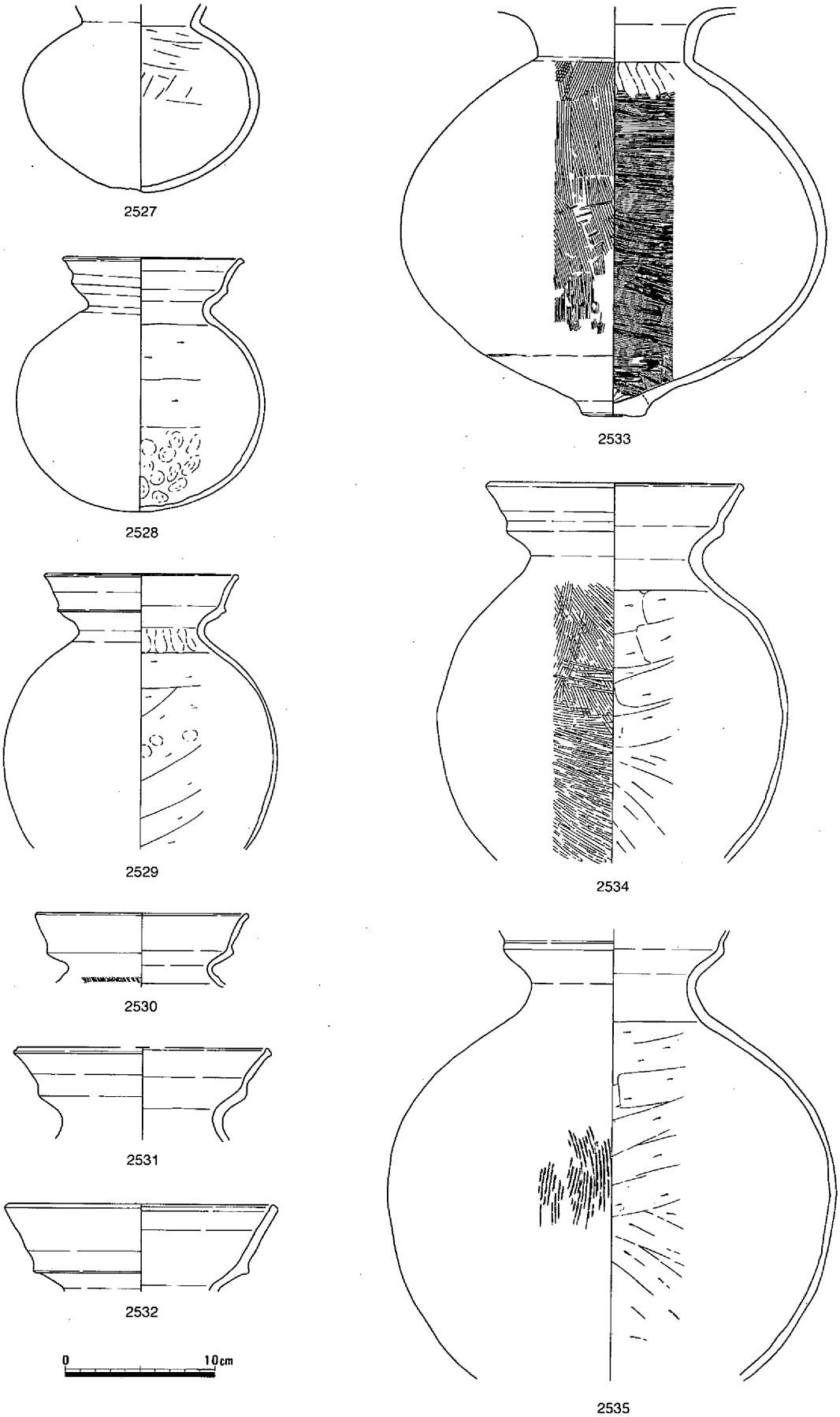
壺は二重口縁で体部が球形



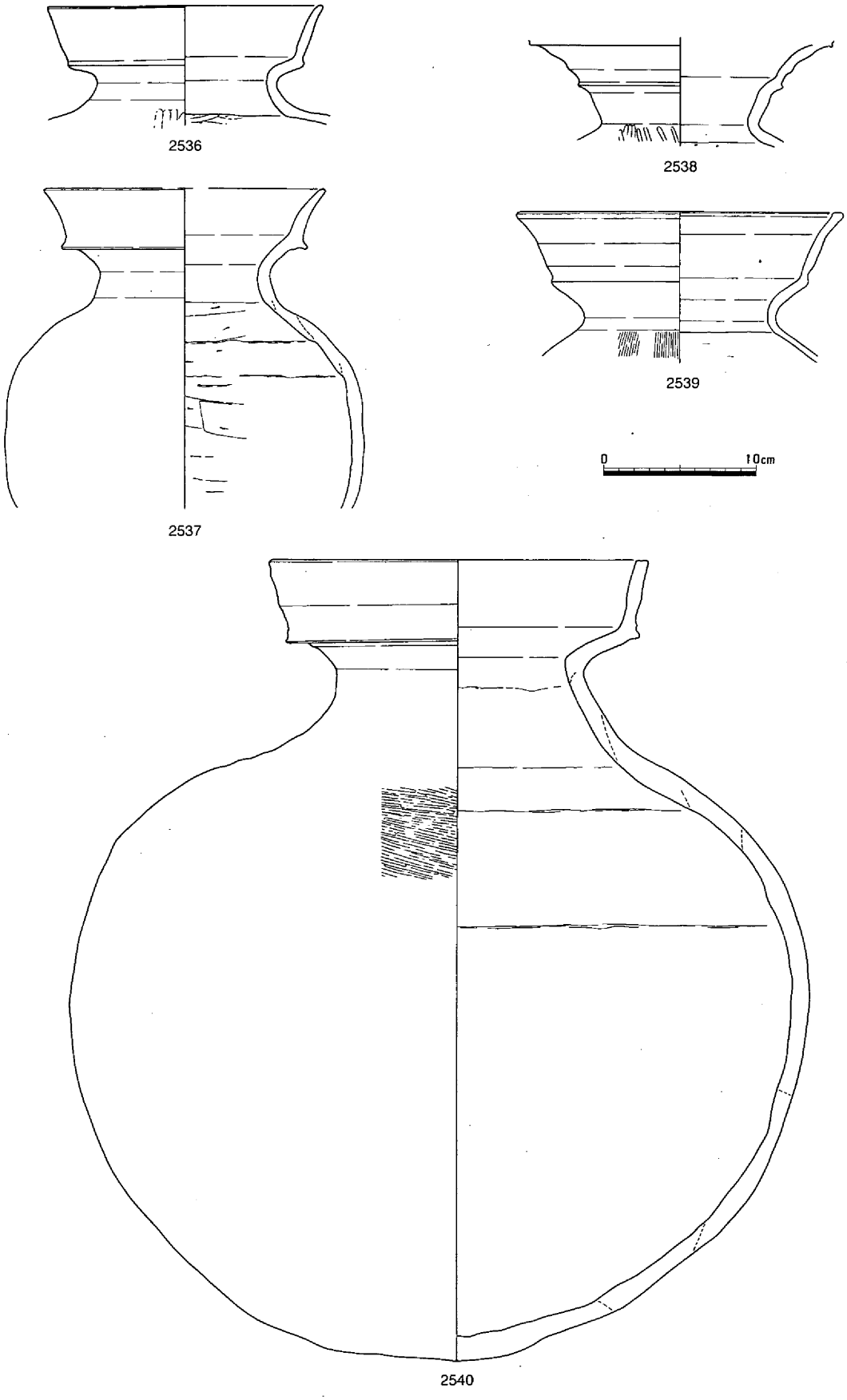
1　暗茶褐色粘質微砂
2　褐色粘質微砂
3　黄褐色粘質土
4　黄灰色粘質土
5　灰褐色粘質土
6　黄灰褐色粘質土
7　黄橙色粘質土
8　暗黄褐色粘質土
9　茶灰褐色粘質微砂
10　暗灰褐色粘質微砂
11　暗灰褐色粘質土（10より暗）



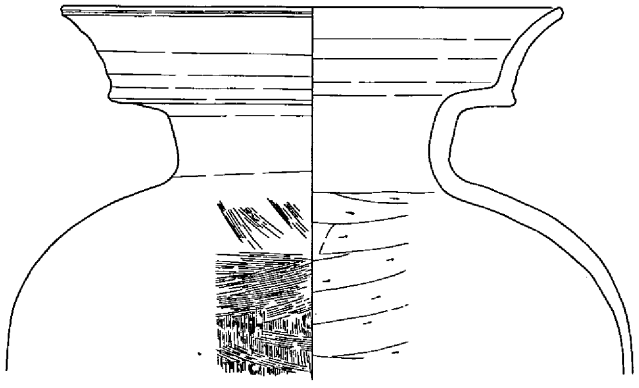
第684図　溝24・25（1/30）・溝24　遺物

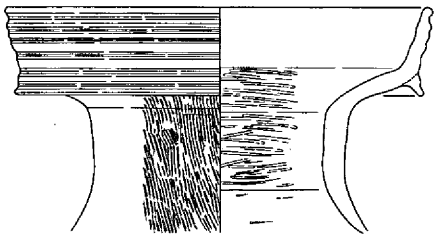


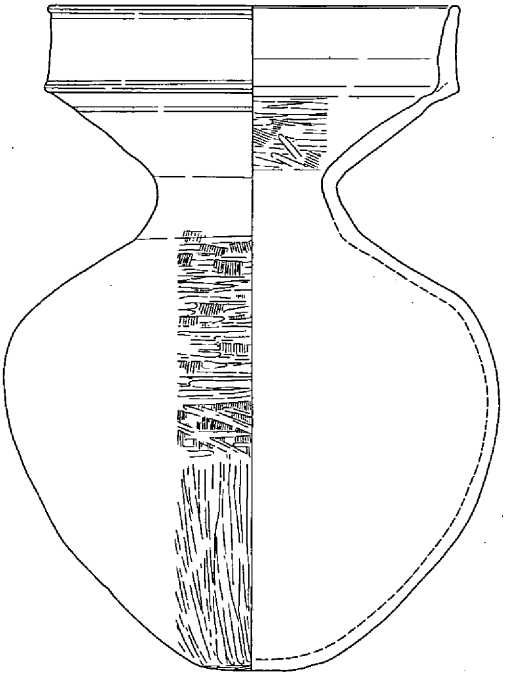
第685図　溝25　遺物（1）

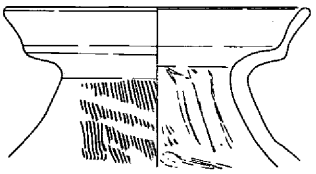


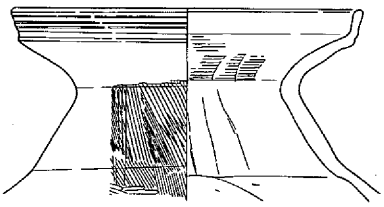
第686図　溝25　遺物（２）

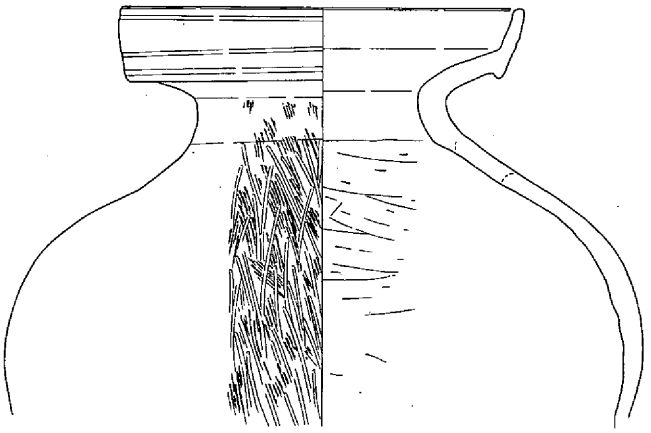

2541

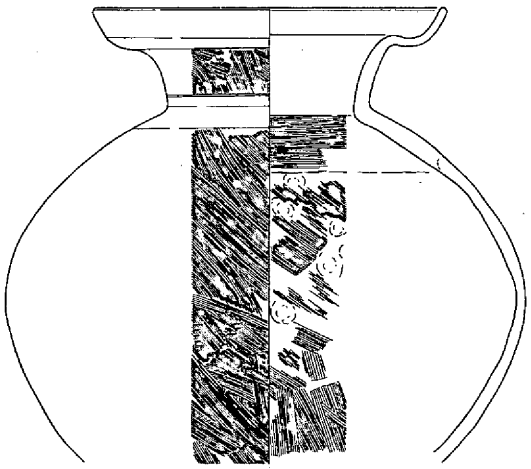

2542

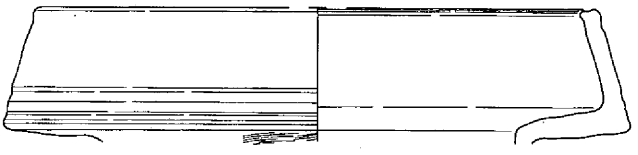

2546

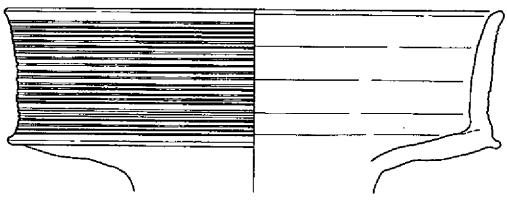

2543


2544

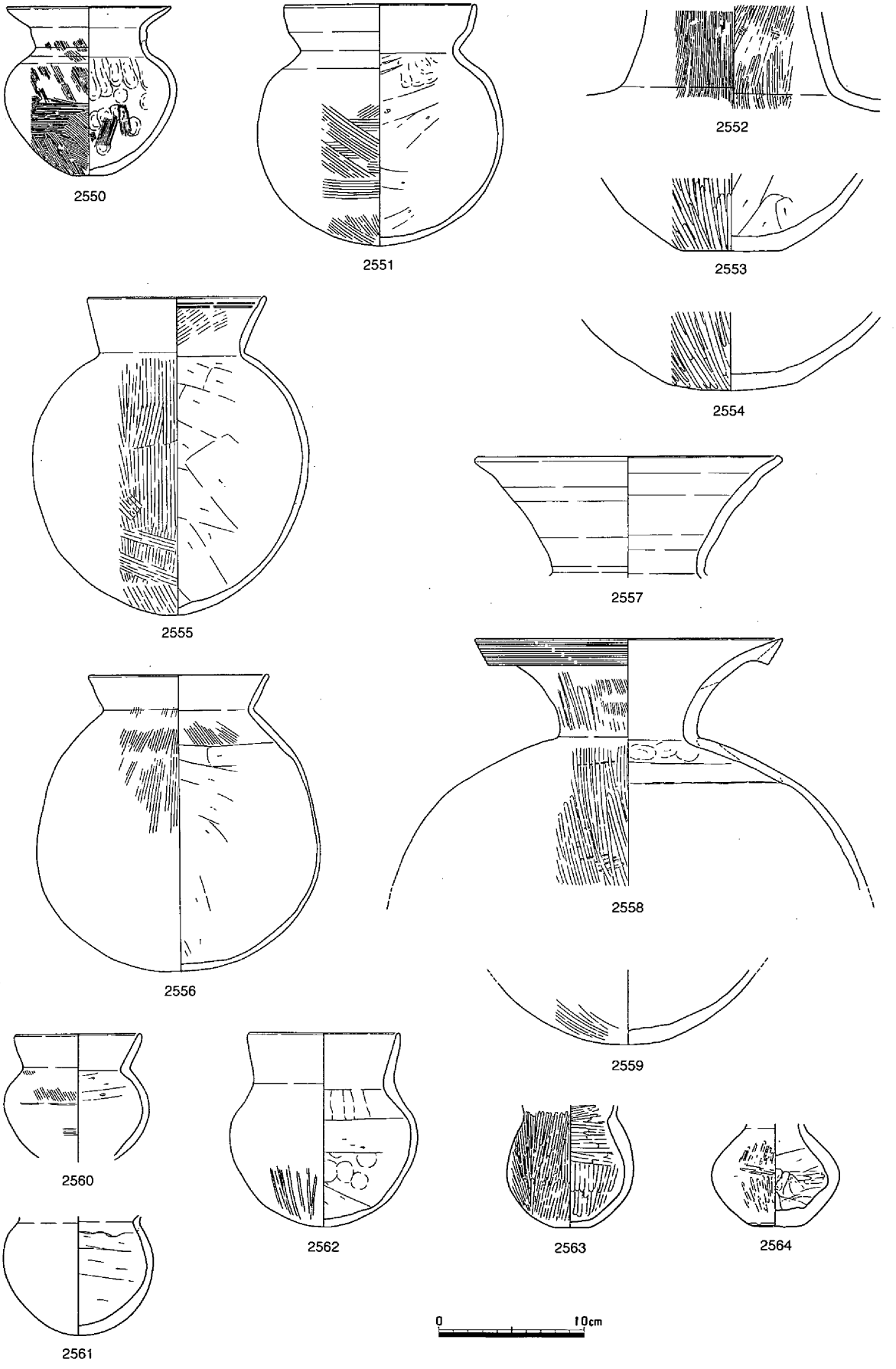

2547


2545

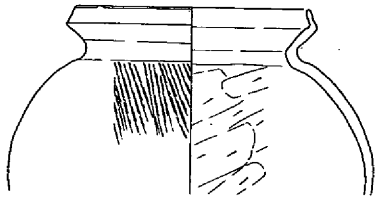

2548

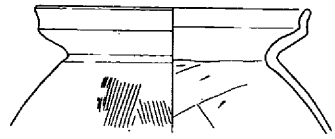

2549

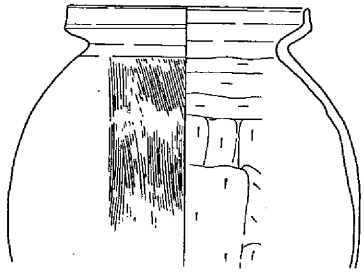
第687図　溝25　遺物（3）

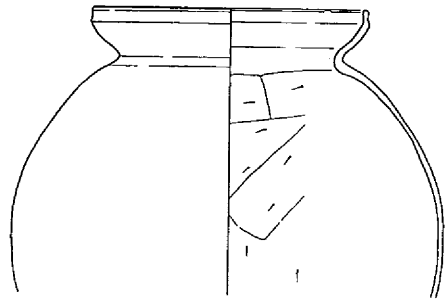


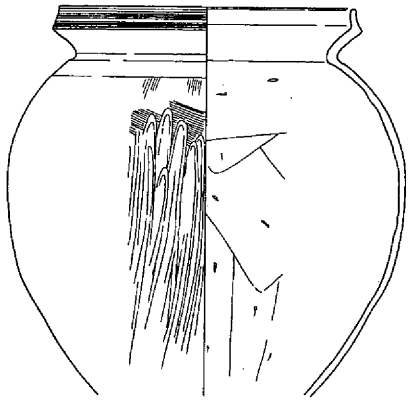
第688図　溝25　遺物（４）

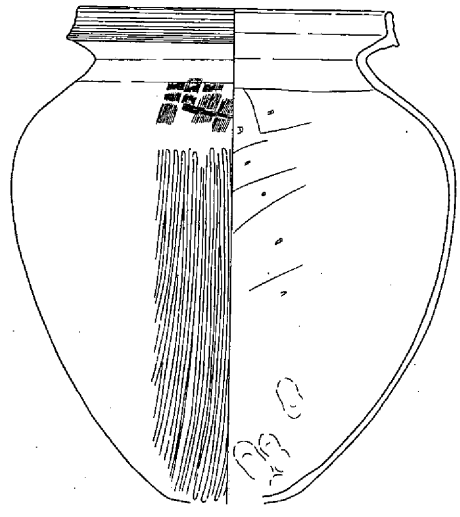

2565

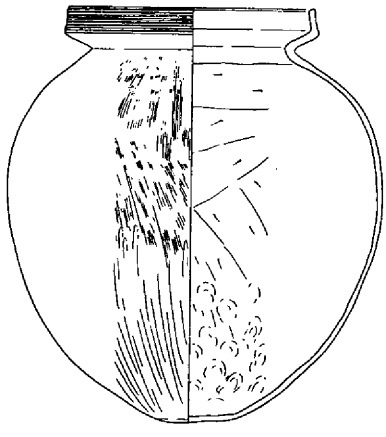

2567

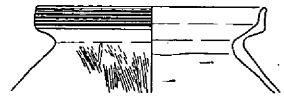

2566

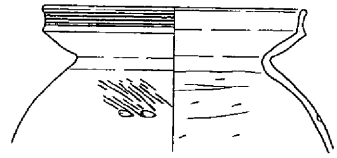

2568

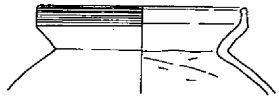

2569

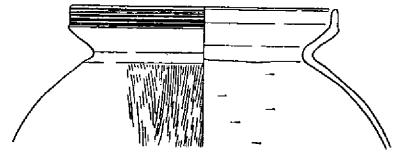

2572


2570

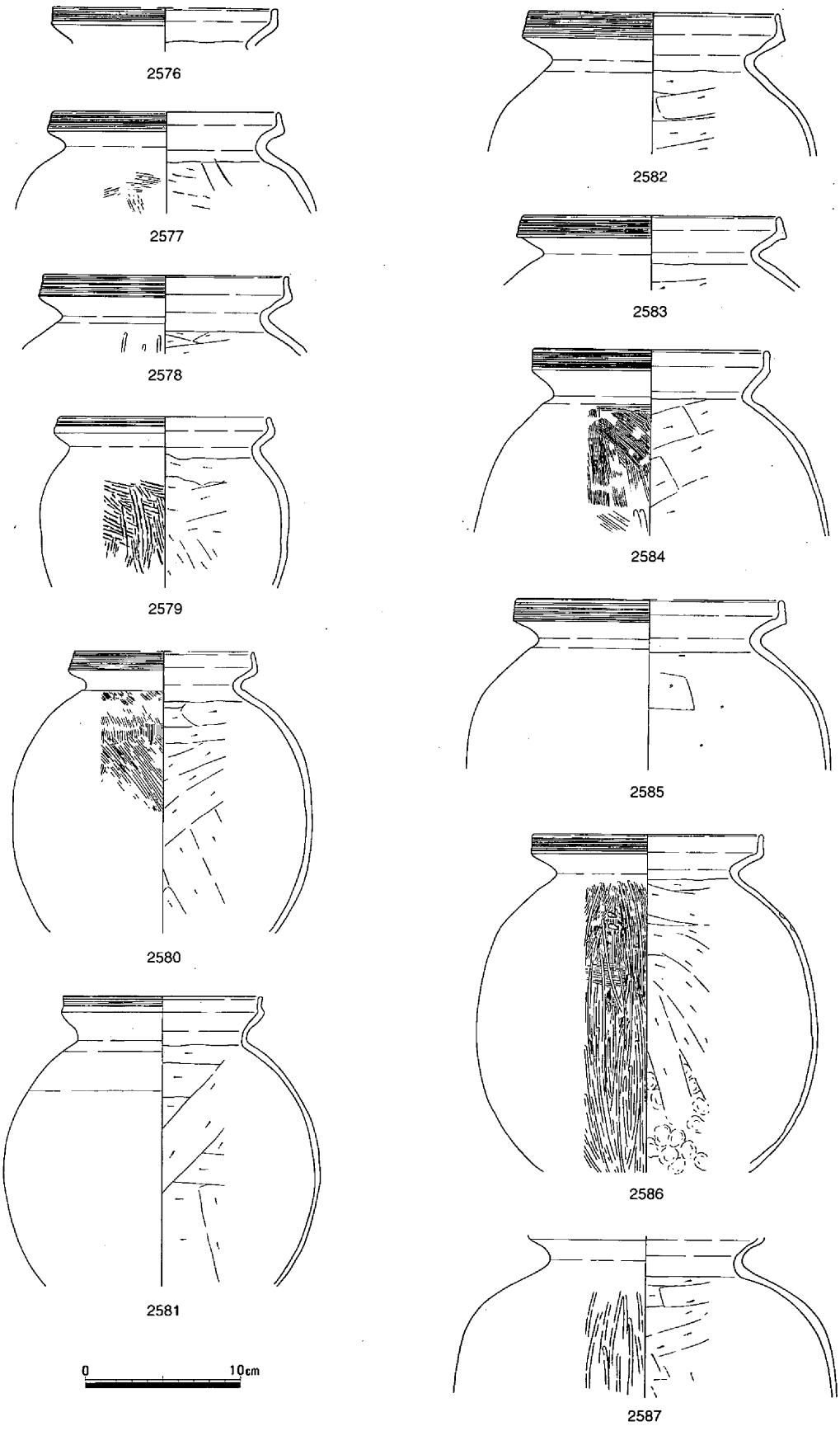

2573


2574

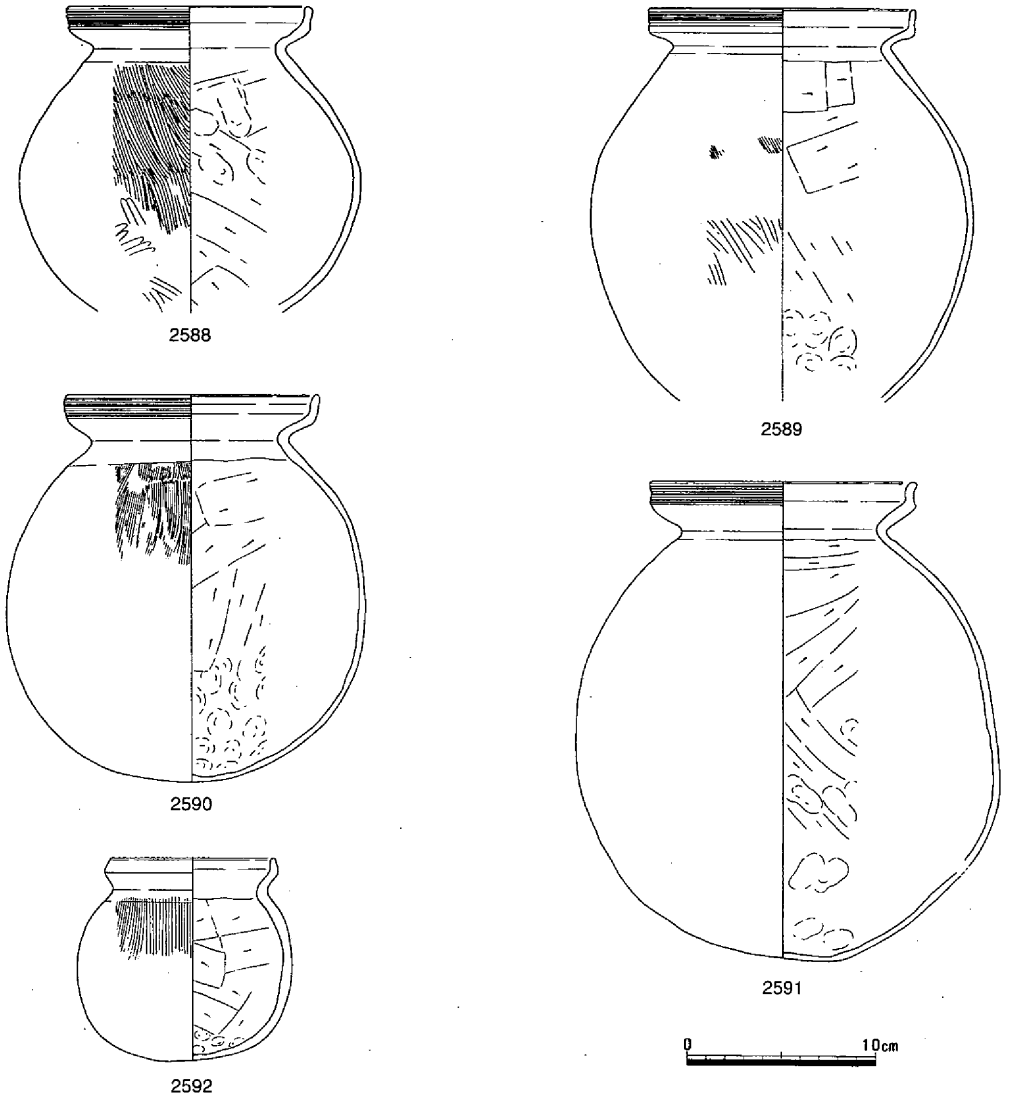

2571


2575

第689図　溝25　遺物（5）



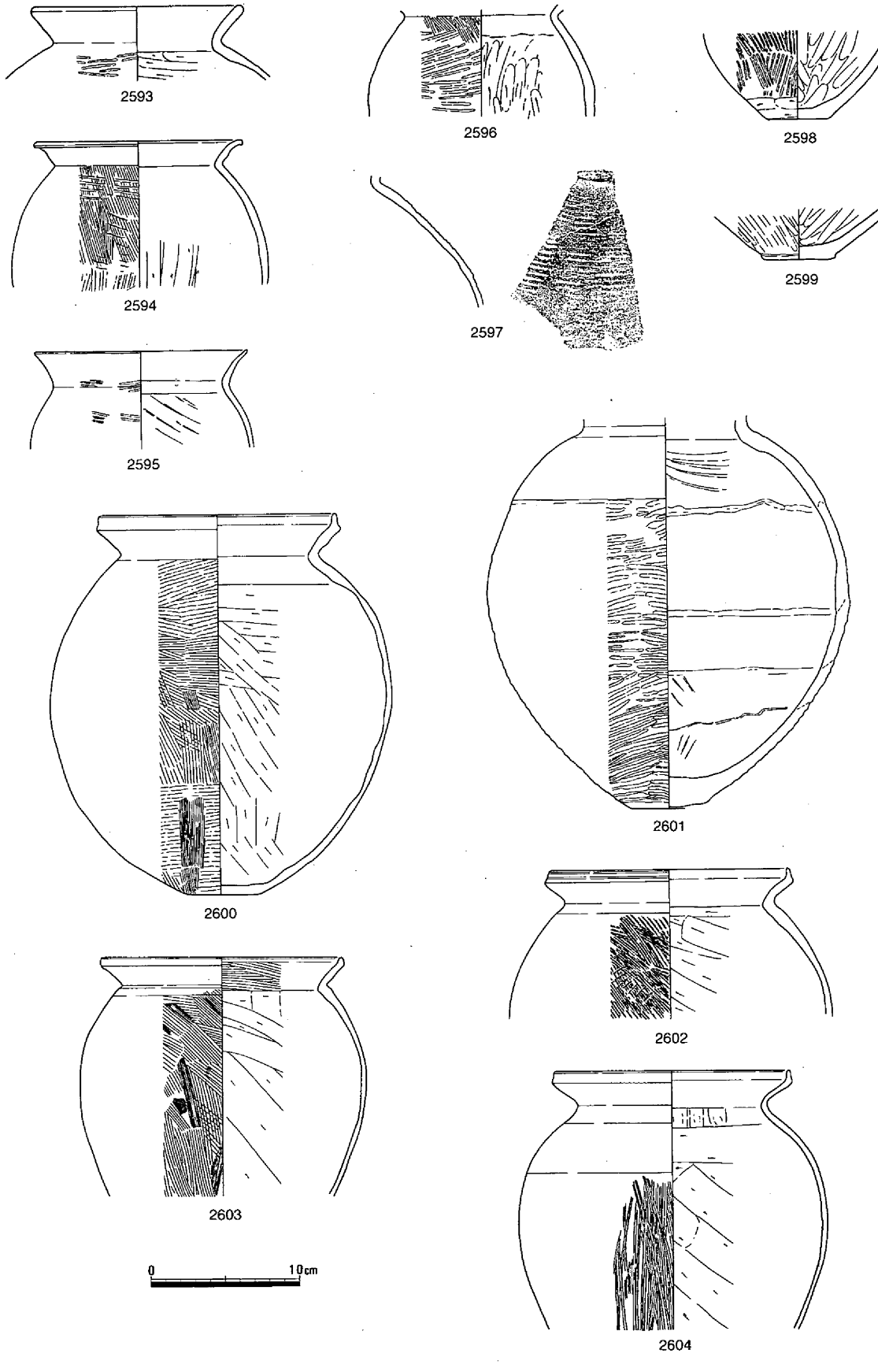
第690図　溝25　遺物（６）



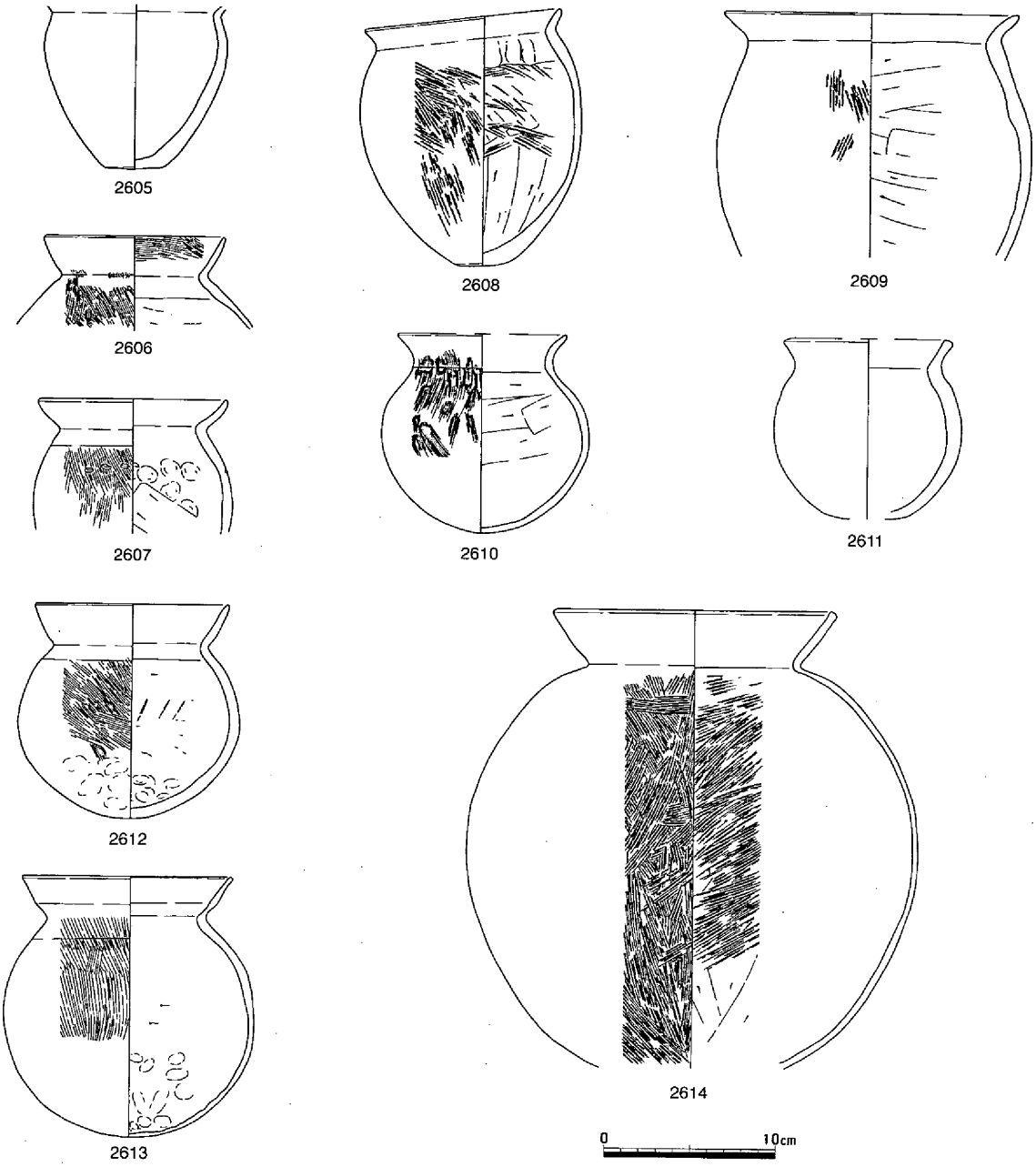
第691図　溝25　遺物（7）

のものが多い。口縁部が外反するものでは、頸部がごく短いかあるいは不明瞭なもの2528～2532・2534～2540、頸部が上方あるいは内傾するもの2541～2544・2546・2549がある。また、口縁部について、内湾するもの2545・2547、内傾するもの2548、外方に真っすぐのびるもの2555・2556、外反するもの2557・2558などもある。調整については、外面はハケメやヘラミガキ、内面はヘラケズリが多いが、2553と2554では内面もハケメが行われている。在地の土器に混じって、非在地系と思われるものが認められる。2533は畿内系、2548は西部瀬戸内系と思われる。

甕の口縁部は、上方に立ち上がるもの2565～2592・2604、わずかに上方にのびるもの2600～2603、外反するもの2593～2595、内湾気味のもの2606・2607・2612～2614などがある。2565～2592・2604では在地の甕で、2572のように古相のものから、2588・2590・2591のように体部が下膨れのものまで認められる。2593～2602は畿内系の甕で、外面は平行タタキが認められ、その後2594・2596・2600・2602のようにハケメを行うものもある。内面は、ナデのみのもの2596・2598・2599・2601、ヘラケズリを行うもの2593～2595・2600・2602、ハケメを行うもの2597がある。2610～2614は体部が球形で、外面はハケメ行う。内面はヘラケズリが認められるが、2612・2613の下半は指頭圧痕が残り、2614の



第692図　溝25　遺物（８）

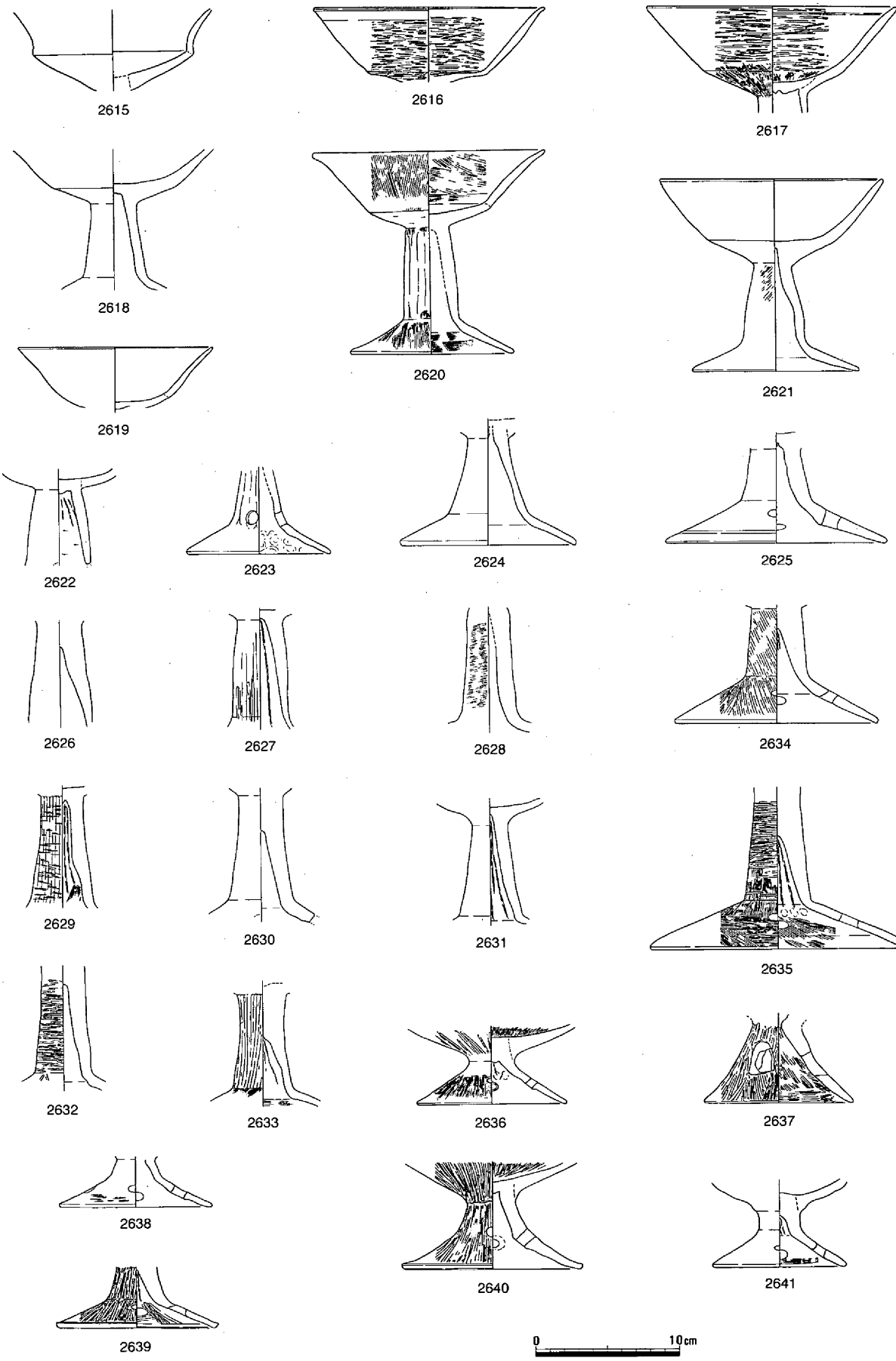


第693図　溝25　遺物（9）

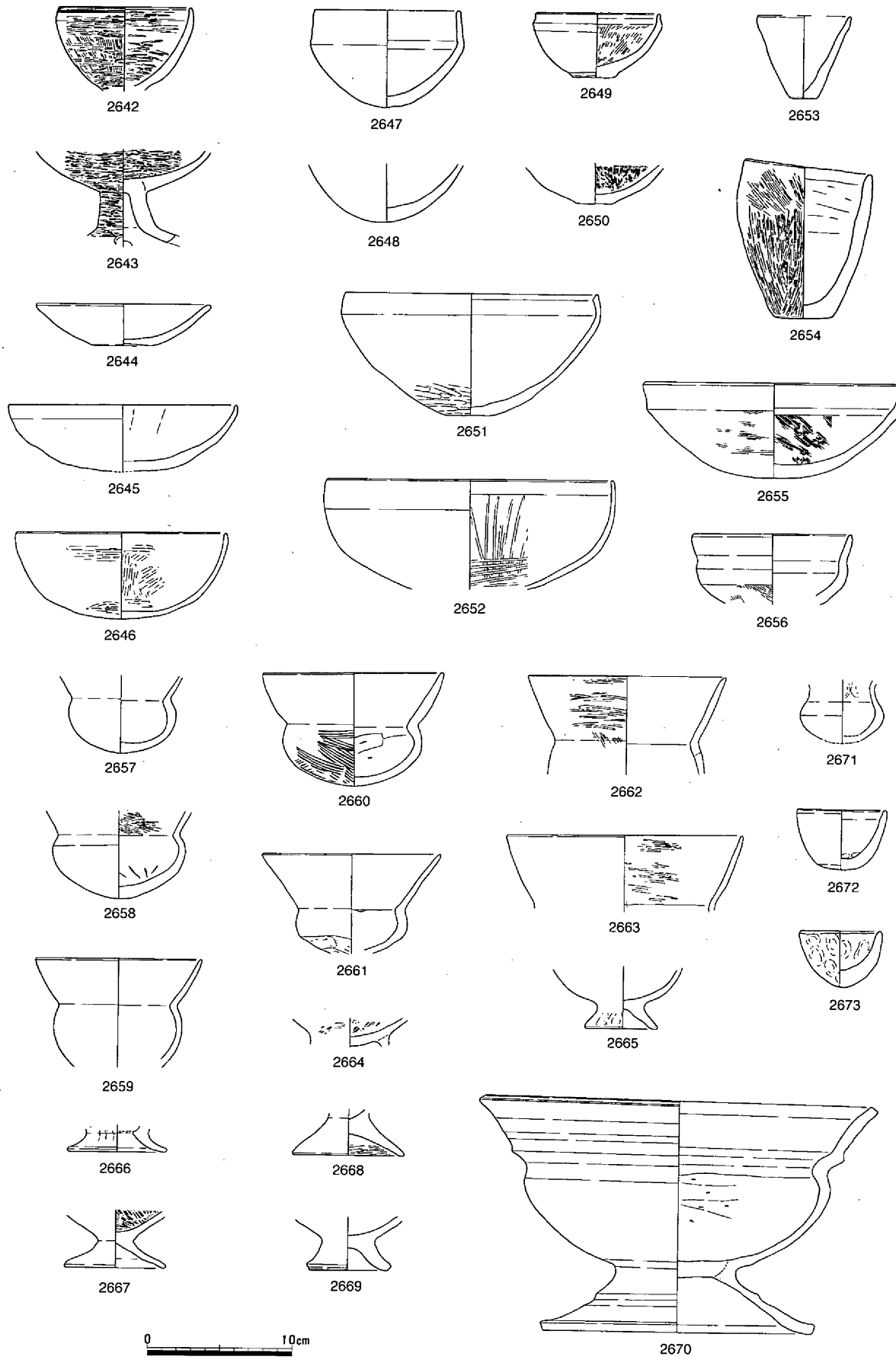
上半はハケメが行われる。

高杯は、2615のように杯部外面の稜が明瞭なものもあるが、2616～2621のように杯部の高さが比較的低く、稜が鈍いものが多い。脚部は、やや短めで中実気味のものもあるが、2620・2627～2629・2632のように細長いものが認められる。

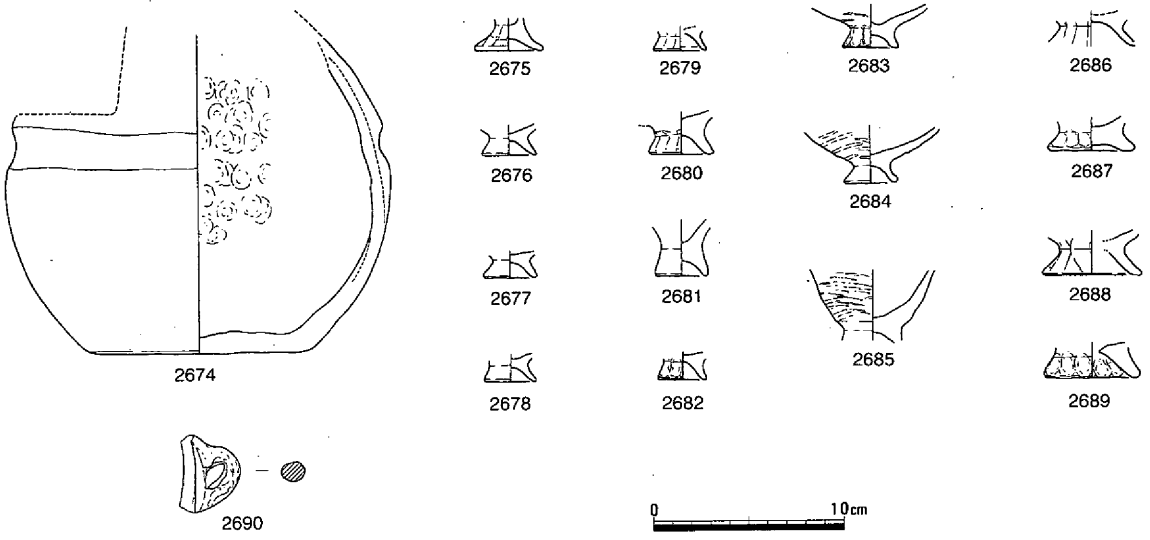
鉢は椀形のもの2644～2652・2655・2656とコップ状のもの2653・2654がある。前者は、口縁部が内傾するものや、外傾するものがある。小形丸底坩は、体部が球形のもの2659や、体部がやや扁平なもの2657・2658・2660・2661がある。2670は体部が扁平で口縁部が大きく開いている。「ハ」字に広がる台部は、中程で明瞭な段を形成している。2674は破片のため全形が明らかでないが、鉢部から覆部を連続して形成し、くびれはナデによって施された可能性がある。2675～2689は平行タタキが認めら

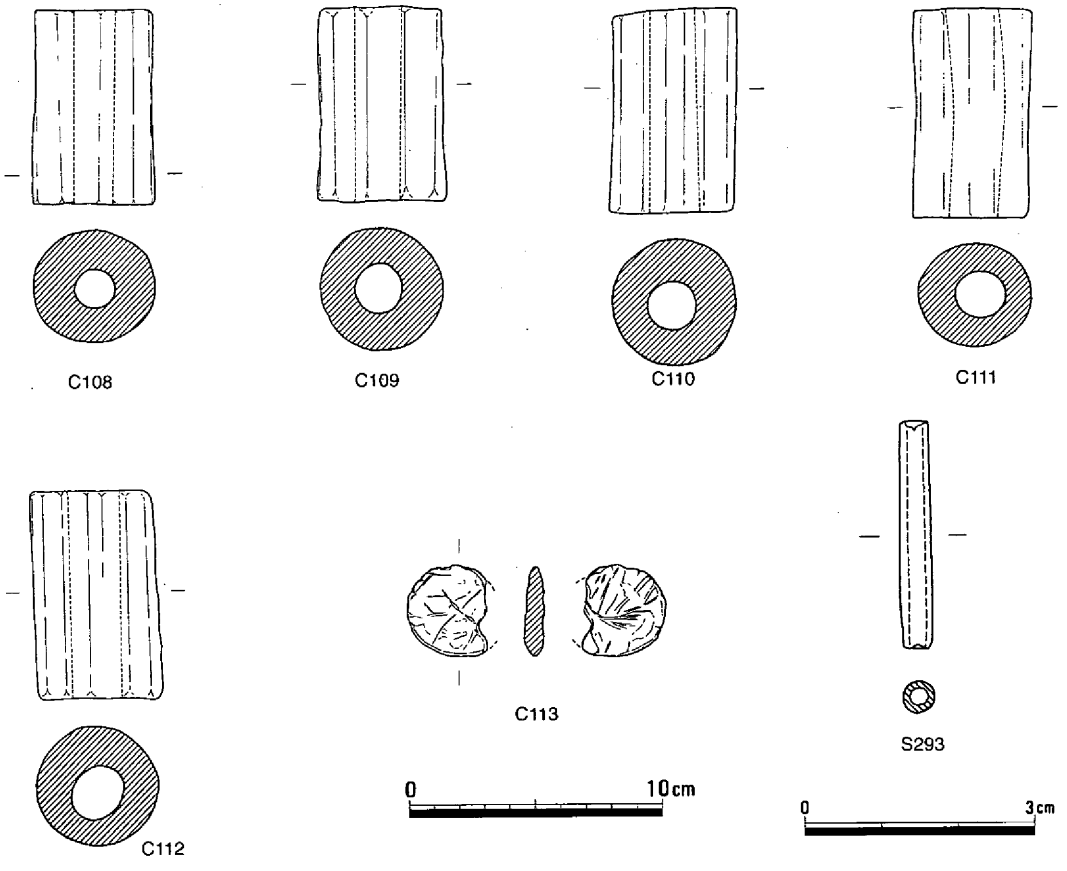


第694図　溝25　遺物（10）

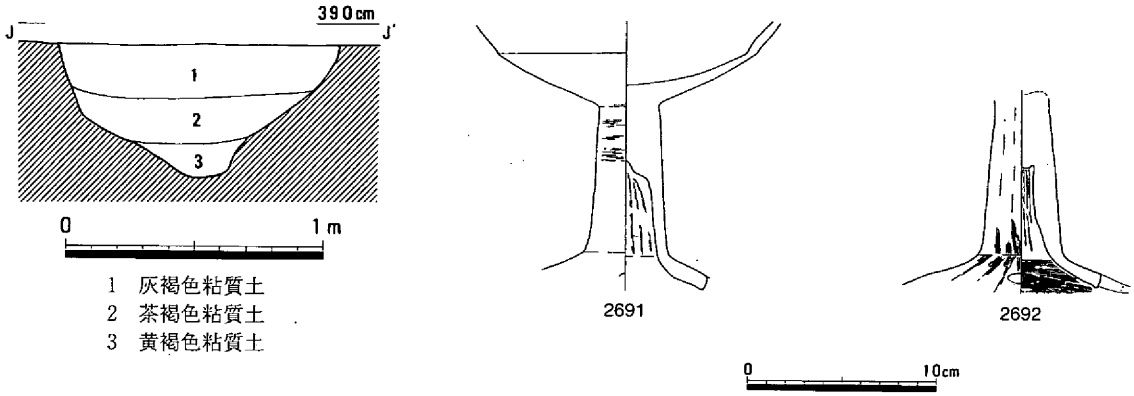


第695図　溝25　遺物（11）

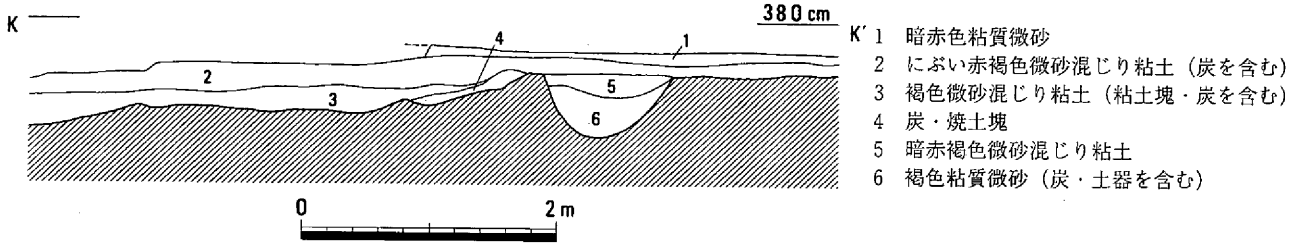


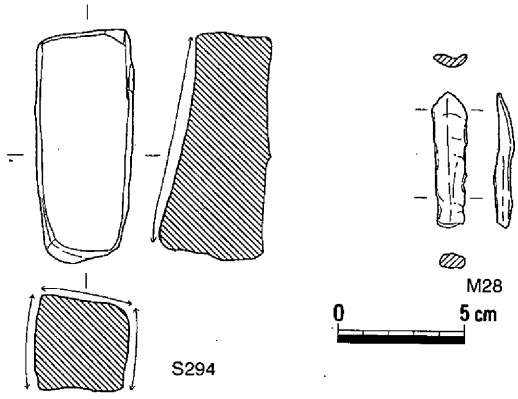


第696図　溝25　遺物（12）



第697図　溝26（1/30）・遺物





第698図　溝27（1/60）・遺物（1）

れ、小さな台部が取り付いている。

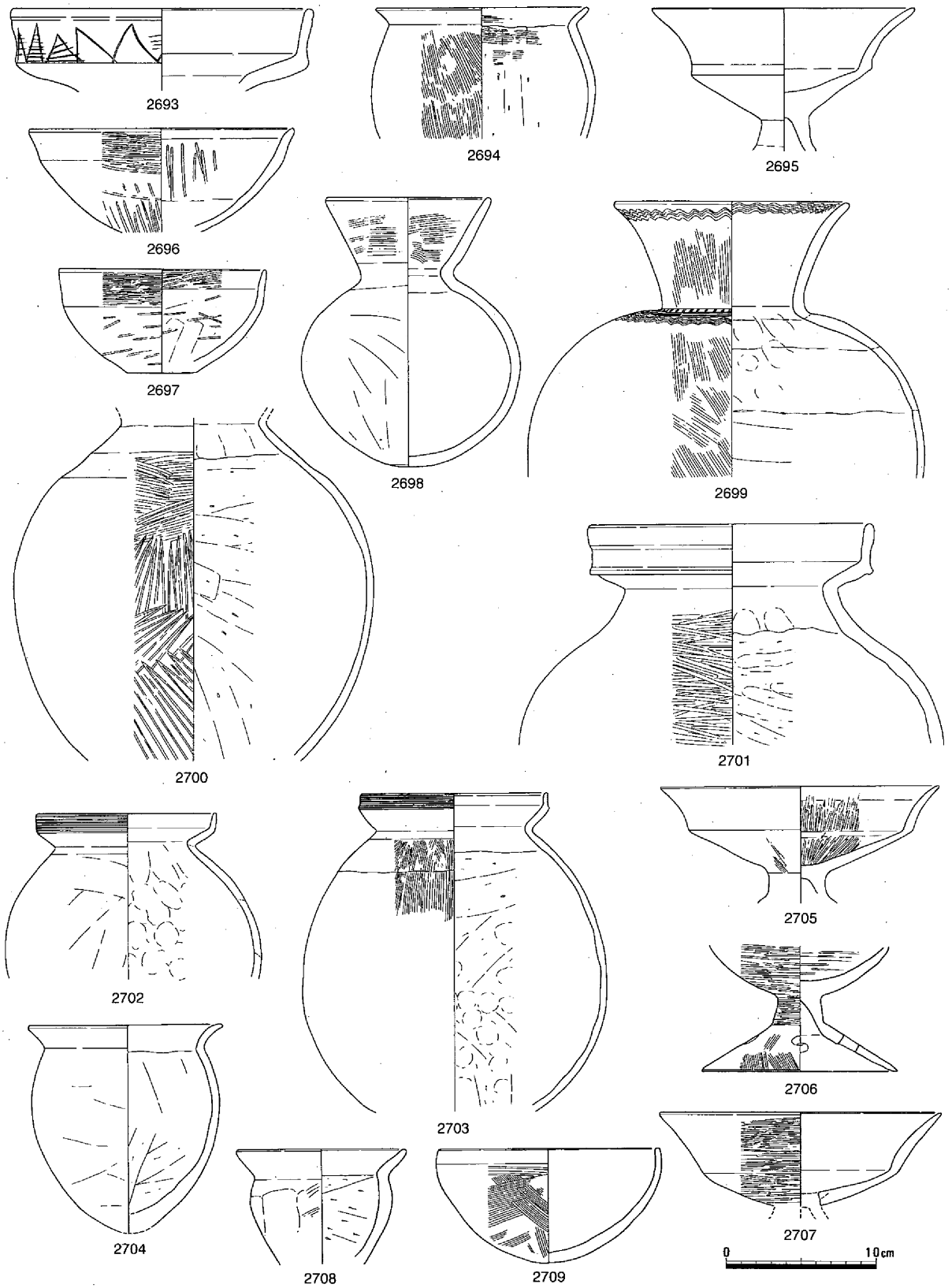
C108～112は胎土やつくりがよく似ており、長さが約8cmを測る。C113は両面に何かの圧痕が認められる。S293は蛇紋岩製の管玉である。（柴田）

溝26（第697図）

第2微高地の北東端で検出された溝で、北西から南東にのびる。北は調査区外、南は河道に切られている。幅は110cmで、深さは54cmを測る。断面は中央が低くなっている。出土遺物には、高杯2691・2692がある。遺物から、古・前・Ⅰの間で廃棄されたようであるが、弥・後・Ⅳの溝17との類似などから、上限はそこまで遡る可能性もある。（柴田）

溝27（第698・699図）

第3微高地の北東端に位置する。北西から南東へ続く溝で、北西側は河道で削り取られている。現状の大きさは、幅102cm、深さ50cmを測る。埋土の下部には炭化物とともに、多量の遺物を出土した。出土遺物には、土器、石器、鉄器がある。石器は流紋岩製砥石で、3面を使用している。鉄器は鉇の先端部片である。刃部付近はU字形に加工している。現存長は5.3cmである。土器には、壺2693・2698～2701、甕2694・2702～2704、高杯2695・2705～2707、鉢2696・2697・2708・2709がある。壺には複合口縁のものがあり、外面に鋸歯文を描いたもの2693がある。甕には、口縁部をくの字に折り曲げたものとクシ描き文を施すものがある。時期は出土遺物から古・前に比定されるが、弥生時代末まで遡る土器2697・2705なども含まれている。（正岡）

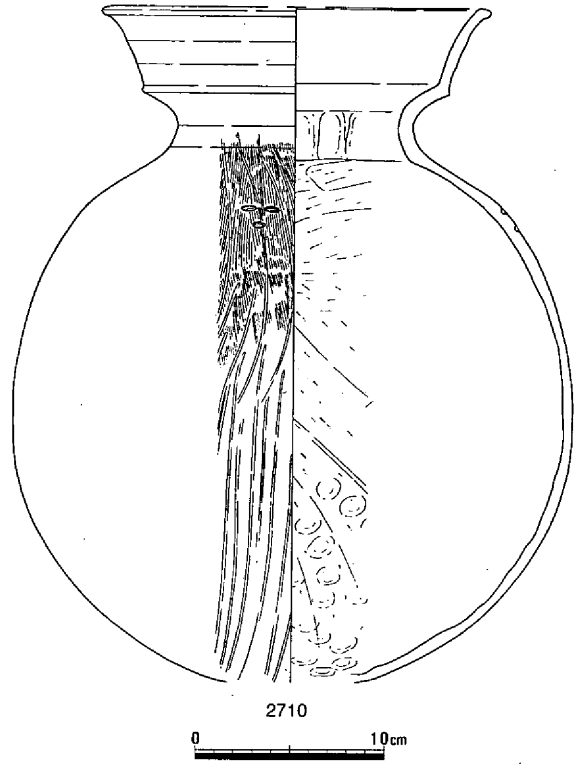


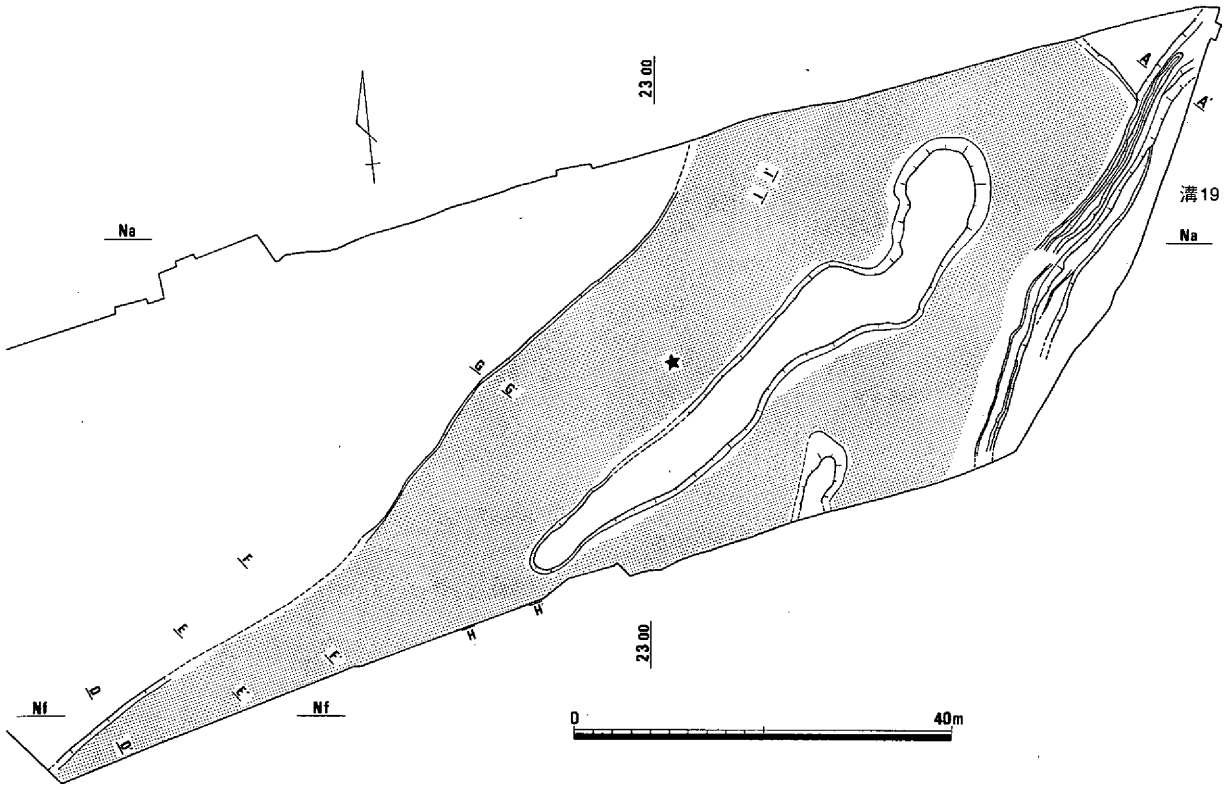
第699図　溝27　遺物（２）

（6）水田

水田５（第700図）

第１微高地と第２微高地の間に位置する。弥生時代後期に開田された水田４がそのまま古墳時代前期にまで継続していると考えて、この時期の水田を水田５として報告しておきたい。水田５とした水田層は水田４と基本的に同じで、第293図Ｅ断面11層、Ｆ断面18層、第294図Ｇ断面４層、Ｈ断面11層、Ｉ断面２層を想定している。水田範囲は水田４と同じで、「島状高まり１」、「島状高まり２」も同じと考えている。第２微高地からこの水田の東端を流れる溝19の埋土中からは古墳時代前期の土器が出土しており、同時期に機能していたと考えている。また、西側の溝９・10・11も同時期の可能性があるが、出土土器からは証明できなかった。2710の壺は、第700図星印位置の水田上面から出土しており、水田５が古・前・Ⅱには廃絶していたと考える根拠になった土器である。　（平井）





第700図　水田５（1/800）・遺物

（７）その他の遺構・遺物

ここで取り上げた遺物は、遺構から遊離して出土したものの他に、調査の際に関係する遺構を特定できなかったもの、明らかに時期の異なる遺構に混じっていたと思われるものなどである。

種別では、土器19点、石製品（玉）１点、金属製品１点、土製品６点を掲載している。遺構の検出状況からも明らかなように、比較的この時期のものは少なく、掲載遺物の量もそれを反映していると言える。

土器（第702図）

壺は2711・2712の２点を掲載している。いずれも二重口縁で、口縁部は大きく外反している。2712では、口縁部内面と胴部外面にヘラミガキが施されている。

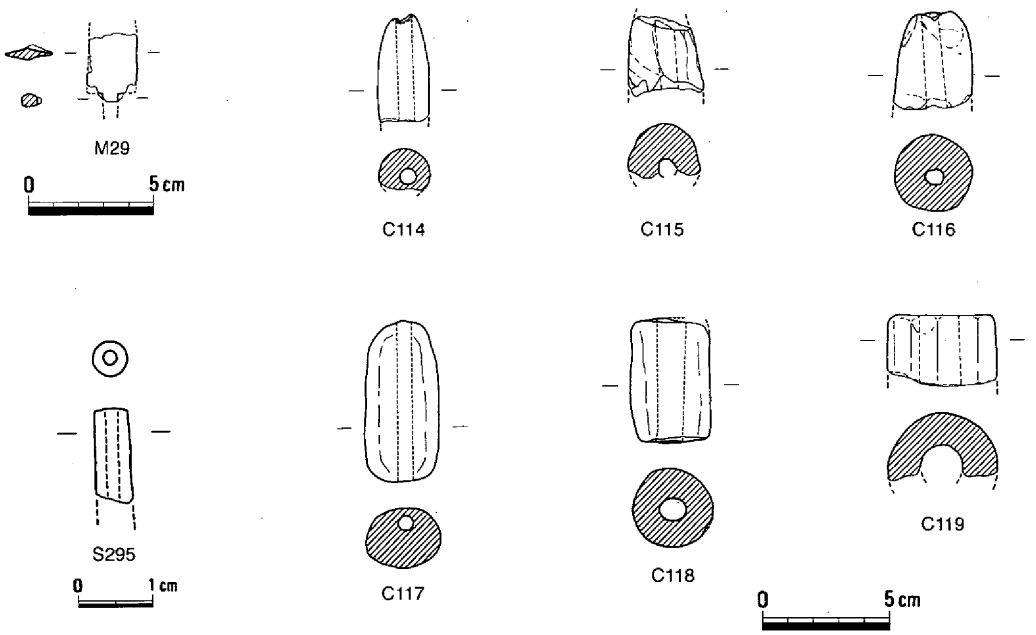
甕は2713～2717の５点を掲載している。2714は丸底で、胴部がわずかに下膨れ気味である。胴部内面中央付近からヘラケズリが認められる。2716と2717は口縁部にクシ描き沈線が施されるが、前者は口縁部の屈曲が緩く、後者は屈曲が強く肩が張っている。

2718は手焙り形土器と思われ、外面に斜格子紋と横方向の２条の平行沈線が施されている。2719は器種は不明であるが、外面にヘラ描きの紋様が施されている。工具の先端は比較的太く、２条１組となって横方向の沈線に２重の半円が描かれている。内面の調整は不明で、胎土の類似性から古墳時代前半とした。

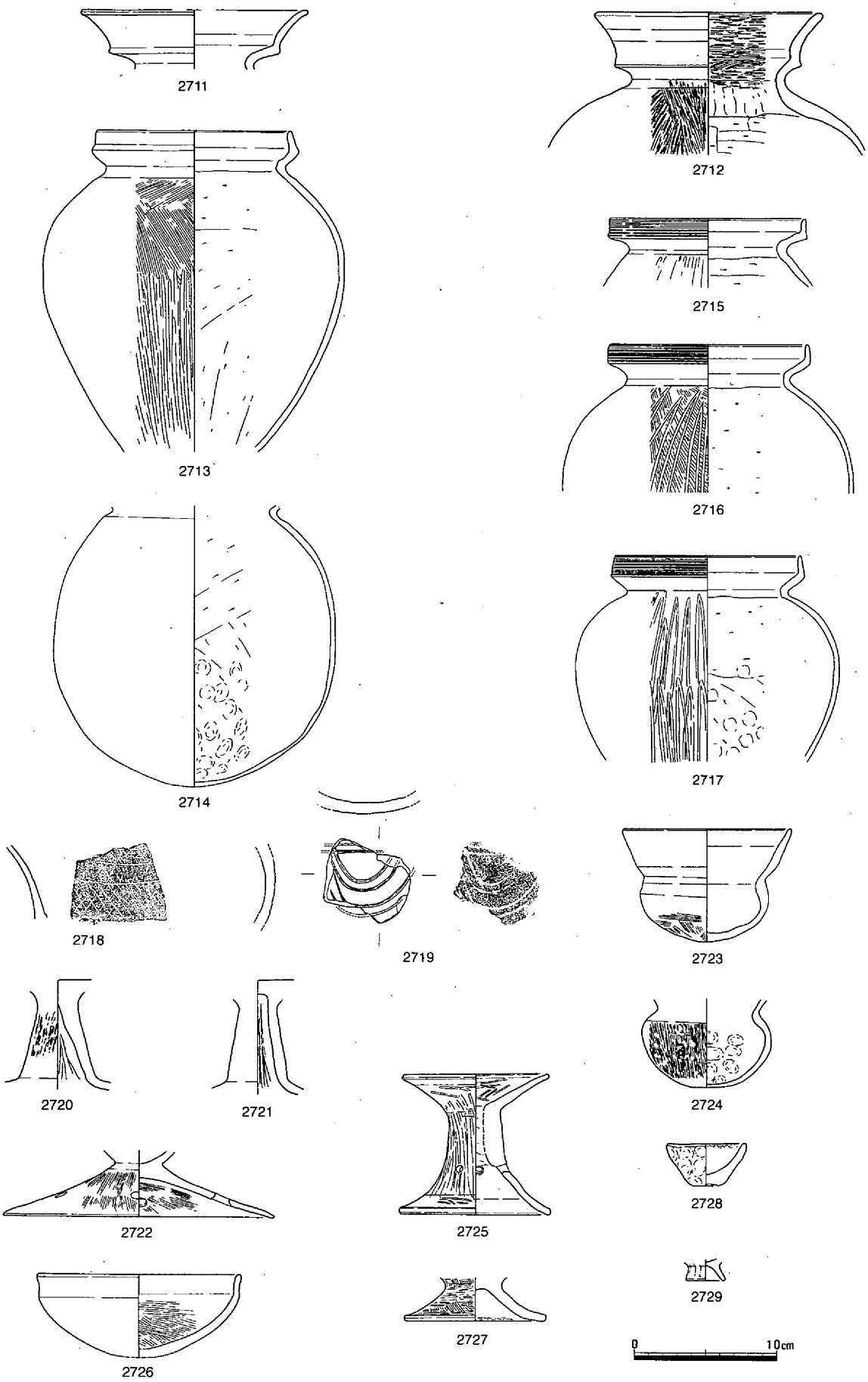
高杯2720・2721は長脚で、中空である。

石製品・金属製品・土製品（第701図、写真104）

S295は璧玉製の管玉で、破損しているが、径５㎜・孔径1.8㎜を測る。M29は鉄剣と思われ、幅19㎜・厚さ５㎜を測る。C114～119は土錘である。端部が細くなるC114や、端部があまり細くならないC115～117、端部が平坦で孔径の大きいC118・119などがある。　（柴田）



第701図　その他の遺物（１）



第702図　その他の遺物（２）

第５節　古墳時代中期～後期の遺構・遺物

（１）概要

中期は、おおよそ５世紀代を想定している。この時期の遺構・遺物は、第２・３微高地で検出した６軒の竪穴住居と出土遺物を報告している。しかしながら、出土遺物が少ないため確実でないものも含まれているかもしれない。

後期は、おおよそ６世紀と７世紀を想定している。報告している遺構は、竪穴住居55軒、掘立柱建物２棟、焼成土壙11基、土壙19基、溝13条などである。

遺構は、第１・２・３微高地それぞれに竪穴住居や土壙が検出できており、居住域となっていたと考えられる。第１・２微高地では竪穴住居の間に溝が検出されており、いくつかの住居群が区切られていたのかもしれない。また、第１と第２微高地の間には低位部が存在しており、確認はできなかったが水田が存在していた可能性を考えるべきであろうか。第２と第３微高地の間については未調査のため明確ではないが、後期にはつながっており、古代以降に河道が形成されたのかもしれない。遺構の中では鍛冶に伴う炭窯とも考えられている焼成土壙が注目できる。また第１微高地で検出されている掘立柱建物も注目しておきたい。

出土遺物としては、須恵器・土師器などの土器や土製品、鉄器、石器などを報告している。須恵器・土師器の時期は概ね６世紀後半から７世紀前半であるが、近年の編年研究の成果とも関連して重要であろう。遺物の中では、竪穴住居や溝から出土している鉄滓や羽口が注目される。前述した焼成土壙とあわせて、この集落で鍛冶が行われていたと考えて良いであろう。

飛鳥様式の瓦は遺構に伴っていないが、出土そのものが重要である。近畿地方以外では最古型式の瓦であり、近くにこの瓦を用いた建物があったのか、他地域から搬入されたのかは検討を要する。火頭形三尊塼仏も出土例が少なく重要であろう。（平井）

（２）竪穴住居

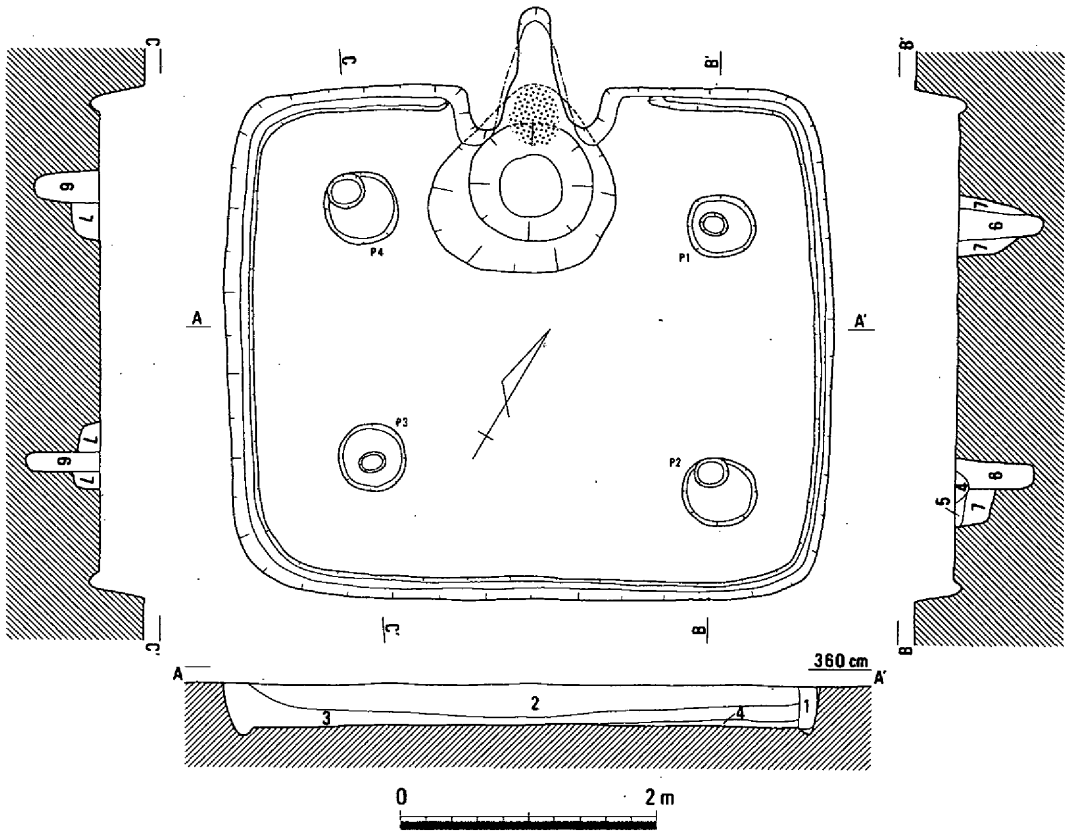
竪穴住居77（第703・708図、写真98）

第１微高地のＮ22区中央部に位置する。平面形は約480×410cmの長方形で、北辺の壁際にカマドを設置している。深さは約35cm残存しており、埋土は基本的に三層確認できた。壁際には、幅10cm前後、深さ5cm前後の溝が掘られている。

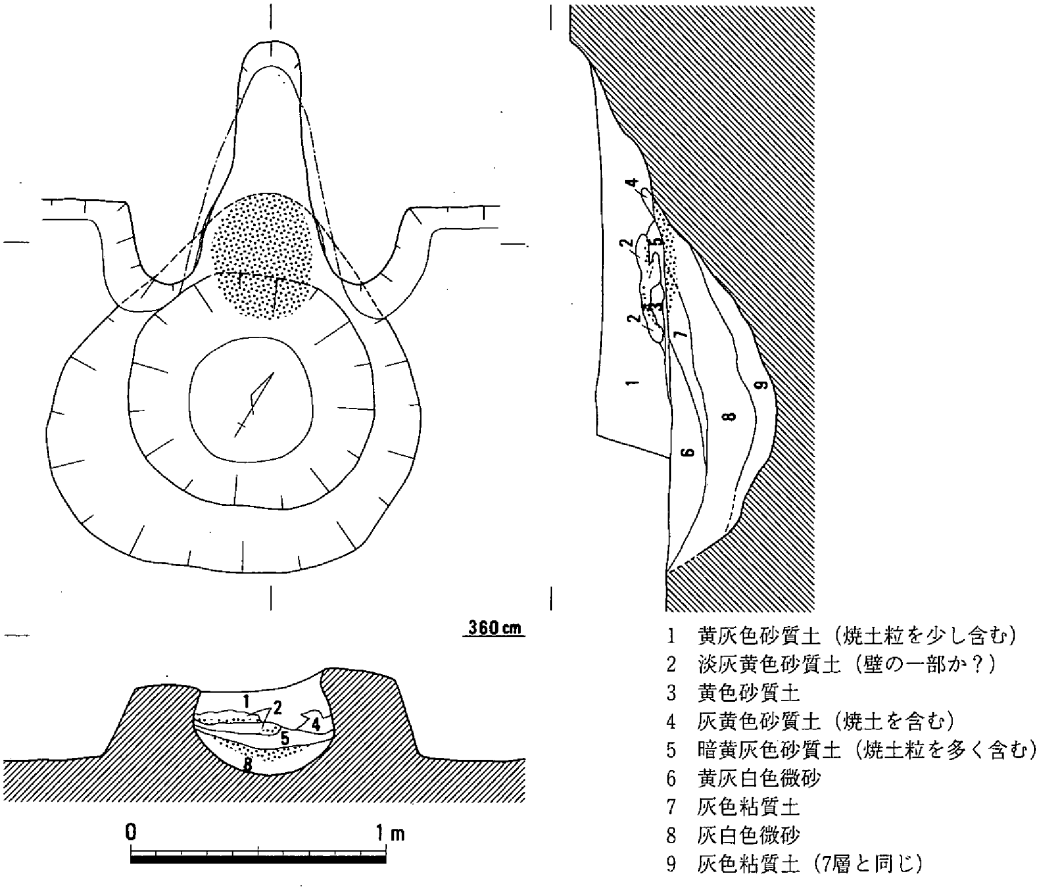
柱穴は四本確認できている。掘り方の平面形は、直径50～60cm前後の円形で、深さは15～50cmであった。また、すべての柱穴において、柱と思われる痕跡を確認している。それによると、柱は、15～20cmの円形で、床面から50～70cm埋められていたものと推測できる。

カマドは、両側に幅40cm前後で、長さ約50cmの袖をつくっている。燃焼部には50×40cmの範囲に橙色の被熱面が存在していた。また、埋土中には落下した天井の壁が確認できている。燃焼部を含む南側には、床面の下部に土壙が掘られていた。土壙の平面形は、約150×130cmの不整円形で、深さは約40cmである。

遺物は須恵器と土師器、および鍛冶滓が少量出土している。時期は古・後・Ⅱであろう。（平井）



1　緑灰白色粘土（中世柱穴）　3　暗灰色粘土（炭を含む）　5　暗褐色粘質土　7　黄灰色粘質土
2　黄緑灰色粘土　4　黄緑灰色粘質土　6　灰黄色砂質土（8層より固い）　8　灰黄色砂質土

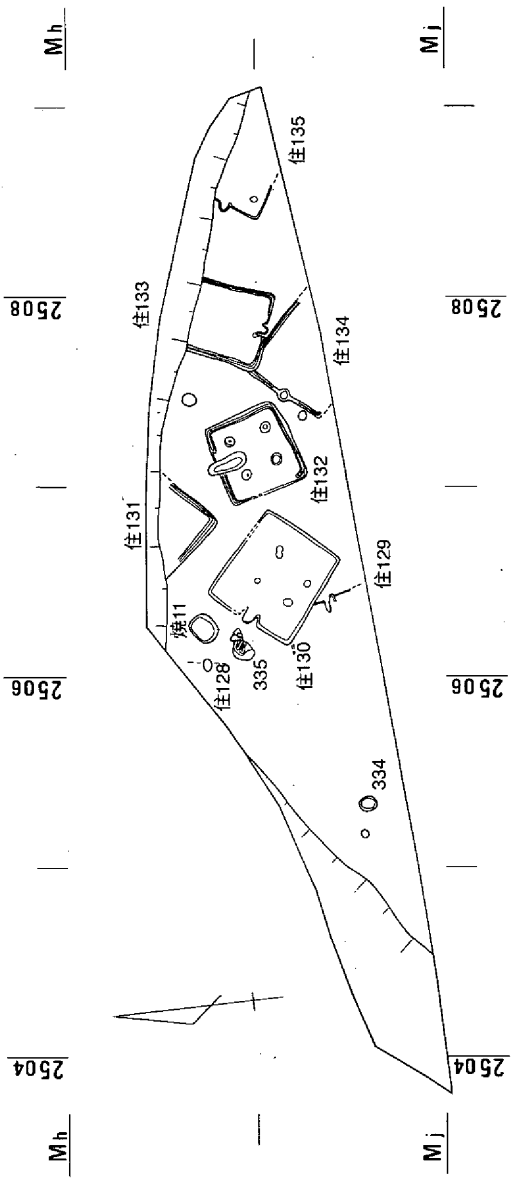


1　黄灰色砂質土（焼土粒を少し含む）
2　淡灰黄色砂質土（壁の一部か？）
3　黄色砂質土
4　灰黄色砂質土（焼土を含む）
5　暗黄灰色砂質土（焼土粒を多く含む）
6　黄灰白色微砂
7　灰色粘質土
8　灰白色微砂
9　灰色粘質土（7層と同じ）

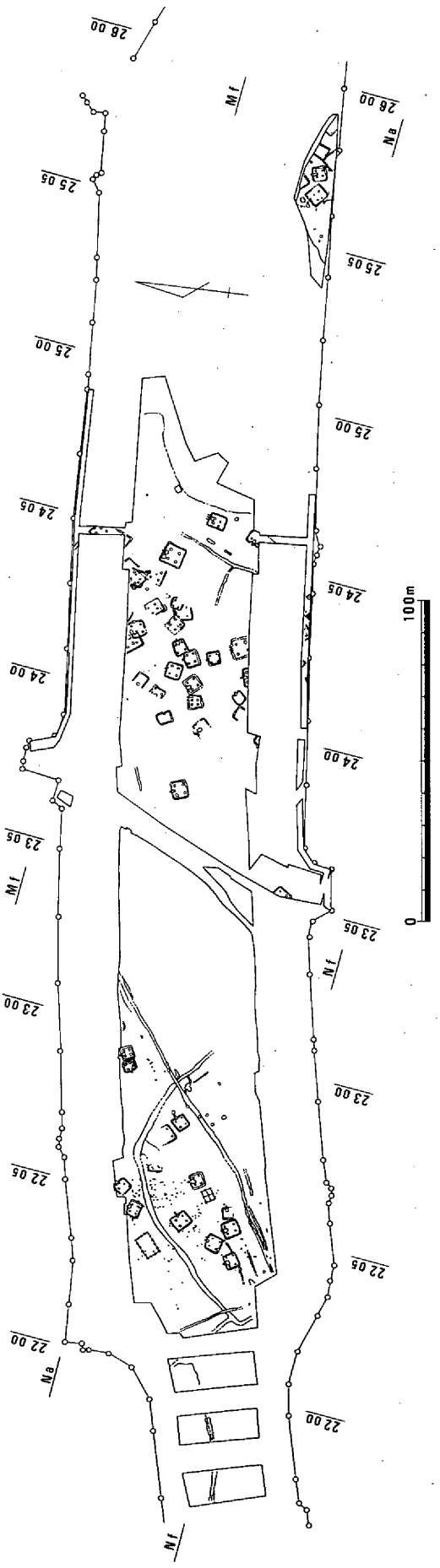
第703図　竪穴住居77（1/60・1/30）

第704図　古墳時代中～後期遺構全体図（１）（1/400）

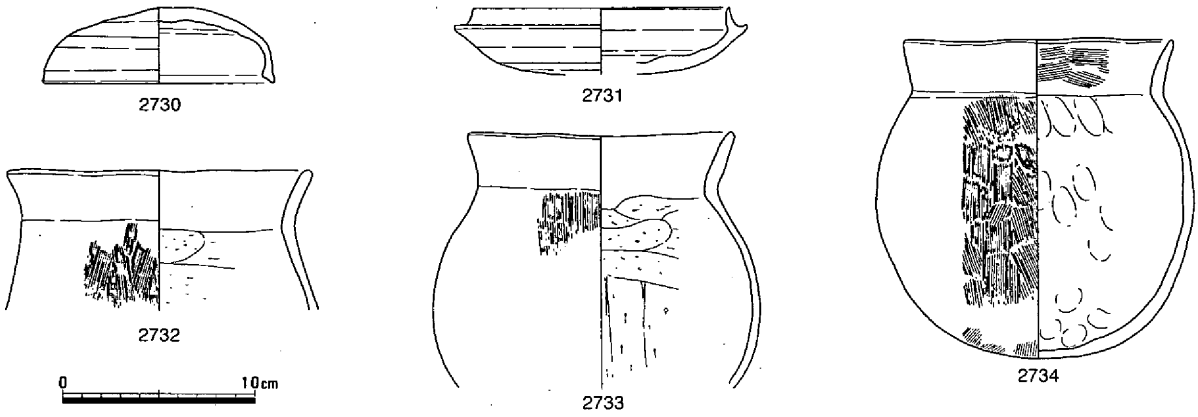
第705図　古墳時代中～後期遺構全体図（2）（1/400）



第706図　古墳時代中～後期遺構全体図（３）（1/400）



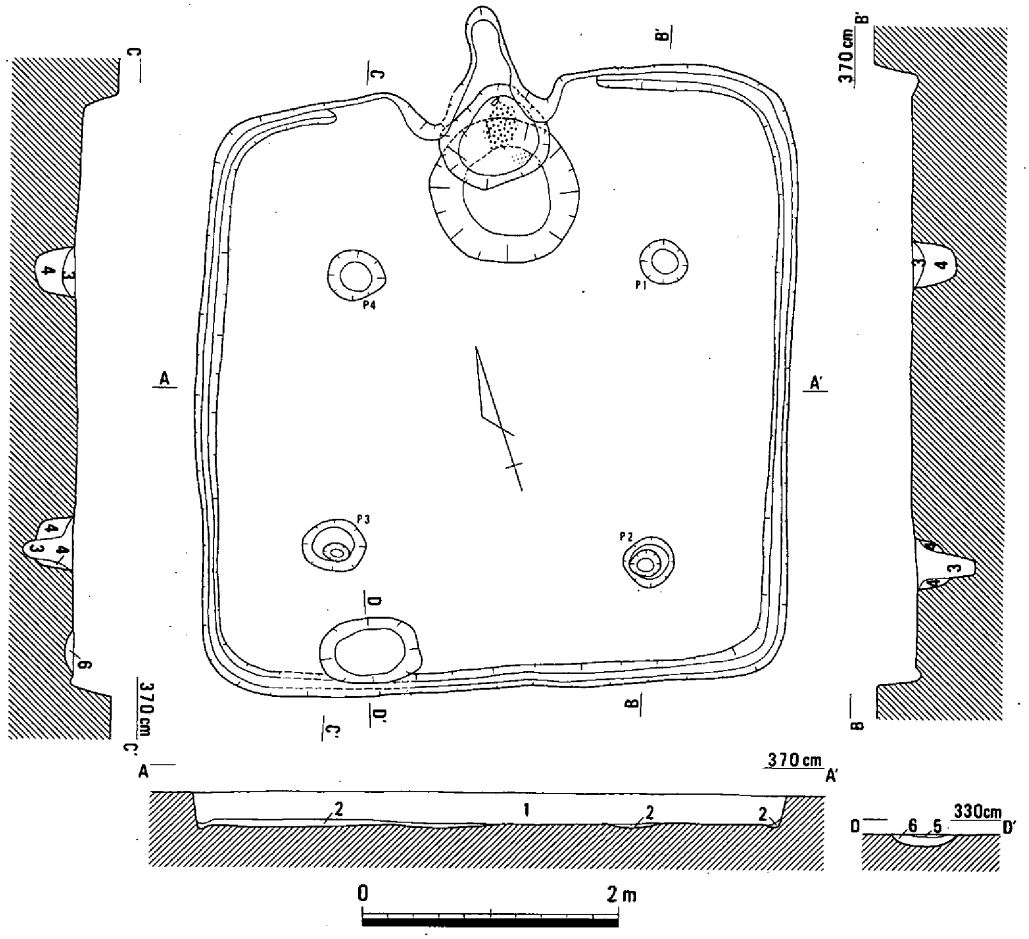
第707図　古墳時代中～後期主要遺構全体図（1/2,000）



第708図　竪穴住居77　遺物

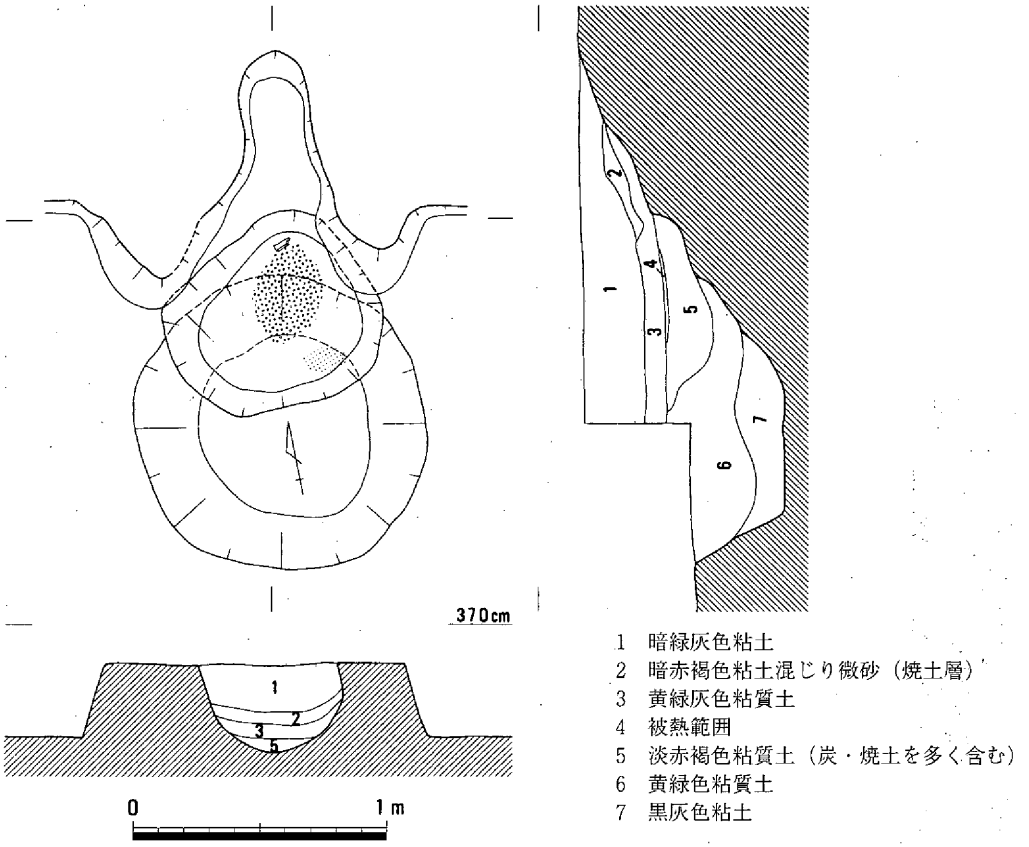
竪穴住居78（第709～711図、写真26－１・２、98）

第１微高地のN22区、竪穴住居77の北東隣りに位置する。平面形は約490×470cmの南北に長い長方形を呈し、北辺の壁際にはカマドを設置していた。深さは30cm前後残存しており、壁際には、幅10cm前後、深さ５cm前後の溝が掘られていた。柱穴は四本確認できた。掘り方の平面形は、いずれも直径40cm前後の円形で、深さは20～35cmである。Ｐ２・３には、柱と思われる痕跡が確認できた。また、

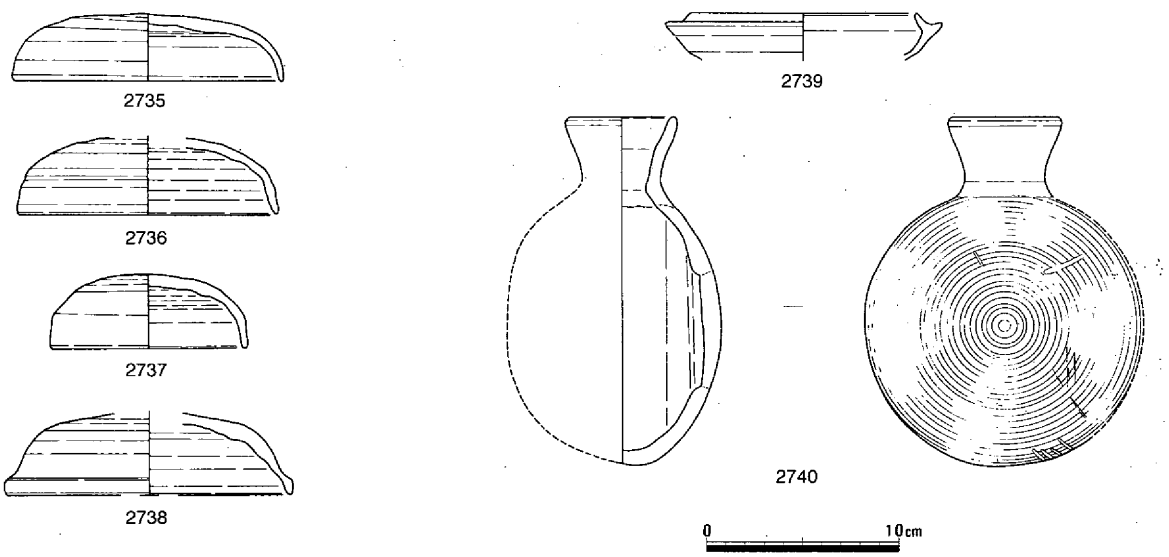


1　暗緑灰色粘土
2　黄緑灰色粘質土
3　暗緑灰色粘土
4　黄緑灰色粘土混じり微砂
5　焼土
6　暗黄緑灰色粘土（焼土を含む）

第709図　竪穴住居78（1/60）



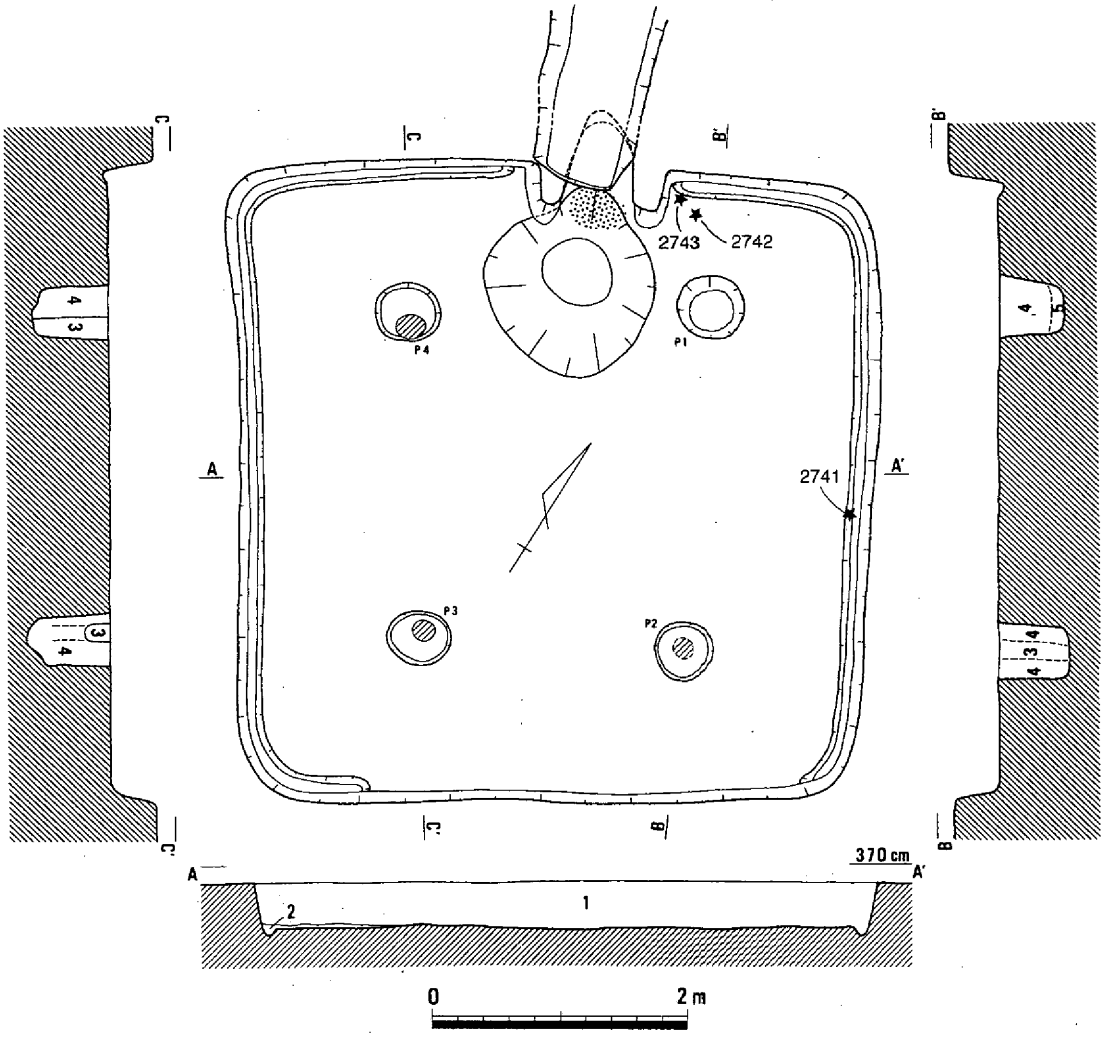
第710図　竪穴住居78　カマド（1/30）



第711図　竪穴住居78　遺物

南西の隅には、楕円形の浅い土壙を検出した。カマドは両袖を作りだし、燃焼部は住居内に、そして煙道は住居外にのびている。燃焼部の被熱面の下部には、二段階に分けて掘られたと思われる不整円形の土壙が確認できた。最深部の深さは、床面から約45cmであった。

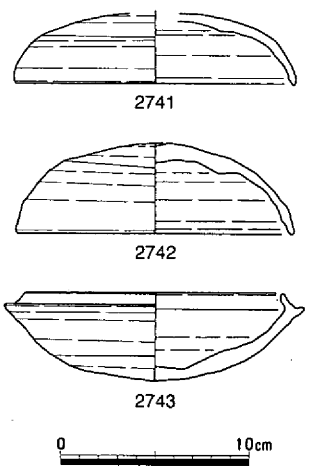
遺物は、埋土中から須恵器の杯や提瓶、および鍛冶滓が少量出土している。時期は古・後・Ⅱと考えている。　（平井）



第712図　竪穴住居79（1/60）

竪穴住居79（第712～714図、写真26－１、98）

第１微高地のＮ22区、竪穴住居78の南東隣りに位置する。平面形は、一辺500cm前後のほぼ正方形で、北辺の壁際にカマドが設置されている。深さは約35cm残存しており、壁際には幅10cm前後、深さ５cm前後の溝が掘られているが、全周してはいない。柱穴は四本確認できた。カマドは、トレンチによって一部壊してしまったが、両側に袖をもち、燃焼部は住居内に位置している。また、燃焼部から南にかけては、床面の下部に直径約130cm、深さ約60cmの土壙が掘られていた。遺物は、図示した位置の床面から、完形あるいはほぼ完形の須恵器杯蓋・杯身が出土しており、その他に鍛冶滓が１点出土した。時期は古・後・Ⅱであろう。　（平井）



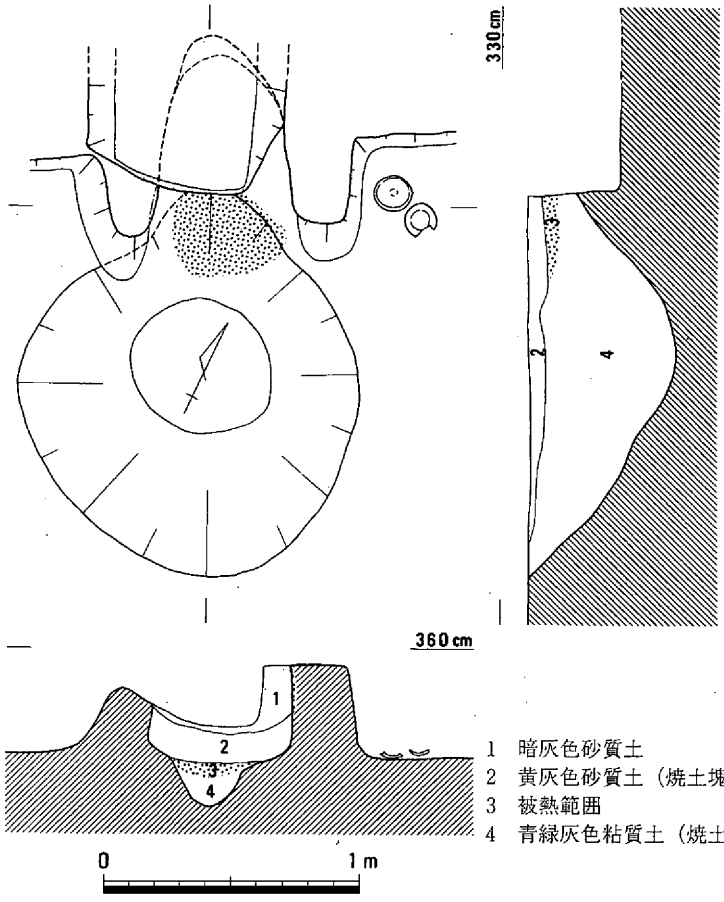
第713図　竪穴住居79　遺物

竪穴住居80（第715図、写真26－１）

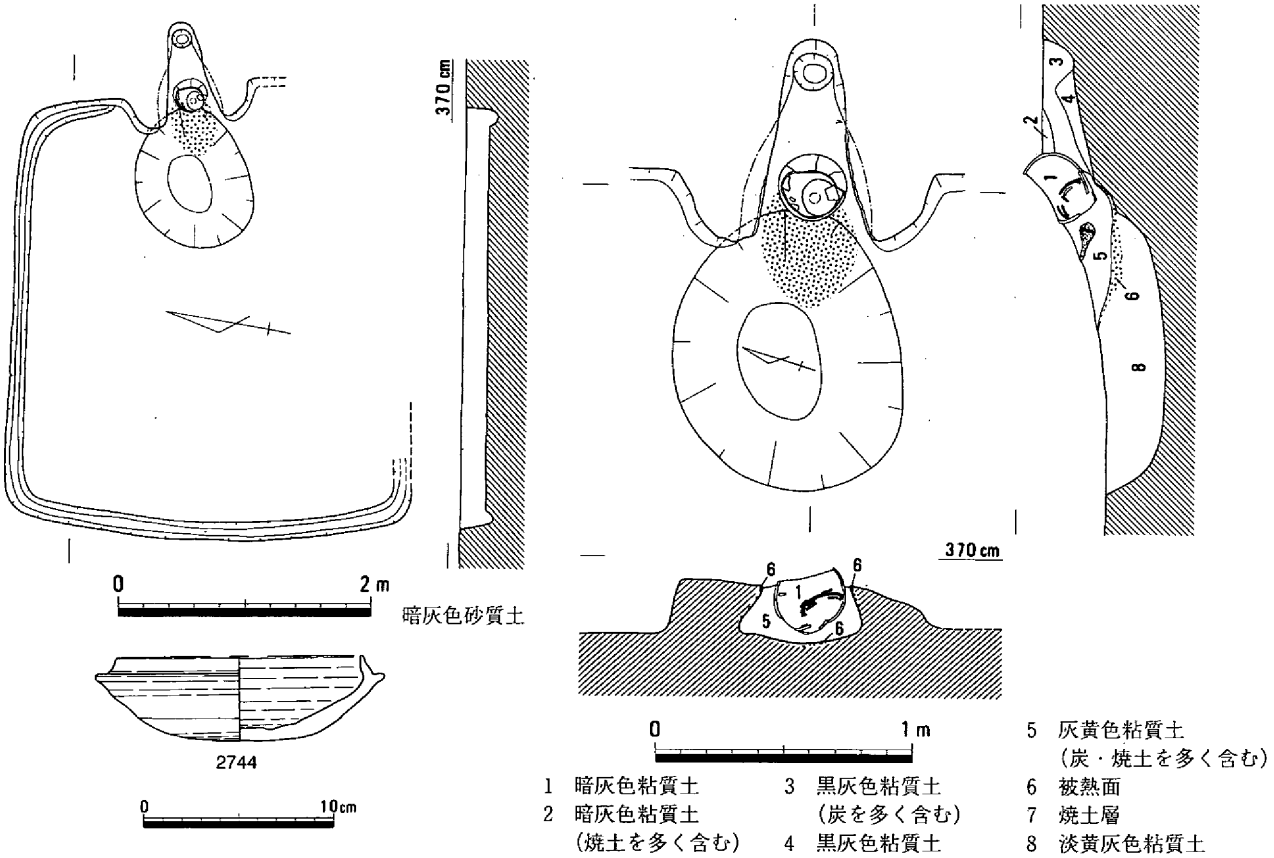
第１微高地のＮ22区、竪穴住居79の東隣りに位置する。平面形は南辺と東辺の一部が後世に削平さ

れており明確ではないが、約360×320cmの東西に長い長方形を呈し、東辺の壁際にカマドを設置している。深さは約20cm残存しており、壁際には、幅10cm前後、深さ５cm前後の溝が掘られている。柱穴は確認できなかった。カマドは両側に袖をつくり、燃焼部は住居内に位置し、煙道は住居外にのびている。燃焼部には図示したように土師器甕が残存していた。また、燃焼部の下部には、約110×90cmの楕円形の土壙が掘られていた。遺物は、須恵器が少量出土しており、時期は古・後・Ⅱであろう。

（平井）



第714図　竪穴住居79　カマド（1/30）



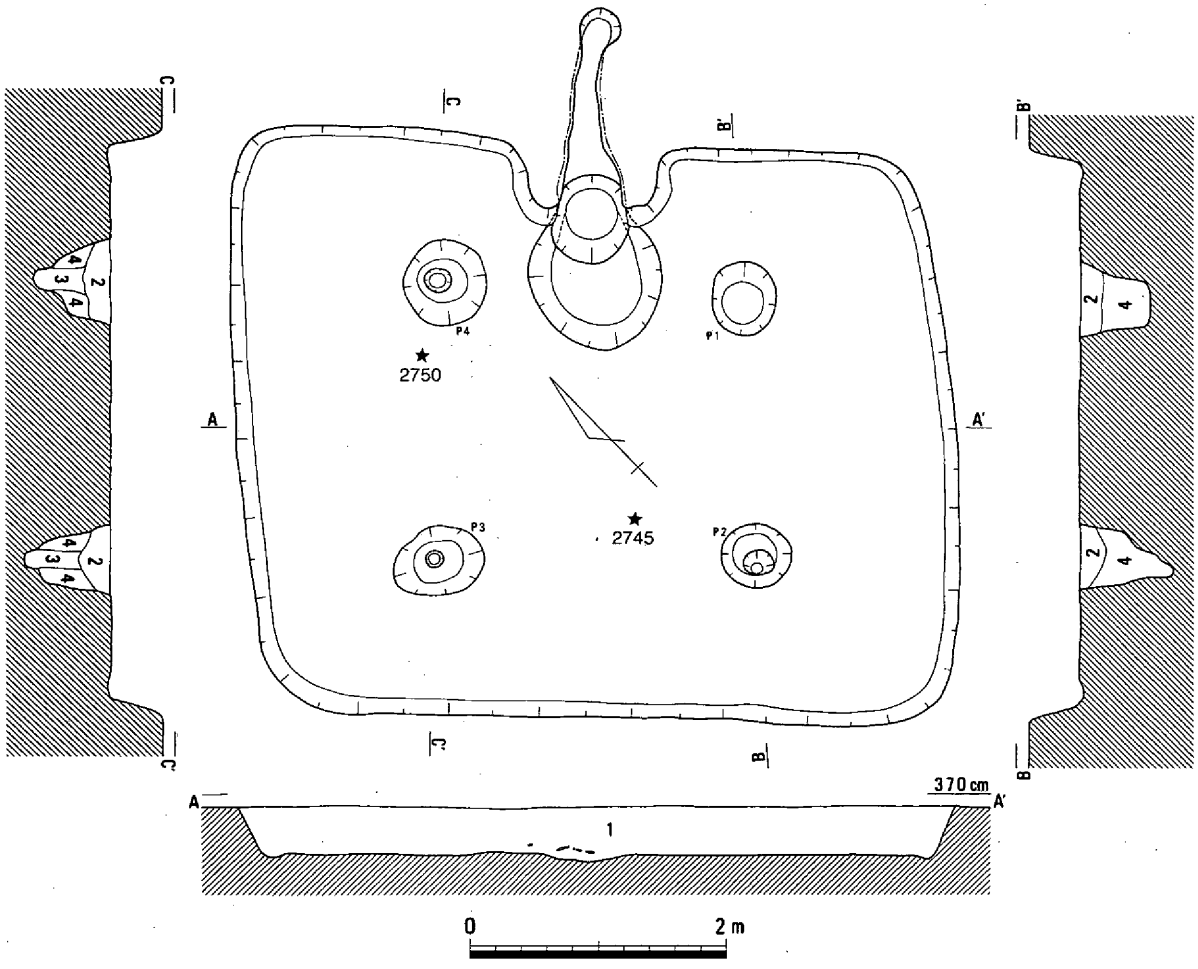
第715図　竪穴住居80（1/60・1/30）・遺物

竪穴住居81（第716・717図、写真26－１・３）

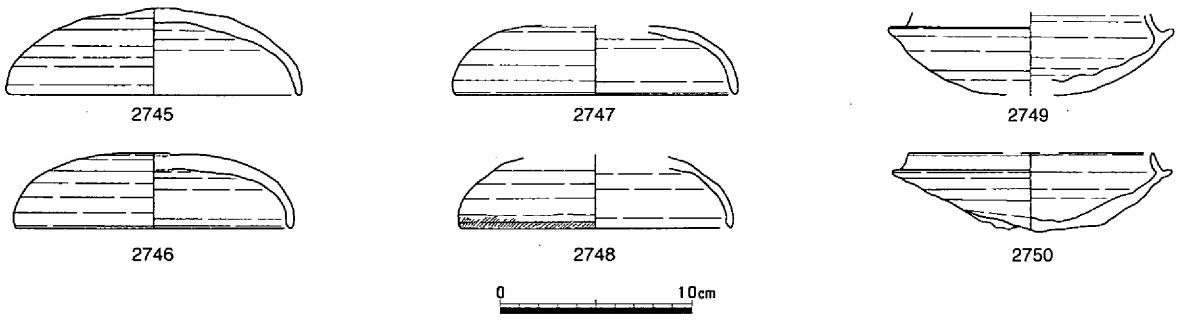
第１微高地のN22区、竪穴住居78の北東約７ｍに位置する。平面形は約570×470cmの東西に長い長方形で、北辺の壁際にカマドが設置されている。深さは、約40cm残存していた。

柱穴は四本確認できた。掘り方は、直径50～70cmの円形で、深さは床面から50cm前後であった。Ｐ２～４では、柱と考えられる痕跡が確認でき、それによると柱は、直径15cm前後の円形であったと推測できる。また、Ｐ３・４の断面観察からは、柱は切断された可能性を考えている。

カマドは、両側に袖をつくっており、燃焼部は住居内にある。煙道は住居外にのびており、約100



1　暗灰色粘質土と黄色砂質土　　2　暗灰色粘土と黄褐色砂質土　　3　暗灰色粘土と青灰白色微砂　　4　青灰白色微砂

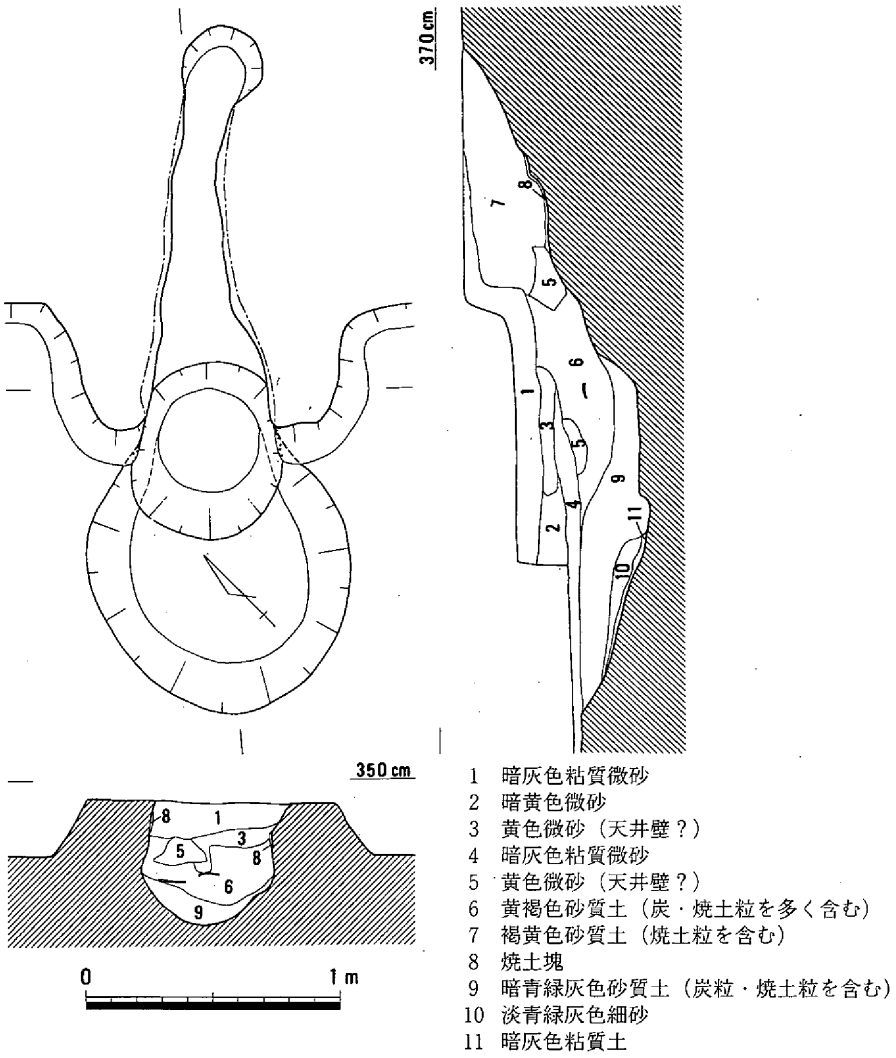


第716図　竪穴住居81（1/60）・遺物

cmを検出することができた。埋土中には、天井の壁と考えられる粘土塊が認められた。

燃焼部の下部には、約280×210cmの楕円形で、深さ約25cmの穴が掘られていた。埋土中には、炭粒や焼土粒を含んでいた。この土壙の機能については、実証はできていないが、燃焼部の除湿の役割を果たしていたのかもしれない。

遺物は床面および埋土中から少量の須恵器杯蓋・杯身が出土している。また、一点ではあるが、鉄塊系遺物が出土している。時期は古・後・Ⅱと考えている。　（平井）



第717図　竪穴住居81　カマド（1/30）

竪穴住居82（第718・719図、写真98・99）

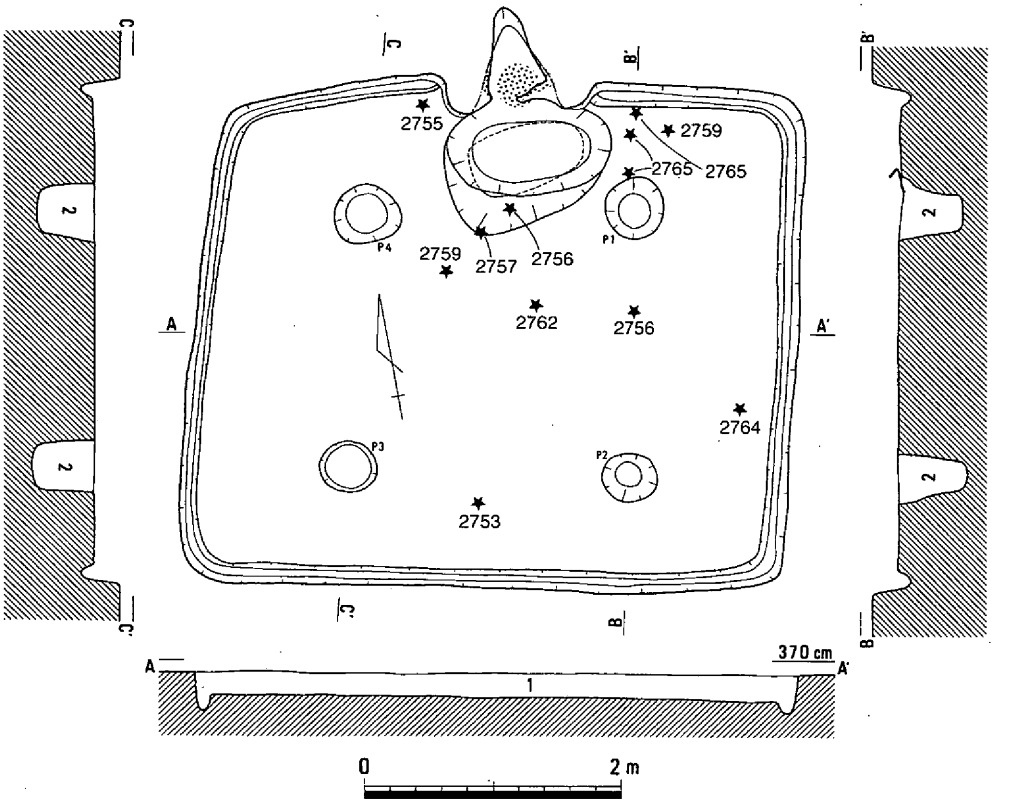
第１微高地のN22区、竪穴住居81の北東約10mに位置する。平面形は約470×410cmの東西に長い長方形で、北辺の壁際にはカマドを設置している。深さは約20cm残存しており、壁際には幅10cm前後、深さ10cm前後の溝が掘られている。柱穴は四本確認できた。掘り方は、直径40cm前後の円形で、深さは床面から50cm前後を測る。カマドは、両側に短い袖をつくっており、天井部もかなり残存していた(写真)。燃焼部は、他と比べて壁に近い部分にある。燃焼部の南側の床面下部には、約130×100cmの楕円形で、深さ約30cmの土壙が掘られている。

遺物はおもに床面から、須恵器の杯蓋・杯身や土師器の甕・甑が出土した。また、少量ではあるが、椀形鍛冶滓やガラス質鍛冶滓が出土している。時期は、古・後・Ⅱであろう。　（平井）

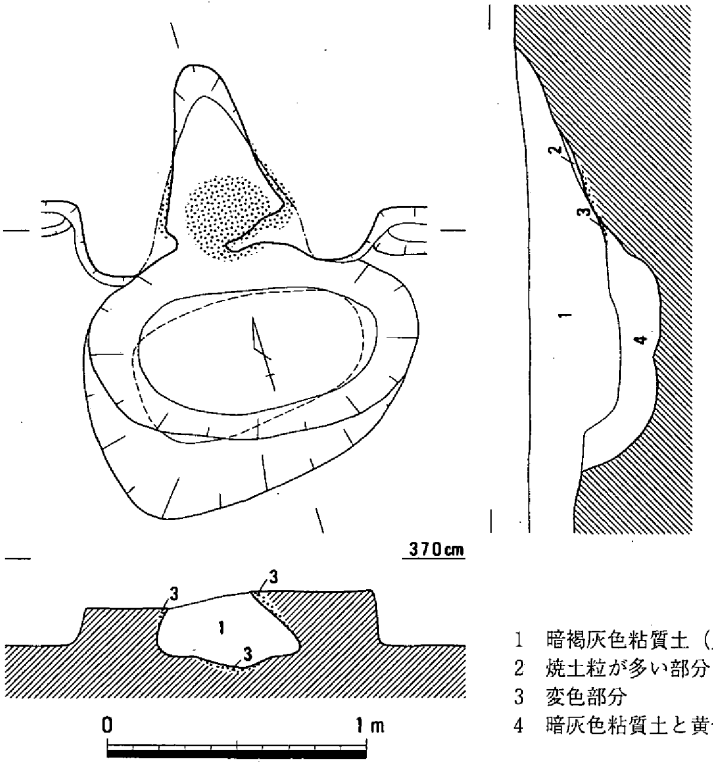
竪穴住居83（第720・721図）

竪穴住居82の北東約３mに位置する竪穴住居である。規模は１辺が420cmの正方形で、検出面からの深さは35cmを測る。また、主軸はN-52°-Eである。

床面では主柱穴２本と壁体溝および北東の壁では中央やや西よりに造り付けのカマドがみられた。カマドは燃焼部に支脚や焼土面は確認できず、住居床面からは１段下がった後に煙出し部は緩やかな傾斜をもって住居外に80cm程が突出する。さらに、袖部は住居の内側に100cm程が突出する。柱穴は



1　暗褐灰色粘質土（炭・焼土粒を少し含む）
2　暗灰色粘土



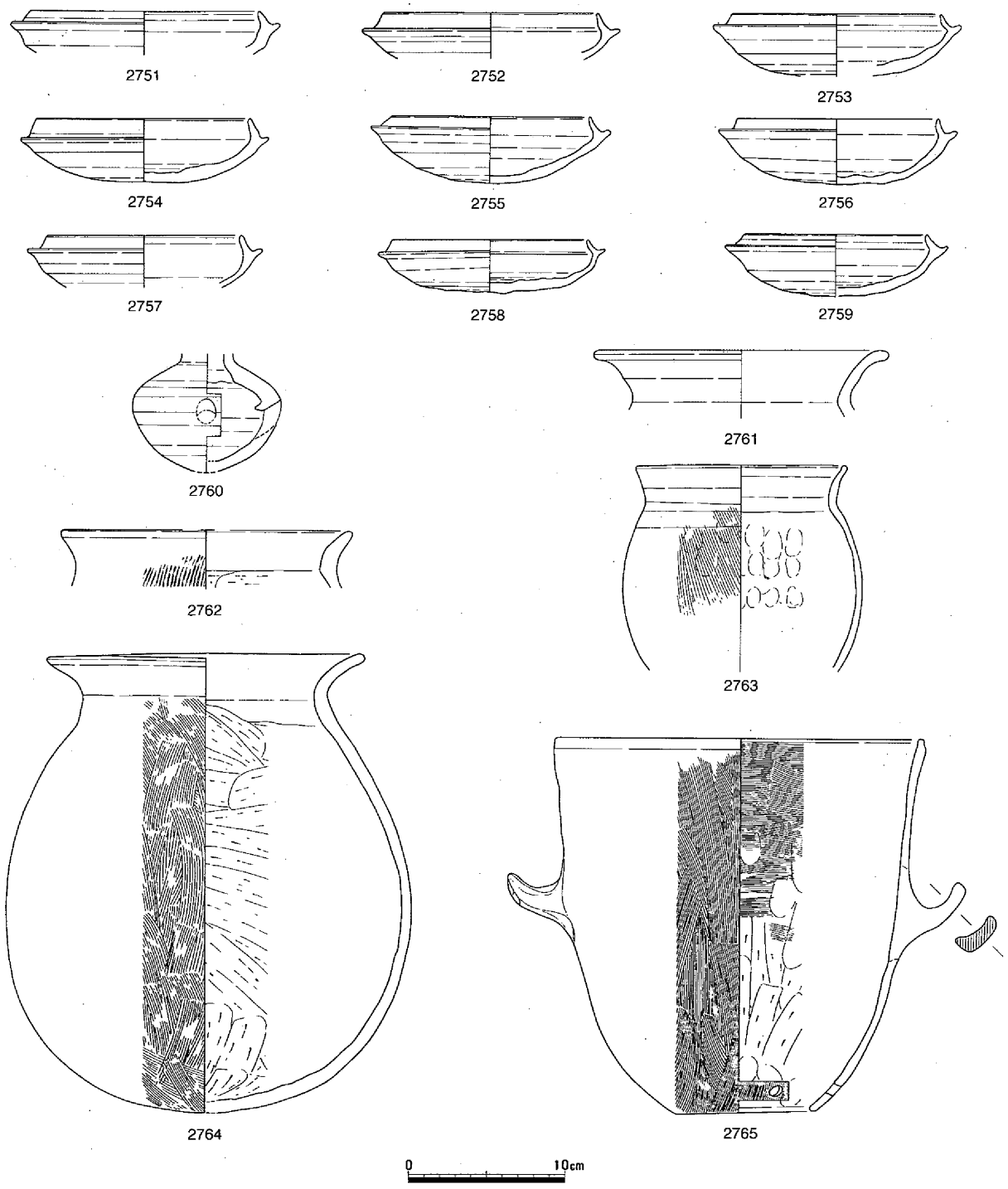
1　暗褐灰色粘質土（炭・焼土粒を含む）
2　焼土粒が多い部分
3　変色部分
4　暗灰色粘質土と黄色砂質土

第718図　竪穴住居82（1/60・1/30）

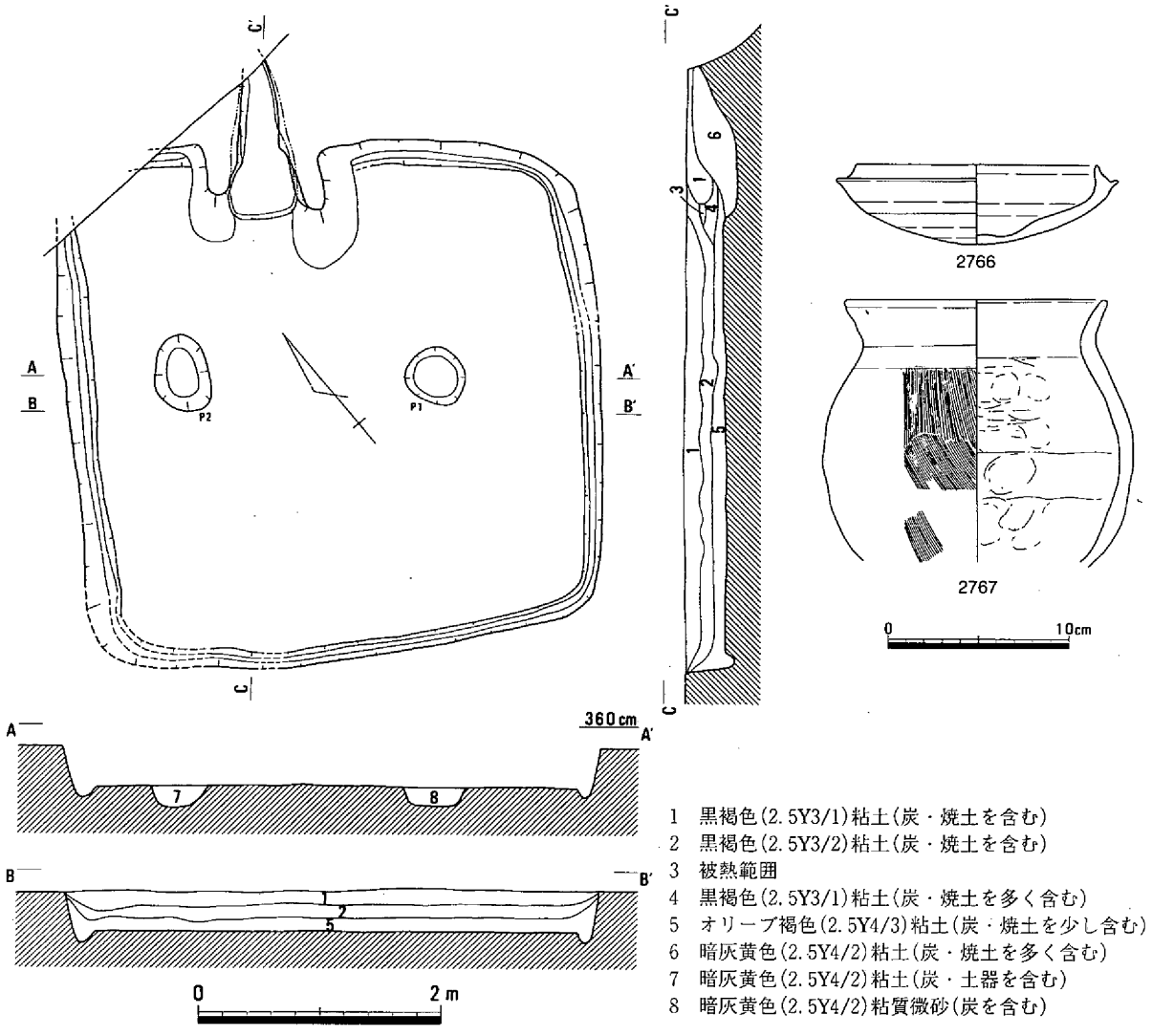
掘り方の直径が45～65cmで、深さは30～35cmを測る。遺物には、覆土上層から出土した須恵器杯身2766と床面上から出土した土師器甕2767がある。これからみて住居の時期は古・後・Ⅱである。(弘田)

竪穴住居84（第722・723図）

第１微高地のＮ22区北端部、竪穴住居82の東約10ｍに位置する。平面形は、東側約半分が、中・近世の溝によって切られているため明確ではないが、ほぼ長方形を呈するものと推測できる。深さは約15cm残存しており、壁際には、幅10cm前後、深さ5cm前後の溝が掘られている。柱穴は二本のみ確認



第719図　竪穴住居82　遺物



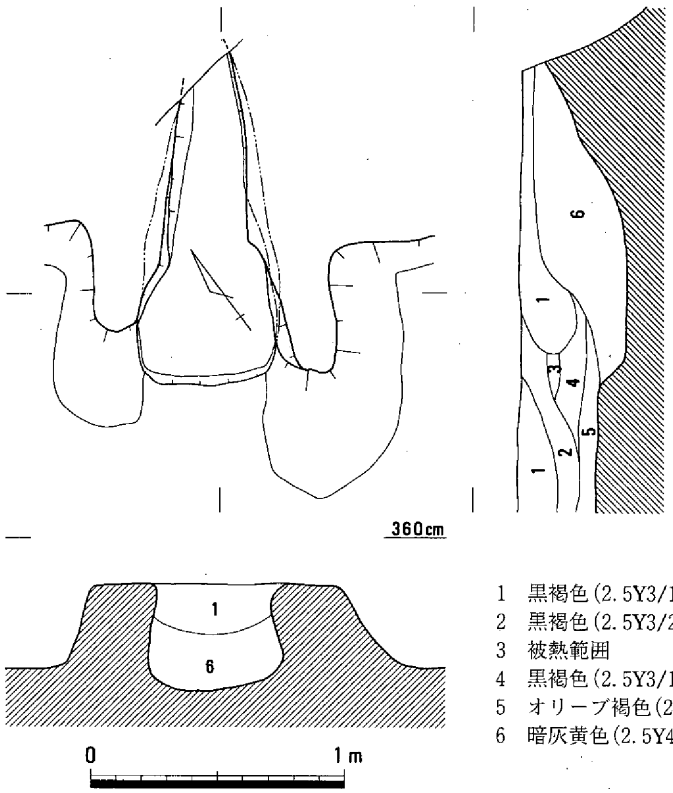
第720図　竪穴住居83（1/60）・遺物

できた。掘り方は直径約25cmの円形で、他の竪穴住居の柱穴に比べて小さい。

カマドは、北側の壁際につくられている。東側約半分が壊されているため、本来の形状は不明であるが、西側には袖を検出することができた。また、燃焼部の南側には、他の竪穴住居と同じく、楕円形の土壙が掘られていた。遺物は、少量の須恵器や土師器、およびガラス質鍛冶滓が出土した。時期は、古・後・Ⅱであろう。　（平井）

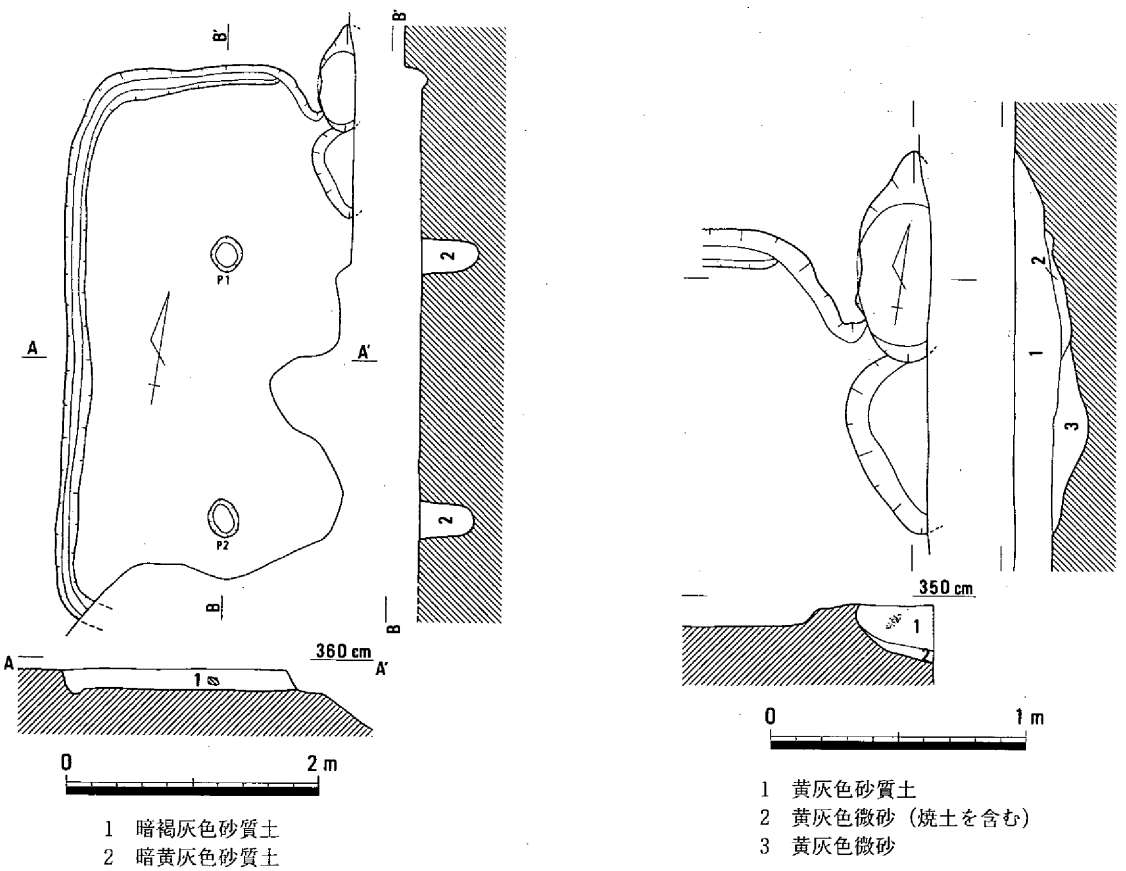
竪穴住居85（第724～726図、写真99）

第１微高地のＮ22区北半部、竪穴住居84の南約８ｍに位置する。平面形は、約470×450cmの正方形に近い長方形で、北辺の壁際には、カマドが設置されている。深さは25cm前後残存しており、壁際には、幅15～30cm、深さ10cm前後の溝が全体に掘られていた。柱穴は四本確認できた。掘り方は、直径約50cmの円形で、深さは床面から50～60cmを測る。また、Ｐ３では、柱と考えられる痕跡が確認できた。これによると、柱は、直径15cm前後の円形であったと推測できる。カマドは、両側に袖をつくっている。燃焼部は壁際にあり、煙道は住居外にのびている。また、燃焼部の南側には、約160×110cmの楕円形で、深さ約50cmを測る土壙が掘られている。遺物は、床面や埋土中から少量の須恵器や土師器、および鉄塊系遺物が二点出土している。また、カマド燃焼部の南東側で、鉄鎌のほぼ完形品が出土した（M30）。時期は、古・後・Ⅱであろう。　（平井）



1　黒褐色(2.5Y3/1)粘土(炭・焼土を含む)
2　黒褐色(2.5Y3/2)粘土(炭・焼土を含む)
3　被熱範囲
4　黒褐色(2.5Y3/1)粘土(炭・焼土を多く含む)
5　オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土(炭・焼土を少し含む)
6　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土(炭・焼土を多く含む)

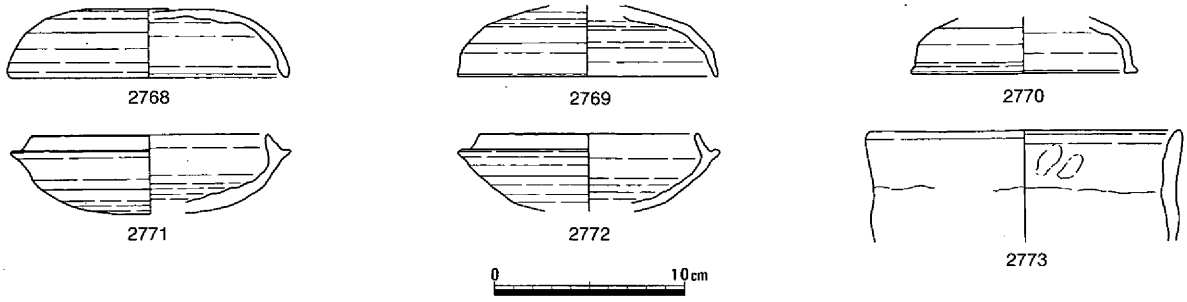
第721図　竪穴住居83　カマド（1/30）



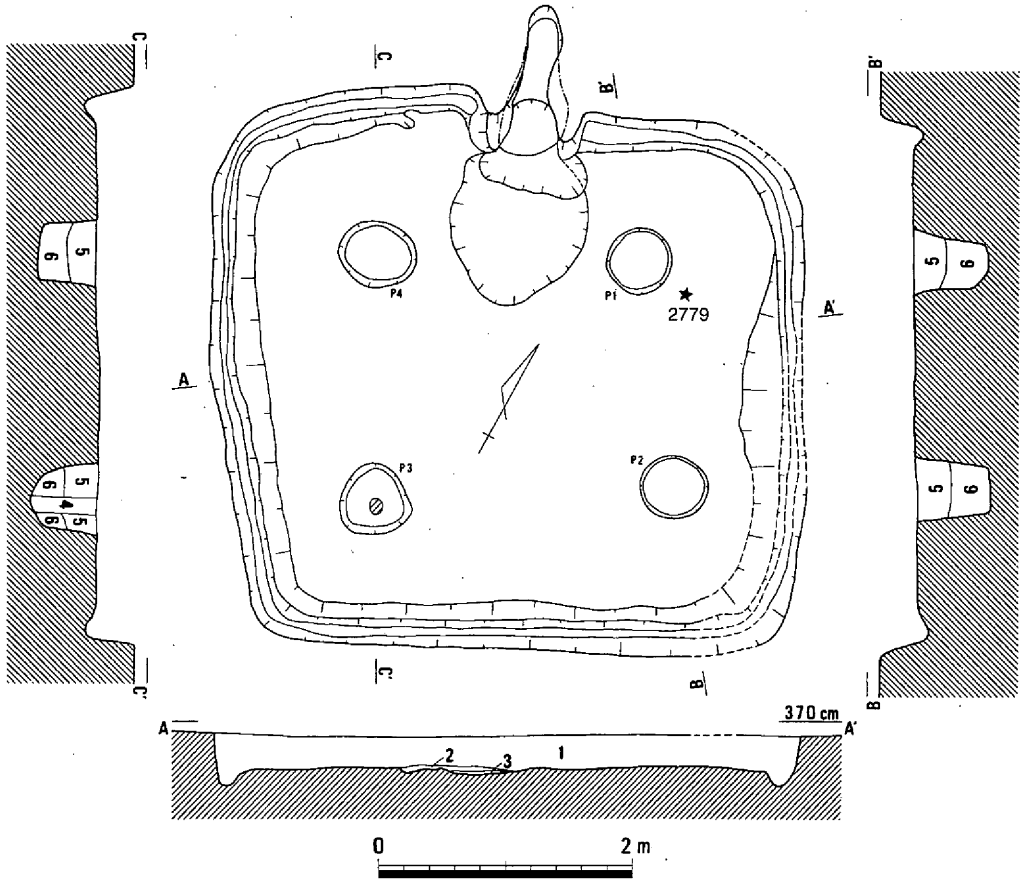
1　暗褐灰色砂質土
2　暗黄灰色砂質土

1　黄灰色砂質土
2　黄灰色微砂（焼土を含む）
3　黄灰色微砂

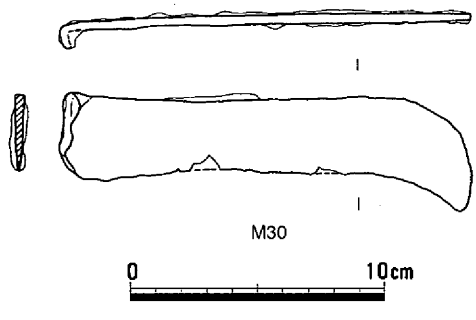
第722図　竪穴住居84（1/60・1/30）



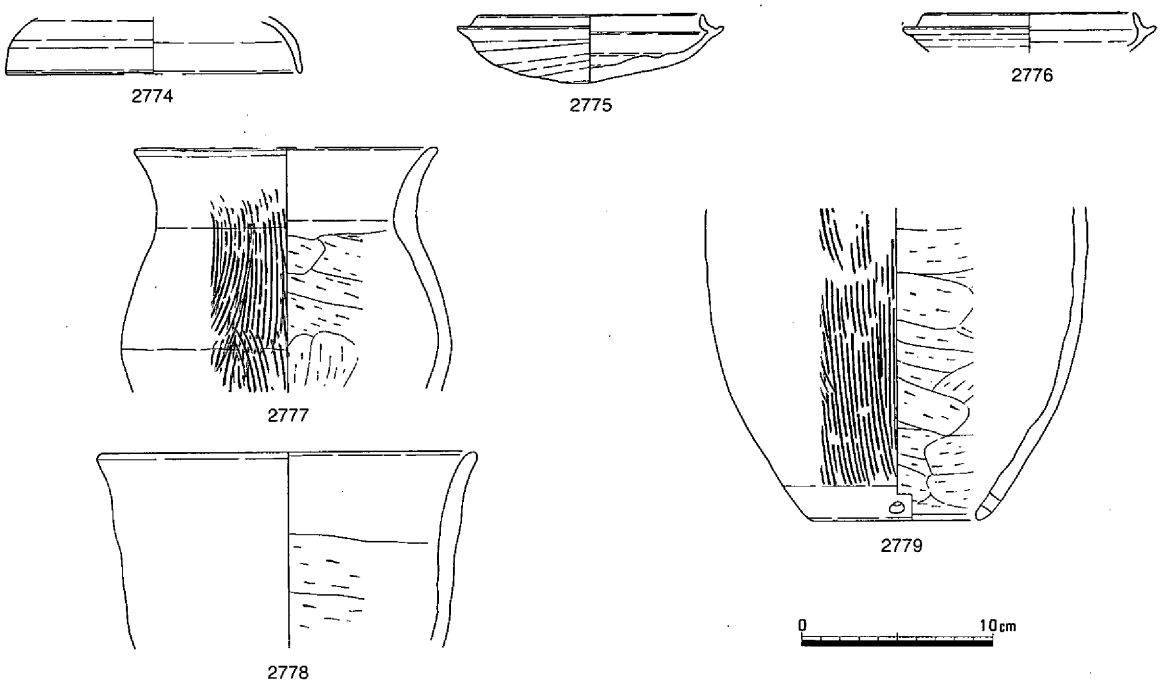
第723図　竪穴住居84　遺物



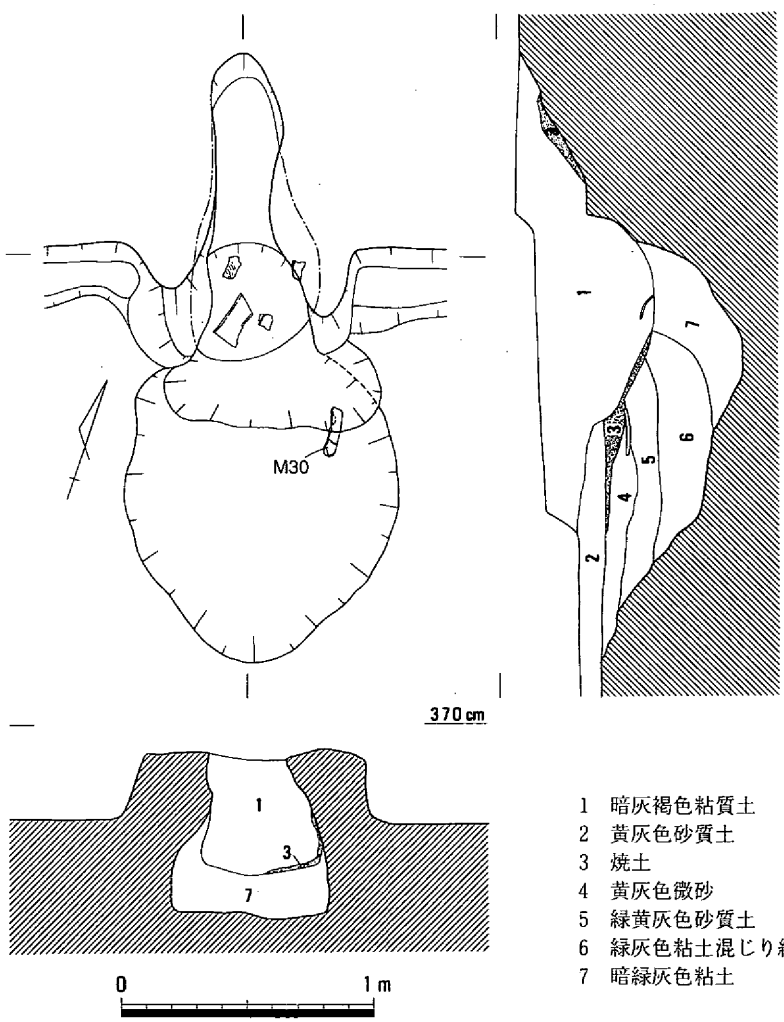
1　暗褐色(10YR3/3)砂質土
2　灰オリーブ色(5Y5/2)微砂
3　オリーブ黒色(5Y3/2)粘土混じり微砂
4　暗緑灰色粘質土
5　暗灰黄色粘質土
6　緑灰色砂質土



第724図　竪穴住居85（1/60）・遺物（1）



第725図　竪穴住居85　遺物（２）

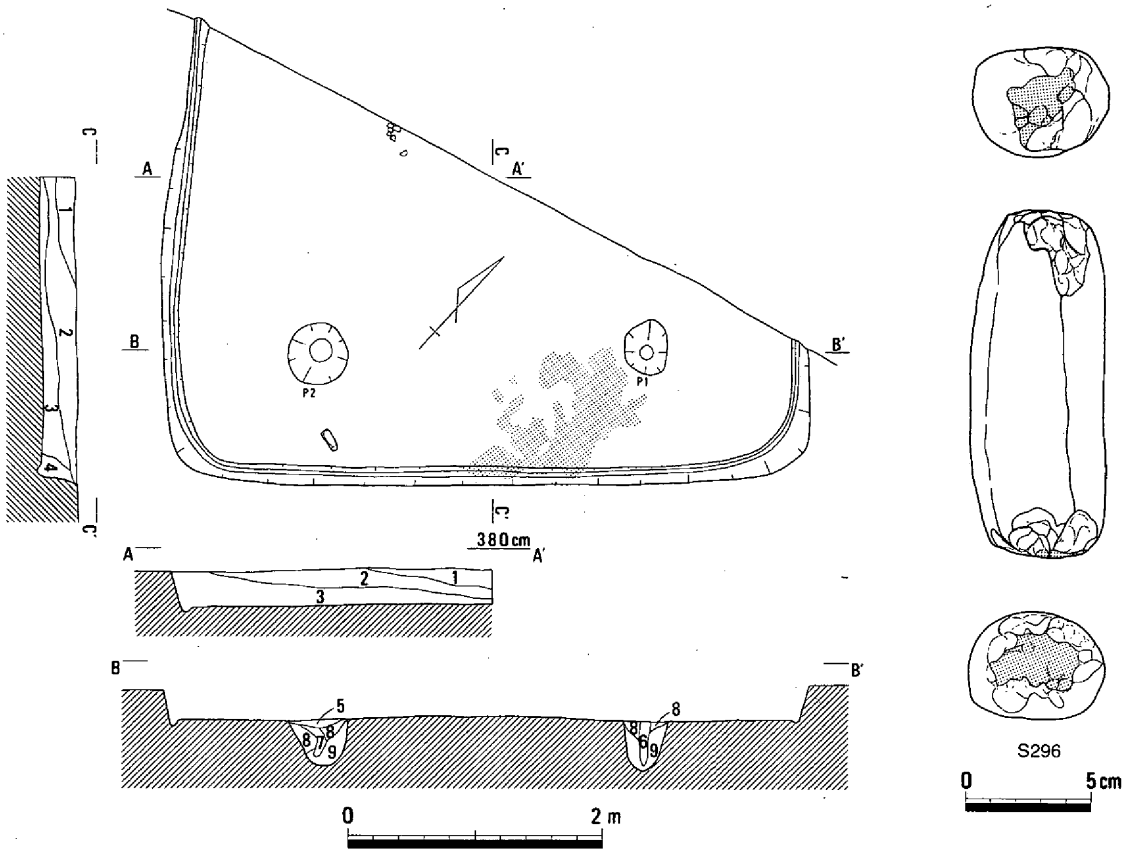


第726図　竪穴住居85　カマド（1/30）

竪穴住居86（第727図）

竪穴住居85の北東11.5mで検出した住居で、N22区の北東に位置する。調査の制約から南半を検出するにとどまったが、一辺496cmあまりの方形を呈するものと思われる。検出面からの深さは30cmあり、24m²あまりと推定される床面の周囲には壁体溝がめぐる。主柱は2本のみを確認したが本来は4本で構成されていた可能性が強い。それぞれ壁体から100～120cmの位置に据えられており、柱間距離は255cmを測る。また、径34～49cm、深さ37～40cmの掘り方には径10cmほどの柱痕跡を残す。

出土遺物は少なく、南隅から出土した石器S296を図示するにとどまった。このため詳細な時期は不明であるが、竪穴住居87に近似した時期が想定される。（亀山）



1　暗黄褐色微砂
2　暗青灰黄色微砂
3　青灰黄色微砂
4　暗青灰褐色微砂（焼土塊を多く含む）
5　暗青灰黄色粘質微砂（炭化物を含む）
6　青灰黄色粘質微砂
7　暗青灰黄色粘質微砂（粘質土ブロックを含む）
8　暗青灰黄色微砂
9　青灰黄色粘質微砂（粘質土ブロックを含む）

第727図　竪穴住居86（1/60）・遺物

竪穴住居87（第728～730図、写真27－1・2、99）

N22区の北東に位置し、竪穴住居86の南東1.2mで検出した方形住居で、主軸をN-40°-Eにおく。長さ416cm、幅404cmの正方形をなすが、カマドを造り付ける北東辺がわずかに広い。深さ27cmにある床面は平坦で、その標高は340cmを測る。面積は16.2m²あり、その周囲には幅10cm、深さ5cmほどの壁体溝がめぐる。4本ある主柱は壁体から90～110cmほどの位置に据えられており、柱間距離は220～185cmを測る。径35～65cm、深さ35～30cmある掘り方からは、径10cmほどの柱痕跡が確認されている。カマドは全長164cmあり、燃焼部の幅は80cmを測る。煙道は17°の傾斜をもって110cmほど屋外へ延び

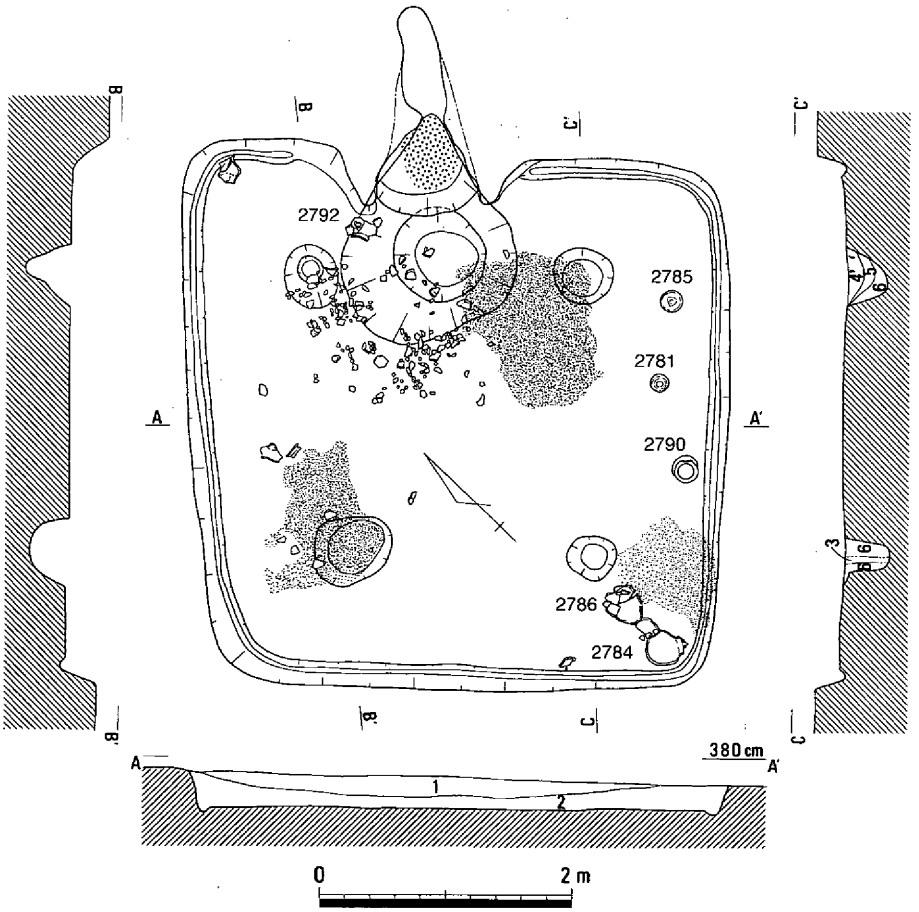
ている。燃焼部からその前面にかけて、長さ176cm、幅141cmの不整な楕円形を呈する土壙が掘りこまれている。深さは52cmあり、その上面には貼り床が施されている。

主柱に囲まれた範囲からは炭・焼土とともに多くの土器が出土した。とくにカマドの前面からは土師器2787～2792が、また南東の壁体に沿って須恵器2780～2786が出土している。また南隅からは黄灰色をなす粘土塊が出土した。このうち、須恵器は大阪府陶邑古窯址群のＴＫ43型式に並行し、６世紀後半に位置付けられる。（亀山）

竪穴住居88（第731図）

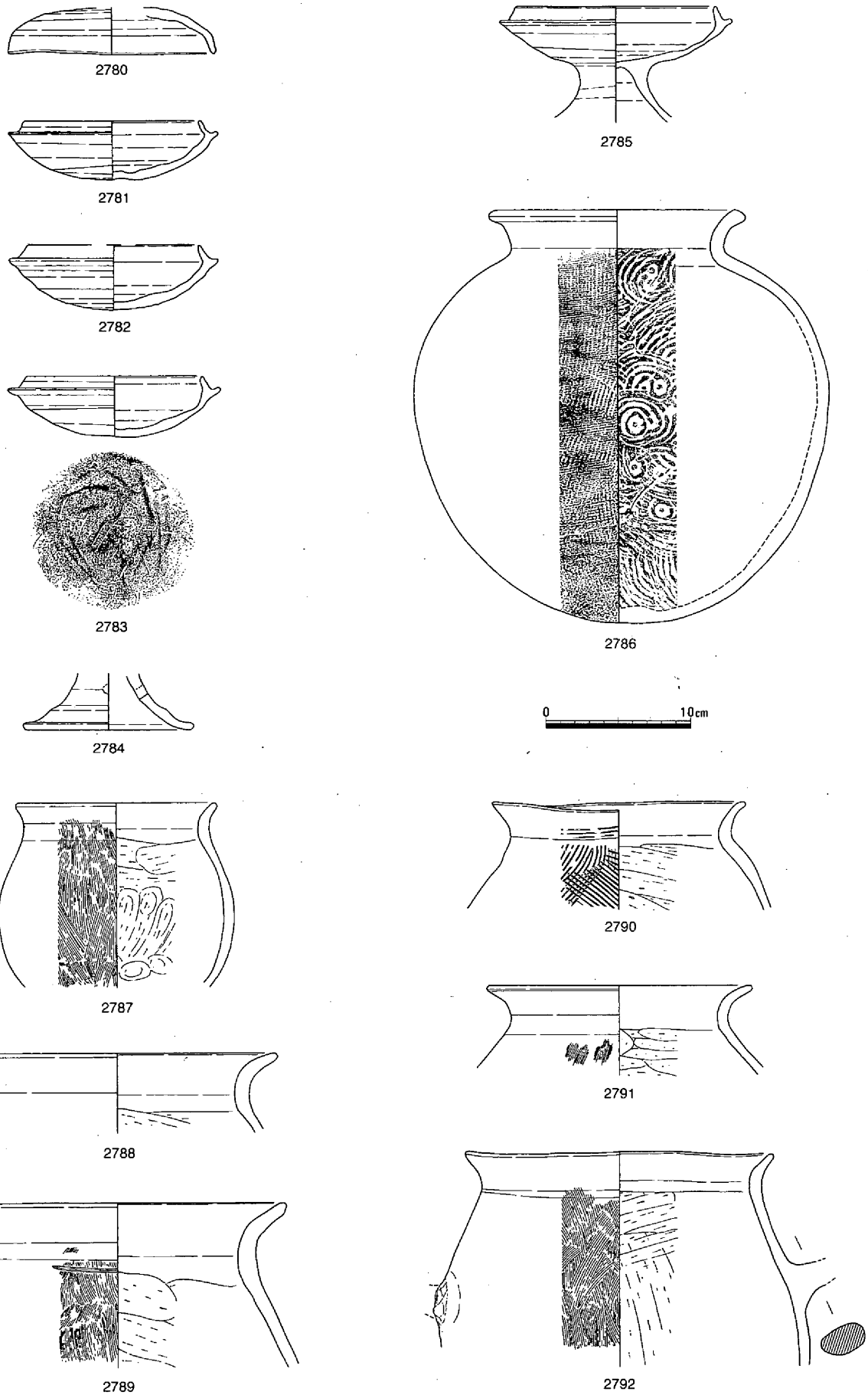
M22区の南西隅で検出された。すぐ東に接して竪穴住居89が存在し、また、竪穴住居88は古代の掘立柱建物８と重複していた。これらの遺構はほぼ同じ規模で、その位置関係から同時存在は考えられないことから、順次に建て替えられていったものとみられる。１軒の住居が長期間にわたって同じ場所を占めていた例として注目される。N22区の竪穴住居群においても隣接する例が認められ、掘立柱建物の存在もあるが、竪穴住居88ほど顕著な例はみられなかった。また、一般の住居が竪穴住居から掘立柱建物に変化する時期を知らせる資料としても重要である。

竪穴住居88は一度建て替えられていて、南側で２条の壁体溝を検出し、柱穴も重複して８個を確認した。柱穴の切り合い関係から住居は北寄りに建て替えられたものとみられるが、断面の土層図や古

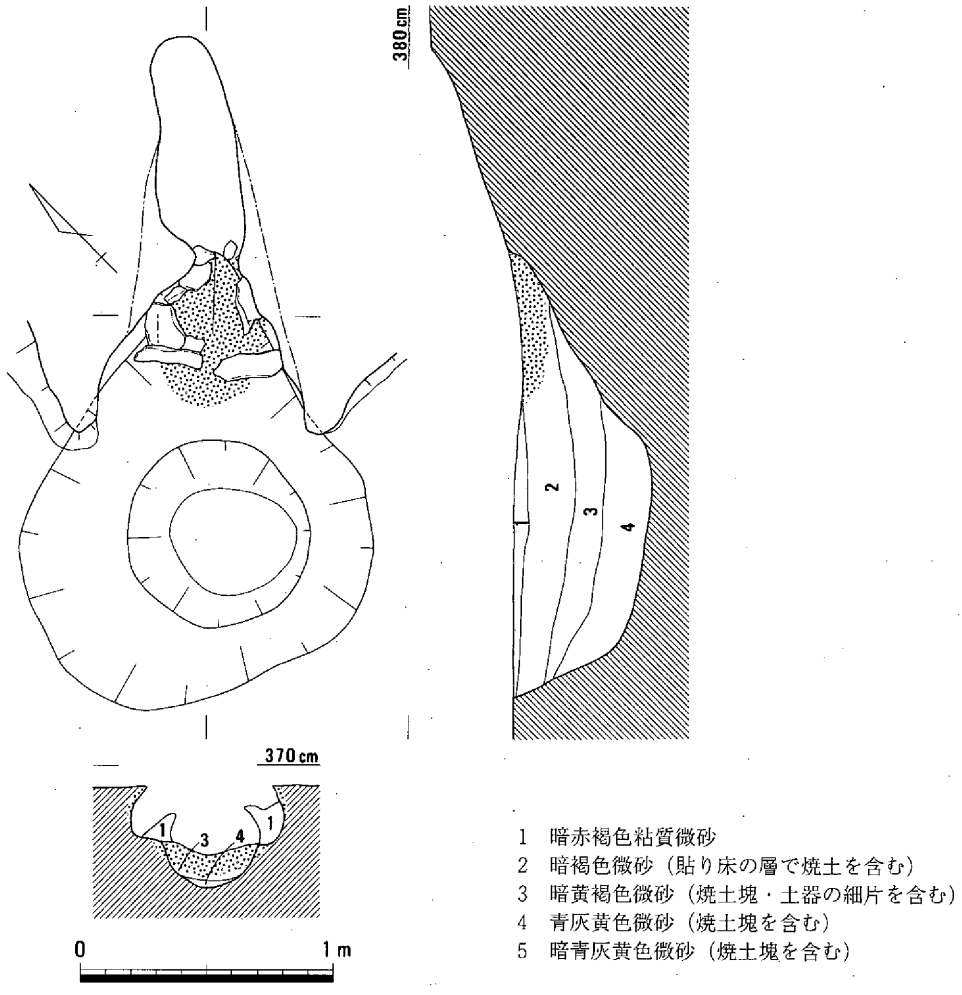


1　茶褐色微砂　　3　暗黄褐色粘質微砂（柱抜き取り痕）　　5　暗灰黄褐色粘質微砂
2　暗灰色粘質微砂　4　暗褐黄色粘質微砂（焼土塊・炭化物をわずかに含む）　6　暗黄褐色微砂

第728図　竪穴住居87（1/60）



第729図　竪穴住居87　遺物



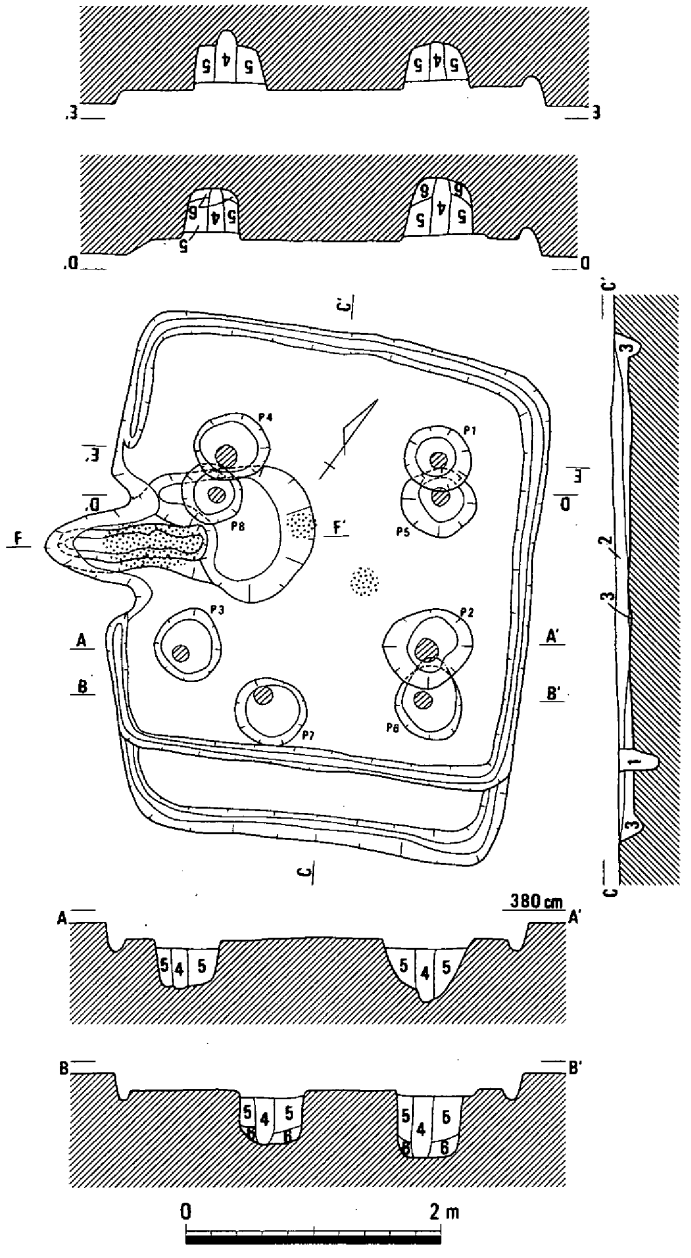
第730図　竪穴住居87　カマド（1/30）

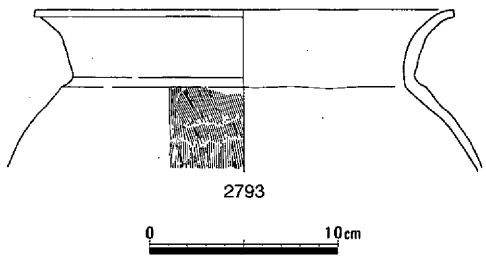
い柱穴の配置から推定すると、北辺は移動させず、むしろ南辺を60cmほど狭くしていた。これによって、最初は長辺410cm、短辺340cmあった住居が、長辺350cm、短辺340cmの規模に縮小し、より方形に近くなっていった。縮小後の床面積は10.6㎡を測った。柱は４本で、柱穴の掘り方は円形であった。最初の住居の柱穴配置はＰ７の位置が方形の規格からかなり東にずれて歪んでいたが、後の住居ではほぼ方形に配置されていた。柱穴掘り方の長径は48～69cmで、柱痕の直径は10～18cmだった。西辺の中央にカマドが設けられていた。カマドの焚き口部分では長径212cm、短径102cm、深さ22cmの穴が掘られ、黄褐色の粘土を埋めて固めた後にカマドに火を入れていた。Ｐ８とカマドの位置からカマドも作り直されたとみられるが、古いカマドの痕跡は確認されなかった。住居の床面では他に２ケ所で火処が認められたが、小範囲にとどまっていた。

出土遺物の2793は弥生土器の甕の破片であるが、竪穴住居88の年代は古墳時代後期である。（岡本）

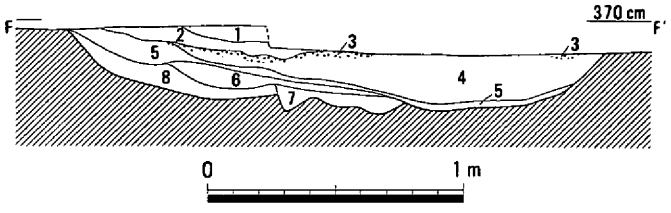
竪穴住居89（第732・733図）

竪穴住居88の西に壁体溝を接するように位置し、その距離は30cm前後にすぎなかった。東西にやや長い方形で、長辺が400cm、短辺は390cm、床面積は13.4㎡を測った。北辺の中央にカマドが設けられていた。カマドの保存状態は良く、煙出しがトンネル状に残存し、北辺から50cmの所で開口していた。カマドの焚き口ではカマドの構築にあたって穴を掘り、黄褐色の粘性砂質土で充填した後にカマドを





1　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘性砂質土(粘性は弱い)
2　暗褐色(7.5YR3/4)粘性砂質土(粘性は弱い)
3　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘性砂質土(粘性は弱い)
4　黄褐色(2.5YR5/4)粘性砂質土
5　黄褐色(2.5YR5/6)粘性砂質土
6　黄褐色(2.5YR5/3)粘性砂質土



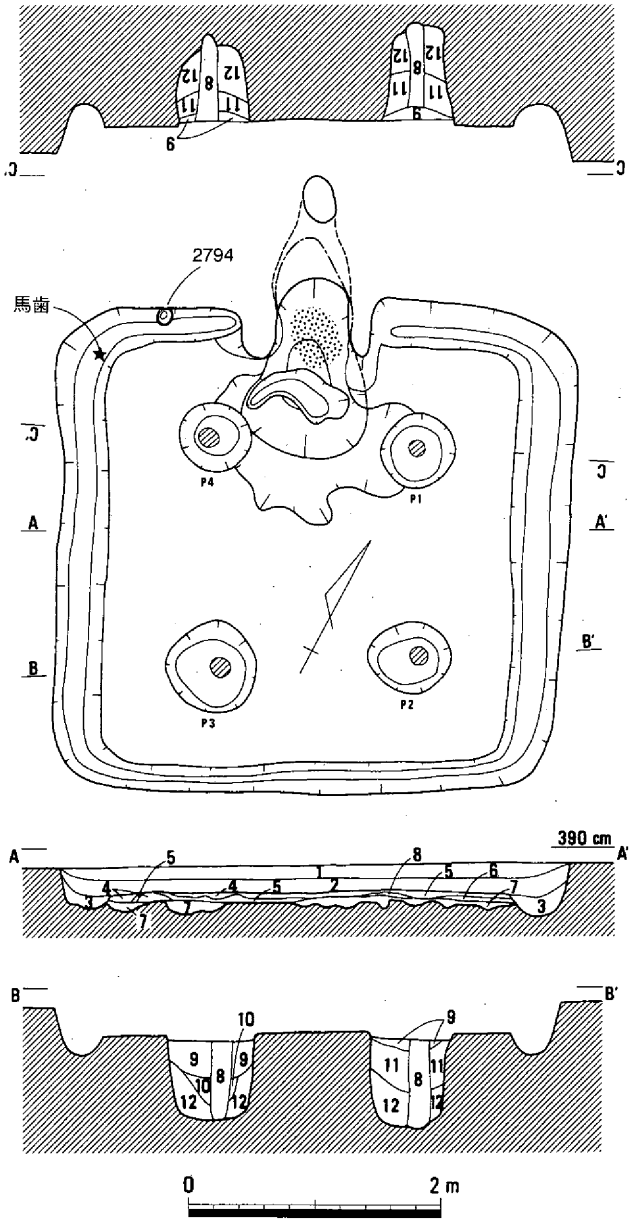
1　灰褐色(7·5YR4/2)粘質土
2　灰褐色(7/5YR4/2)粘質土(焼土・炭粒を多く含む)
3　被熱部分(赤変)
4　灰黄褐色(10YR5/2)粘土斑明黄褐色(2.5Y7/6)粘質土
5　褐色(10YR4/4)～灰黄褐色(10YR5/2)粘質土(焼土塊を含む)
6　明黄褐色粘質土斑褐色(10YR4/4)粘質土
7　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘性砂質土(焼土をわずかに含む)
8　明黄褐色粘質土斑にぶい黄褐色粘性砂質土

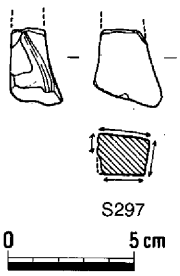
第731図　竪穴住居88（1/60・1/30）・遺物

使用していた。柱穴は４個で、掘り方は円形を呈して長径が58～71cmあり、柱痕の直径は12～20cmであった。壁体溝は周辺の同時代の竪穴住居としては広く、20～47cmもあった。

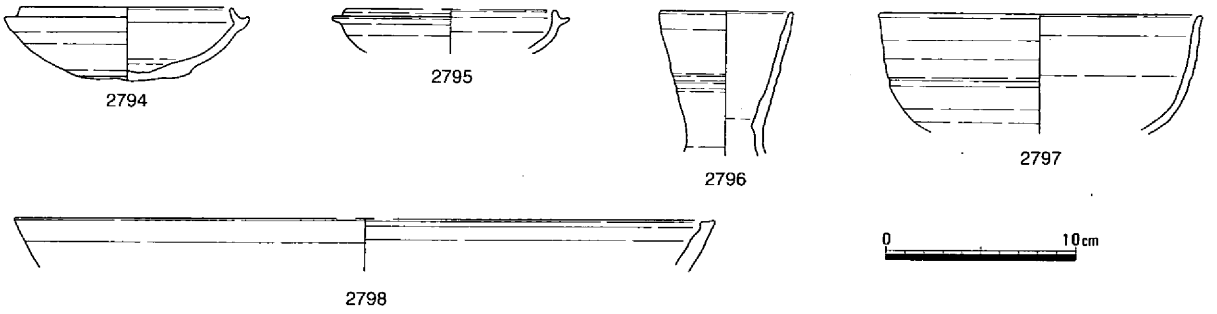
出土遺物として、土器の他に砥石(S18)と馬歯がある。馬歯は小片が壁体溝の底から出土した。また、完形の須恵器の杯身2794も壁体溝の上方から出土した。須恵器の壺(2796)、鉢(2797)、甕(2798)も出土している。杯身2794の口径は112mmを測り、６世紀末から７世紀初頭の年代が与えられる。

竪穴住居の年代は遺物等から７世紀前半と考えられる。竪穴住居88（古）から竪穴住居88（新）を経て、竪穴住居89から掘立柱建物８への流れを想定すると、掘立柱建物は７世紀に遡る可能性が考えられる。　（岡本）

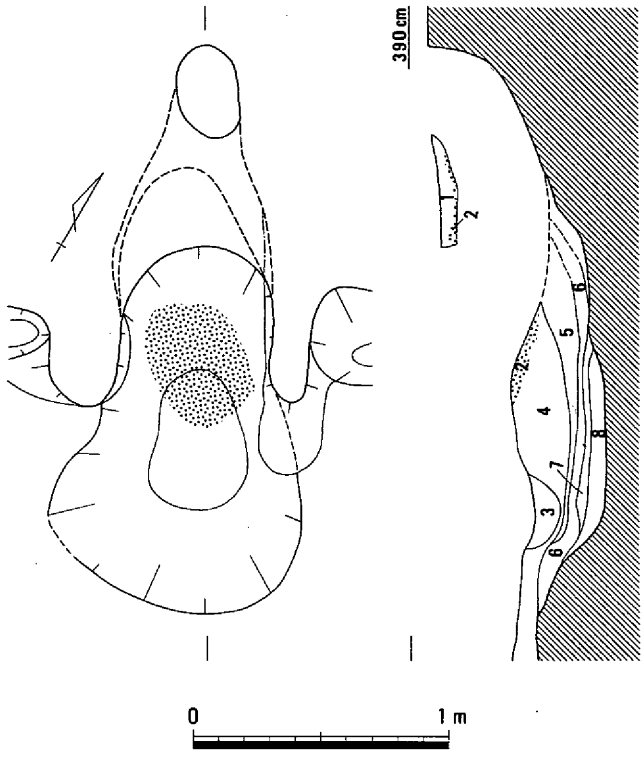




1　暗褐色（10YR3/3）粘性砂質土
2　褐色（10YR4/4）粘性砂質土
3　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）粘質土
4　明黄褐色（10YR6/6）粘質土
5　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘性砂質土
6　褐色（10YR4/4）粘性砂質土
7　黄褐色（2.5YR5/4）粘性砂質土
8　黄褐色（2.5YR5/4）粘性砂質土
9　黄褐色（2.5YR5/6）粘性砂質土
10　灰オリーブ色（5Y5/3）砂質土
11　オリーブ褐色（2.5Y4/6）砂質土
12　暗オリーブ色（5Y4/4）砂質土



第732図　竪穴住居89（1/60）・遺物

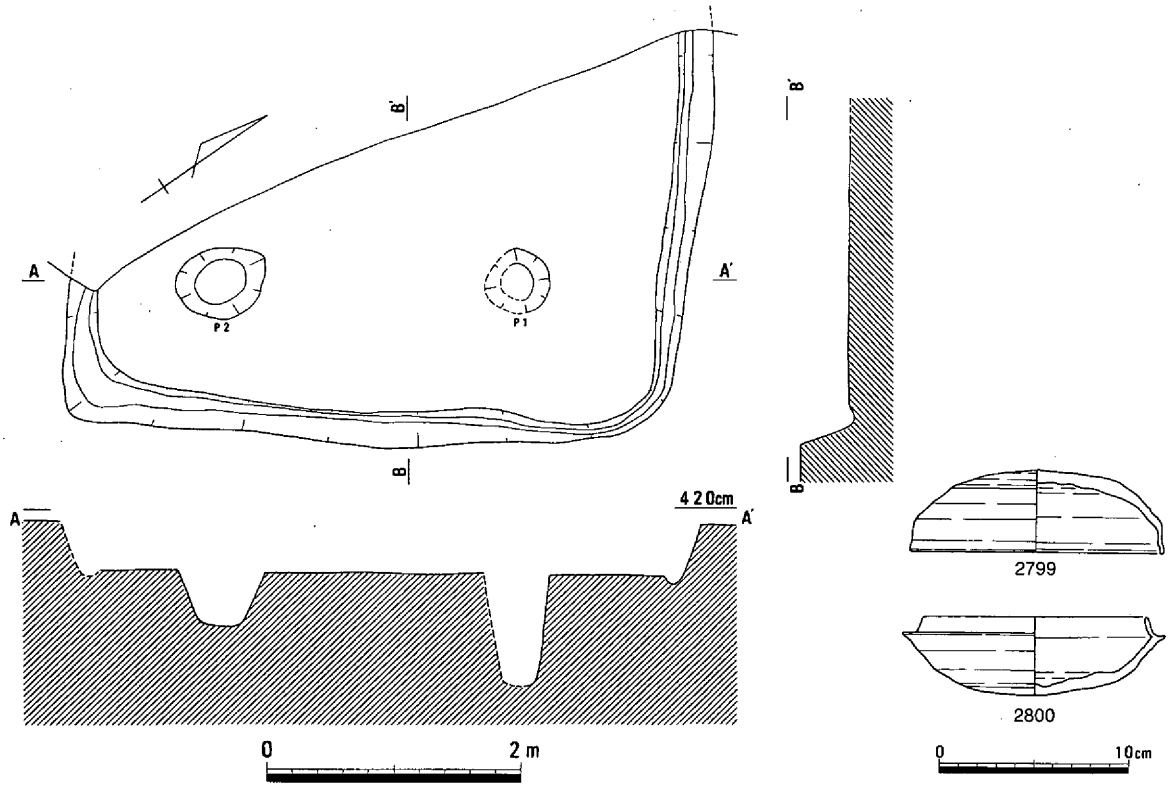


1　黄色粘性砂質土
2　被熱範囲
3　黄褐色（2.5Y5/4）粘性砂質土（焼土塊を含む）
4　明黄褐色（2.5Y6/6）粘性砂質土
5　黄褐色（2/5Y5/3）粘性砂質土
6　黄褐色（2.5Y5/3～5/4の中間）粘性砂質土
7　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘性砂質土
8　オリーブ褐色（2/5Y4/4）粘性砂質土

第733図　竪穴住居89　カマド（1/30）

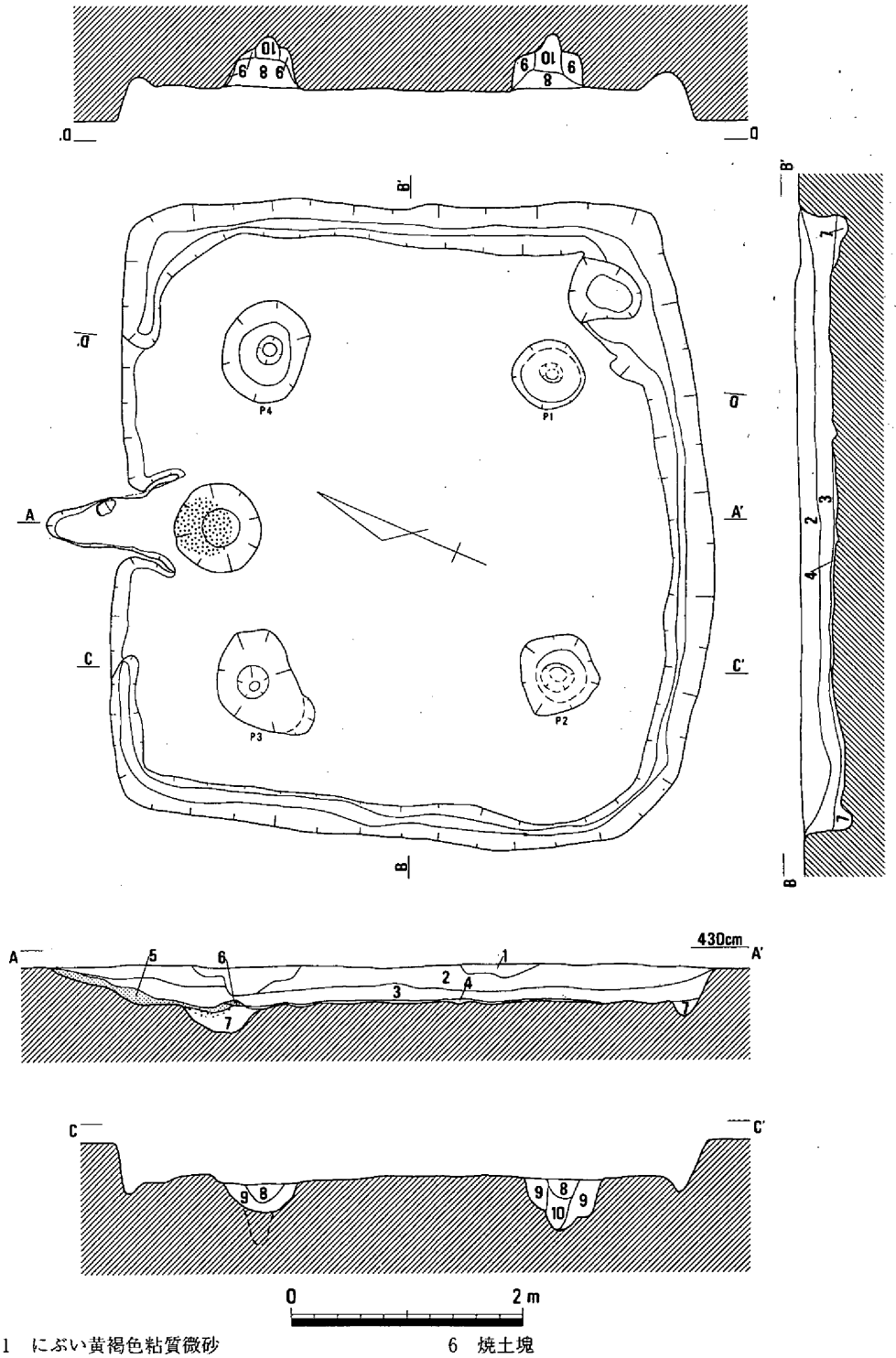
竪穴住居90（第734図、写真100）

自動車道の路線部分から南にのびる調査区、N23$_{05}$区の北西隅に位置する、方形の竪穴住居である。約半分が調査区外にのびるが残存部では１辺の長さが約500cmであり、また検出面からの深さは約40



第734図　竪穴住居90（1/60）・遺物

cmを測る。調査部分の床面には柱穴２本と壁体溝がめぐるほかは、焼土面やカマドなどはみられなかった。２本の柱穴は芯々間の距離が116cmで、掘り方の直径が50～75cmを測る。また深さは両者が異なり、それぞれ20cmと45cmを測る。



1　にぶい黄褐色粘質微砂
2　褐色粘質微砂（3層土をブロック状に含む）
3　暗褐色粘質微砂
（焼土・土器・炭を大量に含む）
4　褐色粘土
5　黒褐色粘土（焼土・炭）
6　焼土塊
7　暗褐色粘土（炭・土器を若干含む）
8　暗褐色粘質微砂（炭・土器を含む）
9　暗褐色粘土
10　褐色粘質微砂

第735図　竪穴住居91（1/60）

出土遺物はごくわずかで、図示できたのは須恵器の蓋杯のセット2799・2800の1組のみである。2799・2800ともに口縁端部は丸く収め、丸みを帯びた天井部と底部の外面には回転ヘラケズリがみられる。陶邑編年のTK43～209型式に平行する。この住居の時期は、6世紀末葉頃と思われる。（弘田）

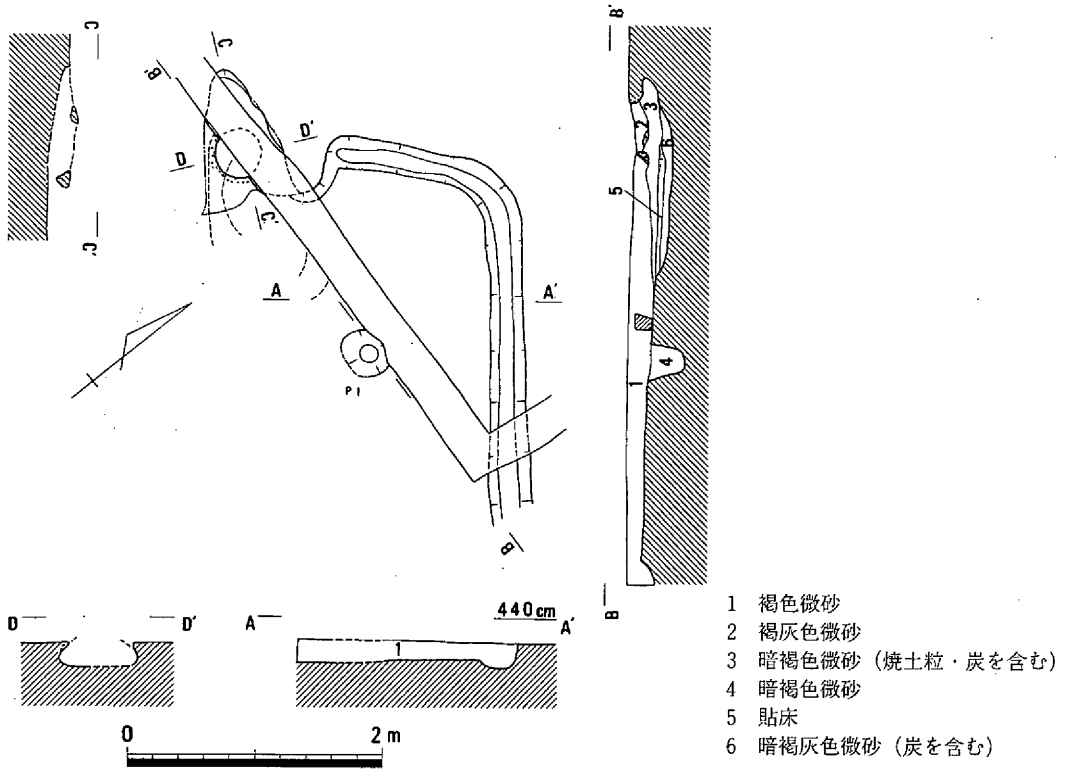
竪穴住居91（第735図）

Mf23$_{05}$区の中央に位置する、方形の竪穴住居である。規模は南北の辺長が500cmに対し、東西の辺はやや長く550cmを測り、また検出面からの深さは30cmを測る。主柱穴は4本で構成され、それぞれ掘り方の径が60～80cmで、深さは45～50cmを測る。なかには径20cm程の柱根跡の残っているものもあった。さらに住居北壁のほぼ中央には造りつけのカマドを設けており、床面の壁体溝はこの周囲で途切れていた。このカマドは天井や袖部あるいは支脚などの遺存状況は良くなかったものの、煙出部は住居外に65cm突出し、また床面・壁面ともよく焼けていた。カマドの主軸はN-23°-Eである。さらに、カマド構築前の下部構造として、焼成部直下に直径80cm、深さ25cmの土壙が存在していた。

出土した須恵器の甕片や住居の構造からみて、この住居の時期は古墳時代後期と思われる。（弘田）

竪穴住居92（第736図）

竪穴住居91の南東24mで検出した方形住居で、N23区の北東に位置する。調査区の南辺にかかって検出したため全体の形状については明らかではないが、北西辺に造り付けられたカマドの位置からすれば一辺400cmほどの方形を呈するものと思われる。深さは20cmと浅く、標高406cmを測る床面の周囲には幅33cm、深さ8cmの壁体溝をめぐらせている。柱穴は1本分を確認しており、その位置から4本柱と推測される。カマドは全長110cmほどあり、屋外へ65cmほど延びている。天井部は落下していたものの、径35cmあまりに復元される懸け口が弧状に遺存していた。また、燃焼部からその前面にかけて、長さ134cm、幅70cm、深さ11cmの楕円形をなす土壙が検出されている。遺物が出土していないた



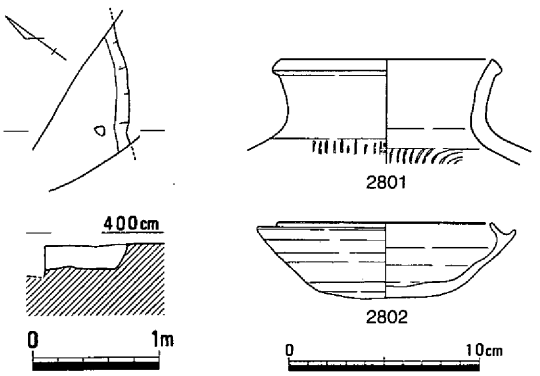
第736図　竪穴住居92（1/60）

め時期は明らかでないが、６世紀後半～７世紀前半に収まるものと思われる。（亀山）

竪穴住居93（第737図）

竪穴住居23や59と重複する位置にある。住居23や59より時期的には後出すると思われるが掘り方の一部しか確認できなっかった。深さが15cm程でおそらく方形の竪穴住居と思われるが壁体溝はみられない。

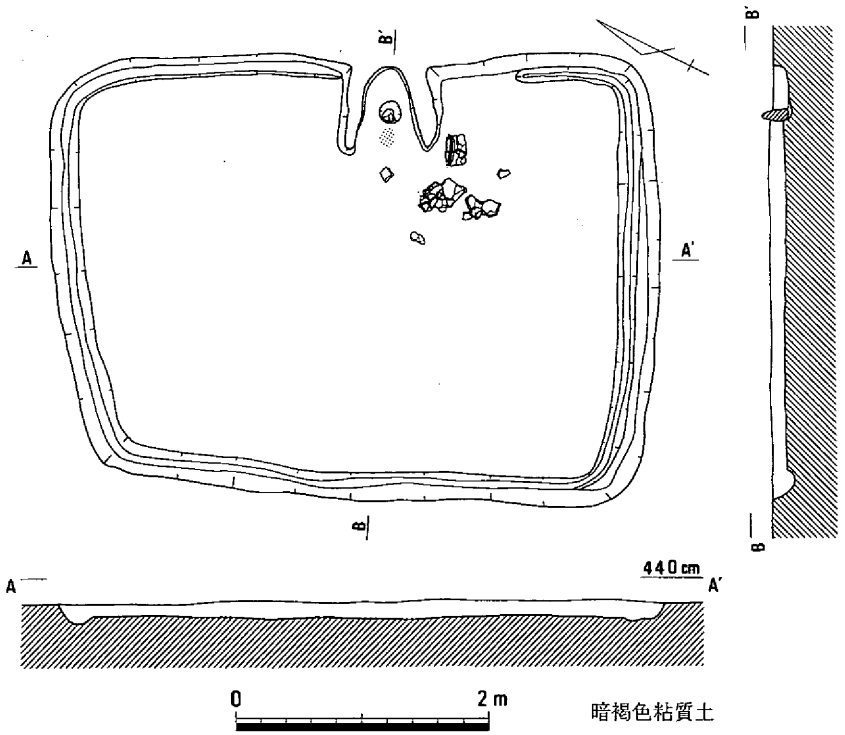
出土遺物としては須恵器の甕2801と杯身2802がある。杯身は立ち上がりが短いものの、底部には回転ヘラケズリがみられる。これからみてこの住居の時期は古墳時代後期Ⅲと考えられる。（弘田）



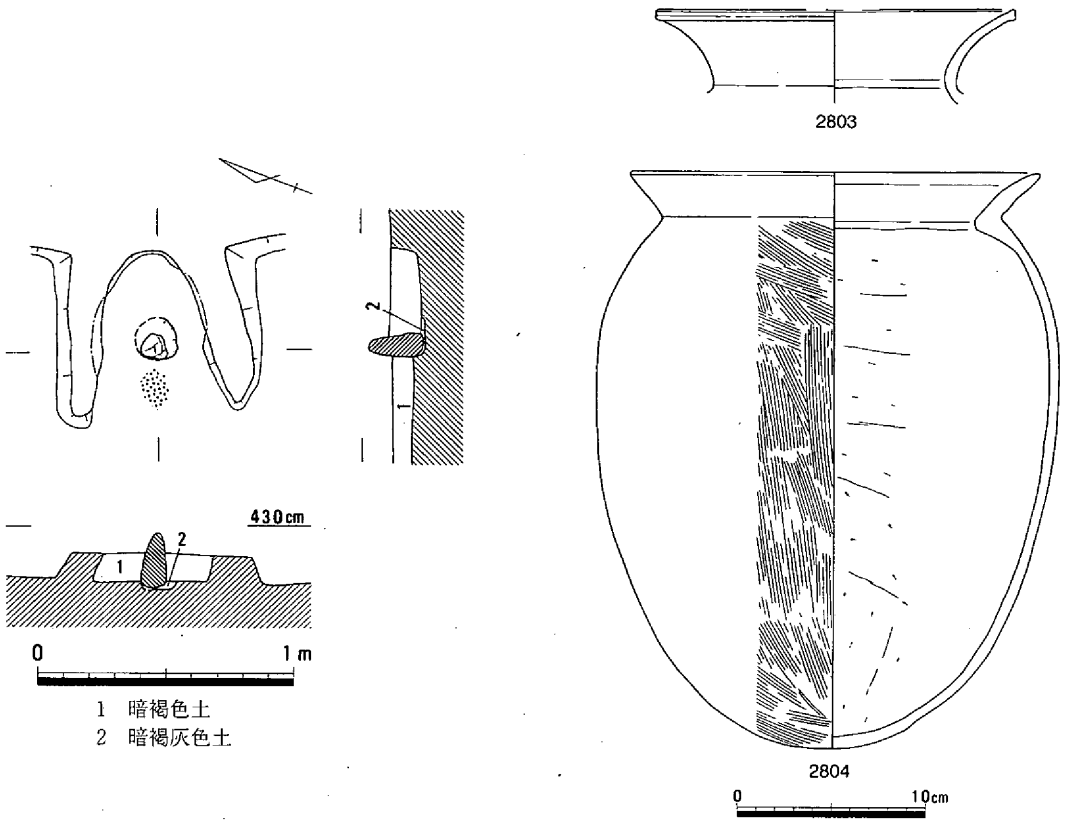
第737図　竪穴住居93（1/60）・遺物

竪穴住居94（第738・739図、写真27－３、100）

竪穴住居93の南約10ｍに位置する竪穴住居である。平面形は長方形を呈し、規模は長辺が470cm、短辺が340cm、深さは検出面から15cmを測る。住居の主軸はN-65°-Eである。床面には周囲に壁体溝をめぐらしているが、柱穴は精査したものの確認できなかった。また、北西の辺の中央やや東よりには造りつけのカマドが存在していた。袖部は、高さ10cm程が残り、壁面から内側に約60cmが突出していた。また、煙出し部は住居検出面においては住居外には出ていない。さらに、カマド中央部には支脚として石が立てて置かれており、その前面は良く焼けていた。出土遺物は、カマドの周囲にみられた。2703は須恵器の口縁部小破片で、口縁端がわずかに下方に拡張し、広口壺などの可能性がある。2704は土師器の長胴甕で、短く外に開く口縁部がつく。この住居の時期は古墳時代後期Ⅲと思われる。（弘田）



第738図　竪穴住居94（1/60）



第739図　竪穴住居94カマド（1/30）・遺物

竪穴住居95（第740図）

竪穴住居94の南６ｍに位置する方形の竪穴住居である。かなり攪乱を受けているが、残存部では一辺が450cmを測り、主軸はN-47°-Wである。床面では北西の辺には造り付けのカマドをもつ。煙出し部は緩やかな傾斜をもち住居外に80cm程が突出する。また、カマドの燃焼部前面の床下層からは長軸175cm、短軸105cmで、深さ50cmの土壙が検出できた。

須恵器などの細片が出土しており、時期は古墳時代後期Ⅲに比定できよう。　（弘田）

竪穴住居96（第741図、写真100）

竪穴住居95の東３ｍに位置する方形の竪穴住居で、規模は長辺が450cmで短辺は410cmを測る。住居東壁沿いの床面には倒置した高杯と焼土面がみられたことからカマドが存在していたと思われるが、袖部や煙出部は検出できなかった。柱穴は４本で、掘り方の径が65cm程、深さは35～60cmを測る。

遺物は、須恵器2805・2806と土師器2807～2812がある。2805は杯ないしは高杯と思われる。内湾気味に立ち、１条の稜線を境に直立する口縁部の端部は内側に緩く傾斜する。色調は灰色を呈す。椀状の杯底部は突線を境に真っ直ぐ立つ口縁となり、端部は内傾する。底部には左回りの回転ヘラケズリを施す。小形椀2806は把手部分が剥離している。底部周囲は手持ちのケズリを、底面はナデて仕上げる。甕2807・2808の口縁端部は、わずかに外につまみだして丸く終わる。内面下半はヘラケズリを行うが、上半は指ナデのみで粘土紐の痕跡が明瞭にみられる。高杯はいずれも杯底部と口縁部の境に段をなしている。2810では緩やかに垂下する脚柱部と強くハの字に開く裾部との境に円孔を３ヶ所穿つ。外面はナデ、内面にはヘラケズリがみられる。また、錆化が著しい鉄片M31は、鉄鏃ないしは鉋と考えられる。この住居の時期は、古・中・Ⅱである。　（弘田）

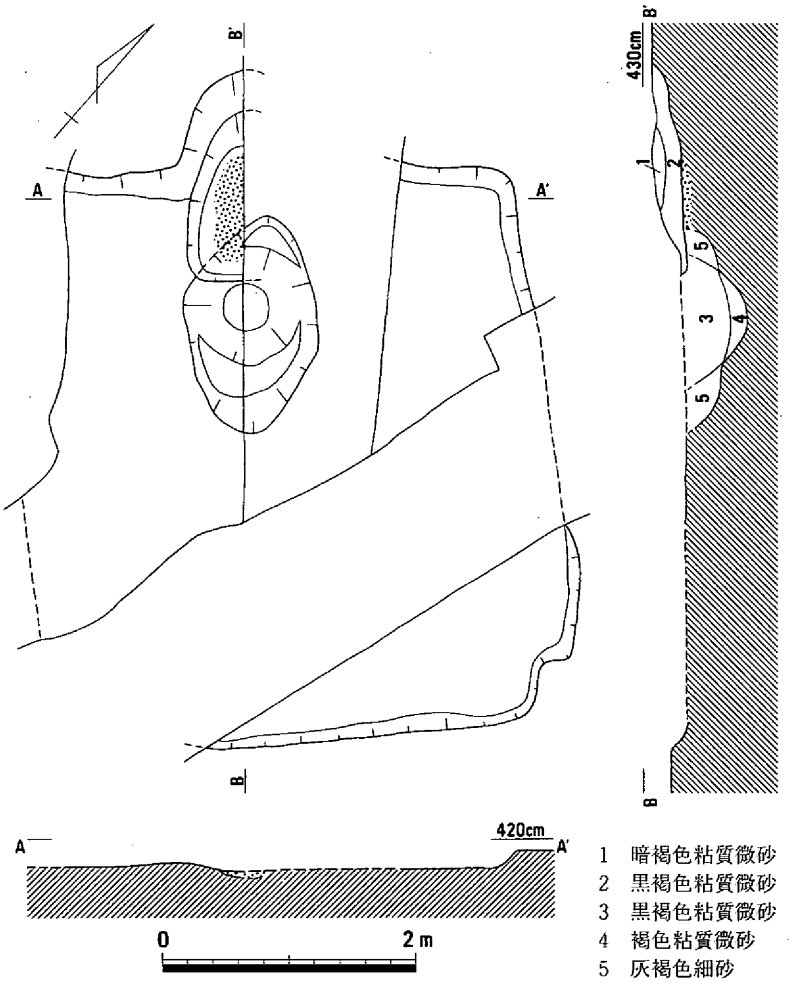
竪穴住居97（第742図）

第２微高地のＮ24区北西隅に位置する。平面形は、南側が新しい溝で切られているため明確ではないが、長方形を呈するものと考えている。深さは、15cm前後残存していた。

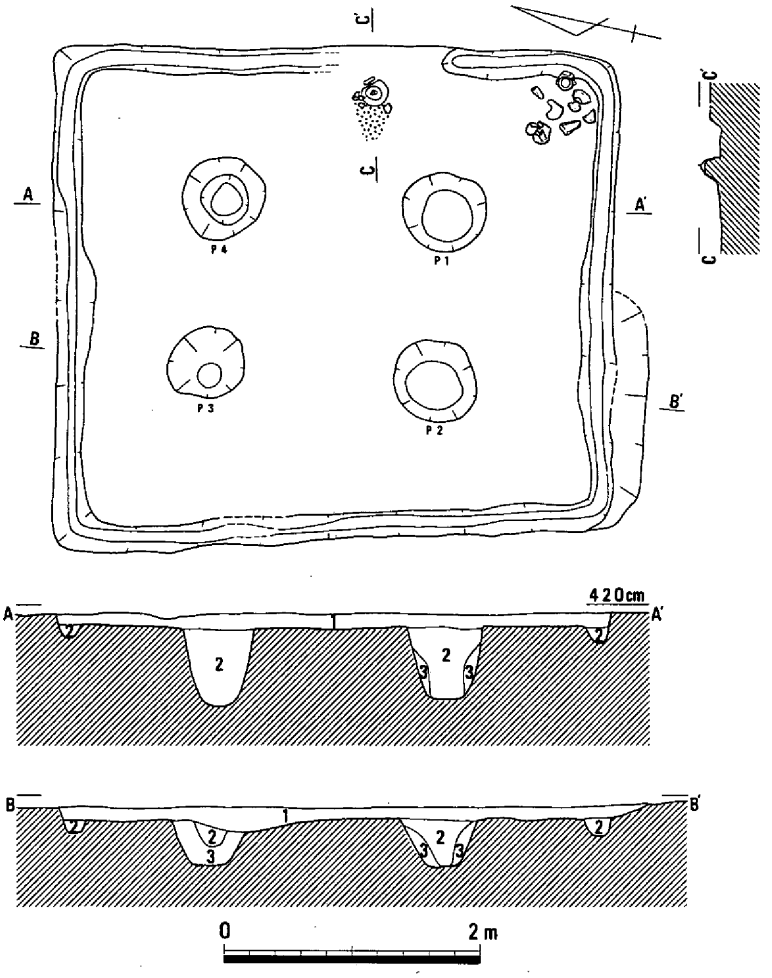
遺物は、少量の土器片の他に、椀形鍛冶滓やガラス質鍛冶滓等が10点出土している。時期は明確ではないが、古・後・Ⅱと考えている。（平井）

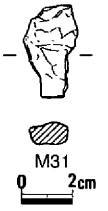
竪穴住居98（第743・744図、写真28－１・２、101）

竪穴住居97の東に接して検出できた。平面形は、約380×340cmの南北に長い長方形で、他の竪穴住居に比べてやや小形であるといえよう。また、各辺についても、直線的でなく丸味を持っている点に特色がある。深さは10cm前後残存していたのみである。柱穴は検出することができなかったが、土層の違いが明瞭ではなかったため、本来無かったのかどうかは、明確にし難い。カマドが、北辺のほぼ中央に設置されている。両側に袖がつくられており、燃焼部は壁際に位置する。煙道は、住居外にのびている。また、燃焼部の南側には、約120×100cmの楕円形で、深さ約40cmの土壙が掘られていた。出土遺物のうち、須恵器杯蓋・杯身は埋土中から出土した。石製紡錘車Ｓ298は、南西隅の床面近くから出土し、表面には図示したような線刻が確認できる。鉄器Ｍ32は埋土中からの出土で、刀子ではなかろうか。特徴的なのは大きく三地点からまとまって馬の頭骨が出土していることである。いずれも床面近くからの出土である。骨の詳細については富岡直人氏に鑑定を依頼し、その結果を掲載して

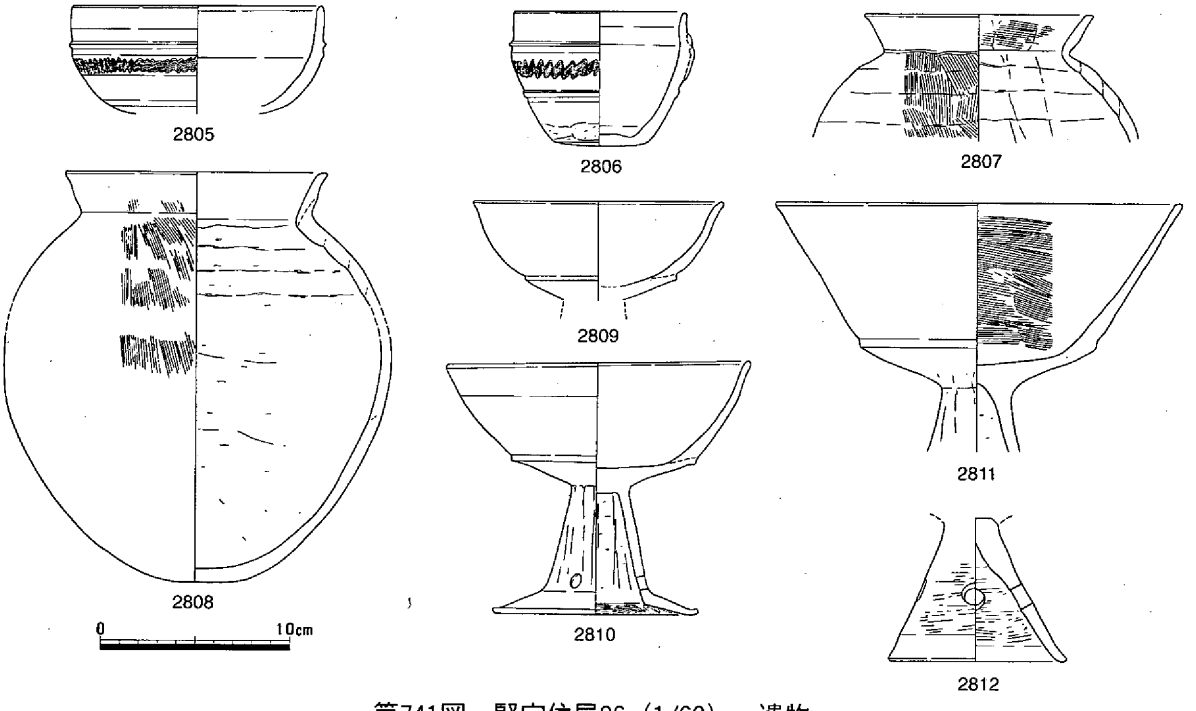


第740図　竪穴住居95（1/60）





1　黒褐色粘質微砂（土器・炭を含む）
2　淡褐色砂質土
3　暗黄褐色粘質土



第741図　竪穴住居96（1/60）・遺物

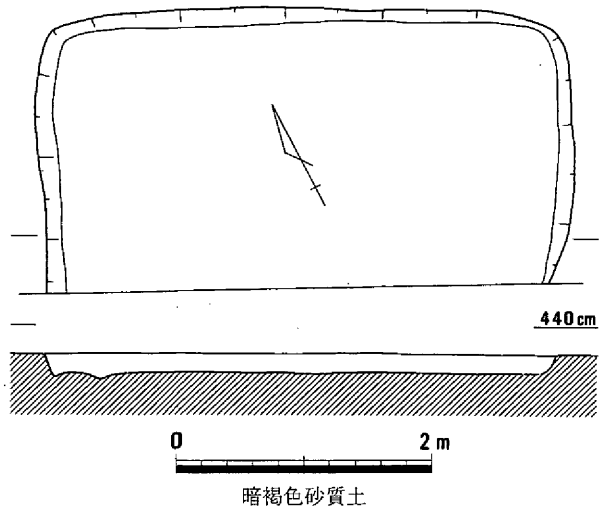
いるので参照されたい。その他に鍛冶滓が４点出土しているのも注目できる。竪穴住居の廃絶の時期は、古・後・Ⅱであろう。（平井）

竪穴住居99（第745～747図）

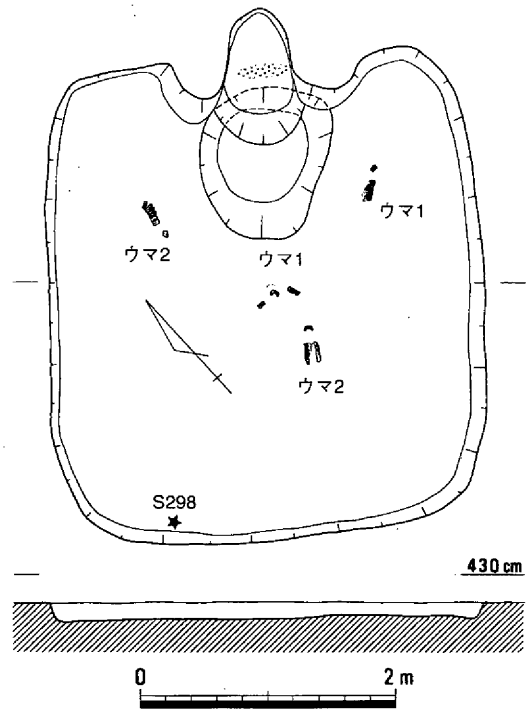
第２微高地の竪穴住居98の東隣りにおいて検出した。南側が調査区外に位置するため、検出できたのは、北側の一部にとどまっている。平面形は、長方形と考えられ、北辺のほぼ中央に、カマドが設置されていた。深さは、約40cm残存しており、壁際には、幅10cm前後、深さ５cm前後の溝が掘られていた。柱穴は二本確認できた。カマドは燃焼部が壁際にあり、下部には、楕円形の土壙が掘られていた。遺物は須恵器杯蓋・杯身、土師器甕、椀形鍛冶滓などが出土している。2817はカマド内からの出土で、2818は、図の二ケ所から出土した破片が接合した。時期は、古・後・Ⅱであろう。（平井）

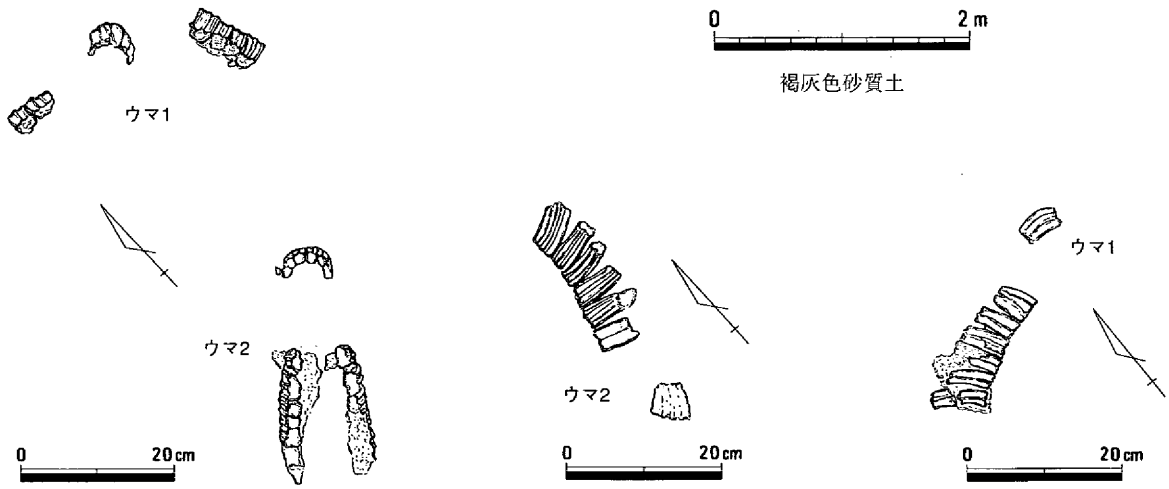
竪穴住居100（第748図）

竪穴住居94の北12ｍに位置する、西端部は不明ながら平面方形を呈す住居である。長軸はN-60°-Wを向く。規模は約380×推定長370cm、床推定面積14㎡、床面の標高は408cmを測る。柱穴は検出されず、また、壁体溝は断面において確認し住居を巡ると予測された

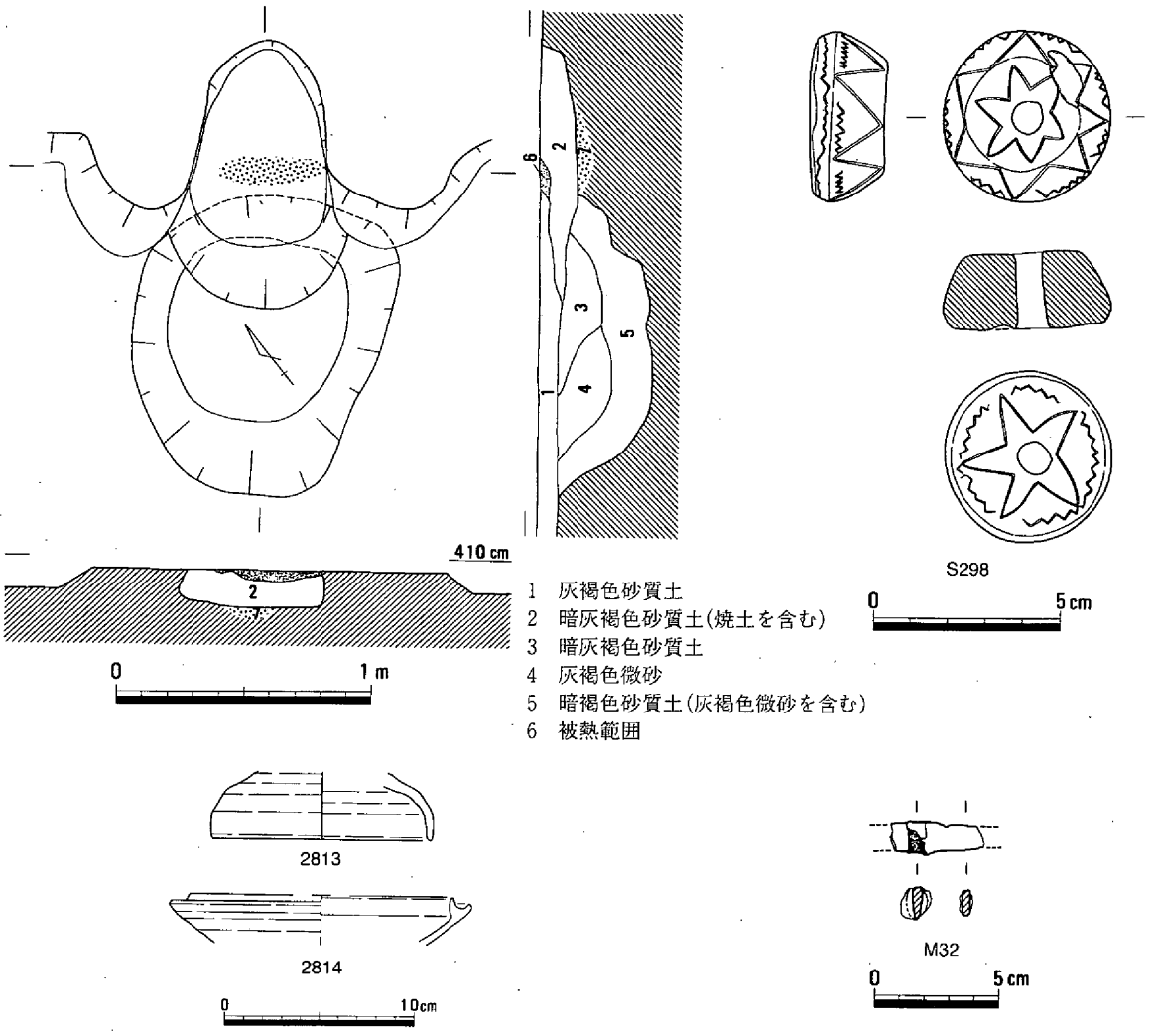


第742図　竪穴住居97（1/60）





第743図　竪穴住居98（1/60）・馬骨出土状況（1/10）

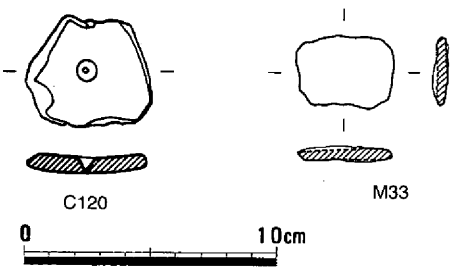


第744図　竪穴住居98カマド（1/30）・遺物

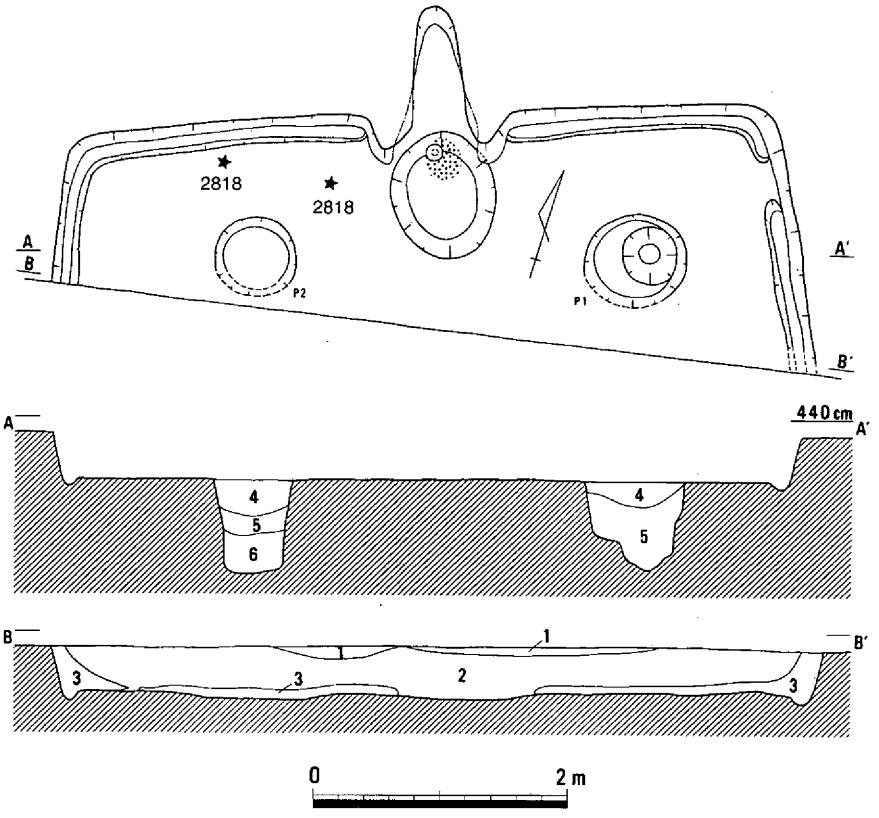
が、平面的に捉えることは出来なかった。唯一住居に伴うものとして西端中央から平面楕円形の土壙を検出した。規模は100×70cm、深さ30cmを測る。断面「U」字状を呈し、埋土は砂質土を多く含む。土壙の西側は調査溝によって切られ判然とはしないが、カマドの下部遺構にあたる可能性が高い。遺物は覆土から土師器・須恵器の細片が僅かに出土するとともに、床面からは杯身2820が出土しており、これら遺物の特徴から当住居は古・後・Ⅲには廃棄されたものと考えられる。（江見）

竪穴住居101（第749図）

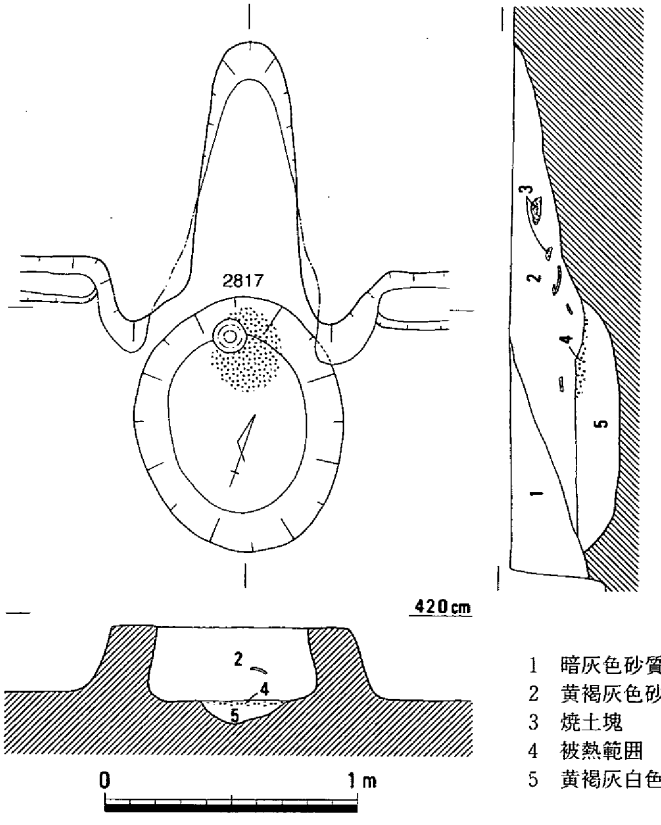
竪穴住居100の南数mに位置する平面方形を呈す住居で、上記住居と同様に調査区溝によって西端は不明である。長軸はN-28°-Eを向く。規模は約400×推定長350cm、床推定面積14㎡、床の標高は414cmを測る。主柱は4本からなり、内3個の柱穴が検出された。主柱間距離は約470と約270cmで南北方向に長い。住居西端中央からは平面楕円形の土壙が貼床下から検出されている。ほぼ半部が残存していると推定されるもので



第745図　竪穴住居99　遺物（1）

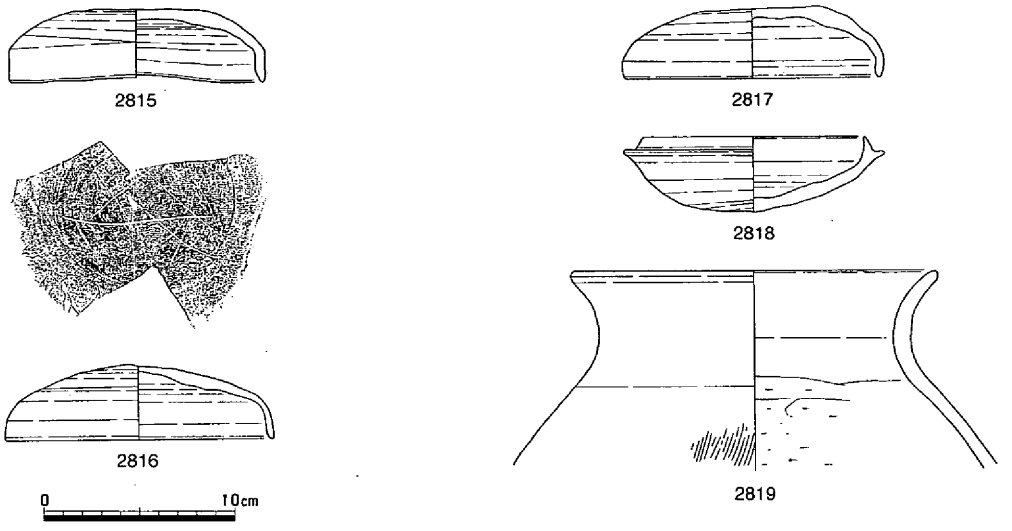


1　灰白色砂質土（近世以降）
2　淡褐灰色砂質土（炭・焼土粒を少し含む）
3　暗灰色砂質土
4　暗灰色粘質土
5　褐灰黄色砂質土
6　黄色粘質土



1　暗灰色砂質土
2　黄褐灰色砂質土(焼土塊を少し含む)
3　焼土塊
4　被熱範囲
5　黄褐灰白色砂質土(炭・焼土粒を少し含む)

第746図　竪穴住居99（1/60・1/30）

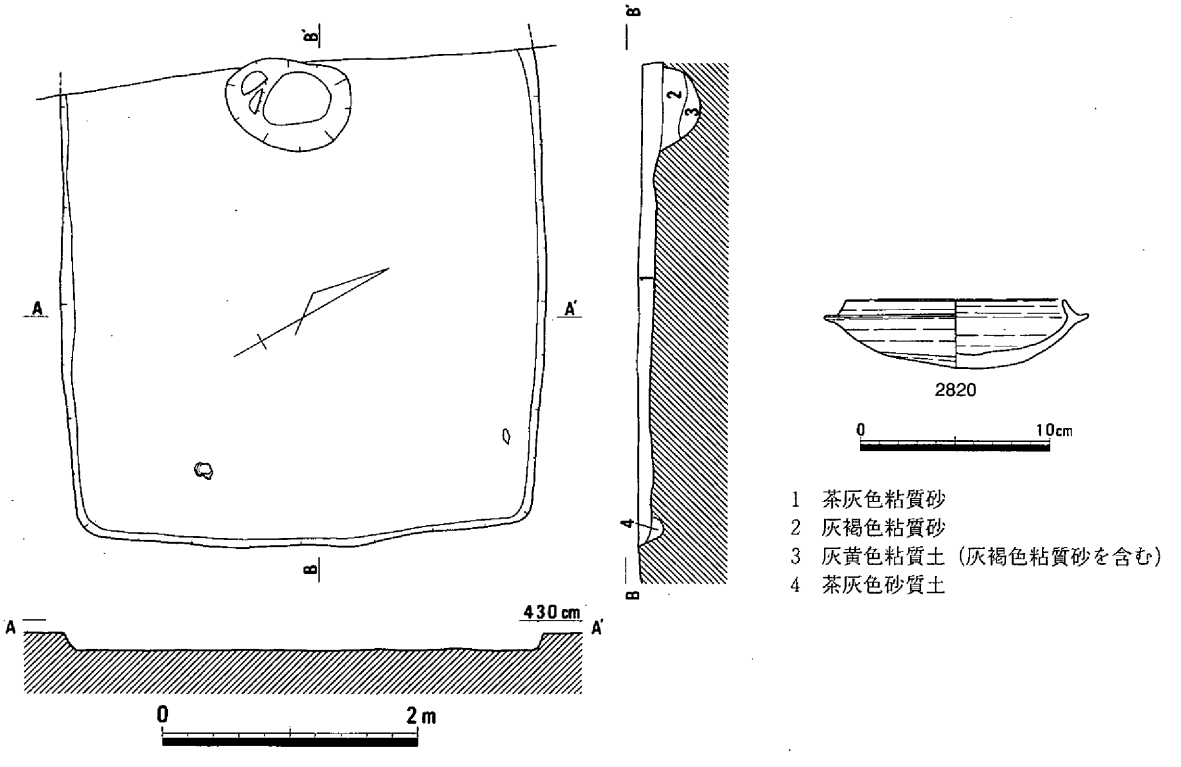


第747図　竪穴住居99　遺物（２）

100×50cm、深さ15cmを残し、埋土は暗灰色粘質砂であった。土壙周辺の床面からは焼土・壁など、カマドに関連するものは検出されなかったが柱穴と土壙の位置関係から、当土壙は上記住居と同様、カマドの下部遺構である可能性が高いものと考える。なお、覆土からの遺物は見なかったが、周辺の状況から古・後と判断した。（江見）

竪穴住居102（第750図）

竪穴住居101の東６ｍに位置する平面方形を呈し、主柱４本からなるカマド付きの住居である。長軸はN-80°-Wに向く。規模は490×483cm、床面積21.8㎡、床面の標高418cmを測る。主柱間距離は205

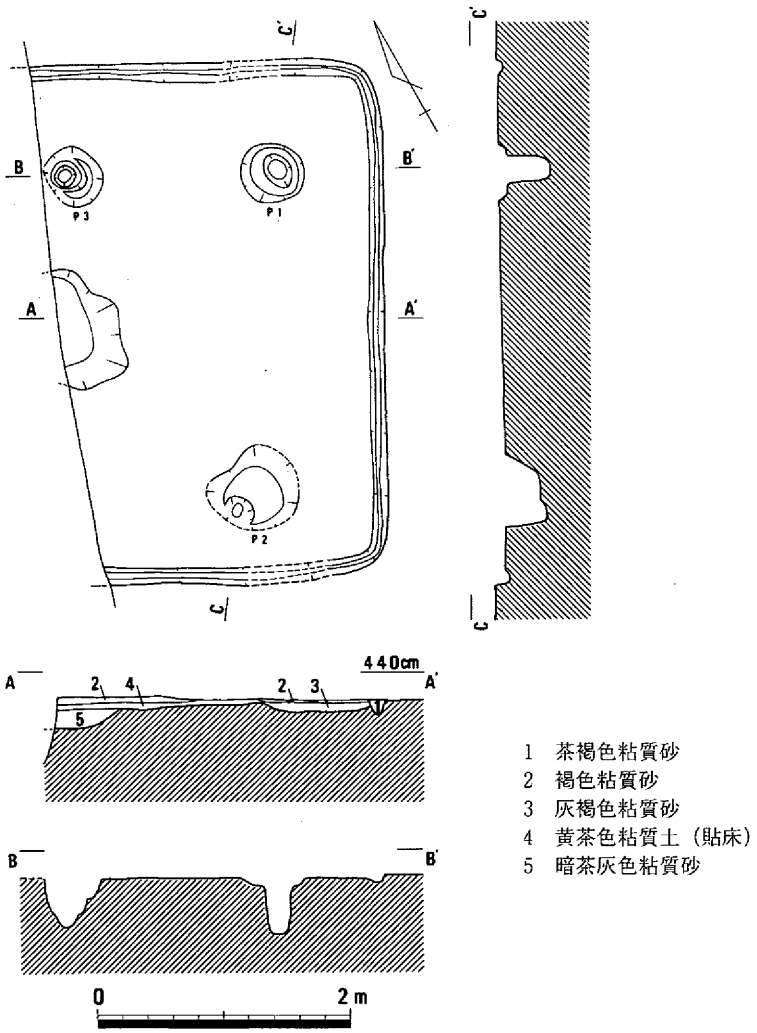


第748図　竪穴住居100（1/60）・遺物

～240cmを測り、東西方向にやや長い。壁体溝は北西隅とカマド部分を除き巡る。カマドは北辺中央に据えられ、規模は全長90cm、燃焼部幅約50cmを測る。焚き口には径約25cm、深さ15cmの支柱の抜き取り穴が検出され、円礫を持ち去ったものと推定される。カマドには南東にややずれてはいるが径約110cm、深さ35cmの下部土壙が掘り込まれ、埋め戻されていた。遺物は床面中央北寄りから鉄鏃？M35・36が、他は覆土から出土した。須恵器はいずれも破片であるが、その特徴から当住居は古・後・Ⅲに廃棄されたものと考えられる。（江見）

竪穴住居103（第751図）

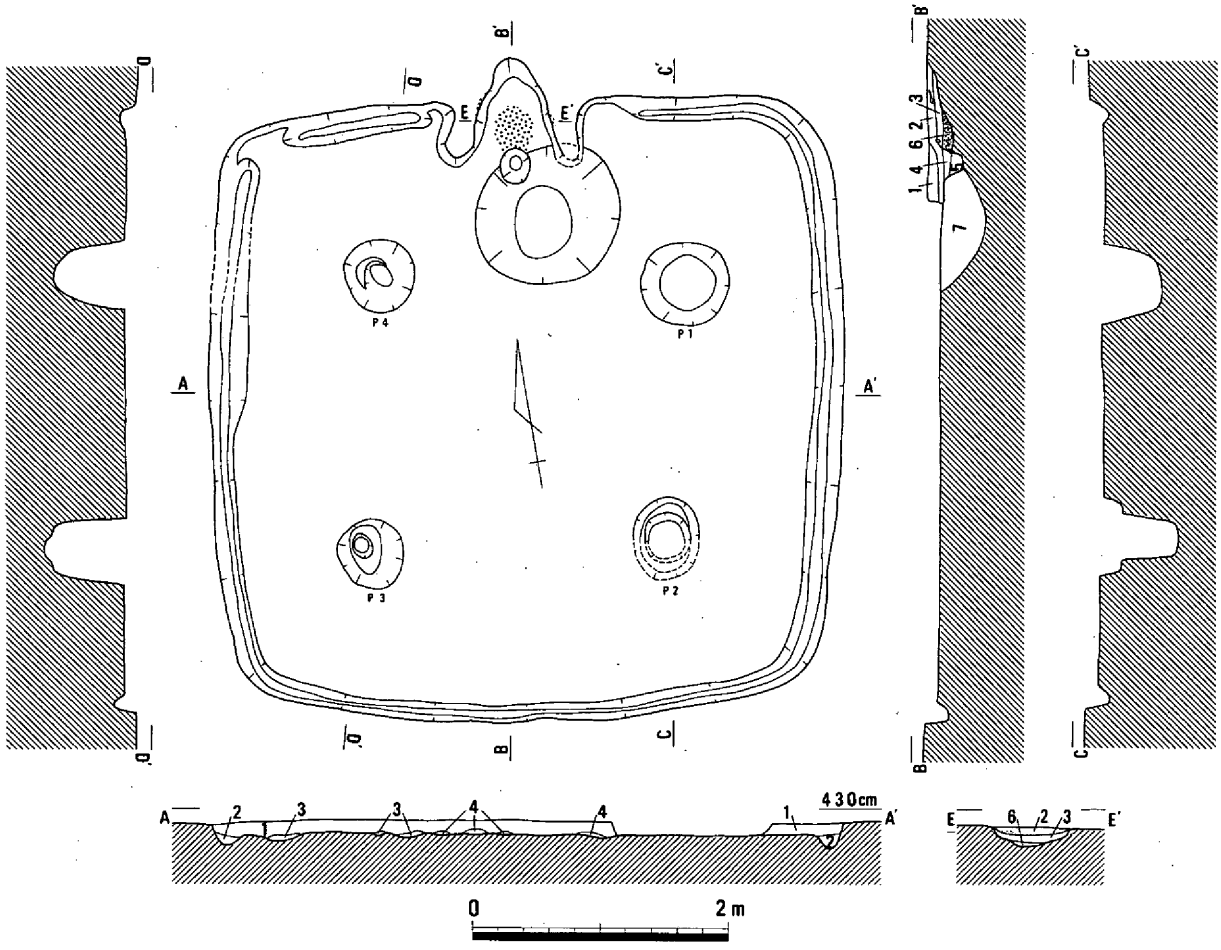
竪穴住居102の南数mに位置する平面やや歪な方形を呈し、主柱４本からなるカマド付の住居である。長軸はN-48°-Eに向く。規模は485×470cm、床面積20.6m²、床の標高は400cmを測る。主柱間距離は2.18～2.5mを測り、東西方向にやや長い。壁体溝はカマド部分を除き巡っているが、他のそれと比較して幅が広い。床面は住居中央からカマドに向かってやや傾斜している。カマドは北辺中央に据えられ、規模は全長約60cm、燃焼部幅約60cmとほぼ同様の数値を示し、幅に対し全長が短い。燃焼部には45×30cmの被熱面が検出されたが支柱の確認には至らなかった。また、カマド下には140×110cm、深さ約30cmの土壙が掘り込まれ、埋め戻されていた。遺物は僅かに土師器細片が出土したのみであるが、その特徴から古・後の範疇のものと判断される。（江見）



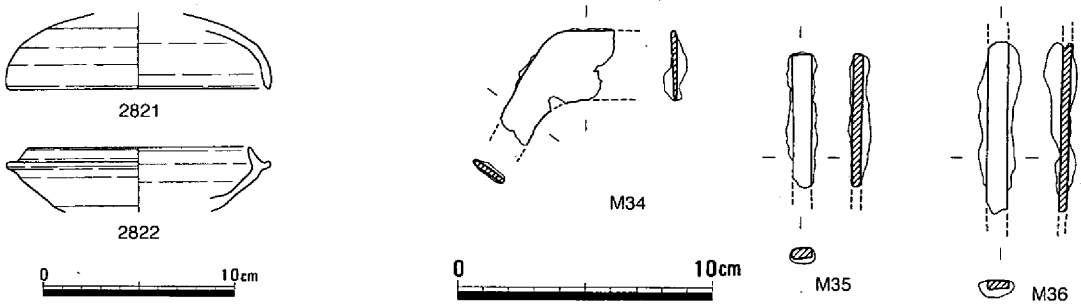
第749図　竪穴住居101（1/60）

竪穴住居104（第752図）

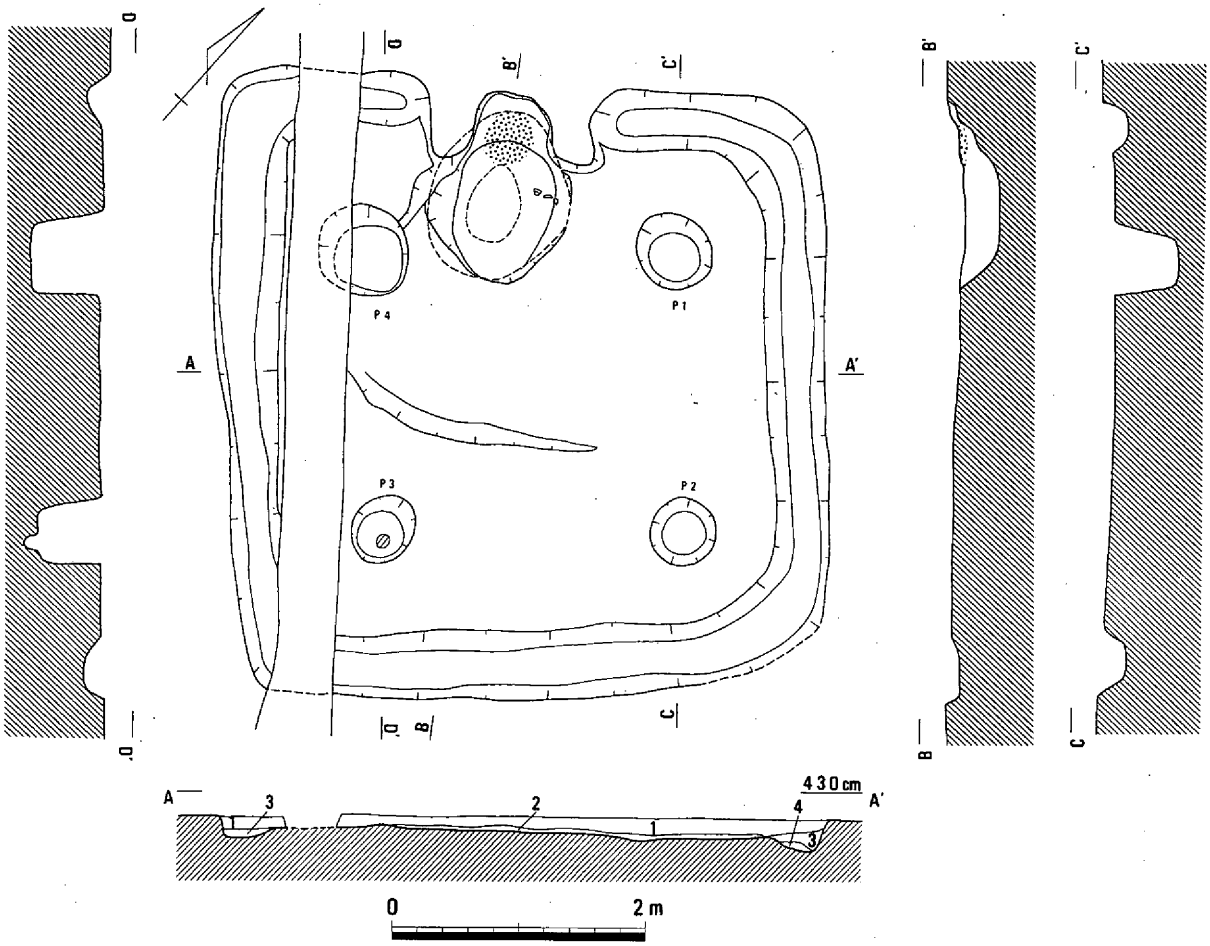
竪穴住居103北東約７ｍに位置し、南西隅を後述する竪穴住居105に切られている。平面方形を呈し、主柱４本からなるカマド付の住居で、長軸はN-56°-Eを向く。規模は447×409cm、床面積17.4㎡、床面の標高は396cmを測る。主柱間距離は252～263cmを測り、南北方向が僅かに長い。壁体溝はカマド部分を除き巡っていた。床面はカマド付近がやや窪んだ状況を示す。カマドは北辺のほぼ中央に据えられ、右袖が崩落のためか短く検出されたが、全長90cm、燃焼部幅約50cmを測る。当カマドにおいても支柱の確認には至らなかったが、カマド下には径約110cm、深さ約40cmの土壙が掘り込まれ、埋め



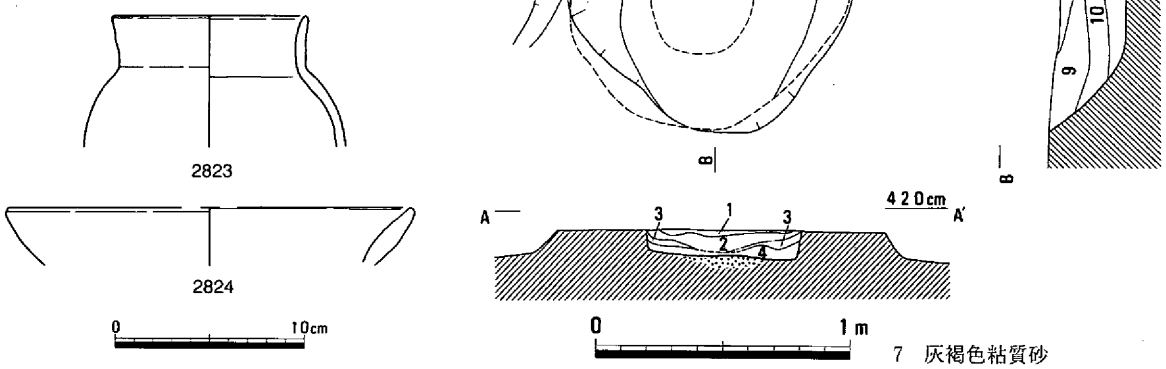
1　暗灰茶色粘質砂
2　暗茶灰色粘質砂（焼土を含む）
3　灰色砂質土
4　茶灰色粘質砂（焼土を含む）
5茶灰色粘質土
6　焼土
7　暗茶灰色粘質砂（茶灰色粘質土ブロックを含む）



第750図　竪穴住居102（1/60）・遺物



1　灰褐色粘質砂（淡黄褐色粘質土ブロックを含む）
2　淡黄褐色粘質土（淡灰褐色粘質砂ブロックを含む）
3　暗灰褐色粘質砂
4　暗灰褐色粘質砂（淡黄褐色粘質土を含む）



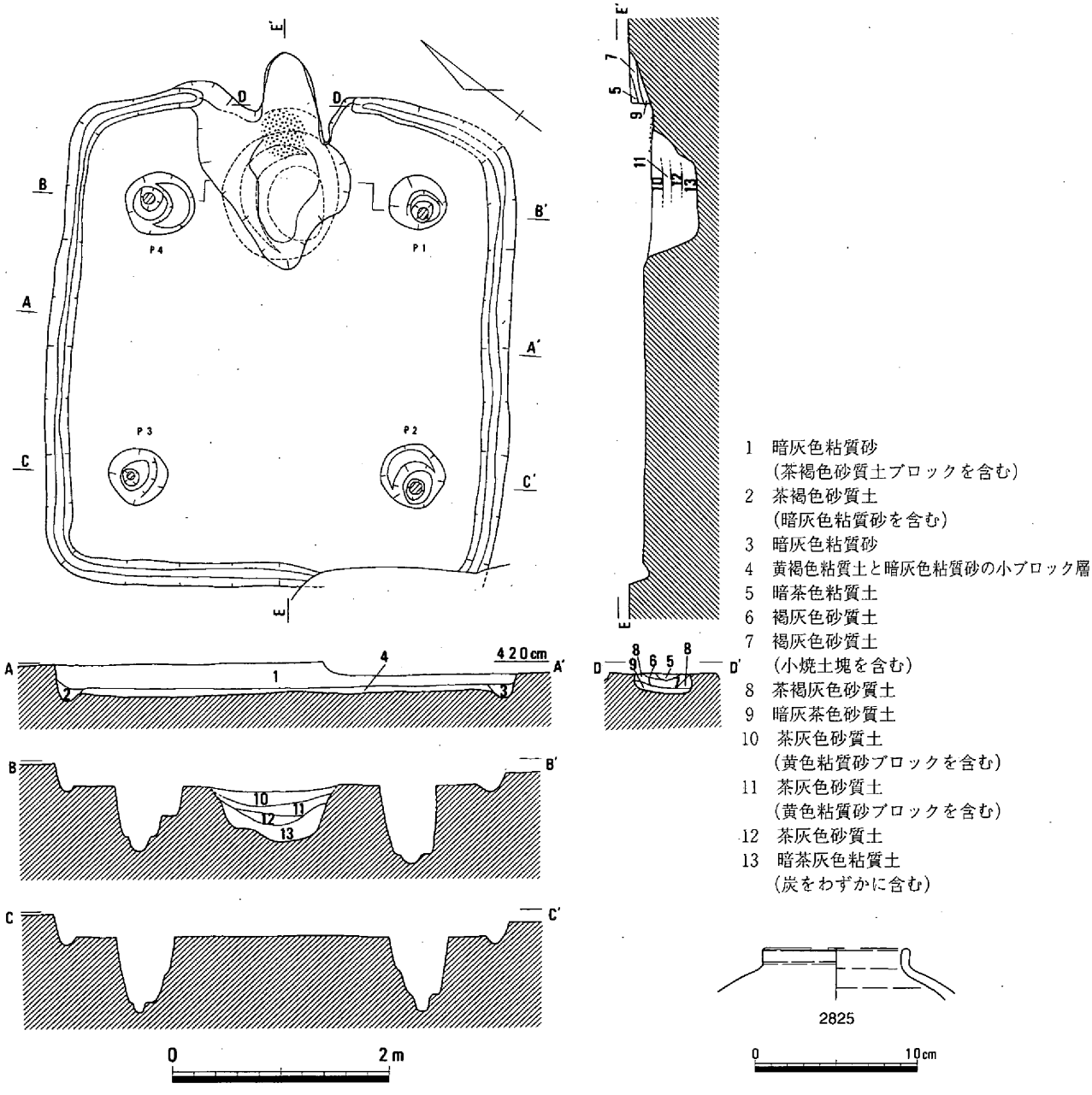
1　茶褐灰色粘質土
2　茶褐色粘質土（焼土粒を多く含む）
3　炭および焼土粒
4　褐灰色砂質土（焼土粒をわずかに含む）
5　暗灰色粘質砂（焼土粒を含む）
6　暗灰色粘質砂
7　灰褐色粘質砂
8　暗黄灰色粘質砂
9　黄灰色粘質砂
10　黄褐色粘質砂
11　褐灰色粘質砂
12　暗灰褐色粘質砂
13　暗褐灰色粘質砂

第751図　竪穴住居103（1/60・1/30）・遺物

戻されていた。遺物は少なく、図示し得たのは須恵器の直口壺片2825のみであったが、時期は古・後・Ⅱ～Ⅲのものであろう。　（江見）

竪穴住居105（第753図）

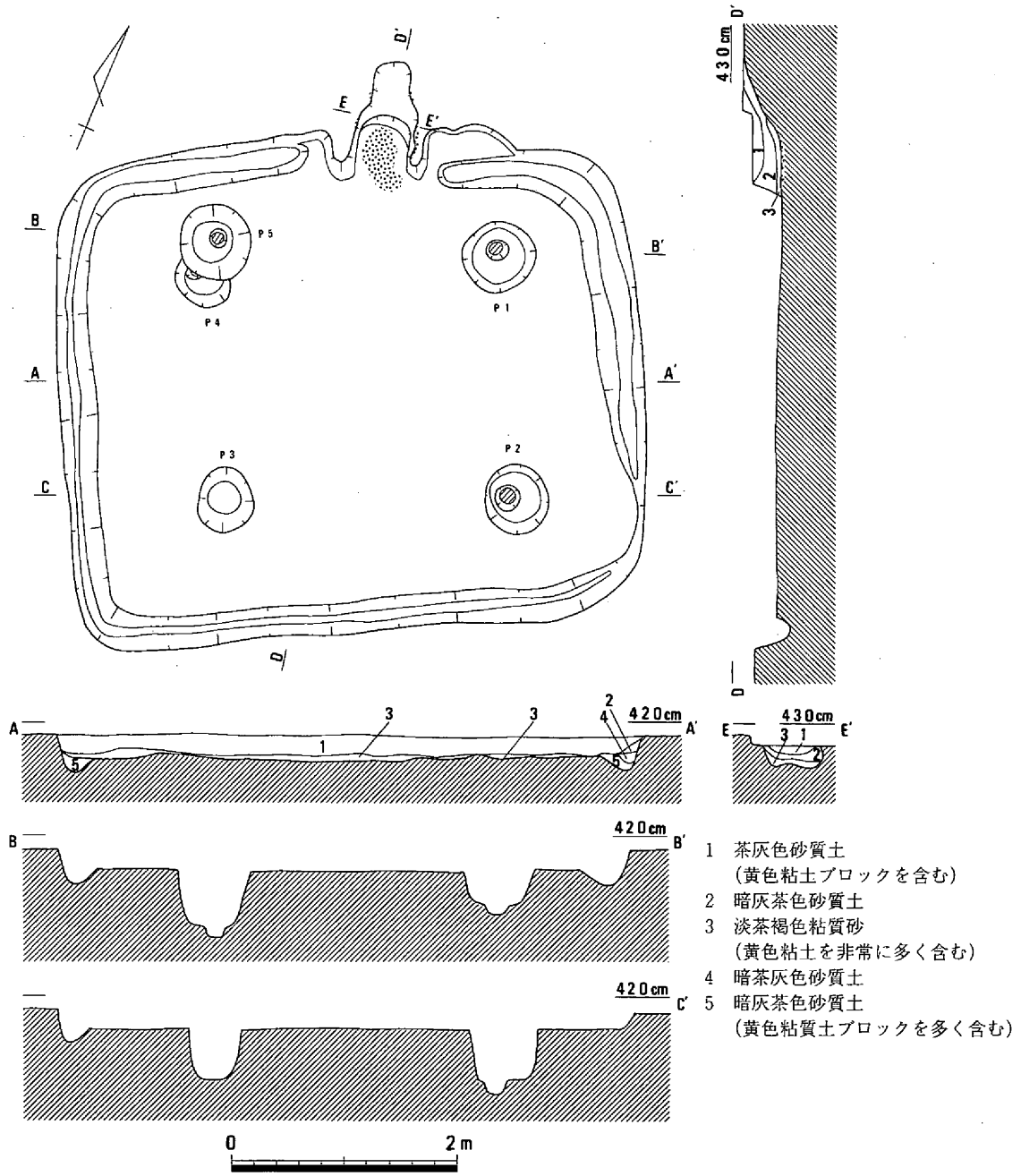
竪穴住居104の西側に一部接して検出された。平面方形を呈し、主柱４本からなるカマド付の住居で、長軸はN-68°-Eを向く。規模は504×432cm、床面積19.5㎡、床面の標高は387cmを測る。主柱間距離は218～250cmを測り、東西方向がやや長く北西の柱は建て直しがなされている。壁体溝は南東隅とカマド部分を除き巡る。カマドは北辺中央東寄りに、住居ラインよりやや北に突出して据えられている。全長約100cm、燃焼部幅45cmを測り、床面には50×30cmの範囲に被熱箇所が検出されたがこのカマドにおいても支柱は確認されなかった。また、他に見られた下部土壙も検出されなかった。遺物は土器細片が出土したのみであったが、周辺の状況から古・後・Ⅲに廃棄されたものか。　（江見）



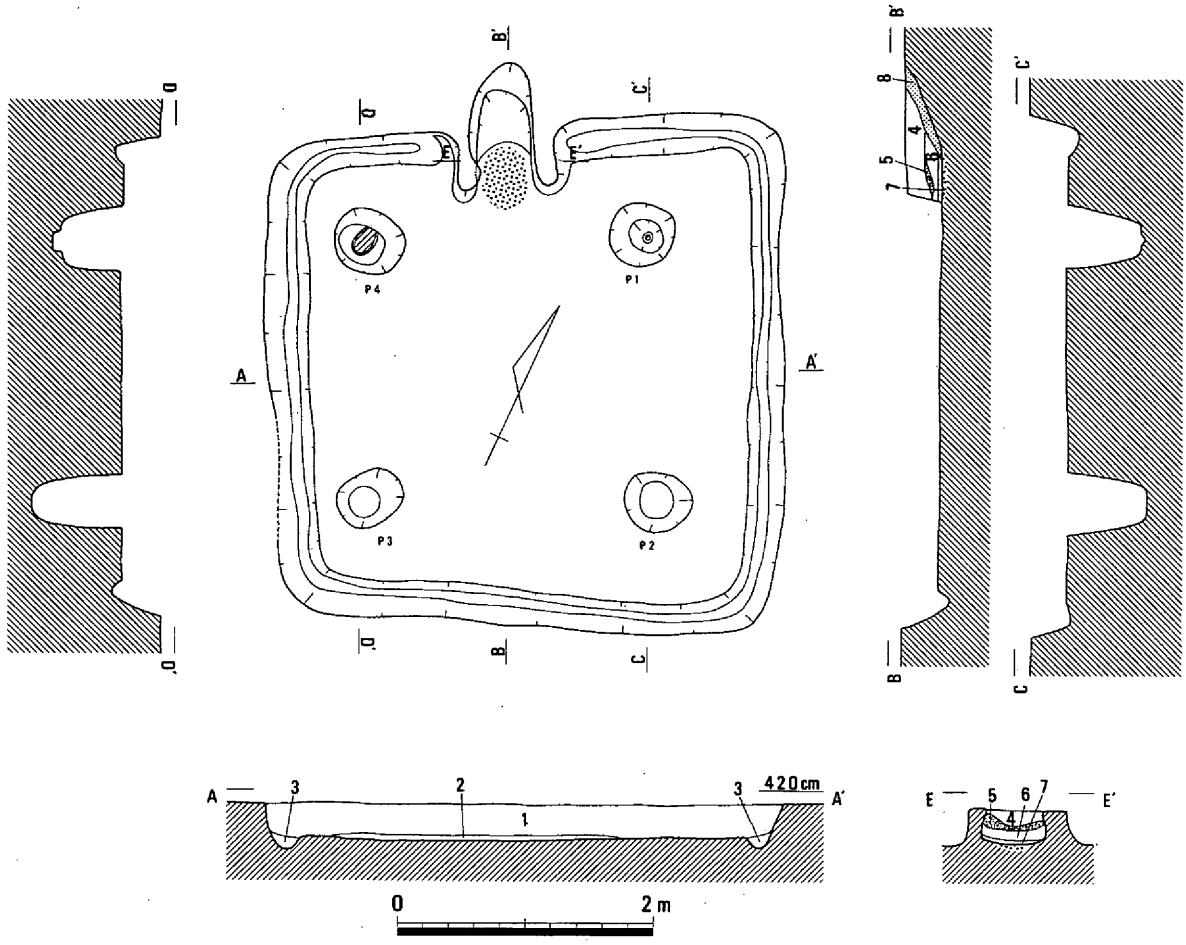
第752図　竪穴住居104（1/60）・遺物

竪穴住居106（第754図、写真28－３）

竪穴住居105の南東数ｍから検出された平面方形を呈し、４本の主柱からなるカマド付の住居である。長軸はN-65°-Eを向く。規模は392×383cm、床面積13.9㎡の比較的小規模な住居で、床面の標高は380cmを測る。主柱間距離は207～229cmを測り、東西方向に僅かに長い。壁体溝はカマドを除き巡る。カマドは北辺のほぼ中央に据えられ、全長約100cm、燃焼部幅約40cmを測る。床面には50×30cmの被熱面が検出されたが支柱および下部土壙は確認し得なかった。遺物は覆土中から須恵器杯身2826・2827、砥石Ｓ299・300、土錘Ｃ121、鉄鏃M37などが出土している。M37は方頭斧箭形式のもので幅28㎜、長さ約６cm、重量約23.5ｇを測る。杯身の特徴から、当住居は古・後・Ⅲには廃棄されたものと考えられる。（江見）



第753図　竪穴住居105（1/60）



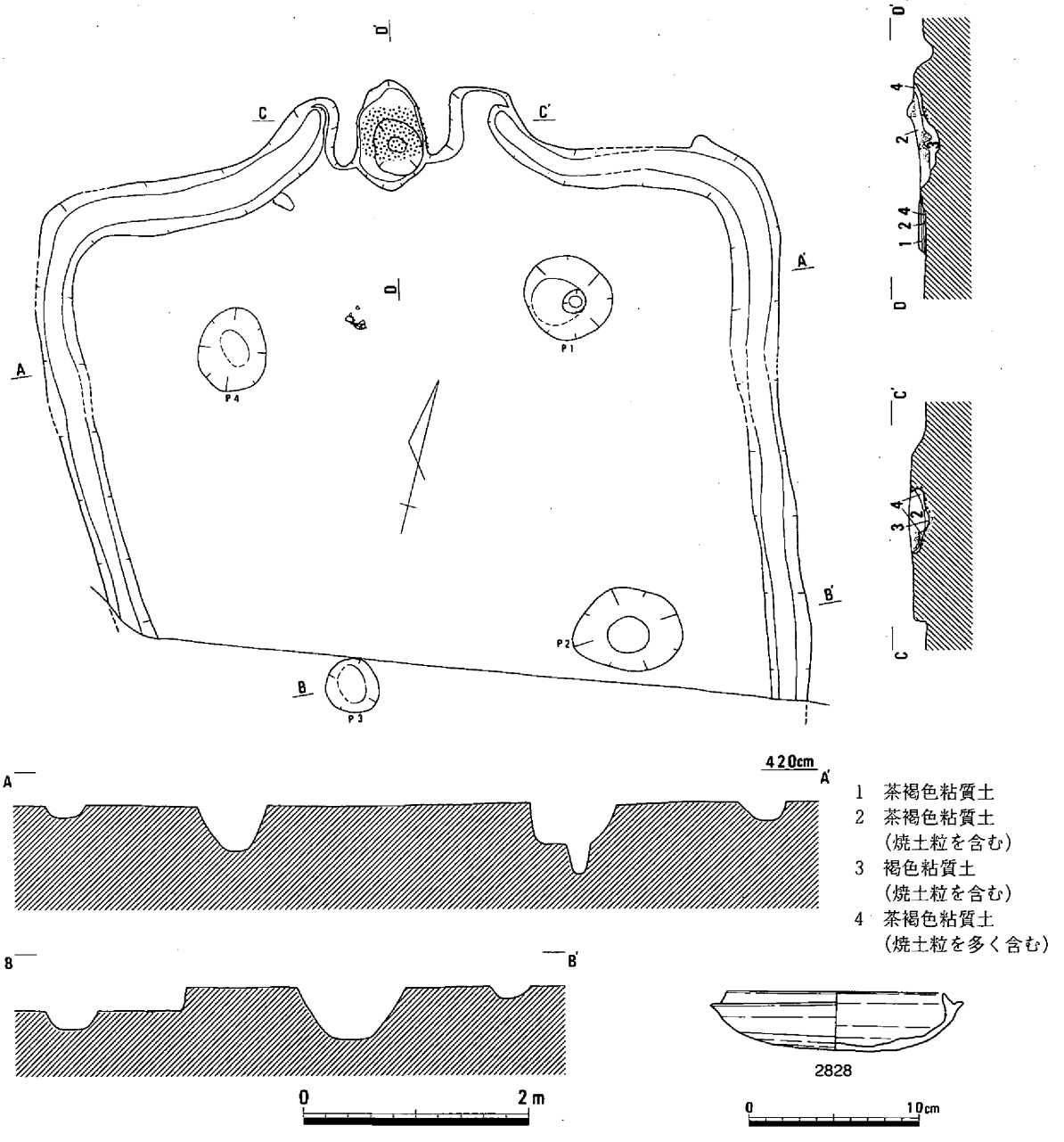
第754図　竪穴住居106（1/60）・遺物

竪穴住居107（第755図）

竪穴住居106の南東７ｍに位置し、住居の南西部が調査区外に延びるものである。平面方形を呈し、主柱４本からなるカマド付の住居で、長軸はN-28°-Wを向く。規模は646×(608)cm、推定床面積20.9㎡、床面の標高は390cmを測る。主柱間距離は249～314cmを測り南北方向に長い。壁体溝はやや広く、カマド部分を除き巡る。カマドは北辺中央に住居壁から突出するように据えられている。全長約80cm、燃焼部幅約50cmを測る。カマド中央床面には径50cmの被熱面が広がり、床面下からは土壙状の浅い窪みが検出されたが、支柱の確認には至らなかった。遺物は少なく、図示し得た杯身2828は覆土から出土したもので、古・後・Ⅲの特徴をもつ。（江見）

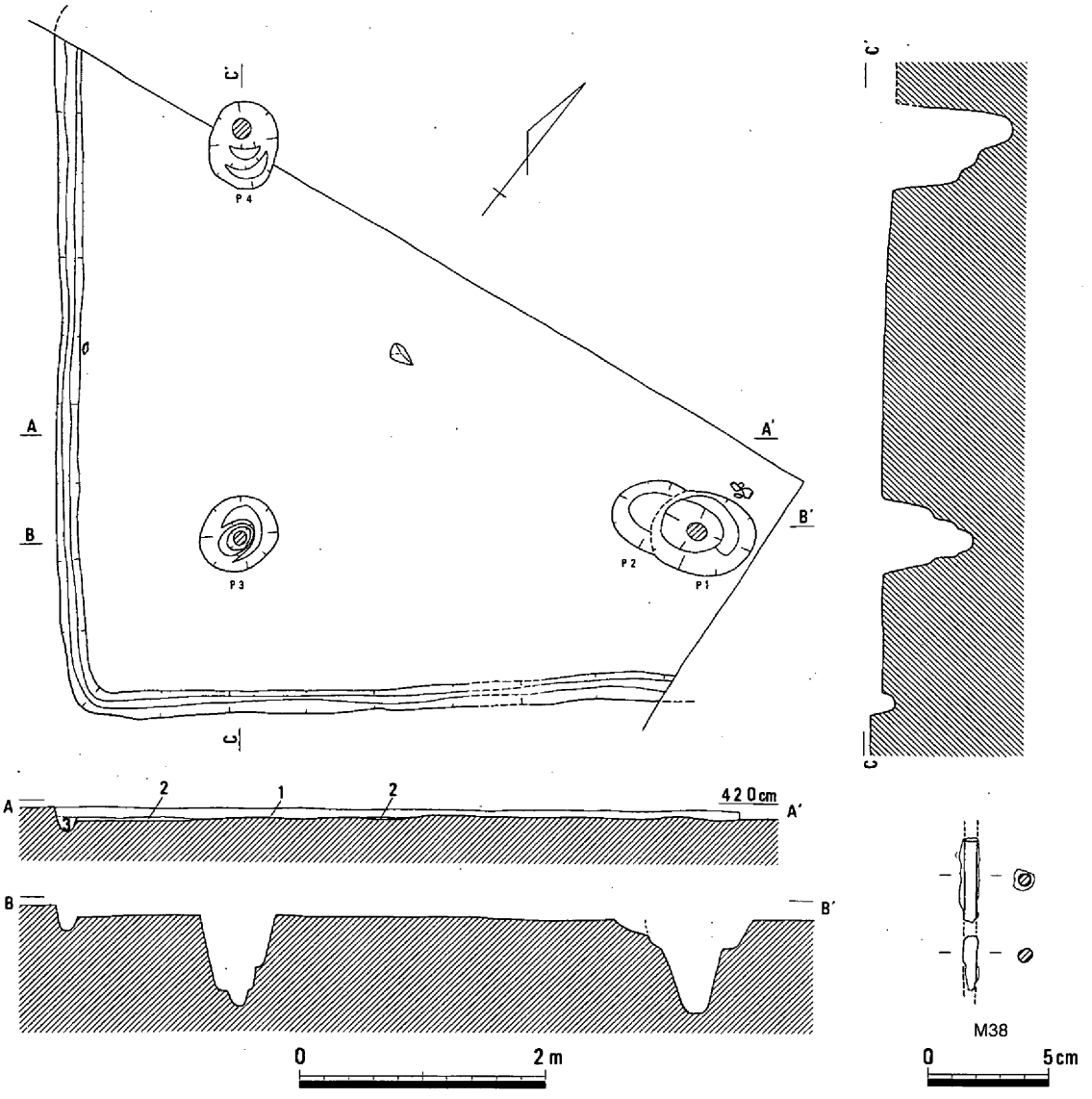
竪穴住居108（第756図）

竪穴住居100の北東10ｍに位置し、住居の北西部は調査区外に延び、東部は後述する竪穴住居109に

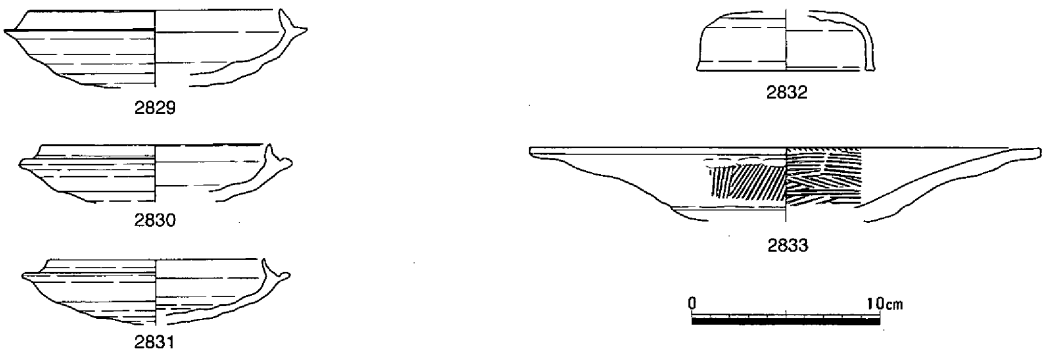


第755図　竪穴住居107（1/60）・遺物

一部切られて検出された。平面方形を呈し、長軸はN-51°-Eを向く。推定規模は一辺600cm、床面積約35㎡を測る大形の住居で、床面の標高は404cmである。主柱間距離は339～373cmを測り、東西方向に僅かに長い。柱穴は径70cm前後、深さ50～70cmと比較的大きく、また、いずれも柱痕跡を残すこと



1　暗灰茶色砂質土　　2　淡茶色粘質土　　3　暗茶灰色砂質土

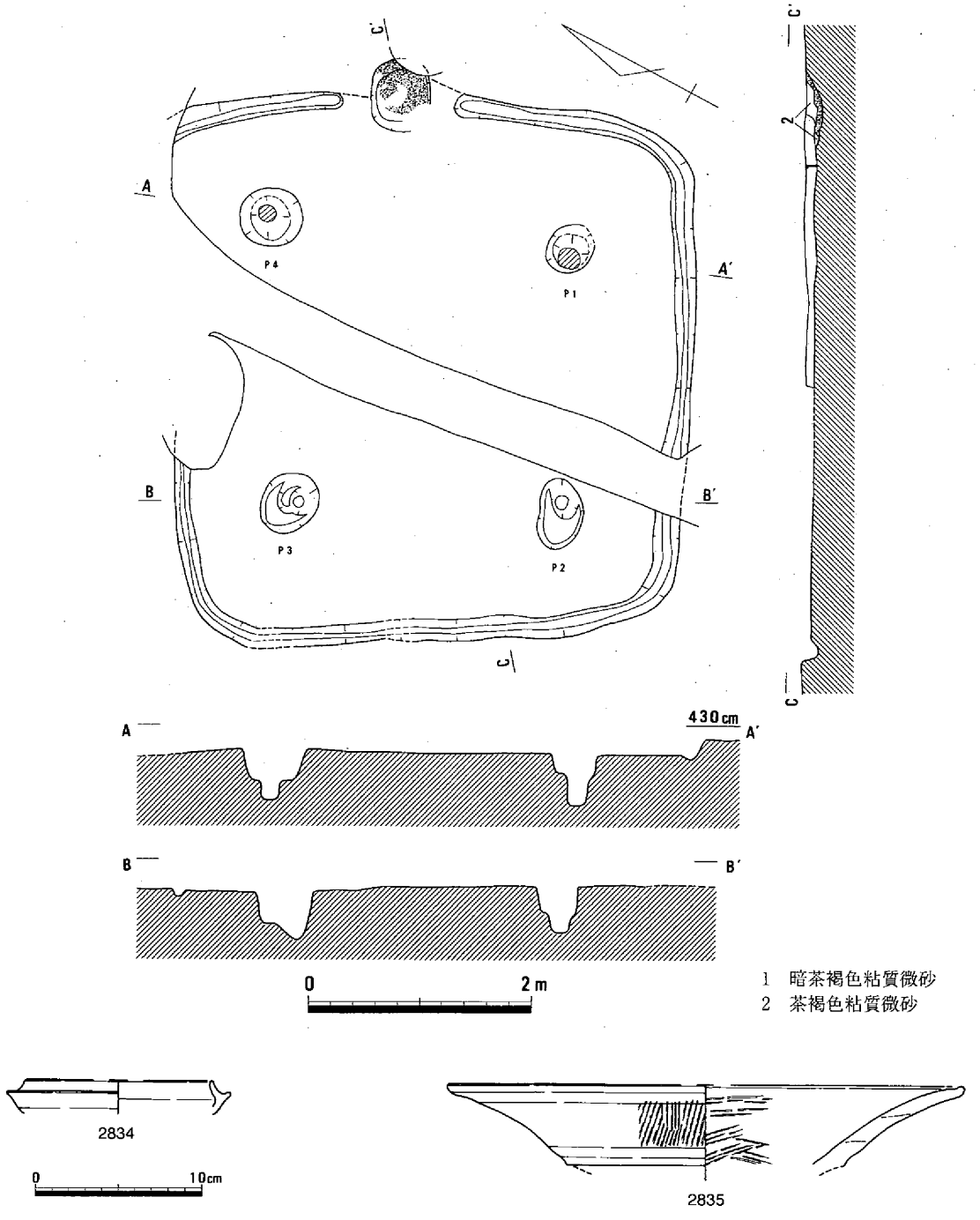


第756図　竪穴住居108（1/60）・遺物

からも上屋に大きく重量のかかっていたことが理解される。なお、カマドは調査区外に所在すると想定している。遺物は床面あるいはそれに近い位置から出土している。須恵器の杯身2829～2831、壺の蓋2832、土師器の高杯2833、鉄鏃？M38などで、これら須恵器の特徴から、当住居は古・後・Ⅲに廃棄されたものと考えられる。（江見）

竪穴住居109（第757図）

第２微高地の北中央部において検出された住居である。１辺が488×466cmのほぼ正方形を呈しており、深さは遺構検出面から約10cmと浅い。北東辺のほぼ中央部に、上部は削平を受けてはいたが、造り付けのカマドが遺存していた。両袖は削平をうけて残存してないが、被熱をうけた燃焼部底面が残



第757図　竪穴住居109（1/60）・遺物

存していた。壁際には幅10cm、深さ５～10cm程の壁体溝が巡るが、カマドの両側25cmの所でそれぞれ途切れている。柱穴は４本確認されていることから、４本柱で構成される竪穴住居である。柱穴掘り方は50cm程、深さは45～50cmを測り、柱痕跡は約15cmである。Ｐ３は柱が抜き取られている。遺物は須恵器の杯身2834、土師器の高杯2835などが出土している。時期は古･後に属すると思われる。(松本)

竪穴住居110（第758図）

竪穴住居109の北東で検出された遺構である。遺構の殆どが調査区外となるため、規模等については不明である。平面形は検出状況からみて、方形を呈する竪穴住居と推察される。壁際には幅５～15cm、深さ10cm程の壁体溝が検出されている。遺物は須恵器の甕2836、土師器の甑2837などが出土している。これらの遺物からみて、時期は古・後に属すると思われる。（松本）

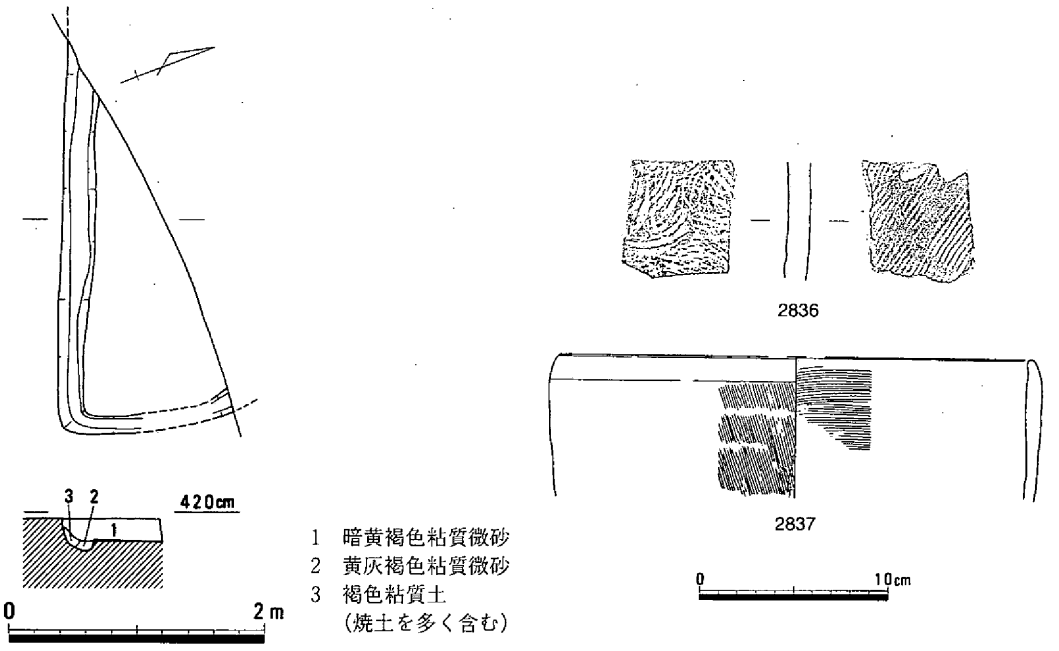
竪穴住居111（第759図）

竪穴住居109の南東約２ｍの位置で検出された遺構である。遺構はほとんど削平をうけているため、検出面から床面までは10cmほどしか残存してなかった。遺構の規模は１辺467×444cm程の方形を呈する。カマドは確認されていない。南東から南西の壁際には、幅５～10cm、深さ5cm程の壁体溝がみられた。柱穴は３本確認されたが、恐らく４本柱で構成される竪穴住居と思われる。柱穴掘り方は35～55cm、深さは20～25cmと浅く、柱痕跡は15～20cmを測る。

遺物は床面や柱穴から須恵器の杯身2838・2839、土師器2840などが出土した。これらの遺物からみて、時期は古・後に属すると思われる遺構である。（松本）

竪穴住居112（第760図）

竪穴住居113と切り合い関係をもつ住居である。遺構は削平と他の遺構に切られていたため、残存状態はきわめて悪いが、検出状態から住居の規模は１辺が454×435cmを想定することができた。平面形は方形を呈する。北西辺コーナー近くで上部は削平されていたが、造り付けのカマドが遺存していた。両袖は削平をうけて残存してないが、被熱をうけた燃焼部底面が確認された。壁際には壁体溝がめ



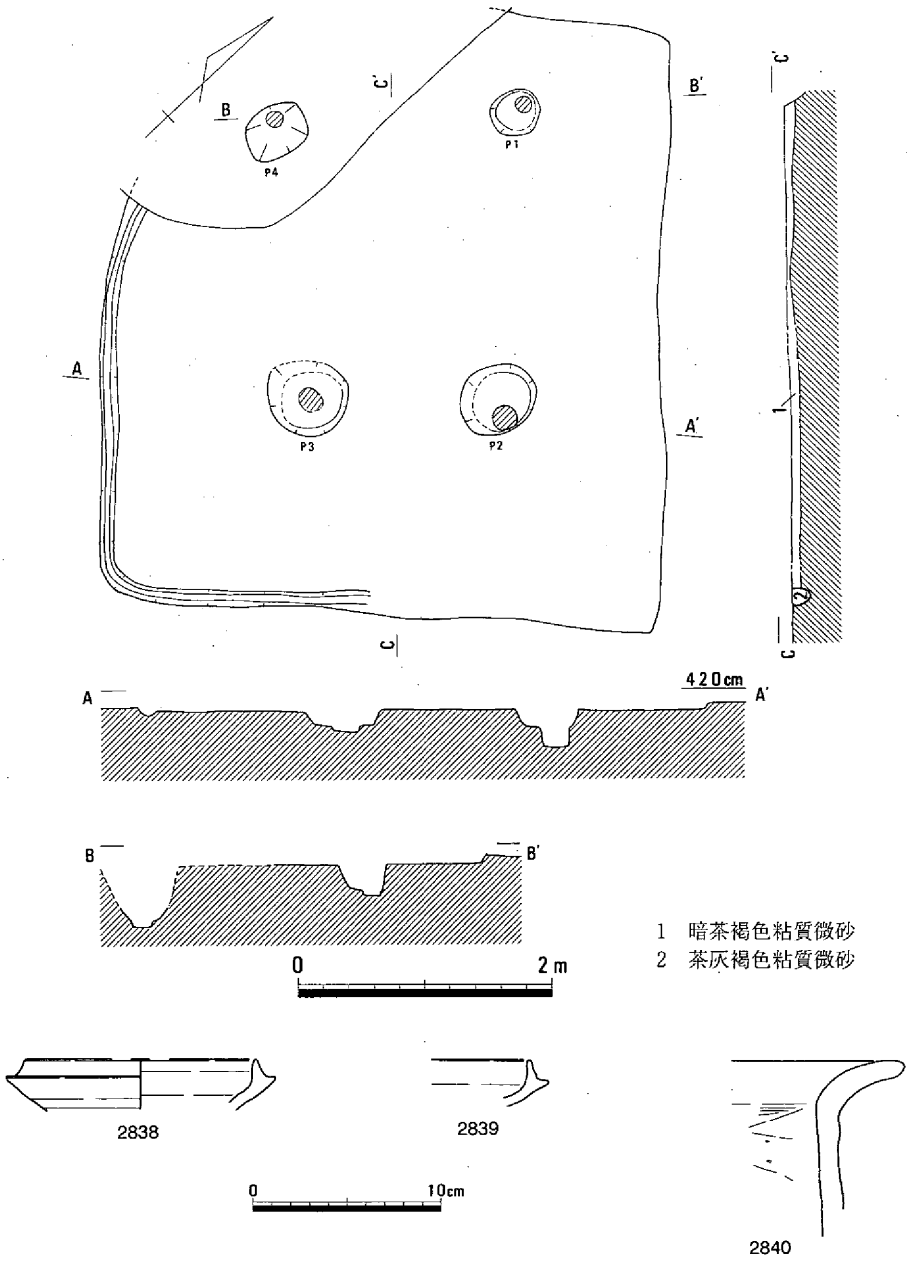
第758図　竪穴住居110（1/60）・遺物

ぐるが、カマドの両側20cmほどの位置で途切れる。柱穴は４本確認されているため、４本柱で構成される竪穴住居である。遺物は須恵器細片が出土しているが、時期は古･後に属すると思われる。（松本）

竪穴住居113（第761・762図、写真29・101）

竪穴住居114に切られる状態で検出された。１辺が567×489cmほどのやや歪な方形を呈する住居である。深さは遺構検出面から約20cmと浅い。北辺のほぼ中央部に造り付けのカマドが遺存しており、煙道部は僅かに残存していた。燃焼部の底面には土師器の甕1498が横倒しの状態で出土している。両袖とも幅約30cm、長さ120cm、高さ20cmを測り、細長い形態を持つものである。壁際には幅５～10cm、深さ10cm程の壁体溝が巡り、カマドの両端まで取り付いている。柱穴は４本確認されているため、４本柱で構成される住居である。柱穴掘り方は30～40cm、深さは65～70cmを測り、柱痕跡は15cm程である。

遺物は須恵器の杯身1495、土師器の甕1496～1498、高杯1499～1501、石器では石錘Ｓ301などが出土している。時期はカマド内の土器などからみて、古・中に属すると思われる。（松本）



第759図　竪穴住居111（1/60）・遺物

竪穴住居114（第763図）

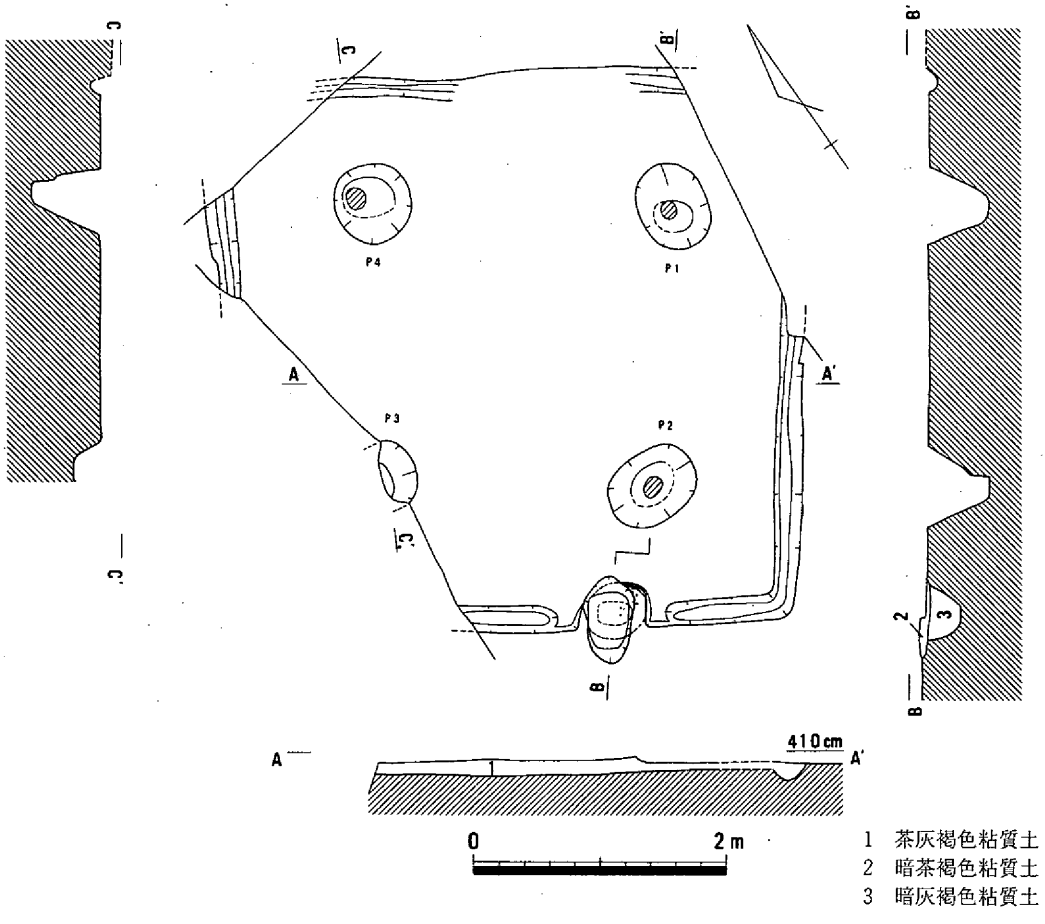
竪穴住居113を切る状態で検出された遺構である。１辺が366×357cmの方形を呈しており、深さは遺構検出面から約10cmと浅い。カマドは確認されてないが、壁際には幅約10cm、深さ10cm程の壁体溝が巡る住居である。柱穴は３本検出されているが、４本柱で構成される住居である。柱穴掘り方は40～45cm、深さは20～30cmを測り、柱痕跡は10～15cm程である。

遺物は床面から須恵器の杯身1493、鉢1494などが出土している。1493は杯身の口縁部である。受部の立ち上がりは短く、退化したものである。1494は胴部外面に平行タタキののちにカキメの調整が行われている。内面には青海波のタタキがみられる。時期は古・後に属すると思われる。　（松本）

竪穴住居115（第764図）

竪穴住居116と切り合い関係を持つ住居である。１辺が約429×466cm程の方形を呈する住居である。上部は削平と他の遺構に切られているため、カマドは確認することができてないが、壁際には幅10cm前後、深さ10cm程の壁体溝が検出されている。柱穴は４本確認されているため、４本柱で構成される住居である。柱穴掘り方は40～60cm、深さは床面から50cm程を測り、柱痕跡は10～15cmであった。

遺物は須恵器では杯身1478・1479、壺1480、甕1481、甑1482があり、ガラス製品は小玉Ｇ６、石器では叩石Ｓ302などが出土している。須恵器杯身には口縁部の形態に相違がみられるが、1479が古相のタイプである。1481は外面に平行タタキ、内面に青海波のタタキがみられる。平底の底部に透かし孔がつけられている。Ｇ６は色調が明緑青色を呈する。時期は古・後に属すると思われる。（松本）



第760図　竪穴住居112（1/60）

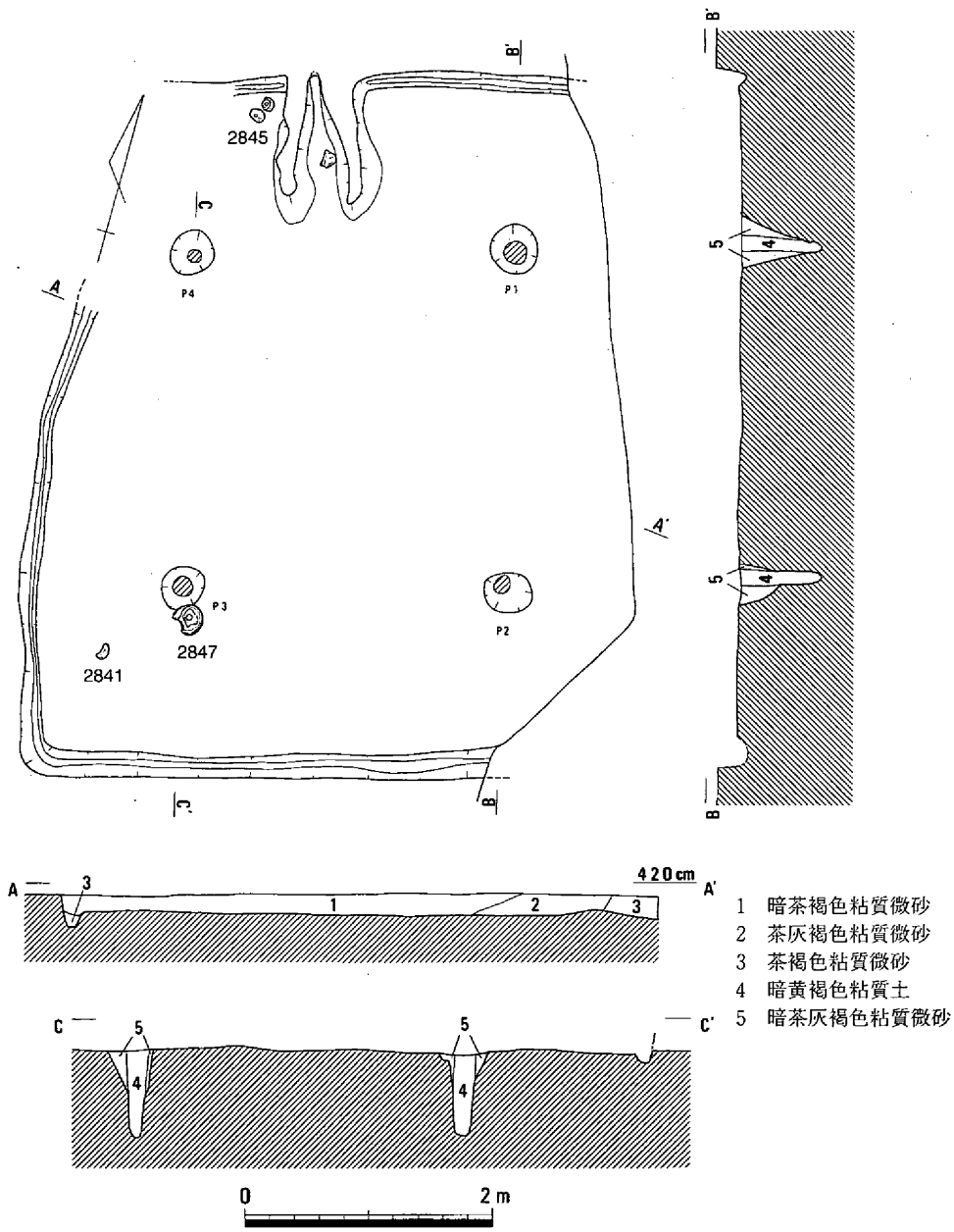
竪穴住居116（第765図）

他の竪穴住居と同様に削平と他の遺構に切られた住居である。したがって、残存状態は悪いが、住居の規模は１辺が488×466cm程を想定することができた。平面形は方形を呈する。遺構の深さは検出面から15cm程と浅く、埋土は５層に区分された。建て替えはみられなかった。床面は平坦で、厚さ約５cmの貼り床土が認められた。壁際には幅約10cm、深さ５～10cmの壁体溝が巡っている。柱穴は３本確認されたが、恐らく４本柱で構成される住居と思われる。柱穴掘り方は50～80cm、深さは床面から40～70cmとばらつきがみられる。柱痕跡は10～15cmである。造り付けのカマドは確認されてない。

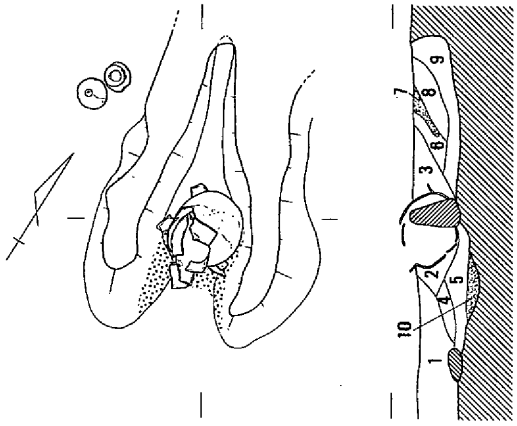
遺物は須恵器の杯身1487と甕の細片が出土している。時期は古・後に属すると思われる。（松本）

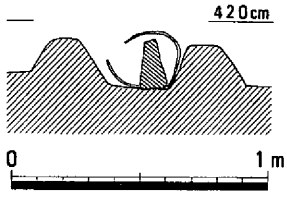
竪穴住居117（第766図）

竪穴住居116の北隣に位置する遺構である。遺構の大部分が調査区外となるため、規模は不明であ

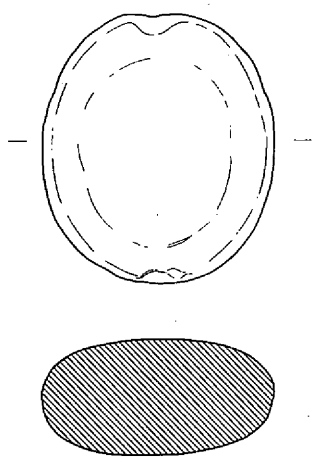


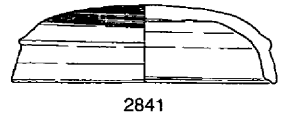
第761図　竪穴住居113（1/60）



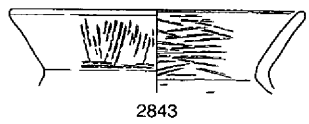


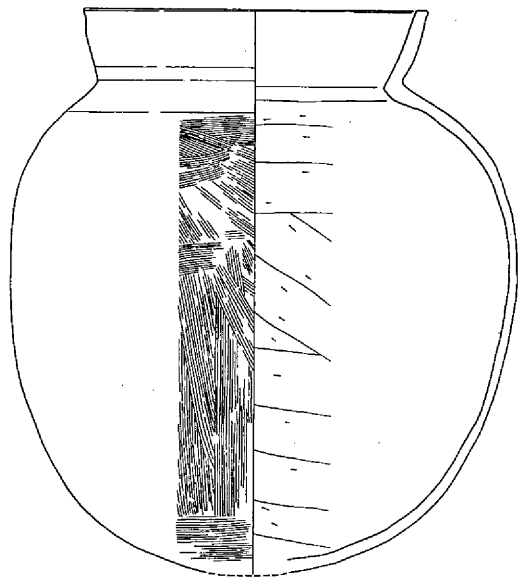
1　暗茶褐色粘質微砂
2　黄褐色粘質微砂
3　暗茶灰褐色粘質微砂
4　茶灰褐色粘質土
（焼土を含む）
5　青灰褐色粘質土
（焼土を含む）
6　灰褐色粘質土
7　焼土
8　暗黄褐色粘質土
9　暗灰褐色粘質土
10　焼土

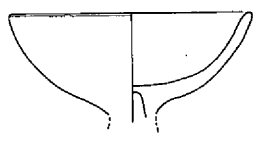


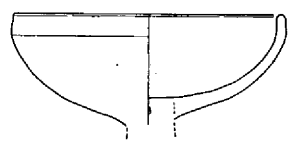

2841

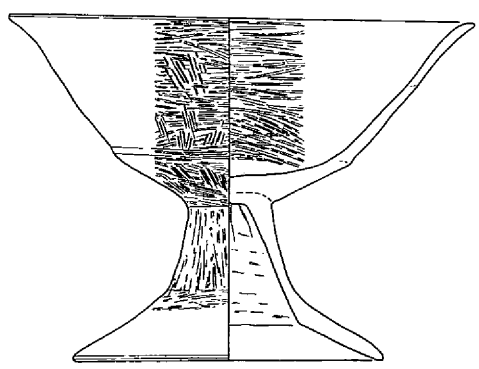
2842


2843


2844


2845


2846


2847

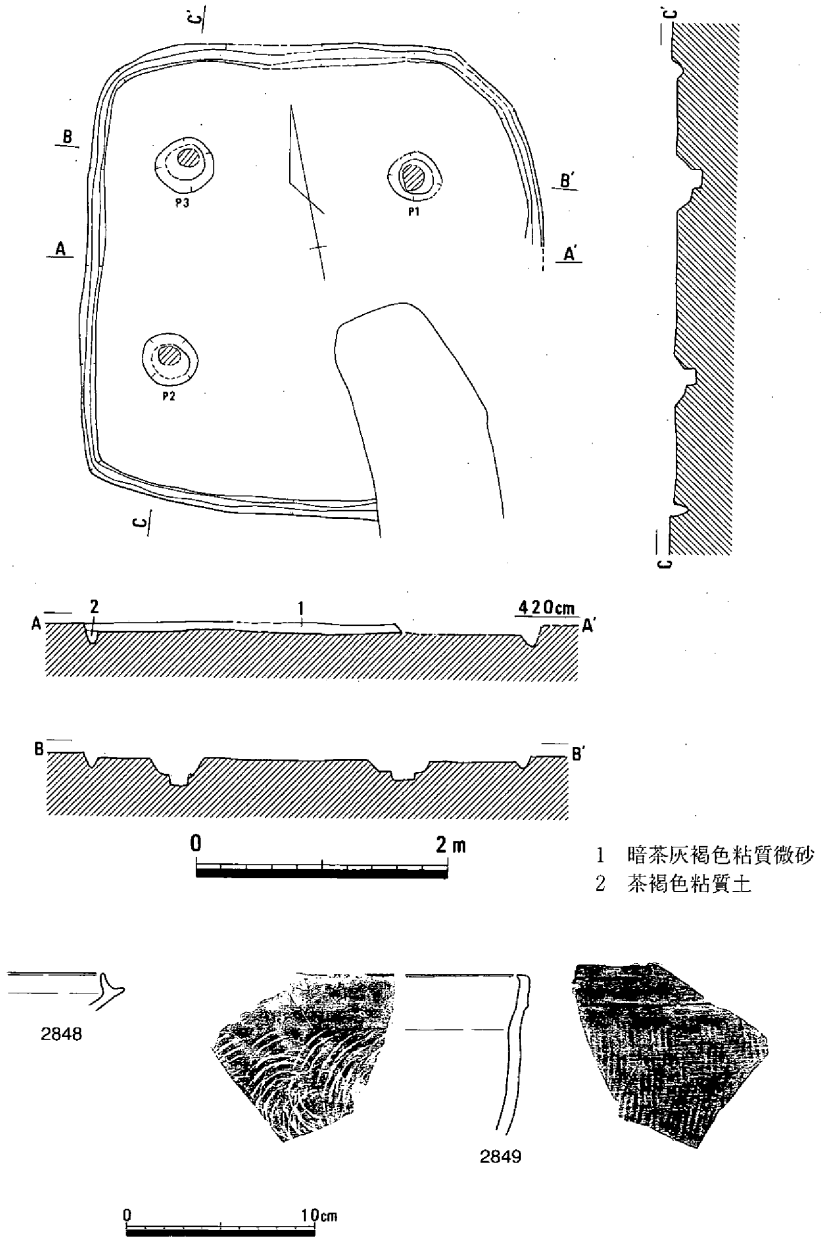
第762図　竪穴住居113カマド（1/30）・遺物

る。確認された長さは北東辺が292cm、南東辺が462cmを測る。コーナー部が角張るため、平面形は方形を呈する竪穴住居と推察される。壁際には幅約10cm、深さ約10cmの壁体溝が巡っている。柱穴は確認されてない。住居床面には焼失によると思われる上屋の炭化材が焼土とともに検出された。材質は不明であるが、径10～20cmの丸太材である。

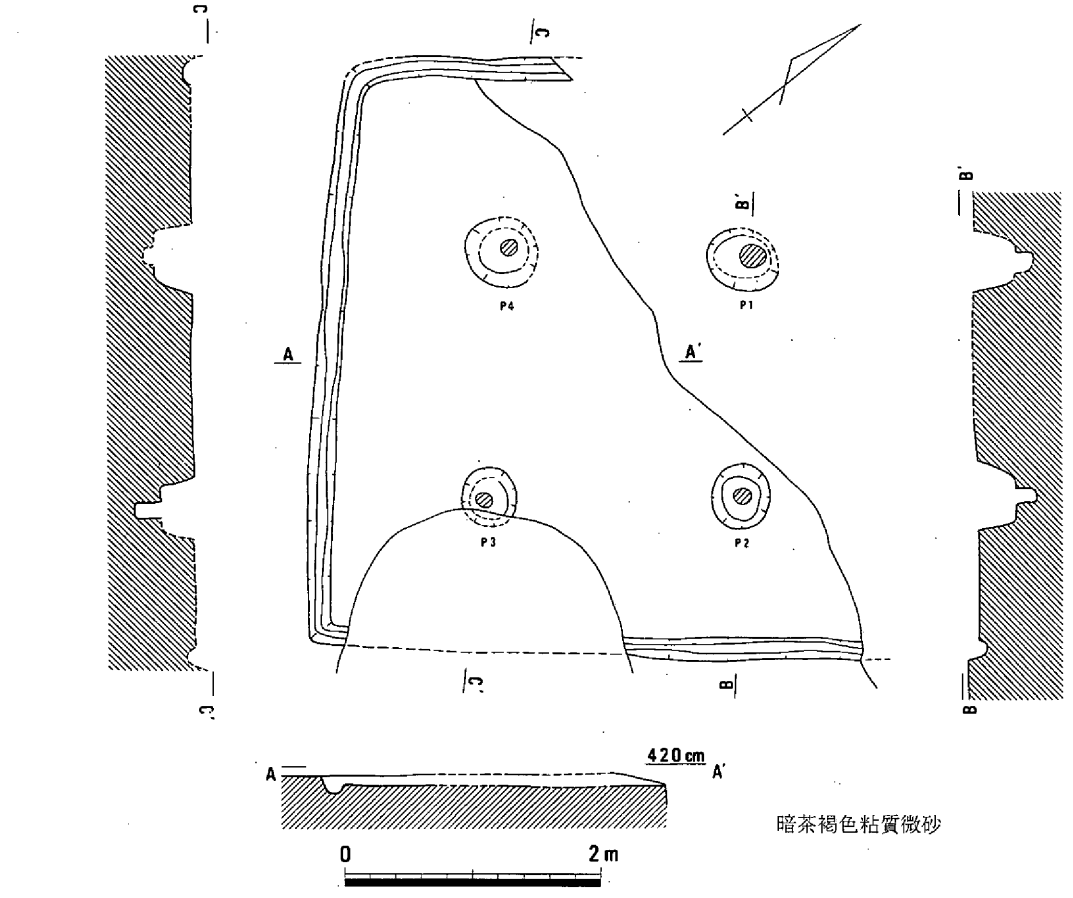
遺物の出土はないが、切り合い関係からみて、時期は古・後に属すると思われる。　（松本）

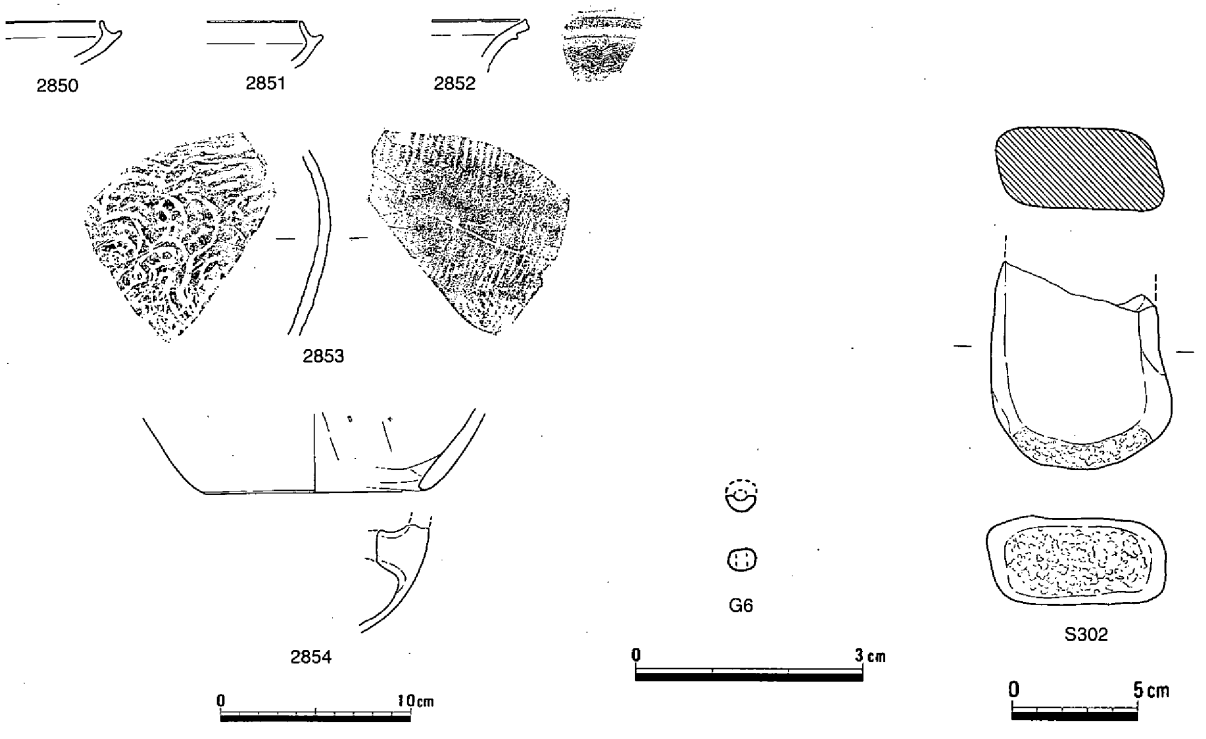
竪穴住居118（第767・768図、写真101）

竪穴住居121の西約２mの位置で検出された遺構である。削平などによって遺構の残存状態は悪いが、検出状態から１辺が519×514cmの方形を呈する住居を想定できた。深さは検出面から床面までが約15cmと浅く、埋土は２層に区分された。北辺の中央部よりやや西寄りの位置に、比較的に遺存状態の良好な造り付けカマドと長さ約60cmの煙道部が検出された。規模は東袖が幅30cm、長さ50cm、高さ

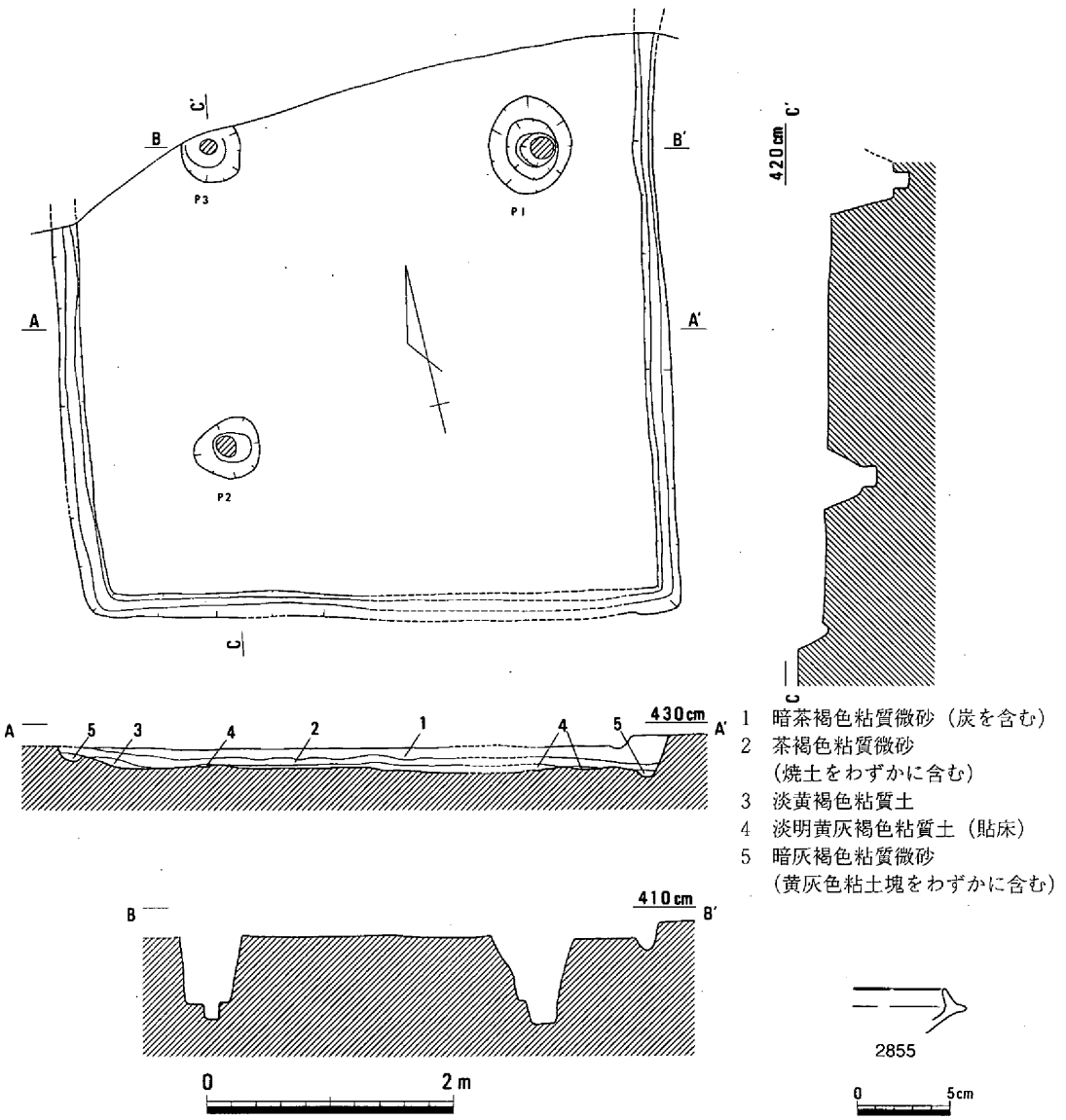


第763図　竪穴住居114（1/60）・遺物

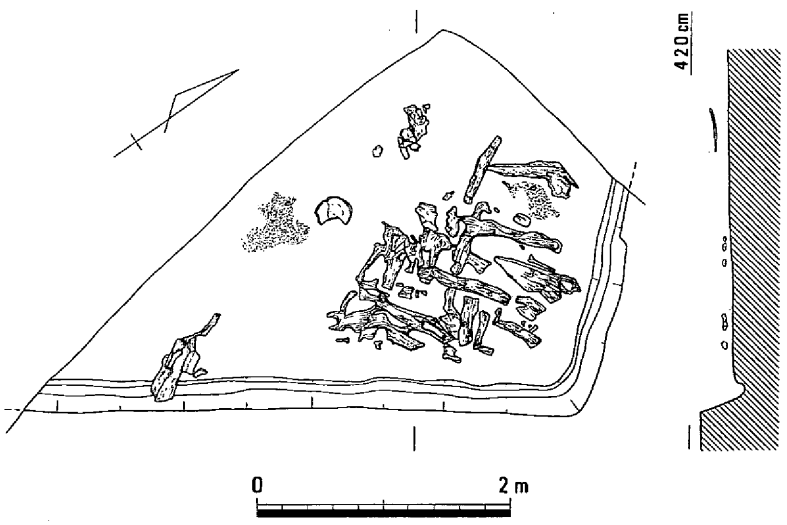




第764図　竪穴住居115（1/60）・遺物



第765図　竪穴住居116（1/60）・遺物



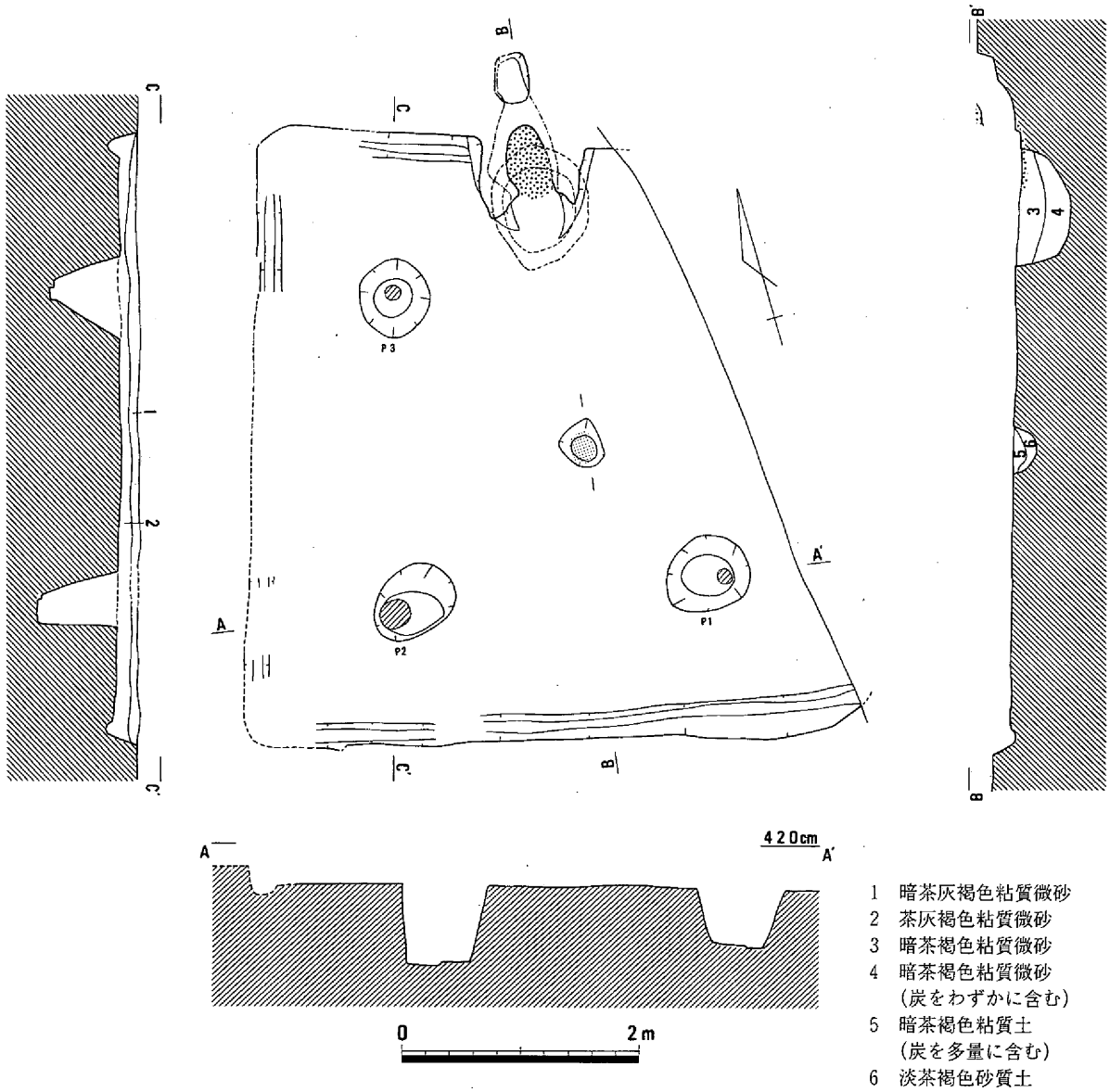
第766図　竪穴住居117（1/60）

30cm、西袖は幅20cm、長さ70cm、高さ35cmを測る。そして、袖の内壁や燃焼部底面は被熱のため著しく赤色化していた。壁際には幅約10cm、深さ10cm前後の壁体溝が巡る。なお、壁体溝はカマドの西側では袖端まで取り付くが、東側は取り付いてない。柱穴は３本検出したが、４本柱で構成される住居と思われる。柱穴の深さは50～70cm、柱痕跡は15～25cmを測る。また、カマドの下層には85×105cm、深さ50cmの土壙が検出されたが、カマド構築前に一度掘り下げた可能性のある遺構である。床面中央部には30×40cm、深さ約20cmのピットがみられ、内には多量の炭が含まれていた。

遺物は須恵器の杯身1490、土製支脚1491、羽口Ｃ122、土錘Ｃ123・124、鉄鏃M39などが出土している。時期は1490がカマドの埋土から出土していることから、古・後に属すると思われる。(松本)

竪穴住居119（第769図）

第２微高地の北東端において検出された遺構である。細長い調査区であるため、正確な規模は不明であるが、確認された長さは１辺が425×319cm程である。平面形は方形を呈する。北辺の中央部より



第767図　竪穴住居118（1/60）

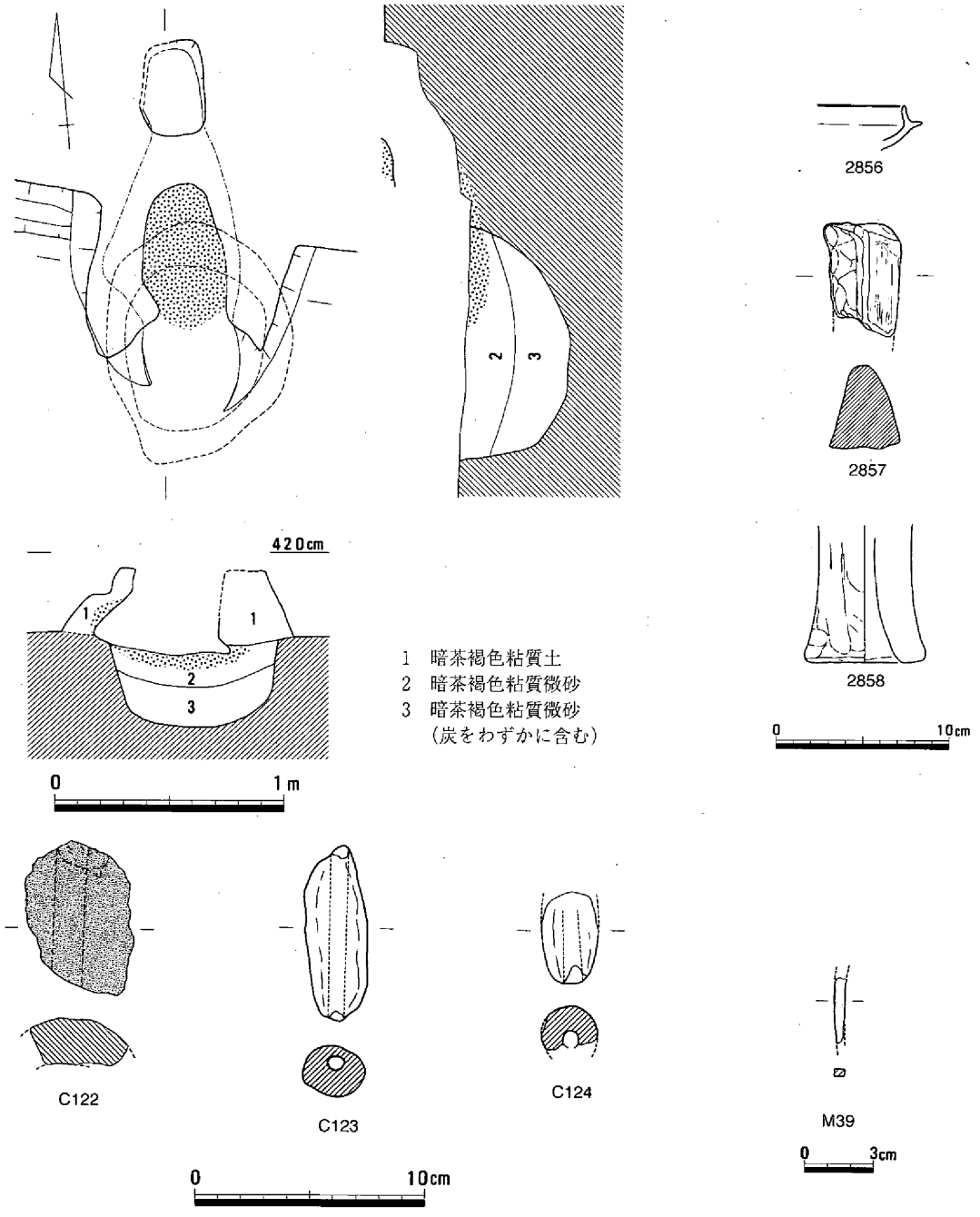
やや西寄りと思われる位置に造り付けカマドと長さ30cm程の煙道部が検出された。カマドの東袖は幅20cm、長さ60cm、高さ10cm、西袖は幅20cm、長さ50cm、高さ20cmを測る。柱穴は３本検出されたが、４本柱で構成されるものと思われる。また、カマドの西側には幅10cm前後、深さ５cm前後の壁体溝が巡る。遺物は図示してないが、須恵器片、羽口が出土している。時期は古・後に属する。　（松本）

竪穴住居120（第770図）

竪穴住居119の南に位置する。１辺557×311cmまでを確認している。壁際には幅、深さが５cm程の壁体溝が巡る。遺物は須恵器の甕2859が出土している。時期は古・中に属する可能性がある。（松本）

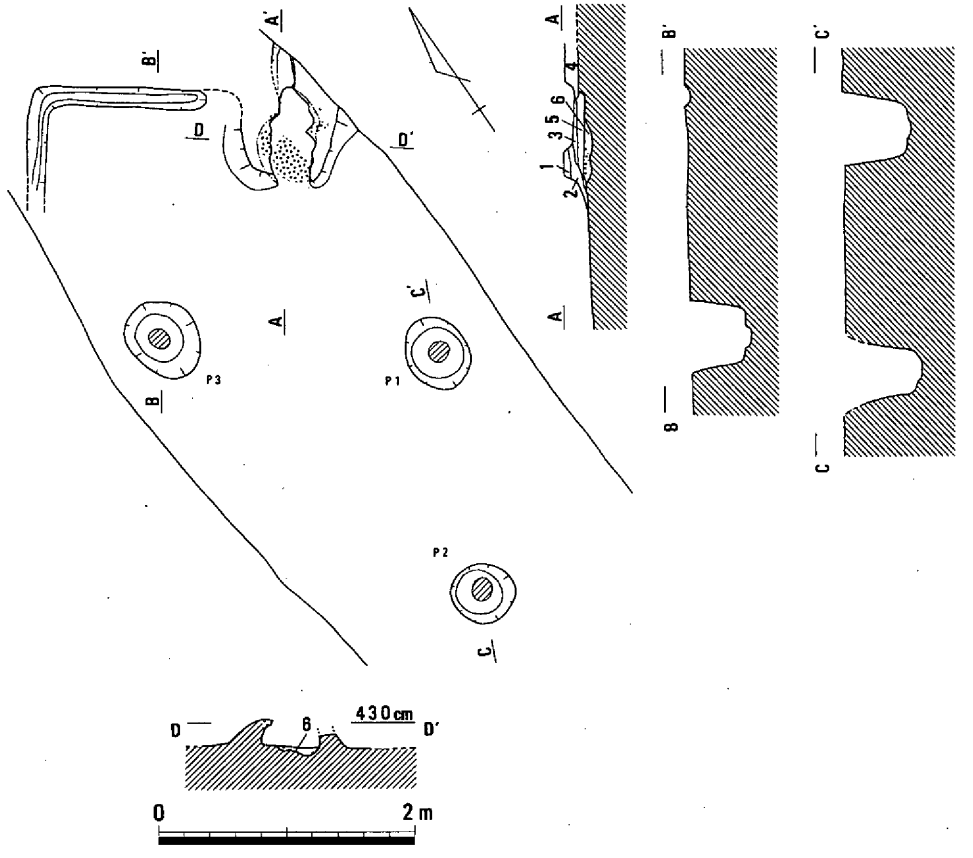
竪穴住居121（第771・772図、写真30・101）

竪穴住居118の東隣において検出された。１辺が674×658cmの方形住居で、第２微高地では古墳時

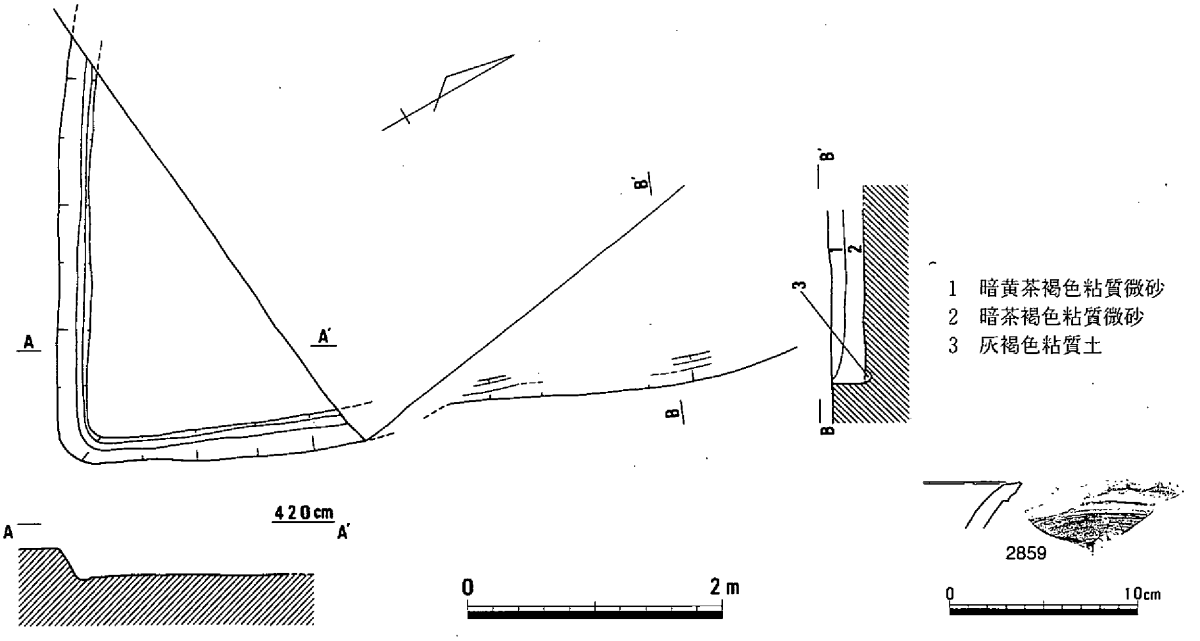


第768図　竪穴住居118カマド（1/30）・遺物

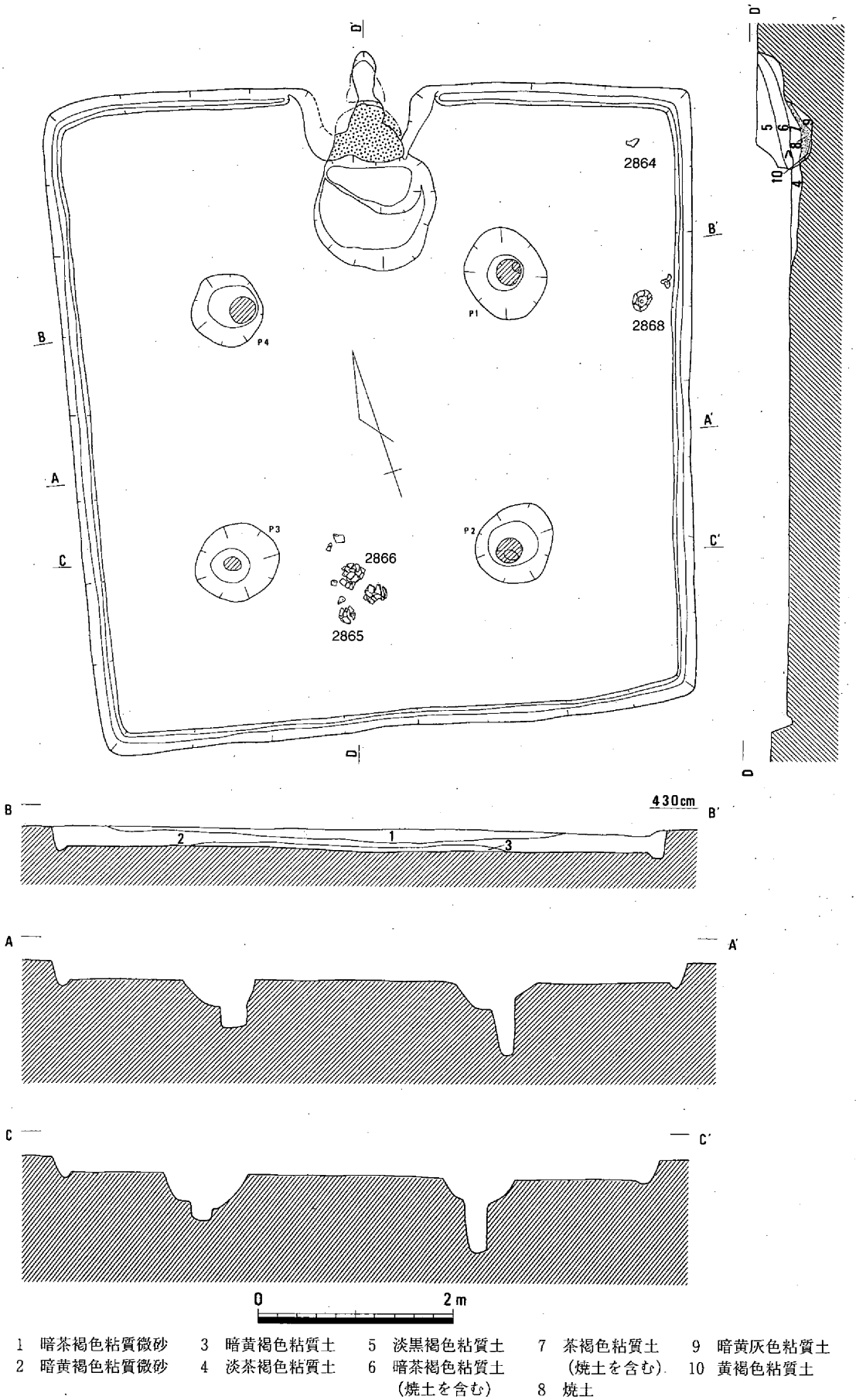
代後期の住居としては最大規模である。深さは検出面から床面までが約20cmと浅く、埋土は３層に区分された。北辺の中央部には造り付けのカマドが遺存していた。両袖は削平を受けて残存しないが、



第769図　竪穴住居119（1/60）



第770図　竪穴住居120（1/60）・遺物



1　暗茶褐色粘質微砂　　3　暗黄褐色粘質土　　5　淡黒褐色粘質土　　7　茶褐色粘質土　　9　暗黄灰色粘質土
2　暗黄褐色粘質微砂　　4　淡茶褐色粘質土　　6　暗茶褐色粘質土　　（焼土を含む）　　10　黄褐色粘質土
（焼土を含む）　　8　焼土

第771図　竪穴住居121（1/60）

被熱をうけた燃焼部底面と長さ50cm程の煙道部が認められた。また、焚口部の前には浅い土壙が存在している。壁際には幅、深さが５～10cmの壁体溝が巡り、カマドの両端にまで取り付いている。柱穴は４本確認されているため、４本柱で構成される住居である。柱穴掘り方70～90cm、深さは床面から50～75cmを測り、柱痕跡は20～25cm程である。

遺物は須恵器の杯蓋2860～2862、杯身2863～2865、土師器の甕2866・2867、高杯2868、甑2869、鉄片などがある。時期はこれらの遺物からみて古・後に属する。（松本）

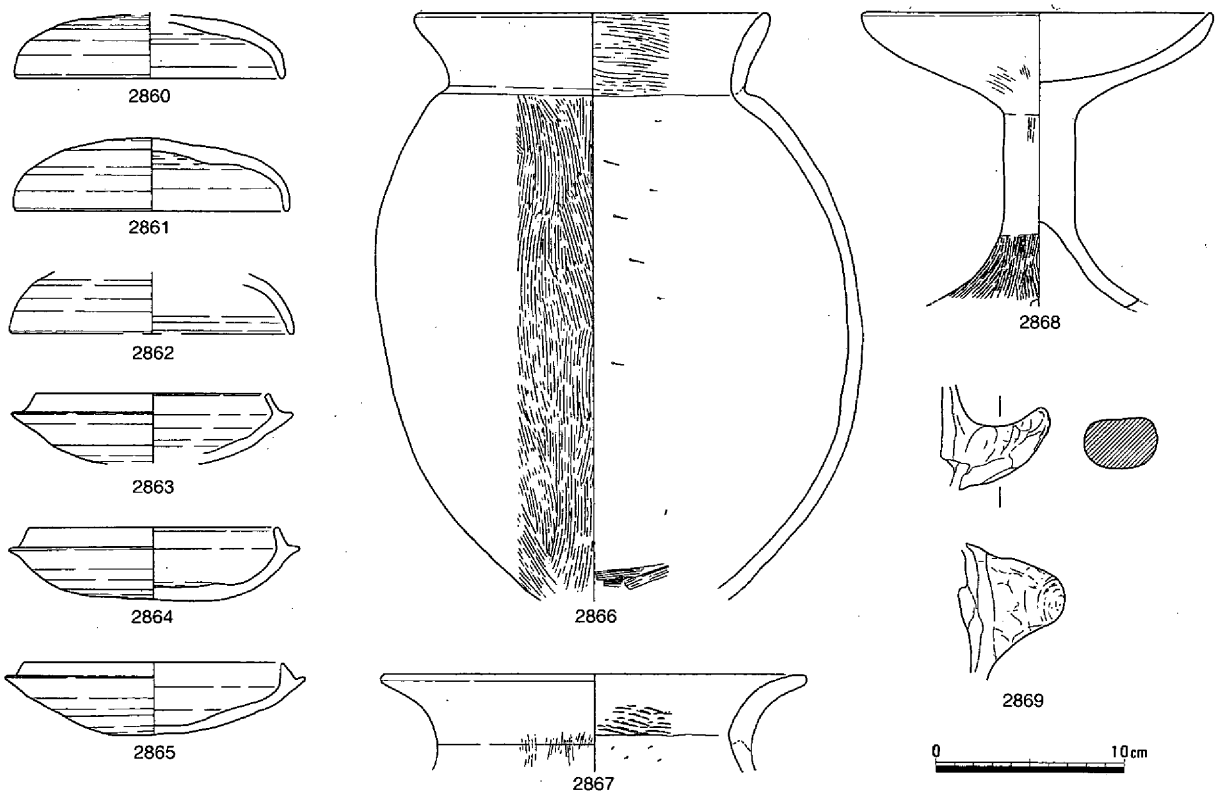
竪穴住居122（第773・774図）

第２微高地の東端で検出された住居である。規模は１辺が554×480cmの方形住居である。深さは検出面から床面までが約20cmと浅く、埋土は２層に区分された。北辺の中央部、やや東寄りに造り付けのカマドが遺存するとともに、煙道部が約70cm認められた。カマドの構築はまず最初に床面を25cmほど掘り下げた後に、両袖から作りはじめるが、袖は煙道部まで延びていたようである。東袖は幅が30cm、長さ150cm、高さ34cm、西袖は幅35cm、長さ150cm、高さ34cmを測る。焚口部の前には100×105cm、深さ15cmほどの土壙がみられた。また、袖の内壁や燃焼部底面は被熱によって赤色化していた。柱穴は４本検出されているため、４本柱で構成される住居である。柱穴掘り方は50～90cm、深さは床面から25～40cmを測り、柱痕跡は15～20cmほどである。なお、壁体溝は認められなかった。

遺物は須恵器の杯蓋2870、杯身2871・2872、甕2873・2874、甑2877、土師器の甕2875・2876・2878、鉄器では鉇M40などが出土している。時期は古・後に属する。（松本）

竪穴住居123（第775図）

第２微高地の南東端で検出された。規模は１辺が約434×376cmの不整方形を呈する。カマドは北西

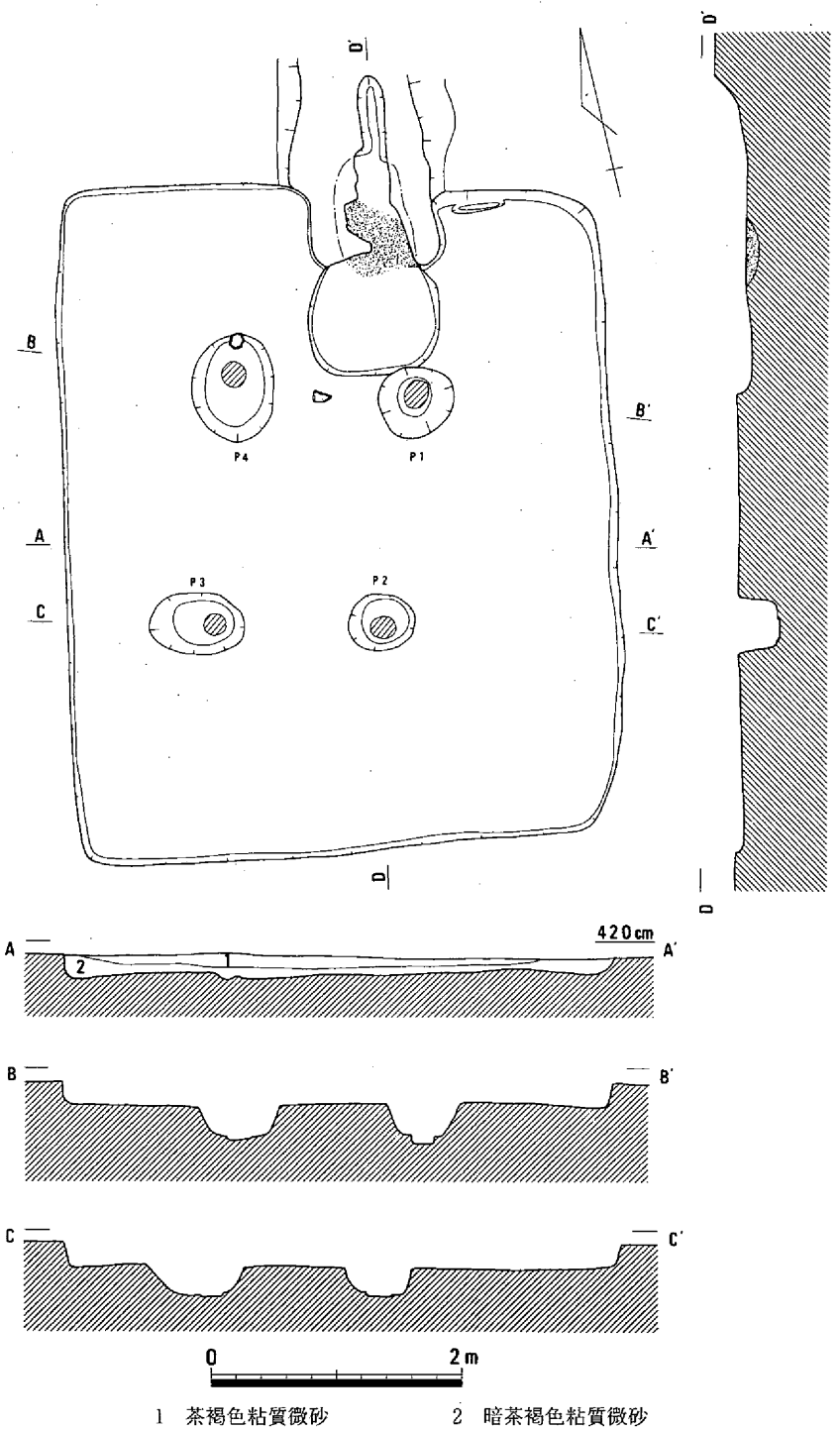


第772図　竪穴住居121　遺物

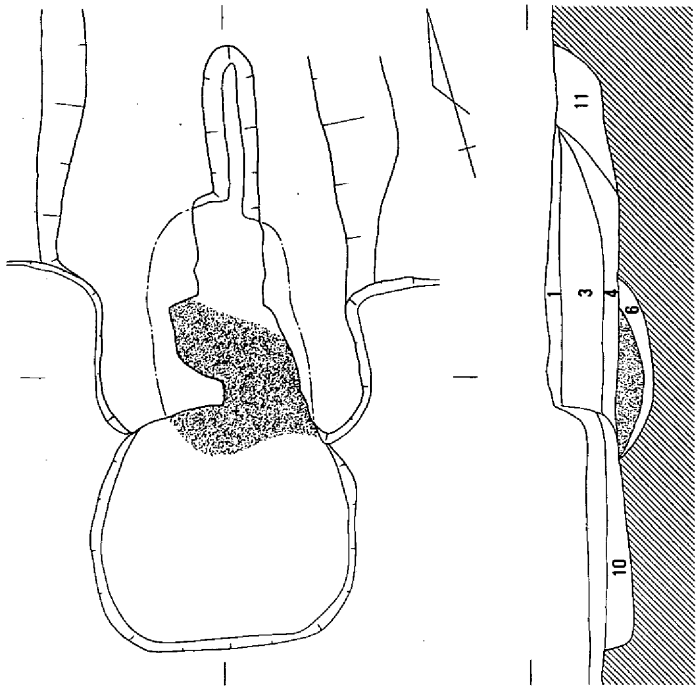
辺の中央部に造り付けられている。このカマドも構築にあたって一度掘り下げが行われたことが確認されている。焚口部の前には浅い土壙がみられた。煙道部は住居の壁に対して直交せず西にやや振っている。また、壁体溝はカマドの両側60cmほどの位置で途切れている。柱穴は２本検出されたが、４本柱で構成される住居である。遺物は須恵器の杯蓋、甕がある。時期は古・後に属する。　（松本）

竪穴住居124（第776図）

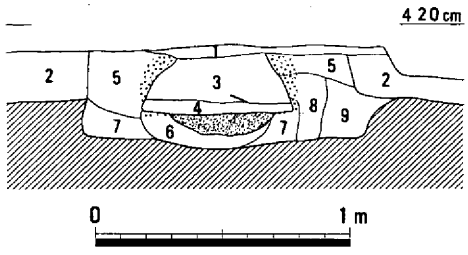
竪穴住居124は、第２微高地中央の南端に位置する。カマドの付近が検出されただけで、遺構の大半は調査区外であるが、カマドが住居の北隅寄りに位置していることが確認された。出土遺物には、

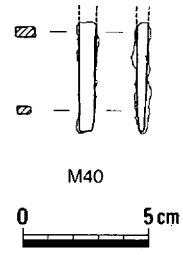


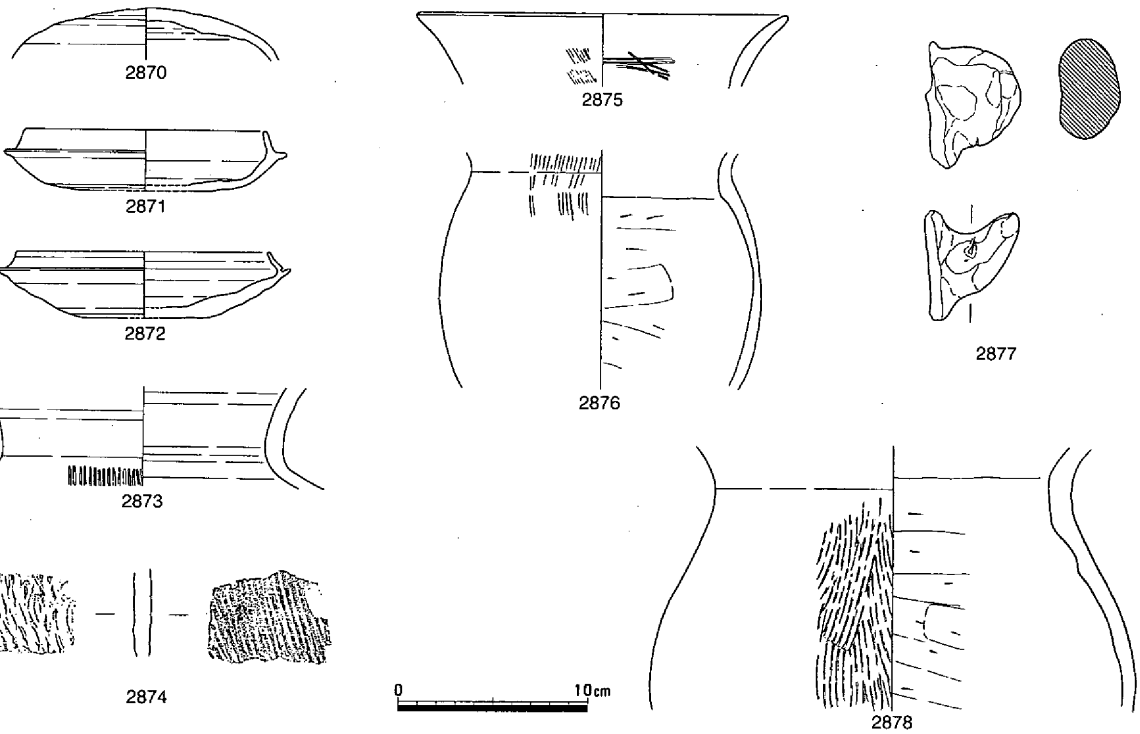
第773図　竪穴住居122（1/60）



1　茶灰色粘質微砂
2　茶灰褐色粘質微砂
3　暗茶褐色粘質微砂
4　暗灰褐色粘質微砂
5　茶褐色粘質微砂
6　暗褐色粘質微砂
7　黄褐色粘質土
8　淡灰褐色粘質微砂
9　灰褐色粘質微砂
10　灰褐色粘質微砂
11　暗茶褐色土





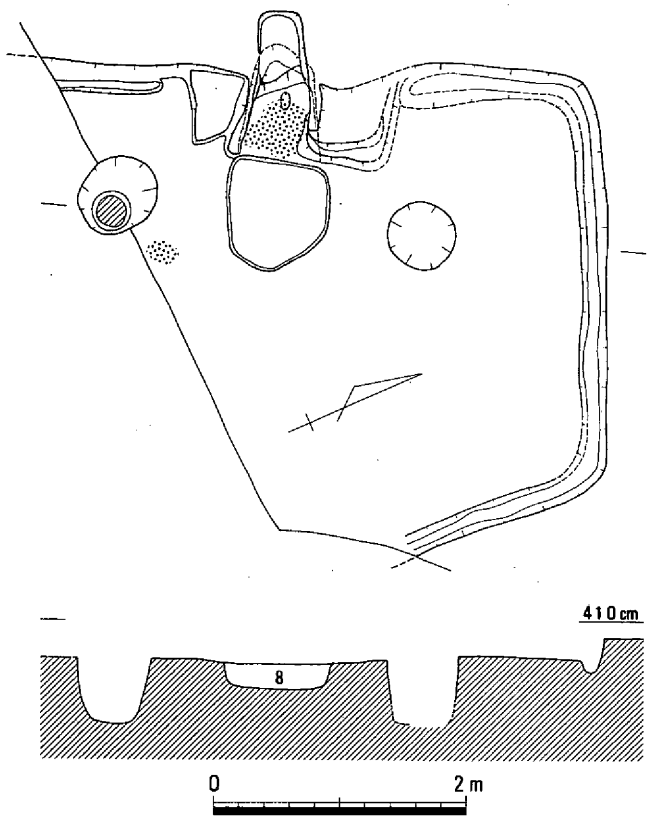


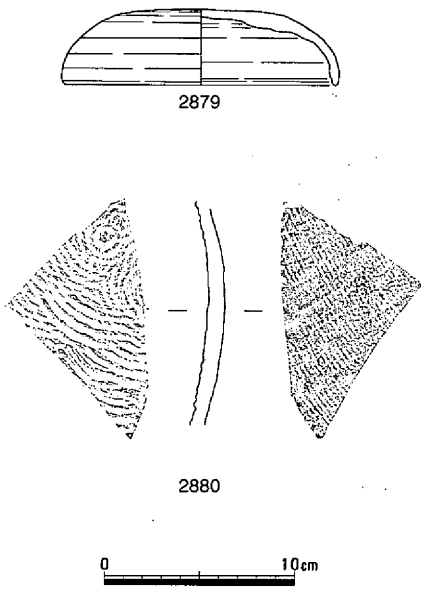
第774図　竪穴住居122カマド（1/30）・遺物

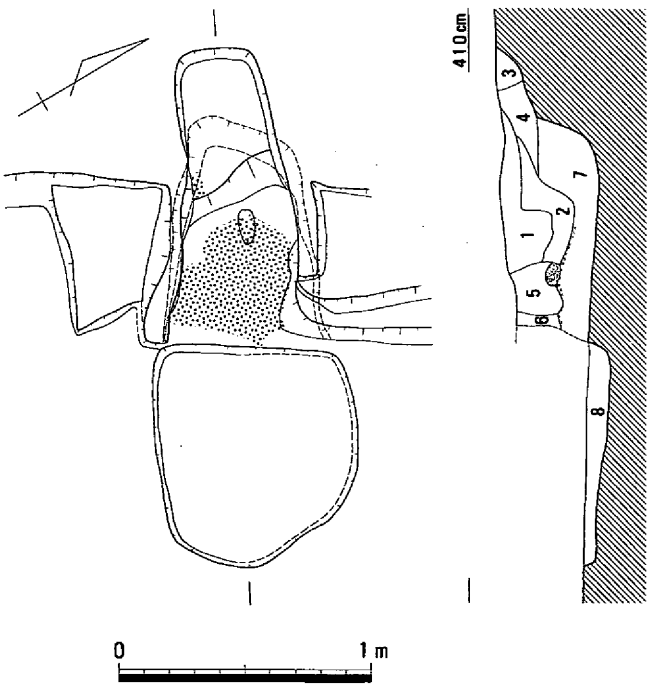
須恵器甕2881がある。外面は平行タタキであるが、内面はナデを行っており当具痕は認められない。遺物やカマドの形態から、遺構の時期は、古・中におさまると思われる。（柴田）

竪穴住居125（第777図）

竪穴住居125は、第２微高地中央の南端に位置する。壁体溝が検出されただけで、遺構の大半は調







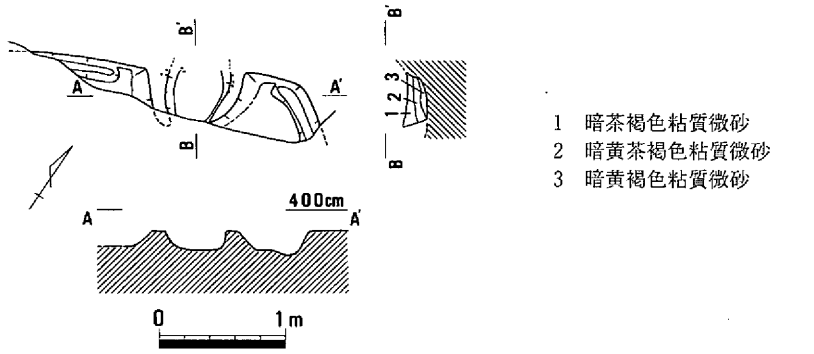
1　黄灰褐色粘質微砂
2　茶灰褐色粘質微砂
3　暗灰褐色粘質微砂
4　暗褐色粘質微砂
　（焼土・炭を含む）
5　暗黄褐色粘質微砂
6　黄褐色粘質微砂
7　黄褐色粘質微砂
8　灰褐色粘質微砂

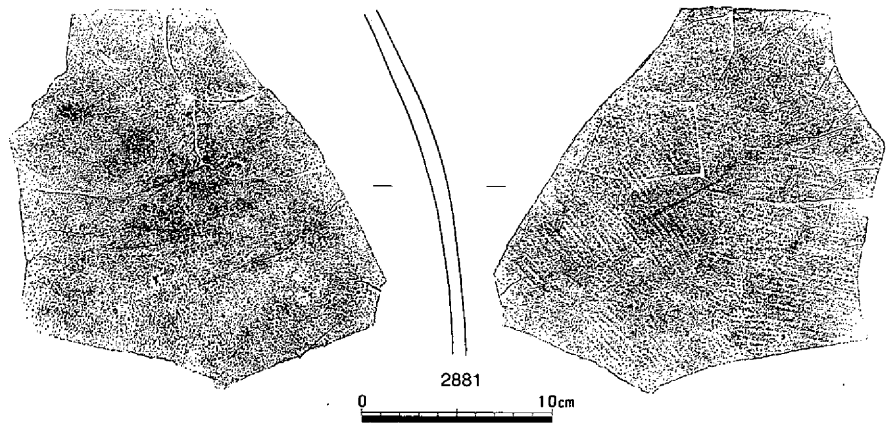
第775図　竪穴住居123（1/60・1/30）・遺物

査区外である。出土遺物は弥生土器片のみだが、壁体溝が直角に曲がっていることなどから、遺構の時期は、古・中～後におさまると考えた。（柴田）

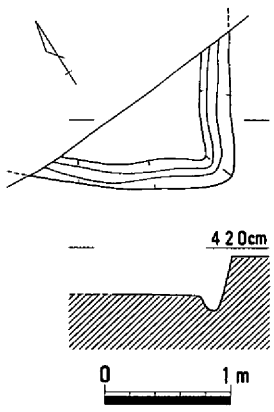
竪穴住居126（第778図）

竪穴住居126は、第２微高地中央の南端に位置する。方形にめぐると思われる壁体溝と２本の柱穴が検出されただけで、遺構の大半は調査区外である。柱穴は径45～52cmの円形で、主柱は４本と考え

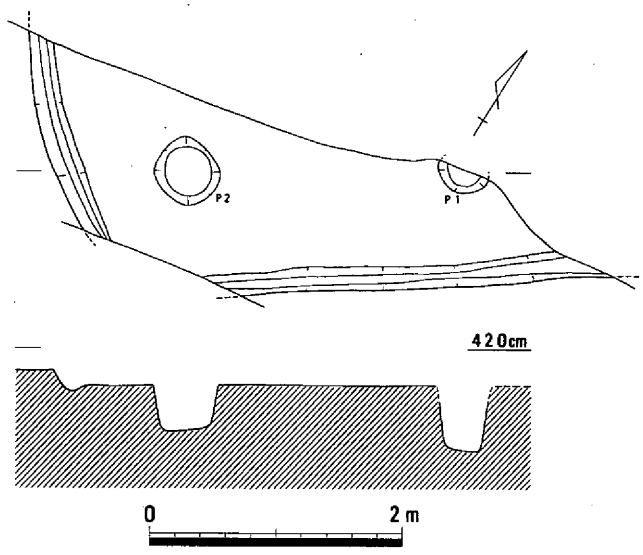




第776図　竪穴住居124（1/60）・遺物



第777図　竪穴住居125（1/60）



第778図　竪穴住居126（1/60）

られる。出土遺物は図示していないが、須恵器片がある。遺物も少なく、遺構の詳細な時期は不明だが、古・後におさまると思われる。（柴田）

竪穴住居127（第779図）

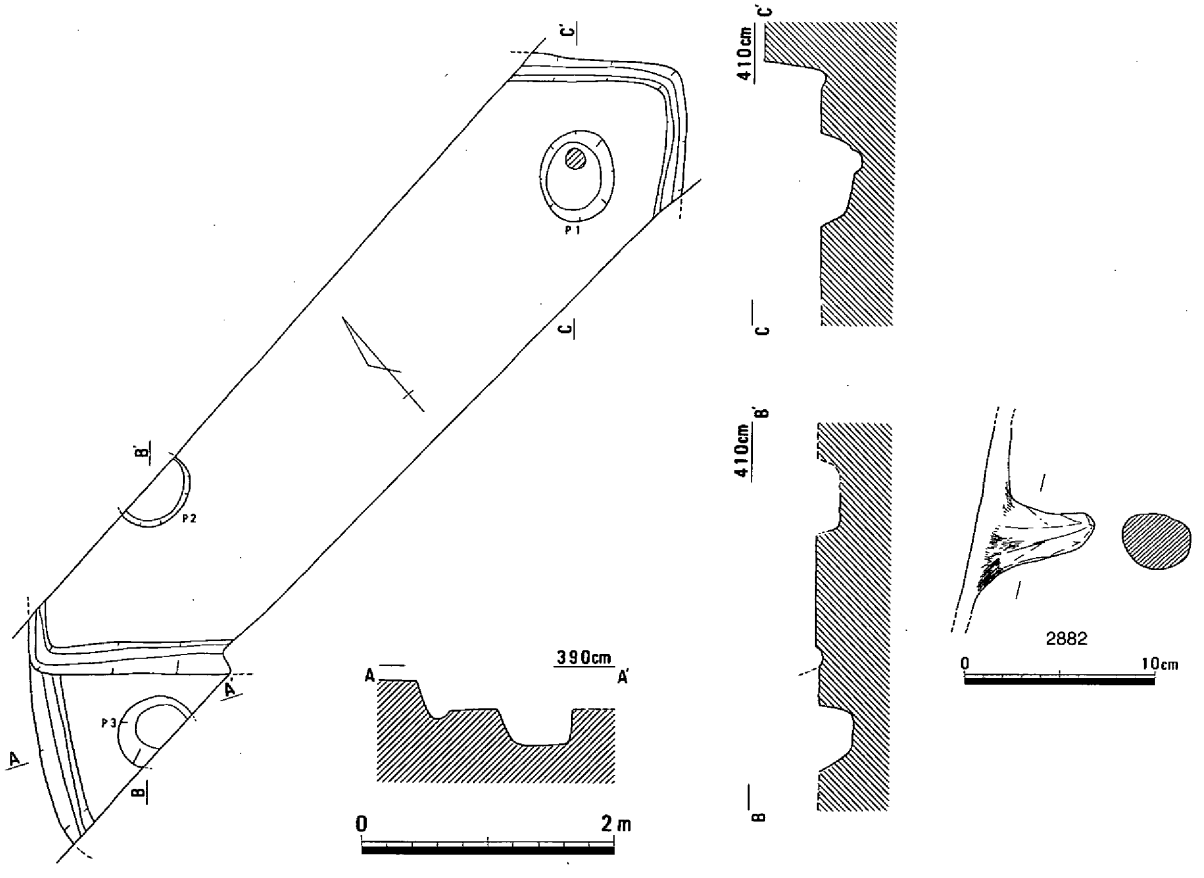
竪穴住居127は、第２微高地中央の南端に位置する。カマドは検出されていないが、方形にめぐる壁体溝が検出された。遺構の大半は調査区外であるが、規模は496×485cmを測ることが明らかになった。住居は、拡張が行われた可能性があり、南西隅に別の壁体溝と１本の柱穴が確認されている。出土遺物には、甑2882があるが、他に内面にナデを行った須恵器の甕片が認められている。これらから、遺構の時期は、古・中におさまると思われる。（柴田）

竪穴住居128（第780図）

第３微高地は、加茂政所遺跡の中心部とは河道を挟んだ東に位置する。河道は後世に形成された可能性があり、本来は西へ連続していたと推測されることから、竪穴住居群も西へ続いていたと考えられる。本住居は調査区の北西端に位置し、上部を削平されていて、北西側は河道によって削り取られている。確認できたのは、カマド部分だけで、全容を把握することはできなかった。カマドでは、焼土塊の上に土師器の甕と甑が潰れた状態で検出された。カマドの方向は東西方向を示し、東壁に築かれたものと判断される。出土遺物には、甕2883、甑2884があり、時期は６世紀に比定される。（正岡）

竪穴住居129（第781図）

第３微高地の南寄りに位置し、南側は用地外となり、北側は竪穴住居130に切られている。上部も削平されていることから、全容を把握することができなかった。辛うじて、カマドと東壁側の一部を

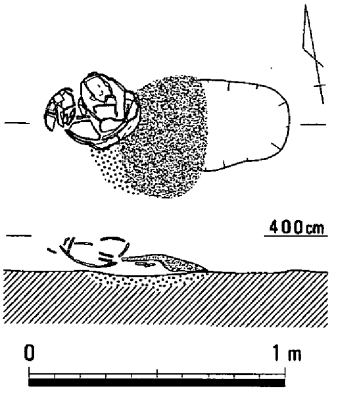


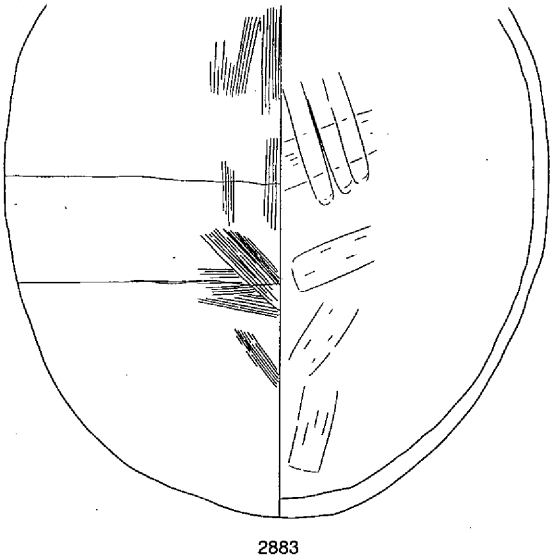
第779図　竪穴住居127（1/60）・遺物

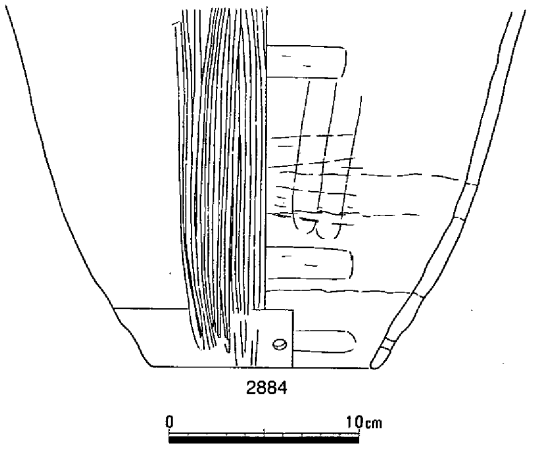
確認し、平面形は方形と判断される。カマドは東壁の中央部付近に築かれていて、かなり崩れているが、中に立石が1個残存していた。住居内の柱穴は確認できなかった。カマドと床面付近で少量の土器片を検出した。時期は6世紀頃に比定される。（正岡）

竪穴住居130（第782図、写真31－1）

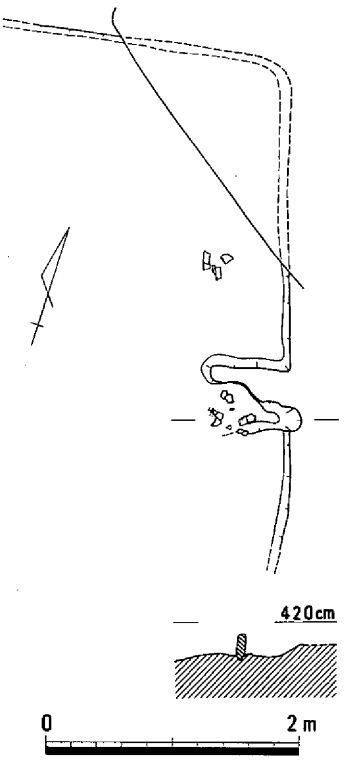
第3微高地の中央部に位置し、全容を確認することができた。平面形は方形を呈し、西壁の中央部







第780図　竪穴住居128（1/30）・遺物

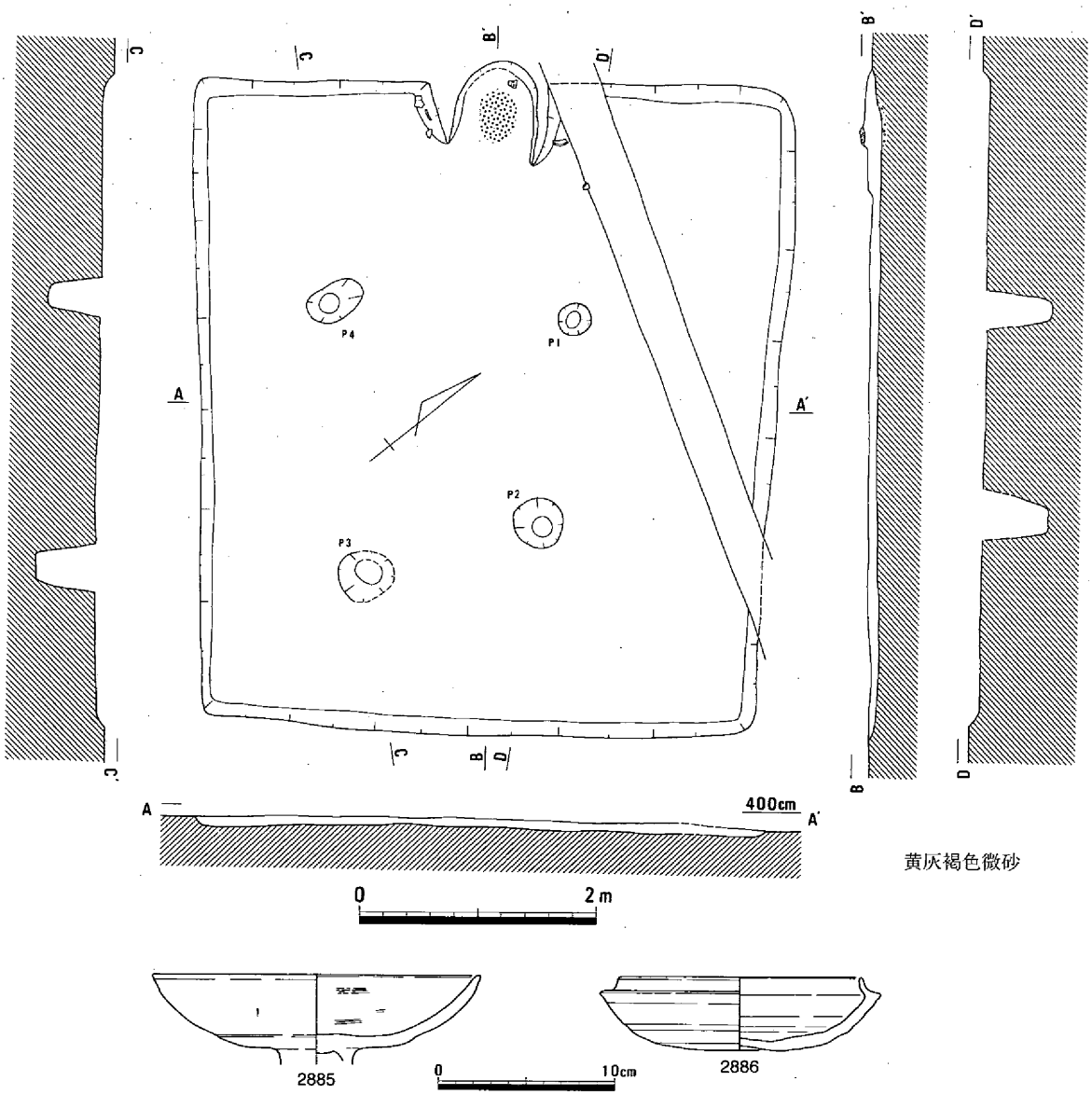


第781図　竪穴住居129（1/60）

にカマドが築かれている。カマドはＵ字形に残存しているが、立石などは検出されなかった。平面形を詳細にみると少し台形になり、カマドのある辺に直交する方が長い。大きさは、長辺533cm、短辺492cmを測る。カマドの付く辺の方が対する辺よりも少し長くなっている。床面の広さは24.8㎡である。床面を精査して、４本の柱穴を検出したが、東部の柱穴は西へ寄りすぎていることから、確認することはできなかったが、外側に別の柱穴が存在した可能性が高い。遺物はカマド付近を中心に少量出土した。実測できたものに、土師器の高杯2885と須恵器の杯身2886がある。時期は６世紀末に比定される。（正岡）

竪穴住居131（第783図）

第３微高地の北端部に位置し、大部分は河道で削り取られていて、わずかに南側の一部を残しているにすぎない。平面形は方形を呈し、南に隅がくる。壁体溝を検出したが、柱穴は残存部が少ないこともあって確認できなかった。残存する一辺の長い方は426cm、短い方の辺は314cmを測り、これより大きい住居であることが分かる。埋土中から少量の土器片が出土している。実測できたものには、土



第782図　竪穴住居130（1/60）・遺物

師器の甕2887、高杯2888がある。甕はくの字形の口縁部で、胴部内面にヘラケズリを施している。高杯は皿形の杯部である。時期は出土遺物から５世紀後半に比定される。（正岡）

竪穴住居132（第784図）

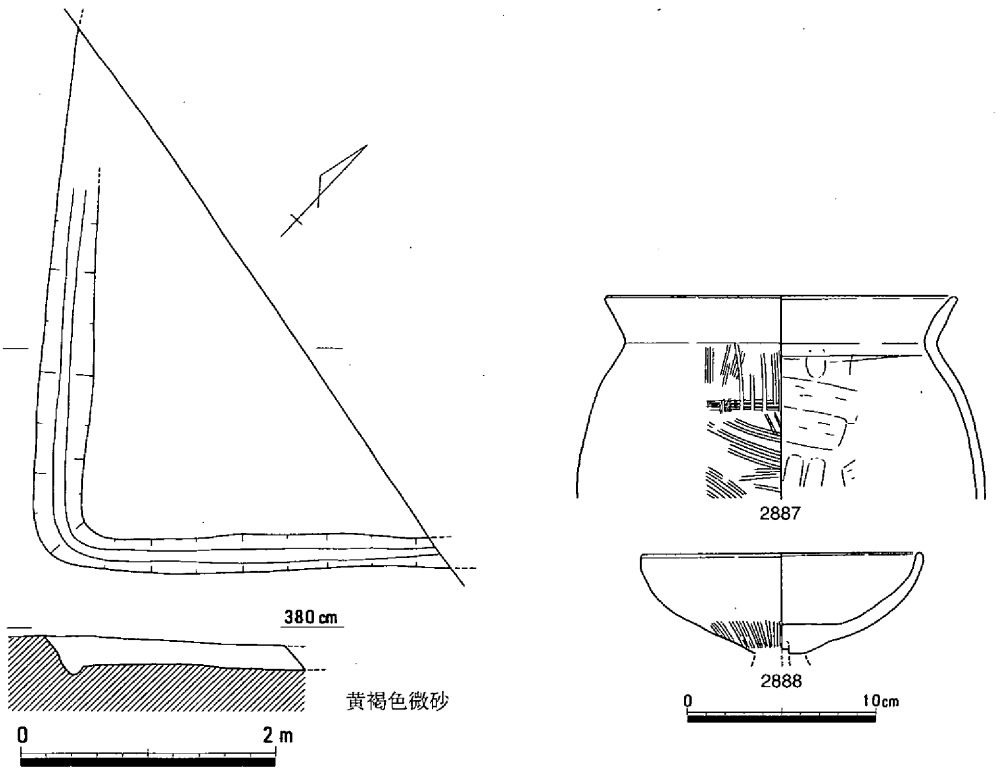
第３微高地の中央部に位置し、全体を調査することができた。平面形は方形を呈し、各辺はほぼ東西、南北に平行している。北辺の中央部にカマドが存在する。カマドの下部には、南北に掘られた土壙があり、大きさは、長さ215cm、最大幅90cm、深さ35cmである。土壙の埋土は暗褐色粘質微砂で、炭や焼土を含んでいる。壁体溝はカマドの部分を除いて全周する。柱穴は４本あり、北側の２本の柱間が少し広くなり、台形に配置している。住居の大きさは、東西443cm、南北410cm、床面積16.8m²を測る。埋土中からは、須恵器の杯身2889、脚台部2890と鉄鏃M41を検出した。時期は出土遺物から７世紀前半に比定される。（正岡）

竪穴住居133（第785図、写真31－２）

第３微高地の北東部に位置し、北側の一部は河道によって削り取られている。平面形は方形を呈し、長軸N-23°-Eを示し、南北より少し東へ振れている。カマドは南辺の中央部に位置し、U字形の立ち上がりが残っている。残存している範囲では、カマド部分を除き、壁体溝が巡っている。柱穴は検出できなかった。住居の大きさは、現存長辺409cm、短辺412cmを測る。埋土中からは須恵器片と鉄器を出土した。実測できた須恵器の杯身2891・2892は、いずれも口径が小さく、口縁部の立ち上がりも小さくて、内傾している。鉄器は、刀子M42、釘M43があるが、どちらも破片である。時期は７世紀前半に比定される。（正岡）

竪穴住居134（第786図）

第３微高地の南東部に位置し、南側半分くらいは用地外になるため、調査していない。平面形は方

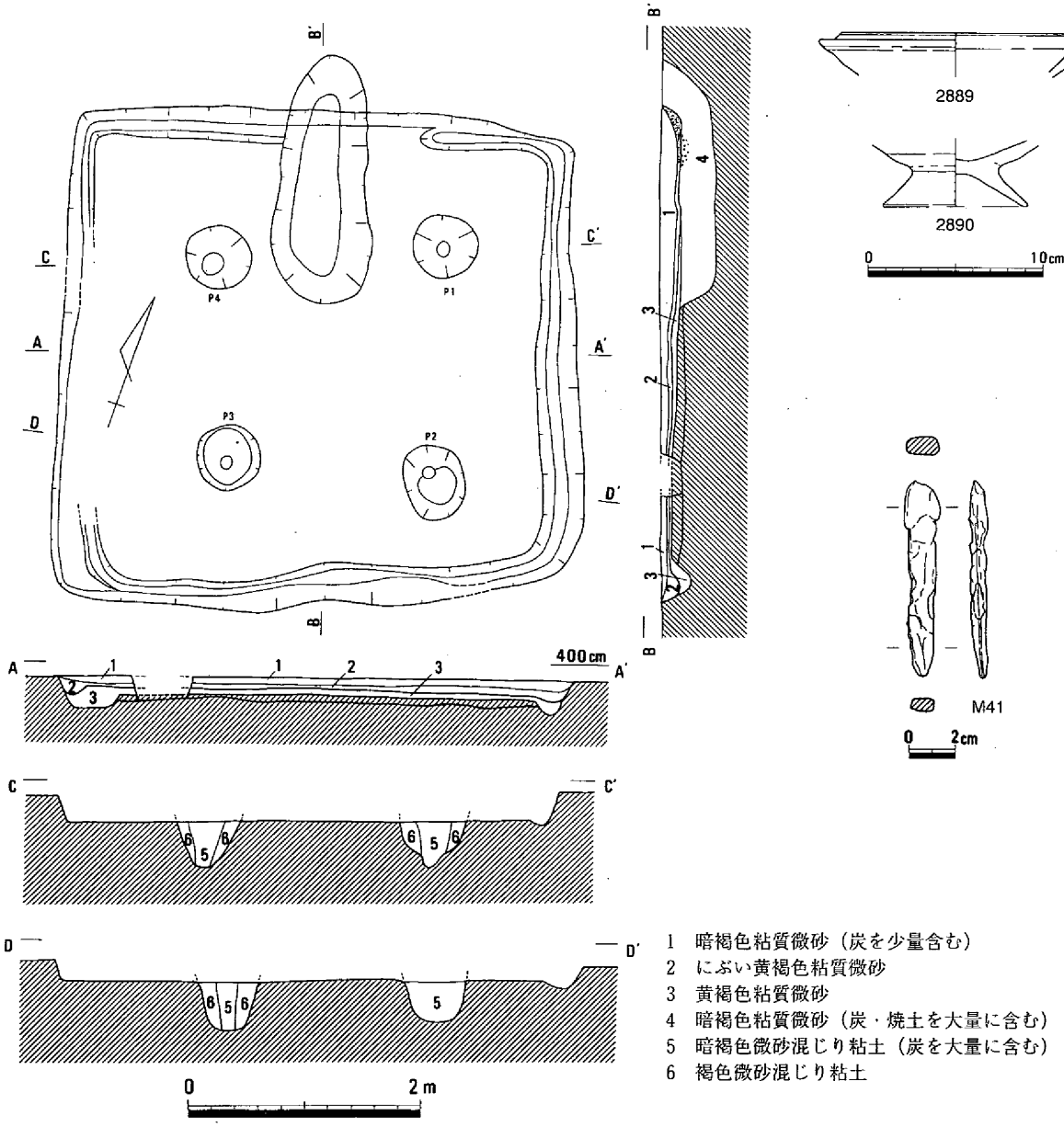


第783図　竪穴住居131（1/60）・遺物

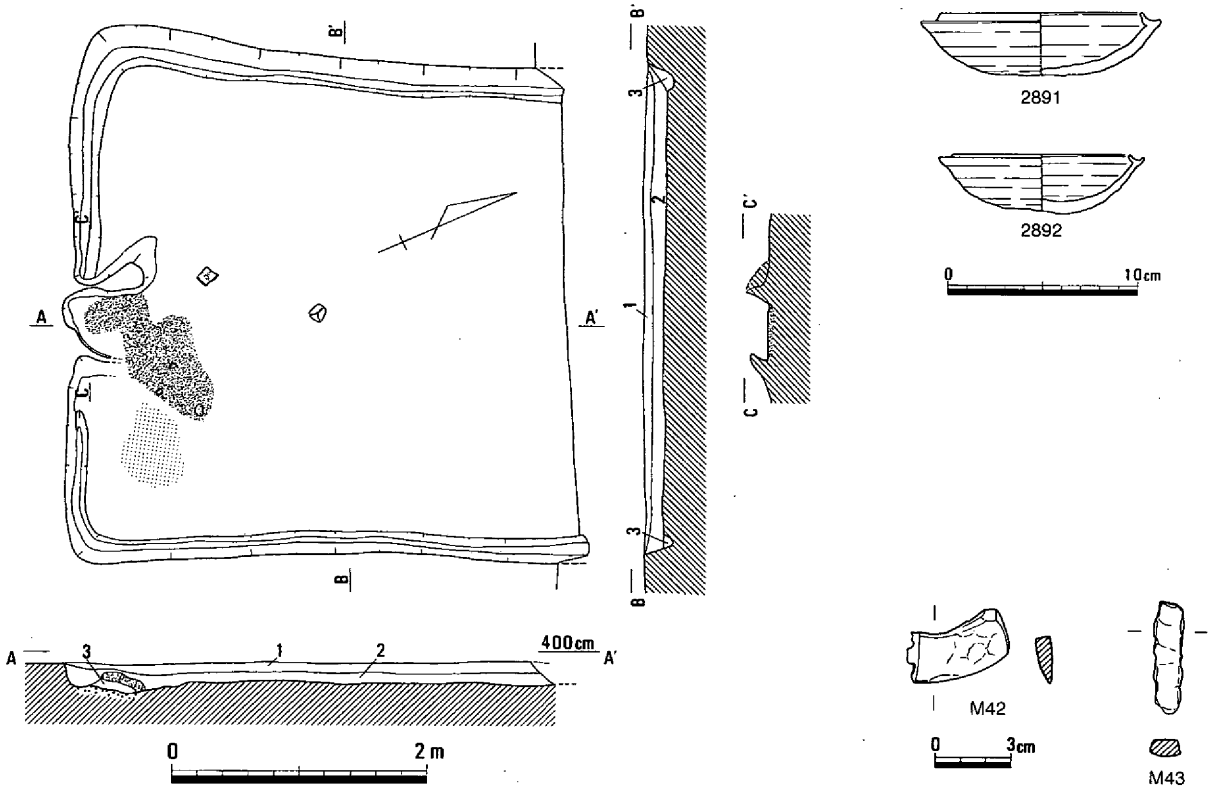
形を呈し、長軸N-54°-Wを示し、西辺の中央部にカマドがある。上部を削平されていて、床面付近しか残存していないので、詳細は分からない。調査した範囲では、カマド部分を除き、壁体溝が巡っている。柱穴は検出できていない。住居の大きさは、長辺の調査部分長467cm、短辺464cmを測る。埋土中から出土した遺物には、須恵器の杯2893がある。口径が小さく、口縁部の立ち上がりも小さく、内傾している。時期は出土遺物から７世紀前半に比定される。（正岡）

竪穴住居135（第787図）

第３微高地の東端部に位置し、北側の半分くらいは河道で削り取られている。南側は用地外になるため、一部調査をしていない。平面形は方形を呈し、長軸N-64°-Wを示し、西辺にカマドがある。上部を削平されていて、床面付近しか残存していないので、詳細については分からないことが多い。柱穴も検出できていない。埋土中からの出土遺物には、須恵器の杯蓋2894、土師器の甕2895がある。時期は出土遺物から７世紀前半に比定される。（正岡）

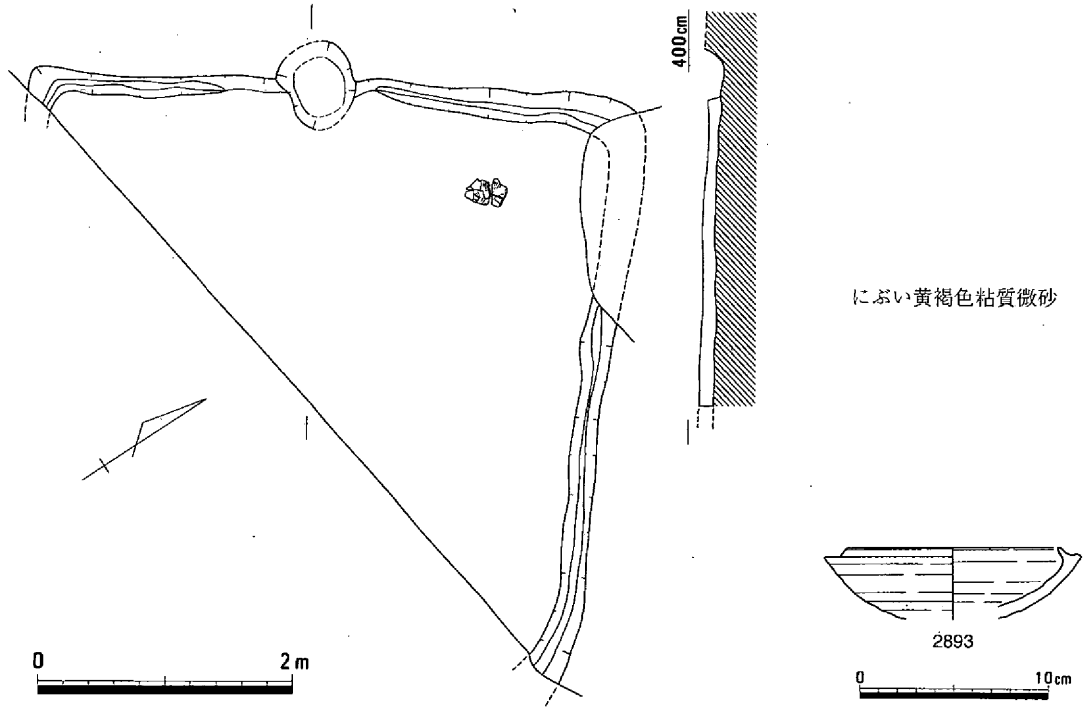


第784図　竪穴住居132（1/60）・遺物

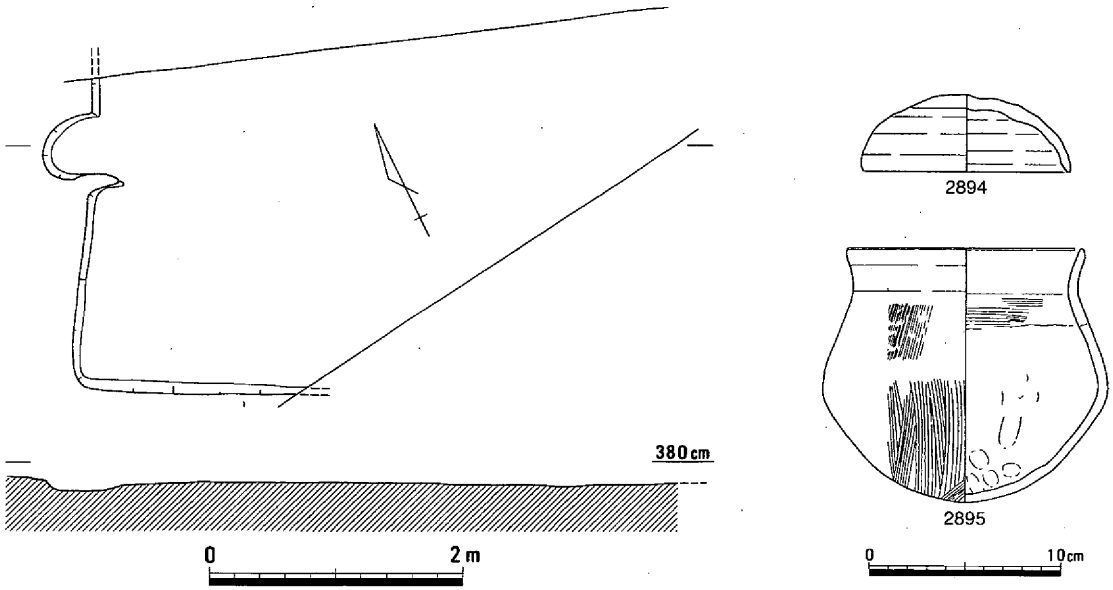


1　暗褐色粘質微砂（炭を含む）
2　褐色粘質微砂（炭を含む）
3　褐色粘質微砂（焼土を大量に含む）

第785図　竪穴住居133（1/60）・遺物



第786図　竪穴住居134（1/60）・遺物



第787図　竪穴住居135（1/60）・遺物

（３）掘立柱建物

掘立柱建物２（第788図、写真31－３）

第１微高地のＮ22区北西部に位置する。規模は、桁行683cm、梁間443cmで、棟方向は、N-49°-Eで、北は意識されていない。間数は、桁行が５間で、梁間は北側が４間、南側が３間であった。柱の掘り方は、50cm前後の円形や楕円形で、深さは30cm前後残存していた。

時期は、Ｐ３の埋土中から図示したような須恵器杯身が出土したこと、および柱穴の埋土がカマドをもった竪穴住居の埋土に類似していることから、古墳時代後期と考えている。（平井）

掘立柱建物３（第789図、写真32－１）

第１微高地のＮ22区北半部、掘立柱建物２の南東約20ｍに位置する。規模は、２×２間で、中央部にも柱をもつ総柱建ての掘立柱建物である。柱穴の掘り方は、30～40cm前後の円形や楕円形で、深さは30cm前後残存していた。棟方向は、N-58°-Eで、北は意識されていない。時期を特定できる遺物は出土していないが、埋土や規模から古墳時代後期と考えている。（平井）

（４）焼成土壙

焼成土壙１（第790図）

第１微高地のＮ22区に位置する。平面形は、約65×50cmの不整長方形で、深さは3cm残存していたのみであった。埋土は灰色粘質土で、炭や焼土を多く含んでいた。被熱した部分は確認できなかったが、形状から焼成土壙と考えている。時期は他の例と同じく古墳時代後期であろう。（平井）

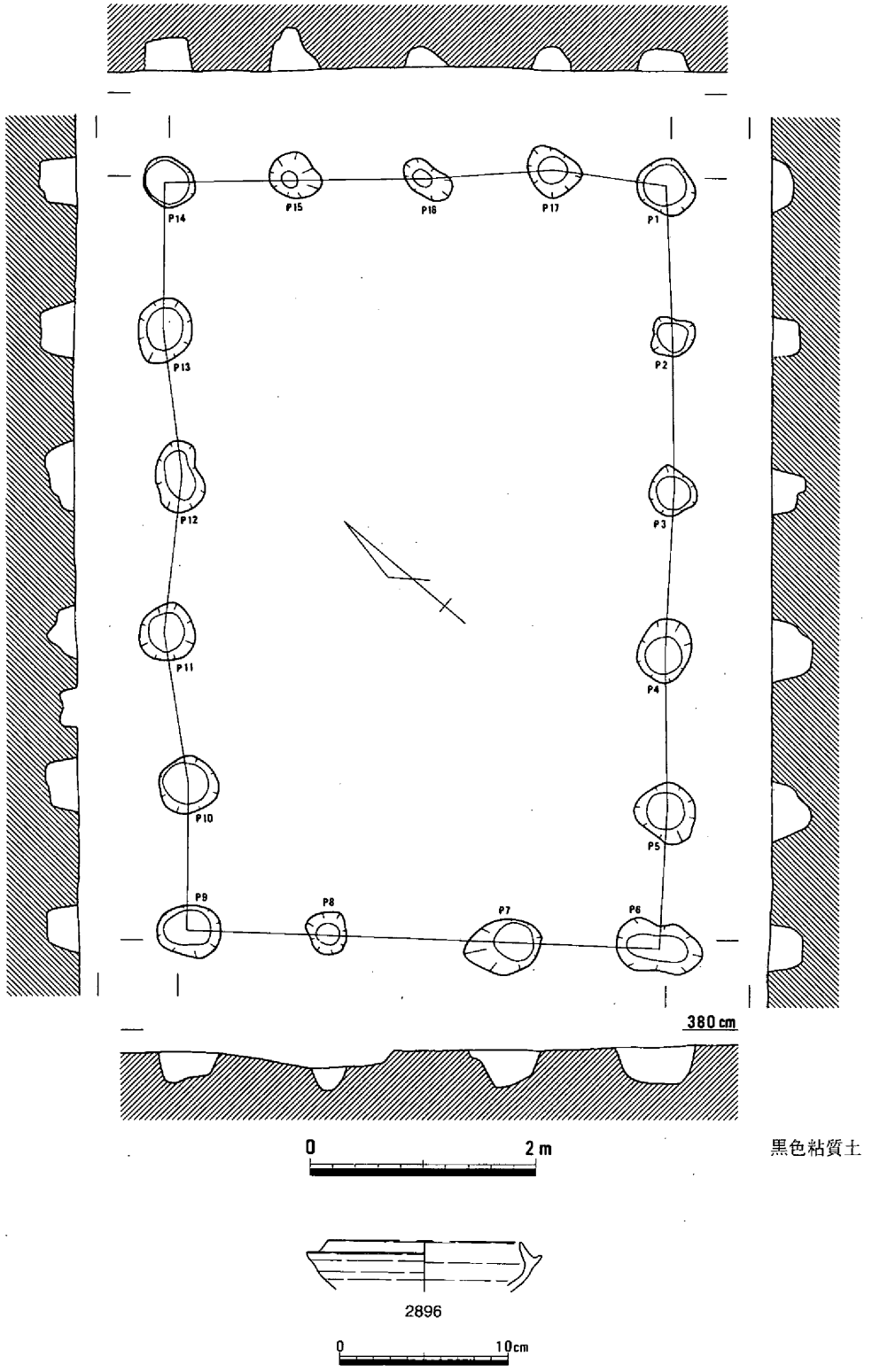
焼成土壙２（第791図、写真32－２）

第１微高地のＮ22区に位置する。平面形は約80×75cmの隅丸方形で、深さは17cm残存していた。特徴は、壁が強く焼けていることと、底面は焼けてはいないが、炭片が多く残存していたことである。このような土壙については、炭を焼いたのではないかとも考えられているが、この土壙では証明でき

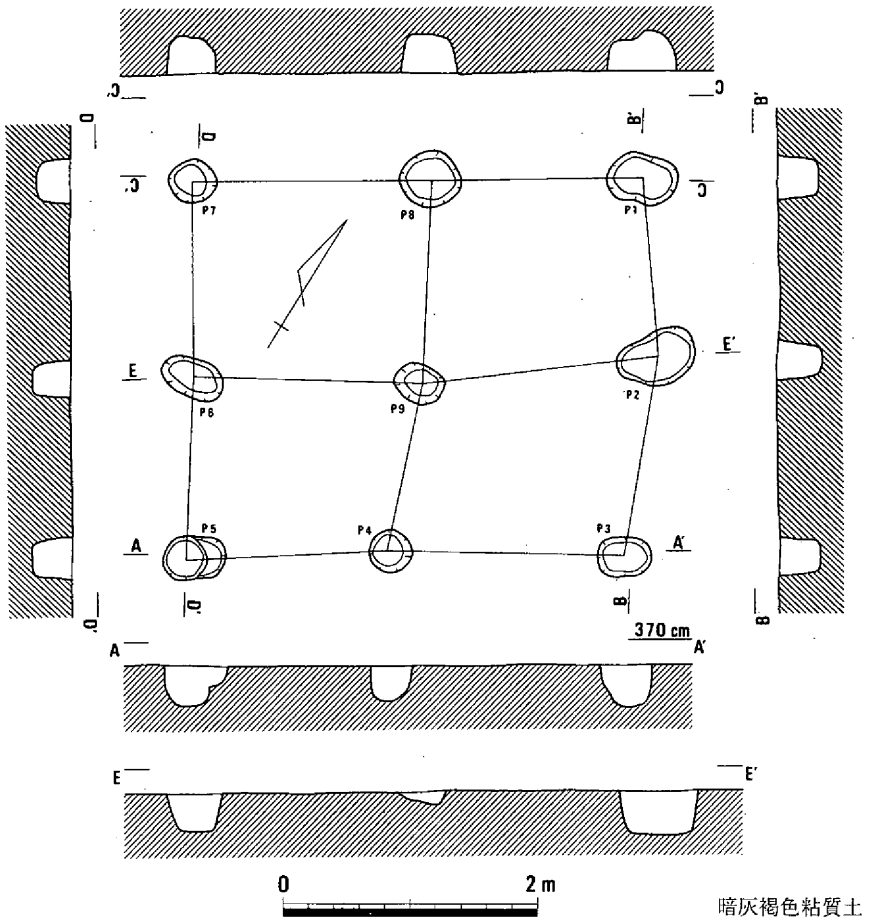
ない。時期を明確にできる遺物は出土していないが、古墳時代後期であろう。(平井)

焼成土壙３（第792図）

Ｎ22区の北東に位置しており、竪穴住居87のカマド左袖を壊して造られている。現状では、幅44cm、長さ88cm以上の長方形を呈しており、深さは23cmを測る。底面には被熱痕跡を残し、炭化物の堆積が



第788図　掘立柱建物２（1/60）・遺物

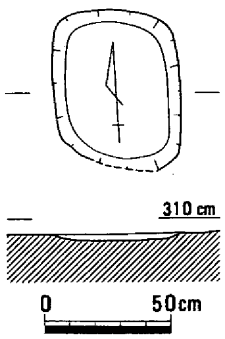


第789図　掘立柱建物３（1/60）

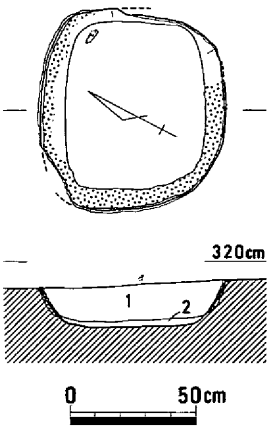
薄く認められた。出土遺物はないが、他例からして７世紀前半に位置付けられる。　（亀山）

焼成土壙４（第793図）

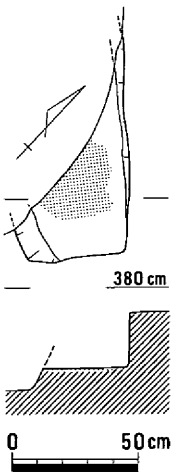
竪穴住居87の煙道に接して検出した土壙で、焼成土壙３の２ｍ東に位置する。長さ109cm、幅82cm



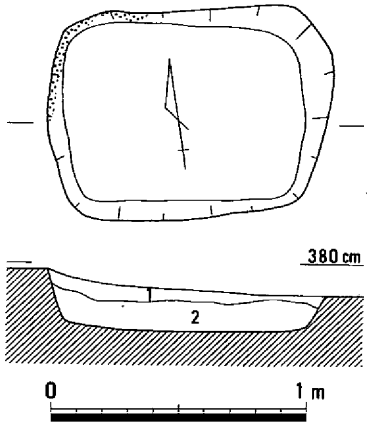
第790図　焼成土壙１（1/30）



第791図　焼成土壙２（1/30）

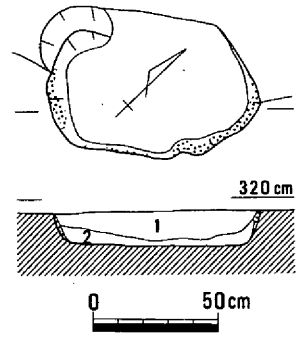


第792図　焼成土壙３（1/30）



1　暗褐色粘質微砂
（焼土塊・炭化物を多く含む）
2　暗黄褐色粘質微砂
（焼土塊・炭化物を含む）

第793図　焼成土壙４（1/30）



1　褐灰色粘質微砂
2　暗褐灰色粘質微砂
（焼土・炭を多量に含む）

第794図　焼成土壙５（1/30）

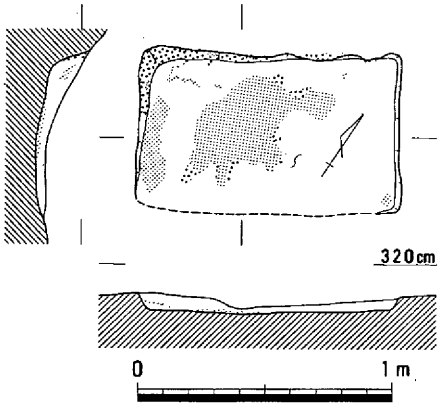
の隅丸方形を呈し、深さは18cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁面は急な傾斜をもって立ち上がる。北東の壁面は被熱により赤変する。上下２層に分かれる埋土のうち、上層には炭化物や焼土を多く含んでいる。遺物は出土していないが、焼成土壙３に近似した時期を想定し得る。（亀山）

焼成土壙５（第794図）

N22区の北東に位置しており、竪穴住居87の南東3.5mで検出した。溝34と重複しているため遺存状態は必ずしも良好ではないが、現状では長さ83cm、幅57cmの不整な方形を呈する。高さ14cmある壁面には被熱痕跡が認められ、下層の埋土には炭や焼土を多量に含んでいる。時期を知る手掛かりに乏しいが、他の遺構との関係から７世紀前半に比定しておきたい。（亀山）

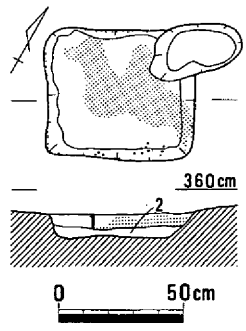
焼成土壙６（第795図、写真32－３）

焼成土壙６は、第１微高地の北東端に位置する。微高地が下がったところで検出され、古・後・Ⅱ～Ⅲの溝34を切っているが、古代の溝43に切られている。平面は長方形で、規模は103×65cmを測る。壁面がよく焼けており、埋土には炭が堆積している。



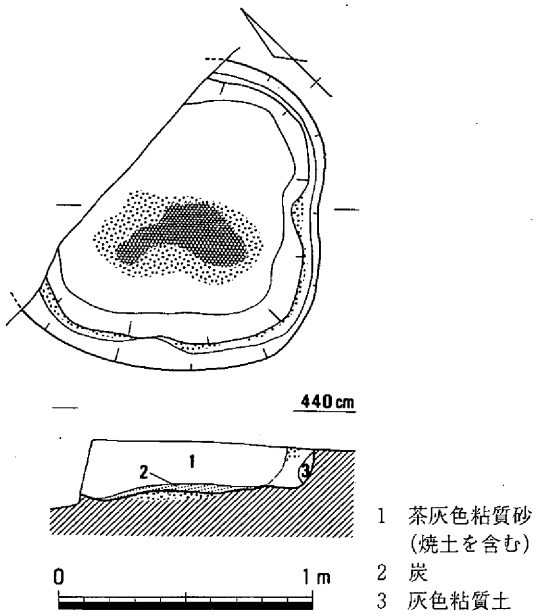
暗褐色砂質土細砂（炭・焼土を多く含む）

第795図　焼成土壙６（1/30）

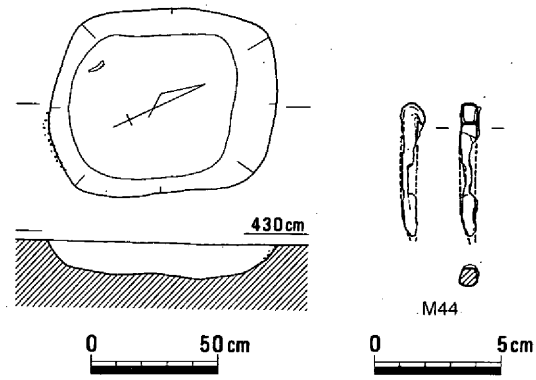


1　暗灰褐色砂質土微砂
（炭・焼土を多く含む）
2　暗灰褐色砂質土微砂
（炭・焼土を少し含む）

第796図　焼成土壙７（1/30）



第797図　焼成土壙８（1/30）

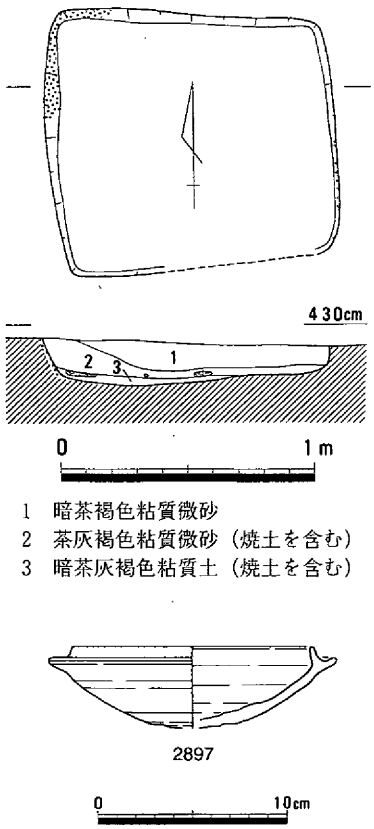


第798図　焼成土壙９（1/30）・遺物

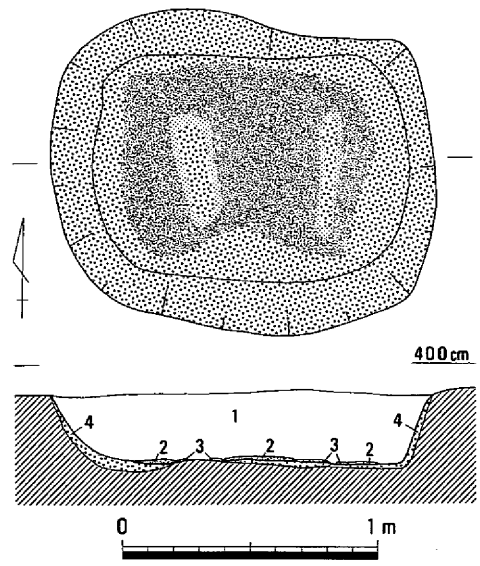
遺物は認められないが、遺構の切り合いなどから、時期は古・後におさまると思われる。　（柴田）

焼成土壙７（第796図）

焼成土壙７は、第１微高地の北東端、焼成土壙６の東に隣接する。微高地が下がったところで検出され、古・後・Ⅱ～Ⅲの溝34を切っているが、古代の溝43に切られている。平面は方形に近く、規模は70×50cmを測る。壁面がよく焼けており、埋土には炭が堆積している。遺物は認められないが、遺構の切り合いなどから、時期は古・後におさまると思われる。　（柴田）



第799図　焼成土壙10（1/30）・遺物



第800図　焼成土壙11（1/30）

焼成土壙８（第797図、写真33－１）

竪穴住居108内に位置し、住居の覆土上面から検出され、土壙北部は調査区外に延びる。平面隅丸方形を呈す。規模は一辺約120cmを測るが、被熱部分はそれより内側約10cmに巡ることから壁は断面破線部と推定される。土壙底部および壁上部に被熱部分が確認され、とくに底部50×20cmの範囲が灰色～赤色の焼土面を形成していた。遺物は須恵器片が出土している。（江見）

焼成土壙９（第798図）

焼成土壙８の南東４ｍから検出された。平面方形を呈し、規模は90×50cm、深さ14cmを測る。断面は皿状を呈し、埋土に焼土・炭粒を多く含むものであった。土壙南西壁、北壁の一部に赤色に変化した被熱箇所が確認されたが、他は顕著ではない。遺物は釘状の鉄製品M44のほか須恵器細片が出土しており、須恵器の特徴から古墳時代後半期のものと判断される。（江見）

焼成土壙10（第799図）

竪穴住居121と切り合い関係をもつ遺構である。規模は長径115cm、短径106cmを測り、平面形は方形を呈する。深さは検出面から19cmと浅いが、底面は平坦である。土壙内の北西壁と東壁は被熱の影響で赤色化しており、火を用いた何等かの遺構と考えられる。埋土は３層に区分され、２・３層は焼土塊を含む。遺物は須恵器の杯身2897がある。時期はこの遺物からみて、古・後に属する。（松本）

焼成土壙11（第800図、写真33－２）

第３微高地の北端部に位置する。平面形は方形を呈し、内部は全面にわたって熱を受け、床面には、焼土と炭が堆積している。大きさは、長さ150cm、幅125cm、深さ30cmを測る。加茂政所遺跡では、ほかにも同様の遺構が検出されている。埋土中から遺物を検出していないことから、詳細な年代は分からないが、同種のものの年代と周辺遺構の状況から、古墳時代後期に比定することができる。（正岡）

（５）土壙

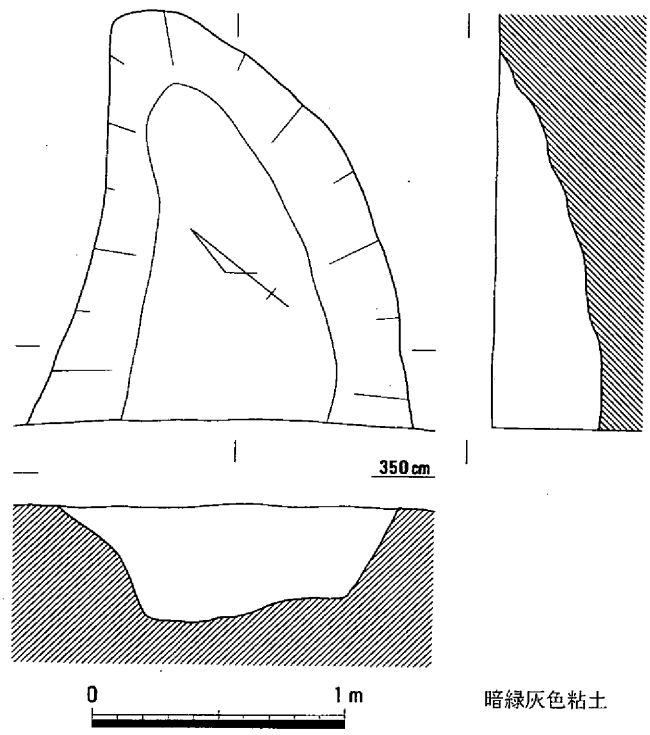
土壙317（第801図）

第１微高地のＮ22区に位置する。平面形は西側が調査区外にのびるため明確ではないが、検出できたのは約160×150cmで、深さは44cm残存していた。北東から南西に向かって徐々に深くなっており、南北の断面形は逆台形であった。

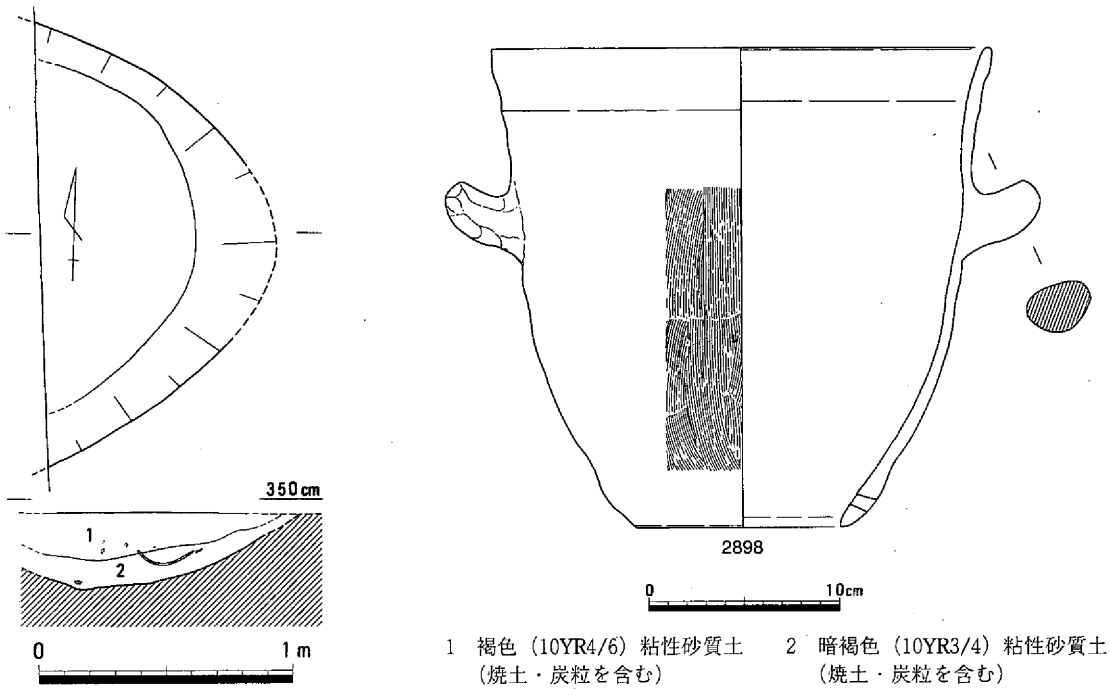
遺物は土器が少量出土しており、時期は古墳時代後期と考えている。（平井）

土壙318（第802図）

Ｎ22区の北端中央付近で溝31や中世の溝に破壊された状態で検出された。平面形は楕円形で、断面形は椀状を呈し、平坦な底面をもっていなかった。埋土は２層で、ともに炭粒や焼土塊を含んでいた。下層からは土師器の甑の大形破片が出土



第801図　土壙317（1/30）

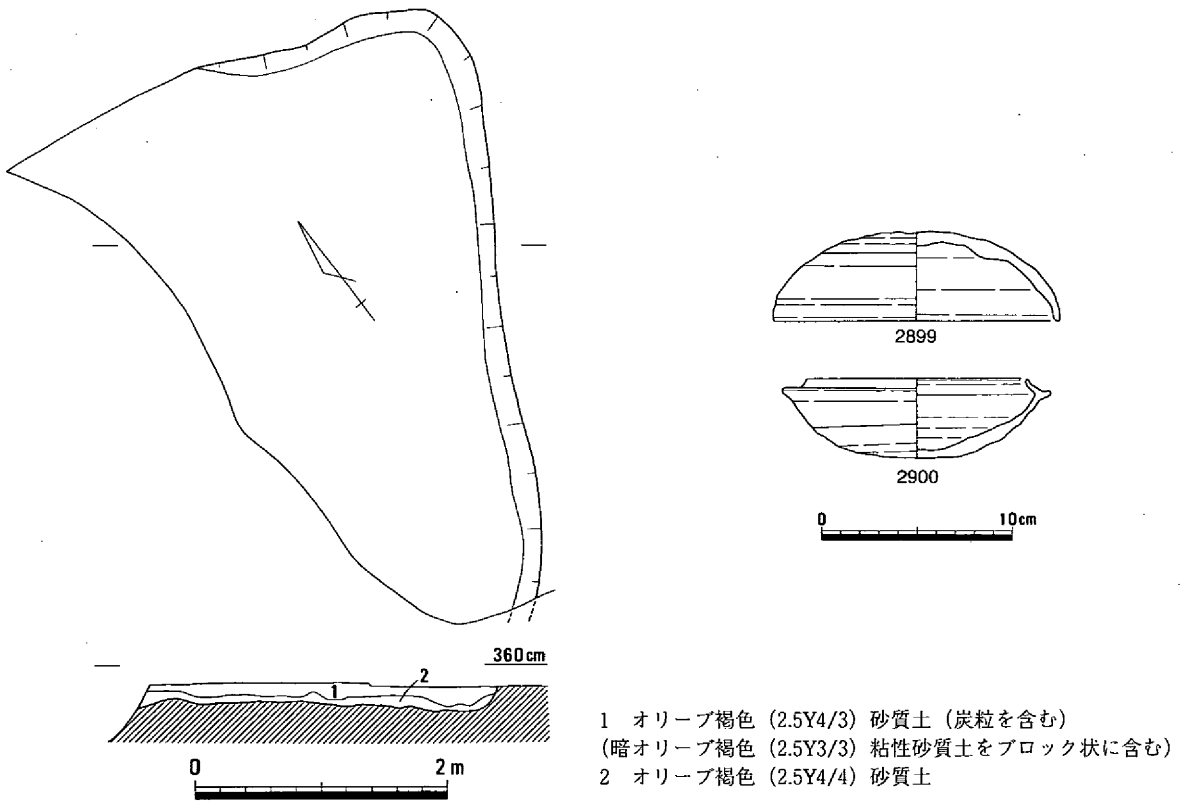


第802図　土壙318（1/30）・遺物

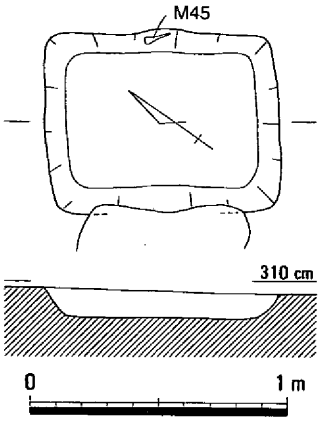
した。形態や埋土の状況、さらには出土土器から、竪穴住居のカマドの可能性が強い。　（岡本）

土壙319（第803図）

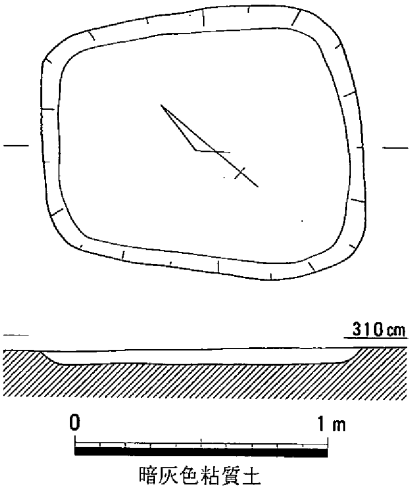
やはり後世の溝によって大きく破壊をうけていた。大形の土壙で、平面形は方形を呈するようであ



第803図　土壙319（1/60）・遺物



第804図　土壙320（1/30）・遺物



第805図　土壙321（1/30）

り、広い平坦面をもつことから、先の土壙318をカマドとしてもつ竪穴住居跡と考えられる。残存長で一辺472cmを測り、深さは20cmであった。柱穴は検出できなかった。埋土は２層で、上層には炭粒が含まれていた。2899と2900は須恵器の蓋と身で、６世紀後葉のものと考えられる。　（岡本）

土壙320（第804図）

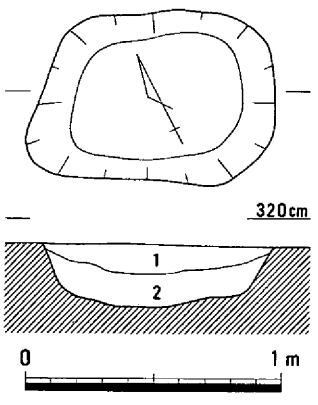
溝34の南東１ｍで検出した土壙で、N22区の北東に位置している。長さ91cm、幅72cmの方形を呈し、深さは11cmを測る。方頭形の鉄鏃M45が出土したのみで時期を知る手掛かりに乏しいが、焼成土壙に類似し、溝34と直交方向に主軸をもつことなどから、一応７世紀代に比定しておきたい。　（亀山）

土壙321（第805図）

土壙320の南東３ｍに位置し、N22区の北東で検出した土壙である。上面は隅丸方形を呈し、長さ127cm、幅108cmを測る。深さは７cmと浅く、遺物はほとんど出土していない。このため詳細な時期については明らかでないが、埋土の共通性から土壙320と近似した時期が想定される。　（亀山）

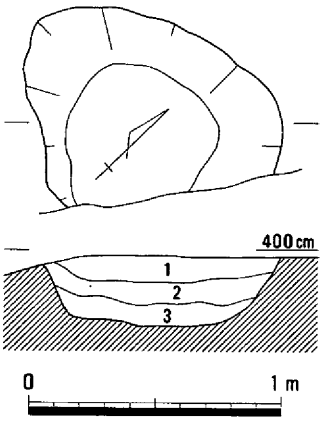
土壙322（第806図）

N22区の北東に位置する土壙で、土壙320の北４ｍで検出した。不整な方形を呈する上面は、長さ



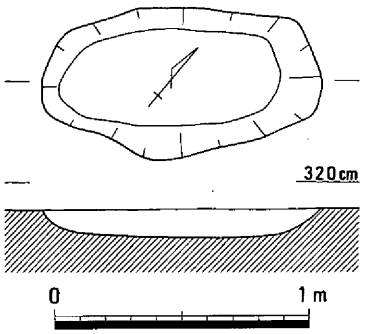
1　灰黄褐色粘質微砂
2　灰黄褐色粘質土

第806図　土壙322（1/30）

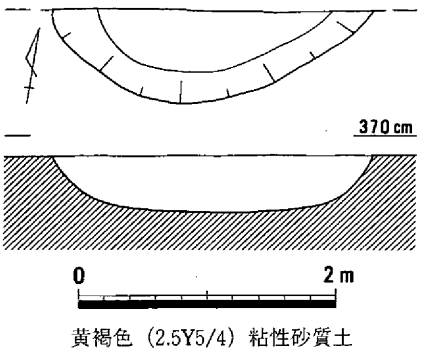


1　黄褐色粘質微砂
2　淡灰黄褐色粘質微砂
3　灰黄褐色粘質微砂

第807図　土壙323（1/30）



第808図　土壙324（1/30）



第809図　土壙325（1/60）

91cm、幅65cmを測る。深さは24cmあり、レンズ状に堆積する埋土は灰黄褐色をなす。出土遺物は少ないが、主軸を土壙320・321と同じくしており、同様な時期に属するものと考えられる。（亀山）

土壙323（第807図）

竪穴住居87の南東２ｍで検出した土壙で、Ｎ22区の北東に位置する。溝34に切られて南東部を失っているが、現状では長さ113cm、幅96cmの楕円形を呈する。深さ28cmを測り、断面は逆台形をなす。時期を知り得るような遺物はないが、６世紀後半～７世紀前半に収まるものと思われる。（亀山）

土壙324（第808図）

Ｎ22区の北東に位置する土壙で、土壙322の東9.5ｍで検出した。楕円形を呈する上面は長さ110cm、幅60cmを測り、深さは11cmと浅い。遺物はほとんど出土していないが、埋土の特徴や、主軸が溝34に平行する状況から、土壙320～323に近似した時期と見て大過ないであろう。（亀山）

土壙325（第809図）

Ｍ22区の南西隅、竪穴住居89から北東5ｍに位置していた。調査区端にあり、一部の検出にとどまったが、大形の土壙である。平面形は楕円形で、残存長径が250cm、深さは45cmを測った。底面は中央部分がやや窪み、周縁より10cmほど深かった。埋土は１層であった。（岡本）

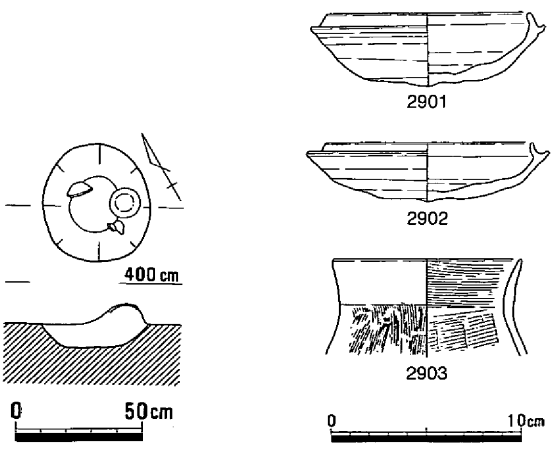
土壙326（第810図）

第２微高地のＭ24区南西端部に位置する。平面形は46×42cmの楕円形で、深さは16cm残存していた。遺物は上面から須恵器杯身や土師器甕が出土した。時期は古墳時代後期である。

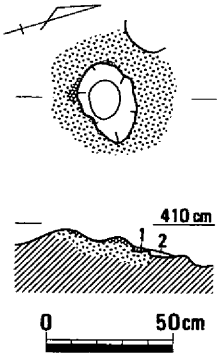
この土壙は竪穴住居98の床面除去後に検出されたが、遺物はこの竪穴住居に伴うものかもしれない。（平井）

土壙327（第811図）

竪穴住居102の北４ｍから検出された鍛冶炉状の遺構である。径30×20cmの楕円形の浅い窪みは厚さ約１cmの白燈色の焼土面を形成し、その周囲径約50cm、厚さ約５cmの範囲が被熱の影響で赤燈色に変化していた。遺物は皆無であったが周囲の状況から当項に記載した。（江見）

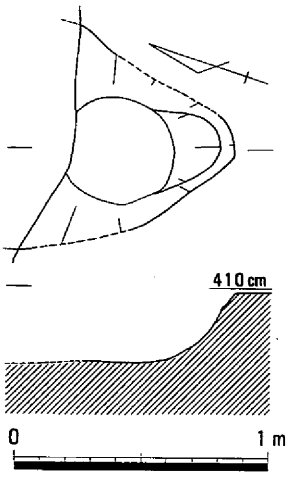


第810図　土壙326（1/30）・遺物



1　炭
2　灰色砂質土（焼土を含む、炭を多く含む）

第811図　土壙327（1/30）



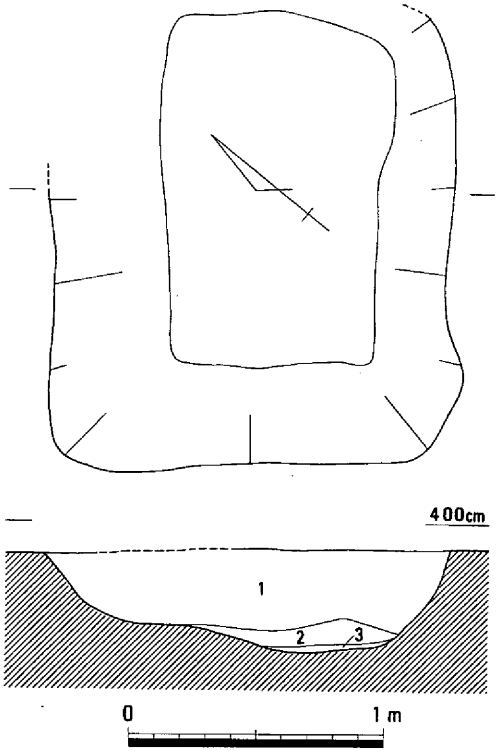
第812図　土壙328（1/30）

土壙328（第812図）

第２微高地のほぼ中央部に位置し、竪穴住居111・114・118などに囲まれた所で検出された遺構である。上部が削平されるとともに他の遺構に切られているが、規模は長径92cm、短径78cmを測り、平面形は不整楕円形を呈する。深さは28cmを測り、底面はほぼ平坦である。形態からみてカマドの可能性をもつ遺構である。遺物は須恵器細片が出土している。時期は古・後に属すると思われる。（松本）

土壙329（第813図）

竪穴住居111と切り合い関係を持つ遺構である。規模は長径183cm、短径162cmを測り、平面形は方形を呈する。深さは検出面から41cmを測り、底面には凹凸がみられる。埋土は３層に区分される。遺物は須恵器細片があるが、時期は古・後に属すると思われる。（松本）

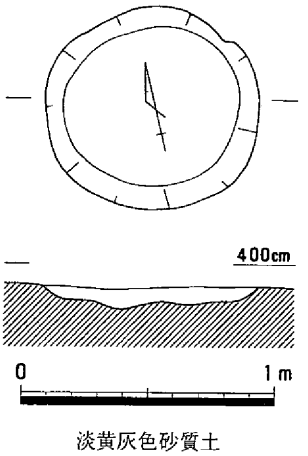


1　淡茶褐色粘質微砂
2　淡褐色粘質微砂
3　茶褐色粘質微砂

第813図　土壙329（1/30）

土壙330（第814図）

竪穴住居111の東４mほどの位置で検出された。規模は長径85cm、深さ10cmを測り、平面形は円形を呈する。底面には凹凸がある。遺物は須恵器細片があるが、時期は古・後に属する。（松本）



淡黄灰色砂質土

第814図　土壙330（1/30）

土壙331（第815図、写真102）

溝38に平行する状態で検出された。規模は長径272cm、短径83cmを測り、平面形は長楕円形を呈する。深さは検出面から21cmと浅く、底面は中央部が窪むものである。溝の可能性も想定される遺構である。埋土は２層に区分される。遺物は須恵器の横瓶2904が出土している。時期は古・後に属する。（松本）

土壙332（第816図）

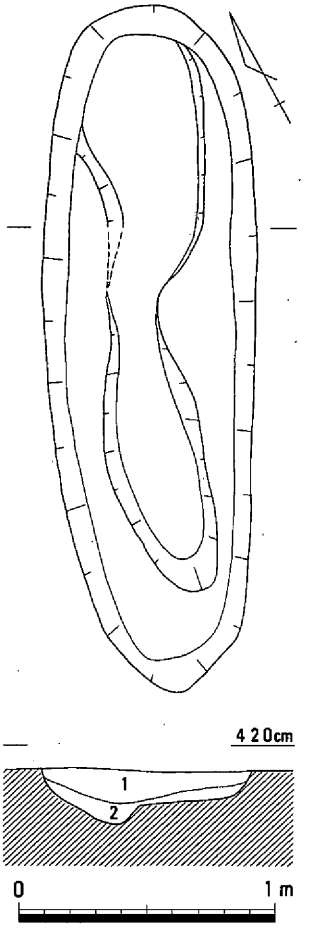
竪穴住居122の南２mほどの位置で検出された。規模は長径109cm、短径84cmを測り、平面形は不整円形を呈する。深さは検出面から32cmを測り、底面は平坦である。埋土は３層に区分される。遺物の出土はないが、検出面などからみて、時期は古・後に属するものと思われる。（松本）

土壙333（第817図、写真102）

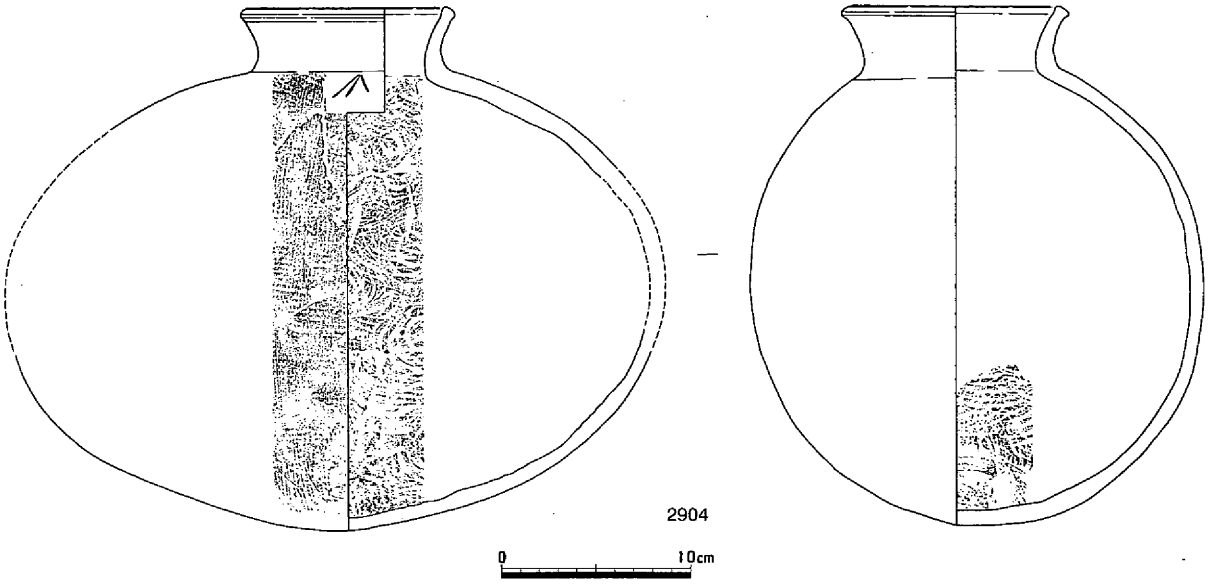
第２微高地の東端において検出された。規模は長径206cm、短径167cmを測り、平面形は方形を呈する。深さは検出面から38cmを測り、底面は平坦である。埋土は３層に区分される。遺物は須恵器の高杯2905が出土している。時期は遺物からみて、古・後に属すると思われる。（松本）

土壙334（第818図）

第３微高地の西端部に位置する。平面形は楕円形を呈し、南北方向に長い。床面は平坦になっている。大きさは、長径95cm、短径71cm、深さ17cmを測る。埋土中からは、須恵器の杯蓋2906、杯身2907、甕2908を検出した。杯身は少し古くなるが、土壙の時期



1　灰褐色粘質微砂
2　黄灰色粘質微砂



第815図　土壙331（1/30）・遺物

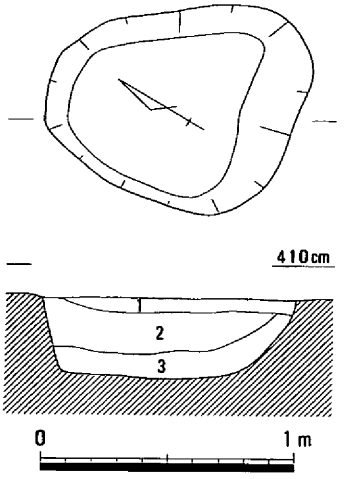
は７世紀前半に比定される。

（正岡）

土壙335（第819図）

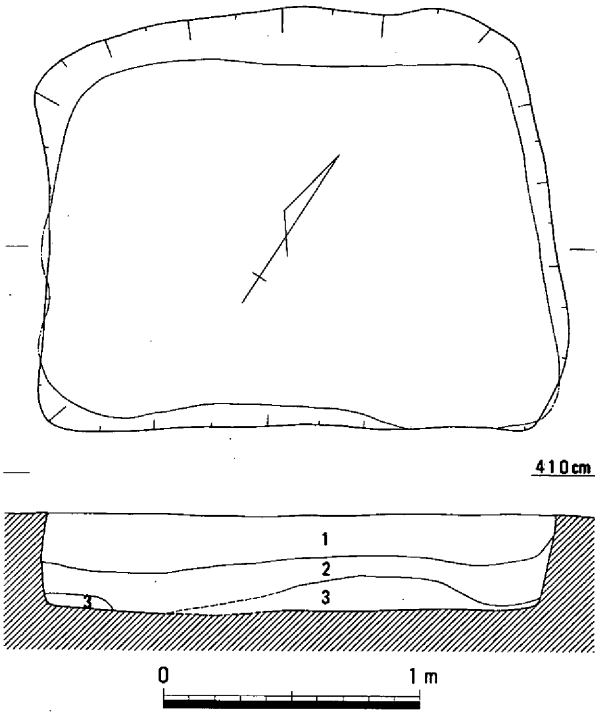
第３微高地の北端部付近に位置する。焼土の立ち上がりと焼土塊・炭などが重なっていることから、竪穴住居のカマドと想定して追求したが、形態がＵ字形にならず、焼土の間に細長いくぼみが３方向に見られた。独立した炉状遺構と考えることもできる。時期は周辺の状況から古墳時代後期に比定される。

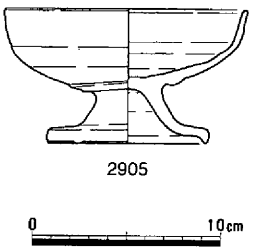
（正岡）



1　茶灰褐色粘質土　2　灰褐色粘質土　3　茶灰色粘質土

第816図　土壙332（1/30）





1　暗褐色粘質微砂
2　黒褐色粘質土
3　淡黄灰色粘質土

第817図　土壙333（1/30）・遺物

（６）溝

溝28・29

溝28はＮ21区の南東部、橋脚７調査区に、溝29はＮ21区の南東部、橋脚８調査区に位置する。いずれも南側に拡がる微高地の北斜面に、微高地に沿う形でつくられていた。

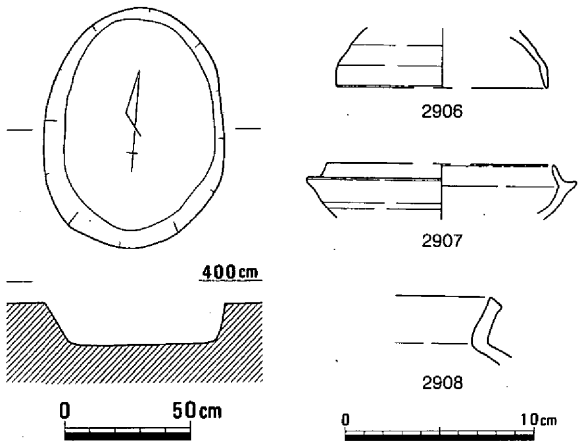
溝28は幅100～150cm、深さは20cm前後残存しており、断面形は逆台形にちかく、底面には凹凸が認められた。溝29は幅100～150cm、深さは約20cm残存しており、断面形は逆台形に近く、底面には凹凸があった。

埋土が黒褐色粘質土であることや出土した少量の土器片から、時期は古墳時代後期と考えている。

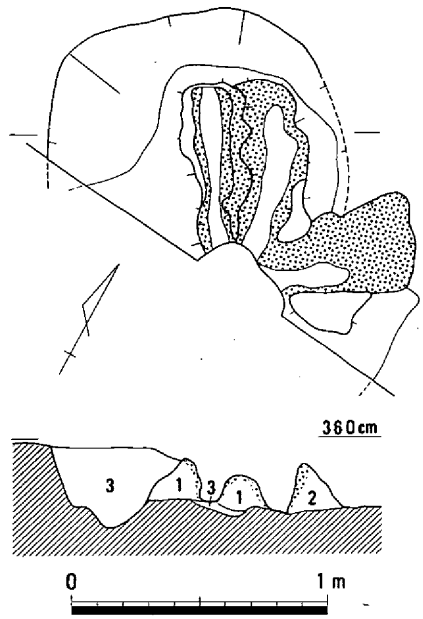
確証はないが、調査区北側の低位部につくられた水田に伴う用・排水路ではなかろうか。　（平井）

溝30（第820図、写真33－３）

第１微高地のＮ22区北西に位置する。検出幅は50cm前後、深さは約20cm、長さ約20ｍが、北西－南東方向にのびる。溝31を切ることや検出面の高さなどから、時期は古



第818図　土壙334（1/30）・遺物



1　明赤褐色微砂
2　暗赤褐色粘土混じり微砂
3　黄褐色微砂（焼土塊・炭を含む）

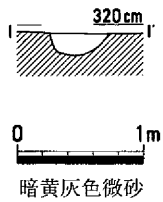
第819図　土壙335（1/30）

墳時代後期と考えている。また、鍛冶滓が少量出土している。（平井）

溝31（第821・822図、写真34－１、102）

第２微高地のＮ22区北半部に位置する。幅は約100～200cmで、深さは30～70cm残存していた。

南西隅では二股に分岐しており、橋脚９調査区の北東隅において続きと思われる落ち込みを確認している。



第820図　溝30（1/60）

また、東端部では古代に削平を被っていたため、規模が徐々に縮小し、途中で消失していた。埋土の状況は一定していなかったが、底には粘土混じりの微砂が堆積していた。

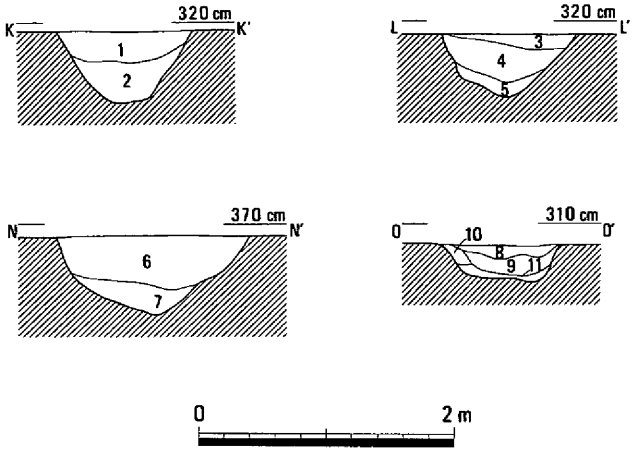
埋土中からは、須恵器・土師器の他に、鉄器や椀形鍛冶滓・ガラス質鍛冶滓、炉壁が少量出土している。

そのうち西端部に近い「Ｍ断面」の位置では、上層の北側斜面にあたかも意識的に置かれたかのように須恵器が出土したことは特筆される。器種は杯蓋と杯身で、完形に近いものはすべて内側を上に向けていた。また北端部では杯身が２個重ねられていた。

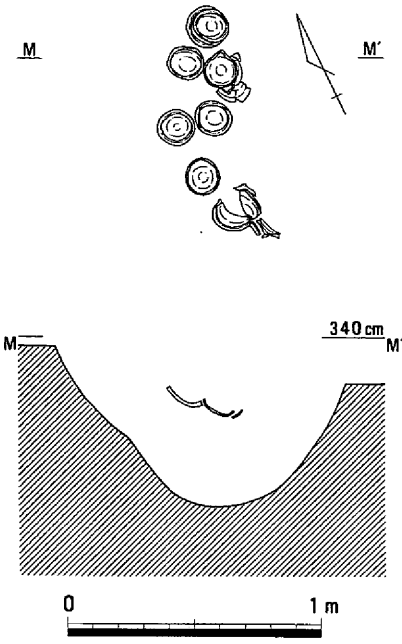
2915は甑である。2944の底部外面には、ヘラ描き沈線が施されている。Ｍ46は鏃であろうか。

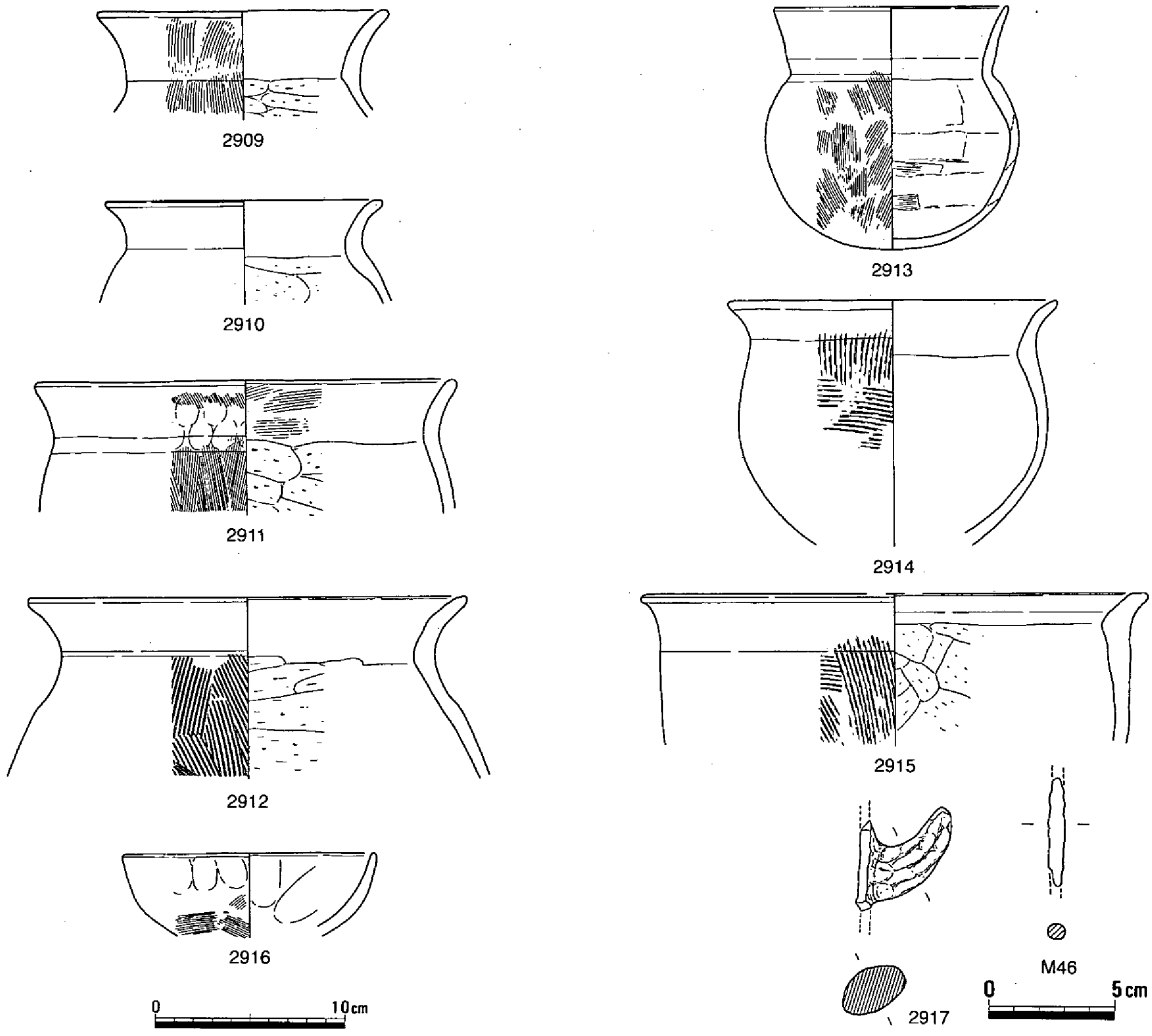
土器の時期は、周辺の竪穴住居出土土器と大きな違いはなく、竪穴住居と溝が同時併存していたと考えている。

時期は６世紀後半から７世紀前半で、集落を区画する溝かもしれない。　（平井）

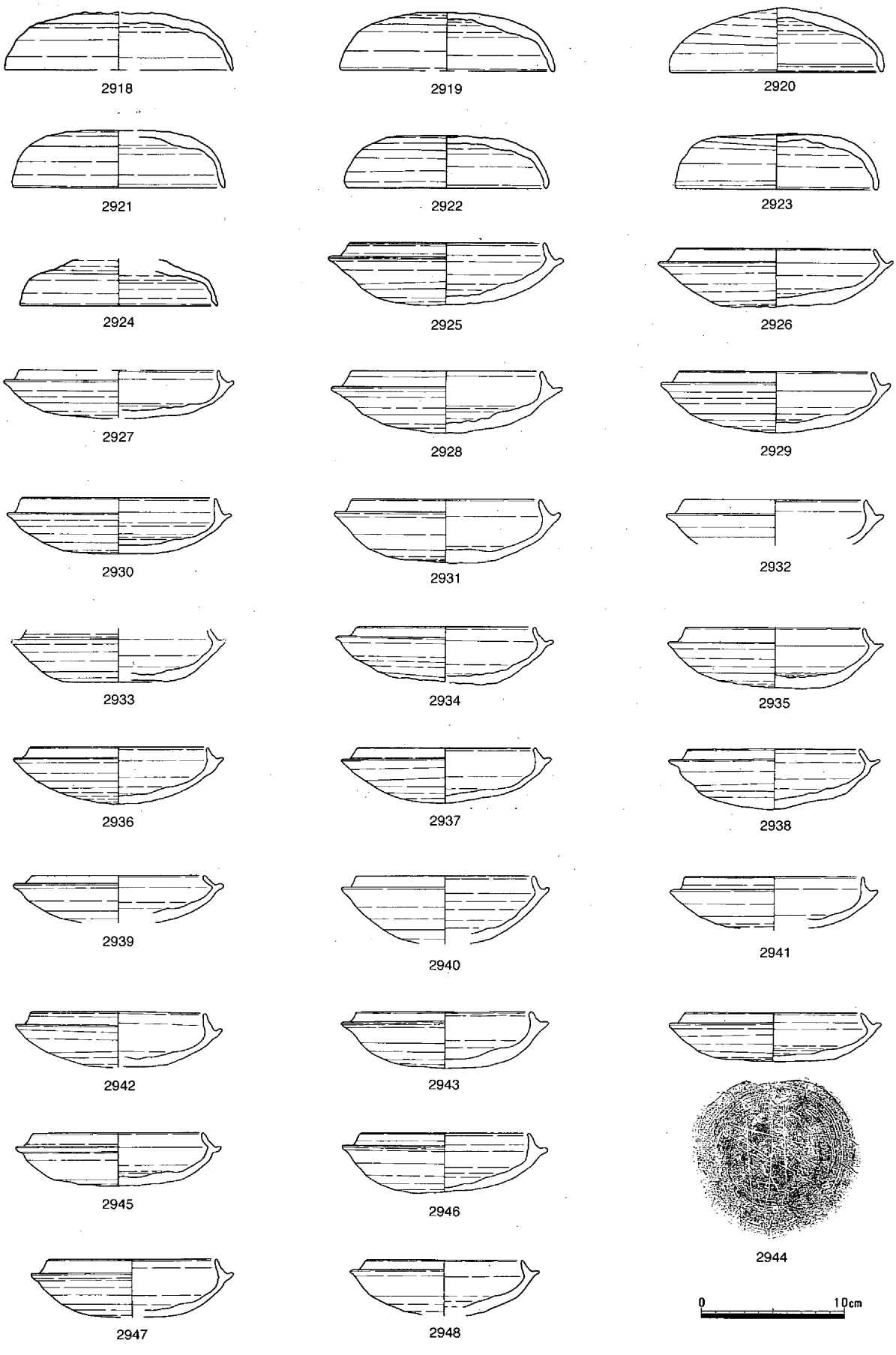


1　暗褐色粘土混じり微砂
2　淡黄緑灰色粘土混じり微砂
3　暗褐色微砂
4　褐色粘土混じり微砂
5　暗灰褐色粘土混じり微砂
6　暗緑灰色粘質土
7　黄緑灰色粘土混じり微砂
8　黒褐色砂質細砂
9　暗灰色砂質微砂
10　灰黄色砂質細砂
11　暗灰黄色砂質微砂
（黄色のブロックを含む）





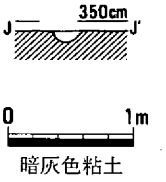
第821図　溝31（1/60・1/30）・遺物（1）



第822図　溝31　遺物（２）

溝32・33（第823図）

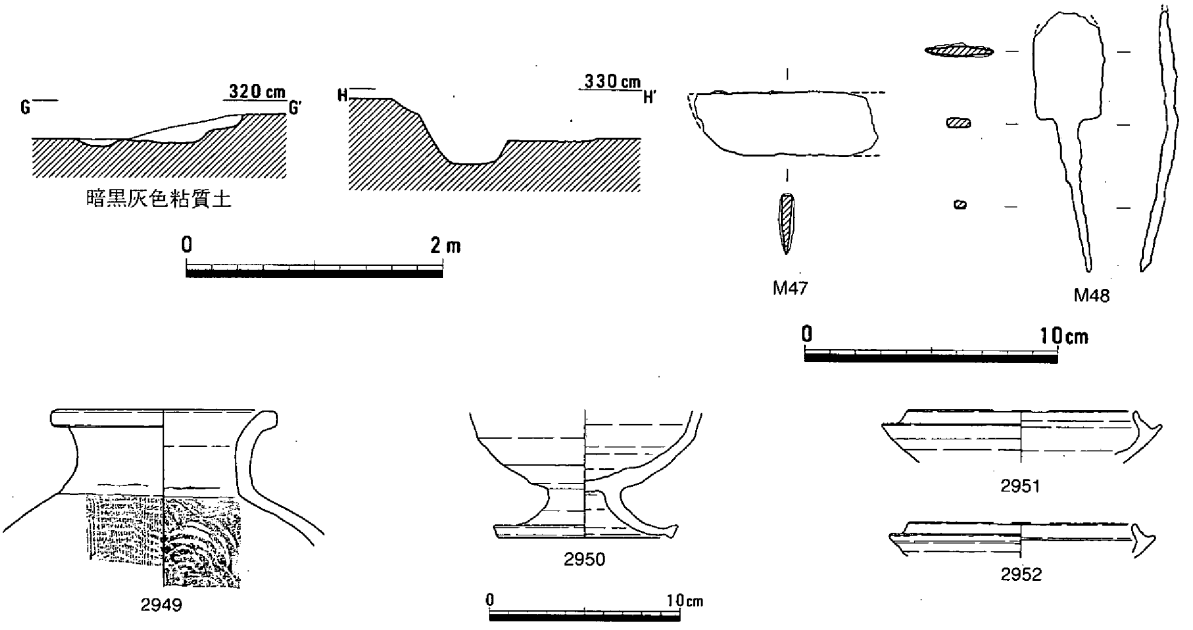
第1微高地のN22区、調査区南端部に位置する。いずれも幅20cm前後で、深さは約10cm残存していたにすぎない。溝32は竪穴住居77に切られている。埋土が暗灰色粘土であることや検出面の高さから、いずれも古墳時代後期と考えている。（平井）



第823図　溝33(1/60)

溝34（第824図、写真34－2・3）

第1微高地の東斜面部に沿って検出できた溝である。検出できた幅はほぼ50～150cmで、深さは約30cm残存していた。土器は土師器、須恵器、鉄器（M47・48）、鍛冶滓などが出土している。土器の時期は7世紀前半と考えている。水田に伴う水路ではなかろうか。（平井）



第824図　溝34（1/60）・遺物

溝35

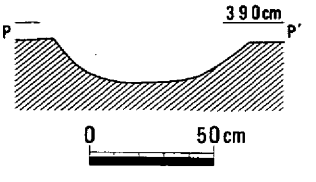
第1微高地の東斜面部に位置する。検出できた幅は50cm前後で、深さは約15cm残存していた（第293図E断面）。溝34と同じ方向であること、埋土が暗褐色粘質土であること、および検出面の高さや少量出土した土器片から、時期は古墳時代後期と考えている。（平井）

溝36

第1微高地の東斜面部に位置する。検出できた幅は約100cm、深さは約10cmであった（第293図F断面）。溝34・35と同じ方向であることや埋土、検出面から古墳時代後期と考えている。（平井）

溝37（第825図）

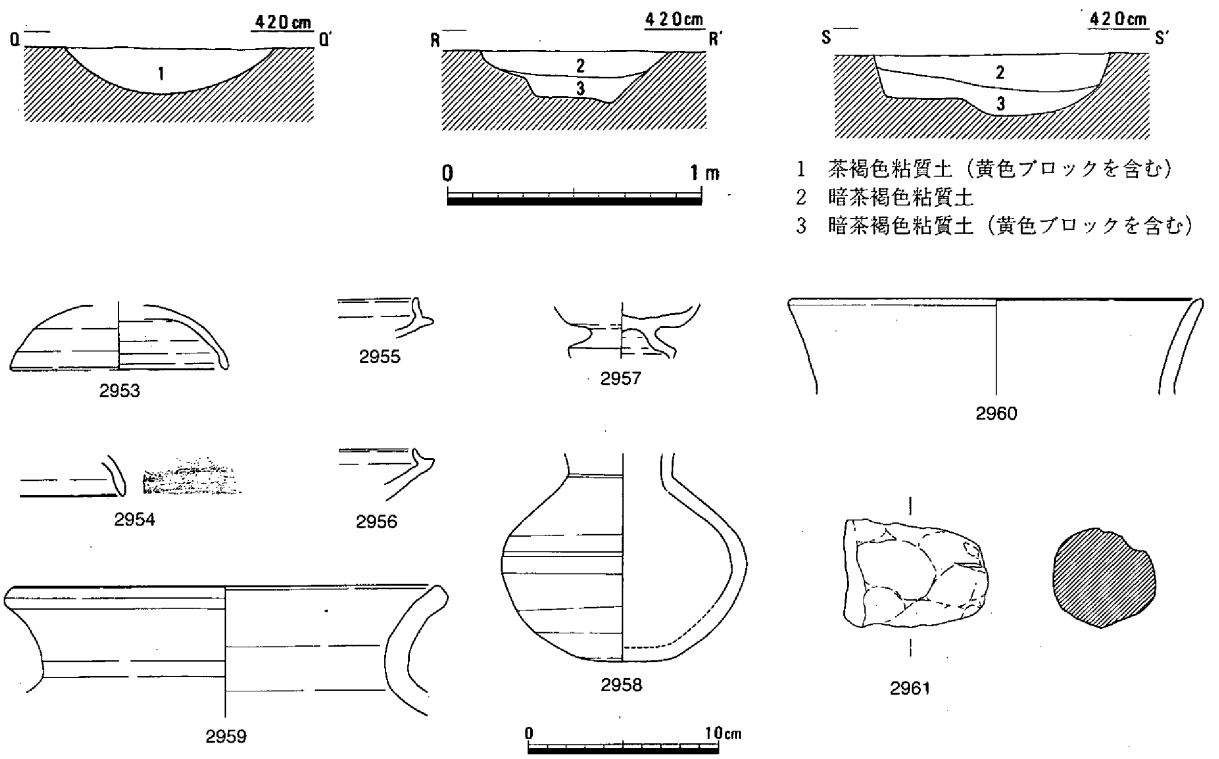
第2微高地の北西端に位置し、東西にのびる溝である。幅は約78cm、長さは720cm以上を測る。断面は浅い「U」字形を呈する。出土遺物は認められないが、古墳時代後期と思われる。（柴田）



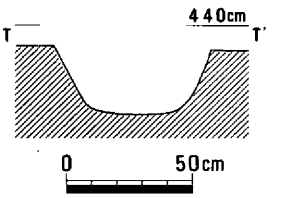
第825図　溝37（1/30）

溝38（第826図）

溝38は、第2微高地中央やや東寄りに位置する。南北に真っすぐのびる溝と、そこから西へ直角に分岐する溝からなる。幅は概ね70



第826図　溝38（1/30）・遺物



第827図　溝39（1/30）

～100cm、深さは18～25cmを測る。南北にのびる方の断面は、逆台形状で東側が１段下がっており、分岐した方は、Ⅲ状を呈している。津寺遺跡高田調査区でも同様な溝が検出されており、集落内を何らかの単位で区画する機能があったと思われる。出土遺物には、須恵器の杯蓋2953・2954、杯身2955・2956、高杯2957・2958、甕2959、土師器の甕2960、把手2961などがある。遺物などから、遺構の時期は古・後・Ⅱ～Ⅲと思われる。（柴田）

溝39（第827図）

溝39は、第２微高地中央の北端に位置する。幅は62cm、深さは25cmを測る。出土遺物は須恵器の小片が認められるだけで、詳細な時期は不明だが、古・後におさまると思われる。（柴田）

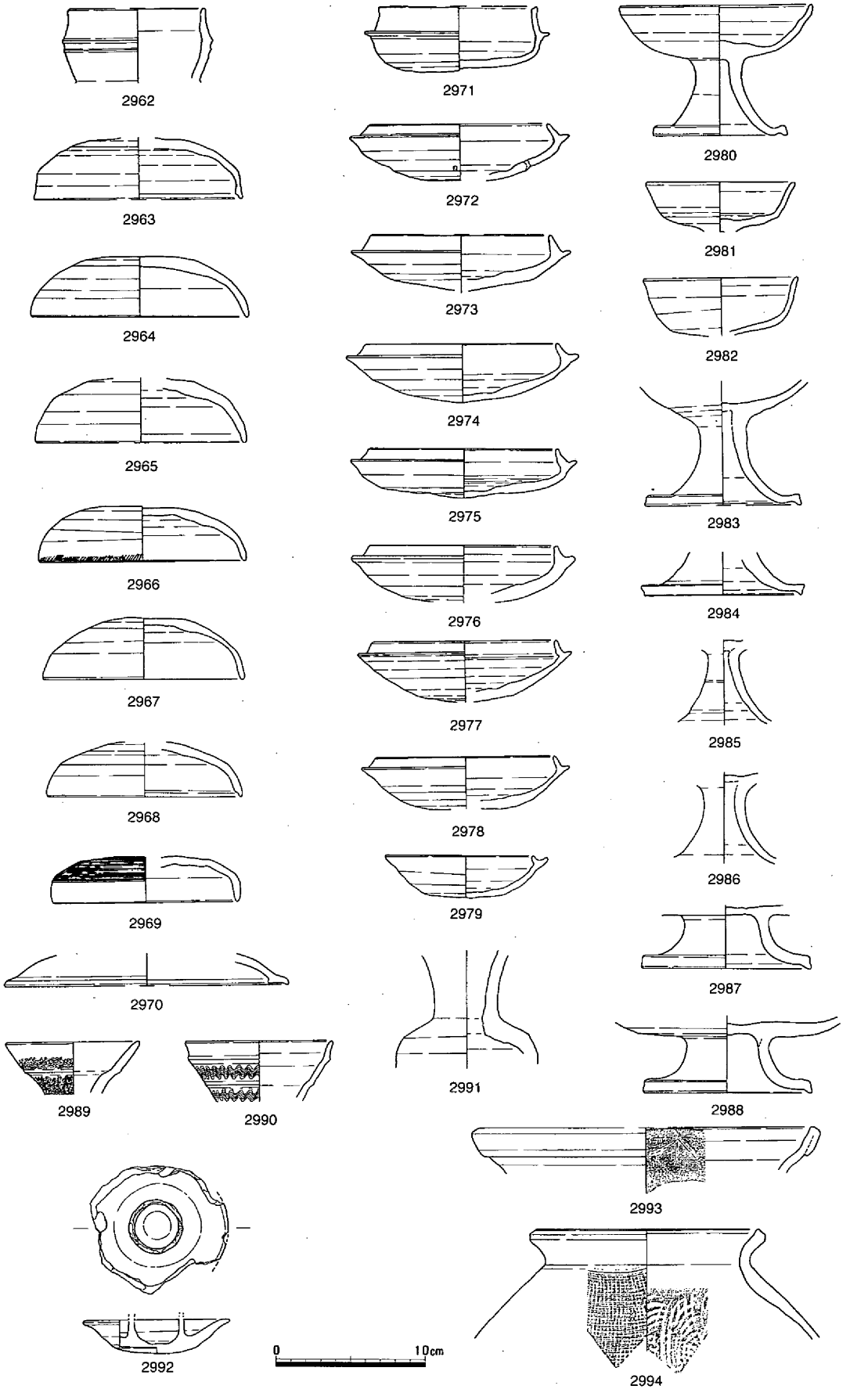
（７）その他の遺構・遺物

ここで取り上げた遺物は、遺構から遊離して出土したものの他に、調査の際に関係する遺構を特定できなかったもの、明らかに時期の異なる遺構に混じっていたと思われるものなどである。種別では、土器・瓦58点、石製品５点、金属製品４点、土製品11点を掲載している。

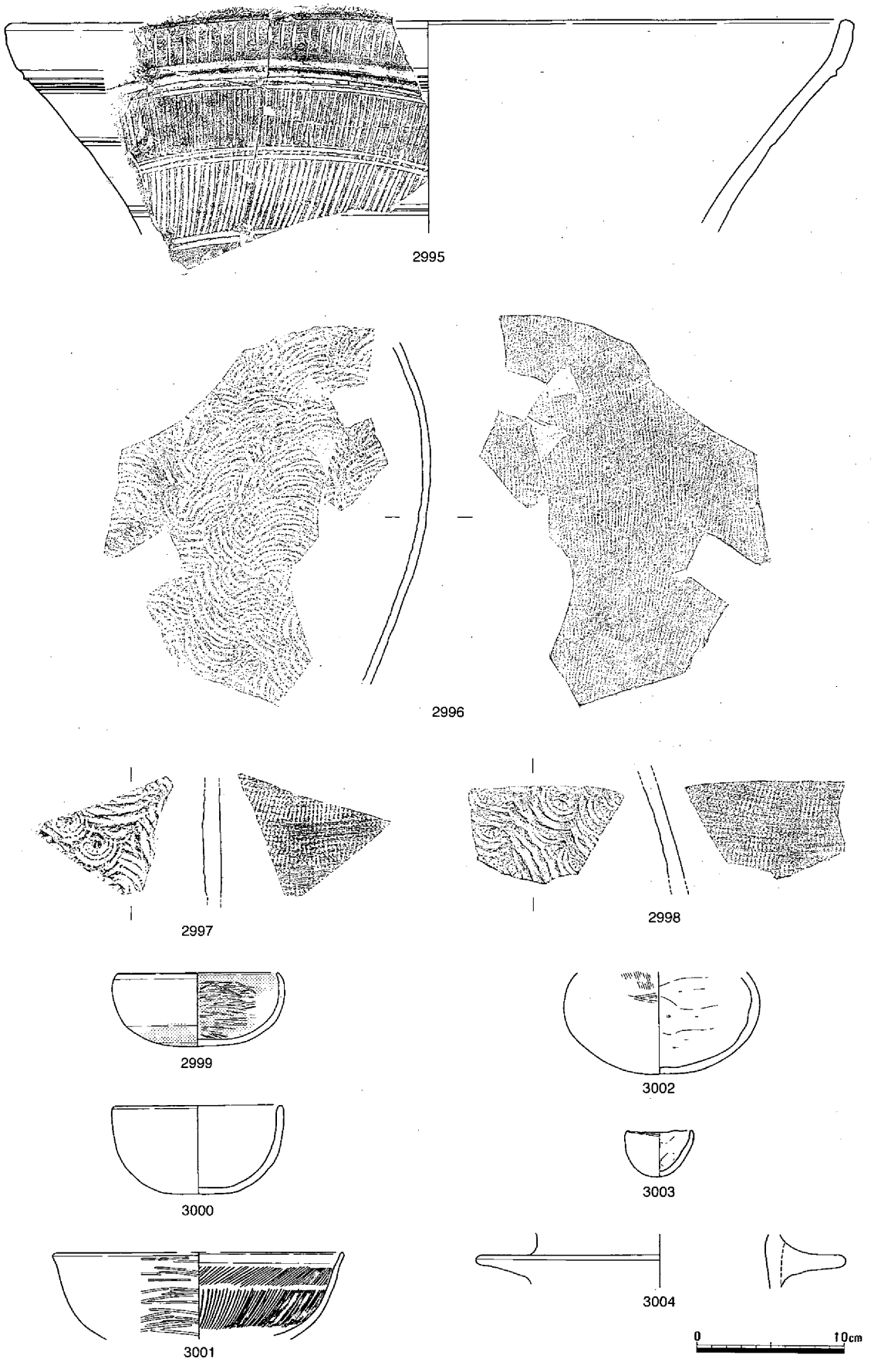
時期別に見ると、古墳時代後期のものが多く、中期のものは少ない。また、当報告書では、前方後円墳の廃絶から奈良時代までの間、つまり概ね７世紀代までを古墳後期とした。これにより、瓦や塼仏などもここで掲載している。

土器（第828～830図）

図示したものは、古墳時代後期の土器が多く、一部中期のものもある。器種については、須恵器椀



第828図　その他の遺物（1）



第829図　その他の遺物（２）

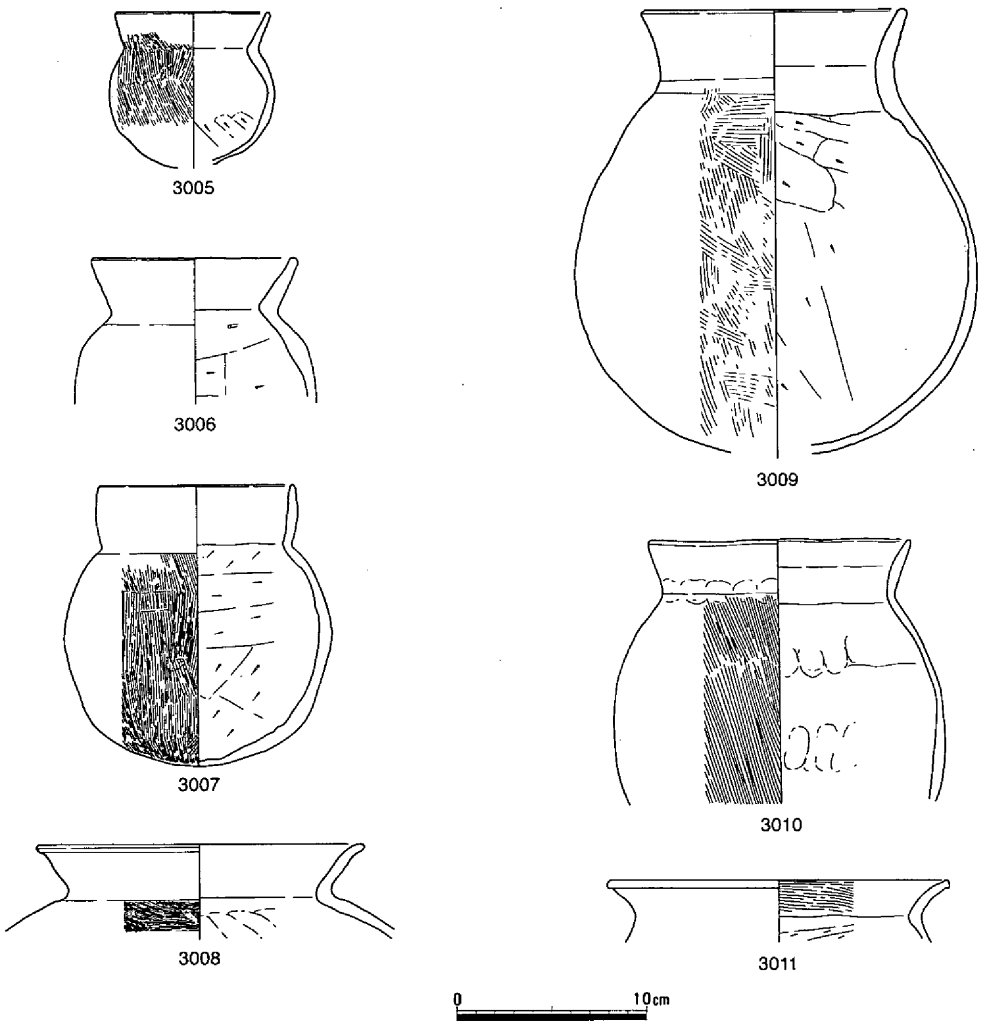
2962、杯蓋2963～2968・2970、杯身2971～2979、蓋2969、高杯2980～2988・2989～2991、燭台2992、甕2993～2998、土師器鉢2999・3000、杯3001、壺3002、羽釜3004、甕3005～3011、手捏ね土器3003がある。2962は小片で把手の有無は不明だが、色調が灰褐色で赤味を帯びており、胎土中の長石粒が目立つ。在地産のものと思われる。2972は、体部に焼成前の穿孔が１ケ所行われている。2992は杯部の内面に、内径３㎝の筒部が取り付いて上方にのびる。2999は口縁部が内湾し、底部外面と内面に赤色顔料が残存している。

瓦（第831図、写真107・108）

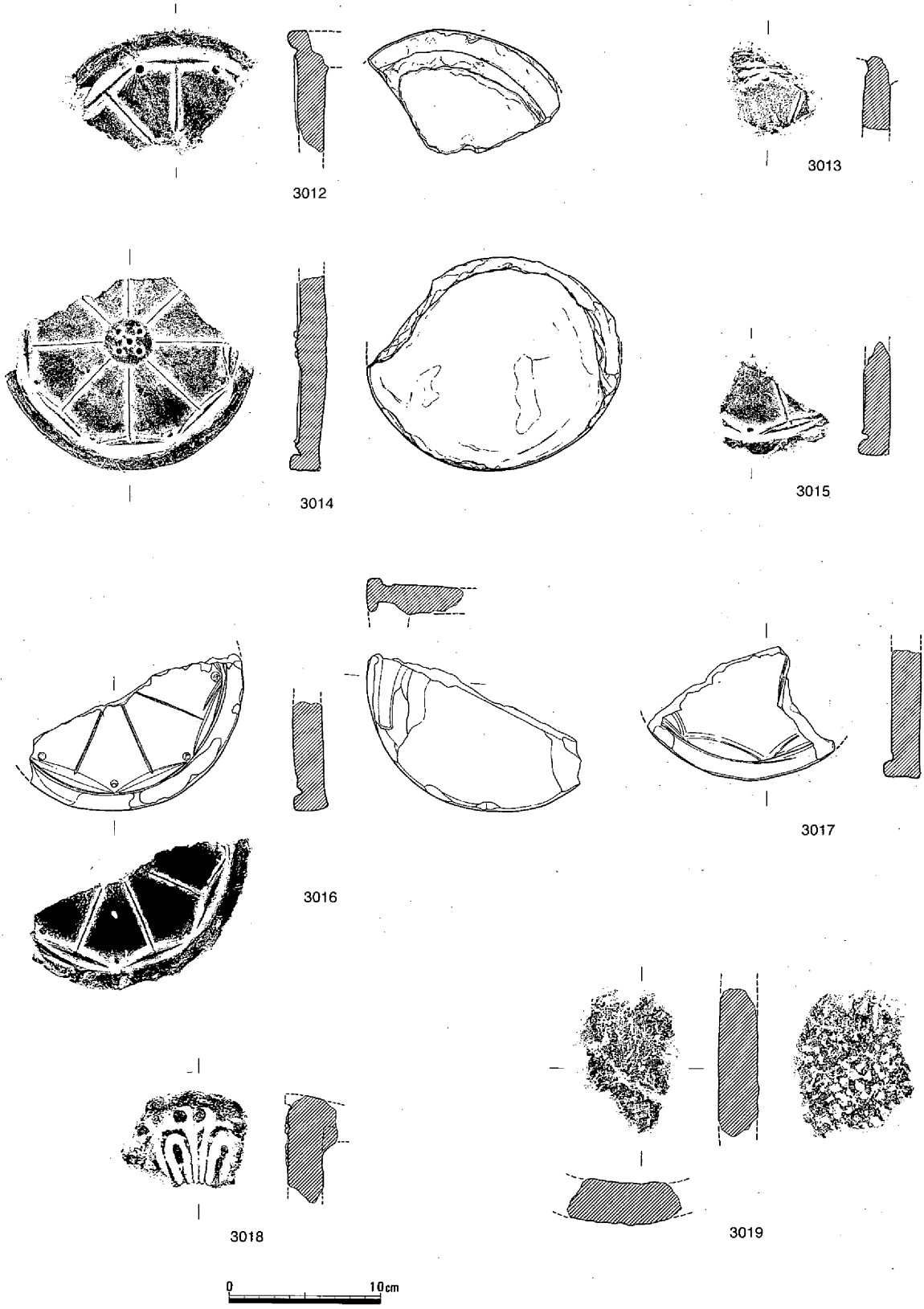
瓦については、軒丸瓦3012～3018、平瓦3019を図示している。3012～3017は角端点珠単弁八弁の軒丸瓦で、奥山久米寺と類似する。外縁はすべて直立縁で、外側は角張っているが、内側は丸味を持つ。Ｔ字形の間弁は、その交差部分が明瞭に接する。蓮弁は肉薄のものが多いが、3012は肉厚である。3017は硯に転用されており、瓦当面を使用している。3018は欠損が著しいが、複弁蓮華紋と思われ、珠文も認められる。3019は、凹面に布目がみられ、凸面は格子タタキが確認される。

石製品・金属製品・土製品（第832・833図、写真104・106）

石製品では、砥石Ｓ303～305、紡錘車Ｓ306・307を図示している。砥石は、いずれも第３微高地出土のもので、Ｓ303・305は流紋岩製、Ｓ304はアプライト製である。紡錘車は、両者とも滑石製で、



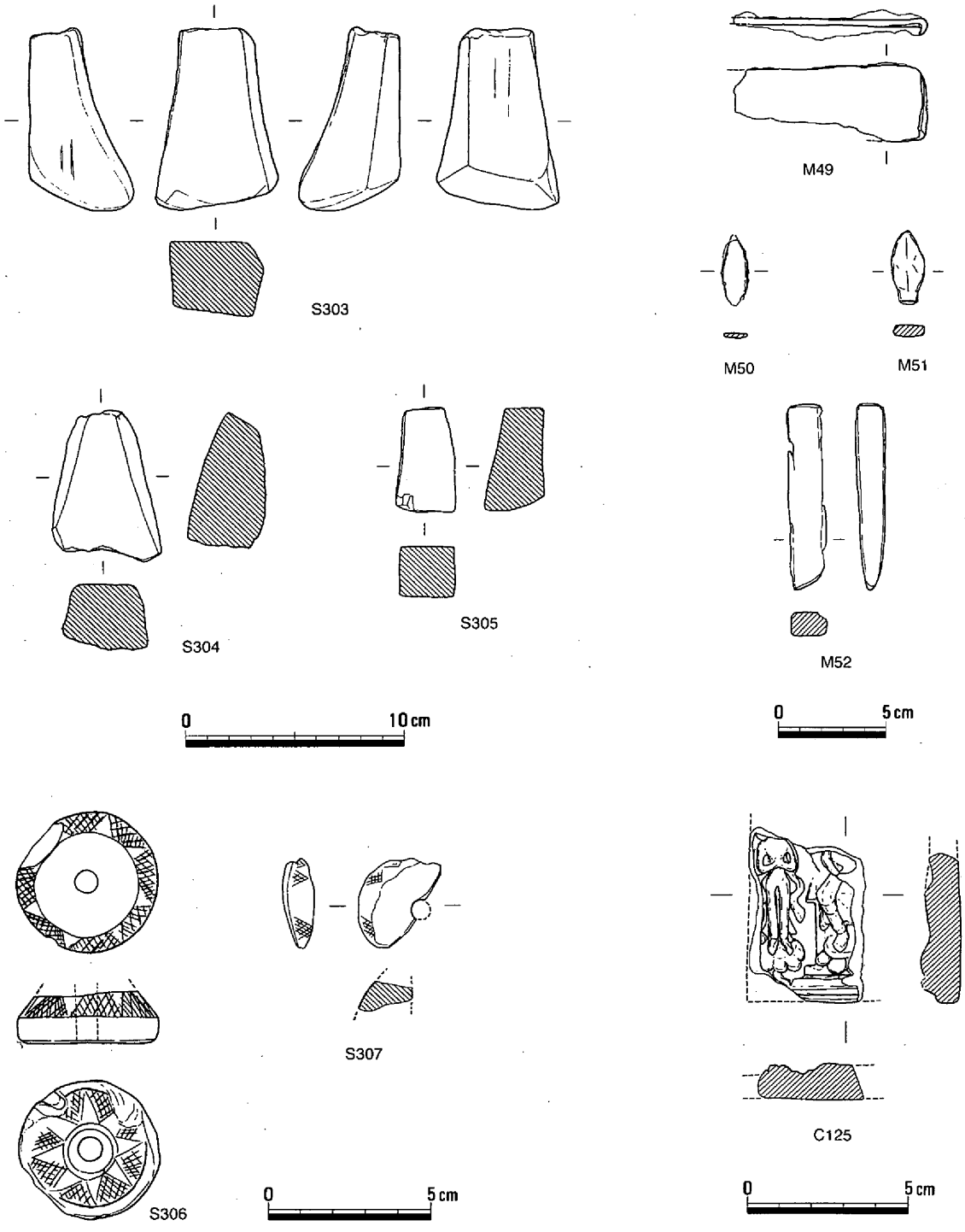
第830図　その他の遺物（３）



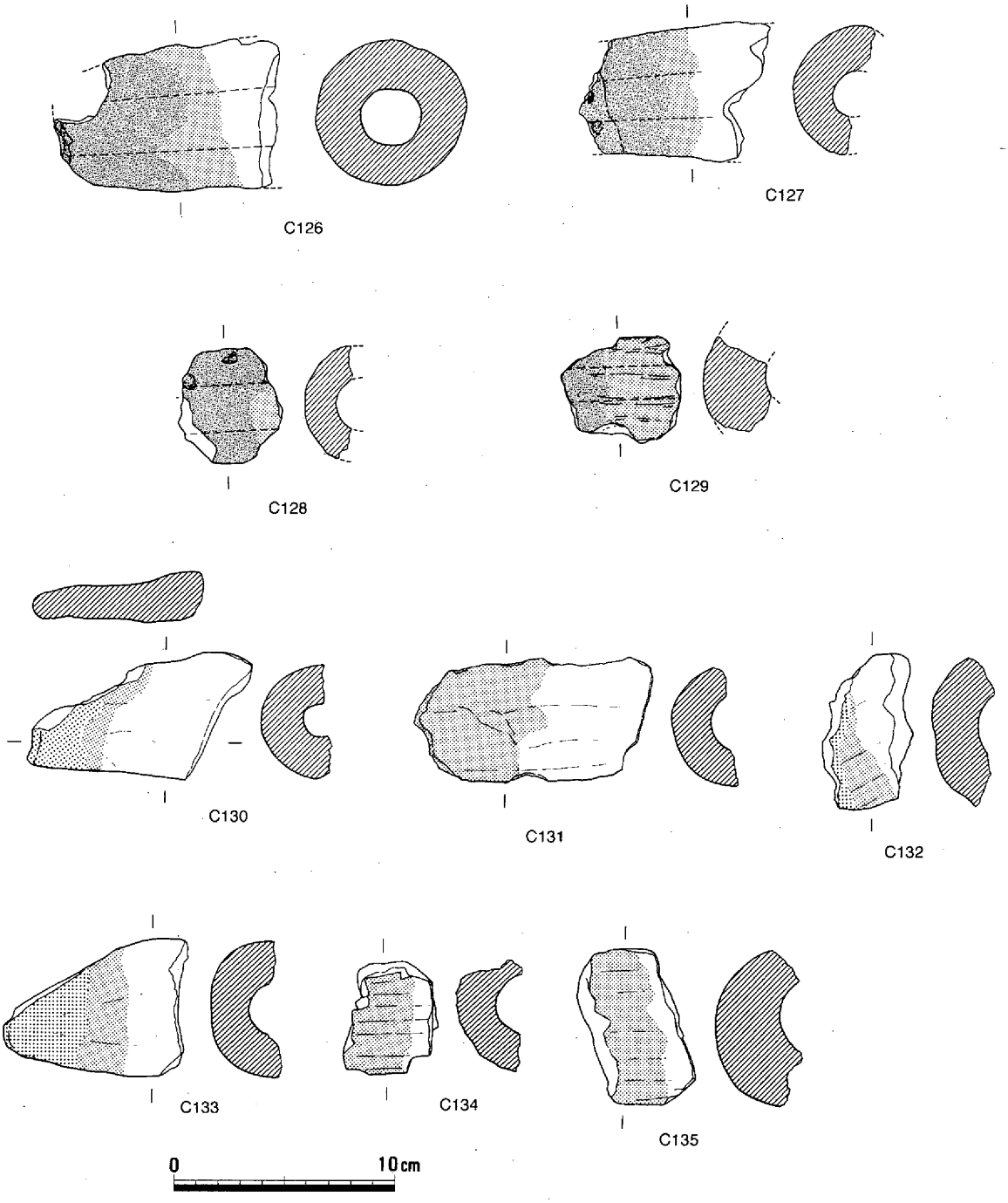
第831図　その他の遺物（４）

断面は台形を呈すると思われる。S306は上半部が欠損しているが、斜面部と下面に鋸歯紋が施されている。S307も小破片であるが、鋸歯紋が認められる。

金属製品では、鎌M49、鉄鏃M50・51、鑿M52を図示している。M49は曲刃鎌と思われ、柄の装着部は刃部に対し直角である。M50・51は長頸柳葉式鉄鏃の鏃身部と思われる。M52は、下端が薄くなって刃部になると思われ、身の部分の横断面は17×14㎜の長方形を呈する。



第832図　その他の遺物（5）



第833図　その他の遺物（６）

土製品では、塼仏Ｃ125、羽口Ｃ126～135を図示している。Ｃ125は、火頭形三尊塼仏の破片と推定され、河道に廃棄された瓦溜りから出土した。中尊は右手の一部と右足しか残存していないが、後屏のある台座に倚座しており、蓮台を踏んでいる。この右には、天衣を翻し、胸のあたりで合掌する脇侍菩薩が立っている。土師質で、胎土は微小な雲母片を含むが、精良である。そのためか周縁の形状が、本来のものか磨耗によるものかの判断は困難である。裏面はナデが認められ、これが剥離面となる可能性も考えられるが、当初からタイル状であった可能性が高く、異例と言える。また、表面には漆と思われる黒褐色の付着物が部分的に認められ、金箔を貼っていたものと推測される。Ｃ130～135は、第３微高地の土壙335の周辺から出土しており、その遺構の性格を考える上で注意される。（柴田）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 138

加茂政所遺跡
高松原古才遺跡
立田遺跡

山陽自動車道
建設に伴う発掘調査
17
（第1分冊）

1999年3月5日　印刷
1999年3月12日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
　　岡山市西花尻1325－3
発　行　岡山県教育委員会
　　岡山市内山下2－4－6
印　刷　富士印刷株式会社

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告138

加茂政所遺跡
高松原古才遺跡
立田遺跡

山陽自動車道
建設に伴う発掘調査

17

（第2分冊）

1999

日本道路公団中国支社津山工事事務所

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 138

加茂政所遺跡
高松原古才遺跡
立田遺跡

山陽自動車道
建設に伴う発掘調査

17

（第2分冊）

1999

日本道路公団中国支社津山工事事務所

岡山県教育委員会

目　　次

－第２分冊－

1　加茂政所遺跡

第１章　調査の概要 …… 25

第１～５節　（第１分冊）……25～576

第６節　古代・中世の遺構・遺物 …… 577

(1)　概要 …… 577

(2)　掘立柱建物 …… 590

(3)　井戸 …… 599

(4)　土壙 …… 605

(5)　土壙墓 …… 657

(6)　火葬墓 …… 660

(7)　柱穴列 …… 663

(8)　柱穴 …… 665

(9)　土器溜り …… 668

(10)　溝 …… 669

(11)　道路状遺構 …… 684

(12)　畑 …… 689

(13)　低位部 …… 692

(14)　河道 …… 695

(15)　その他の遺構・遺物 …… 740

第７節　近世の遺構・遺物 …… 764

(1)　概要 …… 764

(2)　掘立柱建物 …… 764

(3)　井戸 …… 764

(4)　土壙 …… 764

(5)　柱穴列 …… 769

(6)　溝 …… 769

(7)　水田 …… 774

(8)　河道 …… 774

(9)　その他の遺構・遺物 …… 774

第２章　加茂政所遺跡のまとめ …… 777

第１節　遺跡の変遷 …… 777

第２節　弥生時代の集落…… 782
第３節　弥生時代中期前葉～中葉の土器…… 786
第４節　顔のある分銅形土製品…… 792
第５節　弥生時代後期の銅釧…… 794
第６節　飛鳥様式の瓦と古墳時代後期の集落…… 797
第７節　火頭形三尊塼仏…… 801
第８節　火葬墓…… 804
第９節　「加茂政所廃寺」…… 806
第10節　「梵鐘鋳造遺構」と関連遺物 …… 813
第11節　平安時代の土師器…… 818
第12節　平安時代中期の瓦…… 825
遺構一覧表・遺物観察表・遺構名称新旧対照表
写真

－第１分冊－

第１章　調査の概要 …… 25
第１節　遺跡の概要 …… 25
第２節　弥生時代前期～中期の遺構・遺物 …… 26
（１）　概要…… 26
（２）　竪穴住居…… 26
（３）　掘立柱建物…… 45
（４）　袋状土壙…… 45
（５）　土壙…… 63
（６）　土壙墓…… 176
（７）　土器棺墓…… 178
（８）　柱穴…… 179
（９）　溝…… 181
(10)　水田…… 185
(11)　低位部…… 187
(12)　その他の遺構・遺物…… 188
第３節　弥生時代後期の遺構・遺物 …… 209
（１）　概要…… 209
（２）　竪穴住居…… 209
（３）　袋状土壙…… 286
（４）　土壙…… 333
（５）　土壙墓…… 385

(6)　土器棺墓…… 386
(7)　柱穴…… 397
(8)　土器溜り…… 399
(9)　溝…… 400
(10)　水田…… 416
(11)　その他の遺構・遺物…… 417
第4節　古墳時代前期の遺構・遺物 …… 428
(1)　概要…… 428
(2)　竪穴住居…… 428
(3)　土壙…… 462
(4)　柱穴…… 463
(5)　溝…… 463
(6)　水田…… 482
(7)　その他の遺構・遺物…… 483
第5節　古墳時代中期～後期の遺構・遺物 …… 485
(1)　概要…… 485
(2)　竪穴住居…… 485
(3)　掘立柱建物…… 553
(4)　焼成土壙…… 553
(5)　土壙…… 558
(6)　溝…… 564
(7)　その他の遺構・遺物…… 569

図　目　次

第8～833図（第一分冊）
第834図　掘立柱建物4(1/60)……577
第835図　掘立柱建物5・6(1/60)……578
第836図　古代遺構全体図(1)(1/400) …579～580
第837図　古代遺構全体図(2)(1/400) …581～582
第838図　中世遺構全体図(1)(1/400) …583～584
第839図　中世遺構全体図(2)
(掲載遺構のみ)(1/400) ……585～586
第840図　第2微高地東半　古代・中世遺構全体図(1/400)……587～588
第841図　古代主要遺構全体図(1/2,000) …589
第842図　中世主要遺構全体図(1/2,000) …589
第843図　掘立柱建物5・6(1/60)……590
第844図　掘立柱建物5・6遺物 ……591
第845図　掘立柱建物7(1/60)……591
第846図　掘立柱建物8(1/60)……592
第847図　掘立柱建物9(1/60)……593
第848図　掘立柱建物10(1/60)……594
第849図　掘立柱建物10遺物 ……594
第850図　掘立柱建物11(1/60)……595
第851図　掘立柱建物12(1/60)……596
第852図　掘立柱建物13(1/60)……596
第853図　掘立柱建物14(1/60)……597
第854図　掘立柱建物15・16(1/60)……598
第855図　掘立柱建物17(1/60)……599
第856図　井戸1(1/60)・遺物……599
第857図　井戸2(1/30)・遺物(1) ……600
第858図　井戸2遺物(2)……601

第859図　井戸３(1/30)……602
第860図　井戸３遺物(１)……603
第861図　井戸３遺物(２)……604
第862図　井戸４(1/60)・遺物……605
第863図　井戸５(1/30)・遺物(１)……606
第864図　井戸５遺物(２)……607
第865図　井戸５遺物(３)……608
第866図　土壙336(1/30)・遺物……609
第867図　土壙337(1/30)・遺物……610
第868図　土壙338(1/30)……610
第869図　土壙339(1/30)・遺物(１)……611
第870図　土壙339遺物(２)……611
第871図　土壙340(1/30)・遺物……612
第872図　土壙341(1/30)……612
第873図　土壙342(1/30)……612
第874図　土壙343(1/30)……612
第875図　土壙344(1/30)……612
第876図　土壙345(1/30)……613
第877図　土壙346(1/30)・遺物……613
第878図　土壙347(1/30)……613
第879図　土壙348(1/30)……613
第880図　土壙349(1/30)……614
第881図　土壙350(1/30)・遺物……614
第882図　土壙351(1/30)……614
第883図　土壙352(1/60)……614
第884図　土壙353(1/30)……615
第885図　土壙354(1/30)……615
第886図　土壙355(1/30)……615
第887図　土壙356(1/80)・遺物……616
第888図　土壙357(1/60)・遺物……616
第889図　土壙358(1/30)……616
第890図　土壙359(1/30)・遺物……617
第891図　土壙360(1/30)……618
第892図　土壙361(1/30)・遺物……618
第893図　土壙362(1/30)……618
第894図　土壙363(1/30)……619
第895図　土壙364(1/30)・遺物……619
第896図　土壙365(1/30)……619
第897図　土壙366(1/30)……620
第898図　土壙367(1/30)・遺物……620
第899図　土壙368(1/30)・遺物……621
第900図　土壙369(1/30)・遺物……622
第901図　土壙370(1/30)……622
第902図　土壙371(1/30)……622
第903図　土壙372(1/60)・遺物……623
第904図　土壙373(1/30)……623
第905図　土壙374(1/30)……623
第906図　土壙375(1/60)・遺物(１)……624
第907図　土壙375遺物(２)……625
第908図　土壙375遺物(３)……626
第909図　土壙375遺物(４)……627
第910図　土壙375遺物(５)……628
第911図　土壙375遺物(６)……629
第912図　土壙376(1/60)・遺物……630
第913図　土壙377(1/30)……631
第914図　土壙378(1/60)・遺物……631
第915図　土壙379(1/30)……632
第916図　土壙380(1/30)……632
第917図　土壙381(1/30)・遺物……632
第918図　土壙382(1/30)……632
第919図　土壙383(1/60)……633
第920図　土壙384(1/30)・遺物……633
第921図　土壙385(1/30)……634
第922図　土壙386(1/60)・遺物……634
第923図　土壙387(1/30)・遺物……635
第924図　土壙388(1/60)……635
第925図　土壙388遺物(１)……636
第926図　土壙388遺物(２)……637
第927図　土壙389(1/60)……638
第928図　土壙389遺物(１)……639
第929図　土壙389遺物(２)……640
第930図　土壙389遺物(３)……641
第931図　土壙390(1/30)・遺物……641
第932図　土壙391(1/30)・遺物(１)……642
第933図　土壙391遺物(２)……643
第934図　土壙392(1/20)・遺物……644
第935図　土壙393(1/30)……645
第936図　土壙394(1/60)……645
第937図　土壙395(1/60)・遺物……645
第938図　土壙396(1/30)……646
第939図　土壙397(1/30)……646
第940図　土壙398(1/60)・遺物(１)……646
第941図　土壙398遺物(２)……647
第942図　土壙399(1/60)・遺物……648
第943図　土壙400(1/30)……648
第944図　土壙401(1/30)……649
第945図　土壙402(1/30)……649
第946図　土壙403(1/30)……649
第947図　土壙404(1/30)……649
第948図　土壙405(1/30)……649

第949図　土壙406(1/60) ……650
第950図　土壙407(1/60) ……650
第951図　土壙408(1/30) ……650
第952図　土壙409(1/30) ……651
第953図　土壙410(1/30) ……651
第954図　土壙411(1/30) ……651
第955図　土壙412(1/30) ……651
第956図　土壙413(1/30) ……652
第957図　土壙414(1/60)・遺物 ……652
第958図　土壙415(1/60)・遺物 ……653
第959図　土壙416(1/60)・遺物 ……654
第960図　土壙417(1/30) ……654
第961図　土壙418(1/30) ……654
第962図　土壙419(1/30)・遺物 ……655
第963図　土壙420(1/30)・遺物 ……656
第964図　土壙421(1/30)・遺物 ……656
第965図　土壙422(1/30)・遺物 ……657
第966図　土壙423(1/30) ……657
第967図　土壙424(1/30)・遺物 ……657
第968図　土壙墓６(1/30)・遺物……658
第969図　土壙墓７(1/30)・遺物……658
第970図　土壙墓８(1/30)・遺物……659
第971図　土壙墓９(1/30)……659
第972図　土壙墓10(1/30)……659
第973図　土壙墓11(1/30)……659
第974図　土壙墓12(1/30)……660
第975図　土壙墓13(1/30)・遺物……660
第976図　火葬墓１(1/10)・遺物(１)……661
第977図　火葬墓１遺物(２)……662
第978図　火葬墓２(1/10)・遺物(１)……662
第979図　火葬墓２遺物(２)……663
第980図　柱穴列１(1/100) ……663
第981図　柱穴列２・３・４・５(1/80)……664
第982図　柱穴列２～５遺物 ……665
第983図　柱穴列６(1/120) ……665
第984図　柱穴遺物(１)……665
第985図　柱穴遺物(２)……666
第986図　柱穴遺物(３)……667
第987図　土器溜り３遺物 ……668
第988図　溝42(1/60)……669
第989図　溝43遺物 ……669
第990図　溝44遺物 ……670
第991図　溝45(1/60)……670
第992図　溝46・47(1/30)……670
第993図　溝48(1/30)……670
第994図　溝49(1/30)・遺物……670
第995図　溝50・51(1/30)……671
第996図　溝50・51遺物(１)……672
第997図　溝50・51遺物(２)……673
第998図　溝50・51遺物(３)……674
第999図　溝52(1/30)……674
第1000図　溝52遺物 ……675
第1001図　溝53(1/30)……675
第1002図　溝53遺物 ……676
第1003図　溝54(1/30)……677
第1004図　溝55(1/30)……677
第1005図　溝56(1/30)……677
第1006図　溝57遺物 ……677
第1007図　溝59遺物 ……677
第1008図　溝61～67(1/60)……677
第1009図　溝69遺物 ……678
第1010図　溝70遺物 ……678
第1011図　溝71(1/60)・遺物……678
第1012図　溝72(1/60)・遺物……678
第1013図　溝73(1/60)・遺物……679
第1014図　溝74・75(1/60)・遺物……679
第1015図　溝76(1/60)……679
第1016図　溝77・78(1/60)……680
第1017図　溝79(1/30)……680
第1018図　溝81・82(1/30)……680
第1019図　溝87～88(1/60)・遺物……680
第1020図　溝89～94遺物 ……680
第1021図　溝95～97(1/30)・遺物……681
第1022図　溝98・99(1/30)……681
第1023図　溝98・99遺物(１)……682
第1024図　溝98・99遺物(２)……683
第1025図　溝100(1/30)・遺物(１) ……684
第1026図　溝100遺物(２) ……685
第1027図　溝101(1/30)・遺物(１) ……685
第1028図　溝101遺物(２) ……686
第1029図　溝102(1/30)・遺物(１) ……687
第1030図　溝102遺物(２) ……688
第1031図　溝102遺物(３) ……689
第1032図　道路状遺構１(1/80)……689
第1033図　畑(1/500) ……690
第1034図　畑断面(1/60)……691
第1035図　畑遺物(１)……692
第1036図　畑遺物(２)……692
第1037図　低位部２遺物 ……693
第1038図　低位部３断面(1/60)……693

第1039図　低位部３遺物 ……693
第1040図　低位部４遺物 ……694
第1041図　河道断面(１)(1/60) ……695
第1042図　河道断面(２)(1/60) ……696
第1043図　河道遺物(１) ……697
第1044図　河道遺物(２) ……698
第1045図　河道遺物(３) ……699
第1046図　河道遺物(４) ……700
第1047図　河道遺物(５) ……701
第1048図　河道遺物(６) ……702
第1049図　河道遺物(７) ……703
第1050図　河道遺物(８) ……704
第1051図　河道遺物(９) ……705
第1052図　河道遺物(10) ……706
第1053図　河道遺物(11) ……707
第1054図　河道遺物(12) ……708
第1055図　河道遺物(13) ……709
第1056図　河道遺物(14) ……710
第1057図　河道遺物(15) ……711
第1058図　河道遺物(16) ……712
第1059図　河道遺物(17) ……713
第1060図　河道遺物(18) ……714
第1061図　河道遺物(19) ……715
第1062図　河道遺物(20) ……716
第1063図　河道遺物(21) ……717
第1064図　河道遺物(22) ……718
第1065図　河道遺物(23) ……719
第1066図　河道遺物(24) ……720
第1067図　河道遺物(25) ……721
第1068図　河道遺物(26) ……722
第1069図　河道遺物(27) ……723
第1070図　河道遺物(28) ……724
第1071図　河道遺物(29) ……725
第1072図　河道遺物(30) ……726
第1073図　河道遺物(31) ……727
第1074図　河道遺物(32) ……728
第1075図　河道遺物(33) ……729
第1076図　河道遺物(34) ……730
第1077図　河道遺物(35) ……731
第1078図　河道遺物(36) ……732
第1079図　河道遺物(37) ……733
第1080図　河道遺物(38) ……734
第1081図　河道遺物(39) ……735
第1082図　河道遺物(40) ……736
第1083図　河道遺物(41) ……737
第1084図　河道遺物(42) ……738
第1085図　河道遺物(43) ……739
第1086図　河道遺物(44) ……740
第1087図　河道遺物(45) ……741
第1088図　河道遺物(46) ……742
第1089図　河道遺物(47) ……743
第1090図　その他の遺物(１) ……744
第1091図　その他の遺物(２) ……745
第1092図　その他の遺物(３) ……746
第1093図　その他の遺物(４) ……747
第1094図　その他の遺物(５) ……748
第1095図　その他の遺物(６) ……749
第1096図　その他の遺物(７) ……750
第1097図　その他の遺物(８) ……751
第1098図　その他の遺物(９) ……752
第1099図　その他の遺物(10) ……753
第1100図　その他の遺物(11) ……754
第1101図　その他の遺物(12) ……755
第1102図　その他の遺物(13) ……756
第1103図　その他の遺物(14) ……757
第1104図　その他の遺物(15) ……758
第1105図　その他の遺物(16) ……759
第1106図　その他の遺物(17) ……760
第1107図　その他の遺物(18) ……761
第1108図　その他の遺物(19) ……762
第1109図　その他の遺物(20) ……763
第1110図　近世遺構全体図(１)(1/400) …765～766
第1111図　近世遺構全体図(２)(1/400) …767～768
第1112図　近世主要遺構全体図(1/2,000) …769
第1113図　掘立柱建物18(1/60)・遺物 ……770
第1114図　井戸６(1/30)・遺物 ……771
第1115図　土壙425(1/30) ……772
第1116図　土壙426(1/30) ……772
第1117図　柱穴列７(1/120) ……772
第1118図　溝103(1/60)・遺物 ……772
第1119図　溝104(1/60) ……773
第1120図　溝105(1/60) ……773
第1121図　溝106・107(1/60)・遺物 ……773
第1122図　溝108(1/60) ……773
第1123図　溝109(1/60) ……773
第1124図　溝110(1/30) ……773
第1125図　河道遺物 ……775
第1126図　その他の遺物 ……775
第1127図　第２微高地東部　弥生時代中期主要遺構(1/600) ……782

第1128図　第２微高地東部　弥・後・Ⅰ～Ⅲ主要遺構(1/600) ……783
第1129図　弥生時代中期の甕(1/10)……787
第1130図　弥生時代中期の甕・壺・高杯・台付鉢(1/10)……789
第1131図　飛鳥様式の軒丸瓦の出土地点　…797
第1132図　加茂政所遺跡出土須恵器の分類(1/6) ……798
第1133図　火頭形塼仏略図 ……801
第1134図　「加茂政所廃寺」関連遺構(1/600) …807
第1135図　丸瓦類型別の布目糸数による破片数割合 ……809
第1136図　平瓦類型別の布目糸数による破片数割合 ……810
第1137図　「竜頭」・「撞座」の推定復元図 …814
第1138図　杯Ａの法量分布 ……819
第1139図　杯Ｃの法量分布 ……819
第1140図　９世紀から11世紀の土師器編年案(1/6) ……822
第1141図　宝相華紋軒丸瓦・均整唐草紋軒平瓦の分類(1/6) ……826
第1142図　陰刻唐草紋軒平瓦の分類(1/6) …828

表　目　次

第４表　竪穴住居１軒に対する掘立柱建物と袋状土壙（方形土壙）の数量比…… 785

写　真　目　次

写真１　1　砂場調査区作業風景(南東から)
2　竪穴住居２(東から)
3　竪穴住居６(東から)
写真２　1　竪穴住居11(北西から)
2　竪穴住居12(北から)
3　掘立柱建物１(北から)
写真３　1　袋状土壙５埋土断面(東から)
2　袋状土壙６(北西から)
3　土壙１遺物出土状況(南東から)
写真４　1　土壙５貝出土状況(西から)
2　土壙16貝層断面(北から)
3　土壙64貝出土状況(北西から)
写真５　1　土壙75遺物出土状況(南から)
2　土壙76貝層断面(北西から)
3　土壙88埋土断面(南東から)
写真６　1　土壙102埋土断面(南西から)
2　土壙墓１(北から)
3　土壙墓４人骨出土状況(北西から)
写真７　1　竪穴住居15(北西から)
2　竪穴住居16(北東から)
3　竪穴住居24(西から)
写真８　1　竪穴住居27遺物出土状況(南から)
2　竪穴住居27(南から)
3　竪穴住居28(北西から)
写真９　1　竪穴住居29断面(南東から)
2　竪穴住居35(南から)
3　竪穴住居35銅鏃出土状況
写真10　1　竪穴住居36調査風景(南西から)
2　竪穴住居36遺物出土状況(北から)
3　竪穴住居40炭化材出土状況(北から)
写真11　1　竪穴住居43(北西から)
2　竪穴住居44(北西から)
3　竪穴住居44銅釧出土状況(北西から)
写真12　1　竪穴住居46(南東から)
2　竪穴住居47(南東から)
3　袋状土壙24埋土断面(南西から)
写真13　1　袋状土壙26(南東から)
2　袋状土壙28遺物出土状況(東から)
3　袋状土壙29(南から)
写真14　1　袋状土壙40(北西から)
2　袋状土壙52埋土断面(西から)
3　袋状土壙61埋土断面(北西から)

写真15 1 土壙216(南から)
2 土壙224遺物出土状況(東から)
3 土壙239遺物出土状況(西から)
写真16 1 土壙254遺物出土状況(北東から)
2 土壙262埋土断面(南から)
3 土壙264遺物出土状況(北から)
写真17 1 土壙310遺物出土状況(西から)
2 土壙310(北から)
3 土壙310銅釧出土状況(東から)
写真18 1 土壙墓5(北から)
2 土器棺墓2～12(南から)
3 土器棺墓3～6・8～12(南から)
写真19 1 土器棺墓2(北西から)
2 土器棺墓3(北東から)
3 土器棺墓5(北から)
写真20 1 土器棺墓6(南東から)
2 土器棺墓8(東から)
3 土器棺墓5(左)・11(右)(東から)
写真21 1 土器溜り2遺物出土状況
(南東から)
2 溝15埋土断面(南東から)
3 溝9・10、水田4(東から)
写真22 1 水田4島状高まり(西から)
2 水田3～断面(北西から)
3 水田3～断面(南西から)
写真23 1 竪穴住居57(南東から)
2 竪穴住居59(北西から)
3 竪穴住居64(北から)
写真24 1 竪穴住居67遺物出土状況
(南西から)
2 竪穴住居68断面(南西から)
3 竪穴住居69(南から)
写真25 1 土壙314(南西から)
2 溝19(南から)
3 溝24・25断面(南東から)
写真26 1 竪穴住居78～81(南西から)
2 竪穴住居78(南から)
3 竪穴住居81(南西から)
写真27 1 竪穴住居87遺物出土状況
(南西から)
2 竪穴住居87(南西から)
3 竪穴住居94(西から)
写真28 1 竪穴住居98(北西から)
2 竪穴住居98馬歯出土状況(西から)
3 竪穴住居106埋土断面(南から)
写真29 1 竪穴住居113(南から)
2 竪穴住居113カマド内土器(南から)
3 竪穴住居113カマド(南から)
写真30 1 竪穴住居121(南から)
2 竪穴住居121カマド燃焼部(南から)
3 竪穴住居121カマド(南から)
写真31 1 竪穴住居130(南東から)
2 竪穴住居133(南東から)
3 掘立柱建物2(北西から)
写真32 1 掘立柱建物3(北から)
2 焼成土壙2(南東から)
3 焼成土壙6(南東から)
写真33 1 焼成土壙8(南西から)
2 焼成土壙11(南から)
3 溝30(北東から)
写真34 1 溝31(北東から)
2 溝34(南東から)
3 溝34断面(南西から)
写真35 1 掘立柱建物4(南から)
2 掘立柱建物8(北東から)
3 掘立柱建物9(南東から)
写真36 1 掘立柱建物10(北西から)
2 掘立柱建物11(北から)
3 掘立柱建物12(南東から)
写真37 1 井戸3断面(南から)
2 井戸5(北西から)
3 土壙339(北から)
写真38 1 土壙375調査風景(南から)
2 土壙375埋土断面(北東から)
3 土壙375(北から)
写真39 1 土壙384断面(東から)
2 土壙388(下)・389(上)(南西から)
3 土壙424遺物出土状況(西から)
写真40 1 土壙墓7(南から)
2 土壙墓8(西から)
3 土壙墓9(東から)
写真41 1 土壙墓10(北東から)
2 土壙墓12(南から)
3 土壙墓13(北東から)
写真42 1 火葬墓1(西から)
2 火葬墓1骨片・銅銭出土状況
(南西から)
3 火葬墓2(北から)
写真43 1 溝43(北から)
2 溝69・70(西から)

3　溝78(南東から)
写真44　1　溝96断面(南東から)
2　溝101(南東から)
3　溝101断面(南から)
写真45　1　溝102ｕ－ｕ’断面(南から)
2　溝102ｖ－ｖ’断面(南東から)
3　道路状遺構１(北から)
写真46　1　道路状遺構１(北東から)
2　畑１下層(南から)
3　畑１上層(南から)
写真47　1　掘立柱建物18(西から)
2　掘立柱建物18Ｐ２石臼出土状況(北から)
3　溝103断面(北東から)
写真48　1　溝104(北東から)
2　水田６(南東から)
3　山陽道開通後の加茂政所遺跡(南西から)
写真49　竪穴住居６(24・27・Ｓ４・Ｓ５・Ｓ７～９・Ｓ13・Ｃ１・Ｃ３・Ｃ４)
竪穴住居７(48・Ｃ６・Ｃ７・Ｇ１)
写真50　袋状土壙４(80・86・87・88)
袋状土壙５(89)
袋状土壙６(Ｃ12)
袋状土壙９(Ｓ23)
写真51　袋状土壙10
写真52　袋状土壙11(146・147)
袋状土壙16(168・171)
土壙17(237・248)
写真53　土壙19(254)
土壙20(264)
土壙22(271・274・275)
写真54　土壙33(288・290・292～294)
土壙35(295・296)
写真55　土壙47(311)
土壙54(316～318・320)
写真56　土壙60(335)
土壙61(338)
土壙76(367)
土壙88(394・407・409)
写真57　土壙96(419)
土壙102(446)
土壙123(Ｃ25)
土壙130(471・472)
土壙166(Ｃ27)
土壙169(Ｓ51)
写真58　土壙173
写真59　土壙176(Ｓ53)
土壙177(Ｓ54)
土壙178(619・620)
土壙186(Ｓ55・Ｓ56)
土壙196(658)
土壙200(664)
写真60　低位部１(715・716)
その他(803・804・813・814)
写真61　竪穴住居13
写真62　竪穴住居27(１)
写真63　竪穴住居27(２)
写真64　竪穴住居27(３)
写真65　竪穴住居27(４)
写真66　竪穴住居27(５)
写真67　竪穴住居30(1133)
竪穴住居32(1134)
竪穴住居35(1145・1150・1166・1167・1171・Ｍ６)
写真68　竪穴住居36(1172・1177・1185・1186・1190・Ｓ211・Ｓ217・Ｃ70・Ｃ71)
竪穴住居38(Ｇ３)
写真69　竪穴住居41(1214・1216・1221・1223・1225・1226)
竪穴住居42(1229・Ｍ７)
写真70　竪穴住居44
写真71　竪穴住居46(1264・1272・Ｓ234・Ｓ235・Ｃ81)
竪穴住居47(1281・1285・1300・1303・Ｓ239・Ｇ４)
写真72　袋状土壙22(1322)
袋状土壙28(１)(1353・1354・1359・1420)
写真73　袋状土壙28(２)(1356・1360・1363)
袋状土壙31(1425・1426・1434)
写真74　袋状土壙36
写真75　袋状土壙37
写真76　袋状土壙42(Ｓ255・Ｓ256・Ｓ257)
袋状土壙47(1531・1536・Ｃ89)
袋状土壙70(1620・1621・1624)
写真77　土壙223(1640・1642・1647・1655)
土壙224(1659・1661・1663)
写真78　土壙239
写真79　土壙262

写真80　土壙310(1)
写真81　土壙310(2)(1850・1854・1855・M12)
　　土壙312(1)(1874・1875)
写真82　土壙312(2)
写真83　土器棺墓3(1900・1901)
　　土器棺墓5(1903・1904)
写真84　土器棺墓8(1910・1911)
　　土器棺墓11(1914・1915)
写真85　溝15(1)
写真86　溝15(2)
写真87　溝15(3)
写真88　溝15(4)(2115・2120・2123～2126・2132・2136・2137・2139・2144・M13)
　　溝17(C96)
写真89　竪穴住居59(2340・2342)
　　竪穴住居60(2345・2347・2351～2353・M18)
　　竪穴住居63(2354)
写真90　竪穴住居66
写真91　竪穴住居67(1)
写真92　竪穴住居67(2)
写真93　竪穴住居68(2476)
　　竪穴住居69(2481・2484)
　　竪穴住居70(2486・2489)
　　柱穴16(2502)
　　溝24(2520)
　　溝25(1)(2528・2533)
写真94　溝25(2)
写真95　溝25(3)
写真96　溝25(4)
写真97　溝25(5)
写真98　竪穴住居77(2733・2734)
　　竪穴住居78(2735・2737)
　　竪穴住居79(2741～2743)
　　竪穴住居82(1)(2765)
写真99　竪穴住居82(2)(2754・2755・2758・2759・2764)
　　竪穴住居85(M30)
　　竪穴住居87(2780・2783・2792)
写真100　竪穴住居90(2799・2800)
　　竪穴住居94(2804)
　　竪穴住居96(2806～2808・2810・2811)
写真101　竪穴住居98(S298)
　　竪穴住居113(2841・2844・2847)
　　竪穴住居118(C123・C124)
　　竪穴住居121(2861・2865・2866・2868)
写真102　土壙331(2904)
　　土壙333(2905)
　　溝31(2920・2922・2923・2925・2926・2934・2944・2946)
写真103　その他の石製品(弥生時代)
写真104　その他の石製品・金属製品・玉類(弥生～古墳)
写真105　その他の分銅形土製品
写真106　その他の土製品(弥生～古墳)
写真107　飛鳥様式の瓦
写真108　飛鳥・白鳳様式の瓦
写真109　土壙336(3063)
　　土壙350(3075)
　　土壙359(3080～3082・3084)
　　土壙361(3085)
　　土壙368(3089・3090・3092～3095)
　　土壙372(3103・3105)
　　土壙378(3118)
写真110　土壙375(1)
写真111　土壙375(2)
写真112　土壙375(3)
写真113　土壙388
写真114　土壙389
写真115　土壙390(3242・3245・3251)
　　土壙391(3258・3259・3267・3274～3276)
写真116　土壙392(上段)
　　土壙398(中段)
　　土壙424(3418・S317)
　　土壙墓7(M82)
　　土壙墓8(3421)
写真117　火葬墓1(3422・M86～88・M98)
　　火葬墓2(3423・M99～101・M112)
写真118　溝50・51
写真119　溝53(3555・3563・3565・3567・3569・3571・3572・3576～3579)
　　溝100(3623・M124・M126)
　　溝102(3633・3634・3636・3640)
写真120　河道(1)
写真121　河道(2)
写真122　河道(3)
写真123　河道(4)
写真124　河道(5)
写真125　河道(6)
写真126　河道(7)

写真127 河道(8)
写真128 河道(9)
写真129 河道(10)
写真130 その他の瓦
写真131 その他の石製品・金属製品
(古代～近世)
写真132 その他の金属製品・土製品
(古代～近世)

「梵鐘鋳造遺構」の現地説明

瓦の分類作業

金子浩昌氏による
動物遺体の鑑定

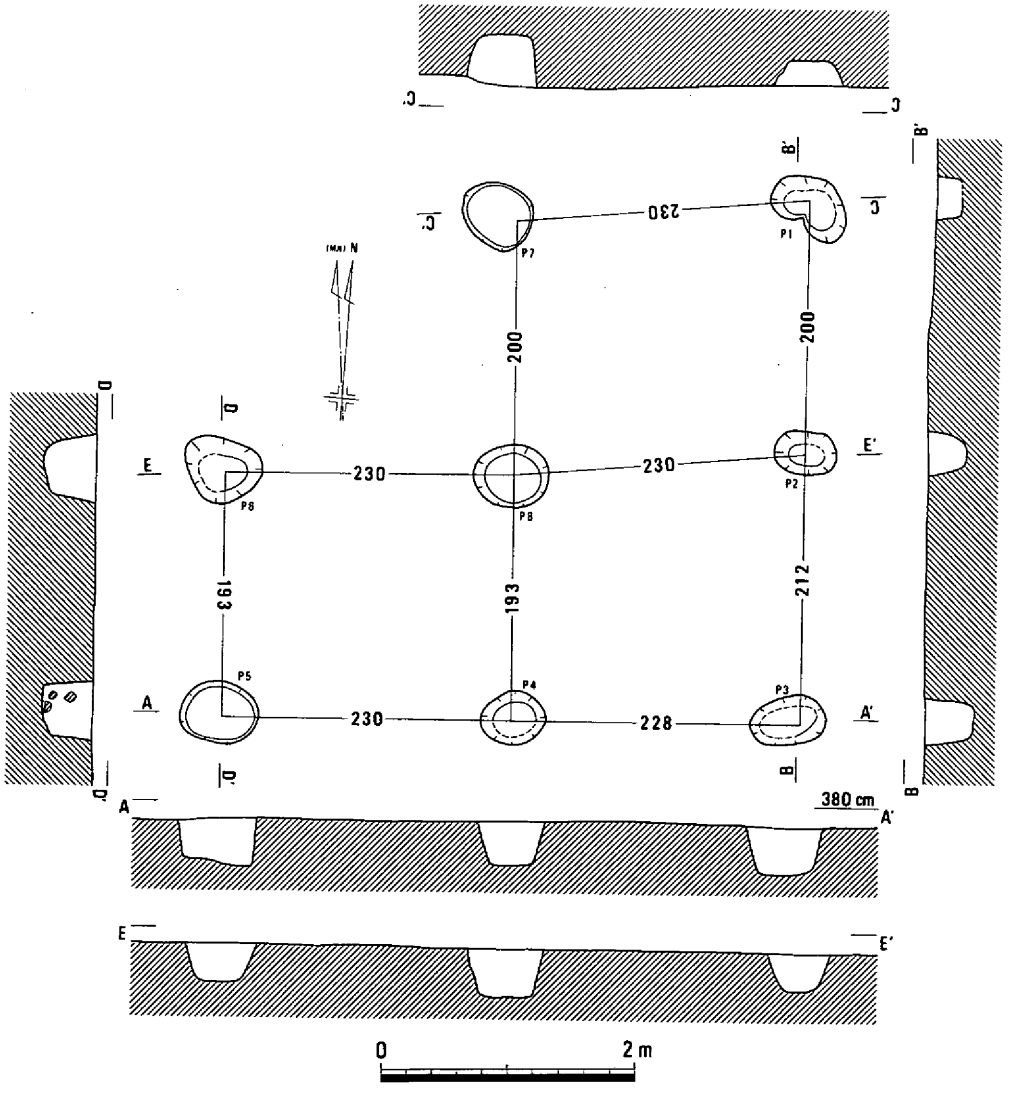
富岡直人氏による
ウマの鑑定

第６節　古代・中世の遺構・遺物

（１）概要

古代に属すると思われる遺構には、掘立柱建物８棟・井戸１基・土壙56基・火葬墓２基・柱穴列５基・土器溜り１ケ所・溝17条・道路状遺構２基・畑２面などがあるが、奈良時代の状況は不明な点が多く、中心は９世紀後半以降の平安時代である。特に平安後期から鎌倉時代にかけての第２微高地では、梵鐘鋳造遺構や区画溝が存在し、また多量の瓦が出土するなど、小規模ながら寺院が建立されていたことが明らかになっている。この前段階である９～10世紀にも既に何らかの施設が存在していた可能性も予想されるところである。

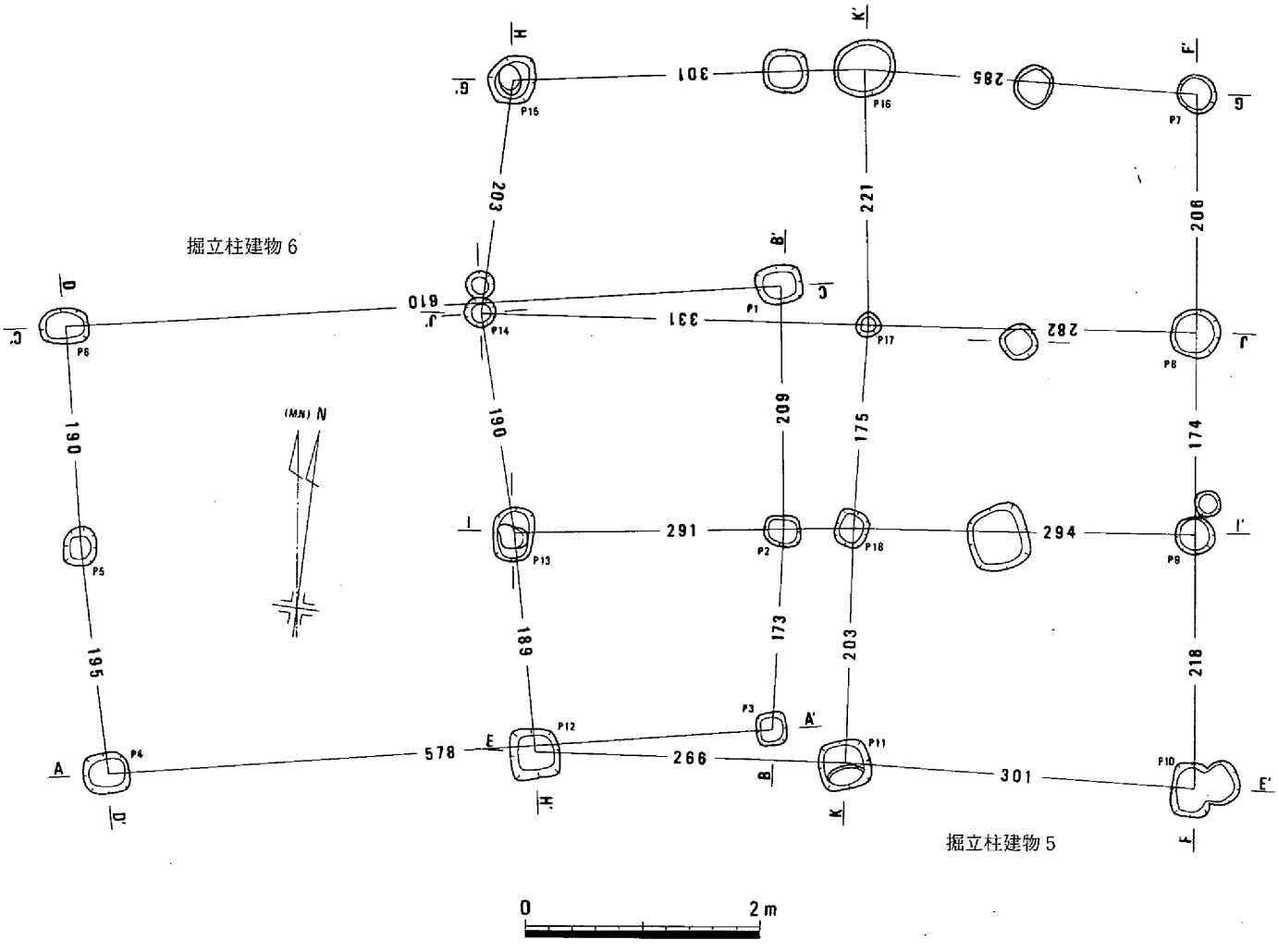
中世では、掘立柱建物６棟・井戸４基・土壙33基・土壙墓８基・柱穴列１基・溝46条・河道などが確認され、河道の肩口では土器や瓦が多量に廃棄されていた。遺構や遺物から、寺院が室町前半頃ま

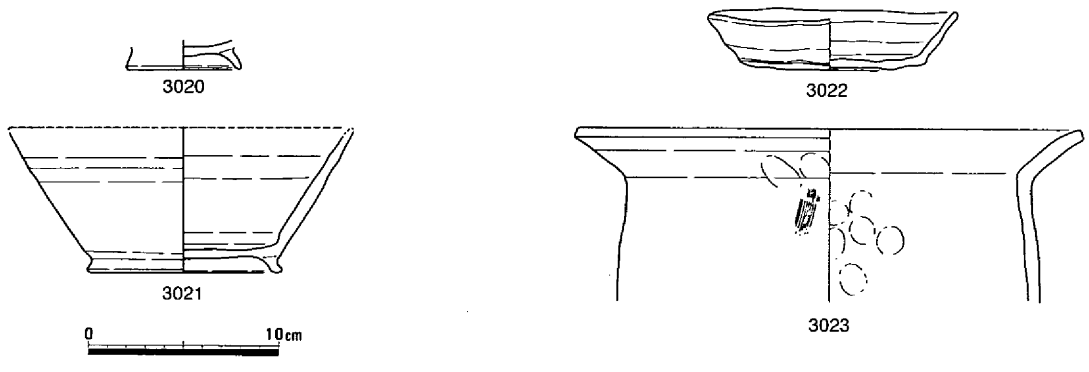


第834図　掘立柱建物４（1/60）

で盛んに運営されていたと思われるが、やがて廃れるようである。一時、後半期に瓦を伴う構造物が建てられた可能性があるが、それも近世初頭までには廃絶したようである。

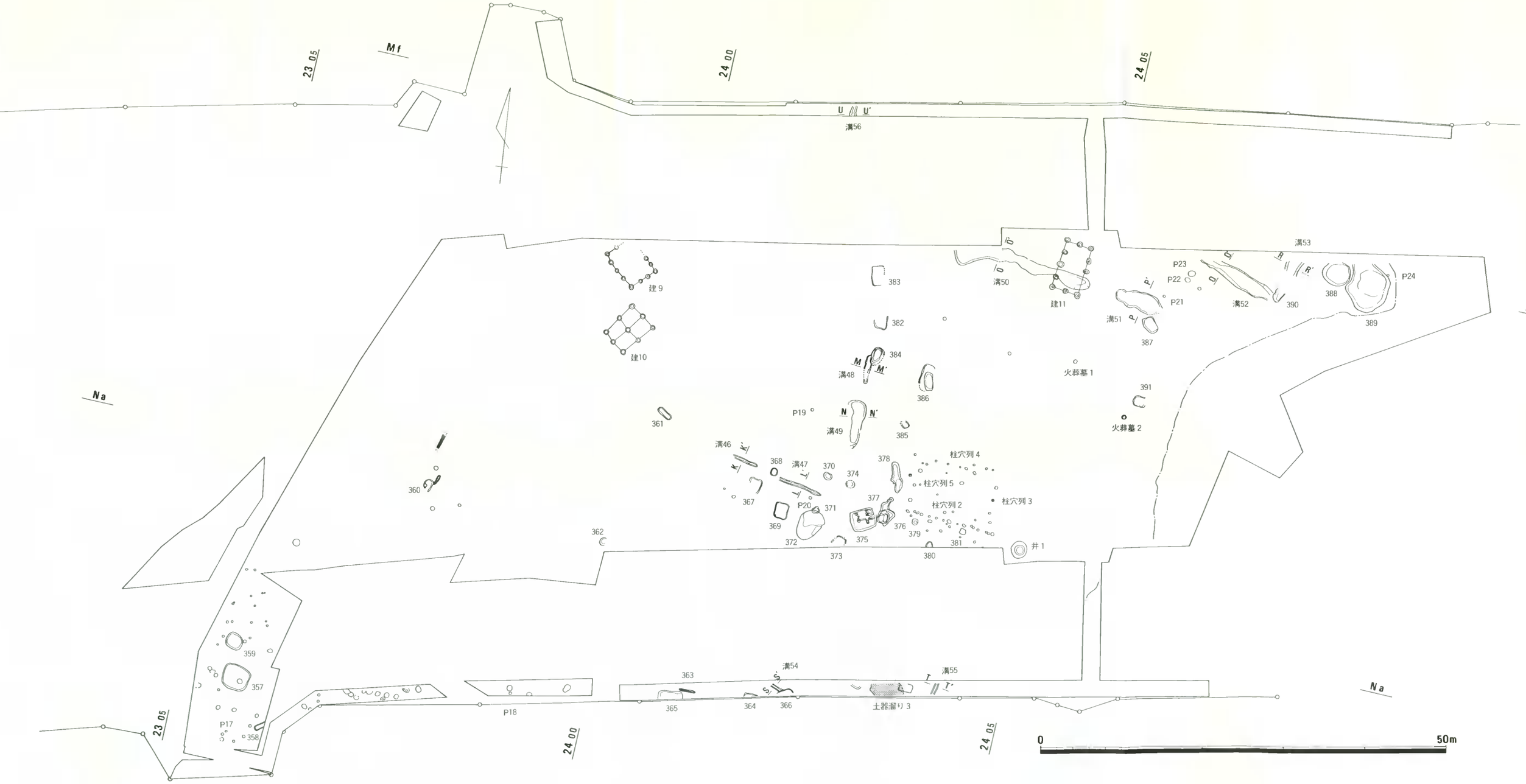
古代から中世の遺物としては、土器・瓦1097点、石製品26点、金属製品171点、土製品110点を図示している。土器では平安期の良好な資料があり、土製品では梵鐘の鋳型、瓦では平安宮内裏出土のものと同笵のものが確認されている。また、火葬墓からは延喜通寶の出土もみている。　（柴田）





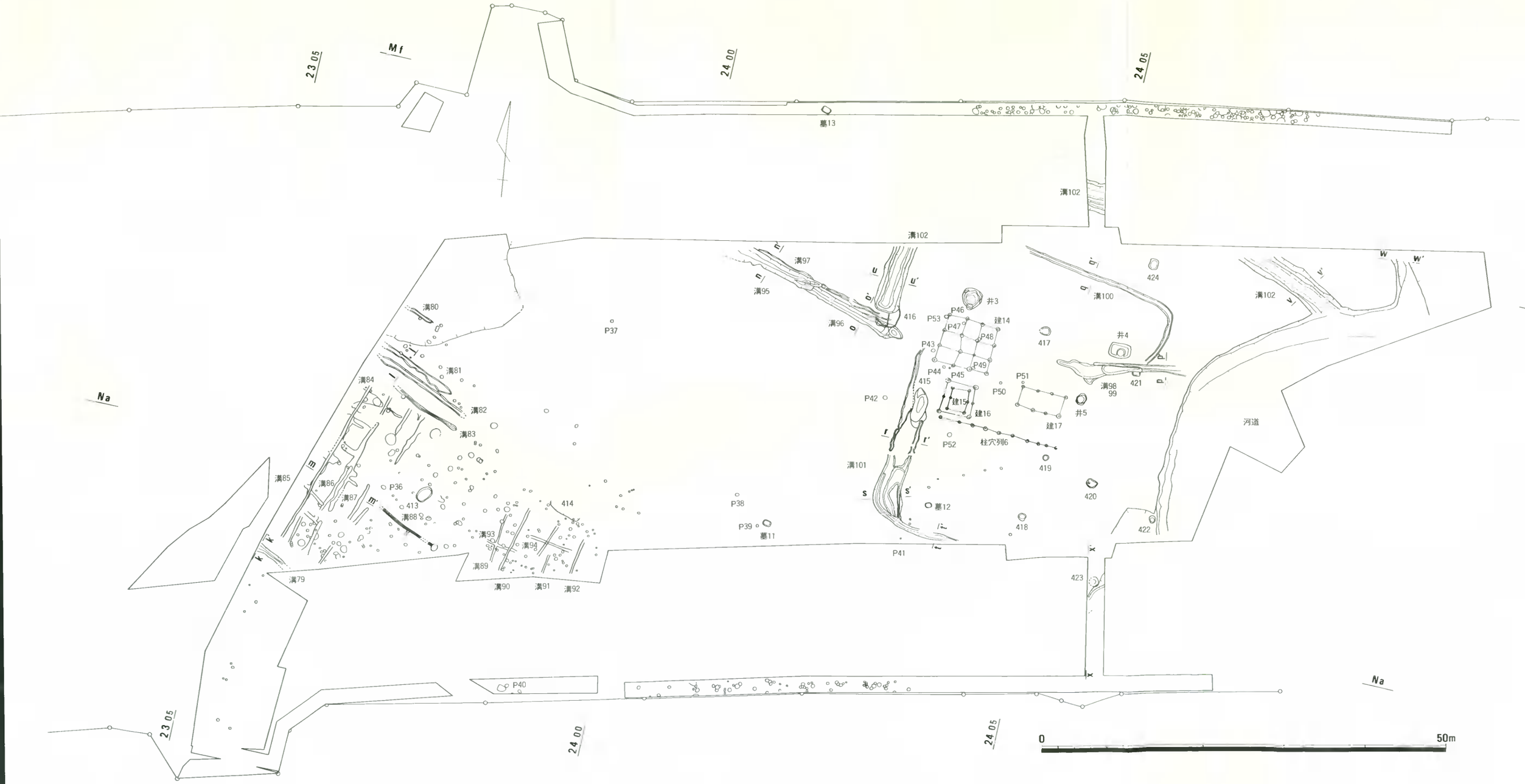
第835図　掘立柱建物5・6（1/60）

第836図　古代遺構全体図（1）（1/400）



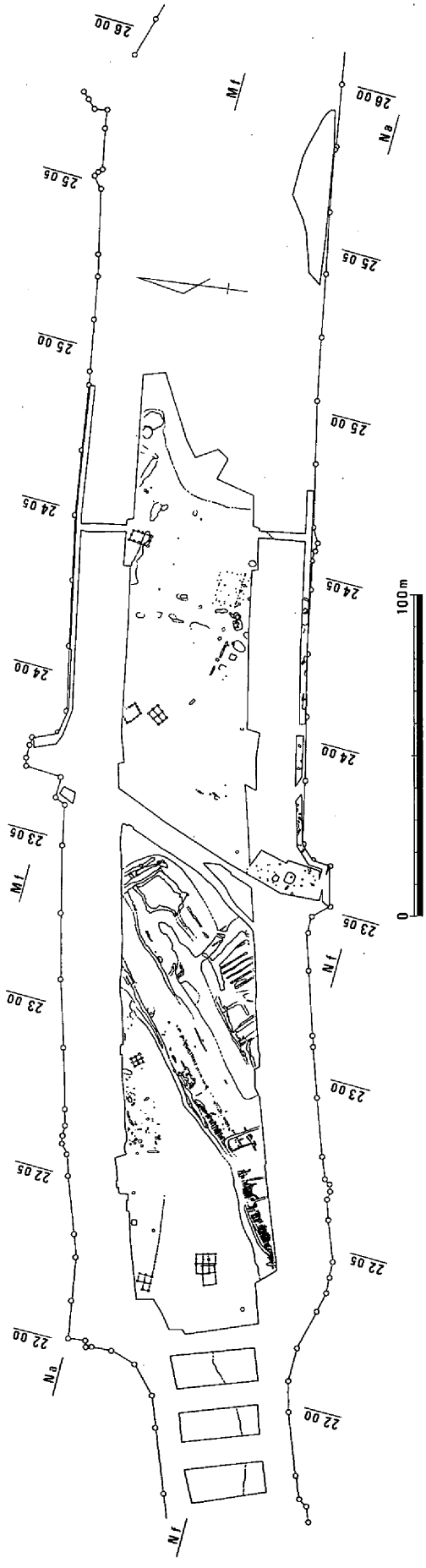
第837図　古代遺構全体図（２）(1/400)

第838図　中世遺構全体図（1）（1/400）

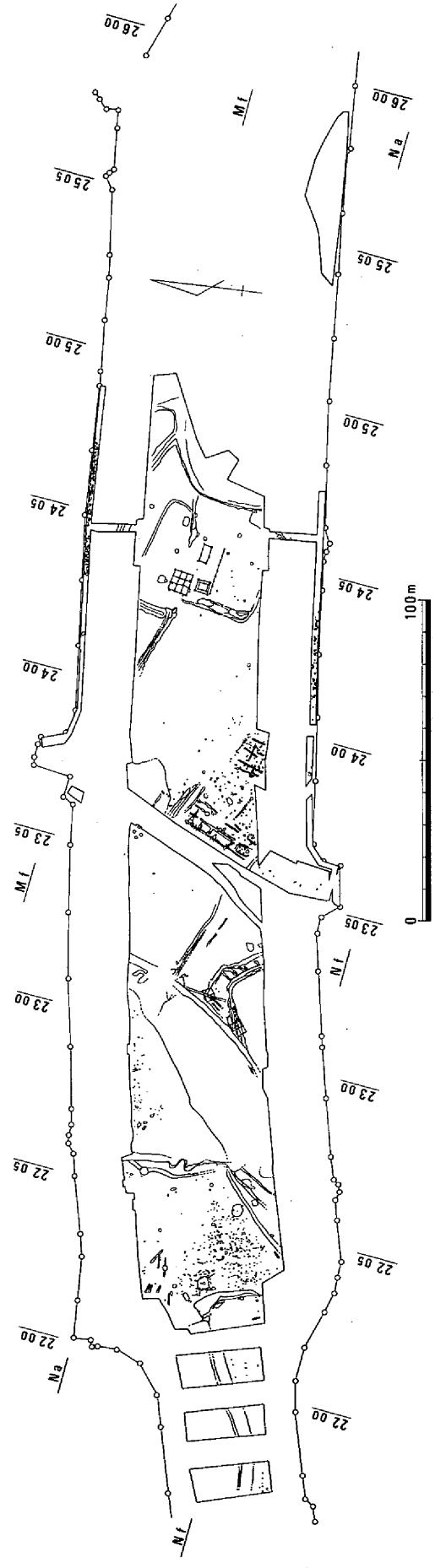


第839図　中世遺構全体図（２）（掲載遺構のみ）（1/400）

第840図　第２微高地東半古代・中世遺構全体図（1/400）



第841図　古代主要遺構全体図（1/2,000）



第842図　中世主要遺構全体図（1/2,000）

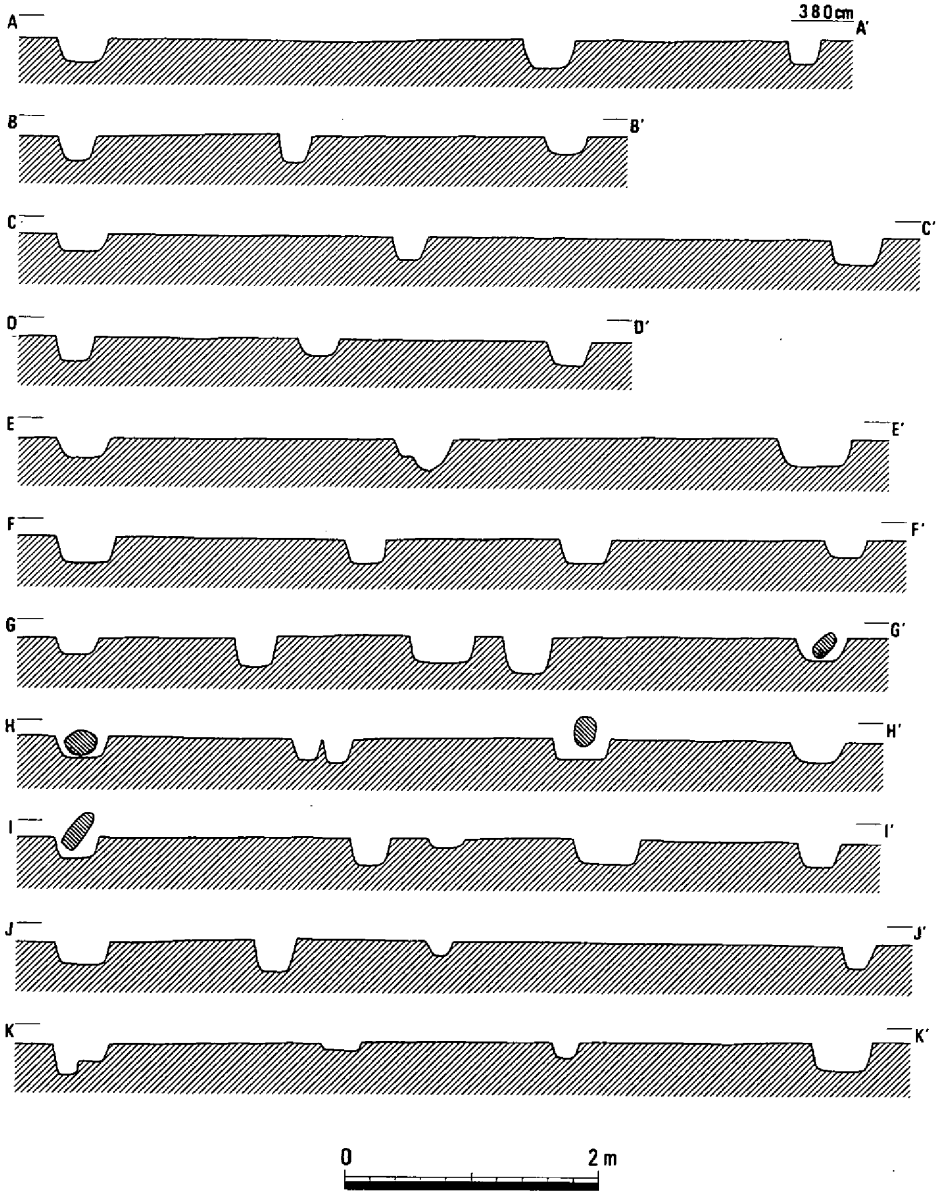
（2）掘立柱建物

掘立柱建物4（第834図、写真35－1）

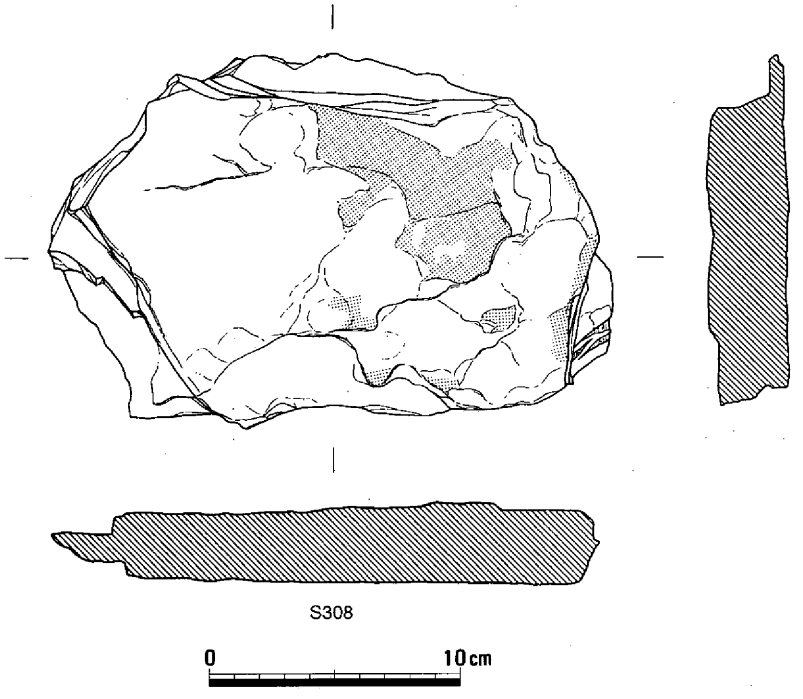
第1微高地のN22区北西部に位置する。北西隅の柱穴が確認できていないが、規模は2×2間の総柱と考えられる。柱間は約190～230cmを測る。棟方向は、北を意識して建てられているようである。柱穴の掘り方は、30～50cmの円形や楕円形で、深さは20～40cm残存していた。埋土は褐灰色砂質土であった。時期を確定できる遺物は出土していないが、P6から鉄滓が1個出土した。埋土や北を意識していることから、古代のものと考えている。（平井）

掘立柱建物5（第835・843・844図）

第1微高地のN22区北西部、掘立柱建物4の南約13mに位置する。この部分には、遺構検出時に古代～中世の柱穴がまとまって確認できた。その中には方形を呈するものもあり、掘立柱建物の存在を想定して検出に努めた。その結果、明確な柱の並びは認められなかったものの、図示したような柱穴



第843図　掘立柱建物5・6（1/60）

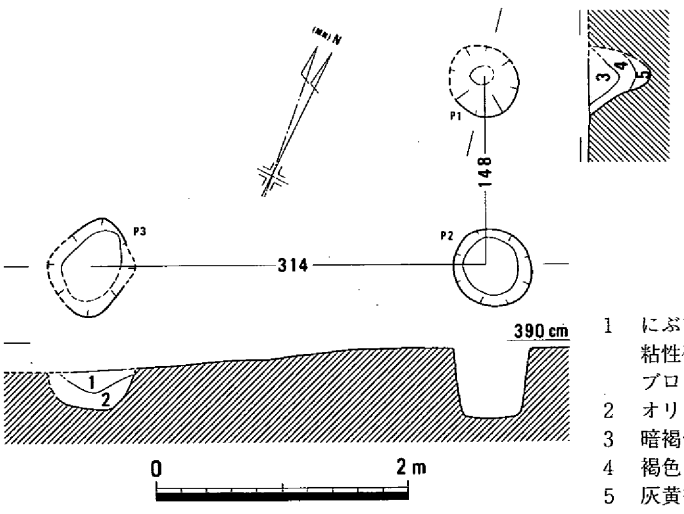


第844図　掘立柱建物５・６遺物

について、掘立柱建物になる可能性を考えて報告するものである。規模は３×２間を想定しているが、西側の柱の並びが不規則で、３×１間だけになるかもしれない。柱穴の掘り方は、円形の他に方形のものがある。大きさや深さにはバラツキが認められる。棟方向は北を意識していると考えられる。埋土は、淡褐灰色砂質土であった。

遺物としては、Ｐ１から土師器の杯3022、椀3021、甕3023が出土している。またＳ308はＰ13から出土したものである。石材は古銅輝石安山岩で、形状から本来は竪穴式石槨に使用されていたものと考えている。図のスクリーントーン部分は摩耗している。

建物の時期は平安時代である。　（平井）



第845図　掘立柱建物７（1/60）

掘立柱建物６（第835・843・844図）

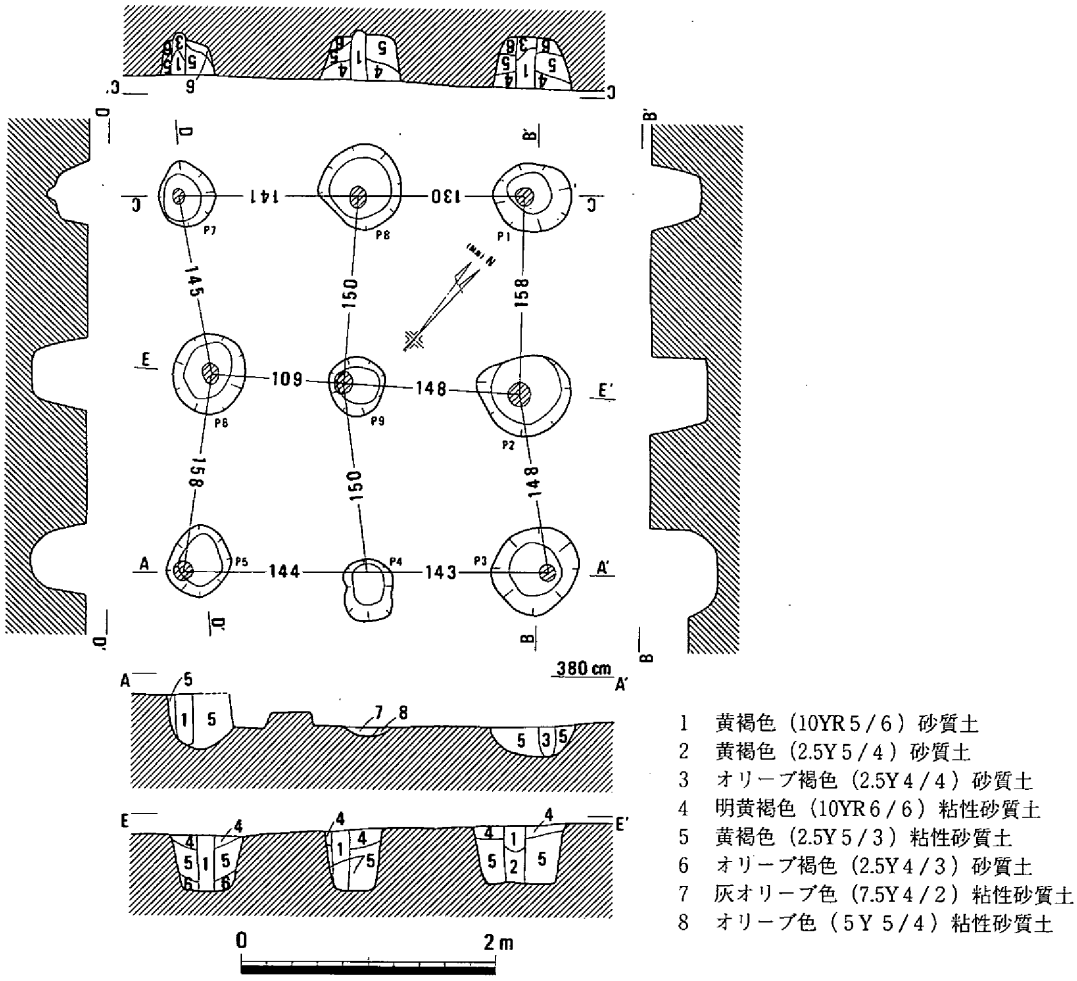
第１微高地のＮ22区北西部、掘立柱建物５と重複している。規模は１×２間で検出しているが、桁行は１間にしては長すぎるため、間に検出できなかった柱を想定すべきかもしれない。柱の掘り方は、20～40cmの隅丸方形で、深さは20cm前後であった。埋土は掘立柱建物５と同じで、遺物はＰ４から土師器椀3020が出土している。時期は平安時代であろう。（平井）

掘立柱建物７（第845図）

小調査区の端部に位置し、また、後世の溝と重複していたため、完全な姿では検出できなかった。それぞれの柱穴の形状や深さにいくらか違いが認められることから、建物とすることに疑問もある。建物の構造は不明であるが、南北棟の建物とすれば、梁間の柱間が314cm、桁行の柱間は148cmとなる。柱穴の掘り方は円形か方形で長径が60～78cm、深さは33～55cmであった。（岡本）

掘立柱建物８（第846図、写真35－２）

Ｍ22区の南東隅に位置し、竪穴住居88と重複していた。東に接して竪穴住居89も検出されていて、１軒の住居が何度も建て替えられ、古代になって掘立柱建物に変わったものと考えられる。建物の構造は桁行・梁間ともに２間の総柱建物であったが、中央の柱穴は浅く、束柱かもしれない。梁間全長は桁行全長より若干短かった。柱穴の掘り方は円形で、柱痕の直径は15cm前後であった。（岡本）



第846図　掘立柱建物８（1/60）

掘立柱建物９（第847図、写真35－３）

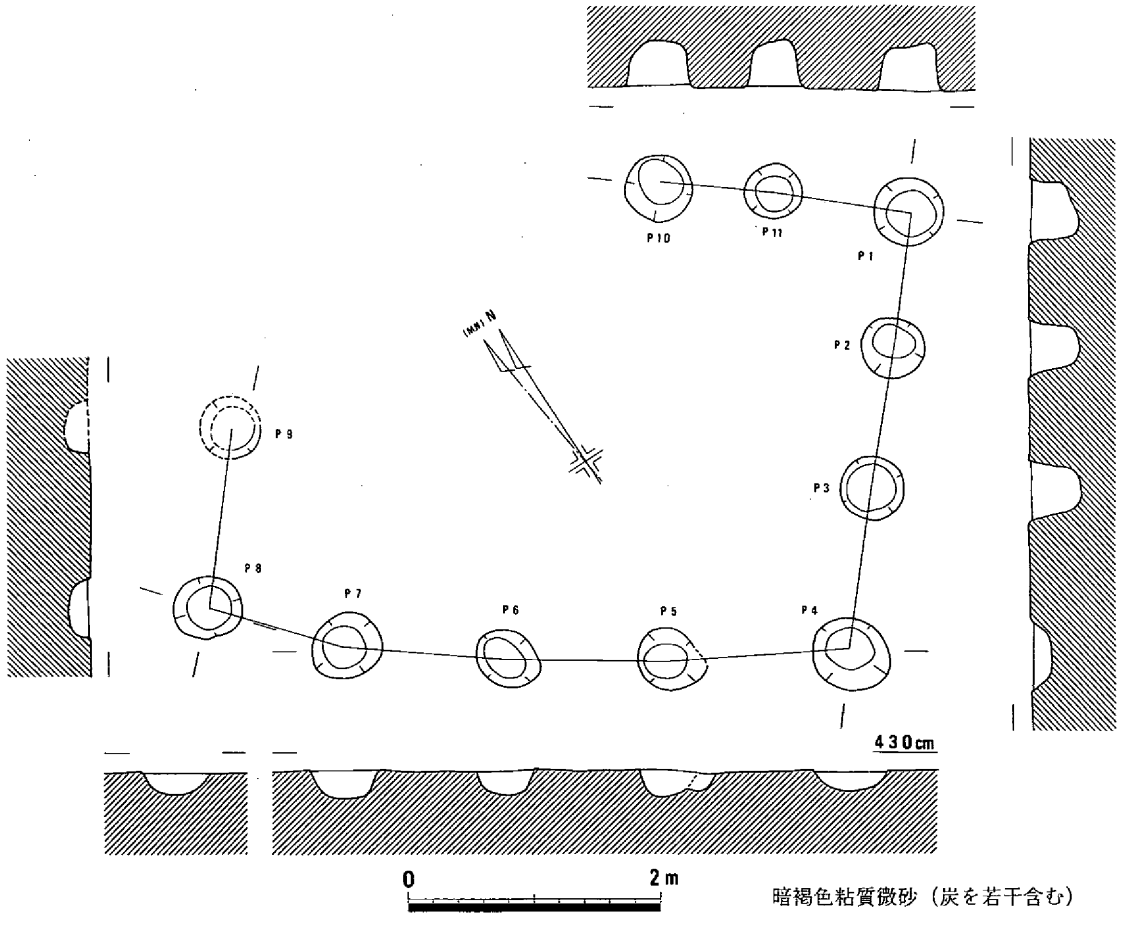
第２微高地の北西部に位置する４×３間の掘立柱建物で、主軸はN-48°-Wである。規模は、桁行が509cmで、柱間距離は91～146cmを測る。梁間は347cmで、柱間距離が102～143cmである。掘り方の平面形は円形で、深さが10～25cmを測る。この建物は、柱間距離が短いことから２軒以上の建物の建て替えの可能性がある。建物の時期を示す遺物は出土していないが、埋土が掘立柱建物10と同じであること、竪穴住居22・23・59を切っていることなどから、古代と考えられる。（弘田）

掘立柱建物10（第848・849図、写真36－１）

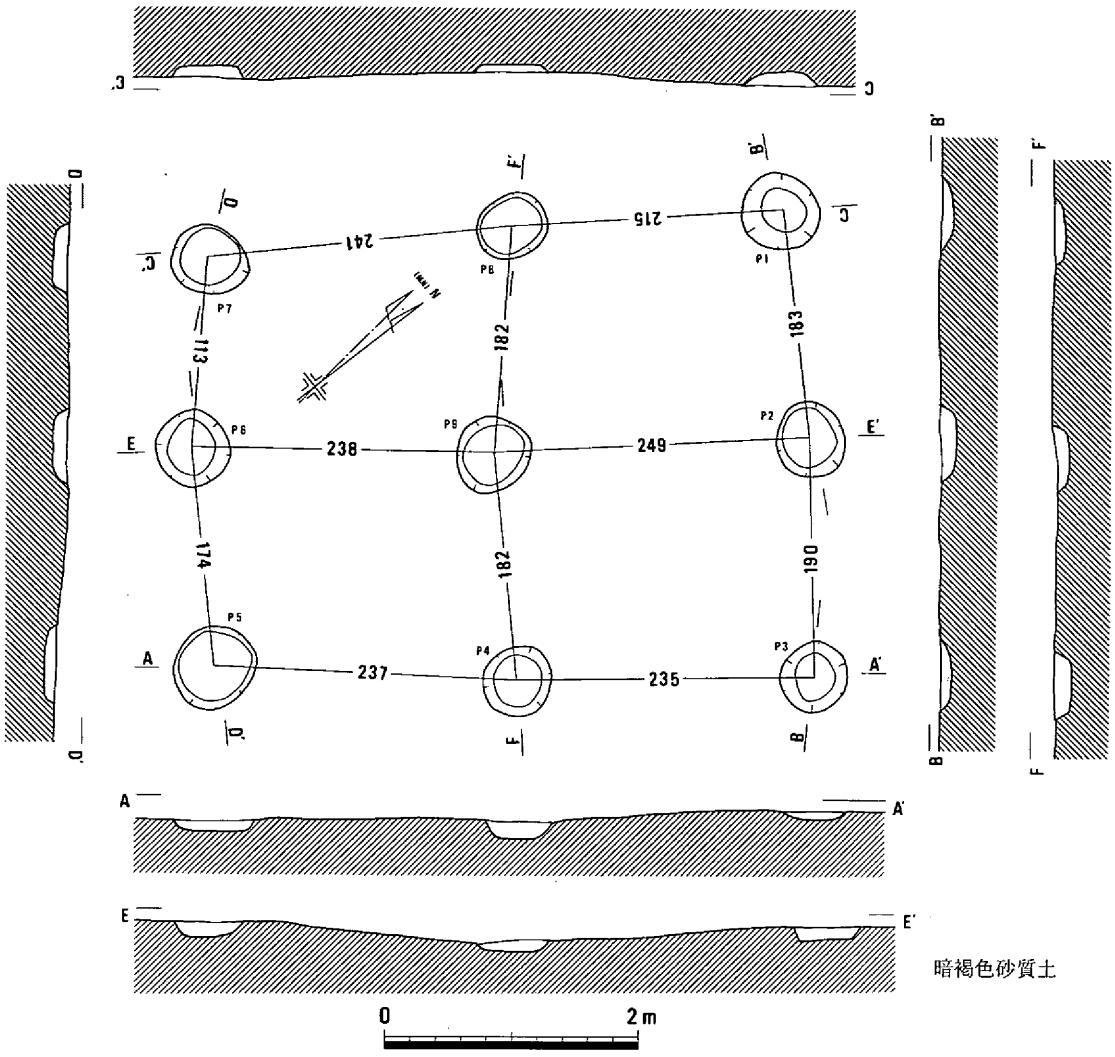
掘立柱建物９の南に接して位置し、古墳時代後期の竪穴住居94を切るかたちで検出した。２×２間の総柱建物で、建物主軸はN-44°-Eを測る。規模は、桁行が486cmで、柱間の芯々距離は215～248cmを測る。梁行は372cmで、柱間距離は152～190cmである。また、掘り方の平面形は円形で、深さは検出面から10cm前後とかなり浅いものであった。遺物としては、Ｐ１から出土した流紋岩製の砥石Ｓ309がある。このほかにも図示し得なかったが須恵器杯蓋の小片がＰ６から出土しており、この建物の時期は奈良時代から平安前期と考えられる。（弘田）

掘立柱建物11（第850図、写真36－２）

第２微高地の北東端において検出され、溝50と切り合い関係をもつ遺構である。南北に長い２×４間の規模で、棟方向はN-13°-Eを示す。東側桁行は601cm、西側桁行は598cm、北側梁行は329cm、南



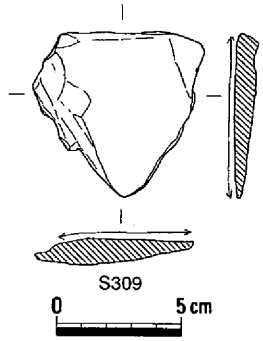
第847図　掘立柱建物９（1/60）



第848図　掘立柱建物10（1/60）

側梁行は342cmを測り、桁は西側、梁は北側がいずれも少し短い。面積は約20m²である。柱間は桁が128～163cm、梁が164～174cmを測る。柱穴の掘り方はいずれも方形を呈する。掘り方の規模は50×50cm～70×80cm、深さは検出面から10～45cmである。柱痕跡は15～20cmのものが使用されている。

遺物の出土はないが時期はおおよそ奈良時代を想定している。（松本）



第849図　掘立柱建物10遺物

掘立柱建物12（第851図、写真36－３）

N23区の西端中央付近で検出された。溝104によって北西隅の柱穴は破壊され、農地の周囲を巡る溝78と重複していた。建物は桁行２間、梁間２間の総柱建物であった。桁行全長が426cm、梁間全長は352cm、床面積は推定で15m²を測った。棟方向はN-53°-Eであった。柱穴の掘り方は円形で、長径が15～34cmと小さく、深さも６～14cmと浅かった。中央の柱穴はほぼ中央に位置していたが、梁間では北側の柱穴が広かった。（岡本）

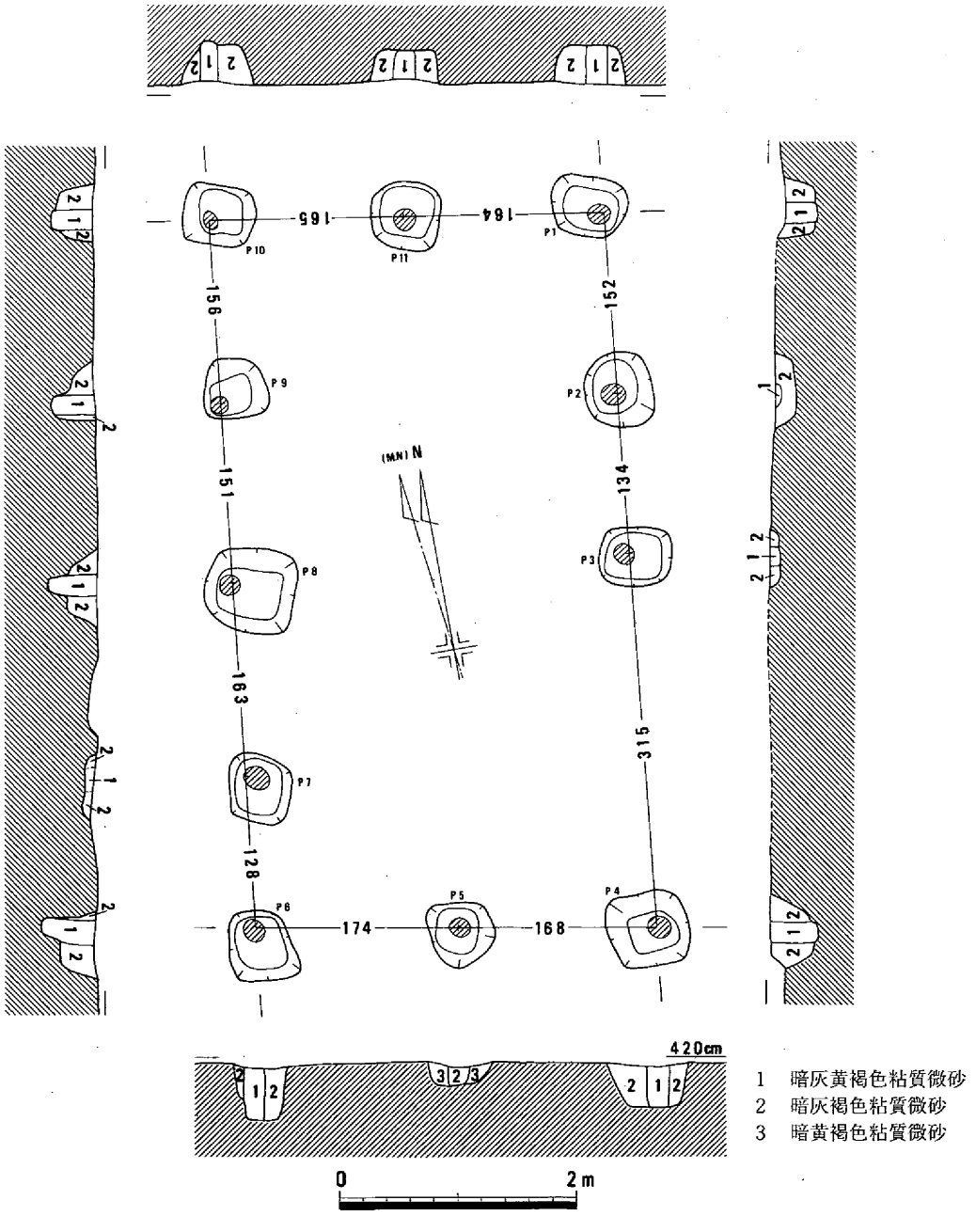
掘立柱建物13（第852図）

掘立柱建物12の北東９mにあり、棟方向がN-59°-Eで建物12と近似していたことから共存した可能

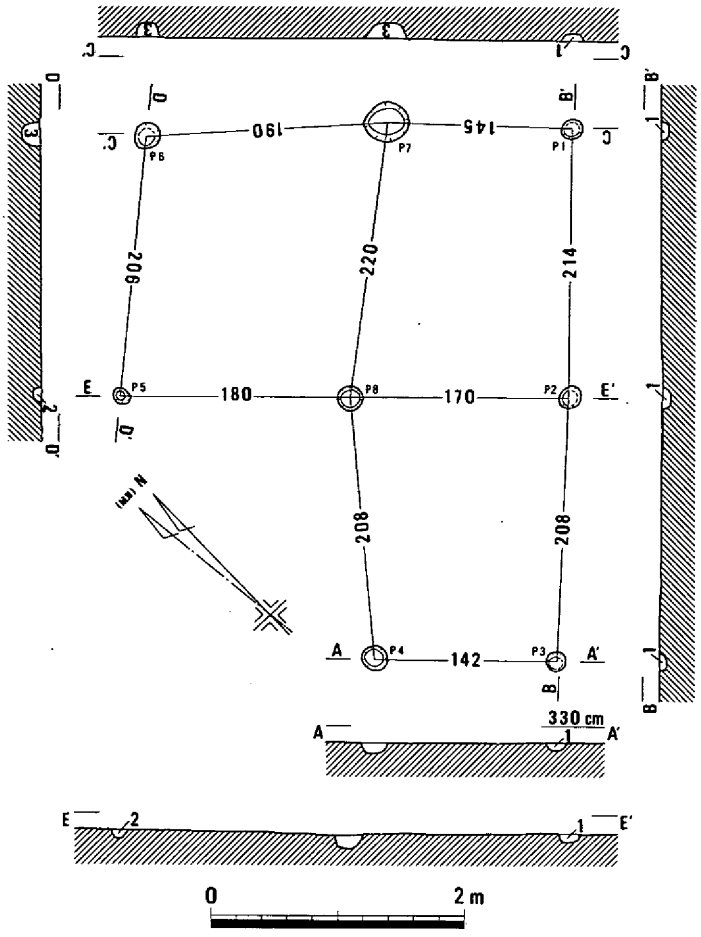
性が高い。桁行２間、梁間１間の構造で、桁行全長が370cm、梁間287cm、面積は10.4㎡を測った。柱穴の掘り方は円形で、長径が22～28cm、深さは18～53cmと、北側柱列が深かった。溝76や農地の周囲を巡る溝77と重複し、それらの方向と棟方向とが異なっていたことから共存は考えられない。近世に入っても農地が継続されることからみれば、建物が溝より古いと考えられる。　（岡本）

掘立柱建物14（第853図）

掘立柱建物14は、第２微高地中央やや東寄りに位置する総柱の建物である。溝100・101あるいは溝102、柱穴列６と方向性が一致しており、それらに囲まれた範囲の西端で検出されている。柱の配置は方形に近いが、棟と思われる方向はほぼ東西でN-82°-Wとなる。規模は、桁行656cm・梁間590cmを測り、面積は38㎡である。柱穴は径25～55cmの円形である。底面の高さにはかなりばらつきが認めら



第850図　掘立柱建物11（1/60）



れるが、傾向としては北東隅が高く、南西に向かって低い。

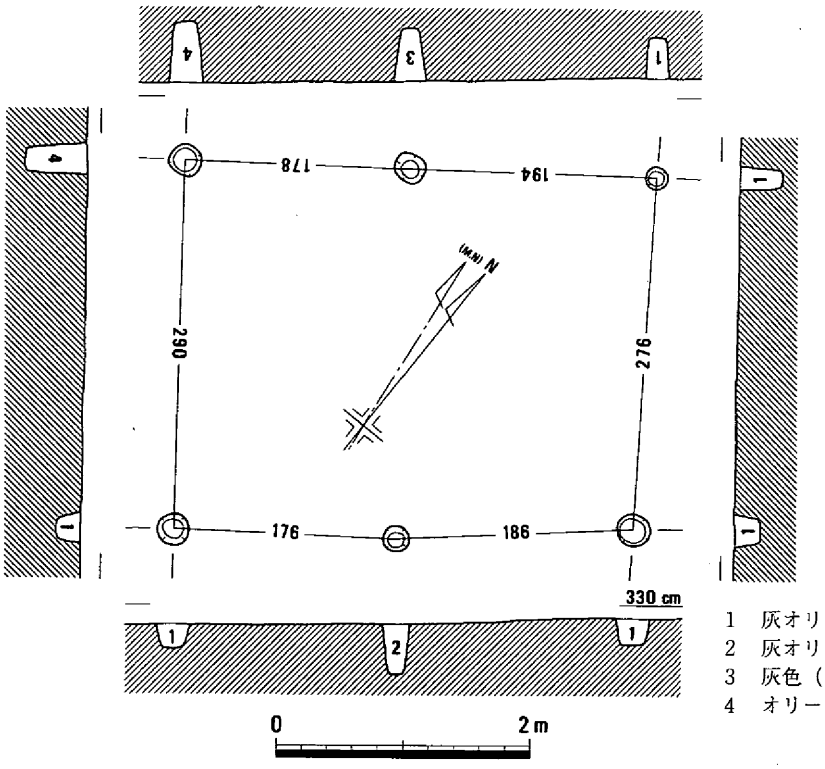
柱穴からは古代の土器片が出土しており、遺構の時期は古代末から中世と思われる。　（柴田）

掘立柱建物15（第854図）

掘立柱建物15は、第２微高地中央やや東寄り、掘立柱建物14の南に隣接する。溝100・101あるいは溝102、柱穴列６と方向性が一致しており、それらに囲まれた範囲の西端で検出されている。掘立柱建物16が建て替えになるか一連の構造になるかは不明である。棟方向はほぼ南北でN-８°-Eとなる。規模は、桁行275

1　暗灰黄色（2.5Y５/２）粘性砂質土
2　オリーブ黒色（５Y ３/２）粘性砂質土
3　灰オリーブ色（５Y ４/２）粘性砂質土

第851図　掘立柱建物12（1/60）



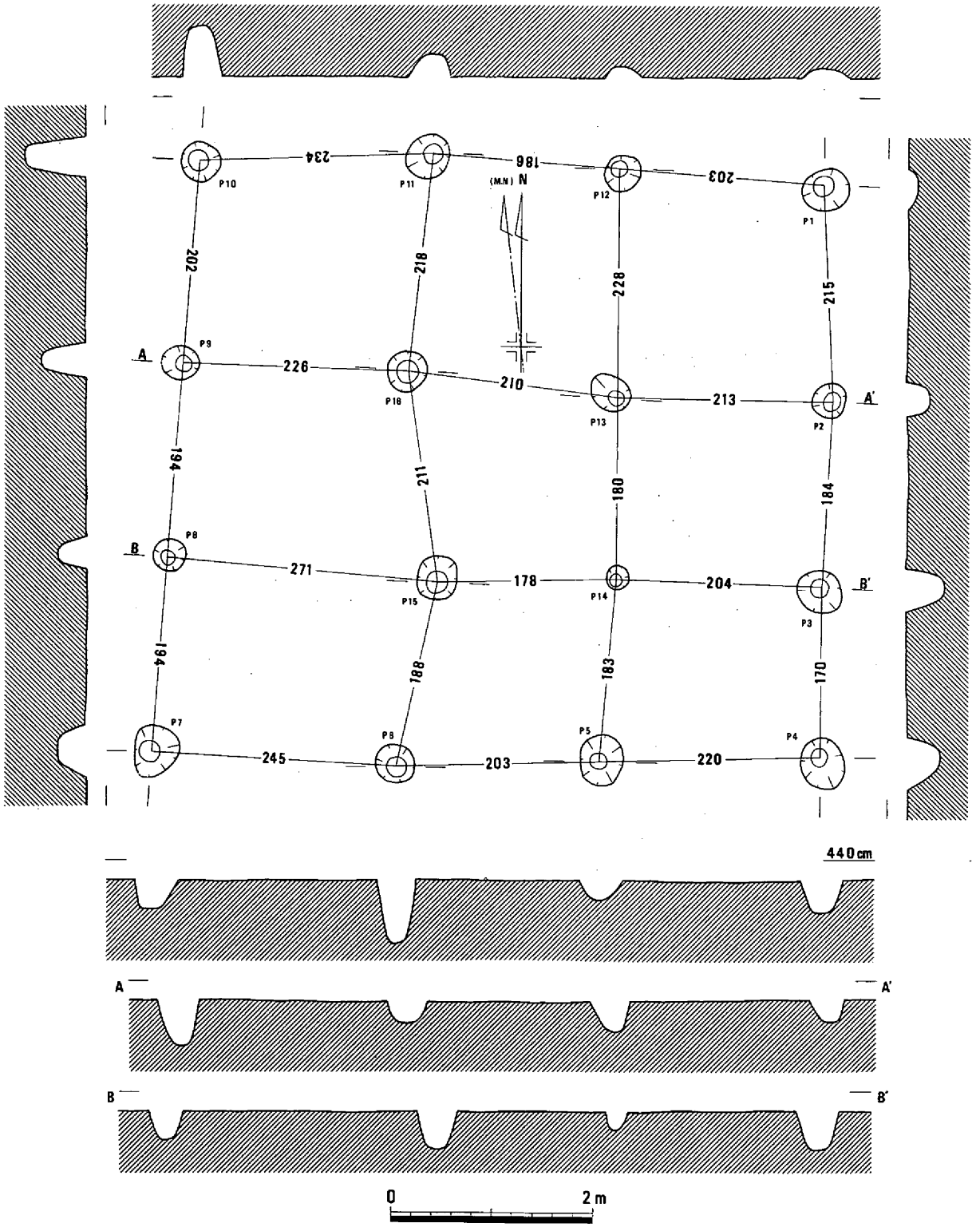
1　灰オリーブ色（５Y ５/２）粘性砂質土
2　灰オリーブ色（7.5Y４/２）粘質土
3　灰色（５Y ５/１）粘性砂質土
4　オリーブ黒色（7.5Y３/２）粘性砂質土

第852図　掘立柱建物13（1/60）

cm・梁間218cmを測り、面積は６㎡である。柱穴は径20～40cmの円形である。底面の高さにはばらつきが認められる。出土遺物はないが、遺構の時期は古代末から中世におさまると思われる。　(柴田)

掘立柱建物16（第854図）

掘立柱建物16は、第２微高地中央やや東寄り、掘立柱建物14の南に隣接する。掘立柱建物15と同じ

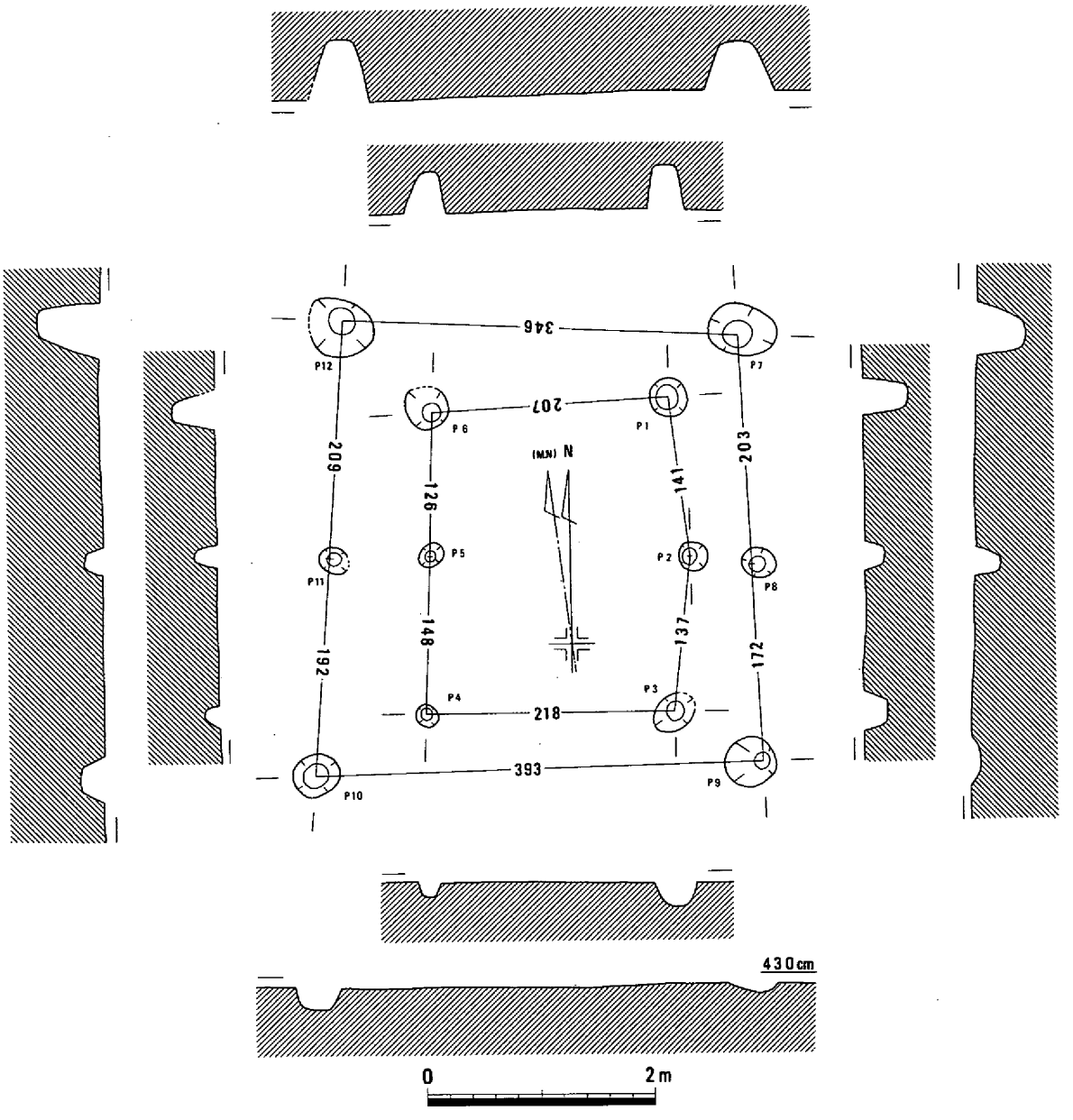


第853図　掘立柱建物14（1/60）

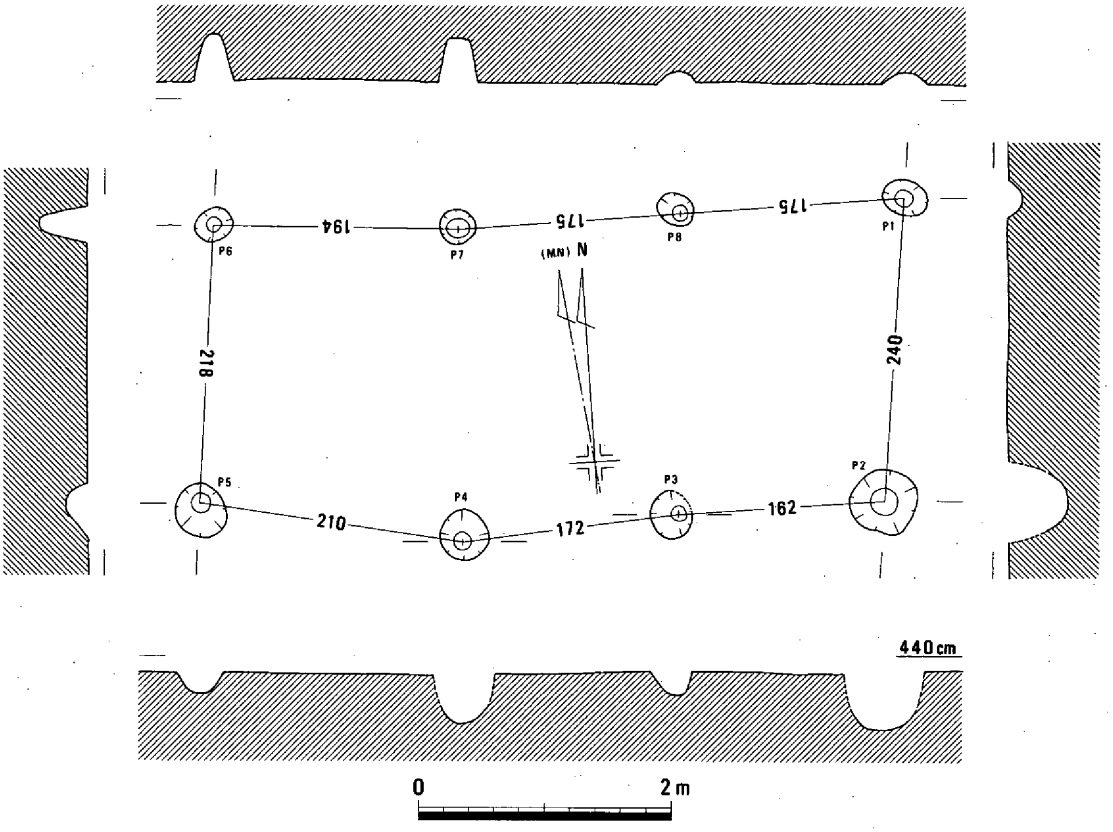
位置で、規模を除くと構造も同じである。それの建て替えか一連の構造かは不明である。棟方向はほぼ南北でN-8°-Eとなる。規模は、桁行401cm・梁間393cmを測り、面積は14.2m²である。柱穴は4隅が大きく、長径40～60cmの楕円形である。底面の高さにはばらつきが認められる。柱穴から古代の土器片が出土しており、遺構の時期は古代末から中世の中でとらえられると思われる。（柴田）

掘立柱建物17（第855図）

掘立柱建物17は、第2微高地の東寄り、掘立柱建物16の東に隣接する。溝100・101あるいは溝102、柱穴列6と方向性が一致しており、それらに囲まれた範囲の中央で検出されている。棟方向はほぼ東西でN-81°-Wとなる。規模は、桁行544cm・梁間240cmを測り、面積は12.9m²である。柱穴は径28～50cmの円形である。底面の高さにはばらつきが認められる。柱穴から古代の土器片や瓦片が出土しており、遺構の時期は古代末から中世の中でとらえられると思われる。（柴田）



第854図　掘立柱建物15・16（1/60）



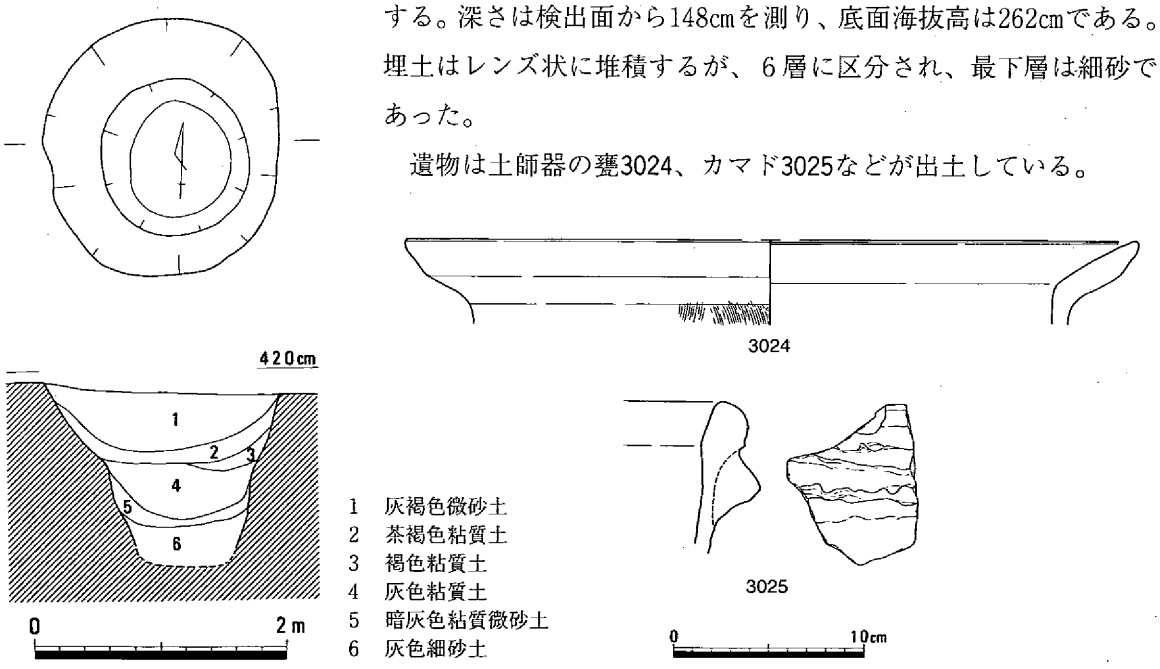
第855図　掘立柱建物17（1/60）

（３）井戸

井戸１（第856図）

第２微高地の南東端において検出された。規模は長径212cm、短径192cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは検出面から148cmを測り、底面海抜高は262cmである。埋土はレンズ状に堆積するが、６層に区分され、最下層は細砂であった。

遺物は土師器の甕3024、カマド3025などが出土している。



1　灰褐色微砂土
2　茶褐色粘質土
3　褐色粘質土
4　灰色粘質土
5　暗灰色粘質微砂土
6　灰色細砂土

第856図　井戸１（1/60）・遺物

時期はこれらの遺物や検出遺構面からみて、おおよそ古代の時期に属するものと思われる。

（松本）

井戸２（第857・858図）

第１微高地のＮ22区中央部に位置する。平面形は、180×170cmの方形で、深さは約170cm残存していた。壁は垂直に近く掘られていた。

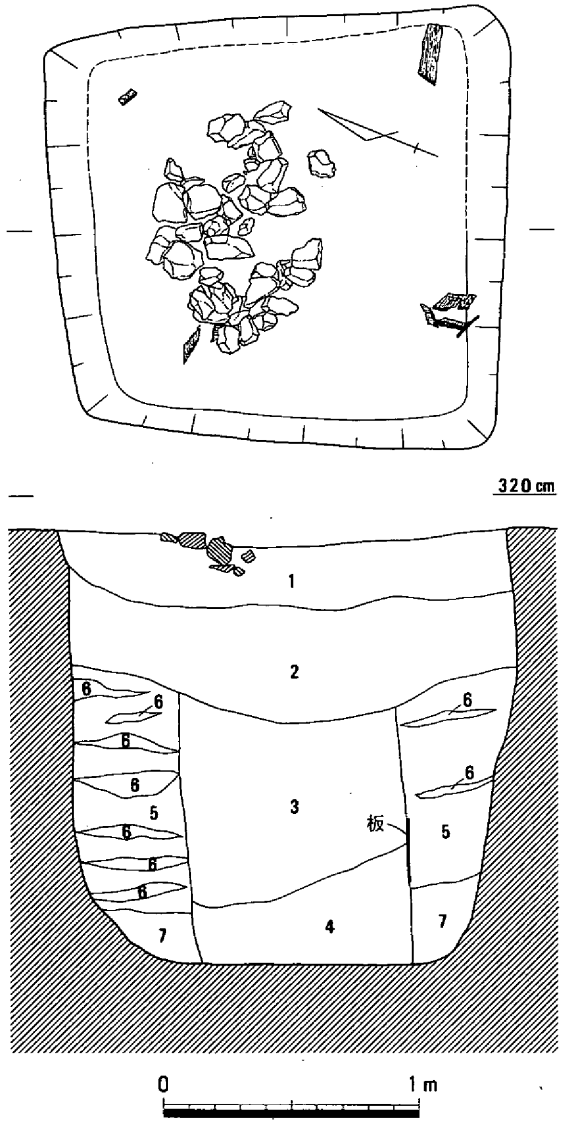
断面観察によれば、まず前述した規模で掘り下げを行った後、中央部に一辺80cmほどの方形の枠を板材で構築し、裏側は粘土と砂で突き固めたものと推測できる。また、深さ約70cmより上部は廃棄される際に壊されており、検出面には図示したような状態で角礫が散布していた。

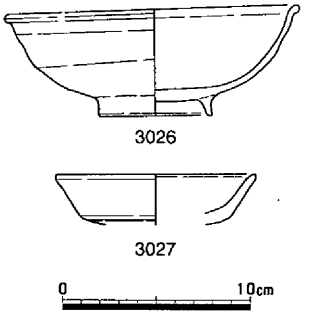
遺物は、埋土中から土師器の椀3026や小皿3027や砥石Ｓ310・311が少量出土している。時期は平安時代末頃ではなかろうか。

（平井）

井戸３（第859～861図、写真37－１）

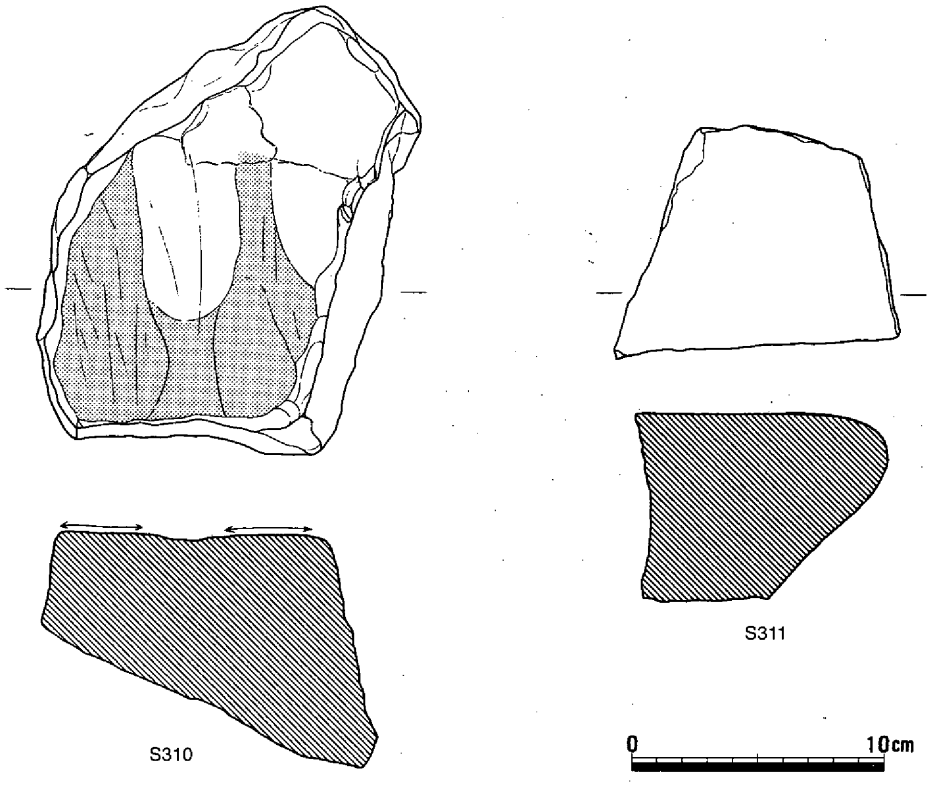
溝102に囲まれた敷地内の北西部で検出された遺構である。掘り方のプランは長径257cm、短径248cmを測り、円形である。深さは234cmを測り、底面海抜高は181cmである。井戸は二段掘りされており、底面から120cm程は井筒の大きさに合わせるように掘られている。この井戸内には直径110cm、長さ150cmほどの丸木を半裁して刳り貫いた井筒であるが、この井筒が不等沈下しないように底面には径20cm、長さ100～120cmの丸木が置かれ、井筒はこの丸木の上に据えられていた。なお、北西のつなぎ目では、高さ調整のため、丸木が２本重ねられていた。井筒の材質は高野槙である。埋土は13層に区分されるが、上層はレンズ状の堆積となる。





1　青灰黄色微砂
2　淡青灰色粘土（木片を含む）
3　暗青灰色粘土
4　淡青灰色細砂（暗青灰色粘土を含む）
5　暗青灰色粘土
6　淡青灰色細砂
7　淡青灰色細砂

第857図　井戸２（1/30）・遺物（１）



第858図　井戸２　遺物（２）

遺物は土師器の椀3028、小皿3029、甕3030、亀山焼の擂鉢3031、鉢3032、備前焼の擂鉢3033、平瓦3034～3038、鉄製品は釘M53・54、ヘラM55、石製品では砥石Ｓ312などが出土している。3028は早島式土器ないし吉備系土師器椀と呼ばれるものである。M55は完形品である。時期は3033のように年代的に下るものもみられるが、井戸の製作技法などからみて中世に属するものと思われる。　（松本）

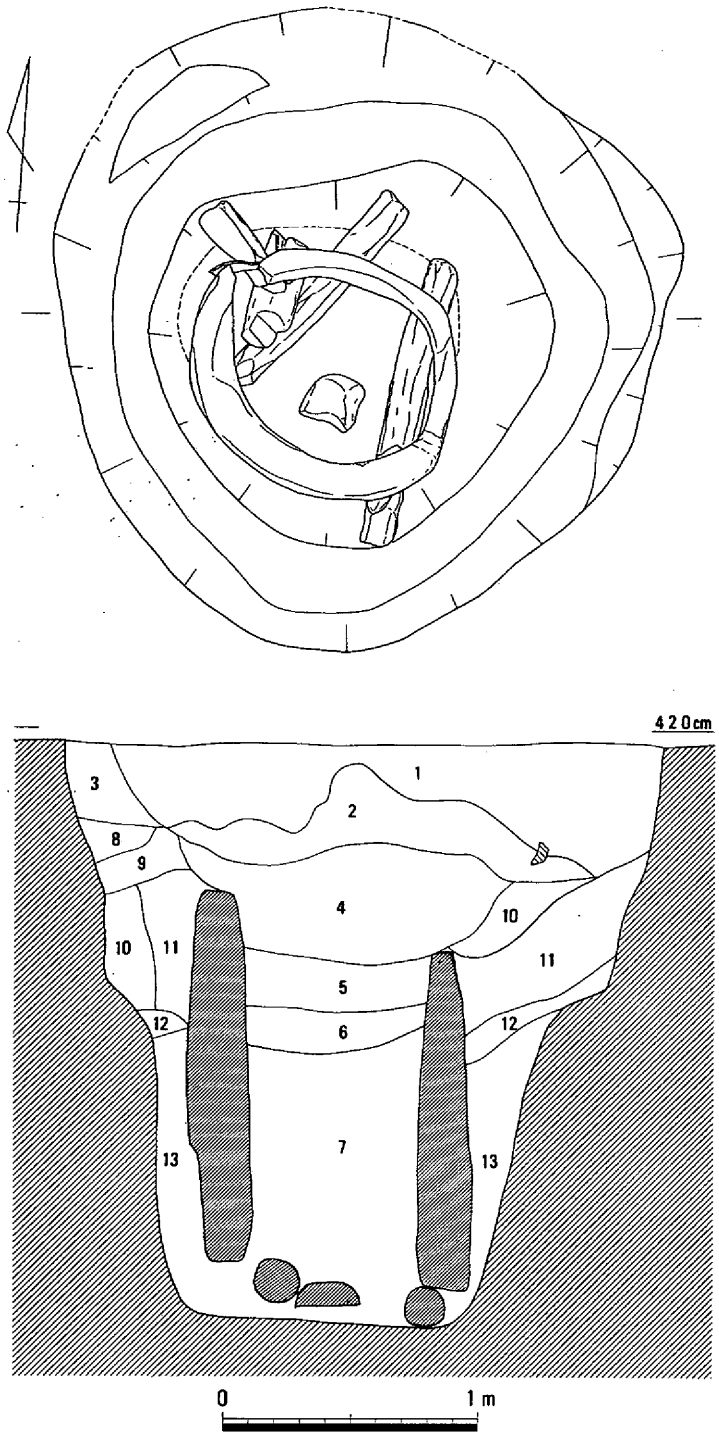
井戸４（第862図）

井戸３から東に約20mほどの位置で検出された。掘り方のプランは長径270cm、短径180cmを測り、長方形を呈する。このような形で深さ70cmほど掘り下げた後、さらに掘り方の南壁中央近くに二段目として長径111cm、短径103cmを測る円形の素掘り井戸が掘られていた。深さは検出面から326cm、二段目からは250cmを測り、底面海抜高は92cmであった。埋土は６層に区分されるが、井戸内はほとんど６層の黒灰色粘質土で埋まっていた。遺物は土師器の椀3039・3040、瓦3041～3043、鉄製品M56・57などがある。時期は出土遺物などから井戸３と同じく中世に属すると思われる。　（松本）

井戸５（第863～865図、写真37－２）

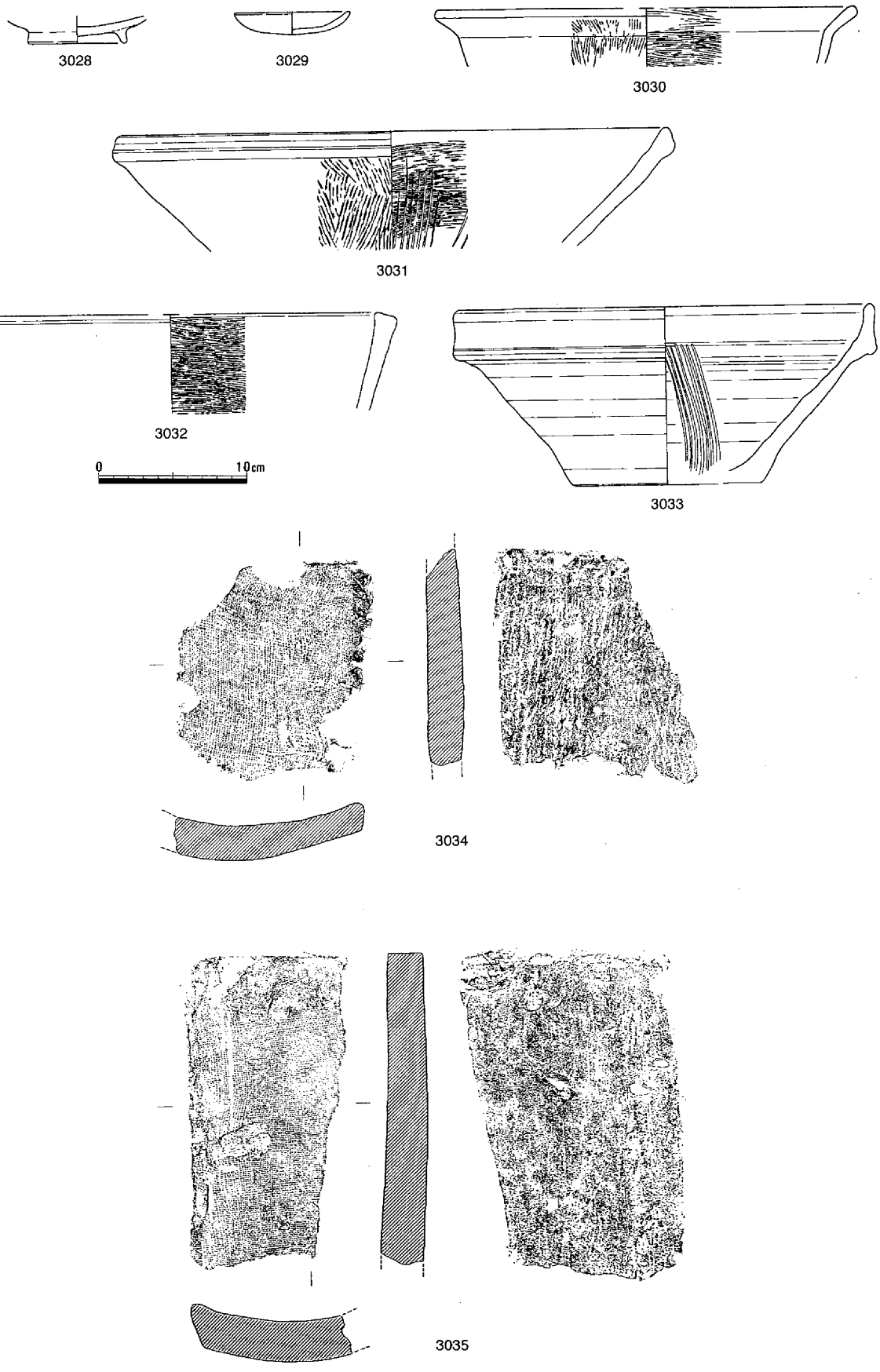
井戸５は、第２微高地の東寄り、掘立柱建物17の北東に隣接する。素掘りの井戸で、平面は楕円形で、規模は149×108cmを測る。掘り方の下半で壁面の傾斜が急になっており、床面は水平である。深さは、検出面から119cmを測る。埋土は細かく分層されない。

出土遺物には、胎土目積みの唐津系陶器皿3044、備前焼擂鉢3045、瓦質土器釜3047、土師質の有脚浅鉢3048、軒丸瓦3049・3050、軒平瓦3051、丸瓦3052～3055、平瓦3056～3062などがある。これらの中には、中世末から近世初頭と思われるものが認められ、遺構が機能した時期から廃棄の時期がこれに近いものと思われる。　（柴田）

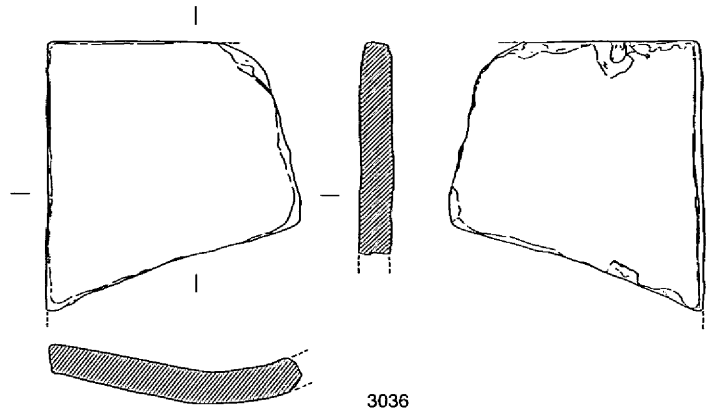


1　淡茶灰褐色粘質微砂
2　橙灰色粘質土
3　淡茶褐色粘質微砂
4　暗灰色粘質土
5　暗灰色粘質土
6　暗黄灰色粘質土
7　灰色粘質土
8　淡黄灰褐色粘質土
9　暗橙灰色粘質微砂
10　緑灰色粘質土
11　淡黄灰色粘質土
12　淡黄灰色粘質土
13　灰色粘質土

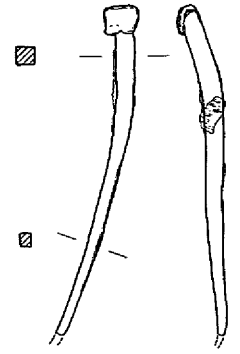
第859図　井戸３（1/30）



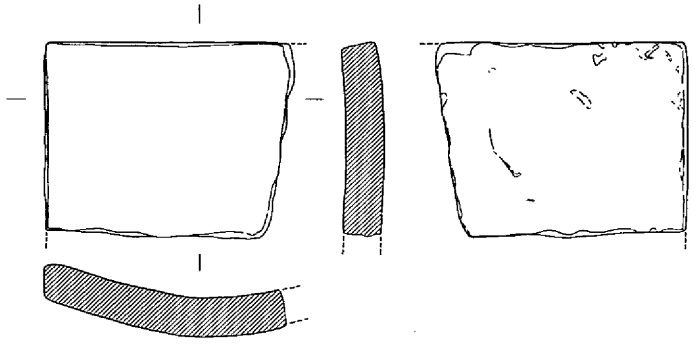
第860図　井戸３　遺物（１）



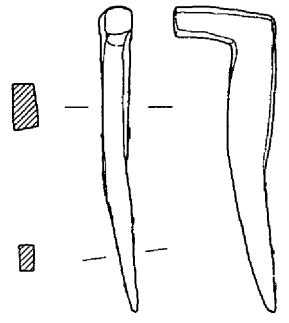
3036



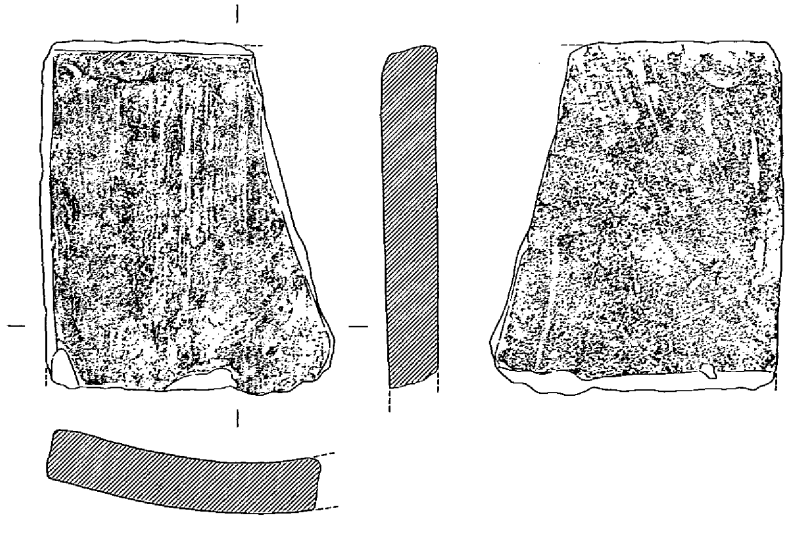
M53



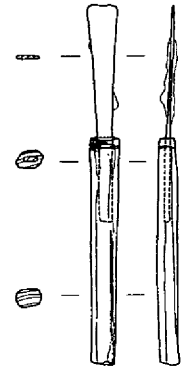
3037



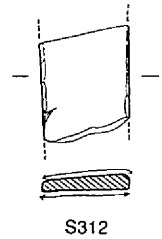
M54



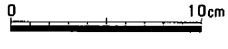
3038

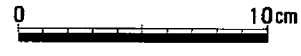


M55

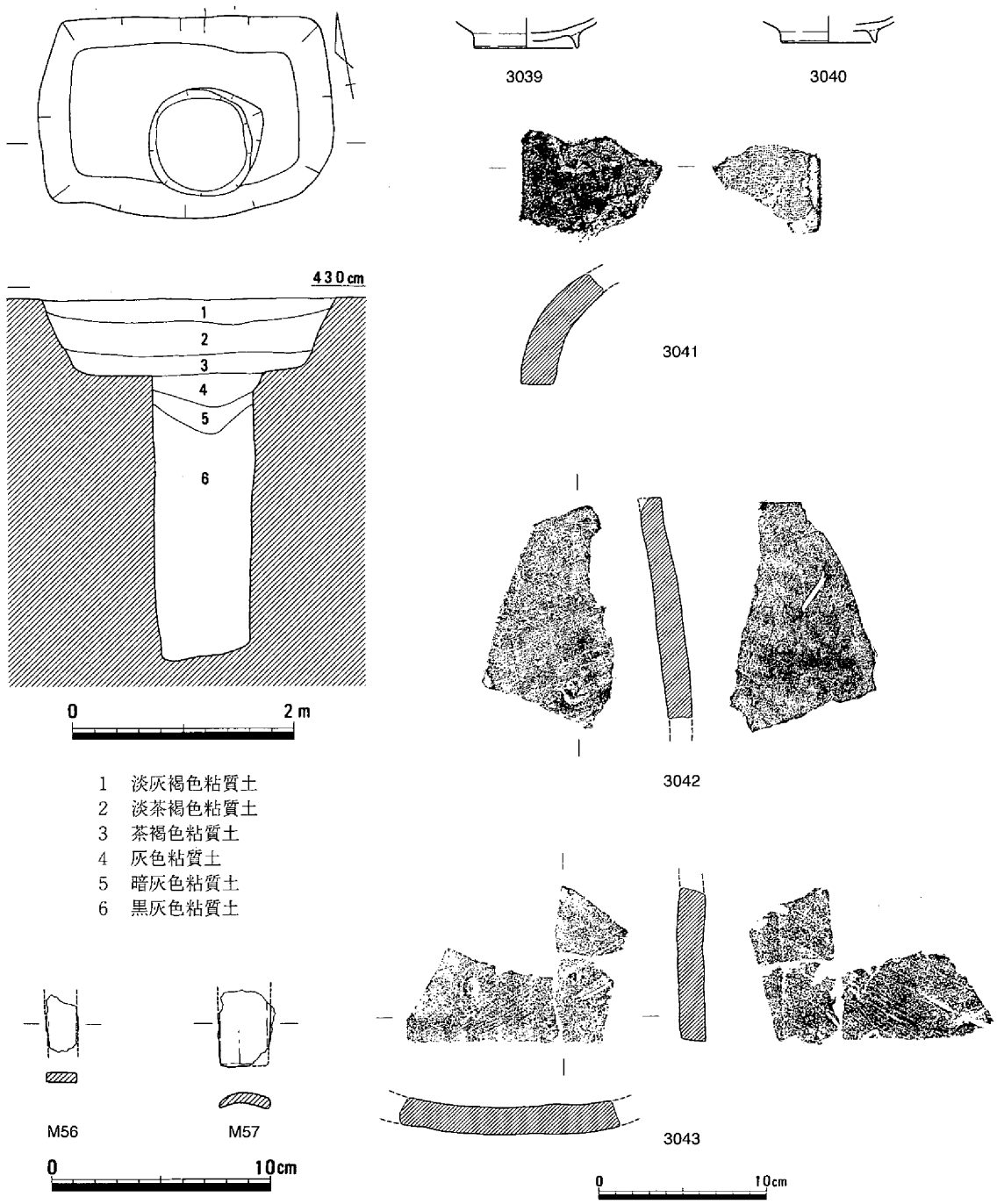


S312





第861図　井戸３　遺物（２）



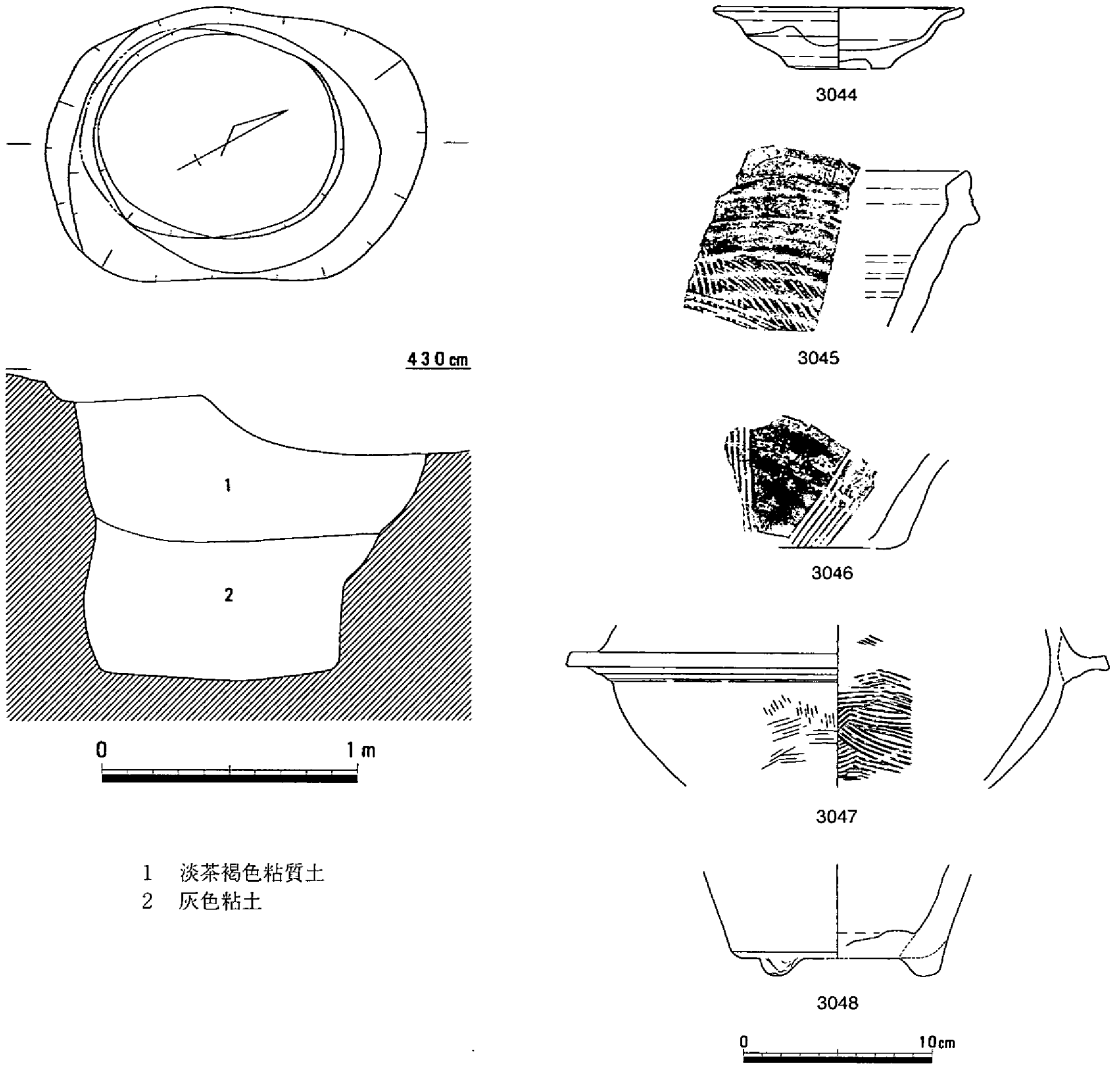
第862図　井戸４（1/60）・遺物

（４）土壙

土壙336（第866図、写真109）

Ｎ21区の南東部の橋脚８調査区に位置する。平面形は、西側が側溝によって切られているため、明確ではないが、本来は不整楕円形を呈していたものと考えられる。深さは、検出面から最大で９cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は黒褐色土混じりの暗緑黄灰色粘質土が一層のみであった。

遺物は、上面から須恵器の杯身と甑が出土している。3063の底部外面調整は、中心までヘラ切りで



1　淡茶褐色粘質土
2　灰色粘土

第863図　井戸５（1/30）・遺物（１）

ある。時期は、奈良時代ではなかろうか。（平井）

土壙337（第867図）

第１微高地のＮ22区中央部に位置する。平面形は約130×110cmの隅丸長方形で、深さは約10cm残存しているのみであった。断面形は皿形で、埋土は炭粒を含む灰色粘土が一層のみであった。

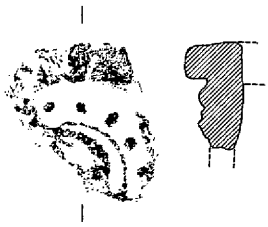
遺物は、少量の土器片が出土している。3065・3066は土師器椀で、杯部外面にはミガキが施されている。3067は鍋で、胴部内外面と口縁部内面は、粗いハケメで仕上げられている。時期は、平安時代末頃と考えている。（平井）

土壙338（第868図）

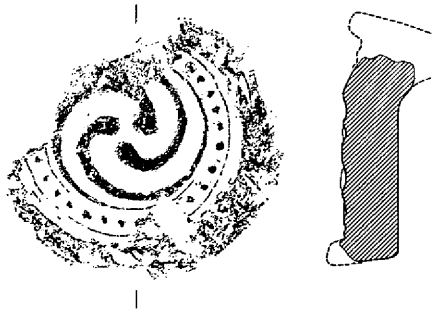
第１微高地のＮ22区北端部に位置する。平面形は長さ約100cm、幅約80cmの楕円形で、深さは７cm残存していたのみである。断面形は皿形で、底面には炭が堆積していた。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は古代ではないかと考えている。（平井）

土壙339（第869・870図、写真37－３）

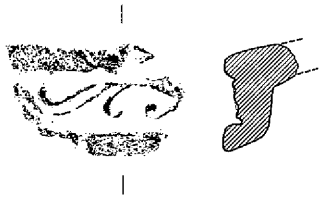
第１微高地のＮ22区、調査区北端部に位置する。平面形は、157×150cmのほぼ正方形で、深さは45cm残存していた。方位に則っており、意識されていたのかもしれない。断面形は逆台形であるが、壁



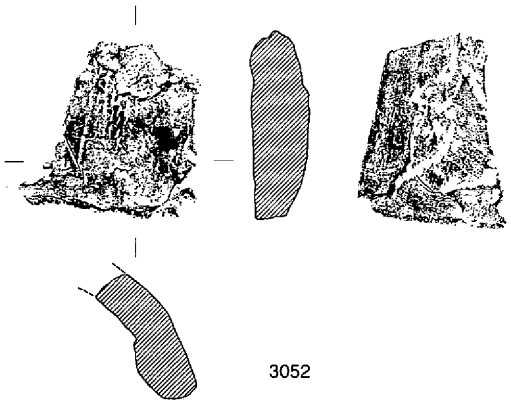
3049



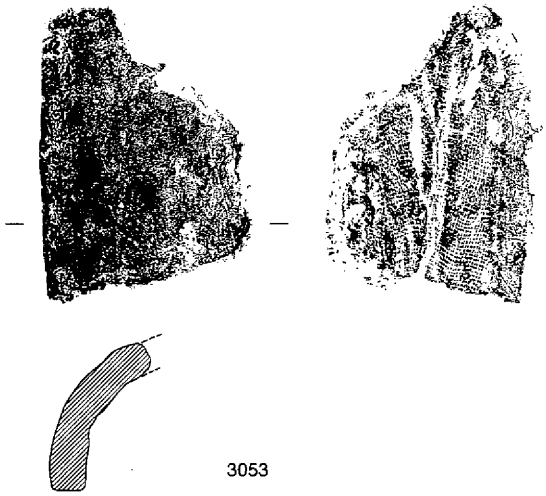
3050



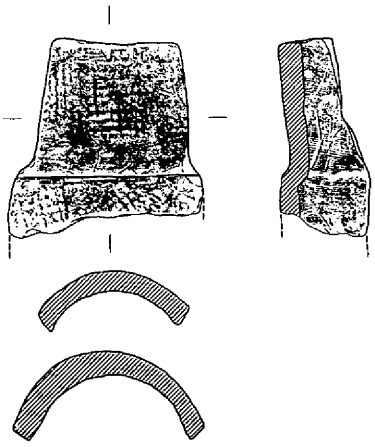
3051



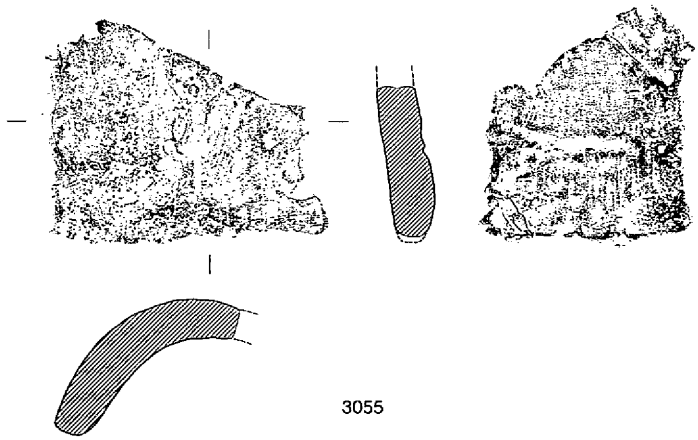
3052



3053



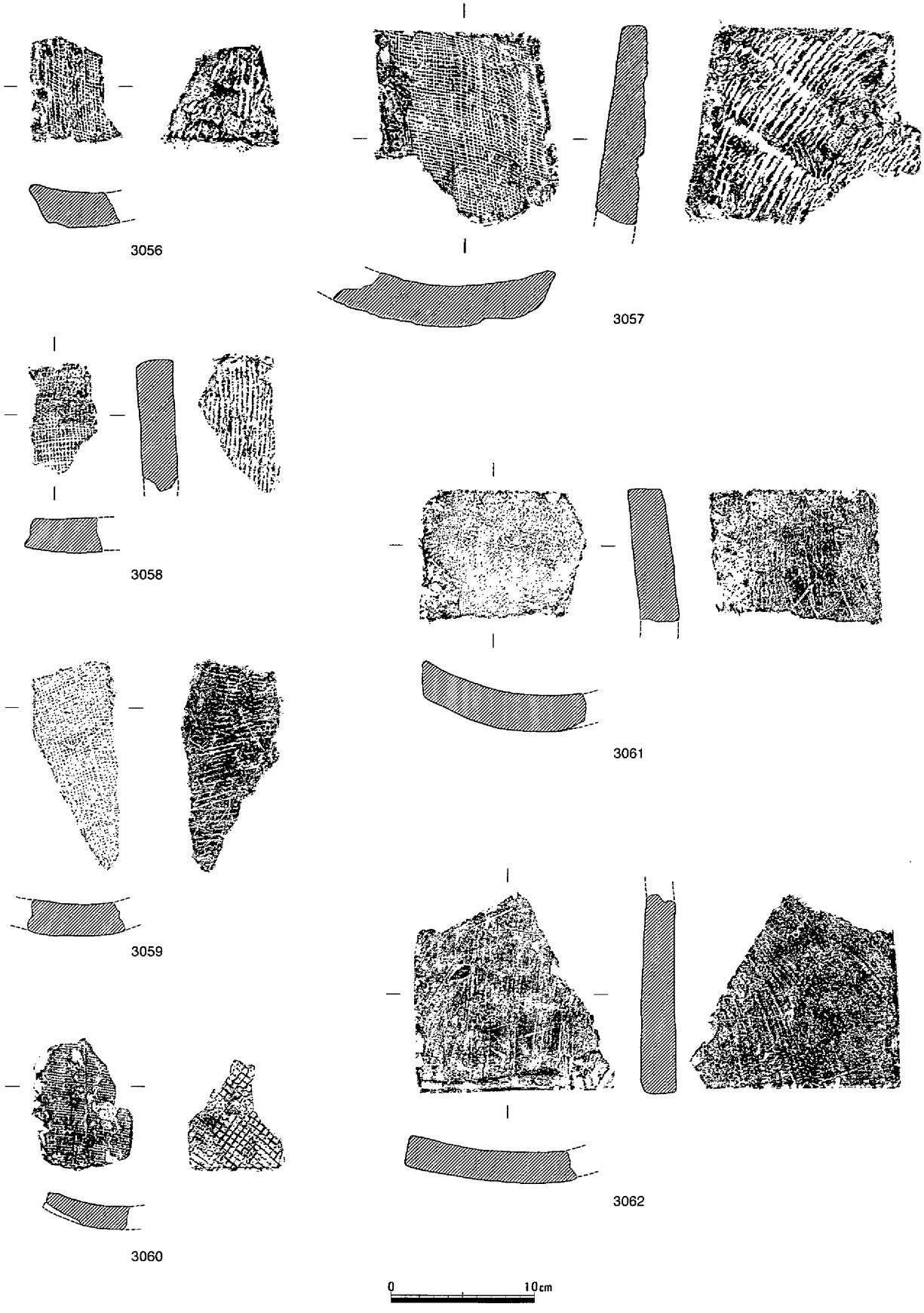
3054



3055

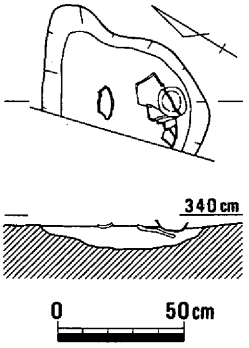
0　10cm

第864図　井戸５　遺物（２）



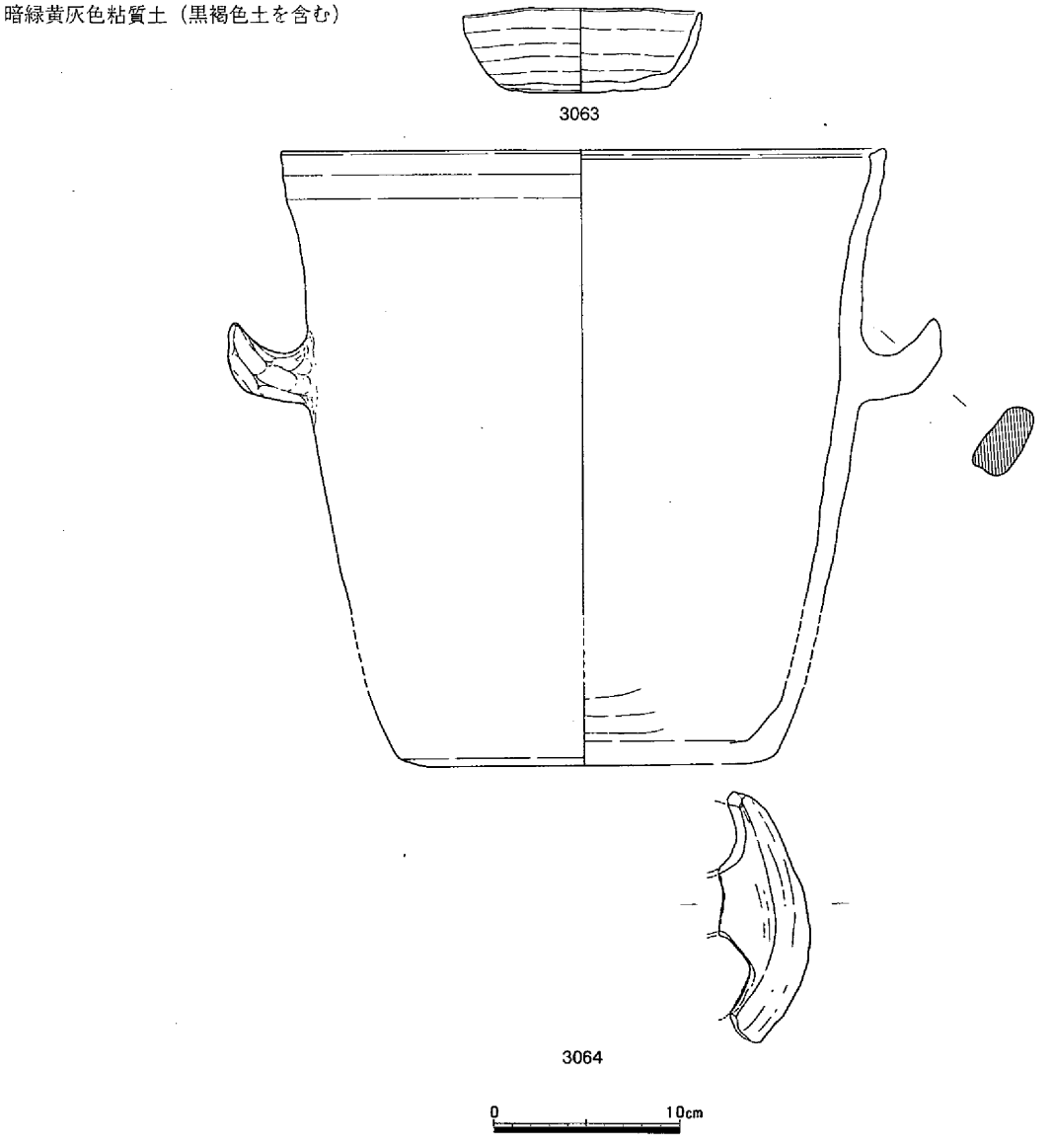
第865図　井戸５　遺物（３）

は垂直に近く立ち上がっていた。埋土はおもに黄灰色微砂で、焼土や灰が少し混じっていた。意識的に埋められた可能性が高いと考えている。底面はほぼ平らである。底面の四隅には、柱穴と考えられる穴が存在していた。柱穴の規模は小さく、直径10～15cmの円形で、深さは６～12cmであった。竪穴住居や掘立柱建物の柱穴に比べて浅いことから、柱穴と考えるには疑問もある。埋土中からは、少量の土器が出土している。3069と同一個体と考えられる須恵器の胴部片は、図示したように西壁際の床面から出土した。3068は須恵器である。小片で、焼成は良くなく、色調は黒灰色である。3069は須恵器甕で、焼成は良好である。3070・3071は土師器杯、3072は土師器皿である。いずれも底部外面の調整は、周縁がヘラ切りで、中央部が指オサエ、ナデである。内外面とも焼成後ベンガラが塗られている。土器の時期は、10世紀前葉頃ではなかろうか。S313は砥石である。（平井）

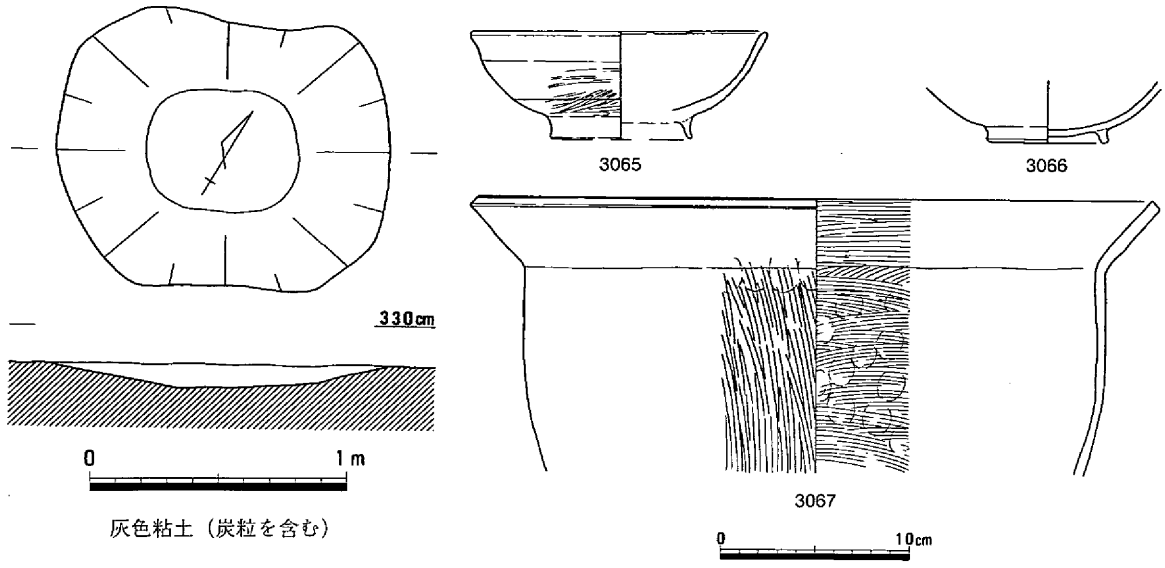


土壙340（第871図）

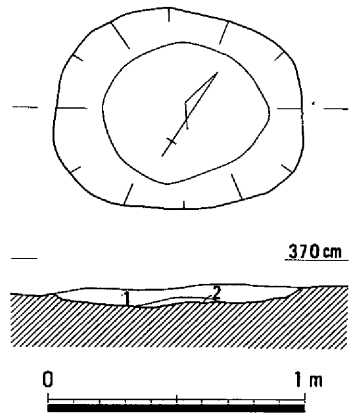
第１微高地のN22区、土壙339の東約７ｍに位置する。図示したように



第866図　土壙336（1/30）・遺物



第867図　土壙337（1/30）・遺物



1　褐灰色微砂（炭・焼土を多く含む）
2　炭

第868図　土壙338（1/30）

二つの土壙が切り合っている可能性が高い。3073は図の1層から出土した須恵器杯蓋で、奈良時代であろう。2層は埋土の特徴から、古墳時代後期の可能性がある。　（平井）

土壙341（第872図）

N22区の北東部で古代の遺構と考えられる土壙や柱穴の密集が認められた。一隅には建物も検出され、屋敷地の中に含まれていたものとみられる。土壙341はこの一画の西端に位置していた。平面形は円形に近く、長径が79cm、短径は76cm、深さが14cmを測った。底面は明瞭ではなく、断面形は椀形に近かった。土器片が少量出土した。　（岡本）

土壙342（第873図）

土壙341のすぐ北東側に位置していた。平面形は楕円形で、長径が125cm、短径は95cm、深さは14cmを測った。底面は広く平坦で、断面形は皿形を呈していた。埋土は1層で、土壙341と類似していた。土器片が少量出土した。　（岡本）

土壙343（第874図）

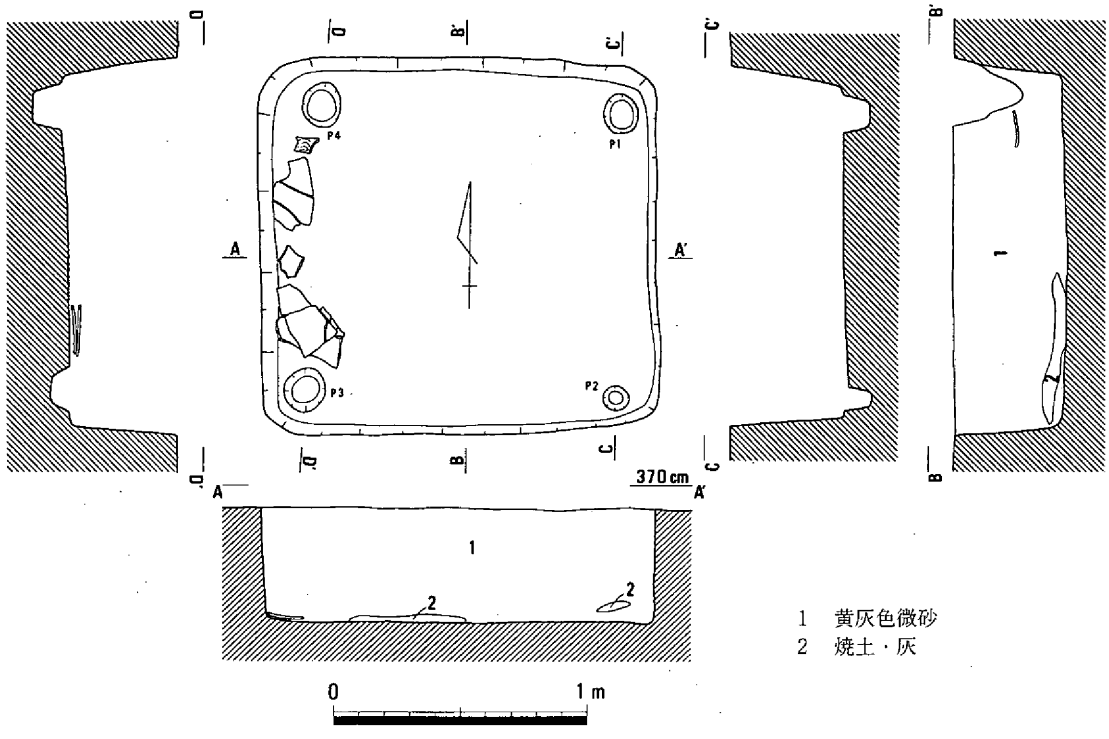
土壙342の1m北、建物7のすぐ東に検出された。大形の土壙だが、調査区の端部にあったため全形は不明である。平面形は楕円形をなすと推定される。残存部分の長径は185cmであった。底面は広かったが、水平ではなく、軽い段をもち、最深で17cmを測った。土器片が少量出土した。　（岡本）

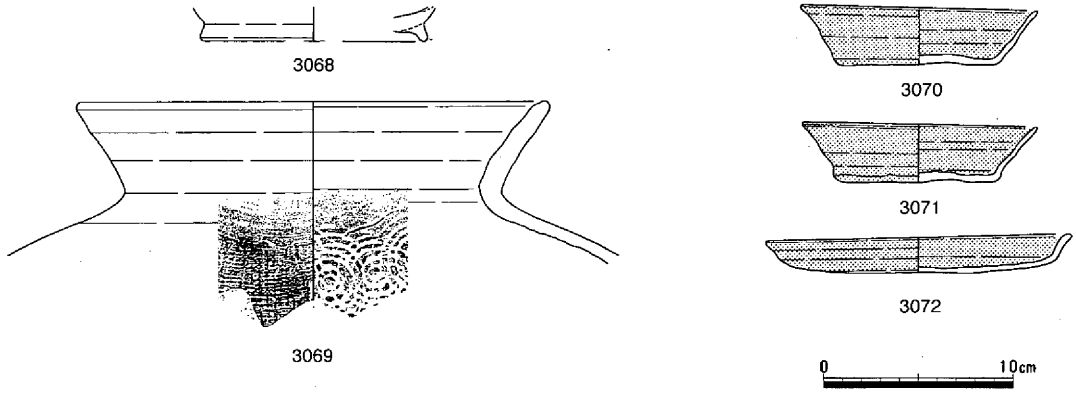
土壙344（第875図）

N22区北東部の土壙・柱穴群の南端に位置していた。平面形は楕円形で、長径が78cm、短径は67cm、深さが28cmであった。底面はほぼ平坦だが狭く、断面形は椀形に近かった。埋土は2層に分かれ、上層には炭粒や焼土塊が点々と含まれていた。土器片も少量出土した。　（岡本）

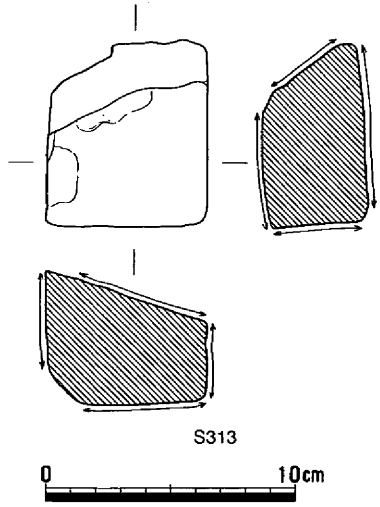
土壙345（第876図）

建物7の東5.5mで検出された。土壙の形状は細長く、溝状を呈していた。壙壁の傾斜は急で、底





第869図　土壙339（1/30）・遺物（１）

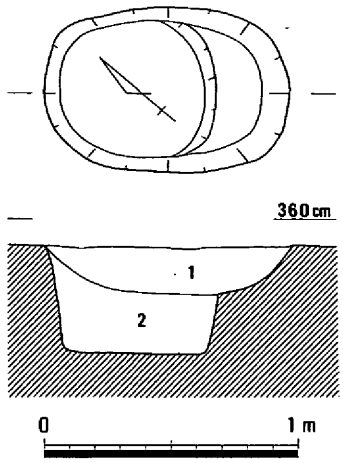


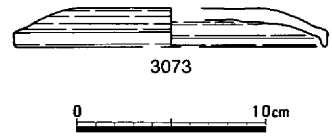
第870図　土壙339遺物（２）

面は中央部が窪んでいたため、断面形はU字状になっていた。長さが227cm、幅は48cm、深さは34cmを測った。埋土は３層に分けられ、水平に近く堆積し、上・中層には炭粒が少量含まれていた。土器片がいくらか出土し、平安時代のものとみられる土器もあった。（岡本）

土壙346（第877図）

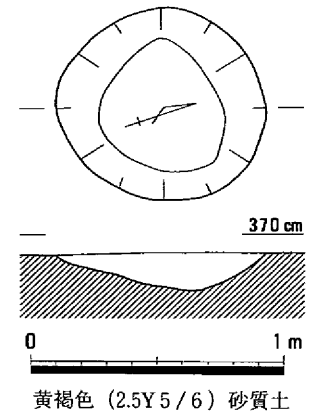
土壙345の北東側に近接して位置し、両端の距離は50cmにすぎない。形態や埋土の状態は土壙345とほぼ等しいが、端部の形状や長軸の方向は少し異なっていた。長径は211cm、短径が49cm、深さは29cmを測った。出土土器の3074は





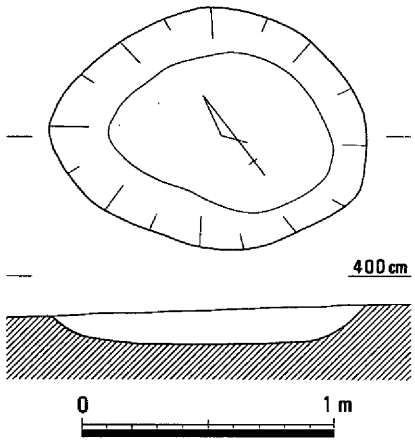
1　褐灰色砂質土
2　暗灰色砂質土

第871図　土壙340（1/30）・遺物



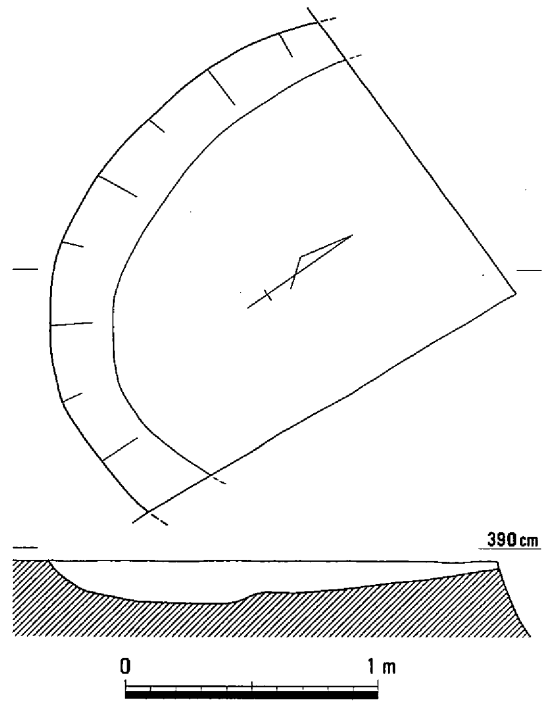
黄褐色（2.5Y5/6）砂質土

第872図　土壙341（1/30）



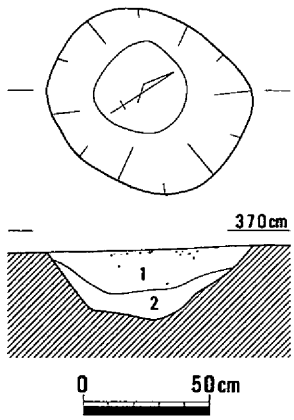
にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土

第873図　土壙342（1/30）



暗褐色（10YR3/4）砂質土

第874図　土壙343（1/30）



1　褐色（10YR4/6）粘性砂質土
（上部に炭を含む・まばらに焼土を含む）
2　褐色（10YR4/4）粘性砂質土

第875図　土壙344（1/30）

内外面丹塗りの杯で平安時代前葉のものとみられる。土壙345と346は共存していたと考えられる。　（岡本）

土壙347（第878図）

土壙346の南5mで検出された。平面形は楕円形で、長径が82cm、短径は64cm、深さは20cmを測った。底面はほぼ平坦であったが、南半が一段落ちていた。断面形は台形に近かった。埋土は1層だった。　（岡本）

土壙348（第879図）

土壙346の東3mにあった。平面形は楕円形を呈し、

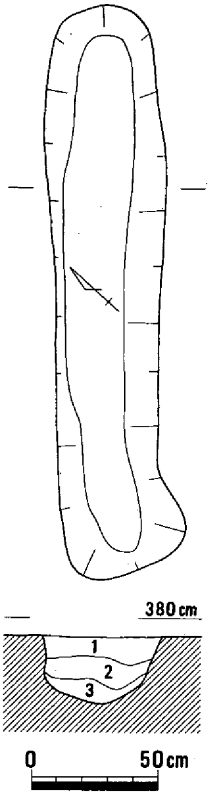
長径が147cm、短径は119cmと、やや大形の土壙であった。深さは25cmを測った。底面は平坦で、断面形は皿形をしていた。埋土は２層で、レンズ状の堆積を示していた。下層は微砂層であった。土器片が少量出土した。　（岡本）

土壙349（第880図）

土壙348のすぐ北に接するように位置していた。調査区の端に位置していたため、一部の検出にとどまり、全形は不明である。楕円形の平面形が推定され、残存部の最大長径が96cm、深さは11cmを測った。土器片が少量出土した。　（岡本）

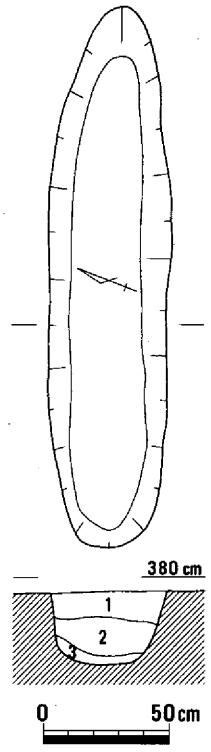
土壙350（第881図）

N22区北東部の土壙・柱穴群の東端に位置していた。調査区の端部で検出

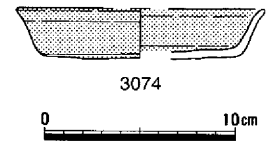


1　灰黄褐色（10YR２/３）粘性砂質土
2　にぶい黄褐色（10YR５/４）砂質土（炭粒を少し含む）
3　にぶい黄褐色（10YR５/３）粘性砂質土

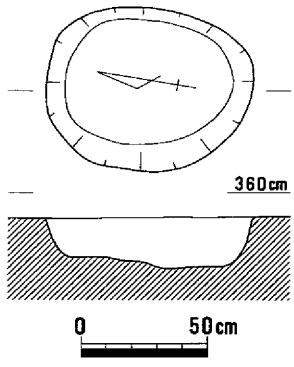
第876図　土壙345（1/30）



1　灰黄褐色（10YR４/２）粘性砂質土（炭粒をわずかに含む）
2　にぶい黄褐色（10YR５/４）粘性砂質土（炭粒をわずかに含む）
3　にぶい黄褐色（10YR５/３）砂質土

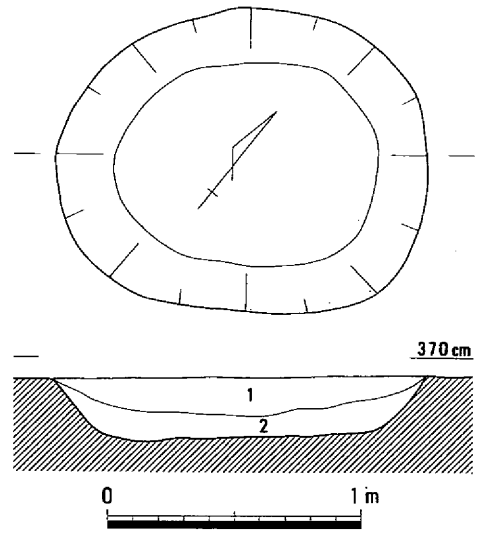


第877図　土壙346（1/30）・遺物



褐色（10YR４/４）砂質土

第878図　土壙347（1/30）



1　黄褐色（10YR５/６）砂質土
2　黄褐色（10YR５/６）微砂

第879図　土壙348（1/30）

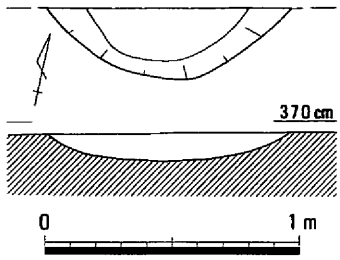
されたために一部は不明瞭であったが、底面の形状から不整形な長楕円形の平面形をもっていたものと推定される。残存部の長径が192cm、短径は151cm、深さは37cmを測った。底面はほぼ平坦で、断面形は台形を呈していた。埋土は2層に分けられ、いずれの土も粘性は低かった。上層はレンズ状の堆積を示していた。平安時代前葉の須恵器の杯3075が土壙の上面から出土した。　（岡本）

土壙351（第882図）

M23区の南西隅、微高地の端部にあった。小調査区の端部で検出したため、一部の検出にとどまり、全容は不明である。残存長径は127cmで、土壙とすれば大形である。断面形は皿状を呈していた。深さは19cmだった。土器片が少量出土した。　（岡本）

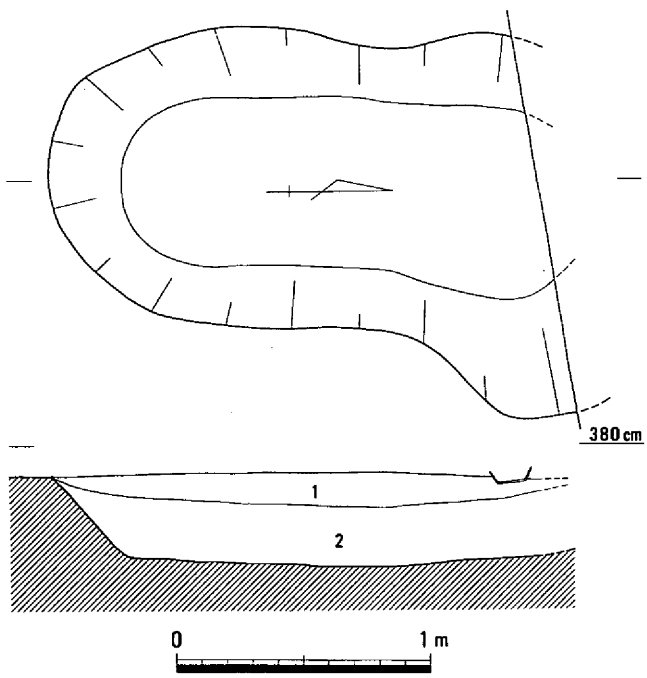
土壙352（第883図）

土壙351のすぐ東にあり、低位部との境界に接していた。小調査区の端部で一部を検出したのみで、その

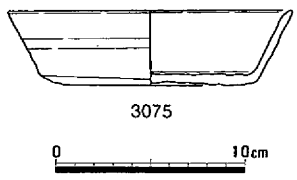


にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土

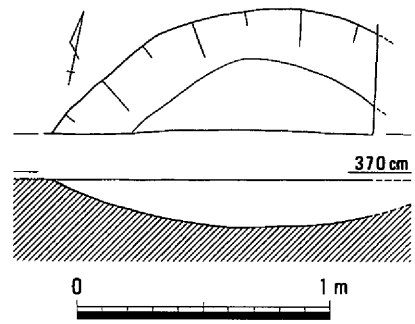
第880図　土壙349（1/30）



1　褐色（10YR4/6）砂質土（マンガンを多く含む）
2　上部は灰オリーブ色（5Y5/3）粘性砂質土
　　下部は暗オリーブ色（5Y4/4）粘性砂質土

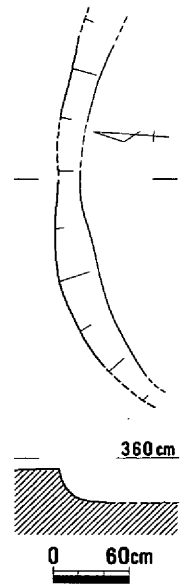


第881図　土壙350（1/30）・遺物



オリーブ褐色（2.5Y4/6）砂質土

第882図　土壙351（1/30）



第883図　土壙352（1/60）

位置からすると微高地端部の肩の窪みの可能性も否定できない。壙壁の傾斜は急で、深さは28cmを測った。残存部の長径は270cmであった。土器片が少量出土した。（岡本）

土壙353（第884図）

土壙353は、第1微高地の北東端に近い低位部に位置する。平面は円形で、径72cmを測る。埋土中に焼土塊が含まれている。出土遺物は須恵器の小片が認められるだけで、詳細な時期は不明であるが、遺構の時期は古代におさまると考えたい。（柴田）

土壙354（第885図）

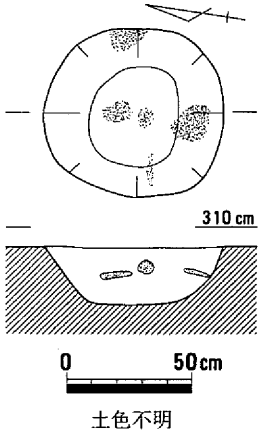
土壙354は、第1微高地の北東端に近い低位部に位置する。平面は75×38cmの楕円形で、非常に浅く残っているだけである。壁面は部分的に熱を受けており、埋土中に炭が含まれている。出土遺物は認められないが、古代におさまると考えたい。（柴田）

土壙355（第886図）

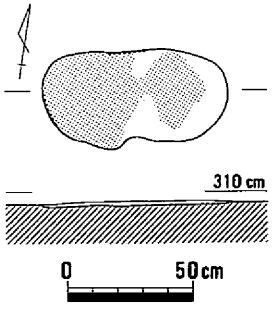
土壙355は、第1微高地の北東端に近い低位部に位置する。土壙354と重なっており、それに切られている。平面は不整形で、床面は中央が円形にくぼんでいる。出土遺物は認められないが、遺構の時期は古代におさまると考えたい。（柴田）

土壙356（第887図）

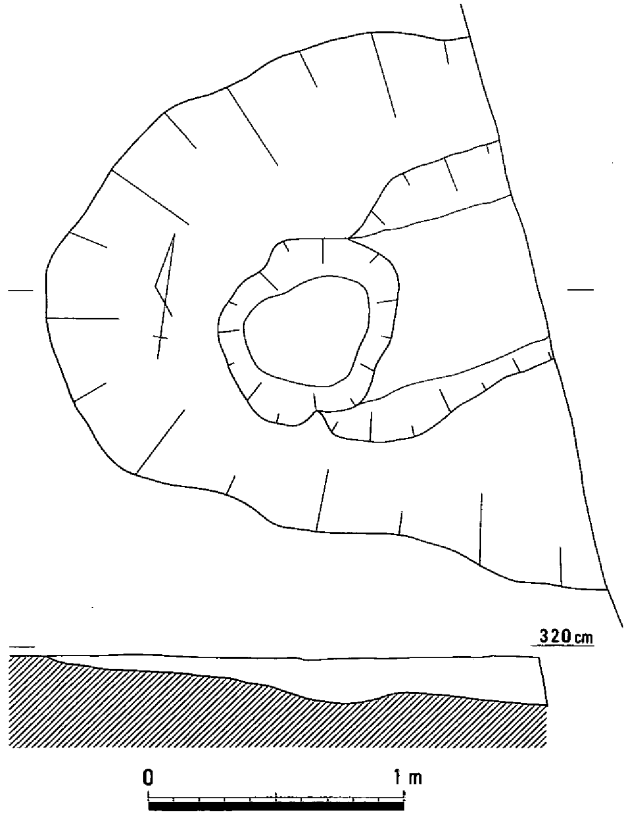
N23区の北東隅、畑1の微高地部の一隅にあった。土壙の西側の低位部は弥生時代以来のものであ



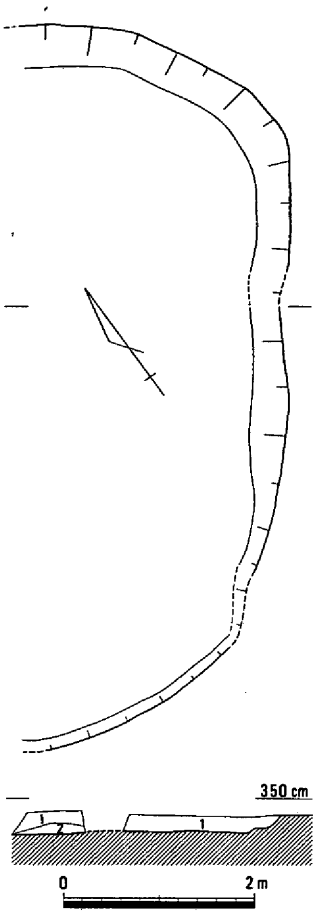
第884図　土壙353（1/30）

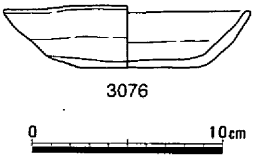


第885図　土壙354（1/30）



第886図　土壙355（1/30）





1　灰黄褐色（10YR5/2）粘性砂質土
2　暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘性砂質土

第887図　土壙356（1/80）・遺物

ることから、畑の微高地を削平して造られたものと考えられる。土壙は不整な楕円形を半裁した形状で、長径が765cm、幅は276cm、深さが24cmを測った。壙壁には段が認められ、底面は平坦であった。畑の一部であった可能性もある。3076は土師器の杯で、平安時代後葉のものとみられる。　（岡本）

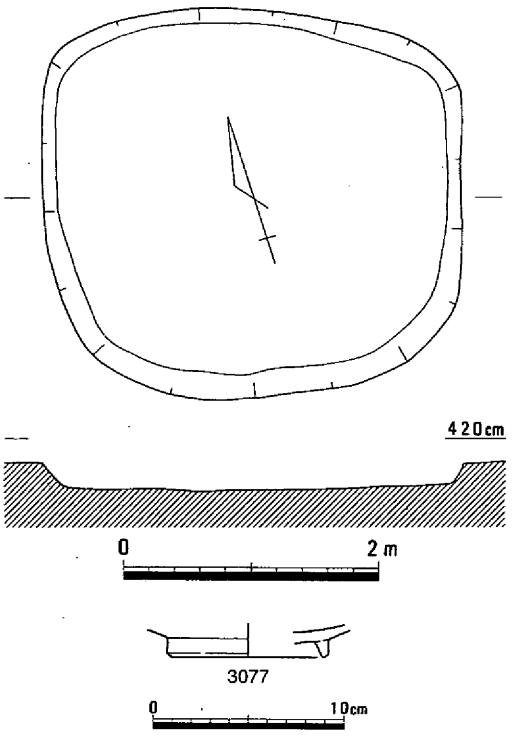
土壙357（第888図）

自動車道本線から南にのびる調査区、N23$_{05}$区に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、1辺が160cm前後を測るが、深さは10cm程とかなり浅い土壙である。

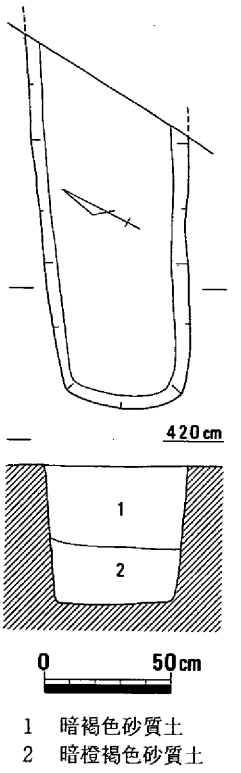
遺物はごくわずかしかみられなかった。3077は東海産灰釉陶器の椀の底部片である。つけ掛け釉で、外面はナデて仕上げる。高台はやや鈍い台形を呈する。O－53号窯式に相当するとみられ、時期は10世紀前半である。　（弘田）

土壙358（第889図）

先の土壙357の南東10mの所に位置する。長さは150cm以上で調査区外に続き、幅は60cmを測る溝状の土壙である。深さは54cmで、壁面



第888図　土壙357（1/60）・遺物



1　暗褐色砂質土
2　暗橙褐色砂質土

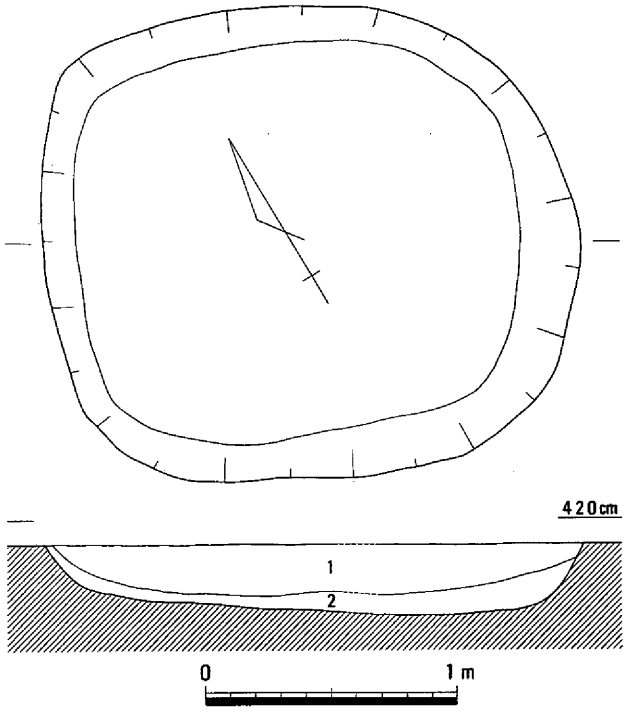
第889図　土壙358（1/30）

は垂直に近く立つ。

図示できる遺物はないが、時期は古代と考えている。　（弘田）

土壙359（第890図、写真109）

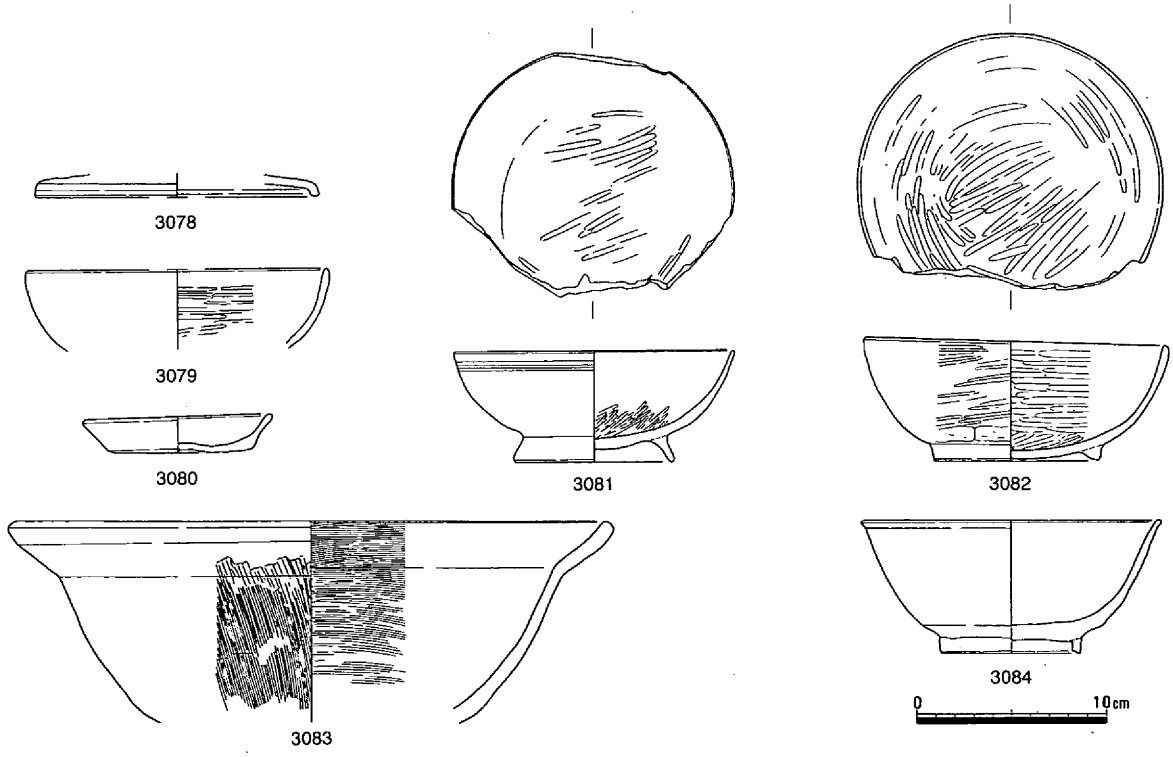
自動車道本線から南にのびる調査区、N23区に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、１辺が200cm前後を測るが、深さは30cm程と浅い土壙である。



1　淡茶灰色粘質微砂（黄色ブロックを含む）
2　灰茶色粘質微砂

出土した土器類には須恵器、土師器、黒色土器、緑釉陶器がある。土師器椀3079には内面にヘラミガキがみられ、皿3080では底部外面にヘラ切りが認められる。黒色土器3081・3082はいわゆる内黒の椀である。3081は高台が高く当地域の土師器と器形が変わらない。一方の3082は畿内系Ｂ類の模倣と思われ、時期は10世紀中葉から後葉と考えられる。また、緑釉陶器椀3084は濃緑色を呈し、有段輪高台で高台内は無釉かつ三叉トチンを用いるなど近江産の特徴を持つ。時期は、10世紀の第三四半期である。

以上この土壙の出土遺物は、須恵器蓋3078が混入と思われるほかは、当地域における10世紀後半の器種組成の一端を示していると思われる。　（弘田）



第890図　土壙359（1/30）・遺物

土壙360（第891図）

Ｍｆ23$_{05}$区の南東端にある平面形が不整形を呈する土壙で、長さが150cm、幅は100cmを測る。図示できる遺物はないが、時期は古代を考えている。（弘田）

土壙361（第892図、写真109）

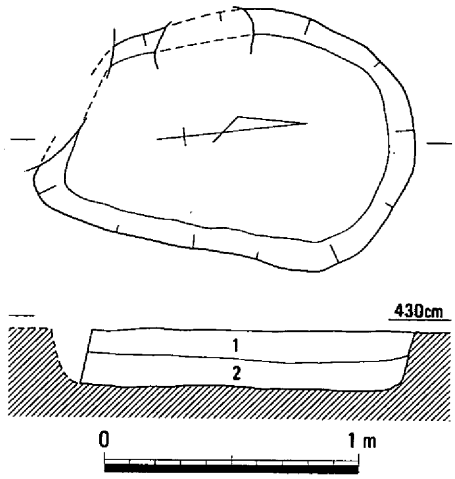
Ｍｆ24区の南西隅に位置する。長さは190cm、幅が77cmで、平面形が長方形を呈する土壙である。遺物は須恵器の杯Ｂが１点出土している。時期は７世紀中葉から後半であろう。（弘田）

土壙362（土壙893図）

Ｎ23区の北東に位置する土壙で、土壙361の南16.5ｍで検出した。東半を確認できなかったが、径95cmの円形をなすものと推定される。遺物は出土していないが、古墳時代の竪穴住居66を切り、なおかつ上部に中世水田が広がっている状況から、古代に属するものと思われる。（亀山）

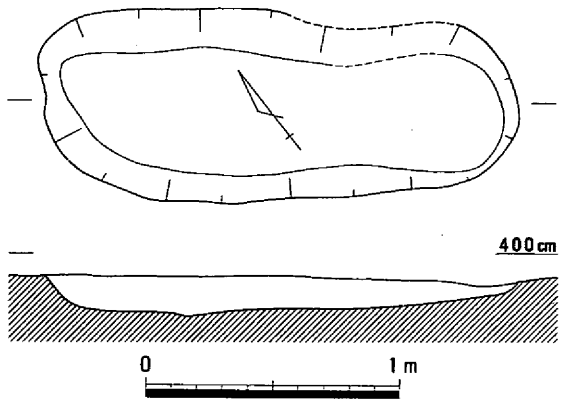
土壙363（第894図）

土壙363は、第２微高地の中央南端に位置する溝状の土壙である。平面は長楕円形で、長軸はほぼ東西方向である。規模は200×22cmを測り、断面は皿状を呈する。出土遺物には、土師器皿の小片が認められ、遺構の時期は古代と思われる。（柴田）

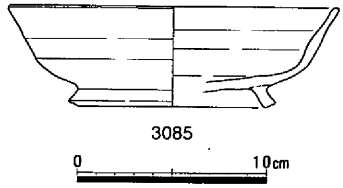


1　暗灰色砂質土
2　褐灰色砂質土

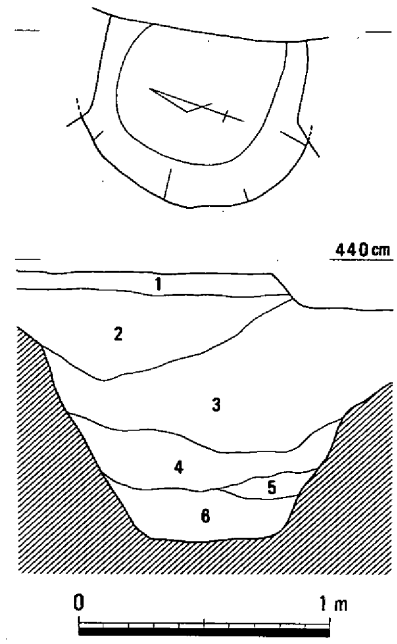
第891図　土壙360（1/30）



暗褐色微砂混じり粘土（土器・炭を若干含む）



第892図　土壙361（1/30）・遺物



1　明灰色粘質土（中世水田層）
2　褐灰色微砂
3　明褐色細砂
4　暗灰褐色微砂
5　黄褐色粘土
6　茶褐色粘土混じり微砂

第893図　土壙362（1/30）

土壙364（第895図）

土壙364は、第２微高地の中央南端に位置する。遺構の南側大半は調査区外である。平面は長方形と推定され、長さは164cm以上になると思われる。出土遺物には、土師器皿3086が認められ、図示していないが、他にも須恵器の小片が出土している。

遺物などから、遺構の時期は平安時代におさまると思われる。（柴田）

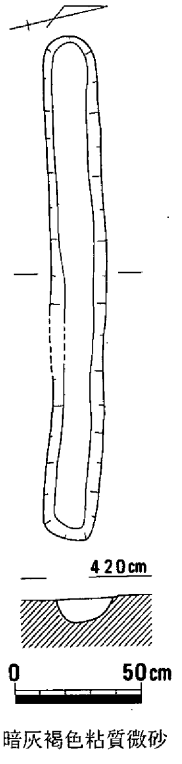
土壙365（第896図）

土壙365は、第２微高地の中央南端に位置する大形の土壙である。遺構の南側大半は調査区外である。平面は長方形で、長さは294cm以上になると思われる。埋土はレンズ状堆積を呈する。出土遺物は図示していないが、黒色土器椀や須恵器の小片などが認められる。

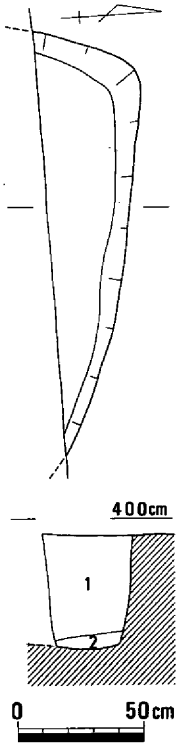
遺物などから、遺構の時期は平安時代におさまると思われる。（柴田）

土壙366（第897図）

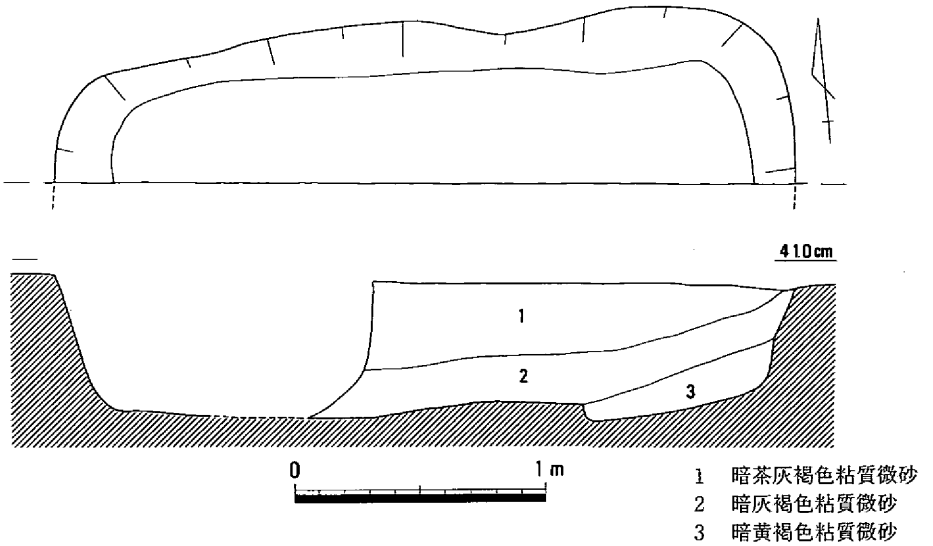
土壙366は、第２微高地の中央南端、土壙364の東に隣接する。遺構の南側大半は調査区外である。平面は楕円形と推定され、長さは210cm以上になると思われる。埋土の下層は水平堆積を呈すると思われる。



第894図　土壙363（1/30）



第895図　土壙364（1/30）・遺物



第896図　土壙365（1/30）

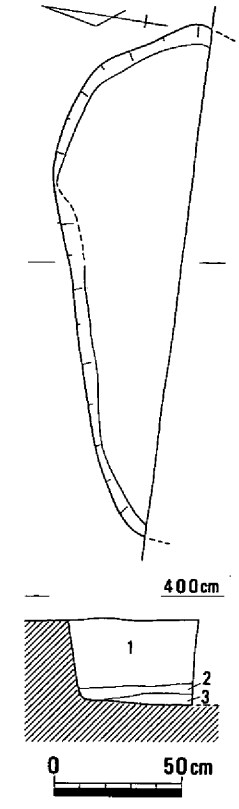
出土遺物は認められないが、遺構の時期は古代におさまると考えたい。（柴田）

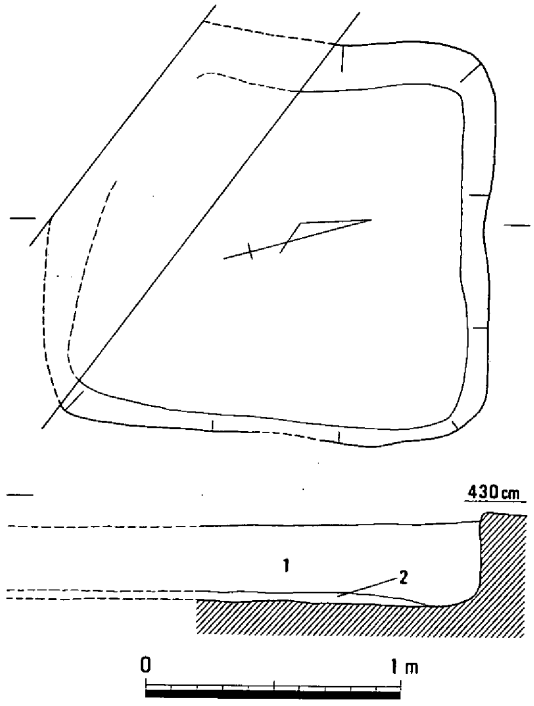
土壙367（第898図）

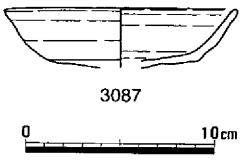
掘立柱建物10の南東25mに位置する。後述する溝46と方位をともにする平面方形の土壙で、南西部は不明である。規模は175×160cm、深さ38cmを測る。主軸はほぼ南北方向に向く。壁はほぼ垂直に下がり、底部は平坦である。埋土は2層からなり、大半が第1層の暗茶灰色粘質砂で覆われていた。土壙からは土師器の杯3087をはじめ、鞴の羽口C136・137、不明鉄製品M58、釘M59などが出土している。C136は径5.8cmに径2cmの送風孔があけられている。平安時代の範疇のものであろう。（江見）

土壙368（第899図、写真109）

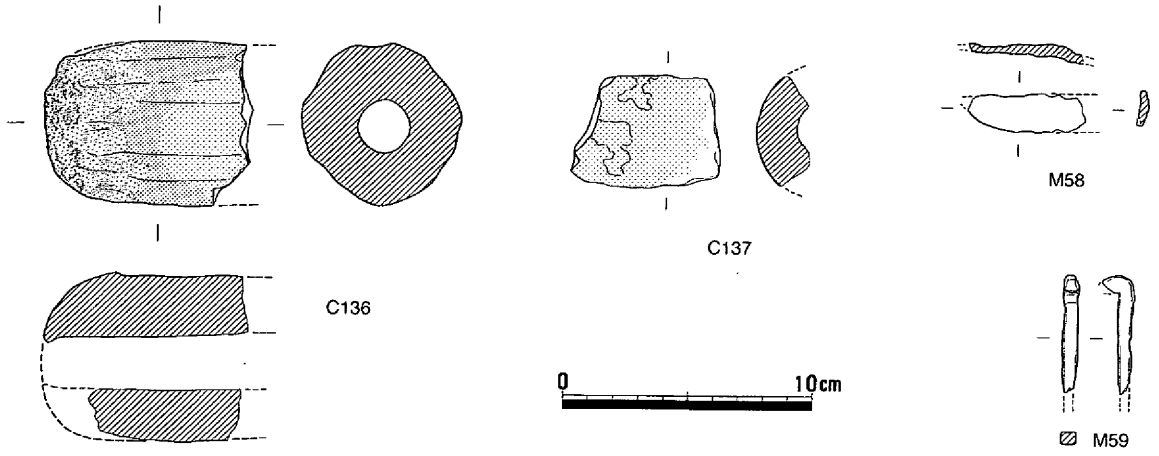
土壙367の北3mから検出された平面隅丸方形の土壙である。規模は92×78cm、深さ37cmを測る。主軸はほぼ南北方向を向く。壁はほぼ垂直に下がり、







第897図　土壙366（1/30）

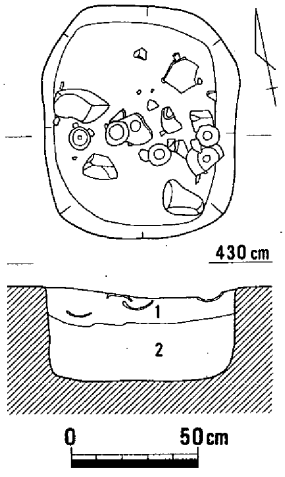


第898図　土壙367（1/30）・遺物

底部は平坦である。埋土は２層からなり、上層には炭粒の混入が認められた。遺物は第１層から20cm大の礫とともに椀3088～3091、小皿3092～3096などが出土している。椀は体部が深い3088、浅く口縁が直線的に延びる3090、内黒の黒色土器3091などがあり、3088の内外面はヘラミガキが施されている。小皿は口径9.3～9.9cm、器高1.8～2.3cmを測る。平瓦3097も出土している。これら遺物の特徴から当土壙は平安時代のものと考えられる。（江見）

土壙369（第900図）

土壙367の東４ｍの位置から検出された平面方形の土壙である。主軸はほぼ南北に向き、規模は191×158cm、深さ24cmを測る。壁はやや斜めに下がり、底部はやや凹凸がある。底部南西には深さ約５cmの窪みがある。出土した土器細片3098・3099は平安時代の範疇のものであろう。（江見）



1　暗茶灰色粘質砂（炭を含む）
2　暗茶褐色粘質砂

土壙370（第901図）

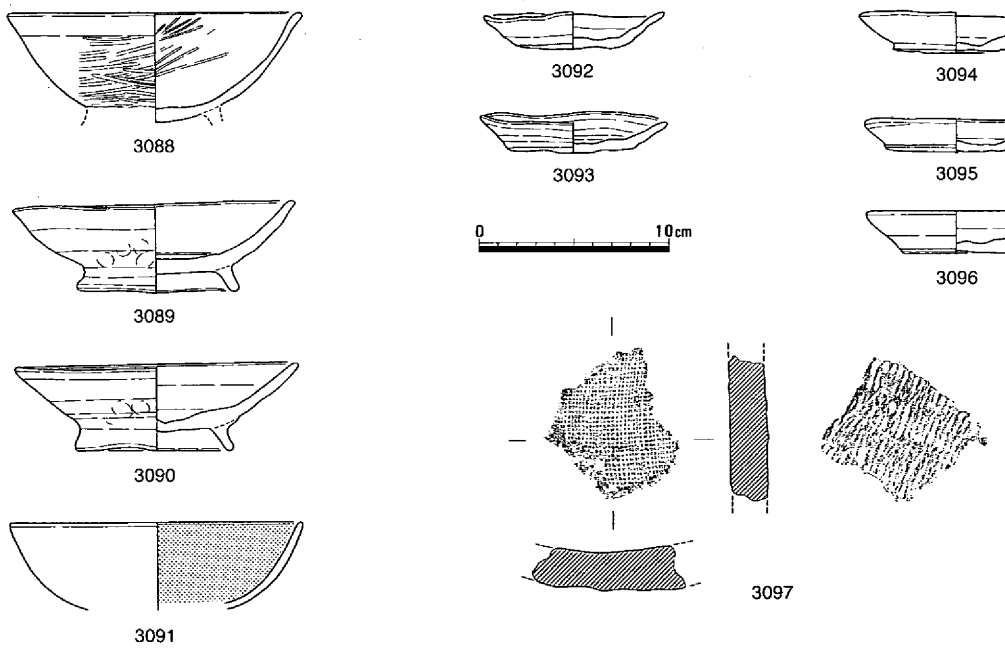
土壙369の北東７ｍから検出された平面楕円形の土壙である。規模は108×88cm、深さ12cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は褐灰色砂質土であった。遺物は須恵器片ほか土器細片が出土している。遺物の特徴から当土壙は古代の範疇のものと判断された。（江見）

土壙371（第902図）

土壙370の南４ｍから検出された平面不整楕円形の浅い土壙である。規模は90×78cm、深さ９cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は暗灰色砂質土であった。平安時代の須恵器片が出土している。（江見）

土壙372（第903図、写真109）

土壙371の南に接して検出された窪地状の土壙である。平面不整楕円形を呈し、規模は394×282cm、深さcmを測る。断面は皿状を呈し、東部にやや窪む箇所がある。埋土の暗灰色砂質土には炭粒が多く含ま



第899図　土壙368（1/30）・遺物

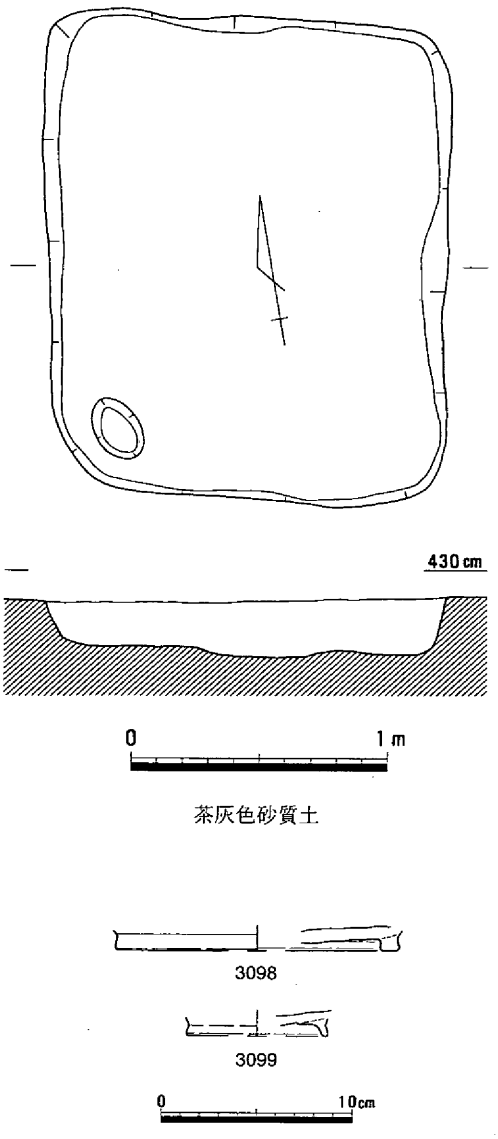
れていた。遺物は土壙北西部から緑釉陶器の輪花椀3100をはじめ、土師器椀3101、杯3102、皿3103、内黒の黒色土器椀3105～3110、釘M60などが出土している。3100は素地が浅黄燈色で、釉は濃緑色を呈し、焼成良好な破片である。黒色土器の底径は6.4～8.4cmを測り比較的大形なものも含まれている。遺物はいずれも平安時代の範疇のものであろう。（江見）

土壙373（第904図）

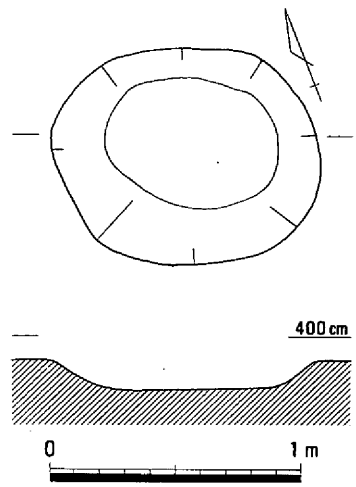
土壙372の東３ｍから検出された平面不整方形を呈す土壙で、南半部は用地外に延びる。推定規模185×134cm、深さ16cmを測る。壁はほぼ垂直に下がり、埋土は炭が僅かに混じる茶灰色粘質砂であった。遺物は平安時代と思われる土器細片が出土している。（江見）

土壙374（第905図）

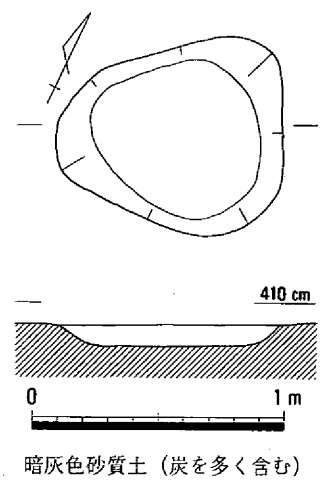
土壙370の西３ｍから検出された。平面楕円形を呈し、規模は104×89cm、深さ28cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は土壙372と同様の暗灰色砂質土であった。遺物は僅かであるが平安時代に属すと思われる土器細片が出土している。（江見）



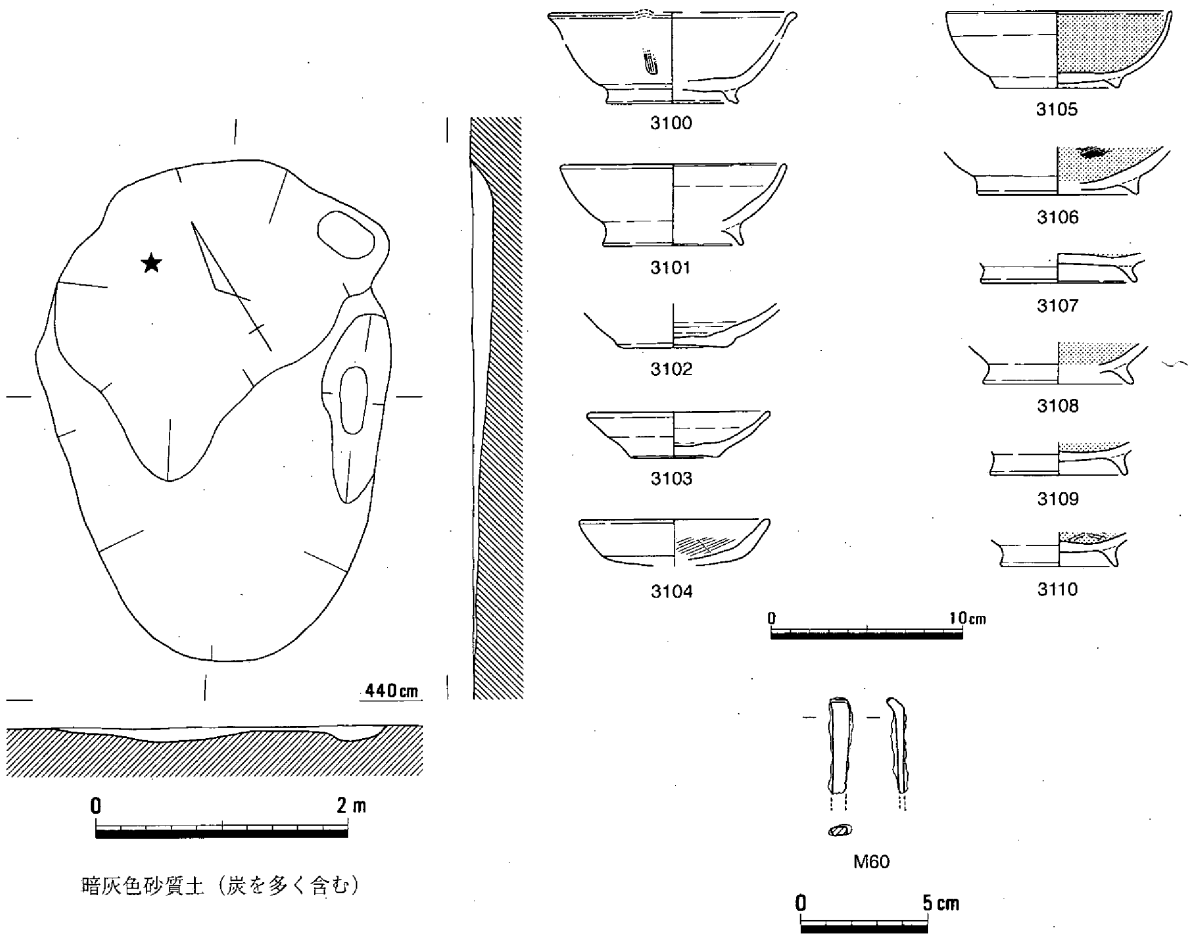
第900図　土壙369（1/30）・遺物



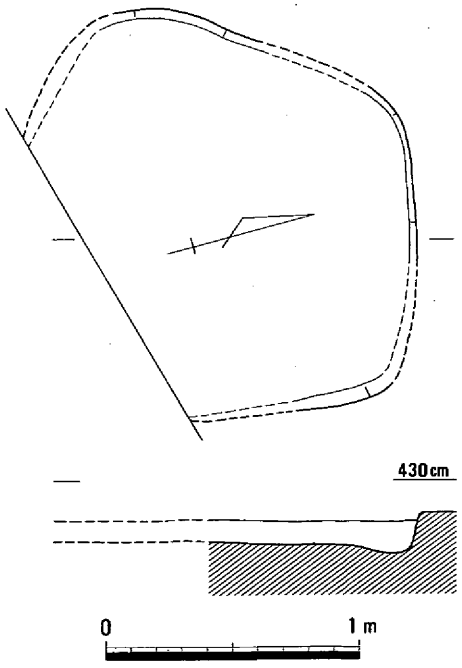
第901図　土壙370（1/30）



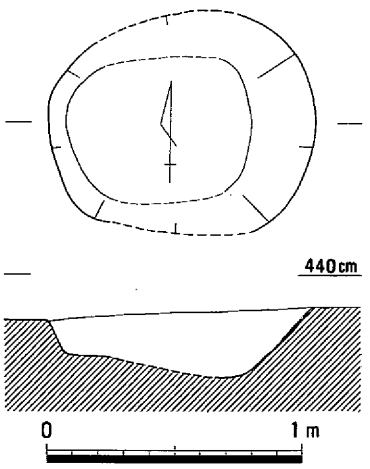
第902図　土壙371（1/30）



第903図　土壙372（1/60）・遺物



第904図　土壙373（1/30）



第905図　土壙374（1/30）

土壙375（第906～911図、写真38、110～112）

いわゆる「梵鐘鋳造遺構」と考えている土壙である。

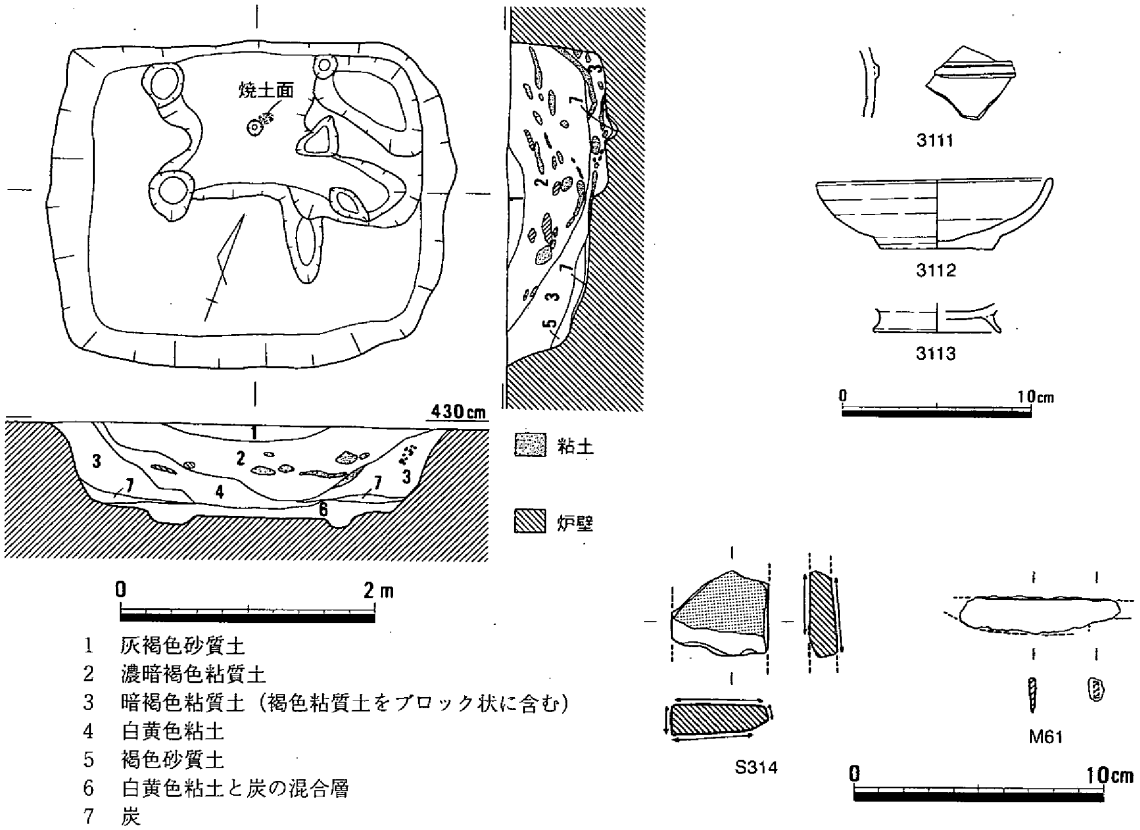
第２微高地のM24区、中央南端部に位置する。検出できた平面形は、長さ318cm、幅260cmの長方形で、深さは底面まで63cm残存していた。検出面は、ほぼ現在の水田耕作土を除去した面であり、50cm以上の削平を考える必要はないと思われるため、本来の平面的な規模については、長方形という形状は同じで、長さ、幅とも20cm前後大きかったと推測しておきたい。

底面には図示したような凹みを検出しているが、写真に見られるように肩が明確ではなく、また底面に凹凸が多いなど、意識的に掘られたものかどうかは明らかにしがたい。

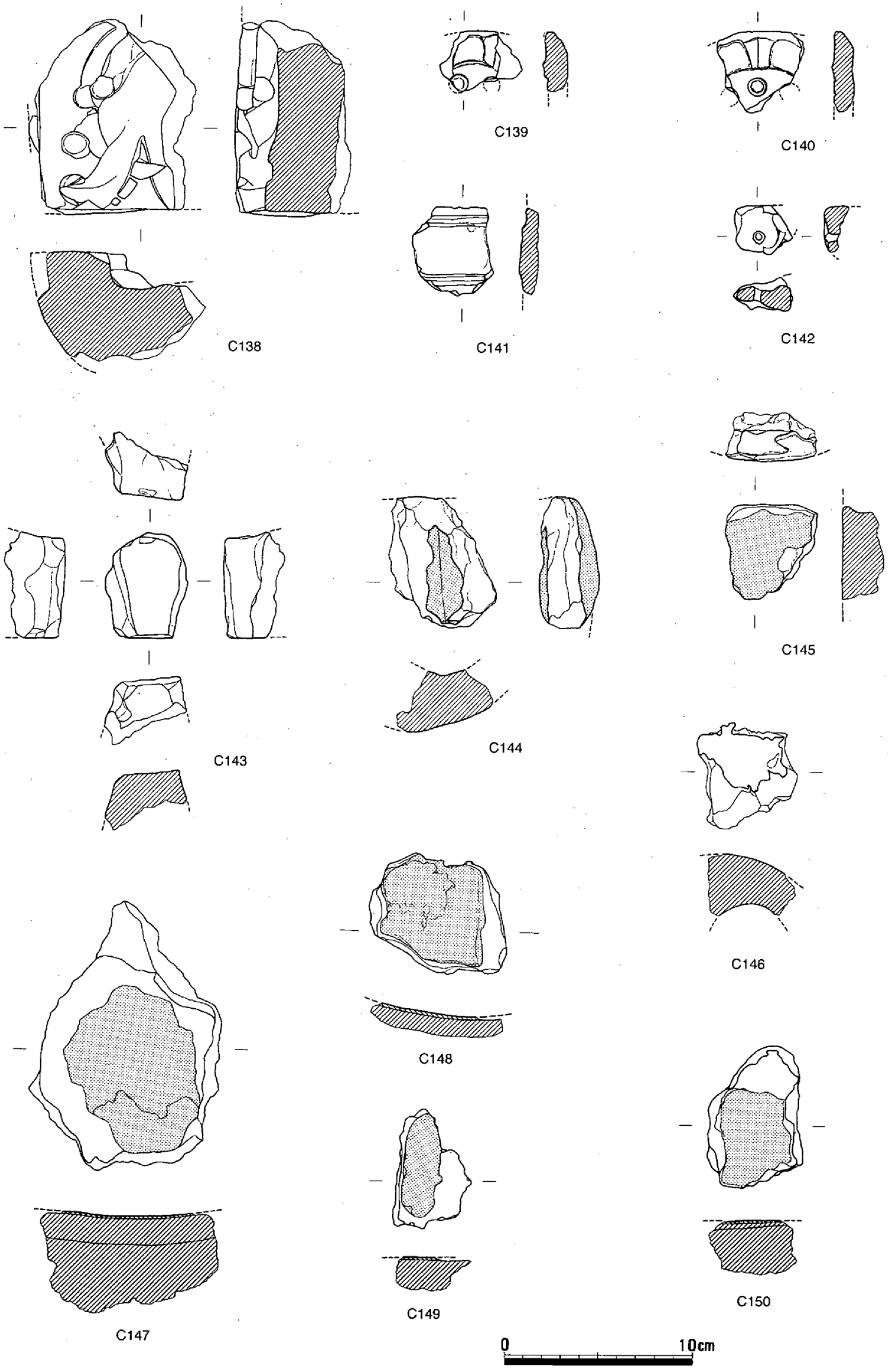
埋土中からは、白黄色の粘土や溶解炉片、鋳型片、土器片、砥石、刀子が出土した。埋土の状況からは、短期間に意識的に埋められたものと考えられる。

土器は、小片が僅かに出土したにすぎない。3112の底部外面調整はヘラ切りである。

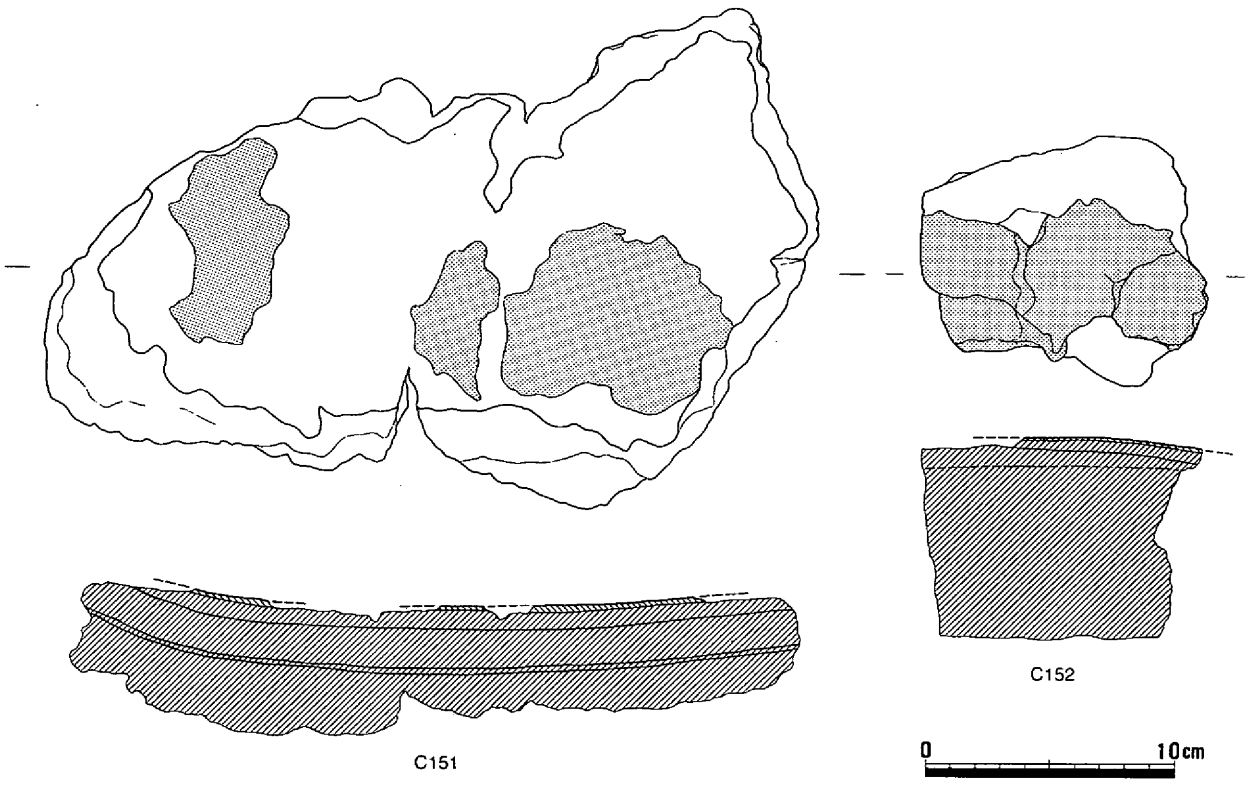
C138は、「竜頭」の鋳型である。C139・140は「撞座」の鋳型である。約1.5×1.5cmの小さな花弁が表現されている。間弁は剣先状になっている。圏線は細い突線でつくられ、内区の蓮子は凹線で表現されている。C141は中帯の間を横に巡っている突帯の鋳型ではなかろうか。胎土中に籾殻が含まれている。C142～145も鋳型であるが、どの部分か明確でない。C143～145は胎土や色調、大きさがC138に類似していることから、「竜頭」の可能性を考えておきたい。C146は溶解炉の一部と考えている。C147～151は、外型の鋳型であろう。胎土にスサを含んでいること、および表面に１～２㎜前後の真土が塗られていることが共通している。C152は内型ではなかろうか。C153～169は溶解炉の破片と考えている。C153～156は口縁部の破片である。C157～160は羽口である。推定できる大きさは内径で18cm前後である。C160は羽口の下の部分と考えている。C161・162・169は、断面の形状か

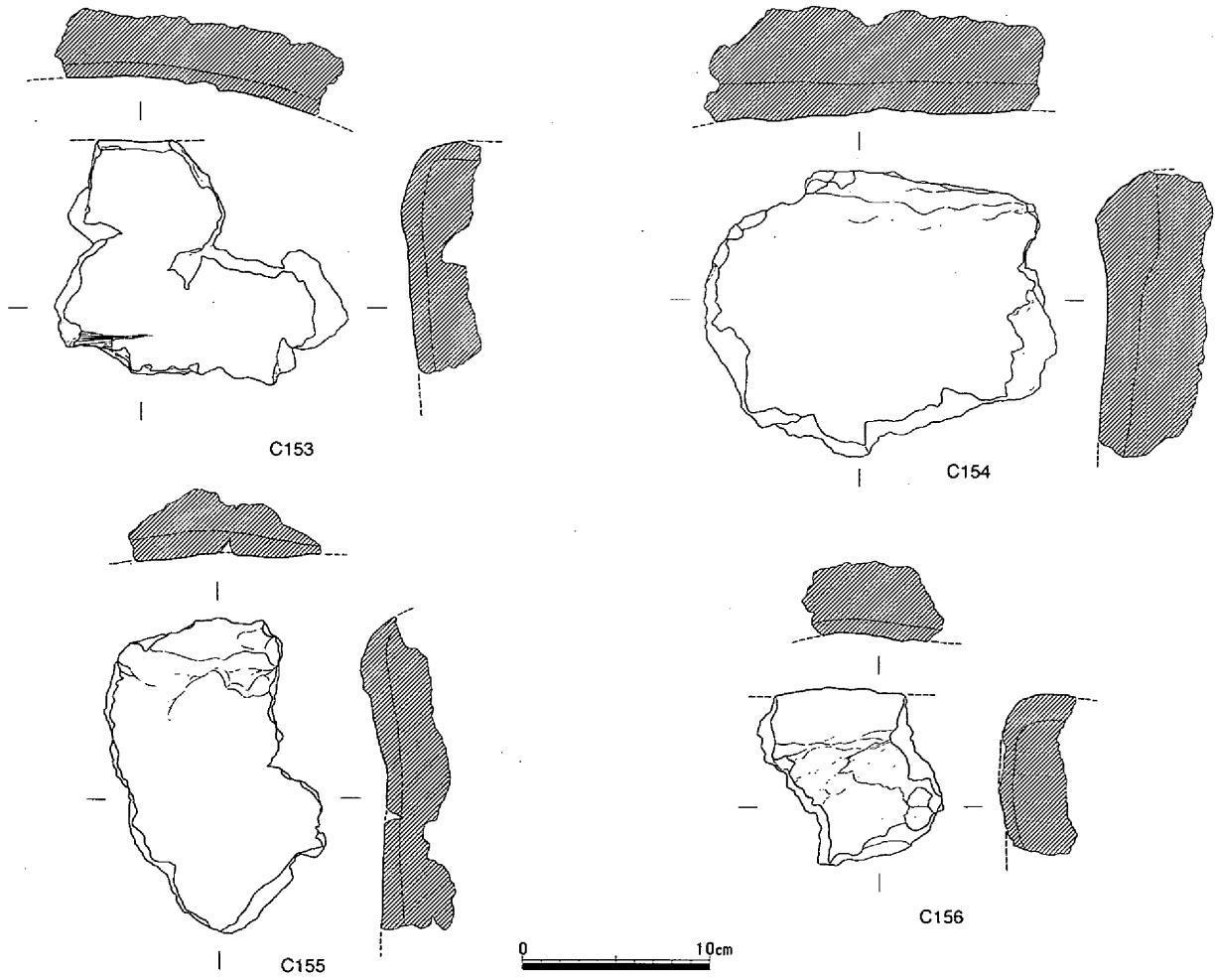


第906図　土壙375（1/60）・遺物（１）



第907図　土壙375　遺物（２）

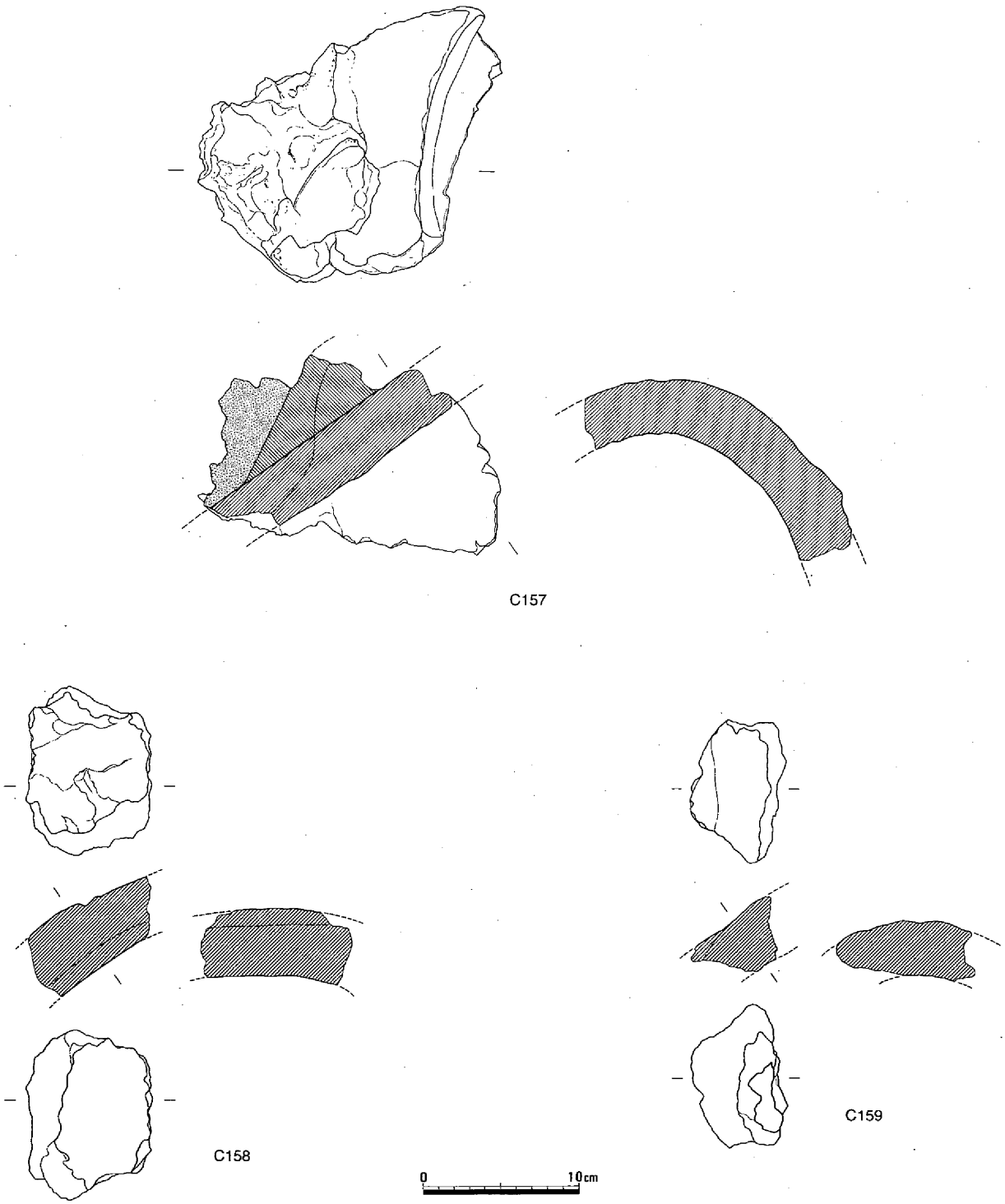




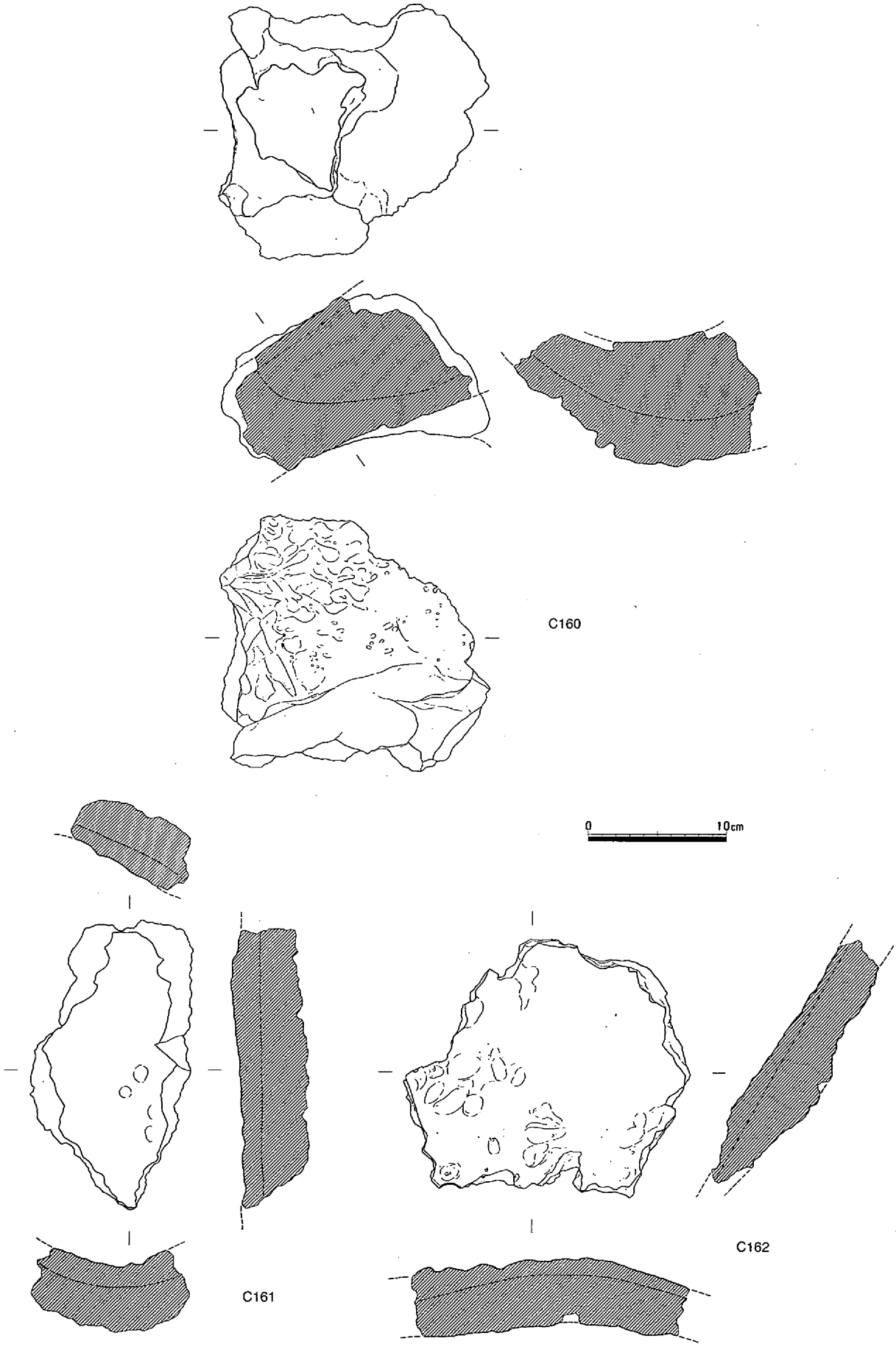
第908図　土壙375　遺物（3）

ら、羽口周辺の炉壁と考えている。スサを多く含んでいる。C163～165は底の部分（湯だめ、ル）と考えている。これによると、底は丸味は少なく、平底に近いといえよう。胎土にはスサが多い。C166・168は底に近い部分と思われるが、溶解炉の円筒状の壁のカーブが確認できる点に特徴がある。胎土にはスサが多く、表面には気泡が目立つ。

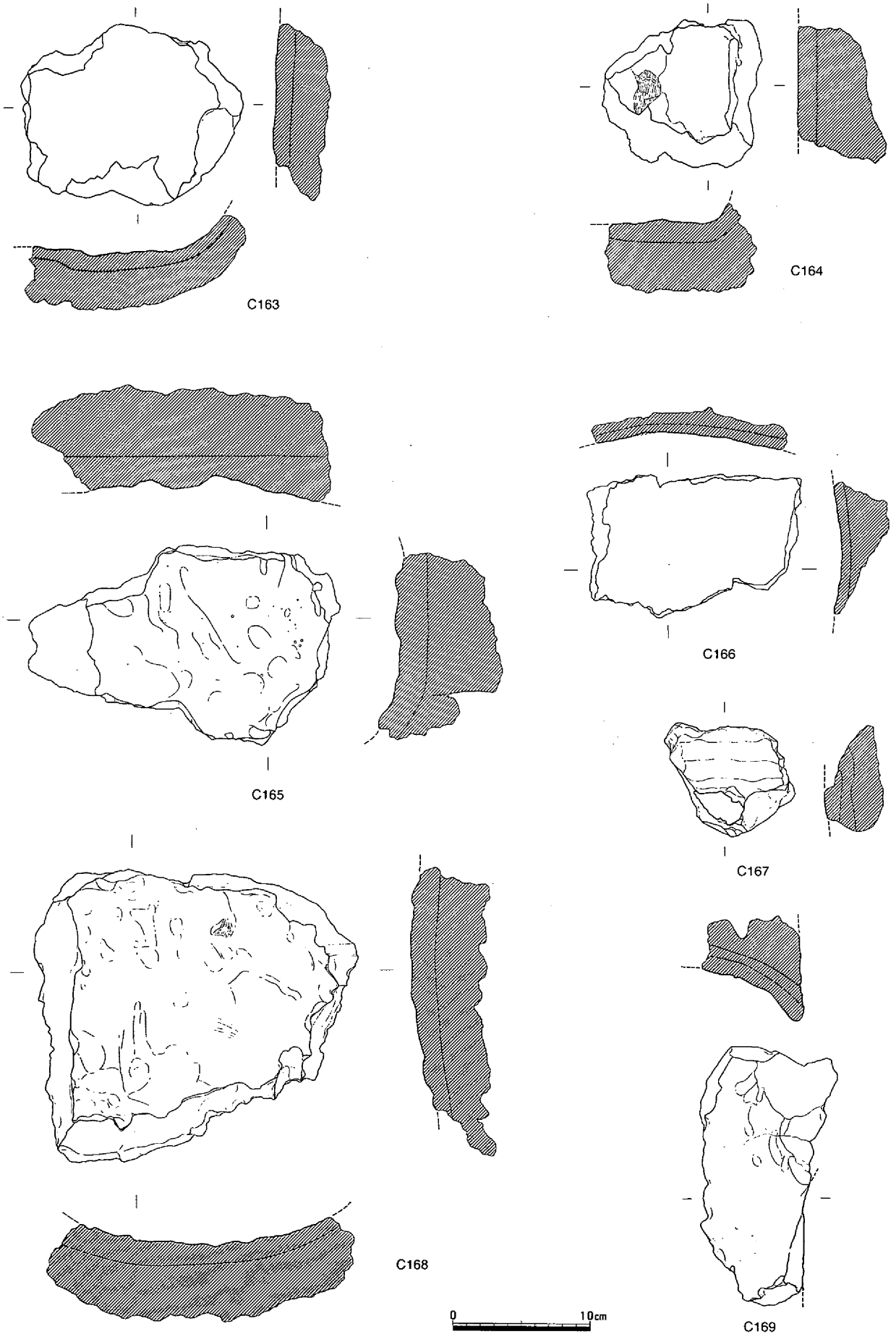
梵鐘が鋳造された時期については、廃棄されている少量の土器片からは、11世紀前半と考えておきたい。（平井）



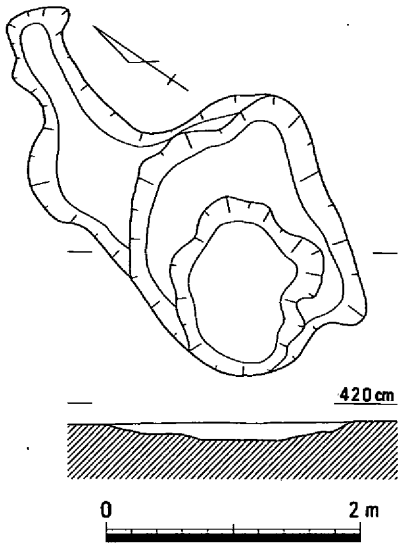
第909図　土壙375　遺物（4）



第910図　土壙375　遺物（5）



第911図　土壙375　遺物（６）



土壙376（第912図）

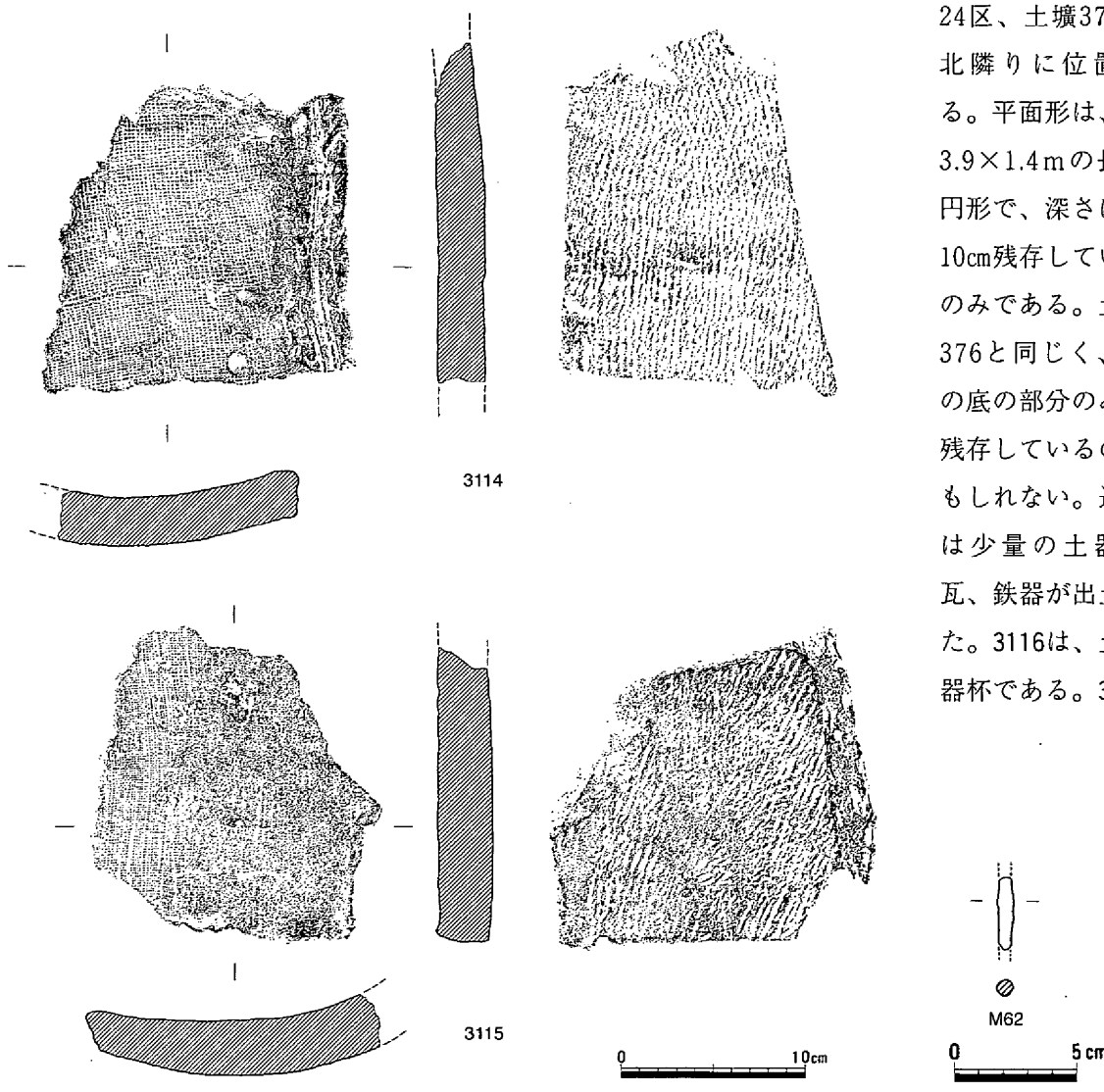
第２微高地のM24区、土壙375の東隣りにおいて検出した。平面形は不整形で、深さは14cm残存していたのみである。埋土は灰褐色砂質土である。形状から、溝の底の部分のみが残存しているのかもしれない。遺物は、鉄釘M62、平瓦3114・3115、土器が少量出土している。時期は平安時代後期ではなかろうか。（平井）

土壙377（第913図）

第２微高地のM24区、土壙376に切られるかたちで検出した。平面形は、約160×130cmの不整楕円形で、深さは約10cm残存していた。断面形は皿形である。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は平安時代と考えている。（平井）

土壙378（第914図、写真109）

第２微高地のM24区、土壙376の北隣りに位置する。平面形は、約3.9×1.4ｍの長楕円形で、深さは約10cm残存していたのみである。土壙376と同じく、溝の底の部分のみが残存しているのかもしれない。遺物は少量の土器や瓦、鉄器が出土した。3116は、土師器杯である。3117



第912図　土壙376（1/60）・遺物

は軒丸瓦で、外区に線鋸歯紋が観察できる。3118は平面図の星印から出土した鬼瓦である。上顎、鼻、頬の一部が残存している。色調は黄橙色で、図のスクリーントーン部分にはベンガラが塗られている。M63は刀子ではなかろうか。時期は11世紀前半であろう。　（平井）

土壙379（第915図）

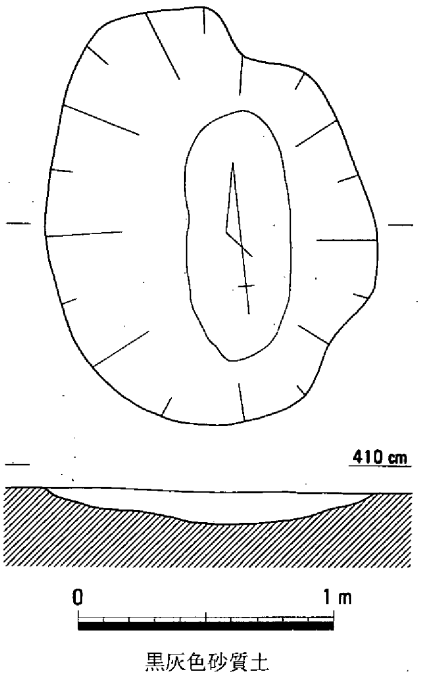
第２微高地のM24区、土壙377の東に位置する。平面形は、一辺約70cmの不整方形で、深さは約20cm残存していた。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は平安時代と考えている。　（平井）

土壙380（第916図）

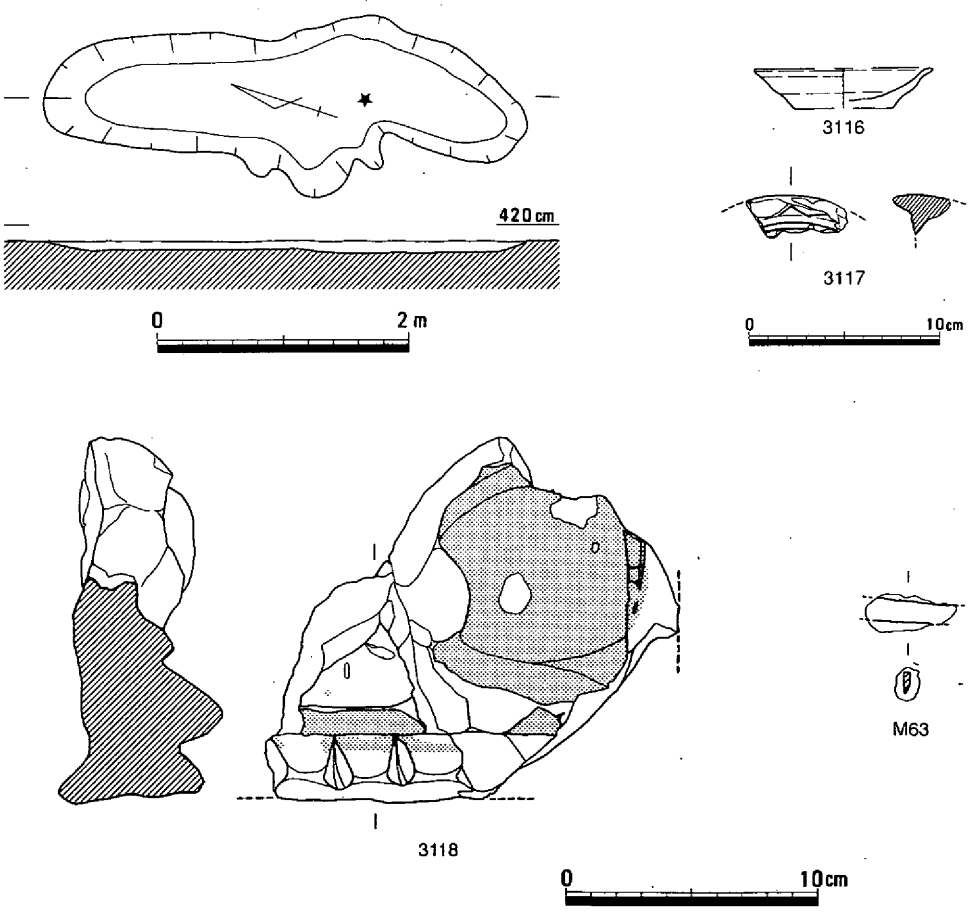
第２微高地のM24区、調査区南端部に位置する。南側は調査区外にのびているが、平面形は楕円形で、深さは44cm残存していた。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は平安時代と考えている。　（平井）

土壙381（第917図）

第２微高地のM24区、土壙380の北東約３mにおいて検



第913図　土壙377（1/30）

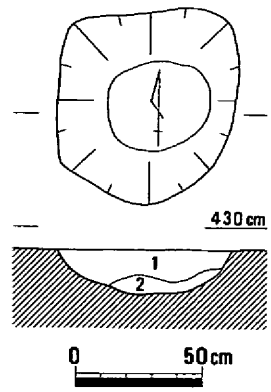


第914図　土壙378（1/60）・遺物

出した。平面形は一辺約70cmの方形で、深さは8cm残存していたのみである。底面はほぼ平らで、壁は垂直に近く立ち上がっている。遺物は少量の土器や瓦が出土している。3119は内黒椀、3120は須恵器壺であろう。3112は宝相華紋軒丸瓦の小片である。3122は軒平瓦で、中心飾りの一部と蕨手紋が観察できる。時期は平安時代と考えている。　（平井）

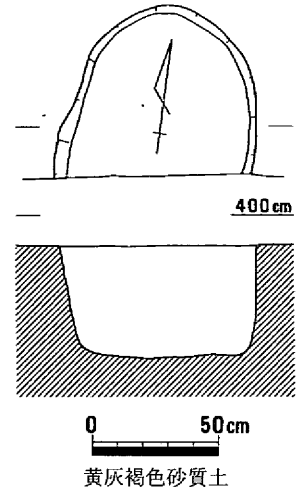
土壙382（第918図）

土壙382は、第2微高地のほぼ中央に位置する。平面は長方形と推定され、規模は198×152cm以上になると思われる。断面は皿状を呈し、床面はわずかに凹凸がある。出土遺物は、須恵器の小片しか認められないが、遺構の時期は古代におさまると考えたい。　（柴田）



1　暗灰色砂質土
2　黒灰色砂質土（炭を含む）

第915図　土壙379（1/30）

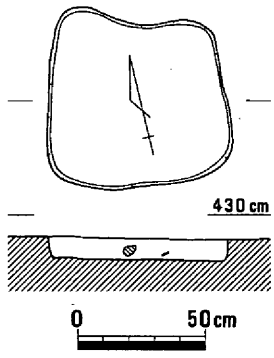


黄灰褐色砂質土

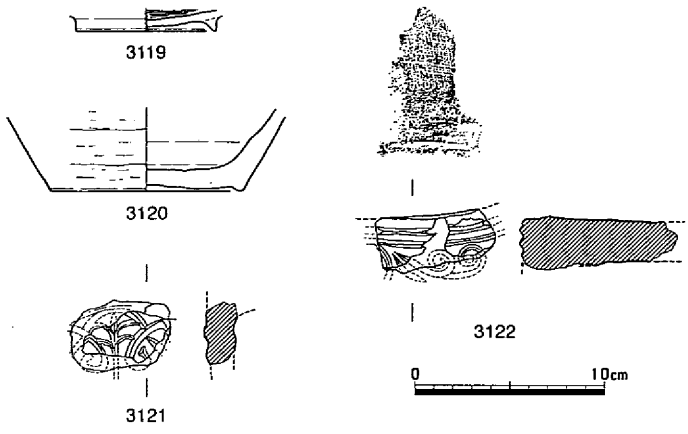
第916図　土壙380（1/30）

土壙383（第919図）

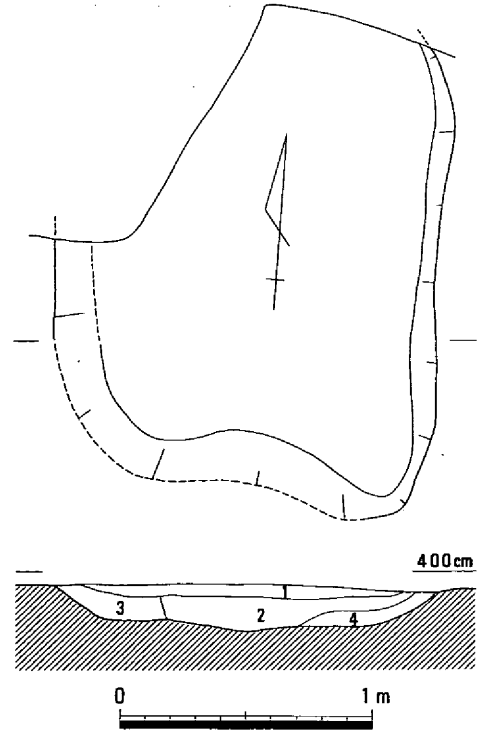
土壙383は、第2微高地の中央、土壙382の北に隣接する。平面は大形の長方形で、規模は237×153cmを測るが、残存状況が悪いためか深さは非常に浅い。出土遺物は土器の小片のみであるが、遺構の時期は古代におさまると考えたい。　（柴田）



灰褐色砂質土

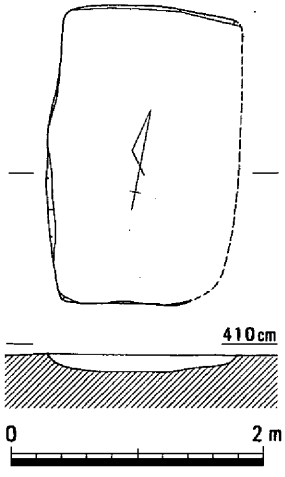


第917図　土壙381（1/30）・遺物

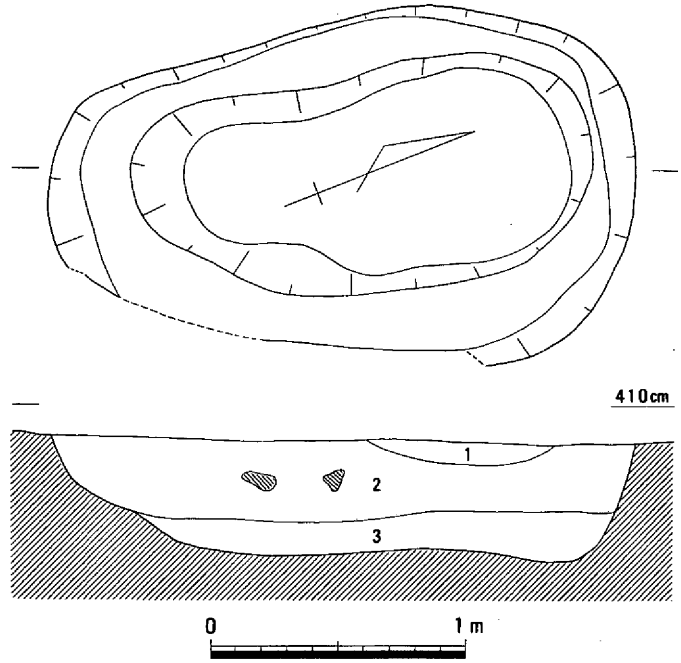


1　暗茶褐色粘質微砂
2　灰褐色粘質微砂
3　淡黄灰色粘質土
4　黄褐色粘質土

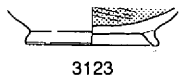
第918図　土壙382（1/30）

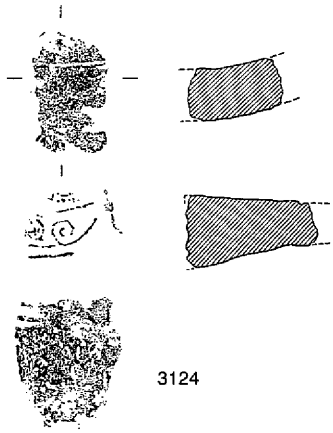


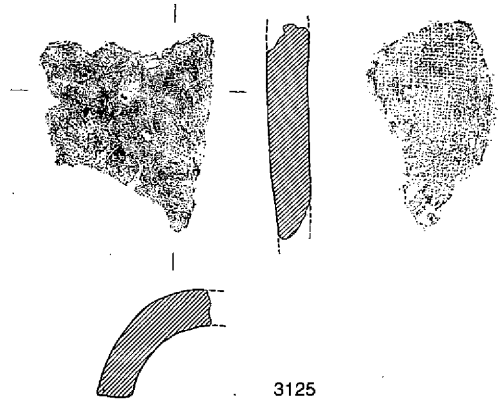
第919図　土壙383（1/60）

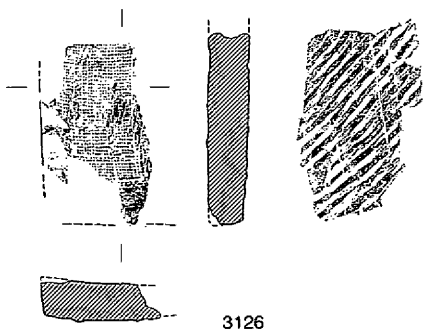


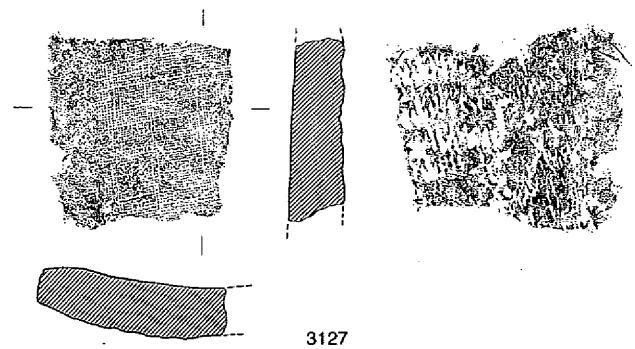
1　暗茶褐色粘質微砂（炭を含む）
2　茶灰褐色粘質土（土器を含む）
3　暗黄灰褐色粘質土


3123


3124


3125


3126


3127

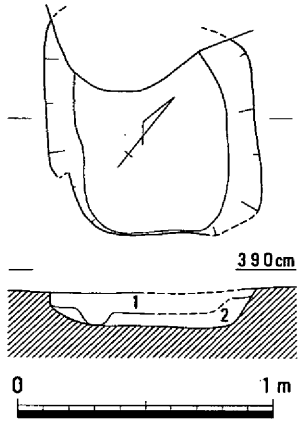
第920図　土壙384（1/30）・遺物

土壙384（第920図、写真39－１）

土壙384は、第２微高地の中央、土壙382の南に隣接する。平面は大形の楕円形で、規模は232×144cmを測る。埋土の下層は水平堆積を呈する。出土遺物には、黒色土器の高台付椀3123、軒平瓦3124、丸瓦3125、平瓦3126・3127などが認められる。3126は凸面に平行タタキが認められ、当遺跡の瓦では少ない種類のものである。遺物などから、遺構の時期は平安時代後期と思われる。（柴田）

土壙385（第921図）

土壙385は、第２微高地の中央やや東寄りに位置する。平面は方形で、１辺約93cmと思われる。出土遺物には、須恵器の小片が認められただけであるが、遺構の時期は古代におさまると思われる。（柴田）



1　暗褐色粘質微砂
2　黄褐色粘質土

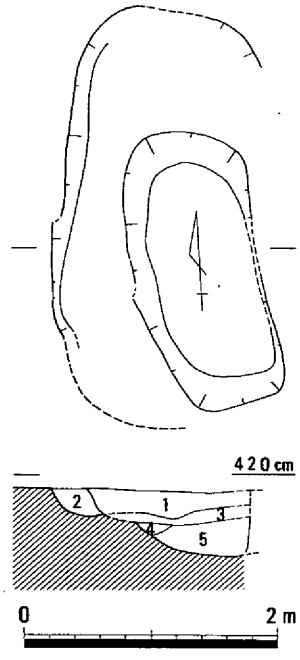
第921図　土壙385（1/30）

土壙386（第922図）

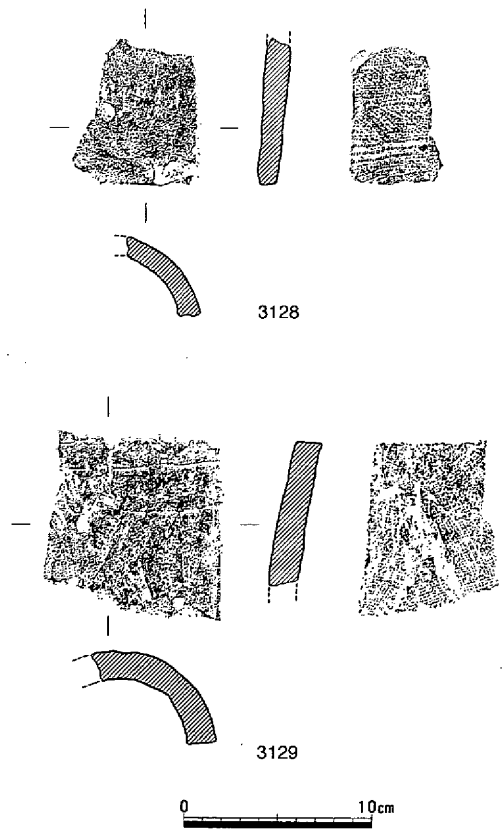
土壙386は、第２微高地の中央やや東寄りに位置する。平面は大形の長楕円形で、長さは328cm以上を測る。形態は土壙384に類似する。出土遺物には、丸瓦3128・3129が認められ、他にも図示していないが、黒色土器高台付椀の小片なども出土している。遺物などから、遺構の時期は平安時代後期と思われる。（柴田）

土壙387（第923図）

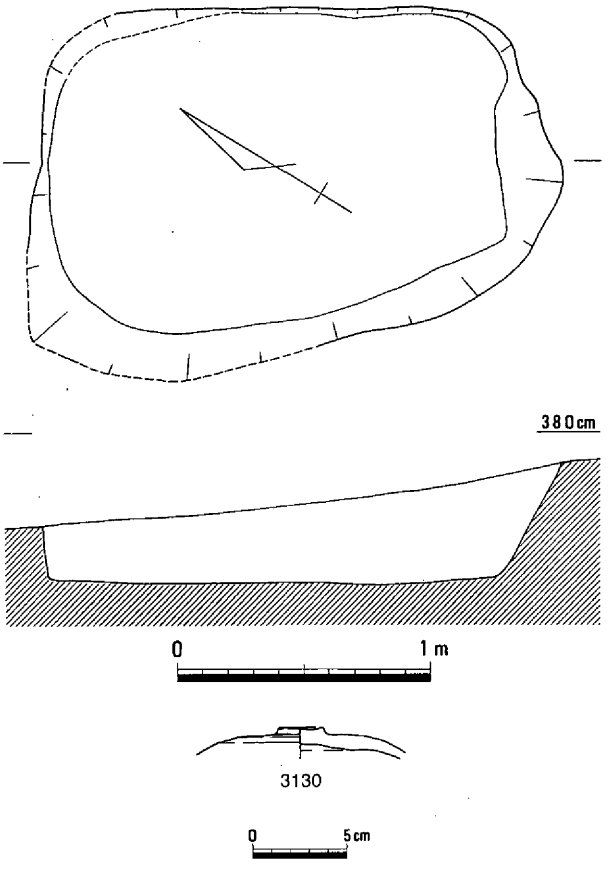
土壙387は、第２微高地の北東寄りに位置する。平面は大形の長方形で、規模は212×146cmを測る。床面はほぼ水平である。出土遺物に



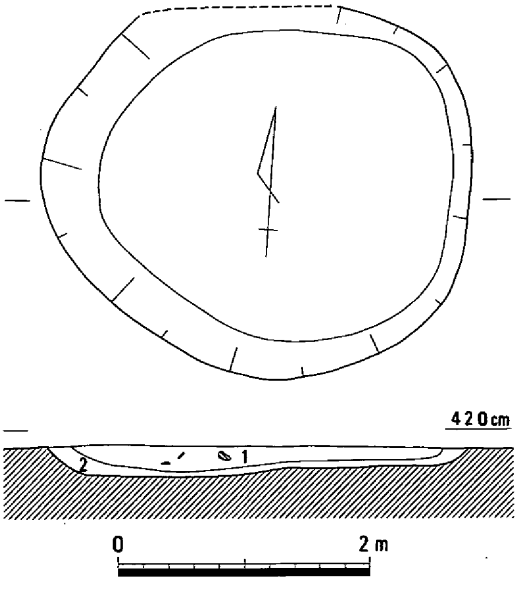
1　茶灰褐色粘質微砂
2　茶灰色粘質土
3　淡灰褐色粘質微砂
4　暗茶褐色粘質微砂
5　黄褐色粘質土



第922図　土壙386（1/60）・遺物



第923図　土壙387（1/30）・遺物



1　淡明灰褐色粘質微砂
2　淡灰茶褐色粘質微砂（炭を含む）

第924図　土壙388（1/60）

は、須恵器蓋3130が認められ、図示していないが、他にも須恵器の小片などが出土している。

遺物などから、遺構の時期は古代におさまると思われる。　（柴田）

土壙388

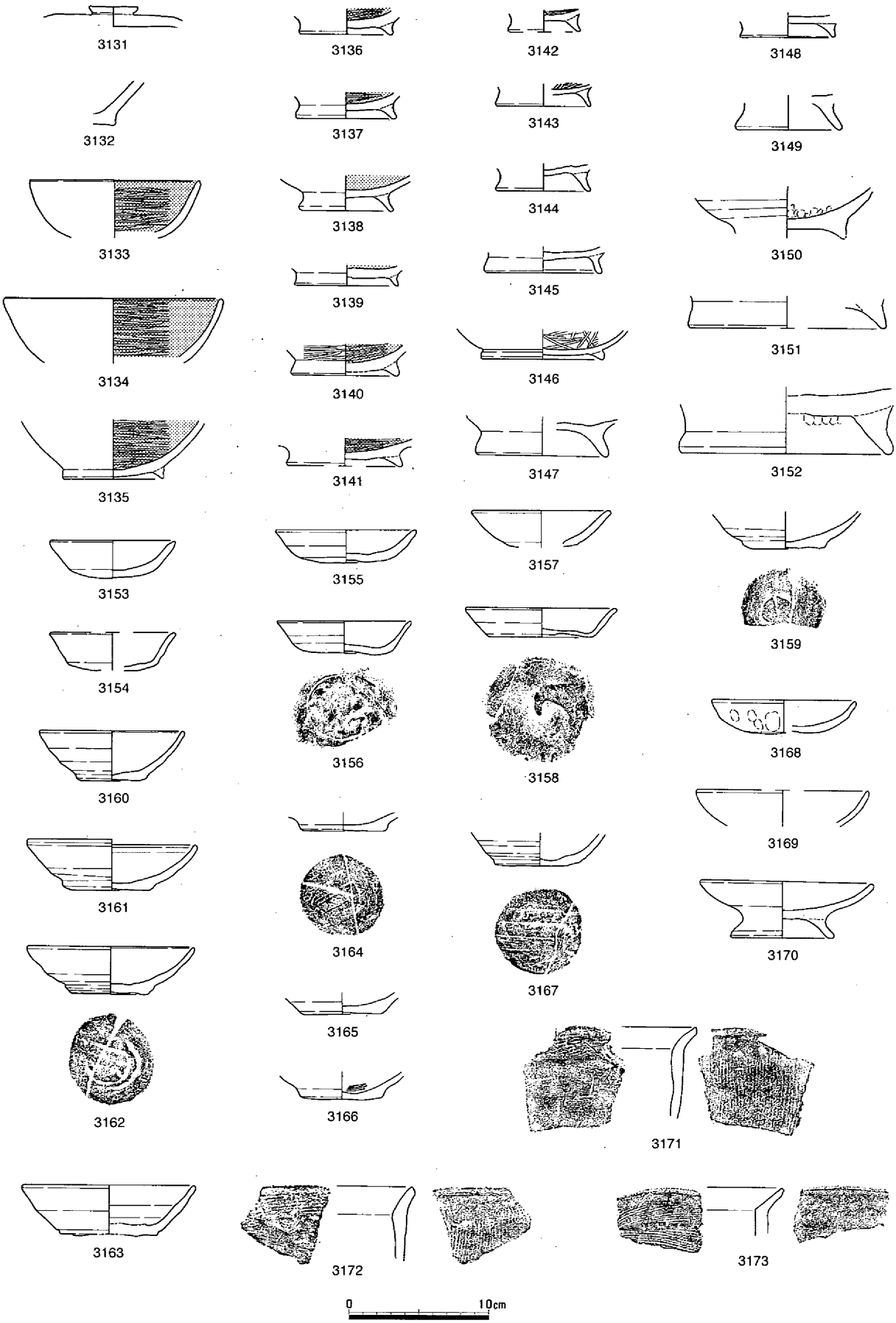
（第924～926図、写真39－2，113）

第２微高地の北東端、旧河道付近で検出された遺構で、土壙389の西隣に位置する。上部はかなり削平を受けているが、規模は長径171cm、短径148cmを測り、平面形は円形を呈する。深さは検出面から12cmと極めて浅く、底面はほぼ平坦である。埋土はレンズ状に堆積し、２層に区分されるが、いずれの層も粘質微砂土であり、下層には炭が含まれていた。

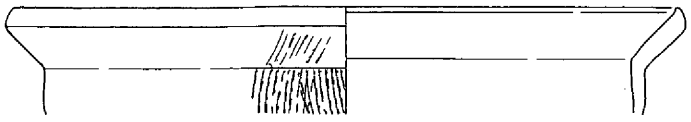
遺物は土器、鉄製品、土製品が出土している。土器には須恵器3131・3132・3183、黒色土器3133～3141、土師器3142～3178、緑釉陶器3179～3181、瓦3182などがある。鉄製品には釘M64～66、不明鉄器M67・68、土製品では土錘C170～178がある。3183は転用硯である。内面に同心円のタタキを持つものであるが、平滑となり、墨痕がみられる。黒色土器の高台はいずれも貼り付けとなる。土師器は底部切り離しがヘラ切りと板目痕の２種類がある。緑釉陶器3179は近江産、3180と3181は同一個体の可能性を持つもので、周防・長門産のものである。時期は平安期に属するものである。（松本）

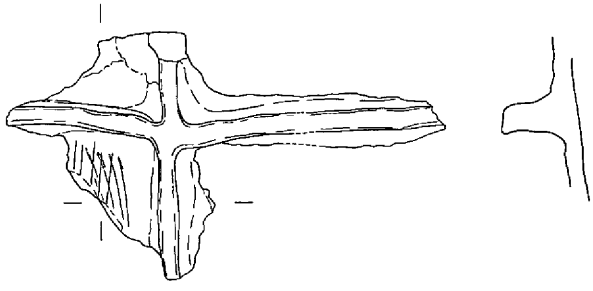
土壙389（第927～930図、写真39－２，114）

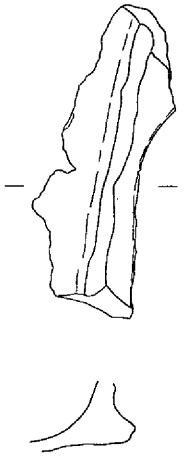
土壙388の東隣で検出された遺構である。上部は削平を受けているため、北側の遺構肩部が明瞭でない。規模は長径約610cm、短径550cmを測り、平面形は不整形な円形を呈する。深さは検出面から38cmと浅く、底面はほぼ平坦である。埋土は３層に区分され、レンズ状に堆積していた。１層は灰黄褐色粘質微砂、２層は炭を含んだ暗灰褐色粘質微砂、３層は灰褐色粘質微砂である。



第925図　土壙388　遺物（1）

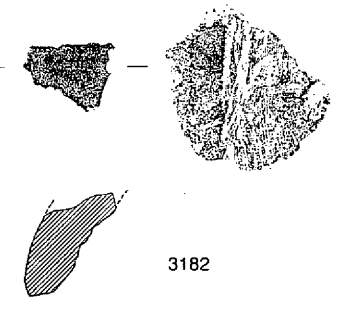

3174

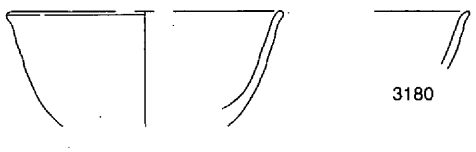

3175


3176

3177

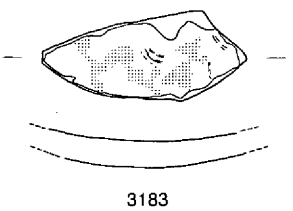
3178


3182

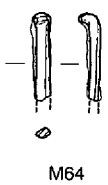

3179

3180

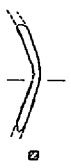
3181

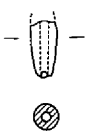

3183

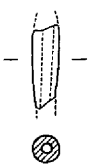
0　10cm

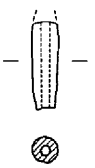

M64

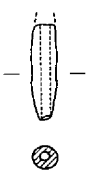
M66

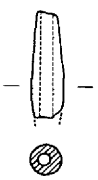

M67

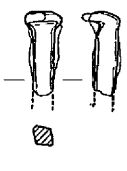

C170


C171

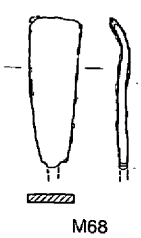

C172

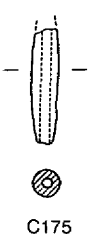

C173

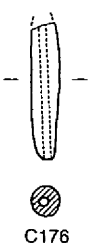

C174

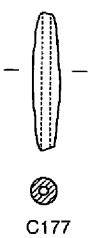

M65

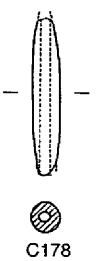
0　10cm


M68


C175


C176


C177


C178

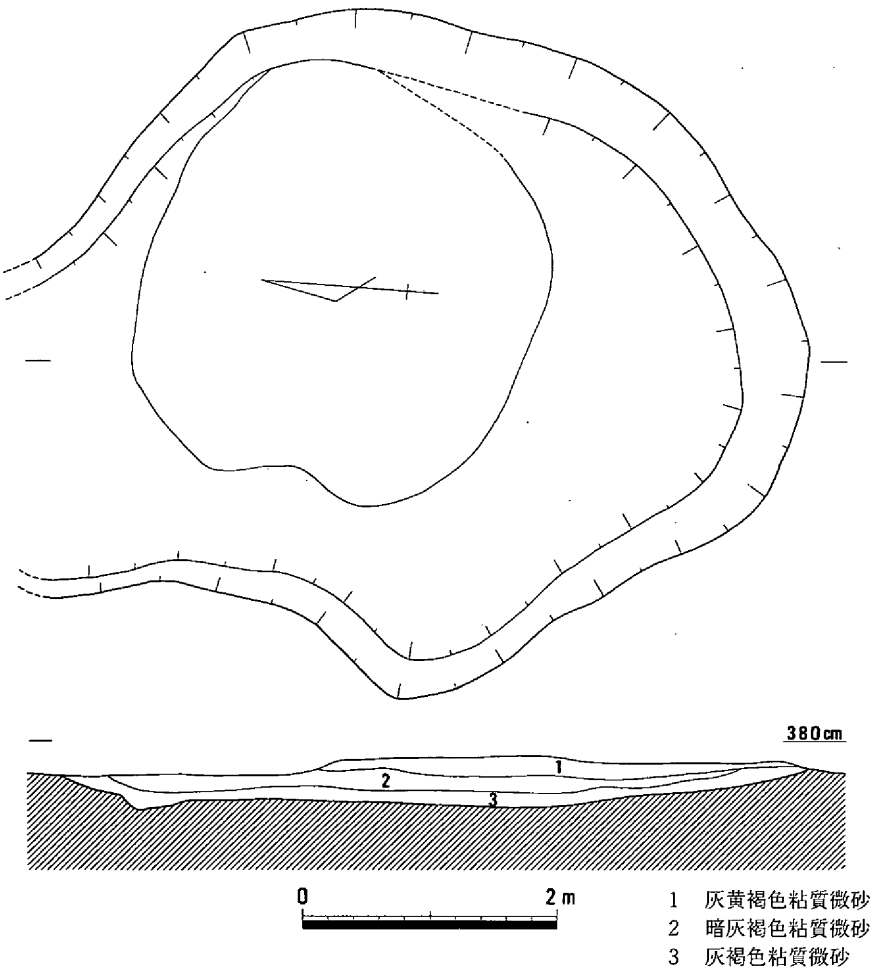
第926図　土壙388　遺物（２）

遺物は土器、鉄製品、土製品が出土している。土器には須恵器3184・3185、3227～3229、黒色土器3186～3189、土師器3190～3225、緑釉陶器3226などがある。瓦3230～3233も出土している。鉄製品としては釘M69～72が、土製品では土錘C179がある。3227は円面硯である。脚部に長方形の透かし孔をもつものである。3228・3229は転用硯である。いずれもよく使われており、3229には墨の付着がみられた。3226は近江産の緑釉陶器である。黒色土器はいずれも内黒と呼ばれるもので、土壙388に比べて出土量は少ない。土師器は高台付の椀3190、3200～3211、杯3212～3220、皿3221、甕3222、カマド3223～3225などが出土している。時期は土壙388と同じく平安期に属すると思われる。　（松本）

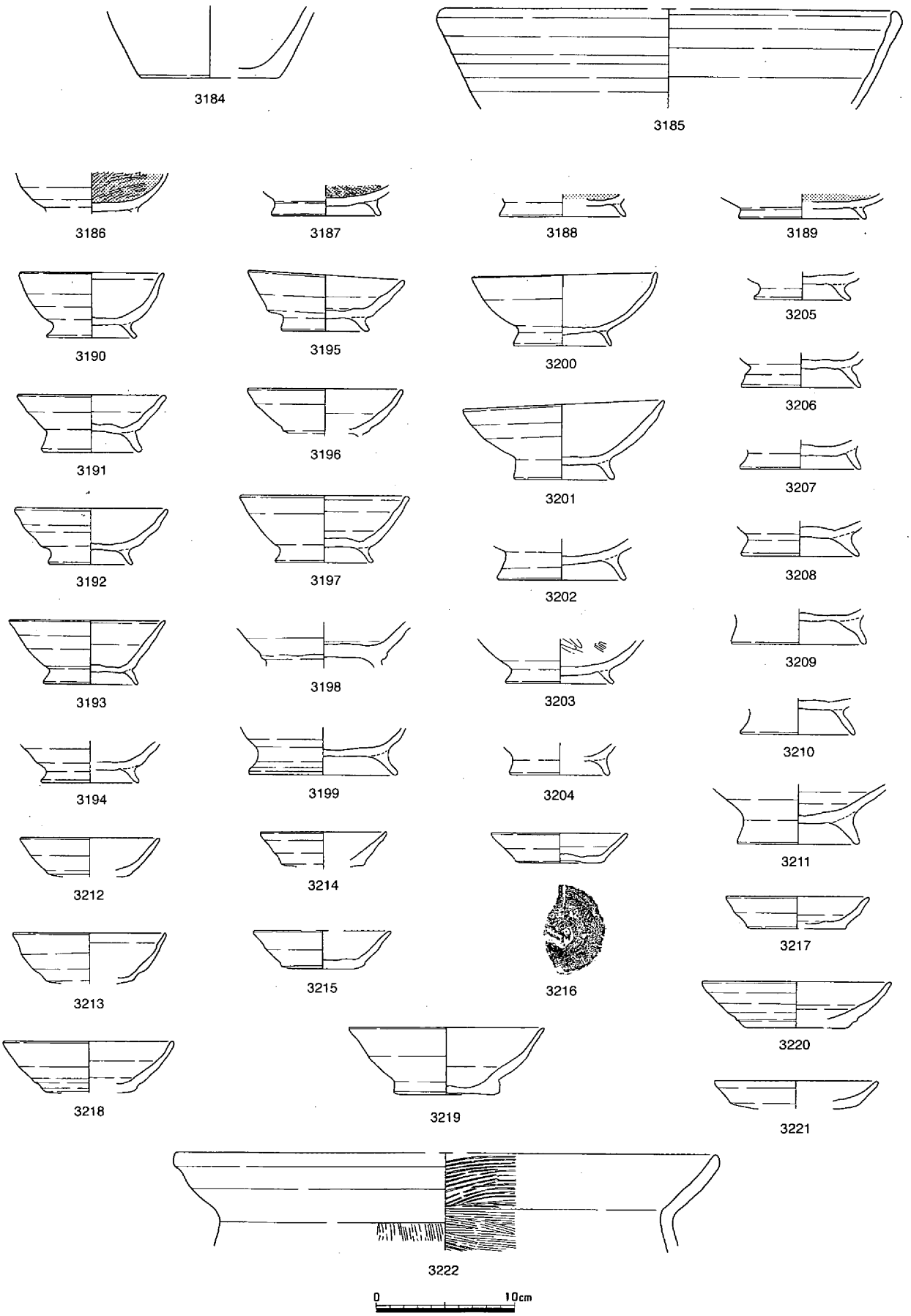
土壙390（第931図、写真115）

溝52の東隣で検出された遺構である。他の遺構に切られてはいるが、確認された規模は、長径192cm、短径110cmを測り、平面形は不整楕円形を呈するものと思われる。深さは検出面から60cmを測り、底面には凹凸が少しみられるが、平坦に近い。埋土は6層に区分されるが、1層は炭を含む黄灰褐色粘質土、2～5層は褐色系の粘質土であるが、6層は暗灰色粘質土であった。

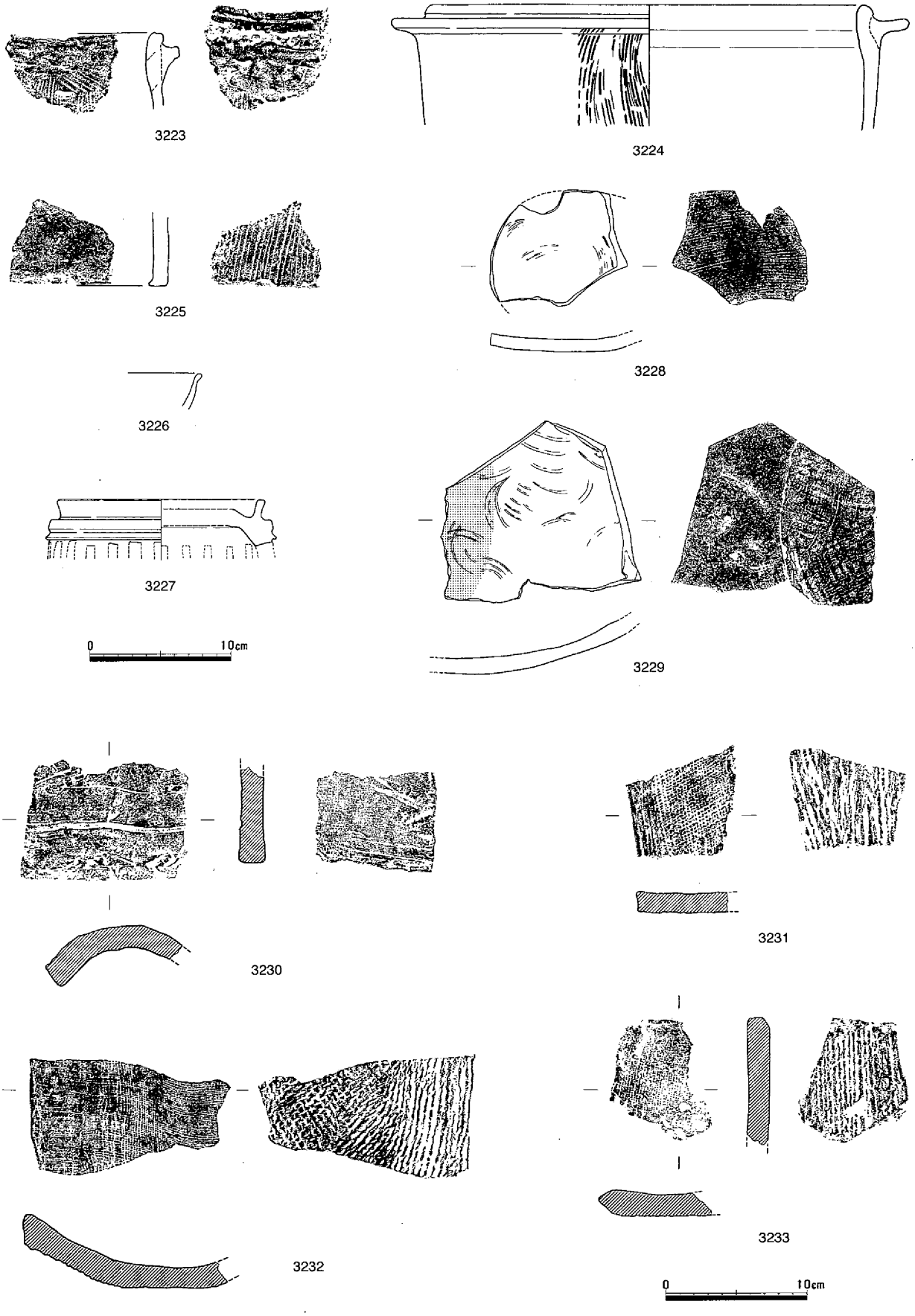
遺物は須恵器 、黒色土器、土師器などが出土している。須恵器3234・3235は甕の胴部である。黒色土器3236・3237は内黒のもので、3236は内外面ともヘラミガキによる丁寧な調整がみられる。3238～3242は高台付杯、3243は皿、3244～3248は椀、3249～3253は杯である。黒色土器や高台付杯などの遺物からみて、時期は土壙389と同じく平安期に属すると思われる。　（松本）



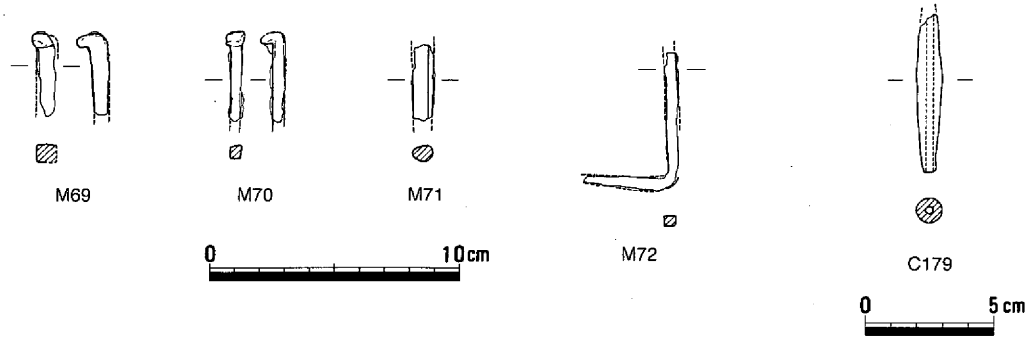
第927図　土壙389（1/60）



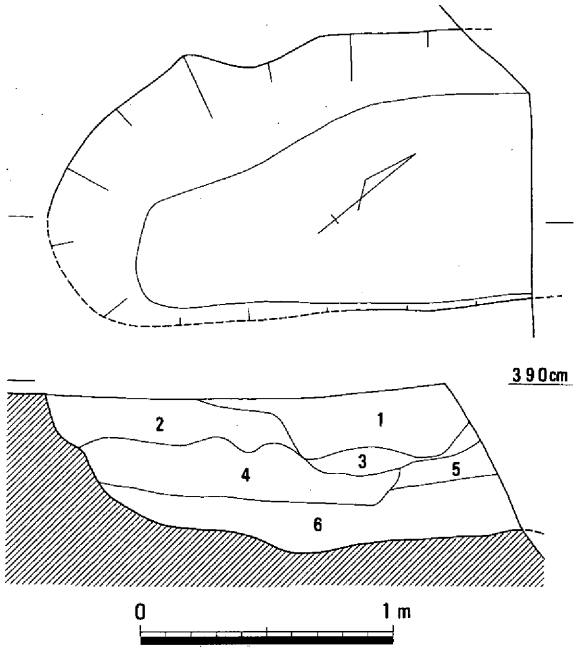
第928図　土壙389　遺物（１）



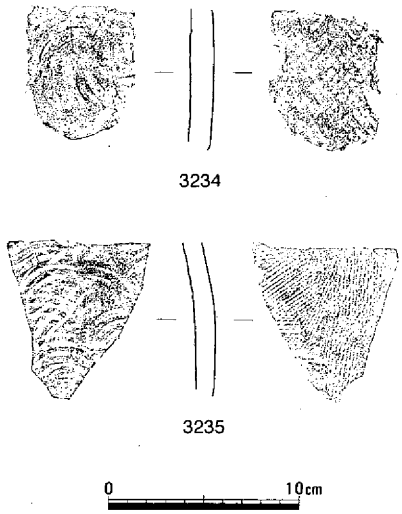
第929図　土壙389　遺物（2）

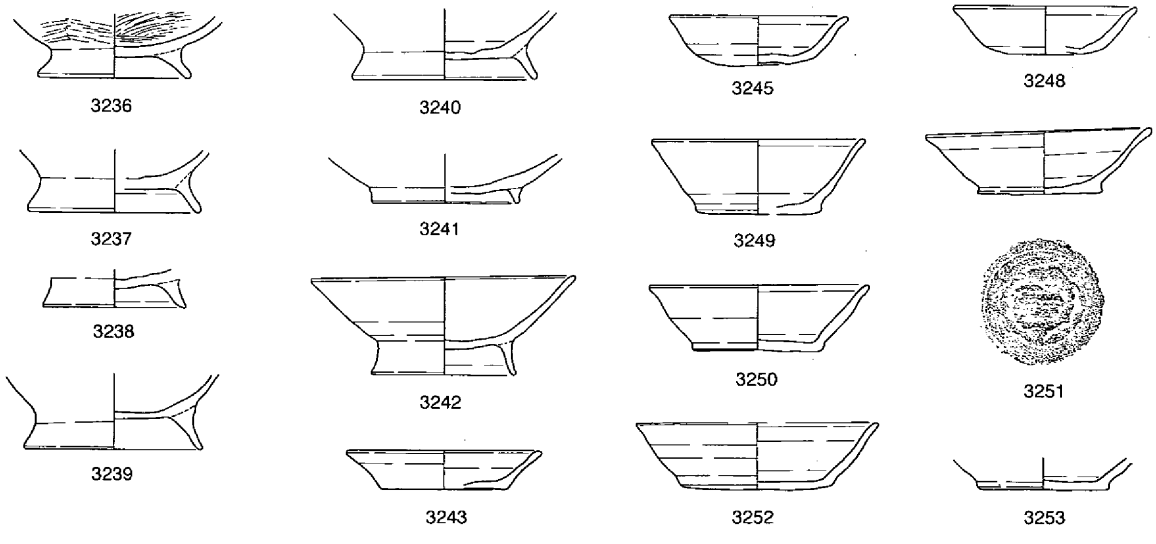


第930図　土壙389　遺物（３）



1　黄灰褐色粘質土（炭を含む）　4　黄灰褐色粘質土
2　灰褐色粘質土　5　淡黄褐色粘質土
3　暗黄褐色粘質土　6　暗灰色粘質土

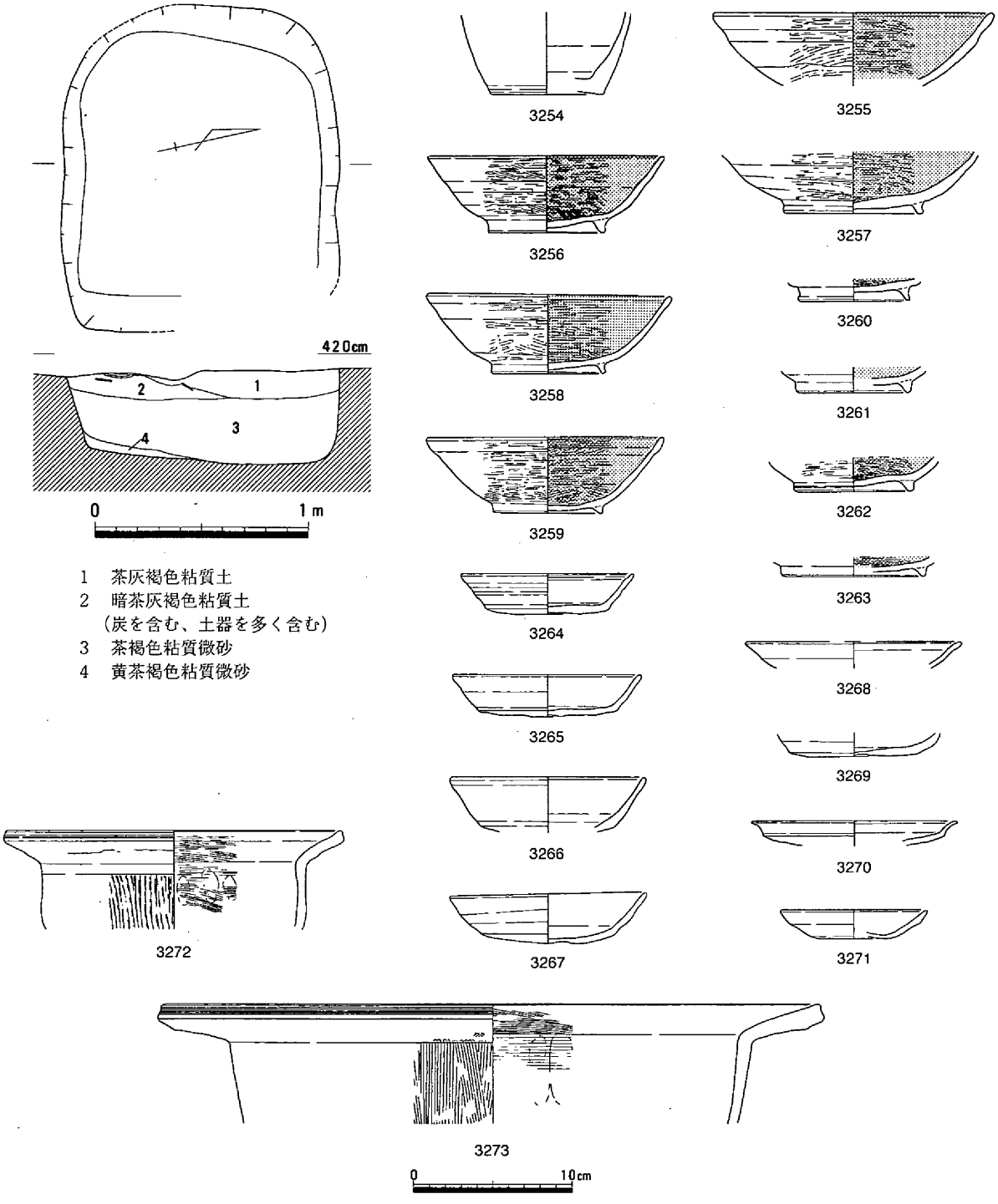




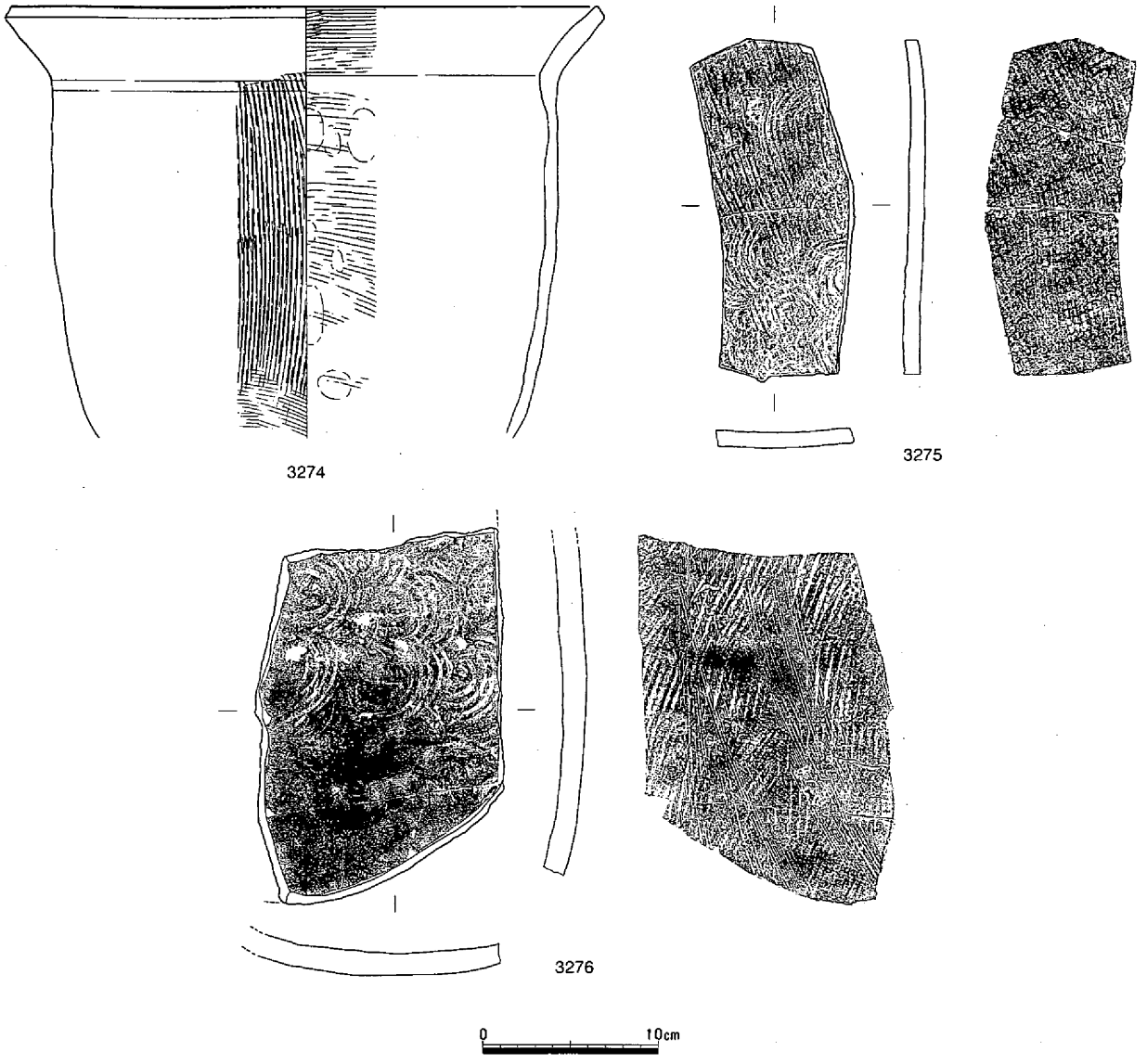
第931図　土壙390（1/30）・遺物

土壙391（第932・933図、写真115）

土壙391は、第２微高地の東端に位置し、火葬墓２の北側に隣接する。平面は比較的大形の長方形で、規模は153×130cmを測る。底面はほぼ平らで、壁面は垂直方向に立ち上がり、深さは45cmを測る。埋土の堆積状況からは、南側からの流入が２・４層で認められる。この２層には炭が含まれ、まとまった土器が出土している。図示した出土遺物には、須恵器壺3254、黒色土器の高台付椀3255～3263、土師器杯・皿3264～3271、甕3272～3274、転用硯があるが、他に緑釉陶器片も出土している。



第932図　土壙391（1/30）・遺物（１）



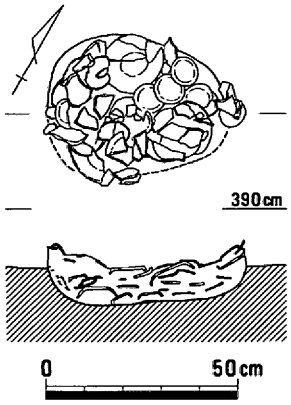
第933図　土壙391　遺物（２）

黒色土器の口縁部径は14.8～17.5cmを測り、器高は５cm程度である。体部から口縁部にかけては、ほぼ外方に真っすぐのびる。杯は、ヘラ切りの後ナデが施される。3275と3276は、須恵器甕の胴部片を硯として利用したもので、特に後者では内面の磨耗が著しい部分が認められる。

出土遺物は、当遺跡の平安時代のものの中では最も古い様相を呈しており、遺構の時期も９世紀後半と思われる。（柴田）

土壙392（第934図、写真116）

第１微高地のＮ22区北西端部に位置する。平面形は約50×40cmの楕円形で、深さは約15cm残存していた。埋土には炭が多く含まれている。この土壙の特徴は、完形品を多く含む土器が、密集して出土したことで、儀式などで使用後意識的に埋納されたのではなかろうか。多くは口縁部が下に向いていたが、特に決まりがあったとは思われない。また完形品の間には破片も存在している。土器は杯と小皿で、図示した土器のうち、完形あるいはほぼ完形のものについては観察表に記している。底部外面調整はヘラ切りがほとんどである。土器の時期は平安時代末～鎌倉時代であろう。（平井）

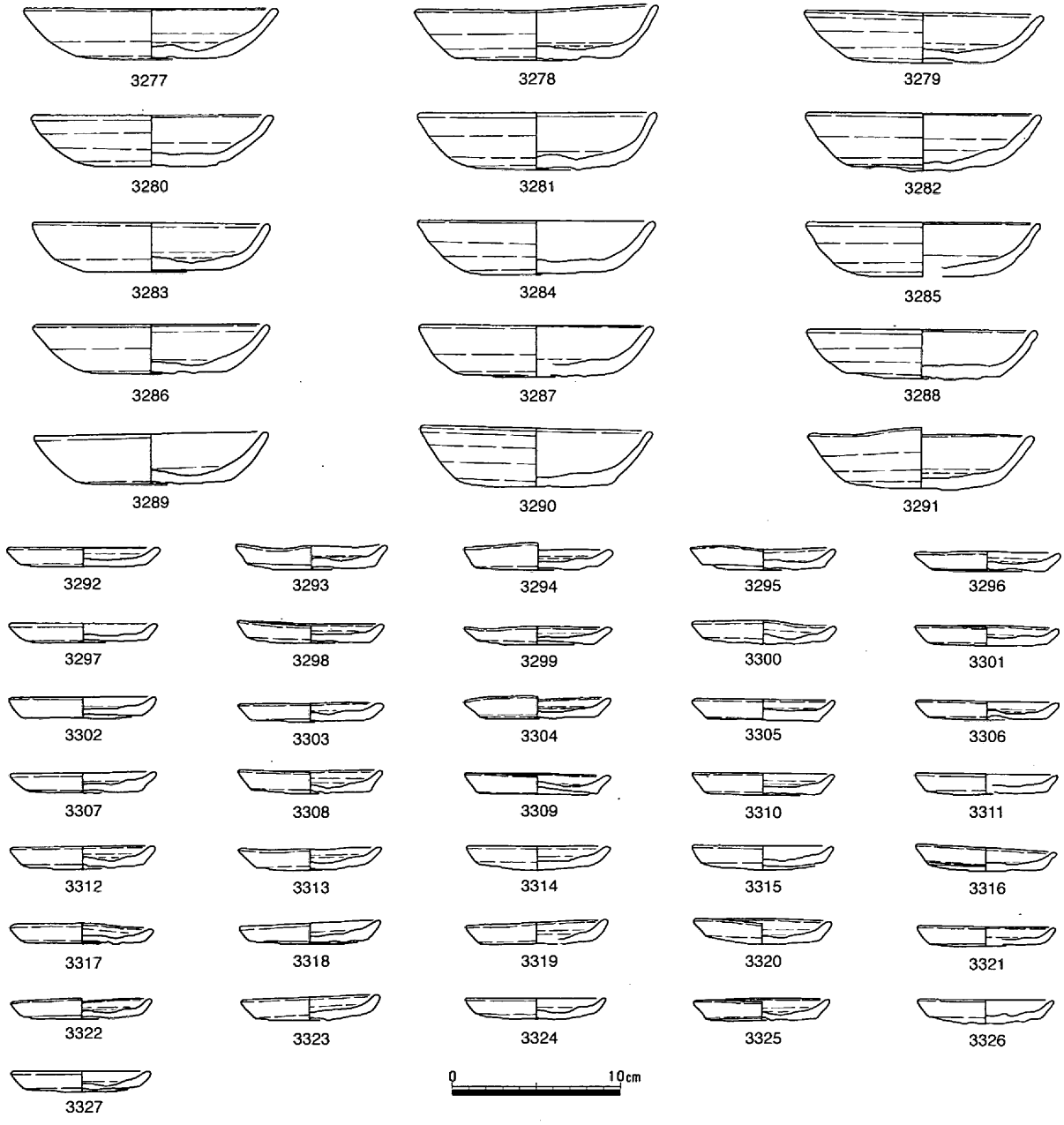


土壙393（第935図）

第１微高地のＮ22区、土壙392の南東約３ｍに位置する。平面形は約110×70cmの隅丸長方形で、深さは約30cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は二層に分離できた。遺物は土器が少量出土しており、時期は中世と考えている。（平井）

土壙394（第936図）

第１微高地のＮ22区、土壙393の南約約３ｍに位置する。平面形は長さ約2.7ｍ、幅約1.3ｍの長楕円形で、深さは約50cm残存していた。埋土は灰黄色砂質土であった。遺物は土器が少量出土しており、時期は中世と考えている。（平井）



第934図　土壙392（1/20）・遺物

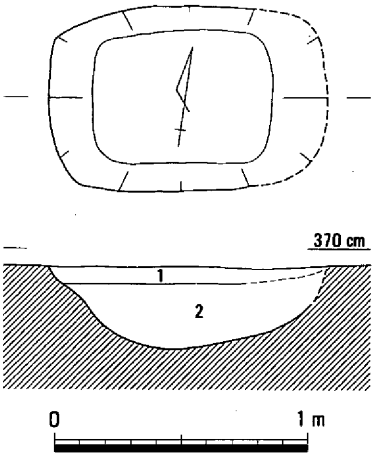
土壙395（第937図）

第１微高地のＮ22区、土壙394の南東約４ｍに位置する。平面形は約3.8×3.5ｍの不整方形で、深さは約35cm残存していた。断面形は皿形で、底面の中央部には柱穴状の凹みが検出できた。埋土は、灰黄褐色粘土混じり微砂が一層のみであった。

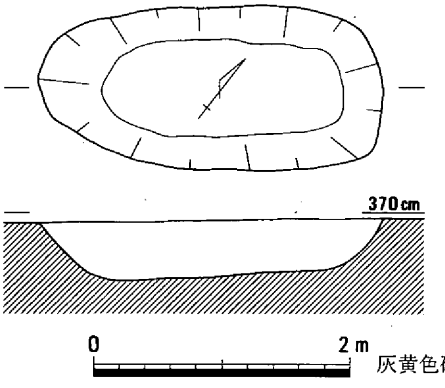
遺物は少量の土器が出土した。3328・3329は土師器椀、3330・3331・3335は土師器杯、3332～3334は土師器小皿、3336は土師器甕である。時期は鎌倉時代前半であろう。（平井）

土壙396（第938図）

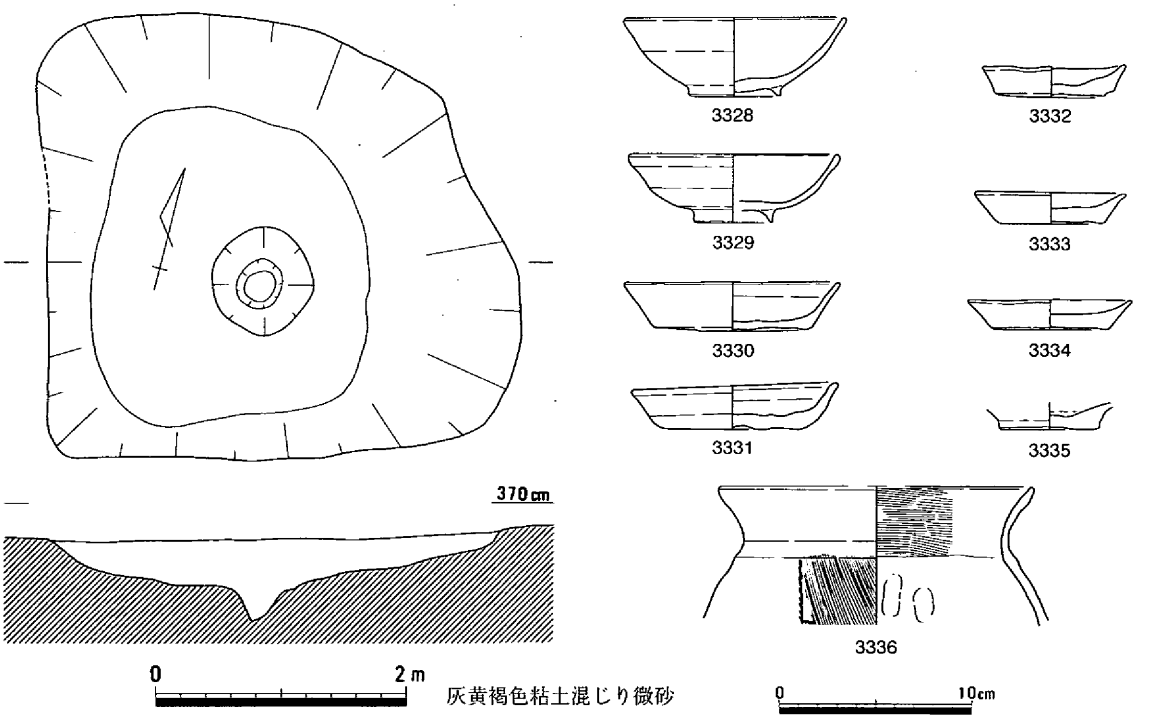
第１微高地のＮ22区、土壙395の南西隅に位置する。平面形は、約70×60cmの不整方形で、深さは15cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は褐灰色微砂が一層のみであった。遺物は土器が少量出土しており、時期は中世と考えている。（平井）



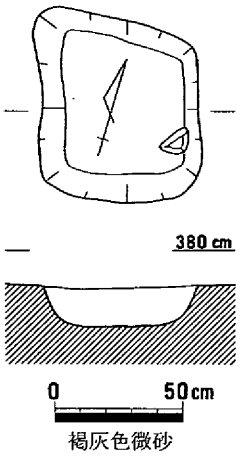
第935図　土壙393（1/30）



第936図　土壙394（1/60）



第937図　土壙395（1/60）・遺物



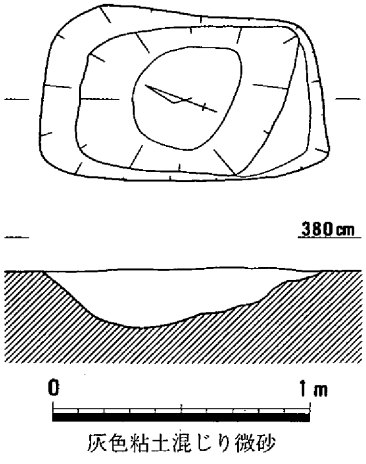
第938図　土壙396（1/30）

土壙397（第939図）

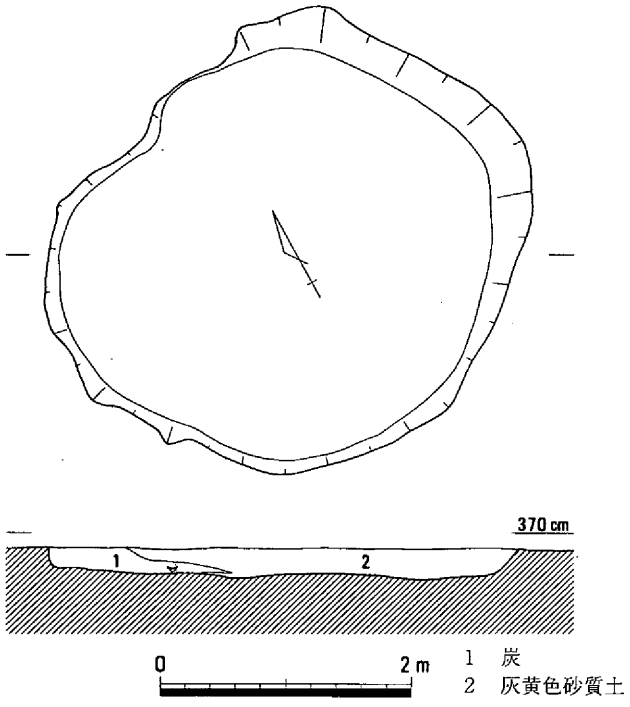
第１微高地のＮ22区土壙396の南約１ｍにおいて検出した。平面形は長さ約110cm、幅約70cmの長方形で、深さは24cm残存していた。断面形は皿形で埋土は灰色粘土混じり微砂が一層のみであった。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は中世と考えている。　（平井）

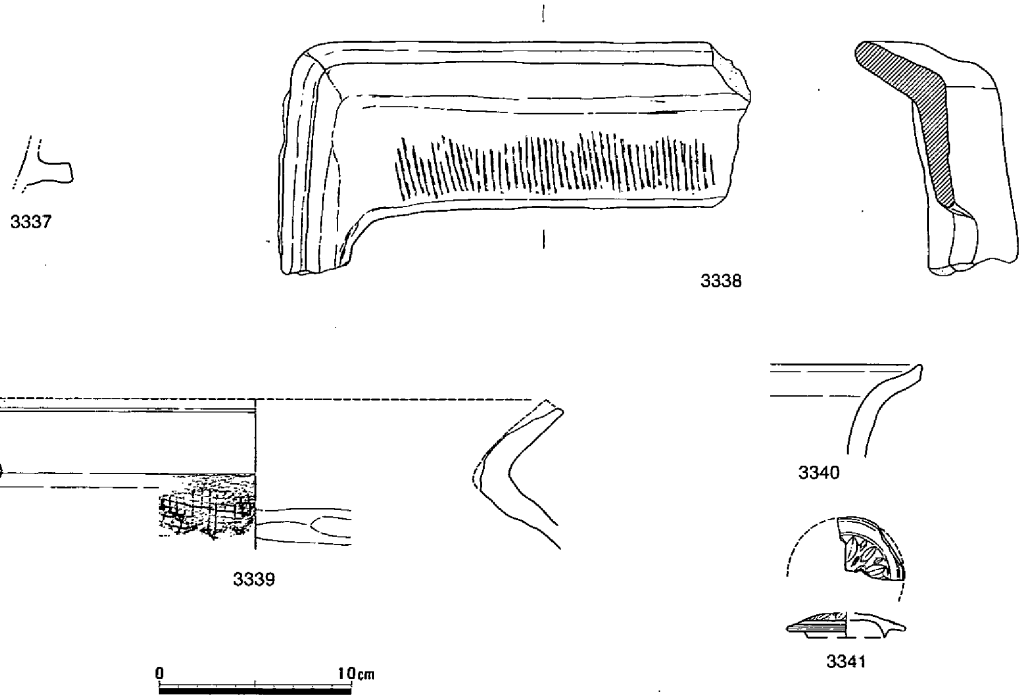
土壙398（第940・941図、写真116）

第１微高地のＮ22区中央部に位置する。平面形は直径約3.8ｍの不整

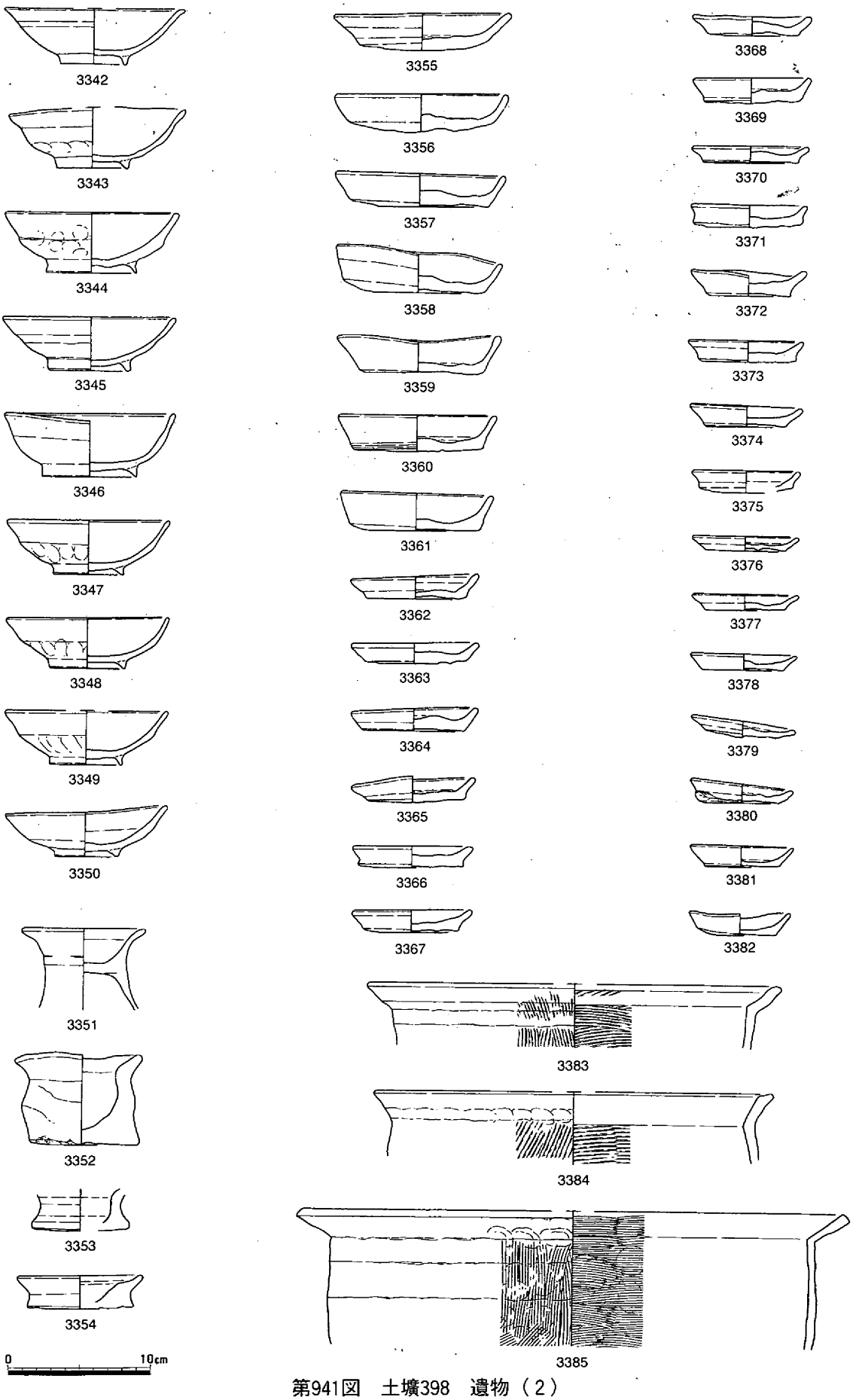


第939図　土壙397（1/30）





第940図　土壙398（1/60）・遺物（１）



第941図　土壙398　遺物（２）

円形で、深さは約20cm残存していた。断面形は逆台形で、埋土は二層に分離でき、西端部には炭が堆積していた。

遺物は、土器と製錬滓が2片出土している。図示した土器のうち、3337は小片であるが瓦質の羽釜である。3338は土師器竈である。3339は亀山焼甕、3340は常滑焼甕である。3341は青白磁合子の蓋である。3342～3350は土師器高台付椀で、口径は12.6～11.2cmである。3351は脚付杯とも呼べるものである。3352～3354は脚台に用いられたのではなかろうか。

3355～3361は土師器杯、3362～3382は土師器小皿である。いずれも底部外面調整はヘラ切りである。また、ヘラ起こしの痕跡と考えられる直線的な凹みが確認できるものもある。3383～3385は土師器鍋で、内外面ともハケメで調整されている。土器の時期には幅が認められ、最も新しいものは13世紀末～14世紀初頭頃ではなかろうか。　（平井）

土壙399（第942図）

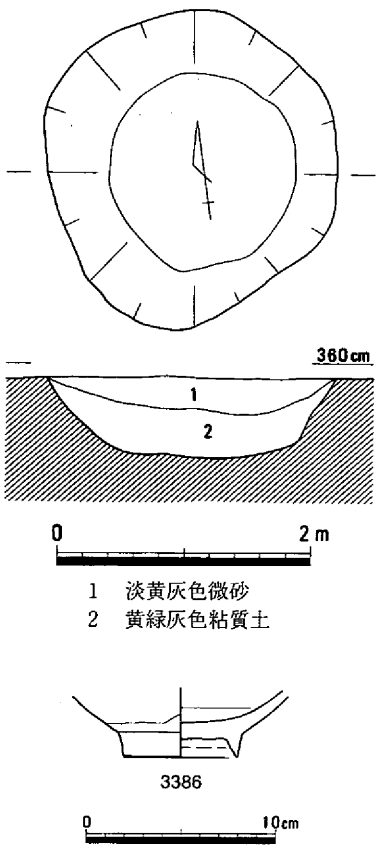
第1微高地のN22区、調査区北端部に位置する。平面形は約2.6×2.3mの不整楕円形で、深さは62cm残存していた。断面形は逆台形に近く、埋土は二層に分離できた。遺物は少量の土器片と石器、および鍛冶滓が1片出土している。3386は白磁椀である。S315は古銅輝石安山岩で、表面には擦られた痕跡が観察できる。本来は竪穴式石槨の石材であろう。時期は中世である。　（平井）

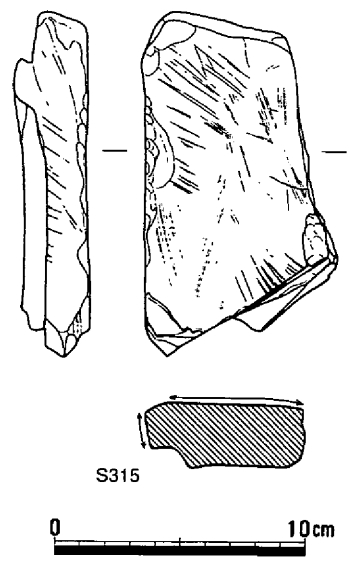
土壙400（第943図）

N22区の北東部、溝72の東側で小形の土壙や柱穴が散在して検出された。屋敷地の一部と思われるが、建物は検出されなかった。土壙400はこの一画の西端に位置していた。平面形は不整な長方形で、長径が95cm、短径は68cm、深さは30cmを測った。壙壁の傾斜は急で、断面形は台形に近い。底面は中央かやや窪むが、ほぼ平坦であった。埋土は1層で、底に炭層が認められた。少量の土器片が出土し、ゴミ捨て穴とみられる。　（岡本）

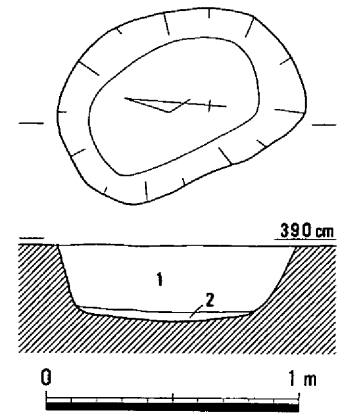
土壙401（第944図）

土壙400の北東に1m離れて検出された。平面形は楕円形で、





第942図　土壙399（1/60）・遺物



第943図　土壙400（1/30）

長径が114cm、短径は93cmを測った。底面は平坦ではなく、東側が一段深くなっていた。段差は16cmあり、最深部の深さは35cmであった。少量の土器片が出土したのみであった。　（岡本）

土壙402（第945図）

土壙400の東1.3mで検出された。平面形は長楕円形で、長径が114cm、短径は46cmだが、深さは６cmしかなく、周囲の土壙よりかなり浅かった。埋土は灰黄褐色砂質土の１層であったが、炭や焼土のブロックを含み、ゴミ穴と考えられる。土器片も少量出土した。　（岡本）

土壙403（第946図）

土壙402の南東２mに位置していた。平面形は長径91cm、短径80cmの隅丸方形で、深さは11cmを測った。断面形は皿状を呈していた。埋土は土壙402と等しく、土器片も少量出土した。　（岡本）

土壙404（第947図）

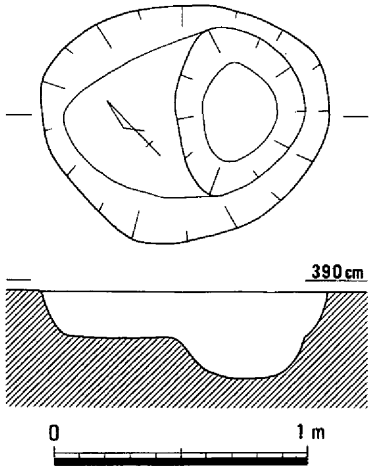
N22区北東部の土壙・柱穴群の南端にあった。調査区端にかかり、半分を検出した。平面形は楕円形と推定され、長径は97cm、深さは17cmを測った。壙壁の裾は湾曲し、断面形は皿形に近い。埋土は１層だが、底面に炭や焼土の小塊が認められた。土器片も少量出土し、ゴミ穴とみられる。　（岡本）

土壙405（第948図）

土壙401の東方4.5mで検出された。平面形は不整な円形で、長径が72cm、短径は66cmを測った。底面の中央部が窪み、深さは10cmであった。底面の中央部には炭が認められ、土壙400と同じような埋土の状況であった。土器片が少量出土した。　（岡本）

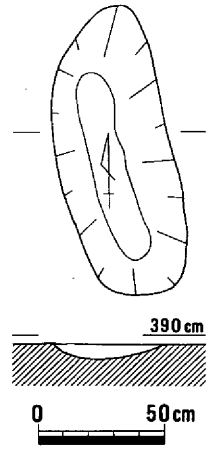
土壙406（第949図）

N23区の北西隅、溝73と76の交点付近で検出された。溝73によって半分以上を破壊された大形の不



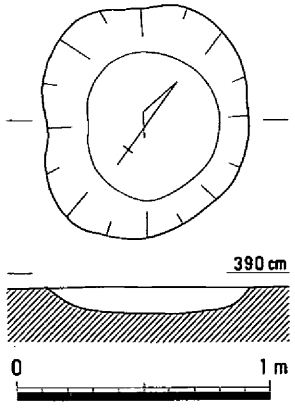
にぶい黄褐色砂質土

第944図　土壙401（1/30）



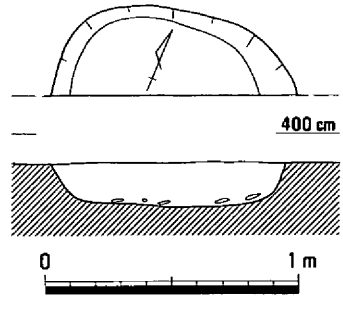
灰黄褐色（10YR４/２）砂質土
（炭と焼土のブロックを含む）

第945図　土壙402（1/30）



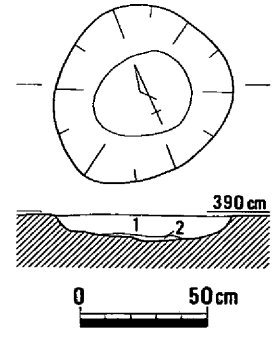
灰黄褐色（10YR４/２）砂質土
（炭と焼土のブロックを含む）

第946図　土壙403（1/30）



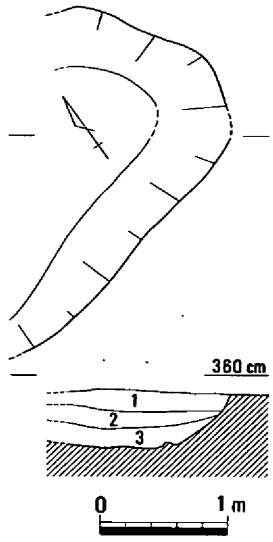
にぶい黄褐色（10YR５/４）砂質土
（炭と焼土のブロックを含む）

第947図　土壙404（1/30）



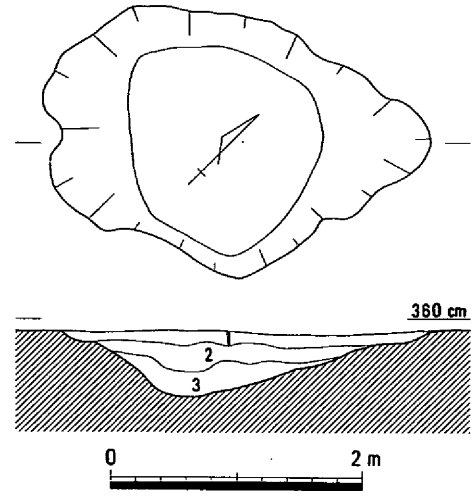
1　にぶい黄褐色（10YR５/４）砂質土
2　炭層

第948図　土壙405（1/30）



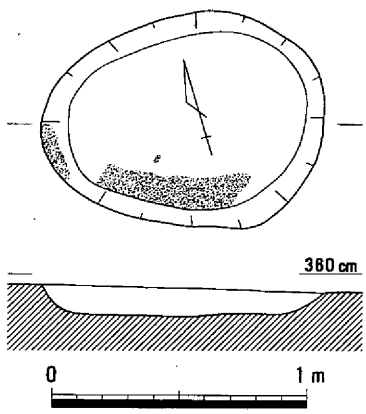
1　にぶい黄橙色（10YR 6 / 4 ）砂質土
2　灰色（N 4 /）砂質土
（黄褐色のブロックを含む）
3　暗緑灰色（10GY 4 / 1 ）粘性砂質土

第949図　土壙406（1/60）



1　にぶい黄色（2.5Y 6 ／ 3 ）砂質土
（マンガンのブロックを含む）
2　灰オリーブ色（7.5Y 5 ／ 3 ）粘性砂質土
（粘性だが砂質の方が強い）
3　灰色（10Y 5 ／ 1 ）粘性砂質土
（やや粘性の方が強い）

第950図　土壙407（1/60）



にぶい黄褐色（10YR 4 / 3 ）粘性砂質土

第951図　土壙408（1/30）

整形な土壙で、残存部の長径が274cm、深さは64cmを測った。壙壁の傾斜は緩やかで、底面はわずかに窪んだ平面となっていた。埋土は３層で、規則的な堆積を示した。位置関係から溝64より古いものと推定される。（岡本）

土壙407（第950図）

Ｎ23区の調査区南西隅で検出された。大形の土壙で、不整形な平面形をもち、肩部に凹凸がみられた。長径が294cm、短径は209cm、深さは54cmを測った。壙底には平坦面をもたず、断面形は逆三角形に近かった。埋土は順次の堆積を示した。土器片が少量出土した。（岡本）

土壙408（第951図）

Ｎ23区の北西隅、溝74の下から検出された。平面形は卵形で、長径が111cm、短径は86cm、深さは12cmを測った。底面の南縁部分と西側の壙壁の一部に被熱によって赤色に変化した部分が存在し、土壙内で火を焚いたものとみられる。（岡本）

土壙409（第952図）

Ｍ23区の南西部、調査区の北東隅で土壙が４個密集して検出された。形状や埋土の状態がよく類似していることから、同じ機能をもっていたものと考えられる。土壙409は平面形が楕円形で、長径が84cm、短径は70cm、深さは10cmを測った。埋土は２層で、底に２cm程度の厚さをもった炭層があり、焼土が混じっていた。この状態は土壙400や土壙405と同じで、ゴミ穴とみられる。（岡本）

土壙410（第953図）

土壙409の南東95cmに位置していた。長径が99cm、短径は86cm、深さは16cmを測った。底面は湾曲

し、断面形は皿形を呈していた。炭層の厚さは４cmであった。土壙409と同じく少量の土器片が出土した。この土壙から12m南西に検出された土壙も同様な状態で、底に炭層が認められた。　（岡本）

土壙411（第954図）

土壙409の北東110cmで検出された。長径が98cm、短径は85cm、深さは17cmを測った。底面はやや狭く、そのためか底の炭層の厚さは5cmともっとも厚かった。土器片が少量出土した。　（岡本）

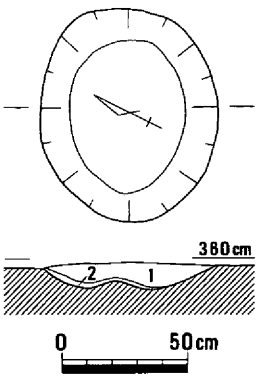
土壙412（第955図）

土壙410の北東170cm、土壙411の南東 110cmに位置していた。長径が92cm、短径は82cm、深さは14cmを測った。断面形は皿形で、底の炭層の厚さは３cmであった。土器片が少量出土した。　（岡本）

土壙413（第956図）

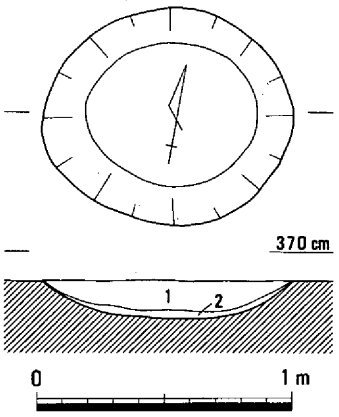
N23$_{05}$区の北端中央に位置する土壙である。長さが220cm、幅は150cm、深さが15cmを測り、平面形はやや歪な楕円形を呈する。この土壙の性格は明らかでない。

図示しうる遺物はないものの吉備系土師器椀の破片が若干出土しており、それからみてこの土壙の時期は、鎌倉時代後半と考えられる。　（弘田）



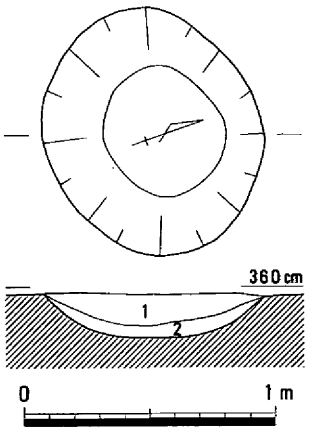
1　にぶい黄橙色（10YR６/３）粘性砂質土
2　粘性砂質土（ところどころに炭を含む・上部に焼土を含む）

第952図　土壙409（1/30）



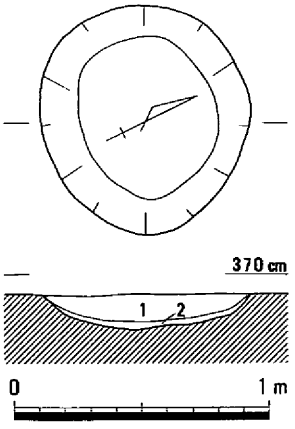
1　にぶい黄橙色（10YR６／３）粘性砂質土
2　炭層（下部に焼土を含む）

第953図　土壙410（1/30）



1　にぶい黄橙色（10YR６/３）粘性砂質土
2　炭層（ところどころに焼土を含む）

第954図　土壙411（1/30）



1　にぶい黄橙色（10YR６/３）粘性砂質土
2　炭層（ところどころに焼土を含む）

第955図　土壙412（1/30）

土壙414（第957図）

N23区の北東で検出した土壙で、土壙361の東５ｍに位置する。南西辺を確認したにすぎないが、現状では長さ405cm、幅78cm以上の方形を呈する。深さは13cmと浅く、たわみ状を呈している。灰色をなす埋土からは、土師器3387・亀山焼3388が出土している。3387は椀の底部で、断面三角形をなす高台を貼り付けており、14世紀前半に比定される。（亀山）

土壙415（第958図）

土壙415は、第２微高地のほぼ中央に位置する。溝101との切り合いは不明確である。平面は大形の不整長楕円形で、規模は494×203cmを測る。出土遺物には、土師器高台付椀3389、杯3390、小皿3391・3392、皿3393～3396、亀山焼擂鉢3397・3398、軒丸瓦3399・3400、軒平瓦3401、銅銭M73・74が認められる。また、図示していないが、他にも多くの瓦片が出土している。

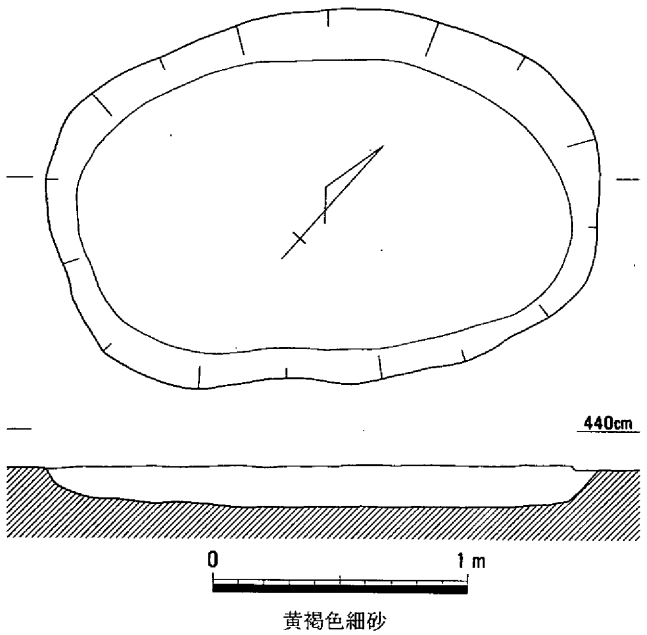
3397・3398は、内面に７条の卸し目を有し、外面は粗いハケメを行っている。口縁端部は上方に肥厚する。3399・3400は宝相華紋の軒丸瓦、3401は平安宮出土のものと同紋の軒平瓦である。M73は元祐通寶（1093年初鋳）、M74は天聖元寶（1023年初鋳）である。

土師器の一部や瓦などは混入と思われるものもあるが、亀山焼から遺構の時期を判断すると、鎌倉時代の後半ではないかと思われる。（柴田）

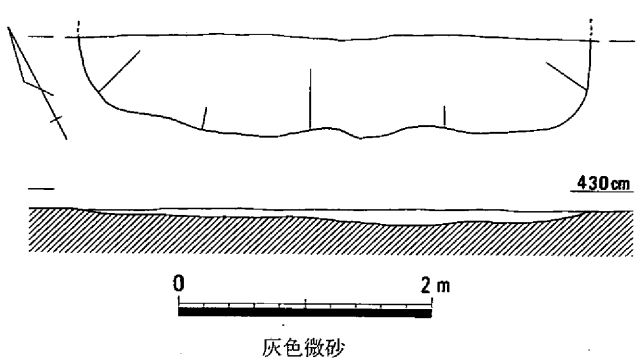
土壙416（第959図）

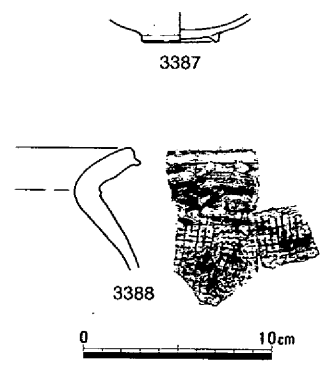
土壙416は、第２微高地の中央北寄りに位置し、溝96や102に切られている。平面は大形の円形で、径は314cmを測る。出土遺物には、土師器小皿3402、鉄釘M75が認められ、図示していないが、他にも青磁や瓦の小片が出土している。

遺物などから、遺構の時期については概ね室町時代におさまるのではないかと思われる。（柴田）

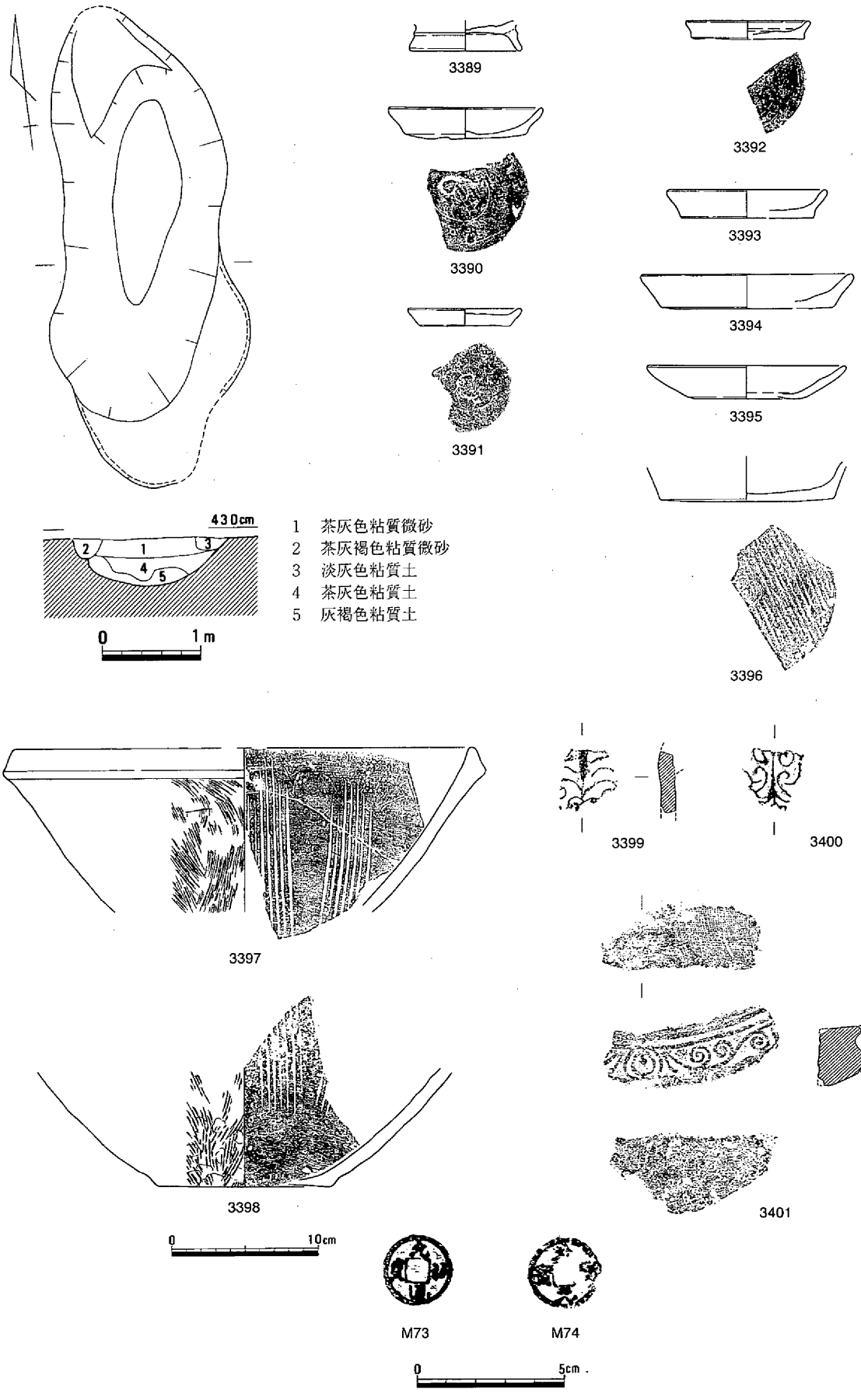


第956図　土壙413（1/30）





第957図　土壙414（1/60）・遺物



第958図　土壙415（1/60）・遺物

土壙417（第960図）

土壙417は、第２微高地の中央やや北東寄りに位置する。平面は楕円形で、規模は130×104cmを測る。残存状況は悪く、深さは非常に浅い。出土遺物は図示していないが、備前焼の擂鉢の小片が出土している。これらなどから、遺構の時期は室町時代におさまると思われる。（柴田）

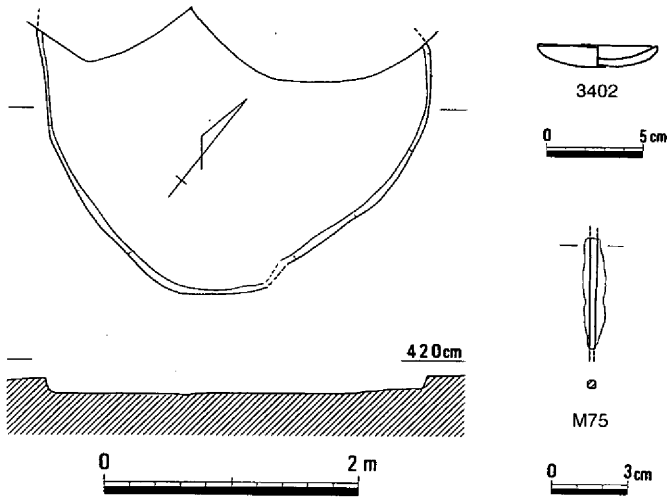
土壙418（第961図）

土壙418は、第２微高地の南東寄りに位置する。平面は円形で、径は96cmを測る。出土遺物は図示していないが、土師質高台付椀の小片が出土している。これらなどから、遺構の時期は鎌倉時代におさまると思われる。（柴田）

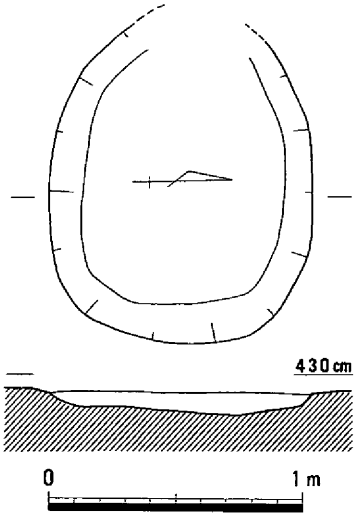
土壙419（第962図）

土壙419は、第２微高地の中央やや東寄りに位置する。平面は円形で、径は64cmを測る。床面は中央がくぼんでおり、埋土はレンズ状堆積を呈する。出土遺物には、土師器小皿3403・3404、甕3405、丸瓦3406、平瓦3407、砥石Ｓ316、鉄釘Ｍ76～80などが認められる。

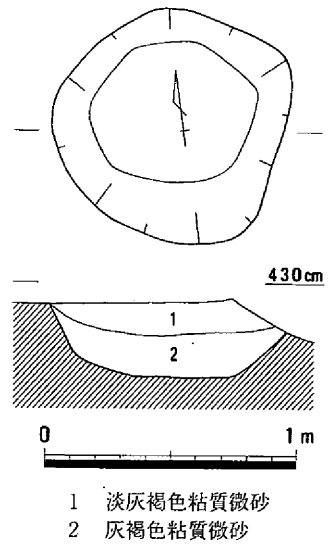
3406は、凹面に布目が認められる。3407は凹面と凸面に糸切り痕が認められ、離れ砂が付着している。Ｓ316は凝灰岩製で、使用面は３面である。鉄釘には、小・中形のＭ76～



第959図　土壙416（1/60）・遺物



第960図　土壙417（1/30）



第961図　土壙418（1/30）

79とM80のような大形のものがある。

遺物などから、遺構の詳細な時期を決めることは難しいが、概ね室町時代におさまるのではないかと思われる。（柴田）

土壙420（第963図）

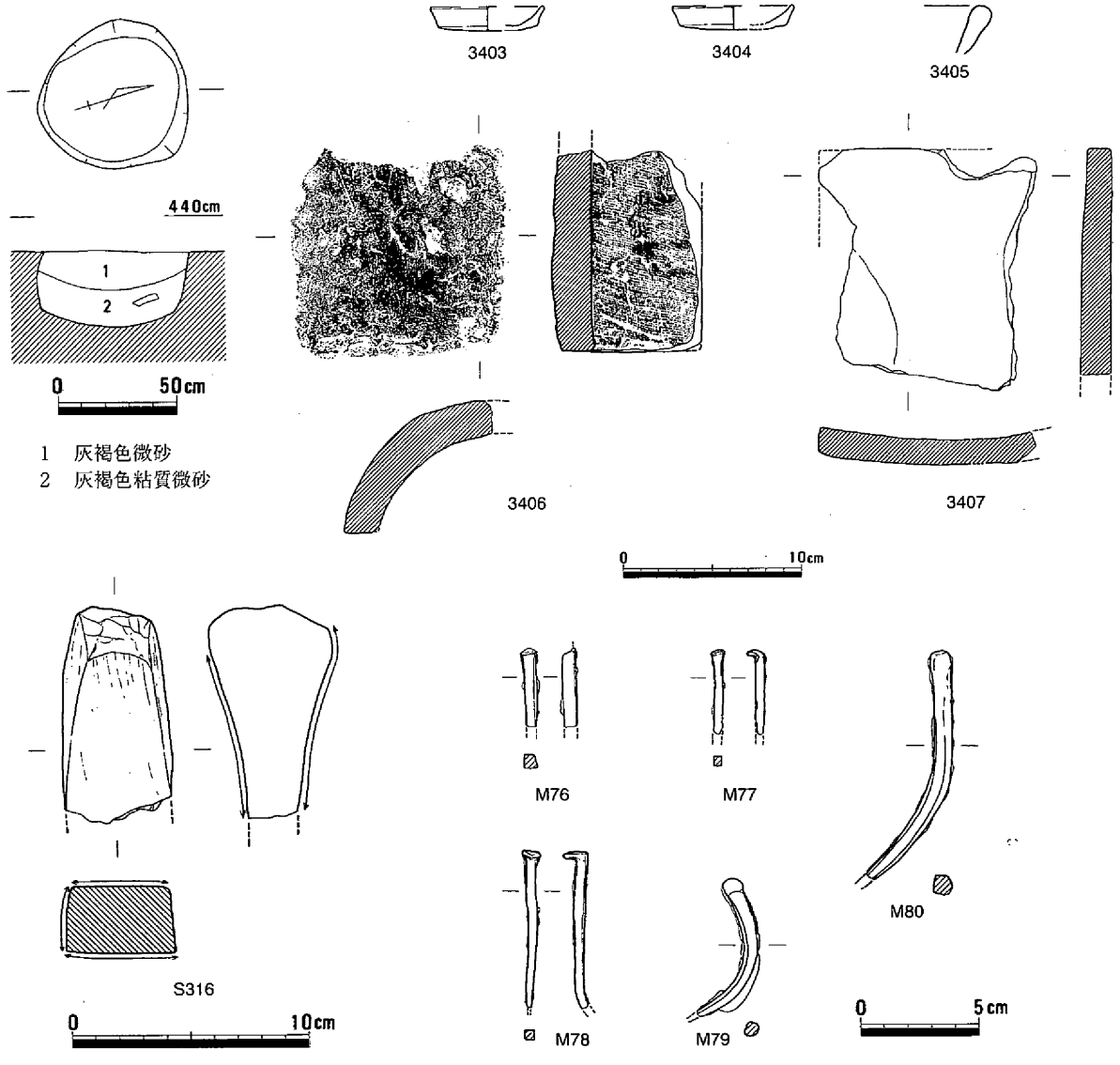
土壙420は、第2微高地の南東寄りに位置する。平面は長方形で、規模は125×93cmを測る。残存状況は悪く、深さは非常に浅い。床面の西側の一部がくぼんでいる。出土遺物には、土師質高台付椀3408が認められる。

遺物などから、遺構の時期は中世におさまると思われる。（柴田）

土壙421（第964図）

土壙421は、第2微高地の東寄りに位置し、遺構の北半分を溝98・99に切られている。平面は方形あるいは長方形と推定され、現状での最大長は107cmを測る。出土遺物には土師器小皿3409～3411、鍋3412、亀山焼擂鉢3413、丸瓦3414、平瓦3415などが認められる。

3410・3411の底部外面はヘラ切りで、上げ底気味になっている。3412の胴部から口縁部にかけては



第962図　土壙419（1/30）・遺物

ほとんど屈曲しないでのびる。3413は口縁端部が外方に肥厚し、内面は横方向のハケメと数条の卸し目が施されている。3415は凹面は布目が認められるが、凸面はナデが行われている。遺物などから、遺構の時期は室町時代におさまると思われる。（柴田）

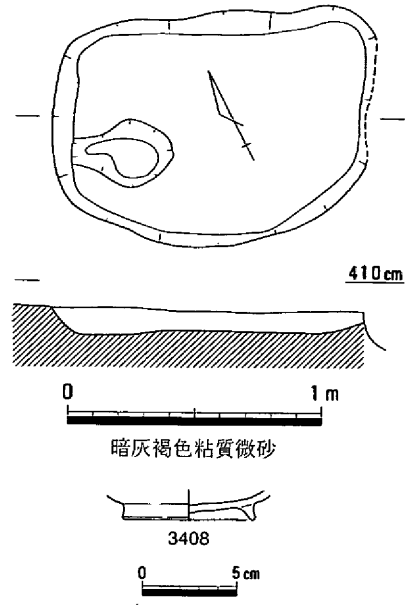
土壙422（第965図）

土壙422は、第２微高地の南東端に位置する。平面は楕円形で、規模は92×64cmを測る。出土遺物には、銅銭M81（洪武通寶、初鋳1368年）が認められる。また、図示していないが、他にも瓦片などが出土している。

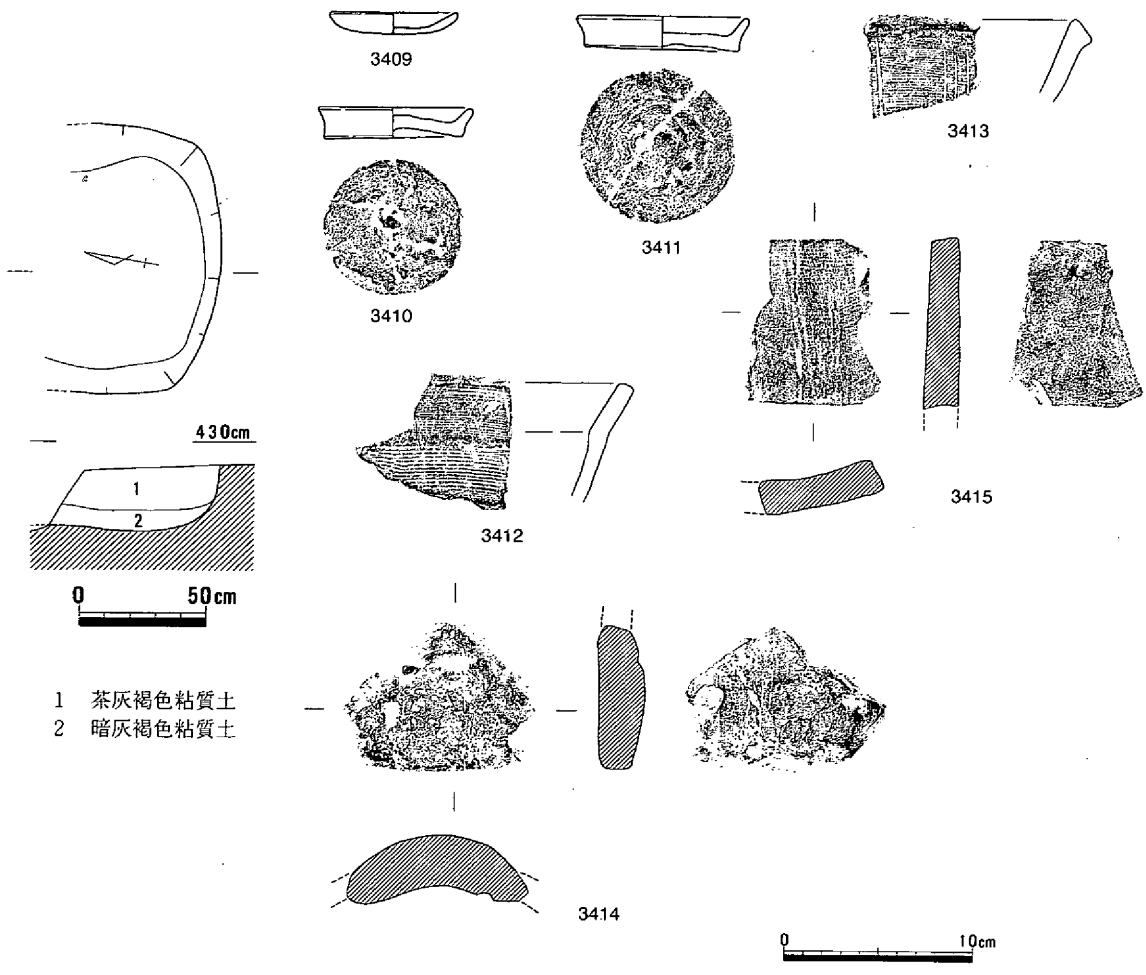
遺物などから、遺構の時期は室町時代におさまると思われる。（柴田）

土壙423（第966図）

土壙423は、第２微高地の南東端に位置し、遺構の西半分は調査区外である。平面は円形と推定され、現状の最大長は121cmを測る。出土遺物は図示していないが、



第963図　土壙420（1/30）・遺物



第964図　土壙421（1/30）・遺物

土師質高台付椀片が認められる。遺物などから、遺構の時期は中世におさまると思われる。（柴田）

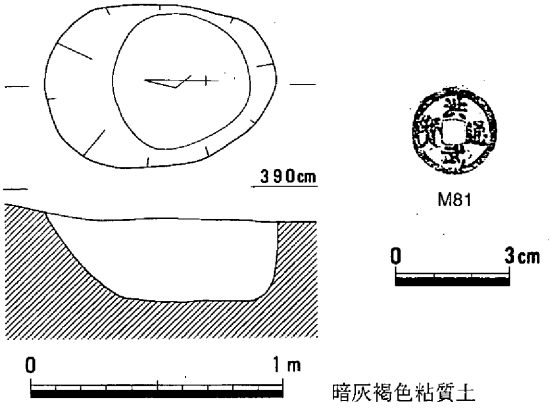
土壙424（第967図、写真39－３）

土壙424は、第２微高地の北東寄りに位置する。平面は長方形で、規模は127×100cmを測る。床面に遺物や礫が検出されている。出土遺物には、土師器高台付椀3416、皿3417・3418、滑石製の石鍋S317などが認められ、図示していないが、須恵器やカマド、鉄釘などの破片や骨片も出土しており、ゴミ穴と思われる。遺物などから、遺構の時期は中世初頭ではないかと思われる。（柴田）

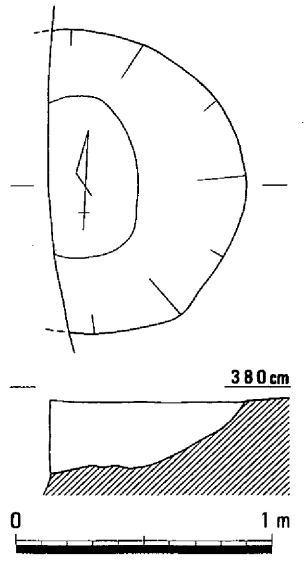
（５）土壙墓

土壙墓６（第968図）

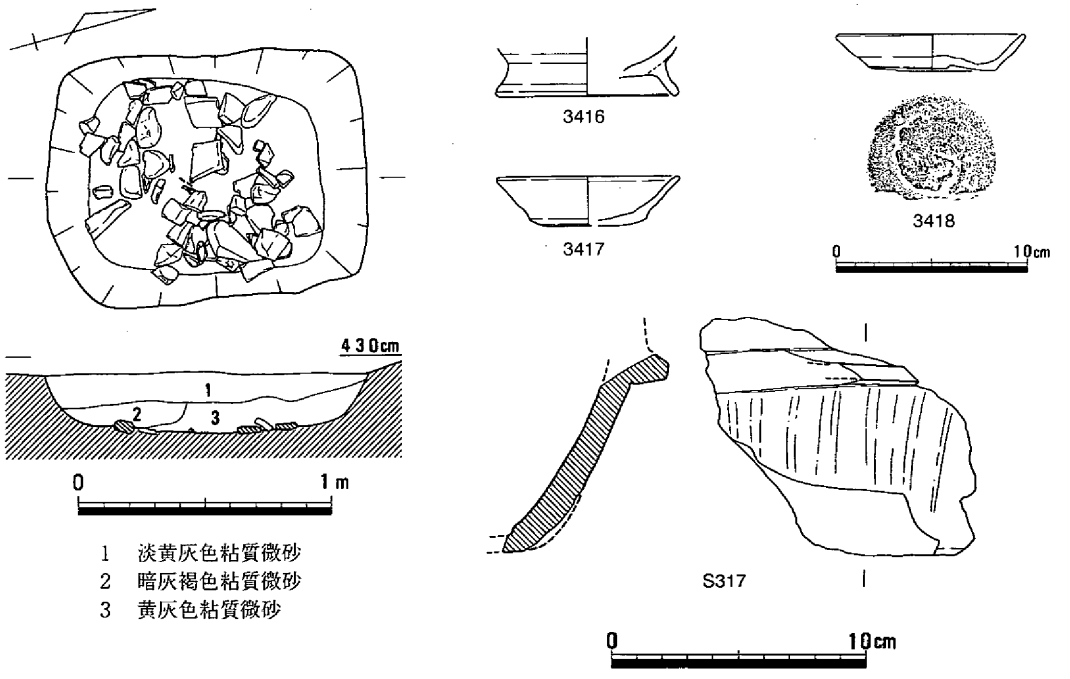
第１微高地のN22区北西部において検出した。中央部が側溝によって切られているが、平面形は長さ104



第965図　土壙422(1/30)・遺物



第966図　土壙423（1/30）



第967図　土壙424（1/30）・遺物

cm、幅78cmの長方形で、深さは26cm残存していた。主軸は南北方向である。北の端にヒトの頭骨が、また南端には足の骨が一部残存していた。

遺物としては、頭骨の側から土師器高台付椀が出土している。おそらく副葬品であろう。土器の時期は、13世紀中頃ではなかろうか。（平井）

土壙墓７（第969図、写真40－１，116）

第１微高地のＮ22区中央部において検出した。平面形は長さ105cm、幅63cmの長方形で、深さは16cm残存していた。断面形は逆台形で、埋土は炭を含む褐灰色粘土混じり微砂が一層のみであった。土壙内には、人骨が一体分残存していた。足は折り曲げられており、いわゆる屈葬である。遺物は土器と鉄器が出土している。3420は土師器小皿で、底部外面調整はヘラ切りである。M82は小刀である。人骨の左脇から、長辺方向にそって切先を足に向けて水平な状態で出土しており、副葬品と考えられる。刀身部には木質が残存しており、鞘に納められた状態で副葬されたと思われる。時期については決め手はないが、鎌倉時代後半と考えている。（平井）

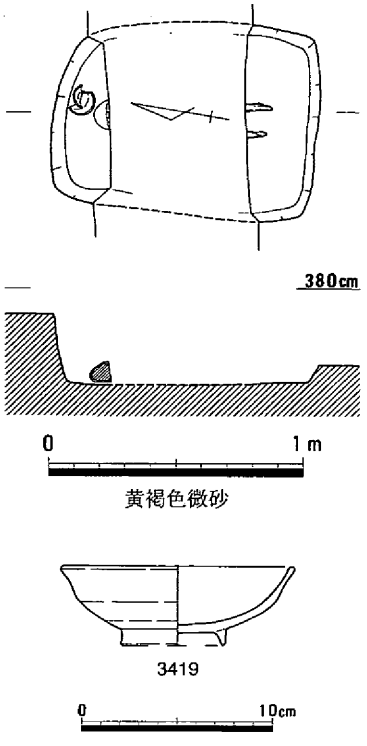
土壙墓８（第970図、写真40－２，116）

第１微高地Ｎ22区、土壙墓７の北東約10ｍにおいて検出した。平面形は長さ97cm、幅77cmの楕円形で、深さは24cm残存していた。土壙内には人骨が残存していた。南側に頭骨があり、いわゆる屈葬状態で葬られていたものと考えられる。

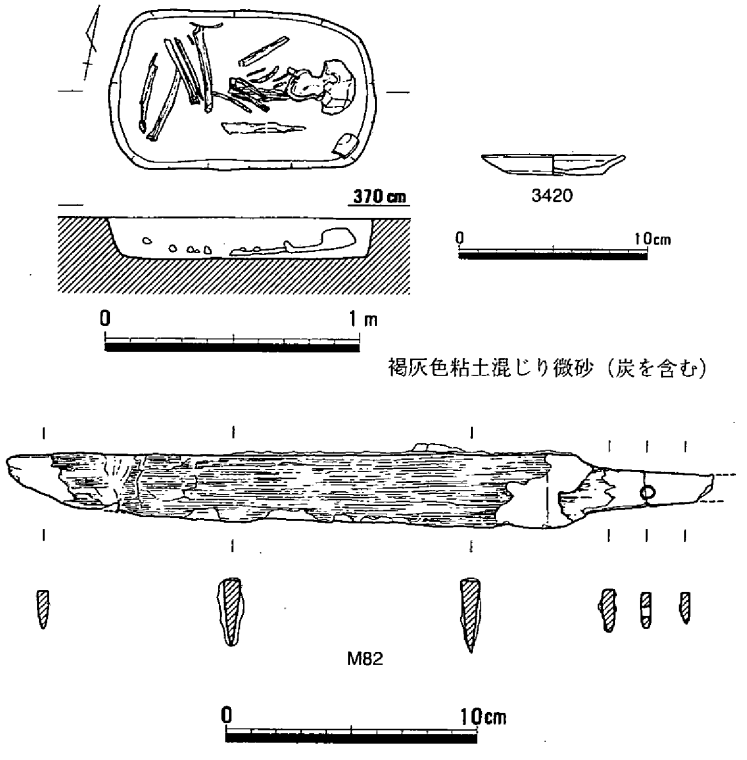
3421は土師器高台付椀で、頭骨東脇の底面から口縁部を上にした状態で出土しており、副葬品と考えられる。土器の時期は13世紀末頃と考えておきたい。（平井）

土壙墓９（第971図、写真40－３）

第１微高地のＮ22区、土壙墓８の北東約15ｍにおいて検出した。平面形は長さ166cm、幅65cmの長



第968図　土壙墓６（1/30）・遺物

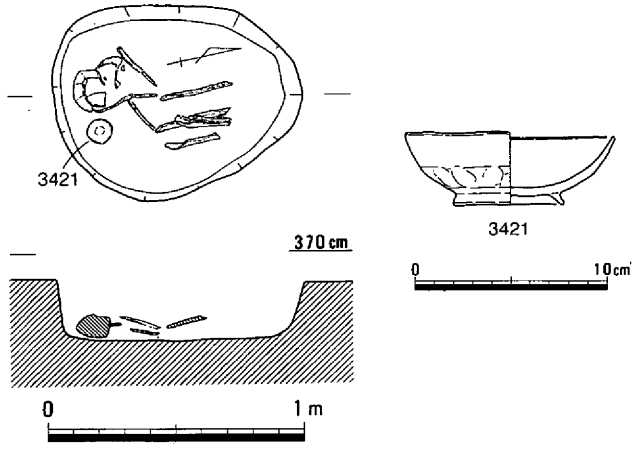


第969図　土壙墓７（1/30）・遺物

方形で、深さは10cm残存していた。土壙内には人骨が残存していた。土壙の規模や人骨の残存状態から、伸展葬ではなかろうか。時期は明確ではないが、鎌倉時代後半と考えている。（平井）

土壙墓10（第972図、写真41－１）

第１微高地のＮ22区、土壙墓９の南約10ｍにおいて検出した。平面形は長さ104cm、幅71cmの長方形で、深さは12cm残存していた。土壙には人骨が残存していた。頭骨は北側にある。また足の骨の残存状態からいわゆる屈葬状態で葬られたものと考えられる。特徴としては、長さ20cmのものを含む石が出土していることで、人と共に意識的に埋納されたのかもしれない。時期は明確ではないが、鎌倉時代後半と考えている。（平井）

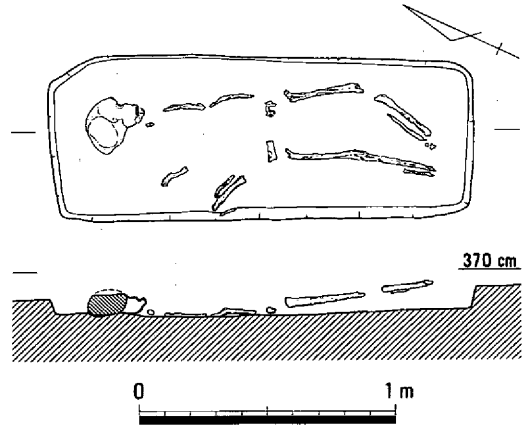


第970図　土壙墓８（1/30）・遺物

土壙墓11（第973図）

第２微高地のM24区南西部において検出した。平面形は長さ86cm、幅60cmの長方形で、深さは5cm残存していたにすぎない。土壙内の南東隅から、残存状態は良くないが、人骨が出土していることから、土壙墓と考えてよいであろう。

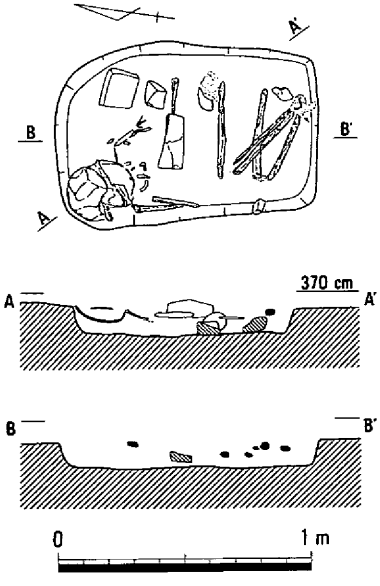
遺物は出土しておらず、時期は明確ではないが、鎌倉時代後半と考えている。（平井）



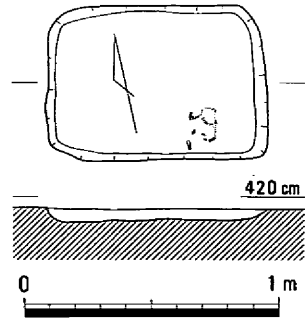
第971図　土壙墓９（1/30）

土壙墓12（第974図、写真41－２）

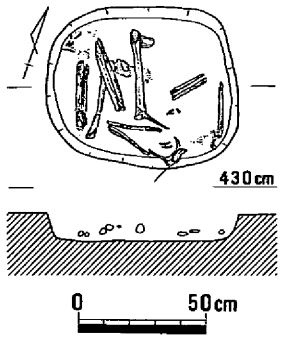
第２微高地のM24区、土壙墓11の北東約20



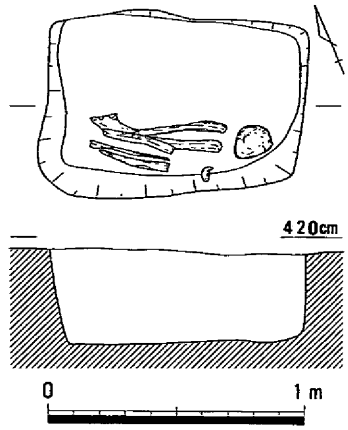
第972図　土壙墓10（1/30）

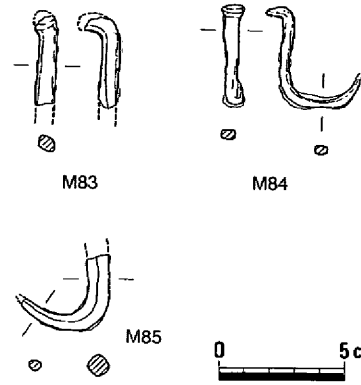


第973図　土壙墓11（1/30）



第974図　土壙墓12（1/30）





第975図　土壙墓13（1/30）・遺物

mにおいて検出した。平面形は75×64cmの隅丸長方形で、深さは11cm残存していた。断面形は逆台形で、底面は平らであった。

土壙内からは頭骨の一部が南東隅に確認できた。人骨はすべては揃っていないが、下肢骨の出土状態や土壙の規模から、いわゆる屈葬状態で埋葬されたと考えられる。

遺物が出土していないので、時期は明確ではないが鎌倉時代後半と考えている。（平井）

土壙墓13（第975図、写真41－3）

第2微高地の北端に設定した東西に細長い調査区で検出された遺構である。規模は長径101cm、短径75cmを測り、平面形は長方形を呈する。深さは検出面から37cmを測り、底面は平坦である。埋土は黒褐色粘質微砂で、平、断面観察においても木棺痕跡を確認することは出来なかったが、壙内から鉄釘M83～85が出土していることから、小さな木棺に埋葬されていたと思われる。南壁側に成人の人骨（頭骨など）が出土した。副葬品はないが、時期は中世に属すると思われる。（松本）

（6）火葬墓

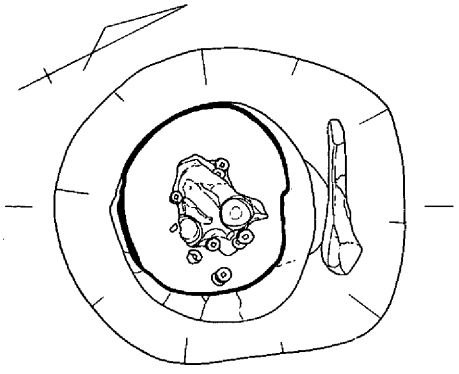
火葬墓1（第976・977図、写真42－1・2，117）

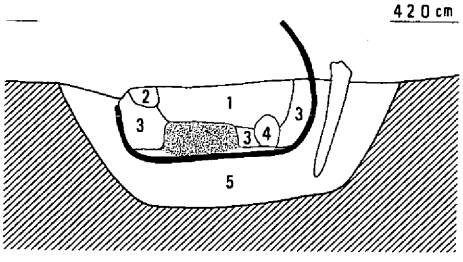
第2微高地の東端近くで検出された。この遺構が形成された時期はまだ空地の状態であったようである。遺構の上部はかなり削平を受けているが、土壙の掘り方規模は46×41cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは検出面から18cmと浅く、底面は平坦である。壙内から焼けた人骨片と銅銭を入れた蔵骨器（土師器の甕）と鋤先が出土している。甕は底面に置かれず、底面から5cm程上に置かれていることが断面観察で確認された。鋤先は甕の北西の位置でほぼ垂直に立てた状態で出土した。この甕の内部からは焼けて細片となった人骨が底部近くにおいて出土している。

副葬品としては、甕内から銅銭M86～97がある。銅銭はいずれも径19～19.5㎜、重さは2g前後である。銭名はM86～88が延喜通宝と読みとることができる。これらは小形で、重量も軽く、しかも銅質が粗悪であることから、鋳造はやや後出のものと思われる。鋤先M98は刃先と両耳が欠損している。甕3422は輪積みの製作で底部が平底となる。時期は平安期に属するものと思われる。（松本）

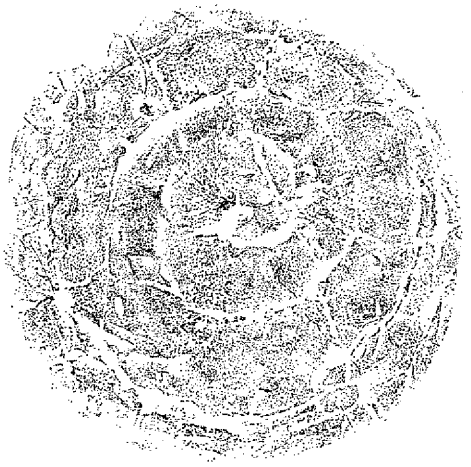
火葬墓2（第978・979図、写真42－3，117）

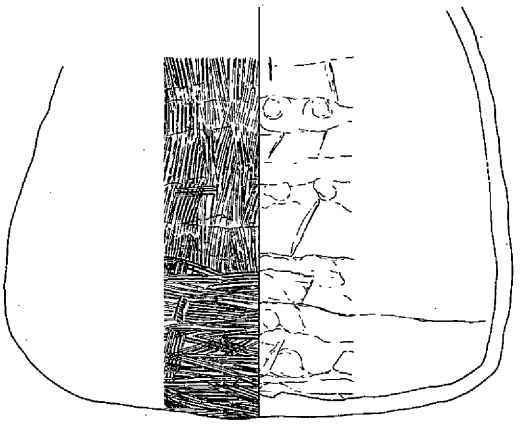
火葬墓1の南東約9mの位置で検出された。遺構の残存状態は良好である。蔵骨器を埋納する土壙

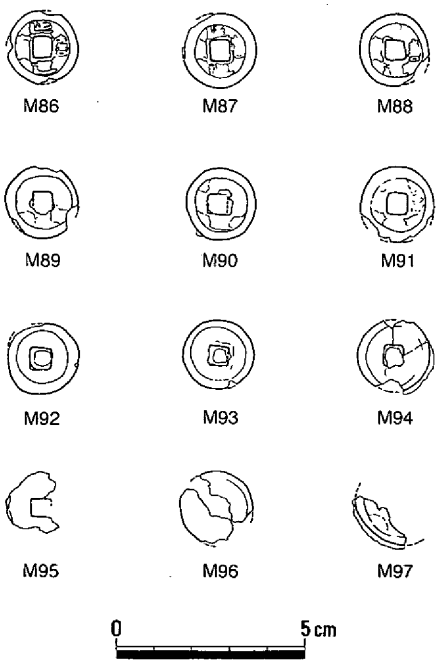


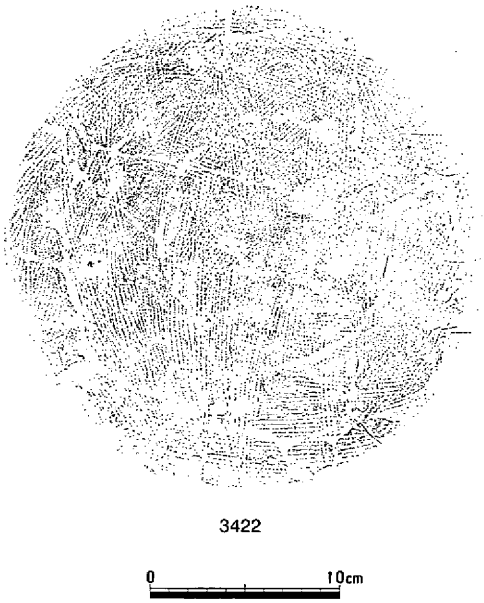


1　暗黄褐色粘質微砂
2　黄灰褐色粘質土
3　灰褐色粘質土
4　明黄橙色粘質土
5　暗茶褐色粘質土

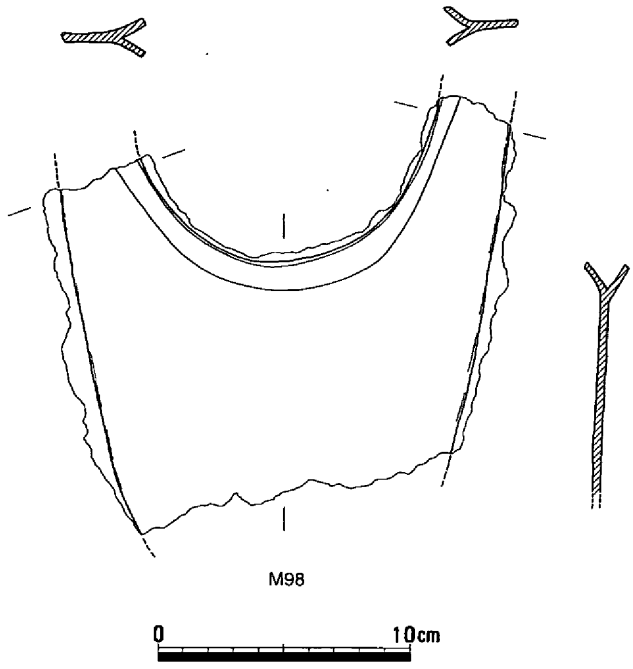








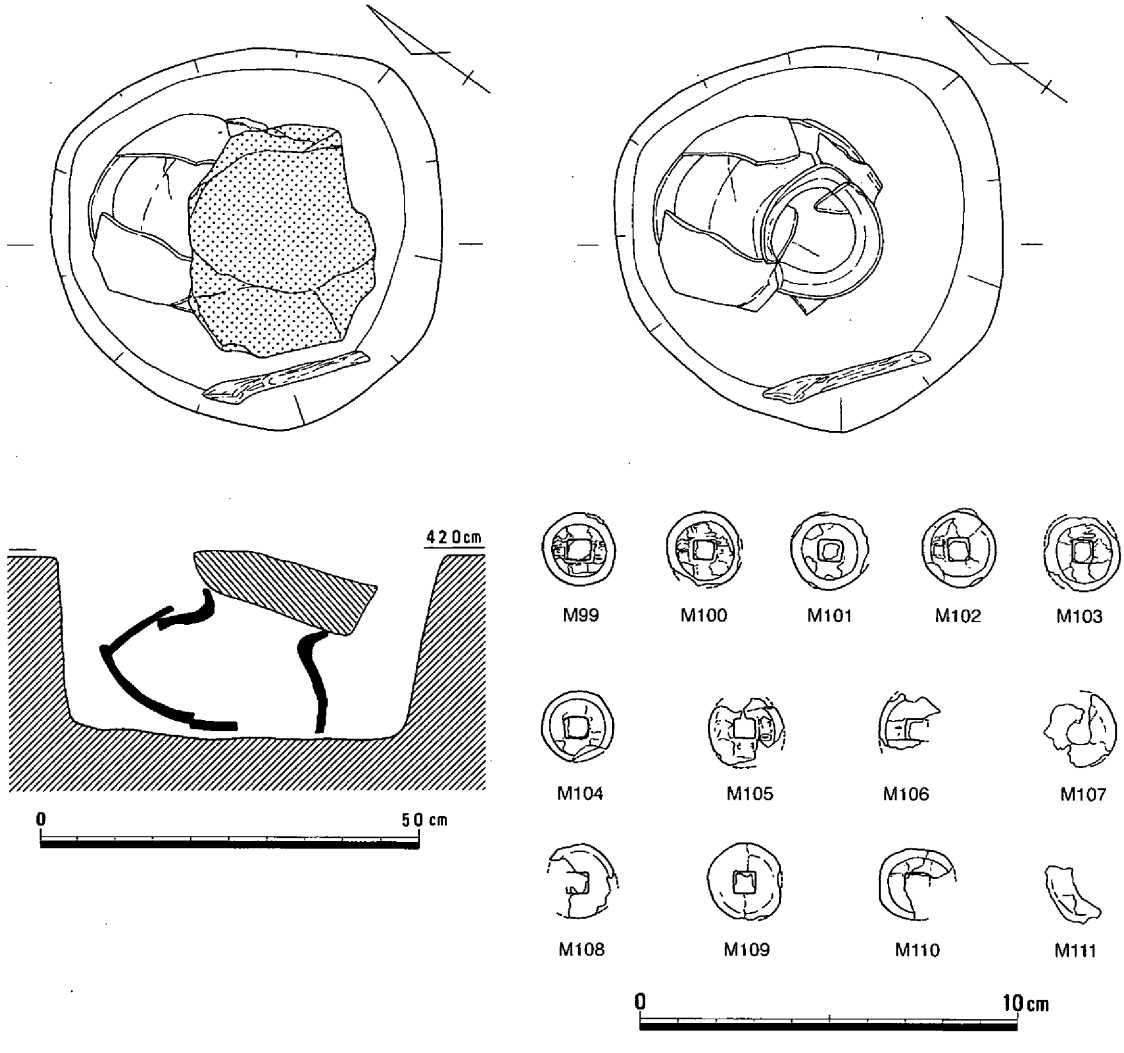
第976図　火葬墓１（1/10）・遺物（１）



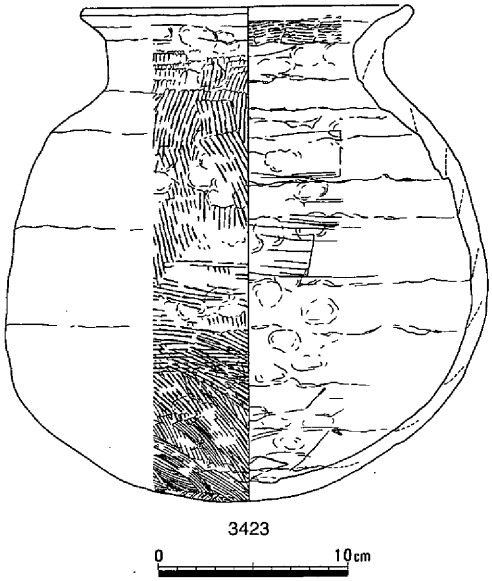
第977図　火葬墓１　遺物（２）

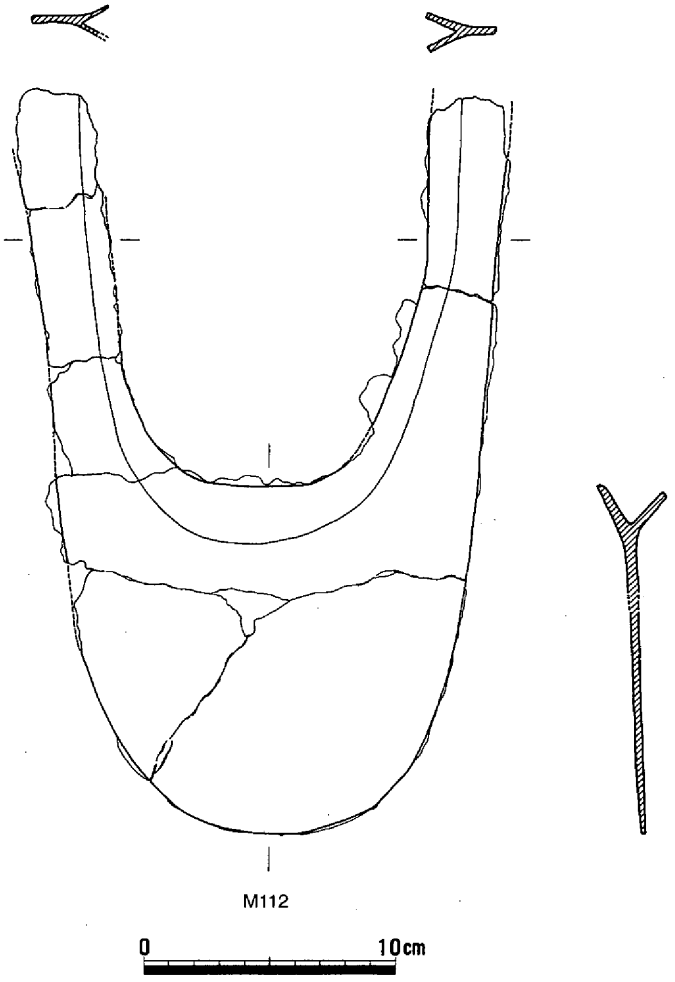
の掘り方規模は51×50cmを測り、平面形は楕円形を呈する。深さは検出面から23cmを測り、底面は平坦である。土壙内からは蔵骨器に利用された土師器の甕と鋤先が出土している。甕には25×30cm、厚さ7cmほどの板石が蓋として使用されていた。なお、甕の中には骨片が認められないが、火葬墓１と同様に銅銭が出土し、鋤先は壙内の南西壁に垂直に立てられた状態で出土した。

副葬品としては、甕内から銅銭M99～111が出土している。銅銭は径19～21㎜、重さ1.6～3.2ｇと幅がある。銭名はM99・100・103・105が皇朝十二銭の一種



第978図　火葬墓２（1/10）・遺物（１）





第979図　火葬墓２　遺物（２）

の延喜通宝である。他は不明である。銅銭の大きさ、重量、材質は火葬墓１に類似している。M112は完形に近いU字型の鋤先である。蔵骨器の甕3423は輪積みの製作であるが、底部はやや丸底となる。外面は櫛状工具によるナデの調整がみられる。時期は平安期に属すると思われる。

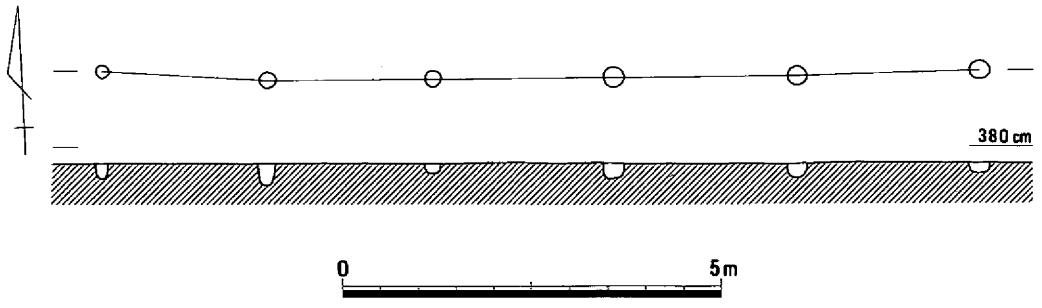
（松本）

（７）柱穴列

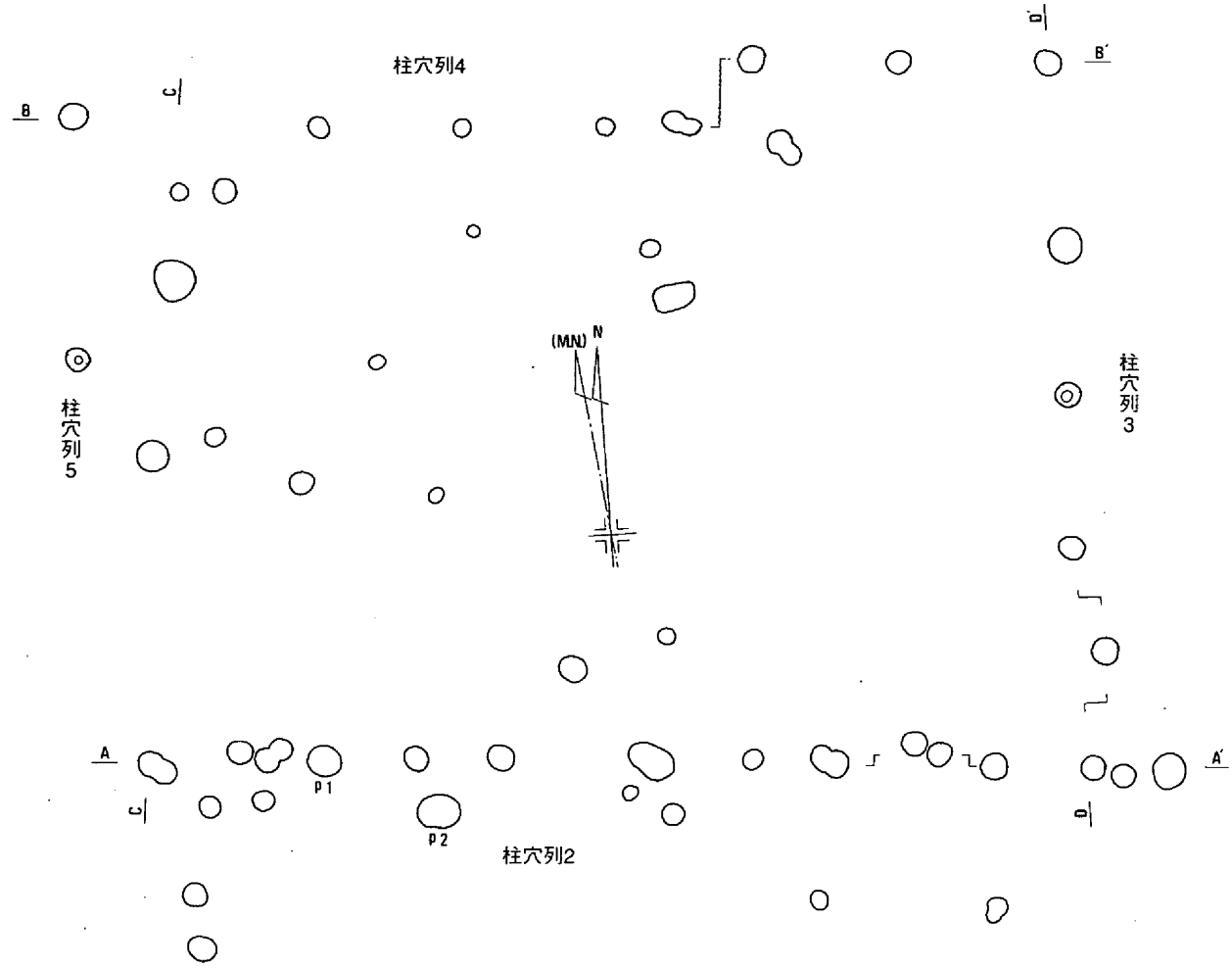
柱穴列１（第980図）

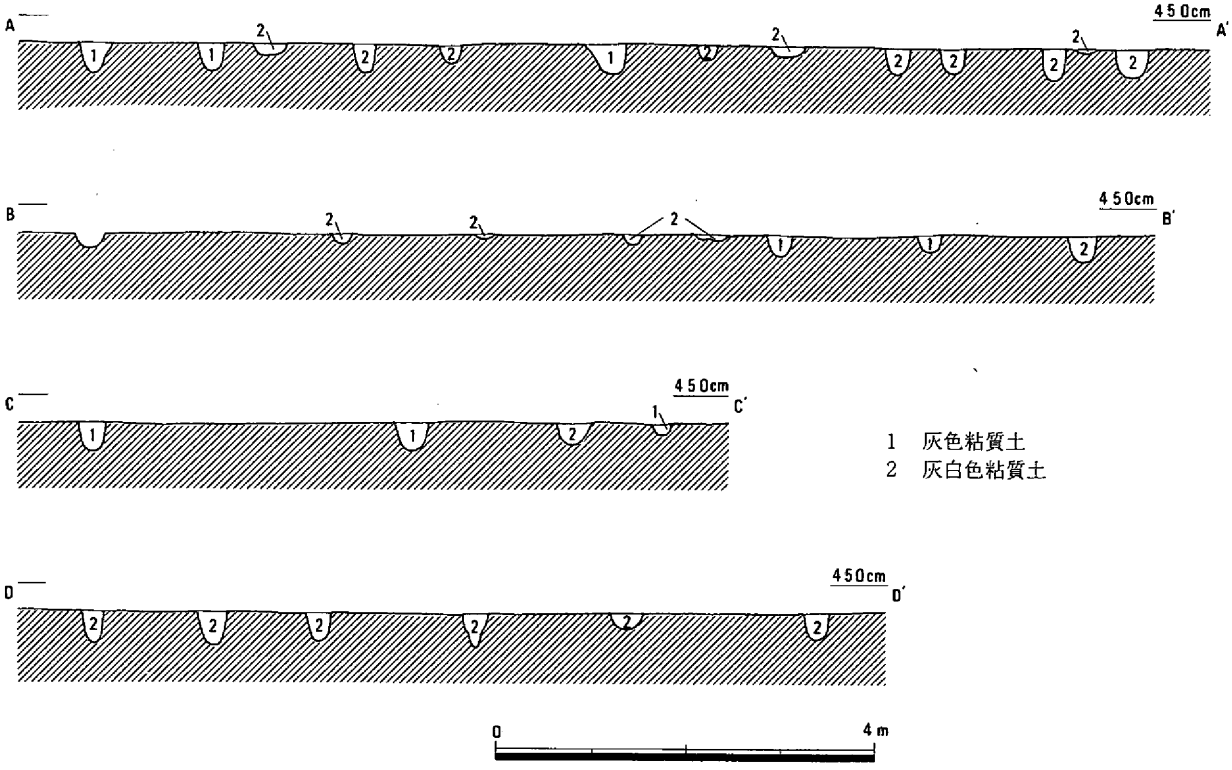
第１微高地の北西部に位置する（第835図）。柱穴状の穴が10個直線的に並んでいた。間隔は210～240cmが多く、一カ所約480cmの部分があるが、これについては柱穴が未検出であるのかもしれない。第980図は一部の図で、柱穴の規模は直径20cm前後の円形で、深さは10～30cmであった。ほぼ東西方向に並んでいることや埋土から古代と考えており、柵列であろうか。　（平井）

柱穴列２～５（第981・982図）



第980図　柱穴列１（1/100）



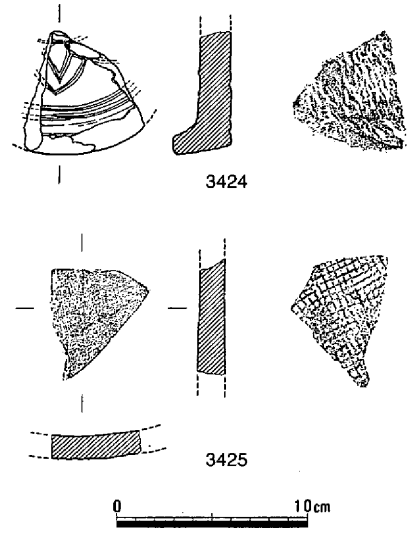


第981図　柱穴列2・3・4・5（1/80）

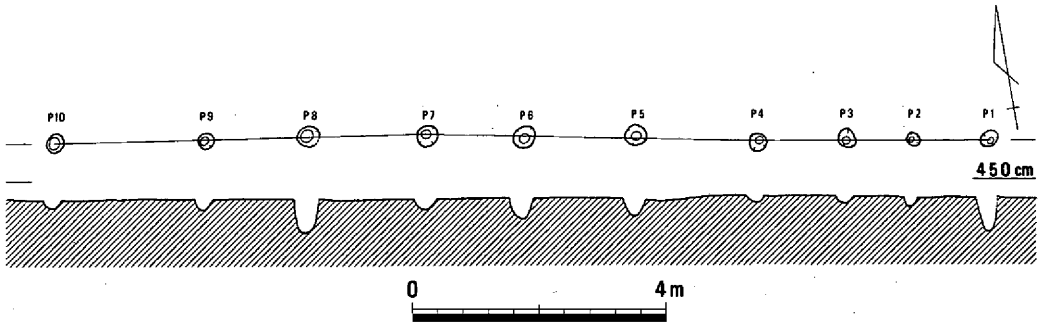
第２微高地の梵鐘鋳造遺構である土壙375の北東部に位置する。約10×８ｍの長方形に並んだ柱列を柱穴列２～５として報告する。柱の規模は概して小さく、深さも浅く一定していない。並びも規則的とは言い難く、柵列とは考えがたい。時期は古代で、梵鐘鋳造遺構や大量の瓦の出土から寺院の存在が想定できるため、寺院を構成する建物の足場杭の跡と考えている。3424はＰ１から出土した軒丸瓦、3425は平瓦で亀山焼か。　（平井）

柱穴列６（第983図）

柱穴列６は、第２微高地の東寄りに位置し、溝100・101で囲まれた区域を南北に分けるように配されている。出土遺物は認められないが、遺構の時期は中世におさまると思われる。　（柴田）



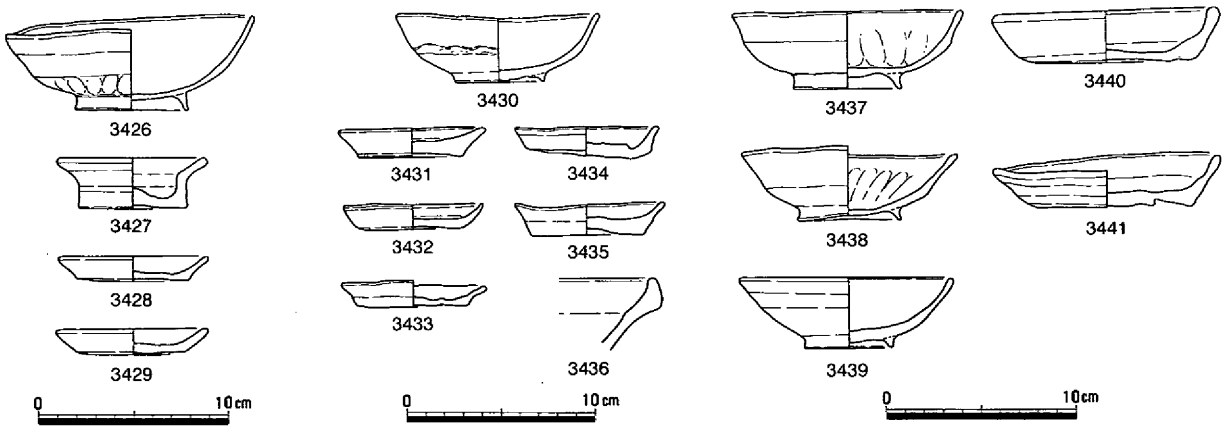
第982図　柱穴列２～５　遺物



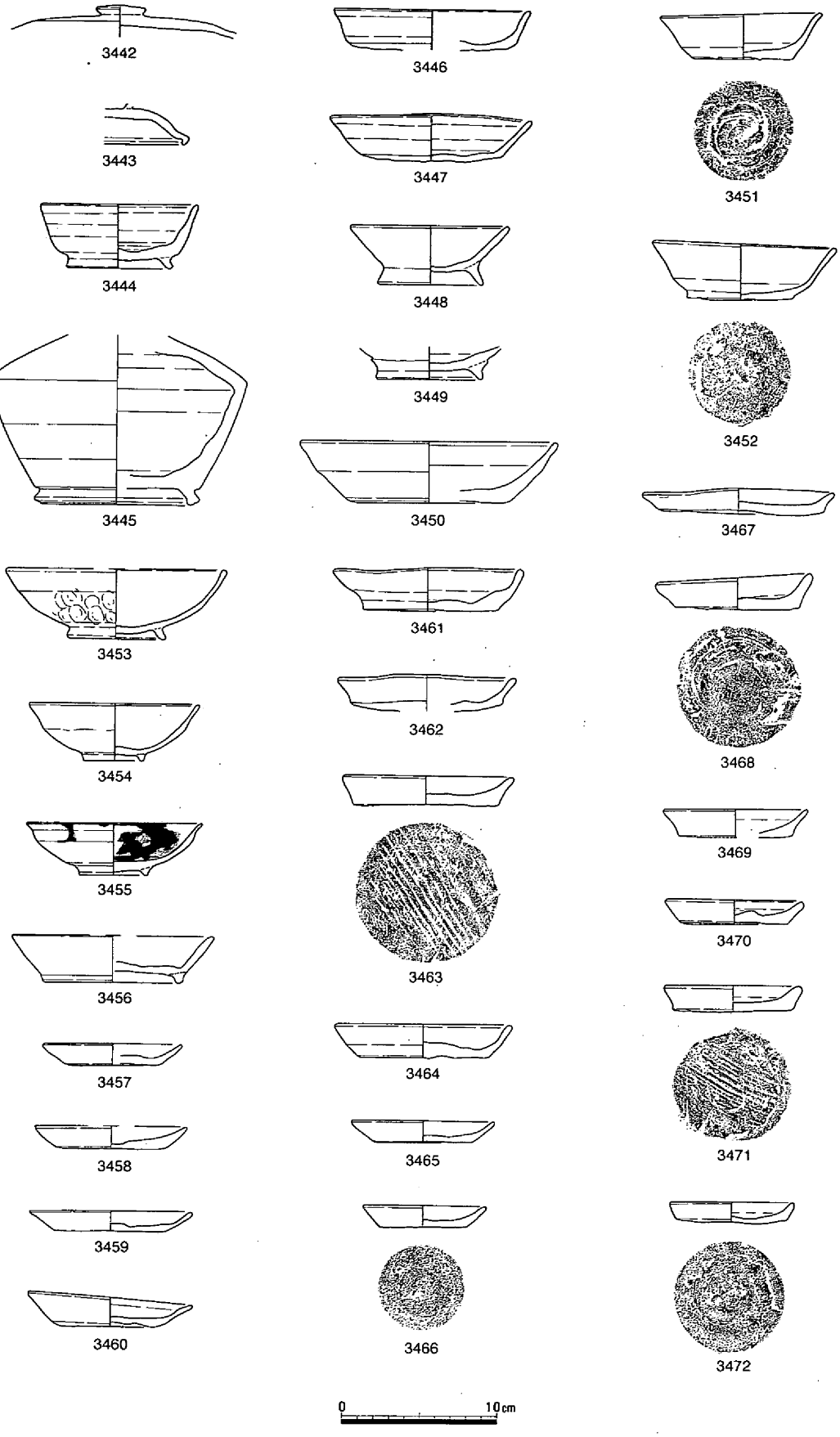
第983図　柱穴列６（1/120）

（８）柱穴

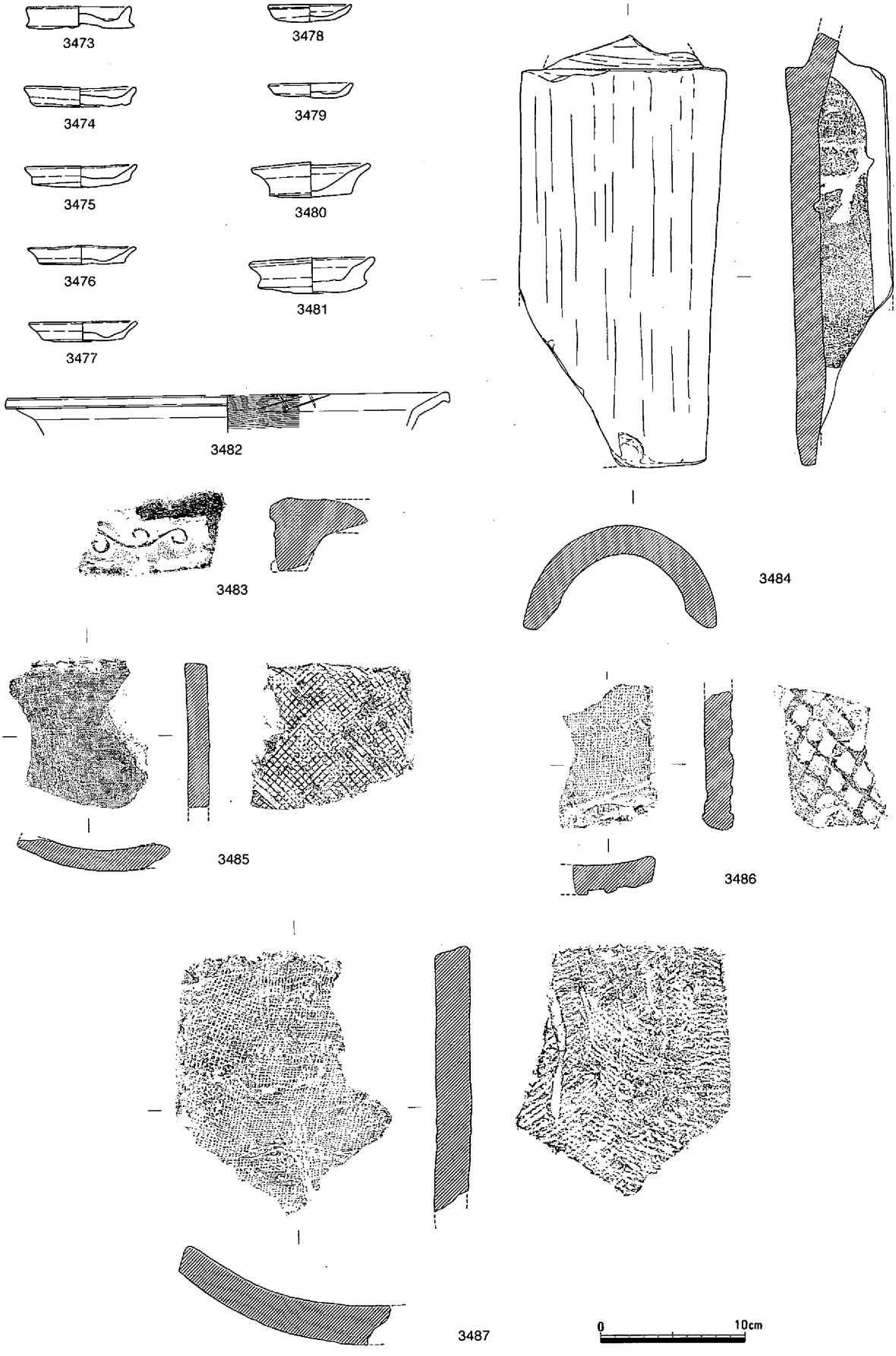
古代と考えられる柱穴は、第１微高地では少なく、北東部で少量確認できたのみである。第１微高地では古代の遺構は建物や土壙が少し検出されているが、遺構密度は全体的に低い。調査区より北側



第984図　柱穴　遺物（１）


3442
3443
3444
3445
3453
3454
3455
3456
3457
3458
3459
3460
3446
3447
3448
3449
3450
3461
3462
3463
3464
3465
3466
3451
3452
3467
3468
3469
3470
3471
3472
0
10cm

第985図　柱穴　遺物（2）


3473
3478
3474
3479
3475
3480
3476
3481
3477
3482
3483
3484
3485
3486
3487
0
10cm

第986図　柱穴　遺物（３）

が中心なのかもしれない。第２微高地では南西端部と北東部に集中して検出されている。南西部には土壙があり、居住域と考えられ、建物が存在しているのかもしれない。北東部は寺院跡が想定できる地域で、まとめることができなかった建物や柵列になる可能性がある。

中世と考えられる柱穴は、第１微高地では南西部に集中していたが、建物にはまとまらなかった。第２微高地では南西部と北東部に集中していた。南西部では建物としてはまとまらず、居住域にはなっていないかもしれない。北東部では建物４棟と柱穴列を報告しているが、それ以外にも存在していた可能性を考えておきたい。

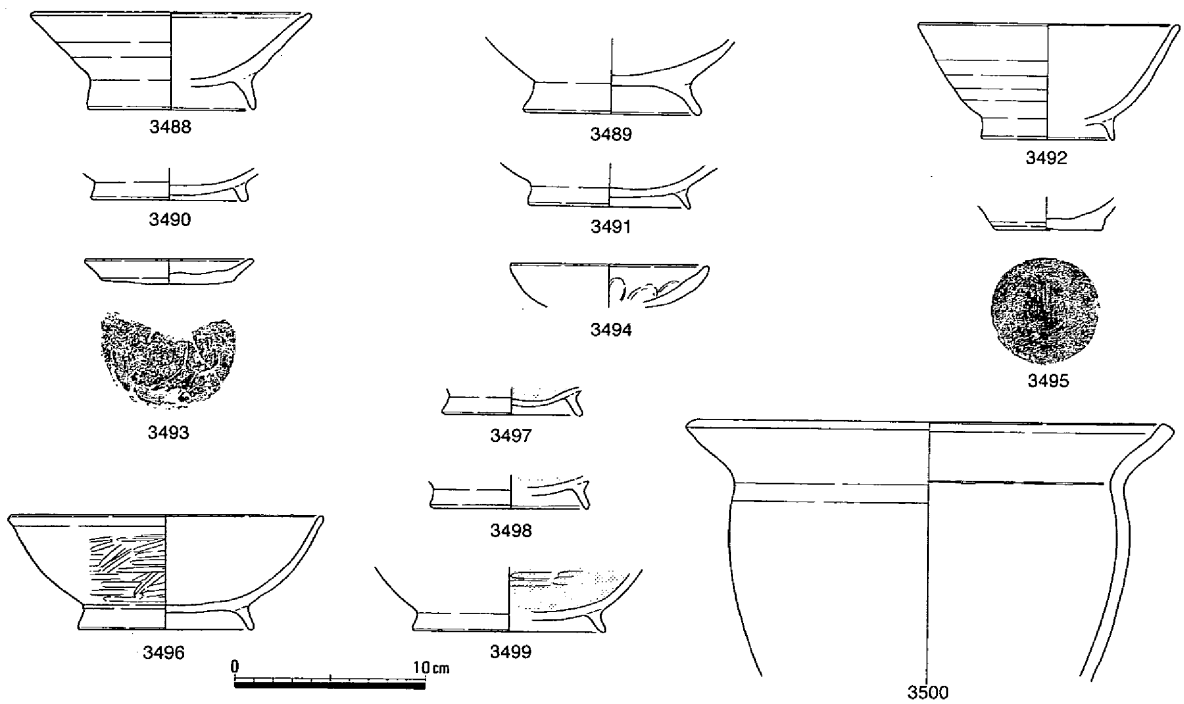
柱穴出土遺物のおもなものを第984～986図に示している。出土した柱穴番号については、土器観察表に記入しているが、3426～3429はＰ26から、3430～3436はＰ27から、3437～3441はＰ33からまとまって出土している。3436は魚住焼である。Ｐ26は13世紀前半、Ｐ27は14世紀前半、Ｐ33は13世紀後半と考えている。

3443は須恵器杯蓋であるが、硯として転用されている。3446・3447は土師器杯である。底部外面調整は、周縁がヘラ切りで、中央部が指による押圧とナデである。９世紀後葉～10世紀前葉であろうか。3482は鍋で、口縁部内面にヘラ描き沈線紋がある。類例として3668・4063・4064がある。3485は凸面に格子タタキがあり、亀山焼であろうか。　（平井）

（９）土器溜り

土器溜り３（第987図）

第２微高地の南端を東西に細長い調査区で検出された土器溜りである。周辺には溝55、土壙366などが検出されている。調査時は土壙として取り扱っていたが、明瞭な掘り方がみられず、たわみ状であることから土器溜りとして取り扱っている。土器溜りの規模は南と北が調査区外となるため不明で



第987図　土器溜り３　遺物

あるが、東西は４ｍの広がりを持つ平面形が楕円形を呈するものである。

遺物としては土師器3488～3495、3500と黒色土器3496～3499などが出土している。土師器の器種としては高台付杯3488・3489、高台付椀3490～3492、小皿3493、皿3494、椀3495、鍋3500がある。黒色土器は椀が出土している。いずれも内黒であり、3496の外面にはヘラミガキ、3498・3499には内面にヘラミガキによる調整がなされている。時期はこれらの遺物から平安期に属するものである。（松本）

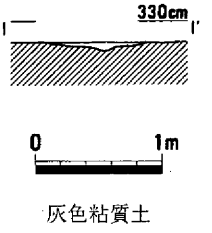
（10）溝

溝40・41

Ｎ22区の第１微高地東斜面に位置する。溝40は、検出できた幅は70cm前後で、深さは５～10cmであった。断面形は皿形で、底面には凹凸がみとめられた（第293図Ｄ断面）。溝41は、検出できた幅は40cm前後で、深さは約５cmであった。いずれも基本的に微高地斜面の方向に沿うかたちでつくられているといえる。道路状遺構を切っていることや検出面の高さ、出土した少量の土器片から、時期は古代と考えている。機能はよくわからない。（平井）

溝42（第988図）

Ｎ22区の微高地東斜面から低位部に位置する。検出できた幅は50～100cmで、深さは約５cm残存していたにすぎない。断面形は皿形で、底面には凹凸が認められた。道路状遺構１・２を切っていることや検出面から、時期は古代と考えている。（平井）



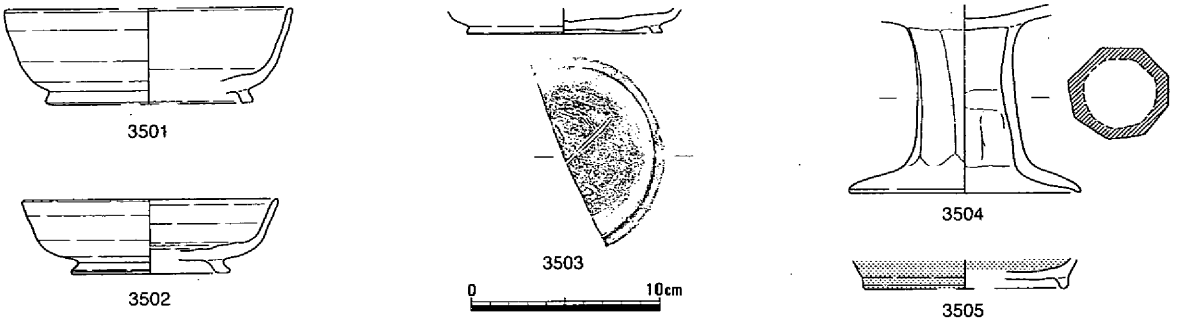
第988図　溝42（1/60）

溝43（第294・989図、写真43－１）

第１微高地の東斜面において検出した。幅は1.2～２ｍで、深さは微高地面から約40cmを測る。埋土はおもに灰色砂質土で、断面形は皿形であった。底の海抜高は3.1ｍ前後で、南西側が低くなっていた。埋土中からは少量の土器が出土している。3501～3503は須恵器杯身で、3503の底部外面には記号と考えられるヘラ描き沈線が確認できた。3504は土師器高杯で、脚部は八角形に面取りされている。3505は土師器杯身で内外面ともベンガラが塗られている。時期は奈良時代前半ではなかろうか。（平井）

溝44（第294・990図）

第１微高地の東斜面部において検出した。幅は１ｍ前後で、深さは約25cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は上層が灰色粘質土、下層が暗灰色粘質土であった。溝43と並行しているが、一部は溝43を切っていた。遺物は鉄器が出土している。溝の時期は奈良時代ではなかろうか。（平井）



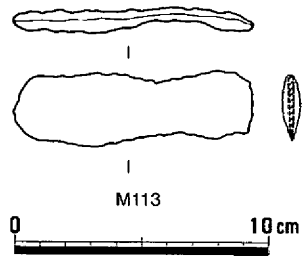
第989図　溝43　遺物

溝45（第991図）

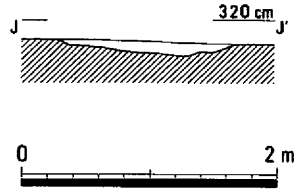
M23区南西、微高地縁辺から12m南東の低位部内に縁辺と平行してあった。さらに南東には畑１の高まりがあり、低位部の農地を区画する溝であったとみられる。深さ10cm前後と浅い。（岡本）

溝46・47（第992図）

Ｍｆ24区の南西から検出された東西方向に延びる幅約35cm、深

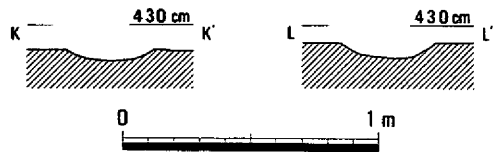


第990図　溝44　遺物

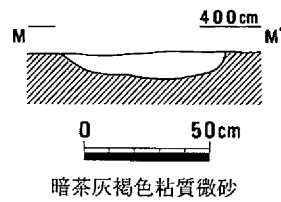


黒灰色（2.5Y３/２）粘性砂質土

第991図　溝45（1/60）

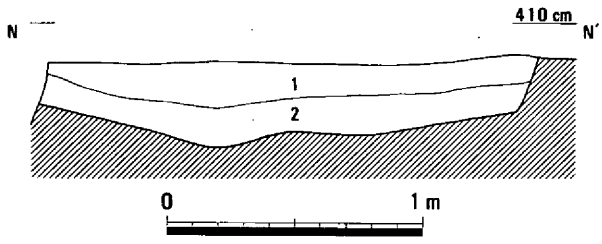


第992図　溝46・47（1/30）

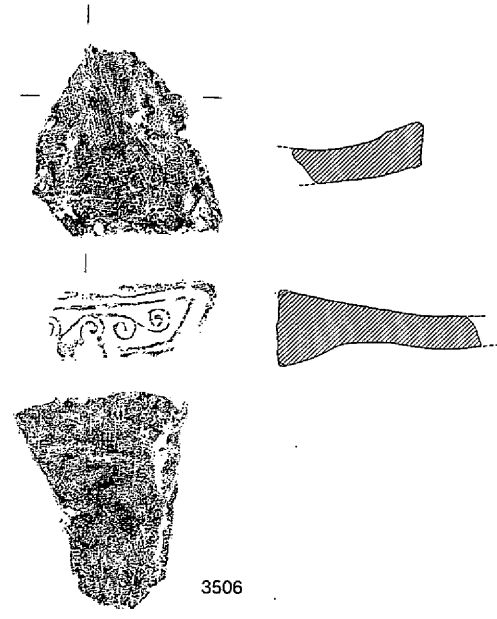


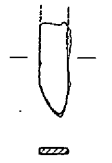
暗茶灰褐色粘質微砂

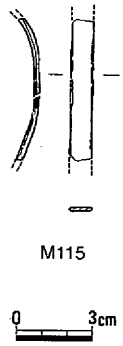
第993図　溝48（1/30）

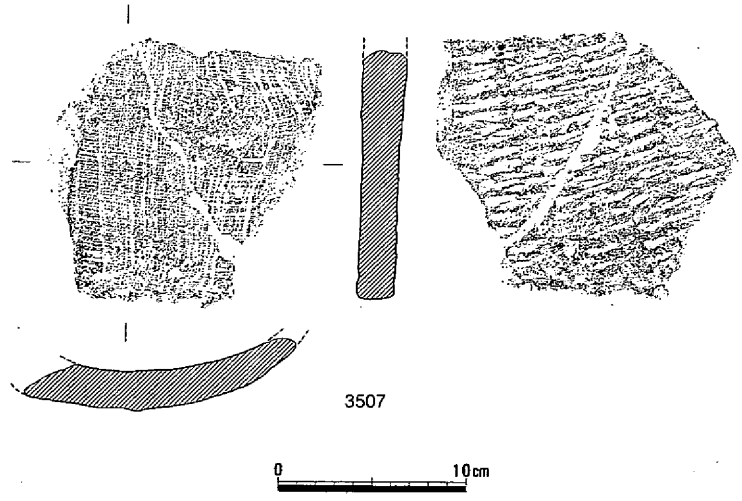


1　暗茶灰褐色粘質微砂
2　暗黄褐色粘質微砂









第994図　溝49（1/30）・遺物

さ約５cmの溝で、同一の溝と思われる。淡褐色砂質土とともに古代土器細片が出土した。　（江見）

溝48（第993図）

溝48は、第２微高地の中央に位置する。南北にのびる土壙状の溝で、方向性が注意される。出土遺物はないが、平安期の土壙384に切られており、時期は奈良～平安時代と思われる。　（柴田）

溝49（第994図）

溝49は、第２微高地の中央に位置する。南北にのびる土壙状の溝で、周辺の土壙や溝との方向性の一致が注意される。出土遺物には、軒平瓦3506、平瓦3507、鉄器の茎M114、不明銅製品M115などがある。

遺物などから、遺構の時期は平安時代ではないかと思われる。　（柴田）

溝50・51（第995～998図、写真118）

第２微高地の北東部で検出された。溝50と51は接続しないが、同一遺構の可能性があるため記述する。溝は北西～南東方向に延びるもので、掘立柱建物11と切り合い関係をもつ遺構である。溝の上部は削平を受けているが、確認された溝50の上幅は158cm、深さは20cmであり、断面形は皿形を呈する。溝51の上幅は約240cm、深さは20cmを測り、断面形は溝50と同様に皿形である。流路方向は不明である。

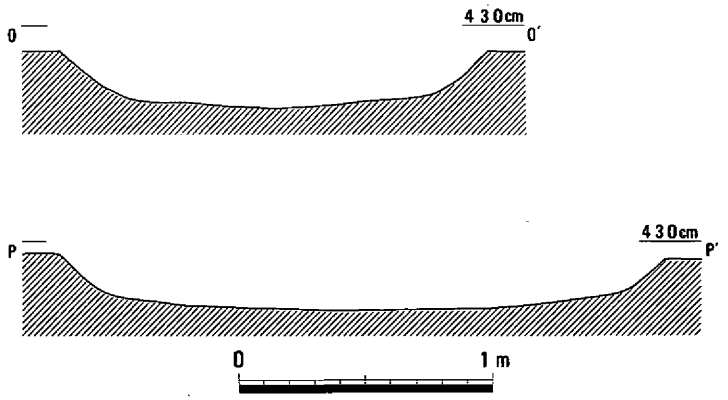
遺物は溝内から須恵器3508、黒色土器3509、土師器3510～3516、瓦3517～3537などの他に、鉄製品は刀子M116、不明鉄器M117、釘M118などが出土している。土製品では土錘C180がある。3509は内黒の椀である。瓦は軒丸瓦3517～3522、軒平瓦3523～3526、丸瓦3527～3529、平瓦3530～3537が出土しているが、軒丸瓦は宝相華文と呼ばれるものである。軒平瓦3524は大内田廃寺と同笵の6663亜式である。時期はこれらの遺物からみて平安期に属する。　（松本）

溝52（第999・1000図）

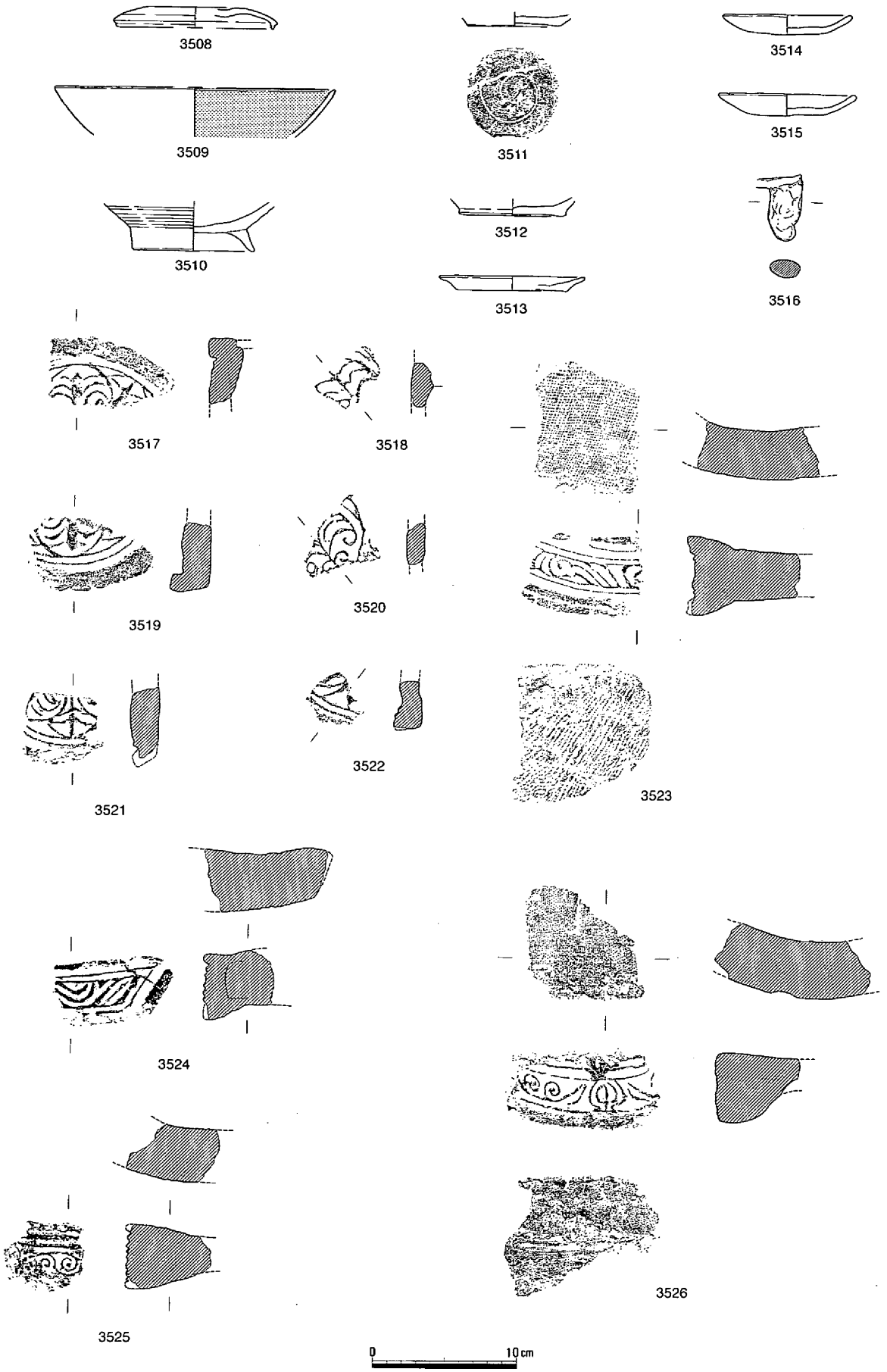
溝51の北東約８mの位置で検出された。溝50・51と平行するため、同時期に機能した可能性をもつ遺構である。溝の東は土壙390と切り合い関係をもつ。規模は上幅が130cm、深さは約30cmを測る。断面形は皿形を呈する。遺物は須恵器3538、黒色土器3539・3540、土師器3541～3550、瓦3551～3553などが出土している。黒色土器は内黒である。時期はこれらの遺物から平安期に属する。　（松本）

溝53（第1001・1002図、写真119）

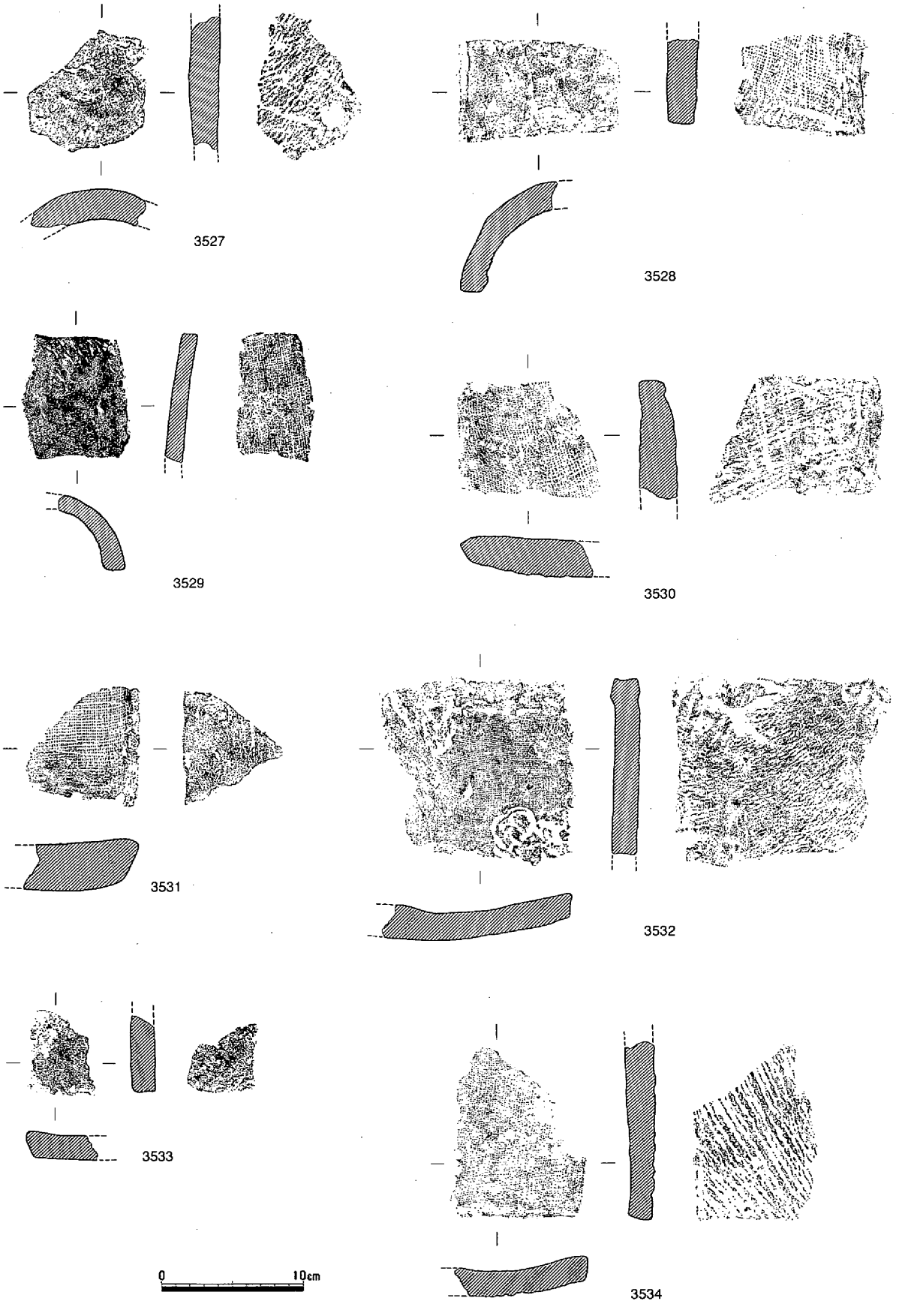
第２微高地の北東端に位置し、土壙388の西隣で検出された遺構である。南は溝102に切られ、北は



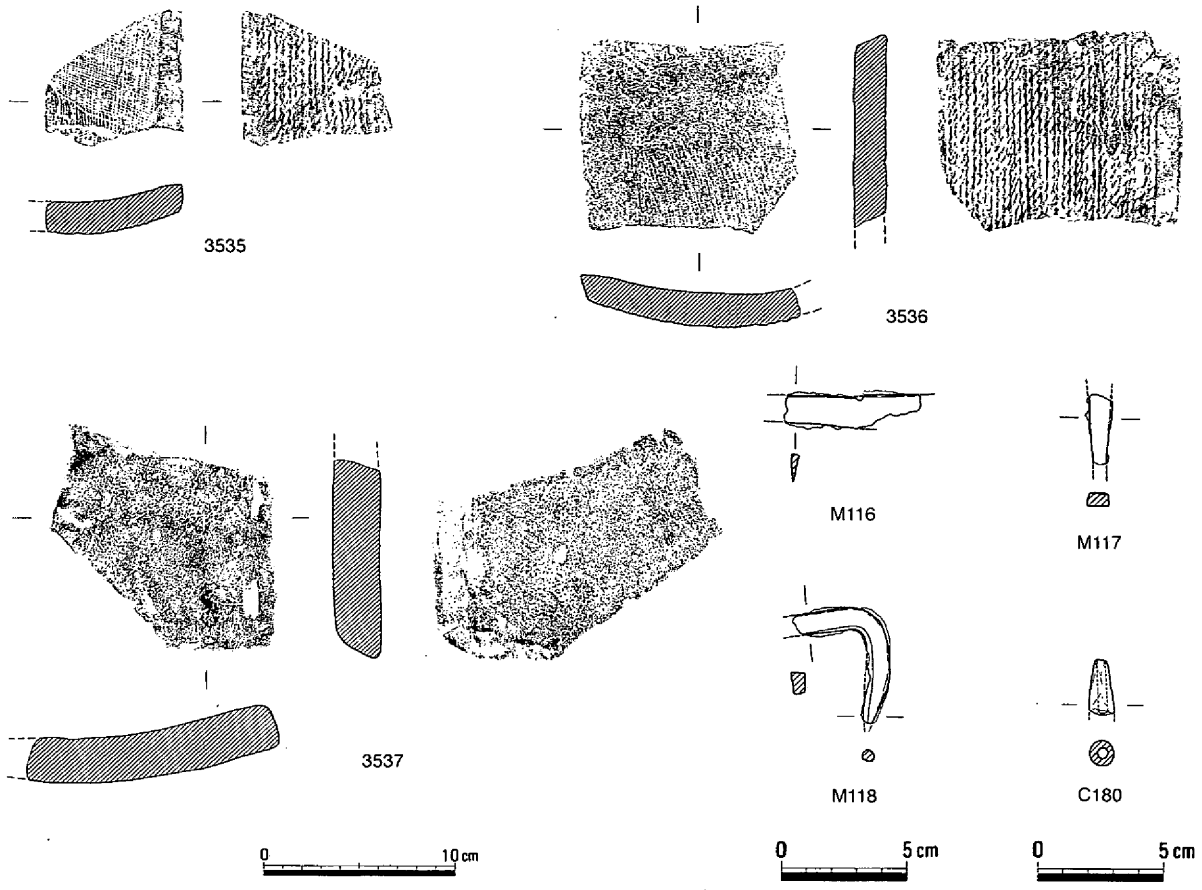
第995図　溝50・51（1/30）



第996図　溝50・51　遺物（1）



第997図　溝50・51　遺物（２）



第998図　溝50・51　遺物（3）

調査区外となっているが、南北方向に走行する溝である。検出した規模は長さ約２ｍ、上幅約85㎝、深さは検出面から約12㎝を測る。断面形は皿形を呈するが、底面はほぼ平坦である。

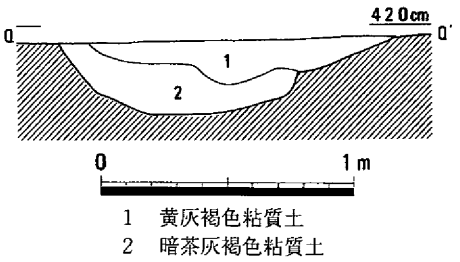
遺物は土師器が出土している。器種としては高台付椀3554・3555・3561・3562、高台付杯3556～3560、椀3563～3573、杯3574～3583、皿3584～3587、甕3588など完形ないし完形品に近いものが多い。3544の内外面はヘラミガキによる調整がなされている。遺物からみて時期は平安期に属する。（松本）

溝54（第1003図）

溝54は、第２微高地中央の南端に位置する。東西方向にのび、東側は土壙366に切られている。幅は35㎝で、断面は逆台形を呈する。出土遺物はないが、遺構の切り合いなどから、時期は古・後～古代のなかにおさまると思われる。（柴田）

溝55（第1004図）

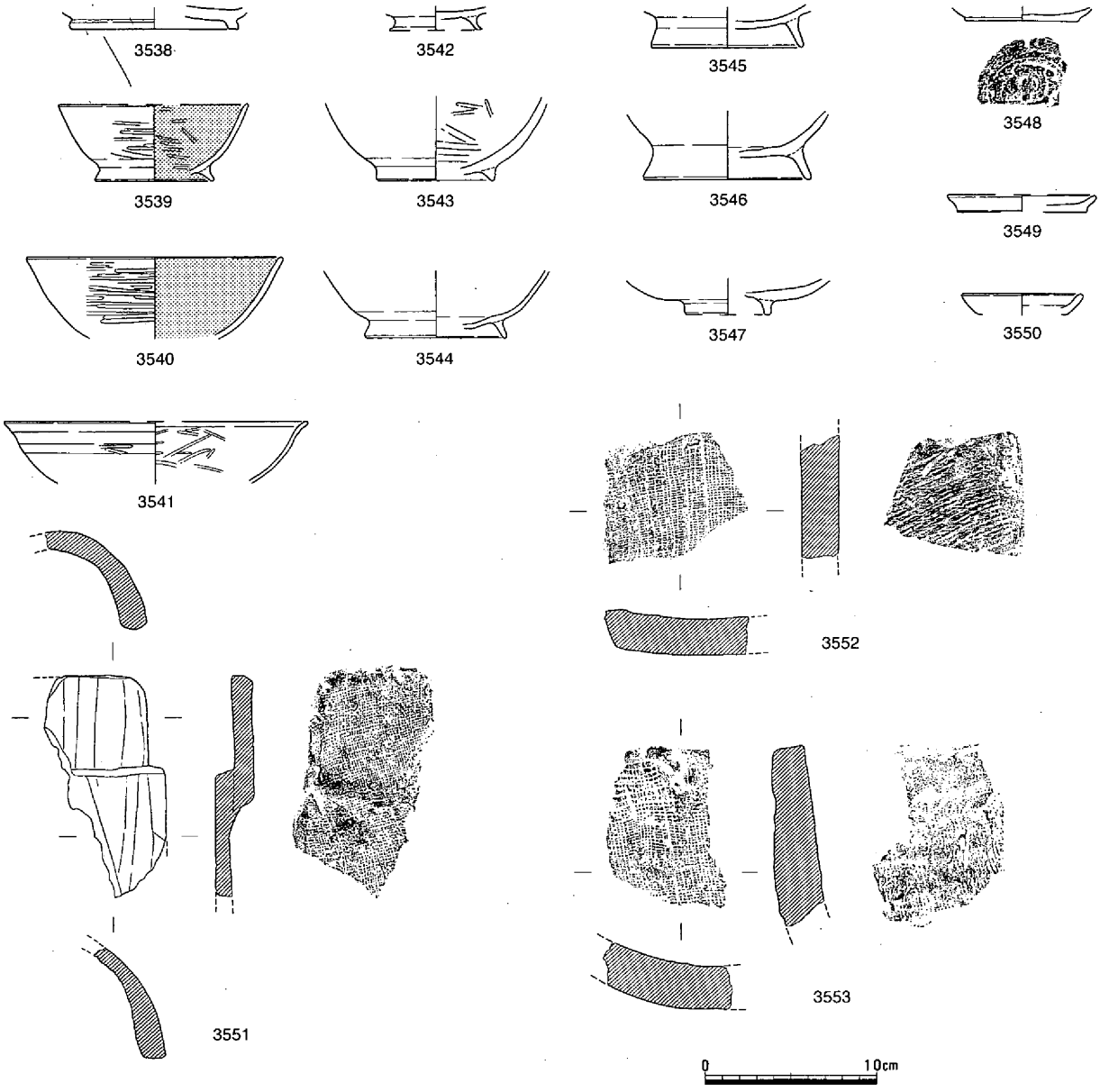
溝55は、第２微高地の南東端に位置する。南北方向にのび、両側は調査区外である。幅は48㎝で、底面は凹凸がある。出土遺物は土器の小片のみだが、遺構の切り合いなどから、時期は古代におさまると思われる。（柴田）



第999図　溝52（1/30）

溝56（第1005図）

溝56は、第２微高地中央の北端に位置する。南北方向にのび、両側は調査区外である。幅は63㎝で、断面は逆台形



第1000図　溝52　遺物

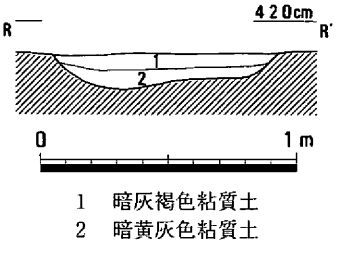
を呈する。出土遺物は須恵器の小片のみだが、遺構の時期は古代におさまると思われる。　（柴田）

溝57・58・59（第1006・1007図）

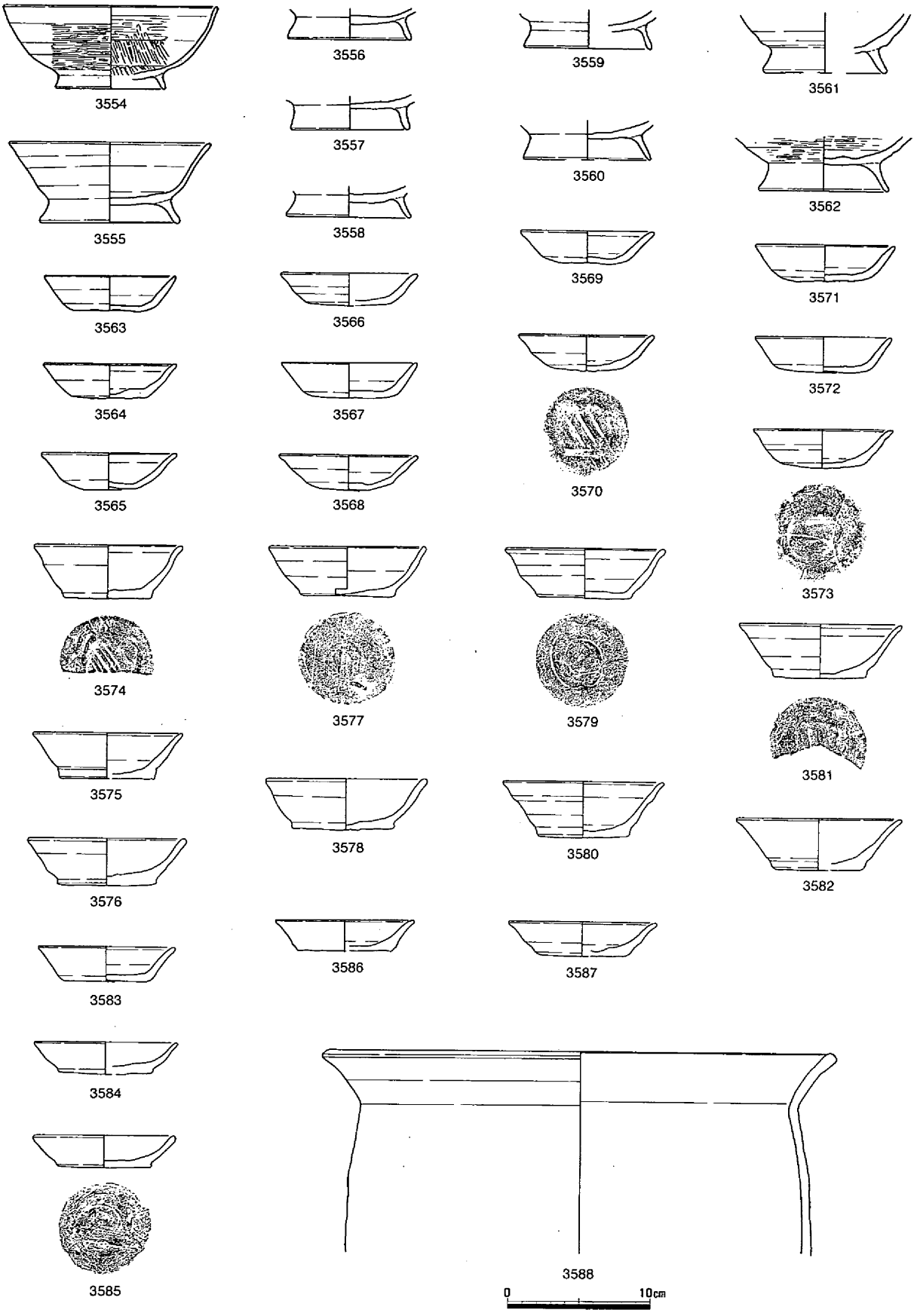
第１微高地の西斜面部において検出した。溝57は橋脚７、溝58は橋脚８、溝59は橋脚９調査区に位置する。幅はいずれも60～100cmで、深さは約20cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は、溝57が淡灰色粘土、溝58が青灰色粘土、溝59が暗灰色粘土であった（第292図）。時期は、少量出土した遺物（3589、C181）や埋土からいずれも中世と考えている。北側につくられた水田の水路であろうか。　（平井）

溝60

第１微高地の調査区南西端部に位置する。幅40cm前後、深さ約10cmで、約３m検出できたにすぎない。断面形は皿形で、埋土は灰色



第1001図　溝53（1/30）



第1002図　溝53　遺物

粘土であった（第1038図）。時期は中世と考えている。（平井）

溝61～67（第1008図）

第１微高地の調査区北西端部に位置する。検出できたのは、溝61～66が幅20～30cmで、深さは約10cmであった。溝67は幅約50cm、深さ約15cmである。断面形は皿形で、埋土は褐灰白色微砂であった。時期を示す遺物は出土していないが、古代から中世と考えている。（平井）

溝68

第１微高地の東斜面に近い位置で検出した。幅は30cm前後で、深さは約10cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は褐灰白色微砂であった。溝61～67と同じ形状であるが、機能については不明である。時期は古代～中世と考えている。（平井）

溝69（第1009図、写真43－２）

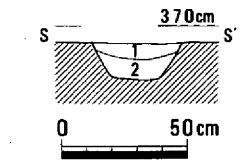
第１微高地の東にある低位部に位置する。検出できた幅は80cm前後で、深さは約15cmである。断面形は皿形で、底面には凹凸が認められた（第293図Ｆ断面）。方向は微高地斜面の肩に沿っている。少量の土器や釘と考えられる鉄器M119・120が出土し、時期は中世であろう。（平井）

溝70（第1010図、写真43－２）

第１微高地東の低位部に位置する。検出できた幅は40cm前後で、深さは約10cmである（第293図Ｆ断面）。方向は微高地斜面の肩に沿っており、かつ溝69に並行している。遺物は土器3590や土錘Ｃ182が出土している。時期は中世である。溝69と関連があると考えている。（平井）

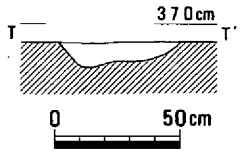
溝71（第1011図）

第１微高地のＮ22区北東部に位置する。検出できた幅は50～130cmで、深さは約50cmであった。断面形はＶ字形で、埋土は三層に分離できた。方向はほぼ南北方向で、北側は溝72に切られていた。遺物は少量の土器の他に、鍛冶滓やガラス質滓が出土している。3591は



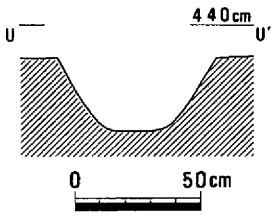
1　暗茶褐色粘質微砂（炭含む）
2　茶褐色粘質微砂（炭含む）

第1003図　溝54（1/30）

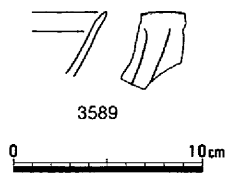


暗茶褐色粘質微砂

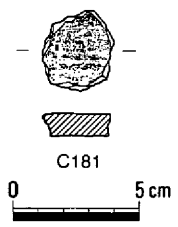
第1004図　溝55（1/30）



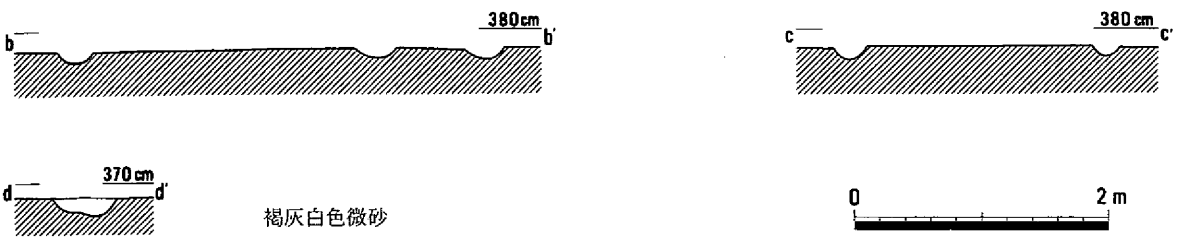
第1005図　溝56（1/30）



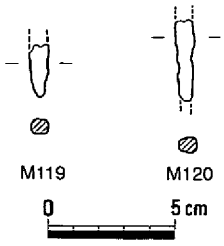
第1006図　溝57　遺物



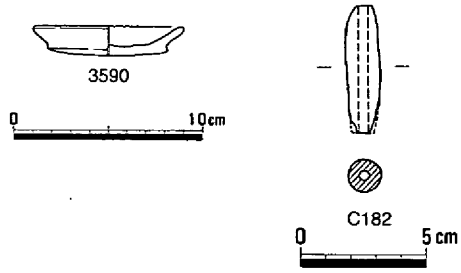
第1007図　溝59　遺物



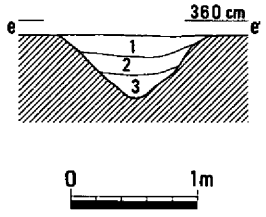
第1008図　溝61～67（1/60）



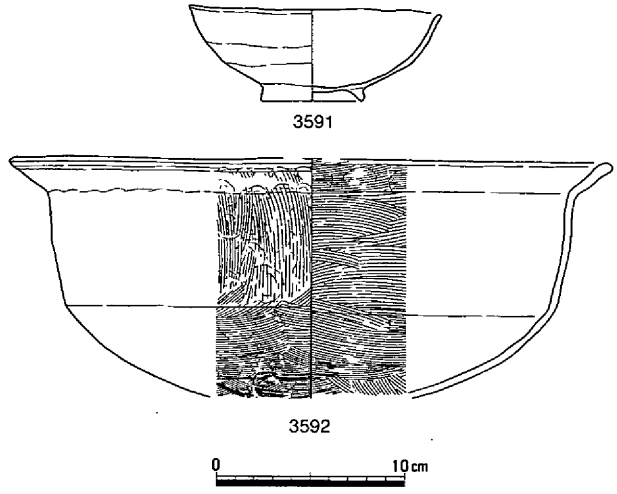
第1009図　溝69　遺物



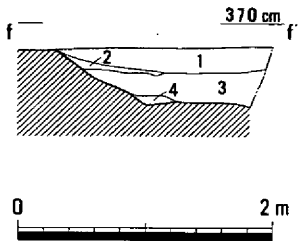
第1010図　溝70　遺物



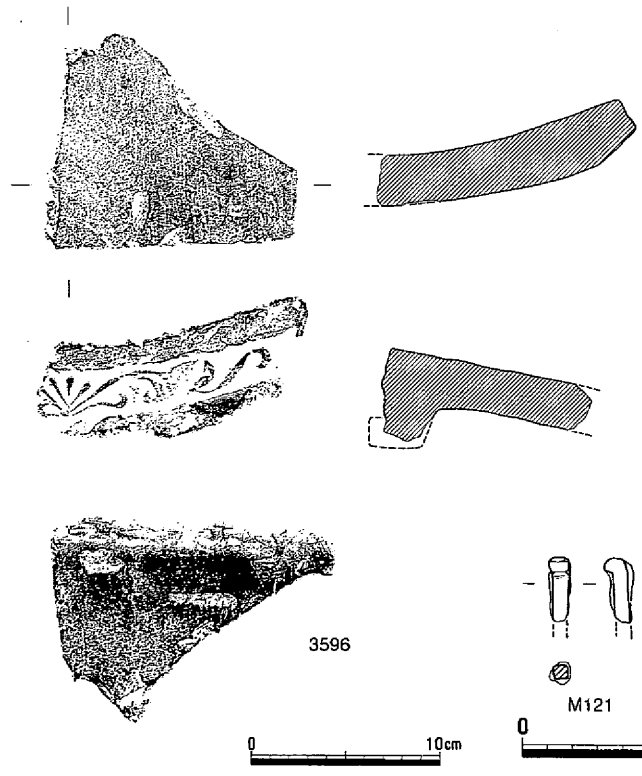
1　灰褐色砂質土
2　灰褐色粘質土
3　緑灰色粘質土



第1011図　溝71（1/60）・遺物



1　褐色（10YR4/4）粘土
　（マンガン・炭を少し含む）
2　にぶい黄橙色（10YR6/4）微砂
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）微砂混じり粘土
　（鉄分を含む）
4　灰色（5Y 4/1）粘土



第1012図　溝72（1/60）・遺物

高台付椀、3592は鍋である。水田に伴う水路で、時期は古代末～中世であろう。　（平井）

溝72（第1012図）

第１微高地のＮ22区北東部に位置する。検出できた幅は80～200cmで、深さは約50cm残存していた。断面形は逆台形やＶ字にちかい部分があり、埋土には粘土や微砂が堆積していた。方向はほぼ南北方向で、溝71を切っている。遺物は土器や瓦、鉄器、鍛冶滓、鉄塊系遺物が出土している。3593は魚住焼、3594は白磁、3595は青磁である。水田に伴う水路で、時期は中世である。　（平井）

溝73（第1013図）

M23区の南西端からＮ23区の西端を流れていたと考えられる用水路である。Ｎ23区の部分は近世に全体が掘り直され、中世の溝そのものは消滅していた。この改修は溝の埋没をうけて実施されたとみられる。溝の幅は2.5m、深さは85cmを測り、東肩は二段になっていた。中世後期の溝であろう。

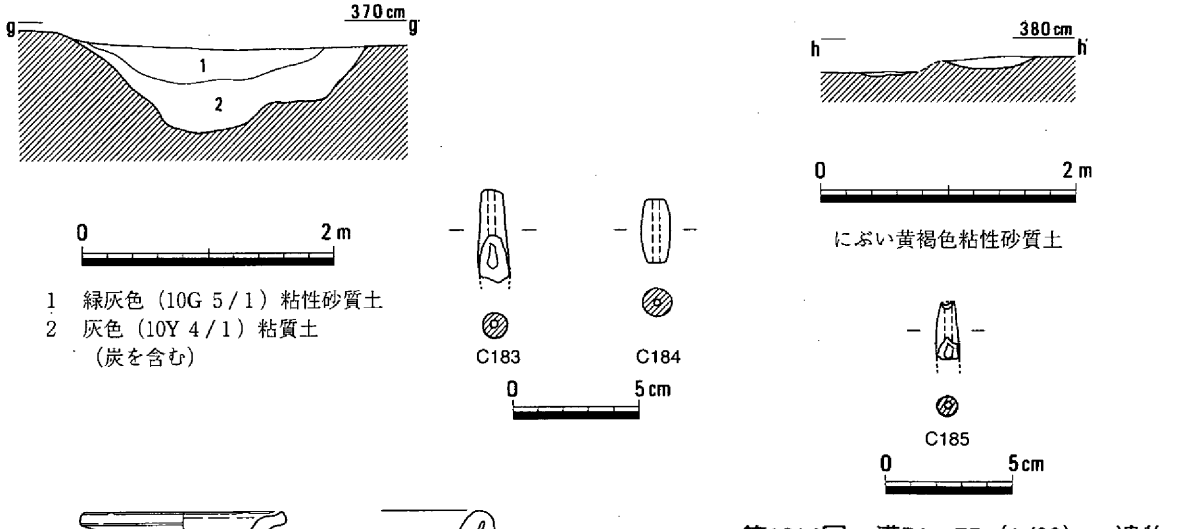
図示した遺物の内、土錘は北半部から出土したが、土器は南半の改修部分の出土である。　（岡本）

溝74・75（第1014図）

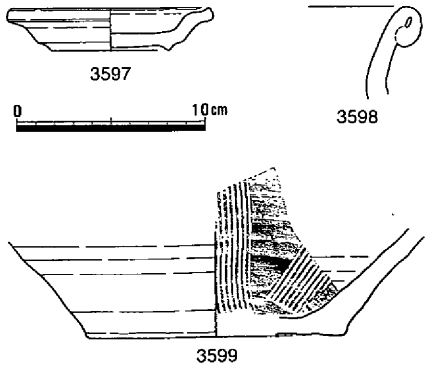
Ｎａライン近くに位置し、溝73から東へほぼ直線的に延びていたものと推測される。この部分には近世に農道が設けられることから、これらの溝は土地を区画する役割も担っていたものと考えられる。溝74は幅が50～70cm、深さは10cm内外、溝75も数cmと浅く、後世の削平をうけていた。　（岡本）

溝76（第1015図）

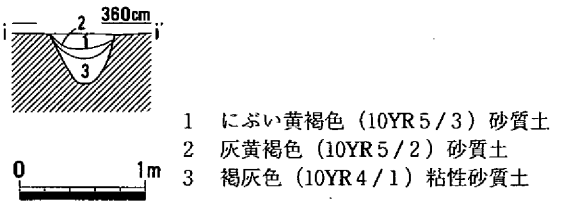
Ｎ23区北西隅にあり、溝73に切られていた。ほぼ南北方向をとり、北へ流れていたとみられる。溝77の下にあり、溝78と接続していた可能性がある。幅が60cm、深さは25～38cmを測った。　（岡本）



第1014図　溝74・75（1/60）・遺物



第1013図　溝73（1/60）・遺物



第1015図　溝76（1/60）

溝77（第1016図）

溝73の東に近接して深さ数cmの方形の落ち込みが検出され、肩に平行する形で底面の周囲に溝が検出された。幅が45～75cm、深さは５cm前後を測った。東部分は鈍角に折れて、溝78と平行していた。この部分では南側に同規模の溝が検出され、掘り直されたものとみられる。この溝は農地に伴うものと考えられ、位置関係から溝73・75と共存し、溝78の農地を拡張したものと判断される。　（岡本）

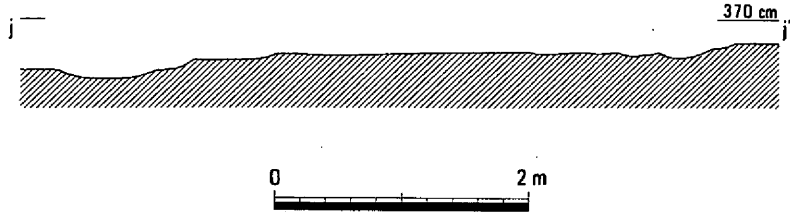
溝78（第1016図）

溝77の南にあり、同様に農地の周囲に掘られた溝とみられる。溝73の西岸にも認められ、溝73よりも古い。２条の溝が重複し、西半には杭穴が集中していた。深さは10cm前後であった。　（岡本）

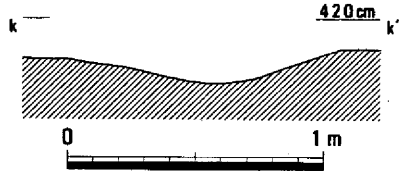
溝79（第1017図）

第２微高地南西端で検出した浅い溝である。北西から南東に伸びる。全長４ｍ以上、幅110cm、深さ15cmを測る。遺物は何も出土していない。

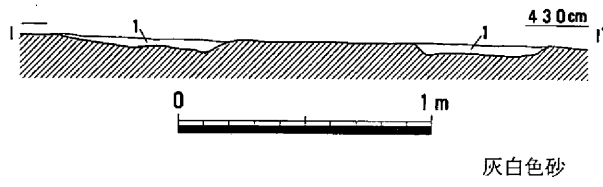
状況から見てこの溝の時期は中世に属する。　（浅倉）



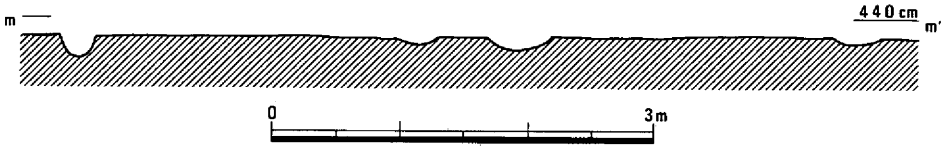
第1016図　溝77・78（1/60）

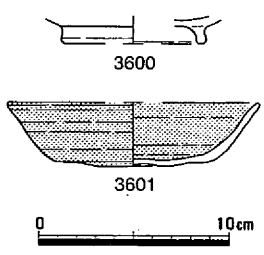


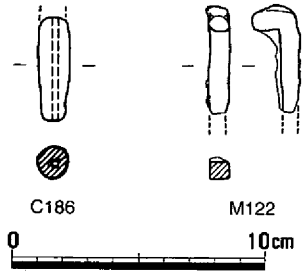
第1017図　溝79（1/30）



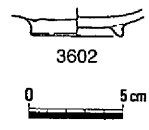
第1018図　溝81・82（1/30）







第1019図　溝87～88（1/60）・遺物



第1020図　溝89～94　遺物

溝80～83

Ｍｆ23_{05}区に位置する、北西から南東方向の溝群である。いずれも幅に対して深さが10cm未満と浅く、また灰白色砂で埋まっていた。これより南にも同一方向、あるいはこれと直交方向の溝群があり、その性格は耕作に伴う痕跡と考えられる。時期は中世でも後半と思われる。（弘田）

溝84～88（第1019図）

第２微高地南西端で検出した浅い格子状溝である。北北東から南南西に伸びる主たる溝４条とそれに直行する短い溝数条がある。最大長23ｍ以上、幅20cm、深さ10cmを測る。遺物は鉄釘、土錘のほか土師器が出土している。

状況から見てこの溝の時期は中世に属する。畑の畝溝であろう。（浅倉）

溝89～94（第839・1020図）

溝89～94は、第２微高地の中央やや南西寄りに位置する。東西方向の溝と、南北方向の溝が交差しており、西の溝群と一連のものと考えられる。いずれも幅は20cm程度で、深さは３cmを測る。出土遺物は土師質高台付椀3602が認められ、遺構の時期は中世のなかにおさまると思われる。（柴田）

溝95・96（第1021図、写真44－１）

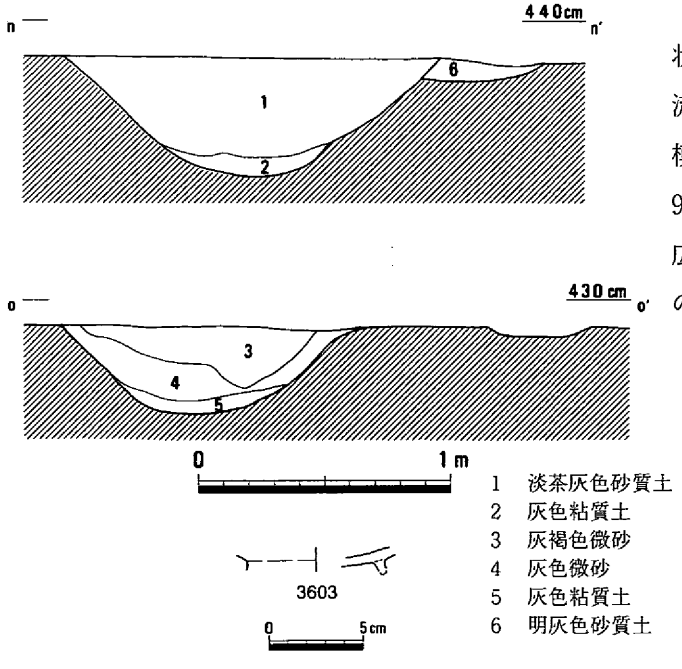
Ｍｆ24区の南西から検出された東西方向に延びる区画溝で、溝95が溝96を一部切っている。溝95は断面は緩い逆台形を呈し、調査区途中から西方向に掘削されていた。幅145cm、深さ45cm、溝底の標高3.8ｍを測る。上層に粗い砂質土が堆積し、下層から灰釉陶器3603が出土した。溝96は溝95の北側に掘削された浅い溝で埋土は明灰色砂質土である。幅約40cm、深さ約10cm、溝底の標高は4.15ｍを測る。遺物はほとんど出土しておらず、これらの溝は灰釉陶器から中世の範疇と判断した。（江見）

溝97（第1021図）

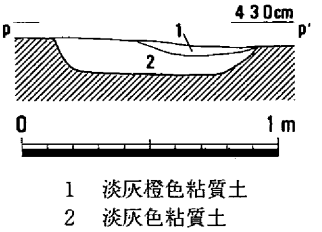
溝95と同様に東西方向に延びる区画溝で、西側を溝95に切られ、東は掘立柱建物14の手前で途切れる。断面は緩い逆台形を呈し、幅110cm、深さ35cm、溝底の標高3.85を測る。時期は中世。（江見）

溝98・99（第1022～1024図）

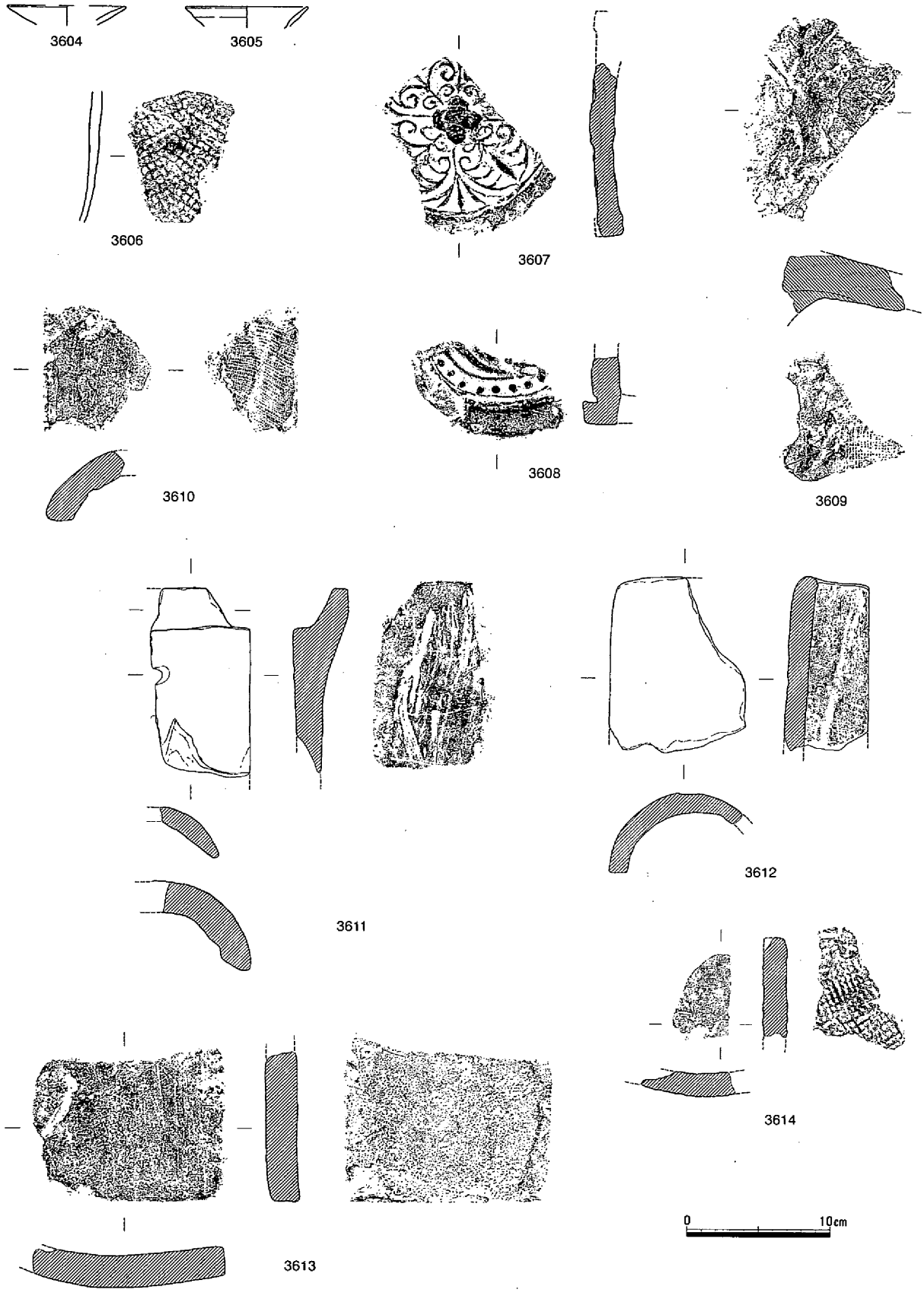
第２微高地の東端に位置し、溝100を切る状態で検出された遺構である。溝98と99の流路は東西方向をとり、重複している。規模は98の上幅が約45cm、深さは５cmを測る。99の上幅は東では約80cm、西では200cmと広くなっており、深さは約10cmを測る。99の断面形は逆台形を呈している。



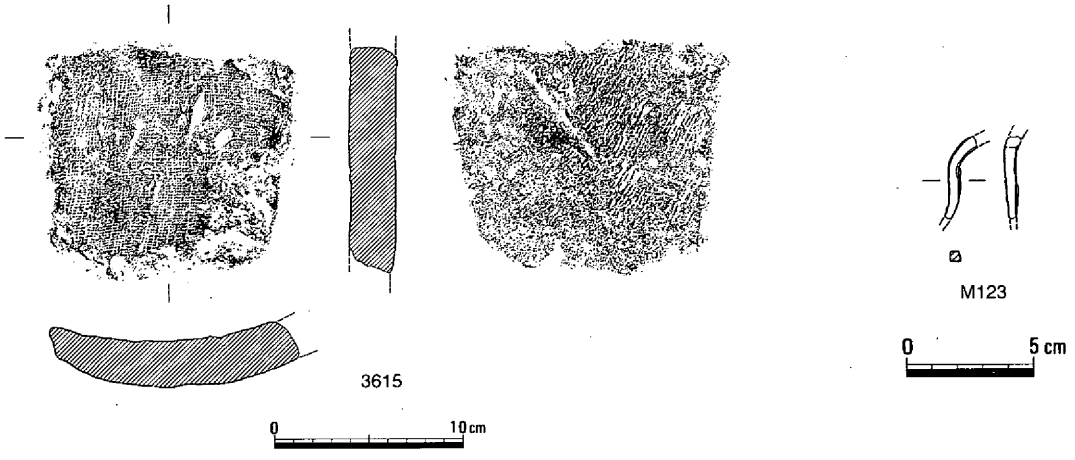
第1021図　溝95～97（1/30）・遺物



第1022図　溝98・99（1/30）



第1023図　溝98・99　遺物（1）



第1024図　溝98・99　遺物（２）

遺物は土師器の皿3604・3605、亀山焼の甕3606、瓦3607～3615、鉄釘M123などが出土している。瓦は軒丸瓦3607～3609、丸瓦3610～3612、平瓦3613～3615が出土している。3607は宝相華文、3608は巴文（左巻き）の軒丸瓦である。時期は鎌倉期に属すると思われる。（松本）

溝100（第1025・1026図、写真100）

第２微高地の北東において、逆Ｌ字状に検出された溝である。溝の規模は上幅が約60cm、深さは検出面から約15cmを測り、断面形は皿形を呈する。埋土は淡灰褐色粘質微砂土である。流路方向は不明である。なお、この溝100は掘立柱建物14～17を囲み、溝101と同一遺構の可能性がある。

遺物は土師器3616～3618、瓦3619～3623、鉄製品では釘M124・125、鉈と推察される鉄器M126などが出土している。3616は高台付椀、3617・3618は皿である。平瓦は3619～3622で、3621の凸面には小さな格子目のタタキである。軒丸瓦3623は6663亜式であり、大内田廃寺出土のものと同じ笵傷をもつものである。時期は検出面などからみて、中世の範疇に入るものと思われる。（松本）

溝101（第1027・1028図、写真44－２・３）

第２微高地のM24区南半部に位置し、Ｌ字状に検出できていることが特徴である。残存状況は良くなく、北側では東西２本の溝となっていた。屈曲部分も２本の溝となっているが、西側ではさらに底が２条になっていた。東端部は１本のみの溝が確認できた。底面には凹凸が認められた。埋土は淡灰褐色砂質土や淡灰色砂質土であった。遺物は釘などの鉄器や土器、瓦、鉄滓が出土している。土器3624～3627は中世であるが、瓦は平安時代のもので、東側約40mに位置する旧河道から大量に出土している瓦と同時期であろう。3631は中心飾りから左右に蕨手紋が描かれた備前・備中に出土例が多い軒平瓦である。この溝は寺院を区画する溝で、中世まで機能していたと考えられる。（平井）

溝102（第1029～1031図、写真45－１・２，100）

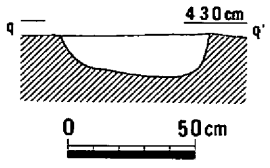
第２微高地の北で検出された遺構である。旧河道によって切られてはいるが、調査区内での状況からみて方形に区画される溝と推察されるが、西は途切れ、南側では確認されていない。確認された規模は上幅が2.7～3.3m、深さは0.95～1.1mを測り、断面形は逆台形を呈する。

遺物は須恵器3633、土師器3644～3636、白磁3637、瓦3638～3647、鉄製品では釘M131～134、不明鉄製品M135などが出土している。3633には線刻された文字がみられる。「太」と思われる漢字である。器種は不明である。時期は恐らく中世～近世に属するものと思われる。（松本）

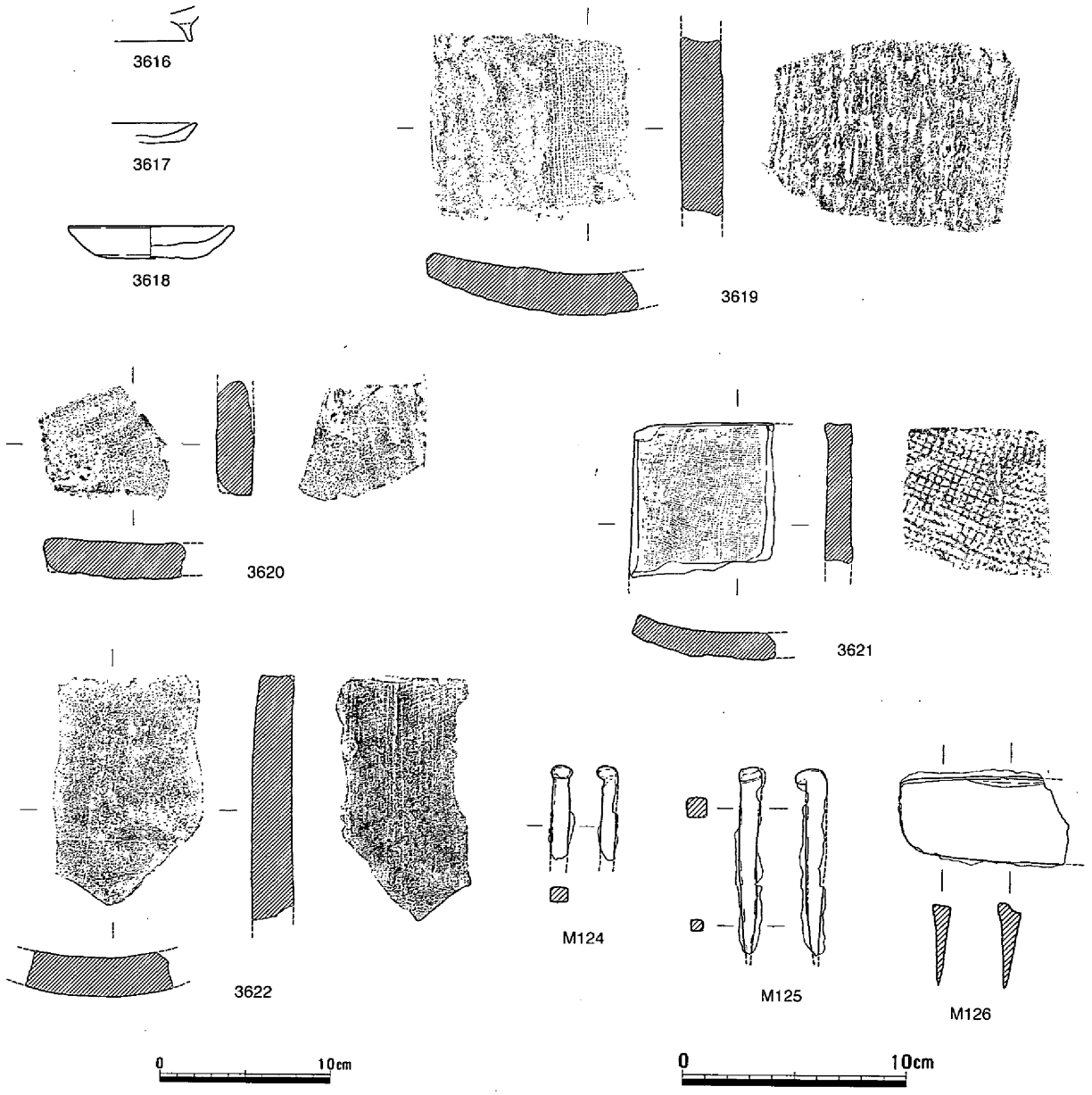
(11) 道路状遺構

道路状遺構１・２（第1032図、写真45－３，46－１）

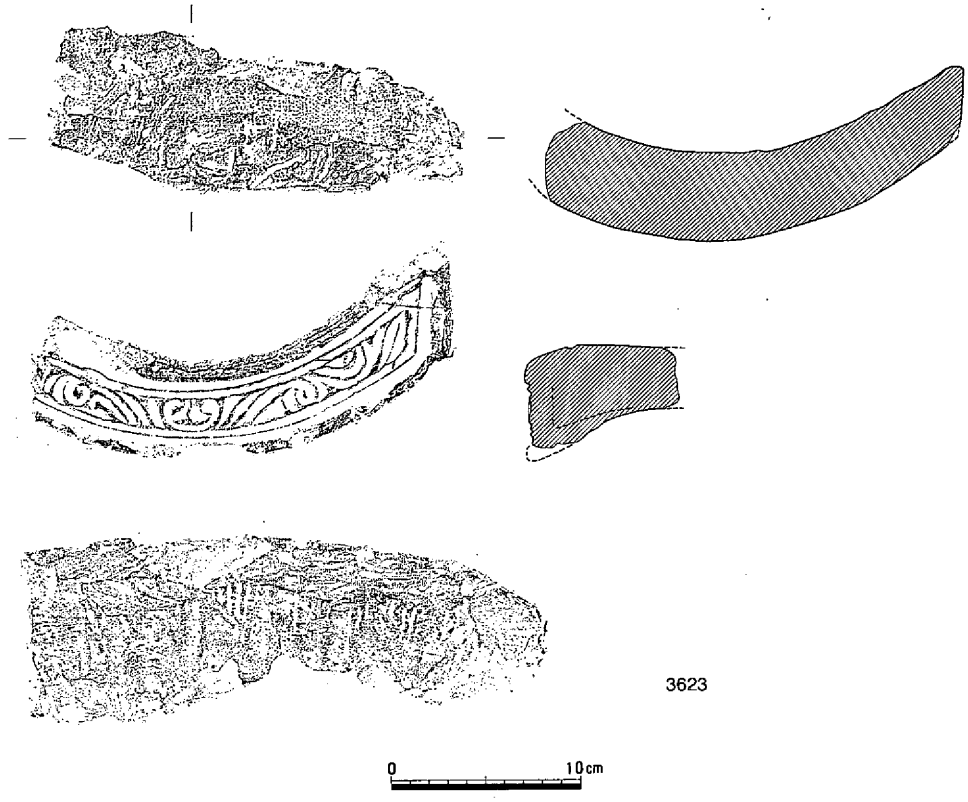
N22区の北東部、およびM･N23区西端部に位置する。第１微高地の東端部とその東に作られている畑との間の低位部において検出した。検出できたのは微高地上面から約50cm下がった面で、上層には古代の包含層が堆積していた（第２低位部出土とした遺物、第1037図参照）。道路状遺構１とした遺構は、長さは約１～３ｍで、幅20～40cm程度の溝が約70条である。これらの溝は未検出の部分があるが、約40cmの間隔で規則的に、かつ直線的に並んでいるのが大きな特徴である。溝の端にくぼみがあるものもあった。深さは10cm以内と浅かった。埋土は灰白色粘質土が中心であった。



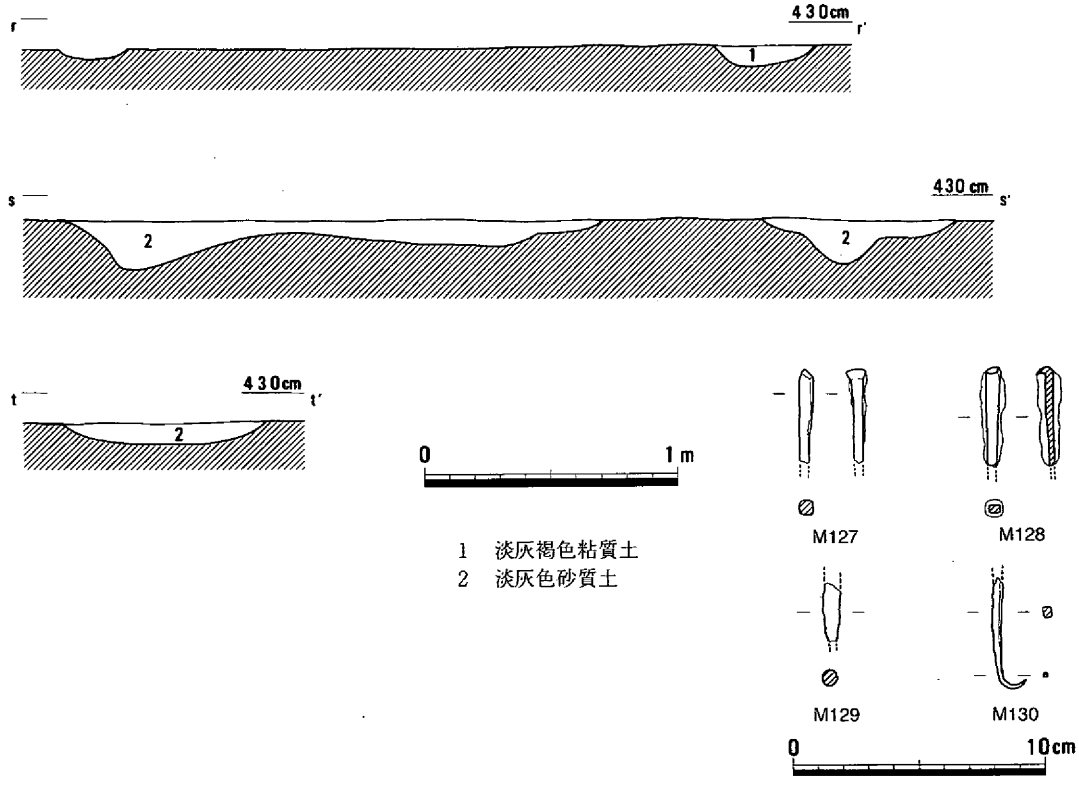
淡灰褐色粘質微砂



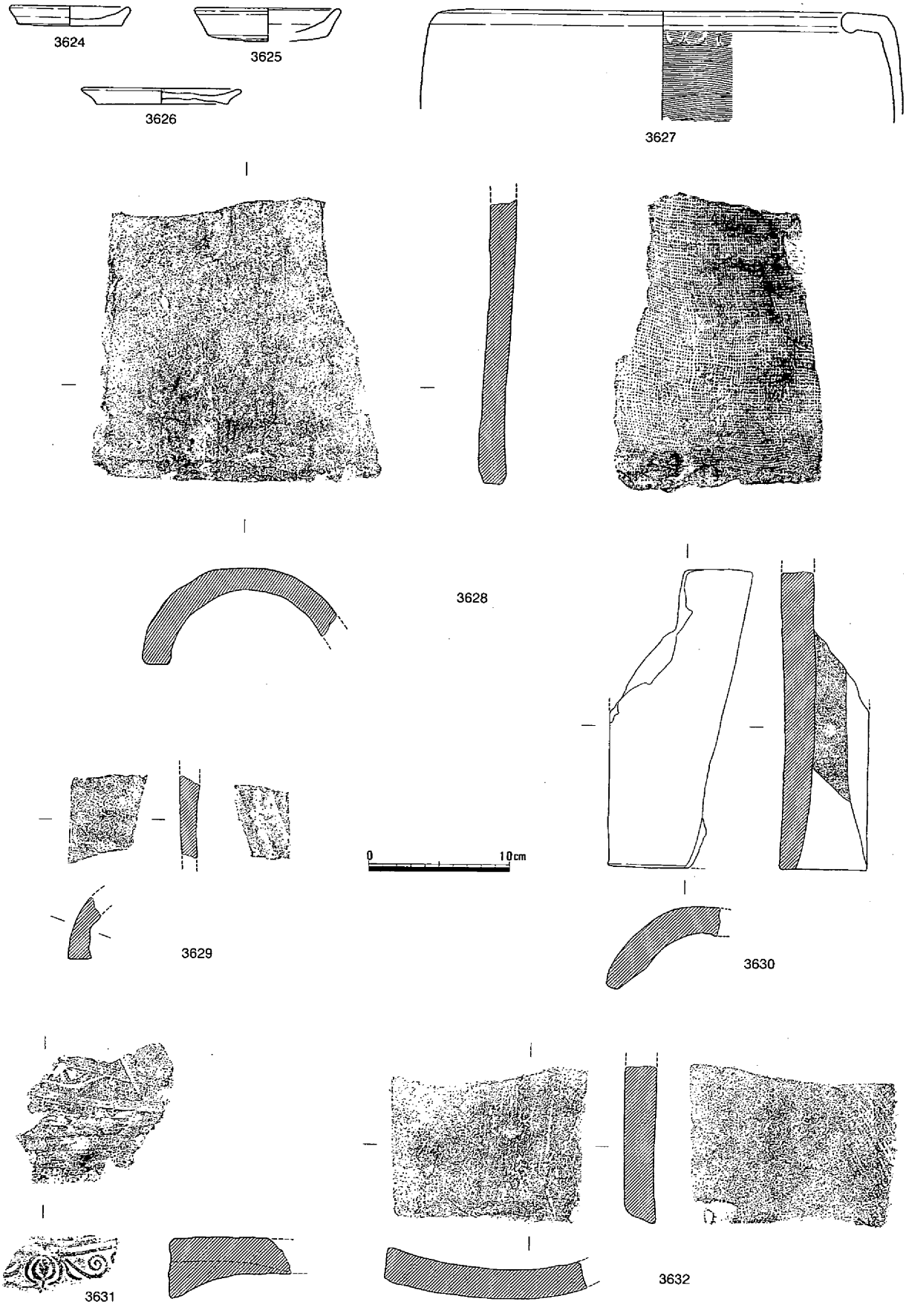
第1025図　溝100（1/30）・遺物（１）



第1026図　溝100　遺物（２）



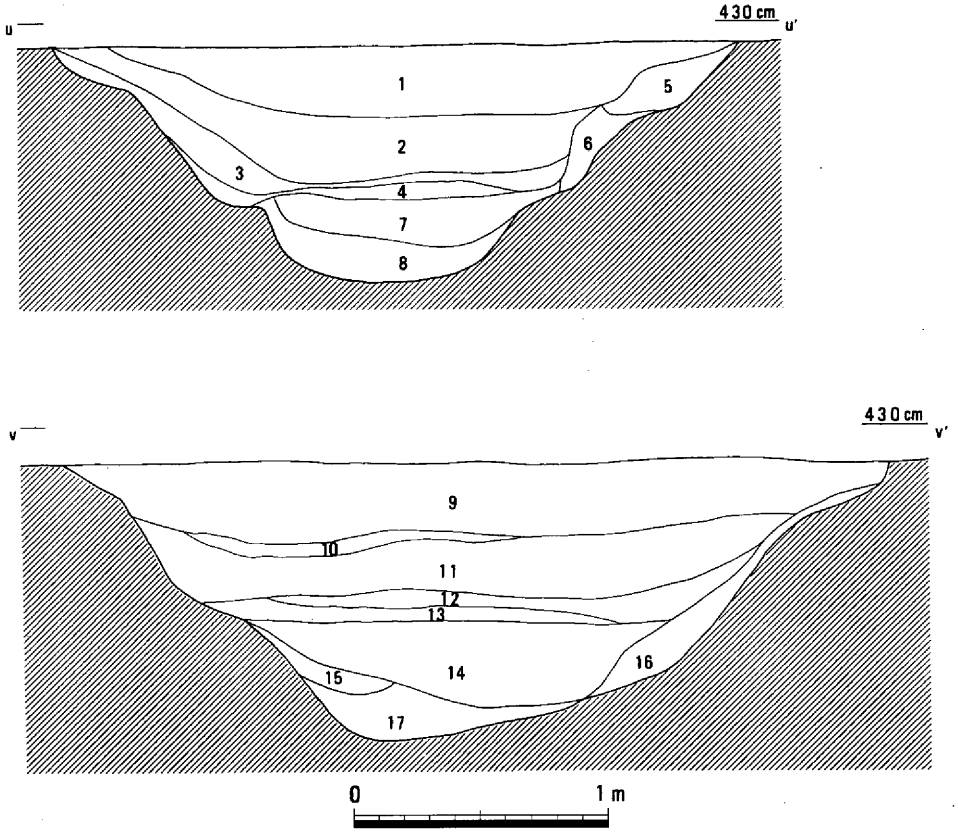
第1027図　溝101（1/30）・遺物（１）



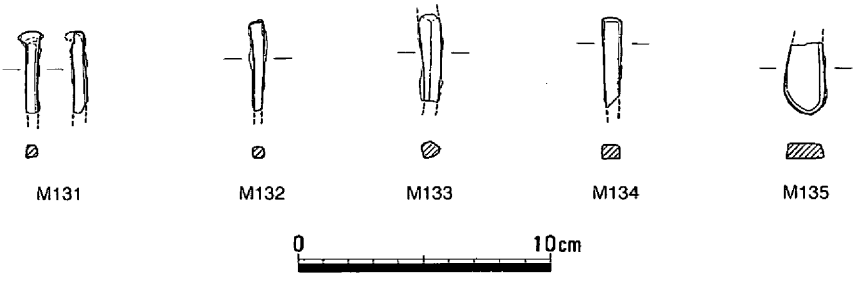
第1028図　溝101　遺物（2）

道路状遺構２としたは、１ｍ未満の楕円形や溝状のくぼみが直線的に並んで検出できた遺構である。深さは10cm未満のものがほとんどである。２個一対になっている部分が多い。

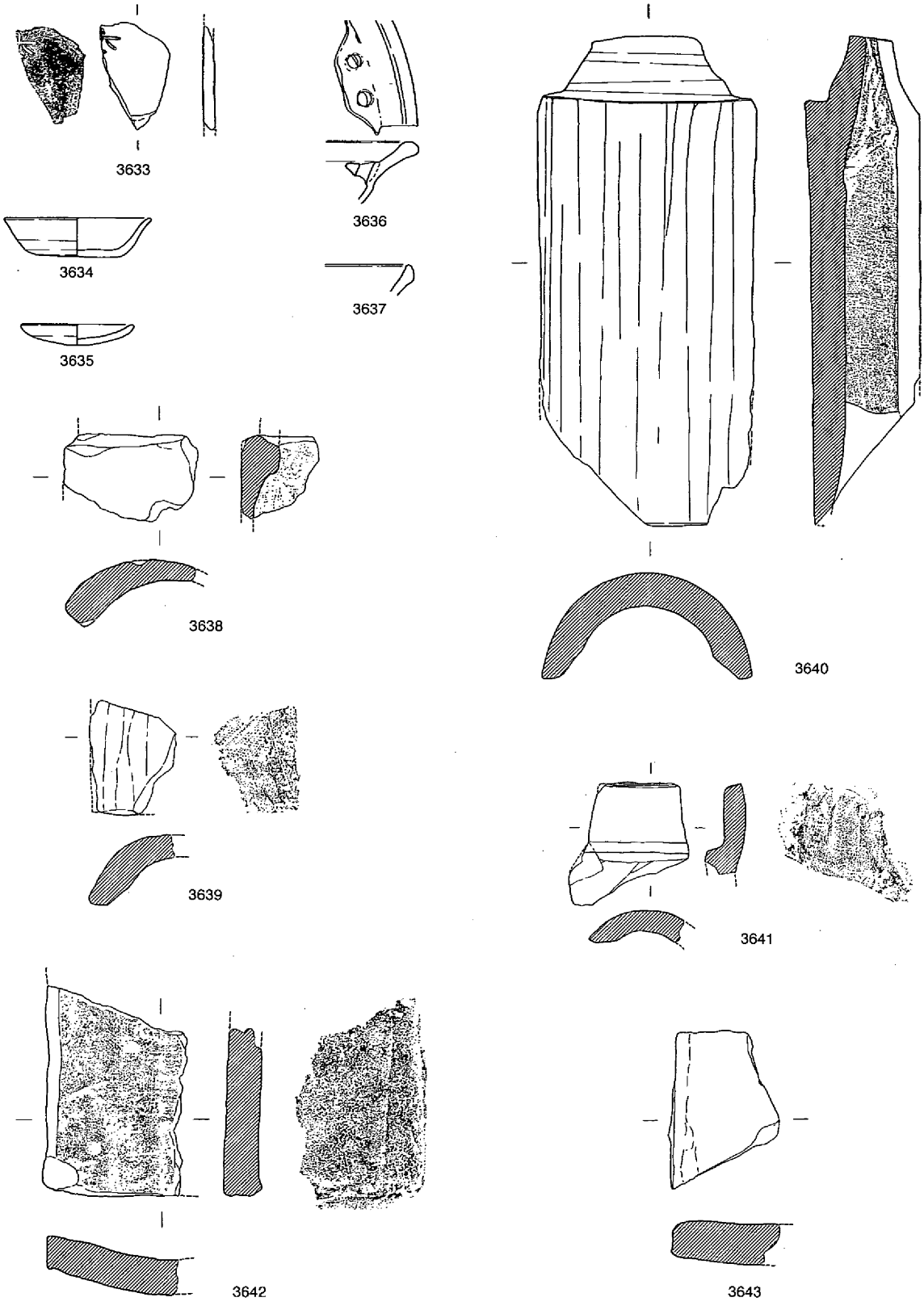
この遺構は、近年道路状遺構とされているものに類似していると考えている。しかし形状以外に道路とする積極的な証拠はない。道路とするならば、低位部の幅約９ｍを想定することができるかもしれない。しかし、微高地より低い部分に道路をつくるのであろうか、疑問も残る。時期は上層に堆積している遺物から、古代前半と考えている。（平井）



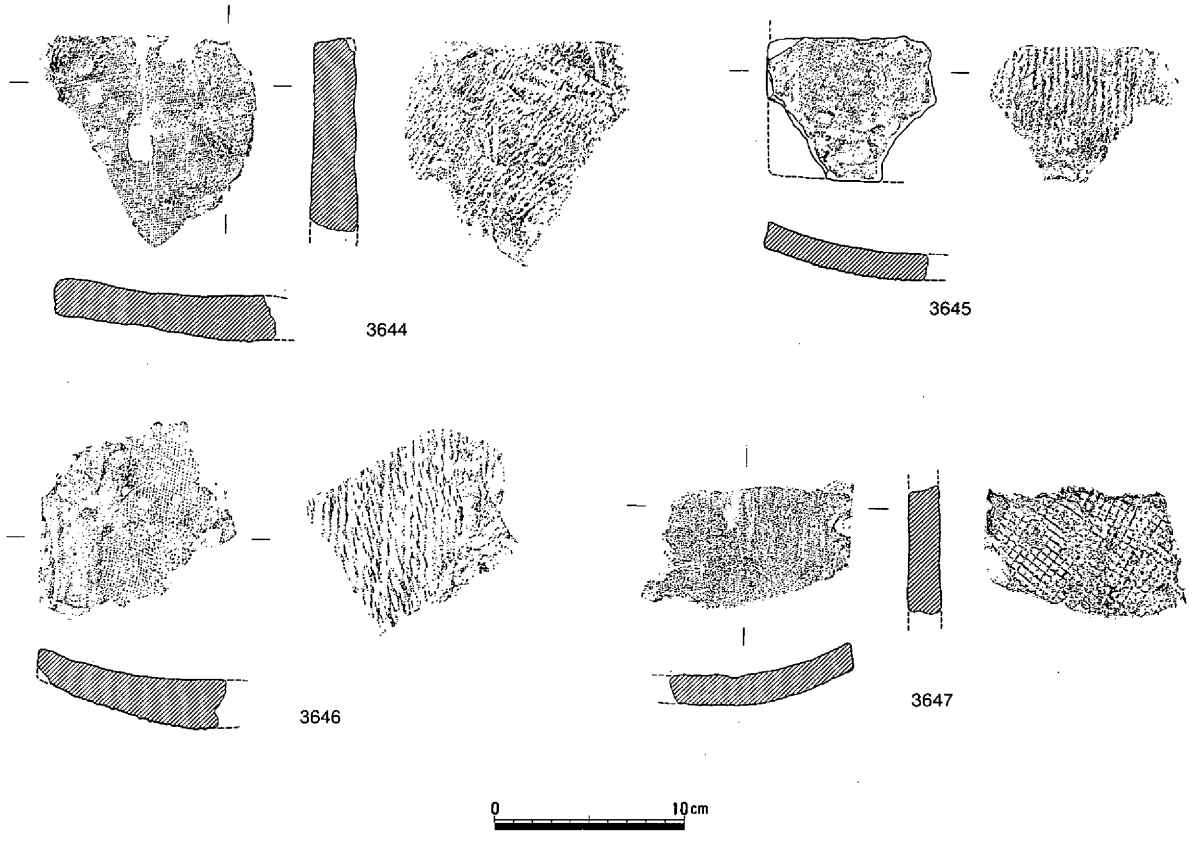
1　淡茶灰褐色粘質土
2　淡茶灰色粘質土
3　茶灰褐色粘質土
4　淡灰褐色粘質土
5　暗茶褐色粘質土（黄色混じり）
6　黄灰褐色粘質土
7　青灰色粘質土
8　淡青灰色粘質土
9　茶灰褐色粘質微砂
10　淡黄灰色粘質土
11　灰褐色粘質土
12　褐色粗砂
13　淡黄灰色粘質微砂
14　暗青灰色粘質土
15　黄灰色粘質土
16　黄灰褐色粘質微砂
17　淡黄灰色粘質土



第1029図　溝102（1/30）・遺物（１）



第1030図　溝102　遺物（2）



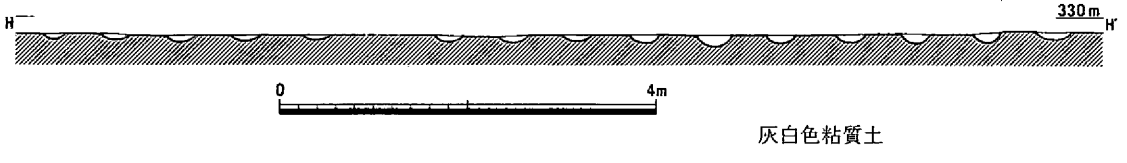
第1031図　溝102　遺物（３）

(12) 畑

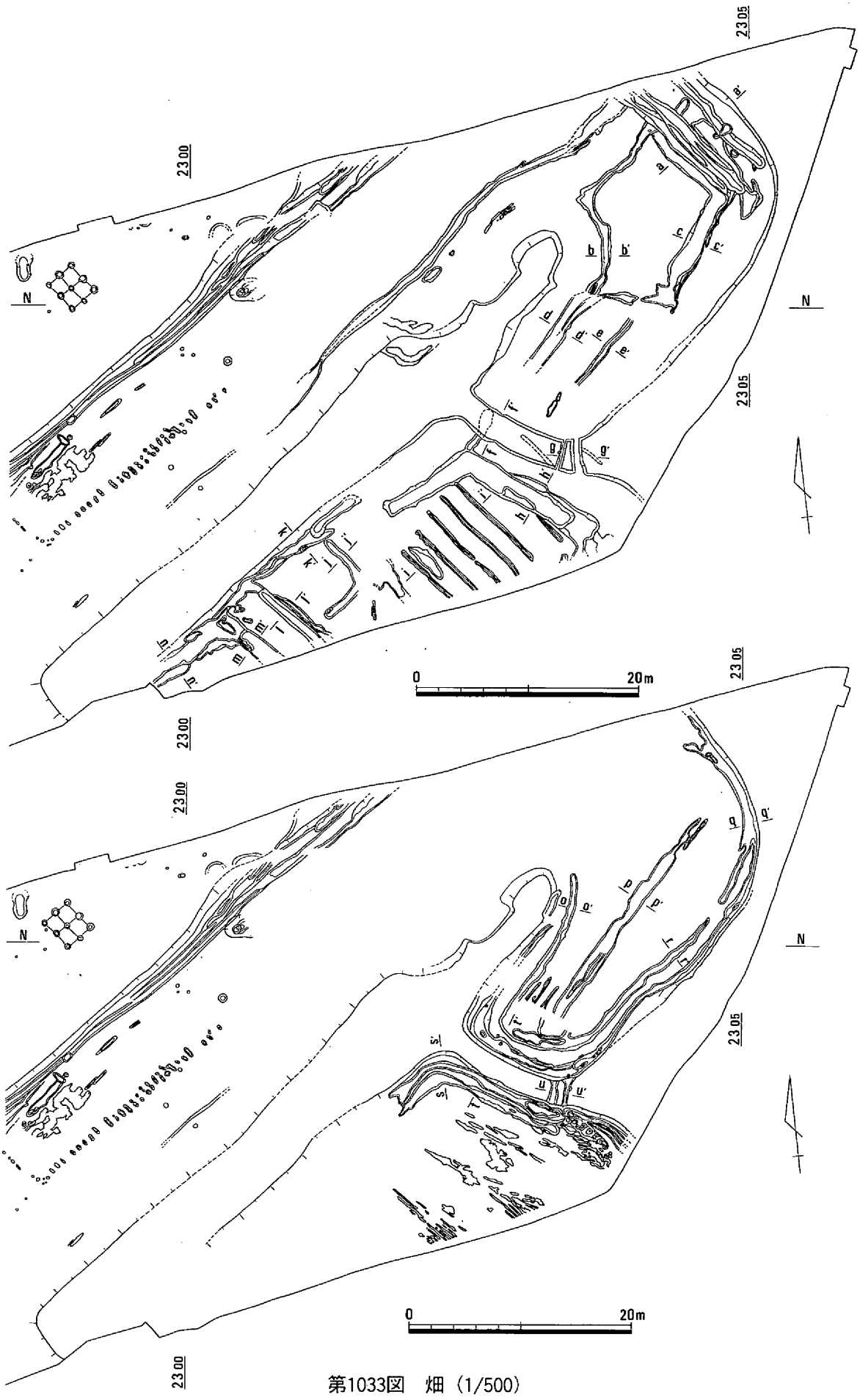
畑１（第1033～1036図）

M・N23区の低位部は古代においても農地として利用されていたが、検出された遺構群の状況からすると畑として耕されていた可能性が高い。耕作面は弥生時代の水田を厚く埋めた粘質土の上面で、弥生時代の水田面よりも30cm前後高かった。耕作面の上にあった浅黄色粘質土層は、微高地の傾斜に添った堆積状況から、耕作廃棄後の自然堆積層とみられたが、その上層は大粒の炭や土器片を多量に包含した褐灰色粘質土で、低位部全体を埋めて整地した層と思われ、古代全般の遺物が出土した。

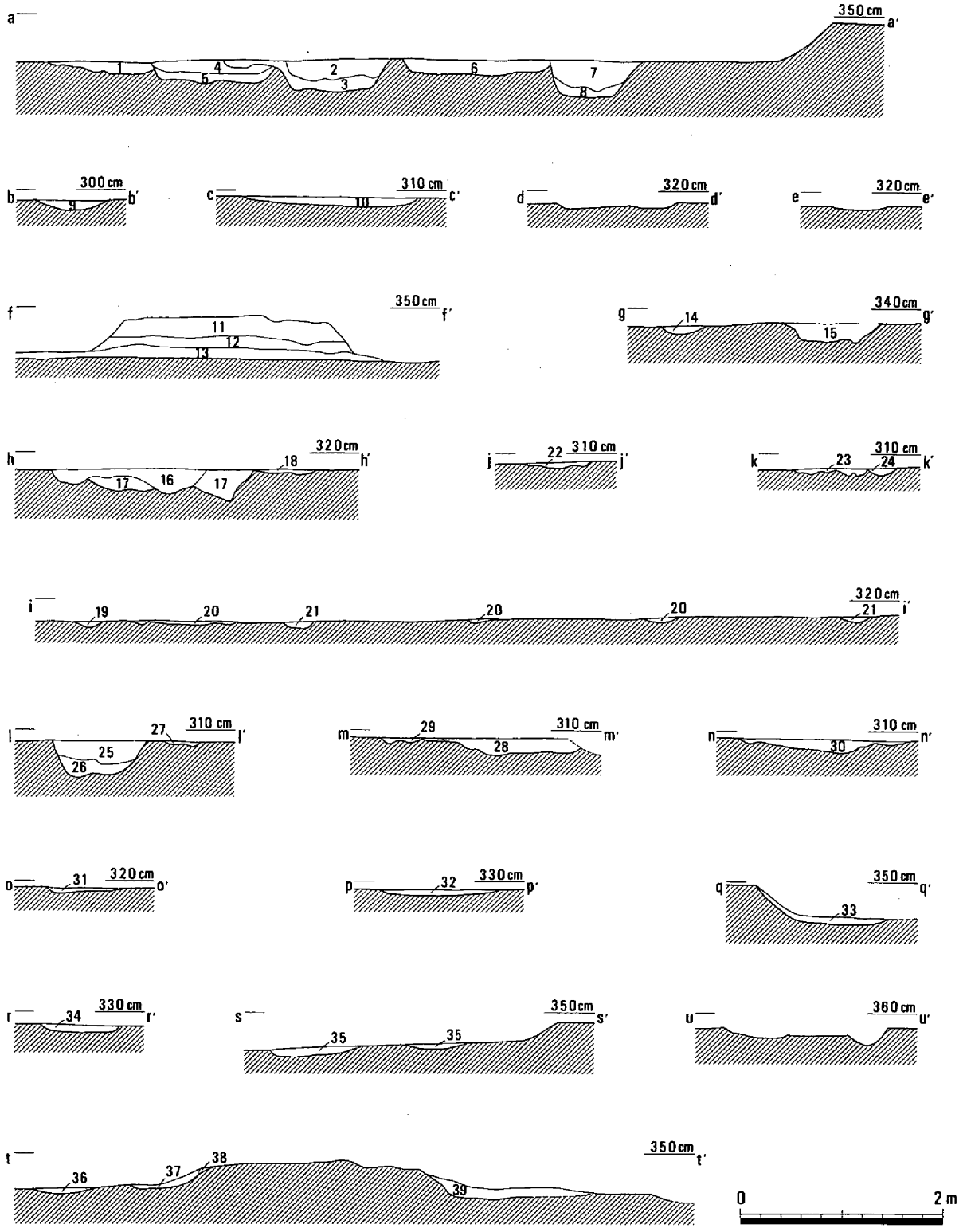
低位部の中央には弥生水田の島状高まりを引き継いだ農道兼作業場が微高地としてあった。その西の低位部では道路状遺構の他には大きな遺構は検出されなかったが、農道の東では部分的に２面の耕作面が確認され、遺構の重複関係からも２時期が想定された。第1033図の上が初期の状況で、下は改変後の状況を示す。前者を下層、後者を上層と呼ぶ。ともに、農道と東の微高地を繋ぐ幅３ｍの土手によって南北に分けられていたが、土手の東端には溝が切られ、南北の農地を結んでいた。



第1032図　道路状遺構１（1/80）

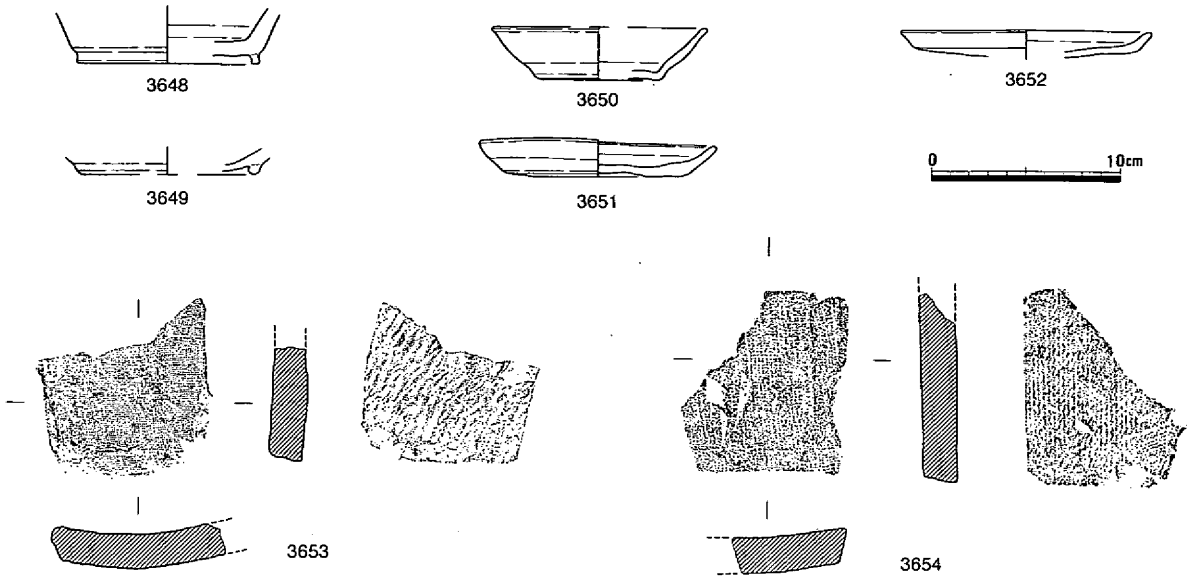


第1033図　畑（1/500）



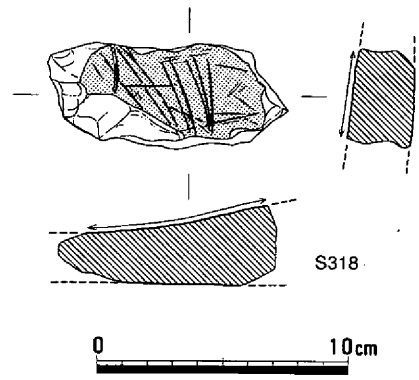
1　明黄褐色（2.5Y7/6）粘質土
2　黄褐色（2.5Y5/3）粘質土
3　灰白色（10Y7/1）粘性砂質土
4　褐灰色（7.5YR5/1）粘質土
5　灰オリーブ色（7.5Y5/2）粘質土
6　黄褐色（2.5Y5/4）粘質土
7　褐灰色（10YR4/1）粘質土
8　灰白色（10Y8/1）粘性砂質土
9　オリーブ黒色（5Y3/2）粘性砂質土
10　黒褐色（10YR2/2）粘性砂質土
11　にぶい黄褐色（10YR5/4）粘性砂質土
12・27　灰オリーブ色（5Y4/2）粘性砂質土
13　オリーブ黒色（5Y3/2）粘質土
14　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土
15　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘性砂質土
16　暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）粘性砂質土
（上層部分はマンガンをブロックで含む）
17・26　暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）粘性砂質土
18　暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）粘性砂質土
（マンガンをブロックで含む）
19　暗褐色（10YR3/4）粘性砂質土
20　暗褐色（10YR3/3）粘性砂質土
21　黒褐色（10YR3/2）粘性砂質土
22・23　暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘性砂質土
24　灰色（5Y5/1）粘性砂質土
25　オリーブ黒色（7.5Y3/2）粘性砂質土
28・30　灰オリーブ色（7.5Y4/2）粘性砂質土
29　オリーブ色（5Y5/4）粘性砂質土
（灰色土をブロックで含む）
31　灰オリーブ色（5Y5/3）粘質土
32・33　灰オリーブ色（5Y5/3）粘質土
34　灰オリーブ色（7.5Y5/3）粘質土
35　褐灰色（10YR5/1）粘性砂質土
（マンガンを含む）
36　褐灰色（10YR5/1）粘性砂質土
37　灰黄色（2.5Y6/2）粘性砂質土
38　にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土
39　灰黄褐色（10YR6/2）粘性砂質土

第1034図　畑断面（1/60）



第1035図　畑　遺物（1）

下層の南半の農地は、幅70～240cm、深さ7～24cmの溝によって小さく仕切られ、もっとも広い北端区画では幅35cm前後、深さ5cm程の小さな溝が1.8～2.2mの間隔で平行に掘られていた。農地縁辺の溝や平行に掘られた溝は水田にはみられず、畑に伴うものと考えられる。とくに平行する小溝は畝の間の溝とみられる。北半の農地は縁辺の溝のみを検出したが、北東端の重複する数条の溝は、断面観察によれば微高地に向かって新しく、農地の拡張を示すものと判断される。



第1036図　畑　遺物（2）

上層の南半の農地では鋤跡状の窪みが認められたのみで、この時点で再び水田になった可能性がある。しかし、北半の農地では依然として多数の溝が存在し、畑が存続していたものとみられる。南半の農地の北東端では柵列状の遺構も検出された。（岡本）

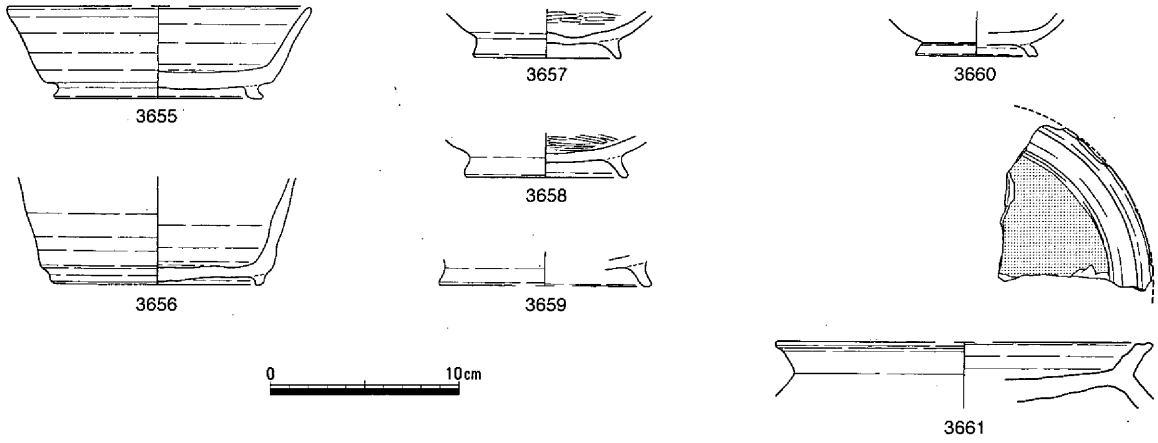
(13) 低位部

低位部2（第1037図）

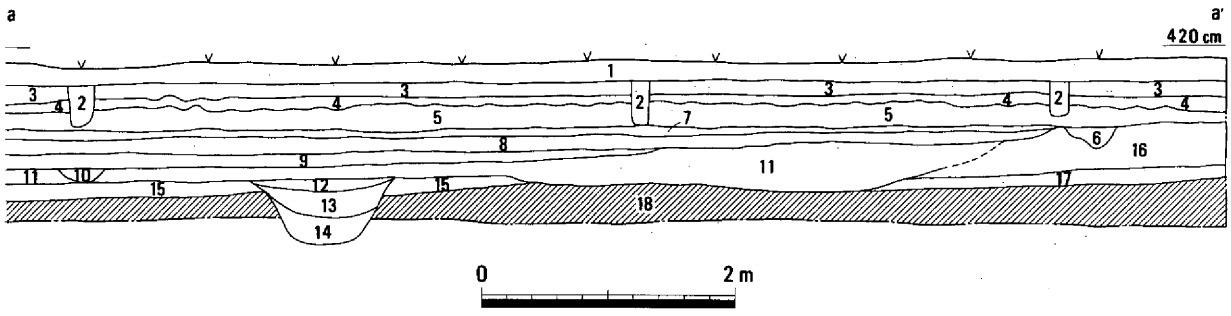
N22区の北東部とM･N23区に位置する。第1微高地とその東側の畑との間の低い部分である。おもに幅15mの直線状になっており、調査区南端部では南に拡がっているようである。検出した微高地上面からは、約50cm低くなっていた。この部分には厚さ30cm前後に包含層が堆積していた（第293図E･F断面）。第1037図はこの包含層中から出土した遺物である。3655・3656は須恵器杯身、3657～3659は内黒椀、3660は緑釉陶器椀、3661は須恵器硯である。時期は古代である。（平井）

低位部3（第1038・1039図）

N22区の西半部、第1微高地の南西部に位置する。平面は第837図に示したような形で、西隣りの橋脚9調査区には北側部分のみが続いているようである。微高地上面からは約40cm低くなっていた。

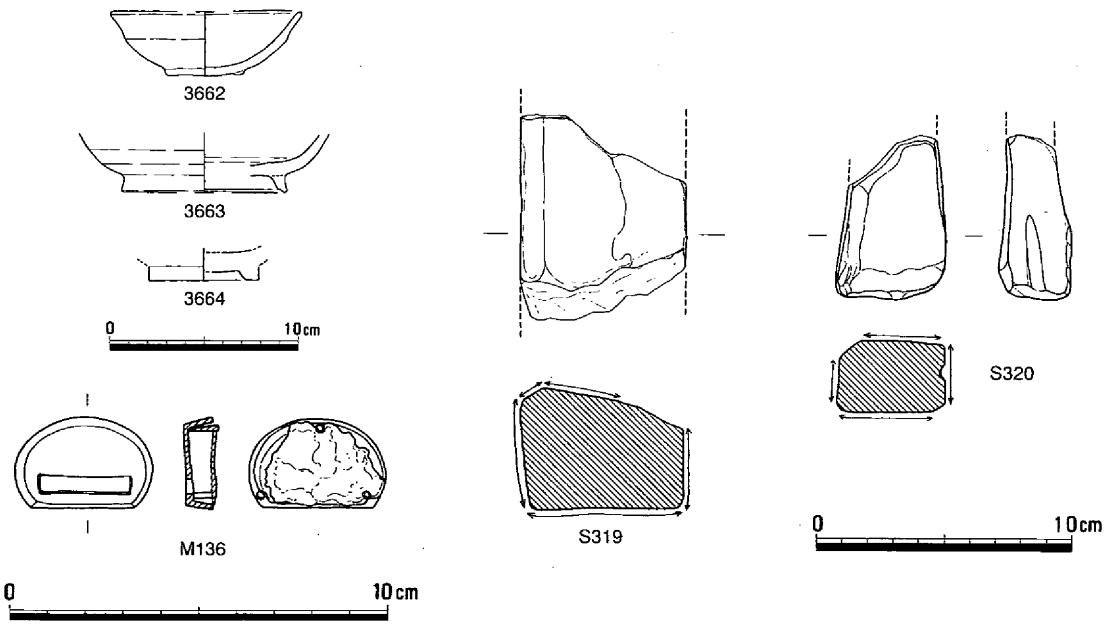


第1037図　低位部２　遺物

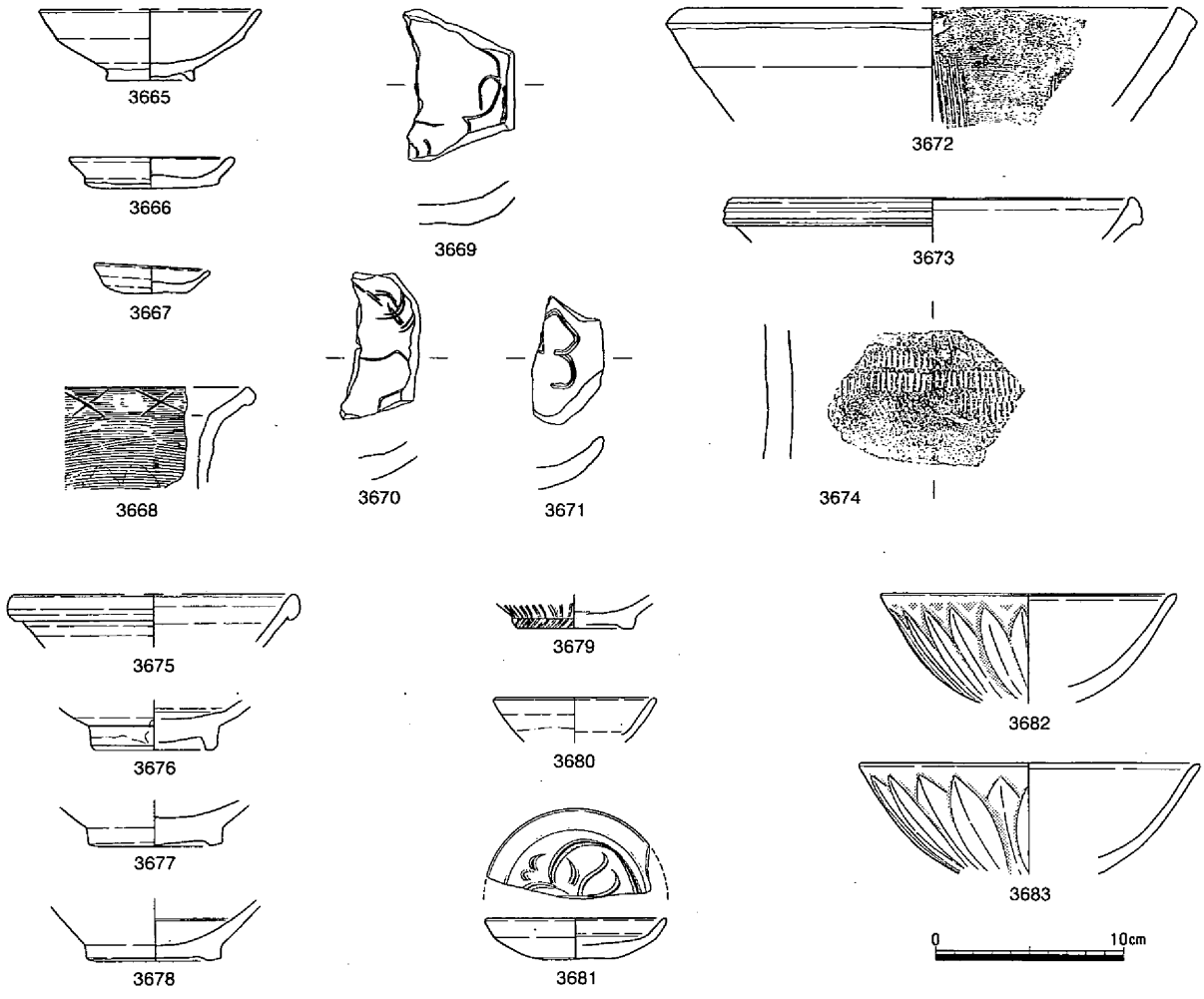


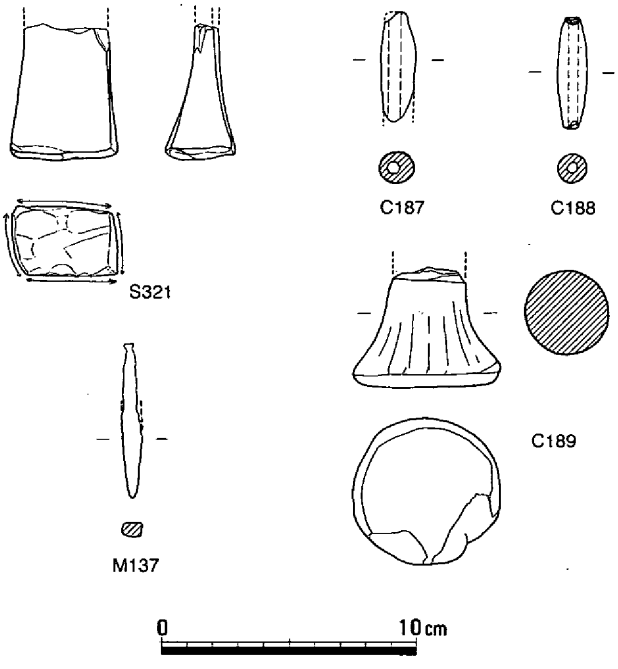
1　暗灰色砂質土（現水田耕土）
2　暗渠
3　黄灰白色粘質土
4　淡灰色粘質土（マンガンを多く含む）
5　灰白色粘土
6　灰色粘質土（炭を含む）
7　灰白色粘土（低位部３）
8　灰白色粘土（低位部３）
9　灰白色粘土（低位部３）
（７・８・９層は鉄分・マンガンの沈着層で分離できる）
10　灰色粘土（溝60）
11　黄灰白色粘質土（低位部３）
12　灰白色粘質土と灰色粘質土（溝31）
13　暗褐色粘質土（溝31）
14　灰色粘土（溝31）
15　灰白色微砂（鉄分が沈着）
16　淡黄色微砂
17　暗黄色粘質土
18　黄灰白色細砂

第1038図　低位部３断面（1/60）



第1039図　低位部３　遺物





第1040図　低位部４　遺物

この部分には灰白色粘土の包含層が堆積していた。包含層はほぼ水平堆積で、鉄・マンガンの沈着層が認められることから、水田になっていた可能性が考えられる。

第1039図はこの包含層中から出土した遺物である。3662は土師器椀、3663は緑釉陶器椀、3664は白磁碗、M136は銅製帯金具（丸鞆）、S319・320は砥石で、時期は古代と中世である。（平井）

低位部４（第1040図）

Ｎ22区北東部とＭ・Ｎ23区の西半部に位置する。第１微高地東端部とその東に拡がる水田との間に位置する。微高地上面からは約30cm低くなっていた。この部分には灰白色の砂質土や粘質土が堆積していた。このうち第293図の１層は下位にマンガンが沈着しており、水田層になるのではなかろ

うか。また３層からは多くの土器や石器、土製品、鉄器が出土した。3668は土師器鍋で、口縁部内面にヘラ描き沈線がある。3669～3671は土師器杯で内面にヘラ描き沈線紋がある。3672は備前焼、3673は魚住焼、3674は常滑焼、3675～3680は白磁、3681～3683は青磁である。Ｓ321は砥石、M137は釘、Ｃ187・188は土錘、Ｃ189は瓦質の不明品である。時期は中世である。　（平井）

（14）河道

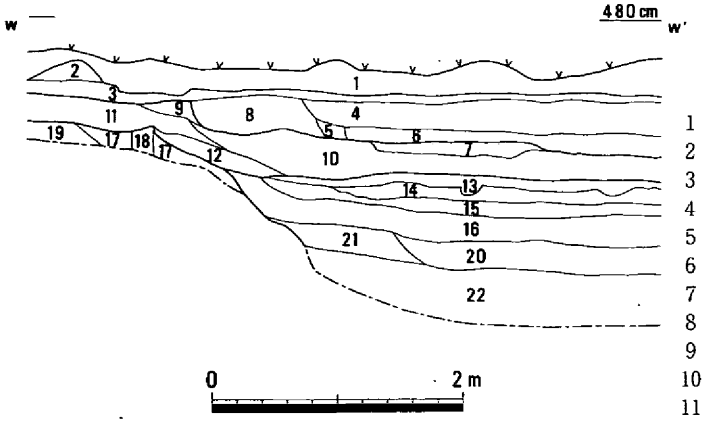
河道（第1041～1089図、写真120～129）

第２微高地と第３微高地の北東には、北西から南東にのびる大きな河道が存在する。さらに、そこから南西に分岐あるいは交差するような河道も検出されている。後者の河道が、本来同一であった可能性の高い第２微高地と第３微高地を分断している。当遺跡で確認されたこれらの河道は、弥生時代から古墳時代後期の遺構を切っており、それ以後の形状を示すと思われる。つまり、古墳時代までの広い微高地が、それ以降に洗掘を受けた結果、検出されたような状況を示すと考えられる。

大きな河道の対岸の状況は、東に約220ｍ離れた高松原古才遺跡の西端で確認されているが、これは弥生時代から古墳時代のもので、古代から中世にかけての河道は確認されていない。そのため河道幅はそれ以下であるとしか言えない。一方、第２・３微高地を分断する河道は、幅が約70ｍであることが明らかとなっている。河道の底は確認されていないが、北端の断面（ｗ－ｗ′）では、掘り下げ停止面の海抜240cm以下、微高地との比高は160cm以上を測るようである。

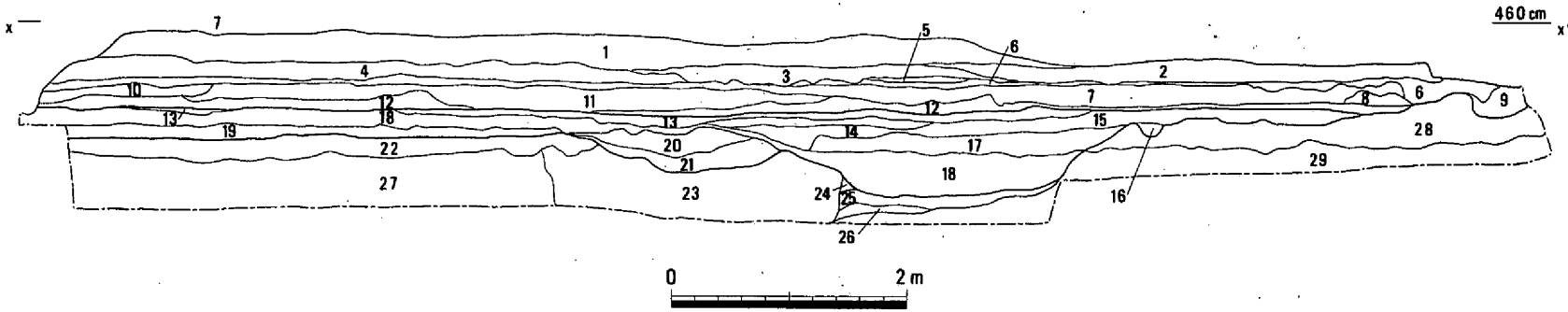
この河道は、埋没の過程で水田となっていた時期があると思われる。ｗ－ｗ′断面で、海抜約350cmを上面とする14層がその可能性が高く、ｘ－ｘ′断面では22層が対応すると思われる。その上層にも水田層が存在し、ｘ－ｘ′断面ではこれらに伴う可能性のある溝が認められる（17・18層、20・21層）。この水田は、後節で述べるように近世初頭のものと考えられ、河道自体は、以下に説明する遺物の状況などから、古代から中世の間に発生し、遅くとも中世後半には幅を減じ、微高地付近では一定の幅のある低位部となっていたと推測される。

この河道からは多量の遺物が出土している。特に注目されるのは、多量の瓦である。平安時代から室町時代までのものが多く、奈良時代のものもわずかに含まれている。これらは第２微高地の東斜面部に偏っており、さらにその南部の調査区が台形状に突出する地点に集中している。これは、この瓦を葺いていた建物の所在地を推定する上で重要である。おそらく第２微高地東端の、溝で区画された



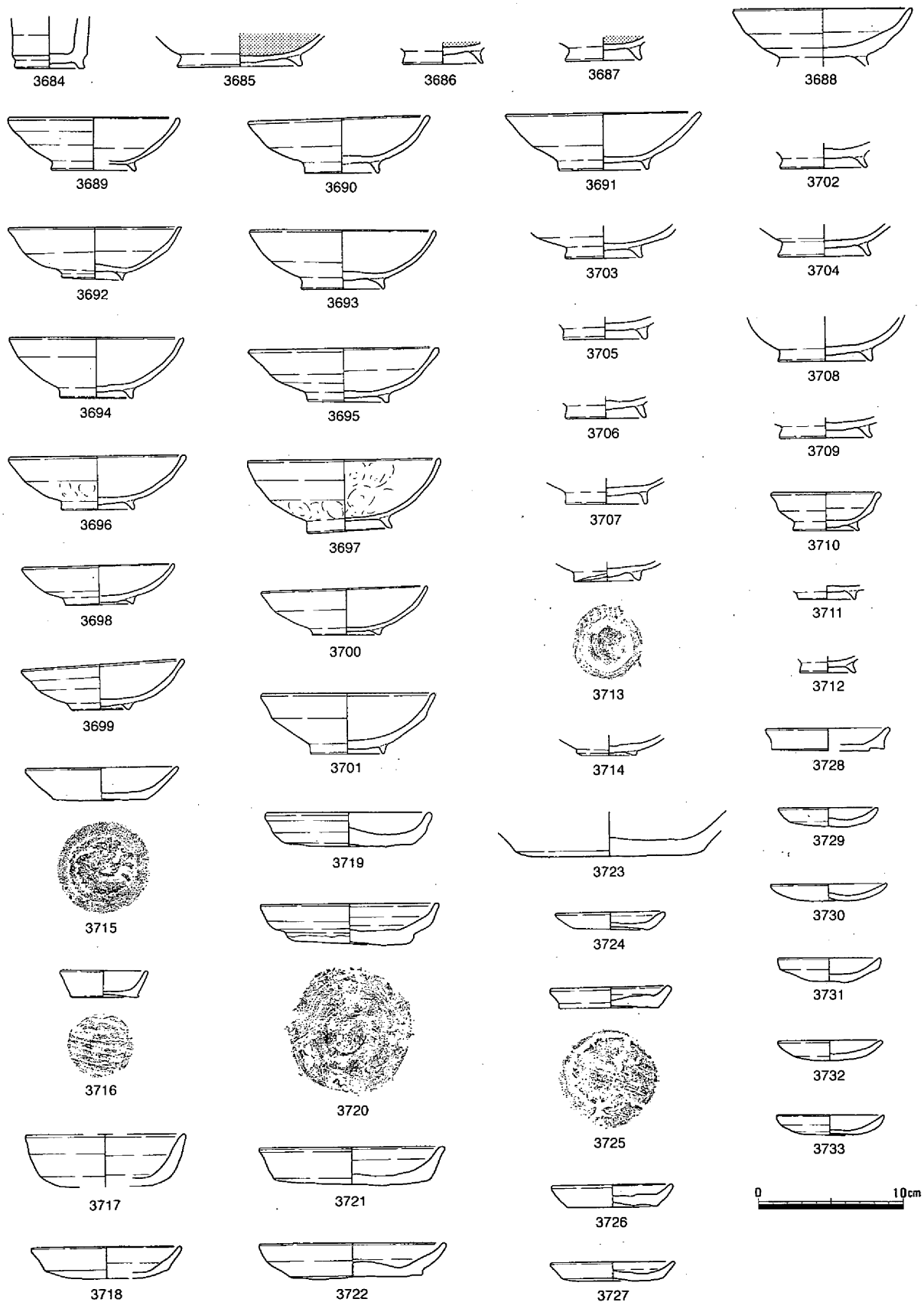
1　耕作土
2　黄灰色粘質微砂（旧畔）
3　灰黄色細砂（マンガン）
4　灰色細砂
5　灰色微砂
6　灰色粘質微砂
7　灰褐色細砂
8　灰色微砂
9　黄灰褐色粘質微砂
10　茶灰色微砂
11　黄茶褐色粘質土
12　灰茶褐色粘質土
13　灰色粗砂
14　暗灰色粘土層（旧水田）
15　灰青色粘質土（微砂混じり）
16　青灰色粘質土
17　茶褐色粘質土
18　暗褐色粘質土（柱穴）
19　黒褐色粘質土
20　緑灰色粘質土（微砂混じり）
21　緑灰色粘質土
22　暗緑色微砂

第1041図　河道断面（１）（1/60）

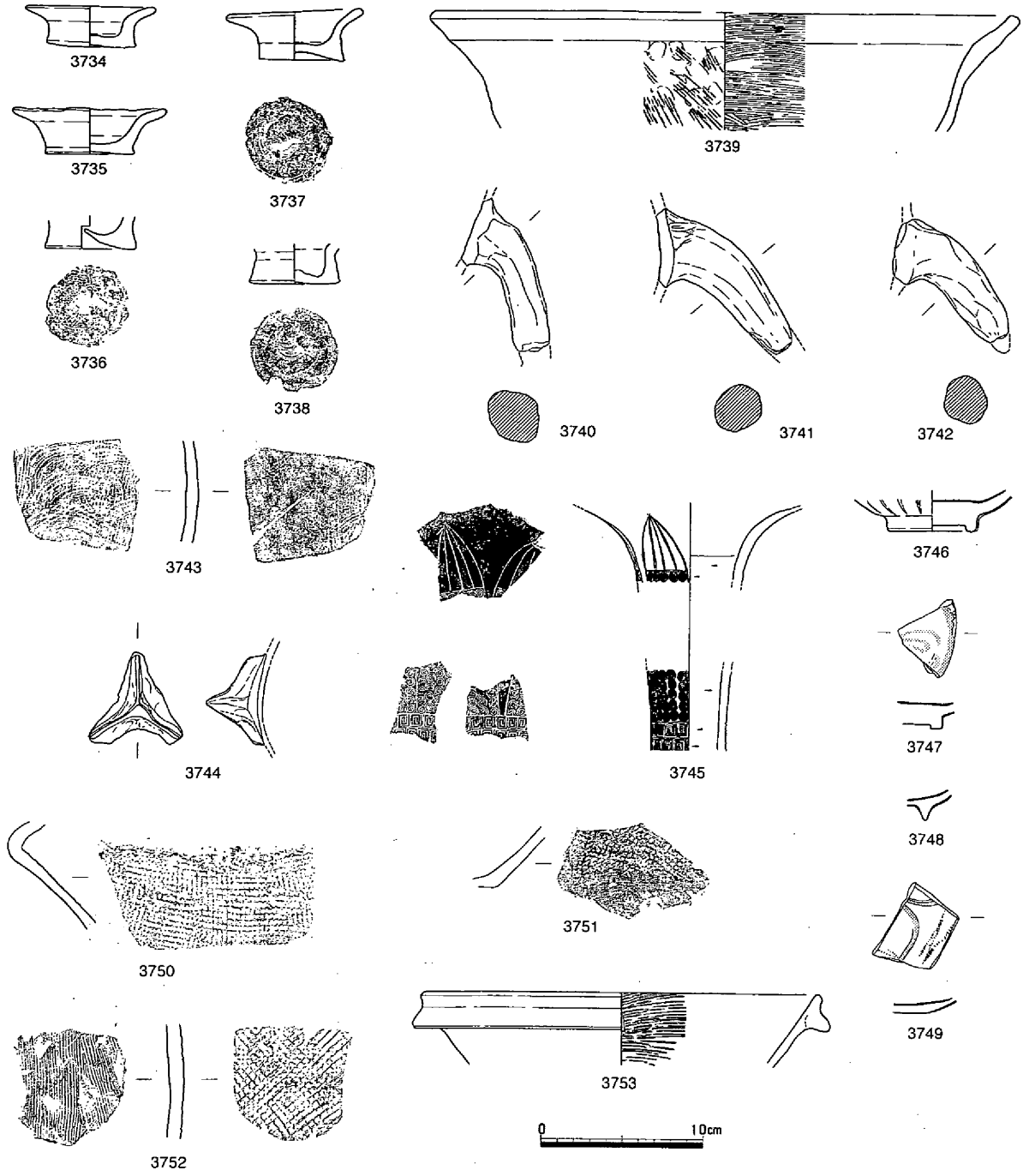


1　黒褐色微砂混じり粘土
2　褐灰色微砂混じり粘土
3　黄灰色微砂混じり粘土
4　黄灰色微砂混じり粘土（多量の酸化鉄を含む）
5　黄灰色微砂混じり粘土（少量の酸化鉄を含む）
6　黄灰色微砂混じり粘土（酸化マンガンを多く含む）
7　暗灰黄色微砂混じり粘土（多量の酸化鉄、酸化マンガンを含む）
8　鈍い黄褐色粘土（多量の酸化鉄、酸化マンガンを含む）
9　黒褐色粘土（多量の酸化マンガンを含む）
10　黒褐色粘土（多量の酸化マンガン、若干の土器を含む）
11　灰黄色粘質（の粘土混じり）微砂（多量の酸化鉄、酸化マンガンを含む）
12　灰黄褐色粘質微砂（多量の酸化鉄、酸化マンガンを含む）
13　黒褐色粘質微砂（砂粒が多い、土器を含む）
14　鈍い黄褐色微砂混じり粘土（多量の酸化鉄、酸化マンガン、土器を含む）
15　鈍い黄褐色微砂混じり粘土（酸化鉄が多く粘性が低い、土器を含む）
16　褐色粘土（多量の酸化鉄を含む）
17　鈍い黄褐色微砂（多量の酸化鉄、酸化マンガンを含む）
18　暗褐色微砂混じり粘土（多量の酸化鉄、酸化マンガン、土器を含む）
19　鈍い黄褐色微砂混じり粘土（酸化鉄が多く粘性が低い、土器を含む）
20　灰色粘土（少量の円礫（径５cm程度）を含む）
21　灰色粘土（20と灰色砂の互層（約３重？））
22　暗灰黄色粘土混じり微砂（多量の酸化鉄、酸化マンガンを含む）
23　灰色微砂混じり粘土（径５～10cmの円礫及び少量の土器片を含む）
24　灰色粘質微砂（土器片を含む）
25　黄灰色微砂混じり粘土（多量の酸化鉄を含む）
26　黄灰色粘土（非常に粘性が高い）
27　黄灰色微砂混じり粘土（多量の酸化鉄を含む）
28　鈍い黄褐色微砂混じり粘土（多量の酸化マンガンを含む）
29　鈍い黄褐色粘土（多量の酸化鉄を含む）

第1042図　河道断面（２）(1/60)

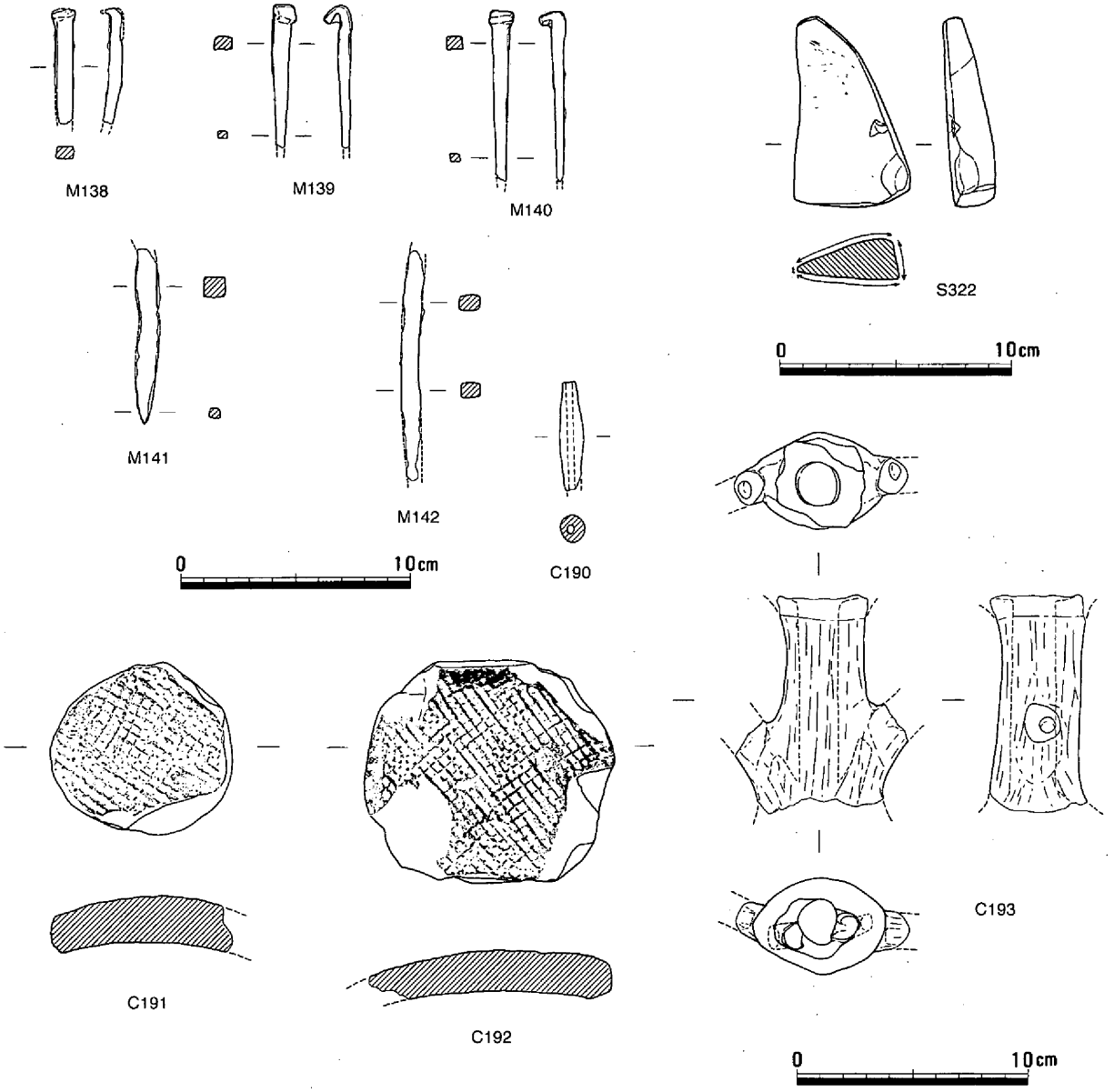


第1043図　河道　遺物（１）



第1044図　河道　遺物（2）

区域内であったことは間違いないようである。遺物の出土層位についてみると、w－w′断面の15・16層に対応する可能性のある「暗灰色粘土層」からの出土が多く、13層に対応すると思われる「淡灰色粗砂層」からも出土している。土器では、「淡灰色粗砂層」は江戸時代初頭のものが認められる。この下層の「暗灰色粘土層」の土器は、鎌倉から南北朝のものが多く、わずかに室町中葉から後葉のものまでが確認されるが、それらは少ない。瓦の多くはこの層からの出土で、平安から鎌倉のものが多く、室町時代のものもみられる。このような傾向を重視すると、中心的な瓦葺き建物は、室町中葉から後葉にかけて廃れ、ある時期に廃棄されたと考えることも可能である。



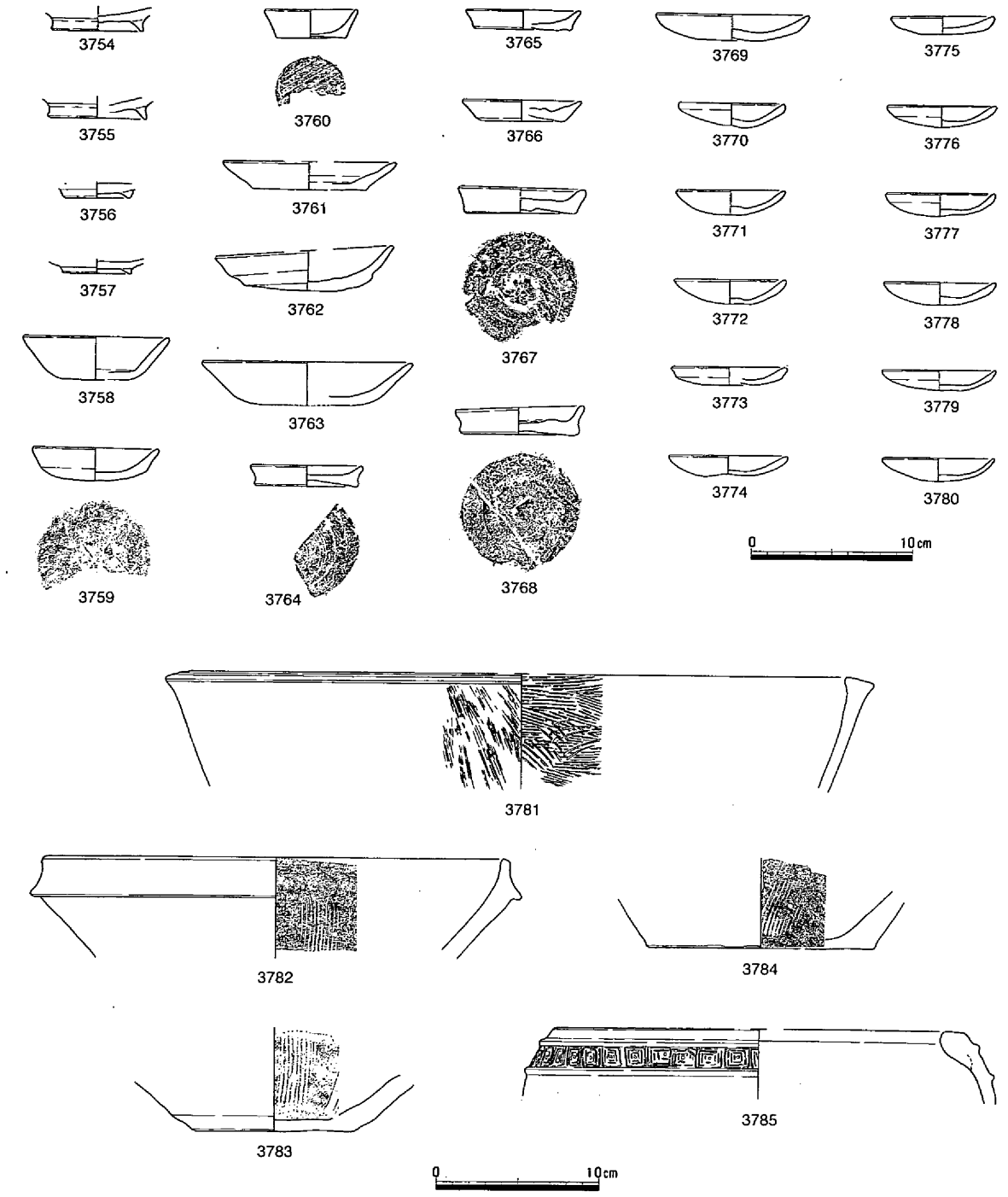
第1045図　河道　遺物（３）

3684～3753の土器、金属製品M138～142、石製品Ｓ322、土製品Ｃ190～193が「暗灰色粘土層」からの出土で、3754～3785の土器が「淡灰色粗砂層」からの出土遺物である。

土器（第1043・1044・1046図、写真120・121）

図示した土器は、須恵器3684、黒色土器3685～3687・3745、土師器3688～3744・3754～3780・3785、青磁3746～3749、亀山焼3750～3753・3781、備前焼3782～3784である。

3689～3714・3754～3757は高台付椀で、高台が比較的しっかりしたものから華奢なものまで認められる。3715～3722・3758～3763は杯、3724～3733・3764～3780は小皿である。小皿には、底部ヘラキリのものと丸底のものがある。これらには、口縁部周辺にススが付着しているものがあり、灯明に使用されていたことが判明している。3734～3738の底部はヘラキリが行われている。3745は密教法具の三具足の一つである花瓶の口頸部である。瓦質であるが、胎土は黒色土器に似ているという指摘もある。外面には線刻による蓮弁が描かれ、その内部には、スタンプの渦巻紋が列を為して充填されている。一方、紐の内部はスタンプの雷紋が充填されている。類似する紋様構成には、滋賀県聖衆来迎寺



第1046図　河道　遺物（４）

の銅製花瓶がある。

石製品・土製品・金属製品（第1045図、写真121）

図示した遺物は、石製品１点、土製品４点、金属製品５点である。M138～141は鉄釘で、完形ではないが、長さは約10cm程度になると思われる。M142は断面が長方形であるが、釘であるかどうかは不明である。S322は流紋岩質凝灰岩製の砥石で、断面は台形を呈する。C190は土錘で、重量は4.6ｇである。C191・192は、格子タタキを有する瓦質の平瓦を加工したものである。C193は、比較的精良な胎土で、灰白色を呈する。大小３つの中空の円柱から成り、中央の上端は剥離しているが、大

きく開くように思われる。両脇の円柱内部の孔は、貫通していない。下部の断面は楕円形で、広がるようである。外面は丁寧なヘラミガキが施されている。器種は不明であるが、燭台のようなものか花瓶や水瓶のようなものを想定している。（柴田）

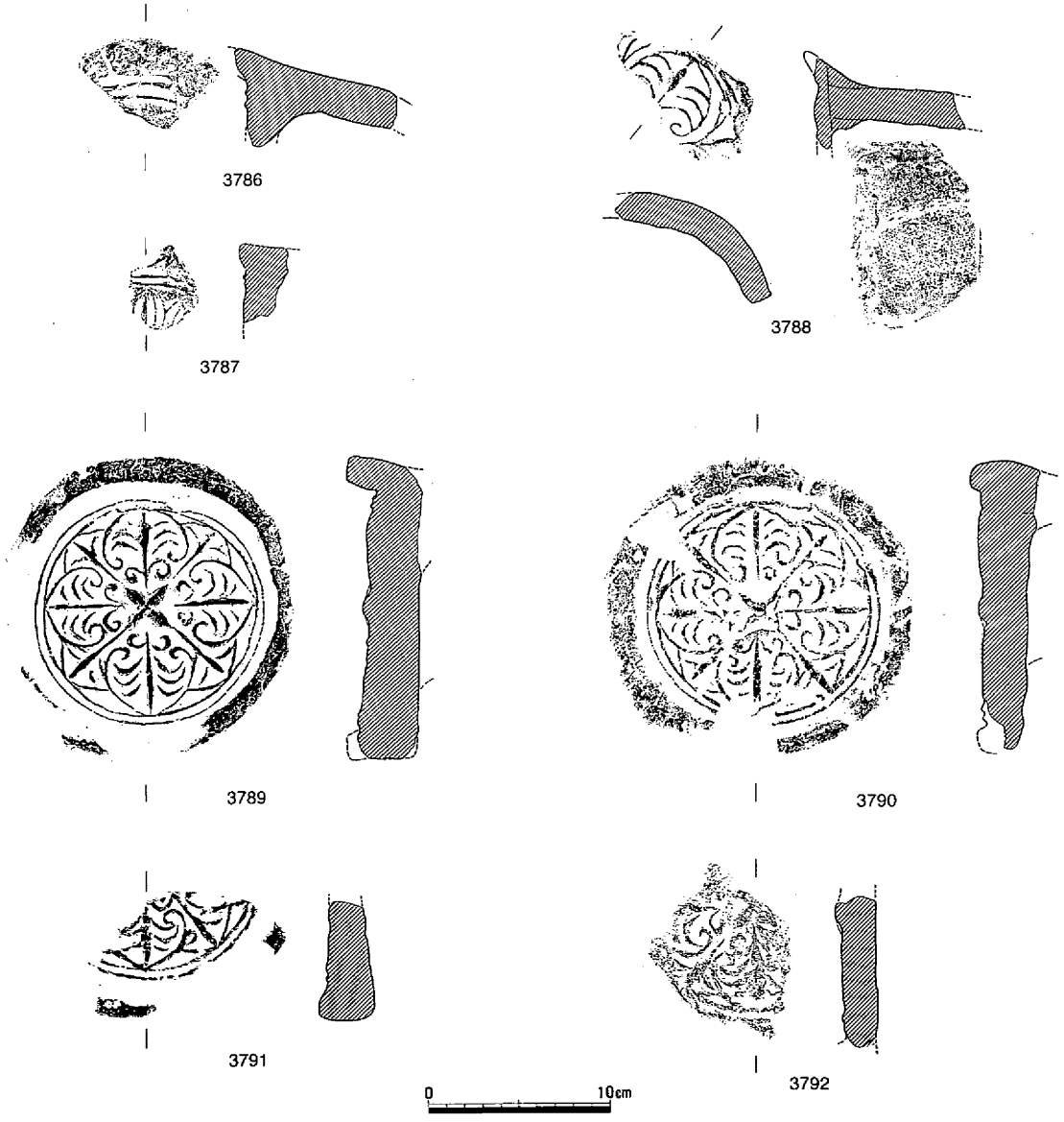
瓦（第1047～第1089図、写真122～129）

河道の堆積土中からは、前述の土器等とともに多くの瓦が出土している。これらは「加茂政所廃寺」に関連するものと考えられ、整理箱にして130箱以上、丸瓦と平瓦の総重量は579kgを測る。種類では、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・雁振瓦・鬼瓦が確認されており、複数の時期のものがある。

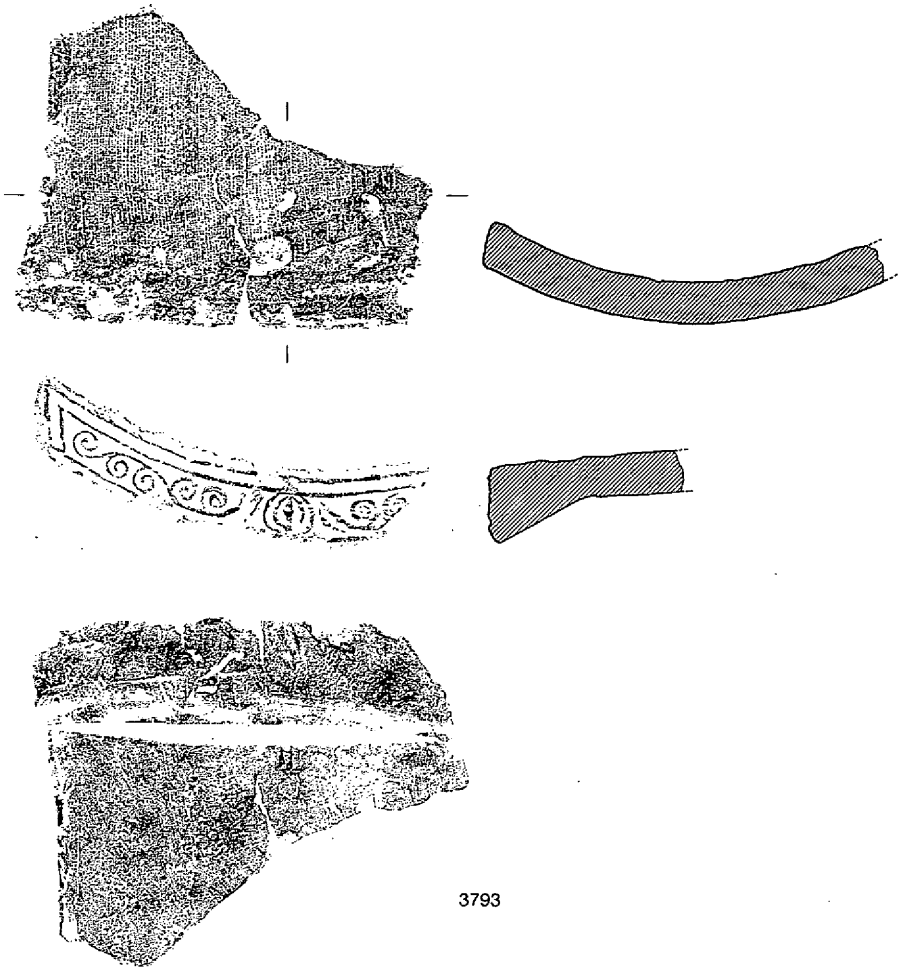
ここでは河道出土遺物の大部分を占める古代～中世にかけての瓦について、種類毎に時期を分けて説明を加える。

古代軒丸瓦

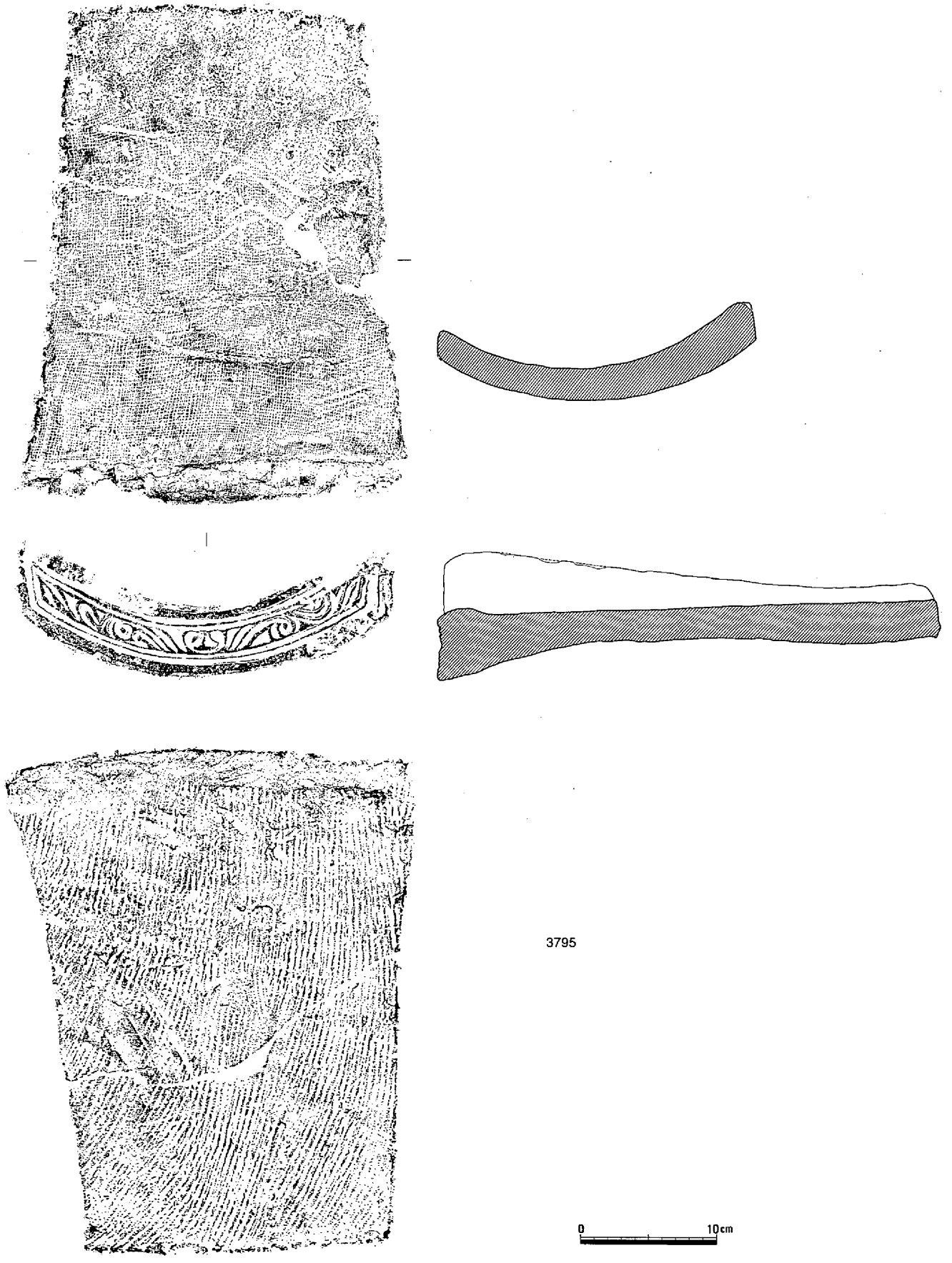
3786・3787は外区に二重圏線をめぐらす軒丸瓦である。3786は丸瓦部がわずかに残存しているが、



第1047図　河道　遺物（５）



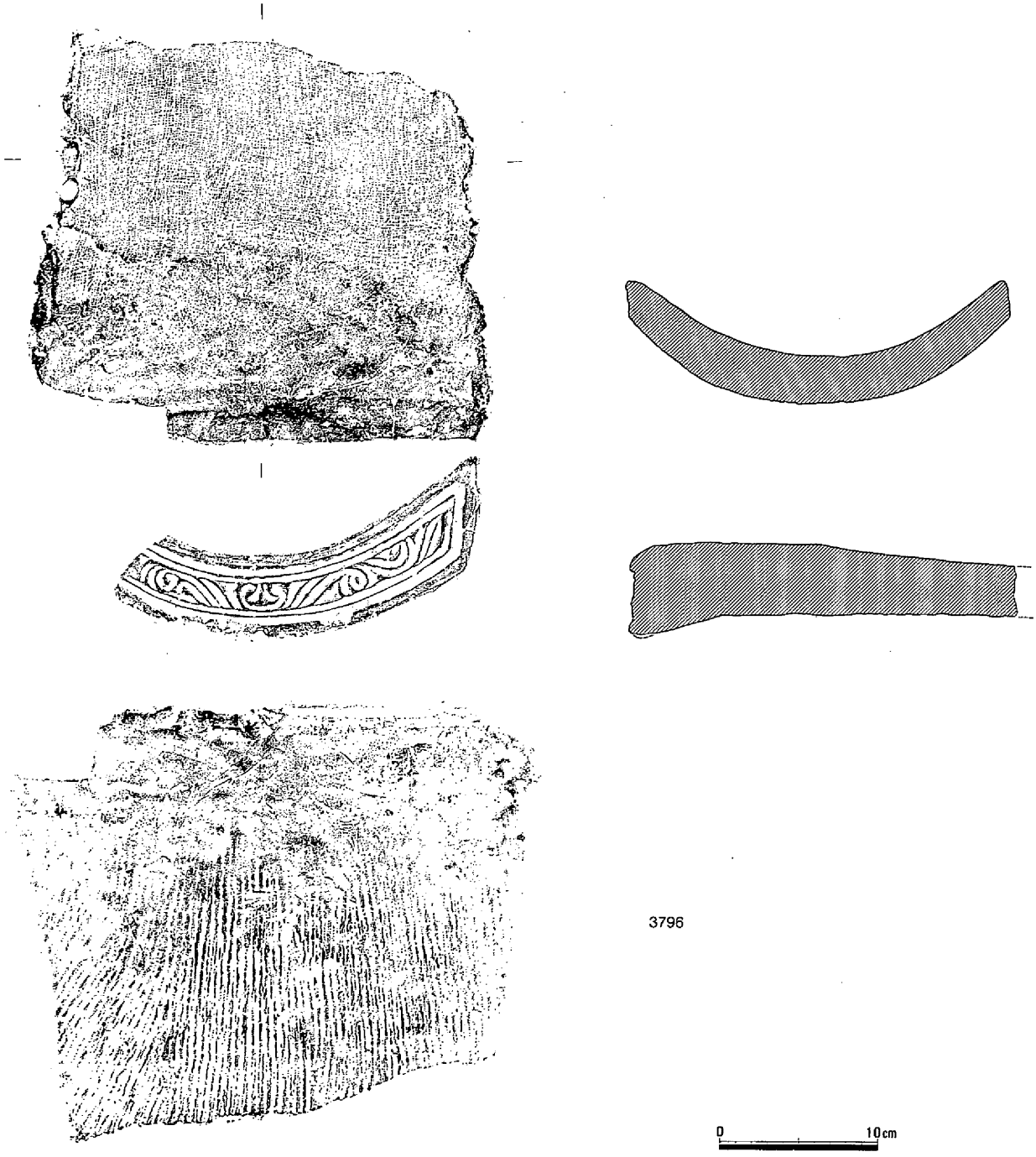
第1048図　河道　遺物（6）



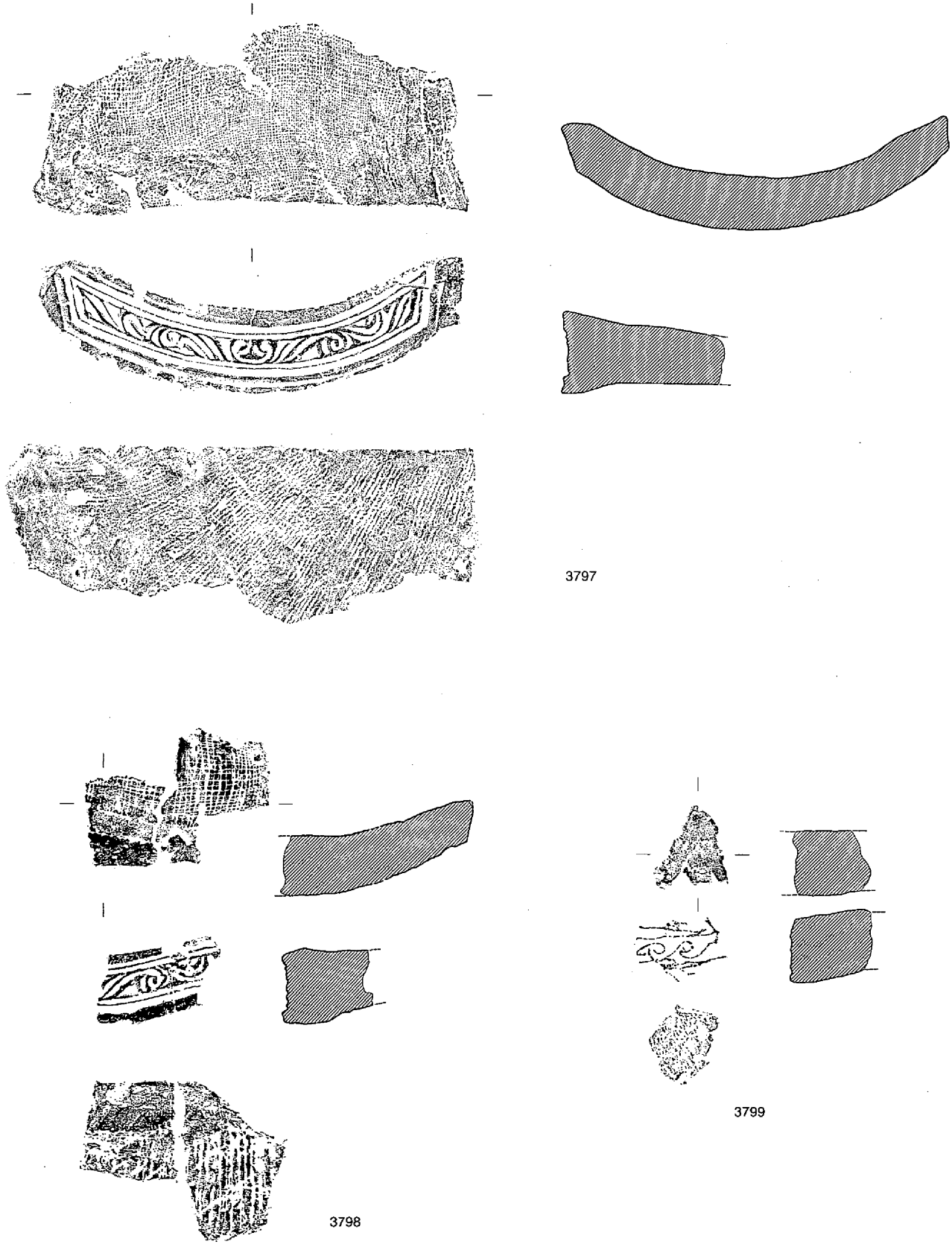
第1049図　河道　遺物（７）

瓦当部は外区外縁と内区が欠損しているため紋様の全容は明らかでない。3787には圏線の他に彫りの浅い蓮弁が二葉残存しており、その特徴から加茂政所遺跡の周辺遺跡から見つかっている平城京軒丸瓦6225型式である事が推測される。２本の圏線の間隔は3786に比べて狭い。瓦当紋様から奈良時代のものと考える事が出来よう。

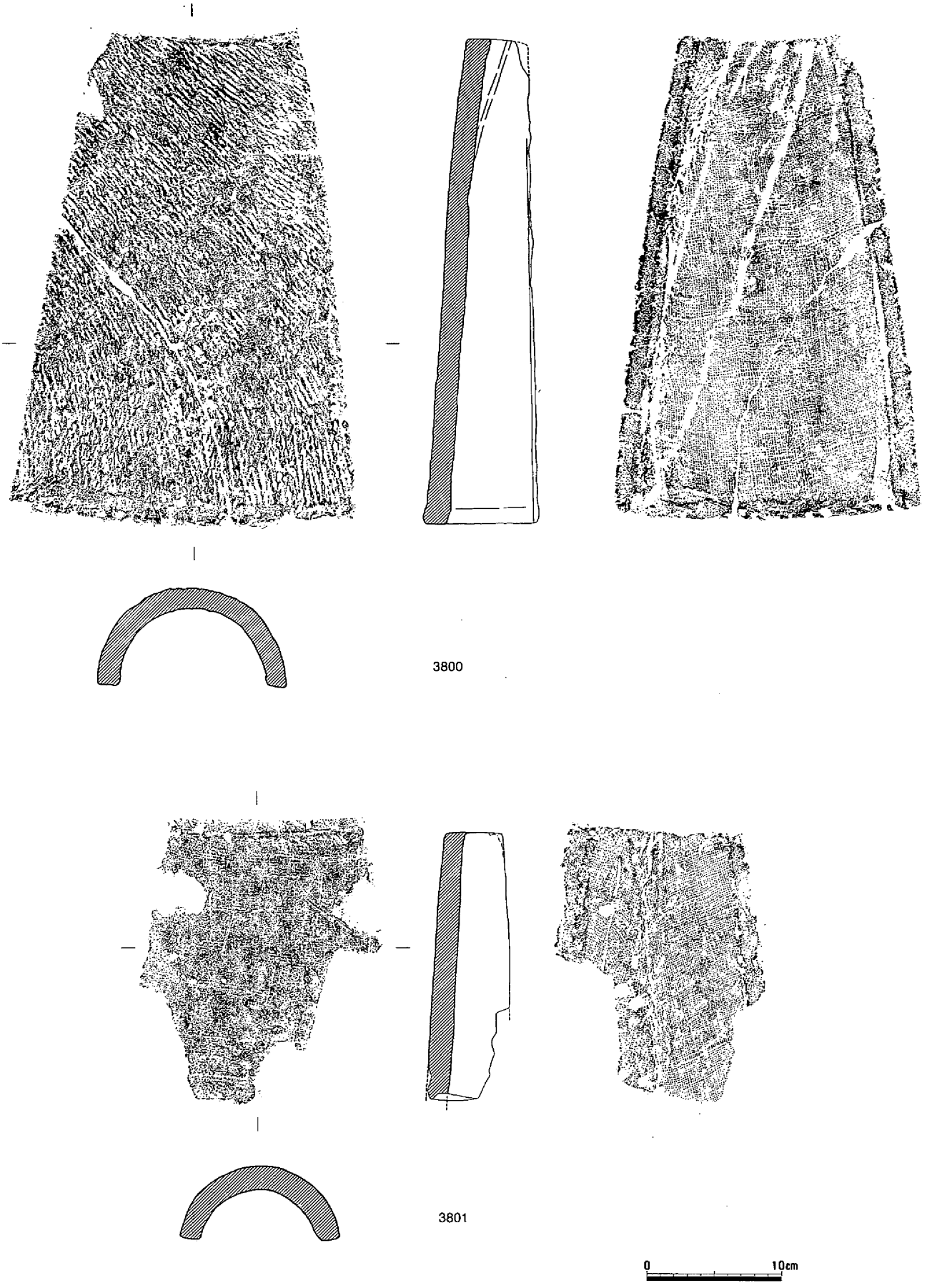
3788と3789～3792は以前より備前・備中特有の紋様として知られてきた宝相華紋軒丸瓦で、それぞれ紋様構成がわずかに異なる。3788は小片ではあるが平安宮内裏蘭林坊出土のものに類似したものである。スペード形の主葉は、軸の先端がつぼみ状に膨らみ、中には６本の支脈が伸びる。その隣に配



第1050図　河道　遺物（８）



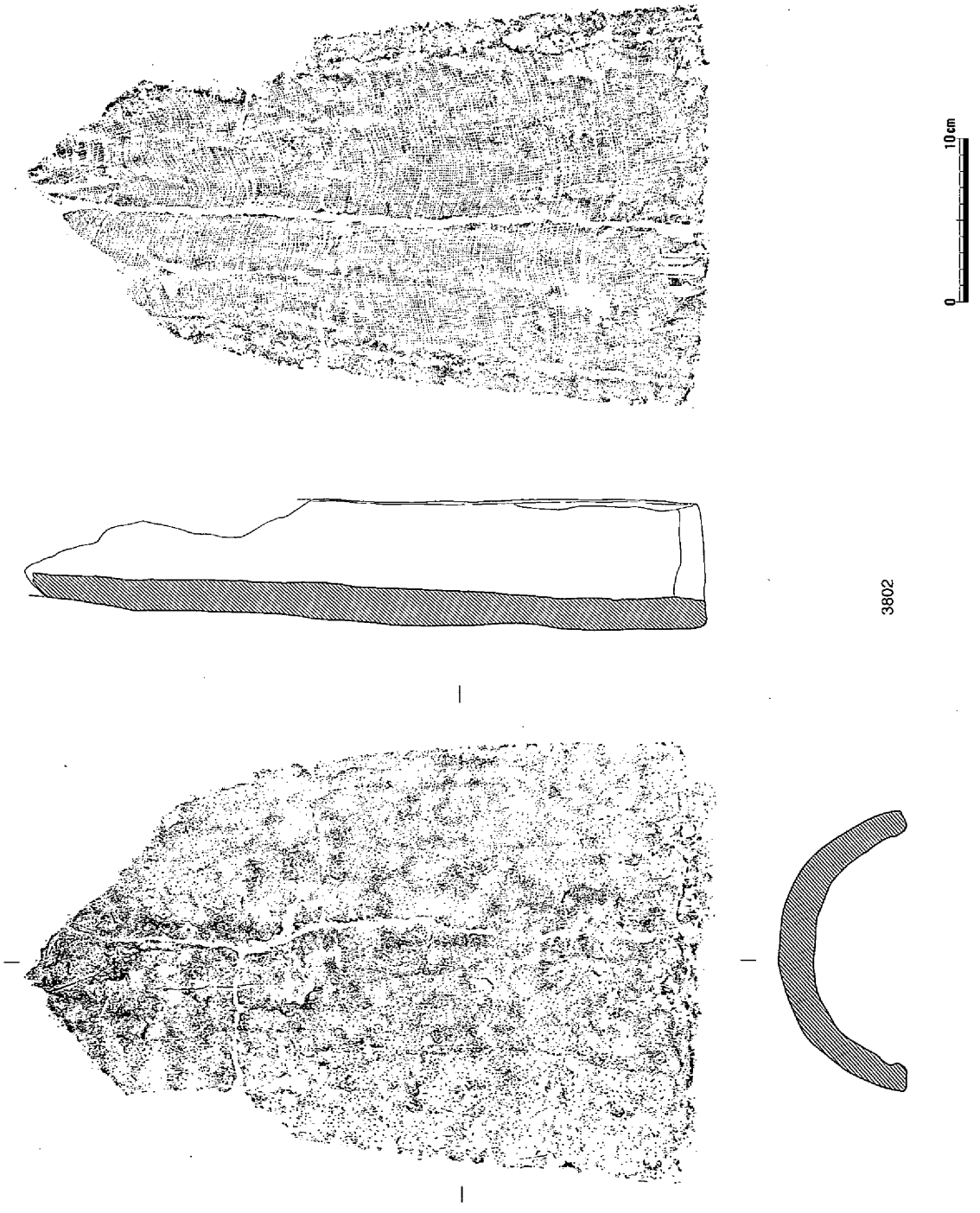
第1051図　河道　遺物（９）



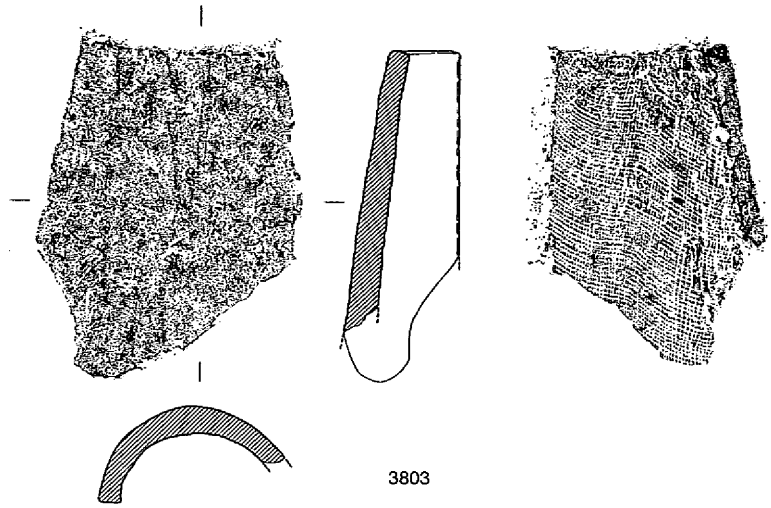
第1052図　河道　遺物（10）

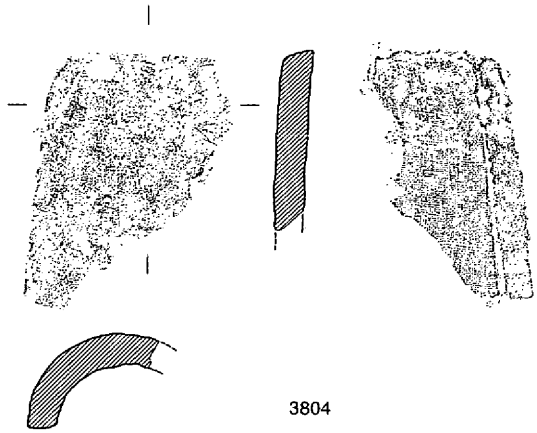
された間弁には左右に２本ずつ支脈が伸び、先端でつぼみのように膨らむ。宝相華紋のまわりには２重の圏線がめぐっている。紋様は稜があるためシャープな印象を受ける。平安時代。

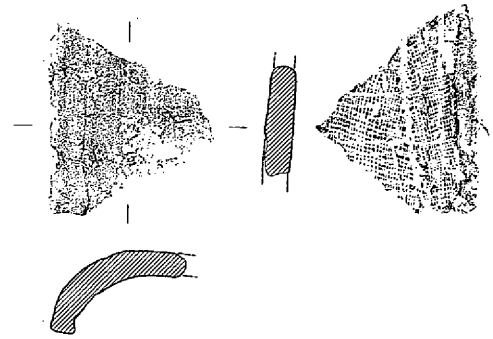
3789～3792は中央に十字形の花紋から八方向に四つの主葉と四つの間弁を交互に配しており、その周囲を二重圏線がめぐる。3789・3791は灰色を呈し、紋様がシャープに表現されているのに対し、3790・3792は灰白色を呈し、紋様は稜が無くなる。笵傷での確認は出来ないが笵型の使用が進んだ事を物語っている。岡山市大内田廃寺出土のものと紋様が類似している。

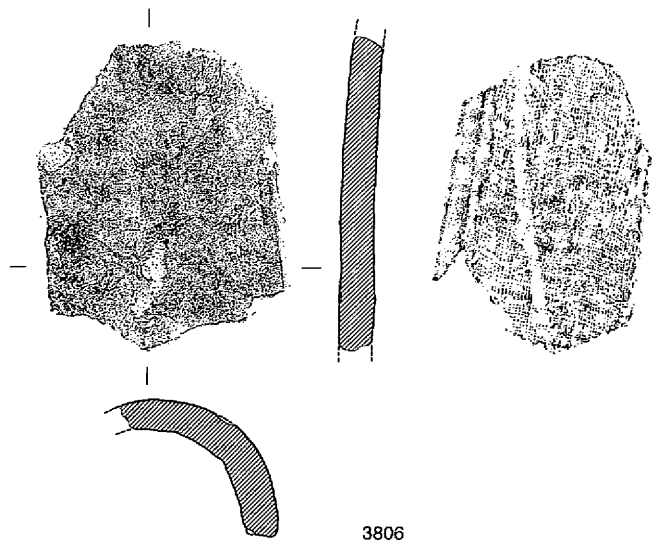


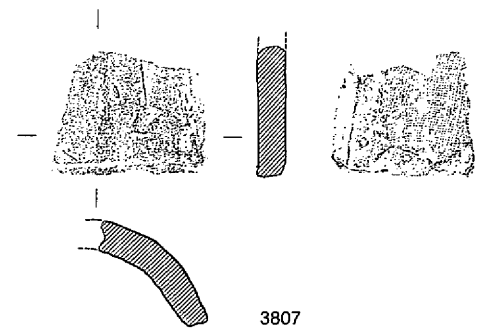
第1053図　河道　遺物（11）



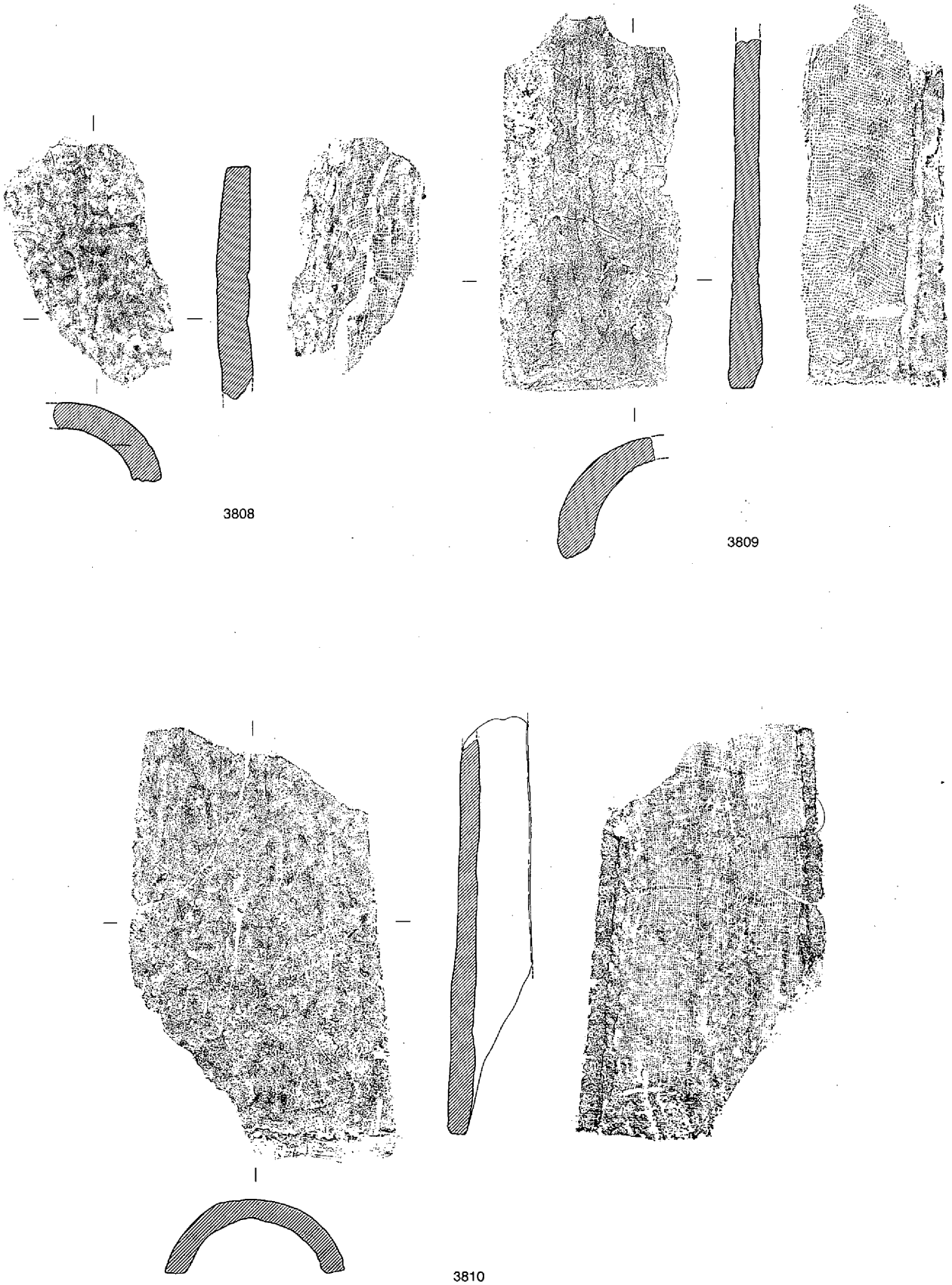




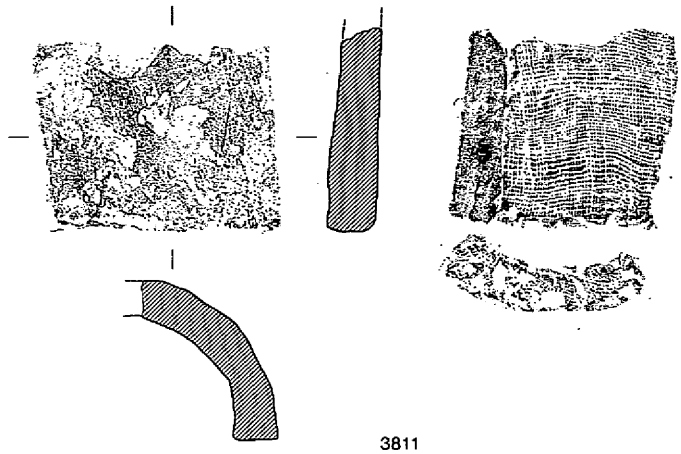




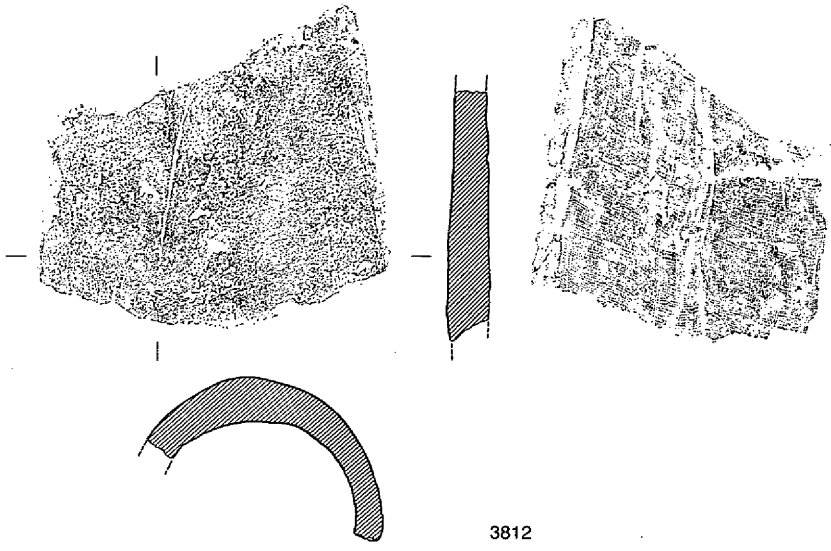
第1054図　河道　遺物（12）



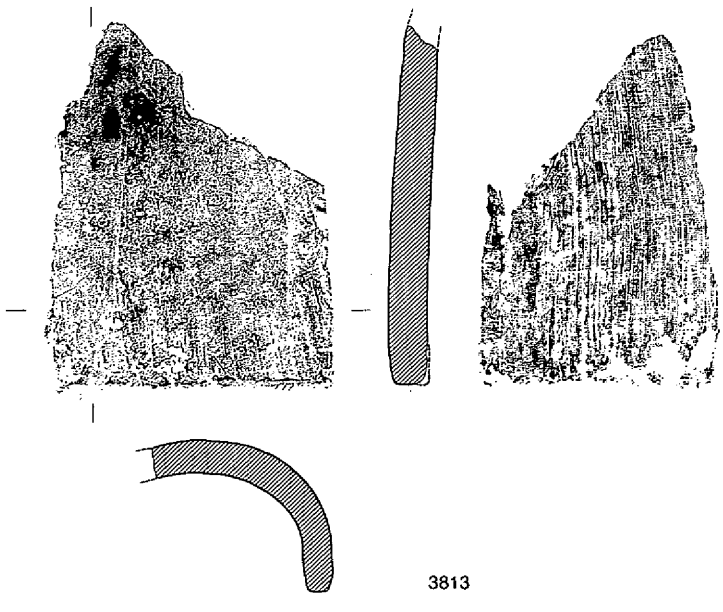
第1055図　河道　遺物（13）



3811



3812



3813

0　10cm

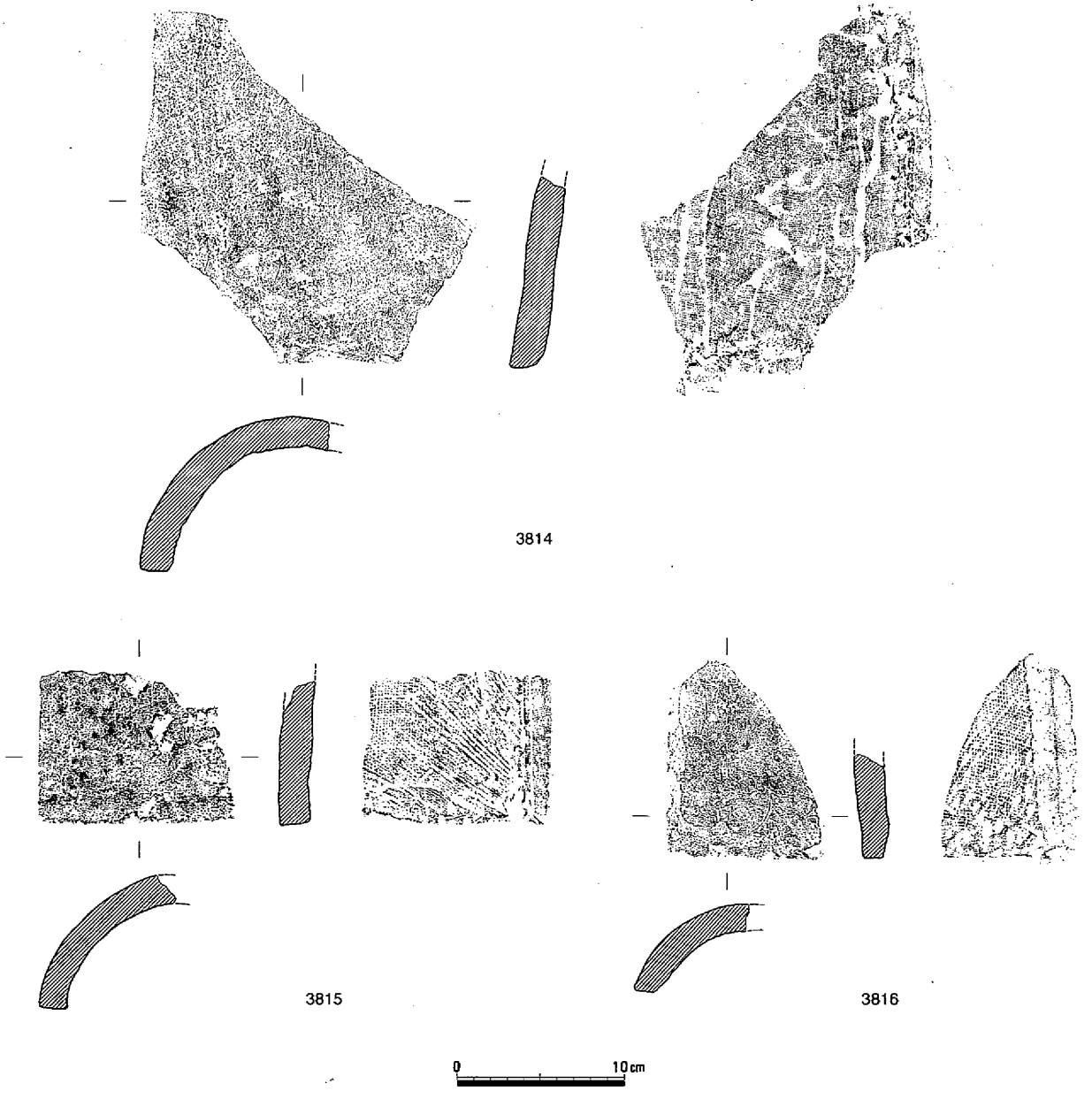
第1056図　河道　遺物（14）

古代軒平瓦

3793・3794は3788～3792同様、備前・備中に特有の紋様の均整唐草紋軒平瓦である。平城京軒平瓦6663型式の紋様の流れをくむもので、同紋のものが平安宮からも出土している。

3795～3798は外区に圏線、内区に均整唐草紋を配した軒平瓦である。平城京軒平瓦6663型式の陰陽を反転させたような紋様であるが、中心飾りから見て左右が対称にならないなど表現の粗雑さが見受けられる。断面は無顎である。平瓦部凹面にはやや粗めの布目痕が残り、凸面には縦位～斜位の縄叩きが施される。両面とも瓦当部に近い部分は横位のヘラ削りが行われるのが通常のようであるが、3797のように全く調整を施さないものも含まれる。焼成は須恵質で、胎土は１～３㎜の大きさの砂粒が多く含まれている。完形品である3795は最大幅27.6cm、長さ36.8cmを測る。製作技法が異なるものの、大内田廃寺で出土しているものと同笵である。平安時代。

3799は、彫りの浅い唐草紋様の軒平瓦である。直線顎で厚みが4.5cmある。この紋様はこの１点の

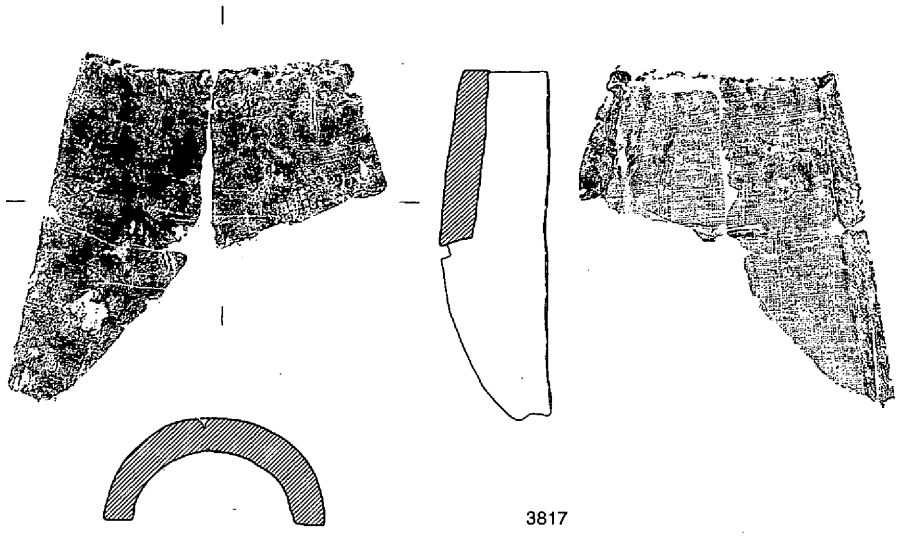


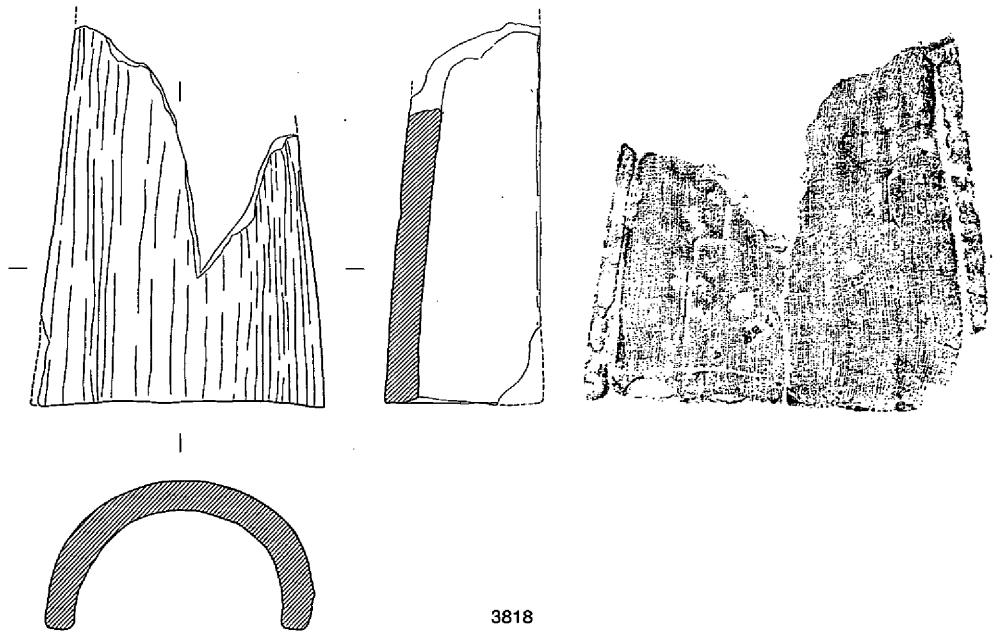
第1057図　河道　遺物（15）

みの出土である。平安時代のものであろうか。

古代丸瓦

3800～3818は行基式丸瓦である。全体的にはサイズの大小で区別があるような印象を受けるが、形にならない破片が多く、ここでは厳密に判別する事はせず一括して掲載している。焼成は多くが土師質で、須恵質焼成のものも若干含まれているが、胎土、調整等に大きな差異は認められない。3800はほぼ完形品で長さ36.3cm、最大幅15.7cm、厚さ1.8cmを測る。凸面には縄叩き痕、凹面には布目痕や布の吊り紐痕跡が残る。側面、端面はナデによって仕上げられている。凹面側の広端縁は面取りが行われる。この大きさのものが小型の部類に入ると考えられ、凸面の縄叩きがナデやヘラ削りによって消されていない事を除けば調整もおおむね同じ傾向がある。それに対して3802は残存長41.1cm、最大幅





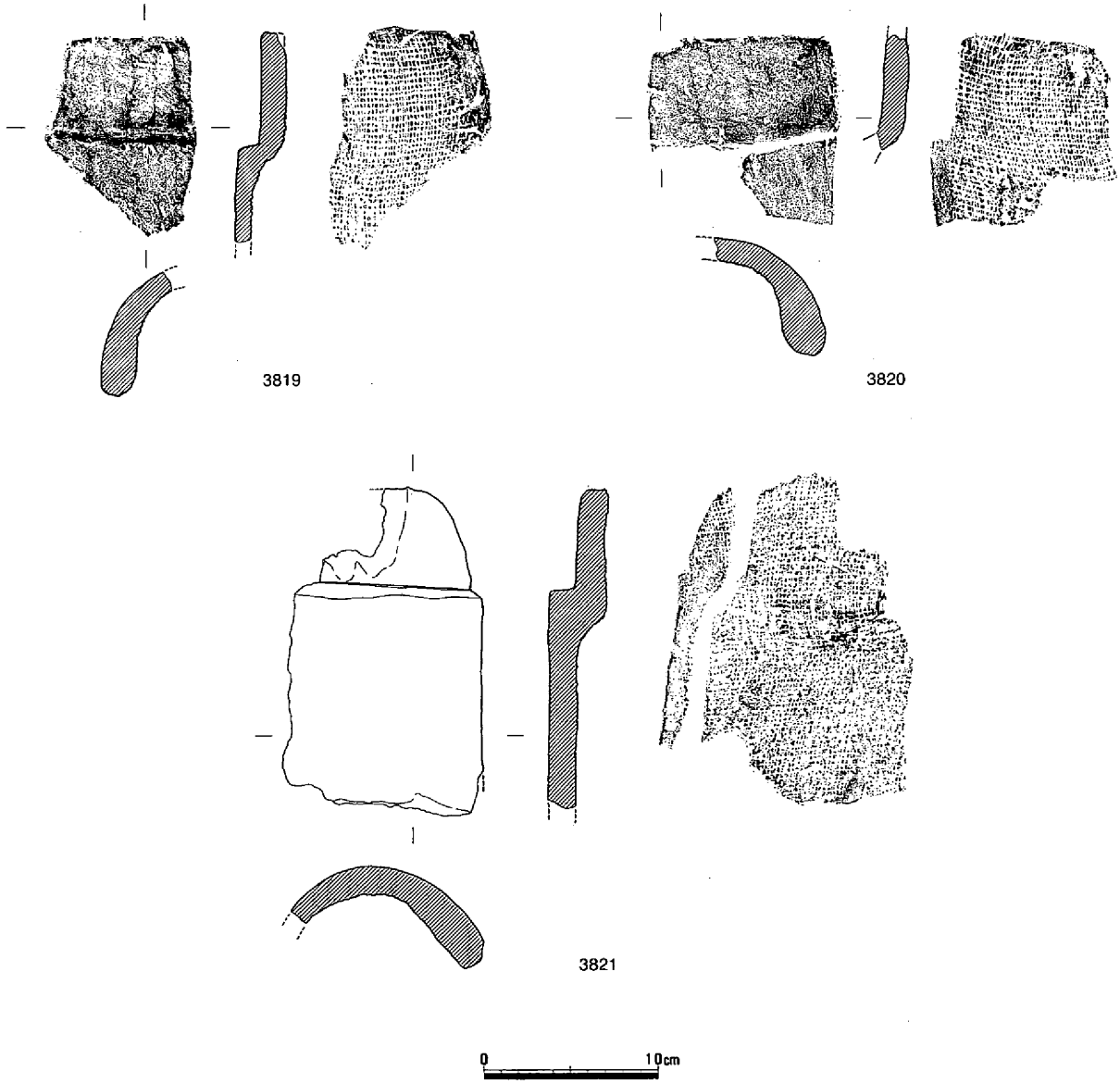
第1058図　河道　遺物（16）

19.3cmを測る、行基式丸瓦の中では大きめのサイズである。凸面叩きは縦方向のヘラ削りによって消され、側縁、広端縁は面取りが行われる。3811の広端面には凹面の布目が連続してみられる。3815・3816の凹面には粘土板糸切り痕が残る。

3819～3821は玉縁式丸瓦である。凸面には縦方向のヘラ削りが施され、凹面から側面にかけては粗めの布目痕が残る。湾曲が比較的緩やかで、厚みが均一でない事からも、凸型台を使用した一枚作りによるものと考えて良いだろう。

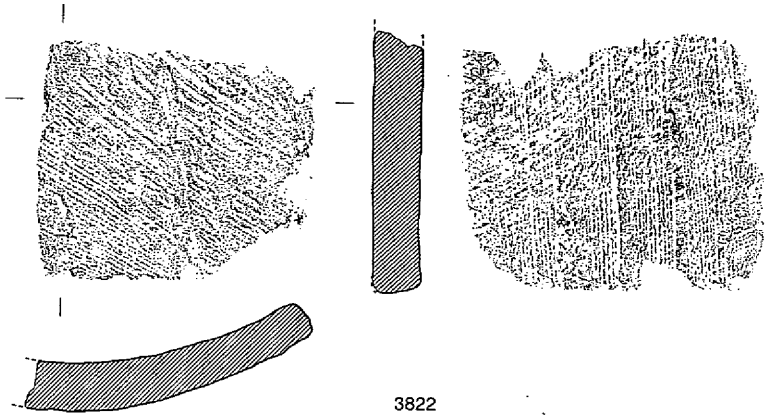
古代平瓦

3822～3824は凸面に縦方向の縄叩きを整然と施し、凹面には布目が残るが、3822・3824のように粘土板糸切り痕が明瞭にみられるものもある。端面・側面には丁寧なヘラキリがなされ、凹面と側面は鋭角をなす。焼成は良好である。これらは津寺遺跡の奈良時代の方形区画溝から出土している一連の瓦と同様の特徴を持つ事から、奈良時代のものと考えて良かろう。

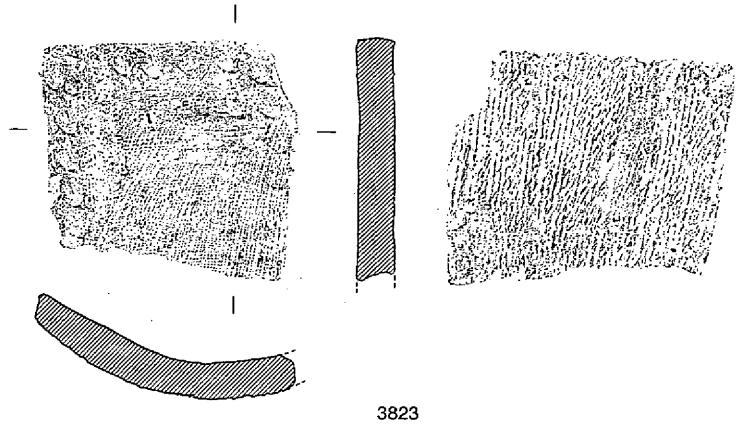


第1059図　河道　遺物（17）

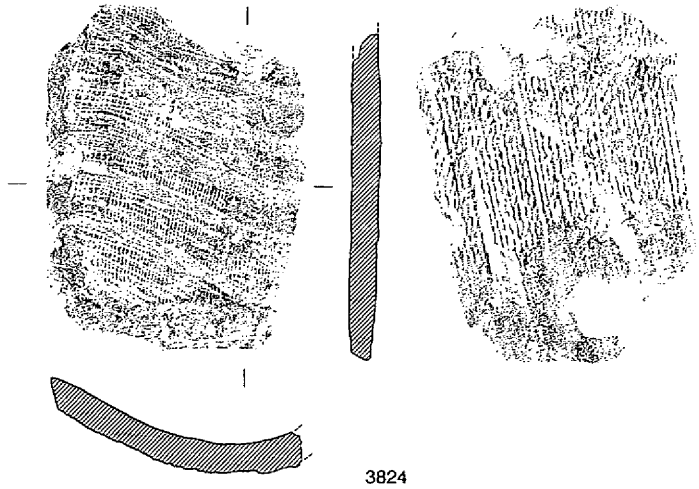
平安時代の平瓦はサイズの大小によって調整がおおよそ決まっている。3825～3834は小型の平瓦である。凸面に左にわずかに傾く縦位の縄叩き、凹面に布目痕が残る平瓦である。端面・側面はナデによって平滑に仕上げられている。焼成は土師質であるが、焼成環境の違いからか色調が灰白色のものと黒色のものがある。厚みは1.5～２㎝の中に収まる薄手の作りのものがほとんどであり、長さも



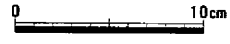
3822



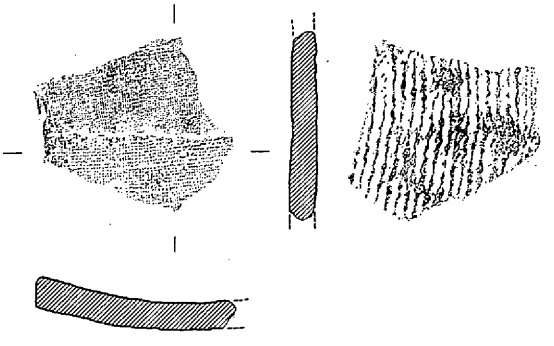
3823



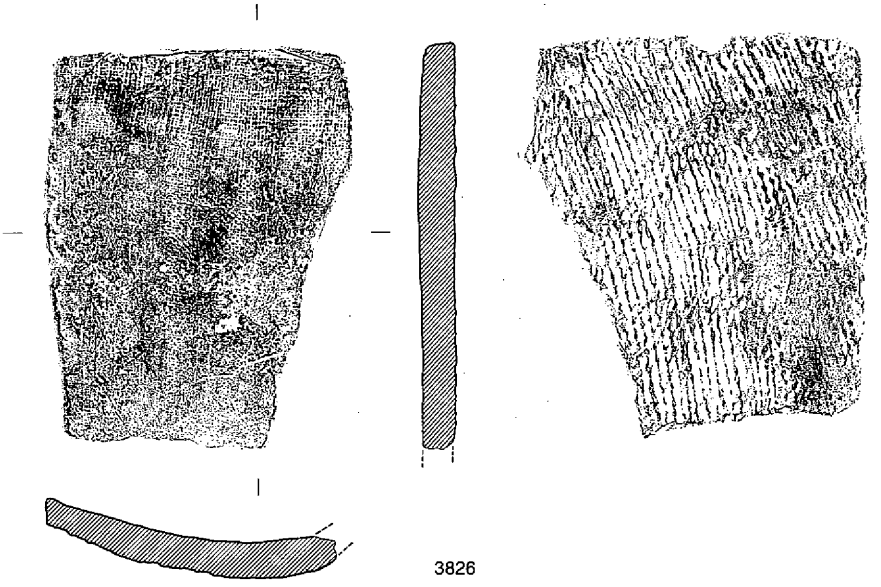
3824



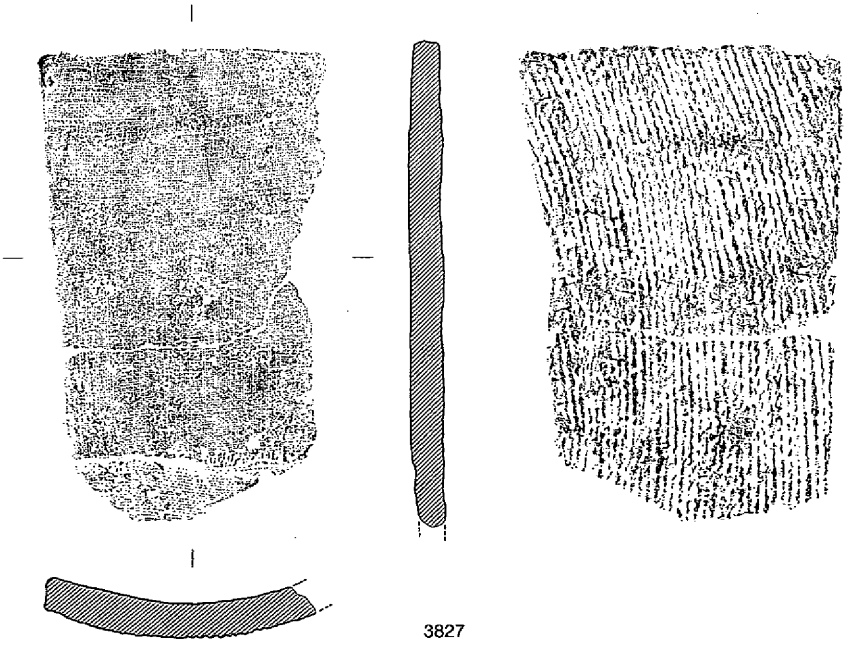
第1060図　河道　遺物（18）



3825



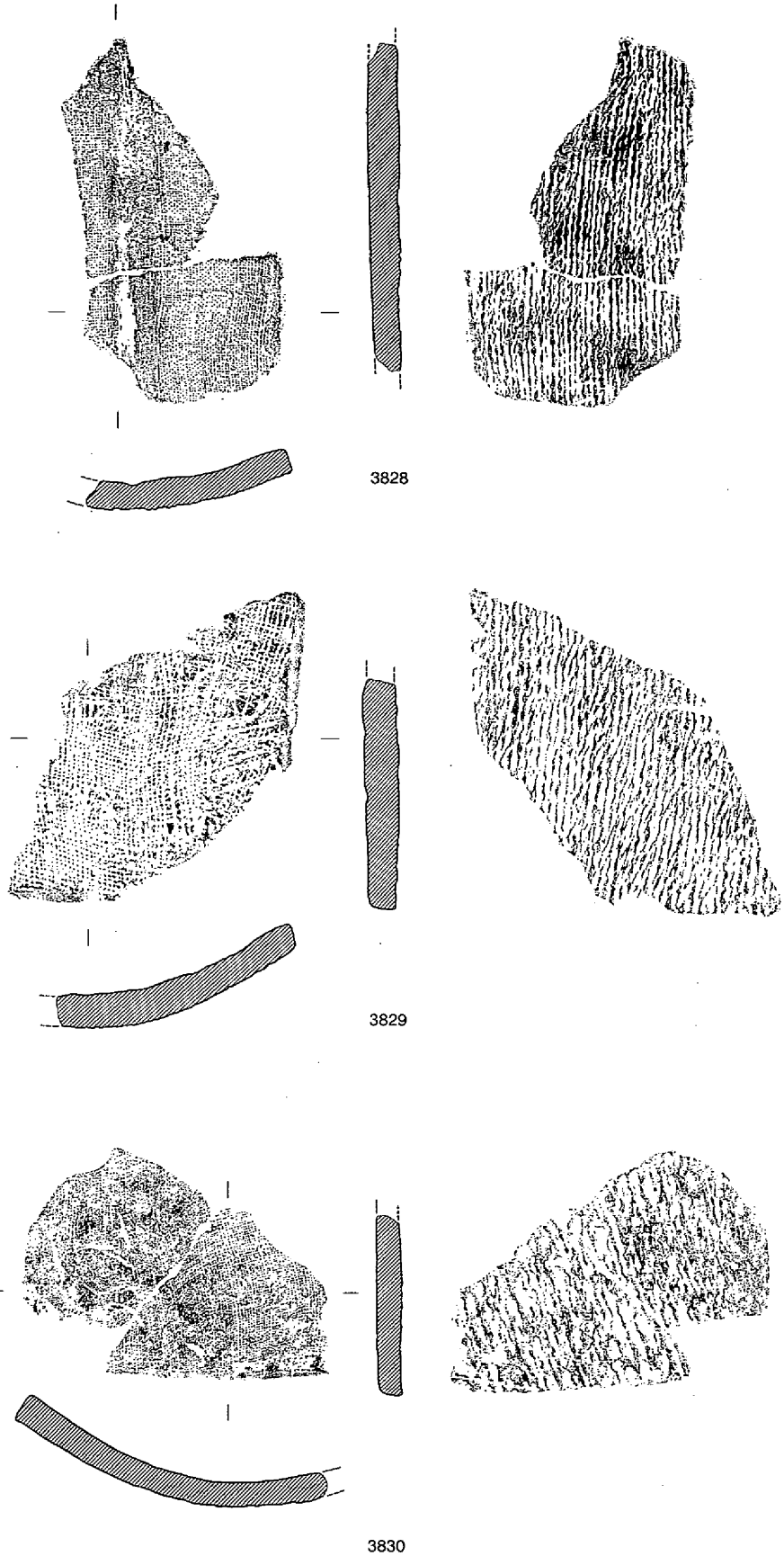
3826



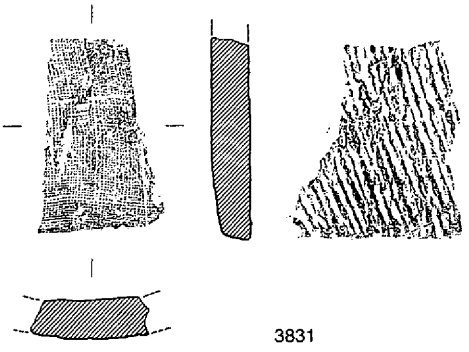
3827

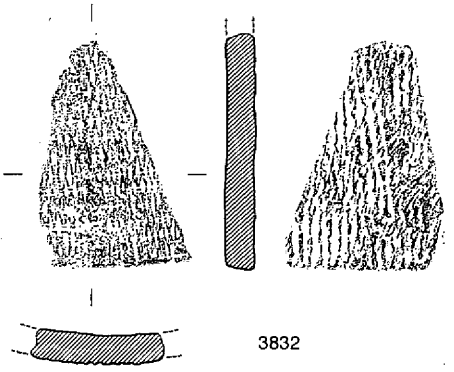
0　10cm

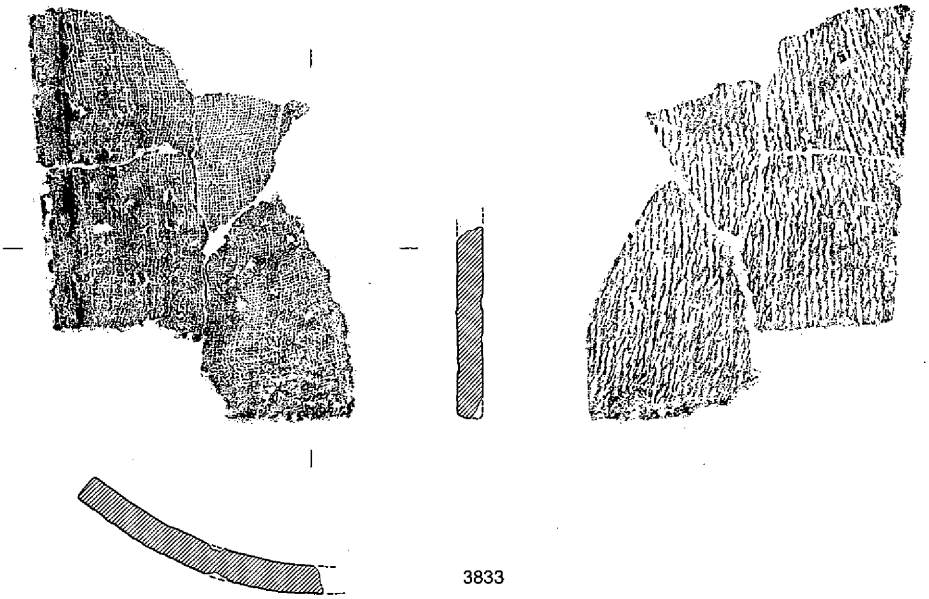
第1061図　河道　遺物（19）

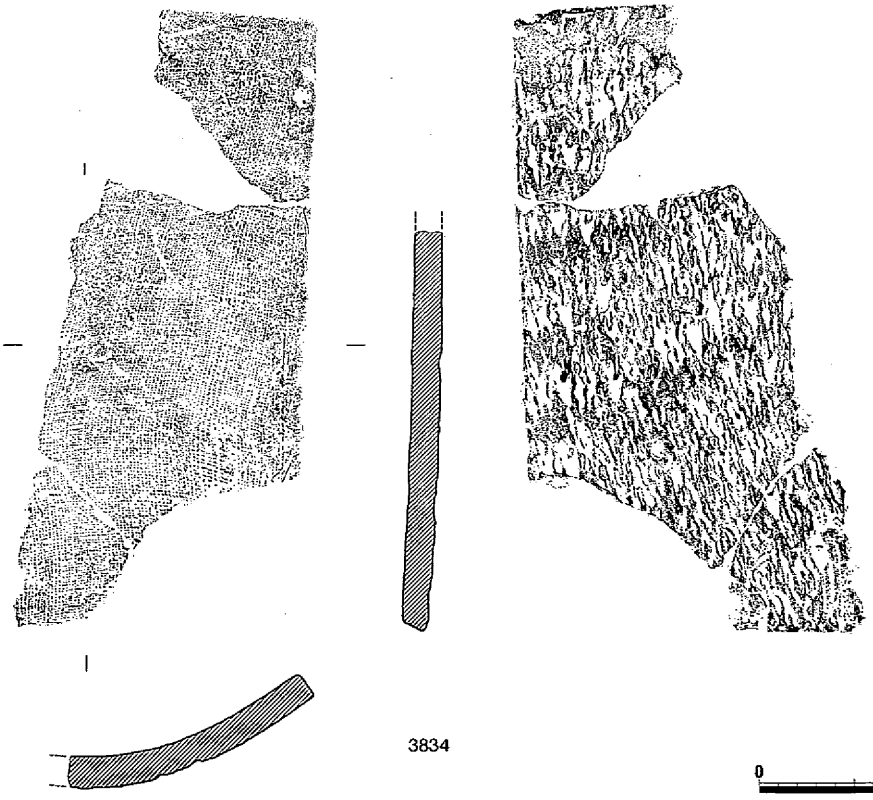


第1062図　河道　遺物（20）


3831

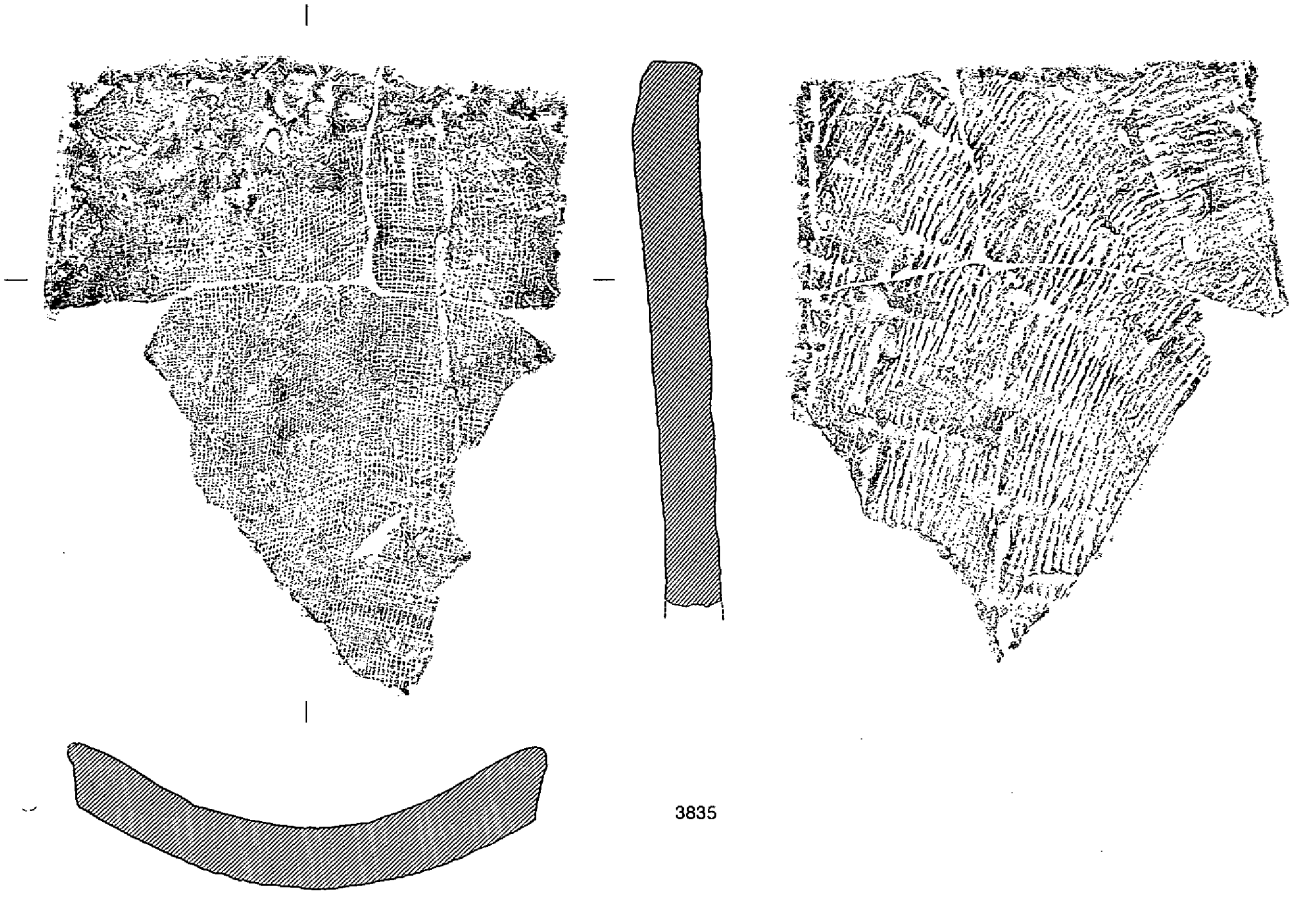

3832

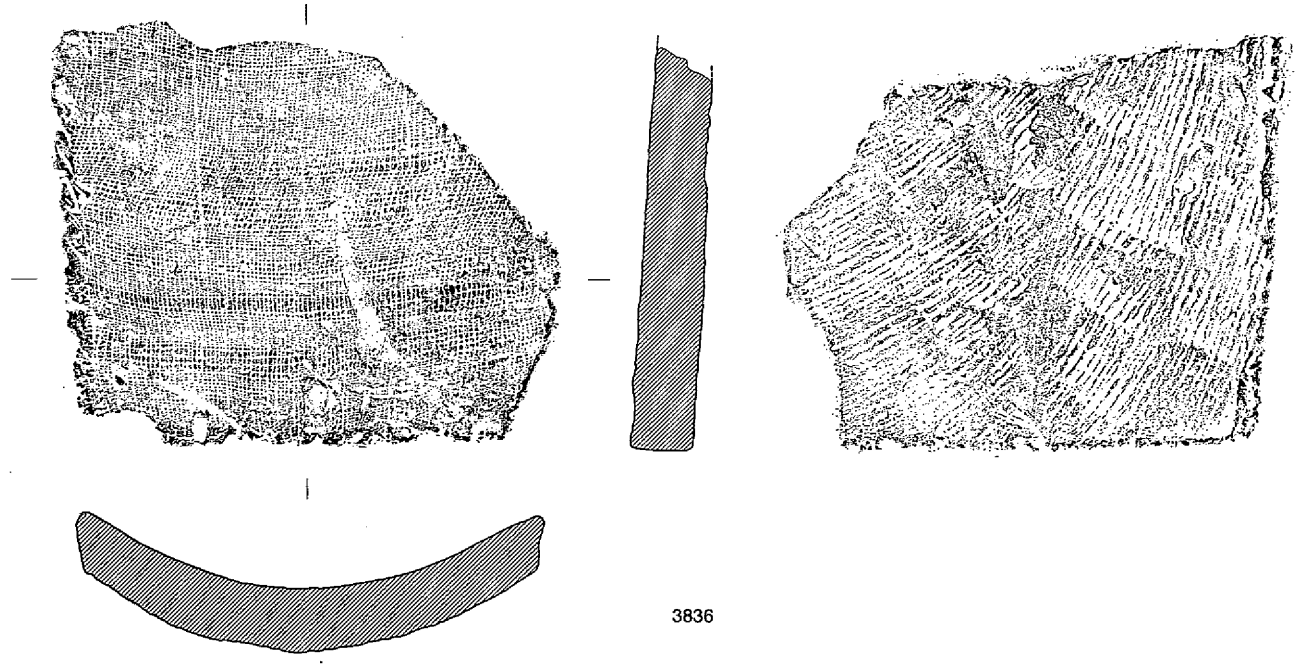

3833


3834

0　10cm

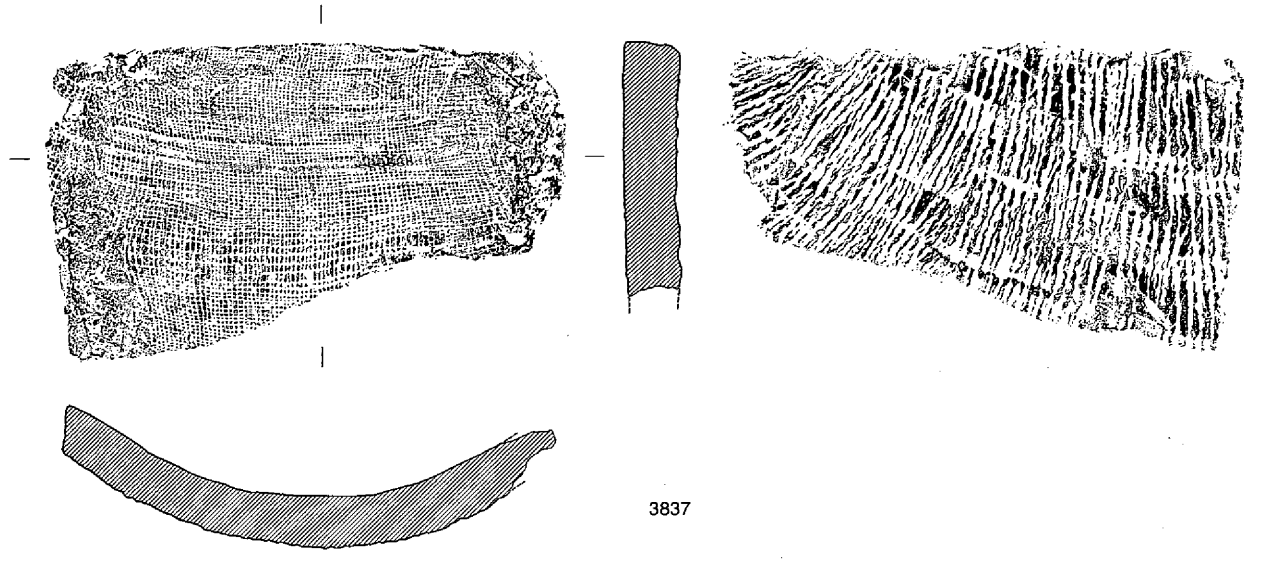
第1063図　河道　遺物（21）



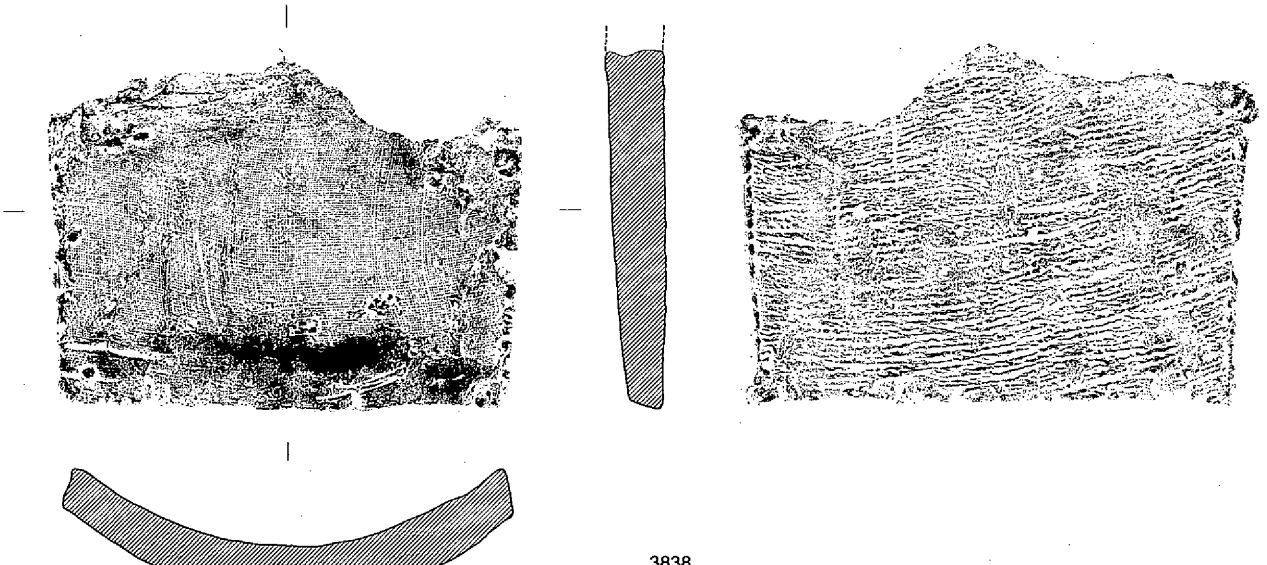


0　10cm

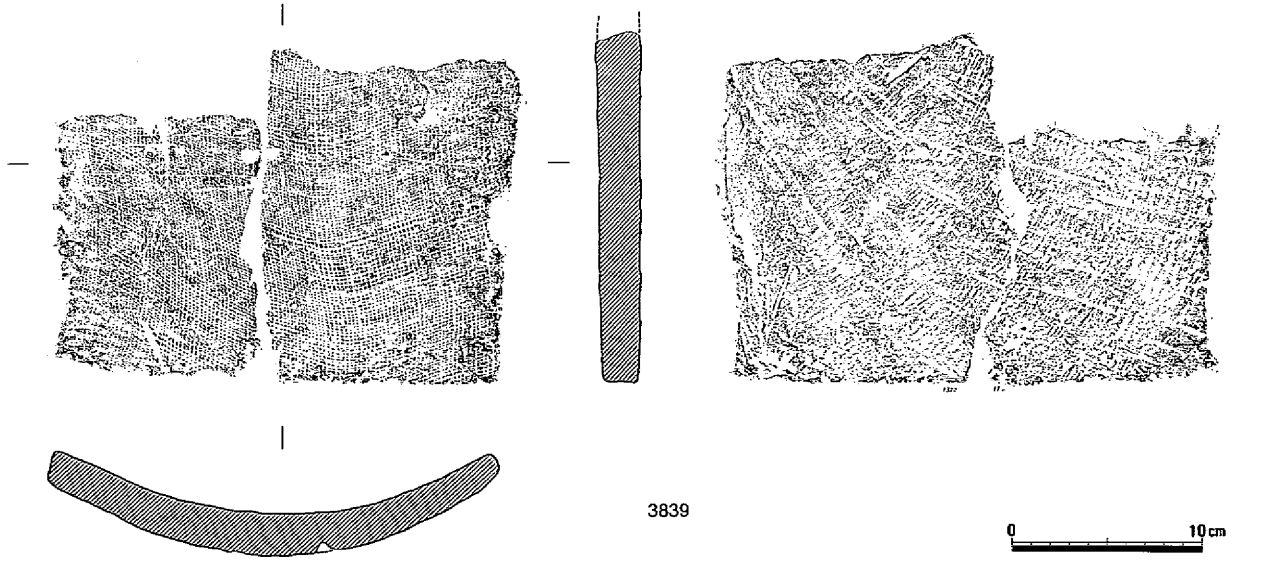
第1064図　河道　遺物（22）



3837



3838

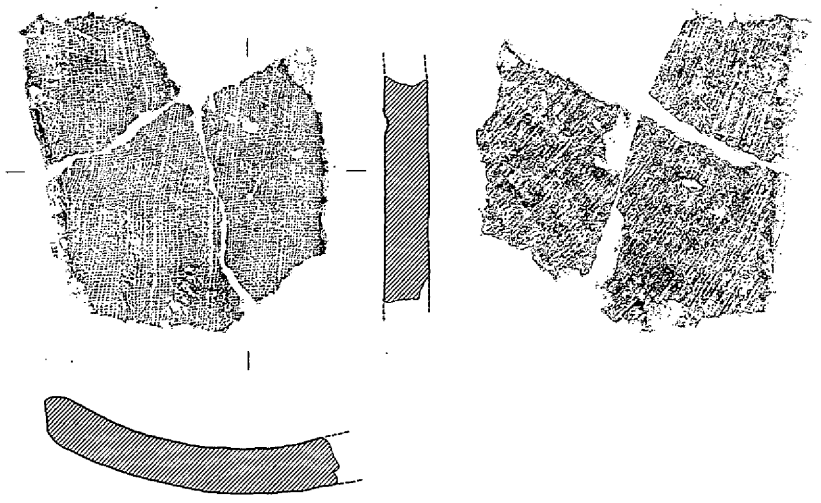


3839

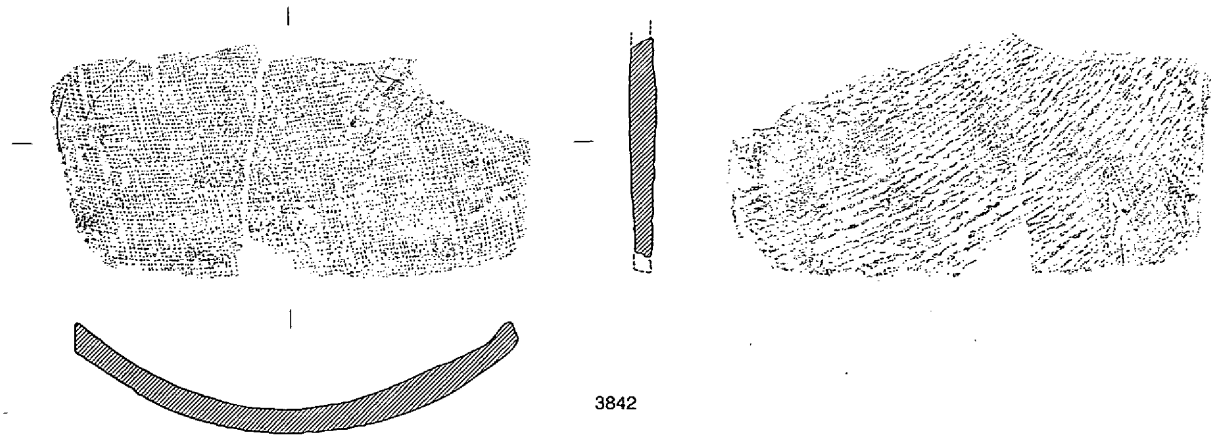
0　10cm

第1065図　河道　遺物（23）

3840



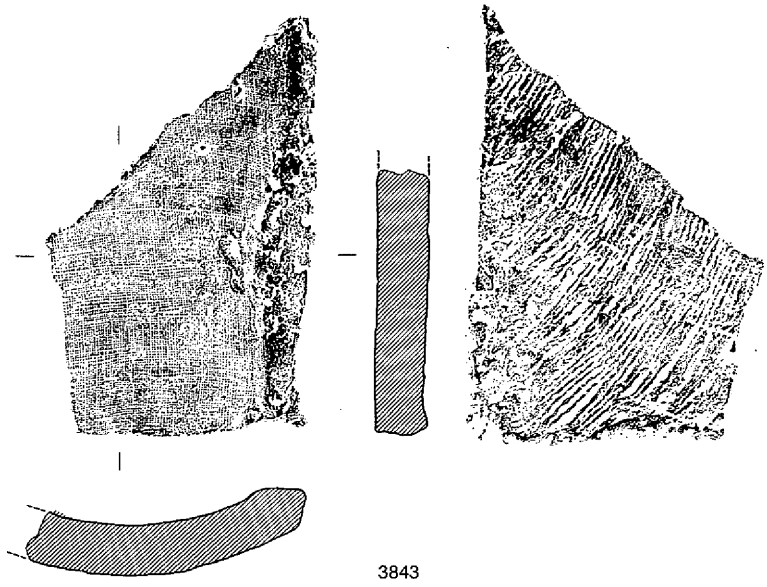
3841

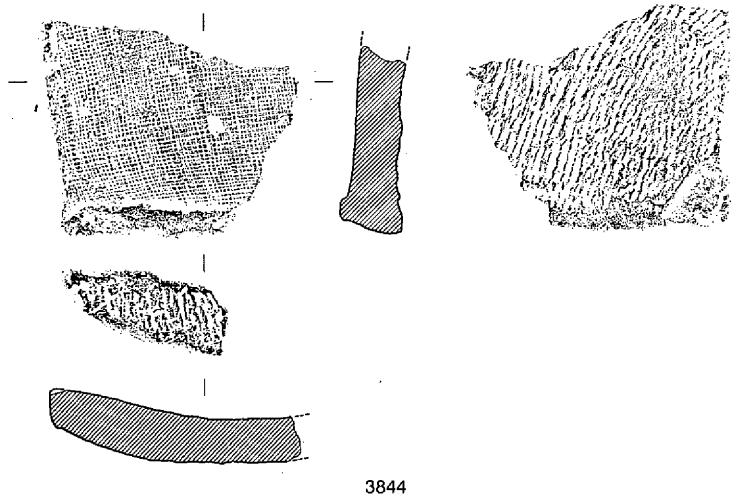


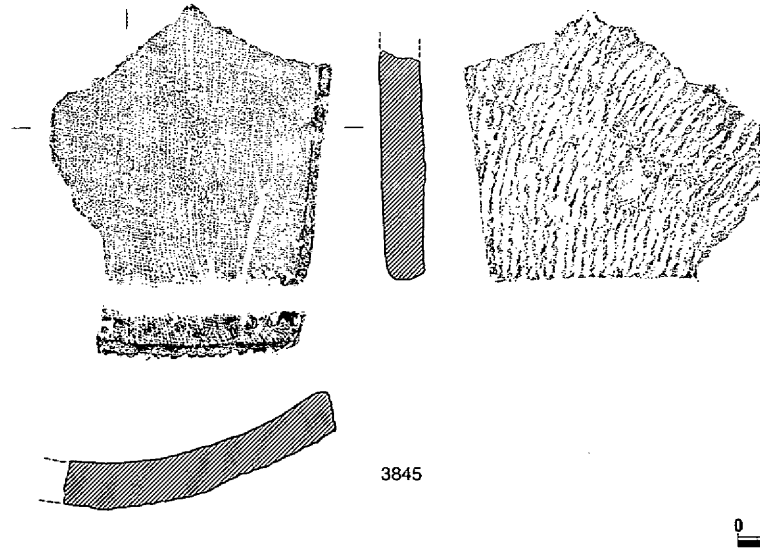
3842

0　10cm

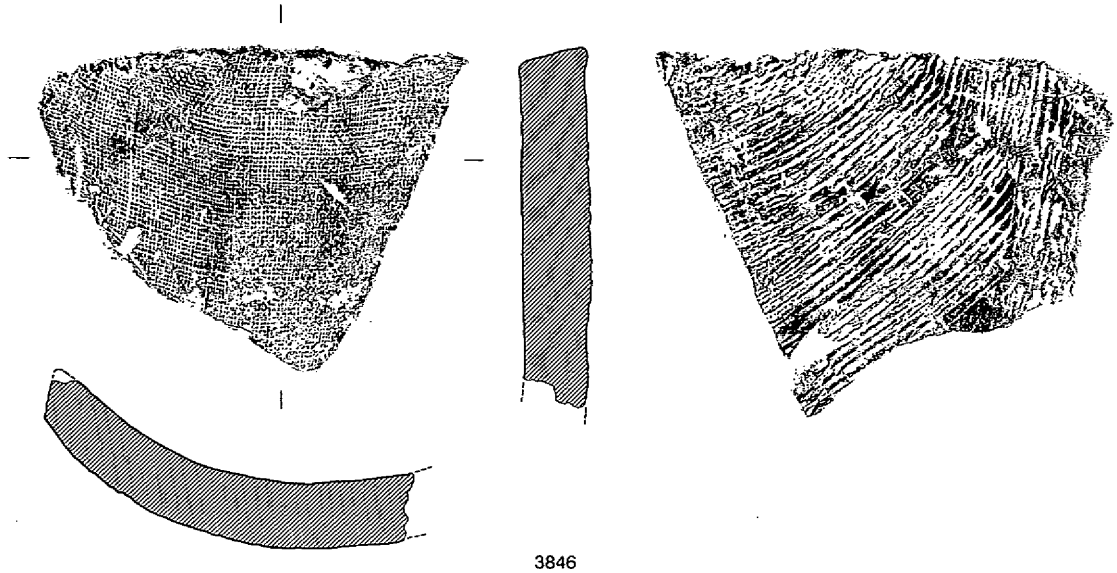
第1066図　河道　遺物（24）



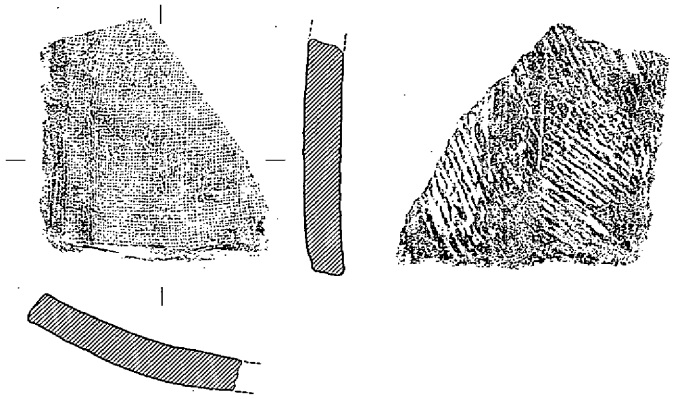




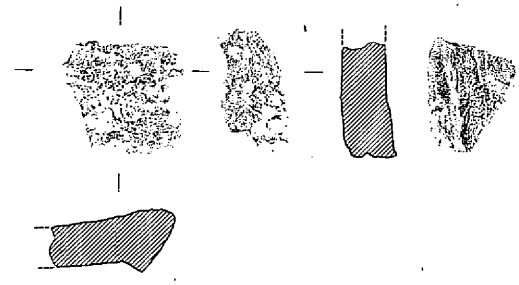
第1067図　河道　遺物（25）



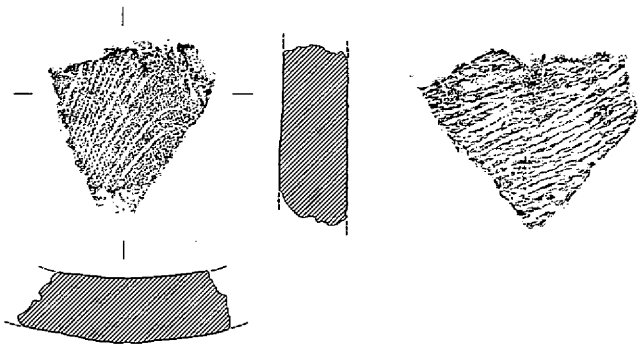
3846



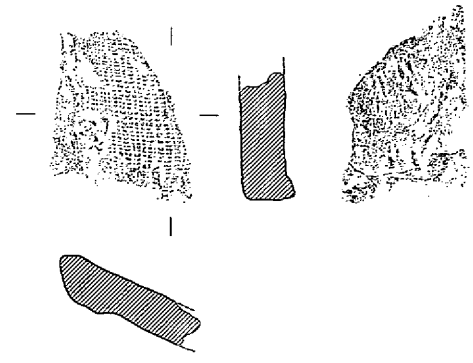
3847



3848



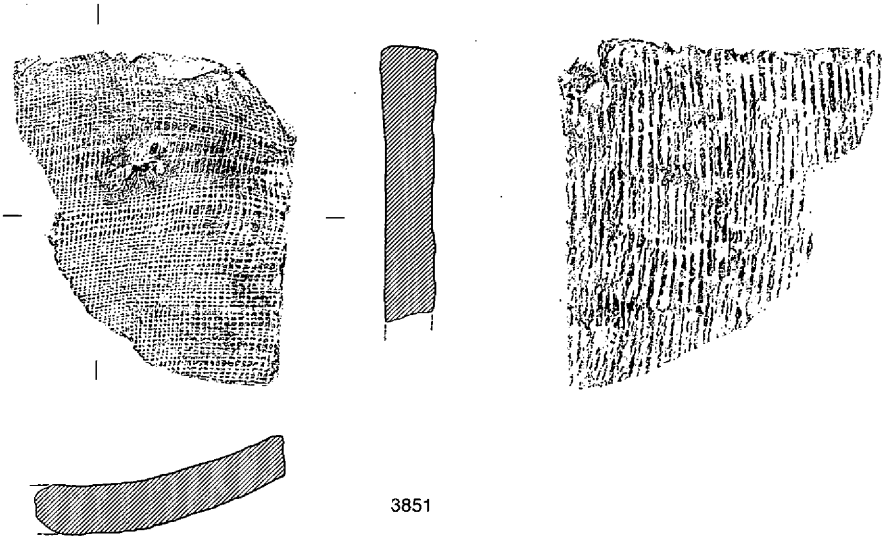
3849

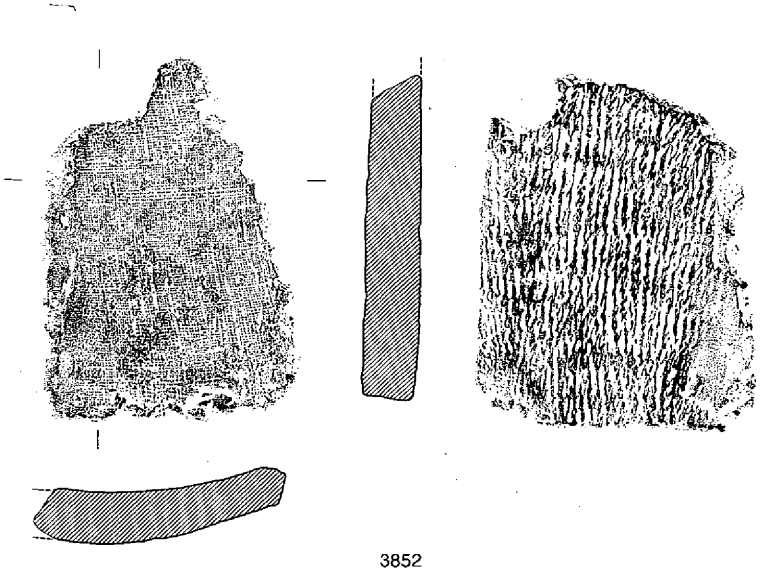


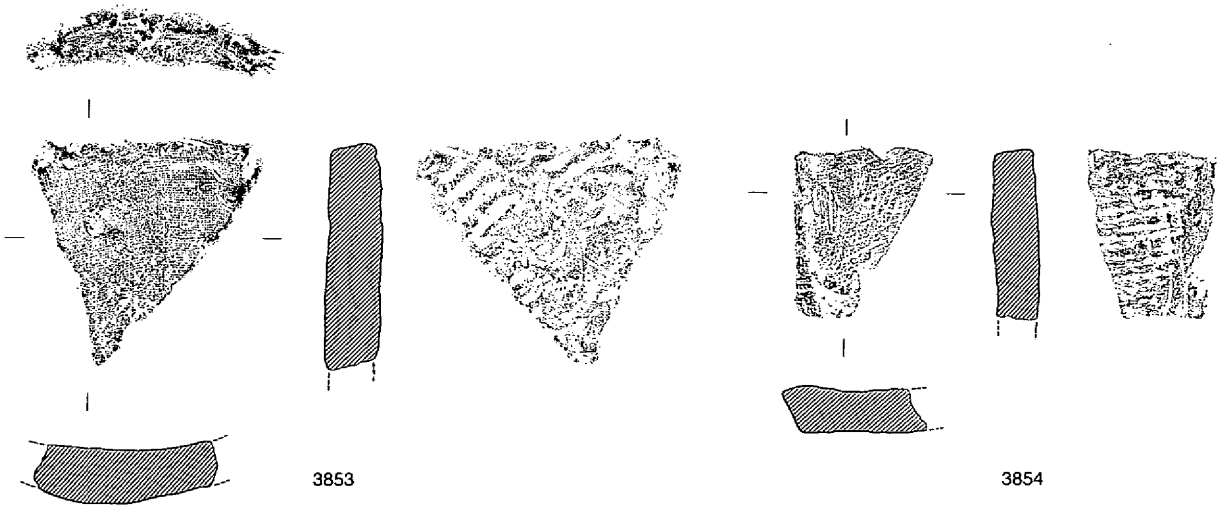
3850

0　10cm

第1068図　河道　遺物（26）





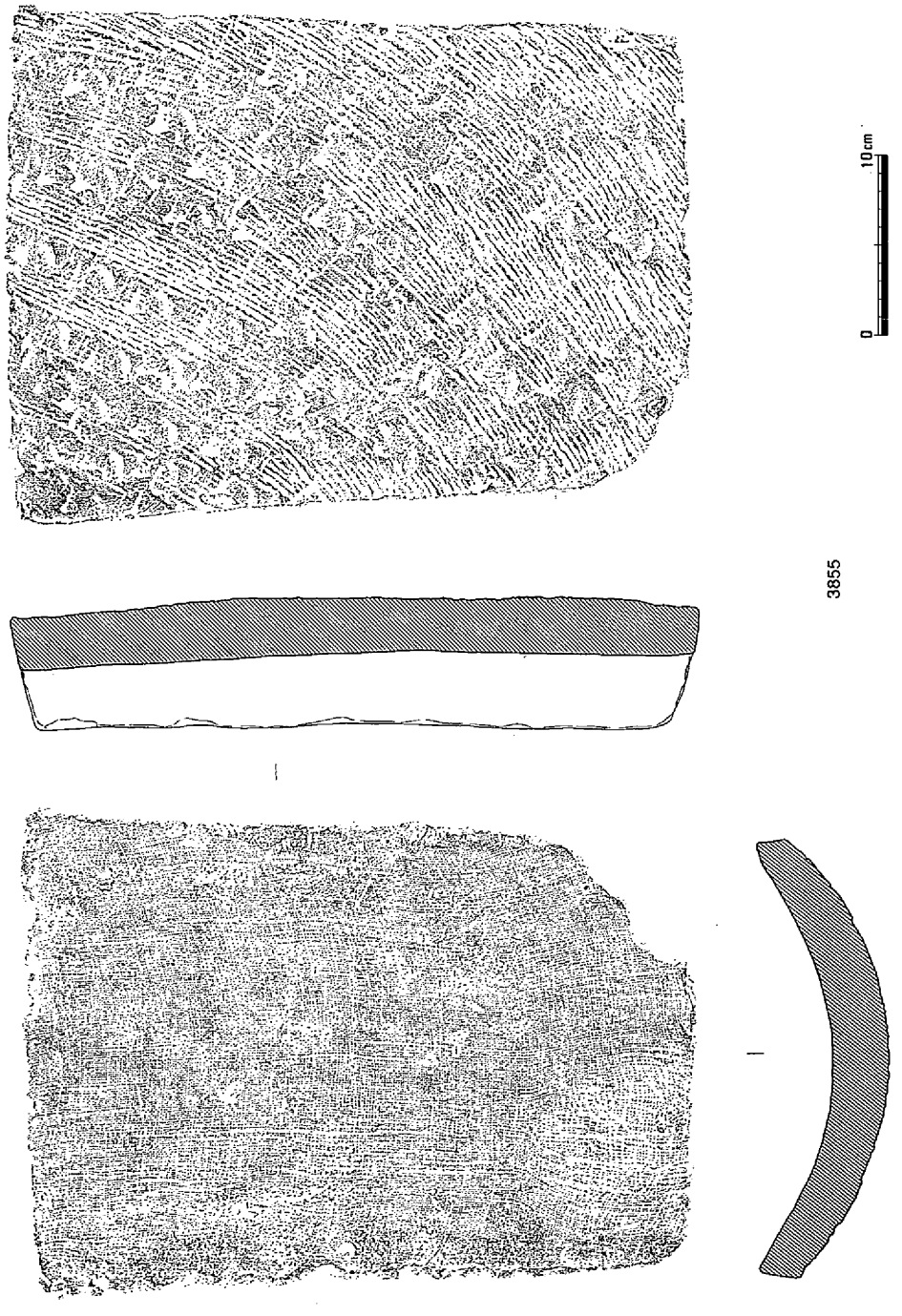


第1069図　河道　遺物（27）

3834の約32cmを大きく前後する値でないと思われる。広端縁と狭端縁の長さの差はそれほど見られない。3825・3827は2種の布をつなぎ合わせたようで布目痕にそれが現れている。

3825～3834に対し、3835～3861・3863は大型の平瓦になる。凸面はある隅からの放射状の縄叩きと、一部縦位の補足的な縄目叩きを行い、凹面には布目痕が残る。端面・側面はヘラキリが行われ、凹面の側縁はヘラ削りやナデによって面取りが行われるものが多い。凹型台や凸型台を使用した痕跡を留めるものもある。

3835～3854は大型の平瓦である。3835・3836・3848などでは凸面側縁が盛り上がっており、凹型台

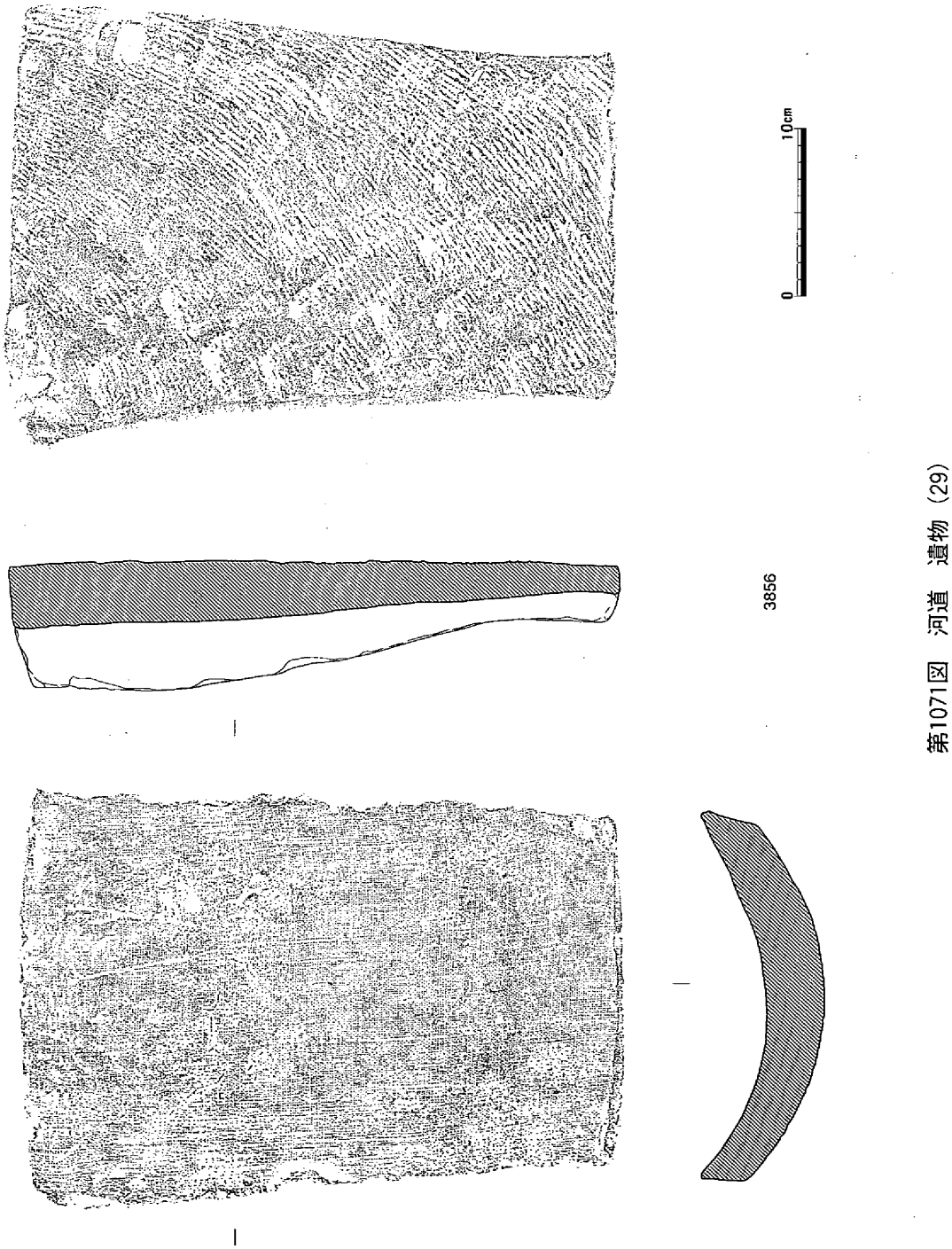


第1070図　河道　遺物（28）

を使用したものと思われる。3839・3849は凹面に糸切り痕跡が残る。3844の端面は縄目叩きが行われ、3845には布目が残っている。3853は隅切り瓦の可能性がある。

3855～3861・3863は焼成が須恵質のものである。3855は完形で、凹型台を使用した可能性がある。長さは38cm、厚さは3～3.4cmを測る。3856もほぼ完形で、長さは36cm、厚さは広端で3.8cm、狭端で1.7cmを測る。3857も凹型台を使用した可能性がある。

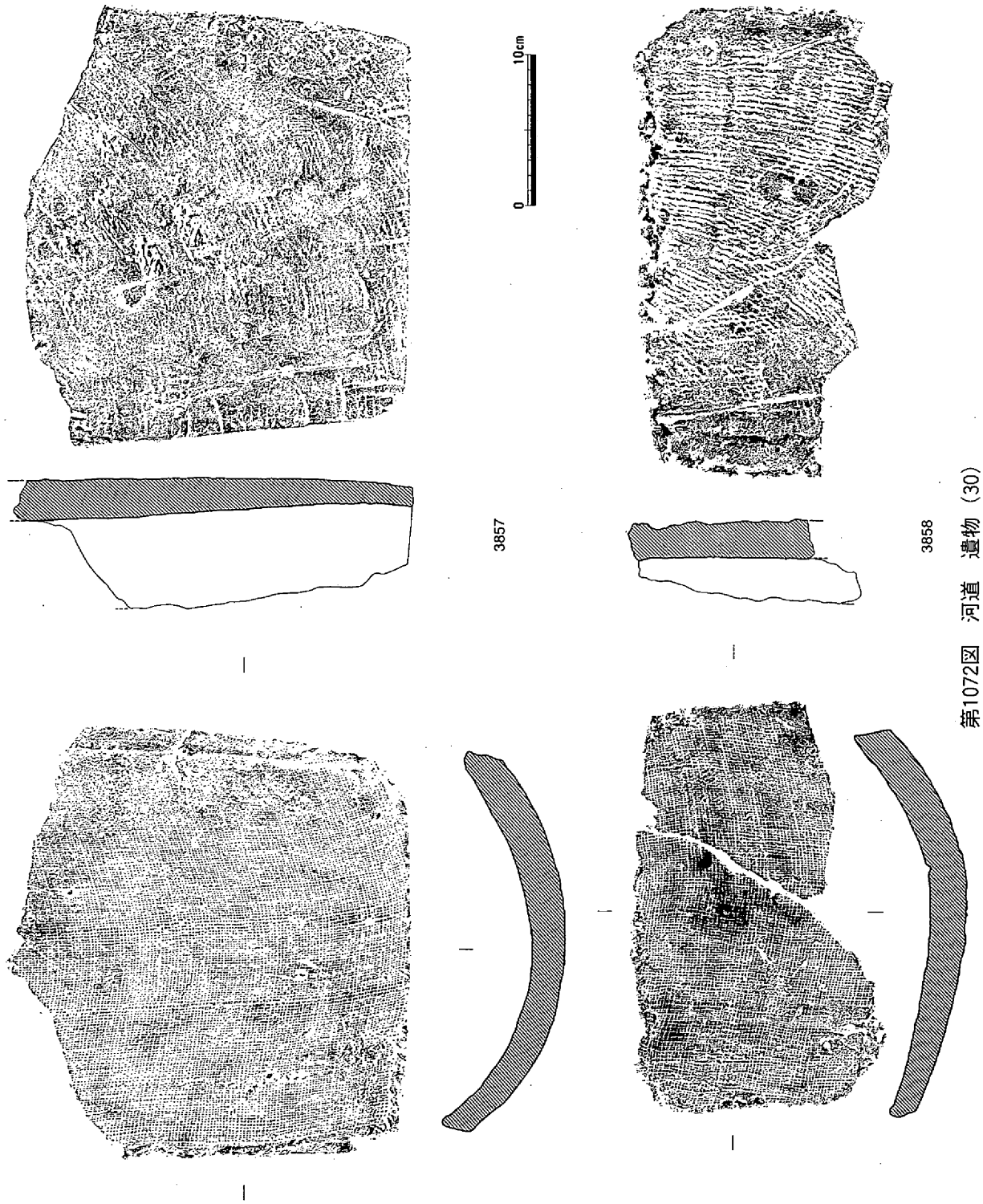
3862は器種は不明で、端面と側面でヘラ削りを行っている。焼成などから奈良時代の道具瓦の可能性があるが、詳細は不明である。3864は凸面に縦位のミガキが行われている。



第1071図　河道　遺物（29）

中世軒丸瓦

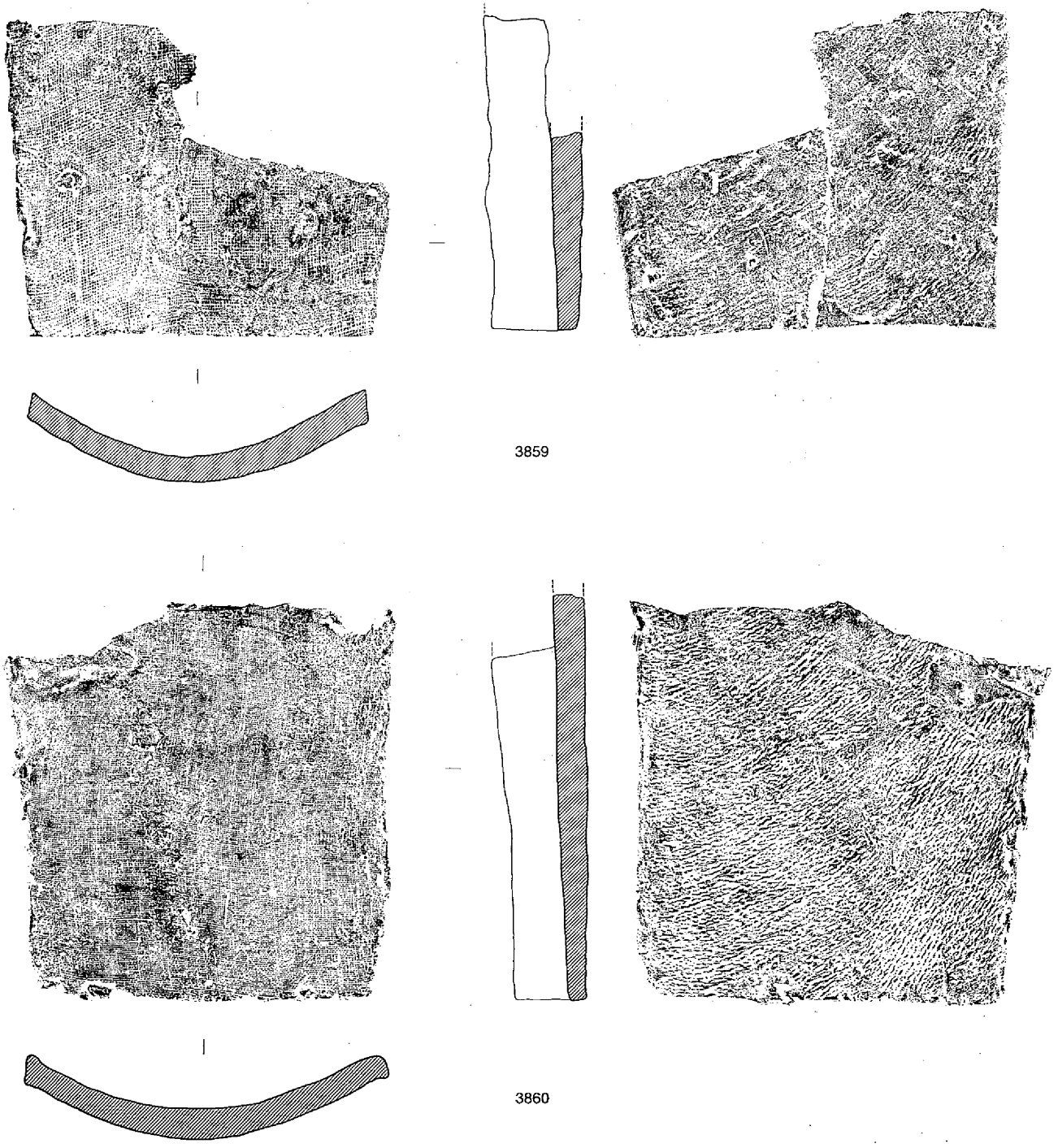
3865～3868は右巻き三つ巴紋と15個の珠紋で構成された軒丸瓦である。紋様の隆起は大きく、断面は半円形をなす。巴紋は頭部の先端が尖りながら中心に向かってわずかに巻き込み、それぞれが接している。尻部は互いに密着し、あたかも圏線状をなす。珠紋はやや大きめである。瓦当径は3866では13.5cmを測るが、3865・3867のように歪な形になるものもある。中世軒丸瓦の中では最も多く出土し



第1072図　河道　遺物（30）

ている。

3869・3870は左巻き三つ巴紋と16個の珠紋で構成された軒丸瓦である。3865～3868に比べれば紋様の隆起はそれほど大きくなく、紋様断面も三角形になる。巴紋の尻部は互いに密着し圏線となっている。瓦当径は約14cmである。須恵質焼成である。



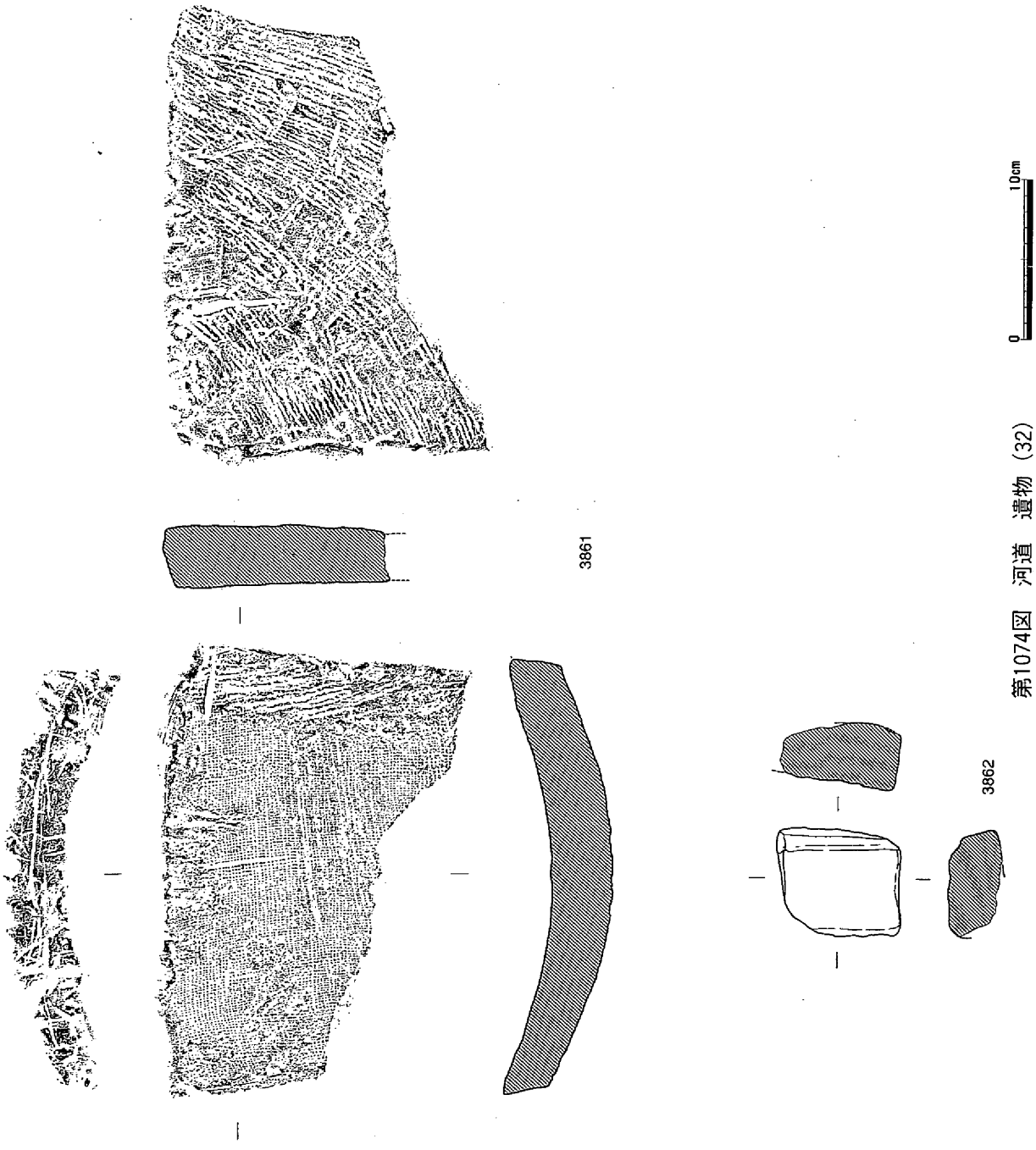
第1073図　河道　遺物（31）

3871は右巻きの巴紋軒丸瓦の小片である。珠紋は密に配されている。欠損部を補う資料もない事から全容は明らかでない。

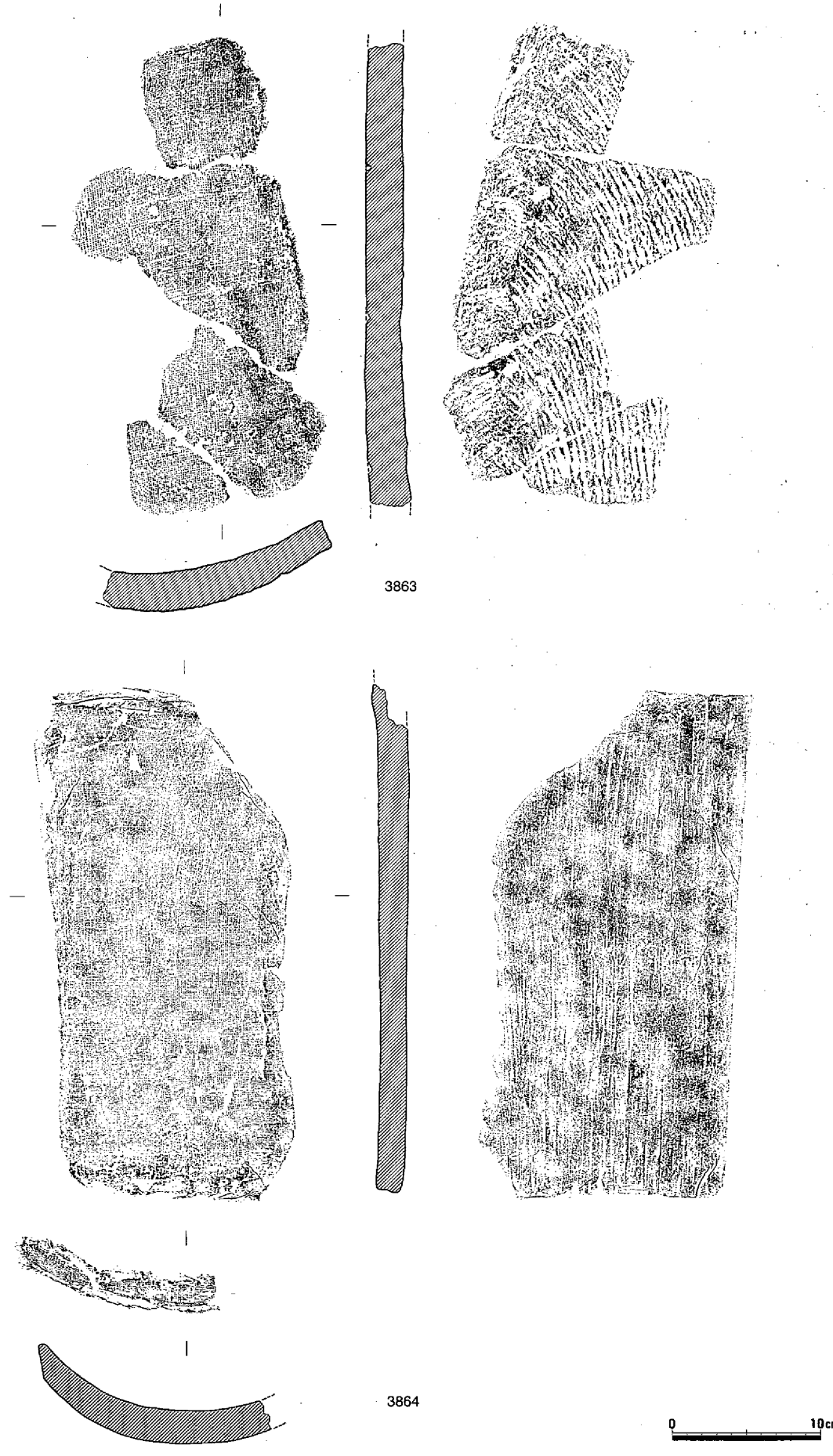
中世軒平瓦

3872は唐草紋軒平瓦である。平瓦部には釘穴が穿たれ、凸面にはすべり止めの凹凸がつけられる。中世でもやや新しいものになる可能性がある。

3873～3877も唐草紋軒平瓦である。顎の部分は貼り付けによって形成されていたため、3874～3877のように剥離してしまったものも多い。剥離面には格子の刻みがつけられている。



第1074図　河道　遺物（32）



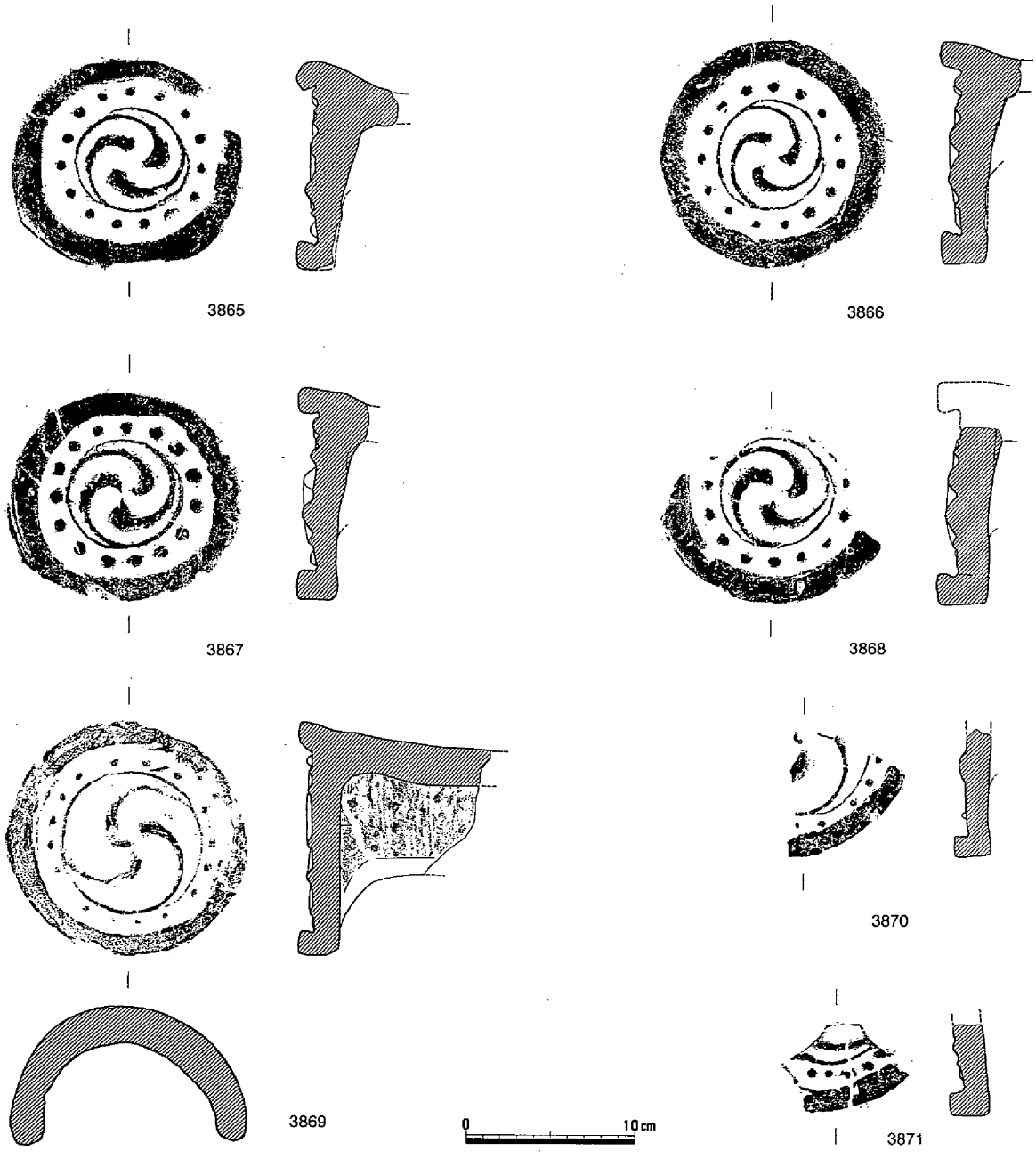
第1075図　河道　遺物（33）

3878は連珠紋軒平瓦で、一点のみの出土である。瓦当面は一部しか残存していない。

中世丸瓦

3879～3882は凸面に格子叩き、凹面に布目痕を残す玉縁式丸瓦である。側面と凹面のなす角度が鋭角であり、断面が緩やかな円弧を描いている事から、一枚作りによる可能性が高い。焼成がやや軟質で灰褐色の色調を呈するものと、硬く須恵質に焼かれ灰色を呈するものがあるが、粘土や製作技法上の相違は見られない。亀山焼によるものと思われる。

3883～3888は玉縁式丸瓦である。凸面は縦方向の縄叩きがナデによって消されている。凹面は布目が残り、側縁・端縁は広く面取りされる。硬く須恵質に焼かれているものがほとんどである。3886の



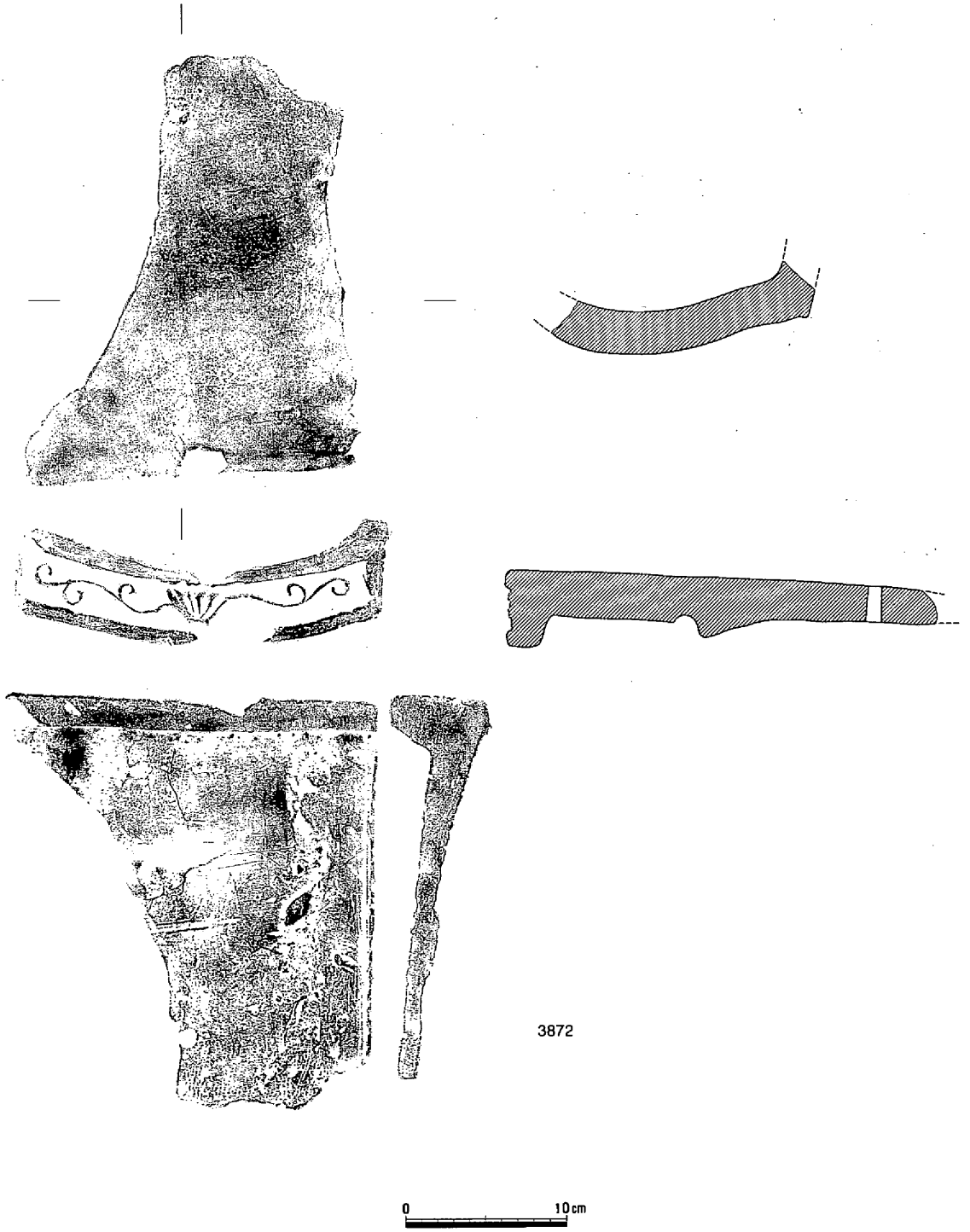
第1076図　河道　遺物（34）

ように玉縁に釘穴が穿たれたものもある。

中世平瓦

3889～3895は凸面に格子叩き、凹面に目の細かい布目痕を残す平瓦である。基本的には、3879～3882の丸瓦と特徴は一緒である。全長のわかるものはないが3895から幅がおよそ20cmであることがわかる。厚みはほとんどが２cm弱であるが、極端に薄い3889のようなものも見られる。

3896～3906は離れ砂を使用した平瓦である。凹凸面に粘土板糸切り痕が明瞭に残るものが多い。



第1077図　河道　遺物（35）

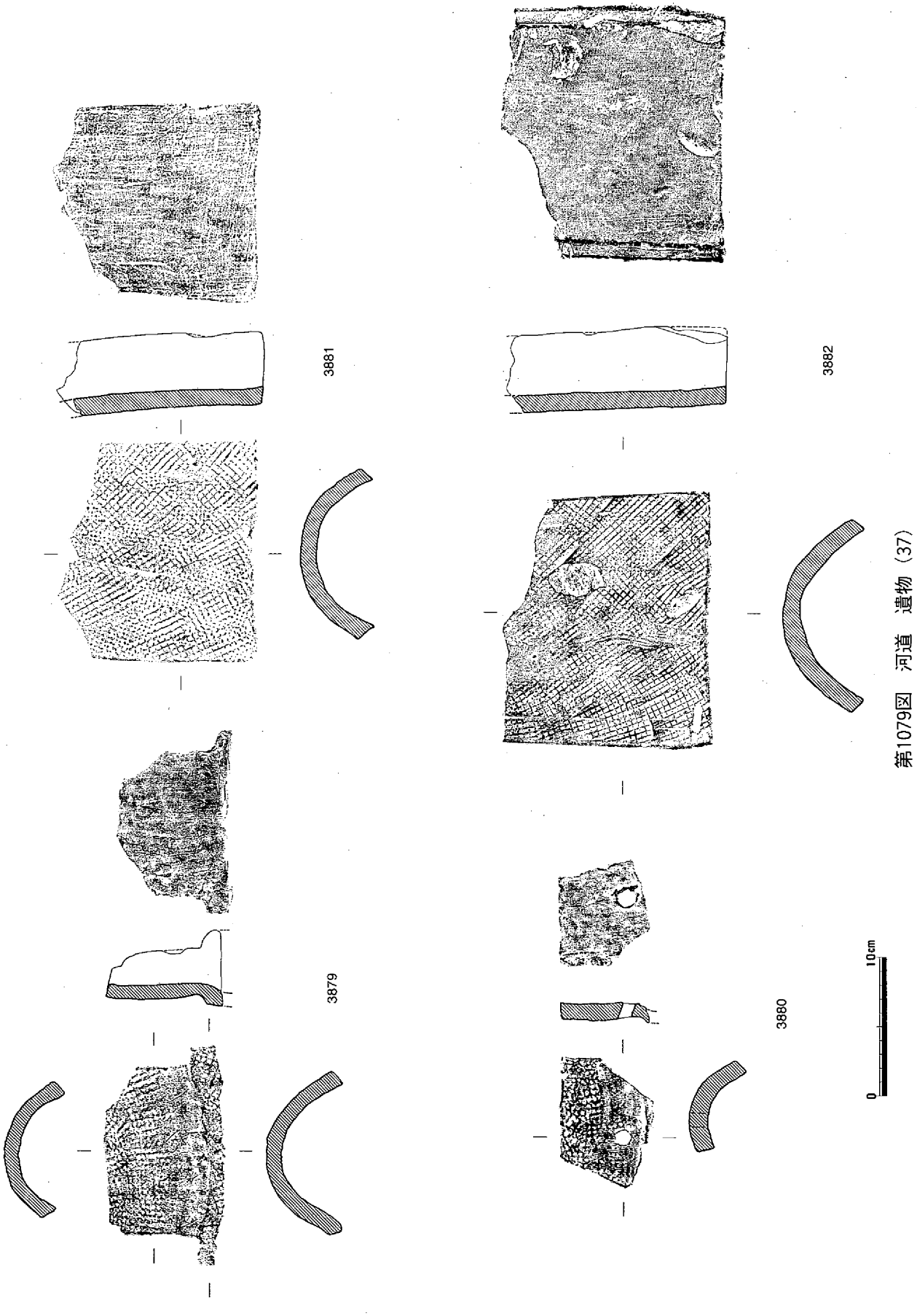
3904・3906のように釘穴を穿っているものも見られる。3906は隅切り瓦であると思われる。

道具瓦

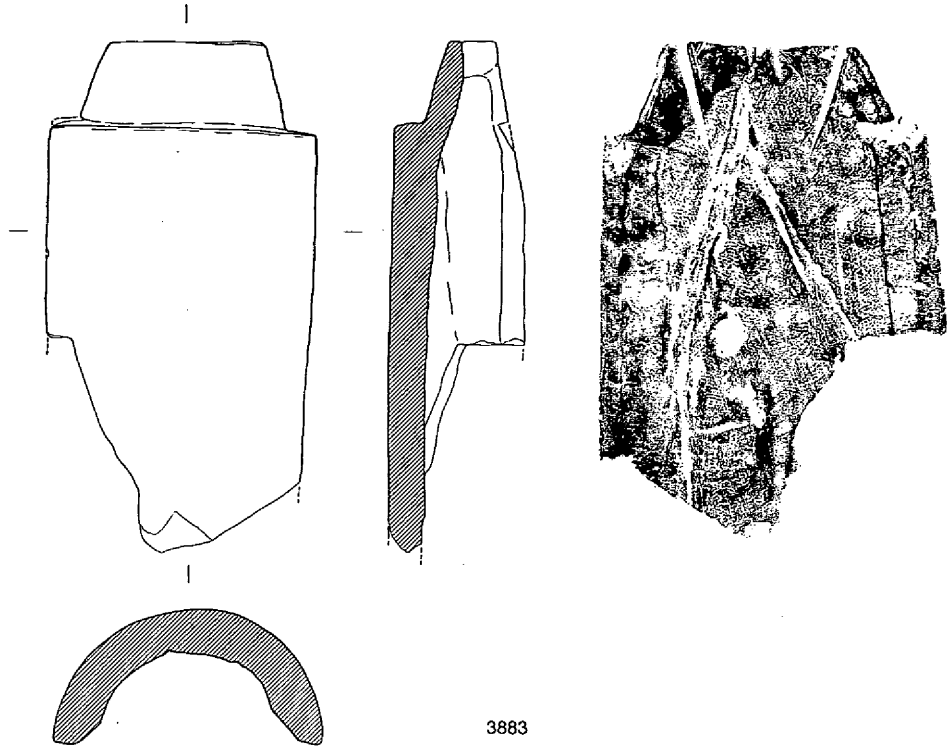
道具瓦は確認できる範囲では全て中世のものである。3907～3913は熨斗瓦である。3907～3910は3889～3895の平瓦の両面に縦位に分割の目安になる傷をつけて半截した転用熨斗瓦である。焼成後に分割作業を行っているため、3907のように分割に失敗したものも見られる。

3911～3913は3896～3906の平瓦を焼成前に分割し、あらかじめ熨斗瓦として作っているものである。

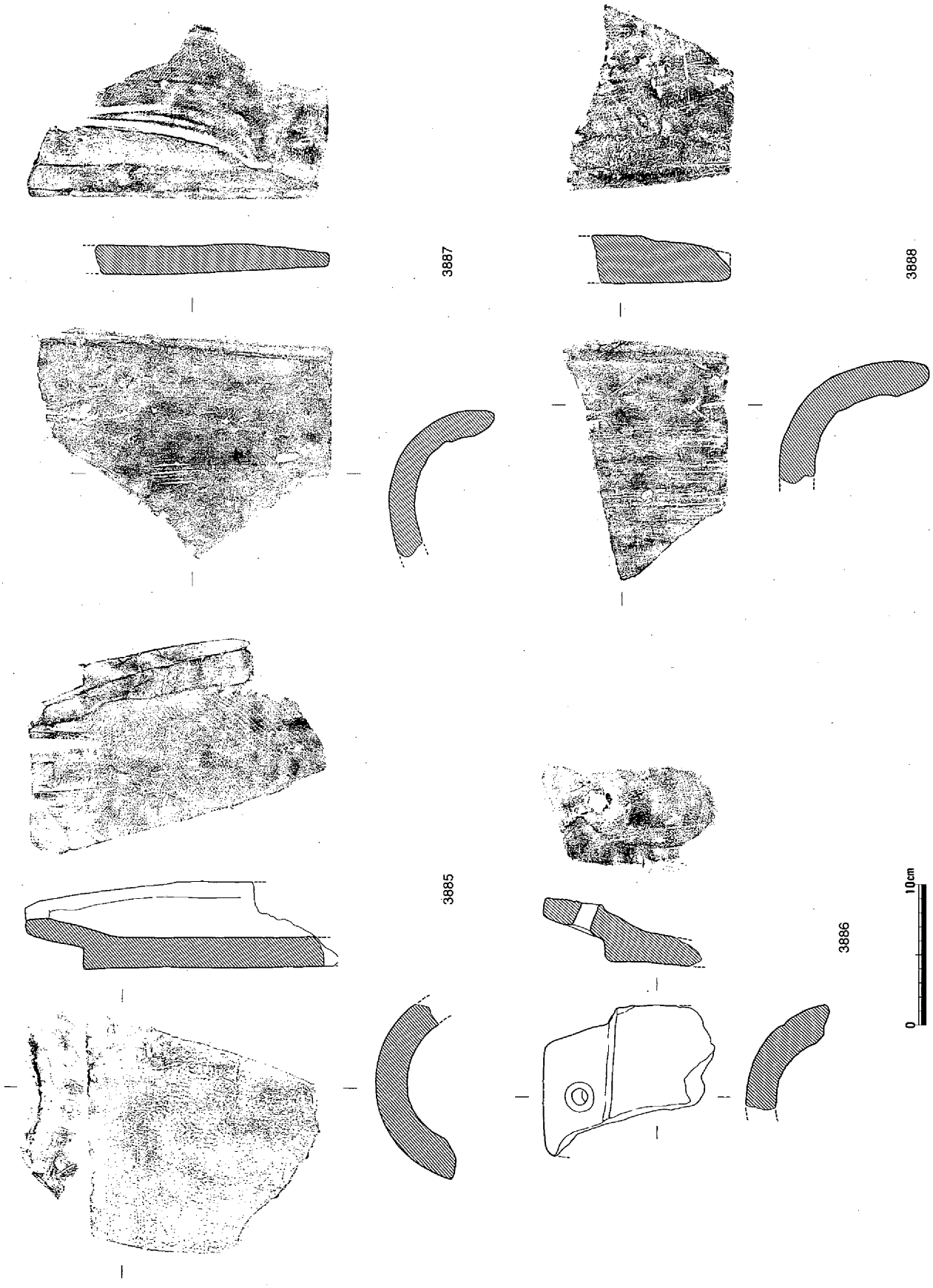
第1078図　河道　遺物（36）



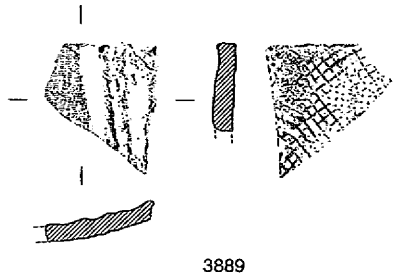
第1079図　河道　遺物（37）



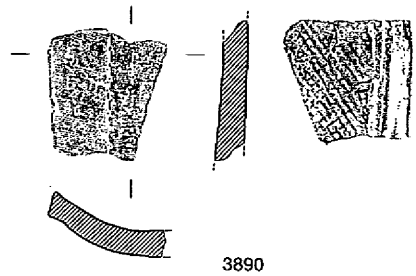
第1080図　河道　遺物（38）



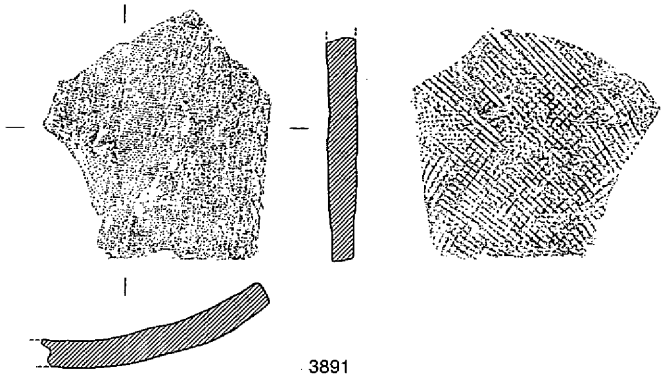
第1081図　河道　遺物（39）



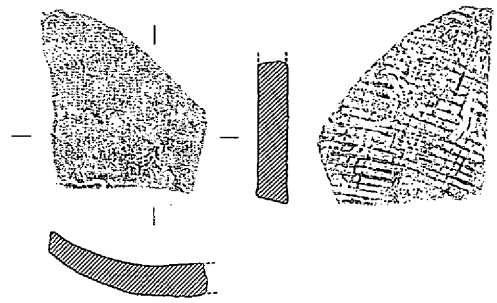
3889



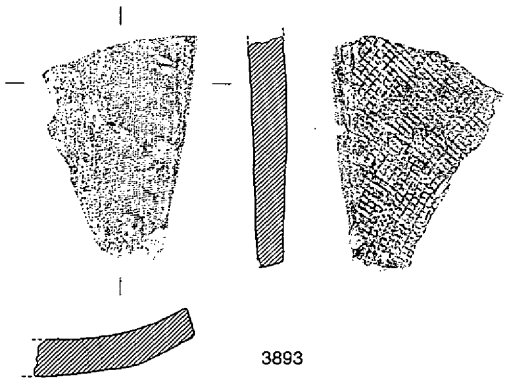
3890



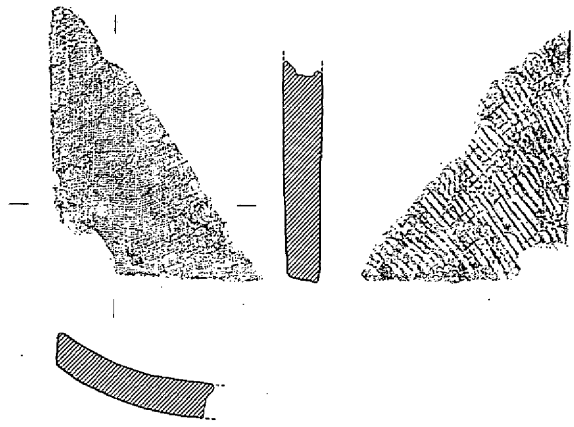
3891



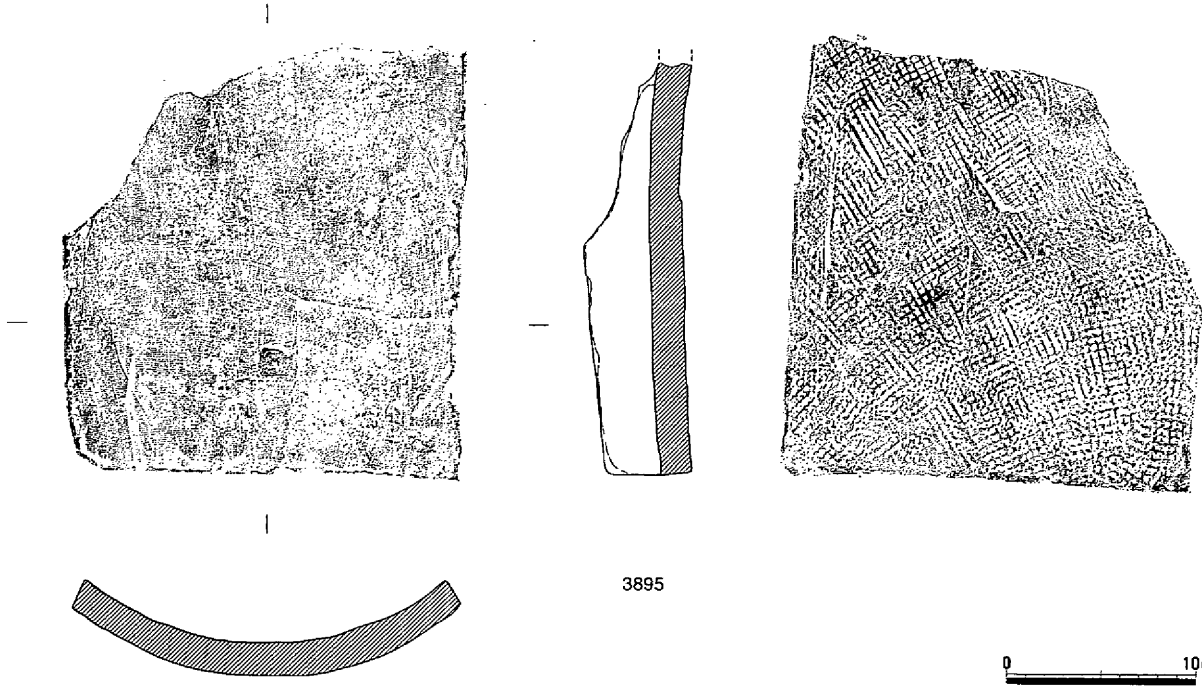
3892



3893



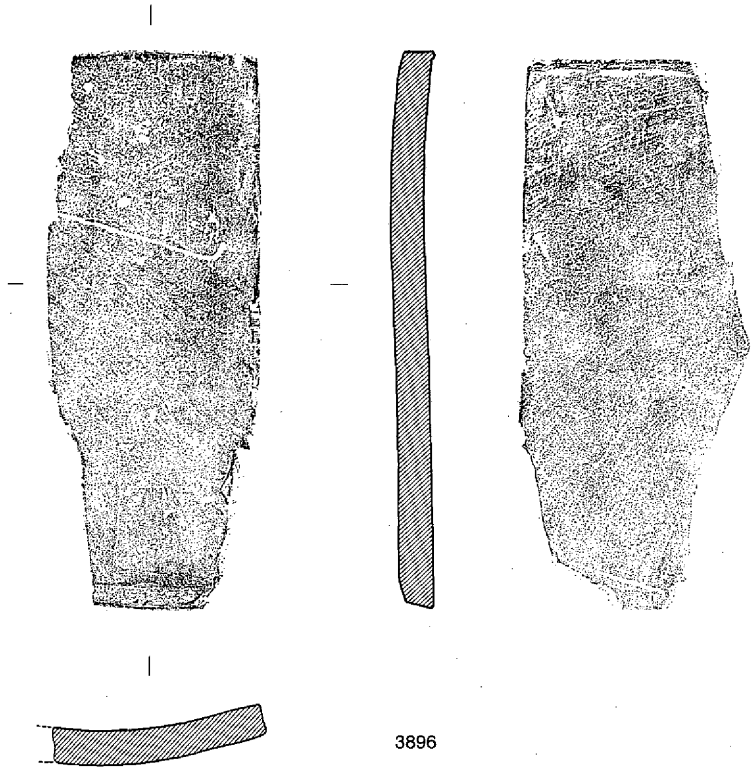
3894



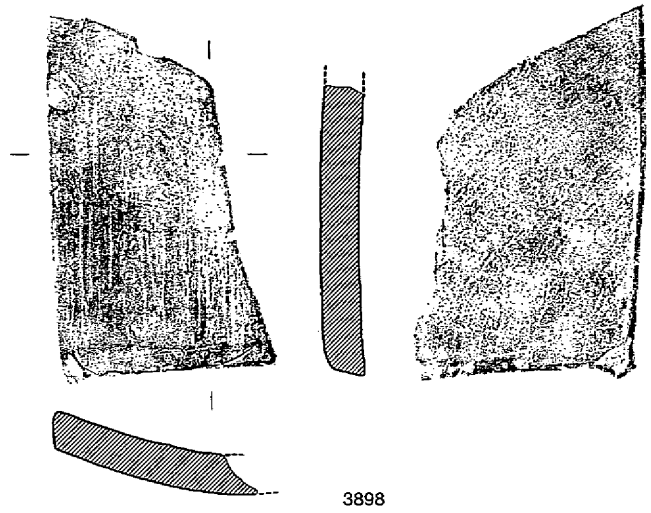
3895

0　10cm

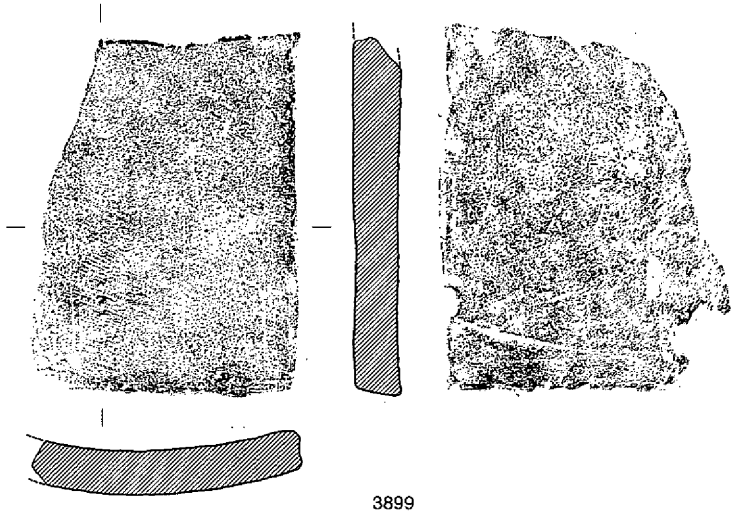
第1082図　河道　遺物（40）



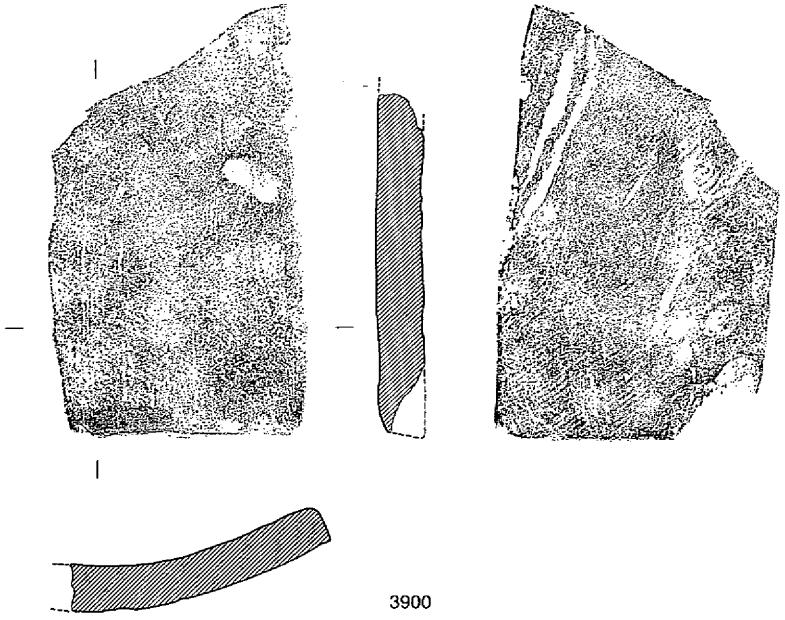
第1083図　河道　遺物（41）



3898



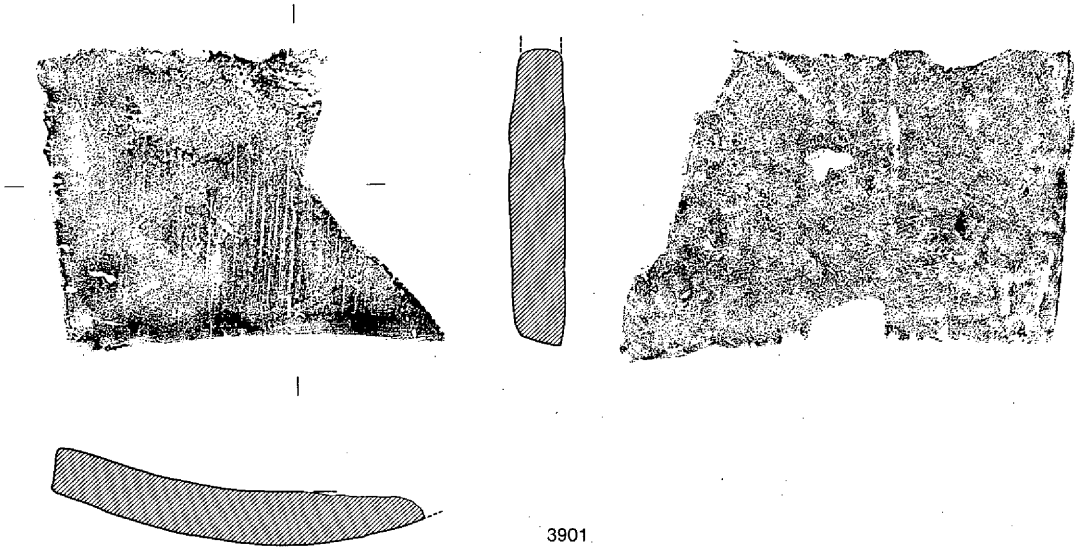
3899



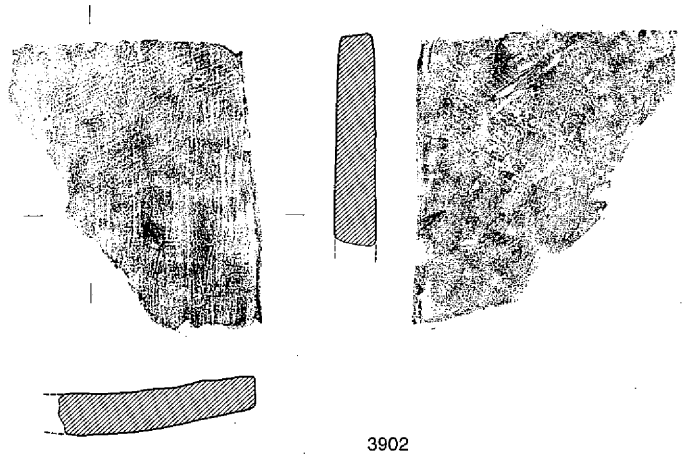
3900

0　10cm

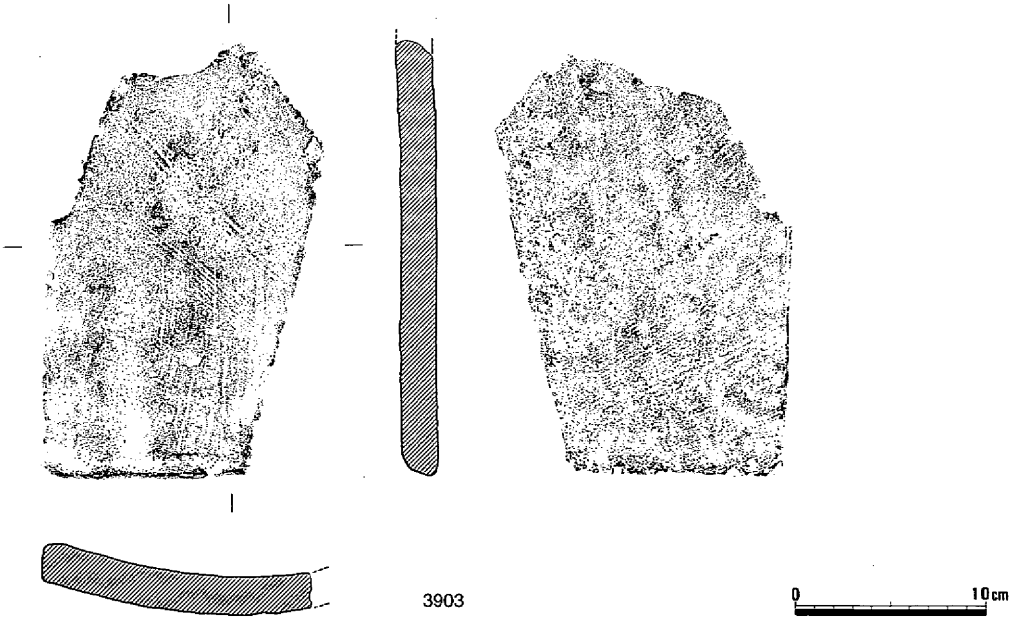
第1084図　河道　遺物（42）



3901



3902



3903

0　10cm

第1085図　河道　遺物（43）

3914は雁振瓦であろうか。丸瓦の断面が「∧」になったような形状の瓦である。凸面には亀山焼に良く見られるような格子叩きが残っている事から、亀山焼によるものであると考えられる。

3915～3920は鬼瓦である。全体像のわかるものはないが、形状や焼成から少なくとも２～３個体はあったと考えられる。3917は獅子（？）の顔で、鼻と右眼が残存している。3919は中心には軒丸瓦の瓦笵を押しつけたと思われる右巻きの巴紋があり、釘穴が穿たれている。（清水）

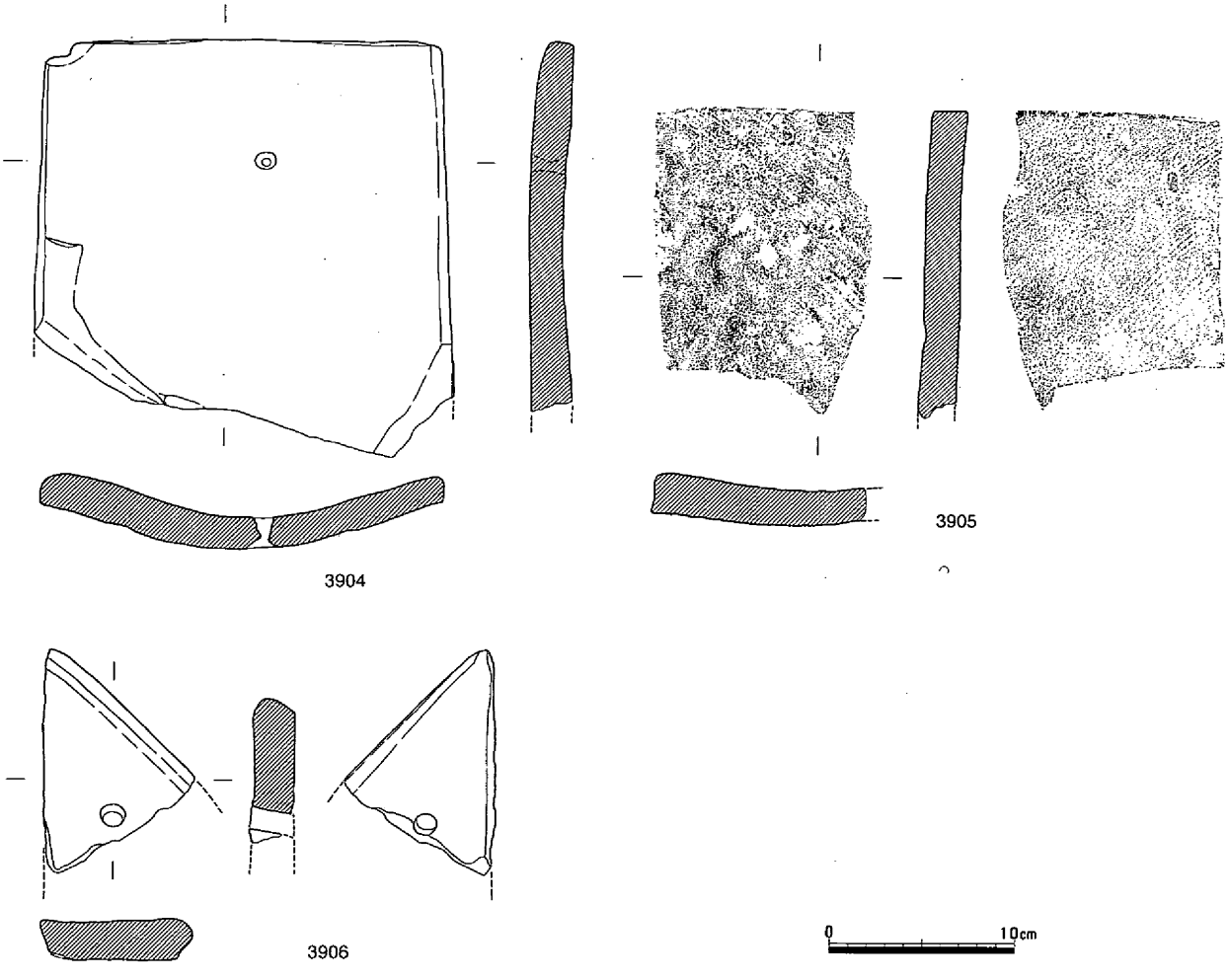
（15）その他の遺構・遺物

古代・中世の遺構に伴わなかった遺物を、その他として掲載し、若干の説明を加えたい。

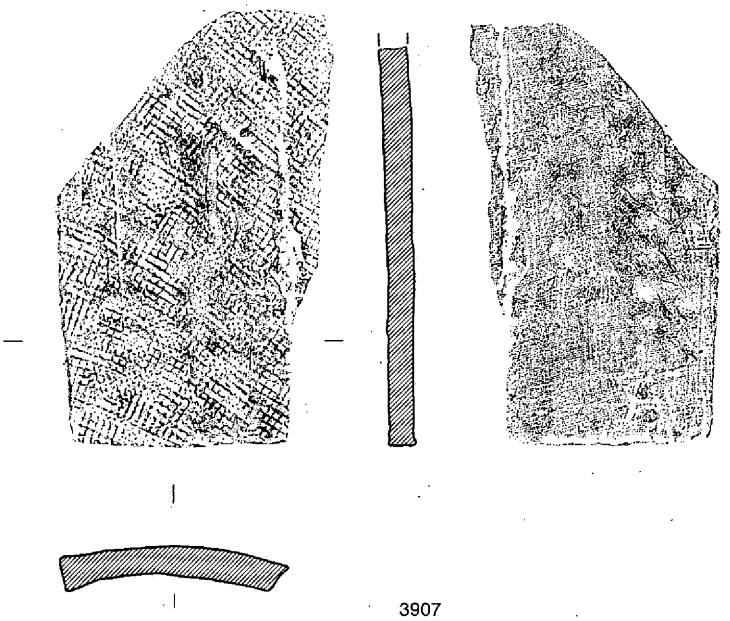
土器（第1090～1095図）

3921～3926は須恵器杯蓋である。3921・3922は７世紀末～８世紀前半、3924・3926は８世紀後半～９世紀前半ではなかろうか。3927は須恵器壺の蓋であろう。3928～3938は須恵器杯身である。高台のないものと、高台を貼り付けたものとがある。７世紀末から９世紀前半のものが含まれているようである。3939は須恵器稜椀の破片と考えている。８世紀末～９世紀前半であろうか。3940～3943は須恵器壺と考えている。3940の肩部にはクシによる刺突文が施されている。

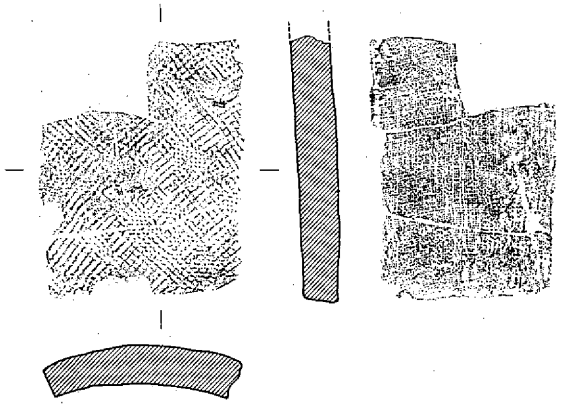
3944～3946は土師器皿である。底部外面調整は、いずれも周縁ヘラ切り、中央部指による押圧とナ



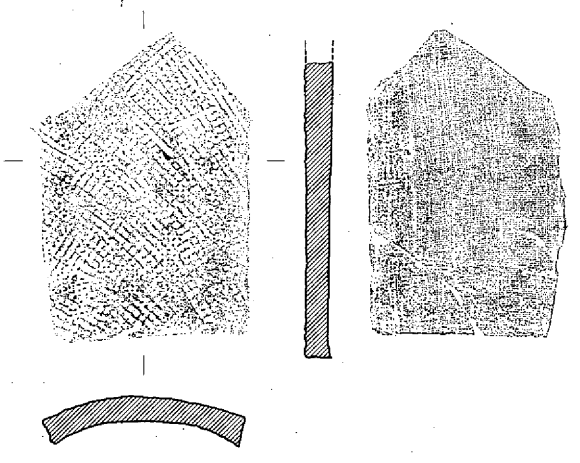
第1086図　河道　遺物（44）



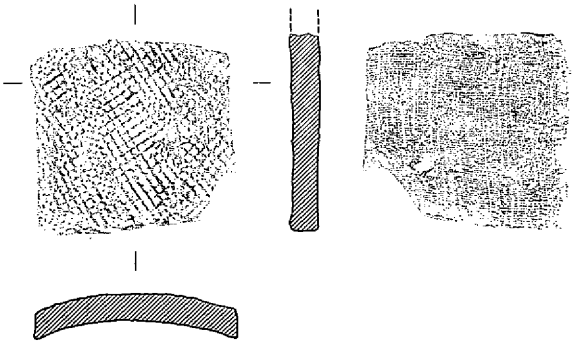
3907



3908



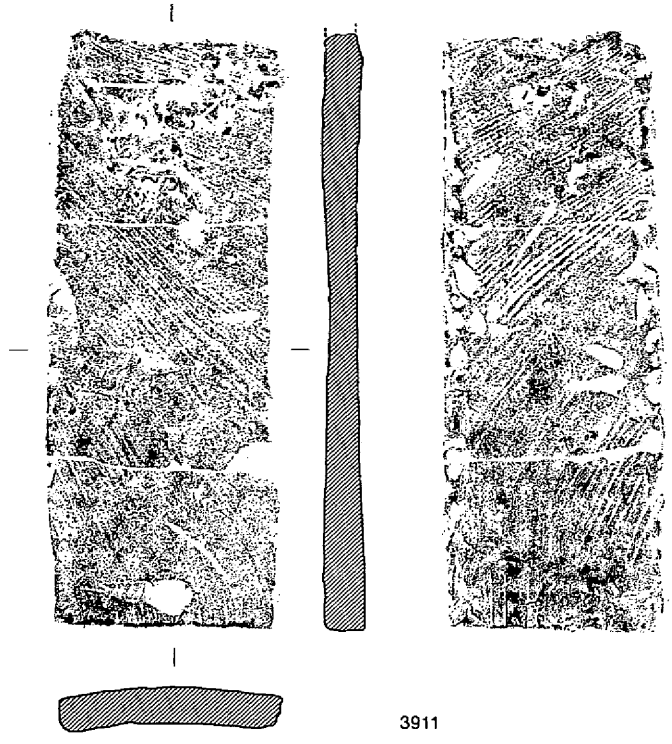
3909

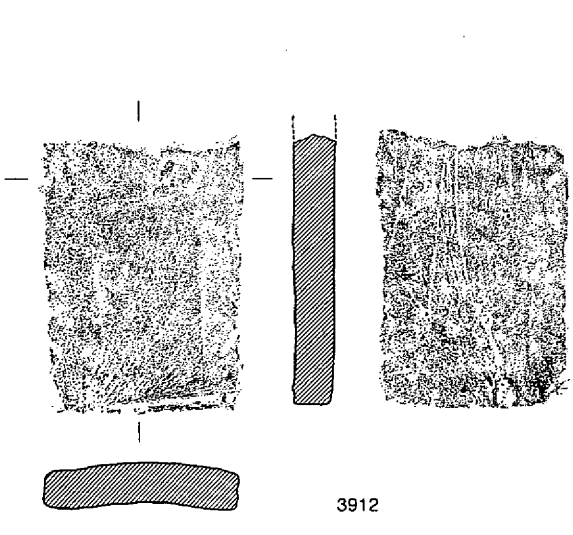


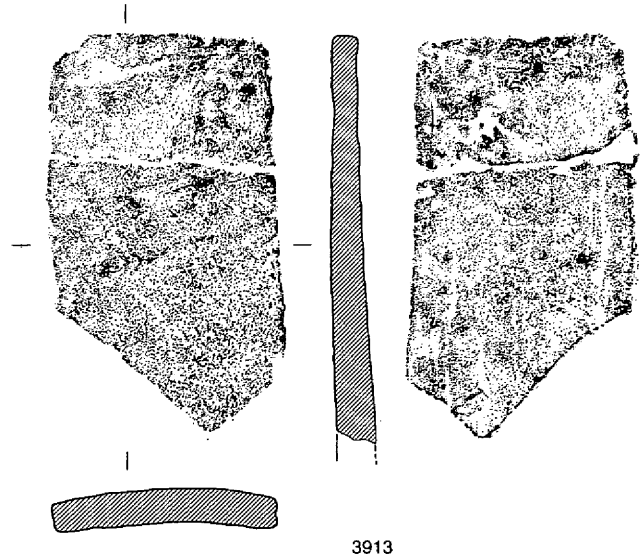
3910

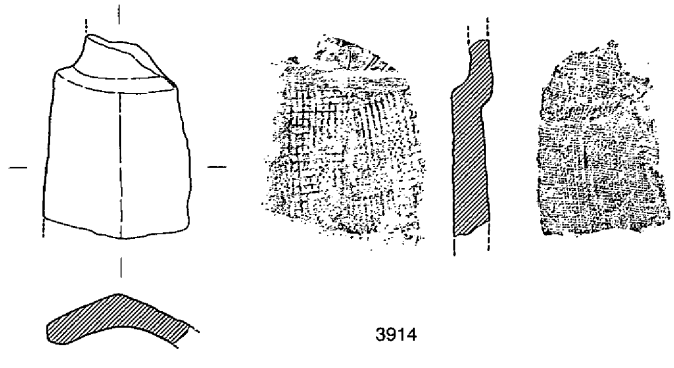
0　10cm

第1087図　河道　遺物（45）

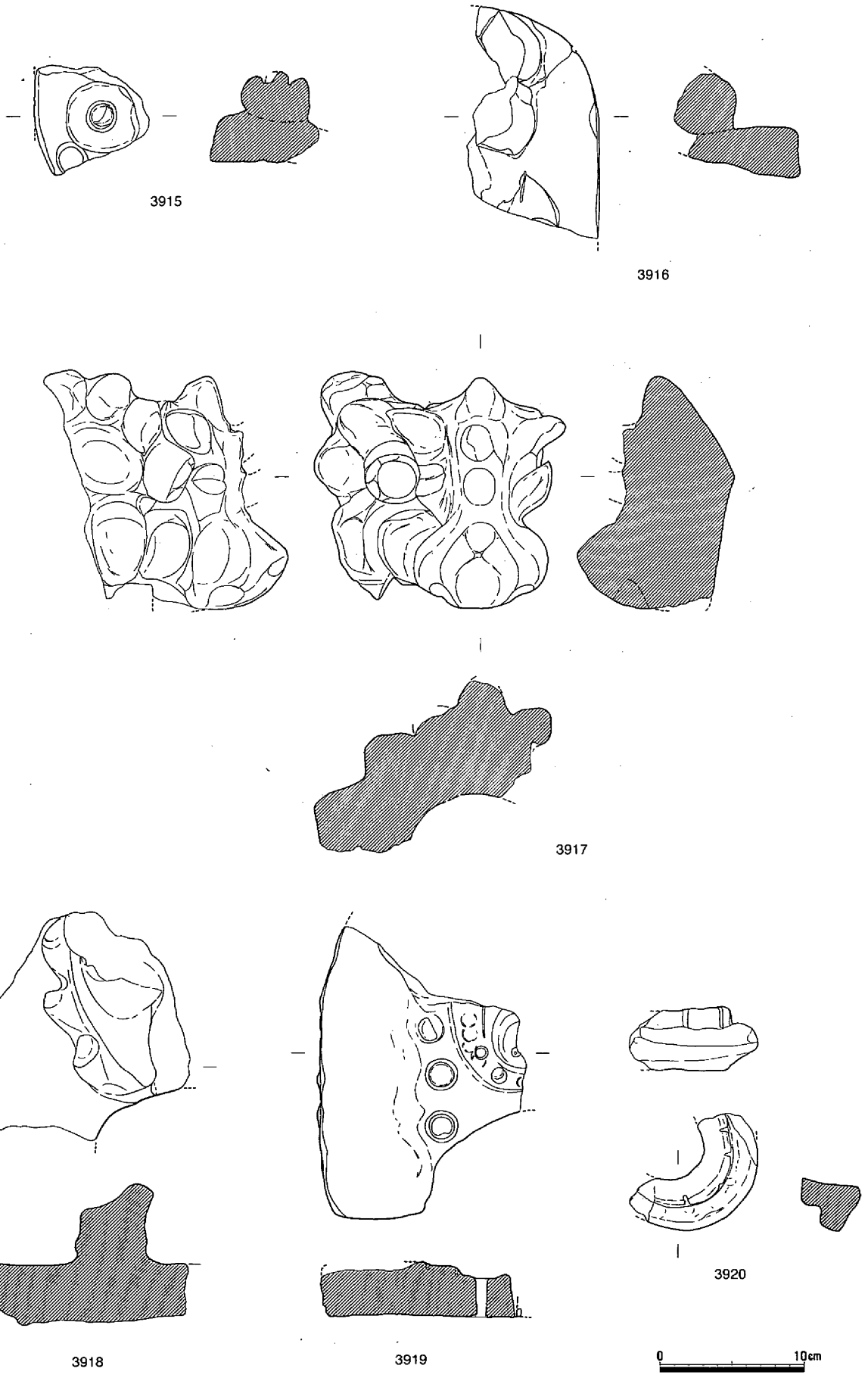




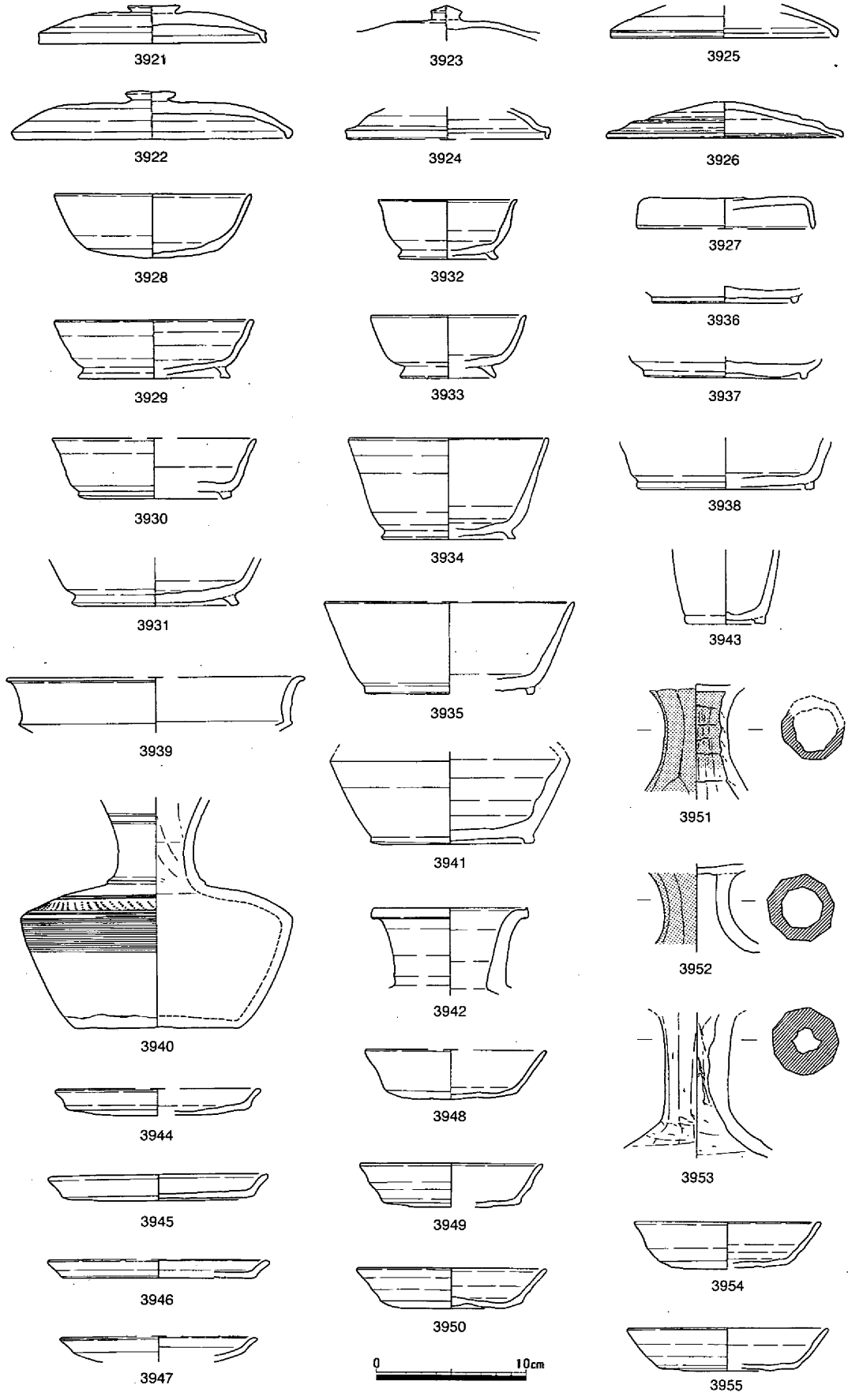




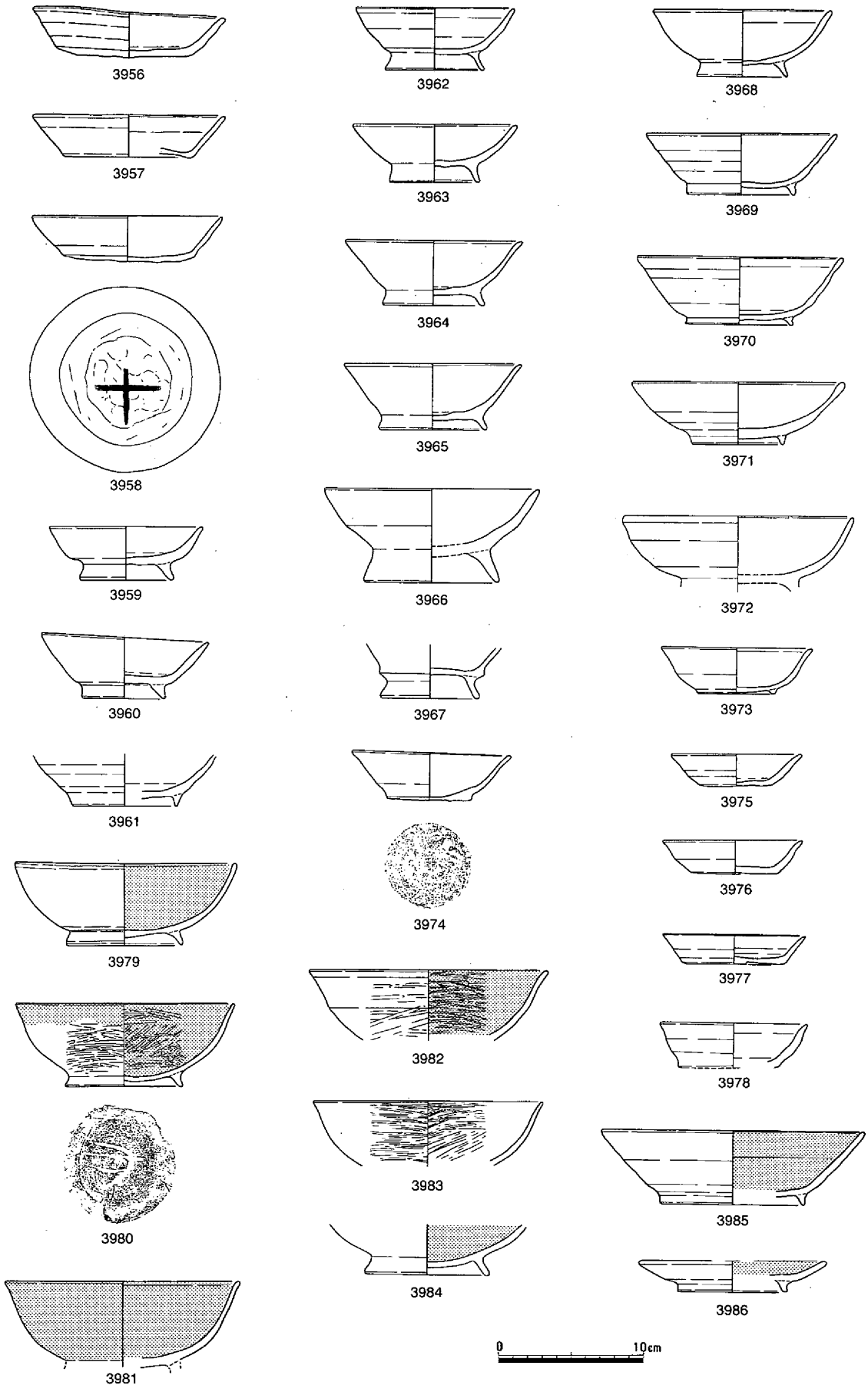
第1088図　河道　遺物（46）



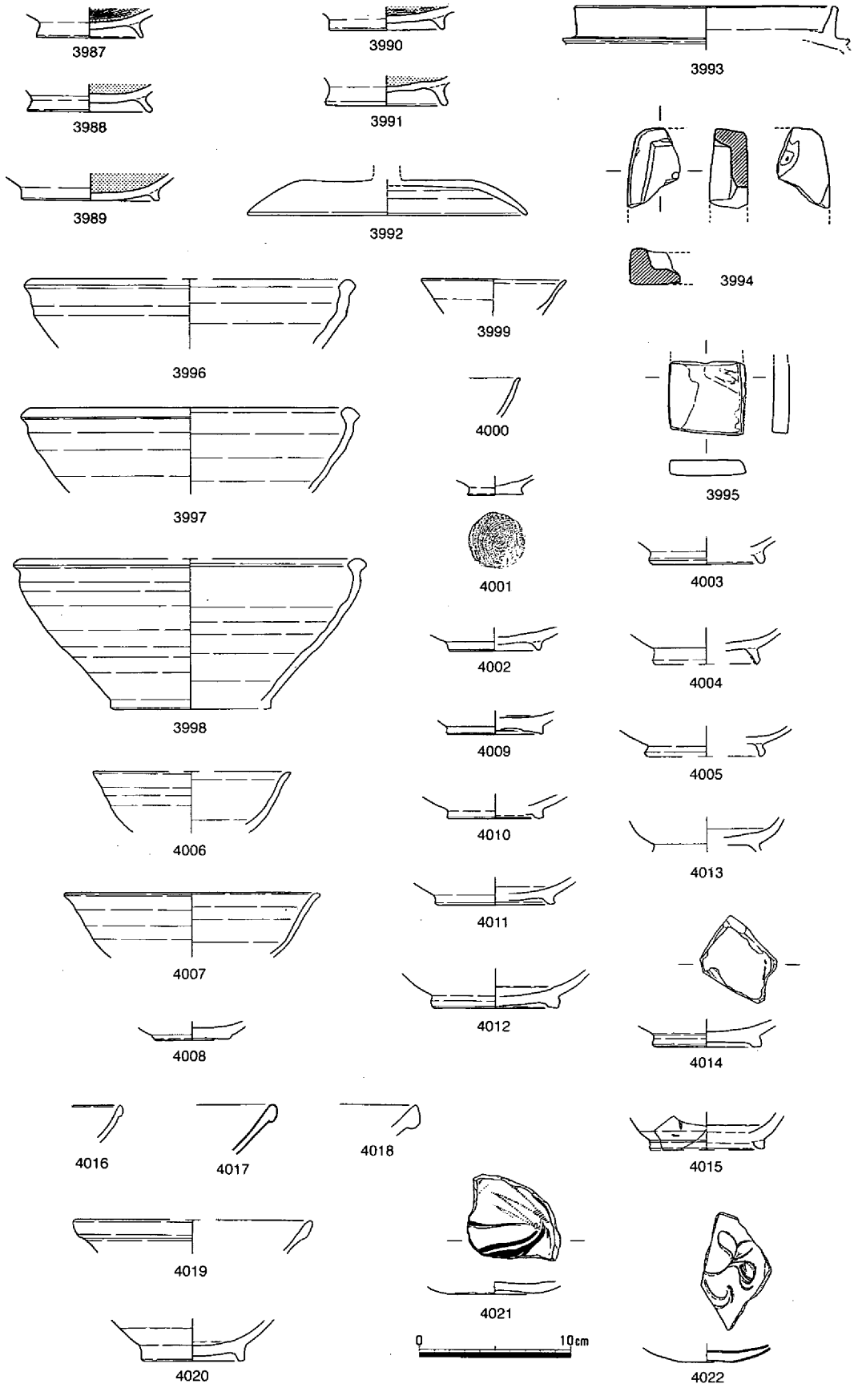
第1089図　河道　遺物（47）



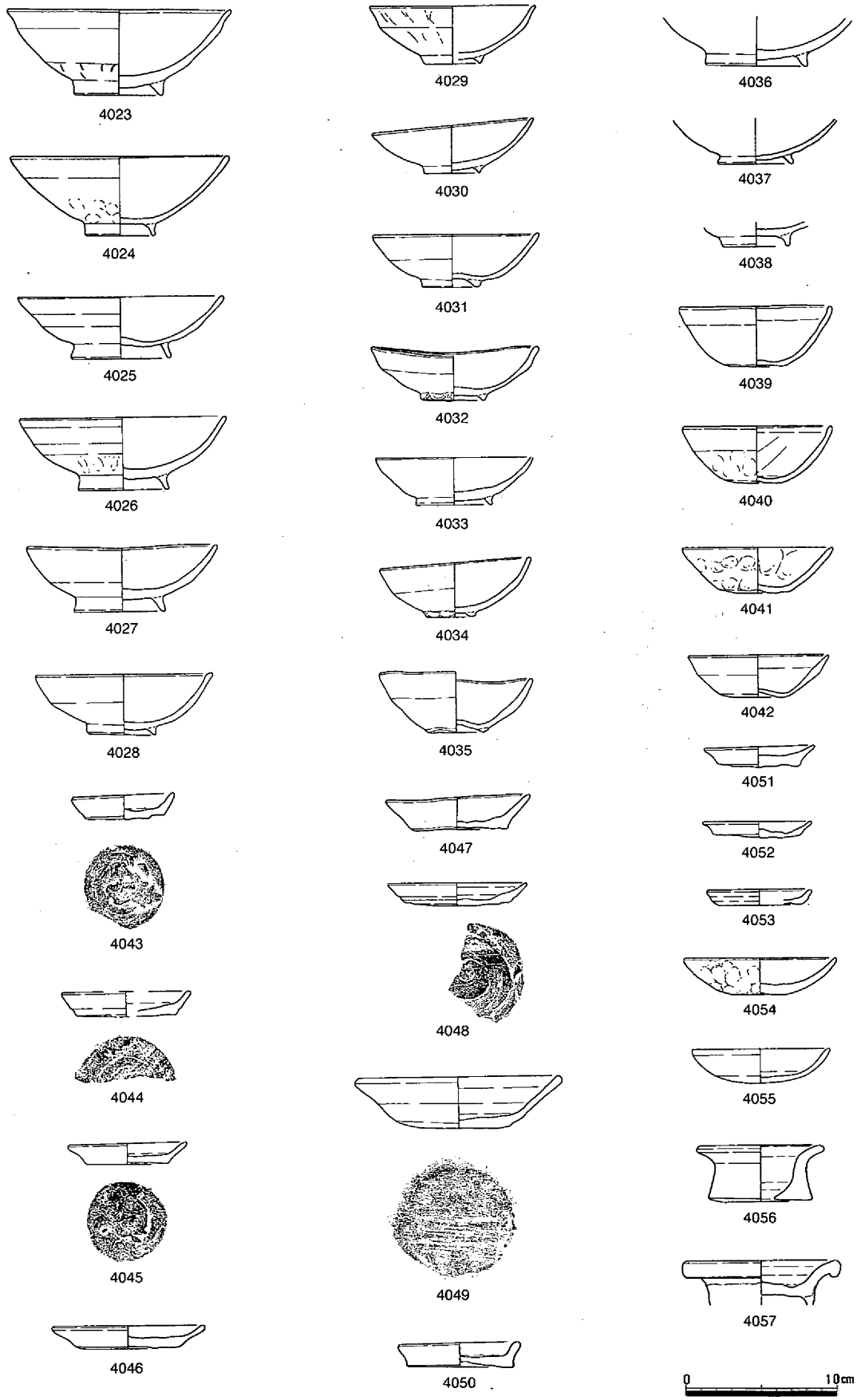
第1090図　その他の遺物（1）



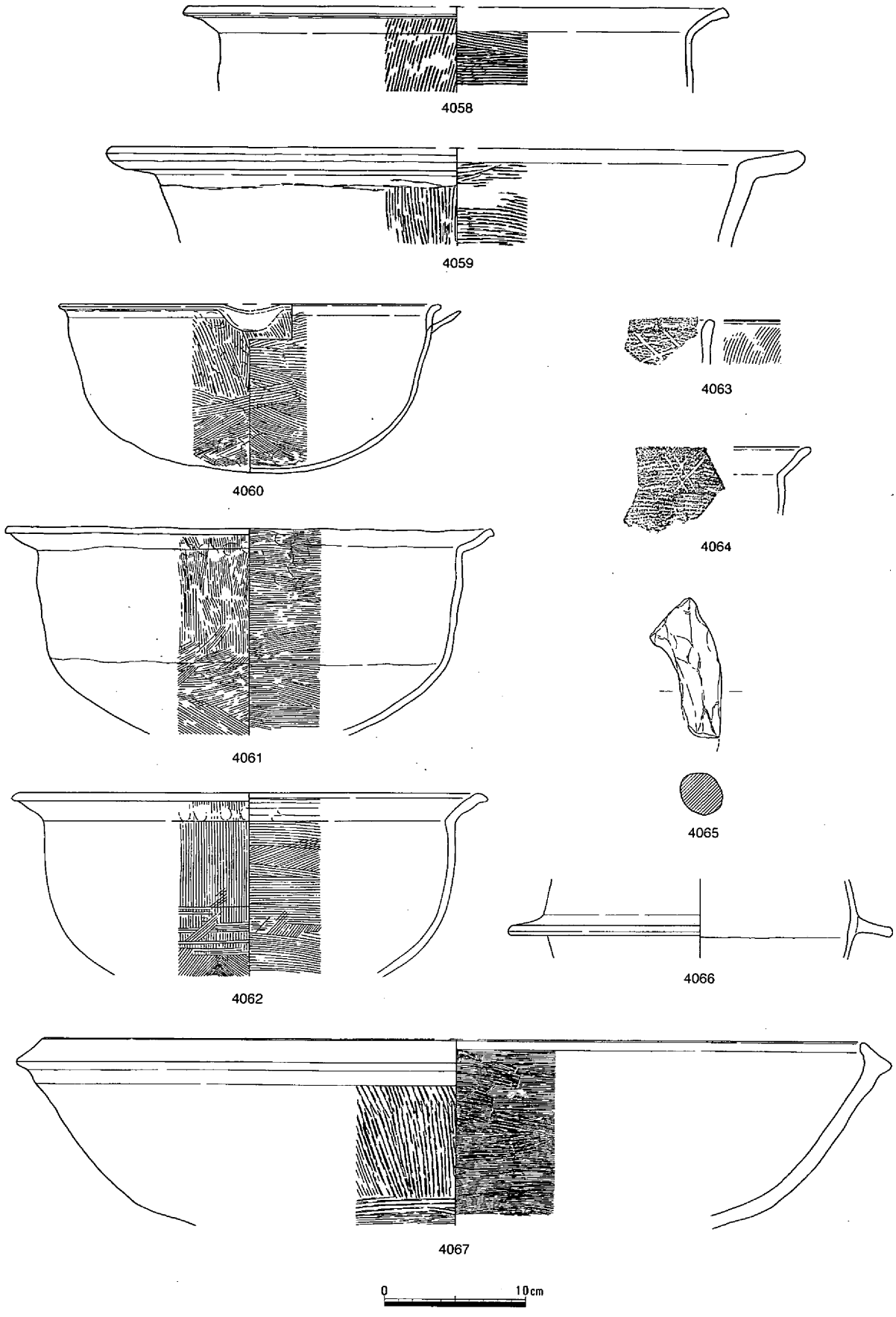
第1091図　その他の遺物（２）



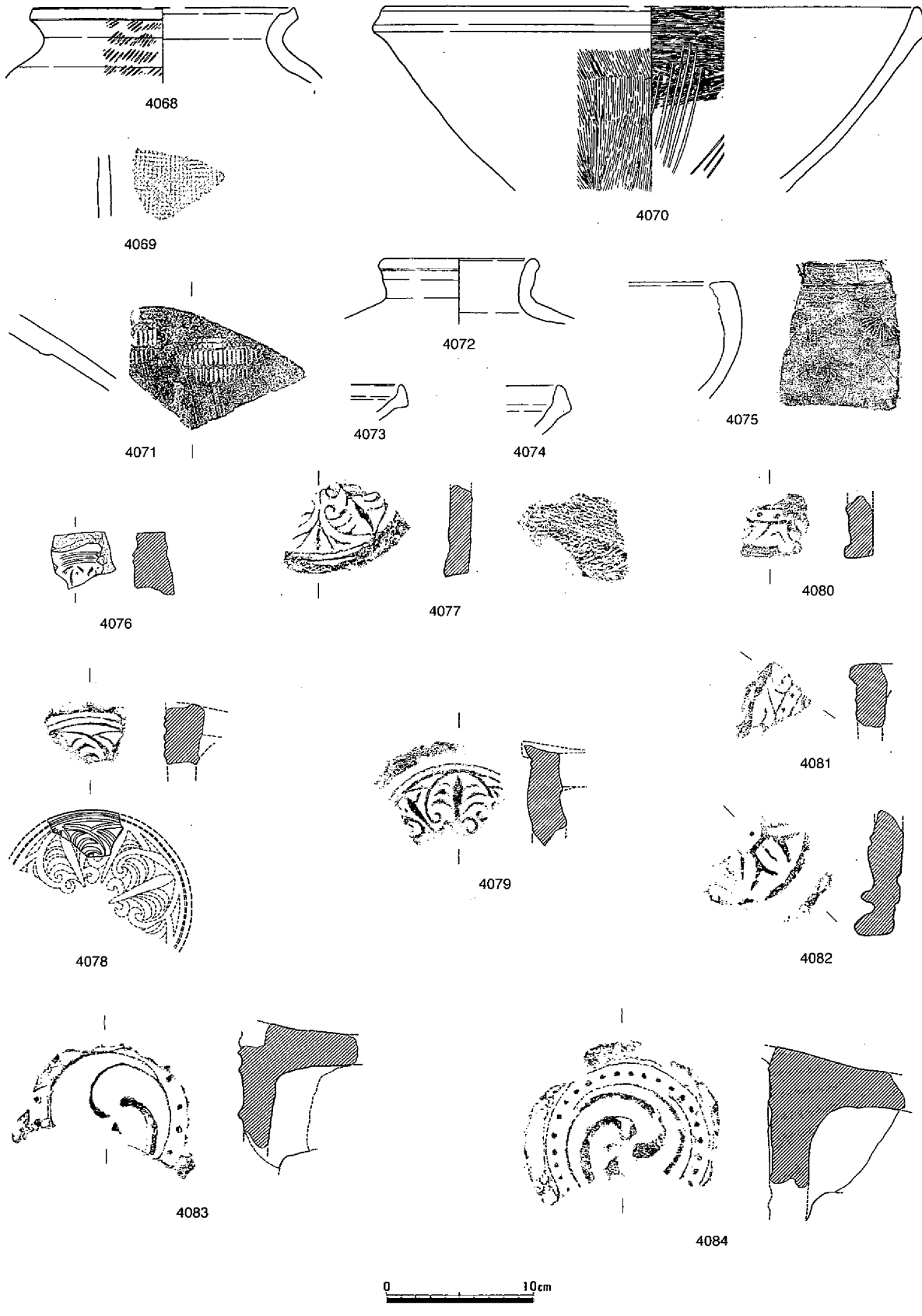
第1092図　その他の遺物（3）



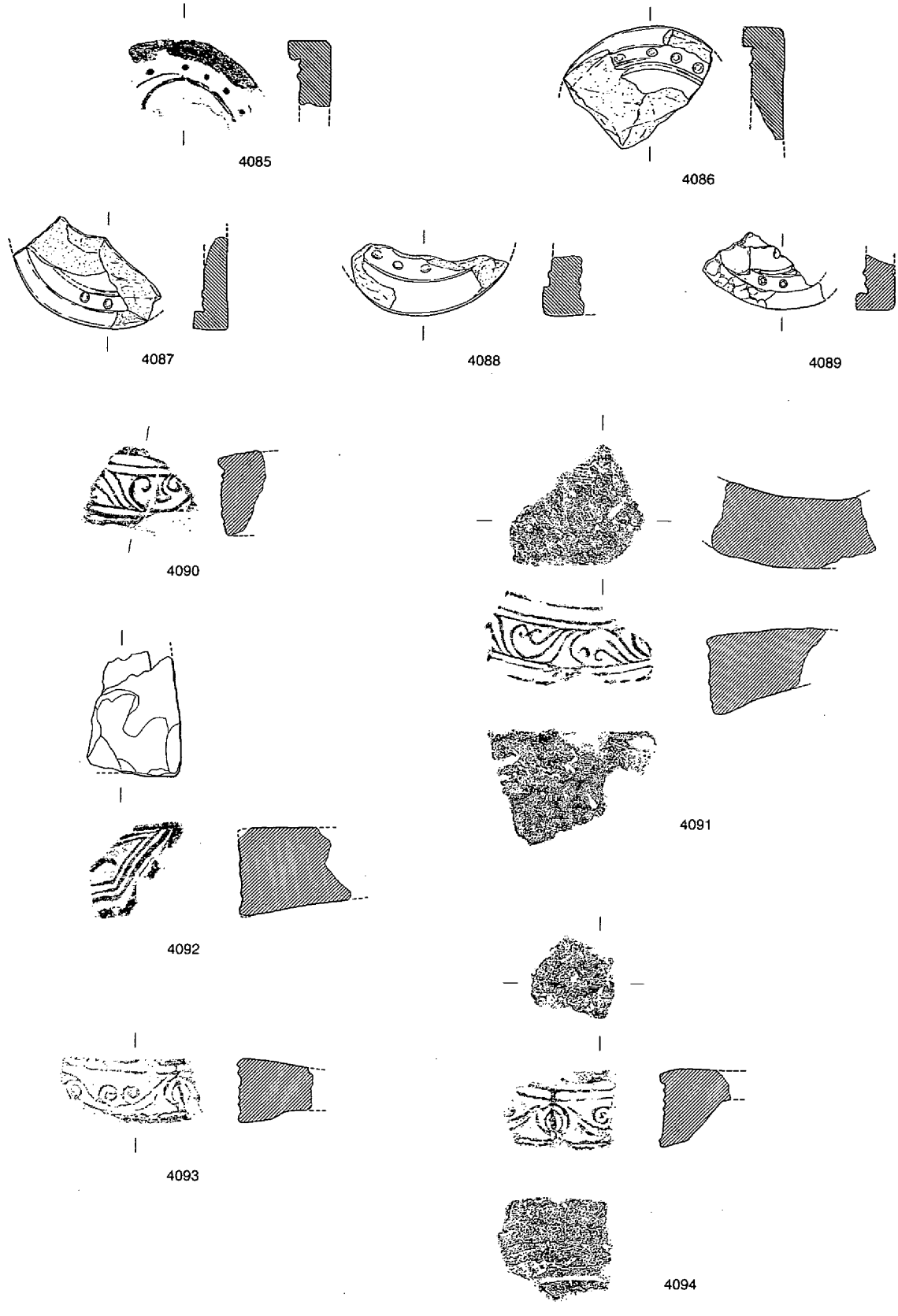
第1093図　その他の遺物（４）



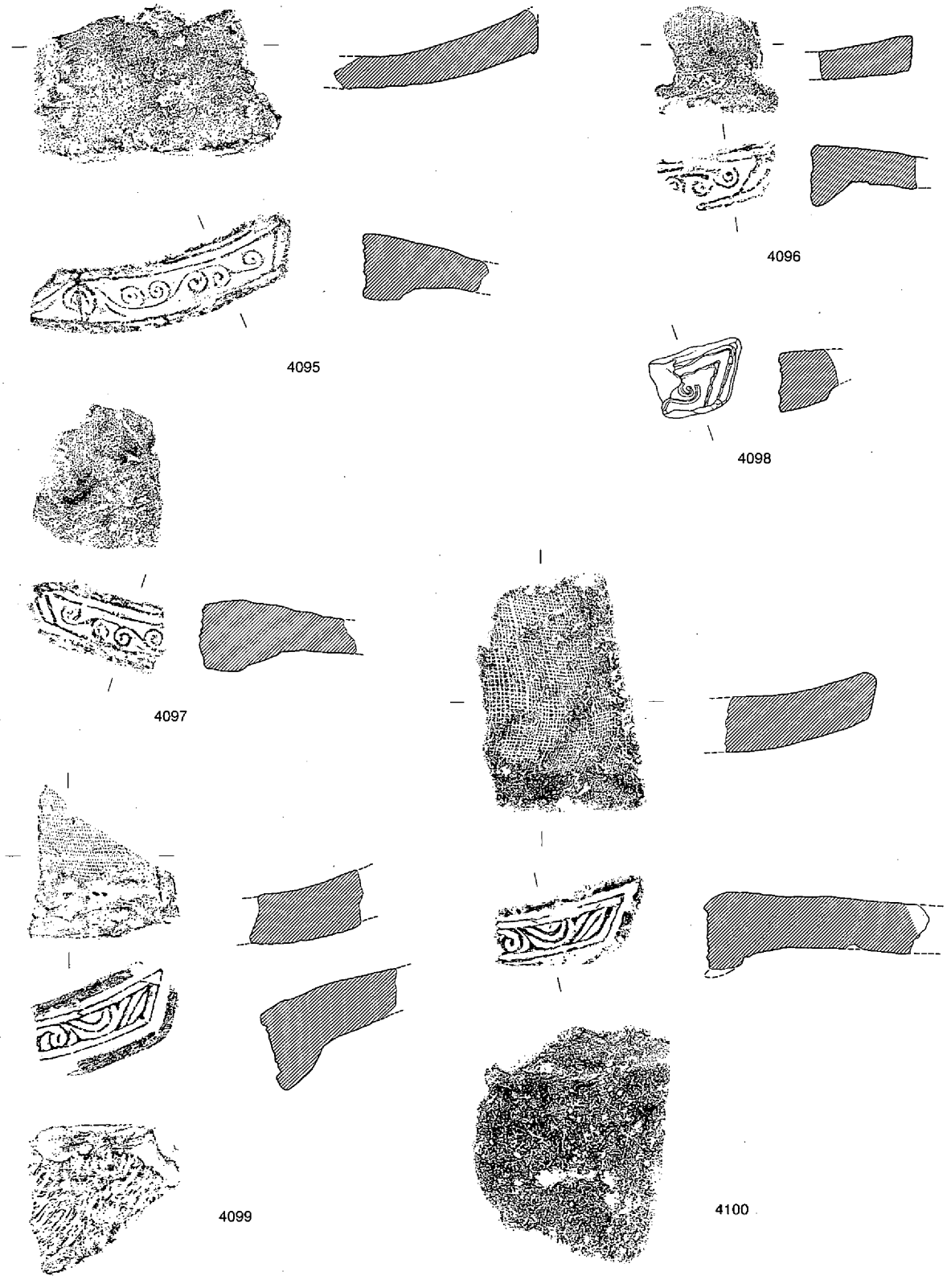
第1094図　その他の遺物（5）



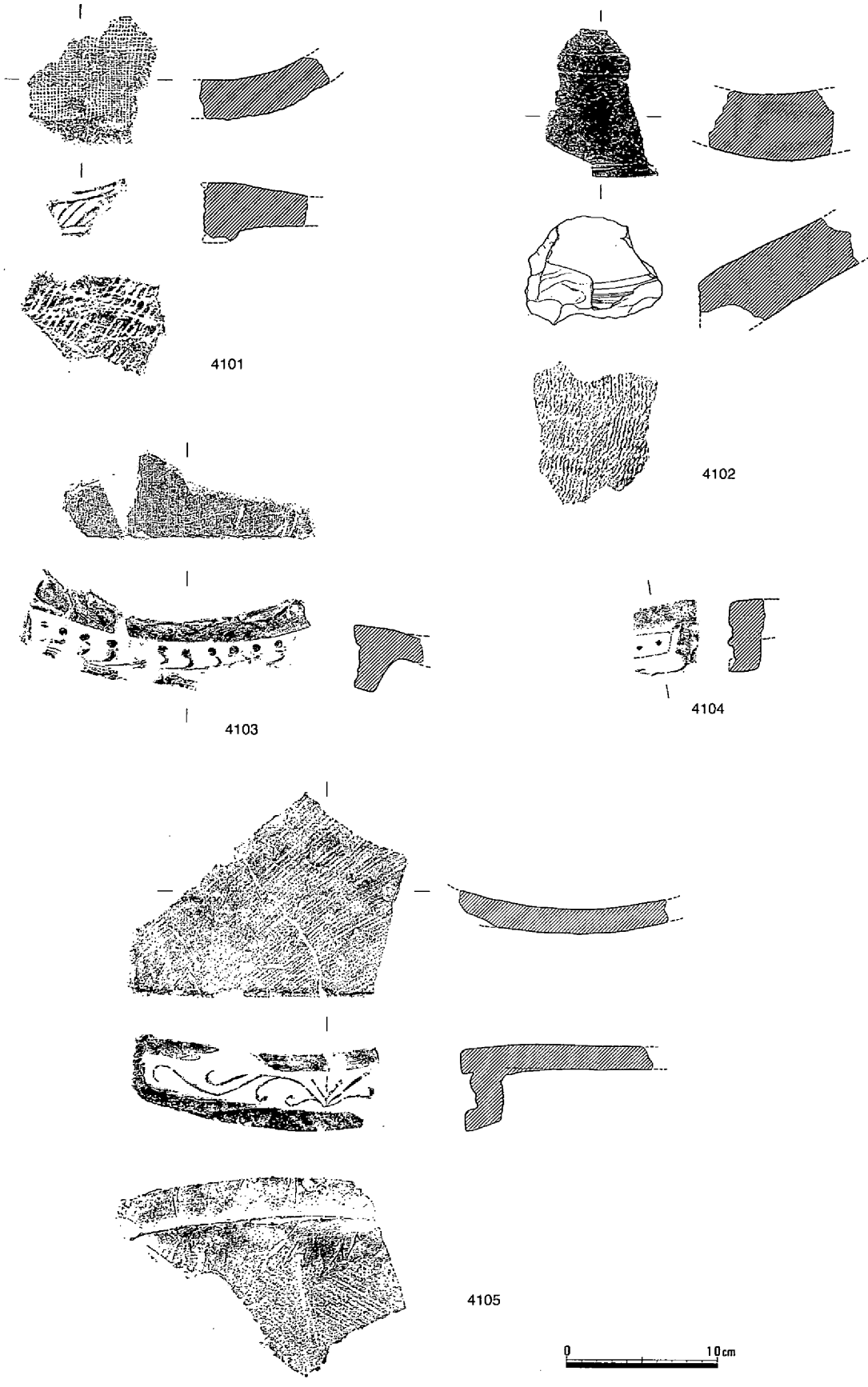
第1095図　その他の遺物（６）



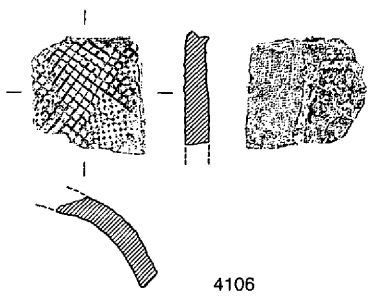
第1096図　その他の遺物（７）

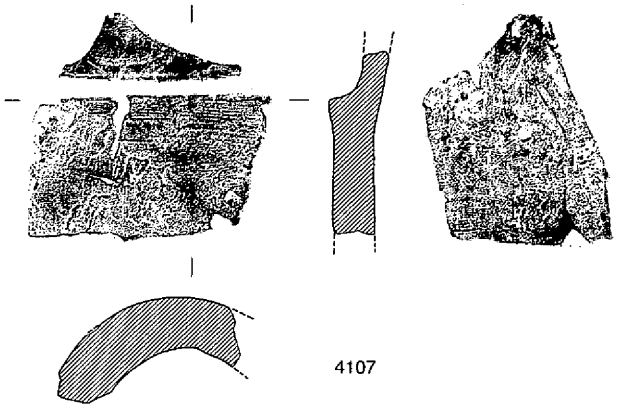


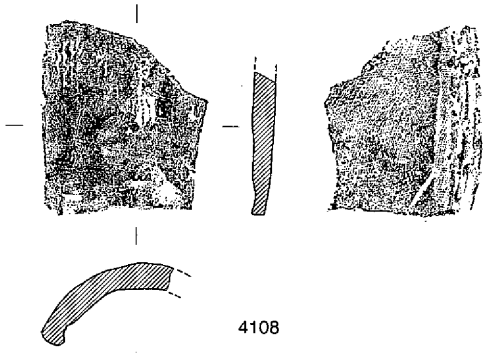
第1097図　その他の遺物（８）

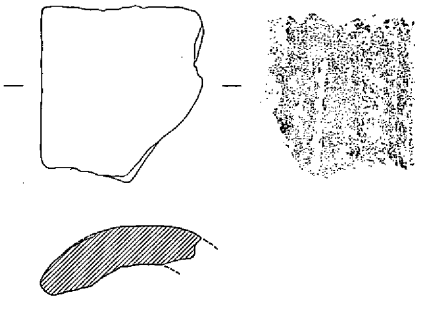


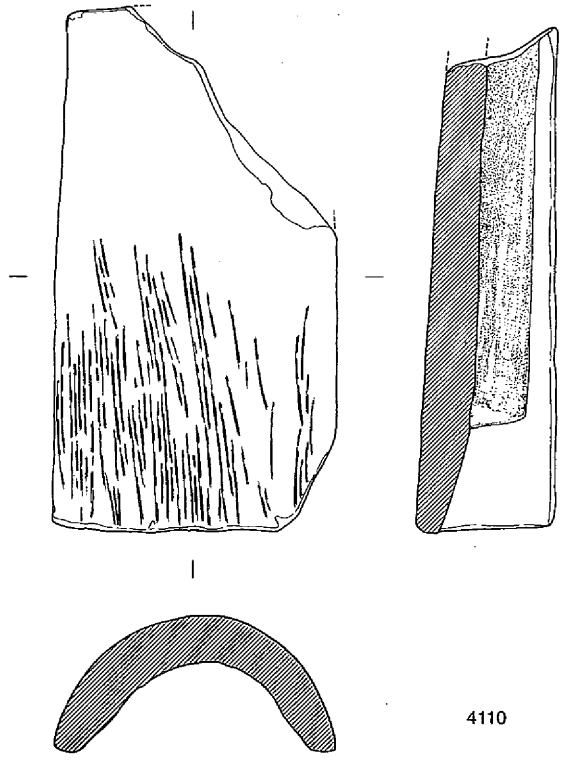
第1098図　その他の遺物（9）

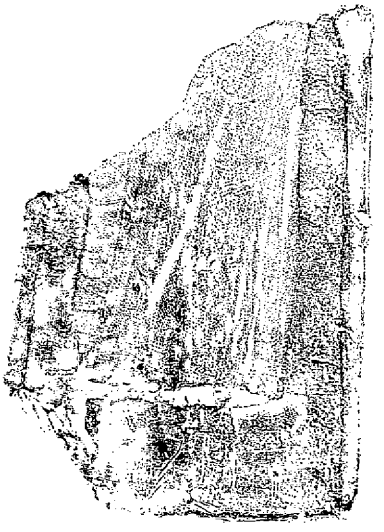




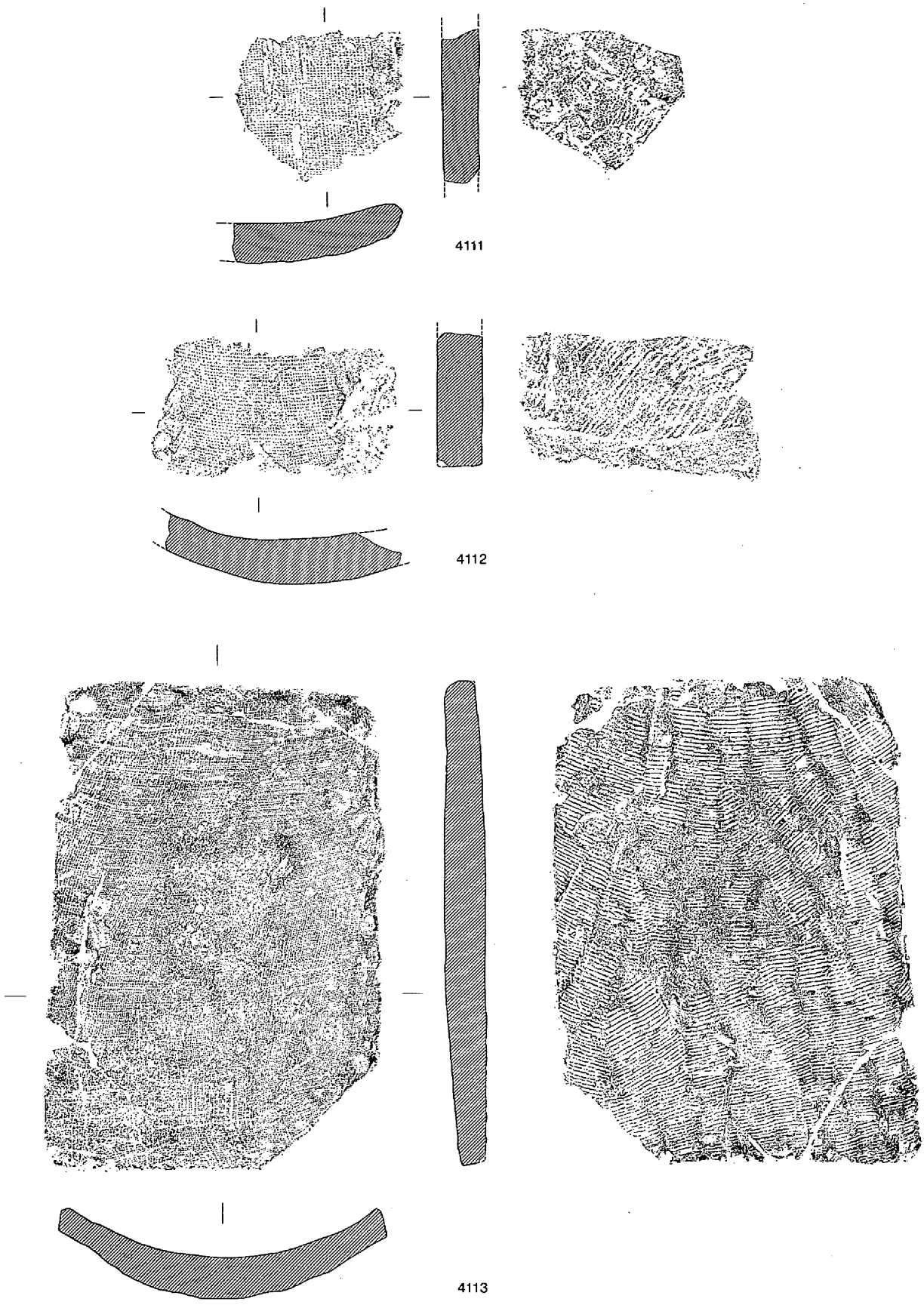








第1099図　その他の遺物（10）



第1100図　その他の遺物（11）

デである。3944は丹塗り（ベンガラ）不詳、3945は丹塗りなし、3946は内外面丹塗りである。

3947は緑釉陶器段皿と考えているが明確ではない。釉は薄く、須恵質である。

3948～3950は、土師器杯である。底部外面調整は、いずれも周縁ヘラ切り、中央部指による押圧とナデである。3948・3950は丹塗りなし、3949は外面丹塗りである。時期は10世紀前葉であろう。

3951～3953は、土師器高杯の脚部である。脚部は面取りされている。3951・3952の外面には丹塗りが残っている。

3954～3958は、土師器杯である。底部外面調整は、いずれも周縁ヘラ切り、中央部指による押圧とナデである。3954・3956は丹塗りなし、3955は丹塗り不詳、3957・3958は内外面丹塗りである。時期は、９世紀後葉から10世紀前葉ではなかろうか。

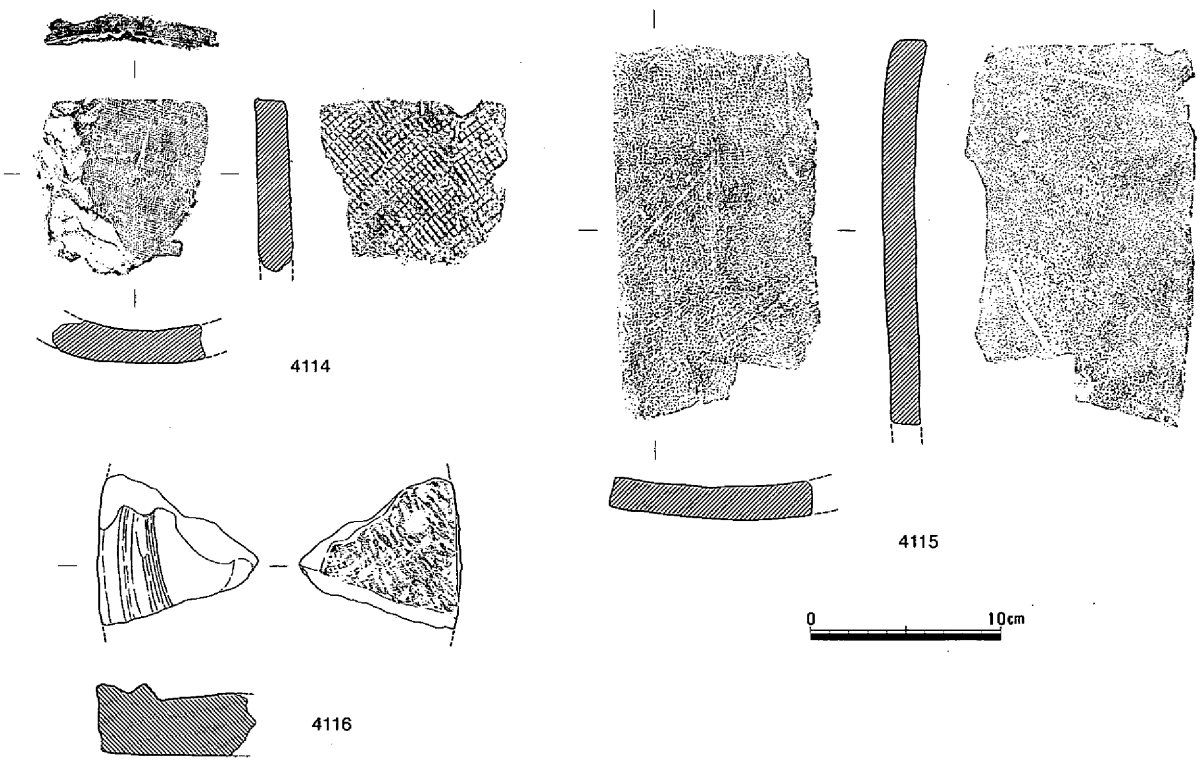
3959～3973は、土師器高台付椀である。口径・器高には大･中･小があり、高台も各種あり、3966はいわゆる足高高台である。各土器の時期は明確ではないが、10世紀中葉から11世紀前葉の幅に収まるのではなかろうか。3974・3978は円盤底の杯と考えている。底部外面調整は、中心までヘラ切りである。時期は、10世紀後葉から11世紀前葉ではなかろうか。

3979～3982・3984・3985・3987～3991は、黒色土器高台付椀である。3981は内外面に炭素が付着しており、それ以外は内黒である。

3986は、黒色土器高台付皿で、内黒である。

3992は、土師器蓋である。天井部にはつまみの剥離痕が確認できた。外面のみ丹塗りで、皿の蓋であろうか。

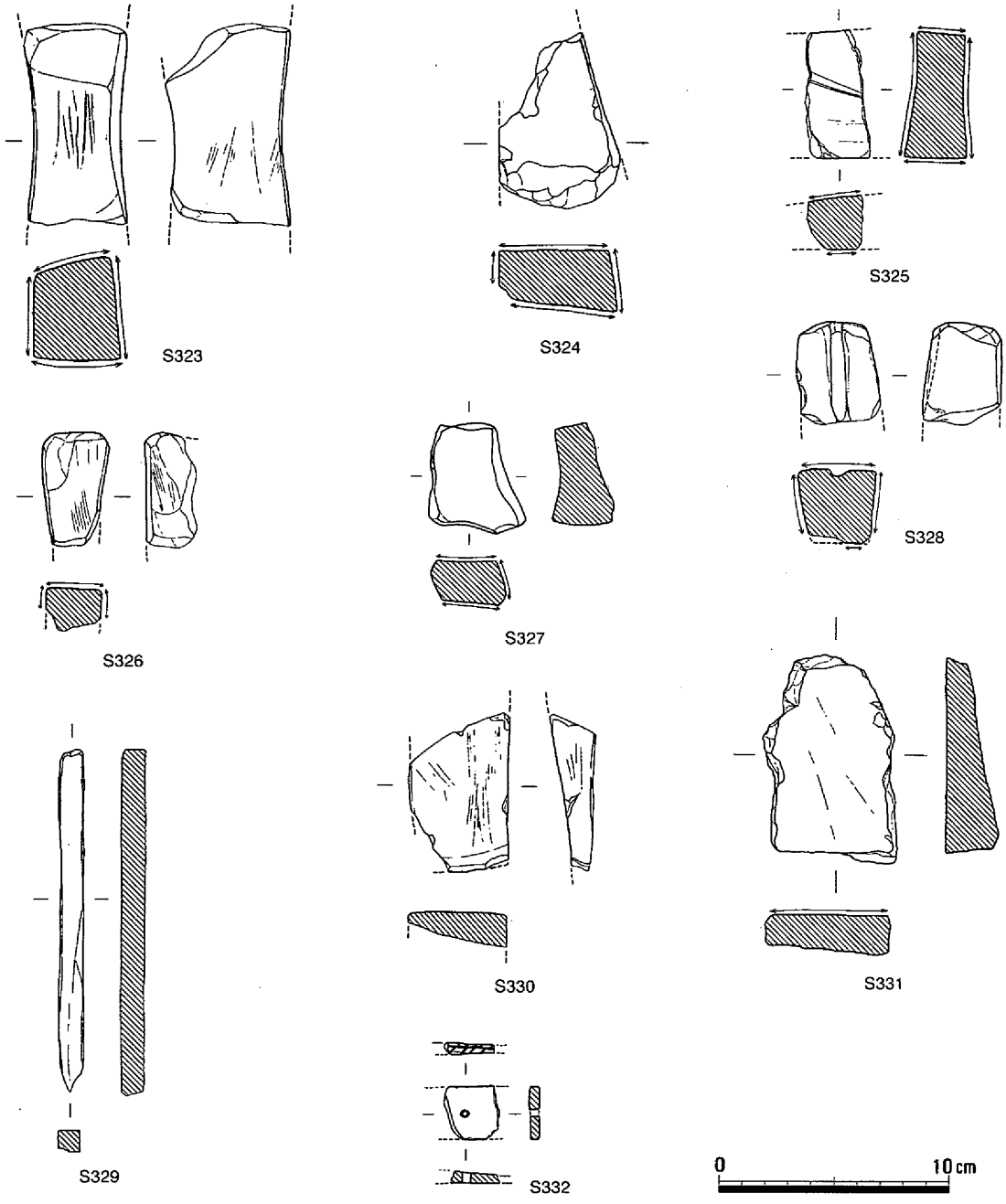
3993は上下不詳であるが須恵質の円面硯、3994は須恵質の風字硯である。



第1101図　その他の遺物（12）

3996～3998は、京都府の「篠窯跡」で生産された鉢と考えている。口径は約21～22cmで、器高は約10cmである。いずれも口縁端部には強いヨコナデが施されている。色調は、3996が灰白色で白っぽく、3997・3998は灰色である。3998の底部外面は糸切りである。胎土には、いずれも僅かではあるが黒色粒を含んでいる。時期は、10世紀前葉～中葉ではなかろうか。

3999・4001・4006・4012・4014・4015は緑釉陶器と考えている。3999は小椀である。4001の底部外面は糸切りである。これらは須恵質で釉は淡い黄緑色である。4006・4007は椀である。4006は釉の色調が濃緑色で、胎土は灰色、須恵質である。近江産で、10世紀後半頃と考えている。4007は色調がオ



第1102図　その他の遺物（13）

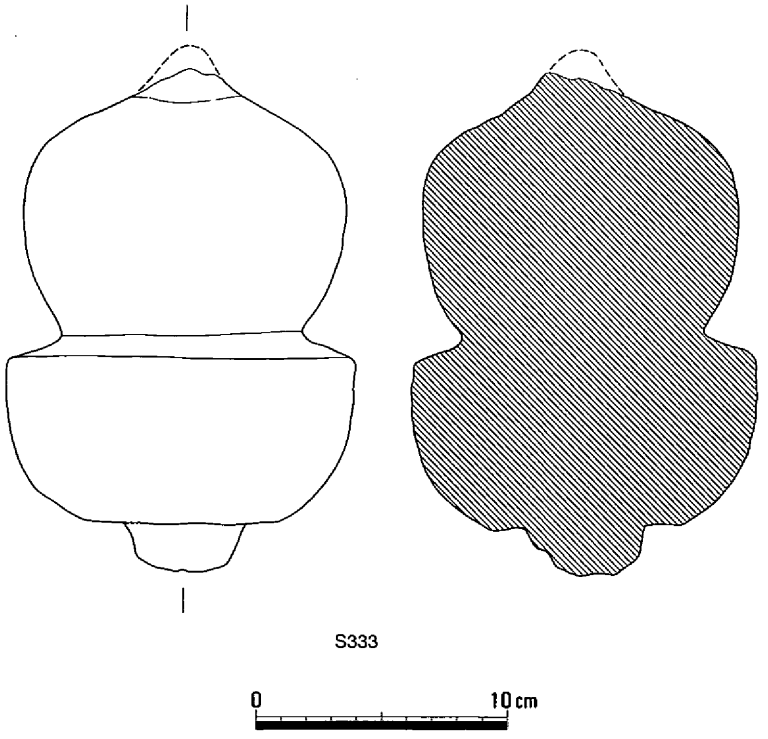
リーブ色で、胎土は灰色、須恵質である。京都産で、９世紀後葉であろうか。4008は皿であろうか。底部は円盤状高台で、内外面とも釉がかかっている。釉の色調は薄黄緑で、胎土は乳白色、土師質である。京都産で、９世紀中葉と考えている。4009は椀であろう。底部は削り出しの蛇の目高台で、全面施釉である。釉の色調は黄緑色で、胎土は灰色、須恵質である。京都産で、９世紀後葉頃と考えている。4010～4012は椀である。高台は、削り出しの輪高台である。いずれも、釉の色調は薄黄緑色で、胎土は淡灰色、須恵質である。釉は、4012は全面施釉であるが、4011は底部外面のみ釉のかかっていない部分がある。4010は部分施釉で、底部外面には釉は確認できない。京都産で、10世紀代のものであろう。4013・4014は椀で、高台は削り出しの輪高台である。釉の色調は黄緑色で、胎土は灰色、須恵質である。4013の底部外面には施釉されておらず、4014の底部外面は一部分のみ施釉されている。京都産で、10世紀後半であろうか。4015は、輪花椀で、高台は明確ではないが貼付の有段高台である。釉の色調は濃緑色で、胎土は橙灰白色、土師質である。近江産で、10世紀後葉であろう。

4000・4002～4005は灰釉陶器である。いずれも椀と考えられる。4002は三角形の貼付高台で、外面には施釉されていない。4003～4005は三日月高台に近く、底部外面以外には施釉されている。K90窯式で、９世紀後葉であろうか。

4016～4020は白磁碗で、4021は同案窯系青磁皿、4022は白磁皿である。

4023～4038は土師器高台付椀である。口径は約15cmから10cmのものがあり、時期は12世紀中頃から14世紀初頭と考えている。4039～4042は無高台の土師器椀である。14世紀代のものであろう。4043～4048・4050～4055は土師器小皿である。底部外面調整は、ヘラ切りとナデのものとがある。4049は杯である。4056・4057は脚台として用いられたのではなかろうか。

4058～4065・4067は鍋である。全体の器形がわかるものは少ないが、4060は片口になっている。4063・4064の口縁部内面にはヘラ描き沈線による斜格子が施されている。類例には、3482・3668がある。4066は瓦質の羽釜である。鍔の上面にふきこぼれ痕が観察できる。



第1103図　その他の遺物（14）

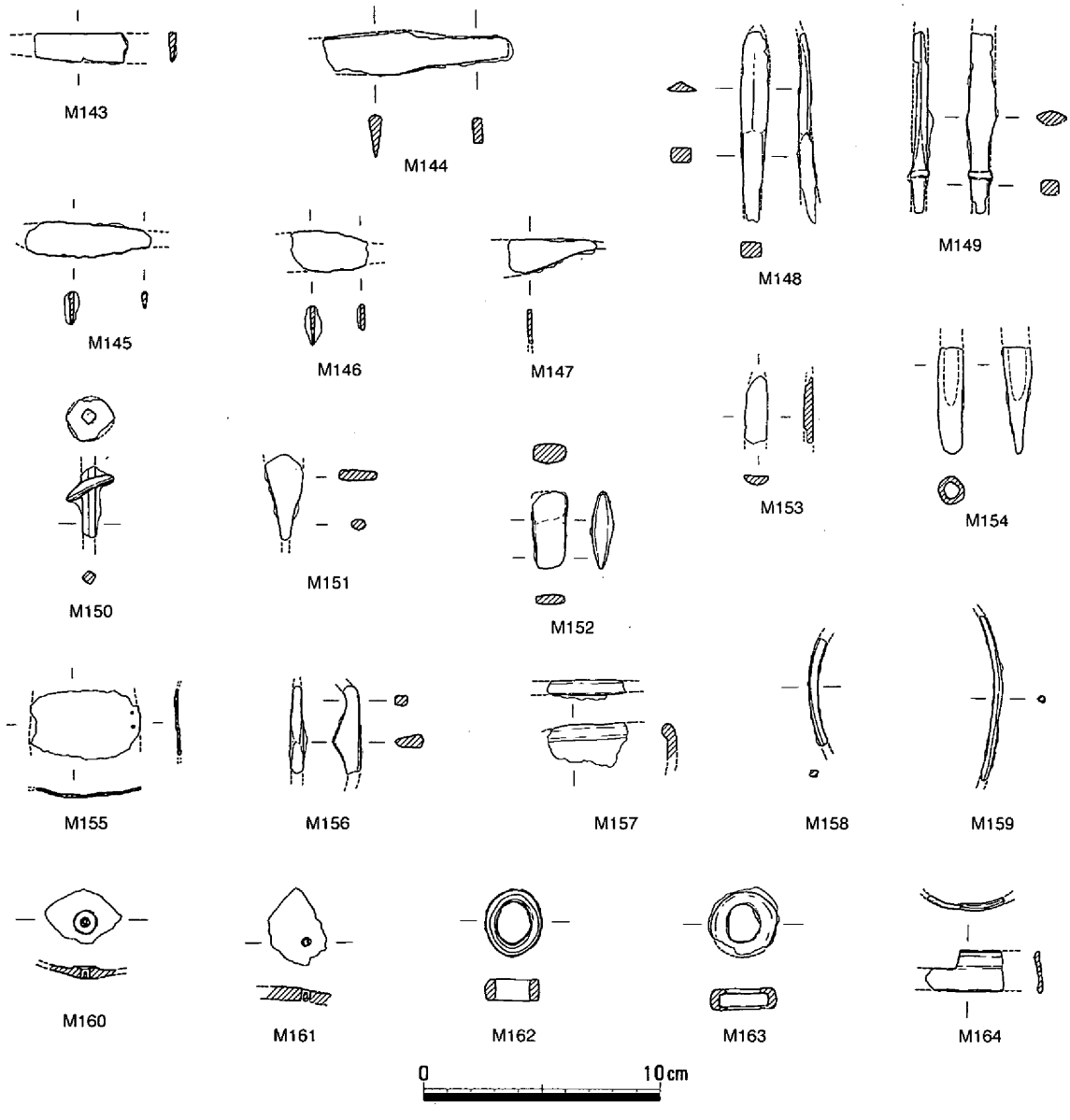
4068は魚住焼の壺である。口縁部まで平行タタキがみられる。4069・4070は亀山焼で、壺と擂鉢である。4071は常滑焼の甕、4072は備前焼の壺、4073・4074は魚住焼の鉢である。4075は瓦質の火舎と考えている。

瓦(第1095～1101図、写真130)

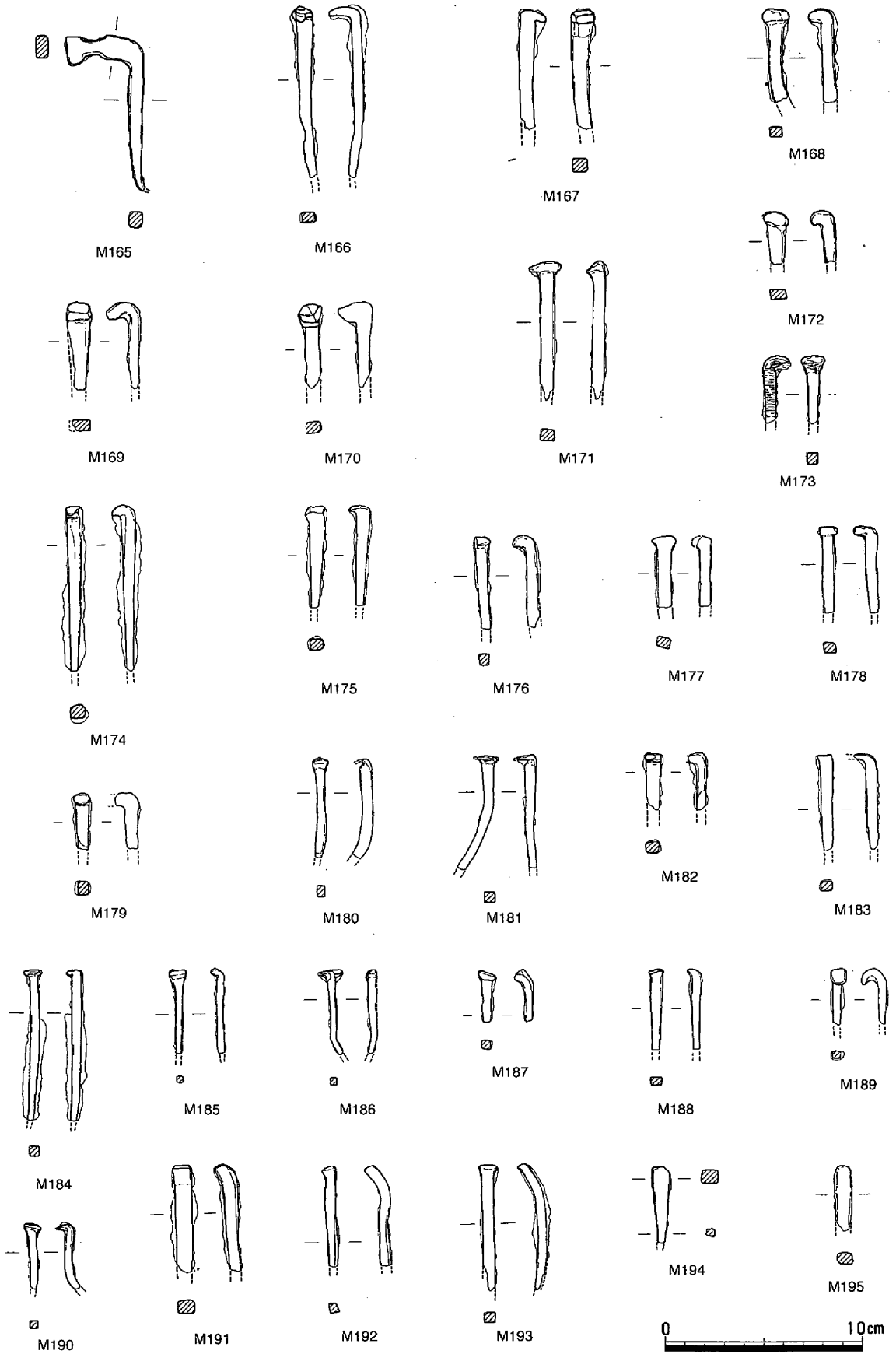
4076～4089は軒丸瓦である。4076は小片であるが、二本の圏線と複弁が確認できる。平城京

6225亜式であろうか。4077～4079は宝相華紋軒丸瓦である。紋様意匠の点では間弁の形状に二種類あり、4077と4078・4079とに分類することができる。また、4077は淡灰色でやや硬質であるのに対して、4078・4079は灰白色で軟質である。器壁も両者で相違が認められる。4077の内面には縄目タタキが残っており、4079の内面はナデである。加茂政所遺跡で推定できる寺院（「加茂政所廃寺」と呼ぶ）の主要軒丸瓦と考えている。4080・4081は同一個体である。全体の紋様は不明であるが、外区には圏線と珠紋や唐草紋が確認できる。4082は太い突線の連弁と蓮子が一つ確認できる。焼成不良で、軟らかい。4081・4082は平安時代であろうが、確実な時期はわからない。4083～4089は巴紋軒丸瓦である。

4090～4105は軒平瓦である。4090と4091は別個体であるが、紋様意匠は共通している。中心飾りから左右に均整唐草紋が描かれており、平城京6663型式のなかで理解できる。残存している凸面はナデで、凹面には一部布目が観察できる。4092は小片のためよくわからないが、唐草紋と圏線が確認でき



第1104図　その他の遺物（15）

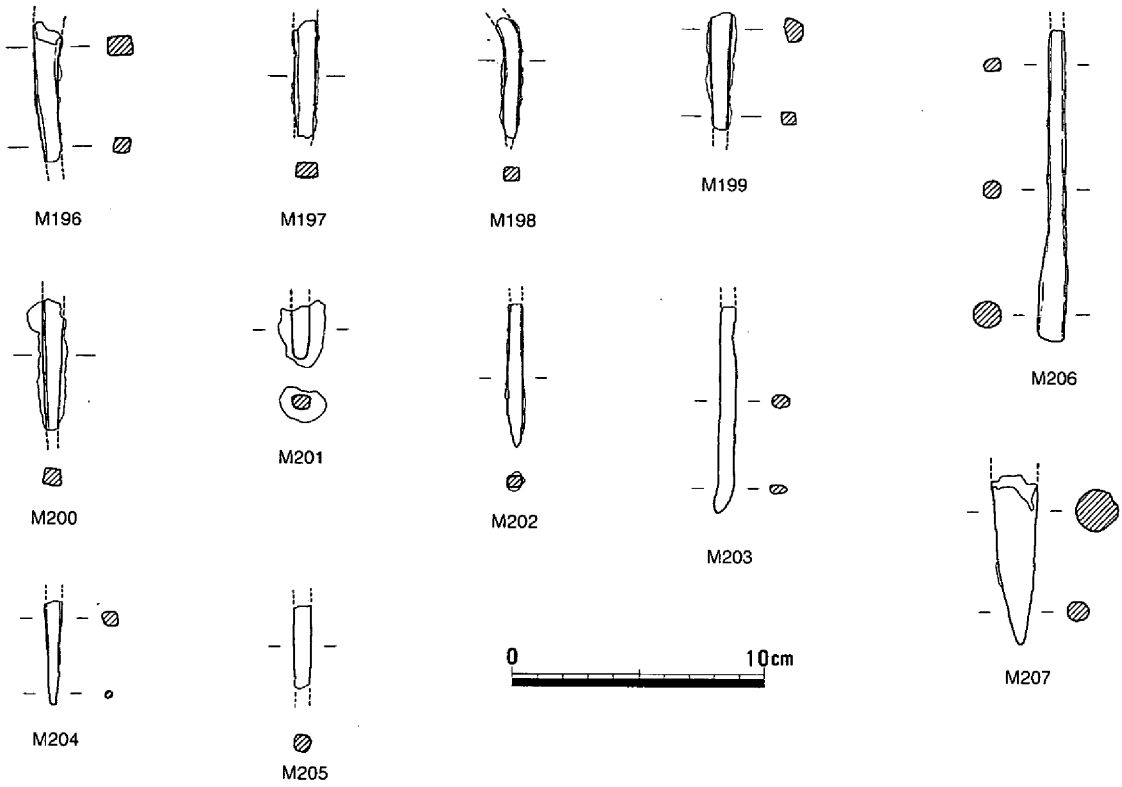


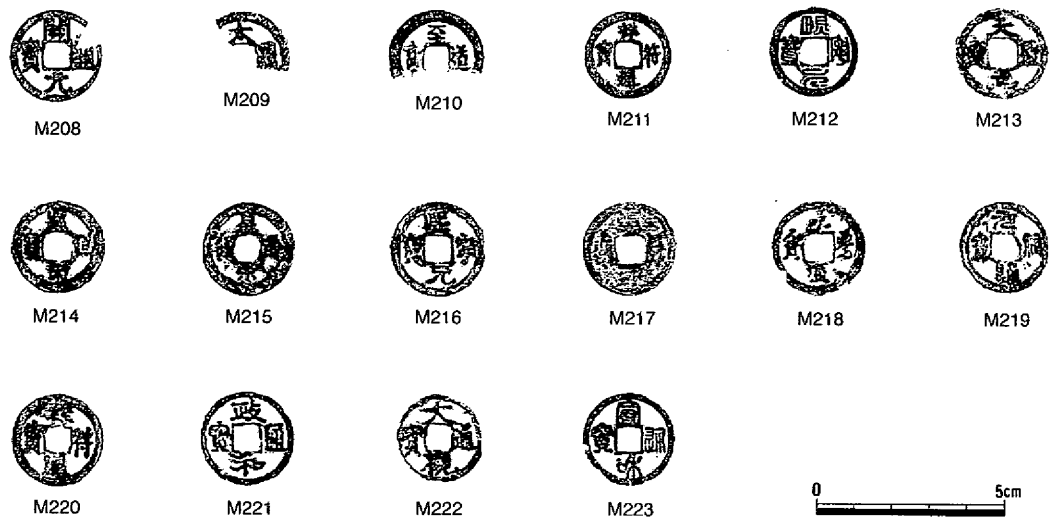
第1105図　その他の遺物（16）

る。圏線が三重なのが特徴的で、美作国分寺跡出土の平城京6663型式に類例がある。

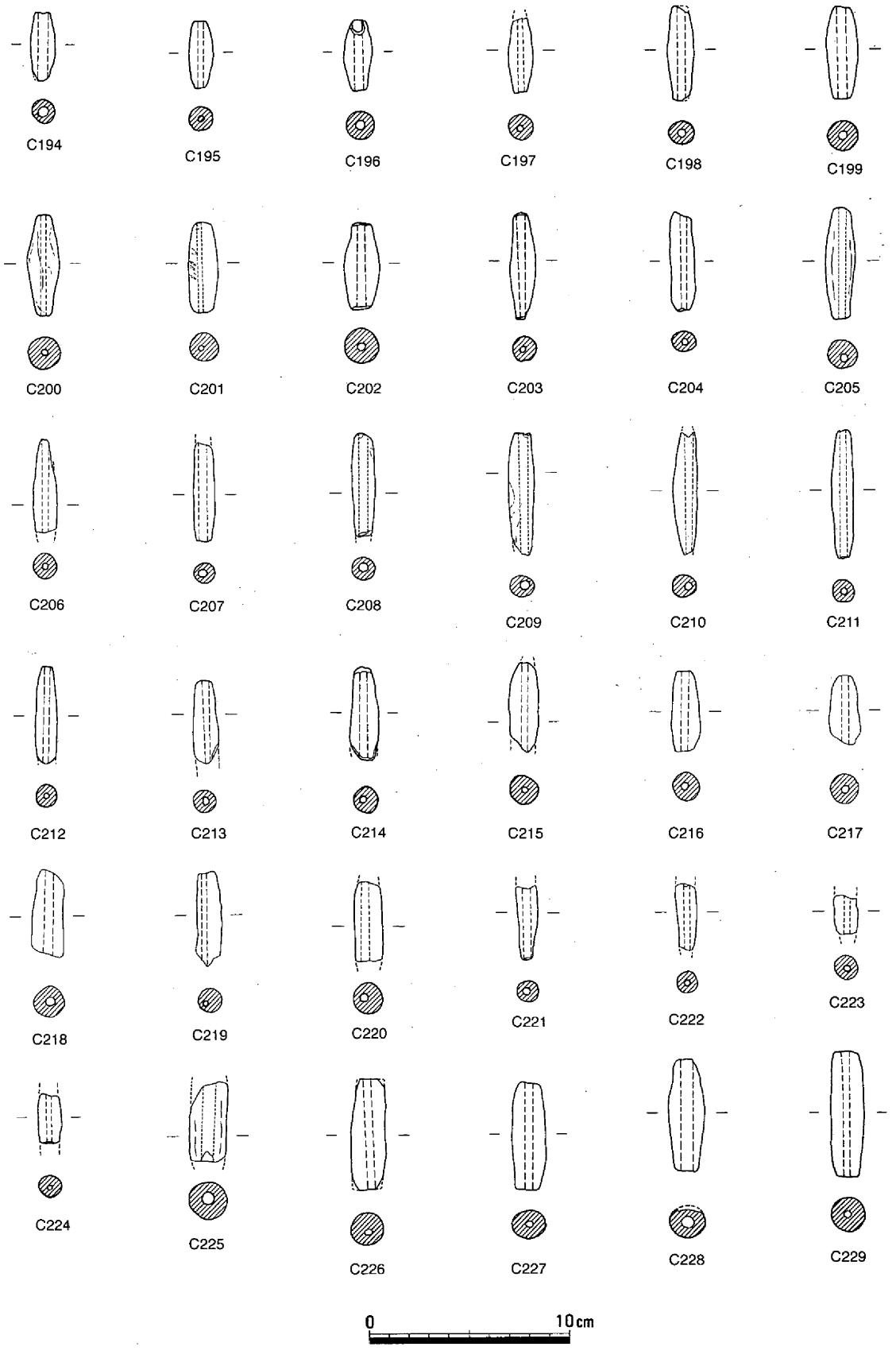
4093～4098の紋様意匠は共通しているが、細かい部分には相違が認められる。たとえば、4095と4096とでは右端の蕨手紋に違いがある。また顎の形式においてもそれぞれが異なっている。凸面の調整については、判明するものでは、4095・4096がケズリで、4096には縄目タタキが残存している。「加茂政所廃寺」の主要軒平瓦の一つと考えている。

4099～4111の紋様は、平城京6663型式系統の唐草紋を陰陽逆転したものと考えている。4099と4100には汜傷が確認できるが、そのうちの右端の傷については、4100の方が小さい。また紋様も4100の方

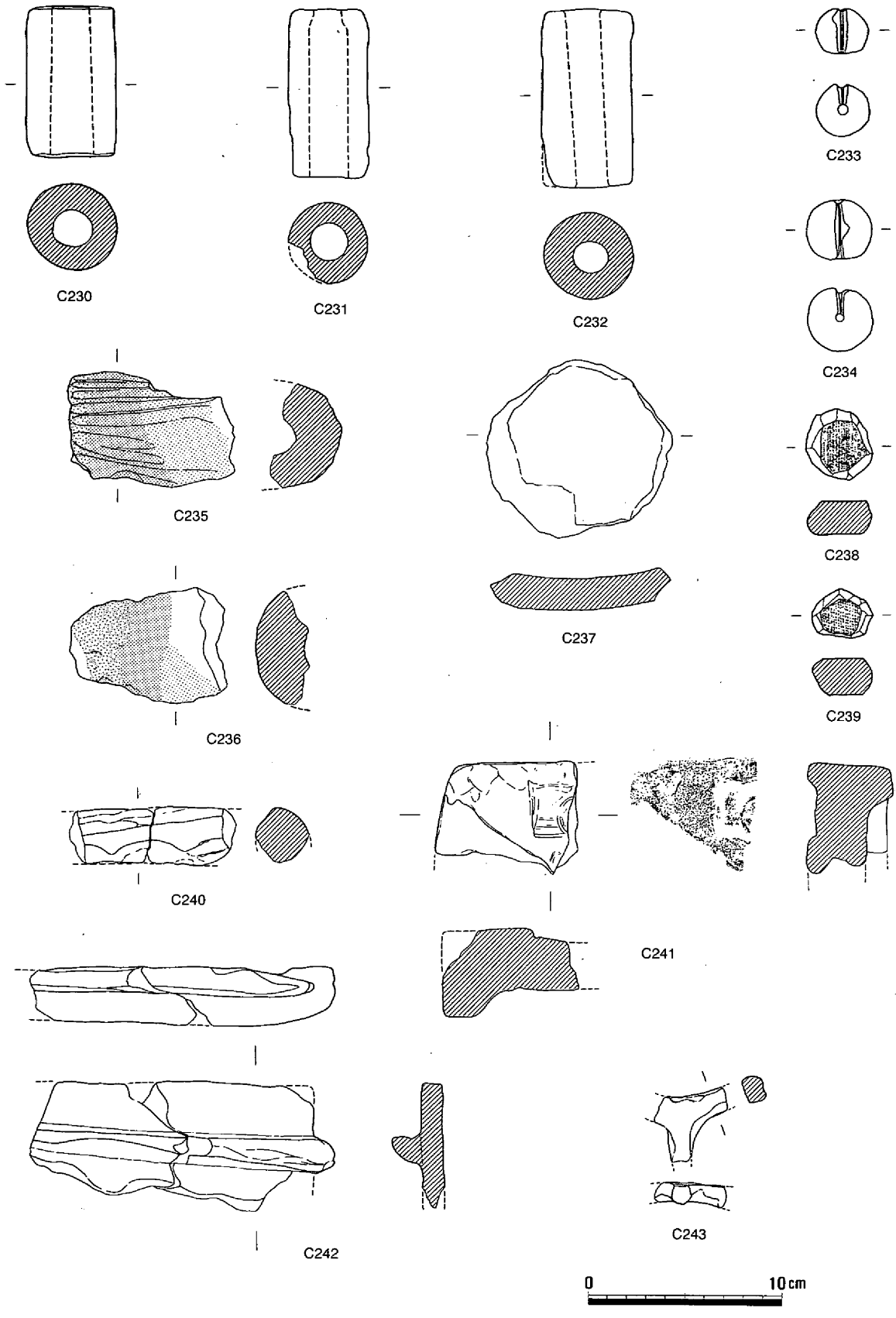




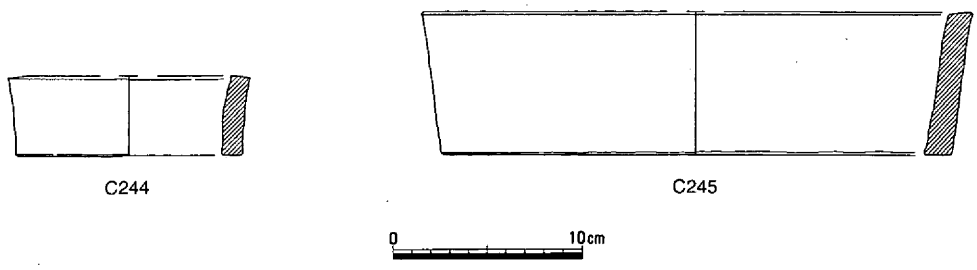
第1106図　その他の遺物（17）



第1107図　その他の遺物（18）



第1108図　その他の遺物（19）



第1109図　その他の遺物（20）

がシャープに感じる。顎の形状も相違しており、凸面の調整も4099が縄目タタキで4100がケズリ・ナデである。4100の方が古いのであろうか。「加茂政所廃寺」の主要軒平瓦の一つと考えている。

4102は圏線のみが確認できる。焼成は硬質で、凹面は丁寧なナデで、凸面には細かい縄目タタキが観察できる。4103～4105は中世のものと考えており、4103は燻し焼き風である。

4106～4110は丸瓦、4111～4115は平瓦である。4106と4114は亀山焼であろうか。

4116は鬼瓦の一部ではなかろうか。

石製品・鉄製品・土製品（第1102～1109図、写真131，132）

石器については古代・中世包含層から出土したものを図示しているが、古代・中世以外のものも含まれているかもしれない。S326・327・330・331は砥石で、328は筋砥石である。S333は五輪塔の空風輪である。

鉄器についても古代・中世以外のものが含まれているかもしれない。用途がわからないものも多いが、それぞれについては「金属器一覧表」を参照されたい。M208～223は古銭である。判明した種類については「金属器一覧表」に示している。

土製品についても古代・中世以外のものが含まれているかもしれない。C194～232は土錘である。C233・234は土玉、C236は羽口、C237～239は円板状土製品と考えている。C240は動物形土製品ではなかろうか。C241・242は不明、C243は三叉トチン、C244・245は焼き台ではなかろうか。（平井）

第７節　近世の遺構・遺物

（１）概要

当遺跡の近世以降の様相は、弥生時代から中世までの状況とは大きく異なっている。これまでみてきたように、第１微高地は中世段階までは集落の一端であり、第２微高地は古墳時代までは集落であり、古代から中世にかけては寺院等が存在していたと考えられる。ところが、近世になると、検出される主な遺構は、掘立柱建物１棟、井戸１基、土壙２基、柱穴列１基、溝８条、水田１面である。このように、他の時期と比較すると、遺構数・種類とも極めて少ない状況である。これは、水田が弥生時代以来の第１微高地と第２微高地の間の低位部はもとより、これまで微高地であった部分にも営まれるようになり、ほぼ全体が水田化していた可能性を示唆すると思われる。

これらの遺構は、残念ながら時期を明確にできる遺物を伴っていない。このため、中世から近世にかけてのこのような現象が、どの時点に起こったかは明らかでない。しかし、当遺跡の寺院などの廃絶時期を考えると、近世初頭以後に水田化が進んだと考えることが可能である。

図示した遺物は、土器５点、石製品２点、金属製品７点、土製品３点と少ないが、これは近世以降の出土遺物そのものが非常に少なかったためである。（柴田）

（２）掘立柱建物

掘立柱建物18（第1113図、写真47－１・２）

掘立柱建物18は、第２微高地の北東寄りに位置する。平面形は長方形で、棟方向はほぼ東西でN-82°-Wとなる。規模は、桁行701cm・梁間411cmを測り、面積は28.7㎡である。柱穴は、径35～40cm程度の円形である。底面の高さにはかなりばらつきが認められるが、傾向としては北辺の方が高く、南辺は低くなっている。いずれの柱穴でも径15cm前後の柱痕跡が確認されており、Ｐ２からは黒豊島石製の石臼Ｓ334が出土している。遺構の時期は近世の中でとらえられると思われる。（柴田）

（３）井戸

井戸６（第1114図）

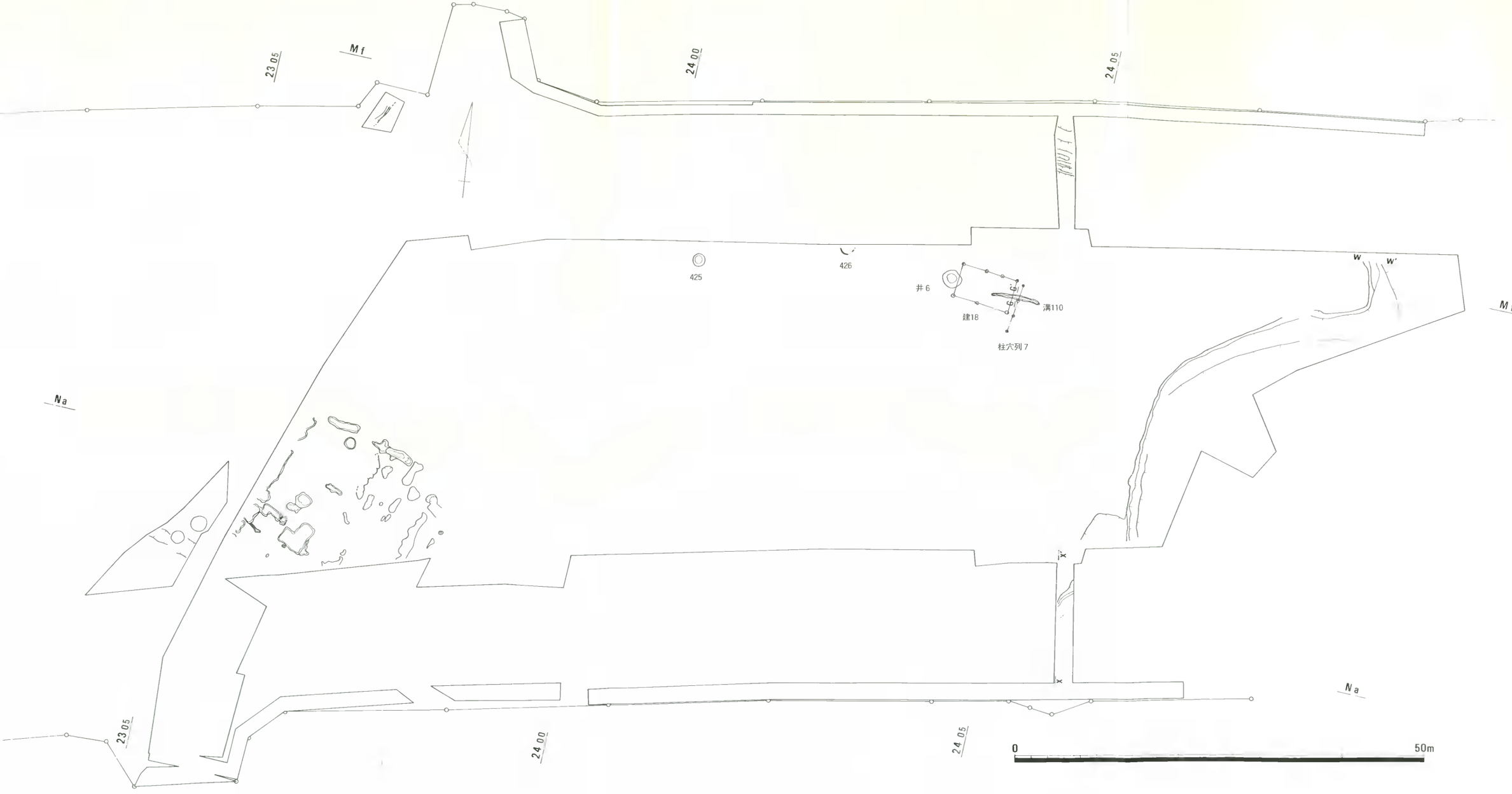
井戸６は、第２微高地の北東寄り、掘立柱建物18の西辺に接する。掘り方上面は径240cmを測るが、中程から狭まり、径128cm以下になる。断面は漏斗形を呈するが、底面までは検出できなかった。出土遺物は、平瓦4117を図示したが、小皿片なども認められた。時期を確定できるような遺物は確認されなかったが、中世から近世におさまると思われる。（柴田）

（４）土壙

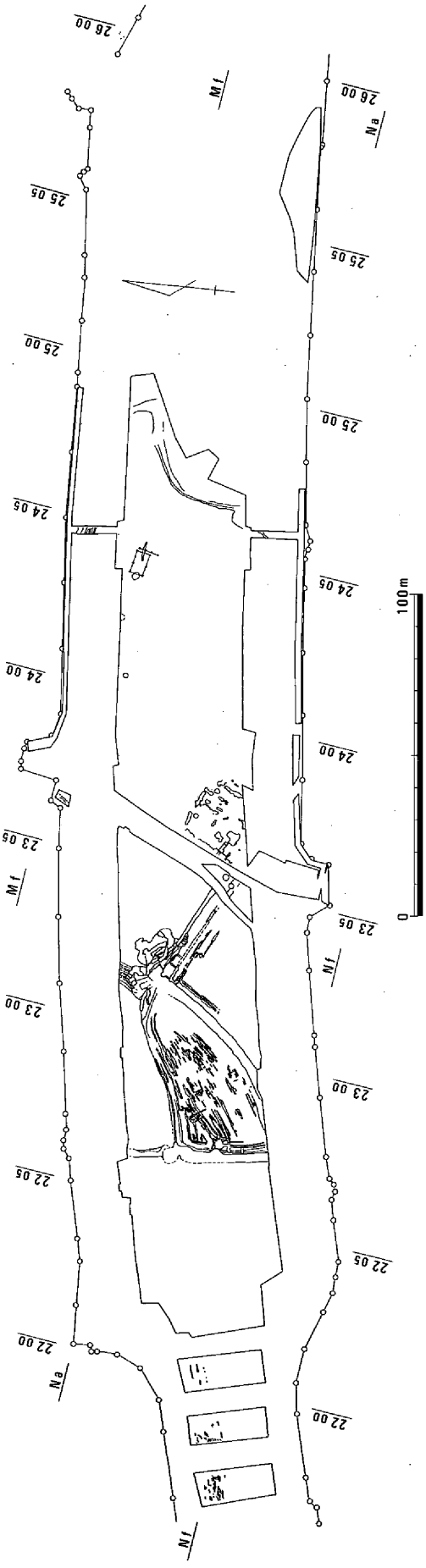
土壙425（第1115図）

Ｍｆ24区の北西から検出された平面円形の土壙で径約150cm、深さ68cmを測る。断面は筒状を呈し、埋土はいずれも粘質土からなる。遺物は僅かながら陶器片が出土していることから近世に属す遺構と判断された。（江見）

第1110図　近世遺構全体図（1）（1/400）



第1111図　近世遺構全体図（２）(1/400)



第1112図　近世主要遺構全体図（1/2,000）

土壙426（第1116図）

土壙426は、第２微高地中央の北寄りに位置する。掘り方の北半分は調査区外であるが、平面は円形と推定される。残存状況は非常に悪く、深さは13cm程度である。

時期を確定できるような遺物は確認されなかったが、近世におさまると思われる。（柴田）

（５）柱穴列

柱穴列７（第1117図）

柱穴列７は、第２微高地の北東寄りに位置する。掘立柱建物18の東辺に隣接し、方向性などからも、これに関連する遺構と思われる。柱穴は径30cm前後の円形で、径15cmの柱痕跡も確認されている。柱穴から小皿片なども出土しているが、時期を確定できるような状況ではなく、時期は中世から近世におさまると思われる。（柴田）

（６）溝

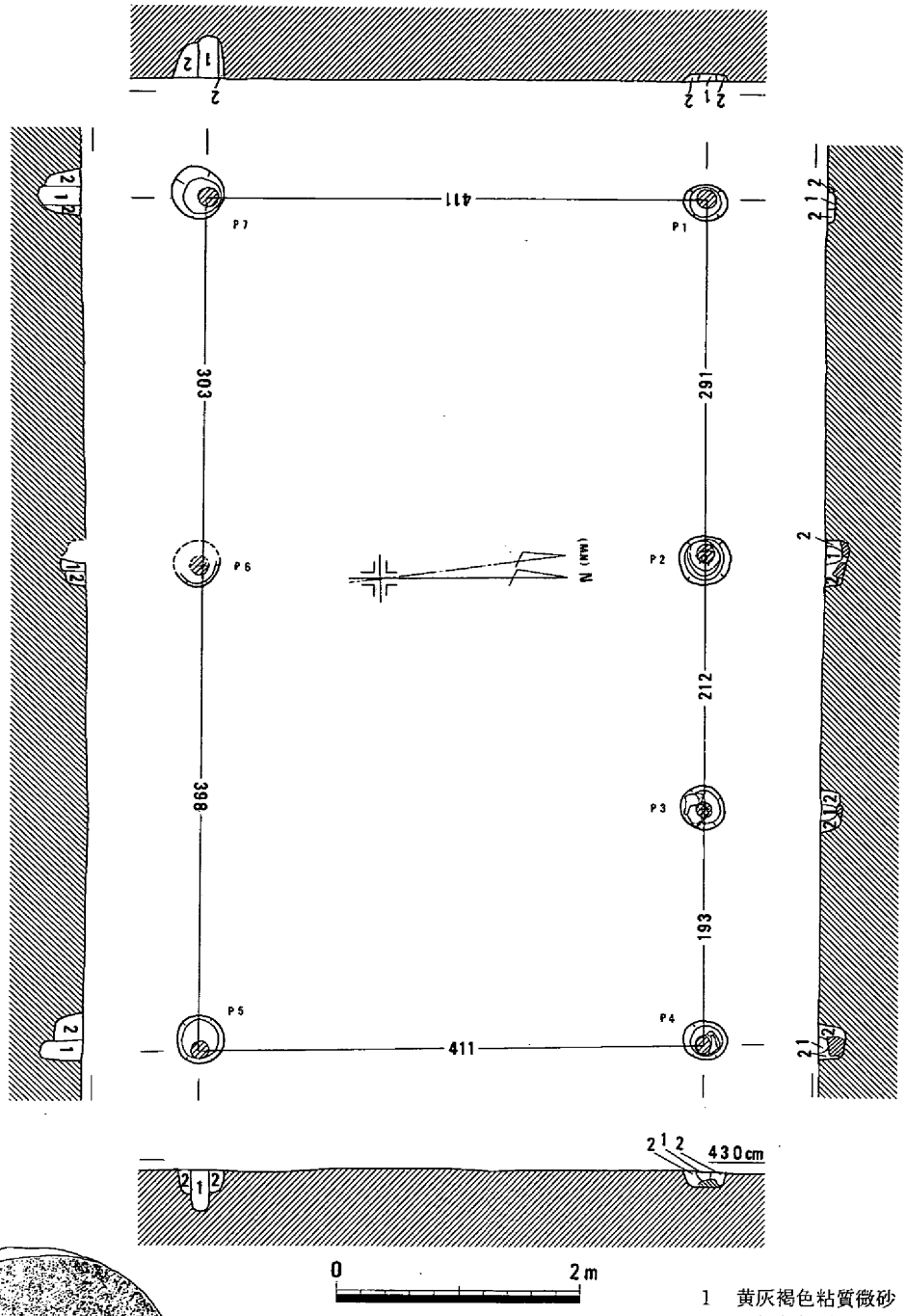
溝103（第1118図）

第１微高地のＮ22区北東部に位置する。検出できた幅は２～2.5ｍで、深さは約80cmであった。断面形は、逆台形の部分が多かった。方向はほぼ南北方向で、南東部に拡がる水田との境には細い土手が築かれていた。

遺物は土器や土錘Ｃ246が出土した。溝72を掘り直した可能性が高く、水田に伴う水路であろう。近世まで機能していたと考えている。（平井）

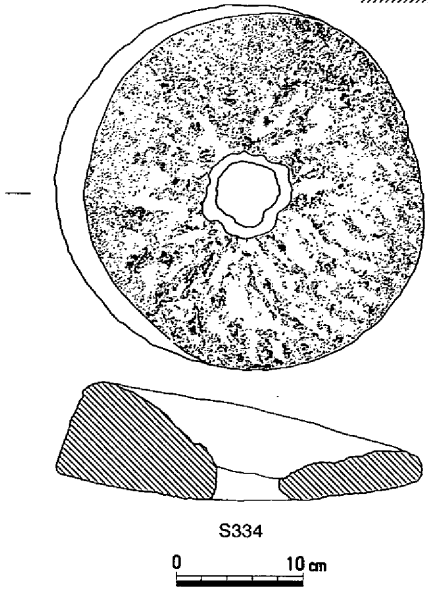
溝104（第1119図、写真48－１）

Ｎ22区とＮ23区の境界付近で検出された。北東から南西方向に流れる大形水路で、ゆるやかに湾曲している。幅は３ｍ前後で、深さは１ｍ程度を測った。溝底の高度からみて水は北から南へ流れていたと考えられるが、検出部分40ｍで、北端と南端の底の高度差は20cm程に過ぎない。埋土は３層で、しだいに埋まっていったとみられるが、第２層は粗砂層で洪水による一時の埋没が考えられる。溝の北端は溝105や溝109と接続し、連続する水路体系を形成し



1　黄灰褐色粘質微砂
2　灰褐色粘質微砂

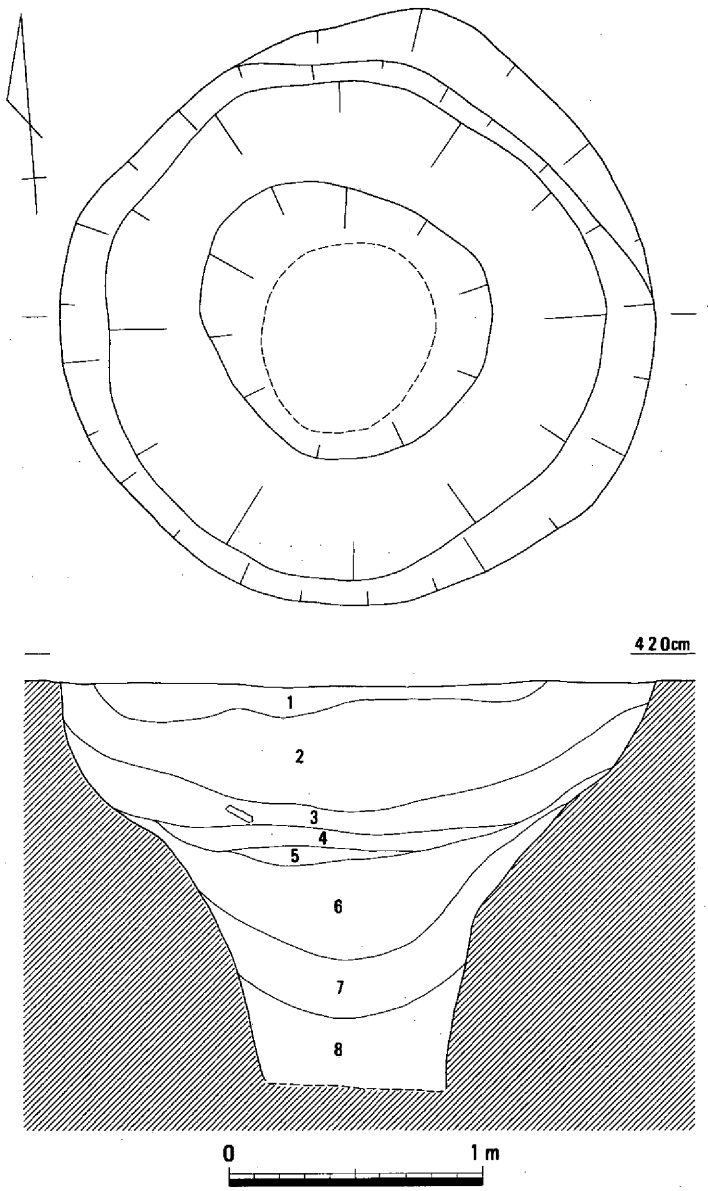
第1113図　掘立柱建物18（1/60）・遺物

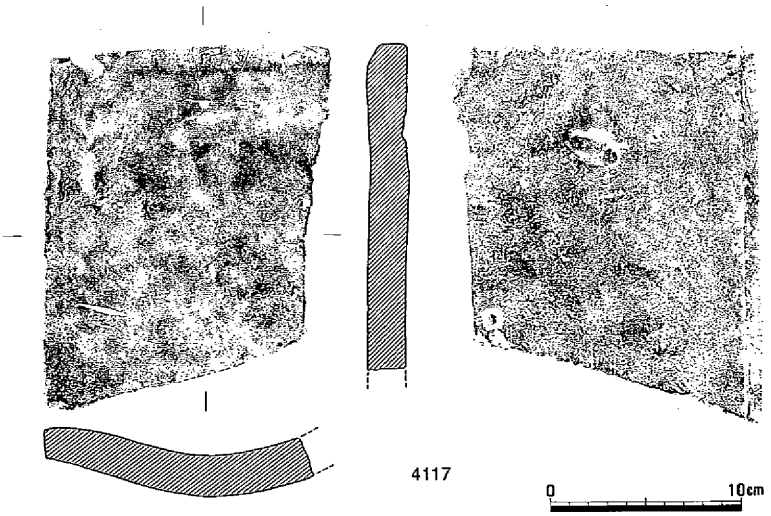


ていたとみられる。溝105や溝109との接点付近には大きな落ち込みがあったが、それらは階段状を呈し、洪水が水田から水路に流れ落ちる時に浸食によってできた可能性が強い。（岡本）

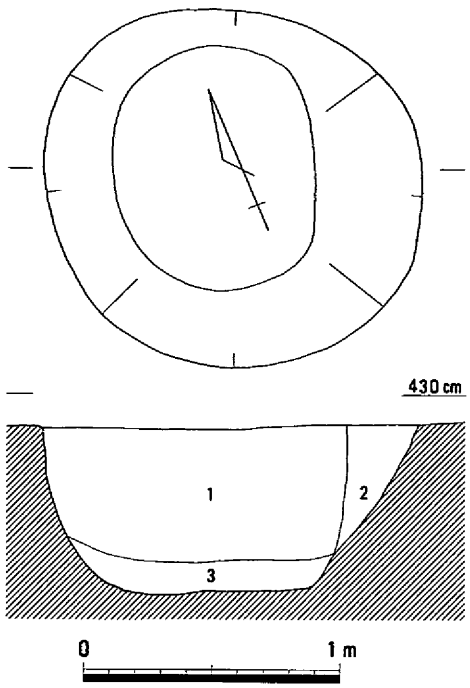
溝105（第1120図）

溝104の北端から直線的に東へ延びていた。幅1ｍ、深さは30～40cmを測った。東西間で溝底の傾斜はなかった。溝106と4ｍの間隔で平行し、この間が農道とみられる。（岡本）



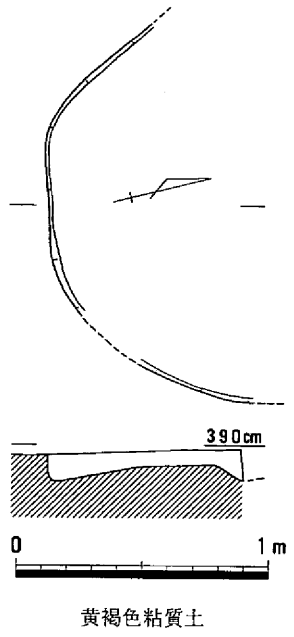


第1114図　井戸６（1/30）・遺物

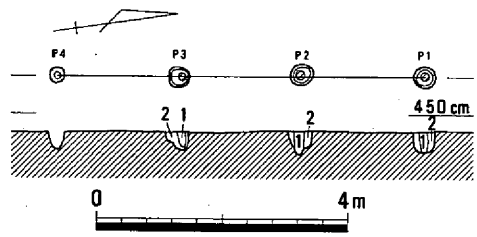


1　淡茶灰色粘質土（淡灰色砂を含む）　3　淡青灰色粘質土
2　淡茶褐色粘質土（淡灰色砂を含む）

第1115図　土壙425（1/30）



第1116図　土壙426（1/30）



1　黄灰褐色粘質微砂
2　灰褐色粘質微砂

第1117図　柱穴列7（1/120）

溝106（第1121図）

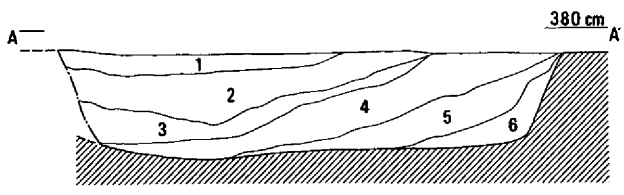
大部分を後世の削平によって消失しているが、幅90～110cm、深さ10cm前後の溝と推測された。溝105と対になって平行していたとみられるが、底の高度では溝106が30cm程高かった。　（岡本）

溝107（第1121図）

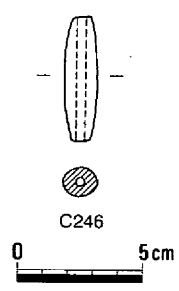
2mの間隔をもって溝106の南に平行していたものと思われるが、大部分は削平され、深さ2～3cmの痕跡を残すにすぎなかった。西端部からみれば溝106と同規模だったと考えられる。　（岡本）

溝108（第1122図）

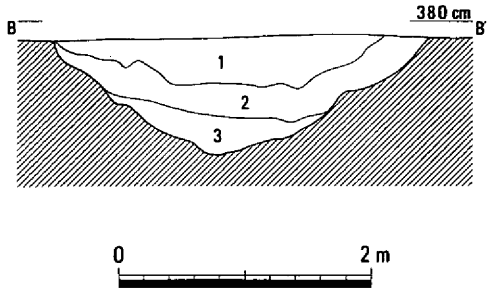
溝104の東に約2mの間隔をおいて平行する溝である。北端は溝107と直角に接続し、底面が続いて



1　青褐灰色粘質微砂
2　青灰色粘質微砂
3　暗青灰色粘質微砂
4　暗青灰色微砂
5　青灰色細砂土
6　青灰色微砂土

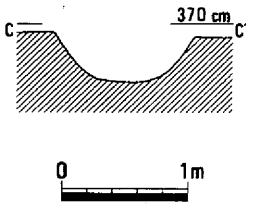


第1118図　溝103（1/60）・遺物

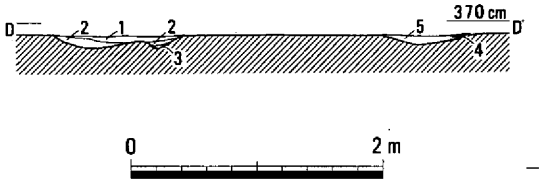


1　暗青灰色（５B ４/１）粘性砂質土
　（上部にマンガンを含む）
2　灰色（7.5Y６/１）砂質土
3　暗青灰色（10BG４/１）粘性砂質土

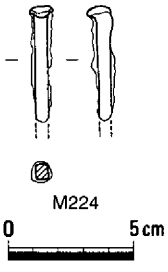
第1119図　溝104（1/60）



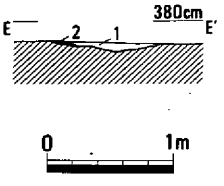
第1120図　溝105（1/60）



1　灰黄褐色（10YR５/２）粘性砂質土
2　にぶい黄褐色（10YR５/３）粘性砂質土
　（マンガンを多く含む）
3　にぶい黄褐色（10YR５/３）砂質土
　（マンガンを多く含む）
4　にぶい黄橙色（10YR６/３）粗砂
5　にぶい黄橙色（10YR５/３）粘性砂質土

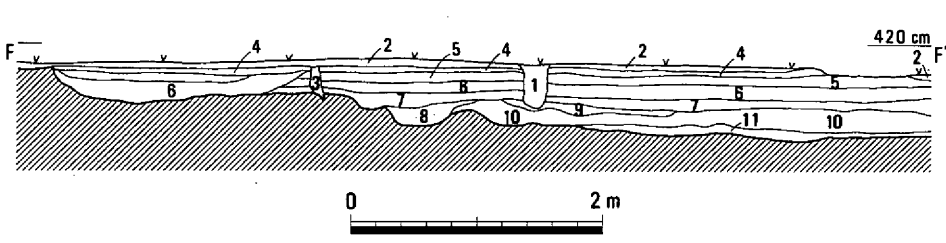


第1121図　溝106・107（1/60）・遺物



1　灰黄褐色（10YR５/２）粘性砂質土
2　にぶい黄褐色（10YR５/３）砂質土
　（マンガンを多く含む）

第1122図　溝108（1/60）



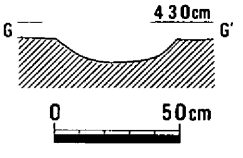
1　暗渠
2　現耕作土
3　暗渠
4　灰白色砂質土
5　黄灰白色砂質土
6　灰白色砂質土
7　淡灰色砂質土
8　灰白色細砂
9　淡黄色微砂
10　灰黄色微砂
11　淡灰黄色微砂

第1123図　溝109（1/60）

いた。幅が１m前後で、深さ数cmの底面の中央にさらに細い溝が刻まれていた。この形状は溝107と等しく、同時性を思わせる。　（岡本）

溝109（第1123図）

溝104のすぐ北方で検出された溝群である。６条の溝が平行していたが、調査区北壁の土層観察から同時存在ではなく、徐々に西方向へ掘り直されたものと判断できた。最新の溝は現代の耕土を除去した段階で検出された。微高地と低位部の境界にあり、弥生時代以来の地割りを残す。　（岡本）



第1124図　溝110（1/30）

溝110（第1124図）

溝110は、第２微高地の北東寄りに位置する。掘立柱建物18の中央付近から、棟方向と同じように

のびる。出土遺物は図示していないが、小皿片や瓦片などが認められる。時期を確定できるような状況ではないが、中世から近世におさまると思われる。（柴田）

（7）水田

水田6

第1微高地と第2微高地との間の低位部に位置する（第1110図）。今回「加茂政所遺跡」として報告する発掘調査区は、調査前には一部の宅地部分を除いて水田が拡がっていた。この現水田耕作土を除去するとその下には床土と呼んでいる砂質土が5～10cm存在している。微高地部分では、その下に黄色砂質土の基盤層が認められ、この面でおもに弥生時代～近世に至る遺構・遺物が検出できる。近世については、基盤層を掘り込んでいる土壙や溝、柱穴等が検出できるが、水田層は確認できない。しかし水田がなかったというのではなく、後世に削平されているか、現在の水田が近世以降継続していると考えるべきであろう。

一方、低位部に当たる部分では、水田層と考えられる水平堆積層が確認できており、これを水田6として報告する。水路に囲まれた範囲が水田6で、上面では鋤痕跡と思われる細く浅い溝が確認できている。同様の溝は橋脚7・8・9調査区北半部でも検出した。（平井）

（8）河道

河道（第1041・1042・1125図）

中世段階に、北西から南東方向にかけて第2微高地と第3微高地を洗掘し、さらに両者を分断したと考えられる河道は、前節でも若干述べたように、埋没の過程で一部水田となっていた時期があると思われる。海抜約350cmを上面とする14層（第1041図）はその可能性が高いが、その範囲は明らかでない。このため、さらに東に近世段階の河道が残存する可能性がある。また、これを覆う灰色粗砂の13層は洪水砂と考えられ、唐津系陶器皿4118、C247、剃刀M225、鉄釘M226・227、不明鉄器M228などが出土している。14層以下では近世の遺物は認められない状況で、この層から上は近世から現在まで水田であり、場所によっては近世の河道も存在した可能性も考えられる。

4118は、溝縁皿の口縁部で、江戸時代初頭のものである。C247は、背中に米俵を載せ、飾りを付けた馬を表現しており、裏面は剥離している。（柴田）

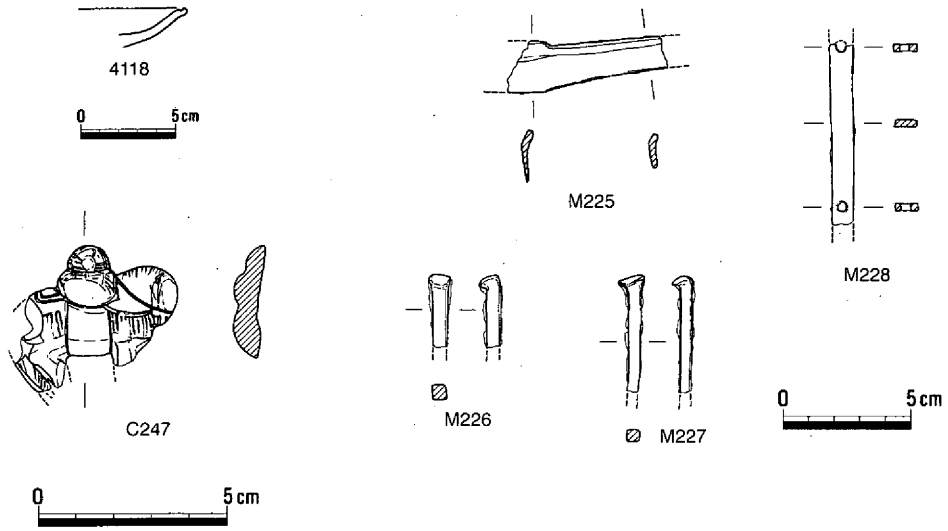
（9）その他の遺構・遺物

遺構

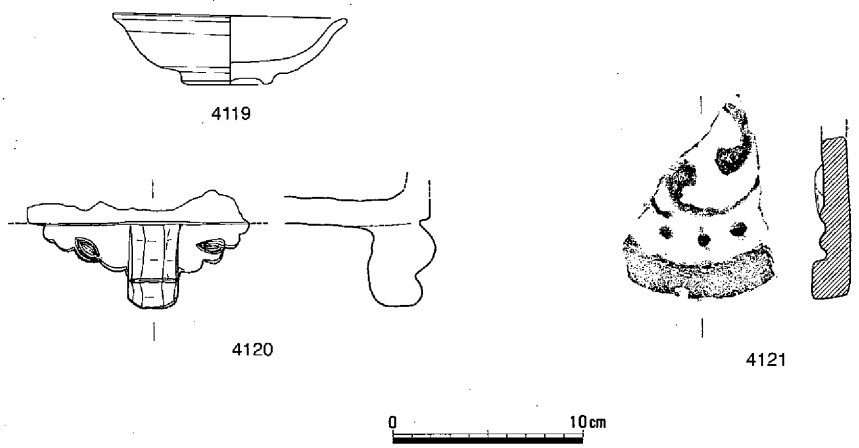
遺構については、第1111・1112図に図示しただけで、詳述していないものがいくつかあるので、ここで概要を述べておく。第2微高地の南西端にみられる不整形な土壙あるいは溝は、いずれも深さ30cm前後で、近世～近代と思われるものである。第2微高地北端の細長い調査区で、東西方向に確認されているのは、6条の浅い溝で、深さ3～5cmを測る。近世以降の水田などの耕作痕跡ではないか思われる。

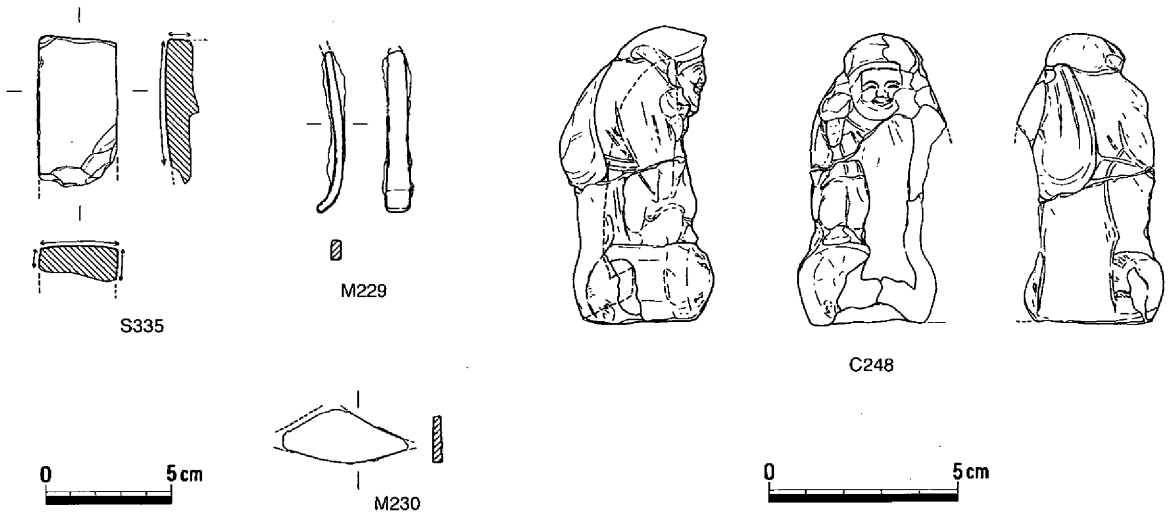
遺物（第1126図、写真132）

図示した遺物は、唐津系陶器皿4119、瓦質の香炉4120、軒丸瓦4121、砥石S335、毛抜きM229、火打金M230、土人形C248である。この他には少量の陶磁器片が確認されているが、量は極めて少ない。



第1125図　河道遺物





第1126図　その他の遺物

4119は、胎土目積みと思われる。4120は、「いぶし瓦」のような焼成で、中世から近世のものと思われる。C248は大黒天像である。右手に打出の小槌を持ち、福袋を左肩にかけた大黒天が、米俵の上にのっている。下面には、焼成時の破損を防ぐ穿孔が施され、表面にはわずかに銀光沢が認められる。体格は極端な肥満を示しておらず、江戸時代前半のものと思われる。（柴田）

第２章　加茂政所遺跡のまとめ

第１節　遺跡の変遷

ここまでに、山陽自動車道建設に伴って発掘調査を実施した加茂政所遺跡の概要について、時代ごとに報告を行ってきた。当遺跡の調査面積は12,686㎡におよび、３つの微高地（本来は２つであったと思われる）と２ケ所の低地を調査している。そこで検出された遺構は、弥生時代前期から近世におよび、竪穴住居135軒（建て替えを含めると144軒）、掘立柱建物18棟、井戸６基、袋状土壙72基、焼成土壙11基、土壙426基、土壙墓13基、土器棺墓12基、火葬墓２基、柱穴列７列、柱穴多数、土器溜り３ケ所、溝110条、道路状遺構２基、水田６面、畑２面があげられる。遺物は、整理箱にして1,487箱を数え、土器の他にも、石製品や金属製品、土製品、ガラス製品などが出土している。

もちろん、これらは、遺跡のごく一部の状況である。現在の微地形を観察すると、第２微高地の北に位置する高松原古才の集落南端が最も高く、それを中心とした微高地が存在するように思われる。これを重視すると、第２微高地はその南端近くに相当すると考えられる。しかし、河道や造成などによる地形の変化がどの程度あり、時代ごとの旧地形をどれほど復元できるかわからない。実際、調査区の南側には「政所」という集落が現存しており、第２微高地はその北端近くであるとも、ほぼ中央であるとも考えられる。いずれにしても、検出された遺構や遺物から多くを語ることは、現状では非常に困難であることは疑いない。

ここでは、その点を念頭におき、報告に従って遺跡の変遷を時期別に大まかに追ってみることにする。なお、遺構や遺物についての個別の問題点や議論は後節で触れることにする。

弥生時代前期～中期

最も古い遺物は縄文時代晩期の土器であるが、遺構は確認されていない。しかし、土器表面の磨耗はあまりなく、集落が近くに存在する可能性はある。最初に遺構が確認されるのは第１微高地で、弥・前・Ⅲの土壙１基である。この時期のものは、この土壙の他には遺構・遺物とも検出されていない。隣接する津寺遺跡でも、これと同時期の土壙１基が報告されており、さらに弥・中・Ⅰの竪穴住居や掘立柱建物も認められている(1)。当遺跡でも、低位部１で弥・中・Ⅰの土器が出土しており、調査区外で住居等が存在する可能性があると考えてよいであろう。

本格的な集落の展開を確認できるのは、弥生時代中期中葉からである。遺構は、第２・３微高地で検出されるが、第１微高地では認められない。該当遺構は、竪穴住居12軒・掘立柱建物１棟・袋状土壙19基・土壙214基・土壙墓４基・土器棺墓１基・溝７条・水田２面などである。竪穴住居や袋状土壙は、弥・中・Ⅱのものが多いが、袋状土壙や土壙ではⅢのものも多く確認されており、連綿と集落が継続していたことがうかがえる。遺跡のごく一部の調査ではあるが、調査区内での住居などの遺構分布から、集落の基本的な単位をある程度想定することも可能と思われる。また、第１・２微高地の間にある狭い低地では、水田畦畔や水路が検出されており、この集落で生産活動が行われていたことを示している。

他に、この時期の食生活や生業の一端を示す遺構も検出されている。それは、数種類の貝や魚骨などを出土する土壙である。各遺構で貝等の出土量の多少はあるが、10基の土壙が確認されている。種類の鑑定結果からは圧倒的にヤマトシジミが多く、なかでも殻長が20㎜程度と比較的小さいものが多いことが明らかになっている。これらの点から、周辺下流域の足守川加茂Ｂ遺跡や吉野口遺跡よりもさらに奥まった汽水域での採取が予想され[2]、居住地域と採取場所があまり離れていないことが推測できる。これらを廃棄した土壙は、第２微高地の南側に偏って分布する傾向が認められる。ゴミ捨て穴であるためか、一見すると住居から極力離れた位置を選んでいるように見える。一方、この集落内では墓も確認されており、竪穴住居５・６の周囲で４基の土壙墓と土器棺墓１基が検出されている。以上のように、当集落では、生産から消費にわたり、完結した活動が行われていたものと思われる。

分銅形土製品は、出土遺構の明確なものが12点、その他に９点が出土している。これらの内、第２微高地の西端で出土したものは３点のみで、他はすべて東側の住居がまとまる地点からの出土である。特に竪穴住居６の周辺では、住居に隣接する袋状土壙10・土壙123・柱穴７で計７点、竪穴住居７では、住居内と隣接の袋状土壙６・土壙166を合わせて３点が出土している。

弥生時代後期

弥生時代後期も、中期に引き続き第２・３微高地に遺構が集中している。検出遺構は、竪穴住居40軒（建て替えを含めて46軒）、袋状土壙53基、土壙97基、土壙墓１基、土器棺墓11基、土器溜り２ケ所、溝11条、水田２面である。調査地区内では、掘立柱建物や井戸は確認されていない。これについては、隣接の津寺遺跡でもよく似た状況を示している。井戸の有無や多少については、自然環境なども影響するであろうが、掘立柱建物については、集落の性格を考える上で大きな問題を含んでいると思われ、注意される。

弥・後・Ⅰ～Ⅲの遺構分布については、中期と同様で第２微高地の東側に集中し、土地利用状況に大きな変化は見られない。ところが、Ⅳの時期になると状況が著しく変化し、それまで中心的であった地点に南北方向の溝15が掘削され、竪穴住居などはその西側全面に展開するようになる。このような占地状況は古墳時代に引き継がれる。また、水田は拡大し、中期と同様に第１・２微高地間の低地の他に、津寺遺跡と第１微高地の間にも営まれるようになる。これらには畦畔や水路、島状高まりも確認されている。おそらく後期後半では、集落規模は拡大方向へ向かっており、溝の掘削などを含む新たな土地開発を考えることができるのではないだろうか。

遺構では、中期から見られた袋状土壙が弥・後・Ⅰ～Ⅱに集中して多数検出されているが、Ⅳの時期には見られなくなる。一方で、この時期の土壙には、平面長方形で規模が大きく、壁面が垂直方向に立ち上がるものが９基認められる。これは「方形土壙」と考えられ、当該期の集落の基本的な遺構と思われ、近隣の足守川加茂Ｂ遺跡[3]や高塚遺跡[4]でも確認されており、興味深い点である。

注目される遺物では、銅釧と顔のある分銅形土製品がそれぞれ２点ある。銅釧は、弥・後・Ⅰ～Ⅱの竪穴住居44から円環形銅釧Ｍ８、弥・後・Ⅳの土壙310から有鉤銅釧M12が出土している。顔のある分銅形土製品は、竪穴住居44からＣ80、弥・後・Ⅰの袋状土壙47からＣ89が出土している。特に後者は丁寧なつくりである。

古墳時代前期

古墳時代前期も、概ね弥生時代後期の状況を引き継ぎ、第２・３微高地に遺構が集中している。検出された遺構は、竪穴住居24軒（建て替えを含めて25軒）、土壙４基、溝９条、水田１面で、他の時

期と比較すると、遺構数・種類とも少ない。遺構の時期は古・前・Ⅰ～Ⅱが多く、Ⅲの遺構はよくわかっていない。また、調査区内では、この時期でも掘立柱建物や井戸は検出されていない。

第２微高地での遺構分布は、弥・後・Ⅳとほとんど同じであるが、竪穴住居はさらに西に偏った分布となる。また、南北溝は位置を東に移して掘削されている。古・前・Ⅰ～Ⅱにかけての大きな変化は、分布上ではあまり顕著ではない。水田については、第１微高地の西側については不明であるが、第１・２微高地間の水田は耕作が続くようである。しかし、これに伴う溝は、弥生時代のものとは異なり、水田の東側のみで確認されている。

古・前・Ⅰでは、71のように円形の竪穴住居が認められる。これらは弥生時代終末から継続して存在するか古い形態を残すものであると考えられ、基本的には方形へと移行する。遺構からまとまりを見出だすことは困難であるが、集落規模は弥・後・Ⅳと比較すると、縮小して弥生中期から後期前半程度に戻っているようである。

古墳時代中期～後期

古墳時代中期は、第２・３微高地で竪穴住居６棟が認められるが、この内のいくつかは、出土遺物が少なく、中期に属するかどうかが明確でないものもある。古・前・Ⅲからこの時期にいたる状況には不明な点が多いが、津寺遺跡で指摘されているように、洪水などによる生活環境の著しい変化が影響していると思われる。そして、中期のある段階に再び小規模な集落が営まれると考えられる。

後期になると、比較的海抜高の低い第１微高地にも集落が展開するようになる。遺構は竪穴住居55軒・掘立柱建物２棟・焼成土壙11基・土壙19基などがあり、集落内は溝で区画されている。また遺構内や周辺から、フイゴの羽口や鉄滓が出土していることも見逃せない。古墳時代後期の集落状況は、津寺遺跡でもほぼ同じであり、集落内で鍛冶を行っていた可能性が高いことが指摘されている。

遺構の時期では、６世紀後半～７世紀前葉が圧倒的に多い状況が認められ、前葉から中葉にかけて減少するようである。津寺遺跡でも、同様な集落の消長が想定されており、７世紀中葉から後半の様子は不明である。ただし、当遺跡では調査区の南側に７世紀後葉の遺物が認められるようである。隣接する両遺跡で、集落の消長や低地への進出、遺構組成が酷似することは、この時期の集落が、広い範囲で同じ性格をもって大規模に、そして一定期間継続して展開したことを示すであろう。今回の調査範囲では、その理由を明らかにする資料は得られていないが、単に自然な人口増加だけでなく、津寺遺跡の護岸施設をはじめとした何らかの大規模土木事業の実施やそれらを主体的に為し得るような特別な存在による計画的な集落構成を想像させる。

第１・２微高地の間は、古墳時代前期まで水田として利用されていたが、この時期での状況は不明である。確認されていないだけなのか、別の場所に水田が拡がるのか、あるいは当集落ではそのような生産を主な活動としては行わなかったのかは明らかでない。

中期から７世紀初頭の遺物では、特筆するものはあまりないが、それ以後の遺物には、飛鳥様式の軒丸瓦と火頭形三尊塼仏がある。いずれも寺院との関連を思わせる遺物であるが、残念ながら同時期の遺構や遺物に伴うものではない。

古代～中世

古代では、掘立柱建物８棟・井戸１基・土壙56基・火葬墓２基・柱穴列５列・土器溜り１ケ所・溝17条・道路状遺構２基・畑２面、中世では、掘立柱建物６棟・井戸４基・土壙33基・土壙墓８基・柱穴列１列・溝46条・低位部２ケ所・河道などが検出されている。以上のように、遺構を古代と中世に

分離しているが、当遺構の一部が寺院を構成するという性格上、存続期間などが明確ではないため、実際は両時期に跨がるものもかなりあると思われる。第１・２微高地の間は、古代には畑として利用され、中世での利用状況は不明であるが、水田あるいは畑などであったと思われる。また、第２微高地の東に河道が入っており、後述する「加茂政所廃寺」の東限がこれを利用したものかどうかは明らかでない。なお、この時期以後は、第３微高地では遺構が検出されていない。

奈良時代の状況については不明な点が多い。第１微高地で２棟、第２微高地で３棟の掘立柱建物がこの時期に想定されているが、出土遺物などからの時期判断は困難で、別の時期になる可能性もある。他には土壙340・361や溝43があげられるが、確実に奈良時代と思われる遺構は少ない。ただし、遺物の出土状況では、調査区の南端に比較的多くの奈良時代の遺物が認められる傾向があり、調査区外に遺構が検出されることも十分考えられる。現状では、津寺遺跡で確認されている「長方形区画溝」の周囲には水田や畑が拡がり、その間に掘立柱建物が点在する様子が想像される。

平安時代以降になると、遺構や遺物が多く認められるようになるが、土器については全時期を通じて多いわけではなく、大小３つの波がある。１つは９世紀後半から概ね11世紀前半を中心とする平安時代前葉から中葉で、この時期の良好な遺物が多く確認されている。２つ目は12世紀～14世紀代で、遺物・遺構とも多く、第２微高地東側では土壙375（梵鐘鋳造遺構）や区画溝の存在、河道へ廃棄された多量の瓦や灯明皿、仏具などから遅くともこの時期には一定の体裁を整えた寺院が所在していた可能性が高い。３つ目はこの後の15～16世紀頃である。この時期には明確な遺構が少なく、土器もごく少量であるが、瓦が若干認められる。

「最初の波」である９世紀後半から11世紀前半の遺構としては、第１微高地では土壙336・339・345・346・350など、第２微高地では井戸１、土壙359・364・367～369・372・378・388・389・391、溝52・53、火葬墓１・２などがある。第１微高地は集落の南端に相当するようである。第２微高地は北東端に土器などを廃棄した状況が認められ、隣接して直交するような溝も見られる。この南に火葬墓が位置し、さらに南端には井戸や土壙が認められる。微高地の中央部分が空白であるが、時期不明の柱穴なども多く存在しているので、建物など何らかの施設があったと考えてよいと思われる。次の時期に所在が明確になる寺院が、確実にこの時期に遡るかどうかは明らかではない。しかし、平安宮内裏出土のものと同笵の軒瓦や延喜通寶を伴う火葬墓、硯、墨書土器の存在、黒色土器や緑釉陶器などが比較的まとまって出土するなど、在庁官人や開発領主などに関係する小規模な寺院（小堂）や屋敷地などの施設が調査区内あるいは近辺に存在した可能性は高いであろう(5)。

「第２の波」である12世紀～14世紀代の遺構としては、後に詳述するように、第２微高地で寺域を形成する区画溝が検出され、梵鐘を伴う瓦葺きの寺院や、僧坊が存在したことが明らかで、これらの建築は若干遡る可能性もある。一方、第１微高地では南側まで集落や墓域が拡がっている。寺域は２時期あり、古段階ではおよそ30m四方程度、新段階では36.5×25mを測り、南側に本堂と鐘楼などが配置され、北側は僧坊であったと思われる。寺院運営は、南北朝頃までが最盛期で、室町中葉以降には廃れたようである。梵鐘については、古段階で寺域の南西隅付近の土壙375で鋳造されており、そのままあまり遠くない位置に設置されたのではないかと思われる。古段階のこの寺院で主に使用された軒瓦は、備前南部と備中南部を中心に分布するもので、同笵関係が確認されたものもある。

この時期は山上寺院が活発になる時期であるが、平地に位置する当寺院は、国衙領などの管理に関わっていたか、あるいはそのような施設に付随する寺院であった可能性をあげることができる。

15～16世紀代は、瓦が確認されているが、土器はほとんどない。古代以来の寺院が、この時期まだ存在して活動していたのか、廃墟になっていたのか、建物が取り壊されていたのかなど、どのような状況であったかは明らかでないが、瓦を葺く小規模な建築物（小堂のようなものか）が建築されていた可能性も考えられる。ただし、土器が非常に少量であることは、そこが既に、以前のように僧坊などを伴って生活を行うような場ではなかったのであろう。

近世以降

近世以降は、掘立柱建物１棟・井戸１基・土壙２基・柱穴列１列・溝８条・水田１面と非常に少なく、遺物も同様である。この時期以後、この地域は主に水田として利用されていたと考えられ、これまでの微高地も耕地化していくものと思われる。

室町時代後半までに建てられたと思われる諸々の建築物は、近世初頭までに廃棄されたと考えることが可能である。この地点は、鴨庄城の北西600ｍに位置し、原古才村の南に接する。まさに当城と原古才村を真っすぐ結んだ線上にあたる。原古才村は、備中高松城水攻めの際、羽柴左衛門督・山内猪右衛門・伊藤掃部・花房助兵衛らの陣が置かれており、それに近接する寺院あるいは寺院跡地が戦略上無関係でないことは十分に想像可能である。このように想像を逞しくすれば、一つには、天正年間の織田勢と毛利勢による備前・備中境での攻防によって、この地に建てられた建物などは決定的に廃棄された可能性も指摘できる。いずれにしても、江戸時代以降における当地の耕地化については、「加茂村」が関ケ原の合戦後に旗本花房領となって、農地を拡大していく流れを暗示しているのではないだろうか。

なお、当寺院が想定される地点には、現在は山陽道建設によって移転しているが、「薬師堂」というお堂が所在していた。近世の文献や地名等では、ここに寺院などは確認できないが、周辺が耕地化されていく過程にあっても、何らかの形で信仰の対象となるものが残っていたと思われる。（柴田）

註

(1) 津寺遺跡については、以下の報告書が岡山県教育委員会から刊行されている。
「三手遺跡　津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90　1994年
「津寺遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98　1995年
「津寺遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104　1996年
「津寺遺跡４」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116　1997年
「津寺遺跡５」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127　1998年

(2) 本書第三分冊の金子浩昌「加茂政所遺跡出土の動物遺体」

(3) 「足守川加茂Ａ遺跡　足守川加茂Ｂ遺跡　足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94　岡山県教育委員会　1995年

(4) 当遺跡と同様に山陽自動車道建設に伴い発掘調査を実施。後年に報告書刊行予定。
『岡山県埋蔵文化財報告』20　岡山県教育委員会　1990年、同　21　1991年

(5) ９世紀後半は藤原保則による備中国の立て直しや主基国の卜定が行われている。当地域で同じころの遺構・遺物が認められることは注意される。
門脇禎二「第五章　古代吉備の官人群像」『岡山県史』第三巻古代Ⅱ　1989年

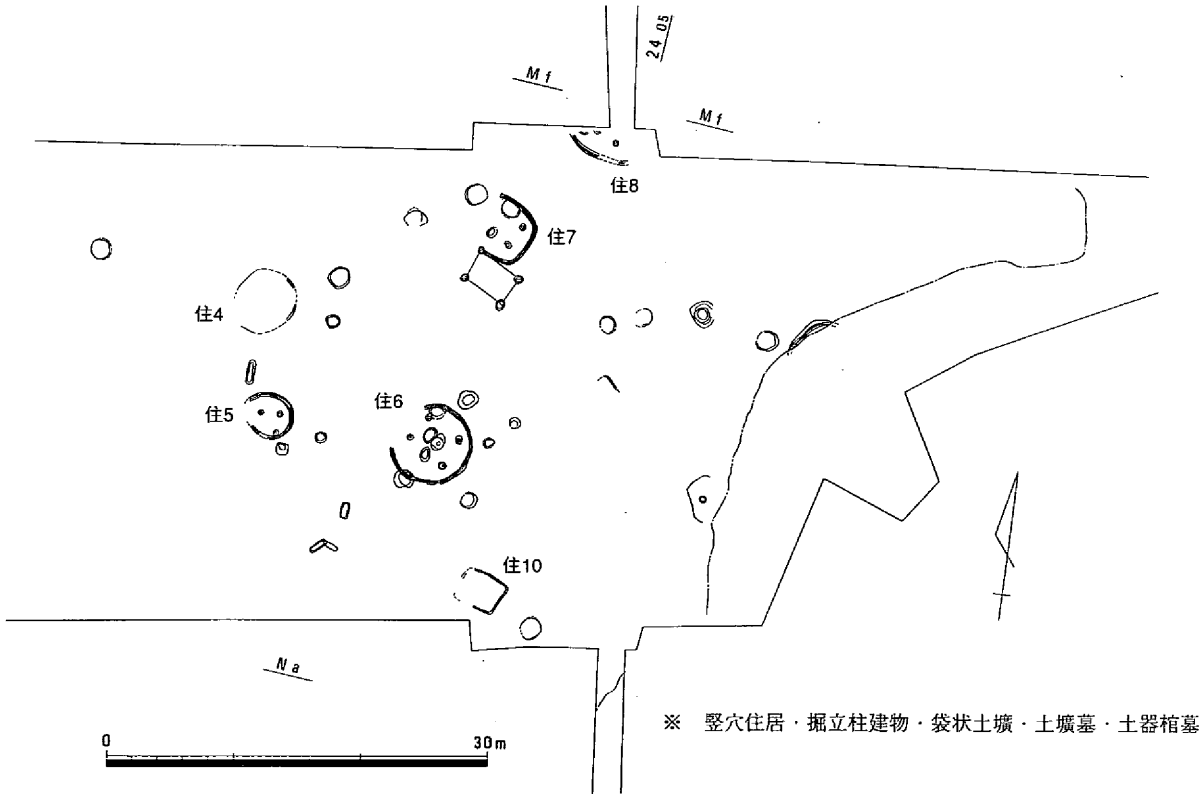
第２節　弥生時代の集落

弥生時代中期

中・Ⅱにおける第２微高地の竪穴住居の分布をみると、東西に分かれる小群が予想され、東群はさらに２ないし３つに細分することも可能かもしれない。住居以外の袋状土壙や土壙などは東群に集中している。調査区内では、東側が弥生時代の微高地の中心線上に当たり、良好な立地であったと思われる。竪穴住居は、すべてについて全容を明らかにできていないので、規模等の比較が難しいが、小群内での構成について可能性を推測してみると次のようになる。

各小群には、やや規模の大きい円形の住居１～２棟が存在している。例えば、竪穴住居２・６・８・12である。これらには、やや小規模な円形・楕円形あるいは長方形の住居が数棟対応する。竪穴住居６・８に対して、４・５・10が該当する。さらに、隅丸方形の竪穴住居７も認められる。掘立柱建物は１棟程度を伴うこともあり、袋状土壙は西群では不明だが、住居周辺に数基が伴うと思われる。袋状土壙は、場合によっては特定の住居に比較的多く集中することもあると思われる。これが、当遺跡の弥生中期集落の基本的な最小単位に近いと考えることも可能ではないだろうか。

遺構からの出土遺物については、あまり良好とは言えないが、東群では次のようになる。分銅形土製品についてみると、竪穴住居６と７を中心として比較的多く出土している。特に竪穴住居６とその周辺遺構の方が７点と圧倒的に優位であるが、７ではガラス玉や鏡形土製品を有する。一方、石斧や石包丁、尖頭器状石器なども竪穴住居６の方がかなり優勢で、住居や周囲の遺構から多く出土してい



第1127図　第2微高地東部　弥生時代中期主要遺構（1/600）

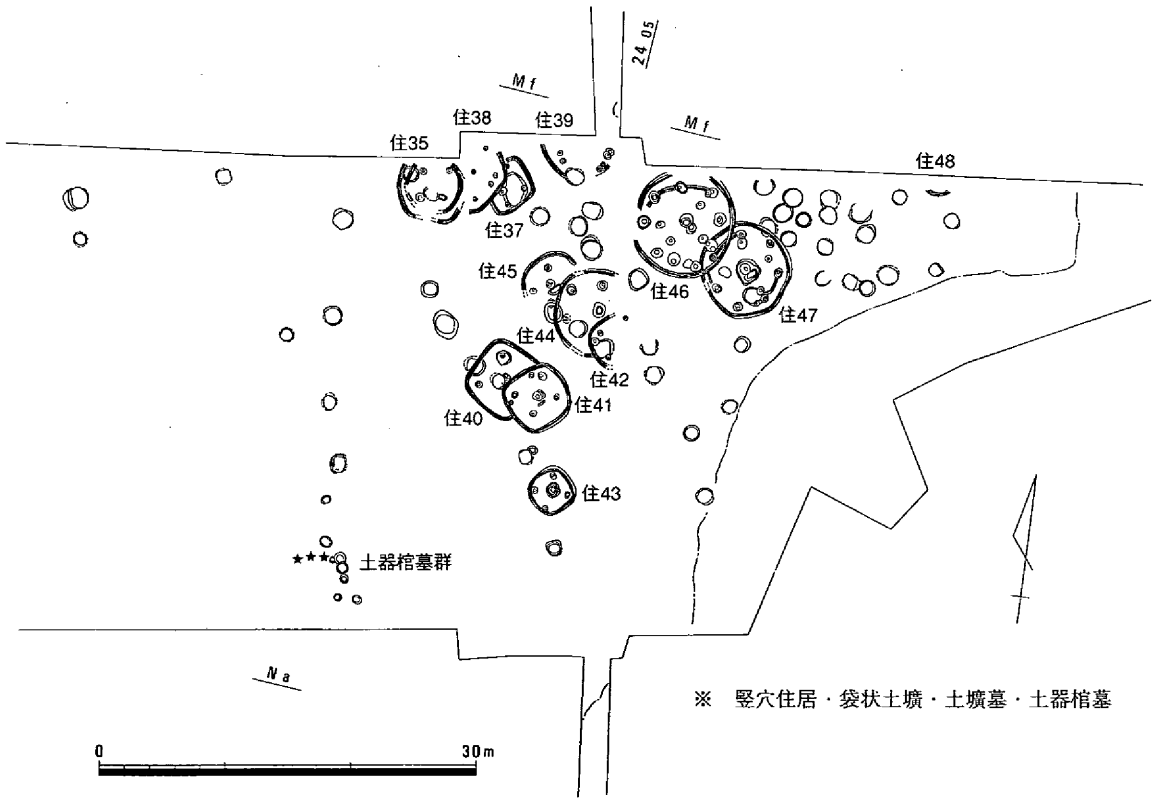
る。この廃棄状況が何を示すかは明らかでないが、遺物の種類や墓を伴っていることなどからは、この小群がある程度独立して諸活動を行い得たものと判断される。

弥生時代後期

後・Ⅰ～Ⅲの竪穴住居は、中期とほとんど同じ場所を利用しており、各時期のなかでもかなり切り合いが認められる。各住居の間隔は２～６ｍと比較的狭く、それぞれの並行関係をさらに考える必要性がある。また、この時期には、掘立柱建物は確認されていない。

第２微高地の東群で見ると、Ⅰの時期は竪穴住居37・39・40・43・45が該当する。45の平面形は不明瞭であるが、他は隅丸方形で、規模の大小が存在する。この大小の住居が組合せとなる可能性が考えられる。一方、住居付近に位置する袋状土壙が非常に多く検出され、44基をこえている。単純に住居１軒に対して袋状土壙が９基前後となるが、次の時期の住居との並行関係も考えられるので、若干比率は下がるかもしれない。しかし、それでも他遺跡と比較して高率を示している。また、この時期では、立地が住居近くではあるが、特定の位置に多く集中する傾向が看取される。ここは第２微高地でも比較的高い位置である。逆に津寺遺跡では低い部分への集中が指摘されており、これらをどのように考えるかは今後の課題であるが、住居に近い場所を占めることには変わりはない。

Ⅱ～Ⅲの時期は竪穴住居35・38・41・42・44・46・47・48が該当する。48の平面形は不明瞭で、隅丸方形は35ａ・41・42である。他は円形で、比較的規模の大きいものが存在する。竪穴住居の形態は変化するが、Ⅰの時期と同様に住居２～３棟が基本であると思われる。一方、この時期は袋状土壙があまり認められない。時期が不明なものもあるため断言はできないが、当地域ではこの頃を以て、袋状土壙が集落を構成する基本的な遺構ではなくなると思われる。また、同時期の住居から離れて、Ⅰ



第1128図　第2微高地東部　弥・後・Ⅰ～Ⅲ主要遺構（1/600）

～Ⅱに属する土器棺墓が８基検出されている。これらは弧状配列を呈するように見えるが、Ⅳの竪穴住居32の掘り方に沿っており、それによって他にも存在した土器棺墓が除去されている可能性がある。しかし、集落内に、土器棺墓を集中して埋納する地点があることは確実で、津寺遺跡でも確認されている。また、墓域が中期と同じ位置であることは、集団の継続性を示唆するかもしれない。

Ⅳの時期の竪穴住居は、比較的多く、第２微高地中央から西にかけてのほとんどのものが該当する。新しい溝の掘削などに見られるように、環境の変化や水田の拡大などが集落の拡大傾向と関係すると考えている。隅丸方形の住居や円形の住居が認められるが、竪穴住居17以外には際立って規模の大きいものは少ない。遺構からまとまりを見出だすことは困難であるが、住居が一定の間隔（10m程度か）をもって存在しているように思われる点が注意される。また、この時期では、第２微高地中央と第３微高地で計９基の「方形土壙」が検出されている。袋状土壙に替わって、当該期の集落の基本的な遺構となるようである。これらは袋状土壙とは異なり、住居から若干離れて位置しているが、足守川加茂Ｂ遺跡などではそのような様子は顕著でないので、この点は検討を要する。

以上のように、当遺跡では、中期中葉から後期中葉ころまで、数棟の竪穴住居と１棟未満の掘立柱建物、数基の袋状土壙などを基本とした集落が継続して営まれている。しかし、後期後葉には、竪穴住居の増加・拡散が行われており、遺構組成やその配置にも変化が起きるようである。本来、単位集団内では、住居近くに位置した袋状土壙は、方形土壙に転換したと思われるが、この遺跡では各住居に伴う状況は認められない。これは、それまでの集団が単に拡大しただけというより、その過程で集落内あるいはより広い地域の集団関係に何らかの変化が生まれたことを示すものであろうか。

竪穴住居：掘立柱建物：袋状土壙（方形土壙）

津寺遺跡では、掘立柱建物の検出例は少なく、一方で袋状土壙がかなり多いことが指摘されている。そして、加茂政所遺跡でも同様な現象が確認された。これは、掘立柱建物の検出や認定の難易度があらゆる条件において異なることや、袋状土壙の定義の曖昧さや認定などに影響を受けるものである。また、遺跡の調査が、そのごく一部分にすぎないということで、集落の全容を把握できないことも大きな原因となり、他遺跡との厳密な比較検討はますます困難である。しかし、それらを勘案しても、津寺遺跡や加茂政所遺跡のこうした状況は、弥生時代の集落の在り方を考えるうえで、注目する必要がある。

ここでは、集落を構成する基本的な遺構のなかで、竪穴住居と掘立柱建物と袋状土壙（あるいは方形土壙）を取り上げ、いくつかの遺跡との比較を行い、傾向を探ってみたい。なお、井戸についてはここでは取り上げない。

第４表は、各時期における竪穴住居１軒に対する掘立柱建物と袋状土壙（方形土壙）の割合を示したものである。加茂政所遺跡や津寺遺跡などでは、百間川遺跡群[1]と比較して、これまで指摘されているように、掘立柱建物の割合は極めて低く、逆に袋状土壙は非常に高いことがわかる。また、後期後半には袋状土壙が減少し、方形土壙が見られるようである。一方、南溝手遺跡や窪木遺跡[2]では、袋状土壙もあるが、掘立柱建物もある程度集落内に存在し、百間川遺跡群に近い傾向を読み取れる。

このように、集落内の遺構組成割合についてみると、掘立柱建物と袋状土壙では、集落によって大きく異なるようである。つまり、掘立柱建物の割合が高い集落と低い集落という類型が考えられるわけである。さらに、袋状土壙と掘立柱建物の割合は反比例関係があると思われるので、前者は袋状土壙の割合が低い集落であり、後者は高い集落となる。これは、１つに遺構の機能や性能と関係するの

遺跡名＼時期	前期	中期中葉 ～ 後葉		後期前葉 ～ 後葉	
加茂政所		0.1 : 1.3	……	0 : 3.1	0 : 0(0.3)
津　寺		1.0 : 0	0.1 : 0.8	0.1 : 5.2	袋状土壙1基
足守川加茂B、矢部南向[3]			0.3 : 0.3	0 : 1.0	0 : 0(1.0)
奥　坂[4]			0.6 : 0	0.1 : 0.1～0.4	0 : 0.7
南溝手・窪木	0.4 : 0.1	0 : 0.5	2.2 : 1.6	0.8 : 0.7	
百間川原尾島、今谷		5.6 : 0		1.1 : 0.03(0.05)	……
大田十二社[5]				0 : 1.6	0 : 3.8

第4表　竪穴住居1軒に対する掘立柱建物と袋状土壙（方形土壙）の数量比

ではないだろうか。

掘立柱建物については、その機能が居住にあるのか、小屋のようなものか、倉庫であるのかなど限定ができない。しかし、袋状土壙との比率に上記のような相関関係が認められるとするならば、一部の掘立柱建物と袋状土壙が同一機能と考えることが可能である。ただし、性能の面で袋状土壙は耐久性が低く一時的なものであり、掘立柱建物と同じ性能を有するものではない。これを集落類型と合わせて考えると、耐久性の高い貯蔵機能を有する集落と、主に一時的な貯蔵機能しか持たない集落があることになる。言い換えれば、前者が母集団で、後者は母集団から分岐しているが、一部機能を母集団に依存している集団と考えることができる。

今回、ここで取り上げた遺跡は少なく、偏りがあるので詳細な分析については、各集落の立地、形成時期や発展過程を広範な地域で十分検討したうえで、それぞれの機能・役割などを明らかにする必要があろう。（柴田）

註

(1)「百間川原尾島遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88　岡山県教育委員会　1994年
「百間川原尾島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106　岡山県教育委員会　1996年
「百間川兼基遺跡1　百間川今谷遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51　岡山県教育委員会　1982年

(2)「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100　岡山県教育委員会　1995年
「南溝手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107　岡山県教育委員会　1996年
「窪木遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』120　岡山県教育委員会　1997年
「窪木遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』124　岡山県教育委員会　1998年

(3)「足守川加茂A遺跡　足守川加茂B遺跡　足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94　岡山県教育委員会　1995年

(4)「天神坂遺跡　奥坂遺跡　新屋敷古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』53　岡山県教育委員会　1983年

(5)「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』10　津山市教育委員会　1981年

第３節　弥生時代中期前葉～中葉の土器

加茂政所遺跡からは多くの弥生時代中期土器が出土している。これらの中期土器は前葉新段階から中葉中段階が多く、約800点の実測図を掲載することができている。そこでこれらの資料を基に、編年的問題について若干のまとめを試みたい。

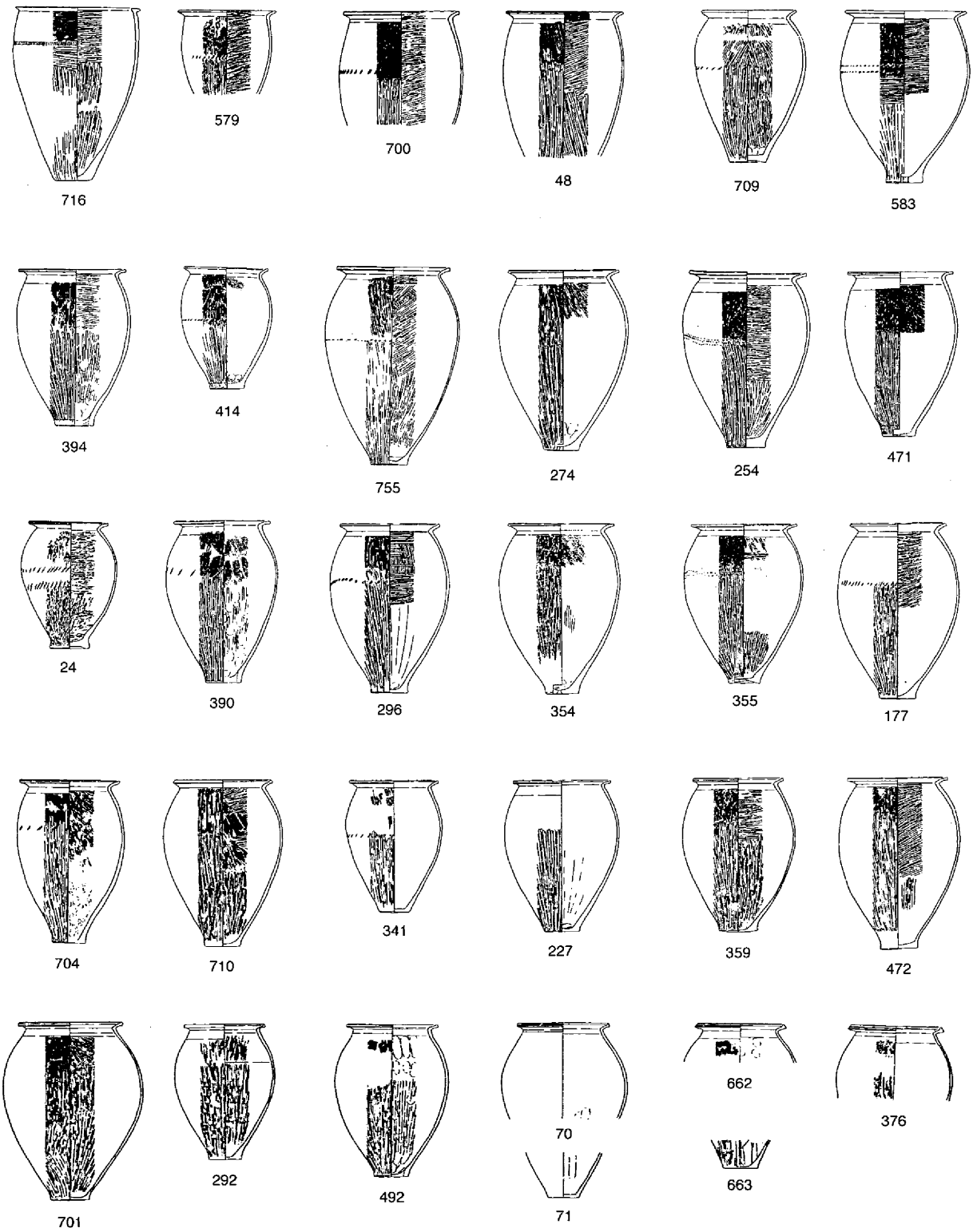
第1129図は全体の器形がわかる個体が多く出土している小形の甕Ａを集成したものである。おもに器形と調整の観点からいくつか検討してみたい。

(1)口縁部の形状については、716が前期後葉に出現している倒Ｌ字形である他は「く」の字形である。579・700・48は短く外反し、口縁部内面には丁寧なミガキが施されているのが特徴である。579・700は直線的で、48は湾曲している（716を１類、579・700・48を２類とする)。709・583・394・414・755・274・254は「く」の字形に外湾しており、内面にはヨコナデののちに何も施されていないのが特徴である。口唇部に拡張は認められない。外湾の度合いについては直線的なものと湾曲しているものとがある。これらを３類とする。471・24・390・296・354・355・177・704は、「く」の字形に外湾し、内面がヨコナデのみである点で２類と共通しているが、口縁端部内面がくぼんでいるのが特徴である（内面が二段になっている)。これは口縁端部が更にヨコナデが加えられた結果であろう。口唇部には面をもつものがあるが、拡張は認められない。これらを４類とする。710・341・227・359・472・701・292・492は、「く」の字形に外湾し、内面がヨコナデのみである点で２・３・４類と共通しているが、口唇部が僅かではあるが上方に拡張されている（ヨコナデによってつまみ上げられている）点が特徴的である。また710・341以外は２・３・４類に比べて外反度が強い点を指摘することができる。227の口唇部はくぼんでいる。これらを５類とする。769は口唇部の拡張が５類に比べて顕著であり、これを６類とする。662・376は口唇部をヨコナデによって拡張し、２本の凹線をほどこしているのが特徴である。これらを７類とする。

(2)胴部の器形や内外面の調整・紋様については、１類は口縁部から底部に向かって徐々にすぼまっている。外面上半には櫛描直線紋と刺突紋が施されており、調整は下半がミガキで、内面はすべてミガキである。２類は１類に比べて胴部に張りが認められる。底部まで残存している個体が出土していないため不明確であるが、張りは弱く、最大径は上位にあると考えられる。外面の調整は上半がハケメ、下半がミガキで、内面はすべてミガキである。紋様には刺突紋がある。３類は胴部最大径が口縁部径よりも大きくなっている。胴部最大径の位置は上位にあるもののほかに中位に位置するものがあり一律ではない。外面の調整は上半がハケメ、下半がミガキである。内面は上半がミガキかハケメでミガキが多く、下半がミガキかナデである。紋様には刺突紋がある。４類は胴部の張り具合は３類に類似しており、最大径の位置は２・３類のように上位にあるものはなく、中位のものがすべてである。外面調整は、上半がハケメ、下半がミガキである。内面は上半がハケメかミガキでハケメが多く、下半はミガキかナデでミガキが多い。５類の胴部の張りや最大径の位置については４類と比べて大きな相違は認めがたい。外面調整は上半ハケメ、下半ミガキである。内面は上半がミガキかハケメか押圧・ナデで、ハケメの割合が４類より高くなっている。下半はミガキかナデでミガキが多い。紋様には刺突紋がある。６・７類は胴部全体の形状のわかるものは出土していないが、最大径の位置は中位にあるようである。外面調整は769が上半ハケメ、376が上半ハケメ、下半ミガキである。内面上半は、

769が押圧・ハケメ、662が押圧・ナデ、376は磨滅のため不詳である。下半は663のようにケズリが観察できることが大きな特徴である。

(3)底部の形状は２類が不明であるが、１類が厚く、３～５類は薄いものがほとんどである。断面観察によって接合方法が判明した394・390・492では、円盤状の底部の側面に胴部が接合されている。



第1129図　弥生時代中期の甕（1/10）

また、この部分の内面が指オサエによって屈曲する特徴を持ったものも多く、胴部を成形した後に底部がはめ込まれた可能性を考えておきたい。3～5類の底部外面は1類と違って外反している。また上げ底は少なくほとんどが平底になっている。

(4)色調・胎土は、1類の716は橙色で、1～2㎜前後の粗砂を多く含んでおり、前期的な胎土といえよう。2～5類の色調は橙色～褐色系統のものが多く、胎土はおもに1㎜以下の細砂を含んでいる。6・7類の色調は灰白色系統で、胎土には細砂を含んでいる。

不十分ではあるが以上のような検討から次のようにまとめたい。第1に口縁部形状については、倒L字形から「く」の字形に変化し、その後ヨコナデが加わって口唇部が徐々に大きく拡張され、この部分に凹線紋が施されるようになるという変遷がすでに指摘されており、このことは型式学的に首肯されるであろう。従って1類から6類への時間的変遷が想定できる。第2に胴部の器形についてはこれも既に指摘されていることではあるが、前期後半の口縁部から底部に向かって尻すぼみになるものから、胴部が張り出し、かつ最大径の位置が上位から下位に下がってゆくという変遷が想定できる。しかしながら2類から3・4・5類への変化は一律ではなく、3～5類には様々な形状のものがあり一定しているとは言い難いのが実態ではなかろうか。第3に調整については、口縁部内面ミガキが3類以降省略されるのが特徴的である。胴部内面上半は1・2類はミガキで、3～5類ではミガキからハケメや押圧・ナデに変化しつつあることが窺えるが、分類の変化とは必ずしも一致しない。6・7類ではミガキは施されず、押圧・ナデになるようである。内面下半の調整は、1・2類はミガキで、3～5類ではミガキからナデに変化しつつあることが窺えるが、分類の変化とは一致しない。7類ではケズリが出現している。色調では6・7類で灰白色に変化している。以上のことから、大きくは1類→2類→3・4・5類→6類→7類という変遷を想定したい。

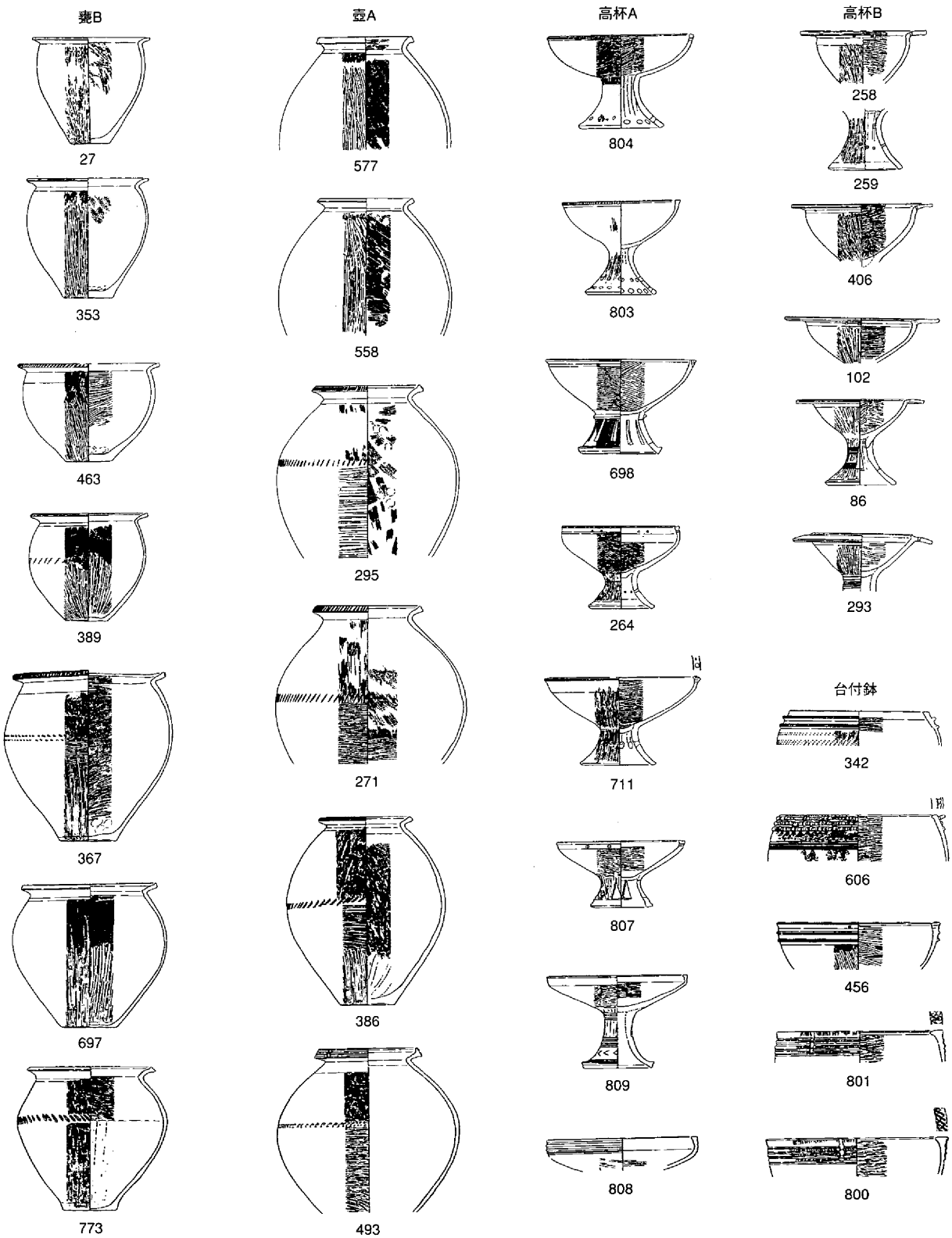
つぎに、点数は少ないが小形の甕以外のいくつかの器種について第1130図に集成した。甕B・壺Aについては、甕Aと同じような観点から上段から下段への変遷を想定したい。高杯Aについてはこれまで指摘されているように杯部の形状から、804・803・698→264・711・807→809→808のように変化するものと推定できる。高杯Bについては、杯部が深く曲線的なものから浅く直線的なものへという変化を想定しておきたい。台付鉢については全体の形状のわかるものは出土していないが、口縁部が拡張しておらず、貼付突帯がしっかりしている342・606が古く、口縁端部の拡張の度合いから456→801・800と変化するものと想定しておきたい。これらの他に口縁部がラッパ状に開く壺については良好な資料は少ないものの、従来指摘されているように口唇部の凹線紋や頸部の凹線紋の出現が新しい特徴であろう。

以上のようにいくつかの器種について型式学的な観点から時間的な変遷を想定した。次にこれらの器種が加茂政所遺跡ではどのような出土状況を示しているかについて検討し、編年を試みるべきではあるが、こうした検討に耐えうる良好な資料は少ない。従って現状での見通しといった意味合いが濃いが、いくつかの出土資料について時期的変遷を次のように想定しておきたい（括弧付きは特に資料が十分ではないことを示す）。1期＝土壙173・(袋状土壙19)・(土壙117)・(土壙150) →2期＝土壙88・(袋状土壙17)・(土壙19) →3期＝土壙17・土壙130・(袋状土壙10)・(土壙33)・(土壙35) →4期（土壙79)・(土壙199)。

最後にこれまでの中期土器編年のなかでの位置づけについて述べておきたい。

岡山県における中期土器のまとまった最初の研究としては、1955年に刊行された『日本考古学講座

４』における鎌木義昌氏の「各地域の弥生式土器・中国」をあげることができる[1]。この中で鎌木氏は戦前の小林行雄氏らによる『弥生式土器聚成圖録』の成果に基づきながら戦後まもなく発掘調査された岡山県南部の門田遺跡や前山遺跡、仁伍遺跡の資料を用いてまとめられている。



第1130図　弥生時代中期の甕・壺・高杯・台付鉢（1/10）

その後鎌木氏は1964年に『弥生式土器集成　本編Ⅰ』において「山陽地方Ⅱ」を執筆された。この中で中期土器は第Ⅱ・第Ⅲ・第Ⅳ様式として説明され、それぞれに高田式・菰池式・前山Ⅱ式という型式名を設定されている[2]。これは全国的に試みられた弥生式土器集成の一環として取り組まれたもので、畿内土器様式との併行関係が意識されていたものと考えられる。高田式は1957年に調査され1961年刊行の『日本農耕文化の生成』に公表された資料であり[3]、菰池式は鎌木氏らが発掘された菰池遺跡の資料でこの時初めてその内容を紹介された。これらの土器型式は現在も用いられている。

1966年に刊行された『日本の考古学Ⅲ　弥生時代[4]』の弥生土器編年表（瀬戸内）では高田式と菰池式の間に新邸貝塚出土資料[5]が畿内第Ⅲ様式（古段階）併行期として挿入されている。この時点では畿内第Ⅲ様式の細分に関連して菰池式が畿内第Ⅲ様式（新段階）併行と考えられ、（古段階）の資料が必要とされたのではなかろうか。

1960年代末から岡山県下では山陽新幹線建設に伴う発掘調査を皮切りに大規模な調査が始まり、中期土器資料は増加した。1969年に発掘調査が行われた岡山市南方遺跡では中期前葉から中葉の土器が多く出土し、1971年に刊行された報告書では、高田式に続く中期前葉に南方Ⅱ式、新邸式や菰池式と呼ばれる中期中葉に南方Ⅲ式を設定して報告された[6]。この段階で櫛描紋を指標とする前葉段階が二時期に区分されたことは重要であるが、公表された土器実測図が少なかったことが惜しまれる。

同じく1969年に調査された雄町遺跡の報告書が1972年に刊行された[7]。この中で弥生土器・土師器は雄町１～15類に分類され、中期土器については雄町３・４・５・６類が設定されると共に他遺跡出土資料を加えて中期土器は８期に細分されたのであった。この編年案は(1)高田式に続く櫛描紋を特徴とする前葉に雄町３類土器を位置づける点で、前葉土器を二時期に細分したこと、(2)菰池式の古い様相と新しい様相を区分して、従来の菰池式を三時期に細分したこと、(3)後葉土器を前山Ⅱ式と仁伍式に区分し、かつ前山Ⅱ式の新相に雄町５類を位置づけ細分したことなどが特徴と考えることができよう。この編年は今からみれば少ない資料にもかかわらず先見性を持った画期的なものと考えられる。

1980年、高橋護氏は考古学ジャーナルの入門講座の一環として山陽地方の弥生土器について執筆され、中期土器を９期に細分する編年案を公表された[8]。この編年は雄町遺跡で試みられたものを基本とされているが、その後の資料も加え、かつ高田式や菰池式、前山Ⅱ式、仁伍式といった学史的な型式名についても挿図とともに簡潔に説明が加えられたものとしてその後の編年研究に大きな影響を与えた。

高橋編年発表後20年近く経過した現在、いくつかの編年研究が新たに発表されているが、基本的な考え方についてはこの編年を受け継いでいるといえよう[9]。高橋氏の中期土器編年についてここで細かく紹介する必要はないと思うが、基本的には甕や壺に櫛描紋を多く用いる前葉と壺・甕・高杯などに凹線紋が盛行する後葉に大きく区分し、櫛描紋の減少と凹線紋の出現期として中葉を位置づけたもので、それぞれを遺跡での出土状況を基に細分したものと考えている。

さて加茂政所遺跡出土資料に立ち返って、現状で最も適切と考えられる高橋編年との関連をみてゆくならば、少量出土している１期の土器は前葉の新段階とされるⅢｂ期の資料と考えられるのではなかろうか。Ⅲｂ期は高田式にみられた甕の櫛描紋が消失した時期で雄町３類土器や南方遺跡出土土器が標識資料としてあげられていた。その後百間川兼基遺跡竪穴住居２、土壙12・18・22[10]や南方（国立病院）遺跡[11]、百間川米田遺跡土壙116[12]で当該期の資料が出土していると考えているが、未だ資

料の少ない時期であろう。

加茂政所遺跡で一定量出土している２期、３期の土器についてはそれぞれ高橋編年のⅣａ期、Ⅳｂ期に併行すると考えている。Ⅳｂ期については鎌木氏が設定された菰池式を標識としてあげられているのみで、その後の資料の増加を期待していた。この時期は口唇部に凹線紋、頸部に貼付突帯をもち、胴部が算盤玉状に屈曲した壺や口縁部強いヨコナデによって口唇部僅かに拡張した甕などの存在が特徴であろうが、南方遺跡土壙26・92[13]などが知られるのみであったと考えている。Ⅳａ期は外面を貼付突帯を施したラッパ状の口頸部に櫛描紋で飾られた卵形の胴部をもつ壺や「く」の字形に外湾する口縁部をもつ甕の存在が特徴であり、船山５類土器[14]が標識としてあげられているが、資料は少なかった。その後も良好な資料は少なく南方遺跡土壙42・73[13]や南方（国立病院）遺跡出土の一部[11]などが相当すると考えていた。

このように加茂政所遺跡出土中期土器の多くはこれまで資料の少ない時期のものであり、今後の編年研究にとって意味のある資料であることを述べ、まとめとしておきたい[15]。　（平井）

註

(1) 鎌木義昌「各地域の弥生式土器・中国」『日本考古学講座４』　河出書房　1995年
(2) 鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」『弥生式土器集成　本編Ⅰ』　東京堂出版　1964年
(3) 鎌木義昌・近藤義郎「岡山県高田遺跡」『日本農耕文化の生成』　東京堂　1961年
(4) 和島誠一編『日本の考古学Ⅲ　弥生時代』　河出書房新社　1966年
(5) 近藤義郎「備中新邸貝塚」『古代学研究』第８号　1953年
(6) 『南方遺跡発掘調査概報－山陽新幹線敷設による市道移転工事にともなう緊急発掘－』　岡山市遺跡調査団　1971年
(7) 「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告－山陽新幹線建設に伴う調査－』　岡山県教育委員会　1972年
(8) 高橋護「弥生土器－山陽１」『考古学ジャーナル』173号　1980年
(9) ただし、藤田氏の論文は畿内地方の中期土器編年をもとに比較検討する方法が用いられており、高橋編年とは異なる編年観が提示されている。
藤田憲司「弥生中期の地域性」『吉備の考古学的研究』(上)　山陽新聞社　1992年
(10) 「百間川兼基遺跡１・百間川今谷遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51　岡山県教育委員会　1982年
(11) 『南方（国立病院）遺跡発掘調査報告』　岡山市遺跡調査団　1981年
(12) 「百間川米田遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74　岡山県教育委員会　1989年
(13) 「南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』40　岡山県教育委員会　1981年
(14) 「船山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告－山陽新幹線建設に伴う調査－』　岡山県教育委員会　1972年
(15) 高橋編年のⅣｃ期については加茂政所遺跡では出土量が少なかったため具体的に検討することはできなかった。以前検討した百間川今谷遺跡出土資料については、口唇部にのみ凹線紋を施す壺と内面下半にケズリを施す甕の組み合わせの資料群（例えば井戸１・８、溝12）と内面下半にケズリを施し口唇部に凹線紋を施す甕と口唇部と頸部に凹線紋をもつ壺の組み合わせの資料群（例えば土壙３・35）に区分することができ、これらによって「百間川中期Ⅱ新相」は古・新に細分できると現在は考えている。
なお中期前葉～中葉土器については、1998年に検討した結果を参考にしている。
平井泰男「発掘調査成果の概要」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』124　岡山県教育委員会　1998年

第４節　顔のある分銅形土製品

当遺跡からは分銅形土製品[1]が30片出土しており、この内で顔のある分銅形土製品は２点（C80・C89）である。どちらも小形で、眉と鼻は隆起して立体的な表現をし、目や口、鼻の穴は刺突による表現方法を採用するものである。

C80は完形品で、分銅形土製品としては抉れが小さく、いわゆる分銅形、というより小判形である。眉の隆起は低く、垂れ目のように表現された目は、鼻の先端の横にあり、左右で位置のズレがある。上端には細い管状工具による刺突が施されている。胎土は比較的粗く、橙色を呈し、後期の土器によく見られる胎土に類似する。左右に１個づつ、小孔がある。高橋氏の分類ではⅡ類に相当する。

C89は非常に丁寧なつくりであるが、上半のみである。抉れは大きく、まさに分銅形になると思われる。眉と鼻の隆起はしっかりしたつくりである。笑っているように見える目は、鼻根部付近にあり、表現された顔は写実的で、また端整である。周縁にはハケメ工具のようなものを押し引きした紋様がめぐる。胎土は比較的精良で、浅黄橙色を呈し、中期後葉を中心とした土器によく見られる色調である。端面には、裏面に貫通する小孔８個が施されている。高橋氏の分類ではⅠ類Bに相当する。

このように比較すると、形態や胎土などから、C89のほうがC80より古い特徴を示していると思われる。供伴している遺物は、C89が弥・後・Ⅰ、C80はⅡであり、製作から廃棄までの順序に矛盾は認められない。顔のある分銅形土製品は、西部瀬戸内地域に多く分布しているが、吉備地域でもこれまでに数点が出土している。これらは後期前葉のものが多く、古いものでも中期後葉のものが認められるだけで、吉備型分銅形土製品の出現期である中期中葉まで遡るものは確認されていない[2]。今回の２点もその時期の間におさまっている。

吉備地域において、分銅形土製品以外で顔を表現する遺物としては、土器や銅鐸などがあげられる。銅鐸はいわゆる邪視紋銅鐸であり、顔というより目を表現したもので、中期中葉頃と考えられている。土器では線刻による黥面が多く、後期後葉を中心としている。土製品では人形土製品があり、時期は、分銅形土製品に顔が表現される時期以降のものが多い。これらは、当地域において、偶像を製作したり、器物に顔を表現する風習が中期中葉から後期後葉かけて次第に盛んになることを示すと思われ、返せば中期中葉までは稀であったのではないだろうか[3]。分銅形土製品もそうした流れの中で、顔が付される可能性がある。ただし、分銅形土製品に特有の紋様（眉状紋）は黥面に変化すると考えており、分銅形土製品はもともと顔と密接な関係にあったのではないかと思われる[5]。

地域性については、出土点数がかなり少ないので時期尚早であるが、顔の表現方法にはそれが認められるのではないかと考えている。例を示すと、西部瀬戸内地域のものは土製品自体の形状も特徴的であるが、隆起した左右の眉がつながり、そのまま鼻へと移行するが、鼻は比較的短い。備中地域のものは眉や鼻を立体的に強調しており、鼻のみが認められるものも出土している。備前地域のものは目と口を刺突や線刻で描く特徴があり、鼻はほとんど描かないし立体表現もしない。ただし、線刻顔面で鼻を表現しない点は、より広範な地域での一般的な在り方の可能性もある[6]。いずれにしても、地域性の問題は、今後の資料の蓄積を待つ必要がある。

絵画や土製品など、器物に表される顔には輪郭の有無によって２種類ある。顔以外の部位を伴う絵画や人形土製品は、器物に何かの個体を描いたり、そのものの像であるので顔の輪郭を持つ。しかし、

顔のみでは両方の場合がある。後期中葉から後葉の西日本の黥面ではすべて輪郭を有するが、前葉では無い可能性がある(7)。また、当遺跡のＣ80のようなⅡ類の分銅形土製品では、そのものを顔の輪郭に見立てることも可能であるが、本来それが鼻を中心とした顔の一部分あるいはそれに関係するものならば、Ｃ89のようなＩ類Ｂに表されているのは輪郭を持たない顔と言えよう。根拠はまだ不十分だが、このような表現方法の変化は弥生時代後期前葉から中葉の間に起こったのではないだろうか。

現時点では、器物に顔を表すことにどのような意図があり、その輪郭の有無は何に由来するのかについては、資料不足や推測部分がかなり多く、定かではない。しかし、顔の表現には時間的な変化が認められると思われ、その意味についても今後慎重に検討すべきであろう。　（柴田）

註

（1）分銅形土製品については以下のものに詳しい。
東潮「分銅形土製品の研究」『古代吉備』第７集　1971年
下澤公明「分銅形土製品」『えとのす』24　新日本教育図書　1984年
高橋護「７　分銅形土製品」『弥生文化の研究８祭りと墓と装い』　1987年
また今回は、分銅形土製品として西部瀬戸内を中心に出土する方形のものや、高橋氏による分類のⅡ類やⅢ類なども取り上げるが、将来的にはそれぞれの形態や機能などを検討し、厳密に定義する必要があると考えられる。

（2）赤磐郡山陽町用木山遺跡出土のＹ18は中期中葉に比定されているが、分銅形土製品ではなく、百間川兼基遺跡のＣ７のような土製品ではないかと考えている。
「用木山遺跡」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』４　山陽町教育委員会　1977年
「百間川兼基遺跡２　百間川今谷遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』114　岡山県教育委員会　1996年

（3）前期としては、岡山市田益田中遺跡の旧河道から、顔面を表現した土製品が出土している。
所報『吉備』第23号　岡山県古代吉備文化財センター　1997年

（4）分銅形土製品そのものや眉状紋のような「○Ｃ」形の図案は、土器などに描かれた分銅形や撥形の線刻紋様や黥面に共通しており興味深い。

（5）高橋氏は、黥面にまでは論及していないが、顔の表現を伴わないＩ類Ａの分銅形土製品について仮面としての機能があった可能性を提起している。また、今回の出土例のようなＩ類ＢやⅡ類については、それとは異なる使用法を想定し、分銅形土製品の持つ元来の性格から容易に顔が付される可能性があったことを指摘している。
高橋護「７　分銅形土製品」『弥生文化の研究８祭りと墓と装い』　1987年

（6）設楽博己「線刻人面土器とその周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集　国立歴史民俗博物館　1990年

（7）上東遺跡の絵画紋土器には顔の輪郭が無く、時期は後期前葉と考えられている。
所報『吉備』第24号　岡山県古代吉備文化財センター　1998年

第５節　弥生時代後期の銅釧

加茂政所遺跡の周辺には、弥生時代後期の大規模な集落として津寺遺跡、高塚遺跡、矢部南向遺跡、上東遺跡などが存在する。これらの集落のうち、高塚遺跡で銅鏃、銅鐸（２個体）、貨泉（25枚）、矢部南向遺跡で小銅鐸、銅鏃、上東遺跡で銅鏃、貨泉（１枚）などの舶載品および国内産の青銅器が多数出土しており、その遺構密度や遺物からみて、弥生時代後期には当地域において後の吉備国の中枢となる強力な集団が形成されていたことが想定される。そのことは、これらの集落を見下ろす位置に巨大な楯築墳丘墓をはじめ、雲山鳥打墳丘墓群、鯉喰神社弥生墳丘墓、女男岩弥生墳丘墓などが存在していることからもうかがえる。

このような歴史的環境にある本遺跡の第２，３微高地において、形式の異なる銅釧が２個出土した。これらはいずれも遺構内から出土したため、使用された時期、遺跡の性格などを考えるうえにおいても重要な遺物であり、少しまとめておきたい。

１　遺跡と遺構について

本遺跡は高梁川の旧河道（板倉川）分流によって、微高地が東西に分断されている。この河道幅は約80ｍを測るが、旧河道がどの時期から存在したかは不明である。旧河道に12世紀代の瓦が多量に投棄されている事実から、それ以前から旧河道が存在していたと考えられる。当初からこの地は比較的低かったため、かなり古い時期からこの分流ができていたと思われる。当地域の弥生時代の古地形復元は困難であるが、恐らく第２と第３微高地は有機的に結合する同一遺跡であったと推定される。このような遺跡の立地を考慮して、銅釧のもつ意味を考えてみたい。

第２微高地から出土した円環型銅釧は弥・後・Ⅰ～Ⅱに属する直径6.6ｍの円形を呈する竪穴住居44の貼床面から出土した。完形品である。この銅釧を所有する竪穴住居の住人は日常生活用品以外に分銅形土製品、表面に刺突文をもつ土玉など呪術に関係する遺物を所有していた。一方、第３微高地において出土した有鉤銅釧は方形を呈する土壙310内から廃棄された状態で出土した。この銅釧は下部が３分の１と鉤の先端を欠損しているが、折損部の状態からみて、すでに弥生時代には折れていたようである。最終的には土器とともに廃棄されており、その時期は弥生時代終末であるが、生産年代は報文にみられるように、弥・後と思われる。

２　銅釧について

円環型銅釧は朝鮮半島の慶尚北道や平安南道等に類例が出土し、日本では対馬や北部九州を中心として東は畿内にまで出土するが、その原型は朝鮮半島の楽浪地域に求められることから、楽浪系銅釧と呼称されているものである。

管見によれば、現在のところ日本国内における円環型銅釧は20遺跡85例出土し、鋳型が１例出土しているが、瀬戸内地方においては初めての出土例であった。

本遺跡出土の円環型銅釧は鋳造後に鋳張り部分をおとしたのちに、全体を非常に丁寧に研磨していた。円環型銅釧の集成を行った小田富士雄氏の法量と断面形による分類[1]に従えば、本遺跡の円環型銅釧の形状は「大型太身」となり、断面形はＥ類（菱形）となる。現在確認されている形式のものとしては、径と重量は異なるものの、鳥取県の長瀬高浜遺跡出土[2]の銅釧が最も近似しているようである。

一方、有鉤銅釧は南海産大形巻貝のゴホウラを縦型に用いて作られた貝輪を青銅で模したもので、立岩型と呼ばれている。本遺跡出土の有鉤銅釧も表面はよく研磨された製品である。欠損によって形態が一部不明瞭ではあるが、福井県西山公園出土[3]の銅釧が最も類似しているようである。

このように、異なる形式の銅釧を同時埋葬あるいは出土した例は、現在のところ全国的にみても本遺跡以外ではみられないが、中国地方では円環型銅釧が鳥取県の長瀬高浜遺跡[4]、土居敷遺跡[5]、有鉤銅釧が広島県の浄福寺2号遺跡[6]、岡山県の荒神峪遺跡[7]などにおいて単独出土している。地理的にみると、本遺跡のように形式の異なる銅釧が同一遺跡内において出土することは、今後もありえると思われる。

腕輪として使用された銅釧出土の在り方は、現在のところ、対馬、北部九州、畿内の墳墓からの出土がほとんどである[8]。そして、いずれも銅釧が腕に着装された状態で検出されているが、これは被葬者が生前において、共同体内における有力者もしくは特殊な事柄を司った人物であったことが埋葬に反映されたものであろう。しかしながら、山陰、瀬戸内地方における出土の在り方はいずれも埋葬に伴うものではなく、居住区内の遺構（竪穴住居、土壙等）から出土していることに他地域との大きな差がみられる。このような事実は銅釧が特定の人物の所有する宝器ではなく、他の青銅器と同様に共同体における祭祀などに使用される道具として利用されていたことを意味していると考えられる。したがって、祭祀を司る人物が亡くなっても、銅釧は埋葬されることなく後継者に引き継がれていったと思われ、本遺跡における銅釧の使用方法はまさにこのような在り方を示すものといえよう。

3　生産地について

次に生産地について考えてみたい。まず、有鉤銅釧の鋳型出土例は全国でも3例[9]しかないが、この形式は北部九州において鋳造されていたことが間違いないことから、本遺跡出土例も北部九州産であろう。鉛同位体比法による分析結果によれば、本遺跡の有鉤銅釧は中国の華北産の鉛と朝鮮半島産の鉛との混合によってつくられた可能性が極めて高いという興味深いデータを得ており[10]、弥生時代後期中葉以降の青銅器生産の在り方を考えるうえにおいて重要な知見であった。

問題は円環型銅釧であろう。この形式は前述したように朝鮮半島に原型を求めることができることから、対馬および北部九州出土の大部分が舶載品と考えることができる。ところが、大阪府東大阪市の鬼虎川遺跡[11]において、円環型銅釧の石製鋳型が出土したことによって、確実に畿内で円環型銅釧が鋳造されていたことが明らかとなり、大阪市の加美遺跡出土の銅釧も形状、法量、時期等からみて鬼虎川の鋳型で鋳造された可能性が指摘されている[12]。

本遺跡出土の円環型銅釧の鉛同位体比法による分析結果では、近畿、三遠式銅鐸、広形銅矛等弥生時代後期の試料が集中する領域にあり、原料となる鉛は中国の華北産であることが判明したが[13]、いまだ生産地を同定することは困難である。あえて推察するならば、本遺跡および畿内、山陰に出土する円環型は鋳型を出土した畿内で銅鐸等とともに生産された可能性が高いと思われる。

4　最後に

加茂政所遺跡の円環型銅釧を出土した竪穴住居44は、この集落内では平均的な規模の住居であるが、分銅形土製品や特異な土玉などを共伴していることから、この竪穴住居44の人物は集落内において祭祀的な行事を司る人物であったことを想定させる。また、有鉤銅釧は折損が原因で祭祀器具としての機能を持たなくなったため、集落内の土壙に投棄されたものではなく、もはや他の青銅器と同様に祭祀の主体とはなれない社会情勢になってきたため、不要品として投棄されたと理解すべきであろう。

なお、円環型銅釧については、福岡大学人文学部教授小田富士雄氏に遺物についてご教示を受けるとともに、資料文献等の入手についても大変お世話になったことを明記しておく。

（松本）

註

(1) 小田富士雄「弥生時代円環型銅釧考－日韓交渉資料の研究－」　『古文化談叢』第13集　九州古文化研究会 1984年

(2) 清水真一「長瀬高浜遺跡出土の銅釧とその背景」『古文化談叢』第12集　九州古文化研究会 1983年

(3) 斉藤優「長泉寺古墳と弥生式遺跡」『福井県文化財調査報告』第７集 1957年

(4) 註(2)に同じ

(5) 会見町教育委員会「浅井字土居敷遺跡発掘調査現地説明会」資料 1981年
および註(2)

(6) 山田繁樹他「浄福寺２号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群』（広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第75集）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター　1993年

(7) 津山市教育委員会「荒神峪遺跡・有元遺跡現地説明会」資料　1996年
小郷利幸「荒神峪遺跡」－津山総合流通センター埋蔵文化財発掘調査報告３－（津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第64集）　津山市教育委員会　1999年刊行予定

(8) 北部九州では雛川遺跡（太宰府市）、畿内では芝生遺跡（高槻市）などにおいても、墳墓以外から出土している。

(9) 福岡市香椎松原、福岡県春日市須玖岡本、福岡県夜須町宮ノ上の３ヶ所で出土。

(10) 平尾良光・榎本淳子「加茂政所遺跡出土銅釧」『加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告138）岡山県教育委員会 1999年

(11) （財）東大阪市文化財協会『鬼虎川の金属関係遺物』 1982年

(12) 田中清美、桜井久之「大阪府加美遺跡Ｙ１号墳丘墓出土の銅釧」　『考古学雑誌』　第73巻第２号 1987年

(13) 註(10)に同じ

第６節　飛鳥様式の瓦と古墳時代後期の集落

今回の山陽自動車道関連の発掘調査では、大和の奥山久米寺と類似する角端点珠単弁八弁の軒丸瓦片が計８点出土している。その内の２点（C16、8433）は津寺遺跡[1]から、６点（3012～3017）は加茂政所遺跡からの出土である。

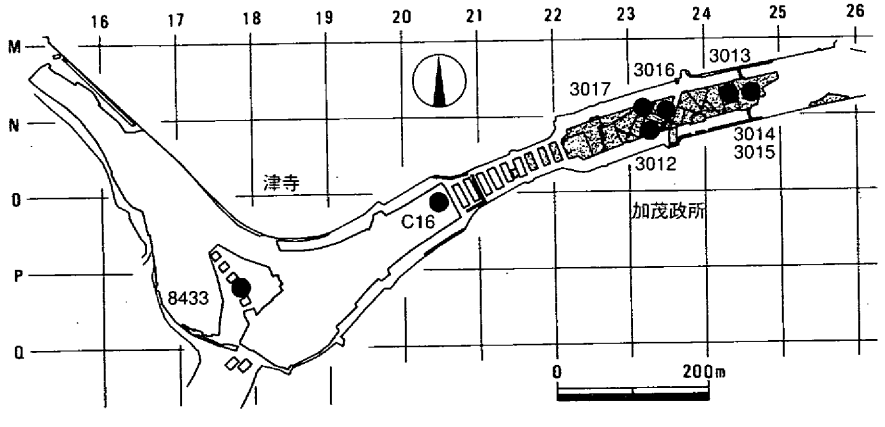
瓦については、外縁はすべて直立縁で、外側は角張っているが、内側は丸味を持つ。瓦当の復元径は約16cmである。8433や3012・3016を見るかぎりでは、丸瓦部広端の凹面側を斜めに削って瓦当と接合しているようである。焼成では、当遺跡のものはやや軟質なものが多い。

蓮弁には肉厚のものと肉薄のものがあり、前者は弁間の界線が比較的高く、幅が広い。津寺遺跡の２点と3012は肉厚で、3016も表面の摩滅が認められるが、肉厚であったと思われる。また、3012と3016は表面の色調が黒みの強い褐灰色系、胎土に５㎜前後の大きな長石粒を多く含み、瓦当の厚みが２cmであることなどで一致しており、硯に転用された3017もこれに類似する。津寺遺跡の２点は表面の色調が灰白色系で、瓦当の厚みが1.6cmであることから、肉厚のものには２種類あるようである。肉薄のものは3013～3015で、色調は灰白色系、瓦当の厚みが1.7cm前後である。3014で見ると、蓮子は１＋４で、中房は比較的小さい。また、花弁端と間弁の間に段が認められることが特徴である。これらは、奥山久米寺「ⅡＡ型式」に非常に近く[2]、その年代観は７世紀第２四半期（630年頃か）である[3]。

次に出土状況を見ると、津寺遺跡の8433は微高地中央付近の溝－475から出土しているが、遺構の時期は奈良時代中葉であり、何らかの理由で混入したものである。C16は、遺跡の東端付近、つまり加茂政所遺跡寄りで出土している。一方、加茂政所遺跡の3017は第１微高地の北東端付近、3013～3015は第２微高地上から、3012・3016は第１・２微高地間の低地から出土している。

このように、瓦片は２遺跡、東西約700ｍにわたって点在しているものの、加茂政所遺跡のほうに多く分布している。さらに、肉厚のものは津寺遺跡と当遺跡の第１・２微高地間、肉薄のものは第２微高地上に分布していると言える。ただ、残念ながら、遺構との関係や他の遺物との供伴関係などは全く不明である。なお、これらに伴う可能性のある平瓦なども、各地点でわずかに出土している。

このような出土状況や出土量からは、さまざまな想像が可能である。分布状況に本当に意味があるのか無いのか。調査区内やその近辺に、この軒丸瓦を使用する建築物があったのか無かったのか。無



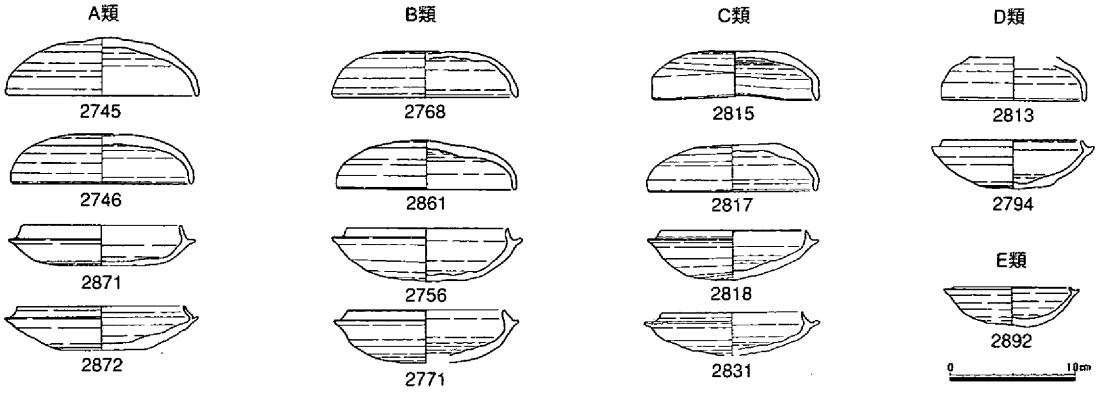
第1131図　飛鳥様式の軒丸瓦の出土地点

かったとすれば、自然にあるいは偶然何かの理由で運ばれたのか。あったとすれば、瓦と同時代の建築物なのか、後世の差し替えによってどこからか持ち込まれたものなのか。建築物の規模は小さかったのか、周辺部のために出土量が少量であるのか、など挙げればきりが無い。そこで、間接的ではあるが、遺跡の状況から何か参考になる点があるかどうかを検討してみたい。

瓦の時期に比定されている７世紀第２四半期を含め、前段階である６世紀後半頃からの状況を取り上げてみると、当遺跡では竪穴住居の軒数が急増し、55軒を数える。他にも、掘立柱建物２棟、焼成土壙11基などが検出され、集落内を溝で区画した状況が確認されている。この時期には、弥生時代以来、安定して集落が展開してきた第２・３微高地の住居41軒とは別に、海抜高の低い第１微高地にも14軒の住居が認められるようになることは注目される。このような状況は、津寺遺跡でも同様で、微高地高位部では住居20軒であるが、古墳時代前期まで水田であった東の低い部分には105軒の住居が検出されている。つまり低位部に集落が集中する様子は、津寺遺跡においてより顕著に認められると言える。

住居の床面海抜高を検討すると、調査区内では津寺遺跡中屋調査区の竪穴住居－330などの位置する付近と加茂政所遺跡の第２微高地がおよそ370～430cmと高く、周辺に向かって最大で110cm程度も低くなっている。それぞれの遺構検出状況には差異が認められないことから、分布状況については地下げなどによる削平を考慮する必要が少ないものと思われる。東西約900mにわたり確認された、点在する微高地上に広がる集落は、調査区外にも及ぶ可能性があると思われる。そのような中で、集落が津寺遺跡の微高地のように良好な土地を敢えて選ばず、低位部に集中すること、これはひとつの疑問であり、重要な事実である。そこで、さらに時期を細かく区切って集落動向を検討したい。

まず、出土した須恵器、特に杯身について分類を行う。Ａ類は口径が13cm程度で、立ち上がりは内傾するが比較的長い。底部はヘラケズリが施され、体部はやや扁平気味である。Ｂ類は口径が12～13cm程度でＡ類とあまり変わらないが、立ち上がりは比較的短く、断面が小さい三角形を呈するものもある。底部はヘラケズリが施されており、丸味を帯びている。Ｃ類の立ち上がりはＢ類より若干華奢で、口径は12cm程度である。これに伴う蓋はＡ・Ｂ類とは異なり、口縁部が直立かやや内湾気味で、天井部も平らである。Ｄ類は口径が11cm程度で、立ち上がりと受け部は矮小である。底部はヘラケズリを施さないものも認められる。Ｅ類は口径が最も小さく10cm程度である。立ち上がりと受け部はＤ類よりもさらに矮小である。これらは、従来の編年からもほぼ時間的な変化として捉えることができ



第1132図　加茂政所遺跡出土須恵器の分類（1/6）

ると思われる。

これを基にして住居軒数を時期別で示すと、Ａ～Ｂ期では、津寺遺跡５～14軒、加茂政所遺跡３～13軒である。ここまでは、集落の拡大傾向が見られる。続くＣ～Ｄ～Ｅ期では、津寺遺跡23～14～３軒、加茂政所遺跡９～４～４軒となり、一転して縮小傾向がうかがえる。この間に、津寺遺跡の高位部（中屋調査区）では、Ｄ期を最後に住居は確認されなくなる。つまりＥ期では、津寺遺跡東部（高田調査区）のみで検出された３軒と加茂政所遺跡４軒となり、集落の縮小傾向は加速し、これ以後は目立った遺構は検出されず、土地利用状況は不明となる。

ただし、加茂政所遺跡では、第２微高地の南部で、７世紀末から奈良時代の遺物が比較的多く認められる傾向がうかがえ、東に位置する高松原古才遺跡[4]でも中葉以後の遺構や遺物も認められる。このことから、集落の占居地が移動している可能性が高い。この高松原古才遺跡は海抜高が低く、加茂政所遺跡も現在の微地形を見ると南や東へ低くなっていることは注目される。つまり、津寺遺跡で見られたような、より生活環境の悪い場所へ集落が移るという傾向が続くと考えられ、非常に興味深い。裏を返せば、環境条件の良い場所を特殊な性格を有する施設などが占居し、特定の集落は周辺に配されるという構図が、Ｅ期以降に推し進められたことを思わせる状況である。これが、当該期の集落概況である。

では、軒丸瓦との比較のために、分類した須恵器の実年代について検討してみたい。Ａ類の口縁部は、立ち上がりが飛鳥寺下層のものより短くそれより新しいと思われ、小墾田宮推定地[5]ＳＤ050下バラス層のものに類似している。Ｂ・Ｃ類は小墾田宮推定地ＳＤ050東部下・中層のものに類似しており、Ａ類との先後関係が確認される。また豊浦寺創建以前の黒色土層上面のもの[6]はＢ～Ｃ類に類似している。豊浦寺は遅くとも628年には存在した可能性があるので、両者はほぼ７世紀第２四半期よりも前である可能性が高い。すると、Ａ・Ｂ・Ｃ類は６世紀末から７世紀第１四半期の間にほぼおさまる可能性が高いと思われる。一方、Ｅ類は、山田寺整地土層[7]や難波宮跡整地層下の黒灰色粘質土層を切る土壙のもの[8]に類似している。これは、この土器が山田寺創建の641年には存在したことを示している。そして、その前にあたると考えるＤ類は、山田寺造営前のＳＤ619のものに似ており、これが641年以前であることを知ることができる。

大和地域を中心とした須恵器の年代観をそのまま利用し整理すると、およそ７世紀第２四半期に比定される角端点珠単弁八弁の軒丸瓦と時期的に重なる可能性が高いのは、Ｄ～Ｅ期であろう。あるいは、地域的な若干のズレなどを考慮しても、Ｃ～Ｅ期ではないかと考えられる[9]。そうすると、当該軒丸瓦の製作と近い時期に集落は高位部から離れ、一方で低位部のものはさらに周辺に移動しながらも継続するといった状況を推測することができる。

津寺遺跡や加茂政所遺跡、さらに高松原古才遺跡の集落は、焼成土壙や鍛冶炉を伴っており、住居内や周辺からフイゴの羽口や鉄滓が出土するなど、集落内で鍛冶を行っていた可能性が高いことが明らかになっている。こうした集団が「特定の場所」の周辺に集落を営んでいた可能性が、以上のような状況から考えられるようである。

この生活環境の最良な場所である「特定の場所」とはいったい何か。時間的に関連を認めることのできる角端点珠単弁八弁の軒丸瓦を重視すれば、寺院の所在が考えられよう。しかし、それだけが孤高峰のように存在していた可能性も低く、仮にそうだとするとあまりにも周囲の空間が広すぎると思われる。むしろ寺院を含めて、それを建立し得た人物の居住地や公的な施設を想像する必要があると

思われる。所在地についても、近隣の調査区外の高位部が候補として挙げられるのではないだろうか。ただし、これはあくまでも状況証拠の積極的かつ過大な評価であり、遺構や遺物による確実な資料によって今後検討されるべきであることは言うまでもない。　（柴田）

註

（1）C16は「津寺遺跡４」に、8433は「津寺遺跡５」に収載している。

（2）「奥山・久米寺の調査（1989－１次）」『飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報』20　奈良国立文化財研究所　1990年

佐川正敏・西川雄大「７　大和　奥山廃寺（奥山久米寺）の創建瓦」『第１回古代瓦研究会　飛鳥時代の瓦づくりⅠ』　奈良国立文化財研究所　1998年

（3）大脇潔氏教示による。また近年、岡山県都窪郡山手村の末の奥窯跡群で加茂政所出土の肉厚のものに類似する軒丸瓦片が確認された。同じトレンチ等からD期以後の須恵器片も出土しているが、時期に幅があるため詳細は不明である。なお、出土遺物の実見にあたっては、日野浦弘幸氏に便宜を図っていただいた。

（4）本書第三分冊

（5）「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」Ⅰ『奈良国立文化財研究所学報』第27冊　奈良国立文化財研究所　1976年

（6）「豊浦寺第３次調査」『飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報』16　奈良国立文化財研究所　1986年

（7）「山田寺第７次調査」『飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報』20　奈良国立文化財研究所　1990年

（8）『難波宮跡発掘調査概報』　高速大阪東大阪線難波宮跡調査会　1978年

（9）須恵器の年代観のズレや推定される瓦の製作時期に相違があったとしても、Ａ・Ｂ期まで遡る可能性は低いと考えている。ただし、Ｅ期より新しくなる可能性は否定できない。

第７節　火頭形三尊塼仏

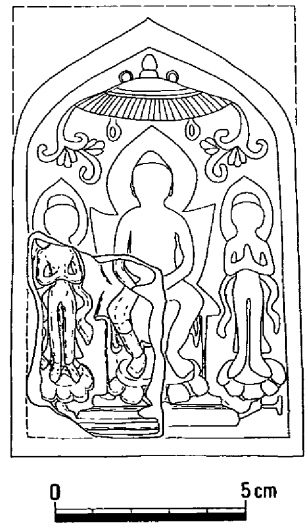
当遺跡の河道から、古代末から中世の瓦や土器に混じって、１点の塼仏[1]が出土している。それは、土師質の火頭形三尊塼仏断片である。

さまざまな形式の塼仏の中でも、三尊塼仏といえば、川原寺裏山遺跡[2]や夏見廃寺[3]などで多量に出土している方形三尊塼仏などが有名である（以下、方形塼仏と略す）。しかし、火頭形三尊塼仏は、天蓋の下に倚座する中尊の左右に脇侍を配しているという図像ではそれらと共通するが、多くの点でまったく異なるものである。また、火頭形三尊塼仏にも大きく２つの型式がある。１つは橘寺のもので、もう１つが現在の中華人民共和国出土とされるものを代表とする一群である。今回出土したのは、後者（以下、これを火頭形塼仏と略す）で、知り得る限りでは、国内で12例目（笵型１例を含む）、岡山県内では２例目である[4]。

復元すると、笵面は火頭形で、大きさは約10×７cm程度になる。方形塼仏では20cmをこえるものが多いが、この形式では、タテ12～13cm程度が大きい部類であり、10～11cmはそれに次ぐ大きさである。やや小さめではあるが、極端に小さいものではなく、踏み返しの結果による縮小と思われる。

笵面は火頭形と思われるが、塼仏全体の形態は明らかにできない。下端と、向かって左端に面とも言える状況が見られるが、胎土ならびに焼成の性質上、これが本来の形状か、磨耗によるものか、あるいは剥離面かの判断が困難である。このため、素縁を有するかどうかも、あるいは多くの火頭形塼仏のように、上部が火頭形を呈するのか、兵庫県法華山一乗寺[5]のように方形を呈するかについても断定できない。ただ、裏面についてはナデが認められており、剥離面の可能性が低いとすれば、この塼仏は厚さ1.2cm程度のタイル状になる。一般的に火頭形塼仏は下方に向かって厚みを増し、安置可能な形態になっているものが注目されているが、今回の例のようにタイル状になるものもいくつか存在する。岡山県久米廃寺[6]や大阪府西淋寺のものなどがそうである。また、表面には漆が塗られていたと思われ、他の例と同様に金箔が貼られていた可能性が高い。

方形塼仏や火頭形塼仏については、形態や出土量などの検討から、前者が主に堂塔の壁面装飾に使用され、後者は念持仏であると考えられている。今回の塼仏は１点のみの出土ではあるが、寺院との関連が明確ではなく、形態もタイル状になるので、従来からあげられる根拠から使用方法を限定することはできない。ただ現在のところ、やはり壁面装飾に使用された可能性は低いと思っており、単体あるいは他の小形塼仏と組み合わせて念持仏として使用されたのではないかと考えている。



第1133図　火頭形塼仏略図

最も問題になるのは、この塼仏の製作時期である。既に述べたように、塼仏は河道から出土している。この地点の出土遺物は、平安時代末期から南北朝の頃までの遺物が非常に多く、これらに混じって出土したことは間違いない。それらの廃棄時期は、室町時代までを視野に含める必要があるが、当遺跡の状況から、平安時代後期から鎌倉時代の間には、何らかの形でこの塼仏が使用されていた可能性があると考えている。では、その時期に製作されたものであるの

か、となると難しい点がある。

火頭形塼仏は、これまで奈良時代創建の寺院から多く出土していることから、そこまで下らせる考え方がある。ただ、この形式が主に念持仏としての使用法を推定されているように、携行や移動が容易であり、長年にわたり受け継がれる可能性が考えられるため、そうした考え方は十分ではない。また一方で、型があれば簡単に製作できるので、踏み返しの時期の問題もあり、事態はさらに深刻である。ただし、中華人民共和国の西安出土と伝えられるものの裏面には「大唐善業・・・」の銘があり、これが資料として確実なものであるならば、この火頭形塼仏は唐代に製作されていたことは明らかで、原型あるいは塼仏が、7世紀初頭以降に彼の地から直接もたらされたことになる。

方形・火頭形を問わず、三尊塼仏の図像構成は、天蓋の下に倚座する中尊の左右に合掌した脇侍が蓮華の上に立っているものである。このような図案は、敦煌莫高窟の壁画[7]のなかでも初唐とされる説法図などに類似しており、莫高窟でも日本でも、中尊が倚座するものは、ほぼこの時期に集中し、前後の時期にはほとんど見られないと考えられている。方形塼仏では、川原寺裏山遺跡・橘寺の型式は、夏見廃寺の型式に先行すると思われるが、どちらも初唐貞観期（618～649年）から武周期（684～704年）に比定される壁画様式に通じるものがあり、特に夏見廃寺の型式は武周期の壁画に近い。ここから、川原寺裏山遺跡や橘寺の型式はおよそ7世紀後半を考えてもよいのではないかと思われる。いずれにしても、方形塼仏は、同時代の壁画に強い影響を受けているのではないかと思われ、類似点も多い。表現の装飾性の高さ、線の細やかさと柔らかさは絵画のようである。

一方の火頭形塼仏は、そうした方形塼仏とは異なり、簡素であり硬い印象が強い図像である。それは、全体において線の細やかさがなく、天蓋は単純で、飛天や背景の菩提樹が表現されないこと、脇侍の天衣の翻り方などからくるものである。このような相違が、様式の前後関係を示すものか、地域差であるのか、あるいは模範の違いを示すのかについては明らかでない。ただし、蓮華台の蓮弁が素弁で、蓮子も表現しないことや台座の後屏の形は、川原寺裏山遺跡の方形塼仏型式と共通している[8]。また、脇侍の体形がそれらより細身であるという指摘もあり[9]、それを重視すれば、当初の火頭形塼仏は7世紀後半のなかでも、川原寺裏山遺跡に先行すると考えることも可能である[10]。

分布についてみると、川原寺裏山遺跡の型式は地点数が少ないが、主に大和が中心で他に山城・和泉と続き、尾張で1点ある。これは、この塼仏型式が大和で生まれた可能性を示すであろう。夏見廃寺の型式では、主に摂津を除く畿内・近江・紀伊・伊賀・伊勢・能登・越前・備後・伯耆となり、広い範囲で認められるようになる。この変化は、各地における寺院の造立状況を反映していると思われる。火頭形塼仏は資料数が少なく、日本では摂津を除く畿内・播磨・紀伊・近江・備中・美作で確認されているが、大和には少ないと言う特徴がある。日本での火頭形塼仏の分布状況の評価については、その性格上、少なくとも現状では困難であるが、中国から特定の場所に入ってきたものが各地へ拡がるのか、当初から各地へ入ったものかといった伝播経路が注目されるところである。

以上、三尊塼仏について簡単に述べたが、使用方法や製作年代の限定、伝播の仕方など検討されるべき点が実に多いことは言うまでもない。これらを解決していくことで、7世紀の仏教や寺院の在り方、それらの普及の様子、遣唐使などの国際交流の一端が見えてくると思われ、今後の資料の蓄積・研究に期待したい。（柴田）

なお、小稿の執筆ならびに遺物の実見にあたっては、大脇潔、亀田修一、中田利枝子、仁木康治、

真鍋成史の各氏にいろいろと便宜を図っていただき、また多くのご教示を賜った。記して、感謝の意を表するとともに、それらを十分に活かせなかったことをお詫びしたい。

註

(1) 塼仏全般ならびに集成については以下のものが詳しい。
久野健編「押出仏と塼仏」『日本の美術』第118号　至文堂　1976年
大脇潔「塼仏と押出仏の同原型資料」『ＭＵＳＥＵＭ』№418　東京国立博物館　1986年
『特別展　塼仏』　倉吉博物館　1990年
清水昭博「出土状況からみた塼仏用法の検討」『考古学論攷』第19冊　奈良県立橿原考古学研究所　1995年

(2) 網干善教「川原寺裏山遺跡と出土遺物について」『研究発表と座談会　川原寺裏山遺跡出土品について』松下隆章編　1977年

(3)『夏見廃寺』　名張市教育委員会　1988年

(4) 奈良県－橘寺（笵）・阿弥陀山寺、京都府－西山廃寺・山城国府、大阪府－私市滝ヶ広遺跡・西淋寺・太平寺廃寺、兵庫県法華山一乗寺、和歌山県神野々廃寺、滋賀県穴太廃寺、岡山県－加茂政所遺跡・久米廃寺の各１点、計12例。

(5)『特別展　塼仏』　倉吉博物館　1990年

(6)「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』４　岡山県教育委員会　1973年

(7) 中国壁画全集編輯委員会編『中国美術分類全集　中国壁画全集』敦煌隋代　1991年
同　敦煌５初唐　1989年、同　敦煌６盛唐　1989年
しかし、これら説法図や中華人民共和国出土のほとんどの塼仏では、中尊が定印を結び脇侍が合掌して直立するものはなく、日本で見られる多くの塼仏とは異なる。これは、製作・使用意図などの大きな変化を示していると思われる。「大唐善業」銘火頭形塼仏は、その例外的な方であり、この資料については今後慎重な評価が必要と考える。

(8) 清水昭博「塼仏製作の一様相」『橿原考古学研究所論集』第12　1994年では、川原寺裏山遺跡などの塼仏Ａと夏見廃寺などの塼仏Ｂ、唐招提寺の押出仏を比較し、図像の変化が簡略化の方向にあるとしてＢ→唐招提寺例→Ａの順を示している。しかし、筆者はむしろ装飾性が高くなる方向を考えている。

(9) 大脇潔「塼仏とその製作年代」『特別展　塼仏』　倉吉博物館　1990年
亀田修一、中田利枝子両氏もこの点を指摘している。

(10) この年代観は、必ずしも当遺跡の塼仏についての製作年代ではない。紋様細部の鮮明さや大きさなどから、１～２回程度の踏み返しによる作品であることは疑いのないところであるが、その時期は不明と言わざるをえない。

第8節　火葬墓

当遺跡では、火葬墓2基が検出されている。いずれも第2微高地の北東端近くに位置しており、火葬墓1から東へ8m、南におよそ5mの位置に火葬墓2が所在する。

火葬墓1は、46×41cmの楕円形の掘り方内に、いったん埋土を施したのちに蔵骨器3422を埋納したものである。蔵骨器内からは骨片と銅銭が出土している。銅銭は12枚程度と考えられ、延喜通寶と判明、あるいはそれと推測されるものが5枚ある。掘り方内には鋤先が立った状態で検出されていることが注目される。

火葬墓2は51×50cmの楕円形の掘り方内に、石で蓋をした蔵骨器を埋納したもので、蔵骨器3423は掘り方底面に直接置かれている点で1とは異なる。蔵骨器内からは銅銭が出土しているが、骨片は確認されていない。銅銭は13枚程度と考えられ、延喜通寶と判明したものは4枚ある。掘り方内に鋤先が立った状態で検出されていることは1とまったく同じである。

どちらの蔵骨器とも器壁が厚く、あまり丁寧なつくりとは言えず、輪積み製作の痕跡が明瞭に残っている。調整技法についても類似しているが、火葬墓1の3422が平底、2の3423は丸底という相違があり、興味深い。類例の少ないもので、蔵骨器として使用するために作られたものであろうか。

銅銭の枚数は両者とも近い数値を示している。12～14枚程度の中で、一定の決まった数字が意識されたものと思われる。ほとんどの銅銭の径は1.9～2.1cmとほぼ均一で、延喜通寶と判明したものはすべてこれにおさまる。この点から、銭名の不明なものも、同一か少なくとも長年大寶以降の皇朝十二銭である可能性が大きい。ただし、火葬墓1のM97は復元径が2.4cmとなり、皇朝十二銭であるならば富寿神寶以前であると考えられる。

これらは、遺構や遺物の年代を考えるうえで貴重な資料でもある。確認された中では初鋳907年の延喜通寶が最も新しい。他は不明であるが、皇朝十二銭ならば初鋳958年の乾元大寶が最後であるので、遺構の上限は10世紀初頭ないし中葉の可能性が高い。その流通期間については当然限定できないが、987年には皇朝十二銭の使用が禁止されるなど、10世紀後半にはほとんど使用されなかったものと考えられている。貨幣以外の価値を付されていたとしても、その質の粗悪さなども考えると長期間保有されたとは思われず、遺構の時期もおよそ10世紀前葉～中葉とすることもできよう。

鋤先は両遺構とも共通して掘り方内にあり、刃先を下にして、立った状態であることが確認されている。また興味深いことに、火葬墓1では蔵骨器の北側に、2では南側にあり、向きがほぼ平行になっていることが注意される。蔵骨器の形態も考慮すると、共通した埋葬方法の中にあって、両者が対峙する要素を認めることができる。

鋤先を出土する火葬墓・小土壙（あるいは柱穴）は、それほど例は多くない。時期は多少異なるものもあるが、県内では津寺遺跡で2基[1]、久世町上野火葬墓で3基[2]が確認されている。県外では鳥取県倉吉市伯耆国庁跡の1基がある[3]。この内、津寺遺跡の丸田調査区P－934のみが立った状態を呈しており、他は水平状態である。この違いの意味については今後の課題である。

遺構の性格については、当遺跡の火葬墓と上野火葬墓以外は、鋤先以外の埋納物が確認されていないので不明である。しかし、津寺遺跡の丸田調査区P－934と土筆山調査区の土壙－50（鎌倉～室町）、伯耆国庁跡のSK04は、共通して建物に近接していることが指摘できる。それぞれ建物－5東辺の柱

穴近く、建物－９の南に平行する溝13の肩口、建物ＳＢ07の南である。このような位置関係は、胞衣容器などを含む「土器埋納壙」の状況にも類似しており、当時の埋葬や出産、地鎮などの風習を知るうえで重要である。

火葬墓も建物との関係があるならば、冒頭に触れた火葬墓１と２の位置関係と鋤先の関係を考えると、１を北東隅、２を南東隅にした東西８ｍ、南北５ｍの長方形の空間ができる。これは周囲の溝などの方向とも一致する。若干飛躍するが、これらをほぼ東辺と北辺にした建物が存在していた可能性が考えられてもよいのではないだろうか。つまり、この２基の火葬墓は無秩序に存在するのでも、いわゆる「墓地」にあるのでもなく、建物と有機的な関係をもって埋設されているということであり、ここが被葬者にとって何らかの重要な意味のある施設であった可能性にまで発展するわけである。９世紀以降の墓は、寺院境内地や周辺に位置する場合があることや、建物との関連についても指摘されており(4)、検討してゆく必要があろう。特に鋤先を埋納する遺構の意義については、今後の資料の蓄積や過去の資料の掘り起こしによって深められることを期待したい。　（柴田）

註

(1)「三手遺跡　津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90　岡山県教育委員会　1994年

(2)『久世町史』　久世町史編集委員会　1975年

(3)『伯耆国庁跡発掘調査概報（第３次）』　倉吉市教育委員会　1976年

(4) 高橋健自・森本六爾『墳墓』考古学講座21　雄山閣　1929年
山田邦和「平安京の葬送地」『季刊考古学』第49号　雄山閣　1994年

第９節　「加茂政所廃寺」

1　遺構について

当遺跡で想定される「加茂政所廃寺」は、後述するように11世紀代に、瓦葺きの建物が建築されたことは明らかであり、ある意味これを以て創建時期と考えることが可能である。しかし、これが寺院そのものの創建か建築物の構造変化かは厳密には決しがたく、当遺跡の古代のなかで遺構・遺物が多い時期、つまり９世紀後半から11世紀前半までに、既に小堂などの寺院が存在していた可能性は否定はできない。ただ、いずれにしても古代末期から中世前半期に本格的に寺院運営の最盛期が存在したことが言えると思われる。

一方の廃絶時期については２つの時期を候補にあげることができる。１つは、微高地上の遺構や遺物、既に報告している河道の状況を見る限り、室町中葉以降に該当するものが非常に少ないことから、この頃から寺院が急速に廃れ、廃絶した可能性である。２つ目は、室町中葉～後葉のある時期に、小規模な建築物（小堂のようなものか）を想定し、その廃棄をもって寺院の廃絶とする考え方である。ただし、これが古代から継続する寺院の末期的な姿であるかどうかは明らかでないので、寺院の廃絶時期としては、現在のところでは、この２つのいずれかの可能性が高いと言うにとどめたい。

寺域については、東辺と南辺が不明瞭である。これは、東辺については河道の形成時期が明確でないことや、それを利用したかどうかが曖昧であること、南辺は溝101だけかどうかが不明であることによる。北辺と西辺は、溝の他に今回土壙として報告した遺構も本来は溝などの下部である可能性もあり、それらから想定することが可能である。

また、遺構の切り合いや出土遺物からみて、複数の時期のものがあることも明確である。瓦では後に触れる宝相華紋の軒丸瓦Ⅰａ類と蕨手状の唐草紋軒平瓦Ⅰ類の組合せ、宝相華紋軒丸瓦Ⅰｂ類と平城京6663型式の陰陽逆転した軒平瓦Ⅱ類の組合せ、巴紋軒丸瓦Ⅱ・Ⅲ類と唐草紋軒平瓦Ⅲ類・連珠紋軒平瓦Ⅳ類の組合せが推定される。前者は量が少ないため、小堂か持ち込まれた可能性もある。これを第１段階とするが、寺院の所在ならびに実態は明らかでない。後２者は量的にもそれぞれ一定量存在し、第２段階が前者で、始まりは11世紀代の中でおさまり、第３段階は後者で、始まりは14世紀前葉を考えている。

第２段階での寺域の南限は明らかでないが、およそ土壙384と溝48・49・50・51で囲まれた方形あるいは長方形の範囲を想定しており、１辺約30m以上を測る。第３段階は、溝100・101で囲まれた長方形の範囲で、南北36.5m・東西25m前後を測る。主軸は、どちらもおよそN-9°-Eになると考えられる。土壙375（梵鐘鋳造遺構）は、第３段階の寺域線の南西角を形成する溝101に切られており、第２段階における寺域内の南西角に位置する可能性が高い。なお、これらの区画より一回り大きいものが認められる。これは南限が不明だが、溝102である。この溝は、溝53を切っており、室町後半に埋没するようであるが、どの段階と関連するものか、あるいは全く別の性格を持つ区画かは、今のところ明言できない。

第２段階の寺域内で、時期の明らかな遺構は、土壙375（梵鐘鋳造遺構）・376、柱穴列２～５である。寺域南西隅の柱穴列２～５は、足場穴の可能性があり、内側に約８×７m程度かそれ以下の構造物が存在していたと思われる。これ以外の場所は空白地のように見えるが、北側は第３段階で確認さ

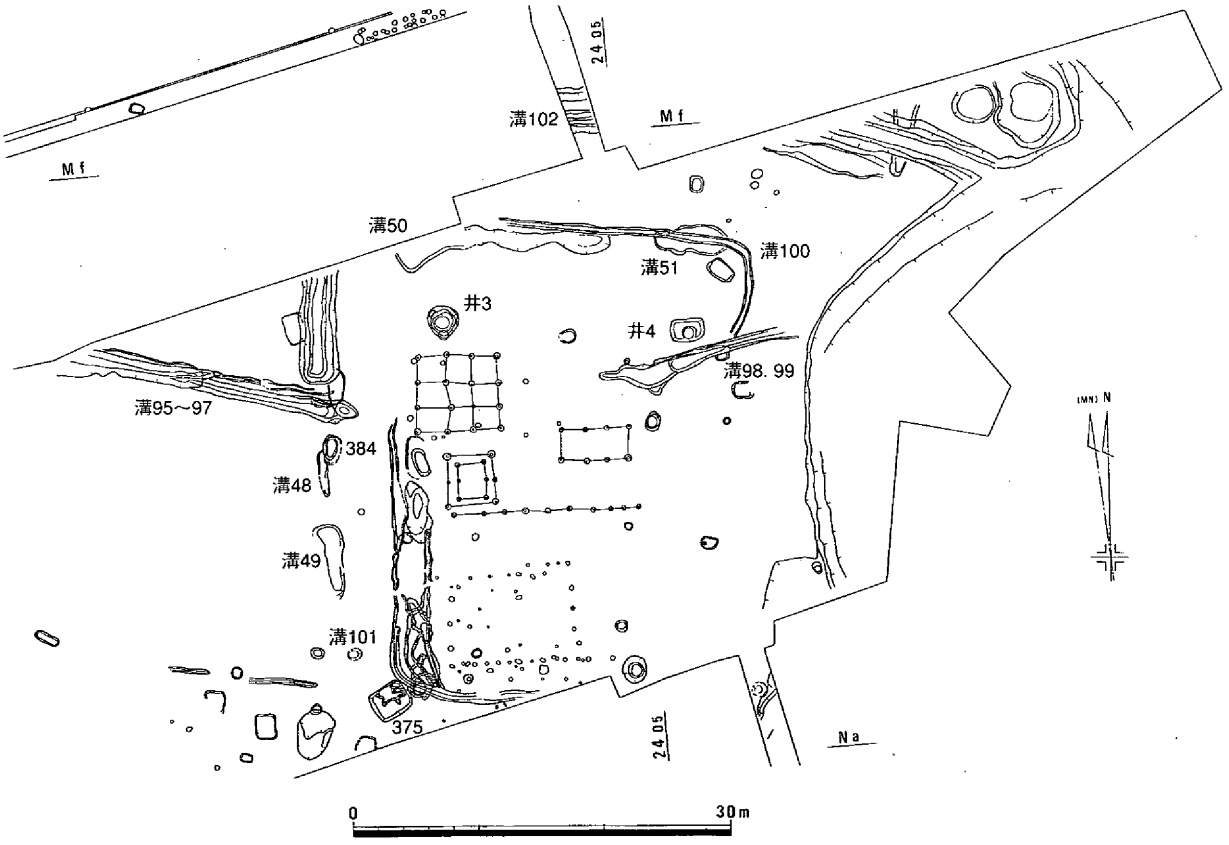
れる状況や時期不明の柱穴などもかなり存在するなど、建物が建てられていた可能性が高い。ただし、柱穴列２～５の東側は柱穴が少なく、ここに瓦葺きの本堂が位置していたことを暗示するものかも知れない。この点は、河道内の瓦などの廃棄地点からも肯定されるのではないだろうか。

第３段階の寺域内は、中央のやや南に位置する柱穴列６で南北に仕切られている。北側は南側より広く、掘立柱建物14～17や井戸３・４などが検出されており、区画溝が途切れた部分には東西から溝95～99が掘削されている。これを見ると、中世の集落状況に類似しており注目される。一方南側には、目立った遺構は認められていないが、おそらく第２段階と同様な状況を呈すると思われる。

以上の内容を総合して「加茂政所廃寺」の伽藍を推測すると、寺域南半の東側（柱穴の空白地）あるいは中央（柱穴列２～５の中）に本堂があり、その西側に鐘楼などの施設が並び、寺域北半が僧坊であった可能性が考えられる。

古代後半から中世前半期は、山上寺院が最盛期を迎える時期で、備前南西部と備中南東部では特に多く見られる。当寺院はその地域の真っ只中にありながら、平地を選んだものである。これは、どのように考えるべきであろうか。

「加茂政所廃寺」の第１段階である９世紀後半から11世紀前半の遺構・遺物状況をみると、既に述べたように寺院としての小堂を含む、在庁官人や開発領主などの屋敷地などが存在した可能性がある。出土した、この時期と思われる軒瓦の一部は平安宮内裏のものと同笵であることが判明しており、国司と一定の関係にあることを強く感じさせる。これに続く11世紀後半には、確実にある程度の体裁を整えた寺院が建立されたようである。用いられた軒瓦の一部は、備前南部や備中南部を中心に分布し



第1134図　「加茂政所廃寺」関連遺構（1/600）

ているものと一部同笵であることも判明している。長い期間でみると、当寺院の造営主体は前時期と同様に国衙領の管理に関わる階層であることを推測できる。そして、寺院そのものがそうした施設であったり、かれらの屋敷に付随するものであったがために、平地に位置するということではないだろうか。

また、当寺院の性格を考えるうえで、時間的に山上寺院の消長とほぼ同じであることが注意される。宗教や思想の歴史的な変遷もさることながら、背景にはそれらを支えた荘園制度などの既存の諸制度の解体があると思われる。

2　瓦について

当遺跡の第２微高地と第３微高地を分断している河道の堆積土から、多量の瓦や土器などが出土していることは、既に報告したとおりである。これらは、「加茂政所廃寺」で使用されたものが、ある時期に廃棄されたと考えられるものである。発掘調査では、遺物が比較的多く集中した第２微高地付近を掘り下げ、遺物の取り上げを行っているが、これは河道埋土の一部であり、出土遺物も「加茂政所廃寺」に関係するものの一部であることをあらかじめ断っておきたい。そのうえで、ここでは河道出土の瓦を中心にして、若干検討したい。

出土した瓦は整理箱にして130箱以上を数え、丸瓦と平瓦の総重量は579kg（丸瓦134kg：平瓦445kg、比率はおよそ１：３）を測る。種類は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・雁振瓦・鬼瓦が確認されており、当然のことながら複数の時期のものが存在している。以下では、奈良時代以前に含まれるものを除き、比較的出土量の多い主要なものについて分類してみたい。

ａ軒丸瓦

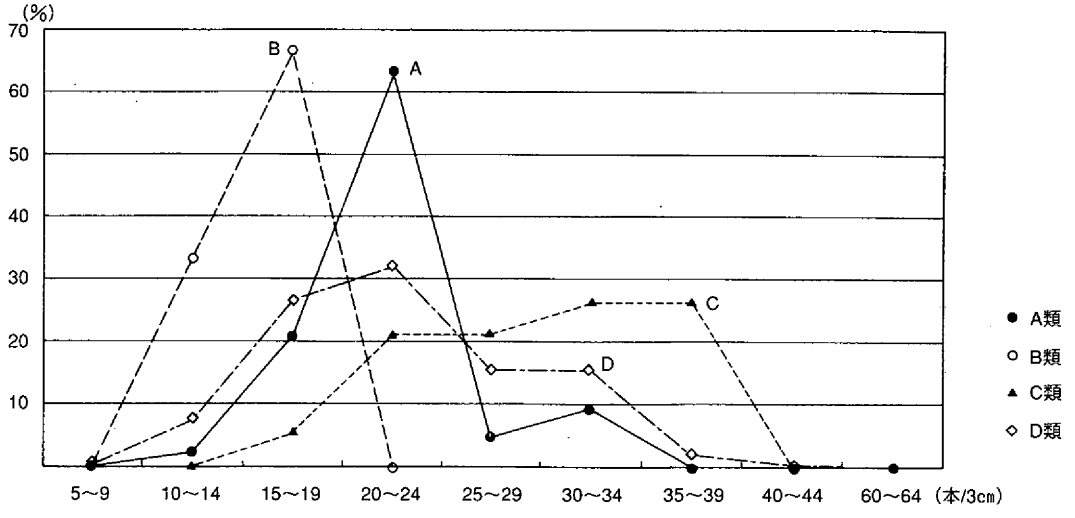
軒丸瓦は、丸瓦部が残存しないものが多く、主に瓦当紋様で分類する。主要なものについて大きく分けると、宝相華紋と巴紋が存在する。

宝相華紋では、間弁などの形状により２種類が確認されている。Ⅰａ類（3788）は間弁の主軸が圏線までのび、主軸中央付近から左右に２本の支脈が広がるもので、瓦当は薄い。これと同紋のものは平安宮内裏蘭林坊でも出土している(1)。Ⅰｂ類（3789・3790）は外縁が直立縁で、瓦当は厚い。間弁の先端に弧状の線が入り、傘状を呈する。間弁主軸から分かれる支脈は基本的に１本であるが、１ケ所で２本になる。3789と3790は同笵で、90°のズレが認められる。紋様の稜線のシャープさなどから3789→3790の順であると思われる。岡山市大内田廃寺(2)のものと酷似している。

巴紋では、右巻き三つ巴紋と左巻き三つ巴紋がある。Ⅱａ類（3871・4084）は右巻きで、珠紋は密である。紋様の隆起は断面四角形だが小さく、尾部は接すること無く、長くのびる。外縁と珠紋の間には圏線が認められる。Ⅱｂ類（3865～3868）は右巻きで、外縁の幅はやや広いが高い。紋様の隆起は大きく、断面は半円形を呈する。15個の珠紋は比較的大きく、巴紋の尾部は互いに接して径の小さい圏線状を呈する。焼成は瓦質である。Ⅲ類（3869・4083）は左巻きで、珠紋は小さいが、配列はやや粗である。焼成は須恵質で、巴紋の尾部は互いに接して径の大きい圏線状を呈する。

ｂ丸瓦

丸瓦には、大きく分けて行基式と玉縁式がある。Ａ類（3800～3818）は行基式で、凸面に縄目タタキが認められる小形のＡ１類と、凸面にナデや縦方向のヘラケズリを施す大形のＡ２類がある。凹面布目の糸については、３㎝あたり20～24本の間に多く分布する（以下、糸の本数は、側面に直交する方について３㎝あたりの本数を示す）。総重量は4.6kgである。Ｂ類（3819～3821）は玉縁式で出土量



第1135図　丸瓦類型別の布目糸数による破片数割合

は少ないが、凸面は縦方向のヘラケズリを施し、凹面から側面にかけて10～19本の粗い布目が残る。厚みが不均等であることなどからも凸型台を利用した一枚作りと考えられる。総重量は1.8kgである。Ｃ類（3879～3882）は玉縁式で、凸面の格子タタキと凹面の非常に細かい布目（30～39本）が多く見られ、特徴的である。平瓦でもまったく同じ特徴を有する一群がある。総重量は３kgである。Ｄ類（3883～3888）も玉縁式で、凸面はナデが施される。須恵質のものが比較的目立ち、凹面の周縁は広く面取りが行われる。断面は比較的厚い。凹面布目はさまざまであるが、15～24本の間に多く分布する。総重量は125kgで最も多いが、Ａ２類の可能性が高いものもかなり含まれるようである。

ｃ軒平瓦

主要な軒平瓦について瓦当紋様を大きく分類すると、備前・備中に特有な蕨手状の均整唐草紋や陰刻の均整唐草紋、他に菊を中心飾りにした均整唐草紋や連珠紋などが認められる。

Ⅰ類（3793・3794）は紋様の彫りが浅く、蕾のような中心飾りから蕨手状に巻き込む唐草紋が左右にのびる。紋様構成は、平城京6663型式などの上下を逆さまにしたものが基本であると思われる[3]。顎は無顎の蹄顎に近い形状だが、段顎である。凹面は布目が残るが、凸面はナデが施される。3793は平安宮出土ものと同笵であることが確認された[4]。Ⅱ類（3795～3798）は、基本的に平城京6663型式の紋様を陰刻した均整唐草紋である。顎は無顎が多いが段顎（4099）も認められる。凹面は布目が残り、凸面には縦位の縄目タタキが施される。瓦当付近には横方向のヘラケズリが認められるものが多いが、そうでないもの（3797）もある。瓦当右隅などに笵傷が確認されたものがあり、岡山市大内田廃寺との同笵関係が判明している。この類のような陰刻唐草紋は、備前国分寺や岡山市富原荒神廃寺[5]で出土している。前者は比較的均整で平城京6663型式に忠実であるが、後者は右の第１葉が上に巻き込んでいる。おそらく岡山市幡多廃寺の第Ⅲ様式軒平瓦[6]などをもとにして製作されたものであろう。当遺跡のⅡ類は後者に近いが、前後関係などは明らかでない。

Ⅲ類（3873～3877）は簡略な唐草紋で、外縁は高い。顎は段顎（浅顎）で、接合面には斜格子の刻みが施される。凹面と凸面とも離れ砂が認められるものが多いが、3877は顕著ではなく焼成も他と比べて堅緻である。Ⅳ類（3878・4104）は連珠紋で、界線を有する。顎は段顎（浅顎）で、外縁は低い。

d平瓦

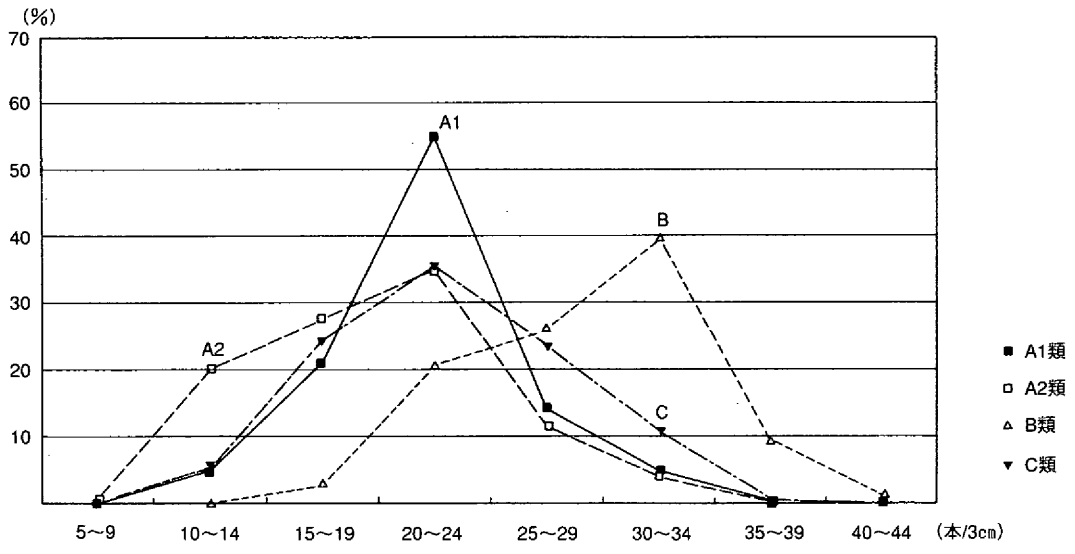
平瓦には大きく4種類が認められる。A類（3825～3861・3863）は、凸面に縄目タタキが認められるものである。このタタキの行い方から、左にわずかに傾斜するがほぼ縦位のA1類と、一部補足的に縦位を施すが基本的には右に傾く斜位のA2類がある。前者は薄手で小形のものが多く、後者は大形のものが多い。凹面布目はどちらも20～24本に多く分布しているが、A2類ではそれ以下のものも比較的認められる。総重量はA1類が52kg、A2類が203kgである。B類（3889～3895）は凸面に格子タタキ、凹面には30～34本を中心とした細かい布目が認められるもので、丸瓦C類と共通する。総重量は7kgである。C類（3896～3906）は離れ砂を使用するもので、凹面凸面とも粘土板糸切り痕が確認されるものが多い。凹面布目はさまざまであるが、20～24本に多く分布する。総重量は178kgである。

e組列と編年

これまでは各器種で分類を行ったが、次にそれらの組列や組合せについて検討する。まずは、軒丸瓦の組列をしてみたい。

軒丸瓦Ⅰa類とⅠb類では、間弁の先端形状で大きく異なる。Ⅰa類のような間弁形は真備町箭田廃寺[7]や金光町占見廃寺[8]、備中国分寺[9]などで出土しているが、これらは、主軸からのびる支脈が左右1本づつで、花弁は先端があまり尖らず丸味があり、ふくよかである。一方、Ⅰb類と同じ間弁形であるものに岡山市神力寺や賞田廃寺[10]出土のものがある。この花弁は矮小で支脈が2本であり、Ⅰb類よりも退化した傾向が見られる。これらをみると、花弁の長幅比率については長さが大きくなり、間弁が目立ってくるという変化の方向が考えられる。宝相華紋軒丸瓦では、「箭田廃寺→備中国分寺→Ⅰa類→Ⅰb類→賞田廃寺」という組列が想定される。

軒丸瓦Ⅱa類とⅡb類では、圏線の有無や珠紋の疎密、巴紋尾部の長さなどいずれもⅡb類のほうが新しい要素を持っている。Ⅲ類は、珠紋の密度などはⅡb類とあまり変わらないが、巴頭部は近接している。これらから「軒丸瓦Ⅱa類・Ⅲ類→Ⅱb類」という組列が想定される。また、Ⅱa類・Ⅲ類は倉敷市亀山遺跡の土器溜り－10の軒丸瓦[11]より新しい様相を呈する。



第1136図　平瓦類型別の布目糸数による破片数割合

軒平瓦は、それぞれ系譜が異なるので軒丸瓦との組合せを見ることにする。

軒平瓦Ⅰ類は、備中国分寺・総社市三須廃寺[12]・金光町占見廃寺・備前国分寺などで出土している。特に備中国分寺と占見廃寺では軒丸瓦Ⅰａ類も確認されており、組合せとなる可能性が考えられる。Ⅱ類は前述したように大内田廃寺と同笵あるいは同紋のものである。大内田廃寺の軒丸瓦には、少量だが軒丸瓦Ⅰｂ類と複弁蓮華紋が出土しているが、Ⅱ・Ⅲ類である巴紋は認められない。このことから、軒平瓦Ⅱ類は軒丸瓦Ⅰｂ類か複弁蓮華紋あるいは両者と組み合わせになる可能性が高い。また大内田廃寺では丸瓦Ａ類と平瓦Ａ類が主体であり、軒平瓦Ⅱ類は調整技法からみてもそれらとの組合せも考えてよいと思われる。

軒平瓦Ⅲ・Ⅳ類はどちらも段顎（浅顎）である。Ⅳ類の外縁は低いが、珠紋は小さい。両者には大きな時期差はないと思われる。またⅢ類では離れ砂の付着が顕著で、焼成なども平瓦Ｃ類との関係が強いと思われる。

以上のことをまとめると、次のような組合せが一つの案として考えられる。

①	軒丸瓦Ⅰａ類	－	軒平瓦Ⅰ類	－	？	－	？
②	軒丸瓦Ⅰｂ類	－	軒平瓦Ⅱ類	－	丸瓦Ａ類	－	平瓦Ａ類
③	軒丸瓦Ⅱａ・Ⅲ類	－	軒平瓦Ⅲ・Ⅳ類	－	丸瓦Ｃ・Ｄ類	－	平瓦Ｂ・Ｃ類
④	軒丸瓦Ⅱｂ類	－	？	－	？	－	？

出土量についてみると、②・③が圧倒的に多い。他に道具瓦では、平瓦Ｂ・Ｃ類の技法を有する熨斗瓦、雁振瓦が確認されるなど、③では種類においてもより豊富であることが言える。①は当寺院では古いもので創建の瓦と見ることも可能であるが、寺院としてある程度の体裁を整えたのは②の瓦とみてよいであろう。③はその次の大規模な建て替えや葺き替えに伴うもの、④も差し替えや新たな小規模な構造物の建築によるものであろうか。

それぞれの時期については、②が大内田廃寺の廃絶時期から、下限を12世紀後半～13世紀前半の間におくことができる。③は、亀山遺跡の土器溜り－10がほぼ13世紀後半～14世紀初頭（亀山遺跡第３段階）に比定されているから、若干新しく14世紀前葉を考えている。一方、①は平安宮内裏蘭林坊から出土しており、960年の殿舎造営割り当て以後、それと近い時期に内裏に持ち込まれた可能性を考えており、②はおよそ11世紀～12世紀前半におさまるのではないかと思われる。さらに言えば、梵鐘の製作時期が11世紀代におさまる可能性が高いと考えられており、②もこれと重複すると考えてもよいのではないだろうか。なお④は14世紀代で、③とあまり時間差はないと思われる。

このような状況を、時期別の土器の出土量と照らし合わせると興味深いことが浮かび上がる。瓦②を11世紀～12世紀前半とした場合、11世紀後半～12世紀前半と考えられる土器は高台付椀の初期のものであり、あまり出土していない。逆に、この次の段階からは出土量は増加するようである。同じように瓦③を14世紀前葉とすると、同時期とされる土器は底部が窪む深い椀などで、ほとんど見られず、次の時期と思われる丸底の小皿は多い。瓦の製作時期と土器の時期が微妙に重ならないこと、これは非常に大雑把な見解であり、実際は一致しているかもしれない。しかし、寺院の建設期間とその機能する期間、そこにこのようなズレが生じる可能性も考えてもよいのではないだろうか。

今回は「加茂政所廃寺」の変遷に注目したため、瓦の生産や供給・流通などの問題について言及し得なかったが、今後十分な検討がなされることを期待したい。　（柴田）

註

(1) 平安博物館編『平安京古瓦図録』雄山閣　1977年

(2)「天神坂遺跡　奥坂遺跡　新屋敷古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』53　岡山県教育委員会　1983年

(3) 先行型式としては、岡山市網浜廃寺（備前）、総社市秦原廃寺（備中）のものがある。

(4) 平安宮出土の吉備地方産瓦の実見にあたっては、京都文化博物館ならびに学芸員植山茂氏に便宜を図っていただき、多くの教示を得た。

(5) 玉井伊三郎・藤沢一夫『吉備古瓦圖譜』第弐輯　1941年

(6)『幡多廃寺発掘調査報告』　岡山市教育委員会　1975年

(7) 葛原克人「箭田廃寺」『岡山県史』第18巻考古資料　岡山県史編纂委員会　1986年

(8) 鎌木義昌「岡山県浅口郡占見廃寺址」『日本考古学年報』2　1954年

(9) 葛原克人「備中国分僧寺跡」『岡山県史』第18巻考古資料　岡山県史編纂委員会　1986年

(10)『賞田廃寺発掘調査報告』　岡山市教育委員会　1971年

(11)「山陽自動車道建設に伴う発掘調査3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69　岡山県教育委員会　1988年

(12)『総社市史』考古資料編　1987年

第10節　「梵鐘鋳造遺構」と関連遺物

加茂政所遺跡土壙375はいわゆる「梵鐘鋳造遺構」と考えられる。この「梵鐘鋳造遺構」と関連出土遺物について本文中に詳しく述べられなかったため、まとめを行うこととする。

土壙375は第２微高地のM24区において検出した（第836図）。検出できた平面形は、長さ318cm、幅260cmの長方形で、深さは最大で63cm残存していた（第906図）。検出したのはほぼ現在の水田耕作土を除去した面であり、本来の規模を推定するには後世の削平をどの程度想定するのかが問題となる。明確な証拠はないが、検出した柱穴の深さなどから、少なくとも50cm以上の削平を考える必要はないと思われる。また断面形は逆台形で、壁は垂直に近く立ち上がる部分もある。したがって、本来の平面的な規模については、長方形という形状が同じで、長さ、幅とも20cm前後大きかったと推測しておきたい。深さは80～100cmぐらいではなかっただろうか。

「梵鐘鋳造遺構」の規模については鋳造される梵鐘の大きさに規定されようが、全国で検出されている平安時代以前の「梵鐘鋳造遺構」は一辺2.5m前後の隅丸方形が多く、これらに比べると少し規模が大きいが、基本的には類似性が高く、特異な形状とはいえないであろう。

底面には、図示したような凹みを検出している。これは南側で黄色砂質土の平坦な底面を確認した段階で観察できた粘土や炭が残っていた部分を掘り下げたもので、写真に見られるように、肩は明確ではなく、また底面に凹凸が多いなど、意識的に掘られたものとは考えにくかった。図において柱穴状に表現している凹みも、明瞭なものではない。発掘調査時点では「梵鐘鋳造遺構」についての認識が乏しかったため、「定盤」や「掛け木」、柱穴についての意識的な調査が十分に行なえていないが、底面にはそうした痕跡はなかったものと考えている。

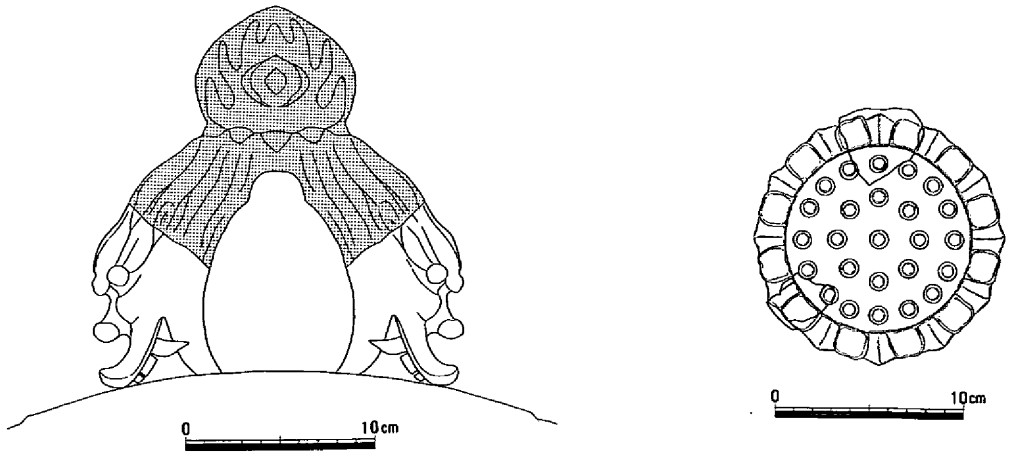
埋土の状況については第395図の断面図や写真を参照されたい。基本的には褐色系統の土が充満していたが、第１の特徴は溶解炉の破片である銅の付着した炉壁や梵鐘鋳型が廃棄されていたことで、この遺構の用途を決定づけた特徴である。第２の特徴は白黄色の良質粘土が多く含まれていたことである。この粘土には表面が被熱のため橙色になっているものがあった（この粘土については現在では「定盤」に用いられた粘土ではないかと考えているが、これについては後述する）。また埋土の堆積状況からは、短期間に意識的に埋め戻されたと考えて良いのではなかろうか。

次に、埋土中から出土した遺物について述べたい。

土器は小片が僅かに出土したにすぎない。3111は須恵器壺の胴部片で、断面台形の突帯が横方向に貼り付けられている。3112は土師器杯である。底部は円盤底で、調整はヘラ切りである。3113は土師器高台付椀である。S314は砥石、M61は刀子ではなかろうか（第906図）。

出土した鋳型については第907・908図のC138～145・146～151として図示している。

C138は梵鐘最上部の半環状懸吊装置である「竜頭」の鋳型である。内面に真土は塗られていないが、底面と外面には部分的にではあるが、白色の細かい土が表面に塗られているのが観察できる。内面の被熱痕跡については、下端部がやや黒ずんでいるのが観察できるのみである。胎土は中心部分には１～２㎜前後の砂粒を多く含んでいるが、表面近くには砂粒をほとんど含まない良質の粘土が用いられている。残存している大きさは、長さ10.2cm、幅９cm、厚さ約4.5cmである。竜の紋様は口から耳のあたりまでが残存しており、上顎の牙、鼻、目、たてがみが表現されている。第1137図はこの鋳型



第1137図　「竜頭」・「撞座」の推定復元図

から推測した竜頭の想定図である。欠損部分についてにはトーンをかけているが、この部分については現存する中世以前の梵鐘の竜頭を参考にしてはいるものの、根拠はなく全くの推測である。「竜頭」の規模から、鋳造された梵鐘の大きさは直径60～70cm、高さ１ｍぐらいと推測しておきたい。

Ｃ139・140は、鐘身側面縦帯下部に撞木を受けるために設けられた蓮華紋の座である「撞座」の鋳型である。いずれも約1.5×1.5cmの小さな花弁が表現され、間弁は剣先状になっている。圏線は細い突線でつくられている。また内区の蓮子は直径約１cmを測り、細い凹線で表現されている。表面には真土が塗られており、被熱のため灰色を呈している。胎土は砂粒を僅かに含む良質の粘土である。残存する大きさは、Ｃ139が長さ4.4cm、幅3.2cm、厚さ1.3cmで、Ｃ140は長さ4.6cm、幅4.3cm、厚さ1.1cmである。「撞座」は相反する位置の二個所にあるのが通常であるため、これらが同一個体であるかは明確ではないものの、第1137図のような「撞座」紋様を想定した(1)。

Ｃ141は中帯の間を横に巡っている突帯部分の鋳型ではなかろうか。表面には僅かに真土が残存しており、胎土には籾殻が含まれている。表面は被熱のため灰色を呈している。

Ｃ142～145も鋳型であるが、どの部分か明確でない。Ｃ143～145は胎土や色調、大きさがＣ138に類似していることから「竜頭」の鋳型の可能性を考えておきたい。Ｃ142は穴があいているのが疑問であるが、「乳」の鋳型なのかもしれない。

Ｃ147～151は紋様部分はないが、外型の鋳型であろう。胎土にスサ（「藁や籾、籾殻」以下同じ）を含んでいること、および表面に１～２㎜前後の真土が塗られていることが共通している。Ｃ147の断面観察では、真土の下に１㎜前後の砂礫が混じった粘土が約１cm貼られており、その下にスサを含む粗い粘土があり芯となっている。またＣ151では、真土の下に１㎜以下の砂粒を非常に多く含む粘土が約６㎜の厚さであり、その下に約1.5cmの厚さのスサや砂礫を少量含んだ粘土と１㎜以下の砂礫層が厚さ約２㎜あり、更にその下に芯としてスサを多く含む粘土がある。

紋様のない外型の鋳型は図示した以外にもコンテナ約２箱分出土している。

第907～911図のＣ146・153～169は溶解炉の破片と考えている。

Ｃ153～156は口縁部である。いずれもスサを多く含んでいる。内面には部分的に強い被熱の痕跡があり、断面図の破線は被熱の範囲を示している。口縁端部は丸くおさめられているようである。内面に湯はかかっていない。

C157～160は羽口である。推定できる大きさは内径で18cm前後である。C157の断面観察では、厚さ約3.5cmの羽口部分の上面に、壁に貼り付けるための粘土が最大で約4.5cm残存している。またその表面には溶けた銅が付着している。この部分の銅の色調は赤褐色で僅かではあるが木炭痕が観察できる。内面は被熱していない。図の右側の端は接合面になっている。C160は羽口の下の部分と考えている。表面には飴状になった銅が付着している。銅の色調は黒灰色で木炭痕が僅かに観察できる。内面にも被熱痕があり、先端に近い部分の破片と考えられる。なお、C157・159では図の左側が、C158では図の上側が被熱状況から先端に近い部分と考えられる。これらの断面図の破線は被熱範囲と銅や炉壁が溶けている範囲を示している。

C161・169は図の上半と下半でカーブが異なっている。またC162は凸面部分が内面となり銅が付着している。こうしたことからC161・162・169は羽口周辺の炉壁ではないかと考えている。いずれもスサを多く含んでいる。C162の縦断面図の下端は接合面で、これによると内傾接合ということになる。これらの断面図の破線は銅と炉壁が溶けた範囲を示している。内面の色調は黒灰色である。

C163～165は底の部分（「湯だめ」、「ル」）の炉壁と考えている。これによると、底は丸味が少なく平底にちかいといえよう。いずれもスサを含んでいる。内面には溶けた銅が付着しており、小さな気泡が目立つことや、C164には木炭が挟まれていることが特徴的である。内面の色調は黒灰色である。

C166・168は底に近い部分の炉壁と考えているが、円筒状の壁のカーブが確認できる点に特徴がある。胎土にはスサが多く、内面には気泡が目立ち、色調は黒灰色である。

C165・166・168の縦断面図下端は接合面ではあるが、天地が明確でない。C163～166・168の断面図破線は銅と炉壁が溶けている範囲を示している。

C146は表面に強い熱を被っている。内面には直径約４cmほどの丸い穴が想定できる。内面は焼けていない。図の左側に接合面がある。羽口のようであるが径が小さい。穴は「ル（湯だめ）」の「のみ口」の大きさであるが、内面に湯が流れた痕跡は無い。溶解炉に伴う遺物と思われるがわからない。

溶解炉の炉壁と考えられる破片は図示した以外にもコンテナ約２箱分出土している。

C152はこれまで説明した鋳型や炉壁とは様相が異なっている。断面を観察すると、表面に１～２㎜の厚さで真土が塗られている。その下には砂粒をほとんど含まない粘土が約５㎜の厚さであり、さらにその下に軟らかい黄白色の粘土がある。被熱は表面から約１cmの厚さに及んでおり、色調は橙色になっている。このような粘土は、埋土の状況のところで説明したように、かなりの量が出土している。大きさには大小があり、表面の被熱痕が残っている破片は少なかった。これらの粘土については明確な根拠があるわけではないが「定盤」に用いられていたのではないかと想定しておきたい(2)。

この他の遺物としては銅滓が少量出土している。銅粒（銅が流し込まれる時に飛び散った飛沫）はほとんど出土していない。なお銅製品の可能性のあるごく小さな銅塊が１点出土している(3)。銅滓や銅粒の出土量が少ないことについては、再利用のために回収された結果ではなかろうか。鉄滓は出土していない。

次に梵鐘が鋳造された時期について考えてみたい。時期を推定する資料となるのは鋳型（特に「竜頭」・「撞座」）と埋土中から出土した土器であろう。「竜頭」から時期を推定することは筆者には難しい。最近刊行された『梵鐘実測図集成(4)』に掲載されている各時期の「竜頭」の実測図との比較では口や牙、たてがみの表現方法や全体的にシンプルな表現であることから、12世紀以降のものよりも古い印象をうける。「撞座」の紋様については類似した軒丸瓦紋様は見出せていない。軒丸瓦の紋様

と「撞座」の紋様が同一の観点で理解できるとは必ずしもいえないが、平安時代中・後期頃の可能性は考えてよいと思われる。

埋土中から出土した土器はごく少量である。器形のわかるものについては図示しているが、これらについては10世紀後葉～11世紀前葉頃の年代を想定しておきたい。だだしこれらの土器は「梵鐘鋳造遺構」を埋め戻すときに周辺に存在していた土器が混入したものと考えられる。したがって鋳造の時期は土器の年代よりも古くはならないものの、どのくらいの時間を加えるかが問題となる。

以上のように「竜頭」・「撞座」からは平安時代中・後期の可能性が推定できるにとどまり、出土土器からは10世紀後葉より古くはならないのではないかと考えた。結論としては、周辺には11世紀中頃から12世紀中頃の遺物がほとんど出土していないことから、11世紀前葉に梵鐘は鋳造されたと考えておきたい。

「梵鐘鋳造遺構」は現在全国で40数遺跡確認されているが[6]、加茂政所遺跡の資料のもつ意義についていくつか述べてまとめとしておきたい。

(1)平安時代の「梵鐘鋳造遺構」は約10遺跡で発見されているが、11世紀前葉に想定されるものは類例がない。また日本の梵鐘研究の上で、現存する有銘梵鐘からは977～1160年までの間は「空白の二世紀」ともいわれている。そうしたことから、今回出土した「竜頭」や「撞座」の鋳型などの資料は今後の研究にとって重要な資料となるであろう。

(2)溶解炉や鞴座の位置は確認できなかったが、溶解炉については出土した炉壁片からいくつかの事柄を導き出すことができる。第1に、口縁部と底部の形状が想定できた。口縁部についてはこれまで出土例から想定されているもの（京都大学構内遺跡[6]、鉾ノ浦遺跡[7]、金井遺跡[8]、猪倉B遺跡[9]）に比べて大きくは異ならない。底部はこれまで丸底（鉾ノ浦遺跡、金井遺跡）と平底（猪倉B遺跡）に復元されている。加茂政所遺跡では平底の可能性が高いと考えている。第2に羽口の良好な資料が出土した。金井遺跡では羽口は炉壁から直接引き出されており、異なるタイプの存在が明らかになったといえる。また羽口上面の銅滓の付着状況や羽口周辺と考えられる炉壁の出土は、京都大学構内遺跡の出土例とともに、今後の溶解炉復元にとって貴重な資料になるのではなかろうか。第3に口縁部（C153）と底部付近（C166・168）の破片から溶解炉の直径が推測できる。推測した内径は50cm前後である[10]。これまでの出土例に比べて小さいといえるのではなかろうか[11]。

(3)加茂政所遺跡では梵鐘以外の製品は製作していないであろう。また周辺の遺構の検出状況からも加茂政所遺跡が複数の製品を作る集中的な鋳造工房跡とは考えられない。したがって、寺院の近辺や境内へ鋳物師が出張して行う「出吹き」の跡と考えることができよう。鋳物師については「撞座」の紋様からは地元の工人とは考えにくく、製作年代観からも大和鋳物師を想定すべきであろうか[12]。

(4)「梵鐘鋳造遺構」の見つかった調査区では約40m東の旧河道中から平安時代の瓦が多量に出土している。また近くには方形に巡る溝や足場杭の跡と考えられる柱穴列、2基の火葬墓などが検出されており、平安時代寺院跡（「加茂政所廃寺」）の存在が想定できる。この「梵鐘鋳造遺構」は「加茂政所廃寺」の存在を裏付けると共に、その年代決定に大きな役割をもつであろう。

加茂政所遺跡の「梵鐘鋳造遺構」および関連遺物については、検出後間もなく来跡された坪井清足氏に、教示と今後の調査に対する貴重な助言を賜りました。また、五十川伸矢氏には報告書整理の段階で遺物の実見をお願いし、教示を頂きました。記して深くお礼申し上げます。　（平井）

註

(1) 花弁の大きさに比べて内区の大きさが大きいことが他の「撞座」の紋様に比べて異なっていること、および蓮子の数を推定する根拠がない点で復元案に不安がある。

(2) 実見してはいないが、京都大学構内遺跡ＳＫ257や広隆寺跡ＳＫ22では粘土でつくられた「定盤」が検出されている。なお内型の可能性も考えられるが、被熱の度合いが外型と考えているＣ141・147～151に比べて低いことや出土量が内型にしては多すぎるように思えることから、否定的に考えている。

(3) この銅塊については内田俊秀氏（京都造形芸術大学）に分析を依頼し、その結果については「Ⅳ自然科学による分析・鑑定」に掲載している。

(4)「梵鐘実測図集成上下」『奈良国立文化財研究所史料』第38冊　奈良国立文化財研究所　1993年

(5) 神崎勝「梵鐘の鋳造遺跡とその変遷」『考古学研究』第40巻第１号　1993年
神崎氏の集成以降は、白山社遺跡（岩手県平泉町、12世紀後半）などで検出されている。

(6) 五十川伸矢・飛野博文「京都大学教養部構内ＡＰ22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報－昭和57年度－』　京都大学埋蔵文化財研究センター　1984年
五十川伸矢「梵鐘の鋳造遺構について」『枚方田中家と鋳物の歴史』　枚方市教育委員会　1984年

(7) 山本信夫・狭川真一「鉾ノ浦遺跡梵鐘鋳造遺構発掘調査速報」『古代研究』27
山本信夫・狭川真一「鉾ノ浦遺跡（福岡県）－筑前太宰府鋳物師の解明－」『仏教芸術』174　毎日新聞社　1987年
山本信夫「太宰府を中心とした鋳物生産遺構について－鉾ノ浦遺跡を中心として－」『梵鐘の音は時を越えて』　美原町・美原町教育委員会

(8)「金井遺跡Ｂ区」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第146集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1994年

(9) 能登谷宣康「福島県相馬市猪倉Ｂ遺跡の鋳造遺構について」『第６回鋳造遺跡研究会資料』　1996年
猪倉Ｂ遺跡の溶解炉は外径約47cm、高さ推定約80cmの円筒形自立炉（こしき炉）と推測されている。ただしこの遺跡で鋳込まれた製品は鋳鉄鋳物で、梵鐘は製作されていない。

(10) 破片のカーブは十分でなく推測値には誤差があるかもしれない。また羽口の内径が約18cmと大きく、それに比べては推測した炉の内径が小さいという疑問もある。

(11) 京都大学構内遺跡では約120cm、鉾ノ浦遺跡では約80cmが想定されている。猪倉Ｂ遺跡では約35cmを測るが、これは梵鐘ではなく小形の鋳鉄鋳物を製作していたためとも考えられる。なお、下川津遺跡（香川県）第２低地帯流路２出土の炉についても溶解炉と思われるが、内径は50cm前後である。
「下川津遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』　香川県教育委員会　1990年

(12) 杉山洋「古代の梵鐘生産について」『第６回鋳造遺跡研究会資料』　1996年

・第11節　平安時代の土師器

はじめに、加茂政所遺跡から出土した平安時代の土師器のうち比較的まとまったかたちで出土している土壙390と溝53出土土器（以下「土壙390・溝53」と表記する）について考えてみたい。これらは別々の遺構として報告しているが、全体図に示しているように近接した位置関係にあり、筆者は同一遺構の出土遺物として捉えることとする。

[Ⅰ]「土壙390・溝53」出土土師器の特徴について以下のようにまとめたい。

(1)杯Aについて[1]

(a)調整・色調・胎土。　口縁部はいずれもヨコナデであるが、底部外面調整については(イ)周縁ヘラ切り→中央部指による押圧・ナデのもの（押圧痕が観察できるのは3571・3572のみで、多くはナデのみである）（3245・3563・3565・3567・3568～3573など）と、(ロ)中心までヘラ切りのもの（3244・3584・3585など）とがある。(イ)グループの色調は褐色系統（褐色～橙色）のものが多く、胎土は１～２㎜の砂粒を含んでいる。(ロ)グループの色調は灰白色系統（乳白色～灰白色）のものが多く、胎土は１～２㎜の砂粒を含むものの他に精良なものがある。底部調整と色調・胎土に相関関係があるように思える。

(b)法量。　(イ)グループは口径9.0～9.7cm（平均9.3cm）、器高2.3～2.8cm（平均2.5cm）で、(ロ)グループは口径9.4～10.3cm（平均9.7cm）、器高2.1～2.4cm（平均2.2cm）である。(ロ)グループの方が口径が大きく、器高が低いといえる（第1138図）[2]。

(2)杯Cについて（3249～3251・3253・3574～3582）

(a)調整・色調・胎土。　すべて口縁部調整はヨコナデ、底部外面調整は中心までヘラ切りである。色調は灰白色系統のものと褐色系統のものとがあり、前者の方が多い。胎土は１～２㎜の砂粒を含むものと精良なものとがあり、灰白色系統のものには精良な胎土が多い。また、ヘラ起こしの際の痕跡と考えている平行な条線が観察できる個体が少量ではあるが存在する。

(b)法量。　口径10.2～11.5cm（平均11.0cm）、器高3.2～4.0cm（平均3.6cm）である。器高の高いものと低いものとの違いに特徴が見出せるのではなかろうか。

(3)杯B（高台付杯）について

まず3236・3241・3554以外のものについて述べたい。全体の器形のわかるものは少ないが、口径15cm前後の大形品がほとんどを占めているようである。高台についてはハの字形に踏ん張る足高高台がほとんどである。色調は褐色系統のものと灰白色系統のものとがあり、胎土は１～２㎜の砂粒を含んでいる。

3554は深椀の器形で、器壁が薄く、内外面ヘラミガキ調整で、硬質感のある焼成である点に特徴がある。色調は、内面は暗灰色であるが外面は白っぽい。こうした特徴から、前述した杯Bの一群とは多くの点で様相が異なっており、3554はいわゆる「吉備系土師器椀[3]」として類型化されている器種の最古形式の一つと理解しておきたい。

3236は小片のため全体の器形は不明であるが、高台形状は前述した杯Bと同じような足高高台である。しかしながら、内外面がヘラミガキ調整で外面の色調が白っぽい（内面は黒灰色）ことが異なっており、特徴的である。

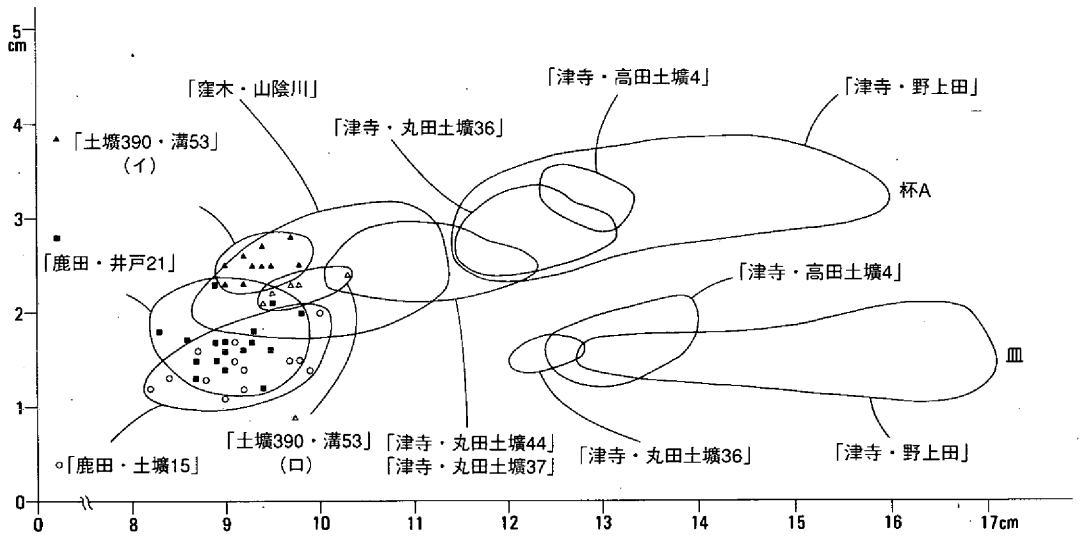
3241は小さい高台や体部形状からは内黒土器との共通性が窺える。しかしながら、色調が内外面とも灰色～灰白色である点で異なっている。

(4)器種構成

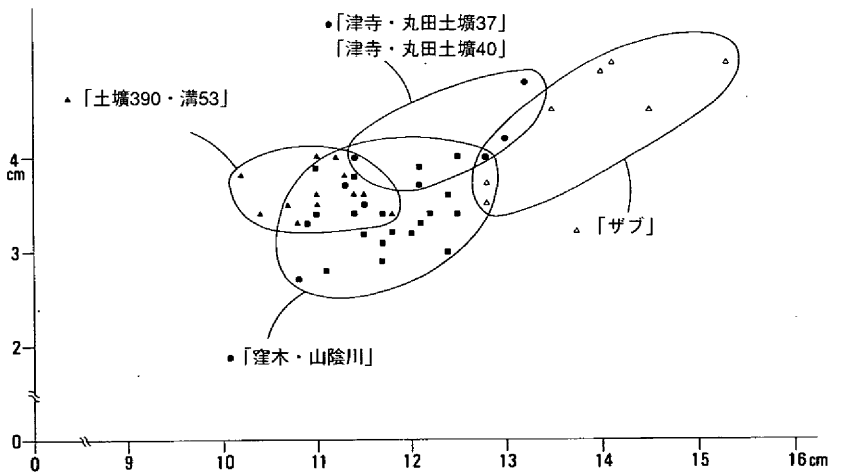
供膳具に限っていえば、杯Ａ・Ｂ・Ｃと「吉備系土師質椀」で構成されており、内黒土器はほとんど出土していない[4]。

[Ⅱ]以上のように「土壙390・溝53」出土土器の特徴をまとめたが、つぎに加茂政所遺跡周辺の遺跡から出土している平安時代土師器との比較を行ってみたい[5]。

比較する資料の第１は杯Ａである。まず法量を比較したのが第1138図である[6]。前述した杯Ａの（イ）グループは「窪木・山陰川[7]」と「林崎[8]」のグループの法量に重複しているが、より口径が小さくなっているようである。また底部外面が中心までヘラ切り調整の（ロ)グループは、「窪木・山陰



第1138図　杯Aの法量分布



第1139図　杯Cの法量分布

川」と「林崎」グループと重複しているが、この法量についても「窪木・山陰川」のうちの同じく底部外面が中心までヘラ切りの資料群[9]に比べてより小規模になっている。

杯Aの底部調整については、備中地域では9世紀前葉から「周縁ヘラ切り→中心部指による押圧・ナデ調整」(「底部押圧技法」とよばれている[10])が行われ、「窪木・山陰川」・「林崎」の段階ではじめて「中心までのヘラ切り調整」が出現している。また指による押圧については「津寺・丸田土壙44[11]」・「津寺・丸田土壙37[11]」段階までは明瞭に観察できるが、「窪木・山陰川」・「林崎」段階になると不明瞭で、ナデのみのものが多くなる(この節ではこの調整も「底部押圧技法」としておく)。「土壙390・溝53」出土の杯Aについても前述したように押圧は不明瞭でナデのみのものが多い。

第2に杯Cを比較したい。杯Cは備中地域において現状の資料では「津寺・丸田土壙37」段階から出現すると考えている。第1139図は杯Cの法量分布図である。資料が少なくまた重複する部分があるが、傾向としては「津寺・丸田土壙37・40[11]」→「窪木・山陰川」→「土壙390・溝53」と規模は縮小しているといえる。杯Cは広島県や四国地方にも出土例があり、一例として10世紀前半の緑釉陶器[12]とともに出土している福山市ザブ遺跡[13]出土の杯Cの法量を図に加えている。これらは、前述した資料群に比べて規模が大きいのが特徴であろう。

以上のような杯A・Cの比較から考えられることは、第1に杯Aの底部調整に前述した(イ)・(ロ)の二つのタイプが存在していること、および法量分布の類似性から、「窪木・山陰川」・「林崎」の資料群に類似していることであろう。第2には類似性が強いものの、法量がより小型化していることから、時期的には「窪木・山陰川」・「林崎」→「土壙390・溝53」のように新しくなると考えることができることであろう。

[Ⅲ]このように考えるならば、「土壙390・溝53」出土土器は、いわゆる「律令的土器様式」として捉えられる土器様相の最終段階として位置づけることができる。そこで、次にいわゆる「中世的土器様式」の最古段階と考えられている資料群との比較を試みたい。

備前・備中南部における「中世的土器様式」の成立については、「吉備系土師器椀」の出現問題をおもな論点として研究が進められており[14]、現状での最古級の資料としては、備前南部に位置する百間川原尾島遺跡井戸9[15]、鹿田遺跡第5次調査土壙15[16]・第1次調査井戸21[17]や備中南部のこうもり塚・下三輪遺跡土壙墓出土土器[18]をあげることができる。

第1に「吉備系土師器椀」の法量比較では、最古段階の「吉備系土師器椀」は口径約14.9～16.7cm、器高約5.5～6.5cmで、現状では資料ごとにバラツキがあり一定のまとまりは認められない。3554は法量的には最古段階に位置づけることができる。また、内外面のヘラミガキ調整や硬質感のある焼成、深椀という体部形状の点でも最古段階と考えてよいであろう。

第2に杯Aと小皿の比較では、「百間川・原尾島井戸9」や「鹿田・土壙15」、「鹿田・井戸21」出土小皿の底部調整の多くは中心までヘラ切りで、「底部押圧技法」は存在していない[19]。法量については、「土壙390・溝53」に比べて器高が低いのが特徴と考えられる(第1138図)。また底部ヘラ切り調整のものに限って比較するならば、「土壙390・溝53」に比べて口径・器高とも小さくなっているといえる。

第3に器種構成についてみると、「鹿田・井戸21」では「吉備系土師器椀」・小皿・杯(以下この節では杯Dとする)が主体で少量の瓦器椀、白磁皿・椀、緑釉陶器椀、須恵器椀が加わるという構成である。「鹿田・土壙15」では「吉備系土師器椀」・小皿・杯Dが主体で少量の内黒椀・瓦器椀が加

わるという構成であるが、茶褐色～暗褐色の椀が椀全体の約３割存在しており、このタイプの椀については前述した杯Ｂの系譜として捉えることができよう。「百間川・原尾島井戸９」は「吉備系土師器椀」、小皿、杯Ｄの他に内黒椀、杯Ｂ、托、備前椀で構成されており、前三者が主体とはいえない。これらの資料群と「土壙390・溝53」との比較では、杯Ｃが存在せず、替わりに杯Ｄが存在している点で共通しており、「吉備系土師器椀」・小皿・杯Ｄのセットが確立していないとという点では「百間川・原尾島井戸９」が最も類似しているといえよう。

以上のような比較をまとめるならば、(a)「吉備系土師器椀」が出現しているという点では共通性があるが、(b)杯Ｂと小皿については「底部押圧技法」の有無や法量の違いがあり、(c)器種構成についても杯Ｂ・杯Ｃ・杯Ｄ・内黒椀の存在や割合に違いが認められる[20]。したがって時期的な変化としては、「土壙390・溝53」→「百間川・原尾島井戸９」→「鹿田・土壙15」→「鹿田・井戸21」と推測することができるのではなかろうか[21]。

[Ⅳ] これまで述べたことから時期についてまとめると、「津寺・丸田土壙44」・「津寺・丸田土壙37」→「窪木・山陰川」・「林崎」→「土壙390・溝53」→「百間川・原尾島井戸９」→「鹿田・土壙15」→「鹿田・井戸21」という変遷が想定できるのではなかろうか。つぎに歴年代について考えたい。歴年代を推定するための資料は少ない。鹿田遺跡出土土器については伴出した瓦器椀の編年観などから「鹿田・井戸21」が11世紀末、「鹿田・土壙15」が11世紀中頃と考えられている[22]。また津寺遺跡と窪木遺跡出土土器については伴出する緑釉陶器の編年観から「津寺・丸田土壙44」が10世紀前葉～中葉、「窪木・山陰川」が10世紀後葉と推定した[23]。したがって「土壙390・溝53」と「百間川・原尾島井戸９」については、大きくは10世紀後葉～11世紀中葉の幅の中で捉えることができるが、ここでは11世紀前葉頃と推定しておきたい。

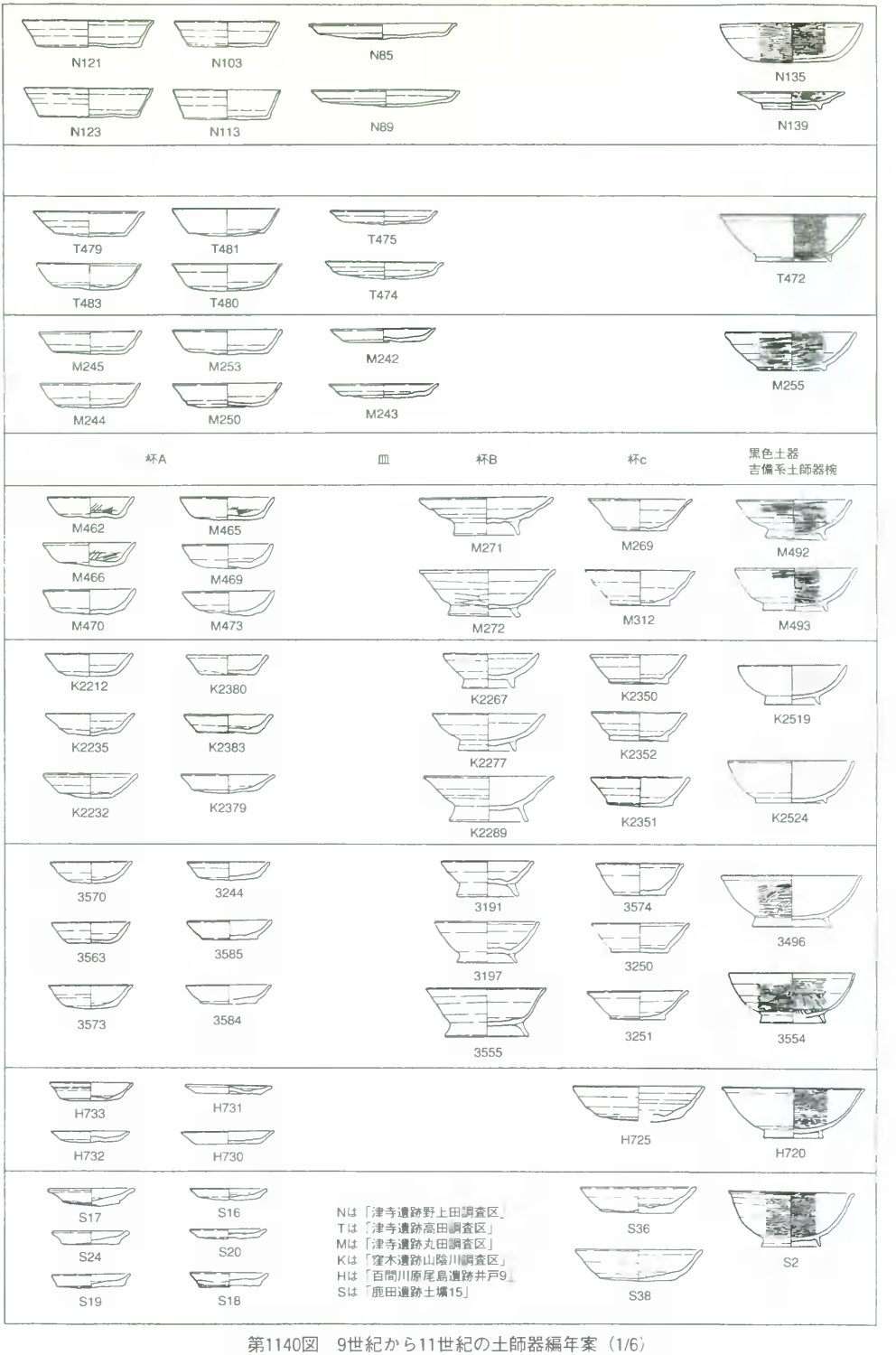
[Ⅴ] つぎに「土壙390・溝53」以外の加茂政所遺跡からまとまって出土した資料について簡単に触れておきたい。土壙368・388・389出土土器は3088・3146が「吉備系土師器椀」と捉えられることや杯Ｂの底部外面調整が中心までヘラ切りのものが多いこと、および杯Ｂ・内黒椀の存在、杯Ｄが存在していないことなどから、資料が少ないものの「土壙390・溝53」段階と推測しておきたい[24]。土壙391出土土器については、杯Ａの底部外面調整が周縁ヘラ切り→中央部指による押圧・ナデであること、杯Ａの法量、杯Ａに内外面とも丹塗りが施されていないこと、小規模な皿（3270）が出土していること、内黒椀の高台がハの字形に高く踏ん張っていないことなどから、10世紀前葉頃と考えておきたい[25]。

最後に加茂政所遺跡および周辺の遺跡から出土した土器を中心に、９世紀から11世紀までの現状での編年案を表とともに提示し、まとめとしたい[26]。

編年の対象としたのは杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｃ、皿、黒色土器のみである。編年のための主要な視点は、杯Ａについての底部外面調整の変化と法量の変化であり、具体的には底部外面調整の周縁ヘラ切り→中央部押圧・ナデから中心までのヘラ切りへの変化と法量の縮小化である。また赤色顔料（ベンガラ）の塗布の変化（内外面両面→内面の省略→内外面とも省略）も参考にしている。こうした視点による杯Ａの編年を基準として、出土状況から共伴すると考えた他の器種を位置づけた。

編年案は、「津寺・野上田[27]」→「＋」→「津寺・高田土壙４[28]」→「津寺・丸田土壙36[11]」→「＋」→「津寺・丸田土壙37・44[11]」→「窪木・山陰川[7]」→「加茂政所・土壙390・溝53」→「百間川原尾島・井戸９[15]」→「鹿田・土壙15[16]」である。

皿は底部調整は周縁ヘラ切り→中央部押圧・ナデであるが、法量の縮小化とベンガラ塗布の省略化



第1140図　9世紀から11世紀の土師器編年案（1/6）

が認められる。杯Ｂは現状では「津寺・丸田土壙37・44」段階から出現しており、その後大・中・小に器種分化してゆく。また「百間川原尾島・井戸９」段階からは徐々に消滅してゆく。杯Ｃは現状では「津寺・丸田土壙37・44」段階から出現しており、その後法量の縮小化がみられるが変化は顕著ではない。また「百間川原尾島・井戸９」段階からは杯Ｄに取って代わられるようである。黒色土器については明確ではないが、「津寺・野上田」段階には無高台の両黒杯と「瓷器」模倣の高台付内黒托が共伴しており、畿内の黒色土器編年観との関連で重要であろう。「津寺・高田土壙４」や「津寺・丸田土壙36」段階には高台付の内黒椀が共伴しており、特徴は高台が小さいことではなかろうか。「津寺・丸田土壙37・44」段階から「土壙390・溝53」段階までは深椀の内黒椀が共伴している。法量や体部・高台の形態については各種認められ、器種分化が進んでいると考えることができる。ただし、ハの字形に踏ん張る高台については前段階より新しい特徴と考えることができるのではなかろうか。また「加茂政所・土壙390・溝53」段階には外面の色調が白色のものが多くなっており、形態上の類似性と共に「吉備系土師器椀」が黒色土器椀から変化して成立するとする考え方を支持したい。歴年代については「津寺・丸田土壙37・44」段階以降については前述した。それ以前については十分な証拠はないが、「津寺・野上田」段階が９世紀前～中葉、「津寺・高田土壙４」・「津寺・丸田土壙36」段階が９世紀後葉から10世紀前葉と考えておきたい。　（平井）

註

(1) 岡山県内の平安時代土師器の器種分類については諸説あり、一致しているとは言い難い。今回は以前検討した分類名称に従うことにする。
平井泰男「古代の土器について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』124　岡山県教育委員会　1998年

(2) ただし、3252は法量や底部外面調整が周縁ヘラ切り→中央部押圧・ナデで、外面丹塗りの可能性が高いことなどから、９世紀後葉～10世紀前葉のものと考えられ、混入品であろう。

(3) 1990年頃から橋本久和氏によって提唱されている。

(4) 3237は内黒土器椀の可能性がある。

(5) 多くの点で1998年に検討した結果に基づいている（前掲注１文献）。

(6) 第1138図は(前掲註１)の文献において作成した図に今回新しい資料の法量を追加したものである。

(7) 窪木遺跡山陰川調査区出土土器群を示している。
「窪木遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』124　岡山県教育委員会　1998年

(8) 「鬼ノ城ゴルフクラブ造成に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』１　総社市教育委員会　1992年
ただし、正式報告書は刊行されていない。

(9) 例えば「窪木遺跡２」（註７）に掲載している2211・2372・2375～2383・2513。

(10) 武田恭彰「古代土器生産についての一予察」『古代吉備』第11集　1989年

(11) 津寺遺跡丸田調査区土壙出土土器群を示している。
「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会　1994年

(12) 前川　要「広島県ザブ遺跡出土平安時代緑釉陶器について」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ　1989年

(13) 「ザブ遺跡」『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』　広島県教育委員会　1973年

上記報告書に掲載されている資料のみ用いている。

(14) 山本悦世「吉備系土師器椀の成立と展開」『鹿田遺跡３－第５次調査－』　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1993年
福田正継・武田恭彰・橋本久和「Ⅱ各地の土器様相　8.山陽東部」『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社　1995年

(15) 「百間川原尾島遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88　岡山県教育委員会　1994年

(16) 「鹿田遺跡３－第５次調査－」『岡山大学構内遺跡は靴調査報告』第６冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1993年

(17) 「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第３冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1988年

(18) 武田恭彰「古墳の再利用について」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』９　総社市教育委員会　1991年

(19) ただし、底部外面調整が押圧・ナデのみの小皿が、「百間川・井戸９」で７点、「鹿田・井戸21」で１点報告されている。これらの小皿については系譜の異なるものと考えられるため、今回は比較の対象とはしていない。

(20) すでに指摘されているように、瓦器椀や備前焼椀の存在については、備前・備中という地域的な違いに基づくものと考えられる。

(21) こうもり塚・下三輪遺跡土壙墓出土土器については資料数が少ないため比較は困難ではあるが、こうもり塚では内黒椀や杯Ｂが、下三輪遺跡では内黒椀が共伴していることから、「百間川・原尾島井戸９」段階に併行すると考えておきたい。また今後杯Ｃと杯Ｄが共伴する資料が検出されれば、「土壙390・溝53」と「百間川・原尾島井戸９」との中間に位置づけることができるかもしれない。

(22) 山本悦世「吉備系土師器椀の成立と展開」『鹿田遺跡３－第５次調査－』　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1993年

(23) 平井泰男「古代の土器について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』124　岡山県教育委員会　1998　年

(24) 土壙389出土の3185は、篠窯跡（京都府）出土の鉢に形態上類似しており、時期的には10世紀後葉～11世紀前葉と考えることができる。歴年代を考える上で参考になる資料であろう。

(25) ただし、3271は14世紀代のもので、混入品であろう。

(26) 前掲（註23）の文献と重複する部分が多いため参照されたい。

(27) 津寺遺跡野上田調査区６区土器溜り出土土器群を示している。
「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会　1994年

(28) 津寺遺跡高田調査区土壙４出土土器群を示している。
「津寺遺跡４」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116　日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会　1997年

第12節　平安時代中期の瓦

「加茂政所廃寺」出土の平安時代瓦のうち、宝相華紋[1]軒丸瓦、均整唐草紋軒平瓦、陰刻唐草紋軒平瓦について若干の分析と考察を行いたい。

Ⅰ宝相華紋軒丸瓦

図示可能なものについて18点報告している。まず紋様の分析からⅠａ・Ⅰｂ・Ⅰｃ類に分類する[2]。

Ⅰａ類とするのは、(a)中房は各弁間に対応した四葉座で、中心が円形に一段高くなっている。(b)主紋様は四葉からなる宝相華紋で、四葉のうち三葉は先端が尖っているが一葉は丸い。(c)間弁の紋様は中房から一本の直線がのびており、先端が五本に分枝している。

Ⅰｂ類とするのは、(a)中房は四葉が剣先状になっており、中央に円形の高まりはない。(b)主紋様の四葉は葉脈の表現がⅠａ類と異なっている。またⅠａ類と同じく先端部は一葉は丸く、三葉は尖っているが尖り形がⅠａ類より強い。(c)間弁の紋様は、三間弁では中房からのびる直線の先端部が三本に分枝しそれらを囲むように傘形の線が加えられている。ただし一間弁は他と異なり先端が五本に分枝している。間弁が主葉的に表現されるようになっているといえよう。

Ⅰｃ類とするのは一片のみで、しかも小片のため詳細はわからないが、間弁は先端が五本に分枝し、傘形の線もあり、Ⅰｂ類に類似している。しかしⅠｂ類に比べて線が細いためⅠｃ類として区別した。

Ⅰａ・Ⅰｂ・Ⅰｃ類の紋様については、間弁に注目すればⅠａ→Ⅰｂ→Ⅰｃ類と時期的に変遷すると考えるのが妥当であろう。

以上のように紋様から三分類したが、次に他の観点から比較を試みたい。ただし小片が多いため比較できる要素は多くない。

(1)周縁の形状は、Ⅰａ類が傾斜縁、Ⅰｂ類が直立縁という違いが見いだせそうである。Ⅰｃ類は不明である。

(2)瓦当部の厚さはⅠａ類が0.8～1.8cmとより薄く、Ⅰｂ類が２～3.4cmとより厚い。Ⅰｃ類は約1.5cmでⅠａ類にちかい。

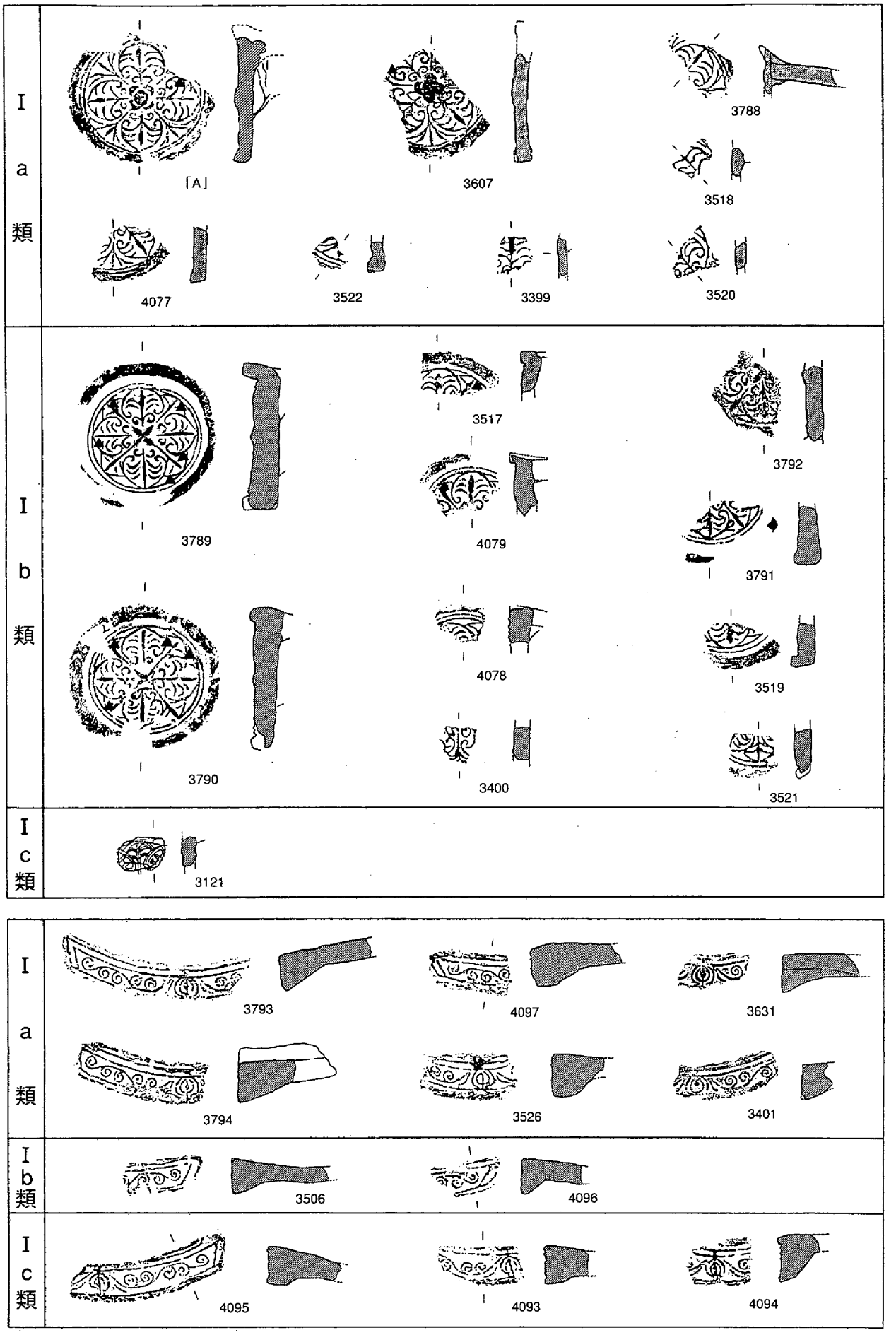
(3)瓦当部裏面調整は、Ⅰａ類の4077のみに細かい縄目タタキが施されており特徴的である。その他はⅠａ・Ⅰｂ・Ⅰｃ類とも指による押圧・ナデで共通している。

(4)胎土は、Ⅰａ・Ⅰｂ・Ⅰｃ類とも１～３㎜前後の長石・石英が含まれている。またⅠａ類の3399、Ⅰｂ類の3790・3791・3792では１～３㎜前後の黒色鉱物粒が確認できたが、他のものに存在しないとは言い切れない。

(5)色調・焼成については、Ⅰａ類は灰色で須恵質・硬質であるのに対して、Ⅰｂ類の多くは灰白色で須恵質・軟質である（ただし3789だけはⅠａ類と同じである）。

紋様から分類し、それを基準に他のいくつかの観点から比較を試みた。次に各類における同笵関係について笵傷を手がかりとして検討したい。

Ⅰａ類とした「Ａ」と3607については▲印の位置に笵傷を認定し、同笵関係にあると考えている。Ⅰｂ類の3789は紋様が良好に残存しており、▲印で示した５カ所に笵傷を認定した。そして3790・3517・4079にも図示した位置に笵傷が確認できたため、これらは同笵関係にあるものと考えている。



第1141図　宝相華紋軒丸瓦・均整唐草紋軒平瓦の分類（1/6）

平安時代中期の軒平瓦のうち、均整唐草紋軒平瓦をⅠ類、陰刻唐草紋軒平瓦をⅡ類とする。

II均整唐草紋軒平瓦

図化できた14点を報告している。まず紋様の分析からⅠａ・Ⅰｂ・Ⅰｃ類に分類する。

Ⅰａ類は全体の紋様がわかる個体は出土していない(3)。花弁を意識したような中心飾りは、中央が膨らんだ弁子を二重の輪郭線が囲んでいる。蕨手状の巻きの強い唐草は、中心飾りの上方から始まり三反転する。界線は上部・脇部で二重、下部では一重になっている。

Ⅰｂ類としたのは3506と4096の二片のみで、しかも中心飾りや左側の紋様が不明であり、Ⅰａ類との相違は明確ではない。3506はⅠａ類の3401やⅠｃ類の4095と比べると、右端から４番目と３番目の唐草紋の間をつなぐ線の形状と距離が異なっている。3401は残存している中心飾りや中心飾りからのびる支葉の形状からⅠａ類と考えられるため、3506をⅠｂ類とした。4096は一部の紋様しか残っていないが、3506に類似していると判断しⅠｂ類としたが確実ではない。

Ⅰｃ類は基本的な紋様パターンはⅠａ・Ⅰｂ類と同じであるため、分類の根拠とした相違点について述べたい。違いの第１は中心飾りの幅がより狭いことである。第２は界線の幅がより広いことである。第３は中心飾りからのびる支葉の形状が、Ⅰａ類ではＬ字状に屈曲しているのに対して、Ⅰｃ類では屈曲していないことである。第４はⅠｃ類の4093とⅠａ類の3793・3794・4097・3526との間にみられる違いで、中心飾りから左へ２番目の唐草紋からのびる線の位置がⅠｃ類の方が低いことである。第５は4095と3401との間にみられる違いで、中心飾りから右にのびる１番目と２番目の唐草紋の大きさが異なり、Ⅰｃ類の4095の方が大きいことである。第６はⅠｂ類の3506と4096との間にみられる違いで、右端から２番目と１番目の唐草紋をつなぐ線の位置と形状の違いである。

次に紋様以外の要素についていくつか比較したい。

(1)調整については、いずれも凹面は布目痕跡の後に瓦当部に近い部分にナデやケズリを施したものが多い。布目の糸数は１㎝当たり７～11本である。凸面の調整は最終的にナデやケズリが施されているが、3793・3794・4096で観察できるように、最初には縄目タタキが施されていたものと考えられる。

(2)胎土は、いずれも１～３㎜前後の長石・石英を比較的多く含んでいる。またⅠａ類の4097とⅠｃ類の4095・4093・4094には１～３㎜前後の黒色鉱物粒が少量確認できたが、他のものに存在しないとは言い切れない。

(3)色調は、Ⅰａ類の3793が淡灰色～灰白色、3401・3506が暗灰色の他は灰色で、各類で大きな相違は認められない。

(4)焼成はⅠｃ類はすべて須恵質で硬質である。Ⅰａ・Ⅰｂ類では3401・3506・4096が軟質、3793・3794・3631がやや軟質で、他は須恵質・硬質である。

(5)顎の形状については規格的ではなく、曲線顎や段顎があり、それぞれについても一定した形状は示していない。顎の形状と分類との関連については、Ⅰａ・Ⅰｂ類には曲線顎と段顎が混在しているものの、Ⅰｃ類ではすべて段顎である点に特徴を見いだすことができるかもしれない。

(6)Ⅰａ類の3631では、粘土を貼り付けて瓦当部を形成したことを窺わせる接合痕が観察できる。

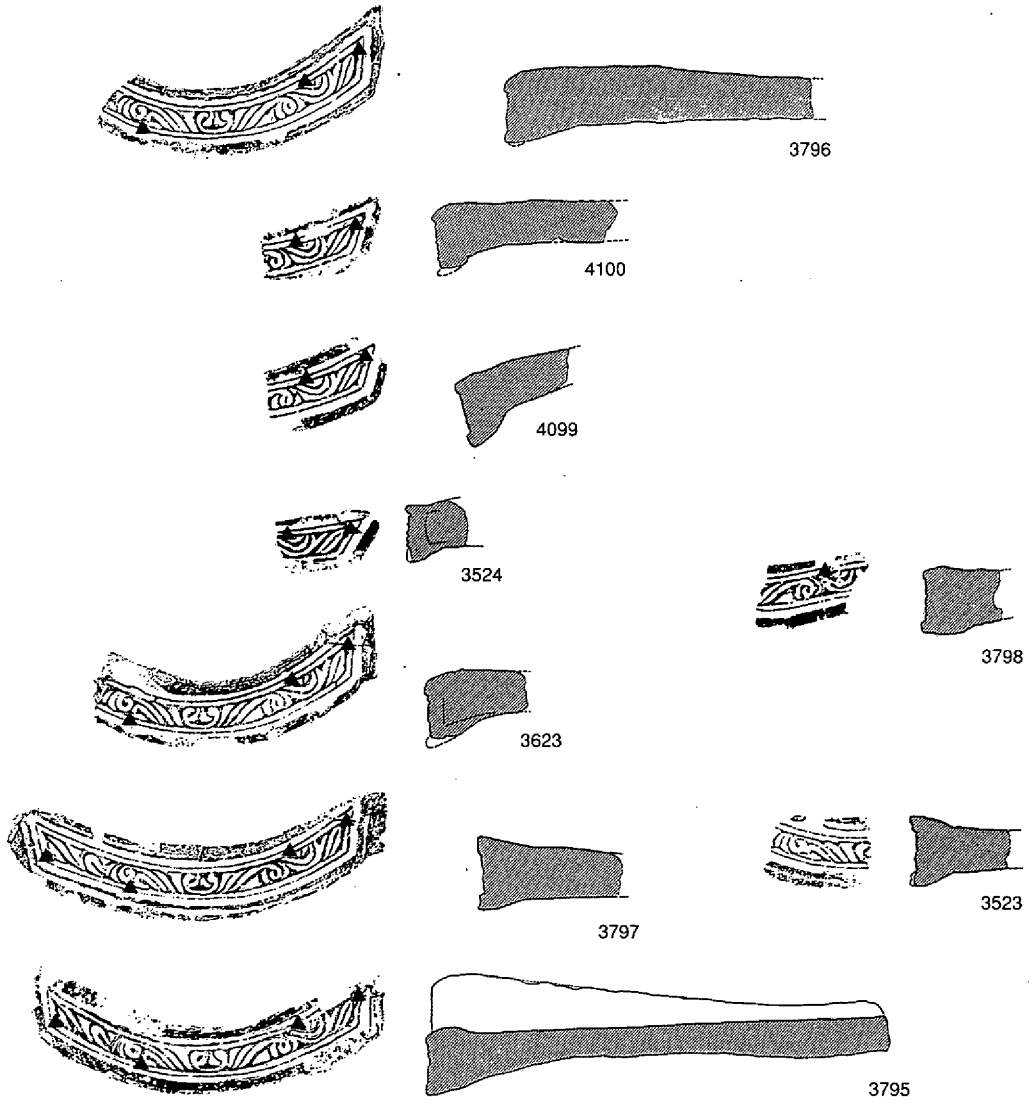
(7)同笵関係については、笵傷の認定ができなかったため明確ではない。また各類の時期的な前後関係についても実証できない。

Ⅲ陰刻唐草紋軒平瓦

陰刻唐草紋軒平瓦をⅡ類とし、図化できた９点を報告している。紋様が完存している3795・3796によると、いわゆる平城京6663型式の変化型式と捉えられる紋様であるが、内区主紋様の陰陽が逆転しているのが大きな特徴である。また唐草紋様は第２・第３単位の主葉や支葉表現が左右で異なっており、均整唐草紋様になってはいない。界線は二重である。

報告した破片の紋様についてはすべて同一紋様であると考えてよいと思う。

同笵関係については笵傷を手掛かりに考えてみたい。認定した笵傷の位置については、▲印で示している。3523を除いて同じ位置に笵傷が認められたものの、最も右側の笵傷については、位置は同じであっても形状が異なっている点に注目したい。すなわち、3796では右側の二本の界線の間に僅かに盛り上がった亀裂状の笵傷が観察できるのに対して、3797・3795では上側と右側の界線をつなぐように亀裂が入っており、盛り上がりも大きく、笵傷が拡大したことが窺える。そのような視点で笵傷の変化に注目するならば、3796→4100→4099→3524→3623→3797・3795の順に笵傷が大きくなっている



第1142図　陰刻唐草紋軒平瓦の分類（1/6）

と考えられる。この部分以外の笵傷が一致することを考慮するならば、前述した変化は同一笵型を使用した際の時間的変化を示していると考えてよいのではなかろうか。

次に笵傷から想定される変化と調整や色調、顎の形の変化との関連について調べたい。

(1)凹面には布目痕跡があり、瓦当面に近い部分ではナデやケズリが加えられている。布目の糸数は１㎝当たり４～８本で、前述した均整唐草紋軒平瓦（Ⅰ類）の布目に比べて粗いといえる。凸面の調整は、縄目タタキを施したのち瓦当面に近い部分にナデやケズリを加えるものが多い。縄目タタキには側縁に平行なものと、斜め方向のものとがある。3623・3523では他に比べて細かい縄目タタキが斜めに施されているのが特徴である。

(2)胎土には１～３㎜前後の長石・石英を多く含んでおり、3706・4100・3623では黒色鉱物粒も観察できる。

(3)色調・焼成は灰色が６点、灰白色が３点で、焼成は3524がやや軟質である以外は須恵質・硬質である。

(4)顎の形状は曲線顎や段顎に近いものがあり、笵傷から考えた変化と、曲線顎から段顎へといった変化とは一致していない。

(5)3796・3524・3623では瓦当部の粘土の接合方法が推定できる。

これまで述べた分析結果についてまとめておきたい。

(イ)宝相華紋軒丸瓦は紋様の違いによって三類に分類した。Ⅰａ類とⅠｂ類とは紋様以外に瓦当部の厚さや周縁の形状でも区別できる。Ⅰａ・Ⅰｂ類とも笵傷が観察でき、同笵関係を推測することができた。

(ロ)均整唐草紋軒平瓦は紋様の違いによって三類に分類した。この三類は調整・胎土・色調・焼成・顎の形状では明瞭に区別することはできなかった。

(ハ)陰刻唐草紋軒平瓦は紋様で分類することはできず、すべて同一紋様と考えられる。笵傷が確認でき、その大きさで時間的な新旧を想定した。調整・胎土・色調・焼成・顎の形状では明瞭に区別できなかった。

(ニ)均整唐草紋軒平瓦と陰刻唐草紋軒平瓦との比較では、大きさ・調整・胎土・色調・焼成・顎の形状では明瞭な相違点は認めがたい。ただし布目の糸数については、均整唐草紋軒平瓦の方がより細かいといえそうである。

次に岡山県内あるいは平安京での出土例との比較によって以下の５点について考察を行い、まとめとしたい。

(1)宝相華紋軒丸瓦は岡山県内では、備中の箭田廃寺（吉備寺）[4]、備中国分（僧）寺跡[5]、大内田廃寺[6]、占見荒神社[7]、安養寺[8]、「松尾廃寺」[9]、備前の神力寺跡[10]、賞田廃寺[11]などで出土例が知られている。県外では平安宮内裏蘭林坊跡[12]出土例が著名である[13]。

県内出土宝相華紋軒丸瓦については、1983年に大内田廃寺を報告された高畑氏が、箭田廃寺（吉備寺）→備中国分（僧）寺跡・大内田廃寺→神力寺跡・賞田廃寺という変遷を考えられた[14]。1987年に亀田氏は備中の新羅系古瓦についてまとめられた中で、箭田廃寺（吉備寺）→備中国分（僧）寺跡→大内田廃寺→賞田廃寺という変遷を考えられ、蘭林坊跡出土瓦については箭田廃寺（吉備寺）からの変化を想定されたが、当時平安宮で考えられていた年代観とは矛盾するため今後の検討を期しておられた[15]。同じく1987年に上原氏は備前・備中から平安京に運ばれた瓦を検討された中で、箭田廃寺

（吉備寺）→蘭林坊跡→備中国分（僧）寺跡→神力寺跡・大内田廃寺という変遷を考えられた[16]。1992年に間壁葭子氏は備中「スエ」と瓦との関連を考察された中で、宝相華紋軒丸瓦の系譜の問題や変遷について述べられた[17]。

筆者は、これまでのように主紋様と弁間の紋様の違いに注目するならば、箭田廃寺（吉備寺）→備中国分（僧）寺跡・占見荒神社→「加茂政所廃寺」Ⅰａ類・蘭林坊跡→「加茂政所廃寺」Ⅰｂ類・大内田廃寺→賞田廃寺・神力寺跡・「加茂政所廃寺」Ⅰｃ類という時期的変遷が想定できると考えたい。

(2)均整唐草紋軒平瓦については、同一系統の紋様が県内では備中の備中国分寺跡[18]、三須廃寺[19]、占見廃寺[20]、備前の備前国分寺跡[21]から、県外では平安京でいくつか出土例が知られている[22]。この紋様についてはすでに備中国分寺跡、備前国分寺跡、平安宮内裏出土瓦の検討から三種の笵が確認できるとされていた[23]。今回加茂政所廃寺出土瓦について三種類の笵があることを推定したが、前述した他の出土例をも検討するならば、中心飾りや唐草紋の形状・大きさによって六種類の笵が存在していたと考えている。

このことについて詳論する紙幅がないため結論のみ提示すれば、備前国分寺跡[24]、備前国分寺跡[25]、備前国分寺跡第Ⅷ型式[26]、「加茂政所廃寺」Ⅰａ類、「加茂政所廃寺」Ⅰｂ類、「加茂政所廃寺」Ⅰｃ類という六種類に区分することができると考えている。これらの時期的な前後関係については今後の課題としたい[27]。

(3)陰刻唐草紋軒平瓦の同紋軒平瓦は大内田廃寺から出土しており、平安京では出土していないらしい。大内田廃寺との比較では、笵傷の位置が一致するものがあり、それらについては同笵関係にあると考えられる。具体的に確認できたのは大内田廃寺出土のＮＨ３・７・12・13・18・19・20であるが、紋様が不明瞭なものが多く、笵傷の細かな比較は難しかった。

このように加茂政所廃寺と大内田廃寺とには同笵関係のものが出土しているが、これらの製作技術には大きな違いがある。特に大内田廃寺では内外面に縄目タタキが施され、凸面にはいわゆる「凹型台」を用いたと考えられる痕跡が明瞭に残存しており、特徴的な技法が用いられている。また側面に縄目タタキが施されていることも相違点である。同じ笵を用いながら異なる製作技術で軒平瓦が製作され、異なる寺院に供給されたのであろう[28]。

(4)「加茂政所廃寺」では軒丸瓦と軒平瓦の組み合わせを実証することはできないが、平安宮内裏では「加茂政所廃寺」宝相華紋軒丸瓦Ⅰａ類と均整唐草紋軒平瓦との組み合わせが想定できる。また大内田廃寺では「加茂政所廃寺」宝相華紋軒丸瓦Ⅰｂ類と陰刻唐草紋軒平瓦との組み合わせが判明している。

(5)年代について。型式的には宝相華紋軒丸瓦Ⅰａ類と均整唐草紋軒平瓦との組み合わせが古く、宝相華紋軒丸瓦Ⅰｂ類と陰刻唐草紋軒平瓦の組み合わせが新しいといえる。「加茂政所廃寺」の創建瓦については宝相華紋軒丸瓦Ⅰａ類かⅠｂ類と考えているが、これらに伴う丸・平瓦の認定が難しく、出土量の比較などは実施していない。Ⅰａ類が創建瓦でⅠｂ類はその後に葺き替えた瓦なのか、Ⅰａ・Ⅰｂ類ともが創建瓦として葺かれたのかは実証できない。

一方周辺から出土している平安時代土器については、10世紀後葉から11世紀前葉の幅を考え、そのうちでも11世紀前葉の可能性が高いと考えた（第11節参照）。この時期に続く土器が調査区内ではほとんど出土しないことから、この時期に寺院が建立され、土器が廃棄されにくくなったものと考えたい。したがって加茂政所廃寺の創建瓦は宝相華紋軒丸瓦Ⅰａ類かⅠｂ類で、時期は11世紀前葉、幅を

もたせれば10世紀後葉から11世紀前葉と考えたい。

次に他遺跡の場合、平安京では1988年度の平安宮内裏跡の調査結果から、均整唐草紋軒平瓦が10世紀後葉に比定できると考えられるようになっている(29)。

もう一つ大内田廃寺については、廃絶時期は13世紀前半と考えられるが、創建時期は不明である。大内田廃寺の所在する天神坂遺跡では平安時代の遺物はNo15土壙墓と東斜面から出土している。天神坂遺跡は平野からの比高差約80ｍの丘陵頂部付近に位置しており、一般の集落が形成されるような立地ではないため、これらの遺構・遺物は大内田廃寺に関連すると考えられるのではなかろうか。平安時代出土土器は少量ではあるが、筆者は11世紀前葉と考えたい。したがって大内田廃寺の宝相華紋軒丸瓦Ⅱ類と陰刻唐草紋軒平瓦は11世紀前葉との重なりが認められることになる。

以上のことから今回は、宝相華紋軒丸瓦Ⅰａ類と均整唐草紋軒平瓦の組み合わせが10世紀後葉、宝相華紋軒丸瓦Ⅰｂ類と陰刻唐草紋軒平瓦の組み合わせが11世紀前葉に出現したと推定しておきたい。

（平井）

註

(1) ここでは宝相華紋として記述するが、すでに亀田氏は県内の類例について検討された中で、宝相華紋軒丸瓦は厳密に言えば箭田廃寺（吉備寺）出土例だけであり、その他は宝相華紋の変化した忍冬紋軒丸瓦とされている。
亀田修一「備中の新羅系古瓦」『東アジアと日本　考古美術編』吉川弘文館　1987年

(2) 第1141図に示した「Ａ」は山陽自動車道で調査した加茂政所遺跡のすぐ北側の部分を「立田排水機場および関連放水管地下埋設工事」に伴って発掘調査した際に出土した軒丸瓦である。出土地点が今回報告する加茂政所遺跡の出土地点に近いため、この節で取り上げ分析の対象に加えたい。（尚この瓦は『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告143』1999年で報告される予定である。）

(3) したがって厳密に言えば均整かどうかは確認できていない。

(4) 葛原克人「箭田廃寺」『岡山県史　考古資料編』　1986年

(5) (a)葛原克人「備中国分（僧）寺跡」『岡山県史　考古資料編』　1986年
(b)高橋　護、葛原克人、松本和男「備中」『新修国分寺の研究　第四巻　山陰道と山陽道』吉川弘文館　1991年

(6) 「天神坂遺跡・奥坂遺跡・新屋敷遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』53　岡山県教育委員会　1983年

(7) 間壁葭子「備中「スエ」と瓦」『倉敷の歴史－倉敷市史紀要－』第２号　1992年

(8) 『浅原寺跡』倉敷市教育委員会　1984年

(9) (a)森田平三郎『倉敷雑記－資料と学習の記録－』１　1981年
(b)間壁葭子（前掲註７）

(10) 間壁葭子（前掲註７）

(11) 『賞田廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会　1971年

(12) (a)寺島孝一、佐々木英夫、松井忠春「平安宮推定内裏蘭林坊跡発掘調査の概要」『古代文化』第27巻11号　1975年
(b)平安博物館編『平安京古瓦圖録』雄山閣　1977年

(13)　このうち安養寺、松尾「廃寺」出土軒丸瓦については、外区に珠文を配している点で他の軒丸瓦と異なっており、系譜を異にする可能性が高いため今回の考察からは除外する。(前掲註７文献)。

(14)　高畑知功「天神坂遺跡の概要」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』53　岡山県教育委員会　1983年

(15)　亀田修一「備中の新羅系古瓦」『東アジアと日本　考古美術編』吉川弘文館　1987年

(16)　上原真人「瀬戸内海を渡ってきた瓦」『大阪湾をめぐる文化の流れ－もの・ひと・みち－』帝塚山考古学研究所　1987年

(17)　間壁葭子「備中「スエ」と瓦」『倉敷の歴史－倉敷市史紀要－』第２号　1992年

(18)　永山卯三郎「備中国分寺」『国分寺の研究』下巻　1938年

(19)　葛原克人「三須廃寺」『総社市史　考古資料編』　1987年

(20)　鎌木義昌「岡山県浅口郡占見廃寺址」『日本考古学年報』２　1954年

(21)　(a)玉井伊三郎『吉備古瓦圖譜』第弐輯　1941年

(b)「備前国分寺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』10　岡山県教育委員会　1975年

(c)伊藤　晃「備前」『新修国分寺の研究　第四巻　山陰道と山陽道』吉川弘文館　1991年

(d)『特別展　吉備の古代瓦』岡山市立オリエント美術館　1980年

(22)　平安京出土例については身近な文献を検索したのみで、集成しきれていない。

(23)　平安博物館編（前掲註12ｂ）

上原真人（前掲註16）

(24)　玉井伊三郎『吉備古瓦圖譜』に掲載されている軒平瓦をさす。(前掲註21ａ)

(25)　『特別展　吉備の古代瓦』に掲載されている軒平瓦をさす。(前掲註21ｄ)

(26)　「備前国分寺跡緊急発掘調査報告」(前掲註21ｂ)

(27)　図面のみの比較で実見していないため不確かであるが、平安宮内裏485・486・487[a]、平安京左京二条二坊高陽院跡[b]、占見廃寺、三須廃寺、平安京内裏土壙２[c]、備中国分寺跡出土例は「加茂政所廃寺」のＩａ類、平安宮内裏489[a]、平安宮内裏土壙３[c]、平安京左京二条二坊高陽院跡[d]出土例は「加茂政所廃寺」のＩｃ類であろう。なお平安宮豊楽院[e]出土例は「加茂政所廃寺」のＩb類ではなかろうか。

(a)平安博物館編（前掲註12)

(b)「平安京左京二条二坊(2)高陽院跡」『平安京跡発掘調査概報　昭和56年度』　京都市文化観光局　1982年

(c)前田義明「平安宮内裏の焼亡と搬入瓦」『平安京歴史研究』　1993年

(d)「平安京左京二条二坊・高陽院跡Ⅰ」『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』　京都市埋蔵文化財研究所　1993年

(e)「平安宮豊楽院跡２」『京都市内遺跡立会調査概報』　京都市文化市民局　1996年

(28)　ただし「加茂政所廃寺」出土の平安時代平瓦には、「凹型台」を用いたと考えられるものがいくつか認められる。

陰刻の唐草紋軒平瓦についていえば、大内田廃寺以外に備前の備前国分寺跡[a]、富原荒神廃寺[b]、網浜廃寺[c]、備中の川入遺跡[d]で出土している。これらは中心飾りや主葉・支葉の渦巻紋の特徴から加茂政所廃寺や大内田廃寺より古いことは明らかであろう。実見していないので不確かではあるが、富原荒神廃寺と網浜廃寺は幡多廃寺第Ⅲ様式[e]と、また備前国分寺跡・川入遺跡は平城京6663型式あるいはその

退化型式と陰陽関係にあるのではなかろうか。

(a)玉井伊三郎（前掲註21）

(b)巌津政右衛門「第五編奈良時代」『岡山市史　古代編』　岡山市役所　1962年

(c)巌津政右衛門（前掲註ｂ）

『小丸山（中山中）遺跡発掘調査報告』　岡山市教育委員会　1993年

(d)「川入遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第２集　岡山県教育委員会　1974年

(e)『幡多廃寺発掘調査報告』　岡山市教育委員会　1975年

(29) (a)前田義明「平安京内裏の焼亡と搬入瓦」『平安京歴史研究』　1993年

(b)前田義明「瓦と瓦窯の変遷　中期の瓦」『平安京提要』　角川書店　1994年

前田氏は平安宮内裏が天徳４年（960年）の焼亡後、急遽再建される際に備前・備中から搬入された瓦と考えられている。『平安京古瓦圖録』の刊行時点では古くとも1058～1075年と考えられていた訳で、このように古く考えることによって型式的な流れや加茂政所遺跡出土土器の年代観とも一致してこよう。

遺構一覧表
遺物観察表
遺構名称新旧対照表

遺構一覧表凡例

竪穴住居

・平面形は、床面の形態を示した。

・規模は、壁体溝の下場（外側）の最大値を測り、（数値）は残存値を示した。

・長軸の向きは、柱穴の中点を結んだ軸について、磁北を基準として示しているが、それができない場合は、壁体溝で計測し、（　）付きで表した。

・面積は、壁体溝の下場（外側）で囲まれた床面積を測り、（数値）は残存値を表す。

・標高は、床面中央付近の海抜高を示した。

・主柱のＢ／Ａは、住居本来の柱の数をＡ、その内で確認された本数をＢとする。

・高床部は、設けられた辺の数、方形土壙はその数を示した。

・中央穴を伴う場合は○、●はそれが焼けていることを表す。

・焼土面の数値は、中央穴やカマド以外の被熱箇所の数を示した。

・カマドが壁体のほぼ中央に位置するものは○、●は隅に偏ることを表す。

掘立柱建物

・桁行と梁間は、両端の柱穴の直線距離の最大値を示した。

・棟方向は、梁の中点を結んだ線について磁北を基準として表した。

袋状土壙、井戸、土壙、焼成土壙、土壙墓、土器棺墓

・断面形は、壁の立ち上がり形態と床面形態の組合せをもとに記号で示す。壁が上方に向かって狭くなる傾向のあるもの（袋状）をⅠ、垂直に近いもの（筒状）をⅡ、上方に向かって広くなる傾向のもの（逆台形）をⅢとする。床面は平坦なものをａ、比較的中央が窪むものをｂ、比較的中央が高くなるものをｃ、明確な溝が巡るものをｄ、凹凸の著しいものをｅとする。

遺物観察表凡例

・土器以外の遺物の法量と重量は、最大値を示した。

・（数値）は残存値を表すが、土器の口径の場合はその残存率が１／６以下であることを表す。

・色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修　1988年版）を使用した。

・胎土は、それに含まれる砂礫の粒径を示しており、2.0㎜ 以上を礫、2.0 ～1.0㎜ を粗砂、1.0 ～0.5㎜ を細砂、水漉粘土のような場合は精良として表した。このため『新版標準土色帖』等で行われている粒径区分とは異なる。

・土器の煤は、土器全体に及ぶものをＡ、胴部上半に及ぶものをＢ、胴部下半でとどまるものをＣとし、ＢやＣであっても、口縁部に煤が見られるものはＢ’・Ｃ’として示した。

・土器の黒斑は、認められる部位により、口縁部をＡ、胴部をＢ、底部をＣとして示した。

竪穴住居

遺構名	平面形	規模(cm)		長軸の向き	床面積	標高	主柱	柱間(cm)		付属施設					時期	備考
		長さ	幅		(㎡)	(cm)		最大	最小	高床部	方形土壇	中央穴	焼土面	カマド		
竪穴住居1	(方形)	(402)	(244)	(N-62°-W)	(4.6)	(363)									弥・中・Ⅱ	部分のみ
竪穴住居2	円形	564			(18.2)	391	4/4	340	260			○			弥・中・Ⅱ	柱替え1回?
竪穴住居3	隅丸方形	—	—	—	(2.4)	370									弥・中	
竪穴住居4	楕円形	(515)	(499)		(17.3)	390									弥・中・Ⅱ	
竪穴住居5	楕円形	394	329		(9.2)	376	3/?	160	151						弥・中・Ⅱ	
竪穴住居6	円形	624			(24.4)	356	4/4	346	220			○			弥・中・Ⅱ	
竪穴住居7	隅丸方形	464	(381)	N-64°-W	(14.7)	376	2/4	179	—						弥・中・Ⅱ	打製石包丁片あり
竪穴住居8	円形?	(475)			(7.7)	368	3/?	?	?						弥・中・Ⅱ	
竪穴住居9	円形?	(403)			(1.9)	374									弥・中・Ⅱ	焼失
竪穴住居10	方形	349	273	(N-68°-W)	(6.1)	364									弥・中	
竪穴住居11	不整楕円形	(375)	(189)	(N-4°-W)	(4.9)	378							1		弥・中・Ⅱ	
竪穴住居12	円形	743			40.8	370	8/8	278	125	—	—	○	—		弥・中・Ⅱ	柱替え1～2回
竪穴住居13	方形	—	—	—	(14.6)	334	2/4	278			1	○			弥・後・Ⅳ	
竪穴住居14	方形	555	412	(N-90°-W)	(18.8)	394							2		弥・後・Ⅳ	
竪穴住居15a	円形	453			14.7	368	3/5	193	185	あり		○			弥・後・Ⅳ	
竪穴住居15b	円形	530			21.4	368	5/5	213	185	あり		○			弥・後・Ⅳ	
竪穴住居16a	方形	513	536	(N-46°-E)	(23.1)	380	4/4	277	245	なし	1	○	なし	(なし)	弥・後・Ⅳ	一部ヤラレ
竪穴住居16b	方形	639	608	(N-46°-E)	(29.4)	380	4/4	334	225	なし	1	○	なし	(なし)	弥・後・Ⅳ	一部ヤラレ
竪穴住居17	(円形)	666		—	(10.5)	350	2/4	333							弥・後・Ⅳ	約1/3残
竪穴住居18	隅丸方形	359	354	(N-48°-E)	10.7	397									弥・後・Ⅳ	
竪穴住居19	?	—	—	—	(1.3)	380									弥・後・Ⅳ	
竪穴住居20	方形	574	535	N-60°-W	(24.9)	384	4/4	262	223			○			弥・後・Ⅳ	柱替え1～2回
竪穴住居21	方形	340	300	(N-66°-E)	9.5	400							1		弥・後・Ⅳ	
竪穴住居22	円形	596			(10.6)	380	4/5?	237	213						弥・後・Ⅳ	
竪穴住居23	方形	443	(413)	(N-13°-E)	(12.7)	376	3/4	256	236			○			弥・後・Ⅳ	
竪穴住居24	円形	510			18.7	380	4/5?	251	205			○			弥・後・Ⅳ	
竪穴住居25	?	—	—	—	(1.7)	392									弥・後・Ⅳ	
竪穴住居26a	(円形)	623	(320)	—	(11.0)										弥・後・Ⅰ	
竪穴住居26b	(円形)	671	(367)	—	(11.8)										弥・後・Ⅰ	
竪穴住居27	円形	405			(7.2)	372	3/4	187	183			○			弥・後・Ⅳ	土器多量
竪穴住居28	-	—	—	—	—	334・358	—	—	—	—	—	—	—	—	弥・中～後	住居址群
竪穴住居29	円形	592			26.6	388	4/4	292	226			○			弥・後・Ⅳ	柱替え1～3回
竪穴住居30	円形	462		N-70°-E	17.1	378	4/4	217	174			○			弥・後・Ⅳ	
竪穴住居31	?	—	—	—	—	366	—	—	—	—	—	—	—	—	弥・後・Ⅳ	柱替え1～2回
竪穴住居32	円形	363	316	—	9.5	364	4/4	198	159			○			弥・後・Ⅳ	
竪穴住居33	隅丸方形	404	(365)	(N-37°-E)	(9.7)	394	3/4	187	157						弥・後・Ⅳ	
竪穴住居34	円形	365			9.9	384	4/4	201	163			○			弥・後・Ⅳ	
竪穴住居35a	円形	450			(12.0)	376						○			弥・後・Ⅲ～	
竪穴住居35b	円形	571			(16.2)	390	4/4	224	176						弥・後・Ⅳ	
竪穴住居36	円形	477			16.6	364	4/4	213	183			○			弥・後・Ⅳ	柱替え1回
竪穴住居37	隅丸方形	402	(338)	N-39°-E	(8.4)	392	4/4	214	178			○			弥・後・Ⅰ	竪穴住居38に切られる
竪穴住居38	円形	(551)			(14.2)	380	3/5	250	233			○			弥・後・Ⅱ	焼失
竪穴住居39	円形?	(556)			(12.7)	390	6/?	291	?						弥・後・Ⅰ	
竪穴住居40	隅丸方形	547	(487)	N-31°-E	(17.5)	374	4/4	293	264			○			弥・後・Ⅰ	焼失
竪穴住居41	隅丸方形	481	473	N-49°-E	19.7	372	4/4	239	209			○			弥・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居42	円形	(385)			(4.7)	368	2/4	197	—						弥・後・Ⅱ	
竪穴住居43	隅丸方形	336	333	N-49°-E	9.4	379	4/4	215	170			○	1		弥・後・Ⅰ	
竪穴住居44	円形	661			(24.3)	374	5/5	321	230			○			弥・後・Ⅰ	
竪穴住居45	円形	503			(11.6)	378	4/4?	272	195						弥・後・Ⅰ	焼失
竪穴住居46	円形	824			51.3	372	8/8	332	200			○			弥・後・Ⅱ・Ⅲ	建て替え1回
竪穴住居47	多角形	715			39.4	361	7/7	290	230			○			弥・後・Ⅱ・Ⅲ	建て替え1回　竪穴住居46に切られる
竪穴住居48	円形?	(170)			(0.5)	376									弥・後	
竪穴住居49	円形	367			(6.4)	348									弥・後・Ⅰ	
竪穴住居50	方形?	(419)			(5.4)	357									弥・後・Ⅰ	
竪穴住居51	楕円形	(414)			(2.7)	(311)									弥・後	
竪穴住居52	方形	268	233	N-60°-W	5.8	357				—		—	—		弥・後・Ⅲ	
竪穴住居53	隅丸方形	315	262	N-50°-E	7.9	377	1/1								古・前	
竪穴住居54	方形	416	406	(N-61°-E)	(10.5)	316	2/2?	147		3	1	○			古・前	
竪穴住居55	方形	517	488	(N-48°-E)	(21.6)	420	3/4	220	195						古・前	
竪穴住居56	方形	292	285	(N-46°-W)	7.8	340						○			古・前	
竪穴住居57	方形	272	269	(N-46°-W)	6.6	355				なし	1		なし	なし	古・前	
竪穴住居58	方形	(397)	337	(N-33°-E)	(11.0)	354									古・前	
竪穴住居59a	方形	562	480	N-52°-E	(24.3)	370	4/4	282	237		1	○			古・前	
竪穴住居59b	方形	582	557	N-31°-W	(26.4)	370	4/4	331	248			○			古・前	
竪穴住居60	方形	506	478	(N-53°-E)	23.0	390	3/4	244	193						古・前	
竪穴住居61	不整方形?	453	390	(N-8°-E)	(15.6)	388	3/4	248	247			○	1		古・前	
竪穴住居62	方形	442	(285)	(N-23°-W)	(9.7)	398	1/4?								古・前	
竪穴住居63	不整方形	520	458	(N-68°-W)	(19.8)	388	1/4			2					古・前	
竪穴住居64	方形	428	404	N-10°-W	15.9	370	4/4	237	209			○			古・前	
竪穴住居65	方形	(408)	(284)	(N-72°-E)	(7.7)	378						○			古・前・Ⅱ	
竪穴住居66	方形	439	(388)	N-8°-E	(15.3)	364	4/4	204	190	2		○			古・前・Ⅰ	
竪穴住居67a	方形	594	543		29.0	350						○			古・前	
竪穴住居67b	方形	618	563	N-58°-E	(31.3)	352	4/4	307	279	4			1		古・前	
竪穴住居68	方形	434	428	N-55°-E	17.2	368	4/4	242	218	4		○			古・前・Ⅱ	
竪穴住居69	方形	582	(351)	(N-79°-E)	17.9	364	2/4	300		(3)		○	1		古・前・Ⅰ	
竪穴住居70	方形	488	482	N-15°-E	22.3	362	4/4	235	221	3		○	2		古・前・Ⅰ	
竪穴住居71	円形	677			34.1	358	6/6	259	212	○		○			古・前・Ⅰ	柱替え1回
竪穴住居72	円形	(290)			(3.8)	378	1/?			1					古・前・Ⅰ	
竪穴住居73	円形	(471)			(4.8)	360	2/?	(177)							古・前	

遺構一覧表

遺構名	平面形	規模(cm) 長さ	規模(cm) 幅	長軸の向き	床面積 (m²)	標高 (cm)	主柱	柱間(cm) 最大	柱間(cm) 最小	付属施設 高床部	付属施設 方形土壙	付属施設 中央穴	付属施設 焼土面	付属施設 カマド	時期	備考
竪穴住居74	(方形)	(507)	(163)	N-65°-E	(5.8)	(365)									古・前	
竪穴住居75	(方形)	(435)	(413)	N-58°-E	(6.9)	326	1/?								古・前	
竪穴住居76	(方形)	(508)	(298)	N-54°-W	(10.9)	322									古・前	
竪穴住居77	方形	457	389	N-63.5°-E	17.2	314	4/4	290	235					○	古・後	
竪穴住居78	方形	475	456	N-73°-W	20.9	323	4/4	242	219					○	古・後	
竪穴住居79	方形	494	483	N-31°-W	23.4	319	4/4	270	202					○	古・後	
竪穴住居80	方形	353	310	(N-10°-W)	—	340	—	—	—					○	古・後	
竪穴住居81	方形	539	430	N-42.5°-W	23.0	319	4/4	252	220					○	古・後	
竪穴住居82	方形	460	396	N-79°-W	17.7	340	4/4	220	201					○	古・後	
竪穴住居83	方形	420	418	(N-52°-W)	(16.4)	310	2/2	211	—					○	古・後	カマドやや隅に偏る
竪穴住居84	方形	(396)	(218)	(N-82°-E)	(8.0)	336	2/4	208	—					○	古・後	
竪穴住居85	方形	449	428	N-60.5°-E	18.0	329	4/4	237	181					○	古・後	
竪穴住居86	方形	496	(344)	—	(11.3)	336	2/4	255	—						古・後	
竪穴住居87	方形	406	404	N-40°-E	16.2	340	4/4	220	185					○	古・後・Ⅱ	
竪穴住居88	方形	337	324	N-54°-E	10.6		4/4	194	151					○	古・後	建て替え1回
竪穴住居89	方形	380	355	N-31°-W	13.4		4/4	181	158					○	古・後・Ⅲ	
竪穴住居90	方形	477	(325)	(N-37°-E)	(10.0)	368	2/4	233							古・後	
竪穴住居91	方形	529	488	N-67°-E	23.7	380	4/4	291	245					○	古・後	
竪穴住居92	方形	(317)	(245)	(N-53°-W)	(3.9)	406	1/4							○	古・後	
竪穴住居93	?	—	—	—	(0.5)	342									古・後	
竪穴住居94	方形	470	338	(N-65°-E)	14.5	410								○	古・後	
竪穴住居95	方形	440	(427)	(N-47°-W)	(17.3)	396								○	古・後	
竪穴住居96	方形	447	409	N-8°-W	16.0	401	4/4	177	135				1		古・中	
竪穴住居97	方形	420	(223)	(N-63°-W)	(8.1)	410	0	—	—						古・後	
竪穴住居98	方形	359	323	N-41°-E	11.0	396	0	—	—						古・後	馬骨出土
竪穴住居99	方形	572	(202)	(N-72.5°-E)	(8.9)	387	2/4	310	—						古・後	
竪穴住居100	方形	(376)	367	(N-60°-W)	(13.2)	408									古・後・Ⅲ	
竪穴住居101	方形	403	(270)	(N-28°-E)	10.1	414	3/4	271	169						古・後	
竪穴住居102	方形	490	483	N-80°-W	21.8	408	4/4	240	205					○	古・後・Ⅲ	
竪穴住居103	方形	485	470	N-48°-E	20.6	400	4/4	240	220					○	古・後	
竪穴住居104	方形	447	409	N-56°-E	17.4	396	4/4	263	252					○	古・後・Ⅱ～Ⅲ	
竪穴住居105	方形	504	432	N-68°-E	19.5	387	4/4	250	218					●	古・後・Ⅲ	
竪穴住居106	方形	392	383	N-65°-E	13.9	380	4/4	229	207					○	古・後・Ⅲ	
竪穴住居107	方形	646	(608)	N-28°-W	28.4	390	4/4	314	249					○	古・後・Ⅲ	
竪穴住居108	方形	(603)	(550)	(N-51°-E)	(20.9)	404	3/4	373	339						古・後・Ⅲ	
竪穴住居109	方形	488	464	N-60°-E	(21.0)	406	4/4	273	217					○	古・後	
竪穴住居110	-	—	—	—	(2.2)	398									古・後	
竪穴住居111	方形	(467)	(444)	(N-44°-W)	(17.5)	404	3/4	249	155						古・後	
竪穴住居112	方形	454	435	N-34°-E	(15.0)	392	4/4	247	212					●	古・後	須恵器小片
竪穴住居113	方形	567	(489)	N-14°-W	(23.7)	394	4/4	268	260					○	古・中	
竪穴住居114	方形	366	357	(N-14°-E)	(12.1)	406	3/4	181	157						古・後	
竪穴住居115	方形	(429)	466	N-39°-E	(13.0)	404	4/4	203	191						古・後	
竪穴住居116	方形	488	(466)	(N-12°-E)	(19.8)	388	3/4	272	244						古・後	須恵器甕小片あり
竪穴住居117	方形?	(462)	(292)	(N-35°-E)	(8.0)	390									古・後	焼失、遺物なし
竪穴住居118	方形	(519)	514	(N-17°-E)	(20.7)	382	3/4	284	278			○		○	古・後	須恵器高杯小片
竪穴住居119	方形	(425)	(319)	(N-34°-E)	(12.4)	408	3/4	219	194					○	古・後	須恵器羽口片あり
竪穴住居120	方形	(557)	(311)	(N-30°-E)	(5.5)	380									古・中?	
竪穴住居121	方形	674	658	N-20°-E	39.3	384	4/4	285	260					○	古・後	鉄片あり
竪穴住居122	方形	554	480	N-19°-W	22.1	392	4/4	199	135					○	古・後	
竪穴住居123	不整方形	(434)	(376)	(N-24°-E)	(12.2)	370	2/4	248					1	○	古・後	
竪穴住居124	方形	(205)	(49)	(N-64°-E)	(0.6)	370								●?	古・中	
竪穴住居125	方形	—	—	—	(0.8)	383									古・後	
竪穴住居126	方形?	(348)	(141)	(N-57°-E)	(4.4)	392	2/4?	220							古・後	
竪穴住居127	方形	496	485	(N-47°-W)	(8.8)	358	2/4								古・中	
竪穴住居128	方形													○	古・後	カマドのみ
竪穴住居129	(方形)	(410)	(207)	N-37°-W		(390)								○	古・後	
竪穴住居130	方形	533	492	N-49°-W	24.8	385	4/4	230	153	—	—	—	—	○	古・後・Ⅱ	
竪穴住居131	方形	(426)	(314)	N-44°-W	(6.5)	346									古・中・Ⅱ	
竪穴住居132	方形	443	410	N-19°-W	16.8	366	4/4	201	172	—	—	—	—	○	古・後・Ⅲ	
竪穴住居133	方形	(409)	412	N-23°-E	(14.6)	374				—	—	—	—	○	古・後・Ⅲ	
竪穴住居134	方形	(467)	(464)	N-54°-W	(11.1)	380								○	古・後・Ⅲ	
竪穴住居135	方形	(491)	(299)	N-64°-W	(9.8)	363								○	古・後・Ⅲ	

掘立柱建物

遺構名	規模			柱間距離(cm)		面積	棟方向	平面形	時期	備考
	間数	桁行(cm)	梁間(cm)	桁	梁	(㎡)				
掘立柱建物1	1×1	383	254	358～383	237～254	9.0	N-58°-W	楕円形	弥・中・Ⅱ	
掘立柱建物2	5×4・3	683	443	111～145	102～167	29.9	N-49°-E	楕円形・隅丸方形・不整形	古・後	北辺は間数4、南辺は間数3
掘立柱建物3	2×2	356	298	160～189	141～160	10.6	N-58°-E	楕円形・円形・不整形	古・後	
掘立柱建物4	2×2	458	412	228～230	193～212	—	N-89°-W	楕円形・隅丸三角・ハート形	古代	北東隅柱穴なし
掘立柱建物5	3×2	595	585	174～218	266～301	33.6	N-13°-W	楕円形・方形	奈良？	
掘立柱建物6	1×2	305	193	578～610	173～209	22.5	N-74°-E	円形・楕円形	奈良？	
掘立柱建物7	(1)×(1)	314	148	314	148	—	—	円形・方形	古代	
掘立柱建物8	2×2	300	287	143～157	130～145	7.8	N-43°-W	円形	古・後？	
掘立柱建物9	4×3	509	347	91～146	102～143	(15.7)	(N-48°-W)	円形	奈良？	一部ヤラレ
掘立柱建物10	3×2	486	372	215～248	152～190	16.8	N-44°-E	円形	奈良？	
掘立柱建物11	4×2	601	342	128～163	164～174	20.1	N-13°-E	方形	奈良？	
掘立柱建物12	2×2	426	352	206～214	142～190	—	N-53°-E	円形	中世	北西隅柱穴なし
掘立柱建物13	2×1	370	287	176～194	276～287	10.4	N-59°-E	円形	中世	
掘立柱建物14	3×3	656	590	186～245	180～228	38.0	N-82°-W	円形	中世	
掘立柱建物15	2×1	275	218	126～148	207～218	6.0	N-8°-E	円形	中世	
掘立柱建物16	2×1	401	393	172～209	346～393	14.2	N-8°-E	楕円形	中世	
掘立柱建物17	3×1	544	240	162～210	218～240	12.9	N-81°-W	円形	中世	
掘立柱建物18	3×1	701	411	193～303	411	28.7	N-82°-W	円形	近世	

井戸

遺構名	規模(cm)			底面標高	平面形	断面形	時期	備考
	長さ	幅	深さ	(cm)				
井戸1	212	192	148	262	円形	Ⅲ－a	古代	
井戸2	182	173	164	135	方形	Ⅱ－a	中世	
井戸3	257	248	234	181	円形	Ⅱ－a	中世	コウヤマキ
井戸4	111	103	326	92	円形	Ⅱ－a	中世	
井戸5	149	108	119	305	楕円形	Ⅲ－a	中世～近世	
井戸6	240	235	163	246	円形	Ⅲ－a	近世	

袋状土壙

遺構名	規模(cm)			底面形	断面形	底面標高	時期	備考
	上面径	底面径	深さ			(cm)		
袋状土壙1	161	172	47	円形	Ⅰ－b	347	弥・中・Ⅱ	
袋状土壙2	167	154	46	円形	Ⅰ－a	364	弥・中・Ⅲ	
袋状土壙3	103	90	39	円形	Ⅱ－a	348	弥・中	
袋状土壙4	193	91	74	方形	Ⅰ－a	325	弥・中・Ⅱ	
袋状土壙5	175	163	57	楕円形	Ⅰ－a	317	弥・中・Ⅲ	
袋状土壙6	148	145	85	円形	Ⅰ－a	291	弥・中・Ⅱ	竪穴住居7に切られる
袋状土壙7	149	75	18	不整楕円形	Ⅲ－a	323	弥・中・Ⅱ	
袋状土壙8	90	103	63	不整方形	Ⅱ－a	365	弥・中・Ⅱ	
袋状土壙9	133	97	52	不整形	Ⅰ－a	310	弥・中・Ⅱ	
袋状土壙10	163	93	69	楕円形	Ⅱ－a	330	弥・中・Ⅱ	
袋状土壙11	79	83	61	楕円形	Ⅰ－b	340	弥・中・Ⅱ	
袋状土壙12	82	54	77	円形	Ⅲ－b	325	弥・中・Ⅱ	土壙272に切られる
袋状土壙13	115	120	81	楕円形	Ⅰ－b	311	弥・中・Ⅱ	
袋状土壙14	175	164	43	不整円形	Ⅱ－c	370	弥・中・Ⅲ	
袋状土壙15	140	131	56	円形	Ⅰ－e	288	弥・中・Ⅲ	
袋状土壙16	138	126	38	(隅丸方形)	Ⅰ－a	311	弥・中・Ⅲ	溝25に切られる
袋状土壙17	205	88	107	楕円形	Ⅱ－b	282	弥・中・Ⅱ	土壙202に切られる、石器片あり
袋状土壙18	(136)	(83)	34		Ⅱ－a	362	弥・中	弥・中の小片
袋状土壙19	179	157	66	不整楕円形	Ⅲ－a	306	弥・中・Ⅰ～Ⅱ	
袋状土壙20	163	171	28	楕円形	Ⅰ－d	377	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙21	165	173	50	不整楕円形	Ⅰ－e	372	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙22	97	105	107	円形	Ⅰ－a	298	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙23	125	124	72	円形	Ⅰ－a	320	弥・後	
袋状土壙24	163	160	98	不整円形	Ⅰ－a	315	弥・後・Ⅰ	貝層
袋状土壙25	121	111	33	円形	Ⅱ－a	336	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙26	99	114	69	円形	Ⅰ－a	334	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙27	154	148	117	円形	Ⅰ－a	281	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙28	140	116	66	不整円形	Ⅰ－a	334	弥・後・Ⅱ	
袋状土壙29	109	138	56	不整楕円形	Ⅰ－a	315	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙30	140	144	66	隅丸方形	Ⅰ－a	335	弥・後・Ⅲ～Ⅳ	方形土壙？
袋状土壙31	231	165	125	楕円形	Ⅱ－a	271	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙32	149	142	127	円形	Ⅰ－a	233	弥・後・Ⅰ	竪穴住居40に切られる
袋状土壙33	109	99	30	円形	Ⅱ－a	337	弥・後・Ⅱ	竪穴住居40を切る、石鏃片あり
袋状土壙34	108	128	99	不整楕円形	Ⅱ－a	271	弥・後・Ⅰ	竪穴住居40を切る
袋状土壙35	66	40	40	(楕円形)	Ⅲ－b	362	弥・後・Ⅰ	袋状土壙37に切られる
袋状土壙36	125	85	121	不整円形	Ⅱ－a	278	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙37	116	119	64	円形	Ⅰ－a	340	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙38	158	119	58	楕円形	Ⅲ－b	306	弥・後	
袋状土壙39	134	135	65	不整円形	Ⅰ－a	298	弥・後・Ⅰ	

遺構一覧表

遺構名	規模(cm) 上面径	底面径	深さ	底面形	断面形	底面標高(cm)	時期	備考
袋状土壙40	(157)	141	75	楕円形	Ⅰ－d	316	弥・後・Ⅰ	溝15に切られる
袋状土壙41	140	156	142	円形	Ⅰ－a	272	弥・後・Ⅰ	楔形石器あり
袋状土壙42	148	139	81	不整楕円形	Ⅰ－b	310	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙43	167	147	63	不整楕円形	Ⅲ－a	301	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙44	157	149	90	楕円形	Ⅰ－a	297	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙45	(39)	(42)	(92)	(不整楕円形)	(Ⅰ－a)	298	弥・後・Ⅰ	袋状土壙44に切られる
袋状土壙46	172	143	43	不整楕円形	Ⅱ－a	304	弥・後	溝25に切られる
袋状土壙47	201	167	54	不整楕円形	Ⅰ－a	311	弥・後・Ⅰ	竪穴住居42に切られる
袋状土壙48	130	118	43	(不整楕円形)	Ⅱ－a	302	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙49	125	132	112	円形	Ⅰ－a	274	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙50	119	104	28	円形	Ⅲ－a	380	弥・後	
袋状土壙51	127	110	62	円形	Ⅰ－d	326	弥・後・Ⅱ	
袋状土壙52	135	124	69	円形	Ⅱ－a	322	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙53	165	134	47	不整楕円形	Ⅰ－a	308	弥・後・Ⅰ	竪穴住居47に切られる
袋状土壙54	118	101	149	円形	Ⅱ－a	264	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙55	152	138	44	(円形)	Ⅱ－a	338	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙56	157	149	60	円形	Ⅲ－a	330	弥・後・Ⅰ	袋状土壙58に切られる
袋状土壙57	160	144	66	不整円形	Ⅰ－e	318	弥・後・Ⅰ	竪穴住居47に切られる
袋状土壙58	154	140	89	円形	Ⅰ－a	302	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙59	129	118	42	不整楕円形	Ⅱ－b	351	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙60	160	133	77	円形	Ⅱ－a	307	弥・後・Ⅰ	袋状土壙61に切られる
袋状土壙61	145	136	64	楕円形	Ⅰ－a	320	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙62	121	(99)	78	円形	Ⅱ－b	315	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙63	133	126	79	円形	Ⅰ－a	313	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙64	181	154	66	(不整楕円形)	Ⅲ－b	327	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙65	155	136	89	円形	Ⅰ－c	297	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙66	121	109	54	不整楕円形	Ⅰ－a	341	弥・後・Ⅰ	土壙302に切られる
袋状土壙67	146	128	75	不整円形	Ⅰ－a	305	弥・後・Ⅰ	袋状土壙68に切られる
袋状土壙68	130	113	71	楕円形	Ⅱ－a	310	弥・後・Ⅰ	土壙303に切られる
袋状土壙69	152	179	124	楕円形	Ⅰ－b	267	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙70	122	113	48	不整楕円形	Ⅱ－a	336	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙71	112	106	46	円形	Ⅰ－a	347	弥・後・Ⅰ	
袋状土壙72	125	117	58	円形	Ⅰ－a	336	弥・後	遺物なし

焼成土壙

遺構名	規模(cm) 長さ	幅	深さ	底面標高(cm)	平面形	断面形	時期	備考
焼成土壙1	62	49	3	301	隅丸方形	Ⅲ－b	古・後？	
焼成土壙2	(79)	73	17	295	隅丸方形	Ⅲ－b	古・後？	
焼成土壙3	(84)	44	23	347	長方形	Ⅱ－a	古・後？	
焼成土壙4	109	82.5	18	353	方形	Ⅲ－a	古・後？	
焼成土壙5	83	(57)	14	301	不整方形	Ⅲ－a	古・後？	
焼成土壙6	103	(65)	11	301	長方形	Ⅲ－b	古・後？	
焼成土壙7	70	50	9	341	方形	Ⅲ－a	古・後？	
焼成土壙8	(123)	(110)	24	403	隅丸方形	Ⅱ－a	古・後？	
焼成土壙9	90	72	14	412	方形	Ⅲ－a	古・後？	
焼成土壙10	115	106	19	406	方形	Ⅲ－b	古・後？	
焼成土壙11	150	125	30	3.6	方形	Ⅲ－a	古・後	

土壙

遺構名	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	時期	備考
土壙1	(141)	51	12	長方形	Ⅲ－a	弥・前・Ⅲ	
土壙2	246	202	70	不整楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	貝層
土壙3	(528)	(134)	30	長楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙4	138	(130)	19	方形	Ⅲ－a	弥・中	
土壙5	293	217	70	不整楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	貝層
土壙6	163	110	18	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙7	97	(65)	44	方形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙8	155	109	15	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	貝層
土壙9	(97)	(93)	19	楕円形？	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙10	92	77	13	不整方形	Ⅲ－a	弥・中	
土壙11	(185)	136	31	方形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	貝層
土壙12	190	99	53	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙13	106	78	14	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	一部ヤラレ
土壙14	184	162	49	円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	一部ヤラレ
土壙15	214	(173)	68	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙16	168	(88)	78	(方形)	Ⅱ－b	弥・中・Ⅱ	貝層、一部ヤラレ
土壙17	160	123	27	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙18	(190)	105	22	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙19	269	152	59	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙20	183	139	73	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	

遺構名	規模(cm)			平面形	断面形	時期	備　考
	長さ	幅	深さ				
土壙21	(97)	(48)	37	(不整楕円形)	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙22	262	211	69	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	貝層
土壙23	120	117	30	円形	Ⅲ－c	弥・中	
土壙24	174	115	24	楕円形	Ⅲ－b	弥・中	一部ヤラレ
土壙25	148	110	32	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙26	112	(65)	29	(円形)	Ⅲ－b	弥・中	約1/2強残
土壙27	124	115	27	円形	Ⅱ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙28	166	143	29	円形	Ⅲ－b	弥・中	一部ヤラレ
土壙29	(133)	(63)	27	(楕円形)	Ⅲ－b	弥・中	約1/3残
土壙30	117	111	30	円形	Ⅱ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙31	91	87	30	隅丸方形	Ⅲ－b	弥・中	
土壙32	156	92	20	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙33	178	87	56	方形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙34	92	(57)	25	楕円形	Ⅲ－a	弥・中	一部ヤラレ
土壙35	195	90	47	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙36	90	86	17	円形	Ⅲ－a	弥・中	
土壙37	61	49	17	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙38	112	74	22	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙39	(174)	(154)	59	隅丸方形	Ⅲ－a	弥・中	1/2強残
土壙40	188	126	38	(楕円形)	Ⅲ－b	弥・中	ヤラレ有
土壙41	115	94	25	不整楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙42	(98)	(81)	37	(楕円形)	(Ⅲ－b)	弥・中	一部のみ
土壙43	117	86	47	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	一部ヤラレ
土壙44	87	80	48	円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙45	122	112	33	円形	Ⅲ－b	弥・中	
土壙46	136	115	40	隅丸方形	Ⅱ－a	弥・中	
土壙47	113	100	50	不整楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙48	120	104	29	隅丸方形	Ⅲ－c	弥・中・Ⅱ	
土壙49	(129)	129	20	円形	Ⅲ－b	弥・中	一部ヤラレ
土壙50	120	79	42	楕円形	Ⅲ－b	弥・中	
土壙51	205	172	52	隅丸方形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙52	178	107	33	不整方形	Ⅲ－b	弥・中	一部ヤラレ
土壙53	208	(106)	25	楕円形	Ⅲ－b	弥・中	一部ヤラレ
土壙54	146	86	64	不整方形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙55	187	(70)	26	楕円形	Ⅲ－c	弥・中・Ⅱ	
土壙56	99	69	40	楕円形	Ⅲ－e	弥・中・Ⅲ	
土壙57	211	95	31	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙58	242	88	64	長楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙59	132	104	53	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅲ	
土壙60	85	74	45	円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙61	181	142	48	不整方形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙62	104	(66)	12	(楕円形)	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	約1/2残
土壙63	256	137	17	隅丸方形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	一部ヤラレ
土壙64	222	142	64	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	貝層
土壙65	98	85	17	不整楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙66	64	(43)	10	楕円形	Ⅲ－b	弥・中	下部欠ける
土壙67	(71)	(38)	10	方形	Ⅲ－b	弥・中	下部欠ける
土壙68	(54)	50	6	方形	Ⅲ－b	弥・中	下部少し欠ける
土壙69	86	(26)	26	方形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	下部欠ける
土壙70	93.5	73	23	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	左上部欠ける
土壙71	(78)	56	17	方形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙72	110	101	37	方形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	貝層
土壙73	122	(67)	42	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	右上部斜めに欠ける
土壙74	171	86	32	隅丸長方形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙75	157	(92)	67	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙76	332	157	58	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	貝層
土壙77	78	76	12	円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙78	98	75	30	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙79	153	143	17	不整円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙80	175	135	28	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙81	100	80	8	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙82	200	164	36	不整楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙83	68	55	22	方形	Ⅲ－b	弥・中	
土壙84	136	123	23	方形	Ⅲ－c	弥・中	
土壙85	180	76	26	不整方形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙86	97	86	45	方形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙87	152	134	38	不整楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙88	180	97	82	楕円形	Ⅱ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙89	323	170	90	不整楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙90	258	123	33	隅丸方形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙91	114	97	18	円形	Ⅲ－a	弥・中	
土壙92	115	96	27	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙93	83	70	11	隅丸方形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙94	(116)	(54)	33	(方形)	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙95	(98)	83	22	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	

遺構一覧表

遺構名	規模(cm)			平面形	断面形	時期	備　考
	長さ	幅	深さ				
土壙96	192	134	47	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙97	110	107	23	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙98	(92)	73	21	不整楕円形	Ⅲ－a	弥・中	
土壙99	(106)	85	34	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙100	(127)	(35)	38	(円形)	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	貝層
土壙101	(143)	130	38	不整楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙102	146	109	53	不整方形	Ⅱ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙103	146		34	円形	Ⅲ－b	弥・中	
土壙104	(118)	108	22	楕円形	Ⅲ－a	弥・中	
土壙105	94	65	25	楕円形	Ⅱ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙106	139	110	21	不整楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅲ	
土壙107	136	(113)	45	不整楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙108	395	256	37	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅲ	
土壙109	(285)	172	14	長方形	Ⅲ－a	弥・中	
土壙110	82	(48)	8	楕円形	Ⅲ－a	弥・中	
土壙111	(108)	(79)	26	楕円形	Ⅲ－a	弥・中	
土壙112	97	80	22	不整楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙113	118	(99)	29	隅丸方形	Ⅲ－a	弥・中	
土壙114	(132)	(48)	21	長楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙115	171	133	57	楕円形	Ⅲ－a	弥・中	
土壙116	(128)	(120)	20	方形？	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ？	竪穴住居５に切られる
土壙117	188	119	44	不整楕円形	Ⅱ－a	弥・中・Ⅰ	
土壙118	104	86	29	楕円形	Ⅲ－b	弥・中	
土壙119	140	118	34	不整楕円形	Ⅲ－a	弥・中	
土壙120	117		16	円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	土壙121に切られる
土壙121	112	100	40	不整方形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙122	117	100	18	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅰ	
土壙123	(171)	103	55	楕円形	Ⅱ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙124	117	106	22	不整円形	Ⅱ－e	弥・中・Ⅱ	
土壙125	137	77.5	45	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙126	141	(54)	39	長方形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	土壙125に切られる
土壙127	105	(22)	39	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	下部1/2欠く
土壙128	225	(70)	40	方形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	下部1/2欠く
土壙129	183	117	45	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙130	300	224	72	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙131	120	120	40	円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙132	69	(50)	15	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	溝22に切られる
土壙133	141	63	19	長方形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙134	120	56	10	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙135	(67)	37	27	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙136	95	74	29	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙137	59	53	16	方形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙138	52	50	12	円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙139	216	108	63	長楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅲ	
土壙140	222	147	67	長楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙141	68	60	25	方形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙142	83	43	11	長方形	Ⅲ－c	弥・中・Ⅱ	土壙141に切られる
土壙143	(109)	81	41	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙144	164	(70)	46	楕円形？	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙145	104	93	28	円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙146	78	50	19	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙147	91	91	25	円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙148	123	85	25	長方形	Ⅲ－c	弥・中・Ⅱ	
土壙149	120	116	47	方形がかった円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙150	(211)	150	35	隅丸方形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	竪穴住居７に切られる
土壙151	272	198	25	不整楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅲ	竪穴住居37に切られる
土壙152	145	121	19	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙153	119	(71)	15	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅲ	
土壙154	135	98	26	楕円形	Ⅲ－a	弥・中	竪穴住居７に切られる
土壙155	250	128	13	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	掘立柱建物１に切られる
土壙156	(90)	76	13	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	土壙155に切られる
土壙157	111	81	17	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙158	(76)	76	15	(楕円形)	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	土壙157に切られる
土壙159	94	88	42	不整方形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙160	157	127	39	不整円形	Ⅲ－b	弥・中	
土壙161	(104)	70	24	隅丸方形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅲ	
土壙162	157	97	18	長楕円形	Ⅲ－a	弥・中	竪穴住居40に切られる
土壙163	147	98	48	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅲ	
土壙164	109	93	19	楕円形	Ⅲ－a	弥・中	
土壙165	(98)	76	37		Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	袋状土壙45に切られる
土壙166	(120)	102	37		Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	袋状土壙45に切られる
土壙167	(123)	80	21	(長楕円形)	Ⅲ－b	弥・中・Ⅲ	
土壙168	142	(91)	68	不整楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙169	180	174	30	円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙170	118	(106)	31	(円形)	Ⅲ－b	弥・中・Ⅲ	

遺構名	規模(cm)			平面形	断面形	時期	備　考
	長さ	幅	深さ				
土壙171	(170)	115	28	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	土壙169・170に切られる
土壙172	181	173	59	円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	土壙173に切られる
土壙173	358	192	68	長楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	土壙169に切られる
土壙174	128	87	(17)	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅲ	
土壙175	116	102	49	円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙176	90	85	29	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙177	(107)	98	26	楕円形	Ⅲ－a	弥・中	
土壙178	155	(85)	50	(楕円形)	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙179	112	(82)	33	(円形)	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙180	105	76	48	楕円形	Ⅱ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙181	133	87	54	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙182	127	72	38	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙183	103	62	17	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙184	122	82	48	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅲ	
土壙185	(110)	(81)	27		Ⅲ－a	弥・中	土壙186に切られる
土壙186	(132)	100	47	不整楕円形	Ⅱ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙187	83	64	38	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙188	108	104	45	円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	土壙189に切られる
土壙189	115	80	38	不整楕円形	Ⅲ－c	弥・中・Ⅱ	
土壙190	(111)	(101)	45	(方形)	Ⅲ－a	弥・中	土壙189に切られる
土壙191	(138)	105	31	不整楕円形	Ⅲ－c	弥・中・Ⅱ	
土壙192	141	84	35	楕円形	Ⅲ－c	弥・中・Ⅱ	
土壙193	97	93	18	方形	Ⅲ－a	弥・中	
土壙194	(93)	60	27	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙195	135	112	51	不整楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙196	106	86	40	楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙197	(144)	85	20	不整楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	土壙198に切られる
土壙198	132	122	28	円形	Ⅲ－a	弥・中	土壙297に切られる
土壙199	116	114	35	円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅲ	楔形石器片あり
土壙200	95	(71)	16	(楕円形)	Ⅲ－b	弥・中	土壙288に切られる
土壙201	208	159	54	(不整楕円形)	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	袋状土壙17に切られる
土壙202	150	138	74	円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙203	180	61	19	長楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅲ	
土壙204	181	(132)	72	(円形)	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	
土壙205	96	82	39	楕円形	Ⅲ－b	弥・中・Ⅱ	石器片あり
土壙206	140	53	20	長楕円形	Ⅲ－a	弥・中	遺物なし
土壙207	174	90	26	不整楕円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅲ	
土壙208	145	142	21	円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅲ	
土壙209	152	95	25	方形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙210	89	75	27	方形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅲ	
土壙211	(73)	(73)	41		Ⅲ－b	弥・中・Ⅲ	
土壙212	162	(146)	5	不整方形	Ⅲ－a	弥・中	
土壙213	133	(102)	17	(不整方形)	Ⅲ－a	弥・中	
土壙214	99	80	9	円形	Ⅲ－a	弥・中・Ⅱ	
土壙215	109	(88)	36	(不整楕円形)	Ⅲ－a	弥・中・Ⅲ	
土壙216	224	78	50	長楕円形	Ⅲ－b	弥・後・Ⅰ	
土壙217	123	108	28	隅丸方形	Ⅲ－e	弥・後	西半分欠ける
土壙218	158	119	42	不整楕円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	
土壙219	101	90	25	不整方形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	
土壙220	(338)	(206)	24	不整方形	Ⅲ－a	弥・後	
土壙221	74	72	16	円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	
土壙222	72	59	14	楕円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	
土壙223	(104)	89	41	不整円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	
土壙224	87	72	44	不整円形	Ⅲ－b	弥・後・Ⅳ	
土壙225	167	(78)	42	(不整楕円形)	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	約1/2残
土壙226	112	94	25	方形	Ⅲ－a	弥・後	
土壙227	95	71	15	楕円形	Ⅲ－b	弥・後	
土壙228	161	133	31	楕円形	Ⅲ－a	弥・後	
土壙229	178	(105)	22	不整楕円形	Ⅱ－a	弥・後	一部ヤラレ
土壙230	148	79	24	楕円形	Ⅲ－b	弥・後・Ⅲ	
土壙231	127	98	19	楕円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	
土壙232	140	115	21	不整楕円形	Ⅲ－b	弥・後・Ⅳ	
土壙233	104	89	22	楕円形	Ⅲ－b	弥・後	
土壙234	(69)	51	11	(楕円形)	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	一部ヤラレ
土壙235	112	(82)	23	楕円形	Ⅲ－b	弥・後・Ⅳ	一部ヤラレ
土壙236	(151)	(90)	37	楕円形	Ⅲ－b	弥・後・Ⅱ	1/2強残
土壙237	83	63	22	楕円形	Ⅲ－b	弥・後・Ⅳ	一部ヤラレ
土壙238	131	95	27	不整楕円形	Ⅲ－a	弥・後	一部ヤラレ
土壙239	197	142	57	方形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	方形土壙
土壙240	107	79	36	楕円形	Ⅲ－b	弥・後・Ⅳ	
土壙241	96	(78)	29	円形	Ⅲ－b	弥・後	約1/3ヤラレ
土壙242	105	78	27	不整楕円形	Ⅱ－a	弥・後・Ⅳ	
土壙243	101	78	24	不整楕円形	Ⅲ－b	弥・後	
土壙244	321	68	19	長楕円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	
土壙245	130	(97)	36	隅丸方形	Ⅲ－b	弥・後・Ⅳ	

遺構一覧表

遺構名	規模(cm)			平面形	断面形	時期	備　考
	長さ	幅	深さ				
土壙246	70	58	26	隅丸方形	Ⅲ－b	弥・後・Ⅳ	
土壙247	150	(91)	30	長方形	Ⅲ－b	弥・後・Ⅳ	下部欠けている　方形土壙
土壙248	(86)	(28)	38	楕円形	Ⅲ－d	弥・後	土壙247に切られる
土壙249	109	75	16	楕円形	Ⅲ－b	弥・後	
土壙250	118	(106)	11	(不整楕円形)	Ⅲ－a	弥・後	
土壙251	(75)	97	23	(長方形)	Ⅲ－a	弥・後	
土壙252	110	87	17	楕円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅰ	
土壙253	104	82	24	楕円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅰ	
土壙254	92	55	73	楕円形	Ⅱ－a	弥・後・Ⅱ	
土壙255	118	80	38	楕円形	Ⅱ－a	弥・後・Ⅰ	
土壙256	176	169	43	隅丸方形	Ⅱ－d	弥・後・Ⅰ	
土壙257	195	110	29	不整楕円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅰ	
土壙258	53	44	21	不整円形	Ⅲ－b	弥・後・Ⅰ	
土壙259	146	136	34	円形	Ⅱ－a	弥・後・Ⅰ	
土壙260	90	58	18	長方形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	土壙264に切られる
土壙261	128	109	36	方形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	
土壙262	146	134	45	方形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	方形土壙
土壙263	73	(60)	26	円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	溝22に切られる
土壙264	157	124	35	横長方形	Ⅲ－c	弥・後・Ⅳ	銅鏃　方形土壙
土壙265	93	76	9	楕円形	Ⅲ－a	弥・後	
土壙266	126	81	10	長楕円形	Ⅲ－b	弥・後	
土壙267	142	119	59	不整方形	Ⅲ－a	弥・後	
土壙268	110	94	39	不整楕円形	Ⅲ－b	弥・後・Ⅰ	
土壙269	92	(71)	35	不整円形	Ⅲ－a	弥・後	
土壙270	154	121	24	楕円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅰ	
土壙271	100		51	円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅰ	
土壙272	103	91	20	楕円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅰ	
土壙273	169	124	30	不整方形	Ⅱ－a	弥・後	
土壙274	127	113	31	不整円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅱ	
土壙275	151	97	27	楕円形	Ⅱ－a	弥・後・Ⅰ	
土壙276	135	96	36	不整楕円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	
土壙277	(157)	146	36	不整方形	Ⅲ－a	弥・後	方形土壙
土壙278	108	107	33	不整方形	Ⅱ－a	弥・後・Ⅳ	
土壙279	90	81	26	円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	
土壙280	114	(70)	25	楕円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅰ	
土壙281	119	112	35	円形	Ⅲ－b	弥・後	袋状土壙34に切られる
土壙282	102	86	20	円形	Ⅲ－a	弥・後	竪穴住居45に切られる
土壙283	(245)	223	(46)	不整方形	Ⅲ－b	弥・後	竪穴住居44に切られる
土壙284	(155)	140	44	(楕円形)	Ⅲ－a	弥・後・Ⅰ	袋状土壙46に切られる
土壙285	(132)	(85)	54	(不整方形)	Ⅲ－b	弥・後・Ⅰ	竪穴住居42に切られる
土壙286	92	75	39	円形	Ⅲ－a	弥・後	
土壙287	(123)	(60)	16	(円形)	Ⅲ－b	弥・後・Ⅰ	溝25に切られる
土壙288	143	(71)	25	(円形)	Ⅲ－a	弥・後	
土壙289	132	80	21	隅丸方形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	
土壙290	112	(72)	30	(楕円形)	Ⅲ－a	弥・後	袋状土壙35・37に切られる
土壙291	112	95	12	楕円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅱ	
土壙292	154	131	25	円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	土壙294に切られる
土壙293	(250)	190	28	長方形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	方形土壙
土壙294	346	260	40	長方形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	溝15に切られる　方形土壙
土壙295	113	(105)	85	楕円形	Ⅲ－a	弥・後	
土壙296	149	(41)	20	長楕円形	Ⅲ－b	弥・後	
土壙297	101	(58)	22	(楕円形)	Ⅲ－a	弥・後・Ⅰ	袋状土壙52に切られる
土壙298	143	116	29	楕円形	Ⅲ－c	弥・後	
土壙299	145	125	41	不整円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅰ	竪穴住居47に切られる
土壙300	105	(84)	14	不整円形	Ⅲ－b	弥・後	
土壙301	85	72	46	楕円形	Ⅲ－b	弥・後・Ⅳ	
土壙302	127	97	40	楕円形	Ⅲ－b	弥・後・Ⅰ	
土壙303	85	86	39	円形	Ⅲ－b	弥・後・Ⅲ	
土壙304	106	102	43	楕円形	Ⅲ－b	弥・後・Ⅰ	
土壙305	(151)	(49)	40		Ⅲ－a	弥・後	
土壙306	70	53	12	楕円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	
土壙307	(115)	106	64	不整楕円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅰ	
土壙308	(122)	85	22	隅丸方形	Ⅲ－b	弥・後・Ⅳ	
土壙309	152	123	32	不整楕円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	
土壙310	245	202	47	方形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	銅釧出土　方形土壙
土壙311	(143)	(70)	12	楕円形	Ⅲ－a	弥・後・Ⅳ	
土壙312	246	193	47	方形	Ⅱ－a	弥・後・Ⅳ	方形土壙
土壙313	128	124	19	方形	Ⅲ－a	古・前	
土壙314	76	61	21	楕円形	Ⅲ－a	古・前・Ⅰ	
土壙315	123	88	17	不整方形	Ⅲ－a	古・前・Ⅰ	
土壙316	172	126	18	楕円形	Ⅲ－a	古・前	
土壙317	(163)	153	44	楕円形	Ⅲ－b	古・後	下部欠ける
土壙318	176	(93)	30	楕円形	Ⅲ－b	古・後	
土壙319	(472)	(375)	20	方形	Ⅲ－c	古・後・Ⅱ	溝で切られる
土壙320	91	72	12	方形	Ⅲ－a	古・後	

遺構名	規模(cm)			平面形	断面形	時期	備　考
	長さ	幅	深さ				
土壙321	127	108	7	方形	Ⅲ－a	古・後	
土壙322	91	65	24	方形	Ⅲ－b	古・後	
土壙323	－	96	28	不整形	Ⅲ－b	古・後	
土壙324	110	60	11	楕円形	Ⅲ－a	古・後	
土壙325	(250)	(74)	45	楕円形	Ⅲ－a	古・後	
土壙326	46	42	16	円形	Ⅲ－b	古・後	
土壙327	33	22	4	不整楕円形	Ⅲ－b	古・後	
土壙328	(92)	(78)	(28)	(不整楕円形)	Ⅲ－a	古・後	カマドか、須恵器小片あり
土壙329	(183)	162	41	方形	Ⅲ－b	古・後	須恵器小片あり
土壙330	85		10	円形	Ⅲ－e	古・後	須恵器小片あり
土壙331	272	83	21	長楕円形	Ⅲ－b	古・後	
土壙332	109	84	32	不整円形	Ⅲ－a	古・後	溝25より新しい、遺物なし
土壙333	206	167	38	方形	Ⅲ－a	古・後	
土壙334	95	71	17	楕円形	Ⅲ－a	古・後・Ⅲ	
土壙335	－	－	－	不整形		古・後	炉状遺構
土壙336	66	(45)	9	不整形	Ⅲ－b	古代	
土壙337	130	111	10	方形	Ⅲ－b	中世	
土壙338	96	79	7	隅丸方形	Ⅲ－b	古代？	
土壙339	157	150	45	方形	Ⅲ－a	平安	
土壙340	97	66	42	楕円形	Ⅲ－b	古代	
土壙341	79	76	14	円形	Ⅲ－b		
土壙342	125	95	14	楕円形	Ⅲ－a		
土壙343	(185)	(154)	17	楕円形	Ⅲ－b		
土壙344	78	67	28	楕円形	Ⅲ－b		
土壙345	227	48	28	隅丸長方形	Ⅲ－b	平安	
土壙346	211	49	29	長楕円形	Ⅲ－a	平安	
土壙347	82	64	20	楕円形	Ⅲ－b		
土壙348	147	119	25	楕円形	Ⅲ－b		
土壙349	96	(22)	11	楕円形	Ⅲ－b		
土壙350	(192)	(151)	37	不整楕円形	Ⅲ－b		
土壙351	(127)	(49)	19	楕円形	Ⅲ－b		
土壙352	(270)	(36)	25	楕円形	Ⅲ－a		
土壙353	72	66	22	円形	Ⅲ－a		
土壙354	75	38	2	楕円形	Ⅲ－b		
土壙355	－	225	18	不整形	Ⅲ－b	古代？	
土壙356	(765)	(276)	24	楕円形	Ⅲ－a	平安	
土壙357	330	310	22	隅丸方形	Ⅲ－a	平安	
土壙358	(152)	62	55	方形	Ⅱ－a	古代	
土壙359	214	188	28	隅丸方形	Ⅲ－a	平安	
土壙360	152	107	24	楕円形	Ⅲ－a	古代？	
土壙361	188	78	16	楕円形	Ⅲ－b	奈良	
土壙362	(95)			円形？	Ⅲ－a	古代	
土壙363	200	22	10	楕円形	Ⅲ－a	古代	
土壙364	(164)	(42)	(45)	(方形)	Ⅱ－a	平安	
土壙365	(294)	(70)	55	(長方形)	Ⅲ－b	平安	
土壙366	(210)	(55)	(34)	(楕円形)	Ⅱ－a	古代	
土壙367	175	160	38	方形	Ⅱ－a	平安	
土壙368	92	78	37	隅丸方形	Ⅱ－a	平安	
土壙369	191	158	24	方形	Ⅲ－a	平安	
土壙370	108	88	12	楕円形	Ⅲ－a	古代	
土壙371	90	78	9	不整円形	Ⅲ－a	平安	
土壙372	394	282	19	不整楕円形	Ⅲ－a	平安	
土壙373	185	(134)	16	不整方形	Ⅱ－a	平安	
土壙374	104	89	28	楕円形	Ⅲ－b	平安	
土壙375	318	260	73	ほぼ横長方形	Ⅲ－e	平安	梵鐘鋳造遺構
土壙376	348	188	14	不整形	Ⅲ－b	平安	
土壙377	164	130	12	楕円形	Ⅲ－b	平安	
土壙378	376	140	8	長楕円形	Ⅲ－a	平安	鬼瓦片
土壙379	76	70	18	右下隅丸方形	Ⅲ－b	古代	
土壙380	78	(67)	44	楕円形	Ⅲ－a	平安	
土壙381	72	70	8	不整方形	Ⅱ－a	平安	
土壙382	(198)	152	19	不整方形	Ⅲ－a	古代	
土壙383	237	153	15	方形	Ⅲ－a	古代	
土壙384	232	144	50	楕円形	Ⅲ－a	平安	
土壙385	(93)	82	16	不整方形	Ⅲ－a	古代	
土壙386	328	(189)	53	長楕円形	Ⅲ－a	平安	
土壙387	212	(146)	45	長方形	Ⅲ－a	古代	
土壙388	171	(148)	12	円形	Ⅲ－a	平安	
土壙389	(610)	550	38		Ⅲ－b	平安	
土壙390	(192)	110	60	(不整楕円形)	Ⅲ－b	平安	
土壙391	(153)	130	45	隅丸方形	Ⅲ－a	平安	
土壙392	(47)	(38)	11	楕円形	Ⅲ－b	中世	
土壙393	(110)	73	32	長方形	Ⅲ－b	中世	
土壙394	270	129	47	長楕円形	Ⅲ－b	中世	
土壙395	376	350	54	不整方形	Ⅲ－b	中世	

遺構一覧表

遺構名	規模(cm)			平面形	断面形	時期	備　考
	長さ	幅	深さ				
土壙396	74	63	15	方形	Ⅲ－a	中世	
土壙397	113	69	24	長方形	Ⅲ－b	中世	
土壙398	357	336	24	不整方形	Ⅲ－b	中世	
土壙399	252	227	62	隅丸五角形	Ⅲ－b	中世	
土壙400	95	68	30	長方形	Ⅲ－b	中世	
土壙401	114	93	34	楕円形	Ⅲ－b	中世	
土壙402	114	46	6	長楕円形	Ⅲ－b	中世	
土壙403	91	80	11	隅丸方形	Ⅲ－a	中世	
土壙404	97	(35)	17	楕円形	Ⅲ－a	中世	
土壙405	72	66	10	円形	Ⅲ－b	中世	
土壙406	(274)	(142)	45	長方形	Ⅲ－a	中世	
土壙407	294	209	54	不整楕円形	Ⅲ－b	中世	
土壙408	111	86	12	楕円形	Ⅲ－b	中世？	
土壙409	84	70	10	楕円形	Ⅲ－b	中世？	
土壙410	99	86	16	楕円形	Ⅲ－b	中世？	
土壙411	98	85	17	楕円形	Ⅲ－b	中世？	
土壙412	92	82	14	楕円形	Ⅲ－b	中世？	
土壙413	219	149	17	楕円形	Ⅲ－a	中世	鎌倉
土壙414	405	(78)	13	方形？	Ⅲ－a	中世	
土壙415	494	203	50	不整長楕円形	Ⅲ－a	鎌倉	
土壙416	314	(228)	15	不整円形？	Ⅲ－a	中世	
土壙417	(130)	104	90	楕円形	Ⅲ－a	中世	
土壙418	96	92	30	円形	Ⅲ－a	鎌倉	
土壙419	64	63	32	円形	Ⅱ－a	中世	
土壙420	(125)	93	11	長方形	Ⅲ－a	中世	
土壙421	107	(64)	26	(方形)	Ⅲ－a	中世	溝98・99に切られる
土壙422	92	64	33	楕円形	Ⅲ－a	中世	
土壙423	121	(78)	(29)	(円形)	(Ⅲ－b)	中世	
土壙424	127	100	24	長方形	Ⅲ－a	中世	
土壙425	150	141	68	円形	Ⅲ－a	近世	
土壙426	(163)		13	円形	Ⅱ－e	近世	

土壙墓

遺構名	規模(cm)			底面標高(cm)	平面形	断面形	主軸	副葬品	時期	備　考
	長さ	幅	深さ							
土壙墓1	187	54	21	355	長方形		N-1°-W		弥・中・Ⅱ	
土壙墓2	122	55	7	386	長方形		N-3°-E		弥・中・Ⅱ～Ⅲ	
土壙墓3	(104)	33	6	400	長方形		N-68°-W		弥・中・Ⅱ～Ⅲ	
土壙墓4	137	40	7	388	長方形		N-43.5°-E		弥・中・Ⅱ～Ⅲ	
土壙墓5	133	94	31	380	長方形		N-7°-E		弥・後・Ⅳ	
土壙墓6	104	(78)	26	342	長方形		N-10°-W	椀	中世	
土壙墓7	105	63	16	349	長方形		N-80°-E	小Ⅲ・小刀	中世	
土壙墓8	97	77	24	335	楕円形		N-11.5°-E	椀	中世	
土壙墓9	166	65	10	353	長方形		N-25°-W	－	中世？	
土壙墓10	104	71	12	352	長方形		N-9°-W	－	中世？	
土壙墓11	86	60	5	411	長方形		N-72.5°-W	－	中世？	
土壙墓12	75	64	11	409	隅丸方形		N-71.5°-E	－	中世？	
土壙墓13	101	75	37	377	長方形		N-67°-W		中世	

土器棺墓

遺構名	掘り方				棺身器種	棺蓋	開口方向	埋設状態	時期	備　考
	平面形	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)						
土器棺墓1	方形	86	86	46	甕	－	－	直立	弥・中・Ⅱ	
土器棺墓2	円形	77	65	26	甕	鉢	北東	斜位	弥・後・Ⅰ～Ⅱ	
土器棺墓3	楕円形	100	80	43	壺	鉢	東南	斜位	弥・後・Ⅰ～Ⅱ	
土器棺墓4	円形	50	46	11	壺	－	北東	斜位	弥・後・Ⅰ	
土器棺墓5	円形	87	(86)	54	壺	鉢	東北東	斜位	弥・後・Ⅰ～Ⅱ	
土器棺墓6	円形	55	55	22	壺	鉢・装飾高杯	北北東	斜位	弥・後・Ⅱ	
土器棺墓7	楕円形	78	60	26	壺	鉢	東南東	斜位	弥・後・Ⅱ	
土器棺墓8	円形	68	60	20	壺	鉢	北西	斜位	弥・後・Ⅱ	
土器棺墓9	－	－	－	－	壺	－	－	－	弥・後	
土器棺墓10	－	－	－	－	壺	－	－	－	弥・後	
土器棺墓11	楕円形	107	85	41	壺	鉢	東北東	斜位	弥・後・Ⅱ	
土器棺墓12	－	－	－	－	甕	鉢	－	－	弥・後・Ⅲ～Ⅳ	

火葬墓

遺構名	掘り方				蔵骨器	蓋	副葬品	時期	備　考
	平面形	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)					
火葬墓1	楕円形	46	41	18	甕	－	延喜通寶等銅銭12枚～　鋤先	平安	骨片
火葬墓2	楕円形	51	50	23	甕	石	延喜通寶等銅銭13枚～　鋤先	平安	

土器観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
1	—	縄文土器	深鉢	22.4	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	刻目
2	—	縄文土器	深鉢	—	—	—	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂、粗砂	
3	竪穴住居1	弥生土器	甕	31.6			明赤褐色(5YR5/6)	細砂	外面ハケ
4	竪穴住居1	土師器	甕				鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	化粧土混入か？
5	竪穴住居1	弥生土器	甕	(14.5)			橙色(5YR7/6)	細砂	外面ハケ
6	竪穴住居2	弥生土器	壺	—	—	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	櫛描文(波状文、格子文)
7	竪穴住居2	弥生土器	甕	14.8	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	内面ハケ後ミガキ
8	竪穴住居2	弥生土器	高杯	—	—	—	赤色(10R5/8)	細砂	突帯2条
9	竪穴住居4	弥生土器	壺	—	7.2	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	粗砂	
10	竪穴住居4	弥生土器	高杯	19.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
11	竪穴住居4	弥生土器	高杯	—	4.2	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
12	竪穴住居5	弥生土器	壺	—	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	沈線、波状文
13	竪穴住居5	弥生土器	甕	—	4.8	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
14	竪穴住居5	弥生土器	甕	—	6.0	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
15	竪穴住居5	弥生土器	高杯	26.4	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	刻目
16	竪穴住居6	弥生土器	壺	13.6	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
17	竪穴住居6	弥生土器	壺	16.3	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂(ごく少)	
18	竪穴住居6	弥生土器	壺	16.4	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	刻目、凸帯指頭圧痕
19	竪穴住居6	弥生土器	壺	17.0	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	円形浮文、斜格子、凸帯
20	竪穴住居6	弥生土器	壺	15.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	円形浮文、斜格子　黒斑A
21	竪穴住居6	弥生土器	壺	18.6	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	刻目、円形浮文
22	竪穴住居6	弥生土器	壺	(18.4)	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	穿孔2ヶ残存、円形浮文　ススA
23	竪穴住居6	弥生土器	壺	—	—	—	鈍い褐色(7.5YR7/3)	細砂	円形浮文、斜格子　黒斑B
24	竪穴住居6	弥生土器	甕	12.7	6.4	20.9	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	貝殻腹縁文2段　ススB
25	竪穴住居6	弥生土器	甕	13.2	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
26	竪穴住居6	弥生土器	甕	15.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	ススC'
27	竪穴住居6	弥生土器	甕	19.4	7.7	17.9	橙色(5YR6/6)	細砂	ススB　ほぼ完形
28	竪穴住居6	弥生土器	甕	17.7	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	刺突文
29	竪穴住居6	弥生土器	甕	(19.0)	—	—	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	
30	竪穴住居6	弥生土器	甕	30.3	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
31	竪穴住居6	弥生土器	甕	26.0	—	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	刻目
32	竪穴住居6	弥生土器	甕	(25.0)	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
33	竪穴住居6	弥生土器	甕	35.3	—	—	鈍い赤褐色(5YR4/3)	細砂	黒斑B
34	竪穴住居6	弥生土器	壺	—	9.3	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂、粗砂	内面ハケメ後ナデ
35	竪穴住居6	弥生土器	壺	—	8.8	—	鈍い橙色(5YR6/6)	細砂	内面ナデ　黒斑C
36	竪穴住居6	弥生土器	甕	—	5.4	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	内面(工具)ナデ
37	竪穴住居6	弥生土器	甕	—	7.4	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	内面(工具)ナデ
38	竪穴住居6	弥生土器	甕	—	7.6	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	内面ナデ　黒斑C
39	竪穴住居6	弥生土器	甕	—	8.0	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	黒斑C
40	竪穴住居6	弥生土器	高杯	19.6	—	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	刻目
41	竪穴住居6	弥生土器	高杯	19.8	—	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	刻目、穿孔1つ　黒斑A
42	竪穴住居6	弥生土器	高杯	10.4	6.6	9.8	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	上12ヶ・下9ヶ　黒斑A
43	竪穴住居6	弥生土器	高杯？	—	12.0	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	透し孔3ヶ残存　黒斑C
44	竪穴住居6	弥生土器	台付鉢	—	6.8	—	鈍い橙色(2.5YR6/4)	細砂	
45	竪穴住居6	弥生土器	台付壺	—	4.5	—	鈍い橙色(2.5YR6/4)	細砂	黒斑C
46	竪穴住居6	弥生土器	ジョッキ形	—	5.4	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	穿孔2個　黒斑C
47	竪穴住居7	弥生土器	壺	—	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	斜格子、粘土紐貼付
48	竪穴住居7	弥生土器	甕	18.9	—	—	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	刺突文　ススB
49	竪穴住居8	弥生土器	壺	16.2	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	刺突文
50	竪穴住居8	弥生土器	壺	—	—	—	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	粘土紐貼付、沈線、波状文
51	竪穴住居8	弥生土器	甕	15.6	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
52	竪穴住居9	弥生土器	甕	—	5.8	—	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	
53	竪穴住居9	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	ヘラミガキ
54	竪穴住居10	弥生土器	壺	—	7.0	—	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	
55	竪穴住居11	弥生土器	壺	(12.5)	—	—	褐灰色(5YR4/1)	細砂	透し孔あり、数不明
56	竪穴住居11	弥生土器	甕	16.2	—	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	
57	竪穴住居11	弥生土器	甕	19.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	刺突文
58	竪穴住居11	弥生土器	甕	20.6	—	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂	内面工具ナデ　ススA
59	竪穴住居11	弥生土器	甕	(19.4)	—	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂	刺突文　ススA
60	竪穴住居11	弥生土器	甕	—	5.4	—	淡橙色(5YR8/4)	細砂、粗砂	
61	竪穴住居11	弥生土器	甕	—	14.8	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂	ヘラミガキ、6分割　ススC
62	竪穴住居11	弥生土器	高杯	(24.6)	—	—	鈍い橙色(2.5YR6/4)	細砂	
63	竪穴住居12	弥生土器	壺	11.0	—	(15.0)	黄橙色(10YR8/8)	細砂	上半ハケ、下半ミガキ　黒斑B
64	竪穴住居12	弥生土器	壺	(24.0)	—	(6.8)	黄灰色(2.5Y4/1)	細砂	刻目、指頭圧痕
65	竪穴住居12	弥生土器	壺	(21.4)	—	(2.0)	赤褐色(2.5YR4/6)	粗砂	刻目
66	竪穴住居12	弥生土器	壺	14.6		(3.9)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	刻目
67	竪穴住居12	弥生土器	壺	—	(8.0)	(19.7)	黄橙色(10YR7/8)	粗砂、礫	内面ヘラケズリ　黒斑B
68	竪穴住居12	弥生土器	甕	(13.0)	—	(8.8)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	内外面ハケメ
69	竪穴住居12	弥生土器	甕	(29.0)	—	(8.5)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	刻目、指頭圧痕
70	竪穴住居12	弥生土器	甕	14.7	—	(16.0)	黄橙色(7.5YR8/8)	粗砂、礫	
71	竪穴住居12	弥生土器	甕	—	2.5	(7.5)	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	
72	竪穴住居12	弥生土器	甕	—	5.7	(5.0)	鈍い橙色(5YR6/3)	粗砂	
73	竪穴住居12	弥生土器	高杯	(18.8)	—	—	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	紐孔2孔一対

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
74	竪穴住居12	弥生土器	蓋	7.6	—	2.7	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	紐孔２孔一対　完形
75	竪穴住居12	弥生土器	蓋	11.7～12.0	—	1.6	黒褐色(7.5YR3/1)	粗砂	
76	掘立柱建物１	弥生土器	壺	—	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	刻目
77	袋状土壙１	弥生土器	甕	(16.2)	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
78	袋状土壙４	弥生土器	甕	11.7	—	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	凸帯、指頭圧痕、列点文
79	袋状土壙４	弥生土器	甕	14.8	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
80	袋状土壙４	弥生土器	甕	17.6	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/3)	細砂	
81	袋状土壙４	弥生土器	甕	29.0	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂	貝殻腹縁文
82	袋状土壙４	弥生土器	甕	—	7.0	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂	焼成後穿孔　黒斑Ｃ
83	袋状土壙４	弥生土器	甕	—	5.9	—	明赤褐色(5YR5/4)	細砂	黒斑ＢＣ・Ｃ
84	袋状土壙４	弥生土器	甕	—	5.4	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
85	袋状土壙４	弥生土器	高杯	20.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	刻目　黒斑Ｂ
86	袋状土壙４	弥生土器	台付鉢	14.7	10.7	14.4	橙色(2.5YR7/6)	細砂	穿孔２ヶ所、透し穴４
87	袋状土壙４	弥生土器	鉢	19.2	7.2	13.2	淡赤橙色(2.5YR7/3)	細砂	貝殻腹縁文　ススＡ
88	袋状土壙４	弥生土器	蓋	17.5	8.3	8.3	淡橙色(5YR8/4)	細砂	刻目
89	袋状土壙５	弥生土器	高杯	21.5	12.3	21.8	灰白色(10YR8/2)	細砂	透し孔20ヶ　黒斑Ｂ・Ｃ　ほぼ完形
90	袋状土壙６	弥生土器	壺	11.2	—	—	灰白色(10YR7/1)	細砂	斜格子
91	袋状土壙６	弥生土器	甕	—	6.4	—	鈍い赤褐色(2.5YR5/4)	細砂	外面ヘラミガキ
92	袋状土壙７	弥生土器	甕	(19.0)	—	—	灰褐色(7.5YR4/2)	細砂	
93	袋状土壙８	弥生土器	壺	15.0	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	刻目３段
94	袋状土壙８	弥生土器	甕	12.1	—	—	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂、粗砂	
95	袋状土壙８	弥生土器	甕	12.8	—	—	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	黒斑Ｂ
96	袋状土壙８	弥生土器	甕	17.4	—	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂	刻目
97	袋状土壙８	弥生土器	甕	28.1	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
98	袋状土壙８	弥生土器	甕	—	8.2	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂	
99	袋状土壙８	弥生土器	壺	—	10.6	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	ススＣ
100	袋状土壙８	弥生土器	甕	—	11.8	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
101	袋状土壙８	弥生土器	高杯	(18.6)	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	刻目、穿孔２ヶ
102	袋状土壙８	弥生土器	高杯	16.4	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	穿孔２ヶ所　黒斑Ａ
103	袋状土壙８	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍い黄橙色(10YR6/4)	細砂	中央陥没
104	袋状土壙８	弥生土器	鉢	11.3	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	穿孔２ヶ、列点文２段　黒斑ＡＢ
105	袋状土壙９	弥生土器	壺	17.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	棒状浮文
106	袋状土壙９	弥生土器	甕	—	—	—	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂	内外面ハケメ後ヘラミガキ
107	袋状土壙９	弥生土器	甕	—	7.6	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	
108	袋状土壙９	弥生土器	高杯	—	11.4	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	
109	袋状土壙９	弥生土器	高杯	—	12.2	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	沈線４条、透し孔あり
110	袋状土壙９	弥生土器	高杯	—	12.4	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	透し孔あり　黒斑Ｃ
111	袋状土壙９	弥生土器	台付鉢	—	8.6	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	ススＣ
112	袋状土壙10	弥生土器	壺	16.7	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	凸帯、刻目
113	袋状土壙10	弥生土器	壺	15.6	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	刻目、凸帯
114	袋状土壙10	弥生土器	壺	18.6	—	—	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂、粗砂、礫	円形浮文、凸帯
115	袋状土壙10	弥生土器	壺	19.6	—	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	斜格子、円形浮文
116	袋状土壙10	弥生土器	壺	14.8	—	—	灰褐色(5YR5/2)	細砂	
117	袋状土壙10	弥生土器	壺	—	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	凸帯
118	袋状土壙10	弥生土器	壺	—	—	—	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂、粗砂、礫	凸帯
119	袋状土壙10	弥生土器	甕	12.9	—	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	刺突文
120	袋状土壙10	弥生土器	甕	18.0	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	
121	袋状土壙10	弥生土器	甕	17.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR5/4)	細砂	円形浮文、指頭圧痕　黒斑ＡＢ
122	袋状土壙10	弥生土器	甕	17.1	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂、礫	刻目
123	袋状土壙10	弥生土器	甕	15.9	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	刺突文　黒斑Ａ・Ｂ
124	袋状土壙10	弥生土器	甕	37.0	—	—	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	刻目、列点文　黒斑Ｂ
125	袋状土壙10	弥生土器	甕	14.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
126	袋状土壙10	弥生土器	甕	14.6	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
127	袋状土壙10	弥生土器	甕	15.8	—	—	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	
128	袋状土壙10	弥生土器	甕	16.1	—	—	明赤褐色(5YR5/8)	細砂	
129	袋状土壙10	弥生土器	甕	15.6	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
130	袋状土壙10	弥生土器	甕	18.8	—	—	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	
131	袋状土壙10	弥生土器	甕	22.0	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
132	袋状土壙10	弥生土器	甕	18.0	—	—	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂、粗砂	
133	袋状土壙10	弥生土器	甕	—	5.6	—	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	穿孔
134	袋状土壙10	弥生土器	甕	—	5.6	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
135	袋状土壙10	弥生土器	甕	—	5.7	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	
136	袋状土壙10	弥生土器	甕	—	5.2	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
137	袋状土壙10	弥生土器	甕	—	8.6	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	ススＣ
138	袋状土壙10	弥生土器	甕	—	8.0	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂、礫	
139	袋状土壙10	弥生土器	甕	—	9.5	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	黒斑Ｃ
140	袋状土壙10	弥生土器	高杯	23.0	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	
141	袋状土壙10	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	沈線
142	袋状土壙10	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂、礫	透し孔２ヶ残存
143	袋状土壙10	弥生土器	高杯	—	10.9	—	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	黒斑Ｃ
144	袋状土壙10	弥生土器	鉢	12.2	5.0	5.9	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂、粗砂、礫	
145	袋状土壙10	弥生土器	台付鉢	—	3.7	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂、礫	透し孔４ヶ
146	袋状土壙11	弥生土器	壺	—	8.2	—	橙色(5YR7/6)	細砂	円形浮文４ヶ　黒斑Ｃ
147	袋状土壙11	弥生土器	甕	17.3	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
148	袋状土壙12	弥生土器	甕	17.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	ススA
149	袋状土壙12	弥生土器	甕	(23.6)	—	—	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	
150	袋状土壙12	弥生土器	甕	(24.4)	—	—	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	
151	袋状土壙12	弥生土器	鉢	—	7.6	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
152	袋状土壙12	弥生土器	壺	—	5.8	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	刺突文　ススC
153	袋状土壙12	弥生土器	鉢	24.4	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
154	袋状土壙13	弥生土器	壺	(17.0)	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	刻目
155	袋状土壙13	弥生土器	壺	16.0	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂	刺突文
156	袋状土壙13	弥生土器	甕	18.4	—	—	橙色(5YR7/8)	粗砂、礫	
157	袋状土壙13	弥生土器	甕	13.8	5.6	20.4	灰白色(5YR8/2)	細砂、礫	
158	袋状土壙13	弥生土器	甕	17.2	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
159	袋状土壙13	弥生土器	甕	(17.6)	—	—	暗赤灰色(2.5YR3/1)	精良	
160	袋状土壙13	弥生土器	甕	21.0	—	—	灰色(N6/)	細砂	
161	袋状土壙13	弥生土器	甕	(18.0)	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	精良	
162	袋状土壙13	弥生土器	甕	(24.0)	—	—	黒褐色(7.5YR3/1)	精良	
163	袋状土壙13	弥生土器	甕	—	5.4	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
164	袋状土壙13	弥生土器	甕	—	7.2	—	鈍い赤褐色(2.5YR5/4)	細砂	少し上げ底
165	袋状土壙13	弥生土器	壺	—	8.8	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂、礫	
166	袋状土壙13	弥生土器	高杯	—	12.4	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	透し孔２ヶ所残存
167	袋状土壙14	弥生土器	高杯	(15.5)	—	—	赤色(10R5/8)	細砂	
168	袋状土壙16	弥生土器	壺	—	6.8	—	灰白色(10YR8/2)	細砂	黒斑ＢＣ　ほぼ完形
169	袋状土壙16	弥生土器	高杯	24.5	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
170	袋状土壙16	弥生土器	高杯	—	13.8	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂(ごく少)	穿孔４ヶ残存
171	袋状土壙16	弥生土器	高杯	—	15.2	—	灰白色(10YR8/2)	細砂	透し孔未貫通９ヶ　黒斑ＢＣ・Ｃ
172	袋状土壙17	弥生土器	甕	—	—	—	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	刻目
173	袋状土壙17	弥生土器	甕	—	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂	
174	袋状土壙17	弥生土器	甕	14.4	—	—	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	
175	袋状土壙17	弥生土器	甕	16.0	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
176	袋状土壙17	弥生土器	甕	(14.6)	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	ススA
177	袋状土壙17	弥生土器	甕	(15.3)	5.8	29.0	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	刺突文、外面ス付着　ススA
178	袋状土壙17	弥生土器	甕	18.2	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
179	袋状土壙17	弥生土器	甕	(18.4)	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
180	袋状土壙17	弥生土器	甕	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	ススB
181	袋状土壙17	弥生土器	甕	—	5.9	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
182	袋状土壙17	弥生土器	甕	—	5.3	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
183	袋状土壙17	弥生土器	甕	—	5.0	—	橙色(5YR6/6)	細砂	焼成後穿孔
184	袋状土壙17	弥生土器	甕	—	8.8	—	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	黒斑C
185	袋状土壙17	弥生土器	甕	(34.0)	—	—	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	ススB
186	袋状土壙17	弥生土器	甕	(34.8)	—	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂	
187	袋状土壙17	弥生土器	甕	—	9.4	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	黒斑C
188	袋状土壙17	弥生土器	高杯	19.5	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	透し孔２個１対　黒斑ＡＢ
189	袋状土壙17	弥生土器	高杯	—	11.0	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	透し孔上４・下６
190	袋状土壙17	弥生土器	蓋	18.2	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
191	袋状土壙19	弥生土器	壺	(24.8)	—	—	橙色(5YR6/4)	細砂	凸帯指頭圧痕　黒斑A
192	袋状土壙19	弥生土器	壺	11.2	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	波状文　黒斑A
193	袋状土壙19	弥生土器	壺	—	—	—	褐灰色(5YR4/1)	細砂	波状文、沈線
194	袋状土壙19	弥生土器	甕	(19.0)	—	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂	
195	袋状土壙19	弥生土器	甕	—	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
196	袋状土壙19	弥生土器	甕？	—	4.4	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
197	袋状土壙19	弥生土器	甕？	—	8.2	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂、礫	
198	袋状土壙19	弥生土器	甕？	—	9.2	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	
199	袋状土壙19	弥生土器	蓋	—	—	—	橙色(5YR6/8)	粗砂、礫	
200	土壙１	弥生土器	甕	(22.0)	—	(17.4)	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	刺突文　ススB
201	土壙２	弥生土器	甕	(14.2)			灰色(4N/)	精良	
202	土壙２	弥生土器	甕	(17.8)			橙色(2.5YR6/6)	細砂	
203	土壙２	弥生土器	高杯		8.1		灰褐色(5YR5/2)	細砂	刻目突帯１条、透かし孔16
204	土壙３	弥生土器	壺	20.2			明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	刻目、内面波状文突帯
205	土壙３	弥生土器	壺		9.0		橙色(5YR6/8)	粗砂	
206	土壙５	弥生土器	壺	15.6			橙色(5YR6/8)	細砂	内外面ハケ
207	土壙５	弥生土器	壺		4.9		鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	
208	土壙５	弥生土器	甕	13.0			明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	内面一部ミガキ　ススB'
209	土壙５	弥生土器	甕		5.5		鈍い赤褐色(2.5YR5/4)	細砂	穿孔　ススA
210	土壙５	弥生土器	高杯	19.8			鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	穿孔２孔一対
211	土壙５	弥生土器	高杯	21.8			橙色(5YR6/6)	細砂	円形浮文、穿孔２孔一対　黒斑A
212	土壙６	弥生土器	壺				橙色(2.5YR6/6)	粗砂	刻目
213	土壙７	弥生土器	甕	(13.9)			鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	
214	土壙８	弥生土器	甕	(18.2)			赤橙色(10YR6/8)	細砂	
215	土壙９	弥生土器	甕	(12.0)			灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	刻目、刺突文
216	土壙９	弥生土器	甕	(12.0)			鈍い赤褐色(2.5YR5/4)	細砂	ススB
217	土壙11	弥生土器	甕	(19.6)			鈍い橙色(5YR6/4)	精良	
218	土壙11	弥生土器	高杯	(25.4)			鈍い橙色(7.5YR7/3)	精良	内外面ミガキ
219	土壙12	弥生土器	壺	17.6	—	—	灰褐色(5YR6/2)	細砂	ススB　焼成不良
220	土壙13	弥生土器	壺	11.1	—	—	赤色(10R5/8)	細砂	円形浮文、格子文　黒斑A
221	土壙13	弥生土器	壺	15.1	—	—	赤色(10R5/8)	細砂	刻目、刻目突帯２条
222	土壙13	弥生土器	甕	(15.4)	—	—	赤色(10R4/8)	細砂	

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	色調	胎土	特徴
223	土壙14	弥生土器	甕	17.0	—	—	赤橙色(10R6/8)	細砂	
224	土壙14	弥生土器	甕	(34.8)	—	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂	内外面ミガキ　ススB'
225	土壙14	弥生土器	高杯	—	11.1	—	橙色(5YR6/8)	細砂	突帯剥離
226	土壙15	弥生土器	壺	10.4	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	円形浮文、格子文、穿孔
227	土壙15	弥生土器	甕	(15.8)	5.6	24.8	赤橙色(10YR6/8)	細砂	ススB
228	土壙15	弥生土器	台付鉢	—	10.1	—	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	指頭圧痕突帯　黒斑B
229	土壙15	弥生土器	ミニチュア壺	4.2	5.0	8.6	明赤褐色(5YR5/8)	細砂	完形
230	土壙15	弥生土器	壺	4.4	—	—	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	ススB
231	土壙16	弥生土器	鉢	16.8	—	—	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	穿孔2個一対　黒斑B'
232	土壙16	弥生土器	甕	16.2	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	内面ハケ後ミガキ
233	土壙17	弥生土器	壺	(28.7)	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	刻目、斜格子文
234	土壙17	弥生土器	壺	(19.2)	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	刻目4条、斜格子あり
235	土壙17	弥生土器	壺	17.4	—	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂、粗砂	刻目3条
236	土壙17	弥生土器	壺	16.8	—	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂	円形浮文　黒斑A・B
237	土壙17	弥生土器？	壺？	(8.9)	5.7	(16.4)	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	黒斑ABC
238	土壙17	弥生土器	壺	—	—	—	灰黄色(2.5YR7/2)	細砂	
239	土壙17	弥生土器	甕	—	9.4	—	灰黄色(2.5YR7/2)	細砂	
240	土壙17	弥生土器	壺	—	6.9	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	黒斑BC
241	土壙17	弥生土器	壺	—	7.0	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	粗砂、礫	黒斑B
242	土壙17	弥生土器	壺	20.0	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	斜格子文　黒斑C
243	土壙17	弥生土器	壺	—	14.2	—	赤褐色(2.5YR4/6)	細砂	黒斑BC？
244	土壙17	弥生土器	壺	—	9.9	—	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	
245	土壙17	弥生土器	甕	(11.1)	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
246	土壙17	弥生土器	甕	17.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
247	土壙17	弥生土器	甕	26.0	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	貝殻腹縁文
248	土壙17	弥生土器	甕の蓋	19.0	5.4	7.2	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	
249	土壙18	弥生土器	壺？	—	—	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂、粗砂	円形浮文2列、斜格子文
250	土壙18	弥生土器	壺？	—	9.8	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂、粗砂	黒斑C
251	土壙18	弥生土器	甕	(17.9)	—	—	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	
252	土壙19	弥生土器	壺	(18.2)	—	—	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	刻目、波状文
253	土壙19	弥生土器？	甕	13.1	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	ススB'
254	土壙19	弥生土器	甕	18.7	6.1	29.5	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	刺突文3列～2列
255	土壙19	弥生土器	壺	—	8.6	—	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	黒斑C
256	土壙19	弥生土器	甕	—	5.5	—	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	
257	土壙19	弥生土器	甕	(24.9)	—	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	
258	土壙19	弥生土器	高杯	(20.8)	—	—	明赤褐色(5YR5/6)	精良	穿孔2個残存
259	土壙19	弥生土器	高杯	—	12.4	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	穿孔2個一対2組
260	土壙19	弥生土器	高杯	—	12.7	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	斜格子、透し孔4　黒斑C
261	土壙20	弥生土器	壺	18.4	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	刻目
262	土壙20	弥生土器	甕	17.9	—	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	
263	土壙20	弥生土器	甑	—	6.0	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	穿孔1個
264	土壙20	弥生土器	高杯	19.6	11.1	13.8	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	黒斑A・C
265	土壙20	弥生土器	甕	—	5.9	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
266	土壙20	手捏土器		3.9	2.0	4.6	褐灰色(5YR5/1)	細砂	完形
267	土壙21	弥生土器	甕	13.1	—	—	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	貝殻腹縁文
268	土壙21	弥生土器	甕	(16.8)	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	黒斑B'
269	土壙21	弥生土器		—	5.4	—	鈍い褐色(7.5YR5/4)	細砂	
270	土壙22	弥生土器	壺	18.5			橙色(5YR6/8)	粗砂	刻目、指頭圧痕
271	土壙22	弥生土器	壺	17.4			浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂、粗砂	刻目、刺突文
272	土壙22	弥生土器	甕	13.0			橙色(7.5YR6/6)	粗砂	刺突文
273	土壙22	弥生土器	甕	16.0			橙色(5YR6/6)	細砂	ススB'
274	土壙22	弥生土器	甕	17.8	5.8	30.0	鈍い褐色(7.5YR5/3)	粗砂	穿孔　ススB　完形
275	土壙22	弥生土器	脚部	16.4			鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂	透し孔5　黒斑C
276	土壙25	弥生土器	甕	(17.0)			橙色(7.5YR6/6)	粗砂	
277	土壙25	弥生土器	脚部	(21.8)			鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	方形透し孔6？、円形透し孔28？
278	土壙25	弥生土器	蓋	8.7		3.2	鈍い褐色(7.5YR5/4)	粗砂	つまみ
279	土壙27	弥生土器	甕	16.2			鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	刺突文
280	土壙30	弥生土器	壺	17.0			橙色(7.5YR6/6)	粗砂	櫛描沈線
281	土壙30	弥生土器	壺	15.2			鈍い黄橙色(10YR6/4)	細砂	刻目、指頭圧痕
282	土壙30	弥生土器	甕	12.4			鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	刺突文　ススB'
283	土壙30	弥生土器	甕	(17.1)			橙色(5YR6/6)	細砂	刺突文
284	土壙32	弥生土器	壺	17.2			鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	円形浮文6個一単位
285	土壙32	弥生土器	甕	15.8			灰褐色(5YR5/2)	細砂	
286	土壙32	弥生土器	甕	24.4			浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
287	土壙32	弥生土器	台付鉢		10.3		鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	突帯1条、透し孔8
288	土壙33	弥生土器	壺	18.2	—	—	赤色(10R5/8)	細砂	刻目、指頭圧痕
289	土壙33	弥生土器	壺	15.9	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂	上面斜格子文
290	土壙33	弥生土器	壺	17.0	—	—	赤色(7.5R4/6)	細砂	刻目、刻目突帯2条
291	土壙33	弥生土器	壺	17.4	—	—	赤褐色(10R5/4)	細砂	刻目、円形浮文3個×5
292	土壙33	弥生土器	甕	(13.1)	5.2	22.4	赤褐色(2.5YR4/6)	粗砂	ススB
293	土壙33	弥生土器	高杯	—	12.7	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂	突帯4条、三角透し孔4
294	土壙33	弥生土器	高杯	16.2	—	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	黒斑B
295	土壙35	弥生土器	甕	17.6	—	—	赤灰色(2.5YR5/1)	粗砂	刻目、刺突文
296	土壙35	弥生土器	甕	(15.6)	6.0	(28.0)	赤色(10R4/8)	細砂	刺突文　黒斑B
297	土壙35	弥生土器	甕	28.8	—	—	赤色(10R5/8)	細砂	刺突文　黒斑B

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
298	土壙35	弥生土器	鉢	35.8	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	刻目突帯３条、棒状浮文
299	土壙37	弥生土器	壺	16.0			明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	内面波状文４条、指頭圧痕突帯
300	土壙38	弥生土器	甕	17.8			明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	内外面ハケ
301	土壙38	弥生土器	高杯	(15.6)			鈍い褐色(7.5YR5/4)	粗砂	穿孔２孔一対×２？
302	土壙38	弥生土器	甕		4.8		鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
303	土壙38	弥生土器	高杯	22.4			灰褐色(5YR5/2)	細砂	刻目、穿孔一ヶ所残　黒斑Ａ
304	土壙39	弥生土器	高杯	29.3			橙色(5YR6/6)	細砂	突帯２条
305	土壙41	弥生土器	甕	34.7			明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	貝殻腹縁文２列
306	土壙43	弥生土器	壺	15.5	—	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	指頭圧痕
307	土壙43	弥生土器	壺	21.0	—	—	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	刻目突帯２条
308	土壙44	弥生土器	壺	—	9.6	—	赤色(10R5/6)	細砂	外面横方向のミガキ
309	土壙44	弥生土器	甕	17.8	—	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	粗砂	粗いヘラミガキ
310	土壙44	弥生土器	高杯	18.0	—	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	粗砂	穿孔２
311	土壙47	弥生土器	壺	34.6	13.3	57.3	橙色(5YR6/8)	細砂	内面ケズリ　黒斑Ｂ　完形
312	土壙48	弥生土器	壺	13.9	—	—	黄灰色(2.5Y5/1)	細砂	斜格子文、刻目突帯２条
313	土壙51	弥生土器	壺	(5.8)	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	波状文、透し孔１残存
314	土壙51	弥生土器	壺	18.4	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	刻目
315	土壙51	弥生土器	甕	19.8	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	外面ハケ
316	土壙54	弥生土器	壺	15.1	9.0	29.8	橙色(5YR6/6)	細砂	円形浮文４個×８　黒斑Ｂ
317	土壙54	弥生土器	甕	15.5	—	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	内面下半ケズリ
318	土壙54	弥生土器	甕	14.4	—	—	赤色(10R5/6)	細砂	刺突文、内面ミガキ
319	土壙54	弥生土器	高杯	—	10.0	—	鈍い赤褐色(2.5YR4/4)	細砂	透し孔12　黒斑Ｃ
320	土壙54	弥生土器	高杯	—	11.0	—	赤色(10R5/6)	粗砂	
321	土壙56	弥生土器	甕	—	5.6	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	穿孔　黒斑Ｃ
322	土壙56	弥生土器	壺	—	10.0	—	鈍い褐色(7.5YR5/3)	粗砂、礫	
323	土壙57	弥生土器	壺	19.2	—	—	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	内部斜格子文、押圧文帯
324	土壙57	弥生土器	壺	20.0	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	押圧文帯
325	土壙57	弥生土器	壺	—	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	押圧文帯、貝殻腹縁文
326	土壙57	弥生土器	甕	(15.8)	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	
327	土壙57	弥生土器	甕	(16.4)	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	黒斑Ｂ
328	土壙57	弥生土器	甕	25.5	—	—	赤色(10R5/6)	細砂	刻目
329	土壙58	弥生土器	甕	15.2	—	(6.0)	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	
330	土壙58	弥生土器	壺	—	9.1	(11.0)	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	
331	土壙58	弥生土器	高杯	(15.0)	—	(7.2)	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	刻目　黒斑Ａ～Ｂ
332	土壙58	弥生土器	蓋	11.6	—	(1.6)	鈍い赤褐色(5YR4/3)	粗砂	穿孔２×２
333	土壙59	弥生土器	壺	—	7.0	(11.2)	鈍い赤褐色(5YR4/3)	粗砂	ススＢ
334	土壙59	弥生土器	高杯	—	10.4	(11.0)	橙色(5YR6/8)	細砂	沈線、透し孔８ヶ　黒斑Ｃ
335	土壙60	弥生土器	長頸壺	5.0	8.1	20.2	橙色(5YR6/6)	細砂	黒斑Ｂ～Ｃ　完形
336	土壙61	弥生土器	壺	13.6	—	(11.8)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	刻目
337	土壙61	弥生土器	甕	16.0	—	(6.0)	橙色(5YR6/6)	細砂	ススＡ
338	土壙61	弥生土器	壺	—	(26.1)	11.0	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	円形浮文、格子文
339	土壙62・63	弥生土器	壺	17.2			橙色(2.5YR6/6)	細砂	刻目　ススＢ
340	土壙62・63	弥生土器	壺	13.2			鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	刻目、刺突文
341	土壙62・63	弥生土器	甕	14.6	4.7	21.6	灰褐色(5YR5/2)	細砂	刺突文　ススＢ
342	土壙62・63	弥生土器	鉢	23.0			鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	刻目突帯２条、刺突文２列
343	土壙64	弥生土器	甕	12.6	—	—	褐灰色(10YR4/1)	細砂	
344	土壙64	弥生土器	甕	(16.5)	—	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	
345	土壙64	弥生土器	甕	(24.2)	—	—	褐灰色(10YR5/1)	細砂、粗砂	
346	土壙64	弥生土器	甕	24.1	—	—	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂、粗砂	刻目、刺突文　黒斑ＢＣ
347	土壙64	弥生土器	甕	—	6.2	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	
348	土壙64	弥生土器	甕	—	7.4	—	灰褐色(5YR6/2)	細砂、粗砂	
349	土壙65	弥生土器	甕	17.9	—	—	褐灰色(10YR4/1)	細砂	
350	土壙65	弥生土器	高杯	21.1	—	—	鈍い黄橙色(10YR5/3)～鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	刻目
351	土壙69	弥生土器	壺	14.4	—	—	灰褐色(7.5YR4/2)	細砂	棒状浮文２個１組、波状文
352	土壙69	弥生土器	甕	(14.6)	—	—	褐灰色(7.5YR4/1)	細砂	刻目２列
353	土壙70	弥生土器	甕	20.0	8.4	20.0	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	刻目一部残存
354	土壙70	弥生土器	甕	(17.0)	5.0	28.1	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂(礫含む)	穿孔
355	土壙72・73	弥生土器	甕	17.0	5.1	26.0	橙色(2.5YR6/6)	細砂、礫	ススス
356	土壙72・73	弥生土器	甕	18.8	—	—	褐灰色(7.5YR5/1)	細砂	少し歪んでいる
357	土壙72・73	弥生土器	甕？	—	7.8		鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、礫	列点文、焼成後穿孔
358	土壙74	弥生土器	壺	14.6	—	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	黒斑Ａ
359	土壙74	弥生土器	甕	(14.2)	6.2	25.1	橙色(2.5YR6/6)	細砂	黒斑Ｂ
360	土壙74	弥生土器	甕	15.3	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	黒斑ＡＢＣ
361	土壙74	弥生土器	甕	(19.4)	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
362	土壙75	弥生土器	甕	16.4	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	
363	土壙75	弥生土器	甕	21.4	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	
364	土壙75	弥生土器	甕	21.2	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂	刺突列点文
365	土壙75	弥生土器	甕	—	6.0	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	焼成後穿孔
366	土壙75	弥生土器	甕	37.0	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	刺突列点文
367	土壙76	弥生土器	甕	25.0	9.6	29.7	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	ほぼ完形
368	土壙76	弥生土器	甕	13.1	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	うすい刺突文
369	土壙76	弥生土器	甕	13.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
370	土壙76	弥生土器	甕	21.4	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
371	土壙76	弥生土器	甕	—	8.2	—	褐灰色(5YR5/1)	細砂、粗砂	
372	土壙76	弥生土器	甕	—	5.2	—	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂	
373	土壙76	弥生土器	甕	—	5.6	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	黒斑B
374	土壙78	弥生土器	壺	15.7	—	—	鈍い黄橙色	細砂	貼付指頭圧痕突帯
375	土壙79	弥生土器	甕	(13.3)	—	—	灰白色(10YR8/1)	細砂	棒状浮文3本1組？確認
376	土壙79	弥生土器	甕	14.4	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	
377	土壙82	弥生土器	壺	14.0	—	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	刻目
378	土壙82	弥生土器	壺	15.0	—	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂、礫	刻目
379	土壙82	弥生土器	甕	17.0	—	—	鈍い赤褐色(2.5YR5/4)	細砂	刻目、貼付突帯文
380	土壙82	弥生土器	甕	11.0	—	—	黒褐色(7.5YR3/1)	細砂	
381	土壙82	弥生土器	甕	—	5.0	—	灰赤色(10R4/2)	細砂	ススA
382	土壙85	弥生土器	甕	22.3	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	透し孔3個　ススB
383	土壙86	弥生土器	高杯	(23.9)	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	刻目2列
384	土壙87	弥生土器	壺	14.5	—	—	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	円形浮文2個残存
385	土壙87	弥生土器		—	5.8	—	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	
386	土壙88	弥生土器	壺	14.6	9.0	31.1	鈍い褐色(7.5YR6/3)～鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	刻目、刺突文
387	土壙88	弥生土器	甕？	16.7	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、粗砂	刻目
388	土壙88	弥生土器	壺？	15.8	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	
389	土壙88	弥生土器	甕	24.0	9.2	29.0	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	刻目、刺突文　ススB
390	土壙88	弥生土器	甕	15.6	5.9	26.9	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	刺突文(全周していない)
391	土壙88	弥生土器		—	8.6	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	
392	土壙88	弥生土器	壺	—	6.4	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
393	土壙88	弥生土器	壺？	—	9.0	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂	
394	土壙88	弥生土器	甕	17.3	6.3	26.1	褐灰色(10YR5/1)	細砂	
395	土壙88	弥生土器	甕？	(16.3)	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	
396	土壙88	弥生土器	甕	15.1	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
397	土壙88	弥生土器	甕	17.2	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	
398	土壙88	弥生土器	甕	17.0	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
399	土壙88	弥生土器	甕	20.5	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
400	土壙88	弥生土器	甕	16.1	—	—	灰色(5Y5/1)～灰色(5Y4/1)	細砂	
401	土壙88	弥生土器	甕	—	7.0	—	褐灰色(10YR4/1)	細砂	刺突文
402	土壙88	弥生土器	甕	32.0	10.0	48.8	橙色(2.5YR6/6)	細砂、粗砂	刺突文　黒斑A・C
403	土壙88	弥生土器	甕	—	7.9	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	
404	土壙88	弥生土器		—	6.7	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
405	土壙88	弥生土器	甕	—	8.0	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂、粗砂	
406	土壙88	弥生土器	高杯	23.2	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	黒斑A
407	土壙88	弥生土器	台付鉢	33.3	16.0	21.8	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	貼付指頭圧痕突帯　ススB？
408	土壙88	弥生土器	ジョッキ形	13.7	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂	刻目　ススB？
409	土壙88	弥生土器(手捏土器)	小型甕	9.3	3.9	12.6	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	ススB'
410	土壙89	弥生土器	壺	26.8	—	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂、粗砂	斜格子文、貼付指頭圧痕突帯
411	土壙89	弥生土器	壺	18.6	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	刻目
412	土壙89	土師器？	甕？	(33.2)	—	—	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	
413	土壙89	弥生土器	壺	(21.8)	—	—	橙色(5YR7/6)～鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂、粗砂	ススス
414	土壙89	弥生土器	甕	13.7	5.6	20.1	橙色(5YR7/6)～淡橙色(5YR8/4)	細砂	刺突文　ススB
415	土壙90	弥生土器	甕	(38.5)	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	列点文(4個単位の刺突文)
416	土壙93	弥生土器	甕	15.0	—	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	
417	土壙96	弥生土器	壺	13.0			鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	刻目、刻目突帯2条
418	土壙96	弥生土器	壺	18.8			鈍い橙色(5YR6/3)	粗砂	棒状浮文、波状文
419	土壙96	弥生土器	壺	19.6			鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	刻目突帯4条
420	土壙96	弥生土器	甕	12.6			褐灰色(7.5YR4/1)	細砂	外面ハケ、内面ミガキ
421	土壙96	弥生土器	甕	18.8			浅黄橙色(7.5YR8/6)	細砂	外面沈線？
422	土壙96	弥生土器	甕	(26.4)			褐灰色(5YR4/1)	細砂	内外面ハケ
423	土壙96	弥生土器	甕	15.9			灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	内外面ハケ
424	土壙96	弥生土器	甕	(18.2)			鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	内外面ハケ
425	土壙96	弥生土器	甕	17.4			橙色(2.5YR6/6)	細砂	内外面ハケ
426	土壙96	弥生土器	壺		9.7		橙色(2.5YR6/6)	粗砂、礫	表面磨滅
427	土壙96	弥生土器	壺		8.1		鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	
428	土壙96	弥生土器	甕		6.1		灰白色(7.5YR8/2)	細砂	刺突文2列、内面ミガキ
429	土壙97	弥生土器	壺				灰白色(10YR8/2)	細砂	櫛描文、波状文
430	土壙97	弥生土器	甕	19.8			鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
431	土壙99	弥生土器	甕				灰白色(10YR8/2)	細砂	
432	土壙100	弥生土器	甕	16.9			灰褐色(5YR5/2)	細砂	刺突文
433	土壙100	弥生土器	甕		4.9		灰褐色(5YR5/2)	細砂	外面ハケ
434	土壙101	弥生土器	壺	(25.2)	—	—	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂	刺突文、外面に斜格子
435	土壙101	弥生土器	台付鉢	—	(23.9)	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	透し孔3ヶ残存
436	土壙102	弥生土器	壺	12.1	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	刻目、凸帯　黒斑A
437	土壙102	弥生土器	壺	18.3	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	刻目、凸帯
438	土壙102	弥生土器	壺	17.2	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	内面にヘラ描き文　黒斑A
439	土壙102	弥生土器	壺	19.8	—	—	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	刻目、内面に斜格子
440	土壙102	弥生土器	壺	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	円形浮文、指頭圧痕
441	土壙102	弥生土器	壺	19.6	—	—	黒褐色(2.5Y3/1)	細砂	粘土紐凸帯、指頭圧痕

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
442	土壙102	弥生土器	甕	16.8	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
443	土壙102	弥生土器	甕	24.8	—	—	黒褐色(7.5YR3/1)	細砂	
444	土壙102	弥生土器	甕	—	5.5	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂	黒斑C
445	土壙102	弥生土器	脚付壺	—	12.6	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	透し孔10ヶ残存　黒斑C
446	土壙102	弥生土器	蓋	—	9.2	2.7	鈍い赤橙色(2.5YR5/4)	細砂	黒斑ＡＣ　完形
447	土壙105	弥生土器	高杯	—	—	—	灰白色(5YR8/2)	細砂	
448	土壙112	弥生土器	壺	15.0	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	刻目、円形浮文
449	土壙112	弥生土器	甕	17.0	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	
450	土壙112	弥生土器	甕	—	6.6	—	鈍い橙色(2.5YR6/4)	細砂	穿孔
451	土壙113	弥生土器	壺	—	7.0	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂、礫	外面ヘラミガキ
452	土壙117	弥生土器	壺	—	—	—	浅黄色(2.5Y7/3)	細砂	沈線、波状文、内面ハケメ
453	土壙117	弥生土器	甕	17.2	—	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂	列点文３段　ススＡ
454	土壙117	弥生土器	甕	28.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	
455	土壙117	弥生土器	甕	—	8.2	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂、粗砂	外面ハケメ
456	土壙121	弥生土器	高杯	26.9	—	—	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	円形浮文、刻目３段、穿孔１ヶ
457	土壙122	弥生土器	甕	16.0	—	—	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	列点文は全周しない
458	土壙123	弥生土器	甕	15.6	—	—	淡橙色(5YR8/3)	細砂、粗砂	ススＢ
459	土壙124	弥生土器	甕	(29.8)	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	凸帯指頭圧痕　ススＢ
460	土壙127	弥生土器	甕	—	5.2	—	灰白色(7.5YR8/2)	細砂、礫	
461	土壙127	弥生土器	鉢	(21.0)	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/6)	粗砂、礫	
462	土壙129	弥生土器	甕	(16.8)	—	—	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	黒斑Ａ
463	土壙129	弥生土器	鉢	(23.5)	7.9	16.5	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂、粗砂	刻目　黒斑C
464	土壙129	弥生土器	甕	—	5.5	—	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	
465	土壙129	弥生土器	台付鉢	(22.7)	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	貼付刻目突帯２列
466	土壙130	弥生土器	装飾壺	20.6	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	円形浮文４個組２列　黒斑Ａ
467	土壙130	弥生土器	壺	15.6	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	円形浮文２段３列１組残存
468	土壙130	弥生土器	壺	11.0	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	斜格子文、円形浮文(３つ組)
469	土壙130	弥生土器	壺	23.0	—	—	灰褐色(5YR4/2)	細砂	刻目、棒状浮文２個残存
470	土壙130	弥生土器	甕	(16.4)	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	刻目
471	土壙130	弥生土器	甕	17.0	5.2	27.1	橙色(5YR7/6)	細砂、礫	穿孔　ススＡ
472	土壙130	弥生土器	甕	16.2	5.8	23.3	橙色(2.5YR6/8)	細砂、礫	ススＢ
473	土壙130	弥生土器	甕	(16.9)	—	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	ススＰ
474	土壙130	弥生土器	甕	(16.2)	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
475	土壙130	弥生土器	甕	(17.1)	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	ススＢ'　？
476	土壙130	弥生土器	甕	—	6.0	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、粗砂	
477	土壙130	弥生土器	甕	—	3.3	—	鈍い赤褐色(2.5YR5/4)	細砂	ススＰ
478	土壙130	弥生土器	甕	—	5.8	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、粗砂	
479	土壙130	弥生土器	甕	—	5.7	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	
480	土壙130	弥生土器	壺？	—	5.6	—	灰白色(2.5Y8/2)	細砂、粗砂	
481	土壙130	弥生土器	甕	25.2	8.2	38.4	橙色(2.5YR7/8)	細砂、粗砂、礫	刻目　ススＢ
482	土壙130	弥生土器	甕	(24.3)	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、粗砂	
483	土壙130	弥生土器	甕	24.0	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	
484	土壙130	弥生土器	甕	—	8.8	—	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂、粗砂	
485	土壙130	弥生土器	甕？鉢？	27.1	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	刻目、貼付指頭圧痕突帯
486	土壙130	弥生土器	鉢	(26.4)	—	—	灰褐色(7.5YR4/2)	細砂	刻目、貼付指頭圧痕突帯
487	土壙130	弥生土器	高杯	—	11.6	—	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂、粗砂	黒斑C
488	土壙130	弥生土器	ジョッキ形	—	6.8	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	黒斑C
489	土壙130	弥生土器	鉢	(37.8)	—	—	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂、粗砂、まれに礫	斜格子文、貼付刻目突帯
490	土壙132	弥生土器	甕	(16.8)	—	—	橙色(5YR6/6)～灰褐色(7.5YR4/2)	細砂	刻目
491	土壙137	弥生土器	甕	(17.0)	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
492	土壙138	弥生土器	甕	14.7	5.6	(25.0)	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	ススＡ
493	土壙139	弥生土器	壺	16.6	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	円形浮文　ススC
494	土壙139	弥生土器	甕	27.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
495	土壙140	弥生土器	甕	(15.3)	—	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	
496	土壙143・144	弥生土器	甕	17.0	—	—	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	刺突文　ススＢ'
497	土壙143・144	弥生土器	甕	15.8	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	
498	土壙143・144	弥生土器	甕	(16.3)	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
499	土壙143・144	弥生土器		—	5.8	—	灰褐色(5YR5/2)	細砂	黒斑C？
500	土壙143・144	弥生土器	壺	(20.5)	—	—	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	刻目
501	土壙143・144	弥生土器	甕	17.2	—	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂、粗砂	刻目
502	土壙145	弥生土器	壺	—	—	—	鈍い褐色(7.5YR5/4)	細砂	斜格子文、円形浮文
503	土壙145	弥生土器	壺	(14.8)	—	—	褐灰色(7.5YR6/1)	細砂	
504	土壙145	弥生土器	壺	(19.4)	—	—	鈍い褐色(7.5YR5/4)	細砂	
505	土壙145	弥生土器	甕	19.1	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
506	土壙146	弥生土器	壺	19.0	—	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	刻目、円形浮文
507	土壙149	弥生土器	壺	15.6	—	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂	刻目、貼付刻目突帯
508	土壙149	弥生土器	壺	17.4	—	—	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	刻目
509	土壙149	弥生土器	壺	8.8	—	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂	櫛描波状文
510	土壙149	弥生土器	甕	—	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
511	土壙149	弥生土器	甕	13.2	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂	
512	土壙149	弥生土器	甕	—	5.4	—	赤色(10R5/6)	細砂	
513	土壙149	弥生土器	高杯	(21.0)	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	円形透し孔１個残存
514	土壙150	弥生土器	甕	17.4	—	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	ススＢ

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
515	土壙150	弥生土器	甕	18.2	−	−	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	
516	土壙150	弥生土器	甕	19.6	−	−	鈍い橙色(5YR7/6)	細砂	
517	土壙150	弥生土器	甕	−	5.8	−	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	ススB
518	土壙150	弥生土器	甕	−	4.8	−	橙色(5YR6/6)	細砂	穿孔(焼成前？)
519	土壙150	弥生土器	壺	−	5.4	−	橙色(7.5YR6/6)	細砂	
520	土壙150	弥生土器	ジョッキ形	−	−	−	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	刻目、列点文
521	土壙153	弥生土器	甕	(18.0)	−	−	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	ハケメの痕跡
522	土壙153	弥生土器	高杯	−	−	−	橙色(5YR7/8)	細砂、粗砂、礫	
523	土壙157	弥生土器	壺	−	−	−	橙色(5YR7/6)	細砂	
524	土壙157	弥生土器	？	−	−	−	黒褐色(10YR3/1)	細砂	波状文、沈線10条
525	土壙157	弥生土器	甕	−	−	−	橙色(2.5YR6/6)	細砂	内外面ハケメ
526	土壙157	弥生土器	甕	−	−	−	灰赤色(10R5/2)	細砂	外面ハケメ後ヘラミガキ
527	土壙159	弥生土器	壺	23.3	−	−	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	刻目、凸帯に指頭圧痕
528	土壙159	弥生土器	高杯	−	−	−	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
529	土壙159	弥生土器	高杯	−	11.1	−	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	透し孔８ヶ残存
530	土壙159	弥生土器	高杯	(42.3)	−	−	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	円形浮文剥離、棒状浮文
531	土壙160	弥生土器	鉢	10.6	3.5	6.0	橙色(2.5YR6/8)	細砂	ほぼ完形
532	土壙165	弥生土器	壺	(14.8)	−	−	橙色(2.5YR6/6)	細砂	刻目３段
533	土壙165	弥生土器	壺	−	−	−	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
534	土壙165	弥生土器	？	−	9.4	−	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂、粗砂	黒斑C
535	土壙166	弥生土器	壺	17.0	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂	斜格子
536	土壙166	弥生土器	壺	(23.4)	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	刻目、円形浮文
537	土壙166	弥生土器	壺	17.4	−	−	鈍い褐色(7.5YR5/4)	細砂、粗砂、礫	刻目３段
538	土壙166	弥生土器	甕	20.6	−	−	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	刻目
539	土壙166	弥生土器	甕	−	−	−	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	
540	土壙166	弥生土器	甕	−	−	−	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂、粗砂	
541	土壙166	弥生土器	甕	−	5.0	−	灰褐色(7.5YR4/2)	細砂	
542	土壙166	弥生土器	甕	−	5.9	−	橙色(7.5YR7/6)	細砂	穿孔
543	土壙166	弥生土器	高杯	−	−	−	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂、粗砂	刻目４段
544	土壙166	弥生土器	高杯	−	−	−	橙色(2.5YR6/8)	細砂	透し孔個数不明
545	土壙166	弥生土器	高杯	−	11.0	−	鈍い赤褐色(5YR4/3)	細砂	
546	土壙166	弥生土器	高杯	−	(15.0)	−	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	透し孔個数不明　黒斑C
547	土壙166	弥生土器	高杯	−	12.6	−	橙色(7.5YR7/6)	細砂	透し孔上下２段
548	土壙168	弥生土器	壺	16.0	−	−	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂、粗砂、礫	刻目
549	土壙168	弥生土器	甕	−	−	−	明褐灰色(7.5YR7/2)	粗砂、礫	刻目
550	土壙168	弥生土器	甕	−	−	−	橙色(5YR7/6)	細砂	外面ハケメ
551	土壙168	弥生土器	甕	19.4	−	−	褐灰色(10YR4/1)	細砂	
552	土壙168	弥生土器	甕	−	−	−	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂、粗砂、礫	刺突文３段が２列
553	土壙168	弥生土器	高杯	−	11.3	−	橙色(2.5YR7/8)	細砂、粗砂、礫	透し孔上９ヶ・下14ヶ　黒斑C
554	土壙169	弥生土器	壺	(15.0)	−	−	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	刺突文
555	土壙169	弥生土器	壺	19.4	−	−	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂、粗砂、礫	波状文、刺突文
556	土壙169	弥生土器	甕	−	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	刺突文
557	土壙171	弥生土器	壺	22.4	−	−	橙色(2.5YR6/8)	細砂	斜格子、貼付指頭圧痕突帯
558	土壙171	弥生土器	甕	15.4	−	−	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	黒斑B
559	土壙171	弥生土器	甕	15.2	−	−	鈍い橙色(2.5YR6/4)	細砂	
560	土壙171	弥生土器	甕	−	10.4	−	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	黒斑C
561	土壙172	弥生土器	壺	15.2	−	−	明赤褐色(5YR5/8)	細砂	刻目１段
562	土壙172	弥生土器	壺	16.3	−	−	赤褐色(2.5YR4/8)	細砂	刻目３段
563	土壙172	弥生土器	甕	−	7.1	−	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	
564	土壙172	弥生土器	甕	−	8.8	−	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、粗砂、礫	
565	土壙172	弥生土器	甕	(32.9)	−	−	橙色(5YR6/6)	細砂	凸帯に指頭圧痕
566	土壙173	弥生土器	壺	9.8	−	−	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	波状文、櫛描沈線７条
567	土壙173	弥生土器	壺	10.6	−	−	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	凸帯に指頭圧痕３段
568	土壙173	弥生土器	壺	−	−	−	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	櫛描沈線12条、波状文２段
569	土壙173	弥生土器	壺	10.7	−	−	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	凸帯に指頭圧痕　黒斑B
570	土壙173	弥生土器	壺	−	7.2	−	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂	棒状浮文　黒斑A・B・C
571	土壙173	弥生土器	壺	17.2	−	−	橙色(5YR6/8)	細砂	刻目
572	土壙173	弥生土器	壺	−	−	−	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	刻目
573	土壙173	弥生土器	壺	−	−	−	橙色(5YR6/6)	細砂	刻目
574	土壙173	弥生土器	甕	11.8	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
575	土壙173	弥生土器	甕	17.1	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
576	土壙173	弥生土器	甕	14.8	−	−	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
577	土壙173	弥生土器	甕	15.4	−	−	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	
578	土壙173	弥生土器	甕	14.2	−	−	褐灰色(10YR4/1)	細砂	
579	土壙173	弥生土器	甕	15.8	−	−	橙色(5YR6/8)	細砂	刺突文　ススA
580	土壙173	弥生土器	甕	18.7	−	−	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	ススA
581	土壙173	弥生土器	甕	18.6	−	−	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	ススC'
582	土壙173	弥生土器	甕	19.0	−	−	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	ススA
583	土壙173	弥生土器	甕	19.2	5.7	28.3	灰白色(7.5YR8/1)	細砂	焼成前の穿孔　ススB　黒斑B　ほぼ完形
584	土壙173	弥生土器	甕	19.8	−	−	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	ススB'
585	土壙173	弥生土器	甕	(22.4)	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	刺突文
586	土壙173	弥生土器	甕	20.0	−	−	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	黒斑A
587	土壙173	弥生土器	甕	27.4	−	−	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	刺突文　ススA
588	土壙173	弥生土器	甕	33.1	−	−	橙色(5YR7/6)	細砂	３列の刺突文２段　ススB

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
589	土壙173	弥生土器	甕	(25.4)	−	−	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	
590	土壙173	弥生土器	甕	−	5.0	−	橙色(2.5YR6/8)	細砂	
591	土壙173	弥生土器	甕	−	5.6	−	橙色(5YR7/8)	細砂	
592	土壙173	弥生土器	甕	−	4.4	−	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
593	土壙173	弥生土器	甕	−	5.4	−	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
594	土壙173	弥生土器	甕	−	4.7	−	褐灰色(5YR5/7)	細砂	
595	土壙173	弥生土器	甕	−	6.4	−	橙色(7.5YR7/6)	細砂	
596	土壙173	弥生土器	甕	−	7.2	−	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	
597	土壙173	弥生土器	甕	−	5.8	−	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	
598	土壙173	弥生土器	甕	−	10.9	−	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂、粗砂	
599	土壙173	弥生土器	甕	−	8.4	−	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	
600	土壙173	弥生土器	甕	−	9.1	−	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	黒斑ＢＣ
601	土壙173	弥生土器	甕	−	9.4	−	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、粗砂、礫	
602	土壙173	弥生土器	甕	−	9.0	−	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂、粗砂	
603	土壙173	弥生土器	甕	−	10.0	−	明赤褐色(5YR5/6)	細砂、粗砂	
604	土壙173	弥生土器	甕	−	6.8	−	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	黒斑Ｃ
605	土壙173	弥生土器	鉢	(19.3)	6.8	16.2	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	ススＢ・Ｃ
606	土壙173	弥生土器	高杯	(25.6)	−	−	鈍い黄橙色(10YR8/3)	細砂	粘土貼付　ススＡ
607	土壙173	弥生土器	高杯	−	18.6	−	灰黄褐色(10YR2/5)	細砂	
608	土壙173	弥生土器	高杯	−	14.0	−	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	黒斑Ｂ
609	土壙173	弥生土器	ジョッキ形	13.6	9.4	17.7	橙色(5YR6/6)	細砂	列点文　黒斑Ａ・Ｃ
610	土壙173	弥生土器	ジョッキ形	−	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	波状文
611	土壙174	弥生土器	甕	17.5	10.5	(53.0)	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	黒斑ＢＣ
612	土壙174	弥生土器	高杯	24.5	−	−	灰白色(10YR8/2)	細砂	内面赤色顔料　黒斑ＡＢ
613	土壙175	弥生土器	甕	15.1	−	−	褐灰色(7.5YR4/1)	細砂	
614	土壙175	弥生土器	高杯	−	−	−	褐灰色(7.5YR4/1)	細砂	刻目、穿孔
615	土壙175	弥生土器	台付鉢	−	−	−	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	線刻２本組４方向
616	土壙176	弥生土器	壺	15.4	−	−	鈍い赤褐色(2.5YR5/4)	細砂	刺突文、刻目
617	土壙176	弥生土器	甕	−	−	−	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
618	土壙176	弥生土器	甕	−	5.4	−	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	
619	土壙178	弥生土器	甕	17.7	−	−	灰赤色(2.5YR6/2)	細砂	
620	土壙178	弥生土器	高杯	18.0	12.3	18.6	鈍い橙色(2.5YR6/3)	細砂	透し孔４ヶ所
621	土壙179	弥生土器	壺	16.2	−	−	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	粘土紐貼付、斜格子
622	土壙179	弥生土器	甕	13.2	−	−	褐灰色(7.5YR5/1)	細砂	
623	土壙179	弥生土器	甕	−	−	−	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	ススＢ
624	土壙179	弥生土器	高杯	−	10.6	−	橙色(2.5YR6/6)	細砂	透し孔４方向？
625	土壙180	弥生土器	甕	17.0	−	−	鈍い黄橙色(10YR6/4)	細砂	
626	土壙180	弥生土器	甕	−	5.4	−	橙色(5YR6/6)	細砂	
627	土壙181	弥生土器	壺	14.6	−	−	鈍い橙色(10YR7/2)	細砂(少)	刺突文
628	土壙181	弥生土器	壺	−	−	−	灰白色(10YR8/2)	細砂	ススＡ
629	土壙181	弥生土器	壺	16.6	−	−	褐灰色(7.5YR6/1)	細砂	刺突文、円形浮文
630	土壙181	弥生土器	甕	−	5.8	−	橙色(5YR6/6)	細砂	ススＣ
631	土壙181	弥生土器	甕	−	9.0	−	褐灰色(10YR4/1)	細砂	ススＣ
632	土壙181	弥生土器	高杯	−	−	−	橙色(5YR7/6)	細砂	穿孔
633	土壙181	弥生土器	高杯	−	11.6	−	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	透し孔２ヶ未貫通　ススＣ
634	土壙183	弥生土器	甕	14.6	−	−	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	
635	土壙184	弥生土器	甕	−	5.0	−	淡赤橙色(2.5YR7/3)	細砂	
636	土壙186	弥生土器	壺	−	−	−	橙色(5YR6/6)	細砂	刻目
637	土壙186	弥生土器	甕	−	−	−	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂(多)	
638	土壙186	弥生土器	甕	−	5.5	−	灰白色(10YR8/2)	細砂	
639	土壙188	弥生土器		−	−	−	明赤褐色(5YR5/8)	細砂	刺突文
640	土壙188	弥生土器	壺	−	−	−	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	刺突文
641	土壙189	弥生土器	壺	16.2	−	−	鈍い黄褐色(10YR5/3)	粗砂、礫	斜格子、内面刺突文
642	土壙189	弥生土器	甕	17.2	−	−	灰白色(10YR8/2)	粗砂、礫	
643	土壙189	弥生土器	甕	35.0	−	−	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂、礫	
644	土壙191	弥生土器	壺	−	−	−	灰白色(5YR8/1)	細砂	刻目
645	土壙191	弥生土器	甕	−	−	−	鈍い橙色(10YR8/1)	細砂、礫	ススＡ
646	土壙191	弥生土器	壺	−	−	−	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	黒斑Ｃ
647	土壙191	弥生土器	台付鉢？	−	6.3	−	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	沈線３条、透し孔
648	土壙192	弥生土器	甕	−	−	−	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	刻目
649	土壙192	弥生土器	壺	−	−	−	灰白色(5YR8/2)	細砂	斜格子
650	土壙192	弥生土器	壺	10.2	−	−	褐灰色(5YR6/1)	細砂、粗砂	
651	土壙192	弥生土器	甕	18.0	−	−	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
652	土壙194	弥生土器	甕	−	8.6	−	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂	
653	土壙194	弥生土器	高杯	−	−	−	橙色(5YR6/4)	細砂	刻目２条、穿孔
654	土壙195	弥生土器	壺	−	−	−	灰黄褐色(10YR6/2)	粗砂(多)	刻目２段、上面円形浮文
655	土壙195	弥生土器	壺	−	−	−	鈍い橙色(7.5YR5/3)	細砂	刻目
656	土壙195	弥生土器	甕	−	−	−	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	
657	土壙195	弥生土器	壺	−	10.7	−	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
658	土壙196	弥生土器	台付鉢	19.3	11.3	17.9	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	赤色顔料、透し孔13ヶ所　黒斑Ｂ・Ｃ　ほぼ完形
659	土壙197	弥生土器	甕	16.0	−	−	灰白色(10YR8/2)	細砂	
660	土壙197	弥生土器	甕	17.0	−	−	橙色(2.5YR7/6)	細砂	
661	土壙197	弥生土器	甕	−	8.4	−	褐灰色(10YR4/1)	細砂	内面コゲあり
662	土壙199	弥生土器	甕	13.8	−	−	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	色調	胎土	特徴
663	土壙199	弥生土器	甕	—	5.4	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
664	土壙200	弥生土器	甕	13.3	6.7	18.7	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	刺突文　黒斑C
665	土壙201	弥生土器	甕	—	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	
666	土壙201	弥生土器	甕	—	4.6	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂、粗砂	
667	土壙201	弥生土器	甕	—	7.0	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
668	土壙202	弥生土器	壺	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	刻目、凸帯、波状文
669	土壙203	弥生土器	壺	14.2	—	—	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	
670	土壙203	弥生土器	甕	(19.8)	7.8	34.4	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	ススB
671	土壙204	弥生土器	壺	—	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	刻目、波状文
672	土壙204	弥生土器	壺	16.2	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	斜格子、棒状、円形浮文
673	土壙204	弥生土器	壺	—	—	—	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	刻目3段
674	土壙204	弥生土器	壺	—	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	刻目3段
675	土壙204	弥生土器	壺	—	—	—	鈍い赤褐色(5YR4/4)	細砂	斜格子、刻目　凸帯に刻目、刺突文
676	土壙204	弥生土器	甕	15.3	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
677	土壙204	弥生土器	甕	(17.2)	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
678	土壙204	弥生土器	甕	27.8	—	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂	3列の刺突文　黒斑A・B
679	土壙204	弥生土器	甕	19.6	10.5	—	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂、礫	
680	土壙204	弥生土器	甕	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	ススB
681	土壙204	弥生土器	甕	—	6.3	—	褐色(7.5YR4/3)	細砂	黒斑C
682	土壙204	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
683	土壙204	弥生土器	鉢	21.6	—	—	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	
684	土壙204	弥生土器	鉢	22.4	—	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	刻目
685	土壙204	弥生土器	台付壺？	—	6.0	—	淡赤橙色(2.5YR7/3)	細砂	
686	土壙204	弥生土器	台付壺	—	10.3	—	鈍い赤橙色(5YR5/3)	細砂	
687	土壙205	弥生土器	甕	(18.1)	—	—	赤褐色(5YR5/4)	細砂	
688	土壙205	弥生土器	甕	—	12.8	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂、粗砂	
689	土壙207	弥生土器	甕	15.4	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂	
690	土壙207	弥生土器	高杯	—	—	—	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂、粗砂	
691	土壙213	弥生土器	甕？	—	6.0	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂、粗砂	
692	土壙墓4	弥生土器	壺	—	—	—	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	
693	土器棺墓1	弥生土器	甕	—	12.4	—	鈍い橙色(2.5YR6/4)	細砂	黒斑BC
694	柱穴1・2	弥生土器	壺	8.2	5.2	14.3	橙色(5YR6/6)～鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	ススC　完形
695	柱穴1・2	弥生土器	甕	14.3	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	ススB'
696	柱穴1・2	弥生土器	甕	—	6.2	—	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	内面ナデ
697	柱穴1・2	弥生土器	甕	22.3	9.2	24.2	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	黒斑AB・BC
698	柱穴1・2	弥生土器	高杯	23.3	12.6	15.9	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	穿孔2ヶ1対残存、透し孔11ヶ
699	柱穴3	弥生土器	甕	17.3	—	—	淡橙色(5YR8/3)	細砂	列点文　ススA
700	柱穴3	弥生土器	甕	18.6	—	—	淡橙色(5YR8/4)	細砂	列文文　ススB'
701	柱穴4	弥生土器	甕	16.4	5.9	29.1	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	ススB'
702	柱穴5	弥生土器	壺	12.2	—	—	灰白色(10YR8/2)	細砂	黒斑A
703	柱穴5	弥生土器	甕	15.1	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	ススB
704	柱穴5	弥生土器	甕	16.0	5.4	26.6	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	ススB　黒斑B・C
705	柱穴6	弥生土器	甕	64.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	列点文
706	溝5	弥生土器	甕	12.8	—	—	鈍い褐色(7.5YR5/4)	細砂	
707	溝7	弥生土器	壺	21.8			橙色(5YR6/8)	細砂	刻目、指頭圧痕突帯
708	溝7	弥生土器	甕	17.8			橙色(5YR6/6)	細砂	外面ミガキ
709	溝7	弥生土器	甕	15.0	5.8	(25.0)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	刺突文　黒斑C
710	溝7	弥生土器	甕	15.8	5.7	27.3	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	黒斑B
711	溝7	弥生土器	高杯		11.4	15.0	鈍い赤褐色(2.5YR5/4)	精良	穿孔、透し孔9
712	溝7	弥生土器	台付鉢				橙色(5YR6/6)	粗砂	指頭圧痕突帯
713	溝7	弥生土器	高杯				橙色(2.5YR7/8)	細砂	内面突帯
714	溝7	弥生土器	台付鉢	15.6	9.3	12.5	明赤褐色(5YR5/6)	粗砂	刻目　黒斑A～B・C　完形
715	低位部1	弥生土器	壺	11.2	8.6	45.8	灰白色(10YR8/2)	細砂	櫛描文、波状文、刺突文
716	低位部1	弥生土器	甕	19.1	5.7	28.4	橙色(5YR6/6)	粗砂	刺突文
717	その他	弥生土器	壺	15.3	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂	波状文、孔4ヶ残存
718	その他	弥生土器	壺	13.4	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	刻目
719	その他	弥生土器	壺	14.4	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂	
720	その他	弥生土器	壺	30.0	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	刻目3列
721	その他	弥生土器	壺	9.3	—	—	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂(多)	刻目、粘土紐貼付
722	その他	弥生土器	壺	10.6	—	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	刻目、粘土紐貼付
723	その他	弥生土器	壺	8.2	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂	粘土紐貼付、指頭圧痕　黒斑B
724	その他	弥生土器	壺	13.4	—	—	灰褐色(7.5YR4/2)	細砂、粗砂	刻目
725	その他	弥生土器	壺	17.1	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂	刻目3段
726	その他	弥生土器	壺	16.0			浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	棒状浮文、突帯3条
727	その他	弥生土器	壺	18.0	—	—	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	凸帯に円形浮文、凸帯
728	その他	弥生土器	壺	16.0			鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
729	その他	弥生土器	壺	13.2	—	—	赤灰色(2.5YR4/1)	細砂(多)	刻目、円形浮文3ヶ組5ヶ所
730	その他	弥生土器	壺	18.0	—	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂、粗砂	斜格子、波状文、円形浮文
731	その他	弥生土器	壺	19.0	—	(9.0)	橙色(5YR6/6)	細砂	棒状浮文
732	その他	弥生土器	壺	12.2	—	—	灰褐色(7.5YR4/2)	細砂	円形浮文4方向
733	その他	弥生土器	壺	6.2	6.5	19.3	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	外面棒状浮文　黒斑B～C
734	その他	弥生土器	壺	8.6	5.3	17.6	灰白色(7.5YR8/1)	細砂	刺突文
735	その他	弥生土器	壺	9.8	5.4	15.5	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	穿孔3個残存
736	その他	弥生土器	壺	3.8		10.4	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
737	その他	弥生土器	鉢	(16.8)		(8.3)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	透し孔１現存
738	その他	弥生土器	壺	8.2	−	−	橙色(5YR6/6)	細砂	穿孔２ヶ１対
739	その他	弥生土器	甕	7.5	4.6	13.7	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	黒斑Ａ・ＢＣ　ほぼ完形
740	その他	弥生土器	甕	13.0	−	−	橙色(5YR6/8)	細砂	刺突文
741	その他	弥生土器	甕	17.0	−	−	橙色(2.5YR6/6)	細砂	刻目
742	その他	弥生土器	甕	11.4			明褐灰色(7.5YR7/1)	細砂	貝殻文、内面ミガキ
743	その他	弥生土器	甕	13.9	−	−	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
744	その他	弥生土器	甕	(17.0)	−	−	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	
745	その他	弥生土器	甕	15.0	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
746	その他	弥生土器	甕	(14.2)		(12.0)	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	内外面ハケ
747	その他	弥生土器	甕	15.0	−	(6.7)	橙色(5YR6/6)	粗砂	
748	その他	弥生土器	甕	14.9	−	(11.0)	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	
749	その他	弥生土器	甕	(20.0)	−	−	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	ススＢ
750	その他	弥生土器	甕	23.6	−	−	鈍い橙色(2.5YR6/4)	細砂	外面ハケメ　黒斑Ａ
751	その他	弥生土器	甕	17.7	−	−	橙色(2.5YR6/6)	細砂	列点文
752	その他	弥生土器	甕	(24.2)	−	−	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	内外面ハケ
753	その他	弥生土器	甕	23.2	−	−	橙色(7.5YR7/6)	細砂	ススＢ
754	その他	弥生土器	甕	30.0	−	−	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	
755	その他	弥生土器	甕	18.2	5.6	32.5	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	列点文　ススＢ'
756	その他	弥生土器	甕	13.2	−	−	橙色(5YR6/8)	細砂	
757	その他	弥生土器	甕	16.1		(6.1)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	刻目
758	その他	弥生土器	甕	22.0	−	(5.0)	橙色(5YR6/6)	細砂	
759	その他	弥生土器	甕	19.4	−	−	橙色(5YR6/6)	細砂	
760	その他	弥生土器	甕	24.0	−	−	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	
761	その他	弥生土器	甕	13.6			鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	外面ハケ後ミガキ
762	その他	弥生土器	甕	32.0	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂、礫	
763	その他	土師器	甕	13.6	−	−	赤橙色(10R6/8)	細砂	列点文
764	その他	弥生土器	甕	−	−	−	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	内外面ハケメ
765	その他	弥生土器	甕	−	−	−	灰褐色(5YR4/2)	細砂	列点文
766	その他	弥生土器	甕	38.8	−	−	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂、粗砂	列点文
767	その他	弥生土器	甕	−	−	−	鈍い橙色(2.5YR6/4)	細砂	凸帯に指頭圧痕
768	その他	弥生土器	甕	37.6	−	−	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂	貝殻腹縁文
769	その他	弥生土器	甕	14.0			褐灰色(7.5YR4/1)	粗砂	内外面ハケ　ススＡ
770	その他	弥生土器	甕	(16.0)	−	(3.7)	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
771	その他	弥生土器	甕	(32.4)		(2.7)	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	
772	その他	弥生土器	甕	14.0			鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	外面ハケ後ミガキ　ススＡ
773	その他	弥生土器	甕	20.2	9.0	24.2	黄橙色(7.5YR8/8)	細砂、粗砂、礫	刺穴列点文
774	その他	弥生土器	甕	16.0	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
775	その他	弥生土器	甕	12.8	−	−	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	ススＢ　黒斑Ｂ
776	その他	弥生土器	壺	−	5.2	(3.6)	明赤褐色(5YR5/6)	粗砂	
777	その他	弥生土器	壺	−	6.0	(4.2)	橙色(5YR6/6)	粗砂	
778	その他	弥生土器	壺	−	5.0	(3.8)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
779	その他	弥生土器	壺	−	6.0	(2.6)	鈍い赤褐色(7.5YR5/4)	粗砂	
780	その他	弥生土器	壺	−	5.8	−	灰褐色(5YR4/2)	細砂	穿孔　ススＣ
781	その他	弥生土器	甕	−	5.6	−	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	穿孔
782	その他	弥生土器	甕	−	6.2	−	橙色(5YR6/6)	細砂	穿孔
783	その他	弥生土器		−	6.1	−	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	
784	その他	弥生土器	甕	−	5.6	−	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
785	その他	弥生土器	甕	−	4.9	−	黒褐色(5YR3/1)	細砂	底部外面ナデ
786	その他	弥生土器	壺・甕？	−	7.4	−	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	黒斑Ｃ
787	その他	弥生土器	甕	−	7.6	−	褐灰色(10YR5/1)	細砂	
788	その他	弥生土器	甕	−	7.4	−	橙色(5YR6/8)	細砂、粗砂	黒斑Ｃ
789	その他	弥生土器	甕	−	8.8	−	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	黒斑Ｃ
790	その他	弥生土器	甕	−	8.6	−	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	
791	その他	弥生土器	甕	−	8.5	−	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
792	その他	弥生土器	壺・甕？	−	9.4	−	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	外面ヘラミガキ　黒斑Ｃ
793	その他	弥生土器	甕	−	5.2	−	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	ススＢ
794	その他	弥生土器	甕	−	5.1	−	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	
795	その他	弥生土器	甕	−	5.4	−	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	刺突文　黒斑Ｂ・Ｃ
796	その他	弥生土器	甕	−	8.1	−	鈍い黄褐色(10YR5/3)	細砂	
797	その他	弥生土器	甕	−	7.6	−	橙色(2.5YR6/6)	細砂	ススＣ
798	その他	弥生土器	甕	−	9.1	−	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	
799	その他	弥生土器	鉢	(22.8)	−	(6.3)	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	
800	その他	弥生土器	鉢	(27.2)	−	(5.4)	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	ススＡ
801	その他	弥生土器	鉢	(30.0)	−	(6.4)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	
802	その他	弥生土器	鉢	−	−	−	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
803	その他	弥生土器	高杯	19.7	11.1	15.8	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	透し孔上12・下18　ススＡ
804	その他	弥生土器	高杯	23.4	13.2	15.7	橙色(2.5YR7/6)	細砂	穿孔２個残存、透かし孔13　ススＡ
805	その他	弥生土器	高杯	−	(10.0)	−	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	
806	その他	弥生土器	高杯	17.3	−	−	明赤褐色(5YR5/6)	細砂、粗砂	
807	その他	弥生土器	高杯	21.0	10.2	11.0	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	透し孔２ヶ１対残存、透し孔４ヶ
808	その他	弥生土器	高杯	25.0	−	−	橙色(2.5Y6/6)	細砂	
809	その他	弥生土器	高杯	22.0	10.9	15.5	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	ヘラ描き、線刻
810	その他	弥生土器	高杯	−	−	−	橙色(5YR6/6)	細砂	透しあり
811	その他	弥生土器	台付鉢	−	12.0	(7.0)	橙色(5YR6/6)	細砂	貼付凸帯、透し孔

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
812	その他	弥生土器	高杯	—	11.5	—	灰白色(7.5YR8/2)	細砂、粗砂、礫	透し孔４方向
813	その他	弥生土器	高杯	24.5	13.3	21.7	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂、粗砂、礫	黒斑Ａ・Ｃ
814	その他	弥生土器	高杯	24.8	13.6	24.7	鈍い黄橙色(10YR7/2)	粗砂	ヘラミガキ８分割 黒斑Ａ ほぼ完形
815	その他	弥生土器	ジョッキ形	14.8	—	—	鈍い橙色(2.5YR6/3)	細砂	波状文、10条の沈線、穿孔あり
816	その他	弥生土器	ジョッキ形	—	—	—	黒褐色(10YR3/1)	細砂	波状文
817	その他	弥生土器	ジョッキ形	—	10.8	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	外面ヘラミガキ、透し孔２ヶ残存
818	その他	弥生土器	ジョッキ形	—	10.0	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	
819	その他	弥生土器	ジョッキ形	—	8.8	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	ススＣ
820	その他	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	貝殻腹縁文
821	その他	弥生土器	鉢	15.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
822	その他	弥生土器	鉢	11.0	—	—	橙色(2.5YR7/8)	粗砂	列点文
823	その他	弥生土器	台付鉢	—	9.0	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	穿孔４ヶ
824	その他	弥生土器	脚部		7.0		鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	
825	その他	弥生土器	高杯		8.2		鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	透し孔６～７
826	その他	弥生土器	台付直口壺	—	—	—	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	貼付突帯２段
827	その他	弥生土器	台付鉢	—	17.0	—	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	刻目
828	その他	弥生土器	蓋	8.5			橙色(5YR6/6)	粗砂	穿孔２孔一対
829	その他	弥生土器	蓋	10.2			灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	つまみ付、穿孔２個一対
830	その他	弥生土器	製塩土器		6.4		鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
831	竪穴住居13	弥生土器	壺	12.0	2.2	16.1	浅黄橙色(7.5YR8/6)	細砂、大きな礫	黒斑Ｃ ほぼ完形
832	竪穴住居13	弥生土器	壺	10.0	—	13.5	橙色(5YR6/6)	細砂	黒斑Ｃ ほぼ完形
833	竪穴住居13	弥生土器	甕	13.5	5.4	19.9	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	黒斑ＡＢ ほぼ完形
834	竪穴住居13	弥生土器	甕	14.6	4.6	22.5	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
835	竪穴住居13	弥生土器	甕	(11.2)	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
836	竪穴住居13	弥生土器	甕	14.3	5.8	18.0	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
837	竪穴住居13	弥生土器	高杯	13.3	—	—	橙色(2.5YR7/8)	精良(水漉粘土)	
838	竪穴住居13	弥生土器	高杯	(19.4)	12.0	10.6	橙色(2.5YR6/6)	精良(水漉粘土)	透し孔４方向？ 黒斑Ａ
839	竪穴住居13	弥生土器	台付鉢	20.8	16.9	(16.8)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	黒斑ＡＣ
840	竪穴住居13	弥生土器	台付壺	7.5	—	—	橙色(2.5YR6/6)	精良	
841	竪穴住居13	弥生土器	手焙形	—	—	—	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	竹管文２個一対５組
842	竪穴住居14	弥生土器	壺	14.6	5.2	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂、礫	
843	竪穴住居14	弥生土器	甕	(16.0)	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
844	竪穴住居14	弥生土器	高杯	12.0	14.4	10.1	橙色(5YR6/6)	精良	透し孔４個
845	竪穴住居14	弥生土器	高杯	—	12.7	—	橙色(5YR7/6)	精良	透し孔４個
846	竪穴住居15	土師器	甕	22.2	—	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂	
847	竪穴住居15	弥生土器？	壺	19.4	—	—	浅黄橙色(10YR8/4)	精良、粗砂	内面に波状文、波状文
848	竪穴住居15	弥生土器	壺	17.5	—	—	明黄褐色(10YR7/6)	細砂	
849	竪穴住居15	弥生土器	壺	—	9.2	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	
850	竪穴住居15	弥生土器	甕	12.0	—	—	褐色(7.5YR4/3)	細砂、礫	
851	竪穴住居15	弥生土器	甕	11.4	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
852	竪穴住居15	弥生土器	甕	14.0	3.7	17.2	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	黒斑ＢＣ
853	竪穴住居15	弥生土器	甕	15.2	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	
854	竪穴住居15	弥生土器	甕	14.2	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	沈線？
855	竪穴住居15	弥生土器	甕	(15.2)	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
856	竪穴住居15	弥生土器	甕	15.9	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
857	竪穴住居15	弥生土器	甕	13.7	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
858	竪穴住居15	弥生土器	甕	12.4	—	—	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	
859	竪穴住居15	弥生土器	甕	16.2	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	
860	竪穴住居15	弥生土器	甕	—	4.6	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	タタキ成形 黒斑ＢＣ
861	竪穴住居15	弥生土器	高杯	17.0	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、礫	黒斑ＡＢ
862	竪穴住居15	弥生土器	高杯	18.2	—	—	橙色(5YR7/8)	細砂、礫	
863	竪穴住居15	弥生土器	高杯	19.5	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
864	竪穴住居15	弥生土器	鉢	(16.0)	(3.9)	7.7	橙色(2.5YR6/6)	精良	
865	竪穴住居16	弥生土器	壺	(19.8)			橙色(5YR6/8)	粗砂	
866	竪穴住居16	弥生土器	壺	(13.0)			鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
867	竪穴住居16	弥生土器	高杯	(15.2)			浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	外面ケズリ後ミガキ
868	竪穴住居17	弥生土器	甕	(13.0)			鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
869	竪穴住居18	弥生土器	高杯		(15.9)		浅黄橙色(7.5YR8/4)	精良	透し孔４
870	竪穴住居20	弥生土器	壺				橙色(2.5YR7/6)	粗砂	沈線、外面ハケ
871	竪穴住居20	弥生土器	甕	13.0			灰黄色(2.5Y6/2)	細砂	
872	竪穴住居20	弥生土器	甕	15.1	5.5	25.2	灰白色 (10YR8/1)	細砂	刺突文Ｂ－３ ススＣ
873	竪穴住居20	弥生土器	高杯	18.1	14.3	10.8	浅黄橙色(7.5YR8/4)	粗砂	透し孔４
874	竪穴住居20	土師器	高杯	20.5	14.2	14.3	淡橙色(5YR8/4)	粗砂	透し孔４ ススＡ
875	竪穴住居20	弥生土器	鉢	(13.6)		7.4	橙色(2.5YR6/8)	礫	外面ハケ後ナデ
876	竪穴住居21	弥生土器	器台	11.0			橙色(5YR7/6)	精良	外面ナデ
877	竪穴住居21	弥生土器	甕	(12.4)			黒褐色(10YR3/1)	細砂	内外面ミガキ
878	竪穴住居22	弥生土器	甕	15.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	
879	竪穴住居22	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR7/8)	細砂	ヘラミガキ 黒斑Ａ
880	竪穴住居22	弥生土器	高杯	17.8	—	—	橙色(7.5YR7/6)	精良	全体磨滅
881	竪穴住居22	土師器	椀	12.9	2.7	6.2	橙色(5YR7/8)	精良	ナデ？ 完形
882	竪穴住居23	土師器	甕	14.0	—	—	鈍い褐色(7.5YR5/4)	粗砂	沈線８条
883	竪穴住居23	土師器	甕	(16.0)	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	沈線６条
884	竪穴住居23	土師器	高杯	10.0	—	—	橙色(5YR7/6)	精良	内外面ナデ
885	竪穴住居24	弥生土器	甕	14.8	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	礫	全体磨滅 ススＢ
886	竪穴住居24	弥生土器	高杯	15.8	—	—	橙色(5YR6/8)	粗砂	外面ケズリ後ミガキ

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
887	竪穴住居24	弥生土器	椀	8.1	2.6	4.8	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	外面工具ナデ？　黒斑B　完形
888	竪穴住居24	弥生土器	台付壺	7.5	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	外面ミガキ、内面ケズリ
889	竪穴住居25	弥生土器	甕	14.5	6.1	28.2	鈍い赤褐色(2.5YR4/4)	細砂	ススA　完形
890	竪穴住居26	弥生土器	壺	13.8			鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	
891	竪穴住居26	弥生土器	甕	(16.0)			鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	
892	竪穴住居26	弥生土器	甕	13.0			橙色(5YR6/6)	細砂	
893	竪穴住居27	弥生土器	直口壺	9.4	—	5.9	褐灰色(5YR6/2)	細砂、粗砂	
894	竪穴住居27	弥生土器	壺	13.2	—	(6.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
895	竪穴住居27	弥生土器	壺	28.2	—	(18.4)	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	鋸歯文、竹管文(5ヶ確認)
896	竪穴住居27	弥生土器	壺	28.0	12.8	41.1	橙色(2.5YR6/6)	粗砂、礫	内側に赤色顔料　黒斑B・C
897	竪穴住居27	弥生土器	壺	—	9.6	(39.6)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	粗砂、礫	貝殻圧痕文　黒斑B・C
898	竪穴住居27	弥生土器	壺	18.5	7.5	32.8	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	内側赤色顔料　黒斑A
899	竪穴住居27	弥生土器	壺	(21.8)	—	(5.6)	橙色(5YR7/6)	粗砂	
900	竪穴住居27	弥生土器	壺	23.2	8.4	37.7	橙色(2.5YR6/8)	細砂	穿孔　黒斑B・C
901	竪穴住居27	弥生土器	壺	21.7	7.0	46.1	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	黒斑A・B
902	竪穴住居27	弥生土器	壺	18.4	10.5	40.9	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	黒斑B・C
903	竪穴住居27	弥生土器	台付直口坩	9.6	12.6	19.5	淡赤橙色(2.5YR7/4)	精良	透し孔4ヶ
904	竪穴住居27	弥生土器	甕	9.0	—	(7.2)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	
905	竪穴住居27	弥生土器	甕	10.6	—	(8.4)	橙色(5YR6/6)	細砂	
906	竪穴住居27	弥生土器	甕	9.6	3.2	10.8	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
907	竪穴住居27	弥生土器	甕	10.2	—	(11.8)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂	
908	竪穴住居27	弥生土器	甕	10.3	3.6	14.9	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
909	竪穴住居27	弥生土器	甕	12.4	—	(7.3)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
910	竪穴住居27	弥生土器	甕	10.8	—	(10.5)	褐灰色(10YR4/1)	細砂	
911	竪穴住居27	弥生土器	甕	11.0	—	(14.5)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	ススB
912	竪穴住居27	弥生土器	甕	11.6	—	(8.1)	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	
913	竪穴住居27	弥生土器	甕	11.8	—	(5.0)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
914	竪穴住居27	弥生土器	甕	12.0	4.0	(8.2)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
915	竪穴住居27	弥生土器	甕	11.6	—	(7.5)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
916	竪穴住居27	弥生土器	甕	11.6	4.1	(17.1)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	
917	竪穴住居27	弥生土器	甕	11.9	3.1	13.9	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
918	竪穴住居27	弥生土器	甕	12.6	—	(9.6)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂、礫	黒斑AB
919	竪穴住居27	弥生土器	甕	12.9	—	(9.1)	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	歪みあり　12.9～13.5cm
920	竪穴住居27	弥生土器	甕	12.8	—	(13.7)	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	黒斑C
921	竪穴住居27	弥生土器	甕	12.8	—	(8.9)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
922	竪穴住居27	弥生土器	甕	13.7	4.0	16.4	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	黒斑B・C　ほぼ完形
923	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.6	—	(6.4)	褐灰色(7.5YR4/1)	細砂	
924	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.0	—	(12.9)	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂	ススC
925	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.7	—	(8.3)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
926	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.0	—	(12.7)	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	
927	竪穴住居27	弥生土器	甕	13.7	4.3	14.8	浅黄色(2.5Y7/3)	細砂、粗砂、礫	
928	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.0	—	(14.5)	明褐灰色(5YR7/2)	細砂	タタキメ　ススB
929	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.2	—	(8.4)	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	
930	竪穴住居27	弥生土器	甕	17.8	—	(7.2)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
931	竪穴住居27	弥生土器	甕	15.4	—	(14.6)	灰白色(10YR7/1)	細砂	ススB
932	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.7	5.1	18.9	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂、粗砂	ススB'
933	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.3	5.0	20.8	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂	ススB　黒斑BC
934	竪穴住居27	弥生土器	甕	16.5	4.6	18.3	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	ススA
935	竪穴住居27	弥生土器	甕	17.3	4.6	16.5	浅黄橙色(7.5YR8/3)	粗砂	
936	竪穴住居27	弥生土器	壺	17.0	—	(7.6)	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
937	竪穴住居27	弥生土器	甕	11.2	—	(11.3)	橙色(5YR6/4)	細砂、粗砂、礫	ススB
938	竪穴住居27	弥生土器	甕	11.8	—	(8.7)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	ススB
939	竪穴住居27	弥生土器	甕	12.7	—	(7.6)	灰白色(10YR7/2)	細砂、粗砂	黒斑A・B
940	竪穴住居27	弥生土器	甕	12.6	—	(10.3)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
941	竪穴住居27	弥生土器	甕	11.6	—	(12.8)	浅黄橙色(7.5YR8/5)	細砂	
942	竪穴住居27	弥生土器	甕	12.8	4.4	16.2	淡橙色(5YR8/3)	細砂	ススABC
943	竪穴住居27	弥生土器	甕	12.4	3.9	18.0	灰褐色(5YR5/2)	細砂、粗砂	穿孔
944	竪穴住居27	弥生土器	甕	13.0	—	(7.4)	淡黄橙色(10YR8/3)	細砂	
945	竪穴住居27	弥生土器	鉢	14.2	5.8	15.1	橙色(2.5YR6/6)	細砂、粗砂	
946	竪穴住居27	弥生土器	鉢	13.8	6.9	15.4	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	黒斑BC
947	竪穴住居27	弥生土器	鉢	18.0	7.3	16.0	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
948	竪穴住居27	弥生土器	甕	12.8	—	(9.7)	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
949	竪穴住居27	弥生土器	甕	13.8	—	(8.8)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
950	竪穴住居27	弥生土器	甕	13.0	—	(13.1)	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	
951	竪穴住居27	弥生土器	甕	13.2	—	(15.2)	灰黄色(2.5YR6/1)	細砂	ススB
952	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.2	4.0	17.2	鈍い橙色(10YR7/3)	細砂	ススA　黒斑BC
953	竪穴住居27	弥生土器	甕	15.2	—	(6.4)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂、粗砂	
954	竪穴住居27	弥生土器	甕	13.2	—	(10.5)	灰白色(7.5YR8/1)	細砂	ススB'
955	竪穴住居27	弥生土器	甕	13.2	—	(10.5)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
956	竪穴住居27	弥生土器	甕	13.1	—	17.7	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	穿孔　黒斑B
957	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.0	—	(12.7)	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	黒斑B
958	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.4	—	(8.1)	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	
959	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.2	—	(12.8)	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	黒斑A・B
960	竪穴住居27	弥生土器	甕	13.2	—	(15.8)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	
961	竪穴住居27	弥生土器	甕	(14.2)	—	(9.6)	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	ススA

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
962	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.0	—	(4.4)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
963	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.0	—	(1.9)	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	
964	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.4	—	(8.2)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
965	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.4	6.0	20.2	灰褐色(5YR6/2)	細砂	
966	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.2	—	(11.0)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂、礫	
967	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.3	—	(8.3)	浅黄橙色(7.5YR8/6)	細砂、粗砂、礫	
968	竪穴住居27	弥生土器	甕	15.1	—	(10.2)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂、粗砂	
969	竪穴住居27	弥生土器	甕	(15.5)	—	(11.7)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	ススB
970	竪穴住居27	弥生土器	甕	17.3	—	(5.6)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	
971	竪穴住居27	弥生土器	甕	(16.4)	—	(11.5)	橙色(5YR6/6)	細砂	
972	竪穴住居27	弥生土器	甕	18.6	—	(7.3)	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
973	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.7	—	(17.4)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂	
974	竪穴住居27	弥生土器	甕	15.6	—	(17.7)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	ススC
975	竪穴住居27	弥生土器	甕	16.0	—	(8.0)	橙色(7.5YR7/6)	細砂、粗砂	
976	竪穴住居27	弥生土器	甕	15.8	—	(11.2)	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	ススB
977	竪穴住居27	弥生土器	甕	16.4	—	(17.1)	褐灰色(10YR5/1)	細砂	ススB
978	竪穴住居27	弥生土器	甕	15.4	—	(9.0)	淡黄橙色(2.5Y8/3)	細砂	
979	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.6	—	(13.2)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	ススB
980	竪穴住居27	弥生土器	甕	15.7	—	20.8	黄橙色(10YR8/6)	細砂	
981	竪穴住居27	弥生土器	甕	16.8	—	(9.2)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	ススB
982	竪穴住居27	弥生土器	甕	17.8	—	(9.9)	淡橙色(5YR8/3)	細砂	
983	竪穴住居27	弥生土器	甕	16.1	—	(16.0)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、粗砂	黒斑B
984	竪穴住居27	弥生土器	甕	16.4	—	(13.9)	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	ススB
985	竪穴住居27	弥生土器	甕	12.6	—	(5.7)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
986	竪穴住居27	弥生土器	甕	(14.2)	—	(2.6)	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
987	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.8	—	(10.9)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	ススA
988	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.5	—	(13.3)	橙色(5YR6/8)	細砂、粗砂	
989	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.2	—	(14.0)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂	
990	竪穴住居27	弥生土器	甕	16.4	—	(3.9)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂、粗砂	
991	竪穴住居27	弥生土器	甕	13.6	—	(8.1)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
992	竪穴住居27	弥生土器	甕	15.0	—	(7.0)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
993	竪穴住居27	弥生土器	壺	12.8	5.8	19.3	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	黒斑A・C
994	竪穴住居27	弥生土器	甕	15.6	7.3	26.2	灰白色(10YR8/2)	細砂	ススB
995	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.4	—	(16.0)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	ススC
996	竪穴住居27	弥生土器	甕	16.0	—	(19.1)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	
997	竪穴住居27	弥生土器	甕	14.7	5.4	23.7	淡橙色(5YR8/4)	細砂、粗砂	穿孔、内面赤色顔料　黒斑BC
998	竪穴住居27	弥生土器	甕	16.9	—	(18.8)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂、粗砂、礫	
999	竪穴住居27	弥生土器	壺	17.6	8.3	30.1	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	ススC
1000	竪穴住居27	弥生土器	壺	16.2	9.0	(31.1)	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	ススB
1001	竪穴住居27	弥生土器	壺	17.6	8.1	32.6	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂	黒斑C
1002	竪穴住居27	弥生土器	壺	17.0	8.2	30.8	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	黒斑B・C　ほぼ完形
1003	竪穴住居27	弥生土器	壺	16.5	8.4	30.8	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	黒斑A・B・C
1004	竪穴住居27	弥生土器	壺	18.6	—	(12.8)	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	
1005	竪穴住居27	弥生土器	壺	19.6		(26.4)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	ススC
1006	竪穴住居27	弥生土器	甕	—	3.6	(5.6)	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	黒斑C
1007	竪穴住居27	弥生土器	甕	—	5.7	(6.7)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	ススC
1008	竪穴住居27	弥生土器	甕	—	4.4	(9.6)	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	
1009	竪穴住居27	弥生土器	甕	—	6.0	(9.0)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	黒斑C
1010	竪穴住居27	弥生土器	甕	—	4.9	(15.4)	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂、粗砂	ススC
1011	竪穴住居27	弥生土器	甕	—	4.8	(14.8)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
1012	竪穴住居27	弥生土器	甕	—	4.1	(12.8)	淡赤橙色(2.5YR7/3)	細砂	ススC
1013	竪穴住居27	弥生土器	壺	—	7.6	(10.6)	褐灰色(7.5YR5/1)	細砂、粗砂	
1014	竪穴住居27	弥生土器	甕	—	5.1	(15.8)	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂、粗砂	タタキメ？　黒斑BC
1015	竪穴住居27	弥生土器	甕	—	5.4	(13.5)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂、粗砂	ススB　黒斑C
1016	竪穴住居27	弥生土器	甕	—	6.6	(8.0)	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	ススB
1017	竪穴住居27	弥生土器	甕	—	4.5	(7.1)	赤灰色(10R6/2)	細砂	黒斑C
1018	竪穴住居27	弥生土器	甕	—	4.8	(7.1)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂	
1019	竪穴住居27	弥生土器	甕	—	3.8	(14.1)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	粗砂	黒斑BC
1020	竪穴住居27	弥生土器	甕	—	3.8	(9.9)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	ススB
1021	竪穴住居27	弥生土器	甕	—	4.2	(14.9)	褐灰色(7.5YR4/1)	細砂	
1022	竪穴住居27	弥生土器	甕	—	5.2	(10.6)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、粗砂	ススB
1023	竪穴住居27	弥生土器	甕	—	5.8	(15.9)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂、粗砂	ススB
1024	竪穴住居27	弥生土器	甕	—	5.6	(11.3)	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	赤色顔料？　黒斑C
1025	竪穴住居27	弥生土器	高杯	13.4	—	(8.0)	淡橙色(5YR8/3)	精良	
1026	竪穴住居27	弥生土器	高杯	14.7	10.7	9.7	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	透し孔3ヶ所残存　黒斑B
1027	竪穴住居27	弥生土器	高杯	15.9	10.8	9.0	橙色(5YR6/8)	精良、細砂	透し孔4ヶ所
1028	竪穴住居27	弥生土器	高杯	15.6	—	(6.3)	黄橙色(10YR8/6)	細砂、粗砂	
1029	竪穴住居27	弥生土器	高杯	16.4	12.9	10.7	橙色(5YR7/8)	精良、細砂	透し孔4ヶ　ほぼ完形
1030	竪穴住居27	弥生土器	高杯	16.6	11.2	9.6	橙色(2.5YR7/8)	精良(水漉粘土)	透し孔4ヶ
1031	竪穴住居27	弥生土器	高杯	16.5	—	(8.2)	橙色(2.5YR6/6)	精良	
1032	竪穴住居27	弥生土器	高杯	17.0	12.6	10.7	橙色(5YR7/8)	精良	透し孔4ヶ所
1033	竪穴住居27	弥生土器	高杯	15.6	10.8	9.7	橙色(5YR6/6)	精良	透し孔4ヶ所
1034	竪穴住居27	弥生土器	高杯	16.7	—	(9.0)	橙色(5YR6/6)	精良	黒斑AB
1035	竪穴住居27	弥生土器	高杯	16.6	—	(5.3)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
1036	竪穴住居27	弥生土器	高杯	17.4	12.4	11.0	橙色(5YR6/6)	精良	透し孔4ヶ

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
1037	竪穴住居27	弥生土器	高杯	17.3	11.3	9.8	橙色(5YR6/6)	精良、細砂	黒斑ＡＢ　ほぼ完形
1038	竪穴住居27	弥生土器	高杯	16.7	12.6	11.0	橙色(2.5YR7/6)	精良	透し孔４ヶ
1039	竪穴住居27	弥生土器	高杯	16.8	11.2	11.8	灰白色(10YR8/2)	細砂	透し孔２ヶ残存　黒斑ＡＢ
1040	竪穴住居27	弥生土器	高杯	16.8	11.6	9.7	橙色(5YR6/8)	精良、細砂	透し孔４ヶ
1041	竪穴住居27	弥生土器	高杯	15.2	12.0	10.9	橙色(5YR7/6)	細砂	透し孔３ヶ残存
1042	竪穴住居27	弥生土器	高杯	17.3	12.9	11.9	淡赤橙色(2.5YR7/4)	精良	透し孔１ヶ残存
1043	竪穴住居27	弥生土器	高杯	17.1	12.0	11.0	橙色(5YR6/8)	精良	透し孔４ヶ　ほぼ完形
1044	竪穴住居27	弥生土器	高杯	19.1	—	(4.9)	橙色(5YR7/6)	精良	
1045	竪穴住居27	弥生土器	高杯	17.6	—	(6.6)	橙色(2.5YR7/8)	精良	
1046	竪穴住居27	弥生土器	高杯	19.2	—	(6.8)	橙色(5YR6/8)	精良、細砂	
1047	竪穴住居27	弥生土器	高杯	—	11.8	(4.8)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良、細砂	透し孔個数不明１ヶ残存
1048	竪穴住居27	弥生土器	高杯	—	12.3	(2.9)	橙色(5YR7/6)	精良、細砂	透し孔４ヶ所、赤色顔料？
1049	竪穴住居27	弥生土器	高杯	—	14.0	(6.3)	橙色(5YR7/6)	細砂	透し孔４ヶ所　黒斑ＢＣ
1050	竪穴住居27	弥生土器	高杯	19.2	—	(8.0)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	黒斑Ａ
1051	竪穴住居27	弥生土器	高杯	—	12.1	(6.8)	橙色(5YR7/6)	精良(水漉粘土)	透し孔４ヶ
1052	竪穴住居27	弥生土器	台付鉢	10.4	3.1	7.3	灰白色(7.5YR8/2)	粗砂	黒斑ＡＢＣ
1053	竪穴住居27	弥生土器	鉢	12.0	2.1	8.6	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
1054	竪穴住居27	弥生土器	鉢	14.0	3.5	10.2	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	黒斑ＡＢＣ
1055	竪穴住居27	弥生土器	鉢	10.9	2.9	9.1	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	黒斑Ａ
1056	竪穴住居27	弥生土器	鉢	14.4	2.0	7.7	灰白色(10YR8/2)	細砂	赤色顔料　黒斑Ｂ　ほぼ完形
1057	竪穴住居27	弥生土器	鉢	16.6	—	(8.7)	淡橙色(5YR8/4)	細砂、礫	黒斑ＡＢＣ・Ｂ
1058	竪穴住居27	弥生土器	鉢	24.1	5.5	13.8	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
1059	竪穴住居27	弥生土器	台付鉢	12.0	11.5	14.4	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	透し孔４ヶ所
1060	竪穴住居27	弥生土器	台付鉢	10.4	—	(8.6)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	
1061	竪穴住居27	弥生土器	台付鉢	11.6	3.6	7.7	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
1062	竪穴住居27	弥生土器	鉢	14.6	—	(6.9)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
1063	竪穴住居27	弥生土器	鉢	13.6	4.3	9.2	明褐灰色(5YR7/2)	細砂	黒斑ＢＣ
1064	竪穴住居27	弥生土器	鉢	17.2	—	(6.8)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	黒斑Ｂ
1065	竪穴住居27	弥生土器	鉢	16.7	—	(5.8)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、粗砂	
1066	竪穴住居27	弥生土器	鉢	(12.2)	—	(6.6)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	黒斑Ｃ
1067	竪穴住居27	弥生土器	甕	12.6	—	(6.8)	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	
1068	竪穴住居27	弥生土器	鉢	12.2	2.8	7.6	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	
1069	竪穴住居27	弥生土器	甕	(11.8)	—	(9.4)	浅黄橙色(7.5YR8/2)	細砂	ススＣ
1070	竪穴住居27	弥生土器	鉢	14.8	3.8	7.7	鈍い黄橙色(10YR8/3)	細砂	黒斑ＡＢ・Ｃ
1071	竪穴住居27	弥生土器	鉢	(14.8)	—	(2.3)	灰色(10YR5/1)	細砂	
1072	竪穴住居27	弥生土器	鉢	(14.4)	—	(10.5)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	黒斑Ｃ
1073	竪穴住居27	弥生土器	鉢	22.2	7.2	14.2	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	黒斑ＢＣ
1074	竪穴住居27	弥生土器	鉢	15.9	3.9	11.2	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂、粗砂、礫	
1075	竪穴住居27	弥生土器	鉢	17.1	4.5	10.1	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
1076	竪穴住居27	弥生土器	鉢	11.1	3.4	7.0	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	黒斑Ｃ
1077	竪穴住居27	弥生土器	鉢	14.4	3.5	9.6	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、粗砂	黒斑Ｃ
1078	竪穴住居27	弥生土器	鉢	(15.6)	—	(11.2)	褐灰色(5YR6/1)	細砂	黒斑ＡＢＣ
1079	竪穴住居27	弥生土器	鉢	19.0	6.0	16.5	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂、粗砂	黒斑ＢＣ
1080	竪穴住居27	弥生土器	鉢	17.3	4.6	17.3	橙色(2.5YR6/8)	細砂、粗砂	歪みあり　黒斑Ｂ　ほぼ完形
1081	竪穴住居27	弥生土器	鉢	19.5	5.1	9.5	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
1082	竪穴住居27	弥生土器	鉢	—	5.1	(14.5)	橙色(7.5YR7/6)	粗砂、礫	黒斑ＢＣ
1083	竪穴住居27	弥生土器	甕	(14.0)	—	(11.7)	橙色(5YR6/8)	粗砂	
1084	竪穴住居27	弥生土器	鉢	15.2	3.4	11.8	灰白色(5YR8/2)	細砂	穿孔２ヶ
1085	竪穴住居27	弥生土器	鉢	(16.4)	6.0	13.2	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	黒斑Ｂ
1086	竪穴住居27	弥生土器	台付鉢	—	3.9	8.7	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	
1087	竪穴住居27	弥生土器	台付鉢	19.8	8.1	13.4	淡橙色(5YR8/4)	細砂、粗砂、礫	台裏面に木の葉のあとがある
1088	竪穴住居27	弥生土器	台付鉢	—	10.6	(3.5)	橙色(2.5YR6/8)	細砂、粗砂	
1089	竪穴住居27	弥生土器	小型壺	7.4	2.2	6.7	淡橙色(5YR8/4)	精良	ススＢ　黒斑ＢＣ
1090	竪穴住居27	弥生土器	鉢	9.0	3.6	6.8	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	黒斑Ｃ　ほぼ完形
1091	竪穴住居27	弥生土器	鉢	11.7	—	(7.9)	橙色(5YR7/6)	精良(水漉粘土)	
1092	竪穴住居27	弥生土器	鉢	12.5	3.3	7.9	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂、粗砂	黒斑ＡＢＣ　ほぼ完形
1093	竪穴住居27	弥生土器	鉢	11.5	3.1	8.4	灰白色(5YR8/2)	細砂	黒斑ＢＣ
1094	竪穴住居27	弥生土器	鉢	(12.9)	4.0	(7.4)	明褐灰色(7.5YR7/1)	細砂	黒斑ＢＣ
1095	竪穴住居27	弥生土器	鉢	12.4	2.4	7.8	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	
1096	竪穴住居27	弥生土器	鉢	(11.7)	3.2	8.2	灰白色(10YR8/1)	細砂	黒斑Ｂ
1097	竪穴住居27	弥生土器	鉢	12.7	4.1	7.7	橙色(5YR8/6)	細砂、粗砂、礫	
1098	竪穴住居27	弥生土器	鉢	13.6	3.2	7.8	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
1099	竪穴住居27	弥生土器	鉢	13.8	3.1	8.8	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂、礫	黒斑ＢＣ
1100	竪穴住居27	弥生土器	鉢	13.8	—	(8.5)	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	
1101	竪穴住居27	弥生土器	鉢	(14.3)	—	(7.7)	鈍い橙色(10YR7/3)	細砂	
1102	竪穴住居27	弥生土器	鉢	14.4	—	9.8	橙色(2.5YR6/6)	粗砂、礫	
1103	竪穴住居27	弥生土器	鉢	(15.4)	—	8.8	鈍い橙色(N6/3)	細砂、粗砂	黒斑ＡＢＣ
1104	竪穴住居27	弥生土器	鉢	(16.6)	3.0	6.4	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	黒斑ＡＢＣ
1105	竪穴住居27	弥生土器	鉢	17.5	—	(6.2)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	黒斑ＡＢ
1106	竪穴住居27	弥生土器	鉢	17.3	4.9	(9.3)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	黒斑Ｂ・Ｃ
1107	竪穴住居27	弥生土器	鉢	14.7	3.5	9.3	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
1108	竪穴住居27	弥生土器	鉢	15.4	5.2	9.1	淡橙色(5YR8/3)	細砂、粗砂	黒斑Ｃ
1109	竪穴住居27	弥生土器	鉢	17.2	4.4	9.9	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	黒斑Ｂ・Ｃ
1110	竪穴住居27	弥生土器	鉢	17.3	4.2	9.7	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	黒斑ＡＢ
1111	竪穴住居27	弥生土器	鉢	14.8	—	(8.0)	橙色(5YR7/6)	細砂	

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
1112	竪穴住居27	弥生土器	鉢	15.6	4.4	(9.8)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	黒斑ＢＣ
1113	竪穴住居27	弥生土器	鉢	17.2	3.4	10.1	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	
1114	竪穴住居27	弥生土器	鉢	17.0	5.1	10.7	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂	黒斑ＡＢＣ
1115	竪穴住居27	弥生土器	鉢	23.7	—	(13.8)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	黒斑Ｂ
1116	竪穴住居27	弥生土器	鉢	(25.6)	—	(6.3)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
1117	竪穴住居27	弥生土器	鉢	—	8.2	(21.0)	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	黒斑ＡＢ・ＡＢＣ
1118	竪穴住居27	弥生土器	鉢	45.2	12.1	27.2	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	
1119	竪穴住居28	土師器	壺	—	—	—	橙色(5YR6/6)	精良	棒状浮文２個１対４組
1120	竪穴住居28	土師器	甕	13.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	櫛描沈線８条
1121	竪穴住居28	土師器	甕	(14.5)	—	—	鈍い黄橙色(10YR6/4)	細砂	櫛描沈線９条
1122	竪穴住居28	弥生土器	甕	24.1	—	—	灰褐色(5YR4/2)	細砂	
1123	竪穴住居28	土師器	台付鉢？	9.5	—	—	橙色(7.5YR7/6)	精良	沈線２条
1124	竪穴住居28	弥生土器	鉢	11.0	3.7	6.6	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	ほぼ完形
1125	竪穴住居29	弥生土器	甕	13.1	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂、粗砂	
1126	竪穴住居29	弥生土器	鉢	18.4	5.6	8.2	赤色(10R5/6)	細砂、粗砂	歪みあり　黒斑ＢＣ？
1127	竪穴住居30	弥生土器	壺	(20.6)	—	—	褐灰色(5YR5/1)	細砂	
1128	竪穴住居30	弥生土器	甕	(13.0)	—	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	歪みあり
1129	竪穴住居30	弥生土器	甕	(13.3)	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	櫛描沈線６条？
1130	竪穴住居30	弥生土器	甕	(16.0)	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
1131	竪穴住居30	弥生土器	鉢	13.4	3.6	6.5	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	
1132	竪穴住居30	弥生土器	鉢	14.6	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	
1133	竪穴住居30	弥生土器	鉢	15.0	4.9	8.5	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、粗砂	内面底部に煮たき痕　ススC'
1134	竪穴住居32	弥生土器	甕	12.8	3.6	18.9	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂、礫	ススC'　ほぼ完形
1135	竪穴住居32	弥生土器	甕	(12.4)	—	—	褐灰色(7.5YR5/1)	細砂、礫	
1136	竪穴住居32	弥生土器	甕	(14.2)	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
1137	竪穴住居32	弥生土器	甕	14.2	—	—	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂	
1138	竪穴住居32	弥生土器	甕	(13.0)	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
1139	竪穴住居32	弥生土器	甕	(13.0)	—	—	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂、礫	
1140	竪穴住居32	弥生土器	鉢	15.2	—	—	橙色(2.5YR7/8)	精良	
1141	竪穴住居34	弥生土器	高杯	(17.7)	12.0	9.7	橙色(5YR6/6)	精良	透し孔４ヶ所？
1142	竪穴住居35	弥生土器	甕	—	5.0	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	外面ハケメ　ススC
1143	竪穴住居35	弥生土器	高杯	(22.6)	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	
1144	竪穴住居35	弥生土器	鉢	(15.4)	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	
1145	竪穴住居35	弥生土器	甕	12.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	黒斑ＡＢ
1146	竪穴住居35	弥生土器	甕	14.0	—	—	赤橙色(10R6/6)	細砂	ススC
1147	竪穴住居35	弥生土器	甕	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
1148	竪穴住居35	弥生土器	甕	15.3	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	ススA
1149	竪穴住居35	弥生土器	甕	12.0	—	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	外面工具痕か
1150	竪穴住居35	弥生土器	甕	13.1	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	
1151	竪穴住居35	弥生土器	甕	12.8	—	—	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	ススB'
1152	竪穴住居35	弥生土器	甕	14.0	—	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	ススB'
1153	竪穴住居35	弥生土器	甕	14.0	—	—	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	
1154	竪穴住居35	弥生土器	甕	14.4	—	—	淡橙色(5YR8/3)	細砂	
1155	竪穴住居35	弥生土器	甕	15.2	—	—	鈍い褐色(7.5YR7/3)	細砂	
1156	竪穴住居35	弥生土器	甕	17.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	
1157	竪穴住居35	弥生土器	甕	—	3.0	—	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	ケズリ工具端の痕跡　ススA
1158	竪穴住居35	弥生土器	高杯	17.0	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
1159	竪穴住居35	弥生土器	高杯	16.6	—	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	ススB
1160	竪穴住居35	弥生土器	高杯	—	11.8	—	橙色(7.5YR7/6)	精良	小孔あり、透し孔４方向
1161	竪穴住居35	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	透し孔あり、数不明
1162	竪穴住居35	弥生土器	鉢	16.2	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
1163	竪穴住居35	弥生土器	鉢	(14.9)	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	工具ナデ　黒斑Ｂ　ほぼ完形
1164	竪穴住居35	弥生土器	鉢	16.0	—	—	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	被熱？　ススB　ほぼ完形
1165	竪穴住居35	弥生土器	鉢	(31.6)	—	—	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	黒斑Ａ
1166	竪穴住居35	弥生土器	台付鉢	13.4	—	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	ススA
1167	竪穴住居35	弥生土器	台付鉢	12.4	4.8	8.3	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	ほぼ完形
1168	竪穴住居35	弥生土器	台付鉢	—	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	ススC
1169	竪穴住居35	弥生土器	台付鉢	—	3.8	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
1170	竪穴住居35	弥生土器	台付鉢	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
1171	竪穴住居35	弥生土器	台付鉢	(14.5)	7.2	12.3	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	ヘラケズリ後ハケメ
1172	竪穴住居36	弥生土器	甕	16.0	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	ススC
1173	竪穴住居36	弥生土器	甕	15.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	黒斑Ａ・ＡＢ
1174	竪穴住居36	弥生土器	甕	13.0	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、粗砂、礫	
1175	竪穴住居36	弥生土器	甕	14.0	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、粗砂、礫	
1176	竪穴住居36	弥生土器	甕	14.6	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	
1177	竪穴住居36	弥生土器	甕	16.6	5.0	25.6	灰白色(10YR8/2)	細砂	ススB　黒斑A
1178	竪穴住居36	弥生土器	壺	—	9.0	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂、粗砂	
1179	竪穴住居36	弥生土器	甕	—	5.0	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂、粗砂、礫	外面ハケメ、被熱　黒斑Ｂ・C
1180	竪穴住居36	弥生土器	甕	—	4.7	—	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	外面ハケメ
1181	竪穴住居36	弥生土器	鉢	—	5.0	—	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂、粗砂、礫	黒斑Ｂ
1182	竪穴住居36	弥生土器	高杯	18.0	—	—	橙色(5YR7/8)	細砂	
1183	竪穴住居36	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR7/8)	細砂	
1184	竪穴住居36	弥生土器	高杯	—	12.5	—	灰黄褐色(10YR4/2)	細砂	透し孔４ヶ
1185	竪穴住居36	弥生土器	鉢	13.2	6.0	8.0	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	内面赤色顔料　完形
1186	竪穴住居36	弥生土器	鉢	16.0	—	6.9	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
1187	竪穴住居36	弥生土器	台付鉢	12.1	4.6	7.5	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂、粗砂	
1188	竪穴住居36	弥生土器	台付鉢	—	6.7	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂、粗砂、礫	
1189	竪穴住居36	弥生土器	台付鉢	14.7	6.7	9.2	橙色(2.5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	
1190	竪穴住居36	弥生土器	台付鉢	18.4	6.6	12.5	橙色(2.5YR7/6)	細砂	
1191	竪穴住居37	弥生土器	壺	17.9	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂	
1192	竪穴住居37	弥生土器	壺・甕?	—	4.8	—	灰褐色(5YR5/2)	細砂	外面被熱、穿孔
1193	竪穴住居37	弥生土器	手捏土器	8.0	—	4.7	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	黒斑ＡＢＣ　完形
1194	竪穴住居38	弥生土器	壺	16.6	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂	沈線10条
1195	竪穴住居38	弥生土器	壺	—	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/6)	細砂、粗砂	刺突文
1196	竪穴住居38	弥生土器	甕	15.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂	沈線５条
1197	竪穴住居38	弥生土器	壺	15.1	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂、粗砂、礫	刺突文
1198	竪穴住居38	弥生土器	壺・甕	—	6.2	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	
1199	竪穴住居38	弥生土器	壺・甕	—	6.2	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂、粗砂	黒斑Ｃ
1200	竪穴住居38	弥生土器	高杯	21.2	—	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂、粗砂	
1201	竪穴住居38	弥生土器	高杯	23.6	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	
1202	竪穴住居38	弥生土器	高杯	24.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂、粗砂、礫	外面ヘラミガキ
1203	竪穴住居39	弥生土器	甕	12.0	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
1204	竪穴住居39	弥生土器	壺・甕?	—	10.2	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	外面ヘラミガキ　ススＣ
1205	竪穴住居39	弥生土器	甕	13.6	—	7.0	浅黄橙色(7.5YR8/3)	粗砂	黒斑Ｃ
1206	竪穴住居39	弥生土器	高杯	10.1	—	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂	黒斑Ａ
1207	竪穴住居39	弥生土器	高杯	—	12.8	—	鈍い黄橙色(10YR8/3)	細砂	竹管文
1208	竪穴住居40	弥生土器	甕	8.7	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	ススＢ'
1209	竪穴住居40	弥生土器	甕	(14.0)	—	—	灰褐色(5YR6/2)	細砂、粗砂	
1210	竪穴住居40	弥生土器	高杯	20.6	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
1211	竪穴住居40	弥生土器	高杯	—	10.1	—	橙色(5YR7/6)	細砂	竹管文
1212	竪穴住居40	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	
1213	竪穴住居40	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
1214	竪穴住居41	弥生土器	壺	18.0	—	—	橙色(5YR7/8)	細砂	黒斑Ｂ
1215	竪穴住居41	弥生土器	壺	—	9.4	—	橙色(5YR6/8)	細砂	黒斑Ｃ
1216	竪穴住居41	弥生土器	壺	17.6	8.0	35.9	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	黒斑Ａ・Ｂ・Ｃ　ほぼ完形
1217	竪穴住居41	弥生土器	甕	8.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	
1218	竪穴住居41	弥生土器	甕	13.0	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	
1219	竪穴住居41	弥生土器	甕	15.1	—	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	
1220	竪穴住居41	弥生土器	甕	—	5.2	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂、粗砂	底部外面ハケメ
1221	竪穴住居41	弥生土器	甕	15.0	5.7	28.3	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂、粗砂	ススＢ'
1222	竪穴住居41	弥生土器	高杯	18.9	—	—	橙色(5YR7/6)	精良	黒斑Ａ
1223	竪穴住居41	弥生土器	高杯	23.6	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂、粗砂	
1224	竪穴住居41	弥生土器	高杯	—	12.5	—	橙色(5YR7/6)	細砂	透し孔４ヶ
1225	竪穴住居41	弥生土器	鉢	7.1	3.1	3.7	橙色(5YR6/6)	細砂	
1226	竪穴住居41	弥生土器	鉢	8.1	3.2	6.8	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂、粗砂	ほぼ完形
1227	竪穴住居41	弥生土器	高杯	—	9.3	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
1228	竪穴住居41	弥生土器	鉢	—	11.2	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	黒斑Ｃ
1229	竪穴住居43	弥生土器	壺	17.2	11.2	35.9	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	黒斑Ｂ・Ｃ　ほぼ完形
1230	竪穴住居43	弥生土器	甕	9.3	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	
1231	竪穴住居43	弥生土器	甕	13.0	4.8	—	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂、粗砂、礫	
1232	竪穴住居44	弥生土器	壺	20.2	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂、粗砂、礫	刺突文
1233	竪穴住居44	弥生土器	壺	21.6	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂、礫	螺旋状の沈線、刺突文
1234	竪穴住居44	弥生土器	壺	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂	刺突文
1235	竪穴住居44	弥生土器	壺	—	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	刺突文
1236	竪穴住居44	弥生土器	壺	—	7.8	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	外面ヘラミガキ　黒斑Ｃ
1237	竪穴住居44	弥生土器	壺	—	7.8	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	外面ハケメ
1238	竪穴住居44	弥生土器	壺	—	9.4	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂、粗砂	
1239	竪穴住居44	弥生土器	甕	11.4	—	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂	
1240	竪穴住居44	弥生土器	甕	17.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
1241	竪穴住居44	弥生土器	甕	12.6	—	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂、粗砂	
1242	竪穴住居44	弥生土器	甕	14.0	—	—	赤橙色(10R6/6)	細砂、粗砂	
1243	竪穴住居44	弥生土器	甕	(15.0)	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	ススＢ'
1244	竪穴住居44	弥生土器	甕	(16.0)	—	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂	
1245	竪穴住居44	弥生土器	甕	—	6.6	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂、粗砂	
1246	竪穴住居44	弥生土器	高杯	(15.8)	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	内外面ヘラミガキ、ヨコナデ
1247	竪穴住居44	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	透し孔３ヶ
1248	竪穴住居44	弥生土器	高杯	—	9.8	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂	透し孔２ヶ残存
1249	竪穴住居44	弥生土器	高杯	—	10.6	—	淡赤橙色(2.5YR7/3)	細砂	透し孔１ヶ残存
1250	竪穴住居44	弥生土器	高杯	—	16.0	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂、粗砂	赤色顔料
1251	竪穴住居44	弥生土器	台付鉢	19.5	12.0	21.8	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂、粗砂	透し孔４ヶ
1252	竪穴住居44	弥生土器	器台	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	刺突文　黒斑Ａ
1253	竪穴住居45	弥生土器	壺	12.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
1254	竪穴住居45	弥生土器	壺	15.0	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	外面ハケメ
1255	竪穴住居45	弥生土器	甕	15.4	9.0	37.6	橙色(5YR7/6)	細砂	ほぼ完形
1256	竪穴住居45	弥生土器	壺・甕?	—	5.6	—	橙色(5YR6/6)	細砂	外面ヘラミガキ、３方向　ススＣ
1257	竪穴住居45	弥生土器	壺・甕?	—	5.8	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	ススＣ
1258	竪穴住居45	弥生土器	鉢	8.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
1259	竪穴住居46	弥生土器	壺	12.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
1260	竪穴住居46	弥生土器	壺	13.0	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	
1261	竪穴住居46	弥生土器	壺	—	—	—	赤色(10R5/8)	細砂	内外面赤色顔料

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
1262	竪穴住居46	弥生土器	甕	12.2	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	
1263	竪穴住居46	弥生土器	甕	(11.6)	—	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	
1264	竪穴住居46	弥生土器	甕	16.6	—	—	橙色(5YR7/8)	細砂	
1265	竪穴住居46	弥生土器	甕	23.0	—	—	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	
1266	竪穴住居46	弥生土器	甕	—	8.6	—	赤橙色(10R6/8)	細砂	外面ヘラミガキ
1267	竪穴住居46	弥生土器	甕	—	4.7	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂	
1268	竪穴住居46	弥生土器	甕	—	4.4	—	鈍い橙色(5YR7/6)	細砂	
1269	竪穴住居46	弥生土器	壺	—	8.2	—	鈍い黄橙色(10YR)	細砂	黒斑C
1270	竪穴住居46	弥生土器	甕	—	7.4	—	明黄褐色(10YR7/6)	細砂	外面ハケメ後ナデ　黒斑C
1271	竪穴住居46	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	内外面ヘラミガキ、ヨコナデ
1272	竪穴住居46	弥生土器	高杯	23.4	—	—	赤橙色(10R6/8)	細砂、礫	
1273	竪穴住居46	弥生土器	高杯	—	13.8	—	鈍い橙色(2.5YR6/4)	細砂	4条1組のヘラ描き沈線
1274	竪穴住居46	弥生土器	高杯	—	8.6	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂	
1275	竪穴住居46	弥生土器	鉢	27.0	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
1276	竪穴住居46	弥生土器	鉢	32.4	—	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂、粗砂	
1277	竪穴住居46	弥生土器	鉢	11.4	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
1278	竪穴住居46	弥生土器	小型壺	4.2	3.0	7.5	褐灰色(10YR5/1)	細砂	ほぼ完形
1279	竪穴住居46	弥生土器	台付鉢	—	5.8	—	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	
1280	竪穴住居46	弥生土器	製塩土器	—	5.4	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
1281	竪穴住居47	弥生土器	壺	7.8	3.0	9.1	浅黄橙色(7.5YR8/6)	細砂、粗砂	ほぼ完形
1282	竪穴住居47	弥生土器	長頸壺	18.9	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	沈線
1283	竪穴住居47	弥生土器	甕	11.6	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂	
1284	竪穴住居47	弥生土器	甕	14.6	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	
1285	竪穴住居47	弥生土器	甕	11.4	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	ススB
1286	竪穴住居47	弥生土器	甕	17.0	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂、礫	
1287	竪穴住居47	弥生土器	甕	18.0	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂、礫	
1288	竪穴住居47	弥生土器	甕	—	7.0	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	
1289	竪穴住居47	弥生土器	甕	—	8.0	—	褐色(7.5YR4/3)	細砂、粗砂	
1290	竪穴住居47	弥生土器	甕	—	5.6	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	
1291	竪穴住居47	弥生土器	甕	—	5.6	—	明赤褐色(5YR5/8)	細砂、粗砂	
1292	竪穴住居47	弥生土器	甕	—	11.6	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	粗砂	
1293	竪穴住居47	弥生土器	甕	—	8.5	—	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂、粗砂	
1294	竪穴住居47	弥生土器	高杯	19.6	—	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂、粗砂	
1295	竪穴住居47	弥生土器	高杯	19.6	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂、粗砂	内面格子状にヘラミガキ
1296	竪穴住居47	弥生土器	高杯	21.0	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	
1297	竪穴住居47	弥生土器	高杯	21.2	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	
1298	竪穴住居47	弥生土器	高杯	12.9	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
1299	竪穴住居47	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	
1300	竪穴住居47	弥生土器	鉢	18.1	3.8	7.5	鈍い黄褐色(10YR5/3)	細砂、粗砂	
1301	竪穴住居47	弥生土器	鉢	27.0	—	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	
1302	竪穴住居47	弥生土器	鉢	30.0	—	—	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂、粗砂、礫	
1303	竪穴住居47	弥生土器	器台	18.2	16.3	12.3	橙色(2.5YR6/8)	細砂	透し孔6ヶ
1304	竪穴住居49	弥生土器	甕	16.4	—	(5.5)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
1305	竪穴住居49	弥生土器	甕	14.0	—	(6.0)	橙色(5YR6/8)	粗砂、礫	
1306	竪穴住居49	弥生土器	甕	—	5.4	(7.0)	鈍い黄橙色(10YR6/4)	粗砂	
1307	竪穴住居49	弥生土器	甕	—	4.8~5.5	(4.0)	赤色(10R5/6)	細砂	
1308	竪穴住居49	弥生土器	高杯	24.0	—	(6.5)	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	円盤充填
1309	竪穴住居49	弥生土器	高杯	—	—	(10.3)	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	円盤充填、透し孔3
1310	竪穴住居49	弥生土器	壺	9.4	3.8	10.8	明赤褐色(2.5YR5/8)	粗砂、礫	
1311	竪穴住居50	弥生土器	甕	(14.6)	—	(7.5)	灰褐色(5YR5/2)	細砂	
1312	竪穴住居50	弥生土器	高杯	—	(11.6)	(4.0)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	透し孔4
1313	竪穴住居52	弥生土器	甕	11.6	—	(2.9)	黄橙色(7.5YR7/8)	細砂	
1314	竪穴住居52	弥生土器	甕	(13.0)	—	(4.2)	明褐灰色(7.5YR7/1)	細砂	
1315	袋状土壙21	弥生土器	壺	14.2	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	
1316	袋状土壙21	弥生土器	壺	14.8	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	
1317	袋状土壙21	弥生土器	甕	13.4	—	—	明褐色(7.5YR5/6)	細砂、粗砂	
1318	袋状土壙21	弥生土器	甕	10.6	4.7	18.0	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	黒斑C？
1319	袋状土壙21	弥生土器	鉢	8.5	—	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	
1320	袋状土壙21	弥生土器	高杯	—	14.0	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	2列組4方向、未貫通透かし孔
1321	袋状土壙21	弥生土器	高杯	24.4	14.4	22.8	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	
1322	袋状土壙22	弥生土器	壺	14.6	7.4	33.4	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂	貝殻腹縁文2段　黒斑BC
1323	袋状土壙22	弥生土器	甕	12.7	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
1324	袋状土壙22	弥生土器	直口壺	9.2	5.2	15.0	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	黒斑AB・B
1325	袋状土壙22	弥生土器	高杯	—	13.7	—	橙色(5YR7/8)	細砂、粗砂	透し孔3方向3段　ス
1326	袋状土壙24	弥生土器	壺	11.5	—	—	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	
1327	袋状土壙24	弥生土器	甕	14.6	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂	ススB'
1328	袋状土壙24	弥生土器	甕	11.5	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	ススB'
1329	袋状土壙24	弥生土器	甕	14.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
1330	袋状土壙24	弥生土器	甕	16.2	—	—	橙色(5YR7/8)	細砂	
1331	袋状土壙24	弥生土器	高杯	21.0	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
1332	袋状土壙24	弥生土器	高杯	28.8	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	
1333	袋状土壙24	弥生土器	高杯	—	13.5	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	穿孔10ヶ残存、未貫通
1334	袋状土壙24	弥生土器	高杯	—	14.4	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂、礫	ヘラ描き沈線
1335	袋状土壙24	弥生土器	台付鉢	—	12.8	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	ケズリ後粗いヘラミガキ
1336	袋状土壙24	弥生土器	鉢	33.4	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
1337	袋状土壙24	弥生土器	鉢	41.1	15.3	22.4	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	外面ヘラケズリ後ナデ
1338	袋状土壙25	弥生土器	壺	15.0	—	—	赤色(10R5/8)	細砂	
1339	袋状土壙25	弥生土器	壺	—	8.8	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	外面ヘラミガキ
1340	袋状土壙25	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
1341	袋状土壙26	弥生土器	甕	(18.0)	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	
1342	袋状土壙26	弥生土器	甕	—	7.0	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂、礫	
1343	袋状土壙27	弥生土器	甕	9.5	5.8	18.0	橙色(5YR6/6)	細砂	ススA　ほぼ完形
1344	袋状土壙27	弥生土器	高杯	—	12.2	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	沈線５条、ヘラ描き線刻
1345	袋状土壙28	弥生土器	壺	15.2	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
1346	袋状土壙28	弥生土器	壺	15.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	黒斑A
1347	袋状土壙28	弥生土器	壺	16.4	—	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂	
1348	袋状土壙28	弥生土器	壺	16.8	—	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	
1349	袋状土壙28	弥生土器	壺	19.4	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	螺旋状沈線、鋸歯文１ヶのみ
1350	袋状土壙28	弥生土器	壺	20.3	—	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂、粗砂	螺旋状沈線
1351	袋状土壙28	弥生土器	壺	19.9	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
1352	袋状土壙28	弥生土器	壺	21.4	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂	沈線16条、列点文
1353	袋状土壙28	弥生土器	壺	20.8	—	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	鋸歯文、螺旋状の沈線
1354	袋状土壙28	弥生土器	壺	21.5	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂、粗砂、礫	沈線27条、列点文　ススC
1355	袋状土壙28	弥生土器	壺	21.8	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂、礫	沈線６条
1356	袋状土壙28	弥生土器	壺	19.2	—	—	淡橙色(5YR8/3)	細砂、粗砂	沈線11条、列点文
1357	袋状土壙28	弥生土器	壺	20.2	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	沈線10条
1358	袋状土壙28	弥生土器	壺	21.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	螺旋状沈線
1359	袋状土壙28	弥生土器	壺	20.4	—	37.0	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂、粗砂	鋸歯文(全周しない)、かご目
1360	袋状土壙28	弥生土器	壺	20.5	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂	螺旋状沈線
1361	袋状土壙28	弥生土器	壺	21.4	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	螺旋状沈線
1362	袋状土壙28	弥生土器	壺	—		—	淡橙色(5YR8/3)	細砂	
1363	袋状土壙28	弥生土器	壺	22.5	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂、礫	沈線13条、列点文
1364	袋状土壙28	弥生土器	壺	—	8.2	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂、礫	沈線11条残存、列点文
1365	袋状土壙28	弥生土器	壺	—	8.2	—	明赤灰色(2.5YR7/2)	細砂、粗砂、礫	底部外面ヘラミガキ　黒斑C
1366	袋状土壙28	弥生土器	壺	—	8.4	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
1367	袋状土壙28	弥生土器	壺	—	8.2	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂	ススC
1368	袋状土壙28	弥生土器	壺	—	7.6	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	
1369	袋状土壙28	弥生土器	壺	—	8.4	—	鈍い黄橙色(10YR6/4)	粗砂	
1370	袋状土壙28	弥生土器	壺	—	8.6	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂、礫	
1371	袋状土壙28	弥生土器	壺	—	8.4	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
1372	袋状土壙28	弥生土器	壺	—	7.2	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	外面ヘラミガキ
1373	袋状土壙28	弥生土器	壺	—	8.2	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	かご目
1374	袋状土壙28	弥生土器	壺	—	10.6	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	
1375	袋状土壙28	弥生土器	壺	—	8.2	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	ススA
1376	袋状土壙28	弥生土器	壺	—	9.4	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	ススC
1377	袋状土壙28	弥生土器	壺	—	11.6	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	外面ヘラミガキ
1378	袋状土壙28	弥生土器	壺	—	8.5	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	ススC
1379	袋状土壙28	弥生土器	壺	—	10.5	—	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	
1380	袋状土壙28	弥生土器	台付壺	9.2	—	—	淡橙色(5YR8/4)	粗砂	
1381	袋状土壙28	弥生土器	甕	14.6	—	—	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	ススA
1382	袋状土壙28	弥生土器	甕	14.8	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	
1383	袋状土壙28	弥生土器	甕	12.6	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂、粗砂、礫	
1384	袋状土壙28	弥生土器	甕	(13.3)	—	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂	
1385	袋状土壙28	弥生土器	甕	13.1	—	—	鈍い黄橙色(10YR6/4)	細砂、粗砂	
1386	袋状土壙28	弥生土器	甕	15.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
1387	袋状土壙28	弥生土器	甕	13.3	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	ススA
1388	袋状土壙28	弥生土器	甕	16.2	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	
1389	袋状土壙28	弥生土器	甕	14.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
1390	袋状土壙28	弥生土器	甕	14.7	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	
1391	袋状土壙28	弥生土器	甕	15.8	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	
1392	袋状土壙28	弥生土器	甕	15.2	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂、粗砂	ススC'
1393	袋状土壙28	弥生土器	甕	24.4	—	—	橙色(2.5YR7/6)	粗砂	
1394	袋状土壙28	弥生土器	甕	—	4.4	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	
1394	袋状土壙28	弥生土器	甕	—	5.0	—	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	
1395	袋状土壙28	弥生土器	甕	—	5.2	—	浅黄橙色(10YR8/4)	粗砂	
1396	袋状土壙28	弥生土器	甕	—	5.4	—	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	
1398	袋状土壙28	弥生土器	甕	—	5.6	—	褐灰色(5YR5/1)	細砂、粗砂	
1399	袋状土壙28	弥生土器	甕	—	4.9	—	橙色(5YR6/6)	細砂	黒斑C
1400	袋状土壙28	弥生土器	甕	—	5.6	—	鈍い赤橙色(5YR5/4)	細砂	ススC
1401	袋状土壙28	弥生土器	甕	—	5.4	—	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	
1402	袋状土壙28	弥生土器	甕	—	4.4	—	赤灰色(2.5YR6/2)	粗砂	穿孔　ススC
1403	袋状土壙28	弥生土器	甕	—	7.6	—	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	
1404	袋状土壙28	弥生土器	高杯	21.4	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂	黒斑A
1405	袋状土壙28	弥生土器	高杯	22.4	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	
1406	袋状土壙28	弥生土器	高杯	20.5	—	—	橙色(2.5YR7/6)	粗砂、礫	
1407	袋状土壙28	弥生土器	高杯	22.6	—	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂、粗砂	
1408	袋状土壙28	弥生土器	高杯	—	13.6	—	橙色(5YR7/6)	細砂	透し孔上３・下４
1409	袋状土壙28	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	透し孔１ヶ残存
1410	袋状土壙28	弥生土器	高杯	—	11.8	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	透し孔上下２段　黒斑C
1411	袋状土壙28	弥生土器	高杯	—	11.3	—	橙色(2.5YR7/6)	粗砂	透し孔上下２段

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
1412	袋状土壙28	弥生土器	高杯	—	12.6	—	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	透し孔２ヶ残存　黒斑Ｃ
1413	袋状土壙28	弥生土器	高杯	—	16.0	—	橙色(5YR6/6)	細砂	透し孔２ヶ残存　黒斑Ｃ
1414	袋状土壙28	弥生土器	鉢	32.8	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂	
1415	袋状土壙28	弥生土器	台付鉢？	—	6.6	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	
1416	袋状土壙28	弥生土器	台付鉢？	—	9.3	—	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂	透し孔４方向
1417	袋状土壙28	弥生土器	台付鉢	—	8.7	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
1418	袋状土壙28	弥生土器	台付鉢？	—	10.0	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂、礫	透し孔２ヶ残存
1419	袋状土壙28	弥生土器	壺	(43.2)	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	ケズリ後ヘラミガキ
1420	袋状土壙28	弥生土器	鉢	46.8	14.4	20.5	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	外面ヘラケズリ　黒斑Ａ　ほぼ完形
1421	袋状土壙29	弥生土器	壺	16.2	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	螺旋状沈線８条残存
1422	袋状土壙29	弥生土器	甕	14.8	—	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂	
1423	袋状土壙29	弥生土器	甕	16.0	7.0	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	穿孔　ススＢ
1424	袋状土壙29	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
1425	袋状土壙31	弥生土器	壺	7.5	—	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂	螺旋状凹線７～８条　黒斑Ａ・Ｂ
1426	袋状土壙31	弥生土器	甕	15.8	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂、粗砂	黒斑Ｂ
1427	袋状土壙31	弥生土器	甕	—	8.5	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂、粗砂	
1428	袋状土壙31	弥生土器	高杯	22.0	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂	
1429	袋状土壙31	弥生土器	高杯	25.0	—	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂、粗砂	
1430	袋状土壙31	弥生土器	高杯	22.6	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂、礫	透し孔２段残存、各４方向
1431	袋状土壙31	弥生土器	高杯	—	11.0	—	橙色(5YR6/6)	細砂	未貫通の透し孔　黒斑Ｃ
1432	袋状土壙31	弥生土器	高杯	—	11.4	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	未貫通の透し孔
1433	袋状土壙31	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	沈線、透し孔あり
1434	袋状土壙31	弥生土器	高杯	8.5	4.5	8.6	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	黒斑Ａ
1435	袋状土壙32	弥生土器	壺	17.8	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂	沈線５条残存
1436	袋状土壙32	弥生土器	甕	13.8	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂、礫	ススＢ’
1437	袋状土壙32	弥生土器	甕	14.6	—	—	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂、粗砂、礫	
1438	袋状土壙32	弥生土器	甕	17.2	—	—	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂、粗砂、礫	
1439	袋状土壙32	弥生土器	甕	17.8	—	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂、粗砂	
1440	袋状土壙32	弥生土器	甕	—	6.7	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	黒斑Ｃ
1441	袋状土壙32	弥生土器	甕	—	5.2	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂、礫	黒斑Ｃ
1442	袋状土壙32	弥生土器	甕	—	7.8	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
1443	袋状土壙32	弥生土器	高杯	21.0	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	沈線３～４条
1444	袋状土壙32	弥生土器	高杯	24.0	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂、粗砂	
1445	袋状土壙32	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	透し孔８ヶ所　ススＣ
1446	袋状土壙32	弥生土器	高杯	—	—	—	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	
1447	袋状土壙32	弥生土器	製塩土器	—	6.9	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂	
1448	袋状土壙33	弥生土器	甕	13.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
1449	袋状土壙33	弥生土器	甕	—	7.0	—	灰褐色(7.5YR4/2)	細砂	
1450	袋状土壙34	弥生土器	壺	—	—	—	淡橙色(5YR8/3)	精良	棒状浮文
1451	袋状土壙34	弥生土器	甕	14.0	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	ススＢ’
1452	袋状土壙34	弥生土器	甕	—	4.6	—	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	
1453	袋状土壙34	弥生土器	高杯	—	—	—	赤橙色(10R6/6)	細砂	
1454	袋状土壙34	弥生土器	高杯	—	9.2	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂、粗砂	竹管文
1455	袋状土壙34	弥生土器	台付鉢	—	8.6	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂	
1456	袋状土壙36	弥生土器	壺	13.6	6.5	23.1	褐色(7.5YR4/3)	細砂、粗砂、礫	ススＢ　ほぼ完形
1457	袋状土壙36	弥生土器	壺	14.6	—	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	沈線10条(螺旋状)　ススＣ
1458	袋状土壙36	弥生土器	甕	13.7	7.7	27.4	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	ススＢ’　ほぼ完形
1459	袋状土壙36	弥生土器	壺	15.2	10.0	38.5	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	ススＢ　ほぼ完形
1460	袋状土壙36	弥生土器	甕	—	7.1	—	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂、粗砂、礫	
1461	袋状土壙36	弥生土器	甕	—	9.8	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	
1462	袋状土壙36	弥生土器	甕	15.2	6.1	16.8	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂	黒斑Ｂ　ほぼ完形
1463	袋状土壙36	弥生土器	高杯	22.8	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	
1464	袋状土壙36	弥生土器	高杯	25.5	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	
1465	袋状土壙36	弥生土器	蓋	10.1	—	3.3	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂、粗砂	穿孔４ヶ所　完形
1466	袋状土壙37	弥生土器	壺	15.0	7.3	32.7	淡橙色(5YR8/3)	粗砂(多)	黒斑Ｃ　ほぼ完形
1467	袋状土壙37	弥生土器	壺	16.4	8.7	37.7	灰白色(7.5YR8/2)	粗砂	内面上半3/4のみヘラケズリ　黒斑Ｂ・ＢＣ　ほぼ完形
1468	袋状土壙37	弥生土器	甕	15.6	7.4	37.4	橙色(5YR8/7)	細砂	擦痕状のハケメ　ほぼ完形
1469	袋状土壙37	弥生土器	壺	15.5	7.9	33.6	橙色(2.5YR6/6)	細砂	黒斑ＢＣ　ほぼ完形
1470	袋状土壙37	弥生土器	台付直口壺	7.1	—	—	橙色(5YR7/8)	細砂	
1471	袋状土壙37	弥生土器	甕	10.8	3.4	13.4	橙色(5YR6/6)	細砂	ほぼ完形
1472	袋状土壙37	弥生土器	甕	12.2	—	—	褐灰色(5YR5/1)	細砂	ススＢ
1473	袋状土壙37	弥生土器	甕	12.3	—	—	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	
1474	袋状土壙37	弥生土器	甕	12.0	—	—	淡黄色(2.5YR8/3)	細砂	
1475	袋状土壙37	弥生土器	甕	15.4	5.8	25.0	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	ほぼ完形
1476	袋状土壙37	弥生土器	甕	12.8	15.8	25.8	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂、粗砂、礫	穿孔、外面ヘラミガキ　ほぼ完形
1477	袋状土壙37	弥生土器	甕	14.4	6.8	25.5	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂、礫	
1478	袋状土壙37	弥生土器	甕	24.4	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
1479	袋状土壙37	弥生土器	甕	—	6.2	—	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂	穿孔
1480	袋状土壙37	弥生土器	甕	—	5.0	—	淡黄褐色(10YR5/2)	細砂、粗砂、礫	焼成後穿孔
1481	袋状土壙37	弥生土器	甕	—	7.4	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	
1482	袋状土壙37	弥生土器	高杯	20.9	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	黒斑Ａ
1483	袋状土壙37	弥生土器	高杯	25.7	11.2	26.2	橙色(7.5YR7/6)	細砂	竹管文　ほぼ完形
1484	袋状土壙37	弥生土器	高杯	22.4	13.8	22.1	橙色(7.5YR7/6)	細砂	竹管文　黒斑Ａ　ほぼ完形
1485	袋状土壙37	弥生土器	高杯	—	14.0	—	橙色(5YR6/8)	細砂	ヘラ描き沈線　ススＣ

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
1486	袋状土壙37	弥生土器	高杯	(26.1)	—	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂	
1487	袋状土壙37	弥生土器	高杯	—	—	—	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂	
1488	袋状土壙37	弥生土器	製塩土器	—	6.4	—	明褐灰色(5YR7/2)	細砂	
1489	袋状土壙39	弥生土器	甕	12.0	—	—	灰白色(10YR8/2)	細砂	黒斑A
1490	袋状土壙39	弥生土器	甕	14.1	—	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	線刻
1491	袋状土壙39	弥生土器	甕	—	7.9	—	褐灰色(10YR6/1)	細砂、粗砂	
1492	袋状土壙39	弥生土器	甕	—	7.0	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	黒斑C
1493	袋状土壙39	弥生土器	鉢	13.1	8.8	6.5	明褐灰色(7.5YR7/1)	細砂	完形
1494	袋状土壙39	弥生土器	台付鉢	—	6.6	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	
1495	袋状土壙39	弥生土器	台付鉢	10.0	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	黒斑B
1496	袋状土壙40	弥生土器	甕	14.0	—	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	
1497	袋状土壙40	弥生土器	甕	—	6.0	—	鈍い橙色(2.5YR6/3)	細砂	ススC
1498	袋状土壙41	弥生土器	壺	—	—	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂	
1499	袋状土壙41	弥生土器	壺	—	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	内外面に赤色顔料
1500	袋状土壙41	弥生土器	甕	12.0	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	
1501	袋状土壙41	弥生土器	甕	9.0	—	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂	
1502	袋状土壙41	弥生土器	高杯	(24.0)	—	—	橙色(5YR7/8)	細砂	
1503	袋状土壙41	弥生土器	高杯	—	17.0	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	外面赤色顔料
1504	袋状土壙41	弥生土器	器台	30.0	—	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂	沈線
1505	袋状土壙41	弥生土器	器台	—	27.0	—	橙色(5YR7/6)	細砂	黒斑C
1506	袋状土壙42	弥生土器	壺	17.6	—	—	橙色(5YR7/6)	粗砂	沈線3条残存
1507	袋状土壙42	弥生土器	壺	—	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	沈線21条残存
1508	袋状土壙42	弥生土器	甕	12.6	—	—	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	外面ハケメ
1509	袋状土壙42	弥生土器	甕	13.2	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	黒斑AB
1510	袋状土壙42	弥生土器	甕	13.6	—	—	橙色(5YR7/8)	細砂	外面ハケメ
1511	袋状土壙42	弥生土器	甕	—	5.0	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	外面ハケメ
1512	袋状土壙42	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	内外面赤色顔料
1513	袋状土壙42	弥生土器	高杯	25.0	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂、粗砂	
1514	袋状土壙42	弥生土器	高杯	27.5	16.0	24.4	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	ほぼ完形
1515	袋状土壙42	弥生土器	高杯	—	14.4	—	鈍い褐色(7.5YR5/4)	粗砂	
1516	袋状土壙42	弥生土器	高杯	—	9.0	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	
1517	袋状土壙42	弥生土器	高杯	12.3	6.8	10.4	橙色(5YR6/8)	粗砂	穿孔8ヶ残存　ほぼ完形
1518	袋状土壙43	弥生土器	甕	(18.0)	—	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂、粗砂	
1519	袋状土壙43	弥生土器	甕	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂、礫	
1520	袋状土壙43	弥生土器	甕	—	4.8	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂、礫	
1521	袋状土壙43	弥生土器	台付壺？	—	—	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂、粗砂	
1522	袋状土壙43	弥生土器	台付壺？	—	10.2	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂、粗砂、礫	刺突文6列4段
1523	袋状土壙43	弥生土器	器台	—	—	—	橙色(5YR7/8)	細砂、粗砂、礫	
1524	袋状土壙43	弥生土器	鉢	11.5	5.0	9.9	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂、礫	ほぼ完形
1525	袋状土壙44	弥生土器	壺	14.0	—	—	赤色(10R5/8)	細砂、粗砂	
1526	袋状土壙44	弥生土器	台付壺	—	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
1527	袋状土壙44	弥生土器	甕	19.4	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	粗砂	
1528	袋状土壙47	弥生土器	壺	10.5	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
1529	袋状土壙47	弥生土器	壺	—	10.4	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂	刺突文
1530	袋状土壙47	弥生土器	甕	19.9	—	—	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	
1531	袋状土壙47	弥生土器	甕	13.3	—	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	ススB'
1532	袋状土壙47	弥生土器	甕	—	6.8	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂、粗砂	外面ヘラミガキ
1533	袋状土壙47	弥生土器	高杯	(21.4)	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	
1534	袋状土壙47	弥生土器	高杯	—	9.8	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	透し孔11ヶ
1535	袋状土壙47	弥生土器	高杯	—	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	沈線2本、線刻10本
1536	袋状土壙47	弥生土器	鉢	13.5	6.7	5.7	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
1537	袋状土壙47	弥生土器	製塩土器	—	5.5	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
1538	袋状土壙47	弥生土器		—	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂、礫	
1539	袋状土壙48	弥生土器	甕	10.8	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
1540	袋状土壙48	弥生土器	甕	12.6	—	—	灰白色(10YR8/2)	細砂	
1541	袋状土壙48	弥生土器	高杯	22.6	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	
1542	袋状土壙49	弥生土器	壺	—	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	沈線6条
1543	袋状土壙49	弥生土器	甕	(12.0)	—	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂	内外面赤色顔料
1544	袋状土壙49	弥生土器	甕	15.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
1545	袋状土壙49	弥生土器	甕	—	5.8	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	外面赤色顔料　黒斑C
1546	袋状土壙49	弥生土器	高杯	22.0	—	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂	
1547	袋状土壙52	弥生土器	甕	13.6	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
1548	袋状土壙52	弥生土器	甕	13.6	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	ススB
1549	袋状土壙52	弥生土器	甕	—	6.2	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	ススC
1550	袋状土壙52	弥生土器	甕	—	8.4	—	褐灰色(5YR5/1)	細砂	
1551	袋状土壙53	弥生土器	鉢	(26.4)	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂、粗砂	
1552	袋状土壙53	弥生土器	高杯	—	12.4	—	橙色(5YR6/8)	細砂	透し孔、ヘラ描き沈線8本1組
1553	袋状土壙53	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	未貫通の穿孔
1554	袋状土壙54	弥生土器	壺	13.4	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	黒斑B
1555	袋状土壙54	弥生土器	甕	13.0	—	—	橙色(7.5YR6/6)	粗砂	ススB
1556	袋状土壙54	弥生土器	甕	14.4	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	
1557	袋状土壙54	弥生土器	甕	—	11.4	—	鈍い黄橙色(10YR6/4)	粗砂、礫	
1558	袋状土壙54	弥生土器	壺	—	10.4	—	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	
1559	袋状土壙54	弥生土器	鉢	10.3	4.2	8.6	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	
1560	袋状土壙54	弥生土器	鉢	11.4	5.4	10.3	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂、粗砂	黒斑BC　ほぼ完形

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
1561	袋状土壙54	弥生土器	高杯	23.2	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂	穿孔６ヶ所残存
1562	袋状土壙54	弥生土器	高杯	—	14.6	—	橙色(5YR6/8)	細砂	円形の刺突文(未貫通)
1563	袋状土壙54	弥生土器	台付鉢	—	9.0	—	橙色(5YR7/6)	細砂	竹管文
1564	袋状土壙54	弥生土器	台付鉢	—	11.4	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂	円形刺突文８ヶ所残存
1565	袋状土壙55	弥生土器	製塩土器	—	5.3	—	鈍い黄橙色(10YR8/3)	細砂	
1566	袋状土壙56	弥生土器	甕	—	—	—	鈍い赤褐色(2.5YR5/4)	細砂、粗砂	外面ヘラミガキ
1567	袋状土壙57	弥生土器	壺	15.6	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
1568	袋状土壙57	弥生土器	壺	17.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	19条の沈線、刺突文
1569	袋状土壙57	弥生土器	壺	—	—	—	橙色(5YR7/8)	細砂	
1570	袋状土壙57	弥生土器	甕	—	9.4	—	灰白色(10YR8/2)	細砂	
1571	袋状土壙57	弥生土器	甕	12.4	5.2	22.0	淡橙色(5YR8/3)	細砂	ススB'　ほぼ完形
1572	袋状土壙57	弥生土器	甕	14.4	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
1573	袋状土壙57	弥生土器	甕	19.4	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	沈線１条
1574	袋状土壙57	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	
1575	袋状土壙57	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	
1576	袋状土壙57	弥生土器	高杯	—	(13.2)	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
1577	袋状土壙57	弥生土器	高杯	—	17.4	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
1578	袋状土壙57	弥生土器	台付鉢	—	13.1	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	穿孔３段４列
1579	袋状土壙57	弥生土器	器台	—	16.6	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
1580	袋状土壙59	弥生土器	甕	13.0	—	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	棒状浮文
1581	袋状土壙59	弥生土器	甕	8.2	4.2	8.9	橙色(7.5YR6/6)	細砂	黒斑ＡＢＣ　ほぼ完形
1582	袋状土壙59	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂	
1583	袋状土壙60	弥生土器	壺	14.0	—	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	
1584	袋状土壙60	弥生土器	甕	19.4	—	—	明赤褐色(5YR5/6)	細砂、粗砂	
1585	袋状土壙61	弥生土器	甕	12.6	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	ススB
1586	袋状土壙61	弥生土器	手捏土器	—	3.2	—	橙色(5YR6/8)	細砂	ほぼ完形
1587	袋状土壙61	弥生土器	高杯	(20.4)	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
1588	袋状土壙63	弥生土器	甕	11.5	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂	
1589	袋状土壙63	弥生土器	甕	—	8.0	—	灰白色(7.5YR8/1)	細砂、粗砂	
1590	袋状土壙63	弥生土器	高杯	24.0	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	内外面赤色顔料
1591	袋状土壙63	弥生土器	製塩土器	—	6.8	—	灰白色(10YR8/1)	細砂、粗砂	
1592	袋状土壙64	弥生土器	甕	14.2	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	黒斑ＡＢ
1593	袋状土壙65	弥生土器	甕	12.6	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
1594	袋状土壙65	弥生土器	甕	(20.8)	—	—	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	
1595	袋状土壙65	弥生土器	壺	—	11.4	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
1596	袋状土壙65	弥生土器	器台	—	25.8	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂	透し孔５ヶ所
1597	袋状土壙66	弥生土器	甕	(14.0)	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
1598	袋状土壙66	弥生土器	高杯	20.6	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
1599	袋状土壙66	弥生土器	高杯	—	13.2	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	沈線５条４段、透し孔２段
1600	袋状土壙66	弥生土器	高杯	13.8	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
1601	袋状土壙67	弥生土器	壺	—	—	—	灰赤色(2.5YR6/2)	細砂	
1602	袋状土壙67	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	
1603	袋状土壙67	弥生土器	高台	—	6.8	—	赤色(10R4/5)	細砂	
1604	袋状土壙68	弥生土器	壺	8.8	4.6	16.1	橙色(5YR6/8)	粗砂	黒斑ＡＢ　ほぼ完形
1605	袋状土壙68	弥生土器	高杯	—	12.2	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	透し孔個数不明
1606	袋状土壙69	弥生土器	壺	14.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
1607	袋状土壙69	弥生土器	壺	12.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
1608	袋状土壙69	弥生土器	壺	12.0	—	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	刺突文
1609	袋状土壙69	弥生土器	壺	(15.0)	—	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	
1610	袋状土壙69	弥生土器	甕	—	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	刻目
1611	袋状土壙69	弥生土器	壺	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	ヘラ描き文　黒斑B
1612	袋状土壙69	弥生土器	甕	10.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	粗砂	ススB
1613	袋状土壙69	弥生土器	壺	—	6.2	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
1614	袋状土壙69	弥生土器	甕	—	13.5	—	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	外面ヘラミガキ　ススC
1615	袋状土壙69	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
1616	袋状土壙69	弥生土器	高杯	—	—	—	淡橙色(5YR8/3)	細砂、粗砂、礫	
1617	袋状土壙69	弥生土器	高杯	—	13.0	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	透し孔12ヶ残存
1618	袋状土壙69	弥生土器	製塩土器	—	6.2	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂	
1619	袋状土壙70	弥生土器	甕	13.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
1620	袋状土壙70	弥生土器	甕	10.8	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	ススB
1621	袋状土壙70	弥生土器	甕	13.6	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	ススB
1622	袋状土壙70	弥生土器	甕	—	12.8	—	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	外面ヘラケズリ　黒斑C
1623	袋状土壙70	弥生土器	高杯	16.8	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
1624	袋状土壙70	弥生土器	高杯	23.2	15.4	24.3	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	沈線、櫛描沈線、刺突文
1625	袋状土壙71	弥生土器	鉢	(10.2)	—	—	橙色(5YR6/8)	精良	
1626	土壙218	弥生土器	甕	14.3			浅黄橙色(7.5YR8/6)	粗砂	外面磨滅
1627	土壙218	弥生土器	鉢	14.4	4.6	6.8	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	内面ミガキ　ススB
1628	土壙218	弥生土器	椀	14.4	5.2	6.2	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	植物繊維圧痕
1629	土壙218	弥生土器	鉢	26.7	7.9	13.0	浅黄橙色(10YR8/4)	粗砂	外面磨滅　黒斑Ｂ～Ｃ
1630	土壙218	弥生土器	台付鉢	14.3	8.5	11.1	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	表面磨滅　ススＡＣ　完形
1631	土壙218	弥生土器	台付鉢	13.9	(10.0)	9.0	橙色(5YR7/6)	細砂	透し孔４
1632	土壙221	弥生土器	甕	15.1	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	櫛描沈線わずか、３条？
1633	土壙221	土師器	甕	—	6.2	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	穿孔１個
1634	土壙221	弥生土器	鉢？	14.3	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	
1635	土壙222	弥生土器	鉢	14.6	4.6	9.2	褐灰色(10YR4/1)	細砂、粗砂	

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
1636	土壙223	弥生土器	壺	20.6	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	
1637	土壙223	弥生土器	壺	—	12.0	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	
1638	土壙223	弥生土器	甕	12.0	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、礫	
1639	土壙223	弥生土器	甕	13.0	—	—	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	
1640	土壙223	弥生土器	甕	13.9	5.5	15.8	橙色(5YR7/6)	細砂	ススB？
1641	土壙223	弥生土器	甕	15.3	—	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂	
1642	土壙223	弥生土器	甕	16.5	5.2	26.4	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	ススC
1643	土壙223	弥生土器	甕	15.4	6.1	25.9	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	刺突文A－3　ススC
1644	土壙223	弥生土器	甕	14.0	—	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂、礫	
1645	土壙223	弥生土器	甕	15.0	—	—	褐灰色(10YR5/1)	細砂	
1646	土壙223	弥生土器	甕	15.4	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
1647	土壙223	弥生土器	甕	12.5	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
1648	土壙223	弥生土器	甕	17.0	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	
1649	土壙223	弥生土器	甕	—	5.2	—	黄灰色(2.5Y5/1)	細砂	
1650	土壙223	弥生土器	甕	—	5.4	—	褐灰色(5YR5/1)	細砂	
1651	土壙223	弥生土器	甕	13.5	5.3	14.5	鈍い黄橙色(10YR7/3)、明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	穿孔1個　ススA　ほぼ完形
1652	土壙223	弥生土器	高杯	19.0	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、礫	
1653	土壙223	弥生土器	高杯	17.0	11.4	9.9	橙色(5YR7/6)	精良	透し孔4個　黒斑A
1654	土壙223	弥生土器	高杯	18.4	12.6	12.6	橙色(5YR7/8)	細砂	透し孔4個
1655	土壙223	弥生土器	鉢	14.6	5.3	12.6	橙色(5YR7/6)	細砂	黒斑BC　ほぼ完形
1656	土壙223	弥生土器	鉢	16.0	—	—	灰褐色(2.5YR5/2)	細砂、礫	
1657	土壙223	弥生土器	鉢	19.0	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂、礫	
1658	土壙224	弥生土器	壺	13.1	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	櫛描沈線6条
1659	土壙224	弥生土器	甕	14.5	4.2	22.0	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	
1660	土壙224	弥生土器	甕	—	5.2	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	ススC？
1661	土壙224	弥生土器	鉢	11.3	4.0	14.5	橙色(5YR6/6)	精良	黒斑C
1662	土壙224	弥生土器	鉢	12.8	3.4	15.5	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	黒斑B
1663	土壙224	弥生土器	鉢	14.8	4.4	13.6	橙色(5YR6/6)	精良	黒斑BC
1664	土壙224	弥生土器	鉢	12.5	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	精良	
1665	土壙224	弥生土器	鉢	(14.0)	4.0	10.9	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	内面にヘラ描き沈線文
1666	土壙225	弥生土器	壺	20.8			淡橙色(5YR8/3)	細砂	外面ヘラミガキ
1667	土壙225	弥生土器	鉢	14.5	4.2	9.9	橙色(7.5YR7/6)	細砂	外面ヘラミガキ　ススB・C
1668	土壙230	弥生土器	甕	13.6			橙色(2.5YR6/8)	粗砂	黒斑B
1669	土壙231	弥生土器	甕	16.2			鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
1670	土壙234	弥生土器	甕	18.1		28.4	浅黄橙色(10YR8/3)	礫	透し孔4
1671	土壙234	弥生土器	高杯		13.3		浅黄橙色(7.5YR8/4)	精良	
1672	土壙234	弥生土器	高杯		11.0		橙色(5YR7/8)	精良	透し孔3
1673	土壙237	弥生土器	甕	16.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	沈線6条
1674	土壙239	弥生土器	壺	24.3			橙色(5YR6/8)	精良	
1675	土壙239	弥生土器	壺	17.4			橙色(5YR7/6)	精良	
1676	土壙239	弥生土器	甕	13.8			鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	ススB　黒斑B～C
1677	土壙239	弥生土器	甕	14.9	5.8	28.3	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	ススC
1678	土壙239	弥生土器	甕	15.4	5.4	(27.2)	橙色(7.5YR6/6)	粗砂	刺突文B－3　ススB　完形
1679	土壙239	弥生土器	甕	15.0	5.2	23.6	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	刺突文B－3　ススB
1680	土壙239	弥生土器	甕	17.0	6.2	31.4	橙色(5YR6/6)	粗砂	ススB
1681	土壙239	弥生土器	甕	14.5			橙色(5YR6/6)	粗砂	刺突文A～3　ススB
1682	土壙239	弥生土器	甕	14.8	5.8	27.0	橙色(7.5YR6/6)	粗砂	ススC
1683	土壙239	弥生土器	椀	11.8	4.0	5.5	橙色(2.5YR7/6)	精良	黒斑B～C　完形
1684	土壙239	弥生土器	鉢	18.0			灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	外面工具ナデ
1685	土壙239	弥生土器	高杯	11.4	9.2	7.5	橙色(2.5YR7/6)	精良	透し孔3　黒斑A　完形
1686	土壙239	弥生土器	台付壺				橙色(2.5YR6/6)	精良	黒斑A～B
1687	土壙240	土師器	甕	(15.2)			灰白色(10YR8/2)	細砂	沈線5条
1688	土壙240	土師器	甕	17.6			鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	外面ハケメ
1689	土壙244	弥生土器	甕	—	—	—	橙色(5YR6/8)	粗砂	
1690	土壙244	弥生土器	高杯	—	13.8	(3.7)	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	透し孔
1691	土壙244	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR7/6)	粗砂	
1692	土壙244	弥生土器	鉢	24.4	6.0	13.5	橙色(5YR7/6)	精良	黒斑B～C
1693	土壙245	弥生土器	甕	(13.7)	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
1694	土壙246	弥生土器	壺	—	4.6	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	黒斑BC
1695	土壙252	弥生土器	壺	16.0	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂、礫	穿孔2孔一対
1696	土壙252	弥生土器	高杯	(23.0)	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
1697	土壙252	弥生土器	高杯	13.0	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	円形透し孔
1698	土壙253	弥生土器	壺	16.0	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	
1699	土壙253	弥生土器	壺	16.8	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂	
1700	土壙253	弥生土器	甕	11.8	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
1701	土壙253	弥生土器	甕	12.5	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
1702	土壙253	弥生土器	甕	14.3	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
1703	土壙253	弥生土器	鉢	13.2	5.8	10.5	橙色(5YR6/8)	細砂、粗砂	
1704	土壙253	弥生土器	高杯	—	11.9	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	黒斑C・C
1705	土壙254	弥生土器	壺	20.6	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	竹管文
1706	土壙254	弥生土器	甕	14.3	5.7	22.1	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	全体に歪み　ススB'
1707	土壙254	弥生土器	甕	13.6	—	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂、粗砂	ススB
1708	土壙254	弥生土器	甕	15.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
1709	土壙254	弥生土器	甕	12.7	4.2	15.2	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	ススB

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
1710	土壙254	弥生土器	高杯	22.2	—	—	赤橙色(10R6/8)	細砂、粗砂	
1711	土壙254	弥生土器	高杯	17.0	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂、粗砂	
1712	土壙254	弥生土器	小型甕	13.2	5.0	11.4	黄橙色(7.5YR8/6)	細砂	穿孔２ヶ所　ススＣ　完形
1713	土壙255	弥生土器	壺	12.9	6.7	27.8	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	螺旋状凹線10条　黒斑ＢＣ
1714	土壙255	弥生土器	甕	(19.6)	—	—	鈍い褐色(7.5YR5/4)	細砂、粗砂	
1715	土壙255	弥生土器	甕	(22.8)	—	—	鈍い黄褐色(10YR5/3)	細砂	
1716	土壙255	弥生土器	鉢	12.1	3.6	11.5	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	完形
1717	土壙256	弥生土器	甕	—	5.8	—	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	
1718	土壙256	弥生土器	高杯	(24.0)	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	
1719	土壙258	弥生土器	壺	(13.1)	7.5	27.4	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	ススＣ、沈線９条
1720	土壙258	弥生土器	壺	15.2	—	—	浅黄色(2.5Y7/3)	細砂、粗砂	
1721	土壙258	弥生土器	甕	14.1	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
1722	土壙258	土師器	甕	(13.5)	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
1723	土壙258	弥生土器	器台	—	17.3	—	橙色(5YR7/6)	細砂	方形透し孔４、円形透し孔
1724	土壙259	弥生土器	甕	14.0	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	
1725	土壙259	弥生土器	甕	(25.0)	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	
1726	土壙259	弥生土器	高杯	(17.0)	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂	
1727	土壙259	弥生土器	高杯	(25.4)	—	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂	
1728	土壙259	弥生土器	高杯	—	9.8	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂、粗砂	
1729	土壙259	弥生土器	高杯	19.4	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
1730	土壙260	弥生土器	壺	15.8	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	
1731	土壙260	弥生土器	甕	—	4.4	—	褐灰色(10YR5/1)	細砂	
1732	土壙262	弥生土器	壺	19.6	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂	刺突文　黒斑Ｂ？
1733	土壙262	弥生土器	壺	16.6	—	—	黄橙色(7.5YR8/8)	粗砂	
1734	土壙262	弥生土器	甕	18.0	—	—	黄橙色(7.5YR8/8)	粗砂	
1735	土壙262	弥生土器	壺	15.7	6.7	30.0	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	黒斑ＡＢ・ＢＣ
1736	土壙262	弥生土器	甕	18.0	—	—	淡黄色(2.5YR8/3)	細砂	頸部に３本位斜めに切ったあと
1737	土壙262	弥生土器	甕	14.6	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
1738	土壙262	弥生土器	甕	14.6	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	黒斑Ｂ？
1739	土壙262	弥生土器	甕	(18.0)	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	ススＣ'
1740	土壙262	弥生土器	甕	14.8	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
1741	土壙262	弥生土器	甕	14.6	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	
1742	土壙262	弥生土器	壺	13.8	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	黒斑Ｂ
1743	土壙262	弥生土器	甕	14.4	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	
1744	土壙262	弥生土器	甕	15.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
1745	土壙262	弥生土器	甕	14.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
1746	土壙262	弥生土器	甕	(15.4)	—	—	鈍い橙色(10YR7/2)	細砂	
1747	土壙262	弥生土器	甕	16.8	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	
1748	土壙262	弥生土器	甕	(14.6)	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
1749	土壙262	弥生土器	甕	(14.8)	—	—	橙色(5YR7/6)	精良	
1750	土壙262	弥生土器	甕	11.6	—	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	
1751	土壙262	弥生土器	甕	(13.6)	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
1752	土壙262	弥生土器	甕	12.4	4.1	18.6	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂、粗砂	ススＢ？
1753	土壙262	弥生土器	甕	14.1	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	沈線　黒斑Ｂ？
1754	土壙262	弥生土器	甕	15.0	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂、礫	
1755	土壙262	弥生土器	甕	16.0	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
1756	土壙262	弥生土器	甕	16.4	—	—	橙色(5YR7/8)	細砂	ススＣ
1757	土壙262	弥生土器	甕	16.8	—	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	ススＣ'
1758	土壙262	弥生土器	甕	15.0	—	—	橙色(5YR7/8)	粗砂、礫	ススＢ'
1759	土壙262	弥生土器	甕	15.4	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
1760	土壙262	弥生土器	甕	15.4	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	ススＢ
1761	土壙262	弥生土器	甕	11.6	(4.4)	20.2	橙色(5YR7/6)	細砂	ススＣ'
1762	土壙262	弥生土器	壺	9.7	—	—	淡橙色(5YR8/4)	細砂	
1763	土壙262	弥生土器	甕	—	4.5	—	灰褐色(5YR6/2)	細砂	
1764	土壙262	弥生土器	甕	—	6.5	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	黒斑Ｃ
1765	土壙262	弥生土器	鉢	13.8	5.2	7.9	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	黒斑Ｂ
1766	土壙262	弥生土器	鉢	15.2	—	—	橙色(5YR6/8)	精良	
1767	土壙262	弥生土器	鉢	27.4	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、礫	
1768	土壙262	弥生土器	鉢	32.0	—	—	橙色(5YR7/8)	粗砂	
1769	土壙262	弥生土器	鉢	33.0	—	—	橙色(5YR7/8)	粗砂	
1770	土壙262	弥生土器	鉢	—	—	—	橙色(5YR7/6)	精良	
1771	土壙262	弥生土器	鉢	15.7	6.2	9.4	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂	完形
1772	土壙262	弥生土器	鉢	10.4	3.9	6.0	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
1773	土壙262	弥生土器	鉢	11.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	黒斑Ｂ
1774	土壙262	弥生土器	高杯	15.2	—	—	橙色(7.5YR7/6)	精良	全体歪みはげしい　黒斑Ａ
1775	土壙262	弥生土器	高杯	(18.6)	—	—	橙色(5YR7/6)	精良	
1776	土壙262	弥生土器	高杯	16.7	12.4	10.5	橙色(5YR6/8)	精良、細砂	透し孔４方向
1777	土壙262	弥生土器	高杯	—	10.7	—	橙色(5YR6/8)	精良	透し孔４方向
1778	土壙262	弥生土器	蓋	15.6	—	8.3	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	ススＢ　ほぼ完形
1779	土壙262	弥生土器	製塩土器	—	5.1	—	橙色(2.5YR6/8)	精良、細砂	
1780	土壙263	弥生土器	甕	12.4	4.3	19.1	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂、細砂	ススＢ
1781	土壙263	弥生土器	甕	13.4	—	—	褐灰色(10YR4/1)	粗砂、礫	
1782	土壙263	弥生土器	甕	16.4	—	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	
1783	土壙263	弥生土器	甕	17.6	—	—	浅黄橙色(10YR8/4)	粗砂	
1784	土壙263	弥生土器	甕	—	5.5	—	浅黄橙色(7.5YR8/6)	細砂	

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
1785	土壙263	弥生土器	甕	12.4	4.8	10.3	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	ススA
1786	土壙263	弥生土器	鉢	(14.8)	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
1787	土壙263	弥生土器	手捏土器	5.6	—	3.6	橙色(5YR7/6)	細砂	
1788	土壙264	弥生土器	壺	(25.7)	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	
1789	土壙264	弥生土器	壺	18.7	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	波状文　黒斑A
1790	土壙264	弥生土器	甕	15.9	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、粗砂	
1791	土壙264	弥生土器	甕	12.5	—	—	黄灰色(2.5Y5/1)	細砂、粗砂	
1792	土壙264	弥生土器	甕	(13.9)	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
1793	土壙264	弥生土器	甕	15.0	—	—	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	黒斑B
1794	土壙264	弥生土器	甕	14.1	5.8	20.8	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂	黒斑AB
1795	土壙264	弥生土器	甕	15.6	—	—	明黄褐色(10YR7/6)	細砂、礫	
1796	土壙264	弥生土器	甕	12.0	4.1	19.0	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、礫	
1797	土壙264	弥生土器	甕	12.2	3.9	17.7	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	黒斑BC
1798	土壙264	弥生土器	甕	14.2	4.6	17.0	橙色(7.5YR7/6)	細砂、礫	
1799	土壙264	弥生土器	甕	16.9	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
1800	土壙264	弥生土器	甕	14.4	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
1801	土壙264	弥生土器	甕	13.1	—	—	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	
1802	土壙264	弥生土器	甕	14.2	5.7	25.8	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
1803	土壙264	弥生土器	甕	17.0	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、粗砂	
1804	土壙264	弥生土器	甕	14.6	—	—	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	
1805	土壙264	弥生土器	甕	18.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、礫	外面橙色
1806	土壙264	弥生土器	甕	17.5	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	
1807	土壙264	弥生土器	甕	18.0	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	黒斑B
1808	土壙264	弥生土器	甕	16.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	ススA
1809	土壙264	弥生土器	鉢	23.6	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	黒斑AB？
1810	土壙264	弥生土器	鉢	(33.7)	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	
1811	土壙264	弥生土器	壺？鉢？	10.3	4.4	9.4	橙色(7.5YR7/6)	精良	
1812	土壙264	弥生土器	鉢	(13.0)	(3.3)	7.4	鈍い赤褐色(2.5YR5/4)	細砂	内外面丹塗り
1813	土壙264	弥生土器	鉢	16.2	4.8	10.4	橙色(2.5YR7/6)	細砂、礫	黒斑C？
1814	土壙264	弥生土器	高杯	15.3	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)～灰黄褐色(10YR6/2)	細砂、粗砂	
1815	土壙264	弥生土器	高杯	19.4	—	—	橙色(5YR6/6)	精良	
1816	土壙264	弥生土器	高杯	—	11.2	—	橙色(5YR6/6)	精良	透し孔4方向
1817	土壙264	弥生土器	器台？	18.8	13.4	11.3	橙色(5YR7/6)	精良、細砂	円形の透かし穴
1818	土壙264	弥生土器	器台？	16.4	—	—	橙色(5YR7/8)	精良	沈線、波状文、鋸歯文
1819	土壙275	弥生土器	高杯	22.0	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂、礫	
1820	土壙276	弥生土器	甕	12.4	5.0	23.5	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	穿孔　ススB　ほぼ完形
1821	土壙276	弥生土器	鉢	16.6	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
1822	土壙278	弥生土器	高杯	16.1	10.0	8.9	橙色(2.5YR6/6)	精良(細砂)	透し孔4方向　ほぼ完形
1823	土壙278	弥生土器	高杯	14.3	11.8	9.4	鈍い橙色(5YR7/4)	精良(細砂)	透し孔4方向　完形
1824	土壙279	弥生土器	甕	14.6	4.6	21.2	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	ススB　ほぼ完形
1825	土壙280	弥生土器	甕	11.2	—	—	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	ススA
1826	土壙280	弥生土器	甕	14.6	—	—	橙色(5YR7/6)	粗砂	
1827	土壙280	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	外面ハケメ
1828	土壙280	弥生土器	蓋？	—	6.6	—	褐灰色(10YR5/1)	細砂	
1829	土壙286	弥生土器	甕	—	5.5	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	
1830	土壙287	弥生土器	甕	13.4	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	ススA
1831	土壙287	弥生土器	製塩土器	—	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	粗砂	
1832	土壙287	弥生土器	製塩土器	—	5.5	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
1833	土壙289	弥生土器	甕	18.6	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	
1834	土壙289	弥生土器	鉢	11.2	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	外面赤色顔料
1835	土壙289	弥生土器	台付甕	—	6.2	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	
1836	土壙293	弥生土器	甕	16.4	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
1837	土壙297	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	沈線11条、透し孔4ヶ所
1838	土壙297	弥生土器	壺	20.4	—	—	淡橙色(5YR8/3)	粗砂、礫	内面刺突文3ヶ
1839	土壙299	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂	
1840	土壙299	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	透し孔2ヶ残存
1841	土壙301	弥生土器	甕	14.3	5.2	18.7	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	
1842	土壙303	弥生土器	壺	18.8	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂、粗砂	内側に貝殻圧痕文
1843	土壙303	弥生土器	甕	14.6	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	
1844	土壙304	弥生土器	壺	10.2	—	—	鈍い橙色(2.5YR6/4)	粗砂	ススB
1845	土壙307	弥生土器	器台		12.0	(3.6)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	
1846	土壙307	弥生土器	高杯		(42.6)	(4.8)	明黄褐色(10YR7/6)	粗砂	透し孔1現存　黒斑C
1847	土壙308	弥生土器	甕	15.2		(4.9)	橙色(5YR7/6)	細砂	
1848	土壙309	弥生土器	甕	13.8		(4.0)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	沈線6条
1849	土壙309	弥生土器	鉢	(43.4)		(7.7)	橙色(2.5YR7/6)	礫	内面ケズリ後ミガキ
1850	土壙310	弥生土器	壺	17.5	10.7	33.5	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	黒斑B・C
1851	土壙310	弥生土器	壺	16.1	6.1	35.4	灰白色(5YR8/2)	細砂	完形
1852	土壙310	弥生土器	壺	17.5	7.2	36.0	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	ススA　完形
1853	土壙310	弥生土器	壺	17.0	5.5	35.7	淡橙色(5YR8/3)	細砂	完形
1854	土壙310	弥生土器	甕	11.9	3.8	12.7	黒褐色(10YR3/1)	粗砂	内面ヘラミガキ
1855	土壙310	弥生土器	甕	13.0	—	(18.1)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	粗砂	タタキ後ミガキ　黒斑B
1856	土壙310	弥生土器	甕	14.8	—	(19.8)	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	刺突文
1857	土壙310	弥生土器	甕	14.0		8.0	灰白色(10YR7/1)	細砂	刺突文　ススB
1858	土壙310	弥生土器	甕	16.0	—	(10.7)	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
1859	土壙310	弥生土器	甕	14.2	5.0	22.2	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	ススB　黒斑C　完形
1860	土壙310	弥生土器	甕	(17.2)	—	(7.7)	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	
1861	土壙310	弥生土器	甕	15.4	5.6	25.6	灰白色(10YR8/2)	粗砂	ススC　完形
1862	土壙310	弥生土器	甕	13.4	—	(19.5)	橙色(5YR7/8)	粗砂	貝殻押圧文
1863	土壙310	弥生土器	甕	15.5	5.3	24.7	灰白色(7.5YR8/1)	細砂	刺突文　ススB
1864	土壙310	弥生土器	高杯	19.6	—	(6.2)	橙色(2.5YR7/6)	精良(水漉粘土)	内外面ヘラミガキ
1865	土壙310	弥生土器	高杯	—	—	(7.0)	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	透し孔4
1866	土壙310	弥生土器	高杯		12.3	(3.5)	鈍い橙色(5YR6/4)	精良	透し孔4
1867	土壙310	弥生土器	高杯	16.7	—	(8.6)	橙色(5YR7/8)	精良	ヘラミガキ
1868	土壙310	弥生土器	高杯	17.4	13.4	8.1	鈍い橙色(2.5YR6/4)	精良	透し孔4
1869	土壙310	弥生土器	鉢	(28.4)		(8.9)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	内外面ヘラミガキ
1870	土壙310	弥生土器	鉢	—	4.5	(6.0)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	外面ハケ
1871	土壙312	弥生土器	壺		11.2	(31.8)	橙色(5YR6/6)	粗砂	黒斑B～C
1872	土壙312	弥生土器	壺		6.0	(32.7)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂、礫	刺突文　黒斑C
1873	土壙312	弥生土器	壺	17.4	—	(26.8)	褐灰色(10YR6/1)	細砂	外面ハケ後ナデ　黒斑B～C
1874	土壙312	弥生土器	壺	19.4	—	(20.0)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	
1875	土壙312	弥生土器	甕	14.9	5.2	26.9	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	外面タタキ?後ミガキ　ススB
1876	土壙312	弥生土器	甕	14.8～15.2	5.5	22.1	橙色(2.5YR7/6)	細砂	刺突文　ススB　完形
1877	土壙312	弥生土器	甕	13.8	5.3	15.8	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	黒斑A～C
1878	土壙312	弥生土器	甕	14.0		(17.0)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	
1879	土壙312	弥生土器	甕	14.5	—	(9.0)	橙色(7.5YR6/6)	粗砂	刺突文　ススB
1880	土壙312	弥生土器	甕	15.2		(3.8)	灰褐色(5YR5/2)	細砂	
1881	土壙312	弥生土器	甕	16.0	—	(6.3)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	
1882	土壙312	弥生土器	甕	15.5		7.2	灰褐色(5YR6/2)	細砂	ススB
1883	土壙312	弥生土器	甕	—	6.4	(16.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	外面ヘラミガキ　黒斑C
1884	土壙312	弥生土器	甕		4.0	(11.2)	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	外面ヘラミガキ　ススC
1885	土壙312	弥生土器	甕		5.6	(18.2)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	ススB
1886	土壙312	弥生土器	高杯	16.4	11.0	9.1	橙色(5YR6/6)	細砂	透し孔4
1887	土壙312	弥生土器	高杯	17.5	—	(9.0)	橙色(2.5YR7/8)	精良	内外面ヘラミガキ
1888	土壙312	弥生土器	高杯	18.8	—	(5.8)	赤橙色(10R6/8)	精良	内外面ヘラミガキ
1889	土壙312	弥生土器	高杯	9.8	—	(5.0)	橙色(5YR7/6)	細砂	透し孔4、内面ハケ後ミガキ
1890	土壙312	弥生土器	台付壺	—	—	(7.8)	橙色(7.5YR7/6)	精良	外面ヘラミガキ、内面工具ナデ
1891	土壙312	弥生土器	脚部	—	14.4	(5.1)	橙色(5YR7/8)	粗砂	黒斑C
1892	土壙墓5	弥生土器	甕	(15.6)	5.2	22.0	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	刺突文A－4　ススB
1893	土壙墓5	弥生土器	甕	—	5.2	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	ススC
1894	土壙墓5	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	精良、細砂	
1895	土壙墓5	弥生土器	鉢	16.6	—	—	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	ススA
1896	土壙墓5	弥生土器	鉢	16.6	—	—	橙色(5YR7/8)	細砂	ケズリ後ヘラミガキ
1897	土壙墓5	弥生土器	鉢	(33.0)	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	ハケメ後ヘラミガキ　ススB
1898	土器棺墓2	弥生土器	鉢	(50.0)	11.9	26.2	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、粗砂	黒斑A
1899	土器棺墓2	弥生土器	甕	22.0	8.6	41.0	橙色(5YR6/6)	細砂	黒斑BC　ほぼ完形
1900	土器棺墓3	弥生土器	鉢	42.1	10.8	19.7	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂、礫	黒斑BC　ほぼ完形
1901	土器棺墓3	弥生土器	壺	26.5	—	66.5	橙色(2.5YR6/6)	細砂、粗砂	黒斑C
	土器棺墓3	弥生土器	壺	—	15.2		橙色(2.5YR6/6)	細砂、粗砂	黒斑C
1902	土器棺墓4	弥生土器	壺	14.6	9.3	34.1	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	黒斑B
1903	土器棺墓5	弥生土器	鉢	34.8	11.0	18.2	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂、粗砂、礫	片口(一方向)　黒斑AC　ほぼ完形
1904	土器棺墓5	弥生土器	壺	26.7	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	鋸歯文、刻目
	土器棺墓5	弥生土器	壺	—	15.5	(61.9)	橙色(2.5YR6/8)	細砂、粗砂	透し孔2方向　黒斑C
1905	土器棺墓6	弥生土器	鉢	(22.0)	6.2	7.3	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂、粗砂	黒斑BC
1906	土器棺墓6	弥生土器	装飾高杯	28.0	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	黒斑A
1907	土器棺墓6	弥生土器	壺	(25.3)	11.7	(42.7)	橙色(5YR7/6)～鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	黒斑BC
1908	土器棺墓7	弥生土器	鉢	42.5	10.3	27.0	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	黒斑BC
1909	土器棺墓7	弥生土器	壺	20.7		(12.8)	橙色(5YR7/6)	細砂	
	土器棺墓7	弥生土器	壺	—	12.0	(40.6)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	黒斑C
1910	土器棺墓8	弥生土器	鉢	45.1	12.1	23.5	淡橙色(5YR8/4)～橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂、礫	黒斑B　ほぼ完形
1911	土器棺墓8	弥生土器	壺	(23.2)	12.6	(46.4)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	下部に穿孔11個　黒斑C　完形?
1912	土器棺墓9	弥生土器	壺	—	10.6	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂、粗砂	
1913	土器棺墓10	弥生土器	壺	—	11.5	—	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂、粗砂	
1914	土器棺墓11	弥生土器	鉢	38.3	12.1	17.5	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂	ほぼ完形
1915	土器棺墓11	弥生土器	壺	24.9	—	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂、粗砂、礫	刻目
	土器棺墓11	弥生土器	壺	—	15.5	(52.5)	橙色(2.5YR6/8)	細砂、粗砂、礫	黒斑AC
1916	土器棺墓12	弥生土器	鉢	33.7	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂、粗砂	黒斑B'
1917	土器棺墓12	弥生土器	甕	19.5	7.1	35.0	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂	穿孔　ススC
1918	柱穴8	弥生土器	甕	13.7	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
1919	柱穴8	弥生土器	高杯	15.2	—	—	橙色(5YR6/8)	精良	沈線5条?
1920	柱穴9	弥生土器	台付鉢	17.4	7.8	11.6	淡橙色(5YR8/3)	細砂	ほぼ完形
1921	柱穴10	弥生土器	製塩土器	—	1.9	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
1922	柱穴10	弥生土器	製塩土器	—	2.5	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂	
1923	柱穴10	弥生土器	製塩土器	—	2.1	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
1924	柱穴10	弥生土器	製塩土器	—	2.1	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
1925	柱穴10	弥生土器	製塩土器	—	2.1	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
1926	柱穴10	弥生土器	製塩土器	—	2.6	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
1927	柱穴10	弥生土器	製塩土器	—	2.6	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
1928	柱穴11	弥生土器	手捏土器	(4.0)	1.3	3.6	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
1929	柱穴12	弥生土器	甕	13.5	5.7	26.1	淡橙色(5YR8/3)	細砂、粗砂	黒斑B・C
1930	柱穴12	弥生土器	甕	14.5	—	—	淡橙色(5YR8/3)	粗砂、礫	
1931	柱穴12	弥生土器	壺	—	6.7	—	灰白色(7.5YR8/1)	粗砂、礫	被熱による剥離　ススB
1932	柱穴12	弥生土器	高杯	—	10.7	—	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	
1933	柱穴13	弥生土器	壺	12.7	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
1934	柱穴13	弥生土器	甕	14.3	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
1935	柱穴13	弥生土器	脚付壺？	—	11.3	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	透し孔上4ヶ・下4ヶ残存
1936	柱穴13	弥生土器	鉢	—	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	粗砂	黒斑A・B
1937	柱穴14	弥生土器	甕	13.8	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂、粗砂	ススB'
1938	土器溜り1	弥生土器	甕	(15.6)	(7.0)	(16.9)	赤灰色(10R5/1)	粗砂、礫	外面タタキ？　ススA
1939	土器溜り1	弥生土器	甕	(11.8)	4.3	15.5	灰褐色(5YR6/2)	粗砂、礫	ススA　完形
1940	土器溜り1	弥生土器	高杯	15.8	—	—	鈍い橙色(5YR7/6)	精良(水漉粘土)	内外面ミガキ
1941	土器溜り1	弥生土器	椀	9.0	2.7	5.0	橙色(5YR6/8)	粗砂、礫	内外面ナデ　完形
1942	土器溜り1	弥生土器	鉢	(14.8)	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/6)	細砂	内外面ナデ？　ススB
1943	土器溜り1	土師器	甕	(14.0)	—	—	灰褐色(7.5YR6/2)	粗砂	
1944	土器溜り1	弥生土器	手捏土器	5.0	2.0~3.0	3.4	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	指オサエ　完形
1945	土器溜り2	弥生土器	甕	13.5	5.4	19.4	橙色(7.5YR7/6)	細砂、礫	
1946	土器溜り2	弥生土器	甕	14.6	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、礫	
1947	土器溜り2	弥生土器	甕	15.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、礫	
1948	土器溜り2	弥生土器	甕	14.4	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、礫	
1949	土器溜り2	弥生土器	甕	15.6	—	—	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂、礫	ススB'
1950	土器溜り2	弥生土器	甕	—	6.8	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂、礫	ススC
1951	土器溜り2	弥生土器	高杯	14.6	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、礫	
1952	土器溜り2	弥生土器	高杯	(19.0)	—	—	橙色(2.5YR7/6)	精良	
1953	土器溜り2	弥生土器	高杯	11.7	10.4	7.2	橙色(5YR6/8)	精良	透し孔4個
1954	土器溜り2	弥生土器	高杯	16.0	—	—	橙色(5YR7/6)	精良	黒斑A
1955	土器溜り2	弥生土器	高杯	8.6	14.0	19.4	橙色(5YR7/6)	精良	透し孔4個(3個残存)
1956	土器溜り2	弥生土器	椀	13.2	6.0	10.4	橙色(5YR7/6)	粗砂	
1957	溝9	弥生土器	甕	10.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
1958	溝9	弥生土器	甕	13.1	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	櫛描沈線5条
1959	溝12	弥生土器	甕	(12.5)	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	
1960	溝13	弥生土器	甕	13.8	4.7	22.5	鈍い褐色(7.5YR6/3)	粗砂	ススB
1961	溝13	弥生土器	甕	15.5	4.0	19.0	鈍い褐色(7.5YR6/3)	礫	砂粒極めて多　黒斑B~C
1962	溝13	弥生土器	台付壺	10.6			鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	外面ミガキ　黒斑B
1963	溝15	弥生土器	壺	18.6	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	沈線8条、貝殻圧痕文
1964	溝15	弥生土器	壺	19.0	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	沈線4条
1965	溝15	弥生土器	壺	19.0	—	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂	沈線5条残存
1966	溝15	弥生土器	壺	20.0	—	—	淡橙色(5YR8/3)	細砂	刺突文、沈線18条
1967	溝15	弥生土器	壺	20.9	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	沈線7条残存
1968	溝15	弥生土器	壺		—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	沈線11条
1969	溝15	弥生土器	壺	—	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	沈線15条、刺突文
1970	溝15	弥生土器	壺	14.0	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	沈線5条、列点文
1971	溝15	弥生土器	壺	—	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
1972	溝15	弥生土器	壺	17.6	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂	
1973	溝15	弥生土器	壺	25.8	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
1974	溝15	弥生土器	壺	—	—	—	淡橙色(5YR8/4)	粗砂	
1975	溝15	弥生土器	壺	—	7.3	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	外面ヘラミガキ　黒暗BC
1976	溝15	弥生土器	壺	16.4	5.1	17.9	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	ほぼ完形
1977	溝15	弥生土器	壺	10.0	9.5	19.8	橙色(2.5YR7/8)	細砂	黒斑B
1978	溝15	弥生土器	壺	10.6	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
1979	溝15	弥生土器	壺	—	7.6	—	淡橙色(5YR8/4)	細砂、粗砂、礫	黒斑C
1980	溝15	弥生土器	壺	—	7.0	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂、粗砂、礫	外面ハケメ後ヘラミガキ
1981	溝15	弥生土器	壺	—	7.4	—	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂、粗砂	外面ヘラミガキ
1982	溝15	弥生土器	壺	—	10.0	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
1983	溝15	弥生土器	壺	—	13.4	—	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂、礫	黒斑C
1984	溝15	弥生土器	直口壺	8.0	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	
1985	溝15	弥生土器	壺	8.0	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	沈線3条、沈線1条
1986	溝15	弥生土器	台付直口壺	5.8	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	
1987	溝15	弥生土器	壺？	—	—	—	橙色(2.5YR6/5)	細砂	内面赤色顔料
1988	溝15	弥生土器	直口壺	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	黒斑C
1989	溝15	弥生土器	台付壺	—	—	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂	沈線3条　ススB
1990	溝15	弥生土器	台付直口坩	8.3	12.8	19.1	浅黄橙色(7.5YR8/4)	精良	工具による×印　ほぼ完形
1991	溝15	弥生土器	台付直口壺	—	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂、粗砂	鋸歯文、竹管文
1992	溝15	弥生土器	甕	(11.2)	4.8	16.4	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	ススB
1993	溝15	弥生土器	甕	15.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	ススB'
1994	溝15	弥生土器	甕	17.6	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
1995	溝15	弥生土器	甕	13.0	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂、粗砂、礫	
1996	溝15	弥生土器	甕	15.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
1997	溝15	弥生土器	甕	13.6	—	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	
1998	溝15	弥生土器	甕	16.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	ススB'
1999	溝15	弥生土器	甕	18.0	—	—	橙色(5YR7/6)	粗砂	
2000	溝15	弥生土器	甕	18.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	ケズリ後ヘラミガキ
2001	溝15	弥生土器	甕	18.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂、礫	

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
2002	溝15	弥生土器	甕	20.0	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	
2003	溝15	弥生土器	甕	21.6	—	—	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	
2004	溝15	弥生土器	甕	19.6	—	—	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	ハケメ後ヘラミガキ、工具ナデ
2005	溝15	弥生土器	甕	16.9	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂、粗砂	
2006	溝15	弥生土器	甕	17.6	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	ススB
2007	溝15	弥生土器	甕	16.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
2008	溝15	弥生土器	甕	(19.0)	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	ススB
2009	溝15	弥生土器	甕	15.9	—	16.7	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	ススB　黒斑C　完形
2010	溝15	弥生土器	甕	15.8	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	外面被熱による剥離　ススB
2011	溝15	弥生土器	甕	15.8	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
2012	溝15	弥生土器	甕	15.8	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
2013	溝15	弥生土器	甕	15.8	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
2014	溝15	弥生土器	甕	15.4	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	粗砂	ススB'
2015	溝15	弥生土器	甕	15.3	—	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	刺突文A－2　ススB'
2016	溝15	弥生土器	甕	(15.5)	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
2017	溝15	弥生土器	甕	14.8	4.4	15.0	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂、粗砂、礫	黒斑BC　ほぼ完形
2018	溝15	弥生土器	甕	14.8	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	ススB
2019	溝15	弥生土器	甕	14.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	
2020	溝15	弥生土器	甕	14.6	4.4	13.5	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂、粗砂	
2021	溝15	弥生土器	甕	11.8	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
2022	溝15	弥生土器	甕	14.4	5.4	18.3	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	ススB　黒斑A・BC
2023	溝15	弥生土器	甕	14.6	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	ススB
2024	溝15	弥生土器	甕	11.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
2025	溝15	弥生土器	甕	12.0	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、粗砂、礫	
2026	溝15	弥生土器	甕	12.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
2027	溝15	弥生土器	甕	11.6	5.4	18.7	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	穿孔　ススC　黒斑C
2028	溝15	弥生土器	甕	13.0	—	—	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	ススB'
2029	溝15	弥生土器	甕	13.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	ススB
2030	溝15	弥生土器	甕	13.2	—	—	橙色(5YR5/6)	細砂、粗砂、礫	刺突文か　黒斑B
2031	溝15	弥生土器	甕	13.8	—	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	ススB
2032	溝15	弥生土器	甕	—	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂、礫	
2033	溝15	弥生土器	甕	12.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	
2034	溝15	弥生土器	甕	13.0	4.2	15.1	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	
2035	溝15	弥生土器	甕	(13.6)	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
2036	溝15	弥生土器	甕	13.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	ススB'
2037	溝15	弥生土器	甕	13.2	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
2038	溝15	弥生土器	甕	13.4	—	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	
2039	溝15	弥生土器	甕	14.0	—	—	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂	歪み
2040	溝15	弥生土器	甕	14.3	4.2	20.1	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂、粗砂	穿孔　ススB　ほぼ完形
2041	溝15	弥生土器	甕	13.6	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂、礫	ススB
2042	溝15	弥生土器	甕	13.8	—	—	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	刺突文B－2　黒斑B
2043	溝15	弥生土器	甕	14.8	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂、礫	
2044	溝15	弥生土器	甕	14.6	—	—	淡橙色(5YR8/3)	細砂	
2045	溝15	弥生土器	甕	14.8	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
2046	溝15	弥生土器	甕	15.0	—	—	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	
2047	溝15	弥生土器	甕	15.1	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	黒斑B
2048	溝15	弥生土器	甕	15.2	—	—	灰白色(7.5YR8/2)	細砂、粗砂	
2049	溝15	弥生土器	甕	15.4	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	刺突文A－2
2050	溝15	弥生土器	甕	15.5	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	刺突文A－2、外面工具ナデ
2051	溝15	弥生土器	甕	15.6	—	—	褐灰色(10YR4/1)	粗砂	刺突文B－3
2052	溝15	弥生土器	甕	16.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	
2053	溝15	弥生土器	甕	16.0	—	—	鈍い黄橙色(7.5YR7/4)	細砂	
2054	溝15	弥生土器	甕	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂	
2055	溝15	弥生土器	甕	16.1	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	
2056	溝15	弥生土器	甕	16.1	—	—	淡赤橙色(2.5YR7/3)	粗砂、礫	外面工具ナデ　黒斑A
2057	溝15	弥生土器	甕	16.9	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	
2058	溝15	弥生土器	甕	17.3	—	—	橙色(5.5YR6/6)	細砂	
2059	溝15	弥生土器	甕	17.6	—	—	橙色(2.5YR7/6)	粗砂	
2060	溝15	弥生土器	甕	16.6	3.5	25.7	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	ススC　ほぼ完形
2061	溝15	弥生土器	甕	17.1	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	黒斑C
2062	溝15	弥生土器	甕	19.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
2063	溝15	弥生土器	甕	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	
2064	溝15	弥生土器	甕	—	—	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	粗砂	
2065	溝15	弥生土器	甕	—	3.4	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	外面ハケメ
2066	溝15	弥生土器	甕	—	3.8	—	浅黄橙色(7.5YR8/6)	細砂	穿孔
2067	溝15	弥生土器	甕	—	4.1	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	ススC
2068	溝15	弥生土器	甕	—	4.0	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂、礫	外面ハケメ
2069	溝15	弥生土器	甕	—	4.6	—	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂、粗砂	穿孔、外面ハケメ
2070	溝15	弥生土器	甕	—	4.8	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、粗砂、礫	外面ハケメ
2071	溝15	弥生土器	甕	—	5.0	—	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	穿孔、外面ハケメ
2072	溝15	弥生土器	甕	—	5.4	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	ススC　黒斑C
2073	溝15	弥生土器	甕	—	6.8	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂、粗砂、礫	外面ヘラミガキ　黒斑C
2074	溝15	弥生土器	高杯	16.3	12.0	10.0	橙色(5YR6/6)	精良、細砂	透し孔4ヶ　ほぼ完形
2075	溝15	弥生土器	高杯	15.6	—	—	橙色(5YR7/8)	精良	
2076	溝15	弥生土器	高杯	15.8	—	—	橙色(7.5YR7/6)	精良	

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
2077	溝15	弥生土器	高杯	15.8	—	—	鈍い橙色(5YR7/3)	精良、細砂	小孔
2078	溝15	弥生土器	高杯	16.5	11.1	9.6	橙色(5YR7/6)	細砂	透し孔１ヶ残存
2079	溝15	弥生土器	高杯	15.8	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	透し孔４ヶ内２ヶ残存
2080	溝15	弥生土器	高杯	17.1	—	—	橙色(5YR6/6)	精良、細砂	
2081	溝15	弥生土器	高杯	17.6	—	—	淡橙色(5YR8/3)	細砂	
2082	溝15	弥生土器	高杯	17.7	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
2083	溝15	弥生土器	高杯	18.4	—	—	淡橙色(5YR8/3)	精良	ミガキ６～７分割タテ方向
2084	溝15	弥生土器	高杯	(21.2)	—	—	淡黄色(2.5Y8/4)	細砂	
2085	溝15	弥生土器	高杯	(18.8)	—	—	橙色(7.5YR7/6)	精良、細砂	
2086	溝15	弥生土器	高杯	19.2	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
2087	溝15	弥生土器	高杯	19.2	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	
2088	溝15	弥生土器	高杯	19.3	11.8	9.7	橙色(7.5YR7/6)	細砂	透し孔４ヶ　ほぼ完形
2089	溝15	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	
2090	溝15	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(7.5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	
2091	溝15	弥生土器	高杯	16.2	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
2092	溝15	弥生土器	高杯	17.4	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂	ススＡ
2093	溝15	弥生土器	高杯	13.2	—	—	褐灰色(7.5YR5/1)	細砂	黒斑Ａ
2094	溝15	弥生土器	高杯	17.4	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	黒斑Ａ
2095	溝15	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	内面ヘラミガキ
2096	溝15	弥生土器	高杯	—	11.1	—	赤橙色(10R6/6)	細砂、粗砂	透し孔４ヶ
2097	溝15	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR7/6)	水漉粘土	透し孔４ヶ
2098	溝15	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	精良、細砂	小孔、透し孔４ヶ
2099	溝15	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	精良、細砂	小孔、透し孔４ヶ
2100	溝15	弥生土器	高杯	—	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂、粗砂	透し孔１ヶ残存
2101	溝15	弥生土器	高杯	—	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	透し孔４ヶ残存
2102	溝15	弥生土器	高杯	—	9.6	—	橙色(2.5YR6/6)	精良	小孔、透し孔４ヶ
2103	溝15	弥生土器	高杯	—	10.4	—	淡赤橙色(2.5YR7/4)	精良	透し孔４ヶ内２ヶ残存
2104	溝15	弥生土器	高杯	—	10.4	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	透し孔４ヶ
2105	溝15	弥生土器	高杯	—	10.5	—	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	小孔、透し孔４ヶ
2106	溝15	弥生土器	高杯	—	11.2	—	橙色(5YR7/8)	精良	小孔、透し孔４ヶ
2107	溝15	弥生土器	高杯	—	11.3	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	透し孔１ヶ残存
2108	溝15	弥生土器	高杯	—	11.3	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	透し孔１ヶ残存
2109	溝15	弥生土器	高杯	—	11.5	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	透し孔４ヶ、赤色顔料
2110	溝15	弥生土器	高杯	—	11.7	—	橙色(5YR7/6)	水漉粘土	小孔　黒斑Ｃ
2111	溝15	弥生土器	高杯	—	11.8	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	小孔、透し孔４ヶ　黒斑Ｃ
2112	溝15	弥生土器	高杯	—	11.9	—	浅黄橙色(7.5YR8/6)	細砂	透し孔４ヶ
2113	溝15	弥生土器	装飾高杯	24.4	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/6)	細砂	波状文、鋸歯文
2114	溝15	弥生土器	鉢	10.1	4.1	4.8	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、粗砂	
2115	溝15	弥生土器	鉢	15.3	5.1	5.8	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	木の葉痕
2116	溝15	弥生土器	鉢	—	—	—	鈍い黄褐色(10YR5/3)	細砂	内面ナデ
2117	溝15	弥生土器	鉢	9.6	—	—	橙色(5YR7/6)	粗砂	
2118	溝15	弥生土器	鉢	16.4	—	—	褐灰色(7.5YR5/1)	細砂	ススＡ
2119	溝15	弥生土器	鉢	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	内面ヘラケズリ
2120	溝15	弥生土器	鉢	16.3	4.3	6.4	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	内面工具痕　黒斑Ｃ　完形
2121	溝15	弥生土器	鉢	12.6	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	ススＢ
2122	溝15	弥生土器	鉢	12.0	4.1	8.4	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	ススＢ
2123	溝15	弥生土器	鉢	13.5	2.6	9.8	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂、粗石、礫	黒斑ＡＢＣ
2124	溝15	弥生土器	鉢	16.5	4.8	9.3	灰赤色(2.5YR6/2)	細砂	外面ヘラミガキ　ほぼ完形
2125	溝15	弥生土器	鉢	13.4	4.4	7.4	浅黄橙色(7.5YR7/4)	細砂	
2126	溝15	弥生土器	鉢	15.4	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	黒斑ＡＢ・Ｂ
2127	溝15	弥生土器	鉢	15.5	3.7	10.0	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	外面ハケメ　黒斑ＢＣ
2128	溝15	弥生土器	鉢	17.4	4.5	10.6	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	ススＡ　ほぼ完形
2129	溝15	弥生土器	鉢	—	5.1	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	ススＣ
2130	溝15	弥生土器	鉢	(20.1)	7.4	17.3	鈍い橙色(5YR7/3)	粗砂	ススＢ
2131	溝15	弥生土器	鉢	17.4	3.1	9.4	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	ほぼ完形
2132	溝15	弥生土器	鉢	18.0	2.8	10.4	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	穿孔　ほぼ完形
2133	溝15	弥生土器	鉢	(41.8)	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
2134	溝15	弥生土器	鉢	(45.0)	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	
2135	溝15	弥生土器	台付鉢	11.1	3.4	6.0	淡黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	
2136	溝15	弥生土器	台付鉢	12.4	4.4	6.8	橙色(2.5YR6/6)	細砂	黒斑Ｂ
2137	溝15	弥生土器	台付鉢	14.7	6.2	8.2	灰白色(7.5YR8/2)	精良	黒斑ＡＢＣ
2138	溝15	弥生土器	台付鉢	—	3.4	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	
2139	溝15	弥生土器	台付鉢	16.4	6.9	10.9	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	ススＣ
2140	溝15	弥生土器	台付鉢	—	5.0	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂、粗砂	
2141	溝15	弥生土器	台付鉢	—	7.1	—	橙色(5YR6/6)	細砂	穿孔４ヶづつ上下２段
2142	溝15	弥生土器	台付鉢	—	5.3	—	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	
2143	溝15	弥生土器	台付鉢	—	7.2	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	
2144	溝15	弥生土器	小形甕	5.4	2.4	7.8	淡橙色(5YR8/3)	細砂	黒斑ＢＣ　完形
2145	溝15	弥生土器	小形鉢	6.0	3.0	5.9	褐灰色(10YR4/1)	細砂	完形
2146	溝15	弥生土器	小形鉢	—	2.2	—	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	
2147	溝15	弥生土器	器台	22.5	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	
2148	溝15	弥生土器	器台	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
2149	溝15	弥生土器	製塩土器	—	6.3	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	外面ナデ　黒斑Ｃ
2150	溝17	弥生土器	壺	—	8.4	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	ススＣ
2151	溝17	弥生土器	甕	13.5	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
2152	溝17	弥生土器	甕	15.0	—	—	淡橙色(5YR8/4)	細砂、粗砂、礫	
2153	溝17	弥生土器	甕	15.0	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、粗砂	内面ヘラケズリ
2154	溝17	弥生土器	甕	15.3	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	外面ハケメ後ヘラミガキ
2155	溝17	弥生土器	甕	14.6	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂、粗砂	内面ヘラケズリ
2156	溝17	弥生土器	甕	13.0	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂(少)	
2157	溝17	弥生土器	甕	13.4	—	—	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	
2158	溝17	弥生土器	甕	15.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂	
2159	溝17	弥生土器	甕	16.1	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
2160	溝17	弥生土器	甕	21.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
2161	溝17	弥生土器	?	—	6.7	—	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	
2162	溝17	弥生土器	?	—	9.0	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、粗砂、礫	外面ヘラミガキ　黒斑C
2163	溝17	弥生土器	壺	—	4.6	—	橙色(5YR6/6)	細砂	外面木葉圧痕？
2164	溝17	弥生土器	高杯	17.0	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	外面ヘラミガキ
2165	溝17	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂、礫	
2166	溝17	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂(少)	外面ヘラミガキ
2167	溝17	弥生土器	装飾高杯	—	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	鋸歯文、竹管文
2168	溝17	弥生土器	鉢	12.4	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
2169	溝17	弥生土器	台付鉢	—	10.6	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂	
2170	溝18	弥生土器	壺	15.0	—	(10.0)	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	外面ミガキ
2171	溝18	弥生土器	高杯	22.0	11.0	15.0	橙色(5YR7/6)	粗砂	透し孔上3・下6　黒斑C
2172	溝18	弥生土器	高杯	18.0	—	(5.4)	橙色(5YR7/6)	細砂	内外面ミガキ
2173	その他	弥生土器	壺	12.4	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
2174	その他	弥生土器	甕	14.2	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
2175	その他	弥生土器	壺	12.4	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	沈線7条　黒斑A・B
2176	その他	弥生土器	壺	16.2	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
2177	その他	弥生土器	甕	18.0	—	—	灰白色(10YR8/2)	細砂	
2178	その他	弥生土器	壺	17.8	10.2	35.1	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	
2179	その他	弥生土器	壺	(20.2)	—	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	螺旋形の沈線14条
2180	その他	弥生土器	壺	20.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	沈線13条、列点文
2181	その他	弥生土器	壺	—	—	—	鈍い橙色(2.5YR6/4)	細砂、粗砂、礫	列点文　黒斑B
2182	その他	弥生土器	壺	—	—	—	淡橙色(5YR8/4)	細砂、粗砂	
2183	その他	弥生土器	壺	8.2	—	—	灰赤色(2.5YR6/2)	細砂、礫	沈線6条
2184	その他	弥生土器	甕	15.5	8.3	34.3	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂、粗砂、礫	
2185	その他	弥生土器	壺	13.9	4.6	21.7	赤褐色(10YR5/4)	細砂	外面に赤色顔料　黒斑BC
2186	その他	弥生土器	壺	24.0	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	
2187	その他	弥生土器	壺	24.0	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	2188と同一個体？
2188	その他	弥生土器	壺	—	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	2187と同一個体？
2189	その他	弥生土器	壺	21.2	—	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂	
2190	その他	弥生土器	壺	8.8	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂(ごく少)	
2191	その他	弥生土器	壺	11.8	6.3	11.4	浅黄橙色(10YR8/4)	粗砂	外面磨滅　黒斑C　完形
2192	その他	弥生土器	甕	—	9.4	—	鈍い赤橙色(10R6/4)	細砂、粗砂	黒斑C
2193	その他	弥生土器	壺	—	10.5	(9.5)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	
2194	その他	弥生土器	壺	—	12.4	—	淡橙色(5YR8/3)	細砂	黒斑C
2195	その他	弥生土器	甕	—	6.2	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	ススC
2196	その他	弥生土器	壺	—	9.6	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂、粗砂、礫	
2197	その他	弥生土器	壺	—	5.3	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	外面ヘラミガキ
2198	その他	弥生土器	小型壺	—	4.3	—	灰白色(10YR8/9)	細砂、粗砂	黒斑AC
2199	その他	弥生土器	壺	7.5	3.4	9.7	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂	黒斑BC
2200	その他	弥生土器	甕	16.0			鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	
2201	その他	弥生土器	甕	13.0	—	—	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	
2202	その他	弥生土器	甕	12.6	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	
2203	その他	弥生土器	甕	12.8	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	黒斑B
2204	その他	弥生土器	甕	18.3	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂、粗砂	
2205	その他	弥生土器	甕	14.6	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
2206	その他	弥生土器	甕	18.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
2207	その他	弥生土器	甕	14.0	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	
2208	その他	弥生土器	甕	14.6	—	—	灰白色(10YR8/2)	細砂	
2209	その他	弥生土器	甕	14.4	—	—	灰白色(10YR8/2)	細砂	
2210	その他	弥生土器	甕	23.0	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、粗砂、礫	鋸歯文1つ
2211	その他	弥生土器	甕	(31.0)	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
2212	その他	弥生土器	甕	16.3	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	沈線？
2213	その他	弥生土器	甕	14.8	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、粗砂、礫	
2214	その他	弥生土器	甕	16.1	—	—	淡橙色(5YR8/4)	細砂、粗砂	
2215	その他	弥生土器	甕	(12.6)	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
2216	その他	弥生土器	甕	15.2	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、礫	
2217	その他	弥生土器	甕	15.4	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	ススA
2218	その他	弥生土器	甕	14.6	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
2219	その他	弥生土器	甕	15.2	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	ススB
2220	その他	弥生土器	甕	13.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	
2221	その他	弥生土器	甕	12.9	—	—	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	
2222	その他	弥生土器	甕	(8.4)		(3.2)	橙色(5YR6/6)	細砂、礫	
2223	その他	弥生土器	甕	12.5	—	—	灰褐色(5YR5/2)	細砂	
2224	その他	弥生土器	甕	13.8	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	
2225	その他	弥生土器	甕	15.8	4.1	23.1	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	ススB'　ほぼ完形
2226	その他	弥生土器	甕	13.3	4.0	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
2227	その他	弥生土器	甕	17.8	5.0~5.4	20.9	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂、礫	外面タタキ後ナデ　黒斑B
2228	その他	弥生土器	甕	(13.6)	5.2	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	ススB
2229	その他	弥生土器	?	—	5.5	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	黒斑C
2230	その他	弥生土器	甕	—	5.5	—	暗赤褐色(5YR3/2)	細砂、粗砂、礫	
2231	その他	弥生土器	壺	—	4.5	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
2232	その他	弥生土器	甕	—	4.6	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	黒斑C
2233	その他	弥生土器	甕	—	7.1	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂、礫	穿孔
2234	その他	弥生土器	甕	—	2.3	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	内面工具ナデ　黒斑C
2235	その他	弥生土器	甕	—	5.0	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	外面ハケメ　ススC
2236	その他	弥生土器	甕	—	6.0	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	外面ハケメ　ススC
2237	その他	弥生土器	壺	—	7.8	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂、粗砂	
2238	その他	弥生土器	甕?	—	7.0	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、礫	
2239	その他	弥生土器	甕	—	2.7	—	灰褐色(10YR4/1)	細砂、粗砂、礫	外面ハケメ
2240	その他	弥生土器	甕	—	4.6	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	外面ハケメ後ヘラミガキ
2241	その他	弥生土器	甕	—	4.5	—	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂、粗砂、礫	外面ハケメ後ヘラミガキ
2242	その他	弥生土器	甕	—	5.4	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	穿孔、外面ハケメ
2243	その他	弥生土器	壺	—	7.1	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂、粗砂	ヘラ描き沈線文?
2244	その他	弥生土器	甕	—	5.2	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	外面ハケメ
2245	その他	弥生土器	甕	4.0	—	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂	穿孔、内面ハケメ後ナデ　黒斑C
2246	その他	弥生土器	高杯	20.6	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	外面ヘラミガキ6分割
2247	その他	弥生土器	高杯	22.4	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	外面ヘラミガキ6分割
2248	その他	弥生土器	高杯	(15.9)	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
2249	その他	弥生土器	高杯	21.0	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
2250	その他	弥生土器	高杯	17.1	8.5	9.6	橙色(7.5YR6/6)	細砂	
2251	その他	弥生土器	高杯	(35.4)	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	黒斑C
2252	その他	弥生土器	高杯	—	12.4	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	沈線、ヘラ描き沈線　ススC
2253	その他	弥生土器	高杯	11.0	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
2254	その他	弥生土器	高杯	—	12.7	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂、粗砂	穿孔、外面赤色顔料
2255	その他	弥生土器	高杯	—	10.0	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	透し孔2ヶ残存
2256	その他	弥生土器	高杯	—	(10.2)	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	透し孔1ヶ残存
2257	その他	弥生土器	高杯	—	12.6	—	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	透し孔4ヶ
2258	その他	弥生土器	高杯	—	10.4	—	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂	穿孔3ヶづつ上下2段
2259	その他	弥生土器	高杯		14.0	(2.1)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	粗砂	透し孔1現存
2260	その他	弥生土器	高杯	—	9.3	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	未貫通の孔9ヶ残存
2261	その他	弥生土器	高杯	—	—	—	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	
2262	その他	弥生土器	高杯	—	9.8	—	橙色(5YR7/8)	細砂	外面赤色顔料
2263	その他	弥生土器	器台	—	10.4	—	灰褐色(7.5YR4/2)	細砂、粗砂	外面赤色顔料
2264	その他	弥生土器	高杯	—	13.8	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	透し孔上3・下3
2265	その他	弥生土器	高杯	14.4	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	外面ヘラケズリ後ヘラミガキ
2266	その他	弥生土器	高杯	16.8	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	
2267	その他	弥生土器	高杯	15.5			橙色(2.5YR7/8)	細砂	透しあり
2268	その他	弥生土器	高杯	19.7	—	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂、粗砂、礫	
2269	その他	弥生土器	高杯	18.0	—	—	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	
2270	その他	弥生土器	高杯	—	10.9	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	透し孔4ヶ内3ヶ残
2271	その他	弥生土器	高杯	—	11.0	—	橙色(5YR7/8)	細砂	透し孔4方向4ヶ残
2272	その他	弥生土器	高杯	—	12.8	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、粗砂、礫	透し孔4方向4ヶ残　黒斑B・C
2273	その他	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	
2274	その他	弥生土器	高杯	—	10.7	—	橙色(5YR6/8)	細砂	透し孔4方向4ヶ残
2275	その他	弥生土器	高杯	—	12.4	—	橙色(5YR7/8)	細砂	透し孔1ヶ残存
2276	その他	弥生土器	高杯	—	10.0	—	橙色(5YR7/8)	細砂	透し孔4ヶ
2277	その他	弥生土器	高杯	—	11.4	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	透し孔4方向4ヶ残
2278	その他	弥生土器	高杯	—	11.6	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	透し孔4方向4ヶ残
2279	その他	弥生土器	高杯	—	14.0	—	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	透し孔4方向4ヶ残
2280	その他	弥生土器	甕	9.5	3.7	7.1	橙色(5YR7/6)	細砂	
2281	その他	弥生土器	鉢	12.2	(3.4)	6.6	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
2282	その他	弥生土器	台付鉢	10.8	5.0	7.6	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	ほぼ完形
2283	その他	弥生土器	鉢	39.8	—	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	
2284	その他	弥生土器	鉢	(36.2)	—	—	淡黄橙色(7.5YR8/3)	粗砂	
2285	その他	弥生土器	鉢	16.0	4.9	7.8	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、粗砂	
2286	その他	弥生土器	鉢	15.0	3.4	7.3	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、粗砂	
2287	その他	弥生土器	鉢	6.4	—	—	橙色(5YR7/8)	細砂	
2288	その他	弥生土器	鉢	—	—	—	褐灰色(7.5YR5/1)	細砂	
2289	その他	弥生土器	台付鉢	14.6	7.3	9.1	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂、礫	
2290	その他	弥生土器	台付鉢	—	9.7	—	橙色(5YR7/6)	粗砂、礫	透し孔7ヶ残存
2291	その他	弥生土器	台付鉢	—	5.5	—	灰赤色(2.5YR5/2)	細砂、粗砂	
2292	その他	弥生土器	鉢	3.8	2.4	6.8	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
2293	その他	弥生土器	鉢	6.9	3.8	10.5	淡橙色(5YR8/3)	細砂	黒斑BC　完形
2294	その他	弥生土器	鉢	4.7	3.8	7.7	淡橙色(5YR8/3)	細砂	黒斑B　完形
2295	その他	弥生土器	鉢	6.9	3.4	7.8	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	
2296	その他	弥生土器	壺	—	1.7	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	黒斑AB
2297	その他	土師器	ミニチュア甕	3.9	1.6	6.1	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	外面に線刻　黒斑AC
2298	その他	弥生土器	壺?	30.5	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	
2299	その他	弥生土器	器台	23.0	—	—	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	竹管文、内側竹管文3ヶ組
2300	その他	弥生土器	器台	27.1	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	内外対の貝殻圧痕文
2301	その他	弥生土器	器台	26.6	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	沈線5条、透し孔1ヶ所残

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
2302	その他	弥生土器	器台	22.0	20.8	21.6	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂、粗砂、礫	竹管文、内側竹管文３ヶ１線
2303	その他	弥生土器	器台	24.9	10.6	19.9	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂、礫	
2304	その他	弥生土器	器台	−	−	−	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	透し孔５方向、内２段１ヶ残存
2305	その他	弥生土器	器台	−	−	−	橙色(5YR6/6)	細砂	透し孔２段残存、沈線(螺旋状？)
2306	その他	弥生土器	器台	−	19.0	−	橙色(5YR7/6)	細砂	
2307	その他	弥生土器	器台	−	22.6	−	橙色(5YR7/8)	細砂、粗砂	透し孔２ヶ所残
2308	その他	弥生土器	器台	35.4	−	−	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂、礫	刻目
2309	その他	弥生土器	器台	(38.2)	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	鋸歯文２段
2310	その他	弥生土器	蓋	−	−	−	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
2311	その他	弥生土器	高杯	−	−	−	橙色(5YR7/6)	細砂	透し孔、赤色顔料
2312	その他	弥生土器	製塩土器	−	3.5	−	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
2313	その他	弥生土器	製塩土器	−	4.6	−	淡赤橙色(2.5YR7/4)	粗砂	
2314	その他	弥生土器	製塩土器	−	4.1	−	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
2315	その他	弥生土器	製塩土器	−	3.4	−	灰白色(5YR8/1)	細砂(多)	黒斑Ｃ
2316	竪穴住居53	土師器	壺	(19.0)	−	−	橙色(5YR6/8)	細砂	二重口縁、円形浮文
2317	竪穴住居53	土師器	壺	17.0			鈍い橙色(5YR7/4)	礫	
2318	竪穴住居53	土師器	壺	16.7	−	−	赤橙色(10YR6/6)	粗砂	
2319	竪穴住居53	土師器	壺	−	(9.0)	−	橙色(5YR6/8)	礫	
2320	竪穴住居53	土師器	壺	−	9.1	−	鈍い橙色(10YR7/4)	礫	
2321	竪穴住居53	土師器	甕	14.4	−	−	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	沈線８条、刺突文
2322	竪穴住居53	土師器	甕	14.8	−	−	橙色(2.5YR6/6)	細砂	沈線８条、刺突文Ｂ－３
2323	竪穴住居53	土師器	高杯	(21.8)	(13.8)	(12.6)	明赤褐色(2.5YR5/6)	精良	透し孔４
2324	竪穴住居53	土師器	高杯	19.0	−	−	浅黄橙色(7.5YR8/6)	精良	
2325	竪穴住居53	土師器	高杯	19.0	−	−	橙色(5YR7/8)	精良	内外面ミガキ
2326	竪穴住居53	土師器	高杯	−	16.4	−	橙色(5YR7/6)	精良	透し孔４
2327	竪穴住居53	土師器	鉢	13.0	2.8	9.4	橙色(2.5YR6/8)	精良	内外面ナデ
2328	竪穴住居53	土師器	特殊器台or壺	27.0			黄橙色(7.5YR8/8)	粗砂	外面沈線
2329	竪穴住居54	土師器	甕	(13.7)	−	−	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	櫛描沈線８条
2330	竪穴住居54	土師器	甕	13.1	−	−	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	櫛描沈線10条
2331	竪穴住居54	土師器	甕	12.3	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	櫛描沈線９条
2332	竪穴住居54	土師器	甕	14.2	−	−	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	櫛描沈線８条
2333	竪穴住居57	土師器	壺	15.8	−	−	赤橙色(10R6/8)	粗砂、礫	
2334	竪穴住居57	土師器	甕	12.0	−	−	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	沈線６条　焼成不良
2335	竪穴住居57	土師器	高杯	(16.0)	15.6	(15.2)	橙色(2.5YR6/8)	精良(水漉粘土)	透し孔３
2336	竪穴住居58	土師器	甕	13.9			鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	沈線７条
2337	竪穴住居58	土師器	甕	15.7			鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	沈線８条
2338	竪穴住居58	土師器	甕				鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	沈線７条
2339	竪穴住居59	土師器	壺	17.8			浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	外面ハケ後ミガキ
2340	竪穴住居59	土師器	壺	18.7			灰白色(10YR8/2)	礫	
2341	竪穴住居59	土師器	甕	(20.4)			橙色(5YR7/6)	礫	黒斑Ｂ
2342	竪穴住居59	土師器	甕	14.5		24.6	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	刺突文　ススＢ　完形
2343	竪穴住居59	土師器	甕	(15.6)			鈍い黄褐色(10YR5/3)	細砂	沈線６条
2344	竪穴住居59	土師器	甕	15.0			浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	沈線７条　ススＢ
2345	竪穴住居60	土師器	甕	(19.4)	−	−	灰黄褐色(10YR4/2)	粗砂	
2346	竪穴住居60	土師器	甕	15.0	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	沈線７条、刺突文
2347	竪穴住居60	土師器	甕	15.0	−	−	橙色(7.5YR6/6)	礫	外面ミガキ？
2348	竪穴住居60	土師器	高杯	−	−	−	橙色(2.5YR7/8)	精良	透し孔１残存
2349	竪穴住居60	土師器	高杯	−	−	−	明赤褐色(2.5YR5/6)	精良	
2350	竪穴住居60	土師器	鉢	(38.4)	−	−	橙色(5YR7/6)	細砂	
2351	竪穴住居60	土師器	坩	14.6	−	7.5	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	外面ハケメ、ススト付着
2352	竪穴住居60	土師器	椀	16.0～16.5	−	5.1	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	黒斑Ｃ　完形
2353	竪穴住居60	土師器	壺	(11.5)	−	(10.8)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	外面ハケメ
2354	竪穴住居63	土師器	高杯	20.4	14.5	15.5	橙色(5YR7/8)	精良	内面ミガキ　黒斑ＡＣ　完形
2355	竪穴住居63	土師器	椀	(12.5)	−	7.6	淡黄色(2.5Y8/3)	粗砂	内外面ナデ　黒斑ＡＢＣ
2356	竪穴住居64	土師器	甕	13.2			橙色(5YR7/8)	礫	外面磨滅
2357	竪穴住居64	土師器	甕	15.0			橙色(7.5YR6/6)	粗砂	沈線９条、外面磨滅
2358	竪穴住居64	土師器	甕	12.7			橙色(2.5YR6/6)	粗砂	沈線11条、刺突文　ススＢ
2359	竪穴住居64	土師器	高杯	−	13.8		橙色(5YR7/8)	精良	透し孔４
2360	竪穴住居64	土師器	高杯	22.4	15.3	17.1	橙色(5YR7/6)	精良	透し孔４
2361	竪穴住居64	土師器	椀	12.0			橙色(5YR6/8)	精良	全体磨滅
2362	竪穴住居65	土師器	壺	20.0	−	−	橙色(5YR7/8)	細砂	黒斑Ａ
2363	竪穴住居65	土師器	壺	−	5.0	−	黄橙色(7.5YR7/8)	細砂	内外面とも磨耗　黒斑Ｃ
2364	竪穴住居65	土師器	壺	(14.4)	−	−	浅黄橙色(7.5YR8/6)	粗砂(多)	内外面とも磨耗
2365	竪穴住居65	土師器	鉢	(8.4)	−	−	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂、礫	(赤色顔料？)
2366	竪穴住居65	土師器	鉢	14.4	−	5.7	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	内外面とも磨耗　ほぼ完形
2367	竪穴住居65	土師器	鉢	18.6	−	−	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	
2368	竪穴住居65	土師器	製塩土器	−	−	−	灰赤色(10R4/2)	細砂	
2369	竪穴住居65	土師器	製塩土器	−	(4.2～4.9)	−	鈍い赤橙色(10R6/3)	粗砂、礫	
2370	竪穴住居65	土師器	製塩土器	−	(5.0)	−	赤色(10R5/6)	細砂	
2371	竪穴住居65	土師器	製塩土器	−	(4.6)	−	赤橙色(10R6/6)	細砂	
2372	竪穴住居65	土師器	製塩土器	−	(5.2)	−	赤色(10R5/6)	細砂	
2373	竪穴住居66	土師器	壺	9.6	−	(4.7)	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
2374	竪穴住居66	土師器	壺	—	—	(9.9)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	黒斑B
2375	竪穴住居66	土師器	壺	—	—	(19.1)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂	黒斑B・BC
2376	竪穴住居66	土師器	壺	17.0	—	(21.7)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	ススB　黒斑B
2377	竪穴住居66	土師器	甕	(12.1)	—	(7.4)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂	
2378	竪穴住居66	土師器	甕	14.0	—	(6.0)	褐灰色(10YR4/1)	細砂	
2379	竪穴住居66	土師器	甕	11.4	—	(13.1)	灰白色(10YR8/2)	粗砂	
2380	竪穴住居66	土師器	甕	15.3	—	(12.8)	明褐灰色(7.5YR7/2)	粗砂	ススA
2381	竪穴住居66	土師器	甕	(16.0)	—	(7.0)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
2382	竪穴住居66	土師器	甕	(15.5)	—	(5.0)	灰色(5Y3/1)	細砂、粗砂、礫	
2383	竪穴住居66	土師器	甕	(13.2)	—	(9.5)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂	沈線5条
2384	竪穴住居66	土師器	甕	13.6	—	(10.7)	明赤灰色(2.5YR7/2)	細砂	沈線6条　ススB'
2385	竪穴住居66	土師器	甕	13.6	—	(2.7)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	沈線5条
2386	竪穴住居66	土師器	甕	14.8	5.7	25.4	灰白色(10YR8/2)	粗砂	沈線4条　ススA　黒斑C
2387	竪穴住居66	土師器	甕	15.1	5.8	28.1	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂	沈線4条
2388	竪穴住居66	土師器	甕	(15.2)	—	(9.6)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	沈線4条　ススB
2389	竪穴住居66	土師器	甕	17.2	—	(13.7)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂	ススB
2390	竪穴住居66	土師器	甕	18.4	—	(21.8)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂、細砂	ススB
2391	竪穴住居66	土師器	甕	—	4.3	(10.9)	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	
2392	竪穴住居66	土師器	甕	—	—	(15.0)	灰白色(10YR7/1)	細砂	ススB
2393	竪穴住居66	土師器	高杯	17.8	13.8	9.6	橙色(5YR7/6)	細砂	透し孔4ヶ所
2394	竪穴住居66	土師器	高杯	19.1	—	(10.6)	橙色(5YR6/6)	精良	透し孔2ヶ残存
2395	竪穴住居66	土師器	高杯	19.8	12.0	13.7	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	透し孔3ヶ
2396	竪穴住居66	土師器	高杯	17.4	13.4	12.6	橙色(5YR6/8)	精良	透し孔4ヶ所　黒斑A
2397	竪穴住居66	土師器	高杯	21.0	—	(6.6)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	精良、細砂	
2398	竪穴住居66	土師器	高杯	21.8	—	(8.3)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、粗砂、礫	
2399	竪穴住居66	土師器	高杯	13.4	—	(8.4)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	透し孔4ヶ
2400	竪穴住居66	土師器	高杯	13.0	—	(7.2)	淡橙色(5YR8/4)	細砂、粗砂、礫	
2401	竪穴住居66	土師器	高杯	—	13.5	(5.4)	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	透し孔4ヶ
2402	竪穴住居66	土師器	高杯	—	15.0	(7.8)	橙色(5YR6/8)	細砂	透し孔4ヶ
2403	竪穴住居66	土師器	高杯	—	12.0	(5.8)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、粗砂	透し孔4ヶ
2404	竪穴住居66	土師器	高杯	—	11.8	(7.0)	明赤灰色(2.5YR7/2)	細砂	透し孔3ヶ　黒斑C
2405	竪穴住居66	土師器	器台	—	11.4	(6.3)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	精良、細砂	透し孔3ヶ所
2406	竪穴住居66	土師器	鉢	13.0	3.5	(6.0)	橙色(2.5YR6/8)	細砂、粗砂	木の葉痕あり
2407	竪穴住居66	土師器	甕	16.0	3.2	14.5	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	ススB
2408	竪穴住居66	土師器	鉢	15.3	—	(12.7)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	ススB
2409	竪穴住居66	土師器	鉢	(25.1)	—	(9.6)	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	
2410	竪穴住居66	土師器	鉢	(15.6)	—	(4.7)	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
2411	竪穴住居66	土師器	鉢	(49.6)	—	(12.6)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
2412	竪穴住居66	土師器	台付鉢	—	7.0	(3.5)	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂、粗砂、礫	
2413	竪穴住居66	土師器	台付鉢	—	9.2	(5.1)	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂、粗砂	
2414	竪穴住居66	土師器	器台	9.6	10.4	7.8	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	透し孔3ヶ
2415	竪穴住居66	土師器	製塩土器	—	4.8	(2.8)	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	
2416	竪穴住居66	土師器	製塩土器	—	4.4	(2.8)	鈍い赤橙色(10R6/4)	粗砂	
2417	竪穴住居67	土師器	壺	26.5			浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
2418	竪穴住居67	土師器	壺	(11.2)			橙色(5YR7/8)	細砂	
2419	竪穴住居67	土師器	壺	16.6			灰白色(7.5YR8/1)	細砂	外面ミガキ
2420	竪穴住居67	土師器	壺	21.0			鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
2421	竪穴住居67	土師器	直口壺	11.0			赤橙色(10R6/6)	細砂	
2422	竪穴住居67	土師器	直口壺	11.8			橙色(5YR7/6)	細砂	
2423	竪穴住居67	土師器	甕	13.2	—	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	粗砂	沈線
2424	竪穴住居67	土師器	甕	11.0	—	—	褐灰色(10YR5/1)	細砂	刺突文
2425	竪穴住居67	土師器	甕	12.4			褐灰色(10YR6/1)	細砂	沈線7条、外面ミガキ　黒斑AB
2426	竪穴住居67	土師器	甕	14.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	沈線6条
2427	竪穴住居67	土師器	甕	14.2			鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	外面ハケ後ミガキ　ススB
2428	竪穴住居67	土師器	甕	13.6	—	20.3	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	下半ハケ後ナデ　ススB　完形
2429	竪穴住居67	土師器	甕	(12.7)	—	20.6	赤橙色(10R6/6)	細砂	指オサエ
2430	竪穴住居67	土師器	壺	13.8			鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
2431	竪穴住居67	土師器	甕	(10.2)	—	—	鈍い黄橙色(10YR6/3)	粗砂	沈線
2432	竪穴住居67	土師器	高杯	(15.6～15.9)	—	—	灰白色(10YR8/2)	細砂	内面ハケ
2433	竪穴住居67	土師器	高杯	15.6	—	—	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	外面ケズリ
2434	竪穴住居67	土師器	高杯	18.2	13.1 14.3	13.8～	橙色(2.5YR6/6)	細砂	内外面ミガキ、透し孔3　完形
2435	竪穴住居67	土師器	鉢	34.6			明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	
2436	竪穴住居67	土師器	鉢	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
2437	竪穴住居67	土師器	椀	14.9		5.4	灰黄褐色(10YR6/2)	粗砂	外面ケズリ　完形
2438	竪穴住居67	土師器	器台	12.4	10.2	7.1	橙色(2.5YR7/8)	精良	表面磨滅
2439	竪穴住居67	土師器	鼓形器台	—	(18.9)	—	赤橙色(10R6/8)	粗砂	外面ミガキ
2440	竪穴住居67	土師器	壺	9.8		10.0	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	外面ケズリ　ススA　完形
2441	竪穴住居67	土師器	坩	10.7		6.5	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	外面ケズリ
2442	竪穴住居67	土師器	鉢	20.6	—	16.3	赤橙色(10R6/6)	粗砂	表面磨滅、粗製
2443	竪穴住居67	土師器	製塩土器	(9.8)	—	—	褐灰色(7.5YR4/1)	細砂	外面タタキ
2444	竪穴住居67	土師器	手捏土器	9.3			橙色(5YR6/6)	粗砂	手捏ね
2445	竪穴住居67	土師器	壺	(21.6)			灰白色(2.5Y8/2)	細砂	
2446	竪穴住居67	土師器	甕	14.6	—	—	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
2447	竪穴住居67	土師器	甕	12.2	−	−	鈍い黄橙色(10YR7/2)	粗砂	
2448	竪穴住居67	土師器	高杯	13.4	8.8	8.2	淡赤橙色(2.5YR7/4)	精良	
2449	竪穴住居67	土師器	椀	14.0		4.7	橙色(5YR6/8)	粗砂	外面ケズリ
2450	竪穴住居67	土師器	壺	4.0		9.6	鈍い橙色(5YR/4)	精良	外面ミガキ
2451	竪穴住居67	土師器	甕	9.2	−	−	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	沈線
2452	竪穴住居67	土師器	壺	9.7			橙色(2.5YR6/6)	粗砂	外面ケズリ
2453	竪穴住居67	土師器	器台	7.9	11.4	7.6	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	
2454	竪穴住居67	土師器	壺	16.0			浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
2455	竪穴住居67	土師器	高杯	15.6	−	−	赤橙色(10R6/8)	粗砂	
2456	竪穴住居67	土師器	高杯	15.7	−	−	淡黄色(10YR8/3)	細砂	黒斑ＡＣ
2457	竪穴住居67	土師器	高杯	(15.0)	−	−	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	外面ケズリ
2458	竪穴住居67	土師器	高杯	−	11.8	−	赤橙色(10R6/6)	精良	透し孔３
2459	竪穴住居67	土師器	高杯	−	11.0	−	橙色(2.5YR6/8)	精良	外面ミガキ
2460	竪穴住居67	土師器	椀	15.0	3.0	5.9	橙色(5YR7/6)	粗砂	外面ケズリ　黒斑Ｂ
2461	竪穴住居67	土師器	椀	14.0			鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	外面ケズリ
2462	竪穴住居67	土師器	椀	8.4		3.3	灰褐色(5YR4/2)	細砂	外面指オサエ
2463	竪穴住居67	土師器	壺	9.8		9.9	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	
2464	竪穴住居67	土師器	坩	10.5		7.2	橙色(5YR7/6)	粗砂	外面ケズリ
2465	竪穴住居67	土師器	鉢				鈍い橙色(5YR7/4)	精良	
2466	竪穴住居67	土師器	製塩土器	−	3.2	−	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	外面タタキ
2467	竪穴住居67	土師器	製塩土器	−	4.0	−	赤色(10R5/6)	粗砂	
2468	竪穴住居67	土師器	手捏土器	4.9		4.0	橙色(5YR7/6)	粗砂	指オサエ　完形
2469	竪穴住居68	土師器	甕	(13.4)	−	−	鈍い褐色(7.5YR5/4)	細砂	櫛描沈線８条
2470	竪穴住居68	土師器	甕	(15.0)	−	−	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	櫛描沈線９条
2471	竪穴住居68	土師器	甕	12.0	−	−	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
2472	竪穴住居68	土師器	高杯	(19.0)	−	−	橙色(5YR7/8)	細砂	
2473	竪穴住居68	土師器	高杯	21.0	−	−	橙色(5YR7/6)	細砂	
2474	竪穴住居68	土師器	高杯	19.6	−	−	橙色(5YR7/6)	精良	
2475	竪穴住居68	弥生土器？	鉢	18.0	−	−	橙色(5YR6/6)	細砂、礫	
2476	竪穴住居68	土師器	鉢	15.6	5.5	9.5	橙色(2.5YR6/8)	細砂	ススＡ
2477	竪穴住居68	土師器	製塩土器	−	6.0	−	橙色(2.5YR6/6)	粗砂、礫	
2478	竪穴住居68	土師器	製塩土器	−	5.2	−	橙色(2.5YR6/6)	粗砂、礫	
2479	竪穴住居68	土師器	製塩土器	−	5.6	−	鈍い橙色(2.5YR6/4)	粗砂、礫	
2480	竪穴住居68	土師器	製塩土器	−	5.0	−	鈍い黄橙色(10YR6/3)	粗砂、礫	
2481	竪穴住居69	土師器	甕	15.9	4.0	25.9	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、粗砂	櫛描沈線８条
2482	竪穴住居69	土師器	甕	12.4	−	−	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	櫛描沈線10条
2483	竪穴住居69	土師器	小型器台	9.3	−	−	橙色(5YR6/6)	細砂	透し孔２個一対２組
2484	竪穴住居69	土師器？(手捏土器)	小型壺	7.2	2.3	9.2	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	歪みがはげしい　黒斑Ｃ
2485	竪穴住居70	土師器	甕	(17.0)	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	櫛描沈線７条
2486	竪穴住居70	土師器	台付壺	8.0	10.6	12.2	橙色(5YR7/8)	精良	
2487	竪穴住居70	土師器	鉢	8.2	−	−	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
2488	竪穴住居70	土師器	鉢	19.0	−	−	橙色(5YR7/6)	細砂	
2489	竪穴住居70	土師器	鉢	9.0	−	7.5	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、礫	ススＢ
2490	竪穴住居70	土師器	？	−	−	−	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
2491	竪穴住居71	土師器	壺	(16.6)	−	−	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	円形浮文＋竹管文
2492	竪穴住居71	土師器	甕	(14.2)	−	−	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	櫛描沈線９条
2493	竪穴住居71	土師器	製塩土器	−	5.2	−	暗灰黄色(2.5Y5/2)	細砂、粗砂	
2494	竪穴住居72	弥生土器	有段鉢	12.6	2.9	7.9	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	沈線４条　黒斑Ｂ～Ｃ
2495	竪穴住居72	弥生土器	脚付鉢	12.0	3.5	8.1	橙色(2.5Y6/6)	細砂	外面ナデ　黒斑Ａ～Ｃ
2496	土壙313	土師器	高杯	19.7			橙色(5YR6/8)	精良	内外面磨滅　黒斑Ａ
2497	土壙314	土師器？	甕	(13.3)	−	−	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	沈線６条？
2498	土壙315	土師器	甕	(13.0)	−	−	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	櫛描沈線７条
2499	土壙315	土師器	甕	13.6	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
2500	土壙315	土師器	甕	(17.0)	−	−	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、礫	
2501	柱穴15	土師器	壺	18.8	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	黒斑Ｂ
2502	柱穴16	土師器	壺	18.6	9.4	37.8	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂、礫	黒斑Ｃ
2503	溝19	土師器	壺	24.8	−	−	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	歪みあり
2504	溝19	土師器	壺	(18.8)	−	−	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	波状文(内面)、沈線３条？
2505	溝19	土師器	甕	12.3	−	−	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	櫛描沈線８条
2506	溝19	土師器	甕	(14.3)	−	−	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	櫛描沈線７条？
2507	溝19	土師器	甕	15.2	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	櫛描沈線９条
2508	溝19	土師器	甕	15.7	−	−	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	櫛描のようなヨコナデ？
2509	溝19	土師器	甕	(16.9)	−	−	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂	
2510	溝19	土師器	鉢	29.5	−	−	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	
2511	溝19	土師器	製塩土器	−	5.0	−	橙色(2.5YR6/8)	細砂、粗砂	
2512	溝19	土師器	製塩土器	−	5.7	−	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	
2513	溝20	土師器	壺	16.4	−	−	橙色(2.5YR6/8)	細砂	外面ハケ
2514	溝20	土師器	甕	−	−	−	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	黒斑Ｃ
2515	溝20	土師器	甕	12.6	−	−	鈍い赤褐色(2.5YR5/4)	粗砂	沈線７条　ススＡ
2516	溝20	土師器	甕	15.6	−	−	鈍い赤褐色(5YR4/3)	粗砂	沈線10条　黒斑Ａ
2517	溝24	土師器	壺	19.4	−	−	淡橙色(5YR8/3)	細砂、粗砂、礫	
2518	溝24	土師器	甕	−	−	−	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂	櫛描沈線６条
2519	溝24	土師器	高杯	−	−	−	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
2520	溝24	土師器	高杯	14.8	7.8	7.7	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
2521	溝24	土師器	壺	5.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	黒斑A
2522	溝24	土師器	鉢	11.6	—	4.3	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	内面ヘラミガキ
2523	溝24	土師器	製塩土器	—	6.9	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	
2524	溝24	土師器	製塩土器	—	2.6	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
2525	溝24	土師器	製塩土器	—	3.3	—	鈍い橙色(2.5YR6/4)	細砂	
2526	溝24	土師器	製塩土器	—	2.7	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
2527	溝25	土師器	壺	—	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	精良、細砂	
2528	溝25	土師器	壺	11.6	—	17.1	灰白色(10YR8/1)	細砂	ススC　黒斑ABC　ほぼ完形
2529	溝25	土師器	壺	12.5	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	内面ユビオサエ後ヘラケズリ
2530	溝25	土師器	壺	14.0	—	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂、粗砂	
2531	溝25	土師器	壺	16.6	—	—	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂、粗砂	
2532	溝25	土師器	壺	17.6	—	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	
2533	溝25	土師器	壺	—	4.2	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	平行タタキ痕あり
2534	溝25	土師器	壺	16.8	—	—	明褐灰色(7.5YR7/1)	細砂	ススB　黒斑A
2535	溝25	土師器	壺	—	—	—	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	外面工具ナデ
2536	溝25	土師器	壺	18.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂	
2537	溝25	土師器	壺	(18.4)	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	ヘラケズリの方向変わる　黒斑B
2538	溝25	土師器	壺	—	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
2539	溝25	土師器	壺	21.0	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	粗砂	
2540	溝25	土師器	壺	24.6	53.0	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂、粗砂、礫	
2541	溝25	土師器	壺	25.9	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	黒斑A
2542	溝25	土師器	壺	21.8	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	ススB
2543	溝25	土師器	壺	15.5	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂	
2544	溝25	土師器	壺	18.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
2545	溝25	土師器	壺	18.1	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	内面ハケメ前の凹凸残る(当具痕?)、外面平行タタキ痕
2546	溝25	土師器	壺	21.3	6.4	35.2	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	内面ヘラケズリ?、外面赤色顔料　黒斑BC　完形
2547	溝25	土師器	壺	20.1	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	ヘラケズリの方向変わる
2548	溝25	土師器	壺	(28.8)	—	—	明褐灰色(5YR7/2)	細砂	
2549	溝25	土師器	壺	26.0	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	沈線22条
2550	溝25	土師器	壺	11.2	2.8	11.6	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	黒斑BC
2551	溝25	土師器	壺	13.0	—	16.6	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂、礫	黒斑A・B
2552	溝25	土師器	壺	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
2553	溝25	土師器	壺	—	6.4	—	褐灰色(7.5YR4/1)	細砂	外面ヘラミガキ
2554	溝25	土師器	壺	—	6.6	—	淡橙色(5YR8/3)	細砂	黒斑C
2555	溝25	土師器	壺	12.0	—	21.9	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂、粗砂、礫	
2556	溝25	土師器	壺	12.2	—	20.3	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
2557	溝25	土師器	壺	20.6	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	粗砂	
2558	溝25	土師器	壺	21.0	—	—	灰白色(2.5Y8/2)	細砂、粗砂、礫	平行タタキ痕あり、2559と同一個体　黒斑C
2559	溝25	土師器	壺	—	—	—	灰白色(2.5Y8/2)	細砂、粗砂、礫	2558と同一個体
2560	溝25	土師器	壺	8.6	—	—	灰白色(5YR8/2)	細砂、礫	
2561	溝25	土師器	壺	—	—	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	
2562	溝25	土師器	壺	10.4	—	13.3	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	粗いヘラケズリ
2563	溝25	土師器	壺	—	2.3	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	
2564	溝25	土師器	壺	—	3.5	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	黒斑B
2565	溝25	土師器	甕	12.0	—	—	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	
2566	溝25	土師器	甕	12.5	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	黒斑A・B
2567	溝25	土師器	甕	14.4	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂	
2568	溝25	土師器	甕	14.4	—	—	浅黄橙色(10YR8/4)	粗砂	ススC
2569	溝25	土師器	甕	15.2	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂、礫	櫛描沈線6条　黒斑A・B
2570	溝25	土師器	甕	12.8	—	21.9	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	櫛描沈線8条
2571	溝25	土師器	甕	11.0	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	櫛描沈線6条
2572	溝25	土師器	甕	16.4	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂、礫	櫛描沈線4条
2573	溝25	土師器	甕	12.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	櫛描沈線6条
2574	溝25	土師器	甕	13.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	櫛描沈線5条、刺突文A－2
2575	溝25	土師器	甕	14.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂	櫛描沈線7条
2576	溝25	土師器	甕	(14.2)	—	—	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	櫛描沈線5条
2577	溝25	土師器	甕	14.4	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	内面ヘラケズリ工具端痕跡
2578	溝25	土師器	甕	15.5	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	櫛描沈線5条
2579	溝25	土師器	甕	13.4	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	櫛描沈線2条
2580	溝25	土師器	甕	11.4	—	—	灰白色(2.5YR7/1)	細砂	櫛描沈線6条　ススB　黒斑B・C
2581	溝25	土師器	甕	12.8	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	櫛描沈線3条　ススB
2582	溝25	土師器	甕	15.8	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	櫛描沈線7条
2583	溝25	土師器	甕	16.2	—	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	櫛描沈線6条
2584	溝25	土師器	甕	14.8	—	—	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	櫛描沈線8～9条
2585	溝25	土師器	甕	(16.7)	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	櫛描沈線5条
2586	溝25	土師器	甕	14.4	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	櫛描沈線6条、刺突文B－2　ススB
2587	溝25	土師器	甕	—	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
2588	溝25	土師器	甕	12.5	—	—	灰白色(5YR8/2)	細砂、粗砂	櫛描沈線7条　ススC
2589	溝25	土師器	甕	14.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂	櫛描沈線4～5条
2590	溝25	土師器	甕	13.0	—	20.5	灰白色(10YR8/1)	細砂	櫛描沈線6条　黒斑B・BC
2591	溝25	土師器	甕	13.9	—	25.4	淡橙色(5YR8/3)	細砂、粗砂、礫	櫛描沈線7条　ススB　ほぼ完形
2592	溝25	土師器	甕	8.4	—	10.8	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	工具ナデ　ススC

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
2593	溝25	土師器	甕	13.8	—	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	平行タタキメ
2594	溝25	土師器	甕	13.6	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂	平行タタキメ　黒斑B
2595	溝25	土師器	甕	14.2	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	被熱、平行タタキメ
2596	溝25	土師器	甕	—	—	—	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	内面ユビナデ、平行タタキメ
2597	溝25	土師器	甕	—	—	—	淡橙色(5YR8/4)	細砂、粗砂、礫	内面ハケメ、平行タタキメ
2598	溝25	土師器	甕	—	4.0	—	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂	内面ユビナデ、平行タタキメ
2599	溝25	土師器	甕	—	4.2	—	暗灰色(N3)	細砂	内面工具ナデ
2600	溝25	土師器	甕	15.8	5.1	25.4	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂、礫	平行タタキ後ハケメ
2601	溝25	土師器	甕	—	5.2	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂、粗砂、礫	内面工具ナデ、平行タタキメ
2602	溝25	土師器	甕	15.8	—	—	灰白色(10YR8/2)	細砂	平行タタキメ痕
2603	溝25	土師器	甕	16.0	—	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	
2604	溝25	土師器	甕	15.6	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	粗砂	内面ユビオサエ　黒斑B
2605	溝25	土師器	甕	—	3.4	—	灰白色(5YR8/1)	細砂	内面ナデ？　黒斑AB
2606	溝25	土師器	甕	10.2	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
2607	溝25	土師器	甕	10.6	—	—	灰白色(10YR8/2)	細砂	刺突文A－3　ススB
2608	溝25	土師器	甕	11.2	3.0	14.5	暗褐灰色(5YR7/2)	細砂	ヘラケズリ工具端の痕跡　ススA
2609	溝25	土師器	甕	17.0	—	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	
2610	溝25	土師器	甕	(9.8)	—	(11.6)	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	
2611	溝25	土師器	甕	10.0	—	—	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂、粗砂、礫	
2612	溝25	土師器	甕	11.1	—	12.5	淡橙色(5YR8/3)	細砂	工具ナデ？　黒斑ABC
2613	溝25	土師器	甕	12.1	—	15.2	橙色(5YR7/6)	細砂	
2614	溝25	土師器	甕	16.0	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	ススB
2615	溝25	土師器	高杯	—	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
2616	溝25	土師器	高杯	15.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
2617	溝25	土師器	高杯	17.2	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
2618	溝25	土師器	高杯	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	外面ハケメ
2619	溝25	土師器	高杯	13.6	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
2620	溝25	土師器	高杯	16.1	11.2	14.1	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	ほぼ完形
2621	溝25	土師器	高杯	15.5	11.6	13.4	明褐灰色(7.5YR7/2)	粗砂、礫	
2622	溝25	土師器	高杯	—	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	透し孔あり
2623	溝25	土師器	高杯	—	9.9	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂(ごく少)	透し孔3方向3ヶ残
2624	溝25	土師器	高杯	—	12.2	—	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	
2625	溝25	土師器	高杯	—	15.4	—	鈍い橙色(2.5YR6/4)	細砂	透し孔2ヶ残存
2626	溝25	土師器	高杯	—	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
2627	溝25	土師器	高杯	—	—	—	浅黄橙色(7.5YR5/2)	粗砂	
2628	溝25	土師器	高杯	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
2629	溝25	土師器	高杯	—	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
2630	溝25	土師器	高杯	—	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	透し孔1ヶ残存
2631	溝25	土師器	高杯	—	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
2632	溝25	土師器	高杯	—	—	—	浅黄橙色(10YR8/4)	粗砂	
2633	溝25	土師器	高杯	—	—	—	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	
2634	溝25	土師器	高杯	—	14.0	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	透し孔2ヶ残存
2635	溝25	土師器	高杯	—	17.6	—	浅黄橙色(10YR8/4)	粗砂	透し孔4ヶ残存
2636	溝25	土師器	高杯	—	10.4	—	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	透し孔4方向4ヶ残
2637	溝25	土師器	高杯	—	10.4	—	淡橙色(5YR8/4)	細砂	透し孔3方向3ヶ所残
2638	溝25	土師器	高杯	—	10.6	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂(ごく少)	透し孔4ヶ
2639	溝25	土師器	高杯	—	11.0	—	橙色(5YR7/6)	細砂	透し孔4方向4ヶ残
2640	溝25	土師器	高杯	—	12.3	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂	透し孔4ヶ
2641	溝25	土師器	高杯	—	9.0	—	橙色(5YR7/6)	細砂	透し孔4ヶ残存
2642	溝25	土師器	鉢	8.9	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	沈線3条
2643	溝25	土師器	台付鉢	—	—	—	橙色(5YR7/6)	精良	透し孔5方向5ヶ残
2644	溝25	土師器	鉢	11.8	4.4	2.9	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
2645	溝25	土師器	鉢	15.6	—	—	明褐灰色(7.5YR7/1)	細砂	内面工具ナデ？
2646	溝25	土師器	鉢	14.3	—	6.1	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	
2647	溝25	土師器	鉢	10.0	—	6.7	橙色(5YR7/8)	細砂	
2648	溝25	土師器	鉢	—	—	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	外面ヘラケズリ後ナデ？　黒斑C
2649	溝25	土師器	鉢	8.5	2.8	4.6	灰白色(10YR8/2)	細砂	黒斑BC
2650	溝25	土師器	鉢	—	2.6	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	
2651	溝25	土師器	鉢	17.6	3.0	8.5	灰白色(10YR8/2)	細砂	黒斑B・BC
2652	溝25	土師器	鉢	19.8	—	—	灰白色(10YR8/2)	粗砂	
2653	溝25	土師器	鉢	(6.4)	(2.0)	(5.7)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
2654	溝25	土師器	鉢	8.7	4.0	10.6	灰白色(5YR8/2)	細砂	内面下半ナデ　ススB
2655	溝25	土師器	鉢	18.0	—	6.6	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	
2656	溝25	土師器	鉢	10.8	—	—	灰白色(10YR8/2)	粗砂	
2657	溝25	土師器	小型丸底坩	—	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	
2658	溝25	土師器	小型丸底坩	(10.0)	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	内面工具ナデ？
2659	溝25	土師器	小型丸底坩	11.4	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	
2660	溝25	土師器	小型丸底坩	12.4	—	7.9	灰白色(5YR8/1)	細砂、粗砂、礫	
2661	溝25	土師器	小型丸底坩	13.3	—	—	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	
2662	溝25	土師器	小型丸底坩	13.6	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	精良、細砂	黒斑A
2663	溝25	土師器	小型丸底坩	16.4	—	—	淡黄色(10YR8/3)	精良、細砂	ススA
2664	溝25	土師器	台付鉢	—	5.5	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂、礫	
2665	溝25	土師器	台付鉢	—	4.9	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	黒斑C
2666	溝25	土師器	台付鉢	—	6.5	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂	
2667	溝25	土師器	台付鉢	—	7.0	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	精良	

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
2668	溝25	土師器	台付鉢	－	7.6	－	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
2669	溝25	土師器	台付鉢	－	5.3	－	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	
2670	溝25	土師器	台付鉢	26.9	18.7	16.3	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂	内外面赤色顔料？
2671	溝25	土師器	鉢	－	－	－	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	黒斑Ｂ
2672	溝25	土師器	手捏土器	6.0	3.1	4.2	橙色(7.5YR6/6)	細砂	
2673	溝25	土師器	手捏土器	5.5	－	3.9	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	ほぼ完形
2674	溝25	土師器	手焙形	11.6	－	－	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	黒斑Ｃ
2675	溝25	土師器	製塩土器	－	3.4	－	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	
2676	溝25	土師器	製塩土器	－	2.8	－	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
2677	溝25	土師器	製塩土器	－	2.6	－	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	
2678	溝25	土師器	製塩土器	－	2.5	－	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
2679	溝25	土師器	製塩土器	－	2.6	－	橙色(5YR7/6)	細砂	
2680	溝25	土師器	製塩土器	－	3.0	－	橙色(2.5YR6/8)	細砂	
2681	溝25	土師器	製塩土器	－	2.6	－	灰黄色(2.5Y6/2)	細砂	
2682	溝25	土師器	製塩土器	－	2.5	－	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
2683	溝25	土師器	製塩土器	－	2.8	－	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	平行タタキメ
2684	溝25	土師器	製塩土器	－	2.6	－	橙色(5YR6/6)	細砂	平行タタキメ
2685	溝25	土師器	製塩土器	－	－	－	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	平行タタキメ
2686	溝25	土師器	製塩土器	－	－	－	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
2687	溝25	土師器	製塩土器	－	4.3	－	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	ススＣ
2688	溝25	土師器	製塩土器	－	4.9	－	鈍い赤褐色(2.5YR5/4)	細砂、粗砂	
2689	溝25	土師器	製塩土器	－	4.6	－	鈍い赤橙色(10YR6/3)	細砂	
2690	溝25	須恵器	把手付椀	－	－	－	灰色(10Y6/1)	細砂	
2691	溝26	土師器	高杯	－	－	－	橙色(7.5YR7/6)	精良	透し孔
2692	溝26	土師器	高杯	－	－	－	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	透し孔３ヶ残存
2693	溝27	土師器	壺	20.0	－	(5.5)	橙色(5YR7/6)	細砂	鋸歯文
2694	溝27	土師器	甕	14.0	－	(8.8)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	内面ハケ後ナデ　黒斑Ａ
2695	溝27	土師器	高杯	17.4	－	(9.6)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
2696	溝27	土師器	高杯	－	－	(4.7)	橙色(2.5YR7/6)	精良	
2697	溝27	土師器	鉢	13.8	－	(6.9)	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	内外面ヘラミガキ
2698	溝27	土師器	壺	10.9	2.9	18.0	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	黒斑Ｂ・Ｂ～Ｃ
2699	溝27	土師器	壺	15.0	－	(18.5)	橙色(2.5YR6/6)	礫	黒斑Ｂ
2700	溝27	土師器	壺	－	－	(23.0)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	外面ヘラミガキ　黒斑Ｃ
2701	溝27	土師器	壺	18.5	－	(14.8)	橙色(5YR6/6)	粗砂	
2702	溝27	土師器	甕	12.0	－	(11.0)	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂	沈線６条　ススＡ
2703	溝27	土師器	甕	12.4	－	(21.3)	鈍い黄橙色(10YR6/3)	粗砂	沈線７条、下半部ナデ
2704	溝27	土師器	甕	13.0	－	13.9	鈍い褐色(7.5YR5/3)	粗砂	外面工具ナデ､内面ススト付着 ススＡ
2705	溝27	土師器	高杯	18.6	－	(7.9)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	精良	内外面ヘラミガキ
2706	溝27	土師器	高杯	13.0	－	(8.3)	橙色(5YR7/6)	精良	透し孔４、外面ハケ
2707	溝27	土師器	高杯	18.7	－	(6.2)	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	黒斑Ａ
2708	溝27	土師器	鉢	11.2	－	(8.2)	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	外面ハケ後ナデ
2709	溝27	土師器	鉢	14.6	－	7.6	浅黄橙色(10YR8/3)	礫	外面ハケ　黒斑ＢＣ　完形
2710	水田５	土師器	壺	(19.4)	－	－	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂	刺突文３個　黒斑ＢＣ
2711	その他	土師器	壺	(15.4)	－	－	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
2712	その他	土師器	壺	15.4	－	－	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、粗砂、礫	
2713	その他	弥生土器	甕	13.4			橙色(7.5YR6/6)	粗砂	ススＢ
2714	その他	土師器	甕	－	－	－	淡橙色(5YR8/3)	細砂	ススＢ
2715	その他	土師器	甕	13.6	－	－	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	沈線６条
2716	その他	土師器	甕	13.9			橙色(7.5YR6/6)	粗砂	沈線７条
2717	その他	土師器	甕	13.0			鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	沈線８条　黒斑Ｂ
2718	その他	土師器	手焙形	－	－	－	淡橙色(5YR8/4)	細砂	線刻、沈線
2719	その他	土師器	?	－	－	－	浅黄色(2.5Y7/3)	細砂	内面ナデ
2720	その他	土師器	高杯	－	－	－	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、粗砂	
2721	その他	土師器	高杯	－	－	－	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
2722	その他	土師器	台付鉢	－	(18.7)	－	淡橙色(5YR8/4)	水漉粘土	透し孔５ヶ
2723	その他	土師器	小形丸底壺	11.7	－	7.9	灰白色(7.5YR8/2)	粗砂、礫	ほぼ完形
2724	その他	土師器	鉢	－	－	－	橙色(5YR6/8)	細砂、粗砂	黒斑ＢＣ
2725	その他	弥生土器	器台	10.2	10.3	9.9	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	透し孔５方向確認
2726	その他	土師器	椀	14.0	－	－	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	
2727	その他	土師器	高杯	－	9.7	－	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	
2728	その他	土師器	手捏土器	5.4	1.8	3.0	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
2729	その他	土師器	製塩土器	－	2.5	－	橙色(5YR7/6)	細砂	
2730	竪穴住居77	須恵器	蓋	11.9	－	4.0	灰色(5Y6/1)	精良	
2731	竪穴住居77	須恵器	杯身	13.3	－	(3.5)	灰色(5Y6/1)	精良	
2732	竪穴住居77	土師器	甕	15.6	－	(7.4)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	
2733	竪穴住居77	土師器	甕	13.6	－	(13.5)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
2734	竪穴住居77	土師器	甕	14.1	－	16.8	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	ほぼ完形
2735	竪穴住居78	須恵器	杯蓋	14.1	－	3.6	青灰色(5B6/1)	細砂、粗砂	ロクロ回転順回り
2736	竪穴住居78	須恵器	杯蓋	(13.6)	－	(4.0)	灰色(N6/)	粗砂、礫	ロクロ回転右
2737	竪穴住居78	須恵器	杯蓋or壺蓋	10.2	－	3.9	灰色(N6/)	細砂、粗砂	ロクロ回転右、一部に自然釉
2738	竪穴住居78	須恵器	杯蓋	15.0	－	(4.3)	灰白色(5Y7/1)	細砂、粗砂	ロクロ回転順回り
2739	竪穴住居78	須恵器	杯身	11.6	－	(2.5)	灰白色(N7/)	精良	外面に部分的に自然釉
2740	竪穴住居78	須恵器	提瓶	(5.5)	－	18.4	灰白色(N7/)	細砂、粗砂	
2741	竪穴住居79	須恵器	杯蓋	14.8	－	(3.8)	オリーブ灰色(2.5GY6/1)	細砂、粗砂	ロクロ回転順回り
2742	竪穴住居79	須恵器	杯蓋	14.6	－	4.8	灰白色(5Y7/1)	細砂	重ね焼き痕、自然釉

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
2743	竪穴住居79	須恵器	杯身	13.7	—	4.6	灰白色(10YR8/1)～灰白色(10YR8/2)	粗砂、礫	ロクロ回転右　焼成やや不良　完形
2744	竪穴住居80	須恵器	杯身	(12.9)		4.4	灰白色(N8/)	細砂、粗砂	焼成不良
2745	竪穴住居81	土師器	杯蓋	(15.0)	—	(4.5)	灰黄色(2.5Y6/2)	細砂、粗砂	ロクロ回転順回り　焼成不良
2746	竪穴住居81	須恵器	杯蓋	14.2	—	3.9	灰白色(5Y7/1)	細砂	ロクロ回転順回り？
2747	竪穴住居81	須恵器	杯蓋	14.6	—	(3.7)	灰色(5Y6/1)	細砂	
2748	竪穴住居81	須恵器	杯蓋	(14.2)	—	3.7	灰白色(N8/)	砂粒、礫	自然釉　焼成やや不良
2749	竪穴住居81	須恵器	杯身	12.6	—	(4.4)	灰白色(2.5Y7/1)	細砂、粗砂	焼成やや不良
2750	竪穴住居81	須恵器	杯身	(13.0)	—	4.1	明紫灰色(5P7/)	砂粒、礫	外面に自然釉
2751	竪穴住居82	須恵器	杯	14.5	—	(2.7)	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	焼成やや不良
2752	竪穴住居82	須恵器	杯身	(13.1)	—	(2.9)	灰色(N6/)	細砂、粗砂	
2753	竪穴住居82	須恵器	杯身	(13.3)	—	(3.9)	灰色(N6/)	細砂、礫	ロクロ回転右
2754	竪穴住居82	須恵器	杯身	13.5	—	4.1	灰白色(7.5Y7/1)	細砂、礫	ロクロ回転右
2755	竪穴住居82	須恵器	杯身	12.6	—	4.3	灰色(N6/)	細砂、礫	ロクロ回転順回り　ほぼ完形
2756	竪穴住居82	須恵器	杯身	12.8	—	4.2	灰色(N6/)	細砂、礫	ロクロ回転順回り　ほぼ完形
2757	竪穴住居82	須恵器	杯	12.3	—	(3.3)	灰色(N6/)	細砂	
2758	竪穴住居82	須恵器	杯身	12.4	—	3.4	灰色(N6/)	細砂、粗砂	ロクロ回転右
2759	竪穴住居82	須恵器	杯身	(11.6)	—	4.0	灰色(N6/)	細砂、礫	ロクロ回転右
2760	竪穴住居82	須恵器	はそう	—	—	(7.5)	灰白色(N7/)	細砂、粗砂	穿孔１個、下部に自然釉
2761	竪穴住居82	土師器	甕	18.8	—	(4.2)	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	
2762	竪穴住居82	土師器	甕	(17.8)	—	(3.6)	灰褐色(7.5YR5/2)～鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
2763	竪穴住居82	土師器	甕	13.3	—	13.1	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	ススＢＣ？
2764	竪穴住居82	土師器	甕	19.7	—	29.2	橙色(5YR6/8)～浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	黒斑？
2765	竪穴住居82	土師器	甑	23.5	9.0	23.9	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂、粗砂	下部に穿孔２個
2766	竪穴住居83	須恵器	杯身	13.3	—	4.4	灰白色(N7/)	細砂、粗砂	ロクロ回転順回り？
2767	竪穴住居83	土師器	甕	14.4	17.2	17.2	橙色(2.5YR6/8)	細砂、まれに礫	ハケメ、指オサエ
2768	竪穴住居84	須恵器	杯蓋	14.4	—	3.6	青灰色(5B6/1)	細砂	ロクロ回転順回り
2769	竪穴住居84	須恵器	壺蓋	13.6	—	3.7	灰白色(2.5Y8/1)	細砂、粗砂	ロクロ回転順回り　焼成やや不良
2770	竪穴住居84	須恵器	壺蓋	12.0	—	(2.9)	灰色(5Y6/1)	精良	ロクロ回転順回り
2770	竪穴住居84	須恵器	杯身	11.0	—	—	青灰色(5B6/1)	細砂	
2771	竪穴住居84	須恵器	杯身	12.3	—	(4.2)	灰白色(7.5Y7/1)	細砂	
2772	竪穴住居84	須恵器	杯身	11.5	—	(4.1)	灰色(N6/)	細砂	ロクロ回転順回り
2773	竪穴住居84	土師器	甕？	16.4	—	(5.9)	褐灰色(10YR4/1)	細砂	別の個体の破片が付着
2774	竪穴住居85	須恵器	杯蓋？	(15.4)	—	—	灰白色(7.5Y7/1)	細砂	焼成やや不良
2775	竪穴住居85	須恵器	杯身	11.8	—	3.7	灰色(10Y6/1)	細砂、粗砂	自然釉
2777	竪穴住居85	土師器	甕	(15.6)	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	
2778	竪穴住居85	土師器	甑？	19.6	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)～橙色(2.5YR7/6)	細砂、粗砂	
2779	竪穴住居85	土師器	甑？	—	(孔径)8.4	—	灰白色(7.5YR8/2)～橙色(7.5YR6/6)	細砂、粗砂	透し孔１ヶ確認
2780	竪穴住居87	須恵器	杯蓋	14.0	—	3.3	灰色(N6/)	細砂、粗砂	ロクロの回転右
2781	竪穴住居87	須恵器	杯身	12.0	—	4.1	灰色(N6/)	細砂、粗砂、礫	ロクロの回転は順回り　ほぼ完形
2782	竪穴住居87	須恵器	杯身	(10.8)	—	—	灰白色(N7/)	細砂、粗砂	
2783	竪穴住居87	須恵器	杯身	12.0	—	4.2	灰色(N6/)	細砂、粗砂	平行沈線６本　ほぼ完形
2784	竪穴住居87	須恵器	高杯	—	11.3	—	灰色(N4/)	精良	透し孔１個確認
2785	竪穴住居87	須恵器	有蓋高杯	13.7	—	—	灰色(N6/)	細砂	ロクロの回転右、自然釉？
2786	竪穴住居87	須恵器	壺	16.4	—	28.6	灰白色(N7/)	細砂	内面同心円文　ほぼ完形
2787	竪穴住居87	土師器	甕	13.5	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	ススＢ
2788	竪穴住居87	土師器	甕	21.3	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂	
2789	竪穴住居87	土師器	甕	22.9	—	—	鈍い橙色(2.5YR6/4)	細砂	
2790	竪穴住居87	土師器	甕	7.5～6.9	—	—	淡橙色(5YR8/4)	細砂	著しい歪みあり
2791	竪穴住居87	土師器	甕	18.2	—	—	淡橙色(5YR8/4)	細砂	
2792	竪穴住居87	土師器	取手付甕	21.1	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂、粗砂	
2793	竪穴住居88	弥生土器	甕	22.0	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、礫	
2794	竪穴住居88	須恵器	杯身	11.2	—	3.8	明青灰色(5PB7/1)	細砂	完形
2795	竪穴住居89	須恵器	杯身	(11.0)	—	—	灰白色(N7/)	細砂	
2796	竪穴住居89	須恵器	壺	7.0	—	—	灰白色(N7/)	細砂	外面に自然釉
2797	竪穴住居89	須恵器	椀	17.0	—	—	灰色(N6/)	粗砂、礫	
2798	竪穴住居89	須恵器	甕	(37.0)	—	—	灰白色(N8/)	細砂	
2799	竪穴住居90	須恵器	杯蓋	13.3	—	4.3	緑灰色(7.5GY6/1)	精良	ヘラケズリ(左回り)　完形
2800	竪穴住居90	須恵器	杯身	11.7	—	4.1	灰白色(N7/)	精良	ヘラケズリ(左回り)
2801	竪穴住居93	須恵器	壺	11.0			灰色(N6/)	細砂	外面タタキ
2802	竪穴住居93	須恵器	杯身	11.1		4.0	灰白色(7.5YR7/1)	細砂	ヘラ切り　完形
2803	竪穴住居94	須恵器	壺	(18.8)			灰白色(5Y7/1)	精良	
2804	竪穴住居94	土師器	甕	21.4		30.6	橙色(5YR6/6)	粗砂	歪み大　ススＢ
2805	竪穴住居96	須恵器	高杯	13.0	—	—	灰色(5Y6/1)	細砂	ヘラケズリ(左回り)
2806	竪穴住居96	須恵器	把手付椀	9.0	4.8	7.1	灰色(5Y5/1)	細砂	手持ちケズリ、把手剥離
2807	竪穴住居96	土師器	甕	12.0	—	—	橙色(5YR6/8)	粗砂	黒斑Ｂ
2808	竪穴住居96	土師器	甕	13.6		(21.5)	明赤褐色(5YR5/8)	粗砂	内面輪積み痕　ススＢ
2809	竪穴住居96	土師器	高杯	13.0	—	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	粗砂	二次焼成
2810	竪穴住居96	土師器	高杯	15.9	10.5	13.2	橙色(5YR6/8)	粗砂	透し孔３
2811	竪穴住居96	土師器	高杯	21.4	—	—	明赤褐色(5YR5/8)	粗砂	カマドの支脚として使用
2812	竪穴住居96	土師器	高杯	—	9.3	—	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	透し孔４

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
2813	竪穴住居98	須恵器	杯蓋	11.4	—	—	灰白色(N7/)	細砂	
2814	竪穴住居98	須恵器	杯身	(13.7)	—	—	灰白色(N8/)	細砂	
2815	竪穴住居99	須恵器	杯蓋	13.0~14.2	—	3.9	赤褐色(10R5/3)	細砂、粗砂	全体に歪みはげしい、ロクロの回転右、一部に自然釉　ほぼ完形
2816	竪穴住居99	須恵器	杯蓋	13.8	—	4.0	灰色(N6/)	細砂、粗砂	線刻
2817	竪穴住居99	須恵器	杯蓋	13.3	—	3.8	青灰色(5B6/1)	細砂、粗砂	ロクロの回転右　完形
2818	竪穴住居99	須恵器	杯身	11.6	—	4.0	青灰色(5BG5/1)	細砂、粗砂	ロクロの回転右　ほぼ完形
2819	竪穴住居99	?	甕	18.9	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
2820	竪穴住居100	須恵器	杯身	11.4	—	3.6	灰白色(N7/)	細砂	ロクロの回転は順回り
2821	竪穴住居102	須恵器	杯蓋	13.5	—	—	灰色(7.5Y6/1)	細砂、粗砂	
2822	竪穴住居102	須恵器	杯身	11.5	—	—	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	自然釉がかかっている
2823	竪穴住居103	土師器	壺	10.2	—	—	褐灰色(10YR4/1)	細砂、粗砂	ススA
2824	竪穴住居103	土師器	甕?	(21.3)	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂、粗砂	
2825	竪穴住居104	須恵器	直口壺	(9.1)	—	—	灰色(N6/)	細砂、まれに礫	
2826	竪穴住居106	須恵器	杯身	(12.4)	—	—	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	
2827	竪穴住居106	須恵器	杯身	9.8	—	—	灰白色(5Y7/1)	細砂	
2828	竪穴住居107	須恵器	杯身	12.7	—	3.5	青灰色(10BG5/1)	細砂、粗砂、礫	ロクロの回転は順回り
2829	竪穴住居108	須恵器	杯身	13.0	—	—	灰色(N6/)	細砂	ロクロ右
2830	竪穴住居108	須恵器	杯身	12.0	—	—	灰色(N6/)	細砂	ロクロ右
2831	竪穴住居108	須恵器	杯身	11.4	—	—	灰白色(N7/)	細砂	ロクロ左
2832	竪穴住居108	須恵器	壺の蓋	9.4	—	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂、礫	自然釉
2833	竪穴住居108	土師器	高杯?	27.0	—	—	橙色(2.5YR6/8)	粗砂、礫	
2834	竪穴住居109	須恵器	杯身	(11.1)	—	—	灰色(7.5Y6/1)	細砂、粗砂	
2835	竪穴住居109	土師器	高杯	(30.6)	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂、粗砂、礫	黒斑A
2836	竪穴住居110	須恵器	甕	—	—	—	灰白色(2.5Y7/1)	細砂、粗砂	
2837	竪穴住居110	土師器	甑	(25.0)	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂	
2838	竪穴住居111	須恵器	杯身	(12.1)	—	—	オリーブ灰色(2.5GY5/1)	細砂、粗砂	
2839	竪穴住居111	須恵器	杯身	—	—	—	青灰色(5BG6/1)	細砂	
2840	竪穴住居111	土師器	甕	—	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	外面ハケメ
2841	竪穴住居113	須恵器	杯蓋	13.8	—	4.0	灰白色(7.5YR7/1)	細砂	
2842	竪穴住居113	土師器	甕	11.8	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂	
2843	竪穴住居113	土師器	甕	15.4	—	—	褐灰色(10YR6/1)	細砂	
2844	竪穴住居113	土師器	甕	18.2	—	30.0	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	黒斑ＢＣ　ほぼ完形
2845	竪穴住居113	土師器	高杯	12.6	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
2846	竪穴住居113	土師器	高杯	14.2	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
2847	竪穴住居113	土師器	高杯	24.3	16.0	17.9	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	ほぼ完形
2848	竪穴住居114	須恵器	杯身	—	—	—	灰色(N6)	細砂	
2849	竪穴住居114	須恵器	鉢	—	—	—	灰色(N6)	細砂	外面平行タタキ後カキメ
2850	竪穴住居115	須恵器	杯身	—	—	—	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	
2851	竪穴住居115	須恵器	杯身	—	—	—	灰褐色(5YR6/2)	細砂、粗砂	
2852	竪穴住居115	須恵器	壺	—	—	—	灰色(N5)	細砂	波状文
2853	竪穴住居115	須恵器	甕	—	—	—	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	
2854	竪穴住居115	須恵器	甑	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	
2855	竪穴住居116	須恵器	杯身	—	—	—	灰色(N6)	細砂、粗砂	
2856	竪穴住居118	須恵器	杯身	—	—	—	灰色(7.5YR6/1)	細砂	
2857	竪穴住居118	土師器	カマド	—	—	—	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	
2858	竪穴住居118	土師器	支脚	—	—	—	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂、礫	
2859	竪穴住居120	須恵器	甕	—	—	—	灰色(7.5Y6/1)	細砂	
2860	竪穴住居121	須恵器	杯蓋	13.8	—	—	灰色(5Y5/1)	細砂	砂粒左回り
2861	竪穴住居121	須恵器	杯蓋	15.1	—	3.8	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	
2862	竪穴住居121	須恵器	杯蓋	(14.6)	—	—	灰色(10Y6/1)	細砂	
2863	竪穴住居121	須恵器	杯身	12.0	—	—	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	砂粒左回り
2864	竪穴住居121	須恵器	杯身	12.8	—	3.8	青灰色(10BG5/1)	細砂	砂粒左回り
2865	竪穴住居121	須恵器	杯身	13.4	—	3.8	灰色(5Y5/1)	細砂	砂粒左回り　ほぼ完形
2866	竪穴住居121	土師器	甕	18.1	—	—	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	
2867	竪穴住居121	土師器	甕	22.0	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
2868	竪穴住居121	土師器	高杯	18.3	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	
2869	竪穴住居121	土師器	甑把手	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
2870	竪穴住居122	須恵器	杯蓋	—	—	—	灰色(N5)	細砂、礫	砂粒左回り
2871	竪穴住居122	須恵器	杯身	13.4	—	—	灰色(5Y5/1)	細砂	ヘラ切り未調整
2872	竪穴住居122	須恵器	杯身	12.6	—	—	灰色(N6)	細砂、粗砂、礫	砂粒左回り
2873	竪穴住居122	須恵器	甕	—	—	—	灰白色(N7)	細砂	
2874	竪穴住居122	須恵器	甕	—	—	—	灰色(N6)	細砂	
2875	竪穴住居122	土師器	甕	21.2	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂、礫	
2876	竪穴住居122	土師器	甕	—	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
2877	竪穴住居122	須恵器	把手	—	—	—	灰白色(N8)	細砂、粗砂、礫	
2878	竪穴住居122	土師器	甕	—	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
2879	竪穴住居123	須恵器	杯蓋	14.2	—	4.0	灰白色(7.5Y7/1)	粗砂	
2880	竪穴住居123	須恵器	甕	—	—	—	灰色(N6)	細砂	
2881	竪穴住居124	須恵器	甕				灰色(N6/)	細砂	外面平行タタキ、内面ナデ
2882	竪穴住居127	土師器	把手				鈍い黄橙色(10YR7/3)	礫	
2883	竪穴住居128	土師器	甕	—	—	(27.0)	灰褐色(5YR6/2)	細砂	ススB
2884	竪穴住居128	土師器	甑	—	(11.4)	(19.0)	橙色(2.5YR6/8)	粗砂、礫	紐孔4　黒斑B
2885	竪穴住居130	土師器	高杯	18.6	—	(5.1)	橙色(5YR6/8)	精良	内外面ハケ?　黒斑A
2886	竪穴住居130	須恵器	杯身	13.6	—	(4.1)	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	ヘラケズリ左回り、仕上げナデ

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
2887	竪穴住居131	土師器	甕	18.4	−	(10.7)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	外面ハケ
2888	竪穴住居131	土師器	高杯	14.8	−	(5.2)	赤色(10R5/8)	細砂	
2889	竪穴住居132	須恵器	杯身	(13.0)	−	(2.5)	灰白色(N7/)	細砂	回転ヘラケズリ
2890	竪穴住居132	須恵器	高杯	−	(8.0)	(3.8)	灰白色(N7/)	礫	低脚
2891	竪穴住居133	須恵器	杯身	10.6	−	3.4	灰色(N5/)	粗砂	ヘラ切り後ナデ
2892	竪穴住居133	須恵器	杯身	9.2	−	3.2	灰白色(10Y8/1)	精良	ヘラ切り後ナデ　完形
2893	竪穴住居134	須恵器	杯身	11.0	−	(3.7)	灰白色(10Y7/1)	粗砂	回転ヘラケズリ左回り
2894	竪穴住居135	須恵器	杯蓋	10.8	−	4.0	明青灰色(5BG7/1)	細砂	ヘラ切り未調整
2895	竪穴住居135	土師器	甕	12.2	−	13.4	明赤褐色(2.5YR5/8)	粗砂、礫	内面下半部指オサエ
2896	掘立柱建物２	須恵器	杯身	(11.4)		(3.0)	オリーブ灰色(2.5GY)	細砂	
2897	焼成土壙10	須恵器	杯身	12.6	−	4.3	灰白色(N8)	細砂	
2898	土壙318	土師器	甑	26.2	10.6	28.0	橙色(5YR6/8)	細砂、礫	穿孔２ヶ所
2899	土壙319	須恵器	杯蓋	15.0	−	4.6	灰白色(N7/)	細砂、礫	
2900	土壙319	須恵器	杯身	11.6	−	4.1	灰色(N5/)	細砂、礫	やや歪んでいる
2901	土壙326	須恵器	杯身	10.6	−	3.8	青灰色(10BG5/)	細砂	ほぼ完形
2902	土壙326	須恵器	杯身	10.8	−	3.1	灰白色(N7/)	細砂	ほぼ完形
2903	土壙326	弥生土器	壺	9.7	−	−	橙色(5YR6/6)	細砂	
2904	土壙331	須恵器	横瓶	10.4	−	27.5	灰白色(10YR8/1)	粗砂	ヘラ記号
2905	土壙333	須恵器	高杯	12.7	8.3	7.1	灰白色(7.5YR7/1)	細砂	
2906	土壙334	須恵器	杯蓋	(11.2)		(3.1)	紫灰色(5RP6/1)	細砂	
2907	土壙334	須恵器	杯身	(12.0)		(2.9)	灰色(6N/)	細砂	
2908	土壙334	須恵器	甕			(3.2)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
2909	溝31	土師器	甕	15.0	−	(5.6)	橙色(5YR6/6)	細砂	
2910	溝31	土師器	甕	14.3	−	(5.5)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
2911	溝31	土師器	甕	22.0	−	(7.1)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
2912	溝31	弥生土器	甕	23.0	−	−	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	
2913	溝31	土師器	甕	12.3	−	12.8	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂、礫	粘土紐内傾接合
2914	溝31	土師器	甕	17.4	−	(13.0)	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂、粗砂	
2915	溝31	土師器	甑	26.9	−	(8.0)	橙色(5YR6/6)	細砂	
2916	溝31	土師器	椀	13.1	−	(4.3)	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	
2917	溝31	土師器	取手	−	−	(5.2)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、礫	
2918	溝31	須恵器	杯蓋	(16.0)	−	4.1	明青灰色(5B7/1)	細砂	
2919	溝31	須恵器	杯蓋	(14.8)	−	4.1	灰白色(N7/)	細砂、礫	ロクロ右
2920	溝31	須恵器	杯蓋	14.7	−	4.6	灰白色(N7/)	細砂、粗砂	ロクロ右
2921	溝31	須恵器	杯蓋	14.8	−	4.0	灰色(N5/)	細砂	ロクロ回転順回り
2922	溝31	須恵器	蓋	13.9	−	3.7	明青灰色(5B7/1)	細砂、粗砂	ケズリ左　完形
2923	溝31	須恵器	蓋	14.0	−	3.9	灰白色(5Y7/1)	細砂、粗砂、まれに礫	ケズリ左　ほぼ完形
2924	溝31	須恵器	壺蓋？	(13.7)	−	(3.2)	灰白色(N7/)	細砂	
2925	溝31	須恵器	杯	13.6	−	4.4	灰白色(N8/)	細砂、粗砂	ケズリ左　完形
2926	溝31	須恵器	杯身	13.8	−	4.1	灰白色(7.5Y7/1)	細砂、粗砂	ロクロ右回り　ほぼ完形
2927	溝31	須恵器	杯	14.0	−	3.4	灰色(N6/)	粗砂	ロクロ順回り
2928	溝31	須恵器	杯	13.3	−	4.3	灰白色(N7/)	細砂、粗砂	ロクロ右回り
2929	溝31	須恵器	杯身	(13.6)	−	4.3	灰白色(5Y8/1)	細砂、粗砂	ロクロ右　焼成やや不良
2930	溝31	須恵器	杯身	(13.5)	−	3.9	紫灰色(5P5/1)	細砂	
2931	溝31	須恵器	杯身	13.2	−	4.5	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	ロクロ右　焼成不良　ほぼ完形
2932	溝31	須恵器	杯身	12.6	−	(3.1)	灰色(10Y6/1)	細砂	
2933	溝31	須恵器	杯	−	−	(3.7)	灰色(5Y5/1)	細砂、粗砂、礫	ロクロ順回り　焼成やや不良
2934	溝31	須恵器	杯身	12.4	−	4.0	灰白色(N7/)	細砂	外面自然釉
2935	溝31	須恵器	杯身	(12.5)	−	4.3	灰色(N6/)	礫	自然釉、ロクロ右
2936	溝31	須恵器	杯身	12.5	−	4.4	灰白色(N7/)	粗砂	ケズリ左　完形
2937	溝31	須恵器	杯	12.5	−	3.9	灰色(N6/)	細砂、粗砂、礫	ケズリ左　完形
2938	溝31	須恵器	杯	12.1	−	4.2	灰白色(N7/)	細砂、粗砂	ロクロ逆回り、外面自然釉
2939	溝31	須恵器	杯	12.2	−	(4.0)	灰色(N6/)	細砂、粗砂	ロクロ順回り
2940	溝31	須恵器	杯身	12.4	−	(4.7)	灰白色(7.5Y7/1)	細砂、粗砂	ロクロ順回り
2941	溝31	須恵器	杯身	12.4	−	(3.6)	灰白色(N7/)	細砂、粗砂	外面自然釉？
2942	溝31	須恵器	杯	12.2	−	3.9	黄灰色(2.5Y4/1)	細砂、粗砂	ロクロ順回り
2943	溝31	須恵器	杯	12.2	−	4.0	灰色(N6/)	細砂、粗砂、礫	ケズリ左　完形
2944	溝31	須恵器	杯身	12.3	−	3.4	青灰色(5B6/1)	粗砂	ロクロ右、線刻
2945	溝31	須恵器	杯身	(12.0)	−	3.7	灰白色(N7/)	細砂	ロクロ回転右
2946	溝31	須恵器	杯	11.7	−	4.2	オリーブ灰色(2.5GY6/1)	細砂、粗砂	ケズリ左　ほぼ完形
2947	溝31	須恵器	杯	11.8	−	4.1	青灰色(5B6/1)	細砂、粗砂、礫	ロクロ回転順回り
2948	溝31	須恵器	杯身	(10.9)	−	4.2	灰色(N6/)	細砂	
2949	溝34	須恵器	壺	11.1	−	−	灰白色(N7/)	細砂、粗砂	一部に自然釉
2950	溝34	須恵器	高杯	−	−	9.0	明青灰色(5PB7/1)	細砂	
2951	溝34	須恵器	杯身	12.1	−	−	灰色(N6/)	細砂	
2952	溝34	須恵器	杯身	12.4	−	−	灰色(N6/)	細砂、粗砂	
2953	溝38	須恵器	杯蓋	11.2	−	3.4	灰白色(N7)	細砂	
2954	溝38	須恵器	杯蓋	−	−	−	灰色(N6)	細砂	刻目
2955	溝38	須恵器	杯身	−	−	−	灰色(N6)	細砂	
2956	溝38	須恵器	杯身	−	−	−	黄灰色(2.5Y6/1)	粗砂	外面自然釉
2957	溝38	須恵器	高杯	−	−	−	明紫灰色(5RP7/1)	細砂、粗砂	
2958	溝38	須恵器	直口壺	−	4.9	−	灰白色(N8)	細砂	
2959	溝38	須恵器	甕	22.2	−	−	灰白色(N8)	細砂	外面カキメ
2960	溝38	土師器	甕	21.4	−	−	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
2961	溝38	土師器	把手	−	−	−	橙色(2.5YR7/6)	細砂	
2962	その他	須恵器	椀	(9.0)	−	−	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	
2963	その他	須恵器	杯蓋	(13.8)	−	−	灰色(N6/)	細砂	ロクロ左
2964	その他	須恵器	杯蓋	14.4	−	4.2	灰色(10YR6/1)	細砂、粗砂	
2965	その他	須恵器	杯蓋	(14.0)	−	−	灰白色(7.5Y7/1)	細砂	
2966	その他	須恵器	杯蓋	13.8	−	3.7	灰白色(5Y7/1)	細砂、粗砂	刻目
2967	その他	須恵器	杯蓋	13.4		4.1	青灰色(5PB6/1)	細砂	ヘラケズリ左回り、仕上げナデ
2968	その他	須恵器	杯蓋	13.0		(3.7)	灰白色(7.5Y7/1)	粗砂	ヘラケズリ左回り、仕上げナデ
2969	その他	須恵器	杯蓋	12.4	−	3.1	灰色(N5)	細砂、粗砂	
2970	その他	須恵器	蓋	(19.1)	−	−	灰白色(5Y7/1)	細砂	
2971	その他	須恵器	杯身	(10.5)	−	−	灰色(N5)	細砂	
2972	その他	須恵器	杯身	12.0	−	−	灰色(6)	細砂、粗砂、礫	
2973	その他	須恵器	杯身	(12.0)	−	−	青灰色(10BG5/1)	細砂、粗砂、礫	
2974	その他	須恵器	杯身	12.8		4.0	灰白色(N7/)	粗砂	ヘラケズリ右回り、仕上げナデ
2975	その他	須恵器	杯身	12.6		3.3	灰白色(N7/)	粗砂	ヘラケズリ右回り、仕上げナデ
2976	その他	須恵器	杯身	12.5	−	−	灰白色(N7)	細砂	
2977	その他	須恵器	杯身	12.3	−	−	灰色(N6/)	細砂	ロクロ左
2978	その他	須恵器	杯身	12.0		(4.6)	灰白色(7.5Y7/1)	細砂	ヘラケズリ左回り、仕上げナデ
2979	その他	須恵器	杯身	9.1	−	2.9	灰白色(N7/)	細砂	ヘラ切り後ナデ
2980	その他	須恵器	高杯	12.8	9.0	8.8	灰色(N6/)	細砂	
2981	その他	須恵器	高杯	9.9	−	−	灰色(N5/)	細砂、粗砂	部分的に自然釉
2982	その他	須恵器	杯	10.3		3.9	灰白色(5Y7/1)	細砂	外面ヘラ切り、内面仕上げナデ
2983	その他	須恵器	高杯		(10.4)		灰白色(5Y7/1)	細砂、粗砂、礫	
2984	その他	須恵器	高杯	−	10.5	−	灰白色(2.5Y7/1)	細砂、粗砂	
2985	その他	須恵器	高杯	−	−	−	灰白色(N7)	細砂、粗砂	
2986	その他	須恵器	高杯	−	−	−	灰色(7.5Y6/1)	細砂	
2987	その他	須恵器	高杯	−	11.0	−	灰色(N6)	細砂、粗砂	
2988	その他	須恵器	高杯	−	11.2	−	オリーブ灰色(5G5/1)	細砂、粗砂	
2989	その他	須恵器	瓶	8.8	−	−	灰色(7.5Y7/1)	細砂	内部に自然釉
2990	その他	須恵器	瓶	9.8		(4.1)	灰色(N4/)	細砂	波状文２段６条
2991	その他	須恵器	瓶	−		−	灰色(7.5Y6/1)	細砂	
2992	その他	須恵器	燭台	9.9	−	−	灰白色(N7/)	細砂	
2993	その他	須恵器	甕	(22.3)	−	−	灰白色(N6/)	細砂	内面に線刻(ヘラ記号)
2994	その他	須恵器	甕	15.0	−	−	灰白色(7.5Y8/1)	細砂、粗砂、礫	
2995	その他	須恵器	甕？	56.8	−	−	灰色(N5/)	細砂	ヘラ描き沈線、沈線
2996	その他	須恵器	−	−	−	−	灰色(N6)	細砂、粗砂、砂質	
2997	その他	須恵器	甕	−	−	−	灰色(N5/)	細砂	表平行タタキ、裏車輪文タタキ
2998	その他	須恵器	甕？	−	−	−	灰色(N6/)	細砂	タタキ成形、内面同心円文
2999	その他	土師器	鉢	11.0	−	5.0	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	内外面赤色顔料　黒斑ＡＢ
3000	その他	土師器	鉢	11.5	−	6.0	淡黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	内面工具ナデ
3001	その他	土師器	杯	(9.7)	−	−	橙色(5YR6/8)	精良	内面に暗文
3002	その他	土師器	壺			(6.9)	橙色(7.5YR7/4)	細砂	
3003	その他	土師器	手捏土器	4.4	−	3.2	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	ほぼ完形
3004	その他	土師器	羽釜			(3.1)	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	
3005	その他	土師器	甕	7.9	−	−	浅黄橙色(7.5YR2/3)	細砂、粗砂	
3006	その他	土師器	甕	10.5	−	−	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	
3007	その他	土師器	甕	10.0	−	14.8	橙色(5YR6/6)	細砂	
3008	その他	土師器	甕	17.8	−	−	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂	
3009	その他	土師器	甕	13.5	−	−	淡赤橙色(2.5YR7/3)	細砂	
3010	その他	土師器	甕	13.8	−	−	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	ススＢ
3011	その他	土師器	甕	18.0	−	−	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
3012	その他	瓦	軒丸瓦				褐灰色(10YR4/1)	細砂、粗砂、礫	
3013	その他	瓦	軒丸瓦				灰白色(10YR8/1)	細砂	
3014	その他	瓦	軒丸瓦				灰白色(2.5Y8/1)	細砂、粗砂	
3015	その他	瓦	軒丸瓦				灰褐色(7.5YR5/2)	細砂、粗砂	
3016	その他	瓦	軒丸瓦	−	−	−	黄灰色(2.5Y4/1)	細砂	奥山久米寺
3017	その他	瓦	硯	−	−	−	灰白色(2.5Y8/1)	細砂、粗砂、礫	奥山久米寺、硯に転用
3018	その他	瓦	軒丸瓦	−	−	−	灰白色(5Y7/1)	細砂	
3019	その他	瓦	平瓦	−	−	−	鈍い黄橙色(10YR6/4)	粗砂、礫	
3020	掘立柱建物５･６	土師器	椀	−	6.0	(1.5)	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	
3021	掘立柱建物５･６	土師器	椀	−	10.3	7.5	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	ススＣ？
3022	掘立柱建物５･６	土師器	杯	13.3	9.9	3.2	橙色(5YR7/6)	精良	ほぼ完形
3023	掘立柱建物５･６	土師器	甕	(26.7)	−	(9.2)	鈍い褐色(7.5YR5/3)	粗砂	
3024	井戸１	土師器	甕	(38.3)	−	−	橙色(7.5YR6/6)	細砂	
3025	井戸１	土師器	カマド	−	−	−	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂	
3026	井戸２	土師器	高台付椀	15.4	5.9	5.8	灰白色(2.5Y8/2)	細砂、粗砂	貼付高台
3027	井戸２	土師器	皿	10.6	8.0	−	灰白色(10YR8/2)	細砂	
3028	井戸３	土師器	椀	−	6.3	−	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	
3029	井戸３	土師器	小皿	7.6	−	1.5	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	
3030	井戸３	土師器	甕	(27.5)	−	−	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	
3031	井戸３	亀山焼	擂鉢	36.1	−	−	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	
3032	井戸３	亀山焼	鉢	(27.7)	−	−	灰色(5Y5/1)	細砂	
3033	井戸３	備前焼	擂鉢	27.2	−	−	灰赤色(10R5/2)	細砂	
3034	井戸３	瓦	平瓦	−	−	−	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
3035	井戸3	瓦	平瓦	−	−	−	灰色(N5)	細砂	
3036	井戸3	瓦	平瓦	−	−	−	灰色(10Y6/1)	細砂	糸切り
3037	井戸3	瓦	平瓦	−	−	−	灰色(N5)	細砂	糸切り
3038	井戸3	瓦	平瓦	−	−	−	灰色(5Y7/1)	細砂	糸切り
3039	井戸4	土師器	高台付椀	−	6.2	−	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	
3040	井戸4	土師器	高台付椀	−	5.6	−	灰白色(10YR8/2)	細砂	
3041	井戸4	瓦	丸瓦	−	−	−	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	
3042	井戸4	瓦	平瓦	−	−	−	灰色(5Y5/1)	細砂	
3043	井戸4	瓦	平瓦	−	−	−	緑灰色(10GY6/1)	細砂	
3044	井戸5	(唐津)陶器	皿	12.9	3.9	3.3	鈍い橙色(2.5YR6/6)	細砂	胎土目積み
3045	井戸5	備前焼	擂鉢	−	−	−	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	
3046	井戸5	備前焼	擂鉢	−	−	−	鈍い橙色(2.5YR6/3)	細砂	
3047	井戸5	瓦質土器	羽釜	−	−	−	褐灰色(10YR5/1)	細砂	ススB
3048	井戸5	土師器	浅鉢	−	10.2	−	褐灰色(10YR6/1)	細砂	
3049	井戸5	瓦	丸瓦	−	−	−	灰色(5YR6/1)	細砂	
3050	井戸5	瓦	丸瓦	−	−	−	灰白色(2.5YR7/1)	細砂	
3051	井戸5	瓦	軒平瓦	−	−	−	灰色(5Y7/1)	細砂	
3052	井戸5	瓦	丸瓦	−	−	−	灰色(10YR6/1)	細砂	
3053	井戸5	瓦	丸瓦	−	−	−	黄灰色(2.5Y8/1)	細砂	
3054	井戸5	瓦	丸瓦	−	−	−	褐灰色(10YR6/1)	細砂	
3055	井戸5	瓦	丸瓦	−	−	−	灰白色(5Y8/1)	細砂	
3056	井戸5	瓦	平瓦	−	−	−	灰白色(10Y8/1)	細砂	
3057	井戸5	瓦	平瓦	−	−	−	灰白色(5Y8/1)	細砂	
3058	井戸5	瓦	平瓦	−	−	−	灰白色(7.5Y8/1)	細砂	
3059	井戸5	瓦	平瓦	−	−	−	灰白色(7.5Y8/1)	細砂	
3060	井戸5	瓦	平瓦	−	−	−	灰色(10Y6/1)	細砂	
3061	井戸5	瓦	平瓦	−	−	−	灰色(7.5Y7/1)	細砂	
3062	井戸5	瓦	平瓦	−	−	−	灰色(10Y6/1)	細砂	
3063	土壙336	須恵器	杯身	12.7	9.2	4.5	灰色(N6/)	細砂	ほぼ完形
3064	土壙336	須恵器	甑	(31.9)		(24.8)	灰色(N5/)～灰色(N4/)	細砂	焼成やや不良
	土壙336	須恵器	甑	(20.0)		(4.5)	灰色(N5/)～灰色(N4/)	細砂	焼成やや不良
3065	土壙337	土師器	高台付椀	15.4	(7.4)	5.7	灰白色(2.5Y8/2)	細砂、粗砂	貼付高台
3066	土壙337	土師器	高台付椀	−	6.5	(3.3)	灰白色(N8/)	細砂、粗砂	
3067	土壙337	土師器	鍋	35.6	−	(14.7)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	ススB
3068	土壙339	須恵器		−	(12.1)	(1.8)	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	焼成不良
3069	土壙339	須恵器	甕	24.8	−	(8.6)	灰色(N6/)	細砂、礫	タタキ成形
3070	土壙339	土師器	杯	12.6	8.5	3.2	橙色(5YR7/6)	精良	ヘラキリ、赤色顔料
3071	土壙339	土師器	杯	12.5	8.8	3.2	鈍い橙色(10YR6/3)	精良、まれに礫	内外面赤色顔料残存
3072	土壙339	土師器	皿	16.2	14.5	2.1	橙色(5YR7/8)	精良、礫	内外面赤色顔料か？
3073	土壙340	須恵器	杯蓋	(16.3)	−	(2.1)	灰色(N6/)	細砂、粗砂	墨痕？
3074	土壙346	土師器	杯身	(13.0)	10.4	2.6	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	内外面丹塗り
3075	土壙350	須恵器	杯身	15.0	6.3	3.9	灰白色(5Y8/1)	細砂、礫	
3076	土壙356	土師器	杯	12.9	8.8	3.3	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	黒斑ＡＢ　ほぼ完形
3077	土壙357	灰釉陶器	椀		7.8		灰白色(2.5Y7/1)	精良	つけがけ釉、内外面ナデ
3078	土壙359	須恵器	杯蓋	(14.6)			灰色(5Y6/1)	細砂	
3079	土壙359	土師器	椀	(15.8)			褐灰色(10YR5/1)	細砂	外面ナデ
3080	土壙359	土師器	皿	9.7	(7.0)	2.0	灰白色(10YR8/2)	粗砂	ヘラ切り
3081	土壙359	黒色土器	椀	14.7	8.2	5.8	灰白色(7.5YR8/1)	細砂	内外面ミガキ、内黒
3082	土壙359	黒色土器	椀	15.9	8.5	6.3	浅黄橙色(7.5YR8/3)	粗砂	内外面ミガキ、内黒
3083	土壙359	土師器	鍋	31.2			褐灰色(10YR4/1)	細砂	
3084	土壙359	緑釉陶器	椀	15.6	7.3	7.0	淡黄色(5Y8/3)	精良	糸切り痕、貼付高台、近江産、内部底面に三又トチン跡
3085	土壙361	須恵器	杯	17.2	9.6	5.3	灰白色(5Y7/1)	粗砂	内外面ナデ　焼成不良
3086	土壙364	土師器	皿			1.2	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	
3087	土壙367	土師器	杯	12.2	8.1	−	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	
3088	土壙368	土師器	椀	15.3	−	−	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	
3089	土壙368	土師器	椀	14.6	8.5	4.8	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	内面に圏線ぼい沈線、貼付高台　内面スス
3090	土壙368	土師器	椀	14.7	8.3	4.7	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	貼付高台
3091	土壙368	黒色土器	椀	15.4	−	−	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	内面に炭素吸着
3092	土壙368	土師器	小皿	9.5	6.0	2.0	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	ほぼ完形
3093	土壙368	土師器	小皿	9.7	6.7	2.2	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	全体に著しい歪み、ロクロの回転右
3094	土壙368	土師器	小皿	9.9	6.3	2.3	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	完形
3095	土壙368	土師器	小皿	9.3	7.0	1.8	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	黒斑C　完形
3096	土壙368	土師器	小皿	9.4	6.0	2.2	橙色(5YR7/6)	細砂	
3097	土壙368	瓦	平瓦	−	−	−	灰色(N6/)	細砂	
3098	土壙369	須恵器	杯身？	−	14.6	−	灰白色(N7/)	細砂、粗砂	貼付高台
3099	土壙369	土師器	椀	−	(7.3)	−	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	貼付高台
3100	土壙372	緑釉陶器	輪花椀	(13.0)	6.9	−	釉：濃緑色　素地：浅黄橙色(10YR8/4)	精良	釉がかかっている　外面に輪花か？
3101	土壙372	土師器	椀	11.6	7.3	4.3	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	
3102	土壙372	土師器	杯	−	6.1	−	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	
3103	土壙372	土師器	皿	9.3	4.7	2.4	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	
3104	土壙372	土師器	杯	9.8	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
3105	土壙372	黒色土器	椀	11.6	6.4	4.1	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	内面に炭素吸着

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
3106	土壙372	黒色土器	椀	—	8.4	—	灰白色(10YR8/1)	細砂	内面に炭素吸着
3107	土壙372	黒色土器	椀	—	8.2	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	内面に炭素吸着
3108	土壙372	黒色土器	椀	—	7.8	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	
3109	土壙372	黒色土器	椀	—	7.2	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂	内面に炭素吸着
3110	土壙372	黒色土器	椀	—	6.2	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	内面に炭素吸着
3111	土壙375	須恵器	壺	—	—	—	灰色(N5/)	精良	貼付突帯、一部に自然釉
3112	土壙375	土師器	杯	12.3	6.0	3.8	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	
3113	土壙375	土師器	椀	—	6.7	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
3114	土壙376	瓦	平瓦	—	—	—	灰白色(2.5Y8/1)	細砂、粗砂、礫	凹面布目痕、凸面縄目痕
3115	土壙376	瓦	平瓦	—	—	—	灰白色(2.5Y8/1)	細砂、粗砂	凹面布目痕、凸面縄目痕
3116	土壙378	土師器	小皿	(9.4)	(5.2)	2.1	浅黄橙色(7.5YR8/6)	細砂	ヘラキリ
3117	土壙378	瓦	軒丸瓦	—	—	—	灰色(10Y5/1)	精良	瓦当部鋸歯文
3118	土壙378	瓦	鬼瓦	—	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	礫	表面に赤色顔料(丹塗り)
3119	土壙381	黒色土器	椀	—	7.2	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
3120	土壙381	須恵器		—	10.0	—	灰色(N6/)	粗砂、細砂	
3121	土壙381	瓦	軒丸瓦	—	—	—	灰白色(2.5Y8/1)	粗砂、細砂	
3122	土壙381	瓦	軒平瓦	—	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂、礫	焼成不良
3123	土壙384	黒色土器	椀	—	6.8	—	浅黄橙色(7.5YR4/3)	細砂	
3124	土壙384	瓦	軒平瓦	—	—	—	褐灰色(10YR6/1)	細砂、粗砂、礫	
3125	土壙384	瓦	丸瓦	—	—	—	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂、粗砂、礫	
3126	土壙384	瓦	平瓦	—	—	—	黄灰色(2.5YR6/1)	細砂、粗砂、礫	粗い平行タタキ
3127	土壙384	瓦	平瓦	—	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂、礫	
3128	土壙386	瓦	丸瓦	—	—	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	
3129	土壙386	瓦	丸瓦	—	—	—	明褐灰色(7.5YR7/3)	細砂	
3130	土壙387	須恵器	杯蓋	—	—	—	灰色(5Y6/1)	細砂	
3131	土壙388	須恵器	蓋	—	—	—	青灰色(10BG5/1)	細砂	
3132	土壙388	須恵器	壺	—	—	—	灰白色(5YR8/1)	細砂	外面糸切り痕
3133	土壙388	黒色土器	椀	12.0	—	—	灰黄色(2.5YR8/3)	細砂	
3134	土壙388	黒色土器	椀	15.4	—	—	灰黄色(2.5YR8/6)	精良	
3135	土壙388	黒色土器	椀	—	7.0	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	
3136	土壙388	黒色土器	椀	—	6.4	—	灰黄色(2.5Y8/3)	精良	
3137	土壙388	黒色土器	椀	—	7.0	—	浅黄橙色(7.5YR8/6)	細砂、粗砂	
3138	土壙388	黒色土器	椀	—	6.4	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	底外面板目痕
3139	土壙388	黒色土器	椀	—	7.2	—	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	
3140	土壙388	黒色土器	椀	—	7.2	—	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	
3141	土壙388	黒色土器	椀	—	8.0	—	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	
3142	土壙388	土師器	椀	—	(5.0)	—	淡黄色(2.5Y8/4)	細砂	外面回転ヘラ切り未調整
3143	土壙388	土師器	椀	—	6.6	—	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	
3144	土壙388	土師器	椀	—	6.6	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
3145	土壙388	土師器	椀	—	8.4	—	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	
3146	土壙388	土師器	椀	—	8.6	—	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	
3147	土壙388	土師器	椀	—	9.2	—	浅黄橙色(10YR8/4)	精良	
3148	土壙388	土師器	椀	—	6.6	—	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	外面回転ヘラ切り未調整
3149	土壙388	土師器	椀	—	7.3	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
3150	土壙388	土師器	椀	—	—	—	浅黄色(2.5Y7/4)	精良	外面板目痕
3151	土壙388	土師器	椀	—	(13.8)	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
3152	土壙388	土師器	?	—	15.0	—	黄灰色(2.5Y4/1)	粗砂	
3153	土壙388	土師器	椀	(8.8)		2.7	灰白色(10YR8/2)	細砂	外面回転ヘラ切り
3154	土壙388	土師器	椀	(8.8)	—	—	橙色(7.5YR5/6)	細砂	外面回転ヘラ切り
3155	土壙388	土師器	椀	9.8	4.5	2.4	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	被熱　ほぼ完形
3156	土壙388	土師器	椀	9.4	6.5	2.3	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂、礫	外面回転ヘラ切り
3157	土壙388	土師器	椀	9.6	—	—	暗灰黄色(2.5Y4/2)	細砂	
3158	土壙388	土師器	杯	10.6	7.4	2.1	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	外面回転ヘラ切り
3159	土壙388	土師器	杯	—	5.4	—	浅黄橙色(10YR8/4)	精良	外面回転ヘラ切り
3160	土壙388	土師器	杯	10.2	4.2	3.6	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	外面回転ヘラ切り
3161	土壙388	土師器	杯	11.8	5.5	3.6	淡黄色(2.5Y8/3)	精良	外面板目痕　ほぼ完形
3162	土壙388	土師器	杯	11.8	5.4	3.4	灰黄色(2.5Y7/2)	精良	外面板目痕
3163	土壙388	土師器	杯	12.4	7.0	3.5	浅黄橙色(10YR8/4)	粗砂	外面回転ヘラ切り
3164	土壙388	土師器	杯	—	5.6	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	精良	外面板目痕
3165	土壙388	土師器	杯	—	5.8	—	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	外面回転ヘラ切り
3166	土壙388	土師器	杯	—	5.8	—	淡黄色(2.5Y8/4)	精良	外面板目痕
3167	土壙388	土師器	杯	—	6.2	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	精良	外面板目痕
3168	土壙388	土師器	皿	10.2	5.4	2.4	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
3169	土壙388	土師器	皿	(12.2)	—	—	淡黄色(2.5Y8/3)	粗砂	
3170	土壙388	土師器	台付皿	15.1	4.0	7.2	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	
3171	土壙388	土師器	鍋	—	—	—	灰色(5Y4/1)	粗砂	ススA
3172	土壙388	土師器	鍋	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
3173	土壙388	土師器	鍋	—	—	—	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	
3174	土壙388	土師器	鍋	35.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
3175	土壙388	土師器	カマド	—	—	—	淡黄色(5YR8/3)	細砂、粗砂、礫	内面スス
3176	土壙388	土師器	カマド	—	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
3177	土壙388	土師器	カマド	—	—	—	灰黄色(2.5Y8/3)	粗砂	
3178	土壙388	土師器	カマド	—	—	—	黄褐色(2.5Y5/3)	粗砂	
3179	土壙388	緑釉陶器	椀	—	—	—	濃緑色	精良	軟陶、近江産
3180	土壙388	緑釉陶器	椀	—	—	—	淡緑色	精良	3181と同一か、軟陶、周防・長門産

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
3181	土壙388	緑釉陶器	椀	—	7.4	—	淡緑色	精良	3180と同一か、軟陶、周防・長門産
3182	土壙388	瓦	丸瓦	—	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
3183	土壙388	須恵器	転用硯	—	—	—	灰白色(10Y7/1)	細砂	内面同心円タタキ、平滑、墨、外面平行タタキ
3184	土壙389	須恵器	壺	—	9.8	—	灰白色(N7)	細砂	
3185	土壙389	須恵器	鉢	(32.0)	—	—	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	
3186	土壙389	黒色土器	椀	—	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	粗砂	
3187	土壙389	黒色土器	椀	—	7.4	—	灰白色(10YR8/1)	細砂	
3188	土壙389	黒色土器	椀	—	8.9	—	灰白色(10YR8/2)	細砂	
3189	土壙389	黒色土器	椀	—	8.6	—	褐灰色(7.5YR6/1)	細砂	
3190	土壙389	土師器	高台付椀	10.4	6.0	4.7	淡橙色(5YR8/3)	細砂、粗砂	
3191	土壙389	土師器	高台付杯	10.8	6.8	4.1	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	
3192	土壙389	土師器	高台付杯	10.8	5.6	4.0	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	
3193	土壙389	土師器	高台付杯	11.1	6.7	4.6	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
3194	土壙389	土師器	高台付杯	—	6.6	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂、礫	
3195	土壙389	土師器	高台付杯	11.0	5.8	4.3	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
3196	土壙389	土師器	高台付杯	10.6	—	—	灰白色(10YR8/1)	精良、礫	
3197	土壙389	土師器	高台付杯	12.0	6.4	4.8	灰白色(10YR8/2)	細砂	
3198	土壙389	土師器	高台付杯	—	—	—	褐灰色(7.5YR6/1)	細砂、礫	
3199	土壙389	土師器	高台付杯	—	10.4	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	精良	
3200	土壙389	土師器	高台付椀	12.2	6.8	5.3	灰白色(10YR8/2)	細砂	ほぼ完形
3201	土壙389	土師器	高台付椀	14.3	7.0	5.8	橙色(5YR7/6)	粗砂	ほぼ完形
3202	土壙389	土師器	高台付椀	—	8.6	—	灰白色(10YR8/2)	細砂、礫	
3203	土壙389	土師器	高台付椀	—	7.2	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、礫	
3204	土壙389	土師器	高台付椀	—	6.6	—	灰白色(10YR8/2)	細砂	
3205	土壙389	土師器	高台付椀	—	6.2	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
3206	土壙389	土師器	高台付椀	—	8.4	—	淡橙色(2.5Y8/3)	細砂	
3207	土壙389	土師器	高台付椀	—	8.2	—	淡橙色(5YR8/4)	細砂	
3208	土壙389	土師器	高台付椀	—	8.0	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	
3209	土壙389	土師器	高台付椀	—	9.2	—	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	
3210	土壙389	土師器	高台付椀	—	7.6	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
3211	土壙389	土師器	高台付椀	—	8.2	—	淡橙色(5YR8/3)	細砂	
3212	土壙389	土師器	杯	10.0	6.0	—	淡橙色(5YR8/4)	細砂	
3213	土壙389	土師器	杯	11.0	6.3	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
3214	土壙389	土師器	杯	9.0	6.1	—	灰白色(10YR8/2)	細砂	内面赤色顔料
3215	土壙389	土師器	杯	(9.8)	6.0	2.7	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	
3216	土壙389	土師器	杯	9.8	6.0	2.1	淡橙色(5YR8/4)	精良	外面回転ヘラ切り
3217	土壙389	土師器	杯	10.0	6.8	2.3	灰白色(10YR8/2)	粗砂	
3218	土壙389	土師器	杯	12.2	6.4	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
3219	土壙389	土師器	杯	14.0	6.6	4.8	橙色(2.5YR7/8)	礫	
3220	土壙389	土師器	杯	13.4	7.0	3.3	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	
3221	土壙389	土師器	皿	11.0	—	—	灰白色(10YR8/1)	細砂	
3222	土壙389	土師器	甕	(38.0)	—	—	灰白色(10YR7/1)	細砂、粗砂、礫	
3223	土壙389	土師器	カマド	—	—	—	灰褐色(7.5YR6/2)	礫	
3224	土壙389	土師器	カマド	30.6	—	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、礫	内面全体にスス
3225	土壙389	土師器	カマド	—	—	—	灰白色(10YR8/2)	礫	
3226	土壙389	緑釉陶器	椀	—	—	—	濃緑色	精良	軟陶、近江産
3227	土壙389	須恵器	円面硯	14.0	—	—	灰白色(N8/1)	細砂	外面自然釉
3228	土壙389	須恵器	転用硯	—	—	—	灰色(N5)	細砂	
3229	土壙389	須恵器	転用硯	—	—	—	灰白色(N7)	細砂	墨付着
3230	土壙389	瓦	丸瓦	—	—	—	灰色(N4)	粗砂	
3231	土壙389	瓦	平瓦	—	—	—	灰白色(N8)	礫	
3232	土壙389	瓦	平瓦	—	—	—	灰白色(10YR7/1)	細砂	
3233	土壙389	瓦	平瓦	—	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	礫	
3234	土壙390	須恵器	甕	—	—	—	灰色(N5)	細砂	
3235	土壙390	須恵器	甕	—	—	—	灰白色(N7)	細砂	
3236	土壙390	黒色土器	椀	—	7.9	—	灰白色(10YR8/2)	細砂	
3237	土壙390	黒色土器	椀	—	8.9	—	淡赤橙色(2.5YR7/4)	精良	
3238	土壙390	土師器	高台付杯	—	7.4	—	浅橙色(5YR8/3)	細砂	
3239	土壙390	土師器	高台付杯	—	9.2	—	浅黄橙色(7.5YR8/3)	精良	
3240	土壙390	土師器	高台付杯	—	9.6	—	灰白色(10YR8/2)	精良	
3241	土壙390	土師器	高台付杯	—	7.6	—	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	
3242	土壙390	土師器	高台付杯	13.9	7.5	5.2	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	
3243	土壙390	土師器	皿	10.1	6.6	2.1	灰白色(10YR8/2)	精良	
3244	土壙390	土師器	椀	9.4	7.0	2.1	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	
3245	土壙390	土師器	椀	9.2	2.9	2.6	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
3246	土壙390	土師器	椀	9.2	3.8	2.5	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
3247	土壙390	土師器	椀	9.8	5.2	2.5	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
3248	土壙390	土師器	椀	9.4	6.3	2.5	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	
3249	土壙390	土師器	杯	11.0	6.6	4.0	鈍い橙色(5YR7/3)	精良	
3250	土壙390	土師器	杯	11.4	6.8	3.6	鈍い橙色(2.5YR7/4)	細砂	
3251	土壙390	土師器	杯	11.8	6.4	3.4	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
3252	土壙390	土師器	杯	12.5	8.0	3.5	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
3253	土壙390	土師器	杯	6.6			灰白色(7.5YR8/2)	精良	
3254	土壙391	須恵器	壺	—	6.8	—	暗青灰色(10BG4/1)	細砂、粗砂	

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
3255	土壙391	黒色土器	椀	17.5	−	−	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	ススA
3256	土壙391	黒色土器	椀	14.8	7.1	4.9	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
3257	土壙391	黒色土器	椀	−	8.6	−	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
3258	土壙391	黒色土器	椀	15.1	6.9	5.1	橙色(5YR6/6)	細砂	
3259	土壙391	黒色土器	椀	14.8	6.7	4.9	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	黒斑A・C
3260	土壙391	黒色土器	椀	−	6.9	−	橙色(2.5YR6/8)	細砂	
3261	土壙391	黒色土器	椀	−	7.0	−	橙色(5YR6/6)	細砂	
3262	土壙391	黒色土器	椀	−	7.1	−	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
3263	土壙391	黒色土器	椀	−	8.9	−	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	
3264	土壙391	土師器	杯	10.8	7.8	2.2	橙色(5YR7/6)	細砂	
3265	土壙391	土師器	杯	11.8	8.8	2.7	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
3266	土壙391	土師器	杯	12.0	−	−	明褐灰色(5YR7/2)	細砂	
3267	土壙391	土師器	杯	12.3	8.5	3.1	橙色(5YR7/6)	細砂	黒斑C　ほぼ完形
3268	土壙391	土師器	杯	(13.6)	−	−	橙色(5YR6/6)	細砂	
3269	土壙391	土師器	杯	−	8.3	−	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	
3270	土壙391	土師器	皿	12.8	−	−	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	外面丹塗り？
3271	土壙391	土師器	皿	9.2	−	1.8	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
3272	土壙391	土師器	甕	20.9	−	−	鈍い赤橙色(5YR5/3)	細砂	ススA
3273	土壙391	土師器	甕	41.5	−	−	橙色(2.5YR6/6)	細砂	
3274	土壙391	土師器	甕	33.2	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	ススB
3275	土壙391	須恵器	転用硯	−	−	−	青灰色(10BG5/1)	細砂	内面同心円当具後平行タタキ
3276	土壙391	須恵器	転用硯	−	−	−	緑灰色(10GY6/1)	細砂	内面無文(木目)当具、中心に十字文
3277	土壙392	土師器	杯	14.8	9.1	3.0	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	ヘラキリ底　ほぼ完形
3278	土壙392	土師器	杯	14.1	9.8	3.1	橙色(7.5YR7/6)	細砂、粗砂	ロクロ左、ヘラキリ底
3279	土壙392	土師器	杯	14.1	9.0	3.0	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂、粗砂	ヘラキリ底　完形
3280	土壙392	土師器	杯	14.2	9.1	3.1	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、礫	ロクロ左　完形
3281	土壙392	土師器	杯	14.1	8.8	3.5	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	完形
3282	土壙392	土師器	杯	14.0	8.6	3.5	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	ロクロ左　ほぼ完形
3283	土壙392	土師器	杯	13.8	8.3	2.9	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂、粗砂	ヘラキリ底　ほぼ完形
3284	土壙392	土師器	杯	14.0	9.1	3.3	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	ほぼ完形
3285	土壙392	土師器	杯	13.9	9.0	3.3	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	
3286	土壙392	土師器	杯	13.7	8.6	3.0	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	完形
3287	土壙392	土師器	杯	13.6	9.7	3.1	橙色(7.5YR7/6)	細砂、粗砂	ロクロ左　ほぼ完形
3288	土壙392	土師器	杯	13.8	9.4	3.0	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
3289	土壙392	土師器	杯	13.9	9.1	3.2	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	完形
3290	土壙392	土師器	杯	13.5	9.2	3.7	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	ロクロ左
3291	土壙392	土師器	杯	(13.4)	9.4	3.1～3.7	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	ヘラキリ底
3292	土壙392	土師器	小皿	(8.7)	(7.5)	1.2	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	ヘラキリ底
3293	土壙392	土師器	小皿	8.8	7.6	1.5	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	ヘラキリ底　ほぼ完形
3294	土壙392	土師器	小皿	8.4	7.3	1.6	鈍い橙色(7.5YR7/4)～鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	ヘラキリ底
3295	土壙392	土師器	小皿	8.5	7.4	1.5	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	ヘラキリ底　完形
3296	土壙392	土師器	小皿	8.4	6.9	1.1	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、礫	ロクロ左、ヘラキリ底
3297	土壙392	土師器	小皿	8.7	7.0	1.2	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	ロクロ左　完形
3298	土壙392	土師器	小皿	8.5～8.0	7.5～7.1	1.4	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	ロクロ左、ヘラキリ底
3299	土壙392	土師器	小皿	8.4	7.0	1.1	褐灰色(10YR4/1)	細砂	ヘラキリ底、ヘラオコシ
3300	土壙392	土師器	小皿	8.6～8.5	7.4	1.4	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	ロクロ左　完形
3301	土壙392	土師器	小皿	8.4	7.2	1.2	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	ロクロ左、ヘラキリ底　完形
3302	土壙392	土師器	小皿	8.7	7.1	1.3	褐灰色(7.5YR4/1)	細砂	ロクロ左　ほぼ完形
3303	土壙392	土師器	小皿	8.4(8.5～8.3)	7.2(7.3～7.0)	1.2	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	ヘラキリ底　完形
3304	土壙392	土師器	小皿	8.4	7.0	1.3	橙色(7.5YR7/6)	細砂	ロクロ左、ヘラキリ底、ヘラオコシ　完形
3305	土壙392	土師器	小皿	8.3	6.8	1.2	灰黄色(2.5Y6/2)	細砂	ヘラキリ底　完形
3306	土壙392	土師器	小皿	(8.2)	7.1	1.1	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂	ロクロ左、ヘラキリ底
3307	土壙392	土師器	小皿	8.6	6.7	1.3	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	ロクロ左　ほぼ完形
3308	土壙392	土師器	小皿	8.3	7.2	1.4	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	ロクロ左、ヘラキリ底　完形
3309	土壙392	土師器	小皿	8.4	7.2～7.3	1.2	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	ロクロ左、歪みあり　完形
3310	土壙392	土師器	小皿	(8.3)	(7.0)	1.3	橙色(7.5YR7/6)	細砂	ロクロ左、ヘラキリ底
3311	土壙392	土師器	小皿	8.5	7.3	1.3	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	ロクロ左
3312	土壙392	土師器	小皿	(8.3)	(7.2)	1.3	橙色(7.5YR7/6)	細砂	ヘラキリ底
3313	土壙392	土師器	小皿	8.2	6.6	1.3	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	ロクロ左、ヘラキリ底
3314	土壙392	土師器	小皿	8.0	7.3	1.5	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	ロクロ左、ヘラキリ底　完形
3315	土壙392	土師器	小皿	8.5	7.4	1.6	鈍い黄褐色(10YR4/3)	細砂	完形
3316	土壙392	土師器	小皿	8.3	7.1	1.4	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	ロクロ左、ヘラキリ底　完形
3317	土壙392	土師器	小皿	8.2	7.3	1.2	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	ヘラキリ底、圧痕あり　完形
3318	土壙392	土師器	小皿	8.4	7.2	1.4	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	ロクロ左　ほぼ完形
3319	土壙392	土師器	小皿	8.0	6.9	1.4	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	ヘラキリ底
3320	土壙392	土師器	小皿	8.0	6.9	1.5	橙色(7.5YR7/6)	細砂	ロクロ左、ヘラキリ底
3321	土壙392	土師器	小皿	8.1	7.0	1.2	橙色(7.5YR7/6)	細砂	ヘラキリ底
3322	土壙392	土師器	小皿	8.0	7.1	1.2	鈍い黄橙色(10YR5/3)	細砂	ヘラキリ底　完形
3323	土壙392	土師器	小皿	7.8	7.0	1.5	橙色(7.5YR7/6)	細砂	ロクロ左、ヘラキリ底
3324	土壙392	土師器	小皿	8.3	7.1	1.3	褐灰色(10YR4/1)	細砂	ロクロ左　ほぼ完形
3325	土壙392	土師器	小皿	8.1	6.8	1.3	黄灰色(2.5Y5/1)	細砂	ロクロ左、ヘラキリ底　完形
3326	土壙392	土師器	小皿	8.1	6.3	1.5	橙色(5YR7/6)	細砂、粗砂	完形

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
3327	土壙392	土師器	小皿	8.2	6.8	1.8	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	ロクロ左　完形
3328	土壙395	土師器	高台付椀	(11.3)	(4.8)	4.1	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	貼付高台
3329	土壙395	土師器	高台付椀	(10.8)	(4.1)	3.6	灰白色(7.5YR8/2)～浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	貼付高台
3330	土壙395	土師器	杯	11.2	8.2	2.6	灰白色(10YR8/2)	細砂	ヘラオコシ
3331	土壙395	土師器	皿	10.7	7.2	2.5	浅黄橙色(7.5YR8/3)	精良	ヘラオコシ
3332	土壙395	土師器	小皿	7.5	6.2	1.8	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
3333	土壙395	土師器	小皿	7.9	5.5	1.7	褐灰色(10YR6/1)	精良	ヘラオコシ
3334	土壙395	土師器	小皿	8.6	6.1	1.6	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	圧痕
3335	土壙395	土師器	杯	—	5.3	(1.4)	灰白色(10YR8/2)	細砂	ヘラキリ底、ヘラオコシ
3336	土壙395	土師器	甕	(16.4)	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂、礫	ハケメ、指オサエ
3337	土壙398	瓦器	羽釜	—	—	—	灰色(N4/)	細砂	ススA
3338	土壙398	土師器	カマド	—	—	—	褐灰色(7.5YR4/1)	細砂、粗砂、礫	
3339	土壙398	亀山焼	甕	31.6	—	—	暗灰色(N3/)	細砂、粗砂、礫	タタキ成形
3340	土壙398	常滑焼	甕	—	—	—	褐灰色(10YR5/1)	精良	内面に釉
3341	土壙398	青白磁	合子蓋	(4.1)	—	—	(釉)うすい明青灰色	精良	外面に釉
3342	土壙398	土師器	高台付椀	(12.6)	4.6	3.9	灰白色(2.5Y8/2)	細砂、礫	貼付高台
3343	土壙398	土師器	高台付椀	(12.4)	5.6	4.2	灰白色(2.5Y8/2)	細砂、礫	貼付高台、正円ではない
3344	土壙398	土師器	高台付椀	11.9	6.3	4.2	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	貼付高台、重ね焼き痕、歪みあり
3345	土壙398	土師器	高台付椀	12.2	5.8	3.8	灰白色(10YR8/2)	精良	
3346	土壙398	土師器	高台付椀	11.7	6.6	4.5	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	貼付高台、歪みあり
3347	土壙398	土師器	高台付椀	11.4	5.0	3.8	灰白色(2.5Y7/1)	精良	
3348	土壙398	土師器	高台付椀	11.2	5.3	3.7	灰白色(10YR8/2)	細砂	重ね焼き痕跡
3349	土壙398	土師器	高台付椀	(11.2)	5.2	3.8	灰白色(10YR8/2)	細砂	貼付高台
3350	土壙398	土師器	高台付椀	11.2	4.5	3.6	灰白色(10YR8/2)	細砂	貼付高台、歪みあり
3351	土壙398	土師器	台付杯	8.6	—	(5.7)	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	
3352	土壙398	土師器	小杯	8.9	7.6	6.4	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
3353	土壙398	土師器	小杯	(5.6)	(6.8)	(2.9)	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	ヘラキリ
3354	土壙398	土師器	小杯？	8.6	7.4	2.4	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	ヘラキリ底、ロクロ左
3355	土壙398	土師器	杯	12.2	9.0	2.8	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	ヘラキリ底、ヘラオコシ
3356	土壙398	土師器	杯	11.9	10.0	2.7	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	
3357	土壙398	土師器	杯	11.7	9.7	2.4	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	ほぼ完形
3358	土壙398	土師器	杯	11.6	10.2	3.3	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	ススA　ほぼ完形
3359	土壙398	土師器	杯	11.2～12.3	7.8～8.6	2.8	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	ススC　完形
3360	土壙398	土師器	杯	10.9	9.0	2.6	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	ヘラキリ底、ロクロ回転左
3361	土壙398	土師器	杯	10.5	9.1	2.7	鈍い橙色(5YR87/4)	細砂	
3362	土壙398	土師器	小皿	9.0	7.1	1.8	灰白色(5YR8/2)	細砂、礫	ヘラキリ
3363	土壙398	土師器	小皿	8.9	7.1	1.5	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	
3364	土壙398	土師器	小皿	8.5	7.2	1.7	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	ヘラキリ底、ヘラオコシ
3365	土壙398	土師器	小皿	8.4	6.9	1.8	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	ヘラキリ底
3366	土壙398	土師器	小皿	8.4	7.4	1.5	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
3367	土壙398	土師器	小皿	8.4	6.7	1.6	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	完形
3368	土壙398	土師器	小皿	8.2	6.4	1.4	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
3369	土壙398	土師器	小皿	7.8	6.9	1.9	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	ヘラキリ底、ロクロ回転左
3370	土壙398	土師器	小皿	7.9	6.7	1.2	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	ヘラキリ底、ロクロ回転左
3371	土壙398	土師器	小皿	8.1	7.5	1.7	浅黄橙色(7.5YR8/4)	精良	
3372	土壙398	土師器	小皿	8.0	5.9	1.8	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	完形
3373	土壙398	土師器	小皿	8.1	6.8	1.5	橙色(5YR7/6)	細砂	ヘラキリ
3374	土壙398	土師器	小皿	7.9	5.6	1.6	鈍い黄橙色(10YR7/2)	精良	完形
3375	土壙398	土師器	小皿	7.3	6.6	1.6	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	ヘラキリ底
3376	土壙398	土師器	小皿	7.3	5.5	1.0	灰白色(10YR8/2)	細砂	焼きがよいうすい
3377	土壙398	土師器	小皿	4.5	5.4	1.2	淡橙色(5YR8/3)	細砂、礫	糸切りか？
3378	土壙398	土師器	小皿	7.5	5.6	1.2	橙色(5YR7/6)	細砂	ほぼ完形
3379	土壙398	土師器	小皿	7.3	5.1	1.6	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	ヘラキリ底、ヘラオコシ
3380	土壙398	土師器	小皿	6.9	5.7	1.7	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	ヘラキリ底　ほぼ完形
3381	土壙398	土師器	小皿	7.1	5.4	1.5	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	うすいのが特徴
3382	土壙398	土師器	小皿	7.1	5.6	1.7	橙色(5YR7/6)	細砂	完形
3383	土壙398	土師器	鍋	(29.0)	—	—	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	ススA？
3384	土壙398	土師器	鍋	(27.6)	—	—	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂、礫	
3385	土壙398	土師器	鍋	(3.8)	—	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	
3386	土壙399	白磁	碗		6.1	(3.5)	(釉)灰白色(7.5Y8/2)（素露)灰白色(N8/)	精良	削り出し高台
3387	土壙414	土師器	高台付椀	—	3.7	—	灰白色(2.5Y8/1)	粗砂	
3388	土壙414	亀山焼	甕	—	—	—	暗青灰色(5BG4/1)	粗砂、礫	格子タタキ
3389	土壙415	土師器	高台付椀	—	7.2	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
3390	土壙415	土師器	杯	10.2	8.2	2.1	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	外面ヘラ切り
3391	土壙415	土師器	小皿	7.8	6.2	1.2	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	外面ヘラ切り
3392	土壙415	土師器	小皿	8.2	7.6	1.3	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	外面ヘラ切り
3393	土壙415	土師器	皿	10.4	8.8	1.9	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	外面ヘラ切り
3394	土壙415	土師器	皿	14.2	11.8	2.4	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	底外面ヘラ切り
3395	土壙415	土師器	皿	13.2	7.8	2.3	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
3396	土壙415	土師器	皿	—	11.7	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	外面板目痕
3397	土壙415	亀山焼	擂鉢	(30.8)	—	—	灰白色(10YR8/1)	細砂	
3398	土壙415	亀山焼	擂鉢	—	11.8	—	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
3399	土壙415	瓦	軒丸瓦	—	—	—	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	宝相華紋
3400	土壙415	瓦	軒丸瓦	—	—	—	褐灰色(10YR5/1)	細砂	宝相華紋
3401	土壙415	瓦	軒平瓦	—	—	—	灰色(N4)	細砂、粗砂、礫	
3402	土壙416	土師器	小皿	6.2	—	1.2	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
3403	土壙419	土師器	小皿	(6.3)	(5.6)	1.3	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	
3404	土壙419	土師器	小皿	(6.7)	(6.0)	1.3	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	
3405	土壙419	土師器	甕	—	—	—	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	
3406	土壙419	瓦	丸瓦	—	—	—	灰白色(5Y8/1)	細砂	
3407	土壙419	瓦	平瓦	—	—	—	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	糸切り
3408	土壙420	土師器	高台付椀	—	6.6	—	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂、粗砂、礫	
3409	土壙421	土師器	小皿	6.6	—	1.2	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良、細砂	
3410	土壙421	土師器	小皿	7.9	7.3	1.8	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	ほぼ完形
3411	土壙421	土師器	小皿	8.7	8.2	1.7	鈍い黄橙色(10YR8/3)	細砂	ほぼ完形
3412	土壙421	土師器	鍋	—	—	—	鈍い黄橙色(10YR8/3)	細砂	
3413	土壙421	亀山焼	擂鉢	—	—	—	灰白色(10YR7/1)	細砂	
3414	土壙421	瓦	丸瓦	—	—	—	灰白色(5YR8/1)	細砂	
3415	土壙421	瓦	平瓦	—	—	—	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	
3416	土壙424	土師器	高台付椀	—	9.2	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
3417	土壙424	土師器	皿	9.4	5.0	2.6	橙色(7.5YR6/6)	細砂	
3418	土壙424	土師器	皿	9.6	6.5	2.1	灰白色(2.5Y8/2)	細砂、粗砂	ヘラ切り
3419	土壙墓6	土師器	高台付椀	12.0	(5.4)	4.2	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	貼付高台
3420	土壙墓7	土師器	小皿	7.6	4.8	1.1	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	圧痕？
3421	土壙墓8	土師器	高台付椀	10.9	5.8	3.9	灰白色(2.5Y8/1)	細砂、粗砂	貼付高台　完形
3422	火葬墓1	土師器	甕	—	—	—	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂、粗砂、礫	黒斑ＢＣ
3423	火葬墓2	土師器	甕	17.1	—	26.2	鈍い橙色(7.5YR7/3)	礫	黒斑ＢＣ　完形
3424	柱穴列2	瓦	軒丸瓦	—	—	—	灰色(N5/)	細砂、粗砂、礫	
3425	柱穴列2	瓦	平瓦	—	—	—	灰色(N6/)	細砂	
3426	柱穴26	土師器	高台付椀	13.0	6.0	5.0	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	貼付高台
3427	柱穴26	土師器	小杯	7.6	5.7	2.7	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	ヘラキリ底
3428	柱穴26	土師器	小皿	7.8	5.9	1.3	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	ヘラキリ底
3429	柱穴26	土師器	小皿	8.0	5.7	1.4	鈍い橙色(7.5YR6/4)	精良	ヘラキリ底
3430	柱穴27	土師器	高台付椀	10.4	4.8	3.6	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	貼付高台
3431	柱穴27	土師器	小皿	7.6	5.5	1.5	浅黄橙色 (10YR7/3)	細砂	ほぼ完形
3432	柱穴27	土師器	小皿	7.4	5.2	1.3	淡橙色(5YR8/4)	細砂、礫	ヘラキリ、ヘラオコシ
3433	柱穴27	土師器	小皿	7.7	5.7	1.4	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、礫	ヘラキリ、ヘラオコシ、うすくて堅い
3434	柱穴27	土師器	小皿	7.6	6.1	2.1	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	ヘラキリ、ヘラオコシ
3435	柱穴27	土師器	小皿	7.9	6.0	1.7	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	ヘラキリ
3436	柱穴27	魚住焼(須恵器)	鉢？	—	—	—	灰色(10Y6/1)	細砂	
3437	柱穴33	土師器	高台付椀	12.0	5.7	4.1	灰白色(2.5Y8/2)	細砂、粗砂	完形
3438	柱穴33	土師器	高台付椀	11.3	5.4	3.9	灰白色(10YR8/2)	細砂	高台部にゲタ印？　完形
3439	柱穴33	土師器	高台付椀	11.6	4.7	3.8	灰白色(10YR8/2)	精良	内面底部に重ね焼き痕
3440	柱穴33	土師器	皿	11.5	8.7	2.8	鈍い黄橙色(10YR7/3)	精良	ほぼ完形
3441	柱穴33	土師器	皿	11.8	8.8	2.8	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	完形
3442	柱穴18	須恵器	杯蓋				灰色(N6/)	細砂	回転ヘラケズリ(右回り)
3443	柱穴17	須恵器	蓋	—	—	—	灰白色(N7/)	精良	転用硯
3444	柱穴19	須恵器	杯身	9.9	6.8	4.2	灰白色(N8/)	細砂、粗砂	
3445	柱穴22	須恵器	長頸壺	—	9.4	—	オリーブ灰色(2.5G5/1)	細砂	外面に釉
3446	柱穴31	土師器	杯	12.6	10.6	2.6	淡橙色(5YR8/3)	細砂、礫	ヘラキリ
3447	柱穴20	土師器	杯	12.7	9.0	3.1	橙色(5YR7/6)	細砂	歪みあり、内外面丹塗りか
3448	柱穴21	土師器	高台付杯	9.9	6.6	3.8	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂、礫	内面にスス？
3449	柱穴24	土師器	高台付杯	—	6.6	—	灰白色(2.5Y8/2)	細砂、粗砂	
3450	柱穴51	土師器	杯	16.2	10.2	4.0	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	板目痕
3451	柱穴23	土師器	杯	10.1	6.4	3.0	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	内面仕上げナデ、ヘラ切り　完形
3452	柱穴24	土師器	杯	11.5	6.7	3.9	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	ヘラ切り
3453	柱穴29	土師器	高台付椀	(13.9)	6.4	4.5	灰白色(7.5YR8/2)～灰褐色(7.5YR6/2)	細砂、粗砂	貼付高台
3454	柱穴25	土師器	高台付椀	10.9	3.9	3.7	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
3455	柱穴36	土師器	高台付椀	11.5	4.4	3.4	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	灯明痕
3456	柱穴38	須恵器	杯	(11.7)	8.2	3.1	灰白色(7.5Y8/1)	細砂	ロクロナデ、ヘラ切り
3457	柱穴38	土師器	小皿	8.9		1.4	橙色(5YR7/6)	細砂	ヘラ切り後ナデ
3458	柱穴37	土師器	小皿	9.8	7.2	1.5	鈍い黄褐色(10YR7/3)	細砂	ヘラ切り
3459	柱穴37	土師器	小皿	10.5	7.0	1.3	浅黄橙色(7.5YR8/4)	精良	ヘラ切り
3460	柱穴37	土師器	皿	10.6		1.9	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	ヘラ切り
3461	柱穴35	土師器	皿	11.8	8.7	2.8	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂、粗砂	ヘラキリ底、ヘラオコシ？
3462	柱穴30	土師器	皿	11.4	9.8	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
3463	柱穴42	土師器	皿	10.6	9.3	1.9	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
3464	柱穴32	土師器	皿	11.0	8.5	2.2	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	
3465	柱穴52	土師器	皿	9.2	7.3	1.4	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
3466	柱穴49	土師器	小皿	7.7	5.6	1.4	鈍い褐色(7.5YR7/3)	細砂	ほぼ完形
3467	柱穴40	土師器	皿	12.4	10.8	1.7	橙色(5YR7/6)	細砂	ヘラ切り、指オサエ　黒斑Ａ～Ｃ
3468	柱穴45	土師器	皿	9.8	8.0	2.0	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	歪みあり　完形
3469	柱穴48	土師器	小皿	9.4	7.3	1.8	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
3470	柱穴34	土師器	小皿	8.7	6.9	1.7	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	ヘラキリ底
3471	柱穴44	土師器	小皿	8.6	7.8	1.7	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	完形

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
3472	柱穴47	土師器	小皿	7.9	7.2	1.3	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	完形
3473	柱穴50	土師器	小皿	7.0	7.5	1.3	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	完形
3474	柱穴31	土師器	小皿	7.5	6.9	1.4	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	ヘラキリ底、ロクロ回転左　完形
3475	柱穴31	土師器	小皿	7.6	6.9	1.7	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	ロクロ左？　ほぼ完形
3476	柱穴28	土師器	小皿	7.3	6.0	1.3	灰白色(2.5Y8/2)	精良	ヘラキリ底、ロクロ回転左
3477	柱穴28	土師器	小皿	7.3	5.6	1.3	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、粗砂	ヘラキリ底、ヘラオコシ？
3478	柱穴43	土師器	小皿	5.8	—	1.2	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	完形
3479	柱穴48	土師器	小皿	5.7	5.1	0.9	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
3480	柱穴31	土師器	小杯	8.0	5.3	2.5	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂	完形
3481	柱穴31	土師器	小杯	8.5	7.6	2.5	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂、粗砂	ヘラキリ底
3482	柱穴30	土師器	鍋	(30.6)	—	—	黒褐色(10YR3/1)	精良	内面に線刻
3483	柱穴41	瓦	軒平瓦	—	—	—	灰白色(5Y8/1)	細砂	焼成やや不良
3484	柱穴46	瓦	丸瓦	—	—	—	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	
3485	柱穴43	瓦	平瓦	—	—	—	灰白色(10Y7/1)	細砂	
3486	柱穴39	瓦	平瓦	—	—	—	灰白色(5YR7/1)	細砂	
3487	柱穴53	瓦	平瓦	—	—	—	灰白色(5Y7/1)	細砂	
3488	土器溜り3	土師器	高台付杯	14.4	8.6	5.2	橙色(2.5YR6/6)	細砂	内外面ナデ
3489	土器溜り3	土師器	高台付杯	9.0			浅黄橙色(10YR4/3)	精良	
3490	土器溜り3	土師器	高台付椀	—	8.0	—	橙色(7.5YR6/6)	精良	内面ミガキ？
3491	土器溜り3	土師器	高台付椀	—	8.4	—	橙色(5YR6/6)	精良	
3492	土器溜り3	土師器	高台付椀	13.8	7.0	6.1	橙色(7.5YR6/6)	精良	
3493	土器溜り3	土師器	小皿	8.7	6.9	1.2	淡橙色(5YR8/4)	精良	ヘラ切り後押圧
3494	土器溜り3	土師器	皿	10.3	—	—	鈍い赤褐色(2.5YR5/4)	細砂	内面指オサエ　ススB'
3495	土器溜り3	土師器	椀	—	5.6	—	明灰褐色(7.5YR7/1)	精良	ヘラ切り後押圧
3496	土器溜り3	黒色土器	椀	16.3	9.0	6.1	橙色(2.5YR6/6)	精良	内黒、外面ミガキ　焼成不良
3497	土器溜り3	黒色土器	椀	—	7.2	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	内黒
3498	土器溜り3	黒色土器	椀	—	8.0	—	橙色(2.5YR7/6)	精良	内黒、内面ミガキ？
3499	土器溜り3	黒色土器	椀	—	10.0	—	橙色(5YR6/6)	精良	内黒、内面ミガキ
3500	土器溜り3	土師器	鍋	24.6	—	—	灰褐色(5YR5/2)	細砂	内面ケズリ後ナデ
3501	溝43	須恵器	杯身	(15.0)	(10.9)	—	灰白色(10Y7/1)	細砂、粗砂	貼付高台
3502	溝43	須恵器	杯身	13.4	8.4	3.9	灰白色(N8/)	細砂、粗砂	貼付高台
3503	溝43	須恵器	杯身	—	10.4	—	灰色(N5/)	細砂	ヘラ記号
3504	溝43	土師器	高杯	—	12.2	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	精良	
3505	溝43	土師器	杯身	—	(10.8)	—	橙色(5YR6/6)	精良	内外面赤色顔料
3506	溝49	瓦	軒平瓦	—	—	—	灰色(7.5Y4/1)	細砂、粗砂	
3507	溝49	瓦	平瓦	—	—	—	灰白色(2.5Y8/2)	細砂、礫	
3508	溝50・51	須恵器	蓋	(10.6)	—	—	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	
3509	溝50・51	黒色土器	椀	(19.2)	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
3510	溝50・51	土師器	台付皿	—	8.2	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
3511	溝50・51	土師器	皿	—	6.6	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	ヘラ切り
3512	溝50・51	土師器	皿	—	7.5	—	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	
3513	溝50・51	土師器	皿	10.0	7.6	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
3514	溝50・51	土師器	皿	8.9	—	13.5	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	黒斑AB　完形
3515	溝50・51	土師器	皿	9.4	—	1.5	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	ほぼ完形
3516	溝50・51	土師器	浅鉢	—	—	—	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	
3517	溝50・51	瓦	軒丸瓦	—	—	—	灰白色(7.5Y8/1)	細砂	宝相華紋
3518	溝50・51	瓦	軒丸瓦	—	—	—	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	宝相華紋
3519	溝50・51	瓦	軒丸瓦	—	—	—	灰白色(10YR8/1)	細砂	宝相華紋
3520	溝50・51	瓦	軒丸瓦	—	—	—	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	宝相華紋
3521	溝50・51	瓦	軒丸瓦	—	—	—	灰白色(10YR8/1)	細砂	宝相華紋
3522	溝50・51	瓦	軒丸瓦	—	—	—	灰色(5Y6/1)	細砂	宝相華紋
3523	溝50・51	瓦	軒平瓦	—	—	—	青灰色(5B6/1)	細砂、粗砂	
3524	溝50・51	瓦	軒平瓦	—	—	—	灰白色(10YR8/1)	細砂	凸面縄目、大内田廃寺と同笵
3525	溝50・51	瓦	軒平瓦	—	—	—	灰色(N5)	細砂	凹面布目(吉備系)
3526	溝50・51	瓦	軒平瓦	—	—	—	灰白色(N7)	細砂	
3527	溝50・51	瓦	丸瓦	—	—	—	灰白色(10YR7/1)	細砂	凹面縄目タタキ、布目痕あり
3528	溝50・51	瓦	丸瓦	—	—	—	褐灰色(7.5YR6/1)	細砂	
3529	溝50・51	瓦	丸瓦	—	—	—	褐灰色(10YR6/1)	細砂	凸面縄目タタキ残る
3530	溝50・51	瓦	平瓦	—	—	—	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	
3531	溝50・51	瓦	平瓦	—	—	—	褐灰色(7.5YR6/1)	細砂	凹面縄目タタキ後ナデ
3532	溝50・51	瓦	平瓦	—	—	—	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	凹面工具の圧痕あり
3533	溝50・51	瓦	平瓦	—	—	—	灰色(7.5Y6/1)	細砂	
3534	溝50・51	瓦	平瓦	—	—	—	灰白色(7.5Y8/1)	細砂	
3535	溝50・51	瓦	平瓦	—	—	—	灰色(7.5Y5/1)	細砂	
3536	溝50・51	瓦	平瓦	—	—	—	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂	
3537	溝50・51	瓦	平瓦	—	—	—	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	凹面糸切り痕
3538	溝52	須恵器	杯	—	9.8	—	青灰色(5B5/1)	粗砂	
3539	溝52	黒色土器	椀	(11.0)	6.8	4.5	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	
3540	溝52	黒色土器	椀	14.8	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
3541	溝52	土師器	椀	(17.8)	—	—	灰白色(10YR8/2)	細砂	
3542	溝52	土師器	椀	—	5.4	—	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	
3543	溝52	土師器	椀	—	6.8	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
3544	溝52	土師器	椀	—	8.2	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
3545	溝52	土師器	椀	—	8.6	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
3546	溝52	土師器	椀	—	9.6	—	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
3547	溝52	土師器	椀	−	4.8	−	灰白色(10YR8/2)	細砂	
3548	溝52	土師器	皿	−	6.4	−	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	外面ヘラ切り後ナデ
3549	溝52	土師器	皿	8.4	7.4	−	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	外面ヘラ切り後ナデ
3550	溝52	土師器	皿	6.8	−	−	橙色(7.5YR7/6)	細砂	
3551	溝52	瓦	丸瓦	−	−	−	鈍い黄褐色(10YR5/3)	細砂、粗砂	一枚づくり
3552	溝52	瓦	平瓦	−	−	−	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	
3553	溝52	瓦	平瓦	−	−	−	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	
3554	溝53	土師器	高台付椀	14.6	7.4	5.8	灰白色(10YR8/2)	細砂	
3555	溝53	土師器	高台付椀	13.8	9.4	5.7	淡橙色(5YR8/4)	精良	内面仕上げナデ
3556	溝53	土師器	杯	−	8.3	−	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
3557	溝53	土師器	杯	−	7.9	−	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	内面仕上げナデ
3558	溝53	土師器	杯	−	8.4	−	灰褐色(5YR5/2)	細砂	
3559	溝53	土師器	杯	−	8.8	−	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	
3560	溝53	土師器	杯	−	(8.8)	−	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	
3561	溝53	土師器	高台付椀	−	(8.3)	−	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
3562	溝53	土師器	高台付椀	−	8.9	−	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	
3563	溝53	土師器	椀	9.0	6.5	2.5	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂(ごく少)	完形
3564	溝53	土師器	椀	9.0	5.0	2.5	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	内面にスス
3565	溝53	土師器	椀	9.2	3.8	2.6	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	黒斑A　完形
3566	溝53	土師器	椀	9.2	6.0	2.3	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂	
3567	溝53	土師器	椀	9.3	6.5	2.5	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	ほぼ完形
3568	溝53	土師器	椀	9.4	3.3	2.5	褐灰色(10YR5/1)	細砂	外面ヘラ切り後ナデ
3569	溝53	土師器	椀	9.0	6.2	2.3	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	黒斑C　完形
3570	溝53	土師器	椀	9.4	5.8	2.7	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	外面板目痕
3571	溝53	土師器	椀	9.7	6.2	2.5	淡橙色(5YR8/4)	細砂(少)	黒斑ABC　完形
3572	溝53	土師器	椀	9.5	7.1	2.5	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	内面仕上げナデ　完形
3573	溝53	土師器	椀	9.7	5.9	2.8	淡橙色(5YR8/3)	精良	外面板目痕
3574	溝53	土師器	杯	10.2	6.0	3.8	灰白色(5YR8/2)	精良	外面板目痕、内面スス
3575	溝53	土師器	杯	10.4	6.4	3.2	鈍い黄橙色(10YR7/2)	精良	内面仕上げナデ
3576	溝53	土師器	杯	10.8	6.9	3.3	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	ヘラ切り　ススC　完形
3577	溝53	土師器	杯	10.7	6.1	3.5	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	ほぼ完形
3578	溝53	土師器	杯	11.0	8.0	3.6	浅黄橙色(7.5YR8/3)	精良	黒斑BC　完形
3579	溝53	土師器	杯	11.0	6.6	3.5	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	完形
3580	溝53	土師器	杯	11.2	6.3	4.0	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂(少)	ヘラ切り、板目痕残る　内面スス
3581	溝53	土師器	杯	11.3	6.5	3.8	鈍い橙色(7.5YR7/3)	精良	板目痕
3582	溝53	土師器	杯	11.5	6.1	3.6	浅黄橙色(7.5YR8/4)	精良	
3583	溝53	土師器	杯	9.4	5.8	2.4	明褐灰色(5YR7/2)	細砂	
3584	溝53	土師器	皿	9.8	6.5	2.3	灰白色(10YR8/2)	精良	ヘラ切り　黒斑ABC
3585	溝53	土師器	皿	9.7	6.4	2.3	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂(ごく少)	完形
3586	溝53	土師器	皿	9.5	6.5	2.2	橙色(2.5YR7/6)	精良	
3587	溝53	土師器	皿	10.3	6.6	2.4	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂(ごく少)	
3588	溝53	土師器	甕	35.2	−	−	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	内面ナデ　ススA
3589	溝57	白磁	碗	−	−	(3.4)	(釉)灰白色(5Y8/2) (素地)灰白色(5Y8/1)	精良	表面線刻、釉
3590	溝70	土師器	小皿	7.8	6.4	1.6	橙色(5YR7/6)	精良	
3591	溝71	土師器	高台付椀	12.9～13.7	(高台)5.4	5.1	灰白色(2.5Y8/2)	細砂、礫	貼付高台、ヘラキリ　完形
3592	溝71	土師器	鍋	(31.2)	−	(12.6)	鈍い黄橙色(10YR6/4)	細砂	ススA
3593	溝72	魚住焼	こね鉢	22.6	−	(4.2)	(釉)灰色(7.5Y5/1) (素地)灰色(N6/)	細砂	ガラス状溶塊(石)
3594	溝72	白磁	碗	−	6.5	(2.4)	(釉)灰白色(2.5GY8/1) (素地)灰白色(2.5Y7/1)	精良	
3595	溝72	青磁		−	5.8	−	明オリーブ灰色(5GY7/1)	精良	内底見込みに蓮華文?、削り出し高台
3596	溝72	瓦	軒平瓦	−	−	−	灰色(5Y6/1)	細砂	
3597	溝73	瀬戸焼	皿	10.5	6.2	2.2	(釉)浅黄色(7.5YR7/3)	精良	外面底部に施釉なし
3598	溝73	備前焼	甕	−	−	−	明赤褐色(2.5YR3/2)	細砂、粗砂	玉縁
3599	溝73	備前焼	擂鉢	−	13.8	−	赤橙色(10R6/6)	精良	内面に卸し目
3600	溝87・88	灰釉陶器	碗	−	(7.6)	−	(釉)オリーブ灰色(2.5GY6/1) (素地)灰白色(2.5Y8/1)	精良	貼付高台、一部に釉が残る
3601	溝87・88	土師器	杯身	(13.2)	(8.2)	3.4	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂、粗砂	
3602	溝89～94	土師器	椀	−	4.8	(1.4)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
3603	溝95～97	灰釉陶器	椀？	−	−	−	灰白色(N8/)	細砂	
3604	溝98・99	土師器	皿	(8.1)	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/3)	精良、細砂	
3605	溝98・99	土師器	皿	8.4	−	−	灰白色(2.5Y8/2)	精良、細砂	
3606	溝98・99	土師器	甕	−	−	−	褐灰色(7.5YR5/1)	細砂	内面ハケメ
3607	溝98・99	瓦	軒丸瓦	−	−	−	褐灰色(10YR6/1)	細砂	宝相華紋
3608	溝98・99	瓦	軒丸瓦	−	−	−	褐灰色(7.5YR6/1)	細砂	巴紋
3609	溝98・99	瓦	軒丸瓦	−	−	−	灰白色(10YR8/1)	細砂	
3610	溝98・99	瓦	丸瓦	−	−	−	灰白色(10YR8/2)	細砂	凸面ナデ
3611	溝98・99	瓦	丸瓦	−	−	−	褐灰色(7.5YR6/1)	細砂	釘穴
3612	溝98・99	瓦	丸瓦	−	−	−	褐灰色(10YR6/1)	細砂	凸面ナデ
3613	溝98・99	瓦	平瓦	−	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	凹面糸切り痕
3614	溝98・99	瓦	平瓦	−	−	−	褐灰色(10YR6/1)	細砂	凸面格子タタキ、布目圧痕あり
3615	溝98・99	瓦	平瓦	−	−	−	灰白色(10YR8/1)	細砂	凸面縄目後ナデ
3616	溝100	土師器	高台付椀	−	−	−	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
3617	溝100	土師器	小皿	−	−	1.2	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂(ごく少)	
3618	溝100	土師器	小皿	9.6	6.5	1.9	灰白色(10YR8/2)	細砂	
3619	溝100	瓦	平瓦	−	−	−	灰色(7.5Y6/1)	細砂、粗砂	
3620	溝100	瓦	平瓦	−	−	−	灰白色(5Y7/1)	細砂	凹凸面糸切り後ナデ
3621	溝100	瓦	平瓦	−	−	−	灰色(N5)	細砂(ごく少)	
3622	溝100	瓦	平瓦	−	−	−	明青灰色(5B7/1)	細砂	凹凸面糸切り後ナデ
3623	溝100	瓦	軒平瓦	−	−	−	灰白色(10Y7/1)	粗砂	笵傷あり
3624	溝101	土師器	小皿	8.2	7.4	1.4	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	ヘラキリ底
3625	溝101	土師器	皿	10.3	−	2.4	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	板目痕
3626	溝101	土師器	皿	11.3	9.3	1.2	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	ほぼ完形
3627	溝101	土師器	鉢	26.3	−	−	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	
3628	溝101	瓦	丸瓦	−	−	−	灰白色(N8/)	細砂、粗砂	凹面布目痕
3629	溝101	瓦	丸瓦	−	−	−	灰色(N6/)	細砂	凹面布目
3630	溝101	瓦	丸瓦	−	−	−	灰白色(5Y7/1)	細砂	
3631	溝101	瓦	軒平瓦	−	−	−	灰白色(5Y7/1)～褐灰色(10YR6/1)	細砂、粗砂	瓦当部唐草文
3632	溝101	瓦	平瓦	−	−	−	オリーブ灰色(2.5GY5/1)	細砂	糸切り
3633	溝102	須恵器	?	−	−	−	灰色(5Y6/1)	細砂(ごく少)	線刻文字「太」?
3634	溝102	土師器	皿	9.3	5.4	2.6	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	タールとスス一部付着　ほぼ完形
3635	溝102	土師器	皿	7.3	−	1.4	淡赤橙色(2.5YR7/4)	精良	
3636	溝102	土師器	鍋	−	−	−	黒褐色(10YR3/1)	細砂	外面ハケメ
3637	溝102	白磁	椀	−	−	−	灰白色(5Y7/2)	細砂	釉薬
3638	溝102	瓦	丸瓦	−	−	−	灰色(N4)	粗砂	
3639	溝102	瓦	丸瓦	−	−	−	灰色(N6)	細砂	
3640	溝102	瓦	丸瓦	−	−	−	灰白色(7/)	細砂	
3641	溝102	瓦	丸瓦	−	−	−	灰白色(10Y7/1)	細砂	
3642	溝102	瓦	平瓦	−	−	−	灰白色(10YR8/1)	粗砂	凸面工具ナデ
3643	溝102	瓦	平瓦	−	−	−	灰白色(10YR6/1)	細砂	
3644	溝102	瓦	平瓦	−	−	−	灰白色(10Y8/1)	粗砂、礫	
3645	溝102	瓦	平瓦	−	−	−	灰白色(7.5YR8/1)	粗砂	
3646	溝102	瓦	平瓦	−	−	−	灰白色(7.5YR8/1)	粗砂	
3647	溝102	瓦	平瓦	−	−	−	灰色(N6)	細砂	
3648	畑	須恵器	杯身	−	9.5	−	灰白色(N7/)	精良	貼付高台
3649	畑	土師器	椀?高台	−	(9.0)		鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	貼付高台
3650	畑	土師器	杯	(11.2)	6.5	2.8	橙色(5YR7/6)	細砂	丹塗りなし
3651	畑	土師器	皿	12.2	9.8	2.1	橙色(7.5YR7/6)	細砂	丹塗りなし
3652	畑	土師器	皿	13.1	11.9	1.4	橙色(5YR6/8)	精良、細砂	丹塗りなし?
3653	畑	瓦	平瓦	−	−	−	灰白色(N7/)	細砂	
3654	畑	瓦	平瓦	−	−	−	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂	表面布目痕、裏面縄目痕　焼成不良
3655	低位部2	須恵器	杯身	(15.9)	11.0	4.9	灰白色(7.5Y7/1)	細砂、粗砂	貼付高台　焼成不良
3656	低位部2	須恵器	杯身	−	11.2	−	灰白色(N7/)	細砂、粗砂	貼付高台
3657	低位部2	黒色土器	椀	−	7.8	(2.5)	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	内面に炭素が吸着
3658	低位部2	黒色土器	椀	−	8.6	−	灰白色(10YR8/2)	細砂	内面黒色、貼付高台
3659	低位部2	黒色土器	椀	−	(11.2)	−	橙色(2.5YR6/8)	細砂、粗砂	外面丹塗り、貼付高台　ス ス
3660	低位部2	緑釉陶器	椀	−	(6.4)	(2.3)	(釉)淡深緑色 (素露)灰白色(7.5Y7/1)	細砂	緑釉
3661	低位部2	須恵器	硯	(19.5)	−	−	灰白色(N7)	細砂、粗砂、礫	内面にわずかに墨?、自然釉
3662	低位部3	土師器	椀	(10.0)	4.1	3.4	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	貼付高台
3663	低位部3	緑釉陶器	椀	−	(8.8)	(3.1)	(釉)緑色 (素露)灰白色(10Y7/1)	精良	削り出し高台、貫入、圏線
3664	低位部3	白磁	碗	−	(5.9)	(1.6)	(釉)明オリーブ灰色(2.5GY7/1) (素地)灰白色(N8/) (露胎)灰白色(10Y7/1	精良	削り出し高台
3665	低位部4	土師器	椀	(11.6)	4.6	3.7	灰白色(2.5Y8/2)	細砂、礫	貼付高台
3666	低位部4	土師器	小皿	8.7	7.0	1.7	橙色(5YR7/8)	細砂	ヘラキリ
3667	低位部4	土師器	小皿	5.9	4.5	1.6	橙色(7.5YR7/6)	細砂	ヘラキリ底、釉　完形
3668	低位部4	土師器	鍋	−	−	−	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	線刻
3669	低位部4	土師器	皿?	−	−	−	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	線刻
3670	低位部4	土師器	皿?	−	−	−	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	線刻
3671	低位部4	土師器	皿?	−	−	−	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	線刻
3672	低位部4	備前焼	擂鉢	(26.0)	−	−	青灰色(5PB5/1)	細砂、礫	卸目
3673	低位部4	魚住焼	こね鉢	21.4	−	(2.4)	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	
3674	低位部4	常滑焼	甕	−	−	−	灰色(5Y5/1)	細砂、粗砂	タタキ成形
3675	低位部4	白磁	碗	(14.6)	−	−	灰白色(2.5GY8/1)	精良	釉
3676	低位部4	白磁	碗	−	6.6	−	灰白色(10Y8/1)	精良	削り出し高台
3677	低位部4	白磁	碗	−	7.0	−	灰白色(10Y8/1)	精良	削り出し高台
3678	低位部4	白磁	碗	−	7.1	(3.2)	灰白色(7.5Y8/1)	精良	内面に釉
3679	低位部4	白磁	碗	−	6.1	−	白灰色	精良	削り出し高台、内面釉
3680	低位部4	白磁?	皿?	8.3	−	−	灰白色(5GY8/1)	精良	釉
3681	低位部4	白磁	皿	9.4	3.8	2.2	オリーブ黄色(5Y6/3)	精良	内面底部に草花文様、釉、底部釉をけずりとっている
3682	低位部4	青磁	碗	15.6	−	−	オリーブ灰色(10Y6/2)	精良	鎬蓮弁
3683	低位部4	青磁	碗	18.1	−	−	明オリーブ灰色(5GY7/1)	精良	鎬蓮弁
3684	河道	須恵器	瓶	−	4.0	−	明青灰色(5B7/1)	細砂	
3685	河道	黒色土器	椀	−	8.1	−	灰白色(2.5Y8/1)	細砂(ごく少)	

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
3686	河道	黒色土器	椀	−	5.4	−	灰白色(10YR8/2)	細砂	
3687	河道	黒色土器	椀	−	5.0	−	灰白色(2.5Y8/2)	細砂(ごく少)	
3688	河道	土師器	高台付椀	12.1	−	−	鈍い橙色(7.5YR7/3)	精良	
3689	河道	土師器	高台付椀	11.6	5.7	3.7	灰白色(10YR8/2)	精良	
3690	河道	土師器	高台付椀	12.3	5.0	4.0	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
3691	河道	土師器	高台付椀	13.2	6.0	5.0	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂(ごく少)	
3692	河道	土師器	高台付椀	11.8	4.2	3.6	灰白色(7.5YR8/2)	細砂、粗砂、礫	
3693	河道	土師器	高台付椀	12.5	5.6	4.1	褐灰色(10YR4/1)	細砂	内面に重ね焼きの痕
3694	河道	土師器	高台付椀	11.8	4.8	4.2	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	内面に重ね焼きの痕
3695	河道	土師器	高台付椀	13.0	5.4	3.9	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	内面に重ね焼きの痕
3696	河道	土師器	高台付椀	(12.0)	4.8	3.7	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	
3697	河道	土師器	高台付椀	13.2	5.7	5.1	灰白色(10YR8/1)	細砂(ごく少)	
3698	河道	土師器	高台付椀	10.3	4.6	2.7	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	
3699	河道	土師器	高台付椀	(11.0)	3.8	3.4	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	
3700	河道	土師器	高台付椀	11.4	4.6	3.4	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
3701	河道	土師器	高台付椀	(11.9)	5.0	4.2	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	内面に重ね焼きの痕
3702	河道	土師器	高台付椀	−	5.8	−	褐灰色(10YR5/1)	細砂	
3703	河道	土師器	高台付椀	−	5.0	−	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	内面に重ね焼きの痕
3704	河道	土師器	高台付椀	−	6.0	−	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	
3705	河道	土師器	高台付椀	−	5.2	−	灰白色(10YR8/1)	細砂(ごく少)	
3706	河道	土師器	高台付椀	−	5.4	−	灰白色(10YR8/1)	細砂(ごく少)	
3707	河道	土師器	高台付椀	−	5.6	−	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
3708	河道	土師器	高台付椀	−	6.2	−	灰白色(10YR8/1)	細砂(ごく少)	
3709	河道	土師器	高台付椀	−	7.1	−	灰白色(10YR8/1)	細砂	
3710	河道	土師器	高台付椀	7.3	4.3	2.7	灰白色(10YR8/2)	細砂(ごく少)	
3711	河道	土師器	高台付椀	−	3.8	−	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂、礫	
3712	河道	土師器	高台付椀	−	3.7	−	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂、粗砂	
3713	河道	土師器	高台付椀	−	4.5	−	灰白色(10YR8/2)	細砂(ごく少)	高台に刻目
3714	河道	土師器	高台付椀	−	3.4	−	灰白色(7.5Y8/1)	細砂	
3715	河道	土師器	皿	10.5	6.5	2.3	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	ほぼ完形
3716	河道	土師器	杯	5.8	4.5	1.8	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	板目痕　黒斑ＡＣ　ほぼ完形
3717	河道	土師器	椀	(11.8)	−	−	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
3718	河道	土師器	皿	10.2	8.5	2.2	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	
3719	河道	土師器	皿	11.3	8.9	2.3	灰白色(7.5YR8/2)	精良	
3720	河道	土師器	皿	12.3	7.5	2.9	灰白色(5YR8/1)	精良、細砂	
3721	河道	土師器	皿	12.6	10.8	2.7	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	板目痕
3722	河道	土師器	皿	12.8	9.1	2.4	灰白色(10YR8/2)	細砂	
3723	河道	土師器	皿	−	13.0	−	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
3724	河道	土師器	皿	7.4	5.0	1.3	灰白色(10YR8/2)	細砂	板目痕
3725	河道	土師器	皿	8.0	6.9	1.5	鈍い黄橙色(10YR7/3)	精良	板目痕　完形
3726	河道	土師器	皿	8.2	6.2	1.6	明褐灰色(7.5YR7/1)	精良	
3727	河道	土師器	皿	8.4	7.0	1.3	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
3728	河道	土師器	皿	8.4	7.7	1.6	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂(少)	スス付着　ススＡ
3729	河道	土師器	皿	6.7	5.5	1.4	淡赤橙色(2.5YR7/3)	精良	スス付着　ススＡ
3730	河道	土師器	皿	6.9	−	−	淡橙色(5YR8/3)	精良	
3731	河道	土師器	皿	7.0	−	1.6	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
3732	河道	土師器	皿	7.0	−	1.4	鈍い橙色(5YR7/3)	精良	内面スス付着
3733	河道	土師器	皿	7.3		1.4	鈍い黄橙色(10YR7/3)	精良	スス付着　ススＡ
3734	河道	土師器	小杯	7.7	5.3	2.5	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	
3735	河道	土師器	小杯	9.1	5.3	2.9	灰白色(10YR7/1)	細砂、粗砂	
3736	河道	土師器	小杯	−	5.4	−	灰白色(10YR8/2)	細砂	
3737	河道	土師器	小杯	8.0	5.3	3.2	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	
3738	河道	土師器	小杯	−	5.4	−	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂(ごく少)	
3739	河道	土師器	鍋	(35.6)	−	−	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	ススＡ
3740	河道	土師器	土鍋の脚	−	−	−	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	内面ハケメ
3741	河道	土師器	土鍋の脚	−	−	−	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	内面ハケメ
3742	河道	土師器	土鍋の脚	−	−	−	灰白色(10YR8/2)	細砂	
3743	河道	土師器	鉢	−	−	−	灰白色(10YR7/1)	細砂(ごく少)	
3744	河道	土師器	?	−	−	−	灰白色(10YR8/1)	細砂	
3745	河道	黒色土器?	花瓶	−	−	−	黒色(2.5GY2/1)	細砂、粗砂、礫	
3746	河道	青磁	椀	−	4.3	−	灰白色(7.5Y6/1)(胎土色)	精良	内外面ともに釉薬
3747	河道	青磁	椀	−	−	−	灰白色(N8)(胎土色)	精良	内外面ともに釉薬
3748	河道	青磁	杯	−	−	−	灰白色(N8)(胎土色)	精良	内外面ともに釉薬
3749	河道	青磁	皿	−	−	−	灰白色(N7)(胎土色)	精良	内外面ともに釉薬
3750	河道	亀山焼	甕	−	−	−	暗灰色(10YR8/1)	細砂、粗砂、礫	内面同心円当具
3751	河道	亀山焼	甕	−	−	−	灰色(5Y5/1)	細砂	内面ナデ
3752	河道	亀山焼	甕	−	−	−	灰色(10Y5/1)	細砂(少)、粗砂(ごく少)	
3753	河道	亀山焼	鉢	24.2	−	−	灰白色(7.5Y7/1)	細砂	
3754	河道	土師器	高台付椀	−	5.5	−	灰白色(10YR8/2)	細砂	
3755	河道	土師器	高台付椀	−	5.8	−	灰白色(10YR8/2)	細砂	
3756	河道	土師器	高台付椀	−	4.0	−	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	
3757	河道	土師器	高台付椀	−	4.2	−	灰白色(10YR8/2)	細砂	
3758	河道	土師器	杯	8.8	−	−	灰白色(10YR8/2)	細砂	
3759	河道	土師器	杯	7.6	−	2.1	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
3760	河道	土師器	杯	5.6	4.2	1.8	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	板目痕
3761	河道	土師器	皿	—	7.0	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
3762	河道	土師器	皿	(10.8)	7.4	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
3763	河道	土師器	皿	12.8	—	2.8	鈍い橙色(7.5YR7/3)	精良	
3764	河道	土師器	小皿	6.8	6.4	1.3	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	
3765	河道	土師器	小皿	6.8	5.8	1.2	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
3766	河道	土師器	小皿	7.2	5.0	1.3	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	
3767	河道	土師器	小皿	7.4	6.8	1.6	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	ほぼ完形
3768	河道	土師器	小皿	7.8	7.2	1.7	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	ほぼ完形
3769	河道	土師器	小皿	9.4	—	1.6	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	
3770	河道	土師器	小皿	6.4	—	1.6	灰白色(5YR8/2)	細砂	ほぼ完形
3771	河道	土師器	小皿	6.6	—	1.6	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	スス付着　ススA
3772	河道	土師器	小皿	6.8	—	1.5	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	スス付着　ススA
3773	河道	土師器	小皿	7.0	—	1.2	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	スス付着　ススA
3774	河道	土師器	小皿	7.2	—	1.2	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	4ヶ所以上スス付着　ススA
3775	河道	土師器	小皿	6.2	—	1.1	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	3ヶ所スス付着　ススA　完形
3776	河道	土師器	小皿	6.6	—	1.3	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	2ヶ所スス付着　ススA　ほぼ完形
3777	河道	土師器	小皿	6.7	—	1.5	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	スス付着　ススA
3778	河道	土師器	小皿	6.8	—	1.4	鈍い橙色(5YR7/3)	細砂	
3779	河道	土師器	小皿	7.0	—	1.3	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	4ヶ所以上スス付着　ススA
3780	河道	土師器	小皿	7.8	—	1.5	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	6ヶ所以上スス付着　ススA　完形
3781	河道	亀山焼	鉢	(40.4)	—	—	灰黄色(2.5Y8/2)	細砂	内面同心円当具後ハケメ
3782	河道	備前焼	擂鉢	27.8	—	—	灰赤色(2.5YR6/2)	細砂	
3783	河道	備前焼	擂鉢	—	9.6	—	灰赤色(7.5YR6/2)	細砂	
3784	河道	備前焼	擂鉢	—	14.2	—	鈍い赤橙色(2.5YR5/3)	細砂	
3785	河道	土師器	鉢	(23.0)	—	—	灰黄色(2.5Y6/2)	細砂	内面スス付着
3786	河道	瓦	軒丸瓦				黄灰色(2.5Y5/1)	細砂	
3787	河道	瓦	軒丸瓦				灰色(5Y5/1)	細砂	
3788	河道	瓦	軒丸瓦				灰黄色(2.5Y6/2)	細砂	宝相華紋
3789	河道	瓦	軒丸瓦				灰色(7.5Y6/1)	細砂	宝相華紋
3790	河道	瓦	軒丸瓦				灰白色(2.5Y8/1)	細砂	宝相華紋
3791	河道	瓦	軒丸瓦				暗灰黄色(2.5Y4/2)	細砂	宝相華紋
3792	河道	瓦	軒丸瓦				灰白色(2.5Y8/1)	細砂	宝相華紋
3793	河道	瓦	軒平瓦				灰白色(10YR8/1)	細砂、粗砂	
3794	河道	瓦	軒平瓦				褐灰色(10YR5/1)	細砂、粗砂	瓦質
3795	河道	瓦	軒平瓦				灰白色(N7/0)	礫～細砂	
3796	河道	瓦	軒平瓦				灰白色(2.5YR7/1)	細砂	
3797	河道	瓦	軒平瓦				灰色(5Y5/1)	細砂	
3798	河道	瓦	軒平瓦				灰白色(N7/0)　灰色(6/0)	粗砂、細砂	
3799	河道	瓦	軒平瓦				灰色(N61)～(N91)	細砂	
3800	河道	瓦	丸瓦				灰白色(2.5Y8/1)	細砂、粗砂、礫	ほぼ完形
3801	河道	瓦	丸瓦				灰白色(10YR8/1)	細砂、粗砂	
3802	河道	瓦	丸瓦				灰白色(2.5Y7/1)	細砂、粗砂	
3803	河道	瓦	丸瓦				灰白色(5Y7/2)	細砂、粗砂	
3804	河道	瓦	丸瓦				灰白色(N8)	細砂、粗砂、礫	
3805	河道	瓦	丸瓦				灰白色(2.5Y8/1)	細砂、粗砂	
3806	河道	瓦	丸瓦				灰白色(5Y7/1)	細砂、粗砂	
3807	河道	瓦	丸瓦				黒色(5Y2/1)	細砂	
3808	河道	瓦	丸瓦				灰白色(7.5Y7/1)	細砂、粗砂、礫	
3809	河道	瓦	丸瓦				灰白色(7.5Y8/2)	細砂、粗砂、礫	
3810	河道	瓦	丸瓦				灰白色(N8)	細砂、粗砂、礫	
3811	河道	瓦	丸瓦				灰白色(10Y8/2)	細砂、粗砂、礫	
3812	河道	瓦	丸瓦				黄灰色(2.5Y6/1)	細砂、粗砂、礫	
3813	河道	瓦	丸瓦				灰白色(N6)	細砂、粗砂、礫	
3814	河道	瓦	丸瓦				灰色(5Y6/1)	細砂、粗砂、礫	
3815	河道	瓦	丸瓦				灰白色(7.5Y7/1)	細砂、粗砂、礫	
3816	河道	瓦	丸瓦				淡黄色(2.5Y8/3)	細砂、粗砂、礫	
3817	河道	瓦	丸瓦				灰白色(10Y8/1)	細砂、粗砂、礫	
3818	河道	瓦	丸瓦				黒色(N2)	細砂、粗砂、礫	
3819	河道	瓦	丸瓦				灰色(N4)	細砂	
3820	河道	瓦	丸瓦				暗灰色(N3)	細砂	
3821	河道	瓦	丸瓦				灰白色(N7)	細砂	
3822	河道	瓦	平瓦				灰白色(2.5Y8/1)	細砂	
3823	河道	瓦	平瓦				灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	
3824	河道	瓦	平瓦				鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
3825	河道	瓦	平瓦				灰白色(2.5Y7/1)	細砂	
3826	河道	瓦	平瓦				灰白色(10Y7/1)	細砂	
3827	河道	瓦	平瓦				灰白色(5Y7/1)	細砂	
3828	河道	瓦	平瓦				褐灰色(10YR6/1)	細砂	
3829	河道	瓦	平瓦				灰白色(10YR8/2)	細砂	
3830	河道	瓦	平瓦				灰白色(10Y8/1)	細砂	
3831	河道	瓦	平瓦				灰白色(10YR8/2)	細砂	
3832	河道	瓦	平瓦				灰白色(2.5Y8/1)	細砂	
3833	河道	瓦	平瓦				灰色(10Y4/1)	細砂	
3834	河道	瓦	平瓦				暗青灰色(10BG4/1)	細砂	

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
3835	河道	瓦	平瓦				灰白色(7.5Y7/1)	細砂	
3836	河道	瓦	平瓦				灰白色(2.5Y8/1)	細砂	
3837	河道	瓦	平瓦				灰白色(2.5Y8/2)	細砂	
3838	河道	瓦	平瓦				灰白色(7.5Y8/1)	細砂	
3839	河道	瓦	平瓦				灰白色(2.5Y8/1)	細砂	
3840	河道	瓦	平瓦				灰白色(10YR8/1)	細砂	
3841	河道	瓦	平瓦				灰白色(10YR7/1)	細砂	
3842	河道	瓦	平瓦				灰白色(7.5Y8/1)	細砂	
3843	河道	瓦	平瓦				灰白色(2.5Y8/2)	細砂	
3844	河道	瓦	平瓦				灰白色(7.5Y8/1)	礫	
3845	河道	瓦	平瓦				灰色(5Y8/1)	細砂	
3846	河道	瓦	平瓦				灰色(10Y5/1)	細砂	
3847	河道	瓦	平瓦				灰白色(5Y7/1)	細砂	
3848	河道	瓦	平瓦				灰白色(10Y7/1)	粗砂、細砂	
3849	河道	瓦	平瓦				灰白色(5Y8/1)	粗砂、細砂	
3850	河道	瓦	平瓦				灰白色(7.5Y8/1)	細砂	
3851	河道	瓦	平瓦				灰色(N6/)	細砂	
3852	河道	瓦	平瓦				灰色(7.5Y4/1)	細砂	
3853	河道	瓦	平瓦				褐灰色(7.5YR5/1)	細砂	
3854	河道	瓦	平瓦				灰色(10Y6/1)	細砂	
3855	河道	瓦	平瓦				灰色(5Y5/1)	細砂	
3856	河道	瓦	平瓦				灰色(10Y6/1)	細砂	
3857	河道	瓦	平瓦				灰色(5Y6/1)	細砂	
3858	河道	瓦	平瓦				灰色(7.5Y6/1)	細砂	
3859	河道	瓦	平瓦				灰色(N6/)	細砂	
3860	河道	瓦	平瓦				灰白色(10YR7/1)	細砂	
3861	河道	瓦	平瓦				鈍い橙色(10YR7/3)	細砂	
3862	河道	瓦	?				灰色(5Y5/1)	細砂	
3863	河道	瓦	平瓦				灰色(N5)	細砂	
3864	河道	瓦	平瓦				灰色(5Y6/1)	細砂	
3865	河道	瓦	軒丸瓦				オリーブ灰色(2.5G6/1)	細砂	
3866	河道	瓦	軒丸瓦				灰白色(7.5Y7/1)	細砂	
3867	河道	瓦	軒丸瓦				灰色(N4/0)	細砂	
3868	河道	瓦	軒丸瓦				灰色(N5/0)	細砂	
3869	河道	瓦	軒丸瓦				灰色(N5)	細砂	
3870	河道	瓦	軒丸瓦				オリーブ灰色(2.5GY6/1)	細砂	
3871	河道	瓦	軒丸瓦				暗灰色(N3/0)	細砂	
3872	河道	瓦	軒平瓦				灰白色(7.5Y7/1)	細砂	
3873	河道	瓦	軒平瓦				灰白色(7.5Y7/1)	細砂	
3874	河道	瓦	軒平瓦				灰白色(5Y8/1)	細砂	
3875	河道	瓦	軒平瓦				灰白色(N8)	細砂	
3876	河道	瓦	軒平瓦				灰色(N6)	細砂	
3877	河道	瓦	軒平瓦				灰白色(N7)	細砂	
3878	河道	瓦	軒平瓦				灰白色(2.5Y7/1)	細砂	
3879	河道	瓦	丸瓦				黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	
3880	河道	瓦	丸瓦				灰色(N4)	細砂	
3881	河道	瓦	丸瓦				灰白色(N7)	細砂	
3882	河道	瓦	丸瓦				暗青灰色(5PB3/1)	細砂	
3883	河道	瓦	丸瓦				灰色(N5)	細砂	
3884	河道	瓦	丸瓦				灰白色(2.5Y7/1)	細砂	
3885	河道	瓦	丸瓦				灰色(5Y6/1)	細砂	
3886	河道	瓦	丸瓦				暗青灰色(5B3/1)	細砂	
3887	河道	瓦	丸瓦				灰白色(10Y7/1)	細砂	
3888	河道	瓦	丸瓦				灰色(7.5Y6/1)	細砂	
3889	河道	瓦	平瓦				灰色(N6/)	細砂	
3890	河道	瓦	平瓦				青灰色(5B5/1)	細砂	
3891	河道	瓦	平瓦				黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	
3892	河道	瓦	平瓦				灰色(10Y6/1)	細砂	
3893	河道	瓦	平瓦				灰色(N5/0)	細砂	
3894	河道	瓦	平瓦				灰色(N5/0)	細砂	
3895	河道	瓦	平瓦				灰色(10Y5/1)	細砂	
3896	河道	瓦	平瓦				褐灰色(10YR6/1)	細砂	
3897	河道	瓦	平瓦				灰白色(10Y7/1)	細砂	
3898	河道	瓦	平瓦				灰色(7.5Y7/1)	細砂	
3899	河道	瓦	平瓦				灰白色(10Y7/1)	細砂	
3900	河道	瓦	平瓦				灰白色(5Y7/2)	細砂	
3901	河道	瓦	平瓦				灰白色(5Y7/2)	細砂	
3902	河道	瓦	平瓦				灰白色(7.5Y7/1)	細砂	
3903	河道	瓦	平瓦				灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	
3904	河道	瓦	平瓦				灰色(10Y5/1)	細砂	
3905	河道	瓦	平瓦				灰色(10Y5/1)	細砂	
3906	河道	瓦	隅切瓦				暗灰色(N4)	細砂	
3907	河道	瓦	熨斗瓦				暗青灰色(5B3/1)	細砂	
3908	河道	瓦	熨斗瓦				灰白色(5YR8/2)	細砂	
3909	河道	瓦	熨斗瓦				灰色(N7)	細砂	

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
3910	河道	瓦	熨斗瓦				灰色(N4)	細砂	
3911	河道	瓦	熨斗瓦				灰褐色(5YR6/2)	細砂	
3912	河道	瓦	熨斗瓦				灰色(N4)	細砂	
3913	河道	瓦	熨斗瓦				灰色(N6)	細砂	
3914	河道	瓦	雁振瓦				灰色(N6)	細砂	
3915	河道	瓦	鬼瓦				暗灰色(N3)	細砂	
3916	河道	瓦	鬼瓦				暗灰色(N3)	細砂	
3917	河道	瓦	鬼瓦				暗灰色(N3)	細砂	
3918	河道	瓦	鬼瓦				灰白色(2.5Y7/1)	細砂	
3919	河道	瓦	鬼瓦				暗灰色(N3)	細砂	
3920	河道	瓦	鬼瓦				暗灰色(N3)	細砂	
3921	その他	須恵器	杯蓋	15.0	—	2.5	灰白色(N7/)	細砂	
3922	その他	須恵器	蓋	18.0		3.2	灰白色(2.5Y8/1)	粗砂	回転ヘラケズリ(右回り)
3923	その他	須恵器	杯蓋				灰色(N6/)	細砂	宝珠つまみ
3924	その他	須恵器	杯蓋	(13.3)	—	—	灰色(7.5Y5/1)	細砂	
3925	その他	須恵器	蓋	15.0			灰白色(5Y7/1)	細砂	回転ヘラケズリ
3926	その他	須恵器	蓋	15.7	—	2.4	灰色(N6/)	細砂	
3927	その他	須恵器	蓋	(11.8)			灰色(N6)	細砂	回転ヘラケズリ(右回り)
3928	その他	須恵器	杯	12.9	8.7	4.3	灰色(N4/)～灰白色(N8/)	細砂	焼成不良
3929	その他	須恵器	杯身	13.0	10.0	3.9	灰白色(N6/)	細砂	
3930	その他	須恵器	杯身	(13.6)	10.0	4.0	灰白色(N8/)	細砂	
3931	その他	須恵器	杯		10.0		灰白色(5Y7/1)	細砂	ロクロナデ
3932	その他	須恵器	椀	9.1	6.4	4.0	灰色(N5/)	細砂	ロクロナデ
3933	その他	須恵器	椀	10.2	6.1	4.2	灰色(N5/)	細砂	ロクロナデ
3934	その他	須恵器	杯	13.2	8.8	6.8	灰白色(N7/)	細砂	高台
3935	その他	須恵器	杯	(16.5)	10.3	6.2	灰白色(5Y7/1)	細砂、粗砂	
3936	その他	須恵器	杯		9.0		灰白色(5Y8/1)	精良	ヘラ切り、仕上げナデ
3937	その他	須恵器	杯	—	11.0	—	灰白色(10Y7/1)	細砂	ロクロナデ
3938	その他	須恵器	杯		10.7		灰白色(5Y8/1)	粗砂	ヘラ切り
3939	その他	須恵器	稜椀？	(19.5)	—	—	灰色(N6/)	細砂	
3940	その他	須恵器	壺		11.0		灰色(N6/)	細砂	突帯、刺突文、カキメ
3941	その他	須恵器	壺or平瓶		10.8		灰白色(N7/)	細砂	内面仕上げナデ
3942	その他	須恵器	壺	10.2	—	—	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	自然釉
3943	その他	須恵器	壺	—	5.2	—	灰白色(2.5YR7/1)	細砂	内外面ロクロナデ
3944	その他	土師器	皿	13.6	11.6	1.8	橙色(5YR6/6)	細砂	
3945	その他	土師器	皿	14.6	12.8	1.7	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	
3946	その他	土師器	皿	(14.5)	(13.0)	1.2	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	内外面丹塗り痕跡？
3947	その他	緑釉陶器	皿	(12.8)	—	—	灰白色(10Y7/2)	精良	わずかに釉がかかっている
3948	その他	土師器	杯	(12.0)	9.7	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
3949	その他	土師器	杯	12.0	9.0	2.9	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	ヘラ切り
3950	その他	土師器	杯	12.5	9.5	2.7	橙色(5YR6/6)	細砂、粗砂	丹塗りなし
3951	その他	土師器	高杯	—	—	—	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	面取り９面、全面丹塗り
3952	その他	土師器	高杯	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	外面丹塗り
3953	その他	土師器	高杯	—	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	面取り
3954	その他	土師器	杯	12.6	9.1	3.1	浅黄橙色(2.5YR8/6)	細砂	内外面丹塗りなし
3955	その他	土師器	杯	13.6	9.8	2.9	鈍い橙色(7.5YR6/4)	精良	
3956	その他	土師器	杯	13.1	9.5	3.5	橙色(5YR7/6)～浅黄橙色(10YR8/3)	細砂、粗砂	黒斑Ａ　ほぼ完形
3957	その他	土師器	杯	13.2	8.8	2.9	橙色(5YR7/6)	精良	外面以外に赤色顔料
3958	その他	土師器	杯	12.9	9.1	3.2	橙色(5YR7/6)	細砂	墨書「＋」、ヘラ切り、指オサエ
3959	その他	土師器	椀	10.4	6.5	3.7	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
3960	その他	土師器	椀	11.4	5.6	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
3961	その他	土師器	椀	—	7.3	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
3962	その他	土師器	椀	10.8	6.6	4.3	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	
3963	その他	土師器	椀	11.2	6.0	4.0	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	
3964	その他	土師器	椀	12.0	6.8	4.4	鈍い橙色(7.5YR7/3)	精良	
3965	その他	土師器	椀	12.0	7.2	4.5	鈍い橙色(7.5YR7/3)	精良	
3966	その他	土師器	椀	14.7	9.0	6.5	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	
3967	その他	土師器	椀	—	6.5	—	淡橙色(5YR8/4)	細砂	
3968	その他	土師器	椀	12.0	6.0	6.6	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	
3969	その他	土師器	椀	13.0	7.0	4.2	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	外面指オサエ
3970	その他	土師器	椀	14.0	7.1	4.7	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	外面指オサエ
3971	その他	土師器	高台付椀	14.5	6.2	4.3	灰白色(7.5YR8/1)	細砂	内面重ね焼き痕
3972	その他	土師器	椀	15.8			灰褐色(7.5YR6/2)	粗砂	
3973	その他	土師器	椀	10.2	5.2	3.1	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
3974	その他	土師器	杯	10.8	5.8	4.4	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	
3975	その他	土師器	杯	8.8	—	2.2	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	
3976	その他	土師器	杯	9.5	6.0	2.3	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	ススＢ
3977	その他	土師器	杯	9.8	6.6	2.0	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	
3978	その他	土師器	杯	10.0	7.0	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
3979	その他	黒色土器	椀	15.1	8.0	5.7	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	内面炭素吸着
3980	その他	黒色土器	椀	15.0	8.0	5.7	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂、粗砂	
3981	その他	黒色土器	椀	16.1	—	—	黒褐色(2.5Y3/1)	細砂	内外面炭素吸着
3982	その他	黒色土器	椀	16.2	—	—	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	
3983	その他	土師器	椀	15.7	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	粗砂	黒斑Ａ

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
3984	その他	黒色土器	椀		8.4		褐灰色(5YR5/1)	精良	
3985	その他	黒色土器	椀	18.0	9.8	5.1	橙色(5YR6/6)	精良	
3986	その他	黒色土器	Ⅲ	(13.0)	(7.6)	2.1	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	
3987	その他	黒色土器	椀	−	7.0	−	鈍い黄橙色(10YR7/2)	精良、細砂	
3988	その他	黒色土器	椀	−	8.0	−	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	
3989	その他	黒色土器	椀	−	9.0	−	灰白色(7.5YR8/1)	細砂	
3990	その他	黒色土器	椀	−	7.4	−	灰白色(10YR8/2)	細砂	
3991	その他	黒色土器	椀	−	8.1	−	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	内面炭素吸着
3992	その他	土師器	蓋	18.3			鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	
3993	その他	須恵器	硯	−	17.4	−	灰色(N6/)	細砂	底わずかに自然釉
3994	その他	須恵器	硯	−	−	−	灰色(N6/)	細砂	旧土製品C38
3995	その他	須恵器	転用硯	−	−	−	黒色(2.5GY2/1)	細砂	
3996	その他	須恵器	鉢	(20.9)	−	−	灰色(N6/)	細砂	篠原型10C前半
3997	その他	須恵器	鉢	20.6	−	−	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	篠原型10C前半
3998	その他	須恵器	鉢	(22.2)	(10.6)	9.9	灰白色(7.5Y7/1)	細砂	篠原型か、10C前葉、黒岩窯
3999	その他	緑釉陶器	Ⅲ	9.4	−	−	(釉)灰白色(10Y8/2)	精良	釉がかかっている
4000	その他	灰釉陶器	碗	−	−	−	(釉)灰オリーブ色(7.5Y6/2) (素地)灰白色(N8/)	精良	ごま状の釉
4001	その他	緑釉陶器	Ⅲ？	−	3.6	−	オリーブ灰色(10Y6/2)	精良	糸切り底、釉がかかっている
4002	その他	灰釉陶器	椀	−	6.0	−	灰白色(N8/)	精良	糸切り底、貼付高台、内面ゴマ状の釉
4003	その他	灰釉陶器	椀	−	7.7	−	(釉)灰白色(7.5Y7/2)	精良	釉、高台部は施釉なし
4004	その他	灰釉陶器	椀	−	(6.0)	−	灰白色(2.5YR8/2)	細砂	内外面に灰釉
4005	その他	灰釉陶器	椀	−	(9.1)	−	(素地)灰白色(2.5Y8/1)	精良	釉一部残存、圏線
4006	その他	緑釉陶器	椀	(13.0)	−	−	深緑色	細砂	
4007	その他	緑釉陶器	椀	16.6	−	−	オリーブ灰色(10Y6/2)	精良	釉がかかっている
4008	その他	緑釉陶器	椀	−	5.0	−	(釉)浅黄色(7.5Y7/3) (素地)灰白色(2.5Y8/2)	細砂	削り出し高台、わずかに釉
4009	その他	緑釉陶器	椀	−	6.4	−	(釉)灰オリーブ色(7.5Y6/3) (素地)灰白色(N7/)	精良	削り出し高台、釉がかかる
4010	その他	緑釉陶器	椀高台	−	6.4	−	オリーブ灰色(10Y6/2)	精良	うっすらと釉、削り出し高台
4011	その他	緑釉陶器	椀？	−	(7.9)	−	(釉)オリーブ黄色(5Y6/3)	精良	釉がかかっている
4012	その他	緑釉陶器？	椀	−	8.4	−	灰白色(10Y7/2)	精良	削り出し高台、釉がかかっている
4013	その他	緑釉陶器 (須恵質)	椀	−	−	−	オリーブ黄色(5Y6/3)	細砂	内側に細い圏線、内側と側面は緑釉施釉、底は露胎
4014	その他	緑釉陶器		−	7.2	−	オリーブ灰色(2.5GY6/1)	精良	内面にめあと？、外面に釉、削り出し高台
4015	その他	緑釉陶器	椀	−	(7.6)	−	暗オリーブ色(7.5Y4/3)	精良	全体に釉、輪花文様わずか
4016	その他	白磁	碗	−	−	(2.4)	(釉)灰白色(2.5GY8/1)	精良	釉、内外面貫入
4017	その他	白磁	碗				灰白色(7.5YR7/2)	精良	
4018	その他	白磁	碗	−	−	−	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	
4019	その他	白磁	碗	(15.6)	−	(2.2)	(釉)灰白色(2.5GY8/1)	精良	釉、貫入あり
4020	その他	白磁	碗	−	6.8	−	(釉)灰白色(5GY8/1)	精良	釉がかかっている
4021	その他	青磁 (同安窯系)	Ⅲ	−	5.5	−	(釉)オリーブ灰色(10Y6/2)	精良(まれに礫)	見込みにヘラによる片彫り、櫛によるジクザグ文様
4022	その他	白磁	Ⅲ	−	3.4	−	(釉)明オリーブ灰色 (7.5GY7/1)	精良	
4023	その他	土師器	高台付椀	14.8	5.8	5.7	灰白色(7.5YR8/2)	精良	
4024	その他	土師器	高台付椀	14.4	4.6	5.2	灰白色(10YR8/1)	粗砂	
4025	その他	土師器	高台付椀	13.6	6.4	−	灰白色(10YR8/2)	細砂	
4026	その他	土師器	高台付椀	13.6	6.0	4.9	灰白色(10YR8/2)	粗砂	
4027	その他	土師器	高台付椀	12.5	6.1	4.4	灰白色(10YR8/1)	細砂	貼付高台、内面底部重ね焼き痕
4028	その他	土師器	高台付椀	11.7	4.4	4.0	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	
4029	その他	土師器	高台付椀	10.9	3.7	3.8	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	外面指オサエ
4030	その他	土師器	高台付椀	10.7	3.7	3.1	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	
4031	その他	土師器	高台付椀	11.0	3.6	3.5	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	
4032	その他	土師器	高台付椀	11.1	4.1	3.6	白色(9/)	細砂	著しく歪みあり
4033	その他	土師器	高台付椀	10.4	5.0	3.1	灰白色(10YR8/2)	細砂、粗砂	
4034	その他	土師器	高台付椀	9.9	3.2	4.0	灰白色(2.5Y8/1)	細砂、粗砂	貼付高台　黒斑？
4035	その他	土師器	高台付椀	10.0	3.9	4.1	灰白色(10YR8/1)	細砂、粗砂	全体歪みあり
4036	その他	土師器	高台付椀	−	6.6	−	浅黄橙色(7.5YR8/3)	精良	外面爪跡残る
4037	その他	土師器	高台付椀	−	4.8	−	灰白色(10YR8/2)	細砂	
4038	その他	土師器	高台付椀	−	4.3	−	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、粗砂	
4039	その他	土師器	椀	9.8	4.1	4.0	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	黒斑内面ＡＢ
4040	その他	土師器	椀	9.8	3.9	3.8	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	
4041	その他	土師器	椀	9.8	−	3.0	灰白色(10YR8/1)	細砂	
4042	その他	須恵器	甕	(23.3)	−	−	灰色(6/)	細砂	外面タタキ目、内面同心円タタキ
4043	その他	土師器	Ⅲ	6.7	5.3	1.8	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	ほぼ完形
4044	その他	土師器	小Ⅲ	(8.3)	6.6	1.6	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
4045	その他	土師器	小Ⅲ	7.8	5.4	1.4	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	歪みあり
4046	その他	土師器	小Ⅲ	10.2	6.9	1.5	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂	
4047	その他	土師器	Ⅲ	9.5	6.0	2.1	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	ヘラ切り
4048	その他	土師器	Ⅲ	9.2	7.4	1.5	灰白色(10YR8/2)	細砂	ヘラ切り
4049	その他	土師器	Ⅲ	13.3	7.7	3.4	灰白色(7.5YR8/1)	細砂、粗砂	
4050	その他	土師器	Ⅲ	7.9	7.0	1.6	鈍い橙色(10YR7/2)	細砂	
4051	その他	土師器	Ⅲ	7.3	5.4	1.3	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	ヘラ切り

遺物観察表

掲載番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底径	器高			
4052	その他	土師器	皿	7.2	5.8	1.1	鈍い橙色(7.5YR7/3)	精良	ヘラ切り　完形
4053	その他	土師器	小皿	(6.8)	(5.4)	1.0	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	ヘラキリ底
4054	その他	土師器	椀	10.0	—	2.4	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	
4055	その他	土師器	皿	9.0		2.3	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
4056	その他	土師器	小杯	8.0	6.9	3.8	橙色(7.5YR7/6)	細砂	孔、ヘラキリ底
4057	その他	土師器	托？	(9.9)	—	(3.0)	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	ヘラキリ底
4058	その他	土師器	甕	(37.8)	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	
4059	その他	弥生土器	鍋	(48.4)	—	—	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	ススA
4060	その他	土師器	鍋	(26.6)	—	12.1	灰白色(2.5Y8/2)	細砂、粗砂	黒斑C
4061	その他	土師器	鍋	34.0			褐色(7.5YR4/3)	礫	ススA
4062	その他	土師器	鍋	32.4	—	—	灰褐色(7.5YR6/2)	細砂	内面ミガキ
4063	その他	土師器	鍋	—	—	—	褐灰色(10YR4/1)	細砂	内面に線刻
4064	その他	土師器	鍋	—	—	—	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	内面に線刻あり
4065	その他	弥生土器	土鍋脚	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
4066	その他	土師器	羽釜	—	—	—	褐灰色(5YR5/1)	細砂	
4067	その他	土師器	鍋	(58.0)	—	—	褐灰色(5YR5/1)	細砂、粗砂、礫	
4068	その他	魚住焼	甕	(17.6)	—	—	灰色(N6/)	細砂	タタキ成形
4069	その他	亀山焼	甕？	—	—	—	橙色(5YR6/6)	粗砂、礫	焼成不良
4070	その他	亀山焼	擂鉢	36.0	—	—	灰白色(10YR8/1)	細砂、粗砂	
4071	その他	常滑焼	甕	—	—	—	灰白色(2.5Y8/2)	細砂、粗砂	焼成不良
4072	その他	備前焼	壺	10.0	—	—	褐灰色(5YR6/1)	細砂	
4073	その他	魚住焼	鉢	—	—	(2.5)	灰白色(N7/)～灰色(N5/)	細砂	重ね焼き痕？
4074	その他	魚住焼	鉢	—	—	(3.3)	明青灰色(5B7/1)	細砂、粗砂	重ね焼き痕
4075	その他		火鉢	—	—	—	灰白色(10YR8/1)	細砂、粗砂	
4076	その他	瓦	軒丸瓦				青灰色(5BG5/1)	礫	平城宮6225型式
4077	その他	瓦	軒丸瓦				鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
4078	その他	瓦	軒丸瓦	—	—	—	灰白色(2.5Y8/1)	細砂、粗砂	宝相華文
4079	その他	瓦	軒丸瓦				灰白色(5Y8/1)	細砂、礫	
4080	その他	瓦	軒丸瓦	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	
4081	その他	瓦	軒丸瓦	—	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	
4082	その他	瓦	軒丸瓦				鈍い橙色(2.5Y6/3)	細砂	焼成やや不良
4083	その他	瓦	軒丸瓦				灰色(5Y6/1)	細砂	
4084	その他	瓦	軒丸瓦	—	—	—	灰色(N6)	細砂、粗砂	
4085	その他	瓦	軒丸瓦	—	—	—	灰色(5Y6/1)	細砂	石流三つ巴
4086	その他	瓦	軒丸瓦				灰白色(2.5Y7/1)	細砂	焼成不良
4087	その他	瓦	軒丸瓦				灰白色(2.5Y7/1)	細砂	焼成不良
4088	その他	瓦	軒丸瓦				灰色(N6/)	細砂	焼成不良
4089	その他	瓦	軒丸瓦	—	—	—	灰白色(N7/)	細砂	
4090	その他	瓦	軒平瓦				鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂、粗砂、礫	
4091	その他	瓦	軒平瓦				淡黄色(2.5Y8/3)	礫～細砂	
4092	その他	瓦	軒平瓦	—	—	—	灰白色(7.5YR8/2)	細砂、粗砂	
4093	その他	瓦	軒平瓦	—	—	—	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂、粗砂、礫	
4094	その他	瓦	軒平瓦	—	—	—	灰白色(N7/)	細砂、粗砂、礫	
4095	その他	瓦	軒平瓦	—	—	—	灰色(N5/)	細砂、粗砂	
4096	その他	瓦	軒平瓦				灰黄色(2.5Y7/2)	粗砂	
4097	その他	瓦	軒平瓦				灰白色(7.5Y8/1)	粗砂	
4098	その他	瓦	軒平瓦	—	—	—	灰白色(N7/)	細砂、粗砂、礫	
4099	その他	瓦	軒平瓦				黄灰色(2.5Y6/1)	細砂	
4100	その他	瓦	軒平瓦	—	—	—	灰白色(N7/)	細砂、粗砂、礫	
4101	その他	瓦	軒平瓦	—	—	—	灰色(N6/)	細砂、粗砂、礫	
4102	その他	瓦	軒平瓦	—	—	—	青灰色(5B6/1)	細砂、粗砂	
4103	その他	瓦	軒平瓦	—	—	—	灰色(N4/)	細砂	
4104	その他	瓦	軒平瓦	—	—	—	灰色(5Y4/1)	細砂	
4105	その他	瓦	軒平瓦	—	—	—	灰白色(10YR7/1)	細砂	糸切り
4106	その他	瓦	丸瓦				明青灰色(5B7/1)	精良	凸面格子タタキ、凹面布目
4107	その他	瓦	丸瓦				灰色(N5/)	細砂	玉縁
4108	その他	瓦	丸瓦				黄灰色(2.5Y4/1)	細砂	外面縄目タタキ、内面布目痕
4109	その他	瓦	丸瓦	—	—	—	灰白色(10YR8/1)	細砂	焼成やや不良
4110	その他	瓦	丸瓦	—	—	—	青灰色(5B6/1)	細砂	
4111	その他	瓦	平瓦				黄灰色(2.5Y5/1)	礫	凸面縄目、凹面布目
4112	その他	瓦	平瓦				黄灰色(2.5Y6/1)	礫	凸面縄目、凹面布目、糸切り
4113	その他	瓦	平瓦				灰白色(N7/)	細砂、粗砂	凹面布目痕、凸面タタキ　ほぼ完形
4114	その他	瓦	平瓦				灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	凸面格子タタキ、凹面布目
4115	その他	瓦	平瓦				青灰色(10BG5/1)	精良	凸面ナデ、凹面布目糸切り痕
4116	その他	瓦	鬼瓦？				灰色(10Y5/1)	細砂	
4117	井戸6	瓦	平瓦	—	—	—	褐灰色(7.5YR4/1)	細砂	
4118	河道	唐津焼	皿	—	—	—	灰オリーブ色	精良	内外面ともに釉薬
4119	その他	唐津	皿	12.4	4.9	3.8	浅黄色(5Y7/3)	細砂	胎土目積みか、内外面に釉薬
4120	その他	瓦質土器	香炉	—	—	—	暗灰色(N3)	細砂	
4121	その他	瓦	軒丸瓦				灰色(N5/0)	細砂	

石器

掲載番号	遺構名	器種	型式	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	時期	備考
S1		紡錘車		凝灰質流紋岩	51.0	51.0	27.0	52.84	古・後	孔径7.0mm　鋸歯文
S2	竪穴住居5	スクレイパー		サヌカイト	86.5	43.0	9.0	27.20	弥・中・Ⅱ	
S3	竪穴住居5	打製石包丁		サヌカイト	124.5	51.5	13.0	89.10	弥・中・Ⅱ	珪酸付着
S4	竪穴住居6	石鏃	凹基	サヌカイト	(15.0)	14.0	3.2	(0.80)	弥・中・Ⅱ	先端欠
S5	竪穴住居6	石鏃	凸基Ⅰ	サヌカイト	(31.0)	17.0	3.2	(1.90)	弥・中・Ⅱ	
S6	竪穴住居6	打製石包丁		サヌカイト	(35.0)	(32.0)	(7.5)	(10.20)	弥・中・Ⅱ	珪酸付着
S7	竪穴住居6	打製石包丁		サヌカイト	(47.5)	(37.5)	(10.0)	(25.10)	弥・中・Ⅱ	珪酸付着
S8	竪穴住居6	石鉄		玄武岩？結晶片岩？	(71.0)	(50.0)	(11.5)	(52.10)	弥・中・Ⅱ	撥形　表面磨耗
S9	竪穴住居6	石匙	縦型	サヌカイト	59.5	23.0	3.0	4.50	弥・中・Ⅱ	
S10	竪穴住居6	楔		サヌカイト	36.0	37.5	7.5	(12.30)	弥・中・Ⅱ	使用痕
S11	竪穴住居6	楔		サヌカイト	18.5	34.5	9.0	(6.70)	弥・中・Ⅱ	使用痕
S12	竪穴住居6	楔		サヌカイト	23.5	30.5	7.0	0.48	弥・中・Ⅱ	使用痕
S13	竪穴住居6	楔		サヌカイト	39.5	37.0	11.5	(18.60)	弥・中・Ⅱ	使用痕 珪酸付着 石包丁から転用
S14	竪穴住居7	石錐		サヌカイト	25.0	6.5	2.6	0.50	弥・中・Ⅱ	
S15	竪穴住居11	打製石包丁		サヌカイト	(66.0)	(44.0)	(11.0)	(22.90)	弥・中・Ⅱ	自然面残る　珪酸付着
S16	竪穴住居11	石錐		サヌカイト	(26.5)	16.5	3.7	(1.10)	弥・中・Ⅱ	
S17	竪穴住居12　P6・7	石鏃		サヌカイト	28.0	21.5	4.0	1.70	弥・中・Ⅱ	
S18	竪穴住居12	打製石包丁		サヌカイト	34.0	22.0	6.0	4.50	弥・中・Ⅱ	
S19	袋状土壙4	石錘		花崗閃緑岩(細粒)	88.0	64.5	37.0	304.00	弥・中・Ⅱ	
S20	袋状土壙8	石鏃？		サヌカイト	30.0	21.0	4.0	2.30	弥・中・Ⅱ	未製品？
S21	袋状土壙8	打製石包丁		サヌカイト	(81.0)	29.0	7.5	(20.30)	弥・中・Ⅱ	珪酸付着
S22	袋状土壙9	磨製石斧		粘板岩	(64.0)	(46.0)	(16.0)	(77.30)	弥・中・Ⅱ	
S23	袋状土壙9	打製石包丁		サヌカイト	(98.0)	42.0	8.5	(40.50)	弥・中・Ⅱ	珪酸付着
S24	袋状土壙12	石鏃	平基	サヌカイト	27.5	14.5	3.3	1.30	弥・中・Ⅱ	
S25	袋状土壙15	石鏃	凸基Ⅱ	サヌカイト	(30.5)	14.5	3.7	(1.80)	弥・中・Ⅲ	
S26	袋状土壙19	打製石包丁		サヌカイト	91.0	47.0	10.0	44.00	弥・中・Ⅱ	
S27	土壙15	石槍形石器		サヌカイト	103.0	48.0	12.0	75.80	弥・中・Ⅱ	
S28	土壙15	石鏃		サヌカイト	26.5	17.0	4.0	1.80	弥・中・Ⅱ	
S29	土壙15	石包丁		サヌカイト	88.0	56.0	15.0	83.90	弥・中・Ⅱ	
S30	土壙15	石包丁		サヌカイト	165.0	59.5	17.2	169.90	弥・中・Ⅱ	
S31	土壙15	砥石		流紋岩	(105.0)	(47.0)	(49.0)	(387.06)	弥・中・Ⅱ	
S32	土壙16	石鏃		サヌカイト	22.5	14.5	3.0	0.90	弥・中・Ⅱ	
S33	土壙17	スクレイパー		サヌカイト	63.0	55.5	8.5	33.20	弥・中・Ⅱ	
S34	土壙17	石斧？	未製品	流紋岩	139.0	47.0	33.5	313.85	弥・中・Ⅱ	
S35	土壙17	石斧	太型蛤刃	ヒン岩？	109.0	59.0	48.0	455.26	弥・中・Ⅱ	
S36	土壙18	石鏃		サヌカイト	16.0	14.5	2.8	0.60	弥・中・Ⅱ	
S37	土壙20	スクレイパー→楔		サヌカイト	38.5	29.0	7.0	8.00	弥・中・Ⅱ	
S38	土壙35	砥石		流紋岩	(148.0)	(97.0)	(100.0)	(1582.00)	弥・中・Ⅱ	
S39	土壙35	砥石		泥岩	70.0	(87.0)	39.0	(285.39)	弥・中・Ⅱ	
S40	土壙52・53	石鏃		サヌカイト	28.0	20.5	3.5	1.50	弥・中	
S41	土壙52・53	砥石		流紋岩(黒色ガラス質)	67.0	47.5	40.5	136.98	弥・中	
S42	土壙62・63	石鏃		サヌカイト	26.5	17.0	2.5	1.00	弥・中・Ⅱ	
S43	土壙64	スクレイパー		サヌカイト	59.5	43.0	9.5	20.00	弥・中・Ⅱ	
S44	土壙72・73	石核		サヌカイト	150.0	101.5	62.5	1378.40	弥・中	
S45	土壙87	打製石包丁		サヌカイト	57.0	43.5	9.5	26.50	弥・中・Ⅱ	
S46	土壙88	スクレイパー(石包丁)		サヌカイト	99.0	51.5	15.0	68.80	弥・中・Ⅱ	
S47	土壙102	スクレイパー		サヌカイト	91.0	49.0	9.5	31.70	弥・中・Ⅱ	上面は自然面
S48	土壙108	スクレイパー		サヌカイト	77.0	27.5	11.0	9.80	弥・中	刃部磨耗　石槍から転用か
S49	土壙128	スクレイパー？		サヌカイト	39.5	24.5	6.0	6.40	弥・中・Ⅱ	
S50	土壙130	スクレイパー？		サヌカイト	40.5	31.0	6.5	11.30	弥・中・Ⅱ	
S51	土壙169	大形打製石包丁		サヌカイト	280.7	230.6	36.0	1670.00	弥・中・Ⅱ	自然面残る
S52	土壙173	楔形		サヌカイト	63.5	38.5	11.5	30.50	弥・中・Ⅱ	
S53	土壙176	石包丁		蛇紋岩	(83.5)	(38.0)	(7.5)	34.20	弥・中・Ⅱ	
S54	土壙177	石槍状石器		サヌカイト	99.0	40.5	14.0	61.00	弥・中	
S55	土壙186	打製石包丁		サヌカイト	108.0	37.0	9.2	40.90	弥・中・Ⅱ	
S56	土壙186	磨製石斧		ヒン岩	(76.5)	(75.0)	(51.5)	402.60	弥・中・Ⅱ	
S57	土壙186			閃緑岩	70.0	68.0	51.5	405.30	弥・中・Ⅱ	
S58	土壙190	石鏃	凸基Ⅱ	サヌカイト	(32.5)	14.5	3.5	(1.40)	弥・中・Ⅱ	
S59	その他	石鏃	凹基	サヌカイト	20.5	13.0	3.0	0.60	弥生	
S60	その他	石鏃	凹基	サヌカイト	(20.5)	(15.5)	3.5	(0.70)	弥生	
S61	その他	石鏃	凹基	サヌカイト	22.0	13.0	3.3	0.70	弥生	
S62	その他	石鏃	凹基	サヌカイト	14.0	23.5	3.5	0.70	弥生	
S63	その他	石鏃	凹基	サヌカイト	22.0	14.0	3.3	0.80	弥生	
S64	その他	石鏃	凹基	サヌカイト	25.0	17.0	3.2	1.00	弥生	
S65	その他	石鏃	凹基	サヌカイト	(25.0)	(13.5)	2.5	(0.80)	縄文？	風化著しい
S66	その他	石鏃	凹基		25.5	10.0	3.0	0.60	弥生	
S67	その他	石鏃	凹基	サヌカイト	(28.5)	(16.0)	4.0	(1.30)	弥生	
S68	その他	石鏃	凹基	サヌカイト	(21.0)	(17.5)	3.0	(0.90)	弥生	
S69	その他	石鏃	凹基	サヌカイト	(26.5)	19.0	5.0	(2.00)	弥生	
S70	その他	石鏃	凹基	サヌカイト	(23.0)	(21.0)	4.0	(1.70)	弥生	
S71	その他	石鏃	凹基	サヌカイト	29.5	20.5	3.5	1.60	弥生	
S72	その他	石鏃	凹基	サヌカイト	23.0	15.0	3.1	1.20	弥生	
S73	その他	石鏃	凹基	サヌカイト	26.0	16.5	4.5	1.20	弥生	
S74	その他	石鏃	平基	サヌカイト	20.5	15.5	3.4	1.20	弥生	
S75	その他	石鏃	平基	サヌカイト	(17.0)	12.5	3.0	(0.50)	弥生	
S76	その他	石鏃	平基	サヌカイト	21.0	11.5	3.0	0.70	弥生	
S77	その他	石鏃	平基	サヌカイト	20.5	15.5	3.0	0.90	弥生	
S78	その他	石鏃	平基	サヌカイト	22.5	14.5	3.0	1.10	弥生	
S79	その他	石鏃	平基	サヌカイト	22.0	17.5	3.0	0.90	弥生	
S80	その他	石鏃	平基	サヌカイト	26.0	17.0	2.5	1.00	弥生	

遺物観察表

掲載番号	遺構名	器種	型式	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	時期	備考
S81	その他	石鏃	平基	サヌカイト	24.5	18.5	3.5	1.40	弥生	
S82	その他	石鏃	平基	サヌカイト	(26.5)	16.0	4.5	(1.70)	弥生	
S83	その他	石鏃	平基	サヌカイト	28.5	17.0	5.0	2.30	弥生	
S84	その他	石鏃	平基	サヌカイト	19.5	11.5	3.5	1.00	弥生	
S85	その他	石鏃	平基	サヌカイト	29.5	20.5	4.0	1.90	弥生	
S86	その他	石鏃	平基	サヌカイト	(28.0)	23.0	4.2	(1.80)	弥生	
S87	その他	石鏃	平基	サヌカイト	28.0	18.0	3.0	1.40	弥生	
S88	その他	石鏃	平基	サヌカイト	(38.5)	(26.0)	3.0	(4.10)	弥生	
S89	その他	石鏃	平基	サヌカイト	19.0	20.5	4.3	1.90	弥生	
S90	その他	石鏃	平基	サヌカイト	14.5	18.0	4.5	1.00	弥生	
S91	その他	石鏃	平基	サヌカイト	(19.0)	(16.5)	4.5	(1.10)	弥生	
S92	その他	石鏃	平基	サヌカイト	(20.0)	17.0	2.6	(0.90)	弥生	
S93	その他	石鏃	平基	サヌカイト	(20.5)	15.0	4.5	(1.30)	弥生	
S94	その他	石鏃	平基	サヌカイト	(18.0)	(19.0)	3.7	(1.00)	弥生	
S95	その他	石鏃	平基	サヌカイト	24.0	13.5	2.5	0.90	弥生	
S96	その他	石鏃	平基	サヌカイト	21.5	15.5	3.0	1.20	弥生	
S97	その他	石鏃	平基	サヌカイト	23.5	14.0	3.0	1.20	弥生	
S98	その他	石鏃	凸基Ⅰ	サヌカイト	30.0	16.5	3.0	1.80	弥生	
S99	その他	石鏃	凸基Ⅱ	サヌカイト	(30.5)	17.0	5.5	(2.60)	弥生	
S100	その他	石鏃	凸基Ⅱ	サヌカイト	(33.0)	16.0	6.5	(2.60)	弥生	
S101	その他	石鏃	凸基Ⅱ	サヌカイト	(44.0)	13.0	6.5	(2.70)	弥生	
S102	その他	石鏃		サヌカイト	(24.0)	(12.0)	(3.2)	(1.00)	弥生	
S103	その他	石鏃		サヌカイト	29.0	18.5	3.8	0.90	弥生	
S104	その他	石鏃	凸基Ⅱ	サヌカイト	36.0	12.5	4.4	2.40	弥生	風化著しい
S105	その他	石鏃	凸基Ⅱ	サヌカイト	(41.5)	17.5	5.2	(3.20)	弥生	
S106	その他	石鏃	凸基Ⅱ	サヌカイト	37.5	17.5	9.0	5.90	弥生	錐部磨耗
S107	その他	石鏃	凸基Ⅱ	サヌカイト	(43.5)	18.5	4.4	(3.70)	弥生	
S108	その他	石鏃	有茎	サヌカイト	(37.0)	24.5	6.2	(5.60)	弥生	
S109	その他	打製石包丁		サヌカイト	124.5	42.0	13.0	72.30	弥生	
S110	その他	打製石包丁		頁岩	76.5	40.0	10.0	35.00	弥生	
S111	その他	打製石包丁		サヌカイト	90.0	35.0	12.0	39.40	弥生	
S112	その他	打製石包丁		サヌカイト	81.5	47.0	12.0	38.70	弥生	
S113	その他	打製石包丁		サヌカイト	73.0	41.5	8.5	39.10	弥生	
S114	その他	打製石包丁		玄武岩？	60.5	41.5	6.0	20.50	弥生	
S115	その他	打製石包丁		サヌカイト	61.0	45.0	8.5	26.00	弥生	
S116	その他	打製石包丁		サヌカイト	70.0	61.0	11.5	50.00	弥生	
S117	その他	打製石包丁		サヌカイト	40.5	42.0	11.5	20.30	弥生	
S118	その他	打製石包丁		サヌカイト	43.0	45.0	10.5	18.50	弥生	
S119	その他	打製石包丁→楔		サヌカイト	48.0	32.5	11.5	25.90	弥生	
S120	その他	打製石包丁		サヌカイト	119.5	54.5	13.0	87.60	弥生	
S121	その他	打製石包丁		サヌカイト	135.5	49.0	10.0	86.50	弥生	
S122	その他	打製石包丁		サヌカイト	76.5	43.0	11.5	45.10	弥生	
S123	その他	打製石包丁		サヌカイト	94.0	61.5	16.0	71.20	弥生	
S124	その他	打製石包丁		サヌカイト	(43.0)	(46.5)	(8.5)	(22.00)	弥生	珪酸付着
S125	その他	打製石包丁		サヌカイト	34.5	27.5	6.3	6.60	弥生	
S126	その他	打製石包丁		サヌカイト	68.5	33.0	9.0	18.70	弥生	
S127	その他	打製石包丁		サヌカイト	51.0	48.0	11.0	35.10	弥生	
S128	その他	打製石包丁		サヌカイト	(34.5)	(33.0)	(7.0)	(8.30)	弥生	珪酸付着
S129	その他	打製石包丁		玄武岩？	50.0	47.0	12.0	31.20	弥生	
S130	その他	打製石包丁		サヌカイト	30.5	46.0	10.0	15.90	弥生	
S131	その他	打製石包丁		サヌカイト	(33.5)	(23.5)	(4.0)	(4.40)	弥生	珪酸付着
S132	その他	打製石包丁		サヌカイト	33.5	25.5	7.5	7.50	弥生	
S133	その他	石錐		サヌカイト	19.5	22.0	4.0	1.00	弥生	
S134	その他	石錐		サヌカイト	36.5	15.5	4.5	2.00	弥生	
S135	その他	石錐		サヌカイト	38.5	15.5	6.0	2.20	弥生	
S136	その他	石錐		サヌカイト	33.5	11.5	4.7	1.70	弥生	
S137	その他	石錐		サヌカイト	34.5	11.0	5.5	2.00	弥生	
S138	その他	石錐		サヌカイト	(34.5)	10.0	4.5	(1.50)	弥生	
S139	その他	石錐		サヌカイト	52.5	29.0	11.0	11.30	弥生	
S140	その他	石錐		サヌカイト	42.5	22.0	4.4	3.60	弥生	
S141	その他	石錐		サヌカイト	41.0	15.5	8.0	5.70	弥生	
S142	その他	石錐		サヌカイト	25.5	16.0	3.4	1.10	弥生	
S143	その他	石錐		サヌカイト	24.0	20.0	4.8	2.10	弥生	錐部磨耗
S144	その他	石包丁→スクレイパー		サヌカイト	(39.0)	(21.0)	5.0	(3.40)	弥生	珪酸付着
S145	その他	石匙		玄武岩？	(55.0)	(36.5)	6.5	(12.70)	弥生	
S146	その他	石匙		玄武岩？	49.0	26.0	5.0	7.60	弥生	
S147	その他	スクレイパー		サヌカイト	155.0	62.0	14.5	138.50	弥生	
S148	その他	スクレイパー		サヌカイト	71.5	36.5	9.0	25.80	弥生	
S149	その他	スクレイパー		サヌカイト	90.0	39.5	10.5	34.40	弥生	
S150	その他	スクレイパー		サヌカイト	68.5	33.5	7.5	15.60	弥生	
S151	その他	スクレイパー		サヌカイト	61.5	25.5	5.5	(9.70)	弥生	上面に自然面残る
S152	その他	スクレイパー		玄武岩？	52.5	25.0	6.2	9.10	弥生	
S153	その他	スクレイパー		サヌカイト	55.0	29.0	8.5	17.50	弥生	
S154	その他	スクレイパー(石匙？)		サヌカイト	89.0	50.0	17.5	53.10	弥生	
S155	その他	スクレイパー		サヌカイト	63.0	44.0	12.5	28.60	弥生	
S156	その他	スクレイパー		サヌカイト	34.5	31.5	6.0	6.20	弥生	表面磨滅
S157	その他	スクレイパー？		サヌカイト	57.5	42.0	9.0	20.40	弥生	
S158	その他	スクレイパー		サヌカイト	57.5	29.0	5.0	9.80	弥生	自然面残る
S159	その他	スクレイパー		サヌカイト	31.5	20.5	4.0	2.30	弥生	
S160	その他	楔		サヌカイト	72.5	33.5	15.5	42.90	弥生	
S161	その他	楔		サヌカイト	52.5	38.0	8.0	25.80	弥生	
S162	その他	楔		サヌカイト	52.0	58.0	19.0	78.70	弥生	

掲載番号	遺構名	器種	型式	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	時期	備考
S163	その他	楔		サヌカイト	38.5	32.0	7.0	8.90	弥生	
S164	その他	楔？		サヌカイト	48.0	35.5	10.5	16.60	弥生	
S165	その他	楔		サヌカイト	31.5	35.5	10.0	13.20	弥生	
S166	その他	楔？		サヌカイト	26.0	24.5	7.0	4.10	弥生	
S167	その他	楔		サヌカイト	28.0	32.0	9.5	10.20	弥生	
S168	その他	楔		サヌカイト	34.0	31.0	10.5	11.40	弥生	
S169	その他	楔		サヌカイト	18.5	32.5	12.0	9.90	弥生	
S170	その他	楔		サヌカイト	28.0	17.0	7.2	4.30	弥生	
S171	その他	石槍状石器		サヌカイト	113.0	36.5	13.0	62.70	弥生	
S172	その他	石槍状石器		サヌカイト	132.5	34.0	12.5	60.60	弥生	
S173	その他	石槍状石器		サヌカイト	133.0	43.5	12.5	71.10	弥生	
S174	その他	石槍状石器		サヌカイト	69.0	33.5	11.0	28.10	弥生	
S175	その他	石槍状石器		サヌカイト	(78.0)	(34.5)	(14.5)	(38.70)	弥生	両側縁磨耗
S176	その他	石槍状石器		サヌカイト	86.5	43.5	11.5	45.60	弥生	
S177	その他	磨製石包丁		溶結凝灰岩	130.0	49.0	7.0	79.70	弥生	
S178	その他	磨製石包丁		粘板岩	(40.0)	(42.5)	6.0	14.20	弥生	
S179	その他	磨製石包丁		緑色片岩	54.0	41.0	6.0	20.70	弥生	
S180	その他	磨製石包丁		粘板岩	55.0	34.0	7.0	21.78	弥生	孔径6.5mm
S181	その他	磨製石包丁		流紋岩	(32.0)	(53.0)	8.0	(23.85)	弥生	孔径7.0mm
S182	その他	磨製石斧		安山岩	(122.0)	(66.5)	(50.0)	(690.60)	弥生	
S183	その他	磨製石斧	太型蛤刃	閃緑岩	114.0	61.0	44.0	557.65	弥生	
S184	その他	磨製石斧		閃緑岩	(70.0)	(56.0)	(42.0)	(325.90)	弥生	
S185	その他	磨製石斧		閃緑岩	(64.0)	(74.5)	(51.0)	(361.30)	弥生	
S186	その他	石斧	太型蛤刃	安山岩	59.0	69.0	70.0	303.00	弥生	
S187	その他	鑿状石器		泥岩	27.0	14.0	5.5	3.46	弥生	
S188	その他	偏平片刃石斧		流紋岩	(37.0)	(22.0)	(6.0)	(7.80)	弥生	
S189	その他	石錘		流紋岩	(61.0)	(72.0)	(17.0)	132.90	弥生	
S190	その他	石皿		砂岩	121.1	135.0	25.0	830.90	弥生	
S191	その他	石皿		流紋岩	(99.0)	(85.5)	(22.0)	250.00	弥生	
S192	その他	石皿		流紋岩	(60.0)	(80.0)	(13.0)	(88.30)	弥生	
S193	その他	砥石		アプライト	(138.0)	(141.0)	(75.0)	2290.00	弥生	
S194	その他	砥石		流紋岩	(103.0)	(99.0)		345.00	弥生	
S195	その他	砥石		アプライト	(193.0)	(140.0)	(94.5)	2690.00	弥生	
S196	竪穴住居22	石鏃		サヌカイト	15.0	16.0	4.2	0.90	弥・後・Ⅳ	
S197	竪穴住居22	スクレイパー		サヌカイト	39.5	37.5	7.5	13.30	弥・後・Ⅳ	
S198	竪穴住居28	砥石		流紋岩	44.0	57.0	50.0	176.73	弥・後	
S199	竪穴住居28	砥石		流紋岩	(101.0)	(43.0)	(30.0)	(145.66)	弥・後	
S200	竪穴住居28	石斧	太型蛤刃	流紋岩	(42.0)	(22.0)	(30.0)	(24.00)	弥・後	
S201	竪穴住居28	石鏃		サヌカイト	17.0	14.0	2.5	0.60	弥・後	
S202	竪穴住居28	楔		サヌカイト	33.5	25.5	8.0	6.50	弥・後	
S203	竪穴住居28	楔		サヌカイト	32.5	19.5	6.5	4.80	弥・後	
S204	竪穴住居28	石包丁		サヌカイト	86.0	58.0	8.0	50.90	弥・後	
S205	竪穴住居29	有耗剥片		サヌカイト	18.5	39.5	3.3	3.10	弥・後	
S206	竪穴住居31	石包丁		玄武岩？	47.0	118.0	9.0	69.75	弥・後	
S207	竪穴住居34　中央穴	楔		サヌカイト	26.0	25.5	5.7	4.00	弥・後・Ⅳ	
S208	竪穴住居34	砥石		玄武岩	37.0	20.0	7.0	9.00	弥・後・Ⅳ	
S209	竪穴住居35	打製石包丁？		サヌカイト	(43.0)	(27.0)	(12.0)	(14.30)	弥・後	裏面と上面に自然面残る
S210	竪穴住居35	打製石包丁		サヌカイト	(49.5)	(36.5)	(5.0)	(5.50)	弥・後	珪酸付着
S211	竪穴住居36	打製石包丁？		サヌカイト	(71.0)	37.0	10.0	(26.90)	弥・後・Ⅳ	1/2欠　珪酸付着
S212	竪穴住居36	打製石包丁？		サヌカイト	(58.5)	(39.5)	(9.5)	(22.60)	弥・後・Ⅳ	
S213	竪穴住居36	スクレイパー		サヌカイト	(54.5)	(35.5)	(14.0)	(22.60)	弥・後・Ⅳ	刃部調整粗雑
S214	竪穴住居36	楔		サヌカイト	45.5	30.5	6.0	(11.80)	弥・後・Ⅳ	使用痕
S215	竪穴住居36	楔		サヌカイト	32.5	35.5	11.5	(15.50)	弥・後・Ⅳ	使用痕 珪酸付着 石包丁から転用
S216	竪穴住居36	楔		サヌカイト	38.0	29.5	9.0	14.30	弥・後・Ⅳ	使用痕 珪酸付着 石包丁から転用
S217	竪穴住居36	砥石		流紋岩	(98.0)	(64.0)	(43.0)	(314.60)	弥・後・Ⅳ	
S218	竪穴住居37	石鏃	平基	サヌカイト	(20.0)	16.0	3.0	(1.10)	弥・後・Ⅳ	
S219	竪穴住居37	石鏃	平基	サヌカイト	22.5	16.0	3.3	1.00	弥・後・Ⅳ	
S220	竪穴住居38	石鏃	平基	サヌカイト	(26.5)	17.0	4.3	(1.80)	弥・後・Ⅱ	
S221	竪穴住居38	打製石包丁		サヌカイト	(36.5)	(12.5)	(4.5)	(1.50)	弥・後・Ⅱ	珪酸付着
S222	竪穴住居40	打製石包丁		サヌカイト	(65.5)	(50.0)	12.0	(38.20)	弥・後・Ⅰ	珪酸付着
S223	竪穴住居41　P4	スクレイパー		サヌカイト	(44.5)	56.0	10.0	(28.10)	弥・後・Ⅱ	
S224	竪穴住居41	楔形		サヌカイト	36.5	30.0	11.5	16.00	弥・後・Ⅱ	使用痕
S225	竪穴住居41	砥石		流紋岩	(54.0)	(47.0)	(40.0)	(92.80)	弥・後・Ⅱ	
S226	竪穴住居43	石匙		サヌカイト	(40.5)	(28.0)	5.0	(4.50)	弥・後	
S227	竪穴住居44　P3	石鏃	平基	サヌカイト	19.0	12.0	2.8	0.50	弥・後・Ⅰ	
S228	竪穴住居44	石鏃	平基	サヌカイト	(21.5)	17.0	4.5	(1.70)	弥・後・Ⅰ	
S229	竪穴住居44	石錐		サヌカイト	36.0	21.0	6.0	3.80	弥・後・Ⅰ	
S230	竪穴住居44	楔形		サヌカイト	26.5	34.5	10.5	9.40	弥・後・Ⅰ	使用痕
S231	竪穴住居46	石鏃	凹基	サヌカイト	(40.0)	(21.5)	5.2	(4.20)	弥・後・Ⅱ	
S232	竪穴住居46	石鏃	平基	サヌカイト	28.0	17.0	3.2	1.50	弥・後・Ⅱ	
S233	竪穴住居46　P7	石鏃	凸基	サヌカイト	40.5	18.0	6.5	5.20	弥・後・Ⅱ	スクレイパーから転用？
S234	竪穴住居46	打製石包丁		サヌカイト	89.0	47.5	10.0	48.40	弥・後・Ⅱ	
S235	竪穴住居46	砥石		玄武岩	(94.0)	(48.0)	(23.5)	(119.20)	弥・後・Ⅱ	
S236	竪穴住居47	スクレイパー？		サヌカイト	29.5	16.0	5.2	2.20	弥・後・Ⅱ	
S237	竪穴住居47	スクレイパー？		サヌカイト	(37.0)	(23.0)	4.0	(4.00)	弥・後・Ⅱ	
S238	竪穴住居47	R．F．		サヌカイト	47.0	22.5	4.0	4.90	弥・後・Ⅱ	
S239	竪穴住居47	打製石包丁		玄武岩？	95.0	48.0	16.0	68.10	弥・後・Ⅱ	
S240	竪穴住居47	砥石		流紋岩	(75.0)	(79.0)	(21.0)	(193.30)	弥・後・Ⅱ	
S241	竪穴住居49	打製石包丁		サヌカイト	52.0	30.5	7.0	11.10	弥・後・Ⅰ	
S242	竪穴住居52	スクレイパー		サヌカイト	50.0	36.0	9.5	15.40	弥・後	
S243	袋状土壙22	磨製石包丁片			27.5	31.0	4.0	3.70	弥・後・Ⅰ	
S244	袋状土壙22	スクレイパー→楔		サヌカイト	51.5	36.5	9.0	18.00	弥・後・Ⅰ	

遺物観察表

掲載番号	遺構名	器種	型式	材質	最大長(㎜)	最大幅(㎜)	最大厚(㎜)	重量(g)	時期	備考
S245	袋状土壙22	石包丁一楔		サヌカイト	57.0	51.0	13.5	49.20	弥・後・Ⅰ	
S246	袋状土壙28	打製石包丁		玄武岩	84.0	44.0	8.0	41.30	弥・後・Ⅱ	抉り２ヶ所
S247	袋状土壙28	打製石包丁		サヌカイト	59.5	39.5	7.0	22.40	弥・後・Ⅱ	抉り２ヶ所　珪酸付着
S248	袋状土壙28	砥石		流紋岩	135.5	36.0	31.0	(209.50)	弥・後・Ⅱ	
S249	袋状土壙28	砥石？		粘板岩	42.5	26.0	7.0	15.50	弥・後・Ⅱ	磨き有
S250	袋状土壙31	打製石包丁		サヌカイト	(53.5)	(48.5)	(8.4)	(24.80)	弥・後・Ⅰ	抉り１ヶ所残存　珪酸付着
S251	袋状土壙34	石鏃	平基	サヌカイト	22.0	19.5	3.5	1.20	弥・後・Ⅰ	
S252	袋状土壙36	石匙		サヌカイト	57.0	26.0	4.5	6.90	弥・後・Ⅰ	
S253	袋状土壙37	石鏃	凸基Ⅱ	サヌカイト	43.5	12.0	6.3	2.80	弥・後・Ⅰ	
S254	袋状土壙37			サヌカイト	47.0	31.0	8.5	13.90	弥・後・Ⅰ	
S255	袋状土壙42	石鏃	凸基Ⅱ	サヌカイト	(45.0)	18.5	4.7	(3.80)	弥・後・Ⅰ	
S256	袋状土壙42	石鏃	有茎	サヌカイト	(34.5)	11.0	6.0	(3.50)	弥・後・Ⅰ	
S257	袋状土壙42	石錘		角閃石斑レイ岩	74.0	69.0	54.0	451.20	弥・後・Ⅰ	細粒
S258	袋状土壙42	叩石		流紋岩	117.0	70.0	67.0	784.20	弥・後・Ⅰ	
S259	袋状土壙43	石鏃	凸基Ⅱ	サヌカイト	34.0	11.5	4.3	1.10	弥・後	
S260	袋状土壙44	石皿		流紋岩	100.0	85.0	26.5	387.10	弥・後	
S261	袋状土壙47	石鏃	有茎	サヌカイト	35.5	17.0	5.5	2.90	弥・後・Ⅰ	
S262	袋状土壙47	作業台石		溶結凝灰岩	(104.5)	(140.5)	(90.0)	2096.10	弥・後・Ⅰ	
S263	袋状土壙49	スクレイパー		サヌカイト	33.0	41.0	6.0	7.50	弥・後・Ⅰ	自然面残る
S264	袋状土壙53	打製石包丁		サヌカイト	(39.0)	(29.5)	(7.0)	(8.30)	弥・後	珪酸付着
S265	袋状土壙64	石鏃	平基	サヌカイト	39.5	17.0	3.0	2.00	弥・後	
S266	土壙226	石錐	打製	サヌカイト	38.0	22.0	5.0	4.20	弥・後	
S267	土壙237	ノミ形石器		泥岩	47.0	17.0	10.0	14.54	弥・後	
S268	土壙255	太型蛤刃石斧→すり石		安山岩	137.0	71.0	(45.0)	(819.33)	弥・後	
S269	土壙258	楔		サヌカイト	47.0	52.5	13.5	38.60	弥・後	
S270	土壙259	石鏃		サヌカイト	50.5	20.5	5.0	5.80	弥・後	
S271	土壙293	石匙		サヌカイト	42.0	44.5	12.0	22.70	弥・後	
S272	土壙294	石鏃	平基	サヌカイト	18.5	12.0	2.0	0.40	弥・後	
S273	土壙294	スクレイパー		サヌカイト	75.0	42.0	14.0	30.20	弥・後	
S274	土壙294	磨製石斧		安山岩	149.5	70.0	51.5	901.50	弥・後	
S275	土壙297	楔形		サヌカイト	(35.5)	21.0	7.5	(6.20)	弥・後	
S276	溝15	石鏃	平基	サヌカイト	(21.0)	16.5	2.0	(0.90)	弥・後・Ⅳ	
S277	溝15	石鏃	平基	サヌカイト	20.5	15.5	3.0	(1.10)	弥・後・Ⅳ	
S278	溝15	石鏃	有茎	サヌカイト	(25.0)	14.0	6.0	(2.30)	弥・後・Ⅳ	
S279	溝15	楔形？		サヌカイト	42.0	22.0	9.0	8.90	弥・後・Ⅳ	使用痕
S280	溝15	打製石包丁		サヌカイト	66.0	42.5	11.0	37.00	弥・後・Ⅳ	
S281	溝15	打製石包丁？		サヌカイト	87.5	56.5	15.0	75.80	弥・後・Ⅳ	
S282	溝18	スクレイパー		サヌカイト	34.0	22.0	6.0	4.50	弥・後・Ⅱ	
S283	その他	人形石製品		蛇紋岩？	38.0	14.5	5.5	3.20	弥生	
S284	その他	管玉		碧玉	8.0	3.5	3.5	0.18	弥生	
S285	その他	管玉		碧玉	12.0	4.0	4.0	0.32	弥生	
S286	竪穴住居54	砥石		流紋岩	90.0	45.0	18.5	88.03	古・前	
S287	竪穴住居57	砥石		流紋岩(熔岩)	63.5	43.0	33.5	121.86	古・前	
S288	竪穴住居60	砥石		流紋岩	128.0	51.0	41.0	372.12	古・前	
S289	竪穴住居60	砥石		流紋岩	70.0	20.0	21.0	46.66	古墳前期	
S290	竪穴住居63	砥石		流紋岩	52.0	95.0	20.0	101.81	古墳前期	
S291	竪穴住居70	叩き石		花崗岩	118.0	52.0	37.0	361.65	古・前	
S292	竪穴住居71	石錘		細粒花崗岩・閃緑岩	52.0	45.0	39.0	132.80	古・前	
S293	溝25	管玉		蛇紋岩	29.5	4.0	4.0	0.70	古・前～中	孔径2.5㎜
S294	溝27	砥石		流紋岩	91.0	39.0	40.0	238.13	古・前	
S295	その他	管玉			12.5	5.0	4.5	0.30	古墳	孔径1.8㎜
S296	竪穴住居86	敲石		輝緑岩	138.0	53.5	43.0	595.25	古・後	
S297	竪穴住居89	砥石		？	29.0	25.0	20.0	19.13	古・後	
S298	竪穴住居98	紡錘車		凝灰岩	45.5	44.0	20.0	36.77	古・後	孔径9.0㎜
S299	竪穴住居106	砥石		流紋岩	77.0	33.0	31.0	95.20	古・後	
S300	竪穴住居106	砥石		流紋岩	(52.0)	(63.0)	(32.0)	(115.98)	古・後	
S301	竪穴住居113	石錘		ひん岩	107.0	91.0	46.0	577.60 587.80	古・後	
S302	竪穴住居115　P３	叩石		流紋岩	(81.0)	(71.0)	(32.0)	305.50	古・後	
S303	その他	砥石		流紋岩	85.0	55.0	39.0	239.48	古・後	
S304	その他	砥石		アプライト	66.0	48.0	30.0	143.08	古・後	
S305	その他	砥石		流紋岩(熔岩)	48.0	27.0	26.0	50.70	古・後	
S306	その他	紡錘車		滑石	43.0	43.0	16.0	45.10	古・後	
S307	その他	紡錘車		滑石	(26.0)	(21.0)	(9.5)	6.20	古墳	
S308	掘立柱建物５　P13			古銅輝石安山岩	146.0	217.0	32.0	1563.20	古代	竪穴石槨の石材
S309	掘立柱建物10　P１	砥石		流紋岩	65.0	64.0	10.0	42.72	古代	
S310	井戸２	砥石		アプライト半花崗岩	177.5	133.5	88.0	2500.00	中世	
S311	井戸２	砥石		角閃ひん岩	88.0	110.0	75.0	1100.83	中世	被熱
S312	井戸３	砥石		流紋岩	(46.0)	(35.5)	(6.0)	(14.70)	中世	
S313	土壙339	砥石		流紋岩(熔岩)	(73.0)	64.0	41.0	299.02	平安	
S314	土壙375	砥石			(33.0)	39.0	12.0	20.51	平安	
S315	土壙399	竪穴式石槨の石材		古銅輝石安山岩	136.0	76.0	29.0	408.07	中世	
S316	土壙419	砥石		凝灰岩	(89.0)	(45.0)	(53.0)	226.30	中世	
S317	土壙424	石鍋		滑石	94.0		12.0		中世	
S318	古代畑	砥石			90.0	40.0	30.0	143.87	古代	
S319	低位部３	砥石		花崗岩	81.0	65.0	48.5	377.78	中世	
S320	低位部３	砥石		流紋岩	62.0	42.0	28.0	99.85	中世	
S321	低位部４	砥石		閃緑岩	53.0	42.0	27.0	62.61	中世	
S322	河道	砥石		流紋岩質凝灰岩	82.0	50.0	16.0	98.30	中世～	
S323	その他	砥石		流紋岩	(87.0)	(44.0)	(51.0)	326.60	古代・中世	
S324	その他	砥石		流紋岩(熔岩)	75.0	52.0	26.0	112.31	古代・中世	
S325	その他	砥石		流紋岩	55.0	(26.0)	(29.0)	(70.91)	古代・中世	

掲載番号	遺構名	器種	型式	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	時期	備考
S326	その他	砥石		流紋岩質凝灰岩	(50.0)	(29.0)	(23.0)	38.20	古代・中世	
S327	その他	砥石		流紋岩	45.0	40.0	29.0	52.57	古代・中世	
S328	その他	筋砥石			44.0	34.5	32.0	67.09	古代・中世	
S329	その他			流紋岩	150.0	11.0	10.0	30.35	古代・中世	
S330	その他	砥石		流紋岩	(65.0)	(42.5)	(21.0)	(58.10)	古代・中世	
S331	その他	砥石		流紋岩(熔岩)	88.0	58.0	22.0	160.00	古代・中世	
S332	その他			サヌカイト	(22.0)	23.0	6.0	(3.93)	古代・中世	
S333	その他	空風輪(五輪塔)		花崗岩	(199.0)	138.5	137.5	(4600.00)	中世	
S334	掘立柱建物18	石臼		火山礫凝灰岩				4720.00	近世	黒豊島石
S335	その他	砥石		?	57.5	31.5	13.5	36.33	近世	

金属器

掲載番号	遺構名	器種	型式	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	時期	備考
M1	袋状土壙13	円形塊		鉄滓?	10.0	9.0	10.0	1.00	弥・中・Ⅱ	
M2	竪穴住居15	鏃	広根	鉄	44.0	22.0	6.0	8.34	弥・後・Ⅳ	
M3	竪穴住居28	釧?		銅	33.5	9.0	1.5	1.29	弥・後	
M4	竪穴住居29	鉄器片		鉄	25.5	28.0	3.0	6.94	弥・後	
M5	竪穴住居29	不明		鉄	26.0	30.0	7.0	13.90	弥・後	
M6	竪穴住居35	銅鏃		銅	(36.0)	(16.0)	2.3	(1.40)	弥・後	
M7	竪穴住居42	銅鏃		銅	(35.5)	(14.0)	3.5	(1.40)	弥・後	
M8	竪穴住居44	銅釧		銅	62.0		5.0	11.41	弥・後・Ⅰ	
M9	土壙264	銅鏃		銅	29.0	11.0	4.0	1.73	弥・後・Ⅳ	
M10	土壙275	鉇		鉄	(83.0)	(18.0)	(4.0)	(33.00)	弥・後・Ⅰ	
M111	土壙307	ノミ?		鉄	(35.0)	15.0	8.0	(5.53)	弥・後	
M12	土壙310	銅釧	有鉤	銅	77.0	78.0	45.0	(17.85)	弥・後	
M13	溝15	銅鏃		銅	(40.5)	(14.5)	3.5	(2.60)	弥・後・Ⅳ	
M14	その他	銅鏃		銅	(32.0)	(18.0)	3.0	(2.91)	弥生	
M15	竪穴住居59	鏃		鉄	(80.0)	22.0	12.0	(22.96)	古・前	
M16	竪穴住居59	鏃	広根	鉄	43.0	16.0	11.0	6.29	古・前	
M17	竪穴住居59	鏃茎部		鉄	(40.0)	10.0	6.0	(3.32)	古・前	
M18	竪穴住居60	鎌		鉄	160.0	35.0	7.0	62.83	古・前	
M19	竪穴住居61	釘		鉄	(35.0)	7.0	8.0	(4.09)	古・前	
M20	竪穴住居67	鉇		鉄	(80.0)	19.0	8.0	(19.13)	古・前	
M21	竪穴住居68	鏃		銅	22.5	11.5	3.5	1.34	古・前・Ⅰ	
M22	竪穴住居68	不明(鉇)		鉄	44.0	12.0	2.5	6.81	古・前	
M23	竪穴住居68	?(刀子?)		鉄	51.0	14.0	2.0	4.32	古・前	
M24	竪穴住居71　中央穴	鉄鎌		鉄	98.0	27.5	5.5	15.81	古・前	
M25	竪穴住居71	鉄器片		鉄	32.5	16.0	3.0	2.84	古・前	
M26	竪穴住居71	棒状		鉄	90.0	16.5	9.0	22.10	古・前	
M27	土壙316	釘		鉄	52.0	4.0	4.0	12.41	古・前	
M28	溝27	鉇		鉄	(53.0)	14.0	6.0	(6.08)	古・前	
M29	その他	剣?		鉄	27.0	19.0	5.0	4.80	古墳前期?	
M30	竪穴住居85	鎌		鉄	162.0	34.0	6.0	51.27	古・後	
M31	竪穴住居96	鏃他2		鉄	(37.0)	20.0	9.0	(7.80)	古・中	
M32	竪穴住居98	小刀?・鉄器?		鉄	(37.0)	13.0	12.5	6.17	古墳後期	
M33	竪穴住居99	?		鉄	(38.5)	(28.0)	6.0	12.33	古・後	
M34	竪穴住居102	鎌?		鉄	—	—	6.0	11.77	古・後	
M35	竪穴住居102	鏃?		鉄	53.0	12.0	6.0	8.18	古・後	
M36	竪穴住居102	鏃?		鉄	68.0	16.5	6.5	14.66	古・後	
M37	竪穴住居106	鉄鏃	広根・カリヌ	鉄	62.5	28.0	12.0	23.39	古・後	
M38	竪穴住居108	鏃?		鉄	35.0	8.0	8.5	3.99	古・後	
M38	竪穴住居108	鏃?		鉄	22.5	6.0	5.5	1.33	古・後	
M39	竪穴住居118	鉄鏃		鉄	(29.0)	(4.8)	(3.0)	(1.11)	古・後	
M40	竪穴住居122	鉇		鉄	(44.0)	8.0	4.0	(3.30)	古・後	
M41	竪穴住居132	鏃	尖根	鉄	(83.0)	15.0	7.0	(11.52)	古・後	
M42	竪穴住居133	刀子		鉄	25.0	(40.0)	6.0	(12.02)	古・後	
M43	竪穴住居133	釘		鉄	(45.0)	11.0	7.0	(6.37)	古・後	
M44	焼成土壙9	釘?		鉄	53.0	9.5	9.0	4.00	古墳後期	
M45	土壙320	鉄鏃	方頭形	鉄	61.0	23.0	0.4	11.38	古墳後期	
M46	溝31	鏃?		鉄	(43.0)	6.0	6.0	1.83	古墳後期	
M47	溝34	小刀		鉄	69.0	25.0	6.5	18.46	古墳後期	
M48	溝34	鏃		鉄	102.0	28.0	5.0	15.53	古墳後期	
M49	その他	鏡		鉄	(89.5)	35.5	3.0	(37.59)	古・後	
M50	その他	鉄鏃		鉄	(30.5)	11.0	2.3	(1.68)	古・後	
M51	その他	鏃		鉄	(34.0)	15.0	6.0	(4.06)	古・後	
M52	その他	タガネ		鉄	87.0	17.0	14.0	49.51	古・後	
M53	井戸3	釘		鉄	(134.0)	7.0	7.0	(35.27)	中世	木質残存
M54	井戸3	釘		鉄	121.5	18.0	10.0	114.34	中世	
M55	井戸3	ヘラ		鉄	143.0	12.0	7.0	8.54	中世	柄残存良好
M56	井戸4	茎		鉄	(26.0)	14.0	4.5	(2.46)	中世	
M57	井戸4	?		鉄	(34.5)	23.5	5.0	(13.84)	中世	
M58	土壙367	釘他1点	金	鉄	45.0	15.5	5.0	7.09	古代	
M59	土壙367	釘他1点	金	鉄	47.0	6.5	6.5	3.95	古代	
M60	土壙372	釘	鉄	鉄	38.0	6.0	4.0	2.98	古代	
M61	土壙375	刀子?		鉄	63.0	15.0	5.5	8.20	古代	
M62	土壙376	釘?棒状		鉄	(29.0)	6.5	6.0	1.74	古代	
M63	土壙378	?		鉄	35.0	15.0	11.0	6.92	古代	
M64	土壙388	釘		鉄	(34.5)	3.2	5.0	(2.71)	平安	
M65	土壙388	釘		鉄	(33.0)	7.0	7.7	(8.09)	平安	
M66	土壙388	釘		鉄	(73.0)	5.5	5.0	(8.31)	平安	

遺物観察表

掲載番号	遺構名	器種	型式	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	時期	備考
M67	土壙388			鉄	(43.5)	3.5	3.2	(1.23)	平安	
M68	土壙388			鉄	(59.3)	20.5	3.8	(12.85)	平安	
M69	土壙389	釘		鉄	(32.5)	(6.5)	7.0	(5.13)	平安	
M70	土壙389	釘		鉄	(35.5)	4.5	5.0	(2.58)	平安	
M71	土壙389	釘		鉄	(30.3)	8.0	6.0	(2.40)	平安	
M72	土壙389	釘		鉄	(86.5)	4.7	4.0	(4.51)	平安	
M73	土壙415	銅銭		銅	24.0		1.0	2.34	中世	元祐通寶(北宋元祐８年1093)
M74	土壙415	銅銭		銅	25.0		1.0	1.68	中世	天聖元寶(北宋天聖元年1023)
M75	土壙416	釘		鉄	(44.0)	(3.0)	(3.0)	(5.51)	中世	
M76	土壙419	釘		鉄	(33.0)	5.8	5.8	(1.84)	中世	
M77	土壙419	釘		鉄	(36.0)	3.0	4.0	(1.71)	中世	
M78	土壙419	釘		鉄	(66.0)	4.0	4.5	(5.97)	中世	
M79	土壙419	釘		鉄	(65.0)	5.3	6.0	(7.56)	中世	
M80	土壙419	釘		鉄	(106.0)	7.6	7.8	(12.50)	中世	
M81	土壙422	銅銭		銅	23.0		1.5	2.60	中世	洪武通宝
M82	土壙墓７	小刀		鉄	(281.0)	32.0	11.0	137.07	中世	
M83	土壙墓13	釘		鉄	(36.0)	7.0	5.0	(3.35)	中世	
M84	土壙墓13	釘		鉄	(66.0)	6.0	3.5	(3.96)	中世	
M85	土壙墓13	釘		鉄	(52.0)	7.5	7.5	(6.06)	中世	
M86	火葬墓１	銅銭		銅	19.0		1.5	(1.40)	古代	延喜通宝
M87	火葬墓１	銅銭		銅	19.0		1.5	(1.90)	古代	延喜通宝
M88	火葬墓１	銅銭		銅	19.0		1.3	(2.00)	古代	延喜通宝
M89	火葬墓１	銅銭		銅	19.0		1.5	(1.00)	古代	延喜通宝？
M90	火葬墓１	銅銭		銅	19.0		1.3	(1.10)	古代	延喜通宝？
M91	火葬墓１	銅銭		銅	19.5		1.6	(1.90)	古代	
M92	火葬墓１	銅銭		銅	19.0		1.5	(1.20)	古代	
M93	火葬墓１	銅銭		銅	19.0		1.5	(1.60)	古代	
M94	火葬墓１	銅銭		銅	19.0		1.5	(1.25)	古代	
M95	火葬墓１	銅銭		銅	－		1.5	(1.27)	古代	
M96	火葬墓１	銅銭		銅	(19.0)		1.5	(1.91)	古代	
M97	火葬墓１	銅銭		銅	－		1.5	(0.92)	古代	
M98	火葬墓１	鋤先		鉄	(175.5)	176.0	4.0	(470.81)	古代	
M99	火葬墓２	銅銭		銅	19.0		1.5	(1.80)	古代	延喜通宝
M100	火葬墓２	銅銭		銅	20.0		1.5	(3.20)	古代	延喜通宝
M101	火葬墓２	銅銭		銅	20.0		1.5	(2.60)	古代	
M102	火葬墓２	銅銭		銅	20.0		1.5	(2.30)	古代	
M103	火葬墓２	銅銭		銅	20.0		1.5	(2.20)	古代	延喜通宝
M104	火葬墓２	銅銭		銅	19.0		1.5	(1.60)	古代	
M105	火葬墓２	銅銭		銅	20.0		1.8	(1.80)	古代	延喜通宝
M106	火葬墓２	銅銭		銅	－		2.5	(2.05)	古代	
M107	火葬墓２	銅銭		銅	(19.0)		1.5	(1.70)	古代	
M108	火葬墓２	銅銭		銅	20.0		1.5	(0.98)	古代	
M109	火葬墓２	銅銭		銅	20.0		1.5	(1.80)	古代	
M110	火葬墓２	銅銭		銅	21.0		1.8	(0.60)	古代	
M111	火葬墓２	銅銭		銅	－		(1.8)	(1.13)	古代	
M112	火葬墓２	鋤先		鉄	(295.0)	192.0	4.0	(438.66)	古代	
M113	溝44	？		鉄	94.0	29.0	7.0	35.80	古代	
M114	溝49			鉄	(37.5)	(11.0)	(2.5)	(4.12)	古代	
M115	溝49	金具？		銅	(56.0)	9.0	1.8	(2.77)	古代	
M116	溝51	刀子		鉄	(54.0)	13.0	3.0	(6.35)	古代	
M117	溝51			鉄	(28.0)	9.5	5.0	(2.67)	古代	
M118	溝51	釘		鉄	(71.0)	9.0	5.0	(10.23)	古代	
M119	溝69	釘		鉄	(20.0)	7.0	6.0	1.35	中世	
M120	溝69	釘		鉄	(33.0)	8.0	6.0	1.90	中世	
M121	溝72	釘		鉄	26.0	9.0	9.0	4.12	中世	
M122	溝89～94	釘		鉄	43.0	9.0	8.0	10.52	中世	
M123	溝98・99	釘		鉄	(34.0)	4.8	4.0	(1.71)	中世	
M124	溝100	釘		鉄	(42.0)	7.8	6.8	(4.07)	中世	
M125	溝100	釘		鉄	(83.0)	9.0	9.0	(15.79)	中世	
M126	溝100	鉈？		鉄	(75.0)	37.5	10.0	(56.20)	中世	
M127	溝101	釘		鉄	32.5	6.0	8.0	2.04	中世	
M128	溝101	釘		鉄	40.0	10.0	9.0	4.98	中世	
M129	溝101	釘		鉄	23.0	7.0	6.0	1.60	中世	
M130	溝101			鉄	45.0	4.0	4.0	1.82	中世	
M131	溝102	釘		鉄	(32.5)	4.0	5.0	(1.84)	中世～	
M132	溝102	釘		鉄	(35.5)	5.5	4.0	(2.53)	中世～	
M133	溝102	釘		鉄	(34.5)	8.5	6.0	(4.13)	中世～	
M134	溝102	釘		鉄	(35.5)	7.0	5.5	(2.91)	中世～	
M135	溝102	？		鉄	(28.0)	16.0	6.0	(8.75)	中世～	
M136	低位部３	丸鞆		青銅	23.5	36.5	8.5	11.95	中世	
M137	低位部４	釘		鉄	(61.0)	(8.0)	(5.0)	2.56	中世	
M138	河道	釘		鉄	(50.5)	8.0	5.5	(5.87)	中世～	
M139	河道	釘		鉄	(62.0)	8.0	6.0	(5.69)	中世～	
M140	河道	釘		鉄	(74.0)	7.0	5.5	(9.65)	中世～	
M141	河道	釘		鉄	(76.5)	9.5	9.0	(14.41)	中世～	
M142	河道	釘？		鉄	(100.5)	8.5	6.5	(18.18)	中世～	
M143	その他	刀子？		鉄	(39.5)	13.5	3.0	3.94	古代・中世	
M144	その他	刀子		鉄	(79.5)	18.0	5.5	(17.77)	古代・中世	
M145	その他	刀子		鉄	53.0	15.0	6.0	6.36	古代・中世	
M146	その他	刀子		鉄	23.0	16.0	8.0	5.43	古代・中世	
M147	その他	刀子		鉄	(37.0)	(15.0)	2.0	(4.53)	古代・中世	
M148	その他	鉇		鉄	(81.5)	12.0	6.5	(9.64)	古代・中世	

掲載番号	遺構名	器種	型式	材質	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	時期	備考
M149	その他	鉄鏃		鉄	(77.0)	(12.5)	(5.5)	(8.11)	古代・中世	
M150	その他	紡錘車？		鉄	(30.0)	22.0	5.5	(6.70)	古代・中世	
M151	その他	鏃		鉄	36.5	16.5	4.5	4.79	古代・中世	
M152	その他	楔？		鉄	33.0	20.0	8.5	7.16	古代・中世	
M153	その他	鉋		鉄	23.0	10.0	3.0	2.22	古代・中世	
M154	その他	ノミ？		鉄	46.0	11.0	11.0	8.40	古代・中世	
M155	その他	銅板		銅	44.0	24.0	1.0	11.35	古代・中世	
M156	その他	？		鉄	(37.5)	11.5	5.5	(3.47)	古代・中世	
M157	その他	？		鉄	(34.0)	(18.5)	5.5	(4.11)	古代・中世	
M158	その他			鉄	(47.0)	4.5	3.0	(1.39)	古代・中世	
M159	その他	針金		鉄	(70.5)	3.0	3.0	(2.79)	古代・中世	
M160	その他			鉄	(23.0)	(32.0)	5.0	(2.99)	古代・中世	小孔あり　φ4mm
M161	その他			鉄	(33.0)	(24.5)	(5.0)	(3.70)	古代・中世	小孔あり　φ4mm
M162	その他	貨金具？		鉄	27.5	9.0	4.5	(6.08)	古代・中世	
M163	その他	環状金具		鉄	28.5		3.5	(8.71)	古代・中世	
M164	その他	？		銅	(33.5)	(17.5)	(2.0)	(3.33)	古代・中世	推定外径7cm・内径6.4cm
M165	その他	釘		鉄	(79.0)	15.0	8.0	(26.29)	古代・中世	一部緑青付着
M166	その他	釘		鉄	88.0	10.0	10.0	12.16	古代・中世	
M167	その他	釘		鉄	61.0	12.0	10.5	12.55	古代・中世	
M168	その他	釘		鉄	(48.0)	6.5	5.0	(8.05)	古代・中世	
M169	その他	釘		鉄	44.5	12.5	5.5	13.84	古代・中世	
M170	その他	釘		鉄	44.0	9.0	8.0	9.47	古代・中世	
M171	その他	釘		鉄	(71.0)	6.8	6.0	(7.75)	古代・中世	
M172	その他	釘		鉄	(27.0)	8.0	5.0	(3.60)	古代・中世	
M173	その他	釘		鉄	(35.0)	5.0	5.5	(4.25)	古代・中世	木質残存
M174	その他	釘		鉄	84.0	11.0	11.0	15.09	古代・中世	
M175	その他	釘		鉄	(52.0)	12.0	7.0	7.30	古代・中世	
M176	その他	釘		鉄	(47.0)	5.0	5.5	(5.26)	古代・中世	
M177	その他	釘		鉄	(36.0)	7.0	5.0	(4.36)	古代・中世	
M178	その他	釘		鉄	(44.0)	6.5	5.0	(4.32)	古代・中世	
M179	その他	釘		鉄	29.0	9.0	8.0	4.50	古代・中世	
M180	その他	釘		鉄	(51.0)	4.0	6.0	(4.37)	古代・中世	
M181	その他	釘		鉄	(58.0)	5.5	5.5	(6.34)	古代・中世	
M182	その他	釘		鉄	(29.5)	10.5	7.0	3.60	古代・中世	
M183	その他	釘		鉄	49.0	8.0	6.0	6.08	古代・中世	
M184	その他	釘		鉄	(77.0)	5.0	5.0	(8.65)	古代・中世	
M185	その他	釘		鉄	(43.0)	3.5	3.5	(2.00)	古代・中世	
M186	その他	釘		鉄	(43.0)	3.5	4.0	(2.21)	古代・中世	緑青付着
M187	その他	釘		鉄	26.0	9.0	8.0	2.00	古代・中世	
M188	その他	釘		鉄	41.0	7.0	6.5	3.08	古代・中世	
M189	その他	釘		鉄	29.0	7.0	5.0	2.70	古代・中世	
M190	その他	釘		鉄	(33.0)	4.5	4.0	(2.40)	古代・中世	緑青付着
M191	その他	釘		鉄	(55.0)	9.0	7.0	(11.52)	古代・中世	
M192	その他	釘？		鉄	(52.0)	5.0	5.0	(5.60)	古代・中世	緑青付着
M193	その他	釘		鉄	(66.0)	6.0	5.0	(6.10)	古代・中世	
M194	その他	釘		鉄	(39.0)	8.5	7.0	(5.41)	古代・中世	
M195	その他	釘		鉄	(33.0)	8.0	6.0	(4.22)	古代・中世	
M196	その他	釘		鉄	(56.5)	10.0	7.5	(8.23)	古代・中世	
M197	その他	釘？		鉄	(47.5)	9.5	6.0	(6.30)	古代・中世	
M198	その他	釘		鉄	(48.5)	6.0	5.0	(5.87)	古代・中世	
M199	その他	釘		鉄	(47.0)	8.8	9.5	(7.58)	古代・中世	
M200	その他	釘		鉄	(52.5)	8.0	7.0	(10.27)	古代・中世	
M201	その他			鉄	19.0	19.0	14.0	6.73	古代・中世	
M202	その他	釘		鉄	(57.5)	8.0	7.5	5.63	古代・中世	
M203	その他	棒状		鉄	(81.0)	7.0	5.0	5.24	古代・中世	
M204	その他	棒状		鉄	(41.0)	7.0	6.0	2.49	古代・中世	
M205	その他	棒状		鉄	(33.0)	7.0	7.0	3.54	古代・中世	
M206	その他	棒状		鉄	(124.0)	11.0	10.5	21.16	古代・中世	
M207	その他			鉄	67.0	18.0	17.0	23.88	古代・中世	
M208	その他	古銭		銅	24.0	24.0	1.8	2.59	中世	開元通寶
M209	その他	古銭		銅	(15.5)	(15.0)	1.5	0.69	中世	太□通□
M210	その他	古銭		銅	(16.5)	24.5	1.6	1.77	中世	(至道元寶)
M211	その他	古銭		銅	23.0	23.0	1.0	2.73	中世	祥符通寶
M212	その他	古銭		銅	23.8	23.8	1.5	2.96	中世	熙寧元寶
M213	その他	古銭		銅	24.0	24.0	1.0	2.27	中世	9枚重なっている、完、元聖元寶？
M214	その他	古銭		銅	24.0	24.0	1.2	3.20	中世	9枚重なっている、完、皇宋通寶
M215	その他	古銭		銅	24.0	24.0	1.5	3.14	中世	9枚重なっている、完、皇宋通寶
M216	その他	古銭		銅	25.0	24.5	1.2	3.48	中世	9枚重なっている、完、熙寧元寶
M217	その他	古銭		銅	24.5	24.5	1.0	2.09	中世	9枚重なっている、完、熙寧重寶
M218	その他	古銭		銅	24.5	25.0	1.7	3.94	中世	9枚重なっている、完、元豊通寶
M219	その他	古銭		銅	23.5	23.0	1.4	3.52	中世	9枚重なっている、完、元祐通寶
M220	その他	古銭		銅	24.0	24.0	1.5	3.94	中世	9枚重なっている、完、元符通寶
M221	その他	古銭		銅	24.0	24.0	1.2	2.98	中世	9枚重なっている、完、政和通寶
M222	その他	古銭		銅	23.5	23.0	1.5	2.54	中世	大観通宝、表面に赤い土
M223	その他	古銭		銅	24.0	24.0	1.5	2.83	中世	宣和通寶
M224	溝107	釘		鉄	46.0	9.0	8.0	5.93	近世	
M225	河道			鉄	(63.5)	20.8	2.5	(6.08)	近世	
M226	河道	釘		鉄	(29.0)	6.0	6.0	(2.38)	近世	
M227	河道	釘		鉄	(46.0)	4.8	5.0	(3.64)	近世	
M228	河道	板状金具		鉄	(71.5)	9.5	3.0	(8.75)	近世	小孔2ヶ所
M229	その他	毛抜き		鉄	(106.0)	10.0	4.0	(7.76)	近世	
M230	その他	火打金？		鉄	(50.0)	(20.5)	3.5	(5.37)	近世	

土製品

掲載番号	遺構名	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重量(g)	色調	胎土	時期	焼成	特徴・備考
C1	竪穴住居6	紡錘車	33.0	31.0	5.0	5.5	(7.20)	鈍い褐色(7.5YR5/4)	細砂	弥・中・Ⅱ	良好	
C2	竪穴住居6	紡錘車	36.0	41.0	6.0	5.0	(15.70)	橙色(5YR6/6)	粗砂、細砂	弥・中・Ⅱ	良好	
C3	竪穴住居6	紡錘車	40.0	44.0	6.0	4.5	(13.60)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	弥・中・Ⅱ	良好	
C4	竪穴住居6	紡錘車	44.0	41.5	6.0	5.0	(12.80)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	弥・中・Ⅱ	良好	
C5	竪穴住居6	紡錘車	50.0	(33.5)	5.0	6.0	(7.59)	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	弥・中・Ⅱ	良好	1/2残存
C6	竪穴住居7 床面	分銅形土製品	(39.0)	(48.0)	(9.0)		(12.70)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	弥・中・Ⅱ	良好	
C7	竪穴住居7	鏡形土製品	47.5	(46.0)	19.0	2.0	(18.70)	橙色(5YR6/6)	細砂	弥・中・Ⅱ	良好	
C8	竪穴住居12	紡錘車	51.0	44.0	6.0	7.0	20.36	鈍い赤褐色(5YR4/4)	粗砂	弥・中・Ⅱ	良	
C9	竪穴住居12	紡錘車	55.0	(30.0)	6.0	(7.0)	11.51	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	弥・中・Ⅱ	良	
C10	竪穴住居12	紡錘車	32.0	31.0	4.0	5.0	3.73	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	弥・中・Ⅱ	良	
C11	竪穴住居12	紡錘車	34.0	33.0	5.0	5.0	7.23	橙色(5YR6/6)	粗砂	弥・中・Ⅱ	良	
C12	袋状土壙6	分銅形土製品	(65.0)	77.0	14.0		(68.70)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	弥・中・Ⅱ	良好	
C13	袋状土壙10	分銅形土製品	36.0	32.0			(17.20)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	弥・中・Ⅱ	良好	
C14	袋状土壙10	分銅形土製品	(62.0)	(45.0)	14.0		(39.40)	灰褐色(5YR4/2)	細砂	弥・中・Ⅱ	良好	
C15	袋状土壙10	分銅形土製品	(42.0)	(57.0)	13.0		(23.7)	鈍い褐色(7.5YR5/4)	細砂	弥・中・Ⅱ	良好	
C16	袋状土壙10	分銅形土製品	(49.0)	(42.0)	13.5		(34.00)	灰褐色(7.5YR4/2)	細砂	弥・中・Ⅱ	良好	
C17	袋状土壙10	分銅形土製品	(69.0)	(80.0)	16.0		(62.00)	鈍い橙色(7.5YR6/3)	細砂	弥・中・Ⅱ	良好	
C18	土壙15	分銅形土製品	63.0	54.0	14.0		40.36	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	弥・中・Ⅱ	良	
C19	土壙20	紡錘車	(46.5)	—	8.1	7.0	(10.25)	浅黄橙色(10YR8/4)	粗砂	弥・中・Ⅱ	良好	
C20	土壙22	紡錘車	65.0	60.0	6.0	9.0	26.14	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	弥・中・Ⅱ	良	
C21	土壙22	紡錘車	(25.0)	40.0	5.0	4.0	(4.94)	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	弥・中・Ⅱ	良	
C22	土壙22	紡錘車	(25.0)	(25.0)	5.0	6.0	(4.27)	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	弥・中・Ⅱ	良	
C23	土壙35	分銅形土製品	(71.0)	45.0	17.0		(48.97)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	弥・中・Ⅱ	良	
C24	土壙35	紡錘車	(43.0)		7.5	5.5	(17.58)	橙色(7.5YR6/6)	細砂	弥・中・Ⅱ	良	
C25	土壙123	分銅形土製品	(46.0)	(41.0)	9.0		(17.20)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	弥・中・Ⅱ	良好	
C26	土壙129	紡錘車	50.8	43.1	6.0	6.0	17.10	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	弥・中・Ⅱ	良好	
C27	土壙166	分銅形土製品	(44.0)	(53.0)	(14.0)		(31.50)	橙色(2.5YR7/6)	細砂	弥・中・Ⅱ	良好	
C28	土壙173	紡錘車	39.5	39.0	8.0		13.80	鈍い褐色(7.5YR5/4)	細砂	弥・中	良好	未製品か
C29	柱穴7	分銅形土製品	(35.0)	(41.0)	12.0		(11.00)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	弥・中	良好	
C30	その他	分銅形土製品	(92.0)	(99.0)	20.0		(196.10)	橙色(5YR6/6)	細砂	弥・中	良好	
C31	その他	分銅形土製品	(82.0)	(85.0)	13.0		(115.60)	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	弥・中	良好	
C32	その他	分銅形土製品	(87.0)	(93.0)	13.0		(77.40)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	弥・中	良好	
C33	その他	分銅形土製品	68.8	49.5	12.0	—	53.52	明赤褐色(5YR5/8)	粗砂	弥・中	良好	
C34	その他	分銅形土製品	(69.0)	(67.0)	17.0		(78.20)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	弥・中	良好	
C35	その他	分銅形土製品	(4.9)	4.8	1.4		(27.43)	黒褐色(5YR3/1)	細砂	弥・中	良	
C36	その他	分銅形土製品	(60.0)	(48.0)	13.0		41.79	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	弥・中	良好	
C37	その他	分銅形土製品	(32.0)	(53.0)	11.5		(22.70)	橙色(5YR6/6)	細砂	弥・中	良好	
C38	その他	分銅形土製品	(28.0)	(21.0)	(13.0)		(6.10)	橙色(5YR6/6)	細砂	弥・中	良好	
C39	その他	紡錘車	34.0	35.0	5.0	4.0	(8.90)	橙色(2.5YR7/6)	細砂	弥生	良好	
C40	その他	紡錘車	33.0	33.0	6.0	5.0	(9.00)	鈍い赤褐色(2.5YR5/4)	細砂	弥生	良好	
C41	その他	紡錘車	35.0	34.0	6.0	4.0	8.20	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	弥生	良好	
C42	その他	紡錘車	33.0	34.0	4.0	5.0	5.60	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	弥生	良好	
C43	その他	紡錘車	29.0	24.0	6.5	6.5	4.50	黒褐色(2.5Y3/1)	細砂	弥生	良好	
C44	その他	紡錘車	43.0	42.5	4.5	5.0	6.77	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	弥生	良好	
C45	その他	紡錘車	43.0	39.0	6.0	5.0	12.10	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	弥生	良好	
C46	その他	紡錘車	38.0	39.0	5.0	5.0	8.40	褐灰色(10YR5/1)	細砂	弥生	良好	
C47	その他	紡錘車	38.0	31.0	7.0	5.5	12.40	橙色(5YR6/6)	細砂	弥生	良好	
C48	その他	紡錘車		33.0	6.0	5.0	10.08	鈍い褐色(7.5YR5/4)	細砂	弥生	良	
C49	その他	紡錘車	36.0	31.0	4.5	6.0	(6.80)	橙色(5YR6/6)	細砂	弥生	良好	
C50	その他	紡錘車	47.5	45.5	5.0	4.0	12.60	赤褐色(5YR4/6)	細砂	弥生	良好	
C51	その他	紡錘車	45.0	47.0	5.0	5.5	12.20	橙色(5YR6/6)	粗砂	弥生	良好	
C52	その他	紡錘車	46.0	46.5	5.0	3.5	14.80	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	弥生	良好	
C53	その他	紡錘車	(44.0)		6.0	2.0	(14.35)	鈍い黄褐色(10YR5/3)	粗砂	弥生	良	
C54	その他	紡錘車	54.0	50.0	7.0	4.0	(20.90)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	弥生	良好	
C55	その他	紡錘車	50.0		6.0	5.0	16.98	明褐色(7.5YR5/6)	細砂	弥・中	良	
C56	その他	紡錘車	45.0	52.0	11.0	5.0	30.10	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	弥生	良好	
C57	その他	紡錘車		(53.5)	4.5	6.0	(16.17)	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	弥生	良	
C58	その他	紡錘車	50.0	52.0	5.0	5.0	16.10	灰黄色(2.5Y7/2)	粗砂、細砂	弥生	良好	
C59	その他	紡錘車	(47.0)	(26.0)	6.0	4.5	11.00	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	弥生	良好	
C60	その他	紡錘車		62.5	6.5	8.0	29.68	橙色(7.5YR6/6)	細砂	弥生	良好	
C61	その他	紡錘車	51.0	50.0	6.0		19.30	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	弥生	良好	未製品か
C62	その他	紡錘車	32.0	36.0	5.0	6.0	7.85	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	弥生	良	
C63	その他	紡錘車	38.7	31.3	5.0	(6.0)	8.99	鈍い褐色(7.5YR6/3)	粗砂	弥生	良好	
C64	竪穴住居15	分銅形土製品	(42.7)	(28.5)	14.3	—	(18.68)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	弥・後・Ⅳ	良好	
C65	竪穴住居17	紡錘車	(49.0)		7.0	4.0	(18.20)	灰赤色(2.5YR4/2)	細砂	弥・後・Ⅳ	良	
C66	竪穴住居20	紡錘車	(75.5)		5.0	5.5	(32.69)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	弥・後・Ⅳ	良	
C67	竪穴住居27	紡錘車	38.0	36.0	7.5	3.8	12.19	褐色(7.5YR4/3)	細砂	弥・後・Ⅳ	良好	
C68	竪穴住居30	勾玉	83.0	21.0	23.0	4.0	80.27	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	弥生後期	良	
C69	竪穴住居35 P3	紡錘車	(27.0)	(17.0)	3.5	4.0	(2.30)	橙色(5YR7/6)	細砂	弥・後	良好	
C70	竪穴住居36	勾玉	33.0	11.5		2.3	6.70	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	弥・後・Ⅳ	良好	
C71	竪穴住居36	分銅形土製品	(36.0)	(39.0)	12.0		(14.05)	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	弥・後・Ⅳ	良好	
C72	竪穴住居38	土錘	49.0	40.0		7.5	63.30	褐灰色(10YR5/1)	細砂	弥・後・Ⅱ	良好	
C73	竪穴住居39 P6	紡錘車	27.0	33.0	4.0	4.0	4.30	鈍い黄橙色(10YR7/2)	礫～細砂	弥・後・Ⅰ	良好	
C74	竪穴住居39	紡錘車	38.0		7.0	5.5	10.00	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	弥・後・Ⅰ	良好	
C75	竪穴住居40	紡錘車	(35.0)	53.0	6.0	5.0	13.90	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	弥・後・Ⅰ	良好	
C76	竪穴住居40	紡錘車	51.0		5.0	4.0	16.80	橙色(5YR7/6)	細砂	弥・後・Ⅰ	良好	
C77	竪穴住居40	紡錘車	38.0	43.0	6.0	5.0	13.30	褐灰色(10YR4/1)	細砂	弥・後・Ⅰ	良好	
C78	竪穴住居43	玉	26.0				15.00	橙色(5YR6/6)	細砂	弥・後	良好	
C79	竪穴住居44	玉	23.0		14.5	3.0	5.70	橙色(5YR7/6)	細砂	弥・後・Ⅰ	良好	

掲載番号	遺構名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	胎土	時期	焼成	特徴・備考
C80	竪穴住居44	分銅形土製品	53.0	44.5	15.0		36.70	橙色(2.5YR7/8)	細砂	弥・後・Ⅰ	良好	表の右半分・裏の中央に黒斑、直径1.5mmの工具による施文
C81	竪穴住居46	棒状土製品	(51.0)	(16.0)		1.5	(15.10)	橙色(5YR6/8)	細砂	弥・後・Ⅱ	良好	
C82	竪穴住居46 P11	土錘	34.0	33.0		5.5	32.40	橙色(5YR6/8)	細砂	弥・後・Ⅱ	良好	
C83	竪穴住居47 P8	紡錘車	(61.5)	(29.0)	6.5		15.10	灰褐色(5YR5/2)	細砂	弥・後・Ⅱ	良好	
C84	竪穴住居52	紡錘車	40.0	44.0	5.0	5.0	9.31	鈍い褐色(7.5YR5/3)	粗砂	弥・後	良	
C85	竪穴住居52	紡錘車	36.0	33.0	5.0	6.0	7.11	橙色(5YR6/8)	粗砂	弥・後	良	
C86	袋状土壙29	紡錘車	55.0	60.0	6.0	6.0	(25.00)	赤灰色(2.5YR4/1)	細砂	弥・後・Ⅰ	良好	
C87	袋状土壙41	分銅形土製品	(48.0)	(42.0)	13.5		(23.8)	灰褐色(7.5YR4/2)	細砂	弥・後・Ⅰ	良好	
C88	袋状土壙44	紡錘車	5.2	5.0	0.8		28.40	鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	弥・後	良好	未製品か
C89	袋状土壙47	分銅形土製品	50.0	69.0	14.0		32.40	浅黄橙色(10YR8/4)	細砂	弥・後・Ⅰ	良好	穿孔8ヶ所
C90	袋状土壙54	玉	30.0	27.0		3.5	(17.10)	黄灰色(2.5YR4/1)	細砂	弥・後・Ⅰ	良好	
C91	土壙243	紡錘車(未製品)	45.0	35.0	5.0		9.69	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	弥・後	良好	
C92	土壙262	土玉	20.9	20.0	—	3.0	5.16	橙色(7.5YR6/6)	細砂	弥生後期Ⅲ～Ⅳ	良好	
C93	土壙263	土錘	74.3	46.1		18.0	178.63	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	弥・後・Ⅳ	良好	
C94	土壙294	紡錘車	50.0		4.5	5.0	8.40	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	弥・後	良好	
C95	溝13	?	(67.0)	(65.0)	(16.5)	8.0		鈍い赤褐色(5YR5/3)	細砂	弥・後・Ⅳ	良	
C96	溝17	勾玉	52.0	15.0	15.0	4.0	18.00	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	弥・後・Ⅳ	良好	
C97	その他	分銅形土製品	62.0	54.0	12.0		(41.30)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	弥生	良好	
C98	その他	分銅形土製品	(31.0)	(43.0)	9.0		12.33	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	弥生	良	
C99	その他	分銅形土製品	35.0	50.0	11.0	—	12.91	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	弥生	良	
C100	その他	分銅形土製品	(45.0)	(60.0)	(16.0)		(40.50)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	弥生	良好	
C101	その他	土錘	22.0	22.0	20.0	3.5	8.38	暗灰黄色(2.5Y5/2)	細砂	弥生	良	
C102	その他	土錘	49.0	45.0	39.0	7.0	81.90	褐灰色(7.5YR5/1)	粗砂、細砂	弥生	良好	
C103	その他	土錘	51.0	43.0	39.0	6.0	78.60	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	弥生	良好	
C104	その他	土錘	55.5	43.0		7.0	60.40	褐灰色(10YR4/1)	細砂	弥生	良好	
C105	その他	土錘	47.5	43.5	(38.0)	6.0	70.70	黄灰色(2.5Y4/1)	細砂	弥生	良好	
C106	竪穴住居64	土錘	65.5	46.0	46.0	17.0	171.39	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	古・前	良	
C107	溝19	土錘	84.7	45.9		17.0	226.07	淡黄色(2.5Y8/3)	細砂	古・前・Ⅰ	良好	
C108	溝25	土錘	7.8	4.9	4.5	1.6	205.70	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	古・前～中	良好	
C109	溝25	土錘	7.8	5.2	4.8	1.9	225.80	灰白色(10YR8/2)	細砂	古・前～中	良好	
C110	溝25	土錘	8.2	5.1	5.0	1.9	256.60	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	古・前～中	良好	
C111	溝25	土錘	8.4	4.8	4.1	2.0	188.00	灰白色(5YR8/2)	細砂	古・前～中	良好	
C112	溝25	土錘	8.3	5.3	4.8	2.1	252.00	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	古・前～中	良好	
C113	溝25	円板	(35.0)	(32.0)	7.5		(10.13)	橙色(7.5YR6/8)	細砂	古・前～中	良好	
C114	その他	土錘	4.3	2.1	0.9	0.7	15.20	橙色(7.5YR6/6)	細砂	古・前	良好	
C115	その他	土錘	(32.0)	30.0	21.5	6.0	20.90	黒褐色(7.5YR3/1)	粗砂、細砂	古・前	良好	
C116	その他	土錘	38.5	31.0	30.5	7.5	35.70	灰褐色(7.5YR4/2)	粗砂	古・前	良好	
C117	その他	土錘	64.5	30.0	24.0		52.60	橙色(7.5YR6/6)	細砂	古・前	良好	
C118	その他	土錘	50.0	32.0	31.5	10.0	(59.80)	橙色(5YR7/6)	粗砂	古・前	良好	
C119	その他	土錘	28.5	43.5	14.0		28.70	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂、細砂	古・前	良好	
C120	竪穴住居99	紡錘車(未製品)	50.7	43.3	6.0	(8.0)	16.45	橙色(5YR6/6)	細砂	古・後	良好	
C121	竪穴住居106	土錘	(79.0)	(48.0)	13.0	(2.4)	(83.79)	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	古墳後期	良好	
C122	竪穴住居118	羽口	(67.0)	(42.5)	(19.5)		(68.00)	灰黄色(2.5Y6/2)	細砂～粗砂	古・後	良好	
C123	竪穴住居118	土錘	76.0	27.5	22.0	7.0	44.80	黒褐色(5YR3/1)	細砂	弥・後	良好	
C124	竪穴住居118	土錘	40.0	24.5		6.0	(14.20)	灰褐色(7.5YR4/2)	粗砂	弥・後	良好	
C125	その他	塼仏	(54.0)	(36.0)	(12.0)	—	(23.75)	黄灰色(2.5Y5/1)	精良	古・後	良好	漆付着か　火頭形
C126	その他	羽口	103.0	67.0	69.0	25.0	376.20	橙色(5YR6/6)	礫～細砂	古・後	良好	
C127	その他	羽口	(88.0)	(60.0)	(21.0)	(21.0)	(133.40)	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	古・後	良好	
C128	その他	羽口					45.60	鈍い黄橙色(10YR7/3)	礫～細砂	古・後	良好	
C129	その他	羽口	54.0	48.5	28.0		67.30	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	古・後	良好	
C130	その他	鞴の羽口	(80.0)	(55.0)	(19.0)	15.0	110.67	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	古・後	良	
C131	その他	鞴の羽口	(102.0)	(54.0)	(20.0)	(28.0)	140.14	橙色(5YR6/6)	粗砂	古・後	良	
C132	その他	鞴の羽口	(40.0)	(68.0)	(22.0)	(40.0)	60.36	褐灰色(7.5YR5/1)	粗砂	古・後	良	
C133	その他	鞴の羽口	(81.0)	63.0	(19.0)	(22.0)	117.41	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	古・後	良	
C134	その他	鞴の羽口	(40.0)	(50.0)	(18.0)	27.0	50.23	褐灰色(5YR5/1)	粗砂	古・後	良	
C135	その他	鞴の羽口	(42.0)	(70.0)	(35.0)	(40.0)	110.74	褐灰色(7.5YR5/1)	粗砂	古・後	良	
C136	土壙367	羽口	(82.0)	64.0	63.0		269.56	褐灰色(7.5YR5/1)	粗砂	古代	良	
C137	土壙367	羽口	(58.0)	(43.0)	(16.0)	(2.0)	(55.11)	鈍い黄橙色(10YR7/4)		古代	良	
C138	土壙375	梵鐘 竜頭 鋳型	(10.2)	(8.3)	(6.1)		366.12	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂、粗砂	古代	良好	
C139	土壙375	梵鐘 撞座 鋳型	(3.1)	(4.3)	(1.3)		12.64	灰色(5Y6/1)	細砂、粗砂	古代	良好	
C140	土壙375	梵鐘 撞座 鋳型	(4.3)	(4.5)	(1.1)		18.22	灰色(5Y6/1)	細砂、粗砂	古代	良好	
C141	土壙375	梵鐘　鋳型	(4.7)	(3.9)	(1.0)		17.66	灰白色(N7/)	細砂、粗砂	古代	良好	スサ含む
C142	土壙375	梵鐘　鋳型	(3.0)	(2.4)	(1.6)		6.92	鈍い黄橙色(10YR6/4)	細砂	古代	良好	
C143	土壙375	梵鐘　鋳型	(5.6)	(4.3)	(3.2)		53.37	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	古代	良好	
C144	土壙375	梵鐘　鋳型	(7.0)	(5.3)	(3.1)		80.86	黄灰色(2.5Y6/1)	細砂、粗砂	古代	良好	
C145	土壙375	梵鐘　鋳型	(5.0)	(4.7)	(2.2)		42.87	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	古代	良好	
C146	土壙375	溶解炉　のみ口?	(5.6)	(4.6)	(3.1)		53.50	灰色(N5/)	細砂、粗砂	古代	良好	
C147	土壙375	鋳型	(13.2)	(9.9)	(5.1)		481.20	黄灰色(2.5Y6/1) 灰白色(2.5Y7/1)	細砂、粗砂、礫	古代	良好	スサ含む　真土
C148	土壙375	梵鐘　外型	(5.7)	(7.0)	(1.1)		47.54	鈍い黄橙色(10YR7/2)～ 鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂、粗砂、礫	古代	良好	表面に真土がのこっている　スサ含む
C149	土壙375	鋳型	(6.3)	(3.9)	(1.7)		27.70	灰白色(2.5Y8/1) 鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂、粗砂、礫	古代	良好	スサ含む　真土
C150	土壙375	鋳型	(7.0)	(5.0)	(2.9)		95.30	灰白色(10YR8/2) 鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂、粗砂、礫	古代	良好	スサ含む?　真土
C151	土壙375	鋳型	(28.6)	(14.6)	(5.1)		(1900.00)	灰白色(10YR7/1)～ 褐灰色(10YR6/1)	細砂、粗砂、礫	古代	良好	表面に真土がのこっている
C152	土壙375	鋳型	(15.8)	(9.9)	(9.9)		1250.30	灰黄色(2.5Y6/2)～ 黄灰色(2.5Y6/1)	細砂、粗砂、礫	古代	良好	表面に真土がのこっている
C153	土壙375	溶解炉　炉壁	(15.3)	(12.4)	(3.8)		489.10	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂、粗砂	古代	良好	スサ含む
C154	土壙375	溶解炉　炉壁	(18.5)	(15.3)	(6.1)		1403.00	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂、粗砂、礫	古代	良好	スサ含む

遺物観察表

掲載番号	遺構名	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重量(g)	色調	胎土	時期	焼成	特徴・備考
C155	土壙375	溶解炉　炉壁	(16.6)	(10.2)	(3.7)		547.90	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂、粗砂、礫	古代	良好	スサ含む
C156	土壙375	溶解炉　炉壁	(8.9)	(8.2)	(4.0)		250.10	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂、粗砂	古代	良好	スサ含む
C157	土壙375	溶解炉　羽口	(17.0)	(15.8)	(3.6)		(1500.00)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂、粗砂、礫	古代	良好	
C158	土壙375	溶解炉　羽口	(10.7)	(8.0)	(4.3)		380.90	鈍い橙色(7.5YR7/4) 灰白色(5Y7/1)	細砂、粗砂、礫	古代	良好	
C159	土壙375	溶解炉　羽口	(8.8)	(5.5)	(3.4)		139.30	浅黄橙色(10YR8/4) 褐灰色(10YR5/1)	細砂、粗砂、礫	古代	良好	
C160	土壙375	溶解炉　羽口	(18.8)	(17.8)	(10.3)		(2000.00)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂、粗砂	古代	良好	木炭痕残存
C161	土壙375	溶解炉　炉壁	(20.1)	(11.2)	(4.8)		947.50	灰白色(5Y8/2)灰黄色(2.5Y6/2)	細砂、粗砂、礫	古代	良好	スサ含む
C162	土壙375	溶解炉　炉壁	(20.3)	(17.5)	(4.8)		1511.40	黄灰色(2.5Y6/1)～鈍い赤褐色(7.5R4/3)	細砂、粗砂、礫	古代	良好	表面に銅　スサ含む
C163	土壙375	溶解炉 炉壁(ル？)	(16.0)	(12.7)	(4.0)		727.20	灰黄色(2.5Y7/2) 紫灰色(5P5/1)	細砂、粗砂、礫	古代	良好	スサ含む
C164	土壙375	溶解炉 炉壁(ル？)	(11.0)	(10.5)	(6.2)		513.70	灰白色(5Y8/1)	細砂、粗砂、礫	古代	良好	スサ含む 気泡 炭痕残存
C165	土壙375	溶解炉 炉壁(ル？)	(21.7)	(14.0)	(7.5)		1689.10	灰黄色(2.5Y6/2) 黄灰色(2.5Y4/1)	細砂、粗砂	古代	良好	スサ含む　気泡　接合痕
C166	土壙375	溶解炉　炉壁	(15.4)	(9.6)	(3.6)		401.10	灰白色(2.5Y7/1)～黄灰色(2.5Y4/1)	細砂、粗砂	古代	良好	
C167	土壙375	溶解炉　炉壁	(8.2)	(8.0)	(4.3)		189.30	暗灰色(N3/)	細砂、粗砂、礫	古代	良好	
C168	土壙375	溶解炉　炉壁	(23.4)	(21.0)	(5.8)		(2000.00)	灰白色(2.5Y7/1)	細砂、粗砂、礫	古代	良好	スサ含む　気泡
C169	土壙375	溶解炉 羽口近く	(18.7)	(9.3)	(6.6)		708.00	暗灰色(N3/)	細砂、粗砂、礫	古代	良好	
C170	土壙388	土錘	23.0	10.0	11.0	3.5	2.50	黒褐色(2.5YR3/1)	粗砂、細砂	平安	良好	
C171	土壙388	土錘	33.0	11.0	11.0		4.00	灰白色(10YR8/2)	粗砂、細砂	平安	良好	
C172	土壙388	土錘	35.0	11.0	11.0	3.5	4.30	黒褐色(2.5YR3/1)	礫～細砂	平安	良好	
C173	土壙388	土錘	38.0	10.0	9.0	3.5	3.70	灰白色(10YR8/2)	細砂	平安	良好	
C174	土壙388	土錘	42.5	12.5	12.0	5.0	5.70	褐灰色(7.5YR4/1)	粗砂	平安	良好	
C175	土壙388	土錘	46.0	11.0	11.0	3.5	5.60	褐灰色(10YR4/1)	粗砂、細砂	平安	良好	
C176	土壙388	土錘	54.0	11.0	12.0	4.0	7.60	灰白色(10YR8/2)	粗砂、細砂	平安	良好	
C177	土壙388	土錘	55.0	11.0	11.0	3.0	6.70	鈍い橙色(5YR7/4)	礫～細砂	平安	良好	
C178	土壙388	土錘	62.0	11.0	12.0	4.5	8.10	褐灰色(10YR4/1)	礫～細砂	平安	良好	
C179	土壙389	土錘	62.0	10.0	10.0	3.0	5.40	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	平安	良好	
C180	溝51	土錘	2.2	1.1	1.0	0.4	1.80	灰白色(10YR8/2)	細砂	古代	良好	
C181	溝59	円板状土製品(須恵器)	32.5	－	9.5	－	10.59	灰白色(N7/)	粗砂	中世	良好	
C182	溝70	土錘	51.5	13.4		4.0	8.52	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	中世	良好	
C183	溝73	土錘	36.9	12.5		3.0	3.99	灰白色(10YR8/1)	粗砂、細砂	中世	良好	
C184	溝73	土錘	25.3	11.6		2.5	3.68	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	中世	良好	
C185	溝74	土錘	(22.6)	8.9		3.0	(1.48)	黒色(7.5YR1.7/1)	細砂	中世	良好	
C186	溝87～88	土錘	(41.0)	12.5	13.0	2.0	(7.13)	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	中世	良好	
C187	低位部4	土錘	43.0	12.8		5.0	5.88	黄灰色(2.5Y4/1)	細砂	中世	良好	
C188	低位部4	土錘	43.8	11.6		4.0	5.40	灰白色(2.5Y8/1)	粗砂、細砂	中世	良好	
C189	低位部4		42.2	52.6	－	－	111.03	灰色(N4/)	細砂	中世	良好	
C190	河道	土錘	48.0	11.0	12.0	3.0	4.60	灰白色(10YR8/2)	粗砂～細砂	中世～	良好	
C191	河道	円板	79.0	78.0	20.0		135.60	灰色(N5/1)	細砂	中世～	良好	平瓦
C192	河道	円板	109.0	97.0	17.5		225.40	灰色(N5/1)	細砂	中世～	良好	平瓦
C193	河道	燭台部品？	(95.0)	(75.0)	(34.0)	18.0	157.10	灰白色(10YR8/1)	精良	中世～	良好	外面ヘラミガキ
C194	その他	土錘	34.2	12.7		5.0	4.67	灰黄色(2.5Y6/2)	細砂	古代・中世	良好	
C195	その他	土錘	33.4	12.1		3.0	5.14	淡灰色(2.5Y8/3)	精良	古代・中世	良好	
C196	その他	土錘	36.0	14.9		5.0	6.26	黄灰色(2.5Y4/1)	細砂	中世	良好	
C197	その他	土錘	38.0	12.0	13.0	3.0	5.40	灰黄褐色(10YR5/2)	礫～細砂	古代・中世	良好	
C198	その他	土錘	47.3	13.1		4.0	6.20	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	中世	良好	
C199	その他	土錘	45.8	15.9		5.0	9.22	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	古代・中世	良好	
C200	その他	土錘	51.0	16.0	16.0	3.0	11.50	褐灰色(10YR5/1)	細砂	古代・中世	良好	
C201	その他	土錘	46.0	15.0	14.0	2.0	10.30	浅黄橙色(10YR8/3)	礫～細砂	古代・中世	良好	
C202	その他	土錘	43.5	17.5	17.5	3.5	10.90	灰白色(2.5Y8/2)	細砂	古代・中世	良好	
C203	その他	土錘	54.0	12.5	12.0	3.0	5.74	橙色(7.5YR6/6)	細砂	古代・中世	良好	
C204	その他	土錘	49.4	12.2		3.0	7.03	褐灰色(10YR4/1)	細砂	古代・中世	良好	
C205	その他	土錘	56.0	15.5	14.5	3.5	(11.50)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	古代・中世	良好	
C206	その他	土錘	47.0	12.0	13.0	3.0	5.60	褐灰色(10YR5/1)	粗砂、細砂	古代・中世	良好	
C207	その他	土錘	50.0	10.0	10.0	4.0	4.90	褐灰色(10YR4/1)	細砂	古代・中世	良好	
C208	その他	土錘	52.0	12.0	11.5	4.0	6.80	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	古代・中世	良好	
C209	その他	土錘	61.5	13.0	10.5	4.0	7.90	褐灰色(7.5YR6/1)	粗砂、細砂	古代・中世	良好	
C210	その他	土錘	61.0	12.0	12.0	4.0	7.90	鈍い黄橙色(10YR7/2)	礫～細砂	古代・中世	良好	
C211	その他	土錘	64.0	11.0	11.0	3.0	7.80	褐灰色(10YR4/1)	粗砂、細砂	古代・中世	良好	
C212	その他	土錘	48.8	11.1		3.0	5.45	灰白色(10YR8/1)	精良	古代・中世	良好	
C213	その他	土錘	(42.0)	12.0	11.0	0.3	6.82	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	古代・中世	良	
C214	その他	土錘	47.0	14.5	13.0	4.0	8.22	褐灰色(7.5YR5/1)	細砂	古代・中世	良好	
C215	その他	土錘	(44.5)	14.0	14.0	3.0	8.46	黒褐色(7.5YR3/1)	細砂	古代・中世	良好	
C216	その他	土錘	(40.0)	(4.5)	14.0	3.5	(7.97)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	古代・中世	良	
C217	その他	土錘	(34.5)	15.0	14.5	4.0	(6.08)	橙色(5YR6/6)	細砂	古代・中世	良	
C218	その他	土錘	(44.0)	16.0	15.0	4.5	(8.98)	橙色(5YR6/8)	細砂	古代・中世	良	
C219	その他	土錘	(48.0)	12.5	12.0	2.5	(7.69)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	古代・中世	良	
C220	その他	土錘	40.0	14.0	16.0	4.0	9.90	黒褐色(10YR3/1)	粗砂、細砂	古代・中世	良好	
C221	その他	土錘	37.0	10.0	11.0	4.0	3.40	褐灰色(10YR5/1)	細砂	古代・中世	良好	
C222	その他	土錘	33.0	10.0	11.0	3.0	3.70	褐灰色(10YR5/1)	細砂	古代・中世	良好	
C223	その他	土錘	20.0	12.0	12.0	3.0	2.70	灰白色(10YR8/2)	礫～細砂	古代・中世	良好	
C224	その他	土錘	(25.0)	11.5	11.0	2.0	3.08	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	古代・中世	良好	
C225	その他	土錘	40.0	19.0	19.0	6.0	(11.90)	灰白色(10YR8/2)	粗砂	古代・中世	良好	
C226	その他	土錘	55.9	17.7		4.0	16.28	明褐色(7.5YR5/6)	粗砂、細砂	古代・中世	良好	
C227	その他	土錘	53.6	16.5		4.0	14.75	橙色(5YR6/6)	細砂	古代・中世	良好	
C228	その他	土錘	55.6	17.9		6.0	10.52	灰白色(10YR8/1)	粗砂(ごく少量) 精良に近い	古代・中世	良好	

掲載番号	遺構名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	胎土	時期	焼成	特徴・備考
C229	その他	土錘	62.8	16.8		4.0	20.45	鈍い褐色(7.5YR5/3)	粗砂、細砂	古代・中世	良好	
C230	その他	土錘	77.0	45.0	45.0	20.0	178.48	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	古代・中世?	良	
C231	その他	土錘	86.7	42.8		19.0	129.35	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂、細砂	古代・中世	良好	
C232	その他	土錘	92.2	46.7		19.0	244.08	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂、細砂	古代・中世	良好	
C233	その他	土錘	23.5	27.0		5.0	17.35	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	古代・中世	良好	
C234	その他	土錘	30.5	32.8		4.0	34.25	灰黄褐色(10YR5/2)	細砂	古代・中世	良好	
C235	その他	羽口	(78.8)	(58.7)	24.0	−	104.29	実測図参照	粗砂	古代・中世	良好	
C236	その他	羽口	84.7	58.4	27.0	−	135.71	実測図参照	粗砂	古代?・中世	良好	
C237	その他	円板	89.0	94.0	16.0		148.80	灰色(N5/0)	細砂	古代・中世	良好	
C238	その他	円板状土製品(瓦)	40.9	−	18.1	−	25.42	灰色(5Y5/1)	粗砂	古代	良好	
C239	その他	円板状土製品(瓦)	30.4	−	20.3	−	14.90	灰白色(2.5Y8/2)	粗砂	中世	良好	
C240	その他	動物形?	(85.0)	(31.0)	(28.0)		(76.03)	橙色(5YR6/6)	細砂	古代・中世	良好	
C241	その他	?	(74.0)	(58.0)	(45.0)		(169.65)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	古代・中世	良好	
C242	その他	?	(156.0)	(66.0)	(30.0)		(171.17)	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	古代・中世	良好	
C243	その他	三又トチン	(40.0)	(35.0)	(11.0)		(11.88)	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	古代・中世	良好	
C244	その他	焼台			12.0			明オリーブ色(7.5GY7/1)	細砂	古代・中世	良好	釉付着
C245	その他	焼台			14.0		(128.48)	灰白色(N7/)	細砂	古代・中世	良好	自然釉
C246	溝103	土錘	49.4	13.2		4.0	8.89	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	近世	良好	
C247	河道	馬形土製品	(28.0)	(39.0)	(7.0)		(6.50)	灰白色(5YR8/2)	精良	近世	良好	
C248	その他	土人形	75.0	(36.0)	(13.0)		(58.18)	明褐灰色(5YR7/1)	細砂	近世	良好	大黒天像、表面光沢

ガラス

掲載番号	遺構名	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色調	時期	特徴・備考
G1	竪穴住居7　覆土	玉	7.0	7.5	4.0	3.5	0.24	灰白色	弥・中・Ⅱ	不透明
G2	竪穴住居29	小玉	4.0	5.5	6.0	2.0	0.16	明緑青色	弥・後	
G3	竪穴住居38　P1	小玉	4.0	4.5	3.0	1.5	0.09	明緑青色	弥・後・Ⅱ	
G4	竪穴住居47	小玉	4.2	4.2	2.5	1.5	0.06	明緑青色	弥・後・Ⅱ	
G5	その他	小玉	4.1	4.3	2.5	1.5	0.05	明緑青色	弥・後	
G6	竪穴住居115	小玉	(4.0)	(4.0)	(2.7)	(1.5)	(0.03)	明緑青色	古・後	

遺構名称新旧対照表

竪穴住居

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
竪穴住居 1	砂場ⅡJ	住 3	古谷野
竪穴住居 2	砂場ⅡA	住 5	古谷野
竪穴住居 3	砂場ⅡI	住10	古谷野
竪穴住居 4	砂場ⅡD	SH-16	松本
竪穴住居 5	砂場ⅡD	SH-15	松本
竪穴住居 6	砂場ⅡD	SH-13	松本
竪穴住居 7	砂場ⅠA	SH-13	松本
竪穴住居 8	砂場ⅠA	SH-19	松本
竪穴住居 9	砂場ⅠA	SH-18	松本
竪穴住居 10	砂場ⅠA	SH-21(SK-31)	松本
竪穴住居 11	砂場ⅠA	SH-08	松本
竪穴住居 12	宮西	SH-10	古谷野
竪穴住居 13	砂場ⅡM	SH-01	浅倉
竪穴住居 14	砂場ⅡK	SH-03	浅倉
竪穴住居 15	砂場ⅡK	SH-02	浅倉
竪穴住居 16	砂場ⅡJ	住 2	古谷野
竪穴住居 17	砂場ⅡJ	住 5	古谷野
竪穴住居 18	砂場ⅡJ	住 1	古谷野
竪穴住居 19	砂場ⅡI	住08	古谷野
竪穴住居 20	砂場ⅡI	住12	古谷野
竪穴住居 21	砂場ⅡI	住02	古谷野
竪穴住居 22	砂場ⅡI	住05	古谷野
竪穴住居 23	砂場ⅡI	住04	古谷野
竪穴住居 24	砂場ⅡI	住07	古谷野
竪穴住居 25	砂場ⅡI	住06	古谷野
竪穴住居 26	砂場南水路 3	住 1	古谷野
竪穴住居 27	砂場ⅡO	SH-02	亀山
竪穴住居 28	砂場ⅡB	No.22住居	江見
竪穴住居 29	砂場ⅡC	No.68住居	江見
竪穴住居 30	砂場ⅡC	No.47住居	江見
竪穴住居 31	砂場ⅡC	No.48住居	江見
竪穴住居 32	砂場ⅡE	住22	平井
竪穴住居 33	砂場ⅡD	SH-05	松本
竪穴住居 34	砂場ⅡD	SH-07	松本
竪穴住居 35	砂場ⅡD	SH-11a·b	松本
竪穴住居 36	砂場ⅡD	SH-12	松本
竪穴住居 37	砂場ⅠA	SH-11	松本
竪穴住居 38	砂場ⅠA	SH-05'	松本
竪穴住居 39	砂場ⅠA	SH-17	松本
竪穴住居 40	砂場ⅠA	SH-09	松本
竪穴住居 41	砂場ⅠA	SH-02	松本
竪穴住居 42	砂場ⅠA	SH-10	松本
竪穴住居 43	砂場ⅠA	SH-04	松本
竪穴住居 44	砂場ⅠA	SH-12	松本
竪穴住居 45	砂場ⅠA	SH-14	松本
竪穴住居 46	砂場ⅠA	SH-15	松本
竪穴住居 47	砂場ⅠA	SH-16	松本
竪穴住居 48	砂場ⅠA	SH-20	松本
竪穴住居 49	宮西	SH-13	古谷野
竪穴住居 50	宮西	SH-03	古谷野
竪穴住居 51	宮西	SH-16	古谷野
竪穴住居 52	宮西	SH-11	古谷野
竪穴住居 53	砂場ⅡF	住 2	古谷野
竪穴住居 54	砂場ⅡK	SH-05	浅倉
竪穴住居 55	砂場ⅡK	SH-01	浅倉
竪穴住居 56	砂場ⅡA	住 8	古谷野
竪穴住居 57	砂場ⅡJ	住 4	古谷野
竪穴住居 58	砂場ⅡA	住 7	古谷野
竪穴住居 59	砂場ⅡI	住03	古谷野
竪穴住居 60	砂場ⅡA	住 3	古谷野
竪穴住居 61	砂場ⅡA	住 2	古谷野
竪穴住居 62	砂場ⅡH	住 5	古谷野
竪穴住居 63	砂場ⅡH(ⅡA)	住 6(住 4)	古谷野
竪穴住居 64	砂場ⅡH	住 2	古谷野
竪穴住居 65	砂場ⅡO	SH-03	亀山
竪穴住居 66	砂場ⅡO	SH-04	亀山
竪穴住居 67	砂場ⅡH	住 4 下層	古谷野
竪穴住居 68	砂場ⅡC	No.31住居	江見
竪穴住居 69	砂場ⅡC	No.42住居	江見
竪穴住居 70	砂場ⅡC	No.39住居	江見
竪穴住居 71	砂場ⅡB	No.19住居	江見
竪穴住居 72	砂場南水路 1	SH-05	松本
竪穴住居 73	砂場南水路 1	SH-06	松本
竪穴住居 74	宮西	SH-09	古谷野
竪穴住居 75	宮西	SH-14	古谷野

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
竪穴住居 76	宮西	SH-17	古谷野
竪穴住居 77	高田Ⅰ	No.19住居址	平井
竪穴住居 78	高田Ⅰ	No.20住居址	平井
竪穴住居 79	高田Ⅱ	No.047住居址	平井
竪穴住居 80	高田Ⅱ	No.118住居址	平井
竪穴住居 81	高田Ⅱ	No.073住居址	平井
竪穴住居 82	高田Ⅱ	No.066住居址	平井
竪穴住居 83	高田Ⅳ	No. 1 住居址	古谷野
竪穴住居 84	高田ⅡA	No.72住居址	平井
竪穴住居 85	高田Ⅱ	No.079住居址	平井
竪穴住居 86	砂場ⅢF	No. 2 住居	亀山
竪穴住居 87	砂場ⅢF	No. 1 住居	亀山
竪穴住居 88	砂場Ⅲd	No.32住居	岡本
竪穴住居 89	砂場Ⅲd	No.26住居	岡本
竪穴住居 90	砂場ⅡF	住 1	古谷野
竪穴住居 91	砂場ⅡA	住 1	古谷野
竪穴住居 92	砂場ⅡO	SH-01	亀山
竪穴住居 93	砂場ⅡI	住13	古谷野
竪穴住居 94	砂場ⅡI	住01	古谷野
竪穴住居 95	砂場ⅡH	住 3	古谷野
竪穴住居 96	砂場ⅡH	住 1	古谷野
竪穴住居 97	砂場ⅡG	No. 2 住居	平井
竪穴住居 98	砂場ⅡG	No. 4 住居	平井
竪穴住居 99	砂場ⅡG	No. 1 住居	平井
竪穴住居100	砂場ⅡC	No.61住居	江見
竪穴住居101	砂場ⅡC	No.59住居	江見
竪穴住居102	砂場ⅡC	No.14住居	江見
竪穴住居103	砂場ⅡB	No.11住居	江見
竪穴住居104	砂場ⅡC	No.15住居	江見
竪穴住居105	砂場ⅡB	No.10住居	江見
竪穴住居106	砂場ⅡB	No.12住居	江見
竪穴住居107	砂場ⅡB	No.20住居	江見
竪穴住居108	砂場ⅡC	No.36住居	江見
竪穴住居109	砂場ⅡD	SH-01	松本
竪穴住居110	砂場ⅡD	SH-02	松本
竪穴住居111	砂場ⅡD	SH-04	松本
竪穴住居112	砂場ⅡD	SH-14	松本
竪穴住居113	砂場ⅡD	SH-10	松本
竪穴住居114	砂場ⅡD	SH-09	松本
竪穴住居115	砂場ⅡD	SH-03	松本
竪穴住居116	砂場ⅡD	SH-06	松本
竪穴住居117	砂場ⅠA	SH-05	松本
竪穴住居118	砂場ⅡD	SH-08	松本
竪穴住居119	砂場ⅠB	SH-01	松本
竪穴住居120	砂場ⅠA	SH-06	松本
竪穴住居121	砂場ⅠA	SH-07	松本
竪穴住居122	砂場ⅠA	SH-03	松本
竪穴住居123	砂場ⅠA	SH-01	松本
竪穴住居124	砂場南水路 1	SH-03	松本
竪穴住居125	砂場南水路 1	SH-02	松本
竪穴住居126	砂場南水路 1	SH-01	松本
竪穴住居127	砂場南水路 1	SH-04	松本
竪穴住居128	宮西	SH-07	古谷野
竪穴住居129	宮西	SH-02	古谷野
竪穴住居130	宮西	SH-01	古谷野
竪穴住居131	宮西	SH-06	古谷野
竪穴住居132	宮西	SH-08	古谷野
竪穴住居133	宮西	SH-04	古谷野
竪穴住居134	宮西	SH-05	古谷野
竪穴住居135	宮西	SH-12	古谷野

遺構名称新旧対照表

掘立柱建物

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
掘立柱建物1	砂場ⅠA	SB-03	松本
掘立柱建物2	高田Ⅱ	No.062建物	平井
掘立柱建物3	高田Ⅱ	No.122建物	平井
掘立柱建物4	高田Ⅱ	No.054建物	平井
掘立柱建物5	高田Ⅰ	No.7建物	平井
掘立柱建物6	高田Ⅰ	No.7建物	平井
掘立柱建物7	砂場Ⅲd	No.25建物	岡本
掘立柱建物8	砂場Ⅲd	No.16建物	岡本
掘立柱建物9	砂場ⅡⅠ	No.1建物	古谷野
掘立柱建物10	砂場ⅡⅠ	No.2建物	古谷野
掘立柱建物11	砂場ⅠA	SB-02	松本
掘立柱建物12	砂場Ⅲa	No.08建物	岡本
掘立柱建物13	砂場Ⅲa	No.30建物	岡本
掘立柱建物14	砂場ⅡD	SB-01	松本
掘立柱建物15	砂場ⅡD	SB-02	松本
掘立柱建物16	砂場ⅡD	SB-02	松本
掘立柱建物17	砂場ⅠA	SB-04	松本
掘立柱建物18	砂場ⅠA	SB-01	松本

井戸

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
井戸1	砂場ⅠA	SE-02	松本
井戸2	高田Ⅱ	No.84井戸	平井
井戸3	砂場ⅡD	SE-02	松本
井戸4	砂場ⅠA	SE-01	松本
井戸5	砂場ⅠA	SE-04	松本
井戸6	砂場ⅡD	SE-01	松本

袋状土壙

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
袋状土壙1	砂場ⅡC	No.73袋状土壙	江見
袋状土壙2	砂場ⅡD	SK-09	松本
袋状土壙3	砂場ⅡD	SK-46	松本
袋状土壙4	砂場ⅡD	SK-23	松本
袋状土壙5	砂場ⅠA	SK-141	松本
袋状土壙6	砂場ⅠA	SK-133	松本
袋状土壙7	砂場ⅡD	SK-53	松本
袋状土壙8	砂場ⅡD	SK-52	松本
袋状土壙9	砂場ⅡD	SK-54	松本
袋状土壙10	砂場ⅡD	SK-26	松本
袋状土壙11	砂場ⅠA	SK-058	松本
袋状土壙12	砂場ⅠA	SK-044	松本
袋状土壙13	砂場ⅠA	SK-029	松本
袋状土壙14	砂場ⅠA	SK-089	松本
袋状土壙15	砂場ⅠA	SK-131	松本
袋状土壙16	砂場ⅠA	SK-093	松本
袋状土壙17	砂場ⅠA	SK-152	松本
袋状土壙18	砂場ⅠA	SK-061	松本
袋状土壙19	砂場ⅠA	SK-166	松本
袋状土壙20	砂場ⅡC	No.69袋状土壙	江見
袋状土壙21	砂場ⅡC	No.60袋状土壙	江見
袋状土壙22	砂場ⅡC	No.71袋状土壙	江見
袋状土壙23	砂場ⅡD	SK-02	松本
袋状土壙24	砂場ⅡD	SK-01	松本
袋状土壙25	砂場ⅡD	SK-40	松本
袋状土壙26	砂場ⅡD	SK-47	松本
袋状土壙27	砂場ⅡD	SK-34	松本
袋状土壙28	砂場ⅡD	SK-27	松本
袋状土壙29	砂場ⅡD	SK-57	松本
袋状土壙30	砂場ⅡD	SK-39	松本
袋状土壙31	砂場ⅡD	SK-31	松本
袋状土壙32	砂場ⅠA	SK-086	松本
袋状土壙33	砂場ⅠA	SK-065	松本
袋状土壙34	砂場ⅠA	SK-072	松本
袋状土壙35	砂場ⅠA	SK-057	松本
袋状土壙36	砂場ⅠA	SE-03	松本
袋状土壙37	砂場ⅠA	SK-046	松本
袋状土壙38	砂場ⅠA	SK-137	松本
袋状土壙39	砂場ⅠA	SK-125	松本
袋状土壙40	砂場ⅠA	SK-138	松本
袋状土壙41	砂場ⅠA	SK-052	松本
袋状土壙42	砂場ⅠA	SK-144	松本
袋状土壙43	砂場ⅠA	SK-155	松本
袋状土壙44	砂場ⅠA	SK-139A	松本
袋状土壙45	砂場ⅠA	SK-139B	松本
袋状土壙46	砂場ⅠA	SK-101	松本
袋状土壙47	砂場ⅠA	SK-129	松本
袋状土壙48	砂場ⅠA	SK-059	松本
袋状土壙49	砂場ⅠA	SK-051	松本
袋状土壙50	砂場ⅠA	SK-041	松本
袋状土壙51	砂場ⅠA	SK-050	松本
袋状土壙52	砂場ⅠA	SK-047	松本
袋状土壙53	砂場ⅠA	SK-160	松本
袋状土壙54	砂場ⅠA	SK-081	松本
袋状土壙55	砂場ⅠA	SK-115	松本
袋状土壙56	砂場ⅠA	SK-109	松本
袋状土壙57	砂場ⅠA	SK-163	松本
袋状土壙58	砂場ⅠA	SK-102	松本
袋状土壙59	砂場ⅠA	SK-105	松本
袋状土壙60	砂場ⅠA	SK-128	松本
袋状土壙61	砂場ⅠA	SK-123	松本
袋状土壙62	砂場ⅠA	SK-113	松本
袋状土壙63	砂場ⅠA	SK-108	松本
袋状土壙64	砂場ⅠA	SK-106	松本
袋状土壙65	砂場ⅠA	SK-091	松本
袋状土壙66	砂場ⅠA	SK-112	松本
袋状土壙67	砂場ⅠA	SK-124	松本
袋状土壙68	砂場ⅠA	SK-118	松本
袋状土壙69	砂場ⅠA	SK-110	松本
袋状土壙70	砂場ⅠA	SK-107	松本
袋状土壙71	砂場ⅠA	SK-170	松本
袋状土壙72	砂場ⅠA	SK-165	松本

焼成土壙

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
焼成土壙1	高田Ⅰ	No.50土壙	平井
焼成土壙2	高田Ⅰ	No.22焼成土壙	平井
焼成土壙3	砂場ⅢF	No.3焼成土壙	亀山
焼成土壙4	砂場ⅢF	No.2焼成土壙	亀山
焼成土壙5	砂場ⅢF	No.1焼成土壙	亀山
焼成土壙6	砂場ⅢH	SK-102	澤山
焼成土壙7	砂場ⅢH	SK-103	澤山
焼成土壙8	砂場ⅡC	No.25焼成土壙(炉状)	江見
焼成土壙9	砂場ⅡC	No.26焼成土壙(炉状)	江見
焼成土壙10	砂場ⅠA	SK-45	松本
焼成土壙11	宮西	SK-7	古谷野

土壙

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
土壙1	高田P9	No.6土壙	平井
土壙2	砂場ⅡF	土壙12	古谷野
土壙3	砂場ⅡF	土壙17	古谷野
土壙4	砂場ⅡF	土壙13	古谷野
土壙5	砂場ⅡF	土壙11	古谷野
土壙6	砂場ⅡF	土壙15	古谷野
土壙7	砂場ⅡF	土壙14	古谷野
土壙8	砂場ⅡF	土壙01	古谷野
土壙9	砂場ⅡF	土壙04	古谷野
土壙10	砂場ⅡF	土壙07	古谷野
土壙11	砂場ⅡF	土壙03	古谷野
土壙12	砂場南水路3	土壙6	古谷野
土壙13	砂場南水路3	土壙4	古谷野
土壙14	砂場南水路3	土壙3	古谷野
土壙15	砂場ⅡF	土壙05	古谷野
土壙16	砂場南水路3	土壙1	古谷野
土壙17	砂場ⅡK	SK-20	浅倉
土壙18	砂場ⅡK	SK-21	浅倉
土壙19	砂場ⅡK	SK-25	浅倉
土壙20	砂場ⅡK	SK-24	浅倉
土壙21	砂場ⅡK	SK-05	浅倉
土壙22	砂場ⅡJ	土壙15	古谷野
土壙23	砂場ⅡJ	土壙16	古谷野
土壙24	砂場ⅡJ	土壙13	古谷野
土壙25	砂場ⅡJ	土壙03	古谷野
土壙26	砂場ⅡJ	土壙09	古谷野
土壙27	砂場ⅡJ	土壙08	古谷野
土壙28	砂場ⅡJ	土壙14	古谷野
土壙29	砂場ⅡJ	土壙04	古谷野
土壙30	砂場ⅡJ	土壙01	古谷野
土壙31	砂場ⅡJ	土壙10	古谷野

遺構名称新旧対照表

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
土壙 32	砂場ⅡJ	土壙07	古谷野
土壙 33	砂場ⅡJ	土壙05	古谷野
土壙 34	砂場ⅡJ	土壙17	古谷野
土壙 35	砂場ⅡA	土壙11	古谷野
土壙 36	砂場ⅡA	土壙12	古谷野
土壙 37	砂場ⅡA	土壙10	古谷野
土壙 38	砂場ⅡA	土壙15	古谷野
土壙 39	砂場ⅡA	土壙05	古谷野
土壙 40	砂場ⅡA	土壙17	古谷野
土壙 41	砂場ⅡA	土壙03	古谷野
土壙 42	砂場ⅡI	土壙12	古谷野
土壙 43	砂場ⅡI	土壙05・06	古谷野
土壙 44	砂場ⅡI	土壙13	古谷野
土壙 45	砂場ⅡI	土壙11	古谷野
土壙 46	砂場ⅡI	土壙04	古谷野
土壙 47	砂場ⅡI	土壙01	古谷野
土壙 48	砂場ⅡI	土壙O7	古谷野
土壙 49	砂場ⅡI	土壙14	古谷野
土壙 50	砂場ⅡI	土壙03	古谷野
土壙 51	砂場ⅡI	土壙O8	古谷野
土壙 52	砂場ⅡH	土壙06	古谷野
土壙 53	砂場ⅡH	土壙07	古谷野
土壙 54	砂場ⅡH	土壙08	古谷野
土壙 55	砂場ⅡO	SK-06	亀山
土壙 56	砂場ⅡO	SK-05	亀山
土壙 57	砂場ⅡO	SK-02	亀山
土壙 58	砂場ⅡO	SK-07	亀山
土壙 59	砂場ⅡO	SK-08A	亀山
土壙 60	砂場ⅡO	SK-08B	亀山
土壙 61	砂場ⅡO	SK-10	亀山
土壙 62	砂場南水路 2	土壙 4	古谷野
土壙 63	砂場南水路 2	土壙 3	古谷野
土壙 64	砂場ⅡG	No.07土壙	平井
土壙 65	砂場ⅡG	No.08土壙	平井
土壙 66	砂場ⅡG	No.05土壙	平井
土壙 67	砂場ⅡG	No.06土壙	平井
土壙 68	砂場ⅡG	No.15土壙	平井
土壙 69	砂場ⅡG	No.14土壙	平井
土壙 70	砂場ⅡG	No.11土壙	平井
土壙 71	砂場ⅡG	No.23土壙	平井
土壙 72	砂場ⅡG	No.19土壙	平井
土壙 73	砂場ⅡG	No.20土壙	平井
土壙 74	砂場ⅡG	土壙17	古谷野
土壙 75	砂場ⅡG	No.18土壙	平井
土壙 76	砂場ⅡB	No.65土壙	江見
土壙 77	砂場ⅡC	No.64土壙	江見
土壙 78	砂場ⅡC	No.58土壙	江見
土壙 79	砂場ⅡC	No.63土壙	江見
土壙 80	砂場ⅡC	No.62土壙	江見
土壙 81	砂場ⅡC	No.45土壙	江見
土壙 82	砂場ⅡC	No.34土壙	江見
土壙 83	砂場ⅡC	No.38土壙	江見
土壙 84	砂場ⅡC	No.44土壙	江見
土壙 85	砂場ⅡC	No.40土壙	江見
土壙 86	砂場ⅡC	No.54土壙	江見
土壙 87	砂場ⅡB	No.13土壙	江見
土壙 88	砂場ⅡB	No.50土壙	江見
土壙 89	砂場ⅡB	No.18土壙	江見
土壙 90	砂場ⅡC	No.53土壙	江見
土壙 91	砂場ⅡC	No.49土壙	江見
土壙 92	砂場ⅡC	No.51土壙	江見
土壙 93	砂場ⅡC	No.52土壙	江見
土壙 94	砂場南水路 1	SK-16	松本
土壙 95	砂場南水路 1	SK-17	松本
土壙 96	砂場南水路 1	SK-11	松本
土壙 97	砂場南水路 1	SK-10	松本
土壙 98	砂場南水路 1	SK-18	松本
土壙 99	砂場南水路 1	SK-07	松本
土壙100	砂場南水路 1	SK-06	松本
土壙101	砂場ⅡD	SK-10	松本
土壙102	砂場ⅡD	SK-03	松本
土壙103	砂場ⅡD	SK-65	松本
土壙104	砂場ⅡD	SK-67	松本
土壙105	砂場ⅡD	SK-13	松本
土壙106	砂場ⅡD	SK-19	松本

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
土壙107	砂場ⅡD	SK-16	松本
土壙108	砂場ⅡD	SK-25	松本
土壙109	砂場ⅡD	SK-22	松本
土壙110	砂場ⅡD	SK-43	松本
土壙111	砂場ⅡD	SK-42	松本
土壙112	砂場ⅡD	SK-45	松本
土壙113	砂場ⅡD	SK-44	松本
土壙114	砂場ⅡD	SK-35	松本
土壙115	砂場ⅡD	SK-41	松本
土壙116	砂場ⅡD	SK-56	松本
土壙117	砂場ⅡD	SK-58	松本
土壙118	砂場ⅡD	SK-59	松本
土壙119	砂場ⅡD	SK-60	松本
土壙120	砂場ⅡD	SK-63	松本
土壙121	砂場ⅡD	SK-61	松本
土壙122	砂場ⅡD	SK-66	松本
土壙123	砂場ⅡD	SK-50	松本
土壙124	砂場ⅡD	SK-28	松本
土壙125	砂場ⅡE	No.46土壙	平井
土壙126	砂場ⅡE	No.52土壙	平井
土壙127	砂場ⅡE	No.54土壙	平井
土壙128	砂場ⅡE	No.53土壙	平井
土壙129	砂場ⅡE	No.44土壙	平井
土壙130	砂場ⅡE	No.55土壙	平井
土壙131	砂場ⅡE	No.38土壙	平井
土壙132	砂場ⅡE	No.29土壙	平井
土壙133	砂場ⅡE	No.34土壙	平井
土壙134	砂場ⅡE	No.35土壙	平井
土壙135	砂場ⅡE	No.63土壙	平井
土壙136	砂場ⅡE	No.60土壙	平井
土壙137	砂場ⅡE	No.61土壙	平井
土壙138	砂場ⅡE	No.62土壙	平井
土壙139	砂場ⅡE	No.25土壙	平井
土壙140	砂場ⅡE	No.33土壙	平井
土壙141	砂場ⅡE	No.50土壙	平井
土壙142	砂場ⅡE	No.59土壙	平井
土壙143	砂場ⅡE	No.57土壙	平井
土壙144	砂場ⅡE	No.56土壙	平井
土壙145	砂場ⅡE	No.32土壙	平井
土壙146	砂場ⅡE	No.41土壙	平井
土壙147	砂場ⅡE	No.30土壙	平井
土壙148	砂場ⅡE	No.47土壙	平井
土壙149	砂場ⅡE	No.23土壙	平井
土壙150	砂場ⅠA	SK-136	松本
土壙151	砂場ⅠA	SK-135	松本
土壙152	砂場ⅠA	SK-151	松本
土壙153	砂場ⅠA	SK-150	松本
土壙154	砂場ⅠA	SK-140	松本
土壙155	砂場ⅠA	SK-134	松本
土壙156	砂場ⅠA	SK-149	松本
土壙157	砂場ⅠA	SK-147	松本
土壙158	砂場ⅠA	SK-148	松本
土壙159	砂場ⅠA	SK-085	松本
土壙160	砂場ⅠA	SK-088	松本
土壙161	砂場ⅠA	SK-098	松本
土壙162	砂場ⅠA	SK-099	松本
土壙163	砂場ⅠA	SK-087	松本
土壙164	砂場ⅠA	SK-082	松本
土壙165	砂場ⅠA	SK-154	松本
土壙166	砂場ⅠA	SK-153	松本
土壙167	砂場ⅠA	SK-083	松本
土壙168	砂場ⅠA	SK-130	松本
土壙169	砂場ⅠA	SK-060	松本
土壙170	砂場ⅠA	SK-084	松本
土壙171	砂場ⅠA	SK-096	松本
土壙172	砂場ⅠA	SK-092	松本
土壙173	砂場ⅠA	SK-094	松本
土壙174	砂場ⅠA	SK-021	松本
土壙175	砂場ⅠA	SK-032	松本
土壙176	砂場ⅠA	SK-071	松本
土壙177	砂場ⅠA	SK-064	松本
土壙178	砂場ⅠA	SK-024	松本
土壙179	砂場ⅠA	SK-018	松本
土壙180	砂場ⅠA	SK-023	松本
土壙181	砂場ⅠA	SK-016	松本

遺構名称新旧対照表

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
土壙182	砂場ⅠA	SK-020	松本
土壙183	砂場ⅠA	SK-017	松本
土壙184	砂場ⅠA	SK-019	松本
土壙185	砂場ⅠA	SK-022	松本
土壙186	砂場ⅠA	SK-012	松本
土壙187	砂場ⅠA	SK-009	松本
土壙188	砂場ⅠA	SK-008	松本
土壙189	砂場ⅠA	SK-027	松本
土壙190	砂場ⅠA	SK-030	松本
土壙191	砂場ⅠA	SK-013	松本
土壙192	砂場ⅠA	SK-014	松本
土壙193	砂場ⅠA	SK-015	松本
土壙194	砂場ⅠA	SK-035	松本
土壙195	砂場ⅠA	SK-028	松本
土壙196	砂場ⅠA	SK-053	松本
土壙197	砂場ⅠA	SK-056	松本
土壙198	砂場ⅠA	SK-042	松本
土壙199	砂場ⅠA	SK-040	松本
土壙200	砂場ⅠA	SK-068	松本
土壙201	砂場ⅠA	SK-162	松本
土壙202	砂場ⅠA	SK-142	松本
土壙203	砂場ⅠA	SK-167	松本
土壙204	砂場ⅠA	SK-143	松本
土壙205	砂場ⅠA	SK-080	松本
土壙206	砂場ⅠA	SK-158	松本
土壙207	砂場ⅠA	SK-159	松本
土壙208	砂場ⅠA	SK-161	松本
土壙209	砂場ⅠA	SK-120	松本
土壙210	砂場ⅠA	SK-117	松本
土壙211	砂場ⅠA	SK-114	松本
土壙212	砂場ⅠA	SK-119	松本
土壙213	砂場ⅠA	SK-168	松本
土壙214	砂場ⅠA	SK-169	松本
土壙215	砂場ⅠA	SK-171	松本
土壙216	砂場ⅢH	SK-105	澤山
土壙217	砂場Ⅲa(北半)	No.32土壙	岡本
土壙218	砂場ⅡF	土壙02	古谷野
土壙219	砂場ⅡF	土壙08	古谷野
土壙220	砂場ⅡF	土壙16	古谷野
土壙221	砂場ⅡK	SK-16	浅倉
土壙222	砂場ⅡK	SK-22	浅倉
土壙223	砂場ⅡM	SK-01(土器溜り)	浅倉
土壙224	砂場ⅡK	SK-13	浅倉
土壙225	砂場南水路2	土壙1	古谷野
土壙226	砂場ⅡA	土壙13	古谷野
土壙227	砂場ⅡA	土壙14	古谷野
土壙228	砂場ⅡA	土壙08	古谷野
土壙229	砂場ⅡA	土壙01	古谷野
土壙230	砂場ⅡA	土壙16	古谷野
土壙231	砂場ⅡA	土壙04	古谷野
土壙232	砂場ⅡA	土壙07	古谷野
土壙233	砂場ⅡA	土壙06	古谷野
土壙234	砂場ⅡA	土壙02	古谷野
土壙235	砂場ⅡI	土壙15	古谷野
土壙236	砂場ⅡI	土壙09	古谷野
土壙237	砂場ⅡI	土壙02	古谷野
土壙238	砂場ⅡH	土壙10	古谷野
土壙239	砂場ⅡH	土壙09	古谷野
土壙240	砂場ⅡH	土壙01	古谷野
土壙241	砂場ⅡH	土壙04	古谷野
土壙242	砂場ⅡH	土壙02	古谷野
土壙243	砂場ⅡO	SK-03	亀山
土壙244	砂場ⅡO	SK-09	亀山
土壙245	砂場ⅡG	No.22土壙	平井
土壙246	砂場ⅡG	No.13土壙	平井
土壙247	砂場ⅡG	No.09土壙	平井
土壙248	砂場ⅡG	No.10土壙	平井
土壙249	砂場南水路1	SK-15	松本
土壙250	砂場南水路1	SK-19	松本
土壙251	砂場南水路1	SK-01	松本
土壙252	砂場ⅡC	No.33土壙	江見
土壙253	砂場ⅡB	No.16土壙	江見
土壙254	砂場ⅡC	No.70土壙	江見
土壙255	砂場ⅡB	No.09土壙	江見
土壙256	砂場ⅡB	No.21土壙	江見

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
土壙257	砂場ⅡB	No.24土壙	江見
土壙258	砂場ⅡC	No.30土壙	江見
土壙259	砂場ⅡB	No.55土壙	江見
土壙260	砂場ⅡE	No.36土壙	平井
土壙261	砂場ⅡE	No.27土壙	平井
土壙262	砂場ⅡE	No.28土壙	平井
土壙263	砂場ⅡE	No.26土壙	平井
土壙264	砂場ⅡE	No.11土壙	平井
土壙265	砂場ⅡE	No.58土壙	平井
土壙266	砂場ⅡE	No.24土壙	平井
土壙267	砂場ⅡD	SK-08	松本
土壙268	砂場ⅡD	SK-05	松本
土壙269	砂場ⅡD	SK-07	松本
土壙270	砂場ⅡD	SK-18	松本
土壙271	砂場ⅡD	SK-33	松本
土壙272	砂場ⅡD	SK-32	松本
土壙273	砂場ⅡD	SK-37	松本
土壙274	砂場ⅡD	SK-62	松本
土壙275	砂場ⅡD	SK-48	松本
土壙276	砂場ⅡD	SK-30	松本
土壙277	砂場ⅡD	SK-36	松本
土壙278	砂場ⅡD	SK-38	松本
土壙279	砂場ⅠA	SK-048	松本
土壙280	砂場ⅠA	SK-049	松本
土壙281	砂場ⅠA	SK-097	松本
土壙282	砂場ⅠA	SK-145	松本
土壙283	砂場ⅠA	SK-122	松本
土壙284	砂場ⅠA	SK-116	松本
土壙285	砂場ⅠA	SK-121	松本
土壙286	砂場ⅠA	SK-063	松本
土壙287	砂場ⅠA	SK-100	松本
土壙288	砂場ⅠA	SK-067	松本
土壙289	砂場ⅠA	SK-062	松本
土壙290	砂場ⅠA	SK-077	松本
土壙291	砂場ⅠA	SK-074	松本
土壙292	砂場ⅠA	SK-070	松本
土壙293	砂場ⅠA	SK-010	松本
土壙294	砂場ⅠA	SK-066	松本
土壙295	砂場ⅠA	SK-037	松本
土壙296	砂場ⅠA	SK-034	松本
土壙297	砂場ⅠA	SK-039	松本
土壙298	砂場ⅠA	SK-054	松本
土壙299	砂場ⅠA	SK-079	松本
土壙300	砂場ⅠA	SK-111	松本
土壙301	砂場ⅠA	SK-075	松本
土壙302	砂場ⅠA	SK-104	松本
土壙303	砂場ⅠA	SK-103	松本
土壙304	砂場ⅠA	SK-076	松本
土壙305	砂場ⅠB	SK-02	松本
土壙306	砂場ⅠB	SK-01	松本
土壙307	宮西	SK-03	古谷野
土壙308	宮西	SK-01	古谷野
土壙309	宮西	SK-04	古谷野
土壙310	宮西	SK-09	古谷野
土壙311	宮西	SK-14	古谷野
土壙312	宮西	SK-16	古谷野
土壙313	砂場ⅡA	土壙09	古谷野
土壙314	砂場ⅡC	No.56土壙	江見
土壙315	砂場ⅡC	No.32土壙	江見
土壙316	砂場ⅡC	No.46土壙	江見
土壙317	高田I	No.42土壙	平井
土壙318	砂場Ⅲd	No.37土壙	岡本
土壙319	砂場Ⅲd	No.36土壙	岡本
土壙320	砂場ⅢF	土壙2	亀山
土壙321	砂場ⅢF	土壙3	亀山
土壙322	砂場ⅢF	土壙1	亀山
土壙323	砂場ⅢF	土壙4	亀山
土壙324	砂場ⅢG	土壙1	亀山
土壙325	砂場Ⅲd	No.35土壙	岡本
土壙326	砂場ⅡG	No.12土壙	平井
土壙327	砂場ⅡC	No.72土壙(炉状)	江見
土壙328	砂場ⅡD	SX-01炉跡	松本
土壙329	砂場ⅡD	SK-21	松本
土壙330	砂場ⅡD	SK-15	松本
土壙331	砂場ⅠA	SK-036	松本

遺構名称新旧対照表

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
土壙332	砂場ⅠA	SK-007	松本
土壙333	砂場ⅠA	SK-078	松本
土壙334	宮西	SK-05	古谷野
土壙335	宮西	SK-17	古谷野
土壙336	高田P8	No.1土壙	平井
土壙337	高田Ⅰ	No.13土壙	平井
土壙338	高田ⅡA	No.63土壙	平井
土壙339	高田ⅡB	No.65土壙	平井
土壙340	高田ⅡB	No.74土壙	平井
土壙341	砂場Ⅲd	No.30土壙	岡本
土壙342	砂場Ⅲd	No.18土壙	岡本
土壙343	砂場Ⅲd	No.19土壙	岡本
土壙344	砂場Ⅲd	No.29土壙	岡本
土壙345	砂場Ⅲd	No.09土壙	岡本
土壙346	砂場Ⅲd	No.10土壙	岡本
土壙347	砂場Ⅲd	No.34土壙	岡本
土壙348	砂場Ⅲd	No.28土壙	岡本
土壙349	砂場Ⅲd	No.50土壙	岡本
土壙350	砂場Ⅲd	No.24土壙	岡本
土壙351	砂場Ⅲd	No.33土壙	岡本
土壙352	砂場Ⅲd	No.45土壙	岡本
土壙353	砂場ⅢH	SK-101	澤山
土壙354	砂場ⅢH	SK-104(SX-102内土壙)	澤山
土壙355	砂場ⅢH	SX-102	澤山
土壙356	砂場Ⅲa	No.28土壙	岡本
土壙357	砂場ⅡF	土壙09	古谷野
土壙358	砂場ⅡF	土壙06	古谷野
土壙359	砂場ⅡF	土壙10	古谷野
土壙360	砂場Ⅱ J	土壙06	古谷野
土壙361	砂場ⅡH	土壙05	古谷野
土壙362	砂場ⅡO	SK-11	亀山
土壙363	砂場南水路1	SK-09	松本
土壙364	砂場南水路1	SK-13	松本
土壙365	砂場南水路1	SK-08	松本
土壙366	砂場南水路1	SK-12	松本
土壙367	砂場ⅡB	No.04土壙	江見
土壙368	砂場ⅡB	No.05土壙	江見
土壙369	砂場ⅡB	No.03土壙	江見
土壙370	砂場ⅡB	No.23土壙	江見
土壙371	砂場ⅡB	No.08土壙	江見
土壙372	砂場ⅡB	No.02土壙	江見
土壙373	砂場ⅡB	No.01土壙	江見
土壙374	砂場ⅡB	No.06土壙	江見
土壙375	砂場ⅡE	No.06土壙	平井
土壙376	砂場ⅡE	No.14土壙	平井
土壙377	砂場ⅡE	No.45土壙	平井
土壙378	砂場ⅡE	No.13土壙	平井
土壙379	砂場ⅡE	No.03土壙	平井
土壙380	砂場ⅡE	No.49土壙	平井
土壙381	砂場ⅡE	No.02土壙	平井
土壙382	砂場ⅡD	SK-14	松本
土壙383	砂場ⅡD	SK-06	松本
土壙384	砂場ⅡD	SK-49	松本
土壙385	砂場ⅡD	SK-51	松本
土壙386	砂場ⅡD	SK-24	松本
土壙387	砂場ⅠA	SK-164	松本
土壙388	砂場ⅠA	SK-156	松本
土壙389	砂場ⅠA	SK-157	松本
土壙390	砂場ⅠA	SK-095	松本
土壙391	砂場ⅠA	SK-043	松本
土壙392	高田ⅡA	No.52土壙	平井
土壙393	高田ⅡA	No.53土壙	平井
土壙394	高田Ⅰ	No.02土壙	平井
土壙395	高田Ⅰ	No.08土壙	平井
土壙396	高田Ⅰ	No.04土壙	平井
土壙397	高田Ⅰ	No.03土壙	平井
土壙398	高田ⅡB	No.76土壙	平井
土壙399	高田ⅡB	No.67土壙	平井
土壙400	砂場Ⅲd	No.04土壙	岡本
土壙401	砂場Ⅲd	No.06土壙	岡本
土壙402	砂場Ⅲd	No.03土壙	岡本
土壙403	砂場Ⅲd	No.02土壙	岡本
土壙404	砂場Ⅲd	No.01土壙	岡本
土壙405	砂場Ⅲd	No.05土壙	岡本
土壙406	砂場Ⅲa(北半)	No.25土壙	岡本
土壙407	砂場Ⅲb	No.6土壙	岡本
土壙408	砂場Ⅲe	No.13土壙	岡本
土壙409	砂場Ⅲc	P-1	岡本
土壙410	砂場Ⅲc	P-2	岡本
土壙411	砂場Ⅲc	P-3	岡本
土壙412	砂場Ⅲc	P-4	岡本
土壙413	砂場Ⅱ J	土壙02	古谷野
土壙414	砂場ⅡO	SK-01	亀山
土壙415	砂場ⅡD	SK-17	松本
土壙416	砂場ⅡD	SK-11	松本
土壙417	砂場ⅠA	SK-001	松本
土壙418	砂場ⅠA	SK-002	松本
土壙419	砂場ⅠA	SK-003	松本
土壙420	砂場ⅠA	SK-004	松本
土壙421	砂場ⅠA	SK-038	松本
土壙422	砂場ⅠA	SK-011	松本
土壙423	砂場ⅠC	SK-01	古谷野
土壙424	砂場ⅠA	SX-01	松本
土壙425	砂場ⅡC	No.57土壙	江見
土壙426	砂場ⅡD	SK-12	松本

土壙墓

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
土壙墓1	砂場ⅡD	SK-64　土壙墓01	松本
土壙墓2	砂場ⅡE	No.39土壙墓	平井
土壙墓3	砂場ⅡE	No.48土壙墓	平井
土壙墓4	砂場ⅡE	No.40土壙墓	平井
土壙墓5	砂場ⅡD	SX-03　土壙墓02	松本
土壙墓6	高田Ⅰ	No.9土壙墓	平井
土壙墓7	高田Ⅰ	No.1土壙墓	平井
土壙墓8	高田ⅡB	No.78土壙墓	平井
土壙墓9	高田ⅡB	No.68土壙墓	平井
土壙墓10	高田ⅡB	No.71土壙墓	平井
土壙墓11	砂場ⅡG	No.3土壙墓	平井
土壙墓12	砂場ⅡE	No.01土壙墓	平井
土壙墓13	砂場北水路	SX-01	松本

土器棺墓

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
土器棺墓1	砂場ⅡD	SX-02土器棺	松本
土器棺墓2	砂場ⅡE	No.19壺棺	平井
土器棺墓3	砂場ⅡE	No.18壺棺	平井
土器棺墓4	砂場ⅡE	No.31壺棺	平井
土器棺墓5	砂場ⅡE	No.17壺棺	平井
土器棺墓6	砂場ⅡE	No.20壺棺	平井
土器棺墓7	砂場ⅡE	No.21壺棺	平井
土器棺墓8	砂場ⅡE	No.15壺棺	平井
土器棺墓9	砂場ⅡE	土器A	平井
土器棺墓10	砂場ⅡE	土器B	平井
土器棺墓11	砂場ⅡE	No.16壺棺	平井
土器棺墓12	砂場ⅡE	土器C	平井

火葬墓

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
火葬墓1	砂場ⅠA	SX-03	松本
火葬墓2	砂場ⅠA	SX-02	松本

柱穴列

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
柱穴列1	高田Ⅱ	No.126柱穴列	平井
柱穴列2～5	砂場ⅡE	P-25・26ほか	平井
柱穴列6	砂場Ⅰ・ⅡD	柵02	松本
柱穴列7	砂場Ⅰ	柵01	松本

遺構名称新旧対照表

柱穴

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
柱穴 1	砂場ⅡC	P-284	江見
柱穴 2	砂場ⅡD	C-988	松本
柱穴 3	砂場ⅡD	C-931	松本
柱穴 4	砂場ⅡD	C-957	松本
柱穴 5	砂場Ⅰ	C-865	松本
柱穴 6	砂場Ⅰ	C-219	松本
柱穴 7	砂場Ⅰ	C-695	松本
柱穴 8	砂場ⅡK	P-11	浅倉
柱穴 9	砂場Ⅰ	C-969	松本
柱穴10	砂場Ⅰ	C-840	松本
柱穴11	砂場Ⅰ	C-574	松本
柱穴12	砂場Ⅰ	C-863	松本
柱穴13	砂場Ⅰ	C-777	松本
柱穴14	砂場Ⅰ	C-849	松本
柱穴15	砂場北水路	C-89	松本
柱穴16	砂場北水路	C-82	松本
柱穴17	砂場ⅡF	P-25	古谷野
柱穴18	砂場南水路 2	P- 4	古谷野
柱穴19	砂場ⅡB	P-47	江見
柱穴20	砂場ⅡB	P-42	江見
柱穴21	砂場Ⅰ	C-088	松本
柱穴22	砂場Ⅰ	C-715	松本
柱穴23	砂場Ⅰ	C-703	松本
柱穴24	砂場Ⅰ	C-923	松本
柱穴25	高田Ⅰ	P-09	平井
柱穴26	高田Ⅰ	P-53	平井
柱穴27	高田Ⅰ	P-63	平井
柱穴28	高田ⅡB	P-111	平井
柱穴29	高田Ⅰ	P-49	平井
柱穴30	高田Ⅰ	P-87	平井
柱穴31	高田ⅡB	P-096	平井
柱穴32	高田ⅡB	P-102	平井
柱穴33	高田ⅡB	P-097	平井
柱穴34	高田ⅡB	P-113	平井
柱穴35	高田ⅡB	P-115	平井
柱穴36	砂場ⅡJ	Pit40	古谷野
柱穴37	砂場ⅡI	P-32	古谷野
柱穴38	砂場ⅡH	Pit21	古谷野
柱穴39	砂場ⅡG	P-27	平井
柱穴40	砂場南水路 2	P- 2	古谷野
柱穴41	砂場ⅡE	P-68	平井
柱穴42	砂場ⅡD	C-413	松本
柱穴43	砂場ⅡD	C-152	松本
柱穴44	砂場ⅡD	C-304	松本
柱穴45	砂場ⅡD	C-610	松本
柱穴46	砂場ⅡD	C-230	松本
柱穴47	砂場ⅡD	C-089	松本
柱穴48	砂場ⅡD	C-079	松本
柱穴49	砂場ⅡD	C-322	松本
柱穴50	砂場ⅡD	C-295	松本
柱穴51	砂場Ⅰ	C-370	松本
柱穴52	砂場ⅡD	C-514	松本
柱穴53	砂場ⅡD	C-106	松本

土器溜り

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
土器溜り 1	砂場ⅡJ	土器溜り	古谷野
土器溜り 2	砂場ⅡK	土壙 4	浅倉
土器溜り 3	砂場南水路 1	SK-14	松本

溝

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
溝 1	高田P 7	No. 3 溝	平井
溝 2	高田P 8	No.11溝	平井
溝 3	砂場Ⅲc		平井
溝 4	砂場南水路 3	溝 2	古谷野
溝 5	砂場ⅡK	溝 4	浅倉
溝 6	砂場ⅡA	溝 6	古谷野
溝 7	砂場ⅡA	溝 7	古谷野
溝 8	高田P 8	No.10溝	平井
溝 9	砂場ⅢH	SD-107	澤山
溝 10	砂場ⅢH	SD-106	澤山
溝 11	砂場ⅢH	SD-105	澤山
溝 12	砂場ⅡK	溝 3	浅倉
溝 13	砂場南水路 3	溝 1	古谷野

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
溝 14	砂場ⅡD	SD-12	松本
溝 15	砂場Ⅰ	SD-05	松本
溝 16	砂場ⅠB	SD-02	松本
溝 17	砂場Ⅰ	SD-12	松本
溝 18	宮西	SD-01	古谷野
溝 19	砂場Ⅲc	No.16溝	岡本
溝 20	砂場ⅡA	溝 5	古谷野
溝 21	砂場ⅡD	SD-04	松本
溝 22	砂場ⅡD・ⅡE	"SD-08・No. 7 ,10溝"	松本・平井
溝 23	砂場ⅡD	SD-09	松本
溝 24	砂場Ⅰ	SD-09	松本
溝 25	砂場Ⅰ	SD-06	松本
溝 26	砂場Ⅰ	SD-13	松本
溝 27	宮西	SD-02	古谷野
溝 28	高田P 7	No. 2 溝	平井
溝 29	高田P 8	No.07溝	平井
溝 30	高田Ⅰ	No.16溝	平井
溝 31	高田Ⅰ・Ⅱ	"No.15,17溝"	平井
	砂場Ⅲd・ⅢH	SD-103	岡本・澤山
溝 32	高田Ⅰ	No.18溝	平井
溝 33	高田Ⅰ	No.17溝	平井
溝 34	高田Ⅰ・Ⅱ	No.47溝	平井
	砂場Ⅲd・ⅢF・ⅢG・ⅢH	溝 7・SD-102	岡本・亀山・澤山
溝 35	高田Ⅰ	No.45溝	平井
溝 36	高田Ⅱ	No.121溝	平井
溝 37	砂場ⅡA	溝 4	古谷野
溝 38	砂場Ⅰ・ⅡE	SD-04・No. 8 溝	松本・平井
溝 39	砂場北水路	SD-01	松本
溝 40	高田Ⅰ	No.23溝	平井
溝 41	高田Ⅱ	No.085溝	平井
溝 42	砂場ⅢF	溝 3	亀山
溝 43	砂場Ⅲd・ⅢF・ⅢG・ⅢH	溝 4・SD-101	岡本・亀山・澤山
溝 44	砂場Ⅲd・ⅢF・ⅢG・ⅢH	No.40溝	岡本・亀山・澤山
溝 45	砂場Ⅲc・Ⅲd・Ⅲe	No.08・38・14溝	岡本
溝 46	砂場ⅡC	No.07溝	江見
溝 47	砂場ⅡC	No.07溝	江見
溝 48	砂場ⅡD	SD-11	松本
溝 49	砂場ⅡD	SD-10	松本
溝 50	砂場ⅡD	たわみ 1	松本
溝 51	砂場Ⅰ	SD-08	松本
溝 52	砂場Ⅰ	SD-10	松本
溝 53	砂場Ⅰ	SD-11	松本
溝 54	砂場南水路 1	SD-02	松本
溝 55	砂場南水路 1	SD-01	松本
溝 56	砂場北水路	SD-03	松本
溝 57	高田P 7	No. 1 溝	平井
溝 58	高田P 8	No.04溝	平井
溝 59	高田P 9	No. 2 溝	平井
溝 60	高田Ⅰ	No.14溝	平井
溝 61	高田Ⅱ	No.055溝	平井
溝 62	高田Ⅱ	No.056溝	平井
溝 63	高田Ⅱ	No.057溝	平井
溝 64	高田Ⅱ	No.058溝	平井
溝 65	高田Ⅱ	No.059溝	平井
溝 66	高田Ⅱ	No.060溝	平井
溝 67	高田Ⅱ	No.061溝	平井
溝 68	高田Ⅰ	No.06溝	平井
溝 69	高田Ⅱ	No.081溝	平井
溝 70	高田Ⅱ	No.080溝	平井
溝 71	高田Ⅱ	No.075溝	平井
溝 72	高田Ⅱ・Ⅲ	No.064溝	平井
	砂場Ⅲ.d	No.14溝	岡本
溝 73	砂場Ⅲa・Ⅲc・Ⅲd・Ⅲe	No.01・21・22溝	岡本
溝 74	砂場Ⅲe	No.03溝	岡本
溝 75	砂場Ⅲe	No.12,26溝	岡本
溝 76	砂場Ⅲa	No.16溝	岡本
溝 77	砂場Ⅲa	No.02,03,04,08溝	岡本
溝 78	砂場Ⅲa	No.09溝	岡本
溝 79	砂場ⅡL	溝 1	浅倉
溝 80	砂場ⅡA	溝 3	古谷野
溝 81	砂場ⅡA	溝 2	古谷野
溝 82	砂場ⅡA	溝 1	古谷野
溝 83	砂場ⅡA		古谷野
溝 84	砂場ⅡK	畝状遺構他	浅倉
溝 85	砂場ⅡK	畝状遺構他	浅倉

遺構名称新旧対照表

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
溝86	砂場ⅡK	畝状遺構他	浅倉
溝87	砂場ⅡK	畝状遺構他	浅倉
溝88	砂場Ⅱj	溝2	古谷野
溝89	砂場ⅡO	溝5	亀山
溝90	砂場ⅡO	溝4	亀山
溝91	砂場ⅡO	溝3	亀山
溝92	砂場ⅡO	溝1	亀山
溝93	砂場ⅡO	溝7	亀山
溝94	砂場ⅡO	溝6	亀山
溝95	砂場ⅡB	No.27溝	江見
溝96	砂場ⅡB・ⅡD	No.28溝・SD-01	江見・松本
溝97	砂場ⅡB	No.29溝	江見
溝98	砂場Ⅰ	SD-07A	松本
溝99	砂場Ⅰ	SD-07B	松本
溝100	砂場Ⅰ	SD-02	松本
溝101	砂場ⅡD・ⅡE	SD-05,06,07・No.4溝	松本・平井
溝102	砂場Ⅰ・ⅠB・ⅡD	SD-03・01・02	松本
溝103	砂場ⅢF	近世大溝	亀山
溝104	砂場Ⅲa	No.1近世溝	岡本
溝105	砂場Ⅲe	No.01溝	岡本
溝106	砂場Ⅲa	No.05溝	岡本
溝107	砂場Ⅲa	No.06溝	岡本
溝108	砂場Ⅲa	No.07溝	岡本
溝109	砂場Ⅲd	近世用水	岡本
溝110	砂場Ⅰ	SD-01	松本

道路状遺構

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
道路状遺構1	高田Ⅰ・ⅡB	No.24～41溝・No.85～116溝	平井
	砂場ⅢF・ⅢG	なし	亀山
道路状遺構2	砂場ⅢH	SA-101	澤山

水田

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
水田1	砂場Ⅲ		岡本・亀山
水田2	砂場ⅢF・ⅢG	水田	亀山
水田3	高田P7～9		平井
水田4	砂場Ⅲ		岡本・亀山
水田5	砂場Ⅲ		岡本・亀山

畑

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
畑(上層)	砂場Ⅲb・Ⅲc・Ⅲe	No.13～19・No.01～04・No.04～08,19～21	岡本
畑(下層)	砂場Ⅲa・Ⅲb・Ⅲc・Ⅲe	No.09～15,29,31・No.20～36・No.05～15,39・No.14～18	岡本

低位部

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
低位部1	高田Ⅰ	No.10・11・12下がり	平井
低位部2	高田Ⅰ・ⅡB	No.05下がり・No.77下がり	平井

河道

掲載遺構名	調査区	旧遺構名	調査担当者
河道	砂場ⅠA・ⅠC	東斜面・旧河道	松本・古谷野

写　　真

写真　1

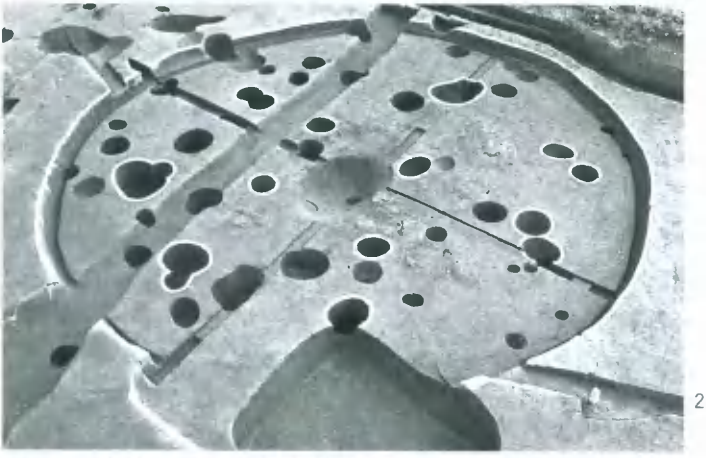
1　砂場調査区
作業風景
（南東から）

2　竪穴住居 2
（東から）

3　竪穴住居 6
（東から）

写真　2

1　竪穴住居11
（北西から）

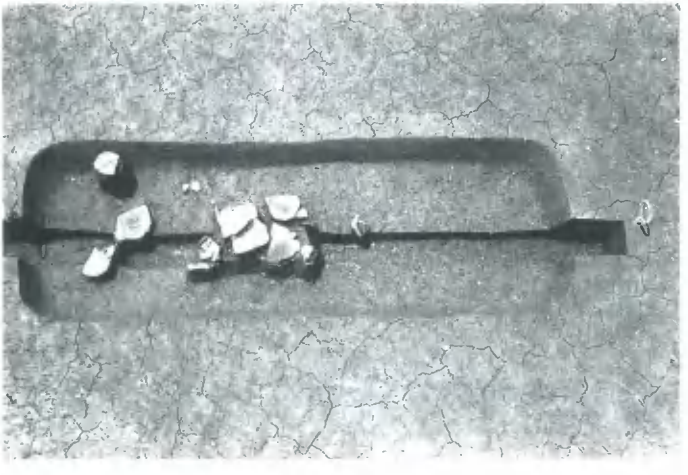


2　竪穴住居12
（北から）

3　掘立柱建物１
（北から）

1　袋状土壙５
　　埋土断面
　　（東から）

2　袋状土壙６
　　（北西から）



3　土壙１
　　遺物出土状況
　　（南東から）

写真　4

1　土壙5
貝出土状況
（西から）

2　土壙16
貝層断面
（北から）

3　土壙64
貝出土状況
（北西から）

1　土壙75
遺物出土状況
（南から）

2　土壙76
貝層断面
（北西から）

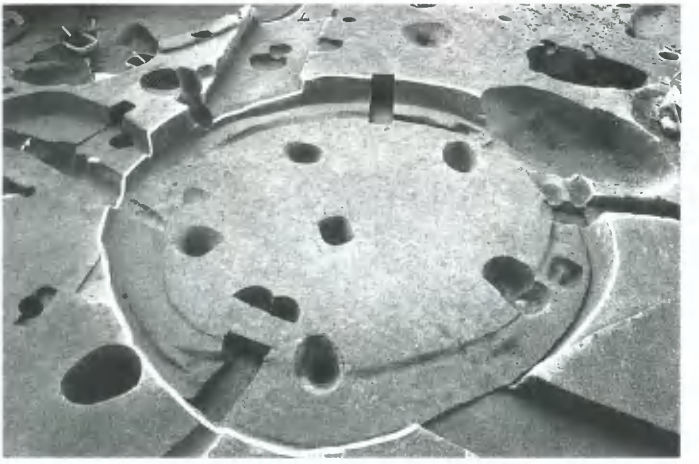
3　土壙88
埋土断面
（南東から）

写真　6

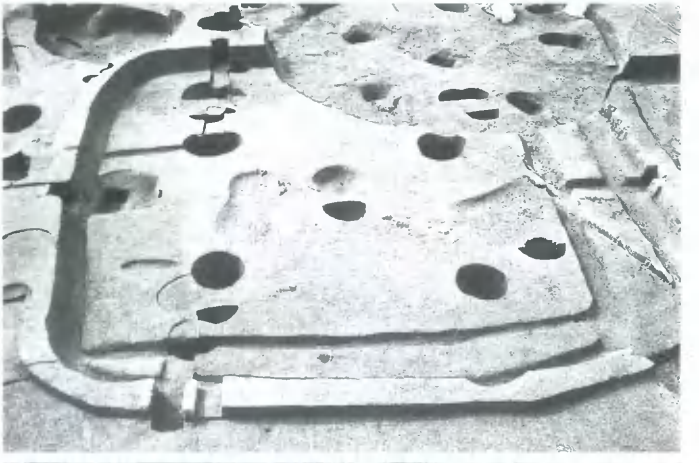
1　土壙102
埋土断面
（南西から）

2　土壙墓１
（北から）

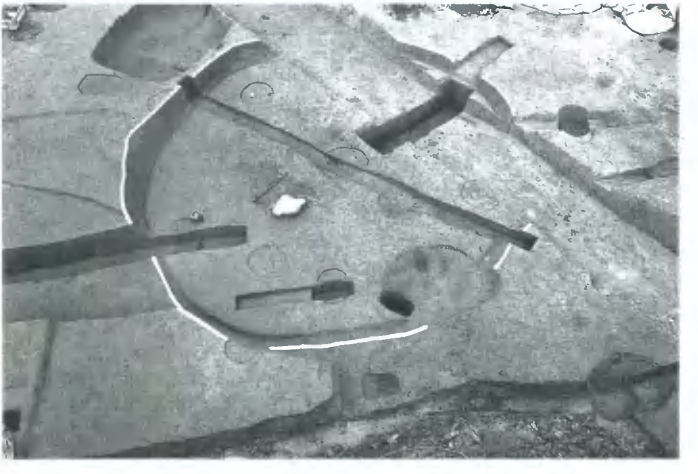
3　土壙墓４
人骨出土状況
（北西から）



1　竪穴住居15
（北西から）



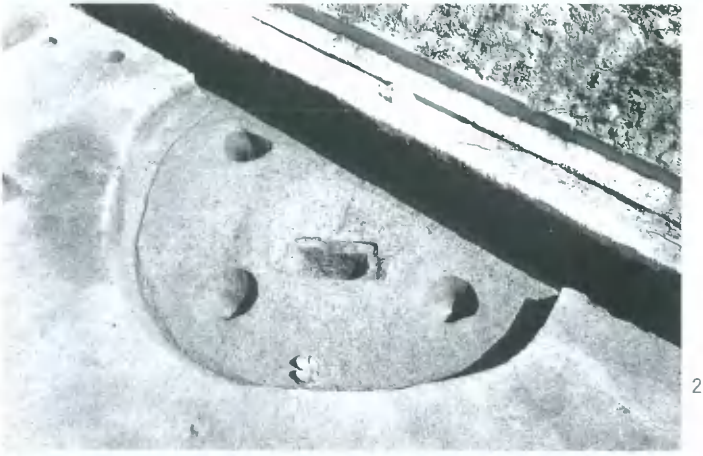
2　竪穴住居16
（北東から）



3　竪穴住居24
（西から）

写真　8

1　竪穴住居27
遺物出土状況
（南から）



2　竪穴住居27
（南から）

3　竪穴住居28
（北西から）

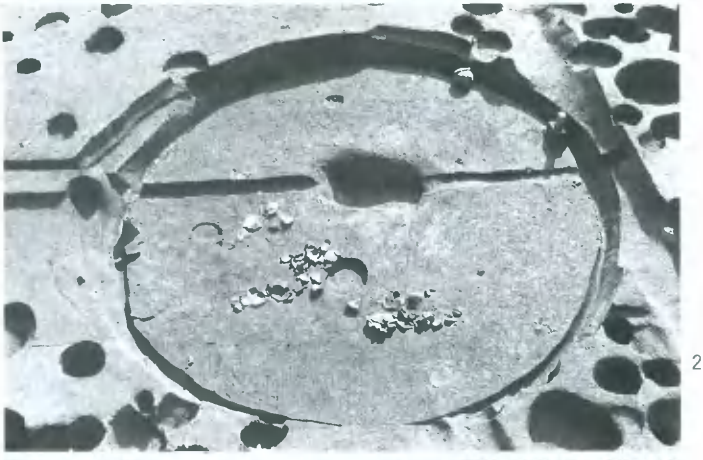
1　竪穴住居29
断面
（南東から）

2　竪穴住居35
（南から）

3　竪穴住居35
銅鏃出土状況

写真 10

1　竪穴住居36
調査風景
（南西から）



2　竪穴住居36
遺物出土状況
（北から）

3　竪穴住居40
炭化材出土状況
（北から）

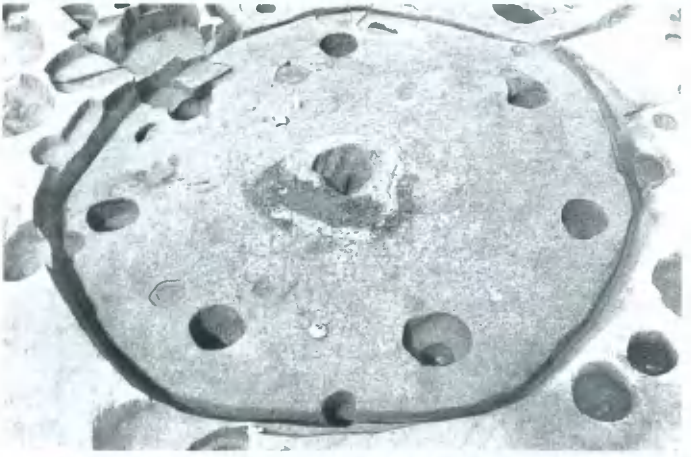
1　竪穴住居43
（北西から）

2　竪穴住居44
（北西から）

3　竪穴住居44
銅釧出土状況
（北西から）

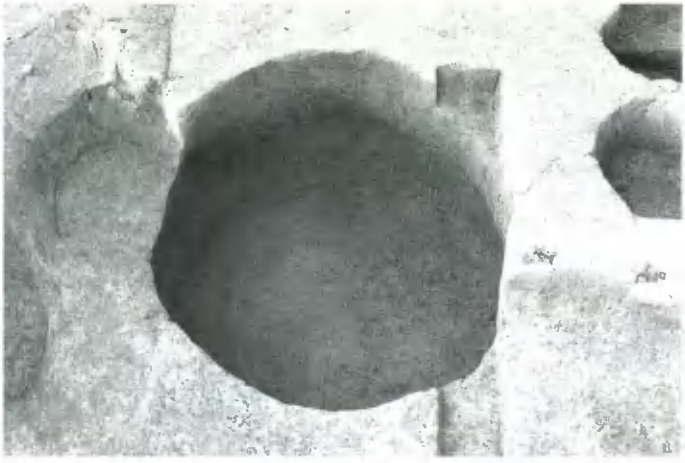
写真 12

1　竪穴住居46
（南東から）



2　竪穴住居47
（南東から）

3　袋状土壙24
埋土断面
（南西から）



1　袋状土壙26
（南東から）

2　袋状土壙28
遺物出土状況
（東から）

3　袋状土壙29
（南から）

写真 14

1　袋状土壙40
（北西から）

2　袋状土壙52
埋土断面
（西から）

3　袋状土壙61
埋土断面
（北西から）

1　土壙216
（南から）

2　土壙224
遺物出土状況
（東から）

3　土壙239
遺物出土状況
（西から）

写真 16

1　土壙254
遺物出土状況
（北東から）

2　土壙262
埋土断面
（南から）

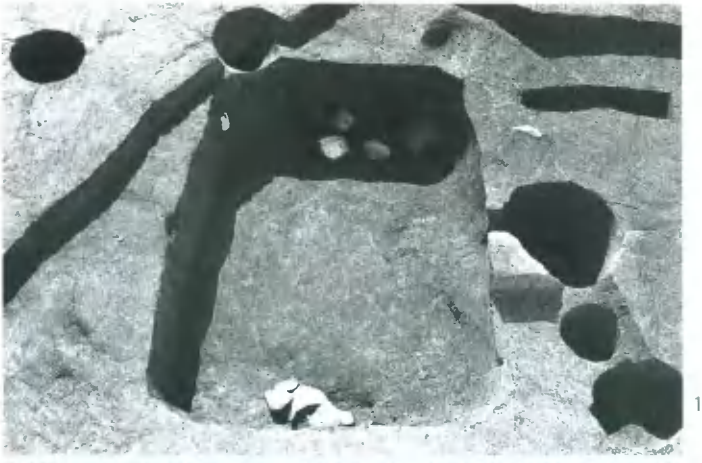
3　土壙264
遺物出土状況
（北から）

1　土壙310
遺物出土状況
（西から）

2　土壙310
（北から）

3　土壙310
銅釧出土状況
（東から）

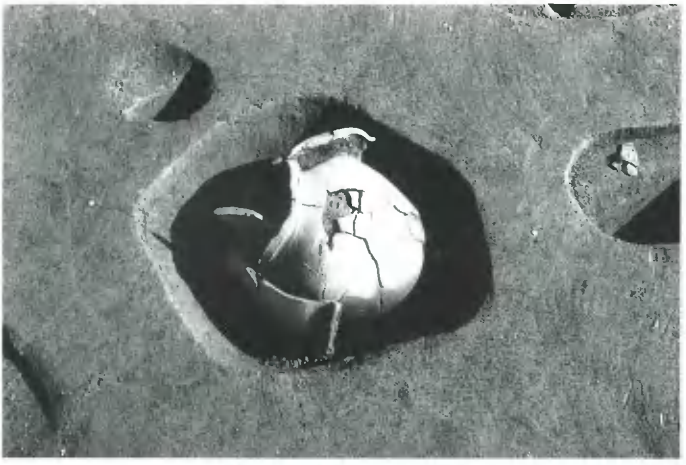
写真 18



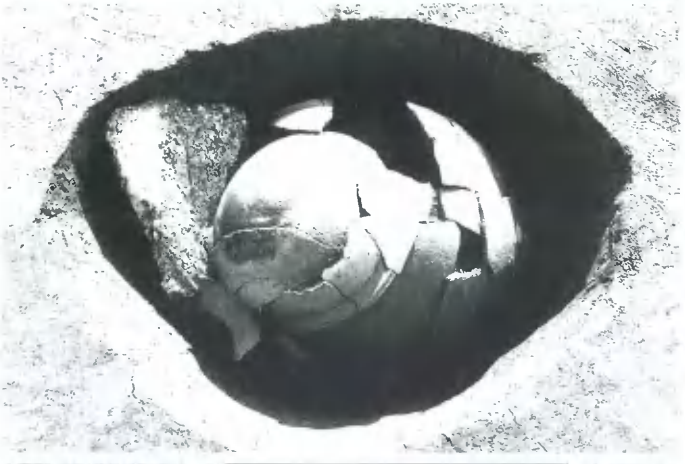
1　土壙墓 5
（北から）

2　土器棺墓 2 ～12
（南から）

3　土器棺墓
3 ～ 6 ・ 8 ～12
（南から）



1　土器棺墓 2
（北西から）

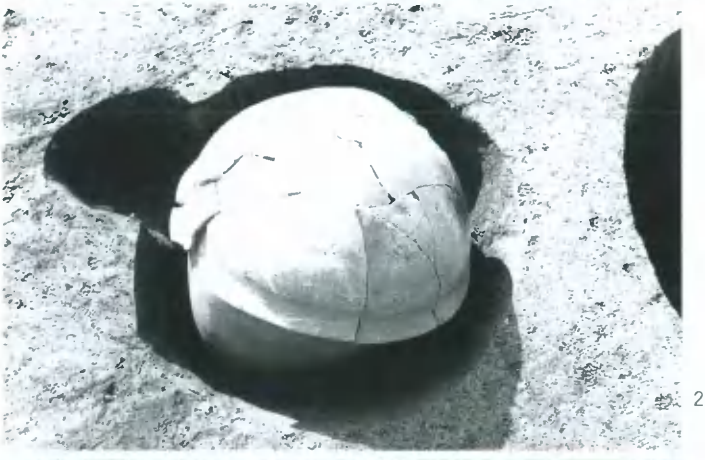


2　土器棺墓 3
（北東から）

3　土器棺墓 5
（北から）

写真 20

1　土器棺墓 6
（南東から）



2　土器棺墓 8
（東から）

3　土器棺墓 5（左）・11（右）
（東から）

1　土器溜り2
遺物出土状況
（南東から）

2　溝15
埋土断面
（南東から）

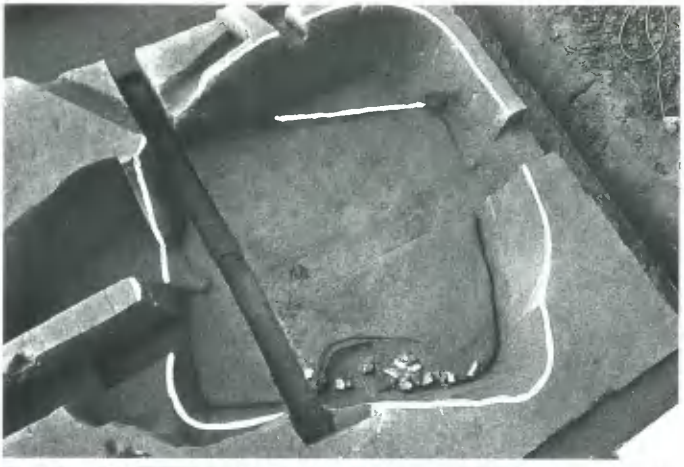
3　溝9・10、水田4
（東から）

写真 22

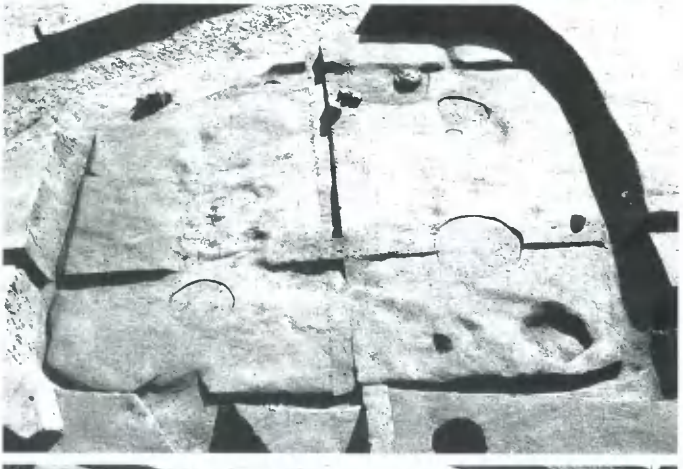
1　水田 4
島状高まり
（西から）

2　水田 3 ～
断面
（北西から）

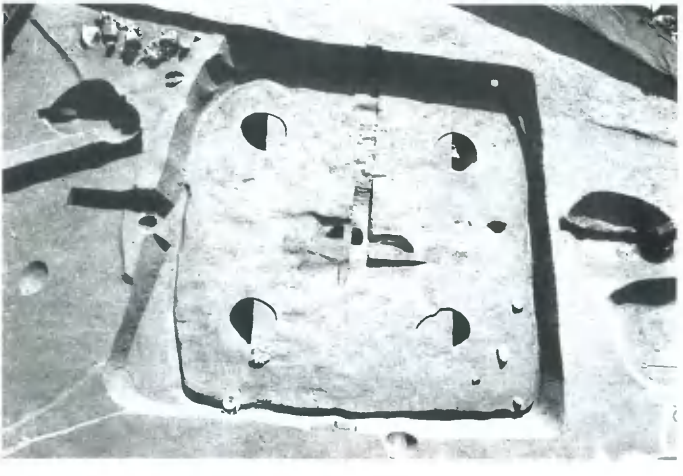
3　水田 3 ～
断面
（南西から）



1　竪穴住居57
（南東から）

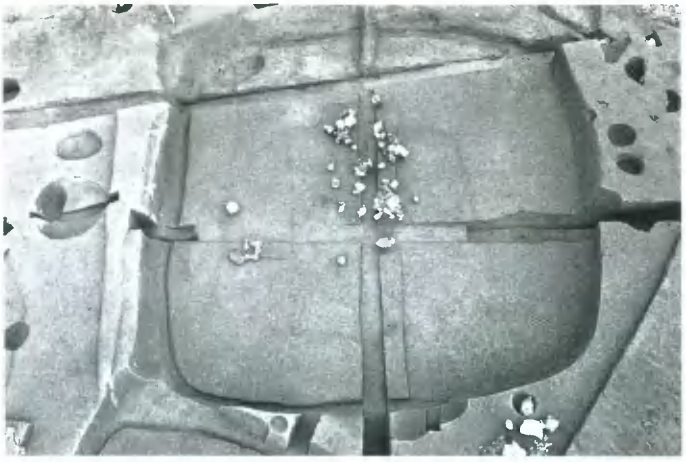


2　竪穴住居59
（北西から）

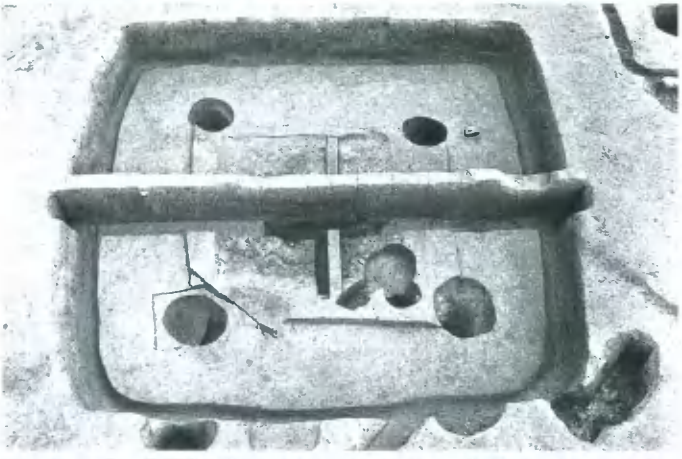


3　竪穴住居64
（北から）

写真 24

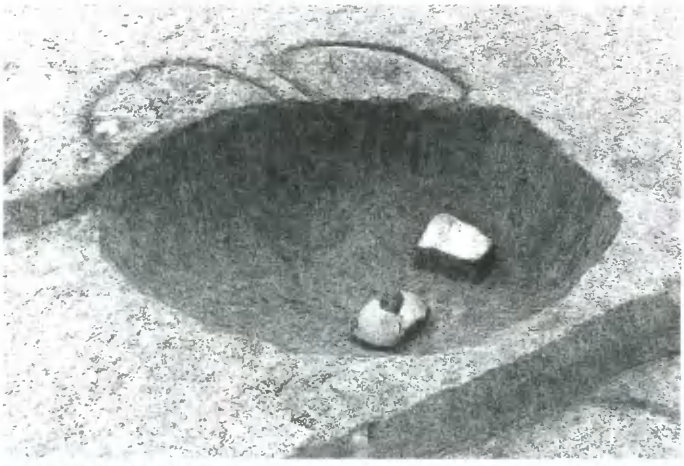


1　竪穴住居67
遺物出土状況
（南西から）



2　竪穴住居68
断面
（南西から）

3　竪穴住居69
（南から）



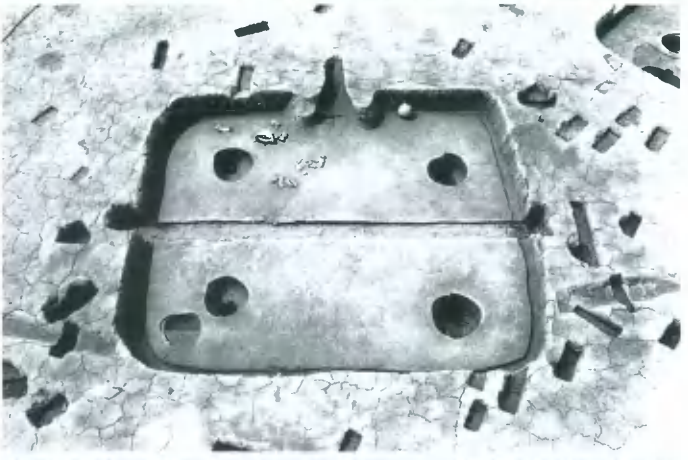
1　土壙314
（南西から）

2　溝19
（南から）

3　溝24・25
断面
（南東から）

写真 26

1　竪穴住居78～81
（南西から）

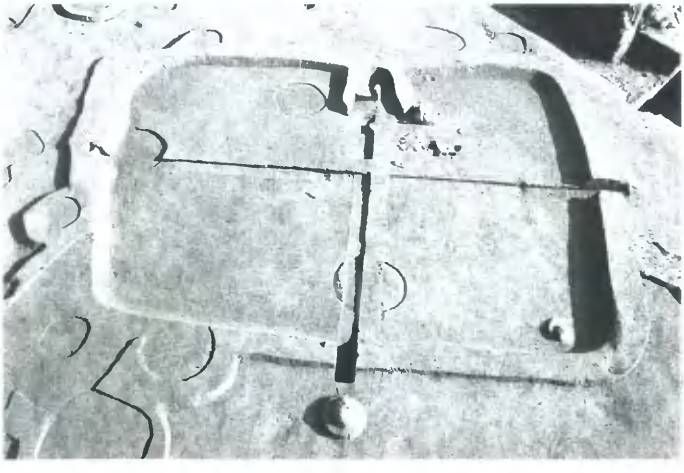


2　竪穴住居78
（南から）

3　竪穴住居81
（南西から）

1　竪穴住居87
遺物出土状況
（南西から）

2　竪穴住居87
（南西から）

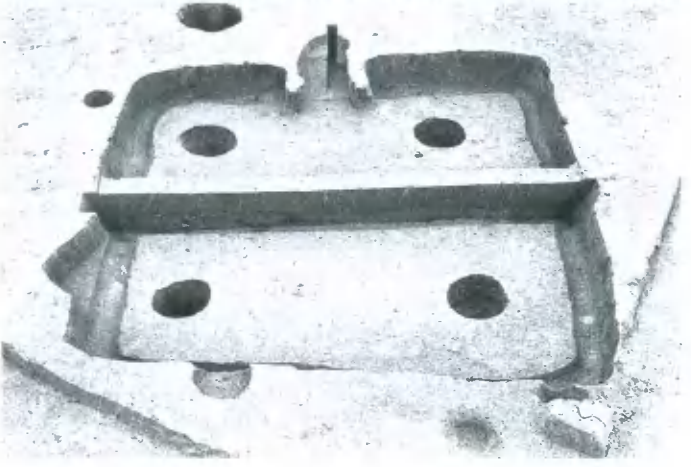


3　竪穴住居94
（西から）

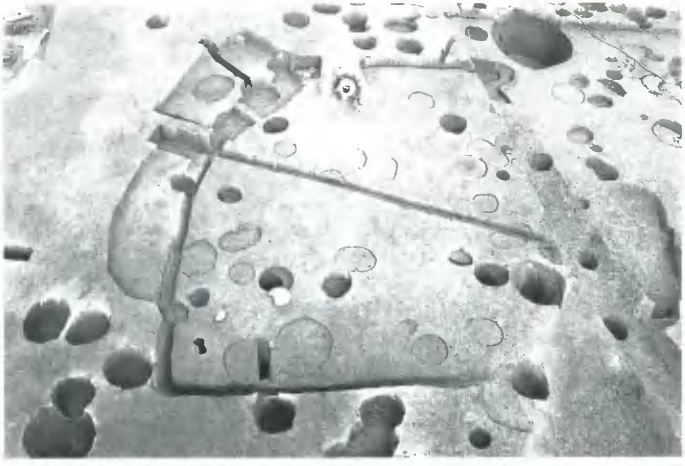
写真 28

1　竪穴住居98
（北西から）

2　竪穴住居98
馬歯出土状況
（西から）



3　竪穴住居106
埋土断面
（南から）



1　竪穴住居113
（南から）

2　竪穴住居113
カマド内土器
（南から）

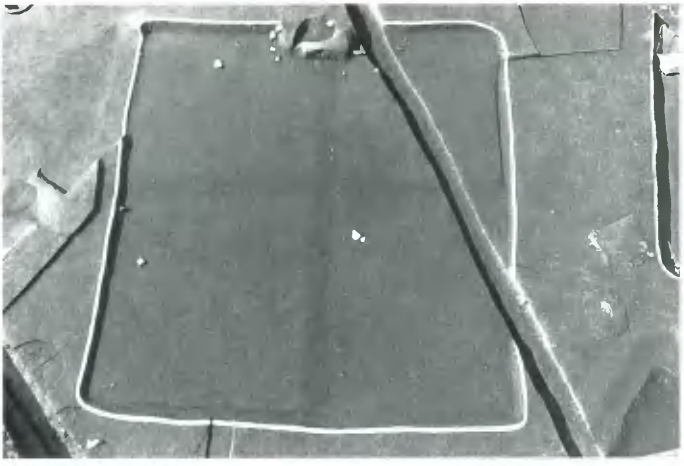
3　竪穴住居113
カマド
（南から）

写真 30

1　竪穴住居121
（南から）

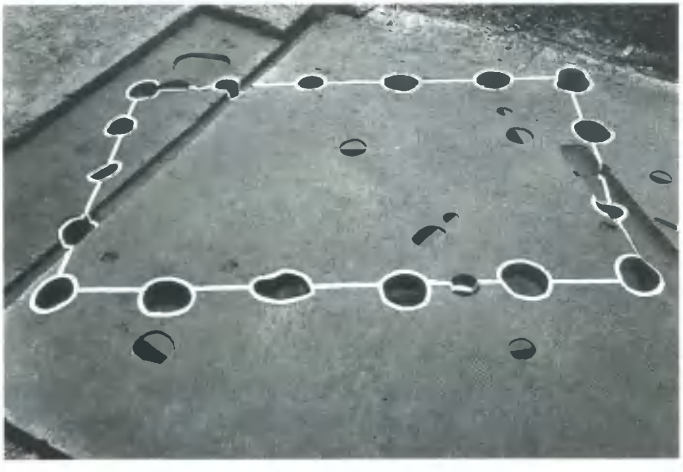
2　竪穴住居121
カマド燃焼部
（南から）

3　竪穴住居121
カマド
（南から）



1　竪穴住居130
（南東から）

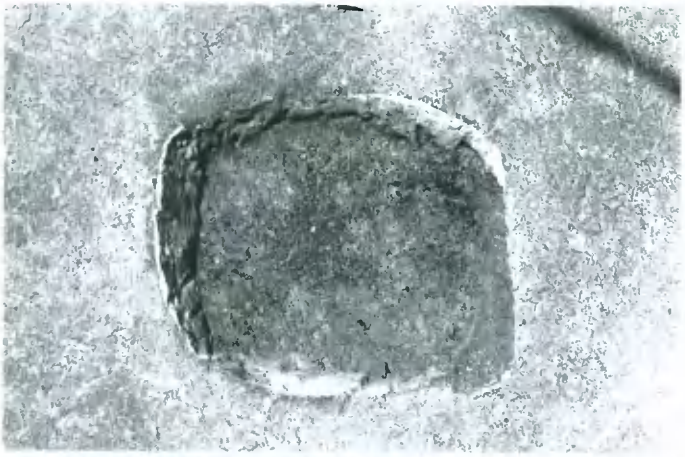
2　竪穴住居133
（南東から）



3　掘立柱建物２
（北西から）

写真 32

1　掘立柱建物 3
（北から）



2　焼成土壙 2
（南東から）

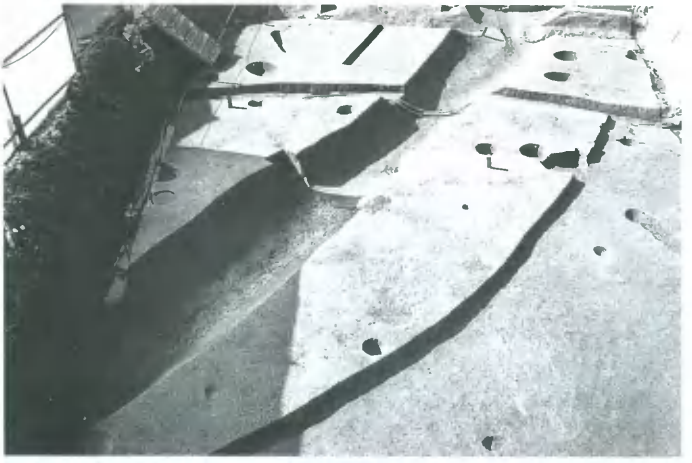
3　焼成土壙 6
（南東から）

1　焼成土壙８
（南西から）

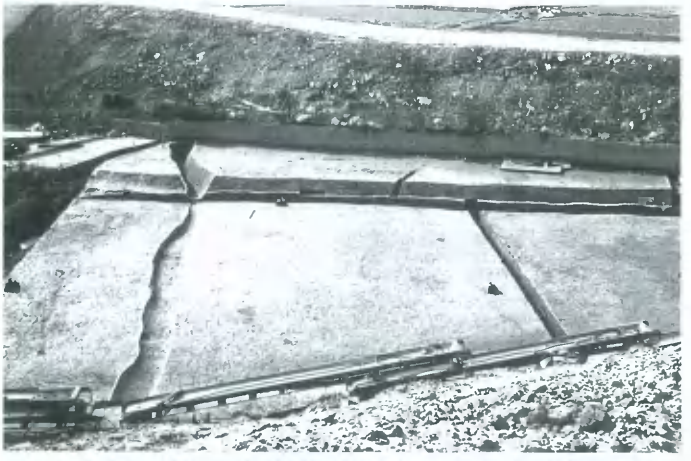
2　焼成土壙11
（南から）

3　溝30
（北東から）

写真 34

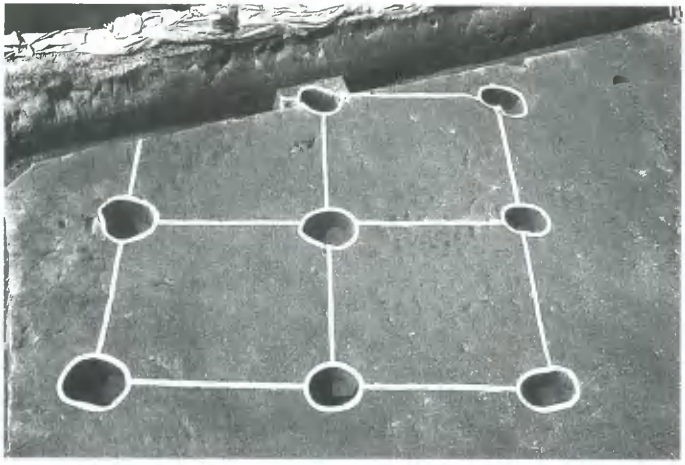


1　溝31
（北東から）

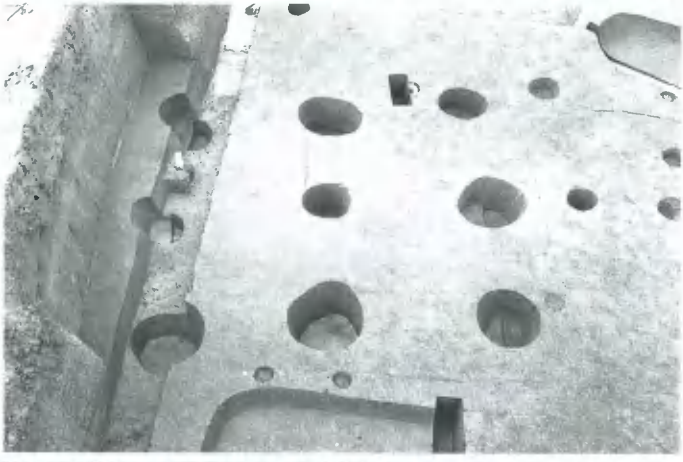


2　溝34
（南東から）

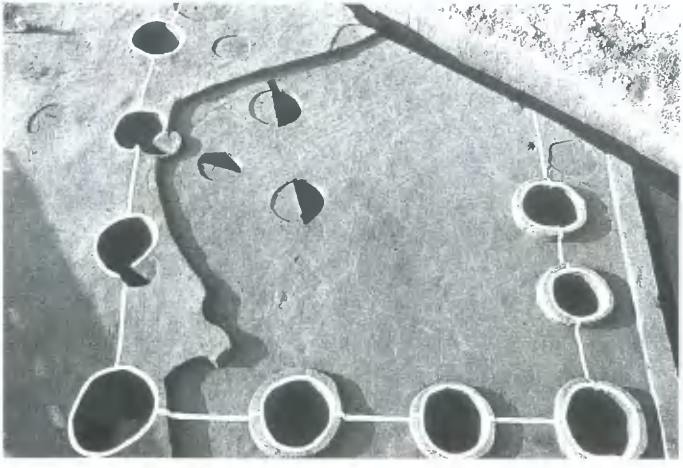
3　溝34
断面
（南西から）



1　掘立柱建物 4
（南から）

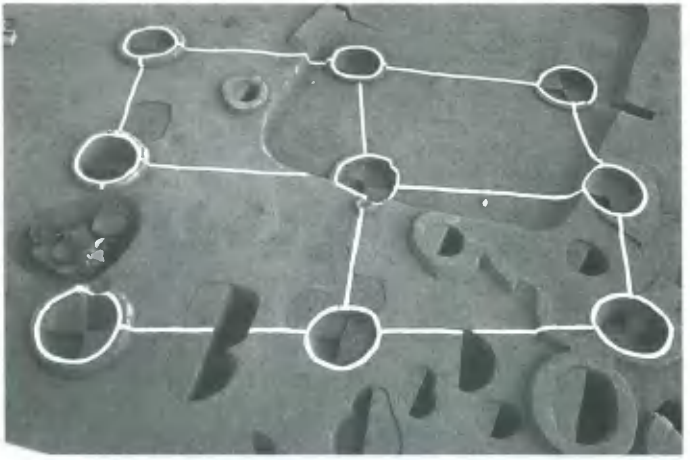


2　掘立柱建物 8
（北東から）

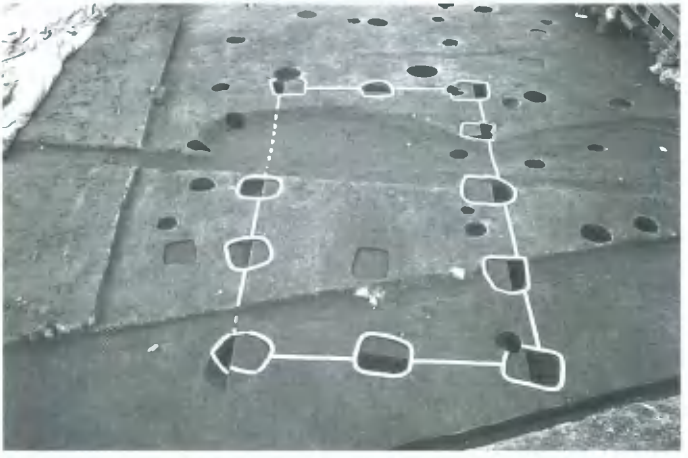


3　掘立柱建物 9
（南東から）

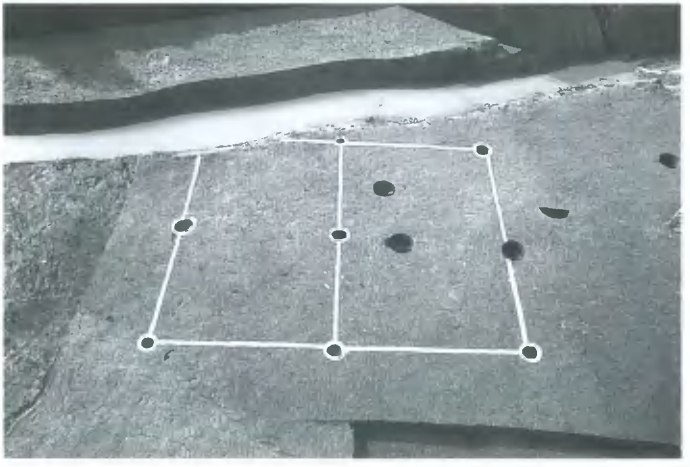
写真 36



1　掘立柱建物10
（北西から）



2　掘立柱建物11
（北から）



3　掘立柱建物12
（南東から）

1　井戸 3
断面
（南から）

2　井戸 5
（北西から）

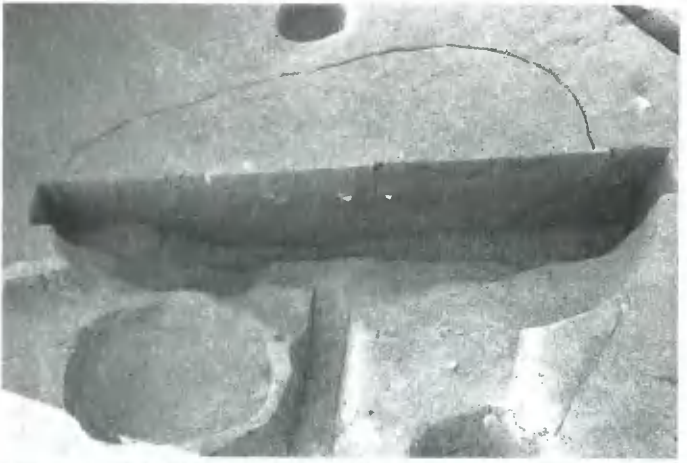
3　土壙339
（北から）

写真 38

1　土壙375
調査風景
（南から）

2　土壙375
埋土断面
（北東から）

3　土壙375
（北から）



1　土壙384
断面
（東から）

2　土壙388・389
下　上
（南西から）

3　土壙424
遺物出土状況
（西から）

写真 40

1　土壙墓 7
（南から）

2　土壙墓 8
（西から）

3　土壙墓 9
（東から）

1　土壙墓10
（北東から）

2　土壙墓12
（南から）

3　土壙墓13
（北東から）

写真 42

1　火葬墓 1
（西から）

2　火葬墓 1
骨片・銅銭出土状況
（南西から）

3　火葬墓 2
（北から）

1　溝43
（北から）

2　溝69・70
（西から）

3　溝78
（南東から）

写真 44

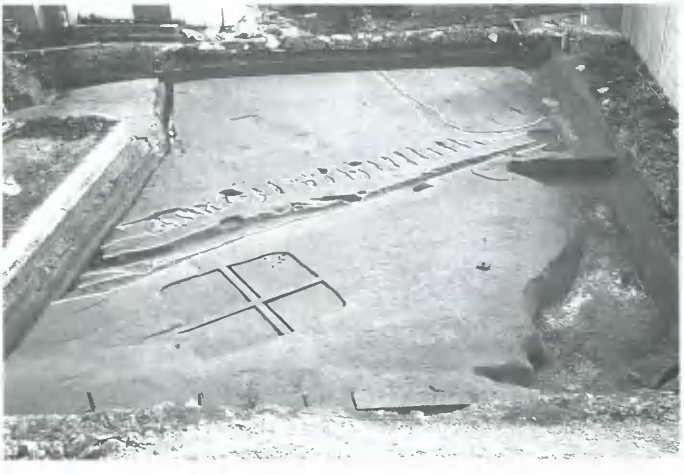
1　溝96
断面
（南東から）

2　溝101
（南東から）

3　溝101
断面
（南から）

1　溝102
　u－u’断面
　（南から）

2　溝102
　v－v’断面
　（南東から）



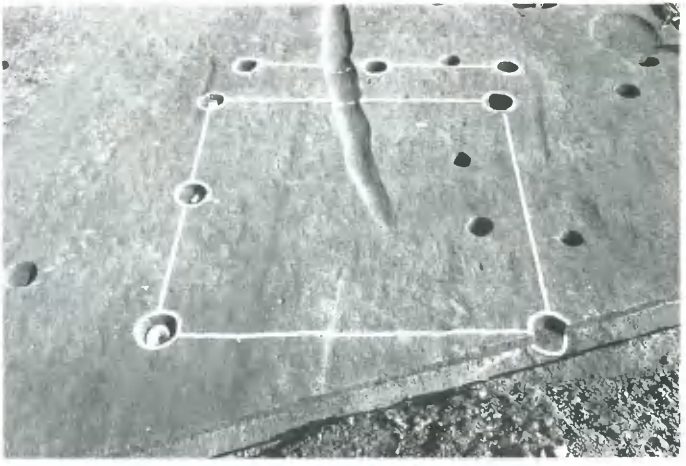
3　道路状遺構1
　（北から）

写真 46

1　道路状遺構 1
（北東から）

2　畑 1 下層
（南から）

3　畑 1 上層
（南から）



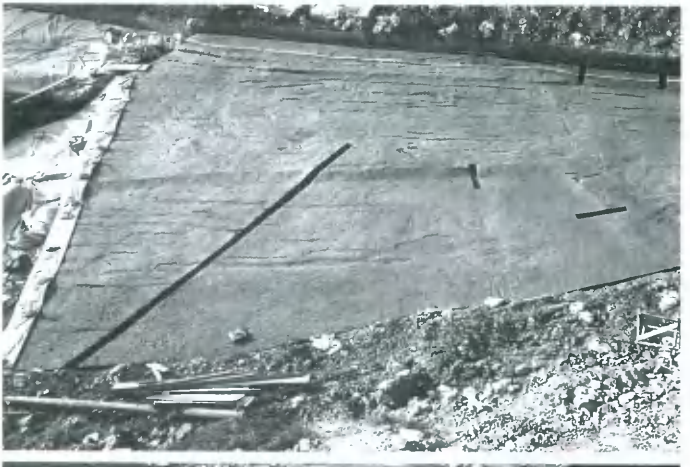
1　掘立柱建物18
（西から）

2　掘立柱建物18
P 2 石臼出土状況
（北から）

3　溝103
断面
（北東から）

写真 48

1　溝104
（北東から）



2　水田６
（南東から）

3　山陽道開通後の
加茂政所遺跡
（南西から）

24

27

S4 S5

S8

S7

S9

S13

48

C1

C3

C4

C6

C7

G1

竪穴住居 6 （24・27・S 4・S 5・S 7～9・S13・C 1・C 3・C 4）　竪穴住居 7 （48・C 6・C 7・G 1）

写真 50

80

87

86

88

C12

89

S23

袋状土壙 4 （80･86･87･88）　袋状土壙 5 （89）　袋状土壙 6 （C12）　袋状土壙 9 （S23）

115

121

113

124

C13

C14

C15

C16

C17

袋状土壙10

写真 52

146

147

168

171

237

248

袋状土壙11（146・147）　袋状土壙16（168・171）　土壙17（237・248）

254

264

271

274

275

土壙19（254）　土壙20（264）　土壙22（271・274・275）

写真 54

288

292

290

294

293

296

295

土壙33（288・290・292～294）　土壙35（295・296）

316

318

317

311

320

土壙47（311）　土壙54（316～318・320）

写真 56

335

338

394

367

409

407

土壙60（335）　土壙61（338）　土壙76（367）　土壙88（394・407・409）

419

471

472

C25

446

C27

S51

土壙96（419） 土壙102（446） 土壙123（C25） 土壙130（471・472） 土壙166（C27） 土壙169（S51）

写真 58

569

570

588

609

土壙173

619

620

658

664

S55

S53

S54

S56

土壙176（S53） 土壙177（S54） 土壙178（619・620） 土壙186（S55・S56）
土壙196（658） 土壙200（664）

写真 60

715

716

803

813

804

814

低位部 1 （715・716）　その他（803・804・813・814）

831

832

833

834

838

839

竪穴住居13

写真 62

896

901

902

903

927

922

竪穴住居27（1）

933

934

946

947

952

980

竪穴住居27（2）

写真 64

983

989

993

994

997

999

竪穴住居27（３）

1001

1003

1002

1037

1040

1039

1043

竪穴住居27（4）

写真 66

1056

1054

1087

1085

1089

1090

1098

1118

竪穴住居27（５）

1133

1134

1145

1166

1150

1167

M6

1171

竪穴住居30（1133）　竪穴住居32（1134）　竪穴住居35（1145・1150・1166・1167・1171・M６）

写真 68

1172

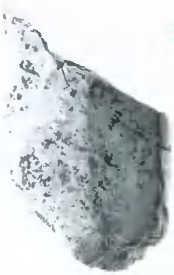
1177

1186

1185

1190

S211



C70

C71

S217

G3

竪穴住居36（1172・1177・1185・1186・1190・S211・S217・C70・C71）

竪穴住居38（G3）

1214

1216

1221

1223

1225

1226

M7

1229

竪穴住居41（1214・1216・1221・1223・1225・1226）　竪穴住居42（1229・M７）

写真 70

1232

1251

1233

M8

S229

C79 C80

竪穴住居44

1264

S234

1272

S235

C81

1300

1285

1303

1281

S239

G4

竪穴住居46（1264・1272・S234・S235・C81）　竪穴住居47（1281・1285・1300・1303・S239・G4）

写真 72

1322

1359

1353

1354

1420

袋状土壙22（1322）　袋状土壙28（1）（1353・1354・1359・1420）

1356

1360

1363

1425

1426

1434

袋状土壙28（2）（1356・1360・1363）　袋状土壙31（1425・1426・1434）

写真 74

1456

1459

1457

1458

1462

1465

袋状土壙36

1469

1468

1483

1470

袋状土壙37

写真 76

1531

1620

1536

1621

1624

S255

S256

C89

S257

袋状土壙42（S255・S256・S257）　袋状土壙47（1531・1536・C89）　袋状土壙70（1620・1621・1624）

1640

1647

1642

1655

1661

1659

1663

土壙223（1640・1642・1647・1655）　土壙224（1659・1661・1663）

写真 78

1674

1678

1677

1676

1679

1683

1685

土壙239

1732

1735

1752

1776

1771

1765

1772

1778

土壙262

写真 80

1853

1851

1852

1859

1861

1863

土壙310（1）

1850

1854

1874

1855

1875

M12

土壙310（2）〔1850・1854・1855・M12〕　土壙312（1）〔1874・1875〕

写真 82

1871

1873

1872

1876

1889

1886

土壙312（2）

1900

1901

1903

1904

土器棺墓 3 （1900・1901）　　土器棺墓 5 （1903・1904）

写真 84

1910

1911

1914

1915

土器棺墓 8 （1910・1911）　　土器棺墓11 （1914・1915）

1972

1990

1983

1976

1986

1977

溝15（1）

写真 86

2009

2015

2017

2022

2027

2040

溝15（2）

2049

2060

2062

2078

2083

2079

2088

溝15（3）

写真 88

2115

2124

2120

2126

2125

2132

2139

2123

2144

2137

2136

C96

M13

溝15（4）（2115・2120・2123～2126・2132・2136・2137・2139・2144・M13）
溝17（C96）

2342

2340

2345

2347

2351

2352

2353

2354

M18

竪穴住居59（2340・2342）　竪穴住居60（2345・2347・2351～2353・M18）
竪穴住居63（2354）

写真 90

2386

2387

2393

2396

2406

2395

2414

竪穴住居66

2425

2429

2424

2420

2457

2434

2456

2459

竪穴住居67（1）

写真 92

2439

2422

2450

2452

2444

2440

2463

2464

2438

2453

2460

2437

竪穴住居67（2）

2476

2484

2481

2486

2489

2528

2520

2502

2533

竪穴住居68（2476） 竪穴住居69（2481・2484） 竪穴住居70（2486・2489）
柱穴16（2502） 溝24（2520） 溝25（1）（2528・2533）

写真 94

2541

2546

2543

2545

2555

2550

溝25（2）

2556

2562

2591

2570

2600

2601

溝25（3）

写真 96

2603

2614

2608

2612

2613

2620

2621

溝25（4）

2654

2649

2657

2659

2658

2661

2660

2673

2670

2690

S293

C108

C109

C110

C111

C112

溝25（5）

写真 98

2737

2735

2741

2742

2743

2733

2734

2765

竪穴住居77（2733・2734）　竪穴住居78（2735・2737）
竪穴住居79（2741～2743）　竪穴住居82（1）（2765）

2755

2758

2754

2759

2780

2764

M30

2783

2797

竪穴住居82（2）（2754・2755・2758・2759・2764）　竪穴住居85（M30）
竪穴住居87（2780・2783・2792）

写真100

2799

2800

2804

2807

2808

2806

2810

2811

竪穴住居90（2799・2800）　竪穴住居94（2804）　竪穴住居96（2806～2808・2810・2811）

2841

2847

2844

2861

2865

2868

2866

S298

C123

C124

竪穴住居98（S298）　竪穴住居113（2841・2844・2847）

竪穴住居118（C123・C124）　竪穴住居121（2861・2865・2866・2868）

写真102

2905

2904

2920

2946

2922

2934

2923

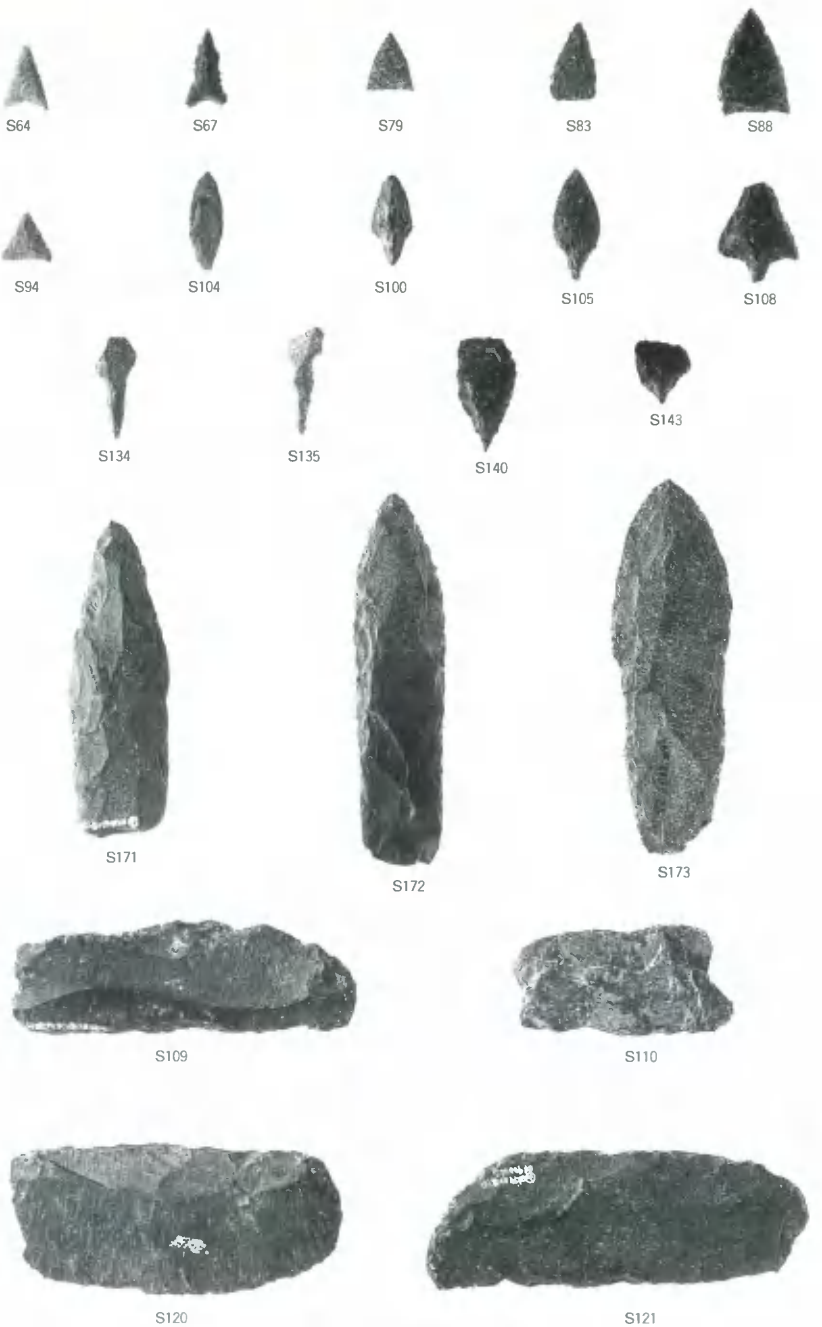
2944

2926

2925

2944

土壙331（2904）　土壙333（2905）　溝31（2920・2922・2923・2925・2926・2934・2944・2946）



その他の石製品（弥生時代）

写真104

S177

S187

S183

S178

S179

S188

S303

S304

S305

S186

S283

M29

M50

M51

S306

M14

M49

M52

S284

S285

S295

G5

その他の石製品・金属製品・玉類（弥生～古墳）

C30

C31

C32

C36

C33

C34

C35

C37

C97

C98

C99

その他の分銅形土製品

写真106

C39　C40　C47　C48　C56

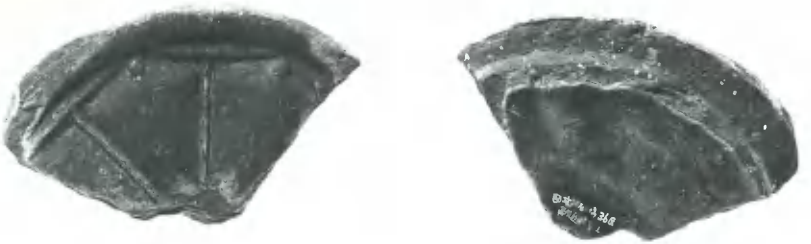
C51　C52　C60　C61　C63

C102　C103　C104　C105

C126　C127　C130

C125

その他の土製品（弥生～古墳）



3012

3012

3016

飛鳥様式の瓦

写真108

3014

3013

3015

3014

3014

3017

3018

飛鳥・白鳳様式の瓦

3063

3075

3081

3082

3084

3080

3085

3089

3105

3103

3090

3092

3093

3094

3095

3118

土壙336（3063）土壙350（3075）　土壙359（3080～3082・3084）　土壙361（3085）
土壙368（3089・3090・3092～3095）　土壙372（3103・3105）　土壙378（3118）

写真110

C138

C139

C140

C141

C142

C143

C144

C145

C149

C146

C147

C150

C151

C152

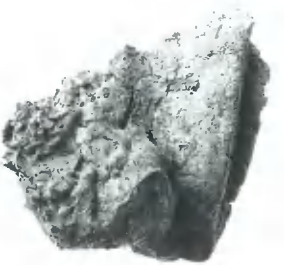
土壙375（1）

C153

C154

C155

C158



C157

C156

C159

C161

C160

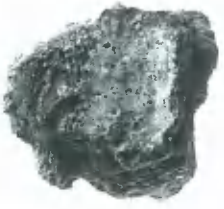
土壙375（2）

写真112

C162

C163

C165

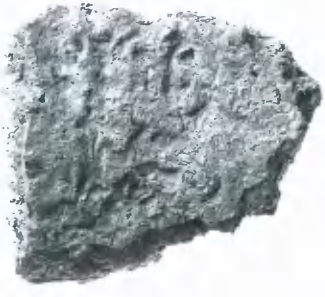


C164

C167

C166

C169



C168

土壙375（３）

3155

3156

3158

3161

3170

3175

3179

3181

3180

3183

M64

M65

M66

C172

C173

C174

M67

M68

C176

C177

C178

土壙388

写真114

3191

3193

3195

3200

3201

3219

3224

3226

3227

3228

3229

3242

3245

3251

3258

3259

3267

3274

3276

3275

土壙390（3242・3245・3251）　土壙391（3258・3259・3267・3274～3276）

写真116

S317

3418

3421

M82

土壙392（上段）　土壙398（中段）　土壙424（3418・S 317）

土壙墓 7 （M82）　土壙墓 8 （3421）

3422

M98

M86

M86

M87

M88

3423

M112

M99

M99

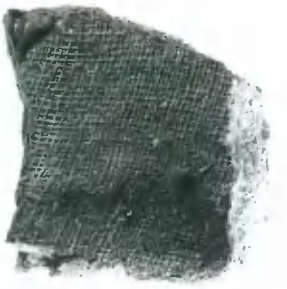
M100

M101

火葬墓 1 〔3422・M86～88・M98〕　火葬墓 2 （3423・M99～101・M112）

写真118

3514



3517

3519

3521

3523

3526

3524

溝50・51

3555

3569

3577

3571

3563

3578

3572

3565

3576

3579

3567

3623

M124

M126

3634

3633

3636

3640

溝53（3555・3563・3565・3567・3569・3571・3572・3576～3579）　溝100（3623・M124・M126）
溝102（3633・3634・3636・3640）

写真120

3690

3692

3693

3694

3695

3697

3698

3700

3710

3715

3716

3720

3722

3724

3733

3734

3737

3749

3744

3745

河道（1）

3768

3772

3775

3776

3779

3780

3783

3784

3785

C191

C192

S322

C193

M138 M140

河道（2）

写真122

3787

3786

3788

3862

3789

3790

3793

3794

3799

河道（3）

3795

3796

河道（4）

写真124

3797

3795

3796

3797

3800

河道（5）

3802

3808

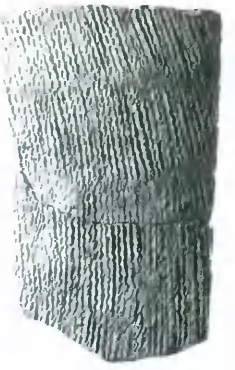
3822

3821

3823

河道（6）

写真126

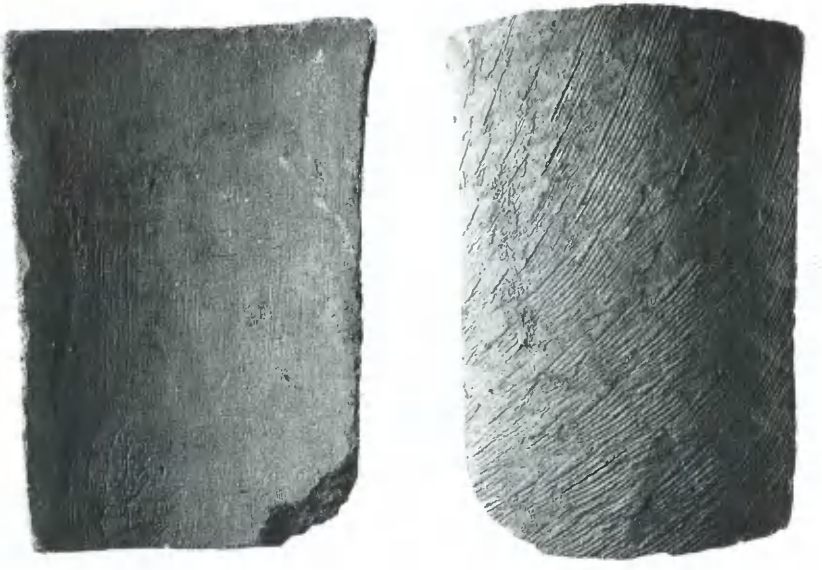


3827

3832

3845

3835



3855

3856

写真128

3864

3866

3872

3879

3883

河道（９）

3895

3907

3914

3917

3911

3919

河道（10）

写真130

4080

4081

4090

4100

4091

4093

4095

4113

その他の瓦

S323

S332

S329

S333

S331

M144

M150

M148

M149

M229

M230

M206

M165

M166

M171

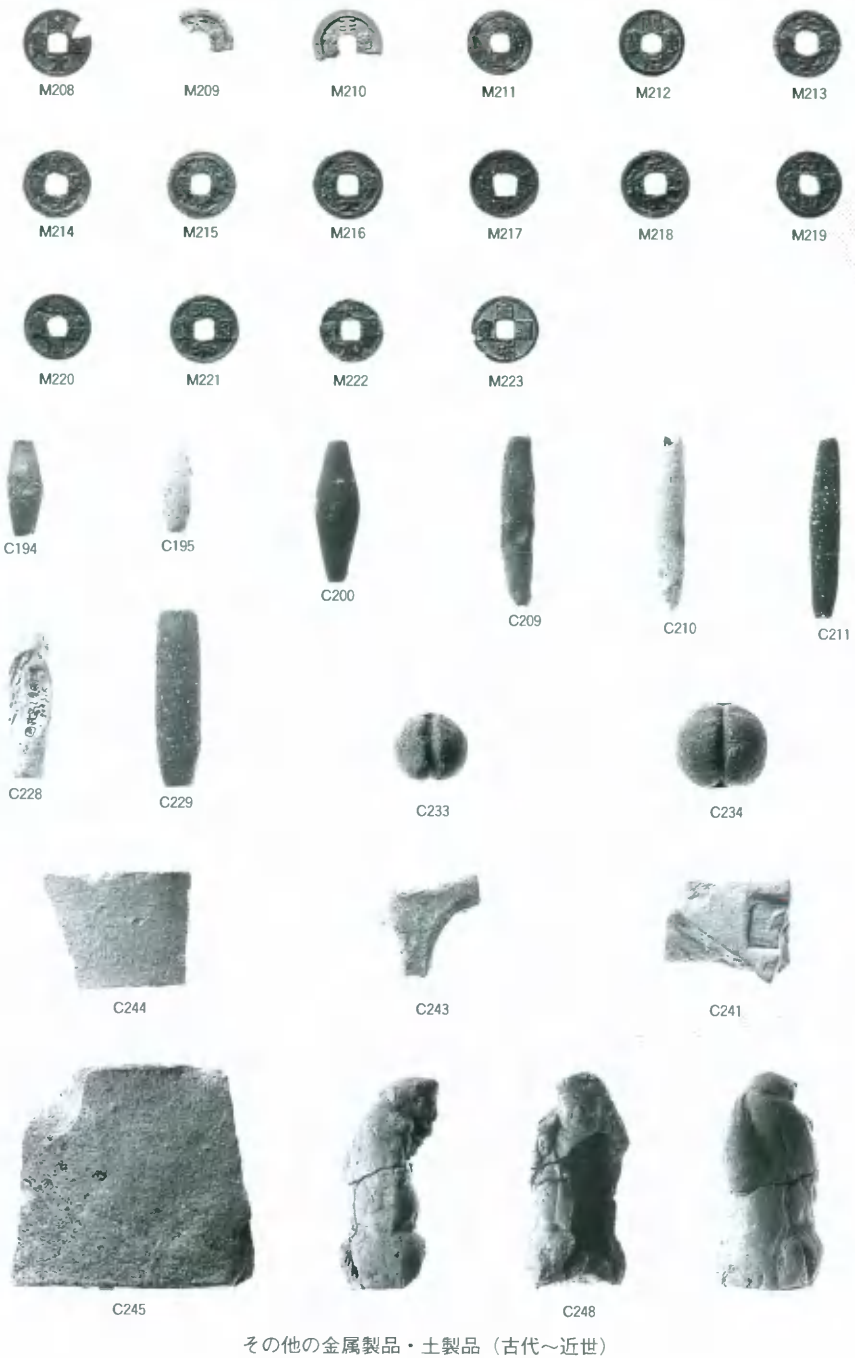
M174

M184

M185

その他の石製品・金属製品（古代～近世）

写真132



その他の金属製品・土製品（古代～近世）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 138

加茂政所遺跡
高松原古才遺跡
立田遺跡

山陽自動車道
建設に伴う発掘調査
17
（第2分冊）

1999年3月5日　印刷
1999年3月12日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
　　岡山市西花尻1325－3
発　行　岡山県教育委員会
　　岡山市内山下2－4－6
印　刷　富士印刷株式会社

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 138

加茂政所遺跡
高松原古才遺跡
立田遺跡

山陽自動車道
建設に伴う発掘調査

17

（第3分冊）

1999

日本道路公団中国支社津山工事事務所

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 138

加茂政所遺跡
高松原古才遺跡
立田遺跡

山陽自動車道
建設に伴う発掘調査

17

（第3分冊）

1999

日本道路公団中国支社津山工事事務所

岡山県教育委員会

立田遺跡　土壙 3 出土遺物

例　言

1　本書は、岡山県教育委員会が高速自動車国道山陽自動車道の建設に伴い、日本道路公団の委託を受けて調査を実施した、加茂政所遺跡（岡山市加茂）・高松原古才遺跡（岡山市高松原古才）・立田遺跡（岡山市立田）の発掘調査報告書である。

2　本書は、高速自動車国道山陽自動車道の建設に伴う発掘調査報告書の第17分冊である。

3　本書収載の発掘調査は、平成元年度（1989年度）から平成４年度（1992年度）にかけて実施したもので、調査面積は加茂政所遺跡12,686㎡、高松原古才遺跡1,682㎡、立田遺跡1,103㎡の合計15,471㎡である。

4　本書収載の遺跡は、これまでに政所遺跡と称して調査成果や遺物の公表が行われてきたものであるが、大字名の検討の結果、３遺跡に分離した。さらに、加茂政所遺跡については、加茂が広範な地域であるため小字名を付している。

5　発掘調査および報告書作成にあたっては、高速自動車国道山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。委員各位からは有益な御指導と御助言をいただいた。銘記して感謝の微意を表したい。

水内　昌康（岡山県文化財保護審議会委員）
鎌木　義昌（岡山県文化財保護審議会委員）平成４年度まで
西岡憲一郎（岡山県遺跡保護調査団）平成３年５月まで
西川　　宏（岡山県遺跡保護調査団）
間壁　葭子（倉敷考古館）平成８年度まで
高見　周夫（岡山県遺跡保護調査団）
根木　　修（岡山市教育委員会）
稲田　孝司（岡山大学）平成３年５月～平成５年３月
新納　　泉（岡山大学）平成３年５月まで、平成５年度～
亀田　修一（岡山理科大学）平成５年度～
土井　基司（岡山大学）平成３年５月～平成５年６月

6　本書に関係する遺物等については、調査中および報告書作成に際して、自然科学分野における鑑定・分析を下記の諸氏、諸機関に依頼し、それぞれ有益な教示を得た。また、一部の成果については報告文をいただいた。記して深く感謝を表す次第である。なお（　）は依頼時の所属機関名である。

・鉄滓の成分分析	大澤正己
・銅滓の成分分析	内田俊秀（京都造形芸術大学）
・銅製品の蛍光Ｘ線分析	白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）
・銅釧の鉛同位体分析	平尾良光　榎本淳子（東京国立文化財研究所） （財）元興寺文化財研究所
・土器・瓦の胎土分析	白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）
・ガラス製品の成分分析	白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）

・土器付着の赤色顔料の成分分析　本田光子（別府大学）
・石製品の石材鑑定　妹尾　護（倉敷芸術科学大学）
・人骨の鑑定　池田次郎（九州国際大学）
・歯牙の鑑定　小田嶋梧郎（岡山大学）
・馬骨の鑑定　富岡直人（岡山理科大学）
・貝類、魚骨類の鑑定　金子浩昌（早稲田大学）
・梵鐘鋳造鋳型と溶解炉の鑑定　五十川伸矢（橘女子大学）
・瓦の鑑定　上原真人（京都大学）
・木製品の樹種鑑定　畦柳　鎮（岡山商科大学）
・炭化材、貝の年代測定　パリノ・サーヴェイ株式会社
・土壌中の植物珪酸体分析　パリノ・サーヴェイ株式会社
・炭化材の樹種鑑定　パリノ・サーヴェイ株式会社

7　本書の作成は、平成９年度に岡山県古代吉備文化財センター津寺事務所において実施した。遺構・遺物の整理は、岡山県古代吉備文化財センター職員　松本和男・平井泰男・中務和彦・岡田達矢・土師忠満・難波拓史・弘田和司・柴田英樹・清水竜太・藤田薫の10名が担当した。

8　本文の執筆は、調査担当者ならびに報告書作成担当者が行い、文責はそれぞれ文末に記した。

9　遺物写真については、政田孝氏、江尻泰幸氏の協力と援助を仰いだ。

10　本書の編集は、各遺跡ごとに整理担当者が行い、全体の編集・構成については平井、弘田、柴田が担当した。

11　本書収載の遺物および各種図面・写真等の記録は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－3）に保管している。

凡　例

1　本報告書に記載された高度は、海抜高である。方位は特に示さない限り磁北であるが、古代以降の一部の遺構については、磁北と真北を並記した。また、第１図～第６図については国土座標系の座標北を示した。遺跡付近の磁北線偏差は西偏６°30′を測る。

2　グリッドは国土地理院第５座標系により設定した。表記はＸ＝－145400・Ｙ＝－48700を起点として、Ｘ軸をアルファベットでＹ軸を数字で示した。

3　土層断面の土色表記は、各調査者の記述に従っており、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修　1988年版）によるものもある。

4　各遺構・遺物実測図の縮尺率は、原則として種類ごとに下記のとおりであるが、例外については縮尺を明記した。

遺構　竪穴住居・掘立柱建物：1／60　各種土壙・土壙墓・井戸：1／30　土器棺墓：1／20

遺物　土器・瓦：1／4　石製品・金属製品・土製品：1／2、1／3　　玉類：1／1

5　遺構・遺物の番号はそれぞれ種類別であり、各遺跡ごとに通し番号を付している。

6　各遺構全体図で示す遺構名は、下記のとおり省略し番号の前に付しており、番号のみは土壙である。

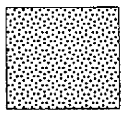
竪穴住居：住　掘立柱建物：建　袋状土壙：袋　焼成土壙：焼　井戸：井

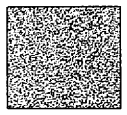
土壙墓：墓　土器棺墓：棺

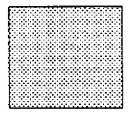
7　遺物番号は、土器・瓦は番号のみ、それ以外のものには材質にしたがって下記の記号を番号の前に付した。

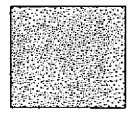
石製品：Ｓ　金属製品：Ｍ　土製品：Ｃ　ガラス製品：Ｇ

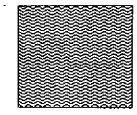
8　遺構図における、被熱範囲、焼土や炭や粘土の分布範囲、貝層については、下記のスクリーントーンで表現した。


被熱範囲


焼土


炭


粘土


貝層

9　土器実測図の中軸線左右の白抜きは、小破片のため口径復元に不確実性があることを示す。

10　遺物名については、壺形土器、甕形土器、高杯形土器などを壺、甕、高杯のように略して用いた。

11　本報告書で用いる時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分、世紀を併用した。また、弥生時代から古墳時代の時期区分については「津寺遺跡２」の序説Ⅴに示す時期区分に基づいている。なお、本書では便宜的に、須恵器の出現をもって古墳時代前期と中期を分け、７世紀代については後期に含めている。

12　第Ⅱ部第１章「発掘調査の経緯と経過」で報告している調査区名については、報告書作成にあたっての地名確認作業によって一部不適切な名称が含まれていることが判明した。そのため本文中

では、第６図と第１表のうち１～７・11の調査区を「加茂政所遺跡跡第１微高地」、16～36の調査区を「加茂政所遺跡跡第２微高地」、37の調査区を「加茂政所遺跡跡第３微高地」として記述することにしている。

また、第７図と第２表の38～47・53～55の調査区は『高松原古才遺跡』、48～52・56～58の調査区は『立田遺跡』として報告している。

13　本報告書に掲載した地図のうち、第２図は建設省国土地理院発行の1／25,000の地形図「倉敷」および「総社東部」を複製し利用したものである。

第３分冊目次

カラー写真
凡　例
目　次
2　高松原古才遺跡 …… 923
第１章　調査の概要 …… 925
第１節　調査区の位置と概要 …… 925
第２節　弥生時代の遺構・遺物 …… 928
（１）概要 …… 928
（２）竪穴住居 …… 928
（３）掘立柱建物 …… 931
（４）土壙 …… 932
（５）河道 …… 934
（６）その他の遺構・遺物 …… 936
第３節　古墳時代の遺構・遺物 …… 938
（１）概要 …… 938
（２）竪穴住居 …… 938
（３）土壙 …… 944
（４）溝 …… 946
（５）鍛冶炉 …… 949
（６）河道 …… 950
（７）その他の遺構・遺物 …… 951
第４節　古代の遺構・遺物 …… 955
（１）概要 …… 955
（２）掘立柱建物 …… 955
（３）土壙 …… 955
（４）溝 …… 958
（５）その他の遺構・遺物 …… 960
第５節　中世の遺構・遺物 …… 963
（１）概要 …… 963
（２）溝 …… 963
（３）その他の遺構・遺物 …… 967

3　立田遺跡…… 969
第1章　調査の概要…… 971
第1節　調査区の概要…… 971
第2節　弥生時代の遺構・遺物…… 973
（1）概要…… 973
（2）竪穴住居…… 973
（3）掘立柱建物…… 988
（4）井戸…… 991
（5）袋状土壙…… 997
（6）土壙……1009
（7）溝……1040
（8）その他の遺構・遺物……1041
第3節　古墳時代の遺構・遺物……1044
（1）概要……1044
（2）竪穴住居……1044
（3）その他の遺構・遺物……1046
第4節　古代の遺構・遺物……1047
（1）概要……1047
（2）溝……1047
（3）その他の遺構・遺物……1047
第5節　中世の遺構・遺物……1050
（1）概要……1050
（2）溝……1050
（3）その他の遺構・遺物……1052
第2章　まとめ……1053
高松原古才遺跡　遺構一覧表・遺物観察表・遺構名称新旧対照表……1061
立田遺跡　遺構一覧表・遺物観察表・遺構名称新旧対照表……1067
写真

Ⅳ　自然科学による鑑定・分析……1081
1　加茂政所遺跡の自然科学分析調査報告　パリノ・サーヴェイ株式会社…1083
2　加茂政所遺跡の植物珪酸体分析　パリノ・サーヴェイ株式会社…1090
3　加茂政所遺跡における弥生時代土壙墓出土の歯牙について　小田嶋梧郎……1094
4　加茂政所遺跡出土の動物遺体　金子浩昌……1099
5　岡山県加茂政所遺跡出土ウマ遺存体　富岡直人……1111
6　加茂政所遺跡出土の土器・瓦の胎土分析　白石　純……1123
7　加茂政所遺跡出土のガラス玉、ガラス滓および銅鏃の分析　白石　純……1130

8　加茂政所遺跡出土銅釧の鉛同位体比分析　（財）元興寺文化財研究所 保存科学センター　東京国立文化財研究所 保存科学部　平尾良光・榎本淳子 ……1132
9　岡山県岡山市加茂政所遺跡出土金属塊の自然科学的分析　内田俊秀 ……1141
10　加茂政所遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査　大澤正己 ……1143
11　加茂政所遺跡出土鉢形土器内の赤色物について　本田光子 ……1200
報告書抄録

図 目 次

高松原古才遺跡

第1143図　調査区配置図(1/1500) ……925
第1144図　調査地周辺の微地形(1/1500) ……926
第1145図　土層断面図(ＡＰ14西壁)(1/80) …927
第1146図　竪穴住居１(1/60)・遺物 ……928
第1147図　弥生時代遺構配置図(1/500) ……929
第1148図　竪穴住居２(1/30)・遺物 ……930
第1149図　竪穴住居３(1/60) ……930
第1150図　竪穴住居３遺物……931
第1151図　掘立柱建物１(1/60) ……931
第1152図　土壙１(1/30) ……932
第1153図　土壙２(1/30)・遺物 ……932
第1154図　土壙３(1/30)・遺物 ……933
第1155図　土壙４(1/30)・遺物 ……933
第1156図　土壙５(1/30) ……934
第1157図　土壙６(1/30) ……934
第1158図　河道１(1/60)・遺物 ……934
第1159図　河道２(AP12北壁・BP13南壁)(1/80) …935
第1160図　河道２遺物……936
第1161図　その他の遺物……937
第1162図　竪穴住居４(1/60)・遺物 ……938
第1163図　古墳時代遺構配置図(1/500) ……939
第1164図　竪穴住居５(1/60)・遺物 ……940
第1165図　竪穴住居６(1/60)・遺物 ……940
第1166図　竪穴住居７(1/60) ……940
第1167図　竪穴住居８(1/60) ……941
第1168図　竪穴住居９(1/60)・遺物 ……941
第1169図　竪穴住居10(1/60) ……942
第1170図　竪穴住居11(1/60)・遺物 ……942
第1171図　竪穴住居12(1/60) ……943
第1172図　竪穴住居13(1/60)・遺物 ……943
第1173図　竪穴住居14(1/60)・遺物 ……944
第1174図　土壙７(1/30)・遺物 ……945
第1175図　土壙８(1/20)・遺物 ……945
第1176図　土壙９(1/20) ……945
第1177図　土壙10(1/30) ……946
第1178図　土壙11(1/30) ……946
第1179図　溝１(1/30)・遺物 ……946
第1180図　溝２(1/30) ……947
第1181図　溝３(1/30) ……947
第1182図　溝４(1/30) ……947
第1183図　溝５(1/30)・遺物 ……947
第1184図　溝６(1/30)・遺物 ……948
第1185図　溝７(1/30)・遺物 ……948
第1186図　鍛冶炉１(1/40)・遺物 ……949
第1187図　河道１遺物……950
第1188図　河道２遺物(１) ……950
第1189図　河道２遺物(２) ……951
第1190図　その他の遺物(１) ……952
第1191図　その他の遺物(２) ……953
第1192図　その他の遺物(３) ……953
第1193図　その他の遺物(４) ……954
第1194図　掘立柱建物２(1/60) ……955
第1195図　古代遺構配置図(1/500) ……956
第1196図　土壙12(1/30) ……957
第1197図　土壙13(1/20)・遺物 ……957
第1198図　土壙14(1/30) ……957
第1199図　溝８(1/30)・遺物 ……958
第1200図　溝９(1/30) ……959
第1201図　溝10(1/30) ……959
第1202図　溝11(1/30) ……959
第1203図　溝12・鋤溝(1/100) ……959
第1204図　溝12遺物……960
第1205図　鋤溝遺物……960
第1206図　土器溜り１遺物……961
第1207図　河道２遺物……962
第1208図　その他の遺物……962
第1209図　溝13(1/60)・遺物 ……963
第1210図　中世遺構配置図(1/500) ……964

第1211図　溝14(1/30) ……965
第1212図　溝15(1/30) ……965
第1213図　溝16(1/60・1/30)・遺物 ……965
第1214図　溝17(1/30) ……965
第1215図　溝18(1/30)・遺物 ……966
第1216図　溝19・20・21(1/30) ……966
第1217図　溝22(1/30) ……966
第1218図　溝23(1/30)・遺物 ……966
第1219図　溝24(1/30) ……966
第1220図　溝25(1/30)・遺物 ……967
第1221図　その他の遺物 ……967

立田遺跡

第1222図　調査区配置図(1/1500) ……971
第1223図　土層断面図(1/80) ……972
第1224図　竪穴住居1a(1/60) ……973
第1225図　弥生時代遺構配置図(1/400) ……974
第1226図　竪穴住居1b(1/60) ……975
第1227図　竪穴住居1a・b遺物……976
第1228図　竪穴住居1c(1/60) ……977
第1229図　竪穴住居1c遺物……978
第1230図　竪穴住居1a・b・c(1/60) ……978
第1231図　竪穴住居2(1/60)・遺物 ……979
第1232図　竪穴住居3(1/60) ……980
第1233図　竪穴住居3遺物 ……981
第1234図　竪穴住居4(1/60)・遺物(1) ……981
第1235図　竪穴住居4遺物(2) ……982
第1236図　竪穴住居5(1/60) ……983
第1237図　竪穴住居5遺物(1) ……984
第1238図　竪穴住居5遺物(2) ……985
第1239図　竪穴住居6(1/60)・遺物 ……985
第1240図　竪穴住居7(1/60)・遺物 ……986
第1241図　竪穴住居8(1/60)・遺物 ……986
第1242図　竪穴住居9(1/60) ……987
第1243図　竪穴住居9遺物……988
第1244図　掘立柱建物1(1/60) ……989
第1245図　掘立柱建物2(1/60) ……989
第1246図　掘立柱建物3(1/60) ……990
第1247図　井戸1(1/30) ……991
第1248図　井戸1遺物(1) ……992
第1249図　井戸1遺物(2) ……993
第1250図　井戸1遺物(3) ……994
第1251図　井戸1遺物(4) ……995
第1252図　井戸1遺物(5) ……996
第1253図　袋状土壙1(1/30)・遺物 ……998
第1254図　袋状土壙2(1/30)・遺物 ……998
第1255図　袋状土壙3(1/30)・遺物(1) ……999
第1256図　袋状土壙3遺物(2) ……1000
第1257図　袋状土壙4(1/30)・遺物(1) …1001
第1258図　袋状土壙4遺物(2) ……1002
第1259図　袋状土壙4遺物(3) ……1003
第1260図　袋状土壙4遺物(4) ……1004
第1261図　袋状土壙4遺物(5) ……1005
第1262図　袋状土壙4遺物(6) ……1006
第1263図　袋状土壙4遺物(7) ……1007
第1264図　袋状土壙4遺物(8) ……1008
第1265図　袋状土壙5(1/30)・遺物 ……1008
第1266図　土壙1(1/30)・遺物 ……1009
第1267図　土壙2(1/30)・遺物 ……1010
第1268図　土壙3(1/30) ……1011
第1269図　土壙3遺物(1) ……1012
第1270図　土壙3遺物(2) ……1013
第1271図　土壙3遺物(3) ……1014
第1272図　土壙3遺物(4) ……1016
第1273図　土壙3遺物(5) ……1017
第1274図　土壙3遺物(6) ……1018
第1275図　土壙3遺物(7) ……1019
第1276図　土壙3遺物(8) ……1020
第1277図　土壙3遺物(9) ……1021

第1278図　土壙３遺物(10) ……1022
第1279図　土壙３遺物(11) ……1023
第1280図　土壙３遺物(12) ……1024
第1281図　土壙４(1/30)・遺物 ……1025
第1282図　土壙５(1/30) ……1025
第1283図　土壙６(1/30) ……1025
第1284図　土壙７(1/30) ……1026
第1285図　土壙８(1/30)・遺物 ……1026
第1286図　土壙９(1/30)・遺物 ……1026
第1287図　土壙10(1/30)・遺物 ……1027
第1288図　土壙11(1/30) ……1027
第1289図　土壙11遺物 ……1027
第1290図　土壙12(1/30)・遺物 ……1028
第1291図　土壙13(1/30)・遺物 ……1028
第1292図　土壙14(1/20) ……1029
第1293図　土壙14遺物 ……1030
第1294図　土壙15(1/30)・遺物 ……1031
第1295図　土壙16(1/30)・遺物 ……1032
第1296図　土壙17(1/30)・遺物 ……1032
第1297図　土壙18(1/30)・遺物 ……1033
第1298図　土壙19(1/30) ……1033
第1299図　土壙20(1/30)・遺物 ……1034
第1300図　土壙21(1/30) ……1034
第1301図　土壙22(1/30)・遺物 ……1034
第1302図　土壙23(1/30) ……1034
第1303図　土壙23遺物(１) ……1035
第1304図　土壙23遺物(２) ……1036
第1305図　土壙24(1/30)・遺物 ……1036
第1306図　土壙25(1/30)・遺物 ……1037
第1307図　土壙26(1/30) ……1037
第1308図　土壙26遺物 ……1037
第1309図　土壙27(1/60) ……1038
第1310図　土壙28(1/30) ……1038
第1311図　土壙28遺物 ……1039
第1312図　土壙29(1/30) ……1039
第1313図　土壙30(1/30)・遺物 ……1040
第1314図　土壙31(1/30) ……1040
第1315図　溝１(1/30) ……1040
第1316図　溝２(1/30) ……1040
第1317図　その他の遺物(１) ……1041
第1318図　その他の遺物(２) ……1042
第1319図　その他の遺物(３) ……1043
第1320図　竪穴住居10(1/60)・遺物 ……1044
第1321図　古墳時代遺構配置図(1/400) ……1045
第1322図　竪穴住居11(1/60) ……1046
第1323図　その他の遺物 ……1046
第1324図　溝３(1/30) ……1047
第1325図　溝４(1/30) ……1047
第1326図　古代遺構配置図(1/400) ……1048
第1327図　その他の遺物 ……1049
第1328図　溝５(1/30)・遺物 ……1050
第1329図　溝６(1/30) ……1050
第1330図　中世遺構配置図(1/400) ……1051
第1331図　その他の遺物 ……1052
第1332図　集落の変遷 ……1054
第1333図　百間川遺跡群の時期別器種組成 …1057
第1334図　京免遺跡SH119遺物出土状況 …1057

表　目　次

表１　土壙３出土弥生土器の組成 ……1055

カ　ラ　ー　写　真　目　次

カラー写真８　立田遺跡　土壙３出土遺物

写 真 目 次

高松原古才遺跡

写真133
1 竪穴住居3(東から)
2 掘立柱建物1(南から)
3 河道1肩部(南から)
写真134
1 竪穴住居9(北から)
2 竪穴住居11(西から)
3 竪穴住居13(南西から)
写真135
1 竪穴住居14カマド(北から)
2 土壙8(西から)
3 河道2(南から)
写真136
1 掘立柱建物2(北から)
2 溝8(北東から)
3 溝12・水田(北から)
写真137
竪穴住居3(8) 土壙2(10) 土壙3(13) 土壙4(15)
竪穴住居9(40) 竪穴住居11(42) 竪穴住居13(45)
竪穴住居14(48) 溝5(51) 溝6(52) 鍛冶炉1(62・63)
写真138
河道1(64) 河道2(古墳時代)(65・69～75)
写真139
その他(古墳時代)
写真140
土壙13(121) 溝8(125・126) 河道2(古代)(145・146)
その他(古代)(151・152・157) 溝13(160) 溝25(170)
その他(中世)(171)
写真141
土器溜り1
写真142
石製品(S1～6・8～12)・土製品(C1～8)・金属製品(M1～8)・玉類(G1・S7)

立 田 遺 跡

写真143
1 竪穴住居1(西から)
2 竪穴住居3(南から)
3 竪穴住居4(北から)
写真144
1 竪穴住居5(南東から)
2 竪穴住居8(北東から)
3 竪穴住居9(北東から)
写真145
1 掘立柱建物1(北東から)
2 掘立柱建物2(南西から)
3 井戸1(南から)
写真146
1 井戸1(北西から)
2 袋状土壙2(東から)
3 袋状土壙3土層断面(北西から)
写真147
1 袋状土壙4(北東から)
2 土壙2(北東から)
3 土壙3(南から)
写真148
1 竪穴住居10(東から)
2 AP16・17区中世鋤溝群(南東から)
3 BP17区中世鋤溝群(北から)

写真149

竪穴住居1a·b(1·8·9·12～15)　竪穴住居1c(21～23)

竪穴住居9(66·67·70)

写真150

竪穴住居4(32·35·36·38·41·42·44)　竪穴住居8(65)

写真151

井戸1(1)

写真152

井戸1(2)

写真153

袋状土壙1(120)　袋状土壙2(123·127～130)

袋状土壙3(131·134·136·138～140·142·144～146)

写真154

袋状土壙4(1)

写真155

袋状土壙4(2)(147·158·161·168·169)　袋状土壙5(171)

写真156

土壙3(1)

写真157

土壙3(2)

写真158

土壙3(3)

写真159

土壙23

写真160

石製品(S4～17)·土製品(C1～6)·金属製品(M1～6)·玉類(S1～3)

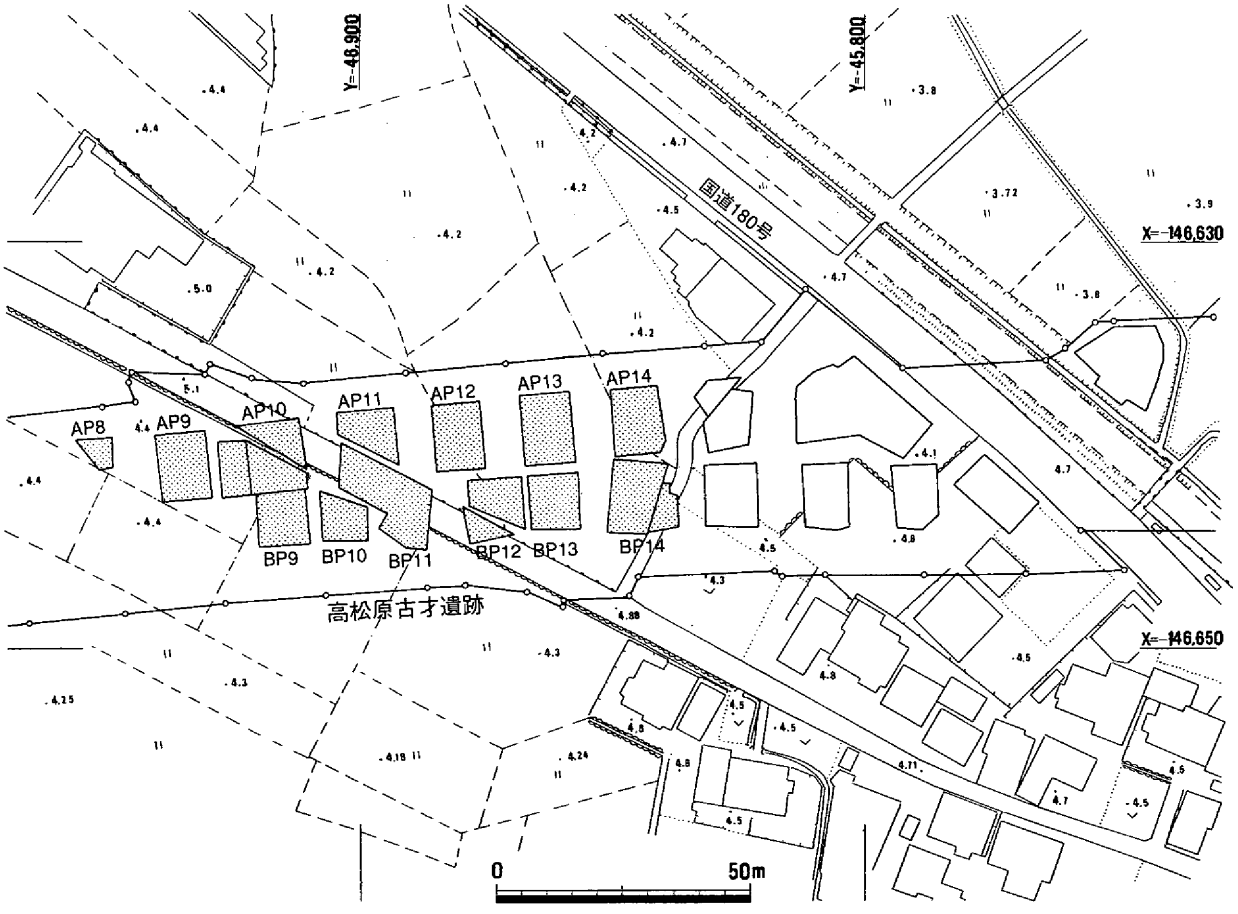
2　高松原古才遺跡

第１章　調査の概要

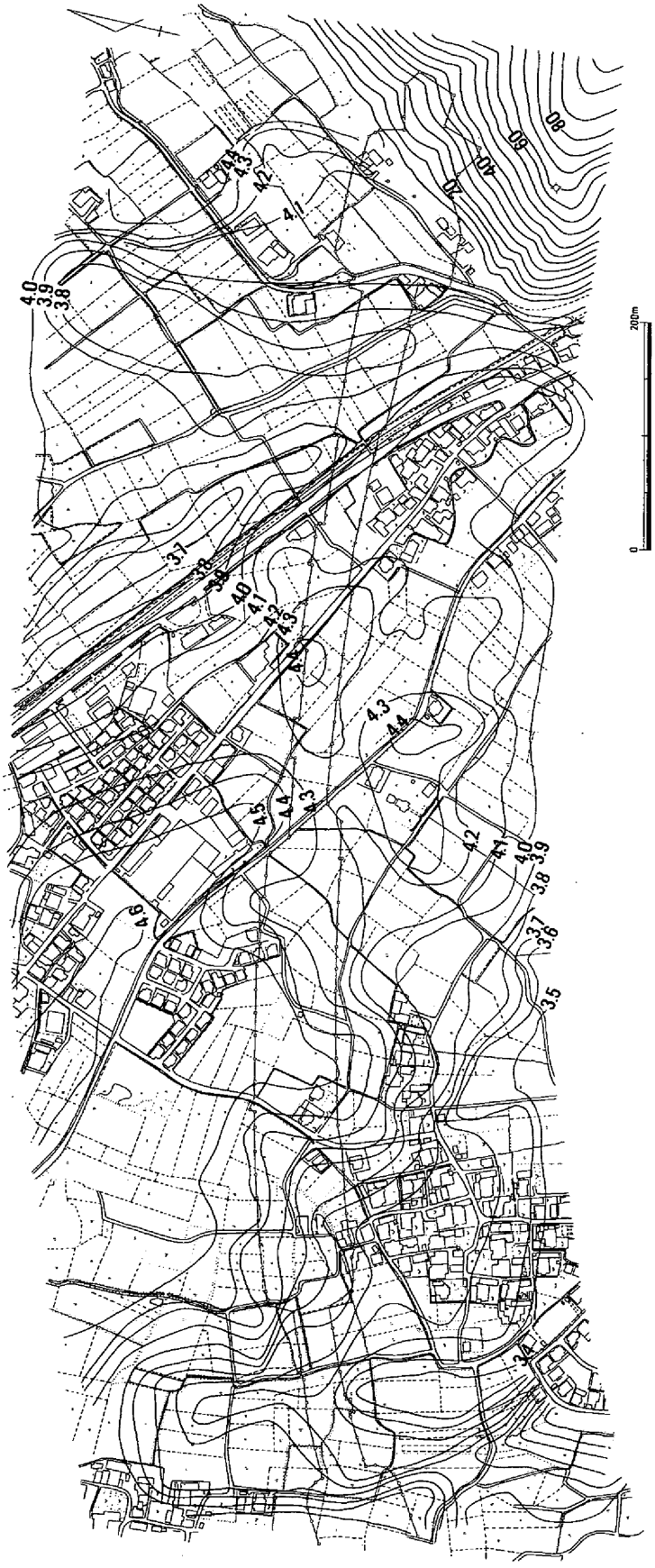
第１節　調査区の位置と概要

山陽自動車道は岡山ジャンクションからみて北東方向に進み鼓山でトンネルに入る。ここに報告するのは確認調査の結果、微高地部分と判断された立田高架橋区の橋脚部分のうち上り車線（ＡＰ９～14)、下り車線（ＢＰ10～14）が該当する（第1143図)。調査時点では政所遺跡立田調査区の一部であったが、市道を境として大字高松原古才に入る調査区は高松原古才遺跡として独立して扱った。なお、調査区名は調査時に使用した呼称を踏襲しており、立田１区を除き各橋脚の名称である。また、当該地のすぐ北側を自動車道に平行して水路工事にともない平成４～６年度に発掘調査を行っており、竪穴住居や溝などの遺構のなかにはその続きが検出されたものもある。

この高松原古才遺跡は、前章で述べた加茂政所遺跡の東に位置するが、間には川幅が100m以上の古高梁川の分流が入る。これは水田の形や加茂用水になごりを残すが、この周辺は工場や住宅地となるなど加茂政所遺跡から調査地付近にかけては津寺遺跡から加茂政所遺跡にかけての水田部に比べ旧



第1143図　調査区配置図（1/1500）

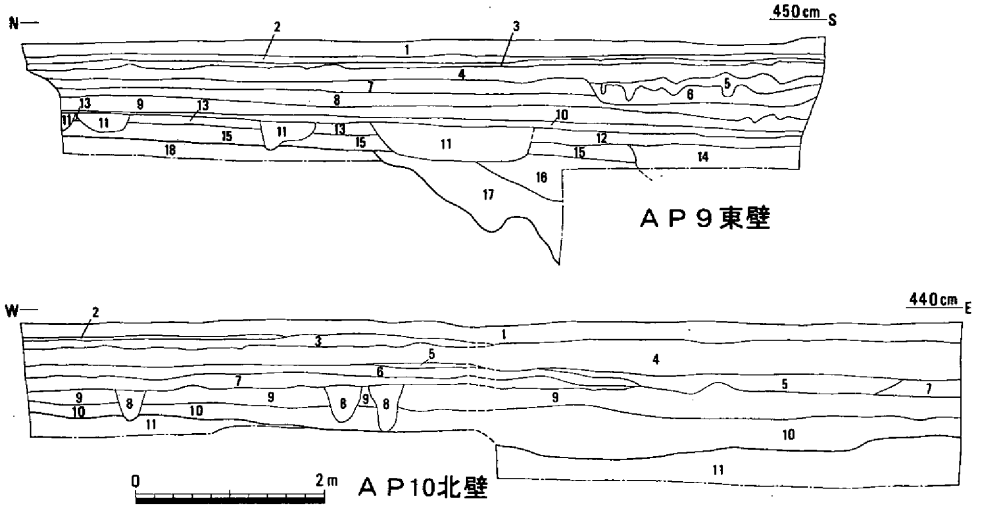


第1144図　調査区周辺の微地形（1/1500）

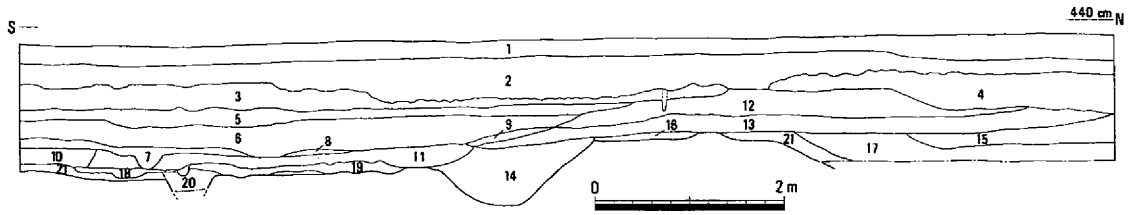
地形の改変が著しい。また、現在の国道180号線を境に北東方向は後背湿地にあたるが、立田遺跡はこの自然堤防から後背湿地への斜面部に位置する。また、高松原古才遺跡と立田遺跡との間にも河道１条が入っていた。

調査前の状況は大部分が水田で、標高は4.2m前後である。これは加茂政所遺跡の弥生遺構のうち検出レベルで最も高いものに相当する。ここでは弥生時代の遺構面は表土から１m程下になる。

ＡＰ９・10区では、１～６層まで、ＡＰ14区では１～４層が近世以降の水田層である。ＡＰ９・10区の７層とＡＰ14区の５層が対応し、中世水田がほぼ水平で全面に広がりをみせる。また、ＡＰ14区西側には河道が入るがその埋没過程の11・15・17層も中世の水田層である。さらに、10層は奈良時代の、12～15層は古墳時代の遺物を含む層である。（弘田）



1　暗灰黄色粘質微砂
2　オリーブ灰色粘質細砂
3　オリーブ灰色細砂
4　灰色オリーブ色粘質土
5　灰色砂
6　灰色粘土
7　にぶい黄褐色粘土
8　褐色粘質微砂（中世）
9　褐色粘質微砂
10　暗褐色粘質微砂（古代）
11　溝・ピット埋土
12　褐灰色微砂（炭・焼土を含む）
13　オリーブ褐色粘質微砂（古墳）
14　褐黄灰色微砂
15　黄褐色粘土
16　オリーブ黒色粘質土
17　黒褐色粘質土
18　黒褐色粘質微砂



ＡＰ14西壁

1　表土
2　明黄灰色粘質微砂
3　灰褐色砂質土
4　明灰黄色砂質土
5　明灰褐色砂質土（中世水田）
6　灰褐色粘質土
7　灰色粘質土
8　青灰色粘質土
9　青灰色粘質土
10　暗青灰色粘質土
11　暗灰黄色粘質土
12　明灰黄色粘質土
13　灰黄色粘質土
14　暗灰色粘質土（溝）
15　灰褐色粘質土
16　暗灰褐色粘質土（古代耕作土）
17　暗灰黄色粘質土
18　暗赤褐色粘質土（竪穴住居１張床）
19　暗黄灰色粘質土
20　黒灰色粘質土（炭を多く含む）
21　黄灰色粘質土

第1145図　土層断面図（1/80）

第２節　弥生時代の遺構・遺物

（１）概要

弥生時代においては、今回の調査地の大半を河道が占める。加茂政所遺跡との境をなす河道を河道１とし、立田遺跡との境の河道を河道２とする。今回の調査範囲内において河道１と河道２に囲まれた微高地は、北西方向となる現在の原古才集落あたりまで続くとみられるが、ここでは弥生時代の遺構は存在していない。

河道以外の遺構は、河道２の東側の微高地上（ＡＰ14区・ＢＰ14区）に存在し、竪穴住居３軒と掘立柱建物１棟、土壙６基および柱穴などがある。これらは、時期的にはいずれも後期に属する遺構であるが、河道や掘り下げ中の遺物のなかには中期にさかのぼるものも存在する。また、それらより東に連続する立田遺跡において検出された弥生時代後期の遺構群をも含めて本来同一集落として位置付けられる。

（弘田）

（２）竪穴住居

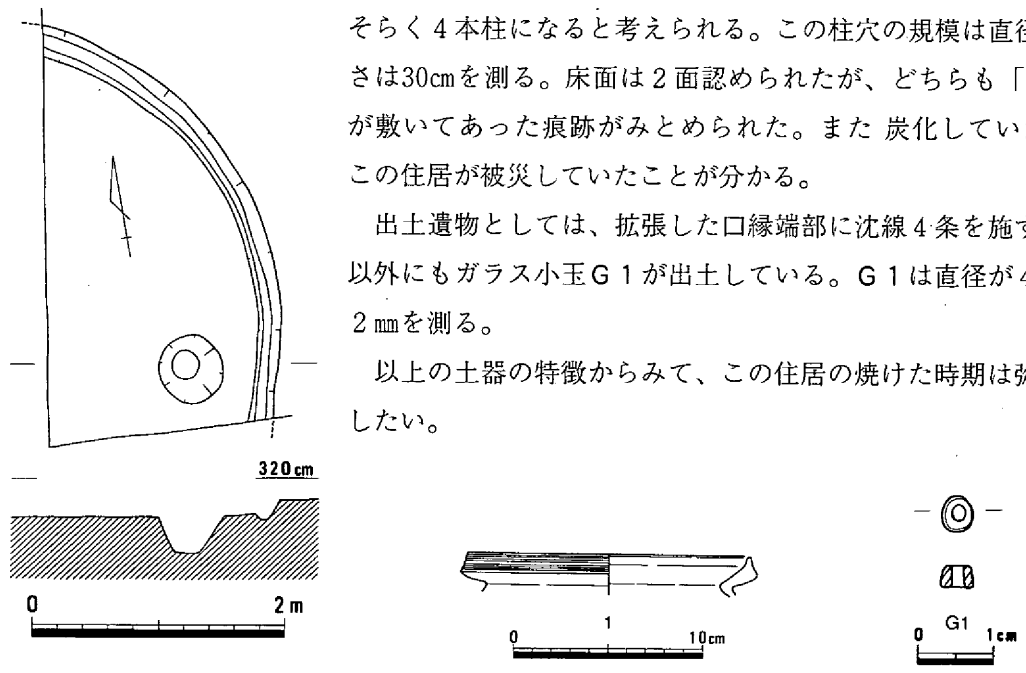
竪穴住居１（第1146図）

ＡＰ14区の南西隅で検出した円形の竪穴住居である。調査区内には全体の１／４が検出できた。壁体溝は幅20cm、深さは床面から10cm程度である。壁の高さは床面から10cm程である。柱穴は壁体溝に近い位置から１本だけ検出できた。おそらく４本柱になると考えられる。この柱穴の規模は直径が50cm、深さは30cmを測る。床面は２面認められたが、どちらも「わらむしろ」が敷いてあった痕跡がみとめられた。また 炭化していたことから、この住居が被災していたことが分かる。

出土遺物としては、拡張した口縁端部に沈線４条を施す甕１と土器以外にもガラス小玉Ｇ１が出土している。Ｇ１は直径が４㎜、孔径は２㎜を測る。

以上の土器の特徴からみて、この住居の焼けた時期は弥生後期Ⅱとしたい。

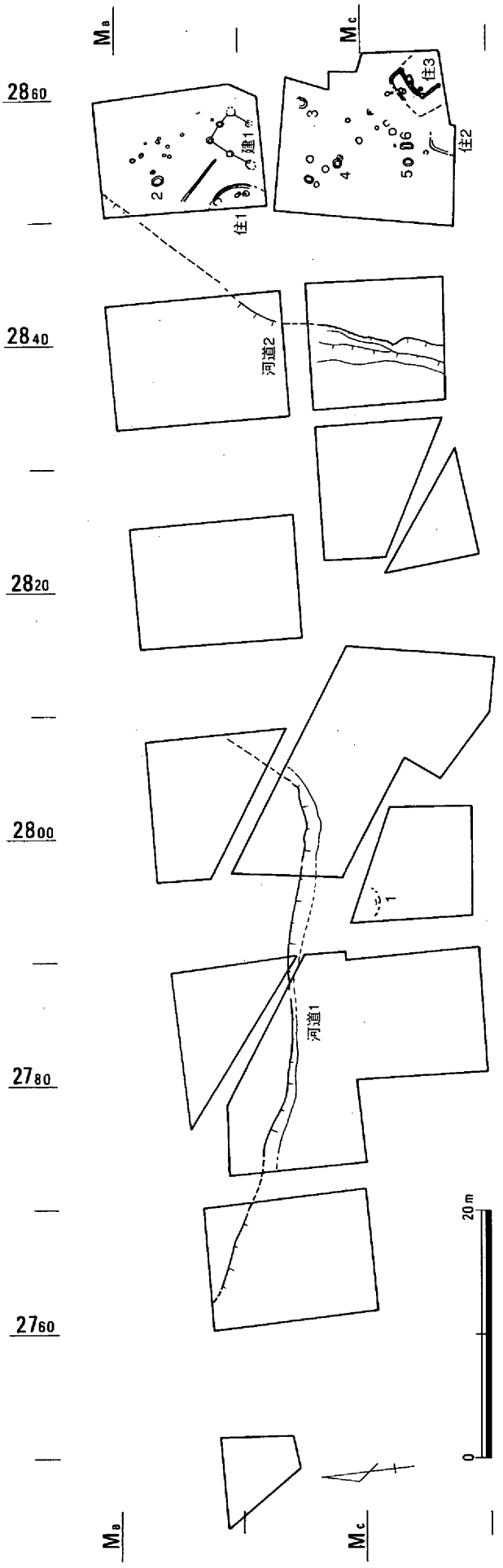
（浅倉）



第1146図　竪穴住居１（1/60）・遺物

竪穴住居２（第1148図）

ＢＰ14区の南端中央部に位置する竪穴住居である。ＢＰ14区はこの住居の東側の農道部を後日拡張

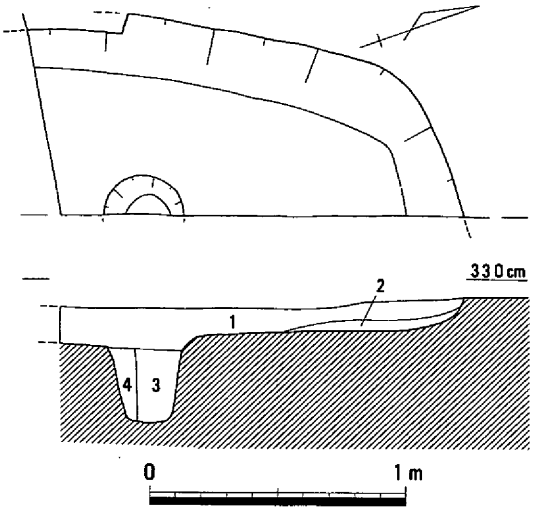


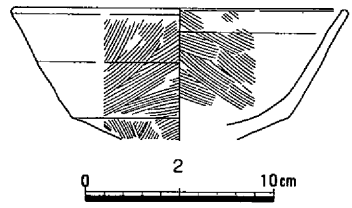
住は竪穴住居を、建は掘立柱建物を、番号のみは土壙を示している。

第1147図　弥生時代遺構配置図（1/500）

して調査を行ったが、調査範囲が狭く、かつ遺構検出面が深かったためにこの住居の続きは確認できなかった。調査した部分での長さは2.9mをはかり、また壁体が直線的であることから、平面形態は隅丸方形の可能性が強い。検出面から床面までの深さは15cmを測り、床面では周囲に壁体溝をめぐらす。柱穴は1本検出できた。この柱穴は、掘り方の直径が32cm、深さは30cmを測る。

出土遺物には高杯の杯部片2がある。杯部の形態は、深く外上方にひらき、内・外面にはハケ調整を行う。これからみて、この住居の時期は、弥生時代後期Ⅳと思われる。（弘田）





1　茶灰色粘質微砂　　3　黄茶灰色粘質土（炭を含む）
2　茶黄灰色粘質微砂　4　黄茶灰色粘質微砂

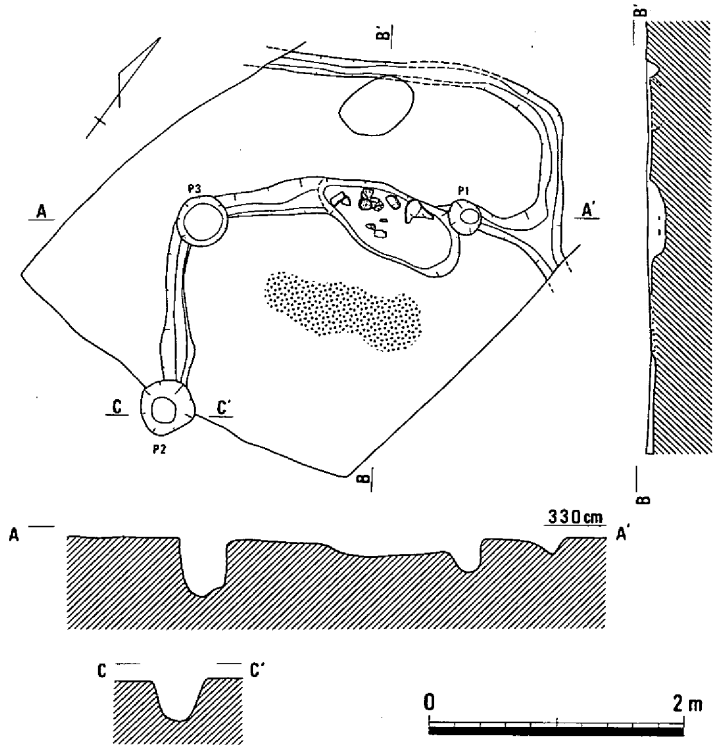
第1148図　竪穴住居2（1/30）・遺物

竪穴住居3（第1149・1150図、写真133-1、137）

ＢＰ14区の東南端で検出できた、平面形体が方形を呈する竪穴住居である。一部が調査区外にのびるが、規模は調査範囲内で1辺4.22mを測り、検出面からの深さは0.05mを測る。主軸はN-54°-Eである。

床面には周囲に壁体溝をめぐらし、高床部や柱穴さらに、焼土面がみられた。高床部は壁体に沿って二辺に現存し、低床部との境にも壁体溝がめぐる。主柱穴は4本と考えられ、Ｐ２・３は高床部の隅に位置する。柱間は2.1～1.5mを測る。なお、床面の中央においては中央穴は確認できていないが、長さが1.3m、幅は0.4mの範囲にわたって焼土面が認められた。

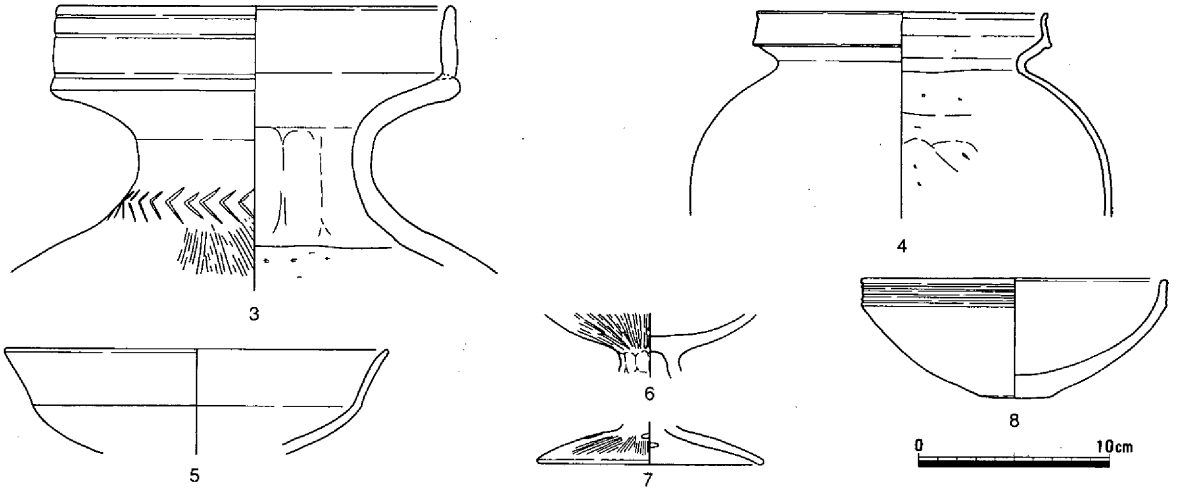
出土遺物をみると、二重口縁の壺3は頸部に刺突文を施す。甕4は、



暗褐色粘土（炭を少量含む）

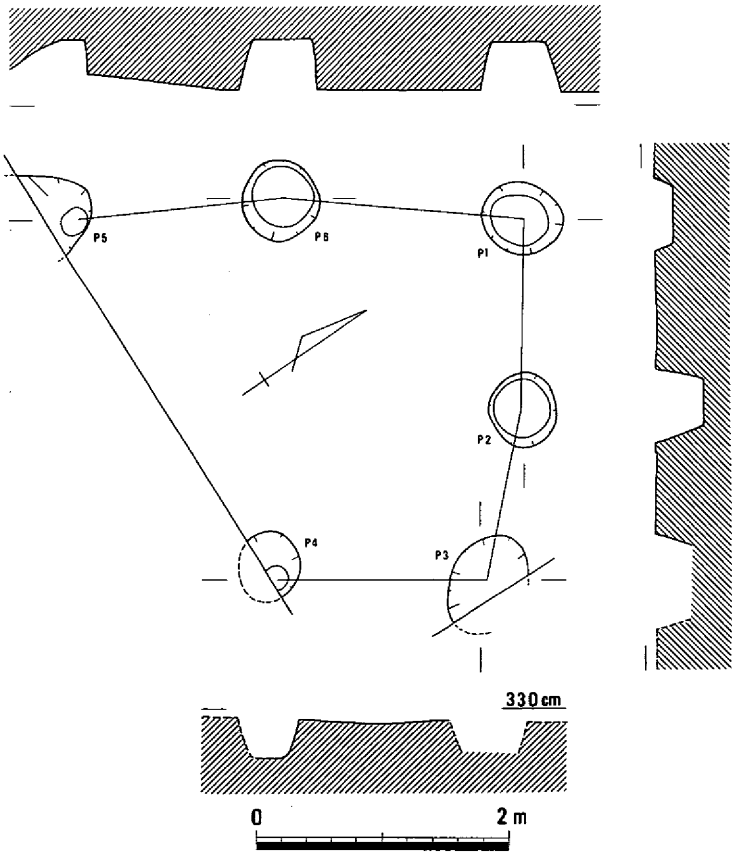
第1149図　竪穴住居3（1/60）

口縁部を上方に拡張させる。高杯５～７は短脚で浅い杯部をもつ。鉢８は直立する口縁部に凹線を施す。これらは高床部と低床部の境にある浅い掘りこみ内からおもに出土している。この土壙が住居に伴うかは確実ではないが、この住居の時期は弥生時代後期末の範疇にあると考えて差し支えないであろう。（弘田）



第1150図　竪穴住居３遺物

（３）掘立柱建物



第1151図　掘立柱建物１（1/60）

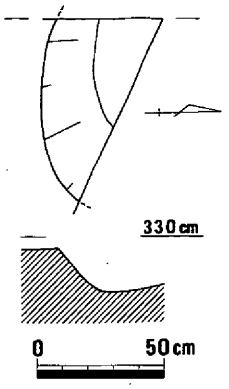
掘立柱建物１（第1151図、写真133－2）

ＡＰ14区の南東隅から６本の柱穴を検出した。桁行きが２間以上、梁間は２間の掘立柱建物で、棟方向はＮ-36°-Ｅである。概ね長方形のプランを呈し、桁行が355cm、梁間は300cmを測る。柱穴の配置は図示した通りである。直線で掘り込まれてなく中央に当たる柱穴はやや外に膨らんでいる。

柱穴掘り方の直径は55cm～60cm、深さは15cm～40cmで、柱間は135cm～192cmを測る。

柱穴からは何も出土していないが、埋土の土質や遺構検出面等から弥生時代とみられ、また竪穴住居１に接することから何らかの関係があると思われる。（浅倉）

（４）土壙



第1152図　土壙１（1/30）

土壙１（第1152図）

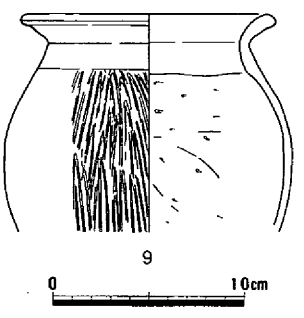
ＢＰ11区に位置する土壙である。河道１の埋没過程でその斜面部に掘削されていた。調査区の端に一部がかかったのみであり、平面形および規模は不明である。

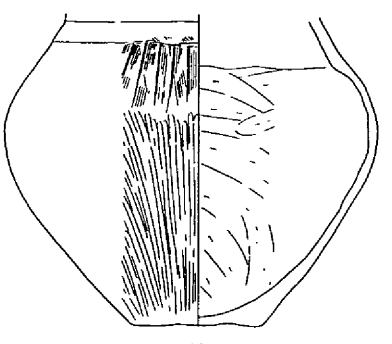
遺物は、土器細片が少量出土したのみで図示しうるものはない。この土壙の時期は、検出レベルなどから判断して、弥生時代でも後期末に近いと考えられる。（弘田）

土壙２（第1153図、写真137）

ＡＰ14の中央部西よりで検出した平面形が楕円形の小型土壙である。検出面の標高は320cmで、断面形は東側床面が深い箱形をなす。上幅の現存長は10cm、幅が72cm、深さは22cmを測る。土器片が出土したのは第１層下部であり、第３層には炭が少量入っていた。第２層は柱穴ではなくブロック状に土質が異なっていたものである。

２点の土器を掲載した。９は甕で、口径12.4cmを測る。外反する口縁の端部は丸く収める。胴部内面はヘラケズリ、外面は粗い縦方向のハケメである。底部は欠けているが平底になると思われる。10は壺で、口縁部を欠いている。胴部内面はヘラケズリ、外面は上１／３が粗い縦方向のハケメ、下部は縦方向のヘラミガキである。この土壙の時期は、弥生後期Ⅲと思われる。（浅倉）





1　暗灰褐色砂質土
2　明黄灰色砂質土
3　灰褐色砂質土（炭を少量含む）

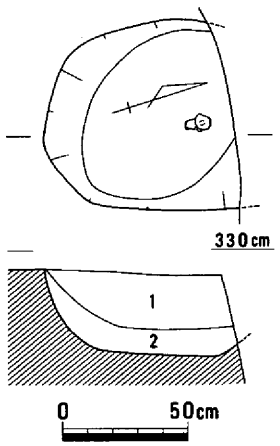
第1153図　土壙２（1/30）・遺物

土壙３（第1154図、写真137）

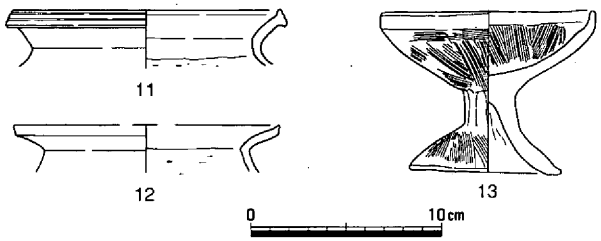
ＢＰ12区の北東隅に位置する土壙であり、平面形が楕円形で、断面形は椀状を呈する。規模は、長さが76cm以上で、幅は76cm、深さが35cmを測る。埋土は２層に分かれ、その上層には焼土や炭とともに土器片も多くみられた。

出土遺物をみると、甕には口縁端部を上下に拡張させて、その外側に凹線を施す11と端部をわずかに上方につまむようにナデて終わる12がある。13では短く直立した口縁部をもつ鉢状の体部に、短い脚部がつく。

以上の遺物からみてこの土壙の時期は、弥生後期Ⅲとみられる。（弘田）



1　茶灰黄色微砂（焼土・炭を含む）
2　淡黄色粘質微砂

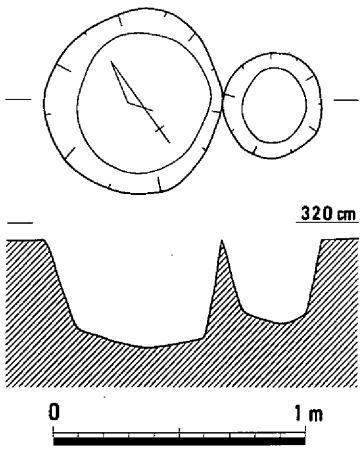


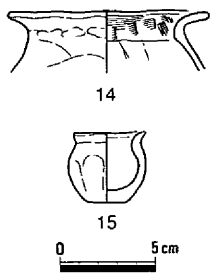
第1154図　土壙３（1/30）・遺物

土壙４（第1155図、写真137）

ＢＰ12区の中央やや南に位置する土壙であり、平面形は円形を呈し、断面形が椀状をなす。規模は、長さが73cmで、幅は71cm、深さが43cmを測る。

出土遺物をみると、小型の甕14は短く外反する口縁部をもち、端部は丸く終わる。さらに、ミニチュア土器15も出土している。この土壙の時期は後期Ⅳとみられる。（弘田）





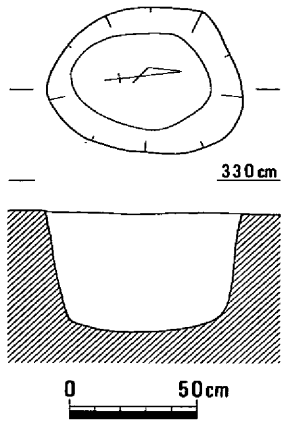
第1155図　土壙４（1/30）・遺物

土壙５（第1156図）

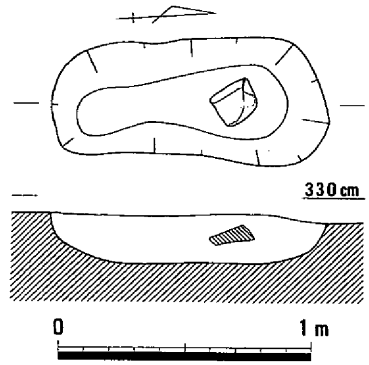
ＢＰ12区の中央やや南に位置する土壙である。平面形は楕円形を呈し、断面形は箱形をなす。規模は、長さが76cm、幅が59cmで、深さは48cmを測る。遺物は細片が少量出土しており、それからみてこの土壙の時期は弥生時代後期とみられる。（弘田）

土壙６（第1157図）

ＢＰ12区の北東隅に位置する土壙である。平面形が隅丸方形を呈し、断面形は浅い椀状をなす。規模は、長さが109cm、幅は51cmで、深さが20cmを測る。出土遺物からみてこの土壙の時期は、弥生時代後期とみられる。（弘田）



第1156図　土壙５（1/30）

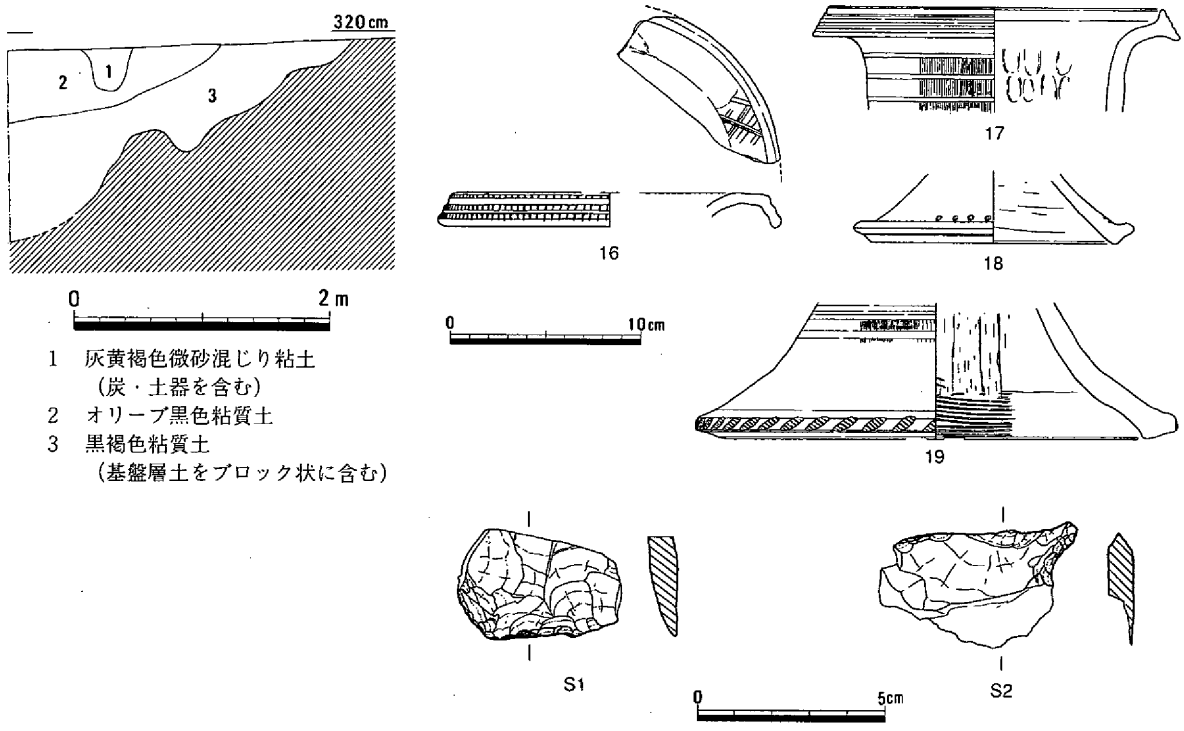


第1157図　土壙６（1/30）

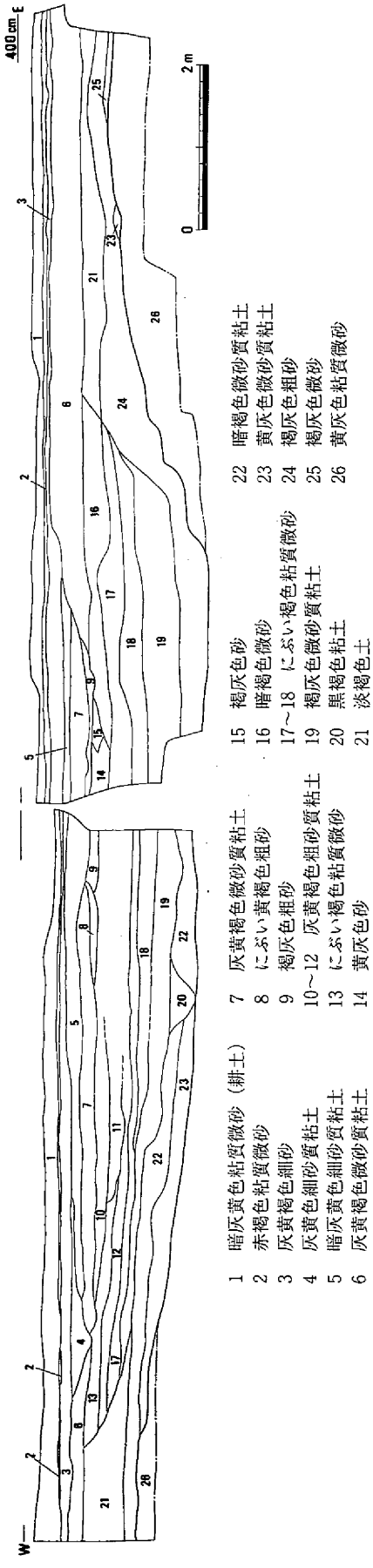
（５）河道

河道１（第1158図、写真133－3）

河道１は、加茂政所遺跡との境をなす古高梁川の東分流と見られる。確認調査の結果に基づいて河



第1158図　河道１（1/60）・遺物



第1159図　河道２（ＡＰ12北壁・ＢＰ13南壁）（1/80）

については全面調査を行っていない。ただし、ＡＰ９～11区にかけてその肩口が検出できたために一部ではあるがトレンチ調査を行ったものの、底は確認できていない。また、ＡＰ10区では肩口から1.5m下がった個所で、肩のラインに沿った溝状の落ち込みがめぐることが確認できた。

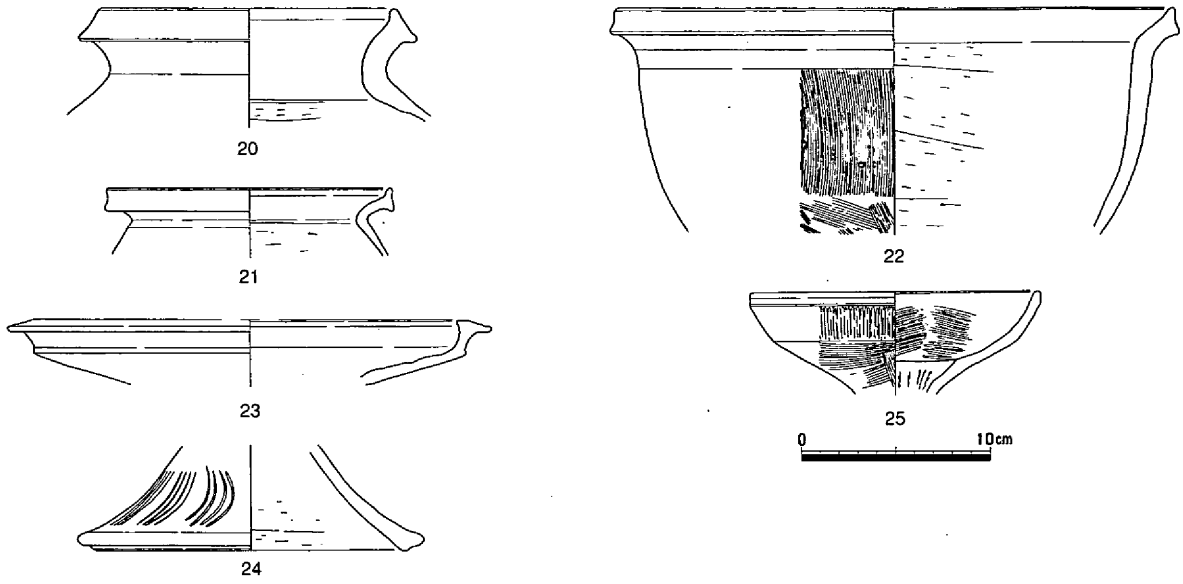
16は広口壺で、口縁端部を下方に垂下させ、その外面には凹線２条と刺突文を施し、内面には櫛描き格子文を施す。このほかにも長頸壺17、高杯18や器台19がある。このうち16が中期Ⅱに属することから河道の時期はそれよりさかのぼる可能性が強い。そのほかは後期Ⅱの範疇にある。さらに土器以外の遺物としては、石器Ｓ１・２がある。ともにサヌカイト製で、Ｓ１はスクレーパー、Ｓ２は石匙と思われる。　（弘田）

河道２（第1159・1160図）

河道２は調査地の北から南へ流走する河道で、もとはここより北西方向にある備中高松城の奥の谷から山沿いと通って東に流れていたとみられる。調査区内では、西側の肩のラインがＡＰ11とＢＰ11区の中央を結ぶ線にある。また東の肩は、ＡＰ14区の北西隅からＢＰ13区南東隅をへてＢＰ14区中央を結ぶ線で検出された。この河道はある段階には河道１の形成していた自然堤防上を越えて河道１へと合流したとみられる。

この河道の幅は、30mあまりに達する。深さは、現表土面から2.2mを測り、河道底の海抜高は1.6mである。土層断面（第1159図）をみると21層以下が弥生時代に相当するが、26層が粗砂層によって埋没しているほかはおもに粘質砂で埋没していることから西側より埋没してゆき、この部分では穏やかな状況にあったとみられる。また、この部分は弥生時代においては、微高地上の低位部として利用されることはなかったようである。

出土したのはおもに土器類であり、図示したものには壺20、甕21、鉢22や、高杯23～25がある。これらのうち、22・23が後期Ⅰの範疇にあるが、そのほかの多くは後期Ⅲである。　（弘田）



第1160図　河道２遺物

（６）その他の遺構・遺物

これまでに述べた遺構以外としては、河道２を挟んで東側の微高地において竪穴住居の存在する周囲に柱穴がいくつか見られる程度であった。また、遺物についても、わずかながら柱穴内やその周辺において出土している。

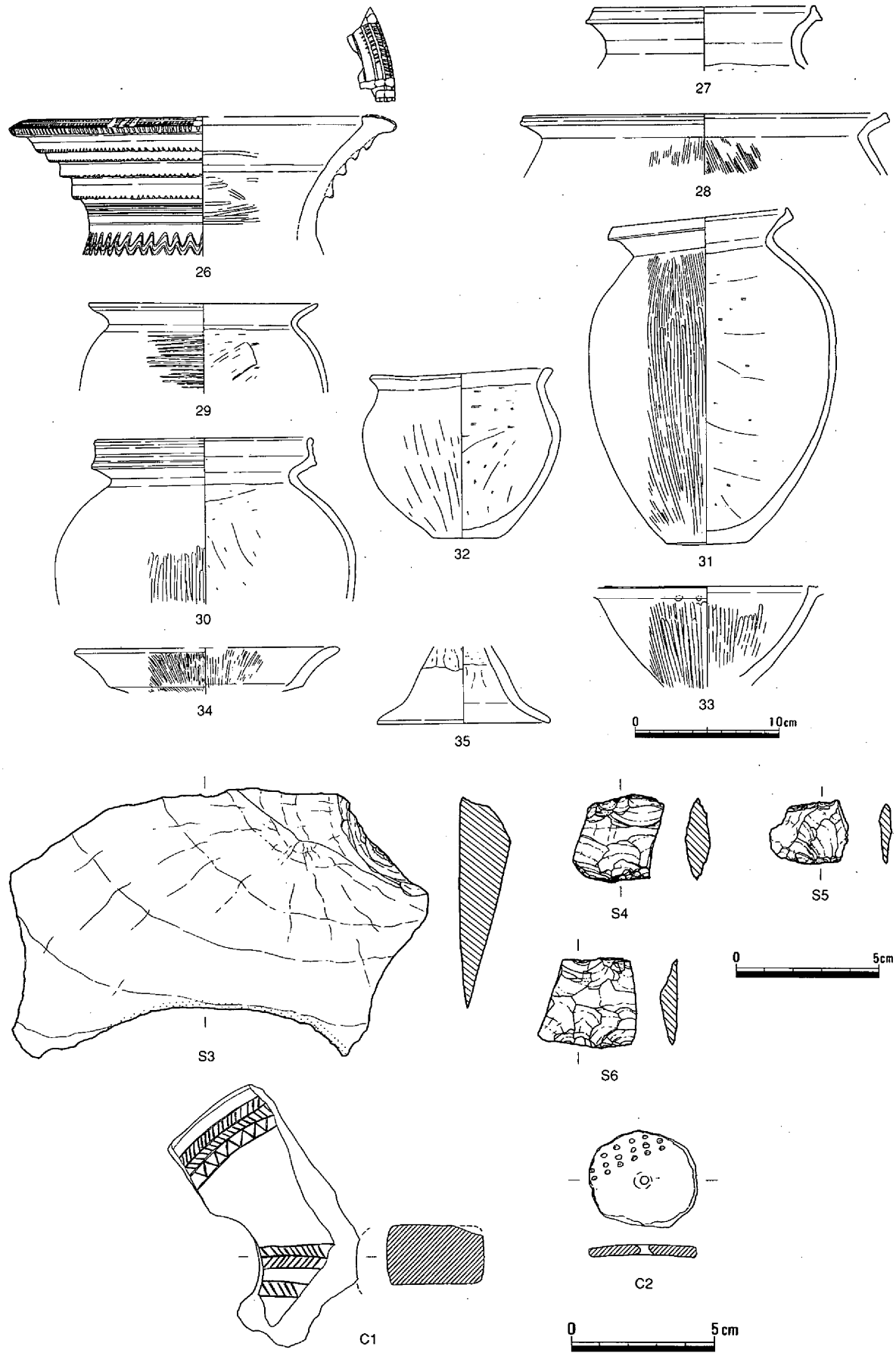
広口壺26は、頸部に櫛描き波状文を施し、そこから緩やかに外傾する口縁部には、４条の刻目突帯を貼り付ける。口縁端部は内外に肥厚させて、内傾する面をつくり、その端面には刺突文と凹線文を、さらには棒状浮文を施す。高杯33は、深い椀状の杯部をなし、口縁部の上端へと貫通する２孔１対位の小円孔がみられる。口縁部は水平に屈曲させ屈曲部の上端には短い突起をめぐらす。この２点は中期中葉にさかのぼる遺物である。

小型甕27は、口縁部を上下に拡張させる。大型甕28では、口縁端部をわずかに上方に肥厚させて内傾する面をなす。また、口径に対して器高が低く、頸部から短く外反する口縁部をもつ鉢32、さらには高杯34が後期Ⅱに属する。

甕29は短く「くの字」に外反する口縁部をもち、端部は丸く終わる。また、外面調整にはナデの下に細かい平行タタキががみられる。甕31は、吉備甕の祖形となるタイプで口縁部を上方に拡張させ、外面には凹線を施す。甕31は、口縁端部を内上方に拡張させることによって内傾する面をつくる。これらは、後期Ⅳに相当する。

石器では、Ｓ３が長さ14.5cmで、幅９cmを測る大型のフレイクを利用した石包丁と思われる。長さ約10cmの刃部にはわずかに珪酸らしきものが付着している。また、Ｓ４・５は楔で、Ｓ６はスクレイパー片と思われる。

土製品としては、Ｃ１は分銅形土製品で、復元すると長さが12cmほどになり、厚さが2.1cmを測る。表面の周縁部にはヘラで綾杉文と鋸歯文を、中央には綾杉文と斜行文を施す。Ｃ２は土器を転用した紡錘車で表面には刺突文が残る。（弘田）



第1161図　その他の遺物

第３節　古墳時代の遺構・遺物

（１）概要

古墳時代の遺構としては、竪穴住居11軒、土壙５基、溝７条、鍛冶炉１基などがあり、それまでの弥生時代と比べて遺構数が増大する。

検出された遺構の大半は古墳時代後期に属するが、ごく一部には中期の遺構・遺物が認められた。また主要な遺構は、古いものでも６世紀の後半までしか遡らず、多くは７世紀に下ると思われる。

この調査地は現在の高松原古才集落を中心とした微高地の南端にあたると考えられるが、弥生期にみられた二条の河道の埋没が進んだことによってこの地区の安定化が進み、新たな居住域や生産の場として開拓されていったとみられる。

遺物については、遺構以外にも低位部や包含層から出土しているが、この中には古墳時代中期から後期を通しての土器がみられ、調査区外の微高地においては古墳時代中期以降の集落の存在を想定できる。また、そのなかでも注目すべきものとしては、韓式系土器も数点が含まれている。　（弘田）

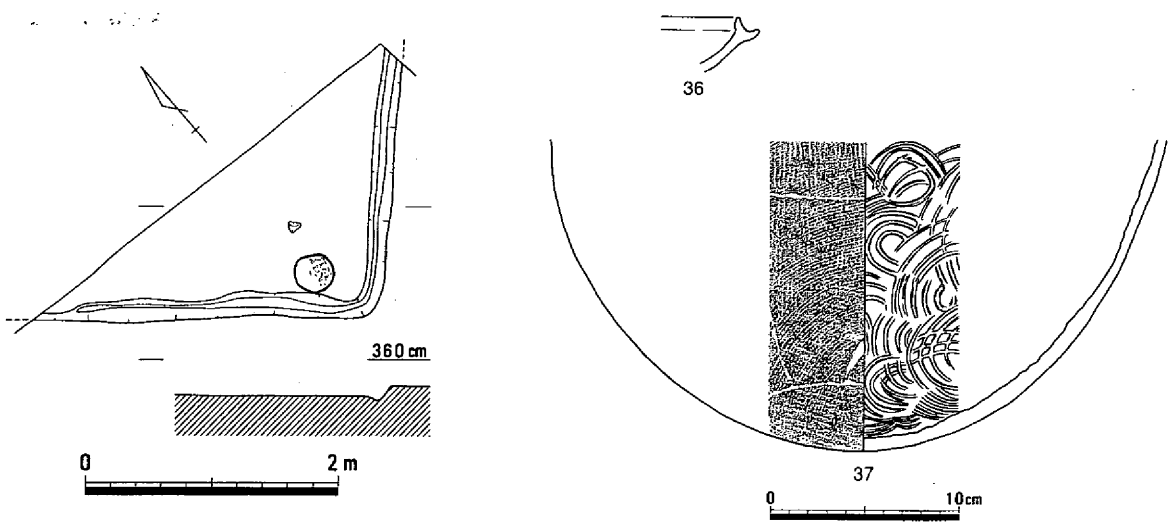
（２）竪穴住居

竪穴住居４（第1162図）

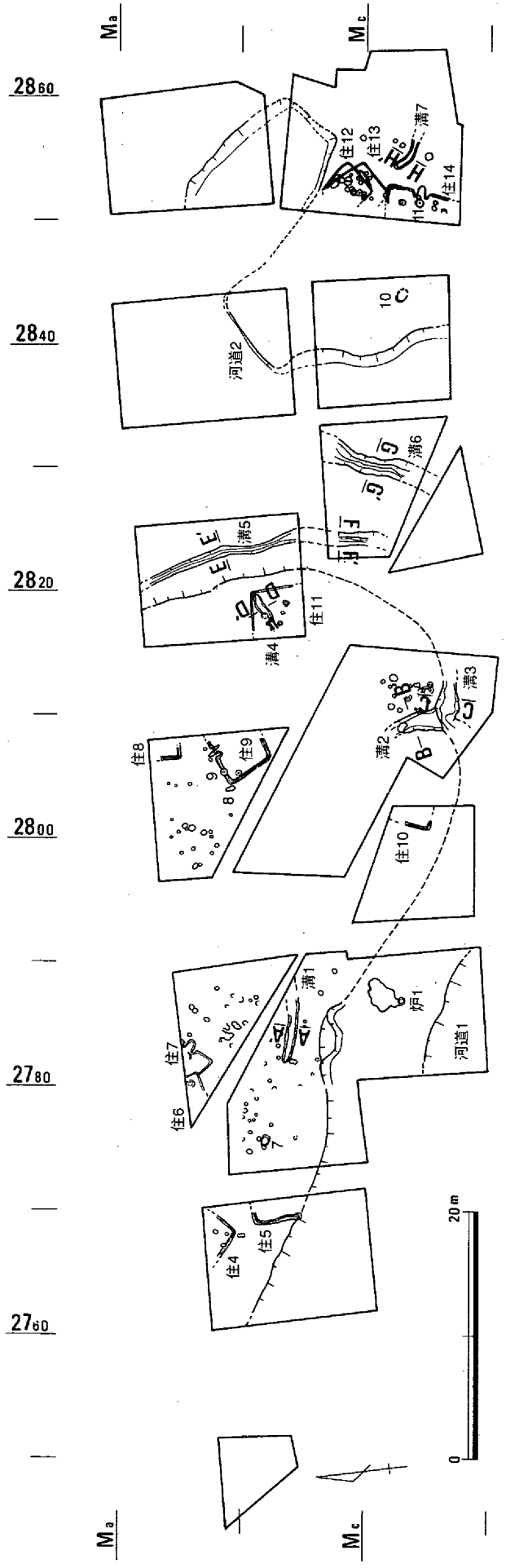
ＡＰ９区の北東部に位置する竪穴住居である。住居の一部のみの検出であるが、平面形は方形で、規模は一辺が2.8m以上、検出面からの深さは0.1mを測る。住居の床面には周囲に壁体溝をめぐらすが、柱穴などは確認できていない。

出土遺物には、須恵器の杯身片36と甕の体部から底部にかけての破片37がある。36は細片であるが、きわめて短い立ち上がりをもつ杯身である。37は外面にタタキの後、カキメを施し、内面には同心円文の当て具痕が残る。

以上の遺物からみてこの住居の時期は、古・後・Ⅲでも７世紀中葉ころと思われる。　（弘田）



第1162図　竪穴住居４（1/60）・遺物



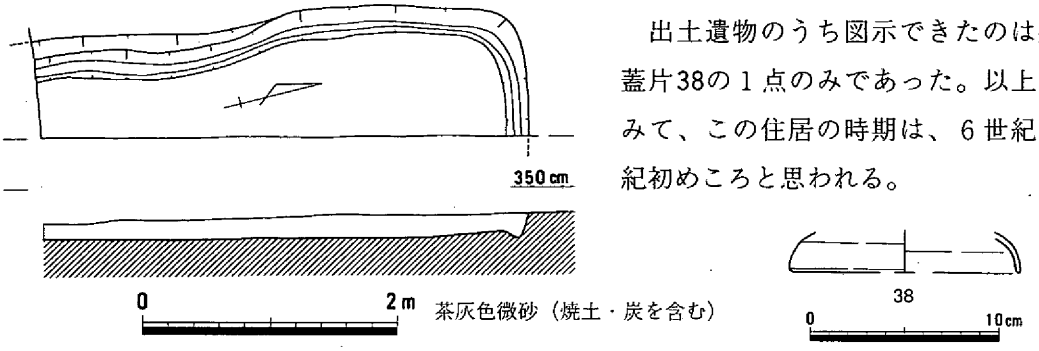
住は竪穴住居を、建は掘立柱建物を、番号のみは土壙を、炉は鍛冶炉を示している。

第1163図　古墳時代遺構配置図（1/500）

竪穴住居５（第1164図）

ＡＰ９区の中央東壁沿いで、さきの竪穴住居４から南へ1.5m離れて位置する。平面形態は方形で、一辺は380cm、検出面からの深さは20cmを測る。床面の周囲には壁体溝をめぐらすが、柱穴・カマドなどの存在は不明である。

出土遺物のうち図示できたのは須恵器の杯蓋片38の１点のみであった。以上の遺物からみて、この住居の時期は、６世紀末から７世紀初めころと思われる。（弘田）



第1164図　竪穴住居５（1/60）・遺物

竪穴住居６（第1165図）

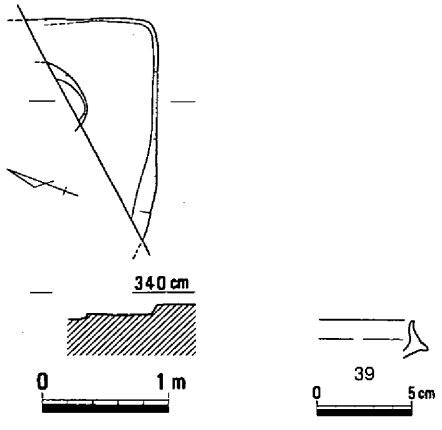
ＡＰ10区の北辺において竪穴住居のコーナー部分のごく一部を検出した。後年次この北側において行われた発掘調査において続きを検出しており方形の竪穴住居とみられるが、ここでは床面には柱穴が１本確認されたのみで、壁体溝などはみられない。

出土遺物としては、須恵器杯身の小片39がある。口縁部の立ちあがりは短く、端部も丸く終わる。これからみて、この住居の時期は、古・後・Ⅲでも６世紀末葉あたりに考えられる。（弘田）

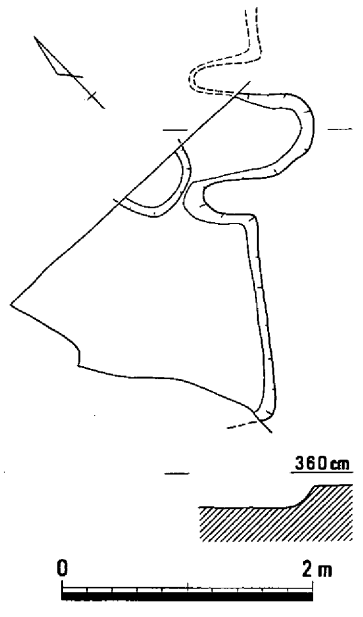
竪穴住居７（第1166図）

ＡＰ10区の北辺において検出された、住居６に切られる方形の竪穴住居である。この住居の大半は北側の調査区外に続くため規模は不明であるが、検出面からの深さは８cm程である。

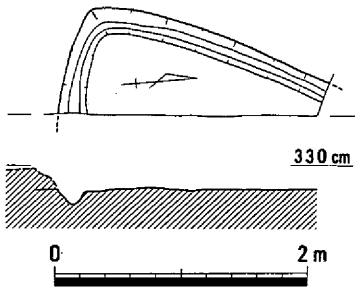
床面残存部分においては、柱穴や壁体溝は確認されてないものの、造りつけのカマドをもつ。このカマドは、袖部を壁体から内側に60cm、煙出しは住居外に45cm程突出させる。また、燃焼部はあまり



第1165図　竪穴住居６(1/60)・遺物



第1166図　竪穴住居７(1/60)



第1167図　竪穴住居８（1/60）

焼けていなかったがカマドの焚き口内側の床面下には直径70 cm程の柱穴状の掘りこみがみられた。これはカマド構築の際の防湿用下部構造とみられる。

時期を特定できる遺物はないが、遺構の切り合いからみて古墳時代後期Ⅲと考えられる。（弘田）

竪穴住居８（第1167図）

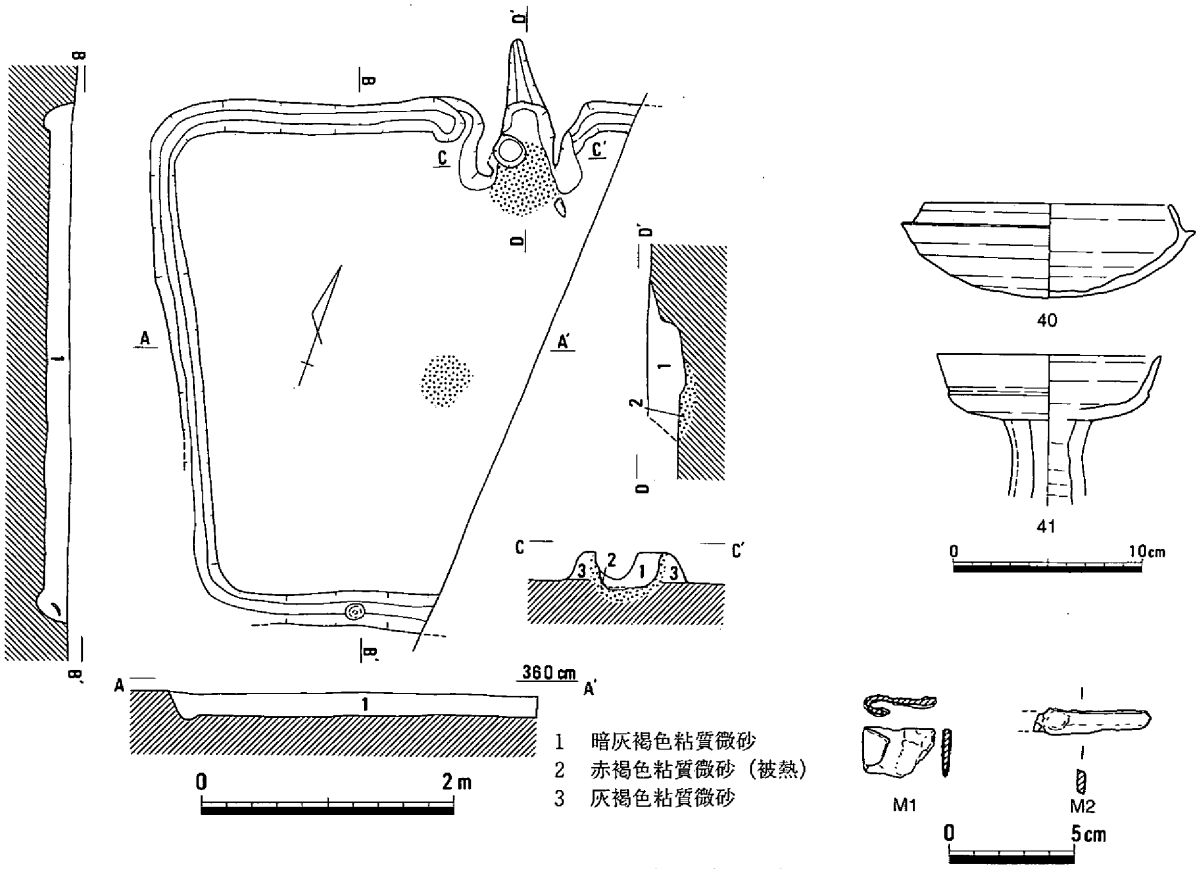
ＢＰ10区の北東隅において竪穴住居のコーナー部分を検出した。規模は不明確であるが、平面形は方形であり検出面からの深さは15cm程を測る。床面には壁体溝をめぐらしている。

出土遺物はないが、周辺の住居から古墳後期の可能性が強い。（弘田）

竪穴住居９（第1168図、写真134－1、137）

ＡＰ11区の東端で約半分が検出された造り付けのカマドをもつ竪穴住居である。平面形がやや歪な方形を呈す。正確な規模は不明であるが１辺は403cmを測り、検出面からの深さが20cm程である。カマドは、支脚が抜き取りによって存在しなかったが袖部の前半部の壁面および床面は非常によく焼けていた。煙道部は約0.5ｍが残存していたが、燃焼部から一段高くなってから緩やかに住居外にのびる。また、床面にはカマド部を除き周囲に壁体溝をめぐらせており、柱穴は確認できなかったものの、中央には火処が１ケ所みられた。

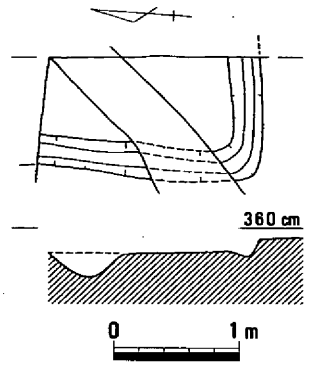
出土遺物には須恵器や土師器のほかに鉄器・鉄滓もみられる。41は長脚の無蓋高杯で、杯部には文様はなく杯底部と口縁部の境に１条の突線をめぐらす。Ｍ１は片側の折り返しを欠くが、手鎌である。



第1168図　竪穴住居９（1/60）・遺物

M２は刀子片である。

以上の遺物からみて、この住居の時期は古・後・Ⅱのなかでも６世紀後半である。（弘田）



第1169図　竪穴住居10(1/60)

竪穴住居10（第1169図）

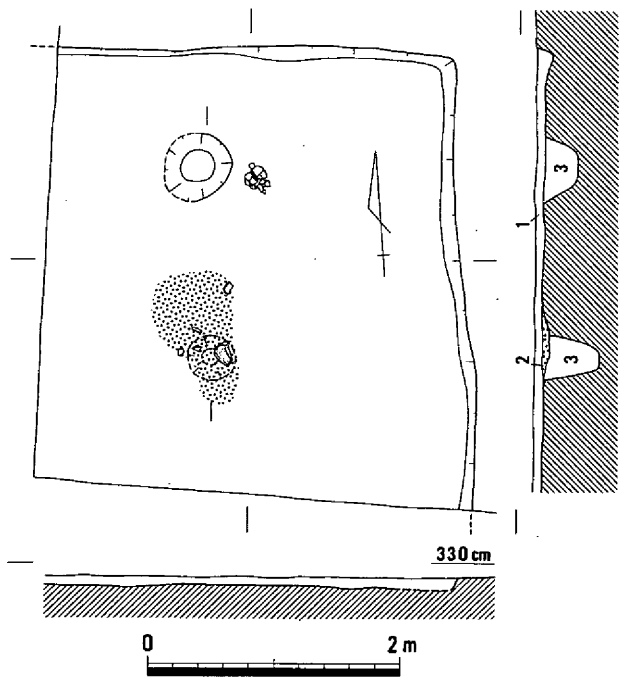
ＢＰ11区の北東隅でごく一部を検出した。壁体溝をめぐらせ、また調査区壁面において柱穴状の落ちを確認していることから方形の竪穴住居と思われるが、床面の状況や規模は不明である。検出面からの深さは５cm程を測る。

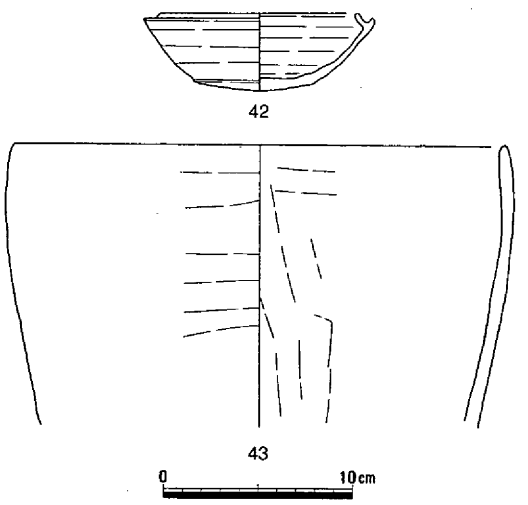
遺物は細片がわずかながら出土しているが、図示できるものはない。それからみてこの住居の時期は、古墳時代後期と思われれる。（弘田）

竪穴住居11（第1170図、写真134－2、137）

ＡＰ９区の南西隅で検出された竪穴住居で、南西方向ではさらに調査区外にひろがる。平面形は方形を呈し、規模は一片が3.5m以上で、検出面からの深さは10cm程を測る。床面には柱穴一本と焼土面が存在するが、壁体溝は明瞭ではない。柱穴は掘り方の直径55cm、深さが25cmを測る。さらに、焼土面の下においてもピットが一本検出できた。直径が30cm、深さは35cmを測る。これを住居に伴うとみると、掘削後すぐに埋められ、上面を火所として使用したとみられる。埋土中には炭を若干含んでいた。

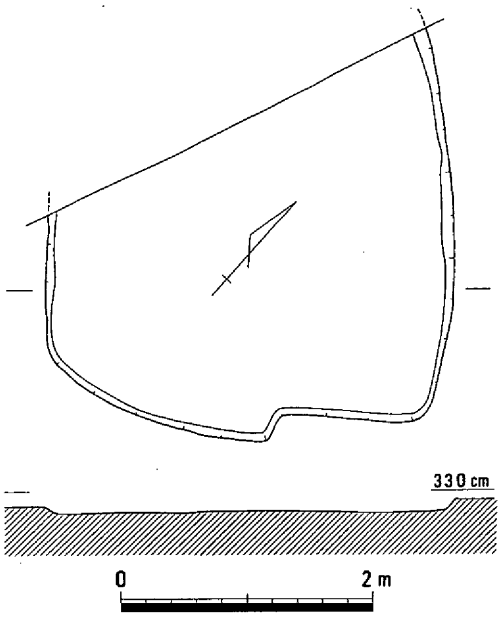
出土遺物をみると、須恵器の杯身42と土師器43がある。42は口縁部の立ちあがりがきわめて短く、端部は丸く終わる。口径が10.4cm、器高は4.1cmを測る。なお、底部外面はヘラ切り後未調整である。43は口径が26cmを測り、口縁端部に向けて緩やかに上方にのびる形態から甑と思われる。内外面をナデによって仕上げている。





1　暗褐色微砂混じり粘土　3　暗褐色微砂混じり粘土
2　被熱　（炭を若干含む）

第1170図　竪穴住居11（1/60）・遺物



第1171図　竪穴住居12（1/60）

この竪穴住居の時期は、古・後・Ⅲのなかでも７世紀中葉ころと考えられる。（弘田）

竪穴住居12（第1171図）

ＢＰ14区の西壁沿いで検出できた竪穴住居である。平面形はやや歪な方形を呈し、南辺では張り出し部がみられるが、これが本来の形状であるかは不明である。

規模は１辺が3.1ｍと小型住居の部類に入り、検出面からの深さも0.1ｍ未満で、主軸はＮ-42°-Ｗである。また、住居の規模によるものか床面においては、壁体溝や柱穴・炉などはいっさい確認できなかった。

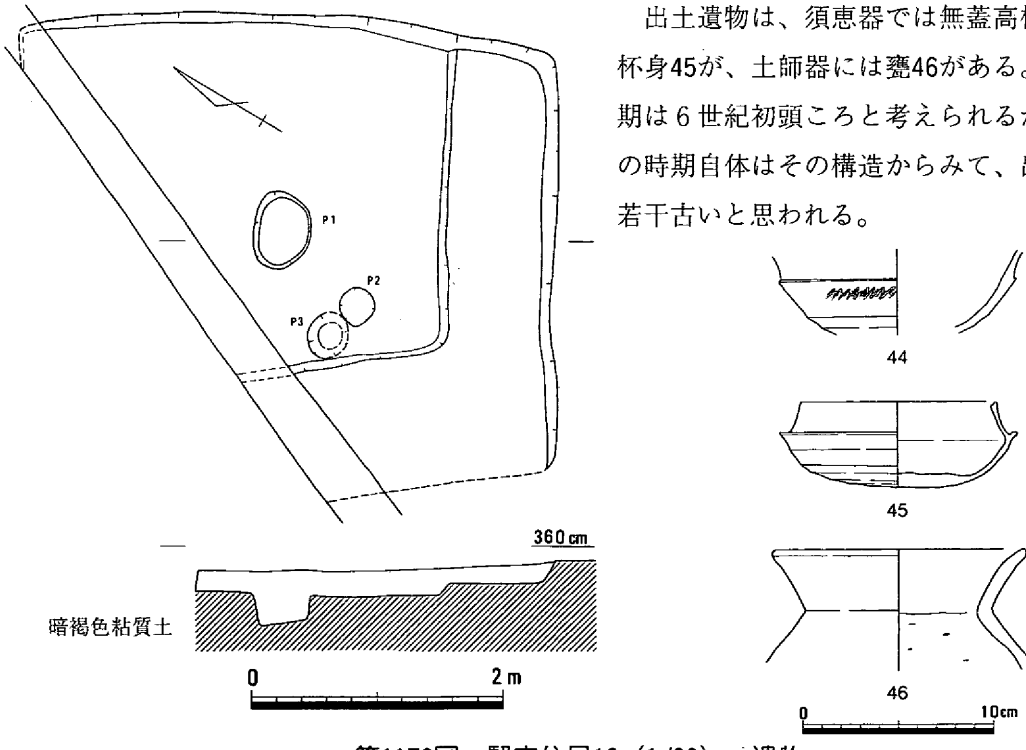
この住居からは時期の判別のできる遺物はみられなかったが、切り合い関係からみて竪穴住居13よりは後出することから、古墳時代後期であろう。竪穴住居13の覆土中からは６世紀初頭の遺物が出土しており、この住居との関連も考えられる。（弘田）

竪穴住居13（第1172図、写真134－3、137）

ＢＰ14区の中央西よりで検出できた竪穴住居である。平面形が長方形を呈し、一辺が3.9～4.3ｍ、検出面からの深さは0.4ｍを測る。

床面には、壁体溝や柱穴はみられなかったものの、中央付近には径が0.60～0.45ｍ、深さ45㎝のピットを備えている。ただし、これには灰や炭などは認められなっかった。さらには、二辺の壁に沿って幅が0.9ｍ程の高床部をＬ字状に配していた。

出土遺物は、須恵器では無蓋高杯の杯部44と杯身45が、土師器には甕46がある。これらの時期は６世紀初頭ころと考えられるが、この住居の時期自体はその構造からみて、出土遺物より若干古いと思われる。（弘田）

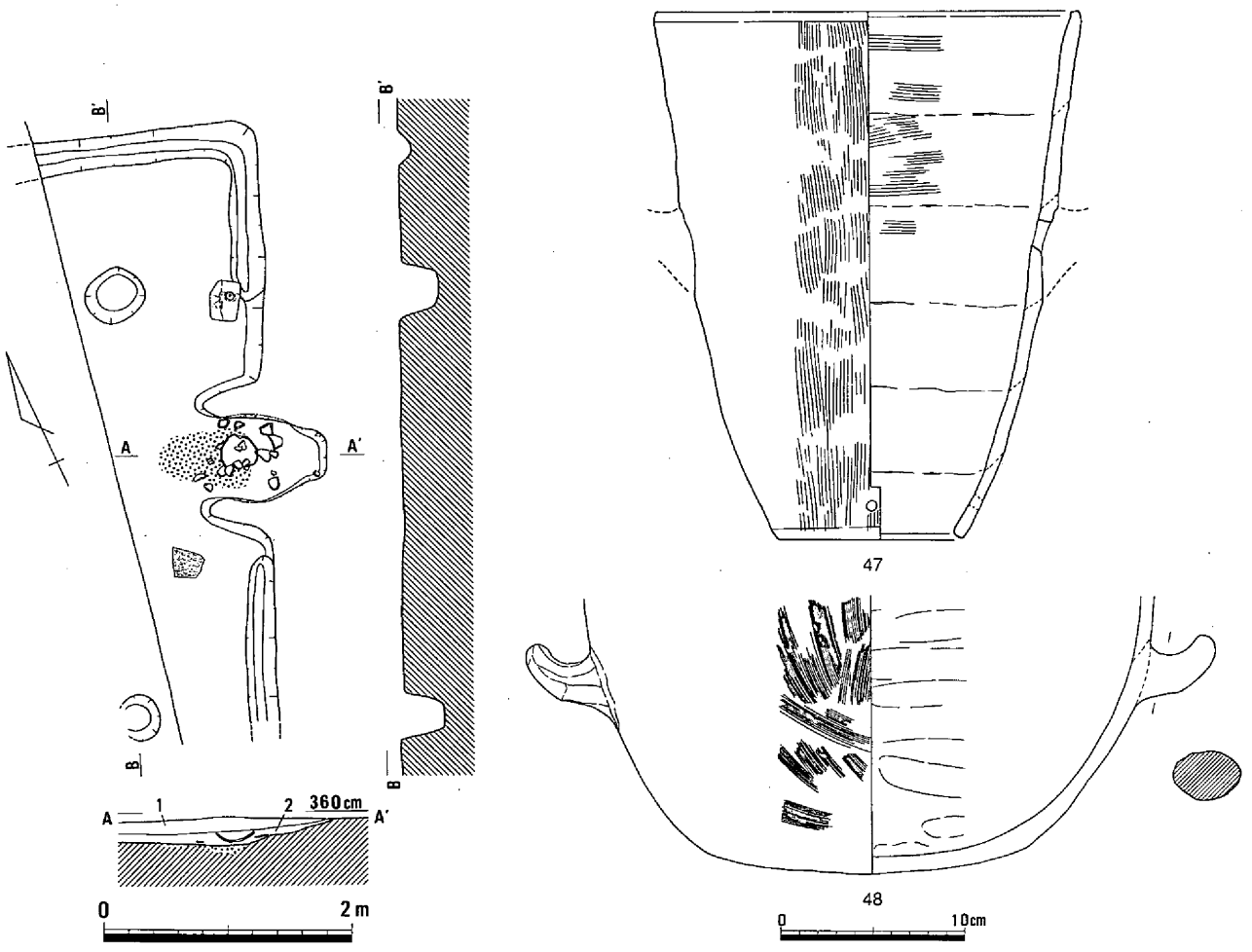


第1172図　竪穴住居13（1/60）・遺物

竪穴住居14（第1173図、写真135－1、137）

ＢＰ14区の南西隅において検出できた竪穴住居である。平面形は方形で、残存する１辺の長さが4.9ｍを測りそのほぼ中央あたりに造りつけのカマドをもつ。このカマドは、壁体から住居内側に袖部を、また煙道部は住居外に50㎝突出させる。支脚が存在しなかったものの、燃焼部は非常に良く焼けしまっていた。床面上にはカマド部分を除き壁体溝をめぐらし、柱穴２本が確認された。この柱穴は掘り方の径が40～50㎝を測る。この２本の柱穴の位置から、主柱穴は４本であったと思われる。

カマド内とその周辺から土師器の甑47と鍋48が出土している。これからみて住居の時期は、古・後・Ⅲと思われる。（弘田）



1　灰褐色粘質土　2　暗灰褐色粘質土

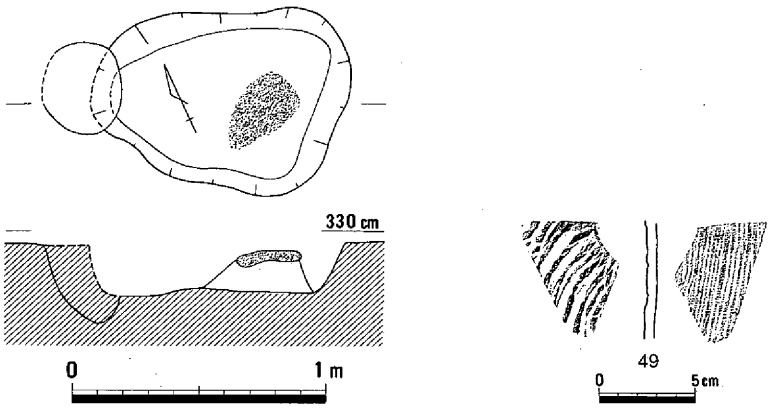
第1173図　竪穴住居14（1/60）・遺物

（３）土壙

土壙７（第1174図）

ＡＰ10区の北東部に位置する。平面形体は不整円形を呈し、規模は長軸で0.96ｍ、短軸が0.76ｍ、深さは検出面から0.2ｍを測る。埋土中には焼土塊が認められた。

出土遺物には、須恵器の甕腹片があり、時期は古墳時代後期と考えられる。（弘田）



第1174図　土壙７（1/30）・遺物

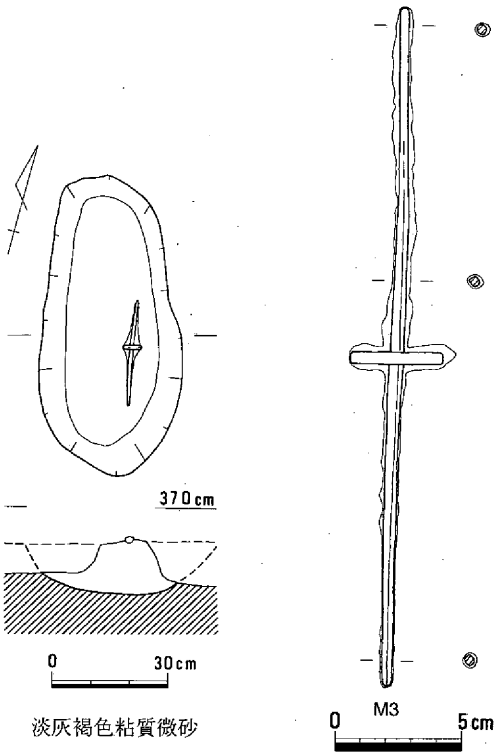
土壙８（第1175図、写真135－2）

ＡＰ11区の中央南よりで、竪穴住居９の西に接して位置する。

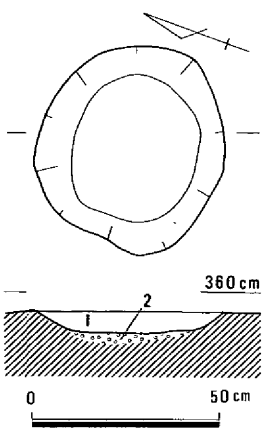
平面形が楕円形を、断面形は椀状を呈しており、規模は長さが79cm、幅は37cmで、深さが14cmを測る。

土壙内には土器類はみられなかったものの、鉄製紡錘車Ｍ３が出土している。軸部は大半が断面方形であるが、上端部あたりでは断面円形となる。その長さは26.9cmで、厚さが0.5cmを測る。またその中央には同じく鉄製の円盤を取り付けており、その直径は3.7cmで、厚さが0.5cmを測る。

検出面や埋土などから判断して、時期は古墳時代とみられる。（弘田）



第1175図　土壙８（1/20）・遺物



1　灰褐色粘質微砂
2　明赤褐色粘質微砂（被熱）

第1176図　土壙９（1/20）

土壙９（第1176図）

ＡＰ11区で竪穴住居９を切って掘り込まれた土壙である。平面形が楕円形を、断面形は皿状を呈しており、規模は、直径が50～55cmで、深さは10cmを測る。

出土遺物はないが、底面が熱影響を受けており、炭窯などの可能性がある。検出レベルや埋土などからみてこの土壙の時期は、古墳時代とみられる。（弘田）

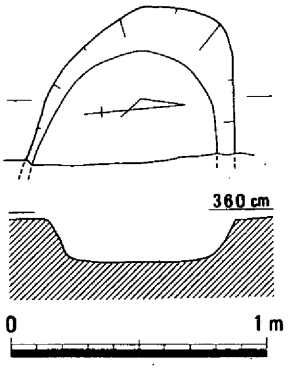
土壙10（第1177図）

ＢＰ13区に位置する土壙で、東側は調査区外となる。平面形が楕円形を断面形は皿状を呈し、規模は残存長が82cmで、深さは17cmを測る。

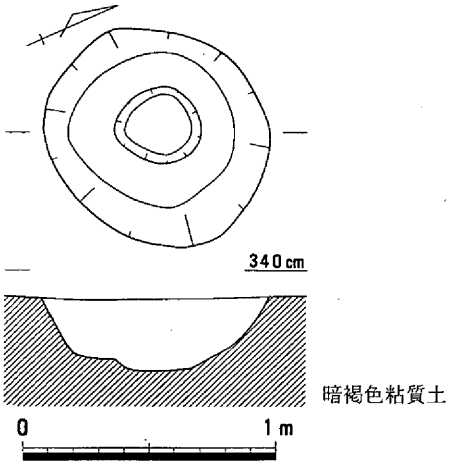
出土遺物はないが、時期は古墳時代とみられる。（弘田）

土壙11（第1178図）

ＢＰ14区の南西隅に位置する。平面形は円形で、直径が84～93cm、深さが30cm程を測る。この土壙は竪穴住居14の下層で検出されており、カマドの下部構造の可能性もある。出土遺物はないが、古墳時代後期であろう。（弘田）



第1177図　土壙10（1/30）



第1178図　土壙11（1/30）

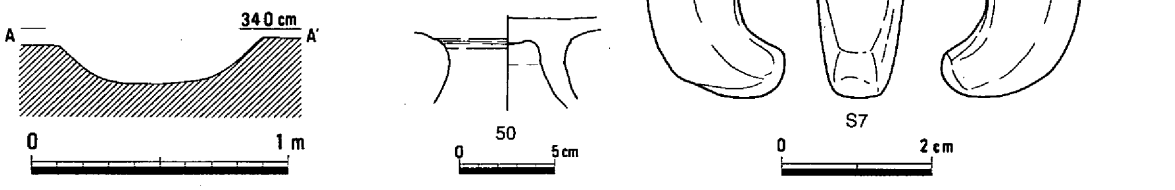
（4）溝

溝１（第1179図）

ＡＰ10区の中央から東端にかけて検出された溝である。規模は、幅が78cmで、断面形は逆台形を呈し、深さは17cmを測る。

出土した遺物のうち、50は須恵器の高杯底部から脚部にかけての破片で、透かし孔はみられない。また、勾玉Ｓ７は蛇紋岩製である。

この溝は、流走する方向がつかめなかったことから大半が削平を受けてしまったと思われる。時期は、古墳時代中期には存在しており、７世紀代には埋没しているとみられる。（弘田）



第1179図　溝１（1/30）・遺物

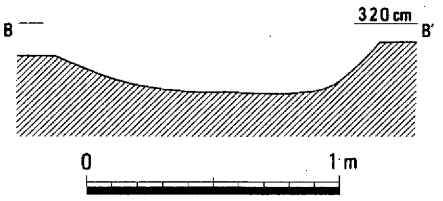
溝２（第1180図）

ＢＰ11区に南東部で検出した溝で、溝３と合流する。上面での幅が125cmで、断面形は逆台形を呈して深さは15cmを測る。

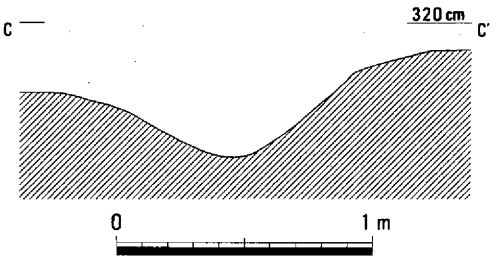
顕著な遺物を見ないが、時期は古墳時代前期と思われる。（弘田）

溝３（第1181図）

ＢＰ11区の南東部で、先の溝２と合流する溝である。上面での幅が110cmで、断面形は逆三角形をなし深さは30cmを測る。ごく一部での検出でありほかの調査区にはつながらないが、古墳時代前半の微高地端部に沿うとみられ、時期も古墳時代前半とみてよい。（弘田）



第1180図　溝２（1/30）



第1181図　溝３（1/30）

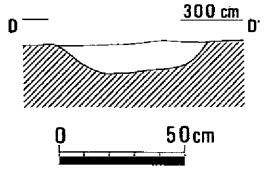
溝４（第1182図）

ＢＰ12区の南西隅で、竪穴住居11の下層において検出した溝である。長さ3.5ｍほどの窪みで、幅が58cm、深さは12cmを測る。

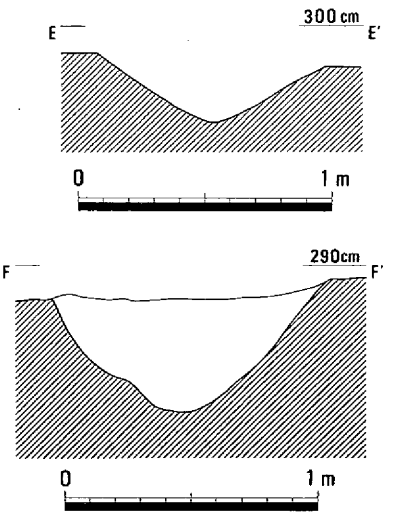
出土遺物はないが、遺構の切りあいなどからみて古墳時代とみられる。（弘田）

溝５（第1183図、写真137）

ＡＰ12・ＢＰ12区で検出した溝である。河道２の埋没過程において低位部に掘削され、微高地端の形状に沿って北から南に向かって流走する。規模は上場での幅が100cmで、深さは46cmを測り、断面形は逆三角形を呈する。

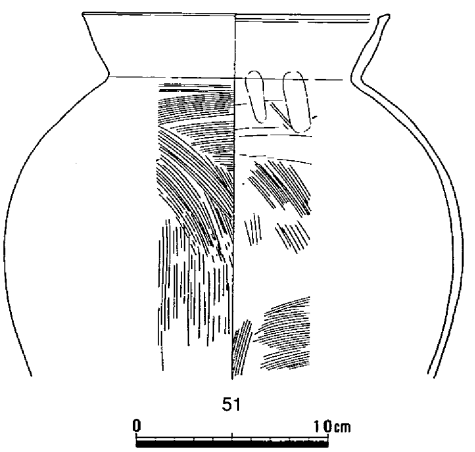


黄灰色粘質微砂



暗褐色粘質砂

第1182図　溝４（1/30）



第1183図　溝５（1/30）・遺物

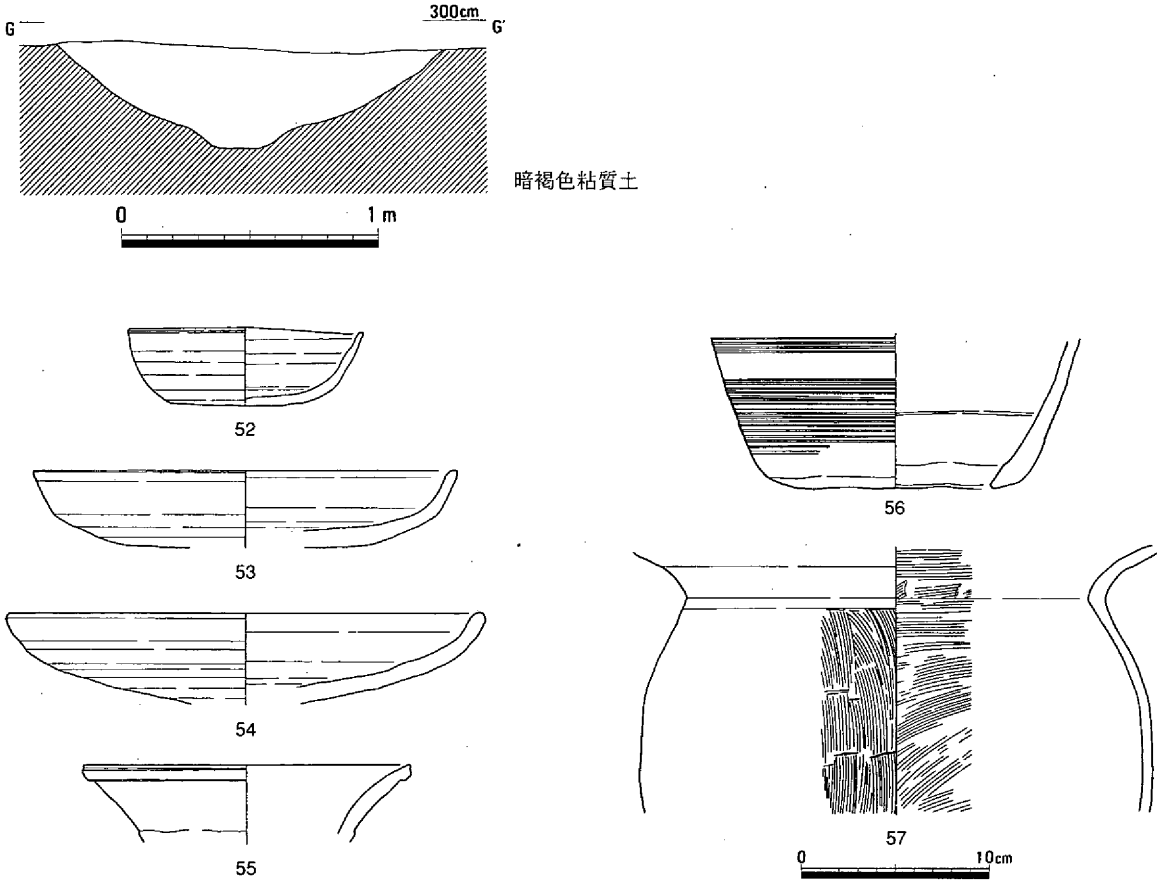
出土した土師器の甕51は、口縁端部を内側に肥厚させて、内傾する面を持つ。調整は外面がハケメ、内面はハケメおよびユビナデである。

この溝の時期は、古墳時代中期Ⅰである。（弘田）

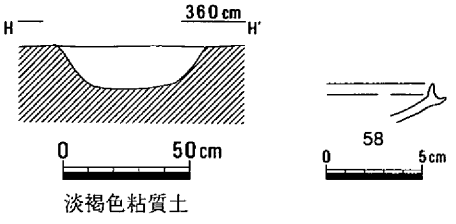
溝６（第1184図、写真137）

ＢＰ12区で検出した、北東から南西に流れる溝で、上端での幅が約160cm、深さは40cmを測る。ＡＰ12区では検出されていないが、当調査地の北に接して行われた立田排水機場建設に伴う調査において、これに接続する可能性の高い溝か検出されている。この個所は弥生時代の河道が埋没した後の低位部にあたり、灌漑用水路と考えられる。

出土遺物には、須恵器52～56と土師器57がある。54は高皿で、皿底部外面は回転ヘラケズリを施している。56は破片で全容はわからないが、甑か特殊扁壺の可能性がある。遺物からみて、この溝の時期は７世紀後半ごろと思われる。（弘田）



第1184図　溝６（1/30）・遺物



第1185図　溝７（1/30）・遺物

溝７（第1185図）

ＢＰ14区の中央付近で、東西方向に長さ３ｍにわたって検出された。幅は58cmで、深さが最大で30cmと、浅い溝状を呈する。

出土した須恵器杯身58からみて、古墳時代後期Ⅲと考えられる。（弘田）

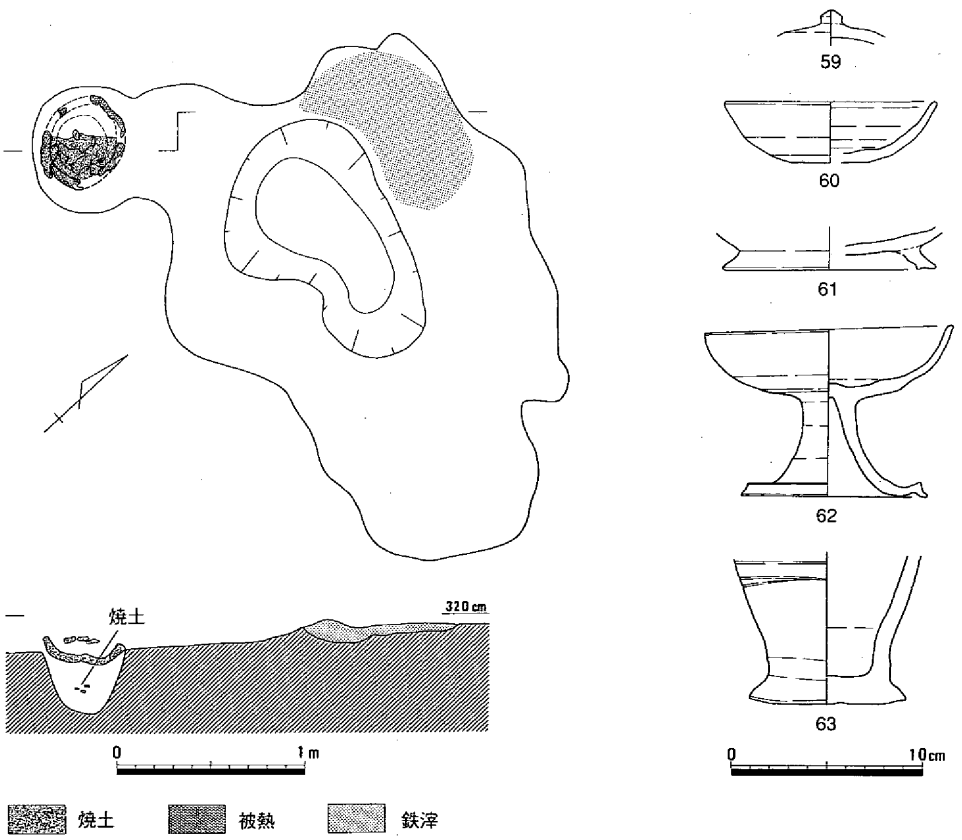
（5）鍛冶炉

鍛冶炉1（第1186図、写真137）

ＢＰ09のほぼ中央部で検出できた円形の鍛冶炉である。炉本体の内径は40cm、深さは10cmを測る。炉壁の厚さは５cmある。炉底は中央部がやや盛り上がった椀形を呈し、表面は凸凹している。炉壁表面は灰色に還元し、断面は赤く酸化している。炉の下部には柱穴状の穴が検出できた。それは直径45cm、深さ33cmを測る。内部には炭が少量混入していた。炉の北東部には図に示したように、鉄滓が広く散布し、その散布地の中心部分には不整形な浅い凹みがあり、その凹みの北側には鉄滓の大きな舟形を呈した塊が残存していた。この塊の大きさは長さ90cm、幅50cm、厚さ15cmを測る。大澤氏に鑑定していただいたところ再結合滓と言うことであった。これを細く砕き水洗を行なったところ、鍛造剥片や粒状滓が検出できた。したがって図示した炉と鉄滓の散布地は一体の遺構と言えるのではないだろうか。

遺物としては周辺から採集したものがある。６点の須恵器である。59は宝珠つまみの付いた杯蓋である。60は杯身で、口径11.0cm、底径4.0cm、器高3.2cmを測る。61は高台付き杯身で、底径10.9cmを測り、高台は高くかつ外に良く踏ん張っている。62は全器形が分かる高杯である。口径13.0cm、底径9.6cm、器高8.8cmを測る。灰黄色を呈する。63は鉢形土器である。すり鉢とも言う。底径8.2cm、現存器高7.8cmを測る。

周辺の須恵器と検出面からこの鍛冶炉の時期は古墳時代後期と考えたい。（浅倉）



第1186図　鍛冶炉１（1/40）・遺物

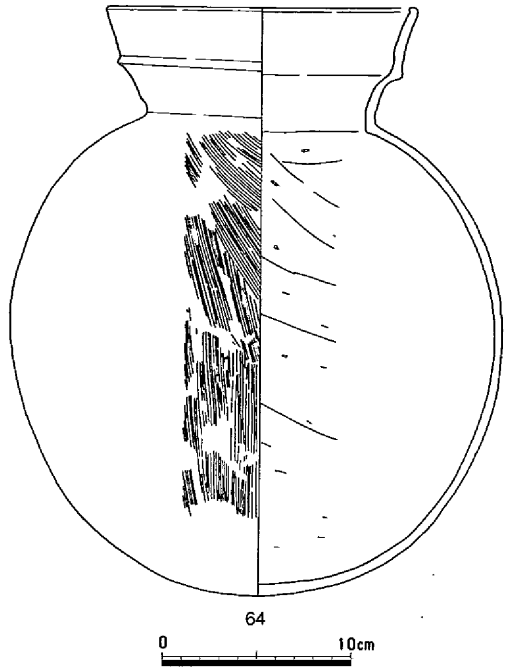
（6）河道

河道１・２（第1187～1189図、写真135－3、138）

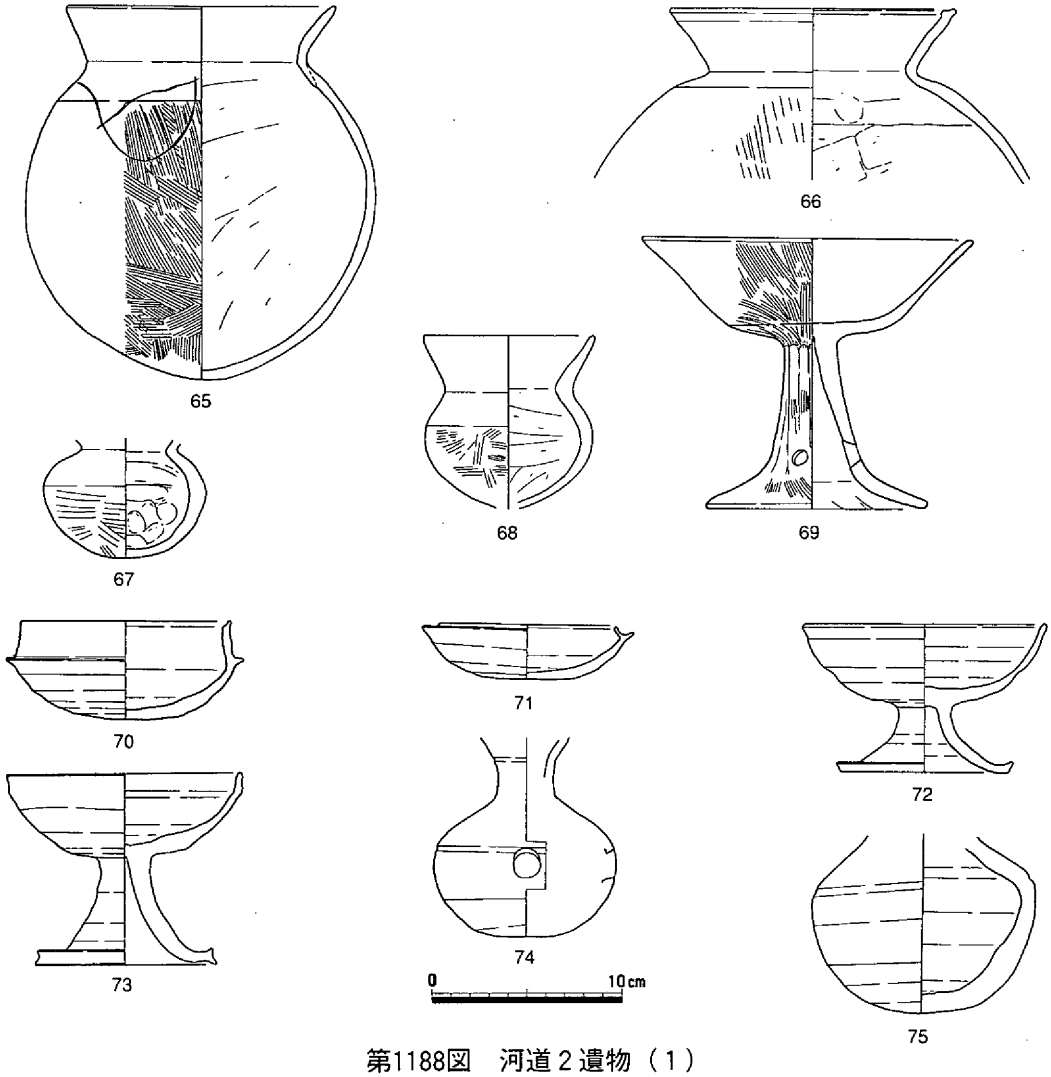
河道１は弥生時代から比べると埋没が進み、微高地が南へと広がりを見せる。前期段階においては、ＡＰ９区中央部からＢＰ11区にかけて肩が検出され、ＢＰ11区の南東端で河道２と合流すると思われる。

壺64はほぼ完形に近い状態で、河道肩口に置かれたようにして出土した。偏球形の体部に、外反した口縁部を上方に拡張させる二重口縁をもち、口縁端部は内側に肥厚させる。

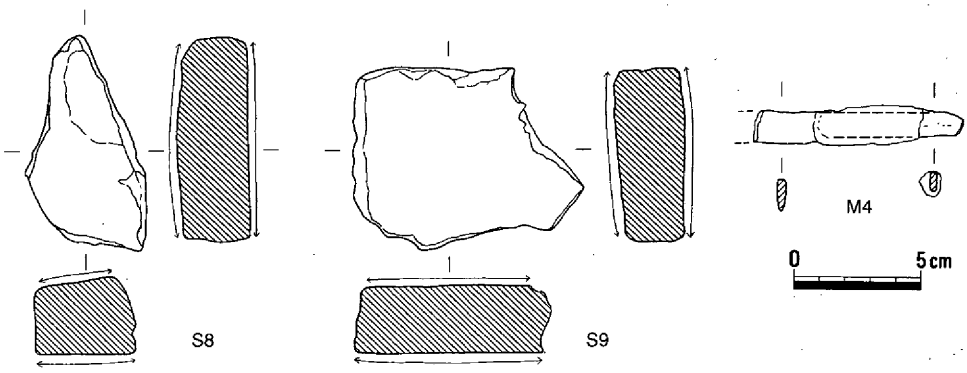
竪穴住居が多くみられる後期Ⅲの段階には調査地内では河道はほぼ埋没し、わずかにＢＰ11区南端においてその肩が検出された。また、この時期の微高地縁辺



第1187図　河道１遺物



第1188図　河道２遺物（１）



第1189図　河道２遺物（２）

部には鍛冶炉１が存在する。

河道２からは、古墳時代中期から後期にかけての遺物が出土している。甕65は偏球形の体部から外上方に広がる口縁部を持ち、口縁端部は丸く終わる。肩部にヘラ描きがみられる。甕66では、口縁端部を内側に肥厚させて内傾する面をもつ。小型丸底壺67・68は球形の体部をもち、外上方にのびる口縁部は口縁部より小さい。高杯69は浅い杯部に対して、長い脚柱部をもち、裾部に3ケ所の透かし孔を穿つ。

須恵器の杯70は、真っ直ぐ上方に立つ口縁部をもち端部は内側に段をなす。これは後期Ⅱに属するが、量的に多いのは立ちあがりのきわめて短い杯身71や高杯72・73、𤭯74、直口壺75などで、後期Ⅲに属し、周囲にこの時期の遺構が多いことがみてとれる。さらには、土器以外でも流紋岩製の砥石Ｓ８・９や鉄製の刀子Ｍ４がみられる。（弘田）

（７）その他の遺構・遺物

古墳時代のその他の遺構としてはＡＰ10・11区からＢＰ11区にかけての竪穴住居の周囲に柱穴が存在し、掘立柱建物の存在も考えられる。これらの柱穴内や遺構検出の際などにも多くの遺物が出土しており、それらは時期的には中期Ⅰから後期Ⅲとそれ以降のいわゆる飛鳥時代に入るものまでがみられる。

76は土師器の甕で、球形の体部に短く外湾する口縁部がつき、端部は丸く終わる。77～79は土師器の高杯である。77は外上方に真っ直ぐ立つ口縁部をもつ。杯底部と口縁部との境には稜線がめぐらせ、そこから下に長い脚柱部がつく。78は深い椀状の杯部をもち、それに比較的短い脚部がつく。ともに透かし孔はみられない。81は手づくねの壺で、82は小型丸底壺である。これらの遺物は、古墳時代中期に属する。

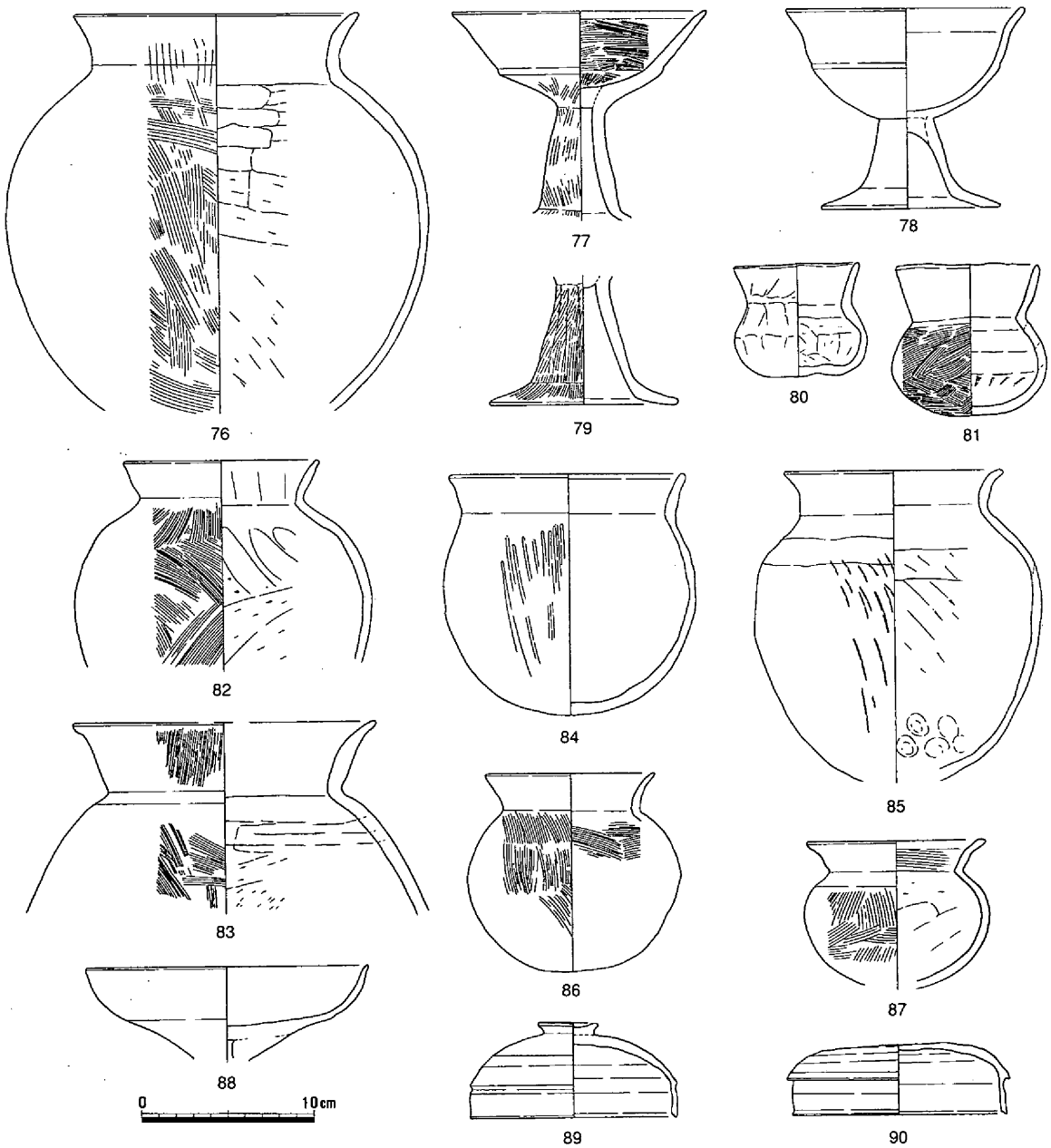
82～87は土師器の甕であり、大小の区別があるが、いずれも外反した口縁部は短く、かつ端部も丸く終わる。内面はヘラケズリ以外にハケメやナデ、ユビ押さえがみられる。土師器高杯83は椀状の杯部をなす。須恵器では有蓋高杯の蓋89と蓋90ともに口縁部と天井部の境には稜線がみられる。これらの土器は後期Ⅰに属する。

91～94は須恵器の杯蓋で、91・92のように天井部口縁部の境に鈍い凹線をめぐらせ、口縁端部は段をなす古相のものと、調整が粗雑でかつ法量も小型化した93・94がある。杯には口縁部の立ちあがりがある94～97と立ちあがりのない杯Ｇの98・99、椀状を呈する100・101がみられる。高杯には通常の

形態をとる102のほかに高皿103もある。甕の体部片104では、内面の当て具が車輪文である。土師器では、球形の体部に直立した長い口縁部をもつ105があり、内面の調整は指ナデと指押さえである。これらの土器は、後期Ⅲに属する。

106～116はＢＰ11区の包含層上層においてまとまって出土した。106～113は須恵器蓋である。杯Ｈの蓋106・107とともに、天井部に擬宝珠様のつまみをもち、内面には返りのつく108・109、天井部のつまみは扁平で、内面に返りのつかない110～113がある。114は口縁端部をわずかに外につまむようにナデ、また外面に浅い凹線をめぐらせており、杯身と考えられる。須恵器の甕115は内湾気味に立つ口縁部を持ち、端部は内側に肥厚させる。また、外面には波状文を施す。土師器の甕116は短く「くの字」に外反する口縁部を持ち、端部は丸く終わる。内面にはヘラケズリを行うが粘土紐の痕跡が明瞭に残る。

これらの遺物は時間的にも一括性が認められ、またそのうち須恵器蓋は３枚が重なって出土するな

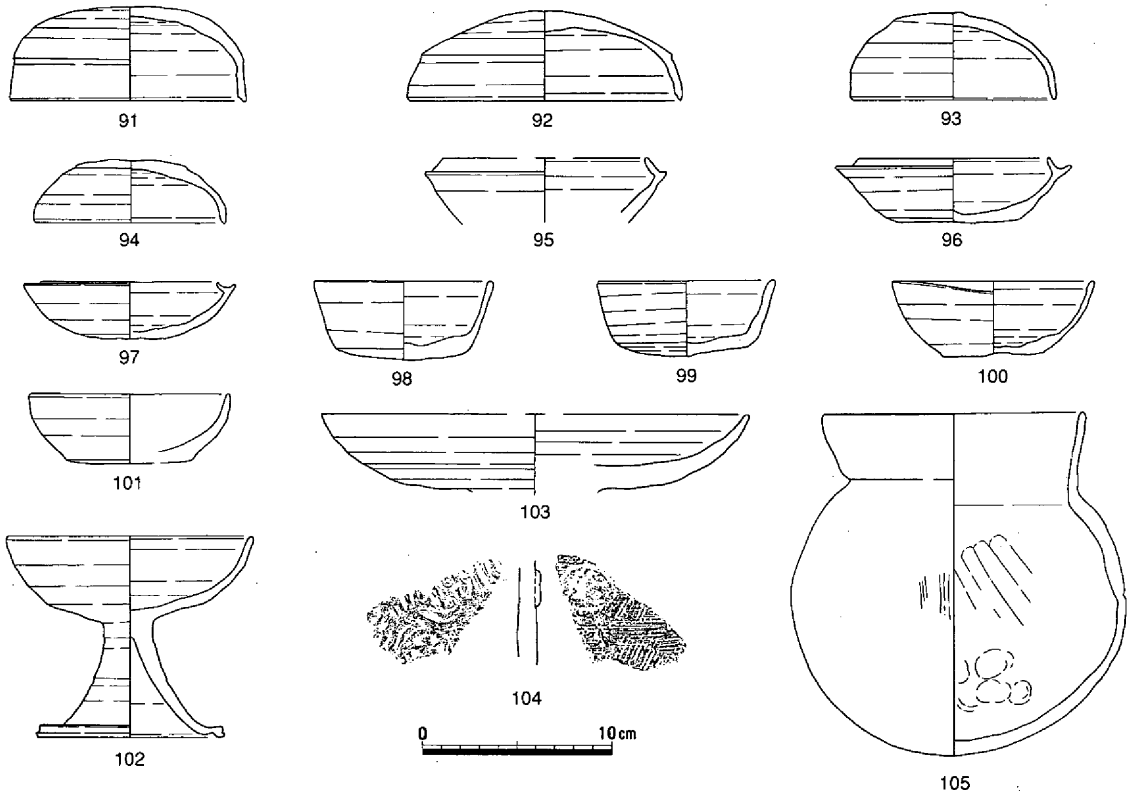


第1190図　その他の遺物（１）

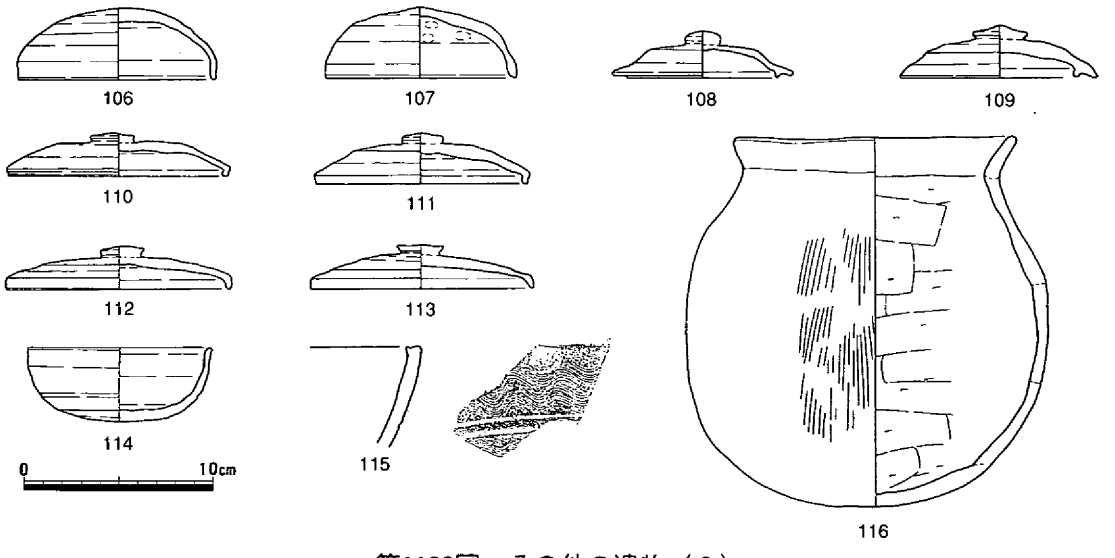
ど何らかの遺構の存在を看取できる状況にあり、実際この面では柱穴や焼土面も確認したが、遺構をとらえることはできなかった。

117は扁平な底部をなし、やや肩の張るインク瓶状の体部をもつ土師器の小型壺である。口縁部を欠くが、底部の形はあまり類例を見ない。調整は、外面にはハケメ、内面はナデとなり、底部は粗雑で粘土紐の巻上げ痕が認められる。また、把手片118と甑119の把手にはともに上面に抉りをいれる。119の外面調整はハケである。120はカマド側面の鰭部片であるが、外面の調整には格子目のタタキ痕がみられる。

これらの遺物については、韓式系土器とのかかわりが考えられよう。

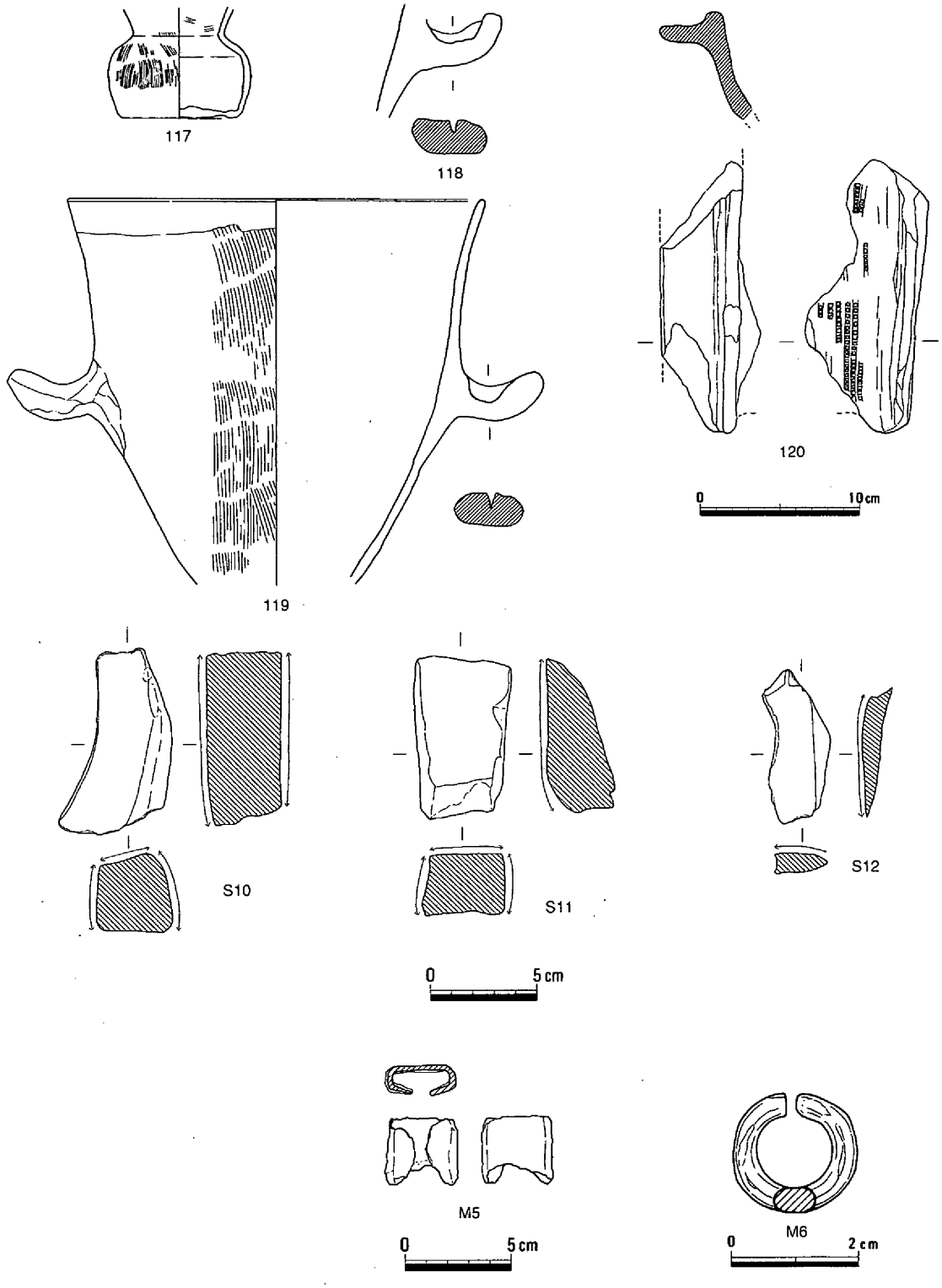


第1191図　その他の遺物（２）



第1192図　その他の遺物（３）

以上の土器以外の遺物には、石製品として砥石Ｓ10～12があり、いずれも流紋岩製である。さらには、金属器として、農工具などの柄金具とおもわれるＭ５や鉄地金銅張りの耳環Ｍ６もみられる。この耳環は、ＡＰ13区の古墳時代包含層からの出土であり、直径が1.9cm、厚さは0.4cmで、重さが７ｇを測る。（弘田）



第1193図　その他の遺物（４）

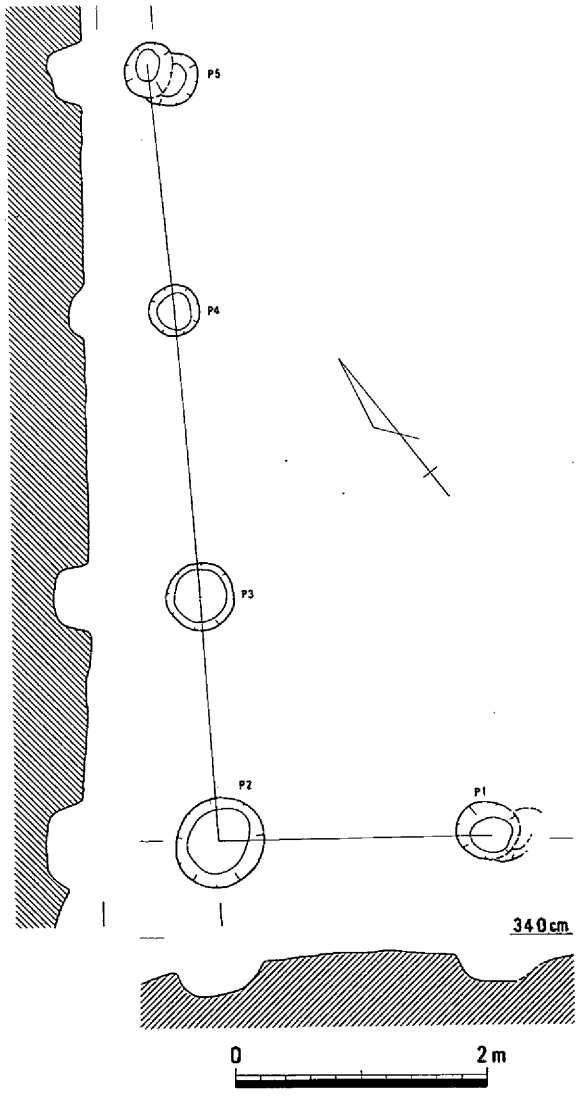
第４節　古代の遺構・遺物

（１）概要

古代の遺構としては、掘立柱建物１棟、土壙３基、溝４条、柱穴、土器溜り１ケ所、水田、畑などがある。また、遺物の出土も調査区の北西に集中し、東あるいは南ほど遺構・遺物とも希薄となることから古代の集落は当該調査地の北西部に位置する可能性が高い。

調査区内においては、古墳時代まで見られた河道１は既に完全に埋没しており、河道２では埋没後北側（ＡＰ12・13区）に水田が開田されている。また、この水田より東側で一段高い位置にある耕作痕跡は畑とみられる。水田への給排水路や鋤溝痕跡の方向性は中世に踏襲されており、この地域には条理制地割は認められないものの周辺地形に即した土地利用と地割の成立は古代にさかのぼるとみられる。

（弘田）



第1194図　掘立柱建物２（1/60）

（２）掘立柱建物

掘立柱建物２（第1194図、写真136－1）

ＢＰ14区において検出された掘立柱建物である。桁行きが３間以上で現存での長は614cm、梁間が１間以上で現存長は216cmを測る。柱間の距離は桁行で192～226cm、梁間で216cmである。棟方向はＮ-34°-Ｅである。

柱穴の掘り方は円形で、規模は掘り方の直径が40～75cmで、深さは13～27cmを測る。

なお、棟方向はこの建物の北にある平安時代の溝12と直交する関係にある。さらにこれは中世期の溝や耕作痕の方向とも関連性があり、この周辺部を含めた地割に規定されたとみることができよう。

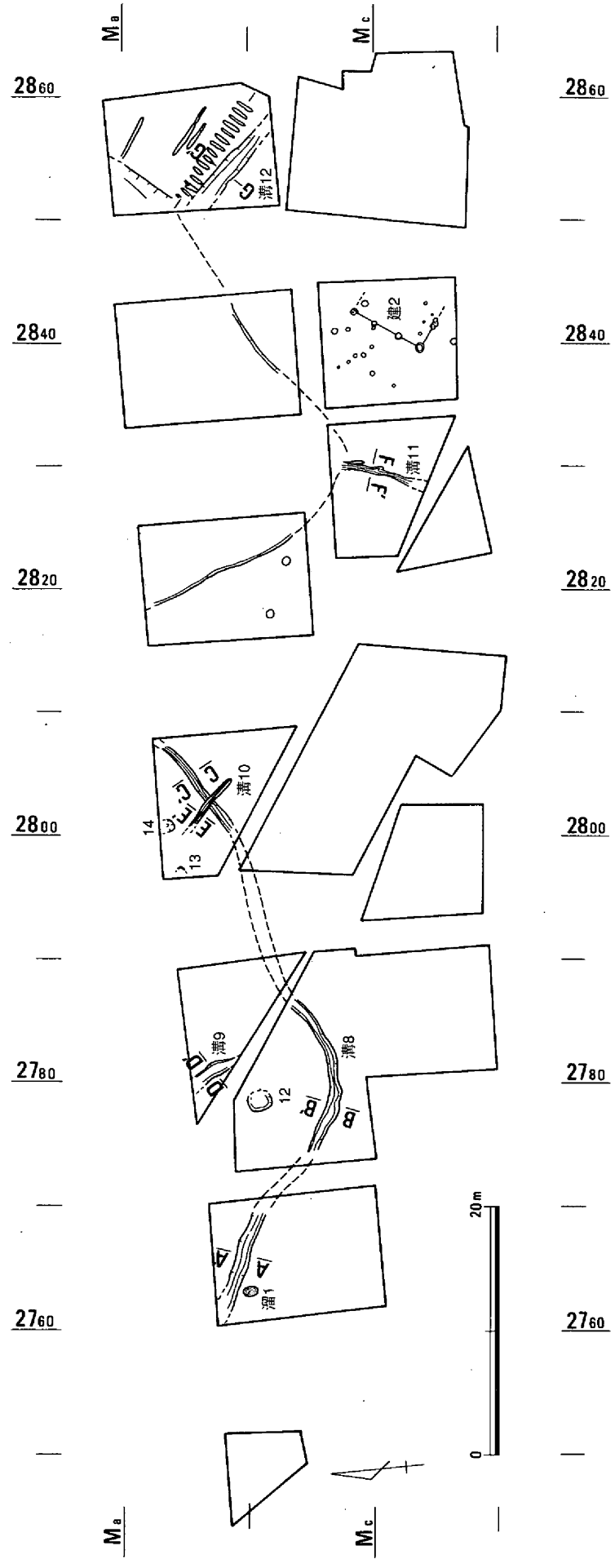
柱穴からの遺物の出土はないものの、層位的には河道２がほぼ埋没したのちの古墳時代後期末の層を切って検出していることや、棟方向と地割の関係などからみて、古代でも後半と考えたい。

（弘田）

（３）土壙

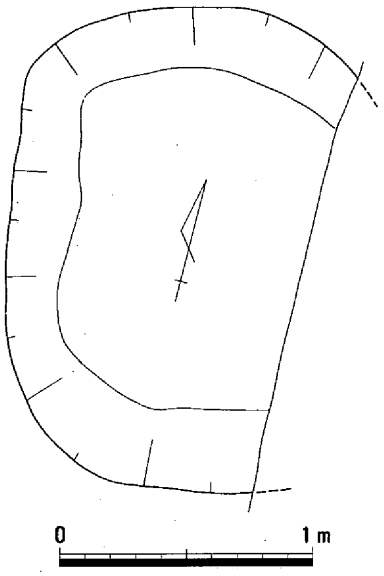
土壙12（第1196図）

ＡＰ11区において検出した土壙である。平面



建は掘立柱建物を、番号のみは土壙を、溜は土器溜りを示している。

第1195図　古代遺構配置図（1/500）



第1196図　土壙12（1/30）

形が隅丸方形を呈する土壙で、東側は調査区外となる。規模は、長辺が192cmを測るが、深さは不明であった。

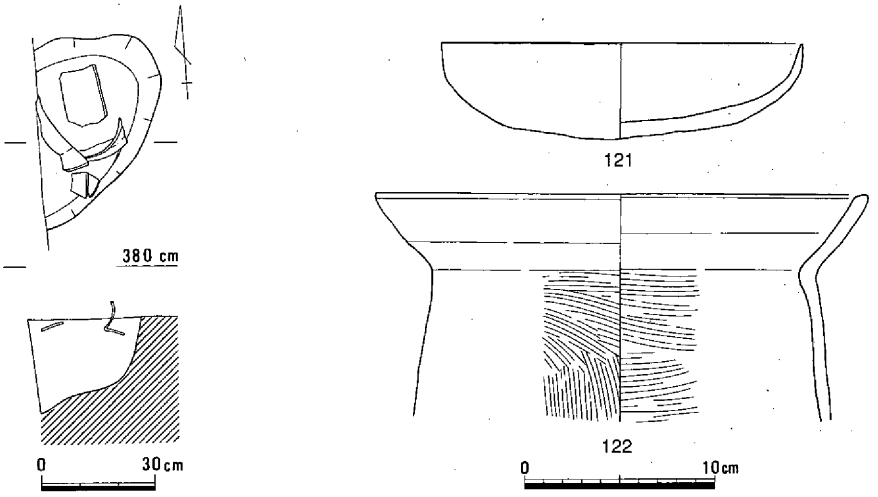
図示しうる遺物はないが、古代と考えられる。　（弘田）

土壙13（第1197図、写真140）

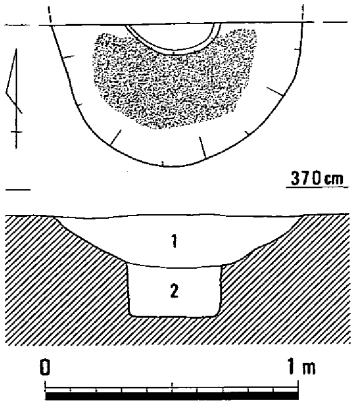
ＡＰ11区の調査区中央西端において検出された土壙である。さらに調査区外に続くとみられるが、残存部での平面形は楕円形を呈し、断面形が椀状をなし、規模は、長辺が51cm、短辺は39cmで、深さが25cmを測る。

出土遺物をみると、121は須恵器の杯で、口縁部は内湾気味に立ち、口縁端部は丸く終わる。口径が18.9cm、器高は5.1cmを測り、底部はヘラ切り後ナデる。土師器の長胴甕122は内湾気味に立つ口縁部の、端部は内傾する面をなす。

以上の出土遺物からみてこの土壙の時期は、奈良時代とみられる。　（弘田）



第1197図　土壙13（1/20）・遺物



第1198図　土壙14（1/30）

土壙14（第1198図）

ＡＰ14区の北端で検出した土壙であり、およそ半分が調査区外にあると思われる。平面形は円形を呈するのに対し、断面形は上部が浅い椀状を、下半が筒状を呈し、直径32cm、深さ22cmにわたって垂直に下がる。また、埋土中には焼土塊を多く含んでいた。残存部での規模は、長辺が57cm、短辺は100cmで、深さが41cmを測る。

遺物は小片がわずかに出土した程度であるが、その遺物の特徴からみて土壙の時期は、奈良時代と思われる。　（弘田）

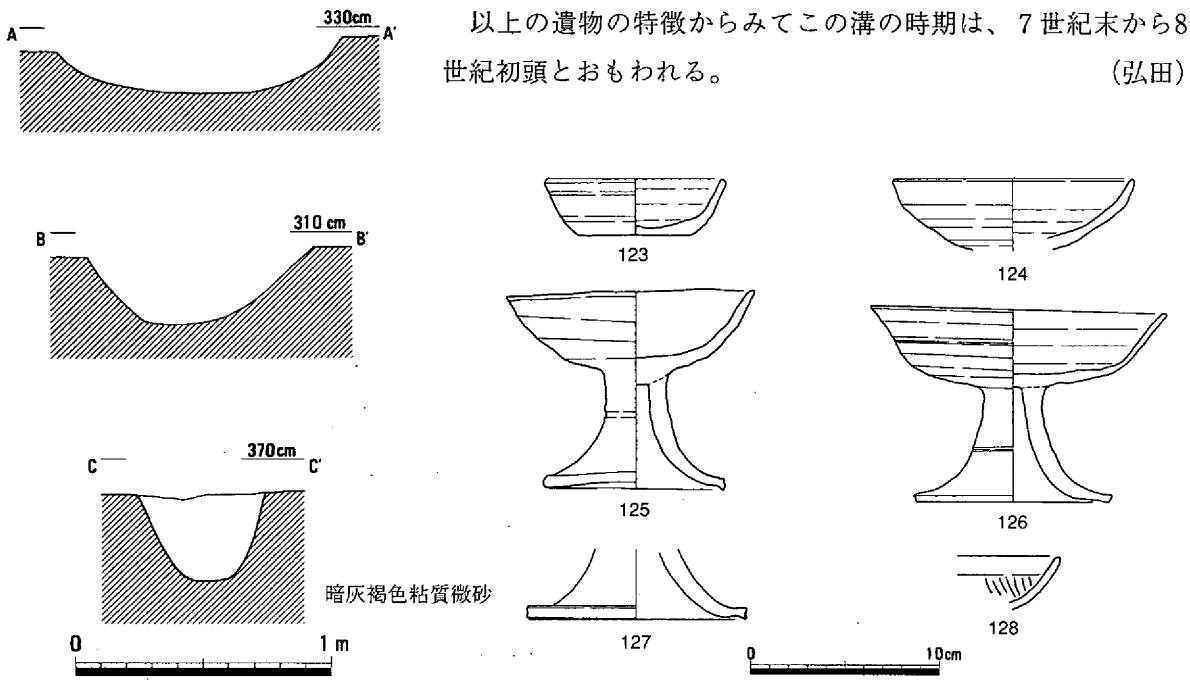
（4）溝

溝８（第1199図、写真136－2、140）

ＡＰ９区からＡＰ11区にかけて検出した溝である。ほぼ旧地形の等高線に沿った形で蛇行気味に流走し、溝底の高低差は少ない。この溝の北側に存在するとみられる集落の排水路か、もしくは河道１から河道２が埋没後の水田部への給排水用の水路とみられる。規模は、幅は50～110cm、深さが20～35cmを測る。

出土遺物をみると、123は須恵器の杯である。内湾気味に立つ口縁部をもち、底部はヘラ切りである。124～127は須恵器の高杯で、椀状の杯部をもつ124・125と口径が大きく外上方に立つ口縁部をもつ126がある。128は土師器の杯で内湾気味に立ちあがった口縁部の端部を丸く納める。また、内面には暗文風のヘラミガキを施す。

以上の遺物の特徴からみてこの溝の時期は、７世紀末から8世紀初頭とおもわれる。（弘田）



第1199図　溝８（1/30）・遺物

溝９（第1200図）

ＡＰ10区北端において長さ４ｍにわたって検出した溝状遺構であるが、南側の調査区には続かない。規模は、幅が116cm、深さが23cmを測る。出土遺物はないが、古墳時代と中世の遺構面の間で検出されたことから、古代に属すると思われる。（弘田）

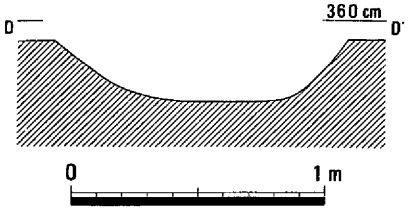
溝10（第1201図）

ＡＰ11区において検出した溝である。長さ５ｍにわたるが、調査区内で両端とも途切れる。規模は、幅が40cm、深さが15cmを測る。

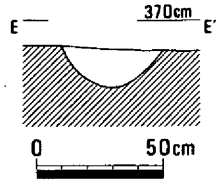
遺物の出土をみないが中世遺構面の下層において検出し、かつ溝８をきっていることから古代に属するとみられる。（弘田）

溝11（第1202図）

ＢＰ12区において検出した南北方向溝で、南に流走する。

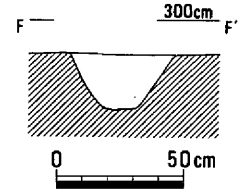


第1200図　溝９（1/30）



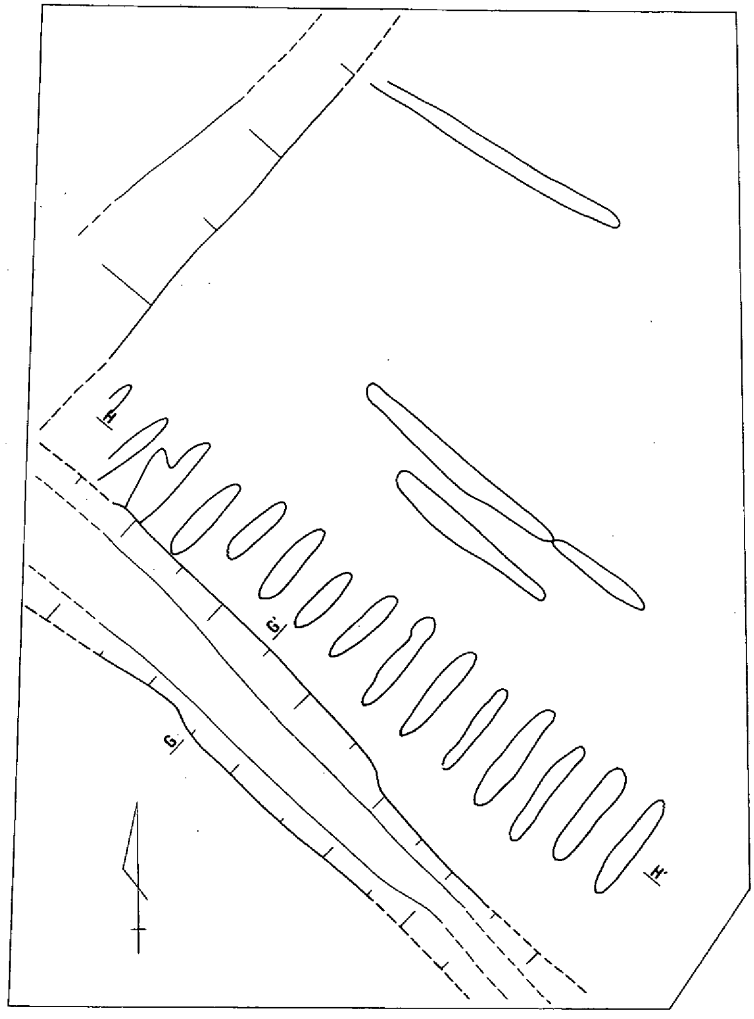
暗灰褐色粘質微砂

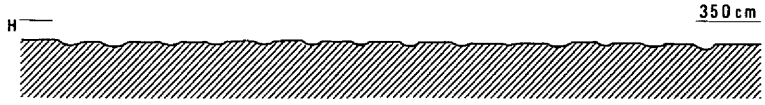
第1201図　溝10（1/30）

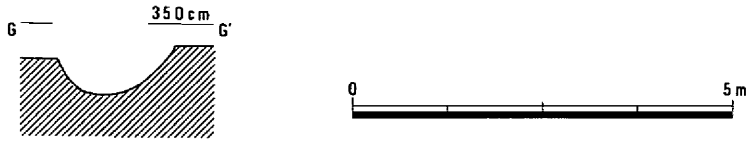


青灰色粘土

第1202図　溝11（1/30）







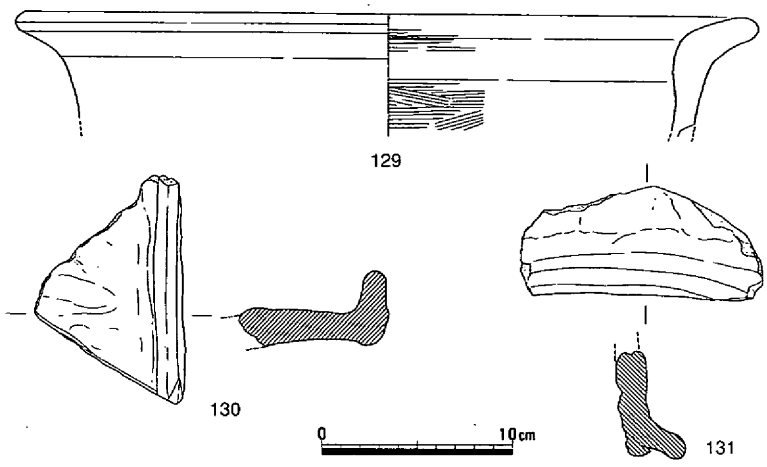
第1203図　溝12・鋤溝（1/100）

規模は、幅が40cm、深さが21cmを測る。検出レベルや埋土の色調から古代とみられ、この北側に位置する水田からの排水路と思われる。（弘田）

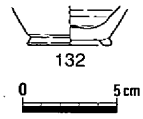
溝12（第1203･1204図、写真136－3）

ＡＰ14区で検出できた幅150cm前後、深さ約70cmを測る直線的な溝である。底部断面はＵ字形を呈している。現在の農業用水路の流れる方向から推定して、北西から南東方向に流れる農業用水路と考えたい。北東岸に連続した牛に引かせたと考えられる唐鋤痕跡15条が認められた。また、北西隅では溝と直角に交わると推定出来る人為的な急斜面が検出されている。これは幅の広い大溝であろう。

遺物としては３点の土師器が出土している。129は大型の甕で、口径37.8cmを測る。胴部内面は粗いヨコハケが残存している。130・131はカマドの一部である。どちらも焚き口周囲の鰭部分である。以上の遺物から考えて、この溝の廃棄されたのは古代末期としたい。（浅倉）



第1204図　溝12遺物



第1205図　鋤溝遺物

鋤溝群（第1203・1205図）

ＡＰ14区の溝12と北西隅の人為的な下がりに囲まれた部分、すなわち唐鋤痕跡の残存している部分は微高地上の耕地と考えることが出来る。そしてＡＰ13区は、ここより一段下がっており河道埋没後の低位部水田と考えたい。後者ではＡＰ12区の東半部分まで同じ土層が続いていた。この土層からは古代の土師器・須恵器片が若干出土していたので時期の確定は調査中から明確に認めていた。しかし、前者については、溝12を調査中には中世と考えていたため、中世の畑ではないかと推定していたものである。時期は別として畑としていた可能性もある。どちらの面においても畦畔は検出できていない。

遺物についてはＡＰ14 区で出土した須恵器しか実測に耐えうるものがなかった。132はその須恵器である。低い貼り付け高台付きの壺と考えられる。底径4.3cm、現存器高2.2cmの小片である。

土層と土器から見て、古代と考えた方が妥当であろう。（浅倉）

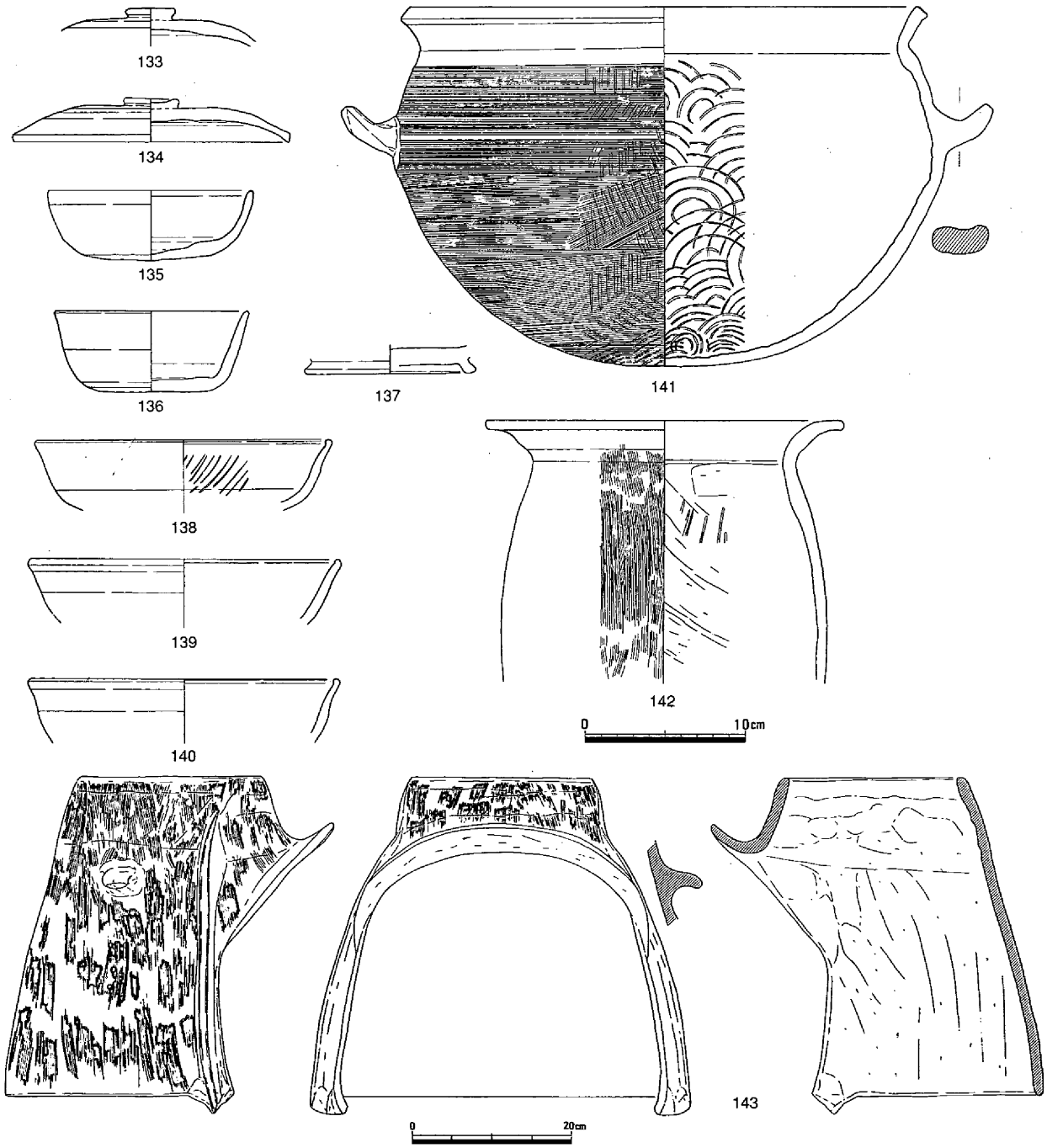
（５）その他の遺構・遺物

上述した遺構以外としては、土器溜り１と柱穴などがある。土器溜りはＡＰ９区で溝９の南に接して存在したが周囲にはこれに伴う遺構はみられなかった。柱穴は主に掘立柱建物２の周囲において検出されている。遺物はこれらから出土したほか、包含層中にもみられた。

133～143は土器溜り１の遺物である。133・134は須恵器の杯蓋で、ともに扁平化したつまみがつく。134では、口径が17.1cm、器高は2.8cmを測る。須恵器の杯には、内湾気味に立つ口縁部をもつ135、平底で外上方に直線的に立つ口縁部をもつ136と高台のつく137がある。138～140は土師器の杯で、口径は14cm前後を計る。口縁端部は内側に丸く肥厚させ、内面に暗文状のヘラミガキを施す138とヘラミガキのない139・140がある。141は須恵器把手付きの鍋で、偏球形の体部外面にはタタキ後カキメを施し、内面には同心円文の当て具痕がのこる。また、短く外反する口縁部を肥厚させ内傾する面をなす。142は土師器の長胴甕で、口径が胴部径を上回る。口縁部は強く外湾して立ち、端部には面をもつ。143は土師質の可動式カマドである。焚き口の上部には幅広の庇がつき、これとは別づくりになる側面の鰭部は受け部のやや下から基底面のわずか下までのびる。これらの土器は時間幅も少ないと思われ土器溜り形成の時期は、奈良時代中葉とみられる。

144～146は河道２における堆積層のなかのほぼ中間層である10・11層より出土した（第1159図）。この層は古代の畑とみられる鋤溝痕（第1203図）より一段低い個所にあたるＡＰ12～14区に広がり、畦畔はみられないが鉄分とマンガン沈着層から河道２埋没後に造田を行ったとみられる。

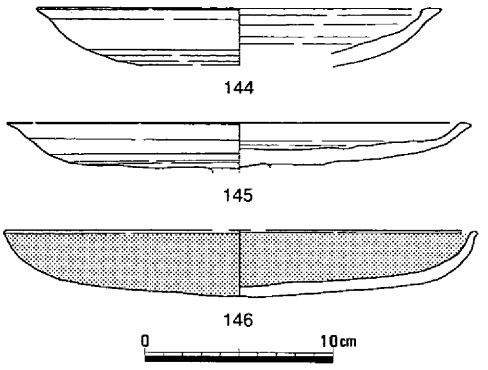
114が須恵器の皿で、口径が21.4cmを測る。口縁端部を肥厚させて上端に面をなす。115は須恵器高皿の皿部で、脚部は欠損するが口径は24.6cmを測る。口縁端部を外に肥厚させ、面をつくる。また、内外面ともに赤色顔料がみられる。116は土師器の皿で、口径が22.4cm、器高が3.4cmを測る。底部から内湾気味に立ち、口縁端部は外に肥厚させる。内外面には赤色顔料がみられる。



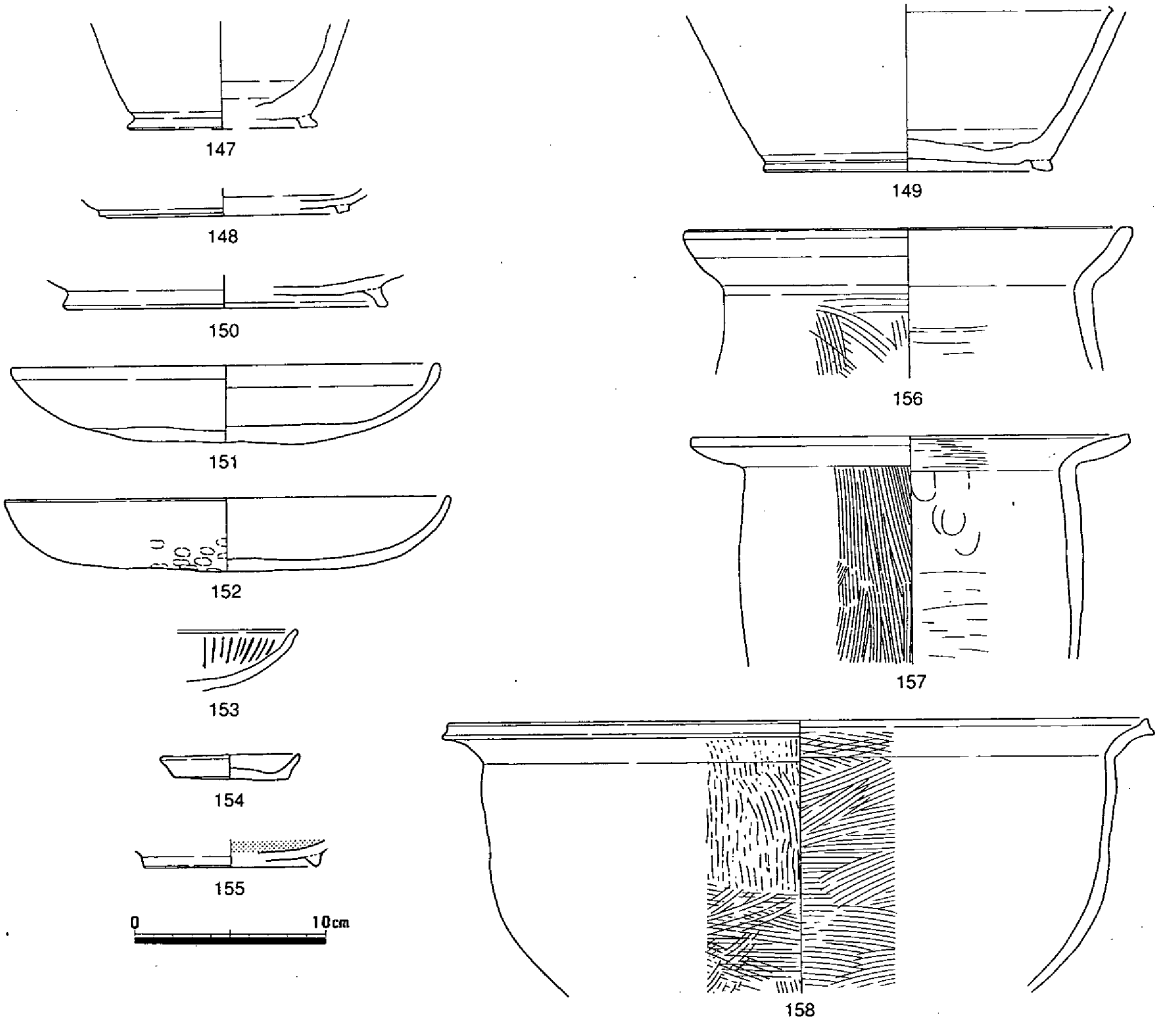
第1206図　土器溜り１遺物

147～158は古代包含層中からの出土である。147～149は須恵器で、147は壺の底部、148は杯皿類の底部、149は壺・瓶類の底部から体部片とみられ、いずれにも高台をつける。150は土師器皿ないしは杯で、底部と口縁部の境から外に強くふんばった高台がつく。151・152は土師器の皿で、口径が約23cm、器高は4cmほどを測る。底部から内湾気味に立つ口縁部となり、端部は丸く終わる。底部外面の調整は、151ではヘラ切り後ナデを施すのに対し、152では指押さえが顕著に残る。152は内面にヘラミガキを施す杯で、口縁端部をわずかに内に肥厚させる。156・157は土師器長胴甕である。口縁部が内湾して立ち上端が面をなす156と、強く外傾し、端部に面をもつ157とがある。以上の遺物の時期は、奈良時代と思われる。

土師質小皿154では、底部ヘラ切り手法がみられる。155は、黒色土器A類椀（内黒）である。さらに土師器鍋158があるが、これらは平安時代中期以降の遺物である。（弘田）



第1207図　河道2遺物



第1208図　その他の遺物

第５節　中世の遺構・遺物

（１）概要

中世の遺構としては、溝13条と水田層やその耕作に伴うと考えられる鋤溝群があるが、掘立柱建物、土壙などは検出されておらず、また２条の河道も中世期には完全に埋没してしまい水平堆積となり、ほぼ全域が耕地として利用されていたと思われる。また、鋤溝群は主に調査地の西半部にみられたが、空白部分も含め全域に広がっていたと思われる。ところで、この鋤溝群が溝13を含む多くの溝と平行していることは、河道１の形成した自然堤防を中心とした土地利用の結果とみられる。さらに、これらと直交関係にある溝３条は時期的には先行し、低位部水田の排水路として機能していたようである。

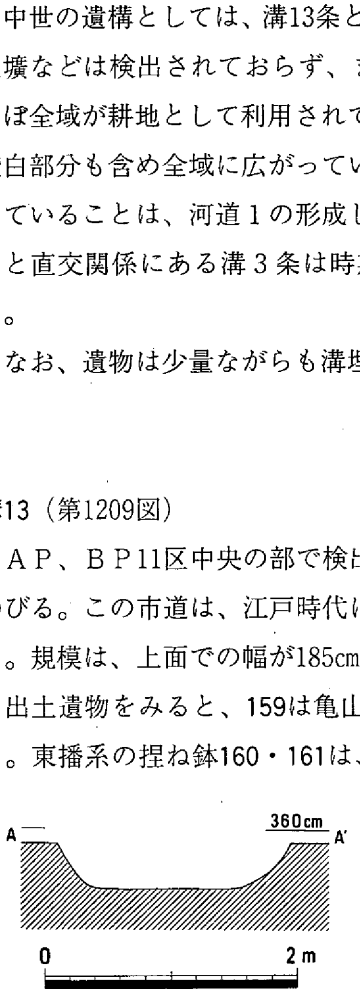
なお、遺物は少量ながらも溝埋土中や水田層などから出土している。（弘田）

（２）溝

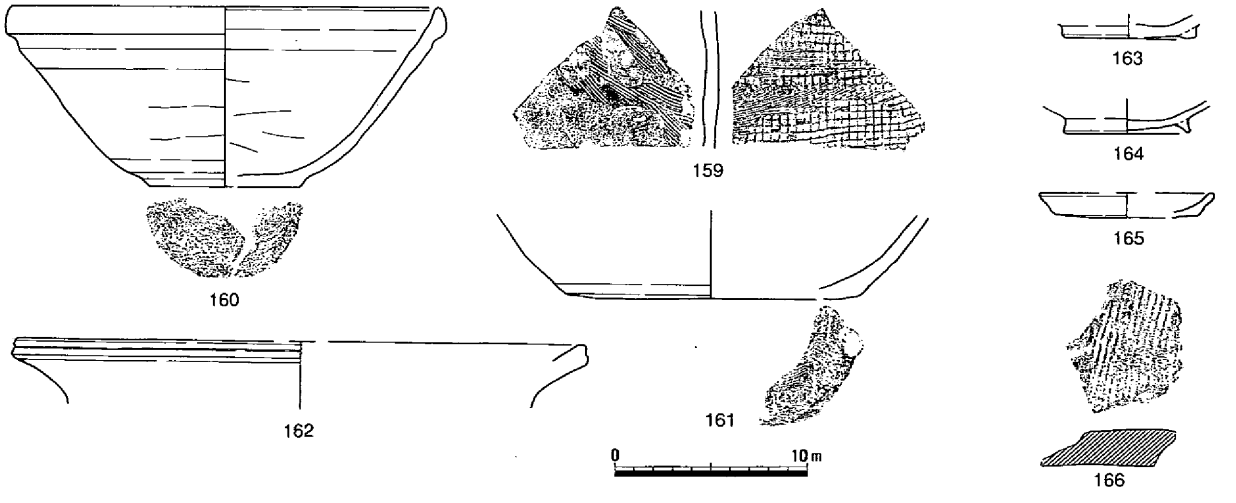
溝13（第1209図）

ＡＰ、ＢＰ11区中央の部で検出した溝で、現在の市道に沿うように北西から南東に向けて直線的にのびる。この市道は、江戸時代に備中松山の城下へ向かう街道として整備された道「松山往来」である。規模は、上面での幅が185cmで、断面は逆台形をなし深さは35cmを測る。

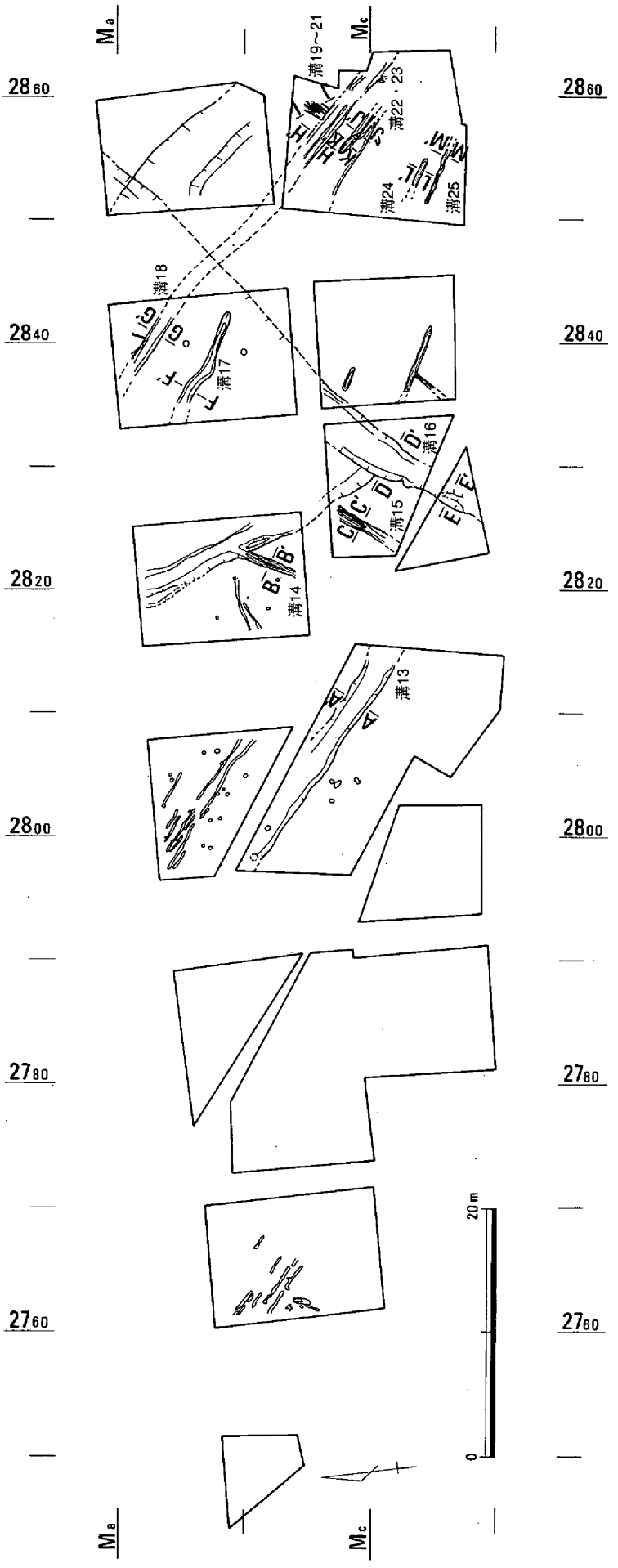
出土遺物をみると、159は亀山焼の甕体部であり、外面には格子タタキ、内面にはハケメがみられる。東播系の捏ね鉢160・161は、ともに底部に糸切り痕が残る。160では底部は平高台状を呈し、口縁部は玉縁状をなす。さらには、瓦質の甕162もある。吉備系土師器椀163・164は、高台がかなり低い台形か三角形となる。土師皿165は、底部ヘラ切りである。平瓦166は凸面に縄目タタキを施す。



この溝は、13世紀後半には掘削されており、14世紀初頭には埋没していると思われる。（弘田）



第1209図　溝13（1/60）・遺物



第1210図　中世遺構配置図（1/500）

溝14（第1211図）

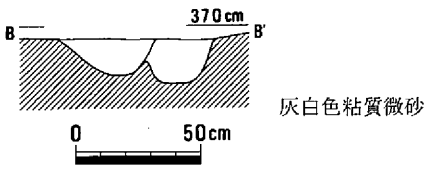
ＡＰ12区で検出した南西から北東方向の溝で、河道２埋没後の低位部水田に流れ込む。規模は、上面での幅が60cm、深さは18cmを測る。

遺物はみられないものの埋土の状況からこの溝の時期は中世と思われる。（弘田）

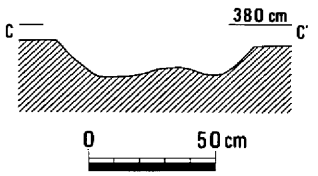
溝15（第1212図）

ＢＰ12区の西部で検出した溝で、溝14に平行して低位部の水田に流れる。規模は、幅が70cm、深さは14cmを測る。

出土遺物はないが、埋土の状況からこの溝の時期は中世と思われる。（弘田）



第1211図　溝14（1/30）

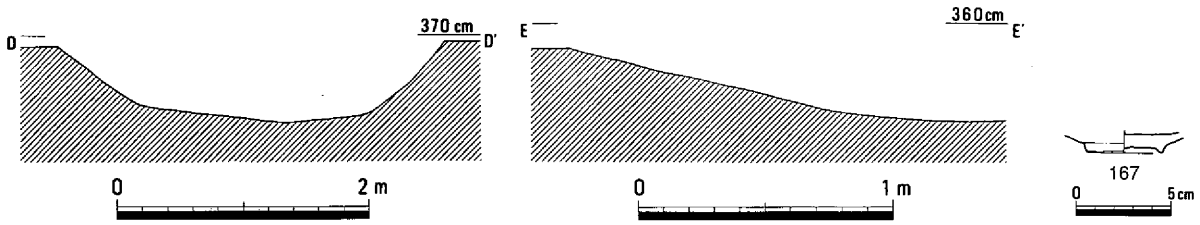


第1212図　溝15（1/30）

溝16（第1213図）

ＢＰ12区で検出し、溝14・15の東を平行して流れる溝である。検出レベルからみて溝13に後出する。規模は、幅が300cmで、深さは60cmを測る。

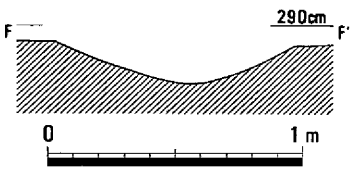
吉備系土師器椀167は13世紀末に属し、溝掘削の時期もおおよそこれに近いと思われる。（弘田）



第1213図　溝16（1/60・1/30）・遺物

溝17（第1214図）

ＡＰ13区の中央部で検出できた少し蛇行し南東から北西に向かう溝である。ＡＰ13区は低位部の古代水田が確認できた調査区である。この溝は当初水田層の下層で検出したもので時期は古墳時代に当てていたものである。しかし整理段階で中世になったのは土層観察の結果であろう。規模は、長さ800cm、最大幅95cm、最大深さ15cmを測る。（浅倉）



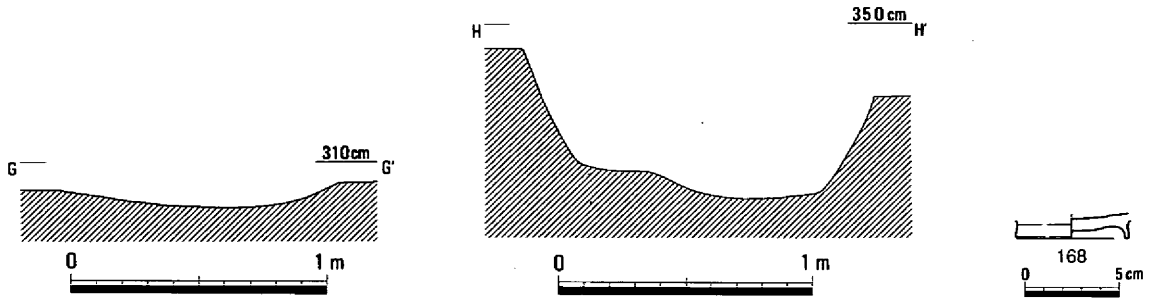
第1214図　溝17（1/30）

溝18（第1215図）

ＡＰ13では北東隅で500cm程検出され、同一溝と考えられるものがＢＰ14で1400cm程確認できた。ＡＰ13では幅110cm、深さ10cmであるが、ＢＰ14では幅140cm、深さ60cmもある。

遺物としては土師器高台付き椀が１点出土している。

この土器と土層から溝の廃棄された時期は中世としたい。（浅倉）



第1215図　溝18（1/30）・遺物

溝19～21（第1216図）

ＢＰ14区の北端部、溝18の北側で、互いに並行する小規模な４条の溝群である。

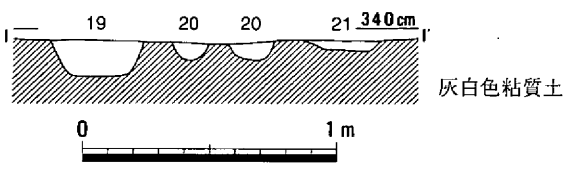
規模は各々まちまちで、幅が14～43cm、深さも４～14cmの間である。耕作に伴う鋤痕跡と思われこの続きはＡＰ15区で検出されている。

遺物の出土をみないが、溝14から16と方向や検出レベルを同じくすること、埋土の色調などからこの溝の時期は中世とみられる。（弘田）

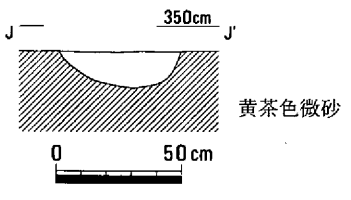
溝22（第1217図）

ＢＰ14区で検出した北西から南東方向にのびる溝で、切り合い関係にある溝23に先行する。規模は、上面での幅が48cm、深さは14cmを測る。

出土遺物はないが、この溝の時期は中世の可能性が高い。（弘田）



第1216図　溝19・20・21（1/30）



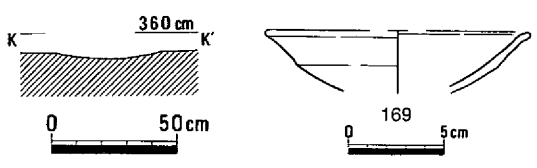
第1217図　溝22（1/30）

溝23～25（第1218～1220図、写真140）

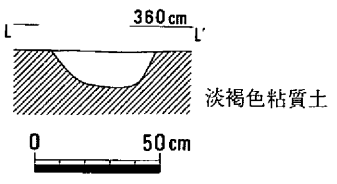
ＢＰ14区において検出した北西から南東方向に向けての溝群である。低位部水田下層において検出した用水路である溝18と平行する位置関係にあるが、検出レベルからみると、この溝と直交方向の溝14～16と同時期の可能性がある。

規模は、溝23は上面での幅が42cm、深さは３cm、溝24は上面での幅が40cm、深さは13cmで、溝25は上面での幅が35cm、深さは５cmを測る。

溝23からは吉備系土師器椀169が、溝25からも同じく椀170が出土している。これらからみてこの溝群の掘削時期は13世紀後半とみられる。（弘田）

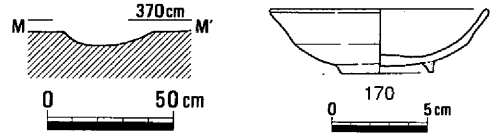


第1218図　溝23（1/30）・遺物



第1219図　溝24（1/30）

（３）その他の遺構・遺物



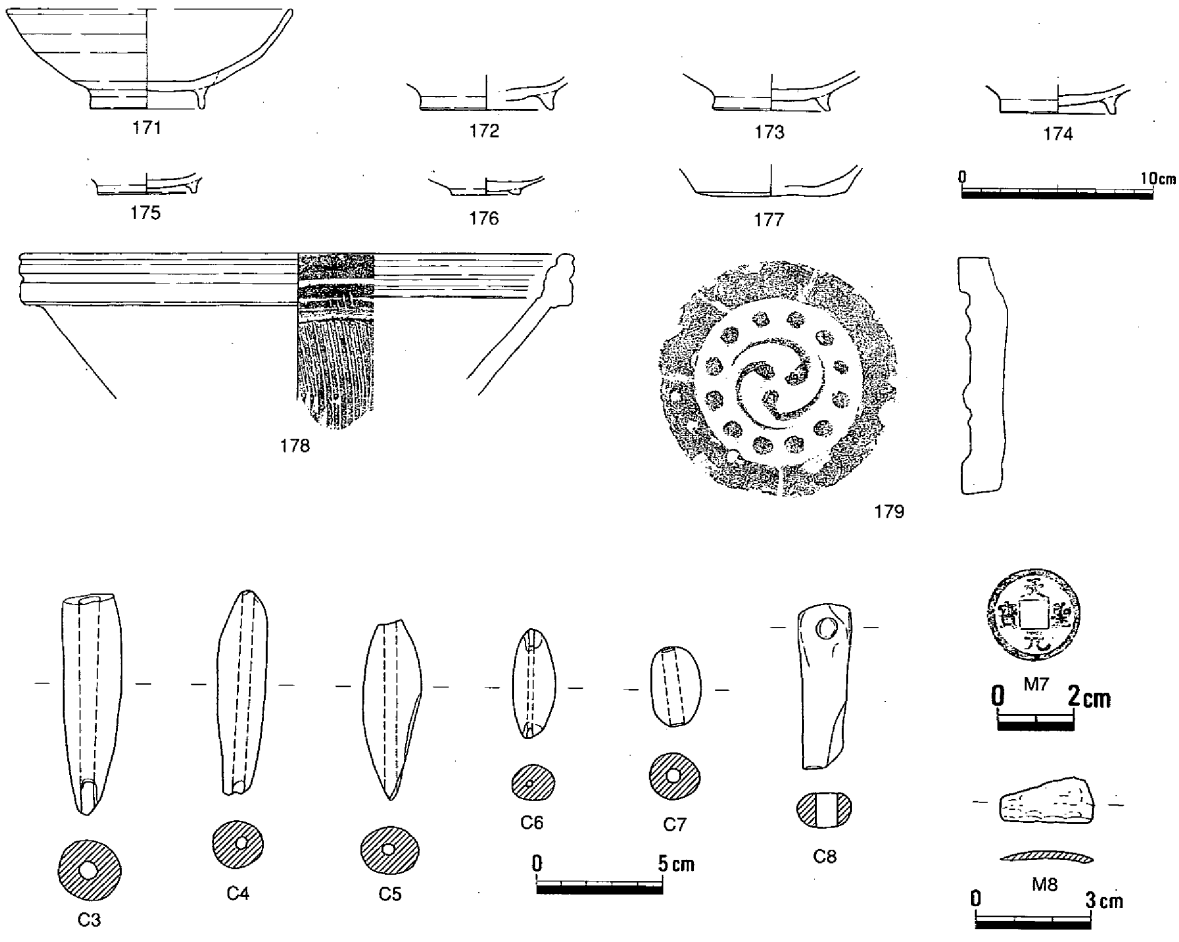
第1220図　溝25（1/30）・遺物

中世に属するその他の遺構としては水田層、柱穴群などがある。水田層の下層からは鋤溝痕が検出されたが畦畔は確認できなかった。しかし、鉄分・マンガンの沈着がみられたことから水田と判断できたものである。その鋤溝群は、遺跡西半部にみられ溝13と平行していたが、低位部水田の広がるＡＰ12～14区にはみられない。

これらからも遺物が出土しており、土師器椀、備前焼すり鉢、三巴文軒丸瓦、管状土錘、棒状土錘、天聖元寶、用途不明銅製品がある。171は高台付きの土師器椀で、推定口径が15.0cm、底径は6.0cm、器高が5.3cmを測る。172～176は高台付きの土師器椀の高台部破片である。177は土師器皿底部破片である。これらの時期は、13世紀中葉～末葉にかけてである。178は備前焼すり鉢で、内部の条線が多いことや口縁端部の拡張からみて近世に近いものと考えられる。179は三巴文軒丸瓦で、軒丸部分は残存しているが後は欠けている。巴のしっぽ部分が長いほど古式である。

土製品のうち、Ｃ３～７は管状土錘と言える。しかしＣ７は短くて太い。Ｃ８は棒状土錘と言われ、両端に円孔を穿つものである。金属器のうち、Ｍ７は中国南宋時代の天聖元寶である。Ｍ８は用途不明銅製品である。

（浅倉）



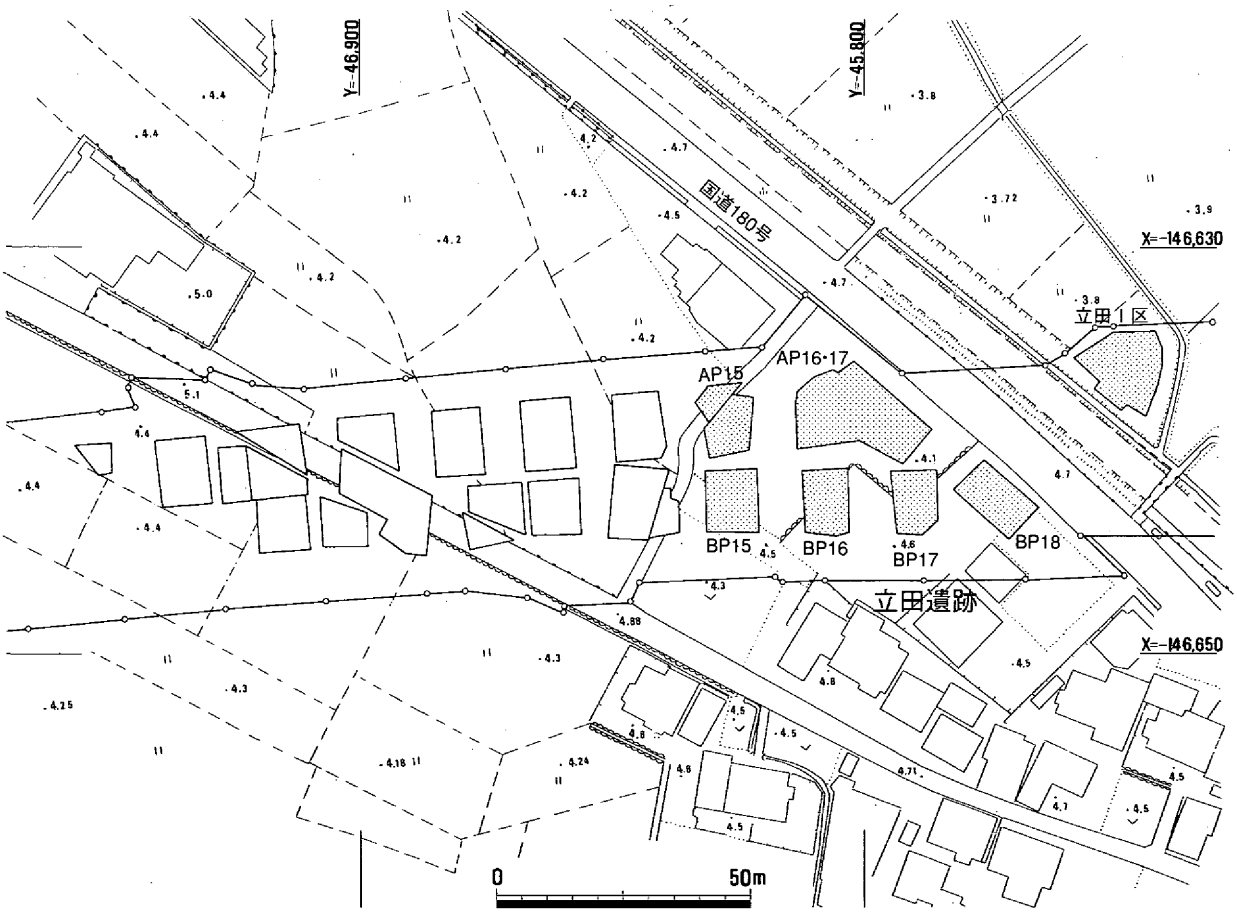
第1221図　その他の遺物

3　立田遺跡

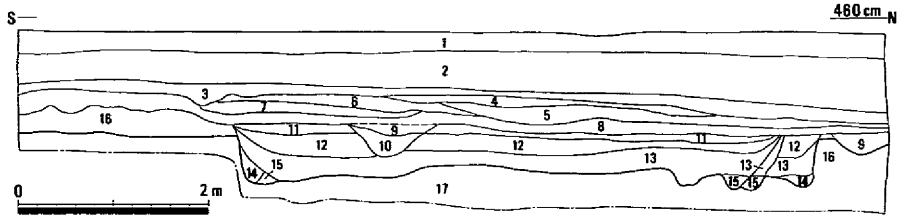
第１章　調査の概要

第１節　調査区の概要

立田遺跡は山陽自動車道と国道180号線が交差するあたりを中心にし、自動車道の橋脚８本分（ＡＰ15～17・立田１区、ＢＰ15～18区）にあたる。遺跡の範囲は、東が立田１区の東側を回り込む水路を境として鼓山との間に低湿地が拡がり、また西では高松原古才遺跡の河道２を西の境としており、東西は120m程である。南は市道が河道推定線となり、さらに当調査地の北に接して行われた立田排水機場の調査を参考にすると南北のひろがりも同程度と考えられる。高松原古才遺跡が古高梁川分流の形成した自然堤防上に位置するのに対し立田遺跡は自然堤防上から低湿地に向かって傾斜するその斜面に立地する弥生時代の集落で、比高差は50cmあまりを測る。調査前の現況は水田の他に国道沿いでは一部宅地が存在しており、標高が4.3～4.5m、国道より山側は一段低く3.8mである。土層断面をみると中世から近現代にかけての水田層が分厚く堆積しており、弥生時代の遺構検出面は表土下100cm程となる。（弘田）

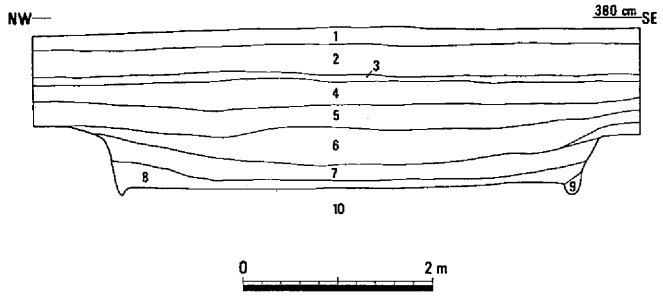


第1222図　調査区配置図（1/1500）



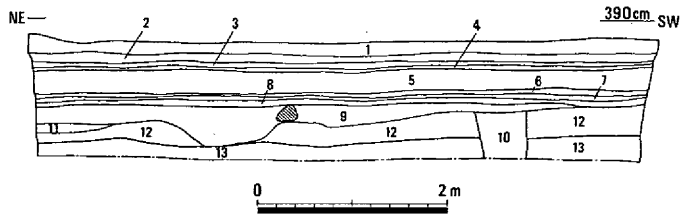
1　黒褐色粘土（水田耕土）
2　黄褐色粘質土
3　にぶい黄褐色粘質微砂
4　黄褐色微砂質粘土
5　褐色粘質微砂
6　にぶい黄褐色微砂質粘土
7　にぶい黄褐色微砂質粘土
8　褐色粘質微砂
9　暗褐色粘土（溝５）
10　黒褐色粘土（溝５）
11　オリーブ褐色粘質微砂
12　黒褐色粘土（炭・焼土を大量に含む）
13　黒褐色粘土
14　黒褐色粘土
15　褐色粘土
16　暗褐色粘土
17　褐色粘土

ＡＰ15西壁



1　表土
2　明灰黄色粘質土
3　灰黄色粘質土（中世耕作土）
4　暗褐色粘質土
5　灰褐色粘質土（弥生時代包含層）
6　明灰褐色粘質土
7　黄褐色粘質土
8　黒灰褐色粘質土（住居５埋土）
9　黒褐色粘質土（住居５埋土）
10　灰黄色粘質土

ＡＰ16･17北東壁（竪穴住居５付近）



1　褐色粘土
2　緑灰色粘土（近世）
3　緑灰色粘土（近世）
4　緑灰色粘土（近世）
5　灰色粘土
6　暗灰黄色粘土（中世）
7　暗灰黄色粘土（中世）
8　暗灰黄色粘土（中世）
9　黒褐色粘土
（炭・礫を多く含む）
10　黒褐色粘土
11　灰黄褐色粘土
12　褐灰色粘土
（炭・土器を多く含む：弥生包含層）
13　にぶい黄褐色粘土

ＢＰ18南東壁

第1223図　土層断面図（1/80）

第２節　弥生時代の遺構・遺物

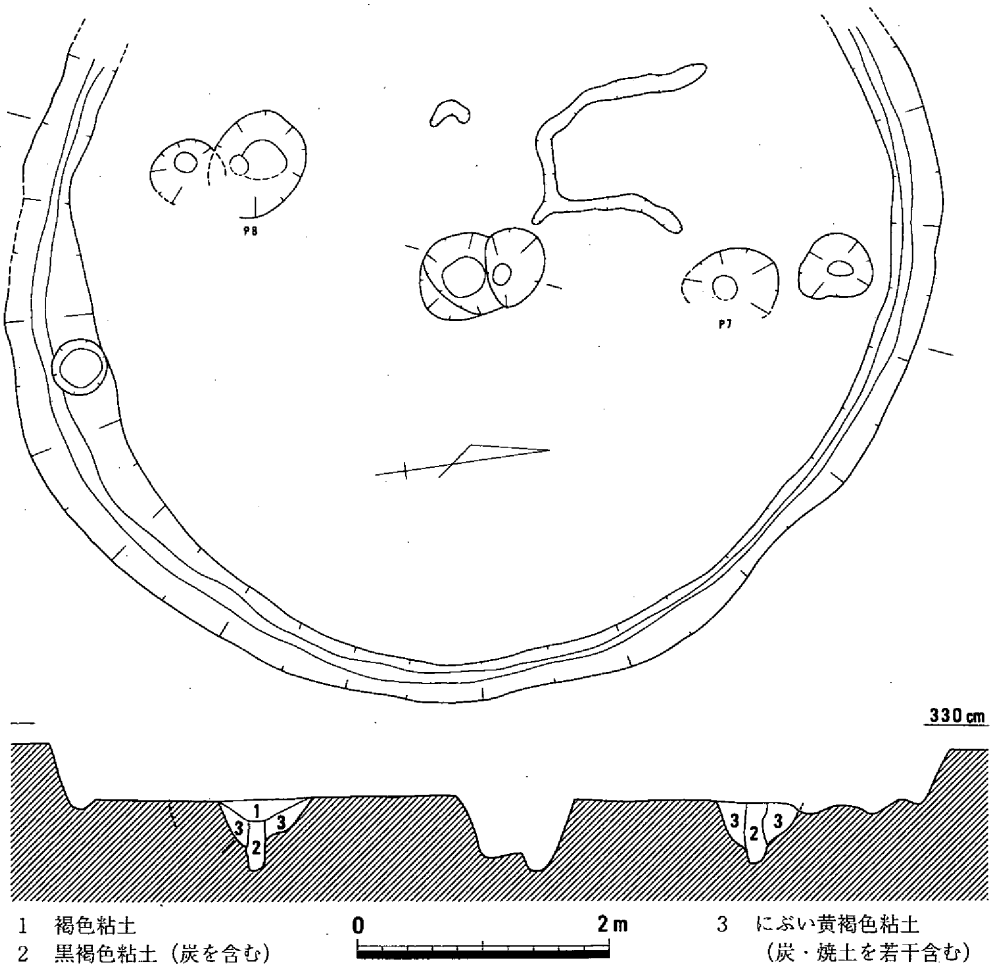
（１）概要

弥生時代の遺構としては竪穴住居９軒、掘立柱建物３棟、井戸１基、袋状土壙５基、土壙30基、溝２条がある。このうち、弥生時代前期に遡るものはなく、中期の遺構として竪穴住居１軒が存在するほかは、大半の遺構が後期に属する。これは後年次にこの調査区の北側に平行して調査を行った結果とも一致する。

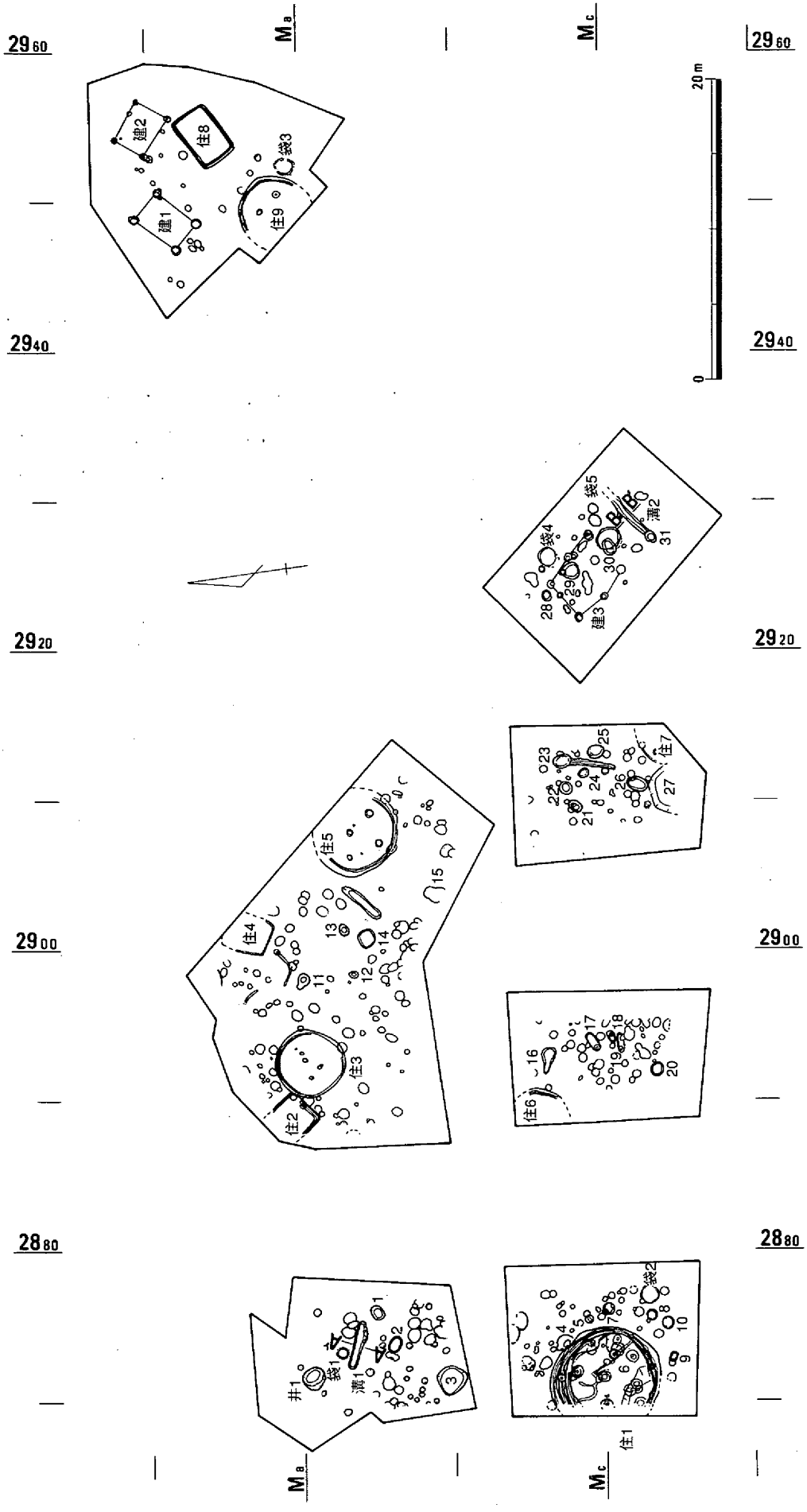
遺構密度はけっして高くないが、当遺跡の西に接する高松原古才遺跡と比べると多くみられる。今回の調査範囲は、加茂政所遺跡と高松原古才遺跡を隔てる河道によって形成された自然堤防から後背湿地部にかけての斜面部に相当すると思われ、ＡＰ16・17区と立田１区の間に入る国道180号線あたりが弥生後期を中心とした集落の中心に近いと考えられる。（弘田）

（２）竪穴住居

竪穴住居１（第1224・1226～1230図、写真143－1、149）



第1224図　竪穴住居１ａ（1/60）



住は竪穴住居を、建は掘立柱建物を、井は井戸を、袋は袋状土壙を、番号のみは土壙を示している。

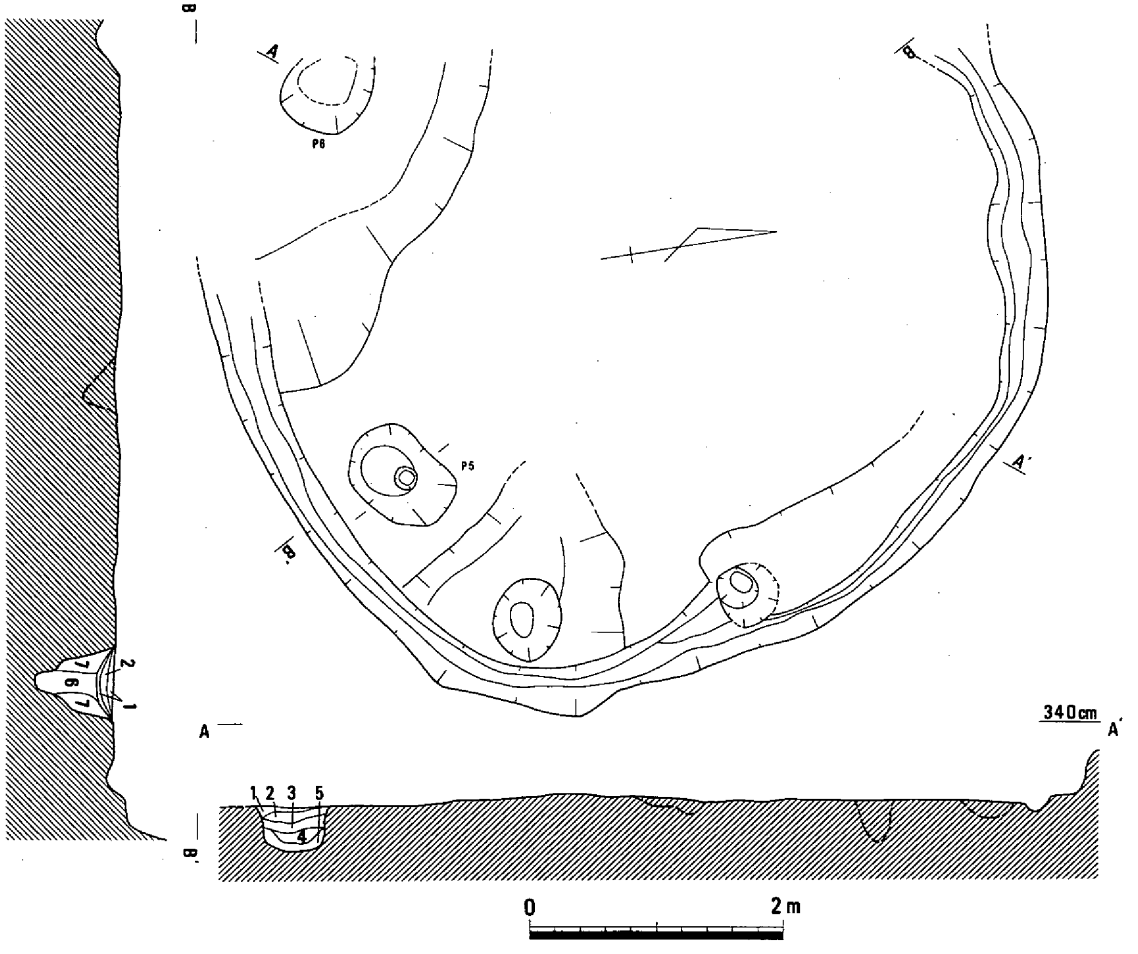
第1225図　弥生時代遺構配置図（1/400）

ＢＰ15区の西辺中央に位置する竪穴住居である。全体の約40％が調査区外にあるが、平面プランはは円形であり、２度の建て替えが行われている。このうち最も時期の古い床面を１－ａとし、最も新しい床面を１－ｃとした。

竪穴住居１－ａは平面形が円形を呈し直径が7.15ｍ、検出面からの深さは0.35ｍを測る。床面には円形の中央穴を中心にして対角線上に２本の主柱穴があり、ともに柱痕跡が明瞭に認められた。また、中央穴では内部に炭の堆積や熱影響は認められなかった。また、中央穴には切り合いがあり、住居１－ｂにともなう可能性がある中央穴Ｉ－ｂからは住居の壁に向かい２条の浅い仕切状の溝がのびる。

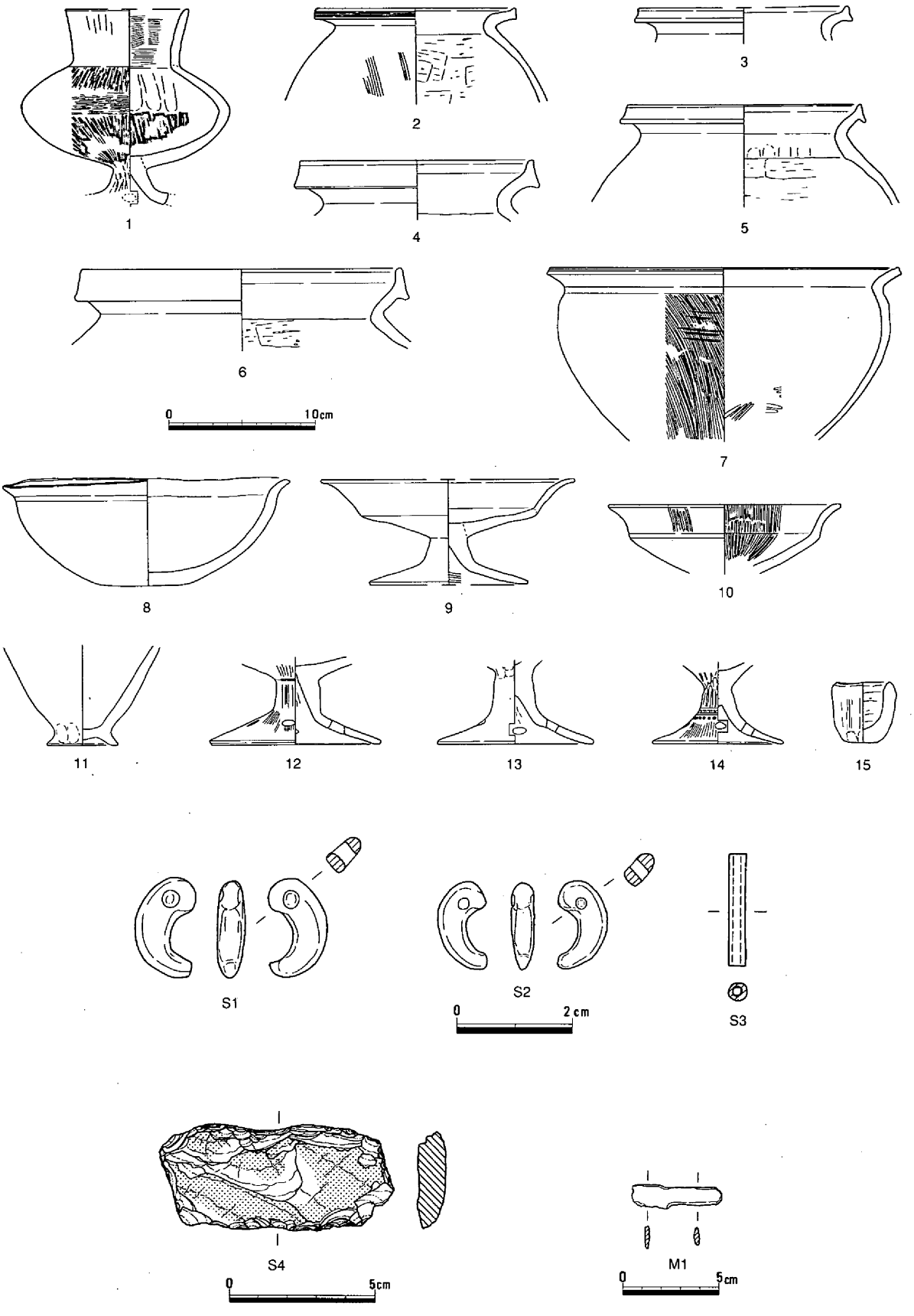
竪穴住居１－ｂは直径が6.45ｍで、検出面からの深さが0.3ｍを測る。平面プランは１－ａと比べるとやや方形に近い。床面の中央付近には1.7ｍ四方の範囲に薄い炭や焼土の堆積がみられたが中央穴に伴うものとは確定できなかった。周囲には壁体溝をめぐらせているほかには、この住居に伴う可能性のある柱穴２本（Ｐ５・６）が存在したもののこれと対になる柱穴は検出できず、主柱穴は住居１－ａの柱穴とあわせて４本以上で構成されていたと思われる。なお、床面は平坦ではなく数ケ所に凸凹がみられるが、これはこの住居に伴うものではなく、最上層の住居１－ｃが床を造る際に掘り込まれたものと思われる。

出土遺物のうち土器には脚付き壺が１個体のみで、残りは甕２～６、鉢７・８、高杯９・10・12～



1　黒褐色粘質土（炭を含む）　2　褐色微砂混じり粘土　3　1と同じ　4　2と同じ　5　1と同じ　6　褐色粘土　7　にぶい黄褐色粘土

第1226図　竪穴住居１ｂ（1/60）



第1227図　竪穴住居１ａ・ｂ遺物

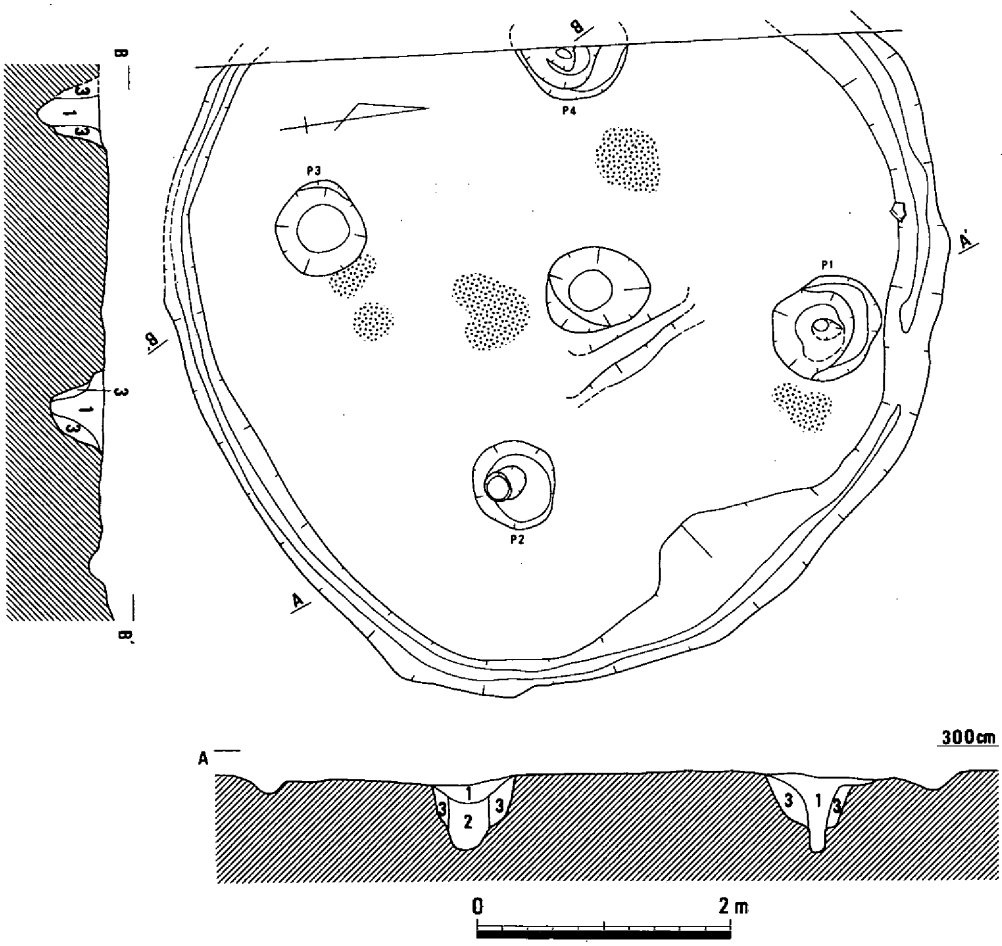
14である。このほかに勾玉Ｓ１（角閃石？）・Ｓ２（蛇紋岩）と碧玉製の管玉Ｓ３や打製石包丁、刀子状の鉄器片Ｍ１がある。

住居１－ａ・１－ｂは床面のレベルがほぼ同じであり、壁体溝の切り合い関係から竪穴住居１－ａが１－ｂに先行すると判断したものの、土器については両者を明確に分離できていない。ただし、時間的な隔たりはなく、時期はともに後期Ⅲに属する。

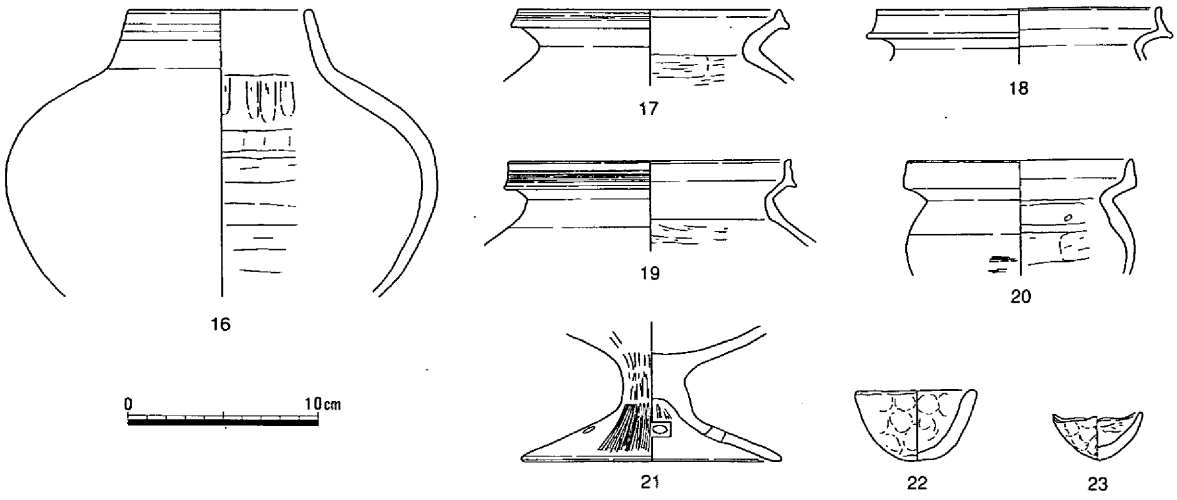
竪穴住居１－ｃは直径が6.09ｍで、検出面からの深さが0.3ｍを測る。平面形は住居１－ｂに近く円形と方形の中間形を呈する。床面には主柱穴が４本と中央穴が存在し、ともに掘り方は円形で直径70～80cm、深さが60cm程である。さらに、先行する住居の床面から厚さ５cmの貼床を行い、さらに周囲には壁体溝をめぐらす。柱穴にはいずれも柱痕跡がみられ、柱間は2.48～2.97cmの間である。また中央穴は平面形が楕円形を呈し、周辺の一部には土手状の高まりが存在した。この中央穴の内部には被熱や炭の堆積はみられなかったが、その周囲には薄い炭の堆積が認められた。また、中央穴に接して１ケ所と３本の主柱穴に近接して４ケ所の計５ケ所の焼土面が存在した。

出土遺物は土器のみである。直口壺16は小型の脚付き壺と同じ形態をとる。また、22・23のような手捏ね土器を伴う。以上からみてこの住居の時期は後期Ⅳである。

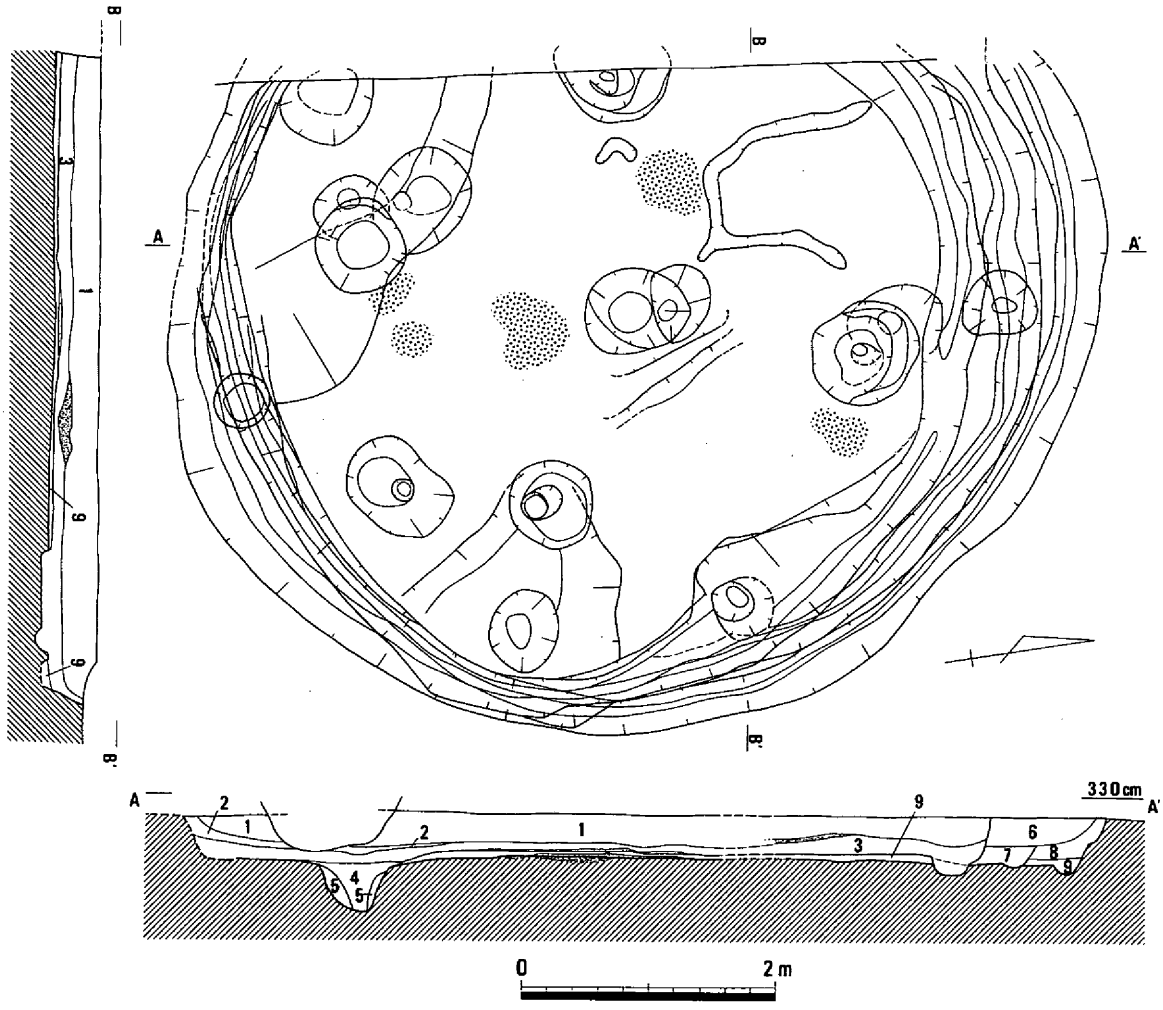
以上、竪穴住居１はａ～ｃへと時期が下るにつれ規模が縮小していると思われる。　（弘田）



第1228図　竪穴住居１ｃ(1/60)



第1229図　竪穴住居１ｃ遺物



1　灰褐色粘質微砂（黄色土ブロック・炭を含む）
2　灰褐色粘質微砂
3　暗灰褐色粘質微砂（黄色土・炭・焼土を含む）
4　黒褐色微砂混じり粘土
　（焼土・炭を多量に含む）
5　暗褐色粘土
6　灰褐色微砂
7　灰褐黄色微砂（焼土を含む）
8　褐黄灰色微砂
9　黄褐灰色微砂

第1230図　竪穴住居１ａ・ｂ・ｃ（1/60）

竪穴住居２（第1231図）

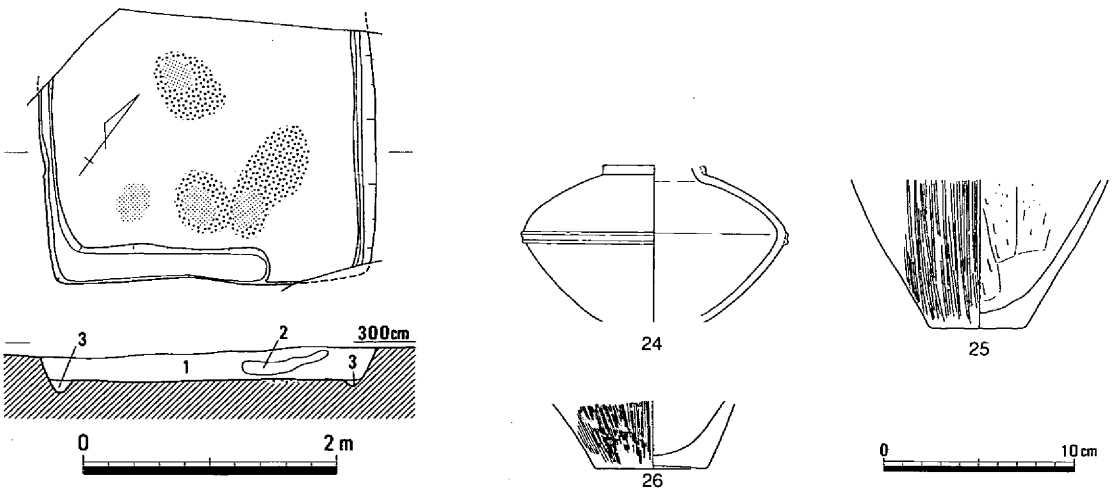
ＡＰ16調査区に2/3掛かる平面形が方形の浅い小型の竪穴住居である。規模は長さ255cm、幅217cmを測る。壁の高さは25cmあり、良く残っている方である。壁体溝はあるが、南東隅が切れてなくなっている。また東西は溝の幅が15～20cmと狭いにもかかわらず、南側は30cmもある。柱穴は精査したにもかかわらず１本も検出できなかった。元来床を掘り込む柱穴はなく、壁の外にあったのか、壁で屋根を支える構造であったのであろう。床面の標高は270cmを測る。堅い平坦な床面には非常に良く焼けた火所が４ケ所も有り、火を使う工房を想定する調査員もいるが、火災にあったものと考えたい。竪穴住居４と類似している。

埋土から遺物が少量出土している。24は直口壺形土器で、口頸部は欠けている。頸部下端と胴部最大径部に凸帯を有す。胴部は算盤玉形を呈する。頸部径4.8cm、現存器高8.3cmを測る鈍い橙色の土器である。25は甕形土器の胴下部から底部である。底径は5.5cm、現存器高3.6cmを測る黒褐色の土器である。わずかではあるが上げ底で、外面の調整はハケメである。26は甕形土器の胴下半から底部である。底径は4.9cm、現存器高7.8cmを測る褐灰色の土器である。完全な平底で、外面の調整はハケメ、内面はヘラケズリである。

これらの土器から弥生後期Ⅲ～Ⅳと考えられる。（浅倉）

竪穴住居３（第1232・1233図、写真143－2）

ＡＰ16調査区に中央部で検出した平面形が円形の浅い小型の竪穴住居である。竪穴住居２の南東隅をわずかに切っている。規模は直径436cmを測る。壁の高さは35cmあり、良く残っている方である。その壁は非常に良く焼けていて、１cmの厚さで赤くなっている。しばしば検出される焼成土壙の壁のようである。一度の火災でこれほど壁が赤くなるものだと言う見本である。そして図のように屋根のたる木が放射状に炭化したまま検出できた。埋土の中央部には赤く焼けた焼土塊が厚く堆積しており、その周囲には拳大から人頭大の角礫が散在していた。このことは火災に遭う前には屋根の上には土と石で防風対策を施していたことを示している。壁体溝はあるが、全周巡っているわけではなく、北半分と南に一部分掘り込まれているだけである。柱穴は４本検出できたが、２本柱で建て替えしているように思われる。堅い平坦な床面は火災にあっているにも関わらず火所が１ケ所もない。

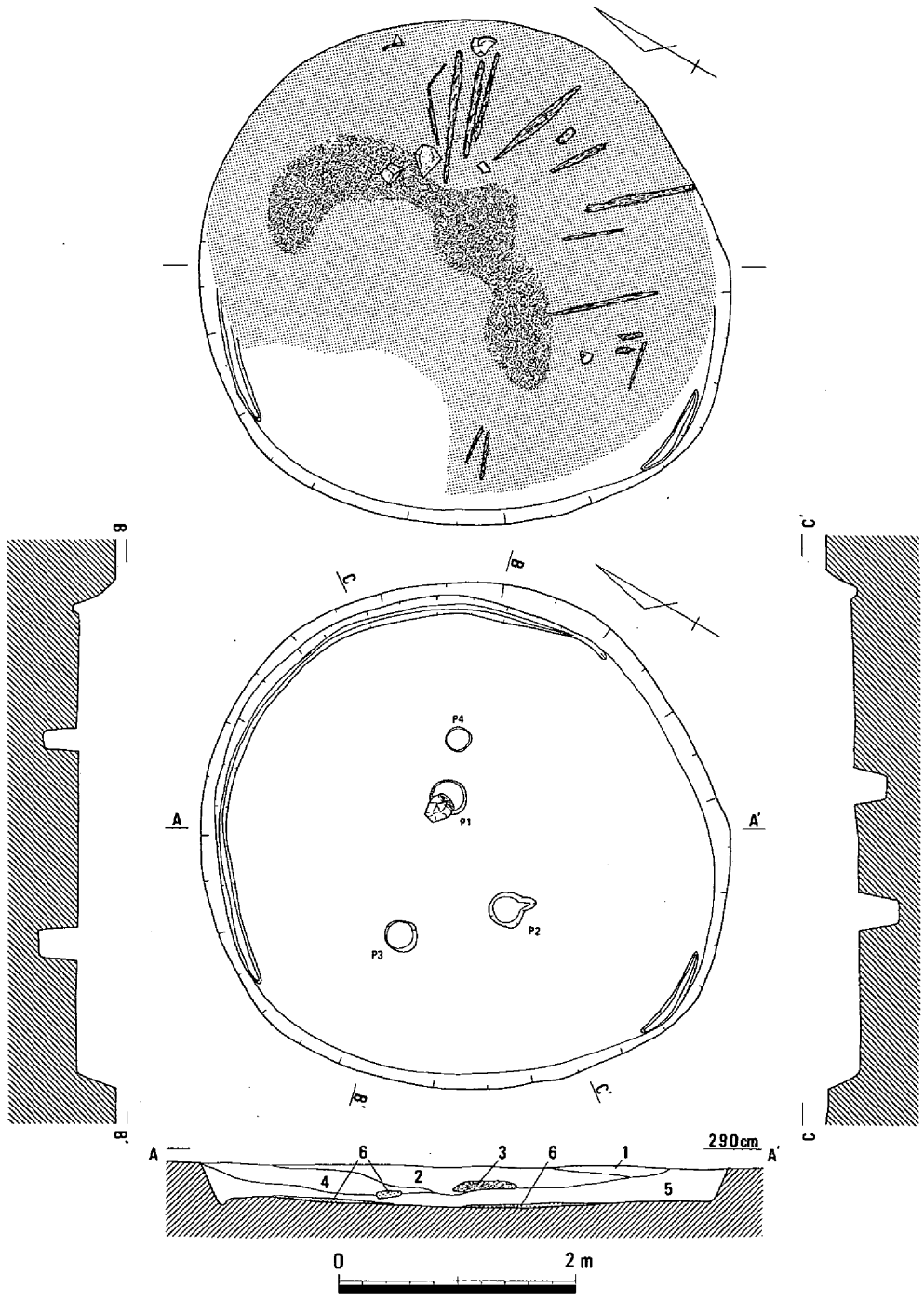


1　淡灰褐色粘質土　3　明褐灰色粘質土
2　灰褐色粘質土

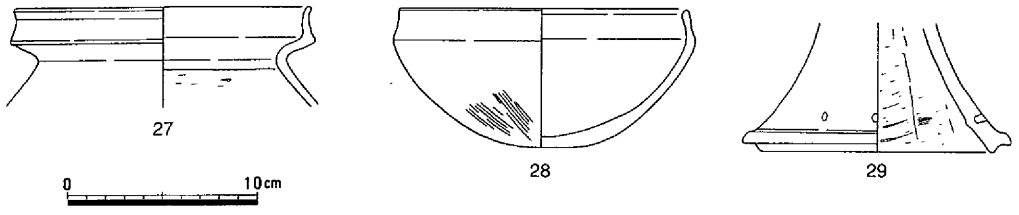
第1231図　竪穴住居２（1/60）・遺物

埋土から遺物が少量出土している。27は甕形土器で、口縁部である。口径15.4cm、現存器高5.2cmを測る鈍い橙色の土器である。28は鉢形土器の口縁部から底部である。口径15.0cm、底径は4.0cm、器高7.3cmを測る橙色の土器である。胎土には精製粘土を使い、外面の調整はハケメである。29は高杯形土器の脚部である。底径は12.0cm、現存器高6.8cmを測る橙色の土器である。円形の刺突は貫通していない。

これらの土器から弥生後期Ⅲと考えられる。　（浅倉）



第1232図　竪穴住居３（1/60）



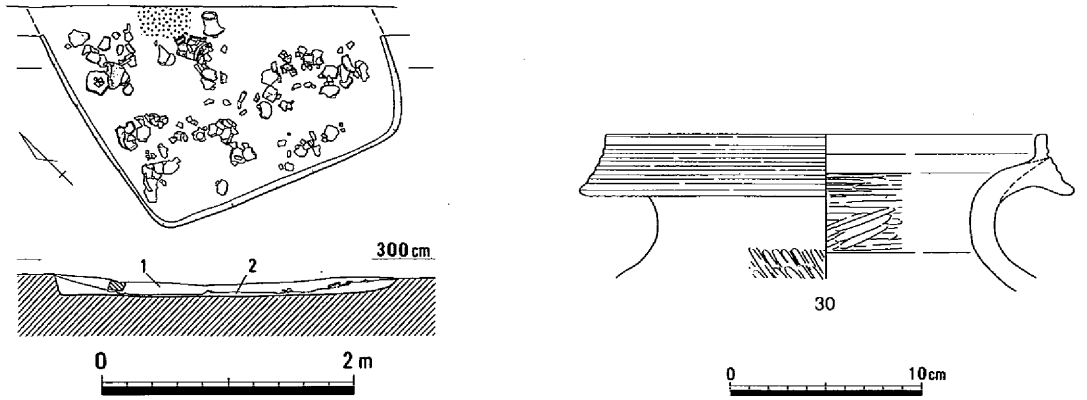
第1233図　竪穴住居３遺物

竪穴住居４（第1234・1235図、写真143－3、150）

ＡＰ17調査区に約半分掛かる平面形が方形の浅い小型の竪穴住居である。規模は長さ243cm、幅206cmを測る。壁の高さは15cmしかなく、残りの良くない住居である。竪穴住居か平地住居か判別しがたい。埋土は２層に分けることが出来たが、土器は上層に広くかつ大量に出土した。壁体溝は精査したにも関わらず検出できなかった。また柱穴も精査したにもかかわらず１本も検出できなかった。元来床を掘り込む柱穴はなく、壁の外にあったのか、壁で屋根を支える構造であったのであろう。床面の標高は271cmを測る。堅い平坦な床面には非常に良く焼けた火所が１ケ所有り、炉跡か火災にあったものか分からない。全体的に竪穴住居２と類似している。

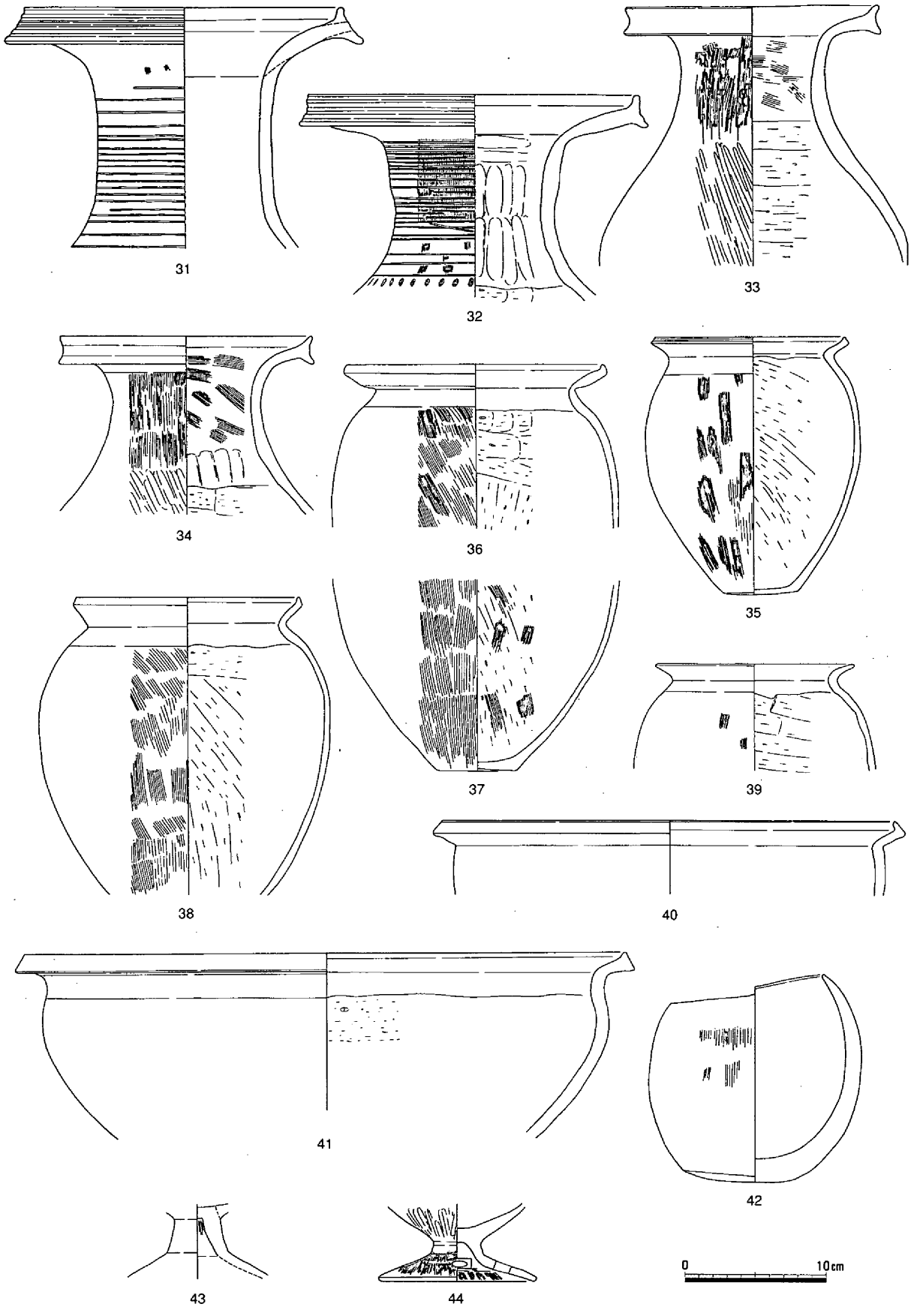
遺物は土器が多数出土している。30は壺形土器の口縁部である。口径22.8cm、現存器高7.6cmを測る橙色の土器である。端面に凹線を５条施す。頸部内面と胴部外面はヘラミガキである。31は長頸壺形土器の口頸部である。口径は21.0cm、現存器高17.0cmを測る鈍い橙色の土器である。頸部には螺旋状に沈線を10数条巡らす。32は長頸壺形土器の口頸部である。口径は22.8cm、現存器高14.5cmを測る鈍い橙色の土器である。肩部に刺突文がある。33は長頸壺形土器の口頸部～胴上半部である。口径は17.6cm、現存器高18.2cmを測る浅黄橙色の土器である。頸部に沈線がない。34は長頸壺形土器の口頸部で、頸部に沈線がない。35は甕形土器で、全形がそろっている。内面ヘラケズリ、外面ハケメである。36～39は甕、40～42は鉢、43・44は短脚の高杯である。36には煤が付着している。44には円孔が４個穿たれている。

これらの土器から弥生後期Ⅲと考えられる。　（浅倉）



1　灰褐色粘質土
2　暗灰褐色粘質土（土器・炭を含む）

第1234図　竪穴住居４（1/60）・遺物（１）



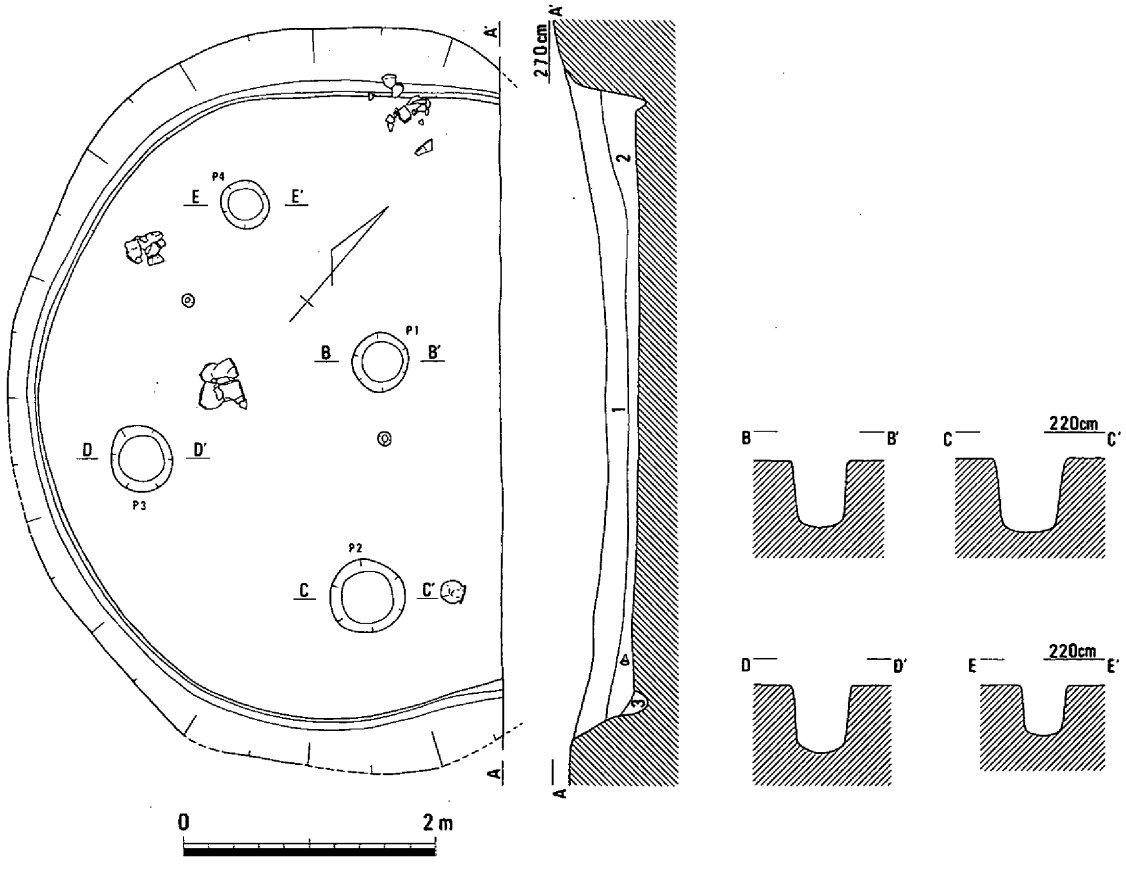
第1235図　竪穴住居４遺物（２）

竪穴住居５（第1236～1238図、写真144－1）

ＡＰ17調査区に約2/3掛かる平面形が円形の深い中型の竪穴住居である。規模は直径535cmを測る。壁の高さは60cmもあり、非常に良く残っている。壁体溝は深くしっかりと掘られている。柱穴は３本も検出できた。４本柱で屋根を支えていたものと考えられる。中央穴は柱穴と同規模であった。床面の標高は200cmを測る。平坦な床面は発掘条件が悪いために軟弱だったが、当時は非常に良く叩き締めていたものと考えられる。火所は検出できていない。国道180号線の下に1/3現状保存になってしまった。

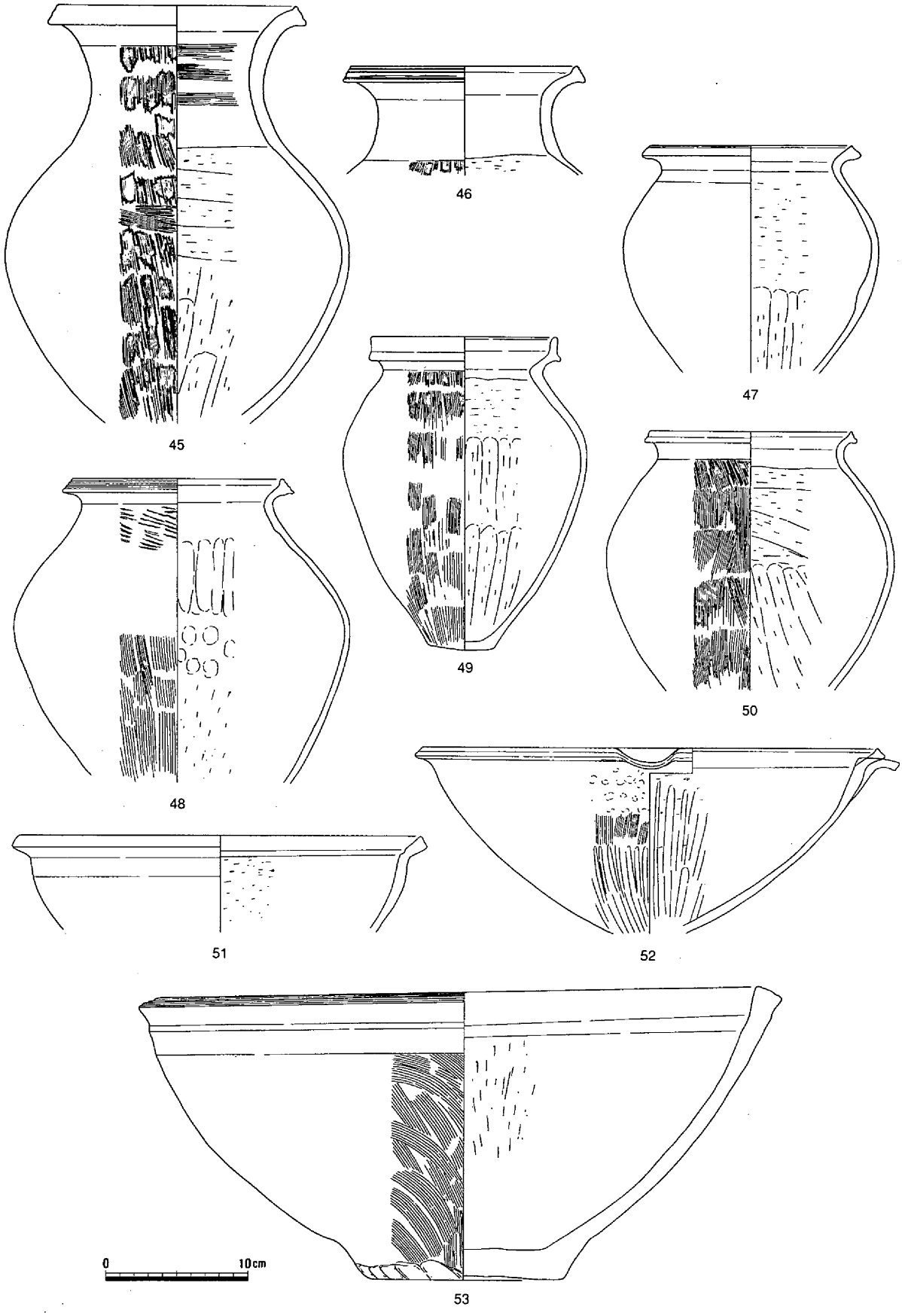
埋土から遺物が少量出土している。床面に密着した土器もあり、土製品と銅鏃も床面から出土している。45は長頸壺形土器で、底部は欠けている。46は壺形土器の口頸部である。47・48は甕である。48の胴上部には平行叩きが見られる。49は完形に復元できた甕で、内面ヘラケズリ、外面ハケメのある典型的な上東Ⅲ式土器である。50も甕で、外面の調整はハケメ、内面はヘラケズリである。51～53は鉢形土器で、52には片口が付いている。54は大型鉢、55～59は高杯である。これらは少し古手の土器で上東Ⅰ式土器である。60・61は台付き鉢形土器で、いわゆる製塩土器である。Ｃ１は直系2.9cmの玉形土製品で、細い紐通しの穴をあけている。Ｍ２は長さ3.3cmの有茎平根式銅鏃で、若干錆ぶくれしているが赤銅色で完形品である。Ｐ２の西床面から出土した。

これらの土器から弥生後期Ⅰ～Ⅲと考えられる　（浅倉）

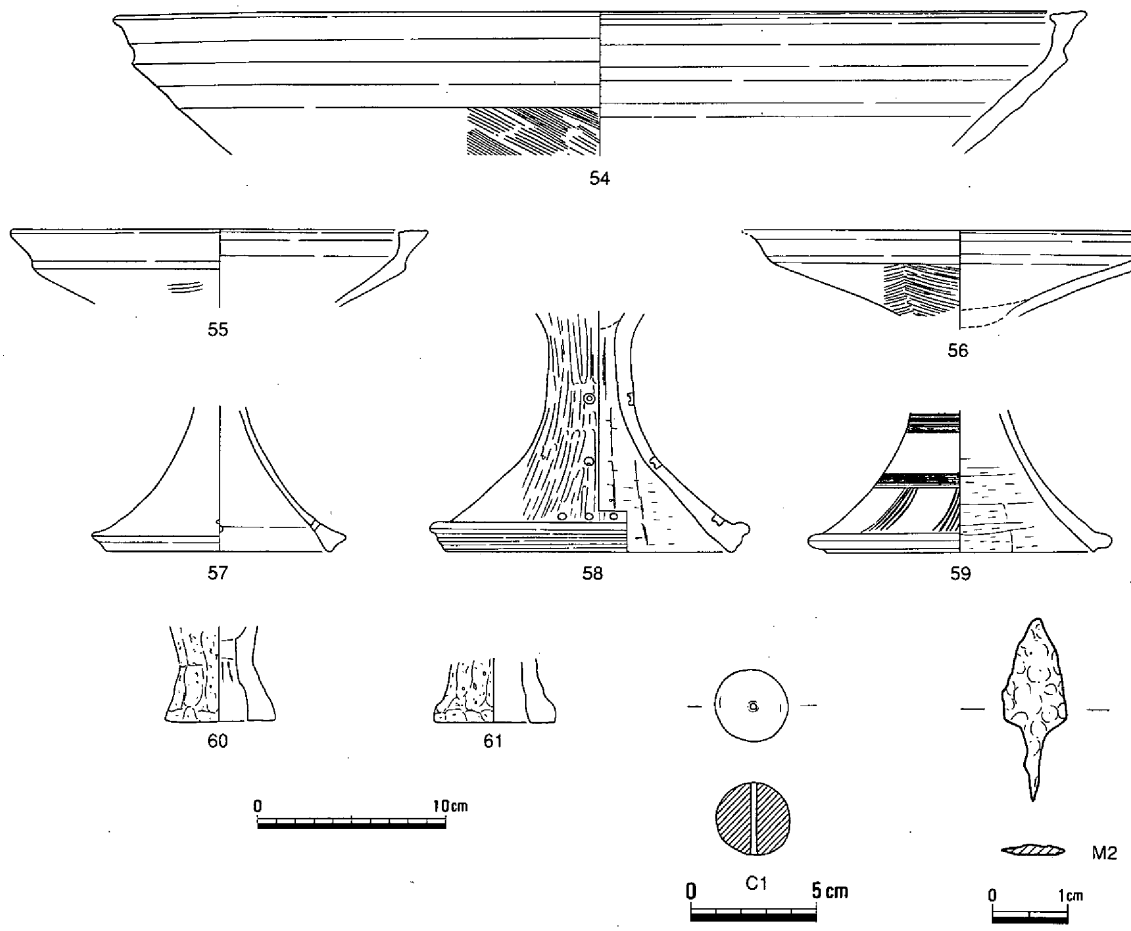


1　黄褐色粘質土　　2　黒灰褐色粘質土　　3　黒灰黄色粘質土

第1236図　竪穴住居５（1/60）



第1237図　竪穴住居５遺物（１）



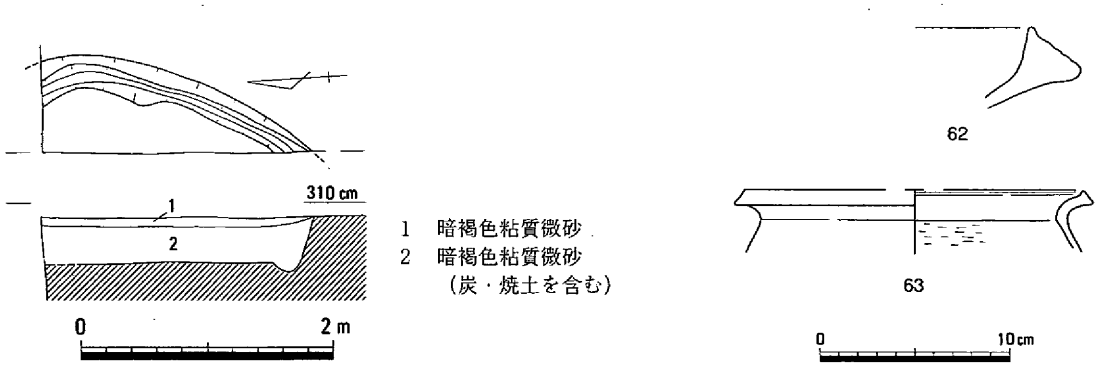
第1238図　竪穴住居５遺物（２）

竪穴住居６（第1239図）

ＢＰ16区の北西隅に位置する。竪穴住居のごく一部が検出できたのみであり、大半は調査区外にひろがる。

住居の平面形は円形ないしは直線的個所もみられることから隅丸方形に近い円形とも考えられる。住居の規模は残存部からの復元では直径2.1ｍとやや小型である。また検出面からの深さは20㎝を測る。柱穴の有無は不明であるが、床面の周囲に壁体溝をめぐらしている。

出土遺物としては、器台の口縁部62や甕の口縁部63などが若干みられた。これら出土遺物からみてこの住居の時期は、弥生時代後期Ⅱに属すると考えられる。（浅倉）

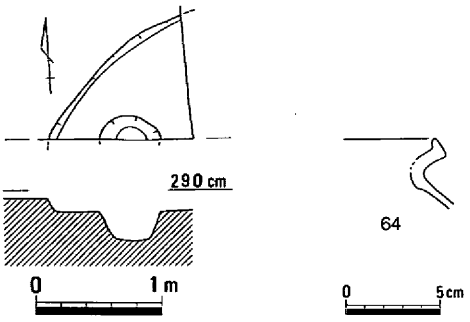


第1239図　竪穴住居６（1/60）・遺物

竪穴住居７（第1240図）

ＢＰ17区の南東隅において検出された竪穴住居で、大半は調査区外にひろがる。平面形は円形とみられ、復元すると直径が４ｍ程の小型住居となる。検出面からの深さは10cmを測り、また床面には柱穴が１基存在した。

甕の口縁部１点のみが出土しており、時期は弥・後・Ⅲとみられる。（弘田）

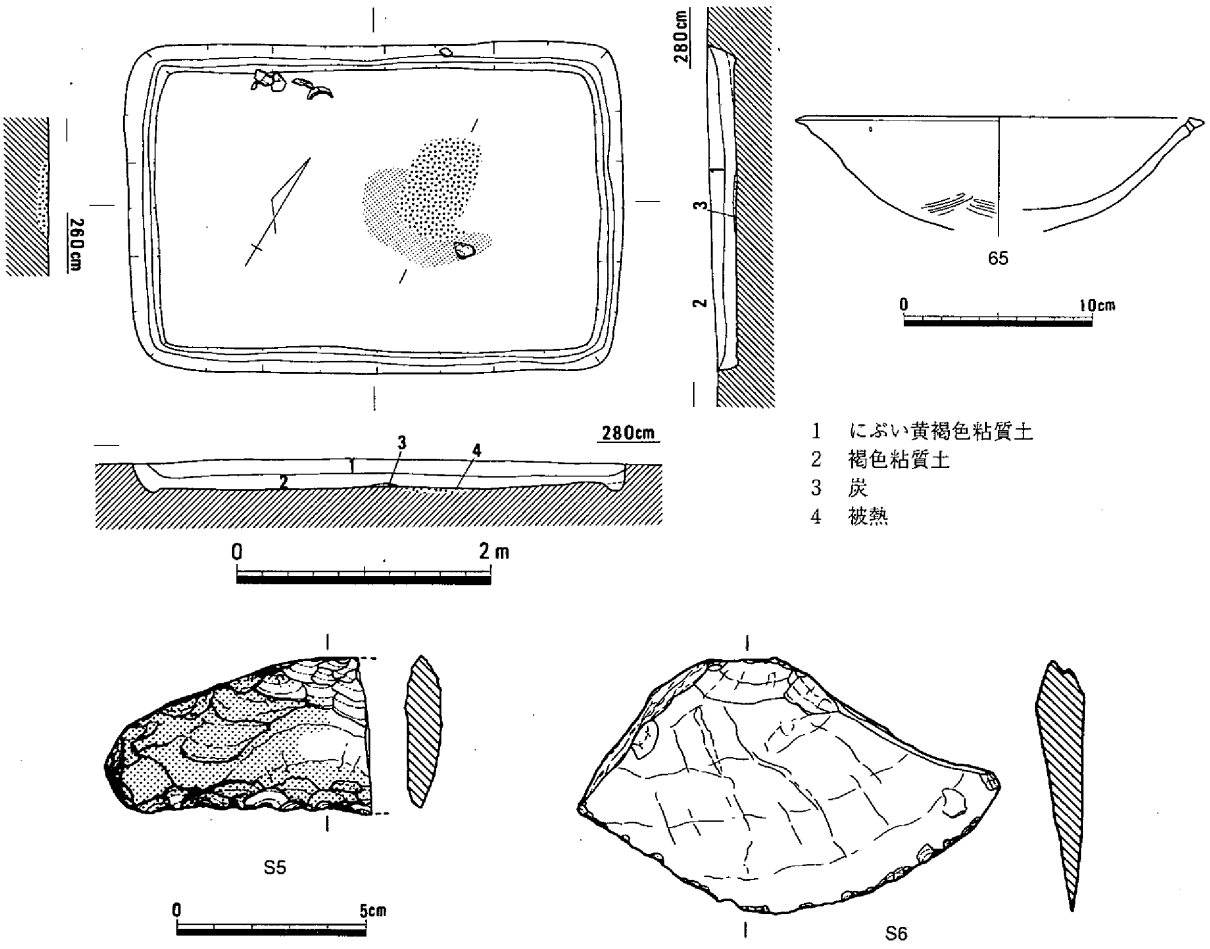


第1240図　竪穴住居７（1/60）・遺物

竪穴住居－８（第1241図、写真144－2、150）

国道180号線の東へも微高地が広がっていて、微高地の東端部に近いところに位置している。平面形は長方形を呈し、四隅は少し丸い。上部をかなり削平されていて、検出面から床面までの深さは20cmしかないが、壁の立ち上がりはきつい。長軸はN-59°-Eを示し、東西方向に長い。中央より少し東へ寄ったところで、80×50cmの床面が焼土面になっている。焼土の南側に炭が集中している。床面を精査したが、柱穴は検出されなかった。住居の規模は、長さ370cm、幅246cmで、床面積は8.7m²を測る。

埋土中からは少量の土器片と石器を検出した。土器には、高杯の杯部65がある。浅い鉢状の杯部で、口縁部は少し肥厚し、斜めになった面を持っている。端部付近に２個の小孔を空けているのが確認さ



第1241図　竪穴住居８（1/60）・遺物

れる。胴部下半にはヘラミガキを施している。胎土には細砂を含み、色調は赤灰色を呈する。石器には石包丁Ｓ５とスクレイパーＳ６がある。石包丁は２分の１程残存していて、刃部をほぼ直線とし、背部は丸みをおびている。表面は広く光沢をおびている。スクレイパーは大きめの剥片を利用したもので完存している。湾曲する刃部には小さく打ち欠いて刃をつけている。

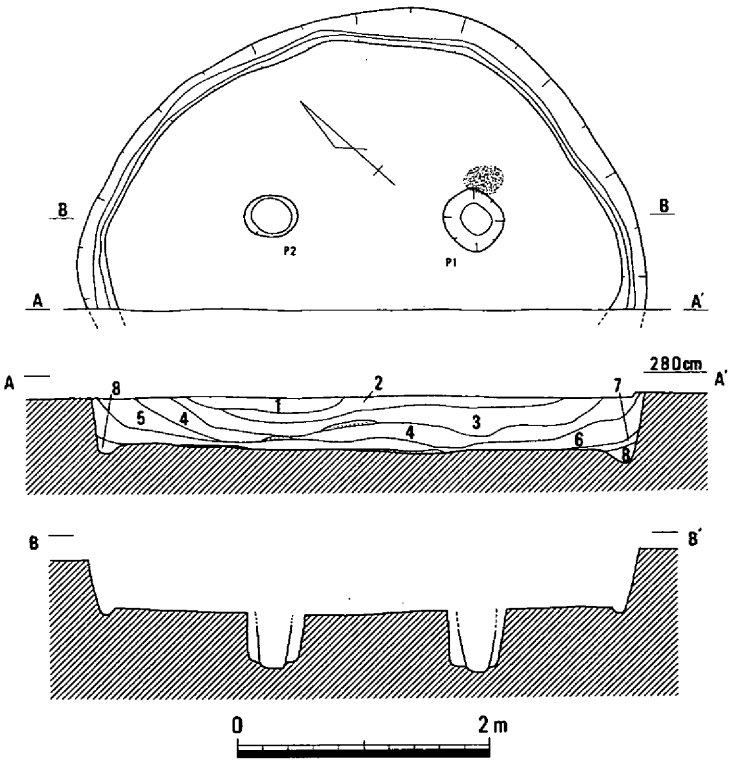
時期は出土遺物から、弥生中期Ⅱに比定される。形状からすると居住のための建物と考えるより作業場と推定される遺構である。（正岡）

竪穴住居－９（第1242・1243図、写真144－3、149）

立田１区の南西側に位置し、竪穴住居－８に近接している。南西側はＪＲ吉備線と現代の用水路に接しているため完掘できず、約２分の１程を調査した。平面形は円形を呈し、壁際には、深さ約10cmの細い溝が巡っている。床面はほぼ平坦であり、中心から東寄りでは２個の柱穴を検出した。この２個の柱穴間距離は163cmを測り、配置状況からみて竪穴住居の主柱は４本柱と推定される。また、住居の大きさは、直径が431cm、深さは40cmである。柱穴の大きさは長径が45cmで、深さは40～45cmである。

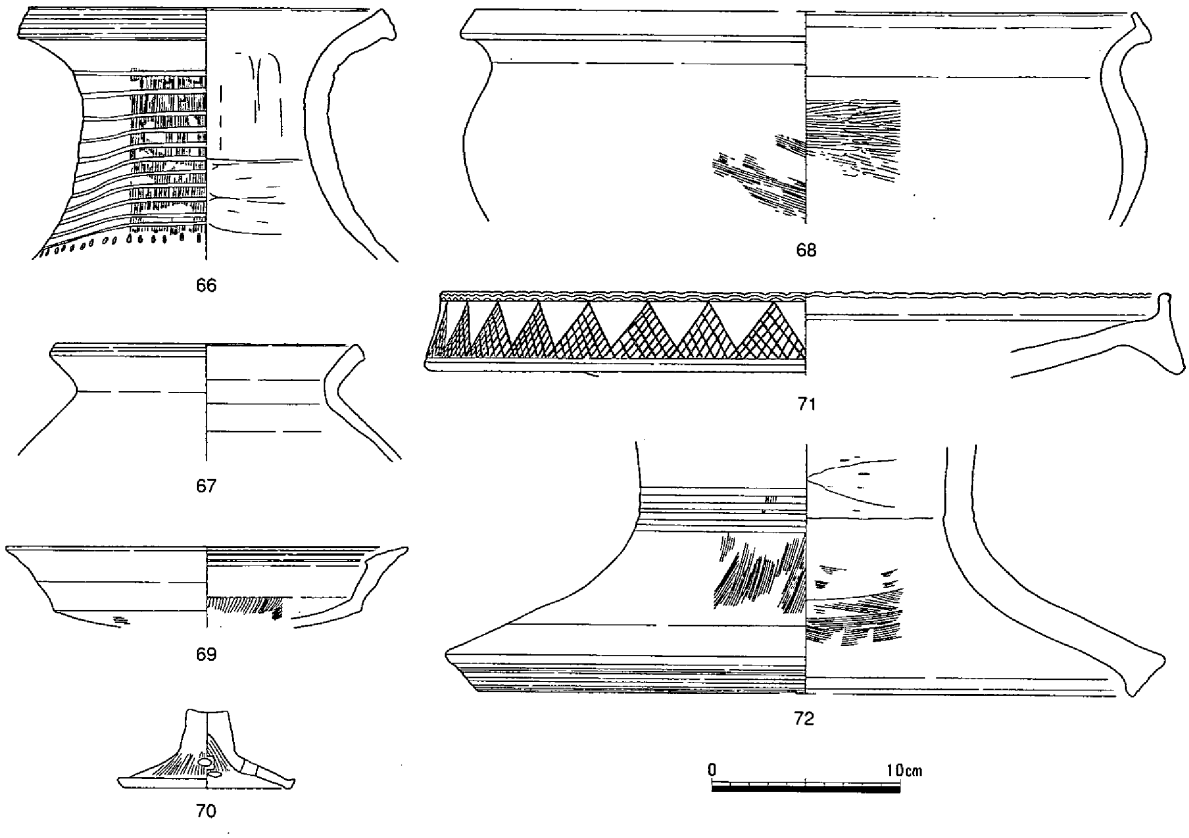
埋土はいくつかの層に分かれていて、中央部が窪んだ堆積状況がみられる。中間の土層には炭化物や焼土を多く含んでいる。また、床面から完形の遺物が出土していないことから遺物の多くは住居廃絶後に廃棄されたものと推測される。さらにその後、廃棄物などの堆積によって徐々に埋没していったものと考えられる。

埋土中からは、弥生土器が出土している。いずれも破片で完形に復元できるものはない。弥生土器には、長頸壺66、壺67、鉢68、高杯69・70、器台71・72がある。長頸壺66は頸の上部をしぼり、口縁部が外反するものである。頸部の外面には、縦位のハケメの上に太い沈線を11条巡らし、下方に刺突文を配している。壺は口縁部を「く」の字状に折り曲げただけのものである。鉢68は大型のもので、復元口径34.8cmを測る。口縁端部は上方へ拡張している。高杯の杯部69は、他の土器よりは古く、弥生時代後期前葉のものである。高杯の脚部70は小型の短脚である。器台の口縁部71は大



1　にぶい黄橙色粘土
2　にぶい黄褐色粘土
　（にぶい黄褐色微砂をわずかに含む）
3　にぶい黄褐色粘土
　（微砂をわずかに含む）
4　灰黄褐色粘土（炭化物・焼土を含む）
5　にぶい黄褐色粘土
6　灰褐色粘土
7　灰黄褐色粘土
8　にぶい黄褐色粘土

第1242図　竪穴住居９（1/60）



第1243図　竪穴住居９遺物

きく開き、口縁端部を上下に肥厚し、外面に斜格子の入った鋸歯文を配している。同脚部72も裾部が大きく開き、端部を肥厚する。筒状部には太い沈線を配している。

住居の時期は弥生後期Ⅲに比定される。（正岡）

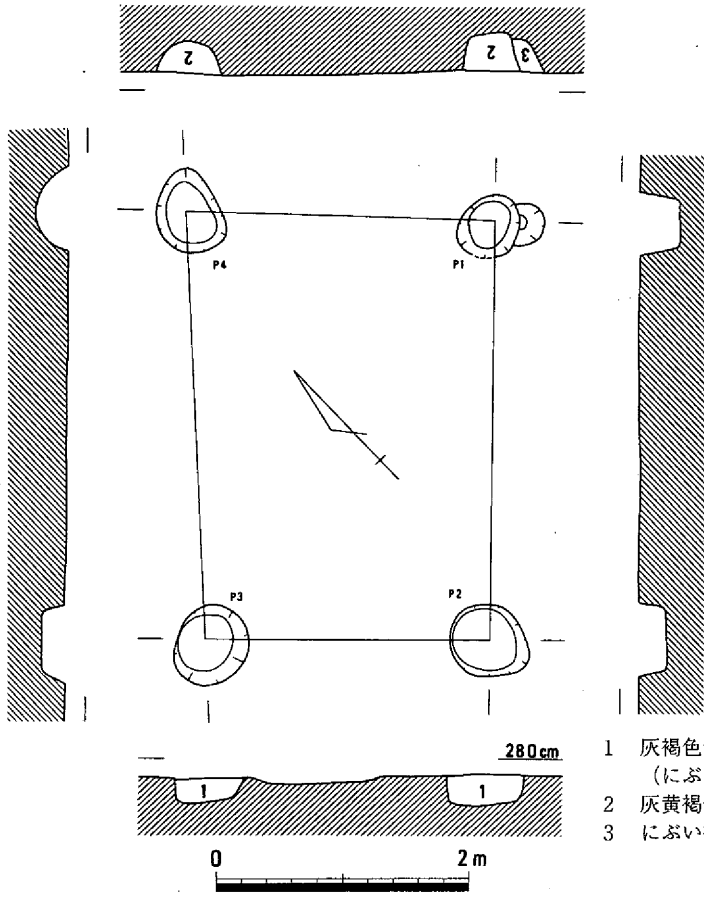
（３）掘立柱建物

掘立柱建物－１（第1244図、写真145－1）

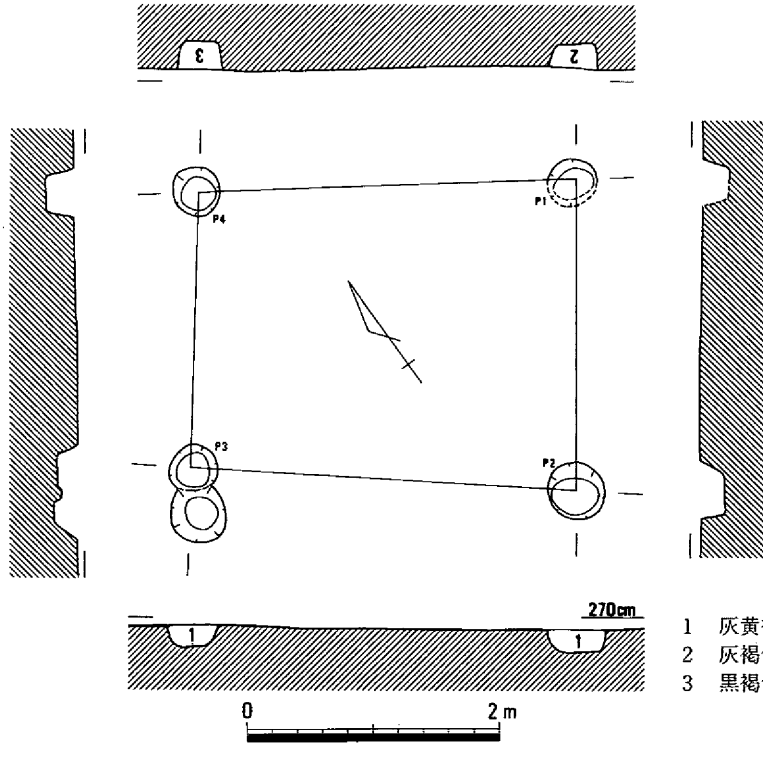
竪穴住居－８・９の北西に近接している。周辺にも柱穴が散在しているが、やや大きな４本の柱穴が長方形に配置されていて、掘立柱建物と確認した。建物は桁行１間、梁間１間である。大きさは桁行338cm、梁間243cm、面積7.8㎡を測る。棟の方向はN-43°-Eを示している。南西側梁間は少し狭くて224cmである。柱穴の掘り方は円形を呈し、長径50～60cm、深さ20～30cmである。良好な出土遺物はないが、埋土の状況などから弥生時代に比定される。（正岡）

掘立柱建物－２（第1245図、写真145－2）

掘立柱建物－１の東側に位置する。建物は桁行１間、梁間１間である。大きさは桁行306cm、梁間247cm、面積7.1㎡を測る。棟の方向はN-67°-Wを示し、掘立柱建物－１の棟方向とはほぼ直交する。北西側の梁間は少し狭くなっていて、218cmである。柱穴の掘り方は円形を呈し、長径40～50cm、深さ20cmである。柱穴の深さから上部はかなり削平されていることが分かる。Ｐ３の柱穴に接して柱穴が１本あり、深さもほぼ同じであることから、改修されたものと推測される。良好な出土遺物はないが、埋土の状況などから弥生時代に比定される。（正岡）



第1244図　掘立柱建物１(1/60)



第1245図　掘立柱建物２（1/60）

掘立柱建物３（第1246図）

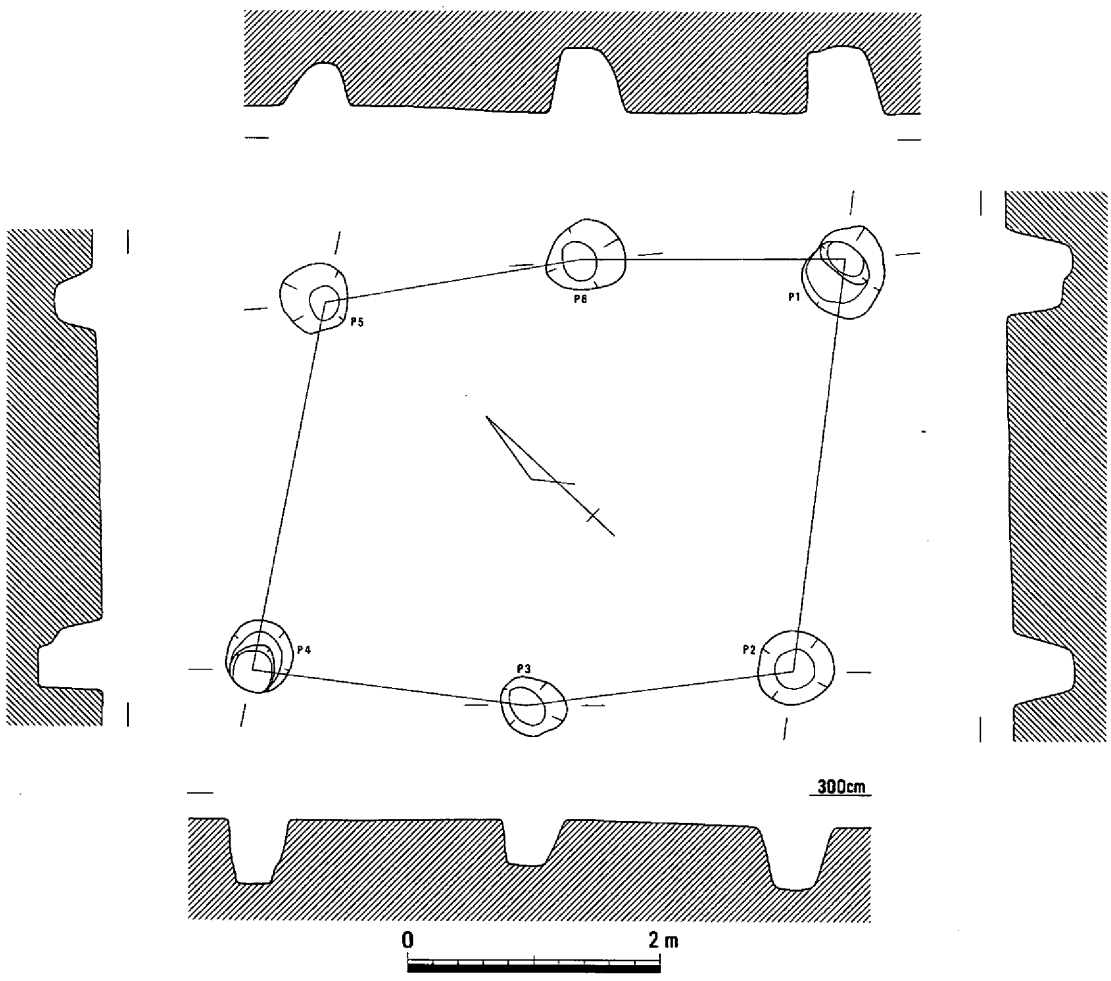
ＢＰ18区のほぼ中央に位置する。調査時には認識できなかったが、調査後に柱穴の規模や埋土から掘立柱建物と判断したものある。

規模は、桁行が２間で総長は4.28m、梁行は１間で3.29mを測り、各柱間の距離はそれぞれ桁行で2.18～2.04m、梁行で3.29～2.95mである。平面形プランは、桁行の柱列が胴張り状のやや歪な長方形を呈す。また、建物の棟方向での軸線は、N-47°-Wである。なお、床面積は12.5㎡で、掘立柱建物１・２とくらべて規模が大きい。

柱穴の平面形はいずれも円形を呈し、掘り方の規模は直径50～70cm、深さが35～50cmを測る。埋土はにぶい黄褐色から暗褐色の粘質土で、いずれも柱痕跡はみられなかった。

この建物の時期については、土器片が細片ながらもＰ２以外の柱穴から出土しており、それらはいずれも弥生時代後期の範疇に入ると思われる。さらにＰ１からは、図示しえなかったものの弥生時代後期Ⅳに属すると思われる土器片が出土していること、さらには周囲の遺構（後期Ⅰ～Ⅱ）との同時併存が考えにくいことから、この建物の時期は弥生時代後期後半から末葉のなかで考えてよいと思われる。

（弘田）



第1246図　掘立柱建物３（1/60）

（４）井戸

井戸１（第1247～1252図、写真145－3、146－1、151、152）

ＡＰ15区の北西部に位置し、弥生時代の基盤層上面で検出した。平面形が円形を呈し、断面形は、壁面がほぼ垂直に落ちる筒状をなし、底面は平坦となる。

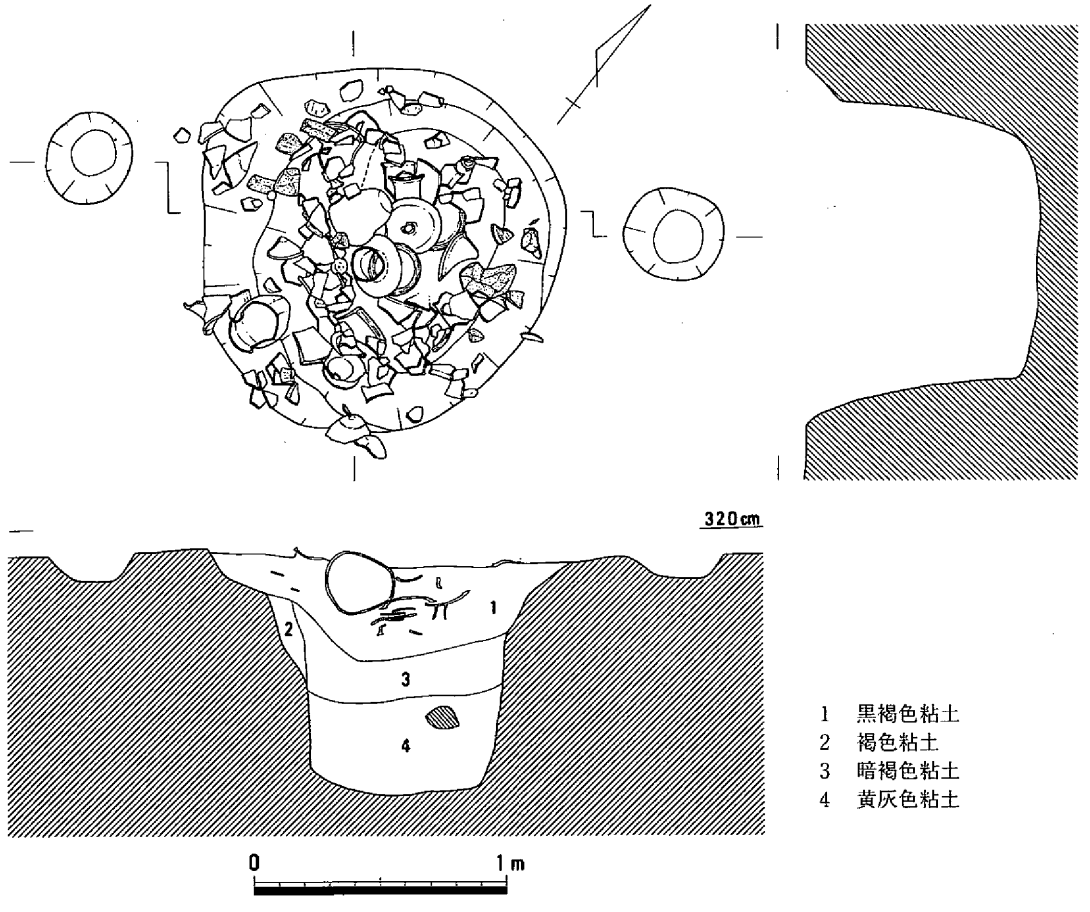
この遺構を井戸とする根拠には乏しいが、後述する袋状土壙とは断面形状に違いがみられる。また、規模は、直径が約150cmで、検出面からの深さは92cmを測る。

この井戸の両側に接するように柱穴を二本検出している。柱間距離は230cmで、その中心を結ぶラインがほぼ井戸の中心をとおる。掘り方は平面形が円形を呈し、規模は直径が40cm程度で、検出面からの深さは10cm程を測る。遺物は出土していないが、埋土の色調から弥生時代に属すると判断できるものであった。さらには、この調査区弥生時代においても周囲に柱穴があまり存在していないこと、井戸より北西では柱穴も含めて遺構が希薄であることなどから、この柱穴は井戸に伴い、上屋を支えていたと判断した。

埋土は、三層にわけられ、いずれも粘質土で埋まっており、焼土と炭を大量に含む。

遺物は、遺構検出時点（上層）と１層（中層）、４層（下層）からはそれぞれ出土しており、そのうち大半が１層からの出土である。

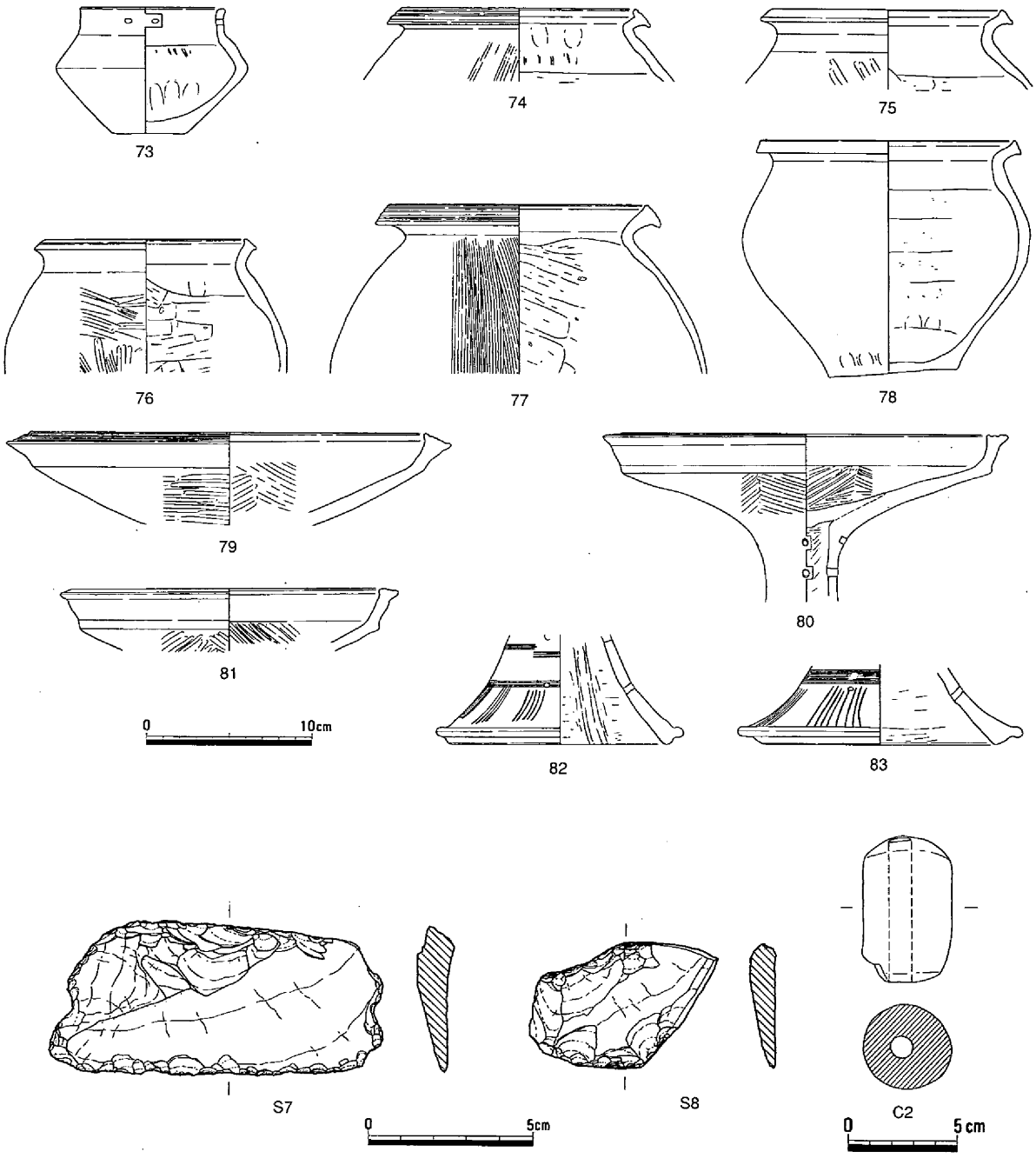
遺物のうち、73～83は４層からの出土である。



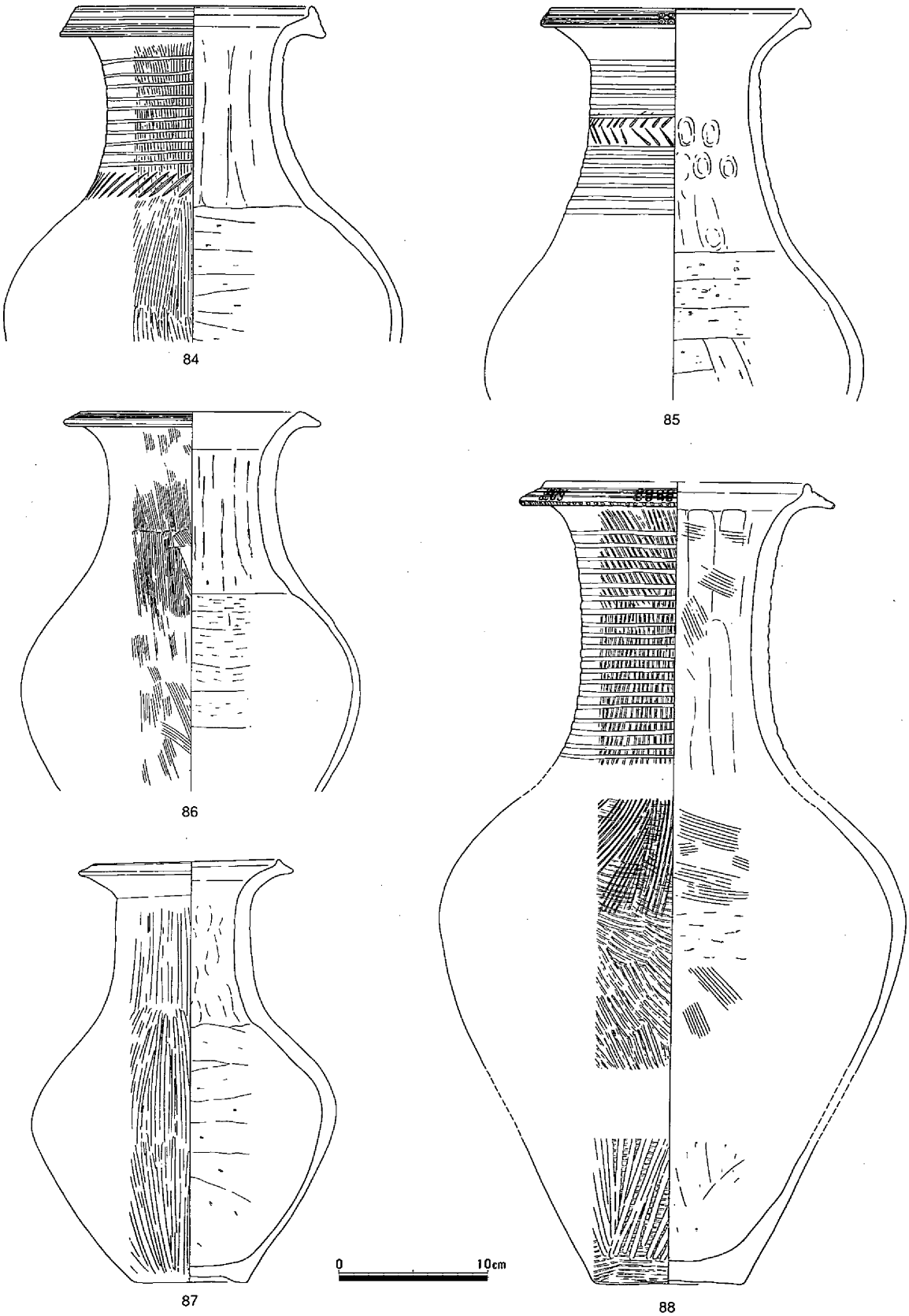
第1247図　井戸１（1/30）

73は小型の壺で、算盤玉状の体部をもつ。短く立つ口縁部には２孔一対の円孔が2ケ所にみられる。74～77は甕である。74は口縁端部を内上方に折り曲げ、端面には凹線を施す。内面のヘラケズリは頸部に達せず、指押さえがみられる。このなかでは古相を示す資料である。75・76は口径が12～13cmで、口縁端部はナデによって上下に肥厚させる。77は口径が15.4cmを測る。口縁端部は上下に拡張し、端面には凹線を施す。78は甕と同様の形態をとるが口径が15.4cmに対し、器高は14.5cmと低く鉢である。

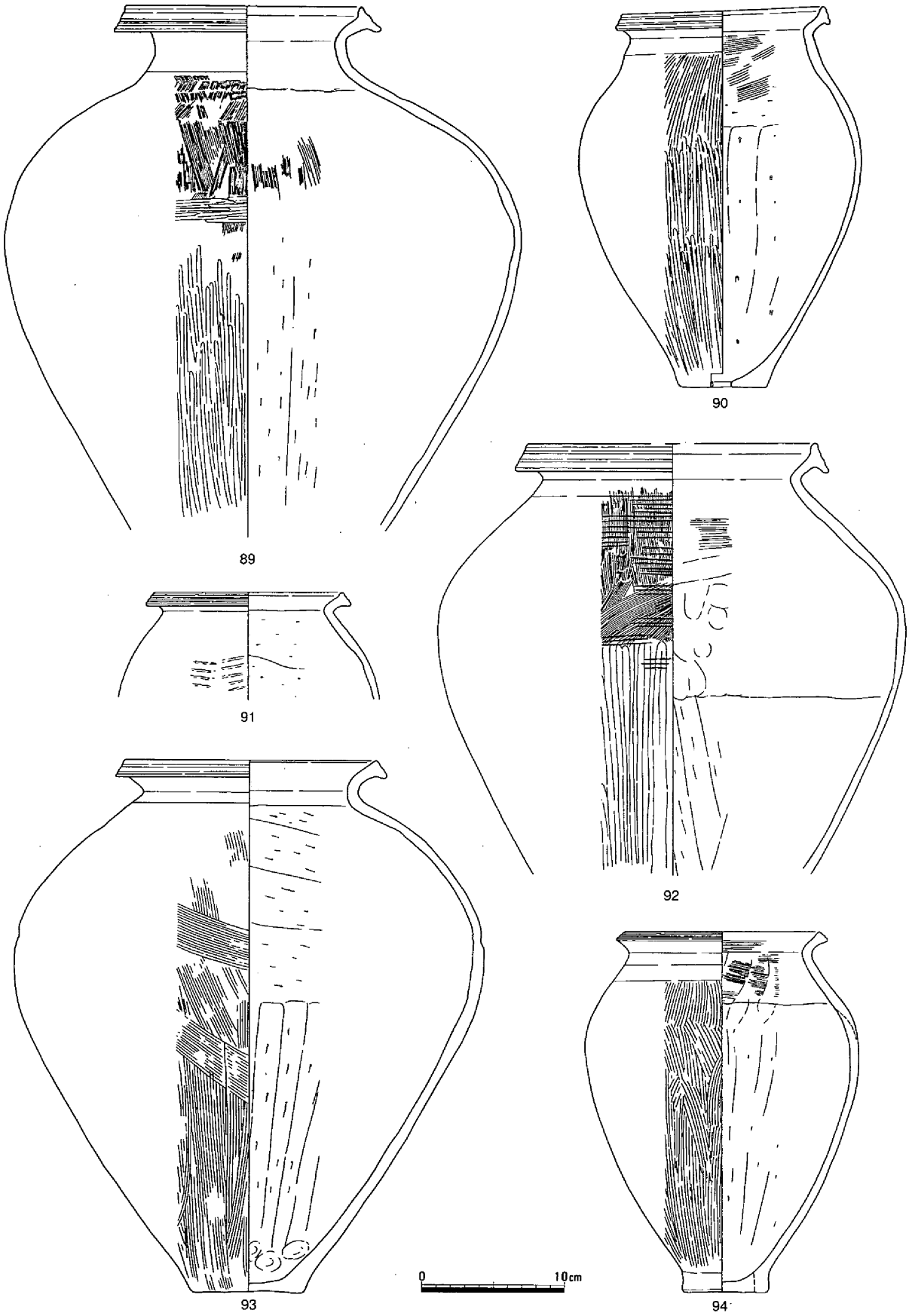
79～83は高杯である。杯部79～81では、口縁部外上方に立ち、内外に拡張した端面には凹線を施す。調整は内外面ともヘラミガキである。脚部82・83では裾外面に櫛描沈線文とヘラガキ沈線で飾り、透



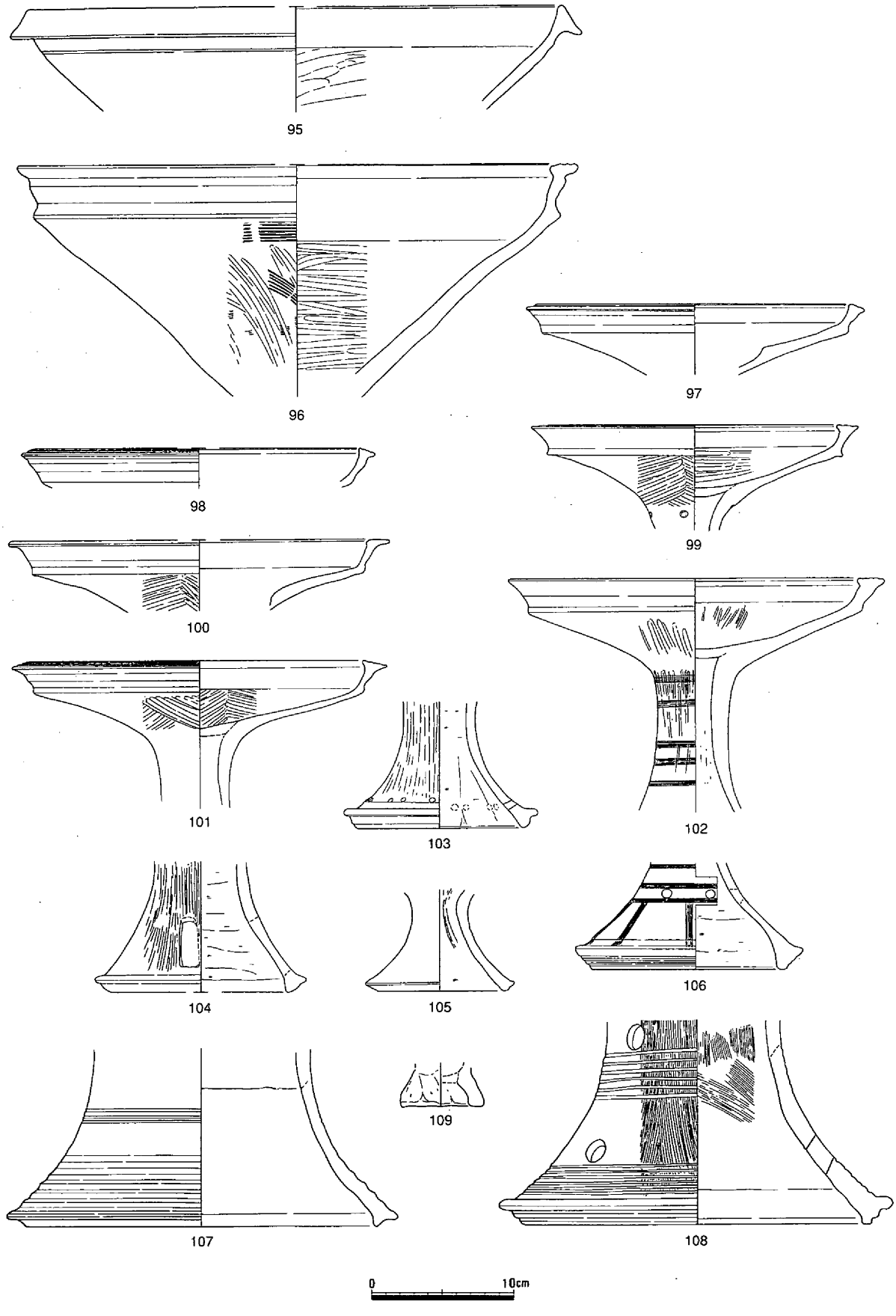
第1248図　井戸１遺物（１）



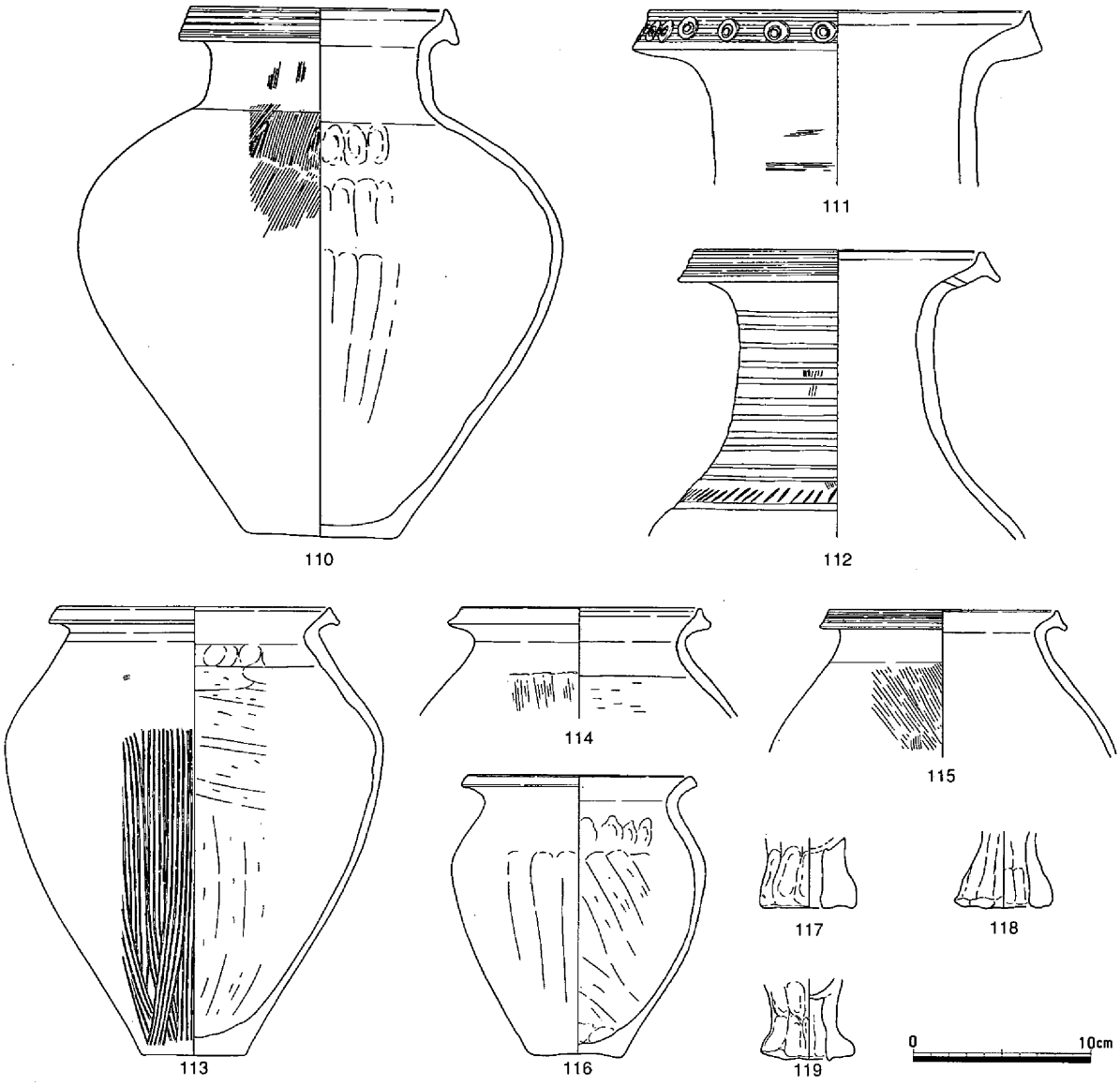
第1249図　井戸１遺物（２）



第1250図　井戸１遺物（３）



第1251図　井戸１遺物（４）



第1252図　井戸１遺物（５）

かし孔は小円孔となる。

84～108は１層からの出土である。

84～88は長頸壺である。いずれもほぼ直立した頸部から緩く口縁部がひらく。端部は拡張あるいは肥厚させて、87以外には凹線を施す。やや小型の86・87では頸部の沈線や刺突文はみられない。また、85では、頸部の中央に綾杉状のヘラ描きを、口縁端部には凹線と竹管文を施す。88は復元器高が50cm以上である。体部外面を平行タタキのち体下半にはヘラミガキ、上半にはハケを施す。口縁部は長く外上方にひらく。また、拡張した口縁端部には凹線と竹管文を、下端には刻み目を施す。89は、短頸広口壺である。胴部最大径あたりで外面は横方向のヘラミガキ、内面ではヘラケズリとハケメの境となる。口縁端部は上下に拡張させて、端面には凹線を施す。

甕には、小型の90・91・94と大型の92・93がある。いずれも口縁端部を肥厚あるいは拡張させ、端面には凹線を施す。90では底部に穿孔がみられる。91・92では外面にタタキのちハケやヘラミガキを

施す。94では低部が平高台状となる。90・92・94では内面のヘラケズリが頸部まで達せずかわってハケや指押さえがみられる。

95・96は大型の鉢である。95では、底部から外上方にひろがり、口縁端部を外下方に垂下させる。96は直立した口縁部から端部は外に拡張させ、端面に凹線を施す。

97～106は高杯である。杯部では口縁部は短く外に傾斜し、拡張した端部の上面には凹線を施す。103の透かしには貫通する孔としない孔がある。104は小破片であるが方形の透かし孔とみられる。106では縦方向のヘラ描きが櫛描き沈線と変わっている。

107・108は、ハの字にひらく器台の裾部片である。107では裾に凹線をめぐらせる。108では円形の透かし孔と沈線で飾り、また肥厚させた脚端部に凹線を施す。

110～119は遺構検出面において出土した一群である。110は、短く内傾して立つ頸部をもち、さらに短くひらく口縁の端部は、上下に拡張させて端面には凹線を施す。111・112は長頸壺である。111は、肥厚させた口縁端部に凹線と円形浮文を施す。112では口縁部に１ケ所の円孔を穿ち、肩部には刺突文を施す。113～116は甕で、このうち中型の113ではナデによって口縁端部を肥厚させる。小型の116は、口縁端部が内傾する面をなし、外面調整はナデて終わる。また、115では拡張した口縁端部に凹線を施す。さらには、製塩土器117～119もみられる。

土器以外にも、サヌカイト製石包丁Ｓ７や石包丁を転用した剥片石器Ｓ８や土錘Ｃ２がみられる。

110～119は、遺構検出面において出土した一群である。112では、口縁部を貫通する円孔116は、短く「くの字」に外反する口縁部をもち、端部は内傾する面をなす。117～119は製塩土器の脚台部である。以上の土器からみて、この井戸の掘削時期は弥生時代後期Ⅰに求められ、後期Ⅱの段階ではほぼ埋没していたと考えられる。（弘田）

（５）袋状土壙

袋状土壙１（第1253図、写真153）

ＡＰ15の中央やや北寄りで検出したほぼ円形の土壙である。検出面の標高は300cm、平坦な床面のそれは232cmで、つまり深さは68cmになる。この土地の地山の色は明黄色で埋土の色は暗黄褐色である。検出面の直径は74cm、床面の直径は79cmでわずかに袋状を呈している。

埋土中から１点の弥生土器片が出土している。120は甕形土器の口縁部破片である。口径は14.0cm、現存器高は6.9cmを測る。胴部からくの字形に外反する口縁の端部は斜め上下に拡張し、その端面には４条の凹線を施す。弥生中期Ⅲに比定したい。（浅倉）

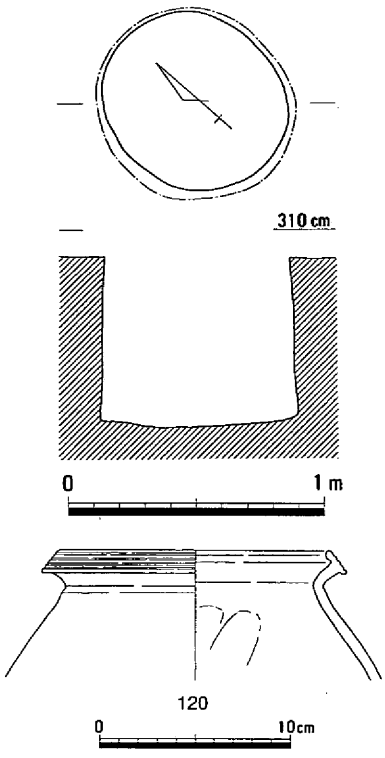
袋状土壙２（第1254図、写真146－2、153）

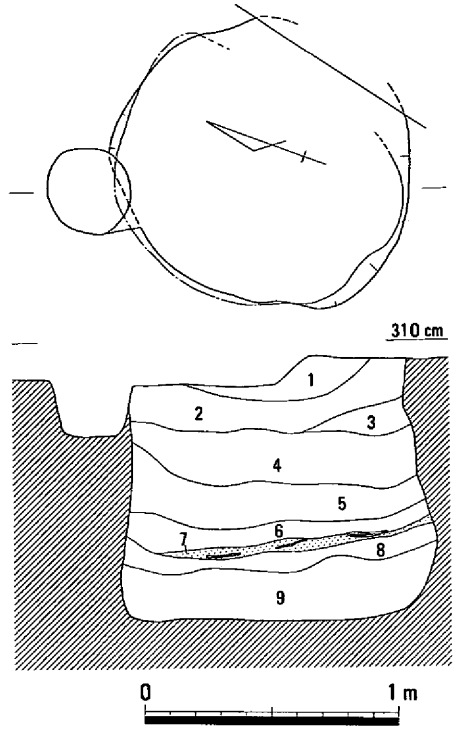
ＢＰ15区の南東隅に位置し、断面形が袋状を呈する土壙である。

規模は、上面がほぼ円形を呈し、直径が122cmである。底面は平坦な面をなし、直径が119cm程の不整円形を呈する。その底面から30cmほど上が最大径となり、直径は125cm程を測る。深さは105cmである。

埋土は、ほぼ水平に堆積しており、９層に分けられた。そのうち中間層の４～７層には炭や焼土を多く含んでいた。なかでも７層は炭層で、遺物も大半はこの層の中から出土している。

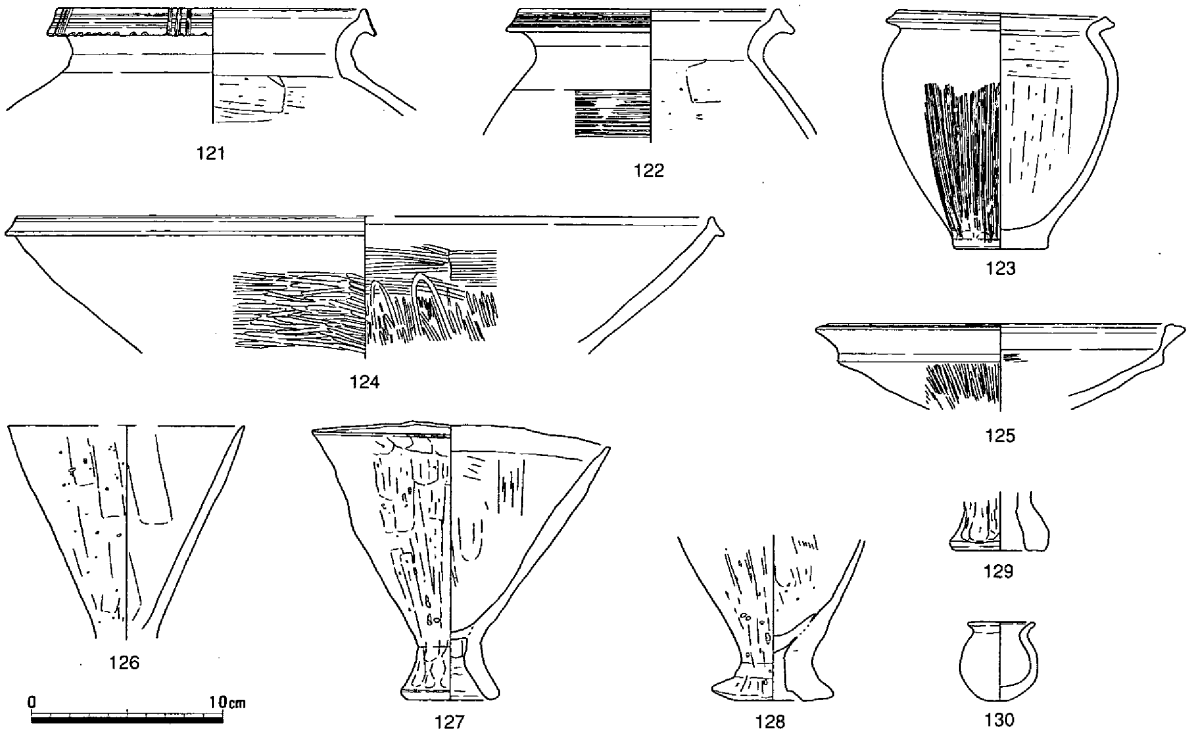
出土遺物をみると、壺121では短く外反する口縁部の端部を上下に拡張させ、その外側には凹線をめぐらせたのち、棒状浮文や口縁下端には刻目を施す。甕には、大形の122と小形の123とがある。





1　褐色粘土
（焼土・炭を若干含む）
2　にぶい黄褐色粘土
（基盤層土をブロック状に含む）
3　にぶい黄褐色粘土
（炭を若干含む）
4　にぶい黄褐色粘土
（炭・焼土を多量に含む）
5　にぶい黄褐色粘土
（炭を多量に含む）
6　褐色粘土
（焼土・炭を含む）
7　炭
8　6と同じ
9　にぶい黄褐色粘土
（炭を若干含む）

第1253図　袋状土壙1（1/30）・遺物



第1254図　袋状土壙2（1/30）・遺物

大形の鉢124は、口縁端部を内外に拡張させ、内・外面にはヘラミガキを施す。高杯の口縁部125では外に拡張した口縁部の端部に凹線をめぐらせる。

さらには、製塩土器126～129やミニチュアの壺130がある。

以上の遺物からみて、この土壙の時期は、弥生後期Ⅰである。（弘田）

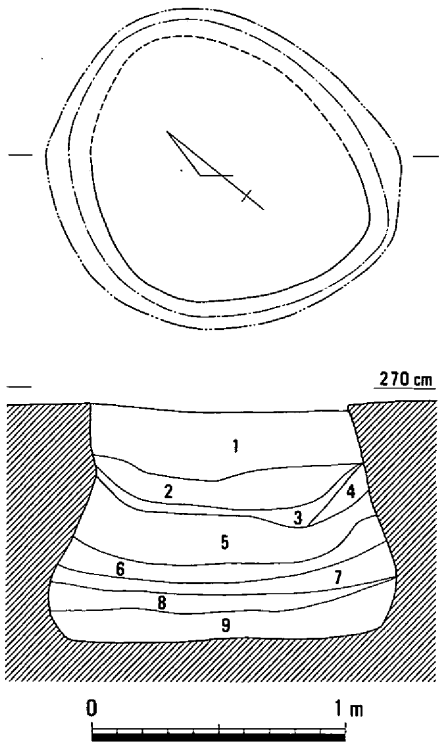
袋状土壙３（第1255・1256図、写真146－3、153）

竪穴住居９の南側に近接したところに位置する。しかし、この住居に先行するもので、併存するものではない。上部を少し削平されているが、下半部へ向かって膨らんだ袋状の形態はよく残っている。平面形はやや歪な円形を呈し、南北方向が東西方向に比べてやや大きい。下部は東側と西側へ大きくひろがり、現状では、東と西へ20cm、北と南へ10cm膨らんでいる。床面は平坦になっている。現存する大きさは、上面径116cm、底面径131cm、深さ93cmを測る。

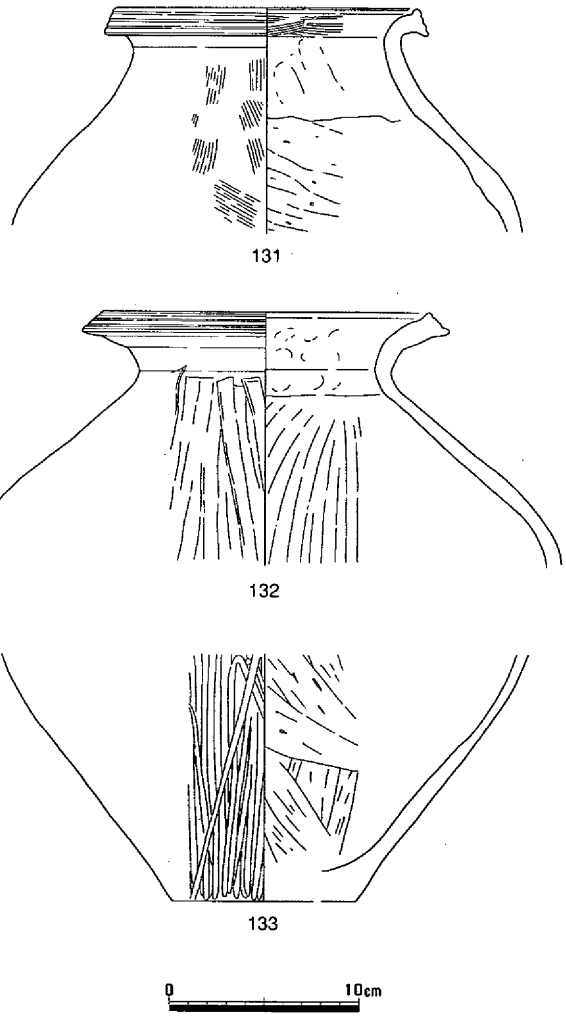
埋土は、暗褐色粘質土と炭を含んだ灰褐色粘土が互層になっていて、一度に埋め戻したのではなく、徐々にごみなどとともに埋められたものと判断される。埋土中からはまとまった土器が出土している。

出土した土器には、壺131～134、甕135～137、台付鉢138、高杯139・140、製塩土器141～145、手捏土器146がある。

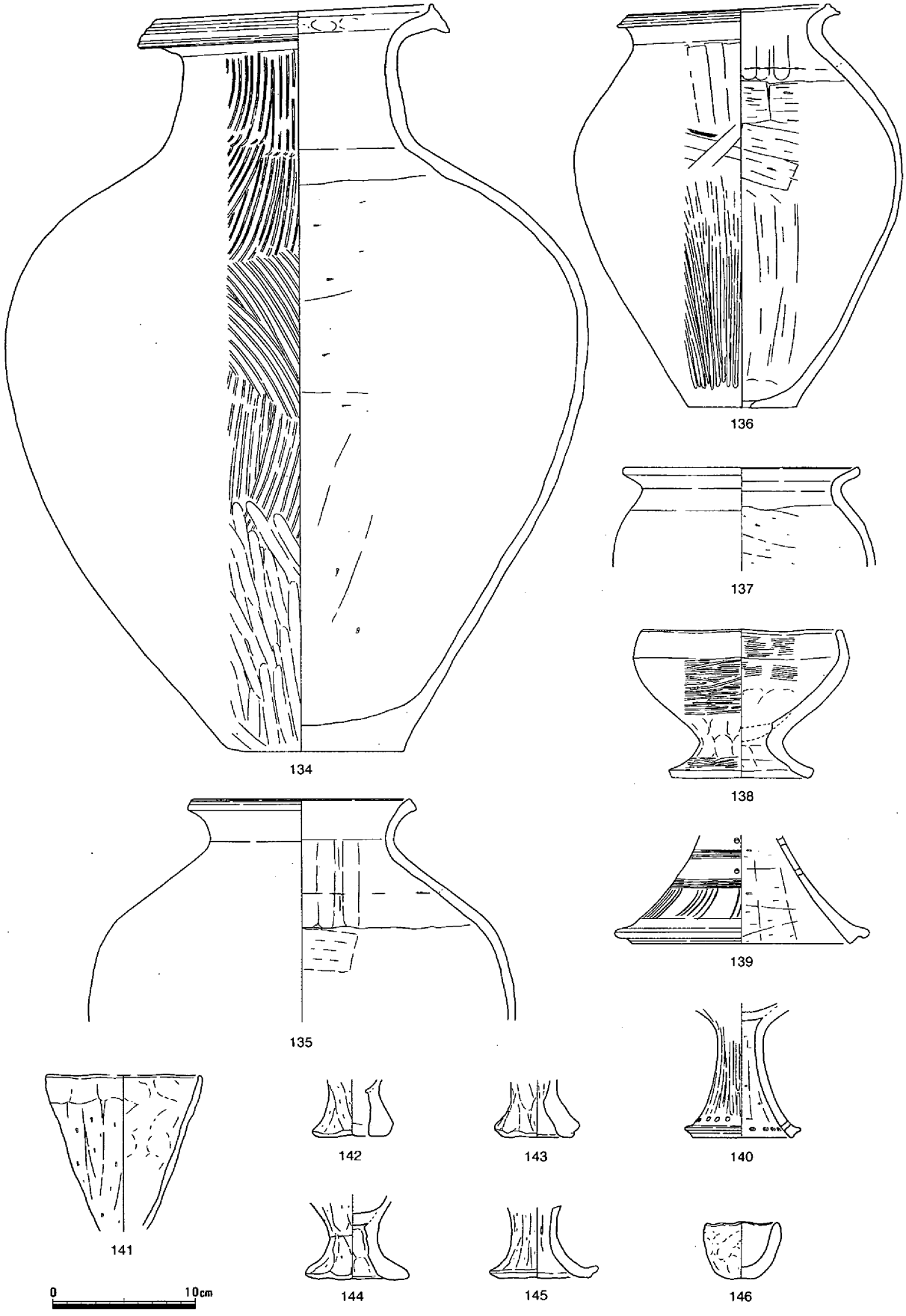
土壙の時期は、土器の形状から弥生後期Ⅰに比定される。（正岡）



1　暗褐色粘質土
2　にぶい黄褐色粘質土
3　１と同じ
4　灰黄褐色粘質土（炭を多量に含む）
5　１と同じ
6　４と同じ
7　１と同じ
8　４と同じ
9　１と同じ



第1255図　袋状土壙３（1/30）・遺物（１）



第1256図　袋状土壙３遺物（２）

袋状土壙４（第1257～1264図、写真147－1、154、155）

袋状土壙４はＢＰ18区の北東部端に位置し、一部が調査区外となる。

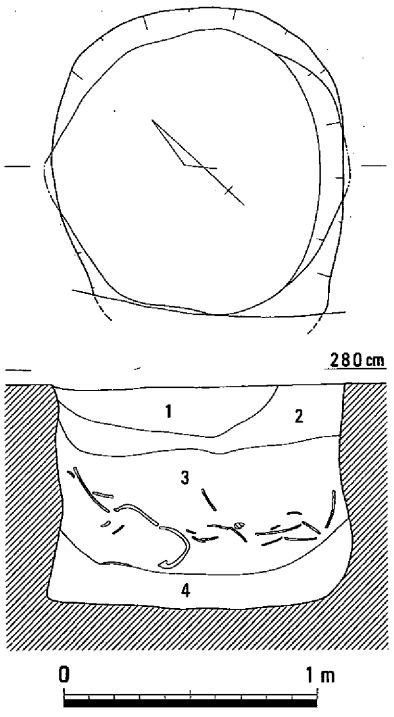
規模と形状は、上面部の一部が崩落しているため、平面形が楕円形を呈している。上面での直径が120～140cmを測る。また、底部は平坦でほぼ円形となり、底径が113cm、標高が1.9mである。断面をみると底面から10～20cmほど上が最大径となり直径が118cmで、そこからは緩やかに底面にいたり、深さは検出面から測って88cmを測る。

土壙埋土は大きく４層に分けられたが、ほぼ水平堆積であった。そのうち最下層である４層は地山の土に類似し、また遺物などを含んでいなかったものの、それより上の１～３層では土器とともに炭や焼土を多く含んでいた。

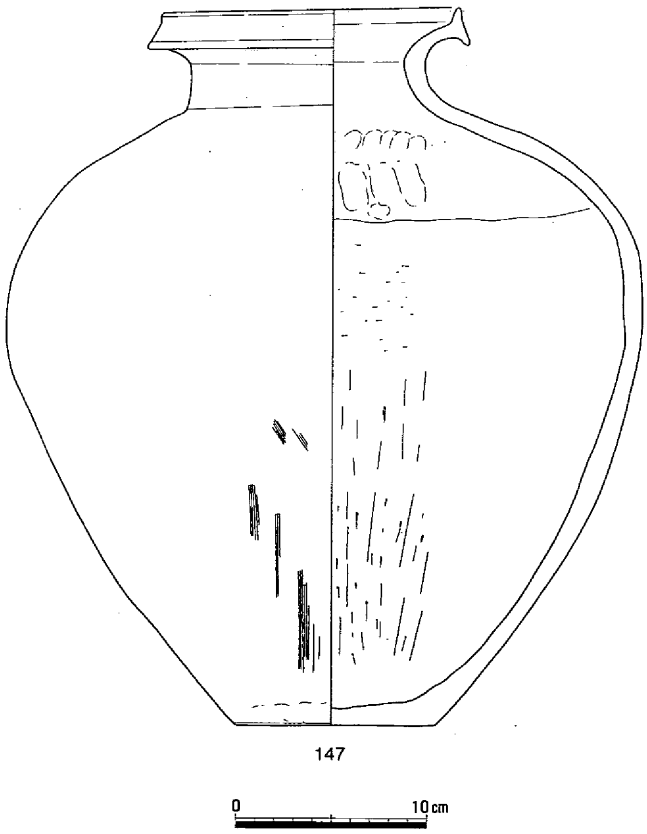
出土遺物は比較的多く、そのうちの大半が３層の下半部からの出土であり、また大型の土器類が多くみうけられた。

147～151は広口短頸壺で、頸部が短く立つか緩やかに外湾しておりそこから口縁部が広がる。いずれの個体も、口縁端部を肥厚あるいは拡張させて内傾する面をつくり、外端面をナデて仕上げる147・148と凹線を施す149～151がある。147では内面のヘラケズリは胴部最大径までで、それより上には指ナデを施す。

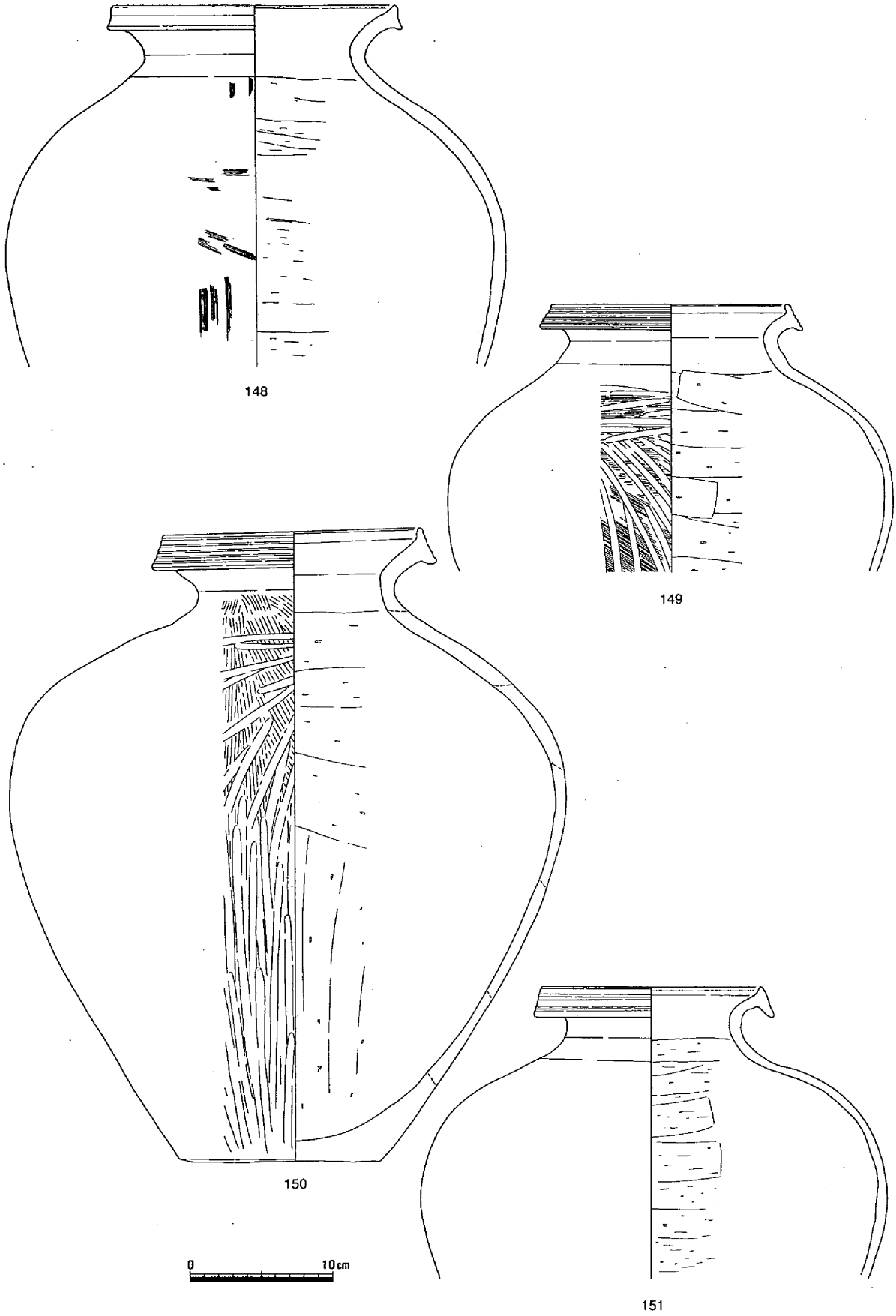
152～155は長頸壺である。頸部は真っ直ぐに立つ152～154とハの字状になる154がある。さらに、口縁部は大きく外湾して端部に至るもの152・154・155と水平に近く屈曲して開く153があるが、いずれの個体も口縁端部を上下に拡張させ、外端面には凹線を施す。また、肩部には刺突文がみられる。



1　灰黄褐色粘土（焼土・炭・土器を多量に含む）
2　暗褐色粘土（焼土・炭・土器を多量に含む）
3　にぶい黄褐色粘土（焼土・炭・土器を多量に含む）
4　黄色灰色粘土



第1257図　袋状土壙４（1/30）・遺物（１）

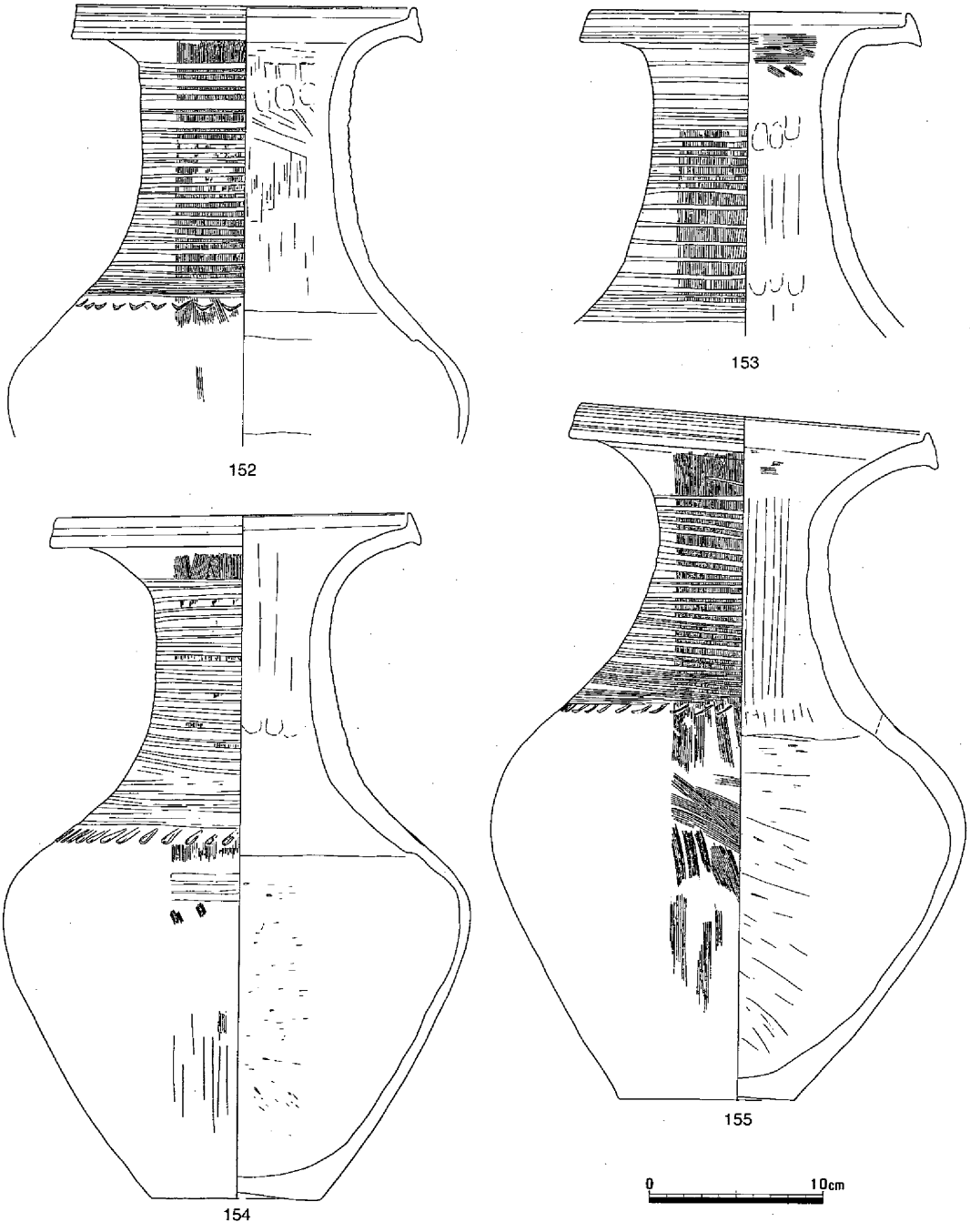


第1258図　袋状土壙４遺物（２）

また、完形に復元できた154と155は、口径が20cm程で、器高は40cmあまりと法量がほぼ一致する。

156～161は甕で、口径が16cm、器高が30cm程の小型甕156・161と、口径が20～25cm、器高が40cm程の中型甕157・158・162、さらに口径が30cmあまりの大型甕159・160がある。いずれの個体も口縁端部を肥厚あるいは拡張させて面をつくり、そこには凹線を施す156～159とナデて仕上げる160～162がある。

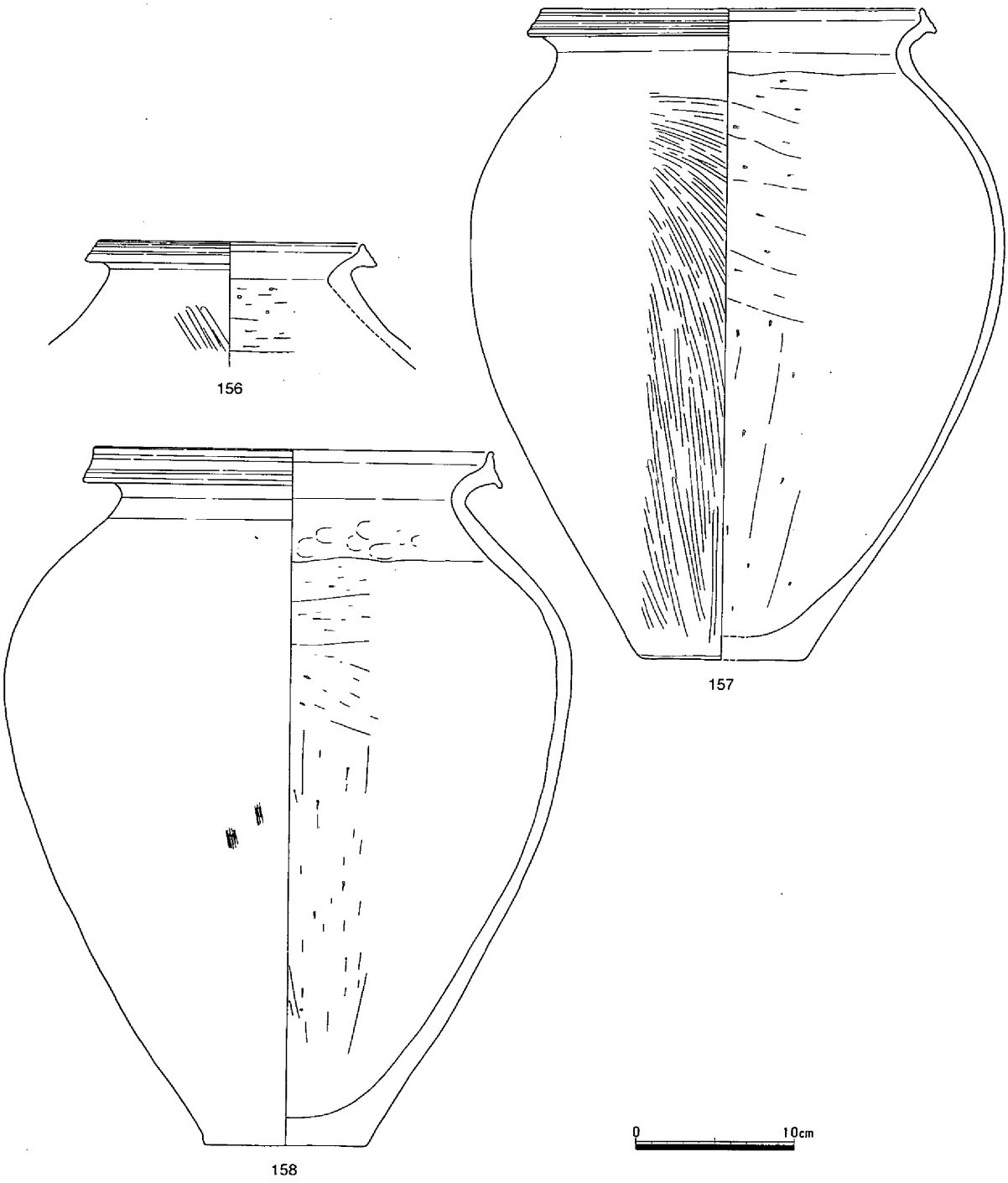
163～167は壺・甕類の底部で、166は最大径が約52cmを測るなど大型の個体が目に付く。このうち、163・167には篦目痕が認められる。



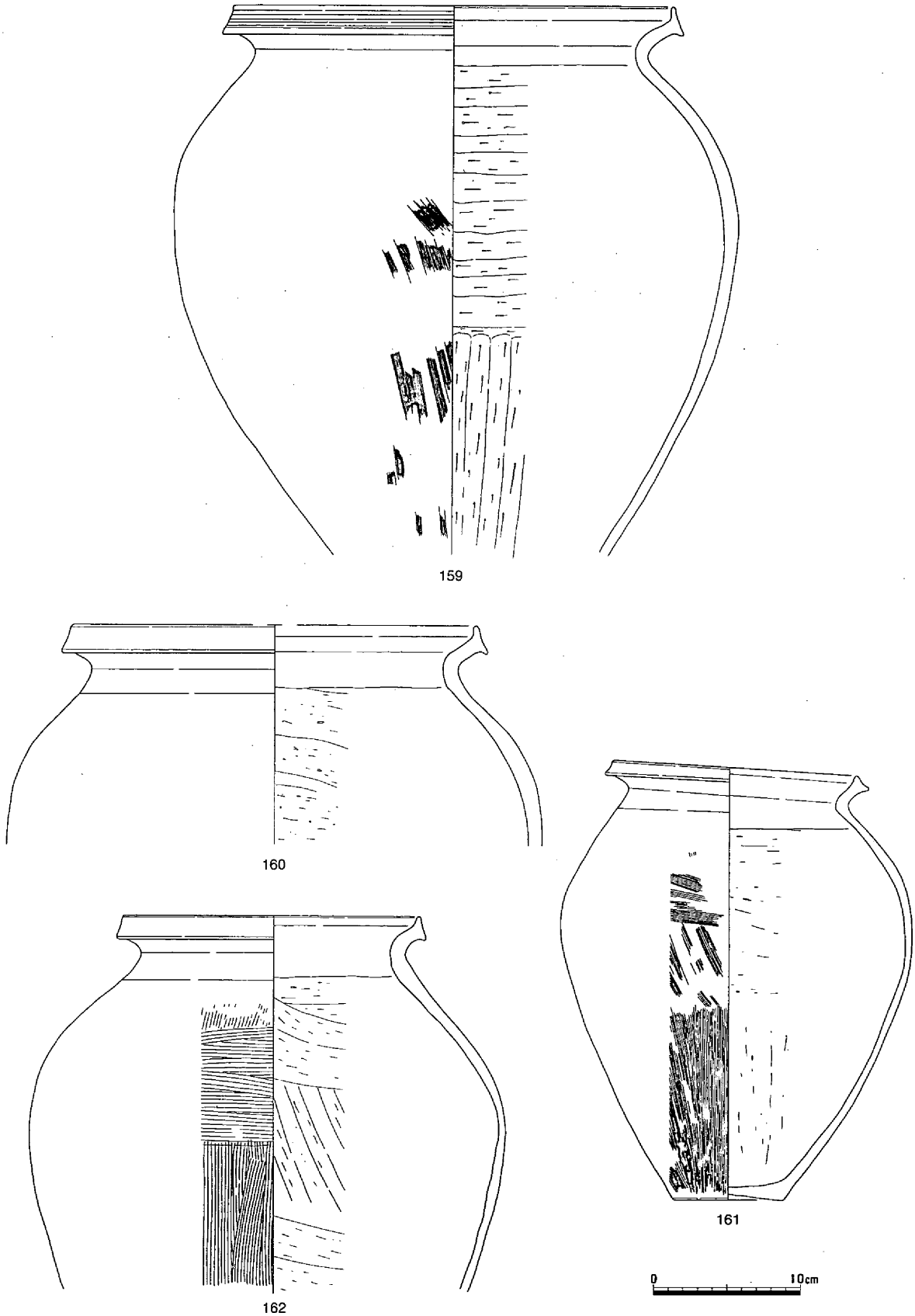
第1259図　袋状土壙４遺物（３）

168・169は大型の鉢である。168は、底部から内湾気味に立ち、口縁部は直立する。口縁端部は拡張して内傾する面をつくり、凹線を施す。169は、底部から内湾してややすぼまった頸部から短く外反する口縁部がつき、口縁端部は上下に肥厚させる。調整は、168が内面ヘラケズリ、169は内外面ともハケである。

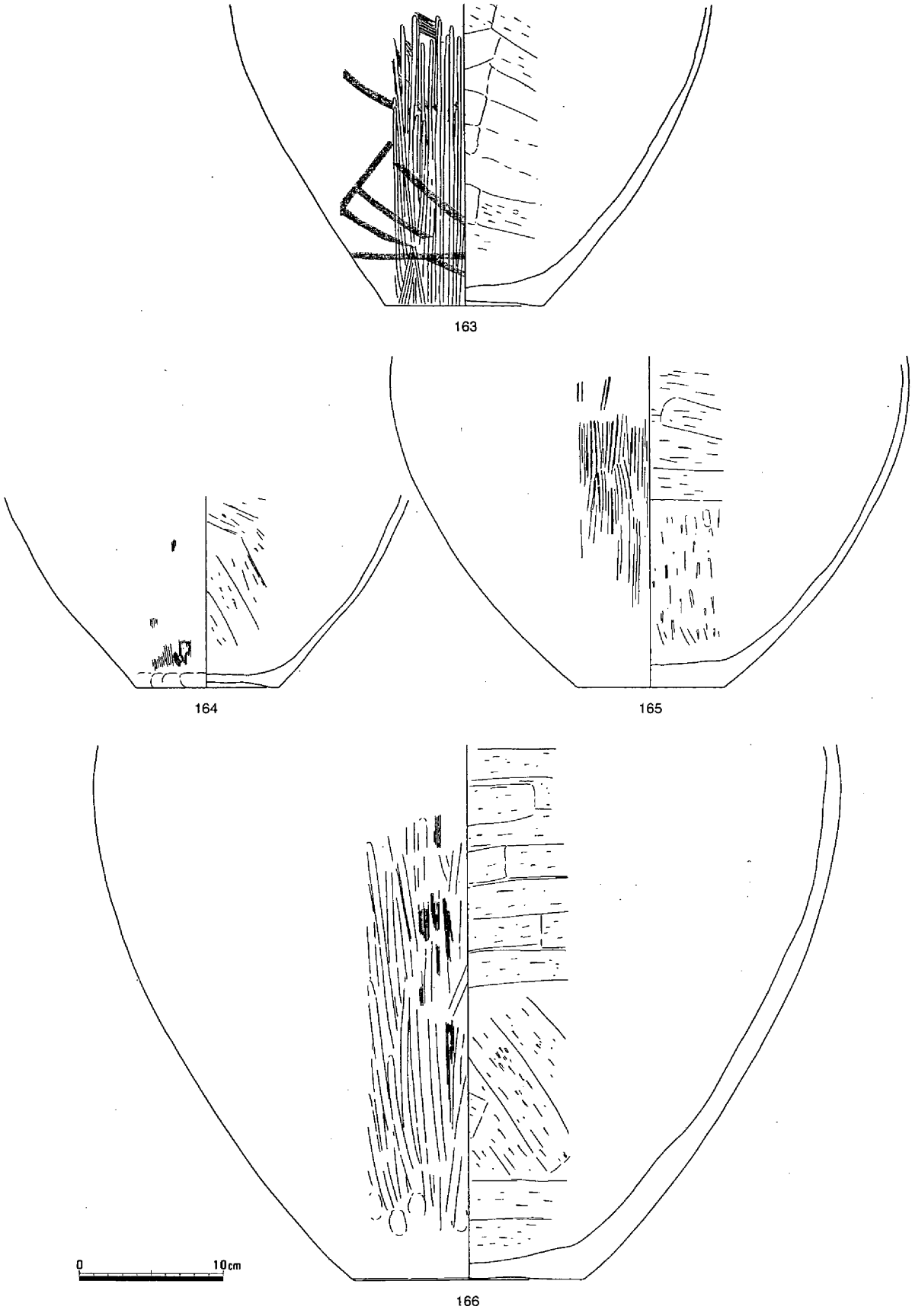
170は高杯杯部片であり、浅い杯部に強く外湾する口縁部をもち、外面はヘラミガキを施す。脚部は別作りとなり、杯部と接合する。さらに、土器以外の遺物としては、粘板岩製の石包丁Ｓ９があり、



第1260図　袋状土壙４遺物（４）



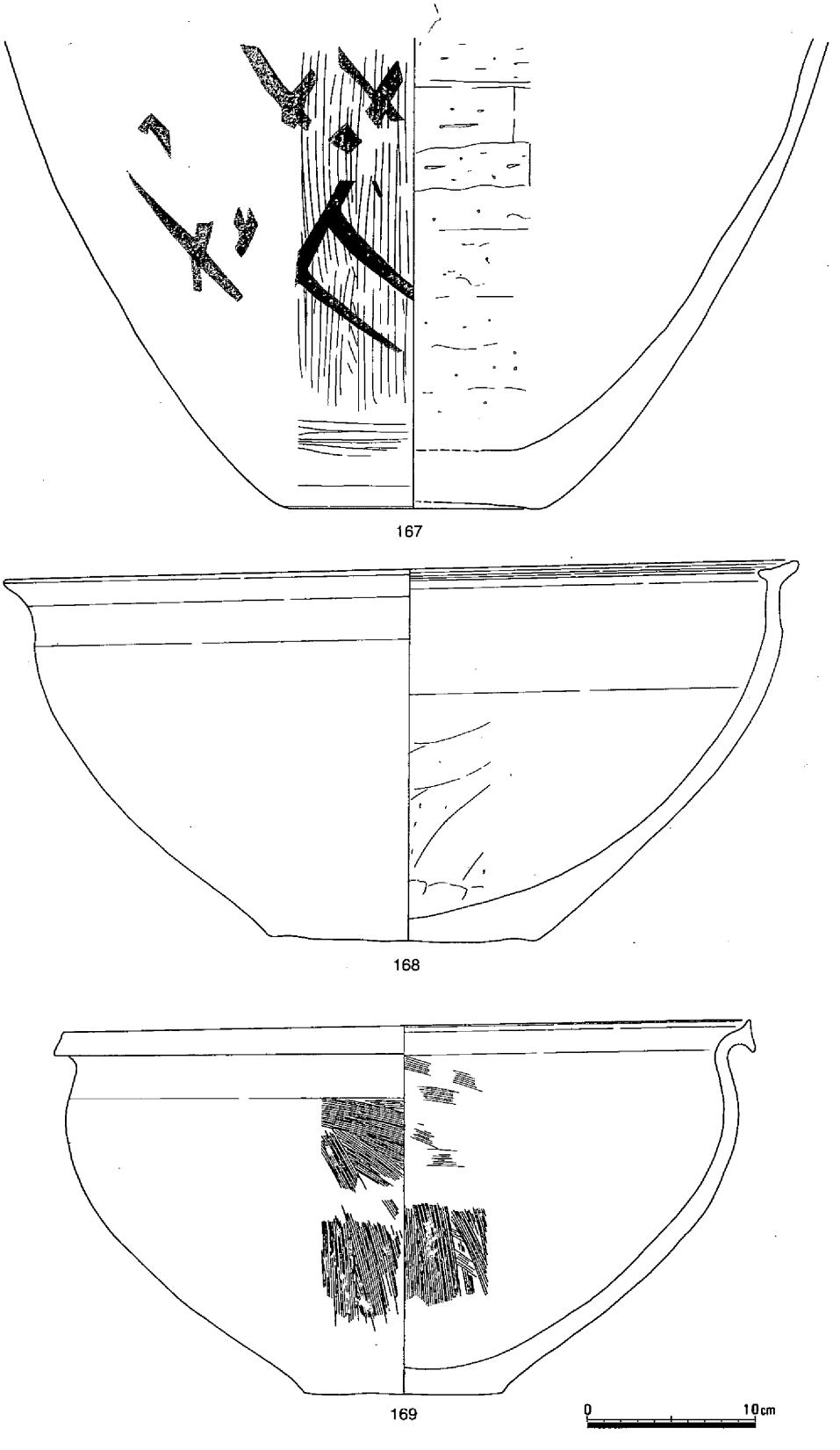
第1261図　袋状土壙４遺物（５）



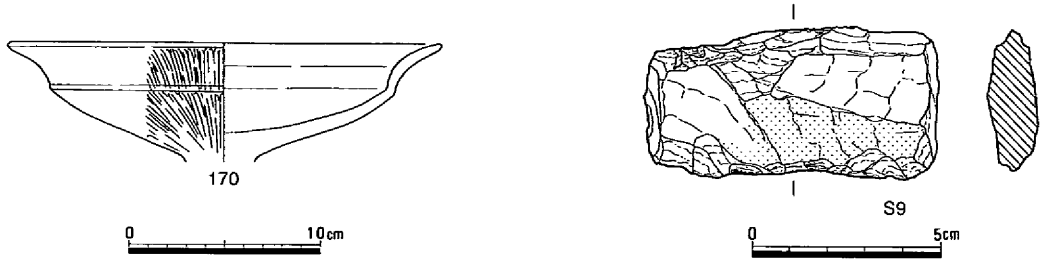
第1262図　袋状土壙４遺物（６）

表面には珪酸が付着している。

以上の土器の特徴からみてこの袋状土壙の時期は、弥生後期Ⅱとみられる。　（弘田）



第1263図　袋状土壙４遺物（７）



第1264図　袋状土壙４遺物（８）

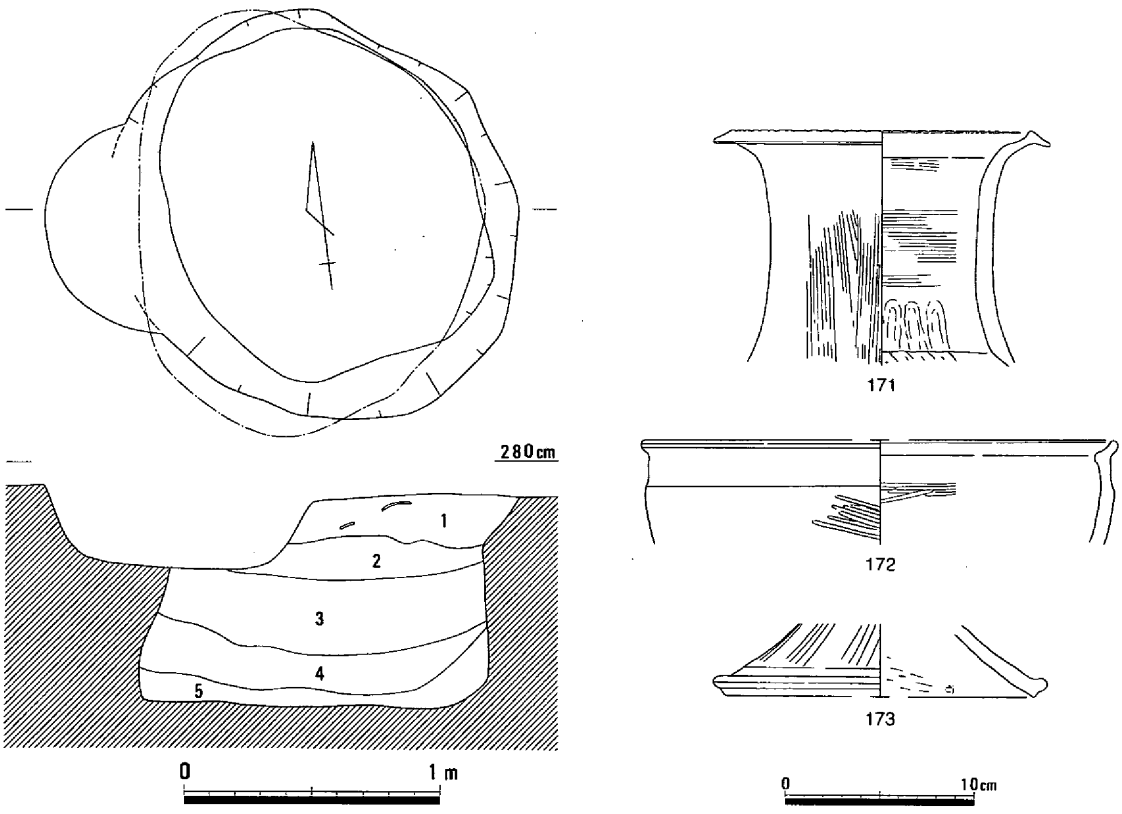
袋状土壙５（第1265図、写真155）

この土壙は、ＢＰ18区のほぼ中央に位置する。

上面部では楕円形を呈し、直径が171cmを測るが、底面はほぼ平坦でかつ平面形は円形をなす。直径は171cmで、深さは89cmを測る。

埋土は５層に分けられたが、各層ともほぼ水平堆積といった状況であった。このうち、１層からのみ炭や焼土とともに遺物が出土している。

出土遺物をみると、長頸壺171はやや外傾する頸部をもち、口縁端部は強く外に拡張させる。また、高杯脚部173には、ヘラ描き沈線が施されている。時期は弥生後期Ⅰである。（弘田）



1　暗褐色粘土（土器・炭・焼土を多量に含む）
2　にぶい黄褐色粘土
3　灰黄褐色粘土（グライ土をブロック状に含む）
4　にぶい黄褐色粘土
5　黄灰色粘土

第1265図　袋状土壙５（1/30）・遺物

（６）土壙

土壙１（第1266図）

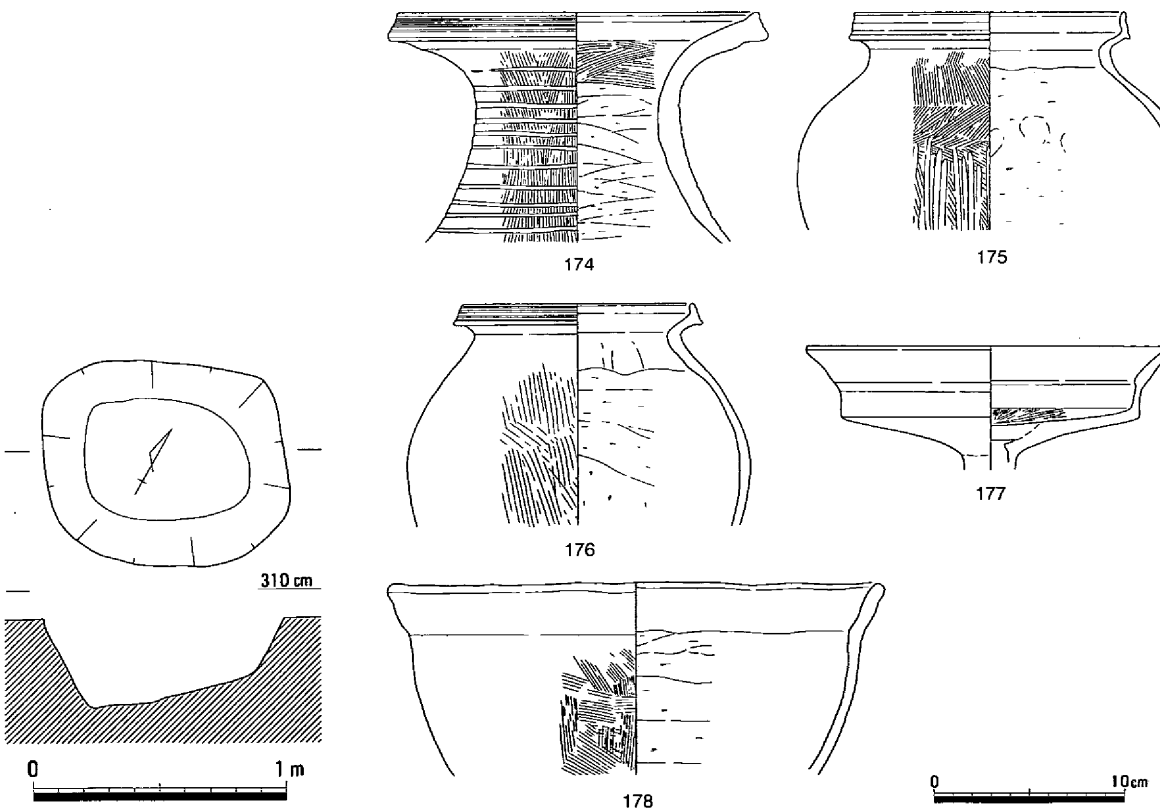
ＡＰ15区の中央やや東寄りで検出したずんぐりした隅丸長方形の小型土壙である。検出面の標高は300cm、西に傾いた床面のそれは265cmで、つまり深さは35cmになる。検出面の長さは96cm、幅は81cm、下幅の長さは66cm、幅は46cmを測る。

小型の土壙ではあるが５点の弥生土器が出土している。174は長頸壺の口頸部である。頸部は八の字形を呈し、螺旋状の沈線を巡らす。175は甕の上半部である。口縁端部は上方に拡張する。176も甕の上半部である。口縁端部は斜め上方に拡張する。177は高杯の杯部である。口縁の外反度は小さい。杯底部は円盤充填している。178は鉢である。わずかに外反する口縁の端部は丸く収めている。土器から見てこの土壙の時期は、弥生後期Ⅲであろう。（浅倉）

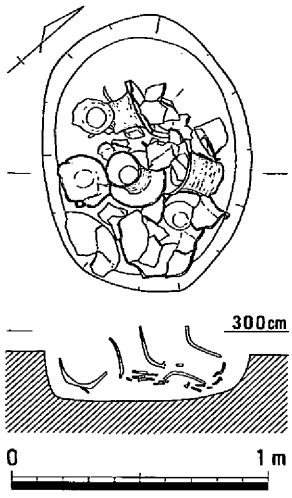
土壙２（第1267図、写真147－2）

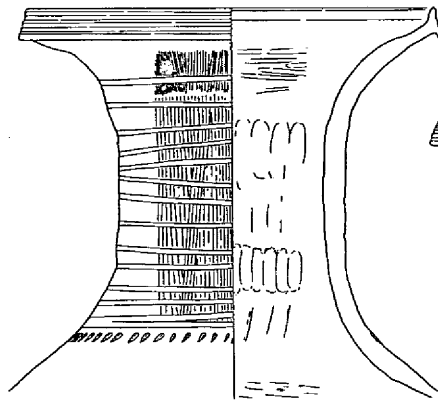
ＡＰ15区の中央やや南寄りで検出した楕円形の小型土壙である。検出面の標高は290cm、平坦な床面のそれは270cmで、つまり深さは20cmになる。検出面の長さは109cm、幅は81cm、下幅の長さは93cm、幅は70cmを測る。

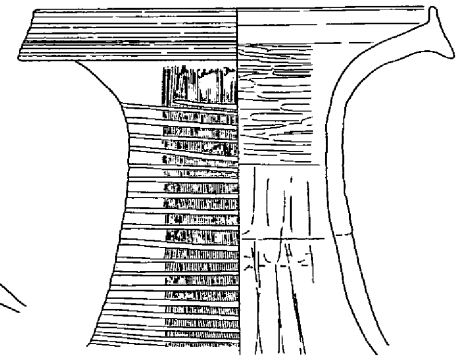
小型の土壙ではあるが８点の弥生土器が出土している。179は長頸壺の口頸部である。口径は21.4cmを測る。頸部は筒形を呈し、螺旋状の沈線を巡らす。下端に刺突文を施す。180・181は長頸壺の口頸部である。182は甕で全形が復元できる。口径は23.8cm、底径は9.9cm、器高は45.7cmを測る。胴部内面はヘラケズリ、外面はハケメ調整している。183は甕の下半部である。184は小型の鉢である。

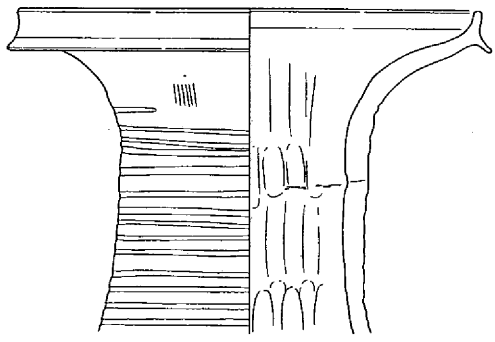


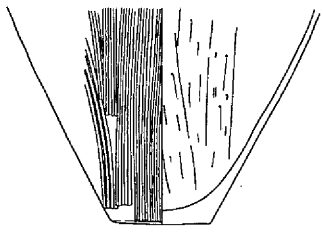
第1266図　土壙１（1/30）・遺物

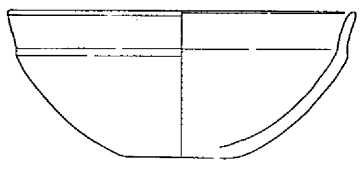


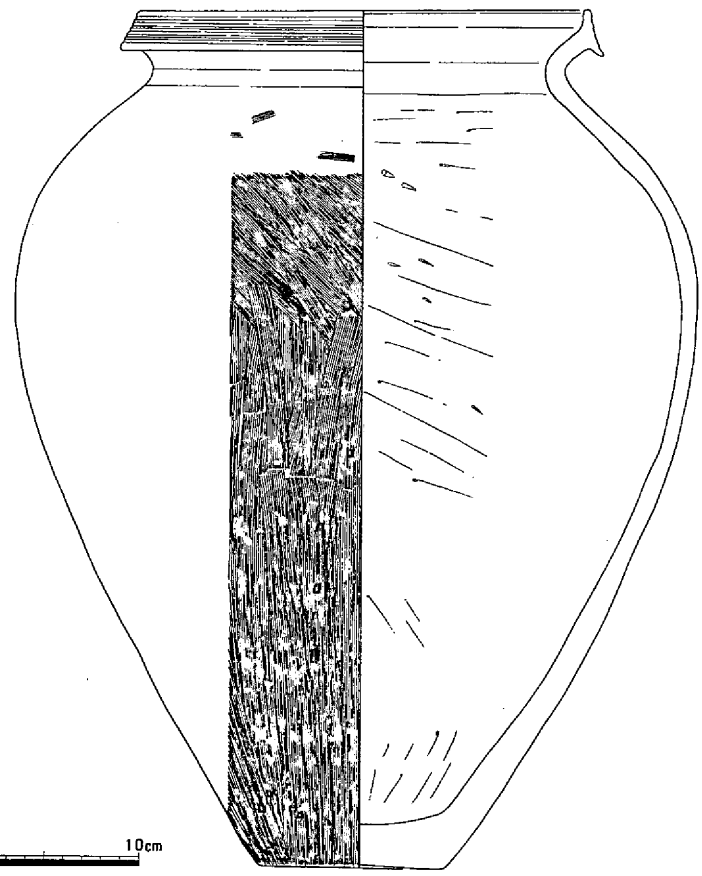

179


180

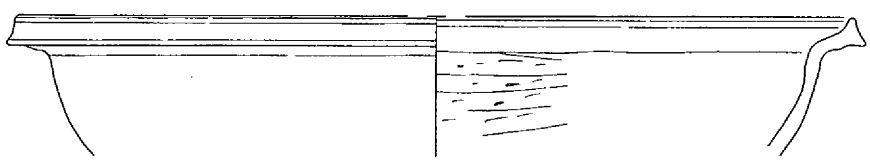

181

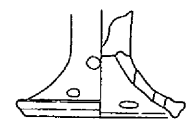

183


184



182


185


186

第1267図　土壙２（1/30）・遺物

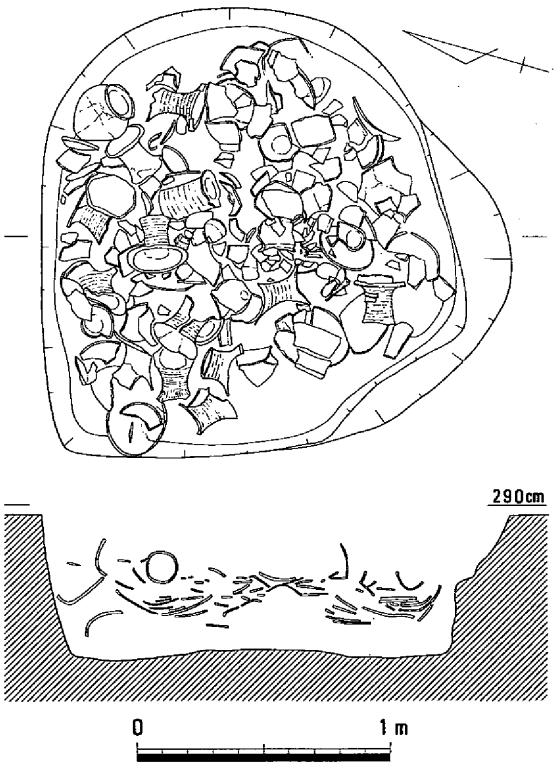
185は大型鉢である。186は高杯の脚である。

土器から見てこの土壙の廃棄された時期は弥生後期Ⅱ～Ⅲであろう。（浅倉）

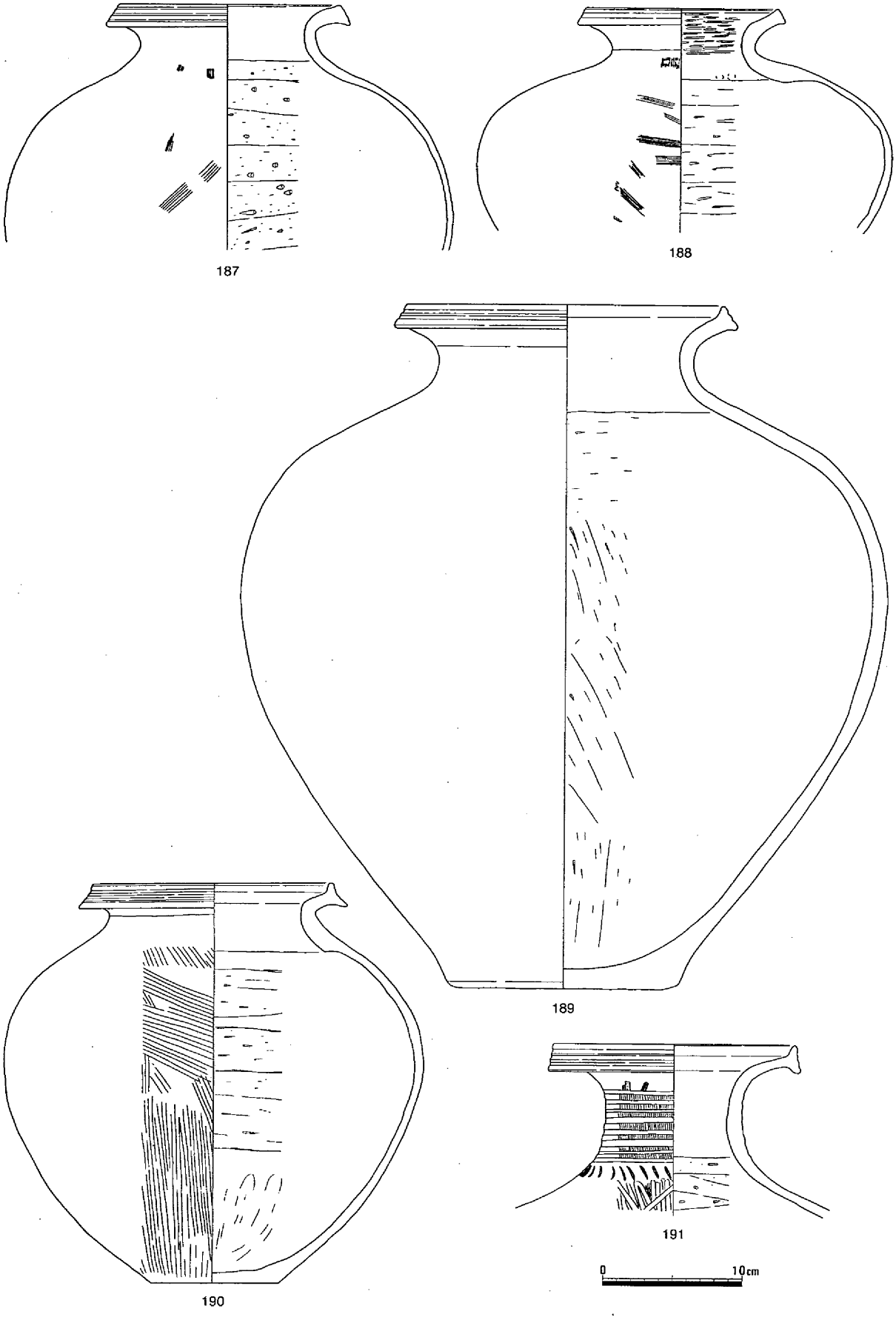
土壙３（第1268～1280図、写真147－3、156～158）

ＡＰ15の中央やや南端で検出した不整方形の大型土壙である。検出面の標高は285cm、平坦な床面のそれは228cmで、つまり深さは57cmになる。床の中央部は心持ち上がっている。検出面の長さは186cm、幅は176cm、下幅の長さは168cm、幅は160cmを測る。土器片がぎっしりと詰まっていた。一見して長頸壺ばかり投げ込んでいるようである。後で復元してみると、確かに長頸壺が30点余りで最も多いが、他にも壺・甕・鉢・高杯・製塩土器も混じっていることが分かった。この土壙の用途・性格は推定することは出来る。おそらく竪穴住居群のどれかのための食料貯蔵穴であろう。そしてその住居で使用済みになった籾貯蔵用の壺・長頸壺、飯炊き用の甕、おかずを盛り合わす高杯、煮炊きに使った鉢、そして海水から製塩した土器などを使用済みになって、投げ捨てるゴミ穴となったのであろう。

出土した土器と石器を番号順に説明していこう。187は壺で、口径15.4cmを測る。188は壺で、口径13.5cmを測る。189の壺は完形で、口径は22.4cm、底径は16.4cm、器高は49.0cmを測る。内面はヘラケズリしている。190の壺は完形で、口径は16.8cm、底径は8.9cm、器高は23.5cmを測る。外面はハケメである。191は長頸壺で、口径14.4cmを測り、あまり長くない頸部に８条の沈線と下端にヘラによる刺突文を持つ。192は大型の長頸壺で、完形に復元できた。肩に断面三角の凸帯が貼り付けられ、刻みも入っている。頸部には10条の沈線を持つ。胴部内外面共にハケメ調整している。口径は25.0cm、底径は12.0cm、器高は60.0cmを測る。193の壺は完形で、口径は16.6cm、底径は10.2cm、器高は35.5cmを測る。194の壺は完形で、口径は27.3cm、底径は13.0cm、器高は40.2cmを測る。短い頸部には櫛書きの沈線が施され、胴部には竹で編んだと考えられるかご目が黒く格子状に陰を残している。195は壺で、下半部が欠けている。口径は16.4cmを測る。口縁端部は上方に拡張している。196は長頸壺で、底部が欠けている。頸部に21条の沈線と下端にヘラによる刺突文を持つ。197は長頸壺で、頸部に９条の沈線と下端に二枚貝の貝殻による刺突文を持つ。198は完形に復元できた長頸壺で、頸部に19条の沈線とヘラによる刺突文を持つ。口縁部に円孔を穿つ。口径は15.5cm、底径は8.8cm、器高は39.0cmを測る。199は完形に復元できた長頸壺で、頸部に20条の沈線とヘラによる刺突文を持つ。口径は21.4cm、底径は8.5cm、器高は43.3cmを測る。200は長頸壺で、頸部に25条の沈線とヘラによる刺突文を持つ。口径は19.6cmを測る。201は長頸壺で、頸部に13条の沈線とヘラによる刺突文を持つ。口径は21.6cmを測る。202は長頸壺で、頸部に10条以上の沈線を持つ。口径は22.2cmを測

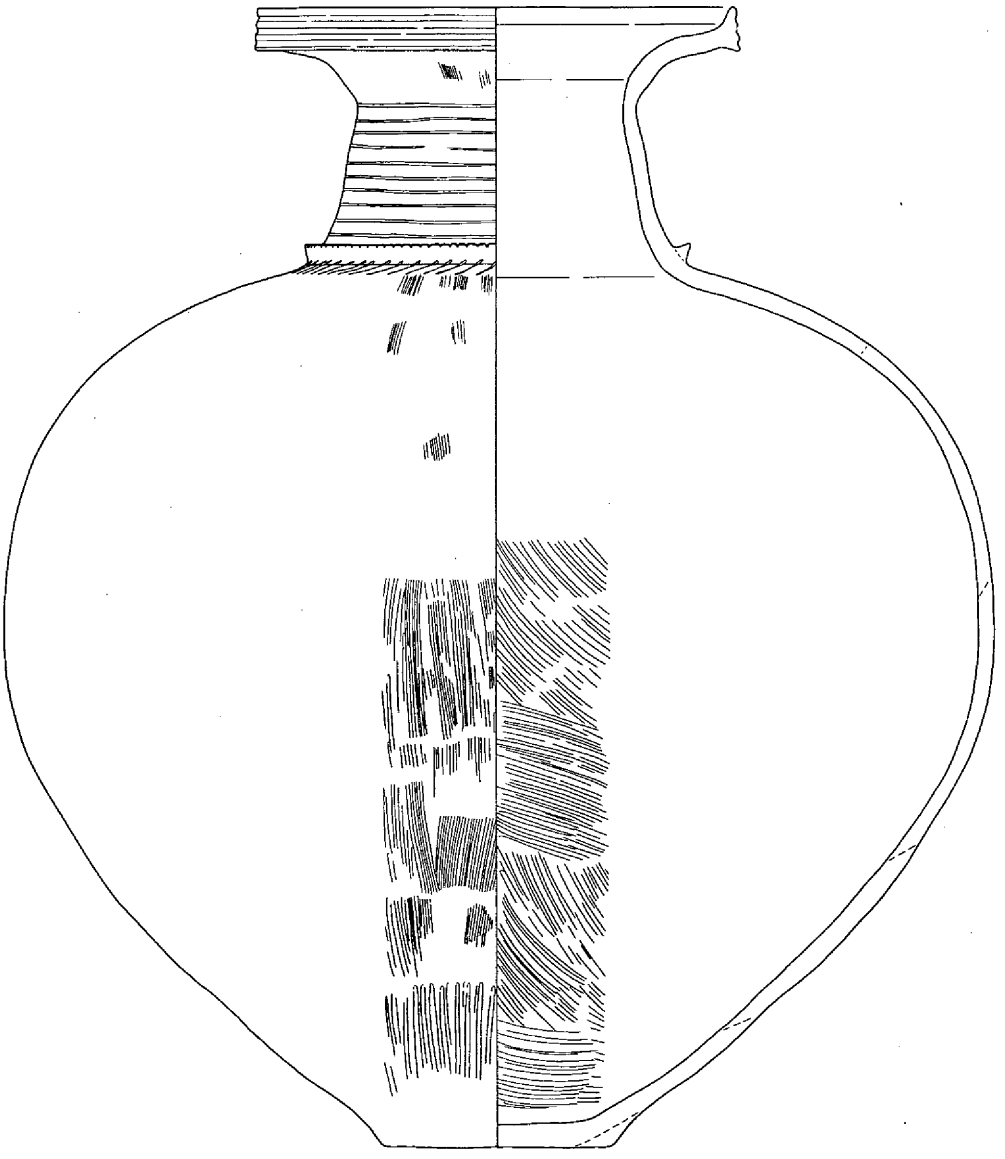


第1268図　土壙３（1/30）



第1269図　土壙３遺物（１）

る。203は長頸壺で、頸部に８条の沈線とヘラによる刺突文を持つ。口径は19.0cmを測る。204は長頸壺で、頸部に13条の沈線とヘラによる刺突文を持つ。205は長頸壺で、頸部に13条の沈線とヘラによる刺突文を持つ。206は長頸壺で、頸部に12条以上の沈線を持つ。207は長頸壺で、頸部に10条の沈線とヘラによる刺突文を持つ。208は長頸壺で、頸部に10条以上の沈線を持つ。209は長頸壺で、口縁部破片である。端部は斜め上下に拡張し、端面には８条の凹線が施されている。210の長頸壺は完形で、口径は19.8cm、底径は8.9cm、器高は37.3cmを測る。頸部にはヘラ描きの沈線が12条施され、肩部には刺突文を持つ。胴部には竹で編んだと考えられるかご目が黒く格子状に陰を残している。211の長頸壺は完形で、口径は20.0cm、底径は9.5cm、器高は41.0cmを測る。頸部にはヘラ描きの沈線が螺旋状に13条施され、肩部には刺突文を持つ。212の長頸壺は完形で、口径は23.8cm、底径は9.8cm、器高は42.0cmを測る。頸部にはヘラ描きの沈線が螺旋状に14条施され、肩部には刺突文を持つ。213の長頸

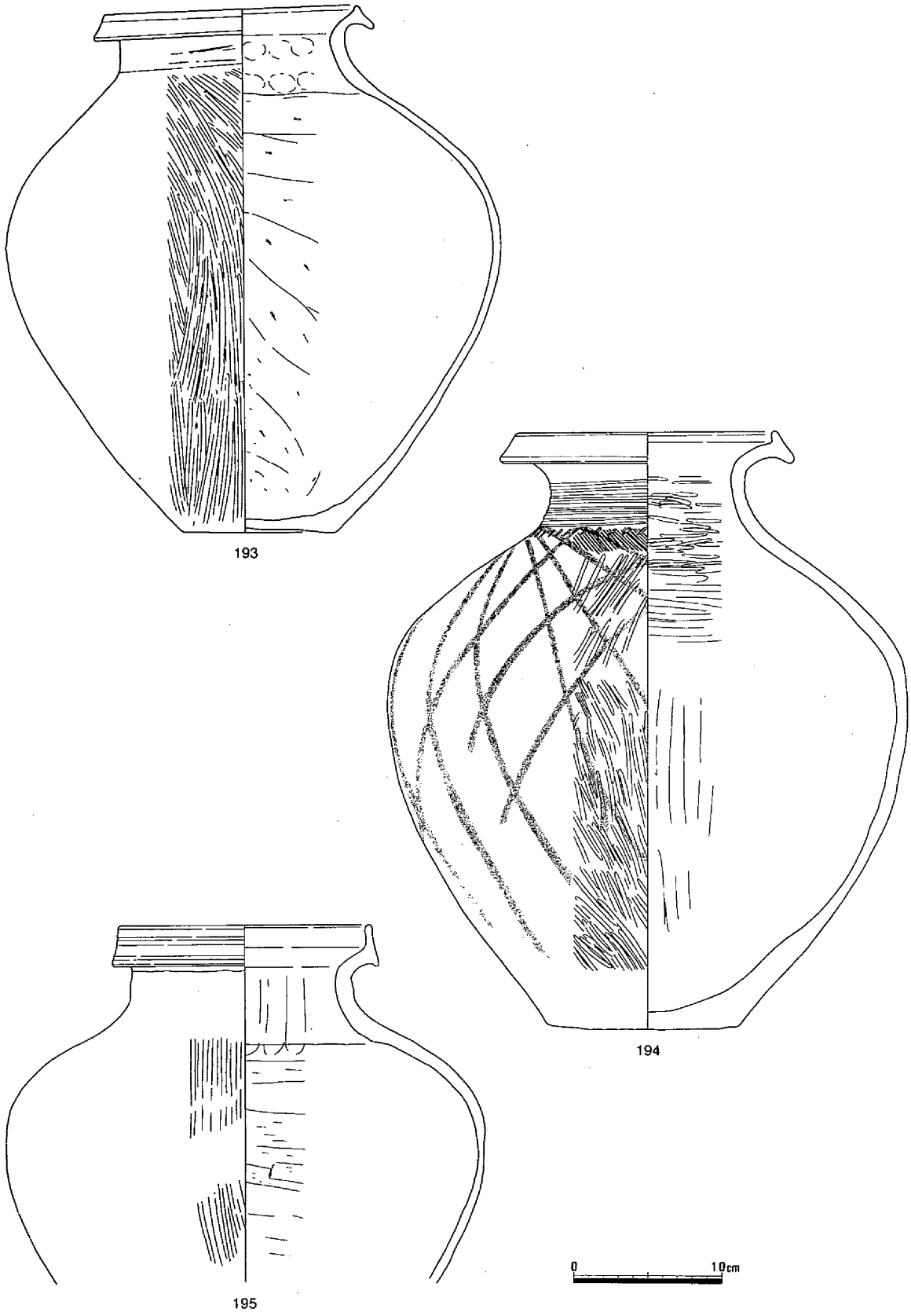


192

0　10cm

第1270図　土壙３遺物（２）

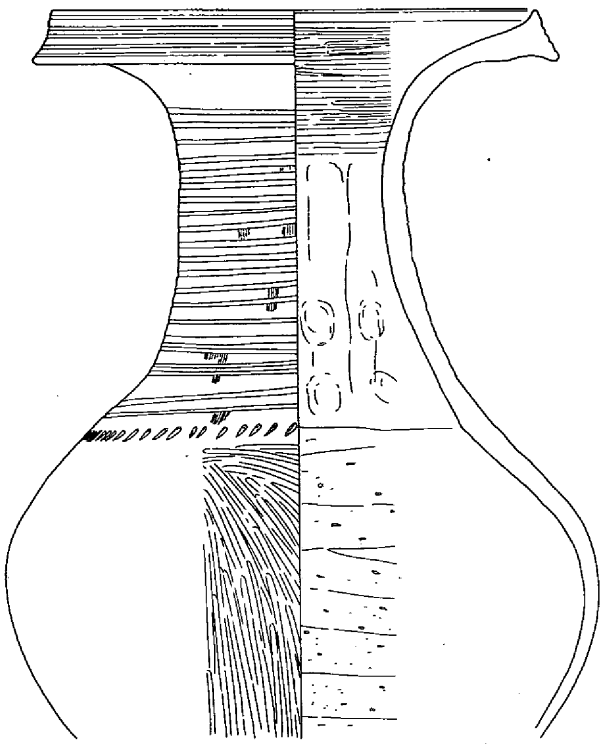
壺は完形で、口径は21.5cm、底径は9.6cm、器高は39.6cmを測る。頸部にはヘラ描きの沈線が螺旋状に12条施され、肩部には刺突文を持つ。214は長頸壺で、頸部に13条の沈線とヘラによる刺突文を持つ。

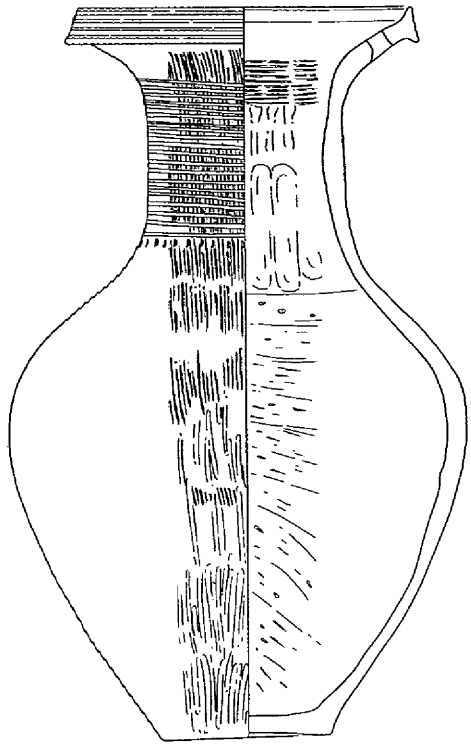


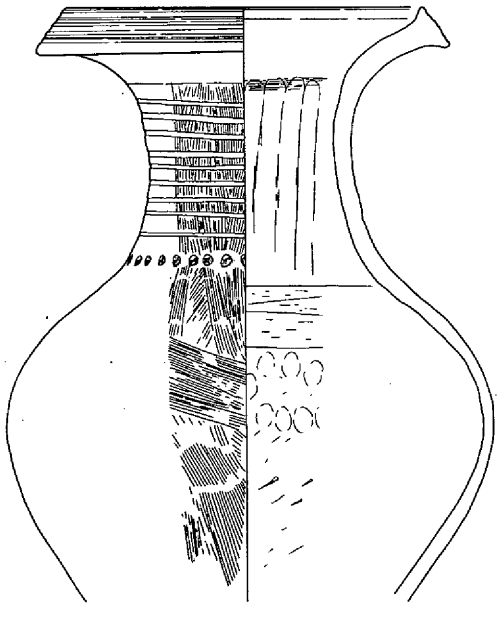
第1271図　土壙３遺物（３）

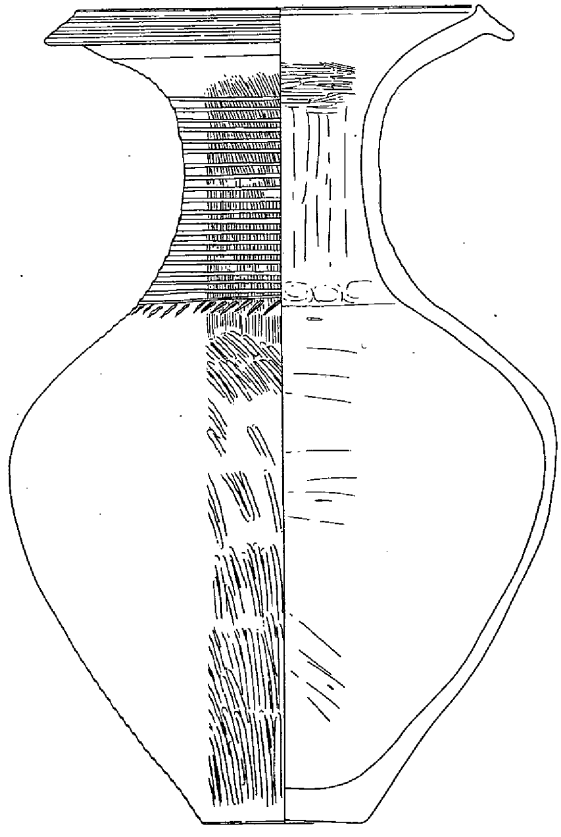
215は長頸壺で、頸部に12条の沈線とハイガイによる刺突文を持つ。216は長頸壺で、頸部に８条の沈線とヘラによる刺突文を持つ。217は長頸壺で、頸部に16条の沈線と竹管による刺突文を持つ。沈線は２回に分けて螺旋状に施している。218は長頸壺で、底部を欠いている。頸部に15条の沈線とヘラによる刺突文を持つ。219は長頸壺で、底部を欠いている。頸部に12条の沈線と竹管による刺突文を持つ。220は長頸壺で、胴部を欠いている。頸部に13条の沈線と竹管による刺突文を持つ。221は長頸壺で、口頸部である。頸部に13条の沈線とヘラによる刺突文を持つ。222は長頸壺で、口頸部である。特に長い頸部に38条の沈線を持つ。その下にはヘラによる刺突文を持つ。223は長頸壺で、口縁部と底部を欠いている。頸部に15条の沈線とヘラによる刺突文を持つ。224は長頸壺で、口縁部と頸部上半を欠いている。頸部に沈線とヘラによる刺突文を持つ。225は長頸壺で、口頸部破片である。頸部の沈線が磨滅している。226は長頸壺で、口縁部を欠いている。頸部に17条の沈線と竹管による刺突文を持つ。227は完形に復元できた長頸壺で、頸部に14条の沈線と竹管による刺突文を持つ。口径は22.1cm、底径は10.2cm、器高は42.5cmを測る。口縁端部に特徴がある。228は壺形土器であるが、器壁が薄いため甕としたものである。229は完形の甕である。口径は21.3cm、底径は7.8cm、器高は35.5cmを測る。胴部外面上半分に平行叩きが見られる。230は壺の上半部である。231は完形の甕である。口径は30.0cm、底径は11.2cm、器高は39.0cmを測る。内面ヘラケズリ、外面ハケメである。232は壺形土器であるが、器壁が薄いため甕としたものである。233は壺のように頸の締まった甕である。器壁が薄い。完形で、口径は23.9cm、底径は9.2cm、器高は36.0cmを測る。内面ヘラケズリ、外面ハケメである。234は小型の器壁の薄い甕である。235は壺の口縁部である。236は完形の典型的な大型の甕である。口縁端部を肥厚してヨコナデし、イチヂク形の胴部内面はヘラケズリし、外面はハケメで仕上げている。底部は安定した平底で、ほんのわずかにあげ底になっている。口径は30.6cm、底径は11.6cm、器高は40.7cmを測る。237は小型の甕で、口縁端部を丸く収める。238は完形で中型の典型的な甕である。口径は14.9cm、底径は4.8cm、器高は23.8cmを測る。底部外面に指圧痕が明瞭に残っている。239は完形で中型の典型的な甕である。口径は14.5cm、底径は5.6cm、器高は27.9cmを測る。口縁端部が拡張し、肩が張っている。煤が付いていることから火に架けていたことが分かる。240は完形の壺である。胴部上半に竹で編んだかご目が黒く陰を残している。口径は25.6cm、底径は13.3cm、器高は39.3cmを測る。241は完形で中型の典型的な甕である。口径は15.2cm、底径は6.0cm、器高は27.0cmを測る。口縁端部を上に拡張する。242は大型の鉢で、刻み目・沈線・刺突文を施し、片口を持つ。243は鉢で、口径は39.3cm、底径は11.4cm、器高は20.3cmを測る。244は鉢の破片である。245は大型の鉢で、口径は48.5cm、底径は10.3cm、器高は21.3cmを測る。246は超大型の鉢かひずみの激しいものであろう。247は高杯で、脚裾が欠けている。口縁は外反し、長脚で、下端に３条の沈線を持つ。248は高杯で、杯底部が円盤充填である。249は椀形の杯を持つ高杯で、口径は16.6cm、底径は14.5cm、器高は12.0cmを測る。250は細頸壺の胴部破片で、中央に２条の細い凸帯とその間に鋸歯文を描く。小型特殊壺とも言われる。祭祀用の土器である。251はミニチュアの高杯である。252は製塩土器のラッパ状の台脚である。253～262は壺と甕の底部である。S10はサヌカイト製の石包丁の破片である。両端が欠けている。

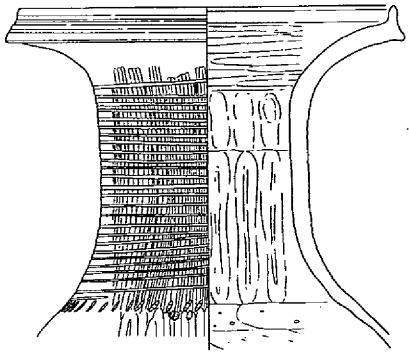
以上の出土遺物の特徴は、弥生後期ⅡとⅢの古相を示すが、出土状況からみて後期Ⅲの段階で一括して廃棄されたと思われる。（浅倉）

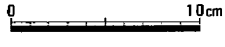

196


198

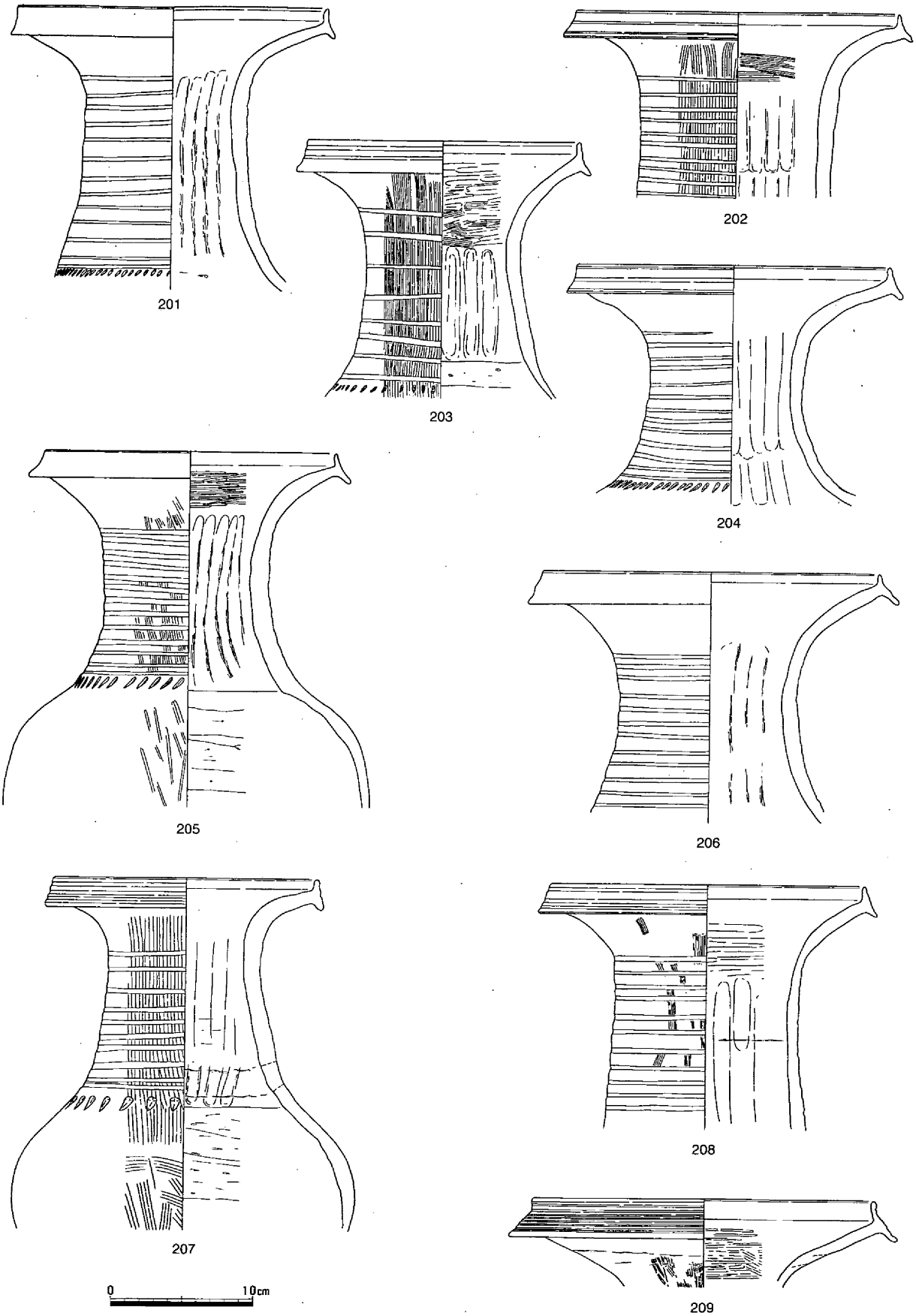

197


199

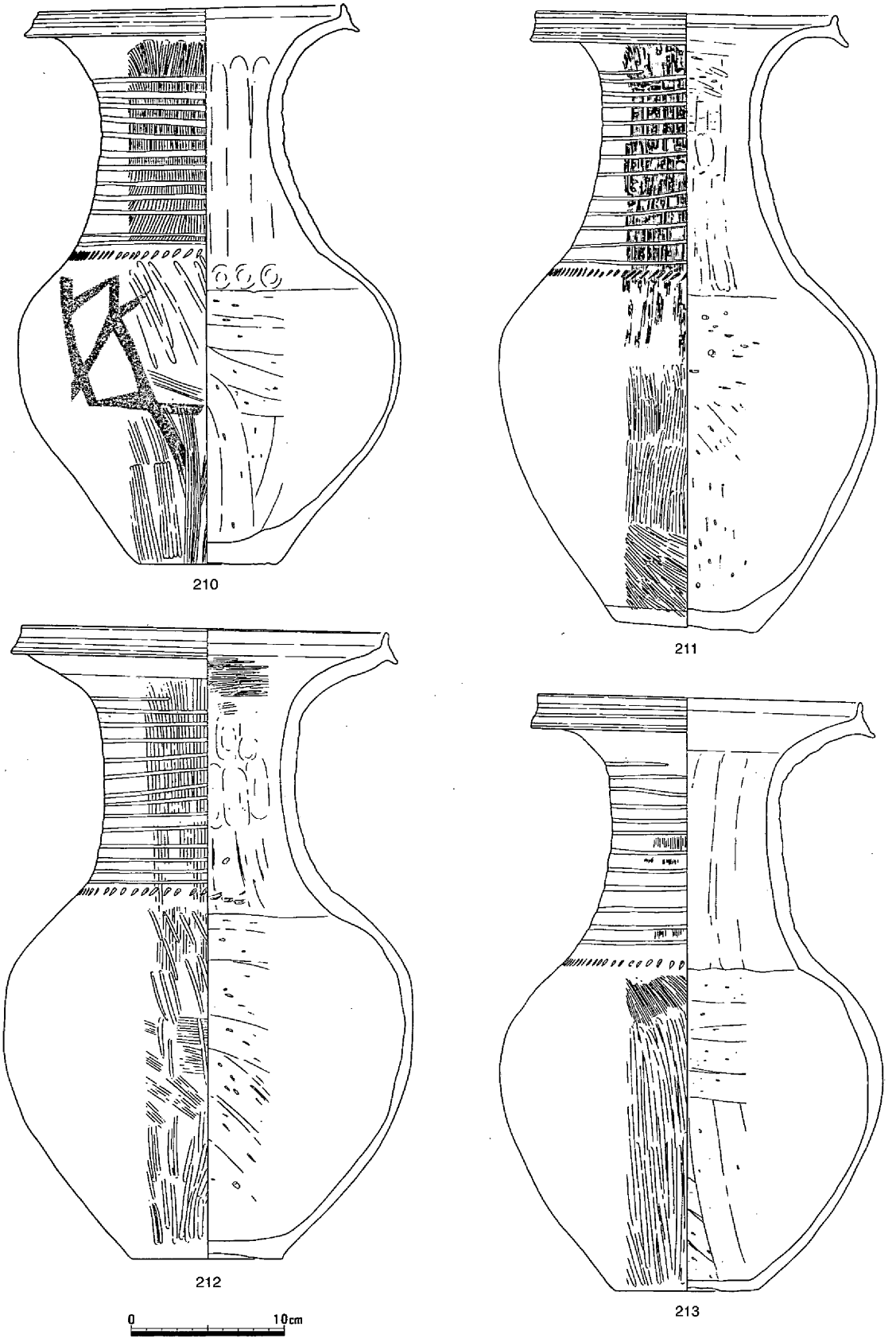

200



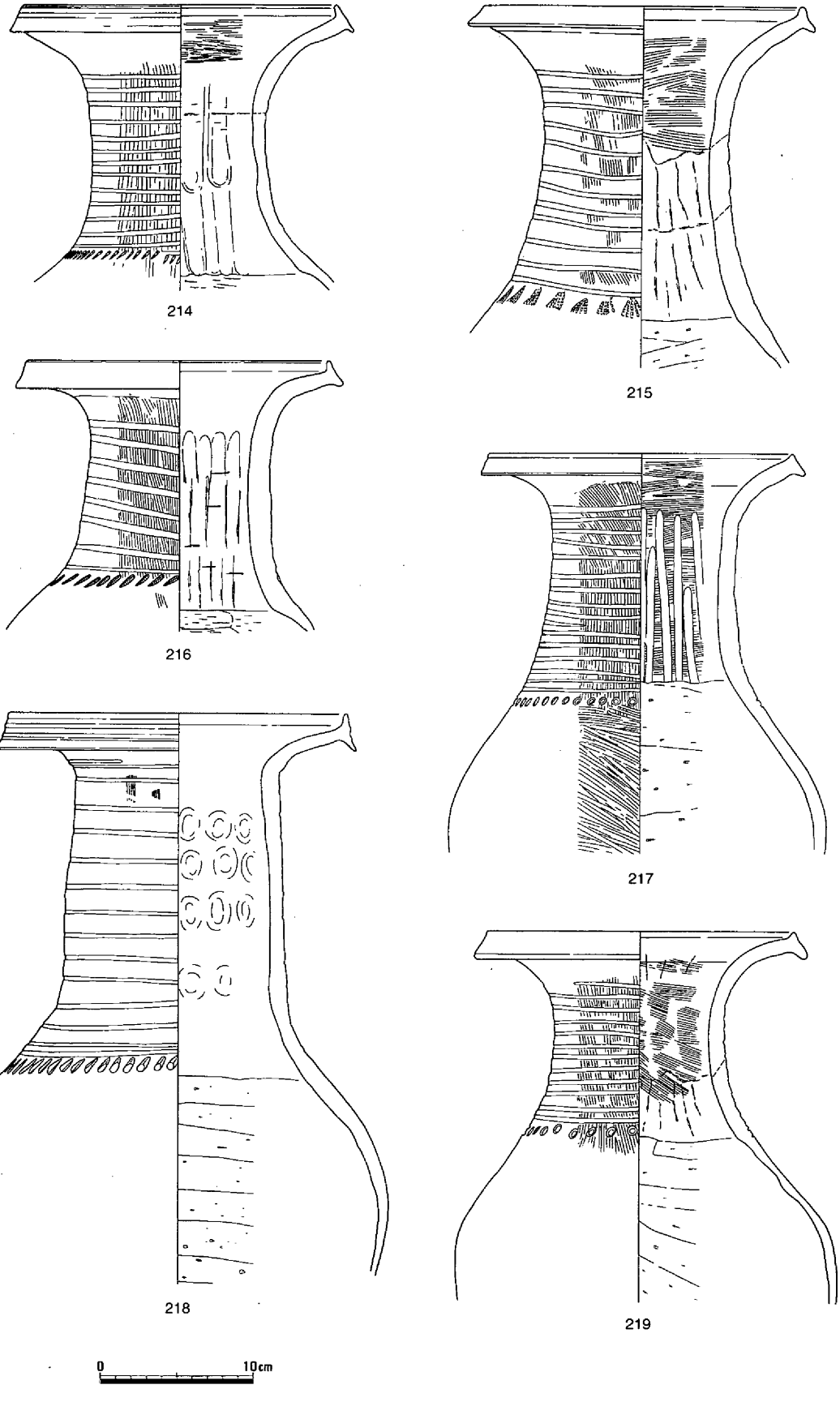
第1272図　土壙３遺物（４）



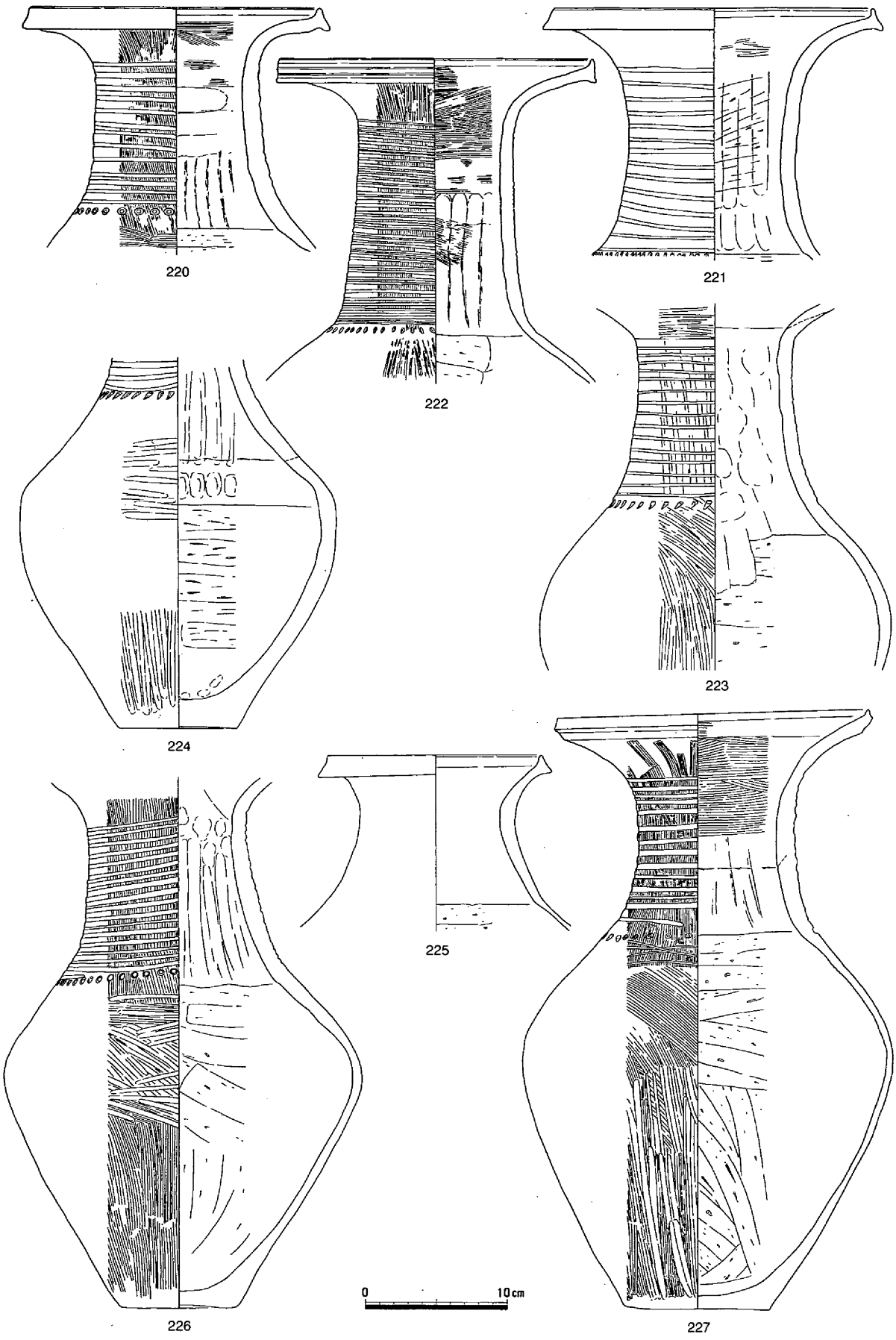
第1273図　土壙３遺物（５）



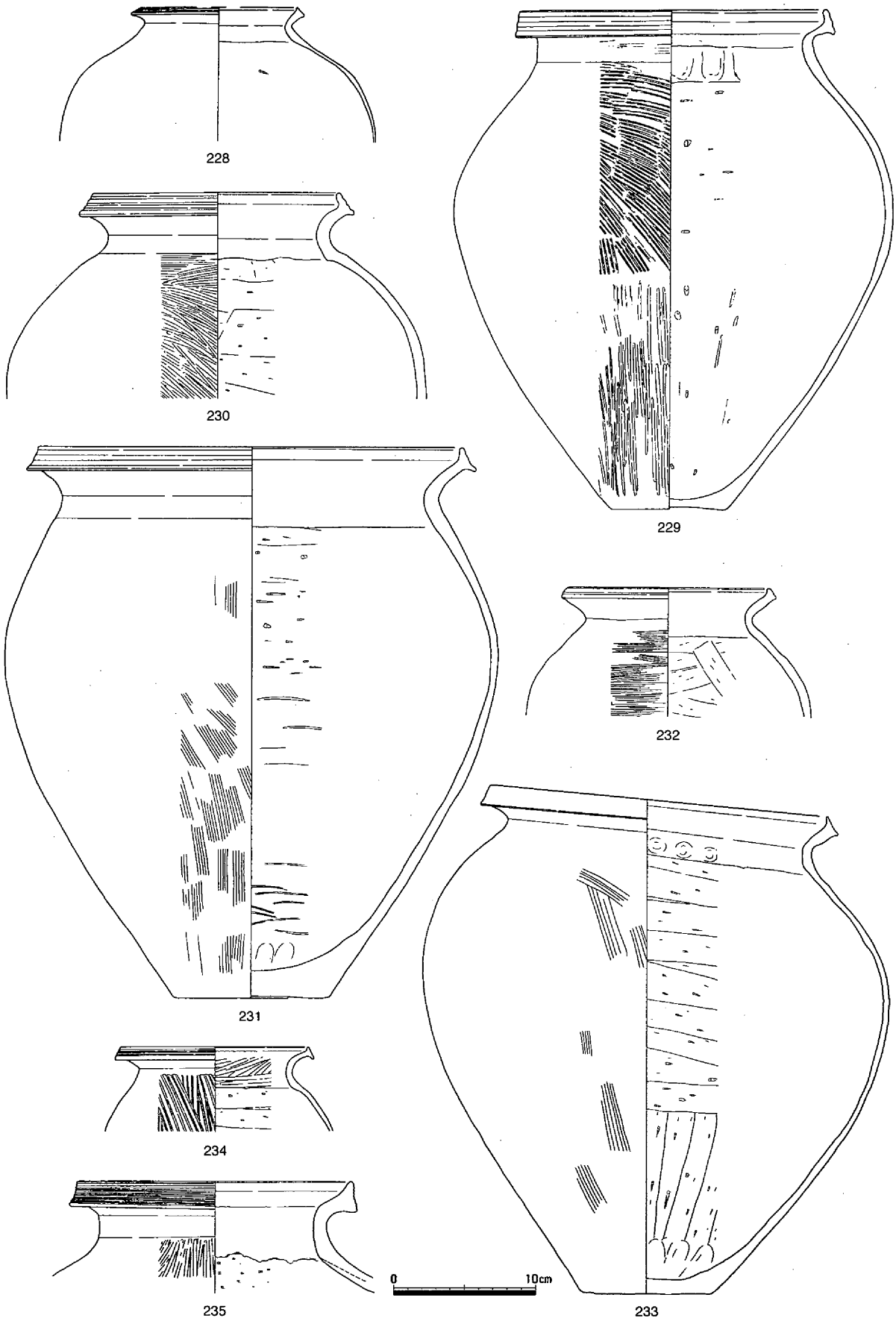
第1274図　土壙３遺物（６）



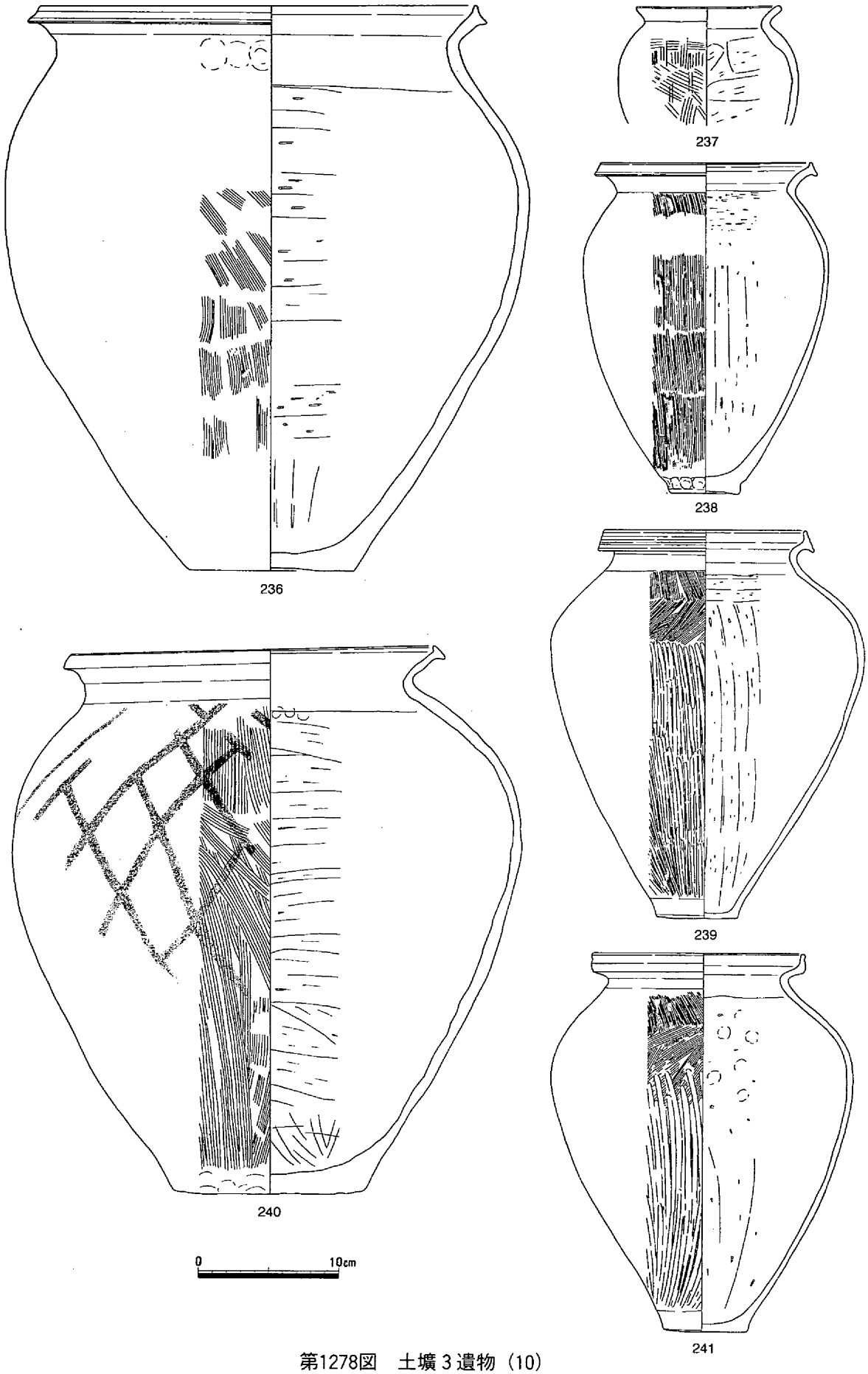
第1275図　土壙３遺物（７）



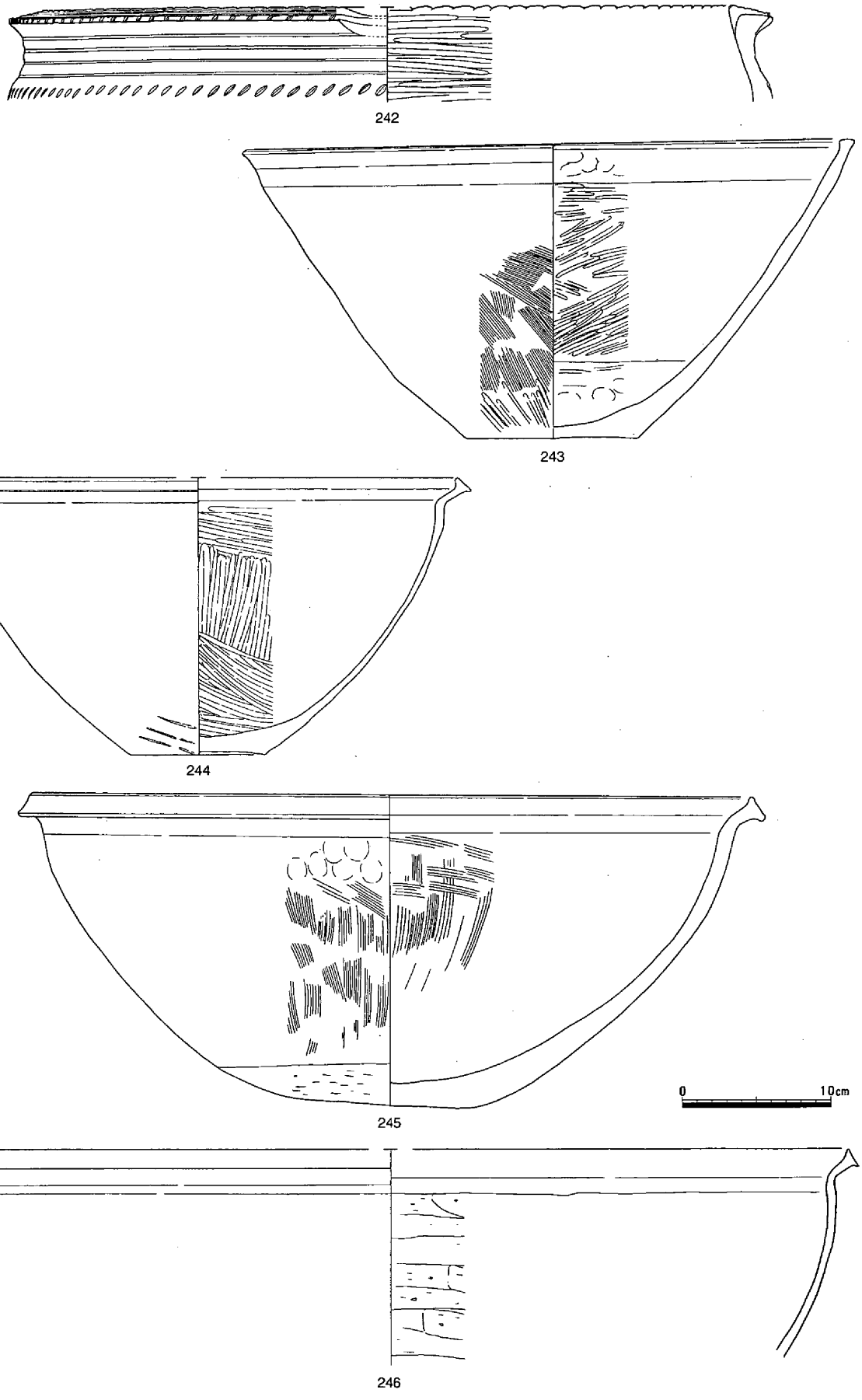
第1276図　土壙３遺物（８）



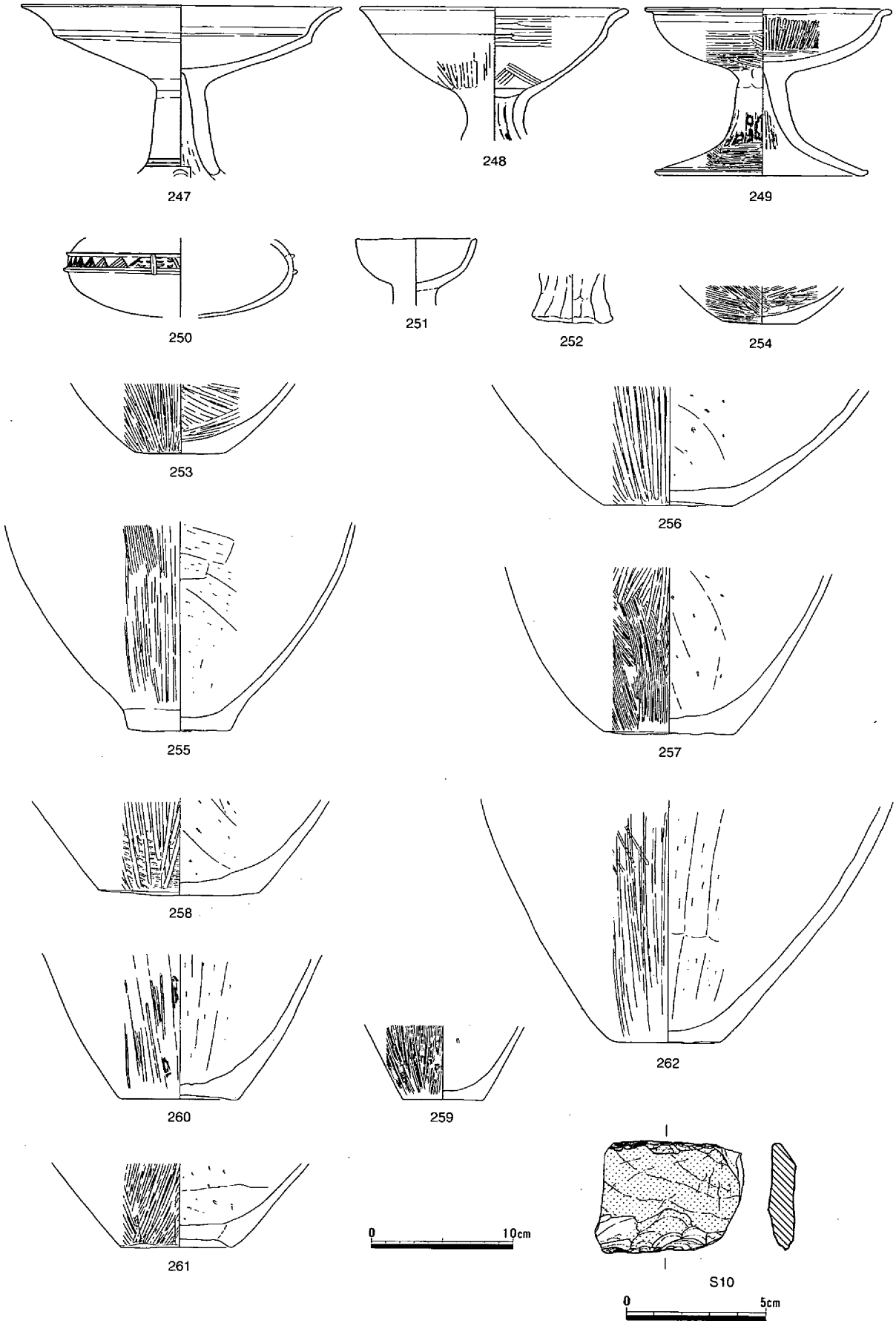
第1277図　土壙３遺物（９）



第1278図　土壙３遺物（10）



第1279図　土壙３遺物（11）



第1280図　土壙３遺物（12）

土壙４（第1281図）

ＢＰ15区の中央北よりに位置し、竪穴住居１に切られる土壙である。平面形は楕円形で、断面形が逆台形状を呈す。規模は、長さが106cmで、幅は87cmで、深さが33cmを測る。

出土した甕263からみてこの土壙の時期は、弥・後・Ⅱである。（弘田）

土壙５（第1282図）

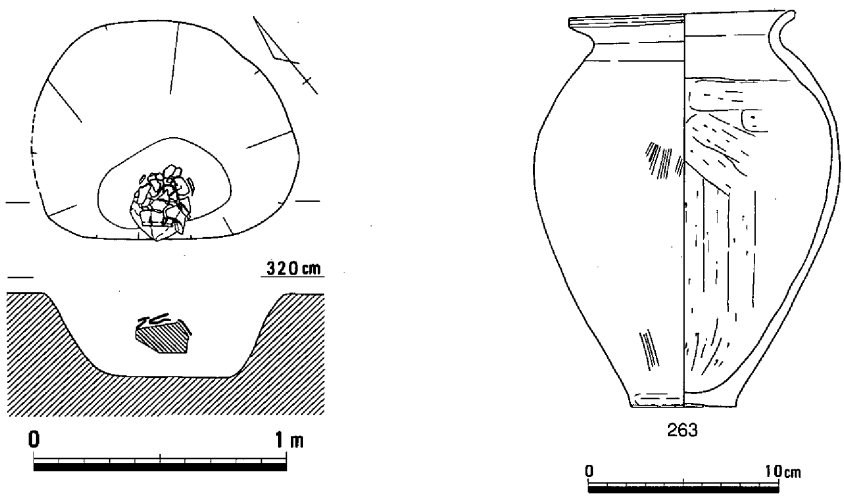
ＢＰ15区中央やや東で竪穴住居１の東に接する。平面形は楕円形であるが、断面形は不定形であった。規模は、長さが63cm、幅は58cmで、深さは22cmを測る。埋土には、焼土を多く含んでいた。

遺物の出土をみないが、埋土や周囲の遺構の状況から時期は弥生後期と思われる。（弘田）

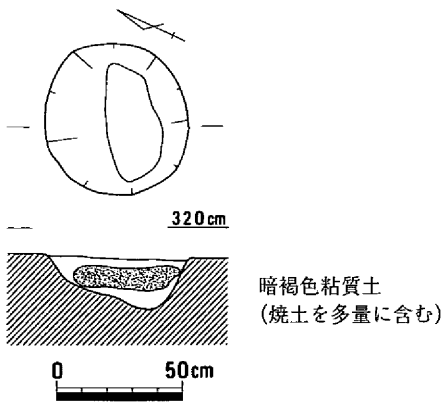
土壙６（第1283図）

ＢＰ15区に位置する土壙で、平面形は円形、断面形が椀状を呈す。規模は長さが93cmで、深さは46cmを測る。

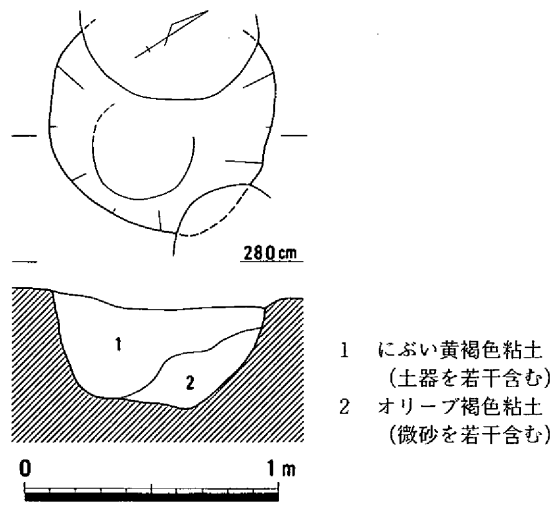
出土遺物からこの土壙の時期は、弥生後期とみられる。（弘田）



第1281図　土壙４（1/30）・遺物



第1282図　土壙５（1/30）



第1283図　土壙６（1/30）

土壙７（第1284図）

ＢＰ15区に位置し、平面形は円形で、断面形が椀状を呈す。規模は直径が79cmで、深さは32cmを測る。

出土遺物をみないが、弥生時代後期と思われる。（弘田）

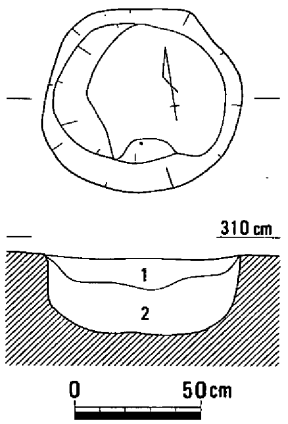
土壙８（第1285図）

ＢＰ15区に位置する。平面形は円形で、断面形が浅い椀状を呈す。規模は、直径が72cmで、深さは19cmを測る。

出土した甕264・265から、この土壙の時期は、弥・後・Ⅲである。（弘田）

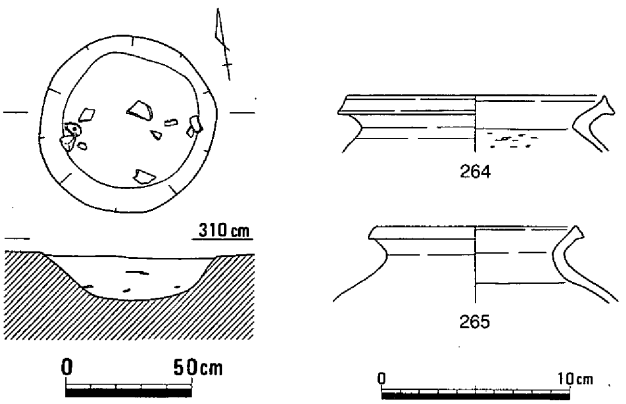
土壙９（第1286図）

ＢＰ15区の南端あたりに位置する。平面形は方形で、断面形が箱形を呈す。規模は、長さが70cm、幅は47cmで、深さが32cmを測る。出土した大形の鉢266は、土壙検出面において破片で蓋をしたような状況がみられたことから有蓋土壙墓の可能性がある。時期は、弥・後・Ⅱである。（弘田）



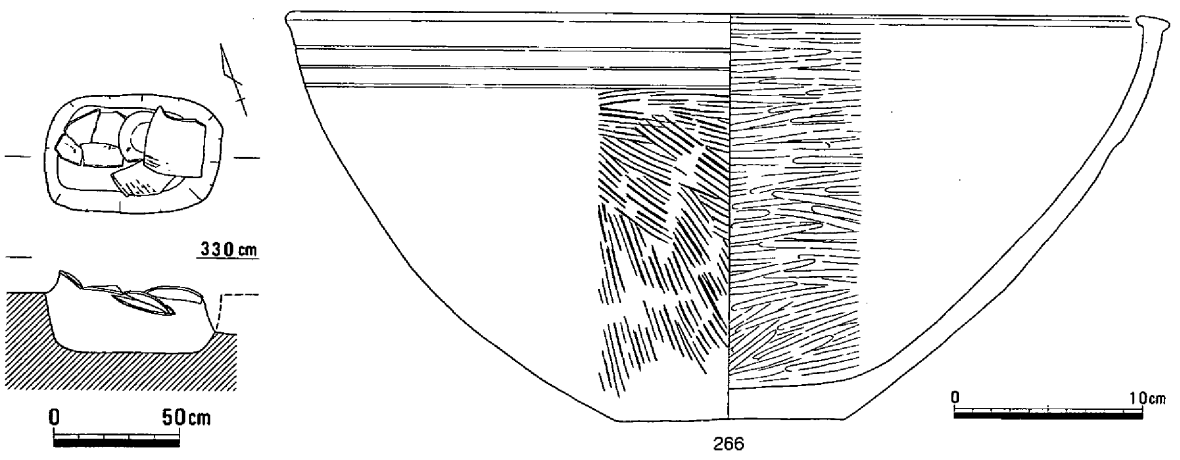
1　黄褐色粘土
2　暗褐色粘土（土器を少量含む）

第1284図　土壙７（1/30）



暗褐色粘質土
（焼土・炭・土器を多量に含む）

第1285図　土壙８（1/30）・遺物



第1286図　土壙９（1/30）・遺物

土壙10（第1287図）

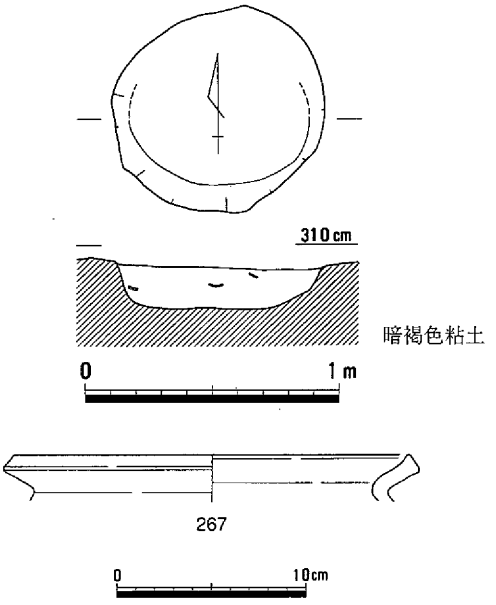
ＢＰ15区の南端近くに位置する土壙である。平面形は円形で、断面形が椀状を呈す。規模は、長さが88cm、幅は77cmで、深さが14cmを測る。

出土遺物は、甕の口縁部267が１点のみであった。時期は、弥・後・Ⅲである。（弘田）

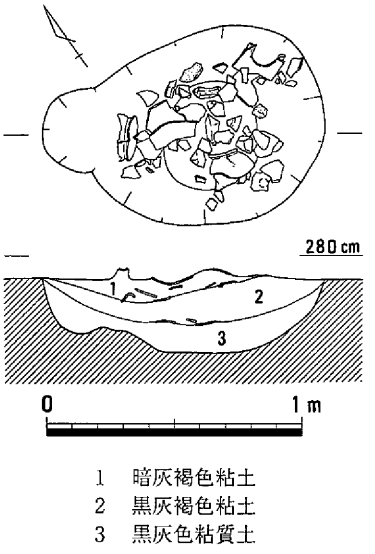
土壙11（第1288・1289図）

ＡＰ16・17区の中央やや北寄りで検出した不整楕円形の小型土壙である。検出面の標高は270cmである。断面形が椀形を呈し、床面の標高は247cmである。検出面の長さは110cm、幅は78cm、深さは33cmになる。

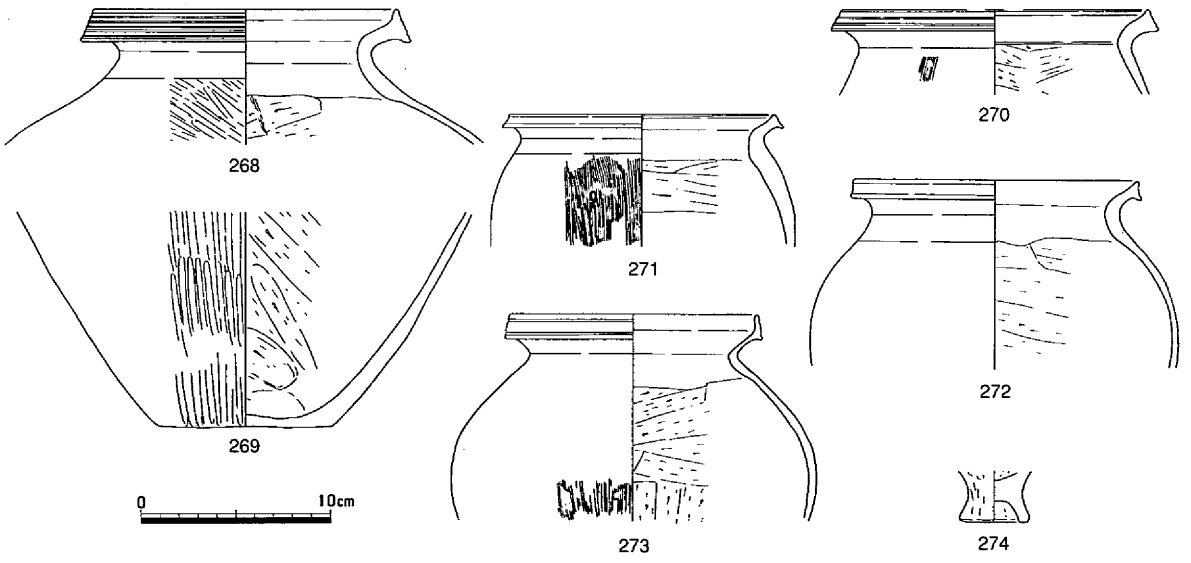
268は壺の口縁部で、269はその底部である。270～273は甕で、273が新しいタイプである。274は製塩土器の脚である。土器から見てこの土壙の時期は弥生後期Ⅲである。（浅倉）



第1287図　土壙10(1/30)・遺物



第1288図　土壙11(1/30)



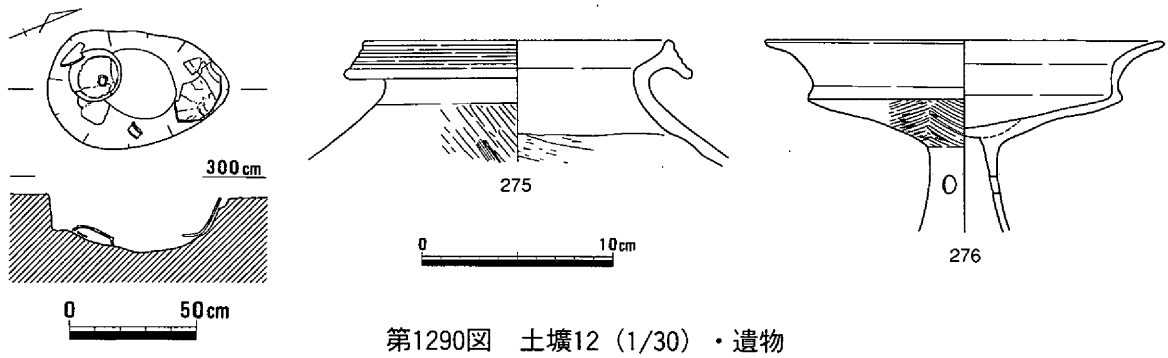
第1289図　土壙11遺物

土壙12（第1290図）

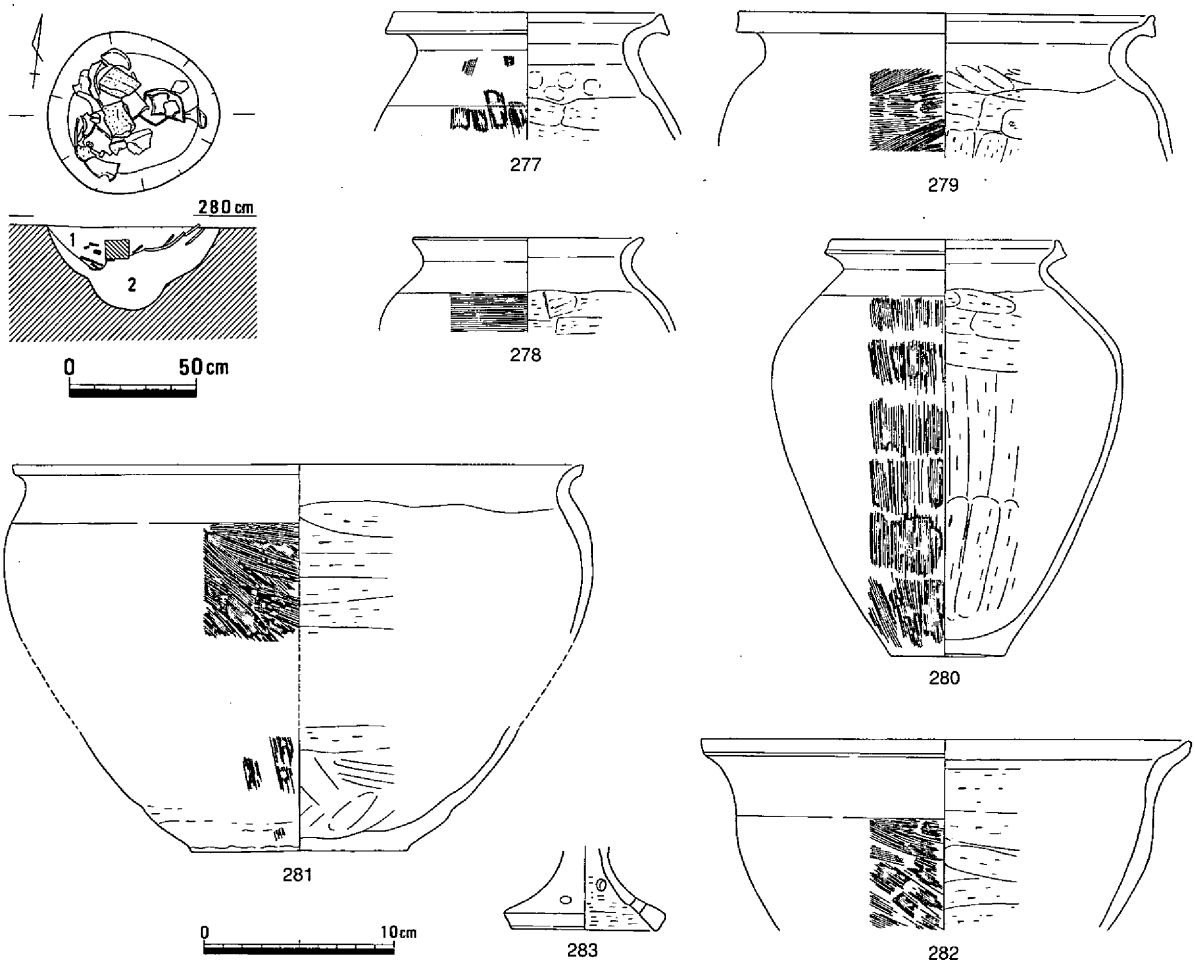
ＡＰ16・17区の中央・土壙11の南で検出した楕円形の小型土壙である。検出面の標高は293cm、椀形の床面の最低部は270cm、深さは23cmになる。長さは71cm、幅は47cm、下幅は円形で直径25cmを測る。出土した壺と高杯から、この土壙の時期は弥生後期Ⅱである。（浅倉）

土壙13（第1291図）

ＡＰ17区の中央部、土壙11の南東で検出した円形の小型土壙である。検出面の標高は275cm、二段になった椀形の床面の最低部は241cmで、つまり深さは34cmになる。上幅の直径が67cm、下幅は直径20cmを測る。



第1290図　土壙12（1/30）・遺物



第1291図　土壙13（1/30）・遺物

甕・鉢・高杯など７点が出土している。それからこの土壙の時期は弥生後期Ⅲと考えたい。（浅倉）

土壙14（第1292・1293図）

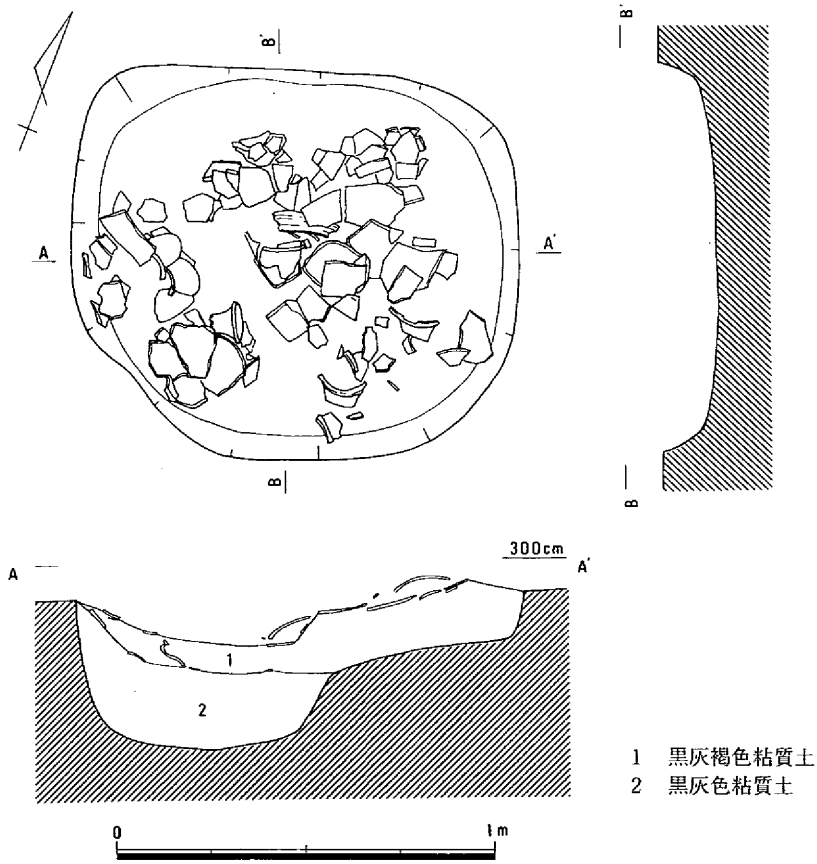
ＡＰ17区の中央部で、土壙12と土壙13の間で検出した隅丸方形の小型土壙である。検出面の標高は290cmで、断面では二段になった椀形の床面の最低部は245cmとなり、深さは45cmを測る。上面での長さが119cmで、幅は102cmを測る。土器片がぎっしり詰まっていたのは第１層で、第２層には入っていなかった。

12点の土器を掲載した。284は直口壺で、緩く外傾した口縁部の径は9.6cmを測る。285は壺の胴部である。286～289は小型甕の口縁部である。口縁端部をわずかに肥厚させる286・288、ナデによって面をつくる287、上部に拡張する289がある。290は大型の甕で全部そろっている。口縁端部は肥厚させ、凹線を施す。内面をヘラケズリ、外面はハケメ調整している。291・292は甕の底部である。293は小型の鉢で、口径18.0cm、底径4.2cm、器高7.5cmを測る。294は大型の鉢で、口径43.0cmを測る。口唇部を丸く収める。295は高杯の脚部で円盤充填がみられる。端部が下方に肥厚し、円形の透かし孔は二段に穿っていた。

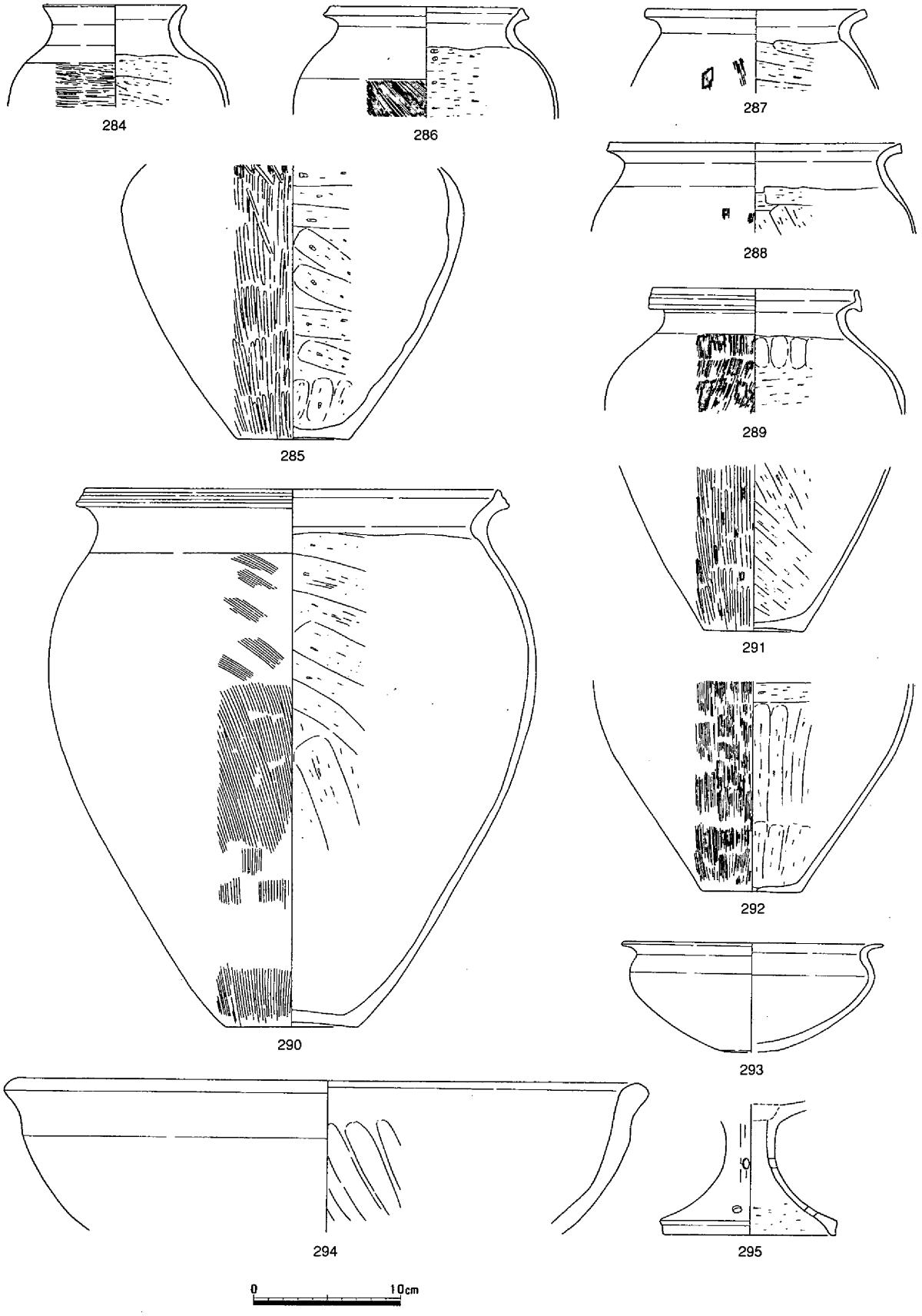
以上の土器から、この土壙の時期は弥生後期Ⅲに入れたい。（浅倉）

土壙15（第1294図）

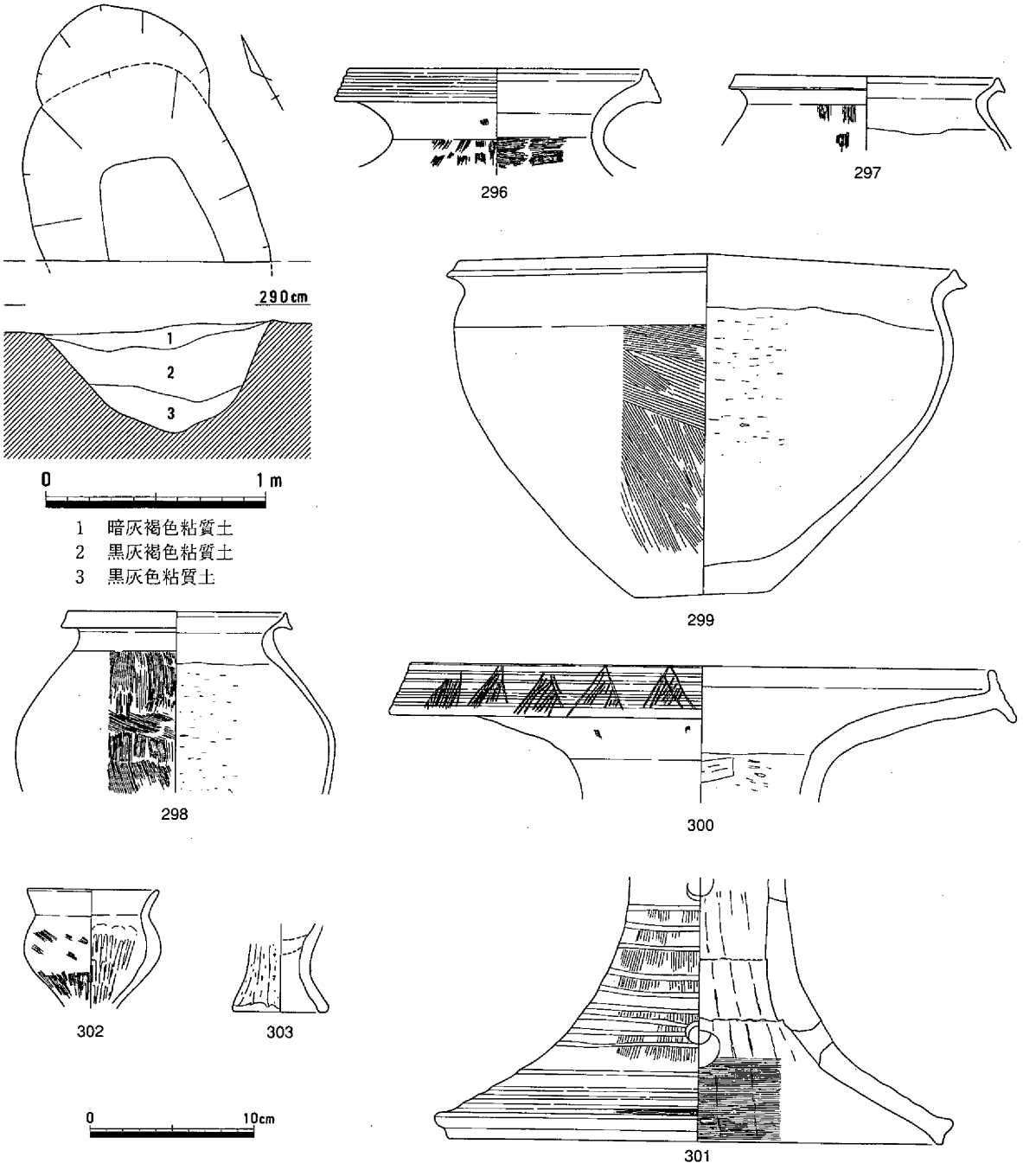
ＡＰ17区の南西部で検出した隅丸方形の小型土壙である。調査区に半分が覗いている。検出面の標高は282cm、尖り気味の床面の最低部は230cmで、つまり深さは52cmになる。上幅現存長108cm、幅99cmを測る。土器片が出土したのは第１層と第２層で、第３層には入っていなかった。



第1292図　土壙14（1/20）



第1293図　土壙14遺物



第1294図　土壙15（1/30）・遺物

８点の土器を掲載した。296は短頸広口壺で、口径が18.0cmを測る。口縁端部は肥厚させ、凹線を施す。297・298は甕で、肥厚した口縁端部はナデて仕上げる。口径は16.0cmと13.2cmである。299は中型の鉢で、頸部から外反する口縁部の端部は上下に肥厚させる。口径が29.5cm、底径は8.0cmで、器高が20.7cmを測る。300は器台の上部で、口径が35.2cmを測る。口唇部を斜め上下に拡張して、その端面には５条の凹線を引き、その上からヘラ描きの稚拙な鋸歯文を付ける。301は器台の下半部である。外面には13条の沈線があり、円形の透かし孔は２段に穿たれている。302は、小型台付き鉢とみられる。303は、製塩土器の脚である。

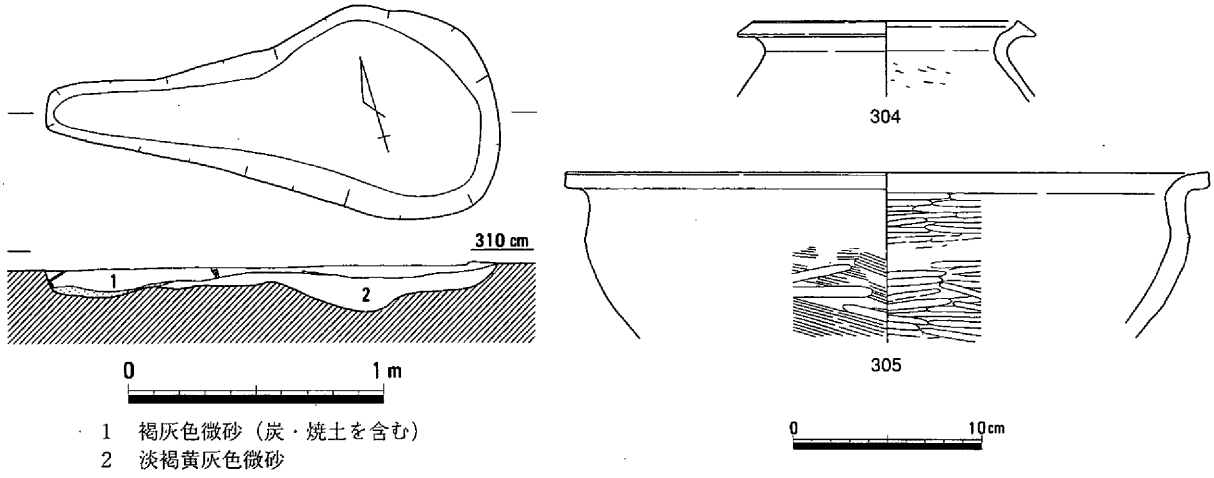
以上の土器からこの土壙の時期は弥生後期Ⅲに入れたい。　（浅倉）

土壙16（第1295図）

ＢＰ16区に位置する土壙で、平面形は不整楕円形で、断面形は浅い皿状を呈す。規模は、長さが178cm、幅は83cmで、深さが20cmを測る。

出土遺物をみると、甕304では、短く外反した口縁部の端部を外下方に拡張させる。大型の鉢305では、半球形の体部に短く外反する口縁部がつき、端部はわずかに上方に肥厚させる。

この土壙の時期は、弥・後・Ⅰである。　（弘田）

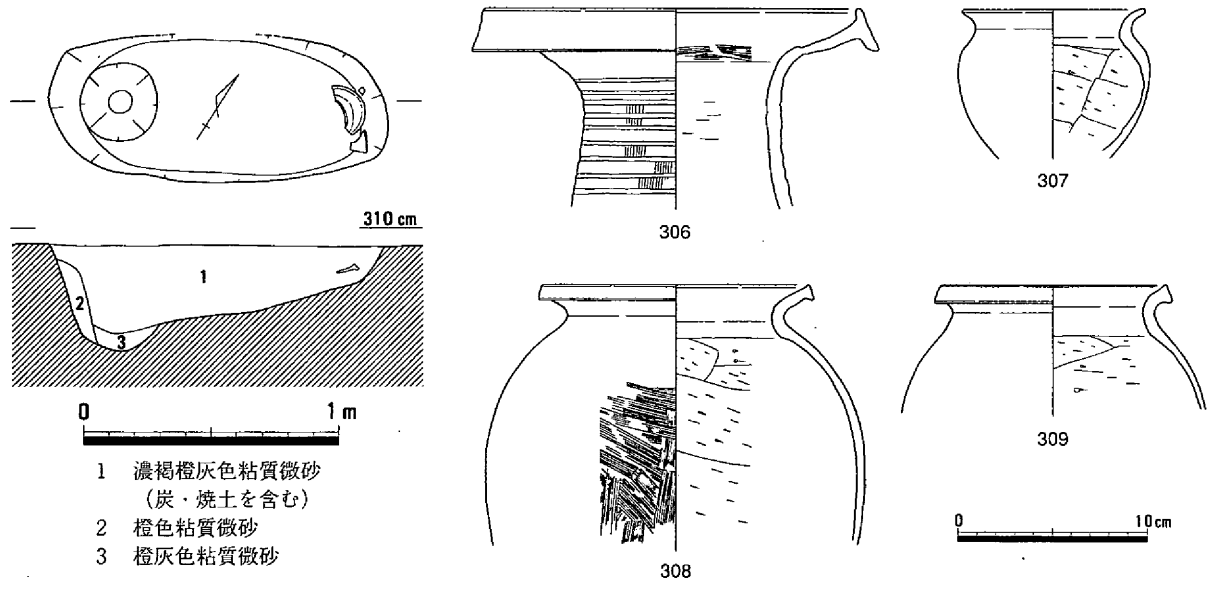


第1295図　土壙16（1/30）・遺物

土壙17（第1296図）

ＢＰ16区に位置する土壙で、平面形は楕円形呈し、断面形は椀状を呈す。規模は長さが132cm、幅は56cmで、深さが42cmを測る。

長頸壺306は、口縁端部を上下に拡張させる。甕には、端部が丸く終わる小型の307と、口縁端部を上下に肥厚させる308・309がある。この土壙の時期は、弥・後・Ⅱである。　（弘田）



第1296図　土壙17（1/30）・遺物

土壙18（第1297図）

ＢＰ16区に位置する土壙で、平面形は不整楕円形を、断面形が箱型を呈する。規模は長さが71cm、幅は45cmで、深さが36cmを測る。

出土遺物には、310がある。上下に拡張した口縁端部には凹線を施す。この土壙の時期は、弥・後・Ⅲである。（弘田）

土壙19（第1298図）

ＢＰ16区の中央に位置する土壙で、平面形は長円形を呈する。断面形は浅くて皿状をなし、西端の落ち込みは柱穴である。規模は、長さが128cm、幅は46cmで、深さが29cmを測る。

出土遺物には甕ないしは壺の体部片がある。これからみてこの土壙の時期は、弥生時代後期とみられる。（弘田）

土壙20（第1299図）

ＢＰ16区に位置する土壙で、平面形は円形を呈し、断面形が箱型をなす。規模は、長さが88cm、幅は82cmで、深さが47cmを測る。

出土遺物には、甕の口縁部片311がある。口縁端部が上方に拡張して内傾する面をなす。この土壙の時期は、弥・後・Ⅲである。（弘田）

土壙21（第1300図）

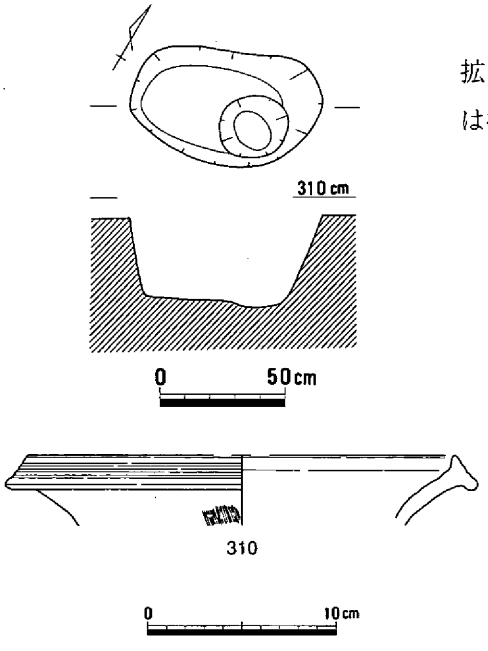
ＢＰ17区の北西部に位置する土壙であり、平面形は不整楕円形を呈し、断面形は椀状を呈す。規模は、長さが92cm、幅は69cm、深さが24cmを測る。

出土遺物には図示できるものはないが、埋土などからみてこの土壙の時期は、弥生時代後期後半と考えられる。（弘田）

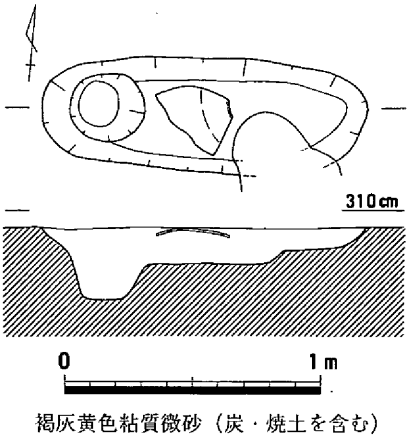
土壙22（第1301図）

ＢＰ17区の北端に位置する土壙で、平面形は円形を呈し、断面形が椀状をなす。規模は、長さが92cm、幅は83cm、深さが24cmを測る。

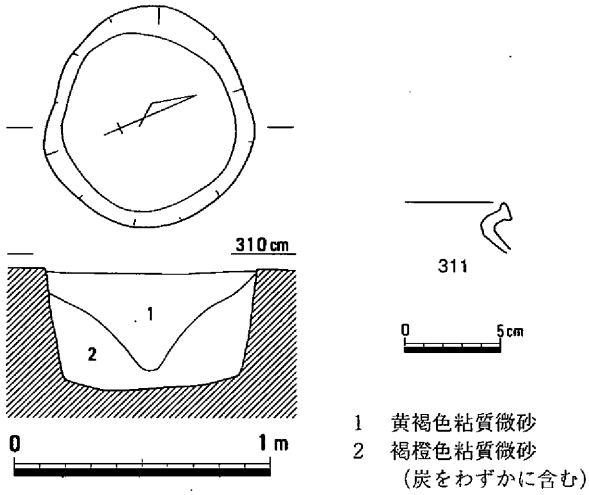
出土した遺物のうち甕312では口縁端部を上方に強く拡張させる。甕313は口縁端部を上に肥厚させ、外面には擬凹線を施す。



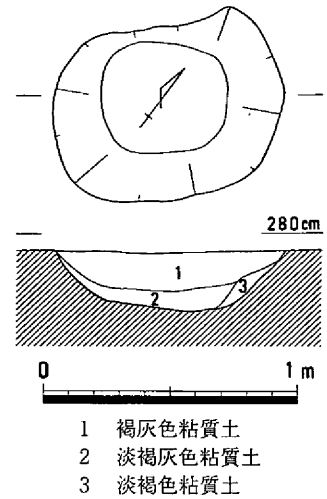
第1297図　土壙18(1/30)・遺物



第1298図　土壙19（1/30）



第1299図　土壙20（1/30）・遺物



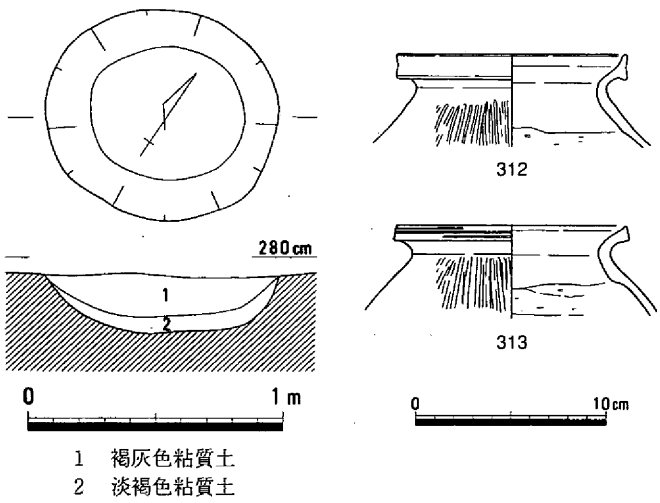
第1300図　土壙21（1/30）

この土壙の時期は、弥・後・Ⅲである。（弘田）

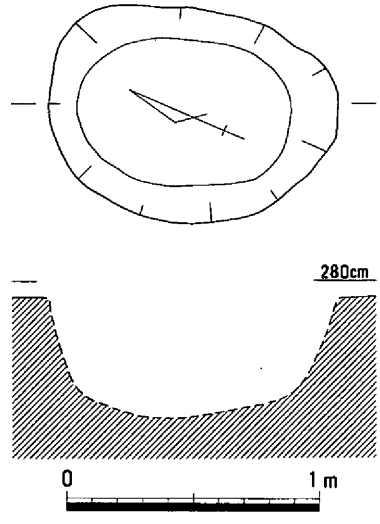
土壙23（第1302～1304図、写真159）

ＢＰ17区の北東部において検出された小土壙であり、平面形は楕円形で、断面形が椀状を呈す。規模は、長さが115cmで、幅は85cmを測る。土壙底が不明確となってしまったが、埋土中には出土遺物が多く見られた。

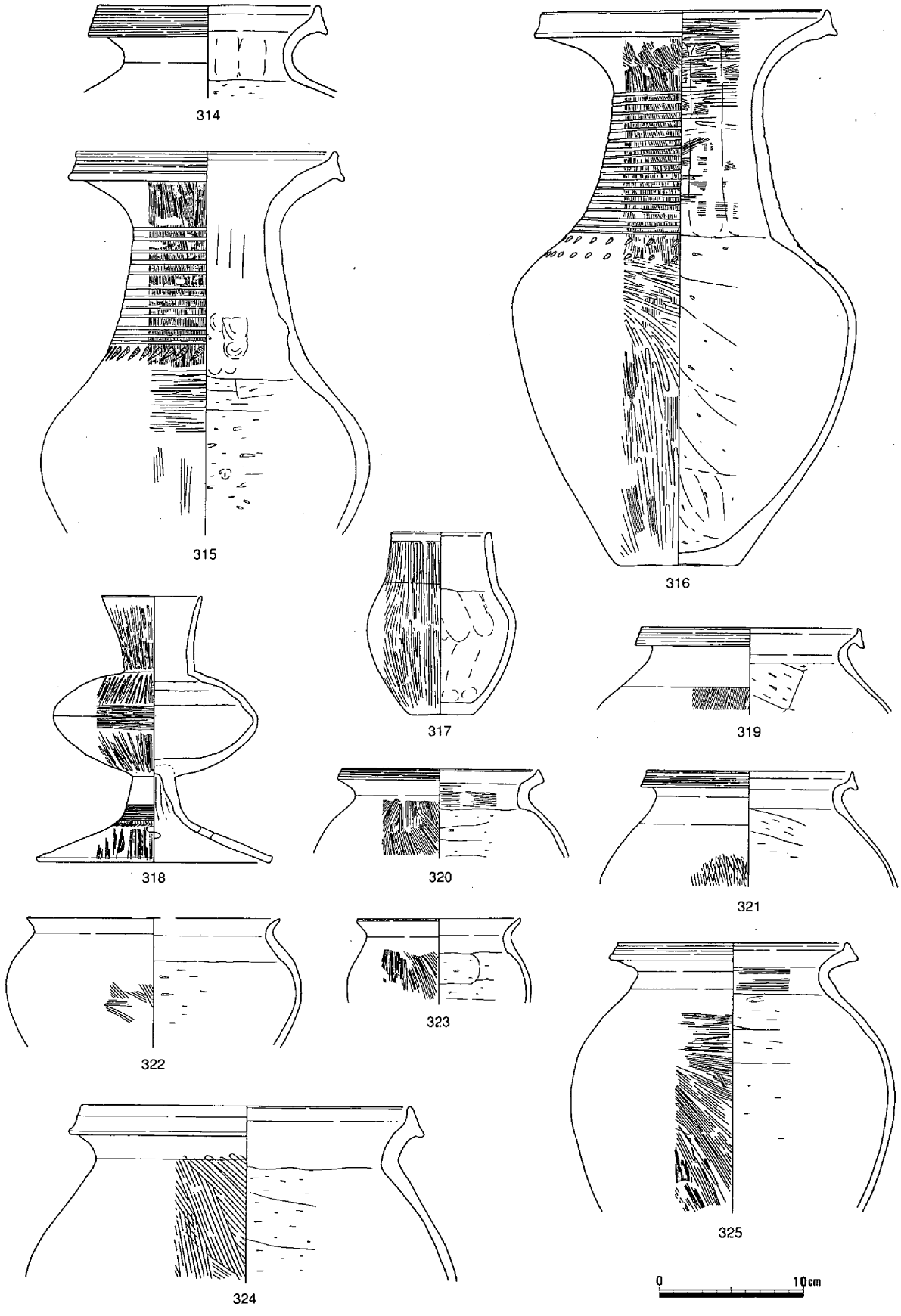
出土遺物をみると、壺では短頸広口壺314と長頸壺315・316、また小型で直立した口縁部をもち、端部が丸く終わる317、さらには偏球形の体部を持つ脚付直口壺318がある。甕には大小があるが、口縁端部を拡張ないしは肥厚させるものと、くの字状の口縁部の端部を丸く納めるものがある。前者では端部外面に凹線を施すものとナデのみの324がある。また、324の底部は上げ底をなしその中心に粘土を充填する。鉢には小型で短く外反する口縁部をもつ328と大型で内湾気味に立ち、口縁端部を内外に肥厚させて、内傾する面には凹線を施す329がある。高杯330～333では、浅い杯部をなし、口縁



第1301図　土壙22（1/30）・遺物



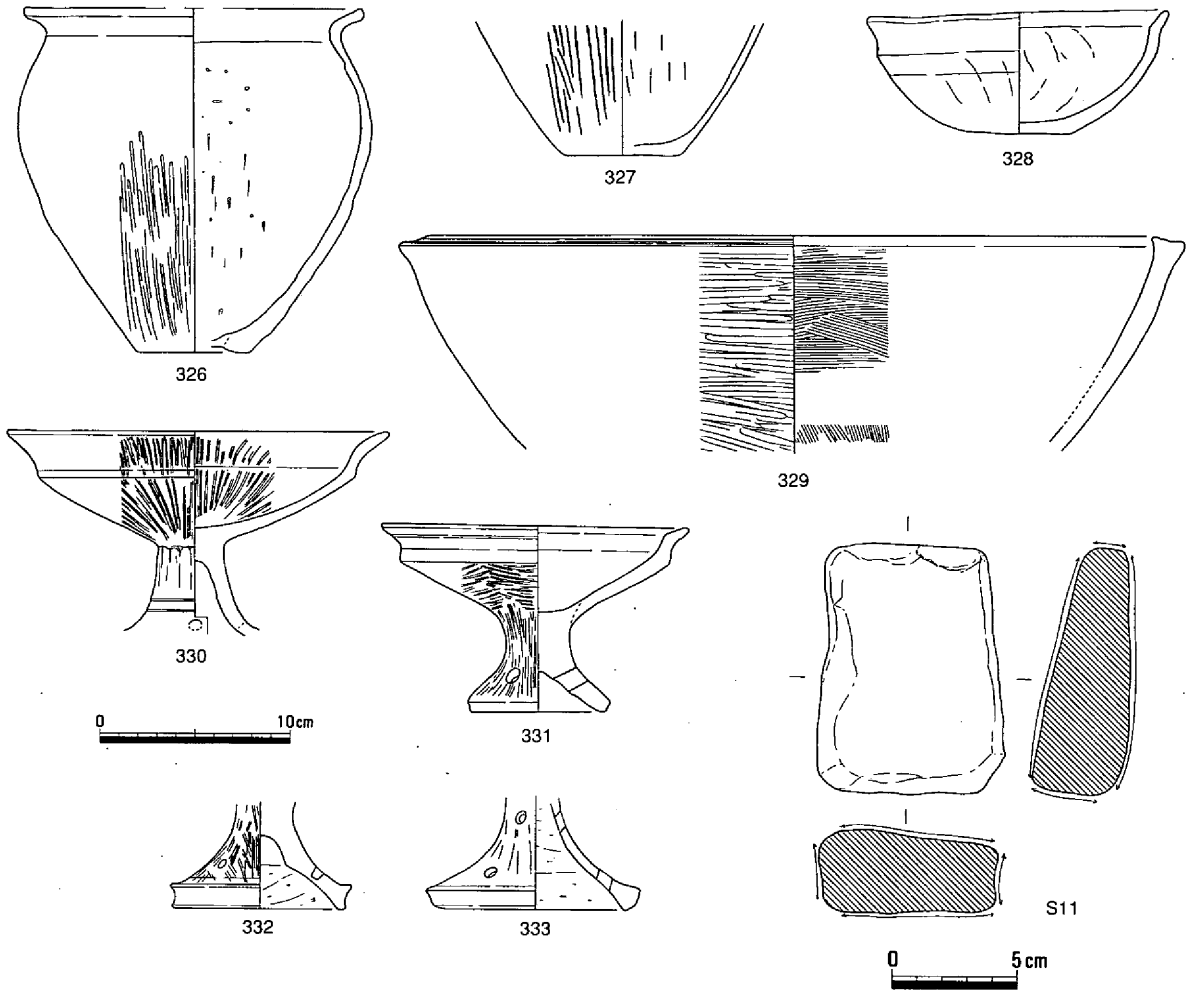
第1302図　土壙23（1/30）



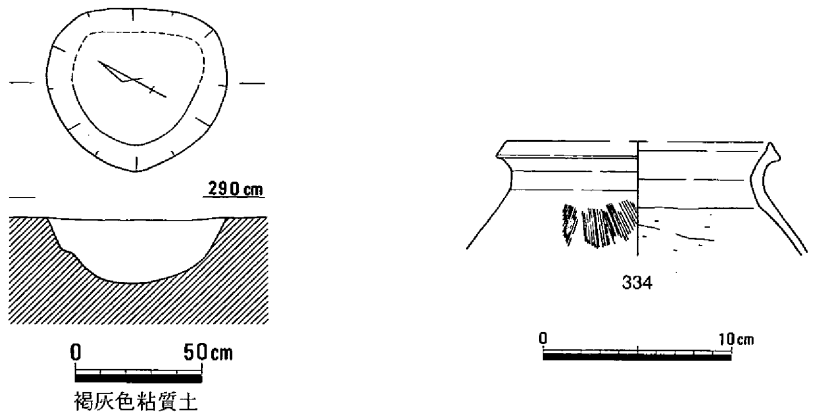
第1303図　土壙23遺物（1/30）（１）

部が強く外湾する330と短く直立したのち外傾する331がある。杯部と脚部とは別作りの接合式である。脚部には、短脚の331以外はラッパ状に広がる裾部をなし、端部は肥厚させて外傾する面をつくる。また、いずれも円形の透かし孔をあけるが、なかには貫通しないもの332もある。さらに、土器以外の遺物としては、砥石S11がある。

以上の遺物からみてこの土壙の時期は、弥・後・Ⅱである。　（弘田）



第1304図　土壙23遺物（２）



第1305図　土壙24（1/30）・遺物

土壙24（第1305図）

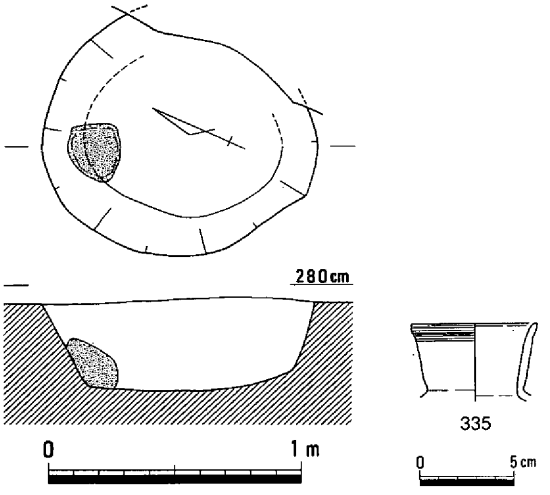
ＢＰ17区に位置する土壙であり、平面形は不整円形で、断面形が椀状を呈す。規模は、長さが71cm、幅は64cm、深さが26cmを測る。

出土遺物は、甕334が１点のみであった。短く外反する口縁部の端部をナデによって上下に肥厚させて、内傾する面をつくる。

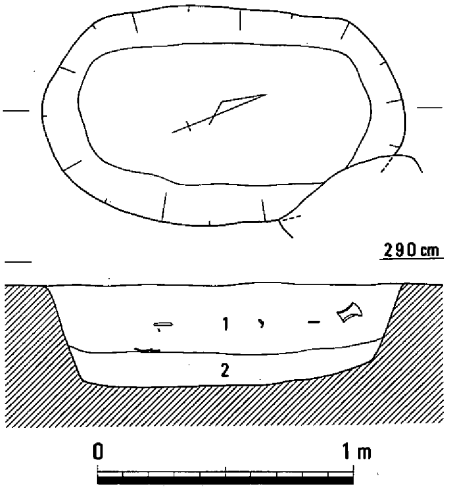
以上の土器の特徴からみてこの土壙の時期は、弥・後・Ⅲである。（弘田）

土壙25（第1306図）

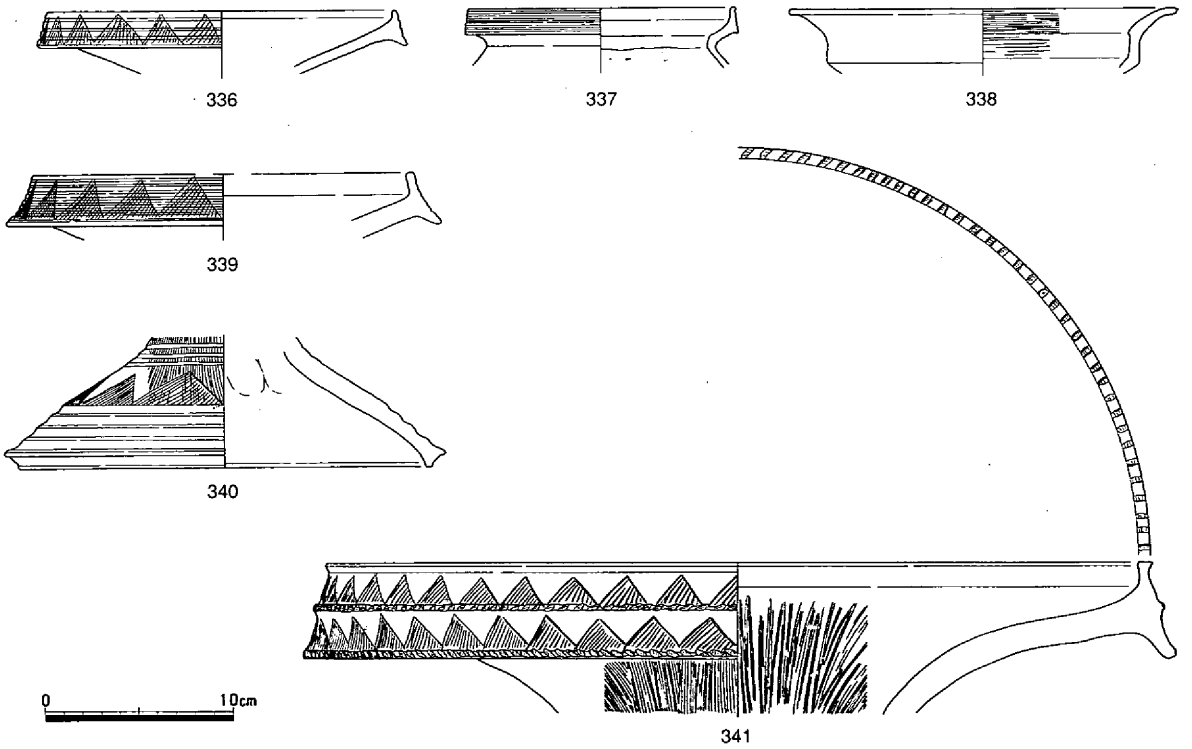
ＢＰ17区の中央部東に位置する土壙である。平面形は円形で、断面形が逆台形を呈し、規模は長さ



第1306図　土壙25(1/30)・遺物



第1307図　土壙26(1/30)



第1308図　土壙26遺物

が104cm、幅は101cmで、深さが37cmを測る。

出土した遺物のうち335は、口縁端部下に沈線をめぐらせる小型の脚付壺である。さらに、良質な粘土塊が土壙底の隅におかれていた。

この土壙の時期は、弥・後・Ⅲである。（弘田）

土壙26（第1307・1308図）

ＢＰ17区に位置する土壙で、平面形は楕円形を、断面形が逆台形状をなす。規模は、長さが142cm、幅は87cm、深さが42cmを測る。

出土遺物をみると、小型の器台336・339はともに口縁端部を上下に拡張させ、外面には複合鋸歯文と凹線文を施す。器台脚部340では、ハの字にひろがる裾部を鋸歯文や凹線で飾る。大型の器台341は、拡張した口縁部の外を上下２列に鋸歯文と刻目文で飾る。甕337は上方に拡張した口縁端部の外面に擬凹線を施す。このほかにも、高杯338がある。

この土壙の時期は、弥・後・Ⅲである。（弘田）

土壙27（第1309図）

ＢＰ17区の南に位置する土壙である。半分以上が調査区外にのびると思われるが、平面形は円形ないしは隅丸方形で、断面形が逆台形状を呈している。規模は、調査範囲で直径が160cm以上とみられ、深さも58cmを測る。

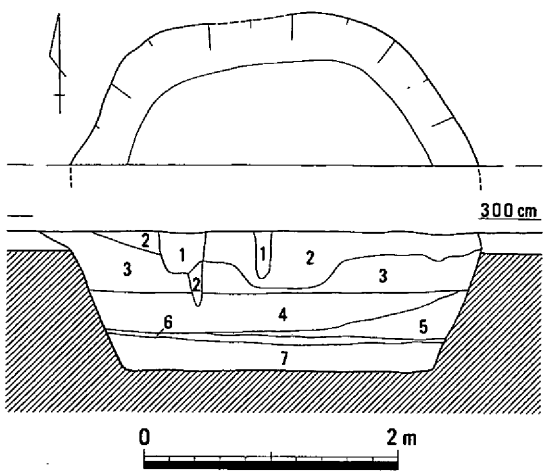
出土遺物はないが、この土壙の時期は、弥生時代後期と考えられる。（弘田）

土壙28（第1310・1311図）

この土壙は、ＢＰ18区の北部に位置する。平面形は隅丸方形で、断面形が椀状を呈している。規模は、長さが71cm、幅は57cmで、深さが38cmを測る。小規模な土壙ながら遺物の出土点数が多く、埋土中には炭も含まれる。

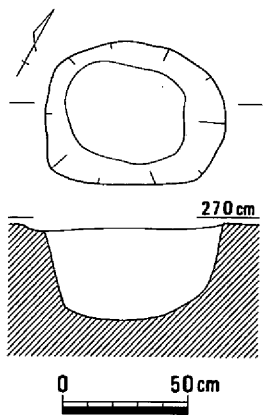
出土遺物には、長頸壺342・343、甕344～346、脚付鉢348と鉢347、さらには高杯349と椀350がある。

以上の遺物からみて、この土壙の時期は、弥・後・Ⅱである。（弘田）



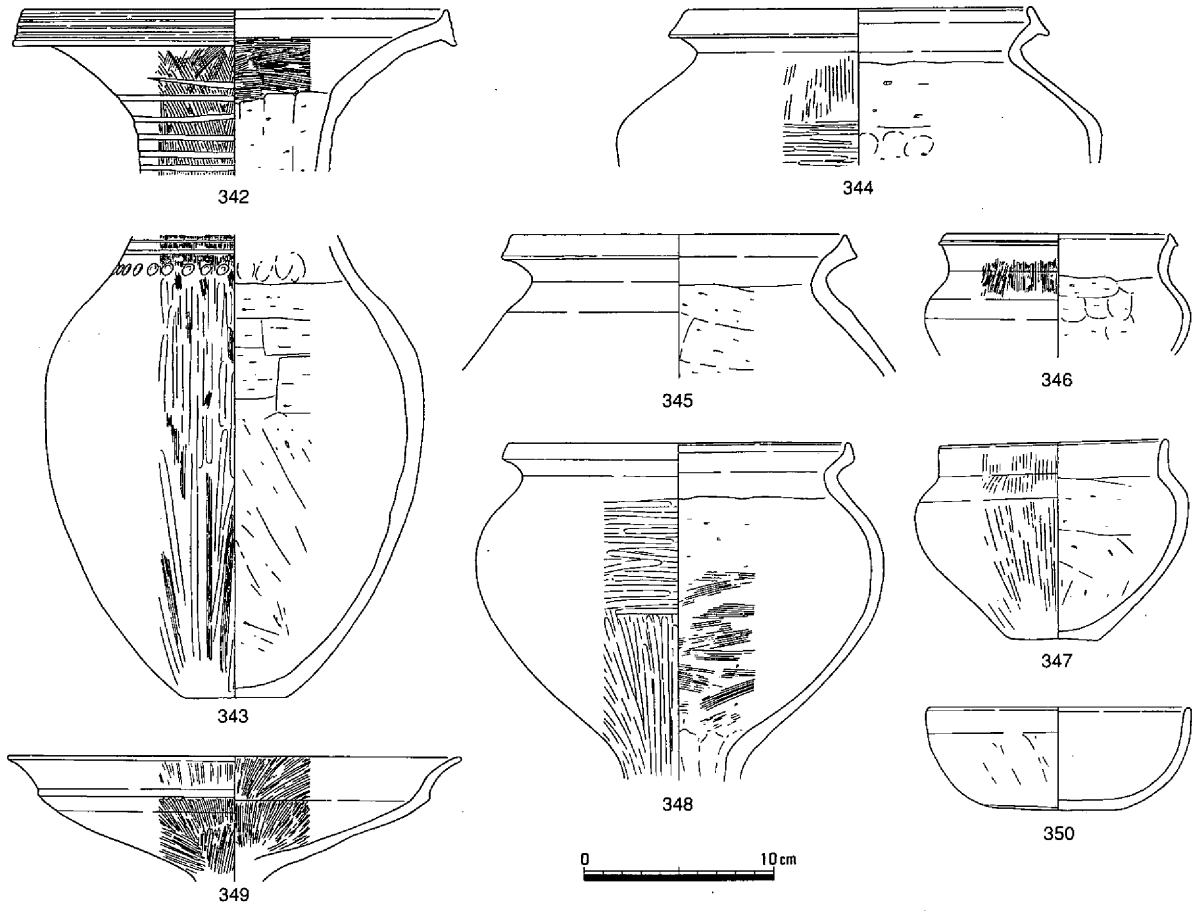
1　灰褐色粘質土　　4　暗黄褐色粘質土　　7　淡褐灰色粘質土
2　暗灰褐色粘質土　5　暗褐色粘質土
3　淡褐色粘質土　　6　橙褐色粘質土

第1309図　土壙27（1/60）



黒褐色粘土
（炭・土器を多量に含む）

第1310図　土壙28（1/30）



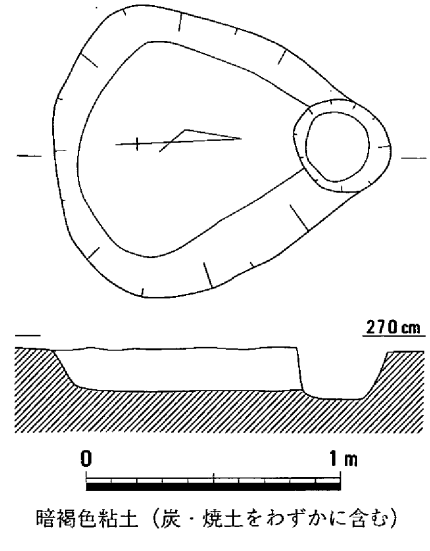
第1311図　土壙28遺物

土壙29（第1312図）

ＢＰ18区のほぼ中央に位置する。平面形は不整方形で、断面形が浅い皿状を呈している。

規模は、長さが122cm、幅は115cmで、深さが18cmを測る。

出土遺物には、図示できるほどの破片はみられないが、周囲の遺構の状況などから判断して弥生後期の可能性が高い。（弘田）



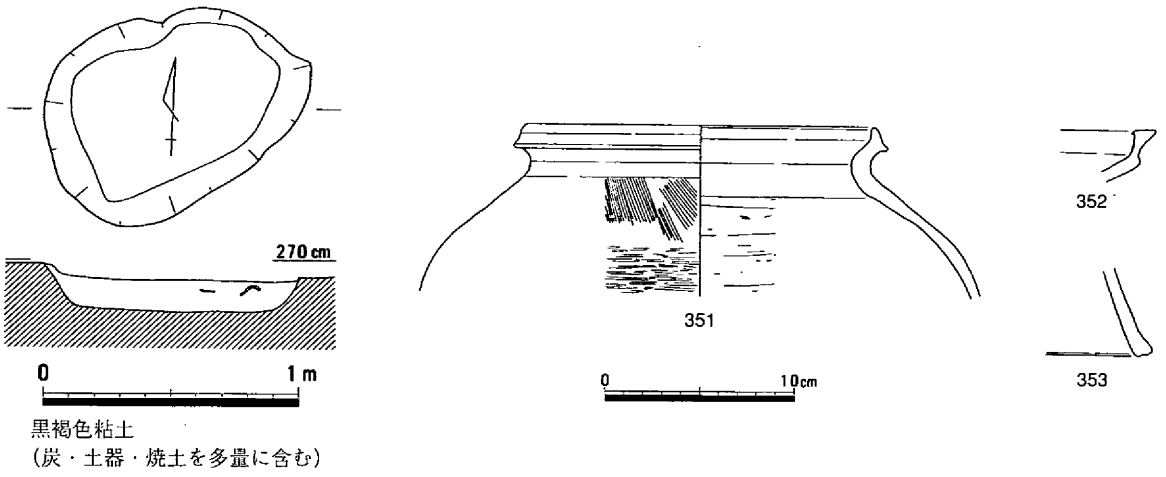
第1312図　土壙29（1/30）

土壙30（第1313図）

この土壙はＢＰ18区に位置する。平面形は不整楕円形で、断面形が浅い皿状を呈す。埋土中には、土器とともに炭や焼土塊を含んでいた。

規模は、長さが109cmで、幅は78cm、深さが19cmを測る。

出土遺物をみると、甕351は口縁部が上下に拡張する。高杯には杯部352と脚部353がある。高杯352が古相を示すものの、脚353脚端部が外傾する面をもって接地する。この土壙が袋状土壙５を切っていることや遺物からこの土壙の時期は、弥・後・Ⅱと思われる。（弘田）

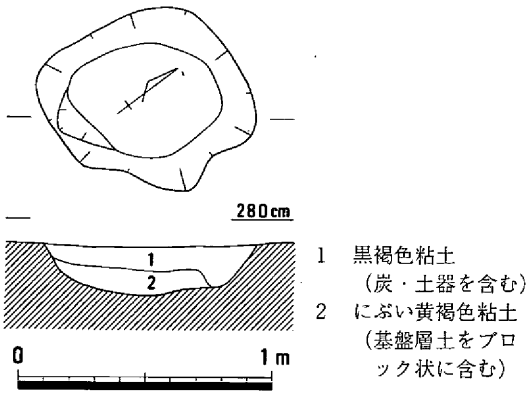


第1313図　土壙30（1/30）・遺物

土壙31（第1314図）

ＢＰ18区に南隅に位置する土壙である。平面形は不整方形であるが、断面形は皿状を呈す。規模は、長さが75cm、幅は73cmで、深さが21cmを測る。埋土は、２層に分かれ上層には炭とともに土器片が、下層には基盤層土がブロックで入っていた。

出土遺物はいずれも小片であり、図示し得るものはないものの、この土壙の時期は、弥生時代後期である。（弘田）



第1314図　土壙31（1/30）

（７）溝

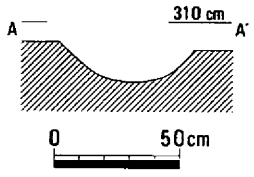
溝１（第1315図）

ＡＰ15区の中央部で検出した短くて浅い溝である。現存長320cm、最大幅90cm、最大の深さ20cmを測る。溝はほぼ東西に直線的に伸びているが、東の方がやや広い。溝の南北では遺構の密度が南側の方が濃い。遺物が出ていないので時期は不明だが、弥生時代であろう。（浅倉）

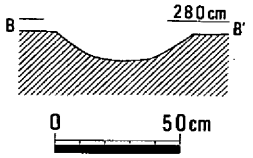
溝２（第1316図）

ＢＰ18区の南に位置し、北東から南西方向に向けての溝である。削平を受けており、長さにして４ｍしか確認できなかった。規模は、幅が50cm程度で、深さは10cm程を測る。

出土遺物は小片がわずかにみられた。それからみてこの溝の時期は、弥生時代後期に属すると考えられる。（弘田）



第1315図　溝１（1/30）



第1316図　溝２（1/30）

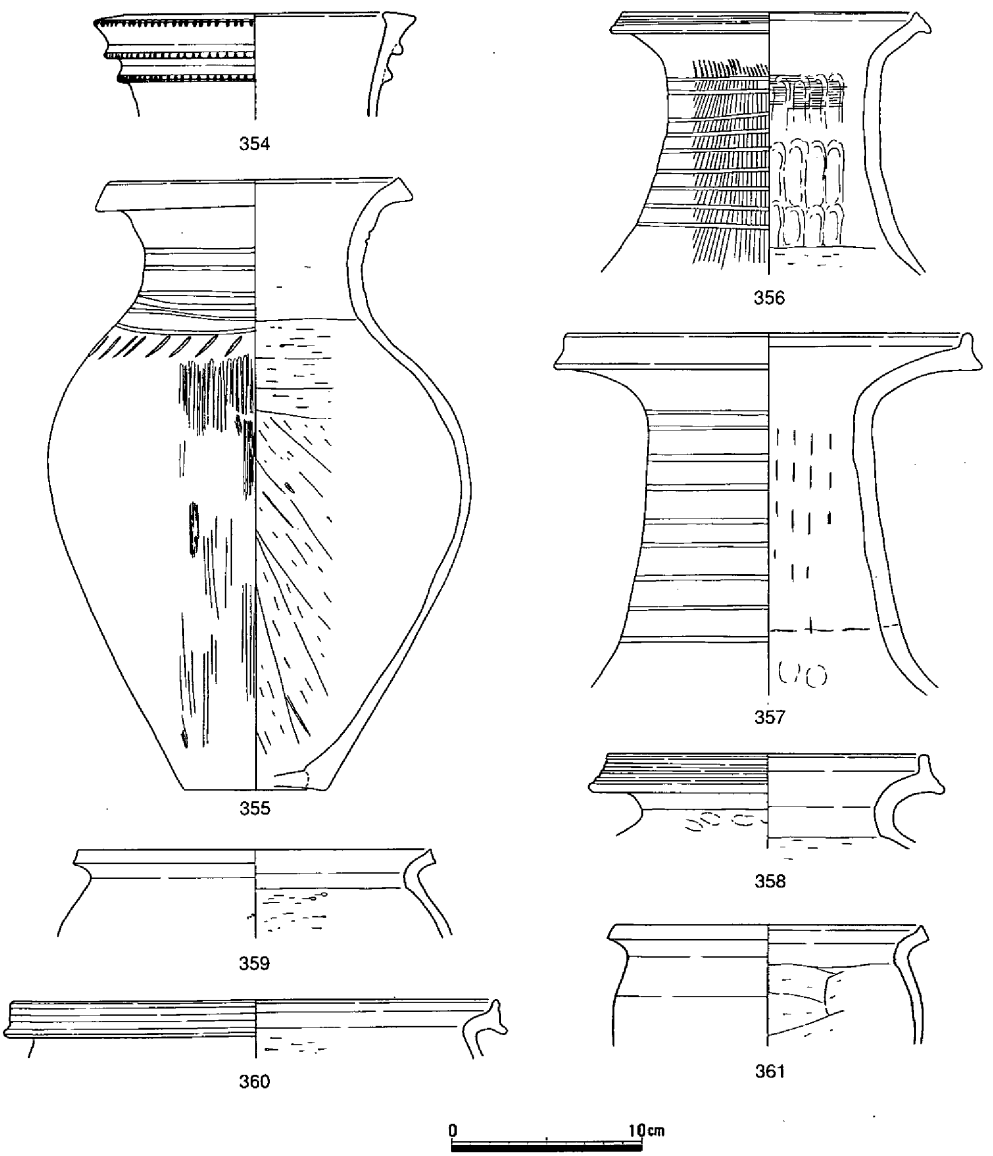
（８）その他の遺構・遺物

上記以外の遺構としては、調査区全域において柱穴がみられたが、東端の立田１区ではその数も少なくなり、後背湿地が近いことが予測される。ただし、確認調査においても水田の存在は知られていない。

図示した遺物は、これらの柱穴内からや遺構検出に伴って出土し、その時期は後期全般にわたり、ごく少量中期に属するものもみられた。

広口壺354は、緩やかに外傾する口縁部に2条の刻目突帯を貼り付ける。また、口縁端部は内側に肥厚させて内傾する面をなし、外端部には刻目がみられる。中期Ⅱにさかのぼる遺物であるが、この時期の遺構は調査範囲内では竪穴住居８以外に確認されていない。

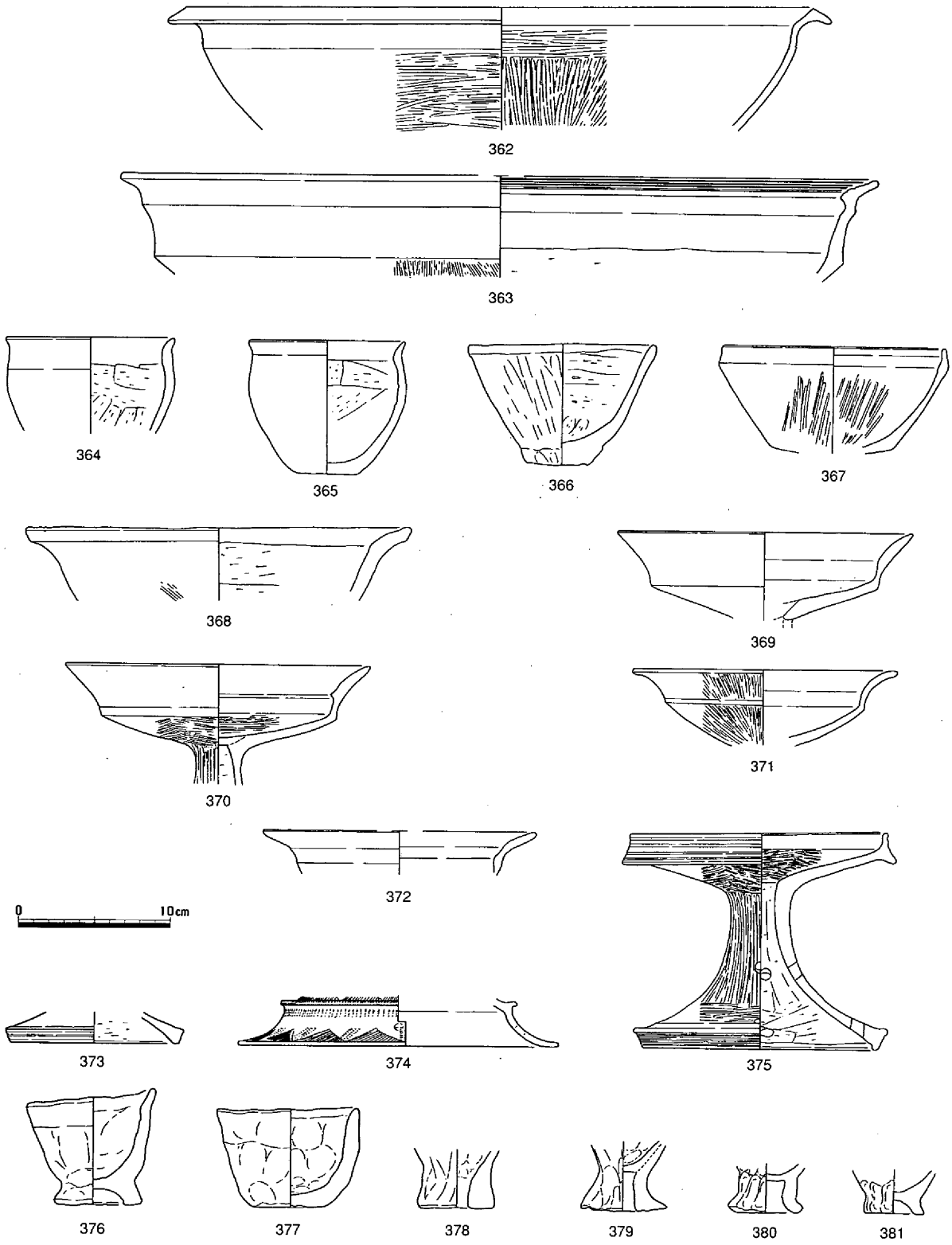
355～357は長頸壺である。このうち355は、ほかと比べて頸部が短くかつ外傾して立ち、また肩部には刺突文で飾る。356・357は、ハの字状の長い頸部をもち、口縁部は強くひらく。さらには、口縁



第1317図　その他の遺物（１）

端部をナデて仕上げる355・357と凹線を施す356がある。358は短頸広口壺で、口縁端部を上部に拡張させて、その端面には凹線を施す。

359～361は甕の口縁部である。359は、口縁端部を上下に肥厚させて内傾する面を持つ。大型の360では上下に拡張した口縁端部に凹線を施す。小型甕361はなで肩の体部をなし、短く外反する口縁部



第1318図　その他の遺物（2）

の端部は上方に肥厚させ、端面はナデる。

362～368は鉢である。大型の362では、頸部から短く外反した口縁部をもち、端部は下方に垂下させる。調整は内外面ともヘラミガキである。同じく大型の363では、口縁部が外上方に直立し、外上方に拡張した端部には凹線を施す。調整は外面をハケ、内面はヘラケズリを施す。小型の鉢には、頸部から短く外反する口縁部がつき端部を丸く納める364・365と口縁部が真っ直ぐに外上方に立つ366、さらに内湾気味に立ち、端部を直立させる367がある。後期Ⅳに属する367は胎土が精良であり、調整は内外面ともにヘラミガキを施す。368は中型で、底部から大きく外傾して立ち、短くひらく口縁部がつく。

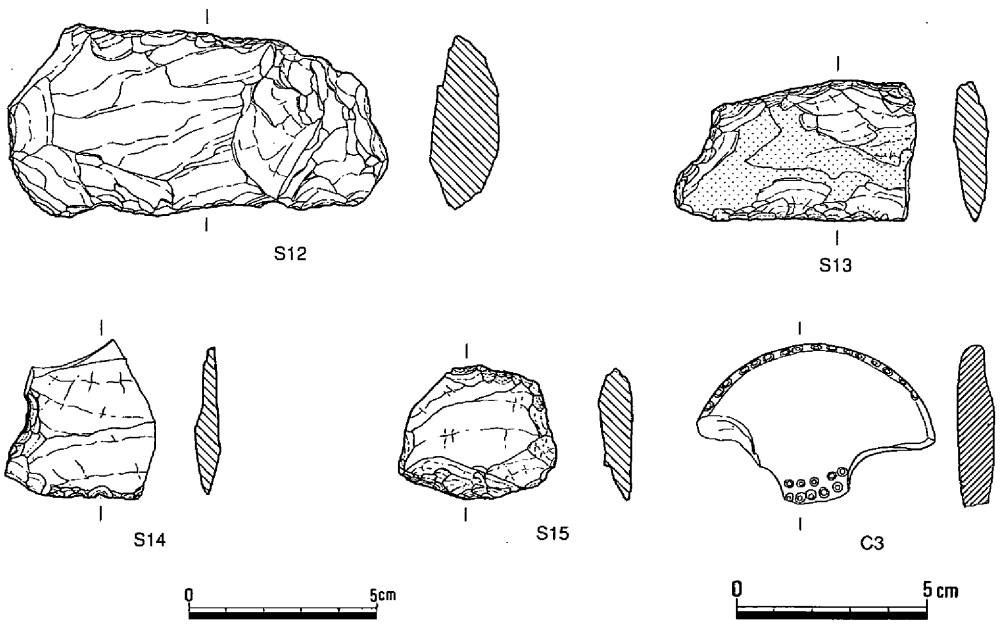
369～374は高杯の杯部である。369・370は短く直立したのち大きく外傾する口縁部をなし円盤充填がみられる。一方371では大きく外湾する口縁部をもち、接合式で脚部との接合を行う。374は装飾高杯の脚部で、貼り付け突帯を境に２段に屈曲して開く裾部には透かし孔を配し、刺突文と複合鋸歯文で飾る。

小型の器台375は高杯と同じ形態の脚部をもち、そこから大きく外反する受け部を連続してつくっている。また、上下に拡張した口縁端部と脚端部にはともに凹線を施す。また、脚部には円形の透かし孔を上下に配する。

376・377は手づくね土器で、脚がつき鉢状を呈する376と椀状の377がある。また、脚台付きの製塩土器378～381は、当遺跡の各遺構中からも多数出土しており、この遺跡における特徴の一つとなっている。

土器以外には石器と土製品がみられた。Ｓ12は石包丁の未製品とみられ、石材種は粘板岩である。Ｓ12～15は、いずれも石材はサヌカイトである。Ｓ13は石包丁で、表面には珪酸が付着する。Ｓ14も石包丁であり、Ｓ15は楔である。

土製品としては、分銅形土製品Ｃ３がみられる。下半部が欠損しているが、最大幅が6.2cmで、厚さは0.9cmを測り、上端面と中央部には竹管文を施している。（弘田）



第1319図　その他の遺物（３）

第３節　古墳時代の遺構・遺物

（１）概要

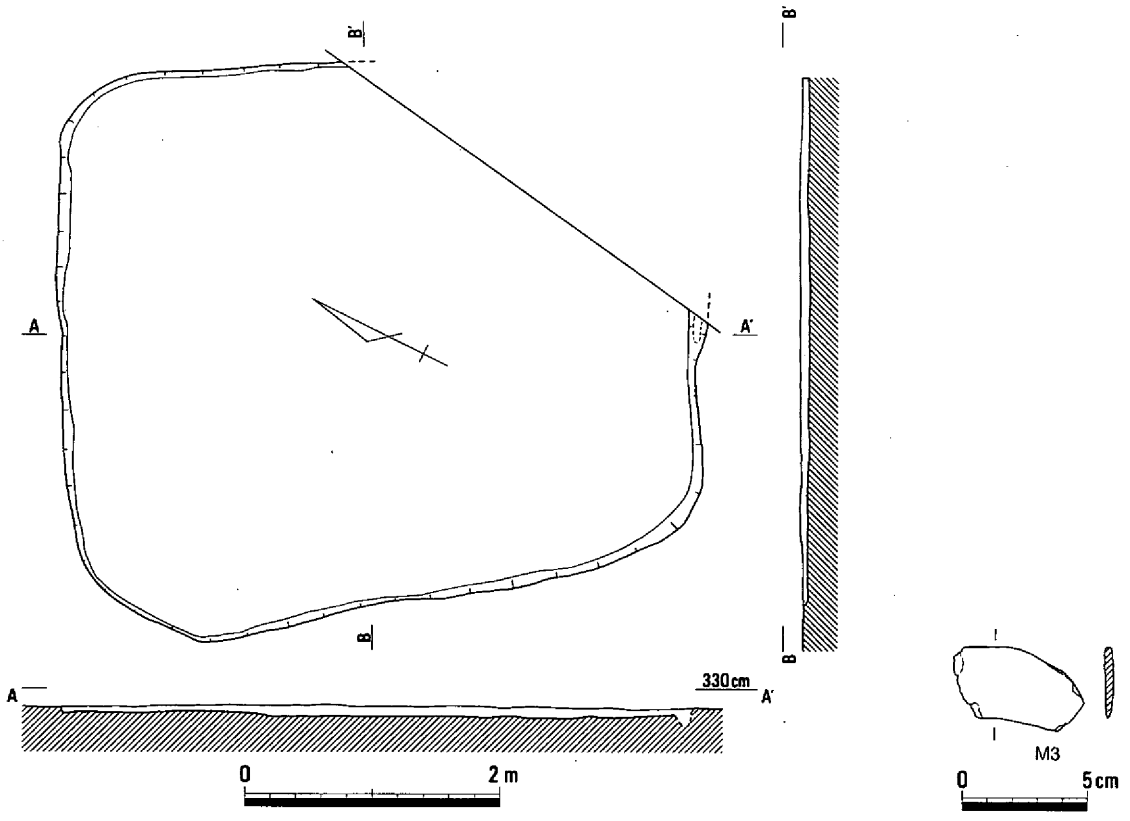
古墳時代の遺構数は、弥生後期の遺構数と比べ激減し、竪穴住居２軒を数えるに過ぎない。これは弥生時代の遺構が少ない高松原古才遺跡と比べて対照的である。この２軒の住居以外の遺構は柱穴も含めてその存在が明らかではなく、出土した遺物の量もごくわずかであった。微高地単位での集落の移動が行われたとみられる。（弘田）

（２）竪穴住居

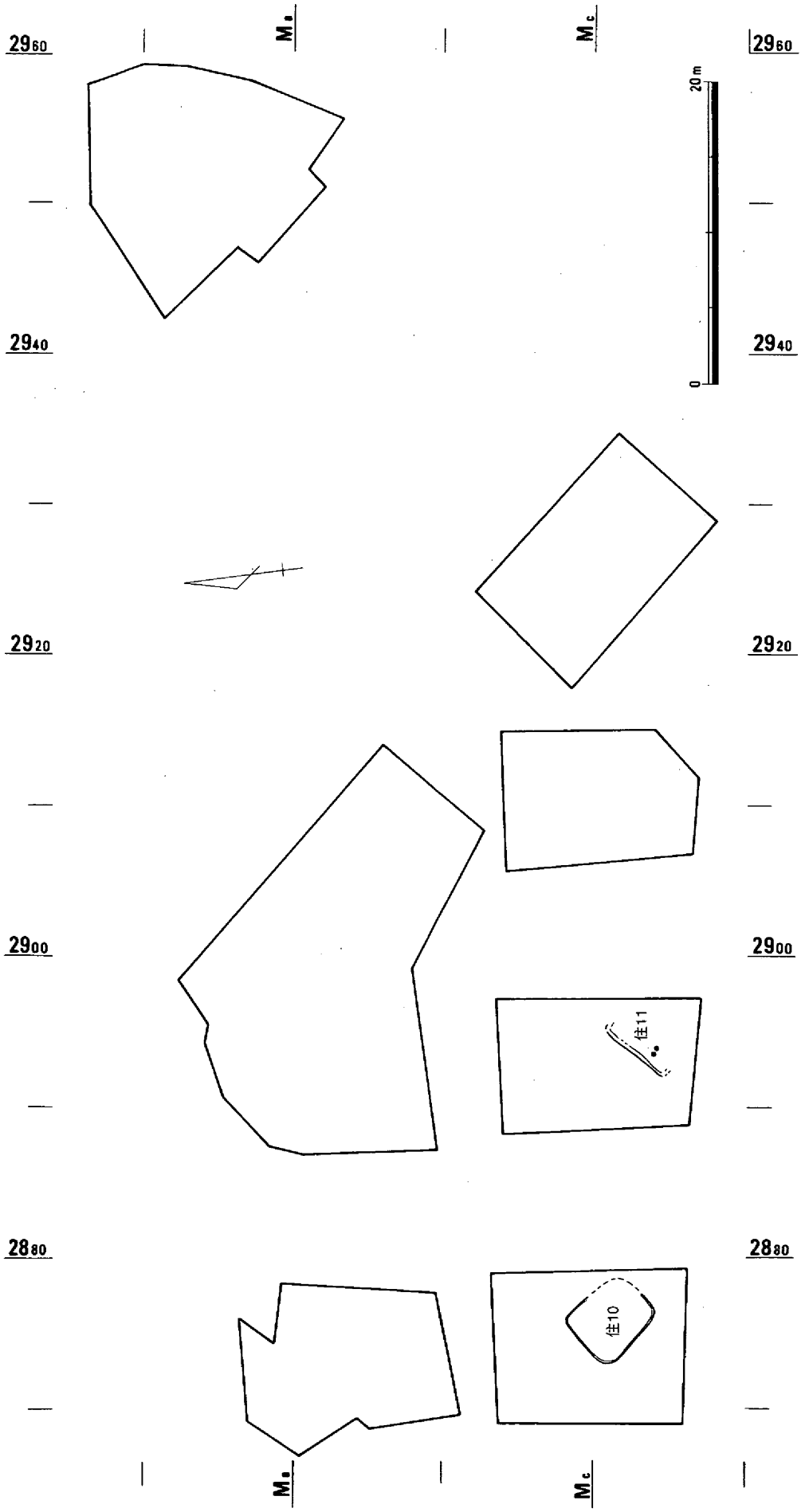
竪穴住居10（第1320図、写真148－1）

ＢＰ15区に位置し、弥生時代の竪穴住居１を切っていた。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺が約５ｍを測るが、深さは検出面からわずかに５㎝であった。柱穴やカマドは見られなかったが、断面において壁体溝が確認された。

出土遺物としては、鉄器Ｍ３がある。鉄製曲刃鎌の茎部から刃部にかけての破片である。土器については図示できるものはなかったが、出土した須恵器の細片からみて住居の時期は、後期Ⅲとみられる。（弘田）



第1320図　竪穴住居10（1/60）・遺物



住は竪穴住居を示している。

第1321図　古墳時代遺構配置図（1/400）

竪穴住居11（第1322図）

ＢＰ16区の南東隅で検出した。大半が調査区外となるが、調査区壁面の土層観察から壁体溝が確認でき、また、平面形も方形とみられた。推定規模は一辺が4.9mである。

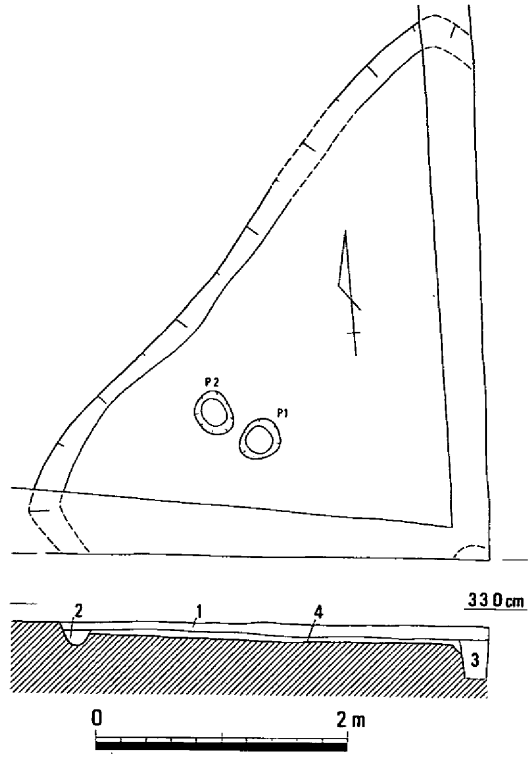
出土遺物から、古墳時代と考えられる。（弘田）

（３）　その他の遺構・遺物

古墳時代の遺構は、先に述べた竪穴住居以外には存在しない。以下の遺物は、住居の周囲や遺構検出中に出土したものである。

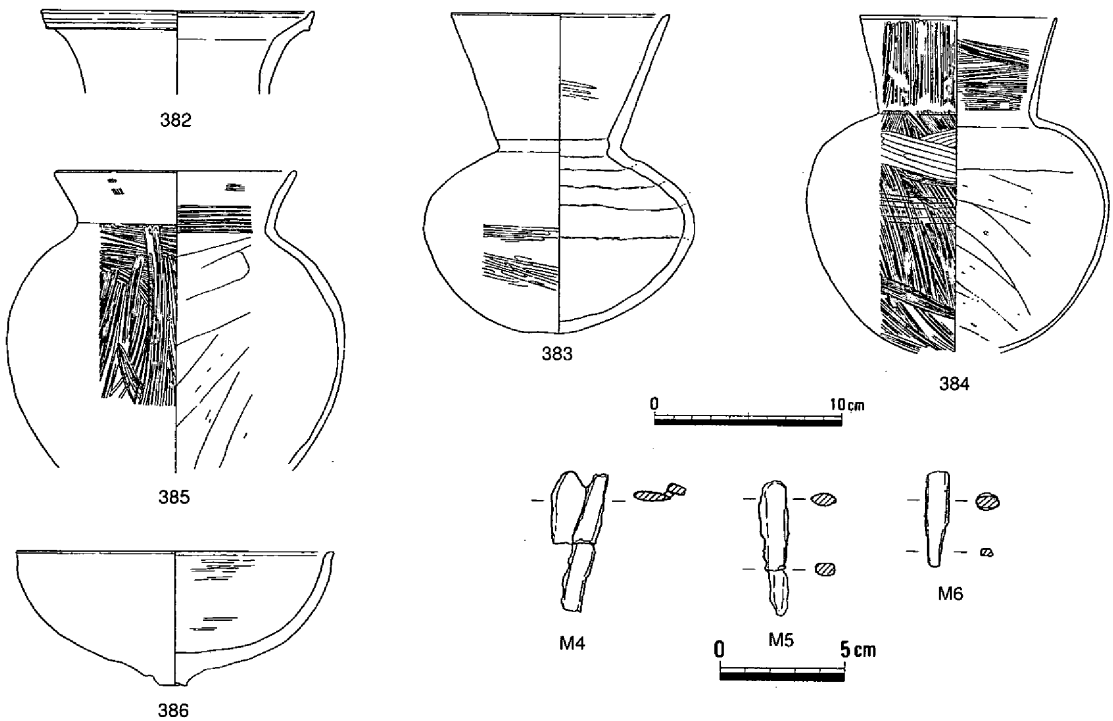
382は須恵器壺の口縁部片である。383・384は直口壺である。383では、偏球形の体部に、真っ直ぐ立つ口縁部がつく。384は外面に平行タタキを行いのちハケを施す。甕385は、外上方に真っ直ぐ立つ口縁部の端部は丸く終わる。386は椀状の杯部をなす高杯である。

鉄鏃Ｍ４～６はいずれも長頸鏃で、弥生時代の竪穴住居１の覆土中として取り上げたが、これと切り合い関係にあった竪穴住居10に伴う可能性がある。（弘田）



1　暗褐色粘質土　3　暗灰褐色粘質土
2　灰褐色粘質土　4　橙褐色粘質土

第1322図　竪穴住居11（1/60）



第1323図　その他の遺物

第４節　古代の遺構・遺物

（１）概要

古代の遺構については、溝２条が検出されたのみで土壙、柱穴などは認められなかった。また、土層断面の検討からみて古代に属する層は存在するとみられるが、面的に調査を行っていないためその広がりについては不明であり、耕作に関わる痕跡も判然とはしなかった。ただし、遺物はわずかながらもみられ、中世の遺構の状況や高松原古才遺跡とのつながりからみて一部では畑などの耕作が行われていたと考えられる。（弘田）

（２）溝

溝３（第1324図）

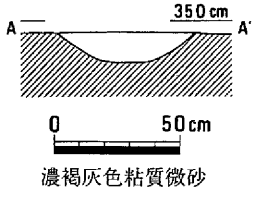
ＡＰ14区の西側拡張区で検出した溝である。規模は、上面での幅が54cm、深さは12cmを測り、断面形をみると浅い椀状を呈する。

時期が明確にできるほどの遺物は出土していないが、中世前期と見られる鋤溝群の下層において検出されかつ弥生時代の遺構面上にあること、また周囲の遺構や遺物出土の状況からみて古代として取り扱った。（弘田）

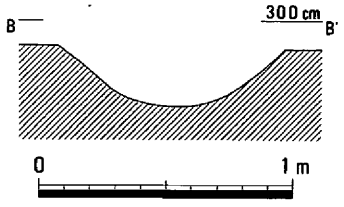
溝４（第1325図）

ＢＰ18区において検出した溝である。北西から南東に向けて流走しており、西に向けては徐々に浅くなって調査区西端では不明瞭になる。規模は、上面での幅が90cm、深さは22cmを測り、断面形は椀状を呈する。

時期が明確にできるほどの遺物は出土していないが、中世前期と見られる鋤溝群の下層において検出されかつ弥生時代の遺構面上にあること、また周囲の遺構や遺物出土の状況からみて古代として取り扱った。（弘田）



第1324図　溝３（1/30）

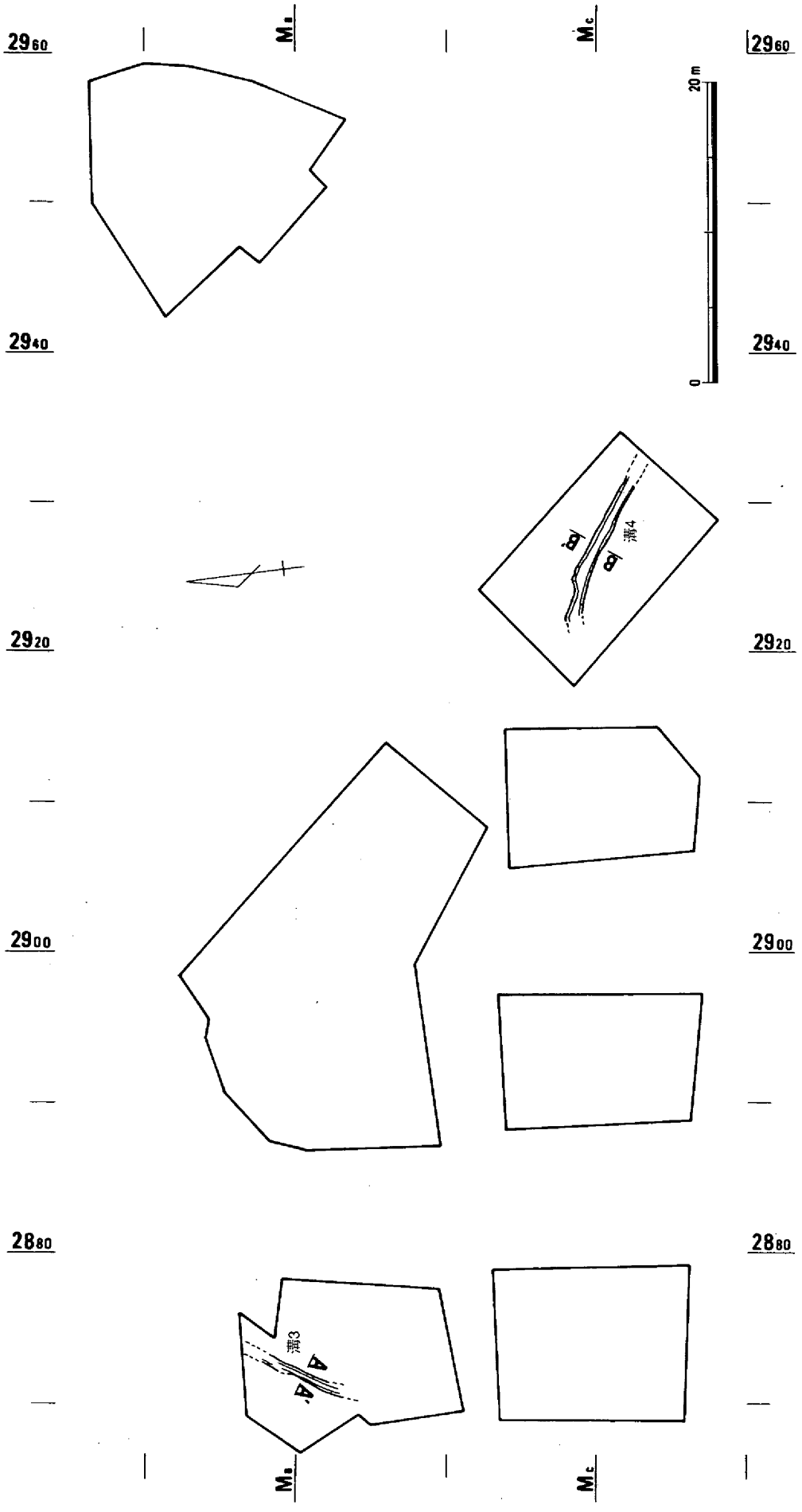


第1325図　溝４（1/30）

（３）その他の遺構・遺物

古代に相当する単純層は確認しておらず、高松原古才遺跡東端の鋤溝痕も広がりをみせず、溝２条以外に遺構は存在しないものの遺物は若干出土している。

387～393は須恵器である。387～388は扁平化したつまみのつく蓋である。高台のつく杯391は口径が12.0cm、器高は3.9cmを測る。392は口径が12.4cm、器高は3.6cmを測る。393は口径が20.0cm、器高は



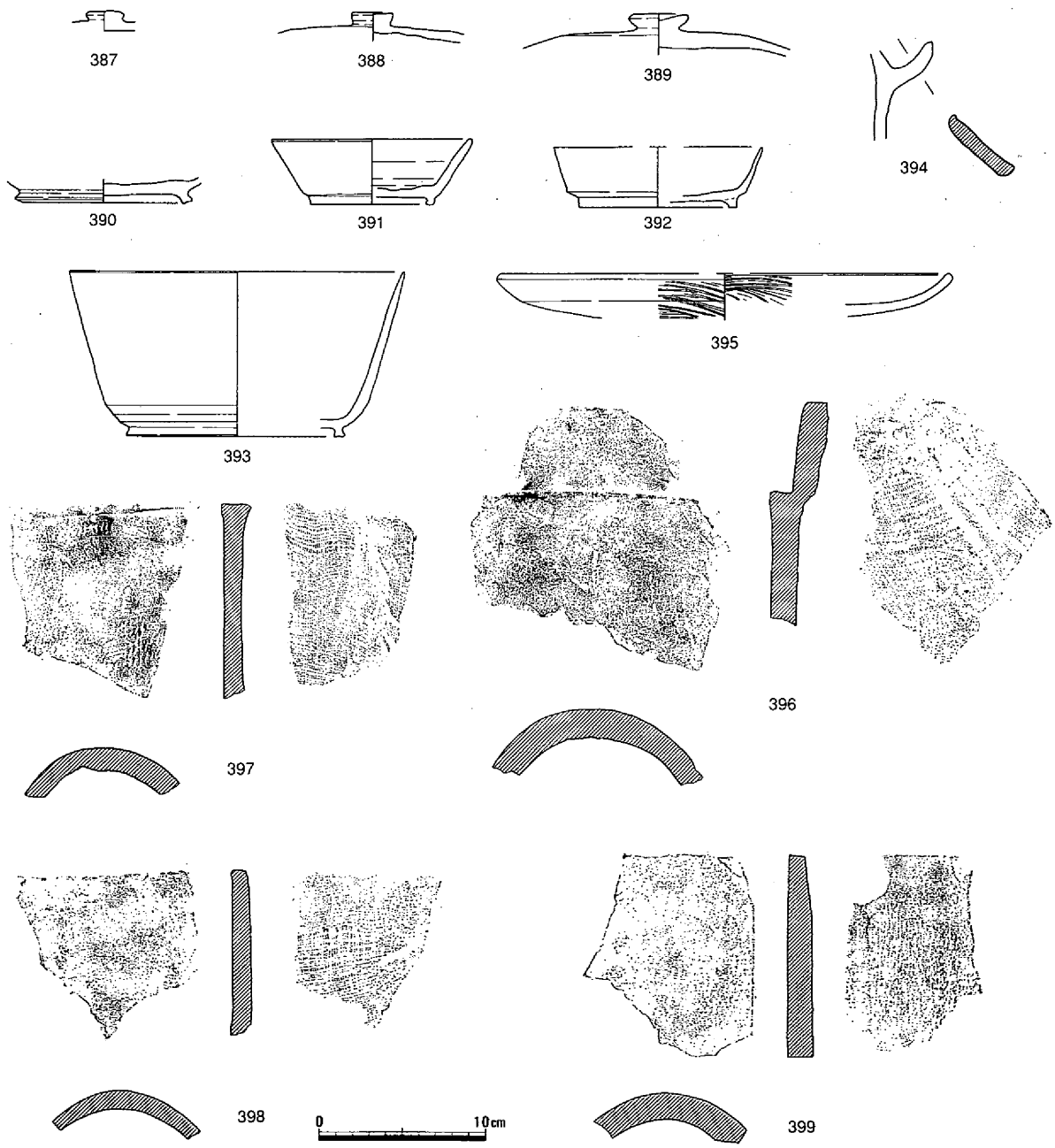
第1326図　古代遺構配置図（1/400）

9.9cmを測る。

394は土師器の鍋類の把手である。395は土師器皿で口径が26.4cmを測る。内外面には暗文風のヘラミガキを施したのち、丹塗りがみられる。

397～399は、すべて丸瓦である。396は行基葺で、凸面には縄目タタキのちナデを施し、凹面には布目痕が残る。397は凸面に縄目タタキを施したのちナデ、凹面には布目痕が残る。398では、凸面に縄目タタキのちナデを施し、凹面には布目痕が残る。399では、凸面には縄目タタキのちナデを施し、凹面には布目痕が残る。

これらの遺物は、時期的には奈良時代の中葉から平安時代初頭に属し、当概期の建物などの遺構が周辺に存在することを暗示させる。　（弘田）



第1327図　その他の遺物

第５節　中世の遺構・遺物

（１）概要

中世に属する遺構としては、溝が２条以上と水田や畑の耕作に伴うとみられる鋤痕跡や格子状・畝状溝群がみられる。水田層と考えられる層には畦畔は認められなかった。また、これ以外には柱穴や土壙などは確認されなかったことから中世段階には全面耕地化していたと思われる。また、耕作痕跡とその方向が一致していることから溝についても灌漑用の水路とみられ、それぞれ東西南北の方位とは約45°斜行した方向にのびていることも高松原古才遺跡と同様であり、この地域の地割に規定させたものと理解できる。（弘田）

（２）溝

溝５（第1328図）

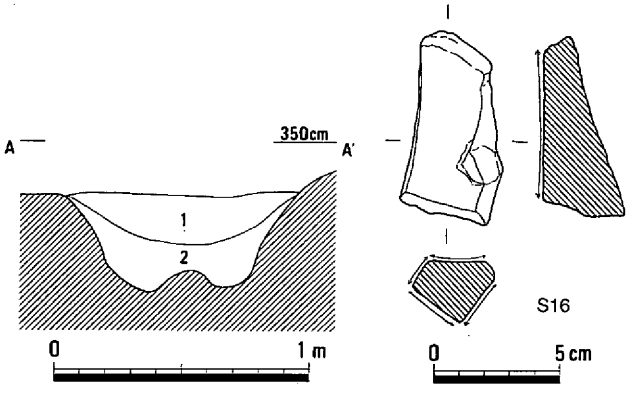
ＢＰ15区の南西部で検出した溝である。北西方向に流走しており高松原古才遺跡の溝18につながると思われるが、南東方向へはのびずにこの調査区内で途切れている。上面での幅が90cmあまりを測り、深さは40cm程を測る。また断面をみると、底面の中央がやや突出した逆台形状を呈している。

出土遺物としては、蛇紋岩製の砥石Ｓ16が１点みられる。このほかには時期を特定できるほどの顕著な遺物の出土をみないが、検出レベルや埋土の状況などから判断して、中世前期に入ると考えられる。（弘田）

溝６（第1329図）

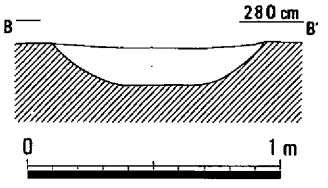
立田１区において検出した溝で、南西から北東方向に向けて直線的に流走し、北側の低位部に流入すると思われる。南側のＢＰ18区には続かないが、この間の高低さは大きく、南が高いことから排水用水路であろう。規模は、上面での幅が84cm、深さは14cmを測り、また、断面をみると浅い椀状を呈している。

遺物の出土を見ないが、この溝の時期は埋土の色調から中世とみてよい。（弘田）



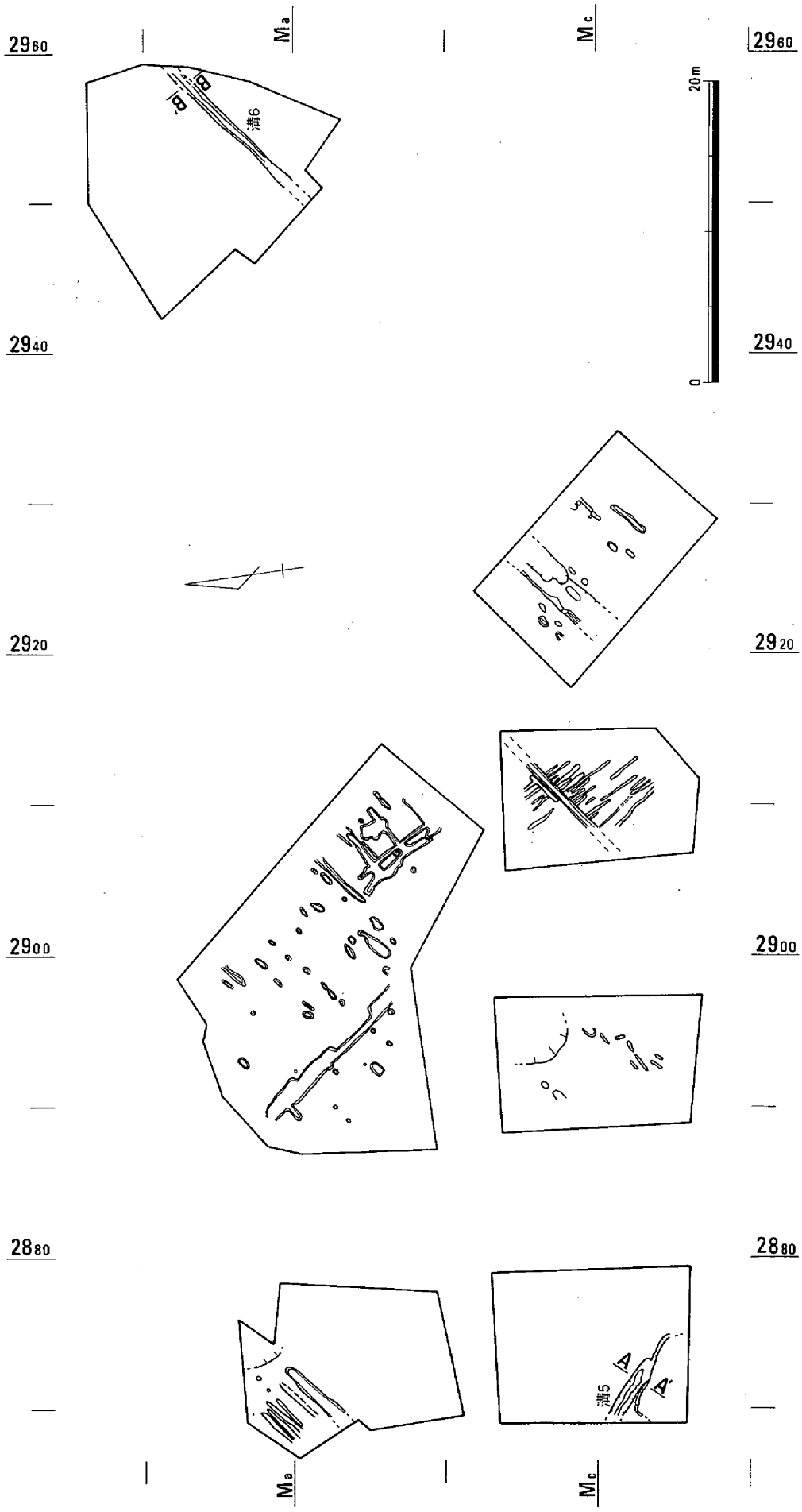
1　にぶい黄褐色微砂混じり粘土
2　褐灰色粘土

第1328図　溝５（1/30）・遺物



暗オリーブ灰色粘土

第1329図　溝６（1/30）



第1330図　中世遺構配置図（1/400）

（3） その他の遺構・遺物

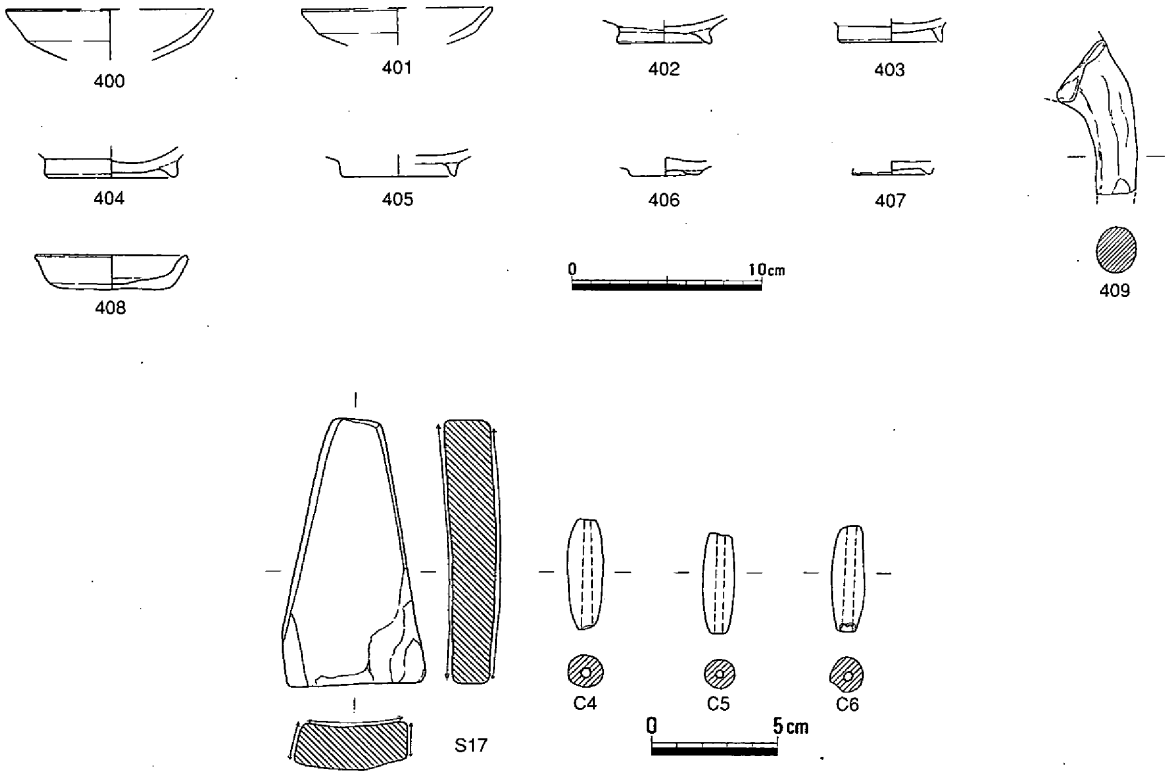
上述した溝以外の遺構としては、調査地のほぼ全体にみられた耕作に伴う鋤溝群がある。ここでは畦畔は確認できなかったが、鉄分やマンガンの沈着から判断して、多いところで３面の水田層が認められた（第1223図：ＢＰ18区６～８層）。この鋤溝の１単位は、幅が30～100cm、深さが５～10cm程度で、それらは南北方位に対して約45°斜行しており、おおくは北西から南東方向に平行にのびるが、場所によっては格子状にしていた。この溝の方向性は、古代の遺構に一部確認できることから、中世段階では先行する地割を踏襲し、さらに拡大していったと思われる。これは河道と河道によって形成された自然堤防といった旧地形に規定された結果とみられる。

遺物についてみると、400～407は吉備系土師器椀である。400・401は口径が10～11cmの間にある。高台は、断面三角形ないしは低い台形であり、底径が5.0～6.0cmの間にある。408は土師器皿で、口径が8.0cmで、器高が1.8cmを測り、底部は糸切りである。さらに、土師器鍋脚409もみられる。

Ｓ17は砥石で、石材種は砂岩ホルンフェルスである。長さが9.5cm、幅は5.5cm、厚さが1.7cmで、重さは170.9ｇを測る。Ｃ４～６は土錘で、長さが4.0～4.4cmで、径は1.2～1.4cm、重さが６～７ｇ程である。

これらの遺物は、13世紀中葉から末葉にかけてのものであるが、とりわけ405・408はＡＰ16・17区の格子状溝群から出土しており、この地域における開墾の年代の一端を明らかにすることができよう。

（弘田）



第1331図　その他の遺物

第2章 まとめ

1　集落の立地

高松原古才遺跡と立田遺跡とは古高梁川の東分流によって形成された自然堤防上に立地する。さらにこの平野部の北側山地に源を発する河道が南北方向に流れこの2つの遺跡を分けている。古墳時代の遺構が自然堤防の高いところに位置するのに対し、弥生時代の遺構の大多数（立田遺跡）が後背湿地に近い自然堤防の北斜面部に立地する。

2　集落の変遷

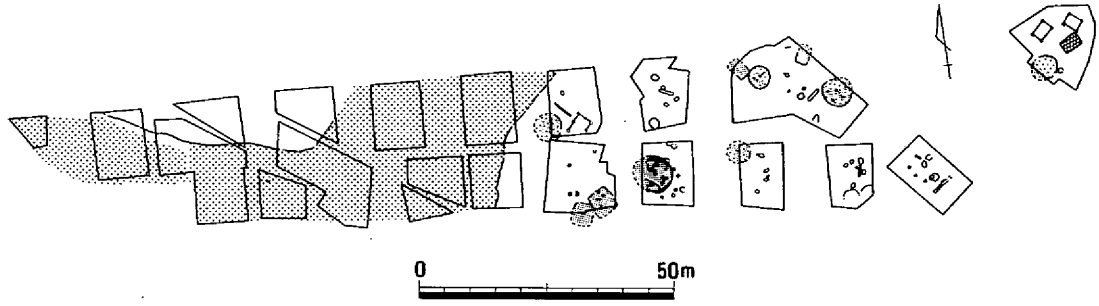
両遺跡において最も古い遺構・遺物は弥生時代中期にさかのぼる。ただし、調査範囲においては、中・Ⅱに属する平面形が長方形の竪穴住居1軒と中・Ⅲに属する袋状土壙1基が存在するのみである。足守川中流域では中期初頭の高田貝塚や中葉の新邸貝塚など沖積地上の集落と前池内遺跡や矢部堀越遺跡など中期後葉における丘陵上の集落が知られていたがいずれも小規模であった。中期後葉における遺跡立地の変動は谷水田開発による母村を中心とした共同体の安定化を目指したものではないだろうか。ところで立田遺跡に隣接する加茂政所遺跡では中期中葉において竪穴住居12軒をはじめとして貝塚など多くの遺構が存在することがあきらかとなり拠点的な集落と位置づけてよいとおもわれる。立田遺跡はその加茂政所遺跡の子村としての位置づけができよう。

弥生時代後期にはいると立田遺跡においてまとまった数の竪穴住居や土壙が散見されるが、後期を前半と後半に分けるた場合に遺構の比率はその二者で大きく変わっている。前半に属する遺構としては井戸1基と袋状土壙4基、そのほかの土壙7基であるが調査範囲内には竪穴住居は存在しない。これに対して後期後半に属する竪穴住居は11軒を数える。このほかにも掘立柱建物4棟がみられるが、周辺にある遺構の状況を考慮して後期と推定するにとどまる。後期後半のなかでも後期Ⅲには集落のひとつのピークを迎えており、この期に属するのは竪穴住居が7軒、土壙14基がある。このうち立田遺跡住居1は最も高いところに位置し、2度の建替によりⅢ～Ⅳにかけて継続する。次の後期Ⅳにも竪穴住居5軒がみられるが貯蔵穴とおもわれる方形土壙はみられず、土壙1基を数えるにすぎない。方形土壙と呼ばれ後期後半段階に一般的にみられる貯蔵穴の欠落は、未掘部分に存在することが考えられるほか子村的集落には存在し得なかったのかもしれない。

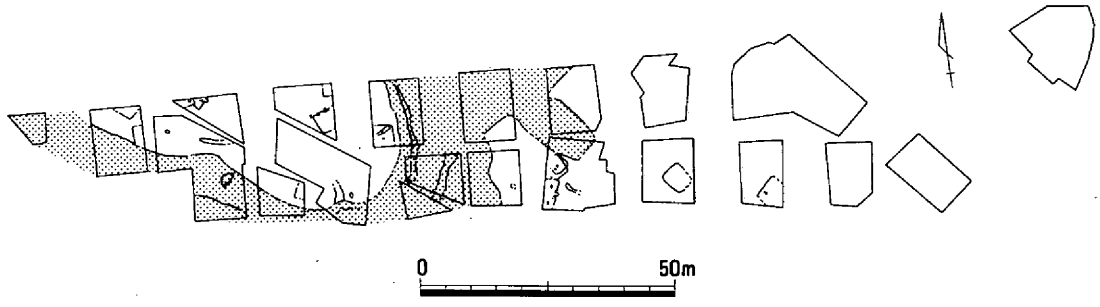
さて後期Ⅲの住居をみると各住居は相互に約20m離れて位置している。これに未掘部分を考慮に入れると最高で10軒ほどの竪穴住居からなる集落を想定してよいと思われる。遺構の切りあいも少なく短期間の小規模集落であった。ただ遺構の切りあいは少なく、この微高地に長期間にわたって連続して生活していたとは考えにくい。ところで立田遺跡から南西1kmに位置する津寺遺跡では推定36,000㎡の微高地部分のうち大部分にあたる30,000㎡を調査しているが、そこでは後期Ⅰ～Ⅱの段階では20軒前後の竪穴住居、後期Ⅰの袋状土壙150余りが存在するのに対し、後期Ⅱの後半からⅢの段階にかけての遺構は皆無に等しかった。このような拠点集落の解体が楯築遺跡を代表とする弥生墳丘墓の出現との係わりで理解する考えもある(1)。当遺跡における後期後半の集落規模拡大もそれとは無関係ではないと思われる。

古墳時代に入ると、高松原古才遺跡に遺構が集中し、竪穴住居8軒、土壙8基、溝数条などがある。一方の立田遺跡では遺構が竪穴住居状遺構4棟のみにとどまり、またそれらは時期も不明瞭であった。

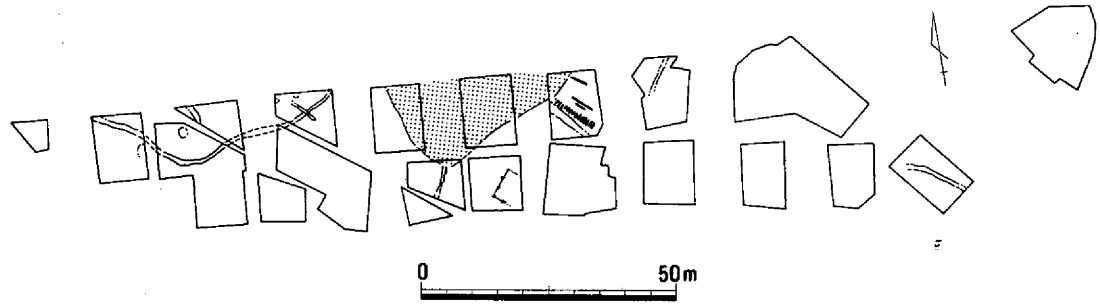
高松原古才遺跡における各遺構の時期は後期Ⅲの段階が中心であり鍛冶炉１基を中心にして周囲の竪穴住居などから鍛錬鍛冶滓が出土しており鍛冶の初期から後半段階までの作業が行われていたとみられる。さて、鍛冶に関連する遺構を多く含み後期Ⅲ段階に新たに形成された集落は津寺遺跡高田調査



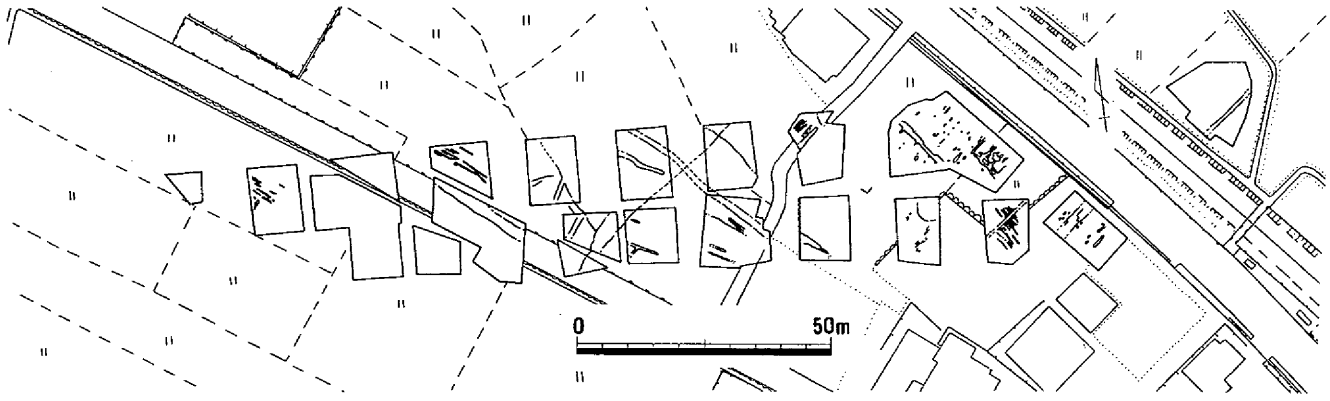
弥生時代



古墳時代



古　代



中　世

第1332図　集落の変遷

区のように従来の微高地の縁辺部に新たに形成された部分を占めている。また、当遺跡のように抉り入り牛角把手をもつ甑や格子叩きのみられるカマドなど朝鮮半島系の遺物みられたが、これは未開地の開拓や鍛冶などの手工業に渡来系氏族が関与したことにほかならないであろう。

古代の遺構としては掘立柱建物１棟と溝、土壙数基が認められるものの河道２埋没後の低位部には水田が、微高地上には畑作に伴うとみられる鋤痕跡が存在する。この遺跡周辺条理制地割は存在しないことは河川の氾濫といった自然的要因が強く作用したからであろう。

中世に入ると柱穴や土壙といった近在に居住域を思われるような遺構は存在せず、ほぼ全域を鋤による耕作痕が認められる。低位部水田は13世紀後半には埋没し、その上層の溝群からみてほぼ全域において水平堆積がみられる。畦畔は確認できなかったが、鉄分やマンガンの沈着から判断して、多いところで３面の水田層が認められた（第1223図：ＢＰ18区６～８層）。この鋤溝の１単位は、幅が30～100cm、深さが５～10cm程度で、それらは南北方位に対して約45°斜行しており、おおくは北西から南東方向に平行にのびるが、場所によっては格子状にしていた。この溝の方向性は、古代の遺構に一部確認できることから、中世段階では先行する地割を踏襲し、さらに拡大していったと思われる。これは古高梁川の東分流によって形成された自然堤防の形状といった旧地形に規定された結果とみられる。やがて近世初頭には備中松山へむかう松山往来として整備されることになるが、その初源は中世段階までさかのぼるであろう。

3　立田遺跡土壙３について

立田遺跡の土壙３は弥生時代後期Ⅱ新～Ⅲ古段階にかけての多くの土器が一括投棄された状況で出土した。破片からの復元率は高く完形になるものも多く、また、大形の土器がめだつことから土器焼成遺構か焼成破損品の廃棄土壙の可能性も考えられたが、熱影響は受けておらず焼成土壙の可能性は低いと思われる。

出土した器種の構成は壺形土器（以下～形土器は略す）でも長頸壺が圧倒的に多く、ついで甕、短頸広口壺が続く。鉢は大形品に限られ、高杯も少量みられるが、専用の器台は存在しなかった。ただし、長頸壺の頸部から肩部にかけての縁を打ち欠いた、もしくはその可能性がある200～206・208・214～216・220～222・225は転用器台とみられる。

そこで口縁と底部についてそれぞれ完形でないものの残存率を16等分で表し、その和を基に最低・最高個体数を出したのが表１である(2)。なお、破片数や重量、個体識別法は行っていない。法量をみると長頸以外の壺にはＬサイズ、胴部最大径30～35cm、器高30～40cmほどが最低６個体（甕のＬと容

表１　土壙３出土弥生土器の組成

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
器種	実測数	割合(%)	口縁残存率	底部残存率	完形数	個体最低数	割合(%)	個体最高数	割合(%)
長頸壺	34	27.00%	25+3/16	8+13/16	5	25+3/16	42.40%	31	37%
細頸壺	1	0.80%	0	0	0	1	1.60%	1	1.20%
広口壺	22	17.40%	6-12/16	12+8/16	4	12+8/16	20.5%	17	20.20%
甕	38	30.20%	12+12/16	13-13/16	4	13+13/16	22.70%	24	28.60%
鉢	9	7.10%	2+10/16	3	1	3	4.90%	5	5.90%
高杯	4	3.20%	3+12/16	11/16	0	3+12/16	6.30%	5	5.90%
製塩土器	1	0.80%	0	8/16	0	1	1.60%	1	1.20%
口縁部片	11	8.70%	9/16	0	0	－	0%	－	0%
底部片	6	4.80%	0	5+4/16	0	－	0%	－	0%
計	126	100%	51+10/16	44+9/16	14	60+14/16	100%	84	100%

量が近い)、それ以上のものも２個体あり、189（最大径46cm、器高49cm）は２Ｌ、192（最大径52.5cm、器高60cm）は３Ｌとする。甕では最大径30～37cm、器高35～40cmのＬが６個体ほど、最大径20cm前後で器高が24～28cmのＭは完形３個体（可能性のあるもの３個体)、それ以下のＳとする。

さて、この土壙にみられるような土器組成が一般的な状態であったのか、あるいは遺構の性格上の問題で特殊な在り方を示しているのか、他遺跡の事例を交えて検討を行いたい。

①　津山市京免遺跡[3]のＳＨ199は後期中葉新段階の火災住居であり、床面出土の土器群は「当時日常用いられていたと想定される器種すべてを含んでおり、土器の法量は５～６人の生活をまかなうのに十分」と指摘されている。壺５、甕３、高杯１、鉢１、転用された器台？（壺の口縁）１、鉢（小型高杯杯部）１で、壺が42%、甕25%でそのほかは10%に満たない。土器の容量をさきの土壙３で示した分類によると、壺のＬが２個体あり、甕はＬが１個体、Ｍが１個体である。

②　『百間川原尾島遺跡３』[4]の土壙１は後期Ⅲに属する土器焼成遺構である。器種構成は長頸壺10、壺７、甕３、台付き鉢１個体が認められた。土壙の面積に出土土器の容量を当てはめると焼成に成功した小形の器種は持ち出されたとしても少量であり、この土壙の組成は需要の一端を示していると思われる。土器の容量は、壺で３Ｌが１個体、Ｌは１個体、Ｍが１個体あり、甕にはＬ以上が１個体とＬが３個体、Ｍが１個体である。

③　『百間川原尾島遺跡４』[5]において弥生土器の器種組成がまとめられている。それによると、壺は後期全体を通して15～27%、鉢は９～17%と比率の変化が小さいのに対し甕と高杯は後期前半にはそれぞれ甕50%と高杯８～17%に対し後期後半においてはその比率が甕25～40%と高杯20～39%となることが指摘されている。そのなかで井戸２の図示された土器の法量をみると、短頸広口壺ではＬが４個体、Ｍが１個体を数える。甕はＬとＭの中間が１個体、Ｍは10個体でＳが５個体であった。

ただ個体数復元の方法として口縁部・底部のそれぞれ破片に付き１個体とカウントしているが、これは本論における最大個体数と比べて実数以上の個体数とならざるをえないであろう。それにしても井戸１基から出土する土器の量は竪穴住居１軒が保有する量を超えており、竪穴住居数棟単位のまとまりあるいは集落全体での廃棄行為と思われる。

むしろ後期３～４の段階において壺が減少し、高杯の比率が増加することこそが重要と思われ、壺の減少傾向とは上東式長頸壺の衰退と理解されよう。

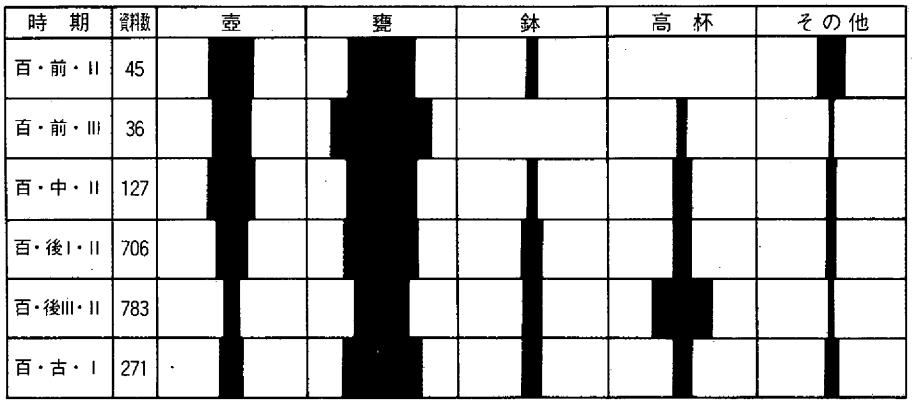
④ 矢部南向遺跡[6]の土壙72では特殊器台・壺・甕・高杯・鉢・製塩土器・ミニチュア土器など約506個体の土器が出土していおり、後期Ⅳの古相を主体として後期Ⅲ～Ⅳ新相を含む土器群である。比率的には甕が最も多く約42%で、ついで高杯26%、鉢が15%、壺が12%であった。

⑤ 五万原遺跡[7]の３号住居は、後期Ⅳ段階の火災住居であり、直径7.2～８ｍの楕円形を呈する竪穴住居である。「床面出土の土器は、住居内の全土器が一住居内で、一時期に用いられた容器の一群」と理解されている。壺が15個体、甕７個体、高杯5個体、鉢1個体、その他４個体が確認されている。そのうち、壺では３Ｌが1個体、Ｌが７個体、Ｍ７個体で、甕はＭが５個体であった。

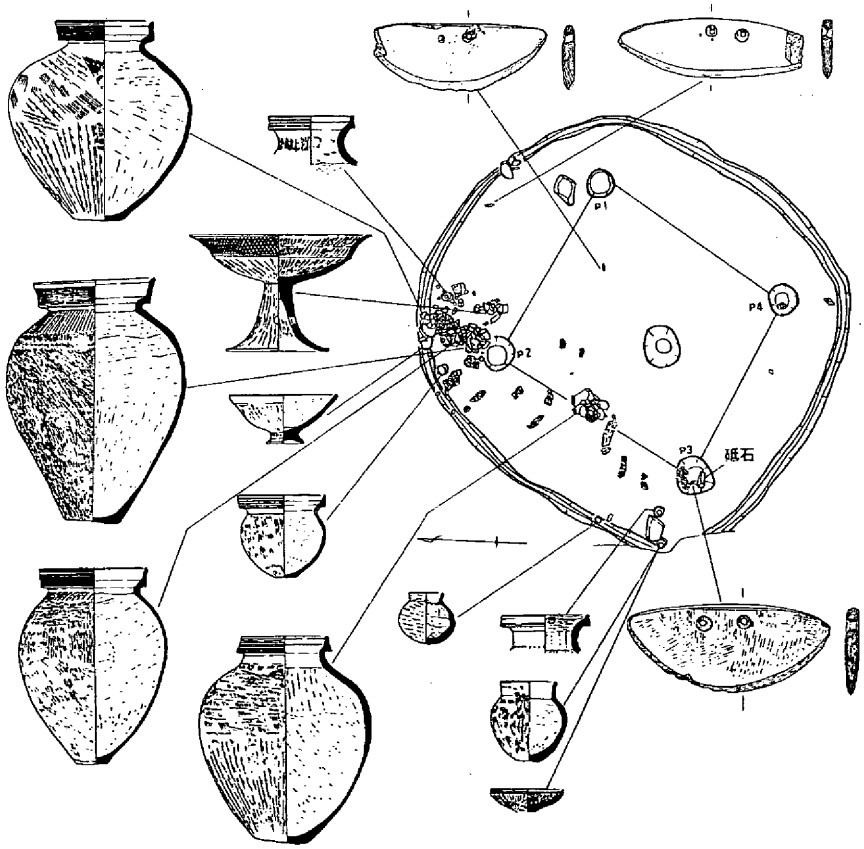
このような土器組成を検討する上では一般的に高杯形や鉢形土器のような供膳用は木製容器の存在が考えられることから土器のみで比較した場合いの比率は低くなると考えられる。煮沸用の甕は破損率が高いことから一遺構における出現率は高くなる。さらに、形態的特徴とは別に実際の用途についての検討と個体数の復元方法についての共通の方法をとる必要もある。そして、土器廃棄のパターンには①住居や井戸ないしは集落自体の廃絶に関わる儀礼後の廃棄。②日常の使用による破損品の集積

（意図的な場合もあると思われる）があり、土器の保有主体も各竪穴住居単位以外にも単位集団や集落全体による所有の場合があったと考えられよう。

さて、以上の事例のうち③・⑤の例と立田遺跡土壙３を除き吉備地域においても後期Ⅱ～Ⅲの間で壺類が減少することはあきらかである。ではその３遺構の例は例外的存在であり偶然性に左右されたものだろうか。この３遺構の土器容量について先に触れた『原尾島遺跡』４の井戸２を比べた場合、壺に限らず甕なども相対的に大きく、また壺には２Ｌ以上のものを必ず含むという共通要素がある。つぎに、立田遺跡土壙３の土器の総量に対して竪穴住居１軒あたりの土器量を①の例を参考に当てはめると６軒程度の竪穴住居に保有されていた土器となる。立田遺跡では竪穴住居７軒が調査され、推



第1333図　百間川遺跡群の時期別器種組成（註5文献より）



第1334図　京免遺跡SH119遺物出土状況

定で最大10軒の存在を想定したが同時併存を考えるとほぼ集落全体の量の土器がこの土壙に投棄されたと考えて差し支えないだろう。都出比呂志は、畿内第Ⅴ様式における土器全般の小型化を土器容量の変化で示し、また、器種組成の変化の中での高杯と鉢の小型化と比重の増大を個人用の食器が土器の形で定着したことの表れとし(8)、また、屋内炉による竪穴住居単位炊飯を想定している(9)。立田遺跡土壙３でみた圧倒的な壺の数と反比例する高杯の数そして小型鉢の欠落といった組成上の特色とは共同体における集落廃絶の儀礼として理解したい。

もう一つ、土壙３を評価する上で重要な点の１つに転用器台の存在がある。長頸壺約17個体に対し器台に転用されたのは14～15個体であることからも長頸壺を受ける台であった可能性が強い。後期Ⅲの段階には弥生器台が特殊器台へと「儀礼的象徴的発展」をとげたとされ、集落においてその姿を消すことになる(10)。しかし、のちも長頸壺とそれを転用した器台によって集落ないにおける農耕祭祀がとりおこなわれていたとみなすべきであろう。

『津寺遺跡』５の竪穴住居195は(11)津寺遺跡で唯一の後期Ⅲ段階の遺構であり、楯築墳丘墓の時期であることが注意されている。そこからやはり器台に転用されたとみられる長頸壺が５個体出土しており、口径が27.5～36.4cmといずれも大形である。また、装飾性に富み、そのうち1点からは稚拙ながらも特殊器台の文様を刻むものが存在する。やはり土器の大形化と装飾性の付加は所有主体を示す明確な表示形態であったとおもわれる。つまり、この遺構自体が共同体による集落廃絶儀礼と多いに関わっていたといえるだろう。

註

（１）草原孝典「第Ⅴ章結語　２．弥生時代後期の遺構、遺物について」『吉野口遺跡』 岡山市教育委員会 1998

（２）接合関係にない口縁部の小破片を同一円周上にならべてゆく方法をとった。ただ厳密な個体識別法をとれなかった。

（３）津山市教育委員会『京免・竹ノ下遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集 1982
中山俊紀「弥生集落」『吉備の考古学的研究』（上）　1992

（４）岡山県教育委員会『百間川原尾島遺跡』３ 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88 1995

（５）高田恭一郎「第４章まとめ 第２節弥生土器について 2.器種組成」『百間川原尾島遺跡』４ 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97 岡山県教育委員会 1995　そのほかにも吉備南部域の弥生後期集落５遺跡について、遺跡全体での土器組成を示したものに中田宗伯「中部瀬戸内における甕形土器の地域性」『吉備の考古学的研究』（上） 1992がある。

（６）岡山県教育委員会「矢部南向遺跡」『足守川河川改修に伴う発掘調査』　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94　1995

（７）「岡山県美星町五万原遺跡」『倉敷考古館集報』第５号 1968

（８）都出比呂志「畿内第Ⅴ様式における土器の変革」『考古学論考』小林行雄博士古希記念論文集 1982

（９）都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』 1989

（10）大橋雅也「器台形土器」『吉備の考古学的研究』（上） 1992

（11）岡山県教育委員会『津寺遺跡』５　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127 1998

遺構一覧表
遺物観察表
遺構名称新旧対照表

遺構一覧表凡例

竪穴住居

・平面形は、床面の形態を示した。
・規模は、壁体溝の下場（外側）の最大値を測り、（数値）は残存値を示した。
・長軸の向きは、柱穴の中点を結んだ軸について、磁北を基準として示しているが、それができない場合は、壁体溝で計測し、() 付きで表した。
・面積は、壁体溝の下場（外側）で囲まれた床面積を測り、（数値）は残存値を表す。
・標高は、床面中央付近の海抜高を示した。
・主柱のＢ／Ａは、住居本来の柱の数をＡ、その内で確認された本数をＢとする。
・高床部は、設けられた辺の数、方形土壙はその数を示した。
・中央穴を伴う場合は○、●はそれが焼けていることを表す。
・焼土面の数値は、中央穴やカマド以外の被熱箇所の数を示した。
・カマドが壁体のほぼ中央に位置するものは○、●は隅に偏ることを表す。

掘立柱建物

・桁行と梁間は、両端の柱穴の直線距離の最大値を示した。
・棟方向は、梁の中点を結んだ線について磁北を基準として表した。

袋状土壙、井戸、土壙、焼成土壙、土壙墓、土器棺墓

・断面形は、壁の立ち上がり形態と床面形態の組合せをもとに記号で示す。壁が上方に向かって狭くなる傾向のあるもの（袋状）をⅠ、垂直に近いもの（筒状）をⅡ、上方に向かって広くなる傾向のもの（逆台形）をⅢとする。床面は平坦なものをａ、比較的中央が窪むものをｂ、比較的中央が高くなるものをｃ、明確な溝が巡るものをｄ、凹凸の著しいものをｅとする。

遺物観察表凡例

・土器以外の遺物の法量と重量は、最大値を示した。
・（数値）は残存値を表すが、土器の口径の場合はその残存率が１／６以下であることを表す。
・色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修　1988年版）を使用した。
・胎土は、それに含まれる砂礫の粒径を示しており、2.0㎜ 以上を礫、2.0 ～1.0㎜ を粗砂、1.0 ～0.5㎜ を細砂、水漉粘土のような場合は精良として表した。このため『新版標準土色帖』等で行われている粒径区分とは異なる。
・土器の煤は、土器全体に及ぶものをＡ、胴部上半に及ぶものをＢ、胴部下半でとどまるものをＣとし、ＢやＣであっても、口縁部に煤が見られるものはＢ’・Ｃ’として示した。
・土器の黒斑は、認められる部位により、口縁部をＡ、胴部をＢ、底部をＣとして示した。

高松原古才遺跡　竪穴住居

遺構名	平面形	規模(cm) 長さ	規模(cm) 幅	長軸の向き	床面積 (m²)	標高 (cm)	主柱	柱間(cm) 最大	柱間(cm) 最小	付属施設 高床部	付属施設 方形土壙	付属施設 中央穴	付属施設 焼土面	付属施設 カマド	時　期	備　考
竪穴住居1	円形	(327)	(178)	—	(4.4)	290	1/?								弥生後期Ⅲ	一部残
竪穴住居2	(方形)	(292)	(117)	(N-19°-E)	(2.6)	279	1/?								弥生後期Ⅳ	一部残
竪穴住居3	(方形)	(422)	(332)	(N-54°-E)	(9.4)	317	3/4	210	153	(2)					弥生後期Ⅳ	一部残
竪穴住居4	(方形)	(280)	(211)	(N-49°-W)	(2.8)	(333)									古墳後期Ⅲ	一部残
竪穴住居5	(方形)	(380)	(92)	(N-24°-E)	(2.8)	(321)									古墳後期Ⅱ	一部残
竪穴住居6	(方形)	(157)	(49)	(N-68°-E)	(0.8)	(323)									古墳後期Ⅲ	一部残
竪穴住居7	(方形)	(244)	(200)	(N-48°-W)	(2.7)	(334)								○	古墳後期	一部残
竪穴住居8	(方形)	(193)	(89)	(N-26°-E)	(1.1)	(311)									古墳後期	一部残
竪穴住居9	方形	403	(378)	(N-20°-W)	(11.1)	332							(1)	○	古墳後期Ⅱ	1/2強残
竪穴住居10	(方形)	(170)	(94)	(N-3°-W)	(1.4)	(340)									古墳後期	一部残
竪穴住居11	(方形)	(361)	(329)	(N-5°-E)	(11.2)	313	1/2					●	(1)		古墳後期Ⅲ	一部残
竪穴住居12	方形	(314)	313	(N-42°-W)	(7.0)	314									古墳後期	約3/4残
竪穴住居13	方形	(427)	(385)	(N-30°-W)	(11.0)	322				(2)					古墳後期Ⅰ	1/2強残
竪穴住居14	方形	(491)	(172)	(N-22°-E)	(5.8)	(344)	2/?	345						○	古墳後期Ⅲ	一部残

高松原古才遺跡　掘立柱建物

遺構名	規模 間数	規模 桁行(cm)	規模 梁間(cm)	柱間距離(cm) 桁	柱間距離(cm) 梁	面積 (m²)	棟方向	柱穴掘り方 平面形	時　期	備　考
掘立柱建物1	(3×2)	355	300	165～192	135～151	(7.9)	N-36°-E	円形	弥生後期	遺物なし　ヤラレ有
掘立柱建物2	3×1	614	216	192～226	216	(6.6)	(N-34°-E)	円形	古代	一部残

高松原古才遺跡　土壙

遺構名	規模(cm) 長さ	規模(cm) 幅	規模(cm) 深さ	平面形	断面形	土器	時　期	備　考
土壙1	(71)	(48)	18	(楕円形)	Ⅲ－a	△	弥生	一部残
土壙2	110	72	22	楕円形	Ⅲ－b	○	弥生後期Ⅲ	
土壙3	(76)	76	35	(楕円形)	Ⅲ－a	○	弥生後期Ⅲ	1/2強残
土壙4	73	71	43	円形	Ⅲ－b	△	弥生後期	
土壙5	76	59	48	楕円形	Ⅲ－b	△	弥生後期	
土壙6	109	51	20	隅丸方形	Ⅲ－a	△	弥生後期	
土壙7	96	76	22	不整方形	Ⅲ－b	△	古墳後期	ヤラレ有
土壙8	79	37	14	楕円形	Ⅲ－b	×	古墳	
土壙9	55	50	10	円形	Ⅲ－b	△	古墳	
土壙10	(62)	82	17	(楕円形)	Ⅲ－a	×	古墳	約1/2残
土壙11	93	84	30	円形	Ⅲ－b	△	古墳	
土壙12	192	(132)		隅丸方形		×	古代	断面なし　ヤラレ有
土壙13	(51)	(39)	(25)	(楕円形)	Ⅲ－b	△	奈良	
土壙14	(57)	100	41	(楕円形)	Ⅲ－b	△	奈良	約1/2残

高松原古才遺跡　土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
1	竪穴住居1	弥生土器	甕	14.9	—	(2.2)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良	沈線4条
2	竪穴住居2	弥生土器	高杯	17.7			鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良	内外面ハケメ
3	竪穴住居3	弥生土器	壺	20.8			橙色(5YR7/6)	粗砂	良	刺突文
4	竪穴住居3	弥生土器	甕	15.0			鈍い褐色(7.5YR6/3)	粗砂	良	
5	竪穴住居3	弥生土器	高杯	(20.2)			橙色(5YR6/6)	細砂	良	
6	竪穴住居3	弥生土器	高杯				橙色(5YR6/6)	細砂	良	外面ヘラミガキ
7	竪穴住居3	弥生土器	高杯		11.6		橙色(5YR6/6)	細砂	良	透かし孔
8	竪穴住居3	弥生土器	鉢	15.8	3.8	6.4	橙色(5YR6/8)	細砂	良	凹線4条
9	土壙2	弥生土器	甕	12.4	—	(11.4)	灰黄褐色(10YR6/2)	礫	良	外面ヘラミガキ
10	土壙2	弥生土器	壺	—	7.0	(16.3)	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良	外面ハケ後ヘラミガキ
11	土壙3	弥生土器	甕	14.0	—	—	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	良	凹線2条
12	土壙3	弥生土器	甕	(14.0)	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良	
13	土壙3	弥生土器	高杯	10.9	7.8	8.6	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良	内外面ハケメ，黒斑A·C
14	土壙4	弥生土器	甕	10.4			灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	良	
15	土壙4	手捏土器	壺	3.7	1.9	3.7	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良	手捏ね，黒斑C
16	河道1	弥生土器	壺	(16.6)	—	—	明赤褐色(2.5YR6/8)	細砂	良	口縁内面格子目文
17	河道1	弥生土器	長頸壺	17.6	—	—	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良	
18	河道1	弥生土器	高杯	—	12.8	—	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	良	外面竹管文
19	河道1	弥生土器	器台	—	(22.0)	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	良	内面ヘラミガキ
20	河道2	弥生土器	壺	15.2	—	—	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良	内面ケズリ
21	河道2	弥生土器	甕	15.0	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	良	内面ケズリ
22	河道2	弥生土器	鉢	(29.0)	—	—	淡赤橙色(2.5YR7/4)	微砂	良	外面ハケ，内面ケズリ
23	河道2	弥生土器	高杯	(21.8)	—	—	赤色(10R5/8)	細砂	良	
24	河道2	弥生土器	高杯	—	16.0	—	橙色(5YR7/8)	細砂	良	外面ヘラ描沈線
25	河道2	弥生土器	高杯	15.2	—	—	明褐灰色(5YR7/2)	微砂	良	
26	溝8	弥生土器	壺	(22.4)	—	—	赤橙色(10R6/6)	微砂	良	口縁内面棒状浮文
27	その他	弥生土器	甕	15.2	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良	
28	その他	弥生土器	甕	(25.0)	—	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	微砂	良	内面ハケ
29	その他	弥生土器	甕	16.0	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	微砂	良	外面平行タタキ，ススA
30	その他	弥生土器	甕	15.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良	外面ミガキ，内面ケズリ，ススB
31	その他	弥生土器	甕	12.2	5.5	23.0	橙色(2.5YR6/8)	礫	良	ススB
32	その他	弥生土器	甕	12.5	4.5	11.5	鈍い黄橙色(10YR7/3)	礫	良	
33	その他	弥生土器	高杯	(14.2)	—	—	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良	2孔一対紐孔，ススA
34	その他	弥生土器	高杯	(18.0)	—	—	橙色(5YR7/6)	精良	良	ヘラミガキ
35	その他	弥生土器	高杯	—	12.0	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良	外面ケズリ
36	竪穴住居4	須恵器	杯身	—	—	—	赤灰色(7.5Y5/1)	細砂	良	
37	竪穴住居4	須恵器	甕	—	—	—	灰白色(10Y7/1)	細砂	良	外面格子タタキ
38	竪穴住居5	須恵器	杯蓋	12.0	—	—	灰白色(10Y7/1)	精良	不良	
39	竪穴住居7	須恵器	杯身	—	—	—	灰色(5Y4/1)	細砂	良	
40	竪穴住居9	須恵器	杯身	12.8		5.0	灰白色(N7/)	精良	良	外面回転ヘラケズリ
41	竪穴住居9	須恵器	高杯	11.8			灰色(N6/)	精良	良	三方透かし
42	竪穴住居11	須恵器	杯身	10.4	—	4.1	灰色(N6/)	細砂	良	ヘラ切り未調整
43	竪穴住居11	土師器	甑	(26.0)	—	—	灰白色(10YR8/2)	細砂	良	内外面ナデ
44	竪穴住居13	須恵器	高杯				灰色(N6/)	細砂	良	外面波状文
45	竪穴住居13	須恵器	杯身	10.1		4.5	灰色(N6/)	細砂	良	外面回転ヘラケズリ
46	竪穴住居13	土師器	壺	13.0			鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良	
47	竪穴住居14	土師器	甑	23.0	10.0	28.9	橙色(5YR6/6)	粗砂	良	紐孔2
48	竪穴住居14	土師器	鍋		17.4		橙色(2.5YR6/6)	礫	良	外面ハケ，内面ケズリ
49	土壙7	須恵器	甕	—	—	—	灰白色(10YR7/1)	細砂	良	外面タタキ後カキメ
50	溝1	須恵器	高杯	—	—	—	灰色(5Y6/1)	精良	良	低脚
51	溝5	土師器	甕	16.0	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	良	内外面ハケメ
52	溝6	須恵器	杯蓋	12.0	—	4.1	明青灰色(10BG7/1)	細砂	良	外面回転ヘラケズリ，歪み有
53	溝6	須恵器	皿	(22.0)	—	(4.1)	灰色(N4/)	細砂	良	外面ヘラケズリ
54	溝6	須恵器	皿	(24.6)	—	(4.9)	暗青灰色(5B4/1)	微砂	良	外面ヘラケズリ
55	溝6	須恵器	壺	17.0	—	—	灰白色(N7/)	細砂	良	
56	溝6	須恵器	?	10.2	—	—	灰色(5Y4/1)	細砂	良	特殊編壺？
57	溝6	土師器	甕	—	—	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	粗砂	良	内外面ハケメ，ススB
58	溝7	須恵器	杯身	—	—	—	灰白色(N7/)	細砂	良	
59	鍛冶炉1	須恵器	杯蓋	—	—	(1.8)	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	良	内外面ナデ
60	鍛冶炉1	須恵器	杯身	11.0	4.0	3.2	灰色(5Y7/1)	細砂	良	ヘラ切り

高松原古才遺跡　土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
61	鍛冶炉1	須恵器	杯身	—	10.9	(2.3)	灰色(5Y6/1)	細砂	良	
62	鍛冶炉1	須恵器	高杯	13.0	9.6	8.8	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	良	
63	鍛冶炉1	須恵器	鉢	—	8.2	(7.8)	灰色(5Y6/1)	細砂	良	外面沈線3条
64	河道1	土師器	壺	16.2	—	31.2	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良	外面ハケ，内面ケズリ，ススC，黒斑B
65	河道2	土師器	甕	13.8	—	19.8	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良	外面ヘラ描き，ススA
66	河道2	土師器	甕	15.0	—	—	灰褐色(5YR6/2)	細砂	良	外面ハケ，内面ケズリ
67	河道2	土師器	壺	—	—	—	淡赤橙色(2.5YR7/4)	微砂	良	外面ハケ，内面指オサエ
68	河道2	土師器	壺	9.0	—	(9.2)	淡橙色(5YR8/4)	粗砂	良	外面ハケ，内面ケズリ
69	河道2	土師器	高杯	17.4	12.8	14.3	橙色(5YR7/6)	細砂	良	透かし孔3
70	河道2	須恵器	杯身	10.9	—	5.2	灰白色(N7/)	細砂	良	ヘラケズリ右回り
71	河道2	須恵器	杯身	(9.4)	—	2.8	灰白色(N7/)	細砂	良	外面ヘラ切り
72	河道2	須恵器	高杯	12.8	8.9	7.8	暗青灰色(10BG3/1)	細砂	良	
73	河道2	須恵器	高杯	(12.1)	9.6	10.4	灰白色(N7/)	精良	良	歪み有
74	河道2	須恵器	はそう	—	3.0	—	灰白色(N7/)	精良	良	ヘラケズリ右回り
75	河道2	須恵器	壺	—	—	—	青灰色(10BG5/1)	細砂	良	ロクロ左回り
76	その他	土師器	甕	16.2			橙色(5YR7/6)	礫	良	外面ハケ，内面ケズリ
77	その他	土師器	高杯	14.8	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	良	内外面ハケメ
78	その他	土師器	高杯	14.0	10.3	11.7	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良	ナデ
79	その他	土師器	高杯	—	10.8	(7.7)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	礫	良	黒斑C
80	その他	土師器	壺	7.3	4.2	6.6	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良	内外面指オサエ，小形
81	その他	土師器	壺	8.2	5.0	8.8	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	良	外面ハケ，小形，黒斑A～C
82	その他	土師器	甕	11.0	—	(12.0)	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良	外面ハケ，内面ケズリ
83	その他	土師器	甕	13.3		14.1	淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	良	歪み有，ススA
84	その他	土師器	甕	(17.6)	—	—	鈍い赤褐色(2.5Y5/4)	細砂	良	外面ミガキ
85	その他	土師器	甕	12.5			赤橙色(10R6/6)	粗砂	良	外面タタキ？ススB
86	その他	土師器	甕	9.7		11.5	赤橙色(10R6/6)	細砂	良	ススA
87	その他	土師器	壺	10.5	—	(8.7)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良	外面ハケ，内面ケズリ
88	その他	土師器	高杯	16.3			鈍い黄橙色(5YR7/3)	粗砂	良	ス ス有
89	その他	須恵器	杯蓋	12.0		5.6	灰白色(N7/)	粗砂	良	ヘラケズリ左回り
90	その他	須恵器	杯蓋	12.5	—	4.1	灰色(N5/)	細砂	良	ヘラケズリ右回り
91	その他	須恵器	杯蓋	12.4		5.5	灰白色(N7/)	細砂	良	自然釉，回転ヘラケズリ
92	その他	須恵器	杯蓋	14.4		4.8	灰色(N6/)	精良	良	外面ヘラケズリ右回り
93	その他	須恵器	杯蓋	(10.5)	—	4.6	灰白色(N7/)	細砂	良	外面ヘラケズリ右回り
94	その他	須恵器	蓋	10.0		3.4	灰白色(N7/)	細砂	良	外面ヘラ切り
95	その他	須恵器	杯身	(10.6)	—	—	灰黄色(2.5Y7/2)	細砂	良	外面ヘラ切り
96	その他	須恵器	杯身	10.0	7.0	3.4	灰色(N6/)	細砂	良	外面ヘラ切り
97	その他	須恵器	杯身	9.3			灰白色(N7/)	細砂	良	外面ヘラ切り
98	その他	須恵器	杯	9.4	—	4.2	灰色(N6/)	微砂	良	外面ヘラ切り
99	その他	須恵器	杯	9.0	7.3	4.0	灰白色(N8/)	細砂	良	外面ヘラ切り
100	その他	須恵器	杯身	11.7		4.0	灰白色(N7/)	精良	良	外面ヘラ切り，歪み有
101	その他	須恵器	杯身	10.4			灰白色(N7/)	精良	良	外面ヘラ切り
102	その他	須恵器	高杯	12.8	9.8	10.6	灰色(N6/)	細砂	良	
103	その他	須恵器	高杯	(22.6)	—	—	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	良	2破片有
104	その他	須恵器	甕	—	—	—	灰白色(N8/)	精良	良	車輪文
105	その他	土師器	甕	12.6		18.1	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	良	ススA
106	その他	須恵器	杯蓋	10.3	—	3.8	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	良	外面回転ヘラケズリ
107	その他	須恵器	杯蓋	10.0	—	3.7	灰白色(N8/)	細砂	良	外面ヘラ切り
108	その他	須恵器	杯蓋	7.8	—	2.5	灰白色(7.5Y7/1)	細砂	良	外面回転ヘラケズリ
109	その他	須恵器	杯蓋	10.3	—	2.8	灰色(N6/)	細砂	良	外面回転ヘラケズリ
110	その他	須恵器	杯蓋	11.6	—	2.3	灰白色(10YR8/1)	細砂	良	外面回転ヘラケズリ
111	その他	須恵器	杯蓋	11.2	—	2.7	灰白色(10YR8/1)	細砂	不良	外面回転ヘラケズリ
112	その他	須恵器	杯蓋	11.7	—	2.3	灰白色(N7/)	細砂	良	外面回転ヘラケズリ
113	その他	須恵器	杯蓋	11.8	—	2.3	灰白色(N7/)	細砂	良	外面回転ヘラケズリ
114	その他	須恵器	杯身	9.6	—	3.9	褐灰色(10YR5/1)	細砂	良	外面回転ヘラケズリ
115	その他	須恵器	甕	—	—	—	灰色(7.5Y6/1)	細砂	良	外面波状文
116	その他	土師器	甕	14.5	—	19.5	鈍い褐色(7.5YR5/3)	細砂	良	
117	その他	土師器	壺		7.0		鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良	平底
118	その他	土師器	甑				鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良	抉り入り把手
119	その他	土師器	甑	25.8			鈍い黄橙色(10YR7/4)	礫	良	抉り入り把手
120	その他	土師器	カマド	—	—	—	鈍い橙色(7.5YR5/4)	粗砂	良	外面格子タタキ

高松原古才遺跡　土器観察表

掲載番号	遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
121	土壙13	須恵器	皿	18.9		5.1	灰白色(N8/)	細砂	不良	ヘラ切り後ナデ
122	土壙13	土師器	甕	25.5			橙色(5YR6/6)	礫	良	内外面ハケメ
123	溝8	須恵器	杯	11.2		3.0	灰色(N6/)	細砂	良	内外面ナデ
124	溝8	須恵器	高杯	12.7			灰白色(N7/)	細砂	良	杯外面ヘラケズリ
125	溝8	須恵器	高杯	13.1		10.5	灰白色(N7/)	精良	良	内外面ナデ
126	溝8	須恵器	高杯	15.7		10.2	灰色(N6/)	微砂	不良	杯外面ヘラケズリ
127	溝8	須恵器	高杯		11.5		灰白色(N7/)	細砂	良	内外面ナデ
128	溝8	土師器	杯	—	—	—	橙色(5YR7/6)	精良	良	内面暗文
129	溝12	土師器	カマド	37.8	—	(6.8)	橙色(7.5YR7/6)	礫	良	雲母多く含む
130	溝12	土師器	カマド	—	—	—	橙色(7.5YR7/6)	礫	良	雲母多く含む
131	溝12	土師器	カマド	—	—	—	橙色(7.5YR7/6)	礫	良	雲母多く含む
132	溝12	須恵器	壺	—	4.3	(2.2)	灰色(5Y6/1)	細砂	良	
133	土器溜り1	須恵器	蓋	—	—	—	灰色(N6/)	微砂	不良	ヘラケズリ右回り
134	土器溜り1	須恵器	蓋	17.1	—	2.8	灰色(N5/)	精良	不良	ヘラケズリ
135	土器溜り1	須恵器	杯	(12.8)	(8.2)	4.4	灰白色(7.5Y8/1)	細砂	良	外面ヘラ切り後ナデ
136	土器溜り1	須恵器	杯	12.0	7.0	5.1	灰白色(N8/)	精良	良	外面ヘラ切り後ナデ
137	土器溜り1	須恵器	杯？	—	10.0	—	灰色(N5/)	細砂	良	内面暗文
138	土器溜り1	土師器	杯	18.6	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良	内面暗文
139	土器溜り1	土師器	杯	19.2	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	良	内外面ナデ
140	土器溜り1	土師器	杯	(19.0)	—	—	橙色(5YR7/6)	細砂	良	内外面ナデ
141	土器溜り1	須恵器	鍋	31.5	—	22.5	灰色(5Y5/1)	細砂	良	外面タタキ後カキメ
142	土器溜り1	土師器	長胴甕	22.0	—	—	明赤褐色(2.5YR5/6)	細砂	良	外面ハケ、内面ケズリ，ススB
143	土器溜り1	土師器	カマド	22.5	48.0	42.2	明赤褐色(5YR5/6)	粗砂	良	ススA
144	河道2	須恵器	高杯	21.4	—	—	灰色(N5/)	精良	良	
145	河道2	須恵器	高杯	24.6	—	—	灰白色(5Y8/1)	精良	良	内外面赤色顔料
146	河道2	土師器	皿	12.4		3.5	橙色(5YR6/6)	精良	良	内外面赤色顔料
147	その他	須恵器	壺？		(9.6)		灰色(N6/)	細砂	良	
148	その他	須恵器	椀	12.0	—	—	灰色(5Y6/1)	細砂	良	
149	その他	須恵器	鉢	—	15.2	—	青灰色(10BG6/1)	精良	良	内外面ナデ
150	その他	土師器	皿	—	(16.8)	—	橙色(2.5YR7/8)	細砂	良	高台付
151	その他	土師器	皿	22.4	9.2	4.1	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	良	ヘラ切り後ナデ
152	その他	土師器	皿	23.3	—	3.9	橙色(5YR6/8)	細砂	良	外底面指オサエ
153	その他	土師器	杯	—	—	—	橙色(2.5YR6/6)	精良	良	内面暗文
154	その他	土師器	皿	7.2	6.0	1.3	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良	外面ヘラ切り
155	その他	黒色土器	椀	—	9.0	(1.4)	褐灰色(7.5YR4/1)	細砂	良	内黒
156	その他	土師器	長胴甕	23.2	—	—	灰褐色(5YR5/2)	粗砂	良	外面ハケ，内面ケズリ
157	その他	土師器	長胴甕	23.8	—	—	明赤褐色(5YR5/8)	粗砂	良	外面ハケ，内面ケズリ
158	その他	土師器	鍋	37.0			鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良	内外面ハケメ，ススA
159	溝13	亀山焼	甕	—	—	—	明青灰色(5PB7/1)	精良	良	外面格子タタキ，内面カキメ
160	溝13	土師器	鉢	22.7	8.0	9.4	灰白色(2.5Y7/1)	細砂	不良	東播系，糸切り底
161	溝13	須恵器	鉢	—	15.1	—	灰白色(N7/)	精良	良	東播系，糸切り底
162	溝13	土師器	甕	(30.0)	—	—	褐色(10YR4/1)	細砂	良	瓦質
163	溝13	土師器	椀	—	6.0	—	灰白色(10Y8/1)	精良	良	内外面ナデ
164	溝13	土師器	椀	—	6.3	—	浅黄色(7.5Y8/3)	粗砂	良	内外面ナデ
165	溝13	土師器	皿	8.8	7.4	1.3	灰白色(10Y8/1)	精良	不良	外面縄目タタキ
166	溝13	瓦	平瓦	—	—	—	灰白色(10Y8/1)	粗砂	不良	外面縄目タタキ
167	溝16	土師器	椀	—	3.9	—	灰白色(10YR8/1)	精良	良	内外面ナデ，高台付
168	溝18	土師器	椀	—	6.0	—	灰白色(10YR8/1)	細砂	良	内外面ナデ，高台付
169	溝23	土師器	椀	(13.5)	—	—	灰白色(10YR8/1)	細砂	良	内外面ナデ，高台付
170	溝25	土師器	椀	11.2	4.8	3.4	灰白色(7.5YR8/2)	細砂	良	内外面ナデ，高台付
171	その他	土師器	椀	(15.0)	6.0	5.3	灰白色(10YR8/1)	精良	良	内外面ナデ，高台付
172	その他	土師器	椀				灰色(7.5Y8/1)	細砂	良	高台付
173	その他	土師器	椀		6.0		灰白色(7.5Y8/1)	細砂	良	重ね焼き痕，高台付
174	その他	土師器	椀	—	5.9	(1.5)	褐灰色(7.5YR4/1)	細砂	良	内外面ナデ
175	その他	土師器	椀		5.1		浅黄橙色(10YR8/3)	精良	良	高台付
176	その他	土師器	椀		3.7		灰白色(7.5Y8/1)	細砂	良	高台付
177	その他	土師器	皿		7.8		灰白色(7.5Y8/1)	精良	良	
178	その他	備前焼	擂鉢	(28.2)			赤色(7.5R4/8)	細砂	良	
179	その他	瓦	丸瓦				灰色(N4/)	細砂	良	長さ12.5cm，幅12.2cm，厚さ2.2cm

高松原古才遺跡　石製品

掲載番号	遺構名	遺物名	材質	法量(cm)			重量(g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ			
S1	河道1	スクレイパー	サヌカイト	4.3	2.9	0.8	11.1	弥生	
S2	河道1	石匙？	サヌカイト	5.3	3.3	0.7	9.7	弥生	
S3	その他	フレイク	サヌカイト	14.7	9.4	2.3	214.5	弥生	
S4	その他	楔？	サヌカイト	3.2	3.1	0.9	9.4	弥生	
S5	その他	楔？	サヌカイト	2.8	2.3	0.5	3.2	弥生	
S6	その他	スクレイパー？	サヌカイト	3.5	3.2	0.6	7.5	弥生	
S7	溝1	勾玉	蛇紋岩？	1.2	1.2	0.3	10.5	古墳後期	
S8	河道2	砥石	流紋岩	8.0	4.7	3.1	164.6	古墳	
S9	河道2	砥石		9.0	6.3	2.8	289.8	古墳	
S10	その他	砥石		8.6	4.5	3.7	181.8	古墳	
S11	その他	砥石	流紋岩(溶岩)	7.7	4.4	2.9	125.0	古墳	
S12	その他	砥石	頁岩	7.2	2.6	1.0	23.4	古墳	

高松原古才遺跡　土製品

掲載番号	遺構名	器種	法量(cm)				重量(g)	色調	胎土	焼成	時期	備考
			長さ	幅	厚さ	孔径						
C1	その他	分銅型土製品	9.1	6.7	2.1	—	(93.2)	橙色(5YR6/6)	細砂	良	弥生後期	
C2	その他	紡錘車	5.1	5.6	0.6	0.4	20.2	鈍い赤褐色(5YR4/3)	細砂	良	弥生後期	
C3	その他	土錘	8.7	2.3	2.4	0.7	44.9	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	良	古墳	
C4	その他	土錘	7.9	2.0	1.9	0.5	25.5	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良	古墳	
C5	その他	土錘	6.9	2.3	1.9	0.5	25.8	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	良	古墳	
C6	その他	土錘	4.3	1.2	1.4	0.2	8.7	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良	古墳	
C7	その他	土錘	3.1	1.9	1.8	0.5	11.0	鈍い橙色(7.5YR6/4)	粗砂	良	古墳	
C8	その他	土錘	(6.5)	2.1	1.5	0.9	(21.9)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良	古墳	

高松原古才遺跡　金属製品

掲載番号	遺構名	器種	材質	法量(cm)			重量(g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ			
M1	竪穴住居9	手鎌	鉄	—	2.0	2.5	—	古墳後期Ⅱ	
M2	竪穴住居9	刀子	鉄		0.9	0.4		古墳後期Ⅱ	
M3	土壙8	紡錘車	鉄	26.9	3.7	0.5	32.0	古墳	
M4	河道2	刀子	鉄	—	1.0	0.3	—	古墳	
M5	その他	柄金具	鉄	3.1	3.4	0.2	13.2	古墳	
M6	その他	耳環	鉄地金銅張	1.9	1.9	0.4	7.0	古墳	
M7	その他	銭	銅	2.5	2.5	—	2.4	中世	天聖元宝
M8	その他	不明	銅	(2.4)	(1.2)	0.2	2.6	中世？	

高松原古才遺跡　ガラス

掲載番号	遺構名	遺物名	材質	法量(cm)				重量(g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ	孔径			
G1	竪穴住居1	小玉	ガラス	0.4	0.4	0.3	0.2	0.1	弥生後期	色調　青

高松原古才遺跡　遺構名称新旧対照表

竪穴住居

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
竪穴住居1	ＡＰ14	ＳＨ－０１	浅　倉
竪穴住居2	ＢＰ14	住4	弘　田
竪穴住居3	ＢＰ14	住1(農道下)	〃
竪穴住居4	ＡＰ9	ＳＨ－０２	正　岡
竪穴住居5	ＡＰ9	ＳＨ－０１	〃
竪穴住居6	ＡＰ10	ＳＨ－０１	弘　田
竪穴住居7	ＡＰ10	ＳＨ－０２	〃
竪穴住居8	ＢＰ10	ＳＨ－０１	〃
竪穴住居9	ＡＰ11	ＳＨ－０２	正　岡
竪穴住居10	ＡＰ11	ＳＨ－０１	〃
竪穴住居11	ＡＰ12	ＳＨ－０１	弘　田
竪穴住居12	ＢＰ14	住3	〃
竪穴住居13	ＢＰ14	住2	〃
竪穴住居14	ＢＰ14	住1	〃

土壙

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
土壙1	ＢＰ10	ＳＫ－０２	弘　田
土壙2	ＡＰ14	ＳＫ－０１	浅　倉
土壙3	ＢＰ14	土壙1	弘　田
土壙4	ＢＰ14	土壙8	〃
土壙5	ＢＰ14	土壙7	〃
土壙6	ＢＰ14	土壙6	〃
土壙7	ＡＰ10	ＳＫ－０１	〃
土壙8	ＡＰ11	ＳＫ－０４	正　岡
土壙9	ＡＰ11	ＳＫ－０３	〃
土壙10	ＢＰ13	土壙1	弘　田
土壙11	ＢＰ14	土壙5	〃
土壙12	ＡＰ10	土壙2	〃
土壙13	ＡＰ11	ＳＫ－０２	正　岡
土壙14	ＡＰ11	ＳＫ－０１	〃

掘立柱建物

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
掘立柱建物1	ＡＰ14	ＳＢ－０１	浅　倉
掘立柱建物2	ＢＰ13	ＳＢ－０１	弘　田

溝

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
溝1	ＡＰ10	ＳＤ1	弘　田
溝2	ＢＰ11	ＳＤ3	〃
溝3	ＢＰ11	ＳＤ2	〃
溝4	ＡＰ12	ＳＤ3	浅　倉
溝5	ＢＰ12	溝4	弘　田
	ＡＰ12	ＳＤ2	浅　倉
溝6	ＢＰ12	溝5	弘　田
溝7	ＢＰ14	溝7	〃
溝8	ＡＰ9	溝1	正　岡
	ＡＰ10	溝2	〃
	ＡＰ11	ＳＤ2	〃
溝9	ＡＰ10	溝1	弘　田

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
溝13	ＢＰ11	ＳＤ1	弘　田
溝14	ＡＰ12	ＳＤ1	〃
溝15	ＢＰ12	ＳＤ1	〃
溝16	ＢＰ12	ＳＤ2	〃
溝17	ＡＰ13	ＳＤ1	浅　倉
溝18	ＡＰ13	ＳＤ2	〃
	ＢＰ14	溝3	弘　田
	ＢＰ14拡	ＳＤ1	〃
溝19	ＢＰ14	溝4	〃
溝20	ＢＰ14	溝5	〃
溝21	ＢＰ14	溝6	〃
溝22	ＢＰ14	溝10	〃

立田遺跡　竪穴住居

遺構名	平面形	規模(cm) 長さ	規模(cm) 幅	長軸の向き	床面積 (㎡)	標高 (cm)	主柱	柱間(cm) 最大	柱間(cm) 最小	付属施設 高床部	付属施設 方形土壙	付属施設 中央穴	付属施設 焼土面	付属施設 カマド	時期	備考
竪穴住居1a	円形	715			(29.4)	273	2/4			—	—	○	—	—	弥生後期Ⅲ~Ⅳ	最終床面
竪穴住居1b	円形	645			(26.2)	280	2/4	373		—	—	—	—	—	弥生後期Ⅲ~Ⅳ	第2床面
竪穴住居1c	円形	609			(24.6)	(279)	4/4	297	248	—	—	○	5	—	弥生後期Ⅳ	第1床面
竪穴住居2	方形	255	(217)	(N-52°-E)	(5.0)	270							4		弥生後期Ⅲ~Ⅳ	1/2強残
竪穴住居3	円形	436			13.4	240	2/2	174	108	—	—			—	弥生後期Ⅲ	焼失住居
竪穴住居4	(方形)	243	(206)	(N-22°-E)	(3.4)	271							1		弥生後期Ⅳ	約1/2残
竪穴住居5	円形	535			(16.4)	200	3/5	218	210			○			弥生後期Ⅲ	1/2強残
竪穴住居6	(円形)	(211)	(51)		(0.9)	(261)									弥生後期Ⅲ	一部残
竪穴住居7	(円形)	(115)			(0.7)	(275)	1/?								弥生後期Ⅲ	一部残
竪穴住居8	方形	370	246	(N-59°-E)	8.7	246				—	—	—	1	—	弥生中期Ⅱ	
竪穴住居9	円形	431			(7.4)	229	2/4	163							弥生後期Ⅲ	1/2強残
竪穴住居10	隅丸方形	502	451	(N-29°-W)	(17.5)	318				—	—	—	—	—	古墳後期Ⅲ	一部欠
竪穴住居11	方形	(492)	(311)	(N-44°-E)	(8.7)	302	1/?								古墳	1/4弱残

立田遺跡　掘立柱建物

遺構名	規模 間数	規模 桁行(cm)	規模 梁間(cm)	柱間距離(cm) 桁	柱間距離(cm) 梁	面積 (㎡)	棟方向	柱穴掘り方 平面形	時期	備考
掘立柱建物1	1×1	338	243	331~338	224~243	7.8	N-43°-E	円形	弥生	
掘立柱建物2	1×1	306	247	299~306	218~247	7.1	N-67°-W	円形	弥生	
掘立柱建物3	2×1	428	329	204~218	295~329	12.5	N-47°-W	円形	弥生後期	

立田遺跡　井戸

遺構名	規模(cm) 長さ	規模(cm) 幅	規模(cm) 深さ	底面海抜高 (cm)	平面形	断面形	土器	時期	備考
井戸1	151	147	92	216	円形	Ⅲ－a	◎	弥生後期Ⅰ～Ⅱ	両側に柱穴

立田遺跡　袋状土壙

遺構名	規模(cm) 上面径	規模(cm) 底面径	規模(cm) 深さ	底面形	断面形	底面標高 (cm)	土器	時期	備考
袋状土壙1	74	79	68	円形	Ⅰ－a	232	△	弥生中期Ⅲ	
袋状土壙2	122	119	105	不整楕円形	Ⅰ－a	299	○	弥生後期Ⅰ	
袋状土壙3	116	131	94	円形	Ⅰ－a	170	◎	弥生後期Ⅰ	
袋状土壙4	140	113	88	円形	Ⅰ－a	186	◎	弥生後期Ⅱ	
袋状土壙5	171	171	89	円形	Ⅰ－a	182	△	弥生後期Ⅰ	ヤラレ有

立田遺跡　土壙

遺構名	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時　期	備　考
	長さ	幅	深さ					
土壙1	96	81	35	方形	Ⅲ－b	◎	弥生後期Ⅲ	
土壙2	109	81	20	楕円形	Ⅲ－a	○	弥生後期Ⅱ～Ⅲ	
土壙3	186	176	57	不整方形	Ⅲ－c	◎	弥生後期Ⅱ～Ⅲ	長頸壺30余点，火だすき土器
土壙4	106	87	33	楕円形	Ⅲ－a	△	弥生後期Ⅲ	
土壙5	63	58	22	円形	Ⅲ－b	△	弥生	
土壙6	93	93	46	円形	Ⅲ－b	△	弥生	
土壙7	79	78	32	円形	Ⅲ－a	×	弥生	
土壙8	72	71	19	円形	Ⅲ－b	△	弥生後期Ⅲ	
土壙9	70	47	32	方形	Ⅲ－a	△	弥生後期Ⅱ	
土壙10	88	77	14	円形	Ⅲ－a	△	弥生後期Ⅲ	
土壙11	110	78	33	不整楕円形	Ⅲ－b	○	弥生後期Ⅳ	
土壙12	71	47	23	楕円形	Ⅲ－b	△	弥生後期Ⅱ	
土壙13	67	64	34	円形	Ⅲ－b	○	弥生後期Ⅲ	
土壙14	119	102	45	隅丸方形	Ⅲ－b	○	弥生後期Ⅲ	
土壙15	(108)	99	52	(方形)	Ⅲ－b	○	弥生後期Ⅲ	約1/2残
土壙16	178	83	20	不整楕円形	Ⅲ－b	△	弥生後期Ⅰ	
土壙17	132	56	42	楕円形	Ⅲ－b	○	弥生後期Ⅱ	
土壙18	71	45	36	不整楕円形	Ⅲ－b	△	弥生後期Ⅱ～Ⅲ	
土壙19	128	46	29	楕円形	Ⅲ－b	△	弥生	
土壙20	88	82	47	円形	Ⅱ－a	△	弥生後期Ⅲ	
土壙21	92	69	24	不整楕円形	Ⅲ－b	△	弥生後期	
土壙22	92	83	24	円形	Ⅲ－a	△	弥生後期Ⅲ	
土壙23	115	85		楕円形		◎	弥生後期Ⅱ	
土壙24	71	64	26	不整円形	Ⅲ－b	△	弥生後期Ⅲ	
土壙25	104	101	37	円形	Ⅲ－a	△	弥生後期Ⅲ	ヤラレ有(外周約1/4)
土壙26	142	87	42	楕円形	Ⅲ－a	○	弥生後期Ⅲ	
土壙27	160	(60)	56	(不整円形)	Ⅲ－a	△	弥生	約1/2残
土壙28	71	57	38	隅丸方形	Ⅲ－b	○	弥生後期Ⅱ	
土壙29	(122)	115	18	不正楕円形	Ⅲ－a	×	弥生	ヤラレ有
土壙30	109	78	19	不整方形	Ⅲ－a	△	弥生後期Ⅰ	
土壙31	75	73	21	不整方形	Ⅲ－b	×	弥生	

立田遺跡　土器観察表

挿図番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
1	竪穴住居1a·b	弥生土器	台付壺	(8.2)	—	—	赤色(10R4/6)	細砂	良	透かし孔有り
2	竪穴住居1a·b	弥生土器	甕	13.6	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良	沈線3条
3	竪穴住居1a·b	弥生土器	甕	(14.4)	—	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	良	
4	竪穴住居1a·b	弥生土器	甕	16.0	—	—	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	良	
5	竪穴住居1a·b	弥生土器	甕	16.0	—	—	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良	
6	竪穴住居1a·b	弥生土器	甕	11.7	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良	
7	竪穴住居1a·b	弥生土器	鉢	(24.0)	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良	凹線1条,外面タタキ後ハケ
8	竪穴住居1a·b	弥生土器	鉢	19.4	4.9	7.5	赤色(10R5/6)	粗砂	良	内外面ヘラミガキ,ススB'
9	竪穴住居1a·b	弥生土器	高杯	(17.4)	(10.8)	(7.3)	浅黄橙色(7.5YR8/6)	精良	良	
10	竪穴住居1a·b	弥生土器	高杯	16.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良	内外面ヘラミガキ
11	竪穴住居1a·b	弥生土器	台付鉢	—	4.8	—	灰白色(10YR7/1)	精良	良	
12	竪穴住居1a·b	弥生土器	高杯	—	11.4	—	赤橙色(10R6/8)	細砂	良	透かし孔4
13	竪穴住居1a·b	弥生土器	高杯	—	10.7	—	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良	透かし孔4
14	竪穴住居1a·b	弥生土器	高杯	—	9.0	—	橙色(5YR6/6)	精良	良	透かし孔4,竹管文
15	竪穴住居1a·b	弥生土器	手捏土器	3.6	2.3	4.2	浅黄色(2.5Y7/3)	細砂	良	
16	竪穴住居1c	弥生土器	壺	9.6	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良	
17	竪穴住居1c	弥生土器	甕	13.6	—	—	浅黄橙色(10YR8/4)	粗砂	良	凹線2条
18	竪穴住居1c	弥生土器	甕	15.0	—	—	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良	凹線2条
19	竪穴住居1c	弥生土器	甕	14.6	—	—	橙色(2.5YR7/6)	細砂	良	沈線5条
20	竪穴住居1c	弥生土器	甕	11.8	—	—	褐灰色(10YR5/1)	細砂	良	
21	竪穴住居1c	弥生土器	高杯	—	13.3	—	浅黄橙色(10YR8/3)	精良	良	透かし孔4
22	竪穴住居1c	弥生土器	手捏土器	5.4	(2.0)	3.7	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	良	内外面指オサエ
23	竪穴住居1c	弥生土器	手捏土器	4.6	—	2.5	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良	内外面指オサエ,黒斑C
24	竪穴住居2	弥生土器	壺	4.8		(8.3)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良	頸部·体部中央に突帯
25	竪穴住居2	弥生土器	甕		5.5	(3.6)	黒褐色(5YR3/1)	細砂	良	
26	竪穴住居2	弥生土器	甕		4.9	(7.8)	褐灰色(7.5YR5/1)	細砂	良	
27	竪穴住居3	弥生土器	甕	15.4		(5.2)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良	
28	竪穴住居3	弥生土器	鉢	15.0		7.3	橙色(5YR7/6)	精良	良	
29	竪穴住居3	弥生土器	高杯		12.0	(6.8)	橙色(5YR6/8)	礫	良	透かし孔残存,黒斑C
30	竪穴住居4	弥生土器	壺	22.8		(7.6)	橙色(5YR7/6)	礫	良	凹線5条
31	竪穴住居4	弥生土器	長頸壺	21.0		(17.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良	凹線5条
32	竪穴住居4	弥生土器	長頸壺	22.8		(14.5)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良	凹線4条,肩部刺突文
33	竪穴住居4	弥生土器	長頸壺	17.6		(18.2)	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	良	
34	竪穴住居4	弥生土器	長頸壺	17.6		(12.3)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良	
35	竪穴住居4	弥生土器	甕	13.5		18.2	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	良	沈線3条
36	竪穴住居4	弥生土器	甕	17.6		(11.5)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良	ススO
37	竪穴住居4	弥生土器	甕		5.4	(13.5)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良	内面ケズリ後ハケ,黒斑C
38	竪穴住居4	弥生土器	甕	15.5		(21.0)	橙色(7.5YR6/6)	礫	良	黒斑C
39	竪穴住居4	弥生土器	甕	13.8		(7.5)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	良	
40	竪穴住居4	弥生土器	鉢	31.6		(5.2)	灰黄褐色(10YR6/2)	粗砂	良	
41	竪穴住居4	弥生土器	大型鉢	42.0		(13.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良	
42	竪穴住居4	弥生土器	鉢		5.9	(14.5)	鈍い橙色(5YR7/4)	精良	良	外面ハケ,水漉粘土
43	竪穴住居4	弥生土器	高杯			(5.0)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	良	
44	竪穴住居4	弥生土器	高杯	—	10.6	—	鈍い橙色(5YR6/3)	細砂	良	
45	竪穴住居5	弥生土器	長頸壺	16.2	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	良	黒斑B～C
46	竪穴住居5	弥生土器	壺	16.0	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良	凹線4条
47	竪穴住居5	弥生土器	甕	14.0	—	—	橙色(5YR6/8)	粗砂	良	
48	竪穴住居5	弥生土器	甕	14.5	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良	凹線3条,外面タタキ残,ススB
49	竪穴住居5	弥生土器	甕	13.5	4.6	22.0	橙色(5YR7/6)	粗砂	良	ススB
50	竪穴住居5	弥生土器	甕	14.0	—	—	明赤褐色(5YR5/8)	粗砂	良	ススB
51	竪穴住居5	弥生土器	鉢	28.0	—	—	鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良	
52	竪穴住居5	弥生土器	大型鉢	(32.0)	—	—	鈍い褐色(7.5YR6/3)	粗砂	良	片口付き
53	竪穴住居5	弥生土器	大型鉢	41.5	13.3	20.0	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良	
54	竪穴住居5	弥生土器	鉢	51.0	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	良	黒斑A
55	竪穴住居5	弥生土器	高杯	22.0	—	—	鈍い赤褐色(2.5YR7/4)	細砂	良	凹線4条
56	竪穴住居5	弥生土器	高杯	20.0	—	—	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良	凹線4条
57	竪穴住居5	弥生土器	高杯	—	12.0	—	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良	透かし孔4
58	竪穴住居5	弥生土器	高杯	—	15.0	—	淡橙色(5YR8/4)	粗砂	良	透かし貫通しない,黒斑C
59	竪穴住居5	弥生土器	高杯	—	14.0	—	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良	櫛描沈線,ヘラ描沈線
60	竪穴住居5	弥生土器	製塩土器	—	5.5	—	鈍い赤橙色(10YR6/4)	礫	良	
61	竪穴住居5	弥生土器	製塩土器	—	6.0	—	鈍い赤橙色(10YR6/4)	礫	良	

立田遺跡　土器観察表

挿図番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
62	竪穴住居6	弥生土器	壺				浅黄橙色(7.5YR8/3)	粗砂	良	凹線4条
63	竪穴住居6	弥生土器	甕	(17.8)			灰白色(7.5YR8/2)	細砂	良	
64	竪穴住居7	弥生土器	甕				橙色(5YR7/6)	粗砂	良	
65	竪穴住居8	弥生土器	高杯	20.0		(6.0)	赤灰色(2.5YR5/1)	細砂	良	孔2ヶ所に残存
66	竪穴住居9	弥生土器	長頸壺	18.4		(12.9)	赤褐色(2.5YR4/6)	細砂	良	
67	竪穴住居9	弥生土器	壺	15.6		(6.0)	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良	凹線1条
68	竪穴住居9	弥生土器	鉢	(34.8)		(11.3)	灰黄色(2.5Y7/2)	粗砂	良	凹線3条,刺突文
69	竪穴住居9	弥生土器	高杯	21.0			赤灰色(2.5YR5/1)	細砂	良	
70	竪穴住居9	弥生土器	高杯		8.7	(4.1)	淡黄色(2.5Y8/3)	精良	良	透かし孔4,凹線4条
71	竪穴住居9	弥生土器	器台	38.4		(4.5)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良	
72	竪穴住居9	弥生土器	器台		(34.6)	(13.3)	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良	底部凹線4条,頸部沈線4条
73	井戸1	弥生土器	壺	8.6	4.4	7.7	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	良	透かし孔4(2個一対),黒斑A·B
74	井戸1	弥生土器	甕	14.0	—	—	赤色(10R5/8)	細砂	良	凹線3条
75	井戸1	弥生土器	甕	13.8	—	—	鈍い赤褐色(2.5YR5/4)	細砂	良	ススA,黒斑A
76	井戸1	弥生土器	甕	12.0	—	—	褐灰色(5YR4/1)	粗砂	良	凹線1条
77	井戸1	弥生土器	甕	15.4	—	—	淡赤橙色(2.5YR7/3)	礫	良	凹線4条
78	井戸1	弥生土器	甕	15.4	7.7	14.5	明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	良	
79	井戸1	弥生土器	高杯	(23.6)	—	—	明褐灰色(7.5YR7/2)	細砂	良	凹線4条
80	井戸1	弥生土器	高杯	22.3	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂	良	凹線3条,円盤充填,透かし孔上4・下4?
81	井戸1	弥生土器	高杯	18.4	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良	凹線3条
82	井戸1	弥生土器	高杯	—	13.0	—	橙色(5YR7/8)	細砂	良	透かし孔上下2残,櫛描沈線3条1単位,ヘラ描沈線5条1単位
83	井戸1	弥生土器	高杯	—	14.0	—	橙色(5YR6/8)	細砂	良	透かし孔1残,櫛描沈線6条,ヘラ描沈線8条1単位
84	井戸1	弥生土器	長頸壺	15.8	—	(22.5)	橙色(5YR7/8)	粗砂	良	凹線4条,肩部刺突文
85	井戸1	弥生土器	長頸壺	16.6	18.0		淡黄橙色(10YR8/4)	粗砂	良	口縁凹線4条,竹管文4個1単位,頸部刺突文
86	井戸1	弥生土器	長頸壺	14.0		(25.3)	橙色(5YR7/6)	細砂	良	凹線4条
87	井戸1	弥生土器	長頸壺	12.4	7.5	28.0	橙色(5YR6/8)	粗砂	良	黒斑B～C
88	井戸1	弥生土器	長頸壺	(17.2)	9.8	(53.7)	橙色(5YR6/6)	礫	良	口縁沈線3条＋竹管文4個×3段,脚部刻目文,外面タタキ後ハケ,ミガキ,黒斑B
89	井戸1	弥生土器	壺	16.3		(36.7)	赤橙色(10R6/8)	細砂	良	凹線3条
90	井戸1	弥生土器	甕	14.0	6.0	26.5	橙色(5YR6/6)	礫	良	凹線2条,底部穿孔,ススB
91	井戸1	弥生土器	甕	13.0	—	(7.5)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良	凹線3条
92	井戸1	弥生土器	甕	(20.1)	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良	凹線3条,ススB
93	井戸1	弥生土器	甕	17.4	7.6	37.2	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良	凹線2条,ススC
94	井戸1	弥生土器	甕	13.6	6.0	25.2	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良	凹線2条,黒斑A·B
95	井戸1	弥生土器	鉢	(37.4)			赤色(10R5/8)	細砂	良	
96	井戸1	弥生土器	鉢	(39.1)			黄橙色(7.5YR8/8)	粗砂	良	凹線3条
97	井戸1	弥生土器	高杯	21.8			赤色(10R5/8)	細砂	良	凹線1条
98	井戸1	弥生土器	高杯	(23.0)			橙色(5YR6/8)	細砂	良	凹線3条
99	井戸1	弥生土器	高杯	20.0			橙色(5YR7/6)	粗砂	良	凹線3条,円盤充填,透かし孔4(貫通せず)
100	井戸1	弥生土器	高杯	(26.6)			橙色(2.5YR6/8)	細砂	良	
101	井戸1	弥生土器	高杯	23.6			橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良	凹線4条,円盤充填
102	井戸1	弥生土器	高杯	26.1		(16.3)	灰白色(2.5Y8/1)	粗砂	良	口縁部凹線4条,脚部櫛描沈線
103	井戸1	弥生土器	高杯	—	11.8	(8.9)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良	透かし孔2個一対(計20で貫通するものは4),黒斑C
104	井戸1	弥生土器	高杯	—	(12.6)	(9.2)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良	透かし孔(方形?)
105	井戸1	弥生土器	高杯		9.1		橙色(2.5YR7/8)	粗砂	良	
106	井戸1	弥生土器	高杯	—	13.7	(7.5)	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良	脚端部凹線3条,櫛描沈線,透かし孔数不明,黒斑C
107	井戸1	弥生土器	器台		(25.0)		橙色(5YR7/8)	細砂	良	沈線3条,凹線6条
109	井戸1	弥生土器	製塩土器	—	5.7	(3.2)	灰黄褐色(10YR5/2)	礫	良	
108	井戸1	弥生土器	器台	—	24.2	(14.5)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良	透かし孔上下3個づつ,沈線6条×2,脚端部に凹線2条,黒斑C
110	井戸1	弥生土器	壺	14.3	8.2	29.5	赤色(7.5YR4/8)	礫	良	
111	井戸1	弥生土器	長頸壺	21.3		(9.9)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良	沈線4条,円形浮文
112	井戸1	弥生土器	長頸壺	16.1		(16.3)	淡橙色(5YR8/3)	細砂	良	凹線3条,肩部刺突文

立田遺跡　土器観察表

挿図番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
113	井戸1	弥生土器	甕	15.0	5.8	25.5	赤褐色(2.5YR4/8)	細砂	良	凹線3条,ススB
114	井戸1	弥生土器	甕	13.2		(6.2)	鈍い赤褐色(2.5YR5/4)	細砂	良	
115	井戸1	弥生土器	甕	12.8		(8.2)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良	凹線3条
116	井戸1	弥生土器	甕	12.4	4.7	16.0	灰褐色(5YR6/2)	粗砂	良	
117	井戸1	弥生土器	製塩土器		4.9	(4.0)	灰黄褐色(10YR6/2)	粗砂	良	
118	井戸1	弥生土器	製塩土器		4.2	(4.3)	鈍い黄橙色(10YR6/3)	粗砂	良	
119	井戸1	弥生土器	製塩土器		5.2	(4.6)	灰黄灰色(10YR6/2)	礫	良	
120	袋状土壙1	弥生土器	甕	14.0	—	(6.9)	鈍い赤褐色(5YR5/4)	細砂	良	凹線2条
121	袋状土壙2	弥生土器	甕	16.0	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良	凹線3条,縦方向に沈線3条,端部に刻目文
122	袋状土壙2	弥生土器	甕	13.6	—	—	赤色(10R4/8)	粗砂	良	沈線5～6条
123	袋状土壙2	弥生土器	甕	11.0	4.8	12.3	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	良	
124	袋状土壙2	弥生土器	鉢	(36.4)	—	—	灰白色(7.5YR8/2)	精良	良	黒斑B
125	袋状土壙2	弥生土器	高杯	17.4	—	—	赤色(10R5/8)	細砂	良	凹線3条
126	袋状土壙2	弥生土器	製塩土器	(12.3)	—	—	淡黄色(2.5Y8/3)	礫	良	
127	袋状土壙2	弥生土器	製塩土器	(15.8)	4.2	13.8	明褐灰色(7.5YR7/2)	礫	良	黒斑A～C
128	袋状土壙2	弥生土器	製塩土器	—	6.5	—	淡黄色(2.5Y8/3)	礫	良	
129	袋状土壙2	弥生土器	製塩土器	—	4.8	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良	
130	袋状土壙2	弥生土器	手捏土器	3.5	—	4.2	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良	
131	袋状土壙3	弥生土器	壺	15.8			灰黄褐色(10YR5/2)	粗砂	良	凹線3条
132	袋状土壙3	弥生土器	壺	17.0			鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	良	凹線3条,工具ナデ
133	袋状土壙3	弥生土器	壺	—	9.6		淡黄色(2.5Y8/3)	粗砂	良	黒斑B
134	袋状土壙3	弥生土器	壺	19.3	12.6	51.9	橙色(2.5YR7/8)	細砂	良	凹線3条,外面下半ミガキ,黒斑B·C
135	袋状土壙3	弥生土器	甕	15.2			明赤褐色(2.5YR5/8)	細砂	良	ススB
136	袋状土壙3	弥生土器	甕	14.0	7.5	28.3	浅黄橙色(10YR8/4)	粗砂	良	凹線2条,底部ミガキ,穿孔,ススB
137	袋状土壙3	弥生土器	甕	16.4			橙色(5YR7/6)	粗砂	良	
138	袋状土壙3	弥生土器	台付鉢	13.9	9.6	10.4	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良	黒斑B·C
139	袋状土壙3	弥生土器	高杯	—	15.3		鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良	透かし孔上下2列(1個残存),櫛描沈線,ヘラ描沈線
140	袋状土壙3	弥生土器	高杯	—	7.0	(9.5)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良	透かし孔19(内貫通するのは2)
141	袋状土壙3	弥生土器	製塩土器	(10.7)	—	(10.9)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	礫	良	傾き不明
142	袋状土壙3	弥生土器	製塩土器	—	4.8	(4.0)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良	
143	袋状土壙3	弥生土器	製塩土器	—	4.7	(4.0)	褐灰色(10YR4/1)	細砂	良	
144	袋状土壙3	弥生土器	製塩土器	—	6.2	(6.0)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	礫	良	
145	袋状土壙3	弥生土器	製塩土器	—	6.3	(5.0)	灰褐色(7.5YR6/2)	礫	良	
146	袋状土壙3	弥生土器	手捏土器	5.0	1.6	4.0	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良	指オサエ
147	袋状土壙4	弥生土器	甕	15.5	10.4	38.0	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良	黒斑C
148	袋状土壙4	弥生土器	壺	19.6	—	—	赤褐色(10R4/4)	細砂	良	
149	袋状土壙4	弥生土器	壺	16.6	—	(19.0)	橙色(5YR7/8)	礫	良	凹線5条
150	袋状土壙4	弥生土器	壺	18.0	14.0	44.8	橙色(5YR7/6)	礫	良	凹線5条,黒斑C
151	袋状土壙4	弥生土器	壺	15.4	—	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	粗砂	良	凹線3～5条
152	袋状土壙4	弥生土器	長頸壺	19.5	—	—	灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	良	凹線3条,肩部刺突文,ススB
153	袋状土壙4	弥生土器	長頸壺	18.3	—	—	橙色(5YR7/6)	粗砂	良	凹線1条
154	袋状土壙4	弥生土器	長頸壺	20.5	9.8	40.0	鈍い橙色(5YR7/3)	粗砂	良	凹線1条,肩部刺突文,黒斑C
155	袋状土壙4	弥生土器	長頸壺	20.0	10.2	40.5	灰赤色(7.5R4/2)	粗砂	良	凹線4条,肩部刺突文,黒斑B
156	袋状土壙4	弥生土器	甕	16.4		(7.8)	赤橙色(10R6/6)	粗砂	良	凹線3条
157	袋状土壙4	弥生土器	甕	24.0	10.0	41.4	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	良	凹線3条
158	袋状土壙4	弥生土器	甕	24.7	10.1	44.2	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良	黒斑B
159	袋状土壙4	弥生土器	甕	29.9		(37.5)	灰黄色(2.5Y7/2)	粗砂	良	凹線3条
160	袋状土壙4	弥生土器	甕	25.2	—	—	橙色(5YR7/6)	粗砂	良	凹線1条
161	袋状土壙4	弥生土器	甕	16.6	7.6	29.9	明赤褐色(2.5YR5/8)	粗砂	良	凹線1条,黒斑B
162	袋状土壙4	弥生土器	甕	20.2	—	—	赤色(10R5/8)	粗砂	良	
163	袋状土壙4	弥生土器	甕	—	16.0	—	橙色(5YR6/8)	細砂	良	カゴメ？ススB
164	袋状土壙4	弥生土器	壺	—	10.2	—	赤色(10R5/8)	粗砂	良	
165	袋状土壙4	弥生土器	壺	—	9.4	—	淡黄色(2.5Y8/3)	粗砂	良	
166	袋状土壙4	弥生土器	甕		11.0	(21.0)	灰褐色(7.5YR6/2)	粗砂	良	カゴメ,ススC
167	袋状土壙4	弥生土器	甕	—	16.0	—	鈍い赤褐色(2.5YR5/3)	粗砂	良	カゴメ,ススB
168	袋状土壙4	弥生土器	鉢	47.7	16.0	22.4	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂	良	凹線4条
169	袋状土壙4	弥生土器	鉢	41.3	12.0	22.1	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良	黒斑A
170	袋状土壙4	弥生土器	高杯	22.5	—	(6.3)	橙色(2.5YR6/8)	礫	良	

立田遺跡　土器観察表

挿図番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
171	袋状土壙5	弥生土器	長頸壺	16.0			淡赤橙色(2.5YR7/4)	細砂	良	口縁端部刻目文
172	袋状土壙5	弥生土器	鉢	(25.0)			褐灰色(7.5YR4/1)	細砂	良	
173	袋状土壙5	弥生土器	高杯		(16.4)		橙色(2.5YR7/8)	粗砂	良	ヘラ描沈線
174	土壙1	弥生土器	長頸壺	18.8	—	(12.1)	橙色(7.5YR6/6)	粗砂	良	凹線4条
175	土壙1	弥生土器	甕	14.0	—	(11.4)	橙色(5YR7/6)	粗砂	良	凹線2条
176	土壙1	弥生土器	甕	12.0	—	(11.6)	鈍い橙色(5YR7/4)	礫	良	沈線4条
177	土壙1	弥生土器	高杯	19.0	—	(6.5)	橙色(5YR7/6)	細砂	良	
178	土壙1	弥生土器	鉢	25.3	—	(10.0)	灰黄褐色(10YR6/2)	細砂	良	
179	土壙2	弥生土器	長頸壺	21.4	—	(20.3)	赤橙色(10R6/8)	粗砂	良	凹線2条,肩部刺突文,黒斑B
180	土壙2	弥生土器	長頸壺	21.0	—	(18.0)	橙色(5YR6/8)	粗砂	良	凹線6条
181	土壙2	弥生土器	長頸壺	24.0	—	(17.2)	赤色(10R5/8)	粗砂	良	
182	土壙2	弥生土器	甕	23.8	9.9	45.7	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	良	凹線5条,黒斑B
183	土壙2	弥生土器	壺	—	5.0	(11.3)	赤橙色(10R6/8)	細砂	良	黒斑B·C
184	土壙2	弥生土器	鉢	(18.2)	(6.0)	(7.8)	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良	底面は楕円形？
185	土壙2	弥生土器	鉢	(44.0)	—	(7.4)	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良	
186	土壙2	弥生土器	高杯	—	8.0	(5.5)	淡橙色(5YR8/4)	粗砂	良	透かし孔上4·下6
187	土壙3	弥生土器	壺	15.4	—	(17.5)	赤色(10R5/8)	細砂	良	凹線2～3条
188	土壙3	弥生土器	壺	13.5	—	(15.9)	淡黄色(5Y8/3)	礫	良	凹線1条,黒斑B
189	土壙3	弥生土器	壺	22.4	16.4	49.0	赤褐色(10R5/3)	礫	良	凹線2条
190	土壙3	弥生土器	壺	16.8	8.9	23.5	橙色(5YR6/8)	粗砂	良	凹線3条,黒斑B
191	土壙3	弥生土器	長頸壺	14.4	—	(11.8)	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂	良	凹線3条,肩部刺突文
192	土壙3	弥生土器	壺	25.0	12.0	60.0	鈍い赤褐色(5YR5/3)	粗砂	良	凹線3条,頸部刻目突帯,肩部刺突文
193	土壙3	弥生土器	壺	16.6	10.2	35.5	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	良	凹線3条,黒斑A·B·C
194	土壙3	弥生土器	壺	27.3	13.0	40.2	黄灰色(2.5Y6/1)	粗砂	良	肩部刺突文,カゴメ
195	土壙3	弥生土器	壺	16.4	—	(24.0)	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良	凹線3条
196	土壙3	弥生土器	長頸壺	25.1	—	(38.6)	褐灰色(10YR5/1)	粗砂	良	凹線5条,肩部刺突文
197	土壙3	弥生土器	長頸壺	18.6	—	(31.5)	鈍い黄橙色(5YR5/4)	粗砂	良	凹線5条,肩部刺突文(貝殻文)
198	土壙3	弥生土器	長頸壺	15.5	8.8	39.0	橙色(5YR6/6)	粗砂	良	凹線4条,肩部刺突文
199	土壙3	弥生土器	長頸壺	21.4	8.5	43.3	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	良	凹線4条,肩部刺突文
200	土壙3	弥生土器	長頸壺	19.6	—	(18.0)	褐灰色(5YR6/1)	粗砂	良	凹線3条,肩部刺突文
201	土壙3	弥生土器	長頸壺	21.6		(19.2)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	粗砂	良	肩部刺突文
202	土壙3	弥生土器	長頸壺	22.2	—	(13.0)	橙色(7.5YR7/6)	細砂	良	凹線2～3条,黒斑A
203	土壙3	弥生土器	長頸壺	19.0	—	(18.0)	橙色(2.5YR6/6)	細砂	良	凹線2条,肩部刺突文
204	土壙3	弥生土器	長頸壺	21.6	—	(17.0)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良	肩部刺突文
205	土壙3	弥生土器	長頸壺	20.4	—	(25.0)	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良	肩部刺突文
206	土壙3	弥生土器	長頸壺	22.3		(17.0)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良	
207	土壙3	弥生土器	長頸壺	18.4	—	(24.6)	浅黄橙色(10YR8/4)	粗砂	良	凹線3条,肩部刺突文
208	土壙3	弥生土器	長頸壺	21.7	—	(17.1)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	粗砂	良	凹線3条
209	土壙3	弥生土器	長頸壺	23.5		(6.3)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良	凹線8条
210	土壙3	弥生土器	長頸壺	19.8	8.9	37.3	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂	良	カゴメ,凹線2条,肩部刺突文
211	土壙3	弥生土器	長頸壺	20.0	9.5	41.0	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良	凹線3条,肩部刺突文
212	土壙3	弥生土器	長頸壺	23.8	9.8	42.0	鈍い黄橙色(10YR7/2)	粗砂	良	凹線2条,肩部刺突文
213	土壙3	弥生土器	長頸壺	21.5	9.6	39.6	浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	良	凹線3条,肩部刺突文,黒斑B～C
214	土壙3	弥生土器	長頸壺	20.2	—	(18.0)	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	良	肩部刺突文,黒斑A
215	土壙3	弥生土器	長頸壺	20.4	—	(23.5)	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂	良	肩部刺突文(貝殻文)
216	土壙3	弥生土器	長頸壺	19.7	—	(17.5)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	粗砂	良	肩部刺突文
217	土壙3	弥生土器	長頸壺	19.7	—	(26.0)	鈍い赤褐色(5YR5/4)	粗砂	良	肩部刺突文
218	土壙3	弥生土器	長頸壺	22.0	—	(37.0)	鈍い赤褐色(5YR5/3)	粗砂	良	凹線3条,肩部刺突文
219	土壙3	弥生土器	長頸壺	19.8	—	(24.1)	橙色(5YR7/6)	礫	良	肩部刺突文
220	土壙3	弥生土器	長頸壺	20.0		(17.0)	鈍い褐色(7.5YR6/3)	粗砂	良	肩部刺突文
221	土壙3	弥生土器	長頸壺	22.4	—	(17.5)	橙色(5YR6/8)	粗砂	良	肩部刺突文
222	土壙3	弥生土器	長頸壺	21.8		(22.7)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良	凹線3条,肩部刺突文
223	土壙3	弥生土器	長頸壺	—	—	(26.3)	橙色(5YR7/6)	粗砂	良	肩部刺突文
224	土壙3	弥生土器	長頸壺	—	8.1	(26.3)	暗褐色(7.5YR3/3)	粗砂	良	肩部刺突文
225	土壙3	弥生土器	長頸壺	14.9	—	(12.5)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	礫	良	
226	土壙3	弥生土器	長頸壺	—	8.0	(37.1)	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良	肩部刺突文,黒斑B
227	土壙3	弥生土器	長頸壺	22.1	10.2	42.5	灰褐色(5YR6/2)	細砂	良	肩部刺突文(2種類)
228	土壙3	弥生土器	甕	(11.0)	—		橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良	凹線3条
229	土壙3	弥生土器	甕	21.3	7.8	35.5	灰黄褐色(10YR5/2)	粗砂	良	凹線2条,外面上半タタキ
230	土壙3	弥生土器	甕	17.3	—	(14.6)	橙色(2.5YR6/6)	礫	良	凹線3条
231	土壙3	弥生土器	甕	30.0	11.2	39.0	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良	凹線2条
232	土壙3	弥生土器	甕	14.0	—	(9.2)	鈍い黄橙色(10YR7/2)	細砂	良	凹線1条,黒斑B

立田遺跡　土器観察表

挿図番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
233	土壙3	弥生土器	甕	23.9	9.2	36.0	鈍い褐色(7.5YR5/3)	粗砂	良	
234	土壙3	弥生土器	甕	13.4	—		鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良	凹線3条
235	土壙3	弥生土器	甕	19.4	—	(8.0)	明赤褐色(2.5YR5/8)	礫	良	沈線10条
236	土壙3	弥生土器	甕	30.6	11.6	40.7	橙色(5YR6/6)	粗砂	良	
237	土壙3	弥生土器	甕	10.2	—	(8.4)	明赤褐色(2.5YR5/8)	粗砂	良	
238	土壙3	弥生土器	甕	14.9	4.8	23.8	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良	
239	土壙3	弥生土器	甕	14.5	5.6	27.9	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良	ススB
240	土壙3	弥生土器	甕	25.6	13.3	39.3	橙色(5YR6/8)	粗砂	良	カゴメ,黒斑C
241	土壙3	弥生土器	甕	15.2	6.0	27.0	橙色(5YR6/6)	細砂	良	ススA
242	土壙3	弥生土器	鉢	(46.0)		(6.5)	鈍い赤褐色(5YR5/4)	粗砂	良	凹線5条,口縁端部の両端に刻目文,体部に刺突文
243	土壙3	弥生土器	鉢	39.3	11.4	20.3	鈍い橙色(5YR6/3)	粗砂	良	
244	土壙3	弥生土器	鉢	(35.2)	9.2	18.8	橙色(5YR6/8)	粗砂	良	外面底近くタタキ
245	土壙3	弥生土器	鉢	48.5	10.3	21.3	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良	
246	土壙3	弥生土器	鉢	(61.4)	—	(14.1)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良	
247	土壙3	弥生土器	高杯	22.2	—	(12.5)	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良	透かし孔4,櫛描沈線3条
248	土壙3	弥生土器	高杯	18.5	—	(9.5)	赤橙色(10R6/8)	細砂	良	円盤充填
249	土壙3	弥生土器	高杯	16.6	14.5	12.0	鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良	
250	土壙3	弥生土器	細頸壺	—	—	—	淡橙色(5YR8/4)	細砂	良	体部中央に2条の突帯＋棒状浮文とその間に鋸歯文＋刺突文
251	土壙3	弥生土器	高杯	9.4	—	(4.6)	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	良	
252	土壙3	弥生土器	製塩土器		5.8	(3.5)	鈍い橙色(10YR7/2)	粗砂	良	
253	土壙3	弥生土器	壺	—	6.4	(5.0)	橙色(5YR7/6)	粗砂	良	黒斑C
254	土壙3	弥生土器	壺	—	5.3	(2.6)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良	
255	土壙3	弥生土器	壺		7.1	(14.7)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	良	
256	土壙3	弥生土器	壺		9.1	(8.5)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良	黒斑C
257	土壙3	弥生土器	甕		9.5	(11.9)	鈍い橙色(5YR6/4)	礫	良	黒斑C
258	土壙3	弥生土器	甕		11.2	(6.9)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	礫	良	外面タタキ後ミガキ,黒斑C
259	土壙3	弥生土器	甕		5.7	(5.3)	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良	
260	土壙3	弥生土器	甕		8.2	(10.3)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良	
261	土壙3	弥生土器	甕	—	8.0	(6.0)	橙色(5YR7/6)	粗砂	良	黒斑C
262	土壙3	弥生土器	甕		7.2	(17.3)	鈍い黄橙色(10YR6/4)	粗砂	良	黒斑C
263	土壙4	弥生土器	甕	11.7	5.4	21.0	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	良	凹線1条,黒斑A～C
264	土壙8	弥生土器	甕	13.6	—	—	橙色(5YR6/6)	粗砂	良	
265	土壙8	弥生土器	甕	10.6	—	—	鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	良	
266	土壙9	弥生土器	鉢	45.0	12.0	21.5	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	良	凹線3条,黒斑A～B･B～C
267	土壙10	弥生土器	甕	20.8			浅黄橙色(7.5YR8/6)	細砂	良	
268	土壙11	弥生土器	壺	16.0	—	(7.2)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	粗砂	良	沈線6条
269	土壙11	弥生土器	壺	—	9.0	(11.3)	鈍い黄橙色(10YR6/4)	粗砂	良	
270	土壙11	弥生土器	甕	(16.0)	—	(4.6)	浅黄橙色(10YR8/3)	細砂	良	凹線3条
271	土壙11	弥生土器	甕	6.9	—	(7.0)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	良	凹線1条
272	土壙11	弥生土器	甕	15.0	—	(9.9)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	良	
273	土壙11	弥生土器	甕	13.0	—	(19.0)	黄橙色(7.5YR7/8)	粗砂	良	
274	土壙11	弥生土器	製塩土器	—	3.7	(2.7)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	礫	良	
275	土壙12	弥生土器	壺	16.0	—	—	鈍い褐色(7.5YR5/4)	粗砂	良	沈線4条
276	土壙12	弥生土器	高杯	21.0	—	—	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良	透かし孔3
277	土壙13	弥生土器	甕	14.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良	
278	土壙13	弥生土器	甕	12.0	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良	黒斑B
279	土壙13	弥生土器	甕	22.0	—	—	鈍い橙色(5YR7/4)	礫	良	
280	土壙13	弥生土器	甕	12.0	—	—	鈍い黄褐色(10YR5/4)	粗砂	良	ススB
281	土壙13	弥生土器	鉢	30.0	11.4	(20.3)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良	黒斑C
282	土壙13	弥生土器	鉢	(26.0)	—	—	灰黄褐色(10YR6/2)	粗砂	良	
283	土壙13	弥生土器	高杯	—	7.4	—	鈍い橙色(5YR7/4)	粗砂	良	透かし孔上下3
284	土壙14	弥生土器	直口壺	9.6	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	細砂	良	黒斑B
285	土壙14	弥生土器	壺	—	7.6	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	礫	良	黒斑B･C
286	土壙14	弥生土器	甕	13.0	—	—	橙色(5YR6/8)	礫	良	
287	土壙14	弥生土器	甕	15.0	—	—	橙色(5YR6/6)	粗砂	良	
288	土壙14	弥生土器	甕	20.0	—	—	灰黄褐色(10YR4/2)	細砂	良	
289	土壙14	弥生土器	甕	14.0	—	—	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂	良	
290	土壙14	弥生土器	大型甕	28.0	9.0	37.0	鈍い橙色(7.5YR7/3)	礫	良	凹線2条
291	土壙14	弥生土器	甕	—	6.8	—	鈍い黄橙色(10YR4/3)	礫	良	
292	土壙14	弥生土器	甕	—	6.8	—	橙色(7.5YR7/6)	粗砂	良	底部穿孔,黒斑B～C

立田遺跡　土器観察表

挿図番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
293	土壙14	弥生土器	鉢	18.0	4.2	7.5	橙色(5YR6/8)	礫	良	
294	土壙14	弥生土器	大型鉢	43.0	—	—	鈍い黄橙色(10YR7/3)	礫	良	
295	土壙14	弥生土器	高杯	—	12.0	—	橙色(5YR7/8)	礫	良	透かし孔上3·下3
296	土壙15	弥生土器	壺	18.0	—	(6.5)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	礫	良	沈線4条
297	土壙15	弥生土器	甕	16.0	—	(4.5)	橙色(5YR6/8)	粗砂	良	
298	土壙15	弥生土器	甕	13.2	—	(11.2)	鈍い橙色(7.5YR6/4)	礫	良	
299	土壙15	弥生土器	大型鉢	29.5	8.0	20.7	黄橙色(7.5YR7/8)	礫	良	
300	土壙15	弥生土器	器台	35.2	—	(8.2)	橙色(5YR6/6)	礫	良	凹線5条,鋸歯文,黒斑A
301	土壙15	弥生土器	器台	—	30.0	(16.0)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	礫	良	透かし孔上下2段4個,凹線4条
302	土壙15	弥生土器	小型鉢	8.0	—	(7.2)	鈍い橙色(5YR7/4)	礫	良	
303	土壙15	弥生土器	製塩土器	—	5.8	(5.3)	鈍い橙色(5YR7/3)	礫	良	
304	土壙16	弥生土器	甕	14.0			灰褐色(7.5YR5/2)	細砂	良	
305	土壙16	弥生土器	鉢	(33.8)			鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	良	黒斑B
306	土壙17	弥生土器	長頸壺	19.6			橙色(5YR7/6)	粗砂	良	黒斑A
307	土壙17	弥生土器	甕	9.4			橙色(5YR7/6)	細砂	良	
308	土壙17	弥生土器	甕	14.0			橙色(5YR7/6)	粗砂	良	
309	土壙17	弥生土器	甕	11.8			橙色(5YR6/6)	細砂	良	
310	土壙18	弥生土器	長頸壺	(22.6)			褐灰色(5YR4/1)	細砂	良	凹線3条
311	土壙20	弥生土器	甕				橙色(5YR7/6)	細砂	良	
312	土壙22	弥生土器	甕	12.0	—		橙色(7.5YR7/6)	粗砂	良	凹線3条
313	土壙22	弥生土器	甕	11.8	—		鈍い橙色(7.5YR7/3)	粗砂	良	
314	土壙23	弥生土器	壺	15.4	—	(6.5)	鈍い橙色(5YR6/4)	粗砂	良	凹線5条
315	土壙23	弥生土器	長頸壺	18.0	—	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	粗砂	良	凹線3条
316	土壙23	弥生土器	長頸壺	19.8	8.2	38.8	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良	肩部刺突文
317	土壙23	弥生土器	壺	6.9	4.3	12.7	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良	
318	土壙23	弥生土器	台付壺	7.2	16.0	18.6	鈍い橙色(2.5YR6/4)	細砂	良	脚部沈線8条,刺突文,透かし孔4
319	土壙23	弥生土器	甕	14.5			鈍い橙色(7.5YR6/4)	細砂	良	凹線3条
320	土壙23	弥生土器	甕	13.8	—	(6.2)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良	凹線4条
321	土壙23	弥生土器	甕	14.2			鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良	凹線4条
322	土壙23	弥生土器	甕	(17.6)	—	—	鈍い橙色(5YR7/3)	粗砂	良	
323	土壙23	弥生土器	甕	11.4	—	(5.8)	橙色(2.5YR6/6)	粗砂	良	
324	土壙23	弥生土器	甕	23.1	—	(12.2)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良	
325	土壙23	弥生土器	甕	16.0	—	—	明赤褐色(2.5YR5/8)	粗砂	良	凹線2条
326	土壙23	弥生土器	甕	(17.6)	5.9	18.3	鈍い橙色(5YR7/3)	粗砂	良	
327	土壙23	弥生土器	甕		5.8		鈍い橙色(10YR7/4)	細砂	良	
328	土壙23	弥生土器	鉢	15.8	6.0	6.5	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良	
329	土壙23	弥生土器	鉢	38.0	—	(11.4)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良	凹線3条
330	土壙23	弥生土器	高杯	20.0	—	(10.8)	橙色(5YR7/6)	粗砂	良	脚部沈線2条,透かし孔1残
331	土壙23	弥生土器	高杯	16.0	7.0	9.8	橙色(2.5YR6/8)	礫	良	透かし孔3
332	土壙23	弥生土器	高杯	—	8.8	(5.7)	橙色(5YR6/6)	礫	良	透かし孔3(貫通せず)
333	土壙23	弥生土器	高杯	—	9.5	(6.0)	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良	透かし孔上下各3
334	土壙24	弥生土器	甕	(14.0)	—	(6.0)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良	
335	土壙25	弥生土器	壺	6.7	—		橙色(2.5YR6/8)	精良	良	沈線4条
336	土壙25	弥生土器	長頸壺	18.4	—		橙色(5YR6/6)	礫	良	凹線3条,鋸歯文
337	土壙25	弥生土器	甕	14.0	—		橙色(5YR7/6)	細砂	良	凹線5条
338	土壙25	弥生土器	高杯	20.1	—		橙色(2.5YR6/8)	細砂	良	
339	土壙25	弥生土器	器台	(20.0)			橙色(5YR7/8)	礫	良	凹線7条,鋸歯文
340	土壙25	弥生土器	器台		21.8		橙色(5YR7/8)	礫	良	沈線3条,鋸歯文,凹線4条,黒斑B
341	土壙25	弥生土器	器台	43.5	—		灰褐色(5YR5/2)	礫	良	口縁端部上面·中央·下面に刺突文,鋸歯文2列
342	土壙28	弥生土器	長頸壺	22.4		(8.8)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良	凹線5条
343	土壙28	弥生土器	長頸壺	—	5.6		明赤褐色(2.5YR5/8)	粗砂	良	ススC
344	土壙28	弥生土器	壺	18.0		(8.4)	橙色(5YR6/6)	礫	良	肩部刺突文
345	土壙28	弥生土器	甕	(17.7)		(7.5)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良	
346	土壙28	弥生土器	鉢	11.8		(6.5)	橙色(5YR6/6)	細砂	良	口縁端部沈線？
347	土壙28	弥生土器	鉢	12.0	4.5	10.4	鈍い褐色(5YR7/4)	粗砂	良	
348	土壙28	弥生土器	台付鉢	18.0		(17.8)	明赤褐色(5YR5/8)	礫	良	
349	土壙28	弥生土器	高杯	24.0		(6.5)	明赤褐色(5YR5/6)	細砂	良	
350	土壙28	弥生土器	椀	13.8	7.0	5.5	鈍い褐色(7.5YR5/4)	粗砂	良	ヘラミガキ？
351	土壙30	弥生土器	甕	18.4	—	—	赤色(10R5/8)	細砂	良	凹線1条,黒斑B
352	土壙30	弥生土器	高杯	(29.0)	—	—	橙色(2.5YR6/8)	細砂	良	凹線3条
353	土壙30	弥生土器	高杯	—	—	—	橙色(5YR6/8)	細砂	良	外面ヘラ描沈線3条

立田遺跡　土器観察表

挿図番号	掲載遺構名	種別	器種	法量(cm)			色調	胎土	焼成	特徴
				口径	底径	器高				
354	その他	弥生土器	壺	17.0			赤色(10R5/6)	粗砂	良	口縁端部刻目文,刻目突帯2条
355	その他	弥生土器	長頸壺	15.3	(7.5)	32.2	赤灰色(2.5YR6/1)	礫	良	肩部刺突文
356	その他	弥生土器	長頸壺	15.4			浅黄橙色(7.5YR8/4)	細砂	良	凹線2条
357	その他	弥生土器	長頸壺	21.0	—	—	橙色(2.5YR7/6)	礫	良	凹線1条
358	その他	弥生土器	壺	16.6	—	(4.7)	橙色(5YR6/8)	粗砂	良	凹線4～5条
359	その他	弥生土器	甕	18.6		(4.6)	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	良	
360	その他	弥生土器	甕	25.6			鈍い橙色(2.5YR6/4)	粗砂	良	凹線2条
361	その他	土師器	甕	16.0	—	(6.3)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	礫	良	
362	その他	土師器	鉢	41.5	—	(8.2)	橙色(5YR6/6)	粗砂	良	黒斑B
363	その他	土師器	鉢	(50.0)	—	(6.7)	橙色(5YR7/6)	粗砂	良	口縁端部沈線4条,黒斑A
364	その他	弥生土器	鉢	10.8		(6.3)	鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良	
365	その他	弥生土器	鉢	10.2	4.0	8.9	鈍い黄橙色(10YR7/3)	細砂	良	
366	その他	弥生土器	鉢	12.1	3.9	8.1	鈍い黄橙色(10YR7/4)	礫	良	
367	その他	弥生土器	鉢	14.6		(7.1)	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良	
368	その他	土師器	鉢	25.0		(4.9)	灰黄色(2.5YR7/2)	細砂	良	
369	その他	弥生土器	高杯	19.4			赤橙色(10R6/6)	粗砂	良	
370	その他	弥生土器	高杯	20.0	—	(8.0)	橙色(2.5YR6/8)	粗砂	良	
371	その他	弥生土器	高杯	17.5	—	(5.2)	橙色(2.5YR7/8)	精良	良	
372	その他	弥生土器	高杯	(17.9)		(2.9)	鈍い橙色(10YR7/3)	細砂	良	
373	その他	弥生土器	高杯	—	11.0	—	橙色(5YR7/8)	細砂	良	凹線2条
374	その他	弥生土器	装飾高杯	21.0	—		鈍い橙色(7.5YR7/4)	精良	良	貼付突帯その上に鋸歯文, 透かし孔1残,刺突文
375	その他	弥生土器	器台	17.2	15.5	14.4	橙色(5YR6/8)	礫	良	口縁部凹線4条,脚端部凹線4～5条, 透かし孔上4·下4
376	その他	手捏土器	手捏土器	8.2	5.5	7.0	鈍い黄橙色(10YR7/3)	礫	良	指オサエ,黒斑A～C
377	その他	弥生土器	手捏椀	9.3	4.6	6.5	鈍い黄橙色(10YR6/3)	細砂	良	
378	その他	弥生土器	製塩土器	—	4.6	(3.9)	橙色(2.5YR6/6)	礫	良	
379	その他	弥生土器	製塩土器	—	5.7	(4.7)	橙色(2.5YR6/6)	礫	良	
380	その他	土師器	製塩土器		4.0	(2.1)	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良	
381	その他		製塩土器		4.0	(2.7)	灰黄色(2.5YR6/2)	礫	良	
382	その他	須恵器	壺	14.2	—	—	灰色(N4/)	精良	良	内外面ナデ
383	その他	土師器	壺	11.4		17.0	鈍い褐色(7.5YR5/4)	細砂	良	
384	その他	土師器	壺	10.5			明黄褐色(10YR7/6)	細砂	良	外面タタキ後ハケ
385	その他	土師器	甕	12.4			鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	良	
386	その他	土師器	高杯	16.6		(6.6)	淡赤橙色(2.5YR7/3)	細砂	良	内面ミガキ
387	その他	須恵器	杯蓋	—	—	(1.2)	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	良	
388	その他	須恵器	杯蓋	—	—	(1.8)	灰白色(10YR7/1)	細砂	良	外面ヘラケズリ
389	その他	須恵器	杯蓋	—	—	(2.4)	褐灰色(10YR6/1)	細砂	良	外面ヘラケズリ
390	その他	須恵器	杯身	—	9.4	(1.5)	灰色(5Y6/1)	細砂	良	
391	その他	須恵器	坏身	12.0	6.4	3.9	灰白色(N8/)	精良	良	内外面ナデ
392	その他	須恵器	杯身	(12.4)	8.4	3.6	灰白色(N7/)	細砂	良	内外面ナデ
393	その他	須恵器	椀	20.0	11.6	9.9	灰白色(N7/)	細砂	良	口縁部底近く回転ヘラケズリ
394	その他	土師器	取っ手	—	—	(5.5)	鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良	
395	その他	土師器	皿	(26.4)	—	(2.6)	橙色(2.5YR6/8)	精良	良	内外面丹塗り
396	その他	瓦	玉縁丸瓦				灰白色(2.5T7/1)	細砂	良	長さ(16.0)·幅(12.0)·厚さ2.0cm
397	その他	瓦	丸瓦				鈍い橙色(7.5YR7/4)	細砂	良	長さ(11.6)·幅(10.0)·厚さ1.7cm
398	その他	瓦	丸瓦				橙色(7.5YR7/6)	細砂	良	長さ(9.7)·幅(10.5)·厚さ1.2cm
399	その他	瓦	丸瓦				鈍い橙色(5YR7/4)	細砂	良	最大長(12.0)·最大幅(10.0)· 厚さ1.5cm
400	その他	土師器	台付椀	(10.8)		(2.7)	灰白色(10YR8/2)	精良	良	
401	その他	土師器	台付椀	(10.0)		(1.9)	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良	
402	その他	土師器	台付椀		5.0		灰白色(7.5YR8/2)	細砂	良	
403	その他	土師器	台付椀		5.2	(1.3)	灰白色(2.5Y8/1)	細砂	良	
404	その他	土師器	台付椀		6.6	(1.7)	灰白色(2.5Y8/1)	粗砂	良	
405	その他	土師器	台付椀		6.0		浅黄橙色(7.5YR8/3)	細砂	良	
406	その他	土師器	台付椀			(0.9)	灰白色(10YR8/2)	粗砂	良	
407	その他	土師器	台付椀			(0.7)	灰白色(10YR8/2)	細砂	良	
408	その他	土師器	小皿	8.0?		1.8	鈍い褐色(7.5YR6/3)	細砂	良	糸切り
409	その他	土師器	鍋の足		4.2		鈍い橙色(7.5YR7/4)	粗砂	良	

立田遺跡　石製品

掲載番号	遺構名	遺物名	材質	法量(cm)			重量(g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ			
S1	竪穴住居1a·b	勾玉	角閃石？(軟玉)	1.7	0.6	0.5	0.9	弥生後期Ⅲ～Ⅳ	
S2	竪穴住居1a·b	勾玉	蛇紋岩	1.5	0.6	0.3	0.6	弥生後期Ⅲ～Ⅳ	
S3	竪穴住居1a·b	管玉	碧玉	2.0	0.3	0.3	0.3	弥生後期Ⅲ～Ⅳ	
S4	竪穴住居1a·b	楔	サヌカイト	8.0	3.7	1.1	39.0	弥生後期Ⅲ～Ⅳ	
S5	竪穴住居8	石包丁	サヌカイト	7.0	4.2	1.1	32.4	弥生中期Ⅱ	
S6	竪穴住居8	スクレイパー	サヌカイト	11.1	6.7	1.4	72.1	弥生中期Ⅱ	
S7	井戸1	石包丁	サヌカイト	10.1	4.7	1.2	59.6	弥生後期Ⅰ～Ⅱ	
S8	井戸1	石包丁？	サヌカイト	5.7	3.9	1.0	21.9	弥生後期Ⅰ～Ⅱ	
S9	土壙4	石包丁	粘板岩	7.9	4.1	1.4	56.7	弥生後期Ⅱ	
S10	土壙3	石包丁	サヌカイト	5.3	4.0	1.1	32.4	弥生後期Ⅱ	
S11	土壙24	砥石		10.5	8.0	3.3	465.3	弥生後期Ⅲ	
S12	その他	石包丁未製品？	粘板岩？	10.1	5.2	2.2	126.6	弥生	
S13	その他	石包丁	サヌカイト	6.4	3.7	1.0	28.3	弥生	
S14	その他	石包丁	サヌカイト	4.0	4.3	0.7	32.4	弥生	
S15	その他	楔	サヌカイト	4.2	3.6	9.0	16.3	弥生	
S16	溝5	砥石	流紋岩	7.3	3.8	2.4	88.0	中世	
S17	その他	砥石	砂岩ホルンフェルス	9.5	5.5	1.7	170.9	中世	

立田遺跡　土製品

掲載番号	遺構名	器種	法量(cm)				重量(g)	色調	胎土	焼成	時期	備考
			長さ	幅	厚さ	孔径						
C1	竪穴住居5	土錘	2.9	2.9	2.9	0.2	25.9	橙色(7.5YR6/6)	細砂	良	弥生後期Ⅰ	
C2	井戸1	土錘	6.7	4.0	3.9	1.0	118.6	橙色(7.5YR6/6)	粗砂	良	弥生後期Ⅰ	
C3	その他	分銅形土製品	4.2	6.1	0.9	－	21.2	鈍い黄橙色(10YR7/4)	細砂	良	弥生後期	
C4	その他	土錘	4.4	1.4	1.2	0.4	6.8	浅黄橙色(10YR8/3)	粗砂	良	中世	
C5	その他	土錘	4.0	1.2	1.2	0.3	6.1	鈍い橙色(7.5YR7/3)	細砂	良	中世	
C6	その他	土錘	4.2	1.3	1.4	0.4	6.3	鈍い黄橙色(10YR7/3)	粗砂	良	中世	

立田遺跡　金属製品

掲載番号	遺構名	器種	材質	法量(cm)			重量(g)	時期	備考
				長さ	幅	厚さ			
M1	竪穴住居1a·b	刀子	鉄			0.3		弥生後期Ⅲ～Ⅳ	
M2	竪穴住居5	鏃	銅	3.3	1.2	0.2	1.6	弥生後期Ⅰ	有茎
M3	竪穴住居10	鎌	鉄			0.4		古墳	曲刃
M4	その他	鏃	鉄			0.4		古墳	尖根
M5	その他	鏃	鉄			0.5		古墳	
M6	その他	鏃	鉄			0.5		古墳	

立田遺跡　遺構名称新旧対照表

竪穴住居

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
竪穴住居1a	BP15	SH－02	弘　田
竪穴住居1b	BP15	SH－02	〃
竪穴住居1c	BP15	SH－02	〃
竪穴住居2	AP16･17	SH－04	浅　倉
竪穴住居3	AP16･17	SH－03	〃
竪穴住居4	AP16･17	SH－01	〃
竪穴住居5	AP16･17	SH－02	〃
竪穴住居6	BP16	住1	弘　田
竪穴住居7	BP17	SH－01	〃
竪穴住居8	立田I区	SH－01	正　岡
竪穴住居9	立田I区	SH－02	〃
竪穴住居10	BP15	SH－01	弘　田
竪穴住居11	BP16	住2	〃

掘立柱建物

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
掘立柱建物1	立田I区	SB－01	正　岡
掘立柱建物2	立田I区	SB－02	〃
掘立柱建物3	BP18		弘　田

井戸

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
井戸1	AP15	SE－01	弘　田

袋状土壙

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
袋状土壙1	AP15	SK－04	浅　倉
袋状土壙2	BP15	SK－06	弘　田
袋状土壙3	立田I区	SK－01	正　岡
袋状土壙4	BP18	SK－01	弘　田
袋状土壙5	BP18	SK－04	〃

溝

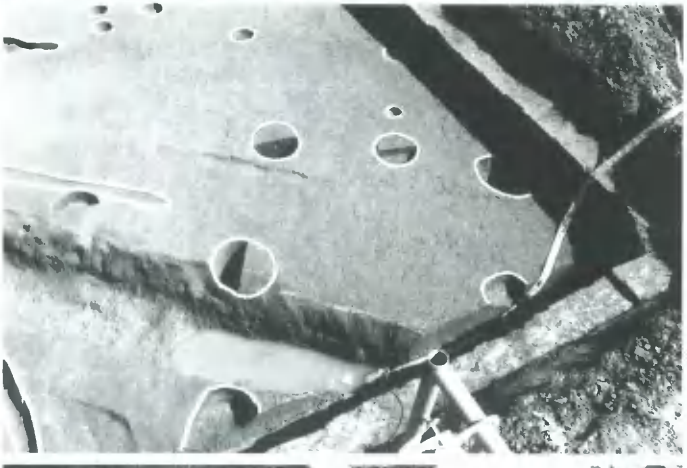
報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
溝1	AP15	SD1	浅　倉
溝2	BP18	SD2	弘　田
溝3	AP15	溝	〃
溝4	BP18	SD1	〃
溝5	BP15	SD1	〃

土壙

報告名称	調査区	調査名称	調査担当者
土壙1	AP15	SK－03	浅　倉
土壙2	AP15	SK－02	〃
土壙3	AP15	SK－01	〃
土壙4	BP15	SK－01	弘　田
土壙5	BP15	SK－02	〃
土壙6	BP15	SK－08	〃
土壙7	BP15	SK－05	〃
土壙8	BP15	SK－03	〃
土壙9	BP15	SK－04	〃
土壙10	BP15	SK－07	〃
土壙11	AP16･17	SK－05	浅　倉
土壙12	AP16･17	SK－09	〃
土壙13	AP16･17	SK－10	〃
土壙14	AP16･17	SK－04	〃
土壙15	AP16･17	SK－08	〃
土壙16	BP16	土壙1	弘　田
土壙17	BP16	土壙2	〃
土壙18	BP16	土壙3	〃
土壙19	BP16	土壙4	〃
土壙20	BP16	土壙5	〃
土壙21	BP17	土壙3	〃
土壙22	BP17	土壙2	〃
土壙23	BP17	土壙1	〃
土壙24	BP17	土壙4	〃
土壙25	BP17	土壙6	〃
土壙26	BP17	土壙5	〃
土壙27	BP17	土壙7	〃
土壙28	BP18	SK－03	〃
土壙29	BP18	SK－06	〃
土壙30	BP18	SK－02	〃
土壙31	BP18	SK－05	〃

高松原古才遺跡写真

1　竪穴住居３
（東から）



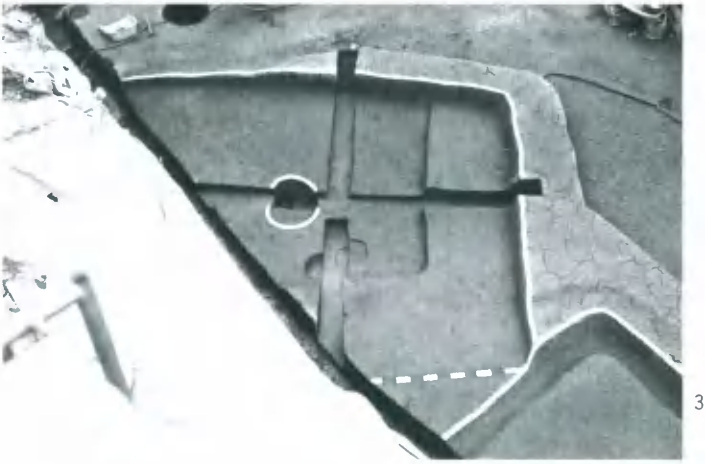
2　掘立柱建物１
（南から）

3　河道１
肩部
（南から）

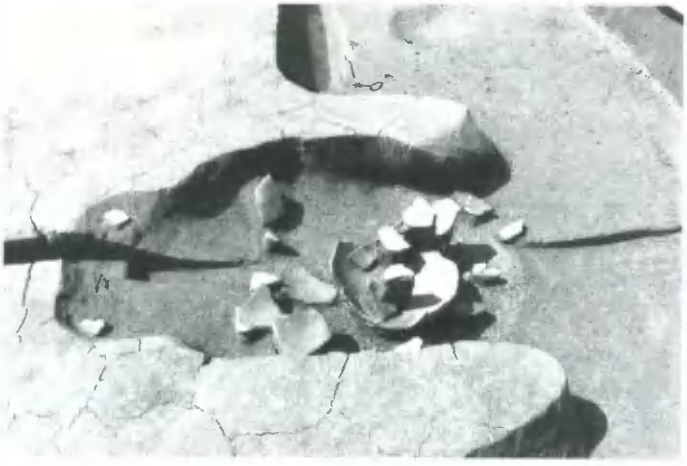
写真134

1　竪穴住居 9
（北から）

2　竪穴住居11
（西から）



3　竪穴住居13
（南西から）

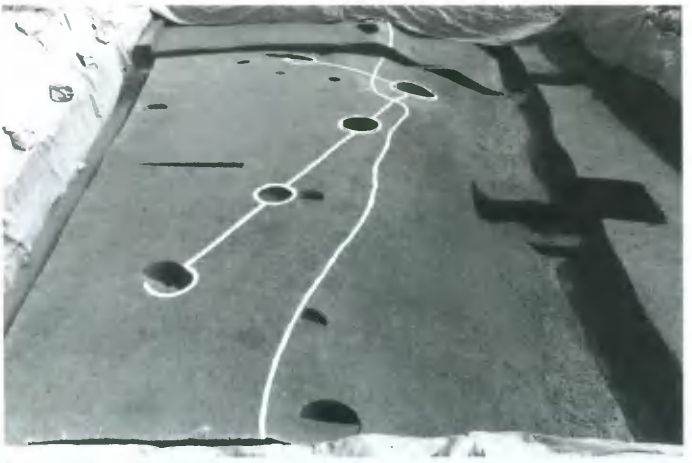


1　竪穴住居14
カマド
（北から）

2　土壙8
（西から）

3　河道2
（南から）

写真136



1　掘立柱建物２
（北から）

2　溝８
（北東から）

3　溝12・水田
（北から）

8

13

15

10

40

42

48

51

45

52

62

63

竪穴住居 3 (8)　土壙 2 (10)　土壙 3 (13)　土壙 4 (15)
竪穴住居 9 (40)　竪穴住居11(42)　竪穴住居13(45)　竪穴住居14(48)
溝 5 (51)　溝 6 (52)　鍛冶炉 1 (62･63)

写真138

64

71

72

73

65

69

70

74

75

河道１（64）　　河道２（古墳時代）（65・69～75）

89

93

92

98

99

100

106

107

85

108

109

110

111

116

112

113

81

86

103

119

写真140

121

125

151

126

152

145

171

146

170

157

160

土壙13(121)　　溝 8 (125・126)　　河道 2 (古代)(145・146)
その他(古代)(151・152・157)　　溝13(160)
溝25(170)　　その他(中世)(171)

141

143

土器溜り 1

写真142

石製品〈S1～6・8～12〉・土製品〈C1～8〉・金属製品(M1～8)・玉類〈G1・S7〉

立田遺跡写真

1　竪穴住居 1
（西から）

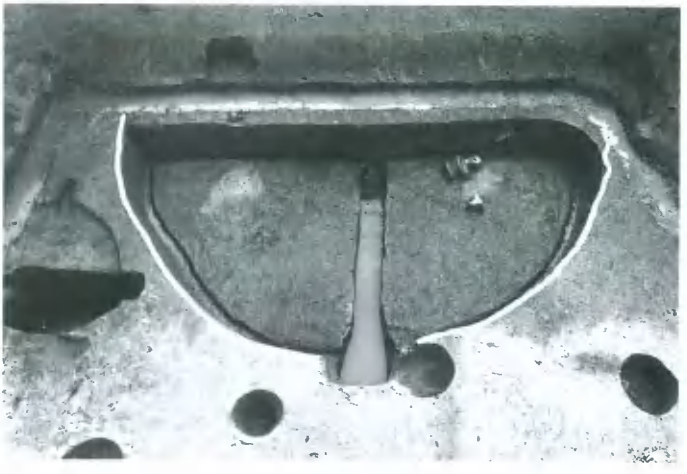
2　竪穴住居 3
（南から）

3　竪穴住居 4
（北から）

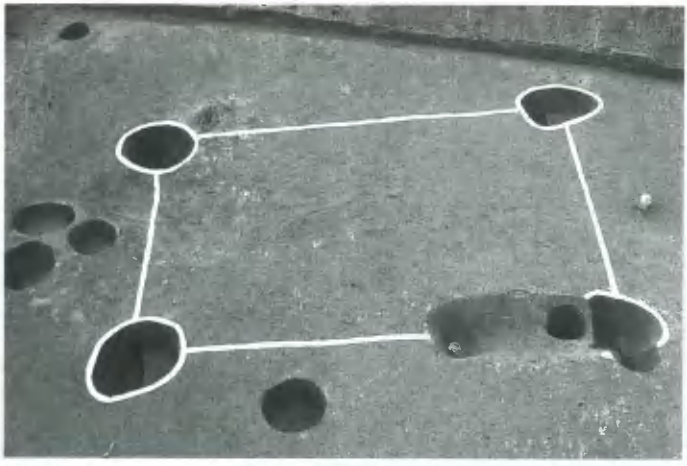
写真144

1　竪穴住居5
（南東から）

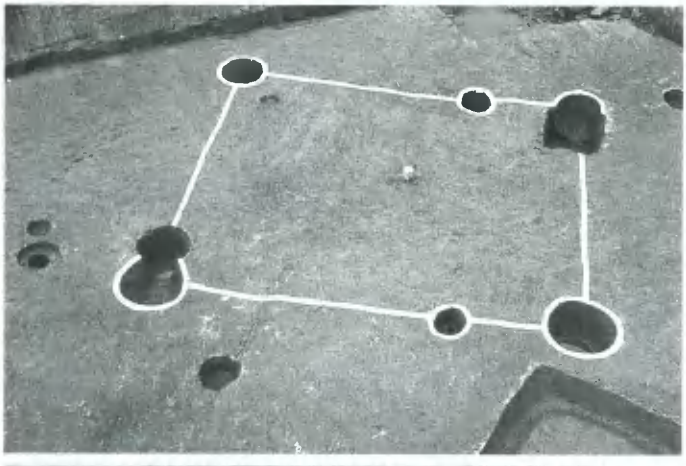
2　竪穴住居8
（北東から）



3　竪穴住居9
（北東から）



1　掘立柱建物１
（北東から）



2　掘立柱建物２
（南西から）

3　井戸１
（南から）

写真146

1　井戸1
（北西から）

2　袋状土壙2
（東から）

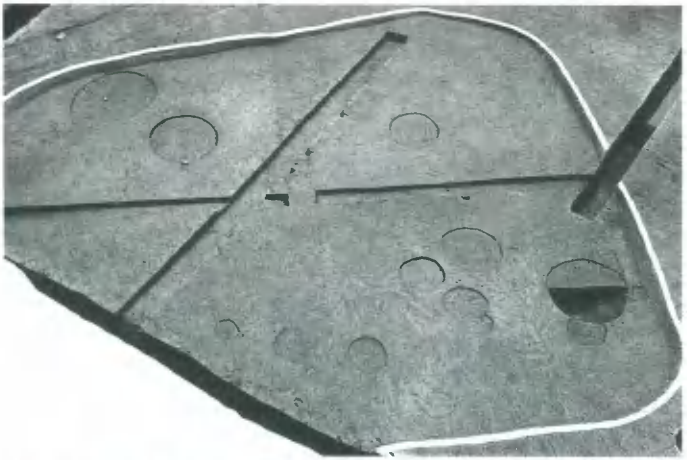
3　袋状土壙3
土層断面
（北西から）

1　袋状土壙4
（北東から）

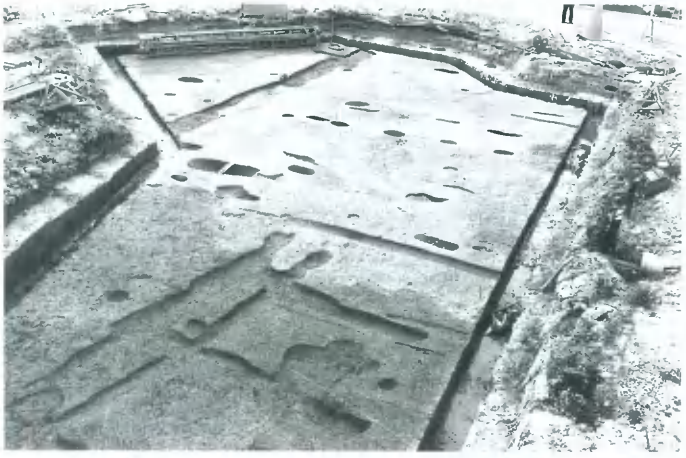
2　土壙2
（北東から）

3　土壙3
（南から）

写真148



1　竪穴住居10
（東から）



2　AP16･17区中世鋤溝群
（南東から）

3　BP17区中世鋤溝群
（北から）

1

12

13

14

15

8

9

21

22

23

66

67

70

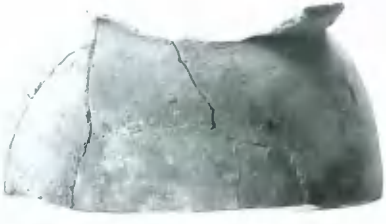
竪穴住居１a･b(1･8･9･12～15)　竪穴住居１c(21～23)
竪穴住居９(66･67･70)

写真150

32

35

38



36

65

42

41

44

竪穴住居 4（32・35・36・38・41・42・44）　竪穴住居 8（65）

101

73

102

116

80

78

99

82

107

井戸１（1）

写真152

87

90

94

85

110

117

118

93

105

119

111

井戸1 (2)

120

123

129

130

127

128

136

131

140

138

134

142

139

146

144

145

袋状土壙1（120）　　袋状土壙2（123・127～130）
袋状土壙3（131・134・136・138～140・142・144～146）

写真154

150

154

166

155

170

袋状土壙 4（1）

147

158

161

168

169

171

袋状土壙 4 (2) (147・158・161・168・169)　　袋状土壙 5 (171)

写真156

190

198

199

210

239

241

土壙 3（1）

192

227

194

218

土壙 3（2）

写真158

238

245

243

249

247

248

250

251

土壙 3 (3)

314

316

318

320

324

328

317

331

332

333

土壙23

写真160

石製品(S4～17)・土製品(C1～6)・金属製品(M1～6)・玉類(S1～3)

Ⅳ　自然科学による鑑定・分析

1　加茂政所遺跡の自然科学分析調査報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

2　加茂政所遺跡の植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

3　加茂政所遺跡における弥生時代土壙墓出土の歯牙について

岡山大学名誉教授　小田嶋梧郎

4　加茂政所遺跡出土の動物遺体

早稲田大学　金子浩昌

5　岡山県加茂政所遺跡出土ウマ遺存体

岡山理科大学　富岡直人

6　加茂政所遺跡出土の土器・瓦の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所　白石　純

7　加茂政所遺跡出土のガラス玉、ガラス滓および銅鏃の分析

岡山理科大学自然科学研究所　白石　純

8　加茂政所遺跡出土銅釧の鉛同位体比分析

（財）元興寺文化財研究所　保存科学センター

東京国立文化財研究所　平尾良光・榎本淳子

9　岡山県岡山市加茂政所遺跡出土金属塊の自然科学的分析

京都造形芸術大学　内田俊秀

10　加茂政所遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査

大澤正己

11　加茂政所遺跡出土鉢形土器内の赤色物について

別府大学　本田　光子

1　加茂政所遺跡の自然科学分析調査報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

加茂政所遺跡（岡山県岡山市加茂に所在）は、岡山平野の北西部、足守川の氾濫原上に位置し、自然堤防上から低地にかけて立地する。本遺跡では、これまでの発掘調査により弥生時代中期～後期の集落跡や捨て場とみられる貝土坑などが検出されている。また、古代とされる層準では、畦畔などは確認されていないが、稲作が行われていた可能性があるとされる。

今回の自然科学分析調査では、弥生時代および古代における稲作の消長について検討するために植物珪酸体分析を実施する。また、弥生時代の住居跡や土坑の構築時期を確認するために放射性炭素年代測定を実施するとともに、住居跡から検出された構築材と考えられる炭化材の樹種を明らかにするために樹種同定を実施する。

1　試料

植物珪酸体分析は、高田Ｐ－８区が調査対象とされた（1091ページ図１）。Ｐ－８区の層序は上位より１層～13層に分層されており、13層は灰白色砂、12層は13層を掘り込んで構築される溝の埋積する褐灰色粘土、11層・10層は黄色～灰白色粘土、９層・８層は灰色砂、７層は黒褐色粘質土、６層～３層は灰白色～暗灰色粘土、２層は灰白色砂質土、１層は現水田耕作土である。これらの内、10層が弥生時代後期、７層が古墳時代後期、６層～４層が古代、３層が中世とみられている。試料は10層・６層～４層の各層から採取された４点である（図１）。

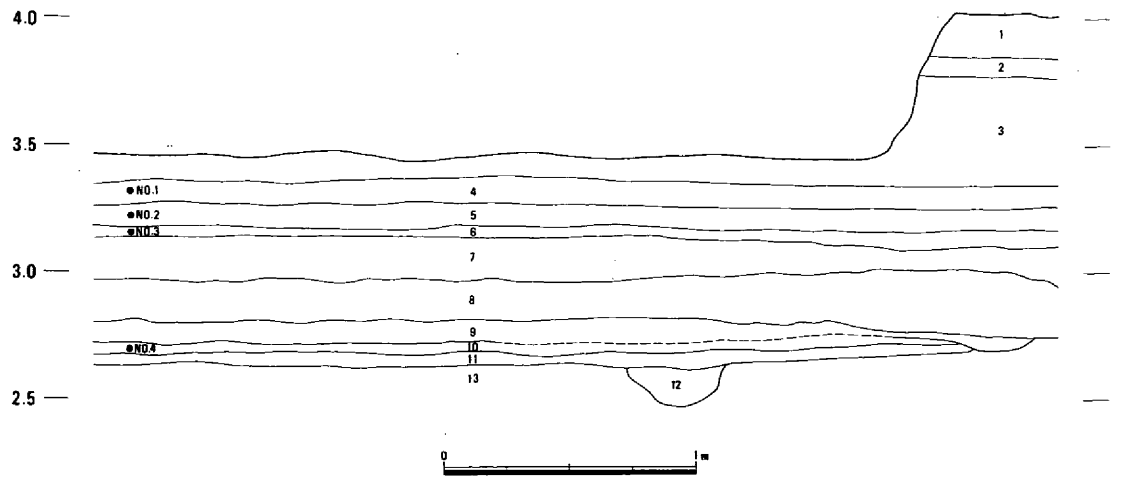


図１　資料採集地点の土層断面および資料採集層位

１層：現水田耕土
２層：灰白色砂質土
３層：灰白色粘土（中世）
４層：暗灰色粘土（古代？）
５層：灰白色粘土（古代？）
６層：淡灰色粘土（古代？）
７層：黒褐色粘質土（古墳時代後期）
８層：灰白色粘質微砂
９層：灰色微砂
10層：灰白色粘土（弥生時代後期？）
11層：黄色粘土
12層：褐灰色粘土（溝埋積物）
13層：褐灰色粘土

放射性炭素年代測定は、住居構築材など炭化材８点（試料番号１～８）と貝土坑から採取された貝類５点（試料番号９～13）の合計13点である。また、樹種同定を行う試料は、放射性炭素年代測定試料の試料番号１～８と同一試料８点である。放射性炭素年代測定および樹種同定の試料の詳細については、結果とともに表示する（表２）。

2　分析方法

（１）植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W，250KHz，１分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

（２）放射性炭素年代測定

測定は、放射性炭素年代測定室に依頼した。年代値の算出には、^{14}Cの半減期としてLIBBYの半減期5,570年を使用している。

（３）樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3　結果

（１）植物珪酸体分析

結果を表１に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるが、検出個数は少ない。また、保存状態の悪いものが多く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

弥生時代後期の10層から採取された試料番号４ではタケ亜科が多産し、ヨシ属、ウシクサ族、栽培植物のイネ属、イチゴツナギ亜科などが認められる。

古代とされる６層から採取された試料番号３でも同様にタケ亜科が多産し、ウシクサ族やイネ属などが認められる。同じく古代とされる５層・４層から採取された試料番号２・１でも同様な種類が認められ、タケ亜科が多産するが、イネ属の機動細胞珪酸体の検出個数が多くなり、頴珪酸体や

表１　植物珪酸体分析結果

種類 / 試料番号	1	2	3	4
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	6	4	1	1
タケ亜科	72	36	16	40
ヨシ属	10	1	2	
ウシクサ族コブナグサ属	1	－	－	1
ウシクサ族ススキ属	5	5	－	1
イチゴツナギ亜科	19	6	－	1
不明キビ型	13	5	－	2
不明ヒゲシバ型	7	5	1	
不明ダンチク型	12	4	2	2
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	26	16	2	8
タケ亜科	20	12	13	33
ヨシ属	1	－	－	－
ウシクサ族	7	－	1	－
不明	17	6	2	1
合計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	145	65	21	50
イネ科葉身機動細胞珪酸体	71	34	18	42
総計	216	99	39	92
組織片				
イネ属穎珪酸体	1	－	－	－
イネ属短細胞列	1	－	－	－

表２　放射性炭素年代測定結果

試料番号	試料採取位置	時代時期	試料の質	年代（1950年からの年数）	Codo No.
1	砂場１区 竪穴住居42	弥生時代後期前半	炭化材	2720±90 770 B.C.	Gak-19703
2	砂場１区 竪穴住居45	弥生時代後期前半	炭化材	2390±70 440 B.C.	Gak-19704
3	砂場１区 竪穴住居９	弥生時代中期中葉	炭化材	2300±80 350 B.C.	Gak-19705
4	砂場１区 竪穴住居41	弥生時代後期前半	炭化材	2020±70 70 B.C.	Gak-19706
5	砂場１区 竪穴住居40	弥生時代後期前半	炭化材	2720±90 770 B.C.	Gak-19707
6	砂場2D区 竪穴住居５	弥生時代中期中葉	炭化材	2320±100 370 B.C.	Gak-19708
7	砂場2D区 土壙墓１	弥生時代中期中葉	炭化材	2020±70 70 B.C.	Gak-19709
8	立田AP16・17区 竪穴住居３	弥生時代後期後半	炭化材	1820±70 A.D.130	Gak-19710
9	砂場2D区 袋状土壙24	弥生時代中期末 ～後期初頭	貝殻	2340±80 390 B.C.	Gak-19711
10	砂場2B区 土壙76	弥生時代中期中葉	貝殻	2610±80 660 B.C.	Gak-19712
11	砂場2G区 土壙70	弥生時代中期中葉	貝殻	2090±70 140 B.C.	Gak-19713
12	砂場南水路１区 土壙100	弥生時代中期中葉	貝殻	2580±100 630 B.C.	Gak-19714
13	砂場南水路２区 土壙225	弥生時代中期中葉	貝殻	2050±90 100 B.C.	Gak-19715

短細胞列などの組織片も認められる。

（２）放射性炭素年代測定

結果を表２に示す。大半の試料が約2,000年前前後の測定値が得られた。ただし、試料番号１・５・10・12の４試料は、約2,500～2,700年前の測定結果が得られた。

（３）樹種同定

結果を表３に示す。試料番号５は木材組織を観察することができず、不明とした。試料番号８には２種類が認められた。これらの炭化材は、いずれも広葉樹で、４種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属アカガシ亜属・カキノキ・ハイノキ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*）　ブナ科

環孔材で孔圏部は１～３列、孔圏外で急激で管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）　ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は短接線状および散在状。

・カキノキ属（*Diospyros*）　　カキノキ科

散孔材で管壁は厚く、横断面では楕円形、単独または２～４個が時に年輪界をはさんで複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は小型で対列状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型、１～２細胞幅、10～20細胞高で、階層状に配列する。

・ハイノキ属（*Symplocos*）　　ハイノキ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および２～５個が複合し、道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型、１～３細胞幅、１～20細胞高で、時に上下に連結する。

4　考察

（１）低地の利用について

弥生時代後期とされる10層および古代とされる６層・５層・４層についてイネ属の植物珪酸体の有無を調べた。いずれの土層からも栽培植物のイネ属の葉部に形成される２形態の植物珪酸体が認められる。前回に分析調査した加茂政所遺跡砂場調査区３－Ｈ区の弥生時代後期とされる水田層（次節に掲載）や津寺遺跡中屋調査区３ＢＵ－Ⅱ区の古墳時代以降の水田層とされる堆積物では、いずれもイネ属が検出され、とくに機動細胞珪酸体の出現率が高かった。今回調査した層準は、これらの層準と地質学的な層序対比がなされていないが、植物珪酸体の産状が悪い点、これまでの分析調査事例と比較検討した場合には、今回分析調査した層準で稲作が行われたことを積極的に支持することは難しい。層相の比較による層序対比や珪藻分析から堆積環境を明らかにした上で、改めて検討すべき課題として残される。また、古代とされる層準では、上位に向かい機動細胞珪酸体の検出個数が増加する傾向が認められたが、この要因も現段階では不明である。上位の中世とされる土層からの落ち込みを考慮し、上位層の分析調査も行った上でその要因について検討する必要がある。

なお、弥生時代や古代には周辺にタケ亜科をはじめとしてヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などのイネ科植物が生育していたと思われる。検出された植物珪酸体の保存状態が悪い点、優占するタケ亜科は物理・化学的風化作用により植物珪酸体が残留しにくい土壌中でも残留しやすい点（近藤，1982：杉山・藤原，1986）を考慮すれば、タケ亜科の多産は土層内で残留しやすかったことを反映する可能性が考えられ、これが他のイネ科植物より優占的に生育していたことを示すことではないと考える。

表３　樹種同定結果

番号	調査区	出土遺構	時代・時期	用途など	樹種
1	砂場１区	竪穴住居42	弥生時代後期前半	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
2	砂場１区	竪穴住居45	弥生時代後期前半	住居構築材	コナラ属アカガシ亜属
3	砂場１区	竪穴住居９	弥生時代中期中葉	住居構築材	コナラ属アカガシ亜属
4	砂場１区	竪穴住居41	弥生時代後期前半	覆土中	ハイノキ属
5	砂場１区	竪穴住居40	弥生時代後期前半	住居構築材	不明
6	砂場2D区	竪穴住居５	弥生時代後期中葉	住居構築材	コナラ属アカガシ亜属
7	砂場2D区	土壙墓１	弥生時代中期中葉	燃料材？	コナラ属アカガシ亜属
8	立田ＡＰ16･17区	竪穴住居３	弥生時代後期前半	住居構築材	コナラ属アカガシ亜属
					カキノキ属

（2）遺構の構築年代

試料番号1・5・10・12を除く試料は、約2,000年前前後の測定値が得られた。したがって、これらの試料が採取された遺構は弥生時代頃とみられ、発掘調査所見とほぼ調和する結果と考えられる。試料番号1・5・10・12は、約2,500～2,700年前と予測されている年代よりもかなり古い測定結果となった。この要因については、再堆積などに由来している可能性もあるが現時点では不明であり、今後検証を重ねる必要がある。

（3）植物利用状況

住居構築材と考えられる炭化材は、約半数がアカガシ亜属であり、他にクヌギ節、ハイノキ属、カキノキ属が認められた。アカガシ亜属やクヌギ節については、津寺遺跡などでも古墳時代や弥生時代の住居構築材に比較的多く確認されている（未公表資料）。このことから本地域で住居構築材として一般的な樹種であったことが推定される。住居構築材として利用された背景には、強度が高いという材質のほか、これまでに得られた花粉分析などの調査事例などから周辺で入手が容易であったと考えられることなどが挙げられる。カキノキ属やハイノキ属については、いずれも周辺に生育していた種類を利用した結果と考えられるが、当時住居構築材として一般的であったか否かは、周辺地域での資料が少ないために不明である。今後、さらに周辺地域での類例を蓄積して、各時代における用材選択の詳細を明らかにしたい。

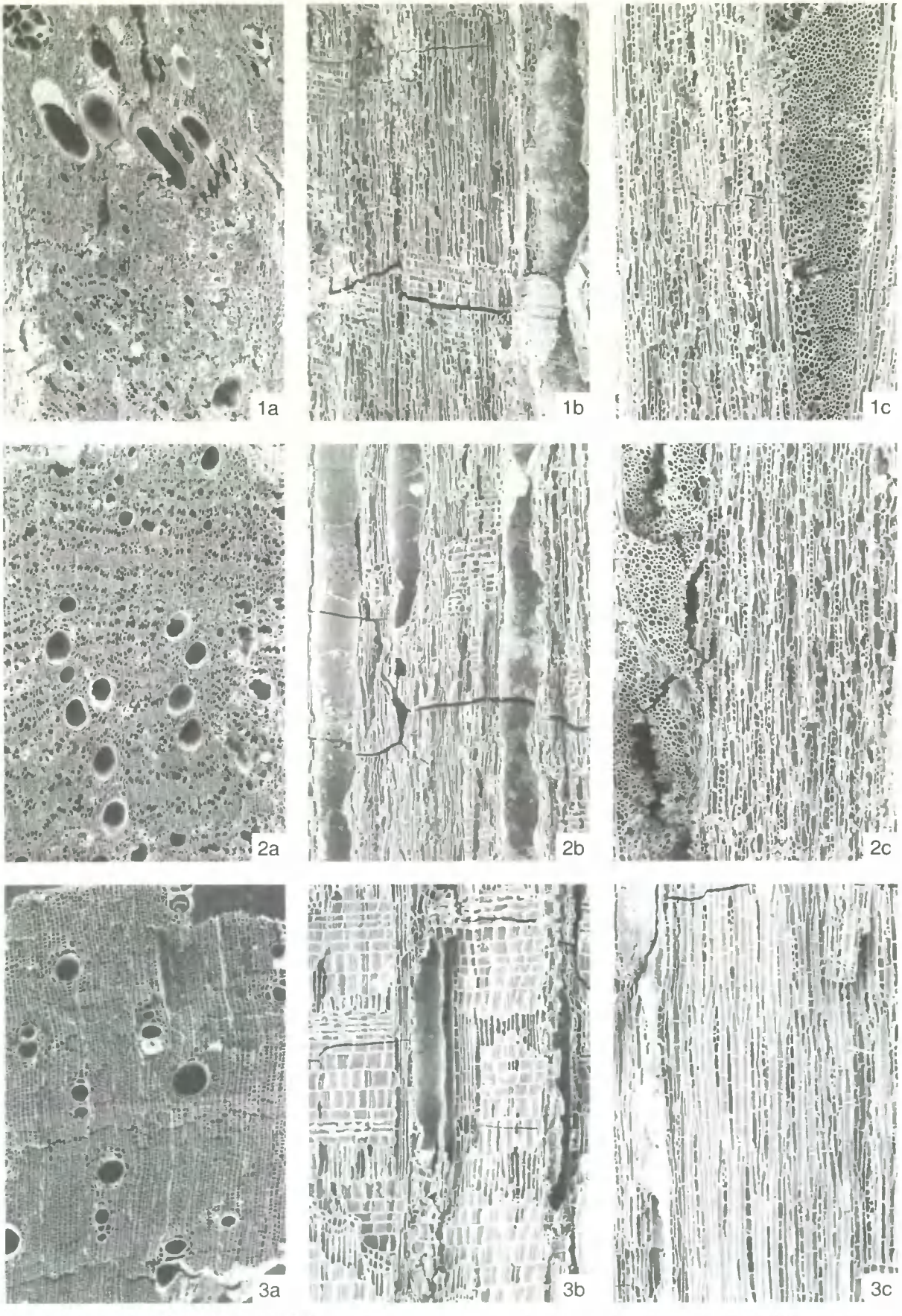
＜引用文献＞

近藤錬三（1982）Plant opal 分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究．昭和56年度科学研究費（一般研究C）研究成果報告書，32p.

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-64.

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p.69-84.

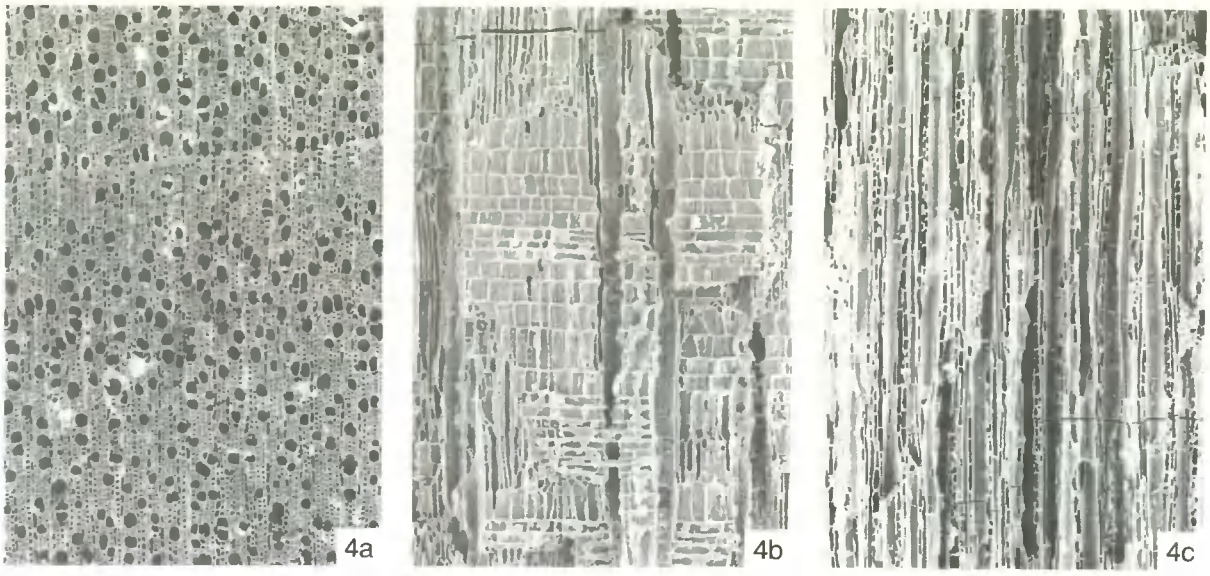
図版１　炭化材（１）



1　コナラ属コナラ亜属クヌギ節　試料番号１
2　コナラ属アカガシ亜属　試料番号２
3　ケヤキ属　試料番号５
a：木口、b：柾目、c：板目

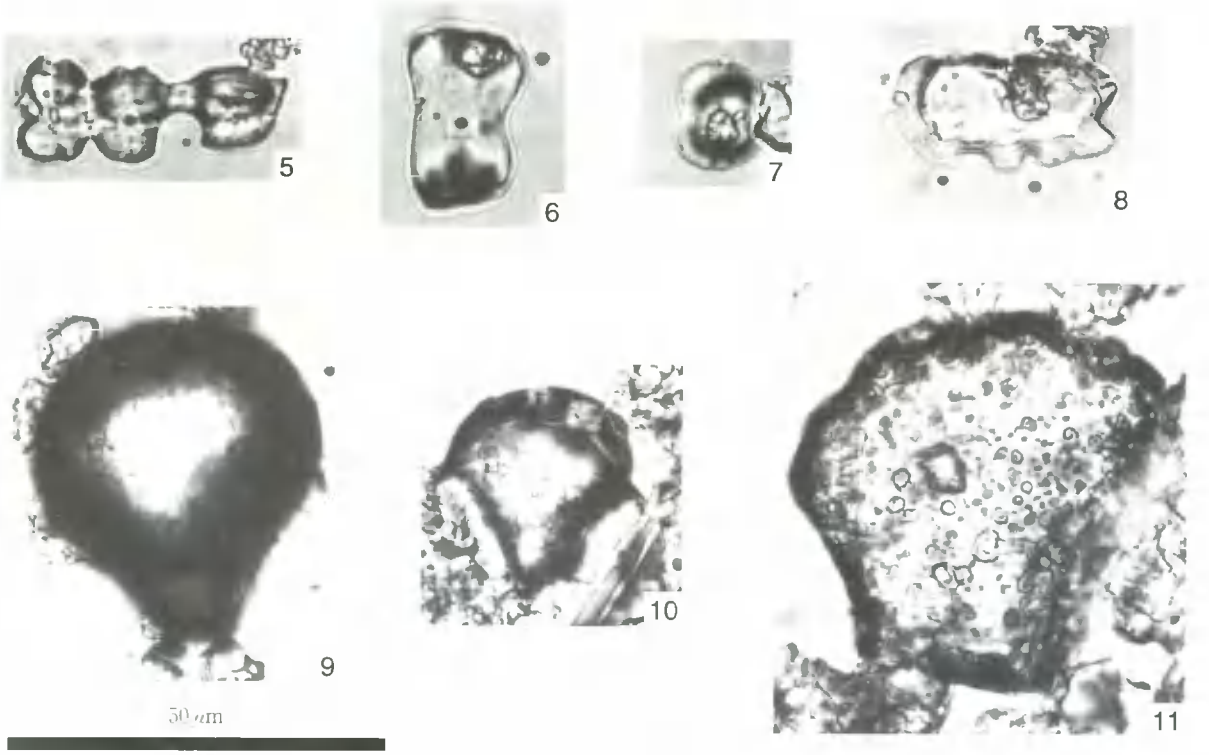
200 μm：a
200 μm：b、c

図版2　炭化材（2）珪酸体



4　ハイノキ属（試料番号4）　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm：a
200 μm：b，c



(5-11)

5　イネ属短細胞列（高田P-8区：1）
6　イネ属機動細胞珪酸体（高田P-8区：1）
7　タケ亜科短細胞珪酸体（高田P-8区：4）
8　イネ属機動細胞珪酸体（高田P-8区：4）
9　ヨシ属短細胞珪酸体（高田P-8区：1）
10　タケ亜科機動細胞珪酸体（高田P-8区：4）
11　イチゴノキ亜科短細胞珪酸体（高田P-8区：1）

2　加茂政所遺跡の植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岡山県内の地形は、県北部の中国山地、県中部の吉備高原、県南部の岡山平野・倉敷平野などの平野部に大きく区分される。この内、岡山平野は、旭川や笹ヶ瀬川など数多くの河川が流れる。加茂政所遺跡は、岡山平野の内部を流れる足守川の氾濫原上に立地する。

加茂政所遺跡の砂場調査区３－Ｈ区では、隣接する津寺遺跡中屋調査区と同様に、弥生時代後期と古墳時代初頭の水田址が検出されている。

今回、岡山県古代吉備文化財センターから加茂政所遺跡の稲作の様態について、自然科学的手法を応用した分析調査が要望された。そこで、今回は加茂政所遺跡の水田層を主体的にイネ科植物相および稲作の様態に関する検討を行うために植物珪酸体分析を実施した。

1　試料

試料は、加茂政所遺跡砂場調査区３－Ｈ区から同センターにより採取された（図１）。次に採取された試料について述べる。

試料採取地点である西壁の土層断面は、１層～７層に分層されており、１層は古墳時代以降の堆積層、３層は古墳時代初頭の水田層、４層は弥生時代後期の水田層とされている（図２）。

試料は、３層～５層の各層より合計３点（試料番号１～４）採取され、全点を分析に供した。

2　分析方法と結果の表示法

試料約５ｇについて、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、重液分離（臭化亜鉛：比重2.3）を順に行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。これを、プリュウラックスで封入して、プレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下で、出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類を参考にして同定・計数する。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類（Taxa）の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するために、植物珪酸体組成図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で算出する。

3　植物珪酸体の産状

結果は、表１と図３に示す。イネ科植物起源の植物珪酸体は、全試料で検出される。保存状態は、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体ともに良好である。

試料番号４～１（７層～３層）では、植物珪酸体組成の層位的な変化が認められる。試料番号４

（7層）では、タケ亜科の機動細胞珪酸体が多産する。これに対して試料番号3（5層）より上位では、栽培植物とされるイネ属機動細胞珪酸体が多産し、イネ属の短細胞珪酸体が少数検出される。また、短細胞珪酸体は、全試料でタケ亜科が多産し、ヨシ属・イチゴツナギ亜科などを伴う。

4　植物珪酸体組成から推定される稲作の消長

5層～3層では、栽培植物とされるイネ属の葉部に形成される2形態の植物珪酸体が検出される。弥生時代後期～古墳時代以降とされる5層～3層では、イネ属の機動細胞珪酸体の出現率は23%以上であり、先述の現水田耕作土層の調査事例（近藤，1988）と比較して高率である。したがって、当時周辺で稲作が行われていたと示唆される。これは5層・4層では、弥生時代後期と古墳時代初頭の畦畔が確認されており、発掘調査成果と調和する。また、古墳時代以降の堆積層（3層）でもイネ属が高率に検出されるため、稲作が行われていた可能性もあるが、今回の調査では水田址が検出されていないために詳細は不明である。今後は本遺跡周辺の古墳時代以降の水田址に関する調査例との比較検討が重要となる。

なお、7層で検出されたイネ属に関しては、出現率が低いこと、堆積層が砂であることを考えると

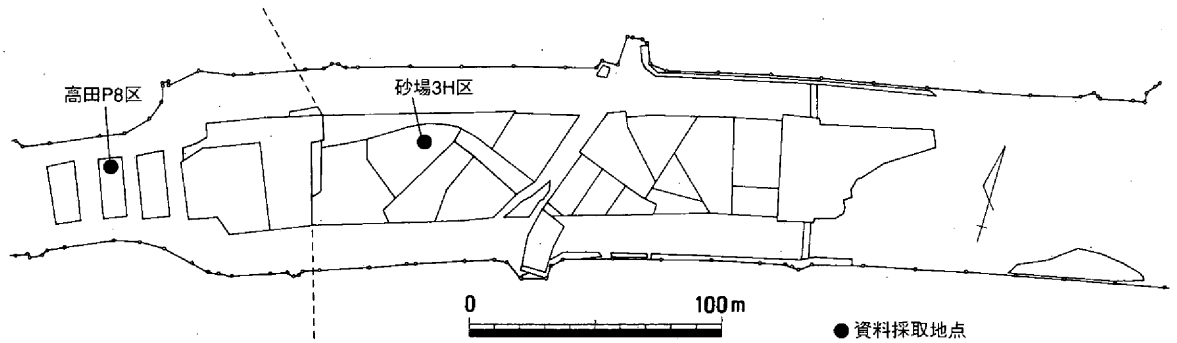


図1　資料採取地点

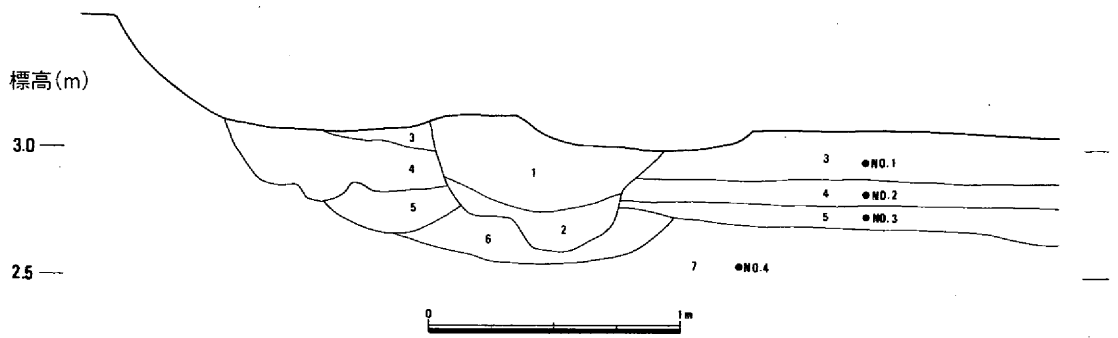


図2　資料採取地点の土層断面および資料採集層位

1　暗茶褐色砂質微砂　　2　灰黄褐色砂質微砂

3　茶褐色砂質微砂　　4　淡灰白色砂質微砂　水田Ⅰ（古墳時代初頭）

5　淡灰黄白色砂質微砂　水田Ⅱ（弥生時代後期）

6　暗灰黄白色　　7　細砂

●は分析資料採集層位を示す。

他の場所から搬入されてきた可能性が高い。

また、随伴種のエノコログサ属・キビ族・オオムギ族・イチゴツナギ亜科には、先述と同様である。そのほか、周辺ではタケ亜科やイチゴツナギ亜科などのイネ科植物が生育していた可能性がある。

5　まとめ

今回の分析結果では、水田層とされる層準からイネ属が高率に出現し、発掘調査成果と調和的な結果が得られた。また、水田層の上位・下位の層準からもイネ属が検出されており、弥生時代後期以前および古墳時代以降の稲作の消長・様態について課題が残される。当遺跡における今回の発掘調査では、弥生時代後期以前と古墳時代以降の水田址が検出されなかったために、今回分析調査によって検出されたイネ属について、詳細に検討することは困難であるが、今後周辺の遺跡において当時の水田址が検出された際に、今回の分析結果を資料として検討したいと考える。

表1　砂場調査区3H区の植物珪酸体分析結果

種　類（Taxa）　試料番号	9	10	11	12
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	2	4	4	−
キビ族エノコログサ属	1	−	−	−
キビ族（その他）	5	7	2	6
タケ亜科ネザサ節	26	14	15	10
タケ亜科（その他）	267	246	191	250
ヨシ属	9	12	4	8
ウシクサ族コブナグサ属	−	1	−	−
ウシクサ族ススキ属	3	1	1	−
イチゴツナギ亜科オオムギ族	1	1	2	−
イチゴツナギ亜科（その他）	22	34	41	11
不明キビ型	67	73	40	20
不明ヒゲシバ型	54	66	22	39
不明ダンチク型	37	55	36	34
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	39	26	80	6
キビ族	1	−	−	−
タケ亜科ネザサ節	−	3	−	2
タケ亜科（その他）	34	36	22	54
ヨシ属	6	7	3	7
ウシクサ族	4	8	2	2
シバ属	1	−	−	−
不明	17	29	20	29
合　計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	494	514	358	378
イネ科葉身機動細胞珪酸体	102	109	127	100
検　出　個　数	596	623	485	478

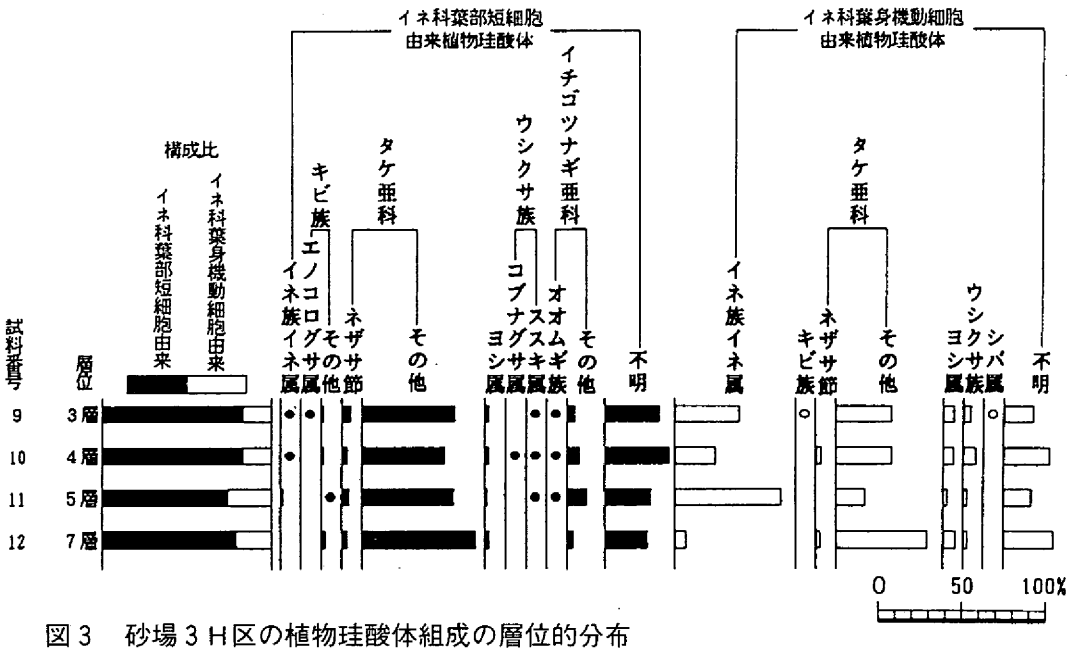


図3　砂場3H区の植物珪酸体組成の層位的分布

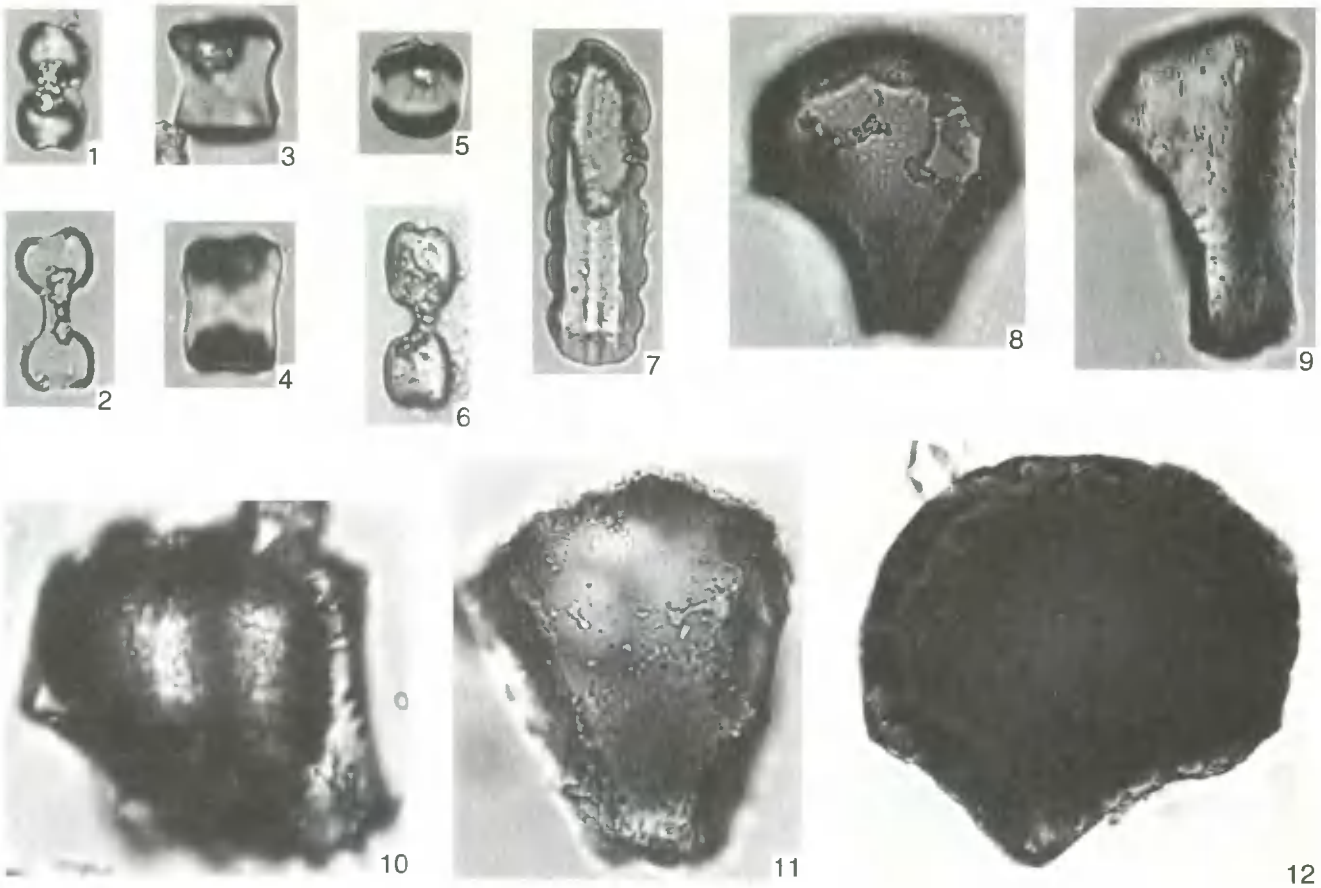
検出個数は、イネ科葉部短細胞珪酸体はイネ科葉部短細胞珪酸体総数、イネ科葉身機動細胞珪酸体はイネ科葉身機動細胞珪酸体総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。●○は、1％未満の出現した種類を示す。

＜引用文献＞

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-64.

近藤錬三（1988）十二遺跡土壌の植物珪酸体分析．十二遺跡発掘調査報告書，御代田町教育委員会，p.377-383.

図版1　砂場調査区3H区の植物珪酸体



30 μm

1　イネ属：短細胞珪酸体由来（試料番号11；5層）
2　キビ族：短細胞珪酸体由来（試料番号9；3層）
3　ネザサ節：短細胞珪酸体由来（試料番号10；4層）
4　タケ亜科：短細胞珪酸体由来（試料番号10；4層）
5　ヨシ属：短細胞珪酸体由来（試料番号10；4層）
6　ススキ属：短細胞珪酸体由来（試料番号10；4層）
7　イチゴツナギ亜科：短細胞珪酸体由来（試料番号11；5層）
8　イネ属：機動細胞珪酸体由来（試料番号10；4層）
9　ウシクサ族：機動細胞珪酸体由来（試料番号10；4層）
10　ネザサ節：機動細胞珪酸体由来（試料番号10；4層）
11　タケ亜科：機動細胞珪酸体由来（試料番号10；4層）
12　ヨシ属：機動細胞珪酸体由来（試料番号9；3層）

3　加茂政所遺跡における弥生時代土壙墓出土の歯牙について

岡山大学名誉教授　小田嶋梧郎

1　土壙墓２

資料を水洗後、保存状態良好の４種歯冠を鑑別の対称とした。すなわち、左・上顎犬歯(⌊3⌋)、右・下顎第一切歯(⌊1⌋)、右・下顎犬歯(⌊3⌋)、右・下顎第一大臼歯(⌊6⌋)が検出できたので、鑑別記録を述べる。なお、多数のエナメル歯冠片は判別不能で除外した。

◎左・上顎犬歯(⌊3⌋)

歯冠が膨らんで尖頭をなし、唇面外形が五角形で、短い近心切縁と長い遠心切縁が区別され、すなわち尖頭が近心によっている。この遠心切縁の傾斜は近心切縁より強く傾斜し、近心切縁隅角と遠心切縁隅角はともに鈍角をなしているが、後者の角が大きく、丸味を帯びている。歯冠の幅8.4㎜(平均値7.9㎜)、と大きいので男性歯であろうと推察した。なお、歯冠の舌面には逆Ｖ字形の辺縁稜が認められ、それによって囲まれた軽度の凹面に、尖頭から歯頸に向かう中央舌面隆線が、近心および遠心舌面小窩を区別できることなどから左・上顎犬歯(⌊3⌋)と判別した。

◎右・下顎犬歯(⌊3⌋)

上顎犬歯に比べて歯冠の幅が短く7.3㎜(平均値6.9㎜)、近・遠心的に圧平されて細長く、すらっとして見える特徴がある。また、尖頭が上顎犬歯と比べて低いので、近心切縁と遠心切縁とのなす角は大きく、尖頭が近心によっていることから右・下顎犬歯(⌊3⌋)と判別した。

◎右・下顎第一切歯(⌊1⌋)

全歯列中で最も小さい下顎第一切歯の歯冠外形はノミ(鑿)に似た形態を示し、弯曲徴も歯面徴もみられない特徴があって、左右側の鑑別には歯根の根面溝をみなければ確かではない。また、隅角徴もない点、すなわち近心切縁隅角と遠心切縁隅角とはおよそ85°を示し、ほぼ同大であるが、後者のそれはやや丸味を帯びているところから右側と判別した。

なお、歯冠の切縁を眺めると、切縁に３個の切縁結節があることは、若年者の切歯と推察可能である。つまり、通常の切縁はほとんど水平に走り、これは下顎中切歯の特徴で、早期に咬耗のために生ずる現象だからである。

◎右・下顎第一大臼歯(⌊6⌋)

本例は、遠心舌側咬頭と遠心咬頭との間に過剰咬頭、すなわち、Hellman(1928)の命名による第六咬頭が現われた稀しい下顎第一大臼歯である。(図１参照)

下顎第一大臼歯の大きな特徴は５咬頭性、すなわち、頬側に３個、舌側に２個の咬頭を具えているのが基本形である。このうちの遠心咬頭は遠心頬側咬頭と遠心舌側咬頭との間で頬側よりに位置する。

前述した第六咬頭は遠心咬頭に相接して過剰に現われた咬頭である。更に注意深く観察すると、遠心辺縁隆線が発達して結節をつくるとき、この第六咬頭が現われた場合、これと遠心咬頭に挟まれて出現する遠心頬側辺縁副結節も認められた。(図1参照)

下顎第一大臼歯が多咬頭性となって、その咬合面を増すのは、食物の咀嚼、いわゆる臼磨運動に適合しようとするからであって、硬いものを噛みくだくために必要な大臼歯である。本例の歯冠長は8.2㎜、歯冠幅13.3㎜、歯冠厚12.3㎜といずれも平均値より大きく、しかも咬耗もなく、下顎切歯に3個の切縁結節のあることは、若年者で男性の歯と推察した。

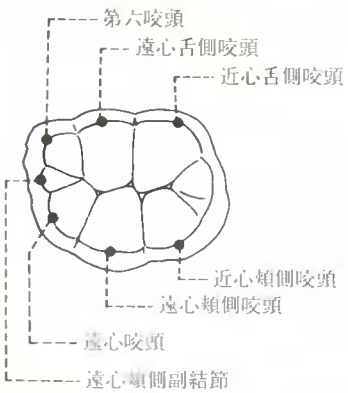


図1　右・下顎第一大臼歯の咬合面観

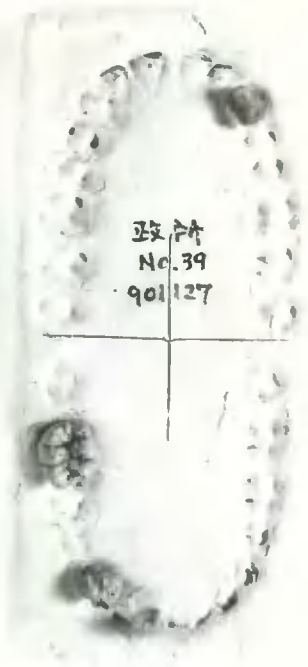


写真1

2　土壙墓4

平成5年(1993年)8月4日に依頼された歯の鑑別経過と結果を報告する。

翌々日の8月6日、直ちに水洗し、乾燥を待ってのち、判別できた歯冠部は極めて保存状態がよく、右・下顎第一切歯(1)、左・下顎第一切歯(1)、左・上顎第二切歯(2)、左・下顎第二切歯(2)、右・上顎犬歯(3)、右・下顎犬歯(3)、右・上顎第一小臼歯(4)、左・上顎第一小臼歯(4)、右・下顎第一小臼歯(4)、左・下顎第一小臼歯(4)、右・下顎第二小臼歯(5)、左・下顎第二小臼歯(5)、右・下顎第一大臼歯(6)、左・上顎第一大臼歯(6)、左・下顎第一大臼歯(6)の合計15種である。

(右)　(歯式)　(左)

○	○	○	○	④	③	○	○	○	②	○	④	○	⑥	○	○	上顎
○	○	⑥	⑤	④	③	○	①	①	②	○	④	⑤	⑥	○	○	下顎

以下、鑑別記録を述べる。

◎右・下顎第一切歯($\overline{1|}$)と左・下顎第一切歯($\overline{|1}$)

第一切歯(中切歯)の両者の歯冠部は、切縁結節が明瞭で、しかも咬耗が殆ど見られないところから、若年で10歳代後半の切歯と推察した。

◎左・上顎第二切歯($\underline{|2}$)

この側切歯の歯冠長、歯冠幅、および歯冠厚は日本人平均値とほぼ同じで、特に丸味をもった遠心切縁隅角が著明で、また、咬耗の無いことから、切縁が著明に傾斜し、切縁観がやや凸弯しているので、裁縫用の箆(へら)形をなし、舌面窩が深い。また、辺縁隆線がふくよかな高まり、すなわち、隆線の幅がやや広いなどの特徴が見られ、判別は容易である。

◎左・下顎第二切歯($\overline{|2}$)

切縁結節が著明であり、また、切縁の傾斜、すなわち、切縁が遠心側に向かって斜め下方に走る。遠心切縁隅角が近心切縁隅角より大で、その隅角徴が著明であるなど、10歳代後半の歯と推察した。

◎右・上顎犬歯($\underline{3|}$)

歯冠幅8.0㎜、歯冠部の近心切縁と遠心切縁とのなす角が鋭く、辺縁隆線の発育良好である。なお、右・左の鑑別は、弯曲徴が顕著で、切縁から見て、近心側の弯曲度が大きい。すなわち、急カーブに強く弯曲(角度が小)するほうが近心側になることから、右・上顎犬歯と判別した。また、隅角徴が著明である。すなわち、近心切縁隅角が鋭く突出し、遠心切縁隅角は鈍円であることも右・左差の判別は容易である。

◎右・下顎犬歯($\overline{3|}$)

右・上顎犬歯($\underline{3|}$)と比較して、歯冠幅7.5㎜でやや小さい。歯冠接触面から眺めて、舌側面の輪郭が凹弯(上顎犬歯は直線的)しているなどから、下顎犬歯と判別した。

右・左の鑑別は、近心側の弯曲度が遠心側より大きく、弯曲徴が著明で、右・下顎犬歯と判別した。

なお、切縁が近心から遠心に向かって歯頸側へ傾斜するので、遠心隅角は近心隅角よりも鈍円となる隅角徴が著明であることも右・左側の判別となった。

◎右・上顎第一小臼歯($\underline{4|}$)と左・上顎第一小臼歯($\underline{|4}$)

両者ともに歯冠部の欠損大であるが、同一個体であることから、左・上顎第一小臼歯の鑑別から右側のそれの判別は可能である。すなわち、歯冠のうち、欠損部分以外の頬側半部の左・上顎第一小臼歯の特徴は、咬合面の隅角部を観察すると、遠心頬側隅角が近心頬側隅角よりも強く頬側に突出している、いわゆる非対称的で、しかも近心頬側縁と遠心頬側縁とがほぼ等しく、頬側咬頭頂が中央に位置することなどから判別した。よって、更に欠損部分の大きな他側の歯を右・上顎第一小臼歯と鑑別した。

上顎第一小臼歯の右・左側鑑別点で重要なことは、弯曲徴である。すなわち、遠心頬側隅角が近心

頬側隅角よりも強く頬側に突出しているため、歯冠の頬面から遠心面へ移行する角度が近心面へのものより鋭く、弯曲度が大きい。すなわち、急カーブで、しかも角度が小さい。これは、上顎第一小臼歯の近心側か遠心側かを決定する最も大きな特徴であって、上顎第一小臼歯のみがほかの歯と弯曲徴が反対になるからである。

◎右・下顎第一小臼歯(⌐4⌐)と左・下顎第一小臼歯(⌊4⌋)

咬合面に2咬頭をもつ歯冠は、右・左側とも欠損部分なく、舌側咬頭の発達悪く、犬歯に似た下顎第一小臼歯である。上顎犬歯に類似しているといっても、本例は歯冠長が短いことや、歯冠の接触面から見て、舌側半部の発達してる点を考慮すれば、両者の判別は容易である。

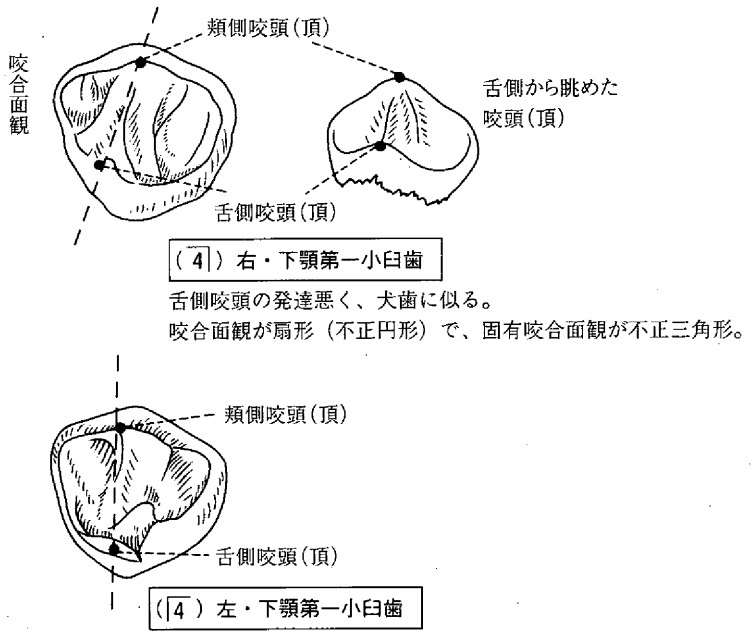


図2

咬合面観(外形)は扇形、または不正円形で、固有咬合面観(解剖学的咬合面)が不正三角形(図2参照)であることから、下顎第二小臼歯との判別も容易である。また、右・左側の鑑別点は、頬側咬頭頂と舌側咬頭頂がやや近心寄りに偏位し、遠心咬合縁隅角の丸味が著明な隅角徴があり、かつまた、近心辺縁隆線が遠心辺縁隆線より短く、しかも高く位置するなどで近・遠心側の鑑別がつき、下顎第一小臼歯の種別ならびに右・左側の判別がつく。

◎右・下顎第二小臼歯(⌐5⌐)と左・下顎第二小臼歯(⌊5⌋)

頬側咬頭(頂)と頬側三角隆線が著明で、その方向から判別した。なお、左側・下顎第二小臼歯は舌側咬頭の発達が良好で、右・左側ともに欠損大であるが、その欠損を補足した場合の咬合面観(外形)は四角形であることから、下顎第一小臼歯(⌐4⌐)との判別は可能である。なお、本例の右・左側の鑑別点は、舌側咬頭の発達が著明で、その頂が近心に寄って位置し、高く、咬合面から見て、近心半部が遠心半部よりも頬側に突出する。つまり、近心頬側咬合縁の弯曲度が大きい弯曲徴などから判別できる。

◎左・上顎第一大臼歯(⌊6)

歯冠部の欠損大であるが、遠心舌側咬頭並びに著明な遠心舌側溝、中央小窩、中央溝が認められるので、判別は容易であった。

◎右・下顎第一大臼歯(6⌋)と左・下顎第一大臼歯(⌊6)

歯冠の大きさは右・左側ともにほぼ同大で、平均値より大きい(表参照)。また、両者は五咬頭性で、特に遠心咬頭の発育良好である。五咬頭の頂の咬耗は認められず、歯冠の大きいことなどから10歳代後半の男性歯と推察した。

(単位mm)

	歯冠長	(平均)	歯冠幅	(平均)	歯冠厚	(平均)
6⌋	8.2	7.9	12.8	11.4	11.4	10.8
⌊6	8.2	7.9	12.8	11.4	11.3	10.8

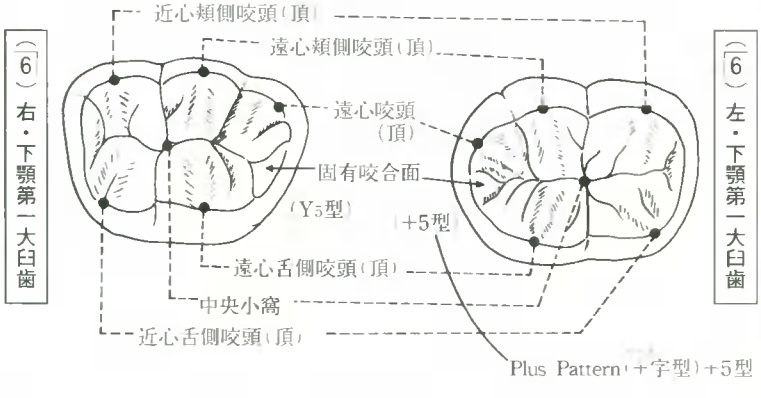


図3

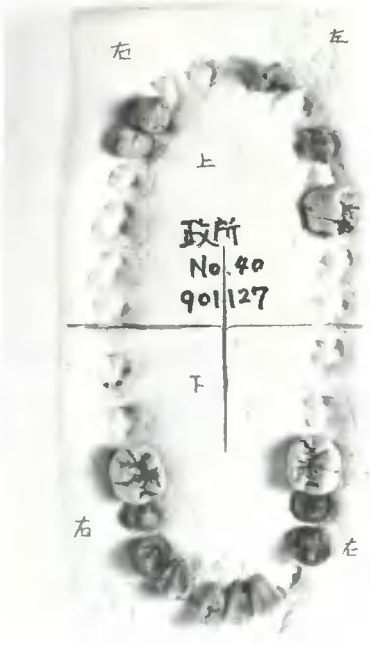


写真2

4　加茂政所遺跡出土の動物遺体

早稲田大学　金子浩昌

はじめに

加茂政所遺跡において知られた遺構内の貝堆積中の動物遺体について調査した。貝類はヤマトシジミを主体とし、小型の殻が多かった。貝以外に知られた脊椎動物遺体の数は少なかったが、コイ、ウナギ、クロダイなどの魚類、スッポンなども検出された。しかし、これらは当時採取された個体のすべてではなく、たまたま混入した程度のものではなかったかと思われる。土壙は貝殻処理用に使われ、他に獣、魚類などの遺体は別に扱われているのではなかろうか。かつて筆者も報告することのできた足守川加茂Ｂ遺跡が弥生時代後期であったのに対して、本遺跡が中期に属することから、動物遺体については特に関心がもたれたが、資料的にやや乏しかったのは遺跡の性格によるのであろう。

Ⅰ　検出された動物遺体の種名表

節足動物門　Phylum　ARTHROPODA
　甲殻綱　Class　Crustacea
　　蔓脚亜綱　Subclass　Cirripedia
　　完胸目　Order　Thoracia
　　フジツボ類　Balanomorpha Fam.　et　gen.　indet.
軟体動物門　Phylum　Mollusca
　腹足綱　Class　Gastropoda
　　中腹足目　Order　Mesogastropoda
　　タニシ科　Family　Viviparidae
　　オオタニシ　Cipangopaludina　japonica
　　カワニナ科　Family　Pleuroceridae
　　カワニナ　Semisulcospira　bensoni
　　ウミニナ科　Family　Potamididae
　　ヘナタリガイ　Cerithideopsilla　cingulata
　　フトヘナタリ　Cerithidea　rhizophorarum
　　新腹足目　Order　Neogastropoda
　　アクキガイ科　Family　Muricidae
　　アカニシ　Rapana　venosa
　　レイシガイ　Thais(Reishia)broni
　二枚貝綱　Phylum　Pelecypoda
　　フネガイ目(糸鰓目)　Order　Arcoida(Filibranchia)
　　フネガイ科　Family　Arcida
　　ハイガイ　Tegillarca　granoza

サルボウガイ　Scapharca　subcrenata
ウグイスガイ目　Order　Pteroida
イタボガキ科　Family　Ostreidae
マガキ　Crassostrea　gigas
マルスダレガイ目　Order　Veneroida
シジミ科　Family　Corbiculidae
ヤマトシジミ　Corbicula　japonica
マルスダレガイ科　Family　Veneridae
ハマグリ　Meretrix　lusoria
脊椎動物門　Phylum　VERTEBRATA
軟骨魚綱　Class　Chondrichthyes
エイ目　Order　Rajiformes
科、属不明　Family　et　gen.　indet.
硬骨魚綱　Class　Osteihthyes
ウナギ目　Order　Anguilliformes
ウナギ科　Family　Anguillidae
ウナギ　Anguilla　japonica
ニシン目　Order　Clupeiformes
ニシン科　Family　Clupeidae
ヒラ　Hisha　elongata
コイ目　Order　Cypriniformes
コイ科　Family　Cyprinidae
コイ　Cyprinus　carpio
スズキ目　Order　Perciformes
スズキ科　Family　Serranidae
スズキ　Lateolabrax　japonicus
アジ科　Family　Caranidae
マアジ　Trachurus　japonicus
タイ科　Family　Sparidae
クロダイ　Acanthopagrus　schlegeli
ボラ科　Family　Mugilidae
ボラ　Mugil　cephalus　cephalus
爬虫綱　Class　Reptilia
カメ目　Order　Chelonia
スッポン科　Family　Trionychidae
スッポン　Trionyx　sinensis　japonicus
哺乳綱　Class　Mammalia
偶蹄目　Order　Artiodactyla

イノシシ科　Family　Suidae

イノシシ　Sus　scrofa

シカ科　Family　Cervidae

ニホンジカ　Cervus　nippon

Ⅱ　動物遺体の概要

1　遺構内から検出された貝類

貝類の多くは土壙遺構内に堆積していたもので、土壙によって貝殻の量はまちまちであったが、特に大量の貝殻を含む土壙がやや近い場所に二カ所あり、その他の土壙は地区の全域に広がっていた。遺構内から出土した貝類はヤマトシジミを主体として、別に３～４種類の貝種を含むものであった。詳細な出現率表を別に示すが次に概要を述べる。計測値単位は特に記されていない場合は㎜である。

1）土壙76

ヤマトシジミ主体、もっとも多く出土。

チリメンカワニナ、カワニナ、ハイガイ、ハマグリがごく少量。

2）袋状土壙24

ヤマトシジミ主体、多い。

ヘナタリ、チリメンカワニナ、レイシ、ハイガイ、マガキがごく少量。

3）土壙８

ヤマトシジミごく少量。

4）土壙15

ヤマトシジミほとんど無し。

5）土壙５

ヤマトシジミやや多い。カワニナ、ハイガイ、サルボウガイ少量。

6）土壙２

ヤマトシジミやや多い。カワニナ、レイシ、サルボウガイ少量。

7）土壙３

ヤマトシジミごく少量。

8）土壙64

ヤマトシジミ大量。ヘナタリ、カワニナが多い。

チリメンカワニナ、ハイガイ、サルボウガイ少量。

9）土壙72

ヤマトシジミやや多い。ヘナタリやや多く、アカニシ、ハイガイ、サルボウガイ、マガキ少量。

10）土壙72・73

ヤマトシジミ、ヘナタリやや多く、ハイガイ、サルボウガイ、マガキ少量。

11）土壙22

ヤマトシジミごく少量。

12）土壙100

ヤマトシジミ、ヘナタリ少量。

13）土壙16

ヤマトシジミやや多い。カワニナ、チリメンカワニナ、ハイガイ、サルボウガイ、マガキ少量。

以上述べたように本遺跡遺構にみられた貝類はヤマトシジミを主とし、その他の貝種ではヘナタリガイがやや多いことがあった位で、ごく少量かほとんど採られることはなかったようである。ヘナタリガイが多かったことも、ヤマトシジミが多量に採られているのでいっしょに入ったと思われ、またこの貝がヤマトシジミ以外では多く生息していたのであろう。

2　その他の動物遺体

1）袋状土壙24

甲殻類

フジツボ類：破片1

爬虫類

スッポン

左右剣状突起

近、遠位骨端に付く小突起を破損する個所がみられるが、おそらく同一の個体のものであったと思われる。この骨はスッポンの腹面にあって、最後部に左右に並ぶ骨格である。解体の際に左右につながった状態で残されたのであろうか。ただし今となってはそれを確かめることはできない。この大きさの剣状突起をもつ個体であれば、甲長は24cm位になったことが推測される。

魚類

エイ類：椎骨1、椎体長3.9、同径6.1

ウナギ：主上顎骨1、全長18.7

スズキ：腹椎骨1、椎体長6.0。　右方骨1、全長8.8(近心部の長さ)

クロダイ：右歯骨1、近心部破損全長推定21.0

哺乳類

ネズミ類：仙骨片1

2）土壙76

魚類

スズキ：右上鎖骨1、近位骨端を欠損。その部分に被熱の痕跡をみる。調理の際に焦げたものか。

3）土壙64

魚類

ヒ　ラ：左歯骨1、近心部のみを残す。高さ9.5。左角骨1、現長17.3、上記の歯骨に見合う大きさである。

4）土壙72・73

魚類

マアジ：尾椎骨1、椎体長7.7、同径4.6。

5）土壙不明（砂場2F区土壙11・12）

魚類

コ　イ：咽頭歯1、球状の歯、最大径6.0。

6）土壙76

魚類

スズキ：腹椎骨２、椎体長4.9、同径5.0、椎体長4.8、同径4.8。尾舌骨１

タイ類：腹椎骨１、椎体長8.7、同径9.8。鰭棘片１

７）土壙72

マアジ：

腹椎骨　椎体長　6.1　6.9　7.1　　尾鰭椎　椎体長　6.2　7.2　7.6

尾椎骨　椎体長　7.2　7.3　7.3　7.3　　椎体長　7.9　8.1

椎体長　7.4　7.9　7.9　8.0　8.2

椎体長　9.6　9.8　9.9　10.4

他に破損椎骨、腹椎骨１、尾椎骨６(上記の中間大)

スズキ：右主上顎骨１、破損。

８）土壙76

魚類

ボ　ラ：主鰓蓋骨左右各１、全長推定50.0、同一個体の標本か。

９）土壙２

魚椎骨片、鰭棘片

10）土壙５

哺乳類

イノシシ：肋骨４、第３、４、11、12(推定)の４点である。いずれも完存するものではない。第４肋骨は関節頭を残し、第11肋骨の関節頭は切断された痕跡をみる。解体痕である。

ニホンジカ：左大腿骨頭１、遊離した関節骨端のみ。

11）土壙64

魚類

マアジ：尾椎体１、椎体長9.4、上後頭骨片１、間鰓蓋骨片

12）土壙76

魚類

マアジ：第１腹椎１、尾椎体１、椎体長8.4、楯鱗１

13）土壙72・73

フジツボ類：破片７

14）土壙76

魚類

ボラ類：腹椎１、椎体長15.0±

スズキ：腹椎１、椎体長4.8

15）土壙76

獣類

ニホンジカ：右橈骨遠位端１

16）土壙16

魚類

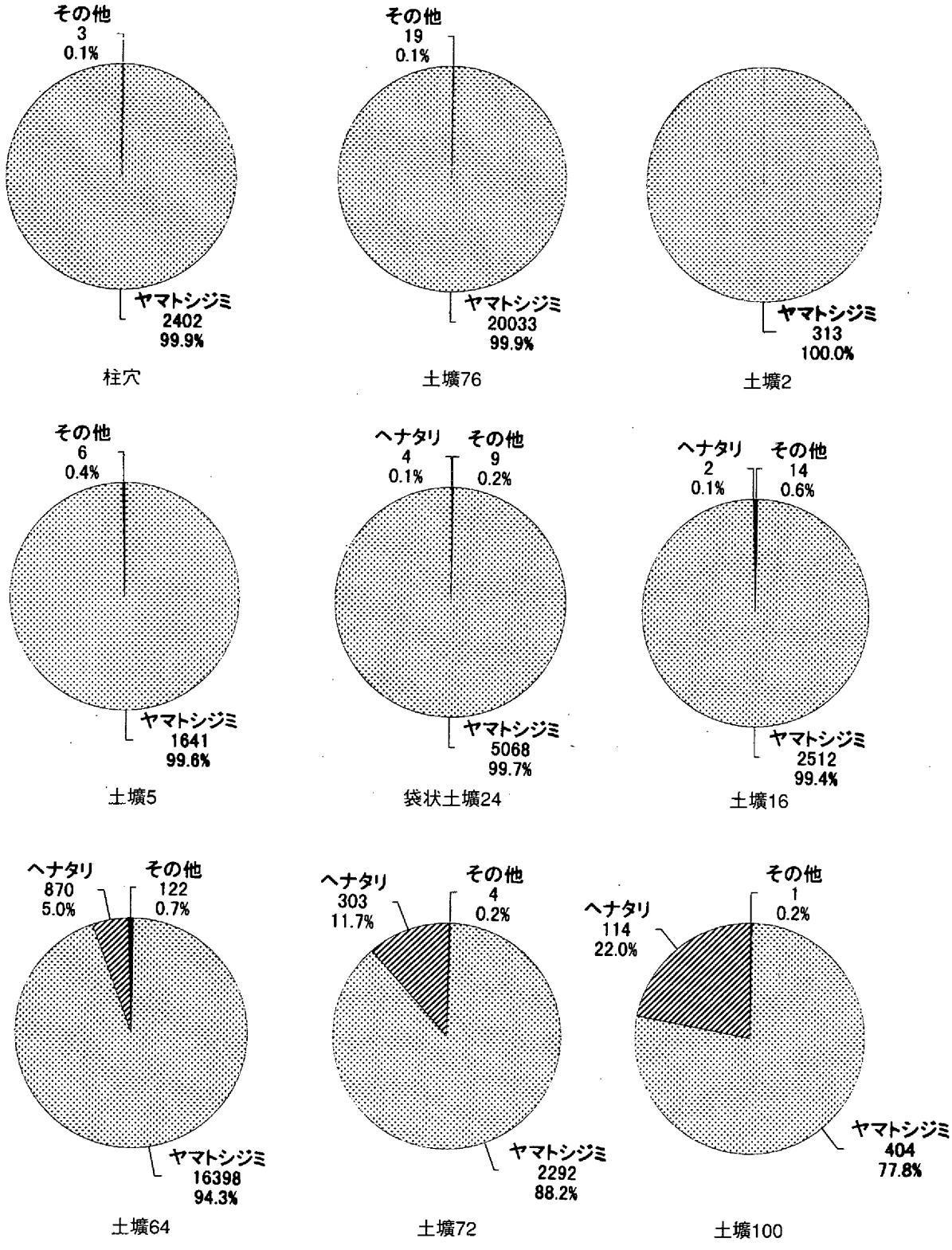
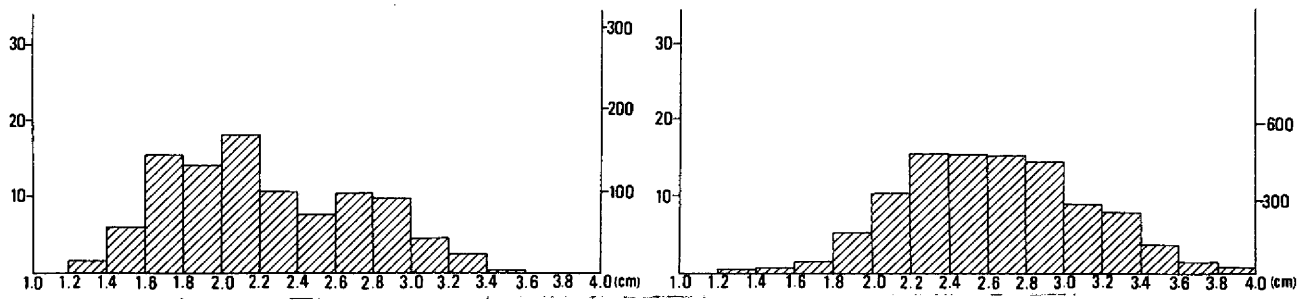
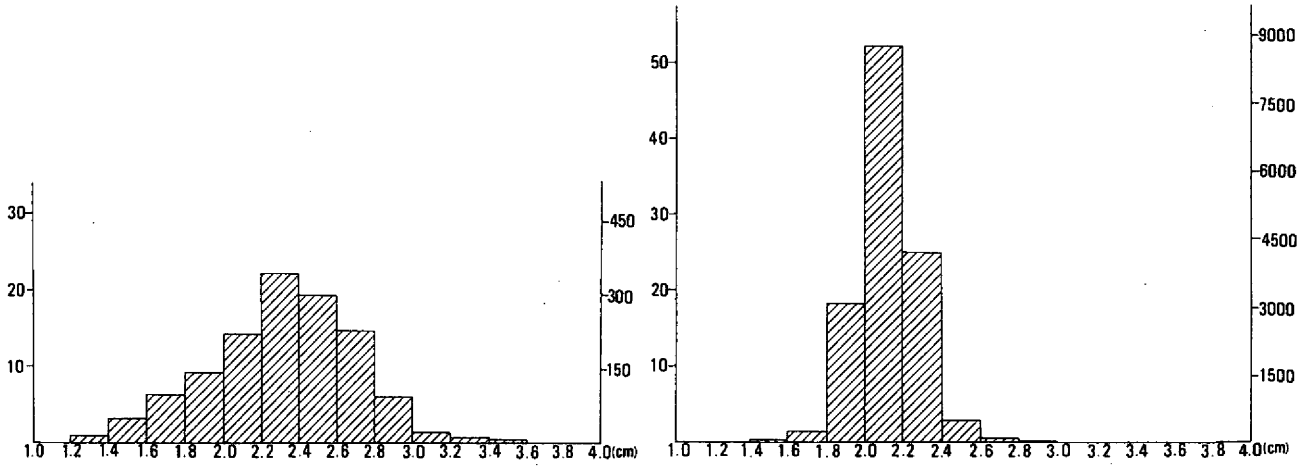


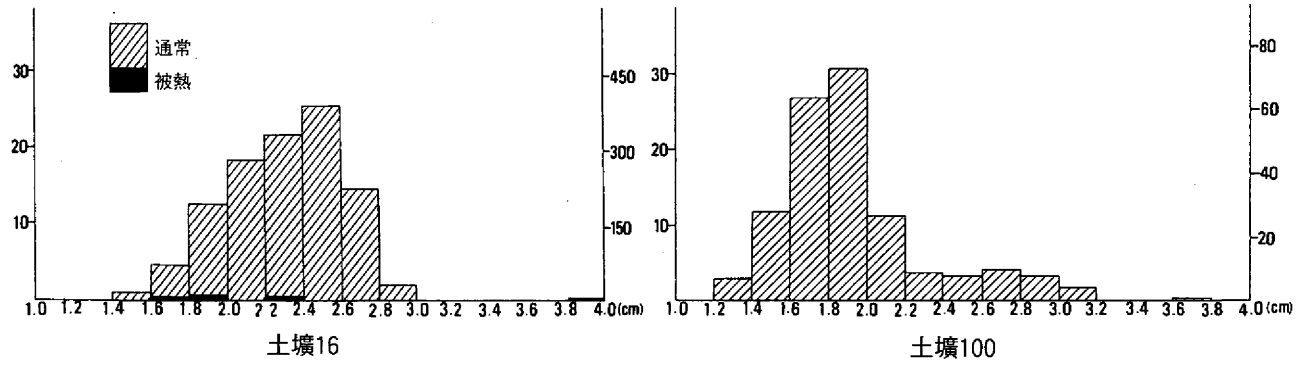
図1　遺構出土貝類の比率



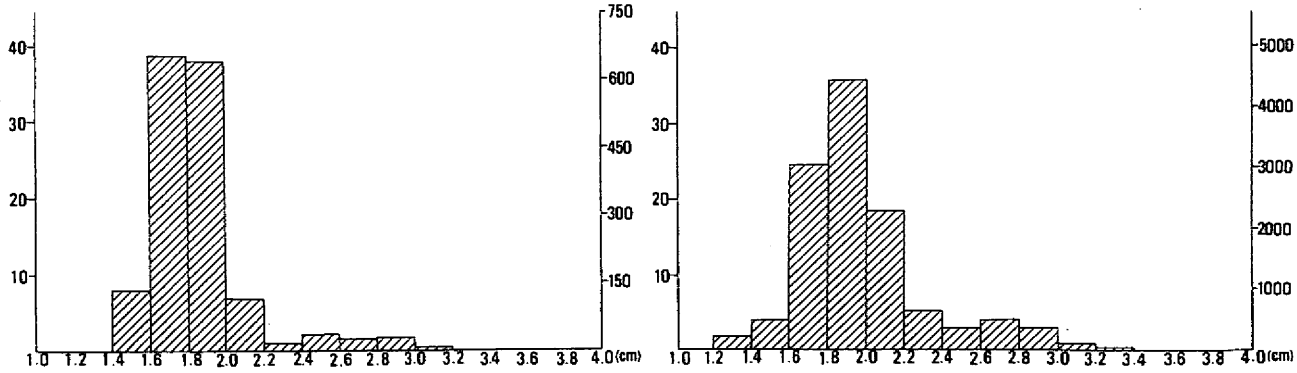
土壙5　　袋状土壙24



土壙2　　土壙76



土壙16　　土壙100



土壙72　　土壙64

図2　シジミ

エイ：類椎体１、椎体長3.0、椎体径3.0

Ⅲ　要　約

（１）貝類について

加茂政所遺跡土壙内から検出された貝類はこの地域における貝採集の様相を知る興味ある資料である。ここでは殻長20㎜前後の小さいヤマトシジミが主体であってヘナタリガイなどやや多くみられる貝種があったが、この貝自体に特別の有用性はないと思われるので、意図的な採集ではなかったのであろう。岡山県下の弥生期の貝塚の貝種についての報告はこれまでに幾つか知られているが、足守川加茂Ｂ遺跡、吉野口遺跡などに比較してヤマトシジミの主体性が一層強まり、殻の小型化がみられるのは、その立地がさらに奥まっていることと関連すると思われる。

（２）脊椎動物について

スッポンの遺骸が検出されたのは珍しいことである。筆者が幾つか調査する機会をもったこの地域の貝塚ではこれまでに知られることがなかったからである。左右の剣状突起一組のみであったが、食用に当てた残りであろう。スッポンの遺骸は石器時代には琵琶湖水系から知られ、それ以降生息域を広めるようである。本遺跡での検出もそうした結果なのであろう。魚類についてはこれまでの調査では知られていないマアジの目立ったことが注目されよう。この魚種は吉野口遺跡の奈良時代期の遺構でわずかに検出されていたが、それ以前にあっては西日本での検出例は多くない。関東地方沿海域の貝塚でのマアジの多いことと比べて対称的である。魚族の分布上興味ある点である。

報告に当たって種々ご教示いただいた岡山県古代吉備文化財センターの弘田和司氏に御礼申し上げる次第である。

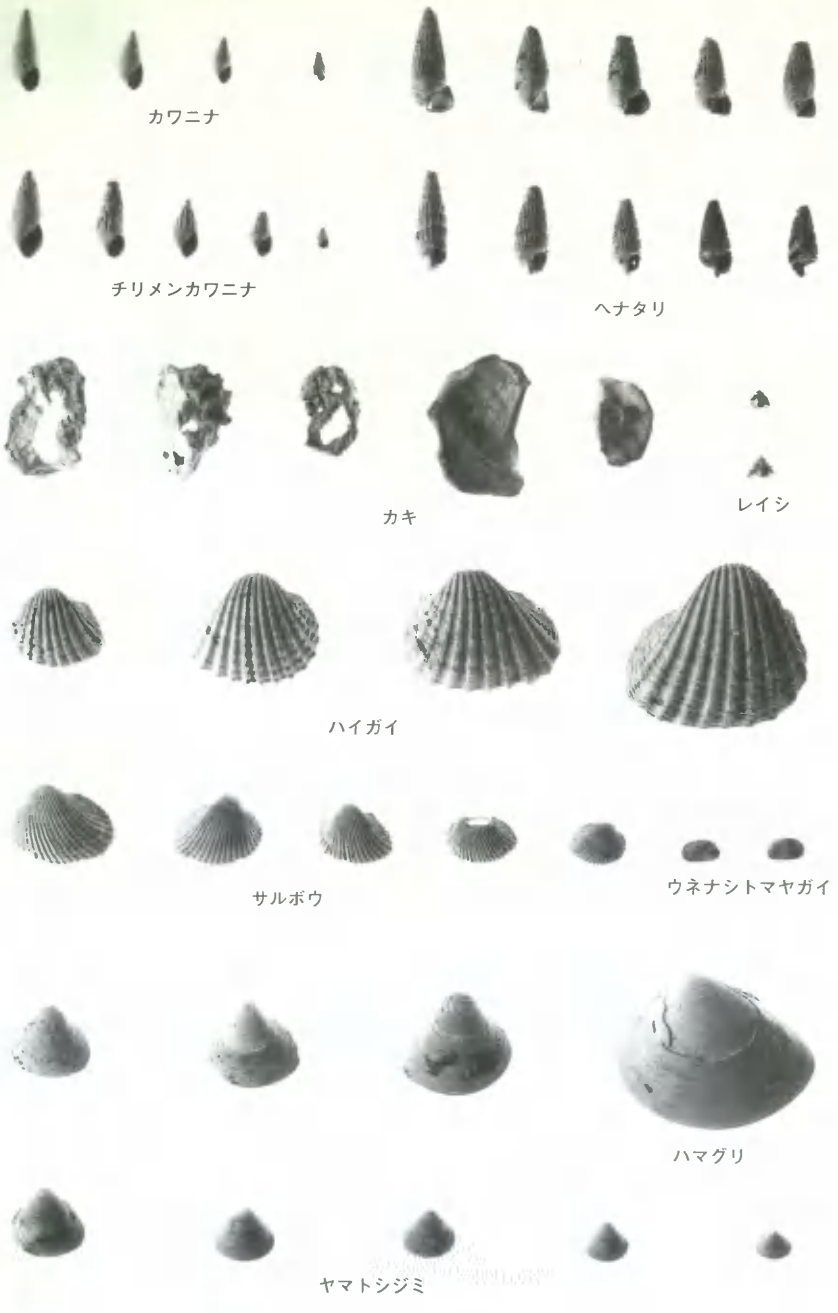
文献

金子浩昌：「岡山県足守川加茂Ａ・Ｂ遺跡出土の動物遺体と骨角製品」『岡山県埋蔵文化財調査報告書』第94集　足守川加茂Ａ遺跡、足守川加茂Ｂ遺跡、足守川矢部南向遺跡、1995,3,31

草原孝典、河田健司：『吉野口遺跡－岡山市立鯉山小学校給食棟建設事業に伴う発掘調査報告－』1997,3,31

河田健司：「貝類の分析」『吉野口遺跡－岡山市立鯉山小学校給食棟建設事業に伴う発掘調査報告－』

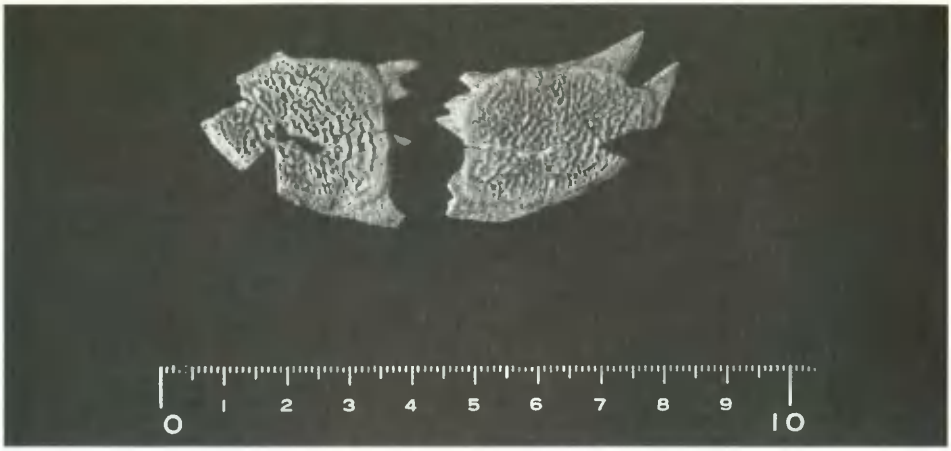
金子浩昌：「岡山市吉野口遺跡出土の動物遺体」『吉野口遺跡－岡山市立鯉山小学校給食棟建設事業に伴う発掘調査報告－』



弥生時代中期の土壙出土の貝類

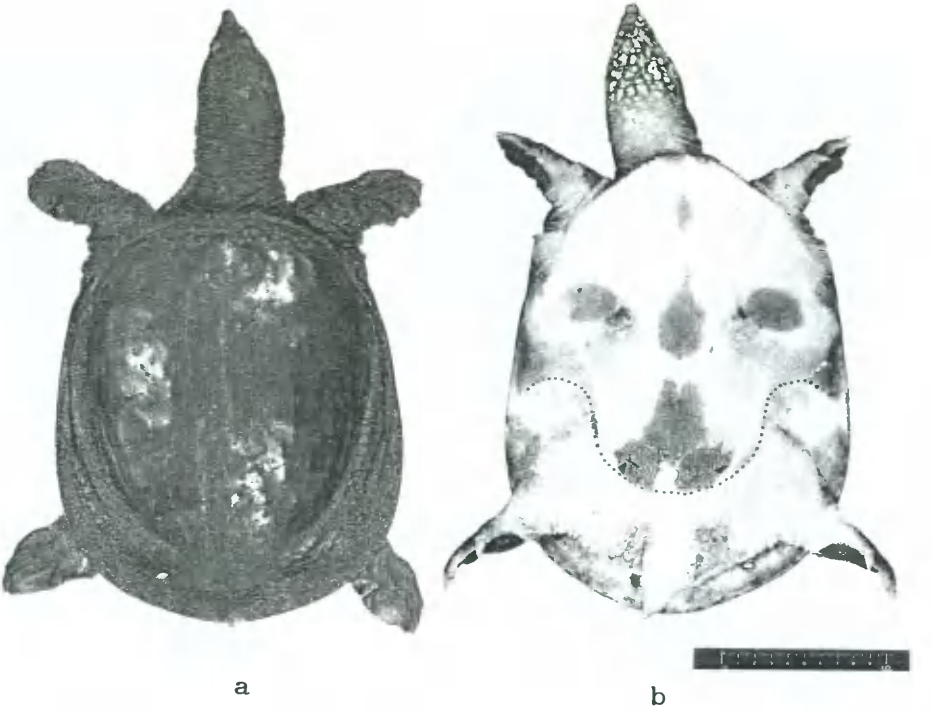
土壙76
ボラ　主鰓蓋骨　1　右（外面）、2　左（内面）

1～21　マアジ椎骨
　1～20　小型
（1～4腹椎、5～8、尾椎
　19・20尾鰭椎）
9～13　中型
（9・10腹椎、11～13
尾椎、21尾鰭椎）
14～21　大型　尾椎
22エイ類椎体
23ウナギ左主上顎骨
24スズキ腹椎
25スズキ右方骨
26クロダイ右歯骨
27クロダイ左腰帯
28コイ咽頭歯
29ヒラ左歯骨片
30ヒラ左角骨
31マアジ尾椎
32スズキ右上鎖骨



袋状土壙24
スッポン　剣状突起　1　右、2　左

土壙５
イノシシ　1　左大腿骨骨頭、2　右第３肋骨、3　右第４肋骨、4　右第11肋骨、5　右第12肋骨(推定)



スッポン
スッポン剣状突起の位置を示した図。現生スッポン図に重ねてみた。スケールは骨の対するもの。
……線は腹甲の尾側範囲を示す。a．背甲面、b．腹甲面

図3　スッポン

5　岡山県加茂政所遺跡出土ウマ遺存体

岡山理科大学理学部　　富岡直人

本報告文は、1990年に古代吉備文化財センターの発掘により、岡山市大字加茂に所在する加茂政所遺跡砂場調査区から検出された７世紀前半時代に属するウマ遺存体について記述するものである。

第１節　検出状況と保存処理

このウマ遺存体は、発掘時に竪穴住居98において確認・サンプリングされた。フルイによる資料の抽出は実施していないが、発掘に際しては慎重な精査が実施されており、歯牙類の取りこぼしなどはないと考えられる。

出土資料は、発掘時に台座状に掘り残された後、周囲を石膏で保護して取り上げられた。発掘８年後の1998年、富岡と古代吉備文化財センターは、保管されていた資料を観察し、今後の保存方法について検討した。

その結果、①資料の乾燥および脆弱化の状態．②石膏の脆弱化と石膏の亀裂による破損が広がる可能性を持つ状態．③土壌に埋存したままであるため、咬耗面や萌出状況が正確に把握できない状態．⑤資料が重くかさばる状態．といった保存上望ましくない諸点が指摘され、石膏と土壌から資料を外すこととした。その際に、資料ごとの解剖学的まとまりを保つため、透明無色の冷間埋込用樹脂（丸本工業:No.105）を使用し、対象の歯牙の周囲に失われた骨格に沿った形状の流込型（メス）を油粘土で設定し、アルミホイルでプロテクトした後、樹脂を流し入れ、包埋した。気密作業室内で気圧を下げ作業をする方法も検討したが、資料体が大きかったため、常温、常圧で作業を実施した。この結果、十分なダウンサイズがなされ、土壌付きで各10kg以上の重量は、各600～700g程度にまで下げることができ、整理用プラスチックコンテナ５箱収納から、２箱収納に変更できた。

第２節　ウマ遺存体の概要

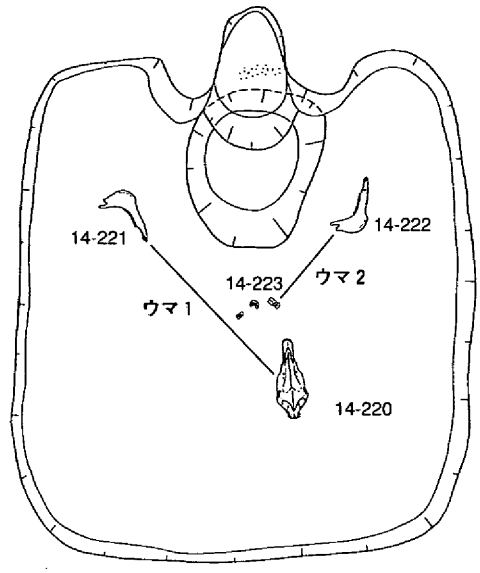
脊椎動物門　　Vertebrata
　哺乳綱　　Mammalia
　ウマ目（奇蹄目）Perissodactyla
　ウマ科　　Equidae
　　ウマ　　*Equus caballus* Linnaeus

いずれも竪穴住居98から出土した（第１図）。ほとんどの骨格は腐食が進み失損しているが、耐酸性の高い歯牙エナメル質部分は比較的良好に保存されていた。

大きさと成長度を考慮したマッチング（同一個体か否かの検討）の結果、最小個体数と同数の成獣２体分のウマ頭蓋骨であったことが明らかになった。14-220と14-221をウマ１、14-222と14-223をウマ２とする。２個体の大きさは微妙に異なっており、年齢あるいは雌雄の違いである可能性もあるが、年齢はウマ１(14-220)が7～10歳、ウマ２(14-223)が5～10とほとんど変わらない上、いずれも犬歯Cがみられないことから、体格の異なるほぼ同世代の雌の可能性が高い(注1)と考えられる。いずれの資

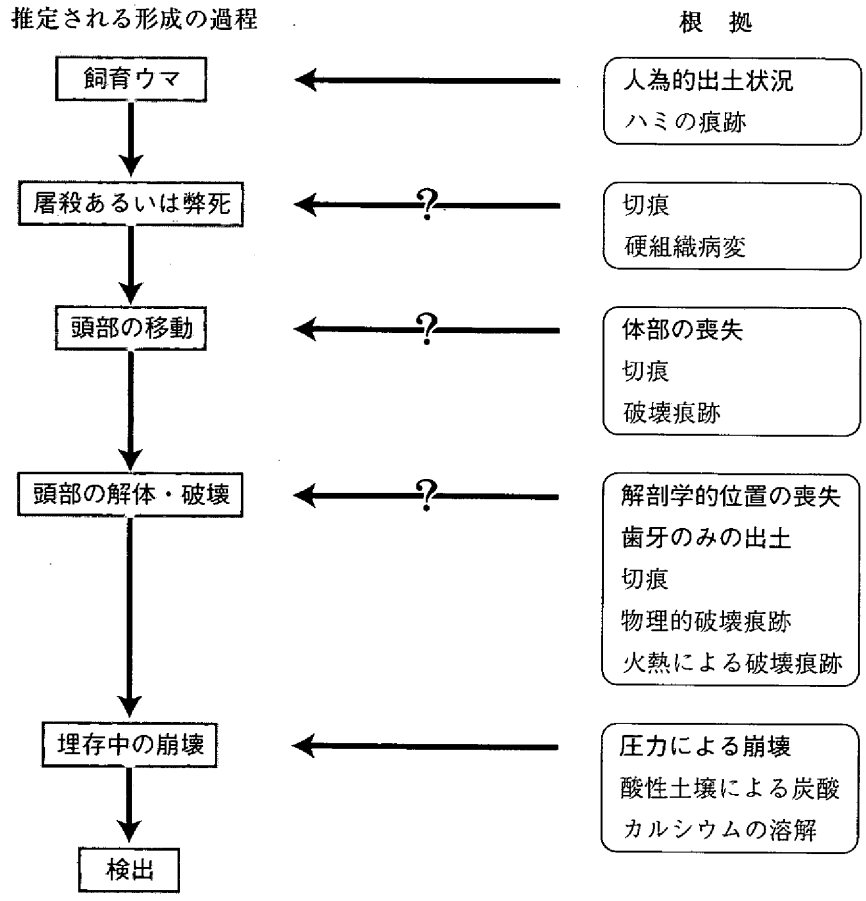
料にも歯根が残っていない点は、破損や腐食のため失われた可能性も考えられるが、歯根の発達が進んでいない若い個体であることに主因があると考えられる。

出土状況から判断して、これら資料の形成過程（formation process）を推定すると、「**屠殺あるいは弊死（へいし）した飼育ウマから頭部を外し、ウマ１はほぼ完形のまま、ウマ２は上顎部を破壊し、竪穴住居98に意図的に納めていた**」と考えられる。ただし、竪穴住居内で床に配置したのか、上部構造から下げていたのかなど、具体的な原位置は不明である。この所見をまとめると、これら遺存体の形成過程と解釈は第２図のようになる。



第１図　ウマ遺存体出土位置(復元)（竪穴住居98）

これらの資料を林田重幸氏ら（1974）、金子浩昌氏（1985）や富岡（1998ab）による考古資料の測定値、西中川駿氏ら（1988）による在来馬の測定値と比較した（第１表）。まず、現生の個体群と比



第２図　出土ウマの遺物化過程

左に推定される遺物化の過程、右にその推定の根拠を示し、政所遺跡で確認された現象は太字で示した。細字は今回確認されなかったが、本来根拠となりうる項目を掲げている。

				→Driesh 1976による名称		Length of Premollar row		Length of mollar		L.of cheek-toothrow					Dental Length				
項目・測定部位	所在地	時期	部位・測定値	整理番号	LI3～R13	P2～P4	P2～P3	M1～M3	M1～M2	P2～M3	P2～M2	P3～M3	P4～M3	I1～P前	I1～M3	I1～M2	上顎臼歯部最大幅	推定年齢	備考
津寺砂場2G区住居98	岡山県	7世紀前半	右上顎	14-223			59.00	69.05					93.00					5～10歳	14-222と同一個体
津寺砂場2G区住居98♀	岡山県	7世紀前半	左右上顎	14-220	63.45	83.45	59.15	73.80		155.15			99.10	125.75	282.80		110.75	7～10歳	左上顎計測値を優先
百間川沢田高縄手A溝113	岡山県	古墳時代前期	上顎			84.00		69.00		151.00									金子1985
津寺中屋溝18	岡山県	5世紀中葉～7世紀	左右上顎					76.00				130.00							金子1996
トカラウマ♂	鹿児島県	現代	上顎(平均)			82.60		70.50		151.70									*1
トカラウマ♀	鹿児島県	現代	上顎(平均)			87.10		72.00		154.50									*1
ミサキウマ♂	宮崎県	現代	上顎(平均)			90.70		77.60		166.10									*1
ミサキウマ♀	宮崎県	現代	上顎(平均)			85.80		74.60		158.50									*1
キソウマ♂	長野県	現代	上顎(平均)			86.70		74.20		160.10									*1
キソウマ♀	長野県	現代	上顎(平均)			98.90		81.90		175.90									*1
多賀城跡鴻池地点	宮城県	10世紀	上顎							132.30						239.00		12カ月齢	富岡1992
津寺砂場2G区住居98	岡山県	7世紀前半	左下顎	14-221		84.90	58.10	83.00		170.55			111.20	117.00				7～10歳	14-220と同一個体
津寺砂場2G区住居98	岡山県	7世紀前半	右下顎	14-222		81.85	56.40	73.30		155.5			99.50	116.70	280.50			5～10歳	14-223と同一個体
百間川沢田高縄手A溝113	岡山県	古墳時代前期	下顎			94+			68.50	160+-								7歳程度	
津寺中屋溝18	岡山県	5世紀中葉～7世紀	左下顎							160.00									金子1996
津寺三本木5区B	岡山県	室町時代	左下顎	4								132.50							富岡1997
トカラウマ♂	鹿児島県	現代	下顎(平均)			79.50		78.10		148.00									*1
トカラウマ♀	鹿児島県	現代	下顎(平均)			80.20		78.10		151.20									*1
ミサキウマ♂	宮崎県	現代	下顎(平均)			87.00		80.80		156.70									*1
ミサキウマ♀	宮崎県	現代	下顎(平均)			82.00		80.60		155.10									*1
キソウマ♂	長野県	現代	下顎(平均)			81.30		80.00		161.30									*1
キソウマ♀	長野県	現代	下顎(平均)			88.90		84.40		168.90									*1
国分僧寺・尼寺中間地域♀	群馬県	中世～近代	左下顎	230		95.20			59.40		159.10								小さい中型馬

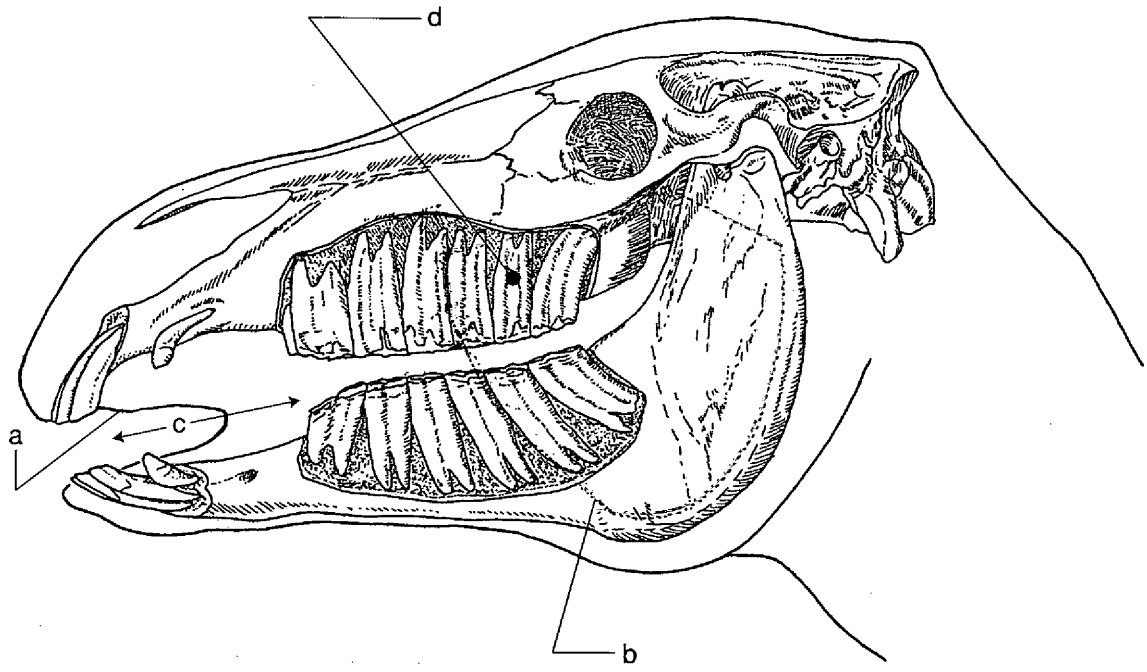
表1　ウマ頭蓋骨・歯牙計測表　(*1は西中川1989による)

較すると出土資料の第１～３後臼歯と第２～４小臼歯の長さから、現生の鹿児島県トカラウマ程度の小型ウマから、長野県キソウマや宮崎県ミサキウマ程度の中型ウマの小型程の大きさであることが判明した。

また、遺跡出土資料では、岡山県内の百間川沢田高輪手A遺跡溝113（古墳時代前期）、津寺中屋遺跡溝18（５世紀中葉～７世紀）、香川県中間西井坪遺跡（SD７出土資料:９世紀?）、さらに津寺三本木遺跡5区B（室町時代）からの出土資料とほぼ同じ大きさであった。一方で、群馬県の中世～近代の資料と考えられる国分僧寺・尼寺中間地点のNo.230（雌）や中間西井坪遺跡（近世包含層出土）と比較すると数値は大きく隔たり、本資料は極めて小さい個体であることがうかがわれる。

下顎第２前臼歯についてはハミの痕跡を検討した。これは、ハミによる臼歯表面の磨耗痕の研究（Brown 1998、注2）を参考とした。14-222のみ、この臼歯の残存が良好で、観察が可能であった。その結果、わずかに磨耗が観察されるものの、明確なハミの痕跡は確認できなかった。

また、ウマ1の右上顎(14-220)第2後臼歯は極めて短く、歯槽内部にあたる部分まで欠けている（第１図版1c)。本来であれば第1後臼歯が先に萌出することから、第1が第2より若干短いはずであるが、この長さも逆転している。咀嚼面側は、検出時に下向きになっており、丁寧に保存処理された面であり、発掘時に破損した可能性はない。また、咀嚼面側を詳細に観察すると、破損面の腐食や咀嚼による磨滅、さらに異常な欠損にともなう歯槽部分の変化、上顎臼歯の欠損にともなう下顎臼歯列や歯根部の異常、欠損後の成長はみとめられなかった。以上の点から、本資料はこの個体の死亡直前から死亡後、埋存するまでの間に第2後臼歯の咀嚼面側を欠損したことになる。ただし、生存中であればこの部分は口の奥部で露出しておらず、さらに咬筋が頬側の側面を覆っており、欠損させるのは困難であろう。ウマ頭蓋骨が体部から離され、顔面を覆う筋肉が分離された後、あるいは分離作業中に当時の人が欠損させた可能性が最も高いといえる（第３図)。特に下顎を上顎から分離する作業中に欠損



第３図　ウマ頭部の骨格と咬筋、衝の設定位置（a口、b咬筋、c衝の設定位置、d破損した第２後臼歯の位置〔ただし左右逆〕増井（1943）を改変作図）

した可能性もある。このような臼歯の欠損について、類例の報告はみられない。

また、ウマ2の上顎は解剖学的な位置を失って出土し、左臼歯列が切歯の列をはさんで左右に10cm程離れた状態であった（第１図、第２図版1c·d·e）。ウマの頭蓋骨を生前にこれほど破壊するには、かなりの物理的力が必要であることから、この頭蓋骨も死後に意図的に破壊された可能性が高い。

いずれのウマも、上顎骨と下顎骨は１m以上の距離を隔てており、意図的に下顎骨が頭蓋骨から外され、上顎骨と離れた位置で保管あるいは廃棄されたと考えられる。

第３節　加茂政所遺跡出土ウマの特徴

岡山県域では、百間川沢田高輪手A溝から古墳時代前期、津寺中屋遺跡溝18から５世紀中葉～７世紀に属する頭蓋骨が出土し、全国的にも早い段階でウマが移入された地域と考えられる。４世紀末から５世紀にかけてウマが飼育されていた地域は、大阪府、奈良県、和歌山県、熊本県が知られ（西中川　1990、松井　1991）、岡山県域にはこれら地域や朝鮮からの移入が想定される。また、一方で国内に岡山県域からも搬出されることもあったであろう。

頭蓋骨・臼歯の計測データ（第１・２表）からみると、岡山県内から出土した個体はいずれも小型から中型の体格である。この結果と本遺跡のデータを考えると、５世紀以降７世紀に至るまで岡山県域では矮小なウマが飼育されていたことになる。この点から、当時の岡山県域のウマには、①明確な体格の差がみられなかった．②品種以下のレヴェルで特徴が異なる個体群が存在したものの、いずれも矮小であった．③品種は複数で、体格にも違いがあったが、現在検出されている遺存体が矮小種に偏っている．などの可能性が考えられる。

特に岡山県上東遺跡において第３切歯が萌出した個体のすべての切歯が凹状を呈する状況（林田他1974b）は、14-222下顎骨切歯の左第１・２切歯でもみられており、偶然の可能性を残すものの、類似した特徴であることが指摘され①の可能性を支持している。

しかし、７世紀には全国に広く牧の展開がみられ、馬鍬やウマ遺存体の出土状況からも7·8世紀にはウマが日本の広い範囲で一般化していったと考えられる（松井　1991、松井,神谷　1994）。岡山周辺にも牧が設置されたことが知られ、品種以下のレヴェルで、体格などに多様性が生じるなど個体群に変化が生じた可能性は高く、②③の可能性も残される。本資料はこのようなウマの普及期にあたり、５世紀のウマとは様々な条件が異なっていたと考えられ、①の仮説は根拠が薄いであろう。

文献資料でも、この時期の岡山県域でのウマの普及がうかがわれる。８世紀初頭、続日本紀慶雲元年五月甲午条（704年）には、「備前国献神馬（びぜんこくしんめをけんず）」という記述がみられる。神馬なるものが何かは不明であるが、「・・・又壬寅年（大宝２年）以往大税、及金出神馬郡当年調」という記述があることから、瑞兆を示すウマ、特に白馬や優良なウマと考えられる。このことから、８世紀には岡山備前地域とその隣接地域はこのように珍しいウマも生産される馬産地となっており、７世紀代には体格その他の発現形質に明確な違いのあるものも存在していた可能性が高くなり、前述の③の仮説も支持される。この場合には、使用する人の階級・階層によって、所有するウマの体格などが異なっていた可能性も考えられ、その最も優れたもの稀少なものが天皇に献上されたのであろう。

また、本遺跡出土頭蓋骨は、人間の営為が多く加えられており、意図的に配置されていたか、殉葬や雨乞い儀礼（松井、神谷　1994）などに利用するために保管されていた可能性をうかがわせる。こ

遺跡名		川入	上東	加茂政所	加茂政所	加茂政所	加茂政所	加茂政所	大阪府城山	大阪府城山	香川県中間西井坪	中間西井坪
地区				砂場2G区	砂場2G区	砂場2G区	砂場2G区	砂場2G区	Dトレンチ	Dトレンチ	11	7
遺構				住居98	住居98	住居98	住居98	住居98	溝SD0502	溝SD0502	SD7・堰土1下層	包含層
時期		古墳時代	古墳時代	7世紀前半	7世紀前半	7世紀前半	7世紀前半	7世紀前半	8世紀後半	8世紀後半	9世紀	近世
整理番号				14-223(L)	14-220(L)	14-220(R)	14-221(R)	14-222(R)			1	2
上顎／下顎		下顎	下顎	上顎	上顎	上顎	下顎	下顎	左上顎	右上顎	左上顎	右上顎
雌雄				♀?	♀?	♀?	♀?	♀?	♀	♀	?	?
I1	咬耗度	?	?	d?	d	d	測定不能	d	?	?	?	?
	最大歯高	?	?	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	59.65	?	?	?	?
	咬耗面最大幅	?	?	測定不能	測定不能	15.50	測定不能	測定不能	?	?	?	?
	咬耗面最大厚	?	?	測定不能	測定不能	11.1.0	測定不能	9.45	?	?	?	?
	咬耗面最大幅	?	?	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	11.10	?	?	?	?
I2	咬耗度	?	?	d?	d	d	測定不能	d	?	?	?	?
	最大歯高	?	?	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	?	?	?	?
	咬耗面最大幅	?	?	測定不能	測定不能	17.00	測定不能	測定不能	?	?	?	?
	咬耗面最大厚	?	?	測定不能	測定不能	10.75	測定不能	9.65	?	?	?	?
	咬耗面最大幅	?	?	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	14.40	?	?	?	?
I3	咬耗度	?	?	?	b-c?	c-d?	測定不能	c?	?	?	?	?
	最大歯高	?	?	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	48.10	?	?	?	?
	咬耗面最大幅	?	?	測定不能	測定不能	15.95以上	測定不能	測定不能	?	?	?	?
	咬耗面最大厚	?	?	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	?	?	?	?
	咬耗面最大幅	?	?	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	15.70以上	?	?	?	?
P2	咬耗度	?	?	?	d	d	d?	d	?	?	?	?
	最大歯高	?	?	測定不能	40.75	40.40	測定不能	測定不能	?	?	?	?
	咬耗面最大幅	13.00	14.70	19.00	20.95	21.23	測定不能	14.50	21.10	19.80	?	?
	咬耗面最大長	31.00	30.50	34.35	33.60	33.20	28.10	30.00	35.10	34.40	?	?
	歯冠高頬側	?	?	測定不能	測定不能	測定不能	14.50	16.55	?	?	?	?
	歯冠高舌側	?	?	測定不能	測定不能	測定不能	n	13.25	?	?	?	?
P3	咬耗度	?	?	?	d	d	d	d	?	?	?	?
	最大歯高	?	?	測定不能	55.15	52.85	測定不能	測定不能	?	?	?	?
	咬耗面最大幅	15.00	16.00	20.80	23.75	24.00	18.65	15.75	24.60	24.20	?	?
	咬耗面最大長	28.00	26.50	24.80	27.55	26.40	27.85	26.60	27.7	27.60	?	?
	歯冠高頬側	?	?	測定不能	測定不能	測定不能	11.80	12.50	?	?	?	?
	歯冠高舌側	?	?	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	14.00	?	?	?	?
P4	咬耗度	?	?	d?	d	d	d	d	?	?	?	?
	最大歯高	?	?	測定不能	59.30	60.50	67.45	測定不能	?	?	?	?
	咬耗面最大幅	?	16.00	22.83	24.00	24.00	18.00	16.90	24.80	25.80	?	?
	咬耗面最大長	28.00	25.00	23.60	26.05	25.50	28.65	26.20	25.60	24.60	?	?
	歯冠高頬側	?	?	測定不能	測定不能	測定不能	13.75	13.65	?	?	?	?
	歯冠高舌側	?	?	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	15.05	?	?	?	?
	その他	?	?					メタスタイルが突出	?	?	?	?
M1	咬耗度	?	?	d	d	d	d	d	?	?	?	?
	最大歯高	?	?	測定不能	51.60	|45.25|	58.55	測定不能	?	?	?	?
	咬耗面最大幅	?	16.00	25.55	23.40	23.30	15.40	16.45	23.70	24.10	?	?
	咬耗面最大長	27.00	24.00	22.80	22.00	21.30	26.35	23.85	21.90	21.30	?	?
	歯冠高頬側	?	?	測定不能	測定不能	測定不能	12.05	14.10	?	?	?	?
	歯冠高舌側	?	?	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	14.80	?	?	?	?
M2	咬耗度	?	?	d	d	d	d	d	?	?	?	?
	最大歯高	?	?	測定不能	51.50	測定不能	|58.20|	測定不能	?	?	?	?
	咬耗面最大幅	?	13.00	25.30	23.25	22.75	15.25	15.10	22.80	22.60	?	?
	咬耗面最大長	27.00	25.00	23.20	23.00	22.15 (破損面)	29.15	23.35	22.40	23.10	?	?
	歯冠高頬側	?	?	測定不能	測定不能	測定不能	7.15	9.10	?	?	?	?
	歯冠高舌側	?	?	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	9.80	?	?	?	?
M3	咬耗度	?	?	d	d?	d	d	d	?	?	d	d
	最大歯高	?	?	測定不能	53.25	測定不能	|63.00|	測定不能	?	?	42.2	51.95
	咬耗面最大幅	?	12.00	|21.55|	20.70	20.35	13.05	13.00	20.90	21.40	測定不能	測定不能
	咬耗面最大長	28.00	27.00	24.30	27.15	26.00	28.55	27.75	27.60	31.60	27.55	29.40
	歯冠高頬側	?	?	測定不能	測定不能	測定不能	7.45	8.55	?	?	測定不能	測定不能
	歯冠高舌側	?	?	測定不能	測定不能	測定不能	測定不能	11.10	?	?	測定不能	測定不能

第2表　ウマ　歯牙属性表

b:ｴﾅﾒﾙ質咬耗開始　c:小窩独立　d:小窩連結　　咬耗面最大幅：breadth at binding surface　咬耗面最大長：Length at binding surface

林田、鈴木(1974)、松井(1984･85)、富岡(1998b)のデータに基づく。

れは、津寺遺跡中屋調査区で溝中に意識的に置かれた例（金子　1996）と、発見された場所の機能が異なっており、これらの性格は大きな違いがあったと考えられる。ただし、この相違が、儀礼などの行為による違いか、遺物化の過程での段階が異なるだけなのかは、明確ではない。いずれにせよ、**出土状況・破損状況が明確な点、体格の復元など属性分析ができた点、供伴遺物・遺構が明確な点などから、7世紀代のウマ普及期の飼育文化についてうかがうことのできる貴重な資料**である。

注1　加藤嘉太郎の研究では約8000頭の雌ウマに、上下両顎に小さいながら犬歯が生えていたのは2～3%で、下顎だけに小さい犬歯があるのは20～30%、上顎だけのものは6～7%で、雄馬や去勢雄ウマでも1～1.8%の割合で1個または数個の犬歯を欠いていることが指摘されている（加藤 1974:p.71）。以上から、犬歯のみられない状況は、雌である可能性が高いと判断した。

注2　馬背上での乗馬風習が判別されている

謝辞

古代吉備文化センター平井泰男氏、松本和男氏、弘田和司氏、藤田薫氏には資料の提供とともに保存処理と整理・分析について様々な御援助を頂いた。特に藤田氏には、保存処理をはじめ、実測図の原図製作や属性抽出にあたって頂いた。奈良国立文化財調査研究所松井章先生、国立歴史民俗博物館西本豊弘先生には、同定と分析について御教示と御指導を賜った。岡山理科大学関係各位には多大な御援助と御協力を賜った。なかでも岡山理科大学名取真人助教授には、骨格資料の比較と同定に御教示を頂いた。同大学小林博昭教授、亀田修一助教授には、御教示と御助力を賜った。さらに、同大学学生、廣坂美穂、八木聡子、藤田芙美、同大学院沖田絵麻の諸氏には、同定、記録、登録作業に多大なる御協力を賜った。記して深謝の意を表します。

参考文献

今泉吉典　1960　『原色哺乳類図鑑』（保育社）

今泉吉典、岡田弥一郎　1983　『学研生物図鑑　動物』（学研）

内田　亨他　1972　『谷津・内田　動物分類名辞典』（中山書店）

内田　亨　1979　『新編日本動物図鑑』（北隆館）

大江正直、木津博明、桜岡正信、友廣哲也　1990　「上野国国分僧寺・尼寺中間地域出土の動物遺存体」『上野国国分僧寺・尼寺中間地域(4)』本文編(2):pp.707-938

岡田　要（校閲）　今泉吉典（著）　1960　『原色日本哺乳類図鑑』（保育社）

岡田　要　内田清之助　内田　亨　1965　『新日本動物図鑑』下（北隆館）

加藤嘉太郎　1974　『家畜の解剖と生理』（養賢堂）

加藤嘉太郎　1979　『家畜比較解剖図説』（養賢堂）

金子浩昌　1985　「百間川沢田遺跡高輪手A調査区溝－113出土の馬歯」『百間川沢田遺跡2』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59）:pp.454-456

金子浩昌　1995　「津寺遺跡出土の動物遺体」『津寺遺跡2　山陽自動車道建設に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98:pp.597-604

金子浩昌　1996　「津寺遺跡中屋調査区出土のウマ遺骸」『津寺遺跡3　山陽自動車道建設に伴う発掘

調査12』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104:pp.282-285

久合田勉　1932　『馬学外貌編』（日本中央競馬会弘済会）

富岡直人　1999a　「津寺遺跡三本木地点出土動物遺存体」『津寺三本木遺跡・津寺一軒屋遺跡』岡山県埋蔵文化財調査報告書142:pp.208-211

富岡直人　1999b（印刷中）　「香川県中間西井坪遺跡出土動物遺存体」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第32冊、pp-375～382

林田重幸、山内忠平　1954　「日本石器時代馬について」『日本畜産会報』2(2-4):pp.122-126

林田重幸、山内忠平　1957　「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』6:146-156

林田重幸　1957　「中世日本の馬について」『日本畜産会報』28(5):pp.301-306

西中川　駿　1989　『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の起源、系統に関する研究－特に日本在来種との比較』（昭和63年文部省科学研究費補助金研究成果報告書）

林田重幸、鈴木孝司　1974a　「川入遺跡出土の馬骨について」『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書2）:pp.354-363

林田重幸、鈴木孝司　1974b　「倉敷市上東遺跡出土の馬歯について」『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書2）:pp.364-367

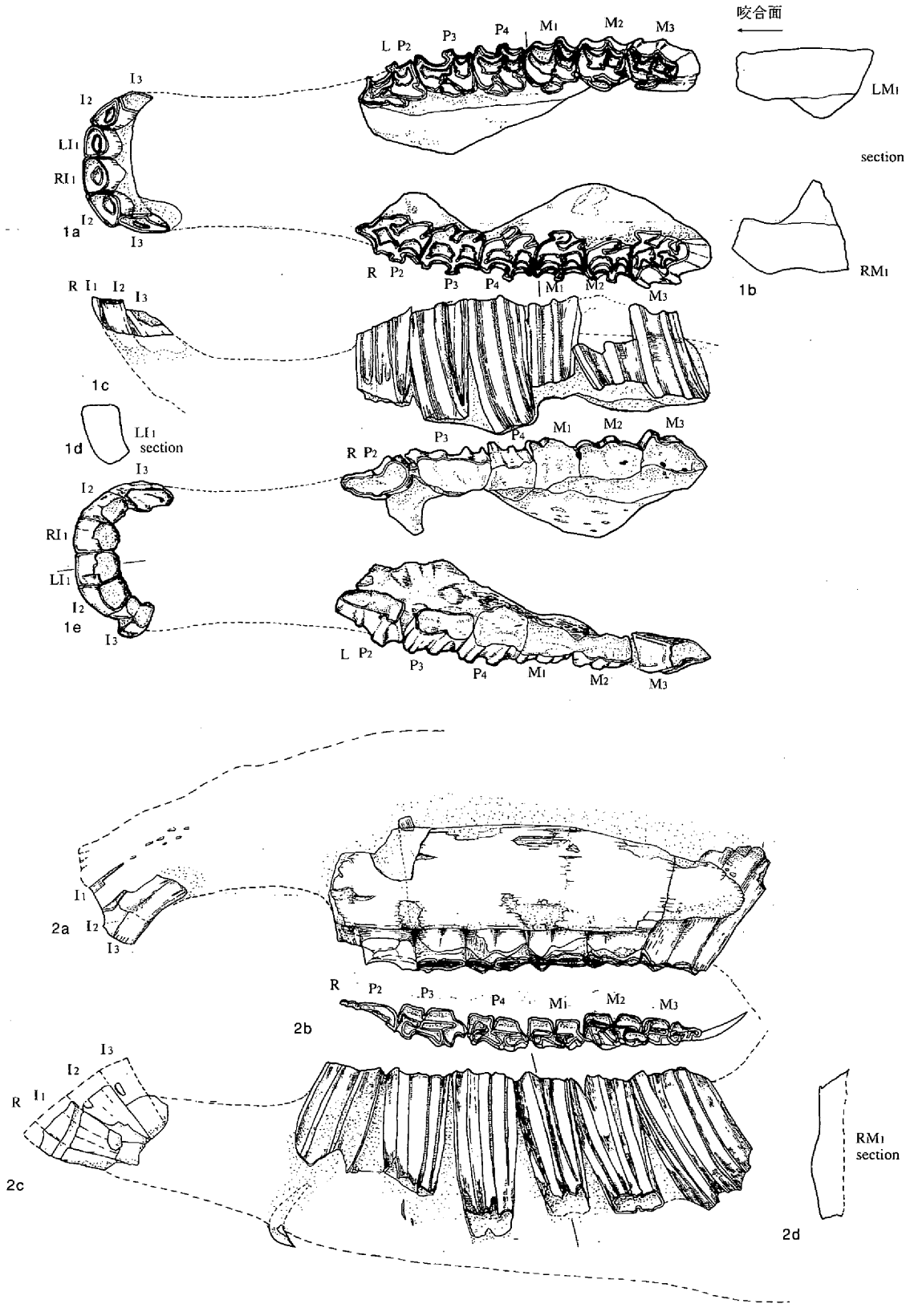
増井　清　1943　『家畜比較解剖学』（養賢堂）

松井　章　1991　「家畜と牧－馬の生産」『古墳時代の研究』4（雄山閣）pp.105-119

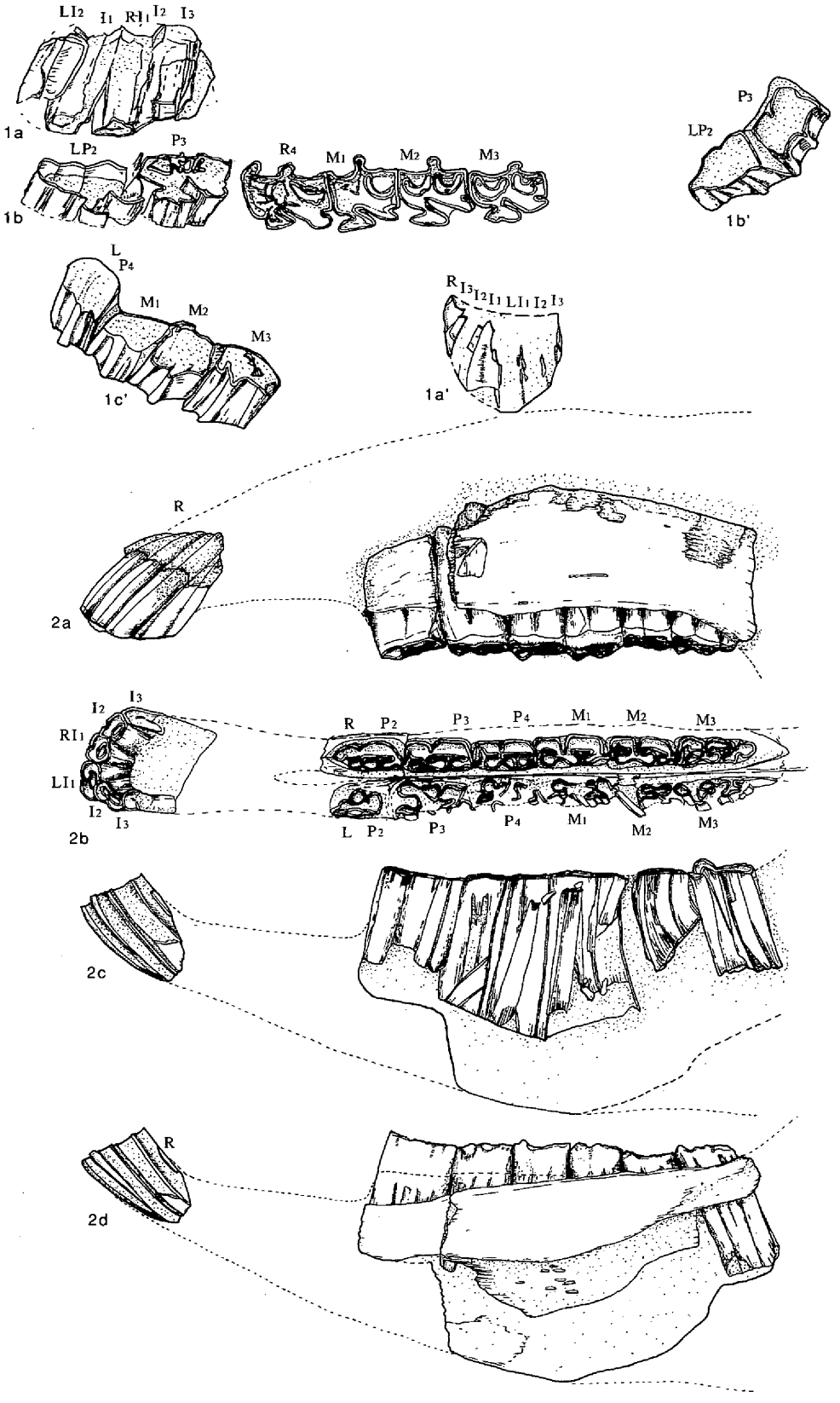
松井　章、神谷正弘　1994　「古代朝鮮半島および日本列島における馬の殉殺について」『考古学雑誌』80-1:pp.57-94

Brown, Dorcas & Anthony, David 1998 'Bit Wear, Horseback Riding and the Botai Site in Kazakstan' in "Journal of Archaeological Science"25:pp.331-347

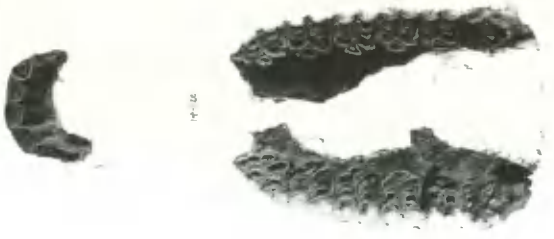
Driesch, A. 1976 "A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites" (Peabody Museum Bulletin Peabody Museum of Archaeology and Ethnology Harvard University)



第１図版　ウマ１　　1　14-220上顎（a. 咀嚼面．b. M_1部断面．c. 右頬側．d. 左 I_1 断面．
（同一個体）　　e. 歯根側、検出状況）
2　14-221右下顎（a. 右頬側．b. 咀嚼面．c. 右舌側、検出状況．d. 右M_1断面）



第２図版　ウマ２　　1　14-223上顎（a～c. 咀嚼面側. a：LI 1.2RI 1～3. b：P2・3. c：P4M1～3. a′～c′歯根側検出状況）
（同一個体）　　2　14-222下顎（a:右下顎頬側. b:咀嚼面. c:左下顎頬側、検出状況. d. 右下顎舌側）

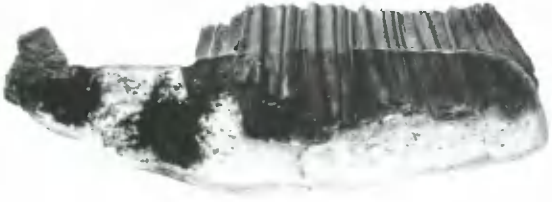


1a

1b

2a

2b



2c

第1図版　ウマ1　1　14-220上顎（a咬合面、b右頬側）
2　14-221右下顎（a頬側、b咬合面、c舌側）

1a　　1b

2a

2b

2c

第２図版　ウマ２　1　14-223上顎（a 切歯咬合面、b 臼歯咬合面）
2　14-222右下顎（a 頬側、b 咬合面、c 舌側）

6　加茂政所遺跡出土の土器・瓦の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所
白石　純

1　分析の目的

加茂政所遺跡は弥生時代から近世にかけての複合遺跡で、特に古代の遺構および遺物は、梵鐘鋳造遺構や緑釉・灰釉、多量の瓦、塼仏などが出土していることから寺院跡の可能性がある。

この分析では、砂場地区から出土した平安時代後期の黒色土器、土師器、瓦の蛍光X線分析法による胎土分析を実施し、以下のことについて検証した。

(1)肉眼観察により、黒色土器は4類、土師器は5類に分類されている[1]。前者の黒色土器は形態、手法的に搬入品ではなく在地産と考えられることから、土師器類との比較をし在地産であるかどうか。そして、周辺遺跡出土土器との比較を行い差異があるかどうか検討した。

(2)加茂政所遺跡から出土している平安時代の瓦で種類、焼成、技法により胎土に差があるか。また、周辺遺跡(津寺遺跡、天神坂遺跡)から出土している瓦および生産地である亀山焼との比較検討。

2　分析方法、結果

分析は、波長分散型蛍光X線分析装置(リガク)を用い、測定方法、条件、試料の作製は現在までに行っている方法である。

分析試料は、第1表の黒色土器、土師器類49点と第2表の瓦31点の合計80点である。

分析の結果、K、Ca、Sr、Rbの各元素の差異から、XY散布図を作製し検討した。

第1、2図の散布図では、4類に分類されている黒色土器の差異みると、1類のみが一つの分布域をつくるが、他の2、3、4類は胎土の分析値でまとまらなかった。ただ、2類(試料番号1、3)、3類(13)、4類(12)の4点と1類(16)、2類(15)の2点がそれぞれでまとまりグループをなしている。

第3、4図の土師器類の散布図では、5類に分類されているが、このうちA類、B類はそれぞれ一つにまとまるが、C、D、E類はそれぞれ二つに分かれ分布した。そして、これら5分類の土器全体でみると、大きく3つのグループ(以下a、b、cとする)に分類され、aグループにはA類土器。bグループにはB類土器、C類土器(31、32、33)、D類土器(35、36)、E類土器(38、41、42)が、またcグループには、C類土器(29、30)、D類土器(34、37、43、44、45)、E類土器(39、40、46、48)がそれぞれ分布している。

黒色土器と土師器の比較では、第5、6図よりほぼ全ての黒色土器が土師器の分布範囲に入る結果となった。特に、土師器のbグループとcグループの分布域に入るようである。

「津寺遺跡4」[2]の高田調査区より出土した土師器、黒色土器との比較では、第5、6図から胎土的に差異は認められず、また土師器A類(加茂政所遺跡)と津寺4の胎土G類での比較では、肉眼観察でよく似ているが、胎土分析では一致しなかった。

瓦の分析は、種類、焼成、技法等の差により胎土的に差異があるかどうかでは、第7図の散布図から検討すると、種類、技法などで胎土に差はあまりみられず、瓦質か須恵質による焼成の差で胎土に違いがみられる傾向がある。また、瓦の時期ごとにより差があるかどうかでは、平安時代とそれ以降

の中世の時期で分布域が異なっている。

周辺遺跡出土の瓦との比較では、第８図から亀山焼および天神坂遺跡の両分布範囲に入る加茂政所遺跡の瓦はほとんど無かった。

試料番号49の緑釉椀は、第９図の散布図から近江産の分布域に入った(3)。

3　まとめ

加茂政所遺跡出土の10世紀代の黒色土器、土師器、瓦の蛍光Ｘ線による胎土分析を実施したが、この分析での結果を整理してまとめると

(1)黒色土器、土師器の分析では、肉眼観察による胎土分類でそれぞれ４分類と５分類に分けられているが、蛍光Ｘ線分析では肉眼観察の分類ほど細かく分かれなかったもののある程度の差異はみられた。まず、黒色土器では、１類がほぼ一つにまとまる特徴のある胎土であり、それ以外の黒色土器も二つのグループにまとまることから、大きく三つの異なった胎土があることが推測される。在地産の土師器の分析でも大きく三つの胎土に分かれることが確認された。そして、黒色土器と土師器の比較では、黒色土器が土師器のbグループおよびcグループの分布域に入ることがわかり、このことより黒色土器は遺跡周辺で生産されたことが予測される。

『津寺遺跡４』の高田調査区から出土した黒色土器、土師器との比較でも、胎土的に差異はなかった。

(2)瓦の分析では、瓦質か須恵質かによる焼成の差により胎土に差がみられ、また時期によっても差異があることがわかった。ただ、亀山焼および天神坂遺跡との比較では、両遺跡に入るものはほとんどなく、亀山焼の中でも胎土的に複数に分類できる可能性があることから、これら遺跡の分析試料を蓄積し再検討する必要がある。

この胎土分析の機会を与えたいただいた松本和男氏、平井泰男氏、弘田和司氏、岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々には、文末ではありますが記して感謝いたします。

註

(1) 肉眼観察による胎土分類は、試料提供者の観察による。

(2) 白石　純「津寺遺跡出土の須恵器、土師器の胎土分析」『津寺遺跡４』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116　岡山県教育委員会1997.

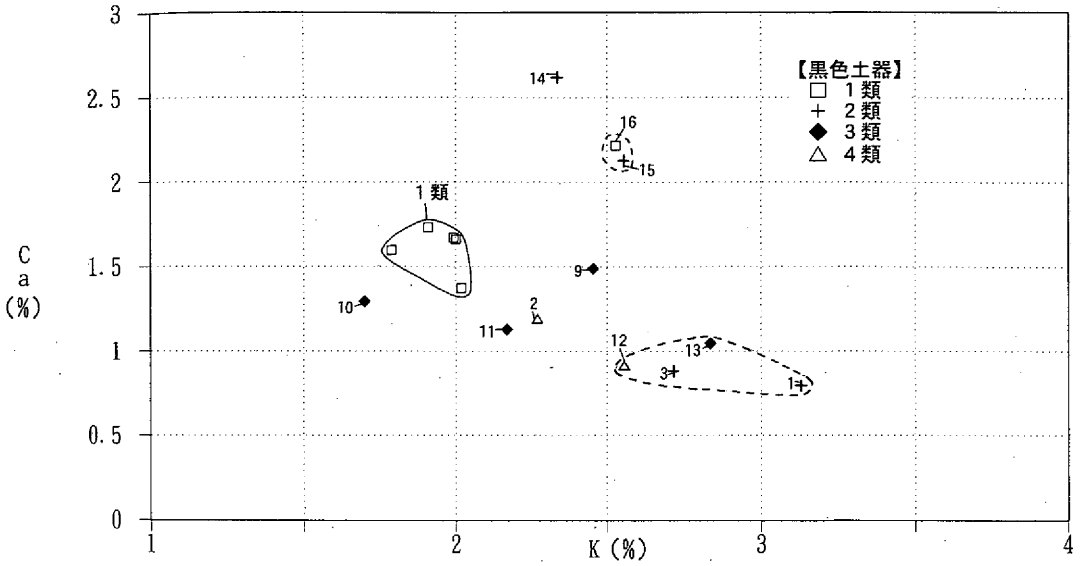
(3) 白石　純「窪木遺跡・出土土器の胎土分析」『窪木遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告124　岡山県教育委員会1998.

第1表　加茂政所遺跡黒色土器・土師器胎土分析一覧表（%）　ただし、Sr,Rbはppm.

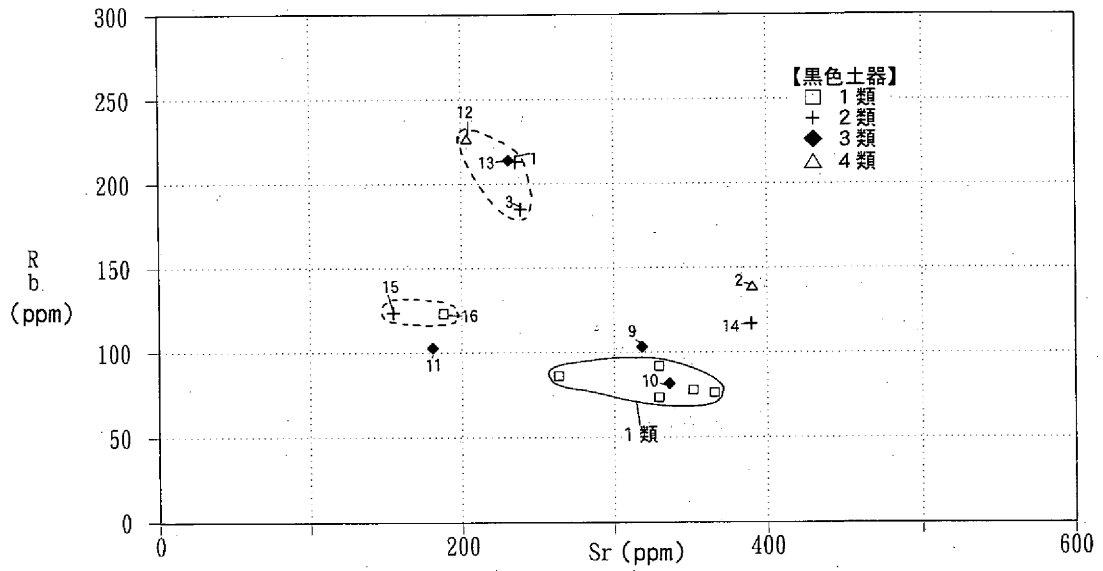
試料番号	掲載番号	調査区	遺構	種別	器種	胎土分類	K	Fe	Si	Ti	Al	Ca	Sr	Rb
1	3255	砂場I区	土壙391	黒色土器	椀	2類	3.13	5.48	61.30	0.83	19.27	0.79	239	185
2	3259	砂場I区	土壙391	黒色土器	椀	4類	2.27	6.66	59.28	0.81	17.71	1.19	390	139
3	3257	砂場I区	土壙391	黒色土器	椀	2類	2.72	6.27	61.80	0.70	19.57	0.88	235	213
4	3134	砂場I区	土壙388	黒色土器	椀	1類	1.91	5.27	64.45	1.01	16.06	1.72	365	76
5	3141	砂場I区	土壙388	黒色土器	椀	1類	2.00	5.99	65.05	1.02	16.57	1.65	328	91
6	3140	砂場I区	土壙388	黒色土器	椀	1類	1.99	5.88	65.14	1.01	16.31	1.66	350	78
7	3136	砂場I区	土壙388	黒色土器	椀	1類	1.79	5.08	65.08	0.92	15.85	1.59	328	73
8	3138	砂場I区	土壙388	黒色土器	椀	1類	2.02	5.90	66.35	1.04	16.90	1.36	263	86
9	3135	砂場I区	土壙388	黒色土器	椀	3類	2.45	5.76	61.07	0.69	17.04	1.48	317	103
10	3186	砂場I区	土壙389	黒色土器	椀	3類	1.70	4.17	67.40	0.91	18.50	1.29	335	82
11	3200	砂場I区	土壙389	黒色土器	椀	3類	2.17	5.69	62.43	0.68	22.32	1.12	179	103
12	3082	砂場2F区	土壙359	黒色土器	椀	4類	2.56	2.80	55.04	0.60	21.48	0.91	203	227
13	3081	砂場2F区	土壙359	黒色土器	椀	3類	2.84	3.67	59.33	0.61	22.37	1.04	232	214
14	3499	砂場南水路I区	土器溜り3	黒色土器	椀	2類	2.34	10.20	50.87	1.06	17.85	2.62	389	117
15	3496	砂場南水路I区	土器溜り3	黒色土器	椀	2類	2.55	11.49	54.91	1.19	19.25	2.12	154	123
16	3984	砂場南水路I区	土器溜り3	黒色土器	椀	1類	2.53	11.11	54.68	1.15	19.26	2.20	188	123
17	3252	砂場I区	土壙390	土師器	杯	A類	1.21	12.93	46.56	1.07	19.90	2.59	334	56
18	3250	砂場I区	土壙390	土師器	杯	A類	1.34	13.13	45.56	1.02	18.94	2.47	332	50
19	3145	砂場I区	土壙388	土師器	椀	A類	1.72	7.55	54.25	0.79	20.29	2.28	264	74
20	3583	砂場I区	溝53	土師器	椀	A類	1.38	12.72	48.97	1.10	19.08	2.39	236	50
21	3556	砂場I区	溝53	土師器	椀	A類	1.35	12.34	47.80	1.07	18.99	2.46	274	60
22	3568	砂場I区	溝53	土師器	椀	A類	1.33	12.82	50.56	1.13	20.48	2.40	246	55
23	3489	砂場南水路I区	土器溜り3	土師器	杯	B類	1.95	6.44	62.83	1.00	15.67	1.59	368	93
24	3495	砂場南水路I区	土器溜り3	土師器	椀	B類	1.95	6.12	61.16	0.98	16.15	1.61	413	101
25	3240	砂場I区	土壙390	土師器	椀	B類	1.94	7.42	60.94	0.98	15.59	1.89	458	94
26	3162	砂場I区	土壙390	土師器	椀	B類	1.83	5.29	66.22	0.97	15.33	1.57	281	79
27	3150	砂場I区	土壙388	土師器	椀	B類	1.90	6.30	62.87	1.03	15.95	1.59	317	105
28	3241	砂場I区	土壙390	土師器	椀	B類	1.95	7.65	62.25	1.07	15.73	1.31	245	90
29	3265	砂場I区	土壙391	土師器	杯	C類	2.42	7.59	62.93	1.01	21.00	0.48	70	178
30	3264	砂場I区	土壙391	土師器	杯	C類	2.71	6.85	62.86	0.73	19.45	0.70	160	199
31	3147	砂場I区	土壙388	土師器	椀	C類	1.90	5.95	66.24	1.03	15.67	1.46	287	93
32	3199	砂場I区	土壙389	土師器	椀	C類	1.99	5.66	66.06	1.10	17.21	1.20	240	82
33	3562	砂場I区	溝53	土師器	椀	C類	2.10	9.55	52.65	0.98	17.43	2.24	346	95
34	3244	砂場I区	土壙390	土師器	椀	D類	2.18	5.33	55.61	0.65	20.44	1.69	507	120
35	3213	砂場I区	土壙389	土師器	椀	D類	1.85	6.57	58.96	0.91	19.47	1.76	413	84
36	3187	砂場I区	土壙389	土師器	椀	D類	1.86	5.92	59.06	0.83	18.96	1.72	405	83
37	3561	砂場I区	溝53	土師器	椀	D類	2.23	7.49	65.27	1.08	20.10	0.59	88	103
38	3241	砂場I区	土壙390	土師器	椀	E類	1.89	7.36	50.48	0.94	20.79	1.85	452	101
39	3202	砂場I区	土壙389	土師器	椀	E類	2.28	3.89	60.80	0.67	20.88	1.14	259	123
40	3192	砂場I区	土壙389	土師器	椀	E類	2.41	2.85	70.14	0.92	18.54	0.77	156	103
41	3215	砂場I区	土壙389	土師器	杯	E類	1.84	4.47	65.10	0.83	17.59	1.43	335	98
42	3584	砂場I区	溝53	土師器	皿	E類	1.55	6.88	64.75	0.89	14.56	1.67	413	68
43	3274	砂場I区	土壙391	土師器	甕	D類	2.46	6.64	59.61	0.74	18.09	1.74	223	86
44	3273	砂場I区	土壙391	土師器	甕	D類	2.42	6.96	62.68	0.75	16.10	1.96	289	86
45	3083	砂場2F区	土壙359	土師器	鍋	D類	2.78	6.65	57.12	0.66	19.45	1.09	138	87
46	3500	砂場南水路I区	土器溜り3	土師器	鍋	E類	2.29	8.37	53.66	0.97	19.65	1.57	292	100
47	3176	砂場I区	土壙388	土師器	竈	E類	3.47	3.44	61.98	0.57	19.48	1.25	262	162
48	3224	砂場I区	土壙389	土師器	羽釜	E類	2.90	3.60	63.34	0.51	18.27	1.02	215	131
49	3084	砂場2F区	土壙389	緑釉	椀	近江産	2.56	5.41	65.66	1.23	19.89	0.42	88	98

第２表　加茂政所遺跡瓦胎土分析一覧表（%）　ただし、Sr,Rbはppm.

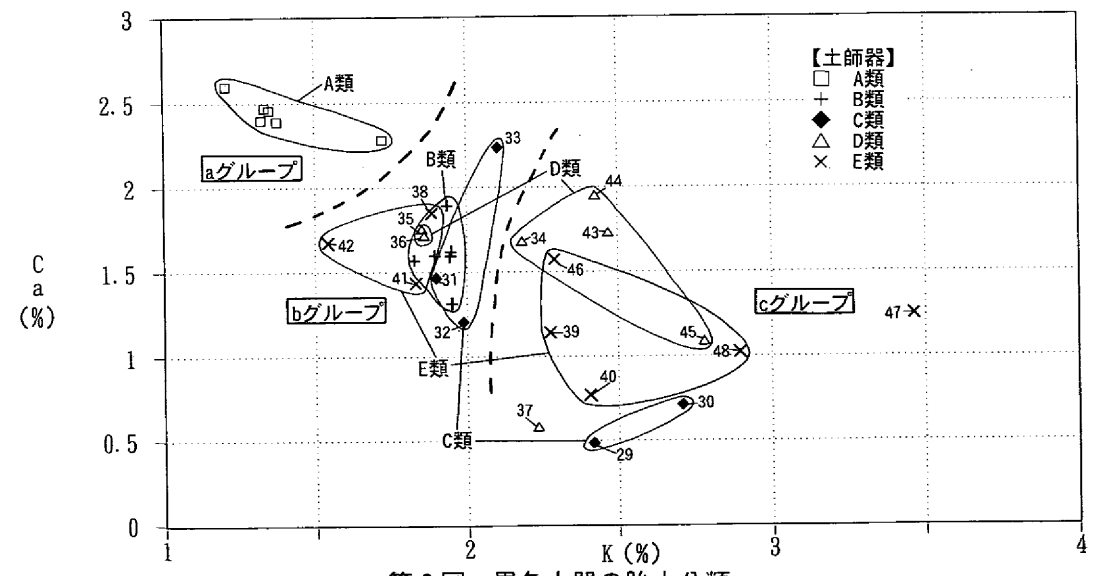
試料番号	計測番号	種別	焼成	技法(叩き)	時期	K	Fe	Si	Ti	Al	Ca	Sr	Rb
1	61	丸瓦	瓦質	縄	平安時代	3.11	3.87	76.67	0.51	16.27	0.54	114	198
2	62	丸瓦	瓦質	縄	平安時代	2.95	4.28	72.77	0.56	16.78	0.64	96	183
3	672	平瓦	瓦質	縄	平安時代	2.70	4.26	72.05	0.55	16.31	0.69	126	154
4	939	平瓦	瓦質	縄	平安時代	2.74	4.89	75.22	0.54	17.54	0.59	111	171
5	1307	平瓦	瓦質	縄	平安時代	2.84	2.28	74.45	0.73	19.73	0.76	166	153
6	1095	平瓦	瓦質	縄	平安時代	2.84	2.42	74.63	0.70	19.49	0.73	163	158
7	439	平瓦	瓦質	縄	平安時代	2.77	2.39	72.78	0.74	19.65	0.67	154	162
8	741	平瓦	瓦質	縄	平安時代	2.80	2.22	71.47	0.72	20.12	0.79	172	153
9	1237	平瓦	瓦質	縄	平安時代	2.81	2.68	69.15	0.75	19.89	0.79	165	156
10	1417	平瓦	瓦質	縄	平安時代	2.85	2.06	69.21	0.72	19.83	0.85	200	146
11	1184	平瓦	瓦質	縄	平安時代	2.87	4.25	71.57	0.60	19.52	0.70	103	187
12	1298	平瓦	瓦質	縄	平安時代	2.72	4.12	65.95	0.57	18.82	0.79	141	170
13	1301	平瓦	瓦質	縄	平安時代	2.81	4.24	69.16	0.60	20.71	0.68	109	193
14	689	平瓦	須恵質	縄	平安時代	2.79	4.88	71.83	0.57	17.80	0.61	102	190
15	723	平瓦	須恵質	縄	平安時代？	2.70	3.03	74.42	0.75	19.59	0.86	164	160
16	687	平瓦	須恵質	縄	平安時代	2.26	2.57	80.11	0.65	18.12	0.37	75	131
17	1445	平瓦	須恵質	縄	平安時代	2.41	2.05	76.49	0.54	19.28	0.70	135	130
18		丸瓦	瓦質		平安時代	2.75	1.98	75.79	0.70	19.53	0.76	167	144
19		丸瓦	瓦質		平安時代	2.65	3.57	68.96	0.56	20.17	0.73	118	178
20		丸瓦	瓦質		平安時代	2.37	5.71	57.30	0.66	21.82	0.87	148	144
21		丸瓦	瓦質		平安時代？	2.78	4.01	73.93	0.73	18.13	0.72	138	150
22		丸瓦	瓦質		平安時代	2.32	2.87	72.85	0.47	16.53	0.69	130	138
23		丸瓦	須恵質		平安時代	2.64	2.74	74.78	0.64	19.26	0.67	118	146
24		丸瓦	須恵質		平安時代	2.15	7.51	65.22	0.93	20.19	1.16	152	96
25	2042	丸瓦	瓦質	格子	平安～鎌倉時代	2.59	3.11	74.81	0.65	19.31	0.63	133	139
26		平瓦	須恵質	格子	平安～鎌倉時代	2.40	3.92	76.10	0.79	17.95	0.59	98	137
27		平瓦	瓦質	格子	平安～鎌倉時代	2.36	3.97	67.62	0.81	22.24	0.45	91	143
28		丸瓦	瓦質		中世	2.47	6.49	68.47	0.84	16.75	1.36	189	107
29		平瓦	瓦質		中世	2.57	6.78	63.80	0.85	17.37	1.48	213	98
30	1285	平瓦	瓦質	縄	平安時代？	1.53	6.26	73.95	1.04	14.23	0.80	121	77
31		丸瓦	瓦質		平安時代？	2.17	2.67	71.28	0.65	21.67	0.39	68	137



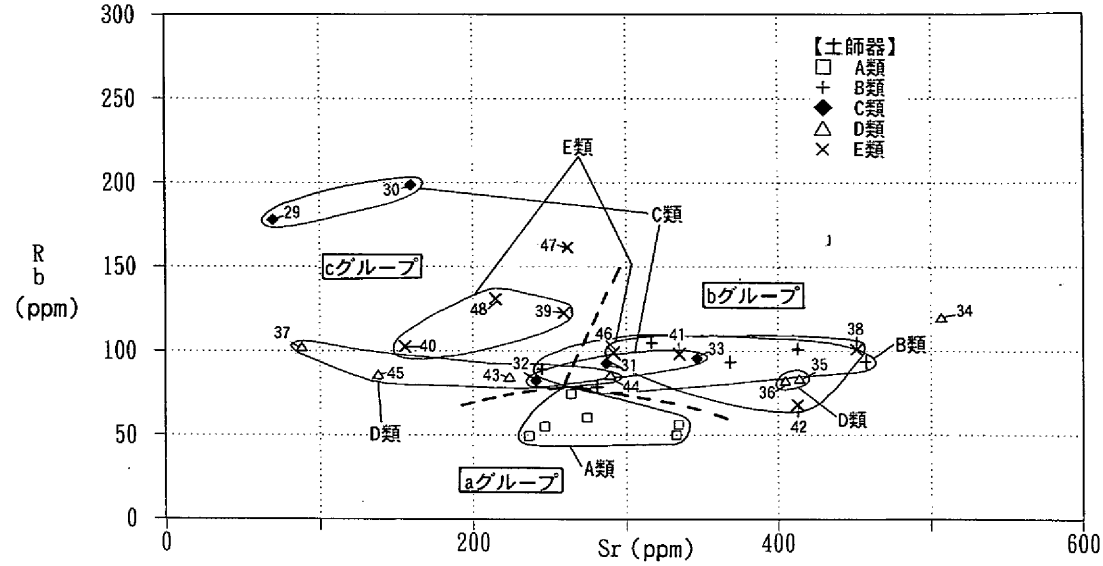
第１図　黒色土器の胎土分類



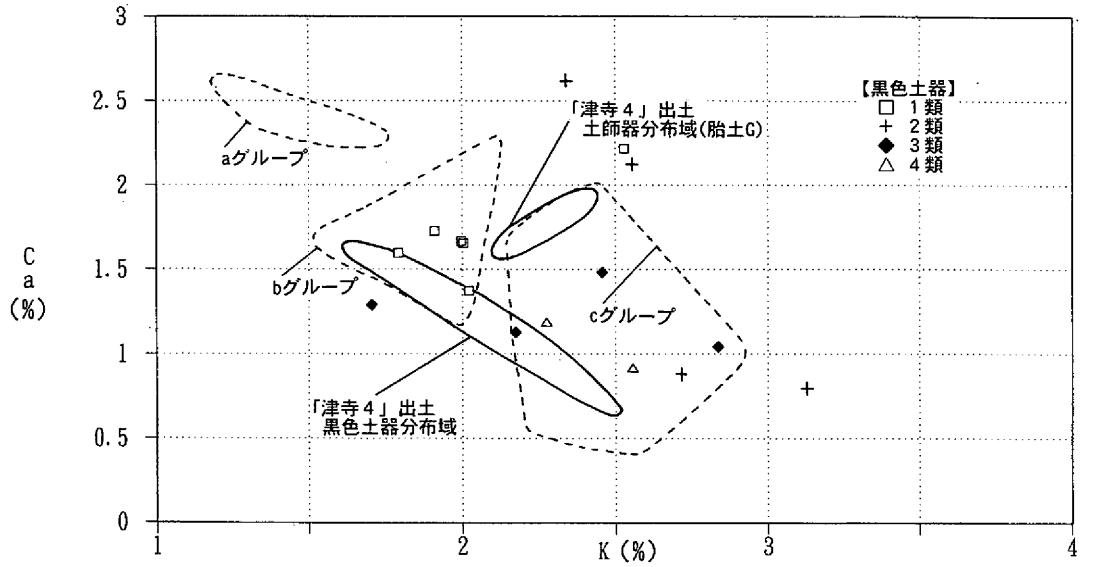
第２図　黒色土器の胎土分類



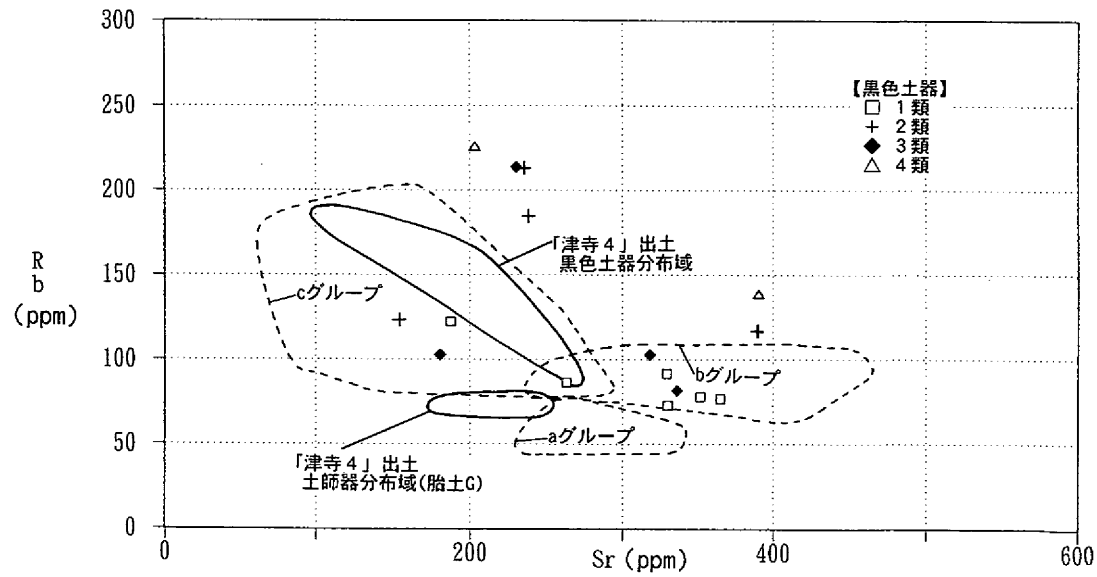
第３図　黒色土器の胎土分類



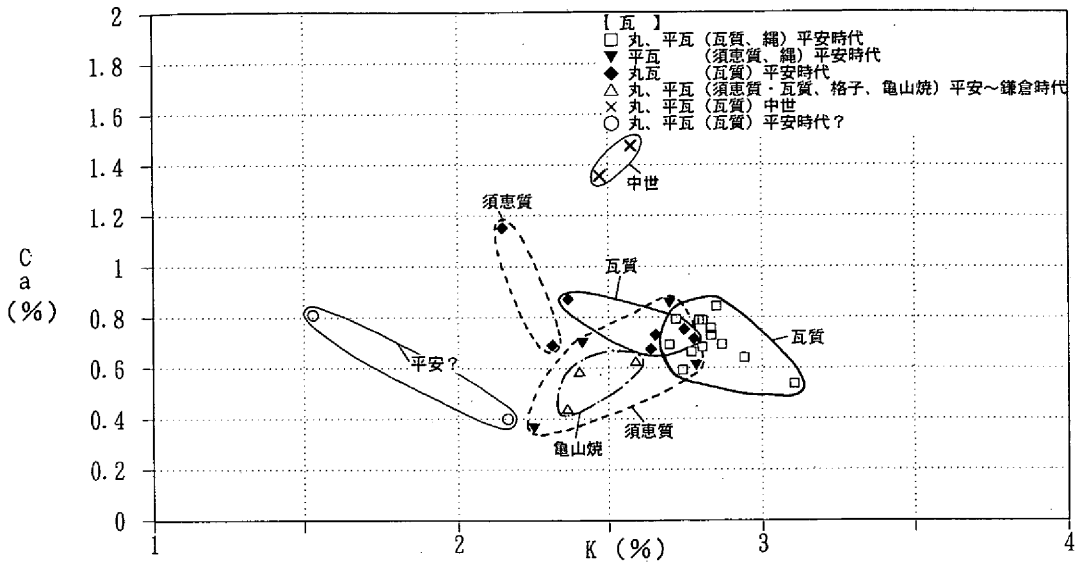
第４図　土師器の胎土分類



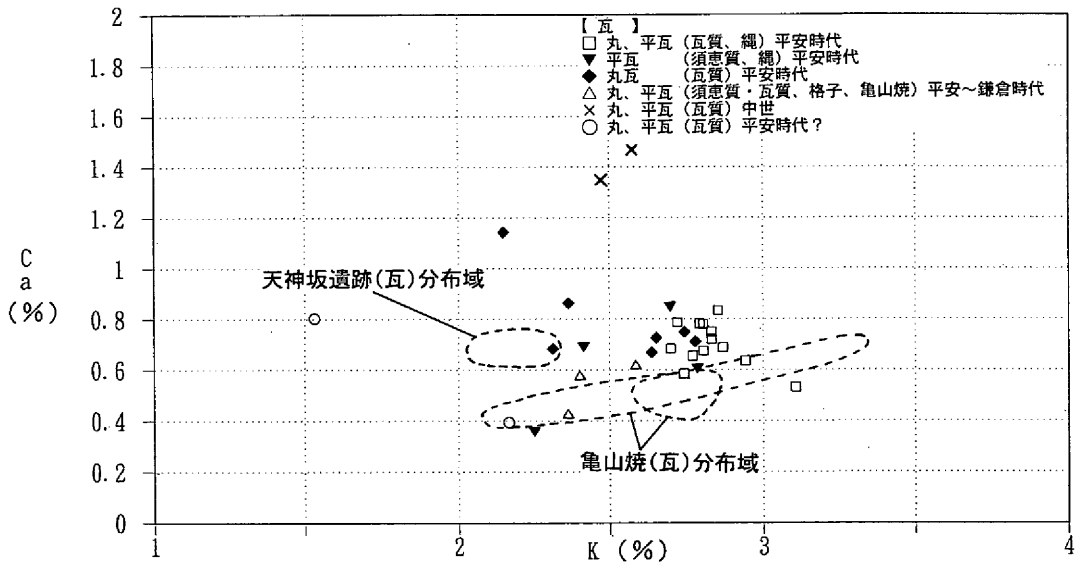
第５図　黒色土器と土師器の比較



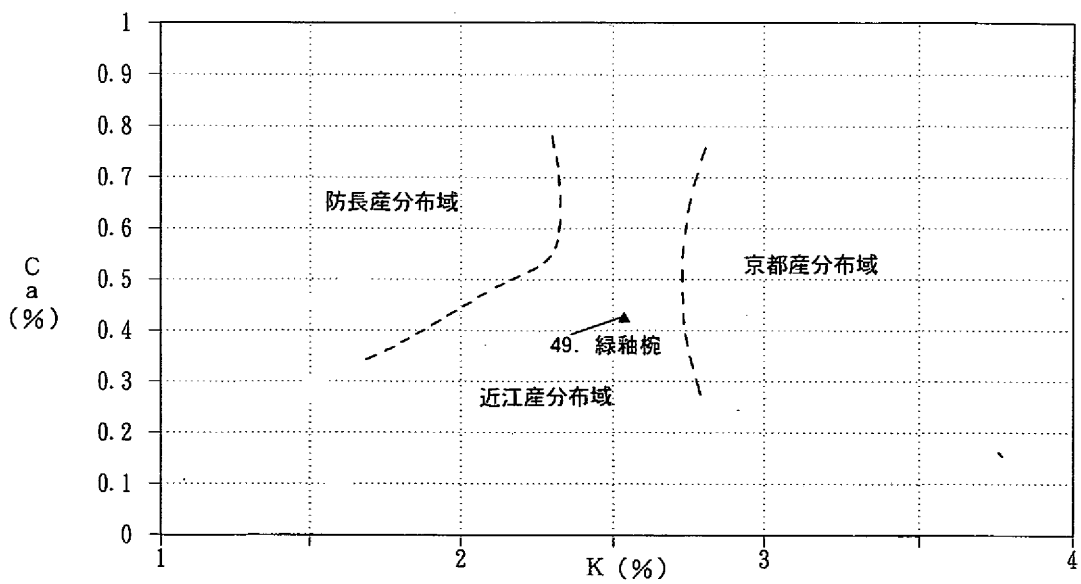
第６図　黒色土器と土師器の比較



第７図　加茂政所遺跡出土瓦の胎土分類



第８図　加茂政所遺跡出土瓦と亀山焼・天神坂遺跡出土瓦との比較



第９図　加茂政所遺跡出土緑釉椀の産地推定

7　加茂政所遺跡出土のガラス玉、ガラス滓および銅鏃の分析

岡山理科大学自然科学研究所
白石　純

1　分析目的・結果

加茂政所遺跡砂場地区と立田地区から出土したガラス玉、銅鏃の成分などをエネルギー分散型蛍光X線分析法(1)により分析し、ガラス玉、ガラス滓については成分、色調の由来、他の遺跡から出土したガラス玉、ガラス滓との比較を行い、また、銅族などの銅製品は成分組成について検討した。

分析方法は、ガラス玉、銅製品は非破壊で試料の表面を、ガラス滓は試料を粉末にしコイン状に加圧成形し分析した。

分析の結果、第１・２表に分析した各資料の分析結果を示す。まず、第１表のガラス玉、ガラス滓の分析値で、１～６までのガラス玉はSiO_2(二酸化珪素)、K_2O(酸化カリウム)が主成分として検出され、カリガラス(K_2O-SiO_2系ガラス)であることがわかる。そして、この６点の玉類の色調がスカイブルー(淡青色)を呈し、いずれにもCuO(酸化銅)が４～６％ほどと１～２％のFe_2O_3(酸化鉄)が含まれていることから、このガラスの着色には銅と鉄が関与していることが考えられる。また、７、８のガラス滓は、Fe_2O_3、K_2Oの成分が多く含まれている。

次に、銅鏃、釧の分析では、第２表に分析結果を示した。この９点の資料のうちNo.３の立田AP16･17区SH02出土の銅鏃は、CuO量が90%以上含有されていることがわかった。しかし、それ以外の銅鏃、釧はCuO、Pb、Snの各成分が平均して20～40%ほど含まれていることが確認された。

2　まとめ

(1)ガラス玉の分析では、カリガラスであることがわかり、着色には銅および鉄が関与していると推測される。また、ガラス滓の分析では、他の遺跡から出土したガラス滓との比較を行った。第３表に各遺跡出土のガラス滓の分析値を比較している。この表から砂場ⅡB区のガラス滓と比較的近似した組成を示すものは、百間川原尾島遺跡出土のガラス滓である。そして、各遺跡のガラス滓を分析値の量で比較すると、現段階の試料から大きく３つに分類できよう。

(a)政所遺跡、百間川原尾島遺跡のようにNa_2O量が少なくFe_2O_3量が多いもの。

(b)百間川今谷遺跡、鹿田遺跡ではNa_2O量が多くFe_2O_3量が少ないもの。

(c)津寺遺跡のようにNa_2O、Fe_2O_3量が少ないものや両元素とも多いもの。

このように各遺跡ごとのガラス滓に特徴が見られることが示唆されるが、試料の蓄積を行い実証する必要がある。

(2)銅鏃、釧の分析では、No.３の銅鏃がCu量が90%以上と純粋な銅に近いことがわかった。

また、この他の銅鏃、釧ではCu、Pb、Snの３元素が主体をしめ、銅鏃ではCuに比べPbの含有量が多く、釧では逆にCu量が少ない傾向が見られる。出発物質となる原料の違いが関与していることが考えられる。

註

(1)分析装置は、セイコー電子工業製卓上蛍光X線分計SEA2010Lを使用し、定量分析ではファンダメンタル・パラメーター法(理論計算法)により算出した。

第1表　加茂政所遺跡出土ガラス玉、ガラス滓分析値一覧表（%）

番号	調査区	出土遺構	時期	SiO_2	Na_2O	K_2O	CaO	Al_2O_3	Fe_2O_3	TiO_2	MnO	CuO	PbO	SnO	MgO
1	砂場Ⅰ区	竪穴住居38,P-1	弥生時代後期	67.36	----	21.43	----	----	2.04	----	----	4.44	1.45	0.42	----
2	砂場Ⅰ区	竪穴住居47	弥生時代後期	65.84	----	21/41	----	----	1.59	0.35	----	5.52	2.01	0.49	----
3	砂場Ⅰ区	P-617(旧名称)	弥生時代後期	65.23	----	22.04	----	----	1.53	----	----	4.50	2.02	0.45	----
4	砂場ⅡC区	竪穴住居29	弥生時代後期末	63.25	----	20.13	1.16	----	2.08	0.42	----	5.47	2.89	0.75	----
5	砂場ⅡD区	竪穴住居115	古墳時代後期	68.09	----	12.44	----	7.16	1.51	0.45	----	3.73	1.46	----	----
6	立田AP14区	竪穴住居1	弥生時代後期末	62.55	----	16.05	1.01	8.68	2.07	0.46	----	4.92	1.93	0.41	----
7	砂場ⅡB区	P-29(旧名称)		60.75	1.76	3.47	2.65	17.06	10.57	----	----	----	----	----	1.81
8	砂場ⅡB区	南包含層		58.41	2.42	3.69	4.86	11.83	15.29	----	----	----	----	----	1.77

※6は高松原古才遺跡、それ以外は加茂政所遺跡

第2表　銅製品分析値一覧表（%）

番号	調査区	遺構	種類	Cu	Pb	Sn	Si	Al	Fe	Ca	P	As	備考
1	砂場Ⅰ区	竪穴住居42	銅鏃	19.54	36.28	25.76	10.82	4.44	1.66	0.95	----	0.33	表面は青白色で緑青錆が付着している
2	砂場Ⅰ区	溝15	銅鏃	18.10	5.23	3.56	43.84	14.06	8.73	1.09	----	----	表面には土壌が付着している
3	立田AP16･17区	竪穴住居5	銅鏃	90.76	2.59	2.24	0.69	2.77	----	----	0.21	0.22	表面は銅色
4	砂場ⅡC区	竪穴住居28	釧	24.96	21.89	39.65	5.04	1.93	0.66	----	3.14	0.59	表面は青白色で緑青錆が付着している
5	砂場ⅡE区	土壙262	銅鏃	47.07	27.57	6.28	3.95	1.49	----	1.48	7.48	----	表面は青白色で緑青錆が付着している
6	砂場ⅡD区	竪穴住居35	銅鏃	30.71	38.85	12.09	3.23	1.71	0.41	0.61	6.97	0.29	表面は青白色で緑青錆が付着している
7	砂場ⅡD区	溝49	釧?	28.44	12.53	28.72	17.47	6.74	2.10	----	1.03	0.60	表面は黄青色で緑青錆が付着している
8	砂場ⅡD区	Pit	釧?	44.20	21.99	14.47	7.83	1.17	0.18	0.90	3.96	1.38	表面は青白色で緑青錆が付着している
9	砂場ⅡC区	竪穴住居68	銅鏃	33.08	40.75	9.35	6.69	2.69	0.77	0.98	3.99	0.32	表面は青白色で緑青錆が付着している

※3は立田遺跡、それ以外は加茂政所遺跡

第3表　各遺跡出土ガラス滓の分析値（%）

遺跡名 出土地区	加茂政所遺跡 砂場ⅡB区①	加茂政所遺跡 砂場ⅡB区②	百間川原尾島 9,10B･D区(1) 土壙､井戸	百間川原尾島 13,14C･D区(2) 溝	百間川原尾島 9,10Z区(3)	百間川今谷 跡(4)	鹿田遺跡(5)	津寺遺跡(6) 中屋調査区 土壙	津寺遺跡(7) 中屋調査区 土壙
時期	?	?	弥生後期	弥生後期	?	弥生中期	弥生中期後半 ～古墳初頭	古墳初頭	?
SiO_2	60.75	58.41	58.7	59.2	50.6	63.06	60.7	54.1	55.0
Na_2O	1.76	2.42	4.6	5.7	2.5	11.5	9.4	1.9	8.9
K_2O	3.47	3.69	2.1	2.4	1.5	1.80	2.0	1.6	2.4
MgO	1.81	1.77	3.4	2.2	3.3	3.69	5.7	5.2	4.6
CaO	2.65	4.83	3.1	3.0	2.3	2.43	3.6	5.3	2.7
Al_2O_3	17.06	11.83	16.0	12.4	20.8	12.63	9.7	27.1	15.3
Fe_2O_3	10.57	15.29	10.0	12.2	14.7	3.67	5.1	5.9	9.6

註

(1) 苅谷道郎「百間川原尾島遺跡出土ガラス小玉およびガラス滓」『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106　1996年
(2) 苅谷道郎「百間川原尾島遺跡出土ガラス玉およびガラス滓」『百間川原尾島遺跡４』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97　1995年
(3) 苅谷道郎「百間川原尾島遺跡9･10区出土ガラス滓」『百間川原尾島遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88　1994年
(4) 井上　弘「ガラス」『百間川今谷遺跡１』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51　1982年
(5) 三浦定俊、苅谷道郎「鹿田遺跡出土ガラス滓」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1988年
(6) 苅谷道郎「津寺遺跡中屋調査区出土のガラス滓について」『津寺遺跡３』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104　1996年
(7) 苅谷道郎「津寺遺跡出土のガラス滓について」『津寺遺跡４』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116　1997年

8　加茂政所遺跡出土銅釧の鉛同位体比分析

(財)元興寺文化財研究所保存科学センター
東京国立文化財研究所 保存科学部

平尾良光　　榎本淳子

1　はじめに

岡山市加茂の政所遺跡砂場調査区から出土した銅釧に関して、鉛同位体比法を用いて資料に含まれる鉛の産地を推定した。

2　資　料

資料は２点である。いずれも岡山市加茂政所遺跡砂場調査区から出土しており、写真で示されるように円環形銅釧（釧－１とする）と有鉤形銅釧（釧－２とする）である。政所遺跡は弥生時代から中世までの集落跡で、釧－１は弥生時代後期前半の竪穴式住居跡の床面から出土したとされる。釧－２は釧－１出土地点から100メートルほど離れた方形土壙の底から出土しており、遺構の時期は弥生時代後期末とされる。

同位体比測定用の試料は、釧－１はクリーニング時に除去した錆、釧－２は破損部位の断面から採取し（写真参照）いずれも（財）元興寺文化財研究所で行った。

3　測　定

銅釧のケイ光Ｘ線分析は(財)元興寺文化財研究所、鉛同位体比測定は東京国立文化財研究所にて行った。

１）鉛同位体比法による青銅原料の産地推定

産地推定のために鉛同位体比法を利用した[(1)(2)(3)(4)(5)(6)]。今までの研究から一般的に、鉛の同位体比は鉛鉱山の岩体が異なればそれぞれの鉱山毎に特有の（固有の）値となることが知られており、産地によって特徴ある同位体比を示すことがわかっている。そこで、鉛の産地の違いが鉛同位体比に反映されるならば、文化財資料に含まれる鉛同位体比の違いは材料に含まれる鉛の産地の違いを示すと推定される。古代の青銅には鉛が主成分の一つとして５％以上含まれていることが多い。この場合の鉛は鉱山から採取された鉛と推定される。エネルギー分散型ケイ光Ｘ線分析装置（セイコー電子工業㈱製SEA5200）で調べたところ、２資料とも主に銅、スズ、鉛から成り、鉛同位体比測定に十分な量の鉛を含んでいた。それ故、資料から採取された約１ｍｇの錆を鉛同位体比測定用に用いた。鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定機器（質量分析計）の感度が非常に良いため、１ﾏｲｸﾛｸﾞﾗﾑの鉛があれば十分である。また埋蔵環境からの汚染等がなければ、資料の金属部分でも

錆部分でも同位体比は変わらないことが示されている。

2）鉛同位体比の測定

提供された試料を石英製のビーカーに入れ、分析用超高純度硝酸(TAMA PURE AA-100)を加えて溶解した。この溶液を白金電極を用いて２Ｖで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水(TAMA PURE))で溶解した。0.1μｇに相当する鉛をリン酸－シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、全自動表面電離型質量分析計 （サーモクエスト社製MAT262） に装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1,220 ℃に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した鉛標準物質NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした。

4　結果と考察

1） 鉛同位体比測定値

測定された鉛同位体比を表１で示した。得られた値を今までに測定された他の資料の値と比較してみると、図１、２のようになった。

図１は縦軸が $^{208}Pb/^{206}Pb$の値、横軸が $^{207}Pb/^{206}Pb$の値である。この図をＡ式図と呼ぶこととする。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表わし、今回の結果をこのなかにプロットした。すなわち、日本の弥生時代に相当する時期の東アジア地域において、Ａは中国の前漢時代の銅鏡が主として分布する領域で、華北産の鉛である。Ｂは中国の後漢および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛と推定される。Ｃは現代の日本産の主要鉛鉱石が集中する領域である。Ｄは朝鮮半島産の多鈕細文鏡と細形銅剣が分布する幅のあるラインの中心領域として示されることが判っている。また“ａ”は弥生時代後期の銅鐸が集中する規格化された鉛の領域である。図２は縦軸が $^{207}Pb/^{204}Pb$の値、横軸が $^{206}Pb/^{204}Pb$ の値である。 この図をＢ式図と呼ぶこととする。図２の中で Ａ’、Ｂ’、Ｃ’、Ｄ’ はそれぞれ中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表わしている。これらの図の中に本測定値を「●」で示した。また今までに本研究室で得られた数点の試料の測定値も参考として併せて示した。図の中では「○」で示している。

2）鉛同位体比測定結果と考察

円環形銅釧（釧－１）について

資料の鉛同位体比はＡ式図でＡ領域からはずれたＡとＢ領域の間に位置した。Ｂ式図においても同様にＡ’と、Ｂ’領域の間でＡ’領域を僅かに外れた所であった。このような位置にプロットされた資料は今までに測定された資料の中で極めて少なく、同位体比的には特殊な鉛と判断できる。その内容として次の三つが考えられる。

① Ａ領域の拡大。図１のＡ領域は過去の資料や鉱石の測定値から、大部分の資料が分布する領域として設定されており、この中に入らなければならないと言う領域ではない。むしろＡ領域を広げてこの点まで含める法が良いとも考えられる。即ち、華北産鉛を用いていると解釈できる。

② このような値を示す鉛鉱山がどこか（中国・朝鮮半島）にあったとも考えられる。
今までに当研究室では弥生時代資料の鉛同位体比を約2,000種以上、測定している。この中で図中のA,B領域の間に位置する資料としては円環形銅釧（福岡県、吉武高木遺跡出土)、巴形銅器片（高崎市、新保遺跡出土)、朝鮮式小銅鐸（大分県、別府遺跡出土）の３点がある。今後このような値を持つ資料のお互いの関連性が見いだされればはっきりとした考え方が出せるかもしれない。但し、これら資料は一種類の鉛同位体比を示しているとは見なせない。

③ 材料の混合である。図中のＡとＤという各々の領域（朝鮮半島産および中国華北産）に属した材料が混合されたと考えられる。それ故、混合された後の材料は両方の中間の値を示す。この場合Ａ領域に近いことからＡ領域の材料が多く含まれている可能性がある。この考え方の理解のために、例として図３と図４を付す。これらの図に使用した３点は釧－１、釧－２および群馬県、天引狐崎遺跡出土の銅片である。ここで釧－２はａ領域の規格化された鉛（中国華北産)、天引狐崎遺跡の銅片はＤ領域（即ち朝鮮半島の鉛）の資料とする。この２点の材料を混ぜたとすると、その混合材料はこの２点を結ぶ上に位置する。その混合比に従って量の多い方に近くなる。即ち釧－１のような点になるとも考えられる。

今回の測定結果からだけではどれということはできないが、今後類似資料が測定されれば本資料に関してより深い理解が進むと思われる。

本資料に関しては、弥生時代前期後半から中期前半頃のＤ領域（朝鮮半島産）の材料と後期後半のａ領域（規格化された華北産）の材料とが混合されたとする場合、弥生時代前期後半から中期前半の材料を後期後半にどのようにして手に入れることができたのかが、問題点として浮かび上がる。前時代の破片を再利用する頻度がどの程度であるのかは今後の問題と考える。

有鉤形銅釧（釧－２）について

資料の鉛同位体比はＡ式図でＡ領域に含まれることが分かった。しかも“ａ”領域に非常に近い所に位置した。“ａ”領域は近畿・三遠式銅鐸、広形銅矛等という弥生時代後期の資料が集中する領域である。Ｂ式図でみると、Ａ’領域に含まれている。このことからも、この資料は華北産の規格化された鉛を利用した材料で作られていると言える。出土状況は弥生時代後期末と考えられる方形土壙の底からであり、ほぼこの時期の資料として鉛同位体比に矛盾はない。また過去にこの資料とよく似た値を持つ釧資料（静岡市・駿府城内遺跡出土、群馬県渋川市・有馬遺跡出土）が測定されており、これらはいずれも弥生時代後期の遺跡からの出土と考古学的に判断されている。

5　引用文献

(1)　平尾良光：古代日本の青銅器；M.A.C.サイエンス，4,22-33(1990),
Material Analysis company

(2)　平尾良光：古代日本の青銅器の原料産地を訪ねて；計測と制御 28,681-688(1989)

(3)　馬淵久夫,平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究

；ＭＵＳＥＵＭ No.370,4-10(1982a)

(4)　馬淵久夫,平尾良光：鉛同位体比から見た銅鐸の原料；考古学雑誌 68,42-62(1982b)

(5)　馬淵久夫,平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究(二)
；ＭＵＳＥＵＭ ；No.382,16-26(1983)

(6)　馬淵久夫,平尾良光：東アジア鉛鉱石の鉛同位体比－青銅器との関連を中心に－
；考古学雑誌 73,199-210(1987)

表1　岡山県加茂政所遺跡から出土した青銅製品と関連資料の鉛同位体比測定結果

	$\frac{^{206}Pb}{^{204}Pb}$	$\frac{^{207}Pb}{^{204}Pb}$	$\frac{^{208}Pb}{^{204}Pb}$	$\frac{^{207}Pb}{^{206}Pb}$	$\frac{^{208}Pb}{^{206}Pb}$
政所遺跡					
釧1－1（KP211）	17．928	15．579	38．564	0．8690	2．1511
釧1－2（KP212）	17．765	15．560	38．436	0．8759	2．1636
参考値					
駿府城内遺跡（静岡県）*1)					
釧－A	17．744	15．553	38．434	0．8765	2．1660
釧－B	17．723	15．536	38．402	0．8766	2．1668
釧－C	17．748	15．560	38．451	0．8767	2．1665
釧－D	17．655	15．466	38．198	0．8760	2．1636
有馬遺跡（群馬県）*2)					
4－1	17．758	15．566	38．468	0．8766	2．1663
4－2	17．750	15．556	38．426	0．8764	2．1649
4－3	17．746	15．542	38．397	0．8758	2．1637
4－4	17．768	15．558	38．438	0．8756	2．1633
三王山遺跡（名古屋市）*3)					
A－1	17．755	15．557	38．456	0．8762	2．1659
A－2	17．750	15．553	38．440	0．8762	2．1656
B－1	17．746	15．547	38．426	0．8761	2．1653
B－2	17．745	15．545	38．413	0．8760	2．1647
天引狐崎遺跡（群馬県）*2)					
釧片	18．873	15．721	39．441	0．8330	2．0898
吉武高木遺跡（福岡県）*4)					
銅釧	18．044	15．677	38．703	0．8688	2．1449
別府遺跡（大分県）*5)					
朝鮮式小銅鐸	17．897	15．583	38．357	0．8757	2．1640
新保遺跡（群馬県）*2)					
巴形銅器片	17．929	15．578	38．492	0．8689	2．1470
誤差範囲	±0．010	±0．010	±0．030	±0．0003	±0．0006

表中の（KPNo.）は当研究室の測定番号である。

*1)　「静岡市　機山および駿府城内遺跡から出土した銅釧の鉛同位体比」(1993.7)
平尾良光、榎本淳子。静岡市教育委員会へ報告済み。未発表。

*2)　「群馬県から出土した弥生時代青銅器の自然科学的研究-群馬県高崎市新保遺跡出土の巴形銅器、甘楽郡甘楽町天引狐崎遺跡出土の銅釧、渋川市有馬遺跡出土の銅鏃・銅釧に関して-」／群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘報告第211集 天引狐崎遺跡II／群馬県埋蔵文化財調査事業団篇　p209-224 (1996) 平尾良光、榎本淳子。

*3)　「名古屋市三王山遺跡から出土した銅釧・銅鏃の自然科学的研究」(1996.10)
平尾良光、榎本淳子。名古屋市教育委員会・名古屋市見晴台考古資料館へ 報告済み。未発表。

*4)　「福岡県出土青銅器の鉛同位体比」『考古学雑誌』75巻4号(1990)
馬淵久夫、平尾良光。

*5)　「大分県出土青銅器についての自然科学的研究」(1996.2)　平尾良光、鈴木浩子。
大分県教育委員会へ報告済み。未発表。

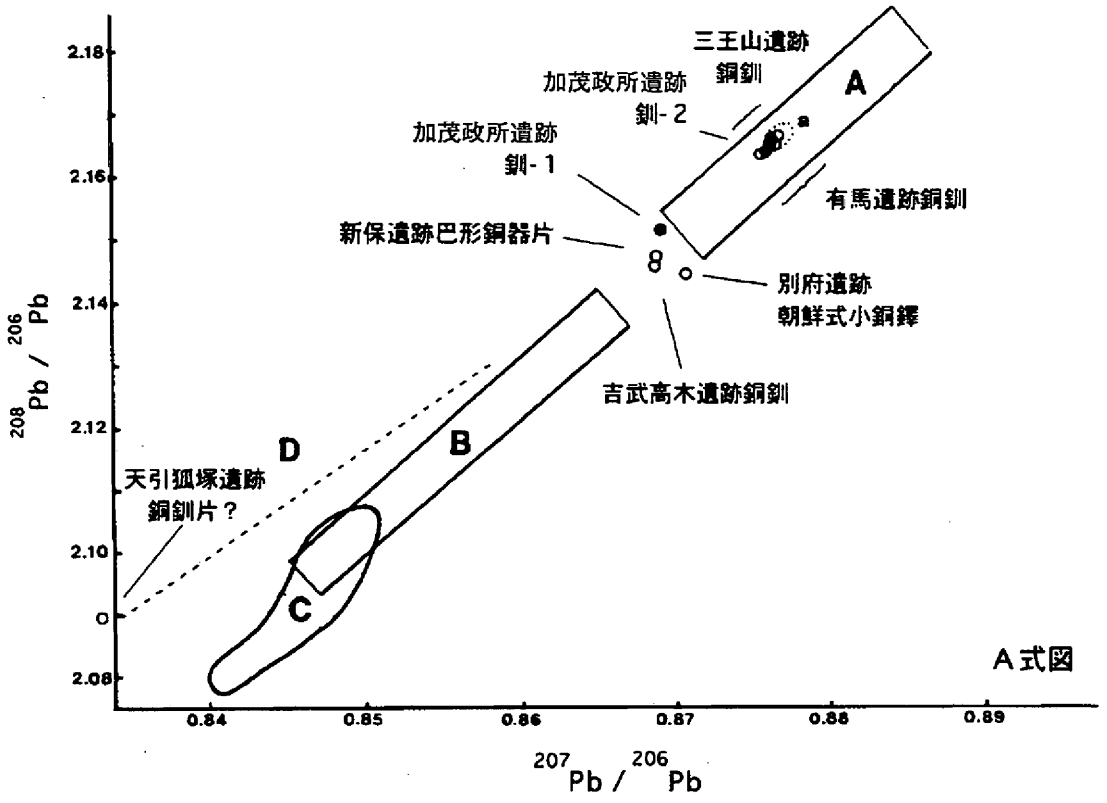


図１　加茂政所遺跡出土銅釧と関連資料の鉛同位体比（1）

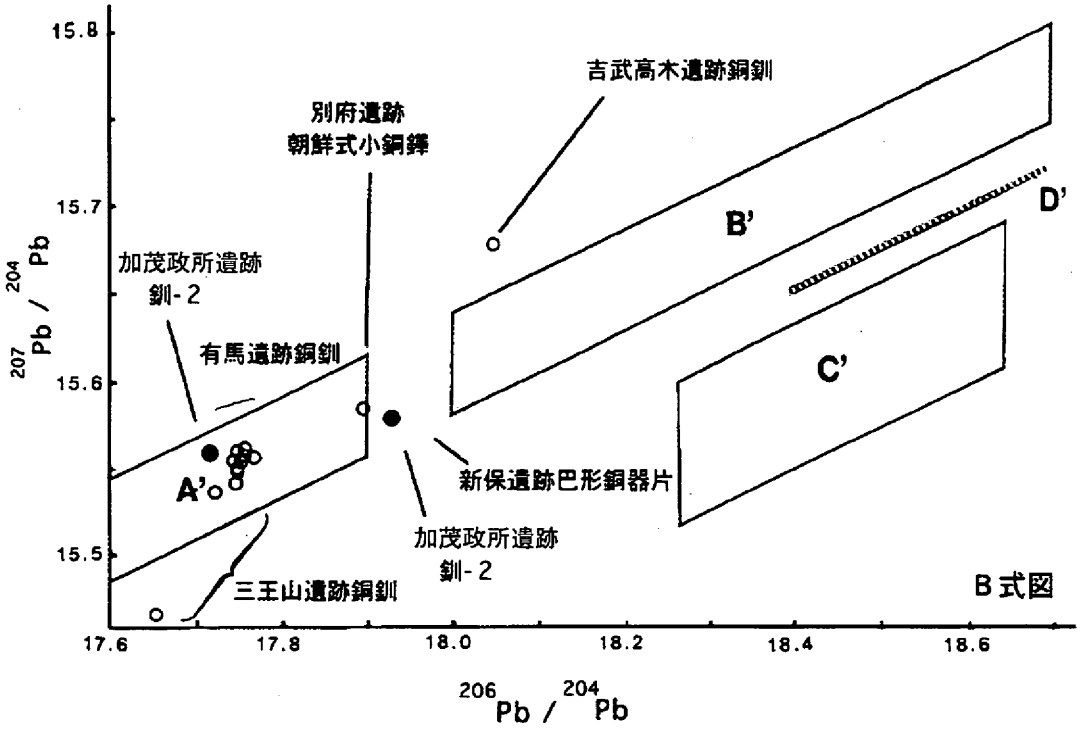


図２　加茂政所遺跡出土銅釧と関連資料の鉛同位体比（2）

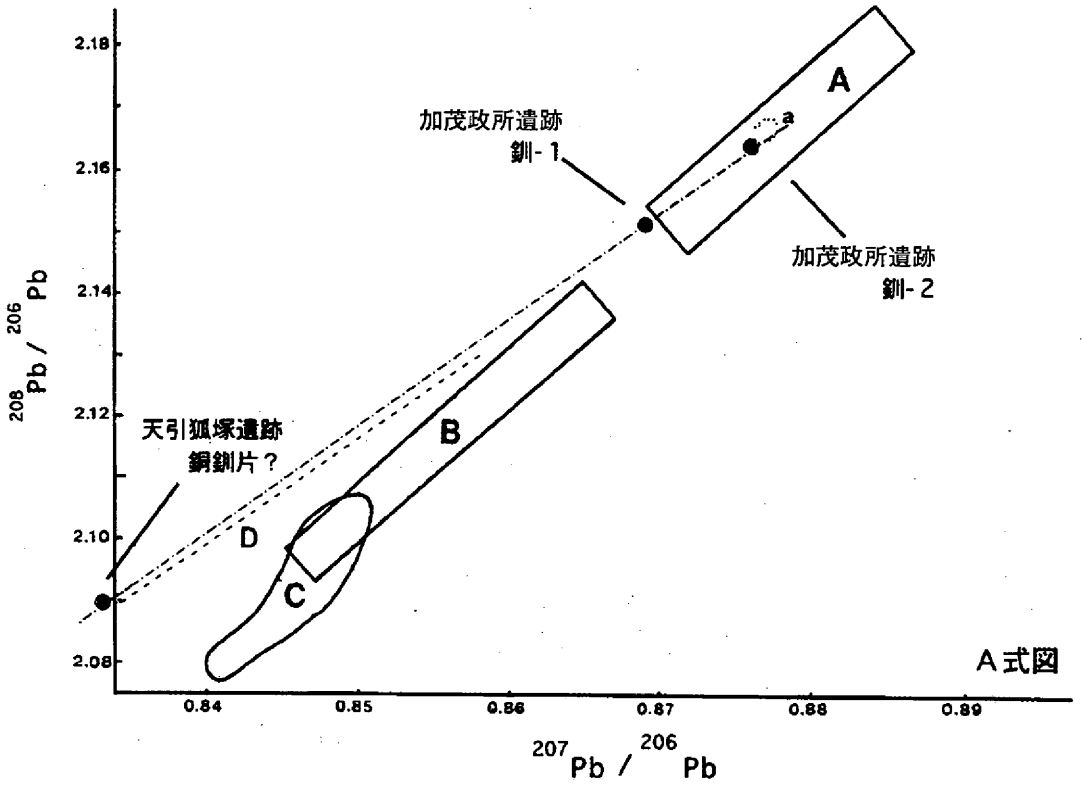


図3　加茂政所遺跡出土銅釧と関連資料の鉛同位体比（3）

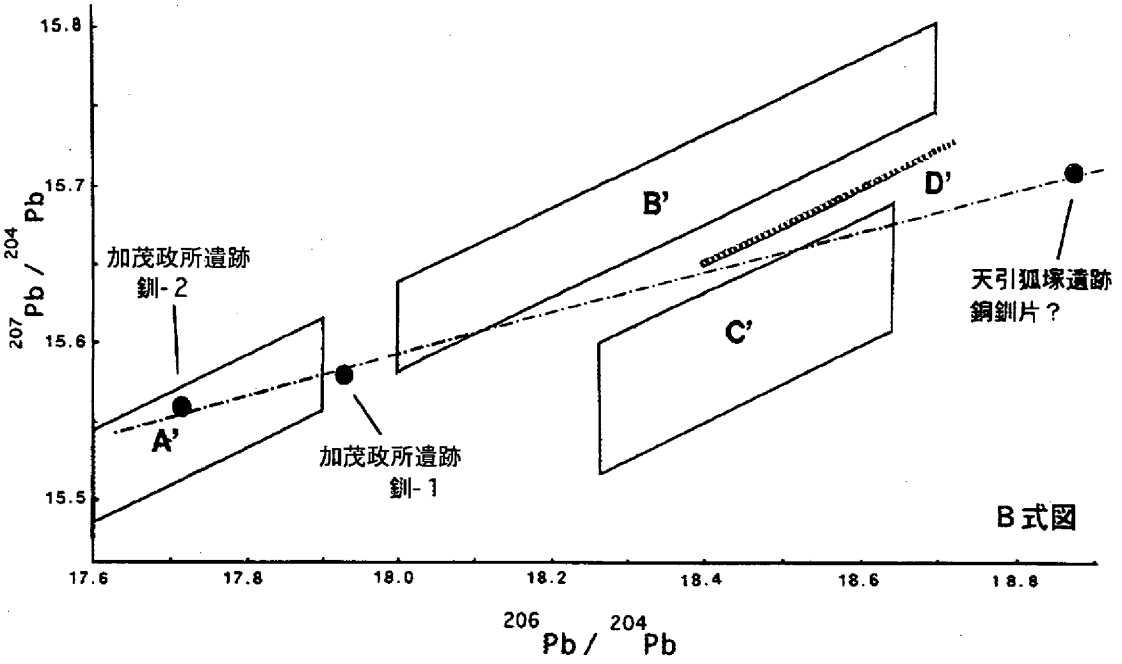


図4　加茂政所遺跡出土銅釧と関連資料の鉛同位体比（4）

クリーニング時に除去した錆を試料とした
円環形銅釧（釧－1）

有鉤形銅釧（釧－2）

写真　鉛同位体比測定の試料採取箇所

9　岡山県岡山市加茂政所遺跡出土金属塊の自然科学的分析

京都造形芸術大学文化財科学研究室
内田俊秀

1　はじめに

1997年10月岡山県古代吉備文化財センターの平井泰男氏から、岡山市加茂所在の加茂政所遺跡（土壙375）出土金属塊について分析調査を依頼された。出土物の年代は、11－12世紀の平安時代で、金属塊の重量は、85.9ｇであり、緑色系の色調の錆が覆う、不定形の塊であった。

2　分析と結果

金属塊の一部から0.2ｇをダイヤモンドカッターで切り出し試料とした。試料はエポキシ樹脂に包埋し、エメリー紙およびアルミナパウダーで研磨し、鏡面仕上げとし、分析に供した。分析に使用した機器は、電子顕微鏡は、日本電子社製5400ＬＶで、付属のＸ線分析装置は同社製2400である。

分析結果：写真（１）は75倍の倍率の組成像で、代表的な部分の金属相である。この部分での成分分析結果は（％は重量）、銅77.13％、鉛18.08％、であり、金属はこれの成分からなる。アルミニウムが4.79％検出されたが、これは元々金属に含まれたものでなく、研磨時に付着したものと考えられる。

以上の結果からこの金属塊は、非常に純度の高い銅に、鉛が添加された金属と考えられる。なお、奈良時代の銅合金によく検出される砒素や、梵鐘に使用される銅合金に含まれる錫は、検出されなかった。

写真（２）は150倍の倍率の組成像で、写真（３）はこの内、鉛の分布を示している。ここから写真（１）と（２）の白い不定形の粒は鉛であることがわかる。残りの部分は銅である。

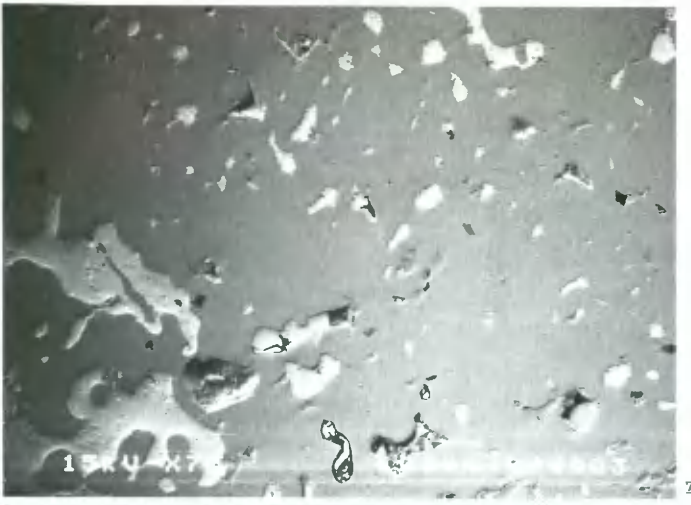


写真 1

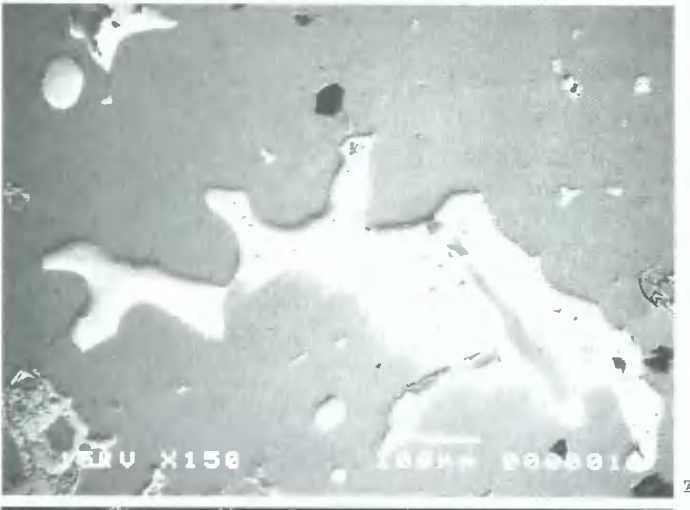


写真 2

写真 3

10　加茂政所遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査

大澤正己

概要

加茂政所遺跡の３地点（高田調査区・砂場調査区・宮西調査区）と高松原古才遺跡から出土した製鉄関連遺物（鉄滓：製錬滓・鍛冶滓、含鉄鉄滓、鉄塊系遺物、羽口、鍛冶工房床面土層の再結合滓）を調査して、次の点が明らかになった。

＜１＞　高田地区は、古墳時代の鍛冶に関した遺物を出土する。鍛冶は、鉱石系の荒鉄（製錬生成鉄で表皮スラグや捲込みスラグ、更には炉材粘土など不純物を含む原料鉄）の不純物除去と成分調整をはかった精錬鍛冶から、鉄素材の折返し曲げ鍛接の高温作業を行った鍛錬鍛冶まで行われた可能性をもつ。使用羽口は、鉄分や塩基性成分（CaO＋MgO）が多いため耐火度が1,240℃と少々低め傾向の羽口が使用されていた。

＜２＞　砂場調査区は、古墳時代から古代にわたる鉱石系製錬滓と、弥生時代後期のねずみ鋳鉄片を出土した。前者は当区周辺に製鉄炉があったのか、鍛冶原料となる荒鉄選別場があって、その残滓が放棄されたのか何れかであろう。更に未分析鉄滓には鍛冶滓と羽口などの出土があるので鍛冶操業も無視できない地区である。

＜３＞　宮西調査区は、磁鉄鉱を始発原料とする共析鋼（Ｃ：0.77％）から過共析鋼（Ｃ：0.77％以上）、亜共晶組成（Ｃ：4.23％以下）の白鋳鉄など高炭素含有の鉄塊系遺物が出土する。小割り鉄塊の重量は、３～11ｇの小型品から41ｇ前後の中型品までが残存する。鍛冶原料鉄の規格品の一端を表すのであろう。

＜４＞　高松原古才遺跡は、古墳時代の鍛冶炉の発見された地区である。鉱石系鍛錬鍛冶滓の出土と、鍛冶鍛打作業において、赤熱鉄素材の表面突起部から溶出酸化した粒状滓から、表面酸化膜の鍛造剥片などが検出された。今回の５㎜以下の微細な粒状滓や鍛造剥片は、鍛冶工房内の床面に２次的に堆積固化した再結合滓からの情報である。

１　いきさつ

加茂政所遺跡は、岡山市加茂に所在し、山陽自動車道建設工事に伴って調査された。古墳時代を中心にした出土製鉄関連遺物を通して、当時の鉄生産・鉄器製作の実態を把握すべく目的から、金属学的調査を行った。供試材は平成９年７月８日に津寺整理事務所において筆者の選別したものである。

２　調査方法

２－１　供試材

Table. 1 に示す。鉄滓10点、含鉄鉄滓１点、鉄塊系遺物６点、鋳鉄片１点、羽口１点、再結合滓７点（同一母体の可能性をもつ）、粒状滓５点、鍛造剥片６点である。

２－２　調査方法

Table. 1（その1）供試材の履歴一覧表

符号	調査区	遺物名称	出土位置	推定年代	計測値		調査項目							備考
					長さ×幅(㎜)	重量(g)	マクロ組織	顕微鏡組織	ﾋﾞｯｶｰｽ断面硬度	X線回折	CMA	化学分析	耐火度	
MTK-1	高田1区	鍛冶滓	溝31	古墳時代	60×42×40	96.06		○	○	○		○		
MTK-2	高田1区	含鉄鉄滓	溝31	古墳時代	69×41×22	64.54		○			○	○		
MTK-3	高田1区	鉄塊系遺物	溝31	古墳時代	22×20×11	14.67		○	○		○			
MTK-4	高田1区	鍛冶滓	竪穴住居77	古墳時代後期	48×46×25	94.12		○	○	○		○		
MTK-5	高田1区	鉄塊系遺物	溝31	古墳時代	32×18×17	7.08	○	○	○		○			
MTK-6	高田1区	羽口	溝31	古墳時代	43×30×10	16.57							○	
MTK-7	砂場1区	鋳鉄	竪穴住居7	弥生時代後期	27×18×13	5.56	○	○			○			
MTK-8	砂場1区	製錬滓	土壙389	古代	42×38×21	76.67		○	○	○		○		
MTK-9	砂場2B区	製錬滓	柱穴19	古代～中世	75×50×32	91.00		○		○		○		
MTK-10	砂場南水路	製錬滓	竪穴住居133	古墳時代後期	93×69×33	237.04		○	○			○		
MTK-11	宮西調査区	鉄塊系遺物	竪穴住居133	古墳時代後期	33×26×10	19.29	○	○	○		○			
MTK-12	宮西調査区	炉底塊	竪穴住居133	古墳時代後期	57×37×33	82.87		○	○	○		○		
MTK-13	宮西調査区	炉底塊	竪穴住居133	古墳時代後期	53×39×39	98.04		○	○	○		○		
MTK-14	宮西調査区	鉄塊系遺物	包含層	?	32×31×22	40.66	○	○	○		○			
MTK-15	宮西調査区	鉄塊系遺物	包含層	?	21×19.5×13	7.55	○	○	○		○			
MTK-16	宮西調査区	鉄塊系遺物	側溝	?	19×9×8	3.07		○	○		○			
MTK-17	立田AP-10区	鍛冶滓	土壙7	古墳時代?	19×13×11	3.89		○	○					
MTK-18	立田AP-11区	鍛冶滓	竪穴住居9	古墳時代後期	48×32×23	48.36		○	○			○		
MTK-19	立田BP-12区	鍛冶滓	溝6	古墳時代	38×26×21	19.28		○	○					
MTK-20	立田BP-9区	再結合滓	鍛冶炉1	古墳時代	40×27×23	24.82	○	○						
MTK-21	立田BP-9区	再結合滓	鍛冶炉1	古墳時代	26×22×11	5.88	○	○						
MTK-22	立田BP-9区	粒状滓	鍛冶炉1	古墳時代	4.3～2.4㎜径	5点	○	○						
MTK-23	立田BP-9区	鍛造剥片	鍛冶炉1	古墳時代	−	6点	○	○						

Table. 1（その2）供試材の履歴一覧表

符号	調査区	遺物名称	出土位置	推定年代	計測値		調査項目							備考
					長さ×幅(㎜)	重量(g)	マクロ組織	顕微鏡組織	ﾋﾞｯｶｰｽ断面硬度	X線回折	CMA	化学分析	耐火度	
MTK-24-1	立田BP-9区	再結合滓	鍛冶炉1	古墳時代	30×18×12	6.06	○	○						
MTK-24-2	立田BP-9区	再結合滓	鍛冶炉1	古墳時代	25×20×12	6.27	○	○						
MTK-24-3	立田BP-9区	再結合滓	鍛冶炉1	古墳時代	25×17×12	4.69	○	○						
MTK-24-4	立田BP-9区	再結合滓	鍛冶炉1	古墳時代	20×20×9	3.20	○	○						
MTK-24-5	立田BP-9区	再結合滓	鍛冶炉1	古墳時代	20×19×10	2.80	○	○						
MTK-24-6	立田BP-9区	再結合滓	鍛冶炉1	古墳時代	20×17×10	2.50	−							未調査
MTK-24-7	立田BP-9区	再結合滓	鍛冶炉1	古墳時代	13×14×10	1.97	−							未調査
MTK-24-8	立田BP-9区	再結合滓	鍛冶炉1	古墳時代	15×11×8	1.28	−							未調査
MTK-24-9	立田BP-9区	再結合滓	鍛冶炉1	古墳時代	16×10×10	1.58	−							未調査
MTK-24-10	立田BP-9区	再結合滓	鍛冶炉1	古墳時代	9×7×9	1.13	−							未調査

（1）　肉眼観察
（2）　マクロ組織
（3）　顕微鏡組織
（4）　ビッカース断面硬度
（5）　粉末X線回折
（6）　CMA（Computer Aided X－Ray Micro Analyzer）調査
（7）　化学組成分析
（8）　耐火度

3－1　高田1区出土品

（1）　MTK－1：椀形鍛冶滓（精錬鍛冶滓）

①　肉眼観察：平面が不整三角形を呈した小型椀形鍛冶滓（96ｇ）である。荒鉄の成分調整の溶融で排出された滓が鍛冶炉の炉底に堆積形成されている。平面は団塊状に中央部へ向かって盛り上がりをみせ、灰黒色の地肌がみられる。肌はざらつきをもち、約5㎜幅の深い木炭痕を3ヶ所に残す。裏面は鍛冶炉の炉底灰白色粘質土を付着して、炉底湾曲面を写し出す。破面は2面もつ。全面は灰白色の粘土膜に覆われる。

②　顕微鏡組織：Photo.1の①～⑤に示す。鉱物組成は、白色粒状結晶の大量のヴュスタイト（Wüstite：FeO）と、淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。

なお、③のヴュスタイト結晶粒の拡大組織において、粒内に淡斑点状の析出物が観察されるのは、ヘーシナイト（Hercynite：$FeO \cdot Al_2O_3$）である。高温化による析出物であるが局部的な析出である。

③　ビッカース断面硬度：Photo.1の①に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、468Hvであった。ヴュスタイトの文献硬度値が450～500Hvであり[1]、この範囲内に収まっていた。ヴュスタイトに同定される。

④　粉末X線回折：Table.3とFig.1に示す。主要鉱物相は、Wüstite（FeO）が65％である。他のFassaite以下は帰属不明であり、極く微量である。

⑤　化学組成分析：Table.2に示す。全鉄分（Total Fe）は、47.12％に対して金属鉄（Metallic Fe）0.17％、酸化第1鉄（FeO）48.87％、酸化第2鉄（Fe_2O_3）12.82％の割合となる。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は33.71％あり、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）4.73％を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）は0.32％、バナジウム（V）0.01％以下と少なく、鍛冶原料の鉄素材は鉱石系（磁鉄鉱系）と想定される。また、酸化マンガン（MnO）0.44％、銅（Cu）0.020％などは高め傾向にある。荒鉄の不純物除去と成分調整を行った精錬鍛冶滓に分類される。

（2）　MTK－2：含鉄鉄滓（鍛錬鍛冶滓）

①　肉眼観察：平面が不整楕円形状で赤褐色を呈する偏平な含鉄鉄滓である。表面の中央は窪み、これに亀裂が走り赤錆が発生する。裏面は平坦で、灰色粘土の付着がみられた。破面にも亀裂が表面から底部へかけて貫通する。含鉄の影響が現れていた。

②　顕微鏡組織：Photo.１の⑥～⑧に示す。鉄滓の鉱物組成は、白色粒状結晶のヴュタイト、淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。鍛冶滓組成の晶癖である。次に⑦⑧は含鉄部分の組織である。金属鉄は既に残留せず錆化してゲーサイト（Goethite：α－FeO・OH）となるが、辛うじてパーライト（Pearlite：フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織）の痕跡を留める。パーライトの占める面積は、炭素含有量の増加にともなって増し、焼ならし状態では0.4％前後で約半分、0.77％で全部パーライトとなる。この面積率で含鉄部分の炭素量を推定すると、0.1％前後の炭素含有量となる。

③　ＣＭＡ調査：Photo.28に示す。SE（２次電子像）にある６種の鉱物相の特性Ｘ線像と定量分析結果である。まず、SE（２次電子像）に１の番号をつけた白色粒状結晶は、鉄（Fe）と酸素（O）にのみ白色輝点が集中し、定量分析値は98.2％FeO組成であった。鉱物相はヴュタイト（Wüstite：FeO）が同定される。２は淡茶灰色不定形結晶で白色輝点の集中する元素は、鉄（Fe）、硅素（Si）、アルミニウム（Al）、カルシウム（Ca）などである。定量分析値は、10.0％CaO－21.0％FeO－16.7％Al_2O_3－39.7％SiO_2である。この組成の鉱物相は、鉄・ゲーレナイト（Iron gehlenite：$2CaO\cdot(Fe\cdot Al)_2O_3\cdot SiO_2$）に近いもので、Ｘ線回折のFassaite（$CaAl_2SiO_6$）、Piemontite（$Ca_2Al_3(SiO_4)_3(OH)$）あたりに対応するのであろう。

３は淡灰色盤状結晶で、鉄（Fe）と硅素（Si）に白色輝点が集中する。定量分析値は63.1％－31.6％SiO_2でファイヤライト（Fayalite：$2FeO\cdot SiO_2$）が同定される。４は茶褐色片状結晶である。白色輝点は、燐（P）、アルミニウム（Al）、硅素（Si）に強く集中する。定量分析値は、26.9％Al_2O_3－24.5％P_2O_5－12.1％SiO_2である。鉱物相は、Aluminum Phosphate系になろうか。６は灰褐色小盤状結晶であり、白色輝点は鉄（Fe）とアルミニウム（Al）に集中する。定量分析値は、46.6％FeO－45.4％Al_2O_3となり、鉱物相はヘーシナイト（Hercynite：$FeO\cdot Al_2O_3$）が同定される。以上の結果は、鉱石系鍛冶滓に分類されよう。

④　化学組成分析：Table.２に示す。鉄分が多く、ガラス質の少ない成分系である。全鉄分（Total Fe）は48.55％に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.18％、酸化第１鉄（FeO）27.47％、錆化鉄含みで38.63％高めの割合であった。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は22.75％で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）は低減して1.56％となる。また、随伴微量元素なども少なくなり、二酸化チタン（TiO_2）0.19％、バナジウム（V）0.01％以下、酸化マンガン（MnO）0.25％となる。ただし、銅（Cu）のみは0.130％と高めであった。銅（Cu）は通常鉄中に固溶するが、このような高め傾向は、鉱石起因であって、含銅磁鉄鉱系の充当が想定される。岡山県下では、時折、検出される数値でもある[2]。

（３）　ＭＴＫ－３：鉄塊系遺物

①　肉眼観察：平面が不整台形状で丸味を帯びた小型（15ｇ）の鉄塊系遺物である。赤褐色の大部分の表皮は剥離し、素地の黒褐色鉄錆肌が露出する。中核部は金属鉄を残留して強磁着をもっている。

②　顕微鏡組織：Photo.２の①～⑧に示す。①は鉄中の非金属介在物である。３μｍ前後の微小黄褐色介在物が微細黒色斑点に囲まれて点在する。硫化鉄（FeS）とFe－Fe_3C－Fe_3Pの三元系共晶のステダイト（Steadite）である。③に金属鉄の腐食（Etching）後の組織を示す。中央部の白色と黒色

Table. 2　供試材の化学組成

試料番号	遺跡名	出土位置	種別	年代推定	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	* 二酸化珪素 (SiO_2)	* 酸化アルミニウム (Al_2O_3)	* 酸化カルシウム (CaO)	* 酸化マグネシウム (MgO)	* 酸化カリウム (K_2O)	* 酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	耐火度	Σ* 造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe	注
MTK-1	加茂政所	溝31	精錬鍛冶滓	古墳時代	47.12	0.17	48.87	12.82	21.81	5.59	3.94	0.79	1.08	0.50	0.44	0.32	0.03	0.02	0.42	0.08	<0.01	0.020		33.71	0.715	0.007	
MTK-2	加茂政所	溝31	鍛錬鍛冶滓	古墳時代	48.55	0.18	27.47	38.63	15.83	4.50	0.98	0.58	0.46	0.40	0.25	0.19	0.03	0.02	0.88	0.27	<0.01	0.130		22.75	0.468	0.004	
MTK-4	加茂政所	竪穴住居77	鍛錬鍛冶滓	古墳時代後期	54.61	0.26	57.16	14.18	16.57	4.04	3.14	0.50	0.77	0.33	0.29	0.17	0.02	0.01	0.25	0.05	<0.01	0.018		25.35	0.464	0.003	
MTK-6	加茂政所	溝31	羽口	古墳時代	6.34	0.10	1.66	7.08	48.70	18.16	1.85	4.86	1.03	1.03	0.23	0.34	0.04	0.01	0.87	#13.10	0.01	0.001	1240	75.63	11.930	0.054	#
MTK-8	加茂政所	土壙389	鉱石製錬滓	古代	48.59	0.24	49.60	14.01	22.97	3.83	2.07	0.72	1.25	0.62	0.17	0.27	0.02	0.03	0.62	0.14	0.01	0.005		31.46	0.647	0.006	
MTK-9	加茂政所	柱穴19	鉱石製錬滓	古代～中世	44.34	0.29	17.98	43.00	19.41	3.58	5.58	0.68	0.54	0.33	0.24	0.15	0.02	0.10	0.45	0.23	<0.01	0.022		30.12	0.679	0.003	
MTK-10	加茂政所	竪穴住居133	鉱石製錬滓	古墳時代後期	39.42	0.26	36.10	15.87	30.27	6.59	2.95	0.90	1.32	0.72	0.31	0.27	0.03	0.04	0.53	0.13	<0.01	0.035		42.75	1.084	0.007	
MTK-12	加茂政所	竪穴住居133	鉱石製錬滓	古墳時代後期	45.44	0.24	36.54	24.02	24.25	5.11	1.93	0.68	1.33	0.63	0.17	0.21	0.02	0.05	0.29	0.19	<0.01	0.005		33.93	0.747	0.005	
MTK-13	加茂政所	竪穴住居133	鉱石製錬滓	古墳時代後期	44.73	0.14	46.67	11.89	25.22	5.22	4.58	0.91	1.12	0.54	0.70	0.21	0.03	0.02	0.37	0.07	<0.01	0.030		37.59	0.840	0.005	
MTK-18	高松原古才	竪穴住居9	鍛錬鍛冶滓	古墳時代後期	59.03	0.14	46.92	32.05	10.55	3.26	0.71	0.48	0.35	0.18	0.12	0.11	0.01	0.03	0.18	0.13	0.01	0.010		15.53	0.263	0.002	

#：Igloss

斑点は亜共晶組成（C：4.23%以下）の白鋳鉄であり、この組織の両側の黒色地に白色針状結晶を走らせる個所は、初析セメンタイトをもつ過共析鋼（C：0.77%以上）域である。③④は両組織の拡大であり、更に外側は⑤⑥にみられる全面パーライト域の共析鋼（C：0.77%）である。鋳鉄なりかけの高炭素鋼であり、最硬鋼と呼べよう。

③　ビッカース断面硬度：Photo. 2 の⑦は白鋳鉄の白色板状結晶の初晶セメンタイトと地はオーステナイト（常温ではパーライト）とセメンタイトの共晶であるレデブライト（Ledebulite）の硬度測定の圧痕である。硬度値は、650Hvを呈し、組織に見合った値である。また、⑧は針状初析セメンタイトを析出する傍らの全面パーライト部の硬度圧痕である。値は335Hvであった。こちらも妥当な数値と判定された。最硬鋼に分類される。

④　ＣＭＡ調査：Photo.29は、SE（２次電子像）にある淡黄褐色微小介在物の特性Ｘ線像と定量分析結果である。介在物に白色輝点が集中するのは、鉄（Fe）と硫黄（S）であり、定量分析値が93.0%FeO－26.9%Ｓ組成で硫化鉄（FeS）が同定される。また、この介在物の周辺には燐（P）の存在が白色輝点の分布によって知ることができる。Fe－Fe_3C－Fe_3P三元系共晶のステダイトである。高温還元での介在物と判断される。

（４）　ＭＴＫ－４：鉄滓（鍛錬鍛冶滓）

①　肉眼観察：平面が不整三角形を呈した灰黒色の滓である。表面は５㎜幅の木炭痕が三ヶ所にみられ、１㎜径前後の気泡が露出して、肌はやや流動性を保つ。裏面は茶褐色基地に木炭痕と気泡を散在させ、これに薄く灰色粘土被膜が覆う。破面は茶褐色から黒色の混合した緻密な滓を示す。

②　顕微鏡組織：Photo. 3 の①～③に示す。鉱物組成は、白色粒状結晶のヴスタイトと、この粒内に少量の微小茶褐色析出物のヘーシナイト（Hercynite：$FeO \cdot Al_2O_3$）をもち、この粒間を淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライトと基地の暗黒色ガラス質スラグが占める。鉄素材の折返し曲げ鍛接の高温作業で排出された鍛錬鍛冶滓に分類される。

③　ビッカース断面硬度：Photo. 3 の①に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、429Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の下限を若干割っているが、誤差範囲であってヴスタイトに同定できる。

④　粉末Ｘ線回折：Table. 3 とFig. 2 に示す。主要鉱物相は、Wüstite（FeO）が74%、Fayalite（$FeSiO_4$＝$2FeO \cdot SiO_2$）16%であり、顕微鏡組織に対応する。

⑤　化学組成分析：Table. 2 に示す。鉄分多く脈石成分は低減する成分系である。全鉄分（Total Fe）は54.61%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.26%、酸化第１鉄（FeO）57.16%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）14.18%の割合である。ガラス質成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）は25.35%で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）3.64%を含む。また、随伴微量元素は少なくなり、二酸化チタン（TiO_2）0.17%、バナジウム（V）0.01%以下、酸化マンガン（MnO）0.29%であった。銅（Cu）は0.018%で、前述ＭＴＫ－１精錬鍛冶滓の後段階に連なる鉄滓であろう。鉱石系鍛錬鍛冶滓に分類される。

（５）　ＭＴＫ－５：鉄塊系遺物

①　肉眼観察：平面が不整方形で指先大の小鉄塊（７ｇ）である。表皮は剥離して、黒褐色の鉄錆

Table. 3　回折X線パターンによる定性分析結果

試料名	化学式	鉱物名
鍛冶滓MTK－1	FeO $CaAl_2SiO_6$ SiO_2 $Ca_2Al_3(SiO_4)_3(OH)$ $Ca(AlFe)_{12}O_{19}$	Wuestite, Syn Fassaite Quartz, Low, Syn Piemontite Hibonite-5H, ferroan
鍛冶滓MTK－4	FeO Fe_2SiO_4 $Ca(AlFe)_{12}O_{19}$	Wuestite, Syn Fayalite, Syn Hibonite-5H, ferroan
製錬滓MTK－8	FeO Fe_2SiO_4 Ca_3SiO_5 $Ca_6(SiO_4)(Si_2O_7)(OH)_2$	Wuestite, Syn Fayalite, Syn Hatrurite, Syn Dellaite, Syn
椀形鍛冶滓MTK－9	Fe_2O_3 Fe_2O_3 Fe_3O_4 $Ca_3Si_2O_7$ $Ca_2FeAl_2Si_3O_{11}(OH)_2 \cdot H_2O$ $FeAl_2SiO_5(OH)_2$ $CaAl_2Si_2O_8$	Maghemite, Low, Syn Maghemite, High, Syn Magnetite, Syn Rankinite Pumpellyite Chloritoid Anorthite, Low
炉底塊MTK－12	Fe_2SiO_4 Fe_3O_4 Fe_2O_3 $CaAl(SiO_4)(OH)$ FeO AlO(OH) Fe_2O_3	Fayalite, Syn Magnetite, Syn Maghemite, Low, Syn Vuagnatite Wuestite, Syn Diaspore Hematite, Syn
炉底塊MTK－13	Fe_2SiO_4 FeO SiO_2 $CaAl_2SiO_6$ $Fe_3Al_2(SiO_4)_3$ $Ca_6(SiO_4)(Si_3O_{10})$ $Ca_5(SiO_4)_2(OH)_2$	Fayalite, Syn Wuestite, Syn Cristobalite, Low, Syn Fassaite Almandine Kilchoanite, Syn Reinhardbraunsite
鍛冶滓MTK－18	FeO Fe_2O_3 Fe_3O_4 $CaAl_2SiO_6$ $Ca_6(SiO_4)(Si_2O_7)(OH)_2$ Fe_2SiO_4 Fe_2O_3	Wuestite, Syn Maghemite, Low, Syn Magnetite, Syn Fassaite Dellaite, Syn Fayalite, Syn Maghemite, High, Syn

面を露出する。中央部は亀裂が走る。

②　マクロ組織：Photo.22の①に示す。金属鉄は、極低炭素鋼のフェライトで、その周辺を白色粒状結晶のヴスタイトがとり囲む。

③　顕微鏡組織：Photo. 3 の④～⑧に示す。④は鉄中の非金属介在物である。鍛打を受ける前の鉄塊であり、含有された介在物は球状のままで展伸は起こしていない。⑤は鉄滓のヴスタイトと金属鉄のフェライト（Ferrite：α鉄もしくは純鉄の呼称）である。フェライトの結晶粒界にはセメンタイト（Cementite：Fe_3C）の析出もないのが⑥の拡大組織で判る。

④　ビッカース断面硬度：Photo. 3 の⑦にフェライトの硬度測定圧痕を示す。硬度値は72.0Hvであった。フェライト結晶粒は粗大化していて、組織に対応した値である。⑧は白色粒状結晶の圧痕で値は383Hvであった。当結晶は、ヴスタイトに推定されるが、文献硬度値の450～500Hvから大きく外れている。当結晶には硬度圧痕に大きく亀裂が入り、かつ結晶は時効を受けて異常値を出したものと考えられる。

⑤　ＣＭＡ調査：Photo.30に鉄中非金属介在物の特性Ｘ線像と定量分析結果を示す。SE（２次電子像）に示した球状介在物の調査である。SE（２次電子像）に７の番号をつけた白色粒状結晶は、白色輝点が鉄（Fe）と酸素（O）に集中し、定量分析値が96.4％FeOなのでヴスタイト（FeO）が同定される。更に８の番号のついた淡灰色盤状結晶は、鉄（Fe）と硅素（Si）と酸素(O）に白色輝点が集中し、定量分析値で62.6％FeO－29.4％SiO_2組成となり、ファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）が想定された。砂鉄特有元素の二酸化チタン（TiO_2）は検出されず、鉱石系鉄素材と判定される。

（６）　ＭＴＫ－６：羽口（胎土）

①　肉眼観察：羽口の基部寄りの破片である。胎土は白色長石微粒子が粘土中に均一に混和されて焼成良好。羽口内径は2.5㎝前後が想定された。色調は橙色。

②　化学組成分析：Table. 2 に示す。胎土の強熱減量となるIg Lossは13.10％と熱影響を受けてない状態での分析である。鉄分（Fe_2O_3）が7.08％、塩基性成分（CaO＋MgO）が6.71％と両者多くて、耐火度に期待はもたれぬ成分傾向である。胎土中には、砂鉄の混入は少なく、二酸化チタン（TiO_2）0.34％、バナジウム（V）0.01％留りである。鉄（Fe）に有害となる硫黄（S）0.01％、五酸化燐（P_2O_5）0.87％も悪影響を及ぼすものではない。

③　耐火度：胎土をゼーゲルコーンという試験片にして１分間当たり10℃の速度で温度上昇をはかると、試験片に変化が起こると４℃に速度をおとし、荷重なしに自重だけで軟化し、崩れる温度が1,240℃であった。岡山県下の鍛冶関連での耐火度としては低め傾向にある。例えば７世紀初めが比定される原尾島遺跡出土の羽口は、1,490℃であった[3]。

小結

高田調査区は、古墳時代に比定される調査区で、32点の鍛冶関連遺物を出土する。このうちの鉄滓２点、含鉄鉄滓１点、鉄塊系遺物２点、羽口１点の計６点を調査した。出土遺物は、いずれも鉱石（磁鉄鉱）を始発原料とする。また、含銅磁鉄鉱をおもわせる高銅系もあった。一方、鍛冶作業は、荒鉄（製錬生成鉄で、表皮スラグや捲込みスラグ、更には炉材粘土などの不純物を含む原料鉄）の不純物除去や成分調整の精錬鍛冶から、鉄素材の折返し曲げ鍛接の高温作業を伴う鍛錬鍛冶までの工程

が確認された。鍛冶原料鉄は、炭素含有量が0.8～2.0％前後まで変動をもつ小鉄塊や、鍛冶段階で「下げ」脱炭された極低炭素鋼までが存在し、かつ、含鉄鉄滓中の鉄は、0.1％前後炭素量の極軟鋼であった。

なお、鍛冶における羽口は、内径2.5cm前後のものが採用される。胎土成分は、鉄分や塩基性成分（CaO＋MgO）が多くて耐火度が劣り、1,240℃の耐火度に留まった。

3－2　砂場1区・2B区・南水路出土品

（1）　MTK－7：鋳鉄片

①　肉眼観察：平面は嚢状の茶褐色錆に亀裂が入り一部剥落した小片（6g）である。旧皮の剥落跡は、黒褐色の錆化が著しく、金属鉄の遺存は望めない。破面には1～2㎜の気泡が発生し、鋳鉄片と判断した。

②　マクロ組織：Photo.22の②に示す。凸レンズ状の膨らみをもつ断面が検出されたが、内部は空洞化し、外周部は錆化鉄のゲーサイト（Goethite：α－FeO・OH）となる。金属鉄は残存しない。

③　顕微鏡組織：Photo.4の①～⑤に示す。①～③は錆化鉄に初析セメンタイトを析出した過共析鋼（C：0.77％以上）の痕跡を留めた個所の組織である。また、④⑤は片状黒鉛（Flake graphite）を晶出したねずみ鋳鉄の痕跡を残す領域が検出された。過共析鋼側は加熱されて脱炭を受けた可能性をもつ。該品は鉄製品か半製品か、錆化が激しいことから結論は出しかねる。

④　CMA調査：鉄中の非金属介在物を探したが錆化鉄であり、剥落現象を起こし、うまく捉えられなかった。Photo.31は、硫化鉄（FeS）の痕跡と思ったが、硫黄（S）の残存はなく、炭素（C）の存在であった。錆化物であろう。また、Photo.32は初析セメンタイトと片状黒鉛析出近傍の特性X線像である。ここでの硫化鉄（FeS）の検出を狙ったが失敗に終わった。

（2）　MTK－8：鉄滓（鉱石製錬滓）

①　肉眼観察：平面は不整方形を呈し、周囲4面が破面となった炉底塊の破片である。表面は灰黒色で、8㎜幅前後の木炭痕を3ヶ所に残し、2㎜径程の気泡を多発させる。表面肌は荒れはなく、10×15㎜楕円形状の窪みをもち、炉壁のスサを付着する。灰色粘土が流れ込む。裏面は弛く湾曲し、木炭痕と炉底粘土との反応痕を残す。破面は小気泡を発するが緻密である。

②　顕微鏡組織：Photo.4の⑥～⑧に示す。鉱物組成は、淡灰色盤状結晶のファイヤライト、極く少量の白色粒状結晶のヴュスタイト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。鉱石製錬滓の晶癖である。

③　ビッカース断面硬度：Photo.4の⑦に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は489Hvでヴュスタイトに同定される。⑧は淡灰色盤状結晶の硬度圧痕で、こちらは577Hvであった。ファイヤライトの文献硬度値の600～700Hvの下限を若干割るが、誤差の範囲であって、ファイヤライトに同定される。

④　粉末X線回折：Table.3とFig.3に示す。主要鉱物相は、Wüstite（FeO）、Fayalite（Fe_2SiO_4）などである。こちらはヴュスタイトとファイヤライトの量の逆転があるが場所的な偏析であろう。

⑤　化学組成分析：Table.2に示す。鉄分がやや高めで、脈石成分の多い傾向をもつ滓である。全

鉄分（Total Fe）は48.59％に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.24％、酸化第１鉄（FeO）49.60％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）14.01％の割合である。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は31.46％で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）を2.79％含む。二酸化チタン（TiO_2）0.27％、バナジウム（V）0.01％など鉱石製錬滓としては高めに含有し、酸化マンガン（MnO）0.17％、銅（Cu）0.005％と低めであった。成分系の異なる系統の製錬滓である。これのみは古代の層位からの出土品であった。

（３）　ＭＴＫ－９：鉄滓（鉱石製錬滓）

①　肉眼観察：平面が不整台形状で基地が灰黒色をした不整台形状の炉底塊破片である。表面荒れは少なく、大小の気泡と木炭痕を残す。裏面は僅かな湾曲の頂点に突起部をもち、８㎜前後の木炭痕をもつ。側面は破面で端部に幅10㎜前後の木炭痕がある。

②　顕微鏡組織：Photo. 5 の①～⑤に示す。鉱物組成は①②にある淡灰色木ずれ状のファイヤライトと、基地の暗黒色ガラス質スラグである。該品は、含鉄鉄滓であるが、金属鉄は錆化して③④のゲーサイト（Goethite：α－FeO・OH）が検出された。粒状鉄は吸炭されていない純鉄である。⑤は木炭に鉄が置換した黒鉛化木炭で、導管孔が認められた。鉱石製錬滓の晶癖である。

③　粉末Ｘ線回折：Table. 3 とFig. 4 に示す。主要鉱物相は、鉄酸化物のMaghemite.Low（Fe_2O_3）、Maghemite.high（Fe_2O_3）、Magnetite（Fe_3O_4）などと、カルシウムを含む酸化物Rankinite（$Ca_3Si_2O_7$）が検出されている。含鉄鉄滓の錆化鉄部分が中心に対象化された結果となった。

④　化学組成分析：Table. 2 に示す。全鉄分（Total　Fe）は、44.34％に対して金属鉄（Metallic Fe）0.29％、酸化第１鉄（FeO）17.98％、多くは錆化鉄由来の酸化第２鉄（Fe_2O_3）の43.00％である。Ｘ線回折でのマグヘマタイト（Maghematite：Fe_2O_3）の検出に対応する。また、ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は30.12％あり、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）が6.26％と高い。こちらもＸ線回折の鉱物相で、カルシウム系が同定されたのと一致する。酸化マンガン（MnO）0.24％は製錬滓としては低めであって、、銅（Cu）は通常レベルの0.022％となった。

（４）　ＭＴＫ－10：鉄滓（鉱石製錬滓）

①　肉眼観察：平面が不整台形状の炉底塊破片である。表面は灰黒色地に赤褐色を混じえ、５～８㎜幅の木炭痕を残して凹凸面をもちながら流動状を呈する。裏面は湾曲状で木炭痕と気泡を発した灰黒色反応痕を残す。破面は緻密質であった。

②　顕微鏡組織：Photo. 5 の⑥～⑧に示す。鉱物組成は淡灰色木ずれ状のファイヤライトと、基地の暗黒色ガラス質スラグである。鉱石製錬滓の晶癖と推定された。

③　ビッカース断面硬度：Photo. 5 の⑧に淡灰色板状結晶の硬度痕跡を示す。硬度値は、579Hvであった。ファイヤライトの文献硬度値の600～700Hvの下限を僅かに切るが、ファイヤライトに同定される。

④　化学組成分析：Table. 2 に示す。鉄分が低めでガラス分の多い成分系である。全鉄分（Total Fe）は 39.42％に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.26％、酸化第１鉄（FeO）36.10％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）15.87％の割合である。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は42.75％で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）を3.85％を含む。二酸化チタン（TiO_2）は0.27％、バナジ

ウム（V）0.01%以下、酸化マンガン（MnO）0.31%など脈石成分を含有し、銅（Cu）0.035%と高め傾向であった。鉄分低めで、ガラス質分など不純物を多く含む成分系で鉱石製錬滓に分類される。

小結

砂場調査区は、古墳時代後期から古代にかけての層位から鉄滓が出土している。鉱物組成はファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）主体で、僅かにヴュタイト（Wüstite：FeO）を晶出するものもあり、鉱石製錬滓に分類される。化学組成は、鉄分が39.42～48.59%バラツキをもつが低め傾向で、ガラス分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）が31.5～42.8%と高めの特徴をもつ。この製錬滓の存在は、当区に製鉄炉があったのか、荒鉄選別場があり、鉄塊共伴からの製錬滓であったのか何れかであろう。

なお、弥生時代後期の住居跡から6ｇ未満のねずみ鋳鉄片が出土しているが、錆化が進行しており、製品か半製品なのか判別しがたい状態であった。

3－3　宮西調査区出土品

（1）　MTK－11：鉄塊系遺物

①　肉眼観察：L字状に流動した小鉄塊（19ｇ）である。表面は、かまぼこ形の丸味をもち、細い亀裂を走らせる。破面は黒褐色の鉄錆面で、ここでも亀裂が認められた。色調は全体に灰黒色基地に茶褐色酸化土砂が薄く付着する。

②　マクロ組織：Photo.23の①に示す。針状の初析セメンタイトを析出する基地の黒い過共析鋼（C：0.77%以上）の個所と、亜共晶組成の白鋳鉄の個所が混在する。

③　顕微鏡組織：Photo.6の①～⑤に示す。①は鉄中の非金属介在物である。淡黄の微小介在物で硫化鉄（FeS）である。②③は白色はセメンタイト、黒色はオーステナイト（常温でパーライト）の初晶と、地はレデブライトである。④は、過共析鋼の領域で、基地のパーライトと、初析セメンタイトを示す。高炭素鋼と白鋳鉄の混合組織である。

④　ビッカース断面硬度：Photo.6の⑤に白鋳鉄の白色板状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、652Hvであった。セメンタイト（Cementite：Fe_3C）に同定される。

⑤　CMA調査：Photo.33のSE（2次電子像）にみられる淡黄色微小介在物（3 μm前後）の特性X線像と定量分析値を示す。SE（2次電子像）に9の番号をつけた介在物は、白色輝点が鉄（Fe）と硫黄（S）、燐（P）に集中し、定量分析値は11.0%FeO－16%S－3.6%P_2O_5が得られた。介在物の形状が小さいため誤差が生じているが、硫化鉄（FeS）とステダイト（Fe－Fe_3C－Fe_3P三元系共晶）の存在を表すものである。銑鉄に介在する異物の特色組成であった。

（2）　MTK－12：炉底塊（鉱石製錬滓）

①　肉眼観察：平面が不整台形状の炉底コーナー部に接する滓である。表面は灰褐色で中央隆起部分は流動状肌を有し、小気泡を露出する。裏面は平坦で灰褐色粘土が厚く付着し、木炭痕や鉄錆痕が辛うじて認められた。破面にも茶褐色粘土被膜が覆うが緻密質肌は読みとれた。

②　顕微鏡組織：Photo.6の⑥～⑧に示す。鉱物組成は、淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライトと、

白色粒状結晶のヴスタイト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。また、含鉄部分が残留し、⑦に錆化鉄のゲーサイトにフェライト結晶粒の痕跡を留めていた。0.2%（C）程度の軟鋼になる鉄粒である。なお、鉱物相は、鉱石製錬滓の晶癖であった。

③　ビッカース断面硬度：Photo. 6 の⑧に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は439Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の450～500Hvの下限を若干割っているがヴスタイトに同定される。

④　粉末X線回折：Table. 3 とFig. 5 に示す。主要鉱物相は、Fayalite（Fe_2SiO_4）、Wüstite（FeO）、Magnetite（Fe_3O_4）、Maghemite.Low（Fe_2O_3）などである。顕微鏡組織に対応する。

⑤　化学組成分析：Table. 2 に示す。全鉄分（Total Fe）は45.44%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.24%、酸化第1鉄（FeO）36.54%、錆化鉄含みで酸化第2鉄（Fe_2O_3）24.02%の割合であった。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は33.93%で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）2.61%が含有される。二酸化チタン（TiO_2）0.21%、バナジウム（V）0.01%以下などと、酸化マンガン（MnO）0.17%もあまり多くはないが鉱石製錬滓の成分値である。銅（Cu）0.005%と最低であった。

（3）　ＭＴＫ－13：炉底塊（鉱石製錬滓）

①　肉眼観察：平面が不整台形状の炉底塊で側壁寄りの滓である。表面は、灰黒色基地に13㎜幅の木炭痕や1㎜前後の気泡を発した肌をもつ。裏面は平坦で茶褐色酸化土砂をまだら状に付着する。破面は炉壁溶融のガラス質滓が付着して、8㎜大の木炭痕まで確認できた。

②　顕微鏡組織：Photo. 7 の①～⑤に示す。鉱物組成は、淡灰色の長柱状や短柱状のファイヤライトと、小粒白色粒状結晶のヴスタイト、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。鉱石製錬滓の晶癖である。

③　ビッカース断面硬度：Photo. 7 の④は白色粒状結晶、⑤は淡灰色短柱状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、前者が473Hv、後者で652Hvであった。ヴスタイトとファイヤライトの鉱物相が同定された。

④　粉末X線回折：Table. 3 とFig. 6 に示す。主要鉱物相は、Fayalite（Fe_2SiO_4）、Wüstite（FeO）、Cristobalite Low（SiO_2）などが検出された。顕微鏡組織に対応した結果であった。

⑤　化学組成分析：Table. 2 に示す。脈石成分が高めの成分系である。全鉄分（Total Fe）は44.73%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.14%、酸化第1鉄（FeO）46.67%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）11.89%の割合であった。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は37.59%で、このうちに滓と鉄の分離に寄与する塩基性成分（CaO＋MgO）は高めの5.49%である。二酸化チタン（TiO_2）は0.21%、バナジウム（V）0.01%以下と低めであるが、、酸化マンガン（MnO）は0.70%と多い。また、銅（Cu）は0.030%と、これも高め傾向で鉱石製錬滓の特徴を有するものであった。

（4）　ＭＴＫ－14：鉄塊系遺物

①　肉眼観察：全体が赤褐色に変色した酸化土砂に覆われた梅干大の中鉄塊（40ｇ）である。端部に亀裂が走り、黒褐色の鉄肌がみられて金属鉄の残留が判る。

②　マクロ組織：Photo.23の②に示す。組織の右下側に初析セメンタイトの網状組織を析出した部

分を僅かにもつが、その大部分は亜共晶組成（C：4.23%以下）の白鋳鉄である。0.2～0.6㎜径の気泡を散在させるが金属鉄の遺存度は良好である。

③　顕微鏡組織：Photo. 8 の①～⑨に示す。①は鉄中の非金属介在物である。淡黄色微小異物で硫化鉄（FeS）と燐（P）化合物のステダイトである。②③が組織の大半を占めた亜共晶組成の白鋳鉄である。黒色のオーステナイト（常温パーライト）の初晶と、地はレデブライトである。また、④⑤は極く一部に存在した過共析鋼の網状の初析セメンタイトを析出したパーライト組織である。該品の炭素含有量は、2.0%前後となろう。

④　ビッカース断面硬度：Photo. 8 の⑦～⑧に硬度測定の圧痕を示す。⑦は板状セメンタイトで736Hv、⑧は蜂の巣状のセメンタイトとオーステナイトの共晶であるレデブライトは678Hv、⑨のパーライト部分は251Hvであった。組織に見合った硬度値である。

⑤　ＣＭＡ調査：Photo.34に鉄中の非金属介在物である淡黄色で５μm前後の異物の特性Ｘ線像と定量分析値を示す。SE（２次電子像）に10と番号をつけた異物は、鉄（Fe）と硫黄（S）に白色輝点が集中し、定量分析値は87.6%FeO－35.8%S組成で硫化鉄（FeS）が同定される。また、この硫化鉄の周辺に共存する三元系共晶のステダイトが11の番号の個所で、微かに白っぽくみえて白色輝点は燐（P）と鉄（Fe）に集中して、12.4%FeO－17.7%P_2O_5の定量分析値が得られている。ステダイトは$Fe-Fe_3C-Fe_3P$の組成であり、定量値は酸化物で検出したので誤差を生じている。

（５）　ＭＴＫ－15：鉄塊系遺物

①　肉眼観察：全体を灰褐色粘土膜に覆われた銀杏大の小鉄塊（7.6ｇ）である。表面１/３端部寄りに深い割れが入る。また、裏面は一部表皮が剥離して黒褐色地肌を露出する。中核部に金属鉄を残す。

②　マクロ組織：Photo.24の①に示す。大きな割れ目をはさんで２片に分離する。両域ともに金属鉄を残し、全面パーライト析出の共析鋼を表す。マクロ組織右側は大部分が錆化鉄のゲーサイトとなるが上方は共析鋼が観察される。

③　顕微鏡組織：Photo. 7 の⑥～⑧に示す。⑦はファイヤライトを晶出する捲込みスラグをもつ全面パーライト析出の金属鉄部分である。また、⑧はパーライトの拡大組織でフェライトとセメンタイトが層状をなし、セメンタイトは僅かに白く浮き上がって見える。この組成の鋼を共析鋼という。950℃前後の温度に保持された熱履歴を呈している。

④　ビッカース断面硬度：Photo. 7 の⑥に全面パーライト析出の共析鋼組織に硬度測定の圧痕を示す。硬度値は218Hvであった。組織に見合った値である。

⑤　ＣＭＡ調査：Photo.35に鉄塊中に捲込まれたスラグの特性Ｘ線像と定量分析値を示す。顕微鏡組織での捲込みスラグは、単純にファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）と判定したが当分析結果をみると組成は複雑である。SE（２次電子像）に12の番号をつけた黒色ガラス質部は、白色輝点はガラス分（Si＋Al＋Ca＋Mg＋Na）に集中し、定量分析値は、44%SiO_2－20.1%Al_2O_3－8.2%CaO－7.0%K_2O－1.6%Na_2O－15.6%FeOである。鉄の15.6%FeOの検出がなければ非晶質硅酸塩であるが、鉄分を配慮すると、Iron Cordierite（$2FeO \cdot 2Al_2O_3 \cdot 5SiO_2$）とカルシウム化合物との混合組成、もしくは鉄ゲーレナイト（Iron gehlenite：$2CaO \cdot (Fe \cdot Al)_2O_3 \cdot SiO_2$）あたりに近い鉱物相となろう。

次はSE（２次電子像）に13、14の番号をつけた淡灰色で濃淡をもつ長柱状結晶は、白色輝点が鉄

(Fe)、硅素（Si)、カルシウム（Ca）に集中し、13の定量分析値は54.3%FeO－7.4%CaO－32.4%SiO_2、14の定量分析値が49.4%FeO－16.8%CaO－31.5%SiO_2で灰かんらん石のオリピン（Olivine）あたりに同定されよう。岡山県下の鉱石製錬滓からのオリピンの検出は、７世紀代が比定される白壁奥遺跡出土鉄滓からも検出されている④。オリピンは鉄カルシウム・オリピンとも呼ばれて、スラグが1,300℃以下で融液状態となる低融点組成に属する鉱物相で、鉱石中の自媒剤となる塩基性成分の含有量が多い場合に析出するものと推定される。

（６）　ＭＴＫ－16：鉄塊系遺物

①　肉眼観察：表面全体が灰黒色から茶褐色の酸化土砂に覆われた空豆大の小鉄塊（３ｇ）である。小さい亀裂が走り、一部に濃褐色の鉄錆が発する。中核部に金属鉄が残存する。

②　顕微鏡組織：Photo.９の①～⑤に示す。①は表皮スラグで淡灰色盤状結晶のファイヤライトと基地の暗黒色ガラス質スラグの鉱物相を有して鉱石製錬滓の晶癖である。金属鉄は②が全面パーライト析出の共析鋼、③はパーライトの間をフェライトが発達し、そのフェライトの中にセメンタイトが析出した異常な組織である。浸炭反応からの拡散層で見受けられる組織。高炭素鋼の硬鋼（Ｃ：0.5～0.8%）に分類される。

③　ビッカース断面硬度：Photo.９の④は共析鋼域、⑤は異常組織での硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、前者が248Hv、後者で224Hvであった。両者は組織に見合った値となっている。

④　ＣＭＡ調査：Photo.36は表皮スラグの特性Ｘ線像と定量分析結果である。SE（２次電子像）に15の番号をつけた淡茶褐色針状結晶は、鉄（Fe)、硅素（Si）に白色輝点が強く集中し、アルミニウム（Al）は弱く検出される。ファイヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）やアノルサイト（Anorthite：$CaO \cdot Al_2O_3 \cdot 2SiO_2$）の混合組成であろう。SEの16の番号の黒色ガラス質部分は、ガラス質成分（Si＋Al＋Ca＋K＋Na）に白色輝点が集中し、非晶質珪酸塩に同定されるが、ここでも18.8%FeOが存在して鉄分の固溶の解釈に少々苦しむところである。SEの17の番号は、鉄（Fe）と硅素（Si)、マグネシウム（Mg）に白色輝点が集中し、かんらん石のファイヤライト・マグネシアン（Fayalite・Magnesian：$(Fe \cdot Mg)_2SiO_4$）が同定される。

定量分析値は、SEの15が47.6%FeO－7.2%Al_2O_3－38.1%SiO_2、SEの16は47.2%SiO_2－13.5%Al_2O_3－13.8%CaO－2.2%K_2O－2.3%Na_2O－18.8%FeO、SEの17は64.3%FeO－30.7%SiO_2－4.9%MgOであった。

次に鉄中の非金属介在物の特性Ｘ線像と定量分析結果をPhoto.37に示す。SE（２次電子像）に21の番号をつけた紡錘状淡黄色微小介在物は、鉄（Fe）と硫黄（S）に白色輝点が集中し、12.4%FeO－4.2%Sの定量分析値が得られた。酸化物定量で数字に誤差を生じているが硫化鉄（FeS）が同定される。また、SEの22の番号は鉄（Fe）と燐（P）に白色輝点が集中し、13.0%FeO－2.5%P_2O_5組成の定量分析値が得られた。Fe－Fe_3C－Fe_3Pの三元系共晶のステダイトの存在が推定された。

小結

宮西調査区は、古墳時代後期に属する層位より鉄滓や鉄塊系遺物を出土した。調査した２点の鉄滓は、箱形炉のコーナーや側壁寄りの炉底塊で含鉄傾向をもつ。両方とも鉱石製錬滓で、片方は高銅（Cu）含有で、かつ、酸化カルシウム（CaO）を4.58%と多い。更に４点の鉄塊系遺物は、表皮スラ

グにファイヤライトや捲込みスラグに鉄・カルシウム・オリピン（Olivine：（Ca・Fe）O・SiO_2）など含有して炉底塊組成に対応する。また、鉄塊系遺物は、共析鋼（C：0.77%）から過共析鋼、亜共晶組成の白鋳鉄（4.23%以下）と、高炭素鋼系のものであった。当調査区も鍛冶原料の調達のための荒鉄の小割り選別場であったのか、出土鉄塊は小さなサイズは空豆大（3.0ｇ）から大きなものは桃種大（41ｇ）まで存在した。また、炉底塊は含鉄傾向で、鍛冶原料鉄を採取抽出した後の残滓の可能性をもつ。

3－4　高松原古才遺跡

（1）　MTK－17：鉄滓（鍛錬鍛冶滓）

①　肉眼観察：梅干大の小破片（４ｇ）である。全面が灰黒色基地に灰白色粘土が覆う。表皮の粘土剥離部分は、小気泡を発する鉄滓肌をもつ。

②　顕微鏡組織：Photo. 9 の⑥～⑧に示す。鉱物組成は、大量の白色粒状結晶のヴスタイトと、淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライト基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。鉄素材の折返し曲げ鍛接の高温作業で排出された鍛錬鍛冶滓に分類できる。

③　ビッカース断面硬度：Photo. 9 の⑥に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は535Hvであった。マグネタイトの文献硬度値が500～600Hvであって、ヴスタイトでなくて、マグネタイトに同定された。時折りみかける例であり、混在粒である。

（2）　MTK－18：鉄滓（鍛錬鍛冶滓）

①　肉眼観察：平面が不整三角形状で茶褐色の鉄滓である。表面は薄い灰色粘土に覆われるが凹凸状肌に濃褐色鉄錆が透けてみえる。裏面は茶褐色と灰黒色光沢の入り混じった荒れ肌をもつ。

②　顕微鏡組織：Photo.10の①～③に示す。鉱物組成は、大粒の白色粒状結晶のヴスタイトが凝集した状態で晶出し、その粒間に僅かに淡灰色木ずれ状結晶のファイヤライト、暗黒色ガラス質スラグが埋める。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③　ビッカース断面硬度：Photo.10の①に大粒白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、434Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値が450～500Hvで、これの下限を僅かに切るがヴスタイトに同定される。

④　化学組成分析：Table. 2 に示す。鉄分が多く脈石成分の少ない成分系である。全鉄分（Total Fe）は、59.03%に対して金属鉄（Metallic Fe）0.14%、酸化第１鉄（FeO）46.92%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）32.05%の割合である。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は少なくて15.53%、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）は1.19%留まりである。また、二酸化チタン（TiO_2）0.11%、バナジウム（V）0.01%、酸化マンガン（MnO）0.12%など脈石成分は低減し、鍛錬鍛冶滓の成分系を呈する。

（3）　MTK－19：鉄滓（鍛錬鍛冶滓）

①　肉眼観察：平面は不整台形状の鍛冶滓小塊（19ｇ）である。表面は灰黒色で木炭痕と１㎜径前後の小気泡を全面に発する。肌は凹凸状のざらつきをもつ。裏面は平坦面で灰黒色地に２㎜の気泡を

発し、肌は荒れる。破面は黒色多孔質で局部的に鉄錆が認められた。

②　顕微鏡組織：Photo.10の④～⑧に示す。鉱物組成は白色粒状結晶ヴスタイトを大量に晶出し、その粒間をファイヤライトとガラス質成分が埋める。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③　ビッカース断面硬度：Photo.10の④に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、435Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の下限を切るがヴスタイトに同定される。

（4）　ＭＴＫ－20、21：再結合滓

①　肉眼観察：再結合滓とは、鍛冶工房の床面土層塊である。土層塊の内容は、鍛冶作業で派生した鉄滓屑や赤熱鉄素材の表面酸化物から剥離飛散した粒状滓、鍛造剥片などが水分で結合され、錆化土砂と共に踏み固められた２次堆積物である。小塊は時折、鉄滓や不明酸化物などと間違えられる事がある。岡山県下での検出例としては岡山城二の丸遺構内[5]や、大成山たたら遺跡群[6]がある。

ＭＴＫ－20、21は、再結合滓が自然崩壊して不定鉄滓状に存在したものが採取された試料である。前者は不整台形状平面をもつ25ｇの小塊、後者は更に小型で親指大の６ｇの小片である。両者は灰褐色から灰茶色を呈し、２㎜前後の青灰色の鍛造剥片が木炭屑と粘土に混じって認められる。

②　マクロ組織：Photo.25の①②に示す。暗黒色粘土質に白色片状の0.1～0.5㎜、大きなものは1.5㎜の剥片が点在する。鍛造剥片である。また、1.5㎜前後で台形状もしくは不整形の白色斑点の塊が鉄滓屑であるが、これも認められた。なお、球状で0.1㎜前後の点がある。こちらは粒状滓、鍛冶工房の鍛打派生物で形成される。

③　顕微鏡組織：Photo.11～13に示す。まず、鍛冶作業の派生物である粒状滓について述べる。粒状滓は、凹凸をもつ鉄素材が鍛冶炉の中で、赤熱状態に加熱されて突起部が溶け落ちて酸化されたものが表面張力の関係から球状化したり、赤熱鉄材の酸化防止に塗布された粘土汁が酸化膜と反応して、これらが鍛打の折りに飛散した球状化微細遺物である。主に、精錬鍛冶の末期から鍛錬鍛冶の前半段階までに発生する。Photo.12の⑥⑦、Photo.13の④⑤に示す。前者は0.09㎜径、後者は0.3㎜径の小粒であり、鉱物組成はヴスタイトの凝集と、マグネタイトであった。後者が先発派生物である。

次に鍛造剥片である。鉄素材を大気中で加熱、鍛打すると表面酸化膜が剥離、飛散する。俗に鉄肌（金肌）やスケールと呼ばれる。鍛冶工程の進行により、表面荒れ肌の厚手から平滑薄手へ、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色（光沢度増す）へと変化する。これも粒状滓同様に鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる[7]。鍛造剥片は５㎜以下の極めて微細な鍛冶派生物であり、発掘中に土中から肉眼で識別するのは難しい。通常は鍛冶址の床面の土砂を水洗することにより検出される。鍛冶工房の調整に当たっては鍛冶炉を中心にメッシュを切って土砂を採り上げ、水洗・選別・秤量により分布状況を把握できれば、工房内の作業空間配置の手掛かりとなりうる重要な遺物である[8]。

Photo.11の①～⑨、Photo.12の①～⑤に鍛造剥片断面の被膜構成を示す。鉄素材を炉内で高温に加熱すれば、速やかに酸化し、表面に硬い黒皮を生ずる。このものは、基本的には、通常、微厚の外層ヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）、中間層のマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）、大部分は内層ヴスタイト（Wüstite：FeO）の３層から構成される。このうちのヘマタイト相は、1,450℃を越えると存在しなく、ヴスタイト相は570℃以上で生成される事は、Fe－O系平衡状態図で説明できる[9]。Photo.11の①～⑤、Photo.12の①の鍛造剥片は、内層ヴスタイトが粒状化して鍛打初期段階での派生

物である。⑥⑦の内層は暗黒色ガラス質スラグ中に微細なヴュタイトが樹状晶で析出する。該品は、赤熱鉄材の酸化防止に粘土汁を塗布したものの一部が剥片化した可能性をもつ。また1片の小型鍛造剥片を抱き込んでいる。

次にPhoto.11の⑧⑨、Photo.②～⑤は内層ヴュタイトが非結晶質の剥片である。後者の被膜は、王水（塩酸3：硝酸1）の腐食（Etching）で3層分離が明瞭となる。3層分離型と呼称する。鍛打作業の後半から仕上げ段階の派生物である。

なお、再結合滓には、粒状滓、鍛造剥片以外に鉄滓屑も内蔵される。Photo.12の⑧⑨は、鍛錬鍛冶滓の晶癖をもつヴュタイト、Photo.13の⑧⑨は暗黒色ガラス質スラグ中にヴュタイトを晶出した鉄滓屑である。また、Photo.13の⑥⑦は、共析鋼（C：0.77%）の組織をもつ金属鉄の残留品である。以上の如く、再結合滓には、鍛冶作業で派生する種々の遺物が含有される。

④　ビッカース断面硬度：Photo.13の⑦に全面パーライト析出共析鋼の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は261Hvであった。組織に見合った値である。

（5）　MTK－22：再結合滓小割り抽出粒状滓

①　肉眼観察：5点を抽出した。A：灰黒色のほぼ完全な球状を呈する2.8㎜径の粒状滓である。表面は気泡を多発する。B：直径3㎜で灰黒色地に茶褐色を混じえた一部欠損の球状粒状滓である。表面気泡は多い。C：直径4.3㎜で灰黒色地の粒状滓である。一部に大きく口を開いた欠損部をもつ。D：球形が半欠し、内部が空洞化した3.0㎜径の粒状滓である。灰黒色を呈する。E：灰黒色の空洞化粒状滓の破片である。気泡多発。

②　マクロ組織：Photo.21の①～⑤に20倍の断面全体像を示す。5点は、いずれも内部が大きく空洞化し、外周部のガラス質基地に微小白色晶出物を含む。気泡を多発する。

③　顕微鏡組織：Photo.14、15に示す。5点は、いずれも白色粒状微小ヴュタイトを晶出するが、Bのみはヴュタイトが凝集している。酸化防止に塗布された粘土汁の影響の強い粒状滓であった。

（6）　MTK－23：再結合滓小割り抽出鍛造剥片

①　肉眼観察：A：平面は不整台形状で長さ7.5㎜、幅5㎜、最大厚み2.8㎜の断面が翼状の破片である。表面は灰黒色の平坦面をもち、裏面に粘土を付着する。鍛造剥片よりも鉄滓の皮とした方がよいと思われる。B：8×4.5㎜の不整長方形剥片で厚み0.5㎜を呈する。表面は灰黒色で肌は滑らか。裏面は茶褐色を混えて一部に表皮剥離面をもつ。C：4.5×3.0㎜で厚み0.2㎜の平坦面をもつ剥片である。表面は灰黒色にやや荒れた肌をもつ。裏面は表面と同色であるが僅かに茶褐色で、やや滑らか面をもつ。D：平面が不整台形状で5.0×2.8㎜、厚み1.0㎜の剥片である。表面は灰黒色に半光沢のぶつぶつ肌、裏面は灰黒色の滑らか肌である。E：平面は台形状で4.3×3.5㎜、厚み0.6㎜の剥片。表面は灰黒色の滑らか肌、裏面は灰茶色のやや荒れた肌をもつ。F：平面は平行四辺形の4.3×2.8㎜、厚み0.18㎜の剥片である。表面は光沢をもつ灰黒色滑らか肌、裏面は地肌付着で小さな凹凸キズをもち灰茶色を混じえた肌を呈する。

②　マクロ組織：Photo.21のA～Fに示す。Aは半楕円形で内側が空洞化する。Bはガラス質基地に白色微細粒を晶出するが黒味を帯びた断面を呈する。なお、0.8㎜径の小剥片を抱き込む。C、Fが3層分離型の平坦度を保つ仕上げ時の剥片である。Eは双曲線状の断面をもつ剥片であるが鉄滓の

皮の可能性をもつ。Dは断面の全体像を捉えきっていないがEに準ずるものである。

③　顕微鏡組織：Photo.16、17に示す。A、B、Dは微小白色粒状ヴスタイトが暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。これは内層である。外層のヘマタイト、中間層のマグネタイトで構成される。鍛打作業初期の派生品であろう。Eはヴスタイト凝集の単相で形成される鉄滓の皮である。C、Fは平坦度を保つ鍛打後半の3層分離の明瞭な剥片である。

（7）　MTK－24：再結合滓小割り核片

①　肉眼観察：前述した粒状滓と鍛造剥片を再結合滓から抽出した際に派生した硬質の核片である。10点準備したが、そのうちの5点を調査に付した。大きさは6.3gから2.8gの小塊が供試材となり、外観は灰茶色の敲打痕をもつ小塊であり、それぞれに共通性をもつ。

②　マクロ組織：Photo.24の②、Photo.26の①②、Photo. 27の①②に示す。いずれも大小の鍛造剥片、鉄滓屑、錆化鉄などで形成される。

③　顕微鏡組織：Photo.18、19、20に示す。

Photo.19の⑤⑥に示す粒状滓は暗黒色ガラス質スラグ中にヴスタイトを少量晶出するもので前述のPhoto.14、15と同系である。また、鍛造剥片は、Photo.19の②③は内層ヴスタイトの粒状化の明瞭なもので初期段階であり、Photo.19の⑦⑧、Photo.18の④⑤らはヴスタイトが凝集しかかり鍛打作業は進行し、Photo.18の②、Photo.20の②～⑤などは鍛打仕上げ段階へと連なる。また、鍛冶滓屑としては、Photo.18の⑧⑨、Photo.19の①④、Photo.20の①らの鍛錬鍛冶滓のものが存在する。いずれも前述したMTK－20、21の再結合滓の内容と差異がない。

小結

高松原古才遺跡は、古墳時代の鍛冶工房の操業がなされた遺構を要する地区である。立田BP10、11、12区からは鉄素材の折返し曲げ鍛接を施した高温作業で排出された鍛錬鍛冶滓を出土し、更にBP9区からは鍛打作業から派生した粒状滓から鍛造剥片を包含する再結合滓が出土した。鍛冶は、鉱石系鉄素材を充当したもので、鍛打は鍛錬の初期段階から中期、後半仕上げにまで連なる事が鍛造剥片の相構造から推定された。

4　まとめ

加茂政所遺跡は、鉱石製錬滓を伴うものの古墳時代の鍛冶製作場としての機能を強く感じさせる遺物群の存在であった。個々の調査結果の概要をTable.4に示しておく。

注

① 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』 1968 ヴスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvとある。

② 大澤正己「原尾島（藤原光町3丁目地区）遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告139）岡山県教育委員会 1999

③ 大澤正己 前掲書②

④ 大澤正己「白壁奥遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査16』

(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　128) 岡山県教育委員会　1998

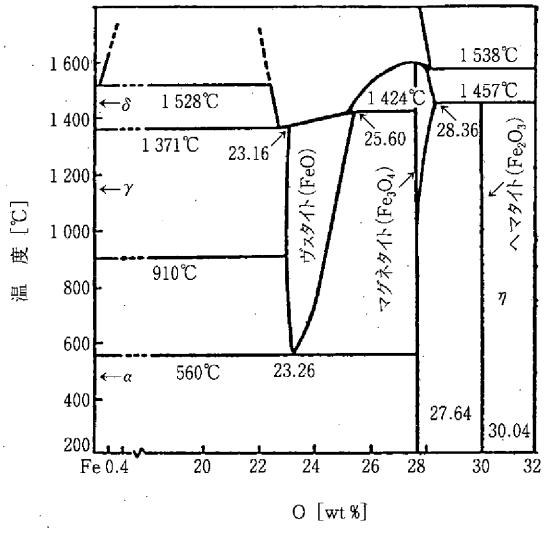
⑤　大澤正己「岡山城二ノ丸遺構出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『岡山城二ノ丸跡』(岡山県埋蔵文化財報告　78) 岡山県教育委員会　1991

⑥　岡山県古代吉備文化財センターの平成８年度の三室川ダム建設に伴う調査　報告書準備中。

⑦　大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘　年報15』(平成３年度) 千葉県立房総風土記の丘　1992

⑧　「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『奈良尾遺跡』(今宿バイパス関連埋蔵文化財調査報告書　第13集)　福岡県教育委員会　1991

⑨　森岡ら「鉄鋼腐食科学」『鉄鋼工学講座』11　朝倉書店　1972



Fe-O 系平衡状態図

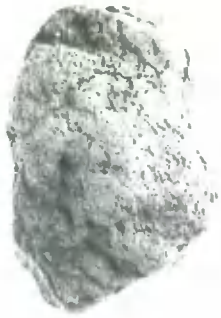
Table. 4 出土遺物の調査結果のまとめ

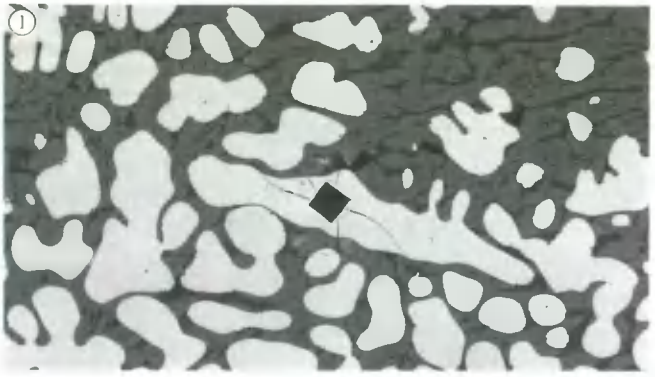
No.	調査区	遺物名称	出土位置	推定年代	顕微鏡組織	化学組成								所見
						Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	ガラス質成分	Cu	
MTK-1	高田1区	鍛冶滓	溝31	古墳時代	W＋F	47.12	12.82	4.73	0.32	<0.01	0.44	33.71	0.020	鉱石系精錬鍛冶滓
MTK-2	高田1区	含鉄鉄滓	溝31	古墳時代	W＋F、Go(0.1%C痕跡)	48.55	38.63	1.56	0.19	<0.01	0.25	22.75	0.130	錆化鉄含み鍛錬鍛冶滓、含銅磁鉄鉱系
MTK-3	高田1区	鉄塊系遺物	溝31	古墳時代	介在物：FeS、過共析鋼～亜共晶組成白鋳鉄	−	−	−	−	−	−	−	−	鉱石系最硬鋼
MTK-4	高田1区	鍛冶滓	竪穴住居77	古墳時代後期	W＋F、Go(W粒内H析出)	54.61	14.18	3.64	0.17	<0.01	0.29	25.35	0.018	鍛錬鍛冶滓
MTK-5	高田1区	鉄塊系遺物	溝31	古墳時代	フェライト、ヴスタイトと共存	−	−	−	−	−	−	−	−	鉱石系極低炭素鋼
MTK-6	高田1区	羽口	溝31	古墳時代	−	6.34	7.08	6.71	0.34	0.01	0.23	75.63	0.001	鉄分・塩基性成分低下、耐火度1240℃
MTK-7	砂場1区	鋳鉄	竪穴住居7	弥生時代後期	Go、片状黒鉛と初析セメンタイト痕跡	−	−	−	−	−	−	−	−	ねずみ鋳鉄
MTK-8	砂場1区	製錬滓	土壙389	古代	F＋W(少量)	48.59	14.01	2.79	0.27	0.01	0.17	31.46	0.005	鉱石系製錬滓
MTK-9	砂場2B区	製錬滓	柱穴19	古代～中世	F＋Go	44.34	43.00	6.26	0.15	<0.01	0.24	30.12	0.022	鉱石系製錬滓(含鉄)
MTK-10	砂場南水路	製錬滓	竪穴住居133	古墳時代後期	F	39.42	15.87	3.85	0.27	<0.01	0.31	42.75	0.035	鉱石系製錬滓
MTK-11	宮西調査区	鉄塊系遺物	竪穴住居133	古墳時代後期	介在物：FeS、過共析鋼～亜共晶組成白鋳鉄	−	−	−	−	−	−	−	−	鉱石系最硬鋼(11g)
MTK-12	宮西調査区	炉底塊	竪穴住居133	古墳時代後期	F＋W(少量)＋Go	45.44	24.02	2.61	0.21	<0.01	0.17	33.93	0.005	鉱石系製錬滓(含鉄)
MTK-13	宮西調査区	炉底塊	竪穴住居133	古墳時代後期	F＋W(少量)	44.73	11.89	5.49	0.21	<0.01	0.70	37.59	0.030	鉱石系製錬滓
MTK-14	宮西調査区	鉄塊系遺物	包含層	？	介在物：FeS、過共析鋼～亜共晶組成白鋳鉄	−	−	−	−	−	−	−	−	鉱石系最硬鋼(41g)
MTK-15	宮西調査区	鉄塊系遺物	包含層	？	捲込みスラグ：Ol、共析鋼	−	−	−	−	−	−	−	−	鉱石系硬鋼(8g)
MTK-16	宮西調査区	鉄塊系遺物	側溝	？	表皮スラグ：F、過共析鋼	−	−	−	−	−	−	−	−	鉱石系硬鋼(3.1g)
MTK-17	立田AP-10区	鍛冶滓	土壙7	古墳時代？	大量W＋F	−	−	−	−	−	−	−	−	鉱石系鍛錬鍛冶滓
MTK-18	立田AP-11区	鍛冶滓	竪穴住居9	古墳時代後期	凝集W	59.03	32.05	1.19	0.11	0.01	0.12	15.53	0.010	鉱石系鍛錬鍛冶滓
MTK-19	立田BP-12区	鍛冶滓	溝6	古墳時代	大量W＋F	−	−	−	−	−	−	−	−	鉱石系鍛錬鍛冶滓
MTK-20	立田BP-9区	再結合滓	鍛冶炉1	古墳時代	W＋粒状滓＋鍛造剥片	−	−	−	−	−	−	−	−	精錬末～鍛錬鍛冶前半～後半
MTK-21	立田BP-9区	再結合滓	鍛冶炉1	古墳時代	W＋粒状滓＋鍛造剥片	−	−	−	−	−	−	−	−	精錬末～鍛錬鍛冶前半～後半
MTK-22	立田BP-9区	粒状滓	鍛冶炉1	古墳時代	W	−	−	−	−	−	−	−	−	精錬末～
MTK-23	立田BP-9区	鍛造剥片	鍛冶炉1	古墳時代	W(内層W粒状化～非晶質)	−	−	−	−	−	−	−	−	鍛錬鍛冶前半～後半
MTK-24	立田BP-9区	再結合滓	鍛冶炉1	古墳時代	W＋粒状滓＋鍛造剥片	−	−	−	−	−	−	−	−	精錬末～鍛錬鍛冶前半～後半

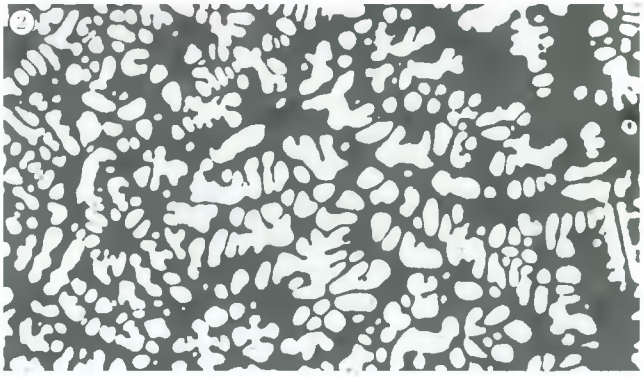
注) W：Wustite(FeO)，F：Fayalite($2FeO\cdot SiO_2$)，Go：Goethite(α-$FeO\cdot OH$)，Ol：Olivin$(Ca\cdot Fe)O\cdot SiO_2$

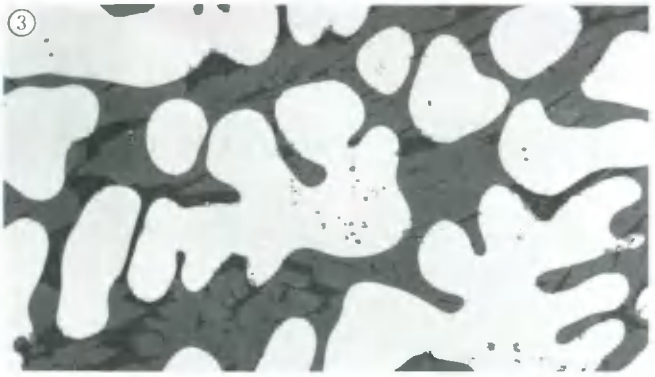
① MTK-1
精錬鍛冶滓

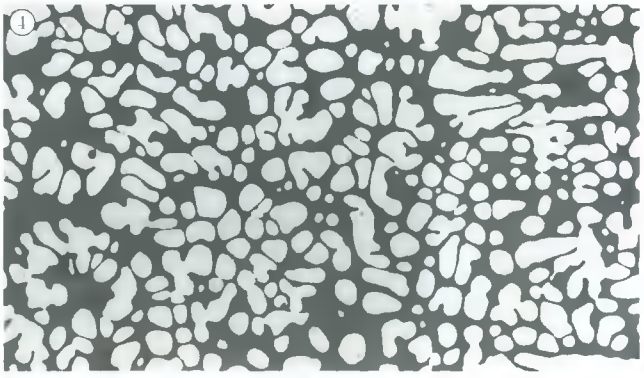
①×200、硬度圧痕
ヴスタイト：468Hv. 200g
②①×100、③⑤×400
ヴスタイト＋ファイヤライト
ヴスタイト粒内（ベーシナイト）

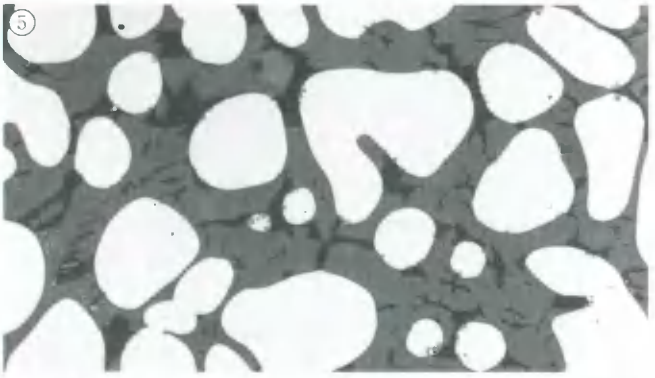






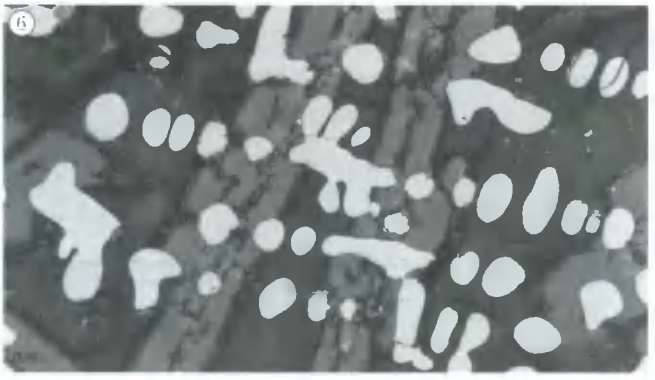






② MTK-2
含鉄鉄滓

⑥×400
ヴスタイト＋ファイヤライト
⑦×100、⑧×400
錆化鉄（パーライト痕跡）



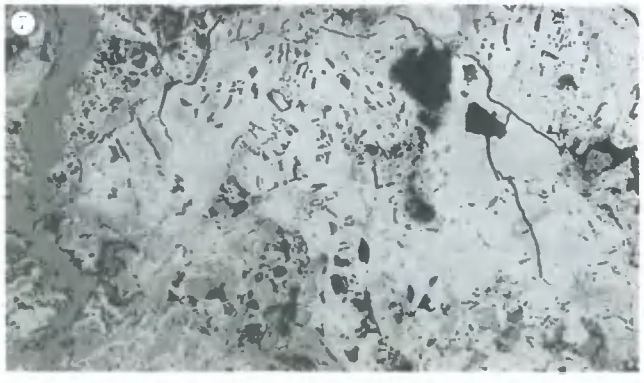
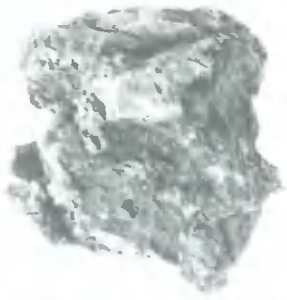


Photo.1　鉄滓の顕微鏡組織

5 MTK-3
鉄塊系遺物
1 ×400 介在物（FeS）
2 ×50 3 ×100 4 ×400
亜共晶組成白鋳鉄＋パーライト
5 ×100 6 ×400：パーライト
7 8 ×200 硬度圧痕200 g
7 レデブライト：650Hv
8 パーライト：335Hv



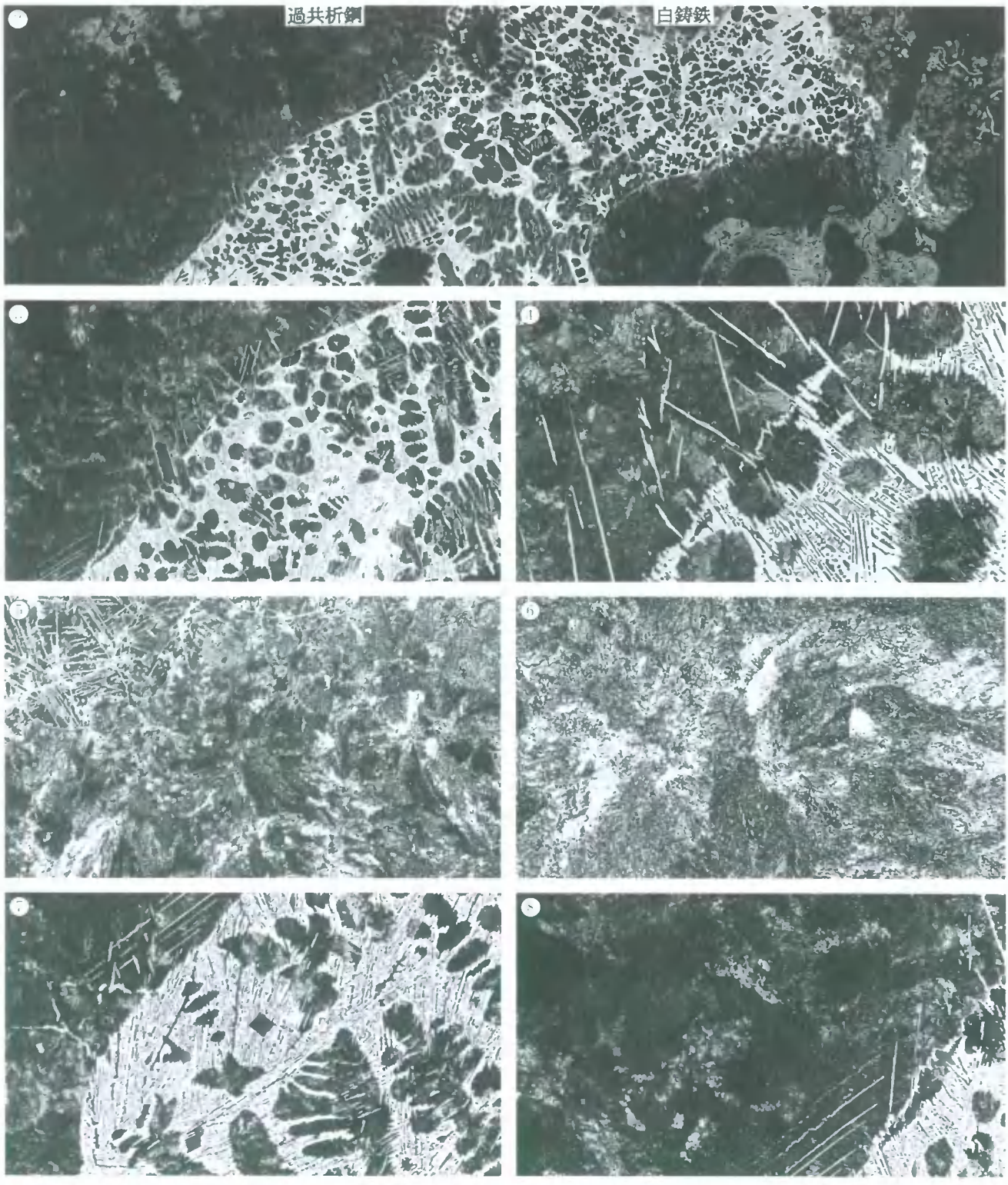
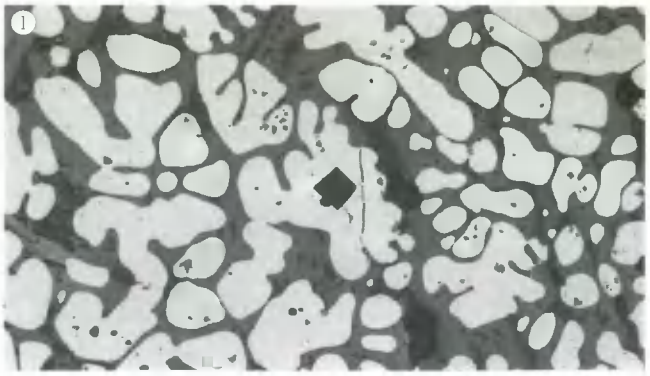
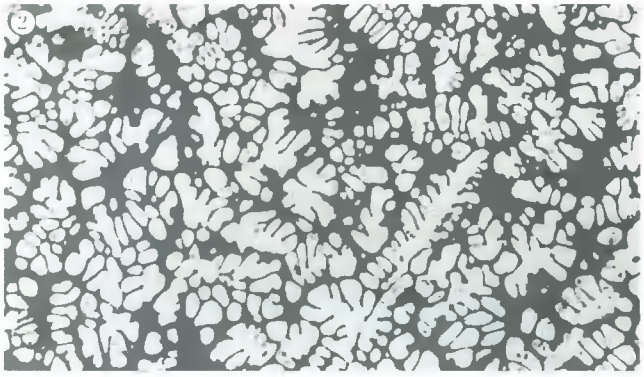


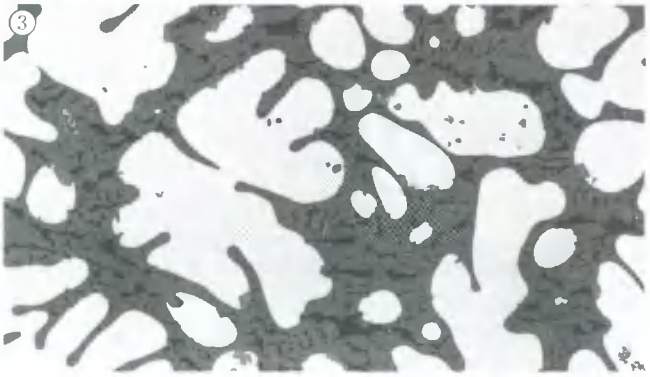
Photo. 2 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

④ MTK-4
鍛錬鍛冶滓

①×200 硬度圧痕
ヴスタイト：429Hv 200 g
②×100 ③×400
ヴスタイト＋ファイヤライト
ヴスタイト粒内（ヘーシナイト）

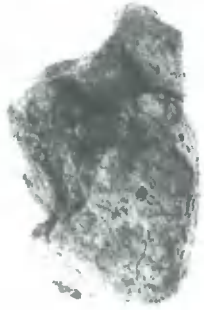


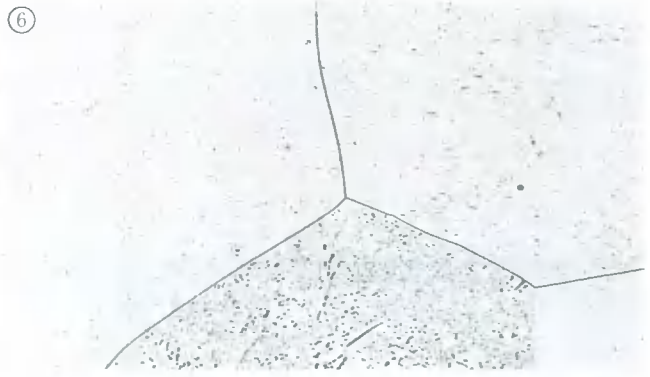


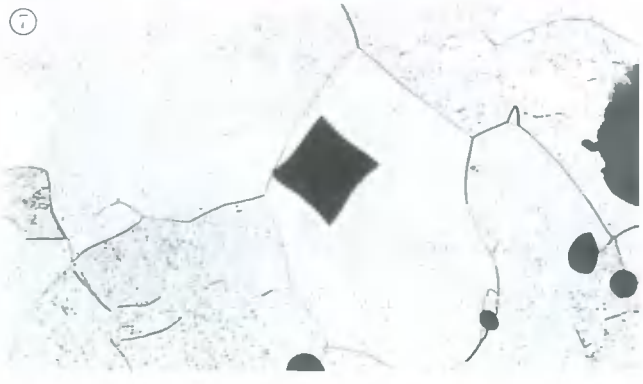


⑤ MTK-5
鉄塊系遺物

④×400 非金属介在物
⑤×100 ⑥×400 ナイタルetch
捲込みスラグとフェライト
⑦⑧×200.硬度圧痕200 g
⑦フェライト：72.0Hv
⑧ヴスタイト：383Hv







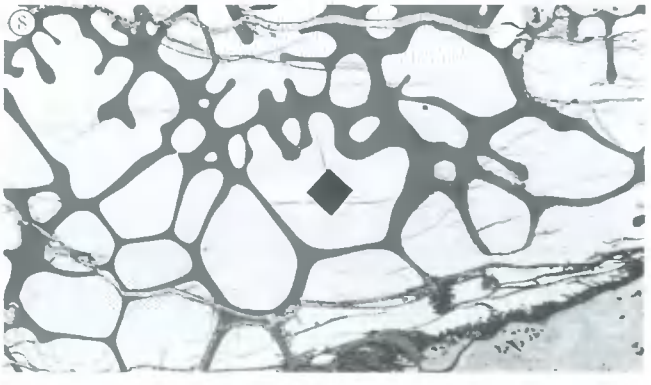
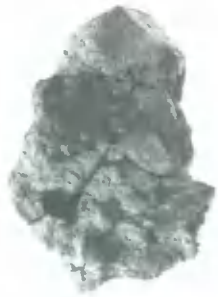
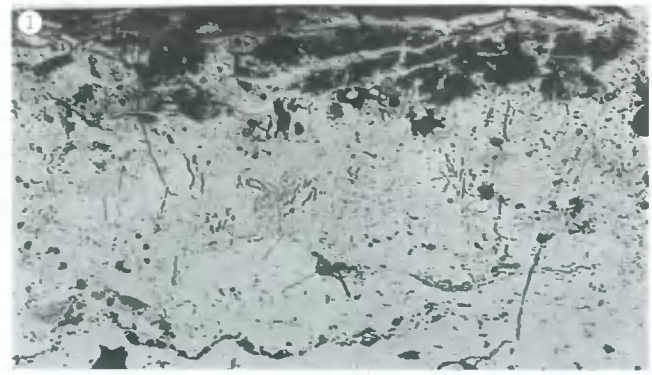
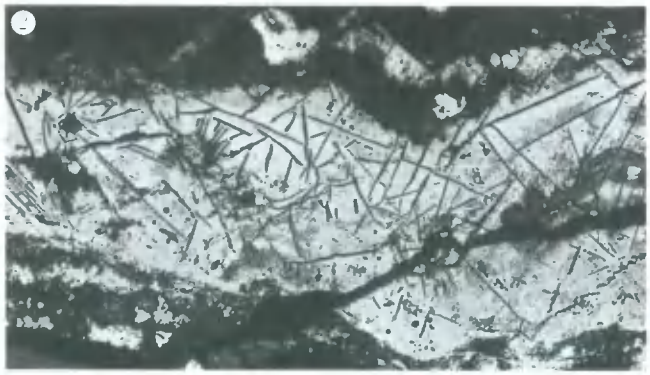


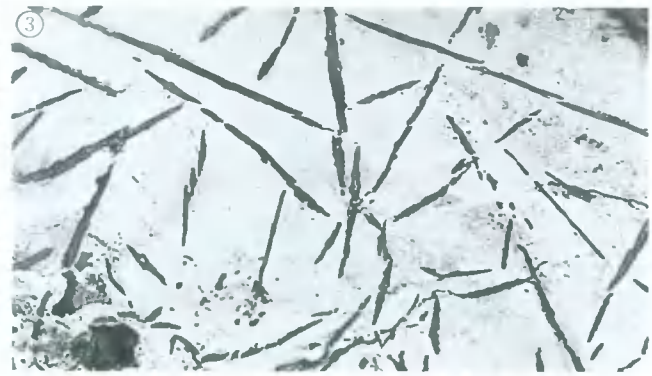
Photo. 3 鉄滓と鉄塊系遺物の顕微鏡組織

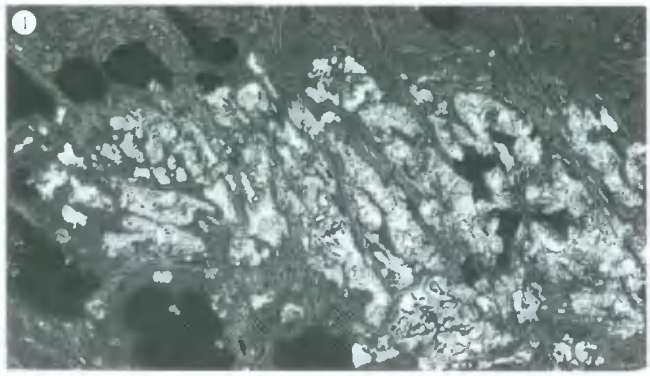
6　MTK−7
　　鋳鉄片
　　（ねずみ鋳鉄）
1 ×100 錆化鉄
ハーライト痕跡
2 ×100　3 ×400
過熱組織痕跡
4 ×100　5 ×400
ねずみ鋳鉄（片状黒鉛）

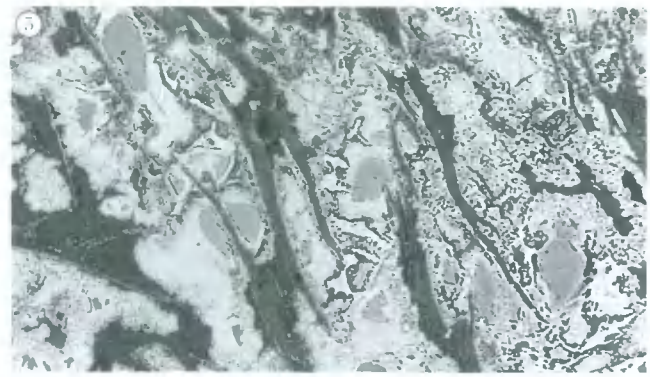






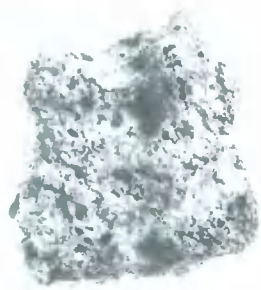


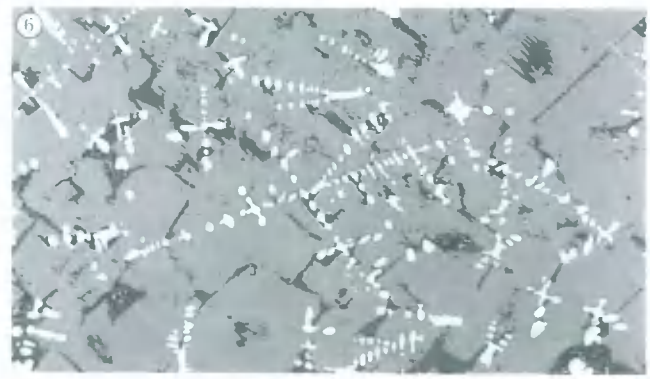


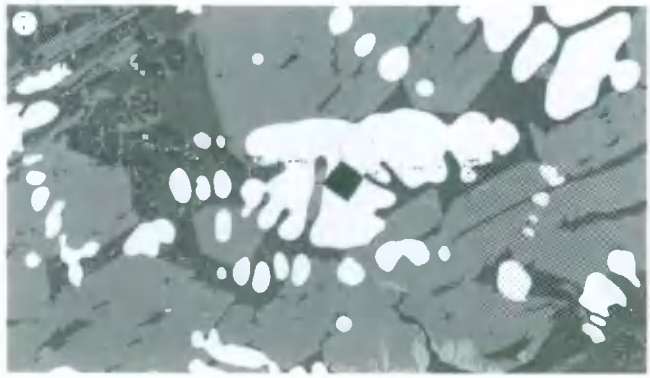


7　MTK−8
　　鉱石製錬滓

9 ×100
ファイヤライト＋ウォタイト
7 8 ×200 硬度圧痕
7 ウォタイト：489Hv
8 ファイヤライト：577Hv







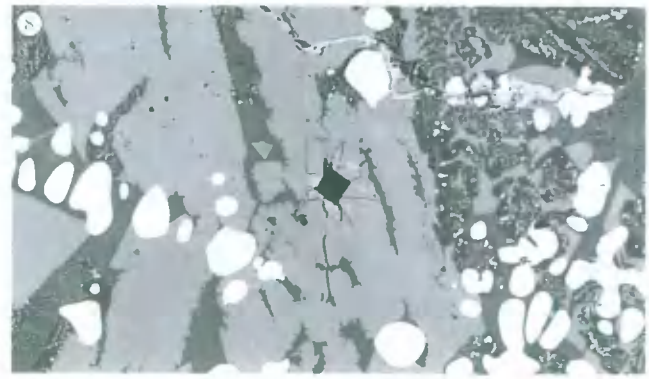
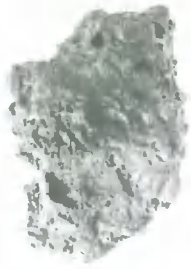
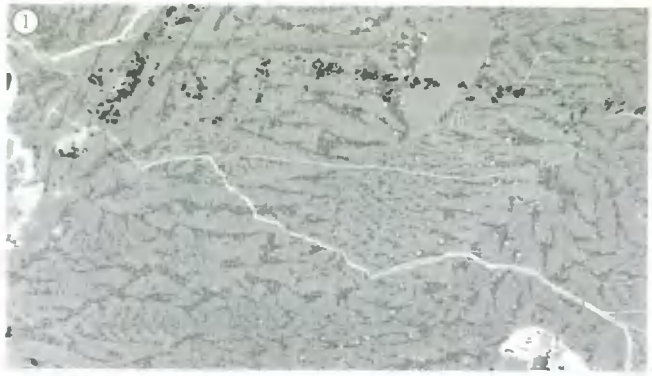


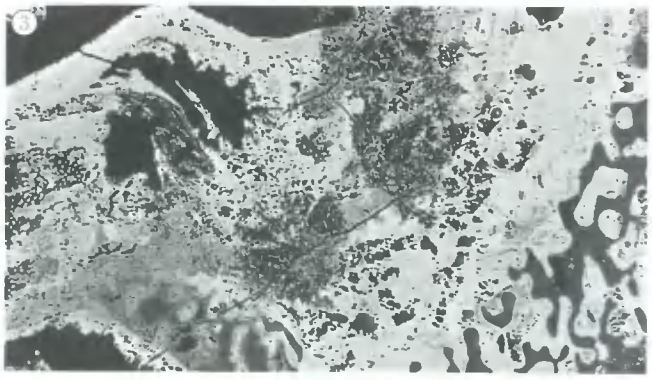
Photo. 4　鋳鉄と鉄滓の顕微鏡組織

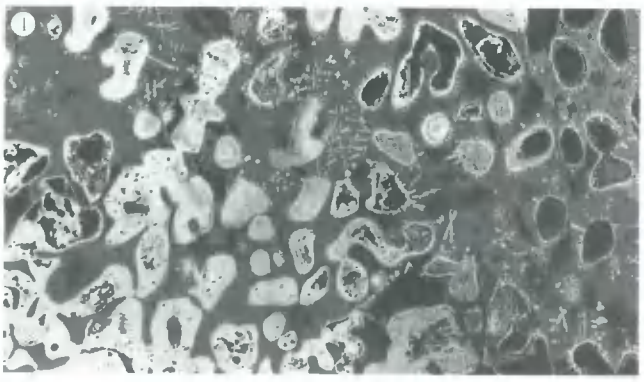
8　MTK-9
鉱石製錬滓

1 ×200　2 ×400
ファイヤライト
3 ×100　銹化鉄
フェライト痕跡
5 ×100　木炭鉄に置換









9　MTK-10
鉱石製錬滓

5 ×100
ファイヤライト
8 ×200　硬度圧痕
ファイヤライト：579Hv

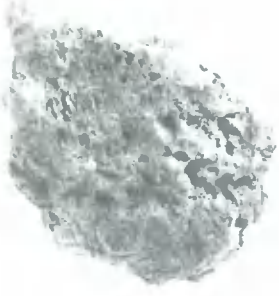
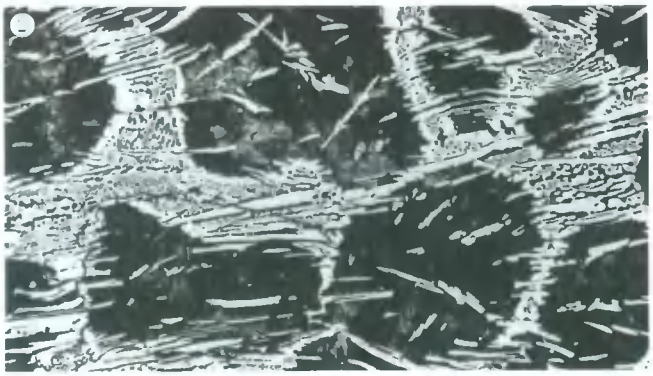
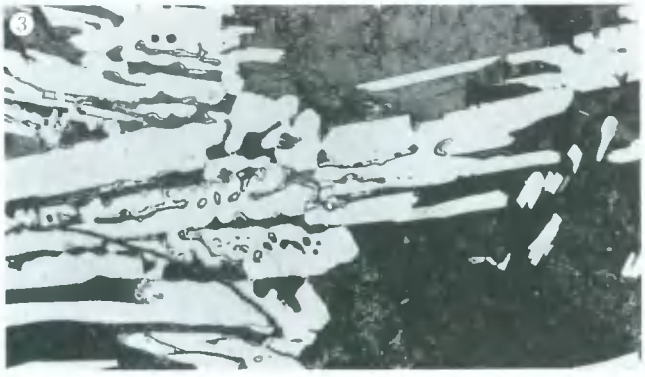


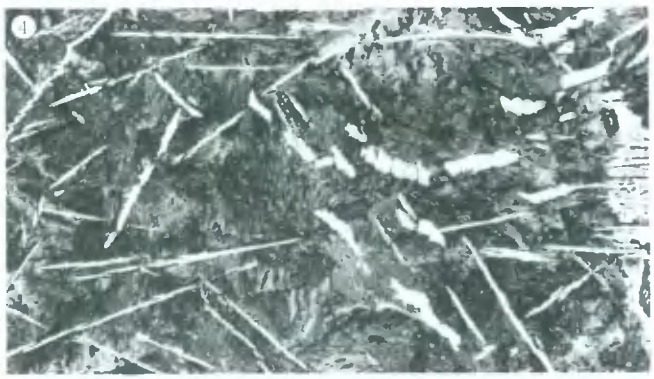
Photo. 5　鉄滓の顕微鏡組織

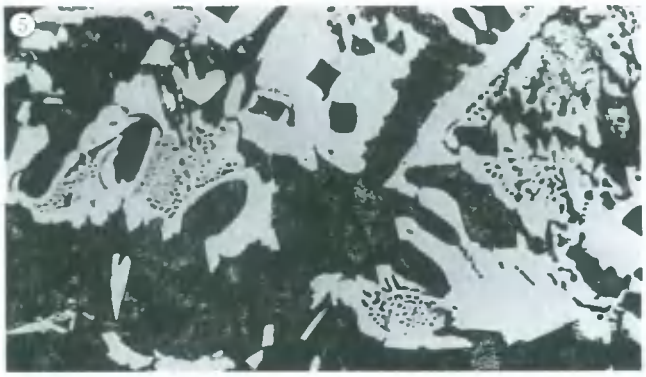
⑩ MTK-11
鉄塊系遺物

1 ×400 介在物（FeS）
2 ×100 3 ×400
亜共晶組成白鋳鉄
4 ×100 パーライト部分
5 ×200 硬度圧痕
セメンタイト：652Hv



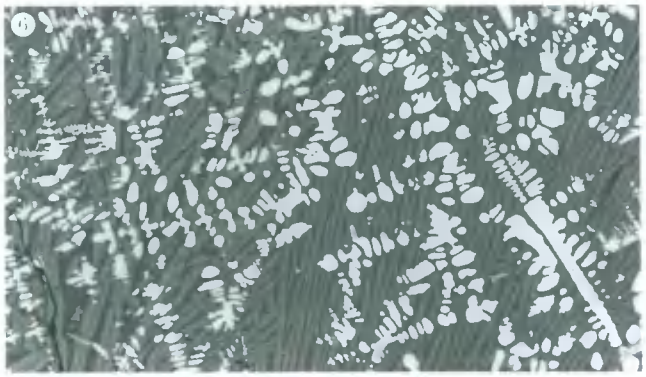


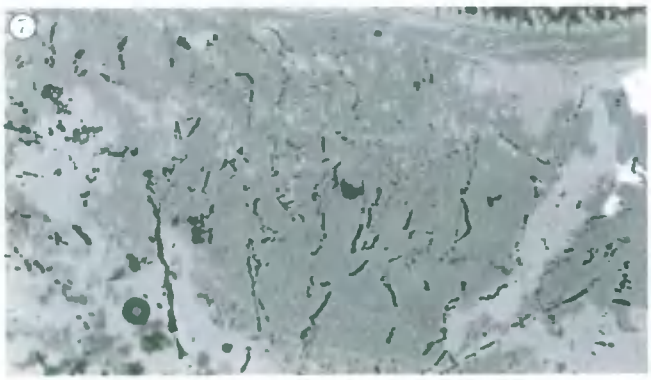




⑪ MTK-12
炉底塊（鉱石製錬滓）

6 ×100
ヴュスタイト＋ファイヤライト
7 ×400 錆化鉄
パーライト痕跡
8 ×200 硬度圧痕
ウュスタイト：439Hv





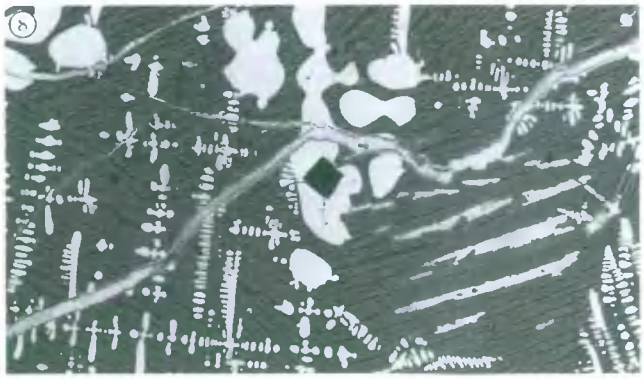
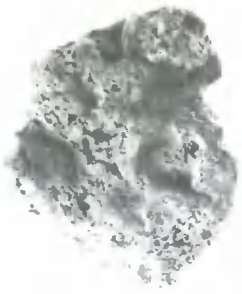
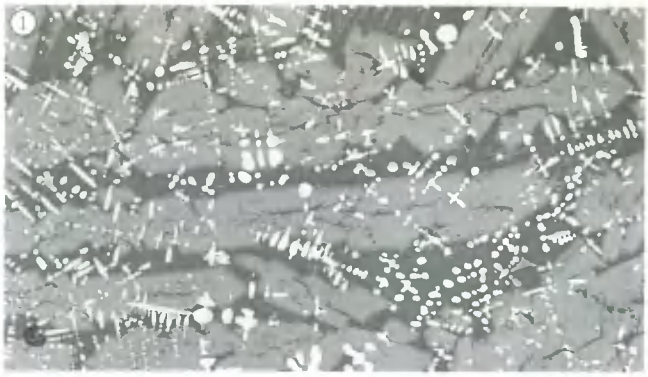


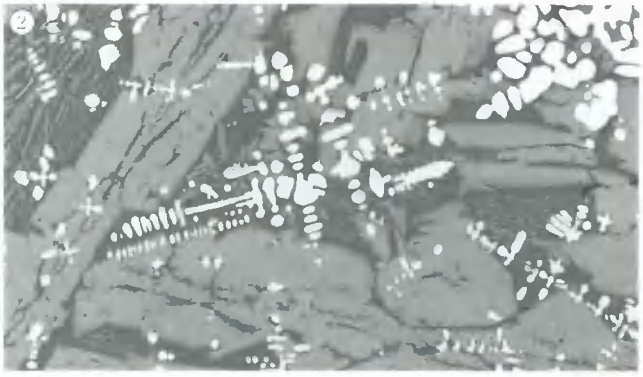
Photo. 6　鉄塊系遺物と鉄滓の顕微鏡組織

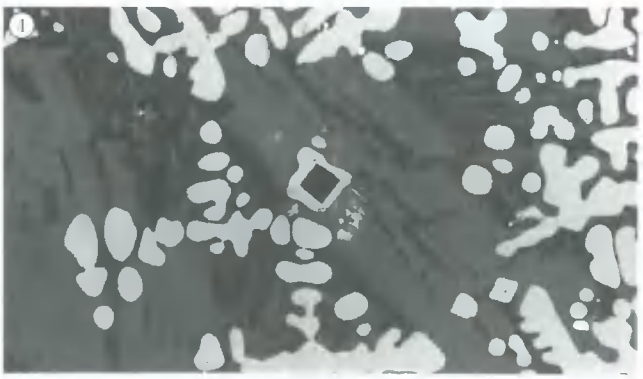
⑫ MTK-13
炉底塊（鉱石製錬滓）

①②×100 ③×400
ファイヤライト＋ヴスタイト
①⑤×200 硬度圧痕
④ヴスタイト：473Hv
⑤ファイヤライト：652Hv



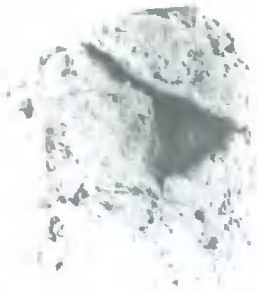


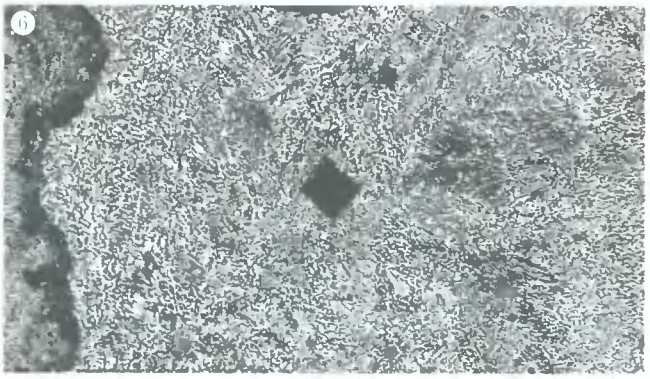




⑬ MTK-15
鉄塊系遺物

⑤×200 硬度圧痕
ハーライト：218Hv、200 g
⑦×100 ⑧×400
捲込みスラグとハーライト





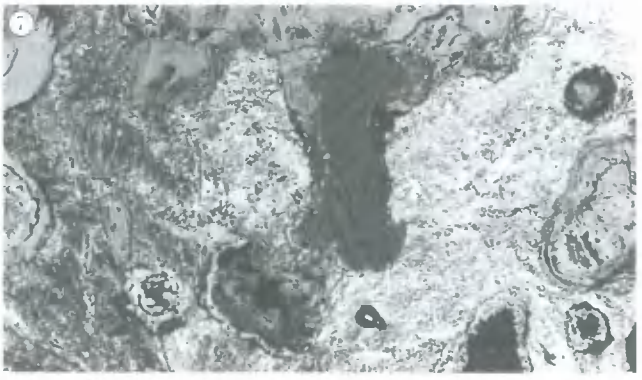
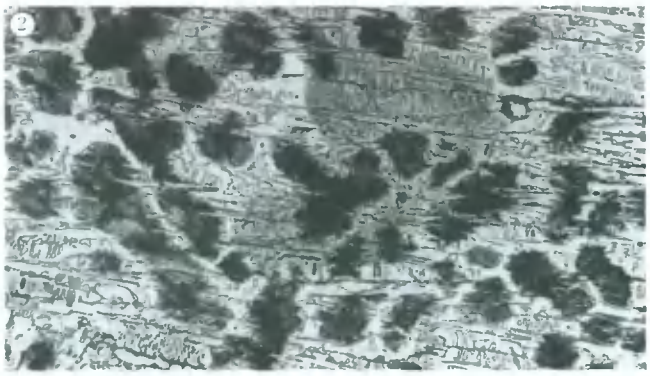
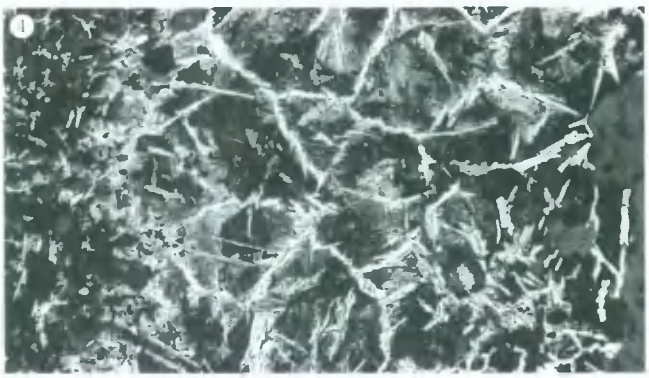
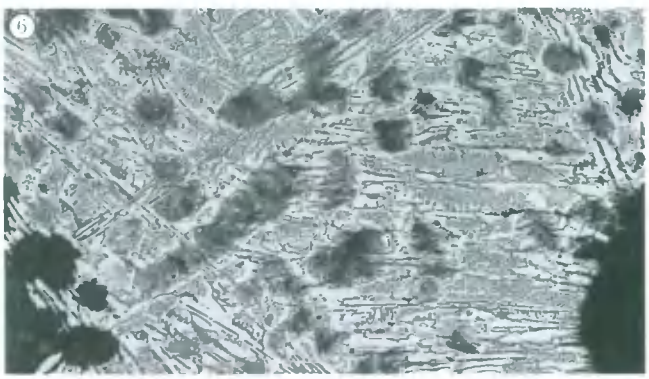


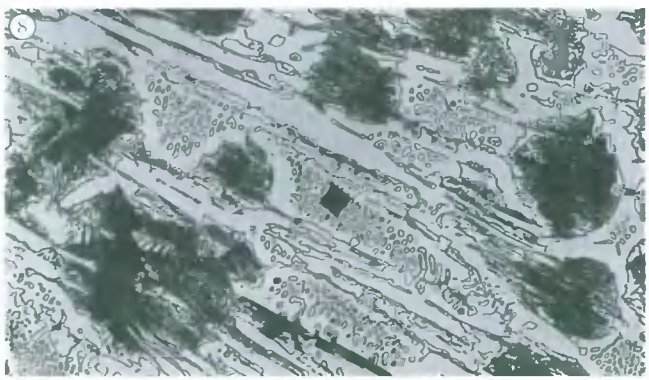
Photo. 7　鉄滓と鉄塊系遺物の顕微鏡組織

14 MTK-14
鉄塊系遺物
① ×400 非金属介在物
② ×100 ③ ×400ナイタルetch
亜共晶組成白鋳鉄
④ ×100 ⑤ ×400
過共析鋼
⑦～⑨ ×200 硬度圧痕
⑦セメンタイト:736Hv ⑧レデブライト:678Hv ⑨パーライト:251Hv









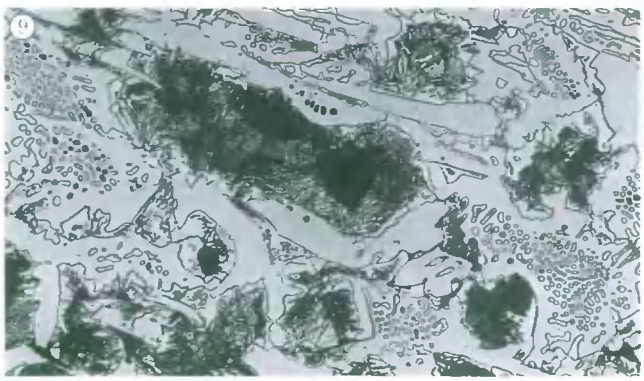
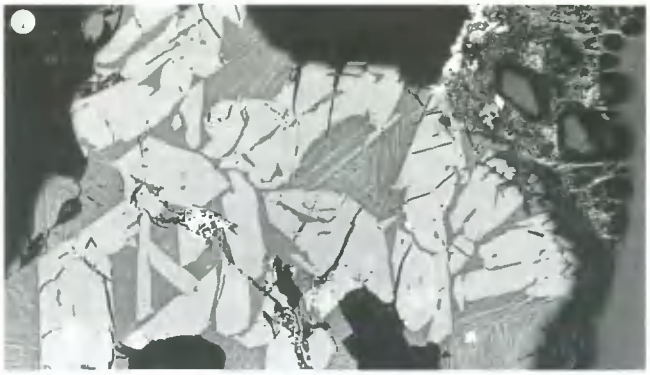
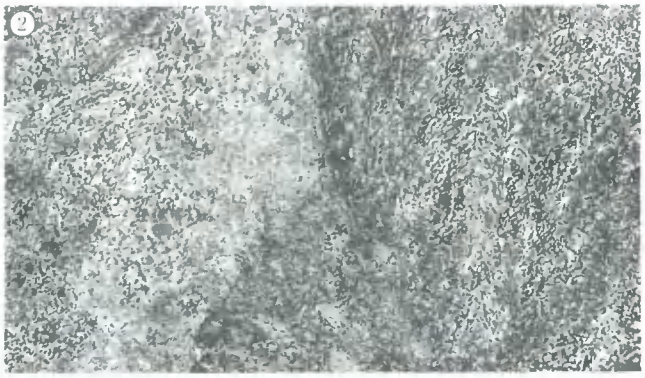


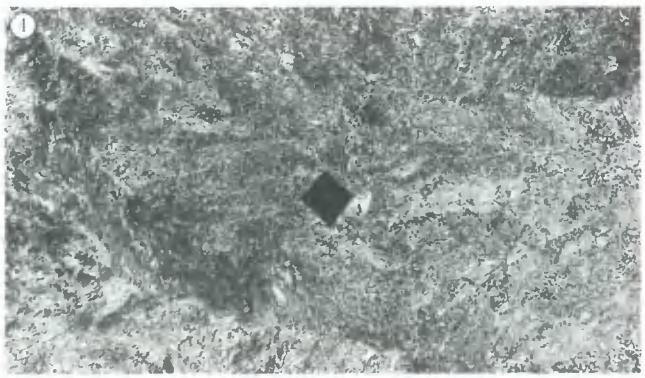
Photo. 8 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

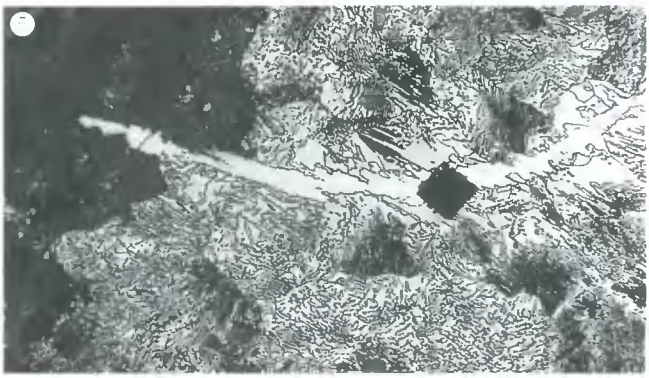
15 MTK-16
鉄塊系遺物

1 ×100 表皮スラグ
2 3 ×400 ナイタルetch
2 ：共析鋼
3 ：過共析鋼
1 5 ×200 硬度圧痕
4 全面パーライト：248Hv
5 一部セメンタイト：224Hv



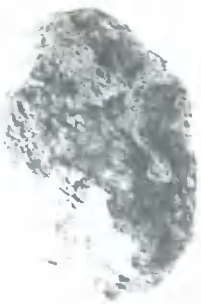


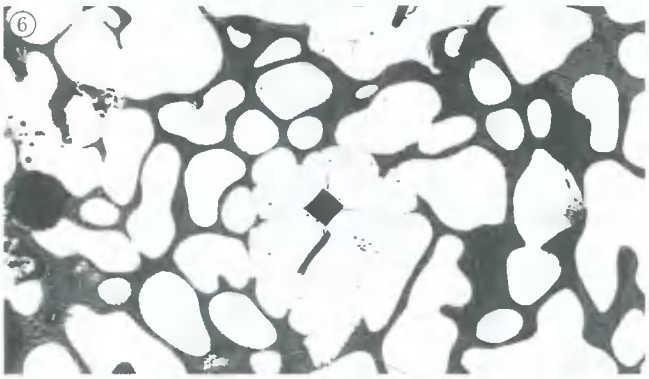


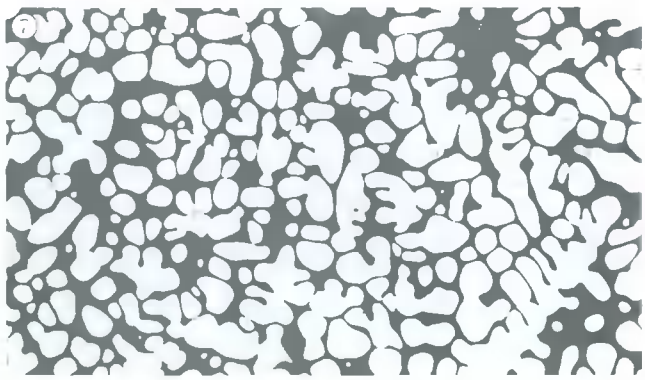


16 MTK-17
鍛錬鍛冶滓

6 ×200 硬度圧痕
マグネタイト：535Hv
7 ×100 8 ×400
ウスタイト＋ファイヤライト
（一部にマグネタイト）







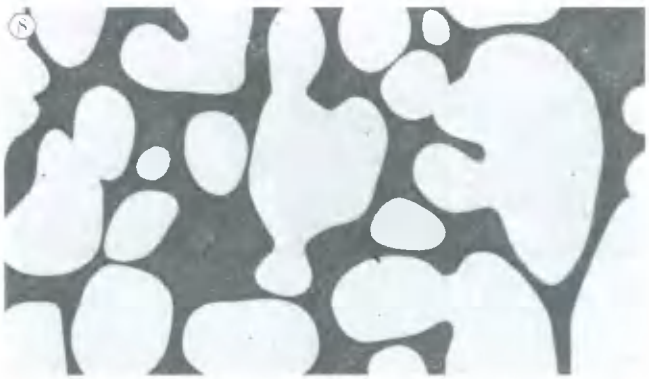
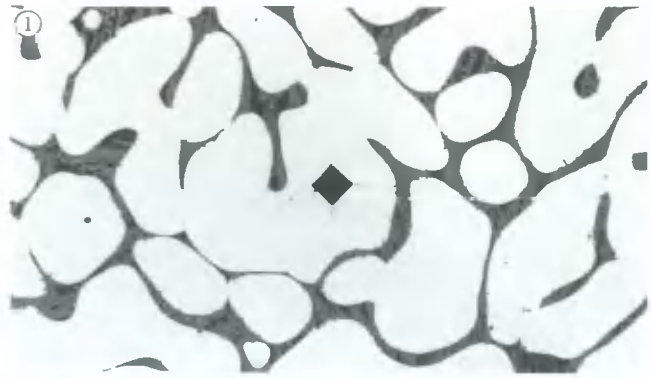
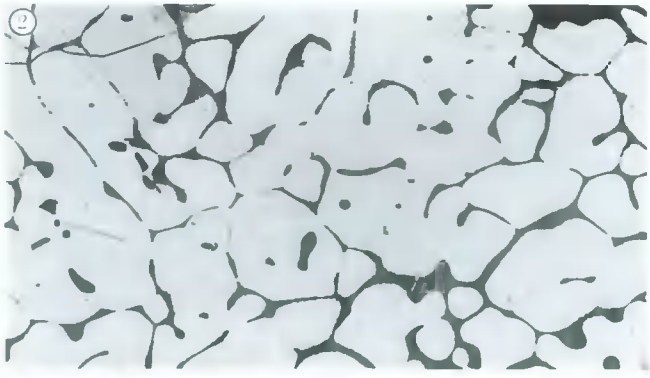


Photo. 9　鉄塊系遺物と鉄滓の顕微鏡組織

17 MTK-18
鍛錬鍛冶滓

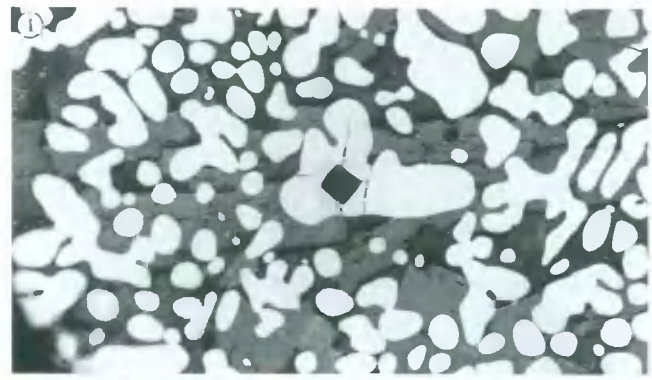
1 ×200 硬度圧痕
ヴスタイト：434Hv、200 g
2 ×100 3 ×400
ヴスタイト凝集

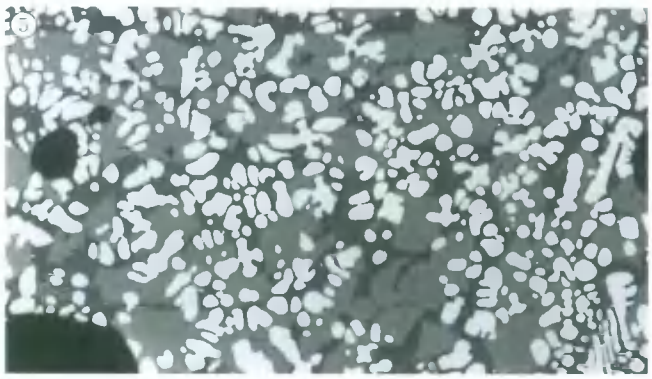


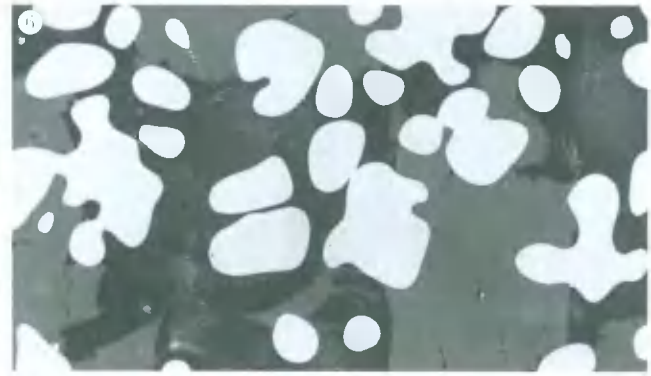


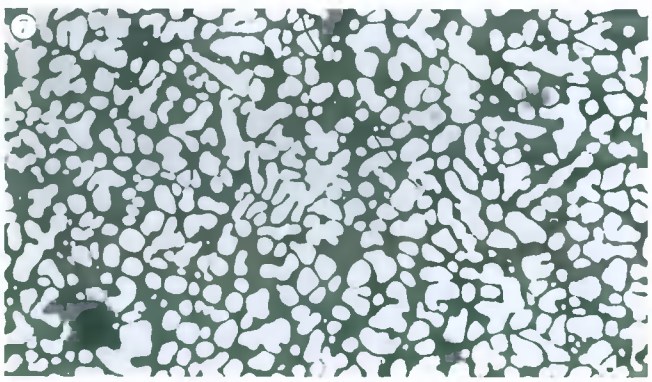
18 MTK-19
鍛錬鍛冶滓

4 ×200 硬度圧痕
ヴスタイト：435Hv
5 7 ×100 6 8 ×400
ヴスタイト＋ファイヤライト









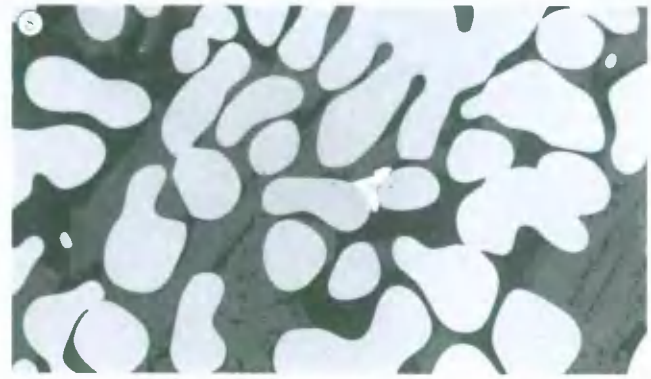
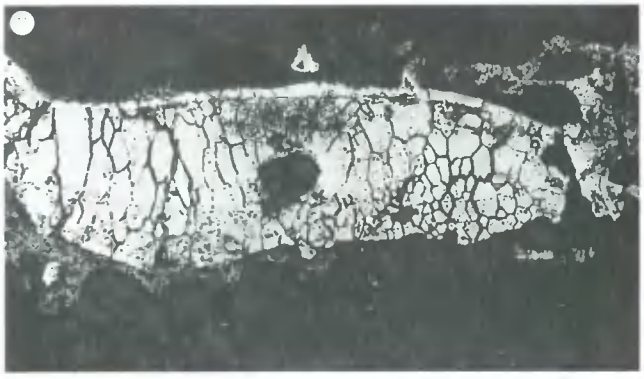
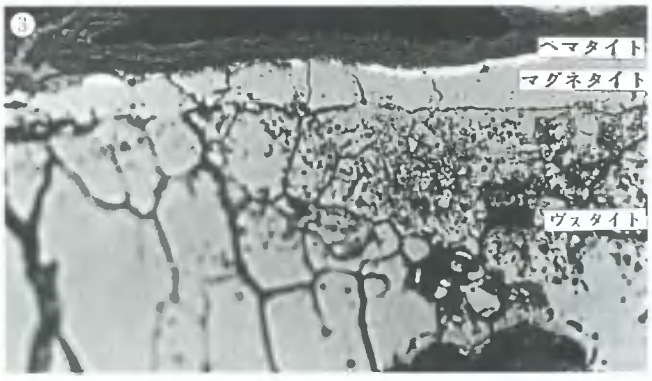


Photo. 10 鉄滓の顕微鏡組織

19　MTK-20
再結合滓
1 ×50　2 ×100　3 ×400
内層ヴュタイト粒状型鍛造剥片
4 ×100　5 ×400　同上
6 ×100　7 ×400
ガラス質鍛造剥片
3層分離型剥片取り込まれる
8 ×100　9 ×400
3層分離型鍛造剥片

外観写真1/1





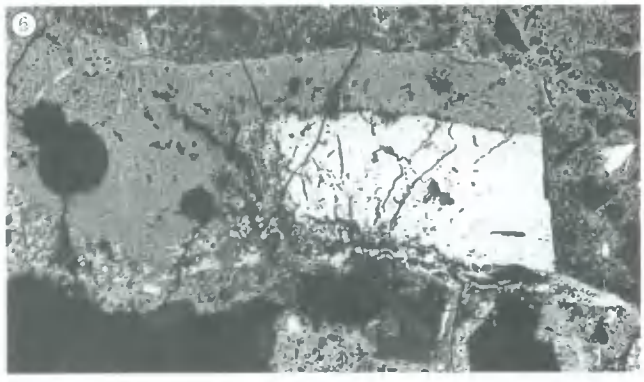
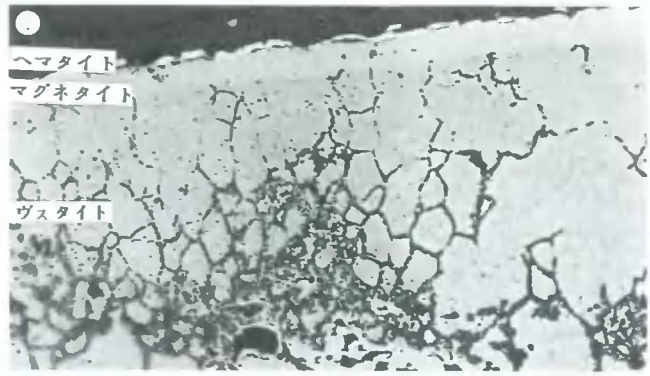
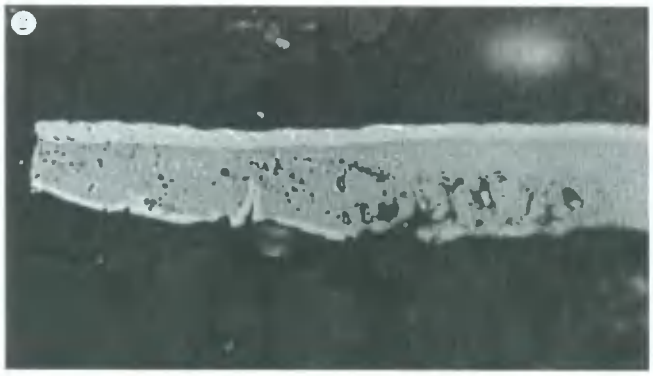


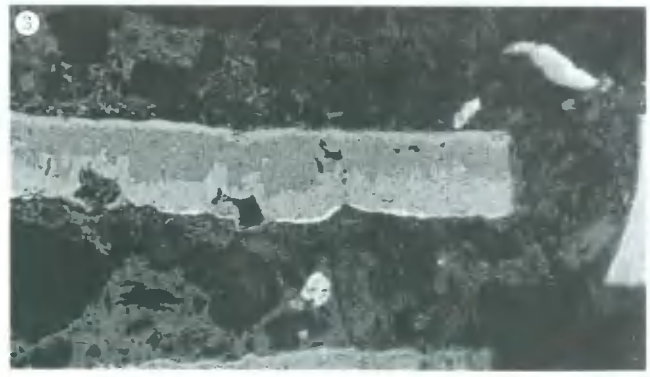
Photo. 11　再結合滓の顕微鏡組織

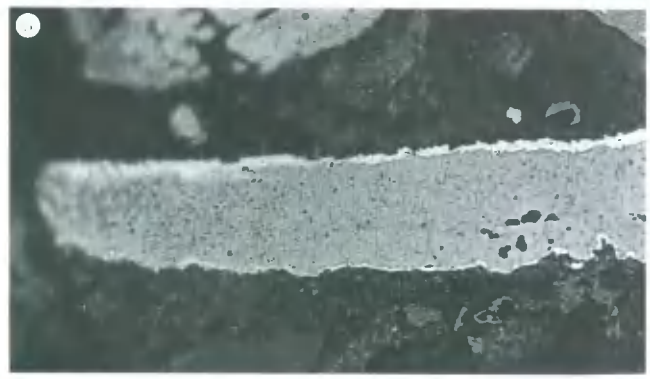
⑳ MTK-20
再結合滓

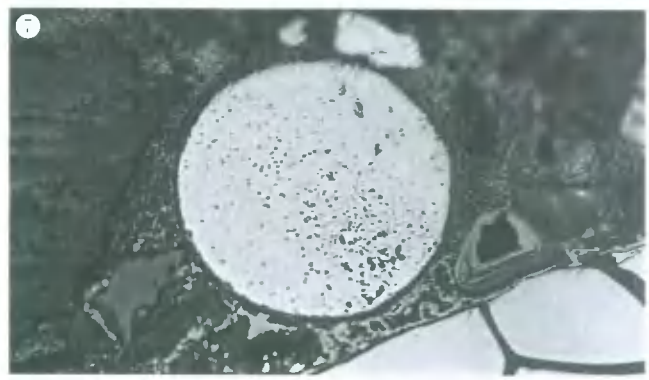
1～5 ×400 王水etch
1 内層粒状化剥片
2～5 3層分離型剥片
6 ×100 7 ×400.粒状滓
8 ×100 9 ×400
鉄滓層：ヴュタイト

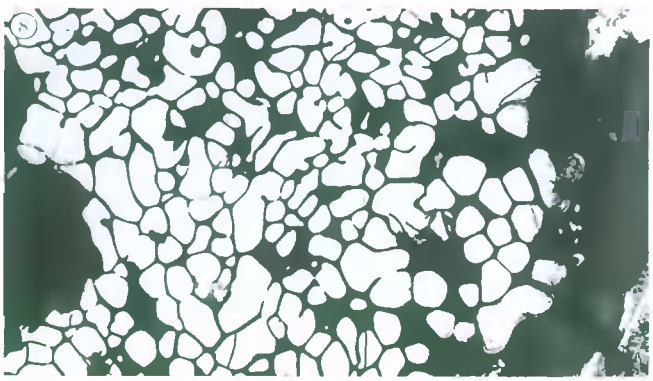












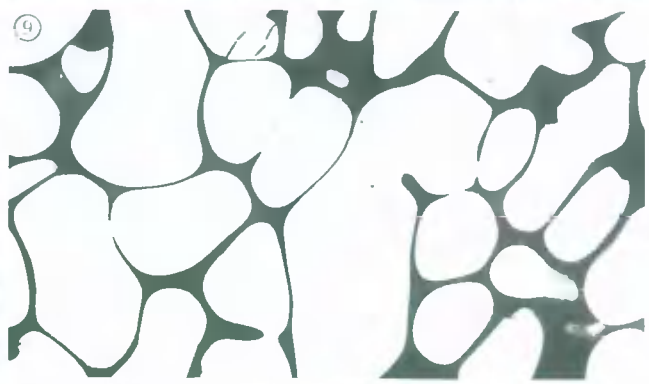
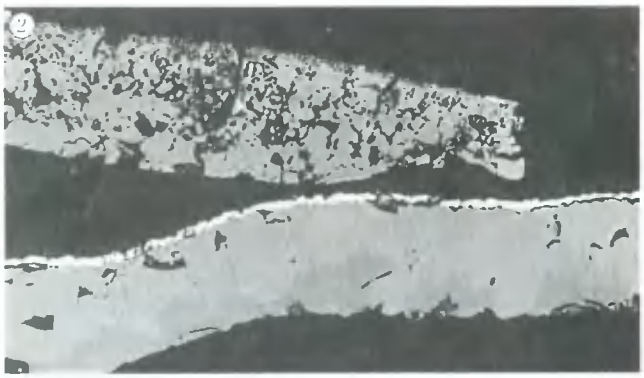


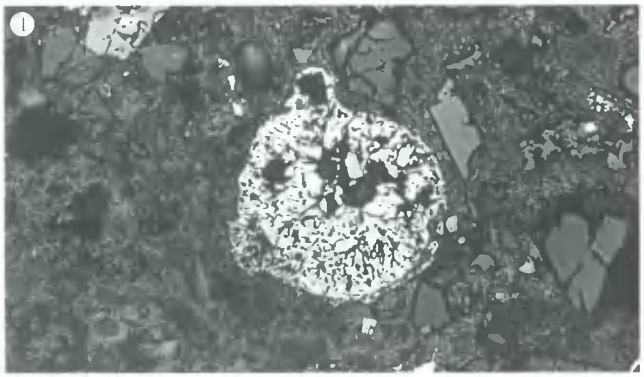
Photo. 12 再結合滓の顕微鏡組織

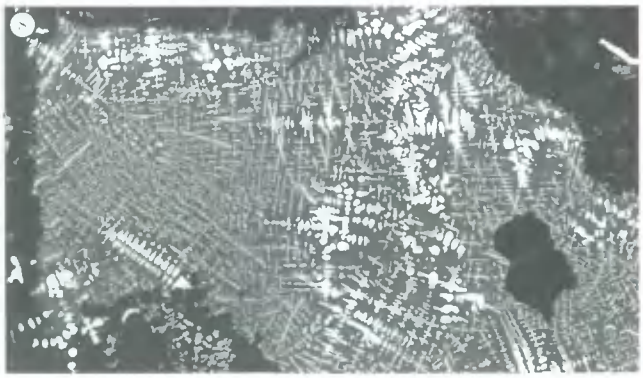
21　MTK-21
再結合滓

1 ×100　2,3 ×400
自然腐食鍛造剥片
1 ×100　5 ×400
粒状滓（マグネタイト）
6 ×100　7 ×200 硬度圧痕261Hv
8 ×100　9 ×400
鉄滓屑（ヴュタイト）

外観写真　×1.5







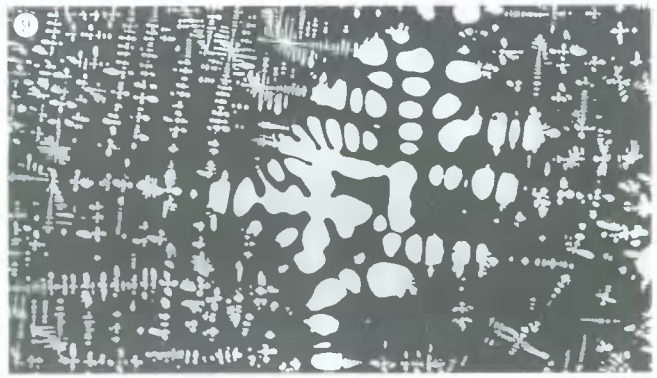
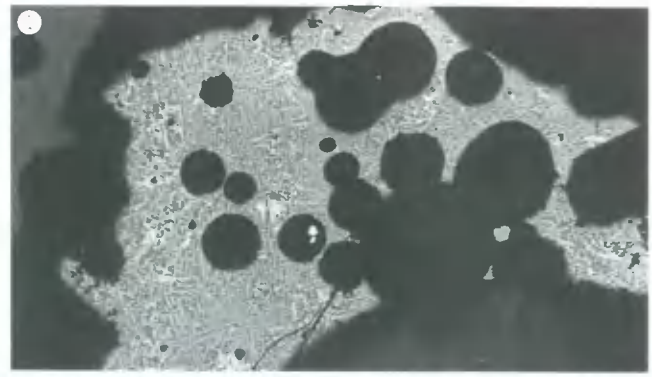


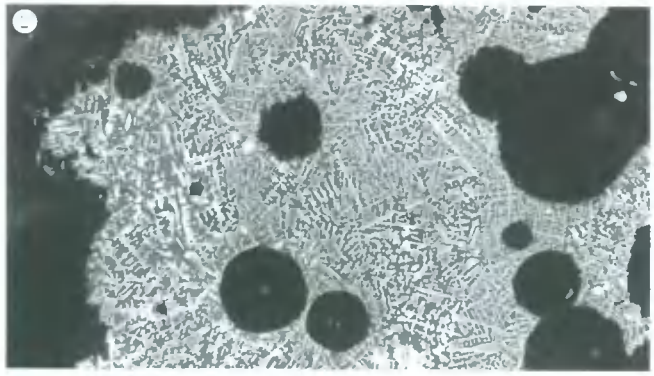
Photo. 13　再結合滓の顕微鏡組織

22 MTK-22A
粒状滓

1 ×50　2 ×100　3 ×400
ガラス質スラグ中のヴスタイト
黒色円形は気泡

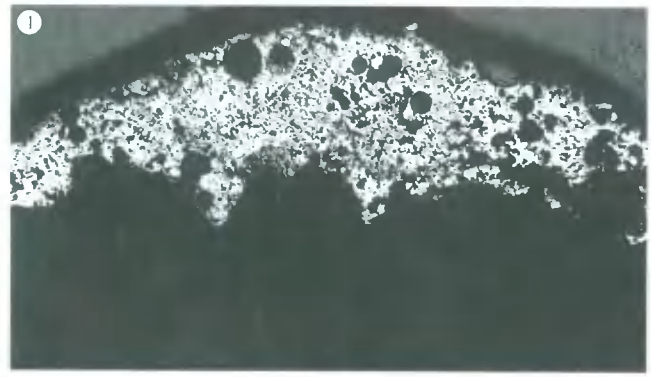
外観写真× 5

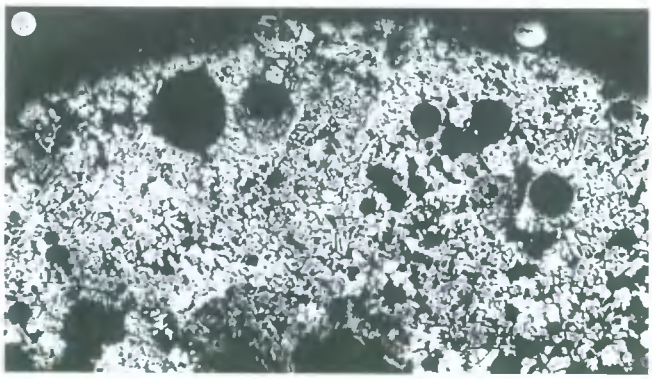


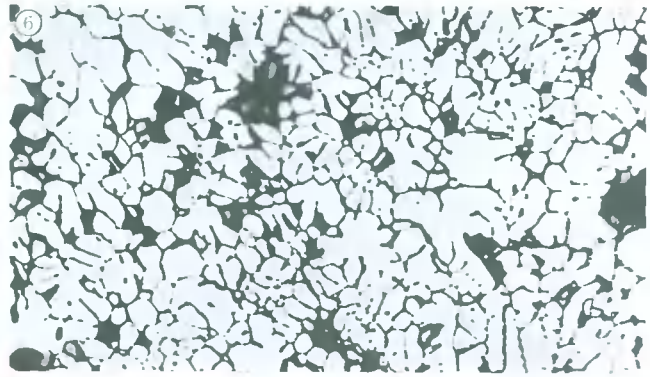


23 MTK-22B
粒状滓
1 ×50　2 ×100　3 ×400
ヴスタイト凝集

外観写真× 5







24 MTK-22C
粒状滓

1 ×50
ヴスタイト微小結晶
Photo.15の 1 ×100 2 ×400
（次頁参照）

外観写真× 1

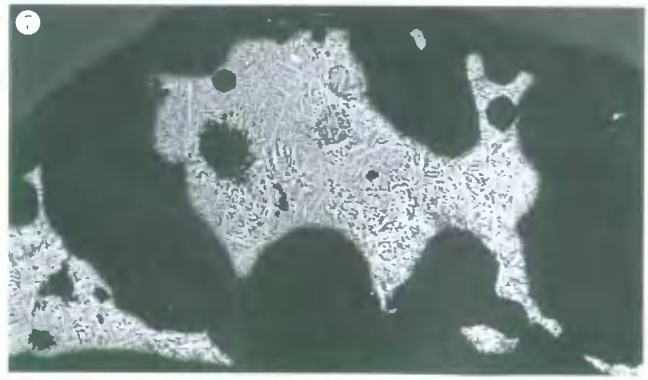
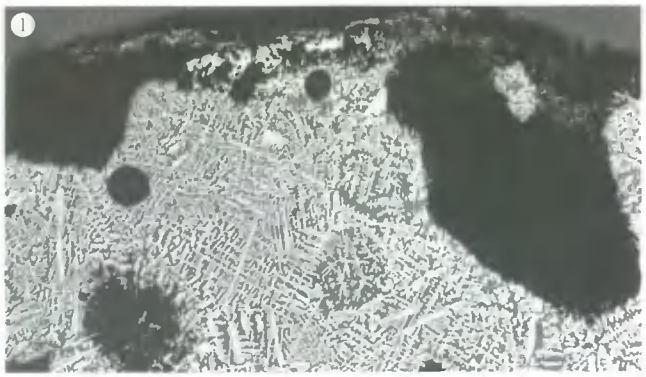
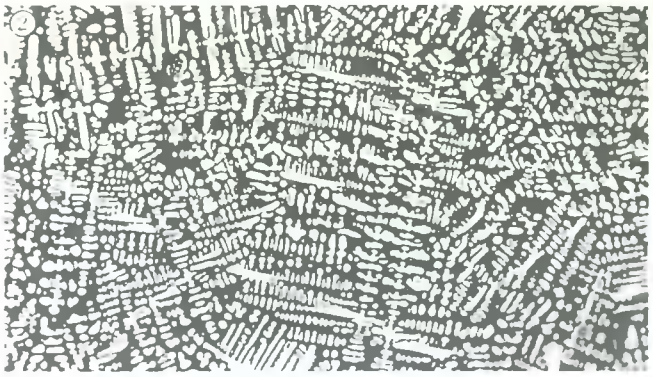


Photo. 14　粒状滓の顕微鏡組織（再結合滓からの抽出品）

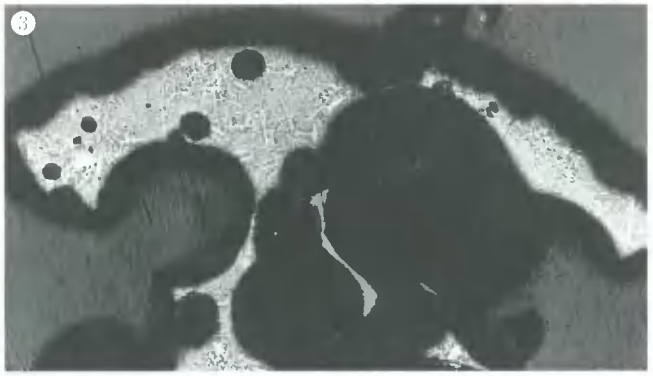


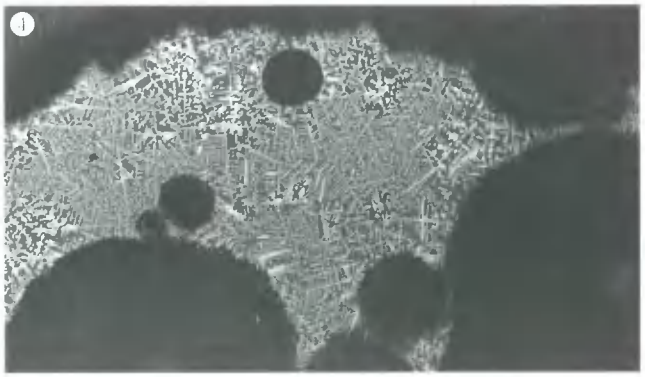


25 MTK-22D
粒状滓

3 ×50 4 ×100 5 ×400
ガラス質スラグ中のウォタイト

外観写真×4



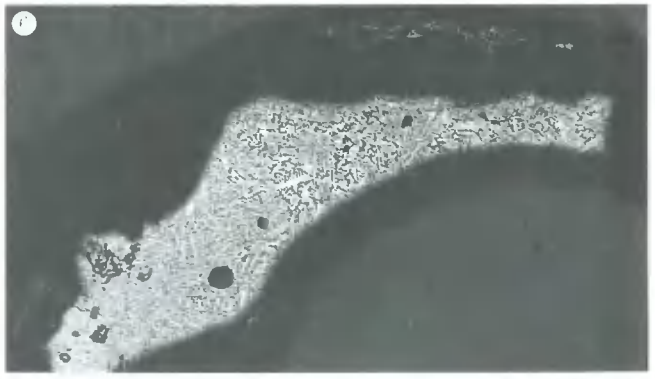


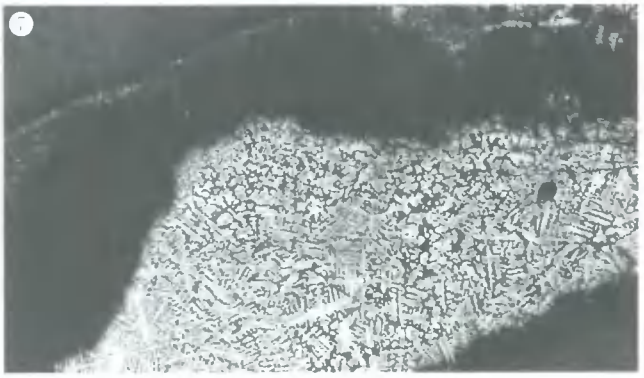
MTK-22E
粒状滓

6 ×50 7 ×100 8 ×400

ウォタイト粒晶出

外観写真×4





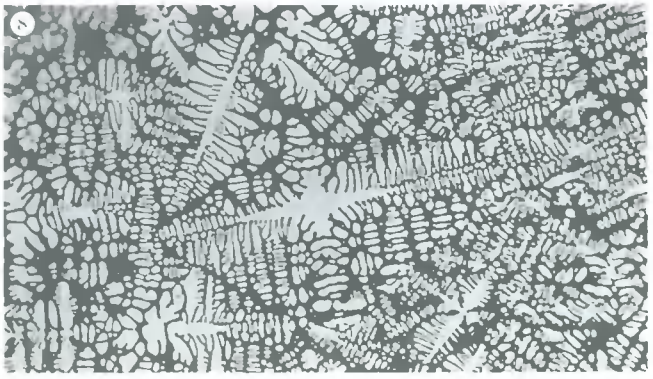
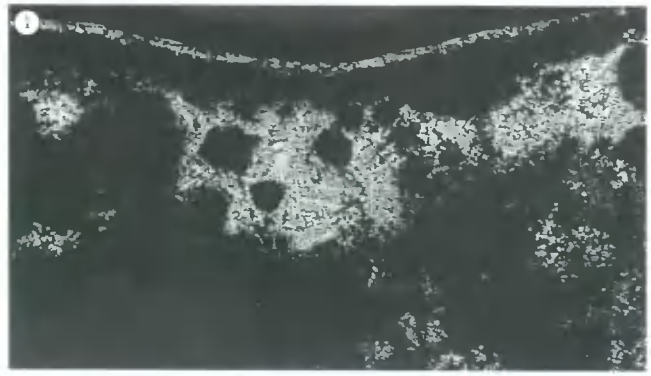
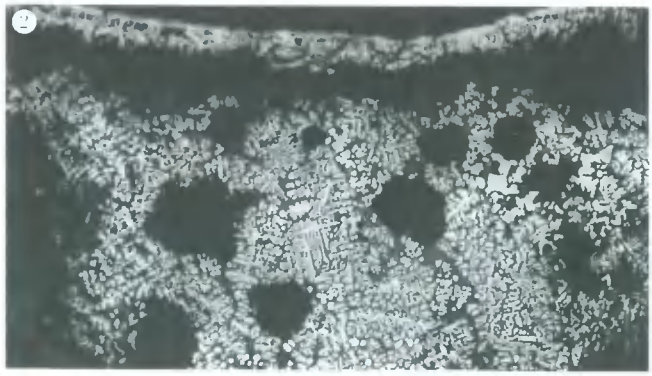


Photo. 15 粒状滓の顕微鏡組織（再結合滓からの抽出品）

MTK-23A
鍛造剥片

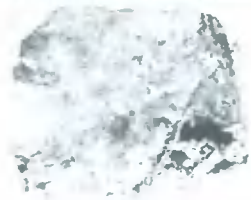
1 ×50　2 ×100　3 ×400
暗黒色ガラス質スラグ中の
ヴュタイト

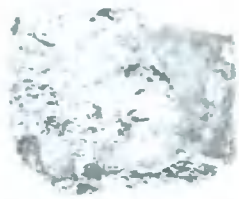


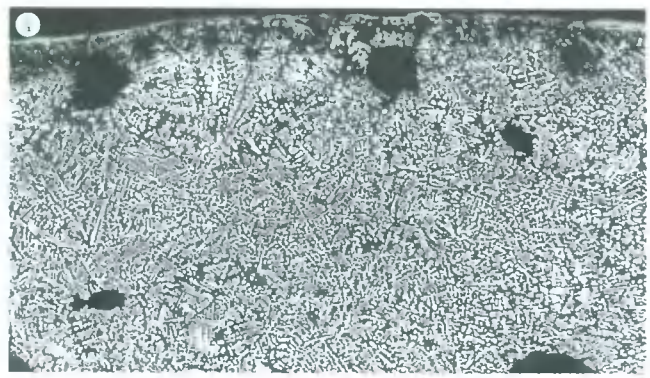


MTK-23B
鍛造剥片

4 ×100
ガラス中のヴュタイト

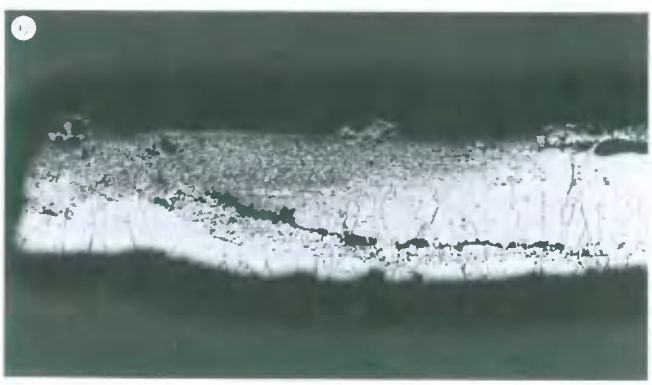






MTK-23C
鍛造剥片

5 ×100　no etch
6 ×100　7 ×400 王水etch
内層非晶質ヴュタイト
3層分離型



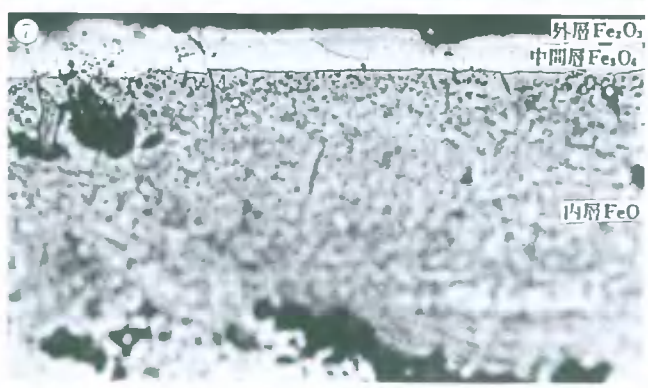
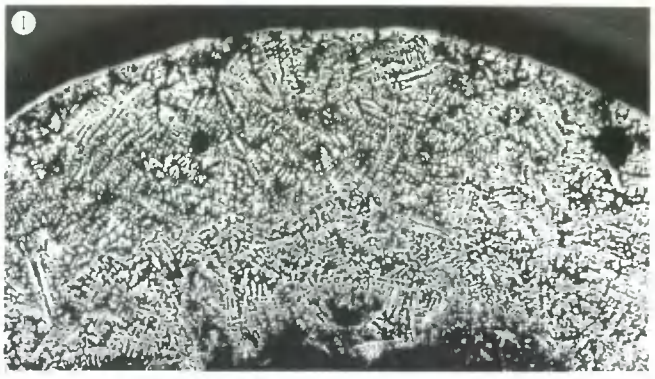


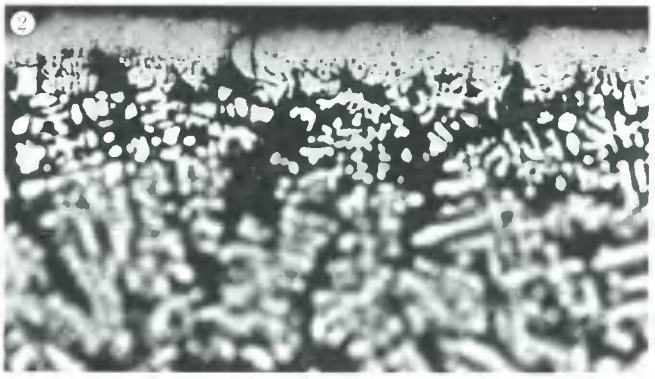
Photo. 16　鍛造剥片の顕微鏡組織

MTK-23D
鍛造剥片

①×100
ガラス中のヴュタイト
但し表層はマグネタイト
②×400



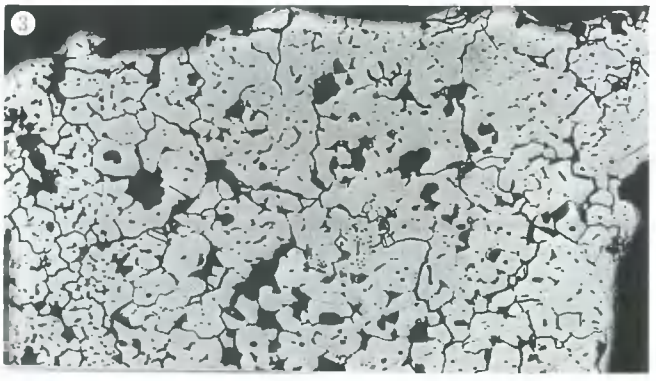
同上



MTK-23E
鍛造剥片

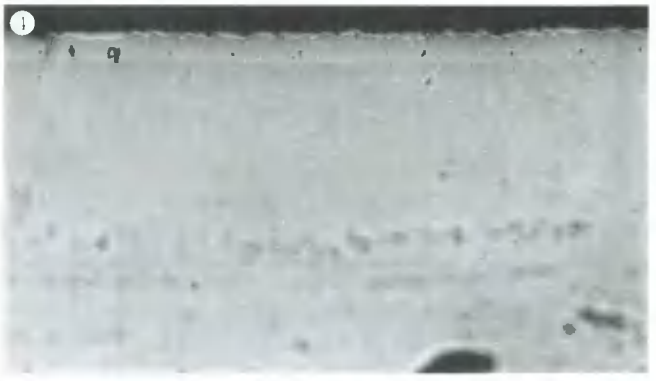
③×100
鉄滓の皮？

ヴュタイト凝集



MTK-23F
鍛造剥片

④×400　no etch
⑤×100　⑥×400
王水etch
内層凝集気味



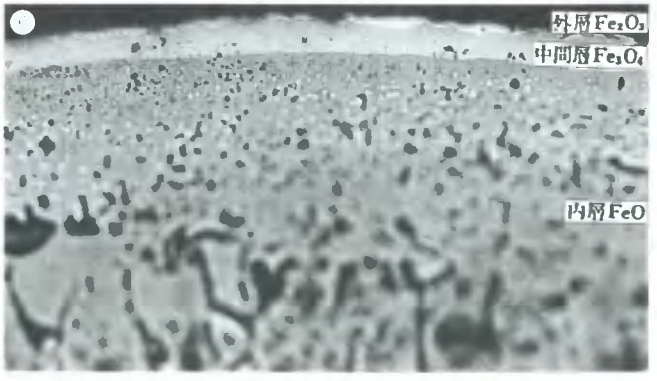
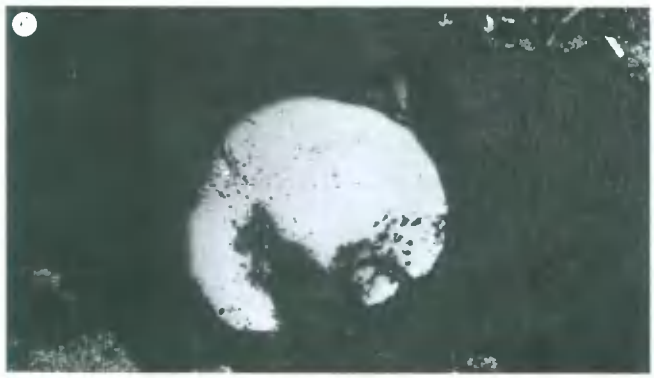


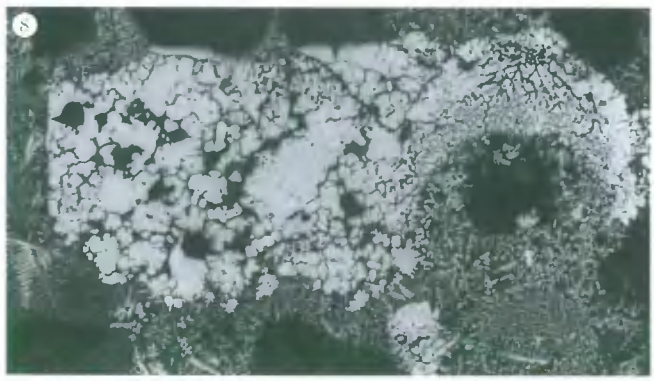
Photo. 17　鍛造剥片の顕微鏡組織

MTK-24 ①
再結合滓小割り塊

①×100　②③×400
④×100　⑤×400
鍛造剥片
⑤×100　⑦×400
鉄粒（酸化物）
⑧×100　⑨×400
鉄滓層（ヴスタイト）

×1.0





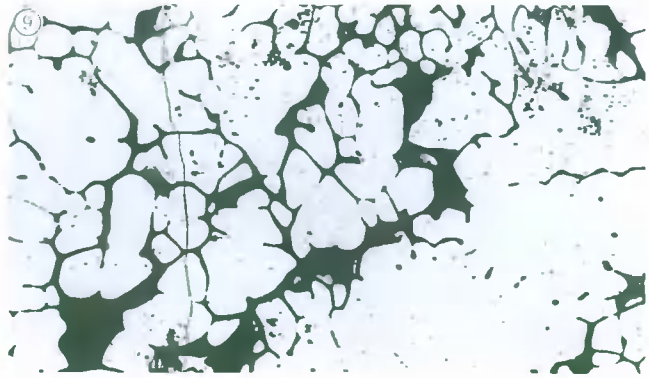
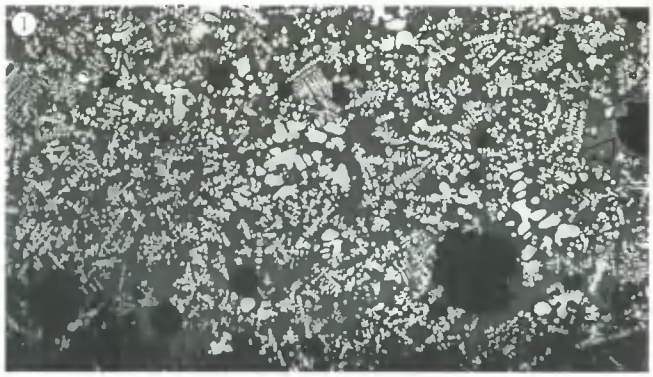


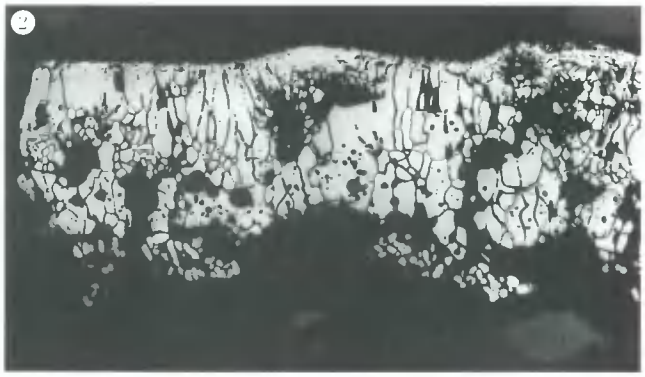
Photo. 18　再結合滓塊の顕微鏡組織

MTK-24 ②
再結合滓小割り塊

①×100　鉄滓層
ガラス質スラグ中のヴスタイト
①×100　②×400
鍛造剥片

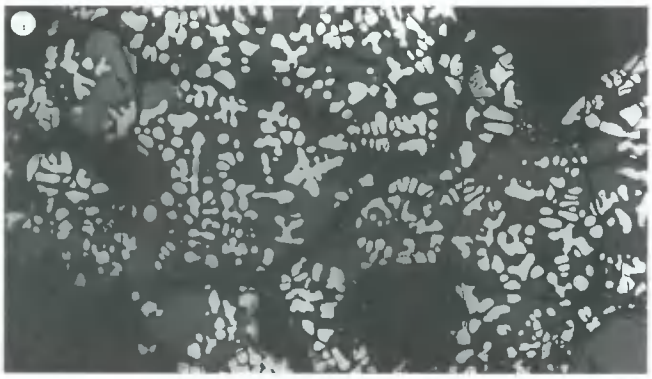
×1.0

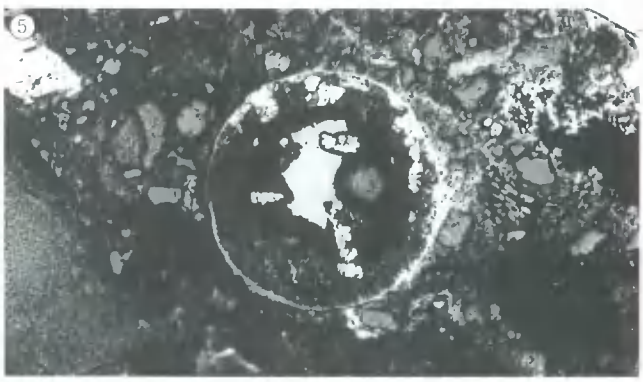


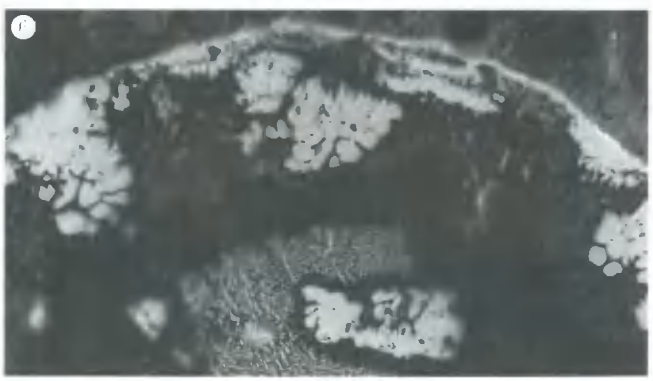


MTK-24 ③
再結合滓小割り塊

①×100　鉄滓層
ヴスタイト＋ファイヤライト
⑤×100　⑥×400
粒状滓
⑦×100　⑧×400
鍛造剥片







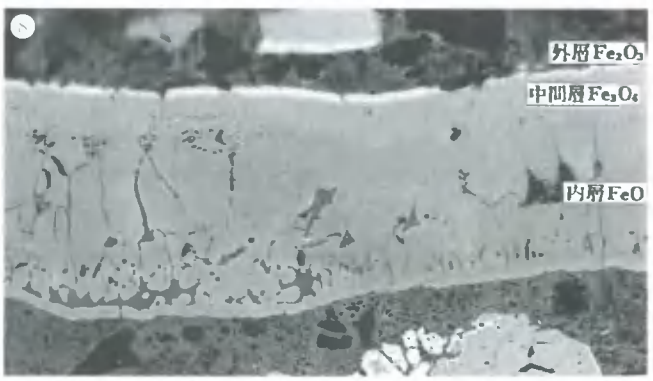
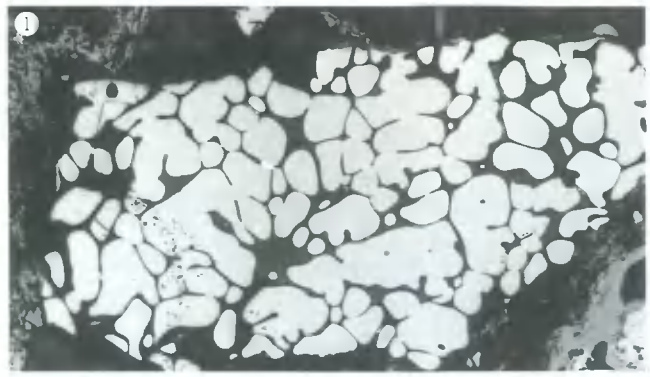
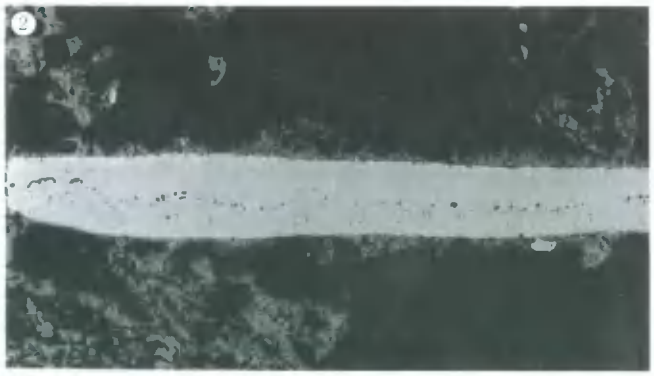


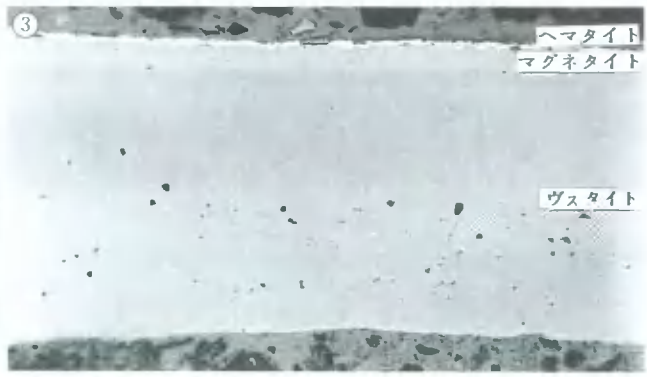
Photo. 19　再結合滓塊の顕微鏡組織

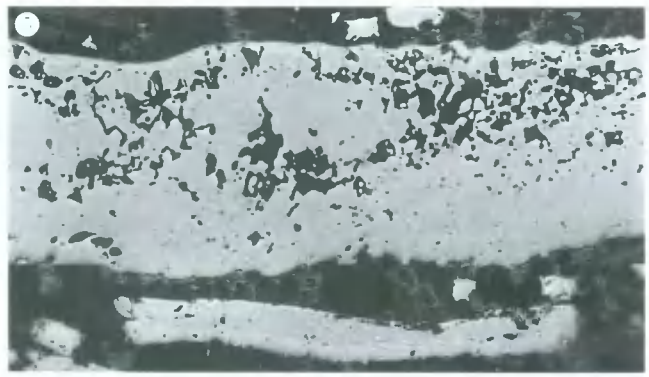
MTK-24④
再結合滓小割り塊

①×100 鉄滓層
②×100　③×400
鍛造剥片
④×100　⑤×400
鍛造剥片









MTK-24⑤
再結合滓小割り塊

⑥×100
鍛造剥片

⑦×100　⑧×400
鍛造剥片と粒状滓

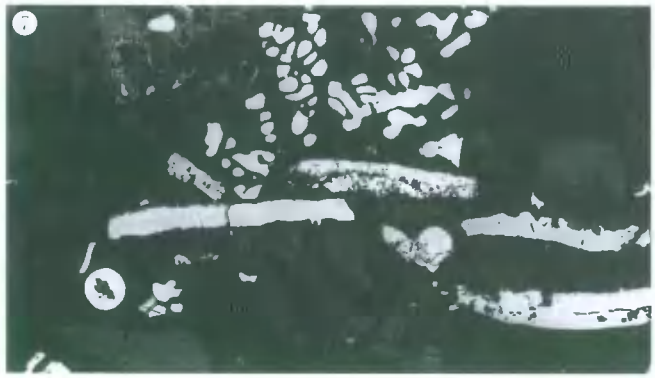
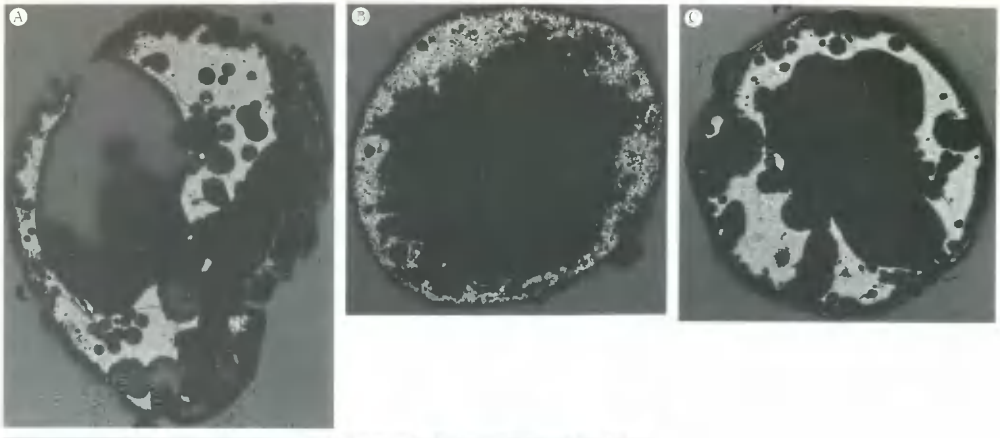
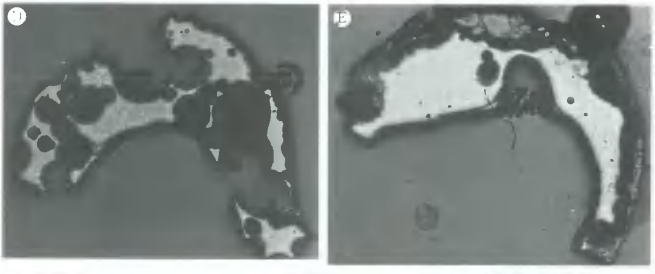
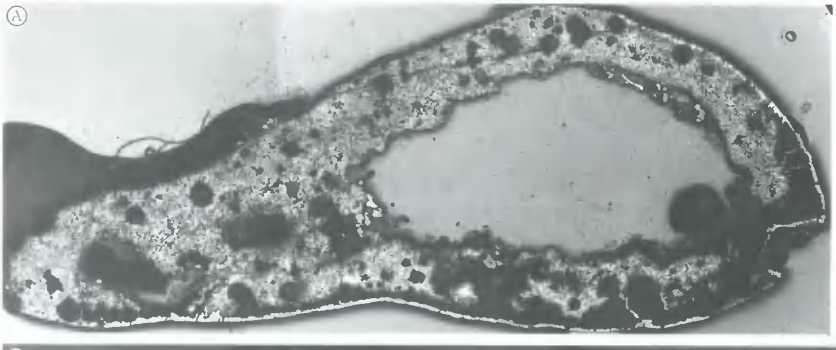


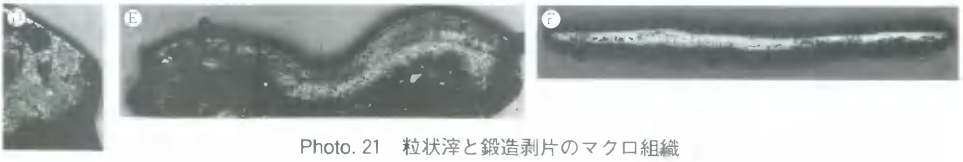
Photo. 20　再結合滓塊の顕微鏡組織





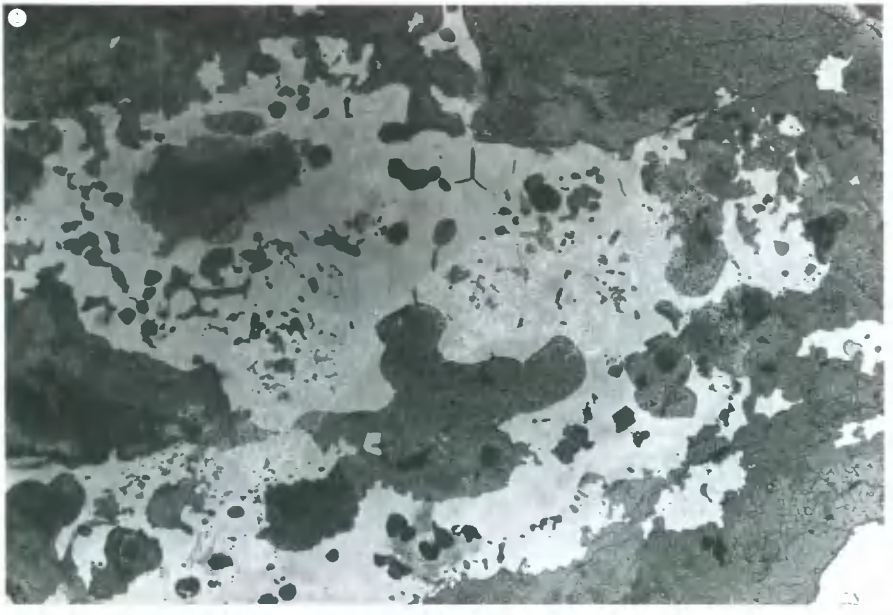
MTK-22　粒状滓
×20





MTK-23
鍛造剥片
×20

Photo. 21　粒状滓と鍛造剥片のマクロ組織

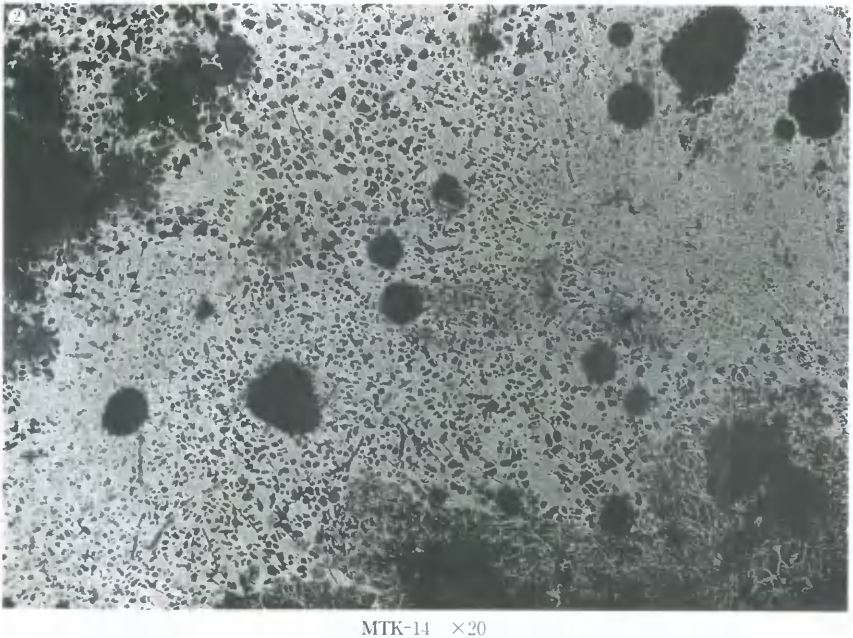


MTK-5　×20

MTK-7　×20

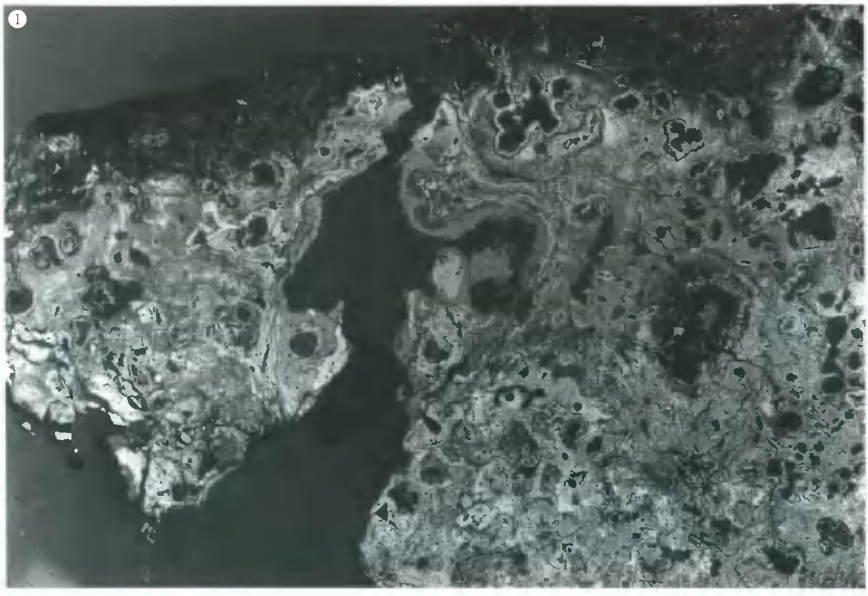
Photo. 22　鉄塊系遺物と銑鉄のマクロ組織

MTK-11　×20

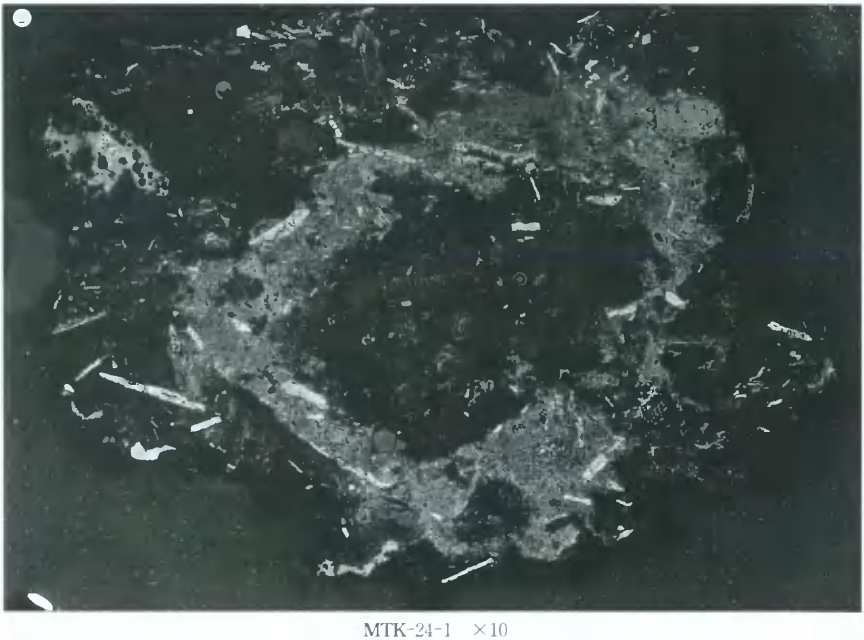


MTK-14　×20

Photo. 23　鉄塊系遺物のマクロ組織



MTK-15　×20



MTK-24-1　×10

Photo. 24　鉄塊系遺物と再結合滓塊のマクロ組織

MTK-20　×20

MTK-21　×20

Photo. 25　再結合滓のマクロ組織

MTK-24-2　×10

MTK-24-3　×10

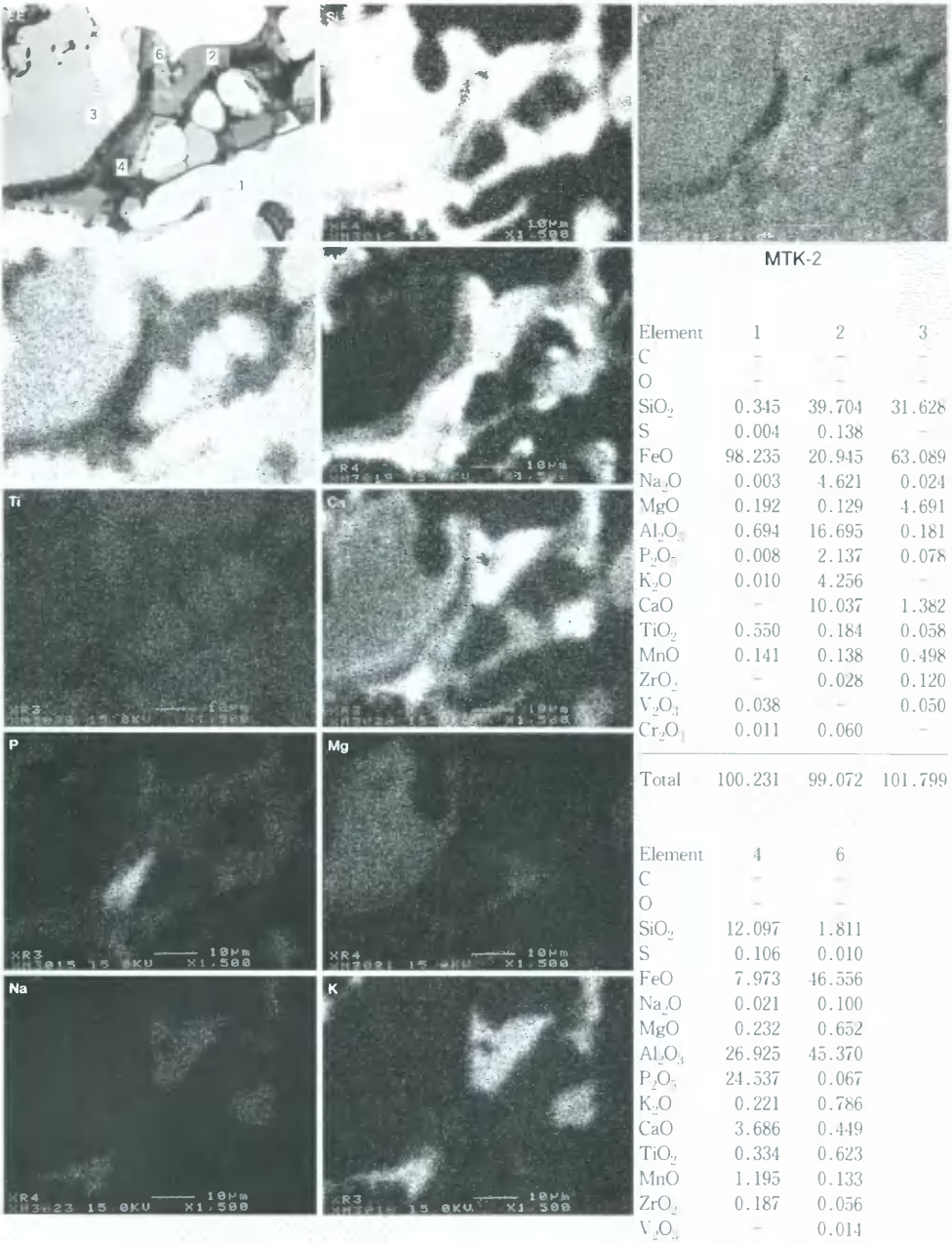
Photo. 26　再結合滓塊のマクロ組織

MTK-24-4　×10

MTK-24-5　×10

MTK-23E　×20

Photo. 27　再結合滓塊のマクロ組織

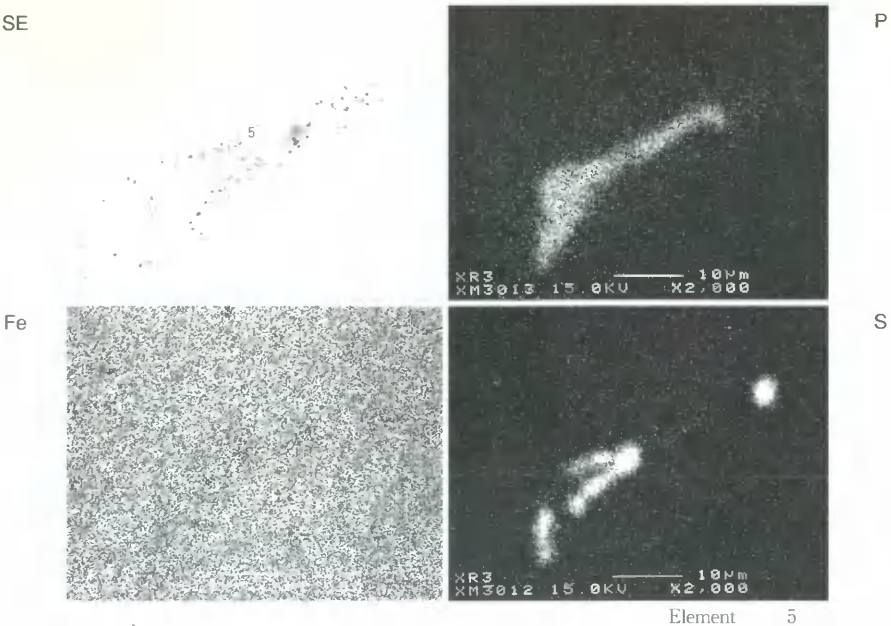


MTK-2

Element	1	2	3
C	–	–	–
O	–	–	–
SiO_2	0.345	39.704	31.628
S	0.004	0.138	–
FeO	98.235	20.945	63.089
Na_2O	0.003	4.621	0.024
MgO	0.192	0.129	4.691
Al_2O_3	0.694	16.695	0.181
P_2O_5	0.008	2.137	0.078
K_2O	0.010	4.256	–
CaO	–	10.037	1.382
TiO_2	0.550	0.184	0.058
MnO	0.141	0.138	0.498
ZrO_2	–	0.028	0.120
V_2O_3	0.038	–	0.050
Cr_2O_3	0.011	0.060	–
Total	100.231	99.072	101.799

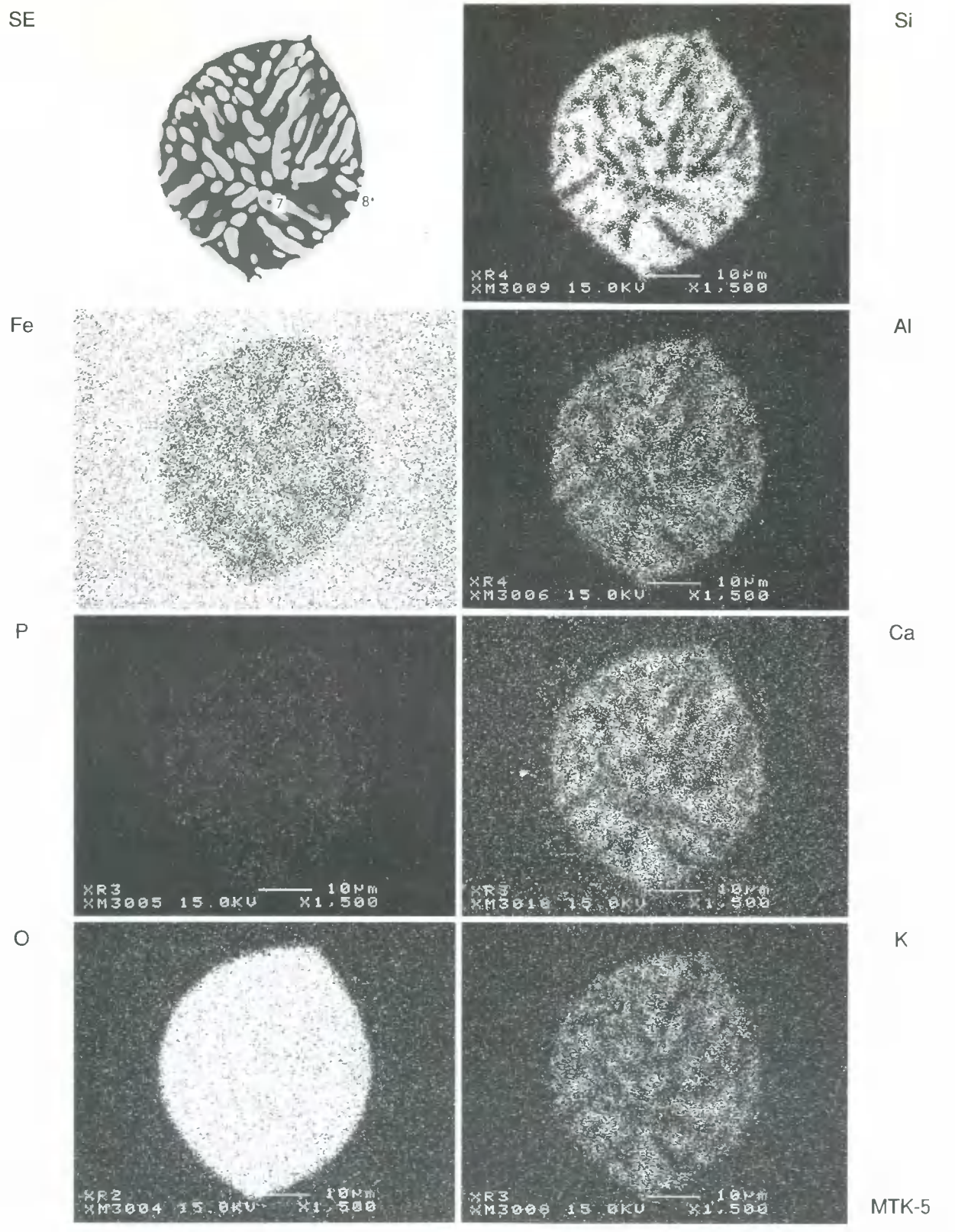
Element	4	6
C	–	–
O	–	–
SiO_2	12.097	1.811
S	0.106	0.010
FeO	7.973	46.556
Na_2O	0.021	0.100
MgO	0.232	0.652
Al_2O_3	26.925	45.370
P_2O_5	24.537	0.067
K_2O	0.221	0.786
CaO	3.686	0.449
TiO_2	0.334	0.623
MnO	1.195	0.133
ZrO_2	0.187	0.056
V_2O_3	–	0.014
Cr_2O_3	–	0.076
Total	77.514	96.703

Photo. 28　含鉄鉄滓（MTK-2）鉱物相の特性X線分析像と定量分析値



Element	5
C	–
O	–
SiO_2	0.111
S	26.881
FeO	93.005
Na_2O	0.022
MgO	0.002
Al_2O_3	–
P_2O_5	0.357
K_2O	–
CaO	–
TiO_2	0.100
MnO	1.592
ZrO_2	0.049
V_2O_3	0.313
Cr_2O_3	0.072
Total	122.504

Photo. 29　鉄塊系遺物〔MTK-3〕鉄中非金属介在物の特性X線分析像と定量分析値



Element	7	8			
C	–	–	P_2O_5	0.043	0.763
O	–	–	K_2O	0.140	1.463
SiO	2.825	29.335	CaO	0.247	2.212
S	0.008	0.029	TiO	0.320	0.167
FeO	96.401	62.617	MnO	0.183	0.595
Na_2O	–	0.165	ZrO	0.017	–
MgO	0.074	0.303	V_2O_5	0.034	–
Al_2O_3	1.019	4.757	Cr_2O_3	0.012	–
			Total	101.323	102.406

Photo. 30　鉄塊系遺物（MTK-5）鉄中非金属介在物の特性X線分析像と定量分析値

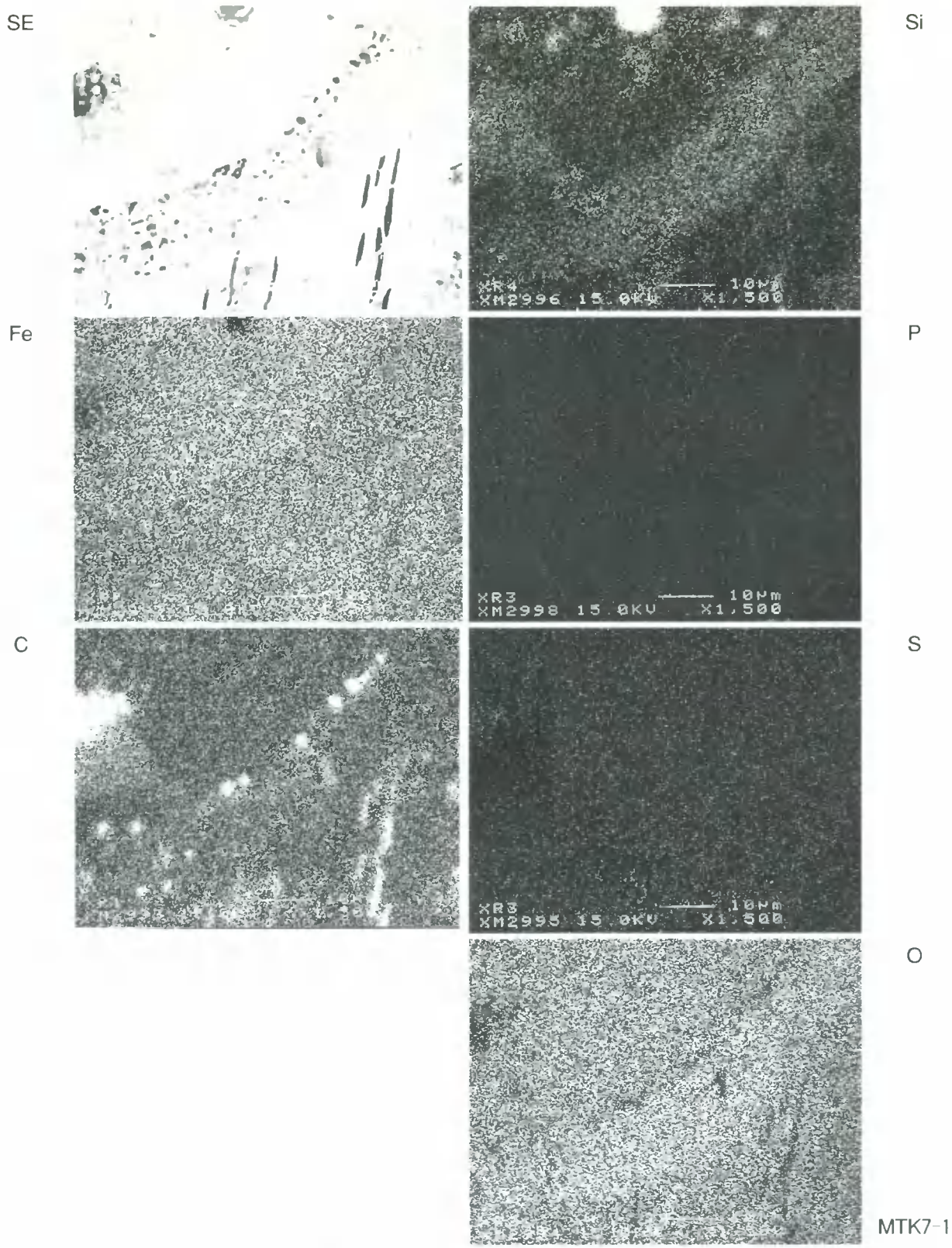


Photo. 31　鋳鉄（MTK-7-1）鉄中非金属介在物の特性X線分析像

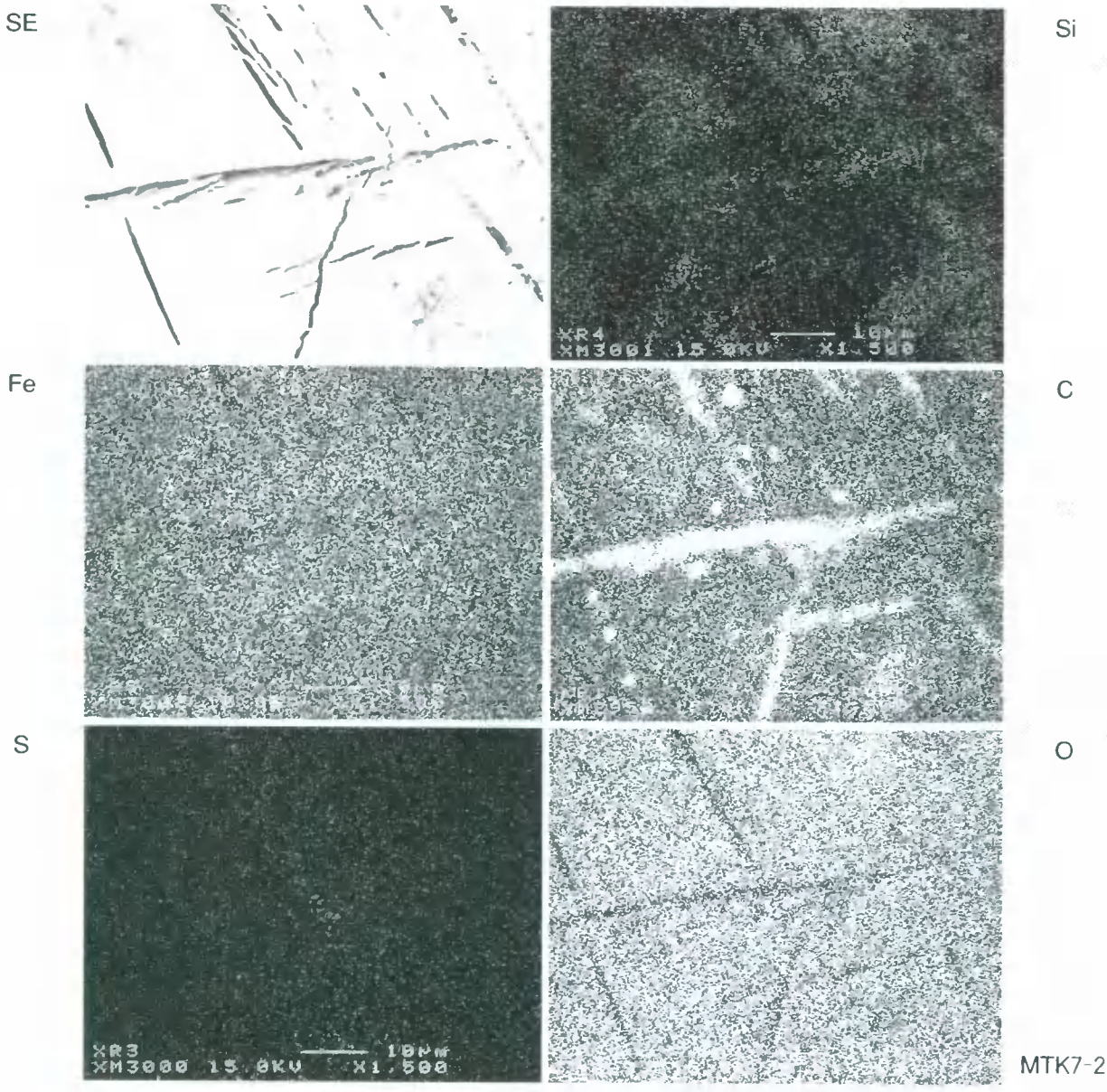
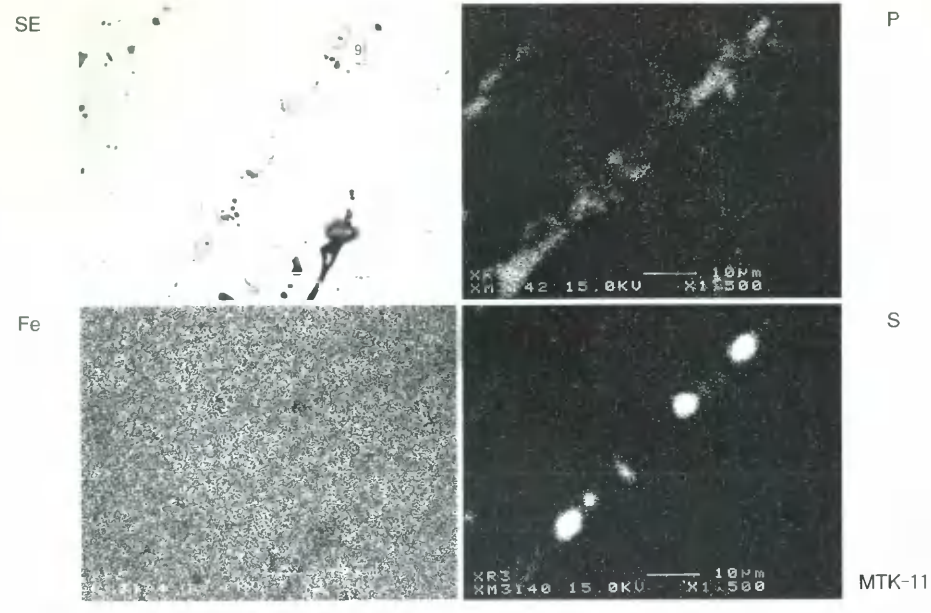
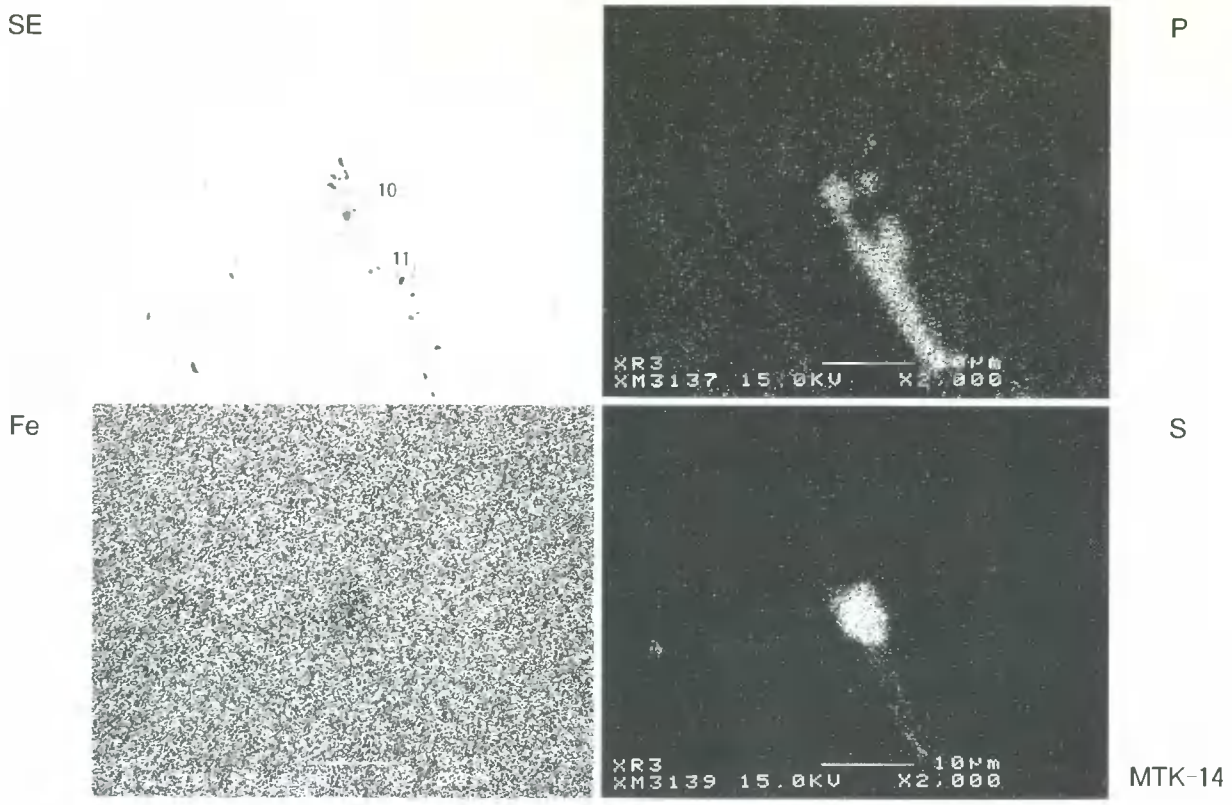


Photo. 32　鋳鉄（MTK-7-2）初析セメンタイトと片状黒鉛痕跡の特性X線像



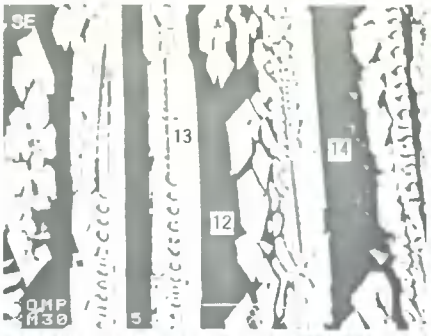
Element	9
C	–
O	–
SiO_2	0.041
S	15.589
FeO	110.870
Na_2O	0.015
MgO	–
Al_2O_3	0.006
P_2O_5	3.627
K_2O	–
CaO	–
TiO_2	0.064
MnO	0.945
ZrO_2	–
V_2O_3	0.015
Cr_2O_3	–
Total	131.172

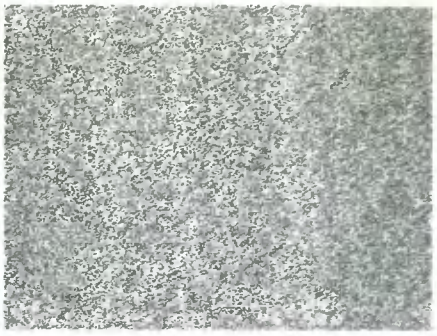
Photo. 33　鉄塊系遺物（MTK-11）鉄中非金属介在物の特性X線分析像と定量分析値



Element	10	11
C	–	–
O	–	–
SiO_2	0.037	0.078
S	35.831	0.738
FeO	87.617	124.078
Na_2O	0.018	0.045
MgO	0.027	–
Al_2O_3	–	–
P_2O_5	0.141	17.728
K_2O	–	–
CaO	–	–
TiO_2	0.057	0.050
MnO	0.184	0.004
ZrO_2	–	–
V_2O_3	0.031	–
Cr_2O_3	0.026	0.012
Total	123.969	142.733

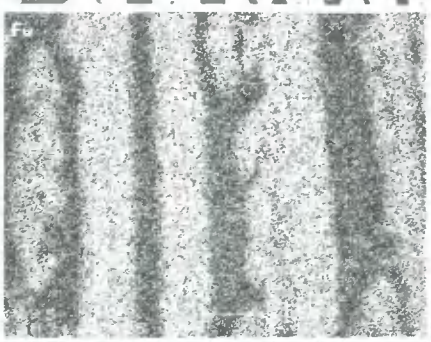
Photo. 34　鉄塊系遺物（MTK-14）鉄中非金属介在物の特性X線分析像と定量分析値

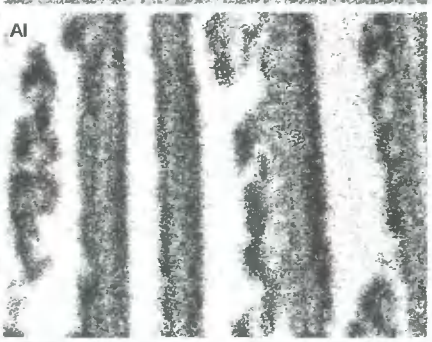


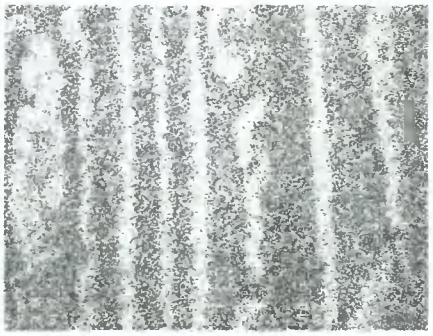


MTK-15

Element	12	13	14
C	–	–	–
O	–	–	–
SiO_2	44.033	32.394	31.496
S	0.083	0.002	0.009
FeO	15.597	54.316	49.441
Na_2O	1.618	0.068	0.079
MgO	0.062	2.363	1.340
Al_2O_3	20.083	2.106	0.227
P_2O_5	0.593	0.211	0.164
K_2O	7.031	1.004	0.221
CaO	8.229	7.427	16.755
TiO_2	0.682	0.115	0.035
MnO	0.065	0.593	0.312
ZrO_2	0.085	–	–
V_2O_3	0.019	0.013	0.003
Cr_2O_3	–	–	–
Total	98.180	100.612	100.082







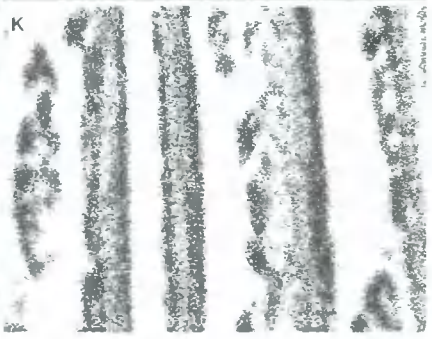
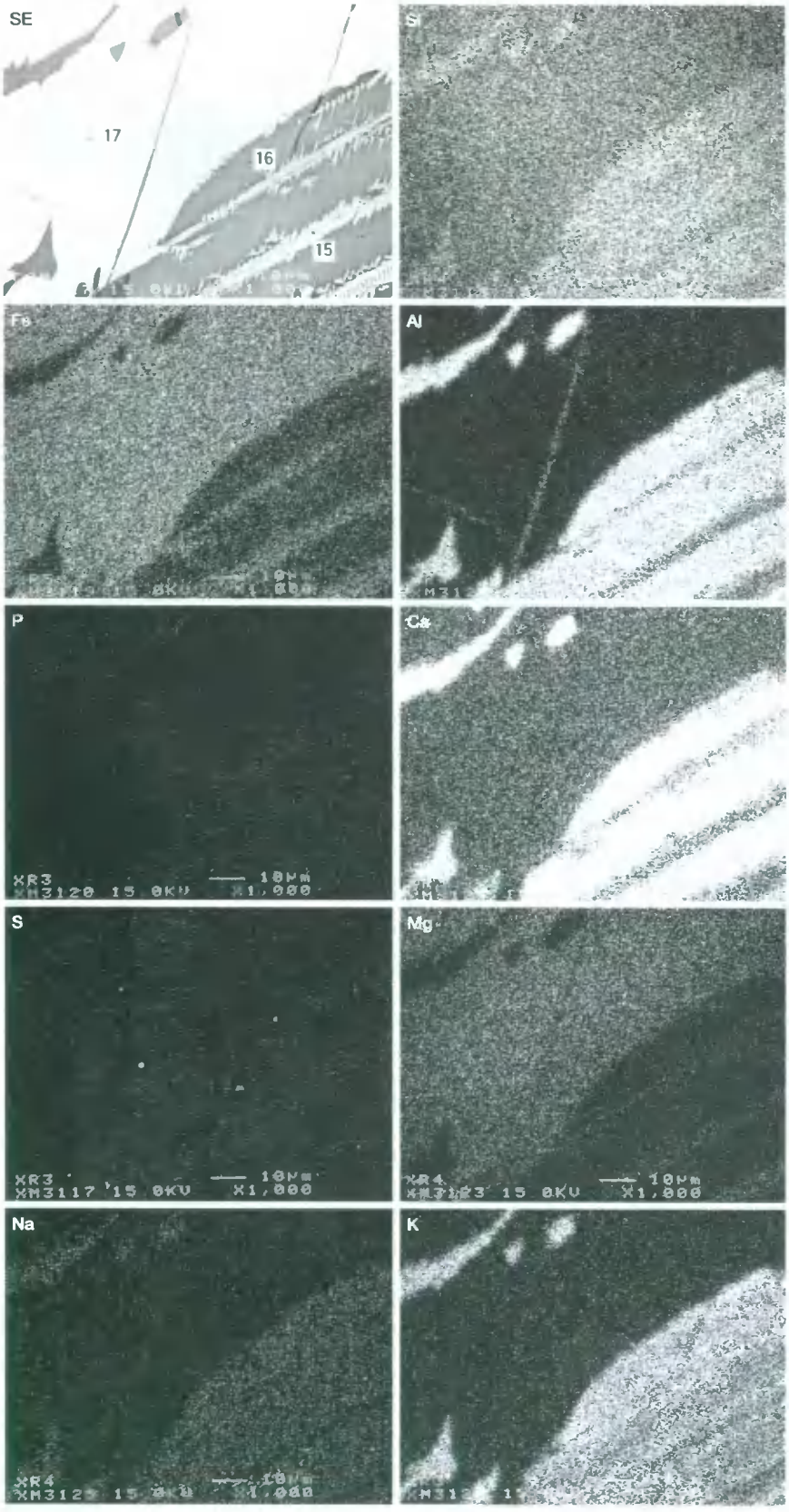


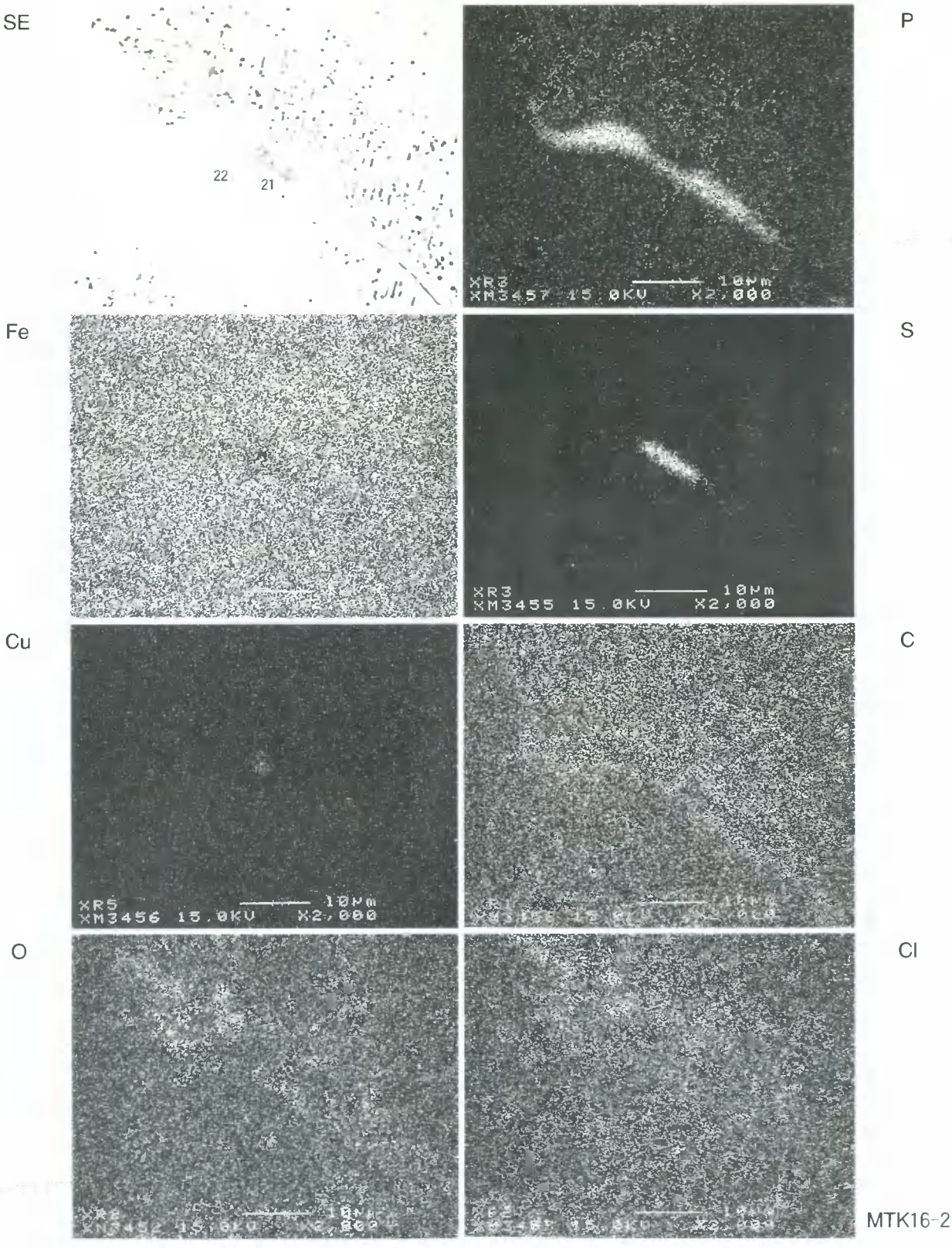
Photo. 35　鉄塊系遺物〔MTK-15〕捲込みスラグ鉱物相の特性X線分析像と定量分析値



MTK16-1

Element	15	16	17
C	–	–	–
O	–	–	–
SiO_2	38.075	47.191	30.686
S	0.010	0.143	0.005
FeO	47.623	18.789	64.342
Na_2O	1.682	2.257	0.005
MgO	1.078	0.156	4.919
Al_2O_3	7.157	13.509	0.175
P_2O_5	0.169	0.478	0.102
K_2O	1.973	2.195	0.001
CaO	3.543	13.757	0.891
TiO_2	0.171	0.767	0.076
MnO	0.545	0.200	0.617
ZrO_2	–	–	0.028
V_2O_3	0.028	0.010	–
Cr_2O_3	0.014	0.010	–
Total	102.068	99.462	101.847

Photo. 36　鉄塊系遺物（MTK-16-1）表皮スラグ鉱物相の特性X線分析像と定量分析値



Element	21	22	CaO	–	–
Na_2O	0.009	–	TiO_2	0.067	0.049
MgO	–	–	MnO	–	–
Al_2O_3	–	–	FeO	123.819	130.007
SiO_2	0.055	0.008	ZrO_2	–	0.026
P_2O_5	0.341	2.452	V_2O_3	0.011	0.018
S	4.213	0.030	Cr_2O_3	–	–
K_2O	–	–	Total	128.515	132.590

Photo. 37　鉄塊系遺物（MTK-16-2）鉄中非金属介在物の特性X線分析像と定量分析値

11　加茂政所遺跡出土鉢形土器内の赤色物について

別府大学　　本田　光子

加茂政所遺跡竪穴住居36出土の鉢形土器1185の内面に付着する赤色物について、その材質と状態を知るために顕微鏡観察と蛍光Ｘ線分析を行った。出土赤色物に関する現在までの知見に寄れば、出土赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第２鉄を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀を主成分とする朱の２種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。

試料

土器内面に付着残存している赤色物をステンレス製カッターで採取した。土器胎土の表面に薄く層状に固着している状態で、採取の際に胎土と赤色物が混和した部分もある。実体顕微鏡下で、胎土に密着した部分から赤色部分のみを針先に付く程度の量を採り検鏡用試料とした。残り（胎土も含めて約15㎜g）を蛍光Ｘ線分析に供した。

顕微鏡観察

三種類の赤色顔料は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等に認められる外観の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。本試料には赤色顔料としてベンガラ粒子を認めた。非常に微細な粒子からなるが、鉱物を破砕したような形状のやや粗粒の粒子も僅かに認められた。やや大きめな不定形の粒子やいわゆるパイプ状粒子は含まれていなかった。

蛍光Ｘ線分析

堀場製作所（株）製MESA-500を用い、15kV-440μＡ：50秒、50kV-20μＡ：50秒、真空、の条件で行った。主成分元素としては、鉄、珪素、アルミニウム等が検出されたが、水銀、鉛は確認できなかった。

まとめ

本資料に認められた赤色物は、赤色顔料のベンガラである。出土ベンガラの産地や製法は多様であり、赤土、黄土、赤色岩やいわゆる鉄鉱石を粉砕あるいは焼成・粉砕したものあるいは鉄細菌を焼成して得られるものなどがあると考えられる。それぞれ粒子の形状は不定形、微粒、パイプ状など多様な特徴が明らかになってきてはいるが、未だ分類整理の途上であり、鉄細菌起源のパイプ状粒子以外は特定しがたいのが現状である。

本資料は鉢の内面に付着した状態から、いわゆる内面朱付着土器であると考えられたが、赤色顔料はベンガラであった。用途が異なるのか、内面朱付着土器の代用であるのか、興味深い資料である。

報告書抄録

ふりがな	かもまどころ　　たかまつはらこさい　　たづた
書名	加茂政所遺跡　高松原古才遺跡　立田遺跡
副書名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	138
シリーズ名	山陽自動車道建設に伴う発掘調査
シリーズ番号	17
編著者名	松本和男・平井泰男・中務和彦・岡田達矢・土師忠満・難波拓史・弘田和司 柴田英樹・清水竜太・藤田　薫・小田嶋梧郎・金子浩昌・富岡直人・白石　純・平尾良光・ 榎本淳子・内田俊秀・大澤正己・本田光子
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701－0136　岡山県岡山市西花尻1325－3　　TEL086－293－3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700－8570　岡山県岡山市内山下2－4－6　　TEL086－224－2111
発行年月日	1999年　3月　12日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
加茂政所遺跡	岡山市加茂	33201		34° 40′ 15″	133° 45′ 47″	890522～920518	12,686	山陽自動車道建設に伴う発掘調査
高松原古才遺跡	岡山市高松原古才	33201		34° 40′ 38″	133° 37′ 42″	900226～901106	1,682	
立田遺跡	岡山市立田	33201		34° 40′ 39″	133° 36′ 15″	891019～900906	1,103	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
加茂政所遺跡	集落 水田 寺院 墳墓	縄文時代		縄文土器	
		弥生時代	竪穴住居　58軒 掘立柱建物　1棟 袋状土壙　72基 土壙　312基 土壙墓　5基 土器棺墓　12基 溝　18条 水田	分銅形土製品・紡錘車・勾玉・土錘・ガラス玉	中期の集落から中葉の土器が豊富に出土
		古墳時代	竪穴住居　86軒 掘立柱建物　2棟 焼成土壙　11基 土壙　23基 溝　21条 水田	土錘・羽口・塼仏 瓦	
		古代	掘立柱建物　8棟 井戸　1基 火葬墓　2基 道路状　2基 柱穴列　5基 土壙　56基 溝　17条 畑　2面	梵鐘鋳型・土錘・焼台 瓦	平安末以降の寺院跡 梵鐘鋳造遺構

加茂政所遺跡	集落 水田 寺院 墳墓	中世	掘立柱建物 6棟 井戸 4基 土壙 33基 土壙墓 8基 溝 46条	土錘	
	集落 水田	近世	掘立柱建物 1棟 井戸 1基 土壙 2基 溝 8条 水田	大黒天像	
高松原古才遺跡	集落 水田	弥生時代	竪穴住居 3軒 掘立柱建物 1棟 土壙 6基	石器（石匙・スクレーパー）土製品（分銅形土製品・紡錘車・土錘）・ガラス小玉	
		古墳時代	竪穴住居 3軒 土壙 5基 鍛冶炉 1基 溝 7条	金属器（金環・鉄製紡錘車） 韓式系土器	
		古代	掘立柱建物 1棟 土壙 5基 土器溜り 1基 溝 5条 水田	丹塗り土器	
		中世	溝 13条 水田	東播系須恵器・瓦・土錘・宋銭	
立田遺跡	集落 水田	弥生時代	竪穴住居 10軒 掘立柱建物 3棟 井戸 1基 袋状土壙 5基 土壙 31基 溝 2条	石器（石包丁・楔・スクレーパー） 土製品（分銅形土製品・土錘） 勾玉・管玉 金属器（刀子）	
		古墳時代	竪穴住居 1軒	金属器（鏃・鎌）	
		古代	溝 2条	瓦	
		中世	溝 2条 水田	砥石・土錘	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書 138

加茂政所遺跡
高松原古才遺跡
立田遺跡

山陽自動車道
建設に伴う発掘調査
17
（第3分冊）

1999年3月5日　印刷
1999年3月12日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
　　岡山市西花尻1325－3
発　行　岡山県教育委員会
　　岡山市内山下2－4－6
印　刷　富士印刷株式会社